
モブから始まる探索英雄譚

海翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モブから始まる探索英雄譚

【Nコード】

N8930FK

【作者名】

海翔

【あらすじ】

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚6が発売されました！！絶賛発売中の1巻はなんと発売即緊急重版しました！！ 新刊コーナーで1〜5と一緒に購入をお願いします！ 電子版ならいつでも購入可です！

ヤングチャンピオンコミックスより2巻が5/18に発売になります！ ピッコマで単話売り始まるみたいです！

HJネット小説大賞2019 受賞しました。

2028年4月 今日も俺はダンジョンに潜っている。

高木 海斗は アルバイトがわりに毎日ダンジョンに潜っている。

貧弱ステータスのモブキャラ海斗は毎日スライムを狩って、せつせと小遣稼ぎをする探索者。

人呼んでスライムスレイヤー（LV3）。

以前、調子に乗ってゴブリンに挑戦して、ボコボコにされ命からがら逃げ出した過去がある。

スライムスレイヤー（LV3）の海斗がいつものようにスライム狩りをしていると見たこともない

金色のスライムが現れ、撃退するとそこにはサーバントカードと呼ばれるレアアイテムが残されていた。

貧弱モブキャラのダンジョン冒険活劇になる

∴

かも

知れません。

カクヨムにも掲載はじめました。

第1話 スライムスレイヤー（LV3）（前書き）

現在書籍版に合わせて名前を変更中ですが、作業途中のため混在しています。

カオリン ヒカリンです。

作業が終わり次第ヒカリンとなりますのでよろしくお願いします。

第1話 スライムスレイヤー（LV3）

2028年4月 今日も俺はダンジョンに潜っている。
ほぼ毎日潜って2年が経った。

2019年に世界に突然地下迷宮が出現した。現在までに世界中で1500程の地下迷宮が確認されているが、この地下迷宮は現在ダンジョンと呼ばれている。

ダンジョンは階層も単層階のものから、100層を超えて未だ最下層が確認されていないダンジョンまで多種多様である。

当初ダンジョンが発見された時には、

「古代遺跡か？」

「いや地底人？」

「埋蔵金？」

などと連日テレビを賑わせていた。

日本の場合、国の管轄下に置かれ、自衛隊による大規模な調査が行われた。

3年間程度の調査の結果、ダンジョンにはファンタジー要素満載でモンスターやお宝、ダンジョン内でのみレベルやステータスや魔法まである事が判明した。

調査を受けて法整備が進み2024年に一般公開される運びとなった。

それを期にダンジョンに潜るための資格 ダンジョン探索調査員

通称 『探索者』が設けられた。

資格は満15歳以上 であれば応募可能。10万円の受講料を振り込み7日間の学科講習を受ければ探索者ライセンスが発行される。当初応募資格は20歳以上となっていたが、いざスタートしてみると仕事をしている人からの応募がほとんどなく、急遽15歳以上に変更となった経緯がある。

俺、高木 海斗 も15歳になったと同時にお年玉とおこづかいを貯めた10万円を持って速攻探索者ライセンスを取得した。抑えきれない期待感を胸に取得した翌日にはダンジョンに潜っていた。

あれから2年今日も俺は近所にあるダンジョンの『1階層』に潜っている。

「いないなー」

俺は獲物を探していた。毎日狩っているあいつらを……

1時間程歩き回りようやく見つけた。

サッカーボール程のゼリー状のモンスター スライムを。

20メートル程離れた場所にいる 青色のスライムに気づかれないように音を立てずに近づいて必殺の強力殺虫剤を噴射した。

噴射と同時にスライムは「グチュ、グニュ、ボヨヨン」とギャグのような音を立てて暴れ回り、消失した。

俺は「すーっ、はー」止めていた呼吸を再開する。

これが俺が編み出した スライム必殺 殺虫剤プレスだ。

どういう原理かわからないが潜りはじめて3日目ぐらいの時にたまにたま持ち込んだ殺虫剤を使用したら

劇的に効いたのだ。

それ以来ずっとこのやり方を続けている。

スライムの消失後、小指の爪の半分くらいの石が残っているの
回収した。

この石はいわゆるモンスター¹の心臓 魔核だ。

魔核は探索者事務所²で買い取ってもらえる。

スライムの魔核1個でおよそ500円 - - - -

放課後に3時間程度潜って、発見できるスライムは3匹程度 。

500円×3匹で1日1500円程度。

夢と希望の探索者としての俺の稼ぎは月に25日前後潜って35000円程度だ。そこから殺虫剤が月に5000円はかかるので実質30000円ぐらいだ。

安い。安すぎる。

多少なりとも命の危険があるにもかかわらず月に30000円。

もちろん夢と希望の探索者なのでシルバ³ランク（中位）以上の探索者は月に100万円単位で稼いでいる。

残念ながら俺は最下級のウッド⁴ランク探索者なのだ。

それでも2年間 1階層専門の探索者として放課後アルバイトがわりに日々頑張っている。

1階層にはスライムしか出現しない。安心安全のかわりにスライムからはドロップアイテムが出ない。

残されるのは魔核のみである。

今日も魔核3個を換金し1500円を受け取り家に帰った。

俺の今のステータス

高木 海斗

L V 3

HP 12
MP 3
BP 10
スキル 1
装備 殺虫剤

2年間スライムを狩り続けてレベルは2つ上がって3になった。HPは5増え、MPは2増えた。

BPとはバトルポイントの略で所謂戦闘力である。

この数値、ウツドラंकにふさわしいものとなっている。

完全にモブである。

最初は夢も希望もあつた。

「いつかオリハルコランクになってやるー!!!」

とクラスの友達にも吹聴していた。今となつては黒歴史でしかない。

俺も一度だけ2階層に降りた事がある。2階層はゴブリンやゲールのような下級人型モンスターの階層だ。

下級という響きで完全に舐めてました。

死ぬかと思いましたが。いやまじで死にかけました。

ゴブリン雑魚？ ファンタジー永遠の雑魚キャラ？

そんなのは「絶対嘘だー!!!」

ちよつと考えたらわかることだった。

人型のモンスター、知能もあればモンスター特有の膂力も持ち合わせている。

どこに素人高校生が勝てる要素があるのだろうか？

1mmありませんでした。

必殺の殺虫剤ブレスもほとんど効果無しでした。
150cmぐらいのゴブリン1匹にボコボコにぶん殴られ、身ぐるみ剥がされかけ、血だるまになりながら、命からがら1階層に逃げ帰りました。

たまたま武器を持たない個体だったので助かったけど武器を持っていたら100パーセント死んでました。

以来猛烈に反省した俺は1階層の住民となりました。

2年間通って探索者仲間も数人出来た。仲間からはスライムスレイヤーの称号を貰いました。

俺は、またいつものように1階層に潜っていた。

「もう1匹狩ったら帰るかー」

独り言を言いながらスライムを求め再び歩いていると金色のスライムを発見した。

「なんだ？ 金色のスライムなんか聞いたことないな」

ちょっと気になったけどいつもの通り、忍び寄って殺虫剤ブレスを実行した。

「グチュ、グニュ、ボヨヨン」といつもの音を出しながらスライムは消失した。

「ん!？」

いつもの通り魔核を回収しようと近寄ると魔核と一緒に一枚のカードがドロップされていた。

スライムからはドロップアイテムが出ないと言われている。実際俺もこれまで2000匹近く倒したが一度もドロップアイテムが出たことはなかった。

初めてのドロップアイテムに俺はちょっとビビりながら恐る恐るカードを拾った。

「こゝ、これは まさか・・・」

震える手の中にあるのは、テレビでしか見た事がないサーバントカードと呼ばれる従者を召喚出来る超レアアイテムだった。

第1話 スライムスレイヤー（LV3）（後書き）

第2話 サーバントカード

ファンタジーの定番通り日本のダンジョンではモンスターを倒すと、ごく稀にドロップアイテムが残される。

スライム以外の全てのモンスターからドロップアイテムが確認されているがドロップ率はおおよそ1〜3パーセントと言われている。

探索者の主な収入源がモンスターの魔核とドロップアイテムの売却益だ。

メジャーなドロップアイテムは ポーション各種。 武器、 武具類。 レアメタルを含む素材。

レアなところで、魔法が使えるマジックオーブ。スキルを覚えるスキルブロック。能力値のアップするバイタルジュエル等があげられる。

もちろん俺はレアアイテムについてはテレビの中でしか見たことはない。

メジャーなアイテムは国の運営している国营ダンジョンマーケットに行けば販売されているので、購入したことは無いが、15歳になりダンジョンに潜れるようになるまで、毎週のようにウィンドウショッピングを気取って見に行っていた。

もちろんレアアイテムも販売はされているがVIP専用の分厚い扉の奥の部屋でのみ販売されており、もちろん俺は入ったことは無い。

『サーバントカード』はVIPルームに鎮座するそうしたレアアイテムの一つである。

テレビ経由の情報によれば、サーバントと呼ばれる、モンスターや

戦士を召喚できるらしい。

見た目はカードゲームのデッキカードのようだが紙ではなく金属製である。

最初に召喚した探索者のみで使用できるらしい。

人間と同じように攻撃されるとHPも減り、0になると二度と呼び出すことはできないらしい。

ただし減ったHPもカードに送還して1日経過すると回復するそう
だ。

魔法と並ぶ探索者垂涎のレアアイテムである。

俺だって夢の中ではレッドドラゴンを召喚して極大魔法を連発して魔王退治するという厨二夢を何度見たかわからない。

大きな声ではいえないが17歳になった今でもときどき夢見ている。

『サーバントカード』でも呼び出せるサーバントは千差万別だ。

現在確認されているカードによるとモンスター系最弱サーバントはゴブリンと言われており、最強サーバントがドラゴン種と言われている。

俺が手に入れた『サーバントカード』

震える手の中にあるカードを祈るような気持ちで、恐る恐る覗いてみた。

最弱ゴブリンでも俺より遥かに強いのだ。もちろんウエルカムだが、本音を言えばもう少しだけ強いカードであってくれ。ドラゴンとは
いわない。せめてワイルドベアぐらいでてくれ。

「頼むー！うっーう！？ 神さまー！！」

心の声が口から、ただ漏れしていた。

意を決して見たカードにはなんと

水色の髪に碧眼で西洋風の鎧姿の絶世の美女　いや　羽が生えてる・・・まさか天使??　いや神様か???

が描かれていた。

慌ててステータス部分を食いつくように見ると

種別　　ヴァルキリー

NAME　　シルフィー

LV1

HP120

MP90

BP170

スキル　神の雷撃　鉄壁の乙女

装備　神槍　ラジュネイト　　神鎧　　レギネス

と表示されている。

人間、想像の埒外のことが起こるとろくに動けないらしい。

喉はカラカラだが全く声が出ない。力が入らない。全身が震える。

それからどうやって家まで帰ったのか記憶がない・・・

家に着いてから、ベッド上で寝転びながら既に2時間以上カードを眺めている。

少し落ち着いてきたので、スマホで『サーバントカード　ヴァルキリー』と検索してみた。

検索結果はカードゲーム等の類似ワードがヒットしただけ。???

今の時代検索できないものなんかあるのか？

このカード もしかして偽物か？

今度は『ヴァルキリー』で検索してみた。

今度は多数のヒットがあった。

『ヴァルキリー』・・・北欧神話に出てくる半神。

半神ってなんだ？

神なのか？そんな事ありえるのか？やっぱり偽物か？

ダンジョン以外では召喚する事は出来ないので、真贋もわからずモヤモヤした気持ちのまま眠りについた。

第3話 シルフィー

翌日学校から帰って来た俺は、いつものようにダンジョンには潜らず、国営ダンジョン探索調査員センター 通称ダンジョンギルドへ向かった。

特別親しいギルドスタッフがいるわけではないが、いつも魔核を買い取りしてもらっている受付のお姉さん

には、普段一言二言会話を交わす程度には顔見知りになっていた。

なので彼女 日番谷さんに昨日の魔核を売却するついでを装って『サーバントカード』について聞いてみた。

「すみません。ちょっと聞いてもいいですか？いつかサーバントカードを手に入れたらいくらぐらいで売れるんですか？天使や神様みたいなカードもありますか？」

ちょっと挙動不審だったかも知れないが、平静を装って矢継ぎ早に聞いてみた。

「そうですね。レアカードは探索者の方が秘匿される事も多いので一般にはあまり知られていませんが、天使等のゴツズ系カードというのが存在しています。世界中で100枚程度しか見つかっていない超レアカードです。」

「おそらくオークションに出回れば10億円以上すると思われるんですが、まず出てくる事はないでしょう」

「じゅ、じゅ、　じゅうおくですか!!!」

心臓が飛び出るかと思った。ドッ、ドッ、ドッ、ドッ　動悸が止まらない。

全身からわけのわからない汗が噴き出してくる。

真摯に答えてくれた日番谷さんにお礼を言って足早に逃げるようにダンジョンに潜った。

潜ったもののダンジョンの片隅で座り込んだ俺は動けなかった。

「10億か〜」「10億な〜」「10億円」「10000000000000円」　「じゅうおくー!!!」

10億あれば今後働かなくても生きていける。いやむしろ贅沢に暮らしていける。

家や車を買ってもまだまだ余る。

大学も行かなくても全然大丈夫。

むしろこれからリッチでモテモテ人生かも知れない。

そんな不健全な考えがぐるぐる頭を回っている。

俺はもう一度ヴァルキリーのカードを取り出して穴が開く程見つめる。

これが10億か・・・

一度でも召喚するともう売り物にはならない。

普通に考えて100パーセント売却以外にあり得ない。

まさにドリームジャンボカード。

夢の10億円カード。

そして夢の10億円生活。

いやオークションだからもつと行くかもしれない。

天使で10億円だとすると、半神だと20億???

だが、しかし・・・
俺が探索者になったのはお金儲けと、もう一つ 夢とロマンを求め
ていたからだ。

このカードがあれば深層階までいけるかも知れない。

夢に何度も見た魔王を倒すような英雄になれるかも知れない。

何よりこの絶世の美女を召喚してみたい。

サーバントの意味は召し使いである。

絶世の美女を召し使いにする。男なら一度は夢見るロマンではない
だろうか。

ゲスい。我ながらあまりにゲスい。

しかしこの2年間スライムのみを狩ってきたスライムスレイヤーと
しては、どうしても召喚してみたい。

探索者ライフが劇的に変わるかもしれない。

このマンネリ化した日々には 探索者になったばかりの頃のようなド
キドキが戻ってくるかもしれない。

そう思い始めるともう我慢できなかった。

「俺の厨二夢は10億にも勝る。」

俺は決断した。

サーバントカードを使用する事を。

使い方は簡単だ。

カードを額に当て サーバントの名前を念じればいいだけだ。

俺はカードを額に当て ヴァルキリーの名前 シルフィーを念じ
た。

カードが閃光につつまれ、目の前には俺のシルフィーが・・・

「え？」

「は？」

「なに？」

「誰だおまえ・・・」

そこにいたのは絶世の美女

ではなく

10

歳ぐらいだろうか？

水色の髪に碧眼のミニチュア鎧姿の少女が佇んでいた。

「ご主人様・・・」

「わたしはシルフィー

召喚に応じ顕現しました」

確かに面影はある。装備も似ている。

だがどう考えてもおかしい。絶世の美女 いや 絶世の美半神がなぜ少女 いや幼半神に??

ここで俺のストライクゾーンにロリ属性があれば泣いて喜んだらう。

確かによく見ると可愛い。

カードの美女を10歳若くした感じだ。

しかも背中から小さな羽が生えている。

どう見ても普通の人間ではないのでおそらくヴァルキリー 半神なのだろう。

確かに夢にまで見たサーバントだ。

俺のサーバントカードは間違いなく本物だったようだ。

しかし・・・

違う。

俺が10億円と引き換えにしてまで召喚した夢とロマンの美女シルフィーがどこにもいない。

確かにシルフィーという可愛い幼女の半神は顕現した。

だが違うんだ。俺が夢見たサーバントはこれじゃないんだ！。

その瞬間、俺には絶望と幼女のサーバントが残されたのだった。

第3話 シルフィー（後書き）

2話目のPVが1日経ったら1話目の倍以上になっていました。
ページが増えたからかもしれませんが本当にありがとうございます。
ブックマークして頂いた方も本当にありがとうございます。

第4話 シルフィーの力

幼女シルフィーが顕現して、俺は叫んだ「俺の10億返せー!!!」

ゲスい自分が呪わしい。

ダンジョンからタイムマシンがドロップしないだろうか？

どうにかして5分前に戻れないだろうか？

夢とロマン？厨二夢??なんだそれ。

俺は頭がおかしくなったのか???

一般家庭に生まれたLV3のモブの俺が人生の選択を間違えた・・・

どうしてこうなった・・・

5分前の頭のおかしい俺が10億円のかわりに選択したのはシルフィーだ。

俺のサーバントだ。

シルフィー それは俺のサーバントの『幼女』だ。

俺はお金と夢とロマンを追いかけていた探索者のノーマル高校生だ。決して幼女趣味は無い。

No ロリータ Yes バイバイ

言い知れぬ後悔と虚脱感が襲ってきたが、もはや後の祭りだ。

「ご主人様　どうかしましたか？」

シルフィーの声に我に帰った。

もうどうしようもない。召喚してしまったものは仕方がない。幼女と言えどもサーバントには違いない。

俺は気をとりなおし「スライムを狩りに行くぞ」と声をかけた。

そのあとすぐにスライムに遭遇した。

普段は1時間に1匹程度の遭遇確率だが今回は10分程度で遭遇した。

もちろん偶然ではなくシルフィーの能力によるものだ。　スキルではないようだ。がモンスターの気配を察知できるようで

「ご主人様こつちです」と誘導された先にスライムがいた。

俺はシルフィーに「一人で倒せるか？」と聞いたが「もちろんです」と即答だった。

シルフィーはスライムの20m程手前に立つと持っていたミニチュアの槍をスライムに向け『神の雷撃』と叫んだ。

強烈な閃光と轟音が響き一瞬にしてスライムは消失してしまった。

「は？」

完全に呆気にとられた俺はさっきまでスライムがいた地点を凝視してしまった。

「なんだこれ・・・」

幼女の姿の所為でシルフィーのステータスを完全に忘れてしまっていた。

俺のBPは10　その俺でも倒せるスライム　。　シルフィーのBPは170　完全なるオーバークルだ。　BP170　はんぱねーよ。シルフィーさん　はんぱねー。いや半神だからシルフィーさまとお呼びした方がいいのか？

「ご主人様・・・」

「あ、ああ」

「お腹が減りました。」

「はい？」

「お腹が空いて倒れそうです。」

「え？」

「どう言う事だ？」

「スライム1匹倒したらお腹が空いて倒れそう・・・？」

「はじめてスキルを使用した反動だろうか？」

「そつえば以前テレビでサーバントは魔核を摂取して成長すると言っていた気がする。」

「俺はスライムの魔核を拾い

「食べる？」

とシルフィーに渡してみた。

シルフィーが嬉しそうに魔核を手にとると魔核は発光し消失してしまった。

シルフィーも満足したようでニコニコだった。

その後1時間程で6匹のスライムを発見し、シルフィーの『神の雷撃』一発で倒していったが、倒すたびに

お腹が空くようで毎回同じように魔核を摂取してしまった。

どうやらはじめてスキルを使用したからお腹が空く訳ではなく、スキルを使用する度にお腹が空くようだ。

この日はこの1時間だけで俺のスライム討伐レコードとなり計7匹のスライムを狩ることに成功したのだった。

だが、しかし手元に残った魔核は0。即ち本日の探索報酬も0となってしまうた。

10億円ロスト事件のショックやシルフィーの予想外の強さに興奮してしまい、おかしなテンションになっていた俺は討伐レコードにも舞い上がってしまい、事の重大さに気がついていなかった。

スライム討伐7 取得した魔核0というリザルトの意味に。

第4話 シルフィーの力（後書き）

朝起きたら部門日間ランキング61位になっていました。

はじめてのランキングです。

評価、ブックマーク本当にありがとうございます。

今日だけにならないよう頑張ります。

これからもよろしく願います。

第5話 ファーストスキル スライムスレイヤー

俺は翌日からシルフィーを連れ、1階層をくまなく回った。

1時間で大体6匹を仕留めることが出来た。

3時間程で20匹ものスライムを狩ることが出来た。

3日連続で20匹のスライムを狩り3日で60匹にのぼった。

全てシルフィーの『神の雷撃』によるものだ。

3日間の60匹にのぼるスライム狩りのリザルトは魔核0だ。

4日目の今日になってようやく冷静に考えることが出来るようになってきた。

この3日間シルフィーがスライムを1匹狩る毎にスライムの魔核1個を摂取している。

という事は……

考えるまでもなくいつまでたっても1円も手に入らないのである。

やばい。

このままではまずい。

人間、舞い上がると皆バカになるのだろうか？

それとも俺だけがバカなのだろうか？

いずれにしてもまずいので俺は考えた。

死ぬほど考えたらあっさり答えが出た。

シルフィーにスライムを探知してもらい、攻撃は必殺の殺虫剤ブレスを俺がお見舞いする。

華麗なる連携技で時間あたり6匹を狩ることがコンスタントに出来た。

それから毎日スライム狩りに励んだ。

2年間も一人で狩り続けていたのだ。

サーバントとはいえ、誰かと一緒に行動できることが嬉しくて仕方がなかったのだ。

狩って狩って狩りまくった。

約3ヶ月毎日ダンジョンに潜り 放課後約3時間スライムを狩り続けた。

連携が更に向上し、狩りの効率もアップして3ヶ月で狩ったスライムは1000匹に届こうとしていた。

いつもの通り狩りを終えてからステータスを確認すると

なんと、なんと、ついに、念願のスキルが反映されていた。

「うおー ついに 俺にも スキルが。モブステータス脱出だ!!」
内容をよく確認もせずスキルの欄に表示があるだけで反射的にテンションマックスになってしまった。

落ち着いて確認してみた。

高木 海斗

LV 4

HP 14

MP 4

BP 12

スキル スライムスレイヤー

スキル スライムスレイヤー?

そのままじゃないか。

なんのひねりもない。

そもそもそんなスキル聞いたこともない。なんか意味あるのか？

スライムスレイヤーの部分をもっと意識すると効果説明が出てきた。

スライムスレイヤー・・・スライムとの戦闘を極めた者に顕現する。

効果 スライムとの戦闘時全ステータス

50パーセントアップ。

・・・微妙。

・・・なんか微妙。

・・・あんまり意味ない。

既にスライムは無傷で3000匹も倒しているのだ。

今更ステータスが1・5倍になって何か意味があるのか？

そもそも俺のモブステータス・・・1・5倍になったところでMP
4が6にup・・・

俺は念願のスキルをついに手に入れた。

いわゆるキワモノの外れスキルを。

『チクショー！！！！』

思わず声が出てしまった。

「ご主人様、スキルがあるだけです。さすがです。」

シルフィーが優しく声をかけてくれた。

泣きそうになったが幼女の前で泣くわけにもいかず、グツと我慢して前を向いた。

きっとこのスキルがあれば今以上にスムーズにスライムを狩れることだろう。

文字通りスライムスレイヤーとして生きていける。

明日からも明るいスライム狩りの未来が開けているに違いない。

こうなったらいつそのこと開き直って目指せ世界NO1のスライムスレイヤー！

いやだ。いやすぎる・・・

第5話 ファーストスキル スライムスレイヤー（後書き）

朝起きたら部門別日間ランキング45位まで上昇していました。

本当にありがとうございます。

ブックマーク、評価を頂いた方ありがとうございます。

興味を持たれたらブックマーク、下部からポイント評価お願いします。
す。

第6話 2階層へ

この3ヶ月のリザルトだがスライムの魔核10000個×5000円で50万円 殺虫剤8万5千円差し引き41万5000円
1ヶ月あたりなんと138000円オーバー

やばい。

めっちゃ稼いでる。

月に30000円だった稼ぎが一気に4倍以上になった。

高校生でこんなに稼いでいるのは俺だけじゃないのか？
いや、探索者でもっと上位の高校生も多数いるはず。
他の奴らはもっと稼いでいるのか？

とりあえず、どうしよう。

41万5000円 人生17年史上 最高の貯金額となってしまう。
った。

何に使おうか考えて見たが、基本、俺の生活は学校に行くかダンジョンに潜るかしかない。
特に金のかかる趣味もなければ、金のかかる彼女がいるわけでもない。

2人しかいない友達も学校以外で遊ぶ事はほとんどない。

つまり使い道がない。

であれば貯金すればいいのだが、せつかく手に入った大金。何かに使ってみたい。

札束で大人買いしてみたい。特に買うものも思いつかないが・・・
結局 俺は探索者マーケットに向かう事にした。

この3ヶ月で自信をつけた俺は一つの決心をしていた。

明日から2階層へチャレンジしてやる。 以前死にかけたあの2階層へ。

考えるだけで冷や汗が出てくる。 魂に刻み込まれたゴブリンのパンチ。

体が

心が

魂が

悲鳴を上げている。

二度と会いたくない あの絶対強者ゴブリン
できることなら俺の人生から排除してしまいたいが、このままずっとスライムを狩り続けるのは辛い。

ようやく稼げるようになってきたけど、やっぱり辛い。 精神的にキツイ。 毎日の反復作業に飽きてきてしまったのだ。

贅沢な悩みなのはわかる。わかるが、サーバント持ちで1階層をホームグラウンドにしているのは世界中で多分俺だけだと思う。

本当はもっと早く2階層へ行くべきだったと思う。

しかし魂レベルに刻み込まれたゴブリンの恐怖とモブ根性丸出しで今まで避け続けた。

でもサーバントカードを召喚した時の夢とロマンの厨二夢が病気のように、また出てきてしまった。

出てきてしまったら治らない。

何しろ10億円の誘惑にも勝った病気なのだ。

行きたくないけど、どうしても行ってみたい。まだ見ぬ階層へ。

という事で購入するものは既に考えている。

シルフィーは2階層でもたぶん大丈夫。となると大丈夫ではないのは俺だ。

L V 4のモブである俺は間違いなくゴブリンより弱い。シルフィーが何かあった時に、俺はまた死ぬ可能性がある。

なのですぐに死なないように防具を買いたい。

何がいいか全くわからず適当に見ていたが、とにかく高い・・・鎧タイプになると数百万はあたりまえ。数千万円もザラである。

ちよっと大金が入ったので、舞い上がってなめていた。ダンジョン用品は思った以上に高かった。

仕方がないので店員のおっさんに

「予算は30万ぐらいまででいい防具なにか無いですか？」

「どの部分だ？」

「できれば全身」

「無理だな」

「え・・・無理って・・・」

「全身だと最低でも0が一個違っぜ。」

「あーそんな感じですか。」

「にーちゃん初心者か？」

「あー まー そうです。」本当は2年以上キャリアがあるが。

「1階層か？」

「いえ2階層に行ってみようと思ってるんで」

「それならスチール製の盾だな」

「盾ですか」

「ダンジョン用に補強されてぴったり30万だ。うまく使えば全身守れるぜ。」

「見せてもらってもいいですか？」

すぐにおっさんはバックヤードから盾を持ってきてくれた。

70cm程度の四角い盾だった。あんまりかっこよくはないが持ってみたら思ったより軽かった。

選択肢がないので思い切って購入した。

「ゴブリンやスケルトンぐらいの攻撃なら十分防げるぜ。あいつらの持っている武器にもよるがな」

おっさんのアドバイスとも脅しとも取れる発言を後に俺は早速ダンジョンに潜った。

「シルフィー、今日はいつものスライム狩りじゃなく、2階層へ行

くぞ。」

「かしこまりました。はじめての2階層ですが、がんばりますね。」

「頼りにしてるからな。」

「ありがとうございます。」

いつもと違う俺。

スチール製の盾を持った俺だ。

ついに2階層へ向った。

覚悟を決めて降りたらずくに絶対強者ゴブリンに遭遇した。

第6話 2階層へ（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。

皆さまのおかげで部門別日間ランキング32位にまで上がる事が出来ました。

ブックマーク、評価いただいた方は本当にありがとうございます。

気がついたらまだ投稿から一週間経っていないにも関わらず週間ランキングにも入っていました。

一週間本当にありがとうございます。

初の感想も頂きました。全部にありがとうございます。

興味を持たれた方はブックマーク 下部からポイント評価お願いします。

第7話 最強ゴブリン戦

2階層の階段の直ぐ側にゴブリンがいた。

心臓が止まるかと思うほど焦った。覚悟をしていたつもりだったが、ボコボコにされて死にかけた記憶がフラッシュバックして動けなくなってしまうた。

む、無理だ。

おしっこちびりそう。

全身から変な汁が出てくる。

顔面蒼白になりながらガタガタ震えがきてしまった。

まだ俺には早すぎた。今なら1階層に上がれば間に合う。なんとか逃げ切らないと死ぬ。

そんな事をゴブリン遭遇の一瞬で考えていた俺にシルフィーが

「ご主人様、大丈夫ですか？　どうかしましたか？体調でも悪いのですか？」

と心配して声かけてくれた。

幼女の声はどこまでも優しく、癒しの響きを持っており、恐慌状態にあった俺のメンタルを立て直すのに十分なだけのヒーリングパワーを秘めていた。

正気に戻った俺は

「大丈夫だ。ゴブリンは俺に任せとけ」

と幼女相手に大見得を切ってしまった。

幼女とはいえ俺にとつて母親以外で唯一接点のある異性である。

もちろんロリコン趣味など一切無いが、3ヶ月毎日のように一緒にスライム狩りをしたせいか、シルフィーの

戦闘力に尊敬の念と 妹に対するような肉親の情のようなものが湧いてきていた。 残念ながら本当の妹はいたことがないが。

見得の一つや二つ切つて当たり前だ。

ここで男を見せなくていつ見せるんだ。

「今だろ ！！！」

俺はやめとけばいいのにゴブリンに向かって

「かかって来いやー！！！」

と大声をあげて向かつて行った。

俺の武器は中学の修学旅行で自分用のお土産に買った1500円の木刀

それと今日買った30万円のスチール製の盾だ。

「うおー！！！」

大声をあげていないと恐怖におしつぶされそうになりながら全速力で突進していった。

喧嘩なんか小学校以来していない。

格闘技の経験も一切無い。

ダンジョンには2年以上潜っているが殺虫剤でスライムを狩る毎日。対人型の戦闘経験は全くない。

それでも突進した。
20m程の距離が100m以上あるような錯覚を覚えながらスチール製の盾でぶつかった。

コンクリートブロックにでもぶつかったような衝撃があったが、それでも全身全霊で押し込んでいった。

スチール製の盾越しにゴブリンの荒い息遣いと、怒り狂ったようなプレッシャーを感じる。

幸い武器を所持していない個体のようで、ガンガン 恐怖のゴブリンパンチを盾に向け浴びせてくる。

俺は、よろめきながらも耐え、攻撃するべくタイミングを見計らっていた。

呼吸の為か一瞬ゴブリンパンチの嵐が止まったので、ここしかないと思い、思いつき振りかぶって野球のバットの要領でゴブリンの頭に木刀をクリーンヒットさせた。

ヒットさせたが、まるでタイヤを殴ったような感覚があり手が痺れた。

肝心のゴブリンは「ギィヤー」と悲鳴？はあげて痛がってはいたが、ほぼノーダメージのようだった。

「ま、まじか！？」

絶好のタイミングからの渾身の一撃だった。

この一撃以上のダメージを与えることはLV4のモブである今の俺にはできない。

この一撃にかけていた。

それが崩れた今、俺のチキンハートを再び恐怖が襲ってきた。

やばい。逃げるか。 いや シルフィーにやってもらうか。

またクズの考えがよぎった瞬間、『男のプライドさん』が戻ってきた。

恐怖を抑え込む為にやってきた。

何がなんでもやってやる。 かつこ悪くてもやってやる。

「グアーガアー！！！」

人生で一度もあげたことのないような雄叫びをあげ、再び盾で押し込んだ。

パワーは明らかにゴブリンが上。今の状態は長くは続かない。

盾越しにゴブリンを観察したが、腰蓑しか身につけていないし、ゴブリンに性別があるのかよく知らないが、多分こいつはオスだ。

頭を狙っても効果が薄いのであれば、頭以上の急所を狙うしかない。ぱっと思いつくのは、目、鼻、そして腰蓑の中のもの。

一番ヒットしそうなのは腰蓑の中のものだ。

オスであるなら生物である以上モンスターであろうが、ただで済むはずがない。

やってやる。

完全に変なスイッチが入った俺は、再び押し合いの中タイミングを見計らっていた。

先程と同じ様に呼吸の合間を見計らって俺は、盾を投げ捨て木刀の一撃にかけた。

今度はやったこともないゴルフの要領で玉に向かって渾身のスイングをお見舞いしてやった。

「グシヤ」

という嫌な感触が伝わってきた。

今度はゴブリンの雄叫びはなく、これでもダメなのか？

盾も手放したしもうこれ以上は手がない。

猛烈に焦りながらゴブリンに追撃。

もう一度同じ場所に渾身の一撃をお見舞いしてやった。

今度も十分に手ごたえがあったが、ゴブリンは反応しなかった。

やはりダメなのか・・・

絶望の念で意識が飛びそうになった次の瞬間　なんとゴブリンがぶつ倒れた。

ぶつ倒れたと思ったら消失した。

ついにやった。やってやった。

「うおおー!!!」

今度は勝利の雄叫びをあげた。

多分戦闘時間は30秒もないぐらいだったかもしれない。だが俺にとっては永遠にも感じる30秒間だった。

人生、いや命そのものをかけた30秒だった。

次も同じことをやれと言われてもできない。

ゴブリンが武器を持っていれば勝てなかったかもしれない。

アニメのヒーローの様なカッコいい勝ち方ではない。

生にしがみついた苦し紛れの一発によるギリギリの勝利だった。

悪役が使う様な手で勝った。

でも俺は勝った。ついにあのゴブリンに勝った。

この感動をみんなに伝えたい。

感激の嵐と自己陶醉MAX中に俺の女神の声が

「ご主人様。カッコ良かったです。でも次からは私も一緒に戦わせてくださいね」

ああ・・・やっぱりこの少女は紛れもない女神だ。
心のオアシスだ。

頑張ってよかったと心から思える。

今度シルフィー教を世界に流布せねばと真剣に考えてしまった。

第7話 最強ゴブリン戦（後書き）

序盤のクライマックスのつもりです。

7話目にしてようやくまともな戦闘シーンとなりました。

読者様に評価頂けると嬉しいです

ブックマーク、ポイント評価していただいた方、本当にありがとうございます。
ございます。

よろしく願います。

第8話 ゴブリンスレイヤー（仮）

二度目の2階層に潜ったその日、俺はゴブリンを倒した。
ついにスライムスレイヤーを返上する時が来た。

俺の今のステータス

高木 海斗

LV 5

HP 16

MP 5

BP 14

スキル スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

NEW

「おおっ」

なんと先程の戦闘でレベルが上がり、ついにLV5 となった。
スライム1000匹倒して1しか上がらなかったレベルが、たった
1体のゴブリンを倒しただけで上がってしまった。

ゴブリンがスライムの1000倍強いと言っわけではないと思うが、
ここらへんの理屈はよくわからない。

俺はLV5までに2年以上かかったが、個人差が大きくあるようで、
探索者になってから1ヶ月程度でLV5になったとか、半年足らず
でLV10になったという話も聞こえてくる。

もしかしたら俺は最遅のLV5到達者かもしれない。

ただし、探索者登録をした者の内の半分程度はLV2までで、やめ

てしまう。

俺と同じように、2階層の壁に阻まれ、スライムをいくら倒しても小遣いにもならない。

なので、かなりの数の探索者が、2階層に潜るのを諦め脱落してしまっただ。

同時期に探索者になったクラスメイト達も、殆どが脱落して、コンビニ店員等にクラスチェンジしている。

それを考えると2年以上スライムを狩り続け、LV5まで到達した俺は、ある意味すごい。

そしてこの度、新しいスキルが出現していた。

「こ、これは」

「ま、まさか」

スキル　ゴブリンスレイヤー（仮）

読んで字のごとくゴブリンに対して補正がかかると思われるが

『（仮）ってなんだよ』

俺は　ゴブリンスレイヤー（仮）　を意識して　説明を見た。

ゴブリンスレイヤー（仮）・・・ゴブリンに対する死の恐怖を克服し、1人で勝利した者に与えられる。

ゴブリンとの戦闘時全ステータス10パーセントUPの補正がかかる。

（仮）・・・偶然による

勝利の為（仮）となり本来のスキルよりも格段に効果が

落ちる。

うーん。うれしいのは確かにうれしい。ただ補正が10パーセント。

俺のLV5になったステータスBP14がBP15になる……全く強くなった気がしない。

しかも（仮）……

おそらくスキル スライムスレイヤーから推察すると、本来のスキル補正は50パーセントなのではないだろうか。それが（仮）のせいで10パーセントの補正になったと思われる。

説明に 偶然による勝利の為（仮）とある。

確かに偶然勝てたと自分でも思う。

たまたま勝てた。それは間違い無い。

だけど勝ったことには変わりがないはず。

なのに（仮）……

「神様はいないのか？」

「慈悲はないのか？」

いやうちに半神は、いるけどさ。

おそらくスキルを発現している探索者はそんなに多くは無い。少なくとも知り合いの探索者には一人もいない。

一般的にスキルを持っていること自体がレアケースであり、憧れの対象である。

そんな中で俺はLV5にして既にスキルを2つも持っている。

1つでもレアなのに2つも持っている。
ものすごいことだと思う。
スライムスレイヤーについては、聞いたこともないウルトラレアス
キルだ。

取得条件が特殊すぎるため、世界で俺だけのオンリーワンスキルの
可能性が高い。

ゴブリンスレイヤーも同じくあまり聞いたことがない。
こちらも取得条件が理由だろう。

普通、死の恐怖を感じたら諦める。もしくは複数人数で挑む。
なので、こちらも取得条件を満たす探索者はレアケースだと思われ
る。

LV5にして スキル2つ持ち。

言葉の響きだけ聞くと カッコいい。

なんか、これから英雄になる探索者の初期設定っぽい。

だが、しかし スキル スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

全く凄そうではない。

どちらもほぼ役に立たないクズスキル。

いつの日にかスキル昇華なんかして役に立つ日が来ないだろうか。
たぶんこないだろうな……

第8話 ゴブリンスレイヤー（仮）（後書き）

いつも読んで頂きありがとうございます。

日間pvが2000となりました。

本当にありがとうございます。

興味を持たれた方はブックマーク 下部からポイント評価お願い致します

第9話 再び2階層へ（前書き）

本日2話目です

よろしくお願いします。

第9話 再び2階層へ

はじめてゴブリンを倒しゴブリンスレイヤー（仮）のスキルを手に入れた翌日、俺は学校もダンジョンも休んだ。

別に病気になったわけではないが、全身筋肉痛でベッドから起き上がれなかったのだ。

昨日のゴブリンとの戦闘で、いわゆる火事場のばか力を発揮した反動だろう。

全く動けなかった。

母親に学校に行くよう叩き起こされたが無理だった。

トイレに行きたくなった時には泣きそうに焦った。

限界まで我慢したが尿意が限界を超える瞬間、俺の肉体も限界を超えた。

文字通り床をはってトイレまでたどり着いて事なきをえた。

丸一日ベッドの住民となり次の日 若さとLV5のステータスのおかげか、動けるようになったので

学校に行くことにした。

授業が終わり、まだ本調子ではないので、少し迷ったが俺はまたダンジョンに潜った。

ほとんど病気かもしれない。

スライムを数匹狩りながらまたゴブリンが待つ2階層へと来ていた。先日の約束通り 今日シルフィーにも戦闘に参加してもらった。した。

「シルフィー、頼むぞ！ ゴブリンを見つけたら速攻で神の雷撃をかましてくれ」

「かしこまりました。ご主人様」

シルフィーはモンスターをいつものように探知して誘導してくれた。5分ほどでゴブリンを発見した。

よく見ると今度のゴブリンは武器を持っている。恐らくショートソードと呼ばれる武器だろう。

俺では絶対に勝てない相手だ。

「シルフィー頼んだ」

「はい」

シルフィーは少し近づき

「神の雷撃」

「ズガガガン」

「あー。こうなるか。」

ゴブリンは跡形もなく消えていた。

俺が絶対に勝てないであろう武器持ちゴブリンが瞬殺である。

「ご主人様お腹が減りました」

こここのところシルフィーを戦わせていなかったのを忘れていたが、これがあった。

俺はゴブリンの残された魔核をシルフィーに渡し、摂取させた。

その後3時間程で15匹のゴブリンをシルフィーの一撃で狩ったが、LVは上がらずだった。

魔核も、もちろんシルフィーが殆ど全部摂取してしまったが、なぜか4つだけ残された。

家に戻ってから今日の事を考えていた。

まずLVが上がらなかつた件だが1匹倒しただけでLV が1上がったのに今日は15匹倒して全く上がらなかつた。

これは恐らくLVアップに必要な経験値的なものが増えたのもあると思うが、別の可能性がある。

もしかして、サーバントが倒した経験値は俺には還元されないのではないか。

もう少し様子を見ないと、はっきりとはわからないが、なんとなくその可能性が高い気がする。

もう一つ。

何故か魔核が4つだけ残つた理由だ。

これは恐らく魔核のサイズの問題だろう。

今日ダンジョンギルドにゴブリンの魔核を売りに行ったら1個700円で売れた。

単純にゴブリンの魔核の方が少しだけ大きいのだ。

小指の爪ぐらいのスライムの魔核に対し、ゴブリンの魔核は薬指の爪より少し小さいぐらいなのだ。

恐らくシルフィーの 神の雷撃がちょうどスライムの魔核1個分ぐらいの燃費なのだろう。
なので複数回 雷撃を使用しているうちにゴブリンの魔核のサイズ分だけ魔核が残されたのだと推察できた。
これについてはまず間違いないだろう。

戦闘中のステータスを確認したことがなかったが、スキルを使用するとMPが消費されるはず。
今度シルフィーが、神の雷撃を使用した時にMPの変化を見ておくか。

今まで一撃で倒してきたので気にしていなかったが、あれだけの威力なのだ。

無限に使用できるはずが無い。

いざという時のために明日しっかり確認しておこう。

本日のリザルト	ゴブリンの魔核4個×700円	で280
0円だった。		

第9話 再び2階層へ（後書き）

いつも読んで頂いてありがとうございます。

はじめての1日2話投稿です。

ブックマーク 下部からポイント評価していただけると頑張れます。
よろしく願いします。

第10話 2匹目のゴブリン

翌日学校から帰ってすぐにダンジョンに潜った。

昨日の考察を検証するためだ。

まずはシルフィーの 神の雷撃の燃費と 使用回数の確認だ。

「昨日と同じように、ゴブリンを探して神の雷撃で倒してみてくれ。」

「かしこまりました。」

すぐにゴブリンと遭遇したので

「神の雷撃」「ズガガガン」

昨日と全く同じ光景が目の前に広がっていた。

俺は急いでシルフィーのステータスを確認する

種別 ヴァルキリー

NAME シルフィー

LV 1

HP 120

MP 80 / 90

BP 170

スキル 神の雷撃 鉄壁の乙女

装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

思った通りMPが減っていた。10減っているので最大で九発撃て

るといふことなのだろう。
昨日と同じように

「お腹が減りました」

といつてきたのゴブリンの魔核を与える。
再度ステータスを確認すると

種別 ヴァルキリー
NAME シルフィー
Lv1
HP 120
MP 89 / 90
BP 170
スキル 神の雷撃 鉄壁の乙女
装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

思った通りMPが9回復していた。
サーバントにとって魔核はマジックポーションのようなものなのだろう。

大量に魔核を持ち歩けば無制限にスキル使用ができるのかはまた今度検証することにした。

次にレベルアップだ。

昨日はゴブリンを15匹狩ったがレベルアップすることはなかった
ので、とにかくシルフィーにゴブリンを
狩り尽くしてもらおうことにする。

途中初遭遇のスケルトンも出てきたがシルフィーの 「神の雷撃」
「ズガガガン」で瞬殺だった。

今日も15匹を狩り 3800円を手に入れた。

それから一週間同じように狩り続け100匹以上撃退したが予想通りLVが上がることはなかった。

おそらくサーバントが倒した場合俺に経験値が一切入ってこない。

となれば、試してみる選択肢は2つ

一つは前回と同じように俺一人でゴブリンかスケルトンを倒す。

これは間違いなく経験値が入り、そのうちLVアップするとは思いますが、前回勝てたのは、まぐれだ。二度目は無い。

なのでこれは実質、手詰まりだ。

もう一つの選択肢はサーバントとの共闘である。

どの程度俺が参加すれば良いかは不明だが、経験値が俺にも入ってくる可能性がある。

現実的に選択できる唯一の方法である。

もうやってみるしか道はない。

ただし今の15000円の木刀ではあまりに厳しい。

こここのところ殆ど稼げていないので、以前の稼ぎの残りの10万しかないが、これで武器を揃えるしかない。

ひとまず俺はダンジョンを切り上げてシールドを買ったマーケットに向かった。

前回と同じおっさんを見つけ

「こんにちは。10万円まででゴブリンかスケルトンにも通用する武器は、なんかないですか？」

「ゴブリンに初心者でもいけるのはピストルクロスボウガンだな。

ただスケルトンには効かねーから超硬質タングステンの棒も必要じゃねーか？」

「両方で10万円で足りませんか。」

「クロスボウの矢を20本付けて10万で足りるぜ。」

「わかりました。お願いします。クロスボウの使い方がわからないんですが。」

「簡単だ。矢をセットして狙いをつけてトリガー引くだけだ。一応射程は10mから20mだが慣れるまでは5mから10mぐらいからじゃないとなかなか当たらないぜ。」

「ありがとうございます。助かりました。」

お金を支払ってすっからかんになった俺は再びダンジョンに戻ってレベルアップの検証をすることにした。

シルフィーの「神の雷撃」はオーバークイルすぎて共闘のしようがない。

となると今まで試したことのないもう一つのスキル「鉄壁の乙女」を使用してみるか。

「シルフィー 次に敵を見つけたら『鉄壁の乙女』を使用してみてくれ。」

「はい。かしこまりました。ご主人様」

5分足らずでゴブリンに遭遇したので

『鉄壁の乙女』

シルがスキル名を言った瞬間　シルフィーの周囲2mほどが淡い光に包まれた。

ゴブリンがこちらに気付いて攻撃しようとしてくるが、光の壁に阻まれて全く効果が無いようだ。

光の円の中にいる俺にも効果があるようだ。

これは、いわゆる防御系スキルだな。

問題は効果時間と中から外に向かって攻撃可能かどうかだ。

「試してみるか。」

まずは効果時間

「効果が切れたらもう一度かけ直してくれ。」

「かしこまりました。」

とりあえず何もせず効果が切れるのを待つてみる。

ちようど1分ぐらいで光の円が揺らめいて効果切れた。

間髪入れずに『鉄壁の乙女』を発動すると再び光のサークルが発生する。

継続時間はおよそ1分だな。

次に光のサークルの中からゴブリンを攻撃してみる。

まずは安全の為近づかずにボウガンで打ってみる。

「ギャー！」

なんと腹に刺さってしまった。

慌てて3連射した。

あっさり頭と肩に刺さってゴブリンは消失してしまった。

「え！？ まじで・・・」

2匹目のゴブリン狩り。嬉しいか嬉しく無いかと言われたら勿論嬉しい。

だが、しかし、ちょっと前に 命までかけて倒した相手がこんなにあっさり倒せていいのか？

俺の覚悟と努力は一体なんだっただろう・・・

2匹目の最強ゴブリン狩りは 俺の中でゴブリンが最強ではなくなった瞬間であり、嬉しさとやるせなさの混在した なんとも言えない奇妙な後味を残した。

第11話 レベルアップ(前書き)

第11話 レベルアップ

俺はその後シルフィーの『鉄壁の乙女』の庇護のもとゴブリンを順調に狩っている。

気になる『鉄壁の乙女』のMP消費は5だった。

『神の雷撃』の半分なので、シルフィーの魔核摂取も半分で済んでいる。

あまりに簡単にゴブリンを倒すことができるので、調子に乗った俺は、ボウガンがあれば一人でも倒せるんじゃないかとやってみた。

「シルフィー 今度のやつは、俺一人で狩るから手を出さずにおいてくれ」

「かしこまりました。」

俺はボウガンをあらかじめセットして再度ゴブリン戦に臨んだ。見つけたゴブリンに気づかれぬよう、少し遠目の20mぐらいから狙いをつけてボウガンの矢を発射。

見事に腕に命中したが、こちらに気付いたゴブリンが

「グギャー！ ギャー！！」

と怒り狂って突進してきた。

焦って連射するが、当たらない。

焦っているのもあるが、動くターゲットは全く別物だった。全く当たらない。

あたふたしているうちにゴブリンは目の前まで迫っていた。迫り来るゴブリンにまた死を覚悟してしまった。

『やばい！今度こそ死んでしまおう！！』

そう思った瞬間、悪あがきで放ったボウガンの矢が、目の前にいたゴブリンの胸に命中した。

怯んだゴブリンを見て、冷静になる間も無く、矢で追撃するとゴブリンは消失した。

「ふーっ」

大量の冷や汗が出ているが一息つくことができた。

「ご主人様 さすがです。 かつこよかったです。 次もお一人で狩りをされますか？」

一切の嫌味を含まない純粹なるシルフィーの声。

俺は先程の戦闘で破れそうな大きさになった心音を、引きつったポーカーフェイスもどきを使い、誤魔化しながら

「うーん。一人で狩るのは満足したから、次からはやっぱり2人で狩ろう。1人より2人の方が楽しいだろ。一人で狩るのもいいけど、やっぱりシルフィーと一緒に一番だな。」

「そんなに私のことを思ってくださっているんですね。嬉しいです。」

今までにないような、弾けるような声と笑顔でシルフィーの返事が返ってきた。

……その笑顔が辛い

・・・心が痛い
・・・魂が痛い
・・・俺はやっぱり　クズだ

死にたくなるような罪悪感を感じながら

「あたりまえだろ。シルフィーの事が一番大事だからな。」

「ありがとうございます。これからもがんばります。海斗様のご主人様で本当によかった」

・・・その笑顔が眩しすぎる
・・・眩しくて目が潰れそうだ
・・・その声で耳も潰れそうだ
・・・神罰がくだるかも

シルフィーと一緒にだともあまりに簡単に倒せるから、ちょっとは自分が強くなったような錯覚をおこしていた。

やっぱり俺はモブでゴブリンは強かった。

これからは調子に乗らずに、シルフィーさんを頼りに地道に頑張ろうと決心した。

それから俺は同じやり方で10匹ほど倒した。
そして遂にその時はきた。

俺は遂にレベルアップした。

高木 海斗

L V 6

HP 18

MP 6

BP 16

スキル スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

装備 スチールシールド

ピストルボウガン

タンクステンロッド

今度は特にスキルが顕現することはなかったが、ついにLV6だ。探索者を初めて2年間でLV1からLV3に 2つしか上がらなかった。それがシルフィーと一緒に狩りをするようになってまだ4ヶ月程度なのに、既にLV3からLV6に3つも上がった。

俺の中では劇的に探索者ライフが変化した。シルフィーを顕現させてから、既に2回も死にかけたけど、俺にとって憧れだった 夢とロマンの探索者ライフが少しだが送れる気がする。

未だ英雄になれる気は、残念ながら一切しないが、万年スライムスレイヤーだった俺が今はゴブリンスレイヤー（仮）になっている。

今までにない手ごたえと充実感にあふれている。本当にシルフィーと出会えて良かった。

シルフィーは今のところ俺にとって女神様だ。

10億円ロストの衝撃は未だ完全に癒えてはいないが……

「ありがとうシルフィー」

心からの言葉が自然と口をついた。

第12話 レアモンスター

今日も放課後に、シルフィーの庇護下のもと、2階層で狩りに来ている。

先日の反省を活かして、全面的にシルフィーを頼っている。知らない人を見ると、ちょっと情け無く見えるかもしれないが、そんなのは完全無視だ。

おかげで、順調に狩りをすすめることができている。

途中珍しく、他の探索パーティと遭遇した。

3人組パーティで俺と同じ年か、少し上ぐらいに見えるがゴブリンを3人がかりで仕留めにかかっている。

前衛の男がゴブリンを誘導して、中衛、後衛の担当がそれぞれゴブリンの死角に入り、攻撃を伺っている。

30秒程のせめぎ合いの後、死角から一気に攻め立て、勝負は決まった。

見ていて正直うまいと思ってしまった。

勝負に勝った3人は、ハイタッチをして喜んでいる。

目線の合った俺は軽く3人に会釈をして早々に立ち去った。

理由はシルフィーをあまり見せたくないのと もう一つ。

パーティメンバーの中衛と後衛は女性だった。

しかも結構可愛かった。

くそっ。リアル リア充か。

前衛の男も確かに、少しだけカッコ良かった気もするが世の中理不尽だ。

今でこそシルフィーがいるが、2年以上ソロでやってきた俺からすると、完全に敵だ。

くそっ。うらやましい……アオハルかよ。くっ……

ダンジョンでは広さと多岐にわたるルートの所為で他の探索者に会うことはそんなに頻繁にはない。

特に一階層でスライム狩りをしている時には、ほとんど出会わなかった。

2階層に進出して、時々見かけるようになったが、今のうちに、戦闘シーンに出くわしたのは、初めてだった。

3人組なのであまり参考にはならなかったが、人の狩りを見るのは初めてだったので、結構新鮮だった。

俺も、3人パーティになつたら、あんな風に戦うのかなと、イメージが膨らんだ。

もちろんイメージの中の3人目は可愛い女性だ。

次こそ可愛い女性をパーティに入れたい。

幼女ではない同世代の女性を。

そんなバカなことを考えながら、歩いていると 先に 発光する骨、いや発光するスケルトンがいた。

「シルフィー、あれってスケルトンだよな。」

「光ってますけど、スケルトンですね。」

「もしかしたら、金色スライムと同様レアモンスターかもしれない。確実に倒すぞ。」

「かしこまりました。」

「シルフィー『鉄壁の乙女』を使ってくれ」

「かしこまりました。『鉄壁の乙女』」

襲ってきた光るスケルトンは、光の壁で立ち往生している。それをいつもの通り、タングステンロッドでぶっ叩く。

「ガンッ！」

「ぐっ、かたいつ。」

いつもならこの一撃で骨を粉砕できるのだが、鈍い音がして攻撃が通らなかった。

おまけに、手が思いつきり痺れてしまった。

やっぱり普通のスケルトンとは違うようだ。

俺とは完全に相性が悪い。

「シルフィー 『乙女の鉄壁』が解けたら、すぐに『神の雷撃』を頼む」

「かしこまりました。」

いきます。『神の雷撃』」

「ズガガガン」

俺では一切ダメージを与えられなかった、光るスケルトンは、シルフィーの一撃で、跡形もなく消え去っていた。

俺は消失した跡を凝視していた。

シルフィーの時のように、何かドロップアイテムがあるのではないかと思っただからだ。

だが残念ながら、ドロップアイテムらしきものはなく、魔核が1個だけ残されていた。

その魔核を拾い上げると、通常の魔核と違って少し赤みがかっていた。

少しだけ不思議に感じたが大きさも通常のものと同様なので、スキル連発で頑張ってくれたシルへのご褒美に渡した。

シルも満足そうに摂取していたので俺も嬉しかった。

その後、魔核を売るためにギルドに寄った。

いつものように日番谷さんに担当してもらい

「日番谷さん、光るスケルトンって知ってますか？」

「どうされたんですか？」

「いや実は今日、2階層で遭遇して倒したんですよ。」

「高木様。それ本当ですか？」

「もちろん本当ですよ。」

「では魔核をお持ちですか？」

「い、いや。少し赤みがかかった魔核を手に入れたんですが、次の戦闘中に無くしてしまっただけで・・・」

俺はシルフィーに摂取させたとは言えず、とっさに誤魔化した。

「落とされたんですか。赤みがかっていたとの事ですので、まず間違いないですね。」

「何がですか？」

「高木様が倒されたのは、滅多に現れないレアモンスターです。赤みがかつた魔核は通常の魔核と違い特別な価値があるのです。」

「え？そうなんですか。どのぐらいの値段ですか？」

「大変申し上げにくいのですが200万円以上はすると思われま

す。」

「200万円……。」

「また会えるかもしれません。気を落とさず頑張ってください」

「はい……。」

やってしまった。何も考えずにシルフィーに渡してしまった。

俺のばか……

200万円が一瞬で無くなった。

『レアモンスター イコール 高額 『考えれば誰にでも

わかることだ。

俺はなんてばかなんだ。

再起する自信がない……

再び俺がダンジョンに潜る気力を取り戻したのは、それから3日後だった。

第12話 レアモンスター（後書き）

第13話 ランクアップ

俺は今日も2階層に潜っている。

シルフィーと一緒にゴブリンを倒し続けている。

ゴブリンに混じってたまにスケルトンにも遭遇するのでスケルトンも倒しているが、こちらはゴブリンよりも大変だ。

何しろ骨しかないので、クロスボウは当たらないし効果が薄いので、タングステンの棒でぶっ叩く。頭蓋骨を粉砕してようやくロストする。

棒で叩くということは、それだけ近づかなければいけないということだ。

シルフィーの『鉄壁の乙女』に守られてはいるが、時々腕が出てしまう。

昨日は知能の高い個体に、出た腕を狙われてしまい、危うく引きずりこまれかけた。

危なかった。

まだまだ気を抜いてはいけないと、自分自身に誓った。

俺のレベルは3ヶ月の間に なんとLV8となっていた。

高木 海斗

LV 8

HP 18

MP 8

BP 19

スキル スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

LV10も一つの区切りではあるが、それ以上に目指しているのがBP20である。

探索者のLVによるステータスは個人差が大きく、LVはあまり重要視されない。

最も重要視されるのがBPである。

BP20でなんとストーンランクにランクアップできるのだ。

最底辺のウッドランクからの脱却。

俺の夢の中の一つだが、もう目の前の手の届くところまで来ていると実感できていた。

その為この所、いつも以上に気合が入っており、時間も許す限りギリギリまで潜っている。

そしてついにその時がやってきた。

高木 海斗

LV 9

HP 19

MP 9

BP 20

スキル スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー(仮)

「おおー、やった。」

「ついにBP20だぜ」

「おめでとつじげいます。」

「ああ、ありがとう。これもシルフィーが居てくれたおかげだよ。」

B P 170のシルフィーに言われるのは少し照れくさかったが、素直に嬉しかった。

しかし俺のステータスは、LV1毎にそれぞれの数値がほぼ1しか上がっていない。

ファンタジーの王道主人公がほとんど持っている、初期の成長補正らしきものは全く見当たらない。

きっと俺は、大器晩成型の英雄に違いないと望みの薄い期待にすぎるしかない。

LV1の時のBPが10だったので ちょうど倍になった計算だ。

ただあまり強くなった実感は薄い。

単独で2階層のモンスターを倒せるわけでもない。

BPだけではない他のステータスも影響しているのだろうか。

正直そこらへんのこととはよくわからないが、とにかく2年以上かかって、ようやく探索者になった時に目指した当初の目標をクリアした。

俺は、はやる気持ちを抑えきれず、すぐ切り上げてダンジョンギルドの受け付けにランクアップ申請をやりに来た。

「ランクアップの申請おねがいします」

「かしこまりました。そちらでおかけになってお待ちください」

15分ぐらいで呼ばれた。

「高木海斗さま」

「はい」

「ランクアップおめでとございます」

「こちらがストーンランクの探索者識別票になります。」

渡されたた識別票は木製から石製に変わっていた。

「ストーンランクへのランクアップの特典ですが、すべての買取価格が3パーセント割増となります。」

またダンジョンマーケットでの買い物レアアイテムを除き3パーセント割引となります。」

「わかりました。ありがとうございます。」

最底辺から一つ上がったただけなので、正直特典はシヨボイ。シヨボイがそんな事はどうでもいい。

ついに俺は探索者としてランクアップを果たしたのだ。

誰でも登録すればなれるウッドランクからストーンランクに上げられる確率はおよそ4割。

6割の探索者はウッドランクのまま辞めてしまう。

俺は4割の壁をやぶったのだ。

4割と言えば、真ん中の5割より1割も上位という事だ。

四捨五入すると探索者全体では上位といっても過言ではない・・・はず。

たかが下から2つ目のストーンランクではあるが、俺にとっては2年以上にわたる探索者ライフの存在証明のようなものだ。

まさにプライスレスな価値がある。

ストーンランクになったからといって明日から何も変わらない。別に強くなったりわけでもなんでもない。

それでも俺は明日からストーンランクの探索者として生きていく。

第13話 ランクアップ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

皆様のおかげで昨日は総合日間ランキングに留まることができ、少しですがランクアップすることが出来ました。

本当にありがとうございます。

読者の方の ブックマークとポイント評価で頑張れています。

興味をお持ちになった方はブックマークとついでに下部からのポイント評価をお願いします。

第14話 学校生活

今日も俺は学校に来ている。

俺の通っている高校は、まあ普通ぐらいの難易度の高校だ。結構人数は多くて1クラス40人で10クラスある。

成績順に1組から順番にクラスが分かれており、俺は4組。4組の中でも中間ぐらいの成績だ。

毎日探索者として潜っているわりには、頑張っている方だろうと自分では思っている。

朝クラスについて、自分の席について友人と呼べる2人、大山真司 と 水谷 隼人の2人にだけ、

「おっ」

と声をかけ 二人からも

「「おっ」」

と返ってくる。

よくスクール物にあるような 教室に入ると同時に全員に「おはよう」 と声をかけるような爽やか青春キャラではないが、全くのボツチの陰キャラでもない。

良くも悪くも目立っていない。

クラスメイトA的なポジションの俺だ。学校でも 正にモブスタータス通りのポジションだ。

学校の授業は結構真面目にノートを取って聞いている。

流石の家では勉強しないので、学校では真面目にやらないとテストがやばい。

探索者をする条件で親から学年200位以内という条件を課されているからだ。

昼休み、真司と隼人の3人で昼飯を食べるのが日課となっているが

「海斗、探索者の方はどんな感じ？」

「うーん。まあまあだな。」

「まあまあか。スライムいっぱい倒してんの？」

「いや。スライムは卒業したよ。」

「え？探索者やめたのか？」

「違うって。2階層でゴブリンとスケルトン狩ってるんだって。」

「えー！？ まじで？」

「うん。まじ」

「おまえすげーな。おい」

「どっやって倒したんだよ。」

「いやまあ、実力だよ。」

「は？何言ってるの？」

真司も隼人も俺と同じ時期に探索者になったが、2人とともに1階層で挫折して、半年で辞めた経緯を持つので、俺が探索者を続けている

ことに、半分呆れて半分はリスペクトしてくれている。
なので、ある程度、以前までの探索者としての俺の状況は把握して
おり、2階層へのジャンプアップは半信半疑なのだろう。
俺もシルフィーの事は、なんとなく言い難いので、ぼやっとさせな
がら答えてしまっている。

数少ない友達の2人であれば、伝えても多分大丈夫だとは思うが、
ゴツズ系のサーバントカードの所持者とはあまり知られたいもので
はない。

おまけにサーバントが、可愛い幼女とくれば、周りに知られれば、
どんな噂が立つか、考えただけでも恐ろしい。

モブキャラどころか、社会的に抹殺される危険性がある。
少なくとも学校での今の俺のポジションは吹いて飛んでしまうだろ
う。

「そんなことより、彼女欲しーなー」

「またそれか。普通に無理でしょ。」

「無理じゃないって。」

「ただでさえモテないのに年中ダンジョン潜ってたら絶対無理でし
よ。」

「ぐっ」

ちなみに俺たち3人も彼女はいない。

というか人生イコール彼女のいない年数の3人だ。

モテないからと言って、女性の興味がないわけではない。むしろ年
相応以上に興味はあり、好意を寄せる子もいる。

「葛城さん かわいいなー」

「さつきちよつと俺の事見てたんだよなー」

「ないない」

「完全に妄想入ってるな」

「葛城さん彼女になってくれないかなー」

「それは絶対はない」

と、いつもの不毛な会話が続く。

俺は葛城春香 さんの事が好きだった。 葛城さんとは小学生から同じ学校で、何度かクラスも一緒になった事がある。 広義的に言えば幼馴染と言えなくもないが、特別仲が良かった訳ではないが、小学校の低学年の頃はそれなりに会話もあった。それが思春期に近づくにつれて全く話さなくなった。

ただ、小学校の5年生の時に起こった衝撃的な出来事を経て、今は完全に惚れている。

あくまでも、陰ながら、一方的にだが。

決してストーカーではない。

葛城さんは彼氏がいたことはないはずだが、結構人気がある。

時々告白されているが、付き合っていないようだ。

もしかしたら俺の事を待ってるのか？

なんていう少し気持ち悪い妄想もはいつているが

高校生活もあと半分になってしまった。

今のところ告白する勇気も接点もないが、なんとかならないものか日々考えている。

探索者としてゴブリンスレイヤー（仮）にランクアップできたように、私生活でもランクアップできないものだろうか。

ランクアップアイテムである私生活でのサーバントカードが欲しい。実際にはそんなものありはしないのだが。

夢とロマンの探索者として成功して英雄になりたいのと同じぐらい葛城さんと付き合いたい。

ダンジョンライフでは、すでに命をかけた絶対に負けられない戦いを経験済みに、スクールライフでは一切命をかける戦いをする素振りも、勇気もない俺だった。

以前は、ダンジョン2階層に行けたら告白しようとか心に決めていた。2階層に到達した今は、3階層に到達したら今度こそ告白しようとか心に決めている。

第14話 学校生活（後書き）

いつもありがとうございます。

日間総合125位 ローファンタジー11位までランクアップできました。

今までブックマーク ポイント評価いただいた方々本当にありがとうございます。

これからもよろしく願います。

ブックマーク 下部からのポイント評価をいただければモチベーションにつながります。

よろしく願います。

第15話　LV10の奇跡

ストーンランクになってからモチベーションが一気に上がり、今まで以上にダンジョン探索にのめり込んでしまっている。

もうダンジョン中毒かもしれない。

中学生の頃に VRゲームにハマった感覚に近い。

寝る間を惜しんでもやりたい。 やってないとダンジョンのことはかり考えてしまう。

もはや、ほとんど病気だ。

レベルアップやランクアップ、スキルの発現やサーバントの存在など今までになかった事の連続で、正直楽しくて仕方がないのだ。まるでゲームの主人公にでもなったような錯覚を覚えてしまう。

のめり込んで1ヶ月以上潜っているが、残念ながらレベルアップはしていない。

あと1つでLV10 となるが、明らかにレベルアップのペースが落ちてきた。

1階層でLV3で頭打ちになったように、そろそろ2階層でのレベルアップ限界が近づいていると思われる。

なかなかレベルアップはしないが、伝説のスライムスレイヤーの俺からしてみれば、1ヶ月程度の時間は全く苦にはならない。

金色のゴブリンでも出てこないかと2匹目のドジョウを思い、日々狩りに没頭している。

そしてついにその日が来た。

高木 海斗

LV 10

HP 25

MP 12

BP 25

スキル スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福 NEW

俺はLV10に到達した。

一般的にLV10には、特には何の意味をも持たないと言われてい
るが

なんと俺には劇的な変化が起きた。

「おおーっ ！！」

自分でステータスを二度見してしまった。

まずステータスの数値だが、今までほとんどLV1につき1づつし
かあがらなかつたのが、何とBPが5も上昇していた。

HPに至っては6も上昇している。

何が起こったのかわからないが、

確変が起こったのか？

それとも何かの間違いか？

俺の時代がやってきたのか？

さらに上がったステータスの一番下に何と3つ目のスキルが顕現し

ていた。

その名も 『神の祝福』

なんか名前だけで主人公のスキルっぽい。

おそろおそろ、スキル名を意識し説明を確認した。

神の祝福 ……神およびその眷属に愛されているものに与えられる。 レベルアップ時にステータス上昇補

正が

かかる。 上昇率は神およびその眷属からの愛の程度に依存する。

これは……まさかのチートスキル。

正真正銘の主人公補正スキルではないのか。

内容からすると 俺に神の知り合いは1人しかない。

まず間違いなくシルフィーに関係するスキルだろう。

シルフィーとの『愛』が深まった為に顕現したスキルだろう。

もちろん『愛』といっても ロリコンLOVE ではなく親愛や敬愛の方だ。

もうシルフィーには頭が上がらない。

いや、やっぱりシルフィーさまと呼ぼうかな。

今まで2年以上一人でスライムを狩り続けてきた。

LV3でも自分なりに頑張ってきた。

誰にも相談できなかつたが、本当は不安しかなかった。

上がらないレベル。

上がっても1ずつしか上昇しないステータス。

自分がクラスメイトAのモブである自覚はあつたが、もしかしたら

自分もいつか主人公になれるんじゃないかと夢見ていた。

最底辺でも続けていれば、やめさえしなければ、いつか夢に見た英雄になれるんじゃないかと本気で思っていた。

だが現実には甘くなかった。

話に聞く有望探索者は、1ヶ月で俺のステータスやレベルを軽く超え世の中で認知されていく。

みんなに認められたい、クラスメイトAのモブキャラではなく『高木 海斗』として認められたい。

周りがどんどん離脱していく探索者を俺は続けて行くことで、モブへの抵抗をしていたのだ。

ただ、現実の俺はモブ以外の何者でもなかった。

やっぱり不安だった。

孤独だった。

苦しかった。

ステータスが5アップしたからといって誰かに認められるわけではない。

誰かに褒められるわけでもない。

劇的に強くなったわけでもない。

ただ俺にとっては今までの全てが報われたとさえ思えた。

まだこれからだ。そう思えた。

探索者になってよかった。

シルフィーに出会えてよかった。

第15話 LV10の奇跡（後書き）

いつもありがとうございます。

部門別日間11位まで来ました。

総合日間も徐々に順位を上げることが出来ました。

本当にありがとうございます。

皆さまのブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれましたらブックマーク 下部からのポイント評価をお願いします。

第16話 3階層への準備と妹萌え？

LV10に到達しBP25となった俺は2階層での成長限界を感じていた。

以前はあれほどの恐怖を感じていたゴブリンだが、今は俺と同程度の強さであると認識している。

仮にシルフィーの助けがなくても、すぐにやられてしまうという事はないだろう。

3階層に向かうという事は、確実にゴブリンやスケルトンを超える強さを持つモンスターが相手となるという事だ。

俺にとっては一度も踏み入れたことのない未踏、未知の領域だ。未知の領域だがもちろん情報はある。

2階層まではモンスター単体でしか出現しなかったが、3階層からは複数体でも出現するとのことだ。

つまりシルフィーがモンスター 1体にかかっている間に、俺も本格的に戦闘を行う必要があるという事だ。

今の俺では、レベルやBPは3階層への挑戦権を得る段階に到達したとはいえ、圧倒的に一人で戦う術が不足している。

「シルフィー、今日からしばらく一人で2階層に潜ろうと思う。」

「わたし何か悪いことしましたか？ご主人様を怒らせるような事をしてしまったのでしょうか。私はもう必要ないですか？」

「い、いや違う。シルフィーは何も悪くないんだ。実は今度3階層への進出を考えているんだが、今のままで

はシルフィーに頼りつきりになってしまう。3階層でお荷物にならないように少し鍛えたいんだ。」

「ご主人様がお荷物なんてありえませんが。でもそこまで考えられるなんて、やっぱりさすがです。」

「ありがとうございます。」

「それともう一つ。俺はシルフィーのことを本当に信頼しているし感謝している。サーバントというより

頼りになる妹のように思っている。これからもっといい関係を築きたいと思ってる。」

「まず手始めに呼び方をシルフィーからシルにしようかと思うんだけど、どうだろう。」

「ありがとうございます。そんな風に思ってくださいってうれしいです。」

シルフィー いやシルは大きな青い目を潤ませながらまっすぐ俺を見て

「こんなに私のことを思ってくれるご主人様に会えてシルは幸せです。」

俺は自分で言い出したことではあるがシルの反応を見て照れまくってしまった。

普通に可愛い。

異常に可愛い。

破壊力が半端ない。

こんな妹がいたらなんでも買ってあげそうになるだろう。

これが『シスコン』というものだろうか？
いや世に聞く『妹萌え』というやつだろうか？

今日一日一人で頑張れそうだ。

それから俺は一人でゴブリンとスケルトンへ挑んだ。

前回の失敗を教訓に挑んだ。

ゴブリンを発見すると、出来るだけ遠くからボウガンで一撃かました。やはり急所に命中することはなく、肩口に命中したが前回と同じように「ゲギャー」と怒り狂いながら突進してきた。前回と違うのは俺だ。

ボウガンからシールドとタングステンの棒に持ち替え、まずシールドでゴブリンの勢いを殺した。

「ドガッ」

凄い衝撃が来たが、以前の戦闘時と違い押し負けずになんとか耐えている。

ここ数日寝る前に、脳が擦り切れるほどシミュレーションしてきた。焦らず、盾の隙間からゴブリンのむこう脛に思いっきりタングステンのロッドをぶちかましてやった。

「ゲウワーッ」

「ガッン」

と手ごたえ十分だ。続けて、もう一本のむこう脛にもかましてやった。

「ギャーッ」

これで勝負は決まった。俺は、動けなくなったゴブリンにとどめをさした。

3匹目にしてようやく余裕を持って狩ることができた。

「次はスケルトンだな。」

俺はスケルトンを探し、今度は最初からシールドとロッドを持って、猛然と突撃した。

シールドでスケルトンの動きを封じてゴブリンの時と同じように、むこう脛にぶちかます。

「ゴキン」

とスケルトンの足が折れた。

骨は鉄ほどの強度を持つと言われるが、タングステンは鉄よりもはるかに硬い。

レベルアップした俺の膂力と合わさり、会心の一撃となった。

あとは頭蓋骨を破壊して戦闘は終了した。

はじめて1人でスケルトンを狩ったが、俺の装備とは思いの外、相性が良かった。

その後一週間俺はゴブリンとスケルトンを一人で狩り続けた。

少しだがソロでの戦闘にも慣れてきた。

遂に明日 俺は3階層へ挑む。

第16話 3階層への準備と妹萌え？（後書き）

いつもありがとうございます。

ついに部門別ランキング6位になることが出来ました。

ブックマーク、ポイント評価頂いた方々本当にありがとうございます。

総合日間も67位までできました。

周りの作品を見るとポイントが10倍どころか100倍以上違う作品もあり順位が上がるのもなかなか難しいですが、この作品は皆様のブックマークと下部からのポイント評価に支えられています。

なんとか部門日間5位を目標に頑張ります。

これからもよろしく願います。

第17話 3階層へ

ついに俺は3階層に潜っている。

もちろんシルも召喚して万全の状態だが、まだ見ぬ敵に緊張感MAXで、恐る恐る進んでいる。

シルの能力でモンスターはすぐ見つかった。ヘルハウンドが2匹いる。

早速、3階層の洗礼なのか複数体のモンスターとの戦闘になりそうだ。

ヘルハウンドは、恐らく戦闘力自体はゴブリンとそう変わらないと思われる、下級に分類されるモンスターだ。

ただ、人型のゴブリンと違い、知能はそれほどもないが、四つ足の獣型なので当然スピードはゴブリンや人間をはるかに凌駕している。

と ギルドのモンスターガイドに載っていた記憶がある。

まずはいつもの通りボウガンで先制する。

しかし、初めての獣型の上 ゴブリンと違って狙うポジションがかなり低い。

完全に外してしまった。
慌てて

「シル 『鉄壁の乙女』だ。」

「かしこまりました。」

すぐにシルに『鉄壁の乙女』を使用させヘルハウンドを迎撃する体制を整えた。

すぐにヘルハウンドが光の壁に阻まれ

「ウ、ウウー」

と唸り声を上げている。

十分に引きつけてからタングステンロッドでぶっ叩いた。

1匹目はすぐに仕留める事が出来た。

「次だ」

2匹目を仕留めようとすぐ目を向けるが、既にそこには姿は無く、後ろに回り込まれていた。

「速っ！」

移動したのが見えなかった。

後ろに周り込んだヘルハウンドをタングステンロッドで攻撃しようとしたが、光の壁から距離を取られているため、円の中からは届かない。

明らかに、1匹目への攻撃を学習している。

『乙女の鉄壁』の有効時間はまだ半分以上残っているはず。

大丈夫だ。

俺は焦る気持ちを抑え込み、もしもの時の為に用意していたものをリュックから取り出した。

世界最臭兵器 『シユールストラダ』発酵ニシンの缶詰を。

息を止め、一気にプルトップを引き上げヘルハウンドに向かって投

げつけた。

避けられ当たるとはなかったが、人の数十、数百倍あるであろう嗅覚の持ち主である、獣型モンスターには劇的に効いた。

「キュー、ワン、ワン」

普通の犬のような声を出して暴れはじめたのだ。

俺は意識のそれたヘルハウンドに向けてボウガンを連射した。見事2本がヒットし、仕留めることができた。

残された魔核は少し色は違うが、ゴブリンのものと同程度の大きさだった。

「ご主人様。やりましたね。3階層ではじめてのモンスターでも、問題なく倒せましたね。さすがです。」

無事に3階層での初戦闘をクリアできたが、内心俺は焦っていた。

2階層までは単体の敵だったので初見殺しで勝つことができていた。それが2匹に増えた途端に、2匹目にはあっさり、いつもの攻撃手段が通じなかった。

結果として『シールドストライダー』が劇的に効果を発揮した。

しかしこれは奥の手のつもりだった。

効果も不確定だった。

それを初戦から使用する羽目になってしまった。

おそらく今後も同レベルのモンスターであれば1匹目は問題なく倒せる。

2匹目も同じ戦法が通用するのであればなんとかなる。

しかし

3匹以上が同時に出現した場合の対抗手段が今の俺にはない。

どうしよう・・・

第17話 3階層へ（後書き）

いつもありがとうございます。

部門別日間6位になることが出来ました。

5位まであと6ポイントとなりました。

この作品は皆様のブックマークとポイントと評価によって支えられています。

興味を持たれた方はブックマーク と下部からポイント評価をお願いします

第18話 理由(前書き)

本日2話目です。

第18話 理由

俺が探索者になったのには理由がある。

もちろん、かつこいいからという単純な理由も大きい。

だが本当の理由は、誰にも言ったことはないが小学生の頃に遡る。

俺は小学生の低学年の頃、そこそこ運動能力が高かった事と、社交的だったこともあり、クラスの中心人物とはいかないまでも、それなりにクラスでは目立った存在だった。

その頃は友達も男女問わず多かった。

ただ特別、好少年というわけでもなく、自分から進んで善行を行うこともなかった。

むしろ、どちらかというクラスの中でも騒いでいる事が多かった。

そんな小学生生活も高学年に近づくにつれ、変化を見せはじめていた。

低学年の頃は、運動能力や社交性が特に重要視されていたが、高学年になるにつれ、そこに学力やルックスという要素が大きく影響するようになってきた。

それらの要素が色濃くなるにつれ俺の評価も相対的に下がる事となった。

学校で以前ほどの活躍の場が無くなった俺は、丁度その頃に親に買ってもらったVRゲームに傾倒していった。

VRゲームは本当に楽しかった。物語の主人公になり、やればやるほど無双出来た。

VRゲームの世界の中心は俺だった。

オンラインで顔も分からないゲーム仲間もいっぱいできた。

ゲームの世界に比重を置く事でリアル为学校生活が希薄になっていくことに気がつかなかった。

今となつては、何がきつかけだつたかは分からない。
ある日を境にクラスメイトから話しかけられる事が無くなった。
話しかけても、なんとなく、あしらわれてスルーされた。

そんな状態が数日続けば、俺でも自分の置かれた状況は理解できた。
暴力等の、あからさまな『いじめ』ではないが、自分がそのターゲットとなつたことに気づいてしまった。

その後5ヶ月ほどは同じような状況が続いた。

あからさまな『いじめ』ではないので、先生や親に相談することもできない。

小学生の俺には精神的にかなりこたえた。

今までの行動を省みて、自業自得と思いつつも、孤独感、絶望感
は日々増していった。

その頃になると、学校帰りに、通学路から少し離れた神社の裏手
で毎日泣いていた。

「うえーん、ううー。ぐすっ。」

「どつしたの？」

「えっ？」

突然声がした。

声の方を見るとそこには、去年まで同じクラスだった葛城 春香が
立っていた。

泣いているのを見られて、気が動転して、あたふたしたが、涙が直
ぐに止まるわけもなかった。

「ううー」

「何か悲しいことでもあったの？」

優しい言葉をかけられて更に涙が溢れた。

「ぐ、ぐっ、ふー、ふー、ううえーん」

「話してみて？」

正直、人に話すのは躊躇してしまうが、誰かに聞いて欲しかったのだと思う。

俺はクラスでの現状を洗いざらい彼女に話してしまった。

「ふーん。そうなんだ。」

「またね〜」

「え？」

特に何かを期待していたわけではないが、事情を聞くだけ聞いて、あっさり帰ってしまった彼女に啞然としてしまった。

次の日からまた学校での変わらない生活が始まったが、それから4〜5日ぐらいしてからだろうか

なんとクラスメイトの一人が挨拶してきたのだ。

「おはよう」

「お、おう」

その日はそれだけで終わったが、次の日以降も数人のクラスメイトが挨拶してきた。

それだけではなく、今まで完全にスルーされていたのに、なんか雰囲気が変わっている。

積極的に話しかけてくる訳ではないが、視線も含めて、無視するわけでもなく、普通に戻っている気がする。

「????」

俺は何が起こったのかよく分からなかったので、最初に挨拶してきた、クラスメイトが一人になったのを見計らって、事情を聞いてみた。

聞いてみて本当に驚いた。

葛城 春香さんだった。

彼女が、朝や休憩時間に、俺のクラスメイトを順番に呼び出して、説得してくれたというのだ。

当時から人気のある生徒だった彼女に直接説得され、後ろめたさもあり、クラスメイトは俺へのいじめをやめることにしたようだ。話を聞いたクラスメイトも

「悪かったな」

といつてきたが、正直あまり耳に入らなかった。

特別、親しい間柄でもない葛城 春香が俺の為に動いてくれた。しかも俺に特別何かを求める訳でもなく、恩を売る訳でもなく、俺の居ない所で助けてくれた。

当時の俺には衝撃的だった。

ゲームの世界は英雄だらけだが、現実の世界で英雄というものがい

るのなら彼女の事だと本当に思った。

その後、小学校を卒業するまで彼女と特に親しくなる訳でもなく、クラスメイトと関係性も劇的に好転した訳ではないが、彼女への感謝の念と憧れだけが膨らんだ。

俺の中の英雄は彼女だった。

俺が探索者になって英雄になりたいと思ったのは、他に英雄になれる術を思いつかなかったからだ。

彼女に認められるような英雄になりたいと思ったからだ。

もちろん、他にも色々な形の英雄がある。

それは彼女から嫌と言っただけで教わった。

だが、当時の単純な俺は、これしかないと思いついてしまった。

思い込んでしまった以上、途中で投げ出すことは許されぬ。

今では憧れから、一方的な恋愛感情へと変わった葛城 春香さんへ

の想いと、彼女に相応しい男になる。

そして早く告白して付き合いたい。

それが今の俺の原動力となっているのだ。

以前、3階層に行ければ絶対告白しようと思っていたが、今は4階層に行ったら絶対告白しようと思心に決めている。

第18話 理由（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆さんのブックマークとポイント評価で支えられています。

興味をお持ちの方はブックマークと下部からのポイント評価お願いします。

第19話 2枚目のサーバントカード

俺は前日の探索リザルト - 12953円に茫然自失状態となっていた。

ダンジョンに潜って、バトルにも全て勝ったにも関わらず、赤字。

正に前代未聞の事態である。

今の俺の実力では『シユールストライダ』無しでは正直厳しい。しかも今回3匹までは対応できたが、それ以上になると正直厳しい。俺の実力不足もあるが手数が圧倒的に不足している。頭数が単純に足りない。

3階層より奥に潜っている探索者は、殆どが3〜5名程度でパーティを組んでいる。

俺の場合、シルの異常に高いBPがあるにしても2人である。

正直厳しい。

かといって、パーティを組んでくれる相手に当てもないし、ほぼ、毎日潜っている俺と一緒に潜れる時間のある同レベルの探索者は、皆無だろう。

仮にいたとしても、シルの特殊性を考えると、パーティを組むことに抵抗感がある。

という事で、正直手詰まりとなってしまうた。

「うーん」

俺は、悩みに悩んで一つの作戦を実行に移すことにした。

その名も『2匹目のドジョウ 作戦』だ。

ここが異世界なら、美少女キャラの奴隷を購入してパーティーメンバ
ーに加えるところだが、実際にはそんなことはできない。

なので、バカな作戦だとは思うが、2匹目のドジョウ 『金色』の
スライムを倒して、2枚目のサーバントカードを手に入れるしか
ない。

そうと決めれば早速 1階層へ潜ることにした。

スキル スライムスレイヤーを手に入れてから、ほとんどスライ
ムを狩ることはなかったので、久しぶりである。

実際にスライムを狩り始めると、何故か殺虫剤にも補正がかかるの
か驚異的なペースでスライムを狩ることができた。

なんと1時間で10匹ものスライムを狩ることができた。

やはりスキル スライムスレイヤーはスライム狩りには欠かせな
いスキルのようなのだ。

それから毎日1日3時間スライムを刈り続けた。

それから2ヶ月以上経ったが、金色のスライムは未だ現れていない。
既に1500 匹以上狩っている。

それでも現れない。

レアなのはわかってている。

幻なのかもしれない。

ただ前日も2000匹目ぐらいで出現した。

今回も後500匹ぐらいで出現してくれないだろうか。

いや、ぜひ出現してほしい。

俺はそれから半月間せつせと、スライムを刈り続け2000匹目
に突入しかけたその日、

ついに ついに 現れた。

『銀色』のスライムが。

『銀色????』

とは思ったが、今まで見たことの無いスライムだ。
おまけに銀色。 金色と無関係なはずがない。

「シル絶対に逃がすな。」

「はい。かしこまりました。」

『神の雷撃』

無慈悲なシルの一撃で『銀色』のスライムは跡形もなく 消失して
しまった。

俺は『銀色』のいた場所をすぐに凝視した。

あった。ありました。

シルの時と同じく地面にはカードが残されていた。

「うおー!!! やったぜ」

思わず、久しぶりに雄叫びをあげてしまった。

金色でも銀色でも良かったようだ。

とにかくレアカラーであればなんでも良いのかもしれぬ。

俺はやりきった。

2匹目のドジョウ作戦を完遂したのだ。

2枚目のサーバントカードを手に入れたのだ。

おまけにスライムを2000匹も狩りまくっていたのでこの2ヶ月
半でなんと

100万円近く稼いでしまった。

1日3時間で1ヶ月あたり40万円以上だ。

時給に換算するとなんと5000円。

すごい。すごすぎる。

探索者のプロ並みに稼げている。

やっぱり、スライム狩りが一番儲かるのかもしれない。

競合相手もないし独占状態。

狩り放題。

1階層は夢のスライムパラダイスだ。

第19話

2枚目のサーバントカード（後書き）

いつもありがとうございます。

ようやく2000ptとなりました。

本当にありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価に支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からポイント評価お願いします。

第20話 ルシエリア

2匹目のドジョウ

いや、2枚目のサーバントカードを手に取り、表示されているサーバントをおそろおそろ確認する。

「うっー」

「たのむー!!」

二度目でもやっぱり緊張する。

「おおー!!」

「きたー!!」

そこにあっただのは、

濡れ羽色の黒髪に、漆黒の闇を湛えるような黒い目をした、ナイスバディの超絶美女だった。

種別 子爵級悪魔

NAME ルシエリア

LV 1

HP 70

MP 120

BP 130

スキル 破滅の獄炎 侵食の息吹

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

間違いないく、超絶美女だが、種別を見て引いてしまった。

「子爵級悪魔??」

ゲームの世界には結構出てくるので、何を意味しているのかはわかる。

ステータスを見ても、シルに比べると少し劣っている印象を受けるが、MPにおいてはシル以上。

装備を見てもいわゆる、魔法使いタイプなのだろう。

かなり優秀なサーバントなのは間違いない。

まず間違い無く当たりだろう。おまけにナイスバディだし。

ただ 悪魔って召喚しても大丈夫なのか？

呪われたり、取り憑かれたりしないのか？

悪魔＝悪

サーバントとはいえ、言う事聞いてくれるのか？

正直、不安しかないの俺はまた、探索者ギルドへ向かった。前回と同じように 日番谷さんがいるのを確認すると、

「魔核売りたいんですけど。」

「かしこまりました。」

「あとちょっと聞きたいんですけど。」

「はい、なんででしょうか?」

「サーバントカードのことなんですけど。」

「はい。そういえば以前もゴツズ系のカードの話を聞いてもらいましたね。」

「あー、覚えてました？」

「はい。結構記憶力はいい方なので。」

「えーとですね。今度はゴツズ系じゃなくて、悪魔系のカードってあるのかなーと思って」

「はい。ありますよ。あまり使いたがらない方も多いので、ある意味ゴツズ系よりも 珍しいかも知れません」

「デーモン系と言われるサーバントカードです」

「へー。デーモン系ですか。呼び出すと取り憑かれたりとか、呪われたりとかしますかねー」

「確かに報告では、ごく稀に呪われたと言う事例はありますが、ほとんどの場合は問題ないようです。」

「へ、へえ 呪われるってどうなったんですか？」

「報告では7日後に所有者の探索者が亡くなったそうです。」

「亡くなったんですか!!」

正直動揺してしまった。怪しまれてないだろうか。

「はい。でも本当に稀なケースですよ」

「そうですねー」

「ちなみに価格ってどのくらいになりますか？」

「そうですね。ゴッズ系ほどの人気は無いですが、オークションだと、やはりレアカードになりますので男爵級でも1億円以上になると思われます」

「す、すごいですね」

「珍しいカードですからね。」

「ありがとうございます。」

俺は魔核の代金 15450円を受け取って、素早く立ち去った。

日番谷さんは前回同様、有用な情報を教えてくれた。

今回のポイントは2点だ。

男爵級悪魔カードで1億円以上とのことなので、俺の手に入れた子爵級カードはそれ以上、2億円にはなるだろう。

もう一点は、呪われて、死ぬかもしれないという事だ。

「うーん」

「2億円かー。シルの時の10億よりは安いけど、すごい額だな」

「贅沢しなければ一生食べていけるな。」

「おまけに稀に呪われるのかー。死にたく無いなー。」

「うーん」

「誰がどう考えても売るべきだ。売る以外の選択肢はない。」

「よし決めた。使おう」

俺はシルの時と同じで、頭がおかしくなってしまうた。

やはり夢とロマンの厨二夢は無敵だった。

二億円や死のリスクぐらいには負けなかった。

決意の俺は、黒髪のナイスバディ超絶美女を夢見て カードを額に
当て『ルシェリア』と念じた。

第20話 ルシエリア（後書き）

いつもありがとうございます。

ジャンル別日間7位です。

ありがとうございます。

日間5位の壁があるようで厳しいですが頑張ります。

この作品は皆さんのブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方はブックマークと下部からポイント評価お願いします。

第21話 デジャヴ

俺は額に新しいサーバントカードをあて、『ルシエリア』の名を念じた。

シルの時と同じく、カードが閃光につつまれそこには、黒髪の絶世美女……

「え？」

「うそだろっ」

そこには、黒髪の少女がいた。容姿はサーバントカードの子爵級悪魔の面影がある。あるが、幼女だ。

シルの時と全く同じ……

「俺の超絶美女が……」

「俺の2億円が……」

「俺の夢が……」

一瞬にして悟ってしまった。やってしまった。

シルと同じで幼女化したサーバントが顕現してしまった。

「お前がわたしの主人か？」

「ああ、まあ、そう」

「なんか頼りない主人だな。」

「え……」

「頭も悪そうだな。」

なんだ？ 物凄い違和感が。

本当にこの黒髪の幼女は俺のサーバントなのか？
サーバントって召使いの意味だぞ？

この態度はなんだ？

「なにか食べさせてくれ。お腹が空いた。」

「あ、あの一。ルシエリアは俺のサーバントだよな。」

「ああそうだけど、それがどうした。」

「なんか、態度悪くないか？」

「別に」

「それよりお腹空いた。なんか早く食べさせて。」

「なっ」

俺は啞然としながらも、仕方がないので渋々魔核を一個渡した。

なんだ。このシルとの違いは 悪魔はやっぱりサーバントとい
えども、悪魔なのか？

「おかわり」

「はっ？」

「あるわけないだろー」

「えー、ケチな主人に当たったみたい。さいあく〜」

ギャルか？ギャルなのか？

幼女なのにギャルなのか？

悪魔なのにギャルなのか？

いや ヤンギャルなのか？

なぜかサーバントのはずの、こいつの方が偉そうなんだが。

こいつ苦手だ。

俺の召喚したサーバントだから責任を持たないといけないのはわか
っている。

現状を引き起こしているのは全て自分の責任なのもわかっている。

しかし、よりもよってなんでこいつなんだ。

正直 幼女枠はシルで一杯だ。

もう幼女はいらない。

絶世の美女がパーティに加わると思ってカードを使用したのに、こ
れか。

幼女でもシルは本当に良かった。

それがどうだ。こいつは幼女の皮を被った悪魔だ。実際に子爵級悪魔なのだが……

正直、シルが素直で従順なので、サーバントとはそういうものだと思います。思い込んでいた。

しかし、このちょっとしたやりとりで悟ってしまった。

呪われるぐらいだ。言うことを聞かないぐらい当たり前なのかもしれない。

この際、態度が悪いのはなんとか目をつぶろう。

だが、しかしこいつは、ルシエリアは戦力になるのか？それが問題だ。

「ルシエリア、お前の力を見せてくれ」

「えー、めんどくせーな。」

「いやいや、やってくれよ。」

「チツ、わかったよ。」

いやいやながら、ルシエリアに了承させ、とりあえず2階層のゴブリンを倒させてみることにした。

すぐに発見したゴブリンに向かって

「ルシエリア、破滅の獄炎 を使ってみてくれ」

「はーい。『破滅の獄炎』」

「グヴオージュオー」

ゴブリンは跡形もなく消失していた。

「は、はは。」

想像は出来たけど・・・シルの時と同じだ。
完全なオーバーキルだ。

「おい、なんかくれ。腹が減った。」

「あ、ああ」

俺はその場に残ったゴブリンの魔核を与えた。

「それじゃ次は『侵食の息吹』を使ってみてくれ」

「えーまだやんの？」

「倒したら魔核は、お前にやるから、な。」

「わかったよ。」

2匹目のゴブリンを見つけ

『侵食の息吹』

『グgyウgygyガgygガygy』 「ゲシユル、ジユル」

は？なんだこれ。ゴブリンが狂ったように、暴れ始めたと思った
ら、そのまま溶けた。

怖い。このスキル 怖すぎる。 絵面的にもやばい。

先ほどの様子を見たうえで、スキルの名前から推測すると、最初精神異常を引き起こし、その状態異常が
体にまで影響をあたえ、溶解してしまう。

こんなところだろう。
まさに悪魔の所業だ。

「おい、早くくれよ」

「ああ、そらっ」

約束通り魔核をあたえながら、改めてサーバントの威力を痛感していた。

シルより劣る？確かにBPは劣っているが、別の方向性で強烈だ。
おまけに、ツンデレ？ ヤンデレ？

デレもまだないので単純に ツン とヤン か。

正直 ツンもヤンもいらぬ。

俺にこいつを従わせることは本当にできるのだろうか？

まかり間違って『浸食の息吹』を俺に使われた時には、地獄に落ち
そうだ。

サーバントって主人に攻撃してこないよな。

攻撃できないよな。

大丈夫だよな。

俺は17歳にして今後のことを考えると、ストレスで胃がキリキリ
と痛んだ。

第21話 デジャヴ（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。またジャンル別6位までできました。なんとか5位に上がれるようがんばります。

興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価お願いいたします

第22話 パーティアタック

ルシエリアを手に入れ、不安だらけだが、悩んでいても、どうしようもないので思い切って3階層に再挑戦することにした。

3階層に潜ると 前回からのおなじみヘルハウンドが3匹現れた。

「シル、鉄壁の乙女頼む」

「かしこまりました。『鉄壁の乙女』」

「俺が1匹倒すから 残りの2匹をルシエリア 頼む」

「はいはい。魔核くれよな。『破滅の獄炎』」

俺がボウガンでヘルハウンドを仕留めている間に、残りの2匹ルシエリアが『破滅の獄炎』一発でかたをつけていた。

どうやら、シルの『神の雷撃』よりも威力は劣りそうだが、効果範囲は広いようだ。

残った魔核3個のうち、2個をシルとルシエリアに与え、俺の手元には魔核が1個残った。

これを繰り返せば、3階層攻略もすぐだろう。

前回シルと2人で潜った時は、結構でこずって、ぎりぎりになりながら、相手にしていたが、今回はあっという間に片付いた。

パーティーってすごい。

ソロの長かった俺にはちょっと感動的だ。

おまけに今回は秘密兵器の『シユールストラダ』も使用していないので、

リザルト 魔核1個で 721円のプラスだ。

劇的に収支が改善した。

これで、探索者を続けることができる。

ほっとした……

のもつかの間

またルシエリアが

「あたしが2匹倒したんだから魔核2個くれよ」

は、まただ。今度は少し耐性がついたのか、怒りはなかったが、胃が痛い……

「すぐには無理だ。あと何匹か倒したら一個余分にやるから。」

「ほんとだな。約束だぞ。嘘だったら地獄に落ちるぞ!!」

「ああ本当だ」

地獄に落ちるって、本物の悪魔に言われたら洒落にならない。

絶対に約束は守らなければ、やばい。

その後も直ぐに、ワイルドボアの3匹に出会ったが、シルの『鉄壁

の乙女』

とルシエリアの『破滅の獄炎』と俺のピストルボウガンの連射の鉄板コンボで、あっさり撃退した。

余裕すら感じながら探索していると、ついに、ヘルハウンド1匹とワイルドボア2匹、そしてマッドラットの4匹のグループに遭遇した。

初めてのモンスターの4匹構成に、ちよつと焦ったが、すぐにそれぞれ指示を出した。

「シル右のワイルドボアに『神の雷撃』を頼む」

「ルシエリア は左側のやつに『破滅の獄炎』を頼む」

俺はヘルハウンドをやる。

「かしこまりました。」「ああ、わかったよ」

俺は狙いを定めて3連射してヘルハウンドを仕留めた。

隣ではそれぞれ

『ズガガガーン』 『グヴオージュオー』

という爆音が聞こえてきて、俺が見た時には、跡形もなく消失していた。

4匹のモンスター集団もあっさり片付けてしまった。

なんかすごい気がする。

この3人ならどこまででも、いけそうな気がする。4階層もすぐなんじゃないか。

なんて甘い妄想を膨らました次の瞬間

「お腹が空きました。」 「腹減った。」

と いつもの現実引き戻された。

それぞれに魔核を一個づつ渡し、すぐに摂取したが

「おい、約束だろ。そろそろおかわりくれよ」

と ルシエリアが言うので 俺は渋々 1個追加して渡した。

これで 4匹のモンスターを倒したが

リザルトは 先ほどと同じ 魔核1個 721円 だ。

3匹倒しても4匹倒しても、稼ぎは一緒。

なんとなく、やるせない気持ちを抱えながらも ルシエリアを怒らす訳にはいかず、自分を納得させるしかなかった。

その後も2〜4匹のモンスターの集団をサクサクと狩り続けていると、

ついにLV11に上がった。

ステータスを見た瞬間

『やったぜ』

と思っただが、よく見て

ん!?

あれ？？

これ、なんかおかしくないか？？

第22話 パーティアアタック（後書き）

いつもありがとうございます。

なんとジャンル別日間2位にランクアップすることが出来ました。どうしても越えられなかった5位の壁を越えることが出来ました。本当にありがとうございます。

1位になるのは、かなり厳しいですが

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持って頂いた方はブックマーク 下部からのポイント評価をお願いします。

第23話 シルの気持ち

俺はLVアップした事に、単純に喜んだ。

「やったぜ。」

しかも今回はただのレベルアップではなく『神の祝福』による成長補正ありのスーパーレベルアップだ。

期待に胸をふくらませて、レベルアップしたステータスを確認した。

ん？

あれ??

なんかおかしくないか??

高木 海斗

これがLV9時点のステータス

LV 9

HP 20

MP 9

BP 20

そしてこれが前回『神の祝福』により補正されたLV10時点のステータス

LV 10

HP 25

M P 1 2
B P 2 5

そして今回のLVアップによるステータス

L V 1 1
H P 2 7
M P 1 4
B P 2 8

以前、LV1のアップで1〜2程度しか上がらなかったステータスは、前回LV10のレベルアップ時にスキル『神の祝福』を発現した事により一気に5前後アップしていた。

それが、今回L11へのレベルアップ時のステータス変化は、BPが3 HPとMPにおいては2 のアップにとどまっている。

なぜだ??

どう言うことだ??

LV10の時だけ スキル発現ボーナスみたいな感じだったのか?

「うーん」

もちろんLVアップは嬉しい。

しかも今までにくらべるとステータスの上昇も大きい。

しかし・・・

期待していたほどじゃない。

『神の祝福』に期待しすぎたのだろうか?

いろいろ考えている最中に、天啓のように思い出した。
思い出してしまった。

ま、まさか・・・

慌てて俺はスキル『神の祝福』の説明画面を確認する。

神の祝福・・・神およびその眷属に愛されているものに与えられ
る。レベルアップ時にステータス上昇補

正がかか

る。上昇率は神およびその眷属からの愛の程度に依存する

上昇率は神およびその眷属からの愛の程度に依存する。

これだ。間違いない。これでしょ。

『でもなぜだー。』

俺はシルとはうまくやっていると思っていた。

呼び方もシルフィーからシルにランクアップした。

愛情もたっぷり注いでいるつもりだ。

もちろんLOVEではなく親愛の情だが。

シルからも好かれていたと思っていた。

それがなぜだ。

前回のレベルアップ時よりもシルからの愛がステータス上昇分
つまり3/5になっていると言ったことなのか？

動揺も手伝ってか、何が原因かすぐには思いつかなかった。

しばらく考えてみた。

前回のレベルアップ時と今回のレベルアップ時の違い。

名前の呼び方以外で違うこと。

まさか。

い、いや。

あれか。あれが原因なのか。

それしかない。

思い当たる原因は一つ。

『ルシエリア』の存在しかない。

シルとルシエリアは性格は真逆で存在も真逆だ。

当初は、神と悪魔がうまくやっていけるか心配していたが、お互いに見た目年齢も同じぐらいの幼女同士、性格も真逆なのが良かったのか、最初ルシエリアが、ぶつぶつ言っていた以外は非常にスムーズだった。

シルが包み込んでいるのか、2人とも姉妹のように仲良くやってくれている。

と思っていた。

実際にルシエリアも、俺に対する高圧的な態度と違い、シルには結構優しい感じだ。

それがなぜだ。

シル　本当はルシエリアのことが嫌なのか。　口には出さなだけで本当は嫌で嫌で仕方がないのか？

考えてもどうしてもわからないので、ルシエリアをカードに送還して、思い切ってシルに聞いてみる事にした。

「シル、何か悩みとかないのか？」

「えっ？」

「突然どうされたのですか？特にはありませんよ」

「うーん」

「まどろっこしいのは苦手だからはつきり聞くが、俺のことはどう思っているんだ？嫌いになったのか？」

「えっ？え？何をおっしゃっているんですか？私がご主人様を嫌いになるはずがないではないですか。もちろん敬愛しています。」

「そうか」

全く嘘を言っているような感じではない。ストレートに敬愛していると云われ、顔と頭が熱くなってきた。

「それじゃ、ルシエリアのことはどう思っているんだ。あまり好きじゃないのか？」

「い、いえ。最初はちょっと怖い子なのかと思いましたが、話して

みると優しい、いい子でした。今は仲良しで大好きですよ。」

これも嘘はないように思える。

「そうか。俺はダンジョンではシルが一番大事なんだ。悩みや思っていることがあるなら教えて欲しい」

「特にはないですよ」

「いやなにかあるだろう」

「ないですよ」

「あるはずだ」

「うー。それじゃひとつだけあります。」

「なんだ。」

「最近ご主人様はルシエリアにはっかり優しくしているので、私も同じようにして欲しいです。」

「え……」

シルからの言葉は思いもつかない言葉だった。

「別にルシエリアに特別優しいってことはないだろ。むしろシルの方に優しいと思うが」

「最近魔核もルシエリアの方が多くもらえていますし」

「あつ」

「ルシエリアのことは大好きですが、ルシエリアが来る前は、ご主人様ともっとお話しもできていました。」

「ルシエリアだけじゃなくて、私とももっとお話しして欲しいです。」

「あ、ああ わかった。これからはシルにもルシエリアと同じだけ魔核も渡すし、話も、もっとするようになるよ」

「本当ですか？やっぱり海斗様が主人様でよかった。嬉しい。」

その後、家に帰ってベッドに寝転がって

これは、あれか

いわゆる、やきもちか。

やきもちというやつなのか。

考えてもみなかった。

シルは素直でいい子だから問題ないものだと思い込んでいた。

ルシエリアが問題児なので、そちらばかり気にかけていたのは否定できない。

確かに魔核もルシエリアにだけ多く与えていた。

俺は今まで女の子とろくに接点がなかったのだ。

それがサーバントとはいえ 幼女とはいえ

急に2人も一緒にいる事になったのだ。

これからうまくやっていけるだろうか。

分け隔てなく3人でうまくやっていけるだろうか。

「は〜」

今日も俺は17歳にしてストレスで胃にダメージを蓄積させている。

第23話 シルの気持ち（後書き）

いつもありがとうございます。

ジャンル別日間2位 総合日間はなんと12位までランクアップしました。

ほんとうにありがとうございます。

総合日間10位以内を目指してがんばります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からポイント評価をお願いします。

第24話 シルのレベルアップ

シルの気持ち判明してから1週間が経った。

俺は、とにかくシルにも、意識的に優しく接することを心がけている。

ただし難しいのは、シルに優しくしすぎると、今度はルシエリアの機嫌が目に見えて悪くなるのだ。

俺にどうしろというのか

女性とのふれあい経験が皆無の俺にどうしろというのか。

よく、ドラマや本の中の主人公は同様のシチュエーションでもうまくやっている。

むしろ、ハプニングやお互いのやりとりを楽しんでいる風ですらある。

鈍感系主人公であれば、完全スルーで楽しくやれるのだろう。

しかし、ここは現実。リアルである。

俺にはそんな芸当はできない。

できるはずもない。

俺にできるのは、神経をゴリゴリとすり減らしながら2人の顔色を伺いながら、やっていくことだけだ。

そんな殺伐とした精神状態を抱えながら、ストレスのはけ口を求めようと、さらにモンスター退治にのめり込んでいった。

3階層のモンスターを倒しに倒した。

もちろんシルとルシエリアに依存した戦い方は変わっていないが、最近、流れ作業のように手慣れてきてしまった。

ただしお金は一切貯まっていない。

シルへの魔核供給量をルシエリアに合わせて増やしたため、倒しても倒しても一切俺の手元には残らなくなってしまったからだ。

金欠状態で、いつものように ワイルドボア3匹セットを狩った直後シルに変化が現れた。

『ピカーツ!!!』

シルの体全体が青白い光に包まれ、発光した。数秒だっただろうか、すぐに発光現象はおさまった。

「なんだ、どうしたんだ!?!?!?!?!」

これはもしかして。俺は慌ててシルのステータスを確認した。

「やっぱりそうか。シルレベルアップしたぞ！ やったな！」

「え。本当ですか!?! 嬉しいです。これもご主人様のおかげです。これからも頑張りますね。」

「ああ。これからも頼んだぞ。」

これがレベルアップしたシルのステータス

種別 ヴァルキリー

NAME シルフィー

LV2

HP140

MP105

BP190

スキル 神の雷撃 鉄壁の乙女
装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

特に新しいスキルが発現したわけではないが、ステータスが上昇している。

数値が15→20 上昇している。

さすが俺とは比較にならない上昇数値だ。

よし、せっかくだからスキルの威力を試してみるか。

すぐにヘルハウンド3匹を発見したので

「シル、スキルの変化を見てみたいから『神の雷撃』を使ってすぐに『鉄壁の乙女』をかけてくれ」

「かしこまりました。『神の雷撃』 『鉄壁の乙女』」

「ズカカカガーン」

「すげっ」

いつもより、大きな爆音を残し、2匹のヘルハウンドが消失していた。

残った1匹がすぐに襲いかかってくるが『鉄壁の乙女』の効果に阻まれている。

変化を見るために、効果が切れるぎりぎりまで様子を見てから、ボウガンで仕留めた。

結果はもともと60秒程度だった効果時間が90秒に伸びていた。

2つのスキルとも、目に見えて威力が上がっている。レベルアップすごいな。

これなら4階層も楽勝じゃないのか？

この時はこんな風に安易に考えていた。

いつものようにシルが

「お腹空きました。」

といつてきたので、いつものように魔核を渡すことにした。

今回はスキルを連発したので2個の魔核を渡してやった。

魔核を摂取したシルが、もじもじしながら、俺の方をジーツと見つめてきている。

「ん？どうした？」

「ご主人様、お腹がまだいっぱいになりません。もう1個いただけませんか？」

「え？」

どういうことだ？今までスキル一発で魔石一個以下で大丈夫だったはずだ。

シルがこんなことを言ってきたのは初めてだ。

なんで？

冷静になって考えをまとめると、すぐに答えは出た。

レベルアップで威力が上がった分、消費MPも上がったのか。よく考えたら当たり前のことだった。

リアルの世界では、都合よく威力だけ上がるなんてことはなかった。高出力、悪燃費。

高級外車のようだ……

庶民には維持できない……

やばい。

今でも魔核と懐具合は、いっぱいいっぱいなのに、これ以上魔核が必要になれば、シルを連れてダンジョンに潜ることが出来ない。どうしようもない。

詰んだ。

俺はシルのレベルアップによって窮地に追い込まれてしまった。

第24話 シルのレベルアップ（後書き）

いつもありがとうございます。

シルが神槍を持っていないのに物理攻撃しないのかと、複数の方から質問を受けたので回答です。

幼女に肉弾戦をさせるのは、主人公と筆者の精神衛生上良くないので当面スキル偏重です。

大分先ですが槍を使う時が来ます。皆様が思っている様な効果が発揮されるかは不明です。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からポイントをお願いします。

第25話 ドロップアイテム

シルのレベルアップに伴う魔核問題に頭を悩ませ、今日は探索を休んでいる。

考えに考えて一つの結論に達した。
達したというよりも他に選択肢がない。

俺の結論は一度3階層から撤退して、1階層でスライム狩りをするということだった。

3階層以降の探索を諦めたということではなく、魔核が不足して身動きが取れないのであれば、先に魔核を大量に集めて、それを切り崩しながら探索を進める。ちょっと非効率にも感じるが、それが唯一の道だと思う。

スライムの魔核は最小だ。

最小ではあるが、ヘルハウンドの魔核2個とスライムの魔核3個が大体同じサイズである為、大量に集めればシルとルシエリアが摂取する分には全く問題がなくなるレベルだ。

決めたからには、とことんやる。

俺はまた1階層でスライムスレイヤーとして活躍し、スライムを狩って狩って狩りまくる。

それから俺は毎日の様に1階層に潜っている。

実は、スライムの処理数が1ヶ月の間に500に達しようとしている最中、気がついてしまったことがある。

スライムを狩りながら、結構余裕と時間があるので、今までのこと

をあれこれ考えていたのだ。

通常スライム以外のモンスターを倒すと1〜3パーセントの確率でドロップすると言われている。

しかし俺はなぜか、通常のモンスターからアイテムをドロップしたことがない。

最初は運がないだけかと思っていたが、100匹を大きく超えても一向にドロップする気配がないのだ。

おかしい。

絶対におかしい。

何かがおかしい。

俺が取得したことがあるのは、ドロップアイテムを落とさないはずのスライムからの2枚のサーバントカードのみだ。

サーバントカード2枚だけでも物凄いことなのだが、探索者は普通、魔核とドロップアイテムで稼いでいる。

特にドロップアイテムはドカンと稼げる可能性のあるボーナスのよ
うなものなのだと思う。

思うというのは、一度も手に入れたことがないので、はっきりとは
分からないからだ。

とにかくこれは異常なことだと思う。

普通、よくあるのは、ポジションとか素材とかのはずで、俺も是非
手に入れたい。

しかし俺の手元には一つもない。
たまたまでは、説明がつかない。

おかしいと思いつながらもどうしようもないので、せっせとスライム
狩りに励んで、遂に

1000匹に到達しようとした時

「あれは・・・」

「まさか・・・」

今度はブルーメタリックな色のスライムに遭遇した。

「シル、ルシエリア 絶対に逃がすな」

「はい」「ああ」

間違いない。あれは3度目となる特別なスライムだ。

念には念をいれ

『神の雷撃』『破滅の極炎』のオーバーキルコンボをお見舞いした。

『ズガガガガン』『グヴオージュオー』

いつも通り轟音ど衝撃がおさまった跡にはスライムの姿はなくなっていた。

俺は、またスライムの消え去った跡を凝視した。

『お、おお ！！』

『ま、まさか ！？』

『あ、あれは ！！』

そこに残されていたのは3枚目のサーバントカード

ではなく、青色の球が残されていた。

俺のテレビ経由の情報によるとあれは、夢の『マジックオーブ』ではないだろうか。

『マジックオーブ』はサーバントカード等と同じく、レアアイテムだ。

使用することで、なんと魔法スキルが使えるようになるという夢のアイテムだ。

手に取ったマジックオーブは、青色で野球の球ほどで一見ガラス玉のようだった。

俺は初めてサーバントカードを手に入れた時と同じように、手が震えてきてしまった。

やばい。

これを使うと魔法使いになってしまう。

夢の魔法使いに・・・

いや、もしかしたら大魔法使いや、賢者になれるかも。

探索者の夢、いや人類の夢とロマン。

それが魔法だ。

マジックオーブは色によって種別が大別される。

このオーブは青色なので水か氷系の魔法が使えるようになるはずだ。

水系魔法を使う俺。

やばい、かつこいい・・・

もはやモブとは呼べなくなるな。

本当にやばい。

第25話 ドロップアイテム（後書き）

いつもありがとうございます。

ジャンル別日間3位になってしまいました。

ここからまた上がって行けるよう頑張ります。

この作品は、皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方はブックマークと下部からポイント評価をお願いします。

第26話 初めての魔法

ドロップした青色のマジックオーブ。

おそらく売れば、数千万ではきかないだろう。

売れば大金持ちだ。

だが

しかし

俺はもう決めている。

自分で使うことを。

今日、俺は夢とロマンの魔法使いになる。

テレビによるとマジックオーブは魔法を使いたい者が、手にとって地面に投げて割ればいい。

それだけで魔法スキルが身につくのだ。

本当の夢とロマンはお金では買えない。

俺は震える手で青のマジックオーブを地面に叩きつけた。

『ガシャーン』

「ん？」

特に何も変化は感じられない。

あわててステータスを確認

高木 海斗

L V	1 1
H P	2 3
M P	1 4
B P	2 8

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール NEW

あつた。ちゃんとあつた。

水系マジック ウォーターボール

「うおー、やったぜ！」

思わず叫んでしまった。

嬉しい。嬉しすぎる。

感動だ。この感動をお茶の間の皆様にも伝えたい。

とりあえず感動は置いといて、使ってみたい。

今すぐ使ってみたい。

俺は、おもちゃを買ってもらって、待ちきれない小さな子供のようになっっていた。

「シル、ルシエリア ウォーターボールの魔法を覚えた。どこかで威力を試してみたい。サポートしてくれ。」

「「「えつ」「」」

思わず3人で、ハモってしまった。

呆気にとられてしまったが

『破滅の獄炎』

ルシエリアが追撃をかけ、事なきをえた。

「まじか……」

確かに俺の初めての魔法である 『ウォーターボール』 はしっかりと発動した。

ゴブリンに向かっていくスピードも特に問題はなく、しっかりと命中もした。

ただ、小さい。マジックオーブとほぼ同じ、野球ボール大の水の球体が飛んで行った。

飛んで行って

「ベシヤッ」

となったのだ。

イメージ的に水風船が高速で飛んで行って、破裂したような感じだ。

ゴブリンもほとんどダメージはなかっただろう。

魔法を発動したのは間違いがない。

つまり

憧れの魔法使いにはなれた。

だが

しかし

憧れていた魔法使いとは全く違う。

シルヤルシエリアと同じとは思っていなかったが、VRゲームの初級魔法ぐらいの威力は期待していた。

まあ、よく考えればわかる事だが、属性が水という時点で外れだったのだ。

火や雷なら小さくてもダメージを与えることは可能だろう

しかし水は違う。まだ氷であれば当たればタダでは済まない程度のダメージは与えられるだろう。

しかし水では当たっても、モンスターを狩れるほどのダメージは望めない。

濡れるだけだ

大量の水であれば溺れさせることはできるかもしれない。

超高速で飛ばせればウォータカッターのように切断できるかもしれない。

だが野球ボール大の水のボールでは無理だ。

失望感からくるダメージとは別に、体が重い。

気になってステータスを確認した。

高木 海斗

L V	1 1
H P	2 3
M P	1 0
B P	2 8

MPが4も減っている。

この水玉1個でMP4

つまり今の俺ではこの水玉3個が限界ということだ。

俺がショックを受けているのをみかねたのか

シルが

「魔法を発動出来るだけですごいです。慣れてくるときっと威力も上がってきますよ。」

ルシエリアが

「まあ、あれだ。喉が乾いた時にいつでも水が飲めるようになったと思えば良かっただろ。」

その気遣いが痛い。

あのルシエリアまでが変な気遣いをしてきた。

夢とロマンの魔法使いになったその日は、俺にほろ苦いダメージを残した。

第26話 初めての魔法（後書き）

いつもありがとうございます。

魔法回はもう少し続きます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価に支えられています。興味を持たれた方は、ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第27話 魔法の使い方

次の日俺はダンジョンギルドに来ていた。

きっかけ作りに、スライムの魔核を10個だけ売り、いつものように日番谷さんに世間話ののりで話しかける。

「ちよつと興味があつて。マジックオーブってレアアイテムなんですよね。」

「そうですね。滅多に売りに出されませんね。」

「値段つてどのぐらいするんですか？」

「そうですね。不人気の風、水系でも5000万円以上しますね。火や、雷なら1億円以上しますね。」

「や、やっぱり高いんですね。」

「とてもじゃないけど高校生に手が出る代物じゃないですね。」

「いえ、中には高校生探索者の方でも、成功されてマジックオーブを購入されている方もいます。」

「高木様も是非目指されてください。」

「い、いやあ。俺には無理ですよ。ちなみに水系とかの不人気オーブって何かの役に立つんですか？」

「マジックオーブで発現する魔法は、千差万別、いわゆるガチャみ
たいなものですから、当たりを引けば大きな力になってくれるので
す。」

「そうですねですか。じゃあ、もしハズレを引いたら諦めるしかない
んですか？」

「いえ、同じ魔法でも探索者の能力や適性で大きく威力が変わって
くるので、一概にはそうとも言えません。」

「そうですね。わかりました。ありがとうございました。」

俺はいつものように、そそくさとダンジョンギルドを後にした。

日番谷さんの話だと、魔法の種類は運。

これは正直 ウォーターボールは、ハズレだろう。

5000万円とハズレ魔法。

やってしまったかも・・・

でもどうしても魔法を使ってみたかったのだ。

この厨二夢だけは誰にも止められなかったのだ。

それよりも、俺が気になったのは、同じ魔法でも能力や適性で威力
が変わるといふ部分だ。

俺のしょぼい ウォーターボール。これは俺の能力や適性が低
いということだろう。

しかし、能力で威力が変化するということは、魔法は画一的なもの
ではなく、変化するというのではないだろうか？

都合よすぎるかもしれないが、俺の能力がアップすれば威力もアッ

プするはず。

もしかしたら、現状でも威力以外の部分は、変化させることができる可能性があるということだろうか？

一条の光が差し込んできた。

俺はまだ大魔法使いになることを諦めきれない。

時間はある。可能性があるなら、とことん試してやる。

さっそく、ダンジョンに潜った。

ただし2階層ではなく1階層の片隅に来ていた。

検証、改良する気満々ではあるが、流石に今のウォーターボールの威力でモンスターと戦うのは、無謀なので、片隅で一人で自習することにした。

まず一番出来そうなのは、飛んでいくスピードを変えることだろう。

『ウォーターボール』

倦怠感と共に現れた水玉に集中し壁に向かって飛ばしてみる。

『ベチャッ』

初めて使った時と全く同じだ。

『ウォーターボール』

今度は更なる倦怠感と共に、現れた水玉に集中する。

意識を集中させ、分かりやすいよう、スピードを遅くなるようイメージしながら壁に向かって放つ。

できた。

目に見えて遅いスピードで飛んでいき壁にぶつかった。

『バシヤッ』

遅い分多少威力は落ちたようだが、俺の考えは間違っていないようだ。

『ウォーターボール』

今度は立っているのも辛くなるような、倦怠感と共に現れた水玉に、なんとか集中して、スピードアップをイメージする。

かなりのスピードで水玉が飛んでいって壁にぶち当たる。

『バチャン』

スピードが乗っているぶん今までで一番の威力を発揮したようだ。

やった。これは、練習すればなんとかなるかもしれない。

この瞬間。大魔法使いへの道が少しだけ開けた……

ような気がした。

その後あまりの疲労感に倒れそうになりながら、なんとか家までたどり着くことができたが、

ベッドへとフルダイブして朝まで意識を手放してしまった。

第27話 魔法の使い方（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第28話 魔法使い

昨日、大魔法使いへの道が開けたかとも思ったが、そんな甘くはなかった。

今日もダンジョンの片隅で魔法の特訓をしている。

特訓といっても1日三発限定なので、よく考えて訓練する必要がある。

昨日の続きで 今日にはスピードをできる限りアップさせることにした。

『ウォーターボール』

昨日より少しスピードアップしたようだ。

『ウォーターボール』

先ほどとほぼ同じだ。

『ウォーターボール』

変わらない。

これで今日の特訓は終了してしまった。

しかも歩くのもやっとの状態である。

それから、連日ダンジョンの片隅で特訓した。

まずスピードだが、これはすぐに限界を感じた。

飛んでいくスピードは結構早くなったが、おそらくプロ野球選手の投げる球ぐらいだろう。

早いか遅いかで言うとも早いのだが、100kmオーバーで水玉が飛んだところで所詮は水玉。

大した効果が得られることはなかった。

もしかしたら、音速を超えれば威力が増したかもしれないが、無理だった。

スピードを諦めた俺は、今度は大きさを変えられないか、試行錯誤した。

結論から言うと 質量は変えられなかったが、血の滲むような1日3回の特訓で、形を変えて表面積を変化させることはできた。

簡単に言うともボール状だったものを、お皿状に変えたり、丸いものを四角に変えたりといったことだ。

水玉に変化を与えることには成功したが、残念ながら俺には変化はなかった。

よくあるアニメの主人公のように、MPが枯渇するまで毎日使用するとMPが増えたり、威力が上がったりといった、お決まり、成長パターンは訪れなかった。

一つあるとすれば、倒れそうな倦怠感に毎日晒されたことで、倦怠感に対する、耐性ができてきたことだ。

倒れそうでも、無視して動けるようになってきた。

まず間違い無く体には悪いだろうが。

自分のできるようになったことを整理して、なんとか実戦で使用できないか試行錯誤を繰り返した。

そしてついに今日実戦に臨む。

前回と同じように2階層の単体ゴブリンと対峙した。

「シル、ルシエリア 前回と同じで頼む。」

「はい。」 「ああ」

前回と同じように『鉄壁の乙女』に阻まれたゴブリンに向かって

『ウォーターボール』

ゴブリンに水玉がぶつかった瞬間に、ゴブリンの鼻と口を追い隠すように水玉を広げ、貼り付け固定させた。

『ゴボボボツ ゴバツ』

息ができなくなって、生き絶えたゴブリンが消失した。

「ふー。やった。」

「ご主人様さすがです。」

「やるじゃねーか」

「まあな。ありがとう。」

俺がとった作戦。それは溺れさせて窒息させることだった。

威力もスピードもない。

水で出来ること。

これしかなかった。

少ない量でも、口と鼻だけ覆い隠せば、息ができなくなる。作戦はうまくいき、ついに魔法でモンスターを倒すことが出来た。これで俺も魔法使いの仲間入りだ。

「ご主人様あつちにもう一体モンスターがいます。」

余韻に浸っていたが、シルの声で現実に引き戻された。

言われた方に向かうと今度はスケルトンがいた。

「シル、ルシエリア さっきと同じで行くぞ！」

俺はさっきと同じ要領で、『鉄壁の乙女』に阻まれたスケルトンに

『ウォーターボール』

ぶつかった瞬間 水玉の形を変化させて窒息させる。

「え????」

「あ・・・」

スケルトンは止まらなかった。

ルシエリアが『破滅の獄炎』をつかい危なげなく勝ちました。だが、俺の『ウォーターボール』は効かなかった。

完全に失念していた。

スケルトンは骨だけなので呼吸していなかったのだ。窒息攻撃は全くの無効だったのだ。

初めて魔法でモンスターを狩り、うかれていたが、アンデッド系のモンスターには全く効果がないことが判明してしまった。

大魔法使いへの道は遠い……

いやちょっと待てよ。俺がなりたいのは大魔法使いじゃなくて、英雄だった。

ちよっと舞い上がって変なテンションになっていた。

俺は、これからは気をつけようと心に誓った。

第28話 魔法使い（後書き）

いつもありがとうございます。

ジャンル別日間4位となりました。

なんとか順位をキープできるよう頑張ります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からポイント評価お願いします。

第29話 4階層への準備（前書き）

本日2話目です

よろしくお願ひします。

第29話 4階層への準備

『ウォーターボール』を使いこなすようになってから、俺は3階層に何度か潜っている。

ただ、もうレベルが上がる気がしない。

ついに、3階層での成長限界を迎えたようだ。

こうなれば、4階層に潜るしかない。

しかし、4階層に潜るには、俺の装備は貧弱すぎる。

武器は良いが、防具がない。

盾は持っているものの、その他の装備は量販店で購入したデニムパンツにスエットパーカーで今まで潜ってきたが、このままではさすがに怖い。

今までシルの『鉄壁の乙女』に守られてきたので無傷で済んだ。

しかし4階層でもそれが通用するかは、わからない。

なので、全身を守る防具が欲しい。

実は、ダンジョンマーケットのおっさんに相談済みだ。

「あのーすいません。前回盾を買わせてもらったんですけど、今度4階層に潜ろうと思うんです。全身防具なんとかならないですかね。」

「あーおぼえてるぜ。確か2階層に潜るって言ってなかったか？もう4階層なのか？」

「あー、まー、なんとか行けそうなんで。」

「ヒョロイにーちゃんだと思ったら、結構やるんだな。予算はいくらだ。」

スライムの魔核1000個のうち300個は、シルとルシエリア用に残しておきたい。

今までの稼ぎと合わせてマックスで50万 だな

「この前とあんまり変わってないんですけど、 50万までです。」

「うーん。やっぱり無理だな」

「無理ですか。」

「と言いたいところだが、このやり取りも2回目だしな。 中古でよければなんとかしてやるぞ。」

「本当ですか?」

「ちょっと待っとけ。」

しばらくすると、おっさんが奥から2つのケースを持ってきた。

「50万でなんとかなるのは、この2つだけだな。」

「こつちが革製の全身防具にタングステンプレートを取り付けたものと鎖帷子のセット」

「こつちがカーボンナノチューブで出来た全身スーツだ。」

「どつちも50万でいいぜ」

「どつちがいいですかね。」

「こっちはハイテクだ。カーボンナノチューブの方が、全身覆えて隙間なく守れる。貫通もしにくい、薄いから当たれば痛い。」

「逆にこっちはアナログだ。革の防具の方は隙間はあるが、タンゲステンプレートと相まって防御力は高いし、それなりに厚みがあるから、装備している人間にダメージが行きにくい」

「どっちも一長一短あるからな。まず、試着してみるよ。」

「いいですか？お願いします。」

個人的にはファンタジーぽいので、革の防具と鎖帷子がいいかと思っているが、物は試しだ。

まず、革の防具をつけてみた。

歩いたり動いたりしてみたが……

重い。

想像以上に重い。

プレートが付いているせいか、つけるだけならいいが、これで走り回るのは正直無理だ。

鎖帷子だけでも異常に重い。

こんなの身につけて戦えるやついるのか……

革でこれなら、ファンタジー憧れのフルプレートメイルとか絶対無理だな。

となるとカーボンナノチューブしかない。

今度はカーボンナノチューブの全身スーツを着てみる。

ちよっと締め付けられ、思ったより重さもあるが動けないほどではない。

全身を覆うためか、ダイビング用のウェットスーツのようだ。

これで探索しているとSFか何かのようでちょっと恥ずかしい。恥ずかしいが他に選択肢がないので

「これください」

「おう」

「しかし、探索者の装備って、どれも高いですね。」

「当たり前だろ。数もでない上に特殊なものが多いからだよ。普段から、そんなの着てるやついねーだろ。」

「あー確かに」

「それはそうと、4階層の情報はしっかり持ってんのか？」

「一応、テレビとかスマホで調べてました。」

「じゃあ、大丈夫だとは思うがあれの対策はしてるのか？」

「ああ、あれですか。」

「俺、あれは結構得意だと思うんで、多分大丈夫です。」

「それならよかった。まあ死なねー程度に頑張れや」

「はい。ありがとうございます」

俺は、明日ついに4階層に潜る。

第29話 4階層への準備（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価
お願いします。

第30話 衝撃のG

ついに俺は4階層に到達した。

4階層でも俺以外の戦力は問題ないはずだが、一つだけ気がかりがある。

神と悪魔だから多分、大丈夫だとは思うが。

「あちらに反応がありません。 3匹です」

シルフィーの声と共に、4階層のモンスターに初遭遇した。

「キヤー!?!」「ウワー!?!」

「イヤー、逃げましょう!?!」「ぜったいムリムリ!?!」

「たすけてー。気持ち悪いです!?!」「フウワー、死ぬ、死んじやう!?!?」

遭遇と共に、俺のパーティは混乱に陥った。パーティというより、シルとルシエリアが。

遭遇しモンスターは、ゴギブリ型、蜘蛛型、ムカデ型、勢揃いだっ

た。4階層は虫型モンスターのエリアなのだ。

ただし大きさはそれぞれが大型犬ほどもある。

昆虫は人の何百倍もの力や能力を有するらしい。
それがこの大きさになったのだ。
間違いなく強敵だろう。

「シル、ルシエリア 落ち着け。」

「無理です!」「無理に決まってるだろ!」

「落ち着いたら大丈夫だから」

「大丈夫じゃないです!!」「落ち着けるかバカ!!」

やばい。パニック状態だ。

「とにかく、近づかれたくなかったら『鉄壁の乙女』だ」

『鉄壁の乙女』 『鉄壁の乙女』 『鉄壁の乙女』

シルが『鉄壁の乙女』を連呼した。本来重ねがけは出来ないはずだが、なぜか出来ている。

「キヤー、来ないで、もうダメです!!」「ううームリムリ、地獄に帰る!!」

「逃げましょう」「すぐにいくぞ」

「いやいや。ちょっと待て。倒さないと先に行けないから。」

「無理です!!」「無理に決まってるだろ!!」

「大丈夫だつて。俺がやるから。」

「ほんとに本当ですか?」「お前じゃ無理だろ、この嘘つき!?!?」

「任せとけつて」

俺には自信があつた。

虫といえば、殺虫剤。

殺虫剤といえばスライム相手に散々磨いた、必殺の殺虫剤プレスがある。

いくら相手が大きくても、所詮は虫。

装備品としてレベルアップのステータスの恩恵を受けた殺虫剤プレスの敵ではない。

しかも今回はいつものものより、強力な1本1300円の殺虫剤だ。

俺は素早く両手に構えてプレスをお見舞いした。

蜘蛛型とムカデ型は案外あっさり倒すことが出来たが、プレスをくらうとグネグネ バタバタと暴れ出した。

「キヤー、最悪です!」「ぎゃー、死んじゃう。!!!」

2人は暴れる姿を見てまたパニックに陥っていた。

そしてゴキブリ型はしぶとかつた。

プレスをくらうって苦しみ始めたが苦しみながらもガサガサ逃げ始めたのだ。

逃してなるものかと、『鉄壁の乙女』の効果範囲をでて追い回し、連続プレスをしてようやく仕留めることが出来た。

3体とも消えた後には魔核が残されていたが、丁度親指の爪程度の大きさだった。

一段落して シルとルシエリアの元に戻ると

「じゅじんさまー」「うっ、うえーん」

二人とも本気で泣いて抱きついてきた。

シルはキャラ的にまだわからなくもないが、ルシエリアが泣いている。

あのルシエリアが泣いて抱きついてきている。

まさか

呪われないよな・・・

「もう大丈夫だ。2人とも虫は苦手なのか？半神と悪魔なのに」

「そんなの関係ありません。怖いものは怖いです！」「苦手に決まってるだろバカ！」

その後も、しばらく本気で泣かれた。

事前に知らせた方が良かったのだろうか？

「今後の方針を話すぞ。」

「とにかく4階層は今の要領で行くぞ。シルの『鉄壁の乙女』で足止めして、俺が殺虫剤ブレスで仕留める。」

「倒し損ねたモンスターがいればルシエリアが『破滅の獄炎』で仕留めてくれ。」

「絶対やらないとダメですか？」 「無理、無理」

「俺がなんとか頑張るから頼むよ。」

「うー。かしこまりました。」 「無理、無理」

「ルシエリア頼むよ。出来るだけ、仕留めなくていいように俺が、頑張るから」

「本当だな。見捨てたら呪い殺すぞ!!!」

「わかった。まかせとけ」

パニックの後、ルシエリアの意外な一面と、恐ろしい約束を交わして次のターゲットを探し続けるのだった。

第30話 衝撃のG（後書き）

いつもありがとうございます。

今回で30話5万字となりました。

ポイントも10000ptとなりました。

ブックマークとポイント評価頂いた方は本当にありがとうございます。
した。

ランキングは落ちてきましたが、ここから60話10万字20000
0ptを目指して頑張ります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方はブックマークと下部からポイント評価をお願いします。

第31話 蝉の季節（前書き）

今日は連休最終日なので複数話投稿予定です。
よろしくお願ひします。

いくら虫が平気でも大型犬ほどもあるゴキブリが向かってきたのだ。生物としての本能がシグナルを送ってくる。滅茶苦茶びびってしまった。

腰が引けた俺は、避け損ねて『Gちゃん』のギザギザの足が、肩口に引っかかるような形でぶつかってしまった。

「ドン　!!!」

軽く掠った程度だったとは思いが、強烈な衝撃で1Mほど弾き飛ばされてしまった。

「いってー!!!」

無茶苦茶痛かった。カーボンナノチューブのスーツのおかげで、裂傷はない。だけど強烈な打撲だ。

折れてはいない、ただの打撲だが、滅茶苦茶痛い。

「ご主人様大丈夫ですか？」「おい、しっかりしろ」

背後からサーバント2人からの声は聞こえてくるが、救援の手は伸びて来なかった。

仕方がないので痛みを我慢して最後の1匹を再度追い回して仕留めた。

「ふー。危なかったな。」

痛みを堪えて、2人に話しかけたが、2人とも恐慌状態から脱しておらず、ろくな返事がなかった。

ステータスを確認するとレベルアップを果たしていた。

高木 海斗

LV 12

HP 30

MP 18

BP 34

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール

「おおっ ！？」

前回のレベルアップと違い『神の祝福』が十分に作用したのだろう。今までで一番数値がアップしている。

BPもアップした。

おそらく今回の4階層でシルからの俺への信頼という『愛』がアップしたのだろう。

頑張つてよかった。

少し強くなった俺は、また狩り続ける。

今度は、カマキリ型と芋虫型そして初のセミ型だった。

カマキリの鎌に切られれば、ひとたまりもないだろう。

『鉄壁の乙女』の効果範囲内から倒したい。

芋虫は問題ないと思うが、問題はセミ型だ。「Gちゃん」とは違い、初めての本格的な飛行タイプだ。

殺虫剤が届かない場合は、ボウガンを使用するしかない。

すぐに戦闘状態に入ったが、まず芋虫型を先に仕留めた。殺虫剤プレス大量噴射で問題なかった。

次にカマキリ型だが、鎌の部分を伸ばして威嚇してくるので、プレス噴射するが仕留めるには、微妙に射程が届かない。

意を決して『鉄壁の乙女』の効果範囲を飛び出し、カマキリ型の側面に回り込み、タングステンロッドで牽制しながら殺虫剤プレス。攻撃される前にうまく倒すことが出来た。

残るはセミ型だ。

ブンブン飛び回っている。

降りてくる気配はないのでボウガンを連射する。

「カン」「カン」

「嘘だろ　！？」

ボウガンの矢はあっさりセミ型の外殻に弾かれてしまった。

4階層に潜ってからメインの武器が殺虫剤プレスばかり使用していたので、失念していたが、昆虫の外殻はもともと硬い。

それが大型犬サイズとなると、とんでもない硬さと厚みだろう。

やばい。俺の手持ちの武器では、歯がたたない。

ボウガンの攻撃に刺激されたセミ型が

『ジージージー！！！！』

鳴き始めた。

「うわー!!!」

とんでもない音量だ。 サイズ相応の爆音だ。 鼓膜が破れそうになる。

「うっ……」

俺は背後の2人に助けを求めようとして絶望した。

『Gちゃん』以外も虫全般ダメなようで、『鉄壁の乙女』の効果で音の影響は受けていないようだ。音が苦しんでいる俺を見ても、全く助けようとする素振りは見えない。

このままではやばい。

想定外の展開になってしまったが、こうなっては、俺の手札は一つしかない。

『ウォーターボール』

セミの顔に水の塊を貼り付かせた。

本物の昆虫は気門で呼吸しているので水責めは効果が薄い。だがこいつらは昆虫型のモンスターだ。効くかどうかかわからないがやるしかない。

しばらくすると、セミ型は蛇行をはじめ、墜落して消失した。

やった。効果があった。

ホッとした俺は、疲れがどつと出てその場に入たり込んでしまった。
俺はサーバント達のサポートの無さを嘆きたくなった。

第31話 蝉の季節（後書き）

いつもありがとうございます。

連休最終日ですが、ついにジャンル別日間6位となってしまいました。

また5位になれるよう頑張ります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非、ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第32話 話し合い（前書き）

本日2話目です。

ちよつと短めです。

もう1話投稿するかもしれません。

第32話 話し合い

なんとかセミ型のモンスターを倒したものの、疲労困憊となった俺は、さつさと家に帰ってベットとお友達になった。

次の日、ダンジョンの1階層の片隅で、シルとルシエリアを喚びだし、話し合いをすることにした。

「今日もこれから、4階層に潜ろうと思うが、その前にちょっと話があるんだ。」

「はい。なんででしょう?」「なんだよ」

「昨日の戦闘のことだ。『Gちゃん』との戦いの時に、一撃もらって、吹き飛んだんだけど、なんのサポートもなかったよな」

「はい。」「まあ」

「その後のセミ型も、音で苦しんでいるのは、みてたよな。」

「・・・はい」「・・・まあ」

「ボウガンの攻撃が効かずに、苦し紛れの『ウォーターボール』でなんとか倒せたのも、みてたよな。」

「・・・はい」「・・・まあ」

「今度戦ったら、上手くないかもしれないかもしれない。死んでしまうかも

「しれないな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「虫が苦手なのもわかる。　　だけど、いざという時にはサポートしてほしい。」

「すみません・・・・・・・・」　「それはわかるけどさ・・・・・・・・」

「だったら次から頼むよ！」

「無理です　！　無理なんです　！！」　「絶対無理　！！」

「お前たちに被害が及ばないように前衛には俺が立つ。基本全部俺が戦うから、危ないときだけ頼むよ。」

「うー・・・・・・・・」　「あー・・・・・・・・」

「頼むよ。」

「・・・・・・・・はい」　「・・・・・・・・わかったよ」

「なんとか頼みこむかたちではあるが、話し合って解決の方向には向かえたと思う。」

「ちょっと不安ではあるが、こればかりは、実戦で様子を見てみるしかない。」

「早速4階層に潜り、『Gちゃん』の群れ、なんと4匹の群れに遭遇してしまった。」

「シル『乙女の鉄壁』頼む」

『乙女の鉄壁』に阻まれた4匹のうち、2匹は近い位置にいたので
2本持ちのダブルブレスで撃退することに成功したが2匹は、素
早く「ガサ、ガサ」と離散した。

俺はそれぞれを追っていった。

1匹に向かってダブルブレスをお見舞いした。
お見舞いしている最中にガラ空きになった俺の背中に

「ドカーン　！！！」

「うっっ」

最後の1匹が死角から　フライングアタックを仕掛けてきたのだ。

痛みと、呼吸困難で、すぐには動けなかった。

まずい。やられる。

『ズガガガカーン』

『グヴオージュオー』

本気で焦ったその時、いつもの爆音が響いた。

爆音の後には『Gちゃん』は消失し魔核が残されているだけだった。

痛んだ体でゆっくりと後ろを振り向くと、そこには半泣きになりな
がらスキルを使用した、

シルとルシエリアの姿があった。

「たすかった・・・」

俺の今の力では3匹でぎりぎり、4匹は限界を超えているようだ
今回受けたダメージも過去最高、死を予感させるに十分なものだっ
た。

実際にシルとルシエリアのサポートがなければ死んでいた可能性が
高い。

本当に助かった。

シルとルシエリアには本当に感謝だ。

ただ・・・贅沢を言えば、全部見ていたのだから、背後から襲われ
る前に撃退して欲しかった。

第32話 話し合い（後書き）

いつもありがとうございます。

今作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第33話 休日（前書き）

本日3話目です。

連休最終投稿になります。

よろしくお願ひします。

第33話 休息日

先日、『Gちゃん』の一撃をもろに食らってしまった俺は、寝込んでしまった。

痛くて動けない。おまけに熱も出てしまった。重症だ。

今日で、もう3日も寝込んでいるうえ学校も休んでしまった。

このぐらいのダメージは低級ポーションがあれば、一瞬で回復するのだろうが、俺は持っていない。

何しろ1本10万円もする高級品なのだ。

仕方がないので自然治癒力に任せる他なく、ベッドに張り付いている。

そろそろ明日には動けるようになりそうだ。

明日は土曜日なので学校も休みだ。

寝るのにも飽きてきたので、明日は買い物でも行こうかなと考えている。

特に買うものも無いので、いつものようにダンジョンマーケットにウィンドウショッピングに行こうかと思う。

次の日、なんとか動ける程度には回復したので、予定通りダンジョンマーケットに向かうことにする。

家を出てしばらく歩いていると向こうの方から気配がした。

これは……

葛城さんの気配ではないか。

悪いことをしたわけでもないのに慌てて道陰に隠れてしまった。しばらくすると葛城さんが女友達と2人で楽しそうに会話をしている。

友達の方が

「岡島くんってかつこいいよねー！」

「えーそうかな？」

「超イケメンでしょ。」

「わたし、ちょっとチャライ感じの人は苦手だから・・・」

「じゃあどんな人がタイプなの？」

こ、これは恋バナ!？

しかも葛城さんのタイプ？

俺は何があっても聞き逃さないように全神経を耳に集中させた。

「うーん。何かに一生懸命打ち込んでる人。あと優しい人かな」

なんだと・・・

何かに打ち込んでいる人!？

俺か?俺のことなのか?

俺はダンジョンに打ち込んでいるぞ。

優しい人?

俺は葛城さんのためなら超優しい人になれる。

やばい

葛城さんと両想いかもしれない。

そんなありもしない妄想に脳みそを支配されながら
俺は葛城さんたちの後ろ姿をこそこそ眺めながら、にやにやしていた。

「ママ、この人変質者」

「ちょっとやめなさい」

気がつくと、小さな女の子が俺をみて指差しており、母親が慌てて止めていた。

さすがに気まずい雰囲気となり、そそくさとその場をあとにした。

『変質者』って、どこがだよ　と思いながら予定通りダンジョンマ
ートにやってきた。

特に欲しいものがあるわけではないが、子供の頃からの休日の日課
のようなものだ。

いつものようにショーケースの中をじっくり眺めていく。

上級ポーシオンをみて、これがあれば、この痛みを一瞬で消してく
れるだろうなと思いつながら、当然値段を見て次の商品に目を向ける。
幻想武器であるミスリル製のナイフを見て、いつか自分もダンジ
ョンで手に入れて、使いこなしたいと妄想にふける。もちろん買う気
は一切ない。

買えるわけもない。

ポーチ大のマジックバッグを見て、これさえあれば、魔核や殺虫剤
をリュックに背負う事もない。もっと身軽にダンジョンに潜れる。

今一番ほしいアイテムだ。

しかし値段が高い。

5kgしか入らないのに1000万円している。

5kgつて多分どれだけでも入らない。殺虫剤が何本入るだろうか。とても手が出ない。

これもダンジョンで手に入らないだろうか。

そんなふうには、妄想しながらダンジョン産アイテムを見て回るのは本当に楽しい。

たとえば、人に暗いとか、気持ち悪いとか思われていたとしても、やめられない。

しばらくウィンドウショッピングを続けていると普段は見慣れない、ショーケースが端っこにあった。

よく見ると在庫処分と書かれている。

在庫処分？

そんなの今までなかったな。

興味をひかれて、ショーケースの中を見てみた。

先が折れたナイフ。

錆びてぼろぼろの籠手。

色がちよつと濁った低級ポーション。

端々が千切れたモンスターの毛皮
等々

売られている。

それもタダではなく、そこそこの値札が付いている。

色がちよつと濁った低級ポーションはちよつと欲しいと思ってしまったが、商品説明欄に、賞味期限切れにつき、効果不確定。体調に変化があつた場合でもダンジョンマーケットは一切責任を負いません。と書かれている。

これ売っていいやつか？

と思つたがスルーする事にした。

何かないかと物色していたら、端の方に青い小さなガラス玉のようなものが装飾された、ブレスレットのようなものがあり、この中にはまともなアイテムに見えたので、俺はじっくり見てみることにした。

第33話 休日（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価に支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第34話 マジックアイテム

俺はガラス越しにブレスレットをじっと見てみた。
壊れている様子もなく、普通に綺麗だ。
商品説明を見てみると。

身につけた人の魔法効果を増幅する。

ただし魔法発動中はその場から一切動けない制約がかかります。

これは・・・

いわゆる、呪いのマジックアイテムではないか。

魔法を増大する。これは素晴らしい。

しかし、その次の魔法発動中に一切動けなくなる制約がかかる。

これは致命的ではないだろうか。

敵が複数の場合、魔法発動中に狙われると一発でやられる。

3階層より奥のモンスターには致命的欠陥というより呪いだ。

マジックアイテムには時々呪いのアイテムと呼ばれるものがある。

効果に対して、デメリットとなる制約がかかるアイテムたちだ。

たまに使用している人もいるが、クセが強すぎてほとんどの場合見向きもされない。

値段を見ると100000円。

安くはないが頑張れば買えないことはない値段だ。

「うーん」

ちょっと俺に当てはめて考えてみた。

魔法の効果が増大。

これは貧弱魔法使いの俺には喉から手が出るほど欲しい効果だ。だが、発動中一切動けなくなる……

「んっ？」

そこで気づいてしまった。

よくよく考えると俺にはシルがいる。

魔法発動を『鉄壁の乙女』の効果範囲だけに限定すれば動けなくても問題ないのではないか。

今までも効果範囲内から魔法を発動している間に攻撃されたことはない。

これは……

俺のための、呪いのアイテム いや、マジックアイテムに違いない。

居ても立っても居られなくなった俺は、急いで家に帰って、なけなしの10万円を握りしめ、ブレスレットを購入に向かった。

販売員のお姉さんにブレスレットの購入を伝え、アイテムを取り出してもらった。

「あー。これを本当のご購入でよろしかったですか？」

「はい。お願いします」

「ご自分で使用されるんですか？」

「はい。そのつもりです。」

「そうですね・・・では商品の説明はよくお読みになりましたか？」

「はい。大丈夫です。」

「そうですね・・・マジックアイテムとしては安価ですが・・・これは・・・いわゆる呪いのアイテムです。本当にご購入で大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です。」

「正直、若い方がご使用になるのをあまりお勧めはできませんが。」

「ありがとうございます。でも大丈夫です。」

「わかりました。それでは、このアイテムが原因で何かあってもダンジョンマーケットは一切の責任をおいかねます。ご了承ください。」

「はい。わかりました。」

俺は期待いっぱい、ブレスレットを手に入れたのだが、販売員さんに変に気を使われた感じがすごかった。きっとあの人はすごくいい人なんだろう。

今日は休日と決めていたが、マジックアイテムを手に入れ、我慢できなかった。

すぐにダンジョンの1階層の片隅に向かった。

購入したブレスレットを腕にはめ、魔法を使用してみる。

『ウォーターボール』

魔法の発動と共に身動きが取れなくなるような拘束感が発生した。これが呪いと呼ばれている所以だろう。

ブレスレットの効果は魔法の効果増大。

おそらく、水玉が大きくなるか、飛んでいくスピードがアップするのだろうと漠然と考えていた。

しかし、ブレスレットの効果は思っていたのとは違う形で現れた。

水玉の大きさは、全く同じ野球の球ぐらいのまま。

飛んでいくスピードも変化なし。

ただ

『ズガン』

「えっ　!?!」

壁にぶち当たるといつもとは違う、硬質な炸裂音がした。

よく見ると、ウォーターボールは水ではなく、氷の玉になっていた。

ブレスレットの効果は　ウォーターボールがアイスボールになるという思ってもいない効果を発揮した。

俺は、ブレスレットの効果で『アイスボール』使いとなっていた。

大きさは変わらないのでそこまでの威力はないかもしれないが、今までの殺傷能力ほぼゼロからすれば

雲泥の差だ。

小躍りしたくなる気持ちを抑えて、きつちりあと二発を発動させて、強烈な倦怠感と、充足感を感じながら家に帰った。

第34話 マジックアイテム（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第35話 告白!?

俺は今度5階層に挑む。

以前から5階層に潜ることになったら、告白する事に決めていた。ずっと先延ばしにしてきたが、ついに覚悟を決めた。

明日、俺は葛城 春香さんに告白する。

朝、目が覚めてからずっと落ち着かない。

学校に行くのだが、期待感と共に足が重い。

教室につき、いつも通り

大山 真司 と 水谷 隼人に

「おう」

と声をかけるといつも通り

「おう」

と返ってきた。

その後授業を受けているが、内容がほとんど頭に入らない。

告白の事で頭いっぱい、葛城さんのことをチラチラ見してしまう。

昼休みに真司 と隼人と、たわいも無い話をしていたが、突然隼人が

「なんかあったの?」

「海斗、今日変じゃないか?」

鋭い・・・

「いや別に・・・」

「絶対なんかあつただろ」

「いや特に・・・」

「葛城さんか？」

「え。は？い、いや。ん、な、何言ってるの」

「やっぱりそうか」

「い、いや、やっぱりって。」

「全然違うし」

「振られたのか？」

「いや振られてない。」

「そうか。これからか。」

「これからって。どついう意味だよ。」

「そついう意味だよ。」

「いや、俺は葛城さんと付き合えるって」

「頭大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるだろ。」

「これから告白か？」

「な、なんでわかった？」

「いや、バレバレでしょ。なあ真司」

「ああ、朝からずっと葛城さんの方見てぼーっとしたり、そわそわして、気持ち悪かったぞ」

「いや、気持ち悪いってどういふことだよ」

「それだけ態度に出てたらなー。普通気づくだろ。」

「チキンの海斗くんが一体どういう心境の変化だ？」

「チキンじゃないって。俺は今日英雄になる。」

「英雄って柄かよ。どっちかっていうとストーカーだろ」

「なっ!？」

「クラスの結構な人数がストーカーはいつてると思ってるぞ。」

「え、マジで!？」

「マジで」

「てことはクラスの奴らは俺が葛城さんの事好きなの知ってるって事か？」

「そんなの当たり前だろ。気付いてないのは葛城さんぐらいじゃないの」

「え……」

「普段から葛城さんのこと見過ぎなんだよ。」

「あー。」

「それで今日告白するのか？」

「そうだよ。悪いか」

「いや、悪くない。早く次の恋を見つけろよ。」

「なんで振られる前提なんだよ。」

「え。いけると思ってるの？」

「当たり前だろ」

「はー。まーいいんじゃないか。海斗らしいよ。まー頑張れ。」

お決まりパターンではあるが、放課後 葛城さん呼び出した。

「急に呼び出してごめん」

「別にいいよ。暇だったし。」

「あ、あの葛城さん」

「はい」

「あ、あの。ぼ、ぼくは葛城さんが、い、いや葛城さんと、お、お、おつ、おつ、おつ、おつかいしたいです。」

「え？おつかい？」

「い、いや、ち、ちがつ」

「あー、一緒に買い物に行きたいの？」

「えっ。あ、ああ、うん、そうそう。一緒に買い物行かないかと思つて。」

「別にそのくらい良いけど。」

「えっ？いいの」

「別にいいよ。何か買いたいものがあるの？」

「あ、ああ。探索者用のアイテムを買いたくて。」

「そういえば高木くんは探索者頑張ってるんだったね。でも私全然

「詳しくないんだけど。」

「あ。全く問題ない。むしろ詳しくない方がいいくらい。」

「えー。詳しくない方がいいくらいって。なにそれ」

「あと服も買いたいし。葛城さん、センスよさそうだから。」

「別に普通だと思うけど。じゃあ、いつにするっ。」

「今週の日曜日をお願いします。」

「わかった。場所は？」

「駅前集合9時をお願いします。」

「うん。じゃあそれで。日曜日にね」

そのまま葛城さんは去っていった。

これは何だ？

俺は何をやったんだ？

告白は・・・

日和って失敗した。

よりもよって、おつかいってなんなんだ。

自分で自分が信じられない。

しかし、なぜかおつかいの約束をしてしまった。

2人で おつかい いや おかいもの。

これってデートではないのか？

???

誘っておいてなんだが、なんできてくれるんだろう。

教室に戻ると隼人と真司が待ち構えており

「頑張ったな。残念会開こうぜ」

「いや、振られてないし」

「は？どついう意味？」

「いや言葉通りだけど。」

「ま、ま、まさか。OKもらえたのか？」

「いや、ちょっと違う」

仕方がないので先程のおつかいの件を教えた。

2人は腹を抱えて大爆笑した。

大爆笑のあと、

「なんでおつかい 一緒にしてくれるんだ？」

「さあ？」

と曖昧な返事しかできなかった。

日曜日は、葛城さんと初めてのおつかい、いやおかいもの。いやが上にもテンションが上がってきた。

第35話 告白！？（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第36話 4階層突破

ブレスレットにより、『ウォーターボール』が強化された翌日から、また4階層に潜り始めた。

「だいぶん、体の調子も戻ってきた感じがするな。」

「シル、ルシエリア 今日も一日打ち合わせ通り頼むぞ。」

「はい。」 「ああ。」

すぐ『Gちゃん』5匹に遭遇した。

今までで、最大数のモンスターだ。

相変わらず、シルとルシエリアは顔を引きつらせている。

無言でシルの方に顔を向けると

『鉄壁の乙女』

シルはすぐにスキルを発動した。

この辺りは連戦で連携がかなり取れてきて、いちいち指示しなくても、阿吽の呼吸で意思疎通が取れるようになってきた。ルシエリアについても、今のところ4階層限定ではあるものの意思疎通が取れてきている。

いつものように『鉄壁の乙女』に群がってきた5匹の『Gちゃん』怒涛の迫力があり、生命本能が悲鳴をあげる。

それを押さえつけ、殺虫剤両手持ち、殺虫剤ダブルブレスで手早く

2匹を狩った。

その瞬間残りの3匹が離散したが、そのうち1匹に向けて

『ウォーターボール』

拘束感とともにブレスレットで強化された氷玉が一直線に飛んでいき

『グシヤ』

問題なく狩れたが、拘束感も着弾と共に無くなった。

残りの2匹はシルの『神の雷撃』とルシェリアの『破滅の獄炎』
であっさり片付いた。

2人を見ると、若干顔色が悪い気はするがしつかりと立っていた。

先日の話し合いが効いたようだ。

この調子だと、なんとか4階層を探索できる目処がたったようだ。
その後1ヶ月に渡って、昆虫系のモンスターを狩り続けレベルも上
がらなくなってしまうた。

この階層でのレベル限界を迎えたようだ。

現在のレベルは

L V 14

H P 42

M P 27

B P 47

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール

レベルは14に達していたが驚くべきはステータスの上昇幅だ。なんとBP47になっていた。

どうやら、4階層補正とでも言えはいいのか、この階層ではシルが俺に依存しているといっても過言ではない特殊な状況にある。

その依存度がダイレクトにステータス補正に影響したようなのだ。ある意味頑張ったのが報われたようで、とにかく嬉しい。

そして最近になって気づいたことがある。

たぶんLV2にレベルアップした影響かシルが少しだけ成長した気がする。

ほんのすこしだけだったので、女性慣れしてない俺がすぐに気がつくことはなかったが、

しばらく一緒にいてなんか、違和感があるなと思ったら。本当に少しだけ背が伸びた気がする。

これはもしかしたら、サーバントのレベルを上げていけば、カードの通り絶世の美女が現れるかもしれない。

そう思ったら、モチベーションとテンションが一気に上がってしまった。

そんな理由もあって、そろそろ4階層からの卒業を考えている。

4階層では、ほぼ全部俺が前衛をやった。

魔法も覚えて、さらにアイテムのおかげではあるが強化もできた。

レベルもステータスもアップした。

前衛に立った所為で、スライム狩りとまではいかないが、モンスターを倒す技術も少しは上がった。

シルとルシエリアと3人ならきつと、5階層でもやっていける。ただし、4階層のように殺虫剤はそれほど活躍しないと思われるので、今まで通りにはいかないかもしれない。

「シル。ルシエリア。　ちょっといいか？」

「はい。」　「なに？」

「そろそろ5階層へ進もうと思ってるんだけど、どう思う？俺はいけると思ってるんだけど。」

「一つ質問があります。」

「ん？なんだ？」

「5階層にも虫は、いるのでしょうか？」

「いや5階層は虫のモンスターエリアではないから、多分いないと思うけど。」

「是非行きましょう！今すぐ行きましょう！！さあ早く！！！！」

「それを早く言えよ。バカなんじゃないの！？　何が悲しくて4階層にいないといけないんだよ。バーカ！！」

「えー……」

2人の虫嫌いは理解しているが、5階層だぞ。

そんなにさつさと進んで大丈夫か？

提案したのは俺だけだ。

こうして次の日から俺たちは5階層に潜ることが決まった。

第36話 4階層突破（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価に支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からポイント評価をお願いします。

第37話 お買い物

来週俺は5階層に挑む。

未知の世界である5階層、しっかり準備もしたいところだ。

だからというわけではないが、今日は葛城さんとお買い物だ。

告白したはずが、ばかな俺のせいで、お買い物をする事になってしまった。

もちろん初めて2人でお買い物なのでものすごく、うれしい。

9時に待ち合わせた、最寄り駅に8時についてしまった。

テンションが上がりすぎでよく寝れなかったのと、そわそわして落ち着かないので早くきてしまった。

もちろん葛城さんはきていないので、1人で待っているが、落ち着かない。

1時間ってこんなに長かったっけ。

8時45分になると、葛城さんが現れた

「おはよう。」

「お、おはよう。」

「今日これから何処にお買い物行くの？」

「えーっと。まずダンジョンマートに行ってから、ショッピングモールに行くと思うんだけど、いいかな。」

「うんいいよ。ダンジョンマーケットって行ったことないから、ちょっと興味があるんだよね。」

私服の葛城さんを見るのは小学校以来だが、強烈だった。清楚が服を着て歩いている。

いや服も清楚で可愛い。

白のワンピース。

可愛い。

制服とは違った意味ですごくいい。

やばい。俺にクリティカルヒットしてしまった。

どきどきしながら、それを隠してダンジョンマーケットに2人で向かった。

「へー。ここがダンジョンマーケットなんだ。結構大きいね！人もいっぱいいるねー！」

「まあ、日曜だから。」

「そっか。高木くんはよくここにきてるの？」

「まあ、きてる方だと思うけど。」

「放課後いつも、すぐ帰ってるけど、ここにきてるの？」

「い、いや。いつもは大体ダンジョンに潜ってるから。」

「そうなんだ。毎日ダンジョンなんだ。危なくないの？なんかすげえねー！」

社交辞令だとはわかっているが、すごいと言われて、急速に顔に血液が集中してきた。

鏡があれば、真っ赤になっているかもしれない。

「い、いや。別にすごくないよ。慣れだよ、慣れ。」

あたふた、返事をするのが精一杯だった。

5階層に向けてどうしても欲しかったのが低級ポーションだ。

10万円もするアイテムだが、回復手段を持たない俺には必須だと思えた。

ポーションを注文してお金を払ったが

「高木くんってお金持ちなんだねー。高い商品をさっさと買うからびっくりしたよ。」

「いや、いや、俺もこれを買うのは初めてなんだけど、今度どうしても必要になりそうだから、いつも買ってるわけじゃないよ。」

「ふーん。そうなんだ。」

そんな会話をしているいつもの武器店のおっさんが声をかけてきた。

「おー坊主。今日は偉いべっぴんさん連れてるじゃねーか。坊主の彼女か？」

おっさん急に何言いやがる。

「えー!? いやちがいますよ。同じ学校のクラスメイトですよ。い

「やだなー。」

「ふーん。クラスメイトねー。まあ坊主の彼女にしてはべっぴんすぎるわな。」

おっさん。余計なお世話だ。

「坊主、モテなさそうだな。お嬢ちゃん、こいつのお守り大変だな。」

「いえ。初めてダンジョンマートに連れてきてもらったので楽しいです。」

「お嬢ちゃんいい子だな。まあちょっと変わった坊主だがよろしく頼むわ。」

おっさん、何余計なこと言ってんだ。しかもちよつと変わった坊主ってどついう事だよ。

「あーまた今度来るんで。じゃあつ。」

これ以上は、事態が悪化すると思い、早急に葛城さんを連れて立ち去った。

「なんか、いい人だったねー。」

「えっ、どこが？」

ちよつと葛城さんが言っている意味がわからなかったが、そのあとはいつも通りウィンドウショッピングができた。

おっさんのやりとりで、あたふたしたせいで、ちょっと肩の力が抜けて、葛城さんと普通にまわれた気がする。
そのあとシヨッピングモールへ向かった。

第37話 お買い物（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第38話 ショッピングモール

俺はダンジョンマーケットの後にショッピングモールに来ている。ダンジョンマーケットの時と違って、特に、あてがあるわけでもなく、欲しいものがあつたわけでもない。

葛城さんとお買い物と言われて、とっさに思いついたのがショッピングモールだっただけだ。

一応服を買いたいと言ったものの、ほぼ毎日ダンジョンに潜っていたのでデニムパンツに、パーカーかトレーナーで十分なのだが、今回はそれは言えない。

葛城さんが

「どんな服が好みなのかな？カジュアルな感じかな？」

「あんまりよくわからないからお任せしていい？」

「わかった。まかせといて。」

と言つて連れてこられたのは カジュアルないつものお店ではなく、

なぜか、ちょっとお洒落な大人っぽいお店だった。

一人だったら気後れして入れそうにないお店だった。

「あの一 葛城さん？」

「大丈夫、大丈夫。任せといて。」

「はい・・・」

それからなぜか、俺の着せ替えショーがはじまった。誰も見たくないだろうに・・・

「あ、こっちもいいかも。やっぱりこっちかな。ちょっと着てみて。」

「あ、ああ はい。」

（普段見せない葛城さんのノリに圧倒させられながら、俺は着せ替え人形と化した）

もしかしたら1時間程度は、着せ替えショーが続いたかもしれない。いい加減疲れてきた頃

「うん。これが一番いいと思う。どうかな。」

それは、白のキレイ目なスキニーパンツに 紺色のジャケット

。自分では違和感しかない。

俺これ着てて大丈夫か？

こんな服いつ着るんだ？

とは思ったものの

「ああ。まあ。すごくいいと思います。」

「よかった。じゃあせっかくだからこのまま着替えて、この後回るうよ。」

「え？今着替えるの？」

突然の申し出に断る術を持たない俺は、そのままの格好でその後一日を過ごすこととなった。

その後、ウインドウショッピングを続けていたが、よく考えると俺のものしか買っていない。

プレゼントを送るような間柄でもないし。

そんな事を考えていると、ちょうどゲームコーナーに差し掛かった。葛城さんが歩きながら クレーンゲームの、大きなぬいぐるみに目を奪われていることに気がついて

「あのぬいぐるみ欲しいの？」

「ううん。クレーンゲームとかで取れたことないから。ちょっとかわいいと思うっちゃっただけ。」

「ああ、じゃあちょっと、待ってて。」

俺はすたすた、クレーンゲームの前まで行くと100円を入れてクレーンゲームを起動した。

アームを引つ掛けて取るうとするが、思いの外アームが弱くて取れなかった。

それからもう100円使い、再度挑戦して、めでたく目当てのブタのぬいぐるみをゲットした。

「すごい。わたしほとんど取れた事ないよ。」

「これ。どっぞ。」

「え。くれるの?」

「今日のお礼のかわり。」

「ありがとう。うれしい。このぬいぐるみ可愛いと思ってたんだ。」

俺は以前VRゲームにハマる前にゲームセンターにハマったことがあり、クレーンゲームもその時かなりやり込んだ。

当時、男がぬいぐるみを大量に取っても、ちよつと扱いに困ったものだが。

あの時の不毛な日々はこの時のためにあつたのだと、過去の俺に感謝した。

その後、ぬいぐるみを持った葛城さんと、歩いていると、

「あれっ、高木じゃないか?」

「え……」

「やっぱり高木か。おしゃれしてて見違えたよ。」

そこには同じクラスの岡田 剛 が立っていた。

岡田とは特別仲が良い訳ではないが、悪くもない。

岡田は学校では俺よりは、社交的にやっている。

「あ……」 「葛城さん……」

どうやら俺にしか目がいつてなかったようで、横にいる葛城さんに

気付いて動揺しているようだ。

「え、なんで葛城さんと高木と一緒に・・・」

「あー、まー、あれだ」

「一緒にお買い物に来てるんだよ。」

葛城さんの声に岡田が、あからさまに狼狽えた。

「ああ、そ、そうなんだ。 ああ、俺はちょっと用があるから、
じゃあ。」

そういつて、それ以上話すこともなく去っていった。

大丈夫だろうか。

明日学校で何もなければいいけど。

岡田の反応に不安を覚えたが、もうどうしようもない。

実際に葛城さんとは何もないのだから、こちらも反応のしようがない。

葛城さんは大丈夫だろうかと思い、目をやるが、特に気にした様子もない。

それからしばらく、歩いて、駅で解散した。

慣れない買い物と葛城さんと一緒だった緊張感から、ダンジョンの4階層に潜ったよりも、数倍疲れていた。

ところで、このお買い物つて、ちょっとデートっぽかったかも。と後になって気がついた。

もちろんデートでは全くないのだが。

第38話 ショッピングモール（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からポイント評価をお願いします。

第39話 5階層前日

予定では、今日5階層に潜る予定だったが、俺はまだ4階層に潜っている。

遅れた理由は、ランクアップの手続きのためだ。

BP 40に到達した時点で申請できたが、4階層を抜けるタイミングで申請したかったのだ。

「高木 海斗さん」

「はい」

「おめでとつございます。こちらがアイアンランクの識別票となります。」

「ありがとうございます。」

「履歴を見ると、ストーンランクから数ヶ月でのランクアップですね。すごいですね。何か特別な攻略法でもありましたか？」

「い、いや。そういう訳ではないんですけど。はは・・・」

「ストーンランクには2年以上かかられたようですが、そこから僅か数ヶ月でアイアンランクですからね。なかなか無い事ですよ。これから頑張ってくださいね。」

「はい。がんばります。」

滅多に褒められることがないのに、このタイミングでギルドの人に褒められて、顔に血液が集中してしまった。

「アイアンランクの特典ですが、すべてのアイテム買取価格が5パーセント割増となります。

またダンジョンマーケットでの買い物レアアイテムを除き5パーセント割引となります」

ストーンランクより少しだけ優遇されるようだ。

少しだけ・・・

自分でも信じられない。シル達に出会ってからすごいペースで変化が訪れている。

少し前の俺なら アイアンランクと5階層進出なんて話を誰かにしたら笑い話にしかならなかっただろう。

それが今、現実になった。

まだ先は長い。でもこれから進んでいこう。今はそう思っている。手続きに時間がかかった為、5階層への挑戦は見送り、4階層に潜ることにした。

いつも通り 探索をしていたが後ろで何やら シルとルシエリアがコソコソやっている。

気にはなるが、ちょっと怖いので放っている。

「ルシエリア お話ってなあに？」

「ああ、あのさー。あれだよあれ」

「あれってなあに？」

「名前だよ名前。」

「名前って?」

「シルフィーはシルって呼ばれてるだろ。わたしはルシエリアのまんまだろ。結構一緒にいるけど、ルアとかシエリとか呼ばれないのかなと思ってさ。」

「あー。ルシエリアも愛称で呼んでもらえるように頼んでみれば?」

「い、いや。呼んで欲しいわけじゃないから。なんとなくだよ、なんとなく。」

「ルシエリアはご主人様の事どう思っているの?」

「いや、正直、最初はさえない奴に召喚されたなー。ハズレたなーと思ってただけ。ケチだし。それが最近、結構私に優しいし。」

「うん、ご主人様優しいよね。」

「弱っちいから、役立たずだと思ってただけ、この階層に来てから　な。結構頑張ってるなと思う」

「そうだよな。虫がダメな私たちのために、頑張ってくれてるよね。かっこいいよね」

「い、いや!?　かっこよくはないけどな。まあちょっと、認めてやってもいいかと思って。」

「そうなんだね。ルシエリアもご主人様が大好きなんだね。」

「バ、バカ!? 違うよ。全然好きじゃないし。ちょっとマシになっただけだ!」

「うん、うん。じゃあ私がお願いしてあげる。」

「えっ、いいのか!」

「うん」

どうやらコソコソしていたのが一段落したようだ。

「ご主人様。」

「ん?なんだ」

「一つお願いがあるんですが、よろしいでしょうか?」

「お願い?内容にもよるけど」

「ルシエリアの名前なんですけど、シルみたいに呼び名をつけてもらえないでしょうか?」

「えっ、ルシエリアに?それ大丈夫か?あいつに呪われないかな?」

「ルシエリアが望んでることなんです。」

「そ、そうか。じゃあ考えるぞ。うーんじゃあ『ルシエ』が

いいかな。」

「はい。とってもいいと思います。ねえルシエリア」

「あ、ああ。センスねえな。だけどまあ、もらっというてやるよ。』
ルシエ』な。」

「ああこれからもよろしくな。ルシエ。」

「う。う。うん。まあよろしく。」

なんだこの態度は？

自分たちで呼び名をつけてくれと頼んできたのに、センスがないとか。

しかも仲良くなる為の呼び名かと思ったら、妙によそよそしい。意味がわからない。

やっぱり、ルシエリア いやルシエは難しい。

そんなこんなで、仲も深まったのかよくわからないが、ランクアップも果たし、テンションMAXで明日から5階層に挑む。

第39話 5階層前日（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価に支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第40話 5階層へ

テンションMAXのまま、ついに俺は5階層に足を踏み入れている。
5階層のモンスターは、今までの生物系と大きく異なる。

「シル、モンスターはいるか？」

「あつちに2体です」

現れたのは

マッドマン サンドマンのグループだった。

今までの生物系とは違い、動いてはいるが生きているのかよくわからない。

それぞれ 『マン』とついているが、男というわけではなく、人型なのである。

とりあえず、シルに「鉄壁の乙女」を使用してもらい、様子を見る。
ポウガンをマッドマンに連射してみる。

「グチャ」

「へっ？」

ポウガンの矢がすり抜けた？

慌てて今度はサンドマンに射出してみる。

「ジャリッ」

「あっ」

やっぱり、矢がすり抜けてしまった。

かなり焦ったが、なんとか気持ちを立て直して、タンゲステンロッドでマッドマンに殴りかかる。

「グチャッ」

鈍い感覚と共にマッドマンの体をすり抜けてしまった。

こいつらもしかして物理攻撃が効かないの？
かなりまずい。というかやばい。

もしこれが効かなかったら、俺には攻撃手段がない。
俺は間髪入れずに殺虫剤ブレスを射出した。

が、効果は全く無いようだったが。
マッドマンとスライム 正直何が違うのかわからないが、効かないものはしょうがない。

「ルシエ 『破滅の獄炎』を頼む。」

「ああ。」

『グヴオージュオー』

2体とも跡形もなく消失していた。

やばい。

どうする。

俺の攻撃が一切通じない。

考えても正直どうしようもない。

せつかくレベルアップしたし、魔法も覚えた。

5階層は俺が活躍するつもりだった。

だけど、これは無理だ・・・

こうなったら、仕方がない。

攻撃はシルとルシエに任せるしかない。

最近、シールドの出番が少なくなっていたので俺が盾役をやる。

主人の威厳を保つにはそれしかない。

考えた作戦をシルとルシエに伝え、そのまま探索を続けることにした。

「あつちに3体です。」

今度は、ストーンマン、サンドマン、マッドマンの組み合わせだ。

シルの『鉄壁の乙女』で、モンスターを近づけてからルシエが『破壊の獄炎』

サンドマンとマッドマンを消失させることに成功した。

残りはストーンマンだ。

俺が『鉄壁の乙女』の効果が切れると同時に飛び出して、盾で受け止める。

「ガッン　ゴリッ」

強烈に硬い塊がぶつかってきた。

うつつ。重い・・・

必死で押し込まれるのを耐えるが、レベルアップしたステータスをもつてしてもかなりきつい。

なんとか耐え、避けた瞬間 シルに指示

『神の雷撃』

「ズガガガガーン」

爆音とともにストーンマンは消失した。

それぞれ残された魔石は親指の爪程度の大きさだ。

多分1個1000円以上にはなりそうだ。

しかし、この階層は結構きついな。

一回の戦闘でかなり体力を消費してしまった。

シル、ルシエの攻撃力は全く問題なく通用している。

問題は俺だ。

単体であれば問題なく盾役をこなせそうだ。

問題は俺の体力だ。

いくらレベルアップしたとはいえ全身全霊をかけて、モンスターを受け止めるので、正直滅茶苦茶きつい。

短時間での連戦はかなりきつい。休みながらやっていくしかない。

シルとルシエに魔核を与えながら、息を整えその場に座り込んでしまった。

10分ほど小休憩をとって、次のモンスターを探すことにする。

「ご主人様、向こうに4体いるようです」

「よしつ。数が多いから慎重に行くぞ。1体ずつ狩っていくからな。」

「はい」「ああ」

音を立てずに、モンスターのところまで辿り着くとそこにいたのは

ブロンズマン、ブルスマン、サンドマン、ストーンマンの4体だった。

ブロンズマンとブルスマンは今まで出たことのない、金属系のモンスターだ。

突然、普段そこまで勉強していない俺の頭が閃いてしまった。

確か銅とかの金属って導体だから電気を通しやすいよな。

地面に足がついてるからアース効果があるんじゃないか？

シルの『神の雷撃』効くのか？

普段の俺ならあり得ないのだが、なぜかこの時、物理的思考が頭をもたげた。

第40話 5階層へ（後書き）

いつもありがとうございます。

ようやく40話まできました。

当分毎日更新頑張ります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第41話 神槍ラジュネイト

物理的思考が頭をもたげている最中にモンスターに気づかれた。慌てて、シルに『鉄壁の乙女』をかけてもらう。

とりあえず、サンドマンとストーンマンをルシエの『破滅の獄炎』で消失させる。

少し余裕が出たので再び思考を開始する。

残りの金属系の1体はルシエに倒してもらうとして問題はもう1体のモンスターだ。

俺が盾役で突っ込んで、どうやって仕留める？

シルの『神の雷撃』を試してみるか？

いや、効かなかった時に隙が生まれてどうなるかわからないな。

ルシエに『破滅の獄炎』を連発してもらうか。

これも3連発は試したことがない。

ルシエだし、ちょっと不安だ。

うーん。

あれを試してみるか？

いや、でもなー。

俺が盾役しつかりやれば大丈夫か？

うーん。

悩んではみたが、これが一番いいような気がする。

「シル、神槍で攻撃することってできるのか？」

「えっ。もちろん出来ますよ。」

「じゃあ俺が抑えてる間に攻撃頼む。」

「はい」

「ルシエはもう1体に『破滅の獄炎』頼む。」

「ああ」

『鉄壁の乙女』の効果が続く瞬間、俺はブロンズマンめがけて特攻した。

「グワーン！」

ストーンマンを受け止めた時以上の衝撃が来た。押し返しながら

「シル、たのむ」

「はい」

「我が敵を穿て、神槍ラジュネイト」

シルの聖句のような声が聞こえた途端 俺の後ろが発光した。よく見えないが多分、シルの槍が光っている。

次の瞬間

「ドバガガン」

目の前のブロンズマンが消失した。

「えっ!? あー。まー、ねっ」

シルだし、神槍だし、こうなっても何も不思議なことはないのだが。今までシルに神槍を使用させなかったのは、俺なりに理由がある。ヴァルキリーとはいえ幼女。

前衛に立たせて戦わせるのには抵抗があった。

そこには俺なりの騎士道精神があった。

もちろん騎士などという高尚なものではなく、ただのモブに過ぎないがモブなりの矜持がある。

実際には守られてばかりなのだが、幼女は、俺が守るものと勝手に思っている。

前衛に立つのは俺でありたいと勝手に思っている。

そんな思いがあるので、神槍がすごいのはわかったが、できることなら今後も後衛でスキル中心に戦ってもらい前衛には立たせたくない。

「おなかがすきました」「腹減った」

いつものようにシルとルシエに魔核を摂取させるが、なぜかシルが悲しそうにこちらを見てくる。

「どうしたんだ？」

「これだと足りません。」

「え？いつもと同じけど」

「神槍を使用したので、いつもよりお腹が減りました。」

「あー。神槍ってお腹減るの？」

「はい。神具ですから。使用するだけでもお腹は減りますよ。」

「あーそうなんだ。そうだよな。へーっ。」

やっぱりシルの燃費は異常に悪い・・・

シルの神槍が十分に通用するのがわかったので今度は『神の雷撃』が通用するか試してみたい。

「シル、今度金属系のモンスターにあつたら、最初に『神の雷撃』を放ってくれるか。」

「はい、かしこまりました。」

その後もシルに感知してもらいモンスターを何組か倒したが、なかなか金属系のモンスターと遭遇しない。

もしかしたら、金属系の個体数は少なめなのかもしれない。俺でなければ、金属素材でもドロップするのかもしれない。

そんなことを考えながら、探索しているとようやく、ブロンズマンとサンドマンのペアに遭遇した。

「シル、頼んだぞ。」

「はい。『神の雷撃』」

「ズガガガガン」

「あっ。」

ブロンズマンに轟音と共に雷撃が命中した瞬間・・・

ブロンズマンは跡形もなく消えていました。
物理的法則とかは関係ないのか？

ないんだろっな。

気がつくくと、もう1体のサンドマンは、あっさりルシェが倒して
いた。

「シル。『神の雷撃』って金属系のモンスターにも効果あるんだな。」

「はい。それはもちろん『神の雷撃』ですから。」

「うん。あー。そっだよー。『神の雷撃』だもんねー。」

真面目に考えてた俺がバカだった。

モブの浅い知識など、なんの意味もなかった

シルはやっぱりシルだった。

この瞬間、いままで通り、前衛は俺。

シルは後衛でスキルを使ってもらうのが決定した。

第41話 神槍ラジユネイト（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方はブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第42話 隠し通路

今日も俺は5階層に潜っている。

探索者の目的は大きく分けて2つある。

ダンジョン内でモンスターを倒し、アイテムや魔核を手に入れる。

もう一つはダンジョンを、くまなく探索し、ダンジョンを踏破する。

前者は金儲けの意味合いが強く、後者は名誉や、探求心を満たす意味合いが強い。

プロの探索者にはバランス良く両立している人たちもいる。

俺は、心情的には後者を重視したい。

しかし、現実は甘くなく、先立つ物がなければ、準備もできないし、探索を進めることもままならないので、スライムの魔核狩りは欠かせないライフワークだ。

5階層にも少し慣れてきて、ある程度戦い方が確立されてきた感じもする。

「シル、周辺にモンスターの気配はあるか？」

「いえ、すぐ近くにはいないようですが、ちょっと変です。」

「変って何が？まさか、俺のこと！？」

「い、いえ違います。あの突き当たりの壁から魔力を感じます。」

「あ、ああ。壁ね。壁から魔力ってどういうことだ？」

「それがよくわからないんです。」

「それじゃ、ちょっと調べてみるか。」

俺は突き当たりの壁を恐る恐る、観察してみた。

モンスターが潜んでいたりと、擬態しているとやばいので、タングステンロッドで、小突いたり、落ちている小石を投げたりしてみたが特に変化はない。

思い切って、近づいて触ったり、押したりしてみたが、ただの壁だ。

「シル。特に変わったところは何も無いな。ただの壁だぞ。」

「いえ、やっぱり間違いないです。この壁から魔力を感じます。」

「ルシエ、お前はどうか。何か感じるか？」

「わたしは、なんにも感じないけど。シルが言うなら間違いないんじゃない。」

「うーん」

俺は再度、隅から隅まで探ってみたがやっぱりただの壁だ。仕掛けも無ければ、スイッチや隙間もない。

アイテムが埋まっているわけでも、モンスターが潜んでいるわけでもない。

「やっぱり、何も無いな。次に行くか。」

「ご主人様。ここ絶対何かあります。できれば私に任せてもらえませんか？」

「それは別にいいけど、何も無いぞ。どうするんだ？」

『神の雷撃』

「ズガガガーン」

「え！？ シル？」

なんとシルは壁に向かって『神の雷撃』をぶっ放した。

これ大丈夫か？ 捕まったりしないよな。

それはそうと、シルは何を考えているのか。

いきなり壁に『神の雷撃』ってやばい人だろ。

まあ人ではないけど・・・

『神の雷撃』をぶっ放した壁の土煙が晴れてきたので、じっと見てみるとそこには通路らしきものが現れていた。
これって・・・

「シル、ダンジョンの壁って穴を開けると、通路が現れるものなのか？」

「いえ、詳しくはわかりませんが、通常は違うのではないのでしょうか？」

「そうだよな」

「これ、隠し通路でしょ。それしかないでしょ！？」

ルシエがちょっと興味津々という感じで騒いでいる。

隠し通路か。

そうだよな。これが噂の隠し通路だよな。それしかないよな。

ダンジョンには未踏破エリアがある。まだ見ぬ深層エリアもそうだが、稀に隠し通路や隠し穴といったものがあり、全てが見つかったいるわけではなく、偶然に発見される場合が多い。

しかし、今回の隠し通路、壁に魔力が感じられるって、普通の探索者には分かるはずもない。

おまけに普通の壁が立ちはだかっている。調べても普通の壁だった。シルだから一発で破壊できたが、通常の探索者ではこうはいかない。電動工具を持ち込んで時間をかければ穴を開けることはできるかもしれないが、確信を持ってない状態で、そこまでの労力をかける探索者は稀だろう。

正直、隠し通路とはいえ隠しすぎだろ。

隠し通路というより、もはやただの壁だ。

だから今まで誰にも手をつけられることなく残っていたのだろう。

第42話 隠し通路（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第43話 隠しダンジョン

俺は隠し通路の前にいる。

これからどうすべきか考えている。

選択肢は3つだろう。

- 1・・・このまま戻ってギルドに報告して、後日挑戦する。
- 2・・・無かったことにしてこのまま立ち去る。
- 3・・・準備も予備知識もないがこのまま隠し通路を探索する。

当然、2の選択肢はないが、1と3は悩みどころだ。

普通であれば1が望ましいのはわかる。わかるが、隠し通路の先が気になる。

お宝が眠っている可能性もある。

しかし、完全に未知の領域だ。何が起こるかわからない。俺たちで対処できるか疑わしい。

「うーん。どうしようか。シル、ルシエどう思う？」

「ご主人様の思うようにすればいいと思います。3人なら何かあっても大丈夫ですよ。」

「あー。せっかく見つけたのにもつたいないだろ。なに悩んでんだよ。」

「そうだよな。よし、決めた。進もう。」

結局俺は進むことにした。先が見たい好奇心に勝てなかった。

「ここからは何があるかわからないから、慎重に行くぞ。シルもモンスターがいたらすぐ知らせてくれ。ルシエも自分の判断で先制攻撃してもいいからな。」

「はい、わかりました」「わかった、ぶっ放してやるよ」

俺は、通路を進んでいったが、ただの一本道ではなく、そこにはダンジョンが存在していた。

隠し通路ではなく隠しダンジョンだったようだ。

おそらく、そこまで広くはないのだと思うが、用心しながら探索を開始する。

歩いているとシルが

「ご主人様、その床がちょっと変です。」

ちょっと見、なんの変哲も無い床だが・・・

シルが言うのなら多分そうなんだろう。

俺は、小石を投げてみたが、変化がない。今度はタングステンロッドで先の床を叩きながら進む。

「ズザザザー」

「うおっ。」

タングステンロッドでたたいた床の一部が崩れ、蟻地獄のように砂が流れていつている。

「これはやばいな。シル、この先おかしなところがあったらすぐ言

つてくれ。ルシエもシルより先行しないよう注意して進んでくれ。」
おそらく砂にはまると、抜け出せなかっただろう。
通常のダンジョンと明らかに違う。今までモンスターは出現したが、
トラップが出現したのは初めてだった。

先程の床もシルがいなかったら、危なかった。
残念ながら、畏看破のような便利なスキルは持ち合わせていない。
シル頼みで進むしかないな。

その後も探索を進める

「向こうにモンスターが3体います。」

初出現のモンスターを確認すると、そこにいたのは
なんと

真っ赤なワイルドボア？ 2匹と真っ黄色のブロンズマン？だった。
どちらも強烈な原色カラーとぶよぶよでサイズが一回り以上大きい
気がする。

「ちょっと目が痛いです。」 「気色悪い色だなー！」

シルとルシエが騒ぎ出した。

「今までと同じで行くぞ。」

「気持ち悪いです。今までよりひどいです。」

「同じじゃない。あの色とブヨブヨのサイズ見てわかんないのか？
バカかバカなのか？」

シルとルシエが騒いでいるが、スルーして指示を出す。

「シル『鉄壁の乙女』 ルシエ 黄色い方を頼む」

俺はそのまま『鉄壁の乙女』の効果範囲内からボウガンの矢を連射する。

いつものワイルドボアならこれであっさり仕留めれる事が多いのだが、一回り以上大きいせいか脂肪のせいか、なかなか倒せない。

1匹に手こずっている間にもう1匹に距離を取られた。

1匹は放っておいて今掛かっている方に集中して追撃を続ける。

矢を5本命中させたところで消失した。

俺の横でルシエが黄色の方に なんと『侵食の息吹』 を使用していた。

気持ち悪いからか、動転したのか 突然の使用となったが敵には初使用だった。

「グジュール、ジュール」

ブロンズマンに思考能力がないのか、狂ったようなそぶりはなかったが、気持ち悪い感じに溶けて消失した。

生物系以外にも問題なく効くようだが、やっぱりあんまり気持ちの
良いスキルではない。

残った1匹を追いかけて俺が飛び出す。

月の輪熊ほどもある体躯だが。かなり素早い。

猛然と逃げ回るのを、予測して先回りしてボウガンの矢を射出する。1本命中すると、さらに激しく逃げ始めた。

間違っても、ぶつかられないように、注意に注意を重ねながら追い詰めていった。

最後、5本目の矢がささるのと同時に消失した。

2体で矢を10本使用してしまった。もちろん回収再利用はするけど足りるかな・・・

残った魔核は今まで最大で五円硬貨ぐらいの大きさがあった。

おそらく1個1500円は行くだろう。

でも・・・

シルとルシエの分を引くと、ほとんどゼロかもしれない。

ドロップアイテム出ないかな・・・

第43話 隠しダンジョン（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第44話

トラップ & トラップ

俺は隠しダンジョンを奥に進んでいる。

途中何体かのモンスターと遭遇して撃退したが、どうやらこのダンジョンに出現するモンスターは、今までに遭遇したモンスターの亜種。亜種といっても激しい色と一回り以上大きい躯体で、精神的にも肉体的にもかなり負担がかかる戦いを強いられている。

トラップらしきものは、蟻地獄のような床以来、特になさそうだ。最初だけだったのかなと思いつつも慎重に歩を進めていると、

『カチッ』

と音がした。

ビクツとして瞬間的に音がする方を見るとルシエがスイッチらしきものを踏んでいた。
やばい。

「ルシエっ　!?!」

やばいと感じ声をかけた瞬間

「シュッ」

「あ・・・」

風切り音と共に矢が飛んできて、ささった。

なぜか、ルシエではなく 俺に。
それも2本も。

「う、うう」

「いってー!!」

「ぐうう。ううう。」

「ゲホツ、ゲホツ」

実際には刺さりはしなかった。

おっさんに勧めてもらったカーボンナノチューブのスーツが矢が刺さるのを防いでくれた。

刺さりはしなかったが死ぬほど痛い。

一本は胸の付近に命中してしまい、息ができない。

死んでないって素晴らしい。

でも死ぬほど痛いし、苦しい。

涙が溢れてくる。

『男子泣を見せるな』という言葉があるが、男子だって人間なんだ。痛かったら涙も出る。

我慢のしようがない痛みだった。

うずくまって痛みを我慢していると

シルとルシエが

「ご主人様大丈夫ですか？死なないですよね！？ どうすればいいですか？ああ、ルシエどうしよう」

「お、おい。大丈夫か？私は悪くないぞ。悪くない。スイッチが悪いんだ。大丈夫だよ。死ぬなよ。死んだら地獄に落ちるぞ。」

「た、たぶん大丈夫だ。ううう」

2人があたふた焦っている感が伝わってくる。こんなに切羽詰まった感じになるのは初めてだと、痛みを耐えながら少し冷静に考えていた。

しかし、ルシエが最後の方に不穏なことを言っていた気がする。

俺って死んだら地獄行き確定なのか？

嫌だ・・・

それから5分ぐらい経ってようやく動けるようになってきた。

体を確認するが、痛みはまだ残っている。もしかしたら胸骨あたりにヒビでも入っているかもしれない。

ただ今回はラッキーだった。頭に当たっていれば即死だっただろう。最近、シルヤルシエのおかげで、死の恐怖は少し遠のいていたが、やっぱりそんな甘いもんじゃ無かった。

気を抜いていたわけじゃない。

でも突然矢が飛んできた。

もちろんルシエがトラップに、はまったからなのだが、やってしまったものは仕方がない。

「ごめん」

「えっ!？」

なんとルシエが謝ってきた。小さな小さな声だが確かに聞こえた。一瞬耳を疑ってしまった。

まあ、死にかけたのだから、謝罪ぐらいあってもおかしくはない。
おかしくは・・・

「まあ誰でも1回ぐらいは失敗するもんだ。これからは気をつけてくれよ」

「ああ。わかったよ」

今回の事で慎重になった俺は、1個しかない低級ポーションは念の
為、残しておく事にした。

そのまま歩き始めてしばらくすると、また先程と同じような

「カチツ」

という音がした。

まさか。 という思いで後ろを見ると、そこには固まったルシエが
いた。

また、お前か。

今度は避けねばと本能的に横に飛び込んだ。

飛び込んだ先に水たまりがあり着地した瞬間

「アババババ!!!」

電気伝導率の高いナノカーボンチューブ製のスーツを着用した俺に、
強烈な電気刺激がやってきた。
強烈な痛みと衝撃が襲ってきた。

昔、電気風呂というのに入ったことがあるが、全くの別物だ。

感覚的にはあれを100倍にも1000倍にもしたような感覚だ。
今までに感じたことのない衝撃に俺の視界は暗転してしまった。

第44話

トラップ & トラップ(後書き)

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第45話 低級ポジション(前書き)

週末なので本日2話目です。

第45話 低級ポーション

どのぐらい時間が経ったかわからない。
俺は夢を見ていた。

ルシエに連れられて地獄に来ている夢だ。
まさに悪夢だ。

「……さま」

「……おい」

「……さまして」

「……ごく行きだぞ」

シルとルシエの音がする。やっぱりルシエが地獄行きだと言っている。

もう地獄にいるよと思いながら、少しずつ意識が覚醒する。

「う、う、う」

「ご主人様!!」 「おおっ!!!!」

「シル、ルシエ、俺は……」

「ああっ。ご主人様よかった。もうダメかと思いました。」

「ああ、地獄に落ちたのかと思ったたら戻ってきたのか。よかったな」

「ルシエったら、そんなことばかり言ってる。さっきまで泣いて大変だったじゃない。」

「シルなにいつてるんだよ。そんなことあるわけないだろ」

二人のやりとりを聴きながら、ちょっと頭がはつきりしてきた。

俺は・・・

トラップに、はまったんだった。電撃を食らって意識が無くなったんだった。

慌てて自分の体を確認する。

特に変わったところはない。とっさに髪の毛も触って確認するが

普通だ。

いや、変わったところがないのがおかしい。

その前に受けたトラップのダメージもほとんどなくなっている。痛みがない。

これは・・・

まだ夢の中なのか？

いやでもこれは現実だよな。

「シル俺はどうして無傷なんだ？意識がない間に何があった？」

「はい。ご主人様は電撃のトラップにはまってしまって、意識を失いました。慌てて確認したのですが、やけどを負われて、意識は戻らないし、心音も弱くなってきたので、勝手にご主人様の持つていた低級ポーシオンを使用しました。」

ああ、そういう事か。

俺はトラップにはまって、重傷を受けた。それをシルがポーションを使って治してくれたらしい。

「よくやってくれた。本当に助かったよ、シルありがとう。」

「いえ。ご無事でよかったです。」

低級ポーションすげー。

低級でこの効果、すげー。

低級で10万円もするだけある。

命の恩人、低級ポーション。

探索のお供に低級ポーション。

言葉では言い尽くせない感動がある。

初めて使用したが、こんなに効果があるとは思わなかった。

正直低級と侮っていた。何かの時のお守りがわりに買ったのだが、

お守りどころではなかった。

一緒に買いに行ってくれた葛城さんにもありがとう。

人知れず感動した後ちよつと冷静になってきた。

俺がトラップに、はまったのって・・・

ルシエだ。2回共、あいつのせいだ。あいつがトラップのスイッチを「カチッ」と2回も踏んだからだ。

「ルシエ。ちよつといいか」

「え。なんだよ。」

「なんだよじゃないよね。ちよつと口のききかたに問題があるんじゃないかな。」

「え？」

「1回目は仕方ないって言ったけど、2回目も仕方ないとは言えないよな？」

「そ、それは。スイッチが悪いんだよ。私の足の下になんかあるから……」

「ルシエ！？わかってるよね。」

「い、いや。ちょっと電撃ぐらいであんなにダメージ負うと思わなかったし」

「るしえ！？」

「ああ」

「ああ？」

「い、いや。はい……」

「なんか言う事ないの？」

「はい……ごめんなさい」

「ごめんですもの？」

「ごめんなさい。もうしません。」

「もうしないって言っても、1回目の時もわかったって言ってたよね。」

「う……」

「今のままじゃ怖くて歩けないから、このフロアでは、移動中はカードに戻ってもらおう。」

「えーっ！？」

「えーじゃない。それともう一つ。今後はもう少し俺への態度を優しくする事。この2つができれば、今回の件は忘れるけど。」

「うー。わかったよ」

「わかったよ!？」

「い、いや わかりました。」

さすがに3回目は無理なので、そのままルシエをカードに戻す。今までスルーしてきたが、今後もルシエには教育的指導が必要かもしれない。

第45話 低級ポーション（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第46話 エリアボス？

低級ポーションはもう無い。

普通に考えると、慎重に來た道を撤退するのが正解だろう。

しかし

「ご主人様、少し先にモンスター3体の反応があります。ちょっと今までと感じが違います。」

シルがこんなことを言うものだから、迷ってしまった。

あと3匹ぐらい大丈夫だろう。ちょっと感じが違っつていうのも気になる。

好奇心に負けて、進んでしまった。

「よし。この3体を倒したら撤退するぞ。最後まで頑張っていこうか。」

「はい。かしこまりました。」

シルの指示する方向に進んでいくと、なんと扉があった。ここまでで初扉だ。

なんか胸騒ぎはするものの、探索者であれば扉があつて、開けないということはあるまい。

俺は思い切つて、少しずつ開けてみることにした。

クツと力を入れて押してみる。

あれ？

開かない。

今度は引いてみるがやっぱり開かない。

スライドドアのオチもなく開かない。

よく見ると鍵穴がある。どこかで鍵を手に入れないと開かないようだ。もちろん俺は持っていないのでどうしようもない。

「シル。鍵がないから無理っばい。」

「大丈夫ですご主人様、私にまかせておいてください。」

「え?」

『神の雷撃』

「ズガガガガーン」

「あ!？」

またシルがやってしまった。

壁の時と同じく有無を言わず、1発かましてしまった。

扉を見ると、跡形もなく消し飛んでしまっている。

結果オーライなのかもしれないが、当初の予定の隙間から覗き見るプランは崩壊してしまった。

全開の入り口を見るとそこには

見た事もない超大型スライムと白熊ぐらいの大きさの鬼が2体そこにいた。

鬼はおそらくオーガと呼ばれるモンスターだと思われるが、なんかうつすらと光っているし知識にあるオーガよりも明らかに大きい。スライムも見たことがない種類のスライムだったが大きさがおかし

い。

下手するとオーガよりも大きい。

なんかどちらにもボス感が半端ない。

やばい感じもかなりするが、オーガの方と目がバッチリ合ってしまったている。

今更逃げ出すのは無理だろう。

俺は急いでルシエを召喚する。

「ようやく出番かー？」

「いきなりで悪いが、なんかボスっぽい。」

「え？まあいいけど、なんでそんなのがいるんだよ？」

「まあ、シルがちょっと、な」

「とにかく、シル、ルシエ 入り口に入った瞬間、オーガに先制攻撃がまずぞ。」

「はい」「うん」

俺たちは入り口に走って入り

『神の雷撃』

『破滅の獄炎』

を発動した。

爆音と共に土煙が舞い、おさまるといつものように敵が消失して・

いなかった。しっかり頭在していた。

「なっ!？」

どういう事だ？2人のスキルが効いてない!？

よく見ると、それぞれ火傷したような痕は見られるので全くのノーダメージではないようだが、致命傷には程遠い。

通常のオーガに2人のスキルを耐えきることができるとは思えない。考えられるのは、あのうつすらと光った感じ。スキル無効化もしくはスキル耐性アップの魔法か何かがかかっているのではないか？そうだとすればどうすればいい？

雷撃と炎は、ほぼ無効化されている。

全てのスキルが無効化される可能性は有るが、別のスキルが有効の可能性もある。

急いでシルに指示

「シル『鉄壁の乙女』を頼む」

『鉄壁の乙女』

さすがに『鉄壁の乙女』まで無効化されるとやばいと思ったが、攻撃してきたオーガが、効果範囲を突破してくることはなかった。この事で少し冷静になれた。

やはり全てのスキルを無効化するわけではない。

ほかのスキルであれば、どれかが通用する可能性があるという事だ。今までに無い展開に最初は焦ったが、今は不思議な程冷静に考えることができている。

今までの成長を見せる時が来た。

そう感じていた。

第46話 エリアボス? (後書き)

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第47話 エリアボス戦

『鉄壁の乙女』の効果範囲の中で瞬時に指示を出す。

「ルシエ、右側のオーガに『侵食の息吹』を頼む。」

そう言いながら俺はオーガに向かってボウガンを連射。

「ギャウワー！、グウギャワー！！」

矢はしつかり刺さっている。物理攻撃は有効のようだが、決定打とはまだなっていないようだ。

的が大きいので当てるのは容易だが、とにかくデカくて筋肉の塊のようだ。刺さっても奥まで突き抜けてはいない。

更に追撃で5連射。確実に効いている。

となりのオーガは「グギャー！！ ウギユルエー、グウワアー！？」

かなり怒り狂ったような声を上げている。『侵食の息吹』の効果があるにはあるようだが、こちらも、かなりレジストされているようで、本来の効果を發揮していない。

この時点で、もはやルシエは攻撃要員としては機能しない。後、可能性があるのは俺自身とシルの 神槍ラジュネイト だ。

俺の物理攻撃が効いているので、おそらくシルの神槍なら倒せる。

しかし、シル1人でオーガ2匹は同時には相手に出来ないし、たとえ1匹だとしても発動まで俺が盾役をこなさなければならぬ。

それは、つまりどちらか1匹は俺が倒さないといけないという事だ。

考えを瞬時に整理して再度、ボウガンを連射して急所を狙う。次々に矢は刺さっていき、かなりダメージを蓄積させたように見えるが

「まずいな・・・」

ボウガンの矢は普段20本持ち歩いているが既に15本まで射出してしまっている。残り5本で確実に倒さなければならぬと思い、オーガの頭を狙って連射する。腕で防がれながらも

「グウギャー！！！」

オーガの右目に命中した。

「やったか？」

相当ダメージがあるのは間違いない。しかしまだ消失には至らない。

「やばい・・・」

ついに矢のストックが切れた。この巨躯相手にタングステンロッドで肉弾戦はきつい。というより無理だろう。

となると、あとはウォーターボールしかない。そもそも効果があるかはわからないが、俺のウォーターボールは物理

的に氷の玉をとばす。
単純な物理攻撃に近い。可能性はある。

現在の俺のMPは27　およそ6発分だ。
この6発に全てをかける。

『ウォーターボール』

オーガの頭を狙って放つ。

「ドガッ！」

俺が魔法を使うと思っていなかったのか、ボウガンとは違うスピードで向かってくる氷に反応が遅れ、頭に直撃して、オーガの頭がのけ反った。

「いける！」

あれほどの耐性をシルとルシエのスキルには発揮したが、俺のウォーターボールは、もろにダメージが通っている。
続けて2発を放つ。「ウォーターボール」「ウォーターボール」

「ガンッ　ドガッ！」

確実に効いてグロッキーだがまだ消失に至らない。
単純に威力が足りない。
あと3発・・・

「やるしかないっ！」

ウォーターボールの特訓を思い出せ。大きさは変えられなかったが、形は変えられた。それならこの氷玉も元は水玉。形を変えられるはずだ。水の時は変えても意味はなかったが、氷になった今なら・・・とっさに俺は

『ウォーターボール』を唱え

形をイメージする。

イメージするのは槍の穂先。

先端を極限まで鋭利に尖らせ放つ。

「グサツ」

見事にオーガの頭に刺さった。間髪入れずに2発目を放つ。

「グサツ!!」

今度もうまく刺さった。

刺さったと同時にオーガがようやく消滅した。

やった!

やってやった!

ついに俺がオーガを倒した。

俺史上最高の偉業を達成してしまった。

喜びで飛び跳ねたくなる衝動を抑えてもう1体のオーガを見る。

「グヤッジュヤー

ウッヤグ「ウアー

グウアー」

先ほどよりも、精神錯乱は進んでいるようだが、寧ろ凶暴性が増しているようにも見える。

いずれにしてもこのままでは消失するよりも先に『鉄壁の乙女』の効果切れ。

俺は疲労感をアドレナリンで消し、覚悟を決めて2匹目に向かっていった。

第47話 エリアボス戦（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第48話 エリアボス撃破

俺はもう1体のオーガに向かって突進した。盾を持ったまま突撃した。

「ドガッツ！」

さすがにゴブリンとはわけが違う。

長時間は持たない。

「シル、神槍を使用してくれ。それまで俺が引きつける。ルシエ、あつちのでかいスライムに『破滅の獄炎』を頼む」

指示を出しながら最後の「ウォーターボール」を詠唱

一撃で仕留める自信はないので、動きを阻害する為、右足を狙って、槍の穂先状の氷を射出する。

「グシュッ」

「グギヤーツ！」

近距離からなので確実に命中させることができた。

もう俺には攻撃手段は残されていない。スツカラカンになったが十分に役目は果たした。

「我が敵を穿て、神槍ラジュネイト」

シルが射程に入り、神槍を発動した。

「ドバガガガーン」

あれほど苦勞したオーガが一瞬にして消失していた。

「ははっ」

やっぱりシルは凄かった。

残るは巨大スライムだが、見るとルシエが『破滅の獄炎』を發動していたが、スライムは消失していなかった。

「こいつもか!?!」

こいつもスキルが効かないようだ。

だとすれば、シルの神槍だな。

「シル 俺が足止めしている間に、あのデカイのにも神槍を頼む」

「わかりました。」

俺は再度盾を構え直して、スライムへと向かう。

相対するととにかくデカイ。たかが、スライム されど、この大きさ……

盾を構えて近づいて、接触した瞬間

「ジュツ、ジュオー」

「!?!」

凄い音を立てて、盾が溶けていく。

やばい。このスライム強酸が何かできているのか？
まともに触れたら死ぬ。
まじで死ぬ。

俺は溶けかけの盾をそのまま投げつけ、横に飛び退いた。

「我が敵を穿て、神槍ラジユネイト」

再度、発光とともに神槍が炸裂

「ズバガガガン」

衝撃とともにスライムは消失して
いなかった。

たしかに一部は吹き飛んだ。しかしデカすぎるのか、すぐ別の部位
で補完して少し小さくなったが、元の状態を保っている。

「マジか・・・」

シルの神槍の効果も限定的だった。このまま連発することも考えた
が、強酸の恐怖もある。

ハイコストの為MPの残量も気になる。

もうあれしかないのか!?

俺に残された最終手段を発動させるべく

「シル、スライムとの間に『鉄壁の乙女』を張ってくれ」

「はい。『鉄壁の乙女』」

『鉄壁の乙女』の効果範囲から殺虫剤ブレスをダブル噴射した。

スキル スライムスレイヤーで補正された必殺殺虫剤プレスだ。スライムに効かないはずがない。

まず2本使いきってしまった。すかさずスピアに持ち替えて射出を続ける。持ち替えた2本も使い切り、手持ちの残り1本を使用する。

「ブシューシュー！」

この1本に俺の全てをかける。

「おおおおー!!!」

気合いの雄叫びとともに射出し終わった。

スライムをよく見ると明滅し始め、消失した。

やった。

スライムスレイヤーはビッグスライムスレイヤーへと進化した。ギリギリだった。

MPも装備も全て使い切ってしまった。

シルとルシエのスキルが通用しないとは、これっぽっちも考えていなかった。

本当に危なかった。

でも俺はやった。やってやった。勝った。

生き残った。

湧き上がる達成感と興奮に浸っていたらルシエが「ピカーツ」と光った。

これはまさか・・・

俺は慌ててルシエのステータスを確認した。

種別 子爵級悪魔

NAME ルシエリア

LV 2

HP 80

MP 138

BP 143

スキル 破滅の獄炎

侵食の息吹

暴食の美姫 NEW

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

おおっ。ステータスが軒並み上がっているのと新しいスキルが発現している。

スキル 暴食の美姫・・・契約者のHPを消費する事で、一時的にステータスアップを図ることが出来る。

ステータスの上昇幅は契約者との信頼関係に依存する。

なんだ？このスキル。契約者って俺のことだよな。おそらく、ルシエとの信頼関係が深まった事で発現したスキルだとは思うが、HPを消費するってなんだ？俺の命を吸い取っていくということではないのか？

ルシエが強化されるのは嬉しいが、命を吸い取られるのは、ちょっと無理だ。

悪魔にふさわしいスキルかもしれないが、怖い。

これは当分封印だな。

そもそも、今回の戦いで全く活躍しなかったのに、なんでレベルアップしてるんだ？

パーティ戦なのはわかるがちょっと納得いかない。

第48話 エリアボス撃破（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第49話 ポストドロップ

ルシエのレベルアップを終え、俺も自分のステータスを確認してみた。

LV 15

HP 47

MP 31

BP 52

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール

「おおっ」

レベルがついに15になり、なんとBPが50を突破した。

BP50だと探索者の中でも、それなりに頑張っている人たちの仲間入りだ。

今回は流石に活躍した自覚があるので、本当に嬉しい。

一人で感慨にふけていると、倒したモンスターたちの跡に魔核が残されている事に気がついた。

オーガ2匹の跡に残されていた魔核はなんと、赤みを帯びている。

こ、これは・・・以前何も知らず、シルに使用してしまった、レア魔核ではないか。

しかも前回よりも大きい。しかも2つも・・・

これは500万円以上は確実だろう。

ついに俺に春がきた。
俺はついにやったよ、母さん。
ボスっぽいモンスター最高！
ビバ隠しダンジョン！

感動しながらも、ビッグスライムの跡を見るとそこには

「これは、いったいなんだ？」

そこにはドロップアイテムと思われるものが落ちていた。

多分これは、ナイフ？いやもつと小さいな。ステーキナイフ？
一応刃物なのは間違いないが小さい。

ボスっぽいモンスターからのドロップなので普通のステーキナイフ
ということは無いと思うが、よくわからない。

こんな感じのドロップアイテムは、ダンジョンマートでも見たこと
がない。

もしかしたらレアアイテムかもしれない。

見た感じはレアアイテムっぽくはないが、とりあえず、持って帰っ
てギルドで聞いてみよう。

超高額なアイテムだったら、速攻で売りたい。

アドレナリンで疲労を抑え込んでいたが、一気に疲れが出てもう立
っているのも辛い。

一刻も早く戻らないと、いつまた襲われるかわからない。
残念ながら今襲われたら死ぬ自信がある。

「シル、ルシエ、急いで帰るぞ。極力モンスターは避けてくれ、頼
んだぞ。」

「ご主人様・・・」 「ちよつと無理・・・」

「ん？なんだ、どうした。」

「お腹が減りましたー」「腹が減ったんだよー」

「あー。忘れてた・・・」

よく考えると今までで一番スキルを連発させていた。それはお腹も空くだろうと思ひ、俺はそれぞれに奮発して、魔核8個つつ渡した。

「満足です」。また大きいオーガとか出るといいです」「うん、今回はよかった。いっぱいもらえて大満足」

2人とも満足したようなのでさつさと、地上を目指す。

途中2度ほどモンスターと交戦したが、俺は心身ともにすっからかんなので、シルとルシエに任せつきりになった。

少し気が咎めたけど、モブの俺が、あれだけ頑張ったんだからこのぐらいは許してほしい。

ふらふらになりながらも、シルたちにおぶさる訳にもいかず、どうにかこうにか自力で地上までたどり着くことができた。

ただギルドに行く余力はなかったので家路について、いつものように、ベッドにフルダイブして朝までぐっすり眠ってしまった。

疲れていた所為で、その日は全く気がつかなかったけど、次の日になつてルシエもほんの少しだけ身長と髪が伸びていることに気がついた。

やっぱりLVが上がると微かに成長するらしい。

今回の出来事のお陰で、ルシエの言葉使いと俺への態度も少しだけ良くなった気がする。

死にかけただけのことではあつたと思つ。

ただ、俺はシルの時と同様にテンションが一気に上がったせいで、超絶美女になるまでに、このペースだといったいどのぐらいのレベルアップが必要かを考えることを放棄してしまっていた。

第49話 ポスドロップ（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第50話 魔剣？

次の日俺は学校に行っつていつものように真司と隼人に

「おつ

とあいさつしたが2人からは、なぜか返事がなかった。

???

なんだ？

「なんだよ。2人ともどうしたんだよ。」

「海斗くん、おととい何をしていたのかな？」

おととい？

「買い物してたけど、それがどうした？」

「ふ〜ん買い物ね。誰とどこにいったのかな？」

ここまで聞いてピンときてしまった。

昨日何もなかったから完全に大丈夫だと思って油断していた・・・

岡田 剛だ。

あいつが、ショッピングセンターでの事を言いふらしたに違いない。

「あ、あれだよ。あれ」

「どれだよ？」

「あの、この前言った、おつかいだよ。行くって言ってただろ。」

「確かに行くとは聞いたけど、本当に行ったんだな。しかもおしゃれして、デートみたいだったそうだが」

「い、いや、それは服を選んでもらって着替えたからで・・・」

「は？お前、葛城さんに服選んでもらったのか？それってもしかしてデートじゃないのか？」

「いや。おつかいだよ。おつかい。俺的にはすごい楽しかったけど、残念ながらただのおつかいだよ。」

「あー、お前らしいな。やっぱり海斗だな。海斗はどこまでいっても海斗だな。」

「どういう意味だよ。わけのわからない事を言っなよ。」

「それはそうと葛城さんと次の約束はしたのか？」

「そんなの、してるわけないだろ。そんなに何回も一緒に買い物なんかしてくれるわけないだろ。」

「は？。ダメ元で誘ってみろよ。減るもんじゃないし。案外何回でも一緒に行ってくれるかもしれないだろ？」

「いや、そんなに買うものも、もうないし。」

「そういう問題じゃないと思うけど、海斗だしな。まあ頑張れ。」
いろいろと、大きなお世話だと思いながら1日が終わってしまった。
授業が終わって、早速、ギルドに来ていた。
いつものように日番谷さんのところに並んで

「すみません、ちょっといいですか？」

「はい、今日は買取でしょうか？」

「まあ、魔核の買い取りなんですけど。これをお願いします。」

俺は昨日手に入れた赤みがかった魔核を2個ともカウンターに並べた。

「これは・・・少々お待ち頂けますか？」

「はい。大丈夫です。」

日番谷さんは魔核を持って奥の部屋へ行ってしまった。
5分程待っていると、日番谷さんが奥から戻ってきた。

「高木様。失礼ですがこの魔核はどこで手に入れられたのでしょうか？」

「えっと、昨日ダンジョンの5階層で隠しダンジョンを見つけまして、その奥にオーガっぽいのがいて、倒したらそれが残ってました。」

「え？隠しダンジョンですか？今まで5階層でそんなものは見つかっていませんが、その話は本当でしょうか？」

「ええ間違いありませんよ。昨日行ってきましたから。」

「そうですね。至急ギルド職員に確認させますので、マップを指示頂くことは可能でしょうか？」

「はい。大丈夫です。ところでその魔核なんですが……」

「失礼しました。この魔核ですがオーガのものなんです。それにしてもちょっと大きい気がしますね、」

「この魔核は特別な魔核になります。1つで350万円。2つで700万円となりますが、いかが致しましょうか？」

「あ……も、もちろん買取お願いします。すぐに売ります。」

「かしこまりました。では少々お待ちください。買い取り代金はお振込みでよろしいでしょうか？」

「はい。それをお願いします。あと、ちょっと鑑定して欲しいアイテムがあるんですけど。いいですか？」

「鑑定料として3万円お支払いいただければもちろん大丈夫ですよ。」

「じゃあこれをお願いします。」

俺は昨日手に入れたステーキナイフ？を取り出して日番谷さんに渡

した。

「これですか。少々お待ちください。」

また日番谷さんは奥の部屋に下がっていき、しばらく待っていると帰ってきた。

「これが鑑定書になります。鑑定料は先程の買い取り代金から相殺させていただきますね。」

「はい、それをお願いします」

俺は渡された鑑定書をその場で見てみた。

アイテム名

魔剣 バルザード

魔核を吸収する

事で斬撃の威力を増す。

え？

これ魔剣なの？

魔剣ってこんなに小さいの？

ステーキナイフぐらいしかないけど魔剣！？

「あの、すいません。魔剣ってあの魔剣ですよね。こんなに小さい魔剣であるんですか？」

「鑑定結果に間違いはないので、そちらは間違いなく魔剣です。ただ、私が今まで見た中では一番小さいサイズの魔剣となります。」

「一番小さい……これの次に小さい魔剣ってどんなのでしたか？」

「そうですね。大体刃渡り30cmぐらいの物でしたね。」

「これ、それよりもかなり小さいですね。」

「はい。まあ、かなり。でも間違いなく魔剣ですから、使用するれば高木様の助けになってくれますよ。」

こうして俺は憧れの魔剣を手にしたこととなった。
最小サイズのステークナイフっぽい魔剣を・・・

第50話 魔剣？（後書き）

いつもありがとうございます。

ようやく50話まで来ました。これからも頑張ります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第51話 パーティアタック？

俺はエリアボス戦で精根尽き果ててしまい、思い切って今週いっぱい、ダンジョンに潜るのを休む事にした。

今までで一番の長期休暇となるが、消耗した状態で無理をすると危ない気がしたのでこれからの準備も兼ねて普段でできなかった事もやってみようかと思う。

まずは真司と隼人に声をかけてみる。

「今週いっぱい、暇なんだけどどっか遊びに行かないか？」

「珍しいな。ダンジョンは潜らないのか？中毒症状出ないの？」

「中毒ってなんだよ。人を病気扱いするな！ちよつと頑張ったから休むんだよ。どっか行こうぜ。」

「そついや海斗は今2階層だっけ？」

「いや、よつやく5階層に潜ったところだけだ。」

「え？5階層？まじで？まじで言ってる？そんなに進んでるのか？」

「ああ。まじで言ってる」

「レベル幾つなんだよ？」

「昨日レベル15に上がったとこ」

「レベル15！？ お前万年レベル3じゃなかったっけ。なんか裏ワザあるのか？俺たちにも教えてくれ。金積んだのか？」

「そんなことするわけないだろ。実力だよ、実力。」

「海斗がダンジョンジャンキーなのは知ってたけど、すごいことになってるな。探索者のプロでやってけるんじゃないのか？せっかくだから、俺たちもつれてつてくれよ。2階層でいいから。な、いいだろ。」

「お前らもダンジョン行きたいの？俺、今日から休んでるんだけど。」

「普段、5階層に潜ってるんだよな、2階層なんか休んでるようなもんだろ？頼むよ。この通り。」

「押んでくる2人を見て、2階層ぐらいだったら、リハビリがてらいかなと思っってしまった。」

「もしかしたら末期の中毒かもしれない。」

「わかったよ。2人とも準備してから明日の放課後な。」

「おおっ！楽しみだな。ご指導お願いします。海斗教官」

次の日の放課後、2人とそのままダンジョンに向かった。

2人とも以前の俺と変わらない軽装だが、武器はそれぞれ、金属製のバットと農耕用の鍬を持ってきていた。

貧弱だが、以前、木刀でゴブリンにソロバトルを挑んだ俺よりは随分マシに見える。

「それじゃあ。今から潜るけど打ち合わせしとくぞ。 2階層はゴブリンが単体で出現する。見つけたらまず俺が、ボウガンで足を狙う。機動力を奪ったところで、俺が前衛で注意を引くから2人は横か背後から一気に畳み掛けてくれ。狙うのは頭と首な。危なくなったらすぐに離脱してくれ。俺が仕留めるから。」

「おおっ。海斗がプロっぽい。しかし・・・お前のその格好なんなの？海にでも潜る気？どっかの変態みたいだな。」

「馬鹿にするな。これでも中古で50万もしたんだからな。カーボンナノチューブでできてるんだよ。」

「中古で50万もするの？騙されてないか？」

「ちょっと、そのぴっちりで誰かの中古って抵抗感あるよな。」

「お前ら、サポートしてもらおう気ある？ やっぱりやめとくか？」

「あ、よく見るとちょっとかっこいいかも、いやむしろオシャレかも。海斗先生お願いします。」

「調子良すぎだろ。まあいいけど作戦通りで頼むぞ。気をぬくと危ないからな。」

「はい。海斗先生。」

俺たち3人はそのまま2階層まで潜り、ゴブリンを探しているが、普段と違い、シルがないのでかれこれ30分近く歩いている。

「なかなかでないもんだな。ゴブリンって本当にいるのか？」

隼人がそう言った直後、前方にゴブリンを発見した。

「俺がボウガンを射出して、ゴブリンの動きを止めたら、2人で頼むぞ」

そう言って、ゴブリンから10Mぐらいの地点まで近づいて、足を狙って連射した。

「グギャーギャギャー！」

うまく両足に刺さってくれた。これで素早い動きを封じたので、あとは安全を確保しながら仕留めればいいだけだ。

あれ？

しばらく待ってみたが、一向に真司と隼人が攻撃をかけない。

???

後ろを振り向くと、2人とも顔を引きつらせて、固まっていた。

「おい、2人とも作戦通り頼むぞ。」

反応がない。

仕方がない俺が仕留めるか。

俺は、そのままゴブリンの頭部に向けてボウガンを射出して無事、仕留めた。

前途多難だなと思ったけど、まあこれからだと気持ちを切り替えて次に臨むことにした。

第51話 パーティアタック? (後書き)

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第52話 パワーレベリング？

俺は固まっっている真司と隼人に向かって

「そんなに緊張しなくて大丈夫だって。俺がついてるから安心してくれよ。伊達に毎日潜ってるわけじゃないからな。俺も最初はそんな感じだったからわかるけど、慣れだから。次も俺が足止めするから頼むぞ。」

「ああ、わかった」

以前の俺ならどの口が言うんだというセリフだが、下層域での戦闘を積んだ今の俺は少し余裕がある。経験者としてできる限りサポートに気を配っていきたい。

それから俺たちは次のゴブリンを探して歩いている。

途中、真司と隼人がゴソゴソなにか密談している。

「おい隼人。さっきはびびったな。俺全然動けなかったよ。ゴブリンってあんなに怖いんだな。やっぱりモンスターだな」

「ああ俺もだよ。足がすくんで全然動かなくなった。もうちょっとでおしっこちびりそうだったよ。だけど、なんかすごかったな。」

「ああ、あれって本当に海斗だったか？双子の兄とかじゃないよな。毎日潜ってたのは知ってるけど、なんかプロの探索者みたいになってるな。」

「本当にLV15だったんだな。あんなの見たら女の子が惚れても不思議はないな。あんな、ぴっちりくんなのに、なんかカツコ良く見えちゃったよ。吊り橋効果かな？やべーな。」

「葛城さんもこれ見たのかな？でもダンジョン潜ったって聞いた事ないしな。」

「いや、それはないと思うが、あれは謎だな。学校7不思議の一つだな。」

「おい、なにコソコソやってんだよ。ゴブリンいたぞ。今度は頼むぞ。」

俺は再度ゴブリンに近づいて、ボウガンを射出してゴブリンの動きを封じた。

「うりゃ〜！」「といや〜！」

「ガンッ」「ゴスッ」

「うお、堅ってー、おお〜」「手がいて〜、もう一発。おりゃー。」

「ガンッ、ガスッ」「バカツ、ゴスッ」

今度はちよつと間抜けな掛け声と共に、背後から2人で連撃を加えている。

「おおー。やった。すげーよ」「仕留めたぞー。うおー。バーニングー！」

訳のわからない叫び声を伴って、ゴブリンが消失した。

「海斗、俺たち遂にやったぜ。サンキューな。おおっレベルが、レベルが上がってる。レベル2になってる！？すげーよ、マジですげーよ。うおー！」

「あつ、俺も上がってる。やったぜ。初めて上がった。レベルつて上がるんだな。うおー、マキシマム。」

「一体なんなんだ。その変な雄叫びは？まあでもよかったな。今度はゴブリンも倒せたし、レベルも上がったし。俺もサポートした甲斐があったよ。じゃあそろそろ帰るか。」

「は？何いつてるんだよ。帰るわけ無いだろ。これからだよこれから。なあ真司」

「当たり前だろ。これで帰れるわけないだろ。今日はとことん付き合ってもらっぞ。海斗先生」

「えー。俺休みの予定だったんだけど・・・まあいいか。今日だけだぞ今日だけ。」

そのままなし崩し的にゴブリン狩りを続けることとなった。

「おつ、あっちにいるぞ。それじゃもう一回行くぞ！」

俺たちは、再度ゴブリン戦に臨んだ。

先程と同じように、俺がゴブリンに近づいて行って、ボウガンを射出して足止め。

その瞬間に

「うおりゃー。死ね、死にやがれ、どりゃー!!」 「ヒヤッホー、オリヤー、ファイヤー!!!」

「ズガッ、ドガッ、グシャ」 「バキッ、バガッ、ガンッ」

「やったぜ、楽勝、ヒヤッホー!」 「滾るぜ、ハイパー、ウオー!!」

え？

なんだこれ？

さっきまでと違う・・・

全くテンションが違う・・・

二人に一体何が起こったんだ・・・

「うおー。レベルが3になったぜ。海斗、次行くぞ次。」

「俺もレベルアップしたぜ。もう俺は誰にも止められないぜ、ヘイ、カイト、カモン」

誰だこいつら!？

俺はそのまま連れ回されて、結局あと2回ゴブリンと戦闘をさせられる羽目になった。

「今日は、もう終わりな。もう満足しただろ、また明日学校でな」

「ああ、今日はありがとうな、それで明日は何時からにする?」

「え？今日だけっていったら？」

「何いつてるんだよ。今日だけなわけないだろ、寝ぼけてるのか？」

「明日も放課後直行な、頼んだぞ」

俺の意思は完全に無視をされ、明日もダンジョンに3人で潜ることが確定してしまった。

俺は休み中なんだよー。

第52話 パワーレベリング? (後書き)

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第53話 ダンジョン中毒(前書き)

本日2話投稿予定です
よろしくお願ひします。

第53話 ダンジョン中毒

次の日の放課後、隼人と真司に急かされながらダンジョンに潜った。

「今日で終わりだからな。今日だけだぞ。」

「分かってるって。今日も頼むぜ海斗先生。」

しばらく、ダンジョンを探索していると、昨日は出会わなかったスケルトンが前方に見えた。

「隼人、真司、スケルトンだ。ボウガンは効果が薄いから俺が前衛で、スケルトンの足を折るから、そのあとはゴブリンと同じ手順で行くぞ。」

「ああわかった。スケルトンって本当に骨が動いてるんだな」

「理科室に置いてあるのしか見た事ないけど、なんか骨が歩くってシュールな感じがするな。」

2人ともバカな事を言っているが、ゴブリンの時と違って初見のモンスターにも自然体で臨んでいるようだ。

「ガンッ！ボギッ！」

俺のタングステンロッドの一撃で、スケルトンの片足を粉碎、続けて

「ゴッキッ！」

もう片方の足の骨も粉碎した。これでよほどのことがない限り、問題なく倒せるだろう。

「ウヒヤー。オリヤー。潰れる。この骨野郎！ラーメンのダシにするぞー！」

「スケルトン カモン。俺の血潮がバーニング。ウオリヤー、ドリヤー」

……やっぱり2人とも人間が変わってしまっている。

これは、いい事なんだろうか？

2人とも一度は挫折した探索者として、モンスターを倒しているのだから、テンションが上がるのはわかる。

わかるが……。大丈夫だろうか？

俺が変な扉を開いてしまったんだだろうか？

どうすればいいかわからない。

「ゴブリンより、怖くなかったな。おおっ、またレベルが上がった。もうLV4だけ。LV5もすぐじゃないか？」

「楽勝、ヴィクトリー！俺もLV 4だけ。フォーだけ、フォー。最高の気分だな！」

「……よかったな。」

その日もみっちり3時間連れまわされた。2人が嬉しそうなのは良かった。

でもなんか疲れた。

「海斗、また明日も放課後な！頼んだぜ。そろそろ3階層行ってみようぜ。」

「いいねー。3階層。ゴーゴー！」

「いやゴーゴーって。そもそも今日で終わりの約束だろ。」

「あと1日だけ頼む。お願いします海斗先生。」

「お願いします。プロフェッサーカイト。プリーズ」

「本当に明日で最後だぞ。俺も準備と休養しないと本当にまずいかな。」

なぜか、つぎの日の放課後も俺は、かりだされてしまった。

どうしても3階層に行ってみたいというので、2人には条件を出した。

2人だけでゴブリンを倒せたら3階層へ連れて行くと約束した。

「おっ。ゴブリン発見。じゃあ行くぞ隼人。俺が正面、お前が後ろな。」

「任せとけ。一気に行くぞ。」

真司が、正面で牽制している間に、隼人が後方から鍬で一撃を加える。

「おりゃー、クラッシュしまえ。ウォー！」

ゴブリンが後方からの一撃に気を取られた間に、真司も金属バツで連撃を加える。

「死ぬ。死ぬ。このゴブ野郎。うおおー！」

「楽勝だったな。」「ああ、これで次は3階層だな。」

なんか、掛け声とテンションは可笑しなまんまだが、うまくなくなる。もしかしたら、俺のレベル4の時より強くなってないか？強くなるのはいいけど、少し複雑だ。

俺はあんなに苦労してレベル4まで行ったのに、たった2日でこれか・・・
来週からまた頑張ろう。

「それじゃあ、今から3階層に行くけど4匹以上の群れに遭遇したら撤退するぞ。2匹か3匹までしか対応できないからな。これだけは約束してくれよ。」

「わかった。海斗先生」「イエッサー。カイト」

遂に3人で3階層まで来てしまった。ちょっと気を引き締めて行く。

まず出会ったのはワイルドボア2匹だった。

「突進されるとまずいから、常に移動しながら狩ってくれ。1匹は俺が倒すからもう1匹を2人でお願いな。」

そういうと、早速ボウガンで右側のワイルドボアを狙う。問題なく命中し、その後の追撃で消失させることが出来た。消失を確認すると同時に左側を見ると

「猪鍋にしちまうぞ!? おりゃおりゃ、このデカブツが!」

「フンツ。くらえ渾身の鍬の一撃。おりゃーサンダーブレイク」

サンダーブレイクって何?

変さが増してる気がする。

まあ倒せたからいいけど。

次を探して歩いていると ヘルハウンド2匹とワイルドボア2匹の集団に遭遇してしまった。

やばいな。

「真司、隼人、撤退するぞ。殿を俺がやるから全速力で逃げる」

「いや。いけるでしょ。」 「ああ、問題ない」

「は!?! 何言い出すんだ。逃げるぞ。」

「うおりゃー。猪肉は俺たちがやるぜ」「任せとけミンチにしてやるぜ。」

「ば、ばかやるう。」

2人はワイルドボア目掛けて飛び込んで行ってしまった。

俺は慌てて臨戦態勢を整え、ヘルハウンドにボウガンを連射。1匹に命中したが消失には至っていない。

追撃しようとする所にもう1匹が飛び込んできたのでタングステンロッドで横殴りにする。

「ギャウツー!!」

ダメージはあるがまだ仕留められてはいない。焦りながら2人の方を見ると、ワイルドボアに1対1で向かい合っている。早く倒して、フォローに入らなくては。普段経験したことのない状況に焦りを感じていた。

矢が刺さった方のヘルハウンドに追撃を行い、撃退した。
その瞬間

「ウワー、ヤバイ、ううっ」 「がはっ、痛ってー。」

慌てて見ると2人ともワイルドボアに吹き飛ばされていた。やばい。焦りで頭が真っ白になりそうなのを必死で堪え、

「ウォーターボール」

いつもと違い『鉄壁の乙女』がない状態で魔法を放つため、目の前のヘルハウンドをタングステンロッドで大きく振るって牽制しながら、真司の敵に氷槍を放ち、隼人の相手にボウガンを連射する。一瞬、マジックアイテムによる拘束感を感じたがすぐに解ける。2匹を仕留めたのを確認して、そのまま

「ウォーターボール」

なんとかヘルハウンドを消失に追いやる事に成功した。

第53話 ダンジョン中毒（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第54話 おバカ2人(前書き)

本日2話目です。

よろしくお願いします。

第54話 おバカ2人

「本当にすみませんでした。本当に申し訳ない。調子に乗ってごめんなさい」

「なんでも言う事聞きます。ありがとうございます。助けてくれて本当にありがとうございます。」

戦闘が終了すると同時に、真司と隼人は土下座の格好で謝ってきた。怒ろうと思っただけど、完全に不意打ちを食らってしまい、怒るタイミングを逃してしまった。

「は。あれだけ言ってただろ。3匹以上は撤退だって。死んでてもおかしくないぞ。」

「返す言葉もございません。楽しすぎて調子に乗ってました。ごめんなさい。」

「なんかテンションが上がっちゃって、変になってました。海斗がいてくれると思って気が大きくなってました。もうしません。」

「わかってるならいいけど。今日はもう終わりだからな。二度と無茶はするなよ。」

「はい、もちろんです。それはそうとあれはなんだよ？魔法か？お前魔法が使えるのか？」

「俺も気になってたんだよ。あれすげーな。かつこよすぎだろ。で

もあれ「ウォーターボール」って言ってたと思うけど、水でもボールでもなかったけど。」

「ああ。あれはいろいろあって、今はアイスボールと言うか、小さいアイスジャベリンぽくなってるんだよ。」

「おお〜！？お前ほんとに海斗か？なんかかつこいいんだけど。」

「俺も女なら惚れてたかも。顔隠してたらイケメンじゃねー？」

「あーもういいや。今日はこれで帰るからな。」

「ああ。本当に楽しかったよ。レベル1だった俺たちがレベル4だからな。しかもゴブリンだったら、俺らだけでもいけるしな。」

「ああ、今度から2人で2階層に潜ることにするから、たまには付き合ってくれよな。」

「お前ら・・・反省してねーな。本当に無茶すんなよ。また休みとる時に一緒に行けるといいな。」

そのあと俺たちは地上に戻って別れた。

「海斗には、感謝しかないな。付き合ってもらってフルサポートの上、命まで助けてもらったしな。」

「あの海斗がな。ダンジョンでは別人だったな。ただのダンジョンオタかと思ってたけど、すごかったな。」

「ちょっとは俺らも恩返ししないとな。借りっぱなしってのもカッ

「悪いしな。」

「ああそうだな。2人で海斗に恩返しだな。」

2人と別れてから、俺はダンジョンマーケットへやって来ていた。

まずはポーションの購入だ。今回も1個あって助かったけど、かなり危なかった。なので今度は3個購入することにした。

赤っぽい魔核の代金の700万の使い道を考えてみたが半分の350万は将来の為に貯金することにした。

将来もダンジョン探索者として生活したいなどは考えているが、高校卒業と同時にプロはちょっと厳しいので、大学に行きながら探索者の基盤を固めるつもりだ。なので貯金はその時の学費に当てようと考えている。残りは、探索者の自分への投資用にしようと思う。

「あのすいません。低級ポーションを3個ください。」

「低級ポーション3個ですね。かしこまりました30万円になります。」

「あの、低級ポーションでも、ものすごく効果があったんですけど、100万円の中級ポーションってどのぐらい効果があるんですか？」

「低級ポーションは、単純骨折や中度程度の切り傷、そしてHPを回復してくれます。中級ポーションは、複雑骨折や、重度の切り傷にも効果がありMPも回復させてくれます。」

「そうなんですか。もう一ついいですか？ポーションってサーバントにも効果がありますか？」

「はい。ポーションは敵味方問わず、使用した対象に効果を発揮するので、サーバントであろうとも、同じく効果を得ることができま
すよ。」

「どうやらサーバントにも問題なく効果を発揮するようだ。もしもの
時用に中級ポーションを買うのもありかもしれない。とりあえず低
級ポーション3個の支払いを済ませ、他も回ってみることにした。」

「おう、坊主。今日はべっぴんさんと一緒じゃねーのか？」

「ああ。1人ですよ。そういえば今度5階層なんですけど盾が溶か
されちゃって、なんか代わりの盾と、ボウガンに代わるような武器
ってないですか？」

「ああ。あの盾か。4〜5階層にあの盾を溶かすようなモンスター
いたか？まあいいけど、盾はこのポリカーボネイトのいいんじゃないか。」

「値段はいくらですか？」

「5万だな。」

「5万円って今までののに比べるとちょっと安いですね。」

「いや、今までお前の予算に合わせたものを予算通り出してやった
だけだ。」

「そ、それってぼった・・・」

「あ！？なに！」

「い、いえ、なんでもありません。いつもありがとうございます。ところで武器はなんかありますか？」

「武器か。坊主は未成年だからな。本物の剣とかはブロンズランク以上にならないと売れねーからな。ちよつと値段は、はるがこの魔核銃はオススメだけどな。予算はいくらだ？」

「いや、あの。先に値段を教えてください。お願いします。」

「チツ。小せー奴だな。値段は200万だよ。」

「ところで魔核銃ってなんですか？」

「あ？知らねーのか。魔核銃はダンジョンでしか効果を發揮しねーが、魔核を燃料にこの金属バレットを打ち出すことができるんだよ。ボウガンより軽くて、連射も10連射までできるし、マガジンを準備しとけばダウンタイム無しにさらに連射可能だ。威力もダンジョン内では本物の銃並みにあるぜ。」

「なんかその銃ものすごくないですか？それにしてもあんまり使っている人を見た覚えがないんですけど。」

「おつ。坊主鋭いな。この銃はな、魔核を燃料にしているんだが、すごぶる燃費が悪くてな。使用前に魔核をチャージしないとイケないんだが、10発撃つのにスライムの魔核で5個必要なんだ。まともにおつと思つたら、魔核の10や20すぐになくなるからな。ちよつと人気がないんだ。」

魔核を燃料にしているのか。しかも燃費が悪い。まるでシルヤルシエのようだな。これも何かの縁かもしれない。

「わかりました。じゃあこれください。」

「え？買うのか？これを。坊主200万持ってんのか？」

「はい、お願いします。」

「そ、そうか、じゃあこのバレットは500個サービスでつけてやる。なくなったら10個で3000円で売ってやるよ。」

こうして俺はポリカーボナイトの盾と魔核銃なるものを手に入れた。ダンジョン限定とはいえ銃だよ銃。かっこいいよな。

お金が貯まったら2丁拳銃にしてみようかな。

やばい。かっこいい。

第54話 おバカ2人（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第55話 新しい武器

短くなった休暇を過ごし、今日からダンジョン探索を再開することにした。

5階層に潜る前に新しい武器を試しておきたいので、まずは2階層に潜ることにした。

準備の為、魔核銃と魔剣に魔核を吸収させる。

限界まで吸収させてみたが、魔核銃はなんと魔核50個を吸収してしまった。おそらく100発撃てるのだろう。

魔剣は魔核3個まで吸収出来た。

両方の準備で魔核53個も使用してしまった。これで、またスライム狩りに励まないといけなくなった。

早速ゴブリンを発見して、魔核銃を発砲する。

「プシュ」

外れた。

「プシュ」 「プシュ」

慌てて2連射してそのうち1発が頭に命中してゴブリンが消失した。

「おおっ」

当てるのに少し慣れが必要だが、威力は申し分ない。しかも軽いしカッコいい。

今度は魔剣バルザードを試すことにする。
再度ゴブリンを見つけて向かうが、リーチが短いため今度は接近する必要がある。

ポリカーボネイト製の盾を構えて突撃する。盾でぶつかって接近してから右手で魔剣を突き出す。

「バシユ！」

さすが魔剣と思わせる切れ味と威力を見せ、あっさりとゴブリンを倒す事に成功した。

すごい威力と切れ味だがあまりに射程が短すぎる。

超近接戦限定だろう。投げナイフの要領で倒す事もできるかもしれないが、正直当てる自信がない。

ゴブリンだからこんなに上手く倒せているが、もう少し上位のモンスターだところはいかないだろう。

手で触れる距離まで近接しないと使えない。

かなり切迫した状況のみで活躍するピーキーな武器と言える。

やられかけた時の奥の手用として使っていこう。

できれば使う状況にならない事を祈りたい。

そして思いのほか使い勝手がいいのが、ポリカーボネイト製の盾だった。

今までよりもかなり軽い上に、透明である事が思いのほか良い。

盾越しに相手の挙動が見て取れるので、次の動作に備えることができる。

しばらく使用してみないとなんとも言えないが、これはかなりお買い得だったのではないだろうか。

できれば最初からこれを、勧めて欲しかった

当初の木刀に殺虫剤のスタイルから比べると飛躍的に装備がレベル

アップしている。

このまま一気に進みたいところだ。

それからしばらくゴブリン相手に戦闘を繰り返して、魔核銃を練習し、動いている相手にも十発中八発か九発は命中させられるようになってきたので再度5階層に臨んだ。

なんかいつもより他の探索者が多い気がする。

多分隠しダンジョンが見つかったので、その話を聞きつけて集まってきたのかもしれない。

「おい、聞いてるか？隠しダンジョンの奥にエリアボスがいたそう
だ。赤系の魔石と、なんと魔剣をドロップしたそうだ。どんな奴が
最初に見つけたんだろ？ソロらしいけど俺もあやかりたいもん
だ。どこか他にも隠しダンジョンがあるかもしれないな」

「おふっ!?!」

他の探索者の喋り声が聞こえてきたが、俺の個人情報ダダ漏れじゃないか。流石に名前までは伝わってないようだが、ダンジョンギルドって一体……
とにかく知らんふりを決め込むしかないな。

とにかく俺は人目を避けながら隠しダンジョン内の探索を進めていく。

パープル色のヘルハウンドとピンク色のワイルドボア2匹に遭遇した。

この色は一体誰が考えたんだろう。もっといい色があるだろうに、
なんていうバカな事を考えながらシルとルシエに指示を出す。

「1人1体つつ狩るぞ。俺が紫をやるから、後を頼む」

高速で動くヘルハウンドだが、通常個体より大きいので狙い易かった。

「プシュ、プシュ」

2発発砲すると同時にモンスターは消失した。

ボウガンが5本以上撃って仕留めれた事を考えると格段に威力が上がっている。

横ではシルとルシエがピンクのワイルドボアを片付けて終わっていた。

なんか今までになくスムーズにいった。

今度の新装備すごいな。

この後しばらく戦闘を繰り返して自信を深めた俺達は明日6階層に挑むことにした。

第55話 新しい武器（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第56話 6階層

俺は今6階層に潜っている。

この6階層は今までの階層と大きく違うところがある。

入り口の脇になんとコンビニがあるのだ。ダンジョンによって違うらしいが、このダンジョンの6階層にはゲートと呼ばれる入り口があり、地上のゲートとつながっている。仕組みは全くわからないが、一度ダンジョン側からゲートを使用して地上に戻ると、その後は6階層まで一気にこれるようになる。もっと深層階にもゲートのある階層があるらしいが、今の所、俺にはまだ使用することはできない。

おそらく一種のワープホールのようなものだと思われる。

いずれにしてもここまで来ることができると、明日から5階層までをすっ飛ばして直接6階層まで来ることができる。しかもコンビニ付きだ。値段は・・・高い。ミネラルウォーター500mlで350円もしている。

しかし、装備以外のものを気にせず探索できるメリットは計り知れない。

世の中金次第という事だろうか。

今日からまたバリバリ稼がないといけない。

「それじゃ、頑張つて探索するか。シル、ルシエ今日も頼んだぞ。気を抜かずに行くからな。」

「はい。まかせてください。」 「ああ。私がいれば問題ない。」

探索を初めて程なく6階層のモンスターに遭遇した。

オーガ2体のグループだ。

オーガは5階層で出会った奴のように光ってはおらず、サイズも1回りは小さい。

俺が6階層進出を早々に決めた理由の一つがこれだ。

5階層で既にオーガの特殊個体を撃破していたので6階層で出現する通常個体のオーガであれば問題無いと判断したためだ。

「シル、念のため『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエは右側のオーガを頼む。」

指示をした後、『鉄壁の乙女』の効果範囲内から左側のオーガを狙って、バレットを射出。

「プシュ」

『鉄壁の乙女』の効果範囲内から安全に狙えた為、1撃で頭部に命中して、消失させることが出来た。

右を向くとルシエが『破滅の獄炎』でオーガを消失させていた。

やはり特殊個体以外はスキルレジストされることはないらしい。とりあえずひと安心だ。

考えていたよりもあっさりとオーガを倒すことに成功したので、次は節約の為に『鉄壁の乙女』無しでやってみることにする。

うろつろ探索していると今度はオーガとオーク2匹のグループに遭遇した。オークは初出現だが、顔がブタっぽいのですぐにわかった。よくファンタジーものでオークの肉は美味いと謳っているシーンをみるが、間違ってもこのブタっぽいモンスターの肉を食べたいとは思えない。臭そうだし気持ち悪い・・・

「俺が右側のオークを倒す。左側をルシェ、オーガをシルが頼む。一気に倒すぞ。」

初のオークだったが豚っぽい体型だけあって腕力はあるそうだが、ちよつと動きが遅い。

こちらに気付いて向かってきている間にバレットを射出

「プシュ」

初撃がオークの肩口に命中

「グブヒィー。ブホッ、ブギャー」

痛がっているがそのまま突っ込んでくる。

「プシュ」

すぐさま2発目を射出する。

2発目が頭に命中すると同時にオークは消失した。シルとルシェもそれぞれ問題なく倒せたようだ。

5階層に引き続き、今までになくスムーズに進んでいる。

急に自分が特別強くなったような錯覚を覚えるが、勘違いしてはいけない。

すごいのはこの魔核銃だ。

さすが200万円しただけのことにはある。やはり世の中、金次第なのか。

燃費が悪いのがネックだが、ストレスフリーで狩りができる。本当に素晴らしい。

今まで使用していたボウガンも買った時は凄いと思ったが、矢から

銃、人間の進歩は素晴らしい。

間違っても、俺がすごいなどと自分の力を過信してはいけない。モブの俺が調子に乗ると、いつもろくなことがない。

でも銃で一撃のもとモンスターを狩る俺。ちよっとかっこいい。探索して小腹が空いたのでコンビニでおにぎりでも買おうかな。お金さえ気にしなければ、この6階層は最高かもしれない。

第56話 6階層（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第57話 プチ無双

コンビニで買い喰いしたら、満腹状態でちよつと眠い。昼寝をしたくなるのを押さえ込んで、6階層をさらに探索する。

遭遇したのはオーガとトロール2匹のグループだ。トロールは思った通りデカかった。

デカさだけなら5階層のオーガの変異種並みだ。一瞬怯んでしまったが、5階層での勝利した自信が、怯んだ気持ちを立て直して、冷静に指示を出すことができた。

「シル、右のトロールに『神の雷撃』を頼む。ルシエ、オーガを頼む。俺は左のトロールを相手にする。やばくなったら援護を頼む。」

俺はトロールに注視しながら、魔核銃を発砲する。初めてのモンスターの上、デカくて怖いので念のために足を狙う。

「プシュ」「プシュ」

「グボウワー、グギャーワー、ウグガー！」

しっかり効いている。足を射抜かれたトロールは完全に動きが止まっている。止まったトロールめがけて再度発砲する。

「プシュ」

頭部に着弾すると同時に消失した。

トロールにも魔核銃は通用した。やっぱり魔核銃すげーよ。隣を見ると、ルシエとシルもそれぞれ、問題なくモンスターを倒していた。

5階層と同じ様に6階層でも十分以上にやれている。

「ご主人様おなかが空きました〜」 「頑張った。腹減ったから魔核くれ〜」

これさえなければ、いくらでも戦えそうなのに、魔核銃の分と合わせて魔核の消費量が半端ない。

やはり、世の中金次第。明日は1階層でスライム狩りに励もう。

モンスターを求めて探索を続けると今度は、トロール2匹、オーク、オーガの揃い踏みグループと遭遇してしまった。

数も4体なので、この階層で一番多い。

一瞬、『鉄壁の乙女』に頼ろうかとも考えたが、今日の俺はのっている。『いける』という変な自信もあり速攻を選択した。

「シル、右のトロールを頼む。ルシエ、左のトロールをよろしく。残りの2体は俺がやる。」

距離を取りながらオークに魔核銃を発射。

照準が甘くなってもいいように2連射する。

「プシュ」「プシュ」

同時に

「ウォーターボール」

オーガに向けて氷の槍を放つ。

今までにやったことのない2体同時攻撃だ。

本番ぶつつけでやった所為で、ちよつと余裕がなかった。

その為、どちらも狙いが甘くなり、命中はしたものの消失させることはできなかった。

「ブギュー、グルギヤール」

「グギヤール、グルルウー」

ただ2体とも確実にダメージは受けている。

再度、落ち着いて魔核銃からバレットを射出

「プシュ」

同時に今度はしっかりと狙いを定めて氷の槍を放つ。

「ウォーターボール」

「ザクツ」

今度はバレットも氷の槍も頭部に命中し、命中と同時にオークとオーガは消失した。

横ではシルが『神の雷撃』ルシエが『破滅の獄炎』を使用してあっさりトロールを消滅させていた。

6階層の4体のモンスターを、ものの数秒で片付けてしまった。

ちよつと勘違いして調子に乗ってしまいそうだ。

もちろん俺は勘違いなんかしないので調子にも乗らない。

あくまでの武器がパワーアップした恩恵に過ぎないのだ、残念ながら俺だけの力ではない。

でもやっぱりサクサク倒せると気持ちいい。

その日俺は、調子のいいまま、2回ほどモンスターとの戦闘を繰り返し広げた。

繰り返し広げたと言うよりも瞬殺に近かった。

次の日は予定通り1階層でスライム狩りに励んでいる。

スライム狩りもレベル15は完全にオーバースペックなので、今迄で一番サクサク進んで1時間当たりに、なんと12個もの魔核をゲットすることができ、

と12個もの魔核をゲットすることができ、合計3時間で36個の魔核を手に入れることができた。

これでまた数日は補給無しで潜ることが出来る。

それにしても5分に1匹のペースで狩った計算になる。もはや匠の技、1階層では最強無敵かもしれない。

まあ実際のところレベル10以上で1階層のスライムを狩っているのもおそらく、俺一人だと思われるのだが。

第57話 プチ無双（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第58話 シルとルシエの密談

「今日も俺は6階層に潜っている。」

「最近調子が良いので3人とも探索中もいい感じにリラックス出来ている。」

「そのせいか、移動中シルとルシエがコソコソなんか話している回数が増えている。」

「2人で仲良くしているようなので触れずに放置している。」

「6階層になってから、調子がいいよね。ご主人様がすごくいい感じに活躍してるね。」

「ああ、なんか隠しダンジョンで死にかけた時はもうダメかと思っただけ、そこからゴキブリのように復活してから妙に調子良さそうだな。一回死にかけたのが良かったのか？」

「ルシエ、そんな風に言ってもダメだよ。ご主人様がトラップにはまった時、あたふたして泣き出してたでしょ。本当は元気になってくれて嬉しいんですよ。」

「まあ、私のせいで死んじゃったら、気分悪いからな。助かってよかったよ。」

「ルシエはあの時ご主人様に叱られてから、随分変わったよね。今の方がずっといいよ。」

「なに言ってるんだよ。とりあえず、まあそれは置いといて、なんかあいつ好きな子がいるみたいだぞ。知ってるか？」

「シルとルシエのことでしょ。ご主人様はシルとルシエの事大好きだものね。」

「違うよ。人間の女だよ。この前ニヤニヤしながら、ブツブツ独り言つぶやいてるのが聞こえてきたんだよ。なんか春香とかいう女みたいだぞ。お買い物がどうか、白のワンピースが最高だったとか聞こえてきたんだよ。」

「え！？私達の他にも好きな人がいるなんて知らなかったよ。ちょっとびつくりしたけど、ダンジョンでは私が一番だから、大丈夫だと思っの。」

「いや、最近わたしにも優しいからわたしが一番かもな。ギャップ萌えだよギャップ萌え」

「ルシエ、私たちは仲間でしょ。2人でしっかりご主人様をお守りして、1番に可愛がってもらわないとね。」

「わたしは別にどうでもいいけど、そこまで言うなら一緒にやってやるよ。」

ヒソヒソ話の最中にチラチラ視線を感じる。そのせいかちょっと悪寒がする。何もなければ良いんだが。

その直後、オーガ2体にトロール1体のグループに遭遇した。

「シルはトロールを頼む。ルシエは左のオーガを頼む。俺は右のオーガを狩る」

「いえ、大丈夫です。ご主人様は休んでいてください。」

「え？どうということ？休んでいて？」

「我が敵を穿て、神槍ラジュネイト」

「え？」

『侵食の息吹』

「ええ？」

『神の雷撃』

なんだ？どうした？

明らかに今までと違う。

シルが今まで指示に従わなかった事は一度も無かった、おまけに2人共普段のスキルの使い方と違う。

やたらと積極的に攻撃していた感じがする。

一体2人ともどうしたんだ？

「シル、ちょっと前に出過ぎたんじゃないか？ルシエも『侵食の息吹』とは珍しいな。俺も全然戦えるんだけど。」

「ご主人様。私たち2人で頑張りますから、ゆっくりしててください。」

「あ、ああ、シルがそう言うのなら、そうさせてもらおうかな。」

「はい。任せてください。」

次に出会ったのはトロール4体だった。

「シル、ルシエ、流石にトロール4体は多すぎる。俺も一番右の奴を狩るから、残りを頼むな。」

「大丈夫だって。わたしたちに任せとけて。後ろでドーンと構えといてくれよ。」

「いや、だけどな・・・」

「大丈夫です!!!」

なんかルシエとシルの勢いに押されてしまった。

「我が敵を穿て、神槍ラジュネイト」

『侵食の息吹』

『神の雷撃』

『破滅の獄炎』

一瞬だった。そりゃ、この2人が本気を出せば、この階層の通常モンスターなんか、問題になりようがない。

でもなんか違う。俺がやりたいのとなんか違う。

2人だけに戦わせて後ろで、ドーンと構えているのは俺のやりたい事じゃない。

俺と一緒に戦って、一緒にレベルアップしていきたいんだ。

「シル、ルシエ、ちょっといいか？」

「はい、何でしょうか」「うん、どうした。」

「さつきから2人がすごく頑張ってくれてるのはわかる。多分俺の事を考えてくれてるんだというのもわかる。でもな、俺も2人のことが大事なんだ。俺はお前らと一緒に戦いたいんだよ。2人と一緒に成長していききたいんだ。だから今まで通り、一緒に戦いながら探索していこうな。」

「ご主人様、嬉しいです。そんなに私たちのことを思ってくれていたなんて。これからもずっと一緒に頑張らせてくださいね。」

「まあ、そんなに言うなら一緒にやってやるよ。しょうがないな。」

「ああ、これからもよろしく頼む。」

「ところで、ご主人様、春香様というのはどなたなのでしょう？」

「え!？」

「ご主人様と仲がいいんでしょうか？買い物に一緒に行かれたり、白のワンピースが可愛かったりしますか？」

「い、いや。な、なんのことを言っているんだ？は、春香って誰だろうな？ちょっとよくわからないな」

その後もシルとルシエから、普段感じることはない圧力を感じながら質問されたがなんとかごまかした。

でもなんであいつらが葛城さんのことを知ってるんだ。まさか考え

ている事を覗くスキルでもあるのか？
わからない・・・

第58話 シルとルシエの密談（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第59話 怒り

俺は今日も6階層に潜っている。

シルとルシエは2人だけで突っ走る事もなくなり、以前よりいい関係を築けている気がする。

以前の春香ちゃん発言には得体の知れない怖さを感じたが、今では気のせいだったのかと思うほど、順調で

戦闘での連携もさらに向上した感があり、スムーズに狩りも進んでいる。今週1週間で一度も『鉄壁の乙女』を使用していないのがその証明だろう。

「ご主人様向こうにモンスターが5体います。」

進んで確認するとオーガ5体の群れだった。

本来であれば、オーガが5体もいれば十分に脅威となりえるのだが今の俺達には全く問題とはならない。

「2体は俺が受け持つから、シルとルシエで残り3体をお願いするよ。」

一番左端のオーガに向かって有無を言わず、魔核銃を発砲する

「プシュ」

発砲と同時に

「ウォーターボール」

氷の槍が隣のオーガの頭に命中する。もちろん魔核銃から射出されたバレットもオーガの頭に命中している。

当初は魔核銃を撃ちながら、「ウォーターボール」を使用することに慣れず、少しタイムラグが発生していたが、今は、ほぼ同時に行えるようになっていた。ただし、「ウォーターボール」使用时には着弾まで、マジックアイテムによる拘束がかかるので、必ず魔核銃を先に発砲する必要がある。それも、段々と慣れてきて、タイムリグを測れるようになってきた。

命中率も魔核銃を使用しはじめた当初に比べると格段に上がってきている事もあり、戦闘パターンも1人で2体以上相手にする時は、このパターンをメインに使用している。

隣では、シルとルシエが既に狩りを終わらせている。

本当にこの2人は別格、サーバントとして心強い限りだ。戦闘を終え、2人と軽く話しながら進んでいくと

「ご主人様、ちょっとまずいです。たまたまだと思いますが、モンスターに挟まれています。奥に5体、後ろにも5体います。どうされますか？」

「とにかく、正面のモンスターを先に倒してしまおう。その後は状況次第だ」

すぐに正面からトロール3体とオーガ2体がやってきた。

「オーガ2体は任せてくれ。トロール3体は頼んだぞ。」

指示を出した瞬間、後方からもモンスターの気配がした。

後ろを向くとオーガ5体がこちらに向かって猛然と突進して来てい

た。

「ビュッ」

「あぶねっ!？」

なんと後方のオーガの1体が矢を放ってきた。

今までのモンスターは近接戦闘しかしてこなかったが、初めて遠距離から攻撃してきた。

さすがは6階層、モンスターの知能も今までとは違う、舐めてたらこちらがやられてしまう。

「シル直ぐに『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエ『破滅の獄炎』を連発できるか？」

「当たり前だろ? 誰に聞いてるんだよ。地獄を見せてやるよ。」

「よ、よし、じゃあ正面の敵からいくぞ。」

当初の予定通り正面のオーガに向かって魔核銃のパレットを撃ち出す。

「プシュ」「プシュ」「プシュ」「プシュ」

4連射したと同時に

「ウォーターボール」

オーガ2体を魔核銃で仕留めて、トロール1体に向かって氷の槍を

放ち仕留める。

隣ではルシエが『破滅の獄炎』を連発してトロール2体を消失させていた。

前方のモンスターを壊滅させたので残りは後方のモンスター5体だ。後方を見るとオーガがそれぞれ距離をとって散開している。

明らかに先程の攻撃を見て警戒しているようだ。やはり侮れない。

この距離感だと俺にはちょっと遠いので、『鉄壁の乙女』の効果範囲を出てオーガを迎撃する。

弓を持っている個体が2体、こいつらさえ気を付けていれば問題無い。

先にこの2体を片付けるため、ポリカーボネイト製の盾を構えながら距離を詰めていく。

「カンッ！」

確実にこちらを狙ってきている。矢での攻撃を盾で防ぎながら、魔核銃のバレットを射出。

あっさりと弓使いの1匹目を片付けたその時

「キヤーツ！」

後方からルシエの悲鳴が聞こえてきた。

慌ててルシエの方を見るとルシエのすぐ後ろの地面に矢が刺さっており、ルシエが右腕を抑えていた。

タイミング悪く『鉄壁の乙女』の効果が切れたところを、もう1体のオーガに矢で狙われたらしい。

俺は自分のターゲットに気をとられて、もう1体がルシエを狙っていることに気づけなかった。

オーガと自分自身への怒りで、感情が爆発した。

「うおおー！！ぶっ殺してやる！」

荒ぶる感情に支配されて体が勝手に反応する。

矢を射ったオーガに向かって全力で走りながら魔核銃を射出すると同時に「ウォーターボール」も同時に発動。

着弾後、消失を確認した瞬間に残りの3体に向かって先程同様、魔核銃を連射と同時に「ウォーターボール」を三発連続発動。

攻撃が被っているがそんな事はどうでもいい、とにかく早急にかたをつける事だけに意識を向けて攻撃を放った。

連続発動と精神状態の影響から攻撃は少し乱れたが、なんとか全ての敵を撃破した。

「ルシエ。大丈夫か！？死ぬなあ！しつかりしろよ。」

「おい、勝手に殺すな。ちよつとかすっただけだろ。死ぬわけないだろ。」

ルシエは悪態をついているが、俺は気が気ではない。すぐさま低級ポーションを取り出して、傷口に振りかけてやった。

効果は直ぐに現れ、傷ひとつない肌に戻っていた。

治ったから良かったが、今回は俺のミスだ。調子に乗ったわけではないが、攻撃を急ぎ過ぎて視野が狭くなっていたかもしれない。

本来の俺の役目は盾と指示役だったが、この階層で調子がいいからアタッカーをメインにしまった。

ルシエがダメージを受けることは想定していなかったので、正直かなり焦ってしまった。

今後はシルヤルシエが怪我を負わないよう今まで以上に注意をしようとお心に決めた。

第59話 怒り（後書き）

いつもありがとうございます。

遂に当初の目標としていた10万文字に到達する事が出来ました。
本当にありがとうございます。

次は20万文字を目指して頑張ります。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第60話 モブの恩返し

俺は今学校にいる。

水曜日と木曜日も6階層に潜って、サクサクモンスターを狩っていた。

どうやら、新しい武器と6階層のモンスターの相性は抜群のようで、5階層と変わらずサクサク狩れていた。

ただこの1週間ではレベルアップはしていない。

やっぱりレベルが上がると次のレベルにはなかなか上がらないようだ。

今日は金曜日なので学校が終わったら、週末はダンジョン三昧の予定にしている。なんとか週末の間にレベルアップを目指したい。

「高木くん」

「はい、何でしょうか」

休み時間に突然葛城さんに話しかけられた。

「明日、10時に駅前でよかったよね。」

「え？あ、ああ、まあ、うん、そう。」

「うん。じゃあ明日よろしくね。」

なんだ！？どういう事だ？

明日なんかあったっけ？俺は記憶喪

失になったのか？

明日駅前・・・反射的に「そう」と答えてはしまったが、何のこ

とか全くわからない。

どうしたらいいんだ。全く訳がわからない。

そもそも俺は何をしに行くんだ？

突然の理解不能な出来事に混乱していると、真司と隼人がニヤニヤしながらこつちを見ていることに気付いてしまった。

「お前ら、なんか知ってるのか？なんで葛城さんが俺と駅前で待ち合わせしてるんだ？」

「そりゃあ、まあ俺たちが伝えといたからだけど」

「は？伝えといたって、何をだよ。」

「土曜日に海斗がまた、お買い物と映画に付き合っただけで言ってるって伝えといた。」

「な……なに勝手な事してるんだよ。一言もそんなの頼んでないだろ。」

「ああ、じゃあ葛城さんに海斗の都合が悪くなったって伝えてこようか？」

「う……いや、別にいいけど。」

「先週ダンジョンで世話になったからな。ちょっと恩返しだよ。恩返し。」

「恩返しって……」

放課後ダンジョンに向かう予定だったが、それどころではなくなっ

たので家に直帰してしまった。

明日買い物と映画。一体何を買えばいいんだ。おまけに映画・・・何を見ればいいんだ。

とにかく上映している映画を調べなくては。そう考えてスマホで上映スケジュールを検索する。

明日、やっているのは、

- 1 子供用のアニメ
- 2 幼女物のアニメ
- 3 アメリカンヒーロー物
- 4 大人のラブロマンス
- 5 青春恋愛映画
- 6 歴史超大作。

うくん。どれがいいかわからない。葛城さんはノーマルのはずなので子供用のアニメと幼女物のアニメは除外だろう。あとの4本のどれかだろうが、一番無難なのはアメリカンヒーローだろうか？歴史超大作も好みが分かれるところだろう。

ラブロマンスは変なシーンが出てくると不味いし、青春恋愛映画は恋人同士で見るものな気がするので除外だろう。いろいろ考えてみたが、初めての事なので1人では結論が出ない。明日葛城さんに聞いてみて決めよう。それしかない。

買い物はダンジョンマートしか思いつかない・・・

うだうだ考えていたら、寝不足のまま朝になってしまった。

前回買った服を着て駅前で待っていると葛城さんが現れた。

今日は水色のワンピースだ。前回の白のワンピースも良かったが、今回のワンピースも良い。

暑い夏に清涼感満載だ。やっぱり葛城さんは良い。

「お待たせ。その服着てきたんだね。やっぱりいい感じ。」

「え、あ。そうですか。それはどうも」

突然いい感じと言われてへんな返しになってしまった。

「それじゃあ先に映画にする？お買い物にする？」

「お買い物をお願いします。」

「何か欲しいものあるの？」

「探索用の消耗品を買いだいたいだよ。また同じところになるけどいいかな？」

「もちろんいいよ。あそこ、珍しい物がいろいろあって楽しいよね。」

それから2人でダンジョンマートに行つて、必要なものを買つことにした。

まず昨日使ってしまった低級ポーションを1本買うことにした。

「あ、それこの前も、買ってたよね。ポーションってどこか怪我したの？」

「いや俺じゃないんだけど。一緒に潜つてた奴が昨日怪我したから使っちゃったんだ」

「高木くんって、ダンジョンに誰かと一緒に行つてるんだ？」

「い、いや。たまたま一緒になった奴がいて。本当たまたまだよ。」

「そうなんだ。普段は1人で行ってるの？」

「そうそう、当たり前じゃないか。いつも1人です。永遠の1人探
索者です。」

悪い事は何も無いのだが、幼女2人といつも探索してますとは間違
っても言えないので、突然のやりとりに、かなり焦ってしまった。

第60話 モブの恩返し（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第61話 青春の1ページ

俺は今、葛城さんとダンジョンマートに来ている。

低級ポーションを購入したのであとは魔核銃用のバレットの購入だ。

「すみません。魔核銃用のバレットを200個ください。」

「おー坊主。魔核銃、ちゃんと使ってるんだな。費用対効果が薄いから、使うやつ少ないんだが、まあ良かったよ。それはそうとまた、この前のべっぴんさんと一緒か。やっぱり彼女だったのか、それならそう言えよ。」

「いえ、違いますよ。ただのクラスメイトです。変なこと言うと、もう買いに来ませんよ。」

このおっさんだけは、どうにかしないと、葛城さんと買い物に来れなくなってしまう。

「お嬢ちゃん。こんなバカっぽいのがいいやめといた方がいいぜ。お嬢ちゃんの事を、ただのクラスメイトとか言っちゃう真性のバカだからよ。」

「いえいえ。いつもの事ですから。昔から慣れてますから大丈夫です。」

「お嬢ちゃんも苦労してそうだな。まあまた一緒に来てくれや。」

「はい。またよろしくお願いしますね。」

なんだ一体今の会話は？葛城さんも俺のこと馬鹿だと思ってるのか？かなりシヨックだ・・・

そのあとシヨツピングモールの中の映画館まで行って、上映時間見てから葛城さんに確認する。

「どの映画がいいかな？観たい映画とかある？」

「出来たら、「そらいる青葉と夏の雨」が観たかったんだけど、いいかな？」

「へ？ああ、それはもちろんいいけど。大丈夫かな？」

「大丈夫ってなにが？」

「いや葛城さんがいいならそれでお願いします」

葛城さんが選んだのは高校生2人の青春ラブストーリー。原作本が100万部突破して女子高生の必読の一冊とか言われているので、映画に疎い俺でも知っている題名だ。

ただ普通こういうのは、恋人同士で見るものではないのだろうか？と思いつつも、ちょっと俺も興味もあつたのももちろんOKした。男一人では間違っても見れない。

上映が始まってからは、葛城さんが横にいたので緊張しながらも映画に入り込んでしまった。

映画の内容は、高校でお互いを意識しながら、なにも出来ないでいた青葉と空都が、すれ違いを繰り返しながらも付き合うことになった。幸せいっぱい的高校生活を送る2人だが最後には悲しい別れが待っている、そんな感じの涙なしには観れない感動の青春映画だった。

た。

葛城さんが横にいたので涙を堪えるのが本当に大変だった。多分葛城さんも泣いていたような気がするけど、見てしまったら泣きそう
で横を見ることが出来なかった。

しかし、ヒロインの青葉がちょっと葛城さんに似てたな。まあ葛城さんの方が全然可愛いけど、余計に感情移入してしまった。残念ながら空都はイケメンすぎて全く自己投影できなかった・・・

しかし、女の人と映画館に来るのは、小学生の時に母親とアニメを見にきて以来だったので、その相手が葛城さんでものすごく嬉しい。映画も最高だった。

ただ一つ、これがデートだったらどんなに素晴らしいだろうか。デートというものを1回でいいからしてみたい。いや本音は何回もしてみたい。

残念ながら、今日のはデートではなく、隼人と真司の為に葛城さんが来てくれたのだろう。

クラスメイトの顔を立って映画まで付き合ってくれるなんて、葛城さんは本当に優しい。きつと前世は女神様だったに違いない。

「映画、すごい良かったね。私青葉の気持ち、わかりすぎて最後涙が止まらなかったよ。やっぱり、思いは伝えないといけないんだね。私も見習わないといけないなって思ったよ。」

「ああ。すごく良かった。こんな感じの映画を映画館で見るのは初めてだから。やっぱり映画館で見る映画はいいよな。」

「もしかして映画館に来る事ってあんまりないの？よかったらまた誘ってね。」

「ありがとう。またよろしくお願いします。」

社交辞令とはいえやっぱり葛城さんは天使だな。これが最初で最期でも悔いは無い。

いや今度は恋人同士となって見に来たい。

今日は本当に素晴らしい1日だった。彼女が17年いない俺がデート気分を味わうことができた。

隼人と真司にもちよつと感謝しながら家路についた。

第61話 青春の1ページ(後書き)

第62話 ギルドイベントの案内

2日後学校に行くよ

「海斗くん。一昨日はどうだったのかな？映画は見たのかな。どうだったか教えて欲しいなー」

隼人と真司がニヤニヤしながら聞いてきた。

「ああ、もちろん行ったよ。最高に楽しかったけどそれがどうしたか？。」

「一体なんの映画観たんだよ。アクション物か？」

「いや、そらいろ青葉と夏の雨 っていう映画を見た。」

「え？マジで言ってるのか？あれってベストセラーの青春恋愛映画だよな。」

「ああそう、それぞれ。最後泣きそうになったけど凄いい良かったよ。」

「……映画は海斗が決めたのか？」

「いや、葛城さんが観たいって言うから、それにしたんだけどな。」

「……デートですな」「デートですね」

「いやデートじゃねーよ。お前らが頼んだから、付き合いで来てくれただけだつて。」

「ああそう。まあ海斗だからな」「ああ、そうね海斗くんバカだからね」

「ふざけるな。バカじゃねーよ。」

「次の約束はどうなった？」

「いや、社交辞令でまた映画誘ってくれって言われたけど、流石に俺もそこまで厚かましくはできないからな。次なんかないぞ」

「やっぱりバカだ。」「真性のバカですな。」

2人の的外れな会話にちょっと疲れた。もう放っておこう。

放課後ギルドに行つて魔核を一部売却していると、日番谷さんに声をかけられた。

「高木様、もしよろしければこちらに参加してみませんか？」

見せられたのは、集団での7階層探索イベントの告知パンフレットだった。参加資格はアイアンランク以上。

なんと期日は今週末スタートで1週間開催されているようだ。

「これってなんですか？」

「アイアンランク以上の探索者の方を対象に親睦を深めてもらったり、ソロで突破が難しい人のためのサポートイベントのようなもの

です。結構若い探索者の方が参加されるので、急なのですがよろしければいかがでしょうか」

自分と同程度以上の探索者と潜った事がないし、他の探索者のやり方も興味がある。もしかしたら仲間も増えるかもしれない。

「是非お願いします。」

「それではこちらが案内要項になります。当日までには目を通しておいてください。」

「わかりました。土曜日にまたお願いします。」

要項を見ると募集人数は20名。事前に提出する能力評価を元に3人から5人で日替わりパーティを組み7階層にアタックして、攻略を目指すというものだ。

この前、真司と隼人とパーティを組んだが、本当の意味では初となる、他の探索者とのパーティ戦。正直楽しみではない。

週末までまだ時間があるので、それまでは1階層でスライムを狩って魔核を貯めておくことにした。

手慣れたもので、1時間あたり10個以上のペースをキープできている。一日3時間で35個程度を確保できている。既に100個以上を確保できているので、少し魔剣バルザードの性能を試す事にした。

射程が異常に短いので、使いにくく今まで碌に使用していないが、未知の7階層に臨むにあたって、手持ちの武器は最大限活用出来る体制を整えておきたい。

まず1回に吸収できる魔核は3個、ここまででは検証済みだ。
次に魔核3個分で何回分の攻撃が強化されるかだ。
スライム相手に殺虫剤ではなく、魔剣バルザードを使用してみる。

「バシユッ」

小さいとはいえ流石は魔剣。スライムが斬撃と共に一瞬で消失した。そのあとスライムに連続使用して何度効果が発揮されるか検証してみたが、6回目で普通のナイフに戻ってしまっていた。どうやら3個の魔核で5回使用できるようだ。まあまあ悪くない。
次に、効果を検証。これはスライムではよくわからなかったので2階層のゴブリンを相手に検証してみた。

まず剣の長さが変化しないかと、魔法の要領でイメージしたり色々やってみたが、一切変化なしだった。
その次に試したのが、よくアニメや漫画で見る飛ぶ斬撃。これもイメージしたり、力を込めたりしてみたがダメだった。
斬撃がダメなら魔剣自体を投げつけてみたが、全く上手く刺さらなかったが、どうやら投げても魔剣の威力は保たれているようだ。なので、今度投げナイフの練習をしてもいいかな。

最後に斬撃の威力だが、こちらは結構成果があった。
魔剣をモンスターに刺した瞬間に切るイメージを持って振ると、ズバツと切断することができ、炸裂するイメージを持って使用すると、刺した周囲が爆散することがわかった。
接触した状態であれば、斬撃の種類と威力はイメージに左右されて変化するようだ。

訓練次第で凄い威力を引き出せる可能性がある。

問題は、この超近接の魔剣を7階層のモンスターに刺す事ができるかどうかだ。

今回のイベントで出番があるかはわからないが、なかなか骨が折れるかもしれない。

第63話 ギルドイベント

遂に土曜日となり、俺はギルドに集合している。

既に参加者全員が集まって来ている。

参加者は20名で男性12名の女性8名だ。年齢も数人だが結構上の人がいるようだったが、概ね10代から20代ぐらいのように見える。

「それでは今から7階層攻略イベントを開始します。土日は終日行います。月曜日からは17時から19時までの2時間だけとなります。パーティの組み合わせは、事前にギルドの方で決めさせていだいております。土日は、お昼休憩を6階層で挟みますので1日1パターン、平日は5日間共同じメンバーのみとなりますので、全部で3パターンの組み合わせとなります。それぞれ協力して、レベルアップと攻略を目指してください。それではこれがメンバー表となりますので確認次第開始してください。」

ギルド職員からアナウンスがあり、メンバー表を確認する。

今日のメンバーは『後藤、高木、伊藤、杉本』となっていた。4人パーティらしい。

4人以上で潜るのが初めてなので、すごく楽しみだ。

メンバーで集まってみると、おじさん2人に俺ともう一人同い年ぐらいの男性のパーティだった。

なぜ8人も女性がいて1人もメンバーにいないんだ。しかも2人はおじさん・・・

作為を感じる。

まあ、ダンジョン攻略が目的だからいいんだけど。

4人で集まって、自己紹介を済ませてパーティの戦略を練る。おじさんの1人後藤さんが取りまとめをしたが、どうやらメンバー全員が前衛らしい。

俺の場合厳密には中衛な気もするが似たようなもんだろ。

前衛4人なので難しい事は省いて基本2人1組で各個撃破することと決まった。

早速4人で6階層に移り、そのまま7階層に潜った。

「ところで高木くん、君のメイン武器はなんだい？」

組むことが決まった伊藤さんが聞いてきた。

「今使ってるのは魔核銃ですよ。近接だとたまにタングステンロッドを使う事もあります。結構盾役やる事も多いので、このシールドも使います」

「魔核銃か。高木くん7階層のモンスターの事知ってる？」

「いや、潜る予定が無かったところを急に誘われたんで、よく調べてません。」

「あー。それですか。多分魔核銃では厳しいと思う。」

普段なら未知の階層の情報は極力集めてから臨んでいたが、今回は突然誘われたのと、イベントでパーティを組める事に安心してしまいい、完全に情報収集を怠っていた。

伊藤さんと会話をしている最中に7階層のモンスターが出現した。

出現したのはストーンゴーレム2体だった。
後藤さんが、戦闘開始を合図する。

「高木くん、私が倒すから、サポート頼む。」

伊藤さんから指示が飛んでくる。

6階層であれば魔核銃ですぐにかたがついていたが、7階層は、やってみないとわからない。

とにかくストーンゴーレムに向かって魔核銃を連射

「カーーン」「キーン」

「マジか」

パレットはストーンゴーレムに命中して着弾したものの、弾かれてしまった。厳密に言うもう少しだけ弾痕が残っているので、わずかばかりのダメージは与えたかもしれないが、ほぼ無傷だ。
気にはなるようでごちらを伺っている。

伊藤さんは横から攻撃しようとしているので、今度はタングステンロッドに持ち替え、正面から思いっきりぶっ叩いた。

「グウワキーン！」

「痛ってー」

今度は強烈な衝撃と共に完全に手が痺れてしまった。

やばい。攻撃が通じない。5階層とはまた違う形で俺とは相性が最悪だ。シルとルシェがいればどうにでもなるが、ここでは喚び出すつもりはない。

あと俺にできる事は、シールドと魔核銃を併用しての牽制しかない。止まってしまふ訳にはいけないので、即座に切り替えて魔核銃を、頭に向かつて連射。
注意をこちらに向ける。

伊藤さんの武器は大型のハンマーだ。ストーンゴーレムの注意がこちらに向いている間に振りかぶってストーンゴーレムの頭をぶっ叩いて、粉碎した。

隣では、後藤さんと杉本くんが手分けして応戦しており、程なく撃破していた。

「高木くん。誘導助かったよ。お陰でノーダメージで倒すことができた。」

「ああ。はい、良かったです。ちょっと僕では火力不足のようなので今日は、妨害と、おとりをさせてもらいます。」

「わかったよ。よろしく頼む。」

口ではああ言ったが、悔しい。確かに妨害して有利には戦えていたが、前衛といっておきながら俺だけ攻撃面では戦力外。寄生とまでは言わないが悔しい。こんなはずじゃなかった。

その後もお昼休憩までに2回交戦して、同じようなパターンでモンスターを撃破した。

6階層ではレベルアップしなかったが、7階層のモンスターを倒すことで俺はレベル16になっていた。

こんなに嬉しくないレベルアップは初めてだったが、どうしても、このイベントをこのまま終わるわけにはいけない。そう考えながら昼休憩を迎えた。

第64話 魔剣バルザード

これが今の俺のステータスだ。

L	V	1	6
H	P	5	3
M	P	3	5
B	P	5	7

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール

B Pが57にもなっている。モブだから役立たずでも仕方がないと
言ってしまうばそれまでだが、このままでは、どうしても自分を納
得させることができない。

6階層のコンビニで休憩している最中

「伊藤さん。お願いがあります。午後からの探索ですが、一度でい
いので俺に前衛をやらせてください。」

「え、だけど高木くんの武器じゃゴーレムに致命傷を与える事は・
・・」

「お願いします。無理ならすぐ、誘導役に徹します。」

「うん。そこまで言うなら再開したら最初の戦闘を任せるよ。無理だったら、すぐにチェンジだ。」

「ありがとうございます。なんとかしてみせます。」

お昼に、たらこおにぎりと梅干しおにぎりを食べて午後からの探索に備えた。

探索開始して程なく、ゴーレムのグループに遭遇。

ストーンゴーレム2体とアイアンゴーレム1体のグループだ。

後藤さんから

「伊藤さんたちでストーンゴーレム1体を先に倒してくれ。残りの1体とアイアンゴーレムはこちらで受け持つ。あとで加勢してくれ。」

俺はストーンゴーレムを倒すことに集中する。

俺がこいつを倒すには魔剣バルザードを使うしかない。

素早く懐に入って一閃。そんな芸当はできない。

暗殺者のように気配を消して後ろからの一刺し。そんな隠密スキルも持ち合わせてはいない。

それでもやるしかない。

「伊藤さん、しばらくゴーレムの相手をお願いします。」

伊藤さんにストーンゴーレムの相手をお願いしている間に、俺は盾を構えたままゴーレムに突撃、

ではなくゴーレムの視界から外れるように大回りに横側に走った。

そのままゴーレムの後ろに回って、ゴーレムが伊藤さんと戦闘している間に出来るだけ、音を立てないように、距離とタイミングを測

りながら、少しずつ近づいた。最後に覚悟を決めてゴーレムの背部に飛び込んで魔剣 バルザードを突き出す。バルザードの刃は、鈍い感触と共に難なく刺さった。その瞬間、破裂するイメージを重ねる。

「ボフウン！」

ゴーレムの腹部が爆砕し、同時にストーンゴーレムは消失した。

「なっ！？」

伊藤さんが、何か言いたそうな顔をしていたが、

「伊藤さん、後藤さん達の援護に向かいますよ。」

後藤さん達を見るとそれぞれが1体ずつのゴーレムを相手に、牽制と攻撃を繰り返しているが、一進一退という感じで、致命傷を与えないに至っていない。

目配せで伊藤さんが後藤さんのサポートに入り、俺は杉本さんのサポートに加わった。

先程と同じ様に杉本くんを相手にしているストーンゴーレムの背後にココソコソ回り込み、距離とタイミングを測りながら飛び込んで、バルザードを一突き。刺さった瞬間に破裂のイメージを重ねる。

「ボフウン！」

2度目もなんとかうまくいった。ゴーレムが前方に意識がいついて後方への注意がそれていた事や、動きが鈍い等の要因はあるものの、午前中は、なす術がなかった相手に対して完全に打ち勝つこと

ができた。

隣に目をやると伊藤さんがハンマーで、アイアンゴーレムを粉砕していた。

伊藤さんのハンマーも普通のハンマーではないのかもしれない。

「高木くん、今のは一体なんだったんだ？ ゴーレムが弾け飛んだぞ。バズーカか何か隠し持っていたのか？ それにしては手持ちが無いよ。うだが。」

「あー。あのですね、さっきのはこれです。」

「それってステークナイフ？」

「いや、ちょっと小さいけど一応魔剣です。」

「えっ？ 魔剣ってあの魔剣？ 魔剣って実物は見た事ないけど、こんなに小さかったっけ」

「たぶんこれ最小の魔剣です。今まで射程が短すぎて、ほとんど使ったことがなかったんですけど、うまくいってよかったです。」

「はー。高木くん火力不足なのかと思っただらすごい隠し持ってたんだね」

「いや、本当に隠してたわけじゃないんです。ただほとんど使った事がないんで、使える自信もなかったんです。」

「高木くん、実はすごかったんだね。午前中は全然使えなかったから、すっかり騙されちゃったよ。人は見かけで判断しちゃダメだね。ところでその魔剣っていくらぐらいしたんだい？」

結局その後も褒められてるのがディスプレイされてるのかよくわからない
感じになってしまったが、その後も順調にゴーレムを倒し、無事に
初日を終わることができた。

第65話 新しい二つ名？

昨日に引き続いて今日も俺は7階層に潜っている。

今日のメンバーは岡田、高木、倉井、本田となっている。

なぜか今日も全員男だ・・・

やっぱり作威を感じる。

既に俺を除く11名の男性のうちの6名と組んでいる。なんか確率高すぎないだろうか。

まあ、今日も迷惑をかけないようにダンジョンに没頭しよう。そうしよう。

今日のメンバーのうち岡田さんと本田さんは年上で倉井くんは1歳下だった。

今日も男性ばかりのせいか、前衛ばかりだ。ただし、昨日と違って倉井くんは盾役メインだそうだ。

案外今の俺のスタイルと合うかもしれない。

今日のリーダーは本田さんに決まったので、探索を開始する。30分ほど探索すると、ようやくモンスターに遭遇した。

アイアンゴーレム、ブラストゴーレム、ストーンゴーレムの3体だ。

「高木さんと倉井くんで、アイアンとブラストを引きつけてくれ。

俺と岡田さんでストーンゴーレムを先に仕留める。そのあと加勢して撃破するぞ」

俺はアイアンゴーレムを引きつけることにしたが、正直ゴーレム相手に盾では怖い。

距離を取って移動しながら、魔核銃を発砲する。

もちろん破壊を目的とするものではなく、注意を引くために、注意が逸れそうになる度に発砲した。

途中向かってくるそぶりも見せたので、極力距離を取りながら注意をする。

横では倉井くんが大型の盾を持ってプラストゴーレムに接近戦を挑んでいる。

挑んでいると言つか、盾を構えて近距離で避けている。かすつたりもしているが、正面から受けずにうまく流している。正直、ただ受け止めるだけの俺の盾の使い方とは全く比較にならないので本当にすごいと思った。

2人で注意を引いている間に本田さんと岡田さんがストーンゴーレムを左右から一刀両断した。

すごい。剣で普通に切った。おそらく普通の鉄製とかではないのだろう。

ストーンゴーレム消失後すぐに合流して2対1の状況を作った。

俺は岡田さんとアイアンゴーレムの相手だ。

昨日と同じように大回りに側面を周りこもつとするが、ゴーレムも追ってきてしまった。

魔核銃で牽制しながら、盾を構えてとにかく距離をとり、被弾しないように蛇行しながら後退する。

「ブォーン！」

ゴーレムのパンチが体の脇を通り過ぎて、ものすごい風切り音がする。正直こんなのを食らったら、盾を持っていたとしてもただでは済まないだろう。それこそ生身に食らったらひとたまりもない。

焦りながら避け続けていると背後から岡田さんがゴーレムを切った。その瞬間ゴーレムは胴体からずれて、そのまま消失した。

今回は、結果的に俺がおとり役になって倒すことができたので、まあ良かったが、ちょっと肝が冷えてしまった。

倉井くんの方を見るとこちらと同じように倉井くんがおとり役で攻

撃を避けながら、背後から本田さんが斬り伏せていた。やっぱり倉井くんはうまい。それに本田さんも、なんか侍みたいでカッコいい。ちょっと憧れる。

次に向かう際に他のメンバーには、金属系のゴーレムが出現した場合、俺にやらせて欲しいとお願いをしておいた。魔剣バルガードが金属系のゴーレムにも通用するか、一度試しておきたかったのだ。うろつろつ4人で探索していると、上手い具合にアイアンゴーレム2体が出現した。

早速左側のゴーレムを相手にする。お願いしておいたので、岡田さんが先に近づいて牽制してくれる。その隙にアイアンゴーレムの背後に回りこむ。流石は岡田さん、完璧に注意を引いてくれているようで、ゴーレムが全くこちらを気にする様子がない。俺は出来るだけ気配と音を消し、一気に距離を詰め魔剣バルガードで一突き。そのまま今度は叩き切るイメージを重ねて横薙ぎにバルガードを振るつた。

「ズツ、ズズツ」

バルガードの一突きは、アイアンゴーレムの躯体を全く問題とせず、そのままゴーレムの胴体がずれて消失してしまった。

「おいおい、なんだよ。何をしたんだ？そのステークナイフは一体なんなんだ？反則だろ。」

岡田さんが声をかけてきた。

隣で戦闘を終了させた、本田さん達も合流してきた。

「そのステークナイフそんなにすごいのか？今度は俺と組んでくれ。実際に威力を見てみたい。」

そう言われて今度は本田さんと組むことになり、そのまま次に出てきたブロンズゴーレムを相手にすることになった。

本田さんが威嚇してくれている間に後方に回り込む。今度も本田さんが上手いのか、ゴーレムは俺の事を全く気に止める様子がない。いける感覚があったので、そのまま近づいて一突き、イメージは破裂。

「ボフウン！」

ブロンズゴーレムの腹が弾け飛んだ。

「おおつ。すごいなそのステークナイフ。いったいどこで売ってるんだ！？なんかかつこ悪いけどかつこいいな。私も欲しい。」

「一応ドロップアイテムなんで売ってないです。」

「うーん残念だな。なんかそれで戦ってたら2つ名がつきそうだな。」

「え？二つ名ですか？」

「そうだな。暗殺ステークナイフくんなんてどうだ？いや サイレントステークナイフ、爆裂ステークナイフボーイなんていいかもな。」

なんて酷いネーミングセンス。

絶対に呼ばれたくない。既にスライムスレイヤーと言う嬉しくない二つ名を持っているのだからもう十分だ。

その後も1日、モンスターを相手に戦って日曜のイベントは終了した。

第65話 新しい「じい」名？（後書き）

第6話 もう一枚のサーバントカード

月曜日の放課後、俺はギルドに集合してパーティメンバーを確認した。

神宮寺、高木、森山、田辺の4人構成だ。そしてなんとこのイベントで初めて女性メンバーとパーティとなった。しかも俺以外、全員女性なのだ。このメンバーで週末まで7階層に潜ることになる。

昨日までが嘘の様に心の中が晴れ晴れとしている。生まれて初めて人間の女性とパーティを組む、この状況でテンションが上がらない男はこの世の中にいるだろうか、いやいな。

早速自己紹介をしてダンジョンに行こうとするが、まずリーダーは俺が務めることになった。

そしてなぜか女の子達の発案で名前で呼び合う事となった。さすが女の子が3人集まるといつもと違う。

神宮寺愛理・・・あいりさん。2つ年上のお姉さん。大学生らしいが前衛で薙刀を武器としている。背が高くポニーテールのスレンダーボディがイケてる。

森山ミク・・・ミク。同学年らしい。中衛？武器もよくわからないが、何かあるらしい。ショートボブのミステリアス少女だ。

田辺 光梨・・・ヒカリン。1歳年下。後衛でなんと魔法が使えるらしい。小動物系で結構可愛い。

俺の分析はこんな感じだ。とにかく今までとは違う緊張感を持って、7階層に挑む事になった。

とりあえず、前衛を出来るのが俺とあいりさんしかいないので、俺がミクとあいりさんがヒカリンと組む事になった。女の子の前で無様な姿は見せられないといつも以上に気合が入る。

しばらく探索するとストーンゴーレム2体と遭遇した。連携を確認するにはうってつけの相手だ。

昨日までと違い、女の子をおとりに使うのも気が引けるので積極的に前に出ようと思う。

「それじゃあ、ミク油断せずに行こう、俺が前に出るから。」

「うん。ちょっとまって。」

そう言っただけでミクが取り出したのは・・・
サーバントカード!?

「ミク、それってもしかして・・・」

「来てスナッチ。」

ミクの召喚に応じて現れたのはイタチ。いや頭に赤い宝石が埋まったあれはカーバンクル!?

おおー。俺以外でサーバントカードを使ってるのを初めてみた。しかも動物型だ。テンションが上がる。

こいつ、小さいしあんまり強そうじゃないけど、サーバントだからやっぱり強いのか?

そう思って観察していると、スピード系なのか結構素早く動いている。動きながらなんか攻撃しているようだ。

見えない何かストーンゴーレムに時々、炸裂している。

おそらく風系の魔法かスキルじゃないだろうか。

ただ・・・

威力が弱いのかストーンゴーレムは僅かに傷がついている程度だ。

どう考えても倒せそうにない。

俺はすぐに頭を切り替えて、ゴーレムの側面から背後に回る。カーバンクルがちょこまか攻撃しているせいで、全くこちらに気づいていない。

少し慣れてきたので、特に気負う事なくゴーレムの後ろまで近付いてバルザードを一突き。いつものように破裂のイメージを重ねる。

「ボフウン！」

炸裂音とともにストーンゴーレムが弾けて消失した。

すぐに隣に目をやると、あいりさんが、なぎなたで滅多切りになっていた。

なんか動きが速いし、素人っぽくない。すごいな。

まもなくストーンゴーレムは消失した。

「海斗、ちょっとすごくない？なにさっきの、ステーキナイフでゴーレムが吹き飛んだんだけど！？海斗って凄腕のコックさんだったの？」

「いや、違うけど。そもそもステーキナイフじゃないし。」

「コックさんじゃないなら、忍者でしょ。NINJA。ふらふら後ろから近づいて一撃だもんね。すごい。」

「忍者でもないけど。それよりさっきのあれサーバントカードじゃないのか？ドロップで手に入れたの？」

カーバンクルってどんな能力があるんだ？」

興奮して矢継ぎ早に質問してしまった。

「うん。これサーバントカードだよ。探索者になる時にダンジョン
マートでパパにプレゼントしてもらったの。可愛いから、カーバン
クルにしちゃった。能力はね、『かまいたち』風の刃で相手を切
り刻むんだけど、ゴーレムには相性が悪いからイベントに参加した
んだ。」

「パパ・・・」

「パパって本当のお父さんだよ。」

「お金持ちなんだね・・・」

第67話 本物の魔法使い

俺はその後ミクとペアを継続して3組のゴーレムを撃退した。

ミクが直接戦闘に加わることは無く、カーバンクルが頑張っていたが、まあそれもありがたなと思う。

しかし、カーバンクルを購入とは驚いた。世の中にはお金持ちがいるもんだと妙に感心してしまった。

同じサーバントでもやはり、うちのシルとルシェは特別だと言うのがよく分かった。正直強さの桁が違う。

その日はそれで解散して、3人と火曜日の放課後にまた待ち合わせをした。

全くりア充ではないが、リア充気分を少しだけ味わえて大満足の日だった。

しかしリア充パーティを組んでいる奴は毎日がこんな感じなのか。正直うらやましい。

次の日の放課後にダンジョンの入り口で落ち合い再アタックする。今日はヒカリンとのペアだ。小動物系で結構かわいい。

「ヒカリンは後衛なんだよね。魔法が使えるって聞いているけど、何の魔法が使えるのか聞いていいかな。」

「はい。わたしが使えるのは『ファイアボルト』と『アースウェイブ』なのです。」

「え？2種類も魔法が使えるの？それって結構すごくないか？」

「いえ。探索者を始める時にパパが珍しい色のマジックジュエルを

買って来て、使ってみたら『ファイアボルト』だったんです。

『アースウェイブ』はレベルアップした時に覚えました。」

「パパ……。」

「変なパパじゃないのですよ。本当のパパですから」

「お金持ちなんだね……。」

昨日も同じようなやりとりをした記憶がある。

もしかして女の子でここまで潜れている子達は、お金持ちの子供でサポートをしっかりと受けれてる子が多いのかもしれない。

気をとりなおして、探索にかかるとすぐに3体のゴーレムに遭遇。

「俺が順番に仕留めるから、足止めお願い。」

ヒカリンが『アースウェイブ』を発動する。地面が沼のようになり、アイアンゴーレムが動けなくなった。

そこに『ファイアボルト』を発動。

雷をまとった炎の玉がゴーレムを直撃する。

シルヤルシエとは比べるまでもないが、単純にすごい。ただ、カーバンクルと同様に威力が足りず、深手を負わすことはできていない。俺はヒカリンが攻撃している隙にゴーレムの背後から魔剣バルザードを一閃。ぶった斬るイメージで一気にカタをつけた。

次にミクの相手に向かうと既にヒカリンが『アースウェイブ』を発動しており、身動きできなくなったストーンゴーレムをカーバンクルが一方的に攻撃していた。

今度もぶった斬るイメージで背後からバルザードで一閃。問題なく消失させた。

最後にあいりさんの敵を消滅に向かう。

ここでも既にヒカリンが『アースウェイブ』を発動させており、動けなくなったアイアンゴーレムを、あいりさんが滅多斬りして消滅させていた。

最後は俺の出番が全くなかった。

「ヒカリンすごいな。魔法の使いどころと使い方が上手い。でも、そんなに連発してMP大丈夫なの？」

「はい。もともと人よりMPが多いみたいなのです。なので1日ぐらいは、大丈夫なのです。」

「多たってどのくらいか聞いても大丈夫？」

「はい。今のMPは75なのです。」

75・・・俺のおよそ倍だ。個人差ってこんなにあるものなのか・・・最近、神の祝福の補正でかなりMPも増えてきたつもりだったが、比較にならない。

魔法の手際といい適性があるのだろう。彼女のような子を魔法使いと呼ぶのだろう。

その後も4回ほど交戦したが、ヒカリンの活躍の仕方は尋常ではなかった。

『アースウェイブ』がとにかく今回の戦闘で効きまくっている。重い体躯のゴーレムは避けることができず、効果を発揮すると一切身動きが取れなくなっていた。

直接的な攻撃力が低くても、補助役としての彼女の有用性は群を抜いている。

敵がゴーレムでなければ『ファイアボルト』の威力もかなりのものなので、直接攻撃もいけるのだろう。

見た目も年齢も俺より小さいのに本当にすごい。魔法特化型だし、小動物的な風貌で、魔法少女ヒカリンとして売り出せば結構売れそうなのがする。

第68話 ハーレムパーティー？

水曜日の放課後も4人で7階層に潜っている。

今日はシャツフルしてあいらさんと組んでみようと思うが、前衛2人が一緒に組むという事は必然的に4人ワンセットで戦うことになる。今まではずっと2人組で各個撃破してきたが、今回は別れずに4人で戦うことになる。初めてのパターンなので混乱しないよう、イレギュラーに備えていくつかのパターンを打ち合わせしておく。基本パターンはヒカリンの『アースウェイブ』を軸にしてあいらさんと俺で速攻をかける。その間他の敵はカーバンクルに足止めをしてもらおう感じだ。数が多かったり、速攻に失敗した場合は2人組に分かれてしつかり立て直しを図ってから、各個撃破に切り替える。一通り打ち合わせを終え、探索を開始するがなかなかゴーレムに遭遇しない。

「海斗は普段ソロで潜っているのか？昨日までを見てると、背後からの強襲スタイルのようだけど、誘導役がいなくて見つからないのか？」

あいらさんが歩きながら聞いてくる。

「いや、一応、前衛は前衛なんですけど、普段は魔核銃で中距離攻撃メインなんです。ゴーレムが硬くて歯が立たなかったんで、この階層に来てから、普段あんまりやらない近接戦闘に切り替えたいですよ。」

「そうなのか。それにしても背後からの強襲が妙に板についていたようだが。それとあの武器はなんだ？」

見た感じステーキナイフのようだが、とんでもない威力じゃないか。どこで売ってるんだ？」

「あー。私も気になってたんだよ。パパに頼んで一本買ってもらうかと思っただけだよ。」

ミクも一緒に聞いてくる。

「いや、あれはステーキナイフじゃなくて一応魔剣なんです。買ったんじゃないでドロップしたんですよ。それはそうと、あいらさんの薙刀もすごくないですか？ゴーレムを滅多斬りじゃないですか？」

「ああ。探索者になる時に父が買ってくれたんだ。もともと薙刀は小さい頃から習っていたからな。」

「父……」

「ああ優しい父なんだ」

「お金持ちなんですね……」

このやり取りも3回目だ。どうやら3人ともお金持ちのお嬢さんらしい。まあ3人も魅力的だから俺が何も言うことは無いのだが、俺は自分で貯めたお小遣いと、木刀だけでスタートしたと言つのに……

世の中不公平だと今更ながら痛感する。

しかし今は同じ土俵に立てている事を自分で褒めてあげたい。

そうこうしているうちにゴーレム2体のグループに遭遇した。

打ち合わせ通り、ヒカリンが『アースウェイブ』を発動。

その間にあいりさんと俺がブロンズゴーレムに向かっていき、正面からあいりさんが牽制を仕掛ける。

動けなくなったゴーレムに、なぎなたの少し長めのリーチを生かしてうまくダメージを与えていく。

ゴーレムがもがいているのを横目に、すーっと後ろに回り込みそのままバルザードを一閃。ゴーレムを爆散させた。

直ぐに隣のゴーレムにあたるが、既にヒカリンの『アースウェイブ』が発動しており、ミクのカーバクルのスナッチが攻撃を繰り返している。

戦闘の合間を縫い後ろに回り込んでバルザードを一閃。アイアンゴーレムを消滅させる事に成功した。

「やっぱり海斗って忍者っぽいな。妙に気配が薄いし」

「やっぱりそうですね。気配が消えるというか、するするっと後ろに回り込んでドカンですし。」

「わたしもそう思うのです。なんか気がついたら後ろに回り込んで一瞬で相手を葬ってますから、忍者か特殊なスキルがあると思うのです。」

「いや、特にスキルも持っていないし、忍者っぽい能力も持っていないよ。」

「それじゃあ、あの気配が消える感じは一体・・・」

「普通あんな風にモンスターの後ろに回り込めないでしょ」

「忍者じゃないなら暗殺者？」

「いや暗殺者って。犯罪者みただし勘弁してよ。俺はいたって普通。ノーマルだから」

そうは言ったものの、よく考えてみるとイベントが始まってから背後に回ってバルザードで仕留めるパターンがよくはまっている感じはする。

3人もこう言っているし、気配が薄いのかもしれない。

しかし本当に特別なスキルがあるわけではないので、ナチュラルに気配が薄いのかも・・・

もしかしたら、気づかないうちにモブの特性が戦闘に生かされているのかもしれない。

ちよつと複雑だ・・・

第69話 嬉しいお誘い

今日は木曜日だが、昨日と同じように4人で7階層に潜っている。さっそく4体のゴーレムに遭遇したので、交戦する。

流石に前衛2人でゴーレム4体は結構きついで戦略的に動く。

「一番左から『アースウェイブ』を頼む。ミク、スナッチに左から2番目を見てもらってくれ。一番右端は、俺が牽制しとくから、右から2番目をあいりさん、足止めお願いします。足止めの間に俺が仕留めます。」

指示と同時にそれぞれが役割を果たそうと動き出す。月曜日からの4日間でかなり意思疎通と連携が取れてきたので、スムーズな動き出した。

俺は魔核銃を一番右のストーンゴーレムに向けて連射して牽制。それと同時に隣のゴーレムの後ろにスーツと回り込む。時間をかけられないのであいりさんが薙刀で注意を引いてくれていた間に躊躇せず背後に飛び込んでバルザードを一閃。一気に消失させた。そのまますぐにあいりさんは、右端のゴーレムと相対して、俺は『アースウェイブ』にはまっている一番左のアイアンゴーレムの後ろまで回り込んで一気に仕留めた。

隣のゴーレムはヒカリンの『アースウェイブ』が発動しており、スナッチが牽制しているので、しばらくは問題なさそうなので、そのまま、あいりさんが、相手にしているブロンズゴーレムの方に回り込んで後ろから一閃して、消失させた。

最後は、スナッチの相手にしているストーンゴーレムだけだが、あいりさんが自分で仕留めたいと言うので、譲ることにした。

あいりさんの薙刀捌きは、本当に絵になる。俺と違って流れるような動きで無駄が無い。

あっという間に、滅多斬りにして消失させてしまった。喋り方もだが武道の家元かなんかなんだろうか？

4体のゴーレムも難なく倒してしまった。このメンバーは思いの外、相性がいいのかもしれないな。ちよつと俺も含めて前衛の火力が足りないが、ゴーレム系でなければカーバンクルがもつと活躍してくれるので、結構バランスがいいような気がする。

そんな事を考えながら、次に向おうとするとミクが話しかけてきた。

「海斗、私たち4人パーティって結構上手くやれてるよね。そう思わない？」

「ああそうだな。結構順調じゃないかな」

「実は、私たち3人で昨日話し合って、このイベントが終わっても3人でパーティを組むことにしたの。それで海斗って普段ソロで潜っているのよね。」

「ああ、まあそうだけど。」

「もしよかったら海斗も一緒に組まない？」

「え！？俺？えっ？なんで俺？」

「私達、今までいろんな人と臨時パーティ組んだり色々してきたんだけど女の子が少なくて、なかなかメンバーが決まらなかつただけど、今回の3人なら上手くやれると思って。それと海斗、あなたって普通でしょ？」

「まあ、多分普通だと思っけど。」

「普通って大事なの。今回も土日は違う男の人達とも組んだんだけど、戦闘狂だったり、マツチヨだったり、ちよつと無理な人ばかりで。おまけに組むと絶対連絡先聞かれたり、付き合ってる人はいりのか聞いてきたりで、必ず誘ってくるのよね。それが海斗は一切そんなことがなかったでしょ。戦闘力も見かけによらず、結構あるし、指示が結構やり易いから、3人で相談して一緒にどうかなって話になったのよ。」

言われてみれば、たしかに、イベント中俺は彼女達のプライベートには殆ど触れてこなかった。探索者の女性は少ない上に、彼女たちはそれぞれ、魅力的だ。たしかにいろんな誘いがあってもおかしくない。お嬢様だし。

俺は、そんな発想がなかった・・・

女の子とパーティ組むのも初めてだし、そもそも3人も女の子とパーティを組んでそんなことに気を回す余裕がなかった。

「どうかな？来週以降も私達と正式にパーティ組まない？」

「俺なんかでいいのかな？」

「普通って希少なよ。海斗がよければお願いしたいのよ。」

「うーん。正直、誘ってくれてめちゃくちゃ嬉しい。考えてもなかったからビックリしたよ。実は3人の事は実際に組んでみて俺も相性がいかなとは感じてたんだ。ただ、ちよつと考えさせてくれなかな。俺にも色々事情があつてすぐには決めれないんだよ。本当にごめん」

「そつだよね。私達は急がないから答えが出たらまた連絡しようだ
い。」

そう言つてミクから連絡先を書いたメモを渡された。

これは夢なのか？

俺の人生でこんな事がおこつても大丈夫なのか？

なんか落とし穴はないか？

本当に大丈夫なのか？

色々考えてみても、全く分からなかったが、 3人とパーティを組むという事は、いずれシルとルシエを見せるという事だ。

3人の事だから大丈夫だとは思つが、幼女2人を使う俺・・・

大丈夫だろうか？

そもそも、最近シルから春香さんについて突つ込まれたばかりだ。

あの時のシルとルシエの態度も微妙だった。正直あの2人がうまくやっついていけるか自信がない。

うーん。飛び上がるほど嬉しい誘いだけど、慎重に判断しないと大変なことになる気がする。よく考えてから慎重に返事をしよう。

第70話 久しぶりに3人

俺は今日も7階層に潜っている。

イベント最終日の昨日で4人で潜る最終日となった。

連携も取れ、サクサクゴーレム狩りも進み本当に楽しかった。

目的である8階層の階段前までたどり着く事も出来たので、無事解散となった。

解散の際に、ミクだけでなくあいりさんとヒカリンの連絡先もいた
だけ、

「またね」

と3人から言われた。

本当に人生予測できないことが突然起こるものだ。

今日は、昨日までのメンバーではなく1週間振りに、シルとルシエ
と潜っている。

昨日までのメンバーも本当に楽しかった。しかも今後も誘ってくれ
て夢じゃないだろうかと思おう。

しかし、やっぱりシルは落ち着く。俺の心のオアシスだ。

ルシエは…… まあいないと寂しい。

シルのおかげですぐにモンスターと遭遇した。

ゴーレム3体だが、ここでちょっと迷いが生じてしまった。先週1
週間は常に誰かと組んで、ゴーレムの注意を引いてもらっている間
に俺が背後から仕留めていた。しかし、今のメンバーだと幼女2人
に困役をやらせるわけにはいかない。今までのパターンが身につい

てしまっていて何も考えてなかった。
考える俺。どうするのが一番いい？3人が一番活きる方法。

「シル、一番左のゴーレムに『神の雷撃』ルシエ真ん中のゴーレムに『破滅の獄炎』俺が一番左を受け持つから、先に片付いた方から加勢を頼む」

「はい。かしこまりました。やっぱりご主人様と一緒にだと嬉しいです。」「ああ、久しぶりだからな。思いっきりやらせてもらっぞ」

俺は指示のあと一番右のゴーレムに対して魔核銃を発砲して注意を引く。一定以上の距離を保ち魔核銃をタイミングを見計らって再度発砲。

俺の役目は囷と時間稼ぎ。強力な火力を持つ2人に攻撃を任せて俺は裏方に徹する。これが7階層での最適解だと思う。

とにかく安全マージンだけを意識しながら牽制していると目の前のアイアンゴーレムが

『グヴオージュオー』 『ズガガガガン』

炎と雷の閃光に包まれて一瞬にして消失してしまった。

「お前達やりすぎだろ。2人とも頑張ってくれるのは嬉しいけど、2人同時攻撃はどう考えてもやりすぎだろ。」

「いえ。どうしてもご主人様のお役に立ちたかったので、ちょっと張り切ってしまった。」「ずっと出てきてなかったから、戦いたくてうずうずしてたんだよ。我慢してたんだからこのぐらい、いいだろ。」

まあ。やる気満々で頑張ってくれてるわけだから、いいんだけどやっぱりこの2人の攻撃力は、半端ないな。

本当に一瞬で片がついてしまう。ちよつと久しぶりの感覚だ。バルザードを使つてちよつと自分の攻撃力も上がったなと感じていたが、全く比較にならない。この2人と一緒だと自分がまだまだなのを痛感してしまう。これからも、もつと頑張ろう。

色々考えているうちに、次のゴーレムに遭遇した。今度は4体のグループだ。

「シル、ルシエ、さつきと同じ要領で行くぞ。左から2体は俺が引きつけるから、右の2体を先に頼む。」

そう言つて俺は左側の2体に魔核銃を連射しながら、シルたちとは違う方向に誘導していく。いくらノ口くてもあの巨体が2体迫ってくるのかなり怖い。

なので距離が詰まつたら全力で走つて距離を稼ぐ。

興味がそれかけたところを見計らつて、魔核銃を発砲。これを繰り返すうちに

『グヴオージューオー』 『ズガガガガン』

一瞬でゴーレム2体が消し飛んだ。

「ねえ、ルシエご主人様なんか手慣れてない？私たちの出番がなかった間に、指示もちよつと早くなつてる気がするんだけど。」

「シルもそう思つか？なんか妙に自信がついてると言つか。いい事なんだろうけど、ちよつと怪しいな。」

「怪しいって、どういう意味なの？」

「いや、今まであれだけにやうにやしてたのに、しばらく間が開いた途端妙に自信がみなぎってる。恐らく、女だな」

「え？女ですか？以前の春香様という人でしょうか？」

「いや、そこまではわからないが、なんか臭うな。」

「ルシエ、負けないように2人でもっと頑張るのですよ。一緒に頑張りますよ。」

「ああ。わかってるって。」

またシルとルシエがコソコソ話している。

ちよつと前から時々見かける光景だ。

触らぬ神に祟りなしと言うから、できる限りスルーするしかない。

第71話 魔氷剣

俺は今、一階層の端の方に来ている。

7階層をシルとルシエと一緒に回って、ゴーレムを何度か倒しているが、あくまでも俺の役目は誘導役に徹している。

徹していると言うよりそれしか出来ない。

魔核銃は威力が足りない。バルザードは射程が短い。『ウォーターボール』も効果が薄い。

割り切って、裏方に徹してはいるものの、どうにかして直接的に俺も活躍したい。そう考えていつもの訓練スペースへ来ている。

何をどうすればいいのか漠然とすら思いつかないが出来ることをいろいろやってみるしかない。

ギルドイベントで気がついたのだが、参加者の中でも俺はあんまり強い方ではなかった。技術があるわけでもなく、力が突出しているわけでもない。

シルとルシエと周る事によって飛躍的にレベルとステータスは向上したが、戦闘技術が向上したわけではなかった。同レベルまで達した探索者と比べて圧倒的にスライム以外のモンスターとの戦闘経験が不足しているのだと解った。

技術と経験はすぐには身につかない、であればどうにか頭と既存戦力を使って差を埋めるしかない。

まずは、メイン武器の魔核銃だが、強化できないだろうか？

とにかく連射してみるが、マガジンの関係で十発で一旦終了してしまふ。同じところを何度も打てないかとやってみたが、止まっているのにすら同じところに当てるのは難しかった。まして、動く敵相手には至難の業で、俺には出来ない。

次に同じ玉なので、魔核銃の弾に『ウォーターボール』がのせられ

ないかとやってみたが、撃つスピードと詠唱のスピードが違いすぎるのと、そもその飛行スピードが違っているのでこれも失敗に終わった。次に『ウォーターボール』の強化を考えた。

これについては以前も水の時にやったので、それを氷に置き換えてやるだけだ。

やはりスピードは変えることができる。

形もある程度変えることはできた。ただどんなにイメージしてみても本来の氷の強度以上に硬くすることはできないのと、今のアイスジャベリンを大きく超える成果を得る事は出来なかった。

最後に残されたのが魔剣バルザードだ。腐っても魔剣、この超近接武器でなんとかできないだろうか？

まず最初にやったのは投げナイフの要領で投げる事だ。

勿体無いので魔核を吸収させずに都合100回以上は投げてみたがうまくいかない。どうしてもうまく垂直に刺さらない。もしかしたら投げナイフ専用のナイフとかあるのだろうか。数回だけうまく刺さったものの動く相手に使えたものではない。

それでは、正面から体術で近づいて一撃で仕留める。考えるだけでもカッコいい。まさに忍者か暗殺者の御業だろう。

これについては、スライム相手や、イメージだけではどうにもならないので2階層に潜ってゴブリン相手に訓練を積んでみた。

結論から言うと、回数を重ねる事でゴブリン相手ならなんとか出来るところまでにはなった。しかし、ゴブリンとゴーレムでは射程が違う。おまけに一撃の威力が違うので万が一にも失敗できない。

失敗イコール即死となりかねない。

これもゴーレムには使えなかったが、ゴブリン相手に、この戦法でなんとかこなっている自分の成長を感じられてちょっと嬉しかった。

そして最後に試したのが、魔剣の強化。簡単に言うと射程距離の延長を考えた。

魔核を3個以上吸収できないか、いろいろやったが無理だった。次に刺した瞬間のイメージで威力が変わるので、イメージでどうにか

ならないかやってみたがダメだった。

最後に考えたのは『ウォーターボール』を魔剣に重ねることができないかだ。

魔剣の魔は悪魔の魔かもしれないが、魔法の魔でもある。本質的に同系統のものなのであればなんとかならないのかと考えたのだ。まずバルザードを構えて

「ウォーターボール」

うん。ふつうに飛んで行った。

「ウォーターボール」

今度は手元めがけて飛んできた。危ない。うまくいかない。多分イメージの問題だな。

「ウォーターボール」

今度は剣の先から射出された。ちよつと違う。剣の刃として定着するイメージ。バルザードを持っている持ち手から伝播するイメージを固めて

「ウォーターボール」

「おおっ」

今度は、イメージに近いものになった。氷の刃がバルザードの刃に重なり伸びた。先だけ伸びたので重くなりそうなものだが、そもそも魔法だし、もともと飛んでいくようなものなので不思議と重さは殆ど変わらなかった。

マジックアイテムによる拘束だが、発動の瞬間は拘束されるようだが、バルザードと一体化した瞬間に拘束が解けた。

ブンブン振ってみるが問題なく使えている。約20秒ぐらいすると、氷の刃は消失してしまった。

永遠に魔法を顕現させることはできないので、一発分で20秒がリミットのようだ

射程が伸びたところで氷の強度しかなければ意味がないと思いながらゴブリン相手に試し斬りしてみる。

「ズズツ」

バルザード単体で使った時と同じような感覚があり、破裂のイメージを重ねる

「ボフウン！」

完全にバルザードだ。バルザードと同じだ。

おそらく発動時は普通の「ウォーターボール」だがバルザードと一体化した時点でバルザードの特性を持つのだろう。拘束が一瞬で解ける理由もそれが理由だろう。

その後も何体かで試してみたがイメージ通りの効果を得ることができた。

遂に魔法剣、いや魔氷剣とでも言うべき武器を手に入れてしまった。これでゴーレム相手でも戦えるのではないだろうか。

ただし、1回の使用で、バルザード分の魔核とウォーターボール分のMPの両方かかるので、すこぶる燃費が悪い。

明日からまた1階層でスライムの魔核を集めないといけないな。

第72話 ゴーレム狩り

今日も3人で7階層に潜っている。

今日の目的はいつもと違う。魔氷剣を使用しての実践、ゴーレムの撃破が目的だ。

これができれば、もう7階層には用がないので8階層に進もうと考えている。

「シル、ルシエ、俺は魔氷剣を使ってみるからダメなら、援護を頼むな。」

ゴブリン相手には効果は実証済みだが、ゴーレムとは格が違う。やってみないと通用するかわからない。

「ご主人様 正面に3体反応があります。」

しばらく進むと、アイアンゴーレム×2 ストーンゴーレム1体のグループに遭遇した。

「シル『神の雷撃』で右のアイアンゴーレムを頼む。ルシエは『破滅の獄炎』でストーンゴーレムを頼む。俺は左のアイアンゴーレムを相手にする。」

俺はアイアンゴーレムに近づきながら魔剣バルザードを正面に構える。

20秒という時間制限があるので、距離を慎重に測りながら

「ウォーターボール」

バルザードから氷の刃を伸ばす。

バルザードの攻撃回数も一度に5回という制約があるので、あまり手数はかけれない。

アイアンゴーレムの正面に立つと、ゴーレムが右腕を振りかぶってパンチを見舞ってきた。

そこまでスピードは感じないが、迫力はすごい。

不恰好に大きく避けて、そのままゴーレムの右腕をめがけて、魔氷剣バルザードを振るう。

「ザクツ」

鈍い手応えと共にあっさりとアイアンゴーレムの腕を切り落とした。いける。

とっさのことで破裂のイメージを重ねることはできなかったが、問題なく攻撃は通じた。しかも氷の刃も

バルザードの一部と化しているせいか、全く刃こぼれもしていない。片腕をなくして右側が隙だらけになったゴーレムの右側にスーッと移動してそのまま近づきながら横薙ぎに一閃。今度はしっかりと破裂のイメージをのせる。

「ボフウン」

バルザードでゴーレムを背後から倒した時と同じ手ごたえ、同じ効果を発揮した。

やった！

今のはかなり俺のイメージする探索者っぽい感じだった。正面から強敵を斬りふせる。

ちょっとカッコいい。いや、今までの俺に比べるとすごくカッコいい。

横を見るとシルモルシエもさっさとゴーレムを片付けていた。

「よし。うまくいった。今日はどんどんゴーレムを倒して回るぞ。」

「はい。かしこまりました。」「あゝあ。調子にのるなよ。死んじやっても知らないぞ」

今日とはとにかくゴーレム相手に実践を積みたい。気は、はやっているが、頭は結構冷静だ。

1対1はなんとかかなりそうだ。問題は複数を相手にする時だろう。さっきの戦闘でもゴーレムを倒すのに2手かかってしまっている、2体以上相手にする時は注意が必要だろう。

「ご主人様、あちらに4体のモンスターです。」

ちょっと進むと4体のブロンズゴーレムのグループに遭遇した。

「シルとルシエは、左から2体を頼む。右から2体は俺がやる」

今度は2体を同時に相手にしてみる。

ポリカーボネイト製の盾を左手に構えて右手にバルザードを握る。基本ビビりなので、2体同時に相手をする気満々だが、安全策に盾を構えている。

「ウォーターボール」

バルザードが氷刃を纏う。

ダッシュで一番右のゴーレムの更に右側に回り込み、袈裟懸けに一闪する。

「ザシュッ」

当たるのは当たったが、ちょっと浅かった。盾を持ちながら振るうのが思いのほか難しい。剣を振れる角度が限定され、距離感も取りづらい。盾を持った状態で魔氷剣を使用したのは初めてだが、こんなに違うとは思ってなかった。ただ、今更どうしようもないので更に踏み込んで追撃。再度袈裟斬りに伏せ、ゴーレムを爆砕させた。その瞬間横からもう一体のゴーレムの剛腕パンチが襲ってきた。とっさに盾を間に挟む。

「ドグワアン！」

「うっつ、痛っ！」

強烈な衝撃と共に吹き飛んでしまった。いくら盾があっても、レベルアップして強化されたステータスがあっても、人間がまともにこの巨躯の一撃を食らったらただでは済まない。

「ああっ、ご主人様、大丈夫ですか？私が今すぐ助けますね。少しだけ我慢しててください。」

シルがフォローしてくれようとするが、視線でそれを制した。自らの作戦ミスに後悔しながらも、このままやられるわけにはいかないのとっさに起き上がり、盾を放棄してゴーレムに向き合う。再度殴りかかってきた腕を横薙ぎに斬り落とし、そのまま正面に飛び込んで、胸元に魔氷剣を突き立てる。

そのままゴーレムを爆散させることに成功した。魔氷剣は十分に通用したので、あとはもう少し使い方を検討した方がいいだろう

第73話 攻撃は最大の防御？

俺は、なんとかゴーレム2体を撃退する事に成功した。

成功はしたが、かなり危なかった。盾とバルザードの組み合わせの相性が悪いのか、思ったほどうまくいかず、更にはゴーレムの一撃を盾越しとはいえモロにくらってしまった。例え盾があっても、あれを無傷でいなす事は、今の俺には難しいだろう。

やり方を再度練り直すしかない。と言っても手札は殆どない。

盾がダメなら矛。どうせ効果が薄いなら盾はこの際置いておいて、攻撃と回避に比重を置くしかない。

幸いゴーレムはモンスターの中でも動きは遅い方なので、注意して距離感さえ間違わなければ、避けることは可能だ。

とにかく攻撃は回避するしかない。

攻撃はバルザードメインだが、一刀流では回数制限や敵が多数の場合の手数の面で心配だ。

タングステンロッドとの2刀流も考えてはみたが、そもそもタングステンロッドは両手持ち用で結構重い。今のステータスなら片手で振れなくもないが、無理に振っても威力は極めて弱い。

なので候補からは除外される。

消去法的に魔核銃と、ウオーターボールが残るが、ウオーターボール一発分は既に魔氷剣に使用しており、発動する場合、多重発動となる。以前、連発による多重発動を試した事がある。

結論から言うと出来ることは出来る。但し、異常に精神力を削られる。MP以上の負担があるので、動き回りながら連発するのは現実的に厳しい。

なので魔核銃に頼るしかない。

ゴーレムに対しては威力が足りないので、メインウエポンにはなり得ないが、左手に構えて盾の代わりに、牽制と攻撃をそらす事のみ

に使用する。これしか思いつかない。

剣と銃の二刀流、厳密には刀ではないので違うのかもしれないが、右手にバルザード、左手に魔核銃のスタイルだ。

敵に遭遇する前に両手に武器を持った状態で素振りや試射を何度か繰り返す。どちらも軽いので、片手で扱う事に問題はない。あとは実践しかない。

「ご主人様、後方にモンスターが3体います。気をつけてください
ね」

今度は後ろからブロンズゴーレムが3体現れた。3体ともこちらに向かって突進してきている。

「シル、念のため『鉄壁の乙女』を頼む。ルシェー番左のゴーレムだけ頼む。俺が残りの2体をみるから、やばそうになったらフォロ
ー頼むな。」

そう指示を出すと同時に2体のゴーレムに向かって魔核銃を発砲、突進をストップさせる。

よく考えると『鉄壁の乙女』の範囲まで引き付ければよかったかとも思ったが、後の祭りなので今変更もきかない為、このまま戦闘を続ける。

右端のゴーレムに近づいて至近距離から、魔核銃を発砲する。

「プシュ」

ダメージは大して与えられないが、至近距離からバレットを受けてゴーレムの注意が大きく逸れる。隙だらけになったところを思い切って踏み込んで袈裟斬りにする。イメージは切断。殆ど抵抗を感じ

ないままゴーレムの胴体が崩れ落ち消失。
もう一体の方にすぐ向き変えて、再度近距離射撃を頭に向けて敢行する。

「プシュ」

やはり、ダメージが足りなくても、近距離射撃は、かなりインパクトはあるようで、腕で頭をガードしてきた。

思い切って、腕ごと切断を試みる。先程と同じくイメージを重ね。頭部をめがけて横薙ぎに一閃する。

驚くほど、抵抗感なく腕と頭が切断され、そのまま消失してしまっ

た。
魔氷剣ちよつとすごいかもしれない。まさに魔法剣。カッコいい。完全に思いつきで開発に至った魔氷剣だが、めちやくちゃ使える。威力も申し分ない。

色々制限はあるが、それを補っても余りある性能だ。
ただし、残念な事に時間制限があるので常用の武器としては使用できない。

「よし、今度はうまくいったから、次に行ってみよう。シル頼んだぞ。」

俺は、先程の感覚を忘れないように、次のゴーレムを探すことにした。

第74話 お伺い

俺は7階層で次のゴーレムを探して探索している。

「ルシエ、さっきのご主人様かつこよかったよね。なんかどんどん強くなってる気がするの。よかったよね」

「何か、わたしたちがいなかった先週で、変わった気がする。なんか、頑張り方が違うというか、妙に自信が出てきたような。多分あれは女だな」

「え！？またあの春香様というお方でしょうか？ルシエ、どうしよう。」

「いや、春香かどうかはわからないな。どうも前回と感じが違うんだよね。違う女かもな。」

「ええ！？違う女の人？ご主人様、最近特にかっこいいから、モテルのは仕方がないのかもしれないけれど、大変だね。ルシエ本当にどうすればいいと思う？」

「あいつがそんなにモテルとは思えないけどな。あとでちょっと聞いてみるか」

俺は、そんな会話に全く気付かず、ゴーレム探索に励んでいた。

「シル、ゴーレムだぞ！探知できなかったのか？」

「え！？ 申し訳ございません。ちょっとおしゃべりに気を取られていました。本当に申し訳ございませんでした。」

「まあ、俺が気がついたから、そんなに謝らなくてもいいけど、すっかり行くぞ！今まで一番多い5体だからな。順番に撃破していくぞ。安全に行くから、シル『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエ、ギリギリまで引きつけて一気に殲滅するぞ」

『鉄壁の乙女』

光の防御壁の中でゴーレムを迎え撃つ。ゴーレム5体を取り囲むようにして、一気に攻撃を仕掛けてくる。

光のベールに阻まれるのはわかっているが、流石にちょっと怖い。ゴーレムの攻撃がベールに阻まれた瞬間、魔氷剣で正面のゴーレムを斬り結ぶ。ノーガードのゴーレムは一瞬で消滅、隣のゴーレムが身構える前に、頭部に向かって魔核銃を発砲する。一瞬怯んだゴーレムの胴体に一撃を加えて爆散させることに成功した。

密集状態だったので、ルシエの『破滅の獄炎』も効果を発揮して2発連発で既に3体のゴーレムを一掃していた。

対応さえ誤らなければ、5体のゴーレムも問題なく撃破できた。

シルとルシエと3人であれば7階層はもう、問題ないだろう。次の8階層を目指すことになる。

その前にシルとルシエに確認したいことがある。

「シル、ルシエ、ちょっといいかな。7階層も問題なさそうだし、今度は8階層に向かおうと思うんだけど、8階層まで来ると、敵もちょっと大変だと思うんだよ。3人だとちょっと厳しい場面も出てくるんじゃないかと思うんだ。それで、ちょっと相談んだけど、本当に仮にの話なんだけど、パーティメンバーを増やしたらどう思う？」

「え！？パーティーメンバーが増えるんですか？今のままでも全然大丈夫だと思います。というより、今の3人が一番バランスがいいと思います。」

「はーん。女だな。パーティーメンバーに女を入れたいんだろ。」

「い、いや、なにいつてるんだよ。仮の話だよ、仮。女の子がパーティに入ってくれるはずないじゃないか。ははは。」

「じゃあ、今のままでいいと思います。仮の話は仮で終わりでもいいと思います。」

「まあ、お前にそんな甲斐性があるとは思えないから、仮の話だろうけど仮の。」

「うっ。そうそう仮だよ仮。そうだよな、パーティーメンバーはこの3人で行こうな。うんそれがいい。ところで話は変わりますが、この前イベントに参加したじゃないですか。そのおかげもあって、今回結構スキルアップしたんですよ。そう思いませんか？」

「はい。それはもう間違いないです。ご主人様、最近すごいです。カッコいいです。」

「まーちょっと強くなったような気はするな。」

「そうですね。それで、今後もイベントで知り合った人たちと時々、週末とかにパーティを組んでスキルアップをしようと思うんですよ。シルとルシェも最高だけど、2人が強すぎて俺も置いていかれないように頑張らないといけないじゃないですか。」

「最高だなんて。ありがとうございます。でも私が、ご主人様を置いていくなんて有り得ません。」

「そのメンバーは女なのか？女なんだろう」

「い、いえ、何をおっしゃっているんですか。イベントメンバーは殆ど男でしたよ。男」

「私はご主人様が決めた事なら言うことはありません。頑張ってください。でも普段は私たちと一緒にですよ。」

「ふん。殆ど男ね。まあどっちでもいいけど。ちゃんと魔核は、くれよ」

「はい。もちろんですよ。これからもシルとルシェが一番です。頑張ろう、ははは。」

なんとか週末に他のパーティに参加するのをOKもらった。しかし、女性の部分に異常に反応するな。ちょっと、圧がすごい。イベントメンバーは殆ど男だったのは本当だから嘘は言っていない。誘われたのが女の子からだっただけだ。なんか2人共ちよつと怖かったのでバレないようにしよう。別にそんなに悪いことをしているわけではないのに・・・

「シル。女だな。喋り方とか話の振り方が怪しすぎだな。あれでバテないとも思ってるのかあのバカ」

「むー。女性の方ですね。私たちの努力が足りないのでしょうか？負けられないようにこれから2人でもっと頑張らましようね。」

俺は今度8階層を目指す。

第75話 パーティ結成

俺は今携帯電話とにらめっこをしている。

昨日なんとかシルとルシェに週末だけ他のパーティに参加する了承を得たので、ミク達に連絡をしようとしている。

しかしよく考えると週末だけの参加なんて都合が良すぎないだろうか？そもそも、誘われたのは、4日も前のことだ、もう違うメンバーが決まっているかもしれない。

電話をかけて、変なふうに思われないだろうか？
うーん、緊張する。

携帯を片手に既に30分が経過してしまった。

これ以上考えても無駄だと悟り、ついにミクに電話をかける。

「はい。もしもし」

「あ、あ、ミクさんでしょうか？」

「あ、海斗？電話待ってたんだ。パーティの件どうかな。」

「それなんだけど、色々事情がありまして、勝手なんですけど週末だけ参加させてもらうことは可能でしょうか？時々休んだりする事もあると思うんだけど。無理でしょうか？」

「え？全然いいよ。みんなそんな感じだし。普段はみんな学校があるから、基本パーティで潜るの週末だけだし。」

「あ、そうなんだ。そうだよな。みんな週末だけだよな。」

そうか、イベントだからみんな平日もダンジョンに潜ってたのか。もしかしたら毎日潜ってるのは俺ぐらいなのかもしれない。ちょっと感覚がおかしくなってるのかもしれないな。

「それじゃあ、他の2人にも連絡しとくね。今度の土曜日にパーティ申請しに行かない？」

「あ、ああパーティ申請ね。わかったどこに集合すればいいのかな」

「じゃあギルドに10時にしようか。」

パーティって申請があつたのか。完全に忘れた。そういえば講習で習った気もするけど用がないので完全に忘れてしまっていた。

土曜日迄の時間は魔核を貯めるために1階層のスライム狩りに勤しんだ。土曜日が楽しみなので、ちょっとテンションが高めでスライム狩りも楽しくできた。

結構いいペースで溜まったのでしばらくはこれでいけそうだ。

「あのバカなんかずっと浮かれてるな。怪しすぎるな。」

「私はご主人様を信じているのです。一番は私たちですからね」

ようやく待ちに待った土曜日だ。ちょっと張り切りすぎで8時30分についてしまったが、遅れるよりはいいと

思うのでまあゆっくり待つことにする。

9時40分になって、あいりさん、ミク、ヒカリンの順番でやってきた。

「おはよう。これからよろしくね。」

「こちらこそよろしくお願いします。でも俺で大丈夫ですか？」

「うん。3人でも話し合つて、海斗が一番普通だからという事になったんだ。よろしくたのむよ」

「はい。まあ普通だけが取り柄なんで」

ちよつと褒められてるのかよくわからないので複雑だが、パーティーに入れてくれるという事は3人とも嫌ではないんだろう。

「それじゃ、早速パーティー申請に行きましょう。」

いつものギルドのカウンターではなく、奥のカウンターで申請を行ったが他にも1組手続きをしていたのをみかけたので、俺がはじめてだけで、結構みんなパーティー申請をしているのかもしれない。手続きはメンバーの名前等を用紙に記載して識別票を確認するだけで終了した。

識別票にK-12と記載が増えており、これがこのパーティーの識別コードらしい。

手続きをしている間、もう一組の手続きをしている男性3人のパーティーが、こちらを見ながらコソコソ話している。

「おい、あの子達結構可愛いくないか。しかも3人も」

「おお、俺はあの一番小さい子がタイプだな。アイドルっぽいし」

「それにしてもあの男は何なんだ。あれパーティーメンバーだよな。あの3人とパーティーってどういう事だよ。」

「全然かつこいいわけでもないし、普通じゃねー。あれだったら、俺の方が100倍いけてると思うけど。」

「金でも積んだのかな。あんまり金持ってそうにも見えないけど。」

「登録中みただしあんな奴やめて俺らと組むよう誘いに行ってみるか？」

「おお、それいいな。3対3だしちょうどいい感じじゃね。あのモブっぽいのはどっかいつてもらうか」

なにやら不穏な空気を感じる。俺に対してだけ、悪意のようなものがオーラと共に流れてきている気がする。

「彼女たち、ちょっといいかな。」

「はい。何でしょうか？」

ミクが対応する。

「君たち3人でパーティ登録に来てるんだよね。俺らも3人なんでよかつたら一緒にパーティ組まない？俺たち3人ともストーンランクなんだけど、サポートしっかりするからさ」

「いえ、私たち4人で来てるんで、大丈夫です。男の人も彼がいるので大丈夫です。」

「えー。そんな冴えない感じのモブより俺らの方がいいと思うけど。脅されてるんだったら助けになるよ。」

「いえ、結構です。彼の普通の所が良くてパーティを組むことにしたので、大丈夫です。お互いにそれぞれのパーティで頑張りましょう」

「そんなこと言わずに俺らと組もうぜ、そんな弱そうな奴じゃなくて、俺らの方が絶対安心出来るって」

「失礼ですが、皆さんストーンランクなんですよね。彼も私達も既にアイアンランクなんで彼の方が安心できますので、お断りします。」

「せつかく誘ってやったのに後悔すんなよ。」

「はい大丈夫です。ありがとうございます。」

ちよつと泣けてきた。

今俺は猛烈に感動している。普通って素晴らしい。

モブがこんなに素晴らしいと思ったのは生まれて初めてかもしれない。

これからも彼女たちの期待を裏切らないよう普通に頑張っていこう。

第76話 週末パーティ

俺は7階層に潜っている。

新しい仲間、パーティコード K112のメンバーと潜っている。手続きでちよつと、ゴタゴタしてしまったが、お陰で俺の忠誠心は天井知らずになっている。

「それじゃあ、ゴーレムを探すけど、ちよつと俺の戦い方が先週末でと変わってるんで、ちよつと説明しとくよ。前まで後ろに回り込んで、一気に仕留めるスタイルだったんだけど、今は正面からでも行けるようになったから、前よりもスムーズに対応できると思う。」

「新しい武器でも購入したのです？見せてほしいのです。」

「買ったんじゃないんだけど似たようなもの。ちよつとMP使っちゃうから敵が来たら披露するよ。」

「わかったのです。」

20分ほどウロウロしてようやくゴーレムを発見した。

「みんな、正面にゴーレム4体いるから気をつけて。左の2体は任せてくれ。右の2体を3人で頼む。ヒカリンは右の2体に『アースウェイブ』を頼む。ミクはスナッチで牽制頼む。」

俺はそのまま2体のゴーレムに魔核銃を発砲。

こちらに注意を引きつけて2体を同時に相手しなくて済むように一番左のゴーレムのさらに左に回り込み、そのまま頭部にバレットを

撃ち込む。

ゴーレムが怯んだ瞬間、魔剣バルザードを構えて

「ウォーターボール」

瞬間的に拘束力が発生するが、氷の刃を出現させてから一呼吸をおいて、そのままゴーレムの胴体を斬り裂く。一撃で仕留めることができたので、そのまま次のゴーレムを見ると既に片手で頭をガードしている。流石に賢いな。

すぐに切り替えて、アイアンゴーレムの胴体に向けて発砲するが、ダメージはほとんど入らず、隙を見せない。今度は頭に発砲するそぶりを見せながら、ゴーレムがガードしている右手の方に素早く回り込んで、そのまま胴体を横薙ぎに一閃。撃退することに成功した。他の3人の方を見ると、既に1体は消失しており、残りの一体も「アースウェイブ」に完全に、はまっていて、あいりさんとスナッチが、ボコボコにしている最中だった。女の子と小動物にボコボコにされている姿に敵ながら、ちょっと気の毒になってしまった。程なく、ゴーレムは消失してしまった。

「海斗さん。さっきのは一体なんですか？魔法使えたんですか？全然知らなかったのです。しかも『ウォーターボール』って言ってましたけど、どこにもウォーターもボールもなかったのです。」

「いや、一応『ウォーターボール』には間違いないよ。ただマジックアイテムとか工夫で氷の魔刃になったんだよね。」

「そんなの聞いたことないので。それってもう『ウォーターボール』じゃないのです」

「そう言われても、そうとしか答えようがないんだけど。」

「海斗、なんでこの前は使わなかったんだ。忍者から、魔剣士にでもジョブチェンジしたのか？」

「いやジョブチェンジって、そんなもの無いし。だから前は使えなかったんですよ。イベントが終了してから使えるようになったんですよ。」

「あれってそんな簡単に使えるようになるものではない気がするが」

「いや、実際には1日で、できるようになりました。まあ、もともと『ウォーターボール』は使えてたんで、応用だけですからね。」

「どうみても『ウォーターボール』とは違うものには見えんな。応用と言うより別物だな」

「まあ、見た感じはちょっと『ウォーターボール』っぽくないんですけどどれっきとした『ウォーターボール』です。だって俺『ウォーターボール』以外の魔法使えないですから。」

「海斗って普通だと思ってたんだけど、ちょっと普通じゃないかも言ってる事もなんか変だし。多分あんな『ウォーターボール』使ってるの海斗だけだと思うけど。ヒカリンそもそも魔法ってあんなに劇的に変化するものなの？」

「いえ、私のファイアボールも、いろいろやってみましたが、スピードが変化するぐらいでそれ以上はあまり変化はなかったのです。他の魔法使いの人たちも見たことありますが、海斗さんみたいな変なのはみた事ないのです。」

変なの・・・

これは褒められてるのかディスられてるのかどっちだ？

そもそも、俺は何も悪いことしてない・・・

第77話 上級職？

俺はパーティコードK-12のメンバーと7階層に潜っている。

「さっきの魔剣士っぽいのもいいけど、前のふらふらしながら後ろから、仕留めるスタイルも結構いいと思ったんだけどな。」

「そ、そうかな。まあ魔氷剣は制約が結構あるから、また後ろからとどめを刺すスタイルも使うとは思っけど。」

「わたしも、忍者スタイルがいいと思うのです。忍者カッコいいです。魔剣士は海斗さんとちよつとイメージが違うのです。ちよつと存在感が強すぎるというか。もっと存在感が薄い方がイメージに合っているのです。」

「そう。存在感ね・・・じゃあ次は後ろからやってみるよ。」

「そうか。また忍者に戻るんだな。いつその事、あの存在感の薄いスタイルにさっきの魔氷剣とやらを組み合わせたらどうだろう？ふらふら近づいて、ドカンとやってみたらどうだろうか」

「魔法と魔剣を使う忍者で、魔忍って結構いいんじゃない？」

「魔忍、なんかカッコいいのです。」

「いや。魔忍って、そもそも俺、忍者じゃないし。勝手に名付けられても困るんだけど。しかも探索者にジョブシステムなんか無いし。」

なんか話がおかしな方向にいつてしまっている。とにかく存在感が薄い事を褒められているのかディスられているのかよくわからない。存在感の薄い魔忍、一見かつこい様な錯覚を覚えるが、明らかに俺の目指している英雄とは方向性が違う気がする。要は誰にも相手にされない路傍の石のような存在なだけなんじゃないだろうか。

その後気を取り直して、探索を再開することにした。

「みんな、あつちにゴーレム3体発見だ。ヒカリン以外が一体づつ受け持つよ。片付いた人から各自サポートに入って。ヒカリン左端の奴にタイミングを合わせてファイアボルトを頼む」

俺はとりあえず、左端のアイアンゴーレムに目標を定めて距離を詰めていく。

「ヒカリンいまだ。頼む」

「ファイアボルト」

ヒカリンの魔法の発動と同時に全速力でゴーレムの左脇を駆け抜け、着弾と同時に後ろに回り込む。

「ウォーターボール」

そのまま近づいて後ろから胴体を切断した。

消失の瞬間隣を見てみると、スナッチとあいりさんがそれぞれ、ゴーレムを牽制しながら戦っている。

俺はまずスナッチの相手をしているゴーレムの方へゆっくり、そっと近づいて行って、後ろから魔氷剣を一闪、瞬時に消失させる。

最後の一体もあいらさんと交戦中の為、完全に周りには意識がいていない。即座に最後のゴーレムの方にゆっくり近づいていっても、全く気付く様子がないので、そのまま後ろから突き刺して爆散させた。

「やっぱり、魔忍スタイルいいんじゃないか？後ろからバツサリでちよつと悪役つばいけど」

「結構、サマになってたじゃない。やっぱりさっきのスタイルの方が正面からやり合うより、海斗にはしっくりくる気がするわね。」

「魔忍いいと思います。ふらふらした感じと、気配を消す感じがいい感じなのです。」

「あのう。別にフラフラしてただけじゃないですよ。それに気配も消した訳ではないというか、そんな技術持ち合わせてないんだけど。」

「すごいな。ナチュラルボーン魔忍じゃないか。羨ましいな、私も侍とかやってみたいな。」

「いや、ナチュラルボーン魔忍って。そもそも侍も今の時代いないですよね。」

まあ、それなりにいい感じで出来たと思うので、魔忍というのはちよつと置いといて、臨機応変に武器とスタイルを変えていければ良い気がする。

このパーティでも問題なく7階層を探索できているので、シルとルシエの3人で来週8階層に挑んで問題ないようであれば、このパーティでも来週末にでも8階層に挑んでみようと思う。

どつせなら悪役っばい魔忍よりも正統派の魔剣士に憧れる。

第78話 進路

俺は今日も7階層に潜っている。メンバーは昨日と同じだ。10時から潜っているのでそろそろお昼の時間だ。

「あと1回戦闘したら、お昼休憩にしようか。」

「「「はい」」」

しばらく探索していると3体のゴーレムに遭遇したので臨戦態勢にはいる。

ちよつと慣れてきたので今までと違うパターンも試してみる。

「あいりさん、俺と一番左のブロンズゴーレムを速攻で倒しましょう。ミクはスナッチで隣のアイアンゴーレムを足止め、ヒカリンは一番右のアイアンゴーレムに『アースウェイブ』を頼む。」

俺はあいりさんと一番左のゴーレムに向かって行って挟撃する。あいりさんが薙刀のリーチを生かして攻撃している間に「ウォータール」を発動してバルザードを魔氷剣化してそのまま横からゴーレムを斬り伏せた。消失を確認すると同時に2人で隣のゴーレムに向かい、スナッチと共闘する。ゴーレムがスナッチに気を取られている間に2人で左右から滅多斬りにする、すぐさま最後のゴーレムに全員で臨み、危なげなく仕留めることができた。

今回は攻撃力の高いメンバーが共同で戦い、そのまま押し切ったが、思ったより上手くいった。数的優位がある時にはかなり有効だろう。

7階層で比較的見通しの良い所を選びお昼休憩をとることにする。
俺の今日の昼ご飯は、コンビニの昆布おにぎりとウインナーパンだ。
他の3人を見るとお弁当を食べているが、それぞれかなり豪華だが、
どうやら母親か誰かに作ってもらっているようだ。
コンビニのおにぎりとパンも非常に美味しいのだが、一人だけ浮い
てる感は拭えない。

「あいらさんって大学生なんですよね。どこの大学にいつてるんで
すか？」

「ああ、言っただけだったか、私は王華学院に行っているんだよ。大
学行きながら探索者続けたいと思っているんだ。」

「王華学院ですか。凄いじゃないですか。あいらさんさすがですね。
」
王華学院は地元にある大学だが、結構偏差値が高く、お金持ちの割
合が高いので有名な大学だった。やっぱり愛理さんはお金持ちの子
女で間違いないらしい。

「え〜。あいらさんも王華学院なんですか？私も来年受験しようと
思ってるんですよ。受かったら先輩ですね。よろしくお願ひしま
す。」

「そうか、ミクも王華学院志望なのか。やっぱりな〜。」

「海斗はどうするの？」

「俺は、大学行きながら探索者したいから進学はしようと思っけど、
まだ志望校は絞れてないんだよな。」

「せっかくだし、海斗も王華学院受けてみたら？」

「俺が王華学院？ちょっと場違い感がすごくないか？」

「多分誰も気がつかない、いえ、気にしないから大丈夫だと思うけど。」

さっき気がつかないと言いましたね。ミクさんしっかり聴こえてしつかり傷つきました……

そんな話をしながら、午後もゴーレムを狩ってから、来週の約束をして解散した。

次の日学校に来てから

真司と隼人に進路を尋ねてみた。

「まあ一応進学希望だけどまだどこ受けるかは決めてないな。」

「俺も、もうちょっと頑張らないと志望校に点足りないんだ。それはそうと海斗くん葛城さんに進路聞いてみたのか？」

「え？聞いてないけど。」

「聞いた方がいいんじゃないかな？」

今まで全く気にしていなかったが、そう言われるとやっぱり気になる。

放課後までチラチラ見ながらタイミングを見計らって、葛城さんが

一人になったところに、すーっと近づいて行って聞いてみた。

「葛城さんちょっといいかな。あの、進路の事なんだけどもう決めてたりする？」

「うん一応決めてるよ。出来たら王華学院に行けたらいいなと考えるんだけどね。」

「え？葛城さんも王華学院志望なんだ」

「私もって事は、もしかして高木くんも王華学院志望なのかな？」

「え、あ、まあ、そう、そうなんだよ。偶然だなあ、俺も王華学院に行ければいいなあと考えてたんだよ。うん、本当に奇遇だなあ。ははは。」

パーティメンバーの事とは言えずに、思わず答えてしまった。

「そうなんだ。じゃあ一緒に通えるといいね。小学校からずっと同じ学校なんてちょっとすごいよね。もしかしたら運命かもしれないね。」

「うん。そうだね、同級生になる運命だね。そうに違いありません」

この前の映画では、運命的な2人も高校卒業を機にお別れしていたが、俺は残念ながら付き合っているわけでもないのだからこれには当てはまらないだろう。

まあ、受かるかどうかもわからないので、運命かどうかは全くわからない。ただ、大学は4年間もあるので葛城さんとキャンパスのどこかで会えるかもしれない。

いやそうなら最高だな。もうこれは頑張って王華学院に合格するしかないな。
あいいりさんにもダンジョンで勉強教えてもらおうかな。

第79話 8階層への準備

俺は今1階層に潜っている。

8階層に潜るために、いつものようにスライム狩りに精を出しているが、予定では月曜、火曜はこのまま1階層でスライム狩りを続けて、水曜日に休みがてら買い出し準備、木曜日に8階層に挑んで土曜日はK-12のパーティで8階層に挑戦する予定だ。

結構スケジュールがタイトなのだが、王華学院の受験に向けて学校で今まで以上に集中して勉強しなければならぬので居眠りなど間違っても出来ない。俺の中で探索と並んでこれだけは失敗できないミッションだ。

いつもの通りスライムを狩り続けるがレベルアップしてもやっぱりスライムには殺虫剤プレスが一番効率が良かったので今日も殺虫剤片手に頑張っている。

スライム職人と化した現在の俺のペースは1時間に13匹を倒せるまでになっており、3時間で39匹を狩ることができたが、せっくなのでもう一匹倒して40匹に到達してから1日を終了した。

火曜日も同じように40匹を狩った時点で帰ることにしたので、2日で80匹に到達し、満足感と共に帰宅した。

やっぱり1階層はスライム天国。正にブルーオーシャンなので誰にも知られたくない。この階層の素晴らしさを理解してる人間が他にいないとは思えないが誰も真似しないのはなぜだろうか？このダンジョン最大の謎だ。

水曜日の放課後俺は、アウトドアショップに来ていた。

8階層の準備の為にどうしてもほしいものがあつたのだ。

それはライフジャケット。8階層は水辺が多く存在しており、完全に水没している箇所もあり、水棲のモンスターが出現する階層なの

だ。

そして、俺は殆ど泳ぐことの出来ない、かなづちなので、水に引き込まれたりしたら致命的と言え、どうしてもライフジャケットが欲しかったのだ。

9980円で無事に購入する事が出来たので、ひとまず安心だ。

以前は少しは泳げたのだが、学校の水泳の時間に、同級生がふざけて水の中から足を引っ張ってきた。泳ぎが上手い人間であれば特に慌てる事もなかったのかもしれないが、当時からそれほど泳ぎが得意ではなかった俺は、パニックを起こし、溺れかけたのだ。それ以来、殆ど泳ぐ事が出来なくなってしまうていた。

正直、8階層の水辺エリアはかなり怖い。出来ることなら避けて通りたいたいが、スルーして9階層に行く手段は無いのでどうしても挑む必要がある

本当は他に欲しいものが1つだけある。それはマジックポーチだ。先週ミクたちとお昼を食べている時に気がついてしまった。彼女達3人共弁当と水筒を持ってきていたのだが

リュックなどを用意している気配がない。よく考えたら戦闘中も俺だけリュックを背負っていたが彼女たちは背負っていなかった気がする。

「ミク、ちょっといいかな。お弁当っていつもどこに入れてるの？」

「それは、もちろんこれよ。」

そうやって見せてくれたのはセカンドバックをぺったんこにしたようなポーチだった。

「これって、もしかしてマジックポーチ？」

「当たり前じゃない。他の2人も使ってるよ。探索中に荷物って重

いじゃない、だから最初にパパが買ってくれたんだ。」

「パパ……」

「私もパパが買ってくれたのです。」

「私も最初に父が買ってくれた。」

「ははは……そうですね。女の子ですもんね。弁当とか、かさばりますよね。」

「そうそう。便利だから海斗も1個買えばいいのに。」

「まあ。そうですね。検討させていただきます。ははは。」

俺もポーチを買ってくれるパパが欲しかった。1個最低1000万円以上するのに、そう簡単に買えるわけないだろ。お嬢様はちょっと俺とは感覚が違うのかもしれない。

ただ、パーティーで俺だけ仲間はずれのような気になるので欲しい。ポーチの機能を考えても、プラスしかないので本当は欲しい。

でも1000万円以上だよ。一般的な高校生が買えるわけないだろ。世の中欲しいのと買えるのは違う。

この時に再認識をさせられて、ちょっとだけ憂鬱になってしまった。明日から遂に8階層に挑むので気持ちを入れ替えて頑張ろうと思う。

第80話 8階層

俺は今学校の教室にいる。

「そついえば隼人と真司は、最近ダンジョンに潜ってるのか？」

「おお、2人で結構潜ってるぞ。この前レベル5になったから、時々3階層にも潜ってるよ。」

「2人だとそれなりにやれてるから面白くなってきたところだ。」

「無理すんなよ。この前みたいになっても誰も助けしてくれないからな。」

「それなんだけどな、この前潜った時に女の子2人のパーティと知り合つて、今度一緒に潜る話になってるんだ。ソロの海斗には縁の無い話で申し訳ないんだけど。」

「そうそう、いきなり声かけられてびっくりしたけど、こんなことあるんだな。これも海斗が鍛えてくれたおかげだよ。海斗様様だな。」

「いや、俺も週末はパーティ組んでるぞ。」

「え？パーティ組んでるのか？いったい誰と組んでるんだよ。俺たちの知ってる奴か？」

「まさか葛城さんか？」

「そんなわけ無いだろ。この前ギルドのイベントがあつて、その時一緒に潜ったメンバーから誘ってもらつてこの前からパーティ登録したんだ。」

「何人パーティ？もちろん男と組んでるんだよな。」

「聞くまでもないよな。男4人だよな。」

「4人パーティで俺以外は女の子だけだ。」

「は？何か幻聴が聞こえた。もう一度聞くぞ、パーティメンバーは全員男だよな。」

「俺も幻聴が聞こえた。ちょっとダンジョンで頑張りすぎたかな。」

「いやだから俺以外は女の子だつて。」

「まじで？それってハーレムパーティじゃないか。いや待て。全員おばさんか、誰にも相手にされてない様な子なんだろう。」

「失礼な奴だよ。ハーレムパーティじゃねーよ。全員同世代だけど、一般的にみんな結構可愛い方だと思うぞ。」

「なんだ！？何が起こつてるんだ。これは夢か、天変地異か。海斗なのに一体・・・それはそうとお前それって、葛城さんは大丈夫なのか？」

「いや絶対やばいな。海斗やばいぞそれ。」

「なんでそこで葛城さんが出てくるんだよ。彼女は探索者じゃないんだからパーティと関係ないだろ。」

「は、やっぱり海斗クオリティは変わらないな。葛城さんにはこの事は内緒にしといたほうがいいと思うぞ。」

「葛城さんとパーティメンバーの話をする事自体が無いけど、何を言いたいのか意味がわからん。」

「まあ上手くやれよ。」

「グッドラック」

相変わらずこの2人の葛城さんに関する話はよくわからない事が多い。

放課後ついに8階層に向かった。

カーボンナノチューブのスーツにライフジャケット着用で準備万端だ。

向かう途中に出会った冒険者達が、一様にこちらを見て、コソコソ何か話しているのちよつと失礼じゃないかと思う。

それにしても、ほかの探索者を見るとライフジャケットを着用している人がいないようだ。おそらくみんな泳ぎが達者なのだと思うが、ここはダンジョン。何かあるかわからないので、万全の体制で臨むべきだと思う。ひよつとすると、みんなちよつと気が緩んで抜けているのかもしれない。水場にライフジャケットは必須だ。

8階層に到着すると、他の階層と違って、水場が多く点在しているせいか、湿度が高く、水辺独特の匂いがする。未知の階層に踏み入れる度を感じるが、なんか見知らぬ外国に来たみたいな感覚になるので、毎回ワクワク感でテンションが上がってくる。もちろん、俺

は外国には、行ったことがない。外国どころか国内旅行も殆ど連れて行ってもらった記憶がない。できることなら一度でいいからハワイに行ってみたい。

今俺はダンジョントラベラーとなっている。ただし死出の旅には出ないように細心の注意を払わなければならない。

「シル、ルシエ、初めての8階層だから慎重に行くぞ。」

「かしこまりました。」 「わかったよ。」

第81話 ワニわにパニック

俺は今8階層に潜っている。

もしもの時のためにライフジャケットを着用している。

「シル、ルシエこの階層は初めてだから、しばらくは慎重に行くぞ。敵が現れたら『鉄壁の乙女』の中から攻撃するからな。絶対無理をするな」

「はい。かしこまりました」 「心配性だな。私たちがいれば大丈夫だって。」

足下の床はずっと濡れており、非常にスリップしやすい。前方を見ると沼地のような地形が現れた。

「ご主人様、手前の方に3体いると思われませう。見えてはいませんが気をつけてくださいね。」

全く、気配も感じられない上に濁った水の中は全く伺い知ることが出来ない。

恐る恐る、水辺との距離を詰めると、突然、ワニのようなモンスターが3体、口を開けた状態で、勢いよく飛び出してきた。

「うおっ。シル『鉄壁の乙女』だ。」

慌てて指示を出した『鉄壁の乙女』に阻まれて、開けた口をばくばくやっているが、かなりの迫力だ。クロコダイルなどは6メートルに迫る大きさを誇る個体もいるそうだが、まさに6メートルぐらい

ありそうだ。

圧倒的な重量感とサイズで、もはや恐竜といっても過言ではない。どうでもいいが、この巨体に魔核銃って効果あるのか？一抹の不安がよぎったがやってみないとわからないのでとにかく頭と胴体めがけて発砲してみた。

「プシュ」 「プシュ」

どうやらゴーレムのようにノーダメージではないようで、バレットを食らった個体は、暴れまくっているが、余計怖い。恐竜と言っか、怪獣のようだ。よく見るとバレットが着弾して埋まっているが貫通はしていない。取り敢えず怖いので

「ルシエ、『破滅の獄炎』を頼む」

「グヴオージュオー」

暴れていたワニ型モンスターは一瞬で消失した。ちよつと冷静になる時間ができたので、考えてみる。

このサイズと重量感なので盾で防いだら、まず間違いなく吹き飛ばされる自信があるので却下。

『ウォーターボール』は効果があるか試してみる価値はあるが、ふつうに考えてバレットより氷が効果的とは考えにくい。

となると、バルザードか魔氷剣だが、この巨体相手に超近接は怖すぎるので必然的に魔氷剣だが、魔氷剣の刃渡りがおおよそ50cmから60cmと言ったところなので、今のままだと最低でも50cmの距離まで近づかないといけない。バルザード単体よりは多少マシだが正直やばい。

怪獣相手に50cm迄近づくと勇氣はない。

どうする。どうすればいい。もうすぐ『鉄壁の乙女』が解けてしま
う。

とにかくちょっとでも遠くから攻撃したい。今のショートソード型
をロングソードにできないだろうか。ちょっと体積的に厳しいかし
れない。思いつかない。

「シル、もう一回『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエも、もう1匹頼む」

ちょっと時間稼ぎをして再度検討する。ロングソードには氷の体積
が足りない。ただ長さはもつと欲しい。あれだ、フェンシングで使
ってるような剣。ちょっと違うかもしれないが、昔見たアニメのヒ
ロインが使っていたレイピア、あれをもうちょっと細くして伸ばし
たらいけるんじゃないだろうか？

「ウォーターボール」

いつもの魔氷剣よりは細長くなった。しかし記憶にあるアニメの剣
のようにスマートではない。
ちよつとイメージが足りなかったようだ。
もう一度

「ウォーターボール」

今度ももう少し伸びで細くなったが、もうちょっといける気がする。

「ウォーターボール」

三度目にしてイメージしていた剣が出現した。刃渡りがおよそ1m
弱ぐらいある。従来型よりもかなり伸びたイメージだ。

細いので流石に斬ったり、受け止めるのには向いてないと思うが突

く分には行けそうだ。

そのまま、残った1匹めがけて、思いっきり刺してみる。細いせいもあるのだろうが殆ど抵抗を感じる事なく刺さったものの、細すぎでそれだけでは致命傷にならない。慌てて爆砕するイメージを重ねる。

「ボフウン」

いつものバルザードと同じ効果を発揮してくれた。

俺は遂にワニ型モンスターを消失させることに成功した。

流石に8階層だけあって魔核は親指の第1関節分ぐらいの大きさがあった。1個2500円といったところだろう。

「ご主人様お腹がすきました。魔核をお願いします。」「連発して3倍お腹が減ったから、魔核6個くれよ。」

いや、発動したのは2回だから3倍はおかしい。しかも6個って計算がおかしいだろ。油断も隙もない。

第82話 汽水域？

俺は今8階層に潜っている。

なんとかワニ型のモンスターを撃退することが出来た上に、魔氷剣レイピア型とでもいうべきものを発現してしまった。

ちよっと、ゲームのヒロインみたいでカッコいい。

ただ、気配の無い水辺から大型のモンスターがいきなり襲いかかってくる上に、硬くて強い。

正直シルとルシェがいないとやばかった。流石は8階層のモンスターだ。

明後日K-12のメンバーで潜るまでに何かしらの対策を取らないとやばいかもしれない。

「シル、水の中のモンスターを探知する方法って何かないかな？」

「いえ、私の場合スキルとかではなく、もともと気配を感じる事が出来るだけなのでちよっとわからないです。」

「そうだよな。サーバントだと誰でも気配を感じることができのかな？」

「おい、私は一切感じないぞ。シルが特別なんじゃないか」

そうだった、こいつは今までも何にも探知したことがなかった。罨にもハマりまくったし……

あまり実りのない会話をしているとシルが、あっちから多数のモンスターがきます。とちよっと奥の川のようになっている箇所を指差

した。

「多数ってどのぐらいだ？」

今までシルが個体数を示さなかった事は初めてだった。

「いっぱいです。こっちに移動してきてます。」

「とにかく敵に備えるぞ。念のため『鉄壁の乙女』を発動しておいてくれ」

そう言っているうちに突然水面が弾けた。

飛び出してきたこれは、巨大な魚？いや羽が生えているのでトビウオか？数十匹の巨大マグロを思わせるトビウオがジャンプしながら突進してくる。

まるで軽トラックの編隊が向かってくるような異様な圧力がある。

第一陣は『鉄壁の乙女』に阻まれて、ドスンと地面に落ちた。

魚らしく落ちたら身動きがあまり取れないのかビチビチ跳ねまくっている。

この巨躯が跳ねまくるだけでかなりの脅威ではある。

第二陣は一陣が阻まれて落下したのを見てなんと空中でUターンをはじめた。

魚型モンスターだが、流石に羽が生えてるだけあって、ある程度空中で自由が効くようだ。

衝撃の光景に圧倒されてしまい呆然として、動きが止まってしまった。

「おい、こいつら倒さなくていいのか？」

ルシエの声にハツとなり指示を出す。

「とりあえずこの地面で跳ねてる奴らを片付けるぞ。シルは『鉄壁の乙女』の効果切れたらもう一回頼むよ。」

指示をすると同時にルシエが『破滅の獄炎』を発動する。

俺は跳ねているトビウオの1匹に狙いを定めて魔核銃を発砲。

「プシュ」

飛び跳ねる魚は思いの外、ぶれて狙いが外れてしまい、頭ではなく胴体部分にあたってしまった。ただワニ型と違い完全に貫通しているので、問題なく効きそうだ。

そのあと再度狙いを定めて目の前で飛び跳ねているトビウオを順番に始末していく。慣れると作業自体は問題なく終了した。

ちょっと一息ついた瞬間、再び水面が爆発して第二陣が突撃してきた。ある意味ワイルドボアの突進よりも怖い。スピードと数と大きさが違う。

「ドンッ！」

次々に障壁にぶつかる衝撃音とともに目の前の床には飛び跳ねるトビウオが多数散乱している。

慌てて再度、魔核銃を発砲して順番に倒すことに成功した。

全部で20匹近くいるだろう。半分は俺が倒したが残りの半分はルシエが倒してくれた。

「なあ、今度はスキル使いすぎたから、いっぱい魔核ちようだい。おまけして10個でいいぞ。」

先ほどと同じで明らかに水増ししている。密集していたのでスキル1発で2匹を倒していたはずだ。

スキル5発で魔核10個。明らかに計算が合わない。

「私もお願ひします。できれば5個いただけると嬉しいです。」

おいおい、シルまで水増ししてきてるじゃないか。スキル2発で魔核5個つて、レベルアップで燃費が悪くなったとしても3個ですむはずだ。

油断も隙もないな。

俺はそれぞれに適切な数を渡しておいた。

ブーブー文句が聞こえてきたが、また今度なと言ってスルーしておいた。

それにしても巨大トビウオの突撃も壮観だった。今までにないパターンと数だった。

それにしても、ワニとトビウオが共生している水場つて、ここは汽水域なのだろうか？

まあモンスターだから俺の常識の範疇にはないのかもしれないな。

第83話 魚群探知機

俺は今、探索者ギルドに来ている。

トビウオの大群を仕留めたあと、今のメンバーなら問題ないが、このままK-12のメンバーで土曜日に潜る事は難しいと感じた為、アドバイスを求めてギルドまで戻ってきたのだ。いつものように日番谷さんのところに並ぶ。

「あの、魔核の買取お願いします。」

そう言つて8階層で取れた魔核を全部カウンターに出した。

「全部で23個ですね。こちらの20個が1個2000円です。残りの3個が1個2500円になります。」

「わかりました。それでお願いします。」

トビウオの大群のおかげで47500円にもなった。結構効率よく儲かったのでテンションが上がる。

「高木様、他のパーティメンバーには分配しなくても大丈夫ですか?」

「え?今日は一人で潜つてたんで大丈夫ですよ?」

「そうでしたか失礼いたしました。見たところ8階層の魔石ですの
でパーティで潜られたとばかり思っていました。お一人で8階層を潜られるとは大丈夫でしたか?」

「ああ、なんとか一人でも行けました。ただ水場からモンスターが突然現れて襲ってきて心臓に悪いので、なんかいい方法があったら聞きたいと思って。」

「そうでしたか。」

「他の探索者の方達はどうしてるんですかね」

「そうですね。いくつか対策がありますが、まず一番有用なのは探知系のスキルですね。ただ購入する場合は非常に高額です。人気のあるスキルなので3000万円はします。」

「3000万円ですか。無理ですね。」

「次に現実的な対処法として多くの探索者の方が使われてるのは魚群探知機ですね。これもいくつかタイプがありまして、紐がついて投げ入れるハンディタイプと、ドローンを飛ばして着水させるタイプに分かれます。ハンディタイプのものは値段は安いのですが、手で投げるには近づかないといけませんので、釣竿を持ち込んでキャストするという手もあります。ドローンタイプは遠隔で飛ばして着水させることができますので、安全面ではこちらをお勧めします。最近では小型化されておりますので持ち運びも苦にならないかと思えます。ハンディタイプは釣り具店にもあると思いますがドローンタイプはダンジョンマーケットで売られていますよ。」

「ちなみに値段はどのくらいしますか？」

「ハンディタイプの投げ込み式が3万円ぐらいで、ドローンタイプは20万円ぐらいしますね。」

「うん。結構しますね。ドローンタイプだと今日の分だけじゃ足りないですね。ありがとうございます。」

正直やすい方に惹かれる。自分一人で潜る用なら、迷う事なくハンデタイプ一択だろう。しかし、今回はパーティメンバーがいる。俺以外はみんな女の子なので、できる限りリスクを減らしておくたい。

ドローンタイプだな。もう明日の探索で稼ぐしかない。今日の分を差し引いて15万円。1日の稼ぎとしてはかなり高額だがやってやる。

次の日俺はハンターと化している。手段を選んでいる余裕はない。

シルに出来るだけ魚群らしきのを探してもらって『鉄壁の乙女』の中から魔核銃を乱射してとにかく魔核を回収する。

途中、魚群ではなく巨大なウーパーパーのようなものが出現し、姿にちよつと油断していると溶解液を吐き出してきて、危うく骨だけにされるところだった。やはり8階層は甘くない。

その他にも角の生えた巨大な魚や、巨大なカワウソの様なモンスターも出たりした。

どちらのモンスターも『鉄壁の乙女』に阻まれて相手にならなかったが、明日、相対したら結構な難敵だろう。

この階層はモンスターの種類が今までで一番多いかもしれない。狩って狩って狩りまくる守銭奴ハンターになりながらも、結構遅くなったので今日は帰ることにする。

明日、朝一で換金して、ドローンを買ってからメンバーと合流することしよう。

きつとみんな喜んでくれるはずだ

第84話ドローンの悲劇

今俺は探索者ギルドに来ている。
昨日の魔核を売却するためだ。

「魔核の売却お願いします。」

魔核は全部で45個あった。金額にして92500円、昨日の分と合わせて13万円。かなり頑張ったが20万円には届かなかったの
で、自分の貯金から7万円を引き出しダンジョンマーケットへ飛行ド
ローン型魚群探知機を購入しに行った。

お店の人に確認すると、一番安いもので199800円だった。2
0万円渡してお釣りがたった200円。

なんとも言えない虚しさを覚えるが、これがあればみんなの安全が
買えると思えば安いものだ。

目的のドローンを手に入れ、俺は待ち合わせ場所に向かった。

「おはよう。」

どうやら買い物物のせいで俺が一番最後だったようだ。

8階層に臨むに当たって、昨日までの経験をレクチャーしておく。

「8階層なんだけど、知ってると思うけど、水辺エリアになってい
て突然ワニやトビウオ型のモンスターが飛び出してくるんだよ。ワ
ニはゴーレムほどじゃないけど硬いのと、トビウオは巨大な奴が集
団で突進してくるから要注意だ。そもそも気配が感じられないから
迂闊に水辺には近づいちゃダメだ。そのほかにもウーパールーパー
みたいなやつは溶解液を吐き出すから要注意だよ。まあ、モンスター

「の探知の為の秘密兵器がこれだ。」

「ドローン？」

「ドローン型の魚群探知機だよ。これで遠くからでもモンスターの居場所がわかるんだ。」

「すごい。海斗なんか準備良すぎない。なんか見てきたような口ぶりなんだけど。」

「昨日と一昨日下見がてら潜ってきたんだよ。」

「海斗って平日はソロなんだよね。一人で8階層に潜ったの？」

「あ、ああ。もちろんじゃないか。普段の俺はロンリー探索者だからね。ははは」

「ふん。なんか隠してない？」

「い、いや。な、何も無いって。嫌だなー。ははは。」

「まあいいけど。それじゃあ早速向かいますよ。ところで海斗、その格好は何？」

「何ってカーボンナノチューブのスーツにライフジャケットじゃないか。」

「それはわかるんだけど8階層ってダイビングスポットでもあるの？」

「そんなものあるわけないだろ。何言ってるんだよ。」

「なんかその格好つてスキューバダイビングをしに行くようにしか見えないんだけど、本当にそれで行くの？」

「なんか失礼な言い方だな。すでに昨日も一昨日もこの格好で探索済みだけど」

「一人でその格好で潜ったんだ。よく大丈夫だったね。」

「全然大丈夫だったけど」

ミクがなんか失礼な事を言ってくるがこの格好の何が問題だというのだろう。水辺の戦闘には最適の格好だと思うのだがミクのセンスを疑ってしまいそうになる。

「それじゃあ早速、8階層に行こうと思うけど、ミク、よかつたらこれを使ってみて。俺が前に使ってたやつだけどスナッチが離れた時に自衛にも使えるし、うまく使えば十分モンスターも倒せるから。」

俺はそう言つてミクに俺が使っていたクロスボウを渡した。スナッチが戦っている間のミクが完全にフリーになっていたのが気になっていたので戦力強化の意味でもボウガンは有用だと思ったのだ。

その後、遂にK-12のメンバーで挑戦する事となった。昨日迄とは違う緊張感がある。とにかく安全を第一に考えながらやろう。8階層の探索を始めて直ぐに水辺のエリアに出た。

「よし、ここからドローンを飛ばすから、みんなも離れて待ってて

よ。」

俺は買ったばかりのドローンをセットしてコントローラーで水辺まで飛ばして着水させた。すぐさまスマホの画面で水中の様子を見る。どうやら近くに大きいのが2体いるのが確認できる。さすがは199800円払っただけのことはある。

「みんな、水中に2体いるから注意してくれ」

そう言っただけで臨戦態勢を促した瞬間、水面が爆発してワニ型モンスターが、なんとドローンをくわえてそのまま水中に戻って行ってしまった。

「え！？俺のドローンが……」

俺のドローンを餌かなにかと間違えたのだろうか、くわえて消えてしまった……

俺が199800円出して購入したドローンが一瞬にして消え去ってしまった。

処女航海でそのまま帰らぬ人になってしまった。まるであの有名な豪華客船のようではないか。

「ノー！！カムバック！」

口から魂の叫びが漏れてしまった。

こんなことってあるのか？あつていいの？漫画とかではありそうなオチだが、実際にやられると洒落にならない。

俺は戦闘の前に生きる屍と化してしまった。

第85話 ドローンの恨み

俺は今8階層で生きる屍と化している。

「ねえ、海斗、しっかりして。モンスター来ちゃうわよ。戻ってきて。」

何か遠くでミクの声が聞こえる気がする。そういえば俺は今何をしているんだろうか。もうこのまま貝になりたい。

「しっかりしなさい。」

『バツチーン!』

あいりさんの声と共に右頬にすごい衝撃と痛みが走った。

え？今俺、ほっぺた叩かれた？

突然現世に呼び戻されて覚醒したものの、今度は、女性にほっぺたを叩かれた事にシヨックと動揺を隠せなかった。

「ドローンは残念だったが、今はモンスターに備えるのが先だ。しっかりしろ。」

「あ、ああ。そうですね。モンスターね。モンスター……」

ちくしょー！。絶対に許せない。あのワニ野郎、絶対にミンチにしてやる。俺のドローン返せ！

失われたドローンの最初で最後のお仕事のお陰で敵が2体なのはわかってる。

「みんな。さっきのワニ野郎は、俺が仕留めるから、3人で残り1体の対応を頼む。水際から離れて、上がってきたら『アースウェイブ』で足止めして、そのあとは距離を保ちながら攻撃してくれ。」

指示を出してから、俺が少し水辺に近づくと、ワニ型モンスターが2体飛びかかってきた。左側の個体を見ると、開けた口の中のギザギザの歯にドローンの残骸が引っかかっていた。

それを見た瞬間、俺の中で何かが切れた。

「うおおー。ふざけんなこのワニ野郎。俺の努力と時間と金を返せ。」

感情が爆発して、冷静な判断をできなくなってしまった所為で、正面から突っ込んで行った。

「ウォーターボール」

怒りは恐怖をも凌駕するらしい。

魔氷剣レイピア型を発動させて、そのままワニ型に攻撃を加える。巨大な顎門を結構なスピードでこちらに向けて攻撃して来ようとするが、今の俺には何も恐れるものはない。

素早く避けて再度攻撃を加えるが、避けながらの為、刺突が浅い。再度、体勢を立て直して攻撃を図る。

普段なら恐怖の対象であるはずのギザギザの牙も、ドローンの残骸を見ると怒りの対象でしかない。

「くっそー。199800円。バカにしゃがって。」

怒りを乗せてレイピアをワニ型の頭に突き刺す。今度は手ごたえ十

分だったが、怨念を込めて吹き飛ばすと念じた。

「ドバァン！」

俺の怒りに呼応したのかいつもよりも派手に爆散したような気がする。

それを見て少しだけ気が収まったのですぐにもう1匹の方を向くと、「アースウェイブ」にハマったワニ型が、あいりさんとスナッチに切り刻まれていた。

スナッチの『かまいたち』もゴーレムには効果が無かったが、ワニ型には十分な効果を発揮しているようだ。

しばらく待っているともう一体のワニ型モンスターも消失した。戦闘が終わると、ドローンの仇は打てたものの、虚無感が再度訪れた。

「海斗、しっかりしろ。8階層はこれからだぞ。」

「バチーン」

今度は左頬に鋭い痛みが走った。

またほつぺたを叩かれた。痛い。

「でも、ドローンが無いとこれからの探索が難しいんですよ。今みたいなのが突然現れるんで危ないんですよ。」

「何か他にいい手はないのか？」

「他に良い手ですか。うん。ミク、スナッチって敵の探知とかできないのか？サーバントにはそういう能力がある奴もいるみたいだぞ。」

「え〜。そんなのやらせたことがないからわからないよ。」

「スナッチと会話はできるのか？」

「会話は無理だけど、何となく伝えたい事はわかるしこっちの指示は理解してくれてる感じ」

「じゃあスナッチに敵の探知をしてもらってみてくれ」

「じゃあ、頼んでみるね」

「スナッチ、敵がいたら教えてくれるかな。お願いね。」

そう言いながら再度探索を始めたが程なく別の水辺エリアに出たが、スナッチがミクに

「キューキュー」

と鳴き声を上げている。

「多分、敵がいるんだと思う。みんな注意して。」

水辺から距離をとって注視していると、ウーパールーパー型が2匹飛び出してきた。

どうやら本当にスナッチが探知したようだ。

これなら最初からドローンはいらなかったんじゃないだろうか。まあ詳しい数までは分からなそうだから健在であれば意味はあったかもしれないが。

みんなのことを考えて張り切って購入したのにちょっと虚しい。

第86話 ウーパーパーパーは怖くない

俺は今8階層でウーパーパーパーと対峙している。

ウーパーパーパーを初めて見たのは多分小学生の時にペットショップに連れて行ってもらった時だと思う。

特異な風貌に興味を惹かれた記憶がある。いわゆるキモかわいい感じで親に買って欲しいとせがんだが、あえなく却下されたおぼえがある。

しかし、このウーパーパーパー型モンスター、風貌はまるつきりウーパーパーパーなのだがサイズが3メートル近くある。正直このサイズのウーパーパーパーはキモかわいいを大きく逸脱して、単純に気持ち悪い。

近づくると生理的嫌悪感を覚えてしまう。

しかもこいつは溶解液を口から吐き出すので、ノーダメージで倒す必要がある。

「こいつは、最初に話したように溶解液を吐くから気をつけて。スナッチと俺で遠距離攻撃だ。ミクも出来たら攻撃に参加してみて。」

ヒカリンは後方から支援、あいりさんは、いつでも出れるように待機をお願いします。」

そう指示を出して。ウーパーパーパー型と距離を測りながら攻撃に移ろうとした瞬間

「トスッ」

「え?」

ターゲットのウーパールーパー型にボウガンの矢が刺さっていた。唾然としていると更に矢が刺さってウーパールーパー型は消失してしまっただ。

もう一体もスナッチの『かまいたち』に切り刻まれてあつという間に消失してしまっただ。

「きゃー、ミクさんすごいです。あつという間に倒しちゃいましたね。ボウガンかっこよかったです。使ったことあつたのですか？」

「ううん。初めてだけど、狙って撃つたらなんか当たっちゃっただ。」

「すごいですね。私もボウガン使ってみようかな。」

初めてでこの感じ？

戦力になって欲しくてボウガンを渡したけど、いきなり戦力になってくれて嬉しんだけど、

ちよつと複雑だ。俺の出る幕がなかった。

なんかミクすごいな。

「まあ、うまく倒せてよかった。今後もウーパールーパー型は今の要領で倒していこう。」

それからしばらく探索していると今度もスナッチが

「キューキュー」

と鳴き始めた。どうやら本当に敵を感知できているようだ。

4人で水面を凝視して集中していると今度もウーパールーパー型が3体現れた。

「みんな、さつきよりも数が多いから慎重に行こう。とにかく距離を保って遠距離攻撃で行こう。」

そう言うって臨戦態勢に入る。今度は流石に俺の出番もあるだろうと思ひ慎重に一番左の個体に魔核銃で狙いを定める。

「ドシャーン」

「え？」

目の前のウーパールーパー型に突然炎雷が炸裂して、一瞬で消失してしまった。

一体何が起こったのか理解できずに、啞然として振り返るとヒカリンが『ファイアボルト』を発動したようだった。

こちらもスナッチの『かまいたち』同様ゴーレムには通じなかったが、ウーパールーパー型には十分な威力を発揮していた。

ヒカリンの『アースウェイブ』が有用すぎて、『ファイアボルト』の存在を完全に忘れてしまっていた。

突然の出来事にちよつと動揺してしまつたが、気を取り直して残りの2体に向かおうとするが、既に戦闘は終わりかけていた。

先程の戦闘と同じように、スナッチが『かまいたち』で切り刻み、ミクがピストルボウガンでウーパールーパーの頭を正確に射抜いており、見ている間に2体とも消失してしまつた。

また今回も俺の出番が一切なかった。

7階層のゴーレムの時は相性の問題でそれほど目立ってなかったがうちのパーティメンバーってひよつとして結構強いんじゃないだろうか？

強いと言うか、なんか俺と違って才気を感じる。

まだパーティを組んで日は浅いが、ちよつとパーティでの立ち位置に不安を覚えてしまう。

これからもパーティに捨てられないように頑張らなくてはいけない。

第86話 ウーパールーパーは怖くない(後書き)

第87話 8階層の攻防

俺は今8階層を進んでいる。

「みんな、ウーパールーパー型は問題なく倒せそうだから1番気をつけないといけないのは、魚群だと思う。俺が遭遇したのはトビウオ型だったけど他の魚もいるかもしれない。うちのパーティには強力な盾役がいるわけじゃないから、大群で来られると押し切られかねない。だから戦略を決めておこうと思う。正直、こっちまで到達されたらやられると思う。なので、ある程度距離をとって俺とミカとスナッチ、ヒカリンの一斉掃射で弾幕を張るしかないと思う。撃ち漏らして近づく敵はあいりさんが薙刀で叩き落して再度撃墜するしかない。地面に落としてしまえばあとはどうにでもなるから。」

「なんかパーティ戦って感じがするよね。ちょっとわくわくしちゃうね。」

「いや、そんないいもんじゃないんだけど。あの大軍を目にしたら圧倒されると思うよ。」

「私も頑張るのです。」

「私は出番が無い方がいいようだな」

みんなで打ち合わせを終了して探索を続けていると

「キュー、キュー」

スナッチが鳴き始めた。

全員が一斉に水面を注視していると炸裂音と共にワニ型とビーバー型？のモンスターが飛び出てきた。

ワニ型を見ると再び怒りがこみ上げてきた。ドローンを食べた個体とは別の個体だとはわかってはいるが、見るだけでムカムカする。ワニ型は俺の敵だと魂に深く刻み込まれたらしい。

「ワニ型は俺がやるから、ビーバー型をみんなで頼む。」

「私も手伝おう」

「あ、ああ、そうですね。お願いします。」

結局俺と愛理さんでワニ型を相手にすることになった。

あいりさんが薙刀のリーチを生かして正面から牽制しながら距離を保つ。

俺はその間に魔核銃でワニ型の目を狙う。ちょっと難易度が高いが目を潰せば楽勝だろう。

つづらな瞳に一撃では命中せず、二発目で当てることができた。当たった瞬間にあばれまくっているのが効果抜群だったようだ。

潰れた目の死角側から後ろに回り込み尻尾の動きに気をつけながらバルザードを背側部に差し込んで消滅に成功した。

隣を見るともう戦闘は終了していた。まあ1体にあの2人と1匹が総がかりになっただら勝負は一瞬でつくだろうと思う。

「今日は初日だし次の戦闘で帰ろうと思うんだけどいいかな。」

「……はい……」

その後帰りながら探索を続けていると

「ミュー、ミュー、ミュー、ミュー」

スナッチがさつきまでと明らかに様子が違う。

「みんな注意してくれ、魚群かもしれない。横一列に並んでくれ。撃てなくなったら後ろに下がって。」

魚群の可能性が高いと感じ指示を出す、このメンバーで初めて対応するので不安がないといえば嘘になる。

いざとなればシル達を召喚する必要があるかもしれない。

覚悟を決めて敵の出現を待つ。

水面が一斉に爆発して魚群が迫ってくるがトビウオではない。これはボラか？トビウオよりも大きく羽は生えていないがすごい勢いで飛んでくる。

驚くまもなく魔核銃を撃ち始めると同時に他のメンバーも照射を始める。

とにかく撃ちまくる。十発はすぐに撃ち終わり「ウォーターボール」を連発する。

ただ俺の「ウォーターボール」は着弾まで拘束がかかるのでどうしても連射速度は劣ってしまう。

ちよつと気持ちは焦るが平静を装い手にはバルザードを構える。

横目で周囲を確認するとミクは既にボウガンを撃ち切って下がっている。

ヒカリンとスナッチはスキルと魔法を連発している。

特にスナッチは見えない風の刃を間髪入れずに連射しているようで風の刃の弾幕が張られているのか、ボラが近づいて来れる気配は一切ない。

俺もウォーターボールを五発放ったところで、全てのボラ型モンスターを消失もしくは地面に叩き落とすことに成功した。

魔核銃のマガジンを装填し直し、あいりさんと一緒にビチビチ跳ねているボラ型モンスターを始末していった。しかし、巨大マグロを超える巨大ボラの群れは圧巻だったが、思っていたよりもずっとスムーズに勝つことができた。

やはりこのパーティの中距離攻撃は秀逸だと思う。

今回の反省は、迫り来るボラにびびって、焦ってしまいマガジンの再装填ではなく、『ウォーターボール』を選択してしまった事だろう。連射速度が落ちた上に決して多くない俺のMPが劇減りしてしまった。

今度はもっと落ち着いて対応しよう。

第88話 日曜日の攻防

俺は今8階層で戦っている。

シルとルシェと潜ってた時には、こんなモンスターには出会わなかった。なので対処が完全に後手に回ってしまった。一番前にいた俺はもろに攻撃を食らってしまった。多分胸骨を骨折してしまった。呼吸が苦しく、まともに動けそうにないので、すぐに低級ポーションを使いリカバリーした。

こいつは多分鉄砲魚の類ではないだろうか？未だに姿が見えないのではっきりした事は分からないが、スナッチの鳴き声で警戒していたにもかかわらず、突然、凄い勢いとスピードで水が飛んできて俺にヒットした。強烈な痛みと衝撃を受け、吹き飛ばされてしまった。せいで呼吸ができなくなってしまった。

若干パニックになりながらも常備していた低級ポーションを使用して今に至る。

玉ではないがまさにウォーターボールを食らったらこんな感じだろうか。

「海斗、本当に大丈夫？休んだほうがいいんじゃないの？」

「いや大丈夫だ、それよりもあの水鉄砲に気をつけて極力後ろに下がって」

見ているとまた水の塊がこちらに向かって飛んできたが、今度は横っ飛びに避けた。

しかし相手は水の中から攻撃してくるだけで、姿を現わす気配は一切ない。

こうなったらあれしかない。

「みんな撤退しよう。前を向いた状態で警戒しながら後退して離脱するよ。」

「え？逃げるのか。」

「はい。悔しいかもしれませんがお願いします。」

「わかった。指示に従おう」

俺たちはそのまま戦線を離脱した。

「すいませんでした。今回の敵を想定していませんでした。あの場では対処法を思いつけなかったので、とにかく撤退することにしました。」

「いや。正しい判断だったと思う。私も対処法を思いつけなかったが、撤退を思いつけなかった。むしろあの場で撤退できる海斗を尊敬するよ。」

「私も海斗が攻撃を受けて危ないと思ったら、自分でポジション使って立て直して、冷静に撤退できるってすごいと思っただわ」

「私もです。みんな無事でよかったです」

「そう言ってもらえると助かるよ。今後もあんな感じの敵が出るかもしれないから、水中からの攻撃も最大限注意して行こう。対処法も今のところ思いつかないから、とにかく出会ったら今後も撤退を一番に考えよう。」

ちよっと格好悪いが、自分で対処できない敵を無責任に他の3人に

任せるわけにはいかない。安全が最優先なのだけは譲れない。もしかしたら『ウォーターボール』による氷槍の攻撃であれば水中の敵にも有効かもしれないが、場所が特定できない状態で放つても致命傷を負わせることは難しいだろう。

「ちょっと頼り無いところがあると思っていたが、ああいう判断がちゃんとできるとは意外だったよ」

「そうですね。私も撤退って思いつかなかったんで、撤退って言われた時に戸惑ったんですけど、なかなか女の子の前で撤退って言えないですね。逆にちょっと評価上がりました。」

「前から忍者っぽいと思ってたけど、行動も忍者っぽいのです。S HINOBIです。」

女の子3人がコソコソ何かを話し合っている。

おそらく撤退した事を非難しているのだろう。確かに男としては格好悪いが、こればかりはどうしようもない。パーティーメンバーから追放されないよう頑張るしかない。

「それはそうと来週も土曜日に待ち合わせでいいですか？」

「私、来週は土曜日用事あるから無理。」

「すまない、私も大学で用があるんだ。」

「そうですか2人が休みだと厳しいので、来週は日曜日に集合ということにしましょう。」

ミクも女の子だしプライベートの用もあるのだろうし、仕方がない

ので来週の土曜日はシルとルシエで潜ろうかな。
俺はこの時、あいりさんとミクと一緒に休みを取ることには何の疑問も持たなかった。

第89話 オープンキャンパス

俺は今学校に来ている。

なぜか葛城さんに呼び止められた。

「高木くん今週末の王華学院のオープンキャンパス行くでしょ？待ち合わせて一緒に行かない？」

「え？オープンキャンパス？」

「もしかして今週あるの知らなかった？学生だったら誰でもOKだから行ってみようよ」

「い、いや。もちろん行こうと思ってたよ。うんオープンキャンパスだよねオープン。」

「じゃあ駅前に9時でいいかな？」

「もちろんいいです。」

「あー。俺らも一緒に行ってもいいかな、参考の為にオープンキャンパスに行ってみたいんだけど」

突然後ろから真司と隼人が声をかけてきた。

「もちろんいいよ。みんなで一緒に行こうよ。」

なぜかこのやり取りで4人で王華学院のオープンキャンパスに参加

することになった。

もちろんオープンキャンパスの事は知らなかったので声をかけてもらって良かったが、何故か隼人と真司もついてくるらしい。

「おい、なんでお前ら2人もついてくるんだよ。王華学院志望じゃないだろ。」

「いや、まだ一度もオープンキャンパスに行ったことがないからちよつと興味があつてな。こういうのって1人とかだと行きづらくなる。もしかしたら出会いもあるかもしれないし。まあ海斗の邪魔はしないからよろしく頼むよ。」

放課後はいつも通りシルとルシエと3人で1階層に潜ってスライム狩りに励んでいたが、遂に土曜日を迎えオープンキャンパスに行くことになった

私服でいいとの事だったので葛城さんに選んでもらった服を着て駅に向かう。

駅には3人とも既に着いており、俺が一番最後だった。挨拶を済ませてみんなで電車に乗り込む。

「大学ってどんなところなのか楽しみだよね。私オープンキャンパスって初めてなんだよ。」

「「俺もです」「」

「ところで葛城さんは、王華学院志望なんですか？」

「うんそうだよ。高木くんも王華学院志望だよね」

「はい。もちろんです。」

「ふうん。そうだったんだ。初耳だよな隼人。」

「ああ初耳だな真司。海斗が王華学院ね。ふうん」

「俺は前から王華学院一本だぞ。知らなかったのか？」

そんな話をしているうちに、ようやく王華学院に到着した。

「おおつ。ここがハイソサイエティの集まる王華学院か。門からしてちよつと違うな」

「おおつ。なんか外国の城みたいな門だな。これ見ただけでテンション上がるな」

隼人と真司は、はじめてのオープンキャンパスにちよつと舞い上がり気味だ。

受付で記帳しようとして並んでいると受け付け係の1人が

「海斗じゃないか？こんなところで会うとは奇遇だな、もしかしてうちの学院志望だったのか？」

と声をかけてきた。

「ああ、あいりさん。用事ってオープンキャンパスの事でしたか。俺が王華学院志望なの言ってますませんでしたっけ」

「ああ、初耳だな。ところでそちらの可愛い子は彼女さんか？」

「いえ、違いますよ。クラスメイトですよ。いやだな彼女だなんてあるわけないじゃないですか」

「そうなのか。まあ楽しんで行ってくれ。入学してきたら後輩だなよろしくな。」

「はい。こちらこそよろしくお願いします。」

そう言って記帳を済ませて中に入っていくと

「高木くん、今の綺麗な人とはどういった知り合いなのかな？」

「え？いやダンジョンで・・・」

そこまで答えた瞬間になぜか周囲の気温が急激に下がったような錯覚を覚えて言葉に詰まってしまった。

一体どうした？何が起こった？

「いや〜。実は俺らもあの人のことちょっと知ってるんだよね。海斗と3人で潜った時にちょっと助けてもらったんだよね、真司」

「そうそう。あいりさん。あいりさんだよな。助けてもらったんだよ、なあ海斗」

正直2人が何を言っているのか理解出来なかったが、普段俺の中の奥深くに眠りこけている本能が警鐘を鳴らしているので、訳も分からず

「ああ、そうそう。3人の時に助けてもらったんだよ。3人の恩人なんだよ。」

「そつか。恩人だったんだね。高木くんのことを助けてくれたんだね。それじゃあ私も感謝しないといけないね。」

その瞬間気温が元に戻った気がした。

「一体今のはなんだったんだ？天変地異の前触れか？誰かが特殊能力でも使ったのか？」

しかしなぜ、俺たち3人を助けてもらったら、葛城さんが感謝しないといけないのだろう？

やはり、天使な葛城さんはクラスメイトの恩人にも感謝の気持ちをお忘れないのだろう。

葛城さんの天使っぷりを再確認してしまった。

第90話 オープンキャンパスクライシス

俺は今王華学院のトイレの中にいる。

隼人と真司に誘われて一緒に来ている。

「おい海斗、さっきのつて、もしかしてパーティ組んだって言うってた女の人か？」

「ああそうだけど。それがどうした？」

「どうしたじゃないだろ。あんな美人の人とパーティか。正直羨ましいけど絶対まずいだろ。」

「まずいつてなにが？」

「おいおい、まじかよ。俺らが庇ってやらなかったらさっきの大変なことになってたぞ。」

「俺も修羅場かと思ってとっさに合わせちゃったけどあれはちよつとやばかったな。」

「いや、だから何がだよ。」

「葛城さんに決まってるだろ。お前正気か？あれがわからないのか？」

「葛城さん？まあなんかおかしかったような気はするけど、気のせ

いだろ。」

「海斗、もう死んだ方がいいぞ。その方が世のためになるから。」

「どうやら本気で言ってるみたいだからアドバイスしとくけど絶対に葛城さんにはあの人とパーティー組んでは内緒にしるよ。お前の友達として最後のアドバイスだ。」

「まあよくわからないけど、隼人がそこまで言うなら内緒にしとくよ。」

トイレでの会話を終え、葛城さんと合流してキャンパス内を見て回る。

高校とは違うスケール感と大人感にちよつと圧倒されながらも、将来葛城さんと通っている姿を妄想して、ニヤついてしまった。

今日は学生食堂も解放されており、4人でお昼を取ることにした。

俺のランチは唐揚げ定食で430円だ。さすがは学食、安い上にうまい。

4人で学食の話やキャンパスの話をしていると

「あれ！？海斗じゃない？なんでここにいるのよ」

「ああ、ミクじゃないか。そうか用があるってオープンキャンパスのことだったのか。そういえば言ってなかったっけ、俺、王華学院志望してるんだよ。」

「え！？そうなの。じゃあ受かったら同じ学校だね。」

「まあそうなるな。まあ受かったらよろしくお願いします。」

「それはそうと隣の可愛い子はまさか彼女さんじゃないよね」

「え？違うけど。ただのクラスメイトです。」

「ふ〜ん。そうなんだ。じゃあ私友達待たせてるからまたね。」

「ああ、じゃあね」

「高木くん。さっきの可愛い人は誰ですか？」

「ああミクはダンジョン……」

そこまで言うと朝受付で感じた以上の周辺温度の低下を感知して俺の生存本能が口を閉じさせた。

「ああ葛城さん、彼女は俺と隼人でパーティを組もうかって話してる相手なんだよ。海斗とダンジョンで知り合いだったみたいで紹介されたんだよ。なあ隼人」

「ああ、そうそうミクね。可愛いから俺と真司でちょっと取り合いになってて、海斗にも相談してたところなんだよ、なあ海斗」

「え、ああ、そう、そうだよ。俺が2人に紹介したんだよ。まだうまくパーティ組めるかはわからないけど」

「ふ〜ん。そうなんだ。朝の人もだし探索者の人って綺麗な女の人多いの？」

「いやほとんどいないよな隼人。」

「うんほとんど見た事ない。あの2人が特別なだけだよ。殆ど男しかいないしなあ海斗」

「そうだな。探索者は殆ど男だけどたまには可愛い子もいるけどなあ」

なぜかこの瞬間周りにブリザードの幻影を見た気がした。

「いやほんと殆どガチムチ系の男ばかりだから、なあ隼人」

「ああ、もうそれは男の職場って感じだよなあ海斗」

「そうなのかな高木くん。」

「まあそれはそんな感じだね。結構危ないし。男性比率はすごく高いよ。」

「高木くんはさっきの人達のどっちがタイプなのかな？」

「いやいや、何言ってるのどっちもそんなの考えたこともないよ。俺のタイプは……」

「高木くんのタイプは？」

「うっ。それは近々、葛城さんにお伝えできればと」

「そうなんだ。」

そう言った瞬間温度が平温に戻った。

一体何が起こっているんだ？やはり天変地異の前触れなのか？何や

ら幻影まで見えた気がするし俺はおかしくなったのだろうか？

「そう言えばさっきの2人とも高木くんのこと海斗って呼んでたよね。高木くんも2人の事名前前で呼んでたよね。探索者の人ってみんなそうなのかな。」

「まあ、名前で呼びあつのがスタンダードなんだよ、なあ隼人」

「おう、俺たちも名前で呼びあつてるよな海斗」

「うん、まあそうかもしれないね」

「そうなんだね。じゃあ私も海斗って呼んでもいいかな。小さい時はそう呼んでたでしょ？私のことも昔みたいに春香でいいからね。」

「名前で呼ぶんですか？は、はるかちゃん。」

「海斗、はるかでいいよ」

「は、は、はるか」

「うん。いい感じ。これから学校でもこれで行こうね。」

なぜか先ほどと打って変わって、太陽が降り注ぐような暖かさを感じる。葛城さんとなぜか名前で呼び合うようになってしまったが、葛城さんが満面の笑みを浮かべているのでどうでもよくなってしまった。

そのあと真司と隼人にまたトイレに誘われた。

「おい、海斗、まさかと思うけどあのミクって可愛い子パーティーメ

ンバーの一人じゃないよな。」

「え？そうだけど。」

「ひとつ聞くが、もしかしてもう一人のメンバーも可愛いのか？」

「ああヒカリンか。俺はアイドルっぽくて一番可愛いと思うけどな」

「海斗、お前このやばさに気づいてるのか？」

「いや何の話だよ？」

「絶対にミクちゃんともパーティー組んでる事、葛城さんには言うなよ。もう一人の子のことも絶対に言うな」

「言わない方がいいのかな。」

「当たり前だろ。なあ真司、さっき俺ブリザードの幻影が見えたんだけど。」

「ああ、俺もはつきり見えた。俺の第7感が覚醒した。海斗ほんとうに一回死んだ方がいいぞ。」

「何言ってるんだよ。失礼なやつだな」

とりあえず、2人がどうしても黙っておけというので葛城さん、いや春香にはパーティーメンバーの事は当分伏せておくことにした。

第91話 カ二天国

俺は今8階層に潜っている。

朝からメンバーが俺を放っておいてコソコソやっている。

「あいりさん、昨日のオープンキャンパスで私海斗とあったんです。しかも聞いたら王華学院受験するそうなんです。」

「ああ私も受け付けであったんだが、それを聞いてびっくりしたよ。」

「あと、友達と来てたっばいんですけど、そのうちの1人がめっちゃくちゃ可愛い女の子だったんですよ。隣に座ってたんでありえないとは思ってたんですけど、彼女が聞いてみたんですけど、ただのクラスメイトだって言うんですよ。どう思います?」

「ああ、その子なら私も見たよ。可愛かったから、私もないとは思いながらも彼女が聞いてみたんだ。そしたら同じく、クラスメイトだと言っていたよ。」

「え、海斗さん女連れだったんですか?ひょっとして結構モテるんですかね?」

「最初はモテないだろうと思ってたけど、一緒に潜っていると結構周りに気を遣えるし優しいし、モテてもおかしくないかなとは思えてきたんだけど。」

「そうだな。パーティ組む前は、普通のモテない男の子に見えたんだが、パーティ組むと人が変わったように指示を出したり、自分から周りを庇うそぶりが見て取れて、中身は結構、偏差値高いのかとは思うが。」

「うん。そうですね。最初は気持ち悪くはない感じでしたが、だんだんまともに見えてきたんですよね。」

「やっぱり3人共、結構評価高いから、モテるのかもしれませんが、あんな感じですけど。」

「まあ、ちょっと怪しいからそれとなく観察を続けよう。」

「はい。わかったのです。」

何かいつもと違う雰囲気を感じてしまう。なんかシルとルシェのソコソ話しに共通する妙な圧力を感じる。こういう時はスルーするに限る。

「今日も集中していきますよ。まだまだ未知のモンスターも出るかもしれませんからね。」

「海斗さん彼女いるんですか？」

「へっ？いやもちろんいないけど。突然なに？」

「いえ、いないならいいのです。」

脈絡も無く突然の質問にびっくりしたが、なんだったんだろうか、ダンジョンの集中しようといったばかりなのに。

「キューキュー」

スナッチが鳴き始めたので臨戦態勢に入る。

水面に集中しているとそこにはカニが3匹出現した。多分ガザミの仲間だろう。ただ大きさは、カニ専門店の動く看板ぐらいはある。ロストせずに食する事が出来ないものかと一瞬考えてしまったがこればかりは仕方がない。

おそらくこのサイズのカニの甲羅なのでゴーレム並みの硬さがあるんじゃないだろうか？

「まず俺が魔核銃で撃ってみるから、もし通じないようだったらスナッチとミクは牽制に回って。ヒカリンは『アースウェイブ』で足止めと、もしかしたらカニだから『ファイアボルト』が有効かもしれない。一応試してみて。あいりさんと俺で倒しますよ。」

ああ、この階層に来てからあまり活躍の場がなかったから丁度いい。

俺は狙いを定めて魔核銃を発砲するが、予想以上に殻は固く傷一つ入れることはできなかった。

この瞬間作戦は決まった。

俺とあいりさんが前に出る。

カニに向かっていこうとした瞬間、カニがすごいスピードで横歩きを始めた。

「速っ！」

カニってこんなに高速移動できるもんなのか？巨大なカニが横方向

に、猛スピードの車並みの速度で移動している。普段、スーパーで売られているカニしか見たことがなかったので、予想外の事になり衝撃を受けてしまった。

カニってすごいな。

妙な感動を覚えながらも倒すことに集中する。

このスピードでは、拘束による停止は命取りになりかねないので、距離のあるうちに早々に魔氷剣を発動する。

「ウォーターボール」

移動方向は単純な横方向なのでそれを見極めて斬撃を加えるしかない。

横を見ると、あいりさんはすり足でどんどんカニとの距離を詰めていく。もちろんカニの方がスピードは全然上なのだが何故か距離が詰まって行く。あれが武道というものなのだろうか。

ヒカリンはカニの高速移動を見て『アースウェイブ』は諦めて『フアイアボルト』で焼きガニにする事を選択したように狙いを定めて魔法を発動している。

一番危ないのは俺だなと思いつながら1体のカニに狙いを定める。走行方向を確認し事前に進路に割って入ろうとするが、凄い速さと大型の爪のハサミに怯んでしまい、腰が引けた形で避けてしまった。再度気を取り直して、さっきの反省を生かして進路ではなく進路の少し脇に構えた。再び移動してきたカニに側面から魔氷剣を突き立てそのまま、カニの移動に任せて切断してしまう。

今度は無事に消失させることが出来た。そのまま横を見るとあいりさんはいつものように雑刀でカニの足をぶった斬って、動けなくした上で滅多斬りにしていた。

ヒカリンも一発では仕留めることができなかったようだ。何発か発動して、焼きガニを作り上げていた。

残念ながら3匹とも口ストしてしまい、カニの味を楽しむことは出

来
な
か
っ
た
。

第91話 力二天国（後書き）

第92話 マグロ三味（前書き）

第92話 マグロ三昧

俺は今魚と戦っている。

カニ退治を終え探索を再開したが、カニを食べる事が出来なかったのを嘆く間も無く

「キューキューキューキューキュー」

スナッチが今までに無く反応している。

「この反応は普通じゃない。もしかしたら、魚群かもしれない。前回と同じで行くからとにかく弾幕頼むよ。」

全員で距離を取り横並びに並んでモンスターの出現に備える。

突然、黒い核弾頭の様な物体が猛スピードで近づいてきたが、想定外のスピードに圧倒されながらも魔核銃を連射する。

巨大な核弾頭を思わせる黒い物体、これは寿司ネタの王様、巨大化したクロマグロではないだろうか。

以前TVで見た漁師さんのドキュメンタリーに出てきた巨大マグロをさらに倍化させた感じの物体が、強烈な

加速を伴い、群れで向かってきている。この迫力はダンプカーどころではなく、まさにロケット弾そのものを思わせる。

とにかく喰らわないよう連射するしかない。早々に十発撃ち尽くすが前回の反省を生かして、冷静にマガジン交換を行い間髪入れずに連射するが、魚群の数が今までよりも多い。

このマグロを市場に出したら1匹1000万以上するだろうな。1匹ぐらい持って帰れないかな。初セリに出せたら10億は固い、みんなでマグロ三昧だなと考えながら、撃ち続けるが、すぐに銃弾が

尽き携帯している最後のマガジンと交換する。

再度、銃撃を始め十発を撃ち尽くす。三十発、全弾撃つのに、おそらく30秒もかかっていないだろう。

ちよつと焦りを覚えながら片手にバルザードを構え、「ウォーターボール」を射出し始める。

当然、魔核銃よりも射出速度が遅いので、だんだんとマグロとの距離が近づいてくるのが感じられる。

ジワリと汗が背筋を伝う。

このまま『ウォーターボール』で凌ぎきるか、魔氷剣にスイッチして、うつて出るかどちらか正解か判断できない。

横をチラ見したが当然ミクは離脱しており、スナッチは相変わらずの無双ぶりで、数撃ちには自信があるようだ。ヒカリンも俺と違ってナチュラル魔法使い少女なので、拘束がかかるわけでもなく、豊富なMPで『ファイアボルト』を連発しており、全く問題ないようだ。

やはり表面上は拮抗しているが、一番やばいのは俺のところだろう。

口早に

「あいりさん、俺がやばくなったら一瞬でいいので位置をかわってください。魔氷剣を出します。」

と告げ、「ウォーターボール」の射出を再開する。

MPの残量を気にしながら射出を続けるが流石にマグロの大群も数が減って来て、まばらになってきた。

ついにMPが残り一発分になったところであいりさんと視線を交わしてスイッチ。

最後の『ウォーターボール』をバルザードから発動。魔氷剣レイピア型を顕現させる。

最近MPをゼロに近いところまで使い切ることがなかったのも、久しぶりに猛烈な倦怠感と眩暈に襲われたが以前の特訓で得た、無理矢理動くというナチュラル耐性を発揮して前に出る。これで20秒間五分はいける。再度あいりさんとスイッチしてマグロを迎え撃つ。

もう自分のリミットが決まっている事で不思議と覚悟も決まったのか冷静に状況を判断することができた。

マグロの動きは直線的に突撃してくるのみ。タイミングさえ間違わなければ刺すこと自体は問題ない。問題なのは刺した瞬間に爆散させる事。ちよつとでも遅れると刃渡りの1メートル分など一瞬で詰められて俺は天国、いや、ルシエのせいで地獄行きだ。遂にマグロが向かってきた。タイミングを見計らってレイピア型を突き出すと同時に破裂のイメージをのせる。

「ボフウン」

あと四発。再度構え直してタイミングを見計らって再度突き出すと同時に爆散。

単純な作業なようだが精神力が削れていくのが自分でわかる。あと三発持つかない。

それからは流れ作業のように3匹を始末した。殆どのマグロは撃退したはずだが、もう俺に出来ることは無い。その瞬間、不覚にも意識を失ってしまった。

「……かいと」 「……大丈夫か？」 「……海斗さん」

遠くから声が聞こえる。

「う、うん、俺は一体……」

気がつくときあいらさんの顔が目の前にあり、頭の下が妙に柔らかい。こ、これは。

「うわっ、すみません。本当にすみません。」

一気に意識が覚醒して飛び起きた。

「おい、そんなに急に飛び起きて大丈夫なのか？もう少し寝ていても大丈夫だぞ？」

「いえ、もう大丈夫です。本当にすみませんでした。」

「いや、私は何も役に立っていないかつたし、海斗は限界まで頑張ってくれたんだから全く謝る必要はないぞ。しかし最後のレイピア5連撃は、みごとだったな。小さい頃から薙刀を習っている私から見ても無駄な力が抜けた見事な刺突だった。まるでアニメのヒロインのようだったぞ。」

アニメのヒロイン・・・

自分でもそうイメージして剣は作ったが、これは褒められているのか？

しかも最後のは、力が抜けても何も、最後の気力だけで動いてただけなんです。

「急に倒れたからびっくりしちゃった。でも倒れるまでに全部のマグロ撃ち落としちゃうんだからすごいよね。」

「いや、すごいのはヒカリンとスナッチで、俺は全然。本当に申し訳ない。」

「いえ。すごいですよ。なかなか倒れるまで魔法使える人って聞いたことないのです。大抵の人は魔力が少なくなると、きつくなつて使うのやめちゃうのです。」

「いや。単純に魔力量が少ないだけだから。」

褒めてもらってるんだとは思うが、肩身がせまい。

「海斗、一つだけいいかな。一人で潜った時にも魚群に遭遇したって言つてたよね。どう考えても一人でどうしようもないと思つんだけど、どうやって切り抜けたのよ?」

こんな時までミクさん鋭い指摘。

「いや、まあ、それは、ちょっと数が少なかったし、途中で退却したんだよ。ははは。運が良かったのかな。」

「ふん。そうなんだ。へっ。退却したんだ。」

「うん。そうそう。格好悪いけど退却したんだよ。」

さすがに今日は、もうこれ以上戦う事は出来ないのです、地上に戻つて来週の約束をして、そのまま家に帰つてすぐに昼寝をしてしまつた。

第93話 月曜日の出来事

今日俺は学校にきている。

正直昨日の疲れが抜けず、非常に怠くて眠い。

ただ、進学のためにはどうしても居眠りするわけにはいけないので、なんとか意識を授業に集中させている。

今日の朝は、今までとは違う出来事があった。

いつものように教室に入って、隼人と真司に向かって

「おう」

と挨拶すると突然思いもよらぬ方向から天使の声で

「海斗おはよう」

と聞こえてきたので声の方を見ると、葛城さんが天使の笑顔を浮かべて手を振ってくれていた。

「あ、ああ。おはよう、かつ・・・」

まで言葉にしてからまた、一瞬先日の幻覚が見えたような気がして、言い止まり

「おはよう春香」

と返すことができたが、その瞬間、春香の顔が上位天使の笑顔をとれていたの俺は何とも言えない幸福感に包まれた。

ただそのやりとりがあった瞬間、それまで朝特有のガヤガヤしてい

た教室が一瞬、無音となり、しばらくの沈黙の後ヒソヒソ声が出るところで聞こえてきたのが非常に気になる。

流石にこれは俺でもわかる。春香が俺みたいなモブに名前呼びで、朝の挨拶をしてきたからだ。

しかも何故か俺も春香と呼んで返事をしている。

まるで恋人の朝のひと時のようではないか、これはもう勘違いしてもいいのだろうか？

春香は俺の事が好きなんだろうか？もしかして両思いだったなんてオチあり得るだろうか？

いや名前なら小学生の時にも呼び合っていたし勘違いはいけない。

そういえばパーティーメンバーも名前呼びだったが好きとかとは違うので女性は名前呼びを好むのだろう。

しかし名前で呼ばれると、なんかビクツとするし、名前で呼ぶのが、かなり恥ずかしい。

「おう、海斗、葛城さんと仲が良くて何よりだな。」

真司が声をかけてきた。

「オープンキャンパス大変だったな。正直キャンパスどころじゃなかったけど、パーティーの2人もあそこにいたって事は、王華学院の生徒と志願者だろ。お前、王華学院本当に受けるのか？」

「受けるに決まってるだろ。何のためにオープンキャンパスに行っただと思ってるんだ。春香が行くんだから俺が目指さないでどうするんだ。」

「春香ね〜。葛城さんもいつも、人当たりいいから、あんな特殊能力を秘めているとは思ってもしなかったよ。全員揃ったら、海斗はもう死んでいるな。」

「勝手に殺すな。ところで春香の特殊能力ってなんだよ。」

「それはあれだよ。あの絶対零度、コキュートスを発現させる能力に決まってるだろ。関係ない俺まで凍死するかと思っただよ。」

「いや、俺も変なブリザードの幻影は見た気がしたけど、あれって春香の力なのか？」

「もう面倒見切れないから、さっさと付き合っちゃえよ。じゃないと凍死するのが先と予言できる。」

「付き合えるもんだっいたらとくに付き合ってるよ。付き合えないから悩んでるんだろ。前の告白で燃え尽きたんだよ。」

「告白って前のおつかいの事だろ。それは、流石に告白じゃないだろ。」

「俺の気持ち的には告白と同じだけパワー使ったから、チャージ期間がいるんだよ。」

そんなやりとりをしていたら授業が始まったので今日も授業に集中しなければと思いつながら、疲労から睡魔に襲われそうになりながら、なんとか6時間目の古典まで耐えきった。

「海斗、今日良かったら一緒に帰らない？」

突然のお誘いにビックリしてしまったが、昨日までの疲労が抜け切らず、今日は探索せずに帰ろうと思っていたのでちょうどよかった。

「今日は探索休みだからもちろんいいよ。」

その日は、家の近くまで一緒に帰ったが、一緒に帰るのは小学校の時の集団下校以来だろうか？

俺にとっては夢のような時間だったが、春香も探索者に興味があるのか、毎日どんな風に探索しているのか、パーティってどうやって組むのかとか、女性の探索者は結構いるのかとか色々聞いてきて、結構盛り上がった。

まさか春香と探索者談義で盛り上げられる日が来るとは夢にも思わなかった。また、この夢のような時間を過ごせる事を願うばかりだ。

第94話 リポート

俺は今ダンジョンマーケットに来ている。

月曜日を休んだおかげで疲れも抜けダンジョンに潜れる状態にはなったが、先週1週間でかなり、消耗品が消えてしまったので再補充に来ている。

まずは1個使ってしまった低級ポーションを買わなければならない。10万円の出費は痛い、低級ポーションの有り難みを知った今、これだけはケチれない。

今まで使用したのは2回だけだが、常習性がないのか店員さんに確認したが、毎日のように飲まなければ大丈夫との事だった。流石に10万円を毎日飲む奴がいるとは思えない。次にいつものおっさんのところにやってきた。

「すみません。魔核銃のパレットを300個お願いします。」

「おお。坊主、結構使ってるな。今、何階層潜ってるんだ？」

「8階層ですよ。魚群に結構使っちゃって。」

「もう8階層なのか？そっいえば坊主ソロじゃなかったか？8階層をソロじゃきついだろ」

「いや、この前パーティ組んだんですよ。」

「おお、ついにお一人様卒業か。けどな、最初のパーティは結構上手く行かずにすぐ解散する奴らも多いから注意しろよ。」

「不吉なこと言わないでください。僕らは大丈夫ですよ。たぶん」

「まあ、頑張れや。」

「それともう一丁魔核銃を買うといくらぐらいしますか？」

「あ？もう一丁？2丁拳銃にでもするつもりか。そうだなまあ稼がせてもらってるから特別価格で195万だな。」

「あんまり安くなってないような。」

「は？なんか文句あんのか？200万円でもいいんだぜ。」

「いえ。今はお金がないので貯まったらまたお願いします。ちなみに装填用のマガジンって1個いくらですか？」

「1個3万だな。」

「じゃあ2個お願いします。」

「ああ、わかった。それにしても魔核銃なんか滅多に売れねーのに昨日も坊主ぐらいの年の女の子が、即金で買っていったんだよな。珍しいこともあるもんだな。」

俺は代金を支払ってそのまま、ダンジョンに向かい1階層に潜った。パーティ戦はシルとルシエに魔核がいらさない代わりに、魔核銃による消費がバカにならない。その上魔核は4等分なので全く儲けはないが、その分1階層でのスライム狩りに一層励まなければならぬ。今日から木曜日まではスライムスレイヤーとして1階層の住人となるつもりだ。

「シル、ルシエ、昨日はすまなかったな。本当はダンジョンに潜るつもりだったんだけど疲労が抜けなくて休んでしまったんだ」

「ご主人様お疲れなんですか？大丈夫でしょうか？私がスライムを倒して回りましょうか？」

「いや気持ちは嬉しいんだけど、シルが倒すとマイナスになるから探知だけお願いな。」

「おい、疲労って珍しいな。エリアボス以来じゃないのか？なんかあつたのか？」

「いや、日曜日にマグロ型の魚群に遭遇してな、魔力が尽きて倒れんだよ。」

「は？魔力切れで倒れた？お前何やってるんだよ。大丈夫だったのか？なんで私たち喚ばなかったんだよ。バカじゃないのか。また死にたいのか。地獄に落ちたいのか？」

「いや、またってまだ一度も死んだ事ないんだけど。」

「ご主人様。シルは悲しいです。そんなに危ない場面でも喚んでいただけなんなんて。サーバント失格ですね。もう用済みという事です。すね。ううっ」

「いや何を言ってるんだ。そんなわけないだろ。咄嗟に喚ぶ事が出来なかったただけだよ。今度は何かあつたらすぐ喚ぶから、その時は助けてくれるか？頼りにしてるんだ。」

「本当でしょうか？」

「当たり前だろ？人とも必ず喚ぶから、その時は頼むな。」

「はい、もちろんです」「しょうがないな助けてやるよ」

それから3日間、合計7時間の探索で95個の魔核を手に入れることが出来た。あとちよっとで100個だったが明日は久しぶりの8階層なので、時間通りで切り上げて備えることにした。

第95話 再び8階層へ

俺は今8階層に潜っている。

約一週間ぶりの8階層に少し緊張して臨んでいる。

前回の失敗を繰り返さないよう魔核銃のマガジンを2個追加して五十発まで撃てるようにした。

お金が貯まれば魔核銃の上限、百発迄撃てるようマガジンを買い足そうかと思うが、とりあえず今はこれだけあればなんとかなるだろう。

前回の時も最初から五十発撃てれば、魔力切れを起ささなくても大丈夫だったと思う。

とにかく今出来る万全の装備を整えて8階層に望んでいる。もちろんライフジャケットは必須だ。

「シル、ルシエ頼んだぞ。シル、魚群には特に気をつけながら行くぞ。」

「はい。頑張りますね。」 「焼き魚にして食べてやりたいくらいだな」

早速シルに探知を任せていると

「ご主人様、あっちの水の中に4体います。気をつけてください。」

やっぱりシルの探知は秀逸だ。モンスターの数までわかるので、あの程度想定と準備ができる。

それに比べるとスナッチの探知は、敵の存在しかわからないので、有用だがちょっと不便だ。

出現したのは巨大なヘビ、いやウミヘビか。

完全に意表を突かれてしまった。水系からヘビを想定していなかったが、ほぼアナコンダサイズなので正に大蛇と言えるが、昔図鑑が何かで陸上の蛇の数百倍の毒があるような事を見た記憶がある。もちろんモンスターなので違う場合もあるだろうが、このサイズに噛まれたら、間違いなく一瞬で地獄行きだ。

選択肢は2つある。

K-12のメンバーの為に『鉄壁の乙女』を使用せずに、いろいろ試して

みるか、安全に『鉄壁の乙女』の中で戦うかだ。

正直悩んだ、悩んだ結果

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエ『破滅の獄炎』で右の2体を頼む。俺は左の2体を倒すから。」

結局、安全に戦うことに決めた。流石に猛毒を持ったアナコンダクラスのウミヘビ4体を相手にできるような度胸も勇気も無い。やられたら終わりのリアルの世界でこいつら相手に訓練するほどクレイジーにはなれない。

早速、魔核銃を撃ち込み始める。でかいにはでかいが、的が大きいので撃てば当たる。しかも十分に通用している。とにかく頭部をめがけて連射する。

「プシュ」 「プシュ」

すぐに初めの一体は消失したので、次の一体を撃とうとすると結構なスピードで逃げ出してしまった。

追撃をかけるがさっさと水の中に逃げ返ってしまった。

でかい図体の割に臆病だったようだ。陸上なら追いかけるが水の中では仕方がない。

横を見ると既にルシエが2体とも片付けていた。

『鉄壁の乙女』があるおかげで楽勝だったが、結構な強敵だと思っ。次会っても気を抜かないようにしよう。

また、しばらくうろうろしていると、シルが

「その水辺に1体います。単体は珍しいですが、注意してください。」

「

この階層で1体だけのモンスターは、初めてだ。ちょっと気になっ。て注視する。

水面が爆発して地響きがする。

こ、こいつはカバ？

そこには確かにカバと思しきモンスターがいた。しかし、でかい。

もともと動物園のカバも相当にでかいが、これは小型のダンブカー並みにでかい。

デカすぎだろ。

圧倒されていると、地響きをさせながら向かってきた。見た目からは想像できないスピードで向かってる。まさに殺人トラックのようだ。

こんなの勝てるのか？そう考えているとあっという間に距離が詰まっってしまった。やばい。

『鉄壁の乙女』

「ドガン！」

「シル助かったよ。」

シルが自分の判断で『鉄壁の乙女』を発動してくれていなければ相当やばかった。目の前で怒り狂ってる巨大カバ。動物園ではユーモ

ラスな風体で俺の一番のお気に入りだったが、こいつは怖すぎる。カバってこんなに凶暴で怖いのか？しかもこのサイズはもう怪獣と言っていていいだろう。トロールより全然怖い。とりあえず魔核銃で撃ってみる。

「プシュ」

当たると血が出ているのでダメージはあるようだが、更に怒り狂っている。

デカすぎて致命傷を与えるには全身蜂の巣状態にするしかないかもしれないが、バレットがもつたいない。

「ルシエ、『破滅の獄炎』で焼き払ってくれ」

「グヴオージュオー」

『破滅の獄炎』の威力はさすがで巨大なカバを一瞬で消し去ってしまった。しかし、これまで見たモンスターの中でもエリアボスを除くと一番といってもいいぐらいの圧力だった。正直俺一人で倒せるかちよつと自信がない。それに今回は単体で出現したが、自然界のカバは確か集団で行動していたはずだ。さっきと同様のモンスターが群れで向かって来たら、俺だけでは手の打ちようがない。

やはり8階層は甘くない。調子に乗らず慎重に探索を進めていくことにしよう。

第96話 ダイナソー

俺は今8階層で休憩を取っている。

巨大なウミヘビと巨大カバとの戦闘を終えて、俺自身は殆ど何もしていないが妙に疲れたので、端に寄ってペットボトルの麦茶を飲んでいる。

それにしてもこの8階層は今までのほとんどの階層で出てきたファンタジー系モンスターはおらず、リアルに存在する生物が巨大化したようなモンスターばかり出てくる。敢えて言うなら4階層の虫エリアの水棲生物版といったところだろう。ただ元々の生物のサイズが大きいせいも、モンスターの大きさが桁違いだ。しかもファンタジー系のモンスターは、ちょっとゲームしているような錯覚を覚えて、テンションも上がり気味だったが、この階層ではどちらかと言うと生態観察に近いのりだ。いずれにしても脅威には違いがないので慎重に探索を続けよう。

休憩を切り上げて探索を開始すると程なく

「ご主人様、その浅瀬に2体潜んでいます。気をつけて下さい」

臨戦態勢を整えて待ち構えていると、以前も遭遇したガザミ系の力二型モンスターが出現した。やっぱりかに専門店を彷彿とさせるデカさだ。見るだけでお腹がすいてきてしまった。

いずれにしても魔核銃が通用しないので、俺とはちょっと相性が悪い。シルとルシエで一撃づつで即終了だが、できれば1匹は俺が倒しておきたい。

「シル『神の雷撃』で1匹を頼む。ルシエは待機して、もしもの時に備えてくれ。俺は左側のを狩るから。」

「ウォーターボール」

最初からバルザードに氷のレイピアを発現させる。

カニをめぐって威嚇射撃すると前回と同じ様に横方向に猛烈にダッシュし始めた。やはりかなりのスピードだが直線的な動きなので進路はすぐに予測できる。

カニとはいえ追突されればタダでは済まないだけの、サイズ感と勢いがある。

慎重に予測した進路上に陣取り、マタドールのイメージで避けながらレイピアをカニの胴体に撃ち込んで、破裂のイメージを重ねておく。

2 撃目を加えた瞬間に爆散した。

すぐに隣を見るがシルによって跡形もなく消え去っていた。流石にシルの火力はすごい。

更に探索を進めていくが、マッピングの感じだと結構奥の方まで来ている感じがするので案外9階層への階段もすぐに見つかるかもしれない。

「ご主人様、またモンスターですが1体だけのようです。向こうの深いところから向かってきているようです。」

また巨大カバか？距離をとって水面を見ていると、

「な、なんだあれ」

水面から徐々に頭が見える。最初は潜水艦の潜望鏡のような感じだったが徐々に全貌を表し始めた。恐竜？

いやネツシー？

正直両者の違いが俺にはわからないので、どちらかはわからないが、

子供の時に、国民的アニメ映画のDVDで見た、フタバズキ竜を思わせる怪物が姿を現した。もちろんあんな愛らしいものではない。巨大カバは怪物のようだと思ったが、今度は本物の怪物が出てしまった。サイズも正に恐竜サイズだ。

「し、シル。とにかく『鉄壁の乙女』を頼む。」

「はい。かしこまりました。『鉄壁の乙女』」 「お、おい。あれってなんだ？ドラゴンでもないようだがあんなの地獄でも見たことないぞ。」

ルシエも予想外のモンスターにさすがに面食らっているようだ。それにひきかえシルはいつも通りでいたって普通。流石はシル頼りになる。

いくらでかくても、カバがでかくなって首が伸びただけだ。やる事は変わらない。

「ルシエ、落ち着いていこう。俺が『ウォーターボール』で様子を見るから、『破滅の獄炎』で追撃頼む。」

「ウォーターボール」

頭部めがけて氷の槍を放つ。

「ギュグウ！」

的がでかいので当たるのは当たった。変な声を上げたので多分、痛いのは痛いのだろう。ただ、的に対して攻撃が小さすぎる。もしかしたら、かすり傷程度感覚かもしれない。どこをどうやっても俺

の火力では倒せそうにない。恐らくK-12のメンバー総出でかかっても勝てない。誰の攻撃も決定打にはなり得ないだろう。遭遇したら逃げるしかない。

『破滅の獄炎』

「グルギユギヤー！」

ルシエの追撃が決まった。かなりの痛手を負っているとは思うが、なんと消失していない。今までモンスターでルシエの攻撃をくらって消滅しなかったのは、初めてだ。

「ルシエ、効いているぞ。『破滅の獄炎』を連発してくれ。」

「ああ。問題ない。任せとけて。」

『破滅の獄炎』

「ギヤ、グウワグワー」

『破滅の獄炎』

「ギューggユー、gyアー」

『破滅の獄炎』

「グ、gggY、グ、a」

4発目を放ってしばらく見ているとようやく消失した。仕留めるこ

とが出来たが、都合4発を放つこととなってしまった。

いくらなんでも4発はないだろう。ルシエの悪魔の攻撃だぞ？今まで1発で倒せていたのが急に4発？いきなりインフレが過ぎるだろう。8階層ってこんな怪物が出るのか？やばすぎるだろ。

「腹減った。魔核10個くれ。」「私もお願いします。」

今日ばかりは言われるままに10個渡してやった。スキル4連発のご褒美だ。

怪獣？の後には赤ちゃんの掌程の魔核が残されていたがもちろん今までで最大だ。間違いなく、数万円にはなるだろう。

ちよつと身の危険を感じた俺はそのまま撤収してギルドに向かうことにした。

第97話 異変？

俺は今ギルドの受付に並んでいる。

「すみません、魔核の買取お願いします。」

いつものように日番谷さんに今日手に入れた魔核を渡す。

「高木様。失礼ですが、8階層に潜られていたと記憶しておりますが、間違いないでしょうか？」

「はい、まちがいないですよ。8階層に潜っています」

「では、この魔核はどうやって手に入れられたのでしょうか？」

「その魔核なんですけど、8階層で手に入れたんですが、最後に恐竜みたいなの……」

俺は今日あった出来事を事細かに伝えた。

「信じられません。よく倒せましたね。ご無事で何よりです。話を聞く限り25階層より奥にある古代エリアのモンスターだと思われます。高木様の今までの探索履歴を見ても嘘をついているとは思え難い上にこの魔核は間違いなく本物です。上司を連れてまいりますので、もう一度事情説明を頂いてもよろしいでしょうか？」

「はい、大丈夫です。」

今度は奥の部屋に通され責任者っぽい人に事情説明をさせられたが、責任者の人はずっと難しい顔をしながら話を聞いていた。

あとで聞いてみると、1階層程度奥のモンスターが出現する事はたまにあるらしいが、これだけ階層が離れたモンスターが出現したことは今まで一度もないらしい。現状では他に報告もないので対策の取りようもないらしく、原因も調べてみないとわからないらしい。俺のLUCKが史上最低レベルで悪い可能性も否定しきれないが、普通に考えると、ダンジョンで何かが起きている、もしくは何かが起こる前触れの可能性があるのではないだろうか？

それが何かは全くわからないが、シルとルシエがいなければ、俺がやられていたのだけはわかる。

俺だけじゃなく、同レベル帯の冒険者は確実にやられていただろうと思う。

今の俺の一番の心配は、k-12のパーティメンバーの事だ。明日8階層と一緒に潜るがこの状況で潜るのは正直不安で仕方がない。メンバーに明日相談してみよう。

フタバズキ竜型の魔核は12万円となり、今回の説明を行った手当てとして1万円が支給された。

どうしても現状に不安を覚えたので、今日の稼ぎに自分のお金を足して、再度ドローン型の魚群探知機を購入した。出費は痛いがこれで少しでもリスクが軽減すれば安いものだ。

この日はそのまま家に帰って、何かあった時の為の対策を考えながら寝てしまった。

次の日、ダンジョン前に集合してから、昨日の経緯をパーティメンバーに説明した。

「25階層より奥のモンスターが出たって言うの？」

ミクが聞いてくる。

「ああ、ギルドに行つて確認したんだけどそう言われたんだ。」

「海斗は、昨日一人で潜つてたんだよね。それで、そのモンスターを倒したから魔核が手に入って、それをギルドに持っていったであつてる?」

「ああ。それで間違いない。」

「じゃあ、深層階のモンスターつて言つても海斗一人で倒せるつてことだよな。そんなに心配する必要ないんじゃない。」

「うっ。今回はたまたまだよ。たまたま。無我夢中で必死だったから、次やれつて言われてももう出来ないよ。」

「でも今回は私達3人もいるし大丈夫でしょ。ねえみんな。」

「大丈夫だと思うのです。」

「ああ、大丈夫だろう」

ミクが言っている事は正しい。ただ前提が間違っているだけだ。俺が一人で倒したんじゃない。俺は全く歯が立たなかつた。だがこれを言つと、シルとルシェの話がどうしても出てしまう。

「わかつた。じゃあ一つだけ約束してくれ。実は昨日、恐竜だけじゃなくて巨大なカバにも遭遇したけど、かなりやばい奴だったんだ。8階層には、まだまだいろんなモンスターが出現する可能性があるから、俺がやばいと思つたら絶対に一緒に逃げてくれ。これだけは頼むよ。」

「海斗がそこまで言うなら私はいいけど。」

「私もだ。」

「私もなのです。」

「わかった。じゃあ本当に今まで以上、慎重に探索していこう。」

こうして再びK・12のメンバーで8階層を探索することとなった。

第98話 悲劇再び

俺は今猛烈に怒っている。

再びK-12のメンバーで8階層の探索を始めたが、昨日の出来事の後なので俺は正直不安で一杯だった。

少しでも、リスクを減らすために2台目のドローン型魚群探知機を購入した。

スナッチの探知では残念ながら敵の数迄はわからないからだ。しばらく奥に進むと、水辺に出たので

「みんな、ドローンを飛ばすから下がってくれ。」

ドローンを飛ばして水際のちよつと奥に着水させる。直ぐに携帯モニターを確認すると、赤っぽい塊が2つ表示されている。流石は199800円だけあって高性能だ。

「みんなモンスターが2体いるみたいだから注意して。」

そう伝えてからモンスターの出現を待ち構えるが、なかなか現れないのでもう一度画面を確認するが間違いなく2体のモンスターが表示されている。

それからしばらく待っていると、急にドローンが消えた。

「え？」

先ほどまで水面に浮いていたはずのドローンが消えてしまった。マジックか何かの瞬間移動のように消えてしまった。

目視できる範囲を探してみるが何処にもない。

これは、まさか・・・

考えたくはない、考えたくはないが、それしか考えられない。それからしばらくして、突然ドローンだった物が水面を越え、空中に出現したが、ドローンは吸盤だらけの足に絡め取られている。

この吸盤だらけの足には見覚えがある。これはタコだと思うがそんなことはどうでも良い。

ふぎけるな。買ったばかりのドローン2号が完全に破壊されている。

許せない。1号の時も処女飛行で帰らぬ人になってしまったが、2号までもが同じ目に遭ってしまった。

お前ら、何かドローンに恨みでもあるのか？俺に個人的な恨みでもあるのか？

絶対に許せない。いや許さない。タコ刺し、いやたこ焼きにしてやる。

俺の怒りが頂点に達した時、奴らは姿を現した。

巨大なタコのモンスターが2体。

ワニもタコもまとめて俺の敵だ。生涯の敵認定だ。

大きいタコを見ると、クラーケンの親戚かと思う容貌だが、問答無用で魔核銃を連射する。

「プシュ」「プシュ」「プシュ」「プシュ」

タコを蜂の巣にしてやる。弾切れしたが、マガジンを交換して更に十発撃ち込んだ。

途中痛いのかなんなのか、わからないがうねうねしていたが、そんな事は知ったことではない。

二十発撃つたところで、ドローンを壊した方のタコが消失した。

消失したが、同じ風体をしたもう1体を消し去らなければこの怒りは収まらない。

簡単には消してやらない。

「ウォーターボール」

魔氷剣を顕現させタコめがけて駆け出す。

「うおおー！お前らの所為で俺の199800円が……。いや2台分の399600円が。返せ。今すぐ返せ。」

グニグニしている足で攻撃してきたが、向かってきた足は全部ぶつた斬ってやった。4本足のタコはタコなのか？お前はタコ以下だ。ただのブヨブヨ野郎だ。

悪即斬。ブヨブヨに向けて最大級の怒りをのせてぶつた切る。

「おおおー！」

今までになく鋭利に切断出来た気がする

「海斗さん。すごいです。巨大タコが滅多斬りです。」

「ああ、今の剣さばきは見事だったな。」

「ドローン壊れちゃったね。」

「……………うん。」

「2個目だったのにな。」

「……………うん。」

「残念だったね。」

「……………」

辛い。その慰めを含んだ言葉が突き刺さる。

「そんなに、大事だったのですね。あのドローン。今度パパに頼んで買ってもらいますので、気を落とさないでいいのです。」

いや、そういうことじゃないんだ。パパに買ってもらったドローンは、今は亡き1号2号とは別物なんだよ。

辛いが、ここで立ち止まる訳にはいかない。引きつった笑顔を浮かべながら

「いや、ドローンは所詮物だから。みんなが無事でよかったよ。これからはスナッチにまたお願いするようになるから、みんなも頑張っていこう。」

「無理してますね。」

「ああ、顔が引きつってるな。」

「みんなこれ以上は触れないようにしてあげましょう。」

何か3人でコソコソやっているが気にしないで、先に進むことを選択した。

第99話 お揃い

俺は今、8階層の中程まで進んでいる。

ドローンを失った悲しみに耐え、パーティメンバーと一緒に探索を進めている。

「キユー、キユー、キユー、キユー」

「みんな、気をつけて。魚群かもしれない。横に並んでタイミングを合わせて迎え撃つから。」

4人と1匹で水面を凝視していると、水面が爆発して大型マグロの大群が突進してきた。

前回不覚を取った相手なのでもう二度と失敗はしない。バレットの貯蔵も十分だ。

一斉に照射を始める。

「ップシュ」「ップシュ」「ップシュ」

あれ？なんかいつもと違う。順調にマグロを撃退できているのだが、何故か魔核銃の発射音が、多重で聞こえる。壊れたのか？

「ップシュ」「」

いやそんな感じじゃない。不思議に思っただけだとすると、なんとミクの手の間に魔核銃が握られているではないか。しかも、普通に発砲して命中している。どうなっているんだ？

正直今すぐ聞いてみたかったが、マグロと交戦中なので我慢して戦

闘に集中する。

ミクが、戦闘に加わっていることで、スナッチを合わせて常時4発の攻撃が放たれている。まさに弾幕状態を保っており、前回あれほど苦戦していたのに、思いの外スムーズに撃退出来ている。攻撃の回数が増えた事により、切れ目がなくなり、撃退するペースも上がっている。

「コブシュ」「コブシュ」

最後の発砲が終了して、マグロ型を全滅させる事に成功した。

「ミク、その魔核銃どうしたんだ？」

「ちょっとびっくりさせようと思ったんだけど、この前の戦闘で、ボウガンを撃ち尽くしたら、何もする事がなかったから、いろいろ考えて海斗の使っているこの魔核銃だったら私でも使えると思って、ダンジョンマーケットでパパに買ってもらったのよ。」

「パパ……。もしかしておっさんのところで買ったのってミクだったのか。」

「ああ。お店の人ね？結構優しいおじさんで、いっぱいサービスしてくれたよ。値段もあんまり売れないからって安くしてくれたし。」

「あー。ちなみにその魔核銃はいくらぐらいしたんでしょうか？」

「確か130万円だったと思うけど。」

「130万円！？俺200万で買ったんだけど。」

「うん。もしかしたら海斗専用価格だったのかも。」

「あの、クソ親父。またぼったくりやがった。ふざけやがって。前もやりやがったし。」

「もしかしたら、海斗ってふっかけられても気づかなそうだから、それでかもね。」

なんだその理由は？やはり、あのおっさんの値つけは全く信用ならない。なんとか2丁目を値切らないと気が済まない。

「ミク、魔核銃の使い心地はどうだ？私も父に頼んで買ってもらうかな」

「軽いし、簡単に当たるんでオススメですよ。あいらさんもお揃いにしましょうよ。」

お揃いって。結構高額だと思っただけど。

「ああ、お揃いもいいな。来週父に頼んでみるよ。」

「えーっ。みんなお揃いにするのですか？じゃあ私もパパに頼んで買ってもらうのです。仲間ハズレは嫌です。」

ええ・・・ヒカリンまで？魔法使えるんだから、いらないだろ。4人で同じ武器って、俺の存在意義が薄れていく。早く2丁目を購入するかスペシャルチューンを施さないと、いらぬ人になってしまう。

前回、死にそんな思いでなんとか倒せた大型マグロの群れを、ノーダメージで撃退することができたので、確実にレベルアップしたこ

とを実感できて嬉しいし、魔核銃による戦力アップも本当に嬉しいのだが複雑だ。

多分俺の人間としての器の小ささが、この感情の根源にあるのだろう。今後はダンジョン探索と共に人間力を磨かなくてはならない。ただすぐにそんなビッグな人間にはなれそうにない。

俺もパパがほしい。

第100話 レベル17

俺は今レベルアップしたステータスを見ている。

L V	16	17
H P	53	57
M P	35	38
B P	57	60

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール

ひさびさにレベルアップした。流石に以前の様にポンポン上がることはなくなってきたが、この階層に来て、魚群や怪獣と戦っていたのでようやくLV17に上がった。

うーん。レベルは上がったが、ステータスの伸びが落ちてしまっている。『神の祝福』を得てから各ステータスが大体5以上伸びていたのに今回はBPが3にとどまっている。以前も一回同じようなことがあった。やばい、シルとの信頼関係が薄らいでいるのか。

理由は一緒に潜る回数が減っているせいかもしれない。何とか潜る回数を増やして、もっとコミュニケーションを取らないといけない。結構気をつかっているつもりだがまだまだ足りないようだ。

ステータスの伸びは落ちてしまったが、なんとBPが60に到達してしまった。申請すればブロンズランクとなることが出来る数値だ。但しこの数値と強さが比例しないのは、イベントでも痛感したので調子に乗ってはいけない。BPがルシェの初期値の半分近くにな

つたが、俺が2人いればルシェに勝てるかといえば、絶対に勝てない。単純な数値では測れない強さの壁があるので、今後も努力は怠らないようにしよう。

ちよつと複雑だけどレベルアップはやっぱり嬉しいもので、すっかりドローンのダメージも和らぎテンションは上がってしまった。これが良くなかった。

「みんな、さっきの戦闘でレベルが上がったから今までよりも貢献出来ると思うから、探索を頑張ろう。」

そのまま探索を再開したが、30分程度でスナッチが

「キュー、キュー」

と反応した。

全員で水面を凝視していたが、なかなかモンスターが現れない。はやる気持ちを抑えて、待ち構えていると、またうねうねした足が水面から出てきた。

またあのタコ野郎か！

違った意味でもテンションがさらに上がって、臨戦態勢を整えていたが、出てきたのはタコではなかった。
イカ？

出現したのは巨大なイカが3体だった。大王イカ？それともクラークン？違いがわからないのでとにかく巨大イカとしか言えない。イカのくせに地面を這って移動している。

タコでもイカでもあまり変わらない。たこ焼きがイカ焼きになるだけだ。

「みんな左端の奴は、俺が倒すから、後の2体を頼む。あいりさん以外は遠距離攻撃でいこう」

そう言つて俺も魔核銃を二発発砲してから

「ウォーターボール」

魔氷剣を構えてイカに近づいていく。

ちよつとテンションが上がっていたのと、タコをあつさり仕留める事ができていたので、不用意にも警戒薄めで、近づいてしまった。魔核銃でダメージを負っていたはずのイカが突然、足を動かし襲ってきたが、冷静に対処して襲ってくる足を切断していく。

次々に向かつてくる足を5本切断した時点でそれは起こってしまった。6本目を切断しようとしたが斬れなかった。氷の刃はまだ顕現しているのに切れない。

「なんで斬れないんだ！」

考えてすぐに原因を思いついた。バルザードの使用制限、魔核3個で攻撃5回だ。

氷の刃の制限時間は20秒。氷の刃が手元にあつたので完全に錯覚してしまった。氷の刃の制限時間とバルザードの使用制限回数は全くの別物だった。今まで制限回数まで使うことがほとんどなかったので、それを失念していた。

切れないことに焦ってしまった俺は、近づいてくる足に向けて魔核銃を放つが、足ではなく本体を狙うべきだった。

「う、うわあ。ぐううー。」

巨大イカの巨大な足に巻きつかれてしまった。

「海斗大丈夫か、今助ける」

あいりさんが俺の状況にすぐ気づいて助けようとして、薙刀でイカを攻撃しようとするが、イカは応戦しようと、俺を捉えた足を振り回そうとし始めた。

「グウわー。吐く、吐く。」

締め付けられたところが強烈に痛い、それと同時に思いつきり振り回されて遠心力で気持ち悪い。

あいりさんがイカの足に対抗して斬撃を加えているのが見えたが、次の瞬間俺が捕まっていた足があいりさんによってぶつた斬られた。

「あっ」

次の瞬間、俺自身に全く想像していなかった事態が起きてしまった。

第101話 水難

俺は今、空中を舞っている。

俺が捉えられていたイカの足がいりさんにより切断された。それにより、俺は振り回されていた遠心力により空中に飛ばされてしまった。

今まさに、漫画かアニメのように凄い勢いで頭から飛び出している。

「ああ〜あ〜。」

想像以上の距離を飛ばされて、着地いや着水してしまった。

頭から豪快に水中にダイビングしてしまった。

スローモーションのように水面に近づくところから着水までが流れていく。

これが世に言う走馬灯か。俺は死ぬのか・・・

せっかく探索者として調子が出てきたのに。春香と王華学院でキャンパスライフを楽しみたかった。

と考えているうちに頭から水中に思いっきりダイブしてしまった。

勢いがあったせいでライフジャケットの浮力を無視してかなりの深さまで達してしまった。

「ガボボボグフツ。」

死ぬ。死ぬ。死んじゃう。

この深さまで水中に潜ったことの無い俺はパニックに陥ってしまった。

透明度の低い水の中で恐怖を感じ、暴れながら息を止めるのを忘れて叫んでしまった。

「ガバブバベツ・・・」

当然思いつきり水を飲み込んでしまった。もうだめだ俺死んだ・・・

もがく気力も失せた頃、ライフジャケットが本来の目的を思い出し、俺の体を水面へと押しやった。

どぎえもん状態で浮かんだ俺を誰かが引っ張ってくれる。地獄の使者だろうか。

しばらく引つ張られると足が地面に引きずられて、そこが水辺であることがわかった。

朦朧とする意識の中で、あいりさんの声がする。

「海斗、しっかりしろ、こんな浅いところで死んだら恥だぞ！」

「バチーン！バチーン！」

両方のほつぺたから強烈な痛みを感じて意識が覚醒する。

「ゴホ、ゴホッ、ゲーツ、ウゲーツ」

「おおっ。海斗無事か。」

「あいりさん・・・助けてくれたんですね。ありがとうございます。でもほつぺたが痛いです。」

「すまない。他に方法を思いつかなかったんだ。」

物語の主人公であれば、普通こんな時に、マウスとウマウスなんてイベントがあるんじゃないだろうか。残念ながらモブの俺にはプロ

レスのようなビンタイイベントしか発生しなかった。ちょっと悲しい。

「海斗大丈夫？もしかして海斗って泳げなかったの？それでライフジャケットなんかつけてたんだ。」

「ああ。言ってなかったつけ。子供の頃にプールで足を引っ張られて溺れかけてから泳げないんだ。」

「そうなんだ。それならその変な格好にも納得ね。」

「海斗さん。すごかったのです。リアルの世界であんな飛んでいき方、TVでも見たことないので。ネット配信していれば100万アクセスはいけたのです。」

「ああ、そう。ちょっとそんな余裕はなかったけどね。」

「よかったら、今度泳ぎ方教えてあげようか？」

「いや、今更いいです。ライフジャケットに頑張ってもらおうよ。」

「今日はこれで終わりにして引き上げましょう。海斗もあいりさんも、ずぶ濡れだから風邪引くわよ。」

今日はドローンも買って、張り切って臨んだのだが、午前中で切り上げることになってしまった。他のメンバーにはちょっと申し訳ない事をしたと思うが、今回の出来事で水へのトラウマが増してしまっただかもしれない。

いずれにしても、ライフジャケットには感謝しかない。9980円は安すぎる。10着ぐらいストックしてもいいくらいだ。

一応明日の約束をして別れたが、明日までに気持ちを立て直すこと

ができるかは、ちょっとわからない。このまま帰って寝るには早すぎるので、昼ごはんを食べたら気分転換に映画でも行こうかな。

第102話 寝込みました。

俺は今、ベッドの中で寝込んでいる。

昨日、ダンジョンで溺れたせいだと思うが、腹を壊した上に発熱してしまいベッドで寝ている。

俺が病気でダウンするのは2年ぶりなので、ダンジョンの凄さがわかるというものだ。

昨日の夜もお腹は痛かったものの、寝れば大丈夫だろうと安易に考えていたが朝起きても体調が戻ることはなかったので、直ぐにパーテイメンバーに連絡を入れて寝込んでいる。

流石にちよつと怖いので休日当番医を調べて、検査に行くことにした。

病院に着いて事情を話すと結構年配の医者の方に

「あゝ。それはちよつとまずいかもしれないな。血液検査だね。

大丈夫かな。うん。」

先生、俺まずいですか。大丈夫ですかね。

正直この先生の言い方が心配を増幅させる。

何年かぶりに採血され検査の間ベッドで寝かせてもらっていたが、1時間ほどで検査結果が出たようで再度、先生に呼ばれた。

「うん。どうしてかな。」

なんだ。この間は。俺やつぱりやばいのか？

「特に異常は無いようだな。ちよつと脱水症状気味だけど、細菌関係は出てないし、特に白血球の値も変化ないから目立った炎症菌

所もなさそうだし、胃腸を整える薬と解熱剤だけで大丈夫じゃないかな。うーん、どうしてかな。」

先生本当ですか？何か隠してないですか？言葉の端々に不安を覚えるんですが。

とりあえず薬をもらい、どうしようもないので家に帰って寝ることにした。

とりあえずもらった薬を飲むと、体調も落ち着いたので、今度は手持ち無沙汰になってしまった。

残念ながらダンジョンでのスキルは地上では使用することはできないので練習もできない。

練習できないので脳内トレーニングするしかない。

想定する相手は8階層の巨大カバだ。まずは単体の敵をイメージする。

まずは、魔核銃を連射しまくる。撃って撃って撃ちまくる。マガジンを装填し直して五十発撃ち尽くしたところでカバは消失した。消失はしたがあまりにハイコストで勿体無いので非現実的だと思い直して、今度は魔氷剣で迎え撃つことにしたが、小型ダンプカーを思わせる突進に怯んでしまった。怯んだ瞬間に踏み潰されてしまった。怯んだら負けだな。

今度は怯まず正面から迎え撃つことにした、カバの巨体が突進してきたのをグツと堪えて、レイピアで突いてみるが、勢いが勝り、倒す前に俺が吹き飛ばされてしまった。

それならば次はマトロルのイメージで躲しながら突こうとしてみたが、あまりの巨体に避けることができずにやはり弾き飛ばされた。色々想定してみたがこの巨体相手には遠距離攻撃以外に対処出来そうにない。

まず1人で対処すること自体が難しいが群にでも遭遇したらもうお手上げだ。

次にフタバススキ竜を想定してみる。

今度も魔核銃を撃って撃って打ちまくるが、正直全く効いた気がしない。
頭に向けて『ウォーターボール』を放ってみたが、上手く目にも刺さらない限り効果は薄そうだった。

正直この小山の様な怪物相手に魔氷剣でどこを斬っていいのかわからない。よくアニメで竜退治のシーンがあるが、一体1Mそこらの刃でどうやって巨大な生物を斬る事が出来ると言うのか？超絶スキルや超パワーの剣で一刀両断しているイメージがあるが、現実そんな事が出来る人間っているのだろうか？

少なくとも現状の俺には出来そうにない。どう鼻屑目に見てもK-12のメンバーでは致命傷を与えることはできないだろう。もし出会ったらこれしかない。

死ぬ気で逃げる。

俺は脳内でも本気で逃げてしまった。

トレーニングが終わってすることがないので、部屋を物色していると、今は亡きドローンの説明書が2冊見つかった。

暇なので1号2号ドローンを回顧しながら読み直してみることにした。

普通に構造の説明から操作方法までか書かれており、俺の使い方通りだったが一通りの説明の後にもう一つの使い方説明が載っており、よく読んでみると、このドローンはもともと探索専用に作られたものではないとの事。その為、先に記載のあった使い方が一般的である事。そしてモンスターを目的とした場合は着水させずにホバリング状態から魚探部分だけを投下出来る事が記載されていた。しっかりと米印でモンスターによる破損は保証対象外の旨も記載があった。よく読めばよかったが、こんなに後ろに書かなくてもいいじゃないか。

今後は端から端までしっかりと説明書は読むことにしよう。

第103話 回復

俺は今、学校の教室にいる。

昨日あれだけ苦しかったのが嘘のように元気になった。薬が劇的に効いたようで、あの先生はやぶではなかったようだ。

「そういえば、隼人達パーティ組むとか言ってなかったか？あれってどうなったんだ？」

「あゝあれね。まあ一応仮パーティは組んではみたよ。」

「仮パーティ？それからどうなったんだよ。」

「いや、やっぱり女の子って難しいな。俺は男同士のパーティの方がいいかもしれない。」

「俺もそう思う。女の子は俺たちではちょっと荷が重かった。」

「どうしたんだよ。あんなに張り切ってたじゃないか。」

「ああ。最初は楽しくやっててよかったんだけど、だんだん荷物が重いから持ってくれとか、お腹が空いたからなんか買ってきてとか・・・」

「俺も戦闘の時には完全に盾にされたり、うまく行かないと文句が多くてな。当面2人でやった方が気楽だから、相談して断ったんだ。」

「そうか、お前らもなんか大変だったんだな。また今度一緒に潜ろうな。」

「おお、心の友よ。」

「やっぱり男同志が一番だな。」

くだらない会話をしていたら、授業が始まったのでとにかく集中する。王華学院目指して集中する。

放課後ダンジョンに潜るが今日は1階層だ。思いの外、8階層での魔核の消費が激しいので、しっかり1階層で稼いでおかなければならない。

週2〜3日は1階層でスライムスレイヤーとなり、残りの4〜5日を8階層へのアタックに回そうと思う。

「ルシエ、ちょっと聞きたいんだけど、お前って泳げるのか？」

「き、きゆうになんだよ？別に、ど、どーでもいいだろ。」

「いや、先週8階層で溺れそうになったから、ルシエは大丈夫かなと思ってな。」

「お、泳ぎ？そんなの大丈夫に決まってるだろ。」

「ルシエ、魔界ってプールってあるのか？」

「そんなのあるわけないだろ。」

「じゃあどうやって泳いでたんだ？」

「ど、どうやってって、生まれた時から泳げるんだよ。あ、当たり前だろ。」

「ルシエ。本当のこと言ってみる。怒らないから。」

「な、何言ってるんだよ。嘘なんか言ってるじゃない。」

「ルシエ。俺も泳げないんだ。だから泳げないことは恥ずかしい事じゃないんだぞ。」

「うう。わかったよ。」

「いや、俺がわからないんだけど。」

「お、お、泳げない。」

「一緒じゃないか。仲間だな。」

「一緒にするな。魔界では誰も教えてくれなかったんだよ。」

「俺も8階層で溺れそうになったから、お前も気を付けていこうな。」

「あ、ああ。わかったよ。気をつける事にする。」

なんとなく気になって声をかけてみたが、やっぱりルシエは泳げなかった。隠そうとしていたようだ。がバレバレすぎて笑ってしまいそうになったが、ちょっと可愛かったのでまあOKだ。とにかく俺と一緒に溺れないようにしないといけない。今度子供用のライフジャ

ケツトも見に行ってみようかな。

「ご主人様、先週溺れそうになったのですか？」

「ああ、ちょっと飛ばされて・・・」

「どうして、そんなに危ない目に遭っているのに私を喚んでくださらないのですか」

「いや、喚ぶ間もなく沈んでしまつて。」

「沈むつて大変じゃないですか。今度から、少しでも危ないと思つたら私を喚んでください。」

「ああ。すまない。今度から危ない時にはおねがいするよ。」

「絶対ですよ。約束ですからね。」

俺の事をこんなに心配してくれるなんてシルは本当に優しいな。ちよつとやり取りの間中、変なプレッシャーを感じたが、どこかにスライムの大群でもいたのかもしれないな。やはりシルは俺の心のオアシスだな。

第104話 魔氷槍

俺は今1階層に潜っている。

魔核を貯めるためにサクサク、スライムを狩っている。

スライムと言えどもモンスターなので気を抜いてはいけないとは思
うがほとんど流れ作業と化しているので、この時間を有効活用でき
ないかと思い始めたのだ。

殺虫剤ブレスよりも効率落ちるが、いろいろな倒し方を実践して
いる。

数をこなすので魔法の発動も手馴れてきているが、何かパワーアッ
プや新技を編み出せないかと試行錯誤している。

レイピアまで進化した魔剣バルザードの更なる強化を試みた。

レイピアを更に限界まで伸ばして、槍並みに長くしてみた。ただし
体積の問題で針の様に細い。細くてもなんとかならないかやってみ
たが、流石に細すぎたようでポツキリ折れてしまった。

次はかなり疲労するがバルザードに『ウォーターボール』の重ね掛
けしてみた。結論から言うと3回までは重ね掛けすることができ、
槍並みに伸ばすことに成功した。しかし、2発目以降を唱えて定着
させるのに1発でおよそ2秒程かかるので3発目を定着させたタイ
ミングでは有効な残り時間が1.5秒程度まで減少してしまい、MP
はもちろん3発分減ってしまう。極めつけは重ね掛けは、連射と違
い、極端に精神力を削られた感があり、実用化はかなりハードルが
高い。

『ウォーターボール』の強化にも再度取り組んでみたが、殆ど効果
はなかった。

一種類だけ変わり種としてウォーターボールをシールドのように出
現させることに成功した。

ただしこれも体積の問題で兎に角薄い。薄い氷の膜が張っている感

じで、あまり強固ではないが飛ばすことが出来るので、何かの時に役に立つかもしれない。スライムの攻撃を一発程度なら防ぐことができた。

色々やってみたが、現在のスキルやレベルではここまですが限界だった。

いつの日か新たにスキルや魔法を得ることが出来たらもう少しなんとかなるかもしれないが、今出来る事を最大限活かして頑張るしかない。

とりあえずMPの限界まで練習を重ねながらスライムを倒していたせいで、3時間で10個程度の魔核しか取れなかったが、とにかく今は修練が必要だと言い聞かせて3日間頑張った結果45個の魔核を得ることができた。これで何とか週末を迎えることができそうだ。

木曜日の放課後になったのでシルとルシエを伴って8階層に潜っている。

今日はルシエにプレゼントを買ってきた。

「ルシエ、これ俺とお揃いのだけどプレゼントだ。」

「えっ？こんなもの着れるわけないだろ。バカじゃないのか。絶対無理。」

「いやいや、この前話しただろ。溺れたら大変だからな。わざわざ買ってきたんだから着てくれよ。」

「悪魔がこんなもの着られるわけないだろ。そもそも溺れそうになったら送還してくれればいいだけだろ。」

「いやいや、俺も溺れてたり戦っていると送還できない場合もあるかもしれないだろ。絶対ルシエに似合うと思うんだよ。」

「こんなの似合いたくない。いやだ〜。」

「ル〜シエ。主人の俺が着てるんだ。お前もお揃いだからな。今日から8階層では必着な。」

「う〜。ださい。」

「何か言ったか？」

「わかったよ。着ればいいんだろ。」

俺はルシエが泳げないのを聞いて直ぐに子供用のライフジャケットを購入しておいたのだ。大人用と違って3980円で買ったのでまさに小さな出費で大きな安心だ。

デザインは俺とお揃いのにしておいたので、結構いい感じだ。

その後、何回か戦闘をこなしているが特に変わった事も無く順調に探索を進めている。このペースで進むと、9階層への階段まで明日ぐらいにはマッピングし終わってしまうと思われるが、実力的にはもう少し8階層で修練を積んだ方がいい気がする。

「ご主人様、向こうの水辺に3体のモンスター反応があります。気をつけてくださいね。」

探索を続けていると徐々に巨大カバが出現した。しかも3体なので徐々に増えてきた気がする。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。2体は俺が受け持つからルシエ、残りの1体を『破滅の獄炎』で頼む。」

そう指示をしてから、俺は新技を試してみることにした。『鉄壁の乙女』に守られた状態からじゃないと、ちょっと試す勇気がなかった。

「ウォーターボール」

「ウォー

ターボール」

「ウォーターボール」

うつつ。やっぱりかなりきついな。MPが減るのは別に頭痛と表現しづらい精神の磨耗を感じる。

苦痛を我慢して突進してきているカバ1体に向けて魔氷槍？を突き出す。

あくまでもバルザードの先が伸びただけなので剣は剣なのだが、3M近く長さがあるので魔氷槍と呼ぶ事にする。実際には釣り竿が一番近い気もするが魔氷竿では流石にきびしい。突き出した瞬間カバにしっかりと刺さり、そのまま進んで来ようとするので破裂のイメージで爆散させる。

「ボフウン」

長くなってもバルザードの性能はしっかりと発揮された。

そのまま『鉄壁の乙女』にぶつかってきた个体めがけて魔氷槍を突き出す。

長さがあるので細かな動きには向いていないがカバのような直線的な動きをするモンスターにはかなり相性がいいようだ。スツと刺さった氷槍でそのまま爆散させる。

「ふーっ」

かなりきつかったが、実践でうまくいった。今回は3回の重ねかけ

を試したが、『鉄壁の乙女』があれば、2回の重ねがけの短槍バー
ジヨンの方が負担も少なくて有効かもしれない。明日試してみよう。

「ご主人様、うまくいきましたね。また強くなったみたいでシルは
嬉しいです。あとお腹が空いたので魔核をお願いします。」

「わたしもお腹すいたからな。ちょっとくれよ。まあ魔剣の長いのは、
それなりに良かったんじゃないか。ほら早くくれ。」

2人共褒めてくれているようだ。疲れてはいるが褒められて気分が
いいので1個余分に魔核を渡すことにした。

第105話 ブロンズランク

俺は今ギルドに来ている。

金曜日の放課後だがダンジョンに潜る前にランクアップの申請に来たのだ。

これで3度目のランクアップとなる。次はなんとブロンズランクだ。オリンピックだと3位表彰台だ。

もちろん、ギルドのランクに表彰台制度もなければ3位でもないのだが、気分的にはそのくらい嬉しい。

「高木海斗さま」

いつものように手続きの窓口の人に呼ばれた。

「はい」

「高木様ブロンズランクへのランクアップおめでとございます。こちらが新しい識別票になります。」

新しい識別票はブロンズ製でちょっとカッコいい。

「それではブロンズランクの特典ですが、まずダンジョンマートの買い物の一部の商品を除いて7パーセント割引となります。そして新しい識別票にはクレジット機能が付与されており10万円迄の買い物で決済する事が出来るようになっていきます。引き落としは翌月末に登録口座に請求されます。そしてブロンズランクより、ギルド主催のレイドイベント及び遠征イベントに所属パーティ単位での参加が可能となります。」

「質問いいですか？イベントなんですけど他のパーティーメンバーがアイアンランクの場合はどうなりますか？」

「ブロンズランク以上のメンバーが1名以上いる場合は全員参加可能です。ただしブロンズランクですと難易度によって参加できるイベントは限定されますのでご注意ください。」

「イベントはどうやって知ることができますか？」

「あちらの掲示板に告知が出ますので定期的に見て頂けると助かります。」

「わかりました。ありがとうございます。」

俺はこの日晴れてブロンズランクの探索者となった。

特典については初めて知ったが、クレジットカードを作ったことが無いので、クレジット機能がついたことで、ちょっと大人に近づいた気がして地味に嬉しい。

それにしても、レイドイベントや遠征イベントがあるとは知らなかった。ブロンズランクなので最低限のイベントにしか参加できないのだと思うが、単純に楽しみで仕方がない。

パーティーメンバーにも相談してみようかな。

登録に時間を要したので急いで8階層に潜る事にする。

しばらくウロウロ探索していると、この階層でおなじみとなってきたウーパールーパーが2体出現した。

最初の頃はあれほど気持ちが悪いと思っていた風貌だったが、見慣れてきたのか、子供の頃の気持ちを刺激されたのか妙に愛くるしいと感じるようになってきた。もちろん容赦はできないが。

「ルシエは待機していてくれ。シル、右側の奴に『神の雷撃』を頼む。俺は左側の奴を倒す。」

「ウォーターボール」

「ウォーターボール」

魔氷短槍バージョンを試してみようと2回連続で『ウォーターボール』を発動するが、数秒間動けなくなる。

動きの鈍いウーパールーパーだが、動けない数秒間でかなり距離を詰められてしまった。ウーパールーパーでこれなら素早いモンスター相手ではかなり距離を取らないと危ないな。3連発ほどではないが負担もかなりある。

溶解液に気をつけながらウーパールーパーに向かって短槍を突き出す。

長さがあるので少し扱いづらいが、結構あっさり刺さって仕留めることができた。やはり射程が長いとそれだけで有用だが、疲労感とコストを考えると、当面は実践で使うことはなさそうだ。

申請でロスした時間を取り戻す為、急ピッチで探索を進める。

途中、魚群等のモンスターにも遭遇したが、順調に撃退し、遂に9階層への階段まで到達する事が出来た。

この階段を降りれば9階層だが俺にはまだ早いので一旦お預けだ。

K-12のメンバーと8階層の探索を難なくこなせるようになったら9階層へ挑もうと思う。

本当は少しだけ覗いてみたい。

第106話 カバ コロニー

俺は今、8階層に潜っている。

「みんな、実は俺ブロンズランクになったんだ。それで、レイドとか遠征イベントに参加できるようになったんだけどパーティーでの参加ができるみたいなんだけど、どう思う？」

「え？海斗ってBP60もあるの？そんなに強かったんだ。一緒に戦っても全然そんな感じじゃないのに、人は見かけによらないのね。私よりもBP低いと思い込んでた。」

ミクさん、心の声が聞こえてますよ。別に本当の事なのでいいけど。

「うん。強いってなんだろうか。BPは強さを表すのではないのか？ブロンズランクか、こそつと識別票を交換できないだろうか？」

あいりさん、そんなキャラでしたっけ？心の声が・・・

「ブロンズランクですね。やりましたね。10円玉と同じなのです。すごいです」

「ありがとう。」

10円玉と同じ。確かに間違いではないが。

「でも、パーティーで参加できるのがいいね。レイドとかゲームみたいだし参加してみたいな。」

「そうだな。楽しみではあるな。識別票売ってくれないだろうか・・・」

あいらさん・・・

「変な人が寄って来ないなら参加してみたいのです。変な人がいっぱいだったら難しいのです。」

「俺も参加した事がないのでよくわかりませんが、機会があればイベントをしっかりと選んで参加してみましようか。」

ブロンズランクの報告も終わり、探索を続けているとスナッチが

「ミュー、ミュー、ミュー、ミュー、ミュー、ミュー」

なんだ？今までで一番反応している気がする。

「みんな、多分魚群だと思うけど、スナッチの反応が今までと違うから注意して。」

水面を全員で見ていると、遂に現れてしまった。

このパーティではまだ出現したことが無かった、巨大カバのモンスター。しかも1体では無く、10体以上はいる。

やばい。

カバが出てくる可能性も群れで出現する可能性も想定はしていたが、本当に出られると、魚群の群れの比ではない。大きさも、威圧感も桁違いだ。

カバと戦った事があるのも俺だけなので、とにかく冷静に指示を出すしかない。

俺は既に50発撃ち尽くしたというのに何故か他の3人は未だ魔核銃での連射を続けている。

俺だけ攻撃のペースは落ちてしまったが、他のメンバーは弾幕を張り続けており、みるみるうちにカバが消滅していく。

気がつくともう10匹いたカバの群れが、俺の攻撃している1体だけになっってしまった。

他のメンバーの集中砲火を浴びて、そのカバもあっという間に消滅してしまった。

「みんな魔核銃買ったんですね。」

「ああ、父に頼んだらすぐに買ってくれたんだ。」

「パパにお願いしたら、その日のうちに買ってくれたのです。」

「ああ・・・そう。そうだよ。今回は本当に助かったよ。魔核銃が無かったらやばかったよ。でも俺50発撃ったんだけど、みんなは弾切れしなかったよ。」

「ああ、キリがいいから購入時にマガジン10個つけてもらったんだ。」

「私も」

「私もです。」

「ああ。そうね。女の子だもんね。可愛い娘さんのためなら10個でも100個でも買ってくれるよね。」

ここでも金の力に負けてしまった。いや、バトルには勝ったので本
当に良かったが、俺の弱い心が負けてしまいそうだ。いつかお金の
力に負けない強い心を手に入れたい。

第106話 カバ コロニー（後書き）

第107話 先週の出来事(前書き)

第107話 先週の出来事

俺は今映画館にきている。

しかも一人ではなく春香と一緒に来ている。

ずぶ濡れでダンジョンを引き上げた俺は、家でシャワーを浴びてから、気分転換に映画を観に行こうとショッピングセンターへと一人で繰り出した。

映画館に行こうとしていた最中に偶然、春香に出会ったのだ。

春香は日曜日に両親と買い物に来ているようだった。

「あ、海斗。一人で何してるの？買い物にでもきたのかな？」

「いや、ダンジョンに潜ってたんだけど、ちょっと色々あって午前中で終わったから、気分転換に映画でも見ようかと思って。」

「海斗。映画ならこの前、私を誘ってって言ったでしょ。」

「あ。でもあれは社交……」

そこまで言葉を発しかけて俺の口は言葉を発するのを拒否した。また、気温が下がってきている。うっすらと氷原が見えてきた。

「いや、突然、思いついた事だから、春香は忙しいと思って。いや、残念だな。」

「ちょっと待っててね。」

そう言うと春香は電話をかけ始めた。

「うん、そう。じゃあ夕方をお願いね。」「これで大丈夫。」

「大丈夫って何が？」

「お父さんとお母さんに夕方まで海斗と遊ぶの伝えといたから。一緒に映画見ようよ。」

「お父さんと、お母さん……。そう、じゃあ一緒に見ようか。」

「うん。」

なぜか気温が上昇してポカポカあったかい。なんか眠くなりそうな陽気だ。シヨツピングモールなので空調は万全だと思うのだが。

映画館まで来たので春香に見たい映画があるか聞いてみる。

「俺、突然思いついたから映画調べてないんだ、何か見たい映画ある？」

「それじゃあ、ポセイドニック観たいな。アジア超大作なんだよ。見たかったんだ。」

「じゃあそれを観ようか。」

開演もすぐだったのでそのまま内容も確かめずにチケットを購入して映画の座席についたが、座席について開演を待っていると、猛烈な腹痛が襲ってきた。うっ。なんだ！？

「開演までまだちょっとあるからトイレに行ってくるよ。」

平静を装いながらトイレに直行したが、トイレについてシートに座った途端、決壊して水難事故の様相を呈してしまった。今日の朝まで全く健康体だったはずなのに、この経験したことのないような腹痛と排出量はなんだ？これはもしかして、あれか。ダンジョンで溺れかけたせいだ。ダンジョンで溺れかけて、水をしこたま飲んだ。死ぬかと思うぐらいに飲んだ。あの水が原因か、なんか悪い物でも含まれてたのか。ううっ。

やはり俺は水場が嫌いだ。相性が悪すぎる。お腹が痛い・・・10分ほど籠っていると全部排出され切ったのか、ようやく腹痛も治った。ちよつと生気が失われた気がするがなんとか復活できたので急いで座席に戻った。

「海斗、大丈夫？お腹痛いの？」

「え。全然大丈夫だよ。映画始まるよ、楽しみだな。」

春香が心配してくれているようだったが、タイミングよく映画が始まったので、スルーしておいた。

映画を見始めたが、ちよつと後悔している。どこかで聞いたことがあるようなタイトルに気がつくべきだった。

確かに超大作と言うにふさわしいスケールで、船の中でのラブロマンスを描いているのだが、主人公の周りの人たちが次々に水難事故で死んでいってしまうのだ。

ストーリーは凄くいいし、キャストも俺でも知っているような有名な人ばかりでている。

しかし、このタイミングで水難事故多発映画とは・・・海の中で溺れる様子も丁寧に描かれており、俺のメンタルが悲鳴を上げている。今日の出来事が思い出される。

映画のような劇画チックな溺れ方ではなかったかもしれないが、ス

クリーンの中の人たちと自分が重なる。

一体この映画、何回追憶体験させる気なんだ。俺個人に対する嫌がらせのために作ったのだろうか？

2時間50分にも及ぶ大作映画がようやく終わりを迎え

「すつごく楽しかったね。主人公達も最後に結ばれて感動しちゃったね。」

「ああ。そうね。よかったよね。うん。すごく良かった。うん。」

ちょっと青白い顔になりながらも、春香を悲しませるわけにはいかない。

「いや最高だったよね。溺れる演技も真に迫ってたし、素晴らしかったよ。」

会心のアルカイツクスマイルで感想を述べる事ができた。

「今度は、本当に映画行くときには誘ってね。」

一瞬、得体の知れない圧を感じたがきつと気のせいだろう。しかし春香は本当に映画が好きなようだ。今度は水難系以外で誘ってみようかな。

笑顔で別れてから家に帰って、ご飯を食べたらまたお腹が痛くなってしまうので、トイレに籠ってから寝ることにした。

第108話 ダイナソーパニック

俺は8階層を進んでいる。

正直先ほどのカバの集団には肝が冷えたが、無傷で切り抜ける事が出来て本当に良かった。

消費したバレットを再充填して、奥に向かって歩き出している。

「この魔核銃、初めて使ったんですけど、便利ですね。魔法より手軽で早いです。」

「ああ、私も今まで遠距離攻撃では何も出来なかったから、本当に素晴らしいな。」

みんな、初めてでうますぎるよ。

探索を再開してすぐに次の反応があった。

「ミュー、ミュー」

「みんな通常のモンスターの様だけど、気を抜かずに行くよ。」

水面から現れたのは、最近お馴染みのウーパーパー型モンスター2匹だった。

指示を出そうとした瞬間

「ッップシュ」「ッッ
「ッップシュ」「ッ」

「あっ」

終わってしまった。俺が指示を出す前に、3人とスナッチの攻撃が的確にモンスターを捉えて撃退してしまった。この子たちは一体・

「まあ、あつさり片付けられて良かったよ。今度から数が少ない場合は、指示がなくてもさつきみたいに片付けてしまおうか。うん。ははは。」

やはり、魔核銃により素晴らしく火力アップしており、今までよりも簡単にモンスターを倒すことができているので、案外9階層へも早く行けるかもしれない。

そう思いながら探索を再開したが90分ほど歩いているが、全く反応が無い。

スムーズに進めていると言えば進めているのだが、今までこんなに長時間モンスターに遭遇しなかったのは初めてかもしれない。小心者のせいかな、普段と違う状況に少し不安を覚える。

「結構歩いてるのにモンスター出ないな。なんか大丈夫かな。」

「心配症だな。順調に進めているんだから、問題ないだろう。」

「まあ、そうですね。進めるだけ進んでみましょうか。」

それからさらに30分程歩いたが全くモンスターに遭遇しない。

「やっぱり、ちょっとおかしくありませんか。そろそろ引き返しましょうか。」

「モンスター出ない方が進めていいじゃない。もうちょっと進んで

みましようよ。」

「うん。それじゃあ、あと少し進んだら戻ろうか。」

それからまた15分ほど歩いた時だった

「ミュー、ミュー、ミュー、ミュー、ミュー、ミュー、ミュー、ミュー」

カバの大群か？でもカバの時より明らかにスナッチが騒いでいる。なんだ？

「みんな、カバかもしれないがよくわからない。とにかく距離をとって集中して。」

俺は今ままで一番の緊張感を持って水面を注視する。

「ズザザザザー」

「なっ!？」

爆発ではなく山が出現したかのように水面が盛り上がり、現れてしまった。

恐竜だ。しかも3体。おまけにこの前のよりもでかい。種類も違うように表面が鎧のような皮膚を纏っている。

やばい、やばすぎる。

に、逃げないといけないが、この3体から逃げることができるか？現れた恐竜はおよそ体高が15M以上あり、ちょっとしたビルぐらいある。これでもしカバ並みに機動力があればどう考えても逃げられない。

「みんな。後ろに下がりながら逃げよう。しんがりは俺がやるから、早く逃げよう。」

??反応がない。

不思議に思い視線を横に向けると、3人ともがあっけにとられた顔で停止してしまっている。

無理もない。現実世界ではあり得ない、サイズ、しかも恐竜。ビビるなという方が無理があるが、今はなんとか再起動してもらっしかない。

「あいりさん、ミク、ヒカリン、ここでしっかりしないと、冗談抜きで死ぬぞ！逃げるぞ！聞いているのか？」

「ああ。」

「うつつ。」

「はわわ。」

一応反応があっただが、かろうじてまともな反応を示したのはあいりさんだけだ。後の2人は、返事こそあるものの、硬直状態から脱していない。

このままでは4人で逃げる事はままならない。どうする。どうすればいい。

考えをまとめる間も無く、3体の恐竜が地響きをたてながら、近づいて来ようとしていた。

第109話 召喚

俺は今恐竜から逃げようとしている。

目の前に巨大という言葉では足りない大きさの恐竜が3体いる。どうにか逃げないといけないがミクとヒカリンが硬直して動けなくなっている。

「あいらさん、1人で逃げてください。」

「いや、それは・・・」

「全滅する訳にいきません。ギルドへの報告も必要です。とにかく先に逃げてください。俺が援護します。」

慎重に恐竜の方を見ながら、あいらさんに逃げるように促す。

「わかった。すまない。」

あいらさんが後ずさりながら後退していく。

恐竜もまだ3人と1匹が残っているせいか特に気にした様子も無い。俺は魔核銃を構えたまま恐竜3体に意識を集中する。

3体ともゆっくりとこちらに近づいてくるが、圧が半端ない。

あいらさんの姿は既に見えなくなっているので、無傷で1人離脱することに成功したようだ。

「ミク、ヒカリン、動けそうか？」

「む、むり。腰が、腰が抜けて動けない。」

「わ、わたしも無理なのです。」

3人一緒に逃げるのは不可能だな。

「プシュ」「プシュ」「プシュ」

とにかく魔核銃を1体に向けて連射してみるが、ほとんど効果が無いのか、反応が薄い。

バルザードを構えて

「ウォーターボール」

「ウオ

ーボール」

「ウォーター

ーボール」

魔氷竿 いや 魔氷槍を出現させた。

使用時間に余裕がないので、こちらから向かって行き、踏み潰されないようにだけ注意しながら大回りで側面にたどり着き、突き刺したがほとんど効果が無いようなので、そのまま破裂のイメージを重ねる。

「ボフウン」

「グギィギヤー」

バルザードは役目をしっかりと果たして1m範囲程度を吹き飛ばす事に成功し、そのまま使用制限の残り四発の連撃を加えた。

「グルウギヤー、グギギヤー、グガユシヤー！」

爆音とも言えるほどの恐竜の咆哮がこだまして、地響きを立てて暴れまくりはじめた。

あまりの動きに近づくことができない。

5連撃でかなりの深手は負わせたが、あまりに巨大すぎて、致命傷には程遠い。

そもそも魔氷槍はかなり負荷が掛かるし、この状態で再度発動する事は危険すぎる。

万策尽きた。

これ以上は俺にはどうしようもない上に、2人をこれ以上危険に晒すことはできない。

俺は覚悟を決めた。

サーバントカードをとり出して

「シルフィー召喚。

ルシエリア召喚。」

「ご主人様、急にどうされたのですか？」

「おい、どうしたんだよ。なんかあったのか？」

「急に喚び出してすまない。あれを頼む、俺じゃ無理だったんだ。」

「なんだあのデカブツは？前のよりでかいじゃないか。しかも3体か。」

「ご主人様に危害を加えるとは許せませんね。天罰を与えますね。」

俺は急いでミクとヒカリンの元に走って戻り、危害が及ばないよう前に陣取り、魔核銃を構える。

「か、かいと。あ、あれって何？天使？サーバントなの？あんな小さな子大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。俺のサーバントなんだ。あんな恐竜相手にならないから。」

「か、かいとさん。サーバント2体もいたのですか。しかも幼女じゃないですか」

「黙っていてすまない。俺のサーバントは最強なんだ。見た目は幼女だけど神と悪魔だから恐竜なんか問題にならないから安心して大丈夫だよ。」

『神の雷撃』 『破滅の獄炎』 『神の雷撃』 『破滅の獄炎』
『神の雷撃』 『破滅の獄炎』 『神の雷撃』 『破滅の獄炎』

シルとルシエが恐竜相手にスキルコンボを連発している。

『ズガガガガン』 『グヴオージュオー』

いつもの爆音を発しながら、恐竜を殲滅して行く。

最初に俺がダメージを与えていた恐竜が消滅したが、2対2になった時点で勝敗は決まったようなものだった。

「天罰です。早く消えてしまいなさい。」

「さっさと地獄へ行けよ。このデカブツ。」

シルとルシエも少しモンスターに怒っているのかテンション高めで殲滅に努めている。

全部で7発づつスキルを放った時点で3体目の恐竜も消失した。
さすがに巨大な恐竜だけあって、2人の火力をもつてしても1発で
仕留めることは出来なかったが、とにかくみんな無事で良かった。

第110話 邂逅

俺は今8階層で恐竜の消失を見届けている。

最後の1匹を仕留めたシルとルシエが俺の元に戻ってきた。

「そちらの方達はどなたでしょうか？」

「え？いやパーティ・・・」

「キヤーかわいいー。助けてくれてありがとう。うわぁー、羽が生えてる。すごいかわいいー。」

「可愛いのです。黒髪が可愛すぎます。闇幼女。可愛すぎるのです。きゃー。触りたいー。」

ミクさんヒカリン、2人ともキャラが崩壊気味ですよ。

「イヤァー。天使？天使なの？本物だね。キヤー。触っていい？いいよね。」

「悪魔なのですよね。悪魔って可愛い。うー。うちに来ませんか？可愛い上に強すぎです。」

「ご主人様・・・この方達は・・・」

「名前教えて。名前。」

「えっと、シルフィーです。」

「キヤー。かわいい。名前までかわいい。シルフィーちゃん。いえシルフィーさま？ハグしてもいい？ハグ」

「えーと・・・」

「いいよね。助けてくれてありがとう。うーんふわふわで気持ちいい。いい匂い。天使に初めて会っちゃった。」

「ミク、シルは天使じゃなくてバルキリー、半神なんだけど。」

「きゃー。神様。神様なの？私神様に救われちゃったの？神様ってこんなに可愛いのか？さすが神さま」

「名前を教えて欲しいのです。」

「ルシエリアだけど。」

「名前が素敵です。悪魔なのですよね。悪魔ってこんなに可愛いんですね。きゃーっ。触ってもいいですよね？」

「えっ？おい・・・」

「うーん。可愛いです。髪も、お肌もすべすべなのです。救って頂いてありがとうございます。悪魔って階級があるのですよね。」

「ああ、ルシエは子爵級悪魔なんだ。」

「きゃー。子爵様。貴族様なのです。悪魔貴族様、素敵です。うーん悪魔様いい匂いなのです。」

なんだこの状況は？助かったのは本当に良かったが、ミクとヒカリンがおかしくなっちゃった。

腰が抜けて動けないほどの状況で、シルとルシエに救われたのだから、わからなくはない、わからなくはないが、やっぱり変になってしまったようだ。

「シルフィー様。海斗にシルって呼ばれてるんですね。シル様って呼んでいいですか？いいですよね。」

「え、ええ、べつに構いませんよ。」

「きゃー。シル様優しい。優しくて、可愛くて、強くて、もう離したくない。」

「ご、ご主人さま・・・」

「ルシエリア様は海斗さんにルシエと呼ばれてるのですよね。ルシエ様とお呼びしてもいいですか？ルシエ様。」

「あ、ああべつにいいけど。」

「きゃー。素敵です。さすが子爵様。ルシエ様最高なのです。」

2人ともキャラがおかしくなりすぎですよ。

「2人ともそろそろ落ち着いて。あいりさんを一人で行かせてしまったから、追いかけていんだけどいいかな。」

「あいりさんにも早く紹介しなきゃ。絶対、感動すると思うから。」

「ああ、そう。」

急いであいりさんの後を追ったからすぐに再会することができた。

「本当に無事でよかった。一人で逃げるように言われたが、心配でみんなが来るのを待っていたんだ。ところでその2人はいったい？」

「あいりさん。聞いてください。神様なんです。命の恩人なんです。可愛いんです。」

「あいりさん。悪魔なのです。子爵様なのです。命の恩人なのです。可愛いのです。」

「海斗、これはいったい・・・」

「あのですね。2人は俺のサーバントなんですけど、こっちがシルフィーで半神、そっちがルシエリアで子爵級悪魔なんです。あの後召喚して助けてもらったんですよ。」

「半神、悪魔。海斗そんなにすごいサーバントを従えていたのか。しかもあの場面を救ってくれるとはとんでもなく強いと言う事だな。」

「そうなんです。シル様もルシエ様も強すぎるんです。最高なんです。可愛いんです。」

「確かに2人とも可愛いが、シル様、ルシエ様というのは？」

「お願いしてそう呼ばせてもらうことに決めたのです。」

「そうか。私もそう呼ばせてもらってもいいだろうか。私が何もできなかつたあの場を救ってもらったのだから、私にとっても恩人だ。シル様、ルシエ様。ああ、なんて可愛い」

「なんだ？あいらさんまでおかしくなってる。」

「もしかして、シルとルシエには人を惑わす特殊スキルでもあるのか？とりあえず今日はもう帰ろう。」

第111 帰還

俺は今7階層を歩いている。

8階層での恐竜との戦闘を経て、4人とサーバント3体で帰路についているところだ。

無事に帰ってきているのはいいのだがちょっと様子がおかしい。

なぜか、あいりさんが真ん中でシルとルシエが左右、そしてシル側にミク、ルシエ側にヒカリンが横並びになって手をつないで、歩いている。

俺とスナッチが一緒に後ろからついて行っている。

一体これは何だろう？

後ろから見ると一見、幼女をお姉さん達が面倒を見てお散歩にでも行っているような風景だが、これは明らかに違う。

ダンジョンなのに手つなぎで後ろから見ても3人から幸せオーラが滲み出ている。

ただしちよつと異様な感じなので思うところはあるが口出しできない。

ピクニックか何かと勘違いするような状況のままなんとか地上まで戻ってることができた。

「海斗、ずっと怪しいと思ってたけど、あんな2人を隠してるなんて、ちよつと酷くない？」

「ごめん。ちよつと言い出しづらくて。」

「じゃあ今後はずっと、ご一緒できるのよね。」

「いや、それなんだけど、シルとルシエはちよつと目立つし、強す

ぎてみんなのスキルアップにはなかなか繋がらないから、難易度が
高い時だけ喚ぼうと思うんだ。」

「え〜っ。ずっと一緒に良い。シル様と一緒に良い。絶対それが
いい。良かったらいい。」

ミクさんキャラが完全崩壊してますよ。ただの駄々っ子になってる。

「気持ちはわかる。わかるけど、俺を見てくれ。半年ぐらい前まで
ずっとLV3だったんだ。それがシルとルシエに出会って急速にレ
ベルアップしてBP60にもなったけど、こんな感じなんだよ。自
分なりには頑張ってるけど、本当の意味での強さは足りないんだ。
だからみんなにはそうはなって欲しくないから。もちろんこれから
は、難易度が高い場合は早めにシルとルシエを喚ぶから今までより
スムーズに探索は進むと思うから。」

「うー。わかったわよ。じゃあ、早く難しい所に行きましょう。」

「早く9階層に行くのです。」

「私も早くシル様とルシエ様の勇姿が見たい。」

みんな、言ってることがおかしいですよ。本末転倒とはこの事じゃ
ないだろうか。まあやる気になってくれたと思えばいいのか？

「とりあえず、魔核の売却と報告にギルドに行こうと思うんだけど
大丈夫かな？」

「ギルドに報告ね。そうねそれがいいわね。」

「お願いがあるんだけどシルとルシエの事は内緒にして欲しいんだけど。」

「当たり前じゃない。ルシエ様もシル様も私達だけのものなんだから。」

「そうです。当たり前なのです。」

「うん。それがいい」

いや、シルもルシエも俺のサーバントなんだけど。まあいいけど。

そのままギルドに行つて、日番谷さんの列に4人で並んだ。

「すみません。魔核の買取お願いします。」

カバの魔核10個と恐竜の魔核3個を取り出し並べた。

「高木様。この魔核は一体？」

カバの魔核はともかく、恐竜の魔核は前回よりも更に大きく、女の子の拳大ほどもあった。

「いや、パーティで8階層を探索していたんですけど、前回より大きい恐竜みたいなのが3体同時に現れたんですよ。前回のより大きくて鎧みたいな外皮をしたやつでした。」

「パーティの皆様、先ほどの話は本当でしょうか？」

「はい。間違いないです。」

「うーん。本当だとは思いますが信じられません。前回の1体だけでもイレギュラー中のイレギュラーだったのですが、更に大きい個体が3体も出現するとは。それにしても魔核をお持ちになったと言ふ事は、撃退されたのですか？」

「ああ、もうほんとうにやばかったんですけど、全員で協力して命からがらって感じてなんとか倒せたんですよ。ほんとうにやばかったですよ。ははは。なあみんな」

「えっ？そうです。そうなのです。間違いないのです。死ぬかと思いました。」

「そうなんですネ。本当にご無事で何よりです。通常ですとこのレベルのモンスターはゴールドランク以上相当かもしれません。もしかしたら皆様のパーティのポテンシャルは素晴らしいものがあるのかもしれません。とにかく上司に確認して来ますので、お待ちください。」

そう言っただ番谷さんは奥の部屋に消えていった。

第112話 リザルト

俺は今ギルドのソファアに座っている。

日番谷さんが奥の部屋に消えてから既に10分は経過している。

何かあったのだろうか？

する事もないのでボーツとしながら4人で待っているとようやく日番谷さんがやってきたが、前回同様再度ヒアリングされた。

ヒアリング中、上司の人の顔がどんどん険しくなつて、最後ドラマの凶悪犯の様な顔に変化しており、正直ちよつと怖かった。

前回同様に原因は分からないもののさすがに2回目しかも3体出現したとあつて、ギルドでも探索者に向けて注意喚起を行うとの事だった。

なぜか他に同様の報告は無いようで、ますます俺のLUCKが探索者最低レベルの可能性が増した気がする。

とにかく魔核の買取は通常通り行ってもらえ、なんとカバの魔核が1個7000円×10個で70000円 恐竜分に至っては1個20万円の3個で60万円にもなつてしまった。

4人で分配しようとしたが、3人から何もしていないからと頑なに辞退されてしまい、恐竜分は俺が貰いカバ分を3人で分ける事となった。

前回同様ヒアリングの手当てが支給されたものの4人で前回と同じ1万円だけ支給された。

恐竜3体から全員無傷で帰還できたので、それだけでも言うことは無いのだが、1日で602500円も手に入ってしまった。やはり深層階で活動している人たちの稼ぎはもの凄い事になっているのだと思ひ知つた。

今回の件で、シルとルシエの事をパーティメンバーに知られてしま

つたが、メンバーの反応は当初想像していたものとは全く違い、可愛いを連発している。もはや信者かと思えるぐらいの懐き具合で正直ちょっと引いてしまった。

特殊な環境での出会いが、キャラ崩壊を招くほどのインパクトを与えたのだろう。いずれにしても、幼女使いの変態とは見られていないようで、ひと安心だ。

シルとルシエも戸惑ってはいたようだが、満更でもないように見えるので敢えて触れないようにしようと思う。流石に明日はお休みという事にして解散をした。

日曜日になり俺は、ダンジョンに潜っている。

家にもすることがないので、ダンジョンに来てしまった。シルとルシエとで8階層に潜っている。

「シル、昨日の3人どう思う？やっぱり女だったな。」

「私も最初頭にきたので、問い詰めようとしたんですけど」

「あれじゃあなあ。」

「あの3人に圧倒されてしまったのです。お話しする間もなく詰め寄られてどうしようもなかったのですよね。」

「わたしの方もおんなじだな。あの3人の勢いに押されてしまった感があるな。まあ悪い奴らではなさそうだな。」

「そうですね。あれだけ好意を向けられて嫌な気はしないのですよね。」

「私の事も怖がってないみたいだしな。なんかベタベタ触ってきて

馴れ馴れしいけど、まあわたしの魅力に気がついていようだからいい奴等だと思っな。」

「ご主人様が、あんな感じなので、あの反応は新鮮でしたね。ご主人様もあんな感じになってくれればいいのに。でもあれだけ可愛いと言われて反応に困りますね。でもいい方達の方ですな。」

「そうだよな。なんかピクニックみたいで楽しかったしな。」

「まあ、あの方達であればこれからもうまくやっていけると思っのですよね。あまりご主人様にも興味がなさそうですし。」

「そうだな、あいつにはあんまり興味がある感じじゃなかったな。やっぱりあいつがそんなにモテるはずないと思っただけど、思った通りだったな。」

またシルとルシェがコソコソ密談している。最近このコソコソにも慣れてきてしまった感がある。気にしても仕方がないのでとにかくスルーしておくのが一番良い。

第113話 ドロップアイテム

俺は今8階層に潜っている。

先週は危なかったが、結果としてかなりの大金が入ったのでちょっと嬉しい。

おまけにシルとルシエの機嫌も思ったよりもかなりいいように見えるのでパーティメンバーの事も気に入ってくれたようだ。

お金は手に入ったが、魔核は増えて無いので今週はずっと1階層でスライム狩りに励んでいた。お陰で5日間で200個近くの魔核を手に入れることができたので、当分は余裕を持って探索できるだろう。

土曜日になりまたパーティメンバーで集まって8階層に挑戦する事になった。

「ねえ、早くシル様を喚んでよ。」

「ルシエ様も喚んでください。」

「お二方とも早くお会いしたい。」

「いやいや、先週言ったでしょ。極力自力で頑張るって。危なくなったらすぐに喚ぶから。それまではダメです。」

「え〜っ。ケチ」

いやケチとかそう言う問題じゃないんだけど。

ちよっと3人からの不満を買いながらも探索を開始した。

「キユー、キユー」

スナッチが反応したので臨戦態勢に入る。

出現したのはお馴染み感のあるウーパールーパー型が3体だった。パーティーメンバーも手馴れたもので出現と同時に魔核銃を一斉掃射してあっさりとかたがついた。

「ん？あれは、もしかして」

俺はウーパールーパー型のいた跡に、魔核以外のものが落ちているのを発見した。

これはもしかして念願のドロップアイテム。

「なあ、みんなあれってドロップアイテムだよな。」

「当たり前じゃない。それ以外にあんな物が落ちてるわけないですよ。」

「時々出るのですよ。海斗さんはあんまり見たことないのですか？」

「ああ、俺スライム以外からのドロップって初めてなんだよ。しかも通常のドロップアイテムって初めてかも。」

「スライムからしかドロップした事ないのか？そんな事聞いたこともないが。」

「海斗ってやっぱり普通じゃないのかも。」

ミクの失礼な発言はスルーしてドロップアイテムに意識を戻す。

地面に落ちているそれは白っぽい色合いで30cm角ぐらいの塊で、妙に生っぽい。

うーん。あれはもしかして・・・

「なあ、あれってもしかして」

「もしかなくてもモンスターの肉に決まってるでしょ。」

や、やっぱりそうか。あれが噂に聞くモンスター肉なのか。

しかし、今の戦闘でドロップしたという事は、もしかしてウーパールーパーの肉なのか？

そもそもウーパールーパーって食べれるのか？

あの風貌でこの白っぽい肉・・・

あまり食欲がそそられない。

「もしかして海斗ってモンスターの肉を見るのは、初めてなの？」

「いや、お店で売っているのは見たことあるんだけど、ドロップしたのを見るのは初めてなんだ。」

「モンスター肉って滅多に手に入らないから、結構希少だし、美味しいのよ。」

「モンスターの肉食べた事あるの？」

「パパが結構好きだから時々食べに行くのよ。」

「結構美味しいです。」

「私も好きだな。」

みんな食べた事あるのか。
しかし床に落ちていてこれがそんな美味しい物とは認識できない。
どうしてもウーパールーパーが思い浮かんで、抵抗感が発生する。
しかも生の状態で床に落ちてるし、これ食べるのか？いや売った方がいいんじゃないか？絶対売った方がいいな。

「海斗、今日ダンジョン終わったら行きつけのお店があるから調理してもらおうよ。」

「それがいいです。」

「うん。それはいい考えだな。」

3人とも食べる気なのですね。俺の感覚がおかしいのだろうか？やっぱり庶民と彼女達の住む世界が違うのか？食べるものまで違うのだろうか？

「あ、あのう。これって食べて大丈夫ですかね。お腹壊したり、毒があつたりしないですかね。そもそもウーパールーパーって食べれるんですかね。無理じゃないですかね。」

「何言ってるのよ。これはウーパールーパーじゃなくて、ウーパールーパー型のモンスターの肉なのよ。大丈夫に決まってるでしょ。初めてだったらきつと感動するわよ。ちょっと早めに切り上げてくださいましよう。決まりね。」

言ってることはわかる。これはあくまでもウーパールーパー型のモンスターの肉だ。ウーパールーパーではない。わかるのだが厳しい・

第114話 モンスターミート

俺は今高級フレンチの店にきている。

ウーパールーパーのモンスター肉がドロップした後、まず俺が困ったのは、この肉をどうやって持ち帰るかだ。このむき出しの生肉をどうやって持ち帰ればいいんだ。

「ミク、この肉どうやって持ち帰ればいいんだ？ いざとなったら俺のリュックに入れてもいいけど腐らないかな。」

「何言ってるのよ。マジックポーチに入れるに決まってるでしょ。マジックポーチの温度は一定だからすぐには傷まないんだから。」

ああ、マジックポーチですね。そんな便利なものがあるのをすっかり忘れていました。

マジックポーチに収められたモンスターの肉は、地上に出た後すぐにミクの行きつけの店に持ち込まれた。

「み、みくさん。ここですか。大丈夫ですかね？ 俺大丈夫ですか？ 入っても大丈夫ですかね？」

「当たり前じゃない。大丈夫よ。このオーナーさんとパパが友達だからよく来るのよ。」

連れてこられたのはTVでも見たことがある超高級フレンチの店だった。

ミクさんはよく来るんでしょうが、俺はこんな店来たことないよ。こういう店ってドレスコードとかあるんじゃないのか？ 俺、デニム

パンツにTシャツなんですけど。

緊張のまま個室に通されて、しばらく待っていると料理が運ばれてきた。

ナイフとフォークが大量に置かれている。使ったことはないが俺だつてこのぐらいは分かる。外から使つていけばいいんだ。

最初はアミューズというものが出てきた。アミューズって何だと思つたがなにやらビスケットのような物の上に野菜っぽいのがのつている。これをナイフとフォークで食べるのか？

ちよつと無理じゃないか？ちよつと格闘してみたが無理そうだったので手であつて一口で頬張つた。

うまい。なんか食べたことの無いソースがかかっているがうまい。次にオードブルが出てきた。

オードブルはわかるが正直アミューズとオードブルの違いがわからない。

こちらも、はまぐりのなんとか仕立てなんとか風味と言われたが良く聞き取れなかった。

小さいグラスに入っているのでこちらも一口で頬張る。

うまい。普段食べているあさりの味噌汁とはまた違った貝のうまさがある。

次に出てきたのはアスパラガスの冷製ポタージュ。

流石に聞いたことがある単語で構成されているので俺でも理解できたが、ポタージュといえばコーンポタージュしかイメージがなかったのだが、飲んでみると大人の味がした。多分おいしい。

次にメイン料理が出てきた。

ウーパールーパーのパイ包探索者風だ。

もう生肉の時の原型は見取れない。どこからどう見てもフレンチにしか見えない。言われなければ気付かず食べていたかもしれない。なのに名前はもつとどうにかならなかつたのだろうか？ダイレクトすぎないだろうか。

見た目と裏腹の名前に圧倒されてナイフとフォークが止まってしま

った。勇気が無い。
躊躇しているとメンバー3人がさっさと口をつけている。

「おいしいね。」

「うんおいしいのです。」

「うん。やっぱりモンスターの肉は格別だな。」

やっぱり食べれるらしい。

うん。ここまで来て食べないわけにいかない。

息を止めて口の中に運ぶ。これは鶏肉？いや白身の魚か？うまい。

白身魚のあっさりとした味わいとモンスターならではののしっかりとした食感、噛めば口の中に広がる、えもいわれぬ味わいと幸福感。

なんだこれ、うまい。ウーパールーパーってうまいのか？いやウーパールーパー型のモンスター肉だからうまいのかもしれない。今までに食べたことのない、まさにファンタジーな味わいだ。人間、現金なもので旨いとわかってしまえば、その後はなんともなく食べれてしまった。

その後はデザートのカークと紅茶が出てきて終了だった。

かなり満足感があったが、これでカジュアルコースらしい。フルコースってどれだけ料理が出てくるんだ？

本当に美味しかったが、食べ終わってから気がついてしまった。お金は一体いくらかかるんだ？

「ミクさん。お金っていくら必要なんですか？」

「え？残った肉を渡すことにしたからお金は必要ないわよ。」

無料、タダですか？

ちよつと冷や汗が出たが、結果つまさ倍増で大満足だった。今後、もし肉がドロップしたら一応どんな生き物でもトライしてみようかな。

第115話 2匹目のどじょう

俺は今8階層に潜っている。

日曜日なのでK-12のメンバーで潜っているが、昨日食べたモンスター肉の味が忘れられない。

ウーパールーパーであの味なのであれば、マグロや他の食材はいかほどの味なのだろうか？出来ることなら食してみたい。

しかし昨日ドロップアイテムとして肉を手に入れたが、スライム以外から手に入れた初めてのドロップアイテムだ。他のメンバーに聞いてもたまにドロップアイテムは出現するそうなので、やっぱり俺が特殊なのだろうか？通常モンスターからは今まで一度もドロップしていない。スライムからのみ、しかも超稀にレアドロップするだけ。スライムスレイヤーの称号の呪いでもかかっているのだろうか？なんとなくだが、今回の初ドロップも俺の力ではなく、パーティーメンバーのおかげな気がしている。口にしてしまうと確定事項のようになりそうで、怖くて口にはできない。

昨日はシルとルシエの出番がなかったので、どうしても言う3人の超強力な希望で危なくも無いのに、2人を召喚している。

ただし、探索も含めていざという時以外は手出ししないように言っている。

既に9階層への階段までのマッピングは終了しているので、地図に沿って階段へと向かっているが、相変わらず手を繋いでピクニック状態から脱していない。

しかし見ている限り、シルもルシエも嫌がっている感じではない。ルシエが嫌がっていないのが不思議だが、懐かれてデレているのだろうか？

まあ、雰囲気良く探索できているので良いことだと思うことにした。みんなも上機嫌なので探索効率もすこぶる上がり、サクサク進んで

いる。

既にワニ型モンスターにヘビ型も倒しているが、残念ながら肉はドロップしていない。

確率から言って群に当たるのが一番の近道な気がする。

そう思いながらさらに探索を進めていると遂に群れに当たった。

カニの群れだ。以前までのガザミ系ではなく水族館で見るタカアシガニっぽい。

巨大なてあしを動かしながらゆっくりと向かってくるがその数およそ10体。

一応全員で魔核銃を射出してみたものの、外殻が硬すぎて効果が薄い。この時点でミクとスナッチは攻撃要員から脱落したので残りのメンバーでどうにかするしかない。

「ヒカリン『アースウェイブ』でどんどん足止めしていつて。あいりさんと俺でハマった奴から順番に倒していこう。スナッチとミクは近づいて来ないように牽制お願い。」

「ウォーターボール」

魔氷剣を出現させて、『アースウェイブ』で動けなくなっている力。二の後ろに回り込み斬りつける。

問題なく斬れるのだが、足が長すぎて本体まで届かない為足しか斬れない。しかも数本斬ってもまだ立っているので本体を攻撃することができない。

このままではバルザードの使用制限回数も魔氷剣の制限時間も超えてしまう。5回斬りつけた時点で一旦離脱してバルザードに魔核を吸収させて再起動する。

流石に今のやり方は効率が悪すぎる。本体に直接攻撃するにはこれしかない。

「ウォーターボール」
「ウォーターボール」

「ウォーターボール」

俺の身長と腕の長さを加えると最長5m近い魔氷槍が出現した。

時間制限もあるのでさっさと本体を攻撃して回る。背後に回って上空にある胴体目掛けて突いていく。もちろん攻撃する度に破裂のイメージを乗せて、爆散させていく。

きっちり五発で5体倒したところで周囲を見るとあいりさんが2体目を倒すところだったので、後は3体となっている。

再び戦線を離脱しバルザードに2度目の魔核補給を行う。

既に今日の戦闘で『ウォーターボール』を6発使用しているので、流石に魔氷槍連発はMPが枯渇する上に疲労感が物凄いのでやめておく。

「ウォーターボール」

魔氷剣を発現させて、あいりさんと共闘する事に切り替えた。

あいりさんの戦っているカニの後ろに回り込んで足を切り落とす。

5回しか斬れないがあいりさんと共同ならいける。足が少なくなつてバランスを崩したカニの胴体をあいりさんがぶつた斬る。

2体目も同じ要領で倒したところで使用制限の5回を迎えてしまった。

後一体残っているが、あいりさんと俺が牽制している間にヒカリンが『ファイアボルト』を放って焼きガニにして消滅させることができた。

カニのドロップといえばもちろんカニ身にカニみそだろう。

結構な数が居たので期待感を胸にカニの消失した跡を凝視する。

あった。ありました。

通常の魔核とは別にドロップしているものがあった。

第116話 無用の長物

俺は今ドロップアイテムの前にいる。

「みんなこれって……」

「カニの甲羅ね」

「そうですね」

「それしかないな」

やっぱりそうか。せっかく2度目の通常ドロップアイテムをゲットできたのに、残されていたのは六十センチぐらいの大きさのカニの甲羅の部分だった。

もしかしたら中身があるかと裏返してみたが、残念ながら中身はカラだったので純粋に甲羅部分のみが残されていた。

「これって何かに使えるかな」

「壁にかけるぐらいかな」

「アスタキサンチンが取れるのです」

「いららないな」

ですよ。いらないですよ。この大きさの物を持って帰っても正直使い道がない。本当に後ろ髪を引かれる思いだが、どうしようも

ないのでその場においていくことにした。

今回ドロップアイテムって有用なものばかりが残される訳ではないと言っのがわかっただけでも良しとしよう。

ただどうせなら中身をドロップして欲しかった。

その後も、お馴染みになつてきた八階層のモンスターと何度か交戦して撃退しながら探索を進めたが、残念ながらドロップアイテムは出なかった。当然ながらポンポン出るようなものではないので余計に甲羅が残念だった。やるせ無い気持ちを抱えながらも、探索を進めて遂に九階層の階段のところまでたどり着くことができた。

「ここが九階層への階段なんだけどどう思う？」

「十階層にゲートがあるみたいだからそこまでは、早く行ってみたいけどな〜」

「わたしも8階層の通常モンスターだともう大丈夫だと思うので九階層に行ってみたいのです」

「私はみんなに合わせるよ」

「じゃあ、今日はこのまま探索しながら引き返して来週みんなで九階層へ行ってみようか。その前に俺が明日から下見で潜ってみるか、それで大丈夫かな？」

「わかったわ」

「わかったのです」

「わかった」

とりあえず、恐竜以外のモンスターにはしっかりと対応できているので、次の階層に行ってもまず大丈夫だと思うが、念のために明日からしっかりと下見をしておこうと思う。

この日はこのまま地上の引き返して、家に着いてからすぐに寝てしまった。

翌日から準備を整えて早速九階層に向かう事にした。

魔核集めは先週頑張ったので、今週は九階層へのアタックに専念できそうだ。

「シル、ルシエ新たな階層だから気をつけて行こうな」

備品は8階層の時に結構買い揃えていたので、今回は何も買うものはなかったが、さすがに9階層になると最短距離で来てもそれなりに距離があるので、放課後に活動できる時間は限られてしまう。

短時間集中で探索を進める。

しばらく9階層を歩いていると早速

「ご主人様、通路の向こう側にモンスターの反応が2体あります。注意してくださいね。」

気を配りながら、奥に進んでいく。

「ギギギヤギヤギヤ」 「グルギヤギヤギユ」

なんとリザードマンらしきモンスターが会話をしているように見える。

「シル、初めての相手だから『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエはしばらく様子を見てから攻撃をかけてくれ」

こちらに気づいたモンスターが俺達に向かって駆けてくる。攻撃を仕掛けてくるが当然『鉄壁の乙女』に阻まれたが、今迄のモンスターと決定的に違う箇所があった。

武装しているのだ。剣はもちろん鎧までつけている。

攻撃が阻まれたのを悟ると二体でアイコンタクトらしい動作を見せ、一旦下がった。先ほどの会話しているシーンと言い、今までの力押し of モンスターと違い知能が高いのかもしれない。

今度は左右に分かれて攻撃を仕掛けてくる。

『グヴオージュオー』

リザードマンのうちの一体が一瞬で消失してしまった。

ルシエの圧倒的な火力の前には、リザードマンの知性はあまり意味がなかったようだ。

第117話 9階層

俺は今9階層でリザードマンと対峙している。

一体はルシエが撃退してくれたので、残る一体を、俺が撃退しよう
と光のサークルを飛び出して試みている。

今までもゴブリンなどの人型とは戦闘してきたが、このリザードマ
ンはちよつと違う。

もちろん剣や防具を装着している事にも驚いたが、今までのモン
スターと違い、動きが洗練されている。

今までも棍棒程度を振り回すモンスターはいたが、あくまでも力任
せに振り回しているイメージだったがこいつは違う。明らかに訓練
したかのような剣さばきなのだ。

タイミングを上手く合わせることができれば武器破壊も可能だとは
思うが、こちらの魔氷剣は5回しか斬り合えないのであまり受けに
回るのは得策ではない。

最近使用していなかったポリカーボネイトの盾の使用も考えたが、
知能の発達したモンスターの斬撃を上手く受け切る自信がないので
やめた。

今の俺にはやはりこのスタイル。左手に魔核銃、右手にバルザード
のスタイルが一番しっくりくる。
距離を詰められる前に

「プシュ」 「カンッ」

一応狙いを定めて撃ってはいるものの、両者が動きながらの状態で
正確に当てる事はなかなか難しく、リザードマンの防具に阻まれて
しまった。

「プシュ」

「グギヤー」

再度、防具のない部分を目掛けてバレットを射出。当たった瞬間に痛みで大きく仰け反り隙が出来たところに思い切って飛び込み袈裟斬りに伏す。

なんとか9階層初モンスターをスムーズに撃退することが出来た。もしかしたら個体能力値は8階層のモンスターの方が高いかもしれないが、やはり9階層のモンスターの方が気を抜けない。純粋な剣技だけなら俺よりもリザードマンの方が上だろう。こちらは武器のアドバンテージを最大限生かした戦い方をするのを心がけよう。

まあ当然だがドロップアイテムは無い。

「なあ、おい。今までと違ってモンスターが武器を普通に使ってるな。前みたいに気を抜いて死ぬなよ。」

「だから俺は一度も死んでないんだよ。」

ルシエなりに心配してくれているのだろう。前のように矢のような遠距離攻撃だけは気をつけないといけない。

そんな事を考えて探索していると、突然肩口に激痛が走った。

「うっ。」

矢？いや、もうすこし大きい気がする。どちらにしても痛みの感じからして骨が折れた。

「『鉄壁の乙女』ご主人様、かなり前方にモンスターです。感知が

遅れました申し訳ございません。肩は大丈夫でしょうか。」

「おい、気をつけるって言ったばかりだろ。大丈夫か。また死ぬのか？」

「いや、だから俺は死んだ事ないんだって。くっ。」

俺は慌ててリュックから低級ポーションを取り出して飲み干した。飲んで暫くすると痛みが引いてきた。単純骨折であればこれで完治するはずだ。

完治を待っている間にも大きな矢のようなものが何本も飛んでくるがシルの『鉄壁の乙女』のお陰で助かっている。

「シル、敵モンスターを確認できるか？」

「いえ3体いるのはわかるのですが、距離のせいで目視出来ませんが、恐らく50M以上は離れていると思われるが、矢はどんどん飛んで来ている。とんでもない脅力だと思うが、どうすればいい。このままだといずれ『鉄壁の乙女』が切れてギリ貧になる。かと言って防御のない状態にシルとルシエを晒すわけにもいかないので2人は動かせない。相手がしびれを切らして出てきてくれればいいが、この階層のモンスターは知能レベルが高いようなので期待できない。」

「シル、このまま『鉄壁の乙女』を維持してくれ。ルシエはこの場で待機だ。俺は敵のところまで突っ込むから。」

「ご主人様、無茶です。私も一緒に行きます。」

「大丈夫だ。問題ない。」

俺はポリカーボネイトの盾を構えて、全速力で猛ダツシュした。魔氷剣では、制限時間の調整が効きそうにないので魔核銃を選択する。一応、的を絞らせないために蛇行しながら走り抜ける。普段の俺は足が特別早いわけではないがダンジョン内ではレベル17のステータスを発揮し、かなりのスピードを出せている。おそらく今の俺のステータスはパワー型ではなくスピード型だと思われる。

50mを超える距離を蛇行しながらも7秒ほどで詰めることが出来たが、その間も矢が数本飛んできて、盾に守られることになった。近づくにつれ敵影を確認することができた。見た目はオークだが銀色の毛を生やしているのがみて取れるのでこいつらはシルバーオークだな。オークの上位種と言われているモンスターだ。弓と言うにはかなりオーバーサイズな弓を構えて撃ってくる。

矢がかなりのスピードなので瞬時に反応することは難しいのでとにかく大きく避けるしかない。シルバーオーク3体の同時攻撃は捌き切れないのでとにかくまず1体を仕留める。

盾の脇から魔核銃を発砲する。

「プシュ」 「プシュ」

的が大きいので走りながらも当てることができた。

「グブオーン」

被弾したシルバーオークにさらに追撃を三発加えて1体を仕留めることができた。これで残り2体。止まればやられるのでスピードを緩めず蛇行する。

シルバーオークも焦ったのか、連射してくるが精度が悪く当たらない。

その隙を狙ってまた魔核銃を発砲する。

「プシュ」 「プシュ」 「プシュ」

今度は3発で仕留める事が出来た。残る弾は2発だ。そのままの勢いで最後の一体を仕留めにかかる。

「プシュ」 「プシュ」

「グフオーン」

ダメージは与えているが消失まではいかない。

「ウォーターボール」
「ターボール」

「ウォー

氷の槍を連続で投射して最後の一体を仕留めた。9階層の2番目の敵でこれか。盾でなんとかあったけど、守られてない所に当たったらやばかったかもしれない。魔核を拾って、シルとルシエのところに戻ると

「ご主人様、ご無事で何よりです。安心してみている事が出来ました。さすがですね。」

「いや、それほどでも・・・」

「おい、さっきのつて一旦私たちをカードに戻せば良かっただけじゃないのか？」

「えっ？」

「カードの状態で近くまで運んでから再召喚すれば、3人でもっと楽に戦えたんじゃないのか？」

「うっ。確かに。」

とっさのことでそんな発想がなかったが、ルシエの言うことが正しい気はするが、今回は俺なりに頑張ったんだから、俺の努力もちよつとは認めて欲しい。

第118話 成長の刻

俺は今9階層に潜っている。

昨日ルシエに指摘をされたように遠距離攻撃の敵と遭遇した場合、シルとルシエは一旦送還して、近接してから再召喚する事に決めている。

しばらく探索していると

「ご主人様、この先に2体のモンスターが潜んでいます。気をつけてくださいね。」

シルに感知されても攻撃が来ないのでシルバーオークではないのだろう。

そう思って近づいていくと突然、石の塊が凄い勢いで脇を通過していった。

「はっ?」

突然のことに呆気にとられてしまったが、モンスターの攻撃に違いない。

「シルー旦那『鉄壁の乙女』を頼む。」

光のサークルの中で敵を凝視するとかろっじて影のようなものが目視することができる。

俺はシールドを構えてから、シルとルシエを送還して、そのまま蛇行しながら全速力で敵影に突っ込んでいった。

「ドガンッ！」

「ぐうー。」

シールドに石が激突しかなりの衝撃を受けてしまい、バランスが崩れそうになるのをなんとかこらえて更に近づき、敵を目視できる位置まで来たので、シルとルシエを再度召喚する。

再度展開された『鉄壁の乙女』の中で敵を確認するとそこにいたのは、シルバーオークではなくスリングの様な武器を持ったジャーマンだった。見ている間にも絶え間なくどンドン石を投げ込んでくるので早めにかたをつけたほうが良さそうだ。

「ルシエ、右側の敵を頼む。俺は左側の敵を倒すから。」

この距離であれば魔核銃が十分届くのでバレットを射出する。

「プシュ」「プシュ」

2発を頭部に命中させて難なく撃退することができた。もちろんとなりのルシエは既に戦闘を終わらせている。

「なっ、上手くいっただろ。私の言った通りだろ。うん、うん。」

確かにルシエの作戦通りに運んでさっきの戦闘よりはかなり楽に戦えた。ただやはり、敵との距離を詰める際の移動が問題だ。2回ともシールドに守られて助かったが、シールド以外の場所に当たったただでは済まない。最悪、サーバントをカードに戻しているせいで、フォローを受けられないので死んでしまうかもしれない。

何かいい手は無いだろうか。うん。『鉄壁の乙女』の加護を受けながらどうにか移動できないものだろうか。

しばらく探索を続けていると

「ご主人様、この先の奥にモンスターが3体います。注意してください。」

まずは遠距離攻撃を仕掛けてくるのか近距離なのかを見極める必要があるので、盾を構えたままゆっくりと距離を詰める

「ヒュン」

おおっ。矢が飛んできた。

「シル、『鉄壁の乙女』を頼む」

シルに『鉄壁の乙女』を展開してもらってからルシエだけカードに送還する。

ここからがさつきまでと違うところだ。

「きやつ。ご主人様何をなさるのですか？戦闘中ですよ。」

「いや、色々考えたんだけど、これが一番いいんじゃないかと思っ
て。」

俺はシルをお姫様抱っこしたまま、敵に向かって猛ダッシュし始めた。

「カンッ」

『鉄壁の乙女』は、俺を中心にしっかり機能している。

俺が考えた作戦は、シルが『鉄壁の乙女』を発動中、その場から動けないのであれば、俺がシルを運ばないんじゃないかという事だった。

シルは小さくて軽いので、レベル17になった俺であれば、お姫様抱っこしても、余裕で走れた。

「ご主人様、恥ずかしいです・・・」

「いや、大丈夫だつて。誰も見てないし、『鉄壁の乙女』も発動したままだし、やったな。」

「ご主人様がそんなに喜んでくれるなら、我慢します。」

敵はシルバーオークだったが、目前まで迫ってからシルをその場を下ろして、ルシエを再召喚する。

「なんでわたしだけカードに戻すんだよ。」

「いや、お前走るの遅そうだし、ゆっくり走つてると『鉄壁の乙女』の効果が切れちゃうだろ。」

「わたしも走るの得意だぞ！」

「いや、普通に考えて遅そうだから。」

「うっつ。それじゃあ、わたしはおんぶしてくれればいいだろ。」

「シルを抱っこして、ルシエをおんぶつて、それは流石に無理だろ。どう考えても戦えそうにない。」

「いや、なんとかなるでしょ。」

いやなんともならないでしょ。

「とにかくルシエ、あつちの2体を頼む。俺は正面のやつを狙うから。」

「プシュ」 「プシュ」

やはり『鉄壁の乙女』の中から至近距離で狙えると外しようがないな。あつさりとシルバーオークを片付ける事が出来た。ルシエも問題なく残りの2体を消滅させている。

さつきまで苦戦した相手を知恵と努力で凌駕する、俺は確実に成長している。

これからも知恵と努力を欠かさず探索を続けていこう。

第119話 進化の刻

俺は今9階層で敵と戦っている。

リザードマン3体と交戦しているが複数同時に相手にはできないので、2体はシルとルシェに任せて自分のやるべきことに集中している。

1番に攻撃をくらわない事、とにかく距離感と危なくなったら避けるか逃げる。

それだけを徹底しながら相手の空振りを見計らって魔氷剣で斬りつける。なかなか動く相手に深手を負わすことはできないが、魔核銃と併用して3手目にしてようやく倒すことができた。

横を見ると当然のようにシルとルシェがリザードマンを撃退していた。

いつものようにバルザードの使用回数が5回に達したので魔核を吸収させる。

その瞬間、バルザードが赤い光を発光して激しく明滅を繰り返している。

しばらくして光が収まると、なんとバルザードが万能包丁ほどの大きさに変化していたのだ。

「こ、これって」

まさかの光景に一瞬唖然としてしまったが、これってもしかして、魔核を吸収させて使用すると進化するののか？

ステークナイフが万能包丁に進化してしまった。包丁よりはナイフに近い気はするが確かに刃の部分が大きくなっている。

魔剣なので魔核を吸収させると進化するのか、それともモンスターの生命かなにかを吸収して進化するのかわからないが、とに

かく今までのミニマムサイズからサイズアップしてちょっとカッコよくなっている。もしかしたら以前日番谷さんが言っていた2番目に小さい魔剣に届いたかもしれない。

見た目はともかく、性能に変化があるのか確認したいので、すぐに1階層まで戻っていつものように性能を試すことにした。

まずはスライム相手に使用してみるが、威力はもともとオーバーキル気味なのでよくわからない。もうちょっと下の階で試してみることにしよう。

次に魔核の吸収だが、空になったバルザードに吸収させてみると今までの3個からなんと6個吸収することができた。

「これってもしかしてパワーアップしてるのか」

スライム相手に回数制限を確認してみたが、きつちり10回使用できた。今までの倍、一回の戦闘で10回も剣を使用することはあまりないので、飛躍的に実用性が増したことになる。

魔氷剣等も試してみたが今まで通り使用出来ているが、やはり威力は下層に行ってみないとわからない。

次に斬撃が飛んだりしないか色々やってみたが、やっぱり無理だった。

とりあえず2階層まで降りて、ゴブリン相手に剣を振るってみる。

少し伸びて全体に大きくなったお陰で正面からでもなんとか斬り合うことができるようになった。

威力は多分少し上がっている気がする。魔氷剣の威力も同じく上がっている気がするが残念ながら持続時間は変わっていないかった。

だとしても、もしかするとこのバルザードって本当はすごい魔剣なんじゃないだろうか。このまま進化を続けたら、アニメのような長くてカッコいい魔剣になってしまうのかもしれない。

威力も少し増してる気がするし、そのうち斬鉄剣とか使えるようになるかもしれない。

最近魔核銃と並んでメインウェポンとなっているバルザードの進化は俺自身の進化にも直結しているので滅茶苦茶嬉しい。

「ご主人様、さすがです。魔剣が進化するなんて、ご主人様の凄さを物語っています。きっとご主人様も進化されるのですね。」

「前のよりは、少しはみられるようになったんじゃないか？ステークナイフよりはちょっと良いと思うぞ。」

シルとルシエも褒めてくれているので素直に嬉しい。

これからもニューバルザードを片手に9階層をしっかりと探索しよう。どんどん魔核を吸収させて早く次の進化を促したい。多分進化って1回だけじゃないよな。

第120話 魔剣士

俺は9階層に潜っている。

進化したバルガードを使いたくて仕方がないのでとりあえずモンスターを物色している。

ただ進化したと言ってもまだまだミニマムなので、実際には魔氷剣として使うことになるが。

「ご主人様、前方にモンスターが5体います。少し多いのでご注意ください。」

この階層で5体出るのは、初めてだが、遠距離攻撃があると厄介なので盾を片手に持ちながら進んでいくが、矢が飛んでくる気配はない。

近づいていくとリザードマンとつかいゴブリン、ホブゴブリンらしきのが槍と剣を持って待ち構えていた。ちよつと数が多いので先制攻撃を敢行する。

「シル、ルシエとりあえず槍を持っている奴を攻撃してくれ。」

俺も盾を放棄して

「ウォーターボール」

魔氷剣を発動させてリザードマンに対峙する。アニメで見た騎士とかは、器用に盾と剣を使いこなしていたが、俺はどうしても盾を持つて剣を振るう事は難しいので魔核銃に持ち替える。

今まで使用制限もあり極力攻撃を避けるようにしてきたが、制限回

数が増えた事で、受けると避けるを併用しながら戦うことにした。もちろん剣技に自信などないので危ない咄嗟の時と明確に受けれる時だけ剣を使用し後は今まで通り距離感を保って避ける戦法だ。

リザードマンと対峙している最中に他の4体は消失していたので、俺はこの一体に集中する。

リザードマンが振るってくる剣を避けながら間合いを図る。がちり受け止める事に戸惑いがあったので、恐る恐る剣を合わせる形になったが、凄い衝撃と圧力だ。

受け損ねたらやばい。

再度立て直しながら、タイミングを見計らって、バルザードをリザードマンの剣に合わせると、先程同様のすごい圧力がかかったが、そのまま破裂のイメージを乗せる。

「バキーン」

金属音を立てながらリザードマンの剣が完全に粉碎された。

後は無手となったりリザードマン相手に斬りつけるだけで勝負がついた。

やはり自分からの攻撃でなくとも、剣を重ねた状態からであればバルザードの特殊効果は発揮されるらしい。

これであれば、今後近接武器を持ったモンスターと対峙する時は武器破壊も視野に入れながら戦うことができるだろう。

「ご主人様、お腹が空きました。魔核をお願いします。」

「わたしも2発も撃ったんだからいっぱいいくれよ。」

俺はそれぞれに適量を渡して次の敵を探すことにした。

「ヒュン」

突然矢が飛んできて後ろの地面に刺さった。

前回と全く同じシユチュエーションだが、ラッキーな事に今度は俺に刺さってはいない。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。」

「ウォーターボール」

魔氷剣を片手に持ちながら、シルを抱っこする。

「キャッ」

「うっ。私もおんぶしてくれ。」

すかさずルシエをカードに送還して敵をめがけて猛ダツシユする。蛇行を必要としない分シルを抱っこしても以前よりスピードが出ている。

目視できる距離からさらに近づきシルを地面に立たせてから、すぐさまルシエを再召喚する。

「ルシエ右側のシルバーオークを頼む。俺は左の奴を倒す。」

「うーっ。扱いが違いすぎるだろ。わたしも抱っこかおんぶで運んでくれ。」

いやどう考えても2人は無理だし。

俺は、そのまま左のシルバーオークに接近して斬りつける。

シルバーオークが咄嗟に反応を見せ、手に持っている大型の弓で防ごうとしたので、そのまま切断のイメージを重ねて武器をぶった切る。

武器のなくなったシルバーオークは普通のオークと変わらない。

殴りかかってきたのを大きくかわしてそのまま、十字に斬りむすんだ。

別に袈裟斬りでも良かったが、よくアニメでなんとかクロスとか言いながら、主人公が十字に斬り結ぶのをみた記憶があったので、それを真似してみたのだが上手くいったようだ。

当然、となりのシルバーオークはルシエに消失させられていた。

今回は進化したバルザードを試してみたくて剣を中心にモンスターを倒したものの、本当は魔核銃で撃った方が簡単に倒せたのだろうが、自己満足出来たのでよしとしよう。

第120話 魔剣士（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第121話 モンスターパレード

俺は今モンスターの波に飲み込まれようとしている。

泳げない俺はこのまま溺れてしまうのだろうか。

モンスターの数はおよそ50体。それ以上の数はちょっとわからない。

今日も昨日までと同じ様に放課後に9階層に潜っていた。

昨日のようにバルザードを中心に使って敵を倒して回っていたのだが、突然シルが

「ご主人様。まずいです。数えきれないぐらいの敵です。正面の奥から一斉にこちらに向かっていきます。今までにない数です。逃げるのも間に合いません。迎えうちましょう。」

えっ？数え切れないほどのモンスター？魚群の時もそんな言い方はしていなかった。やばいんじゃないのか？

「シルとにかく『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエ、敵が目視できたら片っ端から『破滅の獄炎』で焼き払え。」

しばらくすると地響きと共にモンスターの集団がこちらに向かって押し寄せてくる。

「うおっ」

モンスターが集団で駆け寄ってくる事自体が異例なので、魚群とは全く違った圧力を生んでいる。

第一陣が『鉄壁の乙女』にぶち当たる。

その瞬間俺も魔核銃を連射し始めたが、隣ではルシエも『破滅の獄炎』を発動し始めた。

前列のモンスターから順番に消失していくが、明らかにおかしい。この階層のモンスターは総じて知能が高かったのに今押し寄せているモンスターは、知性など感じない。

目を血走らせてひたすら突進してくる感じた。よく見ると息も上がっている個体もいる気がする。

そもそも一直線に押し寄せてきたので俺らが目的なのかもわからないような状態だが、今となっては遅い。

確実に立ちはだかるターゲットとして認識されてしまっている。

「シルとにかく『鉄壁の乙女』だけは切らせないでくれ。防御が切れたらやられる。」

「はい。大丈夫です。安心してください。」

俺はルシエに指示を出しながらもひたすら魔核銃を撃ち続ける。

どう考えても50発じゃ足りそうにないがとにかく撃ち続けるしかない。

ルシエを見ると『破滅の獄炎』を連発して順調に敵の数を減らしてくれているようだが、ルシエのMPも無尽蔵にあるわけではないので、いつか尽きてしまう。

敵の数とパーティの残存資源と我慢比べの様相を呈しているが50体程度ならなんとかいけるはずだ。

マガジンの3個目が尽きたので、素早く4個目に入れ替える。

大体近接状態から撃っているので2発で1体を倒せているので既に10体以上は倒している。

「ルシエ、大丈夫か？頑張ってくれ。」

「誰に言ってるんだよ。余裕に決まってるだろ。」

更に4個目のマガジンを交換して最後のマガジンを使用する頃には、ルシエの頑張りもあり敵の数もかなり減って来ており、終わってはいないが、もう大丈夫というところまで来ていた。

「最後まで気を抜かずに行くぞ。」

「はい。」

「当たり前だろ。」

なんとか魔核銃の弾切れ寸前に全ての敵を殲滅することができたが、どうやら60体近くいたようだ。一体これは何だったんだろうか？
今までにこんな事は初めてだった。早く帰って日番谷さんに聞いてみようと考えていた瞬間だった

「ご主人様まずいです。第2陣が来ます。先程と同数程度の敵が奥から向かって来ています。」

おいおい、俺もう弾切れなんだけど。

しばらくすると、遠くから大挙して押し寄せるモンスターの足音と
心配がしてきた。

これはやばい。本格的にやばい。

今までにないぐらいやばい状況だ。どうする。どうすればいい。この
状況で俺に何ができる。

判断ミスが死に直結する。そんな不吉な考えがよぎりながら俺は決
断した。

これしかない。

第122話 スタンビード

俺は今全速力で走っている。

第2陣？そんなもの相手にできるわけがない。もうこれしかない。

俺は即座にシルとルシェをカードに送還して、全速力で逃げた。ステータスに物を言わせて全速力だ。

魔核は惜しいがそんな事を言っている場合ではないのでとにかく逃げる。

絶え間なく後方から集団で移動する音とプレッシャーを感じる。止まったら死ぬ。こんなに命がけで走ったのは生まれて初めてだろう。この気持ちで体育祭を走っていたら、クラスのヒーローになれていたかもしれない。

息が上がる。肺が苦しい。身体中に乳酸が溜まっていく。口の中に鉄分のような味が充満してくる。苦しい。

ただ、スピードは負けていないようで、音が遠ざかりはしないが近づいてくる気配もない。なんとか距離を保っている。永遠にも思える時間を死ぬ気で走ってようやく8階層への階段が見えた。

ほっとしながらもスピードを緩めずに一気に登りきった。

助かった。その場に座り込んで、呼吸を整えるべく大きく呼吸を繰り返す。

やばかった、あと少しで体力が尽きてやられるところだった。安堵と恐怖を感じながら力を抜いた瞬間、音が聞こえてきた。階段を上る音が。

まさか。モンスターは階層を越えては来れないんじゃないのか？階層間に見えない障壁かなにかがあるんじゃないのか？

防がれて通れないのか？希望的観測を込めて階段を見ていたが、現れてしまった。リザードマンの頭が見えてしまった。衝撃の光景に直ぐには反応できない。

「ウオーターボール」

なんとか魔法を発動させるが、時間稼ぎにもならない。急いでシルとルシエを再召喚する。

「シル『鉄壁の乙女』ルシエ『破滅の獄炎』」

最低限の指示を与えて階段からの敵に備える。

幸いしたのは、階段からしか敵が上がってこないので攻撃の場所を限定できているのと、階段という狭いスペースにルシエの『破滅の獄炎』を発動する事で効果が最大限に引き出されている。

俺に今できる事はほとんど無いので、焦りながら空になったマガジンにバレットを再装填するが、指がうまく動いてくれない。

通常、階層を超えてはモンスターは現れない。それが常識だった。しかし、実際に目の前に大挙して押し寄せている。おそらく、以前の恐竜もどうにかして8階層まで階層を越えてきたに違いない。

やはりなにかが起きているんじゃないか？

このモンスター達も何かから逃げている？もしくは何かの前触れなのか？

とにかくやばい。俺一人なら確実にやられていた。

順調に敵を殲滅しているルシエの火力に安心しきっていたのだが

「お、おい。ちょっとやばいぞ。MPが無くなる。」

「え！？」

たしかにルシエのMPは100を超えているがこれだけ連発すればMPが枯渇してもおかしくはない。ただ、そんな事が実際に起こるとは夢にも思っていなかったので完全に失念していた。

「わ、わかった。ルシエ戻れ、俺とスイッチだ。」

マガジンはまだ2個しか装填を終えていなかったがこの際そんな事を言っている場合ではない。

「プシュ」 「プシュ」

とにかく全弾撃ち尽くす。

1個目のマガジンをすぐに撃ち尽くしたので2個目のマガジンを装填する。あと10発しかないが、敵はまだ残存している。撃ちながら頭をフル回転させる。どうすればいい。どうすれば助かる。どうすれば敵を退かせる事が出来る？

「カチツ」

遂に全弾尽きた。

覚悟を決める時が来た。エリアボスや天敵ゴブリンを退けた時と同じかそれ以上のプレッシャーを感じながらも、絶対に生き残る。まだ見ぬ春香とのキャンパスライフの為には絶対に死ねない。

「ウォーターボール」

バルザードに氷の刃を纏わせてから

「ウオオーオオー！」

腹の底から雄叫びを上げて恐怖を振り払いモンスターに向けて突っ込んでいった。

第123話 決死行

俺は今8階層で戦っている。

「ウオオオオー！」

敵はまだまだ数が多いので手数はかけれない。

無駄撃ちできないのでとにかくリスクを冒して敵の懐に飛び込んでから確実に斬る。

避け過ぎても数の力に飲まれてしまうので極限まで集中して最小限の回避に努める。

何度か敵の武器が体を掠めるが、カーボンナノチューブのスーツを信じ痛みは押し殺して動き続ける。

連続で4体倒したが、バルザードの使用制限もあり先が見えない。

「シル、『鉄壁の乙女』が切れたら『神の雷撃』で敵を殲滅してくれ。」

俺は、そのまま敵に向かい合い、斬り込むが相對している後方から矢が飛んできて俺の腹部に命中した。

「グウウウ。」

オオオオー！」

焼けるような痛みが走って、一瞬動きが止まるが、ここで倒れたら終わりだ、死ぬ気で自分を鼓舞して斬り結ぶ。

「ご主人様大丈夫ですか？直ぐにシルと交代してください。」

「シルツ！自分のタイミングで役目を果たせつ。俺は大丈夫だから。」
本当は全く大丈夫ではないが、ここでシルが特攻でもかけようものなら、全く戦況が読めなくなってしまう。最悪全滅だってありえる。俺はまだやれる。

痛む腹を無視して更に2体のモンスターを焼失したところで

「ズガガガガーン」

シルの『神の雷撃』が発動した。

一旦シルの前まで引いて、低級ポーションを一気に飲み干すと同時にバルザードに魔核を吸収させる。腹部の痛みが引いたと同時に再度うつつて出る。

「ウォーターボール」

背後からは、間髪入れずに『神の雷撃』が放たれており、俺は漏れて抜け出してくる敵に向かって行くが、シルの攻撃により数が減り、密度が減った分、放ち易くなったのか逆に矢や石の飛んでくる数が増えている。

敵と斬り合いながら飛んできた矢を避ける。そんな達人のような事は出来るわけがなかった。とにかく頭にだけは当たらないよう注意するがそれ以外は無視するしかない。目の前の敵に集中しないと一瞬でやられてしまう。

逆に割り切れたせいで、妙に頭がクリアになり先程までの戦い方は違い、無言で近づいてレイピア型を心臓めがけて突き刺す。

極力相対するモンスターに体が隠れるように正面に立ち、素早く切られる前に突き刺す。今の俺にできる、最大限無駄を省いた動作を繰り返す。

「グウツ」

肩口に結構な大きさの石がぶちあたる。骨にも影響あるだろうが構わず攻撃を続ける。3体を片付けたところで

「ウウツ」

今度は足に矢が命中する。痛い。めちゃくちゃ痛い。スーツのおかげで刺さってはいないが痛い。我慢しているが痛みで涙が溢れてくる。

動きが途端悪くなり間合いに入れなくなる。

「ウォーターボール」

レイピアで牽制しながら『ウォーターボール』で仕留める。

更に2体片付けた所で再度シルのところまで引く。

最後の低級ポーションを飲み干す。流石に2本飲むとお腹がポーションぶくれしてしまった。これで動く横つ腹が痛くなりそうだが、とりあえず痛みが引いた。さすが低級ポーションだがこれでもう回復アイテムは無い。このアタックで決めないと負ける。本当にこれで最後だ。

「ウォーターボール」

「ウォーターボール」

もう敵の攻撃を食らったら立て直せないなので、最後の一発分を残して距離を置いた状態から魔法を連発する。

シルの『神の雷撃』の威力は十分に発揮されており、流石に数がまばらになってきている。

「ウォーターボール」

最後の1発でバルザードに再び氷の刃を纏わせて、敵に向かって突き進む。後20秒、10発が俺に残された猶予だ。手間取っている時間はない。

最短距離で敵までたどり着き突き刺す。受ける時間が勿体無いのでとにかく突き刺す。

再び腕に痛みが走る。ジャガーマンの剣戟を左腕に食らってしまった。完全に折れたようだが、相手は生きた知能を持つモンスターだ。攻撃ぐらい食らう事もあるに決まっている。アニメの主人公みたいに俺の攻撃だけが一方的に当たる事自体がありえない。

まだいける。俺は右手に構えた魔氷剣を構えて突き刺す。まだ大丈夫。

第123話 決死行（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第124話 終戦

俺は8階層でもがいている。

生き残るために、死ぬ気でもがいている。もう左手は使えないか、右手と両足は健在なので、魔氷剣で敵を殲滅すべくもがいている。ジャガーマンを含め何体倒したかははっきりしないが、倒した数より残りの敵数が気になる。

シルの攻撃も既にかなりの回数展開されているので、ルシエのようにいつMPが尽きてもおかしくない。

MPが尽きた状態のルシエの戦闘力は不明だが、そんな状態になったら戦わず事は出来ない。

俺一人でも戦う覚悟はすでに決まっている。

いざとなったら、シルとルシエのカードを持って死ぬまで逃げてやる。

無駄の無い攻撃を意識して、ホブゴブリンの心臓をめがけて刺突する。

おそらくあと数回、あと数秒で魔氷剣の効果が切れる。

なんとも言い様のない焦燥感を感じながらも、一方で冷静に頭と身体を動かす自分がいた。

ハイオークに剣を突き刺し爆散させた時点でついに氷の刃が解けた。再度シルのところまで戻って、バルザードに魔核を吸収させる。

「シル、大丈夫か？無理になったらすぐ言えよ。」

「ご主人様、心配はいりません。モンスターなどに負けることなどあり得ません。」

俺を安心させる為か強気の発言だが実際には結構きついはずだ。

武器はバルザードしかもう無い。バレットを再装填する時間もない。殺虫剤はあるが効果は望めない。何か無いのか？リュックの中に何かなかったか？

あった。効果は不明だがひとつだけ、いや2缶だけ残されていた。最奥兵器シユールストラダの缶が2缶残っている。

以前、モンスター戦用に一度だけ使用して、そのままになっていた俺の奥の手。

以前ヘルハウンドには劇的な効果をあげたが、9階層のモンスターにも効くかどうかわからないがやってみる価値はある。

一つ目の缶を一気に開封してモンスターめがけて投げつける。上手く命中して周囲に散乱する。俺は息を止めてバルザードを握りしめて様子を伺う。

「グギヨン、グウウルル、ウギヨル」

効いた。命中した一体だけでなく周囲のモンスターにも効果を発揮して暴れている。

今しかない、俺は気配をできる限り薄くしてから、息を止めた状態で全速力でモンスターの中に突っ込んで行きバルザードとどめを刺して周る。

大きく注意を削がれたモンスターはあっさりとバルザードの餌食となってくれた。

更に最後の一缶を開封してモンスターに投げ込む。

口で呼吸をして再度息止めて暴れるモンスターを更に仕留める。

シユールストラダの効果は劇的で2缶で6体を仕留めることができた。

さすがにもう何も無いが、奥を見ると敵はあと7体まで減っていた。気がつくとしルの『神の雷撃』も止んでいるのでMPが尽きたのだらう。

俺のバルザードの使用制限はあと4回、かなり厳しいがやるしかない。
バルザードを構えてモンスターに突っ込んで行く脇をすごいスピードで何かが通り過ぎて行き、そのまま先頭のモンスターを串刺しに
してしまった。

「シル、お前・・・」

「ご主人様、ルシエも再召喚してください。」

「え、でもMPが。」

「大丈夫です。早く召喚してください。」

言われるままに

「ルシエリア召喚」

「ルシエ、私と一緒に敵を殲滅するのですよ。」

「ああ、わかってるよ。」

そう言うところルシエも猛スピードでモンスターのところまで向かって
行き、持っている杖でモンスターをぶっ叩いたと思ったらモンスター
は吹き飛ばされて消滅してしまった。

「はは。ルシエお前もか・・・」

俺も参戦しようと思っただけに出たが、それより速いスピードでシルとルシ
エが次々に敵を殲滅していき、結局2人で残りの5体を倒してしま

った。

「助かった……のか？　助かったんだよな。」

「ご主人様、早く地上に戻って治療してください。ただ、その前に・
・・」

「魔核くれよ。お腹が空いて倒れそうだ。」

ああ、それはそうか。2人ともMPが空になるほど戦ったんだ。当たり前前か。でも一体何個必要なんだ。
とりあえず、リュックに残しておいた50個あまりのスライムの魔核を半分ずつ渡してみた。

「ご主人様、申し上げにくいのですが……」

「全然足りないんだよ。言わせるなよな」

ああやっぱり足りなかった。俺は足元に散乱している魔核を集めて、その半分をシルとルシェに渡した。

「おい、下の階に置いてきた魔核とってこようぜ。もったいないだ
る。」

「え？でも消耗してるし危ないだろ」

「腹が一杯になったから大丈夫だって。なあシル」

「ええ。せっかくだから回収してから帰りましょう。ご主人様の盾も放棄してきましたし。」

俺的にはすぐにも帰りたかったが、スライムの魔核も全て使い果たし、バレットもかなり消費した。先立つ物がなければ探索も厳しくなるので、9階層に戻って魔核と盾を拾ってから地上を目指すことにした。

第124話 終戦（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第125話 我慢

俺は今我慢している。

昨日のモンスターの大群を退けてからすぐに低級ポーションを買いに行きたかったが、遅くなってしまいダンジョンマートは閉店している時間だった。

おまけに今日は金曜日で学校がある。おそらくリザードマンの一撃を食らってしまった左腕は骨折している。しているが、授業を休むわけにはいかないので、放課後まで我慢することに決めた。なんとしても王華学院に受かるべく授業は欠かせない。ただ痛い。授業への集中を妨げるほどに痛い。救いは体育の授業がない事だろう。

「海斗、今日のお前なんかおかしくないか？全然喋らないし、顔色もちよっと悪い気がするけど」

「ああ真司、鋭いな。ちよっと腕が折れたんだ。」

「はっ？ちよっと腕が折れたって、どういう意味だよ。」

「いや、多分左腕が折れてる。」

「折れてるって、病院はどうした。」

「放課後に低級ポーション飲んで治すから大丈夫だ。」

「お前、それ大丈夫じゃないだろ。ちよっと骨折って、骨折はちよっとじゃないぞ、重症だぞ、しかも大丈夫って、お前今大丈夫じゃ

ないだろ。」

「まあなんとか我慢できるから。」

「我慢の問題か？なんかお前感覚がおかしくなっていないか？前は転んであざ作っただけで折れた、折れた騒いでたのに、おかしくなったのか？大丈夫か？」

「いやだから大丈夫だって。」

「うん。わかった。」

その後なんとか授業を6時間目まで受け切って帰ろうとすると春香が声をかけてきて

「海斗大丈夫なの？真司くんから付き添ってくれて頼まれたんだけどね、腕が折れてるって本当なの？」

「ああ、多分。でも大丈夫、低級ポーションですぐ治るから。」

「大丈夫な訳ないでしょ。すぐ買いに行きましょう。どうして今日休まなかったの。」

「いや、授業休めないと思って。」

「そのぐらい、言ってくればノートとか貸してあげれるから、今度もし同じことがあったら絶対言ってるね。」

あれ？なんか肌寒い。でもやっぱり春香は天使だな。真司も余計なお世話をありがとう。

「ああ、ありがとう。今度はお願いするよ。」

そのまま、ダンジョンマートに直行して速攻で低級ポーションを購入して、その場で飲み干した。

やっぱり低級ポーションは最高だな。

しばらくすると左腕の痛みがなくなったので骨が修復したのだろう。そのままおっさんの店に行つて

「すみません。マガジン5個とバレット300個ください。」

「おー。坊主か。最近魔核銃の売れ行きが急に伸びてるんだよな。」

「ああ、それ多分、買っていったの俺のパーティメンバーです。」

「パーティメンバーって、お前、買って行ったのは全員女・・・」

昨日の件で疲れたのだろうか、なにやら得体の知れないフォースを感じる。以前感じた雪原系ではなく、どちらかというと砂漠だろうか？空気がカラカラに乾いているような錯覚を覚える。

「あッ、ああ、女、その年配のおばさんとそういえば坊主ぐらいの男も買っていったな。いや最近忙しくてな。物覚えが悪くなつちまつてな。ははは。」

なぜかおっさんがあたふたしているが、大丈夫なのか？このおっさん。

「メンバーは安く売ってもらったみたいなんですけど、俺も安くしてくれませんか？」

「それは在庫処分できたからだぜ。需要と供給だからな、買う人が増えれば、値引きは減るもんだぜ。」

「おじさん、なんとか安くならないかな。お願い。ねっ。」

「お嬢ちゃんに頼まれたら仕方ねえな。それじゃあバレット100個はおまけしてやるよ。」

おい、おっさん。気持ちはわかるが、春香と俺の違いはなんだよ。

「ああ、そうですか。じゃあそれをお願いします。」

俺は代金を払ってから、ギルドに行くために、春香と別れることにした。

「おまけしてくれてよかったね。」

「ああ、助かったよ。また買い物の時お願いするかもしれないけど。」

「いつでも、言ってくれば大丈夫だよ。」

ああやっぱり、天使がここにいる。

ただ、今回出費がかさんだので魔核を売らないといけない。

第125話 我慢（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第126話 2人の妹

俺は今ギルドに来ている。

いつものように日番谷さんの列に並んでいる。

順番が来たので、受付に行つて

「魔核の買取りをお願いします。」

そう言つて9階層で回収した魔核を全て提出した。

「高木様、全部で73個ありますので、1個3500円となりますので255500円となります。」

おおっ。さすが9階層の魔核だけあつて結構いい値段になった。カバの魔核よりは安い、あれは大きさも含めて特別なだろう。いずれにしても、さつきダンジョンマーケットで使つたのが28万円だったので、ほぼちゃらになった。

「高木様。9階層の魔核がかなりの数あつたようですが、順調に探索が進まれているようですね。」

「いや、まだ潜り始めたばかりなんですけど、スタンピードって言つんですかね。集団に襲われまして、魔核も本当はもっとあつたんですよ。多分120体ぐらいいはいたと思います。いきなり襲つてこられて、もうちょっとで死ぬかと思ひましたよ。」

「高木様。ちょっとよろしいですか？スタンピードとおっしゃいましたか？120体とおっしゃいました？」

「ええそうですよ。やばかったです。」

「他のメンバーの方は大丈夫だったのですか？」

「ああ、俺だけで潜ってたんで、大丈夫ですよ。」

「お一人で潜られていたんですか？120体をお一人で倒されたのですか？」

「あ、ああ。いや、なんか、なんとかできました。ははは。」

「高木様。とにかく120体のスタンピードが本当であれば一大事です。何かが起こっているのかもしれませんが。再度ヒアリングに付き合って頂いてもよろしいでしょうか？」

「ああ、大丈夫ですよ。」

またいつもの上司の人を交えてのヒアリングだったが、疑問だった事を質問してみた。

「今回、9階層から8階層へ逃げ込んだんですけど、モンスターも一緒に8階層について来ちゃったんですけど、モンスターってそんなものですか？階層を越えないものとはかり思っていたんですけど。」

質問をした瞬間、上司の人と日番谷さんの時が止まったのを感じた。時が止まると同時に顔色がみるみるうちに青くなってきた。やっぱり、やばい事だったのか……

「あ、あの、言わなかった方が良かったですか。」

「.....」

「あの、なんかすみません。」

「あ、ああ。申し訳ない。モンスターが階層越えをしたのは本当でしょうか？」

「はい。半分ぐらい多分60体ぐらいは超えてきたんで8階層で倒しました。」

「高木様。この事はしばらく内密にお願いします。特殊な事例ですので至急調査隊を派遣します。無用な混乱を防ぎたいので、原因が分かるまで当分スタッフを巡回させるようにします。」

「わかりました。」

その後もシルとルシエのことは伏せて話させてもらったが、手当てで5000円もらえたので、魔核売却分と合わせて赤字がほとんど解消してしまった。

今回はラッキーだったな。スタンピードも、もう少し小規模で時々起きないかな。

とりあえず今日はもう帰って休むことにした。

翌日から、スライム狩りに集中する事にする。

先日のスタンピードの所為で溜め込んでいた魔核を全部シルとルシエに渡してしまったので、本当に無くなってしまった。お陰でバルザードも魔核銃も使用不可になってしまった。

9階層の魔核を残しておけばよかったのかもしれないが、赤字解消

の為迷わず売ってしまった、後悔は一切ない。
なので今回は殺虫剤ブレス一択で狩って狩って狩りまくる。

K112のパーティメンバーには今週は休む旨を伝えておいたのでこの土日は久々に1階層で籠ろうと思う。

最近時間あたり12個は当たり前になってきたので1日100個が最低のノルマだが、できれば150個を目指したい。

なんとか2日で300個の大台に乗せたい。

「シル、頼んだぞ。シルの感知次第だからな。どんどん見つけてくれよ。」

「かしこまりました。任せておいてください。」

本当はルシエは必要ないのだが、せつかなので召喚してコミュニケーションをとることにしている。

「ルシエ、一つ聞いてもいいかな。サーバントってモンスターもいるけど、逆にダンジョンに悪魔とかが出て出ることがあるのか？」

「わたしが知るわけないだろ。まあ出てもわたしが撃退してやるから問題ないな。」

「同族でも大丈夫なのか？」

「当たり前だろ。同族だからってやられてやるわけないだろ。それにわたしの家族はお前とシルだからな。」

「ん？あのルシエさん。もう一度いいかな。」

「もう一度ってなんだよ。」

「いや、ルシエさんの家族は誰ですか？」

「は？何言ってるんだよ。そんな話、するわけないだろバカじゃないのか？」

「いやいや、確かに言いましたよ。はっきりこの耳が記憶しました。永久保存版決定ですよ。」

ルシエの家族は俺とシル。はっきり聞こえた。

俺は今、猛烈に感動している。確かにルシエとの距離が近づいてきた気はしていた。してはいたが、そんな風に迄思っていてくれたとは。シルは可愛い妹のような存在だと思っていた、だがルシエも最高に可愛い。もうお兄さんなんでも買ってあげそうだよ。

今日俺の家族が増えた。何があっても、3人で乗り越えていけそう
だ。

ただ、勝手に家族が増えて、うちの親がなんと言っただろうか？バレた時が少し心配ではある。

第127話 久々のレアドロップ

俺は今1階層に潜っている。

既に今日一日で100匹以上のスライムを狩っている。

今日は魔核を使う武器は使わないと決めて臨んでいる為、攻撃はワンプターンに陥っている。

サクサク倒せてはいるが、ちょっと退屈なので、一つ思いついてやってみた。

殺虫剤ブレスの吹き出し口にライターで火を灯してから噴射してみたのだ。

以前何かの動画で見たことがあったのだが、物の見事に炎が噴射されて、殺虫剤ブレスがファイアブレスに早変わりした。

炎が噴射された瞬間、結構な炎の大きさと勢いにびびってしまったが、残念な事にスライムへの効果が半減してしまった。ファイアブレスとして一定の効果は得られたが、残念ながら殺虫剤ブレスのようなスライムへの劇的な効果は現れなかった。

これはこれで、他のモンスターへは結構有効かもしれないので、殺虫剤はやはり常備しておこう。

そんな事をしている間に1日が終わり、結果8時間で115個の魔核を手に入れることが出来た。

日曜日なり、順調にスライムを狩り続けている。不思議とレベル17になってもパンチ1発とかで倒せるわけではないので腐ってもモンスターと言うところだろうか。

「シル、スライムって色んな色の奴がいるけど、なんで色が違うんだらうな。」

「申し訳ございません。考えた事もなかったです。特に理由はないんじゃないでしょうか。」

「そうだよな。特に属性とかも無さそうだし、強さもあんまり変わらないしな。スライムの体って何で出来てるんだろうな。」

「水分で出来てるんじゃないでしょうか。」

「まあそうだよな。」

くだらない会話をしながら夕方に差し掛かって、スライムの討伐数が100を少し越えた時、何度か見かけたあのスライムを発見したブロンズメタリックカラーのスライムだ。今までのよりはちょっと地味目の色だが間違いなくレアスライムだ。

「シル、ルシエ、絶対に逃がすな。攻撃頼む。」

素早く逃げようとするスライムに向かって

『ズガガガーン』『グヴオージュオー』

おなじみのシルとルシエのオーバーキルコンボが炸裂した。

「おおつ。」

やはり残されていた。ドロップアイテムだ。だがあれはなんだ？ 黒い小さな物体。

近づいてみると、黒い手袋？ だった。しかも片方だけ。

素材は何かの革製だろうか？

「シル、これなんだと思う？」

「右手用の手袋でしょうか。」

「そうだよな。なんか特殊なアイテムなのかな？」

「そうかもしれませんが、特別感はありませんが。」

「うん。これ呪われているとまずいから、つける前にギルドで鑑定してもらおうよ。」

「それがいいと思います。」

この時点で2日間で魔核200個を突破していたので、そのまま切り上げてギルドへ向かった。

「すみません。これなんですけど鑑定をお願いします。」

「かしこまりました。鑑定料として3万円かかりますが、よろしいですか？」

「はいお願いします。」

受付の人が奥の部屋に行ってから5分程度で戻ってきた。

「こちらが鑑定結果です。」

アイテム名 理力の手袋

MPを消費する事で不

可視の力を発現することができる。

これはなんなんだろう。鑑定結果を見てもよくわからない。

「あのう、すいません。このアイテムってよくあるんですか？」

「いえ、あまり見かけたことはないですね。」

「片方だけなんですけど大丈夫なんですかね。」

「はつきりとはわかりませんが、もともとそういつものなのだと思います。」

「不可視の力ってなんですか？」

「おそらく見えない力のことだと思います。」

やっぱりよくわからないので早速明日、試してみる事にしよう。

第128話 理力の手袋

俺は今1階層に潜っている。

いつもの練習用スペースに陣取って、新しく手に入れた理力の手袋の効果を検証しに来ている。

早速右手に手袋をはめてみる。

特に変わった所も無いし違和感も無い。

これどうするんだろう。使い方がわからない。

とりあえず手袋なので、適当にパンチを繰り返してみるのが特に何も起こらない。

MPを消費するとあるから、魔法のようにイメージすればいいんだろうか。

ちよつと恥ずかしいが、何かを放出するイメージで手を開いた状態から右手を突き出してみる。

特に何も起こって無いように見えるが、微かにだが体に違和感を感じた。

もう一度同じことをやって見るがやっぱり違和感があるので気になつてステータスを確認してみると、MPが2だけ減少している。

2回で2減っているので1回あたり1MPを消費していることになる。

消費しているという事は何かが起こっているのだと思うが、何も起こってる感じがない。

なんだこれ。不良品か？

更に何度か同じ事を繰り返したが、違和感があるだけで特に変化がない。

うーん。

不可視の力なのでもしかして何か起こっていても目に見えないのか？
見えない力をどう感じればいいのか。

考えた結果俺は8階層に来ていた。

水辺まで来て、水面に向かって先程までと同じことをやってみた。

「ジュボン」

ちよつと先の水面が丁度、手のひら分の大きさだけ凹んだ。

やはり目に見えないだけで、何かは出ている？らしい。

今度は拳を握りしめてパンチしてみる。

「ジュボツ」

今度はさつきよりも少しだけ勢いがあるような気がする。

これって見えないロケットパンチみたいなものだろうか。人間相手ならかなり有効だとは思うが、モンスター相手に俺のパンチが効果があるとは思えない。これはハズレアイテムだったのだろうか？さすがにハズレだったで片付けるのは忍びないので、色々と試してみることにした。

まずはチョップしてみたがこれも問題なく射出された。

次に左手にひっくり返して装着して試してみたが、特に問題なく使えた。

今度は足につけてみたが流石に無理だった。

デコピンの要領で指を弾いてみたがこれも成功はしたが威力が弱くなっただけで意味がなかった。

イメージを膨らませて10秒ぐらい溜めてからやってみたが、普通にやるのと大差なかった。

俺が無手で思いつくのはこの程度だった。

次にダメもとで武器を持った状態で使ってみた。

まずはバルザードを右手で握って飛ぶ斬撃のイメージで振ってみる。

「おおっ」

なんと水面が少しだが割れた。

これは夢にまで見た飛ぶ斬撃ではないか。

再度やってみるが、同じ効果を得ることができた。

次に魔氷剣でやってみたが、先ほどよりも広い面積が割れた。

おそらく刃の長さ分切れたのだろう。

調子に乗ってブンブンしてみたがきっちり十発目で変化がなくなった。

手袋を使っても、使用回数は触媒に影響を受けるようだ。

次に「ウォーターボール」に重ねようとしたが、飛んでいく物と見えない物を同時に発現させるのは難しすぎたようだ。

ただ唯一、シールド状の「ウォーターボール」を発現させてから理力の手袋を発動して意識すると、結構自在に移動させることができた。ただし時間は10秒程だ。そのうち何かの役に立つかもしれない。

次に実践で使用して見るために、2階層でゴブリンを探した。

すぐに見つけることができたので魔氷剣を発現させて、少し離れた所から斬撃を飛ばしてみる。

最初の一撃目は、残念ながら命中しなかったので慌てて狙いを定めて再度斬撃を飛ばす。

今度はうまく命中して、ゴブリンを真つ二つにすることが出来た。振るって飛ばすので魔核銃よりも狙いをつけるのが難しい。

練習の為に2体目のゴブリンを探してから、再度斬撃を飛ばしてみるが、今度は一緒に破裂のイメージをのせてみる。

飛ばすイメージと破裂のイメージの両方をこなす為、狙いをつける事まで意識がいかず、再び外れてしまった。

ちょっと焦りながらも、外れないよう十字に斬り結んで斬撃を飛ばしてみたが、どうやら2発共放たれた感覚がある。

ゴブリンに命中したと同時に今度は破裂した。

「おおっ」

やっぱり思った通り、飛ぶ斬撃にも媒介の特性が引き継がれているのでイメージをのせれば色々な効果を得る事が出来るのだろう。外れだと思った理力の手袋だが、訓練次第でかなり使える気がするので今日は一日特訓することにした。

第129話 再び9階層

俺は今9階層に潜っている。

前はスタンピードにあい、探索が殆ど進んでいない為、週末にメ
ンバーと合流するまでに、ある程度探索を進めておきたい。

「シル、もうさすがにスタンピードはないと思うけど、なにが起
るかわからないから注意は怠らないでくれよ。」

「はい、かしこまりました。出来る限り慎重に進みますね。」

しばらく歩いていると

「モンスターが奥に3体います。」

「群じゃないよな。もっと奥とかいないよな。」

「はい、大丈夫です。分かる範囲内にはいません。」

ちよつとびびって慎重になってしまいが気を取り直して奥に進んで
行く。

奥にいたのは雪男？みたいなやつだった。

こちらを認識すると同時に背中を向けて逃げ出した。

「えっ?」

今までにない行動にあっけにとられていると、30mほど逃げたと

ここで反転してこちらに向かつて何かを投げてきた。
なんだ？投げる動作は分かったが物が見えない。

「パシユン」

地面に何かが埋まっている。よく見るとパチンコ玉程度の鉄球のようなものが埋まっている。

どうやら小さすぎて目では追えなかったようだが、殆ど魔核銃のバレットのようなものだ。

やばい。これは見えない上に当たったらやばい。あんなでかい凶体なのにこんな暗器のような飛び道具を使うとは何てずるいモンスタ―だろうか。

俺は慌てて盾を構えてからシルに

「シル『鉄壁の乙女』を頼む」

と伝えてからルシエをカードに送還すると同時にシルを抱きかかえて、雪男目掛けて走る。

「きゃっ」

もう何度か同じ戦法を取っているがシルがなかなか、慣れてくれない。

途中何度か光のベールに鉄球が当たったようだが、効果が無いのがわかった途端に、3体示し合わせた様にまた逃げ出した。逃すわけにもいかないので必死で追いかける。正にリアルけいどろ状態だ。思いのほか雪男のスピードが速くて距離がつかまらない。

しばらく追いかけると『鉄壁の乙女』の効果が切れたが、切れた途端再度こちらを向いて投擲を始めた。

やっぱりこいつはずるい。

シルに指示を与え『鉄壁の乙女』を発動し直して、また追いかけるが距離が縮まらないので埒があかないが、シルを抱っこしたまま狙いをつけた攻撃をするのも難しい。

『ウォーターボール』は有効だとは思うが走りながら拘束されると思いつきり自滅しそうなので使えない。

どうする。考えてはみたがやれる事は限られている。

俺は咄嗟に右手を前に向けて掴むイメージで雪男の足首辺りに向けて理力の手袋の力を発動する。

「ドガツ、ズザーザー」

一番真ん中を走っていた雪男が物の見事に転倒した。

理力の手袋の力で走っている片足を掴むことに成功したが、思った以上に効果的だった。

転倒した雪男を背後から撃ち抜いて消失させた。

残りの2体も一瞬立ち止まって、考えるそぶりを見せたが、再び逃走を始めたので、俺も走り出し、同じ要領で理力の手袋の力で雪男を転ばせることに成功した。

転んだ雪男を再び後ろから狙い撃って消失させたが、流石に最後の雪男は戦法を変えてきて、逃げるのをやめて、つかず離れずの距離感でこちらに間髪入れずに鉄玉を投げってくる。結構距離があるので俺はルシエを再召喚して

「ルシエ、あいつを焼き払ってくれ。」

「ああ、わかってるよ。『破滅の獄炎』」

ルシエの攻撃はえげつないな。一瞬で雪男は消失してしまった。

「し褒美くれよ。」

「私もお願いします」

俺は週末に溜め込んだ魔核からそれぞれに手渡してあげた。まあ2人ともそれほど本気で頑張ったわけでもないからか、数が多くなくてもそれなりに満足そうだった。

この日を皮切りに金曜日まで毎日9階層を探索して周ったので、結構手馴れてきた。

明日は久しぶりにK - 12のメンバーと合流するので楽しみだ。

第129話 再び9階層（後書き）

第130話 パーティで9階層

俺は今9階層に潜っている。

「みんな初めての9階層だから慎重に行こう。一体ずつはそこまで強くないけど、武装してるから注意が必要だよ。防具をつけてる奴は魔核銃も効きにくいから特に慎重に行こう。あとかなり知能が高いし連携攻撃なんかもしてくるから。最後に探知範囲外から突然矢とか石が飛んでくる事があるからとにかく前方には常に気を配っておいてほしい。ないとは思うけどスタンピードが起きたら撤退するからそのつもりでいてほしい。」

「ちょっといい？最後のスタンピードってどういう事？」

「ああ、モンスターが大量発生する事だよ。」

「それはわかるんだけど、どうして急にスタンピードを注意したのかって意味よ。」

「それは、木曜日に9階層でスタンピードにあったんだ。ちょっとやばかったんだよ。」

「スタンピードが起きたなんて今まででもほとんど聞いたことがないんだけど。」

「まあ、たまたまだろうけど、一応気には止めておいて。」

それから探索を開始して20分ほどで

「ミュー、ミュー」

「みんな。臨戦態勢をとってくれ。」

しばらく進むと武装したハイゴブリン3体と遭遇した。

「魔核銃で牽制しながら、俺とあいりさんで仕留めましょう。ヒカリンは『アースウェイブ』を頼む。」

まず3人で魔核銃を撃ちながら足止めをする。スナッチはホブゴブリン相手に『かまいたち』を連発する。

相手が頭部をガードしながら突っ込んで来ようとするところを絶妙のタイミングで『アースウェイブ』が発動して敵の一体をその場に縛り付ける。残った一体にはミクが魔核銃で応戦している間に俺とあいりさんが足止め中の1体の元に急行して前後から挟み撃つ。あいりさんのなぎなたも確実にダメージを与えているが俺はその隙に背後へと回り込みバルザードで一突きして消滅させる。

もう一体に目をやると既に『アースウェイブ』にはまってミクの魔核銃により手負いとなっている。

そのまま、あいりさんとスライドして仕留める。今度はあいりさんが、なぎなたで一閃して仕留めた。

最後の一体は、スナッチが単体で仕留めていた。

久々にこのメンバーで連携をとって敵を撃破した。気持ちいい。メンバーの連携も以前より遥かにスムーズになっており、シルとルシエと組むのとは違った感覚がある。

「海斗さん。なんか武器が違うのです。新しいのに変えたのですか？前のよりも大きくなっているのです。」

「いや、同じ武器なんだけど、なんか進化してみたみたい。」

「進化したのですか？それって凄くないですか？」

「うん。多分凄いいんじゃないかな。」

バルザードを褒められるとなんか自分が褒められてるみたいで嬉しい。

そのまま、継続して探索をしていると、突然前方から石が飛んできた。

特に注意していたのでなんとか被弾せずに済んだが、危なかった。

どうやらスナッチは感知できていなかったようだ。シルでも矢は無理だったが、投石してくる距離は感知できていたので、スナッチの方が感知範囲が狭いようだ。この飛び道具が突然飛んでくるのは本当に危険なので少しでもリスクを減らしたい。

何かあってからでは遅いので、次からシルを探知役として召喚しよう。

とにかく今は敵を倒さなければならぬので、盾を構えてから

「俺が突っ込むから援護を頼む。」

そのまま俺は敵に向かって突っ込んでいったが、後方から左右を魔核銃のバレットが通過していく。

しっかりと牽制になっているようで、ほとんど石が飛んでこないまま敵までたどり着いた。

2体のジャガーマンがいたので、バルザードを振るい斬撃を飛ばす。それぞれのモンスターに2撃つつ放った時点で爆散して消失した。ヒカリンが後ろからついて来ていたよう。

「海斗さん。魔剣を振るったら、離れた敵が吹っ飛んだのです。」

体何をしたのですか？」

「いや、この手袋なんだけどマジックアイテムで理力の手袋って言うんだけど、この前ドロップしたんだよ。なんかこれのおかげで剣戟を飛ばせるようになったみたいで。」

「海斗さん。完全に魔剣士じゃないですか。すごいです。飛ぶ斬撃なんかアニメでしか見た事ないです。達人じゃないですか。」

「いや、そんなんじゃないんだけど。」

謙遜しながらも、普段人から褒められることがあまり無い俺としては、密かに嬉しかった。

第130話 パーティで9階層（後書き）

第131話 危機

俺は今9階層に潜っている。

昨日、メンバーとうまく連携が取れていたので今日も順調に探索が進める事が出来るといいなと思いきや昨日より張り切っている。

昨日とは違う点は、シルを召喚していることだ。

スナッチには悪いが、リスクを少しでも減らす為、9階層での探知はシルに任せることにした。

シルを召喚したことにより、探索効率とメンバーのモチベーションは飛躍的に上がり、順調ではあるものの、俺以外のメンバーはこのペースに慣れていないので逆にオーバーペースにならないか心配になってくる。

今のところ、連携も取れているし、誰も負傷していないし順調にいつている。

「うっ」

痛い。また矢が俺の右足に命中した。他のメンバーに被害がないので良いことなのだが、何故か俺にばかり命中する。念のために盾も持っているのだが、カバーしきれない足に命中してしまった。

もちろん骨が折れているので慌てて、低級ポーションを飲み干す。何度くらっても慣れる痛みではないが、探知できない所から飛んで来るため、これ以上の対策の取りようがない。とにかく俺が前を歩いて、致命傷だけ受けないようにしていくしかない。

「大丈夫？ポーションだったら私も持つてるからいつでも言ってくれ」

流石にメンバーも心配してくれるが、対策がない以上このまま頑張るしかない。

盾を構えたまま突っ込んでいく。

何度か盾に矢が当たったが無視して突っ込む。

最近見慣れてきたシルバーオークが見えたので盾からバルザードに持ち替えて魔核銃とバルザードの斬撃を繰り返す。

即座に2体を消失させたが3体目は撃ち漏らしたので弓では狙えないように近づきつつ側面に回り込んでから

バルザードの斬撃を飛ばす。

「ボフウン」

シルバーオークの消失を確認してから、メンバーの元に戻るが、MP1を消費するものの、斬撃を飛ばせるようになってから飛躍的にバルザードの使い勝手が良くなっている。

「海斗一人に任せてすまないな。」

「いえ、相性がありますからね。一番俺が適任なんで。」

そのあと何度かモンスターと交戦したが全く危なげなく撃退できている。

「ご主人様。不味いです。敵ですが今までとは違います。今すぐルシエを召喚してください。」

何事かわからないが今までこんな事は一度も無かったので、すぐにルシエを召喚する。

「今日はどうしたんだよ。なんか、顔が変だぞ。」

顔が変なのは大きなお世話だが、ルシエなりに異変を感じているのかもしれない。

「ルシエ、奥に高位の敵がいます。明らかに今までの敵とは違います。絶対に気を抜いてはいけませんよ。」

「シルがそう言うなら間違いないな。まあ、わたし達がいれば大丈夫だろ。問題ないな。」

「みんな、聞いた通りだ。恐竜の時でもシルがこんな風に言うことはなかったんだ。とにかくやばくなったら逃げてくれ。遠距離攻撃中心でとにかく攻撃をくらわない事だけに集中してくれ。ヒカリンは敵が現れたらサポートに徹してくれ。シルとルシエも戦闘に加わるから。」

とにかく敵を見ない事には対処のしようがないので、盾を構えた俺を先頭に全員で敵の方向に向かって進んで行く。

近づくにつれ、気配探知など持っていない俺でもわかるほどの強烈なプレッシャーを感じたが、それを無視して進む。遂に敵を目視出来る距離まで来た。

そこにいたのは超巨大な双頭の犬だった。

「なんであいつがこんなところにいるんだ。」

「ルシエ、知っているのか？」

「あいつは地獄の狂犬オルトロスだよ。あいつはちょっと厄介だぞ。口から毒を吐く。おまけにファイアブレスも出せる。尻尾にも高い

毒性がある。絶対に近づくなよ。」

オルトロスか。俺でも知っているビッグネームじゃないか。しかも毒か。低級ポーションで治せるだろうか。とにかく、シルとルシエを軸に遠距離攻撃を展開していくしかない。

軀体を見る限り、あいつの方が確実に速そうだ。逃げるのは無理そうなので必ず仕留めなければならない。

第132話 オルトロス

俺は今オルトロスと戦おうとしている。

「シル、『鉄壁の乙女』を頼む。みんな光のサークル内に入ってくれ。この中なら大丈夫だから。」

「ルシエ、とにかく『破滅の獄炎』で焼き払うぞ。」

そう指示を出してから、俺自身も臨戦態勢に入った。

オルトロスの大きさ自体は恐竜よりは大分小さいが、恐らく攻撃力は上なのだろう。あとは防御力の問題だがやってみないとわからない。

まずは魔核銃を放ってみる。

ミクとあいりさんもほぼ同時にバレットを放つ。

「っっっプシュ」「っ」

オルトロスの反応を見ると、なんらかの影響はあるようだが、ダメージと呼べるものを与えられたのかは分からない。

『グヴオージュオー』

ルシエの『破滅の獄炎』が炸裂したが、オルトロスは健在だ。体毛が焦げてはいるが、炎への耐性が高いのか、致命傷には程遠い。

「ルシエ、『侵食の息吹』を使ってくれ」

指示と同時にオルトロスが吠えたと同時に双頭からファイアプレスを仕掛けてきた。

「うづつ。」

『鉄壁の乙女』に遮られて直接的なダメージはないが、猛烈に熱い。どうやら温度変化までは完全には防げないようだ。

「さつさとくたばれ。『侵食の息吹』」

「グウウー」 「グウルウ」

何かしらの影響を与えてはいるものの、効果がはっきりしない。

この間もスナッチは間髪入れずに『かまいたち』を連発している。

俺もバルザードから斬撃を飛ばして命中させるが、爆散しない。表面で爆発してはいるようだが、本体への影響が極めて少ない。

「アースウェイブ」

ヒカリンが継続的に『アースウェイブ』を発動しているお陰で、オルトロス自体の動きは鈍いのだが、今までで一番防御が堅い。

「ウワオオオオン！」 「グウオオオオオー」

オルトロスの咆哮が響き、強烈なプレッシャーが襲ってくる。

おそらくこの感じ、威圧系のスキルではないだろうか。慌ててメンバーの方を向くが、『鉄壁の乙女』の効果もあり全員が正気を保って、攻撃を続けている。

「ウォーターボール」

魔氷剣を発動してから斬撃を飛ばす。
着弾と同時に少し裂傷を負っているようだが、まだまだ致命傷には程遠い。

オルトロスが再び口を開き攻撃をしてきた。片方の口からは何やら液体を飛ばしてきたので多分毒だと思う。

『鉄壁の乙女』に防がれて俺たちに影響はないが、今のままではこちらも決め手を欠いており、ジリ貧状態だ。

『グヴオージュオー』

「ウウウウー」

オルトロスの唸り声に苦痛の色が含まれているので、ルシエの攻撃は確実に効いてきてはいるが、このままだと千日手の様相を呈し、先にガス欠を起こすのはこちらだと思える。

意を決して、俺はルシエをお姫様抱っこして飛び出した。

「お、おい。急に何するんだよ。」

「このままだと埒があかない。オルトロスの足元まで俺が運ぶから、下から腹に向かって『破滅の獄炎』を放ってくれ。犬だったら腹の部分の方が弱いはずだ。」

「わかった。また死ぬなよ。」

「だから俺は死んだことないんだって。」

そのままルシエを抱えてオルトロスの元へ走るが、当然オルトロスもこちらをロツクオンしてくる。

「「プシュ」 「ファイアボルト」 「ブウウン」

パーティメンバー全員が注意を逸らす為、援護してくれる。

「グオオーオ」 「ギャーウウー」

確実に嫌がってはいる。

「破滅の獄炎」

ようやくオルトロスの足元付近まで近づいて、間髪入れずに攻撃をする。

『グヴオージュオー』

「ガアアアア、ギューアアアア」

効いている。

「ルシエ効いてるぞ。連発してくれ。」

『グヴオージュオー』

『グヴオージュオー』

「グウウウガアアア」 「グルウウウアア」

やっぱり効いているが致命傷まではいかない。

「みんな、シルを一度送還するから、攻撃しながらもっと距離をとってくれ。」

少しだけ間をおいて、シルを送還してすぐに再召喚した。

「シル、ルシエと一緒に腹に攻撃してくれ。『神の雷撃』を頼む」

「ズガガガーン」

なぜかシルの攻撃はオルトロスの背中に着弾した。

第133話 決着オルトロス戦

俺は今オルトロスの足元にいる。

「シル、なんで背中を攻撃したんだ。腹を頼む。」

「ご主人様。『神の雷撃』はあくまでも雷系なので、上から下に落ちます。下から上には無理なんです。」

ああ。確かに雷は上から下に落ちるものだ。完全に特性を忘れてしまっていた。

「すまない。俺のミスだ。神槍は腹に打つことは可能か？」

「もちろん大丈夫です。」

「ルシエ、シルの攻撃に連動して『破滅の獄炎』を放ってくれ。」

「大丈夫だ。」

「我が敵を穿て、神槍ラジユネイト」 「破滅の獄炎」

2人の攻撃に合わせて俺もバルザードの斬撃を飛ばす。

「ギャグウウウ」

初めて明確なダメージがオルトロスの腹部に入る。

ダメージを受けてこちらを攻撃しようとするが、いいタイミングで

スナッチと他のメンバーが再度攻撃をかけてくれる。
鬱陶しいと思ったのか、オルトロスの双頭がメンバー達の方を向いて息を吸い込んだのが見て取れた。

「逃げる！」

俺は声を上げながらも、右側の頭にはバルザードの斬撃を飛ばし、もう一方の頭には氷の盾を出現させて理力の手袋を使ってオルトロスの口の奥に押し込んだ。
ブレスを防ぐほどの強度は全くないが、はるか上部に位置する口の中を狙える方法を他に思いつかなかった。
少しでも遅らせれば良いと思い、咄嗟に発動させていた。

「ゴ、ゴフツ、ゲハツ」

無駄かもしれないと思いつつ放った氷の盾だが思わぬ効果を生んだ。開けた口の中にそれなりの大きさを持つ氷の幕を気管まで一気に押し込まれた事により、オルトロスがむせた。むせて咳き込んだ。右の頭部もバルザードの斬撃ともう一方の頭がむせ込んだお陰で、ブレスを発することはできなかつたようだ。
むせ込んでいる隙に再度腹部に攻撃をかけるが、腹部は完全に弱点だったようで、効いてきている。

他のメンバーも位置を変え再度牽制してくれている。
オルトロスは先程何が起こったのか理解できないようで、警戒してブレスではなく足での通常攻撃をかけて来ようとする。
ダンジョンの照度では透明な薄い氷は認識できなかったのだろう。
突然不思議な力で咳き込んだ様に感じたのかも知れない。
何れにしてもチャンスだ。

俺たち3人も移動を繰り返しながら腹部の1点を狙い続ける。

「グ、グフウツ、ギャウツ」

「効いてるぞ。あと少しで倒せそうだ、押し込むぞ。」

3人で更に攻撃を繰り返すと、オルトロスがたまらず倒れこんできた。

「ズズズウーン」

地響きと共にオルトロスの双頭が攻撃可能な位置に出現した。

「みんな今だ。」

ここが勝負どころなのは全員わかっていたので、ヒカリンは『ファイアボルト』を連発して、あいりさんも駆け寄ってきて薙刀で頭部を斬りまくる。スナッチも近距離から『かまいたち』を放っている。俺も頭部に斬撃を加え、シルとルシエもコンボ攻撃を連発している。流石にこの状態になればオルトロスにもはや抵抗する力は無く、しばらく攻撃を続けるとオルトロスの巨体が消失した。

「やったな。オルトロスを倒したぞ。全員の連携勝利だな。結構消耗したけどノーダメージで勝てたから言うことなしだな。」

1番の勝因はヒカリンの『アースウェイブ』でオルトロスのほとんどの行動を制限できたことだろう。

「ああ、オルトロス相手に上出来だな。けどなんでこんな所にオルトロスがいたんだろうな。普段は魔界にいるはずなんだけどな。もしかしたら、恐竜とかスタンピードもオルトロスのせいだったのかもな。」

「ちょっと休んでいいかしら。私たちこんな大物相手にするの初めてだったから、精神的に疲れちゃって。恐竜の時は硬直してただけだったから。」

「ああ、そうかごめん。ちょっとまって。シル周りにモンスターの気配はないか？ここでしばらく休んでも大丈夫かな。」

「少々お待ちください。」

えっ？

ご主人様今すぐ

臨戦態勢を整えてください。何故だか、最初に感じた強力なモンスターの気配が無くなっています。もしかしたらもう1体いたのかもしれない。」

第133話 決着オルトロス戦（後書き）

第134話 本当の危機

俺は今9階層でオルトロスを撃破したばかりだ。

「シルと言う事だ？オルトロスがもう一体いるって事なのか？」

「申し訳ありません。そこまでは分からないのですが、高位の敵の気配が消えています。」

「みんな、聞いている通りだから休憩はちょっと無理っばい。あと1体倒してから休憩を取ろう。作戦は、さっきと同じで行こう。オルトロスだったら問題なくいけるはずだから。」

取り敢えず、俺たちは臨戦態勢を整え直して再度神経を集中して敵を待つ。

「ああ、所詮は犬ですね。簡単にやられてしまったようですね。」

「はっ？」

奥から声が聞こえてきた。誰か他の探索者が居るのか？

声の方に集中して視線を向けるとそこから現れたのは、人ではなかった。

背丈は大体2Mぐらいだろうか、モンスターとしてはそこまで大きい方ではないが体は茶褐色で筋肉質、見た目は人間に近いが決定的に違うのは頭部に大きな角が2本生えている。

「先程の戦いを見ていましたが、貴方達なかなかやりますね。オル

トロスは頭が良くないとは言え、それなりの強さはあつたはずですが、見た目によらずびっくりしましたよ。なにやら1人は私と同族が混じっているようですし。」

喋った。しかも同族？こいつまさか・・・

「ルシエ、こいつもしかして」

「ああ、間違いないな。こいつ悪魔だな。見たことはないが、そこそこやりそうだ。」

「無礼な子供ですね。士爵級悪魔の私に対して礼儀がなっていないですね。同族のよしみであなただけ逃してあげようかと思いましたがやめました。死んでください。」

「ルシエ、子爵級って。」

「いや多分こいつは子爵じゃなくて士爵級だ。一番下の爵位級だ。」

「じゃあ、大したことないな。ルシエの方が上だろ。」

「何をわけのわからない事を言っているんですか？子供が生意気な口をききますね。暇を持て余して、オルトロスと一緒に来てみたのですが暇つぶしぐらいには頑張ってくださいね。」

「シル『鉄壁の乙女』だ。みんな油断するな。最下級でも爵位級悪魔だから結構強いかもしれぬ。」

「最下級、最下級と平民風情がうるさいですね。もういいです。死になさい。『ダークメア』」

なにやら得体の知れない黒いモヤのようなものが吹き出して光のサークルの周囲を覆ってしまふ。攻撃を仕掛けてきたようなので何かしらの特殊効果を持ったモヤなのは間違いない。スナッチがモヤを吹き飛ばすために『かまいたち』を連発すると、だんだんもやが晴れてきた。

「ほう。なかなか優秀な防御壁のようですね。『ダークメア』を防げるとは思いませんでした。じゃあ次は

・・・」

と言いながら右手に持つ黒い剣でいきなり斬りかかってきた。

「ガンッ」

『鉄壁の乙女』は文字通り鉄壁の効果を発揮して全く寄せ付けないが、俺には見えなかった。あいつの太刀筋が全く見えなかった。気がついたら光のサークルまで剣が届いていた。

こいつはやばい。
今までの巨大な敵と違ってサイズの的にはどうにかかなりそうだが、なんかやばい。

「シル『鉄壁の乙女』だけは切らさないよう注意してくれ。ここからは相手に気取られないように極力指示は控えるから、それぞれ前回と同じように頼む。」

そう言うと俺はバルザードを横に一閃して斬撃を飛ばす。それを合図に全員が攻撃を開始する。

アイリさんとミクが魔核銃を放ち、ヒカリンが『アースウェイブ』を発動。スナッチは継続して『かまいたち』で攻撃。ルシエも『破

滅の獄炎』を発動して、敵を総攻撃する。

それぞれが攻撃を連発しながらも敵を注視する。

攻撃は全弾命中している。命中しているというよりも全く避けるそぶりを見せない。

「嘘だろ・・・」

オルトロスでさえ、なんらかのダメージを与えることは出来ていた。なのにこいつは完全にノーダメージのようだった。

第135話 士爵級悪魔

俺は今士爵級悪魔と対峙している。

正直少し舐めていたかもしれない。ルシエが子爵級悪魔なので、ルシエよりも格下の士爵級は問題ないだろうとたかをくくっていた。しかし、こいつは何だ？なんで俺たちだけではなく、ルシエの攻撃もノーダメージなんだ？子爵の方が強いんじゃないのか？

疑問に思いながらも、攻撃の手を緩めるわけにはいかないので、攻撃を継続的に行う。

「ルシエ、こいつノーダメージっぽいんだけど。やばくないか。」

「ああ。ちょっとやばいな。シルにも攻撃してもらうしかないだろ。」

確かに俺たちの攻撃が効果が無い以上、一番攻撃力の高いシルに頼るしかない。頼るしかないが、シルを攻撃参加させると『鉄壁の乙女』がなくなってしまう。

目に見えない程の攻撃をしてくるあいつ相手では悪手に思えてくる。

「海斗、シル様に攻撃参加してもらってくれ。私たちは大丈夫だ。その間ぐらいは弾幕でなんとかする。あいつの太刀筋も早いがなんとか出来るレベルだ。」

あいりさん。あいつの太刀筋見えてるんですか。俺全然見えなかったんですけど、やっぱりあなたもすごいじゃないですか。

「シル、攻撃に参加してくれ。みんなは、弾幕張りながら出来るだ

「け距離を取ってくれ。」

「かしこまりました。」

『鉄壁の乙女』の効果は切れるタイミングを見計らってシルが

「神の雷撃」

それに合わせて俺とルシエもそれぞれ攻撃を加える。

「嘘だろ」

3人の合わせ技をくらった悪魔は特にダメージを受けている様子もなく、平然とそこに立っていた。

「先ほどまでよりは、ましな攻撃でしたが所詮はこんなものですか。やはり幼女の攻撃など私に効くわけがないのです。」

「シル、神槍だ。ぶっ放してやれ。」

「我が敵を穿て、神槍ラジュネイト」

「ドガガッ」

こいつ、シルの一撃を剣で受け止めやがった。

「ほう。この一撃はかなりのものですね。ただ私は土爵。騎士にそんな攻撃は通じませんよ。」

「ルシエ、『侵食の息吹』だ。」

「ウオーターボール」

俺自身も魔氷剣を出して攻撃力を上げる。
斬撃を連発させるべく、十字に斬って斬撃を飛ばす。

「ふうっ、時間の無駄のようですね。こちらから行きますよ。」

悪魔はゆっくりと歩いてきて、俺の目の前まで来ると持っている剣を一閃した。

「ガキイン」

「海斗しっかりしろ。斬られたら死ぬぞ。」

すんでのところで、あいりさんのなぎなたが伸びてきて、敵の攻撃を防いでくれた。

「ファイアボルト」

ヒカリンが攻撃をかけてくれる。

危なかった。剣筋が見えないうえに、集中力が一瞬途切れてしまった。

再度全員攻撃をかける。

シルまでを含めた全員での一斉攻撃、これに勝る攻撃は出来ない。

「ふうっ。痛いですね。好きにやらせすぎました。順番に潰しますよ。」

嘘だろ。本当に軽くダメージは入ったようだが、それだけだ。全く

倒せる気配などない。

「ガキーン」

今度は再びあいりさんに向かって剣を振るい、あいりさんがふきとばされてしまった。

「うつつ」

外傷はあまりないようだがダメージは受けており、戦線復帰は難しいかもしれない。

今の動きを見ると『アースウェイブ』も機能していないようだ。残りのメンバーで再度総攻撃をかける。遠距離に関してはあいりさんが欠けても威力はそれほど落ちない。

「またですか。ちょっと煩わしいですね。次はあなたですね。」

そう言うと同時に俺の目の前に現れ上段から斬りつけてくるが、目を離さないように集中していたのと何度か太刀筋を見ていたせいで辛うじて受け止めることができた。

受け止めた瞬間、破裂のイメージを複数回繰り返して魔氷剣に乗せた。

「バキーン」

高音の金属音とともに悪魔の武器が粉々に砕け散った。やってやった。

第135話 士爵級悪魔（後書き）

第136話 渾身の一撃

俺は今悪魔と対峙している。

運もあつたが、敵の武器を破壊する事に成功した。

恐らく士爵級悪魔が使う剣なので魔剣だったのではないだろうか。見た目はあれだが、俺のバルザードの方が優れていたのだろう。

「あああつ。このゴミムシが公爵様より頂いた私の剣を。遊びは終わりだ。今すぐ死ぬ。」

やばい。怒っている。怒りで悪魔の顔が悪魔のような顔に変化している。

「死ぬっ」

悪魔が拳でラツシユをかけてきた。

魔氷剣で受け止めるが、すぐに使用制限を超え、ただの万能包丁に戻ってしまう。

死ぬっ。

「させません。」

シルが神槍を発動して割って入るが、槍が掴まれた。神槍の熱量によって手から血が流れているので、初めて目に見えるダメージを与えられたが、それだけだ。

一瞬の膠着状態を見て、全員が一斉に攻撃をかける。俺も『ウォーターボール』で氷の刃を超近距離発動するが、やはり効果が薄い。神槍を掴まれた状態で、シルが持ち上げられ、そのまま振り飛ばさ

れてしまった。

「うつつ」

大丈夫のようだが、構う暇はなく、俺に悪魔のパンチが降り注いだ。とつさに『ウォーターボール』で氷の盾を発動したおかげで、吹き飛ばされたがなんとか生きている。生きてはいるが、何箇所か完全に骨が折れている。

「ご主人様を。許せません！」
「くそつたれ、土爵風情が死ぬ。」

俺がやられたのを見てサーバントの2人が今まで見せた事のない表情を見せ、悪魔に向かって猛攻を仕掛ける。シルは神槍での連撃を繰り出し、ルシエはそれに呼応して『破滅の獄炎』を連発している。スナッチやヒカリンの『ファイアボルト』も間髪入れずに繰り出されているのが見える。

攻撃が続いている間に、リュックから低級ポーションを取り出して一気に飲み干す。

しばらくすると痛みが引いてきたが、今までと違って完全には引かない。思ったより重症だったのかもしれないが十分動ける。

バルザードに魔核を吸収させて、すぐに戦線復帰する。

サーバント達の怒りによるものなのか、攻撃力が上がっているように感じる。そのせいか今までダメージを与えることが出来なかった相手に、若干ではあるが手傷を負わせているように見える。

俺が出来ること。

極力気配を薄くして、倒れていた位置から悪魔の背後までゆっくりと近づいて行く。

何度も繰り返ししてきた手順だ。

みんなのおかげで俺には全く意識が向いていない。

悪魔の背中が目の前にある。

バルザードを構えて身体ごと一気に飛び込んで突き刺す。

「グワツ」

刺さったバルザードに向けて破裂のイメージを制限回数一杯まで繰り返す。

破裂する衝撃を感じなくなった。

直接刺さった状態からのバルザードの特殊効果連続発動だ。効果が無いはずはない。

バルザードが刺さっていた周辺30cmぐらいがポツカリと穴を穿っていた。

勝った。

パーティーメンバー全員がそう思っただろう。

「ガ、ガハツ。フーツ、フーツ『ダークキュア』」

次の瞬間、悪魔がスキルを発動した。

ポツカリ空いていた腹部の穴が徐々に閉じていく。

「う、嘘だろ。」

決死の一撃だった。全員の力を合わせた必殺の一撃。みんなのおかげで繰り出すことができた渾身の一撃だった。

確実に効果はあった。完全に致命傷を与えることに成功した。歯が立たない相手を撃破することができた。

そのはずだった。

それが回復系のスキル？反則だろ。自分がポジションで回復したのに敵が回復しないと思う事に無理があるのかもしれないが、普通、敵は回復しないだろ。このレベルの攻撃と防御ができるやつは、回

復しちやダメだろ。

次の瞬間、俺は再びぶっ飛ばされてしまい、そのまま意識を失ってしまった。

第137話 暴食の美姫

俺は今士爵級悪魔に吹き飛ばされて動けない。

パーティーメンバーが俺をかばって戦ってくれている。

名前は知らないが相手はあの士爵級悪魔だ。

シルとルシエも俺を庇って奮闘してくれているが、メンバーが次々に倒されていく。

今まさにシルとルシエが首を締めて持ち上げられている。

「やめろ！やめろー！！」

助けようと叫ぶが、体が動かない。

その直後、シルとルシエが光の粒子となって消失してしまった。

「ああああああああああー」

目の前の光景に今まで感じたことのない衝撃を受け、意識が覚醒した。

「うっ。ゆめか・・・」

次第に意識がはっきりしてきて、目を開けると、そこにはパーティーメンバーとルシエが倒れていた。

シルもかろうじて立ってはいるが満身創痍の状態だった。

夢じゃなかった。みんなが俺をかばってくれていた。先程の夢とリンクする光景に今まで感じたことのない怒りがこみ上げる。

不甲斐ない自分が許せない。この不条理な悪魔が許せない。

俺がやらないといけない。

何があってもパーティーメンバーは俺が守る。
命に代えてもシルとルシエは守る。

大した覚悟などなかった17年の人生の中で、この時初めて自分の命を懸けてでも為さなければならぬ事がある事に気がついたかもしれない。

怒りと決意が動かない体を無理やり動かして、低級ポーションを取り出すことに成功した。

震える手で蓋を開け一気に飲み干す。

まだ戦える。だがどうやって戦う。また忍び寄って後ろから強襲するか？頭を狙えばいけるか？

もう、注意を引いてくれるメンバーはいない。シルも満身創痍、この状況ではおそらく成功しない。

「お、おい。大丈夫か・・・逃げる。」

「ルシエ・・・」

ルシエはかろうじて意識があるようだが、こんな状況でも俺のことを気遣ってくれている。俺の中でやるせない怒りが増幅する。

どうする。どうすればいい。時間はもうない。今すぐあいつを倒す方法。何か無いか。本当に俺には何も残っていないのか？シユールストラダーが1缶、殺虫剤が1缶。ライターが1個。

シユールストラダーを投げつけて、殺虫剤に火をつけてファイアブレス。

いやダメだ。時間稼ぎにはなるかもしれないがあいつを倒せるイメージが全くわからない。

俺に残されたものはもう無い。無いがまだ使用してないものが一つだけあった。

『暴食の美姫』

ルシエがレベルアップした時に発現したスキル。

スキル 暴食の美姫・・・契約者のHPを消費する事で、一時的にステータスアップを図ることが出来る。
ステータスの上昇幅は契約者との信頼関係に依存する。

発現して以来1度も使用した事はない。俺の生命を吸って発現する悪魔スキルの為、怖すぎて死蔵していた。

以前のルシエであればそれ程のステータスアップは望め無かったかもしれないが今のルシエならあるいは・・・
というよりもこれしかない。これしか残されていない。

悪魔スキルが最後の希望というのも、なんとも皮肉な感じだがこの際目をつぶろう。

「ルシエ、『暴食の美姫』を発動してくれ。」

「えっ・・・あれ、使って・・・大丈夫なのか？責任・・・取れないぞ。」

「ああ、大丈夫だ。俺が責任とってやるから頼む。」

「わ、わかった、やってみる。」

『暴食の美姫』

ルシエが『暴食の美姫』を発動した瞬間、俺の体に急激な変化が訪れた。

MPを使用する時にも何かが抜けていくような気持ち悪い感覚があるが、これはそんなものじゃない。ジェットコースターの落ちる瞬間がずっと続いているような強烈な圧力と虚脱感が混在している。

「ぐづつうう」

慌てて自分のステータスを確認する。

俺の元々のHPは57でポーションを飲んだので全快しているはずだが今は55になっている。

あっ。

見ている間にも減っていく。大体だが2秒にHP1が減っていくている気がする。

このままだと100秒程度で俺は死んでしまう。

そうだ、スキルは発動しているんだ。ルシエはどうなった。何か効果が見れているのか？

現れてなければ、もう終わりだぞ。

死にそうになりながら祈るような気持ちで、ルシエの倒れていた場所を見た。

第138話 子爵級悪魔

俺は今死にかけている。

ルシエのスキル『暴食の美姫』の効果により俺の生命、HPがガリガリ削られていつている。

このままだとあと100秒足らずで死んでしまう。

祈るような気持ちでルシエの方を見たが、そこに俺の知っているルシエはいなかった。

そこにいたのは、俺と同じ年ぐらいだろうが、絶世の黒髪ロングヘアの美少女が立っていた。

「うつつ、お前ルシエなのか？」

「あたりまえだろ。他に誰がいるんだよ。」

「ふうふう、だってお前、大きくなってるんだけど。」

「ああ、それはレベルが初期化された事によって、元の状態から弱体化していたからだよ。」

「うつつ、それじゃあ、今のが本当の姿ってことか。」

「まあ、まだ完全に元に戻ったわけじゃないが、あいつくらいならこれで十分すぎるだろ。」

「は、早くしてくれ、冗談じゃなく俺が死んでしまう。うつつ。」

「わかったよ。おい、三下。わたしの妹にふざけた事してんじやな

い。今すぐ殺してやる。」

わたしの妹？どっちかというとお前の方が妹だろ。大きくなって気も大きくなったのか。

「あなたルシエなの。」

「ああ、交代だ。もう大丈夫だ。」

「あなた誰ですか。先程までいなかったはずですが。」

「うるさい三下。喋り掛けるな。空気が腐る。」

「なつ。無礼な小娘が。身の程をわきまえなさい。」

「うるさい。士爵風情が偉そうに。お前がわきまえろ。」

「あなたが先に死になさい。『ダークメア』」

ルシエを黒い霧が覆い隠す。

「ルシエ！」

ルシエは大丈夫なのか？完全に黒い霧に覆われてしまい全く見えな
い。

しばらく見ていると霧が晴れて来たが変化は見て取れない。

「どうかしたか？ただの霧だぞ。」

「なつ。どういことですか？なぜ大丈夫のですか。」

「士爵程度の攻撃が効くわけないだろ。」

「あなたは一体、何者なのですか。」

「わたしは子爵級悪魔のルシェリアだ。」

「し、子爵様？一体どうしてこんなところに。」

「私の家族に手を出した報いを受ける。『爆滅の流星雨』」

なんだ？聞いた事の無いスキルだ。ダンジョンの上部から無数の炎の塊が落ちてくる。

士爵級悪魔に向かって一斉に降り注ぐ。 うつつ、気持ち悪い……

「ズドドドドドドウウーン」

なんか今までのスキルと桁が違う。異常な熱量と質量だ。ルシェってこんなに凄かったのか。さすがは子爵級悪魔。ただ前振りが長すぎて俺はもう長くない……
粉塵が晴れてくると、そこにはボロボロの状態の士爵級悪魔が立っていた。

これでも死なないのか？

「くっ。どうやら本物の子爵様のようですね。どうでしょうか、同じ爵位級悪魔のよしみで見逃していただけないでしょうか。助けて頂ければそれなりのお礼はいたしますので。」

「お礼って何だよ。何してくれるんだよ。」

「おいおい。何言い出してるんだよ。お前がおしゃべりしてる間にも俺はHPを削られて死にそうだ。冗談抜きでやばい。俺はHPが15を切ったのを確認して焦って最後の低級ポーションを飲み干した。」

「これでまた100秒は大丈夫だが、気持ち悪さは一切治らない。」

「ル、ルシエちょっとは俺のことも気にしてくれ。本気でやばい。もうポーションがないんだ。」

「ああ、わかってるって。ところでお礼って何だ？」

「おい。聞いているのか。」

「わたしにできる事なら何なりと。」

「じゃあ、地獄の宝玉　ローゼンブルをくれよ。」

「い、いえ。それは無理というものです。」

「うん。じゃあ魔王の宝剣　ラグスレウブを取ってきてくれよ。」

「いや無理ですよ。無理に決まってるじゃないですか。私はただの士爵ですよ。」

「なんだ士爵って大した事ないな。じゃあおまけしてお前の魔核でいいぞ。」

「ご冗談を。魔核など渡してしまえば死んでしまうのでは無いですか。」

「ああそうか。じゃあ死んでくれよ。」

「ああっ。まともにした私がバカでした。『ダークキュア』」

悪魔がみるみるうちにダメージから回復していく。

あゝルシエ、だから俺には時間がないんだって。

第139話 勝利

俺は今死にかけている。

あと100秒ほどで死んでしまう。

「る〜シエ。お仕置きするぞ。ふう、ふう」

「わ、わかったよ。さっさとやればいいんだろ。」

「ハリーアップ。」

「はいはい。『神滅の風塵』」

「ちょっとまってください。神滅？ただの子爵に使えるようなスキルではないでしょう。あなたは一体。」

士爵級悪魔が無駄話をしている間に気圧が集約したような暴風が悪魔を包み込んだ瞬間に全ての風が中心部に圧縮されて、消え去った。風が消え去ったあとには、悪魔の姿は、跡形も無く消え去っていた。終わったのか。復活とかなしいよな。大丈夫だよな。

一抹の不安を覚えて、悪魔の居た場所を注視していたが、特に変化はない。

うつつ。こうしている間にも俺のHPは削られ続けている。

「ルシエ、もうダメだ。吐きそう。早く 『暴食の美姫』 解除してくれ。うつつ。」

「え〜せっかく、大きくなれたんだからもう少しこのままでいよう

かな。」

「おいつ。冗談言ってる時間はないんだよ。死ぬ。死んじゃう。」

「え、別に冗談じゃなくて本気なんだけど……」

「いやルシエ、あと30秒しかない。会話の時間が勿体無い。急いでくれ。」

「まあ、このまま30秒ほっとけばわたしは晴れて自由になれるんだよな。ふふふつ。」

「なつ。お前、本気が、本気で言ってるのか？」

「ルシエ、ご主人様をいじめるのはそのぐらいにしておきなさい。」

「ふふつ。わかってるよ。冗談だって。そんなことするわけないだろ。ちよつとからかっただけだろ。」

「いや、あと20秒しかない。命をかけた冗談なんか必要ないから、早くしてくれ。うつつうつつ。」

「しょうがないな。わたしのこと見直したか？これからはシルと同じように優しくしてくれるか？」

「するする。するから早く頼むあと15秒しかない。」

「約束だぞ。」

そう言うところルシエが閃光につつまれて、そこにはいつものルシエが

立っていた。

やばかった。あと10秒しかなかった。

何れにしても俺のHPはあと5しか残っていない。死んではいけないが虚脱感がすごい。

本当に終わった。

オルトロスだけでも大変なのに連戦で土爵級悪魔。ちょっと無理。流石にしばらくはモンスターと戦いたくない。

「あつ」

やばい。シルとパーティメンバーをほったらかしていた。大丈夫だよな。

「シル大丈夫か？」

「もちろん大丈夫です。流石にちょっと疲れましたが、お腹がいっぱいになれば大丈夫です。」

「わたしにもいっぱいくれよ。」

え。ルシエお前も？散々俺のHP吸い取ったじゃないか。

結局手持ちの魔核をほとんど渡す事となってしまったが、帰りのこともあるので、手元に10個だけ残してもらった。

残りのメンバーに目を移して駆け寄ってみると、全員気絶しているだけのようで、間違いなく息はある。

まずは順番に身体を揺すって意識を戻してもらおう。

「うつつ。海斗、あいつはどこに行ったの？」

「大丈夫だ。なんとかルシエが倒してくれた。それよりもみんなを

回復させたいんだ。ポーションは持つてるか？あつたらすぐ使ってくれ。」

そう言うと、ミクはマジックバッグから低級ポーションを取り出して一気に飲み干した。

スナッチも意識を失い倒れているのでミクが起こして、低級ポーションを与えると元気になった。

同じ要領で残りの2人も起こしてから各自の低級ポーションを摂取してもらった。

「助かったのか。よくあの悪魔を倒せたな。もうダメかと思ったぞ。」

「まあ、ルシエのスキルでなんとか勝てました。俺は、もう、ちょっとダメかも・・・しれませんが。」

「げっそりしてふらふらじゃないか、ポーションが無いのか？私のを使ってくれ。」

「ああ、ありがとございます。もうちょっとで死にそうなんです。り難く使わせてもらいます。」

あいりさんから渡されたポーションを飲み切ったが、流石にお腹が苦しい。ステータスを確認するとLV18になっていた。HPも全快していたが、なぜか全身の倦怠感は抜けていない。やはりルシエの『暴食の美姫』は俺の生命を吸っているのかもしれない。まあお陰で助かったので何も言えないが・・・

第140話 全員レベルアップ

俺は今9階層でレベルアップを果たした。

しばらくするとシルとルシエも発光を始めた。

どうやら、オルトロスと土爵級悪魔を倒したお陰で3人ともレベルアップしたようだ。

「これは一体。」

シル達の発光現象を初めて見るメンバーは流石に戸惑いを隠せない。

「ああ、大丈夫だよ。レベルアップしただけだから。」

「レベルアップ。そういえば、私もレベルアップしたようだ。」

「私もレベルアップした。」

「私もしたのです。」

おおっ。全員レベルアップいや1匹してないのか？慌ててスナッチの方を見るとかすかに光ってるような気がする。

これは文句無しで全員レベルアップしたようだ。さすがにあの2体の経験値は相当なものだった様だ。

ステータスを確認してみる。

L V	1 7	1 8
H P	5 7	6 5
M P	3 8	4 0

B P 60 66

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（微）NEW

おおつ。HPが8も増えている。その代わりにMPは2しか増えていないのでかなり偏りがある。

可能性としては先ほどの戦いで何度もHPが枯渇しかけたので補完するように上昇したのかもしれない。

これで『暴食の美姫』を使用しても16秒長生き出来る。

おまけにスキルが発現している。『苦痛耐性（微）』なんとも言い難いスキルだ。読んで字のごとく苦痛への耐性が微弱に上がるスキルのようだが、少しは『暴食の美姫』に耐えられるようになるのだろうか。

続いてルシエだが

種別 子爵級悪魔

NAME ルシエリア

LV3

HP 80 93

MP 138 159

B P 143 165

スキル 破滅の獄炎

侵食の息吹

暴食の美姫

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

さすがのステータスでMPとBPの伸びが著しい。見た目は・・・髪が伸びた？うん。変わっている様なほとんど変わっていない様な。

最後にシルのステータスだ。

種別 ヴァルキリー
NAME シルフィー
Lv3
HP 140 160
MP 105 118
BP 190 216
スキル 神の雷撃

鉄壁の乙女

戦乙女の歌 NEW

装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

おおっ。大幅にBPが上昇している上に新しいスキルが発現している。大幅にBPが上昇している上に新しいスキルが発現している。

戦乙女の歌・・・パーティ全体のステータスを一時的に上昇させる。上昇する数値は対象者との信頼度に依存する。

これは、支援系のスキルの様だがパーティ全体に効果ありとなっているので、かなり期待できるのではないだろうか。

他のメンバーもそれぞれレベルアップしたようだが、何とそれぞれがスキルを発現した様だ。

パーティメンバーのスキルは今後の為にも情報共有したが、あいり

さんのスキルのだが、

『斬鉄撃』・・・MPを消費して一撃の威力が上昇する。

なんか名前が斬鉄剣の親戚みたいでカッコいい。なぎなたの威力がアップするらしい。斬鉄なので今まで敵しかったゴーレムとかにも有効かもしれない。

次にミクだが

『幻視の舞』・・・敵に一定の確率でまぼろしを見せることが出来る。まぼろしについてはスキル保有者のイメージによる。

なんかこれもバトルには凄く有効なスキルに思える。今までスナッチに戦闘の多くを依存してきたミクだが、これで支援役として活躍できるのではないだろうか。次にヒカリン。

『アイスサークル』・・・一定範囲内を凍らせることができる。有効範囲は発動者の能力に依存する。

説明だけでははつきりしないが、攻撃にも使えそうだが、『アースウェイブ』と併用もしくは進化版のような使い方ができるのではないだろうか。ただでさえ有用な『アースウェイブ』の進化版だとしたら、バトルでは絶大な効果を発揮するはずだ。

最後にスナッチ

『ヘッジホッグ』・・・鋼鉄製のニードルを撃ち出すことができる。

今まで風の刃が通じない、硬い敵にも効果がありそうだ。間違いな

く火力アップになっている。

今回のスキルを見ると、どうやらスキルは完全ランダムで発現するわけではない気がする。

先程の戦いで、不足していた部分を補うようなスキル構成になっている。

それまでの戦い全てなのか、レベルアップ直前の戦いかはわからないがスキルの発現において強い影響を受けているような気がする。

いずれにしても全員無事。結果的に全員レベルアップ。おまけにルシエ以外は有用なスキルが発現したので結果だけ見ると今回の戦いは大成功と言えるかもしれない。

しかし、1番頑張った気がするルシエだけスキル発現しなかったのは、あの悪魔スキルを使ったせいなのだろうか？確かめようもないので、たまたまだった事にするしかない。

第141話 第4のカード

俺は今9階層で休憩している。

激闘を終え、パーティメンバーの回復を行なっただけからちょっと休憩中だ。

ただ、俺は低級ポーションを飲んでHPは完全に回復したが、異常に身体が重い。どうやら悪魔スキルのせいだ、HPやMPとは違う疲労があるようだ。

休憩してみても回復しなさそうなので、地上に戻ろうと思うが、その前に、オルトロスと士爵級悪魔のドロップを確認しなければならぬ。

まずオルトロスが消失した跡を見たが魔核が残されていた。

しかしただの魔核ではない。大きさが今までで一番大きくしかも色が深緑色をしている。

こんな色は初めてなので高額買取かもしれない。おまけに大きさが俺の頭ぐらいある。色付き魔核でこの大きさ、以前700万で売れたものより高額な気がする。ちょっとやばいかも。

「何ニヤニヤしてるんだよ。気持ち悪い。」

しまった。顔に出ているらしい。ルシェも目ざといな。

真顔に戻してから士爵級悪魔のいた所に目をやると

「おおつ。あれってあれだよな。」

「それ以外ないだろ。」

そこには、シルとルシエを顕現させたのと同じサーバントカードが落ちていた。

普通に考えたら、あの士爵級悪魔がカード化されたのかなとは思うが、スライムからシルとルシエがドロップされた事を考えると、そこに因果関係はないのかもしれない。

できる事なら次は天使とかがいい。ドラゴンでもいいけど。

俺は他のメンバーも集めてから、カードを手にとって見る事にした。
頼む。

出てくれ。

ううう。

このやり取りも3回目となるが俺は思い切って手にとったカードを見た。今まで2回は大当たりだった。

「ああ・・・」

周りのメンバーからもため息が漏れた。

そこに映っていたのは、先程まで戦っていた士爵級悪魔だった。

種別 士爵級悪魔

NAME ベルリア

LV 1

HP 70

MP 85

BP 90

スキル ダークキュア

装備 魔鎧 シャウド

「あれっ？」

ステータスは、シルヤルシエには劣っているがそれでもLV1での数値はかなりのものだろう。

問題はそこではない。明らかにおかしい。

なぜかスキルがダークキュア1つしかない。俺達との戦闘では他のスキルも使っていたはずだ。

おまけに武器を装備していない。騎士なのに剣を持っていない。これは俺が武器を破壊したからか？

武器を持たず、回復系スキルしか持たない。おっさんのくせに完全に支援系じゃないか。

そもそもこのダークキュアって人間に使っても大丈夫なスキルなんだろうか？

なんか名前だけ見ると、悪魔以外に使うと毒にでも侵されそうだけだ。

周りを見ると、みんな考えている事は同じのようで、一様に微妙な表情を浮かべている。

「みんな、このカードどうする？売った方がいいかな。」

「私は海斗が決めるのがいいと思う。この悪魔を倒したのも実質ルシエ様と海斗だからな。」

「私もサーバントはスナッチがいるから必要ないし、海斗に任せる。」

「わたしはちょっと自分では使えないのです。生理的に厳しいです。海斗さんが使ってみればいいのでは。」

どうやら、みんなは積極的に使いたい訳ではないらしい。

おそらく、このおっさんの風貌と、やられかけたトラウマにも似たものが忌避感を生んでいるのかもしれない。

俺としても悩みどころだ。サーバントカードはそもそも希少だ。ルシエには劣るとはいえ士爵級悪魔、戦力的には申し分ない。

「うーん」

支援職と化した士爵級悪魔のおっさん。悩んでしまう。

シルとルシエの時は金額がどんなに高額であつてもそれ以上にビジュアルに魅力を感じてしまい、顕現させて今に至っている。

しかし、数千万円とこのおっさん悪魔を比較した時にシル達の時のようなトキメキと期待感が薄い。

スキルを使用したルシエ以外は歯が立たなかつたので、レベルアップすれば超強力なのは間違いないが。

「うーん」

どうしたものだろうか。やっぱり売るか。売るしかないか。売ってしまっちゃうか。売ろう。

第142話 ベルリア

俺は今9階層で悩んでいる。

手元にあるサーバントカードを売ってしまおうかと悩み中だ。

「おい、そのサーバント売ってしまおうかと思ってないか？」

「ああ、まあそれがいいかなと思ってるんだけど。」

「そんな奴でも一応士爵だからな。騎士だから忠誠心は高いと思うぞ。前衛に使ってやってもいいんじゃないか」

「うん。ルシエそうは言ってもな、忠誠心ねー。あんまりピンとこないな。そもそもこいつ武器持ってないんだけど前衛できるのかな。」

「あれだけ私達とやれたんだから問題ないだろ。なつ。」

「どうやらルシエは売るのに反対らしい。気は乗らないが、一応倒したのはルシエだから、無下にも出来ないか。」

「わかった。じゃあ一度召喚してみてから決めよう。ダメそうだったら売るのでいいか？」

「ああ、それでいいよ。」

「みんなもそれでいいかな。」

みんなの同意を得てからカードを額に当て

「ベルリア召喚」

召喚と同時に発光してベルリアが顕現した。

「マイロード、ベルリア召喚に応じ馳せ参じました。永遠の忠誠を誓います。」

おいおい、お前もか。

そこにいたのはおっさん悪魔ではなく、ただの子供。小さな角が生えているので悪魔には違いないが、もしかしたらシル達よりも小さいかもしれない。

しかもマイロードってなんだよ。一体誰のことだよ。

「姫、姫様の為にも身を粉にして働きますのでよろしくお願いします。」

姫？一体誰のことだ？姫なんかいないけど。

「ああ、まあよろしくな。」

ルシエお前のことが。お前いつから姫になったんだ。姫ってもっとお淑やかなものじゃないのか？

「ぶふっ」

予想外のやりとりにちよつと笑いが漏れてしまった。

「おい、なんで笑うんだよ、失礼な奴だな。」

「いやだって、姫様って。ちょっと可笑しくてな。ごめんごめん。」

「お二人は本当に仲がいいんですね。羨ましいです。」

ベルリアが話しかけて来るが、嫌味な感じは全くなく、本気で羨ましがっているようだ。

「ねえ、あれって、さっきまでのあの悪魔なのよね。」

「ええ、全然違いますね。むしろ可愛いんですけど。」

「確かに可愛いが、大きくなったらああなるんじゃないか。」

「大きくならない方が絶対にいいですね。」

「そう思います。」

「それはそうとベルリアちょっと聞いてもいいか。」

「はいなんでしょうか。」

「お前武器はどうした、騎士だろ。」

「いえ、私に聞かれてもわかりません。なぜか何も持っていません。是非とも魔剣をお与えください。貴方の剣として頑張ります。」

「いや、魔剣は一本しかないからやれない。また今度拾ったらな。それとスキルも何で1つしかないんだ？」

「それは、レベルが初期化されていますので、そのせいだと思われます。」

「スキルの『ダークキュア』なんだけど人間にも効果あるのか？」

「申し訳ございません。人間相手に『ダークキュア』を使用したことがないので、使って見ないと効果はわかりかねます。」

ああ、これは俺が実験台になるしかない奴だな。スキルがこれしかないので使えるかどうかの確認は必須だ。とりあえずもしもの時の為にポーションを買い揃えてから臨みたい。呪いとか、かかってもポーションで何とかなるんだろうか。そもそも呪われるとどうなるんだろう、不幸にでもなっていくんだろうか。

「ちょっと明日、スキルとかの検証をしてから処遇を考えようと思うんだけどみんなもそれでいいかな。」

「ちょ、ちょっとお待ちください。処遇とはどういう意味でしょうか？ま、まさか手放す気なのですか。私はもう貴方を主人として認めてしまいました。姫様もおられますし、私の居場所はここ以外はあり得ません。お願いします。お願いします。」

こいつってこんなキャラだったのか？なんか俺が悪者みたいじゃないか。悪魔に悪者扱いされる俺って一体・・・

第143話 ベルリア検証

俺は今ダンジョンマートにきている。

放課後に使い果たした低級ポーションを補充しにきているが、念の為4個購入した。週末にオルトロスの魔核を売却予定であるとはいえ、かなり痛い出費だ。

今日はこのまま帰って明日、ベルリアの能力をダンジョンで試してみようと思うが、万が一変な効果があつてはいけないので、一人で潜ることにした。

普段はすぐに眠れるのだが、ちょっと緊張して眠れなかった。もしもやばい呪いにかかったら、シルとルシエになんとかしてもらえない。『暴食の美姫』で成長したルシエならきつとなんとかしてくれるはずだ。きつとそうに違いない。そうであつてほしい。

悶々としながらも次の日の朝を迎えたので学校に向かって、眠気を振り払いながら授業に集中する。

最近ダンジョンで今までよりもレベルの高い戦いを繰り広げている影響で集中力が増しているのか、成績も若干上向いてきているので今の生活を続けていきたい。

放課後を迎えて遂にベルリアの検証の為に9階層にきている。

「ベルリア、それじゃあ今日はお前の力を見せてくれ。」

「あのですね。武器を賜れないでしょうか。これでも騎士なので無手で殴りあうのはあまり得意ではないので。」

「そういうこともあるかと思って用意しておいたぞ。どちらでも使ってくれ。」

「こ、これは一体なんでしょうか？」

「ああ、俺が以前使っていたものだけど遠慮なく使ってくれ。」

「は、はあ。大変有り難いお言葉ですが、これは一体・・・」

「俺の愛用していた木刀とタングステンロッドだよ。」

「あの、もう少し剣のような武器はないのでしょうか？」

「ああ、これしかないんだ。どっちがいい？2刀流でもいけるなら、両方使ってもいいぞ。」

「そ、そうですか。それではその金属棒をお願いします。流石に木剣は難しいので。」

「そうか。じゃあこれ渡しとくな。頼んだぞ。」

タングステンロッドをベルリアに渡してシルに敵を探してもらおう。

「そういえば、お前って敵の探知って出来ないのか？」

「申し訳ございません。探知できませんが必ずお役に立ちます。」

やっぱり、妙にアピールしてくるな。まあ悪い感じはしないのでとりあえずスルーしておく。

「ご主人様、先にモンスターが2体います。」

「ベルリア、一体は俺が受け持つからもう一体をお願い出来るか？」

「いえ、通常のモンスター如き私一人で大丈夫です。マイロードはゆっくり後方で見物しておいてください。」

「本当に大丈夫か？まあ何かあったらすぐ手伝うから。」

「ありがとうございます。それでは早速倒してまいります。」

そう言うとベルリアが敵に向かって駆けていく。

「ん？」

普段シルの速攻を見ているせいか、少し遅いような気がする。まあそれでも俺よりは、速い気がする。

後方からついていくとそこには、ホブゴブリンが2体いた。

敵もベルリアに気付いて斬りかかってくる。ベルリアも敵の攻撃をタングステンロッドで受け止めて、一体に向けて薙ぎ払う。

タングステンロッドなので斬れる事はなく、ホブゴブリンが少し弾き飛ばされた。

「ん？」

普段シルの神槍での攻撃を見慣れているせいか、なんか迫力に欠ける。まあ俺ではタングステンロッドでホブゴブリンを吹き飛ばす事は出来ないだろうから俺よりは凄いな。

ベルリアはそのまま追撃をかけホブゴブリンの頭を粉碎して1体撃破した。

もう一体のホブゴブリンの攻撃をいなして連撃を加える。

軽やかに5連撃を放ってホブゴブリンを消滅させた。

「ん？」

確かに素晴らしい攻撃だったが、5連撃共に俺でも認識できた。

「昨日戦った時は全くと云っていいほど、剣尖が見えなかったので明らかにスピードが遅くなっている。それに、タングステンロッドとはいえ倒す迄に5撃はちょっとかかりすぎている気もする。」

「マイロード、いかがでしたでしょうか？お役に立てる事が証明できましたと思います。是非これからも私をお使いください。貴方の剣となって戦います。」

「ちょっと戦闘力は微妙な気がするが悪い奴ではないような気がするな。」

第143話 ヘルリア検証（後書き）

第144話 ベルリアのスキル

俺は今9階層で悩んでいる。

ベルリアについて悩んでいる。

「昨日戦ったあの士爵級悪魔からすると、かなり物足りない。十分強いとも言えるが、比較するとかかなり弱体化している。」

「ベルリア、頑張ってくれたのはわかるんだけど、この前戦った時と比べるとちょっと弱くなってる気がするんだけど、特に剣術がなあ。」

「い、いえそれは、レベルが1になってレベルに合わせた肉体になっってしまったからです。もともと私は後衛だったのですが、努力を重ねて騎士に上り詰めたのです。剣術もレベルアップと共に上達します。武器も魔剣さえ頂ければもっとやれます。お役に立ちます。頑張ります。」

「どうしてそんなに此処にいたいんだ。別に此処でなくてもいいんじゃないのか？」

「いえ、此処にいらしてください。マイロードに我が剣を捧げましたし、ルシエリア姫のお役に立ちたいのです。もちろんシルフィー姫の為に頑張ります。」

「えっと、シルフィー姫って何？いつから姫になったんだ。」

「ルシエリア姫の妹君なのですから当然シルフィー様も姫とお呼びするべきだと思います。皆さまの剣となって頑張ります。」

「ああ。そうなんだ。」

やっぱり悪い奴ではなさそうだな。ただ、俺に剣を捧げたって、お前、剣持ってないじゃないか。まあ戦力として悪くは無いと思うけど数千万円の価値があるかと言われると難しいところだ。

次にメインとも言うべきスキルの検証なのだが、これは俺が怪我をするか、体力を大幅に削ってみるしかないが、あまり怪我はしたくない。どうしたものだろうか。

とりあえず体力を減らす為に、とにかく敵と戦って、それ以外はダツシユを繰り返してみる事にした。

強化されたステータスを以てしてもダツシユを繰り返すと、かなり体力を削られるようで確認するとみるみる内にHPが減っていつている。

HPが40まで低下したのでそろそろ頃合いかと思い、覚悟を決めてベルリアに指示をする。

「ベルリア、俺に『ダークキュア』をかけてみてくれ。シルも、もし俺に異常が出たらポーシヨンを飲ませてくれ。それでもダメなら地上付近まで運んでくれ。」

「かしこまりました。ご武運を。」

別に武運とかじゃ無いんだけどな。

「ダークキュア」

ベルリアがスキルを俺に向けて発動する。

一瞬、黒っぽく光った気もするが、特に何も変化はない。普通に動けるし、頭もはっきりしているが、体力が回復したような気もしな

い。

念の為にステータスを確認すると

HP 40 44

うん。一応回復しているのか？自然回復も1ぐらいはありそうなので実質3ぐらい回復したのか？

HP3の回復。微妙過ぎる。ポーションをちょっとだけ舐めたぐらいだろうか。

「ベルリア、ちょっといいか。一応俺の体に悪影響は無いようだが、HPが4しか回復してないんだが『ダークキュア』ってこんなもんなのか？前は体に空いた穴まで塞がってたんだけど。」

「い、いえちょっとお待ちください。『ダークキュア』はあくまで怪我を治すのがメインなんです。体力は死なないように少しだけ回復するだけなんです。今度は怪我に試させてください、お願いします。」

「そうなのか。怪我な〜。」

そう言われても正直そんな都合よく怪我出来るはずが無い。わざと矢や石に当たりに行く勇氣はない。どうしようかな。

そういえば腕に虫刺されがあつたが、今見ると治っているような気もしなくも無い。

かなり悩んでみたが意を決してバルザードでほんのすこしだけ指先を切ってみる事にした。

「今からちょっとだけ指から血を出すから、治してみてくれ。」

「はい。もちろんです。」

バルザードで指先をちよつと切るのも結構勇気がある。映画とかではかっこよく切ったりしているが、やっぱり痛いのは嫌だ。恐る恐る、皮一枚分だけちよつと切り込んだ。

刃物で切れる痛みを感じたが、大丈夫なふりをしてベルリアに手を見せてスキルを発動してもらった。

「ダークキュア」

「おおっ」

指先の痛みが消え少しだけ出ていた血も綺麗さっぱり消失している。治っている。

どのぐらいの怪我までいけるのかは確認が必要だが、結構すごいんじゃないだろうか。おまけに体には何の変調もきたしていない。かなり心配したが本当によかった。

第145話 衝撃の事実

俺は今探索を休んでいる。

火曜日にベルリアの検証をする為にダンジョンに潜ったものの、本調子とはいかないので水木金の3日間は、放課後の探索を休む事にした。

ベルリアだが、強いのは間違いないが、どうやら騎士のくせにもともと前衛ではなく、初期段階ではそこまで強力ではない。ただし唯一のスキル『ダークキュア』は俺にも効果があった。

最初はHPが回復するものとばかり思っていたので『暴食の美姫』と合わせてMPが続く限り無限ループで使用できるかもと密かに期待していた。だからといって『暴食の美姫』の使用時の苦痛とその後の言い表せない倦怠感があるので、もともと頻発させられるものでもないのだが、残念ながら当ては外れてHPは微弱に回復するだけだった。そのかわり、どうやら怪我や傷が治るようなのでこれは素晴らしい効果だった。まだ大怪我には試していないのでいまいち真価はわからないが、低級ポーションの使用をかなり抑えられると思われる。もしかしたら怪我の治癒に関しては中級ポーションに届くかもしれない。

ただしスキルを使用するとシル達同様お腹が空くようで魔核を消費する必要があった。

とりあえず、週末にメンバーに話してベルリアも使って見ようかと思っているが、能力云々ではなくちよつとベルリアの必死な感じとキャラクターにシンパシーを感じてしまった。

正直今の状態のベルリアが努力して、あの強さまで至った事に尊敬の念と憧憬の念さえ覚えてしまう。

そして最大の理由がサーバントカードを1度使用してしまうともう売り物にならない。もう俺にしか使えなくなってしまうている。

完全に忘れてしまっていた。

激闘で舞い上がっていたのか、そもそも頭の中でサーバントカードを手放すという概念がなかったのか、完全に失念していた。

昨日の夜、その事に気がついて思わず叫んでしまった。

やってしまったものは仕方がない。時間を巻き戻せない以上ベルリアにもしっかり活躍してもらうしかない。

木曜日になり学校に来ている。

「おう。」

「「おう。」

いつものように真司と隼人に挨拶を済ませて、最近日課となっている

「春香おはよう。」

「うん。海斗おはよう。今日も元気にいこうね。」

はい。もちろん元気いっぱいいきますよ。本当はちょっとだるいけど。

「真司、そういうえばダンジョンの方結構潜ってるのか？」

「ああ、隼人とはほぼ毎日潜ってるぞ。最近調子も出て来て楽しいんだ。海斗は今どこらへん？」

「ああ俺は今9階層に潜ってるところだよ。ちょっと体調不良で今週は休んでるけどな。」

「9階層か。やっぱり進んでるな。さすがだな。」

「それはそうとお前ら今どの辺なんだよ。3階層には行けたのか？」

「ああ、3階層はだいぶ前に卒業してな、今は6階層で探索しているところだ。」

「え？6階層？マジで言ってる？お前ら2人だけで6階層まで行ってるの？」

「ああ、なんか3階層行ったらコツをつかんだみたいでその後は結構サクサク行けるようになってな。」

「そ、そうなのか。ちなみにレベルは幾つなんだ？」

「今2人とも13だよ。」

「レベル13！？お前らちょっとすごくないか。俺と潜ってからどれだけでも経ってないだろ。何でそんなに急激にレベルが上がってるんだよ。」

「いや、たまたま2人ともLV5の時に経験値系のスキルを手に入れたな。それからは結構サクサクレベルも上がって順調なんだ。」

経験値系のスキル。2人ともそんなチートスキルを手に入れたのか別に2人を妬むつもりは一切無い。無いが、自分には無いチートを手に入れ、急激に自分の位置に近づいて来ている2人を目の当たりにして正直羨ましい。羨ましすぎる。俺も欲しい。経験値系のスキルが欲しい。

「良かったら今度一緒に潜ってみてもいいか？2人がどこまで成長しているのか見せてくれないか。」

「もちろんいいぞ。よかったら今日にでも行くか？いいよな隼人。」

「もちろんいいぞ。成長した俺らの姿を見せられるいい機会だからな。張り切って頑張るぜ。」

「ああ、じゃあ今日の放課後お願いするよ。」

体調不良の休養を完全に無視して返事をしてしまった。

2人の今の力が気になって仕方がなかった。もしかしたら、すぐに追いつかれるかもしれない。

ちよつとした焦りと、もしかしたら一緒に探索を進められるレベルに近付いて来ているかもしれないと言う期待を胸に放課後を待つ事にした。

第146話 脱へっぽこパーティー

俺は今6階層に潜っている。

「隼人、お前らの武器って何を使ってるんだ？一応連携取らないといけないから戦い方を教えておいてくれよ。」

「俺たち2人ともピストルボウガンを使ってるんだ。海斗の真似だな。後は俺がこれと真司が槍だ。」

隼人が持っていたのは金属製の大きな槌だった。

「そんな重そうなやつ使えるのかよ。」

「ああ、なんか俺パワータイプみたいでレベルアップしてから、結構普通に使えてるんだよね。」

「そうなんだ。それじゃあまず2人だけでいつも通り戦ってみてくれよ。危なかつたら俺も参戦するから。」

「ああわかったよ。じゃあ行くか真司。」

しばらく3人で歩いているとトロールが2体出現した。2人だけだと結構強敵の筈だが大丈夫なのか？

心配しながら見ていると

真司が『アースバレット』と唱えて、石の塊を発現させトロールに命中させる。

「まさか魔法か。」

怯んだトロールに向けて隼人が槍で攻撃して撃退する。

2対1の状況を作ってから、今度は隼人が槍で牽制しながら、真司が死角から槌をトロールにめり込ませる。

そのまま2撃目を加えてあっさりトロールに勝ってしまった。

「おいおい、すごいな。連携もバツチりだし、魔法まで使える様になったんだな。いくらなんでも成長しすぎじゃないか？」

「そう言われると嬉しいけど、前に一緒に潜った時に差がありすぎたからな。ちよつとでも真似できないかと思ってやってたら、突然強くなったんだ。」

「まあ、もうちよつと見ててくれよ。これで全部じゃないんだよね。」

意味深な言葉を残した2人と一緒に更に探索を続けると今度は突然矢が飛んできた。

おそろくオーガだろう。

遠距離の敵にどう戦うんだ？

『アースバレット』

真司がアースバレットを唱えて反撃する。

『必中投撃』

隼人がスキルを発動して手に持っていた槍を投げたと思ったら、凄

い勢いで飛んで行ってオーガに見事に命中して撃破した。
真司は『アースバレット』を連発して、もう一体のオーガも倒して
しまった。

「おいおい、隼人もスキルが使えるのか？さっきのスキルなんなん
だよ。」

「ああ、あれは『必中投撃』って言って、スキル発動して武器を投
げると命中率が上がるんだ。今まで外れた事は無いな。」

「それってすごくないか。2人ともすごいな。正直予想以上で驚い
た。」

「まあ海斗に比べると、まだまだだけだな。追いつける様頑張るよ。
それはそうと海斗は今何階層を周ってるんだ？」

「ああ、俺は今9階層を周ってる所だな。ちょっとイレギュラーが
あつて休憩中だったんだ。」

「9階層か。じゃあそこまでのアドバイスをなんかくれないか。」

「そうだな。まず7階層のゴーレムが硬いから、真司の槌は通用し
そうだけど、隼人の槍はそのままだと厳しいかもしれない。もつと
威力のある武器が必要かもしれない。あと『アースバレット』って
色々速さとか、大きさとか、硬さとか試してみた？」

「え？魔法って改造できるもんなの？」

「ああできるぞ。飛ぶスピードも調整できるし、多分大きさも出来
る。石だからもしかしたら形や硬さも変えられるかもしれない。」

「そうなのか。じゃあ後でやり方教えてくれよ。」

「わかった。あと隼人のスキルなんだけど槍じゃなくても使えるよな。メインの武器を投げちゃうと、そのあと苦労するから投擲用の投げナイフとか手裏剣みたいなのを用意した方がいいと思う。8階層に魚群とか群れで出る敵がいるから、相当数用意しておいた方がいいぞ。あと魚群探知機は必須だ。説明書は端から端まで必読な。最後にやばかったらとにかく逃げろ。」

「やっぱり先輩の言う事は為になるな。」

「ああ、今まで人に見てもらったことがなかったから自分たちだと気づかないもんだな。」

「役に立てたんだったらよかったよ。」

想像以上に、2人が成長していて驚いたが、俺の経験が役に立ったならよかった。もうドローンによる被害者は出したくない。

第147話 スキルの成長

俺は今1階層に潜っている。

昨日真司と隼人の實力を見させてもらったので、今日は昨日のアドバースを実践するために3人でいつもの訓練スペースに来ている。

「海斗、いつもこんな所で練習してたのか？一人でよくやってこれたな。」

「ああ、本当にすごいな。なかなか一人で訓練なんか出来ないぞ。」

「そうか？普通だと思うけどな。」

「いや、普通ではないだろ。」

まずは、真司の『アースバレット』を色々試してみる。

「真司、まず一番簡単なのがスピードの調整だから、とにかく遅く飛ぶようにイメージして打ち出してみてくださいよ。」

『アースバレット』

少し飛ぶ速度が遅くなった気はするが、いまひとつだな。

「もっと、遅いイメージを持って飛ばしてみてください。」

『アースバレット』

「おおつ。やった。」

今度は明らかに遅くなった。

「じゃあ、今度は速く撃つてみてくれ。」

『アースバレット』

コツを掴んだのか明らかにスピードが増している。

それじゃあ今度は形だな。

「尖ってる方が有効な場合が多いから見ててくれよ。『ウォーターボール』」

「俺の魔法も元々玉だったんだけど、今は槍状になってるんだ。真似してみてくれ。さっきの氷の槍の形状を頭で強く思い浮かべてから放ってみてくれ。」

『アースバレット』

玉ではなくなっているが形成が不十分だ。

「イメージが足りないんだ。もっと鮮明に思い浮かべてから放つてくれ。」

『アースバレット』

ちょっと尖ってきた感じがする。

「海斗、そろそろMPがきつい。あと1発で終わりたいんだけど。」

「ああごめん。それじゃあ、形は後日特訓してくれ。このままやればすぐにできるようになると思うから。最後は硬度を変えてみようか。『アースバレット』は俺の『ウォーターボール』と扱い方が似てるからここまではスムーズだったけど、次は俺ではダメだったや。氷と水の俺は無理だったけど、土と石なら可能性があると思う。金属も石とか土の仲間だからもしかしたら、金属並みの硬度が出せるんじゃないかと思うんだ。」

「まじか。石が金属になるのか？どうすればいいんだ？」

「俺も出来なかったから合ってるかはわからないけど、高硬度のとりにあえず鉄を思い浮かべて、溜めるイメージで意識をしばらく集中させてから放出してみてください。」

「うん。『アースバレット』」

溜め方が独特だがちゃんと魔法は発動した。

壁に向かって飛んで行きたいびつな形の石の玉は壁にぶつかって霧散した。

「どうだった？もう無理だぞ。」

「うん。正直壁相手だったからよくわからなかったけど、なんとなく強化されてるような気もするな。」

「まあ、コツは教えてもらったから土日で特訓してみるよ。」

次に隼人の特訓だ。

『必中投撃』だがMPの消費は1しかないらしく、かなり使える気

がする。

まずは使える武器の検証だ。

拾った石、購入してきたパチンコ玉と投げナイフと針をそれぞれ投げてみた。

結論からすると全部投げて命中させることができた。

流石に後ろ向きで投げると外れたが、意識を集中してある程度、的を見ながら投げると全部命中した。

次に威力だが一応投げる強さに影響されるようで、ふんわり投げると威力は弱まっていた。

最後に狙いだが今までは槍を投げていたせいでそこまで狙いを限定していなかったようだが、練習してみた。

「隼人、的を小さくするから狙ってみてくれ。」

「ああやってみる。」

「必中投撃」

パチンコ玉が的に当たったがど真ん中ではない。

何度かやってももらったが徐々に的の真ん中に近付いて来ている。

どうやら習熟度と集中力で精度が上がるようだった。

「隼人、武器が切れたら、その辺の石とかでもいいと思うけど、鈍器よりも鋭利な物の方が、圧倒的に効果が高いと思う。可能なら投げナイフをMPと同じ本数は欲しいな。最悪針でも急所を狙うことができるれば仕留めることができるから、念のため持っておいた方がいいな。」

「おお、なんかイメージ湧いてきた。やっぱり海斗に頼んで良かったよ。指導してもらって自分で考えるのと全然違うな。」

「それは良かった。想像以上に2人ができるからびっくりしたよ。もうちょっとしたら一緒に潜るのもいけると思うから楽しみだな。」

「すぐに追いつくから待っててくれよ。」

「ああ。ただ1つだけ忠告な。説明書は隅から隅まで読んでくれ。これだけは絶対だ。」

第148話 オルトロスの魔核

俺は今ギルドに来ている。

土曜日になったのでパーティーメンバーと一緒にオルトロスの魔核を売りに来たのだ。

いつものように日番谷さんの列に並んで

「おはようございます。魔核の買取お願いします。これなんですけど。」

俺はオルトロスの大きな緑色の魔核をカウンターに取り出した。

「高木様。ちょっとお話しがあります。中の方へ移動して頂いてよろしいでしょうか。」

「えっ？別にいいですよ。」

そう言うと有無を言わずにメンバー毎、奥の部屋へ連れていかれた。

恐らくオルトロスの魔核に引っかけたのだろう、上司の人を連れてやってきた。

「高木様、ちょっと確認よろしいでしょうか？」

「はい、いいですよ。」

「この魔核は一体なんでしょうか？」

「え？9階層で取ってきたんですけど。」

「9階層にこのような魔核は存在しません。赤色の魔核でも珍しいのに、この魔核は緑ですよ。緑。わかりますか？緑です。」

「はい。見ればわかります。緑ですね。しっかり緑です。」

「いえ、そうではありません。緑の魔核などほとんど世に出回ることはない種類のものです。一体何のモンスターからドロップしたのですか？」

「えっと、あの、大きな犬です。」

「犬ですか？大きくなってどんな犬ですか？」

「いや、あの、頭が2つくらいあったかな。」

「頭が2つくらいある犬ですか？そんな犬いませんよ。本当の事を言ってください。」

「いや、本当に頭が2つあって、尻尾に毒があるんですよ。」

「だから9階層にそんなモンスターはいません。」

「ちょっといいかな。高木くんの言っているモンスターの風貌だけ聞くとオルトロスっぽい気がするんだけど、まさかそんなことは無いよね。」

上司の人が探るように聞いてきた。

「あの、多分、初めてなんでよくわからないですけど、オルトロスかな。多分そうかな。」

「オルトロスですか？冗談でも洒落になりませんよ。オルトロスですよオルトロス。そんなモンスターが9階層にいるわけないじゃないですか。」

いや、今あなたがオルトロスかって聞くから、そうだって答えたのに。

「高木様本当でしょうか。本当にオルトロスの魔核なんですか。」

「たぶんそうなんじゃ無いか。ははは。なあみんな。」

「……たぶん……」

みんな厄介事の匂いを嗅ぎつけたのか、一様の反応を見せる。

「パーティの皆様も間違いないのでしょうか？」

「……たぶん……」

「高木様。オルトロスは超レアクラスのモンスターです。9階層に出るはずのないモンスターですが、オルトロスのものであれば、この緑の魔核も説明がつかます。」

「ああ。それならよかったです。」

「全く良くありません。まず第1にオルトロスが9階層にいたのであれば大問題です。事実確認をして、9階層を封鎖しないとイケな

いかもしれません。第2にオルトロスは失礼ですが皆様で倒せるようなレベルのモンスターでは無いはず。以前も大型恐竜の魔核をお持ちいただいていましたが、あれですら皆様のレベルをはるかに超えているはず。どう言うことでしょうか。」

「いや、どう言うことと言われましても、たまたまですよ、たまたま攻撃が死角からヒットして運良く倒せたんですよ。なあみんな。」

「『ええ、まあ。』」

「高木様、K-12のメンバーは高木様のブロンズランクを筆頭に皆様アイアンランク以上で、若手パーティとしては非常に有望であるとは認識しております。」

「あ、ああ。ありがとうございます?」

「ですが、今回の件はあり得ません。オルトロスですよ。オルトロス。神話に出てくるレベルのモンスターですよ。皆様が嘘をついてない限りあり得ないんですよ。」

「あ、じゃあ俺の勘違いだったのかも。ちょっと大きな奇形の犬だったのかも。」

「高木様。何か隠してませんか?隠してますよね。」

ついに日番谷さんが核心をついてきた。どうしよう。

第149話 半落ち

俺は今ギルドの奥で詰問されている。

俺は何も悪いことはしていない。むしろモンスターを倒して褒められてもいいくらいだと思うが、なぜか問い詰められている。

「高木様。ずっとおかしいとは思っていたんです。何年もウッドランクだったのに急にランクも上昇し始め、装備も急速にレベルアップしているようですね。何かコツを掴んだのかとばかり思っていたのですが、今回の件で確信しました。何か隠してますよね。」

「い、いやだな。一庶民の僕がギルドに隠し事なんかねえ、ははは。」

「高木様。ギルドとしては今回の一大事に一刻も早く対応する必要があります。仮に高木様達が虚偽の報告をして対応が遅延した場合、除名等の措置もあり得ますよ。」

「う、うう。確かに言われている事は分かります。それなら、9階層にオルトロスはまだ出ません。大丈夫です。封鎖しなくても大丈夫です。」

「高木様、どう言う事でしょうか？」

「いや。原因がなくなったと言うか、無くしたと言うか。」

「高木様。」

「あ、オルトロスが9階層にいたのは土爵級悪魔のせいなんです。土爵級悪魔が暇つぶしに連れてきてたんですよ。スタンピードとか恐竜もそれが原因ですよ。」

「高木様、今何とおっしゃいましたか？」

「いやだから土爵級悪魔が原因だったんですよ。」

「高木様、土爵級悪魔が原因と聞こえましたが、その悪魔はどっから来たのですか？」

「いや、俺達で倒したからもう安心ですよ。なあみんな。」

「「「あゝ。はゝ。」」」

みんな、なんだその返しは。

「高木様。土爵級悪魔を倒されたというのは本当でしょうか。」

「本当です。これは本当。だからもう大丈夫。大丈夫ですよ。」

「ちよつといいかな。今の話が本当だとすると全く大丈夫じゃないんだが。」

上司の人がおかしな表情で話しかけてきた。

「いや本当に倒しましたからもう大丈夫です。間違いないです。」

「そうか。本当に倒したならそれは素晴らしい事だが、問題はどうやって倒したかなんだよ。オルトロスだけでも、君達では手に余る

はずだ。それが士爵級悪魔まで倒したと言う。これのどこが問題なのかな。問題しかないよな。」

「うっ。ま、まあ確かにちょっと、運が良すぎるのかな。ははは。」

「高木君。私は真剣な話をしてるんだよ。」

「う、うん。あ、あれです。魔剣が進化して超強力になったんですよ。」

「ちょっと見せてもらっていいかな。」

「はい、いいですよ。」

そう言ってバルザードを渡した。

「高木君、私は鑑定スキルを持っているんだ。だからこの魔剣が素晴らしい性能を秘めているのはわかる。わかるが、ブロンズランクのパーティがこの魔剣1つで勝てない事ぐらいもつとわかる。他にはないのかな。」

「ああ、この理力の手袋で魔剣の斬撃が飛ばせるようになったんですよ。」

「ちょっと見せてもらおうよ。・・・高木君魔剣との相性は素晴らしいアイテムだよな。でもこれじゃないよな。」

「はい・・・」

俺は追い詰められてとっさにメンバーに助けを求めるべく視線を送

つたが3人が3人とともに、なんとも言えない諦めの表情を浮かべている。
だれか助けてくれ。

「高木様。何を隠しているんですか。」

「あ。あのですね。実はですね、今年の春にドロップアイテムを拾いまして。」

「はい。」

「それがですね。サーバントカードです。」

「はい。」

「そのサーバントカードが結構レアカードです。」

「はい。」

「あのですねヴァルキリーなんです。」

「は、はい!？」

「いやだからですね、ヴァルキリーです、半神の。」

「高木様、そう言えば以前、サーバントカードの事を聞いてもらいましたね。確かゴツズ系の話を聞いてもらいましたよね。」

「はい。参考になりました。その節はありがとうございました。」

「……おはようございます、おはようございます。」

第150話 完落ち

俺は今ギルドの奥の部屋へ通されている。

「高木様。たしかゴツズ系のカードの事を尋ねてこられたちょっと後に、デビルズ系のカードの事も聞いてこられましたよね。」

「日番谷さん、記憶力良すぎないですか。ああそれもですね、その後にも2枚目のサーバントカードを手に入れまして。」

「はい。」

「そのカードも結構レアカードです。」

「はい。」

「子爵級悪魔だったんです。」

「え、ええっ。」

「そういう事なんです。」

「それでは、高木様はバルキリーと子爵級悪魔の2体を使役しているという事でしょうか?」

「まあ、そういう事になります。」

「はあ。ちょっと信じられないような話ですが、サーバントカード

を見せて頂く事は可能でしょうか。」

「はい。どうぞ。」

もう隠す意味もないのでカードを取り出して渡した。

「信じられません。本当なのですね。こんな事ってあるのですね。こんなレアカードが2枚も。」

「もういいですか。」

「それはそうと士爵級悪魔を倒した際の魔核はどうされたのですか。」

「ああ、それなんですけど魔核はでなかったんです。」

「それはどう言う意味でしょうか。」

「ちょっと言いにくいんですけど、サーバントカードが出まして。」

「それは何のサーバントカードが出たのでしょうか?」

「それが、士爵級悪魔のカードなんです。」

「ええっ。それは、もしかして先程の倒したとおっしゃっていた悪魔でしょうか。」

「はいそうです。」

「見せていただいてもよろしいでしょうか。」

「はい。大丈夫です。」

俺は言われるままに日番谷さんにベリエルのカードを渡した。

「これが9階層に現れた土爵級悪魔ですか。いかにも強そうな見た目ですね。」

「ああ、まあ、そのカードの見た目は強そうなんですけどね。」

「高木様、このカードはどうするおつもりでしょうか？もし売却すればかなりの金額になると思われませんが。」

「はい。色々考えて見たんですけど、とりあえず使っていこうかと思ってるんです。なんか妙に懐かれたんで。」

「まさか、もう召喚されたのですか？大丈夫でしたか？」

「大丈夫って何がですか。」

「いえ、呪いとか大丈夫でしたか？」

「あっ！」

完全に忘れていた。ルシエを召喚しても大丈夫だったから呪いの事を失念していた。今のところなんともないが、俺大丈夫か。今になつて心配になつてきた。

「たぶん大丈夫です。今のところ大丈夫なんで、たぶん……」

「そうですね。それにしてもこれほどのレアカードを3枚も所有している方は見た事ありません。」

「そうですね。自分ではそんなに意識した事はないんですけど。」

「失礼ですがこれほどのサーバントを従えているのであれば、もつと上のランクも目指せるのではないですか？少しほかのメンバーの方との戦力差がありすぎるかと思うのですが。」

「いえ、サーバントなんですけどレベル1に戻ったせいか、弱体化してるみたいなんです。それに、メンバーのみんなは、今回の戦いでも命がけて俺を守ってくれましたし、かけがえのないメンバーなんです。いつも助けられてるのは俺の方なんです。俺には今が一番なんです。」

「そうですね。大変失礼いたしました。皆様の関係性を無視した発言申し訳ありませんでした。」

「いや、全然大丈夫です。」

「それでは、オルトロスの魔核ですが、買取金額が2000万円となりまして、ブロンズランクの特典として7パーセント加算されますので2140万円となります。」

「2140万円ですか！？そんなにもらえるんですか。家買えますよね、家。」

「申し上げた通り、オルトロスは神話に出てくる類のモンスターですので、魔核も別格となります。このクラスの魔核は市場にほとんど出回ることがありませんので、適正な価格で買取させていただきます。」

ます。」

「やっぱり探索者ってすごいですね。自分の力だけではないのはわかってるんですけど、この半年間の稼ぎがすごい事になってるんですけど。」

「今回の入金が高木様に全額、お振込でよろしかったでしょうか？」

「

「いやいや、4等分でお願いします。それにしてもこの半年間がすごい事になってるんですけど、探索者ってやっぱりすごいですね。」

「いえ、すごいのは高木様です。確定申告用の資料は言っていただければいつでもお渡し出来ます。」

「えっ。確定申告ってなんですか。」

「講習の際にも申し上げましたが、探索者特別控除額の135万円を超える探索者としての収入は申告義務がございますので、高木様は今年から青色申告をする必要がございます。」

「青色申告……。ああ、そうなんですね。具体的にどうすればいいんですかね。」

「年度末に記帳指導もギルドでさせていただいておりますが、心配でしたら税理士の先生を紹介することもできます。」

「税理士の先生ですか……」

「一応念のため申し上げませんが、経費として購入した物品の領収書は保管されていますか？無ければ経費として認められませんので、くれぐれもご注意下さい。最後に税金を納める必要がございますので、ざっくりと収入の3割程度は使わず残しておくことをお勧めします。」

「ああ、そんなんですね。ありがとうございます。」

やばい。完全に忘れていた。殺虫剤を大量に購入しているがスーパーのレシートはその場で捨てていた。

確定申告。名前だけは聞き覚えがあるが全くわからない。俺でも税理士の先生雇えるのだろうか。

第151話 お披露目

俺は今9階層に潜っている。

一番の目的はパーテイメンバーへのベルリアのお披露目だ。

ただ、朝、ギルドで言われた確定申告の事が心配になって他のメンバーに尋ねながら歩いている。

「みんな確定申告してたことあるのかな。」

「ああ。」 「もちろんよ。」 「去年しました。」

みんな確定申告しているらしい。という事は昨年度に135万円以上の収入があったという事だ。みんな羨ましい。

「俺も今年しないといけないっぽいんだけど、大丈夫かな。」

「私は父の顧問税理士に頼んでるから困った事ないけど。」 「私もだ。」 「わたしもです。」

「ああ、そっだよな。顧問税理士って高いのかな。」

「なんか最近は競争が激しいから月1万円ぐらいからやってくれるところもあるみたい。スマホとかでも探せる見たい。」

「俺領収書とか取ってないんだけど大丈夫かな。」

「ダンジョンマートで買った物は履歴がお店に残るから再発行できると思うけど、それ以外は難しいかも。」

「ああ、そうだよな。俺今まで全然稼げてなかったから、気にした事なかったんだ。これからも相談に乗ってください。お願いします。」

「もちろんわかる範囲でなら相談に乗るわよ。」

ああ、やっぱりパーティっていいな。なんて素晴らしいんだろう。そういえば隼人達も俺と一緒に領収書なんか取ってない気がする。月曜日に教えてやろう。

「ガキンッ！」

突然ベルリアがタングステンロッドを振って何かを叩き落とした。

「マイロード敵襲です。ご準備ください。」

どうやら今叩き落としたのは矢だったようだ。シルを含めて誰も気づいていなかったのにベルリアは察知して叩き落としたようだ。

「お前探知系は出来ないって言ってなかったか？」

「いえ、これは探知ではなく、周囲に常に注意を払っていただけです。」

注意を払っていただけで、俺も払っていたけど全く見えなかったぞ。そのままベルリアが進んで行って、シルバーオークを仕留めて戻ってきた。

「敵モンスターを仕留めてまいりました。皆様のお役に立てるよう誠心誠意頑張りますのでよろしくお願いします。」

「なんか、思ってたキャラクターと違うんだけど。」

「そうですね。あの憎たらしいおっさん悪魔と同じとは思えないのです。」

「悪魔だから、嘘をついてるんじゃないか。」

「何をおしゃっているのですか。この私が嘘をつくはずがないではないですか。これでも騎士ですから、誓いは絶対なのです。マイロードと姫様達への誓いは絶対です。信じてください。お願いします。」

「うーん。悪魔ってこんな感じなのかな。ルシエ様しか悪魔を知らないからよくわからないんだけど。」

「俺も先日一緒にダンジョン潜ってみたけど、なんか悪い奴ではなさそうなんだよな。寧ろ超努力家ばいんだよ。戦闘力もそれなりに高いし結構いいんじゃないかな。」

「ああつ。マイロード、ありがたき幸せ。なんと慈悲深いお言葉。」

「そもそもマイロードって何?」

「いや、俺もそれは気になってるんだけど、なんか主人の事みたいなんだけど、めんどくさいから放置してるんだよ。」

「皆様の期待に応えられるように頑張りますのでよろしくお願い

します。」

その後も数回敵モンスターと交戦したが、ベルリアが積極的に戦ってくれたおかげで、圧倒的にスムーズに進んでいる。ただしベルリア自体は9階層では突出しているものの、やはりシル達ほどのスキルを持つわけではないので、頑張ってくれているように見える。

ベルリアもお腹は空くようだがスキルを使っているわけではないのですこぶる燃費はいいようだ。

「みんなどう思う?。」

「まあ、殺されかけたからすぐにはなれないけど、悪い奴ではなさそうだからいいんじゃない。」

「わたしも自分ではいらなですけど、海斗さんに懐いているようなので海斗さんの責任でしっかり管理するならありだと思っ

」

「私も一応賛成だ。戦力アップは間違いないし態度も良い。ただし悪魔だからな、嘘をついてないとは断定できないから海斗しっかり頼んだぞ。」

結局、ベルリアの努力によりパーティメンバーには納得してもらったが、みんなの反応は当然だろう。風貌と態度が激変したとはいえ数日前に殺されそうになった相手だ。おまけにみんなに絶対的な使役権があるわけではないので、主人の俺に責任があるのは間違いない。今後はベルリアの分も責任を持って探索に臨みたい。

第152話 新スキル

今日は日曜日、俺は7階層に潜っている。

今更の7階層だが、パーティメンバーのスキル検証には丁度良いだろうと思いとりあえず7階層に来ている。

「それじゃ、みんなのスキルを確認してみよう。まずはあいりさんとヒカリンのを試してみようか。」

しばらく探索してルシェが発見した、ブロンズゴーレムとストーンゴーレムに対してヒカリンとあいりさんが前に出る。

「アイスサークル」

ヒカリンが新しい魔法を使用する。2m程の範囲で円柱が出現してゴーレムの背丈まで覆い隠す。完全に氷漬けの状態になる。おそらくこのまま放置すると魔法が解除された時点でまた動き出す気はするが、今は完全に動きを封じ込めている。

「斬鉄撃」

氷漬けのブロンズゴーレムが氷ごと真つ二つに切断されてしまった。すごいな。元々のなぎなたの性能とあいりさんの技量もあるのだろうが、すごい威力だ。

同じ要領でストーンゴーレムもあっさり片付けてしまった。

「2人共すごいじゃないですか。かおりんの『アイスサークル』も動きにくくなるどころか、完全に動きを封じ込めているな。あいり

さんの『斬鉄撃』もあの感じだとほとんどのものが斬れちゃうんじゃないですか。」

「まあ、私も『斬鉄撃』の威力には驚いているが、MPを消費するから、無駄撃ちは出来ないな。」

「それじゃあ、次は、ミクとスナッチで戦ってみようか。ちょっと効果が不透明だから危なかったら、みんなですぐにフォローに入るから。」

「うん、わかった。」

しばらく探索しているとすぐにシルが敵を感知した。

「奥に敵が3体います。ご注意ください。」

「ミク、1体はこっちで受け持とうか？」

「せっかくだからわたし達だけでやってみる。無理だったらお願いね。」

前方に見えたのはストーンゴーレムとブラストゴーレム2体だった。問題は、スナッチの攻撃が通用するかどうか。

「幻視の舞」

ミクがスキルを発動したようだ。発動したようだが俺には何も見えない。ミクが踊っているわけでもないし、目に見える幻が発生したわけでもない。

失敗か?と思ったら、ゴーレムが3体とも何も無い虚空に向けて攻

撃を始めた。

どうやら敵にはしつかり、何かの幻が見えているようだ。しかも単体ではなく3体共に効果が波及しているようだ。

ゴーレムが何も無い所を攻撃している様は、不恰好ではあるがたしかに舞っているように見えなくはない。

その舞っているゴーレムに向けてスナッチが、鋼鉄の針を浴びせかける。

「どうやら『ヘッジホッグ』を発動したようだ。

今までの風の刃は残念ながら直接的なダメージは一切与えていなかったが、今度の『ヘッジホッグ』は違った。しつかりとかなりの数の鋼鉄の針がゴーレムの奥の方までめり込んでいき、あつという間に3体共に葬り去ってしまった。

完全に火力不足を解消している。

もう少し知能の高いモンスターでも検証の必要はあるが、ミクとのコンビネーションはかなり使える印象だ。

最後にシルの『戦乙女の歌』を試してみようと思うが、7階層のモンスター相手では効果が測りにくいので9階層まで移動してきた。移動してすぐにシルが3体のモンスターを感知した。

「シル『戦乙女の歌』を使用してみてくれ。サーバントにも効果があるか確認したいから、ルシエとベリエルも戦闘に参加してみてくれ。」

「戦乙女の歌」

シルがスキルを発動した瞬間、頭の中にかすかなシルの歌声が流れてきた。なんととも言えない高揚感がしてきた。

「おおおおお！」

普段あげることのない雄叫びをあげて敵に向かっていく。身体が軽い。足がいつもより早く動く気がする。高揚しながらも普段よりも視界が広い。なんとも言えない無敵感のようなものが感じられる。

目前に迫ったホブゴブリンの攻撃を目視するが、遅い。ホブゴブリンの動きが明らかに鈍く感じられ、余裕を持って避けられる。避けた瞬間バルザードを一閃して斬撃を飛ばしてモンスターを撃破する。

「すごいな。」

明らかに自分のレベルが上がっているのがわかる。高揚感から雄叫びをあげたが、アニメに出てくるバーサーカーのように思考能力が低下するわけではない。寧ろ処理能力は上がっていると感じる。隣を見るとルシエもベルリアも戦闘を終了していた。

「どうだった。」

「ああ、明らかにレベルが上がった感じがあるな。『暴食の美姫』を使った時ほどではないけど、スキルの威力もアップしてるな。」

「わたしは正直よくわかりませんでした。シル姫の歌声は聞こえたのですが、いつもとそれほど変わった感じはありませんでした。」

「そうなのか。」

これは、あれだな。スキルの効果波及条件の信頼関係に依存するというやつだな。俺とルシエは家族だからもちろん信頼度は高く、ベルリアはおまけだから現状信頼度ゼロなのだろう。

ベルリア、これから信頼を築いて行くかな。これからだ。

第153話 9階層踏破

俺は今9階層に来ている。

先週魔核が完全に尽きたので、放課後は1階層で魔核狩りに励んでいた。お陰で200個程度の魔核を手に入れることができたので、これで当面探索には困らないだろう。

土曜日になったのでパーティで9階層の探索を進めている。いつもと違う点はベルリアがいる事だろう。

当初、召喚せずに進むのかと考えていたのだが、ベルリアがしきりにアピールして頼んでくると、矢などの遠距離攻撃を防げる可能性が飛躍的に上がるので、安全策をとって一緒に探索を進めることにした。

パーティメンバーのレベルアップとベルリアのおかげもあって劇的に探索スピードが上がっている。

完全にノーダメージで敵を撃破していつている。

「ガキーン」

ベルリアは、ほぼ確実に矢を防いでくれている。まぐれではなかったようなので本当に良かった。

「ベルリア、あいりさん、敵に突っ込みますよ。」

ベルリアを先頭に3人で敵に突撃をかける。

シルバーオークを俺とあいりさんが斬り伏せ、ベルリアはリザードマンの攻撃を素早く避けてタングステンロッドで連撃をかける。

即座に敵3体を仕留める事に成功した。

ちよっと困った事は、前衛がスムーズになったせいで、後衛の2人

の活躍の場が減ってしまった事だろう。

贅沢すぎる悩みだが、なかなかバランスが難しい。

そんな調子でサクサク進んでいると一日で9階層のかなりの部分までマッピングが終わってしまった。この調子で行くと明日には9階層を突破してしまいそうだ。

「みんな、明日には9階層を突破できそうなんだけど、どうする？ ちょっと早すぎる気もするけど、10階層に行くのも悪くはないと思うんだけど。」

「私は10階層にゲートがあるから早く行きたい。」

「わたしも10階層に行った方が効率がいいと思うのです。」

「まあ、今の感じだと10階層も問題ないんじゃないか。」

「そうですね。わかりました。明日頑張って10階層に行ってみましょうか。」

明日の方針を決めてから家路についた。

流石に10階層となるとちょっと、熟達してきた気がしてワクワクしてくる。装備も少しはレベルアップして臨む必要がある。まだ到達もしていないのに入学式前の中学生の様に、そんな事ばかり考えてしまう。

日曜日の朝になりいつも以上に張り切って9階層に臨む。

昨日と同様のやり方で進んで行っているが、全く問題なく出来ている。

遠距離攻撃してくる敵以外には積極的にミクとヒカリンにも戦闘参加を促して、新スキルの練習もしてもらっている。

みんなの新スキルだが9階層でもしつかり効果を發揮している。スナッチとヒカリンで手数が増えた事は非常に有用だ。

早々に昨日までのポイントにたどり着き、未踏破エリアを進んでいく。

途中でモンスター5体の群れに遭遇したが、カオリンの『アイスサークル』とミクの『幻視の舞』で敵を足止めしている間に、スナッチ、俺、あいりさん、ベルリアの4人が攻撃を加える事で、あっさりと撃破する事に成功した。

新しいスキルのおかげで、パーティとしての連携がうまく取れるようになってきた。

ほぼ最大数の5体を難なく退けた事で全員にも余裕が出てきて、いい感じでその後もモンスターを倒せている。

ルシェの出番は全く無く、シルも探知のみに活躍している状態だ。マツピングを続けて行くと、遂に10階層に続く階段まで到達した。

「みんな、ようやく10階層への階段だ。どうする、思い切ってこのまま降りてみようか。」

「当たり前でしょ、ここまでできて引き返せないじゃない。10階層にはゲートがあるのよ。帰りが断然楽チンでしょ。」

仰る通りです。ちょっと慎重になって聞いてみただけで、俺も降りる選択しかなかった。

みんなの顔を見回してから、10階層へと降りる為に進んでいった。

第154話 10階層

俺は今10階層への階段の前にいる。
これを降れば遂に10階層に到達だ。

「みんないいかな。行くよ。」

パーティメンバー全員で階段を降りて行くと、そこには5階層にもあったコンビニをさらに小さくした様な売店があった。恐らく5階層よりも利用者が少ないせいで小さいのだと思うが、ミネラルウォーター500mlが650円となっている。
高い・・・

恐らく高度の高い山と一緒に奥に行けば行くほど高くなって行くのだろう。出来る事ならマジックポーチが欲しい。ダンジョンを下降しているのに、逆に物価はどんどん上昇していく。

そして、今までになかったブースがある。
それはシャワールームだ。水をどこから引いているのかわからないが1回5分で1000円と書かれている。ミネラルウォーターに比べると随分良心的だが、貼り紙で飲料水には使用できませんとの記載があった。

ダンジョンでお腹を壊すリスクは避けたいので、飲むのは控えようと思うが、特に女性には喜ばれるブースだろうと思う。

「みんな、売店とシャワールームがあるみたいだから、機会があったら利用してみようか。」

「もしかして海斗はどうして10階層にシャワールームがあるか知らないの?」

「え？何か理由があるのか？」

「もちろんあるわよ。10階層からは砂漠エリアになるのよ。ダンジョンで太陽は無いはずなのに、灼熱のエリアもあつて気温が40度を超えるエリアもあるのよ。だからシャワーがあるの。熱中症対策も必須だから。」

「ああ、砂漠エリアなのは知ってたけど、そこまで暑いエリアがあるとは思ってなかった。地面が砂なんだろうぐらいに思ってたよ。それじゃあ、ちょっとこのまま臨むのは無茶かもしれ無いな。」

「長時間は無理だけどせっかくだから、ちょっとだけ進んでみましょうよ。」

「まあ、それがいいかもしれないな。みんなそれでいいかな。」

「はい。」

「ああ。」

「それじゃあシル、初めてのエリアだから特に気をつけて進んでいく様にしよう。」

「かしこまりました。」

俺たちは好奇心に駆られて10階層の探索を始めたが、すぐに汗が滝の様に流れ始めた。

暑い。とにかく暑い。真夏の炎天下を歩いている様な感じだ。

しかも足元が砂地の為足を取られて思いのほか進みが遅い。

他のメンバーを見ると同様の状態だが、サーバントたちはなぜか平然としている。

「シル、ルシエ、お前たち暑く無いのか？」

「もちろん暑いですが、この程度であれば特に問題ありません。」

「魔界にはもっと過酷なところもあるからな、これぐらいだったら問題ない。」

サーバントと人間ではそもそも違うのか、もしくは育った環境の違いかサーバント達はみんな大丈夫な様だった。

「ご主人様、モンスターの反応が2つあります。ご注意ください。」

シルの声で気を引き締め直して、臨戦態勢に入る。

どこだ？目視出来る範囲には見当たらない。前方に注意を払いながら進んでいくが何もいない。

「マイロード、避けてください。」

ベルリアの声に身構えたがどこに何を避けていいかわからず動けなんでいると、俺の足元の土の中から突然巨大なミミズの様なモンスターが現れて俺に巻きついてきた。

うっっ、苦しい・・・

突然の地下からの急襲になすすべなくやられそうになっている俺に向かってベルリアがタングステンロッドで連撃を加える。

ベルリアの連撃に弱ったミミズ型モンスターは俺を離し、土の中に逃げようとしたところを、スナッチが『ヘッジホッグ』でしとめた。

「マイロード避けてください。」

再びベルリアの聲がしたので今度は躊躇なく横方向に飛び退いた。飛び退いた瞬間今までいた場所からもう一体が出現したが、ベルリアとスナッチで挟み撃ちにして討ち取った。

今までに無い下からの攻撃は驚異的だったが、正直常に足下に意識しながら戦う事は難しいので、ベルリアに期待するしかない。思ったよりもベルリア使えるな。

第155話 買い出し

俺は今ダンジョンマートに来ている。

昨日、10階層への初アタックを果たしたが、砂漠という環境に苦戦した為すぐに引き返し、準備を整えてから土曜日に再アタックをかける事にした。

放課後になってダンジョンマートに行く事にしたが、せっかくなので春香にも付いてきてもらおう事にした。

「今度ダンジョンで砂漠エリアに行く事になったから色々買い揃えようと思うんだけど、放課後一緒にどうかな。」

「うん。私も今日は放課後何もないからいいよ。」

やった。どうせなら春香と一緒にの方が楽しいし、おっさんも割引してくれるかもしれない。

放課後になってダンジョンマートに向かうが、購入予定の物は、靴、服、帽子、ベルリアの武器だ。

靴は普通のスニーカーで行ってみたが砂が中に入ってきて気持ち悪いし動きにくいので出来れば砂漠用の靴が欲しい。

服もカーボンナノチューブのスーツだけでは暑すぎる。どうやらこのスーツは暑さに対する快適性は完全に無視をしているようで、少しでも涼しくなる様なものが欲しい。

帽子は完全に暑さ対策だが、太陽が出ているわけではないので必須ではないかもしれない。

最後にベルリアの武器だが、最初はタングステンロッドで十分かとも思ったが10階層で助けてもらったのを機にちょっと褒美をあ

げる方向に変更した。タングステンロッドでは斬れないせいで本来のベルリアの力が発揮されていない様なので剣か刀を買ってやるうと思う。

とりあえず春香に靴のことを相談してみる。

「砂漠で履く靴だね。履いたことないけど、多分デザートシューズとかデザートブーツって言う靴が売ってるから、砂漠にはそれがいいんじゃないかな。」

「デザートブーツか。そういえば聞いたことあるかも。デザートって砂漠のデザートだったのか。知らなかったよ。」

砂漠がデザートなのは理解していたが、デザートブーツのデザートと砂漠が結びついていなかった。やっぱり春香に来てもらってよかった。

早速店内を見て回りデザートブーツを見て回った。

足首までの物ともっと上までカバーしている物があったが、春香が後者の方が砂が入らなくて良さそうということで購入を決めた。値段は18000円程で俺の持っているどの靴よりも高額だったが背に腹は代えられないのでブーツの活躍を願っている。

ただ結構革が硬いので、靴擦れしそうなのが心配だ。靴擦れって『ダークキュア』で治る対象だろうか。

次に暑さ対策のウェアだが、2種類候補が見つかった。

どちらも充電式バッテリーで超小型エアコン搭載の、ダウンベストの様なのと、冒険に出てくる様なマントだ。どちらも性能は同じだが、マントの方が少し長いので効果範囲が大きい様な気がする。

一応試着してみたが、どちらも服の内部が結構涼しい。

涼しさの性能自体はどちらも同じような気がするが、やはりマントの方が腰から下も冷やすので、涼しさには軍配があがるが、ベストに比べると少し動きにくい。

どちらも一長一短あるので、これはもう春香に決めてもらおうしかない。

「春香、このベストとマントどっちがいいと思う？」

「うん。実用的なのはベストだと思うんだけど、探索者のイメージに合うのはマントな気がするな。」

「そうだよな。なんかマントって探索者っぽいよな。」

正直日常生活でマントを羽織ることは全くないのだが、マント、なんか憧れる。

俺に似合うのか？という大きなハードルはあるが、ちょっと探索者スピリットをくすぐられてしまう。

俺は再度マントを羽織ってみて、春香に確認する。

「これって変じゃないかな。」

「うん似合ってるよ。本当はもっと明るい色があればそっちの方がいいと思うけど、茶色のマントも落ち着いてていいんじゃないかな。」

春香の一言に背中を押されて購入を決めた。価格は55000円、ブランド物でもないのにやたらと高い。

まあ買う人もかなり限定される商品なのでやむを得ないだろう。

第156話 剣

俺は今ダンジョンマートで買い物をしている。

靴とマントを買ったので次は帽子を考えている。

涼しくなる帽子を探してみたが、超小型エアコン付きの帽子は無く、小型ファン付きの帽子を発見した。

普通の帽子タイプと、ヘルメットタイプを発見したが、防御力を考えるとヘルメット一択だろう。

試しにかぶって、ファンを動かしてみる。電池式のようなが室内で使うとかなり涼しい。

「春香、これにしようと思うんだけどどうかな。」

「うん。悪くはないんだけど、探検隊かなにかの人みたいだね。普通の帽子じゃダメなのかな。」

「太陽が出ているわけじゃないから、暑さ対策なんだよね。普通の帽子だと日差しには効果があっても涼しくはなさそう。」

「そっか。じゃあ仕方がないよね。うん、いいと思うよ。」

春香のお墨付きももらったのでヘルメットはこれで決まりだ。色は何種類があったが、赤とか黄色はモンスターに標的にされそうなので無難に黒にしておいた。

最後にベルリアの剣だが、こればかりはおっさんの店にしか置いてなさそう。

「こんにちは。武器が欲しいんですけど。刀か剣がいいんですけどいいのなんかありますか？」

「おう、坊主か。また彼女と一緒に、仲がいいな。剣って魔核銃はどうしたんだよ、まさか壊したのか？」

「いや違いますよ。前買ったタングステンロッドの代わりに、斬れる剣が欲しいと思って。日本刀とかどうですかね。他の剣に比べると軽くて強そうじゃないですか。」

「まあ、結構人気はあるがな、あんまり勧めらねーな。」

「えっ、どうしてですか？」

「基本、日本刀は斬る事に主眼を置いてるんだがな、すぐ切れなくなるんだよ。鉄自体は、鍛えてあるから同じサイズの他の剣よりはかなり頑丈だけどな、細くデリケートに作ってあるから、数を相手にするのは向いてない。すぐに刃こぼれるし、脂と血ですぐ斬れなくなるんだよ。研ぐのも技術がいるしな。」

「そうなんですか、時代劇とかで100人斬りとかしてるイメージあつたんですけど。」

「あれはイメージだ。本物はそんな便利なもんじゃねーよ。オススメは切れ味よりもある程度重さで叩き斬れるようなのがいいぞ。斬れなくなってもある程度武器として使えるし、研ぎが甘くてもそこまで影響しねーから、探索者にはオススメだ。」

「そうなんですな。ありがとうございます。なんかおすすりめありますか。」

「予算はどのくらいだ。」

「いえ、物によって考えようかと。」

「そうかよ。学習してるな。ちょっとまってる。」

おっさんは奥の倉庫に引っ込んで行ったがしばらくまっついていると4本の剣を持ってきた。

2つは同じような剣で残りの2つは大きさが違う。

「まず、こっちの2本がバスタードソードだ。まあ汎用性が高い。こっちが25万でこっちが100万だ。こっちがブロードソードとグレートソードだ。ブロードソードが80万でグレートソードが150万だ。」

「やっぱり結構しますね。」

「当たり前だろ。今時こんなファンタジーな本物の剣を使うのは探者ぐらいいしかいねーだろ。ほとんど売れねーんだから高くつくに決まってるだろ。」

「まあそうですね。こっちの25万と100万円の剣は見た感じあんまり変わらないんですけど何が違うんですか？」

「ああ、坊主の予算がわからないからな、一応安いのも持ってきたが25万のはあんまりよくねーぞ。作りが甘い。いわゆるB品みたいなやつだ。100万の方はしっかりしてるからな、予算があるんなら高い方にしとけ。命を預ける武器をケチってもいいことねーぞ。」

「そうですか。それじゃあ3種類あるんですけどどれがいいんですかね。」

「まあ俺のオススメはグレートソードだな。長い分重量もあるが威力も増すからな、モンスターには有効だろうな。ブロードソードとバスタードソードは好みにもよるけどな俺はバスタードソードの方が使い勝手がいい気がするぜ。」

うん。値段はある程度想定内だ。25万円の剣は正直かなり魅力的だが、当面使っていくことを考えると却下だな。グレートソードは俺が使うならありな気もするがベルリアが使うと長すぎて、剣がうまく振れない気がするので却下。残るはブロードソードとバスタードソードだが正直、形以外に違いがわからない。しかし、大きく違うのが名前だ。ブロードとバスタード。完全にバスタードの名前が勝っている。好みはあるだろうが、俺の中でバスタードが圧勝してしまった。100万円のバスタードソードで決まりだな。

「ちょっといいかな。」

春香が小声で服を引っ張ってくる。

「すごく高いんだけど、お金大丈夫なの？安いのでいいんじゃない？それでもすごく高いけど。」

「ああ、ちょっと探索で臨時収入があったから大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。」

まあ、普通の高校生の感覚からすると異常な価格だよな。やっぱり

助言してくれる人がいるのは素晴らしい。ただ武器だけは安いので
済ませるわけにはいかない。

第157話 プレゼント

俺は今ダンジョンマートで剣を選んでる。

いつものおっさんの店で剣を選んでるが100万円のバスタードソードにしようと思ってる。

小声で春香が話しかけてくる

「海斗、お金は大丈夫なんだよね。どの剣がいいと思ってるの？」

「ああ、100万円のバスタードソードにしようと思っただけだ。」

「うん、わかった。おにーさん、海斗と相談して見てるんだけど、ちょっと予算が厳しいみたいなの。でもねその高い方のバスタードソードがちょっといいかなって思ってるんだ。なんとかならないかな。」

「お嬢ちゃん、言ってることはわかるがな、こういうのは数売れるもんじゃないから値引きもあんまりないんだぜ。」

「あんまりってことはちょっとはお願いできますか？」

「お嬢ちゃん、しっかりしてるな。わかったよ90万でいいぜ。」

「ありがとう。おにーさん、もうちょっとなんとかならないかな。」

「おいおい、値段はこれ以上やすくはできないぞ。うん、しょうがねーな、じゃあ砥石と研ぎ方DVDをサービスしてやるよ。」

「おにーさんいつもありがとう。」

おおっ。値段が下がった。春香のスマイルは0円じゃない。確かに価値があるようで、スマイルで交渉するとあっさり10万円も下がった。おそらく俺一人では無理だっただろう。

「そういえば俺ブロンズランクなんですけど割引効きますか？」

「なんだ坊主、もうブロンズランクなのかよ。割引はな。ダンジョンマートを管轄しているダンジョンギルドから還付されるんだよ。ブロンズランクだと3ヶ月後くらいに勝手に口座に振り込まれるはずだぜ。」

「そうだったんですか。知りませんでした。特に説明も受けなかった気がするんですけど。」

「そんなことまで知るわけねーだろ。それよりお嬢ちゃんのおかげで安くなったんだ。少しはプレゼントぐらい買って、ばちは当たらんねーだろ。」

「ああ、そうですね。ありがとうございます。」

バスタードソードを受け取ってから春香に

「買い物助かったよ。御礼するから何がいいかな。」

「別にいいよ。ちょっと付き合っただけだから。」

「いやいや、この前も助かったし、御礼しとかないと次に頼みにく

いから。」

「そうかな。じゃあなんでもいいよ。」

なんでもいいよと言われると女性のプレゼントを購入した事がない俺には決めようがない。

「じゃあとりあえずショッピングモールに行こうか。」

「うん。ありがとう。ほんとに、なんでもいいからね。」

そのまま2人でショッピングモールに向かったが、向かいながら何がいいのか色々脳内で考えてみた。

服は自分で買いたいよな。女の子といえばぬいぐるみ。いやそんな歳じゃないか。

女の子といえば貴金属か。しかし春香が貴金属をつけているのを見たことがない。

指輪もピアスも校則で禁止されているし、ちょっと俺がプレゼントするには敷居が高すぎる。

何がいいかわからない。

春香と会話しながらも頭の中ではプレゼントのことばかり考えていた。

ショッピングモールについて館内をまわることにしてウィンドウショッピングをはじめた。

ブランド物のバッグのイメージもないしな。

「ほんとになにがいいか言ってくれないかな。俺には全く思いつかないんだよ。」

「えつとそれじゃあね、安いのでいいからブレスレットがいいかな。そういえば海斗も時々ブレスレットしてるよね。」

「ああ、俺のはマジックアイテムなんだよ。ちょっと呪われてるけど。」

「えっ？呪われてるの？大丈夫なの？」

「ああ一瞬だから大丈夫だよ。」

「そういうもんなんだ。それじゃあ、呪いのアイテムはちょっと無理だからデザインがお揃いっぽいのがいいな。」

「えっ！？お揃い・・・ああそう、そうね。お揃いね。いいんじゃないかな。うんいいね。」

2人で最初に見たのはストーンショップ、それっぽいデザインの物を見つけて春香が手にとってこれがいいかなというので値札を見て見たが1800円だった。いくら俺でもこれをプレゼントするわけにはいかない。

俺が次に連れて行ったのは、カジュアルな感じのジュエリーショップだ。

青といえばサファイアだな。小さなサファイアのついたブレスレットを発見して値札を見るが、30000円。

流石に今日とこの前に春香がディスクアウントしてもらった金額には全然届かないが、これ以上高いと引かれそうだ。

店員さんをお願いして春香につけてもらったが、なかなかいい感じだ。まあ春香がつけければなんでもいい感じに見える。

春香も気に入ったように見えたので

「すみません。これください。」

「ちよつとまって。こんなに高いものもらえないよ。さっきの十分だから。」

「いやいや、俺の気持ちだから。春香にはもつとお世話になってるから。俺も探索者で結構稼いでるから大丈夫。」

「いや、でも悪いし。」

「もしかしてこれ嫌だった？ 気に入らないなら他のにしようか。」

「ううん。プレスレットはすごく可愛いけど。」

「じゃあ決まりだな。これください。」

そのまま包装してもらって春香に渡した。ほぼ、はじめてのプレゼントかもしれない。

「ありがとう。絶対大事にするね。」

満面の笑顔を浮かべた春香を見て、プレゼントを勧めてくれた、おっさんへの感謝が止まらない。

こんなに天使の笑顔をくれるなら毎日でもプレゼントしたいぐらいだ。

プレゼントって最高だな。いや春香が最高だな。

第158話 新装備

俺は今9階層にいる。

きのう春香に付き合ってもらって10階層用の装備を購入したが、結構苦戦するかもしれないので10階層ではなく、慣れている9階層で新装備を試そうと思う。

すでにブーツ、マント、ヘルメットは装着済みだ。

まずブーツだが砂場ではないので性能はイマイチよくわからないが、今までのスニーカーより重くて歩きにくいしなんか硬い。

ブーツを履く事自体が初めてなので、慣れるまでにしばらくかかるかもしれない。

次にマントとヘルメットだが、どちらも非常に快適だ。

10階層のように暑くはないが、9階層でも効果は体感でき、体全体が涼しい。これならばかなり10階層でも効果的だろう。

ただ今までマントなんか羽織ったことがなかったので腕のあたりにひらひらするのが気になってバルザードの取り扱い時にちよつと鬱陶しい。これも慣れが必要かもしれない。

ヘルメットは今まで防具がなかった所に、防御効果と涼しさが相まって凄くいい。

9階層に来るのに1度10階層に飛んでから登ってきたのだが、10階層にたむろしていた探索者の視線を感じた気がするが、新品の新装備が目立っていたのかもしれない。

俺もより探索者らしく見えるようになったのかもしれない。最後の新装備はベルリア用の新装備バスタードソードだ。

ベルリアを召喚してバスタードソードを見せてやると泣いて喜んだ。

「ああつ。マイロードこれは剣ではないですか。私に賜れるのですか。本物の剣を賜れるとは感激です。この剣が折れるまで必死で頑

張ります。」

「いや、折れちゃダメだろ。折らないように頑張ってくれよ。」

「もちろんです。折らないように擦り切れるまで頑張ります。ううっ……」

「ど、どうしたんだ。なんで泣いてるんだよ。」

「いえ、木刀を見せられた時にはどうしていいか戸惑ってしまったのですが、お優しいマイロードが私のための剣を購入してくれたと思うと嬉しくて。」

「ああそれは良かった。そんなに喜んでもらえる俺も嬉しいよ。」

「この剣で次は魔剣を賜れるように頑張ります。」

いや、頑張っても魔剣は無理だと思う……

「ま、まあいいや、頑張ってくれよ。それじゃあその剣を使って敵を倒してみてくださいよ。」

「まかせてください。」

しばらく歩いているとシルが

「ご主人様、敵がいます。3体です。」

「ベルリア頼んだぞ。3体は敵しいだろうから1体は俺が受け持つよ。」

「何をおっしゃいます。せっかく賜った剣のお披露目なのでからマイロードは後ろでゆっくりとご覧になってください。」

「ああ、そうか。じゃあ危なくなったらすぐに助けるからな。」

「ありがとうございます。頑張ります。」

なんかベルリアは頑張りますが多いな。まあぼちぼち頑張ってくれ
ると嬉しいんだけど。

ベルリアが敵に向かっていくのを俺も追って行くが置いていかれる。
張り切っているのか速くなっている気がする。

リザードマンとホブゴブリンを発見すると同時に、ベルリアが素早
くりザードマンの懐に飛び込むとそのままバスタードソードを一閃
し倒してしまった。

目には見えるもののタングステンロッドの時よりも明らかに速い。
やはり騎士にとって剣は特別なものかもしれない。やはり棒では本来
の力が出せなかったのかもしれないが、俺にとってはタングステン
ロッドもかなり重宝する武器だったのに。

返す剣でもう一体のリザードマンを斬りにかかったが、流石に相手
も読んでおり、武器で受け止められるが、押し合わずにそのままス
ルツと横に抜けて斜め後ろから斬り伏せた。

残ったホブゴブリンと相対したが今度は適度な距離を保って間合い
を測っている。ホブゴブリンがフルスイングで攻撃して来たのをさ
っと避けてそのまま踏み込み腕を斬り落とした。

「グギャギャギャー」

暴れるホブゴブリンをそのままあっさり斬り倒してしまった。
強い。マッチョなおっさんの時には分からなかったが、ベルリアは
技巧派だ。今の小さい体で、力押しではない、素人の俺から見ても
修練された技術で敵を倒した。
チビだけどカッコいいな。やはりこいつは努力の悪魔だ。俺も今度
剣術教えてもらおうかな。

第158話 新装備（後書き）

第159話 剣術

俺は今9階層でベルリアの戦いを見守っている。
ベルリアが3体の敵を華麗な剣技で倒してしまった。

「マイロード、素晴らしい剣をありがとうございます。私の体のサ
イズに合わせたような造り。やはり剣があると気の入り方が違いま
す。これから一層マイロードの為に頑張ります。」

「ああ、それは良かった。期待しているよ。それはそうとかなり見
事な剣技だったけどな。」

「ありがとうございます。私には剣の道しかございませんので、で
きる限りの修練を積んでまいりました。」

「あのさ、もしよかったら俺にも剣技を教えてくれないかな？」

「もちろんです。喜んで教えさせていただきます。」

「それじゃあ、お願いするよ。俺今まで剣技を誰かに習ったことが
ないから、助かるよ。」

「今から始めましょうか？」

「いや、9階層で練習するのはちょっと怖いから明日から1階層で
頼むよ。」

「はい、それでは明日からお願いします。」

その日はそのまま、新装備の検証も兼ねて9階層での探索を続けた。翌日、約束通りいつもの練習スペースにやってきてサーバントを召喚する。

「じゃあベルリア、剣技の練習をお願いするよ。」

「わかりました。マイロードの剣は小さな魔剣ですので、1から訓練したのでは時間がかかりすぎておそらく、ものになりません。なのでその魔剣だけを使いこなせるように練習していきましょう。ですが基本は素振りです。まずぶれることなく剣を振れるように素振りをしましょう。」

ベルリアに言われて素振りを始めたが、ベルリアに言わせると、剣尖がぶれているらしい。サイズのどうしても片手になるのが原因だと思うが、魔氷剣などのサイズになると更にぶれてくるとのこと。その日は1時間程度素振りだけさせられた。慣れない素振りに手の皮がむけて痛かったので『ダークキュア』で治してもらった。

次の日も放課後1階層に潜って素振りをさせられたが、腕だけでなく体も併せて動くように指導され、1時間程度やったが、かなり疲れた。今後には必要なことだと思えるので、継続して訓練を続ける為にも、平日は1階層でまず1時間スライム狩りをしてから、訓練をしようと思う。

また次の日も素振りをしたが今度は正面からだけではなくいくつかの違う角度からの素振りもするようになった。併せて、足の運びと回避の為の上半身の身のこなしの訓練もスタートさせた。

ベルリア曰く、バルザードのサイズで相手の攻撃を受けるのは自殺行為だとの事。基本相手の攻撃については避ける事が必須だそうだ。常に足運びで全方向に対して距離を保つての移動を練習して、特に危ない場面は上半身の動きでさける。更に剣を持っている腕だけを

残して攻撃されないように気を配るように指導された。

指導されたからといってすぐにできるわけもなく、単調な訓練の繰り返し返したが、やらないよりはやったほうがいいに決まっている。

足運びは、習わないと自分では思いつかない部分だった。

次の日も同じ訓練を試みるが、最後にベルリアが軽く攻撃してくるのを避ける訓練をすることになった。

「マイロード、万が一攻撃が当たっても『ダークキュア』で治りますので大丈夫ですよ。思い切ってやりましょう。」

いや、いくら治るからといって剣で斬られるのは絶対に嫌だ。我慢できない。

「ベルリア、最初だからな。そんなに思い切らなくていいからな。

ゆっくりやってくれ、ゆっくりな。」

「そうですか。練習こそ本気でやったほうがいいのですが。」

「いや、お前が本気を出したら死ぬ。死ぬ自信がある。やめてくれ。」

「そうおっしゃるのでしたら、ちょっと加減しながらやりますね。」

「ああ頼むよ。」

「ベルリア、ご主人様に怪我をさせたら承知しませんよ。調子に乗ってはいけません。」

「シル姫申し訳ございませんでした。肝に銘じてかからせて頂きます。」

基本ベルリアの対応は俺に対してもしっかりしているが、シルとルシエへの対応は主人である俺以上のものがあるような気がする。なんの違いだろうか。

第160話 軽い模擬訓練

俺は今1階層でベルリアと訓練をしている。

「それじゃあ、いきますよ。」

「ああ、いつでも来てくれ。」

そう言うと同時にベルリアが斬りかかってくる。

軽くやってくれてるのだと思うが、自分よりもかなり低い位置からの攻撃に感覚がついていけない。

大きく避けて、剣戟を逃れる。

「マイロード、大きく避けすぎです。最小限過ぎると逆に危ないですが、もう少し小さな動きをお願いします。」

そう言うって再び斬りかかってくる。

小さな動き、小さな動き。

無理。

再び大きめに避けてしまった。

「マイロード練習なのですから、当たっても大丈夫です。思い切ってやってみましょう。」

だから大丈夫じゃないんだよ。

今度も上段から斬りかかってくると思ったら横薙ぎに足を狙ってきた。

「おい。危ないって。何するんだよ。」

「マイロード、これは訓練ではありませんが敵はワンパターンではありませんよ。色々な角度から攻撃はくるものです。フェイントだってあるのです。練習のうちから対応できるようにする必要があります。」

言ってる事はわかる。本当に正しいと思う。思うがこっちは武術経験なしの只の高校生だぞ。無理だろ。

そう言いながらも今度は逆の足を狙って斬りつけてくる。今度は虚を突かれなかったのでスムーズにバックステップでかわすことのできた。

今度は下から跳ね上げるように斬りつけてくる。今までモンスターにはなかった動きに反応が遅れ少し掠ってしまふ。

痛い……

痛がる暇もなく返す剣で袈裟斬りを仕掛けてくる。これも掠った直後で動きが硬くなっており、くらってしまった。

カーボンナノチューブのスーツのおかげで斬れてはいない。いないがとてつもなく痛い。

「ストップ、ストップだ、ベルリア。」

「どうされましたか？マイロード」

「いや、どうされましたって斬られたんだよ、お前に。」

「別に傷を負った様子はないですが。」

「ものすごく痛いんだよ。『ダークキュア』を頼む。」

「そうでしたか。『ダークキュア』いかがでしょうか。」

「ああ、良いようだ。」

「それでは。」

と言うとベルリアがまた斬りかかってきた。こいつなんか容赦無いな。

今度は突きを仕掛けてきた。これもモンスターには無かった攻撃だ。とっさにバックステップを踏んだが、そこからさらに押し込んで突いてきた。

「グフツ。」

痛い。

「マイロード、突きは後ろに避けるだけでは足りません。その後の動きに続けて動くか、横に避けてから攻撃に転じてください。」

「お、おい。攻撃しても良いのか？」

「もちろんですが、私も避けますので簡単には当たりませんよ。」

さっき避ける練習って言わなかったか？絶対当ててやる。なんかこの小さいのに一方的にやられるのは心情的に我慢できない。

体制を整えると再度突いてきたので、指導を受けた通り左に避ける。上手く避けたので攻撃に転じる・・・

その瞬間ベルリアが横に剣を薙いだ。

「グウウー。痛ってー。それはズルだろズル。」

「マイロード、何度も申し上げますが、訓練は本番を想定して行うものなのです。ですからいろんなパターンを経験する事が必要なのです。」

「ベルリア、そこそこにしてやれよ。シルにも言われただろ。海斗はあまちゃんだから、あんまり厳しくしてやるな。」

「はっ。ルシエリア姫の仰せのままに。」

なんだこれ。なんか立場がおかしな事になってないか？それはそうと、痛みの中でも俺は聞き逃さなかった。

ルシエが俺の事を海斗と呼んでくれた。今まで、「おい」とか「お前」としか呼んでくれなかったのに、今確かに海斗と呼んでくれた。感動だ。

「ルシエ、もう一回言ってくれないか？」

「は？あまちゃんか？」

「いや、それじゃなくて俺の事だ」

「だからあまちゃんだろ。」

「いや名前だよ、名前。今海斗って呼んでくれただろ。なあベルリア。」

「ああ、確かにそう呼ばれてましたね。」

「ベルリア。そんな呼び方してないだろ。」

「はい、していません。私の勘違いでした。」

「おいおい、ベルリアそれは無いだろう。せっかくの男同士なのに、お前への畏敬の念が薄れていくぞ。」

第161話 模擬訓練の続き

俺は今1階層でベルリアと訓練をしている。

正直ベルリアとの訓練は心が折れそうになる。

何度も攻撃をくらってとにかく痛いのだ。手加減してもらっているのだが、とにかく痛い。

あまりに痛いので時々『ダークキュア』で治してもらうのだが、その時の痛みは消えるものの、やっぱり攻撃をくらうと新たな痛みが発生して痛い。

俺もバカではないのでやられてばかりではない、ベルリアの攻撃を避けた瞬間にバルザードの飛ぶ斬撃をかましてやった。

流石に近距離だったので多少はダメージを与えられたようだ。

「マイロード、今のはズルです。今はスキル等無し of 剣術練習です。使用しての訓練は次のステップですので今のは、無しです。」

ええ？俺のはズル？

「ああちよつとせこいな。いくら敵わないからってそれはないな」

ルシエ、お前まで。

「ご主人様、今のはちよつと・・・」

シルお前もか。

「わかったよ。俺が悪かったよ。剣だけな剣。」

その後も20分ほど訓練を続けたが、そこまでが限界だった。実剣を使った訓練がこれほど大変だとは思わなかった。とにかく集中力を要するし、体力の減りも尋常ではない。素振りとは全く違う疲れ方だ。

ただ、今までやったことの無い本格的な訓練に充実感も感じている。当面平日はこのルーティンで臨もうと思う。

土曜日を迎え、パーティメンバーで10階層に本格的に臨む事となったが、合流時に俺の格好の事を色々指摘されてしまった。ブーツは結構評判が良かった。

マントは、見た瞬間に何かにかぶれてしまったのかと心配されたが、エアコン内蔵なのを聞いてみんな納得してくれた。むしろ探索者っぽくていいんじゃないかとも言ってくれた。

問題はヘルメットだが、春香も微妙な反応を示したが、パーティメンバーの3人も微妙な反応を示した。

ファン付きで涼しい事を説明してもなお、微妙な反応だ。

探索者というより冒険者っぽいとのことだった。まあ、冒険者がヘルメットをかぶっているイメージがあるから仕方がないかもしれない。

みんなもそれぞれ装備品が更新されているが、ヘルメットではなく帽子をかぶっているのと暑さ対策はハイテク下着で体温を調整しているらしいので、表面上はそれほど変化がなかった。

10階層に行くと、ゲートポイントでもあるので他の階層に比べて他の探索者パーティもちらほら見かけるが、一様に俺の事なのか、パーティ全体なのかは不明だが見られている感がある。

俺の新装備がそんなに目立つのか、他のパーティメンバーが目立つのかはよくわからないが注目されているのはわかる。今までにあったのは、ライフジャケットを装着していた時以来なのでちよつと新鮮な感じではあるが、そんなに見ないでほしい。

遂に10階層エリアに本格的に乗り出したが、まずブーツだが重い

ものスニーカーよりは歩きやすいし砂も入ってこないので、ジャリジャリ感もなく快適だ。

暑さも前回に比べると劇的に改善している。

みんなの方も見てみるが特に変わった感じもないので問題なくいけているようだ。

「ご主人様、前方から敵が高速移動してきます。」

なんだ？どこから来る。また地下か？

そう思つて足元に注意していたが実際には前方から急速に猿つばいモンスターが飛んできた。文字通り飛んできた。あまり大きくはないがチンパンジーほどの大きさに羽が生えている。天使の先祖か？とバカな妄想に耽る間もなく高速で上空から迫ってきたので全員で一撃目を回避する。

「みんな機動力はあつちが上だから遠距離から仕留めよう。ミクとあいらさんは魔核銃、カオリンは『ファイアボルト』ベルリアはみんなを守れ。」

俺もバルザードを構え飛ぶ斬撃を発動させるが、今までの敵に比べると小さいのと思いのほか移動速度が速い為なかなか当たらない。おまけに上空からなにかを投げつけてきたがベルリアが撃ち落とす。なんだ？なにを投げかけてきているんだ。

「マイロード、恐らく魔法です。魔法で毒物を射出してきていると思われます。」

「毒物？お前大丈夫なのか？」

「私は耐性があるので問題ありません。皆さまをお守りします。」

今までより小さい風貌にちょっと舐めていたかもしれない。上空から魔法で毒物を射出してくる。遠距離攻撃を持たなければ手詰まりになるような強力な攻撃じゃないか。

とにかく撃ち落とすしかない。

何度か繰り返すが、上空の動く敵がこれほど厄介だとは思わなかった。

当たらない・・・

第162話 10階層の壁

俺は今10階層で戦っている。

天使の先祖ではなく、空飛ぶ猿、名前がわからないので、飛猿と名付けるが、攻撃が当たらない。

今まで大きい系のモンスターが多かったので攻撃自体は難なく当たっていたが、こいつには当たらない。

地上の敵であれば、連射でなんとかなるのだろうが、空から立体で攻められるとこんなに厄介だとは思わなかった。

連射性能が高い魔核銃が数発当たっているようだが、致命傷には至っていない。

バルザードの斬撃はスピードが遅いのと、狙いが大雑把になってしまうので諦めて魔核銃に持ち替えている。

ヒカリンも魔法が当たらないので魔核銃を手にしており、4人で魔核銃スタイルになっている。

しかし当たらない。ライフルか何かがあればちょっと違つかもしれないが、短銃スタイルの魔核銃では相性が悪い。

スキル『必中投撃』がほしいところだが一方的に空から攻められるのもよくないので

「シル『神の雷撃』を頼む。」

「かしこまりました。『神の雷撃』」

「ズガガガガン」

いつもの爆音と共に飛猿が消失した。

「「「さすがです」「」」

いつもより、声が多いと思っただらベルリアもシルを称えていた。

「本当は、シルに力を借りる気は無かったけど、このまま行くとシリ貧で被害が増えてもまずいから。やっぱり10階層だけあって、なかなか厳しいと思う。今後も厳しい場面では、シルとルシェには手伝ってもらおうと思うんだけど、いいかな。」

「「「もちろん」「」」

なぜお前も混じってるんだベルリア。

自分たちだけで探索を進めたかったので不本意だが、みんなの安全には代えられないので、今後はシルとルシェにも場面、場面で参戦してもらおう事にした。

その後も探索を続けているが、思ったほど進まない。

砂地で歩くことがこんなに困難だとは思わなかった。足がとられて重い上に、デザートブーツを履いていても戦闘では予想以上に足を取られる。

参ったのは、ベルリアとステップの訓練をしているのに砂上ではステップが踏めない。最小限の動きで避けるように訓練したが、極力大きく動いて避けなければ、自分の感覚以上に可動域が狭くなっている。

「ご主人様、敵が5体です。正面からです。」

5体はこの階層では今までで1番多い。

正面から、直立したトカゲのようなモンスターが迫ってくる。早い。

リザードマンではない、水上を走るバシリスクのような感じで砂の

上を難なくかけてくる。
どう見ても俺らよりも機動力が上だ。

「シル、『鉄壁の乙女』を頼む。みんなサークル内に入って各自攻撃してくれ。」

「プシュ」 「プシュ」

魔核銃で狙い撃つが、鱗に守られているのか効果が薄い。

「ヒカリン、『アースウェイブ』を順番に頼む。ミク、『幻視の舞』で足止め頼む。スナッチも攻撃を。」

「アースウェイブ」

ヒカリンが『アースウェイブ』を発動するが御構い無しに飛び越えてくる。

砂場だから『アースウェイブ』が有効だと踏んだのだが、砂走りでもいっべき走り方には無効だったようだ。

「すまないヒカリン、『アイスサークル』に変更して。」

最初の1体がサークルまで到達して攻撃を仕掛けてくる。

ベルリアが直ぐに斬り倒したが、それを見た残りの4体は方向転換し一定の距離を保ってこちらを伺っている。やはりそれなりの知能があるようだ。

1体を『アイスサークル』が捉える。それとほぼ同時に2体が奇妙な動きを見せ始める。

ミカの『幻視の舞』にかかったようだが1体は逃れたようだ。

「ベルリア、あいりさん、行きますよ。無傷の奴に注意してください。」

3人で飛び出して、まず『アイスサークル』にはまっているモンスターを撃退しようとするが、なぜかベルリアだけが速い。俺とあいりさんが砂に足を取られて移動速度が落ちているのに対して、特に普段と変わらない速度で走っている。なぜだ？悪魔つて砂は問題じゃないのか？

結果ベルリアだけが先に到達したので1人でモンスターを斬り伏せた。俺とあいりさんは、それを見てターゲットをふらふらしている2体に切り替えて攻撃する。

あいりさんも『斬鉄撃』を発動しているようで一撃で撃破した。

俺も飛び込んでバルザードを突き刺して敵を爆散させた。

残る1体は走り回りながら攻撃を伺っているので斬撃を飛ばすが、なかなか当たらない。

その直後俺の横をスナッチがすり抜けて行き敵めがけて『ヘッジホッグ』を発動して、串刺しにしまった。

全員の連携で無事に5体を倒すことが出来たが、やっぱり手強い。

10階層のモンスターは特別強い感じはしないがそれぞれが特徴を備えており、うまく噛み合わないとなかなか苦戦してしまう感じだ。まだまだこれからのので気を抜かずに進んで行きたい。

第163話 渴き

俺は今10階層で探索を続けている。

今日が本格的に10階層を探索する初日なのだが、数回の戦闘を経て、既にかなり疲れている。

足が重い。喉が渴く。

マントとヘルメットの効果でかなり軽減しているはずなのに汗が止まらない。

1番の問題は水だ。邪魔にならないレベルでもってこれるのはペットボトル3本程度。既に2本を飲み干してしまった。

他のメンバーはマジックポーチがあるので問題はなく、むしろ俺の分も用意してくれようとしている。

メンバーに頼るのは恥ではない。それは分かっているのだが、俺の中の小さなプライドが邪魔をする。できることならこのくらいは自分で済ませてしまいたい。

1番安いマジックポーチが1000万円程度。今までの稼ぎ全部合わせても足りない。税金と学費は残しておきたい。今度はケルベロスでも出ないだろうか？一気にポーチまで到達できそうだ。

それか、ボロくてもいいから中古って売ってないだろうか？中古で半額とかないかな？今度ダンジョンマーケットを物色してみよう。

喉が渴くとそんなことはかりが頭の中をぐるぐる回っている。

「そつえばベルリア、お前戦闘の時、全然移動スピードが落ちないんだけどあれって悪魔だからなのか？」

「いえそうではありません。砂上を走る技術です。足の裏を極力垂直に接地させて素早く動かして砂の影響を受ける前に次の足に重心を移動させるのです。」

おいおい、それって忍者走りみたいじゃないか。俺にはどう考えても無理っぽい。

「ああ、そうなんだ。そういえば、シルも出来るのか？」

「ちょっとやり方は違いますが出来ます。まあ飛んでもいいですし。

」

「そうか。ルシエはどうなんだ？」

「も、もちろん出来る。出来るに決まってるだろ。」

「ルシエ、嘘はダメだぞ。嘘は。」

「嘘じゃない。出来る。」

「じゃあ、あっちまで走ってみてくれ」

「う、わかったよ走ればいいんだろ。」

そう言っつてルシエが砂に上を走り出したが、普通に遅い。

「どうだ。」

「どうだと言われてもな。出来てないぞ。」

「わたしは前衛じゃないからいいんだよ。走らないから問題ないんだ。」

「ああ、そうか。まあいつものことだからな。頑張ろうな。」

やっぱりルシエは運動が苦手のような。平地での戦闘は難なくこなすのに、泳ぎといい今回の事といい親近感がわくので俺としては仲間ができて嬉しい。

「ご主人様、敵です。多分砂の中です。」

またあのミミズのお化けか？

そう考えて足元に神経をとがらせていると、足元の砂が動いた。動いたというか底が抜けたように飲み込まれ始めた。

「やばい。飲み込まれる。みんな逃げろ。」

声をかけると同時に全員飛びのいて足を取られるのを防いだ。

俺とルシエを除いてだが。

俺も声をかけた直後に飛びのこうとしたのだが、何かに引っ張られて飛ぶことができなかった。

後ろから引っ張られて、振り向くとルシエがしっかりと俺のマントの裾を握りしめていた。

「ルシエ、お前何するんだ。飛べなくて飲み込まれてしまうぞ。」

「あ、ちょっとタイミングを逃しちゃって、思わず掴んじゃった。」

おい、なに可愛く掴んじゃっただよ。

「ご主人様逃げてください。モンスターはこの下です。」

そうだろうな。それ以外に考えられないよな。

ただな、シル、もうすっかり足を取られてしまっただけで動けないんだよ。どうしたらいいだろう、なあみんな。

「シル、ごめんちょっと無理。どんどん沈んでいくだけで、上げられそうにない。」

「ご主人様、モンスターが迫ってきています。」

そうだろうね。ちょっとやばいな。ちょっとじゃなくやばいのか？
とりあえず腕は動くので『ウォーターボール』を発動して魔氷剣を作り出して、足元に向かって斬撃を飛ばしてみたが砂に阻まれ効果がなかった。

本気でどうしよう。

第163話 渴き(後書き)

第164話 蟻地獄

俺は今砂に飲み込まれようとしている。

「ルシエ、足元に向かって『破滅の獄炎』を放てるか？」

「バカ、そんなことをしたらお前が丸焼きになるぞ。丸焼き海斗だぞ。」

おおっ、また海斗と呼んでくれた。感動だ。感動だが、やばい。

「ウォーターボール」 「ウォーターボール」

魔氷剣に重ねがけをして魔氷槍に変化させ足元をとにかく突いてみた。

砂の中をブス、ブス、と刺していくが手応えがない。もっと深いところにいるのかもしれない。

そうこうしているうちに、砂の円が大きくなり始めて、底の方を見ると蟻地獄が大きくなったようなモンスターが待ち構えている。もがいてみるが、下方向へ流される方が早い。

今度は槍の突撃を飛ばしてみたがやはり砂が邪魔だ。パーティメンバーも上から攻撃してくれているが、やはり難しいようだ。

『暴食の美姫』を使うか？ただあれば、あまり使いたくはない。他の方法はないか？

「おい、そろそろやばいぞ。なんか考えろよ。」

「わかってるよ。ちょっと待ってっ。」

「いざとなったら『破滅の獄炎』使うからな。」

「いや、ちょっと待て。使ったら俺丸焼けになるんだよな。勘弁してくれ。」

どうする。

「シル『戦乙女の歌』を使ってくれ。」

頭の中にシルの歌声が聞こえてくる。高揚感と共に力が湧き上がってくる。

そのままルシエを砂地から引っこ抜いて思いっきり、上方にぶん投げた。それほど上方には持ち上がらなかったが、ルシエ自身の能力がアップしていたこともあり、上のメンバーの力を借りでどうにか脱出できたようだ。

次は俺の番だ。みなぎる力で目一杯抜け出そうともがいてみたが、やっぱりダメだ。もがいて片足が抜けそうになると今度はもう片方の足が更にめり込もうとする。まさにアリ地獄。

俺だけ抜けられない。

切羽詰まって余裕がなくなってしまったので綺麗事を言っている場合ではない。このままだと食われてしまう。

「シル、一旦送還するから、再召喚したら俺の所から敵に向かって『神槍』を叩き込んでくれ。」

「かしこまりました。お任せください。」

俺はシルを一旦カードに戻してから、再召喚をかけた。

目の前に現れたシルが神槍を発動する。

「我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

中心部のモンスターまで急下降して一気に消滅させたが、モンスターの消滅と共に流砂の流れが止まった。

助かったようだが、とりあえず

「るゝシエ。お前のせいでまた大変な事になったんだけど、どういうつもりだ？」

「いや、とつさにな、目の前の物を掴んだだけだ。まあ大丈夫だったんだからいいだろ。」

「なにを言っているのかな？お前のせいで俺飛べなかったんだけど。おまけに俺だけ抜け出せなかったんだけど。」

「そ、それはお前が鈍いからだ。重いから沈んだだけだろ。」

「そもそもお前のせいで死にかけるのこれで何回目だと思ってるんだ？」

「はじめて、いや、2回目だったかな。探索に危険はつきものだろ。」

「いや、もっといっばいだ。探索に危険はつきものだが、お前のお陰で危険が増してるんだ。今回はさすがにお仕置きするぞ。」

「ひっ。お仕置きってどうするつもりだよ。」

「お尻ペンペンするぞ。」

「いやだ。変態。スケベ。絶対いや。」

「嫌がる事をするからお仕置きになるんだ。」

「いやだ。ごめんなさい。助けてください。もうしません。」

「前も同じセリフを言ったよな。」

「うっう。」

「海斗さん、ルシエ様がかawaiiそうなのです。そのぐらいにしてあげてください。」

「いや、一度きつくお仕置きしないとこいつはまたやらかす。俺にだけやらかす。絶対やらかす。」

「うっう、何回だ？1回だけか？」

「いや10回だ。」

「10回は無理。2回にしてくれ。」

「8回だ。」

「3回」

「6回だ。」

「4回」

「しょうがない大負けに負けて5回だ。」

「うつつ。5回だな。しょうがない。やれよこの変態。」

「ちょっと待て。誰が悪いんだ？」

「ええっと。わたし？」

「そつだよな。俺を加害者の様に言うのはどつなのかな？」

「うつつ、ごめんなさい。」

「しっかり反省しろよ。じゃあ行くぞ。」

「パチーン」

「うつつ。」

「反省したか？」

「ああもちろん。」

「パチーン」

「悪かったよ。」

「パチーン。」

「ごめんなさい。」

「パチーン。」

「もうしません。」

「本当か？」

「本当です。ごめんなさい。もうしません。」

「反省したか？」

「もう反省。すごく反省。目一杯反省した。」

「よし、じゃあ今回はおまけで4回で終了な。今後は俺を危機に晒す様な事は控えてな。」

「はい、わかりました。」

まあ、今回はちょっとやりすぎたかという思いもあるが、愛する妹のためにも必要な事だったと思う。多分これをやらないと、俺は近いうちにルシエのせいで死んでしまうような気がする。

心を鬼にしてのおしりペンペンだ。本当は心と手がちょっと痛い。きつとルシエはお尻が痛かっただろう。

第164話 蟻地獄(後書き)

第165話 2日目

俺は今、家で寝ている。

ルシエがやらかして、それまでにもかなり疲労していたこともあり、探索を打ち切って帰ってきたのだ。

正直今日一日疲れた。ちよつと死にかけたし、砂と暑さにやられた。砂漠に住んでいる人たちは毎日これに耐えているのかと思うと頭が下がる。

普段冷暖房完備の生活を送っている俺には今までで1番過酷なダンジョンフィールドだと思う。

今日の事を思い返してみるが、今までとは全く違う感じのモンスターばかりでてきた。

特殊な感じのやつが多いのでこれが続くようだと対策し辛い。とにかく明日はペットボトルを凍らせて持ち込むことにしよう。

俺はマントのバッテリーを忘れずに充電して眠りにつくことにした。

翌朝になって眼が覚めるが、やはり体が重い。急激な環境変化に体がついて行っていないのだと思うが、そのうち慣れるだろうと思いついて準備してから、ダンジョンに向かってメンバーと合流した。

「みんな体調は大丈夫か？」

「ああ。ちよつと体が重いな。出来れば休憩を挟みながら探索してもらえると助かる。」

他のメンバーもやはり疲労が残っているようだ。調子に乗らず少しずつ進むことにしよう。

そう思いながら全員で10階層に到着したが、やはり先日同様視線

を感じる。一体なんだと言っのだろう。
なんとなく居心地も悪いので早速探索を開始する。

「なあ、ミク、なんかこの階層になってから、他の探索者に見られてないか？」

「まあ、見られてるかもね。」

「やっぱりそうだよな。一体なんなんだろうな。」

「多分海斗さんですよ。」

「俺？いやみんなだろ。」

「いや多分海斗だと思う。」

「いやいや。なんで俺？」

「まあ、海斗はそれでいいと思うよ。海斗らしいから。」

「どう言う意味だよ。」

「褒めてるんだって。いい意味で。」

「はあ。そうなのか？」

まあ、俺がそんなに注目を浴びるとは思えないので、可愛い女の子3人が目立つのだろう。サーバントも出しているから、シルとルシエが目立っているのかもしれない。だが10階層はこの前すぐに襲われた上に、ギルドにバレたから開き直ってサーバントをスター

ト地点から召喚している。まあ、どこの誰だかわからないだろうから問題ない。

「ご主人様、モンスター2体です。気をつけてください。」

どこだ？気配が感じられない。

「シル、どこにいるんだ？」

「わかりませんが、近いです。」

また足元か？

「ベルリア、どこにいるかわかるか？」

「いえ、近くにいるような気はするのですがはっきりとはわかりません。」

どこだ？

「シュツ」

俺の足元になにかが巻きついて、思いっきり引っ張られて激しく転んだ。
なんだ？

「ご主人様を離せ。」

シルが巻きついた何かに攻撃しようとするスルツと外れて何も見えなくなってしまった。

なんだ？

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。」

起き上がって体勢を整える。一体さっきのはなんだったんだ？

「みんな気をつけてくれ。さっきのなんだったか見えたか？」

「よくは分からなかったんですけど、多分何かの長い舌じゃないかと思うのです。」

「舌？じゃあ近くにモンスターがいるのか？見えないけど。」

話していると、光のサークルの表面にべったり何かの舌が張り付いている。

これはカメレオンか？

長い舌だけが見えているが姿は見えない。この長い舌はカメレオン系の舌に違いない。

本体は砂に擬態して見えないのか？

「ルシエ『破滅の獄炎』でそのあたりを焼き払ってくれ。」

「わかった。『破滅の獄炎』」

目の前を広範囲に焼き払うと一箇所が不自然に燃えている。

どうやら見えないモンスターを捉えて焼き払えたようだが、一箇所しか変化がないのもう1体いるはずだ。

どこにいるのかわからないが前方は焼き払ったので今度は後方を焼き払ってもらうが、仕留めた感がないので、両サイドをスナッチの『ヘッジホッグ』とヒカリンの『ファイアボルト』と俺の『ウォー

『ターボール』でそれぞれ無作為に撃つてみた。
しばらく見ているとヘッジホッグの針がモンスターの形に刺さっている。そしてそのまま消滅したようだ。
結局2体を倒すことができたが姿は目視できないままだった。
多分でかいカメレオンだと思う。

第165話 2日目(後書き)

第166話 10階層満喫？

俺は今10階層で見えない敵と戦っていた。

戦闘は終了したものの、結局なんだったのかはよくわからないが、おそらくカメレオンのようなモンスターが砂に同化していたのだからとしか推測できない。

『鉄壁の乙女』のおかげで俺以外はノーダメージで攻略できたが、やはりモンスターのクセが強い。

魔核を回収してからさらに進んでいく。

マントの中は蒸れと、エアコン機能がせめぎ合っている。

いっそのこと、砂風呂として楽しんだらどうだろうか？

女性陣も合わせて、みんなで砂風呂体験をすると、この無駄に熱いエネルギーを有効活用できるのではないか。

ゲートの脇を造成して砂風呂ランドを建設して入場料を取ったらどうだろう。

きっとこの暑さでダイエット効果効果抜群だと思う。もしかしたらダンジョン産の砂が特殊効果を発揮して、美容や健康に劇的に効果を発揮する可能性も否定できない。

あとはこの膨大な砂を建設業者にでも売れないものだろうか？

まあ運ぶ労力が高くつきそうだが、無限収納があれば行けそうだ。

もちろんそんなものはないが。

掘ったら石油でも出ないかな。

ギルドに企画書あげてみようかなと、暑さのせいかバカな妄想を膨らませながら探索を進めていると

「ご主人様、敵3体です。ご注意ください。」

身構えて待っていると、羽の生えた猿が向かってきたが、手にはそ

れぞれ武器を携えており、1体はボウガンのようなものを身につけている。

「飛び道具を持っているやつをとにかく集中砲火しよう。ベルリアは残りの2体を牽制しておいてくれ。ヒカリン『アイスサークル』が効果があるか試してみてください。」

『アイスサークル』

速攻でヒカリンが『アイスサークル』を唱えてくれたが、地面に氷柱が出現したが空中の猿には影響を与えることができなかった。こうなったらとにかく撃ち落とすしかない。

俺はバルザードの斬撃を飛ばし、あいりさんとミクは魔核銃で、カオリンは『ファイアボルト』を一斉に浴びせかける。

全てが効果があつたわけではないが、かなりの火力で一斉攻撃をかけたお陰で猿は傷だらけになり、羽が傷ついたせいで、地面に向かって激しく落ちてきた。

落ちてきたらただの猿に過ぎない。俺とあいりさんが速攻で詰めて斬り伏せた。

残りは2体だと思つたが1体はベルリアが相手にしているうちにスナッチが『かまいたち』で撃ち落としたようです。消失していた残るは1体。

ベルリアを盾役にして、全員で再び一斉射撃を行うと、問題なく撃ち落とし撃破することができた。

昨日はかなり苦戦してしまつたが、今回はかなりスムーズに倒すことができたのでよかった。

そして俺は大変な事を思いついてしまった。

『アイスサークル』だ。

「ヒカリン『アイスサークル』を1発、そこに向かって発動してく

れないか。」

「え？何もありませんよ。」

「いいから、いいから。お願い。」

「それじゃあいきますよ。『アイスサークル』」

目の前に再び大きな氷柱が現れたので俺は氷柱に向かって飛びついでみた。

おおつ。当たり前だが冷たい。

「みんな、一緒にやってみようぜ。冷たくて気持ちいいよ。」

「えっ？魔法ってそんな使い方大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。なんともないって。グズグズしてたらなくなっちゃうぞ。」

みんな躊躇していたが俺が気持ちよさそうにしているのをみて、全員が氷柱に群がってきた。

「本当なのです。冷たくて気持ちいいです。」

「ああ、この暑さにはたまらないな。」

「ご主人様、素晴らしい思いつきですね。」

「ああ、たまにはいい事思いつくもんだな。」

ただ余計だがとにかくいい感じだ。効果が切れるまであと少しだと思うが、それまでは離さない。みんなでべったりと張り付いているとほどなくして氷柱が消え去った。

「ヒカリン、今後は戦闘後の休憩時間に『アイスサークル』を発動してもらっていいかな。戦闘は、ちょっと省エネでやっていって、こっちに回そう。」

「わかりました。魔法は発想と使い方でのいろんな可能性があるのかもしれないね。」

本当はそんな大層なものではない気がするが、みんな満足そうなのでよかった。

第167話 10階層満喫

俺は今10階層を進んでいる。

俺の思いついた『アイスサークル』作戦が功を奏し、随分と探索ペーイスが上がってきた。

途中カオリンにばかり頼るのも申し訳ないと思い、俺の『ウォータール』も発動してみたが、全くダメだった。

みんなで分かち合うには小さすぎて、一応俺の手のひらは冷たかったが、『アイスサークル』とは比べるまでもなかったのでカオリンに一任する事にした。

その代わりに俺は戦闘を頑張ることにした。

同じようなモンスターが出ることも多かったが、初めてのモンスター、ラクダに乗ったりザードマンの様なモンスターが出現した。

もちろんラクダもモンスターなのだが、こんな風にペアで出現するのは初めてだった。

最初ラクダ？と思い少し気を抜いてしまったが、すぐに後悔した。

ラクダが異常に素早かったのだ。

馬よりはるかに大きく、しかも速い。

上に乗っているリザードマンもどきは槍を持っている。

すれ違いざま、刺突を入れようとしますが、回避する。回避する瞬間に、ラクダの口から唾液が放たれたので、生理的に受け付けず、瞬間移動で避けることが出来たが、地面についたよだれによって砂が煙を上げて溶けている。

「酸か？ラクダやばいな。みんな絶対ラクダのよだれをくらうなよ。とにかく近づいたら逃げる。あと口めがけて集中砲火だ。」

俺以外のメンバーも生理的に嫌だったらしく、大きく頷いて速攻で

連射し始めた。とにかく口めがけて撃ちまくる。

しばらくするとラクダは頭を失い、リザードマンだけが残されたが、リザードマンもときもそのまま槍突き出しながら突進してきた。突進に警戒していたが、スナッチがカウンターで『ヘッジホッグ』を発動して、難なく消滅させる事に成功した。

この日はこのままゲートまで引き返す事となったが、女性陣が家に帰る前にシャワーブースでさっぱりしたいと言いだした。

気持ちはわかるので、日頃の感謝を込めて俺が奢ることにした。

ブースの空気が3箇所しかなかったので、俺はサーバント達と待つ事となったが、やはり他者の視線を感じる。

なんだと言うのだろう。女性陣のシャワー帰りを待っているのか？ 変な風に思われているのか？

俺は至って清廉潔白だぞ。

しばらく待っていると

「スッキリした〜。気持ちよかった。海斗も次行っておいでよ。」

「いや、俺は別に。」

「私たちだけお金出してもらって入るわけにいかないから行ってきて。」

ミクが強く進めてくるので俺もシャワーを浴びる事になった。

シャワーブースは海水浴場にあるような感じなので、ボックスになっており1000円入れると4分間お湯が出るようになっていた。

そこまでの、スペース的な余裕がないためか、そもそも女性が少ないからか男女共通となっており、トラブルを防ぐために入室時に探索者票をスキャンする事で空室の場合解錠する仕組みになっている。早速、1000円を入れてシャワーを開始する。

一応シャンプーとボディソープも完備されているのでしっかり埃を

落として行く。

「あーっ。気持ちいい。さいごー。」

もしかしたら俺の入浴史上最高の瞬間かもしれない。『アイスサークル』も最高だったが、それを遥かに凌駕するこの快感感。

普段それほど入浴好きというわけでもないがこれは病みつきになりそう。これで10000円は安い。

しばらくすると、お湯の勢いが弱くなり最後出なくなった。

「あーっさっぱりした。」

みんなは既に出っていたので合流すると、カオリンが

「海斗さんどうでした？」

と聞いてきたので

「いや、最高だったよ。病みつきになりそうだよ。来週もみんなで利用しようか。」

と上機嫌で答えたが、

「やっぱり海斗さんですね。安全ですね。安心です。」

と返してきた。

「何の話だ？」

「いいいいのです。私たちの期待通りのリアクションだったので、

よかったです。」

「ああそう。それは良かった。」

「いまいち何の話かわからなかったが、まあ特に問題なさそうなのでスルーしておいた。」

「俺の中でとりあえず来週もシャワーは確定だ。」

第168話 神宮寺愛理

私の名前は宮本愛理。

友達からは『あいり』と呼ばれることが多い。

私の家は宮本流という古武術の宗家をやっている。

私は今なぎなたを使っているが、物心ついた時から、剣術、弓術、体術などいろんな事を練習させられて来た。

子供の頃の我が家はそれほど裕福ではなく、昔ながらの家と道場があっただけだった。

子供は私一人だったが、特に継がなくても、そのうちなくなってしまうかなぐらいに思っていた。

だが私が小学生になった瞬間に事態は大きく急変した。

TVアニメ 剣姫千変万化が放送されるとすぐに空前の大ヒットとなり、劇中の登場人物たちが用いる古武術にもスポットが当たった。たまたま、流派の名前が昔の剣豪と同じだった事と、娘の私が登場人物の1人に似ていると噂になり、爆発的に門下生が増えた。

アイドル的な扱いを受けたりもしたが、今だけだろうと子供心に樂觀視していた。

ただ、父は商機を逃さなかった。

TV出演から始まって、「古武術エクササイズ 脂肪を斬ってダンシング」というDVDを発売するとこれが、なぜか大ヒットしてしまった。

お陰で私は、超人気古武術道場の跡取り娘として担ぎ出されてしまい、門下生からもアイドル的な扱いを受ける事となってしまった。もともと、武術が嫌いだったわけではないので、高校生になるまで特に疑問もなくやってきたが、最近になってこのままでいいのかなと思い始めた。

限られた世界で、決められた道を歩むことに不満はなかったが、ち

よつと他の世界ものぞいてみたかった。

普段学校と鍛錬があるので、出来ることは限られていたが、高校3年生の春に父に頼んでダンジョンに行くことを許可してもらった。最初父は反対していたが、武術の実践がモンスター相手に積めるから、絶対に将来の役に立つと説得して納得してもらった。

「お父さん、絶対レベルアップして門下生の人達の憧れとなれるよう頑張ります。」

父は心配して業物のなぎなたとマジックポーチを買ってくれた。自分で買えるものは限られるので本当に助かった。それから、基本ソロで潜るようになった。

「彼女1人？ちよつと危ないんじゃないかな？よかつたら一緒に潜らない？」

しばらくすると女1人と言うのが目立ったのか、結構頻繁に他の探索者から声をかけられるようになった。

「いえ、1人で力試しをしているので結構です。」

基本断るようになっていたが、4階層でソロの壁にぶち当たってしまい、進めなくなってしまうた。

1人では、なかなか進まなくなってしまったので仮パーティを初めて組んだ。

男性2名のグループに入れてもらい、探索は進むようになったが、メンバーの2人がそれぞれにプライベートで誘ってきたので

「探索に集中したいのでゴメンなさい。」

とそれぞれ断ると、ギスギスした空気が流れるようになり、すぐ脱退する運びとなった。

またソロに戻ると、進めなくなったので、仮パーティを組みながらなんとか探索を進めていたが、基本男性メンバーが多く、最初のパーティと同じような展開になって長くは続かなかった。

正直、もう無理かもしれない心が折れそうになりながら、一縷の望みをかけてギルドイベントに参加をした。

最初は、いつものように男性メンバーが多く、誘われたりもしたが、最後の組み合わせで奇跡が起こった。

女性メンバー3人に男性メンバー1名のグループになれた。4人も同年代のグループだったが、女性3人集まるのが初めてだったので自然とテンションは上がっていた。

非常に楽しい時間を過ごすことが出来、別れるのが惜しいと思っていたら、メンバーのミクからパーティのお誘いがあった。

どうやら、女性メンバーは私と同じ悩みを抱えていたらしく、すぐに3人で意気投合した。

当初3人パーティもありかと考えていたが、

「あいりさん。海斗も誘ってみようと思っただけど、どう思いますか？」

海斗は、グループで唯一の男性メンバーだが、今までの探索者と違ってあまり下心がないように感じた。力は、他の日に組んだ探索者に比べると少し落ちるように感じたが、妙に正義感があり、少し鈍いようにも感じたものの、私たち3人には結構紳士的だったので

「まあ、いいんじゃないか。」

と答えた。

その後4人で正式にパーティを組むことになったが、ここから私の

探索者としての活動は劇的に変化した。女性メンバーの3人はとても気が合ったが、1番私に変化を与えてくれたのは海斗だろう。

戦力としてはそこまで期待していなかったが、とにかく女性陣の盾となるべく、積極的に前衛で行動してどんどん踏破していった。何度が命も助けてもらい、シル様とルシエ様と言っかけがえのない存在との出会いもくれた。

海斗は年下で、異性としての魅力はあまり感じないが人間としては非常に尊敬している。

これからもこのパーティメンバーであればもつと先まで行ける気がする。

オープンキャンパスで海斗の彼女らしき女の子を見かけたが、凄く可愛い子だった。こんな可愛い子が彼女なんて、人の魅力は見かけではなく、中身なんだなと改めて海斗を見直してしまった。

K-12のリーダーはその弱さも含めて人間的魅力にあふれている。

第169話 ベルリアとの鍛錬

俺は今1階層に潜っている。

スライム狩りとベルリアとの鍛錬の為だ。

先週は全く歯が立たなかった。今週こそはと意気込んで臨んでい
る。

1番教えて欲しかったのは砂上での減速なしの移動法だったが、開
始5分で諦めた。

これは俺には、いや人間には無理だ。足が砂に取られる前に次の足
を出す。理屈ではわかるが、アニメの忍者以外は実現不可能の技だ
ろう。その場だけなら足の回転を上げることができるが、当然それ
では沈んでしまう。前に進みながら異常な回転率で進む。人間業で
はなかった。開始早々に諦めた。

どう考えても鍛錬やレベルでどうにかなる代物ではない。

まだ飛行グッズを手に入れる可能性の方が高い気がする。

諦めたので、素振りや、足捌きをしばらく練習する。

そしてついにベルリアとの打ち合いとなった。

頭の中ではずっとイメージしてきたが、正直正攻法では勝てる気が
しない。今練習しているのは基本。正統派の剣の基礎だが、これは
今の段階では全く通用するレベルにないので忘れる。

俺が出来る事をやるしかない。

「それじゃあ、ベルリア始めようか。」

声をかけるとすぐにベルリアが打ち込んできたが、流石に初撃はか
わすことができた。

俺は理力の手袋をいつもの右手ではなくひっくり返して左手につけ
て、右手にはバルザードを構えて『ウォーターボール』を唱えて魔

氷剣を発動していた。

右手に構えた魔氷剣で、攻撃を開始するが、当たらない。

「マイロード、振りが甘いですよ。片手で振らずに両手で振るよう
にしてください。」

「大きなお世話だ。」

俺はベルリアの助言を無視して右手一本で攻撃を繰り返すが、当然
避けられて当たらない。

避けられた瞬間にベルリアの足をめがけて理力の手袋の力を解放す
る。

至近距離からなので見えない俺の手はベルリアの足首をガッチリと
掴む事に成功した。

掴んだ瞬間踏み込んでベルリアの体に斬り込む。

やった。

完全に決まったと思った瞬間ベルリアがステップを使わずに上半身
の捻りと移動だけで俺の攻撃をかわしてしまった。

まるで特撮映画のような動きに呆気にとられたが、気をとりなおし
て避けられないよう胴の辺りを横薙ぎにしたが、今度はしゃがんで避
けてしまった。

避けられた瞬間、見えざる手の効果が切れたらしく、ベルリアが踏
み込んで俺にカウンターで胴体に一撃を入れて来た。

「うつつ。痛い。」

ベルリアは斬れないように剣の腹で叩いて来ているが痛い。

「マイロード、なかなか上手い手だとは思いますが、セコイです。

正々堂々とやりましょう。見えない手など邪道ではありませんか？」

「何悪魔が邪道とか言ってるんだよ。正々堂々とやって勝てないから色々考えてやってるんだよ。セコイとか言うな。これでも俺の奥の手なんだぞ。」

「そうでしたか。失礼しました。頭を使って戦うのはいいことです。マイロードの最も適性があるのはアサシンスタイルかもしれませんが、以前私も後ろからやられて致命傷をくらいましたが、やられるまで全く気付くことができませんでしたからね。ただ今のよう正面からやり合う場合には通用しませんからやはり、正攻法を身につけていただきます。」

「俺だって別にアサシン目指してるんじゃないからな。正統派の剣士がいいに決まってるだろ。でもな、とりあえず今はお前に負けなように色々やるからな。」

正直、ベルリアの技量に感嘆しているが、これでもサーバントの3人の中では1番手が届きそうな存在なのであっさり引くわけにはいかない。

サーバントの3人は本当に頼りにしている。家族であるシルとルシエはもちろん、付き合いは短いがベルリアにもかなりの愛着を持っている。

しかし、サーバントにおんぶに抱っこは俺の望んでいる探索スタイルではない。

3人と並んでダンジョンを踏破していきたい。

なのでまずはベルリアに並びかけたいと考えている。

ベルリアに並ぶことができて初めて、主人としてスタート出来るよくな気が勝手にしている。

今は全く勝てる気がしないが、いずれはシルやルシエにも並びたい。

第170話 噂

俺は今学校に来ている。

ベルリアとの鍛錬を日々重ねているが、いまだに一撃も入れられないまま、金曜日を迎えた。

真司と隼人に進捗状況を聞いてみる。

「どうだ？あの後ダンジョンの攻略は進んでるのか？うまくいってるか？」

「ああ、アドバイスもらってから自分たちでも試行錯誤して、結構順調にいってるよ。」

「それは良かった。俺もようやく10階層まで行ったんだ。」

「おおつ。やっぱりすごいな。そういえば10階層といえば噂聞いているか？」

「いや、知らないけど何の話だ？」

「それが最近凄い奴が10階層に現れたってギルドとか周りの探索者が噂してたんだよ。」

「へ〜つ。どんな奴なんだ？」

「何か最近になって彗星のように現れた超絶リア充野郎らしいんだ。」

「

「超絶リア充？俺には全く無縁の話だな。」

「それが噂によると、かぶれたマントと変なヘルメットかぶってるらしいんだ。」

「なんだそれ。そんなので超絶リア充なのか？」

「なんか噂によると顔は至って普通らしいんだけどそのパーティ構成がすごいらしい。」

「凄いつてどう凄いだよ。」

「まず、アイドル顔負けの美少女が3人いるらしい。それと15歳未満は入れないはずだから多分サーバントじゃ無いかって言うたけど、超美幼女が2名、それとなぜか小さい男の子までいたらしい。ちよつとぶっ飛びすぎてるから、半分以上は噂が噂をよんで誇張されてるのかとは思っけどな。」

「.....」

「どうした海斗、お前見たことないか？」

「.....」

「本当にどうしたんだよ。急に黙り込んで。」

俺か？その超絶リア充って俺の事か？最近現れた、マントと変なヘルメット。顔は普通。美少女3人に超美幼女が2名、小さな男の子.....

俺のパーティの構成にそっくり。いやそのまんまじゃないか。そういえば10階層が上がってから視線は感じていた。感じていたが、ミク達でも見ているんだと思っていたが、まさかの俺だったのか？

しかし超絶リア充ってなんだ？全く事実無根だぞ？俺は一切モテていないぞ！

もしかして知らない人が見たら俺のパーティは超絶リア充パーティに見えるのか？正直考えたこともなかった。シル達を見られるのが嫌で今まで人目を避けている節はあったがギルドに報告したからもういいかと思つて気が緩んでいた部分もある。

しかし、彗星の如く現れた超絶リア充。一体誰のことだ。俺は違つぞ。断じてそうではない。そうだといいが残念ながら違つ。

「海斗、なんか顔が青いぞ大丈夫か？」

「あ、ああ、まあ、だいじょ、うぶ、だ。」

「大丈夫に見えないぞ。」

どうする。どうすればいいんだ。こんな時はどうすればいい。

「おい海斗どうしたんだよ。」

「真司、隼人、俺たち友達だよな。」

「おお、いきなりどうした。友達だよ。」 「ああ、友達だよな。」

「そうか俺たち親友だよな。」

「ああ、まあそうだな。」 「あらたまつて言われると照れくさい

けど、まあな。」

「どうすればいいと思うっ？」

「はい？何が？」

「いやだからどうすればいいと思うっ？」

「一体なんの話だ？」

「俺だと思っ。」

「いや、だから何が？」

「さっきの話だよ。」

「どの話っ？」

「さっきの超絶リア充だよ。」

「はい？何を言ってるのか意味がよくわからないんだけど、なんの話だよ？」

「いやだから俺だと思っ。」

「ごめん海斗、お前が何を言ってるのかよくわからない。」

「いやだから俺なんだって。」

「うっんやっぱり何を言ってるのかわからない。わかるか隼人？」

「いや俺も何を言っているのか全くわからない。そもそもなんの話をしているのかわからないな。」

「いやだから、さっき彗星の如く現れた超絶リア充の話をしただろ。」

「ああ、したけどそれがどうしたんだよ。」

「だからそれ俺だと思っ。」

第171話 黒い彗星

俺は今教室で真剣に話している。

「すまん海斗、やっぱりなんの話か全くわからない。」

「そうか。もう一回詳しくその超絶リア充の事を聞かせてくれよ。」

「ああ、なんか聞いたところによるとまだ目撃されたのは数回らしいんだけどな、10階層まで行くと初心者卒業だから数が減るだろう。だから結構目立っているとすぐわかるらしいんだけどな。なんか突然現れたらしいけど、最初に10階層で目撃された時はソロだったらしい。変なヘルメットと、かぶれたマントで目立ちまくっていたらしいんだ。その時は全くモテそうな感じじゃなかったらしいんだが、そのあとが衝撃的で、次目撃された時は美少女と美幼女達に囲まれていたらしい。リアルダンジョンでリア充ってそんなにないから、異常に目立っているらしい。既に2つ名も付いているみたいで、超絶リア充 『黒い彗星』」

「あのさ、そ、その『黒い彗星』ってなんなのかな？」

「なんでも彗星の如く現れたのと変なヘルメットが黒色で特徴的だったかららしいけど。」

「ああ、そうなんだ・・・」

「ただな、そのヘルメットが品薄らしいんだよ。俺も一応気になっ
て見に行ってみただけで黒だけなかった。やっぱり黒ヘルメットが

モテるのかな。」

「なっ・・・お前も見に行ったのか。そ、そんな事に・・・」

「俺が知ってるのはこのぐらいだな。」

「やっぱり俺だ。俺しかない。」

「いや、だからなんの話かわからないだって。」

「よく聞いてくれ。そして俺を助けてくれ。頼むよ。その超絶リア充『黒い彗星』だけどな、まず間違いなく俺の事だと思う。装備も全く一緒だし、パーティメンバーも間違いはない。だから俺の事なんだよ。」

「え？だってお前のパーティメンバーって4人だろ？たしかに女の子は、可愛かったけど。」

「話せば長いんだけど、ポイントだけ話すな。確かに人間のメンバーは4人だ。俺と女の子3人だ。女の子も美少女3人で間違い無いと思う。それとサーバントの3人で美少女が2人と男の子が1人それにサーバントのカーバンクルが1匹追加だ。」

「いやいや。ちょっと待ってくれ。美少女3人はわかったがサーバント4体って何？この前組んだ時そんなのいなかったじゃ無いか。」

「すまん隠してた。ちょっと照れくさいのと、変な目で見られそうで。」

「そうなのか？ちなみにどれが海斗のサーバントなんだよ。」

「えつとな、美少女2名と男の子1名だ。」

「おいおい、ほとんど海斗のサーバントじゃ無いか。海斗の家って普通の家じゃなかったっけ。」

「ああ至って普通、自信を持って中流家庭だ。」

「じゃあサーバント3人なんかどうやって手に入れたんだよ。」

「いやたまたまドロップして。」

「おいおい、たまたまって、たまたまで3人？考えられないな。お前運使い果たして死ぬんじゃないだろうな。」

「不吉な事を言うな。既に何度か危なかったんだよ。」

「じゃあ、本当に『黒い彗星』なのか？」

「いや、その呼び方は勘弁してくれ。ちょっときつい。けど、まず間違いなく俺です。」

「は。海斗が『黒い彗星』なのか。」

「いやだからな。その呼び方勘弁してくれ。」

「じゃあ彗星って呼ぼうか？」

「怒るぞー！」

「じゃあブラックコメットか。」

「真面目な話だ。どうすればいいと思う?」

「どうするって言われてもな。もう完全にはれてるしな。どうしようもないんじゃないか?」

「そのうち、海斗が『黒い彗星』って認識されるだろうから、ちょっとした有名人になれていいんじゃないか?」

「本気で言ってるのか隼人。超絶リア充『黒い彗星』だぞ。この俺がだぞ。」

「じゃあヘルメットの色を変えてみるか?赤とかに。」

「それは絶対にダメなやつだろ。訴えられるぞ。」

「うん。今更装備変えてもな。メンバーがばれちゃってるから難しいんじゃないか。」

「そうだよな。真司どうすればいいと思う?」

「いつそのことマスクでもかぶるか?」

「さらにやばさが増して無いかそれ?」

「まあ確かにな。ギルドに相談してみたらどうだ。」

「まあ、それがいいかな。」

「しかし海斗が超絶リア充『黒い彗星』だったとはな。噂聞いた時は半分嘘なんかだと思っただし、やっぱり羨ましいとも思っただけ、実際の当事者目の前にするとなんか大変そうだな。」

「ああ、参ったよ。俺の何処に超絶リア充要素があるって言うんだ。事実無根、濡れ衣じゃないか。」

「いや、まあお前の事よく知ってる俺らはわかっているけど側から見るとな。しょうがないんじゃないか。」

大丈夫だとは思っけど葛城さんには知られない方がいいと思うぞ。

『黒い彗星』の話は。」

「さすがに俺でもそれはまずいのがわかる。大丈夫だ。絶対無いから。」

俺は放課後ギルドに向かうことにした。

第171話 黒い彗星（後書き）

第172話 ギルドの噂

俺は今ギルドに来ている。

日番谷さんのところに行ってみるが平日なので空いていた。

「こんにちは。ちょっといいですか？」

「はいなんでしょうか？魔核の買取でしょうか？」

「あのですね。いくつか聞きたいことがあります。」

「はい。私にわかることであれば。」

「実は、最近噂になっている『黒い彗星』って知ってますか？」

「はい。超絶リア充『黒い彗星』ですよ。先週ぐらいから急に噂が広まったようなのですが、私も把握はしております。」

「ああ、やっぱり日番谷さんも知ってるんですね。」

「まあ、普段あまり変化の無いダンジョンで突然現れたホットな話題ですからね。私の元にも噂が流れてきております。」

「どんな風に聞いてますか？」

「なにやら不思議な装備の黒いヘルメットにかぶれたマント、異常に不細工なのに美女ばかり7人もはべらかして、幼女まで何人も引き連れているそうです。女の敵のような存在と聞いております。」

「はい!？」

おいおい、なんか話が変わつてると言うかデカくなつてる。美女ばかり7人? 幼女も何人も? しかも異常に不細工? いったいななんだ。

噂つて怖い・・・ あつているのが装備だけじゃないか。

「あのですね、日番谷さん。ちょっと相談があるんですけどいいですか。」

「はいなんでしょうか?」

「あのですね、多分その『黒い彗星』俺です。」

「はい? なにをおっしゃっているのか意味がわからないのですが。」

「あの、超絶リア充『黒い彗星』俺です。」

「いえ、高木様おっしゃっている意味がわからないのですが。」

「だからその噂の『黒い彗星』俺のことです。」

「高木様。からかうのはやめていただけますか? 高木様のパーティーは女性は3人だけですよね。しかも高木様は異常に不細工ではなく至つて普通では無いですか。それに何人も幼女などどこにもいないでは無いですか。」

「あのですね、その噂なんですけど俺の聞いたのより大きくなっています。俺が聞いたのはヘルメットとマント、美少女3人に美幼女が

2人と男の子のパーティです。」

「え？でもそれが高木様だと言われるのですか？」

「そうです。最近10階層に潜り始めたんですけど、確かに周りの視線を感じてはいたんです。でも俺に対してだとは思っていなかったんですよね。新しい装備とか他のメンバーに対してかなと思ってたんですよ。それが今日友達から『黒い彗星』の話しを聞いてびっくりしてしまって、どうしていいかわからずここに来たんです。」

「高木様、美少女と男の子というのはもしかして。」

「はい。この前見せたサーバントです。レベルが初期化されたのと同時に幼児化してまして。俺どんな風に思われてるんですかね。やっぱり感じですかね。」

「噂を聞く限り、羨ましいというのが大多数なのでは無いでしょうか？異常に不細工というのもやっぱりかみかと思えます。」

「あの、幼女趣味とか変態とかってというのは大丈夫ですかね。」

「今のところそのようなニュアンスの話は聞いておりません。あくまでも超美少女に対して羨ましいという感じでは無いでしょうか。」

「そうですか。少し安心しました。」

「高木様。失礼ですがそのような趣味がおありなのですか？」

「あるわけないじゃ無いですか。俺はノーマルです。どノーマル。同級生にしか興味はないんです。」

「ふふつ。冗談です。あまりに真剣なのでからかってみたくなくなっただけです。申し訳ありません。」

「冗談になつてませんから。」

「すみませんでした。」

「それはそうと、俺どうすればいいですかね。リア充でもないのに、そう言われるのに抵抗があります。」

「いえ、高木様は私からみても普通にリア充だと思いますが。」

「なっ!?! 日番谷さん、リア充って女性にモテている人のことですよね。」

「まあ一般的にはそうでしょうね。」

「俺、全くモテてないんですけど。多分普通よりもモテてないです。彼女もいたことないですし。」

「高木様、お言葉ですが、パーティメンバーは皆様、可愛い方ばかりではないですか。」

「いやいや、パーティメンバーが可愛いのは俺がリア充だからじゃないですよ。しかも、彼女達とも一切、男女の付き合いはないんですよ。パーティメンバーがたまたま可愛い女の子達だっただけです。」

「ああ。そんな感じなのです。高木様よく、円滑にパーティを組

まれていますね。」

これは褒められているのか？

「なんとかならないですかね？」

「そうですね。マスクとかかぶってみてはいかがでしょう。」

「本気で言ってますか？余計怪しくなるだけじゃないですか。」

「申し訳ございません。冗談です。ただ噂も75日と言いますのでその内収まるのではないでしょう。ギルドから個人情報漏れることもありませんで、高木様個人の特定は難しいと思われ。聞き直つて有名人になつたぐらいの気持ちでいればいいのではないでしょう。」

「そんな気持ちの余裕はないんですけど、何か対策はないですかね。」

「ギルドには様々な噂が入ってきますのでそれに対して個別に対応することは難しいのが現状です。ただ、他の方達が羨むようなパーテイメンバーなものですから自信を持って臨めばよろしいではないですか。私も一度サーバント達を拝見してみたいものです。」

「そんなものですかね。」

結局ギルドでも根本的な解決には至らなかつたが、日番谷さんに言われて少し気が楽になった気がする。1番の懸念だった変態扱いされるどころか、今の所羨ましがられていると聞いて、ほっとした。今後も気を抜かずにこれ以上目立たないように75日を過ごしてい

きたい。

第172話 ギルドの噂（後書き）

第173話 新たな自分

俺は今10階層に来ている。

土曜日になったので再び10階層に臨んでいる。

やはり10階層のゲートをくぐった直ぐ後から視線を感じる。

今までの俺であればきつと逃げ出していたかもしれない。しかし日番谷さんと話して俺は吹っ切れた。

75日の我慢だ。しかも週末しか10階層には来ないので実質20日程度だ。なんてことはない。個人情報漏れない限り身バレすることもない。しかもサーバントも軽蔑の対象ではなく憧れの対象だと言っていた。もう俺に怖いものは何もない。

「海斗、なんか先週と表情が違う気がするんだけど。スッキリしたと言っかちよつと違う感じがするんだけど。それにあのヘルメットはどうしたの？ 気に入ってたじゃない。」

「ああ、俺はちよつと生まれ変わったんだ。彗星のようにな。」

「何それ。意味がわからないんだけど。」

「まあ、気にしないでよ。俺の問題だから。」

「それはそうと、今日は頑張って探索進めようね。」

「ああ、みんなと一緒に頑張ろうな。」

こここのところ、探索があまり進んでいなかったなのでこの土日で一気に距離を稼いでおきたい。

そう思いながら進んでいくとモンスターが現れた。

「ご主人様、モンスターです。3体いるようです。」

どこだ？また地下か？

警戒して進んでいくと今度は羽の生えた猿よりも一回り大きい、羽の生えたゴリラが現れた。

正直ちよつと違和感がある。とてもじゃないが天使の先祖には見えない。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。みんな遠距離攻撃で迎え撃つぞ。ミクは『幻視の舞』を頼む。」

「おい、たまには私も一緒にやらせろよ。最近出番が少なくて退屈すぎる。」

「ああ、そうか。それじゃあ、一体『破滅の獄炎』で頼むよ。」

「1体だけ？まあいいけど。」

たしかに言われてみると、シルに比べても最近ルシエの出番が少なかった気がする。燃費が悪いし、俺たちの訓練にならないから控えてもらっていたが、これからは少しずつ組み入れていこうかな。

空飛ぶゴリラが近付いてきたので全員で迎撃態勢に入る。

「破滅の獄炎！！」

今までストレスがたまっていたのかルシエが速攻でスキルをぶつ放した。

気合いが違うのか1体だと言っておいたのに2体いつぺんに消失し

てしまった。

「ルシエ、1体って言っただろ。」

「1発で2体消えちゃったんだからしょうがないだろ。わざとじゃないから私は悪くないぞ。」

まあたしかにそうだけど。

「幻視の舞」

今度はミクが残った1体に向かってスキルを発動したが、発動後直ぐに効果が現れ、空飛ぶゴリラは墜落してただのゴリラと化していた。

そこからは残りのメンバーの一斉射撃を行い、あっという間に消失してしまった。

「お腹が空きました。」 「腹減った。魔核くれよ。」

久しぶりにこのセリフも聞いた気がするが、魔核を渡してやると2人とも満足そうだ。

「今回は全くお役に立つことができませんでした。今度は私にも出番をお願いします。」

ベルリアが悔しそうにアピールしてくるが、遠距離だとかいつの出番はないんだからしょうがない。

この後は前回死にかけた蟻地獄が出現したが、この前のお仕置きが功を奏したのかルシエもトラブルなく避けることが出来、遠距離から全員で対処できたので無傷で撃退することが出来た。

別に特別活躍したわけでもないのにルシエが得意そうな顔をしてこちらをしきりに見てくるのでちょっと笑ってしまいそうになったが

「ルシエ、今回は良かったんじゃないか。」

と言うと上機嫌になったのでまあ良しとしよう。

「また今回も出番がありませんでした。今度同じモンスターが出たら飛び込んで行って仕留めてやります。」

「ベルリア、無理しなくていいぞ。遠距離の敵は俺らに任せろって。近接の敵はお前が要になってくるんだからな。」

「マイロード、お優しいお言葉ありがとうございます。次こそ活躍してみせます。」

まあ、みんなやる気があるのはいいことだと思うことにした。

第174話 10階層突破

俺は今10階層を探索している。

先週の土日も10階層に潜っていたが、サーバントの力を借りることにしたのと、カオリンの『アイスサークル』による冷却効果のおかげで、あれだけ苦戦していた10階層の探索がどんどん進んでいる。

ただ、平地に比べると砂に足を取られるので体力的な消耗度は高い。土曜日までのマッピング具合で、今日中には10階層を突破できるかもしれないところまで来ている。

「ご主人様、モンスターです。4体来ます。注意をお願いします。」

警戒していると前方から忍者トカゲが2匹向かってきているが残り2体が見当たらない。

カメレオン型か、土の中からの攻撃だろう。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエ、トカゲを1体任せた。俺とカオリンでもう1体を、残りの2体が出てきたら、残りのメンバーで頼む。」

ルシエは最近速攻で倒してしまうので残り1体に集中する。

素早く動くトカゲに向かってカオリンが『アイスサークル』を発動して氷漬けにする。氷漬けのトカゲに向かってバルザードの斬撃を2回飛ばして撃破する。

残りの2体は、カメレオンとミミズだったようで、光のサークルによって弾かれたようで、現れたモンスターに対して、スナッチが『ヘッジホッグ』、ミクが魔核銃、あいりさんがなぎなたでの直接攻

撃をかけて撃破する事に成功していた。今回もベルリアの出番はあまりなかったようだ。

「カオリン、『アイスサークル』をお願い。」

出現した氷の柱にみんなで張り付いて涼を取るが、やっぱり砂漠工リアはこれに限る。

おかげでクールダウンしてみんなで再度探索に臨む。

10階層のモンスターもそこまで種類が多くはないのでかなり手慣れてきて、どんどん倒して行く。

ただ、遠距離攻撃のないベルリアの出番が思ったよりも少ないせいで、本人はアピールの場を奪われたような妙なストレスがあるらしく、いつもよりも元気が無いように見えたが今だけの事かもしれない。

「みんな、おそらくなんだけど後少して11階層への階段まで辿り着ける気がするんだけど、このまま進んじゃう？どうしようか。」

「マイロード、もちろん11階層に進むべきだと思います。絶対にそうすべきです。」

「他のみんなはどうかな。」

「ちょっと早い気もするけどいいんじゃない。」

「そうですね、進んでもいいと思うのです。」

「任せるよ。」

まあ、ベルリアがやたらと積極的なのを除いても概ね進む事に賛成

のようなので行ってしまう事に決めた。
そこから30分程度で下層への階段を発見した。

「ご主人様ご注意を。モンスターの気配があります。」

階段を見つけてテンションが上がった瞬間にシルが冷静な声で告げてきた。

周囲を見渡してみるが全く見つからない。

階段を見つけて気を抜いたところを襲うつもりなのかもしれないので油断ならない。

警戒してしばらく待機してみたが何も現れないので向かってみるしかなさそうだ。

「みんな、多分待ち構えていると思うけど、待っても来なさそうだから思い切って行ってみようか。シル『鉄壁の乙女』を頼む。全員俺から離れないようについてきてくれ。」

俺は『鉄壁の乙女』を発動したシルを抱えて階段までゆっくりと近付いて行くが、階段の手前10mぐらいの位置まで来た瞬間、光のサークルに向かって何らかの攻撃が加わったのが認識出来た。それと同時にすぐ手前にアリ地獄とミミズのモンスターが2体出現した。見えない攻撃はカメレオン型だと思われるので10階層の隠密モンスターが勢揃いした感じた。

ただ『鉄壁の乙女』を展開しておいたおかげでみんな無事なので余裕を持って対応できる。

「ベルリア、ミミズ型を頼む。1体は俺が受け持つ。ルシエはアリ地獄を、残りのみんなでカメレオン型を仕留める為に一齐に射撃してください。」

俺は声をかけると同時にシルをその場に立たせてからミミズ型のモンスターに向かって駆け出した。

これを倒すと11階層だと思つと自然とテンションが上がってしまい、遠距離攻撃だけでもよかつたのに、自分からモンスターに近付いていつてしまった。

もう1体はベルリアが相手をしてくれているので自分の相手にだけ集中をする。

ミミズ型の動きを見て、攻撃を予測して避ける。避けた瞬間にバルザードを横腹に突き刺して破裂のイメージをのせる。

「ボフウン」

炸裂音と共にミミズ型の胴体を分断して消滅させる事ができた。

調子に乗つて痛い目を見ることもあるが、砂地に慣れてきた事もあり今回は何事も無く倒すことができた。

ベルリアもミミズ型を滅多斬りにして消滅させていた。ルシエも戦闘を終了しているので残っているのは、カメレオン型のみだ。

俺も魔核銃を手に参戦してみるが、敵の居場所がよくわからないのでシルに確認するとまだ居るとの事なので、攻撃を継続している。

「どこかに隠れているんだと思うけど、このままだと埒があかないな。ベルリア場所の特定が出来ないか？」

「わかりました。ちょっと集中させてください。」

そう言つてベルリアは剣を鞘に戻して神経を集中させ始めた。

「はつきりとはわかりませんが、彼方の端の方から生き物の気配らしきを感じる気がします。」

ベルリアの指差す方向にみんなで一斉に攻撃を再開すると、本当にモンスターが隠れていたようで、攻撃がモンスターの形に命中しているので、追撃をかけ無事に消滅させることができた。

「無事倒すことが出来たようだから、ちょっとだけ11階層に降りてみようか。」

俺達は遂に11階層へと踏み入れた。

第174話 10階層突破(後書き)

第175話 イベントの季節

俺は今人生最大とも言えるイベントに臨もうとしている。

ダンジョンでは夏を超えた灼熱とも言える環境で戦っていたが、外の季節は時間の経過と共に移り変わっており、もう冬を迎えていた。冬といえば、あれしかない。今までの人生で全くの無関係だったイベント。クリスマス。

今までは誘うことすら思いつかなかったが、今年は違う。春香を誘ってみるつもりだ。

正直2年生になってからの春香との距離は確実に縮まっていると思う。

今でこそ春香と呼んでいるが、春先には葛城さんだった。

告白こそ俺が痛恨の失敗をしてしまったが、何度か映画にも一緒に行っている。

告白に匹敵する大仕事ではあるが、最近失敗から立ち直りメンタルゲージが完全復活したのでいける。

春香をクリスマス誘ってみようと思う。

しかし、クリスマスに誘うのは分かっているが、付き合っていない男はクリスマスに何をして過ごせばいいのだろうか。

よく、付き合っている男女のクリスマスデートスポットを紹介するような雑誌は見かける。

しかし、付き合っていない男女のクリスマスデートの本は見かけたことがない。

どうしたものだろうか。思い切って告白して付き合えれば何の問題もないのかもしれないが、クリスマスに振られる自分と、その場の気まずい空気を想像すると、クリスマスに誘うのが精一杯で、その先の事は難しい。

とにかく誘ってみようと思う。

どうやって誘えばいいだろう。前のように屋上に呼び出すか？しかしあれは失敗してしまった。やっぱり軽いノリで買物に誘った時のようにいってみようか。
放課後になるのを見計らって、春香を追いかける。

「春香、ちょっといいかな。」

「うん。どうしたの？何かあった？」

軽いノリで臨むつもりだったが、面と向かると瞬間的に緊張感がMAXとなり振り切れてしまった。

「あ、ああ、あの。あれ、あれだよ。今日は寒いよね。」

「うん。だいぶん寒くなってきたね。お互いに風邪引かないようにしないといけないね。」

「ああ、ほんと、そうだね。風邪引いたら大変だからね。気をつけよう。」

「うん。そうだね。」

「あの、冬って忙しかったりするかな。」

「毎年年末とかちょっとバタバタしちゃうよね。」

「ああ、年末は忙しいよね。あの、そのちょっと前はどっしってるかな。」

「ちょっと前って？」

「あ、あのですね。ク、クリスマスはどうしてるのかなと思って。」
言った、言ってやった。

「クリスマスは、毎年友達とホームパーティーやることが多いけど。」

「ああ、そうなんだ・・・」

友達とホームパーティー。女の子らしいけど、撃沈してしまった。終わった・・・

「もし良かったら、海斗も来る？」

「い、いや、友達の中に俺が入ると変な感じになりそうだから遠慮します。」

誘ってもらったのは嬉しいが、女友達のパーティーに俺が上り込むわけにもいかない。行ってもどうしようもない。

「じゃあ。またね。」

俺は気取られないように平静を装ってその場を立ち去ろうとするが

「海斗、夕方からなら空いてるんだけど。」

え？なんだって。夕方からなら空いてる！？

「ホームパーティーは終わってるのかな？」

「大体お昼から始まって夕方には終わるから。」

「そうか。そうなんだ。そうか。そ、それじゃあ夕方から、い、一緒に、どこか行きませんか？」

「うん。いいよ。」

春香が寒さを吹き飛ばす笑顔で答えてくれた。

俺は、今この時を持って死んでしまっても悔いはない。むしろこのタイミングで死んでしまったら、俺の人生は最高だったと断言できる。

「それじゃあ、行く場所考えておくから、予定空けといてよ。晩御飯も一緒に食べてもいいですか？」

「もちろんいいよ。でもクリスマスは一杯になるお店が多いから予約しておいたほうがいいかもね。」

「ああ、もちろんだよ。」

考えても見なかった。クリスマスは予約しないと一杯なのか。言われないと当日飛び込みで行く気満々だった。世の中、そんなにクリスマスに外食する人が多いのか。今まで別世界の出来事だったので、要領を得ないが、春香に助言してもらって助かった。

とにかくどこに行くか雑誌を買って研究するしかない。

その前に今年最後のテストを頑張る必要があるが、今回はやる気がとてつもなくアップしたのでいけそうだ。

第176話 クリスマス

俺は今期末テストを受けている。

もちろん全問できたわけではないが、今までで1番の出来かもしれない。これさえ乗り切れば、待望のクリスマスが待っていると思えばテストなど何の障壁にもなり得ない。
無事に全教科のテストが終了した。

「海斗、テストどうだった？今回の結構難しくなかったか？」

「いや、俺は今までで1番できたかもしれない。」

「山でも当たったか？そんなテストで自信のある海斗を見た事ないぞ。」

「今回は、やる気と集中力が違ったんだ。」

「そんなもんか。そういえば冬休みどうするんだよ。どっか行くのか？」

「今のところ特に予定はないな。」

「クリスマスどうするんだよ。寂しく3人で遊びに行くか。」

「悪い。俺はちょっと予定があるんだ。」

「もしかして葛城さんか。ついに誘ったのか。」

「ああ、まあそうだけど。」

「そうか、冬だけどついに海斗にも春がきたのか。告白してOKもらったんだな。」

「いや違つつて。クリスマス一緒に遊ぶ約束しただけだ。」

「おいおい、そんな事あるのか？普通クリスマスと一緒に過ごすイコール付き合ってるだろ。」

「世の中そんな甘いもんじゃないよ。俺はとりあえずクリスマス一緒に遊べるだけで十分だよ。」

「あいな、1つアドバイスするとな、もう告白してもいいと思うぞ。」

「いや、彼女が17年いないお前らにアドバイスもらってもな。俺とほとんど変わらないだろ。」

「うっ。痛いところついてくるな。それはそうだけどな、まあ楽しんでくれよ。俺らは2人で寂しくカラオケでも行ってくる。クリスマスソングメドレーを2人で熱唱予定だ。」

第3者は好きな事言えるもんだ。そんな簡単に事が運ぶなら苦労しない。

それから、指折りクリスマスまでの日を心待ちにしていたものの、先にテストが全部返ってきたが、やはりいつもより点数が高い。いつも平均ぐらいいいたが、今回は上位グループの下の方ぐらいいは食い込んだ気がする。春香はもうちょっと上にいる。さすがは春香だ。才色兼備。性格もいいので言うことないな。

学校が修了式を迎えたので遂に明日はクリスマススイブだ。そういえばクリスマススイブはよくデートをするのを聞くがクリスマス当日って何かするのか？2日連続でデートするものなのか？世の中の人ははどうしているのだろうか。春香もクリスマススイブには誘ったけど、再度クリスマスも誘った方がいいのだろうか。

「春香、じゃあ明日ね。」

「うん。駅前に4時30分に集合ね。」

当日になり朝から落ち着かない。冬用のおしゃれ着など持ち合わせていないのだが、持つてる中では1番小綺麗に見える服を着込んでそわそわしている。朝の10時ごろから時計とにらめっこしているが、一向に時間が過ぎない。時計が壊れているのか、電池が弱っている時間経過が遅いのか？不安になってスマホの時間も確認してみるが、特に問題は無いようだ。俺の体内時計がおかしくなっているらしく、時間が経たない。

本当に長い5時間をなんとかやり過ごし、ようやく15時になったのでかなり早いが我慢できずに駅に向かうことにした。

15時20分に到着したのであと1時間以上ある。かなり寒いが気にしない。周りでは恋人らしい人達がちらほら手繋ぎデートをしている。クリスマススイブというだけあっていつもより数が多いような気がする。

去年までの俺なら、目にする光景に呪いをかけようとしていただろうと思う。というよりも目に触れないようダンジョンに朝一から籠っていただろう。

しかし今年は違う。春香が来てくれる。

スマホで時間を見ると16時20分になったのでもうすこしだと思ったら、春香からメールが届いた。

遅れるのかな？と思いメールを確認してみた。

第177話 初詣

俺は今春香からのメールを読んでいる。

「海斗ごめんなさい。今病院です。昨日から熱が出てしまって、何とか今日中に下がらないかと病院にきてみましたが、今結果が出てインフルエンザでした。本当にごめんなさい。風邪なら無理してでも行けたけど、インフルエンザだとうつしてしまっているので行けません。せつかく誘ってくれたのに本当にごめんなさい。また連絡します。」

おおっ。インフルエンザ・・・

春香は大丈夫かな。春香を心配する気持ちと、クリスマススイブの予定がキャンセルになったショックが混在してガクツと力が抜けてしまった。

経験した事の無い脱力感を感じながらどうしようもないので、ひとり家まで帰ることにした。

クリスマススイブの夜は本当にへこんだ。自分の間の悪さを嘆き、もしかしたら春香が来たくなくて仮病かもしれないとさえ考えてしまった。それでもやっぱり心配なので春香に1日1回はメールで体調を聞いたりしていた。病人に何度もメールするのも悪いと思って一応控えていた。

クリスマススイブにインフルエンザになったので、当然クリスマスもダメだった。

このまま今年も終わりだなと漠然と考えていると、春香から

「心配かけてごめんね。ようやく熱も下がりました。よかったら初詣に一緒に行きませんか？」

おおつ。春香からのメール、しかも初詣のお誘いだ。嫌われたわけじゃなかったらしい。本当によかった。もちろん病気も治ってよかった。

「はい。大丈夫です。お願いします。」

とすぐに返信しておいた。

1月1日になり、待ち合わせ場所に行くと既に春香が来ていたが何と着物姿だった。

春香の着物姿を見るのは多分初めてだと思いが衝撃的だった。

夏の清楚なワンピースも素晴らしかったが、着物姿は非日常性が合わさって別格に素晴らしい。

「春香おはよう。あけましておめでとございます。今年もよろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく願いたします。クリスマス本当にごめんですね。直前まで何とか行けないかと思ってたら連絡が遅くなってしまつて。」

「ああ、大丈夫、大丈夫。全く問題ないよ。それよりインフルエンザって大変だったね。」

「ここ何年もかかってなかったから、自分ではただの風邪だと思つてただんだけどね。」

まあ、クリスマスは残念だったけど、こうして初詣に春香と行けるなんて夢のようだ。

「それはそうと、着物姿初めてみた気がする。」

「どうかな。この振袖変じゃ無いかな。」

「いやいや、すごくいいと思います。いいです。」

「ありがとう。よかった。」

一緒にいると、むしろ普通の格好で来てしまった俺が浮いてしまいそうだが、紋付袴など持っているはずもないのでこればかりは仕方がない。

歩いて行ける範囲では1番大きな神社に向かって歩き始めるが、ちらほら初詣に向かっていると思われる人達も見かける。

家族連れや、恋人と思しき人達も見かける。

俺も春香と歩いていると恋人に見えるだろうか？それとただの友達にしか見えないだろうか？

まあ恋人に見えたところで実際には違うのでちょっと虚しい。

いつもと違う着物姿の春香と横に並んで歩いているだけでドキドキして意識してしまう。

近過ぎず、遠過ぎずの距離感を意識しながら歩いて行く。

30分ほど歩くと目的の神社に到着したが、人で溢れている。

「春香、すごい人だな。俺いつもは混んでる時間を避けてたから、こんなに人がいるのは初めてだよ。」

「でも、いっぱい人がいると、初詣に来たっていう感じがして、お正月が来たっていう気になるよね。」

「そうかもしれないな、今までずっと寝正月だったから朝から初詣

つてというのがなんか新鮮だな。」

人混みの中を進んでいくと神社の境内についたので賽銭を投げ込むことにした。普段は5円か10円なのだが春香が横にいるので見栄を張って100円を投げ入れてしまった。

今年こそ春香と付き合えますようにとしっかりとお願いしておいたが、横を見ると春香がまだお参り中だったので終わるのを待ってから

「春香、結構長くお願いしてたみただけど何をお願いしたのかな？」

「まだ1年あるけど海斗と王華学院に行けますようになってお願いしたんだ。推薦だと今年受験だしね。」

「あつ。俺忘れてた。もう一度お願いしてこようかな。」

推薦だと今年テストか。煩惱が勝ってすっかり忘れてしまっていた。今年こそもう一度春香に告白をしたいが、よく考えるとダメだった場合、同じ大学に行けても非常に気まずい。なかなか悩ましい選択だと思つ。

まだ時間はあるのでしっかりと判断していきたい。

第178話 おみくじ

俺は今初詣にきている。

お詣りを済ませてお願いもしっかりしておいた。

「海斗、せっかくだからおみくじを一緒に引いてみようよ。」

「うん、いいよ。」

おみくじか、小学生の時以来かもしれない。昔は単純にくじとして楽しむ為に引いていた気がする。

自動販売機っぽいおみくじの機械に100円を入れると、おみくじが出てきた。昔引いたのは、棒みたいなのをガラガラ引いた記憶があるのでちょっと、微妙な気分になったが、縁起物なのでよしとしよう。

春香もおみくじを引いたので同時に開封する。

俺は・・・『末吉』

末吉。正直微妙すぎる。凶よりはいい気がするが、吉の中では1番下だ。

学業・・・結果に拘らず励む事。

恋愛・・・困難多し。一途に励む事。

なんだこれは。おみくじって良いことを書いてるんじゃないかっただけ。これを見るとどちらともダメっぽい。たかがおみくじされどおみくじだ。結構シヨックがでかい。

「海斗どうだった？私は大吉だったよ。」

春香が満面の笑みで聞いてくる。

「さすが春香だね。俺は末吉だったよ。内容も微妙……」

「そつか、でも末吉も吉だからね。これからどんどん良くなって行くんだよ。」

「ああ、そつだと良いんだけどね。」

やっぱり春香は優しいな。お互いのおみくじを見せ合つと春香のおみくじには

学業……励めば必ず成就する。

恋愛……意中の相手と結ばれる。

なんだこれは。大吉と末吉でこんなにも違うのか？これが運と人間力の差というものなのだろうか？

軽くシヨックを受けながらも、必ず運命を乗り越えてやると心に誓い、2人でおみくじを結ぶ紐に結んでおいた。

気を取り直して帰る途中の出店で買い食いをすることにした。子供の頃は300円から500円程度の食べ物結構あったと記憶しているが全部500円から1000円になっている。

しばらく利用しない間に値段が上昇していたようだが、今の俺ならこのぐらいは問題ない。

「春香、なにか食べたいものある？」

「それじゃあね、あれがいいかな。」

春香が指差したのは、焼きそばを割り箸に巻きつけて揚げた今、若者に大人気という触れ込みの食べ物だった。

「おじさん、2本ください。」

「1600円だよ。」

おじさんにお金を払って春香に渡すと、お金を返そうとするので、奢りだよと言って受け取るのを拒否しておいた。

2人で並んで食べてみたが、パリパリする食感と焼きそばの味がしつかり美味しい。駄菓子がパワーアップしたイメージだ。

しかし春香が食べている横顔がなんとも言えずかわいい。振袖で可愛さが3割増しで、ただ食べているだけで無茶苦茶かわいい。

「次は何を食べようか？」

「なんでもいいよ。海斗の食べたいので。」

もうお昼なので結構お腹が空いている。鏡餅風のミニ団子に生クリームとチョコチップが振りかけた串があったのでそれを頼むことにしたが、お正月価格なのか1000円と結構高額だ。

「はい。これ春香の分。」

「お金払うね。」

「いやいや、クリスマスの代わりだから俺に出させてよ。」

「じゃあ、今日はご馳走になります。次は私が出すね。」

和風の団子と洋風の味付けスイーツで思ったよりもかなり美味しい。まあ、初詣の雰囲気込みの味だと思うが、春香がいる事で味も完全に3割増しになっている。

しばらく、人混みの中を歩いているとクラスメイトの女の子達のグループに声をかけられた。

「春香、あけましておめでとう。ふうん。高木さんと2人で初詣か。仲睦い事で羨ましい限りです。私達は元旦から女ばかり3人だよ。高木くんも春香を大事にするんだよ。」

「いや、普通に仲良くしてるだけだけど、変な言い方するなよ。他の2人に誤解を与えるだろ。」

冬なので寒いのは当たり前だが、なぜか一段と寒さが増した気がする。

「誤解って。誰も誤解なんかしてないよね。春香も大変だね。高木くんも頑張ってるね。」

何を頑張るのか良くわからないような別れ方をしたが、流石に初詣には知り合いも来ているらしい。他にも誰か来ているかもしれない。しばらくして人混みを抜けると、春香が

「はい。これクリスマスに渡せなかったから。」

おおつ。まさかクリスマスプレゼントか？

渡された袋の中を見ると手編み？のミトンが入っていた。

「春香、これって・・・」

「初めてだから上手く出来なかったところもあるんだけど、我慢してね。」

やっぱり、手編みか。手編みのミトンなのか。テレビでしかみた事のない手編みのプレゼント。

末吉？いやいや大吉だろ。超吉でもいいな。

第179話 幸せのお正月

俺は今初詣に来ている。

春香から手編みのミトンを渡されて猛烈に感動している。

「よかったらつけてみて。」

「ああ、もちろん。」

早速手にはめてみたが、理力の手袋とは全く違う感動が湧き上がってくる。

「どうかな。サイズ大丈夫？」

「ああ、もうぴったりだよ。測ったようにぴったり。もう言う事ないよ。ありがとう。」

そういえば感動で失念していたが、春香がプレゼントをくれたのに俺は何も用意してない事に今気付いてしまった。

クリスマスもどこに行こうかと予定ばかり考えていて、プレゼントを買いのを完全に忘れてしまっていた。

まずい……

「あの〜。プレゼントもらった後でちよつと言いにくいんだけど、俺春香のプレゼント買ったのを忘れてました。ごめんなさい。クリスマスプレゼントを買ったことがなかったから、頭から完全に消えてました。よかったらこれからすぐ買ってきてもいいですか？」

「そんなのいらないよ。もう十分もらってるから。」

出店の食べ物何か？

「いやいや、それじゃあ、俺だけ得してる感じがして気が済まないよ。」

「だって、これもらったでしょ。」

そう言っただけで春香は左手首につけているブレスレットを見せてきた。振袖姿に気をとられて全く気がついていなかったが、春香はこの前ブレスレットしたサファイアのついたブレスレットをしてくれていた。気がついてしまうと振袖と合わさって本当によく似合っている。しかも、しっかり身につけてくれているので気に入ってくれたのかもしれない。

ただ、手編みのミトンには、ブレスレットのお返しだったようなので少しだけ残念な気がした。

「ああ、でもそれは、この前のお礼だから。クリスマスは別のプレゼントを用意しないと。」

「もう十分なんだけど。」

「やっぱり、何か用意するよ。何がいいかな。」

「うん。それじゃあ、クリスマスの代わりに一緒に映画に行こうよ。」

「わかった。じゃあこれから映画に行こうか。予定は大丈夫？」

「今日は、この後家族と予定があるから、明日でもいいかな。」

「わかった。じゃあまた明日行こう。」

今年の元旦は今まで生きてきた中で一番素晴らしいものとなった。春香から手編みのミトンをもらったので感動だ。たとえブレスレットのお返しだったとしても貰った事には違いない。春香の振袖姿もスマホで撮ったし永久保存版だ。

1月2日になり、春香と駅前で合流した。

今日は白のロングコートが振袖とはまた違う魅力を発揮しており、可愛い。

お正月に2日続けて春香と何処かに行けるなんて、幸せだ。

「おはよう。じゃあ行こうか。」

「手袋してくれてるんだね。よかった。」

「ああ、もうあったかいし、言う事ないよ。」

そのまま映画館に直行したが、お正月という事でアニメ映画が多いようだ。

「何かみたい映画ある？」

「できたらこれがみたいかな。」

春香がみたいと言ったのは興行収入100億円突破のアニメ恋愛映画『宇宙で会えたら』だった。

普段、あまりTVを見ない俺でも、至る所でプロモーションをしているので知っている映画だ。

春香と何度か映画に来ているものの、アニメ映画は初めてとなるが俺もちよつと興味があつたので良かった。

早速チケットを買って2人で見たが、お正月だから結構空いていて、逆にそれが良かったりした。

映画の内容は高校生がロケットを製作する話だが、その夢を持ち続けて、大人になってからみんなの思いを乗せたロケットの打ち上げに成功して、高校時代の思い人と結ばれるという話だった。

圧倒的な映像美と、設定が高校生だった事もあり、自己投影して感動してしまった。最後がハッピーエンドで、思い人と結ばれたのも良かった。

アニメ映画を今まで敬遠していた節があつたが、完全に裏切られた。アニメ映画すごく良かった。

春香を見ると、ラストのシーン泣いていた。映画で泣く春香を見るのはこれで2度目だが、やっぱり可愛い。

「海斗、すごくいい映画だったね。私感動しちゃった。私達も同じ大学に行けるように頑張ろうね。」

「ああ、もちろんだよ。」

正月から春香と会えて、良い映画を見れて、本当に今年はいいい年になりそうだ。

第180話 11階層

俺は今11階層に来ている。

初めて踏み入れた11階層は10階層となんら変化なく正直拍子抜けしてしまった。

まあ10階層用に購入した装備が使い捨てにならないだけ良かったと考えることにした。

「なあ、みんな、なんか変わり映えしないよなあ。10階層が続いている感じかな。」

「まあ、気を抜かずに行こう。」

「気をぬくと痛い目に会うのですよ。」

「多分10階層のままってことはないと思うわ。」

10階層未満の情報はネット等でもすぐ検索できるが、10階層を超えた階層の情報は、ほとんど出てこない。

階層的にも危険度が増すので情報にもかなり制限がかかっている。賛否両論はあるものの、能力の足りない探索者が情報を基にしてみやみに下層に挑み事故が起きない様にとの措置だ。逆に情報がないと事故が増えるんじゃないかとも思ったが、今までの探索者は実力で階層を降りてきているので特に問題はないようだ。

k-12のメンバーも気を抜くようなことは全くなさそうなので気を張って臨むことにする。

しばらく進むと直ぐにモンスターと遭遇した。

「ご主人様、モンスターです。3体います。気をつけてください。」

なんだあのモンスターは？

人面犬か？

正面から凄い勢いで向かってきたのは巨大な人面犬？

いや犬ではないかな。ライオンか？

人面ライオン？

「海斗、多分スフィンクスよ。注意して。」

ああ、スフィンクスか。これが、かの有名なスフィンクスか。たしかにTVとかで見た石像のスフィンクスの特徴を備えている気がするが、リアルスフィンクスはちょっと気持ち悪い。

人面ライオン・・・

人面ライオンって普通のライオンより強いのか？

世界的に有名モンスターの出現に頭の中の動きが変な方に動いたのか戦闘に出遅れてしまったが、ベルリア、あいりさん、シルがしっかりと迎え撃ってくれた。

「人間だけではないな。悪魔が混じっているではないか。」

おおつ。喋った。3体のうちベルリアが相手にしているスフィンクスが喋った。普通の人間よりかなり野太い声だが確かに喋っている。人面と言うことは頭の中は人間と同じものなのかもしれない。

「あのおう。ちょっといいですか？」

「なんだ。殺すぞ！」

「いや、普通に喋れるんですね。喋れるんなら、仲良くなれたりし

ないですかね。なんか好物とかあったら持ってきてもいいですよ。ダンジョンにずっといるんですよ。」

「仲良くだ？ふざけてるのか。好物は人間に決まってるだろ。お前を喰わせる。」

「あゝそれはちょっと難しいですね。本当はもっと貴方達の事も知りたかったんだけど、しょうがないですね。みんな殲滅するよ。ミク『幻視の舞』を頼む。ヒカリンはあいりさんの相手にしているやつに向かって『ファイアボルト』を頼む。俺はシルのフォローに入る。ベルリア1人で頑張れ。」

俺はそのまま、気配を薄めてから、シルと対峙しているスフィンクスに向かわず、大回りに迂回して後方に回っていく。

その間にベルリアが相手にしているスフィンクスが口から火の玉を吐いたが、ベルリアは向かってくる火の玉を避けずに斬った。

おおっ。火の玉って斬れるのか？と思い、すごいと感心してしまっただが、次の瞬間斬った火の玉は真ん中から左右に少し別れたもののそのままベルリアの肩口に命中してしまった。火の玉は斬っても漫画のように左右に流れて行ってくれるわけではないようだ。それはそうとベルリア大丈夫か？

「くっ、やりますね。私にダメージを与えると、さすがですね。もう容赦はしません。」

なんか、漫画の主人公みたいな事を言っているが、格好つけずに避ければ良かっただけじゃないのか？

まあ大丈夫そうなので、自分の相手に意識を戻して集中する。

前までは、後方から飛び込んで一刺ししていたが、理力の手袋のおかげで斬撃を飛ばせるようになったので、最後の一步を踏み入れる

必要がなくなった。至近距離まで近づいてしまえば余程の事が無い限り仕留める事が出来るようになってきた。

ゆっくり近づいてからライオンの尻尾の根元を目掛けて斬撃を飛ばして爆散させる。

やっぱりライオンの尻尾は揺れていたのもしかしたら、ネコ科の特性を持っていれば猫じゃらしとかも効果があるかもしれない。

「ぎゃあああ！」

背後から大きな悲鳴がしたので咄嗟に振り向いた。

第181話 判断ミス

俺は今11階層で血の気が引いている。

ヒカリンがスフィンクスの火の玉をくらってしまったのだ。

なんでだ？

どうして後方のヒカリンにダメージが入ってしまったんだ？ベルリアか？

そう思つてベルリアを見たが、対峙していたモンスターは既に片づけられていた。

どうやら、あいりさんが対峙しているスフィンクスがやったようだが、『幻視の舞』も発動しているはずなのになんでだ？

「ベルリア、ヒカリンに『ダークキュア』を頼む。」

「かしこまりました。」

ベルリアに指示する間にもスフィンクスが四方に向けて火の玉を連発しているが俺達を狙っているわけではなさそうだ。よく見ると『幻視の舞』で幻影を見ているようで、幻影に向かってやたらめつたら、撃ちまくっているせいで、流れ弾が運悪くカオリンに命中してしまったようだ。

危なくて近寄れないので

「ルシエ『破滅の獄炎』を頼む。」

ルシエの一撃であっさりとスフィンクスを葬る事ができたが、慌ててヒカリンの元に駆け寄ると既に他のメンバも駆けつけていた。

「ヒカリン、大丈夫か？」

見ると服に燃えた跡があるが、それ以外は問題ないように見える。

「大丈夫なのです。かなり痛くて死ぬかと思いましたが、今は全く痛みもないです。」

「マイロード、私の『ダークキュア』で完璧に治療できましたのでご安心ください。」

「ベルリアよくやった。助かった。」

「ベルリアくん、ありがとうなのです。」

「いえ、当然の責務を果たしただけです。」

『ダークキュア』はヒカリンにも問題なく効果を発揮したようである。本当に助かった。

「ヒカリン、ごめん。俺の判断ミスだったかもしれない。後衛のヒカリンを危険な目に合わせてごめん。」

「いえ、海斗さんのせいではないです。私が鈍っただけです。気にしないでください。」

「とりあえずその服だとあれだから、このマントを羽織ってよ。」

「ありがとうございます。」

ヒカリンは大丈夫だと言ってくれるが、俺の判断ミスがあったのも

確かだ。スフィングスの吐く火の玉が、『幻視の舞』によって被害を拡散するとは思いもしなかった。

『幻視の舞』は強力なスキルだが、使いどころを間違えると大事になりかねないようだ。

どうせなら最後のスフィングスを先に仕留めた方が良かったのかもしれない。

正直その選択をする時間の余裕はあった気がするが、リアルタイムでは判断できなかった。

それにしても頭とかに当たらなくて良かった。いくら『ダークキユア』があるとはいえ、頭に火の玉が直撃する事を想像したくない。

ダンジョンに潜る以上、怪我を負うリスクはあって当然だが、K-12のメンバー構成であれば、それを最小限にする事は可能だと思う。

正直ヒカリンがダメージを負ったのはかなりショックだった。自分がダメージを負うのとは全く違い、精神的にショックだった。

今後、効率だけではなく、メンバーが極力安全を担保できるような形での探索を重視していこうと思う。

焦らずに着実に探索を進めたい。

「みんな、これからはもう少し周りの事も判断できるように努めるから、ごめん。」

「『幻視の舞』は私のスキルだから、コントロールできなかった私の責任。ごめんね。」

「あのスフィングスと相對していたのは私だ。私がもっと早く片をつけていればこんな事にはならなかったんだ。ごめんなさい。」

「みなさん。私が避けられなかっただけなんです。みんなの責任ではないのです。」

みんなそれぞれに思う事はあるようだが、メンバーがこの経験を生かせば、次のスフィングス戦で同じ轍は踏まなくて済むだろう。いずれにしても、俺がパーティリーダーなのだから一番しつかりしないといけないのは間違いない。

反省を胸に探索を再開する事としたが、マントが無くなり暑くて仕方がないので申し訳ないと思いながらもヒカリンにお願いして『アイサークル』を発動してもらった。

第181話 判断ミス(後書き)

第182話 ミイラ

俺は今11階層に来ている。

暑い・・・

ヒカリンを気遣ってマントを渡してしまったせいで滅茶苦茶暑い。返してくれとも言えないので我慢するしかないが、汗とともに体力がガリガリと削られていく。

とりあえず早く、切り上げて帰るしかないが、まだ11階層の探索を始めてどれだけもたたないので言い出せない。

「ご主人様。モンスターです。注意してください。」

待っていると現れたのは、ミイラ化した、フアラオの様なモンスターと同じくミイラ化した犬の様なモンスターが2体だった。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。みんな相手の出方を見ながら遠距離攻撃で倒せるなら倒してしまおう。」

先程と同じ轍は踏まない様まずは防御を固めて相手の能力を見極めようと思う。

光のサークルの中から全員で一斉射撃を行う。バルザードの進化もあって、魔核銃での一斉射撃も久しぶりな気がするが、確実に3体のモンスターを捉えている。

「プシュ」

「プシュ」

「プシュ」

連射していくがモンスターがどんどん近づいてくる。

「海斗、なんか効いてない気がするんだけど。」

「海斗さんもしかしてミイラだから、もう死んでるんじゃないのですか？聖水か何かじゃないとダメなのではないのですか。」

「どうする、打って出て斬り伏せようか？」

「いえ、万が一があつてはいけないのでサークル内から攻撃を続けましょう。ヒカリン『ファイアボルト』を頼む。ルシエ『破滅の獄炎』を犬に頼む。俺は真ん中の人型を狙う。」

俺は真ん中のファラオっぽいモンスターに向けてバルザードの斬撃を飛ばすが、何も起こらない。

なんだ？外れたのか？

今度は外さない様に十字斬りに斬撃を飛ばすが、やはり何も起こらない。

「マイロード、おそらくあの人型、魔法障壁の様なものを纏っているとされます。物理攻撃である魔核銃は届いていたので、魔法系の効果が無効になっているのかもしれない。私が相手をします。」

そう言つてベルリアが飛び出して行つてしまった。

とにかく一体ずつ、倒さなければならぬので、残つた犬型に向かって斬撃を飛ばす。

今度はダメージは与えることができたが、爆散しない上にまだ普通に動いている。

「こいつら、やっぱり死んでるのかもしれない。ルシエもう一発頼む。」

ルシエに犬を頼んでから俺は人型の方に加勢に出る。

ベルリアはミイラの攻撃をかわしながら剣戟を加えているが、やはり斬っても普通に動いている。

再生能力は無さそうだが、他にも能力を秘めているかもしれないので警戒しながら近づいていくと、ベルリアに向けてモンスターが毒液と思しきものを吐き出した。周りの砂から煙が出ているのでやばいのは間違いないが、耐性のあるベルリアには効果がなかったものの、あれが俺ではなくて本当によかった。

そのまま後ろに回り込んでから飛び込んで、一刺しして、破裂のイメージをのせるが、全く効果がない。このままではまずいと思い、今度は切断のイメージを繰り返す。

次の瞬間、人型のミイラは胴体から真つ二つに切断されて、消滅した。

どうやら、破裂の効果は生物限定なのかもしれない。今まで非生物に使用した事がなかったので良い経験になった。

「マイロードご助力ありがとうございます。なかなかの強敵でしたね。死なない上に特殊効果持ちでしたね。」

「ああ、ベルリア、なんか毒液みたいなのくらってたけど大丈夫か？」

「特にダメージはないのですが、少し臭うのでどこかで洗いたいです。」

「じゃあ戻ったら10階層でシャワー浴びさせてやるよ。」

「ありがとうございます。じゃあ今日はさらに頑張りますね。」

全部のモンスターを倒し終わったのでみんなの所に戻ると

「海斗。ちょっといい？」

「なに？」

「さっきの戦闘なんだけど、海斗とベルリア以外は光のサークル内でしか戦わなかったよね。」

「うん。まあそうだね。」

「今までもあった事だから、最初は特に気にならなかったんだけど、私たちの事気遣ったんでしょ。」

「まあ、それもあるけど。」

「でも自分は飛び出したよね。」

「まあ遠距離攻撃だけだと難しそうだったからね。」

「ヒカリンの件があったから慎重になるのはわかるけど、私達の事を気遣いすぎるのは良くないと思う。」

「私もそう思う。私は基本近接で戦うタイプだから、前に出ないと上手く戦えない。気遣ってくれるのは嬉しいが、それによってパーティの戦い方に影響が出るのは良くない。しかも海斗1人だけ負担するのは良くないな。」

「まあ確かに慎重になっていた部分は否定できないかな。」

「海斗さん。普段から私達の事を気遣ってくれているのはわかって

います。本当にありがとうございます。でもパーティですから、海斗さんだけではなくみんなで行きたいのです。」

「みんな海斗には感謝してるのよ。」

「ああ、海斗のおかげで本当にいつも助かっている。」

やばい、俺泣きそう。

みんなの事は出来るだけ気遣っているつもりだったが、みんながこんな風に思ってくれているとは知らなかった。先程の戦いは少し過敏になっていた部分があったのは間違いない。今後はみんなで協力しあって進んでいきたい。

第182話 ミイラ（後書き）

第183話 冬のアイス

俺は今11階層に潜っている。

みんなとの相互理解も深まって、これからだとテンションがぐつと上がったが、残念ながら撤退することにした。

マントをヒカリンに貸してしまったせいで、熱中症になりかけた為、周りに止められてしまった。

汗が止まらないのと、ちよつとフラフラする。

ヒカリンが心配して『アイスサークル』を時々発動してくれるのでとりあえずは問題なさそうだが、念のために戻ることにした。

戻る道中もやっぱり暑いので体力を削られたが、なんとかゲートの位置まで戻ってくることができた。

「ようやくついたな。それじゃあみんなでシャワーを浴びようか。」

そう言って各自シャワーブースに向かおうとするがベルリアがぴったりとついてくる。

「ベルリアどうした？何か用があるのか？」

「マイロード約束したではありませんか。」

「ごめん。なんの約束だっけ。」

「ミイラの毒液が臭うのでシャワーをさせて頂ける約束でした。」

あつ。完全に忘れていた。その後のやりとりと熱中症で完全に忘れていた。

「ああ、もちろん覚えてるよ。別々に入ると思ってたからな。」

「いえ、私はお金も識別票も持っていませんのでご一緒させてください。」

確かにサーバントが一人では、入れないな。

「わかった。じゃあ一緒に入るか。」

そのまま一緒にシャワーブースに向かおうとすると今度はシルとルシエもぴったりとついてきた。

「シル、ルシエ何か用か？」

「私もご一緒させてください。」

「ベルリアだけずるいぞ。わたしも一緒に入る。」

「いや、ちょっと待ってくれ。無理。俺は男だぞ！」

「それがどうかされましたか？」

「そんなの関係ないだろ。ベルリアだけずるい。」

「いやいや、大いに関係あるだろ。いくら小さいからって、女の子と一緒に無理。」

「ベルリアが良くて私達がダメと言うのは男女差別ではないですか？」

「そつだそつだ。ずるいぞ。」

「違います。俺が変態に見られない為に必要な措置です。却下します。」

「納得いきません。」

「一緒に入る。」

「無理なものは無理だ。俺は幼女趣味にみられたくない。申し訳ないけど、あいりさんとカオリン一緒に入ってもらっていいかな。」

「えつ。もちろんだ。大歓迎です。」

「ルシエ様一緒に入りましょう。」

「お前達は、あつちな。俺はベルリアと一緒にいるから終わったら外で待ち合わせな。」

「納得しかねますが仕方ありません。」

「えこひいきだ。今度一緒に入るぞ。」

「いや今度も絶対無理だけどな。」

そう言ってそれぞれシャワーブースに入った。

「ベルリア、お前小さいけど筋肉すごいな。」

「日々精進していますからね。いざという時の為に鍛錬あるのみです。そう言うマイロードもかなり鍛えられた肉体をされていますよ。」

「そうかな、大分筋肉とかがついてきた感じはあるんだけどな。それにしても、やっぱりシャワー、最高だな。」

「はいこれは素晴らしいですね。臭いも取れますし、快適ですね。」

「また今度も一緒に入るか？」

「はい。頑張りますので是非お願いします。」

すつきりして外に出てからしばらくすると、他のメンバーも戻ってきました。

「シル、ルシエどうだった？」

「素晴らしく気持ち良かったです。」

「最高だな。次から必ず入るからお金出してくれよな。」

「わかったよ。あいりさんとカオリンは大丈夫かな。」

「もちろんだ。こちらがお願いしたいくらいだよ。」

「是非是非お願いします。至福のときです。」

まあ全員が満足そうなのでいいかな。とりあえず2人も気に入ったようなので良かった。

それから地上に戻ってからは各自解散したが、帰り道冬なのに無性にアイスクリームが食べたくなり、コンビニで買って帰って家で食べたが、最高に美味しかった。

第183話 冬のアイス（後書き）

第184話 隠し扉？

俺は今11階層に潜っている。

先週、ヒカリンのアクセントもあつたので慎重かつ、パーティのみんなが活躍できるように配慮しながら探索を進めている。

先週と今週でわかったが、この11階層は気温等の環境条件は、ほとんど10階層と変わらないが、出てくるモンスターに特徴がある。多分エジプト系の神話に出てくるようなモンスターばかりなのだ。小さい頃、結構古代遺跡とかが好きだったので馴染みがあるモンスターが出てきているが、今まであまりなかった簡単な魔法系の攻撃をしてきたり、特殊効果を発揮したりと少し手強くなっている印象だ。

「ご主人様、モンスターが向かって来ています。数は5体です。」

今までで1番多いな。しばらく待っているとすぐにモンスターは現れた。

カナブンの親玉みたいなのが3体。多分スカラベだろうと思う。それと禍々しい感じの大蛇が2体。

「海斗多分あれアペプよ。気をつけて。」

まあスカラベは巨大だが昆虫仲間だと思われるので久々に殺虫剤を使用したいところだが、残念ながら想定していなかった為、リュックの中は殺虫剤ではなくペットボトルで占められているので使えない。

スカラベはあまり女性陣は得意ではないだろうから俺とベルリアで受け持つことにする。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。俺とベルリアでスカラベを残りのへビ型の右側をルシエが頼む。残りの一体をみんなで頼む。へビは毒かなんか飛ばすかもしれないから注意して。」

俺とベルリアでスカラベに近付いていくが、攻撃パターンがわからないので俺が先に仕掛けてバルザードの斬撃を飛ばしてみるが、外殻が硬いようで命中したがそこまで傷付いていないので近付いて直接攻撃する必要があるそうだ。

間を空けずに、スカラベが何かのスキルを使用したようで一瞬でお尻の部分に大きな黒い玉が出来上がった。あれはまさかフンコロガシの糞か？

あれを転がしてどうするとかいうのか？

ちよつとビビりながら様子を見てるといきなり後ろ脚でこちらをめがけて蹴り飛ばしてきた。

俺は焦って避けたがベルリアは平然と糞の真ん中を斬ったものの先日火の玉と同じように綺麗に左右に飛んでいくわけではなくしっかり両肩に命中している。

「つまらぬ物をきってしまった。」

ベルリア格好つけている場合じゃない。

スキルで現れた糞なので俺がくらくたと徒では済まない気がする。その前にくらいたくない。

3体のスカラベが絶え間なく糞転がし、いや糞飛ばし攻撃を繰り返してくる。

正直避けるのに精一杯だ。

「ベルリア、お前これくらってもなんともないんだよな。」

「もちろんなんともありませんよ。ちょっと臭っただけです。」

「お前盾になって近づいてみる？」

「マイロードの命とあらば。」

「じゃあお願いするな。」

ベルリアは、剣で糞を斬りながらどんどん進んでいくので俺も遅れずに後ろをついて行く。

スカラベの前まで来たので、バルザードを突き刺して爆散させる。同じ作業を3回繰り返し返してようやくスカラベ型を撃退できた。

へビ型の方はルシエが既に1体倒していたが、もう1体は未だ交戦中だった。

あいりさんが、なぎなたで牽制しながら、ミクとヒカリンが遠距離攻撃を仕掛けているが、とどめはスナッチが高速移動しながら『ヘツジホツグ』を発動して戦闘が終了を迎えた。

その後も順調に探索を続けていたが、

「ご主人様、足下から魔力を感じます。」

「下？モンスターか？」

「いえ、モンスターの感じではありません。おそらく魔力を帯びた空間か何かだと思います。」

「魔力を帯びた空間？前にあつた隠し扉みたいなものか？」

「おそらく同種のものかと思われます。」

「でもなシル、下って砂しかないんだけど、掘るのか？スコップと
か持ってきてないぞ。」

「いえ私にお任せください。」

シル、本当に大丈夫か？

第184話 隠し扉？（後書き）

第185話 隠しダンジョン

俺は今11階層で足下を眺めている。

「シル、任せてくれて言ってもな。どうするんだよ。」

「ご主人様そこを退いてください。『我が敵を穿て神槍ラジュネイト』」

シルが足下に向かって神槍の一撃をぶつ放すと、足下の砂がクレターのように吹き飛んで無くなり、石の床のようなものが出現した。恐る恐る、床に降りてみるがやはり扉のようなものは見当たらない。

「シル、入口っぽいのはないけど、この中に何かあるのか？」

「はつきりとはわかりませんが、おそらくこの床の下に新たなダンジョンがあると思われます。」

「そうかどうしようかな。入口ってどこかにあるのかもしれないけど、探して回ることもできないしな。」

「ご主人様、問題ありません。お任せください。」

『我が敵を穿て神槍ラジュネイト』

「ドガガガーン」

シルがまた神槍の一撃を床にぶつ放した。

「ご主人様、問題ありませんでしたね。」

床には、ぽっかり大きな穴が開いているが、これって問題ないのか？ 器物損壊とかで賠償請求とかされないよな。黙っておけば大丈夫か？ 内心焦ってしまったので、メンバーに視線を向けるが、3人ともにスツと目線を逸らされてしまった・・・

「か、海斗。もう開いてしまった穴は塞がらないんだから。ね。しようがないでしょ。先に進んでみる？」

「でもこれ進んで穴が塞がったら出れなくなったりしないのかな。」

「ご主人様。問題ありません。塞がってもまた穴を開けるだけです。ので大丈夫です。」

まあ、シルなら問題ないだろうな。

「せっかくだから行ってみようか。前回の隠しダンジョンはレアモンスターが強力なのが出現したから気をつけた方がいいな。」

「ちょっと待ってください。海斗さんは以前も隠しダンジョンを攻略したことがあるのですか？」

「ああ大分前になるけど5階層で隠しダンジョンを発見して攻略した事があるんだよ。」

「あの時の隠しダンジョン攻略したのって海斗さんだったのですか？ ちよつと噂になってましたよね。」

「そうだったかな。とりあえずエリアボスつばいのが出てきて死にかけたから今回も要注意だ。でも結構いい魔核が手に入って進学の費用が稼げたんだよ。」

全員で床の穴に潜ることにしたが穴から下を覗くとそれなりに高さがあったので、床の端にぶら下がりながら思い切って飛び降りた。飛び降りた床には砂は無く全体に石造りになっているようだ。飛び降りてから気がついたが、これって帰りはどうやって上がればいいんだろう？降りれても自力で登るのは無理だな。

やばい・・・

もう飛び降りてしまった以上、今考えても仕方がないので一旦思考をストップさせることにした。もしかしたら都合よく先に出口があるかもしれないしな。程なく全員が穴から降りてきたので周囲を見回すとかなり薄暗い。しっかりとダンジョンの通路が存在しているようだ。

「みんな、慎重に進もう。前回の時はトラップが結構あって俺死にかけたんだよ。矢とかも滅茶苦茶痛かったけど、特に電撃のトラップは地獄に落ちかけたんだよ。ベルリア先頭に立ってくれるか？飛んでくる矢とか前方には注意してくれ。特にルシエ、お前が畏れにかかりまくったせいで俺が死にかけたんだから今回は本当に注意してくれよ。」

「わかってるって。大丈夫だよ。」

「任せてください。私に矢は効きません。しっかり役目を果たします。」

「頼んだぞ。」

とりあえずシルの探知能力をあてにしながら先に進むことにしたが並びはベルリア、俺、シル、ルシエ、3人、最後尾にスナッチで行くことにした。

前回は罠に対しての耐性が全くなかったが今回はベルリアがいるので、かなり有利に進めることができるのではないだろうか。

とりあえずみんなの安全に最大限気をつけながら慎重に進んでいこう。

第186話 隠しダンジョンの中

俺は今11階層の隠しダンジョンに来ている。

今のところまだモンスターに遭遇していないのでよくわからないが、モンスターがいらないと言う事は無いだろう。

「シル、敵の気配って無いのか？」

「ご主人様、向こうに1体気配は感じるのですが、どうやら通常のモンスターでは無いようです。感じが違います。」

やっぱり、この隠しダンジョンも普通ではないらしい。

「みんな、注意してくれ。ベルリア特に頼むぞ！」

「任せてください。」

全員で前方に進んでいると1体のモンスターが仁王立ちしていた。そこにいたのはワニの頭を持ったワニ男だった。

「みんなワニ男に注意だ。」

「海斗、多分なんだけど、ワニ男じゃなくて、格好からしてセベクじゃないかな？」

「ミク、セベクってなに？」

「あんまりメジャーじゃ無いかもしれないけど古代エジプトの神な

「ただけど。」

「神……やばく無いか？うちにも神がいるけど半分だけだぞ。負けてるんじゃないか。」

「それはなんとも言えないけど外見だけならシル様の圧勝でしょ。」

「いや、今はそこでは無いと思うけど。」

「シル、なんかあれ神っぽいんだけど、大丈夫かな。バチが当たったりしないかな。」

「いえあれは神ではありません。神格ほどの力を感じません。おそらく偽神です。」

「偽神？」

「はい。神の姿と力を模倣した者の事です。神ほどの力はありませんが、かなりの力を持っているのは間違いありません。全力で行きましょう。」

「みんな、一斉にかかろう。ヒカリンは『アイスサークル』ミクは『幻視の舞』ルシエは『破滅の獄炎』、シルは『鉄壁の乙女』俺とベルリアとあいりさんで仕留めに行きましょう。」

指示を終えてヒカリンの『アイスサークル』が偽セベクを覆った瞬間を見計らって、俺たち3人が飛び出すのが、氷漬けの筈が、氷の内

部から植物が大量に発芽して氷を砕いてしまった。慌ててしまったが今更プラン変更の時間は無い。間髪入れずに『破

滅の獄炎』が襲いかかったが、植物のバリアとでも言えばいいのだろうか、偽セベクの周りを繭状に包み込んだ植物が燃え上がっただけで、本体にダメージを与える事は出来なかったようだ。その状況を見計らってスナッチが『ヘッジホッグ』を発動するが、やはり植物のバリアに阻まれてしまった。後方では『鉄壁の乙女』の光のサークルに沿って植物が大量に発生して覆い隠そうとしている。

「ルシエ焼き払え。ベルリア、あいりさん、近接で3方から攻め立てますよ。」

俺はバルザードの斬撃を相手に向かって飛ばしてから交戦状態に入した。

バルザードでは長さ的なハンデを感じたので魔氷剣を出現させ、切断のイメージを乗せて斬りかかるが、植物のバリアは突破したものの、偽セベクの持っている剣で受け止められてしまった。

その瞬間武器破壊を試みるがタイミングの問題なのか相手の武器が特殊なのかうまくいかなかった。

俺の攻撃に合わせてあいりさんとベルリアも左右から攻撃する。あいりさんは『斬鉄撃』を発動しているようで、一撃で植物のバリアを斬って落とすが、2撃目を加える前にまたバリアが復活している。ベルリアは少し威力が足りないのか手数で補い、バリアを取り払っているが本体までは到達していない。

植物魔法とでも言うべきスキルだと思うが、植物なので単体ではそれほど強度を持たないが、群生する事でかなり厄介だ。

偽とは言え神とつくだけあり、俺の魔法とは比較にならない威力だ。このままでは埒があかない。

ミクの『幻視の舞』も効果は無かったようなのでこのまま3人で押し切るしか無い。

俺は戦いの最中に頭をフル回転させながら現状の確認と戦略を練っ

ていた。

第186話 隠しダンジョンの中(後書き)

第187話 偽セベク撃破

俺は今隠しダンジョンで戦っている。

植物系の魔法を駆使する、偽セベクに攻撃が通じずに苦戦している。

「ベルリア、俺と攻撃のタイミングを合わせて1箇所を順番に攻めるぞ。あいりさんは今のままで攻撃を続けてください。」

俺が斬撃を飛ばすと同時に2人で攻撃を開始するが、相手も予測していたのか植物のバリアと同時に、俺に向かって植物の蔓が大量にやってきた。

足元に絡みついてくるのでバルザードで斬って落とすが、完全に機動力を奪われるのと、植物に結構大きな棘があつてスーツの上からでも地味に痛い。

そのせいでベルリアと息を合わせて攻撃することができなかった。

「あいりさんも攻撃に加わってください。」

今度は3人でかかる事にしたが、やはり俺に向かって植物魔法を發動してきたが、植物バリアとは同時に1箇所しか発動出来ないのか、あいりさんと、ベルリアは無傷で攻撃を仕掛けることが出来、あいりさんが一撃で植物バリアを斬って落とす、そこを狙ってベルリアが踏み込んで斬りつけるが、剣で防がれる。ベルリアも負けじと連撃を加えるが相手もそれに合わせて剣を振るう。

ベルリアと直角以上の剣さばきなのでかなりの使い手に見えるが時間の経過と共にまた植物バリアが修復してしまった。

3人では残念ながら手数が足りない。

後ろを見ると光のサークルに纏わりついていた植物は消失していた

ので、

「ルシエ『破滅の獄炎』を頼む。焼けた直後にヒカリンも『ファイアボルト』を頼む。」

あいりさんとベルリアにはアイコンタクトを済ませて攻撃に備える。ルシエの『破滅の獄炎』が炸裂して、植物バリアを焼き払うと同時にヒカリンの『ファイアボルト』が敵に命中する瞬間、偽セベクは、剣で魔法を切り裂いた。

その瞬間あいりさんと、ベルリアが踏み込んで敵本体に斬りかかる。俺はなぜかまた植物の蔓が襲いかかってきて身動きが取れなかった。あいりさんが袈裟懸けに一太刀浴びせかけて、怯んだところをベルリアがさらに踏み込んで滅多斬りに伏した。

敵の本体も結構な強度があるようで、ベルリアの攻撃がなかなか致命傷にはならないようだったが、あいりさんが2撃目を繰り出した時点で決着がついて消失させる事に成功した。

「あいりさんやりましたね。かなり手強かったけど、エリアボスだったんですね。」

「ご主人様、おそらく違います。ドロップアイテムが何もありません。」

偽セベクのいた所を見ると何も無い。

何故か、魔核もない。

なぜ・・・

「ご主人様、明らかに特殊なモンスターなので通常とは違うのかもしれません。ただ隠しダンジョンである以上エリアボスは存在していると思われず。」

通常と違うのはわかったが、悪い方に違うらしい。結構大変だったのに何も無し。なんかこの隠しダンジョンけち臭い。

「海斗、明らかに通常のモンスターよりも強かったよね。私のスキル通用しなかったみたいだし。」

「まだわからないけどミクのスキルはこのエリアのモンスターには効果が薄いのかもれないな。もしそうなら次からは後方から魔核銃で支援を頼むよ。」

「私の『アイスサークル』もあまり効果が無かったのです。」

「それももしかしたら相性とかあるのかもしれないし、『アースウエイブ』と併用してみてもそれでもダメだったら支援は諦めて、『ファイアボルト』で攻撃するのに戻ってもらおうかと思う。」

「わかったのです。」

「とにかくどこかにボスっぽいのがいると思うからそれを倒すまで頑張ろう。ドロップもそれまでには何か出るかもしれないし、経験値も稼げてる気がするし。」

まさかだけど経験値は稼げてるよな。まさかドロップと同じで何も無しとかは無いと思いたい。少なくとも戦闘スキルはアップした筈

第187話 偽セベク撃破（後書き）

第188話 対セクメト

俺は今隠しダンジョンを探索している。

偽セベクを倒してから探索を再開したが、内部は遺跡っぽい。

ピラミッドとかにはもちろん入ったことはないが、イメージで言う
とそんな感じがする。

探索者というより冒険家にもなった気分でちょっとワクワクして
しまう。

「ご主人様、敵です。今度は2体です。おそらく先程と同等以上の
力がある気がします。」

「みんな、落ち着いて相手をよくみて戦おう。シル、もしかしたら
攻撃参加を頼むかもしれないから準備はしておいてくれよ。」

「かしこまりました。」

そこから50m程進むと2体のモンスターが仁王立ちしていた。

このエリアのモンスターは仁王立ちが基本なのだろうか？

2体とも人型だが頭がそれぞれライオンと羊だった。

スフィックスが人面ライオンだったが、目の前にいるのはライオ
ン面人間だった。

「海斗、セクメトとクヌムだと思う。」

「ミク、なんでそんなに詳しいんだ？俺そんな神の名前知らない
けど、どっちがセクメト？」

「ライオンの方よ。前に興味があつて色々調べたことがあるのよ。」

「エジプトに興味があつたのか？」

「カードゲームよ。」

「ああ、そんな感じか。カードゲームとかやるんだな。それじゃあ能力とかわかるの？」

「クヌムは人間創造だつたと思うけど。セクメトは伝染病の息を吐くと思う。」

「おいおい、セクメトやばすぎるだろ。古代エジプトの伝染病の抗体なんか俺持つてるかな。お母さんちゃんとワクチンうつてくれるかな。」

「多分、一般的なワクチンじゃ無理じゃない？」

「シル『鉄壁の乙女』って伝染病防げるかな。」

「あまり考えたことはありませんが多分大丈夫じゃないでしょうか。」

かなり怪しいが信じるしかない。

「みんな偽セクメトを遠距離から一気に叩くしかないな。ベルリアは毒に耐性があるって事は伝染病とかにも耐性があるのか？」

「全く問題ありません。」

「それじゃあベルリアは近接で偽クヌムの足止めをしてくれ。その間に偽セクメトを殲滅しよう。」

『鉄壁の乙女』のサークルからベルリアが飛び出していく。

俺はとりあえずバルザードの斬撃を飛ばすが、着弾と同時に他のメンバーも攻撃を開始する。

ヒカリンは打ち合わせ通り『ファイアボルト』を連発している。ルシエも『破滅の獄炎』を発動して攻勢を強める。

あいりさんは魔核銃を連射してミクも『幻視の舞』を発動したようだが、変化が見て取れないのを確認するとすぐに魔核銃にスイッチとして攻撃を開始すると同時にスナッチも攻撃参加する。

俺も連撃を重ねて使用制限の10発迄使い切る。

攻撃による粉塵が晴れて来たので偽セクメトを凝視するが、ボロボロだがまだ生きている。しかも少しずつこちらに近づいて来ている。

「みんなやばい近付いて来た。攻撃は効いてるから倒れるまで徹底攻撃だ。特にルシエ、病気には炎が有効かもしれない。どんどんやってくれ。」

正直、『鉄壁の乙女』が病原菌に有効かどうかかわからない上に効果が切れたらやばい。とにかく早く倒すしかない。焦りながらもバルザードに魔核を吸収させて、再度斬撃を飛ばす事に専念する。

他のメンバーも気持ちは一緒なのか、血相を変えてひたすら攻撃を集中させる。

ルシエの攻撃も加わりまさに絨毯爆撃状態になったが、ボロボロの状態になりながら徐々に近づいて来ている。

怖い・・・

いつもと違った恐怖に耐えながら攻撃に集中していたが遂に光のサークルの目の前まで到達してしまった。

「ひっ……」

誰の声かわからなかったが恐怖から声が上がったのはわかった。俺も目に見えない病原体への恐怖からプレッシャーを感じてはいたが、やるしかない。

目の前の偽セクメトに対してバルザードを突き出してねじ込み、瞬間的に破裂のイメージを目一杯重ねてやった。しばらく間があって

「ボフウン」

偽セクメトを爆散させる事に成功した。

第189話 対クヌム

俺は今神もどきと戦っている。

偽セクメトを倒したので、まだもう1体いるものの、異様な恐怖から解放されて力が抜けかけた。

見えない病原菌って本当に怖い。見えるわけではないので言葉だけしかわからないが、イメージすると怖すぎる。

近づいて来たけど多分大丈夫だよな。あとでしっかりうがいと消毒をしておこう。

ほっとしながらもう1体の方を見たが、大変なことになっていた。

ベルリアが奮闘しているが、あれはなんだ？

土人形？いやミクが人間創造と言っていたから土人間か？

偽クヌムによって土人間が10体ほど生み出されており、ベルリアが片っ端から斬り伏せているがすぐに次の土人間が生み出されている。

土人間も一応手には武器を持っており十分に殺傷能力があるように見える。

「みんな、疲れてるところ悪いけどベルリアの加勢に行くよ。明らかにベルリアだけだと手数が足りないみたいだから。土人間には魔核銃は効果が薄そうだから、ミクとスナッチは本体を牽制して。」

俺とあいりさんはそのままベルリアに並んで土人形を倒しにかかる。

「マイロードご助力ありがとうございます。大した強さではないのですが斬っても斬っても減りません。」

3人になったことで少しだけ余裕をもって対応できるようになった

が、相手は常に10体なので依然劣勢が続いている。

「ルシエ、真ん中の奴らに『破滅の獄炎』を頼む。」

ルシエの攻撃も加わり、一気に5体の土人間を葬り去ることが出来たが、次の5体にかかっているうちに再度5体の土人間が生成されて10体になってしまった。

偽クヌムのスキルなのかもわからないが土人間が増え続けMPの底が見えない以上、ほぼ無限ループに近い。

何回か同じ事を繰り返してみたが、根本的な解決には至らない。

ミクとスナツチも本体を攻撃してくれているが影響を与える事はできていない。

「シル、敵の本体に攻撃をかけてくれ。」

「かしこまりました。消えてなくなりなさい。『神の雷撃』」

いつもの爆音と共に偽クヌムを雷の一撃が襲ったが、消滅には至っていない。

さすがは神もどき。普通のモンスターと強度が違うらしい。

「ルシエも本体を狙ってくれ。ヒカリン『ファイアボルト』でこちらの援護をお願い。」

偽クヌムをルシエにも攻撃させることにして、手薄になったこちらをヒカリンにサポートしてもらうことにしたが、数が多く厳しいので効果は薄いが、左手には魔核銃を携え手数を補って戦う。

苦戦しながらも土人間を凌いでいるとクヌムの方で爆音が響き閃光と炎が見えた。

どうやらシルとルシエでタイミングを合わせて同時攻撃を仕掛けた

ようだ。

さすがに今度の攻撃には耐えられなかったようで、体が半分吹き飛んでいるものかろうじて動いている。土人間も消滅しなかったの
で、俺とあいりさんとベルリアで頑張つて消滅させた。

死にかけのクヌムにはシルが再び攻撃を仕掛けて完全に消失に至つ
た。

無事に勝利することができたもののやっぱりドロップは何も無く、
結果として偽クヌムを倒したのはシルとルシエになってしまった。
全員が無傷で勝利したので良いのは良いが、このダンジョンのモン
スターはやはりかなり手強い。

今までに3体出て来たがいずれも古代エジプトの神を模倣したモン
スターだったので、この後も同種のモンスターの出現が予想される
が、それぞれの個体が全く違う能力を発揮してくるのでかなり苦戦
しそうだ。

あとのぐらいでエリアボスまで辿りつくのかわからないが、隠し
ダンジョンはそれほど広く無いはずなのでこのまま進めばそれほど
遠くない段階で出会うだろう。

今の段階でも何体か思いつくが、今対峙していた相手を考えると、
どこまで安全マージンを取れるか不安が募る。

「ベルリア、この後の戦闘は、俺とお前で極力前で敵を倒すぞ。頼
んだぞ。」

「マイロードお任せください。精一杯期待に応えます。」

第190話 トラップ

俺は今11階層の隠しダンジョンで探索を続けている。

苦戦しながらもセクメト達を撃破して進んでいるが、隠しダンジョンなのでそれ程広いとは思えない。もう少しでエリアボスまで到達するのではないだろうか。

「みんな、なんとなくなんだけど、もうちょっとでボスのところまでつく気がするんだよ。気を抜かずに行こうか。多分ボスは古代エジプトの上位神もどきだと思っから十分に気をつけて行こう。」

それからしばらく進んでいくと先頭を歩いていたベルリアが剣を一閃する。

一瞬何が起こったのかわからなかったが、細い串のようなものが地面に落ちているのが見て取れた。

「罠か。ベルリア大丈夫か？」

「問題ありませんが、複数一斉に襲って来た場合は完全には対応しきれませんので皆様も注意してください。」

今まで順調に来ていたので罠の意識が薄れていたが、隠しダンジョンだけあってしっかりと罠も張られているらしい。

「みんな、ベルリアからちょっと離れて歩こう。この細さの串の罠に対応できると思えないから。」

今回は運良くベルリアが防いでくれたが、他のメンバーで対応でき

るのはシルぐらいだろうから、念のためにベルリアから少し距離をとって歩いて行く。

また暫く歩いているとベルリアが剣を一閃した直後に俺の太腿と胸部に鋭い痛みが走った。

「うっ。」

見るまでも無く細い串状のものが足下に2本落ちており、胸部分のマントは小さな穴が空いている。
すぐさま後ろを向いて

「みんな畏だ！大丈夫か？」

確認を試みるがどうやら命中したのは俺だけらしい。もともと2本だけだったのか、他は命中しなかったのかはわからないがとりあえず、俺以外が無傷でよかった。

「マイロード大丈夫ですか。」

「いや、大丈夫じゃない。『ダークキュア』を頼む。」

ベルリアから治療を受けて全快したので進み出すが、すぐに俺の視界が一気に下がった。

歩いていた床が突然抜けてしまったので咄嗟に残った床の縁にしがみついたが、足裏に激痛が走る。

「痛っー！」

慌てて下を見ると剣山のようなものが足下に伸びて来ており辛うじて足裏の辺りで止まっている。

「やばい。やばい。みんな助けてくれ。引き上げて。やばい。急いで。ハリー。」

少しパニック気味になりながら騒いでいると、他のメンバーが急いで引き上げてくれたので慌てて靴裏を見ると穴が無数に空いて血が流れている。

もちろん痛いがそれよりも、もう少し下まで落ちていたと思うと血の気が引いてしまった。

「マイロード大丈夫ですか？」

「いや、全然大丈夫じゃない。『ダークキュア』を頼む。」

再度治療してもらったが、もちろん靴底の穴が塞がることはなかった。多少なりともこの靴の底が俺を守ってくれたかと思うと感謝しても、し足りないが、次までには買い換えないと砂が底から侵入してきた機能を果たしそうにない。

しかし、なぜか先に歩いていたベルリアは穴に落ちず、2番目の俺が落ちた。

なぜだ・・・

まあ女性陣が落ちる事は想像したくないので、俺が落ちて事なきを得た？と思えば納得できる気がする。

しかし、今回はルシエに巻き込まれたわけでもないのに罨にかかってしまっている。

俺って何か罨にかかりやすい体質なのか？それとも末吉ってこんななののか？

「ご主人様大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫だよ。」

「自分で落ちたな。」

「ああ、自分で落ちたけどそれがどうかしたか？」

「いや、別にどうもしないけど自分で落ちたな。」

「そうだな。」

ルシエがちょっと嬉しそうに言ってくる。言いたい事はわかるが、畏にハマって死にかけて俺に対しての態度としてはどうなんだと言いたい。

気を取り直して歩き出すと

「ご主人様敵モンスターです。今度も3体です。気をつけてください。ベルリア見えますか？」

「はい。人型が3体です。トリ頭、犬頭と鼻の長い変な頭の3体です。」

第191話 3 偽神

俺は今11階層で古代神もどきと戦っている。

「ミク、あれって何の偽神？」

「多分 左からホルス、セト、アヌビスだと思う。」

「何となく聞いたことがある気がするな。」

「結構メジャーなんじゃないかと思うけど。だんだん有名な神になってきていると思う。」

「だんだんメジャーな神もどきになってきたみたいなので能力も高くなっているかもしれない。」

「あいつらがエリアボスかな。」

「いえ、多分次ぐらいじゃないかな。1番有名なのがないから。」

「ミク、相手の能力がわかる？」

「ホルスが月と太陽の目、セトが暴風と雷だったかな。アヌビスが死者を司るんだっと思ったと思う。」

説明を聞いてもホルスの月と太陽の目はよくわからないがアヌビスが1番やばそうだ。

「偽アヌビスを優先して倒そう。ベルリア、ルシエ、シルの3人で速攻でケリをつけてくれ。俺とミクとスナッチで偽セトを仕留める。偽ホルスは能力がよくわからないから、あいりさんが牽制しながらヒカリンがとにかく魔法で足止めしておいて。片付き次第合流するから。」

アヌビスの死者を司る能力は何となく悪魔には効かなさそうなのでベルリアとルシエに期待だ。

俺はセトに向かって剣撃を飛ばしたが、偽セトが何やらゴニョゴニョ言つと突風が巻き起こり、剣撃が打ち消されてしまった。

「一応『幻視の舞』を仕掛けてみて。」

ミクがスキルを発動するが変化がない。やはりこのエリアの偽神には効果がないらしい。

「ミクは魔核銃で援護を頼む。スナッチにも攻撃してもらってくれ。」

話している間にも偽セトがゴニョゴニョやったら雷撃が降ってきた。第6感とでも言うべき変な感じがして避けた瞬間地面が抉れてしまった。

シルの『神の雷撃』とは比べるべくもないが俺がくらくつと、どう考えても徒では済まない。

「ミクやばい、下がってくれ。」

俺は囷も兼ねてとにかく移動を続けながら、斬撃を飛ばし攻撃を繰り返してみるが、やはり風に防がれてダメージが届かない。

これやばい。攻撃の手段が無い。

他の2組に目をやるが、偽ホルスは、ミクが『アイスサークル』を連発してかろうじて留めている。

偽アヌビスはサーバント3体に攻撃を受けて、徐々に弱っているのが見て取れる。

アヌビス以外はこちらが劣勢なので、時間をかせぐしかない。

ミクに被害が及ばないように俺とスナッチで攻撃をかけながら逃げるしかない。

スナッチと連携が取ればいいのだが、残念ながら俺はカーバンクル語を話す事も理解することも出来ないし、俺のサーバントでは無いので俺の指示も聞いてくれるわけではないので今の段階ではおまけ程度に考えるしか無い。

時々『ヘツジホッグ』を発動しているが、暴風も完全には『ヘツジホッグ』を防ぐことが出来ないようで、何本かの針は本体に届いている。

全力で逃げているが、時々今までの所に雷が落ちてきているのでスピードを緩める事はできない。

まだか。まだなのか。

再度アヌビスの方に目をやると丁度シルが『神の雷撃』によって倒した瞬間だった。

これで助けが得られると思った瞬間、アヌビスが再度動き出してしまった。ほとんどゾンビ状態だが、これが死者を司ると言う能力なのかもしれない。

このままでは助けが来るまでにどれだけかかるかわからない。

ヒカリン達も早くしないと、いつガス欠になるかわからない。

やるしか無い。

全力で逃げながら俺の覚悟が決まった。

遠距離からの飛ぶ斬撃は無効化されてしまうのでやるなら近距離攻撃しか無い。

俺単体では正直厳しいのでミクとスナッチに助けてもらおうしか無い。

「ミク、俺が仕留めるから、スナッチに『ヘッジホッグ』を連発させてくれ。ミクも同時に連射してくれ。」

そう指示を出しながらスピードを緩めずに偽セトとの距離を微妙に詰めていった。

第192話 対セト戦

俺は今11階層の隠しダンジョンで逃げ回っている。

逃げ回っているが敵を仕留めるつもりで逃げ回っている。

スナッチが『ヘッジホッグ』を仕掛けて、ミクも魔核銃を連射してくれている。

その瞬間偽セトの意識はそちらに向いてスキルもスナッチ達の攻撃を防ぐために発動されているので、その隙を狙って一気に距離を詰めるが、1回の攻撃では詰め切れなかった。

かなり距離が詰まった分、偽セトからの攻撃の着弾時間も短くなってしまうので、雷攻撃をくらわないようにほぼ全速力で逃げ回ることになった。

息が苦しい。いくらレベル18まで上がったステータスとはいえ、全速力で走れる時間はそれほど長くはないが、立ち止まったらやられる。それだけは間違い無いので、悲鳴をあげる肺に鞭打ち走っている。

地上では体育の時間以外で走る事など皆無なので厳しい。

「ミクツ、やばい、もう一度頼むっ。」

呼吸を阻害しないよう最低限の意思伝達をしてから再度全力で逃げるが残された時間はそう長くない。

しかし間を置かずに再び『ヘッジホッグ』が発動し偽セトの意識が一瞬 逸れる。

これで決めるしか無い。

俺は全速力のまま最短距離で敵の後ろに回り込んで、そのまま踏み込みバルザードを敵の背中にねじ込んだ。

それと同時にバルザードに使用制限一杯まで破裂のイメージをのせ

て追撃をかけた。
どうだ？

「ボフウン」

やった。偽セトを倒すことに成功したが、休んでいる暇はない。ヒカリン達も完全に手詰まりになっているので、一刻も早く助けに行く必要がある。

焦りながらも体が悲鳴をあげているので、低級ポーションを取り出して一気に飲み干してからバルザードにも魔核を補充した。

体力の回復を感じながら偽ホルスに向かって駆け出して

「ミク、スナッチと一緒に援護してくれ。」

指示を出してバルザードの斬撃を氷漬けになっっている偽ホルスに放つが、その瞬間ホルスの月の目が光り、光った効果で攻撃が無効化されたのか何も起こらない。

どうやら月の目は攻撃無効化らしい。ただし『アイスサークル』は無効化できていないので全てに効果があるわけではなさそうだ。

それじゃあ太陽の目はなんだ？

そう思った瞬間太陽の目が光ったと思ったら肩口に激痛が走った。

「つつ痛い・・・」

一瞬の出来事に何が起こったのかわからなかったが、肩口に目をやるとマントが焦げ、カーボンナノチューブのスーツに焦げたような小さな穴が空いており、そこから血が流れている。

今まで、物理攻撃はことごとく跳ね返してきたカーボンナノチューブのスーツが突破されてしまった。

今までの経験からこのスーツには絶対の信頼を寄せていたのに、穴

が開いてしまっている。

正直かなりシヨックだった。

太陽の目から何かが出たのは間違いないが見えなかった。ただ太陽の目というぐらいだから、超高温の炎かレーザーのようなものを射出して俺の目では追い切れなかったのだと想像はできる。問題なのは、スーツを無効化されたという事は偽ホルスに俺の装備は全く防御的な意味を持たないという事を示している事だ。

「みんな近付くな。近付いたら危ない。」

俺も一旦体制を立て直すために全力で偽ホルスから遠ざかる。

あいりさんは今までこいつと戦っていた筈だが攻撃をくらった気配は無い。

俺と何が違うんだ？

やっぱり俺が未吉だからなのか？

俺にばかり攻撃が集中する特殊体質なのか？

一瞬バカな考えが頭をよぎったが普通に考えてそんな事はありえない。

素早く動くものに反応したのか？

とにかく、攻略方法を見つけないまま飛び込んでいく事は自殺行為なので遠距離攻撃を続けながら、様子を伺うことにした。

第192話 对七下戦(後書式)

第193話 単純な話

俺は今11階層で古代エジプト神もどきと戦っている。

「海斗、大丈夫か？何か攻撃を受けたように見えたが。」

「あいりさん、ちょっとやばいです。ナノカーボンのスーツが貫通してしまいました。何をくらったのかわからないんですが、とにかく痛いだけです。あいりさんは全く攻撃くらってなさそうですね。」

「ヒカリンが『アイスサークル』を絶えずかけてくれているから今のところ大丈夫だ。」

「いや、でもさっきも『アイスサークル』で氷漬けになってましたよね。」

「そうだな。どうしてかわからないな。海斗だけがターゲットなんだろうか。」

そんな筈はないが、このままではヒカリンが先にダウンしてしまう。

「ベルリア、こっちを手伝ってくれ。」

アヌビス戦ではあまり役に立ってなさそうなのでこちらを手伝ってもらうことにした。

「マイロード大丈夫ですか？」

「いや、だから毎回大丈夫じゃないって。治療を頼む。」

『ダークキュア』によって肩の痛みが取れてきたので、ベルリアに現状を話す。

「どう思っ？」

「マイロード単純な話ではないですか。」

「単純な話？あいらさんは大丈夫で俺だけ攻撃くらったんだぞ？」

「はい。月の目と太陽の目の効果範囲の問題ではないですか？」

「効果範囲？」

「恐らく月の目の効果範囲は敵本体全体をカバーしているのでしょう。ですのであいら様の攻撃が通じなかったのでしょうか。太陽の目は攻撃ですので恐らく、目のカバーしている範囲、片側半分しか攻撃できないのではないのでしょうか。本来であれば首を動かせば全方位攻撃が可能なのですが、氷漬けになっっているせいで首が動かせず片側にいる相手のみに攻撃しているのでしょうか。」

言われてみるとそんな気がしてきた。たしかにあいらさんと俺は反対方向から攻めようとしていた気がする。ベルリアやるな。

「じゃあ、試しに月の目の方から攻撃してみてくださいるか。」

「かしこまりました。」

ずるい気もするが、防御無効の状態の今、確信のない状態でもう一

度突っ込む勇気がない。

ベルリアに全てを任せて様子を伺ってみるが、ベルリアはスルスル近付いて行って敵に斬りつけた。

ただ、月の目が光ってベルリアの攻撃がほとんど効果を発揮していないように見える。

どうやらベルリアの仮説は正しかったようで攻撃を受ける事なく偽ホルスまで辿り着くことができた。

俺もベルリアの通ったルートを辿って近付くことが出来たが、念のため後方に回り込んで、バルザードを突き入れる。

触れる瞬間に大きな抵抗感を感じたがそのまま押し込むと無事突き刺さすことが出来た。

突き刺した瞬間偽セト戦の時と同様に破裂のイメージをのせる。

「ボフウン」

かなり苦戦したが、なんとか2体目も倒すことが出来た。

偽アヌビスの方を見ると、シルとルシエのコンボスキルを受けて木っ端微塵となり、流石に再生出来なかったようそのまま消失してしまった。

それにしてもサーバント3体で臨んでこれだけ時間がかかってしまった事を考えると、1番手ごわいのは偽アヌビスだったのかもしれない。

いずれにしても3体ともかなりの強敵だったのは間違いないがやっぱりドロップアイテムは何も無い。

流石にエリアボスまで何も無いとは思えないが、今までの分も上乗せで期待したい。

「海斗、多分次がエリアボスなんじゃ無いか。だんだんメジャーな神もときが出てきているからそろそろ1番有名な神もときが出る頃だと思う。」

「ミク、事前に少しでも対策しておきたいから、出てきそうな奴の特徴と能力を教えておいてもらえるかな。」

それからパーティーメンバー全員で情報を共有して作戦を練ってから先に進む事にした。

第194話 エリアボス戦

俺は今11階層で最後の戦いを迎えようとしている。

目の前に今までとは違う光景、石造りの大きな扉が出現している。

「ご主人様、間違いありません。中から3体の気配を感じます。先程までのモンスターよりも強力な力を感じます。その中の1体は特に大きな力があるようです。」

3体という事はミクの予想通りのようだ。

「みんな覚悟はいいね。打ち合わせ通り行くよ。」

俺はパーティメンバーの顔を見回してから、石扉に手をかけた。

「ん!？」

形状的に押し扉だと思いが動かない。

再び全力で押し込んでみるが全く動かない。

スライドする可能性も考えて横に向けて力を加えてみたがやっぱり動かない。

「海斗、どうしたの?進まないの?」

「いや、それが動かない。」

「えっ?」

「石だからか全く動きません。ベルリア手伝わってくれるか。」

「かしこまりました。」

「んんっ！」

今度はベルリアと力を合わせて押し込んでみるが動かない。

「あー。申し訳ないけど、全員で押ししてもらっていいかな。」

再度メンバー全員で押ししてみると今度はわずかに動いたが、全く開くところまではいかない。

純粹に重すぎるだけのようだ。

これを考えた奴は何を考えているのかわからないが重すぎて扉として機能していない。

人間だけだと数十人で押し込むしか無いのでは無いだろうか。明らかに攻略難度が高すぎる。

「ご主人様、お任せください。」

まあ、それしか無いよな。

「我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

「ズガガガン」

爆音と粉塵を巻き上げながら石扉の片方が吹き飛んだ。

「みんな行くよ。」

出足でつまずいてちよつと締まらないなと思いつながらも打ち合わせ通りベルリアを先頭に扉の中に駆け込んで臨戦態勢を整える。

目の前には予想通りの特徴を備えたラー、オシリス、イシスを模倣した3体が玉座と思しき椅子に座っていた。

俺達のとつた作戦はとにかく数的優位を最大限に生かして速攻で敵の数を減らす事。

ラーとオシリスは死を司っている為アヌビス同様すぐには倒せない可能性が高いので俺達のターゲットはイシス集中だ。

先程の戦いでも結構一杯一杯だったので打ち合わせ通りシルに『戦乙女の歌』を発動してもらおう。

ラーとオシリスをミク、スナッチ、ヒカリン、ベルリアに足止めを頼み、俺とあいりさんとルシエでイシスを撃破する。

『戦乙女の歌』の効果で体が軽い。注意しながらも時間をかけるわけにはいけないので、速攻で向かっていくが、あいりさんも俺と並走する。

ルシエが俺達の移動に合わせて『破滅の獄炎』を発動するが、明らかに火力が上昇している。

これで仕留められたら言うこと無しだと思ったが獄炎がイシスに襲いかかる瞬間イシスの周りに氷の壁が生じて炎を阻んでいる。

氷系の能力を有しているのは分かったが、俺達の足元から植物の蔓のようなものが次々に発生して足に絡みついてこようとす。

上昇したステータスの恩恵で素早くステップを踏んで移動を繰り返すが、流石エリアボスの一角だけあって2属性以上のスキルが確定した。

止まると蔓が絡まって捕まってしまうので動き続けながらも、接近を試みる。

あいりさんが先に射程に入りなぎなたの一撃を見舞い、すぐに氷の防御壁に阻まれるが『斬鉄撃』効果で氷の壁を突破する。

その瞬間を見計らって俺もバルザードの斬撃を飛ばすが、今度は植

物の繭に攻撃を阻まれてしまった。

どうやら2属性での防御が可能なようなので恐らく攻撃も同じくだろう。

とにかく他の2体の足止めできる時間にも限りがあるので、速攻しかない。

俺はそのまま、偽イシスの正面まで突進していった。

第194話 エリアボス戦（後書き）

第195話 イシス戦

俺は今隠しダンジョンでエリアボスと戦っている。

そういえばエリアボスって1体を指すのだろうか。今俺たちは3体相手にしているがこれは3体でエリアボスなんだろうか？それとも1体がボスで2体はおまけなんだろうか。

緊迫した戦闘の中で緊張しすぎたのか、ふとおかしな事が頭をよぎってしまった。

目の前に偽イシスがいたのでバルザードを突き立てようとするが植物が邪魔で届かない。

偽イシスもドーンと構えて動かないでくれると助かるが当然普通に動き回るので合わせて俺も動き回る。

「ルシエ先に攻撃してくれ。あいりさんと俺で同時に攻撃をかけましょう。」

ルシエの『破滅の獄炎』が炸裂した瞬間、俺とあいりさんが踏み込んで斬りつける。

あいりさんの一撃が植物をなぎ倒し、隙間を狙って俺がバルザードを突き入れるが敵本体の防御力のせいか刃が通らない。再度攻撃をかけようとするが、既に植物の繭が復活して出て来ない。

目線でルシエとあいりさんにコンタクトを取り、再度同じ攻撃を仕掛ける。

今度は隙間に差し込む瞬間に刺突のイメージを重ねて突き入れると手応えがあった。

そのまま破裂のイメージを連発する。

「ボフウン」

バルザードが目一杯威力を發揮してイシスの腹部が半分以上吹き飛んだが、まだ動いており、巨大な氷の塊が俺に向かって落ちてこようとしていたので全力で回避する。

その瞬間横からあいりさんが薙刀を一閃してイシスの胴体は完全に切断されて消失した。

1体を撃破したので残りは2体だが厄介な2体だ。

どちらも死に関係する能力を持ち合わせていると思われるので、直ぐには撃破できないだろう。

「ルシエ、あいりさん、フォローに入るよ。」

ラーはベルリアが対峙しており残りの2人と1体でオシリスを抑えている。

ベルリアを見ると普段よりも動きがよく見えるので少しは『戦乙女の歌』の恩恵を受けているのかもしれない。

よかったなベルリア。

ただ1人で抑えるのはかなり困難のようで結構手傷を負っている。

多分ラーが1番強そうなので後回しにする。

あいりさんにベルリアのサポートを頼んで俺とルシエは偽オシリスの所に向かう。

オシリスもヒカリンが『アイスサークル』で抑えているが、やはり効果の持続時間が短いようで連発している。

オシリスに向かう途中で『戦乙女の歌』の効果が切れたので再度発動してもらいオシリスに攻撃を仕掛ける。

氷漬けになった所をそのままバルザードでぶった斬るが、斬ったそばからオシリスの体がくつついていく。

ぶった斬られて怒ったのか、氷漬けのくせにスキルを発動したようで漆黒のスケルトンが10体現れた。

普通のスケルトンならそれほど問題にならないがこいつらは黒い。

何か違うかもしれないと思い慎重に対峙するが、黒いスケルトンがいきなりファイアボールを打ち出して来た。しかも10体同時にだ。

俺は10方向からの攻撃を全力で回避する。

「ルシエやばい。一気に焼き払ってくれ。」

ルシエにお願いして獄炎で焼き払って貰うが、ブーストされた獄炎でも1発で3体が限界のようなので、俺とあいりさんも加勢してどうにか10体始末するが、始末した瞬間新たに10体の黒いスケルトンが現れた。

「まじか・・・」

クヌムの時と同様に本体を潰さないといけないらしい。

オシリスを倒すには俺では火力が足りない。

恐らくルシエでないと無理だが、ルシエ1人でも厳しいだろう。シルと同時に攻撃しか無い。

ただ、シルが攻撃するという事は『戦乙女の歌』のブーストが無くなるという事だ。

それはオシリスを倒す迄の間、ブーストなしの状態で俺1人で10体の黒いスケルトンを相手にするという事を意味している。

正直かなり厳しい。

でもやるしかない。やってやる。

第196話 オシリス戦

俺は今偽オシリスと漆黒のスケルトン10体を相手に戦っている。

「シル、ルシエと一緒にオシリスを叩け。ミクとスナッチはベルリア達をフォローしてやってくれ！」

『戦乙女の歌』のブーストが無くなれば俺だけではなく、ベルリアにとっても多少なりとも影響が出るはずだ。あいりさんがフォローしているとはいえ、1番強そうな相手に戦力低下は致命的に思えたのでミク達に併せてフォローを頼む。

あとは、俺だ。俺が時間を稼ぐしかない。

『戦乙女の歌』の効果が切れたのを感じた瞬間

「ウオオオオオオオオオオー！！」

腹の底から声を出す事でアドレナリンを極限まで放出して自分の気持ちと心を奮い立たせる。

バルザードの使用制限があり他からの助けが望めない以上、俺に出る戦法は限られている。

10回の攻撃で10体を倒す事は、ほぼ不可能なので頭の中で完全に割り切った。

最低限の手数で可能な限り倒してあとは敵を引き連れて逃げて時間を稼ぐ。

今度も10体がファイアボールをぶつ放して来たので、とにかく避けることに集中するが、避けた瞬間1番手前のスケルトンに向かつて理力の手袋の力で足首を掴んで思いつき引き倒す。

倒れたスケルトンの頭部をバルザードで突き刺すと同時に破壊する。

まずは1体。

斬撃を飛ばす事も考えたが、ファイアボールで相殺される可能性があり、残弾の問題で直接攻撃を最優先にする。

再度9体のスケルトンがファイアボールを仕掛けてきたので再び避ける。

「ドンッ！」

「グウウウウウ。」

視界の外から来た1発が命中してしまった。熱いし痛い、スーツとマントが守ってくれたので死んではない。

一瞬怯んでしまったが、先程と同じ要領で1体を引き倒して撃破する。

残り8体。

警戒しながら低級ポジションを取り出して一気に飲み込む。

やはり効果は絶大で痛みと疲労が一気に取れた。

2体は減ったものの、複数の同時攻撃をいつまでも交わし（躲し）切れるとは思えない。

早々に当初の計画は、破綻してしまった。

今度は攻撃される前に素早く1体のスケルトンの足を掴んで、引き倒している間に斬撃を飛ばして隣のスケルトンを攻撃する。

残念ながら見切られたようでファイアボールで相殺されたので間髪入れずに、2撃目の斬撃を飛ばして1体を撃破して、そのままの勢いで倒れているスケルトンの頭にバルザードを突き立てる。

これで4体仕留めたと思った瞬間に、また攻撃をくらってしまった。ファイアボールにはかり気を取られていたせいで、注意が疎かになっていたスケルトンが持っている剣での直接攻撃をくらってしまった。

仕方がない事だが、敵の数が多すぎるとファイアボールでの遠距

離攻撃に集中しすぎていて直接攻撃への注意が甘かった。

「うっうっうっ。」

「海斗さん大丈夫ですか？ 援護します。」

ヒカリンが『アイスサークル』の合間をぬって、魔核銃で牽制を入れてくれる。

少しだけ間が空いたので、体勢を立て直して、斬りつけてきたスケルトンを避けながら斬り伏せる。

これで5体。

オシリスの方に目をやると、シルとルシエが連続攻撃を仕掛けている。ヒカリンが足止めした状態で攻撃を繰り返しているの、一方的な戦いになっている。このままいけばもう少しで撃破できそうな気がする。

よそ見をしている間にファイアボールが5個向かってきたので必死で避けたが、避け切れないものがあつたので咄嗟に斬撃を飛ばして相殺して回避した。

これで俺に残された残弾はあと3発だが残された黒いスケルトンは5体。

正直かなり分が悪い戦いだがやるしか無い。

いざとなったら徹底的に逃げてやる。絶対に捕まってやらない。死ぬ気で逃げてやる。

第196話 オシリス戦（後書き）

第197話 思い通りには

俺は今隠しダンジョンで漆黒のスケルトン5体を相手に戦っている。半分に減ったとは言え、5体もいるので気をぬく事はできない上に、俺も手傷を負っている。

まだこの戦いを終えていないので低級ポーションは極力控えたい。対峙している間にも5体のスケルトンがそれぞれにファイアボールを放ってくる。

なんとか避けてはいるが、敵も俺の戦闘パターンを学習したようで距離を詰めずにそれぞれ時間差で撃ってくるので、徐々に追い詰められてきた。

シル達の方に目をやるが残念ながらまだのようだ。

意を決してバルザードの斬撃を一番近くのスケルトンに向かって飛ばすが、一撃目が相殺されるのを見越して時間差でもう一撃放っておいたので、無事に倒す事に成功した。

あと1発。

流石に今の状況で次の敵を1発のみで倒す事は難しいので、左手に魔核銃を携え、連射する。

スケルトンに対して魔核銃の効果は薄いだが、連射により注意を引いたところを、一気に距離を詰めて、バルザードで仕留めた。

「ほらっ、こっちだ。来い。お前らなんか相手にならないぞ！」

正直スケルトンに言葉が意味を成すのかはわからないが、僅かでも効果がある事を期待して挑発する。

俺にはもう魔核銃しかないがブラフでバルザードも構えながら、少しずつ後退する。

スケルトンも警戒してそこまで距離を詰めて来ない。

どうかこのまま本体を倒すまで時間が稼げればいいと思った瞬間、2体のスケルトンがシル達の方を目指して動き始めた。

思った様にいかないもんだなと、どこか冷静に考えながら、向きを変えたスケルトンに向かって理力の手袋による、不可視のパンチ攻撃と魔核銃連射により再び注意をこちらに向ける。

下手に逃げたり手を止めると、シル達の方に行ってしまう。とにかく弾が尽きるまで攻撃し続けるしかない。

無駄撃ちに近いのはわかっているが、注意を引くためにとにかく撃ち続けながら、シル達から遠ざかっていく。

それにつられて3体のスケルトンも俺の方に向かってくるが、ファイアボールによる攻撃は継続している。

「シル、ルシエ、まだかっ？そろそろやばい。急いでくれ！」

「任せてください。これで終わりにします。『神の雷撃』」

「余裕だつて。これで終わりだ。『破滅の獄炎』」

俺の言葉に呼応してシルとルシエが雷炎のコンボでラッシュをかけた遂にオシリスを撃破した。

「シル、ルシエ、俺もう弾切れだからこっちも頼む。」

「かしこまりました。ご主人様は下がっておいてください。」

「弾切れつてダサイな。問題ない。わたしに任せとけて。」

2人のありがたいお言葉に、俺は急いで戦線を離脱してバルザードに魔核を補充するが、その間にスケルトン3体はシルとルシエの攻撃によって消失してしまった。

流石、半神と悪魔、俺は死ぬ気で頑張つて、7体倒したが、彼女達にかかると3体が一瞬だった。

わかつてはいるが、彼女達と自分の距離を再認識してしまう。落ち込んでいる暇など無いので、ラーの方に目をやると、あいりさんとベルリアが前線に立ち、ミクとスナッチが後方から攻め立てているのが見えたが、よく見るとベルリアの左腕が無い。

「シル、ルシエ、ヒカリン、ラーを速攻で撃破するぞ。」

そのまま俺はベルリアの位置まで走って行って、スイッチする。

「ベルリア自分に『ダークキュア』をかける。俺が時間を稼ぐ。」

ベルリアにこれほどの手傷を負わせる相手に俺がやりあえる自信はないが、時間ぐらいはかせいでみせる。

初見殺しでも言うべき理力の手袋の力で足首を掴んで一気に引き倒す。

引き倒したところにバルザードの斬撃を目一杯浴びせかけてやった。どうだ？仕留めたか？

完全に俺のパターンにはめてやったぞ。

第198話 隼と羊

俺は今隠しダンジョンの中でエリアボスと戦っている。

まあ、あまり期待はしていなかった。ラーはしっかりと立ち上がってきてしまったが最低限の時間は稼げた。

「マイロードありがとうございます。」

ベルリアの方を見ると切断されていた左腕がしっかりと元に戻っていた。以前、腹に開いた穴が塞がったので驚きは無いが『ダークキユア』すごいな。

「話している暇は無いぞ。一気に全員でかかるぞ。」

強いとはいえ、ベルリアが凌げていた相手なので全員でかかれば問題なく倒せるだろう。

「ヒカリン、足止めを頼んだ。シル、ルシエもタイミングを合わせて攻撃をかけてくれ。」

『アイスサークル』

偽ラーが氷漬けになった瞬間、全員で総攻撃をかけるが、偽ラーの体全体が炎に包まれたと思うと氷が一気に溶け出した。

それでも僅かに拘束できた時間で攻撃できたものの、炎が去ると無傷の状態の敵が現れた。

「ヒカリン、もう一度頼む。」

短時間でも拘束できるのであればその間に倒してしまえばいいと考え、指示を出すがしばらく待っても氷は出現しなかった。

「ヒカリン？」

「海斗さん。すみません。魔力切れです。これ以上魔法を使えませ
ん。」

よく考えると、隠しダンジョンに入ってからサーバントを除くと1番活躍していたのはヒカリンだ。『アイスサークル』を連発していたので魔力切れを起こすのも無理はない。むしろその可能性を頭から除外していた俺が悪い。

「ヒカリン、すまない。低級ポーションを飲んで、休んでおいでく
れ。」

『アイスサークル』が無くて他メンバーで十分いける。

「ベルリア、前衛頼む。俺もフォローするから。」

ベルリアと俺とあいりさんで偽ラーを3方から攻撃をするが、ラーの目が光ったと思うとレーザー光線が飛び出した。

なんだこれ。超人アニメかロボットアニメの世界だな。

幸い命中はしなかったが、ベルリアの腕を切断したのもこの攻撃だろう。

「ウォーターボール」

効果の程は分からないが俺はシールド状の氷をラーの顔前に発動さ

せた。

氷で目から発射されるレーザーを反射してくれないかと淡い期待を抱いていたが、再び目が光ってレーザーが発動した瞬間、俺の薄っぺらい氷の盾は蒸散して跡形も無くなってしまった・・・ある程度予想できたことではあるが、ちょっと切ない。気を取り直して、目を狙ってバルザードの斬撃を連発する。それに呼応してシルとルシエもスキルを発動して攻撃をかける。まだ、倒せてはいないが効果は出ている。このまま押せばいける。

「ミク、スナッチにも頭部を狙わせてくれ。」

メンバー全員の意思統一として、こいつの1番のポイントは目なのでとにかく、それを発動できないように頭部を集中的に狙う事にした。

俺もバルザードの攻撃を相手の頭部に集中しているので、レーザーは発動していない。

シルとルシエの攻撃も続いており、かなり有効打となっている。相手の意識が頭部に集中したのを見計らってあいりさんが足元を薙ぎ払う。

「うまいっ!」

思わず声が出てしまったが、さすがあいりさん。完全に虚をついて『斬鉄撃』で偽ラーの足に深手を負わせた。

完全にいけると思った瞬間、ラーの全身から炎が噴き出して、収まるとなんと傷が癒えていた。

こいつ回復スキル持ちか。

そして何故かラーの鳥頭が羊頭に変化していた。

なんだこれ。マジックか？

「海斗、ラーは2面性があるのよ。太陽の部分が隼、闇の部分が羊で表されるの。羊は死の世界を体現しているの。」

死の世界・・・

また、スケルトンか何かを出すのか？それともゾンビ化でもするの
か？

いずれにしても、回復スキルを持っている以上、今のままでは勝て
ない。

もつと強力な一撃を加えないと消滅させることはできないだろう。

こうなったらあれしか無いのか。

使いたく無いな。

使わずになんとかならないだろうか。

無理だろうな・・・

第199話 ラーの能力

俺は今隠しダンジョンでエリアボスと思われる敵と戦っている。

炎により回復した上で羊頭に変身してしまったラーを前に警戒を強めた。

鳥頭から羊頭に変化したのが羊頭からもレーザーが発射されるのか？

「ヴェーイーエエイー！！」

突然ラーが大きな声で鳴き出したのでパーティメンバー全員がビクツとしてしまった。

なんだ？気合いを入れたのか？

次の瞬間、目を疑ってしまった。

先程倒した、イシスとオシリスが再生していく。

嘘だろ。消滅したモンスターの再生。完全な反則技。本物のチートだよ。

見る見るうちにイシスとオシリスは完全な形で復活してしまった。

「海斗、まずく無いか。どうする？」

「とにかくラーを先に倒すしかありません。火力的に今のままでは難しいのでルシエにやらせますが、俺は動けなくなるので、イシスとオシリスはベルリアとあいりさんで足止めを頼みます。スナッチとミクも出来るだけフォローしてくれ。シルはどちらにでも行けるように待機。」

俺は覚悟を決めて

「ルシエ『暴食の美姫』をやってくれ。」

「ふふつ。久々だな。お前大丈夫か？」

「笑いながら言われても全く説得力がないぞ。やってくれ。」

「ふふつ。それじゃあ『暴食の美姫』」

「ぐぐつぐつ・・・」

来た。この感じ。きつい・・・

一度経験した事があるのである程度の心構えは出来ていたもの、きつい。

「る、ルシエ。はやく、はやくしてくれ。うつつ。」

俺は目の前の絶世の美女と化したルシエにお願いする。

それにしても俺の新しいスキル苦痛耐性（微）は何か意味があるのか？全く仕事をしてきている感じがしない。

「それじゃあ、とりあえずさっさと片付けるかな。『爆滅の流星雨』」

来た。

「ズドドドドウウーン」

久々の異常な熱量の大技だ。

どうだ？仕留めたか？

這いつくばりながら、ラーの方を見ているが、ラーから炎が吹き上

がっている。

「ほう。頑丈だな。いや再生したのか？」

ラーを見ると炎の中で無傷の状態で健在だった。

それにルシエ、何が「ほう」だ。余裕ぶってる場合じゃない。

「う、ウブツ。」

「あとのぐらい大丈夫なんだ？海斗。」

やっぱりこいつ、体と一緒に態度もでかくなってる。だから嫌だったんだよ。

「HPが増えたからな。あと90秒ぐらいはいける。でも大丈夫なわけじゃない。死にそうに気持ち悪い。」

相変わらず2秒にHP1が減り続けている。HPが増えた事で大凡、2分間はいけるようになったがこんな気持ち悪い状態を2分間続ける事が厳しい。

「しょうがないな。私のおかげだからな。あとで何かサービスしてくれよ。」

「わ、わかったから、ふう、ふう、無駄口たたくな。はやくしてくれ。」

「くたばれ羊の偽物野郎。『神滅の風塵』」

ベルリアを葬り去ったスキルだ。

猛烈な暴風が偽ラーに集約していく。

圧倒的な力に流石の偽ラーもそのまま完全に消え去ったようだ。

「よ、よくやった。はやく次に行ってくれ。」

「まあ、親玉倒したんだから焦らなくて大丈夫だって。ゆっくり行こうぜ。」

出たよ。こいつわざとだ。また俺が苦しむのを見て楽しむつもりだ。

「る、ルシエ。あとでお仕置きするぞ。おしりペンペンするぞ。」

「ふふっ、冗談だって。さっさとやるよ。」

絶世の美女と化したルシエにいじられるのは一部のそう言う趣味を持った人にはたまらないかもしれないが、どノーマルの俺には全く嬉しくない。

むしろこの風貌で優しくしてもらえれば俺のモチベーションも上がるのに、まさに小悪魔という感じのルシエは、極限の状態では、本当に扱いに困ってしまう。

世の中思うようにはうまくいかないものだと思改めて感じてしまう。

第200話 らららりー

俺は今苦しんでいる。

「うつつ。ルシエ、早く他も倒してくれ。うえつぶ。」

「しょうがないな。それじゃあ頼まれてあげようかな。ふふっ。」

ルシエに焦らされるこの時間が辛い。生命を吸い取られていつている感覚がきつい。

ルシエが攻撃に移ろうとした瞬間、ベルリアが抑えていたオシリスが発光したと思ったら、なんと消失したはずのラーが復活してしまった。

よく見ると、そのままではなく干涸びた感じがあるのでミイラ化して復活したのか？

何れにしても、ラーとオシリスそれぞれが復活スキルを持っていたようだ。

これって、まさか無限ループなのでは・・・

「ルシエ・・・。遊んでる場合じゃないぞ。俺死んじやう。」

何れにしても、この2体をほぼ同時に倒さなければいけないが、ルシエはともかく先程の戦いからもシルだけでは1体を瞬間的に倒す事は難しい。

どうすればいい。こうしている間にも俺の生命が減っていく。頭が正常に回転してくれない。

「る、ルシエ、さっきの『神滅の風塵』って連発できるのか？」

「まあ出来ない事はないけど、今は完全じゃないからな。ちょっと難しいかもな。」

出来ないのか・・・

どうする？オシリスの方はシルに賭けるか？

「シル、『戦乙女の歌』を発動してくれ。ルシエ、シルの力を借りて出来ないか？」

「やった事がないからわからないな。まあやってみるけど。」

「それじゃあ、ルシエ行きますよ。『戦乙女の歌』」

頭の中にシルの歌声が微かに流れて『戦乙女の歌』の発動を知らせるが、俺の状態は何一つ改善していない。残念ながら『戦乙女の歌』は生命を吸い取られている状況ではほとんど意味をなさならしい。

「くたばれ死に損ない。二度と戻ってくるな。『神滅の風塵』」

再び、ミイラ化したラーに向かって急激に風が集中していく。

「お前も冥府に戻れ。『神滅の風塵』」

間髪入れずに今度はオシリスに向かって風の暴力が集約されていく。やればできるじゃないか。どうやら『戦乙女の歌』の効果があったようで、連続してスキル使用が可能だったようだ。ミイラ化したラーもオシリスも、ほぼ同時に消滅した。あとはイシスだけだ。

「ルシエ、はやくしてくれ。もうだめだ。もう限界だ。」

「せつかく私が活躍したんだから余韻に浸ろうぜ。」

「そんなもん浸るわけないだろ。はやくしろ。まだ残ってるんだぞ！」

やばい、無駄なお喋りの所為で本当に限界が近づいてたので、慌てて低級ポジションを一気に叩る。これであと2分以上は死なない。

「それじゃあ、そろそろやるけど、終わったら何してくれるんだ？」

「何ってなんだよ。とにかく急いでくれ。」

「一緒にシャワー。」

「は！？無理無理。絶対無理。」

「それじゃあ、このままもうちよっと休憩しちゃおうかな。」

「いや、それは困るけど、絶対無理。うぶっ。」

こいつはこんな時に何を言いだすんだ。それにしても気持ち悪すぎて吐きそうだ。

「それじゃあ、おまけしてお姫様抱っこしてくれよ。」

「お姫様抱っこ？」

「ちょっと眠くなってきたけど。」

「わ、わかった。終わったらお姫様抱っこな。してやるよ。」

「してやる?。」

「くっ。さ、させてください。」

「そんなに頼まれたらしょうがないな。ふふふっ。」

俺の返事に納得したのかそのままイシスの方に向かって行って

「お前で最後だ。私のお姫様抱っこのために消えてなくなれ。『神滅の風塵』」

イシスに向かって再度風の力が急激に集まって行き、そのままイシスは消滅してしまった。

「ルシエ姫様。さすがです。素晴らしい。一生お仕えいたします。」

おいおい、ベルリアが恍惚の表情で変なこと言ってるぞ。仕える相手はルシエじゃなくて俺だろ。

しばらく様子を伺ったが、復活する気配はない。

とりあえずエリアボス3体の撃破に成功したようだ。とにかくよかった。

第201話 生命の駆け引き

俺は遂にエリアボスを倒した。

「ルシエ、よくやった。もういいぞ。はやく『暴食の美姫』を解除してくれ。」

「もっと褒めてくれていいんだぞ。」

「あ、ああ、すごかったな。うつつ。はやくしてくれ。」

「もっといっぱい褒めてくれていいんだぞ。」

「なっ……。すばらしい。最高だった。エクセレント……。うえっぶ。」

「まあ、そんなところかな。それで約束だけど、わかってるよな。」

「わかってるよ。お姫様抱っこだろ。はやくしてくれ。」

この無駄話の間にもどんどんHPが減っていく。もう3分以上、強烈な吐き気と戦っている。そろそろ解放されないと気を失ってしまいきそうだ。

「他にも何かないのか？」

「何かってなんだよ。」

「プレゼントとか、プレゼントとか。」

「くっ……。何が欲しいんだ。」

「いっぱい魔核とか、たっぷりの魔核とか。ふふっ。」

「わかった。わかったよ。多めに渡すって。だからはやくしてくれ。」

「もう、しょうがないな。次が早く来るといいな。」

そう言うと同時にルシエは元の姿に戻っていったが次は無いほうがいいに決まっている。

「はあ、はあ、はあ。」

何とか今回も死なずに済んだが、やはり『暴食の美姫』はリスクが高すぎる。

この小悪魔に俺の命運が握られてしまう。

恐らく本気で俺の生命を奪い取ってしまう気は無いと思う。無いと思うがそれを試してみるにはリスクが高すぎる。俺の生命は一つしか無いので賭けの対象になり得ない。

俺は最後の低級ポーションを飲み干してようやく落ち着くことができた。

腰を下ろしてゆっくりしようとするベルリアの体が全体に発光した。

どうやらこの戦いでレベルアップを果たしたようだ。

気になったのですぐにベルリアのステータスを確認する。

種別 士爵級悪魔

NAME ベルリア

Lv 1 2

HP 70 78

MP 85 89

BP 90 99

スキル ダークキュア

アクセルブースト NEW

装備 魔鎧 シャウド

バスタードソード

シルとルシェのレベルアップを見ているせいか、数値の上昇は少々物足りない気がする。

ただし、新しいスキルが発現している。

アクセルブースト・・・物理攻撃時に魔力をのせる事により威力を増加させる事が出来る。

このスキルはベルリアにはかなり良い気がする。
今までベルリアには剣による通常攻撃しかなかったので、威力不足の事も多かった。それがこのスキルを使えば解消するのでは無いだろうか。ベルリアは元々MPが多いので魔力不足になる事もないだろう。

「ベルリア、良かったな。レベルアップと同時にスキルが発現したようだな。しかもベルリアにはぴったりのスキルっぽいな。」

「マイロードありがとうございます。これでもう私が他のモンスターに遅れをとることは有り得ません。これまで以上に頑張ります。」

ルシェがうるさいので、先に魔核をたっぷり渡しておいたが、不公

平にならない様、シルとベルリアにも多めに渡しておいたが、結構消費してしまったのでまた来週は1階層で魔核集めに没頭しなければならぬ。

その後、少し落ち着いてから3体の敵が消滅した場所をじっくりと見回すと、3つのドロップアイテムがしっかり残されていた。

流石に、エリアボスまで何も無しでは厳し過ぎるのでしっかりドロップして置いてホツとした。

ドロップ品は3点。

1つは見た瞬間に分かる代物で金属製の鎧だ。

色は真っ黒で上半身を完全に覆ってしまう金属製の鎧。俺に似合うとは思えないが、単純にファンタジー物の主人公のようでカッコいい。

ただし、以前も金属製の鎧は試着してみたが重すぎて動けそうになかったので残念ながら売却する事になるだろう。

残りの2つは当たりだといいな。

第202話 戦利品

俺は今、ドロップアイテムを目の前にしている。

1つ目は漆黒の鎧だった。

残りの2つだが1つは銃だ。

しかし魔核銃とはなんか違う。バレットを装填する箇所がないのと、結構小型だ。

もう一つは、マジックジュエルだ。茶色なので恐らく土系ではないだろうか。

銃と鎧はギルドで鑑定してみないと性能はわからないがマジックジュエルは誰が使っても有用なのは間違いない。

「みんな、マジックジュエルなんだけど、あいらさんに使ってもらうと思うんだけどいいかな。」

「いや、私は別にいらないぞ。」

「いえ、パーティのバランスを考えた時に近接戦闘の出来るあいらさんが魔法も使えた方が、戦力アップすると思うんです。」

「わたしもそう思うのです。あいらさんが使うのがいいと思うのです。」

「私もいいと思う。」

みんなの同意も得る事ができたので早速あいらさんにマジックジュエルを使用してもらおう。

「あいらさん、どうですか？」

「ああ、おかげで私も無事魔法使いになれたよ。ふふっ。」

とても嬉しそうだが、魔法使いになれた時の感覚は今でも覚えているので、気持ちはよくわかる。

「どんな魔法ですか？」

「思ってたのとはちょっと違ったが、『アイアンボール』だ。」

『アイアンボール』か。土系だからてつきり壁とか穴とか土が出てくる魔法だと思っていたが確かにアイアンも土系といえば土系だ。

「あいらさん、試しに1発撃ってもらってもいいですか？」

「わかった。じゃあやってみるぞ。『アイアンボール』」

あいらさんが魔法を発動すると、俺の水玉同様の野球の球ぐらいの大きさの鉄球が出現してそのまま勢いよく壁に激突してめり込んだ。俺の『ウォーターボール』とあいらさんの『アイアンボール』同じボールなのにこの違いは何だ？

俺の『ウォーターボール』は殺傷能力がほぼゼロだったのにあいらさんの『アイアンボール』は完全に殺人兵器だ。野球の球の大きさの鉄球が高速で飛んでいく。

正直恐ろし過ぎる。

魔核銃が豆鉄砲に思えるほどの威力だ。

「あいらさん・・・すごいじゃないですか。遠距離攻撃もバッチリですよ。モンスターも頭にこれをくらったらタダでは済みませんよ。」

羨ましい・・・」

「海斗？」

「いえ、なんでもありません。」

「じゃあ、この鎧は海斗さんですね。」

「いや、無理かもしれないな。前にプレートメイルを装着したら重くてまともに動けなかったんだ。」

「海斗、どうせ持って帰る時には装着しないとイケないんだから、装着してみれば。」

「ちょっと待ってくれ。俺が持って帰る前提か。」

「他に誰もそんなに大きくて重い鎧を運べないでしょ。」

「いやベルリアとか。」

「海斗、せっかくだからつけてみてよ。」

「ミクがあまりに勧めるので装着してみる事にしたが、そもそもこの鎧真っ黒だけど呪われたりしてないよな。」

「シル、この鎧って大丈夫？呪われたりしてないか？」

「多分大丈夫だと思います。特に邪悪な感じはしません。」

俺はシルの言葉を信じて鎧を装着してみる事にした。

こんな全身鎧なんか、ほぼ初めて装着するので、結構苦戦しながらもどうにか装着できたので試しに歩いてみる。
あれ？

なんか普通に歩ける。

多少の重さは感じるが、妙に軽く感じる。
試しに走ってみるが、普通に走れる。

もしかしなくてもマジックアイテムっぽいな。

漆黒の鎧にマント・・・

俺大丈夫だろうか。

「ミク、これ大丈夫か？」

「まあ、結構いいんじゃないかな。コスプレイヤーみたいじゃない。」

「冒険者とか勇者のイメージはあるけど、探索者ではあんまり見ない格好だよな。」

「その鎧、黒いから勇者って感じじゃなくて、どっちかというところじゃない。」

「ご主人様、私も鎧姿ですので、お揃いです。いいと思います。」

まあ、ギルドで鑑定してもらうまでは何とも言えないのでとりあえずこのまま着用して帰ろう。

第203話 新しいスキル

俺は今隠しダンジョンのドロップアイテムを物色している。

残りの1つは不思議な弾倉のない銃だが、まず間違いなくマジックアイテムだろう。

もし誰でも使えるようなら、ミクに使ってもらうのがいいと思う。ドロップアイテムに気を取られていたがレベルアップしているかもしれないと思えばステータスを確認した。

LV	18	19
HP	65	70
MP	40	42
BP	66	71

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮）

神の祝福

ウオーターボール

苦痛耐性（微）

愚者の一撃NEW

「おおつ。スキルが発現してる。」

ええ・・・

『愚者の一撃』？

なんか微妙な名前のスキルだ。

患者の一撃・・・自分のHPと引き換えに強力な一撃を放つ事ができる。スキル発動後の残HPはランダムで1から9となる。

これって・・・

また俺の生命を犠牲にするスキルじゃないか。しかもスキル発動後に残るHPが1〜9。1つて転んだら死ぬんじゃないか。

『暴食の美姫』といい俺の生命がそんなに欲しいのか？

そもそも患者ってダメな意味で使われる言葉だし、これはまた死蔵させるしかないか？

俺の生命を削ってどのぐらいの威力が出せるのかはわからないが、

『暴食の美姫』との使い分けは、敵の数次第だろう。

『暴食の美姫』を使用すると、俺は完全に戦闘不能になるので、複数を相手にする場合は、俺単独で発動できるこのスキルの方が優先される気がする。

せっかく発現したスキルだが、使う事があるのか不明だな。

そういえば他のみんなはどうだったんだろうか？

「みんな、俺レベルアップしてたんだけど、みんなはどうかな。」

それぞれにステータスを確認してもらったが、3人ともがレベルアップしていたものの残念ながら、スキルを発現したのは俺だけだったようだ。

それにしても、この隠しダンジョン、広さはあまり広くなかったが、敵の質はやたらと高かった。偽ラーに至っては、偽神とはいえ、士爵級悪魔と遜色無い強さだった。

お陰で達成感も半端じゃなくあるのだが、HPが全快しているものの『暴食の美姫』を使用したせいで、身体の芯に残る何とも言えない疲労感が激しい。

とにかく早く帰ってベッドで眠りたい。

「よし、敵も倒したしみんな帰ろうか。」

「海斗さん……。どうやって帰るのですか？」

「あっ！」

戦いが終わったので全部終わった様な錯覚を起こしていた。疲労感で頭が回っていないのか、よく考えると帰る方法がないんだった。

「みんな、その辺りにゲートか階段が無いか探してみよう。シルもおかしい所が無いか確認してくれ。」

それから俺達は全員で周囲の壁や地面をくまなく探してみたが、何も無い。

30分程探してみたがやっぱり何も無い。

どうすればいいんだ。この隠しダンジョンは一方通行なのか？

エリアボスを倒しても帰り道が無いとは何て趣味の悪いダンジョンなんだ。
困った。

「うーん。やばいな。みんなどうしよう。」

「海斗……。もしかして私達ミイラとりがミイラになっちゃった？」

「まあ、このままだとそうなるかも。」

「ご主人様。帰り道などなくても問題ありません。」

「いや、問題あるだろ。どうするんだよ。」

「皆様で元の位置まで戻りましょう。」

他に方法も無いのでシルの言われたままにみんなであついで行くことにした。

「シルどうするんだ？」

元の位置まで戻って来たのでシルに尋ねると

「皆様ロープか何かお持ちでしょうか？」

「いや、そんなの俺は持ってないけど。」

他の3人も持っていない様だ。

「それでは申し訳ありませんが、皆様の衣服等で紐を作って頂いてよろしいでしょうか？」

シル……

衣服って言われても女性陣の服を脱がせて切るわけにいかないだろう。

俺しかいないじゃ無いか。

しかも俺の服だけじゃ足りない。

マントしかない。

短い付き合いだつたがシルのことを信じて俺はマントを切り刻んで紐を作る事にした。

第203話 新しいスキル（後書き）

第204話 脱出

俺は今隠しダンジョンに降りて来た所に戻って来ている。

シルに紐を用意してくれといわれたので、泣く泣く俺のマントを切り刻んで繋ぎ合わせて1本の紐に仕立てたが、まだ長さが足りないというので、スーツの下に着ていたシャツも切り刻んで長さの足しにした。

「少し短い様ですが、これでやってみますね。」

シルはそう言うと、繋ぎ合わせた紐を受け取ってそのまま翔んだ。

「おおっ！」

文字通り翔んでいる。

背後に生えている羽を動かして翔んでいる。

今まで、翔んでいる姿を見たことがなかったので飾りの様に思っていたが、しっかりと翔ぶ機能を備えていたらしい。流星はヴァルキリーだ。

シルはすぐに穴の上部に到達して抜け出す事に成功した。

「それでは今から紐を垂らしますので、お一人ずつ上がって来てください。」

そうやってシルが紐を垂らしてくれたが、俺が手を伸ばしても届かない。

仕方がないのでまずは、ベルリアを俺の肩に立たせて上に登らせる事に成功した。

同じ要領でルシェも上まで登ることが出来た。

問題はここからだ。

女性陣3人と俺がどうやって登るかだ。

流石に俺の肩の上に立ってもらおう事は難しいだろう。

色々考えてみたが余り選択肢がないので、俺が四つん這いになりその上にあいりさんにも四つん這いで乗ってもらい2人ピラミッドを作って、ミクとカオリンには更にその上に立ってもらい、紐を掴む事に成功した。

力の入り難い紐1本だがレベルアップしたステータスのおかげで2人とも難なく登っていった。

残るは俺とあいりさんだが、あいりさんには俺を台にしてジャンプしてもらおう事にした。

「ぐっ！」

いくら女性とはいえ思いつきり背中に踏み込まれるとかなりの圧力がかかってきた。

ジャンプして掴んだ紐が切れないか心配だったが俺のマントから作っただけあつてしっかり持ちこたえてくれた。

残るは俺1人となったが、どうやったらいいだろうか。

「おゝい。どうにか紐を伸ばせないかな。」

ジャンプしてみたり色々やってみているがどうしても届かない。

「仕方ありませんね。私の服を繋ぎ合わせましょう。」

シルが鎧を脱ごうとするのが見えたので慌てて

「シル。ちょっと待て。それはやめてくれ。気持ちは嬉しいがそれ

はダメだ。」

シルの服を脱がせて紐にするのはまずい。ここを乗り切ることが出来ても社会的に終わる可能性があるのもそんな事をさせるわけにはいかない。

「それじゃあ、私が代わりに脱いでやるよ。」

今度はルシエが服を脱ごうとしているのが見えたので

「ちょ、ちよつと待て。ダメだ。それもダメだ。やめてくれ。気持ち嬉しいから。」

このサーバント達は俺の事を考えてくれているのだと思うが非常に危うい。ルシエのはわざとな気もするが。

「しょうがないですね。それでは私が一肌脱ぎましょう。」

今度はベルリアが脱ごうとしているのが見えたのでそのままにしておいた。

まずはシャツを脱いでつないでくれたが、あと僅か届かない。

「仕方ありませんね。最後の一枚ですよ。」

暫く待っていると僅かばかり、紐が伸びてきて漸く手が届いたので、紐を伝ってそのまま登りきることが出来た。

「ベルリア、助かったよ。最後の1枚つてもしかして。」

「マイロードの為です。全く悔いはありません。今度新しいものを

頂ければ幸いです。」

「おおつ。何枚でも買ってやるよ。本当に助かった。ありがとうな。」

「お役に立てて光栄です。またいつでもお申し付けください。」

今度ベルリアには下着を買ってきてやろう。特にパンツは破れに強そうなのを何枚か買ってきてやろうと心に決めた。

第205話 ギルドでバレた

俺は今11階層を歩いて戻っている。

鎧でわからないが、おそらく中はスツポンポンのベルリアを先頭に急いで10階層のゲートを目指している。

隠しダンジョンでかなり消耗してしまった上にマントも無くなってしまったので、あまりゆっくりしてられない。

もしかしたらマントだけ別売りしているかもしれないのでマントに付属していた超小型エアコンは念の為に回収しておいた。

ヒカリンもMP切れを起こしており『アイスサークル』に頼ることもできないので、俺が『ウォーターボール』で小さな氷の塊を発現させながら、何とかたどり着くことが出来た。
疲れた……

ベルリアと一緒にシャワーを浴びてから解散しようとしたがルシエの強烈な視線を感じる。

「なんだ？ なにか言いたいことでもあるのか？」

「まさか忘れてないだろうな？」

忘れる？ なにを……

すぐには何の事が理解出来なかったが、ふつと天啓が降りて来た。

「あ、ああ、もちろん覚えてるよ。当たり前じゃ無いか。俺がルシエとの約束忘れるはずないだろ。ははは。今か？ 今がいいのか？」

「いや、覚えてるならいい。今度ゆっくりしてもらうからな。」

「ああ、任せとけ。」

気が抜けたのと疲労もあって、ルシェとの約束は頭の中から消え去ってしまっていた。

もし完全に忘れていたらどうなっていたか想像するのも恐ろしい。

「それじゃあ、みんな明日は休養日に充てようと思うんだけどいいかな。一応ドロップアイテムの鑑定だけ行ってこようと思うんだけど。一緒に行く？」

「一応、ギルドに報告もしないといけないだろうから一緒に行くよ。」

あいりさんの言葉に他の2人も同調したのか明日4人で向かうことになった。

とにかく今日は帰って夕飯を食べたら寝よう。

その日の夜は泥との様に眠ったが、『暴食の美姫』の影響か朝起きても、なんとなく身体が重い。

待ち合わせの時間に遅れない様にギルドに向かうと既に他の3人は集合していた。

「おはようございます。お待たせしました。それじゃあ最初に報告から行こうか。」

ギルドの着いてから4人で一緒に日番谷さんの窓口に並んで待った。

「こんにちは。今日は魔核の買取でしょうか？」

「いえ、ドロップアイテムの鑑定を頼みたいのと、少し報告したい事があります。」

「はい。どうされましたか？」

「俺達、今11階層に潜っているんですけど。」

「素晴らしいペースですね。流石です。」

「11階層の途中でほんの少し床に穴を開けたんですよ。」

「穴ですか!？」

「地面の下に隠しダンジョンがあって、入る為に小さな穴を開けたんです。でもちゃんと 攻略して来ましたよ。」

「隠しダンジョン!?まさか2つ目ですか？」

「はい。そうなんです。結構強い敵ばかりでした。」

「隠しダンジョンなんてそんなに見つかるものじゃないんです。しかも2つ目ですよ。高木様のパーティはやはり普通では無いですね。流石は『黒い彗星』ですね。隠しダンジョンではどんなモンスターが出現したのでしょうか？」

「日番谷さん……『黒い彗星』って。本気で言ってますか？」

「ふふつ。半分は本気ですよ。」

「あ……。ちょっといいですか?『黒い彗星』ってなんの事ですか?」

「えっ、ご存知無いですか？最近流行っている高木様の2つ名ですよ。」

「まずい。」

「あっ、日番谷さんっ。その話はいいですよ。」

「海斗って2つ名があったの？しかも『黒い彗星』ってなんかカッコいいじゃない。」

「いや、それは……」

「海斗さん。どうして『黒い彗星』なんですか？」

「それは……」

「超絶リア充『黒い彗星』が正式名称ですよ。」

「ああ……」

「海斗、超絶リア充『黒い彗星』とは一体なんなんだ？」

「ここまでバレてしまっっては、もうどうしようも無いので、2つ名の由来を話すことにした。」

「それで最近、黒ヘルメットやめてたのね。言ってくればいいのに。」

「そうですね。私達は海斗さんがそんな人じゃないのわかっていますから。」

「そうだぞ、隠す必要なんか全くないぞ。むしろ『黒い彗星』かっこいいじゃないか。鎧も黒い鎧が手に入ったしぴったりじゃないか。」

正直、変に思われなにか心配だったが杞憂に終わったようだ。一朝一夕では無いメンバーとの絆を感じる。よかった。

「それはそうと、ダンジョン内はエジプトの神を模倣したモンスターばかりでした。」

「神を模倣ですか？そんなモンスターを相手に皆様、お怪我は無かったですか？」

「俺とサーバントが怪我しただけで済みました。よかったですよ。」

「よかった？高木様は大丈夫だったのでしょうか？」

「肩口をレーザーみたいなので焼かれたり、剣で斬られたり、ファイアボールくらったりしたんですけど、もう治りました。」

「高木様。とても大丈夫とは思えないのですが・・・とにかく後で奥に来ていただけますか？詳しい内容をヒアリングさせてください。」

「わかりました。じゃあ後で話しますから、鑑定を先にお願ひします。」

そう言って、着込んで来た黒い鎧一式と魔道具らしい小さな銃の様

な物を見せる事にした。

第206話 鑑定

俺は今ギルドでドロップアイテムを鑑定してもらいに来ている。

「鑑定して欲しいのはこの鎧一式とこの小さな銃の2点です。」

「それでは2点で6万円頂戴しますがよろしいですか？」

「はい、お願いします。」

日番谷さんが鎧と銃を持って奥に下がって行った。

「海斗、超絶リア充『黒い彗星』って凄い2つ名ね。2つ名ってこんな感じでつくのね。なんか目の当たりにすると不思議な感じね。」

「いや、俺が1番不思議な感じだよ。自分の知らない所で違う自分が勝手に出来上がったような。そもそも超絶リア充って誰が考えたんだよと思う。」

「そうですね。世の中って不思議な事がまだまだいっぱいありますね。」

俺の謂れの無い2つ名談義で盛り上がっていると日番谷さんが、鎧と銃を持って帰って来た。

「鑑定結果はこちらです。どちらも非常に有用なアイテムだと思いますので、ご自分達で使われる事をお勧めします。」

そう言つて鑑定用紙を2枚渡してくれた。

魔術鎧ナイトブリンガー・・・軽量化の術式が組み込まれた鎧。魔力を消費する事で僅かに敵意を持つ相手からの認識を阻害することが出来る。

これは、当たりだ。思った通り、軽量化されている上に、黒色なだけあつて特殊能力を備えている。認識阻害がどの程度なのかは分からないが、俺が使用すれば今の戦闘スタイルで更に一段上に行けるかもしれない。今の背後に回り込んで仕留めるスタイルにこの鎧の能力が加われば完全にアサシンスタイルが完成するかもしれない。ただこの黒い鎧はアサシンというより暗黒騎士っぽい。

そしてもう一枚の鑑定書には

魔法銃 スピットファイア・・・魔力を消費して小型のファイアボールを発射することが出来る。

これも大当たりだろう。小型とはいえ、ファイアボールを撃てる銃とは凄い。魔法が使えない者からすれば垂涎の一品に違いない。

「みんな、この鎧なんだけど俺が貰つても良いかな。」

「当たり前じゃない。海斗以外サイズが合わないじゃ無い。」

「そうだな。女性が身につけるにはちょっと厳つすぎるな。」

「海斗さんの2つ名にぴったりなのです。オーダーメイドみたいですよ。」

「そうかな。じゃあ有り難く使わせてもらおうよ。それとこの魔法銃
なんだけどミクが使うのがいいと思うんだけど。」

「私もそれが良いと思う。現状、直接的な攻撃力が1番低いのがミ
クだからな。魔核銃と2丁拳銃でいいんじゃないか。」

「私もそれが良いと思うのです。」

「それじゃあ、この魔法銃は私が使ってみるわね。今までみんなの
力になれない事も多かったから、これで少しは役に立てると良いけ
ど。」

「今でも十分役に立ってるから、そんな事気にするなって。それと
みんなに相談があるんだけど。」

「相談？なんだ？」

「この鎧って大きいじゃ無いですか。とてもじゃ無いけど袋とかで
持ち運べそうに無いんですよ。なので移動する時は着用して歩か
ないといけないんですけど、流石にこれを着用して街中を歩き回る
のは抵抗感があります。何かいい方法ないですかね。今日もここ
まで着て来たんですけど、注目度が高すぎて辛いです。」

「探索者が装備をつけたまま歩いているのもたまに見かけるから大
丈夫じゃないですか？」

「いや、流石にこんな鎧を着た人は見かけた事ないな。コスプレの
人ぐらいじゃないか？俺はコスプレの趣味は残念ながら無いんだよ
ね。」

「いつその事これを機会にデビューするのも有りじゃないか？」

「無しです。」

「真面目な話をすると、大きな口のマジックバッグを買うか、ダンジョンの近くにあるトランクルームを借りるしか無いんじゃない？」

「マジックバッグは論外だけど、トランクルームなんかあるの？」

「知らなかったの？結構使ってる探索者は多いわよ。小さめのスペースなら月5000円ぐらいから借りれるみたいよ。」

「それいいな。早速調べてみるよ。」

俺はその日のうちにトランクルームを契約したが、道中すっかり目立ってしまった。

これからは、現地で着替えれば良いので安心だ。

第206話 鑑定（後書き）

第207話 ダンジョンマーケット

俺は今ダンジョンマーケットに来ている。

今回の目的は俺達を救うために切り刻まれたマントを新調する為と、穴が空いてしまったカーボンナノチューブのスーツを補修する為、そして穴だらけのブーツの代わりを購入予定だ。

まずは、ブーツの購入をしたが、前回のデザートブーツが調子良かったので全く同じ物を購入した。

次にマントを選ぶ事にする。

まず超小型エアコン内蔵のマントだが、マントだけを購入する事が出来たが、価格は3万円程だったのでバラ売りの方が割高感強い。

前回は無難に茶色を選んだので自分では今回も無難な色にしようかと思ったのだが、日曜日、事前にパーティメンバーに相談していた結果、3人共黒が絶対に良いとの事だったので黒を買う事にした。

黒い鎧に黒いマント。本当に大丈夫か？とも思ったが3人共本気で黒を推していたのでおとなしく買ってみる事にした。

その後、低級ポーションを4本購入してから、最後にスーツの補修の為に皆さんの店を訪問した。

「すいませ〜ん。」

「おう、坊主か。なんか買ってきてくれんのか？」

「いえ、そうじゃなくて、これなんですけど、補修って出来ますか？」

「ナノカーボンチューブのスーツか。ちょっと見せてみる。」

「お願いします。」

「おいおい、穴が空いてるじゃねーか。しかも全体にかなり痛んでるな。一体どんな使い方したらこうなるんだよ。このスーツに穴を空ける事が出来るモンスターってどんな奴だよ!？」

「それが、神っばい感じの・・・」

「紙?そんなモンスター聞いた事ないぞ。坊主、今何階層潜ってるんだよ。」

「今は11階層です。」

「坊主、前に魔核銃買って行った嬢ちゃん達とパーティ組んでるって事は週末だけ潜ってるんだよな。ペース早くねえか?」

「まあ、僕は、ほぼ毎日潜ってるんですけど、パーティでは週末だけですね。メンバーが優秀なんで順調に進んでるんですよ。」

「順調にしてはスーツが傷だらけじゃねーか。補修出来る事はできるが、これだけくたびれてると新調した方がいいんじゃないか?」

「ちなみに新調するといくらぐらいかかりますか?それと補修だどのぐらいですか。」

「そうだな新品だと120万って所だな。補修で10万って所だな。但し補修しても新品同様になるわけじゃねーぞ。あくまでも補修だからな。」

「はい。補修をお願いします。」

「おいおい、即答だな。まあ良いけどよ。それじゃあ4日程預からせてもらうぜ。」

「はいお願いします。」

いくら新品でも同じものに120万円を出す選択肢は無いな。新品が高すぎて安く思えるが補修で10万円というのも結構な金額だ。但し特殊な物なのである程度の出費はやむを得ないだろう。これからは上に鎧を纏うのでスーツの出番も減ってくると思う。

「他に何かいらねーのか？」

「いえ特には無いですけど何かオススメって有りますか？」

「そうだな。オススメなのはこれとこれだな。」

「高そうですね。」

「こっちが魔剣だぜ。魔力を帯びていて斬れ易くなる効果がある。効果が単純だから値段も安めで1700万円だ。それと、こっちは魔核ライフルだ。魔核銃の強力版だな。ダンジョン用に短くしたショートライフルだ。これが350万だ。魔核銃と併用すると良いんじゃないか。」

「ありがとうございます。今度お金が貯まったら考えます。それじゃあ金曜日に取りに来ます。」

ベルリアやっぱ無理っばい。魔剣、単純な効果の物で1700万だって。マンション買えちゃうよ。頑張ってドロップさせるしか無

いな。最近ベルリアが頑張っているので出来れば買ってやりたい所だったが、桁が違った。

もう一方のショートライフルも350万と高額だが、春香と一緒に来るとも少し安くなりそうなので、かなり興味を引く。

最近魔核銃が通用しない敵が増えてきているので、魔核銃のアップグレードの為にかなり欲しい。

バルザードの使用制限を補完する意味でもすごく欲しい。

ただ350万円と聞くと尻込みしてしまう。

いずれにしても、ダンジョンでしっかり稼がないといけないと決意を新たにした。

第208話 魔術鎧 ナイトブリンガー

俺は今2階層に潜っている。

今日は平日なので放課後に1人で魔核集めと、鎧と魔法銃の能力検証をする為に来ている。

スライム相手ではよくわからないので、永遠の宿敵ゴブリンを相手に検証しようとしている。

まずは、魔術鎧ナイトブリンガーの能力を検証してみる。

今日もずっと着用しているが、それ程重さを感じず、動けないといった事は一切無いので間違いなく軽量化の効果は現れている。

問題はMPを消費して認識を僅かに阻害するという方だ。

現状3点問題がある。

1点目は単純に能力の発動方法がわからない。マニュアルが付いているわけでも無いので色々試してみるしか無い。

2点目はMPの消費量だ。バルザードの飛ぶ斬撃にもMPを使用しているので余りに消費量が多い様だと使い物にならない。

最後に効果だが、鑑定書には僅かに認識を阻害すると書かれているが、僅かって言うのがどの程度の効果を指しているのかわからない。文字通り僅かしか効果がない場合使う意味がないかもしれない。

とにかく11階層より奥で使える物かしっかりと検証しておきたい。

「ご主人様、前方に1体ゴブリンです。ご注意ください。」

今のレベル的にはゴブリン程度であれば問題にならないが、それはあくまでもステータス上の事であり気を抜くと致命傷を負いかねないので、集中して臨む。

目の前におなじみのゴブリンが現れたので、早速ナイトブリンガーの効果の検証に取り掛かる。

発動条件がわからないのでとりあえず

「魔術鎧 ナイトプリンガー！」

と叫んでみる。

そのまま、スーツと横に移動して見るがゴブリンの視線も一緒について来るのでどうやらダメらしい。

「なあ。何やってるんだよ。」

ルシエが話しかけてくるが、第3者からすると今の行動は変に映ったのかもしれない。

ちよつと恥ずかしいが続けるしかない。

再び集中して、今度は理力の手袋の要領で自分が消えるイメージを持って、気配を薄めて見る。

そのまま元の位置まで移動して見るが、なんとなくゴブリンの視線が曖昧な気がする。

今度はそのまま後ろに回り込んでゴブリンを斬り伏せる事に成功した。

「おおつ。結構すごいんじゃないか？」

「すごいって何が？普通に後ろに回り込んで倒しただけだろ。」

鑑定書にもあったように敵意を持つ相手の認識を阻害するだけなのか、ルシエには特に効果がわからなかったようだ。

ある意味ルシエが俺に対して敵意が無い証明になったのでうれしい。

「ベルリア、シルも分からなかったか？」

「何の事でしょうか？」

「特に何時もと変わったところは無いようでしたが。」

当たり前だが2人とも俺に敵意は無いようだ。少しずるいが思わぬ鑑定スキルを手にしてしまったようだ。但し、面と向かって変化があったと言われた時にショックが大きすぎるので余り色んな人に聞いて回るのは控えよう。

俺達はナイトブリンガーの能力を更に検証する為にゴブリンを探して回った。

「ご主人様、今度は2体です。」

前方に現れたゴブリンに向かって、消えるイメージで気配を薄める。徐々に移動して見るが攻撃してくる気配もないので効果が出ているようだ。今度は気を抜かずにステータスを確認しながら時間の経過を待つて見る。

MPが1ずつ減っているが、およそ10秒で1ずつ減少しているようだ。ずっと発動していると地味に消費してしまうが、場面場面で使用する分には結構いいかもしれない。

移動している最中に鎧が擦れて音がしたが、音に対してはゴブリン2体とも反応を見せた。

どうやら、視覚的に認識されにくくなるようだ、音は対象外らしい。

おそらく匂いも対象外な気がするので、視覚で認識するモンスターに有効だと思われる。

俺はそのまま後ろに回り込んで2体のゴブリンを順番に斬り伏せて戦闘を終了させた。

第209 魔法銃 スピットファイア

俺は今2階層でマジックアイテムの検証を続けている。

魔術鎧 ナイトブリンガーの効果を実感する事ができたので、続けて何度かゴ布林相手に戦ってみたが、ゴ布林相手には、ほぼ100パーセントの確率で効果が発動して難なく倒すことが出来た。後はもう少し上位の敵を相手にも同様の効果があるか確かめる必要があるが、とりあえず魔法銃 スピットファイアの検証を先に進めようと思う。

しかし、スピットファイアは英語だと思うのだがバルザードとかアゼトムとかは何語なんだろう。スキルや魔法もウオーターボールのように英語読みのもはや斬鉄撃のような日本語表記のものまでいろいろあるが、特に規則性は感じられない。一体どう言う理屈で名前が決められているのだろうか？

考えてもわかるはずないのだが、気持ちに余裕があるせいか気にならなくなってしまった。

どうせならカッコいい名前のスキルが欲しい。

「ご主人様、30m程先にゴ布林が1体います」

シルの声に頭の中を切り替えて敵に集中する。

魔法銃スピットファイアは、小さな銃の形をしているが弾倉も無く、可動部分はトリガーのみなので、狙ってトリガーを引くしか無い。ゴ布林が目視できた瞬間にスピットファイアを構えてトリガーを引いてみた。

特に反動らしきものもなく、銃口から炎の弾が飛んで行ったが、ゴブリンの横をすり抜けていってしまった。

外れた・・・

俺は続けざまに3発発射してめでたくゴブリンを倒すことが出来た。トリガーを引く毎に少しだけ魔力を使った時の違和感があるのでMPが消費されているのだろう。

「何外してるんだよ。ゴブリン倒すのに4発も撃ってるじゃないか」

「魔核銃とは勝手が違うんだよ。慣れだよ慣れ」

ルシエがうるさいのはスルーしておくが、スピットファイアは魔核銃とは少し狙い方が違うのか慣れが必要のようだった。ただこの魔法銃はすごい。

普通のファイアボールは、野球の球ぐらいの大きさだがスピットファイアから発せられるのは卓球の球ぐらいの大きさのファイアボールだ。

一見小さいようにも思えるが、通常の銃の弾に比べると遥かに大きく、ゴブリンに使って見た感じでは威力は十分に有ると思えた。

しかも連射が効くのが凄い。通常のファイアボールは短いとはいえファイアボールと口に出す必要があり、多少なりともタイムラグが発生する。おまけに走りながらとかだと、連発は結構厳しい。

それがこの魔法銃スピットファイアは指でトリガーを引くだけで放てるので、一種の無詠唱状態に近い。

都合4発撃つたのでステータスを確認するとMPの減少が4だったので1発につきMP1なので、弾が小さい分効率が良いようだ。

「マイロード、その銃はミク様にぴったりではないですか？もしミク様は必要ないようでしたら私が欲しいぐらいです」

現在パーティの中で唯一魔法による攻撃手段を持たないミクが装備するとパーティの強化は間違いない。

そつえば、ベルリアも魔法攻撃できないんだった。だからこの銃

が羨ましいのか。

まあベルリアは近接専門で全く問題ないので今のところ放っておいて問題ないだろう。

ただし今回、ヒカリンにだけドロップアイテムがなかったので、次回は最優先でヒカリンを考えていきたい。

その後もしばらく2階層での探索を続けたが、10発ほど撃つとだんだん慣れてきたのか、命中率が上がってきたので十分に戦力として使えるようになった。

マジックアイテムによる戦力アップも望めるので、今週末は11階層をサクッと攻略したいものだ。

第210話 火力アップ

俺は今11階層を探索している。

週末になったのでパーティで再び11階層に挑んでいる。

ミクにはスピットファイアの説明をしてから渡してある。

俺も補修の終わったナノカーボンのスーツを着用した上に魔術鎧ナイトブリンガーを着込み更に黒のニューマントを羽織っている。

以前と比べて防具が間違はなくパワーアップしているのと全身が真っ黒、いや漆黑に彩られたさながら、暗黒騎士の様な出で立ちとなっている。

恥ずかしい気持ち半分と、結構かつこいいと思う気持ちが半分だ。10階層のゲートを進んだ時に何時もよりも視線を感じた気もするが、もう気にしても仕方がないので完全にスルーする事にした。

「じゃあ、今日は、ミクのスピットファイアとあいりさんの『アイアンボール』それと俺のナイトブリンガーの効果を確かめながら進んで行こうか。」

新しい要素が3つもあるので、連携も含めてしっかりやって行きたい。

俺のナイトブリンガーの効果も説明はしておいたが、11階層のモンスターに有効かどうかは不明なのでしっかりと検証しておきたい。

「皆様、正面に3体のモンスターです。ご注意ください。」

「それじゃあ、俺とベルリアが前衛に立つから、ミクはスピットファイアをあいりさんも『アイアンボール』を使ってみてください。ヒカリンは状況に応じてフォローを頼む。」

暫く待っていると出現したのは、人面ライオンことスフィンクスが3体現れたので俺とベルリアがそのまま迎え撃つことにした。

スフィンクスがゆっくりと近づいて来たので臨戦態勢に入り2人で剣を構えていたが、後方から高速で鉄球と、小型のファイアボールが飛んで行って、スフィンクスの人面に見事に命中した。

鉄球の命中した方は顔に完全にめり込んでおり、そのまま消失してしまった。

ある意味単純な物理攻撃に近いだけに結構エグい。

そして小型のファイアボールが着弾した方は、消失こそしていないものかなりのダメージをあたえているのが見て取れた。

もう一体の無傷だったスフィンクスにも既にファイアボールが着弾しており深手を負っているのも、俺とベルリアがそれぞれ踏み込んでとどめを刺した。

すっかり忘れていたが、ベルリアも新しいスキル『アクセルブースト』を発動した様で、一撃でスフィンクスの首を刎ねていた。確実に一撃の威力が増している。

自分達のスキルやマジックアイテムで頭がいつぱいでベルリアのスキルまで気が回っていなかったが、確実に強くなっている。

そしてあいりさんとミクも確実に強くなっている。あいりさんは何度かスキルの練習をしていたので分からなくは無いが、ミクに関しては1発目でど真ん中に命中している。しかも2撃目もど真ん中だった。

俺は、すっかり命中する迄に10発ぐらいは要したのにこれが才能というものなのだろうか。

「ミクもあいりさんも凄いいじゃ無いですか。パーティの火力が一気に上がりましたね。次は俺のナイトブリンガーの効果も試して見たいんでよろしくお願いします。」

「マイロード、私の活躍も見て頂けましたか？」

「ああ、見たよ。『アクセルブースト』だろ、すごいじゃ無いか。」

「有難き幸せ。これからも頑張ります。ただ、『アクセルブースト』の威力に剣が負けてしまいかもしれません。」

「ああ、そうなんだ。まあ暫くやってみてダメならその時考えような。」

「はい。新しい武器を賜れる様に精一杯頑張ります。」

やっぱりベルリアが時々アピールしてくる。多分魔剣が欲しいと暗に言っただけだと思いが、その剣だつて100万円してるんだからしっかり手入れをすれば何年でも使えるはずだ。

間違っても魔剣など買えるはずがない。ベルリアには運良くドロップするまで我慢してもらうしかないな。

第210話 火力アップ（後書き）

第211話 ナイトプリンガーの力

俺は今11階層をどんどん進んでいる。

すぐにフアラオっぽいミイラと犬っぽいミイラが出現したが、フアラオの方はナイトプリンガーの効果で背後に回り込んであっさり片付けることが出来た。

犬っぽい方は、ミイラとは言え鼻が効く様で、ナイトプリンガーの効果を発動しても完全には欺く事が出来ず、背後に回り込もうとしたが少し反応されてしまったのですんなりとは後ろに回り込む事は出来なかった。

ただ視覚による認識は阻害されている様で、完全に居場所を特定している感じでも無いので、そのままバルザードの斬撃を飛ばして消滅させる事が出来た。

十分に11階層のモンスターにも通用しているようだが、鑑定書の敵意のある相手から、わずかに認識を阻害するという内容以上に効果がある様な気がして他のパーティメンバーにも聞いてみたが

「たぶん海斗さんだからじゃないですか。」

「そうだな海斗だからだろうな。」

「海斗つてもともと気配消せてたじゃない。その上にナイトプリンガーの効果が上乘せされてモンスターに対しては完全に隠密状態なんじゃない?」

「ちなみにみんなには、どんな風に見えるのかな。」

「特に変わった感じはないのです。」

「見えなくなったりとかは全くないな。」

「私もよくわからないけど、モンスターに効果があるから見えなくなってるんじゃない？」

「そうか、それは良かったよ。」

3人共にナイトプリンガーの影響は受けていないらしい。本当に良かった。正直ホツとした。これで見えなくなつたとか言われると心が折れてしまう所だった。

それとナイトプリンガーの効果も、俺だからと言われるとそんな気もして来た。もしかしたら漆黒のこの鎧は俺にぴつたりのアイテムだったのかもしれない。

いずれにしろ、MPを消費する点を除けば戦闘において有用な効果なのは間違いないので今後も調整しながら使つて行こうと思う。

ただしナイトプリンガーにも重大な欠点があった。

とにかく暑い。

もともとスーツが暑い上に鎧の所為で蒸れるのだ。今まではそれをマントのエアコンがカバーしてくれていたのだが、エアコンの風までも鎧が防いでしまっている。暑さを紛らわせる為にヒカリンに『アイスサークル』を使用してもらつても鎧越しでは著しく冷却効果が低下しているので、この11階層ではかなり厳しいものがある。その為、今までよりも水分補給の回数を増やしながらどんどん進んで行く。

出てくるモンスター達も隠しダンジョンの偽神達に比べると明らかに格落ちするので、パワーアップしたメンバーには正直物足りない感さえある。

「みんな、私事で申し訳ないけど、鎧の所為で蒸れてかなり暑いん

だ。なんとか早くこの階層を抜きたいから、何時もよりもハイペースで進んで行きたいんだけど、大丈夫かな。」

「そうだな。隠しダンジョンも攻略したし、この階層は早く抜けても問題ないだろう。」

「そう思うのです。」

「私もそれでいいと思う。」

俺の願いを受け入れてもらう形でどんどん進んで行ったお陰で、今日1日でダンジョンの半分以上と思われる位置までマップピングが終了していた。

このまま行くと明日には11階層を抜ける事が出来る気がするので非常に順調だが、調子に乗ってナイトブリンガーの効果を乱発したのでMPが欠乏気味になってしまった。

明日からはMPの残量にも注意しながら使用していこう。

探索終了後ゲートまで戻ってからのシャワーは普段よりも何倍も気持ちよかった。やっぱり蒸れるときつい。

解散後、レンタルボックスに装備を片付けてからコンビニに寄ってアイスを買って食べたがいつも以上に美味しかった。

帰る途中に鎧の蒸れがどうにかならないか考えて、ドラッグストアで貼る冷却シートを買ってみたので、これをスーツの中にいっばい貼ってから明日は探索に臨もうと思う。

第212話 11階層突破

俺は今日も11階層に潜っている。

カーボンナノチューブの中には昨日購入した冷却ジェルを大量に貼り付けている。

貼り付けている時は1月の季節と相まって異常に冷たくなってしまい風邪引いてしまうかと思ったが、これであれば11階層も問題なく進めるだろうと臨んだ。

「あゝ。暑い・・・きつい・・・」

「海斗、どうしたの？最初はあんなに快適だって言ってたじゃない。」

「最初は、冷却シートのお陰ですごい快適だったんだけど、1回戦闘したら全く冷たく感じなくなったよ。効果は12時間って書いていたから効果が無くなった訳ではないと思うけど、昨日と同じぐらい暑いんだ。」

「まあ熱中症とかには効果があると思うけど、体感は厳しいかもね。」

効果があると聞かされても実感が無いので辛い。

暑さのせいで結局、昨日と同じく、ハイペースで探索を進める事になった。

「ご主人様、前方からモンスターが11体来ます。ご注意ください。」

「11体？多く無いか。間違いない？」

「間違いありません。」

思いがけない数の多さに身構えて臨んだが現れたのは黒猫の一団だった。

「あれって猫だよな。結構かわいいんだけどモンスターなんだよな。」

「

「はい、間違はなくモンスターです。」

俺は結構猫好きなので少し攻撃しづらいが仕方がない。

「みんな、数が多いから各自で確実に1匹ずつ倒して行こう。一応モンスターみたいだから気をつけていこう。」

俺もバルザードを構えて迎え撃とうとするが11匹の猫型モンスターは一斉に散開してこちらに向かってくる。

かなり素早い。

バルザードの斬撃を飛ばして攻撃するが、当たらない。素早い上に小さいので全くついていけない。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。」

バカな事にかわいいシルエットの所為で相手を舐めてしまっていたので、仕切り直す。

「このスピードだと近接は難しい。みんな魔法か銃で対応して。」

「マイロード、私は魔法も銃も無いのですが。」

「ベルリアはしばらく待機だ。」

今はベルリアに構っている時間は無い。

俺も魔核銃に持ち替え、しっかり狙ってバレットを撃ち出すが、なかなか当たらない。

今までの敵は直線的に向かってくる敵が多かったので当て易かったが、この猫は立体的に動きながら逃げるので照準が間に合わない。

俺は魔核銃でも苦戦しているが、黒猫はどんどん数を減らしている。

あいりさんは『アイアンボール』ヒカリンは『ファイアボルト』でそれぞれ命中させて倒している。

中でも1番活躍しているのがスピットファイアを使用しているミクだ。

ミクのスピットファイアから発せられる小型の火球が次々に黒猫を捉えていく。

「すごいな・・・」

正直俺の出る幕は無さそうだ。ミクには射撃の才能があるのだろう。1発も当てられない俺とは比較にならない。

しばらくするとミク達の活躍で11匹の猫を全て倒す事が出来たが、結局俺の撃退数はゼロだった。

俺の出る幕が無い程にみんながパワーアップしたのを確認して安心したのか、そのあと俺はルシエにお願いされて、約束のお姫様抱っこをする事となった。

俺は当初10秒間か20秒ぐらいのものだと思っていたのに、ルシエは違ったらしい。

それから11階層を突破するまでずっと抱っこをする事となってし

まった。

戦闘時はルシエが俺の代わりに攻撃をしていたので、結果として、よりスムーズに探索が進む事となり12階層へと続く階段までかなりのスピードで到達してしまった。

「あゝあ。着いたのか。もう終わりか。したかったらまたいつでもお姫様抱っこしてもいいんだぞ。」

「いや、いいよ。もう十分だよ。」

「まだ足りないだろ。だからまたしてもいいんだぞ。」

「いや、もう満足だよ。」

「私は満足じゃ無い。またしてもいいぞ。」

「単純にまた抱っこして欲しいだけだろ。」

「そんな言い方するなら抱っこしたくなくてもさせてやらないからな。」

「また気が向いたらな。」

「本当か!？」

「気が向いたらな。」

「約束だからな。」

ルシエはお姫様抱っこが気に入ったのか、どうしてもまた抱っこさ

ねたいよんなので気が向いたらまた抱っこしてやらうかな。

第212話 11階層突破(後書き)

第213話 愚者の一撃

俺は今スーパーマーケットに来ている。

昨日12階層への階段に到達したので、ほんの少しだけ降りてみたが今までとは違う備えが必要だと感じた。

12階層は相変わらず砂漠だったが、真っ暗だった。

夜の砂漠。そんな雰囲気のエリアだったが、問題はその暗さと寒さだ。

11階層では役に立っている感が無かった冷却シートだが12階層ではしっかり効果を発揮して物凄く寒い。

先程までとにかく暑かったのに12階層に入った途端一気に温度が下がった。

「みんな寒く無いか？。砂漠って夜になるとこんなに温度違うの？」

「砂漠に夜行ったことが無いから分からないが寒いな。」

「海斗さんはマントもあるし鎧もあるからまだいいです。私はすごく寒いのです。」

「とにかく一旦帰りましょう。このままだと体温が下がってしまつて動けなくなりそう。」

あまりの温度差にさっさと11階層に戻って来たが、戻った瞬間に今度は灼熱が襲ってくる。

「これってきついな。体験したこと無い感覚だけど暑さと寒さで50度ぐらいは違うんじゃないか？」

「とにかく11階層の服装では12階層は無理だな。完全に凍えてしまうな。」

「とりあえず、来週迄に各自で装備を揃えてきましょう。」

「マジックポーチに防寒服を詰め込めます。」

日曜日はそのまま引き返して解散したものの、マジックポーチを持っていない俺は、防寒具を持ち歩く事も難しいので色々考えた結果、スーパーマーケットで使い捨てカイロを購入することにした。

11階層では、鎧の所為で暑くて仕方がなかったが、12階層では逆に鎧の所為で底冷えがする。金属製の鎧は、戦闘においては非常に有用だが、気温の変化にはすぐる弱いので、なかなか厳しい。翌日の放課後になったのでスーパーマーケットで貼るタイプの使い捨てのカイロを大量に購入して、念の為にあったかくなる下着とソックスも買っておいた。

12階層に続く階段の所でシャツとソックスだけは着替える事にした。

家に帰ってからスーツの中にカイロを一杯貼って試してみたが時間が経つにつれ段々熱くなって来た。

最初は我慢してみたがスーツで熱が籠るのか、普段学校で使用するよりも遥かに高温になってしまい、異常に熱く、スーツを脱いで確認するとカイロの部分が赤くなっている。

完全に低温火傷を起こしかけていた。

このままでは、全身火傷だらけになりそうだったのでちょっと動きにくい、シャツを3枚重ねた上から貼り付ける事でなんとかいけるようになった。

自分なりに防寒対策はしたので、明日最後の懸案である『患者の1撃』を検証しておく事にした。

本来であればナイトブリンガーやスピットファイアと同じ日に検証すれば良かったのだが、その時は覚悟が足りなかった。しかし、12階層もなにかあるか分からないので、手持ちの武器は確認しておくしかない。

いつもならゴブリン相手に検証する所だが『愚者の一撃』の威力を測るには役不足だと思うので、ゲートを使って10階層迄行く事にした。

この時の為に事前に低級ポーションを2本買い増しておいたので心置きなく試せる。

「ご主人様、奥にモンスター2体です。ご注意ください。」

「シルは『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエは1体を頼む。ベルリアは俺にもしもの事が無いように低級ポーションを持って控えておいてくれ。」

すぐに飛猿が2体現れたので左側の1体をルシエに任せて、俺は右側のを倒す事にする。

念には念を入れて『鉄壁の乙女』の中からバルザードの斬撃を飛ばす事にした。

「行くぞ！飛猿。『愚者の一撃』」

覚悟と共にバルザードの斬撃を飛ばした。

本来見えないはずの斬撃が唸りを上げて存在を主張している。

斬撃が飛猿に到達した瞬間に飛猿は消えて無くなった。

「すごいな・・・」

そう呟いた瞬間、強烈な脱力感がやってきた。『暴食の美姫』とは

また別種の不快感だが、一気に来て、立っているのも辛い。強烈な頭痛と目眩がする。

慌ててステータスのHPを確認するが残量はHP4。既にルシエがもう一体を消滅させているので、攻撃される心配はないが、10階層の敵が相手では一瞬で殺されてもおかしく無い数值だ。

愚者の一撃は凄い威力だがやはりリスクが高いようだ。

第214話 愚者

俺は今10階層に潜っている。

『愚者の一撃』の一撃により飛猿を跡形も無く消し去ったが、HP4となつてしまった。

「ベルリア、低級ポーションを頼む。」

ベルリアに渡してあつた低級ポーションを一気に呷ると身体の倦怠感が抜けてHPが全快した。

ポーション使用後は通常の状態に戻っているようで『暴食の美姫』の使用後のような身体の芯に残る疲労感はない。

まだ一度しか使用してないのではつきりとはしないが、威力は申し分無いように思える。

今まで俺が繰り返したどの攻撃よりも威力があつたと思う。

そして使用後の倦怠感が無いと言うことは何度も連発出来る可能性がある。

大量に低級ポーションを買い込んで、使用しては回復するのを繰り返せばある意味制限無く高火力の攻撃を繰り返せる事になる。

ただしこれだと1発のコストが10万円かかる事になるので流石に無理だ。

どうにかならないかと思ひ色々考えたが、突然天啓が降りてきた。

「よし、もう一度使つて見るから同じ要領で頼むな。ベルリア今度は低級ポーションじゃなく『ダークキュア』をかけてくれ。」

俺の思いついた案は『愚者の一撃』を使用した後にベルリアに『ダークキュア』を使用して貰えば僅かばかりだがHPが回復するので、

それを繰り返す事で『愚者の一撃』を繰り返し続けることができるんじゃないかという事だ。

「ご主人様、今度は3体です。」

「それじゃあ、さっきと同じようにルシエが1体を頼む。俺が2体を受け持つから。」

待っていると砂バシリスクが3体現れた。

「1番左を任せた。ベルリア『ダークキュア』を待機してくれ。」

俺は走ってくるバシリスクを『鉄壁の乙女』の中で待ち構えて、射程に入った瞬間

『愚者の一撃』

再びバルザードの斬撃を飛ばしてバシリスクを消滅させるが、やはり凄い威力だ。

程なく強烈な疲れが襲ってきたのですぐさま

「ベルリア頼む。」

「かしこまりました。『ダークキュア』」

ベルリアのスキルのおかげで幾分か楽になった気がするので、ステータスを確認するとHPが12になっていた。なんとか動けるので最後の一体を仕留めにかかるが結構厳しい。

『愚者の一撃』

バルザードの斬撃を飛ばして消滅させる。

「あれっ？」

一応バシリスクは撃退できた。できたが、最初の一撃よりも明らかに威力が弱い。唸るような斬撃では無く、どちらかと言うといつもの感じに近い気はする。

そして、倦怠感が襲ってきたが、なぜかさつきよりきつい。

HPを確認すると2に減っていたので慌てて、低級ポーションを飲み干す。

「やっぱり、乱発するのはまずいな。HP2つてやばいな。『鉄壁の乙女』無しでは使用するのは難しいかも知れないな。一步間違えると死んじゃうかもしれないしな。」

2発目の効果だが、効果が無かったかと言われるとあったような気もする。ただ凄くあったかと言われると無かったと思う。

しかも少ないHPから更に削ったせいか残りHPが2。

この『愚者の一撃』は間違いなく有用だが都合の良い使い方はできなかったなので、あくまでも切り札としての使用に限られるようだ。

自分の生命を削って放つ一撃。しかも使用後のリスクを考えると確かに使用するのは、愚者だけかも知れない。

ただ今後も俺は間違いなく使うと思う。

パーティーメンバーが危険に晒されるような状況に陥ったら迷わず使う。

シルとルシェが危険な状況に陥っても瞬時に使う。

たとえベルリアが危なくなっても確実に使うだろう。

そう考えると俺は間違いなく愚者なのだと思う。

今回は、たまたまかも知れないが次はHP1になるかもしれない。

まさに生命の綱渡りだ。

いずれにしても考えていたような都合の良い使い方は出来ないようなので今後はいざという時に使っていきたい。

第214話 愚者（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第215話 真・黒い彗星

俺は今学校にいる。

休み時間になり真司と隼人と喋っているが、真司に

「海斗、もしかして隠しダンジョン攻略しただろ。」

「なんで真司が知ってるんだよ。」

「やっぱり海斗だったか。噂になってるんだよ。」

「噂？一体どんな噂だよ。」

「11階層で隠しダンジョンが発見されて攻略したパーティがいるけど、それが今噂の黒い彗星のパーティだって。」

「まあ、間違いでは無いから別に良いけど。」

「それともう一つ。海斗装備変えたんじゃないか？」

「まあ、鎧がドロップしたからそれを装備に追加はした。あとはマントの色を変えたぐらいだな。」

「やっぱりそうか。その新装備も噂になってるんだよ。黒い彗星がオーダーメイドの漆黒の鎧を新調したって。」

「いやいや、オーダーメイドじゃない。たまたま黒い鎧がドロップしただけだって。鎧をオーダーメイドってどんな奴なんだよ。」

「俺達は、話を聞いたら、そうかと思っけど周りはなく。」

「そもそも、その噂は良い噂？それともダメな噂？」

「俺達の聞いた感じだと半分半分かな。勢いがあつて調子に乗ってるんじゃないかって感じと、そこまで突き抜けると逆に良いんじゃないかって感じとだな。」

「そうか・・・いずれにしても75日経てば噂も消えると思つてたけど、再燃してしまつたんだな。」

「そつえばマントの色つて何色にしたんだ？」

「黒だけど。」

「漆黒の鎧に黒いマントか。それは目立つなつて方が無理じゃないか。」

「俺もどうせ黒い鎧を身につけるんだつたらもう良いやつて思つてな。マントも黒にしたんだよ。」

「今度見せてくれよ。ある意味憧れるな。俺もメンタル鍛えて真似してみようかな。」

今度は隼人が

「海斗つて今ブロンズランクなんだよな。」

「ああ、そうだけど。どうかしたのか？」

「実は俺達アイアンランクに上がったんだけどな、この前ギルドに寄ったら遠征イベントの募集やってたんだよな。それで内容を見たら来月の3連休で隣の県のダンジョンに遠征らしいんだよ。」

「へっつ。全然見てなかったな。そういえば日番谷さんがブロンズランクから参加できる遠征とかレイドイベントが時々あるって言うてたな。」

「そう、それなんだよ。ブロンズランクを含むパーティなんだけど、臨時パーティでも良いらしいんだよ。そこでなんだけど、俺達と一緒に行ってくれないか？」

「いやダメだろ。うちのパーティは女の子ばかりだからな。泊まりは無理だぞ。」

「それはわかってるって。だから海斗だけで良いんだって。他のメンバーに聞いてみてもらえないかな。」

「そう言う事なら、俺も遠征とか興味あるしな。それにしても2人共、もうアイアンランクって凄くないか？」

「前回、海斗に色々教えてもらったからな。自分たちで昇華して工夫しながら進んだらうまく行ってるんだ。」

「それはそうと何階層潜ってるんだ？」

「今は8階層だな。頑張つて魚群に対抗しているところだよ。」

「順調に進んでるんだな。2人で魚群はきつくないか？」

「海斗の真似して魔核銃を買ったからな。なんかなってるよ。だから頼むよ」

「わかったよ。今度パーティーメンバーに聞いてみるけど、あんまり期待しないでくれよ。」

「ああ、頼むな。それと今日暇？ダンジョン一緒に潜らないか？」

「もし本当に遠征行くんだったら、連携も必要だし行ってみよう。」

「じゃあ放課後一緒に8階層に潜ろうか。それと、せっかくだから海斗のサーバントにも会わせてくれよ。」

「まあ今更隠してもしようがないから、サーバントも召喚するよ。」

「やったな、真司。」

「ようやく会えるのか。楽しみだな。」

ちよつと照れくさいが、2人とも喜んでるようなのでサーバントを召喚しても問題なさそうだ。

久しぶりに3人で潜ることになったので俺も楽しみだが、気だけは抜かないようにしよう。

第215話 真・黒い彗星（後書き）

第216話 臨時パーティ

俺は今5階層に潜っている。

隼人と真司と一緒に8階層に向かうべく潜っている。

「海斗そろそろ良いんじゃないか？」

「わかったよ。シルフィー召喚。ルシエリア召喚。ベルリア召喚。」

目の前にサーバント3体が現れた。

「おおつ。すごいっ！これがサーバント・・・」

「羽が生えてる。しかもかわいい。もう1人もすごくかわいい。」

真司サーバントはもう一体いるんだぞ。

「ご主人様、この方達はどちら様でしょうか？」

「ああ、俺の同級生だよ。」

「同級生と言うのはお友達と言う事でしょうか。」

「はい。もちろん親友です。なあ海斗。」

「いや大親友です。なあ海斗。」

真司と隼人が調子よく答えたが、親友と言われて悪い気はしない。

「おい、お前友達なんかいたのか？意外だな。」

ルシエ、その言葉は地味に傷つくぞ。

「マイロード、せっかいですから御友人に私達を紹介していただ
きませんか？」

「海斗、ご主人様にマイロードってなんかすごすぎないか？」

最近感覚が麻痺してきていたが、普通に聞くとそうなるよな。

「いや、最初からそう呼ばれてたからな」

「なんて羨ましい」

「おい、やっぱり類は友を呼ぶだな。2人共冴えないな。さすがは
海斗の親友だな」

「海斗・・・この子は一体・・・」

「まあ気にするな。これも愛情表現の一つだから。」

「なっ。何言ってるんだよ。別に愛情表現なんかじゃないっ。」

「はいはい。そう言う事にしといてやるよ。」

「海斗、慣れたもんだな。」

「まあいつもの事だからな。それじゃあ紹介するぞ。こっちの羽が

生えた女の子がヴァルキリーのシルフィー。この口の悪いのが士爵級悪魔のルシエリア。最後にこの男の子が士爵級悪魔のベルリアだ。」

「真司です。よ、よろしくお願いします。」

「隼人です。3人ともよろしくお願いします。」

挨拶も終わったので一応それぞれの能力と装備を確認して探索に向かう。

「海斗、ちよつといいか？」

「なんだよ、隼人。相談か？」

「いや、お前のサーバントって悪魔が2人もいるんだな。悪魔って見た事なかったから大丈夫なのかなと思ってな。」

「ああ、大丈夫だ。2人共良い子達だぞ。まあルシエは難しい部分もあるけど、戦う時は頼もしいからな」

「そうか。海斗が言うなら大丈夫なんだろうけど、俺らを襲って来ないように言いつけといてくれよ」

「それじゃあ、戦闘時の指示は俺が出してもいいか？サーバントの事もあるし」

「ああ、頼むな。だけど俺達指示を受けて戦ったことが無いからお手柔らかに頼む」

話しがまとまったので早速探索を開始するが5分程で

「ご主人様、前方にモンスター3体です。皆様ご注意ください」

「おおつ。シルフィーさんが探索してくれるんだな。こんなに効率いいのか。いいな」

進んでいくと久々のウーパールーパーが出現した。

「隼人、真司1番左のやつを頼む。ベルリア真ん中な。俺が1番右を倒すから。シルとルシエは何かあったらすぐにフォロー頼むな」

指示を出してウーパールーパーに向かおうとした瞬間に

『必中投撃』

隼人の声と共に槍が飛んでいって一撃でウーパールーパーが消え去った。

その直後に真司が走って行ってもう一体のウーパールーパーも槌で粉碎してしまった。

遅れて最後の一体をベルリアが斬り伏せて3体のウーパールーパーが消滅した。

「おいおい、2人とも戦い慣れてこの前よりかなり強くなって無いか？俺の出番が全く無かったんだけど」

「まあ、俺たちも2人だけでここまで来ているからな。それなりに強くなってると思うぞ。」

言われてみれば当たり前前の事だが、正直驚いた。

もう少し様子を見ないとわからないが、2人共アイアンランクの探索者として十分戦力になりそうだ。
これは話半分で聞いていたが、真剣に遠征の話を考えないといけないかもしれないな。

第217話 6人パーティ

俺は今8階層に潜っている。

思いの外、隼人と真司が強くなっている。

俺の出番は全くなく、敵モンスター3体が消失してしまった。

「隼人、真司、もうちょっと先まで探索したら今日は帰るぞ。明日学校もあるしな。」

「わかってるって。」

「大丈夫だって、それよりシルフィーさんとルシエリアさんの戦いも見て見たいんだけど。」

「まあ、次の敵次第じゃないか。」

しばらく歩くと水辺に着いたので

「2人共、ドローン持ってないよな、水辺の探知どうしてるんだ？」

「ドローンは高いからな、このハンディ魚探を使ってるよ。」

隼人が取り出したのはボール型の紐の付いた魚探だったので、そのまま投げ入れて確認してもらおう。

「結構先に複数反応があるから、これは魚群だな。注意したほうがいいな。」

隼人の言葉に全員で臨戦態勢を取る。

隼人と俺は魔核銃を構えるが、真司は二刀流？で細身の剣を構えている。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。ルシエは自由にやって。ベルリアは一緒に撃退してくれ」

程なく巨大トビウオの一団が水面から飛び出してきたので迎撃する。俺と隼人は魔核銃を連射するが、2人では、数が足りないので押し寄せてくる。

久々なので忘れていたが、かなりの迫力だ。押し寄せて接近してきたトビウオに向かって真司とベルリアが斬りかかる。

ベルリアはいつものように流麗な剣さばきで斬って落としているが、特筆すべきは真司だ。

両手に持った剣を使いやたらと素早い振りで斬りまくっている。ベルリアの様に洗練された剣さばきとは程遠いが、二刀で斬って斬って斬りまくっている。

俺には出来ない動きに素直に感心してしまった。

『破滅の獄炎』

「グヴオージュオー！」

思い出した様に、時間差でルシエが攻撃を放った。

「おおつ。すごいな。これが子爵級悪魔の力か。」

「こんなのくらったら一発であの世行きだな。絶対怒らせない様に

しないとな。」

隼人と真司が初めてルシェの攻撃を見て驚いているが、軽口を叩いているところを見るとそれなりに余裕があるらしい。

その後数十秒の攻防を経て巨大トビウオの一団を殲滅することが出来た。

「あのな、相談と言うかお願いなんだけど俺のサーバントが結構、大飯喰らいでな、申し訳ないんだけど魔核を半分ぐらい貰えないか？」

「えっ？半分でいいのか？そっちは実質4人だろ。こっちがお願いしてる方だしもっと多くても全然大丈夫だぞ。」

「助かるよ」

「お腹が空きました」

「腹減った。早くくれよな」

「私もお願いしてよろしいですか？」

俺は魔核を回収して自分の分をシル、ルシェ、ベルリアに渡した。

「サーバントが魔核を吸収するって聞いてたけど本当だったんだな」

「なんか感動だな。シルフィーさんとルシェリアさんの魔核吸収を見れるなんて」

この二人はいちいちシルとルシェの行動に感動しているな。でもな、

ベルリアもいるんだぞ。

「そういえば真司、二刀流なんかしてるんだな。」

「ああ、数が多い時はこれに持ち替えてるんだよ。元々パワータイプで槌使ってるだろ。試しに剣振ったら異常に軽く感じてな。両手でどうにでも振れるし、剣速も結構出るみたいだったから、俺は魔核銃の代わりにこっちにしたんだ。」

「そうか、二人共前回から強くなってて驚いたよ。遠征の話しも今度メンバーに聞いてみるよ。」

「おおっ。頼んだぞ」

「せっかくだから明日も一緒に潜ろうぜ」

「わかったよ。明日も頼むよ」

俺も楽しいので明日も一緒に潜る事にしたが、最近スライムの魔核狩りに行けていない。

今度ベルリアとの剣術練習を休んで魔核狩りに行かないと、探索に支障が出てしまう。

明後日からはスライム狩りに集中していこう。

第217話 6人パーティー（後書き）

第218話 僅かで確かな成長

俺は今5階層に来ている。

本来であれば8階層を探索しようと思っていたが、真司と隼人が時間が勿体無いので有効に使える階層が良いと言い出したので5階層を探索する事となった。

「ご主人様、前方に敵モンスター3体です。」

早速現れたのはブロンズマン2体にマッドマン1体だ。

この階層のモンスターとは相性が悪く以前はシルとルシエに頼っていたがレベルアップした今ならいけると思う。

「海斗、俺この階層の敵は得意じゃないんだ。できればシルフィーさんとルシエリアさんに頑張ってもらえると助かるな。」

隼人がこの階層を苦手としている事は理解出来る。以前の俺と同じく高火力の一撃が不足しているから倒し切れないのだろう。

ただし言葉の裏にはシルとルシエの戦いをもっと見たいという好奇心が溢れているのがわかる。

特に悪意も感じないシル達も気にしていないので問題は無さそうだ。

「それじゃあ、今日はシルも攻撃担当で行こうか。ベルリアもメタル系を担当してくれ。硬いから『アクセルブースト』は必須だからな。」

遠征した時に連携を取る意味でもサーバントの能力はある程度、全

員が把握していた方が良いので今日は積極的にシル達に戦ってもらう事にする。

「それでは私はマッドマンを担当しますね。『神の雷撃』」

「私はブロンズマンを倒します。『アクセルブースト』」

「しょうがないな。残りをわたしがやってやるよ。『破滅の獄炎』」

ほぼ一瞬で3体のモンスターが消滅してしまった。

レベルアップと経験を積んだ3人には5階層は簡単すぎたのかもしれない。

「おおっつ。すげーな。俺の『アースバレット』とは比べ物にならないな。これぞ魔法を超えた神と悪魔の力だな。」

「いや力もすごいけど、いいな。2人共いいな。すごく良い。」

だから、ベルリアも活躍していたから触れてやってくれ。ナチュラルなのか意図的なのか判断が難しい。

「よし、じゃあ次行ってみようか。」

時間も限られているのでどんどん進む。

次に出てきたのはマッドマンが3体だったが、ベルリアの攻撃が有効打にならないので、かわりに真司が槌で完全に潰してしまうと消滅した。

マッドマンは剣や槍とは相性が悪いらしい。

「流石にこのままだと俺達のやる事が無さすぎるから、今度は俺達3人でやるつか。」

今日は一度も戦闘に加わっていないので、次は俺も頑張る事にした。以前は無理だったが今なら進化したバルザードを手に行っているのでやれると思う。

「ご主人様、3体来ました。私達は後ろで控えていますのでいつでもお声がけください。」

ストーンマン2体とブロンズマン1体が現れたので俺はブロンズマンを担当する事にする。

ナイトプリンガーの効果を発動して背後に回り、バルザードを突き刺し、多少の抵抗感があったもののそのまま押し込み爆散させる。

レベルも上がっているので当たり前だが確実に成長している。攻撃をシルとルシエに任せきっていた前回とは違う。十分にやれている。自分の成長を感じる事ができて人知れず感動していたが、まだ2体残っているので切り替えてフォローに入る。

真司はストーンマンを槌でボコボコに殴っており、消滅寸前なので放っておいても問題なさそうだ。

問題は隼人の方だが槍で距離を取りながら攻撃を繰り返しているのが危険は無さそうだったが、ストーンマンも倒れる気配は無い。

こればかりは火力の高いスキルか武器を手に入れるしか無いが、現実的にはなかなか難しい。

「隼人、俺がしとめるからそのまま牽制頼むな。」

俺は隼人がストーンマンを牽制している間に背後に回り込みバルザードで仕留めた。今度はナイトプリンガーの能力抜きでやってみたが、隼人のおかげもあり、全く問題なく背後に回る事ができた。

俺と隼人がストーンマンを倒すと同時に真司もモンスターを倒し終
わった。

第218話 僅かで確かな成長（後書き）

第219話 即席パーティ

俺は今5階層を進んでいる。

「海斗、やっぱり凄いな。なんだよその剣、反則だろ。それとさっきの動き何？なんで普通に背後に回れるんだよ。普通、敵に攻撃されてるだろ」

「2人共俺の事見えてた？」

「???どう言う意味だよ。もちろんずっと見えてたけどな」

「ああ特に変化はなかったように見えたけど、それがどうかしたのか？」

まあ疑ってはいなかったけどホツとした。

「一応、この鎧の特殊能力で敵意を持つ相手の認識を阻害できるんだ」

「おいおい、その鎧って見た目だけじゃなくて、マジックアイテムだったのか？完全に『黒い彗星』専用鎧だと思ってたぞ」

「認識阻害ってチートじゃないのか？チート。やっぱり、見た目が凄いと能力も凄いな。俺らも見た目にこだわって見ようかな」

「それが、この鎧を手に入れる前から気配をある程度消せてたからな。今回も2匹目は使ってないんだよな。だからそこまでチートっ

て感じじゃ無いんだけど。」

「海斗ってそんな特殊能力があったのか？アサシンの能力があるのか？」

「能力って言うかナチュラルに出来てただけだ」

「ナチュラルって、普段から存在が薄いつて事か・・・」

「海斗に出来るんだったら、練習すれば俺らにも出来そうだな。俺達分類は同じカテゴリーだろ」

「お前達ならあり得るな。何しろ海斗の友達だからな」

なんか不毛な議論な気もするが、確かにこの2人なら俺と同じ事が出来ても不思議は無いな。

それはそうとルシエがさらっと海斗と呼んできた。最近たまに名前前で呼んでくれるのが非常に嬉しい。ルシエが心を許して来た証拠だと勝手に思っている。

その後もサーバントと俺達で交互に敵を殲滅させていったので、結構一緒に戦う事にも慣れて来た。

帰る前に交互にはなく連携をとって戦ってみる事にした。

「真司と隼人とベルリアが前衛で時間を稼いでくれ。残りの3人で後方から一体ずつ倒すぞ！」

本来俺は後衛型ではないが、単純なフォーメーションの方がやりやすいだろうと思いい、ベルリアと組む事にした。

敵の能力が低めなので確認の為に少し長めに前衛の3人に頑張っ

てもらってから後方3人で一気に敵を殲滅した。
シルとルシエの攻撃の威力に比べると俺の攻撃は見劣りするがこの
際ににしない。

問題なく敵を倒す事が出来たので、これなら即席パーティとはいえ
遠征もなんとかなる気がする。

「まあまあいいんじゃないか？海斗の友達って言うからどんなへっ
ぽこかと思っただけど、それなりじゃないか」

「なあ、海斗。これって褒められてるのか？」

「まあわかりにくいけどそうだろうな」

「シルとベルリアも今度2人と一緒に遠征に行っても大丈夫かな。」

「このメンバーですと少し魔法によるサポートが薄くなりますが、
私がフォローしますから問題ありません」

「マイロード、私がいれば全く問題ありません」

とりあえず2人もそれなりに認められたようで良かった。

今回一緒に潜って2人の成長には目を見張った。以前一緒にゴブリ
ン退治に潜った相手とは完全に別人となっており、なんとなく俺と
同じダンジョンジャンキーの匂いがする。寧ろダンジョンジャンキ
ーでなければこの短期間での急成長は説明がつかない。

恐らく、俺同様毎日の様にダンジョンに潜って鍛えていたのだろう。
その気持ちはよくわかるし、同じ趣味の仲間が増えたようで嬉しい。
今回特に気になったのが隼人が『必中投撃』を時々使用していたが、
敵の相性が悪くあまり効果的ではなかったものの前回アドバイスし
た針のような物も使用しており、釘とかを中心に色々使い分けてい

た。

生物系の敵には地味に効果を発揮しそうだし、投擲する武器によってはもつと有効な手段となり得る気がした。

やはり、魔法やスキルは使い方を工夫すればまだまだ効果を上げれると確信出来たので俺にとつても非常に意味のある時間だった。

今は特に何も思いつかないが、既存の俺のスキルでも、何か出来る可能性はまだ残されているかも知れない。

まあ、『スライムスレイヤー』はその名の通りで工夫のしようはなさそうだが。

第220話 12階層

俺は今12階層に潜る階段の手前にいる。

週末になったので12階層のアタックする事になった。

集合した時に来月の遠征イベントの事を相談してみたが、予想通り3人共泊りがけの遠征は無理との事だったが、俺が隼人と真司と一緒に行く事にはみんな賛成してくれた。

最近毎週のようにダンジョンに潜っていたので、メンバーもプライベートで遊びに行くのに丁度いいタイミングだったようだ。

「みんな、申し訳ないけど準備があるからちょっと待ってくれるかな」

そう言うってから俺はナイトブリンガーとスーツの上半身を脱いでから、リュックに詰めていた下着を2枚追加で重ね着してから貼るカイロを全身に貼りつけて鎧を着込んだ。

「お待ちせしました。それじゃあ12階層行ってみようか」

前回は一瞬で戻って来てしまったので実質初めての12階層探索を開始したが、やはり薄暗く、そして寒い。

「ご主人様、前方にモンスター5体です。高速で向かって来ています。ご注意ください」

「ベルリアと俺とあいりさんが前衛。後のメンバーは後ろでフォロワーして」

数が多いので3人で並んで迎え撃つ事にするが、高速で向かって来ている割に何も見えない。
次の瞬間ベルリアが剣を振るったので、俺も慌てて身構えるがやはり何も見えない。

「ベルリア、敵か？どんなやつだ！？」

「よくは分かりませんが、気配がしました。」

薄暗いせいで俺もよく分からない。

「あいりさん見えますか？」

「いや、見えない。まずいな。」

「ぐっ！？」

鎧越しに何かの攻撃を受けたがやっぱりわからない。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。誰か敵が見えてる？」

「.....」

誰も敵が見えていないらしい。どうする？

「ルシエとりあえず前方に『破滅の獄炎』を頼む」

ルシエが『破滅の獄炎』を放った瞬間、炎の明かりで敵影が映し出された。

映し出されたのは10cm程度のネズミだった。

「ネズミ？」

この小さなネズミがどうやって攻撃して来たんだ？

「ガンツ！！」

突然『鉄壁の乙女』の光のサークルに鋭利な石のような物が当たって砕けた。

魔法か！？この小さなネズミが魔法を使ったようだ。

以前11階層で黒猫と戦った時でさえ俺は手こずって役に立てなかった。それは今回は暗闇の上にとった10cm程の動き回る標的。俺では相性が悪すぎる。

「シル、敵の数はどうだ？」

「先程のルシエの攻撃で2体は消滅したようですが、まだ3体残っています」

「ベルリア捉えられるか？」

「やっつては見ますが小さすぎて正直厳しいです。」

「みんな！ネズミの居場所は確認できる？」

「.....」

やはり俺同様、この暗闇で小さなネズミを捉える事は難しいようだ。どうする？どうすれば良い？

このやり取りの間にも数発攻撃が飛んで来ているか、よく観察して

いると全て前方からの攻撃だけのようだ。

「シル『鉄壁の乙女』の効果が切れたら『戦乙女の歌』を頼む。ルシエは『戦乙女の歌』が聞こえたら、すぐに前方に『破滅の獄炎』を連発してくれ。ミク、スナッチにも『ヘッジホッグ』を使わせて俺とベルリアで前に立つぞ！3人は後ろに下がって。」

俺のとった作戦は戦術と呼べるようなものではない。強化した『破滅の獄炎』で前方を焼き尽くす。それだけだ。

光のサークルが消えた瞬間俺とベルリアが前に出て頭にだけは攻撃を受けないよう顔の付近でバルザードを構える。次の瞬間シルの歌声が頭の中に流れて来た。

「ルシエ！頼んだぞ！」

「わかってるって。『破滅の獄炎』 『破滅の獄炎』」

眼前一帯が獄炎により火の海と化す。仕留めたか？

そう思った瞬間ベルリアが剣を振るう。

「ルシエまだだ。もう一回頼む！」

「ちっ。チヨロチヨロするな。『破滅の獄炎』 『破滅の獄炎』」

ルシエによる五発目の獄炎が放たれてようやく敵の気配が無くなった。

「シル、敵の反応は？」

「ご主人様、どうやら5体共消滅したようです」

なんとか退けたようだが12階層での最初の戦闘は想像していた物とは全く違うものとなってしまったようだ。

第221話 一時撤退

俺は今12階層に潜っている。

「ルシエよくやってくれた。助かったよ」

「なっ、なに言ってるんだよ。このぐらいなんでもないだろ」

ルシエはこう言っているが正直危なかった。恐らくサーバント抜きだとやられていた。

決して甘く見ていたわけではない。サーバントがいればどうにかなるだろうと言うのはあつたかもしれないが、自分達なりに準備もしたし、レベルアップもしていた。

ただ経験値が圧倒的に足りなかったのかもしれない。

暗い所での戦いに慣れていなかった。小型の敵と戦う事にも慣れていなかった。

そのせいで考えが及ばず、事前の準備もその場での対応も出来なかった。

「みんな、来たばかりで申し訳ないんだけど、一旦引き上げた方がいいと思う。このままだと次はやられてしまうかもしれない。今から戻ってすぐに準備し直さないか。」

「それがいいと思う。」

サーバントも含め全員が同じ意見だったようなので、魔核だけ回収してさっさと帰ろうとしたが、シルとルシエは空気を読まずに

「お腹が空きました」

「獄炎使いすぎたから、いっぱいくれ。もっとくれ。」

と言つて来たので、みんなの同意を得て回収した魔核はそのまま2人の手へと渡つた。

確かにこの2人しか活躍していないので文句は言えない。

地上に戻つて来たので4人でダンジョンマーケットまですぐに向かつたが

「装備つて何がいるんだろう？」

「やっぱり暗闇だからナイトスコープ的な物じゃない？」

「凄く明るいライトみたいなのはどうかな」

「いやそれはやめた方がいい」

「使い慣れてないナイトスコープより良い気がするんですけどダメですかね」

「見やすくはなるだろうが、光源の元が特定できるから多分敵から集中攻撃を受けるぞ」

「ああ、それはダメですね」

「それじゃあ人数分ナイトスコープを買いましょうか」

ダンジョンマーケットについたので早速ナイトスコープの売り場を

見つけて確認するが、頭に固定できる両眼タイプだと丁度15万円だった。片眼タイプとか手で持つタイプとかもあり金額もそれなりだったが、ダンジョンの戦闘では使えそうにないので15万円の物にする事にした。

それぞれ1個ずつ手にとってレジに向かう事にするが

「すみません、これあと3個ありますか？」

「海斗さん、4個も買うんですか？」

「ああ、シル達のも買っておこうと思って。サーバントも暗闇の中だと敵が見えないみたいだったからね」

「そうですね。それは絶対必要なのです」

それにしても結構高い。4個で60万円。12階層では今まで以上に頑張る必要がある。必ず元を取らないといけないのでサーバント達にも活躍を期待したい。

ナイトスコープの引き渡しの前に暗い部屋に連れていかれて使い方と見え方を教えてもらったが、なかなか慣れそうに無い。

暗い所でもしっかりと見えはするが、緑色で見える上に裸眼のようにはいかない。

これは戦闘になった時にはある程度動きが鈍る事も想定に入れておいた方がいいな。

それと同時に俺は一つの決心をした。

「みんな、お願いがあるんだけどちょっといいかな。情けない話だけど多分俺では、このナイトスコープを使ってもネズミとかを倒すのは難しいと思う。日中の猫でも手こずったぐらいだから、ナイトスコープを使ってネズミ退治は、ほぼ無理だと思う。だから小さな

敵の時は俺は攻撃を諦めて盾役に徹しようと思う。だから攻撃はみんなに頼らせてくれないかな」

「そんな事？全然いいわよ」

「全く問題ないな。パーティだろ」

「海斗さん細かい狙いが苦手ですもんね。真剣な顔でお願いとか言うので何事かと思いました」

俺としては恥を忍んでの一大決心だったのだが、みんなあつさりしたものだ。文句の一つも言われるかと思っただが、やっぱパーティっていいな。

隼人達の話では無いが、俺は本当にパーティメンバーに恵まれているなあとしみじみ感じてしまう出来事だった。

第222話 再アタック

俺は今12階層に潜っている。

ダンジョンマーケットでナイトスコープを購入したので性能を確認するためにもすぐに戻ってきた。

サーバント達にもナイトスコープを一個ずつ渡して使い方の説明をしておいた。

「ふ〜ん。見え方が緑で変だけど結構見えるもんだな。便利な物があるんだな。これでわたしの活躍は間違いない」

「まあ慣れるまでは無理せずに行くからな」

「マイロードこれがあればネズミなどに遅れを取ることはあり得ません。今度こそ、お役に立ってみせます」

「ご主人様、私達の方まで用意して頂いてありがとうございます。必ず使いこなしてみせます。一つ質問なのですが、このまま明るい光を見ても大丈夫なのでしょうか？」

「ああ、明るい光に対しても調整が効くみたいで問題ないそうだ」

「それであれば思いっきり出来そうですね」

サーバント3人共にやる気になってくれたようだ。

俺が役に立たない可能性があるなのでその分頑張ってくれろと嬉しい。メンバー全員でナイトスコープを装着して12階層の探索を始めたが、普段見慣れないスコープ越しの映像にどうしても違和感は覚え

るが、慣れればなんとか戦闘はいけそうだ。

「ベチャツ！」

突然俺のマントに何か、液体の様な物が飛んできて付着した。
なんだ？

そう思った瞬間、煙を上げながらマントに穴が開いてしまった。
炎ではなく、酸か何かで溶けた様な感じだが、かなりやばいと感じたのでマントをすぐに脱ぎ去った。

流石にナイトブリンガーが溶ける様なことは無かったが、一体どこから飛んできたんだ？

「シル、敵はどこにいる！？」

「申し訳ありません。敵の反応がわかりません。おそらく以前の様に50M以上離れたところからの攻撃では無いかと思われます。」

超遠距離攻撃か。しかもこれは『アシッドボール』か、それに類するスキルか何かだと思う。

鎧をつけていないメンバーがくらくと、かなりやばい。

ナイトスコープを装着したとはいえ遠距離攻撃を見極めるのは至難の技だ。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む。俺とシルが一気に距離を詰めるから、ベルリアとあいりさんも一緒に来て下さい。後のメンバーは後方待機で」

俺は『鉄壁の乙女』を発動したシルを抱きかかえて走り出そうとするが、背中に何かが飛びついてきた。

なんだ！？敵か？

いやルシエか！

「ルシエ何してるんだ。離せ！走れないだろ。」

「わたしはおんぶで良い」

「いや、おんぶもダメだ」

「敵が小さいと、わたしが必要だろ」

「・・・うつ。確かにそうだが」

「じゃあ、おんぶだ」

時間も無いので焦っているうちに、ルシエに押し切られる形でおんぶすることになってしまった。

シルをお姫様抱っこしてルシエをおんぶして走る。

幼女2人を抱えている姿はとても戦いに向かう姿とは思えないが、強化されたステータスのおかげで、それなりに走れた。

「ほら大丈夫だろ」

正直そう言う問題では無いがこの際スルーするしかない。

なんとか『鉄壁の乙女』の効果が切れる前に敵前にたどり着く必要がある。

20M程前進すると、アシッド系と思われる液体が、かなりの回数、光のサークルによって弾かれている。

モンスターが複数いるのは間違いないが、俺の体にも一気に乳酸が溜まり始めた。

完全におんぶしているルシエのせいだが、今更どうしようも無いの

で悲鳴をあげる身体に鞭打って全力で前進を試みる。
更に20M程進んだ所でナイトスコープの視界に何か横切った。
小さいが地面ではなく空中を横切った。
なんだ？

「はあ、はあ、はあ、シル、敵を感知出来るか？」

「はい、恐らく7体です。空中を飛び回っている感じですよ」

7体か。結構多いな。出来れば一気に叩きたい所だな。

第222話 再アタック（後書き）

第223話 バッドバット

俺は今12階層で走っている。

なぜかシルを抱っこしているのにルシエにもおんぶで背中にくっつかれた状態で全力疾走している。

途中迄は良かったが流石にこの状態で50m走る事には無理があった。

それでもなんとか敵を感知出来る位置まで辿り着き敵が7体である事が分かった。

しかも空中を飛び回っている様なので、虫か鳥だと思われる。

「あいりさん、空中の敵には『アイアンボール』をお願いします。ベルリアは・・・まあ援護してくれ。ルシエこままでくっついてきたんだ思いつきりやってくれ」

「あゝあ。もうおしまいか。もうちょっと遠くても良かったな」

「ルシエご主人様を困らせて楽しんではいけませんよ」

「じゃあシルは抱っこされなくて良いんだな」

「い、いえそういう訳では・・・」

「おいおい2人とも真剣にやってくれよ。シルも『鉄壁の乙女』の効果も切れたらもう一回頼むぞ」

「申し訳ございません。かしこまりました」

「ふふっ。怒られたなシル」

「いや、お前も一緒だよルシェ」

この無駄な会話のせいで余計に呼吸が苦しいが更に近づくと、敵影をナイトスコープ越しに捉えることができた。

捉えた姿は空中を結構高速移動しているが小さめのコウモリだった。大きなコウモリは結構恐怖の対象だが、このぐらいのサイズであればちょっとかわいい感じがする。

ただよくみると小さな一本角が生えている。

当たり前だが唯のコウモリな筈は無く眼前のやつは『アシッド』系の魔法を駆使するモンスターなので油断は出来ない。

ルシェとシルをその場に下ろしてから一応バルザードの斬撃を飛ばしてみたが予想通り外れてしまった。

俺とあいりさんは魔核銃に持ち替えて撃ち落とすべく連射する。

「プシュ」 「プシュ」

当たらない。地上の小さなモンスターでも当たらないのに空中で不規則な動きを繰り返すモンスターに当たる筈はなかった。俺だけで無くあいりさんも苦戦している。

「ふふっ、ぜんぜん当たらないな。そろそろわたしの出番だな」

「わかったよ。はやく手伝ってくれよ」

「それじゃあ『破滅の獄炎』」

獄炎が空中の一角コウモリを丸焼きにして消滅させる。

ルシェはかなり軽い感じでスキルを発動したが威力は変わらず強力

だ。

「姫流石です。見惚れてしまう技の威力ですね。素晴らしいです」
またいつもの様にベルリアのルシエに対する変なヨイショが始まった。

「まだコウモリは残ってるぞ、気を抜くなよ」

目視出来る限りまだ5体は残っているので俺は魔核銃を再び構え直して狙いをつけて発射するが、やはり当たらない。
しばらく続けていると隣でありさんが1体仕留めた。
やはり俺は他のメンバーよりもかなり射撃の能力が低い気がする。
1番使用歴は長いのだが才能の問題かもしれない。努力はしているつもりだけどちょっと辛い。

『ウォーターボール』

今度は氷の槍を飛ばしてみるがやっぱり当たらないので俺は牽制に徹することに切り替えた。

「ルシエもう一回頼む！」

「しょうないな。頼まれてやるよ。『破滅の獄炎』」

空中に向かって広がった獄炎により更に2体が消滅したので後2体だけだ。

この2体も間髪入れずに『アシッドボール?』を仕掛けてくるので気は抜けない。

コウモリの一体が比較的低空で飛来しながら攻撃を仕掛けてきた瞬

間、ベルリアが何を思ったのか突然駆け出したと思ったらジャンプしてバスタードソードを一閃した。

「おおっ」

正にアニメか映画の世界の様な攻撃で上空の一角コウモリを一体葬り去ってしまった。

「すごいな」

上空の敵への攻撃手段を持たないベルリアは今回は出番無しのおまけだと思っていたが、流石は達人級だ。俺の想像を超えた攻撃手段で結果を残した。

残りは1体になったところで丁度『鉄壁の乙女』の効果が切れた。

『神の雷撃』

シルの声が聞こえてきたと同時に雷の閃光が走り最後の1体消え去ってしまった。

突然の攻撃に少し驚いたが最近、ルシエがいい意味でも悪い意味でも目立ちすぎてシルの影が薄めなので防御ばかりじゃ無く攻撃もしてみたかったのかもしれない。

いずれにしても敵を殲滅できたので良かったが、結果的に俺だけ1体も倒さずに終わってしまった。

次こそは1体は倒せる様に頑張りたい。

第224話 再戦

俺は今12階層に潜っている。

俺は全然活躍することは出来なかったが一角コウモリの集団を退ける事が出来た。

敵の特性がわかった今となってはミクがいればもっと簡単に対処出来たと思うが、初見のモンスターだったので仕方がない事だろうと思う。

「ミク、今度コウモリが出現したら頼むな。スピットファイアで撃ち落としてよ」

「もちろんよ。さっきの戦いだけど遠目にしか見えなかったけど、もしかして海斗って全然コウモリに攻撃当てれなかったんじゃない？」

「うっ……。まあそうだけど。俺は牽制役してたから」

「良かったら今度一緒に射撃の練習する？コツ教えてあげようか？」

「コツってあるの？あるならば是非教えて頂きたいです」

「じゃあ今度一緒に練習しましょう。きっと当たる様になるわよ」

「先生、是非お願いします」

今までは大きくて直線的なモンスターが多かったので全く気にならなかったが、最近このままでは射撃の腕にコンプレックスを覚えそ

うだったので本当に良かった。

一角コウモリを殲滅してから更に奥に探索を進める。

「みんな寒さは大丈夫？」

「大丈夫なのです。持ってきたダウンジャケットのおかげで全く問題無しです」

「私もコートと手袋のおかげで問題ない。それにしても鎧はカッコいいが大変そうだな」

「いえ、今日は中の装備が万全なので大丈夫ですよ」

それぞれが防寒対策をきちんと取った事で問題なく進めそうだが、また俺のマントがダメになってしまった。買ったばかりだったので本当に惜しいが溶けて大きな穴が開いているので流石に再利用できそうに無い。3万円の出費が確定してしまった。

幸い貼るカイロが活躍してくれているのでマントが無くても何とかこの階層は進めそうだ。

「ご主人様、敵10体が接近してきます。注意してください」

向かってくる10体の群れ。あいつらと同じパターンだ。

「みんな、朝のネズミかもしれないから全員前方に注視して欲しい。見つけたらそれぞれ狙い撃って。シルとルシエも攻撃してくれ」

指示を出したら5秒程後にナイトスコープを通して敵影を捉えた。やはりネズミだ。今回はしっかりと見える。

俺は前に立って魔核銃を連射するが的が素早い上に小さすぎる。ベルリアもさすがに地を這うネズミを相手にした事はない様で苦戦している。

前衛2人が苦戦している中、活躍が目覚ましいのはミクとシルそしてルシエの3人だ。

流石にミクも的が小さすぎるので百発百中とはいかないようだが、スピットファイアを駆使してかなりのペースでネズミを撃退している。

シルは『神の雷撃』ルシエは『破滅の獄炎』と言うおよそネズミ相手に放つスキルとは思えない攻撃をそれぞれ放って、複数の敵を殲滅している。

残念ながらスナッチ用のナイトスコープは流石に無かったのでスナッチは殆ど役に立っておらずこの階層では完全に俺の仲間だ。

流石に途中からは命中させる事は諦めて後方にネズミを行かさないことだけに専念した。

朝のネズミ同様に魔法を使役して石の刃物の様なものを飛ばしてくるので、それを後方に届かない様に俺とベルリアが壁となって奮闘する。

俺の場合ベルリアの様に剣で撃ち落とす事は出来ないので、頭にだけはくらわない様に注意してナイトブリンガーを頼りにネズミの攻撃を一手に引き受ける。

石の攻撃が金属製の鎧に通用する筈が無いと自分に言い聞かせて恐怖に打ち勝つべく大きく立ち回る。

「ぐうぐう」

攻撃が当たるとたびに身体は全く痛くは無いが俺の小さな心臓が跳ねる。早く終わってくれと思いつつながら頑張った。

実際の戦闘は2〜3分程度で終了したと思うが体感的には10分以上戦っていたと思えるぐらい神経をすり減らしてとにかく12階層

のネズミにリベンジを果たす事が出来た。
メンバー全員にリベンジを果たした充実感とネズミに勝つてもな
と言つ微妙な空気が流れたのだった。

第225話 成長？

俺は今12階層に潜っている。

朝苦戦してしまったネズミの集団をスナッチを除く全員で倒したところだ。

「まあ、なんとか倒せて良かったよ。みんな怪我も無いし一角コウモリも倒せだし12階層でもナイトスコープがあればやっていけそうだね」

「おいおい海斗、さっきのネズミの戦いでお前は何匹倒したんだ？わたしは3匹倒したけどな」

「お前分かってて言うてるだろ。どうせ俺はゼロだよ。けどどない応お前達に被害が及ばない様に攻撃を防いでたんだぞ」

「ルシエ、ご主人様も頑張ってくれてるんだから、いじめてはダメですよ」

「分かってるって、ちょっと言うてみただけだって。別に本気じゃ無いって」

「ルシエ、お前のツッコミは本気と冗談の区別が付き辛い。地味にダメージが入るから加減してくれ」

「そうなのか、悪かったよ」

「え!?!」

「なんだよ」

「ルシエも少しは成長してるんだな。俺は今猛烈に感動しているよ」

「ふんっ！失礼なやつだな。わたしは十分成長してるよ。なんなら服の中でも見せてやろうか」

「お、おい。そういう意味じゃ無いって。頼むからやめてくれ。そんなに俺を社会から抹殺したいのか？」

「ふふっ、2人とも本当に仲が良いのですね。羨ましいです」

「本当にそうだな。いつか私もその輪の中に入れてもらいたいものだな」

「私事です。シル様とルシエ様と海斗みたいにもっと仲良くなりたいです」

今のやり取りも外から見ると仲が良い様に見えるらしい。まあルシエも以前より心を開いて来た感はあるし、悪態もまあ良い傾向なのかもしれない。

それでもクソ生意気な妹には変わりがないが。

「よかったら私の服の中も見てみますか？」

「シル、本当に勘弁してくれ」

「ふふっ。冗談です」

ルシエだけでも辛いのにシルまで加わると、もう俺では保たなくな
ってしまいそうだ。

「みんな申し訳ないんだけど、マントがまた溶けて穴が開いてしま
ったから、今日はこれで引き返して良いかな。ダンジョンマーケッ
トで今日中に買っておきたいんだ」

「もちろんよ」

「そんな事、遠慮せずに早く言えば良いじゃないか」

「装備は大事なのですよ」

みんなの同意を経て今日はそのまま引き返す事となったが、マント
の無い状態で10階層のゲートまで引き返すのはかなりきつかった。
暑い……

俺はシャワーを浴びてから地上に戻ってみんなと別れてからダンジ
ョンマーケットに向かった。

「すみません。黒色のマントをお願いします」

「あの、失礼ですが先日も黒いマントをお求めになりませんでした
か？」

「はい。この前買ったばかりなんですけど、モンスターに溶かさ
れて穴が空いちゃったんです」

「その前は茶色のマントを購入されたと記憶しているのですが」

「ああ、そのマントはファイアボールをくらってしまっ
て燃えて穴

が空いちやっただんです。それで探索に必要なだったんで処分した感じ
です」

「魔法を使うモンスターと戦われてると言う事は結構奥まで進んで
るんですね」

「今12階層です」

「それであればこちらのマントはいかがでしょうか？」

「このマント何か違うんですか？」

「特殊な繊維で作られていますので少々の炎なんかでは穴が空きま
せん」

「それは良いですね。値段は幾らぐらいしますか？」

「価格は15万円になります」

「そんなにするんですね。うーん」

「良い物はずっと使い続けることが出来ます。前にお買い上げ頂い
た物は3万円ですので既に6万円使われた事になります。今後も探
索を続ける上でモンスターも強力になってくるでしょう。そうなれ
ば今までのマントでは、更にハイペースで買い替えが必要になる筈
です。それが一度こちらのマントを購入すればずっと使うことが出
来ます。しかも今までのマントよりも遥かに高性能な物を装備し続
けることができるのです。想像してみてください。安いマントで我
慢して買い替え続けるか、この高性能マントで安心して探索を続け
るのとどちらが良いと思いますか？もう答えは出ている筈です」

「はい。高性能なマントをください。黒色でお願いします」

「お買い上げありがとうございます。お客様の探索ライフがこのマント1枚で快適になる事間違いないですね。本当に良い買い物をされましたね」

「はい。ありがとうございます。早速明日から使わせてもらいます」

今日は本当にいい買い物できた。値段は少し高かったが値段には変えられないものがある。

明日からの探索がより楽しみになった。

第225話 成長？（後書き）

第226話 2日目

今日の俺は昨日迄の俺とは違う。

新調した黒いマントを羽織っている。

マントが少しバージョンアップしただけだがテンションは高めだ。

「海斗何かいいことあった？機嫌が良さそうだけど」

「わかる？このマント見てよ」

「え？新しいの買って来たんだよね。それがどうかした？」

「いや、よく見てよ」

「？何？何のことかわからないんだけど。ヒカリンわかる？」

「いえ、昨日のマントと全く同じ黒いマントですよね」

「いやいや全く同じでは無いんだ」

「私も全く同じ物に見えるんだが何か違うのか？」

「実はこれ、今までのと違って特殊繊維で出来たマントで炎とかにも強いんです」

「ああ、そうなのか。全くわからなかった。悪かったな」

「私も全く気づかなかったわ。ごめんね」

「見た目は全く同じに見えるのです。高かったんですか？」

「これは一生物の良いマントだからな。15万円したけど安い買い物だったよ」

「15万円したのか・・・」

「一生物っていつでも、人の好みって変わるのよ」

「まあ海斗さんが満足しているなら良いと思うのです」

なんだこの微妙な反応は？どうも女性陣にはこのマントの良さが伝わらないらしい。マントの良さが分かるのは男性限定なのだろうか。とにかく万全の態勢を整えたので今日も12階層に臨む。暫く進むとすぐに

「ご主人様敵モンスターです。5体反応があります。気をつけてくださいね」

5体か。この階層としては少ない気もするが、今までの階層よりも現れる敵の個体数が多い気がする。

「とりあえず、ネズミかネコか分からないから気を抜かずに対応しよう。俺とあいりさんとベルリアで前に立ちましよう」

小動物の可能性も高いので地面と空中をそれぞれナイトスコープ越しに凝視する。

空中には居ないが微かに砂を蹴って進む音がする。音のする方に注意していると敵モンスターが現れた。

これは、犬か？いや、小型の犬らしきのもう一種類わかりにくい
がきつねの一種のフェネックっぽいのが混じっている。よくみると
それぞれ角や牙が生えている。ぱっと見可愛い風貌だがやはりモン
スターだ。

「俺達前衛が食い止めている間に動きをよく見て残りのメンバーで
攻撃を頼む」

かなりのスピードで5体が迫って来たのでバルザードの斬撃を飛ば
すが散開して躲される。

見ていると犬っぽいのは直線的に迫って来てフェネックっぽいのは
斜め方向に飛び跳ねながら迫ってくる。

「ベルリア、きつねはまかせた。俺は犬をやる」

今までの経験から俺は相性の良さそうな方を選んで対峙する。

流星に迫り来る大型モンスターに短いバルザードだけでは怖いので
魔氷剣を発動し迎え撃つ。

モンスターも俺達前衛3人に対して3体がついて残り2体が傍から
後方に抜けた。

「シル頼んだぞ」

「おまかせください」

その瞬間俺の後方から雷撃の光と獄炎の熱量が伝わって来た。

何も知らないモンスターからすると後衛の方が倒し易いと考えるの
は至って普通だろう。ただ俺たちのパーティは普通では無いので後
衛の方が火力が圧倒的に強い。

飛び込んだ瞬間に即終了となるのでモンスターからすると計算出来

ない相手となつてゐるのだろう。

今度は俺の番だ。犬に向かつて剣を振るうが流石12階層の犬だけあつてヘルハウンドとかよりもかなり素早い。

距離をとつて対峙していると突然犬が吠えながら口を開いた。

まずい。

直感的にまずいと感じて正面から外れるべく飛び退いた瞬間、犬の口から小規模なファイアブレスが放たれた。

少しブレスを浴びてしまい熱量は感じたが、マントは焼けていない。流石は特殊繊維で出来たマントだ。値段以上の価値があると自己満足しながらカウンターで魔氷剣の斬撃を飛ばして犬もどきを撃退することに成功した。

隣を見るとベルリアの相手のフェネック型は飛び跳ねながらベルリアと交戦していたが後方からスピットファイアの小型ファイアボールをくらつて動けなくなつた所をベルリアにとどめを刺されて消失した。

あいりさんが相手にしていた犬型はあいりさんがなぎなたの距離感を生かして完封して終了していた。

今日の初戦は幸先良く完勝だった。新しいマントもしっかりと性能を発揮してくれたので満足だ。もし前と同じ物を買っていたらまた買い替えが必要になる所だった。

第227話 12階層の見えざる敵

俺は今12階層を進んでいる。

2日目の今日は昨日までの苦戦を糧にしてかなり良いペースで進んで来ている。

割り切って小さい敵は他のメンバーに任せて、ある程度的の大きい敵を中心に対応している。

小さな敵の時は盾役に徹する事でうまくいつている。

シルにも攻撃役を積極的にこなって貰っているのでかなり機嫌が良い。

暫く潜ってわかったがこの階層のモンスターはそれぞれが魔法を使ってくる。

そこまで強力なものではなくボール系中心ではあるが、やはり魔法を使ってくるのは非常に厄介だ。

「ご主人様今度も数が多いです。10体以上いそうですがはつきりとは分かりません」

「はつきり分からない？どう言う意味なんだ？」

「反応が微弱で重なっていたりしてはつきりとはわかりません」

「とにかく今までとは違う感じだから念の為シルは『鉄壁の乙女』を頼む。みんなも敵モンスターをしっかりと見極めてから攻撃頼むよ」

「かしこまりました。『鉄壁の乙女』」

光のサークルの中で敵を待ち構えるが一向に来ない。なんだ？どう

して来ないんだ？

「シル敵が来ないんだけど」

「ご主人様、敵の反応は確かにあります。近づいて来ているのは間違いないです」

「みんな、何か見えてる？」

「……………」

返事が無いので俺同様何も見えていないようだ。皆の反応を見ようと横を向いた瞬間、大きな火球が10個連なって襲って来た。

「ズドドドォーン！」

『鉄壁の乙女』の効果でノーダメージだが通常の『ファイアボール』よりも明かに大きな火球の10連撃はかなりの大迫力だった。どこだ？どこから攻撃して来た？シルの感じからしても見える距離にいても良いはずだ。

「ベルリア、分かるか？」

「いえ、確かに何かの気配を感じる事は感じますが、微弱すぎてよく分かりません」

ベルリアもダメか。

「ズドドドォーン！」

再び大型火球の10連撃が襲って来た。
まずいな。敵影が掴めない。このままではギリ貧になってしまうの
で撤退するか？

「ルシエとりあえず前方に攻撃してみてください」

「わかったよ。でも場所は適当だぞ。『破滅の獄炎』」

前方を獄炎の炎が照らし出す。正面で何か燃えた感じはしない。

「海斗さん、何か動きましたよ」

「え！？全然分からなかったけど、何処？」

「前方の砂の上なのです」

砂の上？慌てて前方の砂の上を見るが何も見えない。

「ごめん分からない。どんなやつ？」

「すごく小さいのです。モンスターかどうかもわからないのですが、
ネズミより小さいのです」

ネズミより小さい？

「ミク見えてる？」

「ごめん。私も全然見えてない」

「あつ。動いたぞ！」

「あいりさん。見えましたか？」

「ああ確かに何か動いた。小さいが虫では無いと思う」

俺には見えていないが確かに何かはいるようだ。

「ルシエ前方の地面に向かってもう一発頼む」

「わたしも何にも見えてないからな。当たるかどうかわからないぞ
『破滅の獄炎』」

再び前方を獄炎が照らし出すが、確かに当たったかどうか全く分からない。

「シルどうだ？反応は減ったか？」

「はい。分かりづらいですが、恐らく2体程反応が減りました」

一応効果が得られたようだがまだ8体残っているらしい。

敵も先程の攻撃で警戒するだろうから同じ手は効かないだろう。

昨日のネズミと同じ様な展開だが大きく違うのは、未だに俺が敵を認識できていない事だろう。

「ズドドオン！」

少し数を減らした大型火球がまだ襲って来た。

「シル、効果が切れたらもう一度『鉄壁の乙女』を頼む」

これで後1分は大丈夫なので、戦略を練りながら地面を凝視する。

「あっ！」

確かになにかが動いたが、かなり小さく素早い。

明かにネズミとは違う感じだ。もう少し平たい感じがするが、この小さいのがあんな大きな火球を出現させていたと考えると、小さくても決して侮れない。

第228話 サラマンダー？

俺は今12階層で見えざる敵と戦っている。

見えざる敵とは言つもの完全に見えて無い訳ではなく少しだけ見えている。

ネズミより小さな何かが砂の上を絶えず移動しているが、小さすぎるのとナイトスコープ越しのせいではつきりとは正体が掴めない。

「ドガガガン」

こちらがまごついている間にも大きな火球が襲ってくる。

「ミク、敵を確認出来た？狙えそう？」

「一瞬見えたけど流石にあれは無理よ。小さすぎる。狙ってるうちに逃げちゃうわ」

ミクはダメか。

「ヒカリン何とか『アイスサークル』で捕らえられないか？」

「やってみます」

ヒカリンが砂の上を凝視して『アイスサークル』を発動する。

何とか1体を捕捉する事に成功したが、連続で捕らえることは出来ない。

俺がバルザードの斬撃を飛ばして捕捉した1体は消滅させたが、捕捉した時によやく姿を確認することが出来た。

敵の正体は蜥蜴だった。大きさがおそらく7〜8cmぐらいだろうか？普通のと比べても一回り以上小さいサイズだがよく見ると鱗が鎧の様になっていた。

大きな火球を発現する蜥蜴。これはまさかあの有名な火蜥蜴サラマンダーか！？

「みんな、あの火蜥蜴ってもしかして、あのサラマンダーじゃないか？」

「海斗、さすがにそれはないだろう。サラマンダーだぞ。あんなサイズじゃないだろう」

「いや、でもあんな大きな火球を撃ってくるんですよ。まさに火蜥蜴じゃないですか」

「言われてみれば確かにそうだが」

「ご主人様、本来のサラマンダーは精霊の一種なので同じ物かどうかは分かりませんが、大きさは手のひらサイズの事もあろうようなので、全く違うとは言い切れません」

おおつ。やっぱりあれがサラマンダーか。ファンタジー物のレギュラーキャストと言っても過言ではない有名なやつだ。俺が目にしてる蜥蜴がそつだとしたらちょっと感動だ。倒し方に苦慮しているが、それは置いといて感慨深い。

「おい、海斗。馬鹿面してないでどうにかしろよ」

俺の感動シーンをルシェの無粋な声がかき消してしまった。

どうしよう？後7体。ヒカリンの『アイスサークル』でも7体全

部を同じ戦法で捕らえる事は出来ないだろう。こうなったらとにかく火力押ししかない。

「ヒカリン『鉄壁の乙女』の効果切れたら『アイスサークル』を発動して氷の柱を出して。あいりさんとミク、ヒカリンは氷柱の影に隠れて。危なくなったら重ね掛けして防いで。ベルリアは前衛で炎の球を出来るだけ撃ち落としてくれ。俺とシルとルシエで攻撃をかけるぞ」

ヒカリンの『アイスサークル』が合図となり俺たちは打って出た。前方方向に向けて俺を先頭に3人で走り出す。砂の上を凝視して見つけ次第即攻撃だ。すぐに一体見つけたのでシルに声をかける。

「シル頼んだぞ」

「かしこまりました。『神の雷撃』」

そのまま止まらずに進進するとすぐにもう一体も発見したので今度はルシエが狙い撃つ。

「チヨロチヨロするな蜥蜴のくせに。『破滅の獄炎』」

問題なく2体を葬り去ったがまだ5体残っている。更に奥に走ると今度は3体がそれぞれ離散するのが見えた。

「真ん中は俺がやる。左右に逃げたのを頼む」

俺の通常攻撃では当たらない。狙うには精度が足りず、確実に倒すには火力が足りない。

俺にはこれしか無い。

『愚者の一撃』

バルザードの斬撃に目一杯の威力を込めて地上の火蜥蜴目掛けて放つ。

唸りを上げた斬撃が周囲の砂每、蜥蜴を爆散させた。

強烈な倦怠感が襲って来たのですぐさま低級ポーションを飲み下すとすぐに動ける状態に回復した。

俺が一連の動きをしている間に左右の蜥蜴はシルとルシエがしつかりと仕留めていた。

後2体。

後方から『アイスサークル』の氷柱目掛けて火球が2個飛んでいったのが見えた。

まずい。見落としてしまったらしい。

火球の1つはベルリアが斬って落とした。相変わらず肩口にダメージを受けてはいたが『ダークキュア』があるので問題ないだろう。

もう一発は氷柱にぶつかって氷柱を砕いて水蒸気を上げているが、どうやら氷柱が耐えきつたらしい。

「シル、ルシエ後ろに戻るぞ！」

3人で元の位置に戻るべく走りだしたが、最後の2体はあいりさんとミクがそれぞれ『アイアンボール』とスピットファイアの連射で倒してくれた。

『愚者の一撃』の代償として低級ポーションを1本使ってしまったので10万円が飛んで行ってしまった。

落ちている火蜥蜴の魔核を見ると結構大きいけど1個1万円以上で買っ取ってもらえるかはわからない。

「ご主人様、お腹が空きました」

「『破滅の獄炎』連発したんだからいつぱいくれよな」

あつ、この2人の分もあるから完全に赤字だな。

次こそ俺と相性の良い敵が出ると良いな。何とか次で取り返したいところだ。

第229話 12階層の足下

俺は今12階層を進んでいる。

火蜥蜴を力業で撃退したが、結局攻略法を見つけない事は出来なかった。次遭遇しても全員で力押しするしか無い。

これまでの感じだとやはり12階層は小さな敵が中心なのかもしれない。

「ヒカリン、次にさつきみたいなのが出て来たら『ファイアボルト』で倒せそうかな？」

「やってみないと分かりませんが、動きを予測して放てば、なんとかなるかもしれないのです」

「ミクも何とかスピットファイアで倒せないか？」

「ある程度見通しの良いオープンスペースに敵がいれば連射である程度は倒せるかも」

「あいりさんは『アイアンボール』で倒せてましたもんね」

「ああ、ある程度先読みして放ったからな。狙いも段々つくようになって来たからだよ」

「本当はスナッチが一番適任な気はするんだけど、さすがにカーバングル用のナイトスコープは売ってないよな」

一応、敵に対する全員の経験値が増えたので、次の方がより上手く

戦えると思う。

それにしてもやっぱり暗いのはかなりハンデだ。ナイトスコープを使ってはいるが、普段眼鏡などもつけていない俺が急にナイトスコープを装着して探索をすると、それだけで結構疲れる。

敵がいる時は寧ろ集中するのでそれ程違和感を感じないが、探索を進めている時は足下や周囲の壁にも注意を払わなければいけないので消耗してしまう。

ナイトスコープ越したと距離感が掴み辛く、探索のペースも今までよりも格段に落ちてしまっている。

「ご主人様、敵モンスターです。今度は4体です。」

「俺とベルリアが前だ。あいりさんが中衛、後は後衛で頼むよ」

俺とベルリアが前に立つが、4体だとこの階層では少な目な気がする。

数からして、なんとなくだが今までよりは大きい敵な気がする。

「ベルリア見えたか？」

「いえ、まだ何も見えていません」

迎撃態勢を取ってはいるが敵が来ない。

また火蜥蜴なのか？

砂の上に目を凝らしているが全く何も見えない。

「マイロード避けてください！」

ベルリアの声に反応して横に飛び退くが足下の砂の地面が陥没してしまった。

蟻地獄のようにゆっくりではなく突然足下が陥没してしまったのだ。

「ベルリア、よく分かったな」

「いえ、たまたまです。何となく足下の方に嫌な感じがしたので」

「ベルリア、敵は砂の中か」

「見えているわけではないので、断言は出来ませんが可能性は高い
と思われます」

また厄介な敵だ。

砂の中の敵のようだが以前の巨大ミミズのような直接的な攻撃をかけてくるわけではないので、居場所が特定出来ない。

「シル、敵の居場所がわかるか？」

「ご主人様、申し訳ございません。敵の居場所までは、はっきりとは分かりかねます」

地中の敵。まだ厄介な敵が相手のようだが、またもこれと言った攻略法を思いつかない。

一応バルザードの斬撃を足下の砂に飛ばして見るが、当然砂が弾け飛んだだけで何の効果も無かった。

地中の敵、大きいかどうかすら分からない。

「マイロード避けてください！」

再びベルリアの声に反応して避けるが、また俺の足下だけ大きく陥没した。

おそらくこの敵はいつものように俺をターゲットにしているのかもしれない。

ベルリアが第六感で辛うじて感知できるようなので、その瞬間を狙ってシルに攻撃をさせるしか無い。

「シル、俺の近くに来てくれ。ベルリアが俺の足下の敵を感知したら神槍で足下を攻撃してくれるか？」

「かしこまりました。ただご主人様を囿にしているようで、あまり良い気はしませんが」

「問題ない。俺はこの前おみくじで末吉だったから、こんなもんだよ。シルを信用しているから大丈夫だ。思い切ってやってくれ」

「ご主人様、そこまで私の事を信頼してくださって嬉しいです。間違いなく敵を殲滅して見せます」

俺の一言でシルにやる気が漲っている。

普段から本当にシルの事は信じているのだが、言葉にするってやっぱり大事だな。

第229話 12階層の足下（後書き）

第230話 砂の中のドリル

俺は今12階層で戦っている。

砂の中の見えない敵と交戦しているが、殆ど手詰まりの状態なので俺自身を囿にしてシルの神槍の一撃に頼る事にした。

「ベルリア頼んだぞ。お前の勘が頼りなんだ」

「お任せください。マイロード、必ず期待に応えて見せます」

「ああ、頼んだぞ」

自分で考えた作戦とはいえ、自分自身を囿にするのはかなり緊張する。

数秒後にベルリアから声がかかる

「マイロード、来ました。避けてください」

声に従って大きく横に飛び退くのと同時にシルに声をかける。

「今だシル。頼んだぞ！」

「はい。我が敵を穿て神槍ラジュネイト！」

シルの攻撃により、今まで俺が居た足下の砂地が大きく穿たれ、吹き飛んだ。

シルの攻撃の跡を見ていると吹き飛んだ砂に混じって、小動物のような物が飛んで行って消滅してしまった。

はつきりとは見えなかったがあれってもぐらか？

「みんな、敵を確認出来た？」

「多分もぐらじゃない？」

「もぐらだと思つのですが、口の部分にドリルっぽい物が」

「私も見えたぞ。ドリルがついてた」

どうやら敵はもぐらで間違いないようだが、口がドリルになってい
るらしい。

敵なので微妙なところだが、ドリルもぐら。何となくカッコいいな。
モンスターって言うよりメカで出て来そうな感じと能力なので何と
なく俺の厨二心が反応してしまいそうになる。

「マイロード、来ましたよ。今です」

ドリルもぐらに想いを馳せている間にも敵が襲って来たようで、ベ
ルリアの声に反応してジャンプする。

「シル。頼んだぞ！」

「我が主人の敵を穿て神槍ラジュネイト！」

再び足下がシルの攻撃により大きく穿たれて弾け飛んだ。

今度も弾け飛ぶ土の中にドリルもぐらを確認する事が出来たが、や
っぱり、なんとなくだが散りざまもカッコいいような気がする。

それと、さっきのシルの神槍の発動用の聖句だがなんかおかしかつ
た気がする。聴き間違えだろうか？一瞬の事だったのではつきりと

はしないが違和感を覚えた。

後2回あるので集中して聞き漏らさないようにしないといけない。

「マイロード、今です。跳んで下さい」

流石に3回目になると少し慣れて来た。さっきよりも余裕を持ってジャンプする。

「シル、もう一回頼んだ」

「はい。我が主人の敵を穿て神槍ラジュネイト！」

「ドバガガン！」

三度、足下が炸裂してドリルもぐらが散っていく。やっぱり悪役然としていてかっこいい気がする。

それにしてもシルの聖句だがいつも以上に力が入っている上にやっぱり文言がいつもと違う。

しかも気のせいかなラジュネイトの威力が幾分か上がっている気がする。

「マイロード、最後の一体が来ましたよ。今です。はいっ」

ベルリアも4回目で慣れて来たのか、掛け声が可笑的。

可笑しいが俺も慣れたものでそれに合わせて体が自然と動いてジャンプした。

「シル、これで最後だ。頼んだぞ！」

「我が主人の敵を穿てそして消え去れ！！神槍ラジュネイト！」

おおつ。やはりいつもと聖句が違う。しかも力が入っている。おまけに威力も明らかに増している。

「ドバガガンー!!」

威力がありすぎたのか今度はドリルもぐらは姿を見せる事なく消滅してしまった。

それにしても見事に4体共俺の所を狙って来たな。

俺から変なフェロモンでも出ているのだろうか？それとも末吉の呪いか？モンスターに聞く訳にもいかないので真相は謎だ。

「シル。よくやってくれた。ありがとう」

「いえ。お役に立てて嬉しいです。それにしてもご主人様ばかり狙う不届きなモンスターでしたな。流石に頭にきてしまいました」

「そういえば、神槍の聖句がいつもと違ったようだけど」

「聖句はあくまでも発動のきっかけですから、ご主人様への攻撃が許せなくて、いつもより力が入ってしまいました」

「俺のために怒ってくれたんだな。嬉しいよ。これからも頼りにしてるからな」

「ありがとうございます。これからも頑張りますね」

シルと会話をしているとベルリアが得意そうな顔でアピールして来ているのが見えたので

「ベルリアも助かったよ。ありがとうな」

「マイロードのお役に立てて幸せです。これからも一層励ませて頂きます」

「頼んだぞ」

それはそうとドリルもぐら、敵ながらカッコ良かったな。

「あのさ、さっきのもぐらだけど、ちょっと格好良くなかった？」

「えっ？どこが？」

「いやフォームとか」

「海斗さん変ですよ」

「いや散りざまとか」

「海斗、それはないと思うぞ」

うぐん女性陣にはあの格好良さが分からないらしい。

パーティーメンバーで普段から分かり合っているも、この感覚まで共有する事は難しいらしい。

本当は誰かと共有して盛り上がりたい所だが仕方がないのでこの感情は胸にしまっておこう。

第231話 スライムスレイヤー再び

俺は今1階層に潜っている。

昨日は、ドリルもぐらを殲滅した時点で撤収したのだが、シルにハイコストのスキルを連発させた事もあり、魔核を貯める事が全く出来なかった。今日から放課後はスライムの魔核を貯める事に専念する事にした。

今日も既に8匹を倒しているが、さすがに今のレベルでスライムを倒す事に余裕を感じているので、コストのかからない倒し方を色々研究している。

バルザードや『ウォーターボール』は魔石を消費してしまうので除外している。

ただし、タングステンロッドやノーマル状態のバルザードで切りつけてみたがレベルアップしたステータスを持ってしても倒せない。通常の剣では斬っても斬っても直ぐに再生してしまい埒があかない。次に試したのはパンチとキックだ。格闘経験も全く無いのでへっぴり腰だがレベルに任せて思いっきり蹴り上げて見る。

「グチュ、ボヨヨン」

大きく弾け飛んで、一瞬いけそうな雰囲気はあったが残念ながら修復してしまった。

やって見た感じとしてはもう少し威力があれば倒せそうな気がする。その日はそれ以上成果を得られそうになかった。殺虫剤プレスに切り替えて合計35個の魔核を回収する事が出来た。

次の日に家からいくつか武器になりそうなものを持ち込んだ。

一つ目はフライパンを持ち込んだ。昨日は攻撃の威力と面積が問題のように思えたので硬くて面積の広いフライパンを試してみる事に

したのだ。

早速スライムを発見したので、近づいて思いつきりフライパンでぶっ叩いて見た。

ジェルっぽい抵抗感があり

「グニユ、ボヨヨン」

可笑しな音と共にスライムが後方に吹き飛んだが、消失はしていない。続けて何度かフライパンでぶっ叩いて見たが、同じ事の繰り返しで消滅させる事は出来なかった。

フライパンの持ち手は残念ながら、ぶっ叩く時にそこまで力を込められるように出来ていないようで、武器としての性能は今ひとつのようだ。おまけに手元の部分が少し曲がってしまったので、帰るまでに母親に怒られないよう、こっそり直しておかなければいけない。

次に試したのはテニスケットだ。家の倉庫に転がっていたものだが誰が使っていたものか分からない。

振った感じはスピードも出ていい感じなのでこれならいけるんじゃないか？

フライパンでは倒す事の出来なかったスライムに向けて、ラケットをフルスイングして攻撃して見た。

「グチュッ！」

ラケットにジェル状の強い抵抗感を感じだが、そのまま力任せに振り切ってやった。

結果スライムは消失したが

「うっ。いつて〜」

軽いラケットの副作用とでも言えばいいのか、スライムへのインパ

クトの瞬間持っている手と手首に大きく負担がかかってしまったよ
うで少し痛めてしまった。

1匹ならまだいいが、複数を倒すには向いてなさそうだ。
最後に試したのが大きめのシヨベルだ。

これも家の倉庫で見つけたものだが、かなりの年代物のようで金属
で出来たシヨベル部分が結構重い。

すぐに次のスライムを見つけてシヨベルを両手で持ってフルスイ
ングした。

「グチュ、グニユ、ボヨヨーン」

インパクトの瞬間に結構抵抗感が生まれたが両手で持っているお陰
で問題なく振り切れ、いつものスライムの消失音を発生する事が出
来た。

「やった！」

「ご主人様も見事です。流石です」

「ああ、ありがとう」

「シル、甘やかしちゃダメだぞ。たかがスライム1匹倒したただけだ
る。全然流石じゃない」

「ルシエ、そんな事、わざわざ言わなくても俺が一番わかってるよ」

たかがスライム1匹だが殺虫剤を使わずにコストゼロで倒せた事に
意味がある。

その日はシヨベルを使ってスライムを倒して回ったが、22個の魔
核を回収する事が出来た。

明日以降のペースアップに期待したい所だ。

第232話 スライム狩りの極意

俺は今1階層に潜っている。

昨日と一昨日の2日間試行錯誤した結果、俺はコストゼロでのスライム討伐の偉業を達成していた。

他の探索者にとっては当たり前前の事だとは思うが、今まで殺虫剤や魔核を消費しながら倒していた俺としては、大きな進歩だ。

大きなシヨベルにより一撃。勿論、スキルスライムスレイヤーの恩恵もあると思うのでスライムにとっては結構強烈な一撃になっているのだろう。

今日一日とにかく頑張って、コストゼロで今までの記録を更新してみたい。

「ご主人様、前方にスライムです。頑張ってくださいね」

「ああ任せとけ。今日の俺はいつもとは違っぞ」

前方に現れたレッドスライムに向けて猛然とダッシュして射程に入った瞬間スコップを振りかぶってフルスイングした。

「グチュ、グニユ」

普段使っているバルザードとは全く勝手が違うので、当たるには当たったが、クリティカルヒットとはいかずに少しずれてしまったように消失まで至らなかった。

再生中のスライムにしっかり狙いを定めて、今度は外さないようにフルスイングした。

「グチュ、グニュ、ボヨヨン」

今度は、しっかり命中したようで、いつもの変な音を出しながら消
失した。

「ふっつ。問題なく無事倒せたな」

「何が、ふっつ。問題なくだよ。ただのスライム相手に一撃目外し
たくせに。問題ありだろ」

「ルシエ、いちいちうるさいな。2撃目で倒せたんだから上出来だ
ろ。次からは一撃で倒すから見てるって」

シルはスライムを発見するのに絶対必要だが、シルだけ召喚すると
後でルシエが拗ねてしまうので、ルシエを召喚しないと言う選択肢
はなく、ちよつと面倒だがこのやりとりは仕方がない。

ある意味これがコストといえば今回のコストかもしない。
一応、必要性は薄いがベルリアも召喚している。

「シル、どんどん次を探してくれ」

その後もスライムの出現率も高いので、俺はどんどんスライムを倒
していった。

ただ、探索を続けていくうちに問題点も浮き彫りとなった。

「ご主人様、またスライムです。肩の力を抜いて頑張りましょう」

「ああ、頑張るよ。ありがとう」

シルの声援を受けて眼前のグリーンスライムに向けてシヨベルによるフルスイングの一撃をお見舞いする。

「ボヨーン」

グリーンスライムは大きく弾け飛んだが、消失していない。

一撃で消失まで至る事もあるのだが、先程から結構な確率でそこまで至っていない。

理由は、俺の技量不足もあると思うが、スライムが液体と言うか流動体である為に、インパクトの瞬間にズレるのだ。

しっかり狙って、命中したと思っても、インパクトの瞬間にわずかに中心からズレてしまい消失まで至らない事がある。

「海斗」。全然うまくならないな。才能がないんじゃないか？」

「ルシエ、俺はスライムスレイヤーだからな。スライムに関してだけは才能あると思うぞ」

「ふん。才能ね。それにしてはな」

「姫、何事も訓練あるのみですよ」

「ご主人様、確実に上手くなっていますよ。流石です」

俺はサーバント達と会話を交わしながら、グリーンスライムに追撃をかけて消失させてから小さな魔核を回収した。

ルシエ達とのくだらない会話も単調なスライム狩りでは丁度良い感じに気が紛れるので悪くない。

下層階では余裕を見せている場合ではない事も多いので、会話も限定的だが1階層では余裕があり会話も弾む。

弾むと言つのはちょっと違つかもしれないが、いい感じでサーバント達とコミュニケーションを取る事が出来ていると思う。

ルシエは、遠慮というものを知らないので、いちいち突っ込んで来るがその分会話も多く、今ではシルと同じぐらいの信頼関係を築けていると思っっている。

これで将来、ルシエに『おっさん』とか『臭い』とか言われたら、シヨックで立ち直れないかもしれない。

今日一日のリザルトはスライム24匹だった。

昨日よりは2匹多く狩る事が出来たが、殺虫剤プレス使用時よりも明かに討伐数が減ってしまったている。

コストゼロなのは素晴らしいが、収穫も減ってしまったている。

これでは意味が無い。殺虫剤プレスを使用して狩まくった方が実益は高いかもしれない。

ダンジョンでは思い通りにはいかない。本当に難しい所だ。

第233話 ダンジョンに出会いを

俺は今学校にいる。

今週はスライム狩りを極めようと奮闘している所だ。

「海斗、来週頼んだぞ。楽しみだな」

「ああ、他のダンジョンに行った事ないからな。どんな所か興味あるよな。それはそうと3日間何処に泊まるんだ？」

「それは大丈夫だ。もうビジネスホテルを手配しといたから心配するな。俺達が誘ったからな、ホテル代は俺達2人持ちだぞ」

「そうなのか。それは助かるよ。ありがとだな。後、現地までどうやっていくんだ？」

「電車とバスと徒歩だな。大体2時間ぐらいで着く予定だから。それと装備どうするつもり？俺達は現地のギルドに郵送してもいいかなと思ってるんだけど、一緒に送るか？」

「いや俺は多分、前日までダンジョンに潜ってると思うから送るのは無理だと思う。頑張って装備していくよ」

「流石だな。なかなか出来る事じゃないな。隼人、俺達もそうしようか」

「いや俺達は予定通り郵送しようぜ。そこまで自信が無い」

「そういえば今度のダンジョンの事調べてみたか？」

「勿論調べ済みだって。俺達のダンジョンとは全然違うみたいだな」

「そうみたいだな。まあ3日しか無いからそこまで探索できないと思っけど」

「いや〜。いろいろと楽しみだな〜なあ、真司」

「そうだな〜。いろいろと期待しちゃうよな」

「おい、2人共いろいろって何だよ。怪しいな。ダンジョンに何かあるのか？」

「いや勿論メインの目的は他のダンジョンを経験したいってので間違いないけどな〜真司」

「そうそう、俺達も経験積んでブロンズランクに上がりたいし。間違いないけどな〜隼人」

「何だよ。その変な言い方。何があるんだよ」

「そりゃあ、探索者の男子高校生が県外のダンジョンに遠征したらな〜真司」

「色々あってもおかしく無いよな〜隼人」

「ごめん。2人のいつてる意味が分からないんだけど」

「いやだから、他県のダンジョンに彼女の居ない男子高校生が2人でいくんだぞ。同じイベント参加者とか他県のダンジョンをベースにしている子とかな〜」

「そりゃメインの目的じゃ無いけど期待しちゃうよな〜」

「おい、そもそも2人って俺達3人だろ」

「いや海斗はな〜」

「お前は葛城さんがいるからな〜」

「葛城さんがいるって、別に付き合えてるわけじゃ無いんだぞ。まあ別に他の子には興味ないけど」

「まあお前は大丈夫だ」

「そのままでもいいと思うぞ」

「お前達、この前女の子のパーティーメンバーに懲りたんじゃなかったか？」

「いやそれはもう懲りたよ。だからメンバーには興味無いんだけど、もしかしたら出会いがあるかもしれないだろ。ダンジョンに出会いを求めちゃダメなのか？」

「いや別に悪くは無いけど。そんなつまい話そうそう無いと思うぞ」

「海斗。何事もやってみないと始まらないんだ。始めてみてようやく可能性ってのは生まれるものだぞ。俺は可能性を捨てて、何も始

めない賢者よりも、可能性にかけて行動を始める愚者になりたいんだ」

「すまない、多分凄くいい事を言ってるんだと思うが、全く心に響いて来ない」

「は〜これだから超絶リア充黒い彗星は……」

「おい、それは今関係ないだろ」

「いやいや、関係あるだろ」

「そうだぞ海斗。確かにダンジョンは楽しい。やり甲斐もある。それを教えてくれた海斗には感謝してもしきれない。でもな、俺達は健全な男子高校生だぞ。女の子との触れ合いだってほしんだよ。出来る事なら彼女だって欲しい。可能性があるならそれに賭けるのが男だろ！」

「まあ、気持ちは痛いほどわかるんだけど、力説してる割に説得力が無いな」

「まあ、海斗には関係のない話だから一緒にダンジョン攻略がんばろうぜ。ただチャンスがあったら俺達は、止まらないから応援頼むな」

「ああ、わかったよ。ただな一つ聞いていいか？」

「ああ何でも聞いてくれ」

「この遠征って女の子も来てるのか？」

「それはわからない。でもな、俺達は可能性に賭ける」

「そうか、頑張れよ」

真司と隼人に熱い気持ちを伝えられたが、俺には今まで17年間上手くいかなかったものが遠征に行ったからって急に上手くいくとは思えない。俺はネガティブすぎるんだろうか？

第234話 進撃の前澤さん

俺は今学校にいる。

真司と隼人が来週の遠征に向けて並々ならない意欲をもっていた事が分かった。是非ともその情熱をダンジョン探索に向けて欲しい。

「海斗、来週遠くのダンジョンまで行くの？」

「ああ、春香。真司達から聞いたの？来週は初めての遠征イベントで隣の県のダンジョンまで行くんだよ」

「遠征イベントなんてあるんだね」

「高木君っていつもダンジョンに潜ってるイメージなんだけど、もしかして毎日ダンジョンに行ってる？」

珍しく春香の友達の前澤悠美さんが話に混ざってきた。

「まあ大体ダンジョンに潜ってるけど、それがどうかした？」

「ダンジョンばかりでよく飽きないんだ？」

「最近は毎日変化が結構あるから全然飽きるとかは無いな」

「今度の連休も遠征でダンジョンに潜るんだ？」

「そうだけど。真司と隼人と3人で」

「男子3人で行くんだ。ちなみに連休とかに春香と遊びに行ったりしないの?」

「えっ?春香とはこの前、映画に行ったけど」

「春香、高木くんは、こう言ってるけどそれって結構前だよね」

「うん。まあちょっと前に行ったかな」

「高木くん、もうちょっと春香と遊びに行った方がいいんじゃない?」

「何で前澤さんがそんな事・・・」

「それは春香の友達だからだけだ」

「はあ、それは知ってるけど」

何だ?今日の前澤さんがちょっと怖い

「高木くん、最近春香と仲良くしてるよね」

「まあ、お蔭様で?と言うか、春香の好意で仲良くと言うか時々お買い物とかに行かせてもらってます」

「お買い物ってデートだよな」

「いや、デートじゃなくてお買い物だけだ。そうだよな、春香」

なんだ?外の寒気が何処から吹き込んできたのか?寒い・・・

「うん。お買い物は、まあ、お買い物だけ。ね」

何かまずいのが？歯切れの悪い答え方だ。俺とお買い物に行った事は内緒にしたかったのが？いやでも前澤さんは既に聞いていた様子。なんて答えればいいんだ？

春香の受け答えを聞いて、それまで何ともなかったのが急に焦りを覚えてしまった。

「ふうん。やっぱり高木くんは思った通りね。高木くんがダンジョン好きなのは分かったけど、それ以外のプライベートも大事にした方がいいじゃない？」

やっぱりって一体何が思った通りなんだ。

「いや、ダンジョン以外のプライベートって言うてもなく特に俺には何も無いけど」

そう答えた瞬間、俺に真冬の湖底に沈んだ様な重寒さが去来した。なんだ？俺はやばいのか？突然変な病気にかかった！

「高木くん。とにかく春香をもっと大事にして！」

「う、ううん」

俺は一体何を怒られてるんだ？やばい。春香をもっと大事にして？そもそも俺的にはMAX大事な女性だけど、俺は彼氏でも何でも無いんだぞ？どう大事にしろと言うんだ？

俺は何か悪い事した？

「高木くん。遠征も2人が嬉しそうに出会いがどうとかがって言うってたんだけど」

「ああ、それは真司と隼人が、出会いを求めてるってだけだよ」

「高木くんも求めてる？」

おおっ。意識が遠退きそうになる。熱が急激に出てきた。インフルエンザか？寒い・・・

「いや俺は全く求めてないけど。そもそも遠征に女の子がいるかどうかもわからないし」

「高木くんは、普段から2人と一緒にダンジョンに行ってるんだ？」

「いや、時々一緒に潜る事はあるけど、普段は別だよ」

「それじゃあ、普段は誰と行ってるの？」

「ああ、普段は俺1人で潜ってるんだ。基本俺ずっとソロだったから、土日だけイベントで一緒になったメンバーと潜ってるんだ」

「ふーん、そうなんだ。まあ普段ソロって言うのも何か、似合ってる気もするからそれはいいと思うけど」

「ああ、それはどうも」

これは褒められているのか？

「それじゃあ、逆に言うと平日はいつでも春香と遊べるって事だよ」

ね

「まあ、それは、いつでもってわけじゃ無いけど。言ってもらえれば大体」

「高木くん。女の子から言ってくれればってどう言うことかな。高木くんから誘ってくれないのかな」

「圧が凄い。インフルエンザの俺にはきつい・・・」

「ああっ、春香、今度からもう少し平日にも誘って迷惑じゃないかな」

「私は勿論いいんだけど、「ごめんね」

「そこは、春香が謝るところじゃ無いでしょ、ねえ高木くん」

「はい。そうですね。春香は何も悪く無いです」

「本当に「ごめんね」

「春香！謝らない」

なぜか前澤さんが参戦してきた会話はそれで終わったが、俺は会話中に病気になるってしまったようだ。

結局何の会話だったのかよく分からないが、とりあえず平日にもっと春香を誘うことになったらしい。

俺としては願っても無い事なので、何も言う事はないが、春香は本当に良かったのだろうか？

第235話 スナッチの覚醒？

俺は今12階層に潜っている。

12階層に入ってから探索のペースが落ちてきているので、どこにかこの週末でペースアップしていきたい。

「そういえば、ミクは来週の連休に何処に行くのか？」

「まあ、家族と出かけるのと、ちょっとイベントに行くけど」

「イベントって何？」

「あれよ、あれ」

「あれって何？」

「カードゲームのイベントがあるのよ」

「あゝ。前に言ってたな。現役だったんだ」

「そうよ。何か文句ある？」

「いやいや、全くないよ。むしろ趣味があって羨ましいよ」

「海斗は趣味って何か無いの？」

「俺は趣味がダンジョンみたいなものだからな」

「まあ、打ち込めるものがあるのは良いことよ」

「あいりさんは何するんですか？」

「大学の友達と遊ぶのと、道場の練習生募集イベントに参加だな」

「家の手伝いですか。流石ですね。ヒカリンは？」

「わたしは家でゲームと家族とお泊まりでお出かけなのです」

「ヒカリンもゲームするの。どんなゲーム？」

「普通のゲームです。普通のです」

「ああ、そうなんだ。普通のね」

普通のゲームって何だ？興味は有るが聞いてはいけなような気もしてスルーしておいた。
俺は空気が読める男だ。

「ご主人様、敵モンスターです。8体います。前方に注意をお願いします」

「いつも通り、俺とベルリアが前衛に。あとのみんなは後衛で、ミクはスナッチに自由にやるよう指示して」

「分かったわ」

しばらく前方に注視していると、ナイトスコープの視界にネズミの姿が映った。

バルザードを顔の前に構えて待ち構えるが、次の瞬間後方から小さな影が飛び出していくのが見えた。飛び出した影はそのままネズミに集団に向かって行き、鋼鉄の針を射出してネズミを次々に倒して行く。

倒すスピードが早すぎて、後衛のメンバーも攻撃する事が出来ない。

恐らく20秒程の時間だろうか？

鋼鉄の針が何度目か放たれたと同時に敵の気配が完全に消えた。

「凄いな。シル敵はもういないか？」

「はい。8体ともに消滅しています」

「ミク、スナッチやったな」

「うん。ありがとう。これも海斗のおかげよ」

先週迄全くと言って活躍の場がなかったスナッチだが、ここに来て一番の戦力に躍り出たと言っても過言では無い。俺も苦労したかいがあった。

昨日、急激な体調不良に見舞われた俺は、ダンジョンに潜るのをやめたが、下校の途中で体調も上向いて来たので急遽ミクに連絡を取った。

先週、何とか12階層を探索出来たものの、敵モンスターとの相性の悪さは如何ともし難いので、何とかスナッチを戦力に組み入れられないか色々と考えていた。

今は全く戦力になっていないが、普通に考えて、ネズミとか蜥蜴とかに一番相性が良いのはスナッチなんじゃ無いかと考えたのだ。スナッチが戦力になれない理由はただ一つ。視界の問題だけだ。

カーバンクル用のナイトスコープが有れば一番良いが、そんなものは売っているはずもないので自作するしか無い。

ミクに連絡して内容を伝えたと、試してみたいとの事だったので早速ダンジョンマーケットに向かった。

まず購入したのは単眼の小型ナイトスコープ。本来両眼の方が良かったが、スナッチの目の大きさに合うものがなかったので単眼で我慢する。

次に向かったのはペットショップだ。

ペットショップで小型犬用のハーネスを買い、その後1000円ショップで紐や布類等を購入した。

裁縫とかは全く心得がないので、マジックテープとアイロンを多用して継ぎ接ぎだらけだが、ハーネスに調節の効く小型のヘッドギアのようなものを自作して固定し、そこにナイトスコープを取り付けた。

強度的に不十分なので、補強グッズを色々買い足してから、今日スナッチに実際に着用させてから補強した。

手作り感満載でお世辞にもスマートとは言えないが、効果は劇的だった。

俺達には的が小さすぎるが、スナッチには全く問題にはならなかった様であつと言う間に敵8体を葬り去ってしまった。

これなら、今後の12階層の探索がかなりスムーズになるかもしれない。スナッチも蚊帳の外感があったので、昨日慣れない作業に悪戦苦闘した甲斐があつて本当に良かった。

第236話 12階層のドロップ

俺は今12階層を進んでいる。

スナッチの活躍があり探索ペースが明らかに上がってきている。

火蜥蜴対スナッチは明らかにエサ対捕食者のような構図となり圧倒している。

このまま小動物しか出ないようであれば、スナッチに攻撃は任せ切っても良いぐらいだが、スナッチのMP残量と相談しながら進むしか無い。

スナッチが攻撃出来なくなると、また高火力の力押ししか無くなってしまう。

「シル、何か俺たちの出る幕は無くなってしまったな」

「まあ、パーティなので、そういう事があっても良いではないですか」

流石シル。言う事が素晴らしい。

「だけどシルも虫はダメだけど、小動物とか蜥蜴は大丈夫なんだな」

「はい。虫でさえなければ全く問題ではありません」

「俺的には大差ないような気がするけど不思議なもんだな」

「ご主人様、そこは明確に違いますので細心の注意をお願いします」

「マイロード、流石に女性の方にそれは良くないですよ。虫は虫、

他は他です」

「そういえばベルリア、お前は虫は大丈夫なのか？」

「もっ、もちろんです。こ、この私が虫如きに遅れをとるはずがありません」

「ふんそうなのか」

ベルリアお前、嘘をついているな。まあ、わかりやすいから良いけど。

そのまま進んでいくと、コウモリの群れに遭遇した。

空中にいるコウモリに対してはスナッチの攻撃も絶対的ではなく、瞬殺という状況でも無いので全員で戦う事となった。

スナッチも攻撃手として参加しているが、俺もどうにかこのコウモリを仕留めたい。

武器を魔核銃に持ち替えて狙いを定めようとするが、コウモリの不規則な飛び方を予測するのは結構難度が高くなかなか当たらない。

それでも、俺にも意地がある。何が何でも当ててやるという気持ちをのせて、集中力を極限まで高めて連射する。

「プシュ」 「プシュ」

そのうちの一発がコウモリの羽を射抜いて、そのまま墜落したので追いかけてとどめをさして、消滅に追いやる事ができた。

俺の初コウモリだ。

爽やかな充実感に浸っていると

「もう終わりましたよ」

ヒカリンの声が聞こえて我に返ったが、既に他のコウモリは撃退されていった。

コウモリの消え後の地面を確認すると魔核に混じっていくつか違う物がある。

これってもしかしてドロップアイテム。

久々のドロップアイテムに心臓の鼓動が高鳴る。

近づいて確認してみるとそこには

金属の塊が一つとハサミ？が一つ落ちていた。

「ミク、この金属の塊って何だと思っ？」

「多分、銀じゃない？」

「銀ってシルバーの銀？」

「そう、その銀」

「じゃあ結構価値があるのかな？」

「うん。これが金だったら価値があると思うけど、銀って多分100gで6000円ぐらいじゃないかと思うんだけど」

「これってどのぐらいの重さだと思っ？」

「5000gぐらい？」

「じゃあ30000円よりも安いって事が」

「それより多分500gだけこの状態で買い取ってくれるところは

無いと思う」

「それじゃあこれはどうしたら・・・」

「文鎮か記念品ね」

「それじゃあこのハサミは？」

「これは流石に私じゃわからない」

「私も刃物は結構見たことあるが、これは普通のハサミにしか見えないな」

「まあ、もしかしたらすごいマジックアイテムかもしれません。期待して持って帰りましょう」

「そうだよな。せつかくドロップしたんだし、きっと良いものに違いない。ギルドに行って鑑定してもらおう」

「これ、鑑定してもらうの？」

「もちろんだよ」

「まあ、期待しないぐらいでちょうど良いと思うわ」

メンバーの反応はかなり鈍めだが、ドロップアイテムと言うもののレアさが分かっているのかもしれない。

俺にとってドロップアイテムがどれほどレアか。

2年間一度も出たことなかったんだぞ。ドロップアイテムと言うだけでレアなんだ。

この文鎮だってドロップアイテムと言っただけで価値がある。
残念ながら俺は書道を嗜まないが・・・

第237話 理由(前書き)

第237話 理由

俺は今12階層を引き返しているところだ。

順調に12階層の探索が進んだので、今日は早めに切り上げてギルドに向かう事にしたのだ。

寒さと暑さを階層毎に体感させられるので、10階層でのシャワーは欠かせない。

他のメンバーも習慣づいてきたようで、最近女性陣はマイシャンプーやマイソープをマジックポーチに忍ばせているようだ。シルとルシエとも日替わりで入っているので、2人を相手に香りを変えたりして楽しんでいるようだ。

俺とベルリアは、備え付けのシャンプーとボディソープで済ませているが、十分満足している。

ベルリアは何故か女性陣の香りを嗅いで羨ましそうにしていたが、この士爵級悪魔は意外に女子力が高いのだろうか？

「あゝさっぱりしたな。それじゃあ、みんなでギルドに行こうか」

「すまない。私はちょっと用があるから先に失礼してもいいだろうか？」

「わかりました。他の2人はどうする？俺1人でも問題無いけど」

「私は特に予定はないから一緒に行くわ」

「私も一緒に行くのです」

あいりさんが先に帰ったので地上に出てから3人でギルドに向かっ

た。
基本パーティ4人でずっと行動していたので何となく不思議な感じだ。

「海斗さん。海斗さんから見てあいりさんの事はどんな風に見えますか？」

「あいりさんか。行動が落ち着いていて頼りになるよな。俺兄弟とか居ないから、こんなお姉さんがいたら良いなとは思っよ」

「そうですね。私も憧れます。凜としていて、私も将来はあいりさんのようになりたいのです」

「えっ？ヒカリンってあいりさんみたいになりたいのか？」

「何かおかしいですか」

「いや、全くおかしくはないんだけど、ちょっとベクトルが違うというか。あいりさんもヒカリンもそれぞれに魅力があるわけだから、それを生かしていったほうがいいんじゃないかな」

「海斗さん。ナチュラルに人たらしですね。普段全く空気を読める感じではないのに・・・謎です」

「それって、褒めてるの？」

「もちろん褒めてますよ」

「でも確かにあいりさんには憧れるわよね。王華学院に受ければ1年だけ一緒に大学に行けるし楽しみだわ」

「俺も行けるように頑張らないといけないな」

「海斗は、ちゃんと受験勉強してるの？」

「受験勉強？特にはしてないけど、俺の場合とにかく授業集中だよ。ダンジョンで体を動かしてお金を稼ぐ。」

その代わりに授業を集中して聞く。その方が自分に合ってるみたいで最近成績も上がってきたんだよ。それに俺には絶対に王華にいかなければならぬ理由があるから死んでも受かるよ」

「海斗って学校の勉強だけで何とかかなりそうなんだ。思ったより頭いいのね。それより絶対に受からないといけない理由って何？」

「いやそれは、まあ、内緒だ」

「女ね」

「女ですね」

「い、い、いや。そ、そんな不純な理由では……」

「オープンキャンパスで一緒にいた可愛い子でしょ」

「うっ。どうしてわかった……」

「逆にどうして分からないと思ったの」

「海斗さん。分かり易すぎです。会った事のない私でも直ぐに分かりましたよ。隠すつもりならもう少し、ポーカーフェイスを覚えた

方がいいのですよ」

「そうかな」

年下のヒカリンにこう言われてしまっ俺って・・・

「まあ、3人揃って入学できれば、みんなで友達になれるわね。それと遠征に行くのってあの時一緒にいた男の子達なんですよ」

「うんそう。隼人と真司だよ。結構気のいい奴らだからよかつたら今度紹介しようか?」

「紹介は特に大丈夫だけど、彼らも王華学院うけるのかしら?」

「どうかな。オープンキャンパスに興味があつて来たみたいだけど。まあ一緒に受ければ俺は嬉しいけどな」

「一番最悪なのは5人で受けて海斗だけ落ちるパターンね。注意した方がいいわよ」

「なんて不吉なことを。注意した方がって、注意のしようがないだろ。まあ頑張つて勉強するよ」

「いいですね。楽しそうです。私もお二人が王華学院に通われるようなら、志望してみます」

「ああ、それはいいな。みんなで通えるようがんばろうな」

もうすぐ3年生になるが運命の受験に向けてダンジョン探索も一層頑張りたい。

第237話 理由(後書き)

第238話 魔法のハサミ(前書き)

第238話 魔法のハサミ

俺は今探索者ギルドに来ている。

目的は一角コウモリのドロップアイテムの鑑定だ。

いつものように日番谷さんの所に並んで順番を待つ。

「次の方、どうぞ〜」

「はい。よろしくお願いします。今日はアイテムの鑑定をお願いします」

「はい。どのようなアイテムでしょうか？」

「え〜っと、これとこれです」

「ちょっと海斗、それも鑑定するつもりなの？」

「こちらはハサミと金属素材ですね」

「海斗、その金属多分銀よ。30000円ぐらいの価値しかないのよ。鑑定料の方が高いぐらい。勿体無いじゃない」

「いや、ミクよく考えて見てくれ。これがもしたただの銀じゃなくて魔法銀だったらどうする。銀色の希少金属だったらどうするんだ。ドロップアイテムなんだから、どんな素材でもあり得る」

「まあそれはそうかもしれないけど。日番谷さんはどう思いますか？」

「普通、魔法銀のような希少金属はそうそうドロップするようなものはありませんが、高木様は普通では推し量れない部分がありますので私からは何とも申し上げられません」

「俺は可能性にかけたいんだ」

「わかったわよ。気の済むようにすればいいけど、ただの銀だったら次からは考えてね」

「それはもちろんだよ。じゃあお願いします」

「それでは鑑定料として6万円頂戴いたします」

日番谷さんがいつものように奥の部屋にアイテムを持って行った。

「楽しみだな」

「海斗さん、あまり期待し過ぎない方がいいですよ。海斗さんのようにレアアイテムばかり手に入れる事は本当に稀なのです」

「わかってるって。大丈夫だよ」

5分程で奥から日番谷さんが戻ってきた。

この瞬間は何回経験してもガチャを引くような感覚があり緊張する。

「こちらが鑑定結果になります」

鑑定書を2枚受け取ったので早速鑑定内容を確認する。

一枚目の鑑定結果は

銀鉱石・・・銀で出来た塊。純度は99：999パーセントの銀
おおっ。やはり銀鉱石だったか。これは俺が文鎮として使うしか無
いな。ただ銀って酸化するんだった気がする。普段からの手入れが
必要だな。

「海斗、やっぱり銀だったわね」

「そうだね。銀だったね・・・」

「まあ海斗が納得ならそれでも良いけど、ハサミの方はなんだった
の？ただのハサミだった？」

俺はミクに促されてもう一枚の鑑定書に目を移す。

マジックシザー・・・魔法の力により強化されたハサミ。通常のハ
サミよりも切れ味が鋭い。

これは、文字通りマジックアイテムだ。

「ミク、やったぞマジックアイテムだ。マジックシザーで普通のハ
サミよりも切れ味が鋭いらしい」

「それってよく切れるハサミって事？」

「多分そう言う意味だと思うけど」

「海斗さん、それって何かの役に立ちますか？」

「えっ？」

銀が普通の銀だった事もあり、マジックアイテムという事が単純に嬉しくて舞い上がってしまったが、言われてみて気がついた。

確かに切れ味が鋭いハサミをどうやって生かせば良いのだろうか？一応刃物には違いがないので攻撃に使えなくはないが、初期のバルザード以上に使いにくそうだ。

「良かったら、2人のうちどちらかが使ってみる？ヒカリンにはこの前マジックアイテムを渡せなかったし、もし必要だったら」

「海斗さん大丈夫です。ハサミは流石に使いようがありません。私はまた別の機会にマジックアイテムを頂ければ良いのです」

「そうか、それじゃあミク、これいる？スピットファイアの足しにならないかな？」

「ならないと思うわ。むしろ分解して打ち直しても出来れば良いんじゃないけど、流石にハサミの状態ではね」

2人ともに断られてしまった。あいりさんも業物のなぎなたが有るのにハサミが必要とは思えない。

「日番谷さん。このマジックシザーって売れたりしますかね？」

「はい、一応マジックアイテムですので買取は可能ですが、余り需要が有る物ではありませんので5〜10万円の間だと思われまます。それでも普通のハサミよりは遥かに良いお値段だと思いますよ」

確かに普通のハサミはそこまでの値段しないので高額には違いない

が、売ってしまうには微妙な金額すぎる。
今後何かの役に立つかもしれないし、役立て方をどうにか考える方
向でとりあえず残しておく事にした。

第239話 カフェの扉

俺は今1階層に潜っている。

今週末はついに他県への遠征イベントだ。

このイベントは、ボスを倒すとかそう言った事が目的では無く、殆ど行く事の無い他県のダンジョンを経験させる目的が大きい。経験値を積ませて探索を効率よく進める糧にして欲しいと言うギルド側の思惑と、遠征者と地元の探索者両者の刺激になれば良いというよきな意味合いとが含まれている。

俺も初めての事なので楽しみにしているが、それだけに準備は念入りにおきたい。

特に魔核が足りなくなつては話にならないので、魔核狩りに励んでいる。

そして消耗品も結構買い込んだ。

カップラーメンや栄養補助食品、そして暇つぶしのトランプ等だ。流石に三日分をリュックだけに詰め込むのは無理だったので生まれて初めてキャリアケースというものも買ってみた。将来も使えるように少し大きめのものにしてみたが、実際に揃えた物を詰め込んでみると、少し大き過ぎたかもしれないが、大は小を兼ねると言う言葉もあるのでまあ大丈夫だろうと思う。

「みんなもここ以外のダンジョンに行くのは初めてだから、慎重に行こうな。それと真司達の事も一応頼んだぞ。アイアンランクになったとは言ってもまだまだ成り立てて危ない所もあるはずだから、サポート頼むな」

「ご主人様のご友人なのですから、万全のサポートをさせていただきます」

「マイロード、私にお任せください。精一杯がんばります」

「まあ、あの2人だろ。任せとけて。問題ない」

流石俺のサーバントは頼もしい。まあダンジョンが変わっても遅れを取るような事は絶対にならないだろう。

準備万端で金曜日を迎えたので、この日はダンジョンは休みにして先週約束したように平日だが春香を誘ってみようと思う。

ただ、平日の放課後に春香を誘って何をすべきかが思いつかない。

「あの、春香。先週約束したから、お誘いしたいんだけど、今日の放課後は、ご予定はいかなものでしょうか？」

「うん、大丈夫だよ。どこか行きたい所とかあるの？」

「いや、それが特には。春香と行ければ俺は、どこでも良いです」

「それじゃあ、今学校の女の子に流行ってるカフェがあるんだけど、行っても良いかな？」

「もちろん良いよ。カフェねカフェ」

流石は女子高生、カフェか。

俺は今までの17年の人生の中でカフェと呼ばれるものに行った事がない。

正直、今の生活にカフェは全く必要がなかった。

ジューズもお菓子もコンビニと自販機が有れば用足りるので、ダンジョンと学校が主体の俺の生活には、全く必要のないものだった。

遂に俺のカフェデビューの日が来てしまったらしい。

よくTVでカフェカフェ言っているのを見るので、カフェの事は勿論把握している。

お洒落な人達や女子高生が所謂スイーツや美味しい飲み物を飲む所だ。

図らずも今日、俺も大人への階段を一段登る事になるようで、行くことが決まってから落ち着かない。

放課後になり、春香とカフェに向かう事になった。

「海斗、それじゃあいこっか。場所は私ができるから」

「春香、そのカフェって、行った事あるの？」

「ううん、行った事はないけど、前にクラスの子達がオススメだつて言ってたから」

「そんなんだ。それじゃあお願いします」

春香と並んでカフェまで向かうが、やっぱり並んで歩くだけでも緊張してしまう。

今日の学校の授業の事などたわいも無い話をしながら15分程歩いていると

「海斗、ここなんだけど」

おおっ、ここか。流石は女子高生に人気のカフェ。外観からしてなんか洒落ている。

少々緊張しながらも、その事を春香に悟られないように気を配りながら、俺はカフェの扉を開けた。

第240話 カフェデビュー（前書き）

第240話 カフェデビュー

俺は今、洒落たカフェに来ている。

緊張しながら開けたカフェの扉の中は、思った通り洒落ていた。

そして、他にも結構お客さんが来ていたが、女の子のグループとカ
ツプルしかない。

明らかに俺は場違い感があるが、今日は春香と一緒になので問題ない
はずだ。

空いている席に案内されてメニューを見る。

これはドリンクだけでも良いのか？それとも約束事でデザートも注
文する事になっているのだろうか。

「春香、注文するのって決まってる？」

「うん、オレンジティーとフランボワーズのタルトがオススメだっ
て聞いたから、それにしようと思うの」

オレンジティーとフランボワーズのタルト・・・

やはり今までの俺の人生には関わりが無かった物たちだ。

オレンジティーはわかる。レモンティーのオレンジ版だろう。

フランボワーズがフランス語なのもわかる。聞いたことがある気も
するが、さくらんぼだったか？

流石カフェ、メニューまでフランス語とは凄いな。

メニューを見る限り俺に馴染みがあるのは、フルーツのショートケ
ーキだな。しかしこれは英語表記な気がするけど、誰も突っ込む人
はいないんだろうな。

飲み物もコーラとかの方が本当は良いんだけど、カフェだしな。

カフェと言うぐらいだからコーヒーを注文するべきなんだろうな。

「それじゃあ俺はこのオススメのブレンドコーヒーと春香と同じブランドで」

普段家ではコーヒーなど全く飲まないが、背伸びをして頼んでしまった。

まあコーヒーだから飲めない事はないだろう。

注文してからもう一度周囲を窺ってみるが、やはり女性比率が高い。時間のせいもあるのだろうが、学生が多いし、制服から同じ高校の生徒も数組いるのがわかる。

放課後にカフェを普段使いするなんて、なんてお洒落な人達なんだろう。

カプルの席に目をやると、なんとケーキをお互いにフォークで食べさせあっている……

これは現実か？テレビの中に世界では無く現実世界なのか？こんな事が放課後の日常繰り広げられているのか？

あまりの衝撃に、凝視してしまっていると

「海斗、あんまり見ちゃダメだよ。相手にも悪いからね」

おおっ、やばい。

「ああっ。ごめんごめん。ちょっと衝撃的だったから」

「でも恋人どうしだったら、憧れるよね。あんな感じなもの」

「まあ、そうかもしれないね」

春香はあんな感じに憧れているのか。俺は憧れると言うか、ああいうのは、お話のそれこそファンタジーの世界の出来事だと思っていた

ので全く頭の中に無かった。

確かに春香と「あ〜ん」とか言いながらケーキを食べさせ合いっこするなんて想像をしただけで、俺はもうやばい・・・のぼせて鼻血が出そうだ。

最高すぎる。

あまりにスイートな妄想に正気を奪われそうになっていると本物のスイーツとドリンクが出てきた。

見た感じコーヒーは普通だ。フランボワーズのタルトは、赤いが、どうもさくらんぼではない気がする。

なんか種のようなブツブツが見えるので、イチゴか？普通の苺ではない気がするので木苺か？

フランボワーズは木苺の事か！知ったかぶりして

「ああ、さくらんぼのタルトか！いいね」

などと調子に乗らなくて良かった。

「私の希望でここに決めちゃったけど、海斗って甘い物大丈夫だったかな？」

「ああ、俺はなんでも大丈夫だよ。甘くても辛くても。春香の行きたい所だったらどこでもいいです。ここも最高です」

「うん。クラスの女の子にもここはすごく評判がいいみたい。私は初めて来るんだけど、折角だからタルトも早く食べてみよっか」

春香に勧められて、フォークでタルトを切って一口食べてみる

甘い・・・

俺は比較的甘い物もいける口だと思うが、かなり甘い。

甘いのをごまかそうとコーヒーに口をつけたが、今度は苦い・・・

「海斗、評判だけあってすごく美味しいね」

「あ、ああ。美味しいね。すごく美味しい。甘いのが美味しいね」

もしかしたら女の子には丁度いいのかもしれない。

春香が美味しそうに食べているのを見ていただけで俺は幸せだ。

第240話 カフェデビュー（後書き）

第241話 カフェは甘くて苦い大人の味（前書き）

第241話 カフェは甘くて苦い大人の味

俺は今人気のカフェに来ている。

フランボワーズのタルトとブレンドコーヒーを頼んで食している。

タルトは想像以上に甘くて普段飲まないコーヒーは苦い。

だが目の前にいる春香が美味しいと言って、嬉しそうに食べている。その瞬間に立ち会えただけで、俺はもう最高だ。

この瞬間を演出してくれている、この人気カフェもやはり最高だと
言わざるおえない。

「春香は甘い物が好きなんだね」

「うん、ケーキとか特に好きなんだ。でも海斗も甘いもの大丈夫だったんだね。知ってたらもっと早く誘ってればよかったよ」

「もうね。甘いものでもなんでもいいよ。いつでも誘ってね」

「ここはね、オレンジピールのブラマンジェも人気みたいだから今度また来ようね」

「えっ、それじゃあ今からもう一個頼もうか？そのオレンジピールのブラマンジェ」

「2個も食べたなら太っちゃうから、今度来ようね」

「はい。今度来よう。来週でも来よう」

「じゃあ来週また約束ね」

おおく。やっぱりカフェ最高だ。来週も春香と来る事になってしまった。

オレンジピールのブラマンジェ。オレンジピールは英語でブラマンジェはフランス語だと思うがこの際そんな事はどうでもいい。人気メニューとして存在してくれていてありがとう。

正直美味しいかどうかもよくわからないフランボワーズのタルトを食べながら、春香とおしゃべりをしている。

「春香は、この連休は何をして過ごすか決まってるの？」

「うん、悠美達と、ショッピングモールへお買い物に行く約束をしてるんだ」

女の子達でのお買い物、時間がかかりそうだ。

「買うものって決まってるの？」

「うん、服とか買いたいなと思ってるんだけど、海斗は、3人で遠くのダンジョンに行くんでしょ？」

「ああ、そう。初めてなんで俺も勝手が良くはわかってないんだけど、最近ブロンズランクになったから、遠征にもいけるようになったんだ。真司と隼人はまだアイアンランクだから俺を誘ってきたんだよ」

「男の子って泊まりで行けるのっていいよね。合宿みたいで楽しそうだね。泊まる場所とか決まってるの？」

「真司達が手配してくれてるらしいから俺も詳しくは知らないんだ

けど、今回はお金も出してくれるみたいだから俺は飯ぐらいは奢ろうかと思ってるんだよ」

「ダンジョンって一日中潜ってるものなの？」

「まあ人によると思うけど、俺たちの場合一日中潜ってると思う。3人共ダンジョン中毒気味だから・・・」

「それって大丈夫なのかな？無理しちゃダメだよ。何事もやりすぎは良くないからね。周りが見えなくなる場合もあるから、3人の内の誰かは冷静にね」

「ありがとう。無理はしません」

「海斗、今までにダンジョンで危なかった事とかは無いの？」

「まあ、時々はあるけど・・・」

「あるの!?!」

「いや、本当にちょっとだけだよ。ほんの少し」

「ダンジョンが大事なのはわかるけど、無理はしないでね。約束ね」

「はい。無理はしません。約束します」

本当は結構危ない事も有るのだが、春香の優しさを前に、結構有りますとは言えなかった。極力無理はしないよう努力はしようと思う。これ以上ダンジョンの話になるとボロが出そうなので春香の話に話題を変える事にした。

「春香って休みの日にやるような趣味はあるの？」

「趣味？結構色々あるんだけど、最近はね料理と写真かな」

「料理と写真？結構意外な感じがするけど」

「海斗、それって結構失礼じゃない？料理は趣味って言うか、前からよく作ってるんだよ。お菓子とかも作るし」

「いや、そうじゃなくて写真だよ。写真が趣味の人って余り周りにいないから」

「最初はスマホで、周りの風景とか友達とかを撮ってたんだけど、だんだん撮るのが楽しくなってきた、デジタルカメラを買ってからは、電車とか車とか動く物にも興味が出てきて撮ってるんだよ」

「そうなんだ。俺は写真撮ることとかほとんど無いから、また機会があつたら撮ってみたいな」

「本当に？それじゃあ今度一緒に、写真撮りに行こうよ」

「うん是非お願いします」

意外な春香の趣味が判明したのと、一緒に写真も撮りに行けそうなのでよかった。

ただ今のところ写真の良さや違いはわからないが、とりあえず俺の初カフェは甘いタルトと苦いコーヒーの味で、少しだけ大人になれた気がした。

第241話 カフェは甘くて苦い大人の味（後書き）

第242話 初遠征(前書き)

第242話 初遠征

俺は今電車に乗っている。

朝7時に真司、隼人と駅で待ち合わせをしてから遠征先のダンジョンに向かっている。

一旦、ダンジョンの近くにある探索者ギルドで今回の参加者全員で集合することになっている。

「海斗、本当にフル装備で来たんだな」

「それはそうだろう。装備無しってわけにはいかないだろ」

「しかもその大きなトランクは何？2泊3日だぞ。海外にでも行くつもりか？」

「いやいや、このぐらいは必要だろ。カップラーメンとかトランプとか装備とか」

「俺達も装備は送ったけど、俺たち2人分よりも多いぞ。女の子でもそんなになんじゃないか？」

「お前ら、遠征イベントを舐めてるな。備えあれば憂い無しだよ」

「海斗、多分備えすぎてるぞ」

「まあ、どっちでもいいだろ。それにしても楽しみだな。今回は何人ぐらい参加するんだろうな。2人共イベント参加は初めてだろ」

「ああ。初めてだから緊張してるんだよ。変な人とかに絡まれたりしたらどうしようかって真司とも話してたんだ」

「イベントだと一応登録制だから、やばい人は少ないんじゃないかな」

「そうかもしれないけど、申し込んだときは出逢いに期待してたんだけど、だんだん不安になってきてな。俺達もが出逢いに期待してるって事は、他にも期待してるパーティがいっぱいいるだろうからな。よくよく考えたら結構難易度高いと思ってるな」

「いや、何の難易度だよ。多分他のパーティは出逢いを求めてじゃないと思うけどな。そもそも男女ペアのパーティとかもいるかもしれないしな」

「くっ。リア充かつ」

「何だよそれ」

「海斗、お前変わったな」

「いやいや、別に何も変わってないだろ」

「お前には春香ちゃんもいるしな。パーティメンバーも可愛い子ばかりだしな。しかもサーバントまで超可愛いしな。お前がリア充じゃないか〜！」

「いやそんなんじゃないって。春香とは残念ながら何も進展はないし、メンバーはそんなんじゃないし、サーバントなんか幼女だぞ」

「以前のお前なら絶対俺たちと同じ反応をしたはずだ。ダンジョンに男女ペアで潜ってるのを見たら、絶対に呪いの言葉を吐いていたはずだ。それが今はどうだ、仏様か菩薩様にでもなったかのような穏やかな表情。それこそ勝者の表情じゃないか。俺もあやかりたい。海斗と一緒にいると恩恵があるかもしれない」

「恩恵って・・・俺そんな凄い存在じゃないぞ。それよりせっかくトランプ持って来たから、着くまで遊ぼうぜ」

「わかった。リア充とモブゲームをするか」

「そんなゲーム知らないんだけど」

「大富豪のことだよ。大富豪イコールリア充だろ。それ以外はモブなんだよ」

「ああ、まあ間違っただけは無いかもな。じゃあそれやるか」

それから電車が目的地に着くまでの1時間俺たちはリア充とモブゲームに勤しんだが、普段特にトランプゲームに強いわけでは無い俺だが、何故かこの日は、ほとんどひとり勝ちしてしまった。

「くっ。リアルなリア充はトランプまでリア充なのか。世の中何て不公平なんだ。俺達もこの遠征でリア充になるぞっ！」

俺が変な風に勝ちまくったものだから、真司と隼人の心におかしな火がついてしまったようだ。

俺は全く悪く無いが、少しだけ責任を感じてしまうので、機会があればしっかりサポートさせてもらおうと心に誓った。

電車が目的の駅まで着いたら今度はバスでの移動となったが、結構距離があつて30分以上揺られて移動した。

そこからは徒歩で15分ぐらいで目的地のギルドまで到着した。

初めてのギルドだが、いつものギルドと作りがよく似ているのでぐにわかった。

今の時間は9時10分。待ち合わせの時間まであと50分あるので中で待つ事にした。

第242話 初遠征（後書き）

第243話 初めてのギルド

俺は今ギルドに来ている。

いつものギルドではなく初めての隣県ギルドだ。

内部の作りはいつものギルドと大差無いが、当然日番谷さんをはじめめとするいつものスタッフはいない。

中に入ってから、イベント参加者である事を伝えて、真司と隼人は事前に送っていた装備を受け取って準備をした。

「おい、お前らそれ何？」

「いや何ってなあ」

「うん、ただのマントだけだな」

「先週までそんなの装備してなかったよな」

「先週海斗と一緒に潜って、やっぱり形から入るのも大事かなと思つて2人で買い揃えたんだ」

「海斗が黒だったから、俺らは茶色と灰色にしといたから」

「しといたからって・・・」

「流石に鎧は無理だったからマントだけな」

「3人お揃いだな」

「お揃いって、これってどうなんだ」

黒、茶、灰色のマントを着た17歳の男子探索者が3名。

客観的に見て、おかしい。3人集まると流石にこれって厨二感が強すぎないか？

今更どうしようもないので、今回の探索はこれで通すしかない。

集合時間の10時まで待っていると順番に今回のメンバーが集まってきた。

パーティ単位の参加なので集まってくるとすぐにわかった。

今回の参加パーティは俺達を含めて全部で6組の25名だった。

年齢を見る限り、俺達は若い部類に入っているような気がするが、思った通り男性比率が高く、25名中20名が男性だった。

そして女性5名も女性だけのパーティは無く全員が男性。パーティと一緒にだった。

「終わった・・・」

「儂い夢だった・・・」

真司と隼人があからさまに落胆しているのが見て取れる。

「まあ、探索頑張ろうな」

「ああ」

「うん」

「それでは今回お集まりの皆様にご説明させていただきます。今回の遠征では皆様にマップをお渡しさせて

頂きます。普段探索されているダンジョンとは全く違う造りとなっ

ておりますので、マップにしたがって無理のない範囲で探索をお願いします」

「おいつ、真司あの人可愛くないか？」

「ああ良い感じだよな、隼人。今日から毎日会えるよな」

「楽しみだな」

「ああ頑張ろうな」

この2人は一体何を頑張るんだ。さっきまであれだけ落ち込んでいたのに現金なものだ。

一通りの説明を受けたので早速ダンジョンに潜る事にするが入り口までは係の人に誘導されて25名全員で向かう事となった。

ワクワクしながらダンジョンに踏み入れたが、いつもとは違う風景がそこに広がっていた。

このダンジョンは2層しか無い。いつものダンジョンは下に階層が広がっているが、このダンジョンは横に広がっている。

ワンフロアがエリアによって階層分けされている。

今回は第1層を探索する事となるが、大凡のマップでの階層分けを見ながら進む事にする。

道中も初見のモンスターが出現する可能性が高いので最初からサーバントを召喚しておく。

「シルフィー召喚。ルシエリア召喚。ベルリア召喚。みんな初

めてのダンジョンだから頼んだぞ」

「シルフィーさん、ルシエリアさんよろしくお願いします」

「俺達も頑張るんで一緒をお願いします」

「ここは明るいですね。最近暗いところが多かったのでよかったです」

「なんか、ダンジョンっぽく無いな。なんか広いし壁もいつもより少ないぞ」

「マイロード、私も精一杯頑張ります」

せつかくの新たなダンジョンなので時間がもつたないと思い、すぐに全員で進む事にした。

「おい、あのパーティってもしかして・・・」

「あれって、メンバー構成がちょっと違うけどあれだよな」

「若いサーバント3体とあの黒い装備間違いないだろ」

「俺、噂だけで、都市伝説だと思ってたよ」

「あれが噂の『超絶リア充黒い彗星』か」

「本当に普通だな。噂通り装備は普通じゃなかったけど」

「サーバント、可愛かったな。うらやましい・・・」

俺の知らないところでこんな話しが展開されていたようだが俺が知る由もなかった。

第244話 平面ダンジョン

俺は今初めてのダンジョンを進んでいる。

普段のダンジョンは下に伸びる所謂立体型のダンジョンだったが、このダンジョンは横方向に伸びている所謂平面型のダンジョンだ。全方向にかなりの広さを持っているので、初めは固まっていたイベント参加者達も徐々にばらけて来て、今目視出来るのは1組だけとなっている。

途中スライムに遭遇したが、殺虫剤で問題無く倒せたのでダンジョンが変わってもスライムは同じだと言う事が確認できたのでよかった。

殺虫剤でスライムを倒すのを見て、真司と隼人が俺の戦闘スタイルについて質問して来たので仕方無しに答える事にした。

「絶対人には言うなよ。俺にも理由はわからないけど、スライムはな、殺虫剤に弱いんだよ。所謂特効的効果があるんだ」

「へ〜っ。そうだったんだ」

「ふ〜ん。あんまり知られてないよな」

「お前ら、それだけ？」

「いやそれだけって、スライムだしな」

「ああ、普段俺たち5階層まではゲート使ってるから、もうスライムに会う事無いし」

「いや、お前らわかってないな。スライムを手軽に狩り放題なんだから。すごくないか？」

「スライム狩り放題って、スライムばかりそんなに狩ってもな」

「そもそも、狩り放題って言うほど会えないし」

確かにシルのようにモンスターを探す手段がなければ、効率よくスライムを狩る事は難しいだろう。

正直俺の中では秘匿しておきたい、とっておきだったのだが、レベルがある程度上がっている探索者には、あまり旨味が少ない内容なのかも知れない。

正直目から鱗だった。

そこからさらに進んでいると突然

「ご主人様、モンスターです。かなりのスピードで移動しています。おそらく3体です」

「よしっ。俺と真司とベルリアが前に、隼人とシル、ルシエが後方に」

エリアもスライムのいたエリアからは既に外れているので、違うモンスターに違いない。

待ち構えているとすぐにモンスターの姿が見えた。馬に2本の角が生えている。

馬に角といえばユニコーンをイメージするが、どちらかと言うと羊の角の大きい奴なのでユニコーンとは大分違う。

ダンジョンが広い為に散開しながらスピードを出して向かってくる。まず俺がバルザードの斬撃を真司が『アースバレット』を放つが、俺の斬撃は命中して一体は消滅したが、真司の『アースバレット』

は、外れてしまった。

敵の動きが思ったよりも早い。残った二角馬が猛然と突進して来てそのまま俺達を飛び越して後方に抜けてしまった。

「シル、ルシエ頼んだ！」

「消えてなくなりなさい『神の雷撃』」

「馬の丸焼きつてうまいのか？『破滅の獄炎』」

2人の攻撃が爆音と共に2体の馬型モンスターに炸裂して消滅に追いやった。

「まあ初戦にしては被害もなかったし良かったんじゃないか？」

「ご主人様、馬型は、初めてなので、やはりモンスターの種類は違うようですが全く問題はありません」

「馬は角が生えても所詮馬だな。わたしの敵じゃないな」

「まあ2人の事は全く心配してないけどな」

「海斗俺やばいかも。『アースバレット』が当たらなかったし、あつさり後ろに行かれた」

「いや俺の方がもつとやばいって。馬が飛び越えてくると思わなかったから咄嗟に動けなかった。シルフィーさんとルシエリアさんがいなかったら俺やばかったよ」

「まあ2人とも初戦だからな。これから徐々に対応できる様になる
つて。慣れるまでは俺とシル達がフォローするからあんまり気にす
んな。俺なんか普段から他のメンバーに頼りつきりだからな」

「おおっ、海斗がかっこよく見える・・・やばい惚れてしまう」

「俺も海斗がかっこよく見える。吊り橋効果で変な扉が開いたらや
ばい・・・」

「2人とも馬鹿な事言つのはやめてくれ。置いていくぞ」

「すまん。でも一瞬カッコよく見たのは本当だぞ」

「俺も一瞬カッコよく見えたけど、変な扉は冗談だ。何があつて
も扉は開かないから安心してくれ」

「本当に頼むぞ！フォローはするけど、冗談が過ぎると置いていく
からな」

モンスターに注意を払わないといけないのに、この2人にまで流石
にそっちの気は配れない。

ダンジョンで可笑しな冗談は洒落にならないので控えて欲しい。

第245話 スピードスター

俺は遠征先のダンジョンを進んでいる。

目指すは8階層と区分されているエリアだ。

原始的だが一番間違いない方位磁石を使いマップ通り進んでいく。

「ご主人様、敵です。今度もかなりのスピードで移動しています。4体います」

「みんな、さつきと同じでいくぞ。真司と隼人は焦らず行こう」

俺と真司とベルリアで前に陣取る。

今度も二角馬か？

そう思いながら前方を見てみると、現れたのはゴブリン？

いつも見ているゴブリンよりも一回り小さい気がするもの見た目は完全にゴブリンだが移動スピードがおかしい。

「はやつ」

まだ距離があるので姿を捉えられているが、明らかに通常のゴブリンとは違うスピードで移動している。

「隼人も魔核銃で応戦してくれ」

近づかれると厄介なので近づかれる前に仕留めたい。

俺も魔核銃を手に持ち攻撃をかける。

「嘘だろ!？」

魔核銃の攻撃が当たらない。弾が着弾する前に次の場所に移動してしまっている。

これはただのゴブリンではない。ゴブリンの素早い版。スピードスターゴブリンとでも言うべき存在だ。

正直狭いダンジョンではこいつらの特性は生かされないと思うが、この広い平面ダンジョンでは縦横無尽に駆け巡ることができる。

モンスターもダンジョンの特性に合わせて独自進化しているのかもしれない。

まだ、それほどこのダンジョンのモンスターに出会ったわけではないがスピード系のモンスターが多いことは想像できる。

このダンジョンをベースにしている探索者もそれに適応する形でレベルアップしているのだろう。

やはりダンジョンは奥深い。

「おいっ、何ぼーっとしてるんだよ。さっさと指示しろよ」

「ああ、すまない。ルシエ、進行方向を予測して周辺一帯焼き払ってくれ。シルも雷撃を頼む。いくら速くても雷撃以上ってことはありえない」

「かしこまりました。ゴブリン如き素早くなくても所詮相手ではありません。『神の雷撃』」

「チヨロチヨロするな。『破滅の獄炎』」

「俺もやるぜ『必中投撃』おりゃ」

シル達の攻撃で2体のゴブリンが消炭と化し、もう一体も隼人の『必中投撃』による槍の一撃で消失してしまった。

シル達の攻撃の威力は言わずもなだが、隼人の『必中投撃』はある意味スピード殺しとも言える物だろう。スピードが速かるうが必中するのだから、相手からするとたまったものではない。

俺も一応スピードタイプのもりなので負けられない。残った1体に向けて俺も走り出す。

残念ながらスピードスターゴブリンほどのスピードは出ないが動きを予測して距離を詰めることは出来ている。

攻撃が届く距離まで全力で走りながら理力の手袋の力を使い、ゴブリンの足を掴んでやった。

凄いスピードで走っていたゴブリンは、そのスピード分だけ思いっきり転んでゴロゴロと転がっていった。

転がって動けなくなったゴブリンに向かって一気に距離を詰めてバルザードでとどめを刺した。

「今度の敵も素早かったな。このスピードに徐々に慣れていこう。それにしても隼人の『必中投撃』は凄いな。スピードを無効化してる様なもんだな」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。さっきは、全く動けなかったからな。なんとか今回は役に立たないと思って必死だったんだ。海斗も戦い慣れしてて、さすがだな」

「まあ、ちょっとだけ俺の方が先輩だからな。いろんな敵にあってるからだよ。それに先週末までにかく小さい敵ばかり相手にしてたからな。今回は普通サイズの敵ばかりだからほっとしたと言っつかやりやすいんだ」

「また、俺だけ役に立てなかった。俺やばいかも」

「まあ真司はパワータイプだから引き付けて戦うしかないな。武器もここでは槌じゃなくて2刀流で素早い動きに対応した方がいいんじゃないか」

「ああ、そうしてみるよ」

「マイロード、次こそ頑張ります」

そういえばベルリアこのダンジョンに入ってから全く役に立ってなかったな。

第246話 師匠

俺は8階層エリアへと進んでいる。

マップがあるので問題なく進んでいるが、とにかく広い。

これは迷子になったら帰ってこれないかもしれないのでマップだけは無くせない。

道中何回かモンスターに遭遇したが、このモンスターはスピードが速い。

ただ、暗闇でもなければ、極小でもないので俺的にはストレスなく戦えていて結構いい感じだ。

「ご主人様、前方からモンスターが3体近づいています」

「マイロード、ここは私にお任せください」

「ベルリア、このモンスターとは相性悪いだろ。別に無理しなくても大丈夫だぞ」

「いえ、無理など一切しておりません。私が戦いたいただけなのです」

「うん。そうは言ってもな」

「ご主人様、ベルリアもご主人様のお役に立ちたいのです。いくら相性が悪くてもベルリアがこの程度のモンスターに遅れをとるはずがありません。任せてみてはいかがでしょうか」

「シル姫様。一生ついていきます」

前はルシエと同じセリフを言っていた気がするが、お前の主人は俺じゃないのかベルリア。

「シルがそう言うなら任せてみようか。じゃあ俺たちは全員後方待機で、危なくなったら援護するな」

「はっ。必ずお役に立って見せます」

そう言っただけでベルリア1人で前衛に立ち、俺たちは普段よりも後方に移動した。

「なあ、海斗。ベルリアってなんであんなに必死なんだ？まだ始まったばかりだけど」

「うん。性格もあると思うけどな」

「いや、隼人。俺にはベルリアの気持ちかわかるぞ。他の4人が活躍しているのに俺たち2人だけ全く活躍出来てないからな。俺もベルリアと同じ気持ちだ。痛いほどわかる。ベルリアっていいやつだな。俺の中で好感度が急上昇だ」

まあ、ベルリアの気持ちも真司の気持ちもよくわかる。以前の俺は2年間ずっとこの状態だったのだから。

前方から猛スピードでスピードスターゴブリンが迫って来た。

「ベルリア気を抜くなよ！」

「頑張ります」

「シル、ルシエ、いつでも行けるように準備しておいてくれよ」

「はい、もちろんです」 「わかってるよ」

スピードゴブリンはベルリアが1人で前衛に立っているのを見て3体で一気に攻め立てて来た。

ゴブリンの武器はそれぞれがショートソードを手に持っているが、高速で3方から迫って来た。

「ベルリア！」

予想は出来た事だが、流石に高速の敵に3方から一斉にかかられてはまずい。

ゴブリンが剣を振りかぶって、ベルリアを攻撃しようとした瞬間、ベルリアがブレてすり抜けた。

俺の目にはそう見えた。

すり抜けた瞬間に正面から襲って来たゴブリンの武器を持つ腕が落ちた。

「グギャガギャギャー！」

痛みで暴れだすゴブリンに向かってベルリアが背後から袈裟斬りにとどめをさす。

「おいっ海斗今のなんだ？ベルリアがブレて敵をすり抜けた様に見えるぞ」

「おいおい、ベルリアってあんなに強かったのか？俺と同じモブサイバントなのかと思ってたぞ」

「まあ剣はすごいんだよ。一応士爵級悪魔だしな。俺の師匠だから」
一体をやられたゴブリンは、まだ数的優位を保っているのを理解している様で間髪入れずにベルリアに再び襲いかかった。
今度は2方からショートソードで襲いかかってきたが、今度はバックスステップでその攻撃を躲し、次の瞬間前方に踏み込んで右側のゴブリンを一閃して消滅させた。
残った1体のゴブリンが一瞬躊躇した後に逃げ出そうとして背を向けた瞬間、ベルリアが再び瞬間移動の様にブレてゴブリンのすぐ背後に迫り、そのまま斬り伏せて倒してしまった。

「すげえ！」

「ベルリア。いやベルリア師匠！かつこいい」

「ベルリア、よくやった。流石だな」

「はい。ありがとうございます。やりましたよ」

「ベルリア、よくやりました。これからも励みなさい」

「はっ、シル姫のために頑張ります」

「まあ、頑張ったんじゃないか。これからはもっと敵を倒せよ」

「ルシエ姫。ありがとうございます。ルシエ姫の剣として恥ずかしくない様励みます」

やっぱりやり取りがちょっとおかしい気がする。主人は俺だぞベルリア

第247話 ベルリアレックス

俺は今ダンジョンを進んでいる。

「師匠。ベルリア師匠と呼ばせてください」

「なんですかあの動きは、俺にも稽古をつけてください。お願いします。師匠」

隼人と真司は先ほどのベルリアの戦いを見て、感化されてしまったらしい。

「マイロードが良いと仰ればもちろん稽古をつける事は構いませんが」

「本当ですかベルリア師匠。海斗いいよな。なっ」

「それじゃあ決まりだな。俺たち2人を弟子にしてください」

「マイロードよろしいでしょうか？」

「まあ、このダンジョンに潜ってる間はいいんじゃないか」

「それはそうと師匠、あの動きはなんですか？師匠の体がぶれたと思ったらゴブリンをすり抜けたんですけど」

「あれはスキルですか？それとも魔法ですか？」

「いえあれは足運びによる瞬間的な移動ですよ。長距離は無理ですが、瞬間的に有ればあのぐらいのスピードは出せるのですよ」

「あれがただの足運びなんですか？と言う事は俺たちでもできる様になる可能性があるって事ですか」

「まあ理論的には不可能では無いと思いますが」

「すげー。俺頑張ります。師匠についていきます」

「俺もあれができれば活躍できる。師匠お願いします」

2人とも自分達も出来るかもと舞い上がっている様だがそんな簡単に出来るわけないだろ。

俺なんか毎日ベルリアに稽古をつけてもらってるが全くあんな動きはできないぞ。

あれは達人だよ。達人の域に到達しないとああはならないんだ。

まあテンション下げ様な事は言いたくないから今は言わないけど。そこから8階層エリア迄はベルリアが中心となって敵を倒して進んだ。

途中、真司と隼人に口頭でのレクチャーもしているが、流石に口で教えてできたら苦労はしない。

「ご主人様、敵モンスターですが2体だけです」

今までの中では少ないな

「シル、やっぱり高速移動してるのか？」

「はい、今までよりも速いぐらいです」

「マイロードお任せください」

「それじゃあベルリア頼んだぞ。俺たちは後ろに控えてるからな」

先程と同じ陣形で敵モンスターを待ち受けるが、現れたのは、翼が4枚ある大型の鷲だった。

上空から、かなりのスピードで迫ってきている。

鷲はベルリアには向かわずそのまま上空を通り過ぎ、後方の俺達に狙いを定めて降下してきた。

「やばい、シル『鉄壁の乙女』を頼む。隼人『必中投撃』で一体を頼んだ。俺がもう一体を仕留めるから引き付けてから攻撃しよう」

2体の大型鷲のモンスターは完全に俺をロックオンした様で2体共に俺目掛けて急降下してきたが、目前迄迫った瞬間『鉄壁の乙女』に弾かれた。

その瞬間を目掛けてバルザードの斬撃を飛ばして、鷲を真っ二つにする。

隼人は少しタイミングがずれてしまったが、鷲が離れる瞬間

「焼き鳥にしてやる。『必中投撃』」

槍を鷲に向かって投げ、見事に中心を貫いた。

「結構やるじゃないか」

「おおっルシエリアさんに褒められた！やったぜ」

無事2体とも倒せたのでよかったが、やはりこのダンジョンにも飛

行型のモンスターが居る様なので、しっかりと対策をとっていく必要がありそうだ。

「マイロード、申し訳ありません……」

「まあ、ベルリア気にするな。飛行型だと思っでなかつたしな。ただ次からは元の陣形で行こうな。お前だけだとな。空は無理だろ」

「……はい」

「師匠、得手不得手がありますからね。もしあれだつたら投擲は俺が教えましょうか？師匠ならすぐに上手くなりますよ」

「ありがとうございます。少し考えさせてください」

「はい、いつでも言うってください」

ベルリアの立場が……

教える方から教わる方になってしまった。

まあそれで戦力アップに繋がれば俺はどちらでもいいのだが。

第248話 チームワーク

俺は8階層エリアに到達した。

明確な線引きがあるわけではないのでおおよそだが、恐らくここが8階層エリアなのだろう。

マップさえ有れば階層型のダンジョンより平面型のダンジョンの方が効率よく回れるかもしれないが、ゲートはもしかしたら存在しないのかもしれない。

「ベルリア、投擲の練習はしないのか？」

「私はマイロードの剣です。投擲は隼人様にお任せします」

ベルリア、さっきお前はルシエの剣とか言ってなかったか？

「ご主人様、最近暗いところばかりだったのでここは広くて明るくて本当に良いですね」

「そうだなここは敵も大きいから俺もやりやすいな」

「また時々こちらにも来てみませんか？」

「まあ、時々来るのも良いかもしれないな」

「本当か海斗。その時はまた俺達も誘ってくれ」

「俺は別に良いと思うけど」

「私もいいと思います」

「おお、流石はシルフィーさん」

「お話の途中ですが、ご主人様、敵モンスターです。3体います」

「よし、じゃあ俺と真司とベルリアは前衛だ。特にベルリアは俺の剣として力を見せてくれよ」

「マイロードお任せください。貴方の剣はオリハルコンを凌駕します」

敵を待ち構えているが、そこに現れたのは小型のオークだった。

俺の知っているオークは動きが鈍いがこのオークは違う。

何やらカンフーのような動きをしている。

小型と言っても俺らよりは随分大きいのでミニ豚のような可愛さは一切感じられない。

すぐに3体が迫って来て俺達前衛と戦闘になる。

俺の相手はヌンチャクのようなものをブンブン振り回してくる。

今までこんなものを武器にした相手と戦った事がないのでやりづらい。

間合いも数撃ごとに変わり、角度もおかしい。

短いバルザードでは応戦するのにも限界があるので、俺はバルザードの斬撃を飛ばして、オークの動きを止めてから合いを測って、大きく後方にステップバックして魔氷剣を発動した。

流石にあの動きに短いバルザードでは対応しきれない。

魔氷剣の効果が切れるまでが勝負だが、相手の攻撃が途切れないので受けに回ってしまい、なかなか攻撃できない。

「隼人、一瞬でいいからこいつの攻撃を邪魔してくれ！」

「任せとけ。『必中投撃』豚の串焼きの出来上がりだ」

隼人が投擲したのは槍ではなく、釘。

オークの顔面に釘が見事に命中した。

「ブヒイーグツヒイ」

いくら脂肪が分厚くても顔に釘が刺さると、相当な痛みだろうと想像はできるが、相手の攻撃が止まったので

そのまま俺は踏み込んで魔氷剣をオークの腹に突き刺して、そのまま爆散させた。

戦闘が終わり、余裕ができたので真司の方に目をやると、真司も同様に押されていた。

真司の相手は無手。所謂体術を駆使して攻撃をかけて来ている。手と足に金属製の武具を身につけており、パンチやキックを繰り出している。

豚のくせに異常に身軽だ。アクションスターばりに旋風脚を繰り出している。

真司も 2刀を使い防いでいるが防戦一方だ。

「真司、その状態から『アースバレット』だ。その距離なら絶対に決まる」

「おおっ、近接戦闘しながら使ったことなんかないぞ！」

「大丈夫だ。やってみるよ」

「わかったよ。やるよ、やってやる『アースバレット』」

流石に細かい照準は無理だろうが、目の前の豚のサイズがあれば流石に外さない。

見事に命中して動きが止まった所を真司が滅多斬りにして勝負は決した。

最後に残ったのはベルリアだが、珍しく苦戦している。

苦戦の理由は間合いだ。

敵オークが武器に槍を使っているからだ。

バスタードソード より遥かに長い槍に苦戦をしているが、相手の豚もかなりの使い手に見える。

「師匠、お手伝いしますよ」

「隼人様……お願いします」

「ベルリア師匠の剣の錆となれ『必中投撃』」

再びオークの顔に釘が突き刺さり、槍の攻撃が止まった瞬間、ベルリアが、残像を残して高速で踏み込みオークの首をはねてしまった。

「流石です。師匠」

「いえ、隼人様のおかげです」

今回の戦闘は、隼人のサポートを受けてかなりいい感じだったのではないだろうか。

連携も向上して来て少しだが戦闘スタイルが見えてきた気がする。

第248話 チームワーク（後書き）

第249話 8階層エリア

俺は今8階層エリアに来ている。

このエリアに着くまで張り切っていたベルリアの元気がないのが少し気になるが、まあ放って置いてもすぐ元気になるだろう。

ここにくる前に歩きながら昼ごはんを済ませておいた。

今日の昼ごはんはコンビニのたらこおにぎりと焼きそばパンだ。

俺のダンジョンでの食事はほとんどの場合、これにサンドウィッチを加えたものをローテーションで食べている。やはりおにぎりとパンの組み合わせがたまらなく美味しい。

「ご主人様。敵モンスターです。4体いますがやはり高速移動しています。注意してください」

「よし、じゃあ真司と俺とベルリアで前衛、残りは後衛を頼む。隼人も攻撃できるタイミングがあればいつでも攻撃してくれ」

しばらく待っていると軽く地面が振動している気がする。

なんだ？地震か？

更に待っていると結構なスピードで現れたのは角の生えたトロールだった。

トロールなのに素早く移動している。

俺が戦った事があるトロールは、パワーはあるものの基本的に動きが鈍いので的にしやすかった。

それがこの角の生えたトロールはその欠点が消えてしまっている。

4体いるので1体は隼人に任せる。

「みんな注意してくれ。スピードタイプのトロールだ。パワーもあ

ると思うから絶対に攻撃はくらうな！隼人一体任せたぞ」

走って移動しているのを見ると恐らく俺の全速力よりも早い。後方に通さないように前衛の3人で壁となる。

目前に迫ってきたトロールの武器は大型の棍棒だ。

3体が体当たり気味に俺たちに向かってくる。

俺は流石にこいつらと正面衝突する気はないのでバルザードの斬撃をトロールの足下に飛ばす。

トロールは足下を見えない斬撃で切断されて、前のめりに思いつきりすつ転んだ。

そのまま、前方に走ってトロールの背中にバルザードを突き立てて消滅させた。

ベルリアと真司は正面から迎え撃っていた。

ベルリアはトロールの重量級の一撃をバスタードソードで器用にいなしながら『アクセルブースト』を使用してトロールの胴体を真っ二つにってしまった。

真司は、信じられない事に正面からトロールの一撃を受け止めていた。

いくらパワータイプとは言ってもトロールと人間ではサイズが違う。どれだけパワーにステータスが偏ってるんだ？

「おおおおおお〜」

変な雄叫びをあげながら二刀の刃で応戦している。

当然トロールの武器よりも一本多いので、かなりの手傷を負わせていつている。

これなら問題なさそうだ。

後方へ向かったもう一体のトロールに目をやったが、隼人の槍が腹部に刺さってはいるものの、まだ健在で3人の元に向かっていた。

「うあああああ」

手伝おうかと身構えたが、シルが神槍を構えてそのまま迎え撃って串刺しにしまった。

もちろん神槍の力を発動せずに通常攻撃で片をつけてしまった。

流石はシル。格が違うが隼人はメイン武器の槍を手放した状態で大型のトロールが突進してきたのでかなり焦っていたようだ。

その後真司の方に目を向けたが、既に勝負は決しておりトロールは消滅していた。

「隼人、槍を手放した後に敵が向かってきたら焦らずにナイフとか釘とかで足止めすればいいよ。シルとルシェがいるから絶対に大丈夫だから。それとできれば細身の剣か何かをサブウエポンで腰にでも下げてた方がいいんじゃないか？」

「そうだよな。今までは魔核銃でカバーしてたけどトロールぐらい大型のが突進してきたら魔核銃じゃ厳しいもんな。さっきは焦って声が出ちゃったよ。ははっ」

まあ、いつものダンジョンには高速のトロールなんかいなかったの
で対応が後手になるのは仕方がない。

この後の戦闘も慌てずにしっかり対応をしていきたい。

第250話 8階層探索

俺は今8階層を探索している。

敵のスピードにも慣れて来たが、やっぱりこのダンジョンとは結構相性がいい。

しかもファンタジー系のモンスターも多いのでなんと無くテンションが上がる。

「ご主人様、モンスターです。今度は5体いますが、今までよりは移動がゆっくりな気がします」

「とりあえずモンスターの数が多いから1人1殺で行こうか」

「おい海斗、わたしたちは6人だぞ。引き算もできなくなったのか？」

「そのぐらいの計算俺でもできてるよ。じゃあルシエは待機な。危なかったら助けてくれよ」

「えっ？わたしが待機？」

「敵が5体だからな。しょうがないだろ。待機してくれ」

そんな話しをしているうちに現れたのは、ゴブリンだった。ただ普通のゴブリンとは大きく違う。

フル装備のゴブリン。

鎧兜を着込み、剣や槍を持っている。

俺よりは、ひと回り小さいがベルリアよりは大きい。

種類もただのゴブリンとは少し違うのかもしれない。

「ギエエエー！」

5体とも一気には向かって来ず、武器を構えて少しずつ距離を詰めてくる。

これは、明らかに武器を使える感じた。

力押しの特ロールとは、動きがまったく違う。

「みんな防具の隙間を狙って。防具に弾かれたら危ない」

俺も一体の武装ゴブリンに目星をつけて向かい合うが、剣で切りつけてくる。単純な上段からの攻撃にバルザードを合わせようとしたが、急に太刀筋が変化した。

咄嗟にステップバックして避けたが、かなり危なかった。

こいつフェイントを使ってきた。見かけ倒しではなく完全に武器を使いこなしている。

明らかに剣術に近いものがある。

まともに斬り合えば俺の方が劣っているだろう。

俺の戦い方は魔道具込みの剣術だ。

俺は再度斬り合う素振りを見せながらそのままバルザードの斬撃を至近距離からお見舞いしてやった。

流石にバルザードの斬撃は鎧の上からでも効果を発揮して、武装ゴブリンを胴体から切断する事に成功した。

斬り合いは、2合と一瞬の事だったが、このゴブリンは結構手強かった。

「ふっっ」

と大きく呼吸してから、周囲を見てみるとシルは既に武装ゴブリン

を倒してしまっていた。

神槍に貫けない物はないと言ったところだろう。

残りのメンバーに目をやるとベルリアはゴブリンと斬り合っているが、明らかにベルリアの剣技が上回っており、鎧の隙間を狙って斬りつけて徐々にゴブリンを追い詰めている。

ベルリアの剣技が際立っているが、相対しているゴブリンも、なかなか剣を使いこなしているのがわかる。

単純にベルリアとの斬り合いを想定した場合、俺ではあそこまでもたない気がする。

残りの2人だが真司は槍を持ったゴブリンと斬り結んでいるが、相手の間合いが遠いのでかなり苦戦している。槍の攻撃をかなり遠目から弾いて応戦しているが、懐に入れずに決定打を出せていない。

逆に隼人は槍で距離を保ちながら確実にダメージを与えているが、そもそも鎧を付けた相手と戦う事はほとんど無かったので、動く相手の隙間を狙う事に苦労している。

どちらかのフォローに入った方がいいかもしれない。

「真司、隼人助けが必要か？」

「俺はまだ奥の手があるから大丈夫だ」

「俺は正直厳しい。ルシエリアさん希望」

真司・・・お前何言ってるんだ。

「ルシエ聞いたか？真司がお前をご希望だそうだ。頼んだぞ」

「しょうがないな。そんなをお願いされたらこれで終わりだ『侵食の息吹』」

ルシエなりに気を使ったのか真司に被害が及ばないようにしたのだと思うが、久々に『侵食の息吹』だ。

「グギユ g y うー、ウガ A a ー」

「お、おい。海斗これって一体？」

「ああ大丈夫だ。精神汚染と共に体が溶けるんだ」

「なんて恐ろしいスキルなんだ。流石ルシエリアさん。素敵・・・」

馬鹿な真司は放っておいて隼人をいつでもフォローできるようにしておく。

槍で突きながらも、なかなか倒しきれない状況が続いたが、片手で槍を突き出して牽制した瞬間『必中投撃』

空いた手で釘を投げゴブリンの眉間に突き刺した。

俺の戦い方に少し似ているなと思ったが見事な物だ。

無事、武装ゴブリンを倒すことができたので良かった。

第251話 空飛ぶゴブリン(前書き)

遂に累計ポイントが30000pt突破しました。本当にありがとうございます。

悪魔な俺のヘブンスドア <https://ncode.syo.setu.com/n9722fv/>
もよろしくお願いします。

第251話 空飛ぶゴブリン

俺は今8階層エリアの探索をすすめている。

真司と隼人も敵によって得手不得手があるもののそれなりに順応してきた感じがする。

武装ゴブリンも退けて、パーティのモチベーションも上がって来ているが、初日なのでもう少し頑張ったら切り上げようかと考えている。

「真司も隼人もさっきの戦闘は結構やれてたんじゃ無いか？シルとルシェのサポートがあればもう少し先の階層も行けそうだな」

「いや、まだ一杯一杯の所もあるから今日はここまででお願いします」

おおっ、真司冷静だな。

「ああそうだな、あせる必要もないから今日は8階層エリアを巡回して引き上げるか」

「ご主人様、モンスターです。4体ですのでご注意ください」

「よし、じゃあ今度は、隼人も前衛に上がってみようか。4人が前衛でシルとルシェがサポートしてくれ」

4人で並んでモンスターを待つが、シルとルシェが後ろに控えているので安心して戦闘に臨める。

「マイロード来ましたよ」

俺よりも視力の良いベルリアが先に発見したが、出現したのは先程と同じゴブリンだった。

ゴブリンだが、飛んでいる。

背中に大きな羽が生えておりさながら天使ゴブリン？のようだ。

ある意味シルに近いシルエツトだが、流石にこいつらとシルを一括りにするのは、シルに申し訳なさすぎるので、フライングゴブリンと名付ける事にする。

「真司とベルリアは敵が向かって来るまで引き付けてくれ。隼人は積極的に撃ち落としてくれ」

徐々にフライングゴブリンが近づいて来るが、羽根のついた人型モンスター……

やはり違和感がある。

近づいて来たが通常攻撃では届かない結構高い位置にいる上によく見ると手には弓を持っている。

これはまずい

「シル『鉄壁の乙女』を頼む」

「かしこまりました。それにしても不格好な生き物ですね。翼まで生えていて非常に不愉快です。『鉄壁の乙女』」

シルが相手の事を批評するなんて珍しいな。まさか同族嫌悪か？いやシルに限ってそんな事はないな。

「ベルリアは大丈夫だろうから『鉄壁の乙女』の効果範囲から出て戦っても良い。自由にしてくれ、真司は中で待ち構えてしとめるぞ」

指示を出している間にも次々に矢が飛んでくる。上からの矢の攻撃は普段体験する事がないのでかなり厄介だ。

俺はバルザードの斬撃を先頭のフライングゴブリンにお見舞いする。敵も攻撃が届かないと踏んで、完全にこちらを舐めていたのか無防備な状態で直撃して、そのまま墜落して消えていった。

真司も槍を投げ一体消滅させる事に成功したがあと2体。

ベルリアが敵を引き付けるべく前方で目立った動きを見せているが、フライングゴブリンも警戒して上空からの攻撃に徹しているが矢による攻撃はベルリアがバスタードソードで叩き切っているので膠着している。

「海斗、すまん。敵が近づいてこないから俺役に立てそうにない」

「まあ気にするな。次から俺の魔核銃貸すよ。ちょっと練習してから実戦で使ってみようぜ」

「おおつ。心の友よ」

「大袈裟だな。まあ気を抜かずに行こうぜ」

残りの2体だが俺と隼人で倒すのがベターだと思うので

「隼人、もう一体行けるか？ベルリアを攻撃してる奴」

「ああ任せとけ。師匠が釘付けにしてくれてるから余裕だよ」

隼人に一体を任せて俺も最後の一体に狙いをつける。

左手に魔核銃を構えてカモフラージュに威嚇射撃をしながら右手に持ったバルザードを振るって斬撃を飛ばす。

片手で振るったせいで少し狙いがずれて、片方の翼に命中し、そのまま墜落した。

墜落したゴブリンにとどめを刺そうと構えると同時に前方を炎が覆った。

「ルシエ、指示して無いけど」

「ここに来てから待機ばかりで疲れた。少しぐらい良いだろ」

まあ気持ちは分からなくは無いけどな。

もう一体は隼人が投げナイフを命中させ、墜落したところをベルリアがしとめていた。

一応師弟コンビが連携した形なので、結果として良かったかもしれない。

第251話 空飛ぶゴブリン（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を願います。

第252話 射撃練習(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のヘブンスドア <https://ncode.syo>
setu.com/n9722fv/

よろしく願います。

第252話 射撃練習

俺は約束したように魔核銃を真司に貸し出す事にした。

パーティのバランスを考えた時に真司が遠距離攻撃できないのは致命的なので明日から活躍してもらったためにも今日中に訓練しておきたい。

「まず魔核銃の説明からするけど、魔核を事前に吸収させとけばいいんだけど、マガジンに弾が十発込めれるから連射は十発までだ。一応、予備のマガジンを5個渡しておくから入れ替えたら最大で六十発まで撃てるからな。本当に危ない時は撃って撃ちまくってくれ」

「ああわかったよ。使った分は後でお金返すな」

「それじゃあ早速練習するか。まずは動かない的からだな。ここにカップラーメン置くからこれを狙ってみよう」

「すまないな。なんか食べ物が勿体無い気もするけどやってみるよ」

真司に構え方をレクチャーしてから10mほど離れてから撃つてもらおう。

「プシュ」

「おおっ、こんな感じか」

トリガーを引けば、バレットが射出されるので当然弾は出た。出た

がどこに行つたかわからない。
もちろん的のカップラーメンは無傷だ。

「どこだ？どこに当たつたんだ？」

「マイロード、あそこですよ」

さすがベルリアしっかり見えていたようだ。

「えっ？」

弾が命中したのはカップラーメンからは2m近く左横に離れた位置の背後の壁だった。

はつきり言つて俺を含めて今までで一番下手だ。それも断トツに。

「よし真司もう一回構えてみてくれ」

「おう、こんな感じか？」

「うゝん見た感じはそれっぽいんだけどな。もう一回撃つてみるか」

「プシユ」

再度真司がトリガーを引いた。

カップラーメンは無事だ。今度も左か？

先程命中した位置を確認してみるが弾痕は一つしか無い。どこだ？

「どこに行つたんだ？」

「マイロードあちらです」

ベルリアが指したのはカップラーメンの右横2mぐらい離れた位置の後方の壁だった。

今度はこつちか・・・

何が悪いんだ？

見た感じそんなにおかしくは無い。

「隼人、何が悪いんだろう。俺にはそんなにおかしいようには見えないんだけど」

「うーん。俺もよくわからないな。自分がやってるのとそんなに違うようには思わないけどな」

どうすればいいんだ？左右で4mもずれている。この距離でこんなにずれるもんなのか？

「マイロード一つよろしいでしょうか」

「どうしたベルリア」

「真司様ですが、構えは悪くありませんがトリガーを引く時に力が入りすぎて銃口が動いてしまっています。もっと肩の力を抜いて軽く引けばいいのでは無いでしょうか」

おおっ。ベルリア流石だな。俺は撃った瞬間飛んだ先しか見てなかったから全く気がつかなかった。もしかしてベルリアは銃を持たせてもすごいのか？

「真司、そう言う事だそうだ。深呼吸して軽くやってみようか」

「おおつ。ベルリア師匠ありがとうございます。やってみます」

「プシュ」

今度もカップラーメンは無事だったが、着弾箇所はすぐに分かった。カップラーメンのすぐ横の位置の後方の壁だった。

「もうちょっとだ。次いけるぞ」

「プシュ」

四発目にしてついにカップラーメンに穴が空いた。中心からは外れているがしつかり穴が空いた。もうお湯を注ぐ事はできない。

「やったな。それじゃあ、感覚を忘れないようにもう一発行っとこ
う」

「プシュ」

今度も真ん中では無いがカップラーメンの穴が2つになった。カップラーメンは1個しか持ってきていなかったので、3個目の穴が空いたところでお役御免となった。

「それじゃあ、今度は動く相手に撃ってみようか。この辺りのモンスターは速いからちよつと難易度高めだけど、これができないと意味がないしな」

「おおつ、まかせといてくれ。しつかり命中させて見せる」

正直真司は余り射撃の才能があるようには思えないので、このエリアのモンスター相手には苦戦するだろうが、俺達でフォローして何とか目的を達成させてやりたい。

第252話 射撃練習（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を願います。

第253話 ゴブリンスレイヤー（微）（前書き）

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア [https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/)

よろしく願います。

第253話 ゴブリンスレイヤー（微）

俺は、探索を切り上げて帰ってきた。

真司の射撃の練習が一段落したので、今日は早めに切り上げて帰っている。

「みんなどうだった？」

「俺は苦戦ばかりだったから、明日からは魔核銃も借りたし頑張るよ」

「ああ、俺も苦戦したけど途中からはなんとかなってきた感じだな。やっぱり海斗達がいると安心感が違うな。俺達だけだと1日じゃ調整出来なかったと思う」

「マイロード明日も私は頑張ります」

「まあベルリアも空中の敵は隼人と連携とって行こうな」

「私は特に問題なく進めたと思いました。明日慣れてくればもう少し奥まで行っても大丈夫ではないでしょうか」

「まあ、明日次第だけど、パーティとしてはそれほど苦戦した感じはなかったよな」

「私がいれば全く問題なしだな。明日はどんどん進んでもいいぞ」

「だから明日次第だつて」

マップを見ながら入り口に向かって帰っているが、なんとなくステータスを確認してみても驚いた。

LV 19
HP 60
MP 20
BP 71

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（仮） ゴブリンスレイヤー（微）

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（微）

愚者の一撃

「ああっ！」

それほどの強敵を倒したわけではないので、勿論レベルアップなどするはずも無いが何とスキルが進化した。

そもそもスキルが進化する事自体知らなかったのだが初めてスキルが進化した。

ゴブリンスレイヤー（仮） からゴブリンスレイヤー（微）へと進化した。

「海斗どうしたんだ？変な声を上げて。何か変な敵でもいたのか？」

「いやそれが、さっきの戦闘でスキルが進化したみたいだ。多分今までに遭遇した事のないゴブリンと何回か戦ったからだと思うけど」

そうやって俺はゴブリンスレイヤー（微）の効果を確認する。

ゴブリンスレイヤー（微）・・・ゴブリンに対する死の恐怖を克服し、1人で勝利した者に与えられる。

ゴブリンとの戦闘時全ステータス20パーセントUPの補正がかかる。

以前のゴブリンスレイヤー（仮）は偶然による勝利の為に制限がかり、ゴブリンとの戦闘時、全ステータスが10パーセントUPだったが、今回のゴブリンスレイヤー（微）は、偶然による勝利の注釈が消え、ゴブリンとの戦闘時のステータスが20パーセントUPとなっている。

たかが20パーセントUPだが、ゴブリンスレイヤー（仮）の10パーセントUPと比較すると倍だ。ステータス10パーセントUPではあまり効果を実感する事はなかったが20パーセントUPすれば体感できる部分も多くなってくるのではないだろうか。

俺はやった！遂にスキルの壁を超えた！正直自分を誇りに思う。

スライムスレイヤーだけではなくゴブリンスレイヤー（微）としても活躍する事を義務付けられている気がする。

しかし、スキルが進化するとは思ってもいなかった。

もしかしたら他のスキルも進化する可能性を秘めているのかもしれない。

ゴブリンスレイヤー（微）と同じ（微）がついている苦痛耐性（微）がなんとなく一番可能性を秘めている気がする。

恐らく苦痛耐性（弱）になる可能性があるのではないだろうか？

ただし今回ゴブリンスレイヤー（微）が進化した条件は、恐らく多種のゴブリンを倒したからだろう。

これに照らし合わせると苦痛耐性（微）の進化条件は多種の苦痛を味わう事か・・・

いやだ。俺はこれ以上多種の苦痛を味わいたくは無い。

ただでさえ電撃トラップや『暴食の美姫』による苦痛を味わって発現したスキルなのに、これ以上どんな苦痛を味わえば進化すると言うのか。

ダンジョンの神は一体何を俺に期待しているのか、スキル進化の可能性とそれに至るまでのことを想像して俺は身震いしてしまった。

第253話 ゴブリンスレイヤー（微）（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を願います。

第254話 ホテルダンジョンシティ（前書き）

1000万pv 突破しました。ありがとうございます。
新作始めました。

悪魔な俺のヘブンスドア [https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/)
よろしく願います。

第254話 ホテルダンジョンシティ

俺は今ダンジョンを引き上げている。

一応スキルの進化に喜びながら帰路についた。ギルドに着いたので今日一日の報告に向かう。

「海斗、今日の報告だけど俺に任せてもらっていいか？」

「ああ、別にいいけど」

「よし！」

「隼人ずるいぞ」

「いやいや早い者勝ちだからな」

「明日は俺の番な」

何だ？そんなに報告が大事なのか？

「すみませ〜ん。今日の報告お願いします」

「はい。よろしくお願いします」

ああっ、これが。隼人が報告に向かった先は朝、可愛いと言っていた職員の下だった。

流石だな隼人。それだけ積極性があれば良い相手がすぐ見つかる気がするが、どうして17年間彼女がいないのか謎だな。

それから今日の報告を、隼人が満面の笑顔で済ませたのでホテルに向かう事にする。

「隼人、今日泊まるホテルって近いの？」

「ああ、ちゃんと調べて近くを取ったから、徒歩5分ぐらいだ」

最近シャワーが習慣付いてきているので早く浴びたいなと思い、すぐにホテルに向かう事にした。

徒歩ですぐにホテルに着いたが見た感じ普通に綺麗なホテルだ。

『ホテル ダンジョンシティ』まあそのまんまだが、探索者を相手にしたビジネスホテルのようなものだろうか。

「すみません3人で予約しておいた水谷です」

「はい。今日から2泊でご予約賜っております。ご朝食はいかかいたしましょうか」

「朝食は無しでお願いします」

「かしこまりました。それではこちらがルームキーとなります」

「ありがとうございます」

受け取ったルームキーはカード式となっていたが、普段ホテルに泊まることなどほとんど無いので、ちょっと感動した。

「隼人、今時部屋の鍵ってカード式なんだな」

「そりゃ、最近カードじゃない方が少ないんじゃないか？」

「そうなのか」

少し時代に取り残されてきている気がするが、これでカードキー経験者として胸を張っていける。

部屋は405号室だったのでエレベーターで4階に上がったから部屋を探す。

「そういえば1部屋なんだな。3人で泊まれるぐらい広い部屋だと高くなかったか？」

「いやそんな事はないよ、結構安かったぞ」

そう話しながら部屋に着いたのでカードキーを使ってみる。部屋の前のボックスにかざすとカチツと音がして扉が開いた。

「何だこの部屋は・・・」

目の前に広がっている部屋の光景、と言うか広がっていない。狭い。まあ狭いのは仕方がないが、問題はベッドが2台しかない。

「隼人、ちよつといいか。俺達3人だよな」

「当たり前だろ」

「それじゃあ何でベッドが2台しかないんだ？」

「いや、あるだろ。なあ真司」

「まあ安かったからな」

ベッドはどう見ても2台しかないが、どう言う事だ？

「それだよそれ、それがベッドになるんだって」

そう言うて隼人の指した方を見るとそこにはソファがあった。

「これか？」

「そう、ツインの部屋にエキストラベッドで3名利用なんだよ」

「エキストラベッド・・・」

「そう。このソファがな、こつやると倒れてな」

隼人がソファを倒すと小さめのフラットなベッドが現れた。

「ところでこのソファベッドは誰が使うんだ？」

「それはジャンケンだろ」

ジャンケン・・・

絶対に負けられない。負けるわけにはいかない。絶対に勝つ。

絶対に負けられないジャンケンが始まった。

「ジャンケン・・・」

俺は渾身の力を突き出したが、隼人と真司は示し合わせたかのよう
うにパーを出してきた。

「負けたく！」

負けてしまった。絶対に負けられない戦いに俺は負けてしまった。

「じゃあ俺はこっち側使うな」

「それじゃあ俺はこっちな」

2人が普通のベッドを占拠したので、俺はエキストラベッドに寝てみる。

寝れない事はないが狭い……

ダンジョンでの疲れが取れる気がしない。

俺がお金を払うわけではないので文句は言えないが、どうやらリア充とモブゲームで運を使い切ってしまったらしい。

第254話 ホテルダンジョンシティ（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第255話 裸の付き合い(前書き)

10000ブックマーク突破しました。ありがとうございます。

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア [https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/)

よろしく願います。

第255話 裸の付き合い

俺は今ホテルダンジョンシティのソファベッドに寝そべっている。シャワーを浴びたいが3人いるので順番になっちゃおう。

「俺シャワー浴びたいんだけど順番どうする？」

「海斗、言っただけじゃなかったっけ、このホテルは大浴場がついてるんだよ」

「そうなのか。じゃあ折角だからみんなで入るか」

そんなやりとりがあり、俺たちは3人で大浴場に入る事にした。

「あ〜っ。気持ちいいな〜。シャワーもいいけど、風呂もいいな〜」

「このホテル部屋は狭いけど、大浴場があるから結構いいな」

「それはそうと海斗、お前葛城さんとどうなってるんだよ」

「どうなってるって、別にどうもなくていいけど」

「どうもなくて無い事は無いだろう。最近どこかに誘ったりしたのか？」

「昨日カフェに行ったけど」

「カフェ・・・」

「海斗、カフェデビューしたのか。大人だな。どこのカフェに行ったんだよ」

「いや学校の近くにあるカフェでクラスの女子に人気らしい」

「それでカフェってどうだった？」

「どつって言われても、まあよかったよ」

「良かったってどう良かったんだよ」

「お洒落で、フランボワーズのケーキとコーヒーが多分美味しかった」

「おいおい、フランボワーズって何だよ。それに多分美味しかったって……」

「それはそうと、カフェでどんな話をしたんだよ」

「この遠征の話とか、春香の趣味の話とかだな」

「ところで葛城さんの趣味って何なの」

「料理と写真だそうだ」

「料理と写真か〜いいな〜」

「俺なんかゲームとダンジョンしか趣味ないぞ〜」

「いやまだいい方だろ。俺なんかダンジョンしか無いんだけど」

「今度俺ら3人でカフェでも行ってみる？」

「俺はいいや。来週春香と行く約束してるから」

「海斗。それはデートだよな」

「いや、カフェに行くだけだぞ。オレンジピールのブランマンジエを食べに行くだけだぞ」

「は。俺も一度でいいから言ってみたいよ。『オレンジピールのブランマンジエを食べに行くだけだ』くっく」

「何だよ一体それは」

「海斗、お前がいい奴だけどバカなのは知ってる。でもな、世の中では、好きな女の子とオレンジピールのブランマンジエを食べる事はデートと認定されるぞ」

「俺はバカじゃないし、デートじゃないぞ。俺だって春香とデートしてみたいんだよ」

「それじゃあ聞くがな、海斗にとってどう言うのがデートなんだよ」

「いやそれは付き合ってる男女が一緒にどこか行く事だろ」

「お前らもう付き合ってるだろ」

「何言ってるんだよ。知ってるだろ、残念だけど俺達はお買い物す

るだけの仲なんだよ。まあ、たまに映画も行くけど」

「は、もう海斗の事はいいから、葛城さんに、俺らにも誰か紹介してもらえないか聞いてみてくれないか？」

「聞いてみるのはいいけど、なかなか難しいと思うぞ」

「是非頼むよ」

「海斗、3組でトリプルデートとか最高じゃないか？」

「いや普通に無理だと思うぞ」

「デートを楽しむにしても俺達趣味が少なすぎるよな。3人で何か新しい趣味始めないか」

「いいな。何にする？」

「写真とかやってみる？」

「それは葛城さんと同じ趣味を持ちたいだけだろ。俺は新しい出会いのために役立つ趣味がいいんだ」

「それじゃあ何がいいんだよ？」

「デートで役に立ちそうなカラオケとか女の子と一緒に行けそうなカラオケとか女の子と盛り上がりそうなカラオケとか」

「隼人さつきから、カラオケしか言ってないけどそんなにカラオケ行きたいのか？」

「いやそう言うわけじゃないけど、何って聞かれると俺デートとかした事ないし、何がいいかわからない・・・映画とカラオケしか思いつかない」

「そうだよな。俺もそのぐらいしか思いつかない。今回の遠征が終わるまでに3人で何が良いか考えとくか」

「そうだな。未だ見ぬデートの日の為に3人で力を合わせて備えよう」

3人での風呂は恋愛談議?で盛り上がったが、モテたことのない3人が集まっても、残念ながら文殊の知恵とはいかず、3人集まっても、ただのモブの知恵だった。

第255話 裸の付き合い（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第256話 2日目(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

よろしく願います。

第256話 2日目

俺は今ホテルダンジョンシティで朝を迎えた。

エキストラベッドで寝てみたが悪くは無い。悪くは無いが出来れば普通のベッドで寝たかったと言うのが本音だ。

昨夜は3人で俺の用意したカップ麺を食べて寝たが寝ながら色々話せて良かった。

真司のタイプがクラスメイトの前澤さんだとわかってびっくりした。どうも強いタイプの女性が好みのような。

朝の準備を済ませて2日目の探索に臨むがギルドに9時集合だった。9時になる前に昨日と同じメンバーが全員そろっていた。

「それでは皆さん2日目の探索頑張ってください。2日目は気が抜けて怪我をする方も増えますので、気を引き締めてお願いしますね。今1番進んでいるのは17階層エリアのH1175のパーティーですね。それでは解散です」

「海斗、17階層だつてよ。すごいな」

「まあ元々のレベルが俺らより高いんだろ。俺は参加できる最低ランクのブロンズだからな。それにここは平面だからマップさえあれば、それ程時間をかけずに奥まで行く事もできるから」

「そうか、海斗で最低ランクなんだもんな。俺も頑張るよ」

「まあ張り切りすぎても失敗するから、集中して頑張ろうな」

ギルドでの点呼を終えたので早速昨日の所まで向かう事にする。

「おい、どうする？『黒い彗星』に声かけてみるか？」

「そうだな、あのサーバントともお近づきになりたいよな」

「サーバントが3人だもんな。超絶リア充は超絶金持ちなんだろうな」

「よし、じゃあ声かけるな。すいませ〜ん。ちょっと良いですか？
なんだ？他のパーティの人が急に声をかけて来た。まさか絡まれるのか？」

「はい。何か用ですか？」

「あの〜失礼ですけど『黒い彗星』さんですよね」

「おい。『黒い彗星』さんって俺の名前は高木海斗さんだけだ。

「いえ、人違いだと思います」

「あつ、すいません超絶リア充『黒い彗星』さんですよね」

「いや、そう言う意味じゃ無い。

「いえ違います」

「またまた〜。その漆黒の装備とサーバント3体って『黒い彗星』
さんしか考えられないじゃ無いですか」

「いや、他にもいるかも」

「いえ絶対にいませんよ。もしかしてお忍びでこの遠征に参加してるんですか？」

お忍びって・・・

「いやそう言う訳では。それでご用件は？」

「ああ、できたら仲良くなれないかと思って声かけたんですよ」

「俺とですか？俺と仲良くしても余り良いことないですよ」

普段話しかけられる事は少ないので警戒してしまっ。

「いやいや、超絶リア充さんと仲良くすれば、俺達もあやかっっちゃよっとはモテるようになるかと思って」

「それ間違ってますよ。俺は全くリア充じゃないです。むしろ非リア充の代表です。俺にあやかっても、モテるところかよりモテなくなっっちゃいますよ。なあ隼人」

「うーん難しい所ですけど、俺はあやかっても全くモテる気配はないですね。真司はどう思う？」

「おそろくですけど『黒い彗星』と仲良くしても彼女ができるような事は無いと思います。俺は全く出来ていないので」

「そ、そう」

「残念ながら皆さんが思ってるようなご利益はないと思いますよ」

「それじゃあサーバントの女の子達を紹介してほしいな」

「うん。ごう言ってるけど」

「何かめんどくさいな。目障りだと燃やしてしまいたい衝動に駆られるぞ！」

「えっ？」

「ルシエ、そのぐらいにしといてくれよ」

「はは、ちょっと紹介してもらうのは難しそうですね。それじゃあ、また明日」

ルシエのセリフが効いたのか声をかけて来たパーティーはそそくさと去ってしまった。

「ルシエ、ちょっと厳しくないか？」

「いえ、ご主人様。ルシエが言っただけじゃ私が代わりに言っていました。ご主人様と親しい方々には、精一杯努めさせて頂きますが、不純な目的で近付いて来られる方を相手にするつもりはありません」

「そうか。嫌な思いをさせて済まなかったな」

「いえ、ご主人様は何も悪くありません」

まあ、シルモルシエも俺と俺のパーティーメンバーにはしっかりやっ

てくれるから問題ないか。
それにしても不純な動機で近づいてくる輩って隼人と真司は大丈夫か？

第256話 2日目（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第257話 ゴブリンスレイヤーズ(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

よろしく願います。

第257話 ゴブリンスレイヤーズ

俺は今8階層エリアに来ている。

昨日一度来ているので今日は結構いいペースで8階層エリアまで到達できた。今日一日、目一杯ダンジョンを堪能できそうだ。

「海斗、今日の朝のルシエリアさんとシルフィーさんかつこよかつたな」

「そうか？」

「ああ、ちょっとチャライ感じの奴らを一刀両断って感じで憧れる」

「そういえば不純な目的で来る奴は許さないって言ってたけど、お前ら大丈夫か？」

「もちろんだよ。海斗くん、僕たちは真面目が歩いているようなものだよ、心外だな」

隼人達と馬鹿な話をしながら進んでいると

「ご主人様。敵モンスターです。5体です。速度は昨日と同じく早めです」

「よし、じゃあ数が多いから隼人も前衛で行こうか、それと真司、魔核銃を構えて敵が見えたら先制攻撃してみるか」

せっかく昨日練習したので真司には動く相手には是非命中させて欲しい。
待ち構えていると現れたのはスピードスターゴブリンだった。ただし手に持っている武器はショートソードだけではなくボウガンと槍の奴が混じっている。
ボウガンはやばい。ベルリアは多分大丈夫だが俺達3人は大丈夫じゃない。

「真司、隼人ボウガン持つてる奴を集中的に叩くぞ」

「ああ、わかった」

俺達3人はボウガンを持った2体を先に倒す事にした。

「プシュ」 「プシュ」

真司と隼人が魔核銃を放つが当たらない。やっぱりこのスピードスターは厄介だ。

俺は理力の手袋の力を使ってゴブリンの足を掴んで、盛大に転ばしてやった。

「真司とどめを」

「プシュ」 「プシュ」

転んで動かなくなったゴブリンに向けて真司が魔核銃を連射して消失させる。

「やった！初めてたおしたぞ」

「まだ4体いるんだ。気を抜くなよ。とにかくもう一体を攻撃される前に仕留めるぞ」

動き回るボウガンを持ったゴブリンの足に狙いを定めて、再度理力の手袋の力を使う。

先程と同じように勢い良く、ぶつ転んだゴブリン目掛けて真司と隼人が魔核銃で攻撃をかけて消失に追いやる。

一連のやり取りを見て、残りの3体の警戒度が上がった様で距離を取りながら移動して攻撃を伺っている。

ただし距離をとってくれど、ボウガン持ちは既に倒したのでこちらに有利だ。

「真司、隼人、射程に入るまでは待つて、射程に入ったら一斉射撃だ」

「おおっ！」

スピードスターゴブリンもしばらく射程外で移動を繰り返していたが、このままでは埒が明かれないと思ったのか、槍を持った一体が覚悟を決めて向かってきたので、俺達3人はその一体に集中して攻撃をかける。

「プシュ」

『必中投撃』

直線的に向かって来たこともあり、真司の弾も命中して隼人の放った釘も頭部に刺さっている。

痛みに立ち止まったゴブリンを目掛けて俺がバルザードの斬撃を飛ばして消滅に追いやる。

あと2体だ。

やはり、ゴブリンスレイヤー（微）が仕事をしてくれているのか、いつもより集中力が増している気がする。

3体を倒した時点で残りの2体も覚悟を決めたのか2体同時に一気に距離を詰めて襲いかかって来た。

2体の相手を真司と隼人に任せて俺はナイトブリンガーの能力を発動して素早くゴブリンの背後に回り込み、とどめを刺す。

隼人が槍で牽制している相手にも間髪入れずに飛び込んで背後からバルザードを差し込んで消失に追いやる。

スピードスターゴブリン5体を相手にサーバントの助けを一度も借りずに倒すことが出来た。

ゴブリンスレイヤー（微）の力と真司が魔核銃で遠距離の敵を倒せる様になったのが大きい。いざとなれば真司には『アースバレット』もあるので十分戦力になっている。

ゴブリンが相手とはいえ、このゴブリンを倒す事はかなりの経験を積んでいる気がする。

ちょっとダサイが気分はゴブリンスレイヤーズだ。

第257話 ゴブリンスレイヤーズ（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第258話 ビッグスライムスレイヤー（前書き）

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア [https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo
setu.com/n9722fv/)

よろしく願います。

第258話 ビッグスライムスレイヤー

俺は今8階層エリアを探索している。

ゴブリンスレイヤーズと化した俺達は順調に探索をこなしている。

「結構この辺りはいけそうだな。時間も限られてるし9階層エリアまで移動してみようか」

「えっ？9階層か。俺達には未体験エリアだな」

「でもせっかく海斗達がいるし行ってみるか」

「シル達はどう思う？」

「全く問題ありません。次のエリアに向かいますよ」

まあシル達がいればもっと先のエリアでも問題ないだろうと思うので8階層を切り上げて9階層エリアに向かう。

マップを見る限りは隣接しているので、それほど時間はかからないはずだ。

「よし、じゃあ次のエリアを目指して移動するから移動中も気を抜かずに行こう」

途中オークの一団を撃退しながら9階層と思われるエリアまでスムーズに到達する事が出来た。

「ご主人様、敵です。3体ですが、移動速度は極めて遅いです」

移動速度が遅いとは、このダンジョンにしては珍しいな。9階層エリアになったので今までとは違う種類のモンスターなのかもしれない。

なぜか、しばらく待っても現れないので、俺達の方から向かう事にした。

「どんなモンスターなんだろうな」

向かって行くとモンスターを目視する事が出来たが、かなり大きい。かなり大きいスライムだ。

「海斗、あれってスライムか？」

「そうみたいだな」

「海斗、あのサイズのスライムって倒せる物なのか？」

「まあ、もつと大きいのを倒した事も有るから大丈夫だろ」

「えっ？あれより大きいスライムって俺らのダンジョンにいるの？」

「ああ、隠しダンジョンで1回倒したけどあれの倍ぐらいあったぞ」

「あれって通常攻撃効くの？」

「うん。通常の剣と槍じゃ難しいかもな。槌はやってみないと」

俺達は眼前にいる等身大程度の巨大スライム3体を倒しにかかる。

「隼人は今回後衛で行こうか」

俺と真司、ベルリアでそれぞれ一体ずつに相対し戦闘に入った。俺はもちろんリュックから殺虫剤を2本取り出して殺虫剤プレスをダブルでお見舞いする。

いくら大きくても所詮はスライム、スライムスレイヤーたる俺のダブル殺虫剤プレスの前には無力だ。

ただ、やはりデカイだけあってなかなか消滅まで至らない。プレスし続け殺虫剤を半分程使用した所ようやく消滅させることができた。

流石にこのサイズが大量に出る様だと、殺虫剤が間に合わないのだから他の方法を試みる必要があるかもしれない。

真司とベルリアに目をやると、それぞれがまだ奮闘していた。

真司は槌を手に攻撃を繰り返している。

見ていると槌による一撃はかなり威力があるようで確実にスライムの体を削っていつている。

「うおーりゃー」

真司は槌による連撃を加えていき、どんどんスライムの体が小さくなって来た。

「どりゃーああー」

汗だくになりながらスライムの体を削りきって消滅させる事に成功した。

流石に真司はパワー系だけあって力押しでの戦闘にはかなりの活躍を見せるな。

ベルリアに目をやるとこちらは苦戦していた。

斬りまくってはいるが、バスタードソードでは体積を削る事は出来ずにいる。

『アクセルブースト』も何回か使用してきている様だが、いいところ真司の槌の一撃程度しか効果を見せていないので、どう考えても倒し切る事は無理っぽい。

「おいベルリア、手伝ってやろうか」

「マイロード、心配には及びません。私が圧倒していますので時間の問題です」

ベルリアがそう言うのでしばらく待ってみたが、状況はあまり変わらない。

やはりベルリアとこの巨大スライムは相性が悪い様だ。

「おい、ベルリアいつまでかかっているんだよ。全然進めないだろ、私がやるから下がってろ」

「はい。ルシエ姫申し訳ありません」

「スライムなんか大きくなっただって所詮スライムだろ、ベルリアも修行が足りないんじゃないか『破滅の獄炎』」

『破滅の獄炎』と巨大スライムは相性バツチリの様で一瞬で消失してしまった。

「ルシエ姫ありがとございます」

とりあえず3体倒すことができたが、真司とベルリアの労力を考えると、やはり殺虫剤は素晴らしい。

残りが3本あるので1本ずつ渡しておこうかな。

第258話 ビッグスライムスレイヤー（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第259話 滑落(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のヘブンスドア <https://ncode.syo>

setu.com/n9722fv/

よろしく願います。

第259話 滑落

俺は今9階層エリアに来ている。

目の前には大型のスライムが出現しているが今までのスライムとは少し違い、床にアミーバ状にへばりついているのだ。正直これでは剣や槌では対処のしようがない。

今までこのタイプのスライムは見た事がないので、このダンジョンの固有種かもしれない。

通常の武器ではかなり厳しい気がするので、このダンジョンの探索者は火炎放射器か何かを常備しているのかもしれない。

「とりあえず俺が殺虫剤ブレスで倒すけど、さすがに4体はきついな。シル、ルシエ頼めるか」

「はい。かしこまりました。お任せ下さい」

「しょうがないな、一気に焼き払ってやるよ」

とりあえず一体に近づいて殺虫剤ブレスを吹きかける。アミーバ状だろうがなんだろうが、スライムには殺虫剤が特効で、あつという間に1体を片付けたが、殺虫剤2本が前回の戦闘と併せて空になつてしまった。

残る殺虫剤は2本だけ。出来れば節約したいところだ。

「ご主人様の手を煩わせるまでもない。消えて無くなれ『神の雷撃』」

「

ズガガガガーン」

「グチュグチュ気持ち悪いんだよ。蒸発して無くなれ『破滅の獄炎』」

「グヴオージュオー」

あっさりとは2体が消失したので後1体だけだ。

「我が敵を穿て神槍ラジュネイト」 「さつさと消えろ『破滅の獄炎』」

「あっ！」

2人共このダンジョンに来てからサポート役となり、活躍の場が少ないからか、今回張り切った様で2人同時に床に張り付いた1体のスライムに向けてスキルを発動した。

眼前のスライムは一瞬で消失してしまった。完全なオーバーキルだ。

『ピシッ』

えっ？なんだ今の不吉な音は？足下から聞こえて来たぞ？

「おいつ、さっきの聞こえたか？」

「ああ聞こえた」

「聞こえたけどこれって」

『ピシッ、ピシッ』

やばい。なんかやばいがどうしていいかわからない。
あたふたしている間に予想通りと言うか最悪の出来事が起きてしま
った。

足下の床が崩れてしまい、俺達パーティ全員が下層に向かって滑落
してしまった。

「うっわーあゝ！」

これは、シルとルシェが床に向かってコンボ攻撃を仕掛けてしまっ
たからだろう。

通常の攻撃であればダンジョンの床が抜ける事は考えられないが、
シルの神槍は床と壁をぶち抜いた実績がある。そこに運悪く絶妙の
タイミングでルシェの獄炎が加わってしまい、足元が崩れて底が抜
けてしまった。

瓦礫と共に落下してしまったが、ステータスに助けられ無事に着地
する事が出来た。

「みんな。大丈夫か？」

「おおつ。俺は大丈夫だ」

「びつくりしたな。俺も大丈夫だぞ」

「ご主人様申し訳ありません。やり過ぎてしまいました」

「わたしのせいじゃないぞ。床が脆くなってたんだよ」

「マイロード私も大丈夫です」

とりあえず全員無事のようなのでよかった。

それにしても前回隠しダンジョンに潜った時も同じ様な感じで下に降りたが、今回も同じ様に登るしかないな。
またマントが犠牲になるのかと思いが重くなってしまった。

「シル、前と同じように翔んでくれるか？」

「はいもちろん大丈夫ですが、また紐が必要となります」

「うん……それはわかってるよ」

「シルフィーさんて、もしかして翔べるのか？」

「ああ、一応翔べるよ。翼があるからな」

「おお……。すごいな。空を翔ぶシルフィーさん。神々しすぎるだろ」

「早くみたいだな。天使だ。いや神か」

「俺も翔んでるのは一度しか見た事はないけど、一見の価値有りだぞ」

隼人達とくだらないやり取りをしながら上を向いて俺は愕然とした。

「はっ？これって一体どう言う事だよ」

第259話 滑落（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第260話 迷走(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア <https://ncode.syo>

setu.com/n9722fv/

よろしく願います。

第260話 迷走

俺は今、ダンジョンを滑落してしまった。

シルとルシエの規格外の攻撃威力にこのダンジョンの床が耐えきれなかったようだ。

まあ前回も下層から抜け出した事があるので大丈夫だろうと思っていたが、抜けた天井を見た瞬間にその考えは吹っ飛んでしまった。さつき穴が空いたはずの天井に穴が無い。

「どう言う事なんだ。なんで穴が無いんだよ」

「海斗、これって結構やばく無いか？」

「海斗、ダンジョンが自動修復したって事だよな」

自動修復、確かにそれしか考えられない。

「シル、もう一度天井に穴を開けられるか？」

「はい、やってみます」

シルが天井まで翔んで行き槍を構える。

「我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

「ズガガガーン」

爆音と共に再度天井に穴が空いた。

「よし、これで帰れるな」

帰れる事に安心して声を上げたが、見ている内にみるみる穴が閉じてしまった。

「まじか。本当に穴が閉じた」

俺は慌てて、事前にもらっていた下層のマップを確認する。

俺達がいたのは9回層エリアだから、そこに下層のマップを重ねると、現在地は……

嘘だろ。ここは20階層エリア。

どうすればいい。どうやって帰るんだ。俺でも20階層なんて行ったことがない。ましてや真司と隼人は10階層にすら行ったことがない。

まあ、ベルリアのせいで出現した恐竜達が25階層より奥のモンスターだと言っていたから、なんとかなるか？

「みんな聞いてくれ。今確認したけど、ここは20階層エリアみたいだ。上に登る階段まではかなり距離があるけど、なんとかかたどり着いて上に登るしかない」

「ええつ。20階層って俺まだアイアンランクになったばかりなんだぞ。それって無理だろ」

「ははっ、20階層か。俺死んだな。短い人生だった。一度でいいから彼女とカフェでデートしてみたかった」

「2人共しっかりしてくれ。絶対に大丈夫だ。俺とサーバントで絶対に帰る。真司と隼人も絶対に連れて帰るから大丈夫だ。2人には

言ってなかったけど、俺はエリアボスも2回倒してるんだ。20階層程度何でもない」

「海斗」

「おおっ心の友よ」

運悪くマップで確認する限りいくつかある階段の丁度中間地点ぐらゐに位置している。

しかもどこを通っても20階層エリアより難度の高いエリアを横切ってしまう。

2人にはああ言ったが正直自信が無い。無いがなんとかするしかない。

「シル、ルシエ、ベルリア。すまないが俺に力を貸してくれ。どうにかして上の階へ戻りたいんだ」

「御主人様、心配いりません。シルはいつでもご主人様の側にいます。必ず上階へお連れいたします」

「海斗、心配すんなよ。高々20階層だろ。全く問題ないぞ。辛気臭い顔するなよ悪霊が寄ってくるぞ、わたしに任せとけて」

「マイロード、私がいれば大丈夫です。40階層であつても問題ありません。お任せください」

流石は俺のサーバント達だ、本当に頼もしい。

「それじゃあ、ルートはこのルートで行こうと思う。ただしモンスターと交戦しながら進むには遠すぎる。まともに行けば俺と隼人と

真司がもたないと思う。少々遠回りになっても構わないから、シル、できる限り敵を避けて進もう。敵を感知したら迂回して行こう。相手に感知された時だけ戦う。真司と隼人は後衛に徹してくれ。俺とベルリアが前衛に、数が多い時はシルも前に立ってくれ」

「わかった。それで頼む」

「皆さんお願いします。邪魔にならない様に頑張ります」

隼人と真司も覚悟は決まったようで顔つきが変わった。

恐らく俺のサーバント達は20階層だろうが全く問題ないだろうが、物資も含めて極力節約しながら進まなければ、隼人と真司の体力が先に尽きる。

俺は、まだエリアボス戦等の経験があるが2人はそれが無い。

このエリアを歩くだけで精神と体力を削られるはずだ。こうなった以上俺がなんとかしなければならぬ。

第260話 迷走（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。
さい。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第261話 下層(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のヘブンスドア <https://ncode.syo>
setu.com/n9722fv/

よろしく願います。

第261話 下層

俺は今、平面ダンジョンの下層を彷徨っている。

既にかかなりの時間が経過しており、スマホを見ると時間は16時と
なっている。

朝から潜っているのでかなりの時間が経過している上、相当数の逃
走劇を演じている為、体力がかなり削られてしまっている。

「ご主人様、前方に敵モンスター4体です」

「よし、じゃあこっちに逃げるぞ！」

「はあ、はあ、はあ。海斗、結構きついな」

「頑張れ、まだ半分も来れてないんだ！走るぞ」

「くっつ。こんな事なら普段から走ってればよかった」

「ご主人様、もう大丈夫です、追ってきていません」

下層に落ちてから同じ事を何度も繰り返している。

逃げる度に迂回をしているので、なかなか目的の階段までの距離が
詰まらない。

正直かなり焦りを感じているが、表には出さない様に意識する。

「海斗、まだまだかかりそうだな。今日中に戻るのは無理じゃない
か」

「うん。まあ出来るだけ進んでみてダメだったら、ダンジョンで野宿するか。俺的にはエキストラベッドより広くていいかもな」

「海斗は、すげーな。この状況で冗談言えるんだからな。尊敬するよ」

「いや、結構本気だぞ」

まあ、いくら小さくてもふかふかのベッドとダンジョンの床では勝負にならないが。

「ご主人様正面に3体です」

「よし、じゃあこっちに逃げるぞ」

右折方向に逃げるべく全員で駆け出そうとするが

「ご主人様待つてください。こちらにも敵の反応があります。挟まれました」

遂に来たか。今迄全部を避けてこれただけでも奇跡的だ。やるしかない。

「シル、敵が見えたら『鉄壁の乙女』を頼む。ベルリアと俺で敵を討つぞ！ルシエも敵を見定めて攻撃してくれ。真司と隼人は後方から援護を頼む」

俺達が陣形を整えて待ち構えていると前後から現れたのは武装したオーガだった。オーガだが隠しダンジョンにいた奴同様通常のオーガよりもでかい。

後ろから3体、前から2体の計5体が相手だ。

「とりあえず、先に2体を潰すから、後ろの3体は真司と隼人が牽制してくれ」

俺はベルリアとアイコンタクトを取りタイミングを図って前方の2体に向かって駆け出す。

最初からナイトプリンガーの能力を使用した状態で突っ込む。

バルザードを構えて斬撃を放つが、見事にかわされてしまった。

見えてるのか!?

ナイトプリンガーを使用したのバルザードの斬撃は、ほぼステルス攻撃に近いので今まで避けられた事はなかった。

それがこのオーガにかわされてしまった。

俺は警戒を強めて距離を保ちながら移動を試みるが、オーガが移動方向をみてくる。

やはり見えてるのか?

ただよく見ると俺のいる場所より若干視線がずれている気がするの
で完全に見えている訳ではない様だ。

もしかしてレベルの高い敵には認識阻害の効果が薄まるのか?それ
とも俺とのレベル差の問題か?

ただ全く効果がない訳ではない様なので、今度は俺自身の気配にも
気を配り、出来るだけ気配を薄める。

ナイトプリンガーとの隠密コンボを期待して慎重に音を立てない様
に移動する。

今度は、オーガの反応が鈍い。

一応視線が追っては来ているが、何となくしか追えていない。
恐らくこれならいける。

俺は再度移動し、その直後にバルザードの斬撃を飛ばす。

今度は避けられることはなく、しっかりと命中したが全身を覆って
いる防具に阻害されて致命傷には至らなかった。

恐らくこのままでは埒が明かない。

「ウォーターボール」

俺は魔氷剣を出現させて、そのまま斬撃を放った。

斬撃を放つと同時に気配を薄めたまま、オーガの後方に素早く移動してそのまま背後に飛び込み、魔氷剣を突き刺した。

防具に弾かれない様イメージは切断。

背中から貫いた刃をそのまま横薙ぎに振るい、胴体を斬って落とす。

「ふっっ」

時間的にはそれほど経過していないが結構疲れた。

アイテムやスキルに助けられて勝つことはできたが、基本的なレベルはこのオーガの方が上だと感じる。

集中して臨まないとやられる。

俺は息を整え次の敵に向かった。

第261話 下層（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。
さい。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第262話 脱出行(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のヘブンスドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

よろしく願います。

第262話 脱出行

俺は今下層の武装オーガと戦っている。

一体を消滅させたが、ベルリアの方を見ると、まだオーガと交戦している。

やはり今までよりも手強い。

ベルリアとは身体の大きさが違いすぎる。

恐らくパワーもオーガが上だろう。

ベルリアがバスタードソードで受け流して応戦しており、何度か相手に斬りつけてはいるが、防具に阻まれている。

余計な事かとも思ったが、理力の手袋の力を使い、オーガの手首を掴んでやった。

一瞬不可視の手により動きを阻害されてオーガの動きが止まった瞬間を見逃さずベルリアが『アクセルブースト』を使いオーガの腕を切断し、返す刃で再度『アクセルブースト』を発動して、隙だらけになった胴体をぶった斬った。

「マイロードご助力ありがとうございます」

「次行くぞ！」

流石に隙をつけばベルリアは強さを発揮するが、体格差があり、余り相性が良いとは言えないな。

後方の3体に目を向けてすぐに向かう事にするが、既に一体はルシエにより葬り去られていた。

『鉄壁の乙女』により完全に攻撃はシャットアウトされているが、真司と隼人の持っている魔核銃ではオーガの装甲を突破することは

出来ずに、ほとんど足止めとしての効果を発揮しておらず、一方的に責められている。

光のサークルに阻まれている所をルシエが仕留めたのだろう。今の状態では『鉄壁の乙女』の効果が切れるとまずい。

「ベルリア右のやつを頼む。真司、隼人左の奴を集中攻撃だ。ルシエはベルリアのフォローをしてくれ」

ベルリアに右のオーガを任せて俺は左のオーガを倒しに向かう。

俺単独では、見切られる可能性があるので真司と隼人に注意を引いてもらう。

『必中投撃』

隼人はメインウエポンの槍を投げて勝負をかける。

槍は防具の上から刺さったが、本体の貫通までは至らなかったようで、正面の胴体に突き刺さったままになっている。

槍が刺さったままオーガが攻撃を試みる。

「うおおおおおお〜！」

真司がそれに呼応して打って出た。

動きの鈍ったオーガに対して2刀流で責めて責めて責めまくっているが、力量差がありすぎるので長くは続かないだろう。

「どるああああ〜」

真司が踏ん張っている間を縫って、隼人がオーガの顔を狙って釘を投擲して注意を削ぐ。

2人の援護を受けたのでオーガに対して完全に気配を消す事が出来

た。

気取られないように素早く背後に回り込んでオーガの背中に魔氷剣を突き入れる。

先程と同じように、そのまま胴体を切断して消失させた。

もう一体のオーガはベルリアが相手にした瞬間、ルシエが獄炎で消し炭にしてしまった。

「ルシエリア姫、ありがとうございます」

「ああ、この程度は問題ないな。ベルリアこの程度で苦戦してるよ
うじゃな。もっと励めよ」

「はっ。更に精進いたします」

「ああ、助かった。やっぱりこのオーガは迫力が違うよな。俺
やばかったよ。斬り結びながら、ちびりそうだったよ」

「ああ、俺の槍の投擲でもしとめられなかったしな。かなりやばか
った」

「まあ、みんな無事だったからよかったよ。この後も極力敵を避け
ながら行こうか」

「ああ賛成だ。何度も戦闘するのは厳しい」

「勿論そうしよう。俺もそれがいいと思う」

「海斗」

「何だルシエ」

「お腹が空いた。魔核くれよ」

「ご主人様私もお願いします」

「マイロード私もお願いします」

「わかったよ」

俺はスライムの魔核を取り出して、それぞれに渡しておいた。
この3人は安定というか空気読む気がないな。
まあ3人とも活躍したから良いけど。

第262話 脱出行（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第263話 ダンジョンキャンプ(前書き)

新作始めました。

悪魔な俺のへブンスドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

よろしく願います。

第263話 ダンジョンキャンプ

俺は今ダンジョンの下層を移動している。

オーガを撃退して上階への階段を目指して進んでいるが、なかなか距離が詰まらない。

モンスターを感知する度に迂回しているので、進んでは退がるを繰り返している感じだ。

オーガの一団を倒した感じだと、このレベルで有れば無理を通せば、進めなくはないが、真司と隼人の事を考えるとリスクは避けたいし、数をこなして消耗戦になると厳しい。

総合的に判断して、やはり今の方針が最善手だと思い進んでいるが、みんな分かっているからか誰からも文句の声は上がっていない。

「みんな、相談なんだけど。スマホを確認したら今は18時だけど、まだ半分ぐらいしか進めてないんだ。無理して進めばもしかしたら深夜に上階に着けるかもしれないけど、俺は後数時間したら今日は休息を取った方がいいと思う」

「休まって、ダンジョンの中でか？」

「そう。今はまだ大丈夫だけど、このまま進み続けたら疲労で集中力が下がるし、危ないと思う。もしかしたらシルの感知も鈍るかもしれない」

「ご主人様、私は大丈夫ですよ」

「でも、夜中迄の長時間やった事はないだろ」

「はい」

「だから隼人と真司には悪いんだけど、後2時間ぐらい進んだら、ダンジョンで野宿したいんだ」

「海斗、正直ダンジョンで野宿する発想がなかった。正直どうにか早く進まなきゃと思って焦ってたんだ」

「ああ、俺も一緒に結構疲れて来てたんだ。海斗、お前すごいな。ダンジョンで野宿か。いいんじゃないか」

「よし、じゃあもうちょっと頑張るか！」

その後、モンスターと交戦することなく20時を迎えたので探索を打ち切る。

野宿に適当な場所が良く分かっていないが咄嗟に逃げられる様にオープンスペースに陣取ることにした。

見通しが良く逃れる代わりに4方から攻められる可能性もあるが、何処に決めても一長一短あるので、ここで野宿を始める。

「それじゃあ、シル今は周囲にモンスターはいないよな」

「はい。大丈夫です」

「シルには、夜中にまたお願いするから一旦送還するな」

「かしこまりました。いつでもお喚びください」

「それじゃあ、ベルリアに周囲の警戒を頼むよ」

「かしこまりました。お任せください」

「ルシエは・・・とりあえず一旦戻るか」

「なんか引つかかるけど、わかった」

「ベルリアは24時までな」

「はい」

「それじゃあ、シルとルシエは、また後でな」

そう言つて2人をカードに送還した。

「じゃあ、俺達は晩飯にするか」

「晩飯つて言つても、俺飴ぐらいしか持つてないぞ」

「大丈夫だ。俺がカップラーメン持つて来てる。まあ1個しかないけどな」

そう言つて俺はカップラーメンを取り出した。

「おお。海斗、さすがだな。だけどお湯はどうするんだ？」

「いやこのまま食べるんだよ」

「えっ？そのままで大丈夫なのか？」

「ああ、前に動画で見つけて俺も実食済みだ。毎日は厳しいけど1

「回ぐらいなら全然いけるぞ」

「そうなのか。海斗って思ったよりアウトドアというかワイルドだな」

「本当にアウトドアだったら、ボンベとか鍋とか持ち込んで調理してるだろ」

「まあ確かに」

「分けたらあんまり無いけど、無いよりましだろ。明日はお菓子で凌ぐぞ」

そう言って手で麺を3等分に割って2人に渡した。

「んんっ！これ結構いけるな」

「ああ、お菓子みたいなもんだな。俺もこれから常備しようかな」

「まあ口に合ってよかったよ。喉は少し乾くけど明日の事もあるから水分は控えめにしてくれよ」

カップ麺をそのまま食べただけなので食事は1〜2分で終了してしまっただ。トランプもホテルに置いて来てしまったので特にやる事も無いが寝るには少し早すぎる。

これからどうしようかなと思いつながら、流石に鎧を着用したまま横になるのは無理なので、鎧を脱いでからマントを下に敷いてリュックを枕に転がった。

第263話 ダンジョンキャンプ（後書き）

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第264話 ダンジョンナイト(前書き)

悪魔な俺のへブズドア <https://ncode.sy>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.sy)

もよろしくお願いします。

第264話 ダンジョンナイト

俺はダンジョンの下層で野宿している。

現在21時だがこの時間までダンジョンにいた事は今まで一度もない。

夜のダンジョンは明るかった。昼間の明るさと何も変わらないので目が慣れた今は普段よりも明るく感じるぐらいだった。

ただし床は固くて冷たいので敷いたのがマント1枚では心許ない。

「なあ海斗起きてるか？」

隼人が声をかけて来た。流石にこの状況で眠るには早すぎるのだから。

「ああ、起きてるぞ」

「ダンジョンで野宿した事ある奴ってあんまりいないよな」

「そうだな。普通に考えてほとんどいないだろうな」

「俺さ、こんな状況だけどちょっと嬉しいって言うかワクワクしてるんだ」

「嬉しい？」

「これが終わったら、俺はダンジョンで野宿した事があるんだって人に言えるだろ」

「まあ、そうかもな」

「海斗にダンジョンの潜り方教えてもらって、今回ここにもついて来てもらってさ、俺の人生変わったんだ」

「そんな大袈裟な」

「いや、俺中学でもあんまり友達いなかったし、髪の色も高校入るタイミングで張り切って茶髪にしたけど海斗と真司ぐらいしか友達出来なかったんだ。それが今友達2人とダンジョンで野宿だぞ。ちよっと前なら考えられなかった事だよ。俺こつ言つのにちよっと懂れてたんだ。友達とパーティ組んで冒険する。今俺達冒険してるよな」

「俺もだぜ、海斗。俺も今の状況大変なのはわかってるけど、ちよっと嬉しいんだ。なんか友達とダンジョンで冒険して青春ドラマみたいじゃないか？俺も中学で怪我して部活辞めてから今まであんまり変化のない生活してたから、今が楽しくてしょうがないんだ。海斗ありがとうな」

「急になんだよ。俺だって友達少ないんだからお前らと一緒に潜れてよかったよ。なんか急に感謝されると照れるし、よくある死亡フラグみたいだろ。リアルで死んだら洒落にならないからやめてくれよ」

「いや、そんなつもりじゃないって。話は変わるけど海斗って王華学院受けるのか？」

「ああ、受けるって言うか絶対行くんだけどな」

「葛城さんが行くからだよな」

「まあ、そつだ」

「俺も頑張つて受けてみようかと思うんだ」

「えっ？隼人も受けるのか？」

「実は俺も受けようかと」

「真司も？一体どうした」

「俺達の偏差値だとちょっと頑張らないといけないから迷ってたんだけど、やっぱり大学もこの3人で一緒だと面白いだろうなと思つて」

「俺も今の所決まった目標とかないけど、ダンジョン潜つてて、将来もこれが続くといいなと思つてな。俺と一緒に潜ってくれるのは隼人しかいないし、これだけサポートしてくれるのも海斗しかいないだろ。あと1年しか続けられないのはもつたいないからな。お金もそこそこ稼げて来たし学費ぐらい自分でなんとかなりそうだし」

「そうなのか。そりゃあ俺は2人がまた一緒だと嬉しいけど」

「それに海斗のパーティーメンバーの2人も王華学院だろ」

「多分な」

「あの2人もすごく可愛かったしな。王華学院って可愛い子が多いな。ってオーブンキャンパスの時思わなかったか？」

「おお、俺もそれは思った」

「お前ら、そんな事考えながら回ってたのか。俺はあの時はそんな余裕はなかったな。なんでか冬でもないのに雪景色が見えたしな。あの時は本当に不思議体験だったよ。今考えてもあれは一体なんだったんだろうな。あれ以来俺、不思議体質になってしまったのか時々、雪景色が見えたり、灼熱の光景が見えたり、急に調子崩したりがあるんだよ。お被いでも行ったほうがいいのかな」

「海斗、お前まだ気付いてなかったのか・・・」

「海斗お前は将来絶対大物になるよ。間違いない」

第264話 ダンジョンナイト（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第265話 死亡フラグ（前書き）

悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.sy>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.sy)

もよろしくお願いします。

第265話 死亡フラグ

俺は今ダンジョンで野宿をしている。

余りこんな機会もないので真司と隼人と3人で寝ながら話している。

「俺、ダンジョンから帰ったら前澤さんに告白してみようかな」

「本気で言ってるのか真司。そんな事お前にできるのか？」

「ああ、なんかこんな所で夜過ごすと人生について考えさせられるよな」

「急にどうしたんだ。気をしっかり持てよ！」

「いや、そう言うんじゃないって」

「やっぱり人生1回しか無いんだなと思ったら、俺明日死んだら後悔するなと思って」

「いや、だから死亡フラグ立てるなって。明日は絶対死なないから俺が死なせないから大丈夫だ！しっかりしろ！」

「俺の後悔は17年間彼女がいなかった事だ。前澤さんが彼女だったら俺は明日死んでも悔いはなかったはずだ」

「真司。隼人なんとか言ってくれ」

「まあ俺も明日死んだら悔いが残るな。せっかくダンジョンも楽し

くなくて来たのに今死ぬ訳にはいかないな」

「だから言ってるだろ、そう言うのはダメなんだって」

「俺だって彼女が欲しい。帰ったら受付のお姉さんに声をかけてみようかな」

「隼人」

「それはそうと海斗も悔いが残らないように告白した方がいいぞ」

「いや、俺は死なないから大丈夫だ。心配いらなからな」

「今度から焚火でもできるようにガスボンベとか持って来といたら最高だな。ホテル代も浮くし言う事なしじゃ無いか」

「確かにな。1日ぐらいならいいかもな」

「多分ダンジョンで夜通し潜るのって申請がいるんじゃないか？今日もかなり心配かけてると思うぞ。まあ下層にいるとは思わないだろうから探しようも無いだろうけど。それと、ホテルのチェックアウトが不味く無いか？荷物捨てられないかな」

「多分大丈夫じゃないか、3人で謝って許してもらおうぜ」

「ああ、それじゃあ明日もあるしそろそろ寝ようぜ。ベルリア、スマホ渡しとくから、24時になるか、敵が来たらすぐ起こしてくれ」

「かしこまりました」

俺はそのまま眠りについた。余り神経質ではないのと、朝からずつと探索していた疲れで思いの外あっさり眠りにつく事が出来た。

「マイロード、失礼します」

「あ、あつ。もう時間か。ベルリアそれじゃあ交代だ休んでくれ」

「はい」

俺はベルリアをカードに戻したが、この後どうしようか考えてみた。シル1人に朝まで任せるのは明日に響きそうだが、間違ってもルシエを1人で見張らせる訳にはいかない。

「シルフィー召喚」

「ご主人様、それでは見張りをさせていただきますね」

「ああ、頼んだよ。それじゃあこれで4時になったら起こしてくれ」

「かしこまりました」

シルに任せて再び俺は眠りについた。

「ご主人様」

「ああ、時間か。シル助かったよ。後は任せてくれ」

「はい、よろしく願います」

俺はシルをカードに戻してから

「ルシエリア召喚」

「海斗、遂にわたしの出番だな。任せろって」

「いや、俺も一緒に見張るから大丈夫だ」

「寝てていいぞ。わたしがみてやるから」

「いや、大丈夫だ。俺も一緒に見張るから」

「なんか感じ悪くないか？せっかく好意で言ってるのに」

「ああ、それは嬉しいよ。でも俺も一緒に見張るからな」

「わかったよ」

俺はルシエ1人に任せるほど愚かではない。好意だろうがなんだろうが、こいつはやらかす。今までやらかして来ているのだから、自分たちの為にも、俺も一緒に見張る。そうでなければ目が冴えて寝れなくなってしまう。

そこから朝まではルシエと2人で見張り当番をする事になったが、なぜか春香の事を根掘り葉掘り聞いて来たので、適当にスルーしておいた。

第265話 死亡フラグ（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第266話 ダンジョンモーニング(前書き)

悪魔な俺のへブズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第266話 ダンジョンモーニング

俺は今ダンジョンの下層で見張りをしている。

スマホを見ると朝の6時になったので真司と隼人を起こす事にする。

「朝だぞ、起きろ。そろそろ探索を開始するぞ」

「う、うん。もう朝か」

「俺疲れて熟睡してた。案外ダンジョンでも寝れるもんだな」

「よし、それじゃあ準備して出発するぞ。出来れば早い時間帯に上層に戻りたいからな」

「おう、そうだな」

「よし、頑張るか」

3人共マントを装着してから荷物を背負い探索を開始する。

「シルフィー召喚。ちょっと休む時間が短いかもしれないけど、シルが居ないと探索進まないからな。頼んだぞ」

「はい。ご主人様に頼っていただけで嬉しいです。全く問題ありません」

「ルシエはどうする？ちょっと休むか？」

「シルが頑張ってるのに姉の私が休むわけにいかないだろ」

だからルシエ、お前は姉じゃなくてどう考えても妹だろ。

「そうか、じゃあ頑張っ行ってこうか」

「ご主人様、ベルリアは召喚しないのですか？」

「あつ、忘れてた。ベルリア召喚。ベルリア、今日も一日頼んだぞ」

「はい。頑張ります」

全員揃って準備も終わったので、マップを確認して早速出発する。

昨日の内に半分よりも進んでいるので順調にいけば、今日の昼過ぎぐらいには上階へ出られると思う。

現在地は22階層エリアだが、目的地の階段までは最高で24階層エリアに足を踏み入れる必要があるので注意して臨みたい。

「海斗、見張りもしてくれただよな。ありがとっな」

「俺も見張りをしようと思ったんだけど朝まで目が覚めなかった」

「まあ、ダンジョンで寝るなんてなかなか無いからな。まあいい経験になったよ」

「ご主人様、敵モンスターです。右方向から来ています」

「よし、みんな前方に走るぞ！」

昨日に引き続き、今日の作戦もシルが感知したらとにかく逃げるだ。

昨日もこれで被害なく行けたので格好悪くてもこの作戦を今日一日続けるつもりだ。

「朝から全速力で走ると流石に堪えるな」

「朝一は体が動かないな」

「それは言えてるな。こんな時間から探索した事ないしな。準備運動でもしとけばよかったかな」

「まあ、今走ったので準備運動完了だろ」

「早朝ダンジョンも誰もいなくて静かだし、爽やかでいいかもしれないな」

「健康のために朝ダンジョンいいかもしれない」

「ははっ。もう3人とも完全にダンジョン中毒者だな」

「海斗の影響大だな」

「うん。間違い無いな。海斗の病気がうつっちゃったな」

「大学行っても、これが続けられるといいな」

「そうだな。でも夜はモンスターの襲撃なかったんだな」

「おお、俺もモンスターって夜行性なのかと思って心配してたけど、実際は夜はモンスターも寝てるのかもな」

言われてみると、夜は物音一つしなかった。運良くいたエリアに夜行性のモンスターがいなかったのかもしれない。いつものダンジョンは暗所だから、あのモンスター達は夜行性と言えるのかもしれない。

その後も、モンスターから逃げつつ階段への距離を詰めていくが、現在地は24階層エリアだ。

「ご主人様、正面からモンスター4体です」

「よし、みんな左に入って逃げるぞ」

俺達は正面のモンスターを避け左側に走って逃げる。

「ご主人様正面からも3体です」

「よし挟まれないように右折するぞ」

こんなところで挟まれてはたまらないので急いで右折して逃げる。

「ご主人様、また正面から別のモンスターが4体来ています」

後方には恐らく、先程のモンスターのどちらかが追って来てるだろうから、今更引き返す事は出来ない。

ただ正面を突破するにしても、交戦している間に追いつかれて挟撃される恐れがある。

まずいな。ここは24階層エリア、モンスターの相手をするのは真司と隼人には荷が重すぎる。

第266話 ダンジョンモーニング（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第267話 フラゲの回収(前書き)

悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.sy>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.sy)

もよろしくお願いします。

第267話 フラゲの回収

俺は今24階層エリアを走って逃げている。

どうにか敵モンスターから逃げ切ろうと走っているが完全に挟まれてしまった。

正面に4体、後方には少なくとも3体以上が追って来ている。

このまま、交戦せずに逃げ切るのは、ほぼ不可能だろう。

「みんな、正面突破するぞ、速攻で決める。後ろからのモンスターに追いつかれる前に抜けるぞ。どんなモンスターかわからないけど、目に入ったら速攻しかない。右をシル、真ん中をルシエ、もう一体をベルリア、1番左を俺と真司と隼人で仕留める。仕留めたらすぐに逃げるぞ。出し惜しみは無しだ」

前方に向かって駆けながら敵に攻撃する態勢を取る。

前方から現れたのは大きな亀のモンスター。甲羅から巨大な氷の刃を突き出している。

まずい。シルとルシエは問題ないが、俺達とは相性が悪い。

「必中投撃」

俺が躊躇している間に隼人が槍を前方に投げた。

勢い良く前方に投げられた槍が亀の甲羅に当たり弾かれた。

そつなるよな……

「隼人、ナイフとかでベルリアの相手を牽制してくれ。真司は俺の相手を魔核銃と一緒に攻撃してくれ」

俺はバルザードの斬撃を亀の頭を狙って放つ。

命中と同時に炸裂音が聞こえるが、前方の亀の頭に裂傷を負わせたものの亀は健在だった。

どうやらこの亀は頭にまで装甲を纏っているらしい。

真司も魔核銃を放つがダメージを入れることができない。

思った通り相性が悪い、近距離からバルザードをねじ込むしかないな。

「真司、俺は突っ込むから援護頼む」

前方に向かって駆け出そうとした瞬間、亀のモンスターが口を開いたと思ったら冷気を感じた。

「真司やばい。よける！」

危険な感じがしたので、真司にも指示をしてから横に飛び退くが、さっきまでいた所に氷の刃が降り注ぐ。

かなり危なかったが、流石24階層と言ったところだろう。完全に俺の『ウォーターボール』の威力を上回っている。

「おいっ海斗、モンスターが魔法使って来たぞ！こんなものありか？」

「下層に行けば普通に魔法使ってくるんだ。真司はとにかく正面に立たないようにして逃げろ」

俺は即座にナイトブリングァーの能力も発動して前方に向かうが、やはりある程度探知されているようで攻撃をしかけてくる。

先程と同じように口を開いて攻撃をしかけてくるが、口の直線上に攻撃の効果が現れるようなので、大きく避ける。

避けながら隣のベルリアが目に入ったが、近距離から亀のモンスター

ーに斬り付けているが、警戒したのか、甲羅の中に頭を引っ込めているせいで致命傷は与えるに至っていないようだ。俺も頭を引っ込められる前に仕留める必要がある。

そのまま亀の側面に向かつて走り抜けてから魔氷剣を発動させてから、一気に亀の側頭部に氷の刃を突き入れた。硬い装甲に覆われているのでイメージは貫通と切断。

突き刺ささった状態から一気に頭を落とす。かなりの抵抗感があったが、何とか切断しきることが出来た。

周囲を見回すと、シルとルシエは既に相手を葬り去っていたがベリアはまだまだ苦戦していた。

頭を引っ込めた状態でも魔法を放てるようで、正面から頭に剣を突き入れる事は出来そうにないのでベリアが『アクセルブースト』を使って甲羅ごとぶった斬ろうとしている。

流石に大丈夫なのか心配になったが、何度か繰り返してどうにか倒すことが出来たようだ。

これでようやく抜けれると気を抜いた瞬間

「ご主人様、後方から敵が迫っています。7体ですが逃げるには距離が近すぎます」

おいおい、7体ってさっきの2方向の敵が合流してるじゃないか。

真司、隼人、お前らが昨日あんな事を言うから本当にやばくなってきたぞ！

俺は絶対誰も死なせないけどな。

第267話 フラゲの回収（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第268話 フラゲの行方(前書き)

悪魔な俺のヘブズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第268話 フラグの行方

俺は今決戦を迎えようとしている。

隼人と真司のフラグのせいなのか、7体の上位モンスターに追い詰められようとしている。

何がなんでも全員でこの窮地を乗り越えて見せる。

「シル、ルシエ、とにかく目の前の敵を倒してくれ。真司と隼人はサポートに徹してくれよ。ヤバかったら全力で逃げろ！ベルリアも頼んだぞ」

覚悟を決めて俺とベルリアが前衛に立ち、敵モンスターを待ち構える。

すぐに敵が現れたが、先程の氷の刃を背負った亀が1体、銀色の毛並みの大型の虎が2体、岩で覆われた様な

鎧を纏った、蜥蜴型のモンスターが2体、羽から炎を吹き上げている鳥型が2体だ。

この組み合わせは、何となくゲームとかに出てくる四聖獣っぽい。残念ながら蜥蜴はドラゴンぽくはないし、どのモンスターも四聖獣の遠い親戚の集まりの様だ。

ただ一つ言えるのは、俺とベルリアには相性が悪い相手が多そうだ。

「ウォーターボール」

俺は再び魔氷剣を発動して身構える。

ベルリアは相性の悪い亀型は避け虎型に向かう。俺もモンスターの中で速度に勝る、虎型と鳥型にターゲットを絞り、速度の遅い、亀型と蜥蜴型は後衛に任せる。

虎型は獣タイプだけあって素早い。見た目で言うとシルバータイガーといった所だが大型の虎は単純に怖い。

迫ってくるシルバータイガーに対して魔氷剣の斬撃を飛ばすが、かわされてしまった。

ゆっくり近付いて来ている蜥蜴型に『神の雷撃』が降り注ぐが、かなり装甲に損傷が見られるものの、まだ動いている。岩の装甲と雷撃の相性が良くないのかもしれないが岩に対しては獄炎も同じく効果が半減するかもしれない。

とにかく俺は虎型を倒さなければならぬがかなり素早い。後方から真司が魔核銃を放って、足止めを試みるが普通に避けられた。

俺が攻撃に掛かろうとした所を今度は鳥型が燃え盛る羽を飛ばして来た。

このままではいずれ食らってしまう。

「シル、ルシエ、先に虎型と鳥型を頼む。ベルリア、俺たちは蜥蜴型にターゲットを変えるぞ。真司と隼人は鳥型を牽制してくれ」

ターゲットを変える為の時間を真司が魔核銃を連射して稼ぐ。

隼人は『必中投撃』を駆使して鳥型を攻撃している。スキルのおかげで命中はしているが、釘では威力が足りない様で、そこまでダメージを与えている感じではない。

俺は蜥蜴型に近づいて斬りつけようとするが蜥蜴が口を開いた。

ブレスか？と思ったが飛んできたのは唾液だった。慌てて左方向に避けるが、飛沫がマントにかかってしまった。飛沫がかかった部分から煙が上がっている。火か？と思ったがよく見ると、マントに細かい穴が空いている。どうやら溶解液の様だ。

以前この特殊素材のマントは炎から俺を守ってくれたが、残念ながらこのレベルの溶解液には耐性が薄いらしい。
シヨックだ。シヨックだがシヨックを受けている時間は無い。そのまま突っ込んで蜥蜴型の頭を落とそうと魔氷剣を叩き込むが、完全には切断に至らない。

「硬いつ！」

今度は切断のイメージを強く持ち再度同じ場所に切り込んで首を落としかかるが、さすがに危機を感じた蜥蜴が大暴れして、溶解液を撒き散らす。

横目でベルリアの方に目をやると同じく蜥蜴型に斬りかかり『アクセルブースト』を発動している。

「パキーン！」

「えっ！？」

高音の金属音を発してベルリアのバスタードソードが根元から折れてしまった。

やばいつ！

「ベルリア下がれ！！」

猶予が無い事を悟った俺は、ベルリアに声を掛けて直ぐに自分の前で暴れている蜥蜴にとどめを刺すべく踏み込む。

近距離から魔氷剣の斬撃を放ち、着弾の瞬間を狙い先程刃を食い込ませた箇所を狙って魔氷剣を打ち下ろし、どうにか首を落とすことに成功した。

現状を確認するが、虎型と鳥型は1体ずつ減っている。

こちらは、俺のマントが損傷、そしてベルリアの100万円のバスタードソードが完全にお亡くなりになってしまった。
シヨックはでかいが今はそれどころではないので、なんとか戦闘に集中する。

第268話 フラゲの行方（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第269話 フラゲはもう立てるな(前書き)

悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.sy>

[setting.com/n9722fv/](https://ncode.sy/setting/com/n9722fv/)

もよろしくお願いします。

第269話 フラグはもう立てるな

俺は今敵と交戦している。

俺は蜥蜴型のモンスター1体を撃退することに成功したが、ベルリアのバスタードソードが完全に折れてしまった。

原因はまず間違いなく『アクセルブースト』だろう。先程の亀型といい、蜥蜴型といい異様に固かった。

魔氷剣でも一気に切断することは出来なかった。

ベルリアも同じく硬くて歯が立たない所を無理やり剣技と『アクセルブースト』を使用してねじ込んでいた。結果100万円のバスタードソードの耐久力を超えてしまったと言う事だろう。

恐らくベルリアの『アクセルブースト』を最大限活かすにはもう少し硬度の高い剣が必要なのだろうが、残念な事に値段も高い……とにかくベルリアが戦力から外れたのは痛い。

「真司、亀型の足止めを頼む！逃げながらいいから」

どう考えても、こちらの手数が足りないので真司に足止めを頼むが氷刃魔法で攻撃してくるので危険だ。

俺は再度、もう一体の蜥蜴型に挑むが、先程の戦いを警戒して溶解液を吐きまくっていて近づく事が出来ない。

真司に目をやると槌を振り回して亀型に対抗しようとしているが、大きなダメージは与えることが出来ていない。

「おお～おっ、やべ～。魔法がやばい。海斗、マントに穴が、穴が空いたぞ！」

真司が氷刃魔法を避けた瞬間いくつかマントにかすった様でしっ

かりと裂けていた。

真司、マントは裂けるものなんだよ。穴も開くし、燃えもするんだ。形あるものはいずれ無くなるんだ。

いずれにしても真司では長くは持たなさそうだったが

「そうだ、師匠これ使ってください」

そう言つて真司はサブウェポンの双剣をベルリアに投げて寄越した。真司にしては素晴らしい機転だが、ベルリアつて双剣使えるのか？俺は目の前の敵に集中する。

この溶解液をどうすればいい？時間をかければかけるほど、状況が悪くなる可能性がある。

俺はナイトプリンガーの効果を再度発動してから側面に廻ろうとするが、反応されてしまう。

意を決して、反対方向に回り込んだ瞬間、すでに穴が開いてしまったマントを蜥蜴型の頭部に向かって投げつけた。

溶解液でマントが溶けていくが、その瞬間前方への攻撃は弱まった。マントは1枚しかないのでこの機会を逃すことはできない。

一気に踏み込んで、魔氷剣を叩き込む。

先程と同じく一度では切断し切れないが、想定済みなので慌てる事なく追撃をかけ、切り口に攻撃を重ね、蜥蜴型の頭を落とす。

やはり硬いが、なんとか倒せた。後は亀型だが、真司とスイッチしてベルリアが相手をしていた。

双剣を構えて、連撃を繰り出している。

真司の二刀流とは明らかに違い洗練されている。

闇雲に振り回すのではなく、2刀共に剣技として成立した一撃を繰り出している。

圧倒しているものの、やはり威力が足りない様で致命傷は与えられていない。

手伝おうと歩を向けた瞬間、ベルリアが『アクセルブースト』を発

動した。

それも一刀でなく二刀共に発動した様で一刀目の攻撃が当たった瞬間二刀目を繰り出して、そのまま亀型の頭を落とし切ってしまった。

「ベルリア、凄いな」

流れる様な高速の連撃に思わず声が出してしまった。

今まで2刀流と言う発想がなかったが、ベルリアにはこちらの方が向いているのかもしれない。

威力が落ちる部分を、手数で補えるし、『アクセルブースト』も連続使用できるのであれば威力は跳ね上がるだろう。

シルとルシェの方を見ると、無事にモンスターを倒し切っていた。

「真司、隼人、大丈夫か？」

「ああ、俺はマントに穴が空いた以外は大丈夫だ」

「俺は、槍が溶けた……」

「はっ？槍が溶けたって、一体……」

「『必中投撃』で燃えてる鳥に投げつけたら命中する瞬間に炎が増して、槍が溶けちゃった。俺の自慢の武器が……」

今回の戦いで、真司と俺のマント、ベルリアのバスタードソード、そして隼人の槍がお亡くなりになってしまったが、俺達自身には被害はゼロ。24階層の敵11体を相手にこの戦果であれば上出来ではないだろうか。

損害は痛いには痛いけど、お亡くなりになったのが俺らのうちの誰かではなく装備でよかった。

真司と隼人にはきつく言っておかなければならない。
もう2度と死亡フラグは立てるなど。

第269話 フラゲはもう立てるな（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第270話 脱出(前書き)

悪魔な俺のへブズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第270話 脱出

「ご主人様、お腹がすきました」

「連発したらいつもよりお腹が空いた。早くちょうだい。いっぱいちょうだい」

「マイロード、剣を折ってしまった身で誠に申し上げにくいのですが、私にもお願いします」

いつもの様にサーバント3人が魔核を催促して来たが今回は、24階層のモンスター相手にしつかりと頑張ってくれたのでちよっと多めにスライムの魔核を渡しておいた。

「マイロード、剣を折ってしまった私に罰をお与えください」

「いや、普通に戦って折れたんだから仕方がない。罰なんかあるわけ無いだろ」

「ありがとうございます。ただ私は騎士ですので剣が無ければお役に立てません。今は真司様に剣を借りていますが、いずれ自分の剣が必要になるのですが」

「わかってるって。戻ったら新しい剣を買っよ」

「おおっ、マイロード、それでは今度は魔剣を」

「いや、それは無理」

「マイロード」

「いや無理」

ベルリアが物欲しそうに見てくるが無理なものは無理だ。

「ベルリア、形あるものはいつか壊れるんだ。それが魔剣であつてもだ。つまり魔剣であつても、普通の剣であつても根源的には同じ事なんだぞ。魔剣にこだわるのは良くない。ベルリアの技量で有れば、通常の剣であつても魔剣を超えることができるはずだ」

「わかりました。マイロードがそこまで私の事を評価してくれているとは。一層精進して頑張ります」

まあ、いつの日かベルリアには魔剣を購入してやろうと思う。

「それじゃあみんな、急いでこのエリアを抜けよう。ベルリアはそのまま真司の武器を借りるとして、隼人は戦闘になつたらとにかく後方支援に徹してくれ」

俺達は手許にある武器でどうにか態勢を整えて上階への階段へと向かった。

シルの声にしたがつて、回避を続けながら進んでいったが、途中で高速移動する鳥型のモンスターに追いつかれてしまい戦闘となつたが、シルの『鉄壁の乙女』とルシエの『破滅の獄炎』を連発して難を逃れることができた。

「もう12時か。マップで見る限りあと少しだと思つんだけどな。休みたい所だけど、階段のところまで一気に進んでしまおうか」

恐らく、距離的に1時間もあれば到着する位置まで来ているので、疲労感はあるが強行軍で臨むことにした。

「海斗、疲れたな。今更だけど海斗はその鎧着けて歩いて疲れな
いのか？」

「そりゃあ、少しは疲れるけど、軽量化の術式が施されてるみたい
でそこまで重くはないんだ」

「そうなのか。俺もいつか同じ様な鎧が欲しいな」

「ああ、俺も欲しいな。海斗見てると恥ずかしさを飛び越えて、欲
しくなるよな」

寝められているのかよくわからないが、将来同じ様な装備の3人が
並んで探索している事を思い浮かべるとなんか笑えてきた。

「ご主人様、階段が見えます」

シルの声に反応して全員で前方を凝視するが俺にはよくわからない。

「マイロード、ようやく着いたようですね」

ベルリアにも見えるらしい。やはり人間とサーバントでは視力も違
うのかもしれない。

しばらく歩を進めると、ようやく俺にも目視できる様になって来た。
上層へ上がる階段だ！

「真司、隼人、やったな。戻って来たぞ」

「おお、遂に戻ってこれたよ」

「流石に疲れたな、早く行こうぜ」

階段が目視出来たことにより俺達3人のテンションは一気に上がり、階段まで一気に走ってそのまま上階に登り切った。

長かった下層での探索がようやく終わりを告げた。誰も怪我する事なくここまで来れたのは本当に良かった。

あとは、戻るだけだ。

「みんな、後は戻るだけだけど、このまますぐに出口まで戻る？それとも上階の探索を少し進めてから帰る？」

「海斗。お前元気すぎるだろ。俺はもう限界だからすぐ帰る」

「完全なダンジョン中毒だな。それも末期だぞ。帰ったら即、病院行ったほうが良いかも知れん」

2人から失礼な答えが返ってきたが、俺も疲れたので、おとなしくこのまま帰ることにした。

第270話 脱出（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第271話 地上(前書き)

悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第271話 地上

俺は今ダンジョンの上層を歩いている。

下層から抜けてから既に1時間ぐらいは経過しているが、そろそろ地上への出入口が近い。

地上に出たらギルドとホテルにすぐ行く必要がある。

今回の事情説明と荷物を取りに行かないといけないからだ。

「海斗、あれ出口じゃないか？」

「おおっ本当だな。昨日見た出口だよ。ようやく着いたな」

「久々の外界だよ。長かった」

ようやく俺たち3人は出口への階段を見つけて、地上へと出た。そのまますぐに探索者ギルドへ向かった。

「あの～すみません」

昨日の受付の人を見つけて声をかけた。

「あ～っ！」

声をかけた瞬間大きな声で反応が返って来た。

「高木さんですよ。心配したんですよ。昨日、ギルドへの報告がなかったの、今日も連絡がない様だとダンジョンで何かあったのかと。昨日はどうしてたんですか？」

「それが、下層に落ちてしまいました。抜け出すのに今までかかってしまいました」

「高木さん、ちょっといいですか？言ってる意味がわからないのですが」

「すみません。何がわからなかったですか？」

「いえ、全部です。下層に落ちてしまったと言っ意味がわからないです。おまけに今までかかったって事はダンジョンで一夜過ごしたって事ですか？」

「はい。そうですね。わかってるじゃないですか」

「いいわかりません。下層に落ちたって、どこからどこにどうやって落ちたんですか？」

「あゝそれがですね。9階層付近から下の20階層付近に落ちました」

「落ちたって……今までに9階層エリアに落とし穴があるとは聞いたことがないのですが」

「落とし穴に落ちたんではないんですよ。穴に落ちたんです」

「高木様、やっぱり言っている意味がわかりません。落とし穴ではない穴に落ちたってどう言う意味ですか？」

「それについては誠に申し上げ難いのですが、床に穴が空きまして」

「穴が空いた？」

「いや、正確には穴を空けてしまいました」

「穴を開けてしまった？」

「はい。そうです」

「ちょっと待つてください。ダンジョンの床ってそう簡単に穴が空くようなものではないですよ。一体何をしたのですか？」

「それがですね、非常に言い難いのですが、うちのサーバントがですね。ちょっと張り切っちゃってですね。床に穴を空けちゃったんです」

「空けちゃったって……。いくらサーバントでも床に穴を空けるなんて聞いたことがないですよ」

「そう言われても本当に空けちゃったんですよ。でも大丈夫です。穴は自己修復したみたいで綺麗に閉じているので大丈夫です」

「大丈夫って何が大丈夫なのかよくわかりませんが、その話が本当だとして20階層付近に落ちてしまったんですよ」

「はい。そうです」

「高木様のパーティーは臨時パーティーでブロンズランクとアイアンランクがお二人ですよ」

「その通りです」

「いくらなんでも、ブロンズランク以下の3人パーティで下層エリアから戻ってくるのは無理でしょう。本当のことを言ってください。処分したりしませんから」

「そう言われても本当なんですよ。なぐ真司」

「はい。間違いないです。全部本当の事です。隼人も言っちゃってくれ」

「そうです。海斗の言ってた事は全部本当です。下層で野宿して、今日は朝から銀色の虎とか燃える鳥とか氷の刃の亀とかと戦って逃げて来たんですよ」

「からかってますか？そんなモンスターと戦って逃げ延びれるわけがないじゃないですか。しかも下層で野宿ですか？相当高ランクの探索者しかそんなことできませんよ」

「本当なんですけどね。そうだ、魔核があります。下層の分は全部で21個あるんですけど、見てください」

そう言っつて俺はリュックから下層の魔核21個を取り出して見せた。

「これですか？えっ！」

受付のお姉さんは魔核を見て驚いた様な表情を見せていた。

第271話 地上（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第272話 帰宅（前書き）

悪魔な俺のヘブズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第272話 帰宅

俺は今探索者ギルドにいる。

昨日と今日の出来事をギルドの受付のお姉さんに説明しているが、なかなか理解してもらえないので、手に入れた魔核を鑑定してもらうことにした。

「高木様、この魔核は一体……」

「いや、さっき説明した通り下層で手に入れた魔核です」

「少しお待ち下さい」

そう言うと、お姉さんは一心不乱に渡した魔核21個を識別し始めた。

「どう言う事なのですか？信じられません。全部20階層以上のモンスターのものです。9万円の魔核が4個、10万円の魔核が3個、12万円の魔核が14個もあります」

恐竜の魔核ほどではないが、かなりの高額買取だ。234万円もあるが、3人で分けると1人100万円にもならない。ベルリアの剣1本分にもならない。完全に赤字だ……

「そうですか。だから言った通り下層に落ちて戻って来たんですよ」

「本当だったんですね。でも、皆様のレベルではこのモンスターを20体以上倒すことは難しいと思うのですが、貴方達は一体……」

「まあそこは企業秘密という奴です。でも、さすがに疲れました。ホテルに寄ってから帰ろうと思うので、買取金を3分割お願いします」

「おいおい、海斗3分割はあり得ないだろ」

「えっ？じゃあどうすればいいんだよ」

「せめて6分割だろ」

「そうそう」

「6分割？シル達の分って事か？」

「そうだよ。本当は、ほとんど海斗達の手柄だけど、俺らも必要経費ぐらいは欲しいから海斗が4で俺らが1ずつな」

「いやそれは流石にまずいだろ」

「いや当然だろ」

「海斗達がいなかったら俺達死んでたしな」

「そう言うなら俺が3で2人で3でいこう。それがいい」

「まあ海斗がそれでいいなら、俺はいいけど」

「俺も槍が溶けちゃったから、60万近く貰えるなら言う事ないよ」

「じゃあそれをお願いします」

俺の取り分は117万円だ。ベルリアの剣と俺のマントとほぼ同額だ。ランクによる割増と購入時の還付を考えると若干プラスになっている。初日の分も足すと今回それなりに稼げた気がする。よかった。頑張った甲斐があった。

「それじゃあホテルに行こうか」

ギルドを出てから3人でホテルダンジョンシティへむかった。フロントの人に謝って荷物を受け取り、その足で家に帰ることにした。

来的时候は荷物を送っていた真司と隼人だったが、バタバタしたせいで帰りは送る事自体を忘れていたのか、3人で装備一式を装備したまま荷物を持って帰る事になった。

流石にフル装備に近い3人組がバスと電車に揺られて2時間近く移動するのは非常に目立ったが、昨日からの疲れもあって、電車の中では3人とも熟睡してしまった。

駅に着く寸前に隼人が目を覚ましたので助かったが、あのまま寝ていたらどこまで行っていたのか恐ろしい。

「それじゃあまた明日な」

「今回は本当に世話になったな。これに懲りずにまた一緒に行ってくれよ」

「俺達だけだとやっぱり厳しいからな。また頼むよ」

「まあ、イベントがあったらまた誘ってみてくれよ。俺も楽しかったよ」

「ああ、また誘うよ。じゃあな」

「それじゃあ」

「ああ、また明日」

駅で3人解散となったので歩いて家まで戻るが、まだ少し眠い。1時間以上寝たはずだが、監視のために朝が早かったのと、ダンジョンの硬い床のおかげでまだまだ眠い。

ようやく家に着いたが、寝る前にどうしてもシャワーしたくなかったので、シャワーしながら全身を洗ってから、自分の部屋に戻ってそのまま眠りについた。

途中母親がご飯の為に起こしに来たが、半分寝ぼけてよく覚えていない。

結局翌朝までしっかりと寝てしまい、起きてから学校に行く準備をして家を出た。

今日から1週間また頑張ろうと思う。

第272話 帰宅（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第273話 事後報告(前書き)

悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第273話 事後報告

俺は今家で目覚めたところだ。

目覚ましがなり目が覚めたが、やっぱり家のベッドはいいな。

早く寝たお陰でかなり疲れが抜けたのでスッキリしている。

身支度を済ませて、学校へ向かったが、クラスではちょっとした問題が発生していた。

真司と隼人が始業時間になっても連絡無しに、やって来なかったのだ。

何かトラブルがあったのかと心配したが2人共12時を前にぼろっ
と現れた。

昼休みになったのですぐに2人に喋りかける。

「2人共どうしたんだよ。心配したぞ」

「あゝ。ごめんごめん。寝過ぎしちゃったんだ」

「俺も起きたら11時だった」

「お前ら王華学院受けるって言ってたよな」

「ああ、まあ一応な」

「真面目に授業受けないで受かると思ってるのか？」

「いやゝ。昼からは倍頑張るから大丈夫だって」

「俺もこれから勉強頑張るよ」

俺達が話していると、春香と前澤さんがやって来て前澤さんが声をかけてきた。

「2人共、思いつきり遅刻だったけど何かあったの？」

「いや〜。思いつきり寝過ごしちゃって」

「ああ、疲れが溜まってたんだと思う」

「疲れが溜まってたって、遠征ってそんなに大変だったんだ？」

「それが、ダンジョンの中で1日過ごす事になっちゃって……」

「えっ？ダンジョンの中で過ごす事になっちゃって、どういう意味なのかな？」

隼人が調子良く話していると、春香が聞き返して来た。

「あ……。いやなんでも ないです」

「そうそう、なんでもないよ。大丈夫」

突然隼人の反応が悪くなった。

「私もダンジョンの事詳しくないんだけど、ダンジョンってキャンブとかできるんだ」

なぜか前澤さんまで参戦して来た。

「いや。出来ないことはないと思うな」

「そうそう、まあ楽しかったからいいんじゃないかな」

「海斗、ダンジョンで泊まったの？」

「ああ、そうなんだよ。ちょっとトラブルがあってダンジョンで寝たんだよ」

「海斗、それって危なくないの？」

「まあ、危なくない事はないけど」

「おいつ、海斗」

「なんだよ」

隼人が何か言いたそうな目でこちらを見てくる。

「葛城さん、前澤さん。俺達3人で泊まったからキャンプみたいなもんだよ。実に楽しく過ごせたよ。うん本当に」

「水谷くん、ちょっといいかな。本当に何もなかったのかな。危ない事はなかった？」

「え。あ。まあ。危ない事がなかったわけでは無いけど」

「詳しく教えてもらえるかな」

「あ。は。はい……」

何故か春香からプレッシャーを感じる。隼人に話しかけているはずなのに、俺の周りだけ空気が重い。

これはまさか怒っているのか？春香は俺に怒っているのか？怒っているとすれば、ダンジョンに泊まった事にだよな。危なくない事は無いって言ったからだだよな。

これは……隼人頼んだぞ！

「あのですね。今回2泊3日で遠征に行きまして、初日はそれなりに順調に行ったので、ホテルに3人で泊まったんです」

「うん、そうなんだね。ホテルはどんなところに泊まったの？」

「ホテルダンジョンシティって所で、安かったんだけど3名一室で、ジャンケンに負けた海斗がエキストラベッドで寝たんだよ。まあ修学旅行みたいで楽しかったです」

「男の子っていいね。それでどうなったのかな？」

「それがですね、2日目にちょっとトラブルがありました。ダンジョンの床が抜けて落ちちゃったんです」

隼人から妙に緊張した雰囲気を感じる。しかも話し方がおかしい。完全に敬語になって来ている。

「床が抜けて落ちたって大丈夫だったの？」

「それってかなりやばい状況なんじゃない」

前澤さんも加わって隼人が劣勢に立たされている。

頑張れ隼人！

第273話 事後報告（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第274話 申し開き(前書き)

悪魔な俺のヘブズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第274話 申し開き

俺は今学校で春香達と話している。

正確には話しているのは隼人だが、春香と前澤さんと話している。

「床が抜けて落ちたのは大丈夫だったんですよ。レベルも上がってたから3人とも無傷でした」

「そう。それはよかった」

春香が少し安心した表情を見せている。

「それじゃあ、どうしてダンジョンに泊まる事になったのよ」

今度は前澤さんが突っ込んできた。

「いや、それはですね下に落ちたら上に上がらないとダメじゃないですか。でも穴が閉じちゃったんで、階段を求めて歩いて回ったんですよ。そしたら時間がかかっちゃって」

「私よくわからないんだけどダンジョンってそんなに時間がかかる程広いものなの？」

「まあ、そうですね。広いです。ただ今回は回り道を結構したから」

「回り道？」

「下のモンスターが強かったので避けてるうちに時間が経ちまして」

「それじゃあ、それで時間がかかってダンジョンで泊まったって言う事？」

「そうそう、それで泊まったんだけど、結構快適でよかったよ。見張りもしてもらって安全でよく眠れたんだよ」

「ん？見張りもしてもらってって他に誰かいたの？」

前澤さん……鋭くないですか？隼人も何余計な事言ってるんだよ。

「い、いや、海斗だよ。海斗に見張りをしてもらってたんだよ。は……」

「高木くん1人に見張りを任せて2人はずっと寝てたって事？」

前澤さんが軽蔑したような視線を隼人と真司に向ける。

「い、いやそう言うわけじゃないんだ。前澤さん、誤解だよ」

真司が堪らず参戦して来たが、余り良い予感がしない。

「大山くん。どう誤解なの？」

「海斗にも見張りをしてもらったけどずっとじゃないんだ」

「じゃあ、誰が見張ってたの？」

「そ、それは……」

真司、答えられないなら出てくるなよ。余計悪化したじゃないか。

「海斗、3人で遠征に行くって言ってたけど他にも誰かいたの？」

おおつ、今度は春香から俺に直球の質問が来た。どうする？どうしたらいいんだ。

「い、いや間違いなく3人で行ったよ」

「それじゃあ、現地で合流したの？」

春香がじつとこちらを見つめてくる。この澄んだ瞳を目の前にして誤魔化すのは無理だ。

「いや、誰とも合流はしてないよ」

「本当に？」

「うん。嘘じゃないよ。ただダンジョンの中ではいつもメンバーが増えるんだ」

「メンバーが増えるって？」

「俺にはサポーターと言うか、パーティを支えてくれるメンバーと言うか」

「葛城さん。ダンジョンには、いろんなマジックアイテムとかがあるんだ。それで海斗はそのマジックアイテムをいくつか持ってて、その中にサーバントカードと言うものがあるって、魔法みたいに使い魔と言うか、サポートメンバーと言うかそういう感じのを喚び出

せるんだけど、海斗はそれを持ってるんだ。だから決して怪しい事は無いから安心してよ」

「そうそう、海斗はダンジョンに対しては異常に真面目だから変な事は何もしてないから。葛城さんが心配する事は何も無いよ」

「海斗そうなの？」

「うん。間違いなくそうだよ。今回もサーバントの助けがないとヤバか……いや、見張りがヤバかったよ。寝不足になる所だったんだ」
危ない。動転して余計な事を言いかけた。以前も危ない事は無いのか聞かれた事があったのに、危なかったと言えない。

「大山くん、本当に何も無かったの？」

再び前澤さんが真司を問い詰めようとする。

「う、うん」

「本当に？」

「い、いや。ちょっとはあったかな」

おい、真司何を言い出すんだ。

「ちょっとって何？」

「あ。昨日、強いモンスターに囲まれちゃって。ちょっと危なかったかな」

「水谷くん？」

「いやゝ。ちょっと危なかったかもなゝ。どうだったかなゝ」

もうこれはダメだな……

「海斗、本当は危なかったの？」

「うん。ちょっとだけ危なかったけど、誰も怪我してないから大丈夫だよ。装備がいくつか壊れたけど、サーバントにも助けられて問題無しだよ」

「無理してない？大丈夫？」

「全然無理してないよ。安心してよ。春香が心配する様なことは何も無いから」

「本当に？」

「うん本当だよ」

突然のやり取りに少し焦ってしまったが、買い物友達のをこまめに心配してくれるとはやっぱり春香は天使だな。俺は幸せものだ。それにしても、真司。前澤さんに弱すぎだろ。危うく俺にまで被害が及ぶ所だった。

第274話 申し開き（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第275話 装備品の補充（前書き）

悪魔な俺のヘブズドア <https://ncode.syo>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.syo)

もよろしくお願いします。

第275話 装備品の補充

俺は今ダンジョンマーケットに来ている。

「春香、さっき言った通り今回の遠征で装備がいくつか壊れてしまったんだけど、また買い物に付き合ってもらってもいいかな」

「うん。もちろんいいよ。いつにしようか？」

「今日の放課後でも大丈夫かな？」

「うん、それじゃあ放課後にね」

春香にはまだ伝えていないが、前回一緒に購入したバスタードソードが完全に折れてしまったので新調しなければならない。

放課後になり春香と一緒にダンジョンマーケットに向かった。

「海斗、今回は何を買うの？前は、剣とか買ったと思うんだけど」

「今回は、マントと剣です」

「えっ？この前買ったばかりなのにまた剣を買うの？」

「実は、今回の遠征で根元からポッキリ折れちゃったんだ」

「海斗、大丈夫だったの？あの剣が折れるなんて。もしかして不良品だったの？」

「いや、そうじゃないんだけど、硬い相手を無理矢理斬ってたら折れちゃったんだ」

「でも、あの剣100万円もしたのにお金は大丈夫？」

「ああ、それは大丈夫なんだよ。今回の遠征でちょうどそのぐらいの収入があったから、それで賄えるから」

「3日間の遠征で100万円ってすごくない？そんなに探索者ってお金になるの？」

「いや、今回は特別だよ。下の階層に落ちちゃったから、モンスターが強かったんだ。その分金額も跳ね上がったんだよ」

「それって、その分危なかった事じゃないのかな」

「あつ、あ、そうでもないよ。今回たまたま運が良かったんだよ。うん」

「そう。本当に無理しちゃダメだよ」

「はい。もちろんです」

まずは、マントを買う事にする。

前回と同じ店員さんを見つけて声をかける。

「すみません。またマントの購入したいんですけど」

「あれ？お客様はこの前マントをお買い上げいただいた」

「そうです。この前オススメしてもらったマントを使ってたんですけど、溶けちゃいました」

「えっ？溶けてしまったって言うのは」

「それがあのマント火には耐性があって良かったんですけど、モンスターの溶解液にやられて溶けちゃいました」

「溶解液ですか？あのマントは一応火だけではなく、溶解液などにも耐性のある素材だったはずなのですが。15階層前後のモンスターではあの素材を溶かす様なモンスターは居なかったはずですよ」

「ああ、遠征に行った時に20階層よりも奥に潜る機会があって、そこでやられちゃったんですよ」

「失礼しました、お客様は20階層よりも下層に潜られているのですね。それではこの前のマントでは性能不足だったかもしれません。それではオススメはこちらのマントになります。前回のマントよりもより高性能な繊維素材が使用されており、火への耐性だけではなく溶解系そして氷、水などへの耐性も飛躍的に向上しております。お客様の様に下層へ挑まれている探索者様への一押しのマントとなっております、こちらであれば20階層への探索にも十分耐え得る一品となっております」

「そうですか、良さそうですね。値段はいくらぐらいですか？」

「やはり、これだけの一品となりますので量産品とは一線を画しております、職人によるハンドソーイングの一品となります。その為少しお値段は張りますが、十分価格に見合うだけの品物となっております」

おります。お値段は30万円となっておりますが、正直この品質でこのお値段はお安いと思います」

「そうですね。安いですよ。じゃあ黒でお願いします」

「お買い上げありがとうございます」

「海斗、ちょっといいかな」

「うん、なに？」

「あのマント30万円もするんだよ。すぐに決めて大丈夫？もつと安くてもいいマントもあるんじゃないかな。前に買ったマントは3万円だったよね」

「マントは一生ものだからね。装備品にはお金がかかるんだよ」

「海斗、多分マントは消耗品じゃないかな。今度から私も一緒に考えてから買うのもいい？私も一緒に選びたいと思うんだけど」

「えっ？春香も一緒に選んでくれるんだ。それは嬉しいな。是非お願いします」

次から春香と一緒に選んでくれるらしい。なんて優しいんだろう。一緒に選んでくれると言うことは次から買い物毎回付き合ってくれると言うことではないのか？

今後必要以上にダンジョンマーケットに通いそうだとちょっと自分が怖い。

第275話 装備品の補充（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第276話 春香と新たな剣(前書き)

悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.sy>

[setu.com/n9722fv/](https://ncode.sy)

もよろしくお願いします。

第276話 春香と新たな剣

俺は今ダンジョンマーケットに春香と一緒に来ている。
高位素材のニューマントを購入したので後は剣の購入だ。

「海斗、この前の剣は100万円だったと思うんだけど、今度の予算はどのぐらいを考えてるの？」

「そうだな。さっきのマントが思ったよりも金額が高かったから、出来ればこの前と同じ100万円迄で買いたいんだけどな」

「うん。じゃあ予算は100万円以内で決めようね。でも剣って折れるんだね。あんなに頑丈そうな剣だったのに」

「まあ、今回は特別だよ」

そう言いながら、いつものおっさんの店に向かった。

「すみませ〜ん」

「おう、坊主とお嬢ちゃんか。仲良くやってんのか？」

「はい。まあ」

「おかげ様で、仲良くさせてもらってますよ」

「今日は何だ？ショットガンでも買いにきたのか？」

「まあ、それも欲しいのは欲しいんですけど」

「350万あるのか？」

「350万！？ 海斗ちよっといいかな」

「うん、何？」

「今日の予算は100万円だよな」

「うん、その予定だけど」

「それじゃあ、さっきの350万円って何かな？」

「いや、100万円は剣の予算で、さっきの350万円はショットガンの値段だよ」

「海斗！ダメだよ。100万円でも高いのに、350万円なんてダメだからね。将来の為にもしっかり貯金しておいた方がいいよ」

「いや、まあ今すぐ買うわけじゃないから。そのうちだよそのうち」

「そのうちもダメだからね！次から私も一緒だからね」

なぜか春香に怒られてしまった。

まあ、探索用の装備は高額のことが多く俺の感覚が麻痺して来ていることは否定できないので、春香の様に止めてくれる人がいると言うのは俺は幸せ者なのかもしれない。

まあ頻繁に武器が破損してもらっては困るが、春香と一緒に来てくれるなら悪くない。と言うか嬉しい。

「お嬢ちゃん、話し合いは終わったのか？」

「はい、もう大丈夫です。今日は剣を見せて貰いに来ました。余り高いのは無理なので、この前見せてもらったのと同じぐらいの剣を見せてもらっていいですか？」

「剣？剣はこの前買ったばかりじゃね〜か。お嬢ちゃんも探索者始めたのか？」

「いえ、そうではないんですけど。海斗がダンジョンでこの前の剣を折ってしまったみたいで」

「は〜？剣が折れた？この前売ったのはバスタードソードだったよな。しかもそれなりの出来のやつだったはずだぞ。刃が欠けたって言う意味か？それだったら補修がきくかもしれね〜ぞ」

「いや、そうじゃなくて根本からポツキリ折れちゃったんですよ」

「おいおい、どこをどうやったらバスタードソードが根本から折れるんだよ。壁を斬っても簡単には折れね〜はずだぞ！」

「この前の遠征で硬い敵に遭遇して、何度か使っていると折れちゃいました」

「硬い敵って、剣が折れるほどの敵って一体。それに普通は剣より腕とかの方が折れるだろ。どうなってるんだよ」

まあそれはベルリアがすごいだけなんで。

「まあ、たまたまですよ。たまたま」

「坊主の言ってる意味がわからんが、ちょっと待ってる」

そう言っておっさんは倉庫に消えて行った。

「海斗、やっぱり剣が折れるのって普通じゃないんだね。無理してるんじゃない？」

「今回はちょっとだけ無理したけど大丈夫だよ。剣が折れたのは、本当にたまたま運が悪かったただけだから」

話しているうちにおっさんが、剣を数本持って来てくれた。

「前回と同じのものもあるけどな、こっちの2本がバスタードソードだ。まあ汎用性が高い。こっちが25万でこっちが120万だ。こっちがブロードソードとグレートソードだ。ブロードソードが80万でグレートソードが150万だ。」

「バスタードソードが前回よりも高いですね」

「同じ物じゃね〜からな。それぞれ値段はちょっとずつ違うんだよ。前回も言ったかもしれないけど俺のおすすめはグレートソードだけ。流石にこれは折れね〜と思うぞ」

グレートソードか。150万円はなんとかなるが、ベルリアが使うには大きすぎる。

ベルリアの事だから使いこなしはすると思うが、さすがにバランスが悪いので性能を引き出すことは難しいと思うが悩みどころだ。

第276話 春香と新たな剣（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第277話 2本の剣

俺は今おっさんの店で剣の購入を検討している。

「海斗、100万円の予算だとブロードソードの80万円とバスタードソードの25万円の2本しかないね。頑張って120万円のバスタードソードを交渉してみようか？」

「うん。迷うな。正直前買った100万円のバスタードソードと、120万円のバスタードソードは、それ程変わらないと思うんだよな。折れちゃったし、どうせなら違うやつの方がいいかな」

「それじゃあ、80万円のブロードソードか150万円のグレートソードだけど、150万円は高すぎない？」

「どうしようかな。予算内だとブロードソード一択だけどな」

「私には、剣の良し悪しは分からないから海斗がいいと思う方を選んで。私は交渉頑張るね」

ブロードソードも悪くはないけどバスタードソードで折れたのにブロードソードが折れないとも思えない。剣の無くなったベルリアは正直戦力外と化していた。真司に剣を借りなければヤバかった。よくよく考えてみると真司に借りた双剣の2刀流でかなりいけてた気がする。

最悪一方が折れても2本あればなんとかかなりそうな気がする。

「春香、考えたんだけど、25万円のバスタードソードと80万円

のブロードソードの2本にしようと思っただけど」

「えっ？2本も買うの？2本とも使うの？」

「うん。折れたら武器が無くなってしまっから2刀流でもいいかなと思っ」

「すごいね。あんなに重そうな剣を2本も使えるんだね」

「ああ、言っでなかつたんだけど、俺が使うんじゃないだよ」

「えっ？それじゃあ誰が使うの？」

「実は、学校でも言っでただけど俺のサーバント用なんだよ」

「あのサポートしてくれるって言う使い魔の事？使い魔って剣が使えるの？」

「サーバントにも色々種類があつて、俺のサーバントは剣を使うのが得意なんだよ」

「そうなんだね。私使い魔って言うから、小動物みたいなのをイメージしてたよ」

「俺のサーバントは人型なんだよ。ベルリアって言うんだけど、小さな子供ぐらいの男の子だけど、それなりに頼りになる奴なんだよ。俺の剣の師匠だし」

「すごいね。サーバントってそんな感じなんだね。それじゃあその子の為に買っであげるんだね」

「そう。なぜか元から武器を一切持ってなかったんだ」

「そうなんだね。じゃあサーバントってそういう物なのかもしれないね」

「いや……シルモルシエも自前の武器を持っているから、ベルリアが特殊だと思う。」

「それじゃあ、あとは私に任せてね」

「はい。お願いします」

「おにーさん。ちょっといいですか？」

「ようやく、話し合いが終わったのか。色々作戦練っても安くなんねーぞ！」

「いえ質問です。25万円のバスタードソードってこの前B級品だつて言ってたと思うんですけど、すぐ折れたりしますか？」

「いやB品って言っても、そこまでの粗悪品は売りもんになんねーよ。若干耐久性や切れ味は劣るが、拘らなければ使い物にはなるぜ」

「そうなんですね。多分そのブロードソードとバスタードソードは前回と同じ物ですよね」

「そうだったかな。そこまで覚えてねーよ」

「値段が前に聞いたのと同じなので、同じ物だと思うんですよね。」

多分B級品っていうのもあって中々難しいのかな〜と思うんです」

「お嬢ちゃんよく覚えてるな。言われてみるとそうかもしれね〜な」

「そうでしょう。それでお兄さんに相談なんですけど、その残ってた2本とも買うので安くして欲しいな〜と思って」

「あっ？2本買うのか？2本はいらね〜だろ」

「それが2刀流で2本使いたいみたいなんです」

「おいつ。坊主、2刀流だ？ちょっとかぶれすぎじゃないのか？お前の体型でこの2本を両手で扱うのは無理だろ。悪い事は言わね〜からやめとけて」

「ありがとうございます。でも大丈夫なんです」

「こつ言ってるので、お願いしたいんですよ。2本で105万円じゃないですか。そこを90万円ぐらいにならないかなあと思うんです」

「90万？無理無理、お嬢ちゃん無茶いつちやダメだぞ。前も言ったと思うけど量産される様なもんじゃね〜から安くならねんだよ」

「それじゃあいくらだったら大丈夫ですか？」

「お嬢ちゃん可愛い顔してあげつね〜な。それじゃあ97万5000円でどうだ？」

「値段はそれで大丈夫なので、何かおまけでつけてくれたりします」

か？」

「お嬢ちゃん。本当にしっかりしてるな。それじゃあおまけで剣に塗る精油をつけてやるよ」

「いつもありがとうございます。これからもよろしくお願いしますね」

「坊主。お嬢ちゃんに感謝しろよ。お前にはもったいねーよ」

こうして俺は、高性能マントとベルリア用にブロードソードとB品のバスタードソードを手に入れることが出来た。

第277話 2本の剣（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

新作 悪魔な俺のヘブンズドア <https://ncode.syosetu.com/n9722fv/>

よろしく願います。

ポイント評価の上部にリンクを作りました。クリックしてみてください。

第278話 真司の悩み

俺は今レンタルボックスに来ている。

剣を2本購入したが、今日と明日はダンジョンに潜らないことにしたので剣とマントをレンタルボックスに保管しに来た。

剣を安く買えたお礼も含めて、明日は春香を誘いカフェに行つてオレンジピールのブラマンジェを食べに行くことにした。

たまにダンジョンに潜らない日を作ると、心がうずうずするがこれは禁断症状の現れなんだろうか。

出来る事なら徐々に治していきたいとは思つが、やり方は全くわからない。

翌朝、学校に着いて教室に入ると真司と隼人が神妙な顔をしている。

「2人共どうしたんだ？なんで朝からそんな真剣な顔してるんだよ。何かあったのか？」

「海斗、それがな。聞いてくれよ。真司が告白しようとしてるんだよ」

「えっ？誰に？」

「決まってるだろ、前澤さんだよ」

そういえば、ダンジョンでそんなこと言ってたな。死ぬ前に前澤さんに告白して付き合いたいとか。

「真司、あれは死ぬのを前提の話じゃなかったのか？」

「いや、俺は昨日1日考えてみたけど、やっぱり前澤さんと付き合いたいんだ」

「そうなのか。まあ、お似合いだと思うからいいんじゃないか。頑張れよ」

「海斗、話はそんな単純なものじゃ無いからこうして2人で悩んでるんだよ」

「どう言う意味だ？」

「それがな、真司のやつ前澤さんと付き合いたいし覚悟は決めたくせに告白できないんだって」

「はい？言ってる意味がよくわからないんだけど」

「俺だつてよくわからないけど、覚悟は決めただけど、実際に学校に来て前澤さんを見たら動けなくなつたと言うか、告白出来なくなつたんだそうだ」

「あゝ。そう言う事もあるかもしれないよな。それでどうするんだ？告白するのやめるのか？」

「それなんだよな。今も話してたんだけど、告白はしたいんだそう。でも出来そうに無いからどうしたもんかなと思って。海斗も先輩として何かアドバイスしてやってくれよ」

「先輩ってなんの先輩だよ」

「いや、海斗は告白の先輩じゃ無いか。葛城さんに告白した事があるだろ」

「告白の先輩って、俺失敗したんだけど」

「いやいや、あれはあれで面白かったけど、大成功じゃ無いか？」

「大成功って、おつかいしてくださいだぞ！自分ながらどうしようもないよ」

「そゝは言うけどな海斗、おつかいから始まって映画に行ったり、初詣に行ったり、カフェに行ったり大成功じゃ無いか」

「まあ言われてみればそうかもしれないけど」

「だから先輩からアドバイスを頼む。俺では力になれそうに無いんだ」

「そうだな。それじゃあ、告白の時はテンパるな。緊張すると頭が真っ白になるから、リラックスして臨むのがいいと思うぞ」

「海斗、それがアドバイスか？緊張するな？テンパるな？無理に決まってるだろ。今既にテンパってどうしようもなくなってるんだよ」

「そうか、ごめんな。そうだよなリラックスってそんなのできるわけがないよな。悪かったよ」

「海斗に助けてもらおうと思ってただけど無理だったか。真司今日はやめとくか？」

「告白はしたいんだ。もう俺の気持ちに収まりがつかない。ダンジョンで1日過ごして人生観というか、変わっちゃったみたいでどうしても前澤さんに想いを伝えたい」

「そこまで想ってるんだったら思い切って行ってみるよ。当たって砕けるだ！」

「おい、砕けたくは無いんだよ！そんな事を言われると余計動けなくなっちゃうだろ」

真司は大きな身体の割に性格は結構繊細に出来ている様で、おとなしい一面があるのはわかっていたが、ここに来てダンジョンを経て急転直下の心の変化に、気持ちと身体のバランスがうまく取れていないのかもしれない。

どうにかしてフォローはしてやりたいがどうしたものだろうか。モブの俺に真司のアシストなんかできるだろうか。うーん。

第278話 真司の悩み（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。冬の童話2020に短編童話 サンタさんと小ネズミの妖精 を掲載させて頂きました。

第279話 異世界への扉

俺は今春香に相談中だ。

真司が告白出来ずに困っているんで俺から提案してみたのだ。

「真司、どうしてもなんとかしたいんだったら春香に相談してみよ
うか？」

「えっ？葛城さんに？」

「ああ、春香と前澤さんって仲いいだろ、春香に相談したら力にな
ってくれるんじゃないかと思って」

「確かにそれは一理あるかもしれないけど、相談しづらいな」

「それは俺がしてやるよ」

「そうか、じゃあ悪いけど頼む」

そんなやりとりがあったので、春香が一人になるのを見計らって声
をかけた。

「春香、ちょっといいかな」

「うん、どうかしたの？」

「実は相談があるんだけど」

「うん、どつしたの？」

「実は前澤さんの事なんだけど」

「えっ？悠美がどつかしたの？」

「それが、告白出来なくて困ってるんだよ」

「……………」

「春香？どつかした？」

なんだ？どつかしたのか？春香の様子が明らかにおかしい。そして俺の調子もおかしい。息が苦しい。潰されてしまいそうなプレッシャーを感じる。なんだ？ダンジョンで魔王でも誕生したのか？俺は地上で第7感でも発現してしまったのか？うつつ。息ぐるしい……

「……………」

「春香？」

春香から返事がない。まさか春香までこの変なプレッシャーに晒されてるのか？余りに異常な状況に、隼人と真司の方に目をやるが、普通にピンピンしている。

俺と春香だけが、亜空間にでも囚われたのだろうか？まさかこれが噂の異世界転移の前触れか？。俺と春香で異世界を旅するのか？春香は俺が絶対を守る！それにしても息苦しいし、足元に魔法陣が現れたりもしない。やはり違うのか？

「……………」

春香も体調が悪化したのか心持ち顔色が悪い気もする。
相変わらずプレッシャーを感じるのもう少いで転移魔法陣が発動
してしまうのかもしれない。

異世界に行ったら春香は間違いなく聖女だと思うが、俺の職業はな
んだ？魔剣士だろうかそれともアサシン。まさか盗賊は無いと思っ
が、とにかく苦しい。そろそろ気が遠くなって来たので転移が始ま
るのか。真司すまない。約束を果たせないまま去る事になりそうだ。
隼人も早く彼女見つかるといいな……

「海斗……。悠美の事が好きだったの？」

「はい？」

春香が声を発したと思ったたらとんでも無い事を言い出した。何を言
ってるんだ？

「悠美に告白するんだよね」

そう言う事が。俺真司が告白したいって言わなかったっけ。

「いや、それは俺じゃない。誤解だよ。俺の事じゃ無い」

「じゃあ誰の事だったの？」

「言葉が足りなかったけど、真司だよ真司」

「えっ？大山くん？」

「そう、その真司。前澤さんにどうしても告白したいらしいんだけ

ど、気後れして告白できないんだそうで、俺では力になれそうに無いから、春香に相談しようと思って声をかけたんだよ」

「そうだったんだ。早く言ってくればよかったのに」

春香がいつもの笑顔を取り戻したと思っただら異世界への転移が止まった様で、息苦しさが消えた。もしかしたら異世界召喚は失敗して中断してしまったのかもしれない。

何はともあれ良かったが、春香と2人で異世界転移もしてみたかった気もする。

「春香は前澤さんと仲がいいよね」

「うん友達だよ」

「前澤さんって付き合ってる彼氏とかいるのかな？」

「私が知ってる限りそんな人はいないと思うんだけど」

「そう、じゃあ可能性はあるな。前澤さんってどう言う人がタイプなんだろう？」

「悠美はね、男らしい人が好きなんだよ。ぐいぐい引つ張って行ってくれるような人がいいんじゃないかな」

「男らしい人か……」

真司もガタイはいいので見た目は男らしいと言えないこともないが、実際には告白できないくらい気が小さいからな。どうだろうか、いけるかな？見た目でグイグイ押せばなんとかなるか？

なかなかハードルは高そうだ。

第279話 異世界への扉（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。冬の童話2020に短編童話 サンタさんと小ネズミの妖精 を掲載させて頂きました。

第280話 ダブルデート？

俺は今カフェに来ている。

春香に相談した結果、今日春香と行くはずだったカフェに前澤さんを誘って4人で行くことになったのだ。

「真司、春香がせっかく気を利かせて前澤さんを誘ってくれたんだから、お前も頑張れよ」

「わかってるよ。2人には感謝してるよ。見てくれ俺はやるぞ」

「まあ、あんまり気合が入り過ぎても良く無い気がするから抑えながらいこうな」

俺は真司に事情を話してから4人で放課後を迎えてからカフェに向かった。

「前澤さんは、趣味とかあるの？」

「えーっと、映画鑑賞と音楽鑑賞かな」

「へーっ。どんな映画が好きなのかな」

「普通に恋愛映画とか好きだけど」

「そうなんだ、それじゃあ音楽はどんなの聴くの？」

「今流行ってるのとかなんでも聴くけど、1番好きなのはファルエ

ルかな」

「そうなんだ。ファルエルいいよね」

カフェまでの道中前澤さんにいろいろ聞いているのは俺だ。

あれほど言っておいたのに4人で歩き始めた途端真司の奴一言も喋らない。

緊張から来ているのかガチガチになって、笑顔の一つもない。

そもそも俺には音楽を日常的に聴く様な趣味は無い。

ファルエルってなんだよ。ヴィジュアル系バンドか何かか？

俺が前澤さんの趣味を探ってどうするんだ。せつかく俺が探ってや
つてるんだから、真司しっかり脳内にインプットしたか？ファルエルだぞ！

「恋愛映画って言うところの前春香と『宇宙で会えたら』を見たけど
すごくよかったよ」

「あゝそれ私も見たよ。感動的だったよね。高木くんは春香と行っ
たんだね。いいなゝ私も彼氏と行きたいなゝ」

いや、俺は春香の彼氏では無いが、今はそこは問題では無い。

「前澤さんは彼氏いないのか？」

「えゝいないわよ。クリスマスもお正月も家族と寂しく過ごしたわ
」よ

「あゝそうなんだ。彼氏いないんだね」

「何それ、私に彼氏がない方が良い様な言い方に聞こえるんだけ

ど。高木くんって何か私に恨みでもあるの？」

「いやいや、そんなものあるわけないじゃ無いですか。前澤さんみたいな綺麗な人にどうして彼氏がいないのかなって気になっただけだよ」

「も〜高木くんてこんなに喋るのうまかったんだ。全然知らなかったよ。女の子とかと喋ってるの見た事ないから春香としか喋れないのかと思ってたよ」

「そんなことあるわけないだろ」

いや、言われてみればクラスの女の子と話した記憶がほとんど無い。この前、前澤さんに詰問されたぐらいで、春香以外とろくに話した事がない気がする。

俺って自分の事をモブだと思っていただけ、もしかしてモブよりやばいのか？もつと積極的に女の子と話した方がいいかもしれない。

「半年ぐらい前に付き合ってた人がいたんだけど、性格が合わなくて別れちゃってそこから出会いがなくなってる」

「そうなんだ。性格が合わなかったってどうだったの？」

「それがその人年上だったんだけど、なよなよしてて、全部私が決めないと何も進まない人だったのよ。それでイライラしちゃって」

「ふ、ふ〜ん。それは仕方がないな〜。前澤さんはどんな人がタイプなの？」

しっかり聞いとけよ真司！

「私はね〜やっぱり男らしい人かな。グイグイ私を引っ張っていつてくれる様な人がいいな。普段は大人しくても2人の時は守ってくれる様な人が理想よね」

「そうだね。そんな人がいたら理想だよな。俺らの周りにもいるといいんだけどな〜そんな感じの前澤さんにぴったりの人が」

「本当に？いたら紹介してよ。それにしても高木くと恋話ができるとは思わなかったわ。春香ももっと早く言ってくれてればみんなで楽しく話せたのに」

「うん、ごめんね。でも海斗と恋話なんて今までしたことがなかったから。私もちよつと驚いてるんだ」

確かに春香と恋話はしたことがなかった。と言うより意中の人を目の前に恋話なんかできるわけがない。恋話をして、他の誰かがタイブなんだとか言われた日には再起不能になりそうだとにかく真司何か喋れ！俺ばかり喋ってるぞ！

第280話 ダブルデート？（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第281話 カフェのひととき

俺は今カフェに来ている。

俺と春香は予定通りオレンジピールのブラマンジェを頼み飲み物は俺がカフェラテそして春香がダージリンティを頼んだ。

前回頼んだコーヒーは俺には大人の味すぎて正直美味しいかどうかよくわからなかったので、今日は少しハードルを下げてカフェラテにしてみた。

真司と前澤さんは、初めて来た様なので前回俺が頼んだのと同じフランボワーズのタルトと飲み物を頼んだ。

「前澤さんは甘いものも好きなんだね」

「そうなのよ。だからこのフランボワーズのタルトは一度は食べてみたかったのよ。でも一緒に行く相手がいないと1人ではなかなかね」

「そつだよな。真司も甘いもの好きだよな」

「えっ、俺は、まあそれ……」

真司がそれほど無いとか言いかけたのでテーブルの下で思いっきり蹴飛ばしておいた。

「あ、ああ、もちろん大好きだ。何個でもいけるよ」

「そつだよな。真司そんなに甘いのが好きなんだったら前澤さんとまた来ればいいんじゃないか？」

「あ、ああ、うん、そうだね」

「前澤さんも相手がいない時は真司を誘ってやってくれると嬉しいな。男1人でカフェでケーキは難しい物があるから」

「それは、私はいいけど大山くん、本当に甘いもの好きなの？」

「もちろん大好きだ。三度の飯よりスイーツが大好きなんだ。どうせだったら毎日でも大丈夫！」

「へっつ。意外ね。大山くん結構大きい方だからかもしれないけど、そんな風に見えなかったから」

「いや真司は意外と乙女な所もあるから女の子とは結構うまくいくんじゃないかな」

「ちょっと、乙女って流石にそれは無いでしょう」

「俺は乙女では無いよ。でも女の子には優しくできると思う」

「そうなんだ。ちなみに大山くんはどんな女の子がタイプなの？」

「キタ〜！真司キタ〜！ド直球が170kmで来たぞ。打ち返せ。ホームラン狙え！」

「い、い、い、いや俺のタイプは、しっかりしてて八キ八キした感じの……」

「へっ。そんな感じの子がいいんだ。大山くんは背も高いから結構

「モテそうなのに彼女とかいないの？」

「はい。いません。全くいません。17年間いたことがありません」

「え〜そうなんだ。意外だね。理想が高いのかな〜」

「そこまで話をしているとケーキと飲み物が出て来たので会話は一旦中断する。」

「おいしい〜。このタルト人気なだけあるわね」

「うん。おいしい。おいしいです」

真司の表情を見る限り、タルトは甘すぎるんだろつとは思いますが、こればかりは我慢するしか無い。

俺も目の前に出されたオレンジピールのブラマンジェを食べてみる。食べてみるとフランボワーズのタルトよりは随分食べやすい。これはプリンだな。プリンの上にオレンジの皮の砂糖漬けのようなものが乗っているが、そこまで甘くも無いので非常に食べやすい。飲み物に頼んだカフェラテも前回のコーヒーに比べると随分飲みやすい。このセットは俺には当たりだ。

「春香どう？俺は結構美味しいと思うんだけど」

「うん、この前のも良かったけどこれも美味しいね」

やはり美味しいものを食べている時の春香の嬉しそうな表情を見ていると俺まで嬉しくなってきた。しかも。

これだけでもこのカフェには存在価値があると断言できる。

味わいながら4人でスイーツを食べているが、やはり食べるのに集

中すると会話が疎かになる様で、ほとんど会話が無くなってしまった。

今真司は何を思いながらフランボワーズのタルトを食しているのだろうか。

俺から見ても明らかに普段の真司とは異なる。

想像を超えた緊張と葛藤があるに違いない。

俺は春香への告白を失敗した愚者だが、真司の告白へのサポートだけは賢者の如くやってやりたい。

第281話 カフェのひととき（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第282話 真司の告白（前書き）

当初今日からクリスマスSSS予定でしたが、どうしても今日この話まで行きたかったので明日からになります。

第282話 真司の告白

俺は今妙な緊張感に包まれている。
包まれているのは、俺と真司だけかもしれないが空気が重い。

「前澤さん、このオレンジピールのブラマンジェもすごく美味しいからまたぜひ食べに来てよ」

「そうなんだ。じゃあまた春香と誘ってよ」

「ああ、それはもちろん良いけど、俺は春香と2人で来ることが多いから、前澤さんは真司と来たりしたらどうかな」

「私が大山くんと？4人だとそうでも無いけど2人だと変に緊張して疲れちゃうかも」

「そこはなあ、真司が面白い話で場を和ませたりしてな」

「おう。任せてくれ、面白い話はいくらでもあるんだ。大丈夫」

「あれ？大山くんってそういうタイプだったっけ。なんか今までのイメージと違うね」

「いや俺は、いつも愉快的な男だよ。将来はコメディアンでもいいと思ってるぐらいだよ」

「大山くんがコメディアン？流石に無いんじゃない？」

「いや、将来は無限大だから。いつ笑いの神が降りて来ても不思議はないんだ」

「大山くんって面白いね、冗談とかあんまり言わない人かと思ってた」

「真司は普段から結構愉快なやつだよ。ただ人にはそれが伝わり難いだけだよ。案外男らしいし本当にいいやつなんだよ」

「へ〜っ。2人は仲がいいんだね」

「そう、親友だからね。風呂にも一緒に入ったし、ダンジョンで夜も一緒に過ごした仲だから」

「えっ！？2人ってそう言う関係？」

「そう言う関係って……いやいや違っつて普通に男同士の付き合いだよ」

「ははっ。そんなのわかってるわよ」

「ふ〜っ、焦ったよ。変な噂が流れたら明日から学校に行けなくなっちゃうよ」

「そんな事しないから大丈夫よ」

「あっ、あの〜。前澤さん！俺とカフェに行ってください！」

「急にどうしたの？別にそのぐらい良いけど」

おおつ、今まで大人しかつた真司に急にスイッチが入った。

「俺、面白いし、背が高いし男らしいと思うんだ」

「そう、そうなんだ」

「俺のタイプなんだ」

「えっ？」

「俺のタイプは前澤さんなんだ」

「……………」

「俺は前澤さんのことが好きなんだ。付き合ってください」

おおつ。真司やったな！最後は男らしい台詞で締めた。TV以外で人の告白を見たのは初めてだが、告白したのは自分では無いのに肩に力が入る。どうだ？前澤さんどうなんだ。真司でどうなんだ！

「……………」

「あ、あの〜前澤さん？」

「……………」

「……………」

「……………」

あれ？前澤さんから全く返事がない。これってどう言う状況なんだ？

「あ、ああ、ごめんなさい」

うっ……ごめんなさい？ダメって事なのか？

「ごめん、突然だったからびっくりしちゃって」

「ああ、ごめん。俺も本当は今言うつもりはなかったんだけど、ドンジョンで夜過ぎしてる間に人生について考える機会があって、今告白しないと後悔すると思ったんだ」

「そうなんだ」

「どうだろうか。俺と付き合ってもらえないかな」

「大山くん今までそんな素振り見せた事なかったからびっくりしちゃった。私のどこが好きなの？」

「いやそれは、性格も含めて全部だよ」

「全部って、そんなに言われると恥ずかしいんだけど」

「今日は海斗達に手伝ってもらって告白できたから、今度は2人でここに来てブラマンジェ食べたいんだ」

「春香知ってたの？」

「うん。私も今日聞いたんだけどね」

「そっか。突然だったから、少し考える時間をください」

「それはいいけど」

これはどうなんだ？

断られてはいないよな。考えるって事は全く無しではないって事だよな。

ある意味敢闘賞と言える結果なのか？

「それじゃあ、返事はよく考えてするから」

「はい。お願いします」

真司は無事に告白までこぎつけることができたが、よく考えるから待ってとはどのぐらいの期間だろうか。1日ぐらい？それとも1週間？もしかして1ヶ月？

俺なら待っている時間気が気ではないな。

第282話 真司の告白（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第283話 久しぶりのホームダンジョン

今俺はカフェを後にして歩いている。

真司の告白を見て、なんとも言えない変な感じがする。

ほとんど会話のない状態から急にスイッチが入って告白まで持った。いった真司は素直にすごいと思う。

ただ返事は考えさせて欲しい……微妙だ。その場で断られなかっただけ可能性を残しているとも言えるが、明日から真司にどう接したものか。

「春香、さっきのってどうなんだろう」

「うん。悠美も満更でもなさそうだったけど、どうかな」

「俺は結構お似合いだと思っただけだな」

「そうだね、うまくいくといいね」

「でも、俺も緊張しちゃったよ」

「海斗も結構頑張ってたよね。でも大山くんも最後は男らしく告白したから女の子はやっぱり男の子から告白して欲しいものなんだよね」

「そうなんだ」

「うん。ちょっと悠美が羨ましかったな」

「そっ……」

俺もいつかまた春香に告白したいが、真司の結果を見るとどうしても二の足を踏んでしまう。正直余計告白し辛くなってしまった。とにかく今の俺には真司の幸運を祈るしか出来ない。

「それじゃあ、また明日。それと今度は写真を撮りに誘ってもいいかな」

「うん、いつでもいいよ」

「でも俺デジカメ持って無いんだけど」

「大丈夫、私ので一緒に撮ればいいから」

「じゃあ、それをお願いします」

次の約束も取り付けたし俺は着実にステップアップを目指すだけだ。その場で春香と別れて家に帰ったが、明日は久々にホームダンジョンに向かえるので楽しみだ。

次の日の朝になり、学校へ登校してからすぐに教室へ向かった。

「おっ」

「ああ、おはよう」

「真司、なんか顔色悪く無いか？目の下のくまが酷いぞ」

「それが、昨日の事が気になって仕方がなくて全然寝れなかった。

むしろダンジョンの方が熟睡出来た……」

「そうか、気持ちはわかるけどな」

「海斗、真司のやつ朝からずっとこの調子なんだよ。話は聞いたんだけど実際どうだったんだよ」

「どつって、真司は男らしく告白したし、まあ悪くはなかったんじゃないかな」

「いやそうじゃなくて、前澤さんはどうだったんだよ」

「うーん。いけるようないけないような」

「いったいどつちだよ」

「うーん、嫌ではなさそうだったんだよな。ただ前澤さんのタイプが男らしい人なんだよ。今の真司を見てるとなあ」

「まあ、すぐに結果は出るんだろうからとにかく待つしか無いな。

真司、とにかくやったな」

「あ、ああ。そうだな………」

真司は心ここにあらずと言った感じだが、それも仕方ない事だと思う。とにかく俺達3人は待つことしか出来ない。

放課後になり俺はいつものダンジョンに向かった。先日購入した装備をレンタルボックスから取り出してダンジョンに潜る。

「シルフィー召喚。ルシエリア召喚。ベルリア召喚」

俺は1階層の端でサーバントの3人を喚び出した。

「今日からまたいつものダンジョンだから頑張ろうな。それとベルリアこれがお前の新しい剣だよ」

「おおつ。マイロード有難き幸せ。ところで剣が2本あるのですが？」

「ああ、それだけどベルリアこの前真司の双剣を使いこなしてたから2刀流でどうだろうと思ってな。この前1本折れて困ったから2本あれば最悪1本折れてもなんとかなるだろ」

「ああつ！なんとお優しい。しかも騎士の命とも言わべき剣を2本も。これで私の命が2つになったようなものです。2度と折るような事がない様に誠心誠意頑張らせていただきます。本当に素晴らしいつ！おおおつ」

ベルリアが2刀を振りながらかなり喜んでくれている。

やはり質も大事ではあるが量も大事だと言うことかもしれない。ベルリアの喜びも本数に比例して倍になった気がするのでこれで良かったのだろう。

ただバスタードソードの方はB品なので丁寧に扱った方がいいかもしれない。

第283話 久しぶりのホームダンジョン（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第284話 ダンジョンの神秘

俺は今1階層で戦っている。

遠征で獲得した魔核は全部売却してしまったのでまたスライムの魔核を狩る必要がある、1階層でスライムスレイヤーとしての本分を果たしている。

ただ、さすがに慣れた1階層でのスライム狩りは気を抜いてでも問題なくこなせている。

ベルリアにも新しい剣の使い心地を確かめてもらっている。

「ベルリア、新しい剣の使い心地はどうだ？」

「はい。スライムとは相性が悪いですが、剣が2本あるとやっぱり良いです。0本の時と全く違います。これから2刀流に励みます」

「そう言えばあまり詳しく聞いた事が無かったけど、ベルリアってどうやってダンジョンに来てたんだ？」

「それは、初めてお会いした時の事でしょうか？」

「そう。お前以外に悪魔ってまだダンジョンで遭遇した事がないんだけど」

「それはですね、魔界から大規模術式でこのダンジョンに送られたのです」

「それって何しに来たんだ？」

「魔公爵様の命でオルトロスを連れてこのダンジョンの探索を行いに来たのです」

「散歩って言うわけじゃないよな」

「それは私にはわかりかねます。私は散歩がてら行って来いと言われれておりませんが、魔公爵様の真意は計りかねます」

「そうなのか。もしかしてダンジョンを侵略しようとしてたりしないよな」

「それはよくわかりませんが、既に深層には私以外にも送られた悪魔もいたようです」

「え〜っ！それって深層に行けば悪魔と交戦する可能性があると言っことか？」

「いえ、もしかしたらもう帰ってしまっているかもしれません」

「一つ質問だけど、他の魔族が出て来て襲って来たらお前はどっするんだ？」

「そんな事は聞くまでもありません。マイロードの剣として撃退するのみです」

「そうなのか。その魔公爵とか言うのが出てきたらどうするんだ？」

「私の主はマイロードと姫達ですのもちろん戦います」

「そうなんだ。でも悪魔が侵攻してくるとヤバいけど、どうしてこ

のダンジョンなんだろうな」

「それはたまたまだと思います。たまたま、術式に合致したのがこのダンジョンだっただけで、他のダンジョンに行ける術式もあるようです。秘術の類です」

「ご主人様、天使や神達もダンジョンに現れる事もあると思います。神や天使にとって、人間は特別味方という認識は無いのです。恐らく悪魔から見た人間と天使達から見た人間に対する意識はそれほど差がないような気がします」

「それって、場合によっては天使や神も敵になる可能性があるって事か？」

「そうですね。ダンジョンに執着する者が出てくれば人間とそう言った事になる可能性があります」

「シル、もし天使や神が現れて俺の敵に回った場合、シルはどうするんだ？」

「そんな事聞くまでもありません。ご主人様に敵対するものは即消去します」

「おい、海斗くだらない事聞いているんじゃないぞ、そんなの当たり前だろ！わたし達を馬鹿にしてんのか？」

どうやら俺のサーバント3人はどんな事があっても俺の味方でいてくれるらしい。サーバントとは、もともとそういう存在なのか、それともこれまで築いてきた信頼関係の賜物なのかは分からないが、頼もしい限りだ。

それにしてもつくづくダンジョンとは不思議な所だと思う。

シル達サーバントを目の当たりしているので別世界があるのは漠然と感じてはいたが話を聞く限り異世界と繋がる事の出来る場所という事なのではないだろうか？

人間と悪魔、神や天使そしてモンスターが同時に存在する事ができる空間がダンジョンという事だろう。

地上では決してあり得ない事だが、ある意味すごい事のような気がする。

まあ1高校生にすぎない俺には全く関係がない事ではあるが、少しだけ世界の神秘に触れた気がする。

第284話 ダンジョンの神秘（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第285話 魔界の爵位

俺は今1階層でスライムスレイヤーと化している。

いろいろ試したものの、結局1番効率がいいのは殺虫剤プレスであると結論付けて励んでいる。

「ベルリアは士爵でルシエは子爵なんだよな」

「そうです」

「それがどうかしたのか？」

「いや。俺の住んでる所だとそう言う階級と言うか爵位って今はもう無いから、どんな感じなのかなと思って」

「どんな感じってどう言う意味だ」

「そもそも悪魔の爵位って誰が決めるんだ？」

「マイロードお答えします。通常爵位を決めるのは魔王様です。魔王様が決めるのですが、爵位は基本世襲されますので一度叙爵すると、その家の者に引き継がれます。ただし士爵は違います。爵位を持った魔族が自分の裁量で任命する事ができます。もちろん無制限にと言うことではないですが」

「それじゃあ、ルシエの家は子爵の家でベルリアは誰かに任命されたって事か」

「私は魔公爵様に任命されて士爵となる事ができましたが元々は平悪魔でした」

「じゃあルシエは？」

「わたしもそんなもんだよ」

「そんなもんってどんなもんだよ」

「いや、だからそんなもんなんだよ」

急にルシエの態度がおかしくなった。何か隠しているのか？サーバ

ントカードに子爵級と書かれているので爵位をごまかしていると言
うことは無いと思うが一体なんだ？

「ベルリア、ルシエが何か変なんだけど」

「マイロード、恐らく姫様は姫様なのですよ」

「はい？何を言ってるかわからないんだけどどう言う意味？」

「ですから、姫様の年齢で家督を継ぐと言つのは考え難いのですよ」

「まあ、それは幼児だし、大きくなってはまだ子供だもんな」

「子供とは失礼な奴だな。れっきとしたレディだ！」

「レディ……………ふっ」

「海斗お前死にたいのか？死にたいんだな、今すぐ殺してやる『破
滅の…』」

「ちよつと待て待ってくれ、冗談だ。冗談だよ。れっきとしたレデ
イだ。成長したお前はどこからどう見ても完璧にレディだ。エクセ
レント！」

「そ、そうでもないけどな。わかってればいいんだわかってれば」

ルシエの奴今『破滅の獄炎』を俺に向けて行使しようとしなかった
か？ まさかとは思いが俺に対しては使えないんだよな。サーバン
トは主人には攻撃できないはずだよな。間違つてとか偶然とかない
よな。検証のしようが無いので注意するほか無い。検証の結果ダメ
なら俺はこの世に存在していないだろうから。

「それでベルリアと言う意味なんだ？」

「ですので、姫様は家督を継がれたのではなく姫様自身が子爵であ
ると言うことです」

「ごめんベルリア、それって何か違うのか？俺には違いがわからな
いんだけど」

「全く違います。子爵の家の子供は家督を継げば子爵になれます。
しかし、子供が子爵の場合、普通親は家督を譲っていれば隠居して

爵位は無くなっておりますが、そうで無い場合は別の爵位を保有していることとなります」

「うんよくわからないな」

「つまり子供が既に子爵なのであれば、その親はもつと爵位が上である可能性が高いと言つことですよ」

「あつ、そう言う事か。ようやく言っている意味がわかったよ。

それじゃアルシエは子爵より上の爵位の家柄つて事か。そうなのか
ルシエ」

「いや、別に」

「別につてなんだよ」

「いや、別に」

「俺達家族だよな。家族に隠し事はよく無いんじゃないか？俺はルシエの事をもつと知っておきたいんだけど」

「そ、それは……まあ、そう」

「やっぱりそうなんだ。ベルリアよくわかったな」

「それは姫様の使われている『神滅』のスキルはかなり高位の悪魔にしか使用出来ないスキル系なのです。ですので姫様は姫様なのだろうと思っていました」

「へつ。ベルリアすごいな」

「いえ凄いのには姫様です」

「そうか、ルシエの家の爵位は何なんだ？子爵より上だと公爵か侯爵になるのか？」

「……………」

「どうしたんだよルシエ、どっちなんだよ。ここまで言つたんだからいいだろ。俺にとっては魔界の公爵も侯爵も読み方一緒だし変わらないよ」

「マイロードそれはいくら何でも……………」

「うつ。どつちでも無い」

「ベルリア、魔界の爵位つて俺に知ってるの以外にもあるのか？」

「いえ、マイロードの言われているものだけです」

「ルシエどっちでも無いってどういう意味なんだ？」

やはりルシエの言っている事は意味がわからない事が多い。
まあ俺はそれも含めて可愛い妹だと思っているが。

第285話 魔界の爵位（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第286話 魔界の姫（前書き）

今年も残り僅かとなりましたが年末年始も休まずに投稿します。
よろしくお願ひします。

第286話 魔界の姫

俺は今1階層で魔界の事についていろいろ聞いてみている。

「ルシエ、嘘ついてるんだな。ベルリアもこう言ってるぞ」

「う、うそはついてない」

「だって、公爵が侯爵しか無いって言ってるじゃ無いか」

「だからどっちでも無いんだよ」

「ベルリア、埒があかないんだけど」

「マイロード、おそらく姫様は嘘をついているのではなく、本当に姫様なのですよ」

「さつきからお前らの言っている意味がわからないんだけど、シルはわかるか？」

「はい。おそらくなのですがルシエは爵位では無く王位に連なる立場なのでは無いですか？」

多い？大井？王位？ルシエが王位に連なる？それってルシエは王女様って事？

「シル、いくら何でもそれは無いだろ。ルシエが王女？ぷっ……」

「海斗、お前死にたいんだな。今すぐ死にたいんだな。『侵食の息

……』」

「あゝっ！嘘だよ。冗談だよ。ルシエは王女っぽい。王女でも何の問題もない。ファンタステック！」

「それほどでもない。言いすぎだろ、ふふっ」

い、今のは『侵食の息吹』に間違いない。完全に発動させようとしていた。後少しで発動していたのか、それとも制約がかかって発動

しないのか？怖い。命を賭けてまで実験したく無い。自分が狂って溶ける事などイメージすらしたく無い。

「それじゃあ、ルシエって本当に王女なのか？」

「正確には王女じゃない。子爵だからな」

「どう言う意味なんだ？」

「だからわたしはもう家が別なんだよ。わたしは子爵家なの」

「……？」

「パパは王様だけどママが違うんだよ。だから……」

ルシエの言葉で流石に事情に疎い俺でも理解できた。

よくアニメやラノベであるやつだ。所謂庶子というやつだ。

それで今までルシエが言ってるこなかったのか。ルシエの性格からして全開で自慢してきそうな事なのにそれをしてこなかったって事はそれなりに事情があつての事だったんだな。

興味本位で聞いてちゃったけど悪い事したな。

「あゝ、すまなかつたな。あんまり触れられなくなかつたんだな。

事情も知らずにいろいろ聞いて悪かつたよ。でも俺らが今の家族だからな。今日から俺の事、お兄ちゃんと呼んでもいいぞ！」

「は？お兄ちゃん？何言ってるんだ気持ち悪い！勘違いするなよ、別にパパにもママにも愛されてるんだよ！好きに出来る様に分家してもらったただけだ！」

「そうなんだ……」

気持ち悪い……やっぱりルシエに気を使ったのが間違いだつたかもしれない。

「ルシエ、私もあなたの姉なのですから頼ってくださいいいですよ。ご主人様もあなたの事を気遣ってくれているのです」

「シル、どさくさに紛れて何言ってるんだよ、姉はわたしだろ。シルはわたしの妹だからな。わたしがシルの事を気遣ってやるんだよ。勝手に姉になるな！」

ルシエ、今それか？どう考えてもシルが姉だろ。みんなお前が妹だと思ってるぞ。末っ子の王女様……ルシエの我儘キャラそのままな気がする。むしろ、ふに落ちたというか納得だ。

「そうか。ルシエは元王女様だったんだな。だからそんなに我儘……」

「は？何か言った？やっぱり死に……」

「いや、やっぱり元王女だけあって気品にあふれてるんじゃないかな。マーベラス！」

「気品って、それほどでもないだろ。何言ってるんだよ。ふふっ」

最近ルシエの扱いに慣れてきたというか熟達してきた気がする。

気分屋だけど非常に単純で、寂しがり屋だ。

まあ王女だったのは驚いたけど、俺たちの関係はこれからも変わらない。

俺が長兄でシルが姉でルシエが妹だ。

第286話 魔界の姫（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第287話 久しぶりのK - 12 (前書き)

第287話 久しぶりのK - 12

俺は今、ダンジョンに向かっている。

週末になったのでいつものパーティーメンバーとダンジョンに潜る予定にしているが、1週空いただけで随分会ってないような錯覚を覚える。

「おはよう。みんな元気だった？」

メンバーを見つけたので声をかける。

「海斗こそ遠征どうだったのよ？」

「そうです。どうだったのですか？」

「私も興味があるな。他のダンジョンはどんな感じだったんだ」

「ああ、思ったよりいろいろあって楽しかったよ」

「いろいろって何があったのよ。ちゃんと教えてよ」

みんな他のダンジョンに興味がある様なので、ダンジョンでの出来事を話していく。

「まず、ダンジョンなんだけど2層しか無いんだよ。ひたすら広いフロアが広がっていてエリア毎に階層が分かれている感じだったんだ」

「こことは全然違うんだな」

「はい、全然違ってモンスターも広さを活かす為か足の速いモンスターばかりでした」

「高速移動のネズミとかモグラだと大変そうだな」

「いえ、ネズミもモグラも出なくて、もっと大きい奴ばかりでした」

やはりあいりさんもネズミとモグラには思うところがある様だ。

「明るいところばかりでしたし、随分勝手が違いました。それで2日目の下層に落ちてしまつて、仕方なくダンジョンで野宿したんです」

「海斗！ダンジョンで野宿したの？」

「うん、そう。真司と隼人とサーバントで泊まつただけど、結構快適だったよ」

「快適ですか？」

「床が硬かつたけどエアマットでも用意しとけば1日ぐらいだったら結構いい感じだったよ」

「海斗、やつぱりちよつとダンジョン潜るの控えた方がいいんじゃない？感覚がおかしくなつてる気がするんだけど」

「いや、本当に快適だったんだって。真司も隼人も同意見だったし、類は友を呼ぶ……」

失礼な言葉が聞こえてきたが無視だ。可能であればこのメンバーでも野宿体験してみれば良いのだから流石に無理っぽい。

「でもなんで下層に落ちたの？」

「あゝそれはシルとルシエが張り切つたせいで床に穴が空いたんだ」

「そう、それは仕方がないわね」

「そうですね仕方がないので」

「うん、お二人ならそう言うことも有るな」

「……………」

やはりこの3人はシルとルシエの信者感が強すぎる。2人の行動に対して肯定的すぎる。

あの2人だつて失敗もすれば、我儘な時だつて有るんだ。しっかり見て欲しいものだ。

「それで20階層から24階層迄通つて帰つてきたんだ」

「今24階層つて言つたよね」

「うん、そう」

「大丈夫だったのですか？」

「基本逃げて逃げて逃げまくつてたから大丈夫だったけど、一回だけ挟まれちゃつて危なかつたよ」

「どんな敵だったの？」

「亀と虎と蜥蜴と鳥だった」

「海斗、もつと語彙能力を磨いた方がいいわよ」

「とにかく四聖獣の遠い親戚みたいな奴らで、ベルリアと隼人の武器が折れたりして苦戦したんだよ」

「ベルリアは大丈夫だったの？」

「一応真司の剣を借りてなんとかなつたけど、20階層以上は、俺にはまだ難しいよ」

「そんなの当たり前でしょ」

鋭くミクが突つ込んでくるがこの感じも久しぶりだ。

たった2週程度なので当たり前だが、みんなも変わつてなくてこの感じが懐かしい。

「そういえば俺のマントんだけど溶けちゃつたから、グレードアップさせたんだよ」

「海斗さん、前のマントと見分けがつかないのですが」

「見た目は同じだけど繊維が違ふんだよ」

「お値段を聞いてもいいですか？」

「30万円だつたよ」

「そうですね……」

「まあ、価値は人それぞれだからな」

「また買ったんだ…」

この日俺達は久しぶりにK-12のパーティでダンジョンに臨んだ。10階層迄行ってからシル達を召喚して目的の12階層を目指したが、相談の結果全員一致でこの土日の探索で13階層に抜けてしまふ事を目標にする事が決まった。

やはりみんなも、もぐらやネズミの相手は、早く卒業したいようだ。

第287話 久しぶりのK - 12 (後書き)

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

お正月SS ねずみ年の落とし物（前書き）

あけましておめでとつございませう。

昨夜、急遽思い立ってお正月用のちよつとおめでたいSSを書いたので投稿します。

よろしく願ひします。

本来の時系列的に少し先の295話あたりです。

お正月SS ねずみ年の落とし物

俺は今12階層に潜っている。

既に13階層迄達する事が出来たので、この階層は通過するだけの場所と化しているが、行手をモンスターが遮っていれば、当たり前だが交戦してモンスターを消滅させる。

「ご主人様、前方にモンスターの群れです。一斉にこちらに迫っています」

「群れ！？この階層で群れなんか出た事ないぞ！みんな臨戦態勢を整えてくれ。シルは『鉄壁の乙女』を頼む」

シルがこの階層で群れと言う表現を使った事は一度もないので、数は間違いなく10を超えるだろう。

今までこんな事はなかったので何かが起こっているのか？それともたまたま俺の運が悪いのか？

シルが『鉄壁の乙女』を唱えてから程なくして光のサークルに鋭利な石のようなものが一斉に襲いかかって来た。

これは、何度もこの階層で味わった俺の苦手としているネズミの攻撃だが、数が多い。10どころではない。

「みんな、ネズミの群れだ。ミク、スナッチを頼んだぞ。数が多いから一体ずつ確実に行こう。サークルの中から魔法で仕留めよう」

正確な数はわからないが20ぐらいは、いそいな気がする。

「小さい事言ってるんじゃないぞ、数が多いならまとめて倒した方

が良いに決まってるだろ『破滅の獄炎』」

ルシエが速攻で敵がいるであろう場所に獄炎をお見舞いした。まあ俺の指示とは違うが、ルシエはこのまま好きにやらせておけば問題ない。

俺は、前方の床をナイトスコープ越しに見つめるが7〜8m程前方を小さなねずみがチヨロチヨロしているので、バルザードの斬撃を飛ばす。

命中したかどうかは、残念ながら確認出来ないのでとにかく、攻撃を繰り返す。

ベルリアは2刀の活躍の場を求めて敵に向かって駆け出した。遠距離魔法の使えないベルリアには接近する他術は無いのだが、流石にこの数の中に突っ込んでいくのは危ない気がする。

「ベルリア無茶するな。俺達に任せれば良い！」
「マイロード、心配は無用です。この程度の数、マイロードに頂いたこの2刀の前には物の数に入りません」

見る限り、ねずみの集中砲火を浴びながらも器用に避けながら前に進んでいるので、こちらもそれほど心配無いのかもしれない。

前方に向かってカオリンの『ファイアボルト』の炎雷弾とあいりさんの『アイアンボール』の鉄球が次々に打ち込まれていく。

ベルリアの更に前方でスナッチが『ヘッジホッグ』を連発しているのが見える。

そこに極め付けにルシエの『破滅の獄炎』の業火が追い討ちをかける。

我がK-12の誇る魔法攻撃のオンパレードでさながら打ち上げ花火のようだ。

ねずみに当たっているのかどうか俺の目では識別できないが、徐々に石による魔法攻撃が弱まっているところを見ると、確実に敵の数

が減っているようだ。

「そろそろ私も攻撃してもよろしいでしょうか？」

「あゝ『鉄壁の乙女』の効果が切れたらいつてみようか。ベルリアが攻撃を引きつけてるから大丈夫だろう」

「ありがとうございます。それじゃあ行ってみますね『神の雷撃』」

「

「ズガガガガ〜ン」

みんなが派手に攻撃しているのを見てシルも攻撃を掛けたくなったのだろう。

ねずみの群れが出現した時は、かなり緊張が走ったが、この調子であれば敵を殲滅するのは時間の問題だろう。

俺も少しは役に立たないといけないと思い斬撃を繰り返すが、しばらくすると敵からの攻撃が止まった。

「シル、敵の反応は？」

「ご主人様、すべての敵を倒したようです。もう、モンスターの反応は見られません」

「それじゃあ、みんなで魔核を回収しようか」

全員で手分けをして床の上の魔核を回収したが全部で21個もあった。そして最後の魔核を回収しようと進んだ先に

「こゝ、これは！」

何とウーパールーパー以来のモンスターミートがドロップしていた。ねずみのモンスターミートだ！相変わらず理屈は分からないが、質量の法則は完全に無視されており結構な大きさがある。

「ミク、これ今日食べるよな。前と同じ所で料理してくれるかな。前よりも多いから真司と隼人も呼んでいい？滅多にないから一回食べさせてやりたいんだけど」

「私はもちろん良いけど、他の2人はどう？」

「もちろん良いですよ」

「いっぱいあっても食べ切れないからな」

俺達は久々のモンスターミートを食べるべく、早速ダンジョンを引き上げて地上で真司と隼人に電話を試してみたが、残念ながら圏外だった。まだ時間が早いのでダンジョンに潜っているのかもしれない。残念だが次の機会に誘うしかなさそうだ。

2人がいつ帰って来るか分からないので、4人でこの前のフレンチレストランに向かう事にした。

前回同様、ドレスコードを無視したカジュアルな出で立ちで食事を迎えたが、何と言っても今回のメインは『ねずみのローストペリグーソースがけ新春の風仕立て』だ。

見る限り高級フレンチにしか見えない。ねずみの影形も無い。ナイフで切って口に放り込む。

「うまい！うますぎる。今まで食べた肉の中で一番うまい」

溶ける様に柔らかいが、それでいて噛む毎に肉汁と濃厚な旨味が口の中に広がる。これが幸せの味なのだろう。そして濃厚な味わいの中にも爽やかな後味、これが新春の風と言っやっだろうか。

「みんな美味しいね」

「はい、幸せです」

「私もねずみのモンスターミートは初めてだが、美味しいな。ビーフよりも一段上だな」

みんなも満足しているようでよかった。美味しい物を食べるとみんな幸せで笑顔になれるので、今回はねずみのミートがドロップして本当にラッキーだった。

これから、美味しい肉を食べられる様に充実したダンジョンライフを送っていききたいと思う。

真司と隼人はこんなに美味しい物が食べられなくて残念だが次回こそ一緒に食べれると良いな。

お正月SS ねずみ年の落とし物（後書き）

今年もよろしくお願ひします。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第288話 人の感覚

俺は今12階層に来ている。

先週来なかった為、約半月ぶりとなるので、慣れるまで少し違和感があった。

足下の砂地そして1番はナイトスコープによる視界だ。

「そういえばベルリアの剣が2本になってるんだけど、2刀流なの？」

「はい、マイロードが私の為に2本も下さったのです。これからは今までの2倍頑張ります」

「そうなんだ。でもそんなに重そうな剣を片手で大丈夫？」

「はい、全く問題ありません。この通りです」

「へっつ。小さくてもやっぱり悪魔なのね、凄い力じゃない」

「はい。ミク様の事もお守りしますので安心して下さい」

「そうね、よろしく頼むわね」

しばらく歩いているとシルから

「ご主人様、前方に敵モンスターです。4体です、ご注意を」

久々の12階層での戦闘だ。へまをしないようにしっかりと集中して臨みたい。

臨戦態勢を整えて待っていると視界に燃え盛る炎の球が映ったので慌てて回避する。

この炎の球はサラマンダーか！

炎の球に注意しながら地面を凝視する。

いたっ！小さいのが2匹見える。

「みんな、サラマンダーだ、地面に向かって攻撃してくれ。ヒカリンは『アイスサークル』で攻撃、ミクはスナッチと一緒に見つけ次第攻撃してほしい。他のメンバーは後方待機で何かあったらすぐにフオローにはいって」

俺も目視できている火蜥蜴にむかってバルザードの斬撃を放つが、的が小さく動くので当たらない。

平面ダンジョンで大きい相手に戦っていたせいで感覚がずれてしまっている。蜥蜴は蜥蜴でも竜の遠い親戚を相手にしていたので質量で言うと数千分の1？いや数万分の1かもしれない。

当たらない。やはり俺とは相性が悪いので早く次の階層まで抜けたい。戦闘だけなら24階層のモンスター相手でもどうにかなったので、モンスターの強さの問題ではなく明らかに相性の問題だ。

ベルリアも2本の剣を手に敵を捕捉しようとしているが、正直普通の剣でこの相手を倒すのは無理じゃないだろうか？もっと面積の広い武器か魔法的なものが必要だと思うが、ベルリアにはどちらも無いので無理っぽい。

しかし張り切っているベルリアは、そんな事は無視してひたすら火蜥蜴を追い回している。いっそのこと剣の腹の部分で、もぐらたたきのように押しつぶした方が可能性があるかもしれない。

ただベルリアは時々飛んでくる火球を双剣で斬って落としているので、ある意味それで十分役目を果たしている。

俺達が手間取っている間にもヒカリンが『アイスサークル』で1匹を捕らえたので、すぐさま俺がバルザードの斬撃を飛ばして消滅させる。

残りの3体もミクとスナッチのペアが確実に仕留めていき間もなく戦闘が終了した。

「ヒカリン、ミク助かったよ。久しぶりに相手にするとやっぱりこ

このモンスターは手強いと言うか、俺は苦手だな」

「小さいからしっかり狙いを定めないと難しいわね」

「私は少し慣れてきた感じがするのです」

ヒカリンは慣れてきたと言っているから、これはやっぱり人間の感覚的なものだな。平面ダンジョンでのモンスターとの落差に感覚がついていってない感じがするので、次からはしっかり対応していきたい。

「ベルリアもやり方は少し変えた方がいいんじゃないか？」

「そうですね、ありがとうございます。次からは少し変えてみます。任せてください！」

相変わらず返事は良いが、本当に理解しているのだろうか？ベルリアの場合、技術に頭の回転がついて行っていない気がするのが残念なところだと思う。

これで頭が切れれば、ものすごい戦力になっている気がするのに非常に惜しいが、それがベルリアだと思うと、これはこれで愛着も湧いてくるので不思議なものだと思う。

第288話 人の感覚（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第289話 敵の音

俺は今12階層を進んでいる。

久々に12階層に潜っているが、数回戦闘を繰り返しているうちに大分感覚を取り戻してきた。

取り戻したと言っても俺はあまり活躍できていないが、とにかくスナッチが頑張ってくれているので、主な攻撃はスナッチに任せてスナッチが攻撃を受けないように俺とベルリアで防御するやり方を確立した。

この分業制を敷いてからは劇的にネズミや蜥蜴を退治するペースが上がった。

一角コウモリやドリルモグラについてはスナッチだけでは対処できないので、シルヤルシエの力も借りている。

「結構先の方まで進んできてると思うんだけど、みんな大丈夫かな」「全然大丈夫よ。スナッチとシル様とルシエ様ばかり活躍してるから私達はそれ程疲れてないわ」

「暗いのはそろそろ卒業したいので、早く進みたいのです」

「ここは私の出番はあまりないので大丈夫だ」

「それじゃあ、このままのペースで一気に進みますよ」

早くこの階層を抜けないと今の戦闘スタイルではパーティメンバーへの経験値もあまり入りそうにないのでとにかく13階層を目指す。理想を言えばゲートのある15階層まで早く行ってしまいたい。

階層型のこのダンジョンでは一足飛びに先の階に行く事はできないのでその意味では遠征先のダンジョンの方が苦手なエリアを回避出来、効率がいいかもしれない。

ただ平面ダンジョンは調子に乗って進み過ぎる可能性があるのです

こは自制が必要だとは思う。

「ご主人様、敵モンスターです。反応が小さすぎて数がわかりません」

今までシルがこんな事を言ってきた事はない。今までとは違うモンスターの可能性が高い。しかも数が捕捉出来ないとはどう言う意味だ？

「念のためにシル『鉄壁の乙女』を頼む。みんな敵に備えておいて」「はい。かしこまりました『鉄壁の乙女』皆さん光のサークルの中へお願いします」

俺達は光のサークルの中で敵の襲来を待つ。

「フォン！」

突然風切り音と共に敵の攻撃が『鉄壁の乙女』によって阻まれた。どこだ？どこにいる。

「みんな、敵を確認できてる？俺にはどこにいるのか分かってない」

「私もわからない」

「ベルリアどうだ？」

「いえわかりませんが先程の攻撃が風系の魔法か何かなのはわかりません。ただそこまでの高威力ではないようです」

「俺とベルリアは地面を注視、他の3人は正面を、シルとルシエは上空を見ておいてくれ」

誰も目視出来ていないようなので、14の目を最大限活かすしかない。

「フォン！」

再び風切り音がするがこの際無視をして地面に目を走らせるが、何も捉えることが出来ない。

地面にはいないのか？

他のメンバーからも捕捉の声は聞こえてこないのも、まだ誰も捉えることが出来ていないようだ。

地中に潜っている事も考えられるが今まで完全に地中にいる敵が地上に魔法攻撃をしてきた事は無いので地上からの攻撃な気がする。どこだどこにいる？

「海斗、何か聞こえないか？」

「何がですか？」

「よく耳を澄ませてみてくれ」

あいりさんに促されて聞き耳を立ててみる。

「ブーン」

微かに複数の音がする。何の音だ？

「あいりさん、何か音がしますけど、この音って何の音ですか？」

「私にもよくはわからないが、羽音と言うか風切り音の一種に感じるんだが」

そう言われてみると何かの小さな羽音に聞こえない事も無い。

しかしこの小さな音が羽音だとすると虫なんだろうか？

これだけ小さいと蜂とかの虫が考えられるが、俺の知っている蜂の羽音に確かに似ている気はするが、何となくリズムが一定では無い

感じがして違和感がある。

とにかく羽音がすると言う事は地面ではなく空中のはずなので

「ベルリア俺達も空中を見張るぞ！」

俺達は14の目全てを空中に向けて小さな羽音の正体確かめるべく神経を集中させた。

第289話 敵の音（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第290話 鳥のさえずり

俺は今見えない敵と対峙している。

蜂の羽音に似た、微かな音が複数聞こえてきているので、敵がいるのは間違い無いが、残念ながら敵影を捉えることが出来ていない。誰からも声が上がらないので俺以外のメンバーも見つける事が出来ていないのだろう。

「海斗、居たぞ！」

「えっ？どこにいるんだよ」

「そこだって、そこ」

「どこ？」

ルシエは敵を発見したと言うが俺には見えない。やはりサーバントとの視力差だろうか。

「敵はどんな奴だ？」

「多分虫だ。蜂かハエじゃ無いか」

「大きさは？」

「大きめの蜂ぐらいだぞ」

「ご主人様、私も敵1体を捕捉しました。ルシエの言う通り蜂だと思えます」

「姫、多分あれは鳥です。小さなハチドリですよ。動きが虫にしてはおかしいです」

ベルリアも敵を捕捉したらしい。ハチドリ……テレビか何かで見た記憶がある。確かハミングバードとも呼ばれているんだっけ。花の蜜を吸う蜂を少し大きくしたような高速移動とホバリングが可能な

鳥。俺は見た事ないが日本にもいるんだったかな。やはりサーバントだけが捕捉出来ているようだ。

「ベルリア倒せそうか？」

「お任せ下さい。あんな羽虫のような鳥など私の敵ではありません」

そう言うとベルリアが前方に向かってダッシュして行き、双剣を数度振るった。

「マイロード、仕留めました。見ていただけましたか？」

「いや、すまないが見てないと言っか見えな」

ベルリアが仕留めたと言うのだからおそらく仕留めたのだろう。

しかし、俺から振ったとは言え剣で八チドリを斬って落とすとはベルリア流石だな。昔の剣豪も真つ青の腕前だな。

「ベルリア、まだ羽音が聞こえてるから、他にもいるぞ。注意してくれ」

未だに複数の羽音が微かに聞こえてくるので、注意を解く事はできないがそろそろ『鉄壁の乙女』の効果が消えてしまおう頃だ。

「シル『鉄壁の乙女』を再度使ってくれ。俺にはまだ敵が見えてないんだ」

「かしこまりました。距離にして大体20m程先の位置に敵がいるようです」

暗視スコープを使用して20m先の虫サイズの敵を認識するのは、サバンナかどこかで生まれながらに鍛えられて無いと普通の日本人には無理な気がする。

もしサーバントがない場合は、もつと前方まで踏み込んで敵と交戦する必要がある。近づいて面の大きい武器で叩き落とすか、虫取り網を使うか、もしかしたら殺虫剤も効果があるかも知れない。

「俺にはその距離の敵は見えないからシル移動するぞ！みんなも一緒について来て」

そう言っつてシルを抱っこしたまま前方へと歩を進める。

ベルリアは2体目を仕留める為に既に前方へ移動しているが徐々に羽音が大きくなってくる。

推定距離が5mを切った辺りから徐々に敵影がナイトスコープ越しに確認できるようになってきたが、すぐに移動を繰り返しているの
で捉えたと思ったらあつという間に画面から外れてしまう。

確かに小さい。本当に注意深く見ないと気づかないレベルだ。

「みんな見えてる？」

「うん、見えてる」

「はい」

「ああ、小さいな、今までで1番小さいんじゃないか」

やはりこの距離まで進むと俺と同じようにみんなにも見えているらしい。

「あれ、いける？」

「私は無理ね。さすがにあのサイズを銃で落とせたら神業よ」

「私は『アイスサークル』で閉じ込めてしまえばいけそうない気もします」

「私もなぎなたでは無理だな。もつと近づいてから『アイアンボール』ならいけるかもしれない」

「それじゃあ、ミクには後ろで控えてもらって3人とベルリアでや

つてみようか」

「ちよつと待て、わたしは？」

「ルシエはいざと言う時のために待機な」

「わかった。いざと言う時だな」

『破滅の獄炎』なら1発かもしれないが、ルシエは燃費も悪いし出来る事なら俺達だけで倒しておきたい。

第290話 鳥のさえずり（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第291話 13階層への道

『アイスサークル』

ヒカリンの氷の檻が空中の八チドリを捉えて氷漬けにしたのを確認して俺がバルザードの斬撃を飛ばして氷ごと消滅させる。

ベルリアは2体目の八チドリに向かって鋭く双剣を振るい、見事斬り落とした。

秘技八チドリ返しだな。確実に燕より難易度が上な気がする。

これで3体を撃退したが、後何体だ？

目視出来る範囲では確認できないが、まだ僅かに羽音が聞こえている。

「シル、残りの敵の場所は分かるか？」

「いえ音の感じから大体の場所は分かるのですが目視する事はできません」

「破滅の獄炎」

音がしているであろう周辺の空中部分が一面炎に包まれた。

「ルシエ、何やってるんだよ」

「何って敵を倒したに決まってるだろ。いざと言う時に出番だって言っただろ」

「それは確かにそう言ったけど」

「敵の居場所が大体しか分からないんだから、いざと言う時だっただろ」

「まあ、そうかもしれないけど」

ルシエの言う事も一理あり、何も言い返すことが出来なかった。耳を澄まして見ても、もう羽音は聞こえて来ないので、あれで全部だったのだろう。

ハチドリを倒した跡を確認すると、明かにハチドリよりも大きな魔核が残されていた。

本体よりも大きな魔核が残されている時点で、質量保存の法則は無視されているので、やはりモンスターやダンジョンには俺の常識は通用しないのだろう。

それからペースアップしながら探索を続けて夕方になった時点で切り上げて帰ることにしたが、10階層でのシャワーは欠かせないので、いつものようにベルリアと入ってから家路に着いた。

その日の夜、母親から突然彼女が出来たのかと聞かれた。

今まで一度もそんな事を聞かされたことがないので、急にどうしてそんな事を聞いてくるのか不思議に思い確認

してみたが、土日になって外から家に帰ってくる度にお風呂に入りたい匂いがしてくるので、女の匂が働いたのだそうだが、見当違いもいとところだった。

母親にダンジョンの10階層にシャワーがあつて、汗を流す為に入つてから帰っているのだと説明すると

「あははは、おかしいと思つたわよ。海斗に限つてね。無いわよね」

さらつと失礼な事を言われてしまった。

俺だつて彼女ぐらい出来ていても不思議はない筈だ。母親の反応としてはおかしい気がする。

その後、何度も好きな子はいないのかとか、周りに気になる子はいないのかとか色々聞いて来たので、完全にスルーしておいた。

大きなお世話だ！

次の日になり朝からダンジョンに向かった。

「みんな、今日で12階層を抜けれるように頑張ろう」

俺達は10階層の視線も物ともせず、12階層を邁進して行った。ダンジョンとは不思議なもので、初めてのエリアは何時間もかけなければ、なかなか進まないのだが一度マッピングが済んでしまったエリアについてはかなりのペースで進む事が出来る。

なので昨日の到達エリアまでもかなり早い時間帯に着く事が出来た。

「よし、それじゃあここからは特に注意して行こう」

再び気合を入れてペースアップを図る。

何度か敵に遭遇したものの、今まで対戦した事のあるモンスターばかりだった。

もしかしたら、昨日迄で12階層の全てのモンスターと出会ってしまったのかもしれない。

モンスターについては何度対戦しても気を抜く事は出来ないが、やはりダンジョン攻略と似たところもあり1度対戦したモンスターについては2度目からは、比較的対戦が楽に進む傾向があるので、攻略スピードも自然と上がっていった。

「海斗、あれ階段じゃない？」

「おおっ、本当だな。やった、ようやく12階層を攻略出来たみたいだ」

「ようやくこの暗いの中から解放されるんですね」

「海斗、最後に気を抜かないように行こう」

「そうですね」

最後に待ち伏せの可能性もあるので慎重に階段の所まで進んだが、
幸いな事に何も起こらなかった。
次はようやく13階だ。

第291話 13階層への道（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第292話 13階層

俺は今13階層への階段を下っている。

13階層はどんな階層だろうか。まさかとは思いが、蚊やハエのモンスターが巢食う階層とかはやめて欲しい。そんな羽虫ばかりが出現するエリアで殺虫剤プレスが有効でない場合は流石に心が折れそうだ。

そう心配しながら一歩ずつ階段を進んでいくとそこには、普通に明るいダンジョンが広がっていた。

俺達はナイトスコープを外して周囲を見回す。

「暗くないな。ナイトスコープ使わなくていいだけでも楽になるよな」

「そうね、暗いと視界も限定されてたし開放感があるわね」

周囲にモンスターはいない様だが足元にも変化が見て取れる。

今までの砂地から土へと変化している。それなりの硬さがあるので今までよりも踏ん張りが利き探索も疲れにくそうだ。

「どうしようか？今日はここまでで切り上げてもいいと思うけど、もう少し進んでみるのもありかな」

「私はどっちでもいいわ」

「私事です」

「海斗に任せるよ」

「それじゃあ折角だからもう少し進んでみましょうか。危なかったらすぐに撤退しましょう」

本当は引き返してもよかったのだが、好奇心には勝てなかった。よ

うやく出た明るいエリアに興味を惹かれてしまったので、こればかりは探索者としての本能だから仕方がない。

進む為に歩き始めるがやはり歩きやすい。そして温度が適温に近いので疲労感が全く違う。

これは快適だ。ピクニックか野宿が問題なく出来そうだ。いい感じでマツピングしながら進んで行くと

「ご主人様モンスターです。3体ですが、それほど動きがない様です」

この階層初めてのモンスターだがどんなモンスターだろう。楽しみ半分緊張半分で敵を待ち受けるが一向に現れない。

「シル、敵が来ないんだけど」

「いえ、前方にいますが動きがほとんど無いようです」

動きがほとんど無いモンスター……何だ？

待っても全く反応が見られないので、こちらから敵モンスターの場所まで向かう事にした。

すぐに敵モンスターを確認する事が出来たが、少し動いてはいる様子だ。

前方に現れたのは俺の背と同じくらいの高さの木。木のモンスターだった。よく見ると3種類共、木の種類が違う気がするが何の木かはわからない。そもそも俺には桜の木ぐらいしか区別がつかない。観察を続けると目と鼻と口が幹の部分についている。何となくファンタジーを感じるが、リアルで見るとちょっと気持ち悪い。

木のモンスターといえばトレントか。木の種類が違って同じくトレントなんだろうか？

しばらく全員で観察していたが流石にトレントに気づかれてしまった様でこちらを向いたと思ったら攻撃を仕掛けてきた。

緩慢な動きなのでどうやって攻撃してくるのかと思っていたが、いきなり魔法を使ってきた。

それぞれ3体が別の魔法を発動したようで、足元には以前疑神が使ってきたのと同種の植物の蔓が伸びてきて俺達を捕まえようと襲ってくる。

そして正面からは木の槍と木製のボールが次々に飛んでくる。いくら木製とはいえこれに当たったらただでは済みそうに無い。

「みんな距離をとって散開して。ベルリアはみんなを守ってくれ。ルシエ『破滅の獄炎』を頼んだぞ。ヒカリンも余裕があったら『ファイアボルト』を頼む」

敵の事が良く分かっていれば他の戦略もあるのだろうが、普通に考えて、まず安全を確保してから木には炎だろう。

「わたしの出番だな。任せとけて。木の化物なんか炭にしてやるよ『破滅の獄炎』」

やはり木のモンスターに炎は特効だったようで、モンスターを炎が包んだ瞬間更に燃え上がり苦しみながらもすぐに炭化して消滅してしまっただ。

「私も負けてはいられません『ファイアボルト』」

ヒカリンが放った炎雷もトレントに着弾と同時に炎が燃え広がり一気に全焼して消滅に追いやった。

「もう1発行くのです。『ファイアボルト』」

ヒカリンの2発目の炎雷が最後のトレントに見事着弾して、先程と

同じ様に燃やし尽くしてしまった。

流石は魔法少女、普段シルとルシェの高火力魔法の影に隠れているが、ヒカリンの魔法攻撃は、本当に優秀だ。

とりあえずトレントには、思った通り炎が特効の様なので、次出てきたら2人とミクにも活躍してもらおう。

俺の場合バルガードはそれなりに効果があるそうだが『ウオーターボール』は効果が薄そうだ。むしろブレスレットを使用せずに発動すると逆に活力を与えてしまうかもしれないな。

第292話 13階層（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第293話 トレント？

俺は今13階層にいる。

この階層は初探索なので深追いせずにそろそろ帰ろうと思う。

「みんな今日はそろそろ引き上げようか」

パーティメンバーに声をかけてから、全員で来た道を引き返すことにする。

この階層には普通に植物が生えており、草だけではなく木も生えている。

シルがいるので大丈夫だとは思うが、パツと見はトレントと見分けがつかない木も結構ある。

木があるって事は昆虫とかもいるのかなと考えながら12階層への階段までの道を歩いているとシルが

「ご主人様、敵モンスターです。恐らく2体だと思つのですが、気配が薄いです」

「気配が薄いつてどう言う意味だ？」

「間違いなくモンスターは居ますが、存在というか気配が薄いんです」

いまいちシルの言っている意味が分からないが、とにかく敵襲に備えないといけない。

「みんな、モンスターはよくわからないけどベルリアとあいりさんが前衛に、俺はその後ろにつきます。ミクとスナッチ、ヒカリンは後衛で、もしトレントだったらヒカリンとルシエは魔法を頼む」

陣形を整え敵モンスターを待つてみるがやはり何も現れない。
先程の戦闘と同じ展開なので今回の敵もトレントの様な気がする。

「来ないからゆっくり進んでみようか」

陣形を崩さず歩調を合わせて前方に進んで行くが、それらしいモンスターが見当たらない。

「シル、見当たらないんだけど、間違いかな」

「いえ、もう近くに居るのは間違いありません」

どこだ？土の中か？

警戒してみるが反応は無い。

「みんな、モンスターを確認できてる？」

「……………」

返事が無い。誰も認識出来ていない様だ。

やはりシルの勘違いかと思った瞬間、突然あいりさんがうずくまっ
てそのまま地面に倒れ込んだ。

敵襲か！？

「あいりさん大丈夫ですか！どこをやられたんですか？」

「……………」

あいりさんからの返事が無いので顔を伺うと意識がないようだ。

「ベルリア、あいりさんを頼む。シル『鉄壁の乙女』だ！」

何だ？何の攻撃だ？風系の攻撃か？あいらさんは一体何の攻撃を食らったんだ？

「ダークキュア」

ベルリアがあいらさんに治癒魔法をかけると、あいらさんはすぐに意識を取り戻した。

「あいらさん、大丈夫ですか？どんな攻撃を受けたか覚えてますか？」

「わたしは……」

「あいらさん、意識無くなってたんですよ」

「そうか……何をされたのかわからない。意識を失う程強力な攻撃を受けた記憶は無いが」

攻撃で意識を失ったのでなければ何だ？今までには無かった攻撃パターンだ。

「マイロード、あいら様には外傷はない様でしたので、恐らく精神系の攻撃ではないでしょうか？」

「精神系ってどんなのだ？」

「例えばルシエ姫の『侵食の息吹』とかですね」

「えっ！あいらさん溶けちゃうのか？」

「……嘘でしょ」

「いえ、あれは精神系でも特殊ですから、眠りや混乱、気絶などです」

ベルリアの話通りだとするとあいらさんがくらったのは眠りか気絶だろう。

しかも本人が気づかないうちに効果を発生させているのだから相当

にやばい。

「ベルリア、防ぐ方法はあるのか？」

「シル姫の『鉄壁の乙女』であれば効果を防げる可能性は高いと思われませう。あとは意識して耐えるしかありません」

それにしても直接的な攻撃と違っていつ何処から仕掛けられたのが全くわからない。

精神系の攻撃がこんなに厄介だとは思わなかった。身構えるだけでプレッシャーがかかる。

しかし、敵が近くにいてこちらを認識していることだけは間違いない。

「ミク、スナッチにヘッジホッグを発動させてくれ。どこに居るかわからないから全方向に攻撃するしかない」

俺の要請に伝えてスナッチが『ヘッジホッグ』を発動させて周辺を鉄の針が襲ったが、残念ながら反応が無い。

一体敵はどこから攻撃しているんだ？

第293話 トレント？（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第 294話 草トレント退治

俺は今13階層で交戦中だ。

戦い易いと思っていた13階層だが、今は何か得体の知れないモンスターに襲われている。

姿も見えないし、あいらさんが受けた攻撃の種類もはっきりとはしない。

「海斗、どうするつもり？」

どうすると言われても敵の正体がわからない以上、対応を思いつく事が出来ない。

「うーん。どうしたらいいだろう」

「海斗、馬鹿なのか？敵がわからないんだったら一面燃やし尽くせば問題ないだろ」

「まあ、確かにそうだけど」

「それじゃあ、わたしがやってやるよ。まかせとけ」

一見無茶苦茶な提案だが、ルシエの言う事も無視出来ない。

「わかったよ。それじゃあ、それで頼んだ」

「隠れてても焼けば出てくるだろ『破滅の獄炎』　こっちにはいないのか？それじゃあ、そっちなか？『破滅の獄炎』」

ルシエが『破滅の獄炎』を連発した瞬間、それは動き出した。

なんと地面から生えていた草が動いて逃げ出した。

草？草が動いた。草と言うか背の高い雑草だが、もしかしてこれが

モンスターの正体か？

確かに木のモンスターがいるのであれば草のモンスターがいても不思議では無い。

木と草の違いはあるが分類すると、これもトレントの一種かもしれない。

完全に雑草と化していたので全く気づかなかった。所謂擬態していたのかもしれない。

基本動かず、来たものを攻撃する。今までのモンスターとは違い、完全に待ち受け型なのでまんまとその作戦にハマってしまった。

ただ草トレントの誤算は俺達には規格外のサーバントがいただけだ。

逃げ出した草トレントをよく見ると小さな目と口が見て取れるが、本当によく見ないと気付かない。

必死で逃げる草トレントに向かってカオリンが『ファイアボルト』を放つと、着弾と同時に一気に燃え上がって消滅してしまった。木と草の違いはあれど、やはり炎が特効らしい。

あと一体いるはずだが、同じ様な雑草がまだ何本か残っている。

「よしルシエ、今度はあつちの草に向かって頼む」

「よしあつちだな」

ルシエが雑草に意識を向けて『破滅の獄炎』を放とうとした瞬間、今まで全く動きを見せなかった雑草が全速力で逃げ始めた。

自分の生命の危機を感じたのだろう。だがそれは悪手でしか無い。完全に丸見え状態だ。

「馬鹿じゃ無いのか。所詮草だな、逃げたら狙うに決まってるだろ
『破滅の獄炎』」

逃げる草トレントの背後からルシエの『破滅の獄炎』が炸裂してあ

つという間に消え去ってしまった。
正直炎が特効の草トレント1体には獄炎は完全にオーバーキルだった。

「シル、反応はどうだ？」

「大丈夫です。さっきので全部です」

「良かった。それじゃあ注意しながら戻ろうか」

帰る途中で足止めされたので、魔核を回収して再び12階層に向かつて歩き出そうとすると

「海斗、お腹が空いて死にそうだ。忘れてるだろ、早くくれよ」

「私もお願いします」

今度はルシエとシルに足止めされたが、こればかりは仕方が無い。2人にしっかりスライムの魔核を渡しておく。

「うん。満足だ」

「ありがとうございます。おいしかったです」

まだはつきりとは分からないが、この階層は植物系モンスターのエリアなのかもしれない。

まあ12階層同様、魔法を使ってくるので細心の注意を払う必要がある。

特に精神系の魔法を連続で使われると冗談抜きで全滅する可能性がある。

俺達のパーティの場合は状態回復が出来るベルリアがいるので、ベルリアさえ大丈夫であればなんとかなるだろうと思う。

ベルリアが精神系魔法で一瞬でやられてしまう事は想像出来ないの
で、多分問題ないだろう。

そこからは急いで引き返して10階層でシャワーに入ってから帰ったが、家に着くと母親に

「またシャワーに入って来たのね。いい匂いね。今度お風呂セット持って行ったら？買って置いてあげるわよ」

と言われてしまった。俺の母親はそんなに気が回るタイプでは無かったと思うのだが、折角くれると言うなら今度から持って行って使ってみようかな。

第 294話 草トレント退治（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第295話 春香とカメラ

俺は今春香と写真を撮っている。

春香と写真を一緒に撮る約束をしたものの、土日はダンジョンへ潜らないといけないので、春香に相談した結果放課後に写真を撮る事にした。

ちなみに俺には写真撮影の趣味は一切無く、今までスマホ以外での撮影もした事が無い。

しかも残念な事に写真を撮るような機会はあまり無くスマホでも撮影した事が殆ど無い。

今まで俺には一緒に写真を撮るような相手と場面が極めて少なかったからだ。

「それじゃあね、今日は、夕暮れ時の写真を撮ろうと思うんだけど良いかな？」

「もちろん良いよ。春香にお任せするよ」

そう言つて2人で撮影ポイントまで移動した。

日が落ちるのも早いので学校から近くの少し高台になっている所まで2人で並んで歩いたが、このシチュエーションはまるでデートのようだ。俺はカフェの時はまた違った感じで、結構ドキドキしながら歩いているのだが、春香は何も感じていないのだろうか？

この笑顔を見る限りいつもと変わらないように見えるので、俺一人で舞い上がっているのだろうか。

「それじゃあこの辺りでいいかな」

そう言つて春香が鞆から取り出したのは、結構大きな一眼レフと呼

ばれる本格的なカメラだった。

「春香、本格的なんだな。俺もっとコンパクトなデジカメをイメージしてたよ」

完全に意表を突かれてしまった。てつきりスマホの延長線上にあるコンパクトなデジカメでもっとライトな感じでパシャパシャ撮るものかと思いついていたが、思いの外本格的なものが出てきた。

写真撮影が趣味とは聞いていたが、思っていたより全然本格的な趣味だったようだ。

「うん。最初はコンパクトカメラで撮ってたんだけど、段々もっと上手く綺麗に撮りたくなって来ちゃって、お小遣いを貯めて買っちゃったんだよ」

「そうなんだ。でも俺そんな本格的なカメラ使った事ないから、撮るの無理じゃないかな」

「大丈夫だよ。殆ど自動で撮れちゃうから、少し教えればすぐに撮れるようになるよ」

そう言われて、春香から撮影のレクチャーを受ける事になったが、これがまた俺には刺激が強すぎた。

当たり前だがカメラは1個しか無く画面も1つしかないのも、レクチャーを受けている間中、春香の手が触れたり、身体が近づいたりして俺の精神衛生上良くない状態がしばらく続いた。

何とか、カメラの使い方でも聞いてはいたが正直それどころでは無い。今まで学校でもこんなに近くにいた事は無い。

俺、臭く無いだろうか？昨日、今日と変な物食べてないよな。それより汗の匂いとか大丈夫か？

春香は……いい匂いがする。やばい俺変態みたいだ。でも……いい匂いがする。

春香の手に触れたのは小学校低学年以来だと思いが、こんなにも可憐で柔らかかっただろうか？

よく白魚のような指とか比喻するが白魚どころでは無い。金魚……いやそれはおかしいな。魚では表現出来ない。絹のような、マシユマロのような、美術館の彫刻のようなとにかく、今まで見た中で一番素晴らしい手だ。まあ、俺も今まで人の手を気にした事など余り無いので、もしかしたら女の子の手はみんなこんな感じなのかもしれない。そういえばパーティーメンバーの手も余り観察した事が無かった。

とにかくこのマシユマロのような素晴らしい手であれば、素晴らしい写真が生まれるのも当然な気がする。

「それじゃあ、私が試しに撮って見るから一緒に見ておいてね」

まだ目的の時間では無いが練習の為に春香が写真を撮ってくれる。

「カシヤ、カシヤ、カシヤ」

写真が連写される音が聞こえてくるが、春香の撮影している様を斜め後ろの近距離から見ると、写真を撮る真剣に撮っている春香はすごく良かった。

撮影しているのは春香だが、できる事ならこの瞬間を俺が写真に収めたいぐらい様になっている。

ボーッと春香が写真を撮っているのを眺めていると今度は俺の撮影する番になったのでカメラを受け取るが、かなり重い。いくらオートとはいえ俺にきちんと撮れるだろうか？

頑張つて、何とかいい写真を撮ってみたいものだ。

第295話 春香とカメラ（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第296話 春香と夕暮

俺は今春香と写真を撮っている。

夕暮れを撮る前に練習で写真を撮って見ている。

重い一眼レフのデジカメを受けとって、シャッターボタンを押す。恐らくボタンも機能も色々ついているのだとは思うが、自動でピントを合わせてくれてシャッターボタンを押すだけなので、完全初心者でも一応写真と呼べるレベルのものが撮れている。

「どうかな。これで問題ないのかな」

「うん、結構いい感じだと思うよ。後は時間だけだけど、暗くなる前の夕暮れ時って撮ってて楽しいっていうか、毎回表情が違って同じ写真は一枚も無いから、きっと海斗も気に入るよ」

「そうかな。そうだといいけど」

夕暮れ時が、毎回違うのは何となく理解できるが、そんな風に夕暮れの事を思った事は一度も無い。

叙事的に時間の移り変わりを語る俺……

イメージが全くわからない。

だが今日の景色はいつもと違って見える。それは俺の横に春香がいるからに違いない。

今日は俺が撮る日らしく、カメラはそのまま俺が持ってその時を迎えた。

「そろそろだと思う。カメラを構えて撮って見て」

「あ、ああそれじゃあ、やって見るよ」

夕暮れの景色に向かってシャッターを押すが、カメラの性能のおか

げでそれなりに上手く撮れている気がする。

「春香、どう？結構上手く撮れてると思うんだけど」

「うん、いいんじゃないかな。優しい感じに撮れてると思うよ」

優しい感じに撮れてる？写真って優しいとか怖いとかあるのか？カメラで撮るんだから誰が撮っても同じ感じになるんじゃないのか？素人の俺には理解が難しい世界だ。

「それじゃあ、残りの時間は海斗の好きなように撮って見ていいよ」

うん、好きなように撮っていいと言われても、芸術的センスが欠落しているのか正直どうしていいかよく分からない。同じ景色を撮っても違いがよく分からない。

「じゃあ、春香も一緒に撮ってもいいかな。同じ景色を撮ってても俺には難しいみたいで」

「わたし？私を撮っても意味ないよ」

「いやいや、十分意味あるからお願ひします。その方が絶対うまく撮れると思うんだ」

「そう、それじゃあ、お願ひします」

よく考えると春香の写真撮るのは初めてな気がする。

夕暮れをバックに春香がこちらを向いてくれているので、暗くなる前に写真に収めたい。

「それじゃあ、撮るよ。笑顔がいいかな」

笑顔を向けてくれる春香をカメラで連写する。ファインダー越しに見る春香はいつもの春香と違って見え、まるでグラビアアイドルみ

たいだ。

そこまで写真を撮る事に乗り切れていない俺だったが、この瞬間にスイッチが入った。

この瞬間の春香は今写真に収めないと二度と会う事が出来ない今だけの春香だ。

そう思うと食い入るようにファインダー越しに見つめて連写する。

春香の立ち方と表情が変わるので、その変化を逃すまいとシャッターを押す。

俺はダンジョンでも見せた事の無いような集中力を見せる。今の俺なら上位探索者にも迫るかも知れない。

写真のタイトルは『春香と夕暮れ』だ。あくまでも春香がメインで夕暮れはおまけだが、どの写真も素晴らしい。

俺はアイドルとかには興味が無いので、撮影会とかで写真を撮る趣味としている人の気持ちは今まで全く理解出来なかったが今なら良くなる。

春香のこの瞬間を写真に残したい。

無心でシャッターを押していると、日が落ちて辺りが薄暗くなってきた。

「海斗、暗くなって来たからそろそろ終わりにしようか」

「あゝうんそうだね。終わりにしようか」

夢中になっていたので時間の経過を忘れていた。もう少し撮っていたかったが仕方がない。

「すごく集中してたね。写真撮るの楽しかったの？」

「うん、こんなに楽しいと思わなかったよ。夢中になっちゃったよ」

「それはよかった。誘った甲斐があったよ」

「また機会があったら誘ってよ」

「うん、今度は明るい時間帯がいいかな」

帰り道、先程撮った写真を2人で並んで歩きながら確認したが、来る時同様に緊張してしまった。

ただ素人である俺の撮った写真は素晴らしく良かった。写真が良いというか写真の中の春香が良かった。

そこら辺のグラビアアイドルなど相手にならない美少女がそこにいた。

全部で100枚ぐらいは撮っただろうか？

よく考えると、この素晴らしい写真は全部春香のカメラで撮った写真だ。という事はこの写真は俺の手元には残らないと言っことか！ やってしまった！写真を撮るのに集中しすぎて自分のスマホで撮るのを忘れてしまった……

折角俺のスマホの待ち受けを春香に出来るチャンスだったのに俺は集中すると周りが見えなくなるタイプらしい。

あの写真は欲しいが、春香に欲しいと言つのも言い辛いのでどうしようもない。今度は必ず自分のスマホでも撮るようにしようと心に決めた。

第296話 春香と夕暮（後書き）

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下にスクロールしていただき広告の下部からのポイント評価ボタンで評価をお願いします。

第297話 13階層探索

俺は今学校に来ている。

「真司、どうしたんだよ。どんどんやつれてないか？」

「ああ、それがもう1週間経つのにまだ前澤さんから返事がないんだ」

「そうか……返事がないのは多分真剣に考えてくれている証拠じゃ無いか？」

「そうなのかな」

「そうだぞ、お前の気持ちは1週間も待てないぐらいのものだったのか？1年だって待つぐらいの気持ちで告白したんじゃないのか」

「それはそうだが」

「じゃあ、返事が来るまで気長にリラックスして待てよ。その方が結構良い結果につながるかもしれないだろ」

「お、おおつ。海斗にそう言ってもらえると気が楽になったよ」

「それはよかったよ」

真司にはそう言っではみたものの、1週間返事がないのか……俺ならメンタルが崩壊してしまいそうだ。

本当に1年返事がなかったら真司は受験どころでは無くなってしまいかもしれない。

たとえだめだとしても、前澤さんには早めに返事をしてやってもらいたいものだ。

次の日になり再び朝から13階層にアタックしている。

「みんな、この階層で怖いのは精神系の攻撃だからとにかく集中だ。

シルが敵を感知したらとにかく精神集中だ！」

「海斗、精神集中ってそんなので防げるの？」

「い、いやそれは分からないけど、やらないよりはやった方がいいだろ」

「海斗さん精神集中って何に集中すればいいのですか？」

「それは、自分と敵かな」

「まあ、私は普段から集中してるつもりだったのにダメだったけど」

モンスターに対して一般的な探索者以上の知識を持っていない俺には根本的な解決策は思いつかないが、とにかくどんどん進んでいくしかない。

「ご主人様、敵モンスターです。恐らく4体です」

シルが恐らくと言うぐらいだからまた、小さいか隠れているかどちらかだろう。

やはり前回同様待っていても何も現れない。植物系のモンスターは待ち受けタイプが多いようだ。

全員で陣形を整えて進んでいくが敵が見当たらない。前の様に擬態してそんな草も見当たらない。

「シル、何もいないんだけど間違いないか？」

「はい間違いありません。もうすぐ近くまで来ているはずですよ」

どこだ？今度は本当に見つからない。最近敵モンスターをすぐに見つけられないパターンが増えている気がする。

「マイロード飛んでください」

ベルリアの短い言葉に身体が反応して、横っ飛びにその場から避難

した。

飛びのきながら今まで自分がいた場所を目視するが地面から何本も木の根の様なものが突き出していた。地表に出た部分をベルリアが剣で切断する。

「ベルリア、地中か！木の根による攻撃だな。みんなも1カ所に留まるのはまずい。移動しながら地中へ向かって攻撃しよう」

しかし地中への攻撃だが俺達パーティはシルとルシエがいるので、2人がいればどうにでもなるが他のパーティーはどうしているのだろうか？

魔法を使ったり、爆破出来る様な道具類を持ち込んでいるのかもしれない。

「シルとルシエは、根が出て来た所を下に向かって攻撃してくれ。ヒカリンとミクとベルリアは地上に出て来た部分を攻撃して」

「マイロード、足元です」

ベルリアの声に横つ飛びに離脱する。

俺がターゲットになっっているのか先ほどまでいた足元にまた根の様な物が大量に顔を見せた。

他のメンバーの足元にはまだ現れていないので、いつもの様に俺が狙われているのだろう。

女の子達に攻撃が集中するよりは全然良いのだが、相変わらず俺ばかり狙われる理由が分からない。

やはり末吉のせいかもしれないので、今度春香と一緒におみくじを引き直しに行ってみようかな。

「ベルリア、ヒカリン、ミク頼んだ！」

ベルリアは2刀で根を斬り落とし、ヒカリンが残った部分に向けて『ファイアボルト』を放つと同時にミクが『スピットファイア』を連射すると、それぞれの着弾と同時に地上部分の根が一気に燃え上がりそのまま地中部分にも炎が伝播していった様に見えた。

「シル、反応はどうだ？」

「先程の攻撃で1体仕留めた様です。後3体です」

ヒカリンとミクの攻撃で1体倒した様だ。地中に埋まっているとはいえ、地上の部分に対する炎の攻撃で地中の本体までダメージが通るらしい。

やはり炎が特効の様だ。これならいける。残りの3体を早く仕留めたい。

第297話 13階層探索（後書き）

いつもありがとうございます。遂に50万文字と300話に到達しました。当初10万文字も難しいかと思いましたが、読者様の応援のおかげでここまでになりました。筆者の想像を超えて単行本5冊分になってしまいましたが、今のところ終わる気配は全くありません。春以降の書籍も1巻の壁を超えて2巻以降も続刊出来るよう応援お願いいたします。

頂いている感想も毎回有り難く読ませてもらっています。ついでにブックマーク とポイント評価もお願いします。

第298話 木には炎

残る敵は3体だが、姿が見えない以上油断は出来ない。

「俺とベルリア以外は下がって」

すぐにも飛びのくことが出来る様に神経を張り詰める。

「マイロード今です！」

ベルリアの声に前方にダイブしてその場を離れるが足元だけで無く、飛び込んだ前方からも、木の根が襲ってくる。

完全に狙い撃ちにされているが、焦りながらも前方に右手に持つバールザードを奮って絡みついて来るのを避ける。

「前方は私に任せて」

ミクが『スピットファイア』を連射して前方の木の根を燃やすのと同様に同時に先程の足元にはヒカリンが『ファイアボルト』で攻撃をかける。

K-12のメンバーも一緒に探索を始めてからそれなりに時間が経過しているので、連携も当初に比べてかなり熟達してきた感がある。戦闘中ではあるが妙に感心してしまうのと同時にパーティを実感出来て密かに嬉しかった。

それぞれの攻撃により地上部分は燃えて消えてしまったが、先程と違い地中部分迄燃え上がった感じは薄い。

別々に攻撃したのでは少し火力が足りないのかもしれない。

「二人ともまだまだだな。本当の炎を見せてやるぞ、しっかり見てるよ『破滅の獄炎』」

ルシエが足元に向けて『獄炎』を放つと、土が焦げて地表がめくれ上がり地下にいたであろうモンスターも炭と化して消え去ってしまった。

「木が炎に勝てるわけがないんだ！どうだ海斗すごいだろ」

「あゝ、確かにすごいよ。すごいです」

「そうか、わたしの凄さが分かったならいいけどな」

「さすがルシエ様です」

「私達とは威力が違いますね」

「ふふふっ」

とにかく後1体を倒す必要がある。

「ベルリア、まだか？」

「まだ特に何も感じません」

どうせ俺を狙うなら早く来い。

そう思いながら敵を待ち受けていると、後方から音が聞こえてきたので、慌てて確認すると、あいりさんが空中に舞っていた。

俺の不器用なジャンプとは違い文字通り空中で可憐に舞っていた。敵も俺ばかり狙うワンパターンから学習したのかあいりさんを狙ったらしいが、あいりさんが可憐に空中に避けた所をミクとヒカリンそしてルシエが一斉攻撃をかけた。

強烈な炎に包まれて一瞬にして、地上と地中の敵が消滅してしまっ

た。

敵にとっては俺を狙うよりも悪手だった様だ。

どうせパターンを変えるなら戦力分析をしっかりした方が良かった

と思うが、木の根にそれは望みすぎと言うものかもしれない。それにしてもあいりさんの避け方が華麗すぎる。どうすればあんな風に華麗に避けることができるのだろうか？俺も訓練したらあんな風になれるのだろうか？

マントをはためかして華麗にジャンプして避ける俺。カッコいい！今後のベルリアとの特訓にジャンプしてからの避け方も入れてもらおうかな。

「あいりさん大丈夫ですか？」

「ああ、問題無い」

「よく避けることが出来ましたね」

「何となく気配がして足下がおかしかったからな」

流石はあいりさんだ。俺はベルリアの助け無しには同じ事は出来ないが、子供の時から修練の成せる技なのか、それとも才能の成せる技なのか。

「それじゃあ、先に進みましょうか」

「海斗。腹減った」

「ああ、分かってるよ」

スライムの魔核を渡してから先に進むことにしたが、今回の戦闘では俺は、ほぼ囿役だったが経験値ってちゃんと入ってきているのだろうか？

俺としては避けるだけでも、神経をすり減らしてしつかりと戦闘に加わっているつもりだが、明確な仕組みがよく分からないダンジョンの経験値システムの中で俺はどの程度戦った扱いになっているのだろうか。

少しだけ不安になってしまったが、レベルはそれなりに上がっているので多分大丈夫なのだろう。

第298話 木には炎（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第299話 13階層の大木

俺は今13階層を探索している。

メンバーの活躍で地中に潜った木の根のモンスターを倒す事が出来た。

「ミク、木のモンスターといえばトレントだよな。葉っぱとか木の根のモンスターもトレントなのかな」

「たぶんそうじゃ無い？大きな括りでトレントで細いところでグラストレントとかそんな名前があるのかもね」

「グラストレントか……聞いた事ないし、なんか割れそうだな」
「例えよ例え！」

まあ、これまでの敵を見てもこの階層は植物系モンスター中心なのは間違いない。

心配した精神系の攻撃もあれから食らっていないので心配しすぎたかもしれない。気にしても仕方がないのでどんどん進む事にする。ダンジョンはかなり入り組んでいるので、この階層まで来ると他の探索者と出食わす事はほとんど無い。

戦闘のたびに思う事だが、サーバントのいない他の探索者はどうやって敵モンスターに対処しているのだろうか？真司と隼人を見てみるとダンジョンに適應して独自進化している様な気がする。そういうダンジョンに適應出来た探索者だけが残っていつてるのかもしない。

「この階層はそれ程熱くも無いし過ごしやすいよな」

「そうですね。汗もそれほどかかないしい感じなのです」

「ヒカリンって休みの日は家族と過ごしたりゲームしたりしてるん

だっけ」

「そうです。家族とお買い物する事が多いのです」

「家族と買い物か。俺は普段ダンジョンに潜っているせいも有るけど中学生になっただくらいから親とは買い物に行かなくなったなあ」

「男の子はそうなのかもしれませぬね。でも家族と一緒に楽しいのですよ」

「そう言うものかな」

「海斗さん、家族とは余り仲が良く無いのですか？」

「いや普通だと思うけど、父親とはほとんど話さないな」

「きつとお父さんも寂しがっていますよ」

話しをしていると年下のヒカリンの方が大人な気がする。見かけはともかく女の子の方が精神年齢が高いのかもしれない。

歩いているとそこら中に雑草が生えているので、通り過ぎる度に一瞬草トレントでは無いかと身構えてしまいがシルが何も言ってこないでどんどん進んで行く。

しばらく進むと若干だが景色が変わってきた。今まで完全に足元は土だったのが、芝生の様な草が生えている部分が増えて来て緑色の色彩が強くなってきている。

そして驚いた事に虫や鳥がいる。

「シル、あれってモンスターなのか？」

「いえ、モンスターでは無く普通の生物ですよ」

今までダンジョンにはモンスター以外の生物は居ないのかと思ってしたが、このエリアには普通に生物がいる。

また一つダンジョンの不思議を目の当たりにした気分だ。

「シルとルシエってモンスターじゃなくて普通の虫って大丈夫なのか？」

「種類によります」
「お前馬鹿じゃ無いのか」

2人からは厳しい返事が返って来たので、恐らくダメなのだろう。
モンスターさえいなければ絶好のお散歩コースの様だ。

最近お散歩できる様な所も減って来ているので、有効活用できない
ものかとふと考えてしまった。

パーティーメンバーで気分良くお散歩コースを進んでいるとシルが

「ご主人様、モンスターです。今度は1体だけのようです」

1体だけとは珍しいな。スライムとゴブリンは単体で出る事が多い
が、この階層で単体は初めてだ。

「みんな1体だから問題無いとは思うけど、一応注意しながら進も
うか」

そこから全員で50mほど進んだ所で、俺達は最初から敵モンス
ターを目視していた事に気がついた。

進んだ先にいたのは50m手前からずっと見えていた目印の様な大
きな木だった。

近づくとも10m級の大きな木にしっかりと目と口が付いていた。

確かにこれも木のモンスターなのでトレントなのだろう。

トレントは、本当に幅広い種族の集まりなのかもしれない。

第299話 13階層の大木（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第300話 ビッグトレント

俺は今10m級のトレントと対峙している。

以前戦った恐竜と比べると木なので質量は少ないがかなり大きい。近づく迄殆ど動きを見せなかったので、大きい分動きは鈍いのかと思ったが甘かった。

象の1歩がアリの百歩に勝るのと同じように大トレントの一撃は、俺達の動きを凌駕する程のスピードを持っていた。

枝を腕や足のよう使い大振りにフルスイングして来る。枝と言えども数メートルあるのでかなり危険だ。

最初、ベルリアも俺も剣で受けようとしていたが、まともに受け止めると剣の方がただでは済まなさそうだったので、トレントの攻撃に対してはとにかく避けるように立ち回っている。

「ミク、ヒカリン、隙を見て攻撃してみてよ」

大きくても木のトレントには違いないので、他のトレント同様に炎に弱いのは間違い無いはずだ。

問題は、この大きさだがやってみないと分からない。

俺とベルリアが注意を引いているうちにミクが『スピットファイア』を連射。ヒカリンも『ファイアボルト』を撃ち込んだ。

どちらの攻撃も、ビッグトレントの体躯を燃え上がらせてダメージを与える事は出来たが、その範囲は限定的だった。特にミクの『スピットファイア』による小型の火球では効果範囲が狭過ぎる。

「2人共そのまま攻撃を続けて！」

2人の攻撃の感じを見ると恐らくルシエなら一撃で倒せる。

ただこの階層に来てからルシェに頼る回数が増えて来ているので、残りのメンバーで出来るだけなんとかしたい。残念ながらこの相手にはスナッチは戦力にはなり得ないので、俺とベルリアでビッグトレントの幹を切断まで持つていくしか無い。

「ベルリア、俺とお前で倒すぞ！」

「はい。任せて下さい。問題ありません」

ベルリアの問題ありませんは、普段余り信用ならないが、今回はあてにしたい。

俺はトレントの攻撃を避けながらバルザードの斬撃を飛ばしてトレントの幹に向かってダメージを与えようと試みたが、枝の部分に遮られて本体迄はダメージが通らない。

「ベルリア連携して攻撃するぞ！俺の攻撃進路の枝を先に切り落としてくれ」

「任せてください」

ベルリアが2刀を構えて突撃をかける。

トレントが枝でベルリアの攻撃を阻害して来るが、最小限の動きで避けながら、なぎ払い前進して行く。

流石の動きだが、うまく前方の視界が開けたのでバルザードの斬撃を飛ばす。

ベルリアの露払いのおかげで今度は斬撃が幹まで到達して大きく幹を傷つける事に成功した。

これなら同じ箇所は何発か放てばいける。

そう思い、追撃をかけようと思った瞬間、変化が起きた。

「何だ？傷が治ってる？」

俺が先程バルザードの斬撃で与えたはずの傷が、幹から綺麗に消えていた。

どう言う事だ？まさかこいつの能力か。魔法を使わず物理的な攻撃ばかりだったのでつきり魔法は使えないのだと思いついていたが、どうやら回復系のスキルを持っていたらしい。

「ベルリア、俺だけの攻撃だと倒せそうに無い。お前の力も貸してくれ」

「マイロードもちろんです」

再度態勢を整えてから、ベルリアが突っ込む。

それに合わせて俺もベルリアの後方から突っ込むが、トレントの攻撃は全てベルリアがなぎ払ってくれている。

先程と同じように前方が開けたところでバルザードの斬撃を飛ばしてダメージを与える。

それと同時にベルリアがビッグトレントの至近距離まで飛び込んで俺がダメージを与えた所に『アクセルブースト』を使い斬り込む。

かなり深い所迄傷を負わせたのが分かったが未だ完全に倒しきるには至って無いので、そのまま俺も踏み込んでバルザードに切断のイメージをのせて、木の幹を一気に倒しきる。

「ズドーン！」

大きな音と共にトレントが倒壊してそのまま消失した。

俺とベルリアの3連撃でようやくビッグトレントを倒す事に成功した。

大きいだけあって、かなり手強かったが、思った通り剣は木を切るのにはあまり向いていない。

斧かチェーンソーがあればもっと楽に倒せたかもしれないが、敵に合わせて武器を変えるわけにもいかないなので、これからも俺達は剣

で頑張るじつと思ひ。

第300話 ビッグトレント（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第301話 あいりの悩み相談

俺は今13階層でビッグトレントの魔核を回収している。

通常のトレントの数十倍の質量がありそうなトレントだが、いつもの如く質量無視のダンジョンの法則にのっとり、魔核は、他のトレントとほぼ一緒だった。

あれだけ大きさが違うのに残された魔核の大きさは、ほぼ同じ。

八チドリの時などは逆パターンもあつたので文句はないが不満は残る。

「今日は、初見の敵ばかりで結構頑張ってるから、この後は少しゆっくりしたペースで進もうか」

「わかつたのです」

どんどん前に探索を進めて来たが、1回の戦闘で俺自身結構消耗していると感じるので、他のみんなにペースダウンを申し出た。

やはり初見の相手を攻略して行くのは神経と体力が普段よりも削られて行く。いざと言う時に反応が鈍くなって来ると不味いので休憩を挟みながら進む事にする。

「海斗、ちよつといいだろうか」

「はい、なんですか？」

「この階層に入ってから私は殆どみんなの役に立てて無いんだ。どうにか役に立ちたいんだがどうすればいいだろうか」

「そんな事ないと思いますが、得手不得手がありますからね。物理的攻撃ならあいりさんが有利ですし」

「それは、そうかもしれないが、この階層のトレント相手だと私の攻撃で有効と思える攻撃が思いつかないんだ」

「そうですね。僕も魔剣とかが無いと全く役に立てそうに無いですからね。あいりさんの気持ちは良くわかるんですよ」
「私は前衛のつもりだから、前に立って戦えないのは辛いんだ」
「あまり、おすすめは出来ないんですけど、俺と同じようなやり方ならいけるかも知れません」

あいりさんの腕前が凄いのは分かっているが、やはり女性なのであまり怪我をして欲しくは無い。顔に傷でも残ったら大変なので余りこのやり方はおすすめでできないが、あいりさんの気持ちは分かる。

「俺の場合、遠距離はバルザードの斬撃を飛ばすのがメインなんですけど、それでも効果が薄い場合は近距離まで近づいてから放っているんです。それでもダメなら至近距離からの連発です。ただ敵に近づく必要があるので、危険は増すし、精神力も削られますが」

「そうか、私の場合至近距離からの『アイアンボール』か」

「あいりさんの場合『アイアンボール』となぎなたでの斬撃を同時にでもいけるんじゃないですかね」

「同時か。今まで遠距離は『アイアンボール』と魔核銃、近距離はなぎなたで使い分けしてたからな」

「流石に大型のトレントには難しいかもしれませんが、他のトレントならそれで十分倒せると思います」

「そうか。やはり海斗に相談して正解だったよ。そんな感じに見える海斗も色々考えて努力してるんだな。私も海斗を見習って努力しないといけないな」

そんな感じってどんな感じだ？あいりさんに褒められてるような気もするが、さらっと失礼な事を言われた気もする。見た目と中身が違うのは所謂ギャップ萌えだ。きつと良いことに違いない。

「いきなり戦闘スタイルを変えると危ないんで、少しずつやってみ

ましようか」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

それにしても、あいりさんはいつも飄々としたイメージがあったので、まさかこんな風に悩んでいるとは思いませんでした。

もしかしたら他のメンバーも同様に悩みを抱えているのかもしれない。

俺では余り彼女達の力になれる事は無いと思うが、一応パーティーリーダーなのでメンバーのフォローは俺の役目だろう。振り返って見ても今まで彼女達のメンタルのフォローが足りなかったかも知れない。自分の事で精一杯でメンバーのメンタルの事にまで気が回っていないかったと思う。

これからは、出来るだけそういった部分も気にかけてながらダンジョンを進んでいきたい。

第301話 あいりの悩み相談（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価をお願いします。

第302話 紙一重

俺は今13階層を進んでいる。
ペースを緩めておやつタイムを取りながら進んでいる。

「ミクさん、ちょっと良いですか？」

「ヒカリンどうしたの？」

「それが海斗さんがおかしいんです」

「海斗がどうかしたの？」

「それが急に何か悩み事は無いかなんでも俺に相談してくれとか、色々言って来たんです。おかしいと思いませんか？」

「そういえば私にも同じようなこと言って来たわ。確かに変ね。おかしくなったのかしら」

「海斗さんってそう言う感じの人じゃ無いですよね」

「そうね。マイペースだし女心には疎い感じだしね。急にどうしたのかしら。精神的に不安定にでもなってるのかしら」

「私も急に変な事を言い出したので心配になってしまったのです」

「そうね。今度海斗の悩みを聞いてみようか」

「そうですね。思ったよりも疲れてるのかもしれないね」

後ろで2人がこそこそ話をしているが、やはり2人共悩みがあるのかもしれない。

すぐには言い出しにくいのかもしいないので、また時々声をかけてみようと思う。

「ご主人様、敵モンスター3体です。動きが余り無いのでトレントだと思えます」

「それじゃあ、俺とベルリアとあいりさんが前に立って、残りのメ

ンバーは後ろでいつてみよう」

ゆっくりと進んでいくと、今度は3体の普通？のトレントがいた。

「それじゃあ行きますよ」

俺とベルリアはトレントに近づく為にいつものように駆け出したが、あいらさんもすぐ横を駆けてくる。

「あいらさん、注意してください！」

俺も自分の敵に集中する必要があるのであいらさん迄フォロー出来ない。

目の前から木の杭が飛んできたので大きく回避するが、避けた側から次々に飛んでくる。

ご丁寧に先が尖っているので、向かって来る杭に対して恐怖を覚えるが、止まる訳にはいけないのでそのまま突っ込む。

トレントの目前に迫ったタイミングでバルザードの斬撃を飛ばしてダメージを与えてから更に踏み込んで、幹の部分を切断のイメージで一気に斬り倒した。

横に目をやると、あいらさんがトレントの至近距離からの『アイアンボール』を放っていた。

至近距離から放たれた鉄球は枝を薙ぎ払い、幹のど真ん中に完全にめり込んでいた。

普通の生物があんな感じになったら完全に絶命していると思うが、あいらさんは更に『斬鉄撃』を使い薙刀を横薙ぎに振るい見事に鉄球が埋まって破損している部分のすぐ下側を一刀両断にしまった。

見事としか言いようがない。俺が口頭で伝えただけの戦術をいきなり完璧に遂行してしまった。

当然のようにトレントをあっさり葬り去ってしまった。

一体、さっきの悩みは何だったのかと思うような華麗さだ。そして最後の一体もベルリアが2刀で『アクセルブースト』を使って難なく倒す事に成功していた。

この階層で初めて炎に頼らずトレントを倒す事が出来たので前衛の3人は満足感が高い。

「あいりさん、さすがですね。凄いじゃないですか」

「いや、これも海斗のアドバイスのおかげだよ。私の中にさっきの様なやり方の引き出しは無かったんだ。海斗に相談してよかったよ」

「あいりさん……」

あいりさんにお礼を言われて照れ臭いと言うよりも単純に嬉しかった。メンバーの助けになれた事が純粹に嬉しくて、感極まってしまった。

「ミクさん、何かあいりさんと海斗さんが話しているんですけど、海斗さんが涙ぐんでる様に見えるのです」

「そうね。確かに目が潤んで泣き出しそうね」

「大丈夫なのでしょうか？」

「やっぱり、精神的に不安定なのかもしれないわね。早いうちに相談に乗ってあげた方がいいかもしれないわね」

「そうですね。海斗さん絶対おかしいですよね。私達でフォローしてあげましょうね」

後方ではミクとヒカリンがまた何やらこそこそ話している様だったが、感極まった俺には全く気にならなかった。

第302話 紙一重（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第303話 石鹸とバラの香り

俺は今10階層にいる。

それなりの数のトレントを倒したので引き揚げてきた。

あいりさんの戦い方も堂に入った物なので今日の目的は達成したと言える。

いつものように10階層でベルリアと一緒にシャワーを浴びる。

「マイロードいつも匂いが違うようですが」

「ああ、ベルリアにも分かるのか。今日のは俺の母親が買ってきてくれたシャンプーとボディソープのお風呂セットを持ってきたんだ」

「何かいつもより良い匂いがしますね。花の香りでしょうか？」

「一応ローズの香りって書いてあるな」

「ローズの香り良いですね。それにいつもより髪も身体もしっとりしている気がします」

「それはよかったな。そういえば魔界にもローズってあるのか？」

「私は詳しくないですが色んな種類がありますよ。でもこれ程芳しくは無いですね」

母親が買ってくれたお風呂セットはベルリアに大好評だったので良かった。

魔界の薔薇をイメージすると、なんかデスローズって感じで死を司っている気もするが、花の種類もいっぱいあると言っているから案外俺達のいる所の薔薇と変わらないのかもしれない。

「そういえば前に魔界の事を聞いたけど、ベルリアって魔界では強い方なのか？」

「一応士爵ですから」

「強いんだな」

「土爵ですから」

よく分からないが、今の幼児化したベルリアがそこまで強い部類に入るとも思えない。

仮に今度また悪魔と戦う事になったらシルとルシエに頼らないと仕方がないな。

シャワーを終えて外に出ると他のメンバーも既に出てきていた。

「海斗、もしかしてシャンプー変えたの？」

「えっ？よく分かるな。今日は母親が買ってくれたのを持ってきたんだよ」

「それでなのね。良い匂いだと思うわ」

そんなにシャンプーとかボディソープの匂いって違う物なのか。今まで特にこだわった事は無かったので意識して無かったが、変えた途端に反応があると言うことはかなり違うのだろう。

もしかして今まで俺って臭かったのか？いや多分大丈夫だよな……

「ミクは何か特別なシャンプーとか使ってるのか？」

「特別って事は無いけど、家で使ってるフランス製の物を使ってるわ。ダンジョンで結構髪が傷んじやうから」

さすがは女の子だ。もしかしたら他の2人も同じように、シャンプーにもこだわっているのかもしれない。

「ミクってフランスとか行ったことあるの？」

「家族旅行で結構いろいろ行ってるからね。海斗はどうなのよ」

「俺は中学生の時に家族で旅行に行っつきり何処にも一緒には行つて無いな。もちろん外国は行った事がないよ。俺パスポート持っ

てないし」

「海斗も探索者で結構稼いでるんだから今度家族を旅行にでも連れて行ってあげたら？」

「あゝそう言うのも有りかな。考えた事無かったけど、あんまり父親と喋る事ないから気まずい気もするんだよな」

「絶対ご両親喜んでくれると思うけどな。一緒に行けるのなんて今だけかもしれないでしょ」

「そんなものかな」

「そんなものよ」

流石は女の子、いやミクだからなのか、俺の思いもつかない事を提案してくれたが、言われてみると悪くない気がする。

今の俺があるのも両親のおかげなのは間違いないし、好きに探索者させてもらっているのも両親のおかげだ。

この前、レンタルロッカーを借りる時にも未成年者なので親のサインと判子が必要だったが、お願いしたら何も言わずにやってくれた。その時に母親には王華学院を受験する事を伝えたが、賛成もしてくれなかった。もちろん学費は全部俺が出す事を伝えたからかもしれないが、それでも他の一般的な親よりも好きにさせてくれている気がする。

今日帰ったらそれと無く、母親に聞いてみようかな。

流石にフランスと言われたら断るしかない。

第303話 石鹼とバラの香り（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第304話 親孝行

俺は今家族旅行に来ている。

「母さん、どこか行きたいところとかないの？」

「急にどうしたの。そうね〜行ってみたいのはイタリアかしら」

「ごめん、もうちょっと近いところでどこかないの？」

「そうね〜。ハワイとか？」

「ごめん。国内で行きたいところ無い？」

「国内だと温泉かな〜」

ミクに勧められて、その日のうちに母親に行きたい所を聞いてみたが、フランスでは無かったもののイタリアがあがった時にはどうしようかと思ってしまった。

俺がお金を出すからと家族旅行に誘うと2つ返事で隣の温泉旅館に行く事になった。

「え〜海斗がお金を出してくれるの？なんて孝行息子なのかしら。お父さん泣いて喜ぶと思うわ」

父親が泣いて喜ぶ様は全く想像できないが、とりあえず母親が喜んでくれているようなのでよかった。

夜、父親の了承を得てからスマホで調べて温泉旅館を1泊2食付きで3名予約をした。

初めて自分で旅館の予約を行ったのでちょっと緊張してしまっただが丁寧な対応をしてもらい問題なく取ることが出来た。

週末になり父親の運転で温泉宿まで向かったが、俺はいつも通りの格好だったが父親も母親も他所行きの格好で張り切っているようだ

った。
2時間程のドライブで目的の温泉宿についたが、ホテルダンジョンシティとは全く違い、和風の良い感じの旅館だ。

「海斗。本当にここを予約したの？お母さんお金あんまり持って来てないわよ。本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって。予約の時にしっかり料金も確認しといたから」

「そう、それなら安心ね。お母さんこんなに立派な所だと思ってなかったわ」

中に入り部屋に案内されると、純和風の客室でかなり広い。

「海斗、お前この部屋高かっただろう」

「あ、まあ安くは無いけど、大丈夫だって。日頃のお礼だよ、お礼」

「……………」

父親が無言になってしまった。ちょっと良い部屋を取りすぎて心配させてしまったらしいが、初めての事なので程度が分からずに奮発してしまった。

その後、俺は部屋で過ごし、両親は旅館の周囲を散策したりして時間を過ごしたが、しばらくして食事の時間を迎えた。

「海斗。美味しいわ。蟹よ蟹。しかも何この綺麗な料理。写真よ写真！」

出て来た懐石料理に母親のテンションが上がりっぱなしだ。

「父さん、どう？」

「うん。うまいな……………」

「ビール飲む？」

「ああ」

会話が続かない……

別に父親の事が嫌いな訳では無いが高校生になってからまともに話したことが無い。

頑張って話しかけてみるが、短い返事が返ってくるだけで全く会話が続かない。

「お父さん、おいしいわね。海斗にこんなところ連れて来てもらえるなんて夢みたいね」

「ああ、そうだな」

「海斗、お父さんも本当に喜んでるわよ」

「そう……」

本当に喜んでいいのか？父親の言葉と表情からは読み取れない。

「海斗、それ食べないの？お母さんそれ好きなんだけど」

「ああ、よかつたら食べてよ」

「ああ。幸せ。こんなおいしい料理を食べさせてもらえるなんて海斗を産んでよかつたわ」

料理と俺が同格の様な言い方に引っかけかりを覚えるが、これだけ喜んでもらえて俺も連れて来た甲斐があったと言うものだ。

デザートまで食べるとお腹が一杯になってしまった。これからどうしようか、テレビでもみようかな。

「海斗、一緒に温泉行ってみるか」

「あ、ああいいよ」

突然父親が誘って来たので少し驚いたが、断る理由も無いので一緒に温泉に入る事になった。

風呂場に着くと大きめの内風呂と露天風呂まであり、さすがは温泉旅館と言う感じだ。

内風呂に入ってから折角なので寒さを我慢して露天風呂に駆け込んだ。

「ふ〜っ。は〜」

顔は冷たいが、その代わり余計に体があつたまる感じがして気持ちがいい。

しばらくすると父親も露天風呂にやって来た。

「海斗、いい旅館だな」

「そうだね」

「お金は大丈夫か？足りなかったら父さんが出すぞ」

「だから大丈夫だって」

「本当だな」

「ああ、探索者になって結構稼いでるんだよ」

「そうか」

やはりお金の心配をかけていたらしい。まあ俺が稼いでる様にはあんまり見えないかもな。

「ありがとうな」

「う、うん、まあいつものお礼だから」

俺は突然の父さんからのお礼に面食らってしまった。

第304話 親孝行（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第305話 親心

俺は今父親と一緒に露天風呂に入っている。

「そついえばお前、王華学院受けるんだってな」

「そのつもりだけど」

「受かりそうなのか？」

「今のまま頑張ればなんとかなると思うけど」

「母さんに学費は自分で出すと言ったそうだな」

「だから結構探索者として稼いでるから学費ぐらい大丈夫なんだって」

「そうか。まあ足りなかったら言ってこいよ。俺も普通に稼いでるからな」

「大丈夫だつて」

やはり、お金の心配をかけているらしい。

「お前、探索者になってから3年近く経つけど、そんなに上手いってる感じじゃなかっただろ」

「最初は上手いかなかったけど、最近調子が出て来たんだ」

「まあ、3年近く辞めずに続けてるだけでも感心はしてたんだが。

危なく無いのか？」

「ちょっとは危ない事もあるけど、楽しいし大丈夫だよ」

「将来、探索者で食っていくつもりか？」

「出来たらそのつもりだけど」

「そうか。まあ大学だけはちゃんと卒業しろよ。いざという時役に立つかもしれないからな」

「わかってるよ」

急に真面目な話になったが、どうやら父親は探索者に反対では無いらしいのでちょっとほっとした。これで、大学に行きながら探索者も続けても文句を言われる事は無さそうだ。

「そういえば、お前、彼女とかいるのか？」

「は、はいっ？」

「母さんがお前に彼女がいるらしいと言っていたから、少し気になっただけな」

「いや、そんなのいないけど」

「照れなくてもいいんだぞ。俺も高校の頃に初めての彼女が出来たな」

「いや、本当にいないから」

「そうか、母さんの勘違いか。お前が普段しないお洒落な格好をしたり、恋愛映画のパンフレットを持って帰って来たりしてきたから、絶対彼女とデートだって言っていたんだが」

「なっ……………」

母さん、何を父さんに教えてるんだ。それに格好や映画のパンフレット、なんでそんな事まで見てるんだよ。

俺も少し春香とお買い物で浮かれていたのかもしれない。まさか母さんがそんなところまで見ているとは思いつかなかった。

最近になって彼女がいるのかと聞かれたが、実はかなり前から疑っていたと言う事か。

だが母さん、残念ながら違うんだ。出来ればそうだと答えたい所だが、彼女じゃないんだ。

春香は俺の思い人には違いないが彼女ではないんだ。

「それは、友達と行ったんだ」

「友達か。女の子か」

「そんなのどつちでもいいだろ」

「そうか。頑張れよ」

なんで冬の露天風呂で父親と恋話をしなくちゃいけないんだ。気ま
ずすぎる。

しかもビールを飲んだせいか普段あまり喋らないのに、急にいつば
い喋りかけて来た。

「それじゃあ、俺は先に出るから」

その場から逃げ出す様に父親を残して、先に部屋に戻る事にしたが、
戻ると母親が部屋でテレビを観ていた。

「お父さんは？」

「まだ温泉に入ってるよ」

「そう。そういえば海斗、彼女と上手くいってるの？」

「いや、だから彼女じゃないんだって言ってるだろ」

「春香ちゃんでしょ」

「なっ……………なっ、なにを……………」

「小学校で一緒だった春香ちゃんでしょ。綺麗になったわね」

「……………なんで母さんが春香の事を……………」

「あら〜海斗、春香って呼んでるのね」

「うっ……………なっ、なにを言ってるんだよ。そもそも違うし」

「なにが違うのよ」

「春香は彼女じゃない」

「誤魔化さなくてもいいのよ。だってあんなに仲良くデートしてた
じゃない」

「ど、ど、どこで？どこで見たんだよ」

「それはシヨッピングモールとか、初詣とか」

「母さん、つけてたのか？」

「そんな訳ないでしょ。私だって買い物とかするんだから見かける事もあるわよ。最初見た時はびっくりしたけど、女の子を見たら子供の頃の面影あるじゃない。あゝ春香ちゃんだと思って」

「……………」

「海斗やるじゃない。春香ちゃん射止めるなんて。お母さん見直しちゃった。この前、偶然春香ちゃんのお母さんにも会ったのよ」

「そんな偶然あるのかよ」

「息子がお世話になってますってちゃんと挨拶しといたわよ」

「なっ……………」

「春香ちゃんのお母さんも、海斗が春香ちゃんの写真を一杯撮ってくれたんだって喜んでたわよ」

「ま、ま、ま……………」

母さん一体どこまで知ってるんだ。俺の行動は全部バレてるのか？しかも春香のお母さんにまで話を通ってるのか？俺の撮った写真は春香が見せたんだろうが、女の子ってそんなものなのか？親に写真とか見せるのか？そもそも俺の事はどう伝わってるんだ？まさか娘を激写する変態だとか思ってるないよな。

落ち着け。落ち着け俺。

「母さん、本当に春香とはそんなんじゃないんだ。買い物友達なんだよ」

「買い物友達って、写真も撮ったんでしょ」

「それはそうだけど、買い物友達なんだよ」

「まあ、海斗がそう言うならそう言う事にしとくけど、春香ちゃん可愛いから人気あると思うわよ」

「そ、そ、そんな事は言われなくても知ってるって」

「そう。分かっているならいいけど。頑張ってるね」

母親にどこまで見透かされているのかわからないが、応援されると

変な感じだ。

結局その日は3人でテレビを観たりしながら、ごろごろして眠りについた。

翌朝も美味しいご飯を食べてから父親の運転で家に帰ったが、支払いが1泊2食付き3名で6万9000円だった。

高校生にとってはかなりの高額出費となってしまったが、両親共に満足顔だったので良かったと思う。久しぶりの家族旅行となったが結構良いものだなと思った。

第305話 親心（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第306話 月曜日の学校

今日は月曜日なので俺は今学校にきた所だ。
教室に入ると隼人が居たので挨拶をする。

「おう」

「ああ、海斗、朝からヘビーだけどな真司が呼び出されて行っちゃったんだ」

「前澤さんか？」

「前澤さんだ。まあ2週間以上空いたから真司のメンタルも限界だったと思うけど、今日になって急に呼び出されてついて行っただ」

「前澤さんの様子は、どうだったんだ？」

「それが、普通だった」

どうやら、ついに真司が告白の返事をもらっ事になった様だ。仮にダメだったとしても、蛇の生殺しの様な今の状態が続くよりはよっぽど建設的になれそうなので良かった。

それにしても前澤さんは何を考えて2週間以上返事をしなかったのだろうか？

本当にダメなら即断ってる気がするので可能性はあるのではないだろうか？

「まあ、朝礼までには帰ってくるだろうから待つしか無いな」

「そうだな。海斗、週末はダンジョンに潜ってたのか？」

「いや、週末は家族旅行に行ってたんだ」

「家族旅行？珍しいな」

「ミクに勧められて、俺がお金を出して家族と温泉旅館に行ってきたんだ」

「へ〜やるな〜。俺も今度親を誘ってみようかな」

朝礼が始まる直前に真司と前澤さんが戻って来たがすぐに始業してしまっただので、確認する事ができなかった。

俺と隼人は1時間目の古文が終わった瞬間に真司の所に行つて聞いてみた。

「どうだったんだ？」

「ああ、それが友達からお願いしますって」

「それって、OKだったって事か？」

「OKとは違う気がするけど、断られたのとも違う気がする」

「まあでも友達から恋人へってやつじゃないのか？」

「そうかな。そうだといいいけど、とりあえずフラれなくて良かったよ」

「それでこれからどうするんだよ」

「今日の帰りに2人でカフェに行く事になった」

「おお〜、デートじゃないか」

「いやそれを言ったら海斗も同じ事してただろ」

「ああ、まあ確かに。それじゃあデートじゃないのかも」

「良かったな。あとは俺だけか……。お前ら彼女達に頼んで誰か紹介してくれ。頼むっ！この通りだ！」

「隼人……」

「気持ち分かるけどな〜。まず好きな人を見つけるよ」

「海斗、馬鹿だな。出会った瞬間に恋に落ちるかもしれないだろ」

「もしあの2人から紹介受けるんだったら同じ学校だろうから、もう出会つてると思うぞ」

「それじゃあ、俺知らない間に既に恋に落ちてるのかも」

隼人がいつもの様に馬鹿な事を言っているが、とりあえず真司は前向きな返事をもたらえたらしい。真司の表情も先週までと比べると随

分るい。

友達からか。羨ましいな。そのうち、デートを重ねて付き合ったりするんだろうか。俺は…… 買い物友達か。同じ様なものかな。もしかして俺も前向きな感じなんだろうか？ 自分的には、この半年間ぐらいで随分と春香との距離は縮まった気はするのだが、それが恋に繋がる様な縮まり方かといえば、そうでもない気がする。

どっちかと言うと買い物友達としての仲が深まった気がする。

できる事なら俺としては、すぐにでも恋人にランクアップしたいが、ランクアップの為の条件が分からない。

まさにプライベートでも迷宮に迷い込んだ気分だ。

ただプライベートでは残念ながらシルモルシェもベルリアもないので、完全に丸腰状態となっており、まさにモブ全開だ。

最近ダンジョンでは、自分的にモブ感が薄れて来ている様な気がするのだが、プライベートでは相変わらずだ。

これからは、ダンジョン同様に地上でも頑張っていきたいと思う。ダンジョンでは徐々に経験を積み重ねアイテムを手に入れてパーティを組んだ事によって、少しだけ自信がついて来たと思う。

地上では既にメンバーは真司と隼人がいるので、経験を積み重ねてあとはアイテムと自信をつけるべく頑張りたい。

第306話 月曜日の学校（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第307話 ドリユアス

俺は今13階層を進んでいる。

「ミク、ありがとうな」

「海斗、いきなりどうしたのよ」

「先週休ませてもらって、家族旅行に行ってきたんだけど、行って良かったよ。ミクのおかげだよ」

「私は何もしてないけど」

「いや、家族旅行にでも行ったら行って言ってくれただろ。俺にその発想はなかったから。両親共喜んでくれたよ」

「そう、良かったじゃない」

「父親とも思いのほか話せたし、また機会があったら行ってみるよ」
ミクと話しながら進んでいるが、かなりこの階層にも慣れて来た。
大型のトレントも混じっているものの、問題無くダンジョンを進んでいる。

「ご主人様、敵モンスターです。3体います」

「それじゃあ、さっきと同じ感じで行ってみようか」

この階層のトレントは待ち受け型なので焦っても全く意味は無いので、落ち着いてゆっくりと近づいて行く。

前方に大型のトレントが小さく見えてきたが、2体しか見えない。もう一体はどこだ？小型のトレントが混じっているのか？

「シル、3体目が見えないんだけど、どこにいるか分かるか？」

「はい、小さくですが見えています。ただあれは……」

「どうかしたのか？」

「はい。あれは木の精霊ドリユアスだと思われませす」

「木の精霊って敵なのか？」

「海斗、言っただろ、神だろっつが悪魔だろっつが敵なんだよ。精霊も敵に決まってるだろ」

俺の目にはまだ見えないが、シル達には見えているようだ。木の精霊と言うぐらいだからトレントに羽でも生えているのかもしれない警戒しながら更に近づいて行くと、俺にも目視する事が出来た。

大型のトレントの丁度間にそれはいた。

そこに居たのは緑色の髪をなびかせた女性だった。

「シル……あれが精霊か？」

「そうです、木の精霊ドリユアスに間違いありません」

木の精霊って完全に人間に見えるぞ。しかもかなりの美人だ。

「あれと戦うのか？」

「もちろんです。倒さなければ進めませんので」

考えてみると今までゴブリン等の2足歩行のモンスターはそれなりに戦ってきたが、完全な人型となるとベルリアだけだろう。

しかもベルリアは、おっさんで完全な悪役スタイルだったから躊躇する事はなかったが、目の前の綺麗な女性を倒さなければならぬのか？

どこからどう見ても人に見える。緑の髪なのでどこかの美人コスプレイヤーだと言われたら完全に信じてしまうレベルだ。

「みんな……」

「海斗、しっかりして。人に見えても人じゃ無いのよ」

「海斗、見た目に惑わされるな」
「やるのですよ」

俺以外のパーティメンバーは冷静のようだ。俺も気を取り直して指示を出す

「ドリュアスは能力がわからないから、大型のトレントから叩こう。右のを俺とあいりさんとシルで左をベルリアとルシエとヒカリンでやるぞ。ミクとスナッチはドリュアスを牽制してくれ」

それぞれの役割を果たすべく、攻撃を開始する。

今回は大型2体と未知の敵なので、出し惜しみは無しで行く。

大型のトレント目掛けて俺とあいりさんが駆けていくが、行手を草や蔓が邪魔をしてくる。

今までの大型トレントは、こんなのは使って来なかったのでドリュアスの能力かもしれない。

武器で蔓を斬りながら進もうとするが、手間取っている間にトレントの攻撃が眼前に迫って来たので、大きく避ける。

無事に避けたと思った瞬間、更にトレントの枝から蔦が伸びて来て俺を捕らえようとして来たので、バルザードで蔦を振り払う。

あいりさんも同じ状況だが、脚が鈍った所を、トレントが連続攻撃をかけてくるので今度はバルザードの斬撃を飛ばして迎撃する。

ありがちなパターンなので焦ったりする事は無いが、思うように攻撃出来ず、非常にまどろっこしい。

ミク達もドリュアスを攻撃してくれているようだが、周囲を覆う蔦や植物に攻撃を遮られているようだ。

もしかしたら先にドリュアスを仕留めた方が良かったかもしれない。

第307話 ドリユアス（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第308話 魅了

バルザードの斬撃でトレントの攻撃を防いでそのまま懐まで踏み入れるが、絶えず足元に蔦が絡まってこようとするので、短期決戦で臨む。

俺は懐からバルザードの斬撃を幹に向かって飛ばし、あいりさんも『アイアンボール』を至近距離から放ちビッグトレントの攻撃を退ける。

2人の攻撃により完全に無防備となったビッグトレントに対して

「シル、今だ。頼んだぞ！」

「はい、お任せください。『神の雷撃』」

シルの雷撃がビッグトレントに降り注ぎ、太い幹の部分が焼け焦げて真っ二つに割れてしまった。

さすがはシルだ。炎だろうが雷だろうが関係ない程の威力だ。

もう一体のビッグトレントは、俺達が倒したトレントとほぼ同時に焼失した。

ベルリアが露払いをして、炎を操る2人の攻撃で難なく倒せたようだ。

「みんな、後はドリユアスだけだ。一気に片をつけよう」

ドリユアスに向けて、俺とベルリアとあいりさんの3人が突っ込み、ミクとヒカリンが後方からの攻撃で仕留めにかかる。

先程同様、足元と前方に蔦が生えて来て邪魔をする。

ミク達の炎弾も植物に遮られて本体にはダメージが届いていない。ただドリユアス自身にそれ程攻撃手段がないのか、こちらにも特に

被害は見当たらないのでこのまま押し切れれば、特に問題なく終われるだろう。

更に攻撃の手を強めて5人で押し込むと、さすがに植物だけでは守りきれなくなったようで、緑の髪の女性が無防備な状態で現れたので、止めをさすべく更に踏み込んだ瞬間にドリュアスと目が合ってしまった。

目が合った瞬間、引き込まれる様な錯覚を覚えて手が止まってしまった。

「海斗、止まるなっ！」

斜め後ろからあいりさんの声が聞こえて来たので、ハツとなりそれに従う様にして一旦後ろに下がる。

「海斗、どうしたんだ。完全に仕留める事が出来るタイミングだったぞ」

「すみません。もう一度、俺が行きます」

自分でもどうして動きを止めてしまったのかよく分からないが次こそ仕留める。

再度、植物の障壁を排除してドリュアスに斬りかかろうとしたが、体が動かなかった。

目の前にいるのは、精霊の一種とは言え敵、モンスターの類である事は十分に理解している。

理解しているから今の今まで全力で倒しにかかっていた。そのはずなのにドリュアスに止めを刺そうとした瞬間なぜか身体が動かない。このドリュアスの 目を 顔を 姿を 見た瞬間身体が動かない。完全に人の姿をしているこの相手を手にかける事が出来ない。

俺には出来ない……………

「海斗、どけ！何魅了されてるんだよ。ドリユアスの能力の魅了だ！」

今度は背後からルシエの声が聞こえて来た。

魅了？俺は魅了されたのか？

ルシエの言葉の意味を理解する事に、少しだけ時間を要したが、俺はその言葉に従い攻撃をやめて横に回避した。

「精霊風情が海斗を魅了なんかしてるんじゃないぞ『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎がドリユアスを包み込み一瞬にして灰に帰した。

倒す事が出来て良かったが、俺の中には言い表す事の難しい感情が残されてしまった。

「海斗、ガードが甘いんじゃないのか？あの程度の精霊に魅了されるとはどうなってるんだ！」

「いや、どうなってるって言われても、目を見た瞬間身体が動かなくなっちゃったんだ」

「普段から私やシルを見ているくせに、あんな緑の髪をやつなんか。そんなに大人が良いのか？胸が大きい方が良いんだな？わたしだって……………」

ルシエのお叱りはもつともだ。敵に魅了されて攻撃出来なくなるとは情けない。それに幼女よりは大人の女性の方が良いのも否定は出来ない。

胸も無いよりはあった方が……

いずれにしても、初めてかかってしまった精神系のスキルは強烈だった。

今後かからない様に注意して臨むしか無い。

第308話 魅了（後書き）

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークと下部からのポイント評価を
お願いします。

第309話 覚悟

俺は今家で眠ろうとしている。

精神的にかなり消耗したのでドリュアスを撃破した後、みんなで相談して今日はもう引き上げる事にしたのだ。

家で晩ご飯を食べてからお風呂にも入って、疲れたので明日に備えて早めに眠る事にした。

灯りを消してから布団の中に入って目をつぶると、頭の中に今日倒したドリュアスの瞳が浮かんできた。

魅了の効果は戦闘時のみの一時的なものなので間違いなく影響は無くなっているはずだが、あの時感じた、感情は覚えている。

緑の髪の女性……

あの瞬間は、モンスターとは思えず、明らかに自分と同じ人間であるかのような錯覚を覚えて身体が動かなかった。その感覚がまだ俺の中に残っている。

今迄もモンスターが生き物であると言う認識は勿論あった。

そしてダンジョン探索もリアルであり、命の危険がある事もしつかりと認識出来ていた。

ただ、そのファンタジーやゲームの登場物のような見た目から俺の中でモンスターを倒す行為はVRMMOの中でモンスターを倒す行為と近い感覚だった。それ程抵抗感も無く倒せていたし、倒しても消えて魔核が残るだけなので、相手の死をそれ程意識する事は無かった。

ただ今回の事で漠然としていた認識がはっきりとしたものに変わった。

モンスターも生きている。

人型のドリュアスは勿論他のモンスターだって生きている。

それを毎日俺は狩っているのだ。

「そうだよな。当たり前だよな。あゝ」

しかもドリユアスのような完全に人型の敵を倒した事、おまけに魅了の効果でシンパシーを感じた状態で倒した事は、俺の精神にかなりの影響を与えたようだ。

このまま探索を続ければまたドリユアスにも出会うかもしれない。ドリユアスだけで無く、天使やシル達の同胞にも遭遇するかもしれない。

その時に俺は倒す事が出来るだろうか。

躊躇無く止めをさす事が出来るだろうか。

ドリユアスの瞳が脳裏をよぎる。

普段、人とろくに喧嘩もした事が無い俺が人型のモンスターの止めをさす。

「うう。あゝ。きついな……」

人型で無くとも命を絶っている事に違いはない。

今まで勢いと楽しいとだけで来てしまった部分は否めないが、自覚してしまった以上このままではいけない。

俺には明日から探索者を止める事はできない。自分勝手かもしれないが止める事が出来ない程にダンジョンの探索にハマり込んでいる。続ける以上避けては通れない。

そして俺が躊躇する事で他のメンバーを危険に晒す。メンバーそしてサーバントが危険に晒されている状況を思い浮かべる。

以前ベルリアと戦った時の情景が思い浮かぶ。

あの時に感じた、どうしようもない絶望感と焦燥感、そして俺を守るために傷ついたメンバーの姿。

今思い浮かべても自分への怒りが収まらない。

二度とあんな思いはしたくないし、メンバーにさせたくない。結論の出ないそんな事ばかり頭の中でぐるぐると考えていると既に深夜の1時30分になっていたので、何とか寝ようと無心を心がけて、うだうだしているうちにいつの間にか眠りについていた。

朝6時30分になり、目覚ましの音と共に目が覚めた。

「あゝ眠いな」

今日もパーティメンバーと一緒に13階層に潜る。

正直自分のやっている事に正当性を見出す事は難しい。

だけど、俺はこれからも探索者続ける事を決めてしまっている。

モンスターをこれからも狩る以上、罪悪感を感じる事もあるだろう。躊躇する事もあるかもしれない。

俺の出した答えは、今まで通りに続ける事だった。

今まで通り続ける事は自分のエゴを通す事だと思う。自分に都合の良い勝手な理屈を捏ねる事だと思う。

それにより俺の心が痛む事もあるだろうが、これは自分で決めた事への責任なのでしっかりと心に刻み込んで進んでいきたい。簡単に割り切れる事ではない事を理解したので、その上で俺はこれからもモンスターを倒しながらダンジョンを進んで行く。

第309話 覚悟（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第310話 リベンジ

俺は今13階層を進んでいる。

正直1日で気持ちの切り替えが完全に出来た訳ではないが、目の前の事に集中するしかないのでダンジョンを進んでいる。

「海斗、昨日ちょっとおかしかったけど大丈夫なの？」

「ああ、まあ、大丈夫。いろいろ考える事があって……」

「そう。悩みがあったら相談ぐらいのわよ」

「うん、まあ、とりあえず大丈夫だと思う」

昨日は余程精神的にきていたのか、ミクにも悟られていたらしい。間違ってもメンバーにも迷惑がかからないようしっかり集中して臨むしか無い。

「海斗、お前馬鹿だろ」

「ルシエ、急に何だよ」

「昨日のドリュアスだろ」

「なにを言ってるんだよ」

「顔と態度に出過ぎなんだよ。あれはただの敵だぞ、いちいち気にするだけ無駄だ」

「……………」

「見た目が人型なだけのモンスターだぞ。ゴブリンとかと大差無いぞ」

「そうは言ってもな。ゴブリンとは違うぞ」

「それはお前が女好きだからだろ」

「違うって。そうじゃない」

「まあ、女はわたしが片っ端から潰してやるから安心しろ」

ルシエにまで心配されてしまったが、随分と不穏な言葉だ。『女は片っ端から潰す』

別に男でも人型であれば同じことだと思うが、その場合はどうするつもりなのか……

「ご主人様、前方にモンスターです。頑張ってくださいね」

ここまでみんなに気を使われて頑張らない訳にはいかない。

向かって行くと、そこにはドリユアスが2体待ち構えていた。

どうやら精霊とはいえ火蜥蜴と同じようにドリユアスは1体限定のモンスターでは無いらしい。

「はっつ、ふっ」

俺は深呼吸をして気持ちを整える。昨日も考えたが、この道を進む限り避けては通れない。

「前衛にあいりさんとベルリアが立ってください。俺は後ろから右の奴を仕留めます。ヒカリンとミク、スナッチでフォローともう1体の足止めを頼んだ。シルとルシエは待機だ」

覚悟は決まっているが、目を見るとまた魅了されてしまう可能性があるので、俺はナイトプリンガーの能力を発動して、気配を薄める。自分自身の気配も薄めるよう意識をして、ドリユアスの正面から外れて、ドリユアスの意識を俺から外す。

意図を汲んだベルリアとあいりさんが正面から同時に斬り込む。

植物の盾により防がれているが、別方向からミクがスピットファイアを連射してドリユアスの意識を逸らす。

もう1体はヒカリンとスナッチで牽制してその場に留め置いている。

完全にドリュアス2体の意識は、俺から逸れた。
素早く音を立てないようにドリュアスの横を回り背後に近づく。

「ふ〜」

俺はもう一度大きく静かに息を吐き覚悟を決め、一気にドリュアスの背後迄踏み込んでからバルザードをドリュアスの背中に突き立て、切断のイメージを重ねそのまま横薙ぎに真っ二つに斬り裂いた。魅了はされていないが、突き立て斬り裂いた瞬間に俺の精神に大きな負荷がかかるが、覚悟していたので動きが止まる事はなかった。俺が1体倒すと同時にミクは攻撃を残りの1体に向け、あいりさんもその場から『アイアンボール』を放つ。それを口火にヒカリンも『ファイアボルト』を仕掛けたのでドリュアスの意識は完全に前方へと注がれた。俺はそのまま、大きめに迂回して背後に近づく。ベルリアも意図を汲んで前方から斬りかかっている。

「す〜っふ〜」

再度呼吸を静かに整えてから、完全に無防備となったドリュアスの背中に一気に踏み込み、バルザードを突き立て、先程と同じく切断のイメージをのせて一気に仕留めた。
ふ〜。今度はシルとルシェの力を借りずにドリュアスを倒せた。いつも以上に疲れたが、2体とも俺が止めをさせたので良かったと思う。

戦闘が終了してから、地面を見ると徐々にドロップアイテムが残されていた。

第310話 リベンジ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第311話 ドロップの種

「これ何だ？ドロップ アイテムだよな」

久々に残されていたドロップアイテムだが、どう見てもアイテムには見えない。

「ミク、これって何？」

「多分種じゃない？植物の種」

大きさは大体俺の拳大で、梅干しの種を大きくしたような形をしているので確かに種の様にも見える。

「これって食べられるのかな？」

「いえ、食べられるとは思えないわね」

「海斗さん、これを食べようって発想がすごいのです」

「そうは言っても食べる以外に何か使い道がある気がしないんだけど。これってアイテムとして使えると思う？」

「そうですね。敵に向かって投げると爆発するとか、食モンスター植物が飛び出すとかですかね」

「本気で言ってる？」

「すみません。多分無いですよ。冗談です」

手にとって見ても、硬くて大きい種と言う以外に特に変わった所も無さそう。

「海斗、多分なんだが、聞いたことがあるんだ。ダンジョンの植物は切り取って地上に持って帰っても、地上に根付く事はないが、ド

ロップアイテムとして持ち帰った植物については地上でも活動を続ける事があるそうだ」

「それじゃあ、これってダンジョンの植物の種って事ですか？」

「恐らくそうだろう」

「この種を持ち帰って地上で植えるとダンジョンの植物が育つかもしれないって事ですよね」

「そうなるな。そう言うドロップアイテムは一般人には全く必要とされないが、地上の研究者にはたまらないアイテムなんだそうだ」

「そうなんですか？それじゃあ、この変な種ってギルドで買い取ってもらえるんですかね」

「研究用にそれなりの金額で買ってもらえらると思う」

久々にドロップアイテムが出たと言うのに訳の分からない大きな種が残されてどうしようかと思ったが、そう言う事なら嬉しい限りだ。

「それにしても久々のドロップアイテムね」

「そうですね。本当にドロップしなくなりましたよね」

「ああ、それは私も感じていた。最近と言うか、このパーティになってからドロップが極端に少なくなつた気がするな」

「あゝ！あいりさんもそう思いますか」。私だけかと思ってたんですけど、やっぱりそうですね」

パーティメンバーがドロップアイテムについて話をしているのがしつかりと耳に入ってきて来るが明らかに会話の内容がおかしい。

確かに久々のドロップアイテムであるのは間違いないが、俺からするとドロップするペースはむしろ上がっているように感じる。

俺がK-12のメンバーとパーティを組むまでは特殊モンスターからアイテムドロップした以外は一度もドロップした事が無い。

こうして通常のモンスターからドロップする事自体が俺からするとすごい事なのだが、どうやらみんなの認識はそうでは無いらしい。

「海斗もそう思わない？」

「え、えっ？そ、そうかな。そうかもしれないな。どうかなく」
「その返事は何？何かあるの？」

「い、いや、何も無いよ。あるわけじゃないか。ははは……」
「海斗さん怪し過ぎますよ」

「もしかして海斗は余りドロップアイテムを手に入れた事がないのか？」

「いや、一応サーバントカードとバルザードとかを……」

「そういえば海斗さん、モンスターミートを手に入れた時に初めてだつて言つてましたよね」

「まさかレアなアイテム以外はドロップした事が無いって事？」

「ま、まあそう言うこともあるかもしれないな」

「そんな事つてあるの？レアアイテムつて言つてもレア度が高すぎない？しかもそれ以外は無いの？」

「はい……」

「もしかして、ドロップが少なくなったのって……」

「海斗さんの……」

「そんな事ありえるのか？」

「……」

恐らく、みんなの話を聞く限りドロップ率が下がったのは俺のせいでは無いだろうか？

俺の特殊体質？いや末吉パワーのせいでドロップ率が著しく下がってしまったのか？

俺はむしろ増えたと感じていたのだがこれはみんなのお陰で、俺の本来持つドロップ率がパーティ補正で向上したからなのか。

どう言う原理かわからないが、それなら説明がついてしまう。

俺のせいでみんなのドロップ率が下がってしまったとしているとしたら……

どうしよう。

「まあ、海斗っぽいわね」

「そうですね」

「まあ、個性だな」

「怒って無いの？」

「だって怒りようが無いじゃ無い」

「そうですね。ドロップは少なくなりましたがわたしは今の方が楽しいのです」

「そうだぞ、ドロップアイテム以上に海斗には世話になってるから」

なんと優しいお言葉だろう。やっぱり俺はこのパーティで良かった。俺の特殊体質を受け入れてくれるみんなの器の大きさが心に染みる。でも本当に俺は特殊体質なんだろうか。

第311話 ドロップの種（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第312話 レベル20

俺は遂にレベル20に達した。

ドロップアイテムに気を取られていたのだが、何気にステータスを確認するとレベルが上がっていた。

レベル自体には余り意味は無いのは分かっているが、やはりレベル20に達した事は1つの区切りとなる数字でもあり素直に嬉しい。このタイミングでのレベルアップは、恐らく遠征先のダンジョンでの経験値とこれまでの経験値が合わさって今レベルアップしたのだろう。

しかし、今回止めを2体とも俺が行ったので、経験値にラストアタックが関係しているのであれば少し複雑だ。

まあ、気に留めずにこれからもパーティで連携をとって頑張ってきていたい。

「みんな、俺さっきの戦闘でレベルアップしたみたい。レベル20になったよ」

「レベル20ですか。すごいのです」

「もう立派な中級探索者だな」

「私も早くレベル20になってみたいわ。そういえば何かスキルとか魔法は発現したの？」

ミクに言われて、再びステータスをじっくりと見てみる。

高木 海斗

ジヨブ アサシン

HP 70 75
MP 42 46
BP 71 76

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（微）

愚者の一撃

ステータスは軒並み良い伸びを示しているが、問題が発生している。

「あの〜ミクさん、スキルも魔法も発現してないんだけど、一番上にジョブって言うのがあるんだ」

「ジョブって何？」

「いや俺が聞きたいんだけど、ジョブって何？」

「どう言う意味？ジョブって言うスキルが発現してるって事なの？」

「海斗さんジョブって職業って意味じゃ無いのですか？」

「それは俺にもわかるんだけど」

「海斗、ジョブとだけ表示されているのか？」

「いや、それがジョブの所に『アサシン』と表示されています」

「それって……………」

普通に考えて、俺の職業が『アサシン』って事だよな。

ちょっと待ってくれ、職業『アサシン』ってやばすぎるだろう。

ポイントカードの申し込みとかの職業欄に『アサシン』って書いたら一体どうなるんだ？

多分通らないんじゃないだろうか。

しかもアサシンって日本語だと暗殺者だぞ。

俺は暗殺者なんかじゃ無い。誰も殺した事はないぞ。

しかも日本で暗殺者が合法だとも思えない。

「海斗さん、やっぱり『アサシン』だったんですね」

「いやいや、俺は『アサシン』なんかじゃ無いって」

「だってステータスにジョブ『アサシン』って出てるんですよ」

「それは出てるけど」

「じゃあやっぱり『アサシン』じゃ無いですか。元々忍者がアサシンぽいなとは思ってたんですよ」

忍者かアサシンぽい……ヒカリン、それはゲームの中の話では無いですかね。俺は、現実の世界のステータスに『アサシン』って出てるんですよ。

「海斗、ジョブとアサシンの詳細は見れないの？」

「やってみるよ」

俺はステータスのジョブとアサシンの所に意識を向けた。

ジョブ……対象者が特定の動作を行う場合に補正がかかる。

アサシン……闇と共に無音で敵を葬り去る者。

なんだこれ……

ジョブは分かった。恐らくジョブに該当する職業に沿った行動を行う時に補正がかかるのだろう。

つまり俺の場合は『アサシン』としての行動を行った時に能力補正がかかると言う事だろう。

しかし問題は『アサシン』だ。闇と共に無音で敵を葬り去る者。これは一体なんだ？

闇と共に俺、闇の住人みたいだけど。しかも無音で敵を葬り去

る者って何だ？

「海斗、どうだったのよ」

「それが、見えるには見れたんだけど……」

「どうだったのよ。歯切れが悪いわね」

「うん。それが……」

これを普通に話して大丈夫だろうか？

闇と共に無音で敵を葬り去る者……。

第312話 レベル20（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第313話 アサシン

俺は今レベルアップした自分のステータスを確認してる。

「それが、確認は出来ただけど……………」

「どうだったのよ。歯切れが悪いわね」

「うーん。ジョブはやっぱり職業の事みただけど、恐らく該当する職業に沿った行動を行う時に補正がかかるっばい」

「それじゃあ、海斗の場合『アサシン』に沿った行動を取った場合に補正がかかるって事？」

「まあ、そう言う事だと思っただけど」

「海斗さん『アサシン』に沿った行動って暗殺ですよね」

「ヒカリン、暗殺って……………」

「だって『アサシン』って暗殺者の事ですよ。暗殺者といえば暗殺ですよね」

「いや、俺は暗殺者じゃ無いよ」

「だが、海斗のジョブは『アサシン』なのだろう？」

「それはそうなんですが……………」

メンバーは間違った事を言っているわけでは無いので言い返す事が出来ない。

「それで『アサシン』ってあの『アサシン』なの？」

「あのとて言うのがどれの事か分からないけど、多分そう」

「じゃあ本当に暗殺者なんだ」

「いや暗殺者じゃなくて闇と共に無音で敵を葬り去る者だよ」

「はい？」

「いや、だから闇と共に無音で敵を葬り去る者だ」

「海斗さん、大丈夫ですか？レベルアップしておかしくなっちゃったんですか？」

「おかしくなつて無いよ」

「海斗、余りにその説明は厨二感が出過ぎていると思うのだが」

「いや、だつて本当にそうなんですよ」

「海斗……………」

「本当だつて、本当にステータス画面にそう出てるんだつて」

「本当なのですか？」

「本当だつて。こんな嘘ついても仕方ないだろ」

「ご主人様。闇と共に無音で敵を葬り去る者ですね。カッコいいです。さすがです」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいよ」

「しかし海斗が『アサシン』か。呑気な『アサシン』もいたもんだな」

ルシエの声はいつも通りスルーしておくが、そもそも探索者のステータスにジョブシステムがあるなんて聞いた事がない。LV20になつたら、みんな何かのジョブについているのか？

「それより俺は知らなかったけど、ジョブシステムつてあつたんだな。みんな知つてた？」

「いえ、聞いた事ないわ」

「私も無いのです」

「前にLV20を超えた探索者と臨時パーティを組んだ事があるがそんな話は出て来なかつたな」

「そうですね。でも俺英雄目指してたんですよ。どうせジョブにつくなら勇者とか聖騎士とかせめて暗黒騎士とかが良かったです」

「海斗さん…………それはあまりに厨二感が出過ぎでは……………」

「海斗が勇者は厳しいんじゃない？」

「そうだな聖騎士は憧れはするが、それはあくまでゲームの話じゃ

ないか？」

「いやそうは言いますが、『アサシン』も十分ゲームっぽいですよ。俺のジョブは『アサシン』なんだって人に言ったらどう思いますか？」

「確かに危ないな。聖騎士ですと言つのと変わらない。すまなかつた」

冗談抜きで聖騎士とかのジョブが発現したら俺はみんなに自慢していたかもしれない。目標である英雄に一步近づいたと納得出来たかもしれない。

ただ実際には『アサシン』だ。どう考えても英雄から離れて行っている気がする。

『アサシン』で英雄ってそんな事あるのだろうか？

何となく悪くてダークなイメージしかない。どう考えても主人公にはなれないキャラクターな気がする。むしろ敵に出てきそつだ。

「海斗さん、もしかしたらジョブシステムは重度の厨二病の人にだけ発現するのかもしれないよ」

「ありえるわね」

「いやいや、ありえないでしょ。それに俺は重度の厨二病なんかじゃ無いよ。みんなだつてカードゲームとかするんだから同類だよ」

「私も聖騎士とかのジョブが発現するのだろうか？」

「あいりさん、多分海斗だけです。海斗が特殊なんですよ」

「そうですね。何しろ『黒い彗星』ですからね。『アサシンは黒い彗星』って何かアニメのタイトルみたいじゃ無いですか」

「ああ確かに」

完全に遊ばれている。全く悪意は感じないので、怒りは感じないがメンバーに弄ばれている。

せめてこのジョブに何かの効果がある事を期待したい。

第313話 アサシン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第314話 アサシンの力？

俺は今13階層でジョブの検証をしている。

俺のステータスに発現したジョブと『アサシン』の意味は理解出来たが、効果についてはやってみないと分からないので、探索のついでに検証してみることにした。

検証してみると言っても、スキルと違って呪文がある訳でも無さそうなので戦ってみるしかない。

「そろそろ、敵に遭遇しても良さそうだけどな」

「そんな都合良くはいかないわよ。私達も『アサシン』のジョブに興味があるからみんながよく見させてもらっわね」

「あんまり見られると緊張しちゃうよ」

「『アサシン』って緊張とは無縁な気がするんだけど」

「いや、あくまでもステータスが『アサシン』なだけで本物じゃないからな」

まあ俺も含めて聞いたことが無いステータスの表示と良く知られている『アサシン』に興味を持つなど言う方が無理がある。しかも知識としての『アサシン』は大体強い事が多いので尚更期待されるのも分かるが、もちろん本物では無い俺はみんなに見られると緊張してしまう。

「ご主人様、いよいよですよ。前方にモンスターが3体います。頑張ってくださいね」

「まあ、頑張りようが無いけど頑張ってみるよ」

やはり待っていても全く近づいて来る気配がないので全員で向かっ

て行くと、通常？のトレントが3体いた。

「それじゃあ、俺が1番左側の奴をやって見るからミクがフォローをしてくれ。ベルリアとあいりさんは残り2体を足止めお願いします」

指示を出してからすぐに戦闘態勢に入る。

トレントに向かって駆け出すが、直ぐに木の杭が飛んできたので避けると同時にバルザードの斬撃を飛ばす。

問題無く、いつも通りの動作でトレントとの距離を詰めて行くが、特に実感としての変化は無いような気がする。

別に威力が増したり、足が速くなったりはしていないと思う。

後方からミクがスピットファイアを連射して目の前を遮る蔦を焼き払ってくれたので、そのまま突き切ってトレントの幹をバルザードで斬り落とした。

上手く倒せたがやはりいつもと同じような気がする。それほどこのジョブの効果が無いと言う事だろうか？

そのまま俺はナイトブリンガーの効果を発動させて、残りのトレントの背後に迫ろうとするが、何となく身体が軽い気がする。軽いと言うか、自分が速く走れている気がする。正確には自分が速く走れているのか分からないが周囲のモンスターやメンバーの動きが若干だがゆっくりに感じる。

少しだけいつもと違う感じなので劇的に変わったと言う事は無いが、何か違う。

違和感を感じながらも、トレントの背後に至りそのまま飛び込んでバルザードを突き刺すが、やはりここでも飛び込んだ感じがいつもより素早く動いている気がする。

バルザードによる一撃は問題無くトレントを倒したが、これ自体はいつもと同じような気がする。

再び最後の1体を目指して走るが、やはり違和感を感じる。そして、

先程は気づかなかったが、何時もに比べて走っている時の足音が減っている気がする。

全くの無音では無いが、いつもは全力で駆けるとそれなりの足音がしていたが、今はそれ程感じない。

これは明らかに『闇と共に無音で敵を葬り去る者』の効果が出ている気がする。

実際には無音では無いし、足音にまで反応を見せるモンスターがどれ程いるか分からないので効果としては微妙かもしれないが、確かに変化がある。

そのまま最後の1体の背後に立ち、あいりさんに意識が向いているトレントの幹を背部から斬り落としたが、その瞬間も違和感があった。

先程のトレントよりもバルザードの刃がスムーズに通った気がする。ただ2体目の時には、この感覚は無かったのでもしかしたら個体差による物で『アサシン』によるものでは無いかもしれない。

いずれにしてももう少し検証が必要だと思う。

第314話 アサシンの力？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第315話 時間加速？

「どつだったのよ」

「どつって、外から見分らなかった？」

「いつもと同じに見えたけど」

「はい私にも同じに見えたのです」

「どつという事だ？俺には実感があつたが周りには同じに見えた様だ。劇的に向上したわけでは無いので外から見たのでは変化を感じ取れないのか？」

「俺的には結構違つただけど」

「どつ違つたのよ」

「正面から戦つた時は変化無かつただけど、ナイトブリンガーを使って背後から仕留めようとした時に、速く動けたり、足音が減つたりしたと思うんだけど」

「そうなの？全然気づかなかつたわ」

「そうか、もしかしたら俺の気のせいかもしれないからもう一度やってみるよ」

「ミクやヒカリンに違いが分からないと言われて自信が無くなって来たのでもう一度検証してみる事にする。」

「またダンジョンを奥へと進んでいくがしばらく歩くと」

「ご主人様、敵モンスターです。2体ですが動きが無いのでトレントだと思えます」

「それじゃあ、みんなさつきと同じでお願いします。あいりさんとベルリアが対応している所を俺が後ろから仕留めてみます」

俺達はさっきと同じ要領で倒すべくモンスターの方へと向かった。しばらく進むとすぐにモンスターを発見する事が出来たが、目視できるモンスターはビッグトレント1体だけだ。シルはモンスター2体と言っていたのもう1体いるはずだが、ここからは見当たらない。

「みんな、もう1体が見当たらないんだけど、誰か視えてる？」

誰からも返事が無い。ここから見る限り草トレントらしき大きな草も生えて無さそうだ。

「もう1体が見当たらないから、シルとルシエはもう1体が現れたらいつでも対処できるように後方左右で待機しておいてくれ。ビッグトレントは残りのメンバー全員で当たろう」

ビッグトレントを目の前にして放置も出来無いので、不測の事態にも対応出来るよう指示を出して戦闘に臨む。

ミクとヒカリンが後方から攻撃をかけると同時にベルリアとあいりさんが駆け出す。

俺も少し間を置いてからナイトプリンガーの能力を発動してから、大回りに避けて駆け出す。

やはり周りの景色が若干だがゆっくりになった気がする。

本来速く走れば、周りの風景はその分速く過ぎ去って行く気がする。なのでどうやら俺が速く走れているのでは無い気がする。

感覚的に周りが遅くなったと言うか自分が周りより速く動いている様な錯覚を感じる。感覚的な部分だけが俺だけ加速して周りの時間経過がゆっくりになった感じがする。

感覚的な変化だから周りからは俺の変化が見て取れなかったのだらう。

そして足音は確実に軽減されている。

他のメンバーと交戦しているビッグトレントには全く気取られる事無く後方まで来る事が出来たので躊躇する事無くそのまま背後から飛び込んでバルザードに切断のイメージをのせて斬りかかる。

大木と言って良い幹の太さがあるのでバルザードの能力を使っても一気に切断とはいかず、幹の1/3程度の位置まで剣がめり込んで止まった。

これは前回感じた威力が増したような感じはしない。

しないが、ビッグトレントは後方から突然斬られた事に反応して一気に攻撃を後方に集中して来たので、その場を飛び退いて攻撃を回避する。

流石に目の前で敵に意識されるとある程度認識されてしまうので、俺の居場所に近い所を攻撃してくるが、やはりビッグトレントの攻撃が微妙に遅い感じがするので、少しだけ余裕を持って避ける事が出来た。

後方の俺に攻撃の意識が集中した所をベルリアとあいりさんが突っ込み『アクセルブースト』の2連撃と『斬鉄撃』を俺の斬り込んだ部分に向けて放ち、そのまま斬り倒す事に成功した。

今回はかなり良い倒し方が出来たのでは無いだろうか。

そして何となくだがこの『アサシン』の能力も分かってきた気がする。

第315話 時間加速？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第316話 大きな人参

俺は今ビッグトレントを倒した所だ。

上手く連携してビッグトレントを倒したが、なぜかもう1体は全く攻撃して来なかった。

「みんな、もう1体を探してくれ。絶対に気を抜かないで。何処かに潜んで此方を伺ってるのかもしれない」

全員で周囲を見て回るが、それらしき敵は見当たらない。

「いないよな。一体どこにいるんだ？」

「いませんね」

周囲に芝生や草は生えているが、どう考えてもトレントと呼べる程の大きさは無い。

よく見ると端の方に少し大きな草が生えている。

全員で近づいて見てみるが、これはあれだな。

「これって大根の葉っぱかな」

「かぶじゃないかしら」

「大根とかかぶとはちよつと違う気もするが」

「これが敵って事は無いですよね」

「それは無いだろう。埋まつてるだけで出て来る気配は無いようだ」

「これが敵だとしたら引き抜いたら倒せるんじゃない？」

「そんなもんかな」

明らかに敵とは違うように思えるが、他には何も無いのでミクに言

われた通り引き抜いて見る事にした。
掴んでみるが、ただの葉っぱだ。
思いつきり力を込めて引き抜きにかかるが

「うっつ。抜けない」

「私も手伝うわ」

今度は2人で同時に引っ張るが抜けない。思いの外深くに埋まっているのかもしれない。

「私も手伝おう」

今度は3人で同時に引っ張るがやはりびくともしない。

「それじゃあ私も手伝いますね」

今度は4人でそれぞれ葉っぱを掴んで一気に抜きにかかるが抜けない。抜けはしなすがさつきまでより手応えがありもう少しで抜ける気がする。

「ベルリアも一緒に頼む」

「わかりました」

今度は5人がかりで引き抜くことにした。これ以上は持つところが無いので5人で抜けなければ諦めるしか無い。

「うっん！おっ少し動いたぞ。もう一息じゃ無いか？」

全員で渾身の力を込めて抜きにかかる。あまり畑仕事などした事は無いが、みんなでやると重心に帰ったようでなんか楽しい。

もう少しで抜けそうだがあと少しだけ力が足りないようだ。

「シルとルシエも後ろからでいいから引っ張ってくれるか？もう少しだと思っんだ」

今度はシルとルシエが俺を抱えるような形になり全員で力を込めた。今度はズツと擦れるような感覚が有り抜けて来た。

「よし、抜けてきた。一気に引っ張るぞ！」

そのまま一気に引き抜きにかかるが出てきたのはでかい人参？のようだ。

頭の部分しか見えないが西洋人参ではなく漢方とかで使う人参の巨大なやつに見える。

抜いても食べられる訳では無いので意味は無さそうだが折角なので全部抜き切ってしまうおうと思う。

「おりゃ〜！」

俺の掛け声と共に大きな人参は一気にズルツと抜けた。抜けた人参の全体を見ると軽く1Mは超えている。

これは抜けない筈だ。先端は2股に分かれていますので余計抜け辛かったのだろう。

「でかいなあ。これってダンジョン産の人参かな」

「そうね、でも敵でもなさそうね」

「ただの植物だったみたいですね」

「こんなに大きな人参は地上には無いな」

抜いた人参の大きさにメンバーも驚いているが、これは敵では無か

第316話 大きな人参（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第317話 失敗

「う、ううん」

だんだん意識が覚醒してきた。

俺は……

あの大きな人参をみんなで引き抜いてから……

あの人参が叫び声を上げた瞬間に意識が無くなったのか？

と言う事はまだ敵がいるのか？

ぼくとする頭で現状を整理していきながら、やばい状況に気がついて一気に目が覚めた。

目を開けると、目の前にはシルとルシエが立っていた。

「シル、ルシエどうなった？ 敵はどうなったんだ？」

「ご主人様、安心して下さい。私とルシエで敵モンスターは倒しておきました」

「敵モンスターってあの人参か」

「あれはマンドラゴラだったようです」

「マンドラゴラか、聞いた事あるな。抜いたら叫び声をあげるんだっけ」

「そうです。実際には命を奪う程の力は無かったようですが、私とルシエ以外の皆さんは気を失われてしまったようです」

そうか、シルとルシエ以外は俺と同じくマンドラゴラの叫び声で気を失ってしまったらしい。

ちょっと待て、シルとルシエ以外って事はベルリアはどうなった？

冷静になってから周囲を見渡すと地面にメンバー達が倒れており、そこにはベルリアも含まれていた。

「シル、ベルリアって何で倒れてるんだ？」

「それは、マンドラゴラの叫び声にやられてしまったからですよ」

「それは分かっているんだけど、シルとルシエは大丈夫だったんだよな。ならどうしてベルリアはダメだったんだ？」

「そんなの決まってるだろ。ベルリアが弱いからだよ。私達と一緒にするな」

「そういうものか」

「当たり前だろ！」

俺のパーティにはベルリアがいるから精神系の攻撃をくらっても大丈夫だと思っていた。

ベルリアが『ダークキュア』でリカバリーしてくれれば立て直せる。ベルリアには精神系の攻撃は通じないとばかり思っていたが、実際には効いてしまった。

今回も、シルとルシエが健在だったから問題とならなかったが危なかった。

ビッグトレントを先に倒しておいたので意識を失った後に攻撃されずに済んだが、かなりやばかった。

それにしても、俺が人の事を言える立場には無いがベルリア……………

「マンドラゴラって叫ぶだけの能力だったのか？」

「いえ、叫んだ後に私達が倒れないのを見てから、歩いて逃げ出すとしたので仕留めました」

「マンドラゴラって歩けるのか」

「はい、2股に分かれた所を足代わりに結構速かったです」

「そうなんだ。俺のマンドラゴラのイメージってかなり小さいと思っただからまさか、あれがそうだとは思いませんでした」

「それは仕方がない無いですよ。あれは人參と呼ぶには大きすぎます」

「そもそもマンドラゴラって人参なのか？」

それはともかく他のメンバーを起こさなければならぬ。
やはりベルリアからだな。

「おい、ベルリア起きろ！おいっ！」

ベルリアの前に立って大きな声で呼びかけてみが全く反応が無い。
まさか死んで無いよな。死んだら消えるはずなので寝ているだけか。
俺はベルリアの肩を揺すって再度呼びかける。

「ベルリア起きろ！」

余程深い眠りについているのか全く反応が無い。

仕方が無いのでベルリアのほつたを結構強めにバチバチ叩いてみると、ようやく目を覚ました。

「う、うくんマイロード、敵は？敵はどこですか？」

「うん大分前に退治済みだ」

「何と言う事だ、不覚にも敵を逃すとは！」

「いや逃してない。シルとルシェが倒してくれたんだ。お前は気を失ってたんだよ」

「なっ！そんなバカな！」

「いや本当だから。マンドラゴラの叫び声を聞いて気を失ってたんだよ」

「そんなバカな……………」

「ベルリアって案外精神系の攻撃に弱いのか？」

「いえ、たまたまです。次は必ず耐えて見せます」

「ああ、そう。それじゃあ他のみんなを起こしてくれるか？」

その後1人ずつに『ダークキュア』を使用してスムーズに目を覚ました。全員状況が解っていなかった。マンドラゴラの事を説明した。

全員がイメージしていたマンドラゴラの大きさとかけ離れていた。で驚きの表情を見せていた。

今後はダンジョンの物にはあまり触らないように気をつけたい。

第317話 失敗（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第318話 1階層で

俺は放課後に1階層でスライムを狩っている。

昨日はマンドラゴラの叫び声の影響か、かなり疲れてしまったようでご飯を食べた後にすぐ眠ってしまった。

「シルとルシエはあのマンドラゴラの叫び声を聞いても何とも無かったのか？」

「そうですね、確かに不快でうるさい声でしたが、それ以外は何も「当たり前」たる。わたしがあんな低級なスキルでどうにかなるわけがないだろ」

「でもベルリアはしつかりダメだった所を見ると、悪魔だから大丈夫だったって訳じゃ無いよな」

「ベルリアは修行が足りないんだ。修行が」

「はっ、申し訳ございません。返す言葉もありません」

やはりこの2人は特別にレジストしたとかそんな感じでも無い。

どちらかと言うと何とも無かった感じだ。種族の違いによるものでも無さそうだ。

1番可能性が高いのはBPの違いだろうか？

「やっぱり精神攻撃に耐えるにはレベルアップするしか無いのかな」

「そうですね。レベルアップして強くなればそれだけダメージを受ける確率は減ると思います」

「精神を鍛えるんだよ。精神の鍛え方が足りないんだ。まずその甘々な根性から叩き直した方が良いんじゃないか？ドリュアスにも魅了されたし」

「そ、それは俺じゃなくても魅了されるって。強力なスキルだった

んだよ」

「女の胸ばかり見てるから魅了なんかされるんだよ。わたしは全然されなかったぞ」

「いや、胸は関係ないだろ。瞳を見たら影響を受けたんだから、胸じゃない」

胸は関係ない、ドリユアスは確かに胸があった気もするが、マンドラゴラは胸など無かった。マンドラゴラの性別も分からず仕舞いなので、それも関係無い。

精神を鍛えるって言われても滝行でもすればいいのか？それともお寺にでも籠もればスキル耐性がつくだろうか？

「ベルリアは精神攻撃には強そうだと思ったんだけどな。もしかしたらドリユアスにも魅了されたりするんじゃないか？」

「マイロードそれは有り得ません。私が敵に魅了されるなどと言う事がある筈が無いではないですか」

「俺もそう思ってたんだけどな。意外に精神攻撃に弱いのが分かつちゃったからな。お前がやられちゃうと回復役が居なくなつて全滅も有り得るんだよ。何とか精神を鍛えてくれよ」

「それはもちろんです。頑張ります」

いつもの頑張りますが、あまり期待はできなさそうだ。

だが冗談抜きでベルリアが倒れるとやばい。

「念の為に、シルとルシエに低級ポーションを1本ずつ渡しておくな。ベルリアが倒れたらまずベルリアに使ってくれ。『ダークキュア』が使えれば何とかなるだろ。もう1本俺も持つてるから危ない時は迷わず使ってくれ」

「えーベルリアに使うのか？勿体無くないか？」

「姫……頑張ります」

「まあ、危ないメンバーがいたら臨機応変に使ってくれ」

今すぐに出来る対策はこれぐらいのものだな。後はドリユアスとは目を合わせない。そしてマンドラゴラは抜かない。

その後スライムを狩って回っているが、レベルアップに伴うBPの増加で殺虫剤ブレスも若干だがパワーアップしている。

流石にレベル20まで上昇するとスライム相手には自身の能力の上昇を実感できる。

あっさり倒せて自分が無敵になったような錯覚と、さくつと倒せる爽快感とを同時に感じる事が出来る。

13階層はそれほど敵の数が多い訳では無いので魔核の回収ペースは12階層とくらべても落ちており、活動に支障をきたさないようにその分平日の1階層でしっかりとカバーしておきたい。

移動の合間を縫ってベルリアとの訓練も続けているが、レベルアップによりBPはかなり近づいて来ているにも関わらず全く歯が立たない。

精神的な強さもだが、やはりBPだけで強さを図る事はできないと言う事だろう。

第318話 1階層で（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第319話 レア

今日は水曜日だが俺はギルドに来ている。

日曜日は全員が疲れてしまい来る事が出来ずにいたが、ドロップアイテムの事を思い出したのでメンバーに連絡を取って今日来る事になった。

あいりさんは用があるとの事だったので3人で来ている。

いつものように日番谷さんの窓口に行つて対応してもらつた。

「今日は買い取りでしょうか？」

「そうです。買取希望と相談というか聞きたい事がありました」

「そうですか。では買取からさせて頂きますね」

「まずはこれなんですけど」

俺はドロップした巨大な梅干の種のような物をリュックから取り出して机の上に置いた。

「これは、ダンジョン産の植物の種ですよ。かなり珍しい物なので良い値段で買取できると思います」

「この種って何に使うんですか？」

「基本研究用ですね。発芽させた植物は地上の物とは異なるので色々研究材料となるようですよ」

「そうなんですね」

「ダンジョン産の植物は生命力が強い場合も多く、薬や医療分野での転用が研究されたりする事もあるようです。私には難しすぎてよく分からない分野ですけどね」

「まあ、役に立つなら良かったです。後は魔核ですね」

俺は10階層から13階層で確保した魔核20個ほどを取り出して渡した。

「それでは暫くお待ちくださいね」

日番谷さんが種を鑑定に持って行っている間俺達3人は待つ事しかできないが、ミクとヒカリンと3人していると相変わらず視線を感じる。

今日は装備を身につけていないので装備で『黒い彗星』だとはバレないはずだが視線を感じる。

まあ今日の視線は俺ではなくてミクとヒカリンに向けられたもの様な気もするので、俺が自意識過剰なのかもしれない。しばらく待っていると日番谷さんが帰ってきて

「それでは総額で91万円となります」

「結構行きましたね」

「そうですね。やはり種が高額となっております。半分以上は種の値段になります」

「それじゃあそれをメンバー4等分でお願いします」

「かしこまりました。それで相談というのは？」

「それなんですけど、日番谷さんジョブって知ってますか？」

「ジョブですか？探索者のジョブですよ。知らない事は無いですがもしかして」

「そうですね。俺のステータスにジョブが現れたんですよ。これって一般的なんですかね」

「高木様おめでとございます。流石ですね。ジョブですが一般的ではありません。ほとんどの探索者にジョブは現れていませんがレベルの問題でも無いようです。かなり珍しいレアステータスです」

「レアですか」

「そうですね間違いなくレアです」

まさか探索者になってからレアと言う言葉を聞くとは思っていなかった。

レアとはモブの対極に位置する言葉では無いか。俺がレア……
と言う事は俺はもうモブでは無いのでは無いだろうか？モブではなくレア……

その特別な響きが俺の身体を貫く。

俺は遂にモブからレアにランクアップしたのか？

「高木様、良ければジョブの職種を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ああ、俺のジョブは『アサシン』です」

「『アサシン』ですか！私はそのようなジョブを聞いた事がありません。スーパーレアじゃ無いでしょうか？」

スーパーレア……レアの更にスーパー。俺は一気にスーパーレアまでランクアップしてしまったのか。

「ステータスに『アサシン』の注釈があるかと思うのですがお聞きしてもよろしいですか？」

「それは『闇と共に無音で敵を葬り去る者』です」

「『闇と共に無音で敵を葬り去る者』ですか」

やはりこの文言を他人に伝えるのは抵抗感がある。

「さすがは『アサシン』です。期待を裏切らない内容ですね。まさに暗殺者ですね……」

日番谷さんから、まさに暗殺者という言葉が聞こえてきたが俺は断じて暗殺者では無いぞ。普通の高校生だ。

第319話 レア（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第320話 レジストリング

俺は今ギルドで日番谷さんと話している。

「ジョブってやっぱりあった方がいいんですよ」

「もちろんですよ。流石は今売り出し中の『黒い彗星』です。期待を裏切りませんね」

「いや日番谷さん、売り出して無いです。それに『アサシン』ですよ」

「『黒い彗星はアサシン』ってアニメの題名になりそうじゃ無いですか。黒い彗星とアサシンっていい感じですよ」

「いい感じですか？」

「黒とアサシンで悪役っぽいじゃ無いですか」

「俺別に悪役を目指しているんじゃないんですよ」

「いずれにしても『アサシン』はレアだと思いますので良ければ随時報告を下さい。大体ジョブが発現した探検者は上位探検者になる場合が多いので楽しみですね」

「分かりました。頑張ります」

とりあえずレアらしいのでこれから一層頑張りたいと思う。

「海斗よかったわね。ジョブってレアなのね。しかも『アサシン』はスーパーレアだって」

「やっぱり『黒い彗星はアサシン』ですよ」

「でもまだ実感としてはそれほど恩恵を感じないからこれから役に立てばいいと思うけど」

「それにしてもやっぱり見られてるわね」

「ミクとヒカリンが見られてるんだろ」

「わかってないわね。『黒い彗星』に決まってるじゃ無い」

「いや、今は黒い装備つけてないし違うと思うけど」

「黒じゃなくても『アサシン』ですからね。注目度もアップですよ」

まだ誰にも『アサシン』とは言っていないから俺であるはずは無いのに、今日は2人共随分と控えめで自己評価が低い気がする。

「それじゃあこの後どうしようかな。俺はダンジョンマーケットに行ってみようと思うんだけど」

「じゃあ私も行くわ」

「一緒に行くのです」

念の為に低級ポーションをもう1本買っておきたかったのでダンジョンマーケットに向かった。

よく考えると3人でマーケットに行くのは初めてな気がする。

しばらくして到着したので早速低級ポーションを10万円で購入する。

「海斗さん低級ポーションいっぱい持って無かったですか？」

「この前の件があつて俺だけ持つてるのも危ないと思ってシルとルシエに1本ずつ持たせたんだ。だから俺の分を1本追加したんだよ」

「あゝ前はみんなやられちゃいましたもんね。精神系の攻撃をレジストするマジックアイテムとか無いんですかね」

「多分あると思うけど全ての攻撃に対応しているようなのは無いんじゃないかな。あとは値段が高いと思う」

「一応聞くだけ聞いてみましょうよ」

「わかったよ」

店員さんをつまえて聞いてみる。

「精神系の攻撃を防ぐ様なアイテムって有りますか？」

「ありますよ。ただほとんどのアイテムは1回限りの使い捨てになります。それと防ぐスキル毎にアイテムが違います」

「見せてもらって良いですか？」

店員さんが連れていってくれたのは指輪が並んだコーナーだった。指輪を見るとそれぞれレジスト出来るスキルの種類が値札の横に書かれている。

値段を見ると魅了が20万円気絶が50万円とある。

「これって身に付けるだけで効果があるんですか？」

「そうですね。ただし相手がスキル発動したらオートで即反応しますので、実際には防ぐ必要がない場合でも消費されてしまいます」

「それは痛いですね。かかりそうな時だけ発動したりしないんですね」

マジックアイテムも一方的に俺らに都合の良いようには作られてはいないようだ。

ただこの前の事を考えると……

「すみません。この気絶耐性の指輪を1個ください」

「えっ、海斗これ買うの？50万円よ」

「一回でダメになるかもしれないですよ。しかも無駄になるかもしれないんですよ」

「いいんだよ。この前みたいな事が防げるなら安いものだ。いや安くは無いな。高いけどみんなの命の代わりになってくれるかもしれないだろ」

「お客様、こつ言つのもありますが」

そう言つて店員さんが見せてくれたのは即死耐性の指輪だった。が値

段は1000万円だった。

死んでからでは買うことは出来ないが流石に使い捨てで1000万円は払えない。

出来ればこれはいつの日かドロップして欲しい。

第320話 レジストリング（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第321話 魔剣の砥石

俺は今ダンジョンマーケットで買い物をしている。

気絶をレジストするリングを50万円で購入したので当然指輪を指にはめないといけないのだが、俺は生まれてから1度も指輪なんかした事がない。

むしろつける事に抵抗があるが仕方がない。

指にはめてみようとするが指輪の大きさの問題で薬指にしかうまくフィットしなかった。

「いいんじゃない？高額だったけどデザインはいいと思うわ」

「彼女さんとお揃いのリングにするといいのでは無いですか？」

「いや、彼女じゃないし、50万円の地上では意味を成さない指輪貰っても嬉しく無いだろ」

「海斗さんお揃いって事に意味があるのですよ、分かって無いですね」

「指輪は、ハードルが高すぎる。しかもお揃いって無理……」

「『アサシン』のような心で臨めばなんて事無いのでは？」

「俺、地上では普通の高校生だから」

指輪を普段からつけるわけにはいかないので、週末のダンジョン限定で使用するつもりだが無くさないようにしっかり保管するようになりたい。

流石に50万円の指輪を落としたりしたら凹む。

「2人は何か買うものはないの？」

「特には無いわ」

「私もついて来ただけなのです」

「俺も特に必要なものは無いんだけど折角だから武器を見ていっていいかな」

そう言っつていつものおっさんの店まで向かった。

「こんにちは。武器を見せてもらっつていいですか？」

「おお、坊主じゃね〜か。何だ？今日はいつもの別嬪なお姉ちゃんと一緒にゃね〜のか？しかも2人？」

「ああ彼女達はパーティメンバーなんですよ」

「坊主、実はモテたりするのか？普段はいつものお姉ちゃんと一緒にパーティはその女の子2人と一緒にハレム状態じゃね〜か！」

「いや違います。そんな事有る訳がないじゃないですか。いつもの子は買ひ物友達で彼女はパーティメンバーです」

「坊主、マジか　お前モテなさそうだもんな。いろいろよく考えてみた方がいいぞ！」

相変わらず失礼なおっさんだ。大きなお世話としか言いようがない。

「それより武器をお願いします」

「ああ、いいのが入つてるぜ。高いけどな」

そう言っつておっさんが奥から取り出して来たのは剣が一振りと銃？だった。

「これって何ですか？銃にしては大きすぎじゃ無いですか？」

「これはスゲ〜ぞ！小型の魔核ランチャーだ」

「ランチャーってミサイル見たいなの撃ち出す奴ですか？」

「そうだ。細かい照準が難しいし連射出来ないのが欠点だが威力は魔核銃の比じゃないぞ」

小型とは言え両手を使わないと無理っぽいので、メインウエポンとして使うのだと思うが、流石に使い勝手が悪過ぎる気がする。大型モンスター限定用じゃ無いだろうか。

「すみません。流石にこれはちょっと無理です」

「そうか？火力不足が一気に解消の凄い奴だぞ」

「ところでそっちの剣は何ですか？普通の剣に見えますけど」

「おおこっちの剣は魔剣だ！火属性の魔法が封入されているから普段はこんな風だが、燃えやすい敵を斬ると斬り口が燃え上がるぞ。

それとこれは魔剣用の砥石もセットしてサービス価格1900万円だ。どうだ？」

「どうだと言われても無理に決まってるじゃ無いですか。家が買えますよ。あと魔剣用の砥石って何ですか？」

「魔剣も普通の剣と同じで手入れが必要だからな。手入れしないと斬れ味が落ちるし最悪折れたり欠けたりするんだ。魔剣用の砥石は魔核をパウダー状にしたものを練り込んだ砥石の事だぞ」

「えっ！？魔剣って手入れが必要なんですか？それに折れたりする事あるんですか？」

「当たり前だ。魔剣だって剣なんだから使えば痛むに決まってる。手入れが必要に決まってるだろうが」

「そうなんですか」

知らなかった。魔剣は普通の剣と違って折れないものだと思い込んでいた。

バルザードも手に入れてから一度も本格的に手入れをした事が無い。危なかった。バルザードが折れたら俺はどうしようも無くなるどころだった。

「海斗ってバルザードの手入れってた？」

「いや、した事が無かった。すみません、この魔剣用の砥石だけっ

「て売ってるんですか？」

「ああ、売ってるぞ。坊主もしかして魔剣持ちなのか？」

「一応そうです。小さいやつですけど」

「うちからは買っていったないだろ。ドロップか！」

「まあ、そうです」

「てつきりうちで買って行った剣を使つてるとばかり思ってたぜ」

「まあ、いろいろあります。砥石いくらですか？」

「砥石も特殊だからな5万円だ」

「それじゃあ、その砥石買います。お願いします」

期せずして魔剣用の砥石を手に入れたので、これからは毎日バルザードの手入れを欠かさないようにしたい。

第321話 魔剣の砥石（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第322話 相談

俺は今2階層でゴブリンを倒している。

元々1階層でスライムを倒す予定だったが、学校で真司から相談に乗って欲しいと言われたので、2人でダンジョンに来ている。

俺は1階層でもよかったのだが、真司がスライムはもう大丈夫と言うので2階層でゴブリンを狩る事にした。

久々のゴブリン退治だがゴブリンスレイヤー（微）の効果とレベル20のステータスのおかげで、ゴブリンは全く問題にならなかった。

「海斗、実はな前澤さんとこの前カフェに行ったんだけど」

「あゝそう言えば行くって言ってたな」

「それで今度はオレンジピールのブラマンジェを食べたんだ」

「どうだった？」

「ああ、すごく美味かった。フランボワーズのタルトより甘さ控えめで」

「やっぱりそうだな。何で女の子はフランボワーズのタルトが良いんだろうな。どう考えても甘すぎるよな」

「それでな、ブラマンジェは美味しかったんだけど、俺は……」

「どうしたんだ？」

「ほとんど喋る事が出来なかった」

「何で喋れなかったんだ？」

「それが2人きりだと席も目の前だし緊張しちゃったんだ。それによく考えると共通の話題が無くて何も思いつかなかった」

「それじゃあずっと無言だったのか」

「無言では無いけど、盛り上がりはしなかった」

前回4人の時も俺が結構喋って真司は余り喋ってはいなかったから

な。

前澤さんと2人きりになつたら喋れないのも無理は無い気がする。前方からゴブリンが現れたので真司が槌で思いっきり横殴りにぶっ倒して終わった。

「ふ〜。海斗は葛城さんといつも何を話してるんだ？」

「俺？俺の場合は、春香とは10年来の付き合いだからな〜。もちろん全然話して無い期間も長かつただけど、全く知らないわけじゃ無いし、昔の話をしてても共通の事も多いしな〜。最初は緊張したけどその後は割合スムーズに喋れたよ。春香も結構喋りかけてくれるしな」

「そうか、それじゃあ参考にならないかな。前澤さんもそんなにいっぱい喋る方じゃ無いんだよ」

「趣味の話とかしてみたか？」

「いや俺もあんまり趣味とか無いしな〜」

「折角だからダンジョンとか探索者の話をしてみるのはどうだ？それだつたら結構話す事あるんじゃないか？」

「女の子にダンジョンの話なんかして引かれたりしないかな」

「春香には時々聞かれたりするけど別に引かれては無いぞ」

「そうか〜。もつと話すネタがあれば良かったな」

「俺もカフェはハードル高かつたからな。今度は映画と買い物行ってみたらどうだ？俺はカフェよりはそつちの方がスムーズだった気がする」

「映画か。そうだな今度は映画に誘ってみるよ」

その後2階層では珍しく他のパーティに遭遇した。まだレベルが低いようで連携でゴブリンを倒して2人で大喜びをしていた。俺達と同じぐらいの男女のパーティだったが、喜び方を見ても抱き合っただけだったので完全に付き合っているのだろう。

最近俺も女の子達とパーティを組んだりプライベートで春香と買い

物に行ったりしているの、以前のように殺意までは覚えなかったが、やはり羨ましい。

「いいな。ああ言うの憧れるな」

「真司も前澤さんと潜ればいいんじゃないか？」

「いや、怪我でもさせたら一大事だし、緊張してやらかしてしまいそうだから俺には無理だ」

「そうだよな。俺もパーティーメンバーが怪我したりすると気が動転したりするしな。恋人同士で潜ってる奴らってどれだけ精神力が強靱なんだろうな」

「多分、俺達とは精神構造が全く違うと思う。ゴブリン倒して抱き合うなんか間違っても出来ないな。まだ隼人と抱き合った方が現実的だよ」

「まあそれはそれで微妙だけどな」

その後も2人でゴブリンを倒して回ったが、やはり俺達にとっては女の子との付き合い方は中々に難しいようだ。ダンジョンではレアになれたが地上ではまだまだモブのようなので努力が必要だ。

第322話 相談（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第323話 マンドラゴラ再び

俺は今13階層を進んでいる。

まだ早い気もするが、可能で有ればこの週末で踏破してしまうべくペースアップを図る。

この階層のモンスターは基本待ち受け型なので、極端な話戦わずに走って脇を逃げ去る事は可能だが、それをしてしまうと本来の実力より先に進んでしまう事になり14階層で苦戦する事が分かっている。出現したモンスターは全て倒して進んでいる。

「ご主人様、前方にモンスターです。2体いますので1体は私が担当してもいいでしょうか？」

「ああ、それじゃあそうでしょうか」

シルも最近後方待機の事が多いのでこの辺りで活躍してもらうのもいい事だと思う。

しばらく進んでみるがトレントらしき敵は見当たらず、代わりに草に混じって2箇所に見覚えのある大根の葉っぱの様な植物が生えている。

「あれって……」

「間違いない。あれはこの前の」

「マンドラゴラですね」

「そうだよな。あれってどうしたらいいんだ？多分待ってても動き出したりしないよな」

「ご主人様、恐らく引き抜かれるのを待っているのだと思います」

「これってここから攻撃しちゃって良いんだよな」

「当たり前だろ。そもそもマンドラゴラなんか抜かなきゃただの葉

「つばなんだよ」

前回は抜いてしまい大変な目にあってしまったが、分かっていたら抜く事はない。

抜かなければただの埋まった植物なので遠距離から攻撃すれば問題ないと思うが、あまりに安易な気がして少し不安になってしまう。

「それじゃあ、シルからお願いするよ。あっち側のを頼んだ」

「それじゃあ、いつてみますね『神の雷撃』」

あまり緊迫した場面では無いので、いつもより緩い感じでシルが『神の雷撃』を発動すると、いつもと同じように雷が葉っぱに向かって放たれた。

「ズガガガガ〜ン」

轟音と閃光と共に雷が落ちた場所には大きな穴が空いてマンドラゴラは完全に消失していた。

「ご主人様、もう一体も倒してしまっても良いでしょうか？」

「それはもちろんいいけど、グラストレントみたいに逃げたりもしないんだな。抜かれない限り一方的に攻撃されるだけなんだな。敵ながらちよつと可哀想な気がする」

「なに『アサシン』が甘い事言ってるんだよ。『アサシン』なら敵即斬だろ」

シルもあまりにも簡単に倒せてしまったので消化不良なのだろうか。もう一体を倒すのは別に良いと思うが、それで満足感が得られるとも思えない。

それにしても、全く身動きが取れないマンドラゴラを一方的に蹂躪

する事には少しだけ抵抗感を覚える。ルシエの言う通り冷酷になり切れていないのだろう。ただ敵即斬とは何か格好良いな。

「それじゃあもう1度行きますね『神の雷撃』」

再び雷が地面に突き出している葉っぱに向かって放たれてマンドラゴラは跡形もなく消えてしまい後には魔核が2つ残されていた。

「せっかく担当させてもらったのですが、出来れば次もお願いします。残念ながらあまりお役に立った気がしません」

「シルばかりずるいぞ。わたしも次は一緒にやるからな」

「こう言ってるけどみんないいかな」

シルとルシエの希望はあっさりと受け入れられたので次はシルとルシエと一緒に戦う事になった。

しばらく進むと敵2体に遭遇したが、この一帯はマンドラゴラの群生地なのかまたもマンドラゴラらしき葉っぱが地上に向けて伸びている。

「あゝ。それじゃあ2人共やってくれ」

「はい。残念ですが仕方ありません。やってみますね『神の雷撃』」

「こんなの倒しても全然面白く無いな『破滅の獄炎』」

2人ともブツブツ文句を言いながら全く緊張感無くスキルを発動したが、威力は十分で跡形もなくマンドラゴラは消滅してしまった。

「これだけじゃ足りないぞ。次もわたしがやるからな」

「私もお願いして良いでしょうか」

あまりにも簡単に倒す事が出来てしまい次も2人が担当する事になったが、誰からも異論は出なかった。

第323話 マンドラゴラ再び（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第324話 食人植物

俺は今13階層を進んでいる。

順調に先を急いでいるが、今日はシルとルシェがいつもよりはりきっている。他のメンバーの出番が少し少なめだ。

同じサーバントのベルリアは全くと言っていいほど活躍していない。シルとルシェの活躍により探索のペースは上がっているが、魔核を消費のペースも上がっている。ので良い事ばかりでは無い。

この階層で出て来るモンスターは全て植物に関するモンスターだが、植物の性質なのか、ある程度同じようなモンスターが続けて出てくる事が多いようだ。

俺達はボーナスステージかと思うようなマンドラゴラを退けてさらに進んで行く。

「ご主人様、モンスターですが1体だけのようです」

「マイロード私も戦わせてください。お願いします」

「そうだな。ベルリアもそろそろ頑張れよ」

「はい、頑張ります」

ベルリアの存在が薄くなってきたのを本人も察知したのだろう。今回はサーバントの3人で頑張ってもらおうと思うが、モンスター1体のようなのでベルリアだけで十分かもしれない。

暫く進むと、奥には今まで見た事のないモンスターがいた。見た感じ木ではなく草系だとは思いがかなり大きい。

本体から絡み合った蔓が首のように複数伸びており、その先端には頭を思わせる大きな葉がついている。

その風貌はさながら植物製のヒュドラの様に見える。

「結構凄そうなんだけど、俺も手伝おうか？」

「いえ大丈夫です。私に任せてください。姫様達も見ていて下さい」
ベルリアからいつもの任せてくださいが返ってきたので、いつでも行けるように準備はしておく。

ベルリアが正面から突っ込んで行くが、ベルリアを目掛けて頭の葉の部分が一斉に襲いかかってくる。

複数の頭の部分の葉が口のように大きく開き噛みつくようとしている。葉が噛みつくというのも変な感じだが開いた葉の先端部分にはギザギザの歯を思わせる物がびっしりと生えており、完全なる噛みつき攻撃をかけてくる。

スピードはそこまで速く無いのでベルリアが2刀を使い避けながら対処しているが、数が多い。

頭の部分だけで6個が同時に襲いかかってくる。

6個の同時攻撃を躲しているベルリアも流石だが、噛みつき攻撃の対応に追われて本体に攻撃をかけるまでは至っていない。

しばらくベルリアとの攻防を観察していたが、よくみると葉の口部分からよだれのように液体が滴って来ている。

滴った地面を見ると僅かに煙が上がっているように見えるので、恐らく強力な酸なのだろう。

「ベルリア、溶解液に気をつける！触れると溶けるぞ」

俺がアドバイスするまでもないかもしれないが、至近で対応していると結構見えない物なので声をかけておいた。

ただし6つの攻撃に対処しながら更に溶解液にまで対応するのは容易では無い気がする。

ベルリアが『アクセルブースト』を使い首の部分から頭を落とすが、直ぐに蔓の部分が伸びて再生してしまった。

「シル、ルシエ頼んだ！」

「任せてください」

「わかってるよ」

「ベルリア下がりなさい。一気に決めますよ『神の雷撃』」

「ベルリア燃えないように気を付けるよ。『破滅の獄炎』」

シルとルシエが攻撃をかける。

ルシエの獄炎が頭の部分を焼き払いシルの雷が本体を消滅させてしまった。

2人の火力は流石だが、今回のモンスターは13階層の中でも強敵だったと思う。

ベルリアだけでは倒せなかった。倒す為には最低でも2人がかりで臨む必要があるそうだ。

この階層でソロの探索者がいるのかどうか分からないが、いるとしたら相当な実力がないと無理だと思う。

もちろん俺には無理だ。

「ベルリア、結構手強かったな」

「いえ、大丈夫です。姫達もありがとうございます。もう少し時間をもらえれば私1人でも倒せたのですが」

ベルリア……

どう考えても時間の問題じゃなかっただろ。

2刀どころか4刀ぐらい無いと無理だったぞ。

今回はベルリアの負けず嫌いを再確認させられた一戦となった。

第324話 食人植物（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第325話 もう一つの脅威

俺は今13階層を進んでいる。

今日もそれなりに戦闘をこなしたので今日はこれで切り上げる事にしたが、地上に戻ってからすぐにドラッグストアに直行した。

13階層に入ってから今までと違ってモンスター以外の生物を見かけるようになったが、それと同時に他の階層では起こらなかった現象に苛まれるようになってしまった。

主には蚊だと思つが虫に刺されて痒い。

顔、首、手の露出のある部分が何箇所も刺されて痒い。

前回はそこまで気にならなかったが、今回は蚊の多いエリアだったのか特に痒い。

「すみません。虫刺されに1番効く薬を下さい。あと虫除けスプレーとリングを下さい」

ドラッグストアの店員さんをお願いして薬を買ったので、外に出るから速攻で塗ってみた。

一瞬痒みが和らいだ気がしたが、またすぐに痒くなってしまった。

あまり虫刺されの薬を使った事がないが、残念ながら劇的に一瞬で痒みが治るようなものではないらしい。

ボリボリ掻きながら帰路についたが、明日はこの虫除けリングと虫除けスプレーが活躍してくれる事を祈るしかない。

次の日の朝になっても少し赤みと痒みが残っているので通常の蚊よりも強力なのかもしれないと思いつながらも薬を塗り込んでおいた。朝食を食べてからダンジョンに向かってメンバーと合流した。

「海斗、いつもと違う方にもリングつけてるじゃ無い」

「ああこれは虫除けリングだよ」

「あゝ、13階層虫が酷いですよね」

「みんなはどうしてるの？」

「私はスプレーしてるけど刺されてるわ」

「私はリングと両方ですけどやっぱり痒いのです」

「私もスプレーだが我慢しかないな」

どうやらみんな同じ悩みを抱えていたようだが、スプレーとリングでも完全には防ぐ事ができないようだ。

これは、早く13階層を抜けないといけない理由が増えたな。

早速10階層へゲートで向かってから13階層へと向かった。

急いでお陰で2時間ほどで13階層にたどり着いたので探索を進める。

「そつえばシル、ルシエ、ベルリアは虫に刺されたりしないのか？」

「はい私は虫に刺されたりはしないので大丈夫です」

「当たり前だろ、羽虫に刺されるとかありえないだろ」

「我慢です」

あれ？ベルリアだけ返事がおかしい。シルとルシエはどうやら虫に刺される事はないようだが、ベルリアは我慢。ベルリアだけは刺されてるって事か？

他の2人が特別なだけで悪魔でも虫には刺されるらしい。

「ベルリア、よかつたら使ってくれ。虫除けスプレーだから少しは効果があると思う」

「マイロードありがとうございます。何とお優しい、使わせていただきます」

やっぱりベルリアは虫に刺されているらしい。

「そういえば『ダークキュア』で痒いのって治らないのか？」

「状態異常にもそれなりには効果があるのですが、昨日試してみたところ残念ながら虫刺されには効果が薄いようです」

「そうか、それは残念だったな。ベルリア昨日も痒かったんだな。痒かったら痒いって言うてくれよ。言うてくれないと分からないからならな」

「はい、ありがとうございます。感激です」

俺が気がつかないうちに、サーバントにもいろいろと不具合は発生しているようなので主人として今後はもう少し気を使ってやりたい。

「ご主人様、奥にモンスターがいます。3体です。準備をお願いします」

「それじゃあ、俺とあいりさんとベルリアが前衛で残りのメンバーで後方から攻撃を頼んだ」

しばらく進むと通常のトレントが2体と草トレントらしきのが端の方に1体いるが、草がいつぱい生えているせいか蚊も目視出来てしまっ。

モンスターはそれほど問題無いと思うので、蚊に注意しながら戦闘に臨む事にする。

第325話 もう一つの脅威（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第326話 吸血

トレント2体と草トレント1体を確認したが、草トレントは擬態しているつもりのように動かない。

俺はしつかり狙いを定めてから動かない草トレントに向けてバルザードの斬撃を飛ばす。

着弾した瞬間ヨロヨロと動き始めたトレントに向けてミクがスピットファイアで仕留めた。

これで後2体。

後方から、ミクとヒカリンとスナッチの援護を受けてベルリアとあいりさんがトレントに向けて駆けていく。

飛んでくる木の杭の攻撃を躲してトレントの懐まで到達してベルリアは『アクセルブースト』あいりさんは『斬鉄撃』を発動して一太刀で幹を切断してモンスターを消滅させる事に成功した。

「うまくいきましたね」

「ああ、結構慣れてきたな」

それにしてもマンドラゴラといい草トレントといい、初見では絶大な効果を発揮すると思うが、分かってしまえばこんなに簡単な相手はいない。

戦闘が終わってから何気に手の甲を見ると蚊が止まっていたので瞬間的にもう一方の手で叩き落とした。
潰した蚊から少量の血が見て取れる。

「あゝ！ 刺された！ リングしたのに」

リングは効果が無いのか？ リングをした側の手を刺されたシヨツ

クを感じている間に痒みが襲ってきた。

「痒い……」

「やっぱりリングがあっても完全には厳しいですよね」

ダンジョンの蚊はマラリアとかデング熱とか大丈夫だよな。未確認の伝染病とかなったらきついな。

痒さと共に一抹の不安を覚えたが心配しても仕方がないので先に進むことにする。

数度の戦闘を繰り返しながら昨日の到達点まで来た。

「ご主人様、敵モンスター2体です。右奥にいます」

進むと昨日のヒュドラっぽい植物が2体並んでいる。

しかも一体は頭っぽい部分が8つもある。

「俺とミクとスナッチ、シルで頭が8つの方を残りのメンバーでもう一体を頼んだ」

俺には正面から8つの頭を回避する程の技量は無いので相手の攻撃が届かない位置から魔氷剣を発動してから首の部分に向かって斬撃を飛ばす。魔氷剣として威力を増したバルザードの斬撃は首の部分を一撃で刈り取るがすぐに蔓が伸びて再生してしまう。

8連撃は無理なので順番に潰して行くがキリが無い。

「ミク、牽制を頼む！」

後方から火球が飛んで来て着弾した瞬間を狙ってナイトブリンガーの能力を発動して意識を無に近づける。前方へ駆けるが後方から敵へと飛んで行く火球が少しだけゆっくりと見て取れる。

俺はあまりスポーツに詳しい訳では無いが、稀に一流選手がゾーンに入ると言うのを聞いた事がある。野球選手がゾーンに入るとボールが止まったり、遅くなったりするらしいので、それに似た感覚かもしれない。

敵に認識されないまま一気に8本の首の根本の所まで近づいた。

頭の部分では8つに頭が大きく広がっているが、根本の部分はかなりまとまった状態となっており、そのまとまった部分を横から一気に斬り落とした。

抵抗感無く入った魔氷剣の刃がそのまま全ての付け根を斬り落とした。

この感じ、前回も1度あった感じだが剣の通りがいつもと違う。

偶発的に引き起こされるのか、何かの要因があるのかは分からないが明らかに『アサシン』による補正の効果だと思われる。

「シル今だ！本体を頼む」

「かしこまりました。まかせてください『神の雷撃』」

シルの雷撃が敵本体を貫き跡形も無く消滅させる。

シルのこの火力があればもしかしたら、8つの頭の妨害があったとしても難無く一撃の下にこの敵を倒してしまえるかもしれないが、それでは当然俺達には経験値が一切入って来ないので、連携して戦う事にもしつかりと意味はある。

隣を見るとまだ交戦中だったが、前日と同じようにベルリアが前で頭を相手に剣を振るい、ヒカリンが『ファイアボルト』で援護している。

『ファイアボルト』の連射と2刀での『アクセルブースト』で一気に6つの首を落とした所で

「ようやく出番だな。さっさと燃えて無くなれ『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が本体を燃やし尽くして戦闘が終了した。

「海斗腹が減った。早くくれよ」

「私もお腹が空きました。ご主人様お願いします」

「私もお願いでよろしいでしょうか」

張り切ってスキルを使ったサーバントたちがいつもの様に魔核をせがんで来たので、スライムの魔核をそれぞれに渡しておいた。
調子が出てきたので、このままどんどん進んで行きたい。

第326話 吸血（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第327話 思い込み

俺は13階層を進んでいる。

途中で遭遇したヒュドラっぽい植物モンスターも順調に退け進んでいる。

全体をマッピング出来ている訳では無いので何となくだが階層の半分ぐらいは越えて来ている感じがする。

「ご主人様、敵4体です。奥に散らばっているようです」

「それじゃあ、体勢を整えて行こうか。ヒュドラ型にしてはちよつと数が多い気がするけど他のも混じってるのかもしれないな。1体は先にシルとルシエで倒してくれ。その後順番にフォローを頼む」

いつものように敵の待っている場所まで向かっていると突然ナイトプリンガー越しに衝撃が走り、後方に吹き飛ばされてしまった。

「ぐつ、何が？」

俺が飛ばされた瞬間すぐにシルが俺の前に立ち、ベルリアが剣を抜いて臨戦態勢に入った。

敵か？モンスターの攻撃以外に考えられないがどうしてだ？まだヒュドラ型等の敵影は見えていない。

今までの事を考えても、植物タイプのモンスターが目視出来ない位置から攻撃して来た事は一度も無かった。

敵が待たずに攻めて来たと言うことか？

「ご主人様、大丈夫ですか？ポジションをお飲みになりますか？」

「いや、大丈夫だ。そこまでじゃ無い。それより敵はどこだ？ヒュ

ドラ型が向かって来たのか？」

「申し訳ございません。目視出来ませんでした。が今までのモンスターとは別のモンスターなのは間違いありません」

「そうか、シル『鉄壁の乙女』を頼む。みんな急いで『鉄壁の乙女』の効果範囲の中へ！」

ひとまず体勢を整える為にシルに『鉄壁の乙女』を発動してもらおう。

「海斗大丈夫？」

「完全にノーマークのところを攻撃をくらったから、攻撃された瞬間が分からなかったけどマントとナイトブリンガーのおかげで大きな怪我は無さそうだよ」

攻撃された瞬間も分からなかったが、何の攻撃を受けたのかも良く分からない。

「ブウン！」

光のサークルに向かって何か衝突した様な音がするが、特に何も見当たらない。

風か？どうやら目視出来る物質による攻撃では無いようなので風かもしれない。

風が見えない何かによる攻撃だと思う。

「どうだベルリア敵はいたか？」

「姿はまだ見えませんが上空を何か移動しているような気配を感じます」

上からの攻撃か。メンバーが一斉に頭上に視線を移す。

「あつ！いました。今見えましたよ。鳥です。かなり遠目ですがワシか鷹っぽいです」

「4体いた？」

「いえ見えたのは1体だけですが、他にも違うところにいるかもしれません」

どうやらこの階層には植物以外のモンスターもいたらしい。

当初からずっと植物系のモンスターしか出て来なかったので完全にこの階層はそうなのだと思いこんでしまっていた。

ヒカリンが示した場所をよく見ていると確かに猛禽類を思わせる風貌の鳥が横切った。

「ブウウン！」

再び光のサークルに攻撃が加えられたようだが、かなり遠方から攻撃をかけて来ているようだ。

同じモンスターが4体いるのかは分からないがとにかく見える敵から倒す。

今の位置では俺の射程よりも遠いのでもう少し近づかなければならないが移動を繰り返す敵にシルを抱えて追いかけるのは難しいので光のサークルから飛び出す。

「私も一緒に行こう」

「はい、お願いします」

あいりさんが俺に続き並走するが敵の見えない攻撃は注意が必要なので2人で左右に蛇行しながら敵を目指す。

背後からはミクが援護してくれている。

敵モンスターを射程に捕らえた瞬間バルザードを放ったが、しっかりと外れてしまったので今度は走りながら理力の手袋の力で敵の翼

を掴んでやった。

そのままバルザードを発動しようと思った瞬間

「私にまかせろ！『アイアンボール』」

並走していたあいりさんが『アイアンボール』を発動してバランスを崩して動きが止まった敵モンスターを高速で飛んだ鉄球が的確に捉えて消滅させる事に成功した。

後の3体はどこだ？

第327話 思い込み（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第328話 落とし穴

鳥型のモンスター1体を倒したので残りのモンスターを探す。

「海斗いたぞ！あそこだ」

あいりさんが敵を発見して場所を示してくれる。

前方の上空に先程と同タイプのモンスターが見て取れた。

「あいりさん、さっきと同じでいきましよう。俺が動きを止めるのであいりさんが仕留めてください」

「ああ、わかった」

敵に向かって距離を詰めるために蛇行しながら走ったが、理力の手袋をそろそろ発動しようと思った瞬間、足下の地面が無くなった。無くなったと言つか踏み出した先に本来足が接地すべき土が無く大きな穴が空いていた。

「あっ！」

当然前方と上空に意識を向けていた俺は思いっきり踏み込んだ為に全速力で落とし穴に落ちたような状態になり顔から思いっきり突っ込んでこけてしまった。

一瞬走馬灯のように春香の可憐な姿が脳裏をよぎった気がしたが、死んだわけでは無いので気のせいだったのだろう。

「うっ、うっ、痛い……」

下が土なので折れてはいないと思うが、装備の重みも加わって転んでぶつかつた所が激しく痛い。

「海斗！大丈夫か！敵が来るぞ避ける！」

あいりさんの声に反応して上を見ると鳥型のモンスターがこちらに向かつて飛来して来ていた。

転んだせいでバルザードも前方に放り出してしまっているのだから
咄嗟に

「ウォーターボール」

バルザードの飛ぶ斬撃に頼って最近出番が減ってしまった氷の槍を
発現させて上空のモンスターに向けて放つたものの、敵は旋回して
氷の槍をうまく避けたが時間稼ぎにはなった。

敵が時間をくっている間にバルザードを拾って体勢を整えようと前
に踏み出した瞬間下から根のようなものが伸びてきて脚に絡み付い
てきてしまった。

「ああ〜」

間の抜けた声を出してしまったが、もともと地面に穴など空いてな
かつたので冷静になって考えるとモンスターによる可能性が高く、
そこにはまってしまったのだから何らかの攻撃をくらうのは当たり
前だった。

焦って冷静な判断が出来なかった。

バルザードは前方に投げ出したままで手元には無いので脚を大きく
動かして逃れようとするが全く干切れない。両手でも引引っ張ってみ
るが無理だ。

「ウォーターボール」

氷の槍で脚に絡み付いた根を攻撃してみるが部分的に破損させる事には成功したが、このやり方は単純に危ない。根と一緒に脚が無くなってしまう可能性がある。

考えている間にも再び根が絡みついてきている。

抜け出せない！

落とし穴に木の根のトラップと言う原始的で単純な攻撃だが、俺は見事にはまってしまい、しかも抜け出せない。

しかも穴に落ちているので俺の状況はメンバーには一切見えていない。

どうすればいいんだ。

順調に進んでいたので気を抜いたわけでは無いが、思いもしない場所ですピンチを迎えてしまった。

どうにかして早く抜け出さないと、下と上からの挟み撃ちで完全に詰んでしまう。

そもそもこの木の根は根だけなのか？

本体がその下に潜んで更なる攻撃を仕掛けてくる可能性も十分ある。

「おおおおっ！」

俺は再び全力で根を振り切るべく力を込めて足掻いてみたが、やっぱりびくともしない。

それほど太さがある訳では無いが絡みついていて木の根は思った以上に頑強で一箇所たりとも俺の力では切れる気配が無い。

むしろ暴れているうちにさっきよりも締まって来ている気がする。

上空からは丸見えのこの状態で、上空から狙い撃たれたら避けようも隠れようも無い。

現状に段々焦りがでて来たので、更に暴れてみたが上半身以外は全く動きが取れなくなってしまった。

完全にはまってしまう、まな板の鯉、いや穴の中のモブ状態になっ
てしまったので、冗談抜きでどうにかして抜け出さないとヤバい。

第328話 落とし穴（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第329話 シークレットウエポン

俺は落とし穴に落ちてしまい絶対絶命ともいえる状況に陥ってしまった。

手元に残っていた魔核銃を取り出して絡みつく根に向かって魔核銃を放つが効果範囲が狭すぎる為、効果は限定的で残念ながら断ち切る事は出来なかった。

上にいるあいりさんに向かって

「あいりさん！俺身動き取れないんで、鳥型はお願いします。今狙われるとやばいです」

「わかった。任せてくれ」

上空の敵はあいりさんに任せたのでひとまず大丈夫だろう。

今のうちにこの根とその下のモンスターを倒す必要があるが、正直手詰まりだ。

動いても全く取れない所が寧ろ食い込んでいつている。

『ウオーターボール』は一定の効果があったが、脚すれすれに放つには危険すぎる。

魔核銃は効果が薄すぎる。

後は何がある？

殺虫剤はあるが効果があるとは思えない。

最悪、火をつけてファイアーブレスにすればいけるかもしれないが、俺の脚が無傷で済むとは到底思えないし残念ながらそんな勇氣は無い。

シールドストライダーの缶も1個だけあるが、地中の植物に臭いが効果があるとは思えない。

後は何がある？

後持っているのは間食用のお菓子と水だけだ………
いや待て。そういえば一度も使った事が無かったが、入れっぱなし
になっていた物が1つだけ有った。

『マジックシザー』

以前ドロップしたが他のメンバーに受け取り拒否されてしまい俺が
引き取った魔法のハサミ。

魔力により通常のハサミよりも切れ味が鋭いハサミ。

これまで1度も登場の機会が無く、正直存在自体を忘れかけていた
ハサミ。

もしかして、これならいけるかもしれない。

通常のハサミでは流石に木の根を切るのは厳しいと思うが、俺のは
魔法のハサミだ！

「これしか無い！これに賭けるしか無い！頼んだぞマジックシザー
！」

俺はマジックシザーをリュックから取り出して手に持った。

もう一刻の猶予も無い。

俺は残された唯一の希望マジックシザーに全てを託し、脚に巻きつ
いている根に向かってハサミを入れた。

頼む！切れてくれ！

俺の祈りにも似た念を乗せて刃を閉じる。

刃を閉じた瞬間、ほとんど抵抗も無く完全にハサミの刃が閉じた。

「やった！切れた！」

何の問題も無く切る事が出来るようなので、俺は急いで脚に絡みつ
いている根をどんどんマジックシザーで切り落としていった。

「すごいな……」

自分の手の中にある小さなハサミは、どんどんモンスターの根を切り取って行く。

俺がどれだけ引引っ張っても千切れなかった根がほとんど抵抗感無く切れていくので凄いい切れ味だ。

用途はかなり限定的だが、切れ味だけで言うと魔剣顔負けの切れ味では無いのだろうか。

巻きつかれる前にほとんどの根をカットする事が出来たので、急いでその場から抜け出して前方に放り出してしまったバルザードをすくに拾い上げる。

バルザードを根が出ている中心部目掛けて突き刺して破裂のイメージを伝える。

根の見える地表部分と隠れた地下の本体が一斉に破裂したのがバルザード越しに伝わって来た。無事に倒す事が出来た様だが、今回は危なかった。

マジックシザーが無ければやられていたかも知れない。

余り有用性が認められていないマジックシザーだが、みんな使い方を知らないだけなのかもしれない。

もしかしたら、庭木の剪定や草の手入れには最適なのでは無いだろうか？

この階層においては、転ばぬ先の杖、最終秘密兵器足りえるポテンシャルを秘めた凄いハサミの気がする。

実際に俺の命を救ったと言っても過言では無い。

俺は入れっぱなしにしておいた忘れられたハサミ、マジックシザーに助けられたのだった。

第329話 シークレットウエポン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

SSバレンタインデー（前書き）

今日明日でバレンタインデーSSです。
よろしくお願ひします。

SSバレンタインデー

今日はバレンタインデーだ。

バレンタインデー、それは俺にとってはクリスマスに次ぐ悪夢のようないイベントだった。

モテる奴にはこれ程楽しいイベントは無いのだろうが、非モテの俺には苦行の様な1日だ。

小学校3年生の時以来、母親以外から1度もチョコレートを貰った事が無い。

毎年バレンタインデーの朝は気が重い。

バレンタインデーが土日だった時は心の底からハッピーだった。

去年までの俺は、朝から重い身体を無理やり立たせてトボトボと学校まで向かっていった。

100%誰からも貰えないのが分かっているにも、奇跡が起きないかとあり得ない妄想に頭を支配されて、朝の靴箱を見る。

もちろん何も入っていないが、軽くシヨックを受けながらも誰にも気づかれないように教室に向かう。

次に机の中とロッカーに何かいつもと違うものが入っていないか、コソツと確認するが、もちろん何も入っていない。

次はお昼休みに誰かが手渡ししてくれるというミラクルに期待するが当然そんな青春イベントは起きず、周りではちらほらいイベント発生したモテキャラ達がアオハルオーラを漲らせており、更に俺の心が悲鳴を上げる。

そして最後に放課後イベントを期待しながら何も無くダンジョンに直行して、スライム相手にストレス発散をしてダークサイドの落ちるのを踏み止まる。そして夜家に帰ると母親からオンリーワンのチョコレートをもらう。母親からでも無いよりはマシだと思ってしまう自分が悲しかった。

去年迄の俺はこれの繰り返しだった。だが今年の俺は違う。

買い物友達になった春香がいる。友達ってチョコレートくれるんじゃないだろうか。

仮に義理チョコだとしても同じチョコレートだ。カカオが入っていれば本命と同じチョコレートには違いない。

今俺は学校に向かっているが、去年までの身体の重さが嘘のように感じられない。寒いが清々しい朝だ。

学校についてから真司と隼人に声をかける。

「はっつ。ふっ」

「朝からため息がすごいな隼人」

「そりゃそうだよ。俺は今年もチョコレートをもらえる可能性ゼロなんだよ。一体誰がバレンタインデーなんてものを考えたんだろ。俺はバレンタインさんなんか見たことも聞いたこともないぞ」

「いつにも増して荒れてるな」

「そりゃあ去年お仲間だった2人が裏切って俺1人になっちゃったからに決まってるだよ」

「俺は別に裏切ってないぞ」

「俺も裏切ってないけど」

「お前ら2人はチョコレート確定だよ。しかも本命チョコだぞ。もしかしたら手作りかもな。食べて糖分取りすぎで病気になるかもなはっ」

「ちょっと待て。俺のは本命チョコってのとは違うと思うぞ。もしかしたら真司はそうかもしれないけど。そもそもくれるかどうかも分からないだよ」

「はっつ、どう考えても海斗が1番可能性高いだよ。あゝ俺にもおまけでいいからくれないかな」

隼人の気持ちは痛い程に分かるが、俺も貰えるまではどうなるか分

からないので、だんだん緊張して意識し始めてしまった。

授業が始まってしまったのでとりあえず朝にもらえる可能性は無くなってしまうた。

残るは昼休みと放課後だ。

注意力散漫になりながら授業を受けているうちにお昼休みを迎えた。

3人で昼ごはんを食べていると、春香と前澤さんが向かって来るのが見えた。

このタイミングで来るって事は遂にか！

近づいて来たのをのを気づかないふりをして一心不乱に弁当を食べる。

「ちよつといいかな？」

きた〜！

遂にこの時が来た。

「はい、何でしょうか春香さん」

「今日バレンタインデーでしょ。だから悠美と一緒にトリュフを作ってみたんだ。よかったら食べてみて」

「あ、ありがとう」

え？なんでトリュフ？チョコレートじゃなくてトリュフ？トリュフってキノコだよな。

SSバレンタインデー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

SSバレンタインデー2

前澤さんがトリュフの入った袋を真司に手渡す。

「そうよ2人で頑張って作ったんだから残さず食べてよ。はい真司くん」

「前澤さん……ありがとう。俺、これは一生大事にするよ」

「真司くん、早く食べないと痛むから一生持つておくのはやめてね」

真司を見ると感動で今にもどこかへ飛んでいきそうな表情をしている。やはり2人で作ったと言っているがトリュフって作れるのか？まさかこの日に合わせて自家栽培したとも思えない。

「それとこれは2人から。はい」

「えっ？俺？俺にもくれるの？嘘！しかも手作り？信じられない！ありがとう、ありがとう」

2人が隼人にも作っていた様で前澤さんが渡してきたが、隼人は、予想していなかった分真司以上に感激してしまい、今にも泣き出してしまいそうだ。

「そこまで喜んでもらえると思った甲斐があったよ。3人とも食べたらまた感想聞かせてね」

「ああ、ありがとう」

「もちろんです」

「必ず感想をしたためます」

2人はトリュフを俺達に渡すと席に戻っていった。

「俺感激だよ。まさか俺の分まで用意してくれてると思わなかった。義理でも感動だよ」

「ああ、そうか。よかったな」

「何だよ海斗あんまり嬉しそうじゃ無いな」

「だってトリユフだぞ」

「トリユフ最高じゃ無いか」

「だってキノコだぞ」

「は？キノコ？お前まさかトリユフってキノコの事だと思ってるのか？」

「えっ？違うのか？」

「違うに決まってるだろ。キノコみたいな形の高級なチョコレートだよ。馬鹿だな」

「なんだと？キノコみたいな形のチョコレート？そうなのか。完全に勘違いしていた。」

俺は急いで春香と藤澤さんの所に行つて

「ごめん。俺、キノコと勘違いしちゃってた。トリユフ本当にありがとう。すごく嬉しいです。チョコレートありがとう。絶対食べるからありがとう」

「ああ、それで。海斗チョコレートが嫌いだったのかと思ったよ。」

「違う物にすればよかつたかなと思つてたところだった」

「チョコレート大好きです。最高です。本当に嬉しいですありがとう」

「そんなに喜んでもらえて私も嬉しいよ」

しかし恥ずかしい。盛大に勘違いしてしまった。今までの俺の人生にトリユフという名前のチョコレートが登場したことは無かったの
で完全にキノコだと思つてしまった。

世の中でトリユフという名前のチョコレートはそんなに市民権を得ているのだろうか？

勘違いで恥ずかしい思いをしたもののそれ以上に最高のバレンタインデーだ。たとえお友達用の義理チョコだとしても最高だ。

最高に幸せな気持ちになったのでダンジョンでもテンションは最高潮だった。

「シル、今日のあいつおかしくないか？」

「そうですね。いつもより楽しそうですね」

「あれは女だな。何かいい事があつたに違いないな」

「春香様でしょうか？」

「多分そうだな」

「しばらくしたら2人で探ってみましょうか」

「そうだな」

テンションMAXの俺は全く2人の会話には気づきもなかった。

家に帰るといつものように母親がチョコレートを買ってきてくれていたので有り難く頂戴した。

その日の夜生まれて初めて手作りのトリユフを食べた。カカオさえ入っていれば全部同じチョコレートだと思っていたが、全く違った。おいしい。手作りと言うエッセンスが加わるとこんなに美味しいのか。いや春香が作るとチョコレートはこんなに美味しくなるのか。真司と隼人も今頃感動しているに違いない。

そのあと母親にもらったチョコレートも食べてみたが普通に美味しかった。

次の日になり春香と前澤さんに再度お礼を言っておいた。

「トリユフ美味しかったよ。あんなに美味しいと思わなかったよ。ありがとう」

真司と隼人は既にお礼を言っていたようで、俺以上に熱烈なお礼を言ったらしく

「3人ともそんなに喜んでくれると思わなかったから、こっちも嬉しいよ」

「そうよね。真司くん達凄かったもんね。味覚を永久保存するとか言ってたしね」

バレンタインデーは最高だ。

来年も春香からチョコレートをもらえるといいな。

SSバレンタインデー2（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第330 銃士

俺はマジックシザーにより事なきを得た。

落とし穴から抜け出すと、既にあいりさんが上空の敵は倒していた。

「海斗大丈夫か？」

「まあ、なんとか。脚に根が絡みついてヤバかったですけどね」

「横にいたと思ったら急に姿が消えて焦ったよ」

「俺も焦りましたよ。踏み出したら地面が無くなってたんです」

とにかく無事に終わって良かった。

「ご主人様まだです。もう1体います！」

完全に終わった気になっていたが、よく考えるともう1体いた。

見当たらないので注意して待ち構えていると今度はあいりさんの足下の地面が抉れて穴が空いたが、あいりさんは華麗にジャンプして避けた。

以前も同じような事があったが、武術をある程度極めると気配のよ
うなものが読めるようになるのだろう。

相変わらず俺には全く感じ取れなかった。

空いた穴の底に根が見えたので、底まで降りてからバルザードを突
き刺して敵モンスターを爆散させた。

急にイレギュラーな敵が出てくると対応が後手に回ってしまう。

「ご主人様大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。ここから先は今までと違うモンスターも現れる
可能性が高いから注意して進もう」

今回の戦闘だけでも結構疲れてしまったので、次は他のメンバに任せてちょっと休憩しようと思う。

「ご主人様、急に姿が見えなくなりましたが下では何があったのですか？」

「敵モンスターの攻撃だったみたいで、穴の底で木の根に巻き付かれて身動きが取れなくなってたんだ。これのおかげで助かったんだ」「ハサミですか？」

「そう、マジックシザーで木の根を切って抜け出せたんだ」

「それ、役に立つ事もあるのね」

「私も驚きなのです」

マジックシザーへのみんなの評価が向上したようで、自分の事でも無いのに何となく嬉しい。

更に進んでいくと3体のモンスターが出現したが、2体については先程の猛禽類を思わせる鳥型なので、俺の魔核銃をベルリアに持たせてあいらさんとベルリアの前に出てもらった。

今回俺は中間距離から支援する。

俺の時と同じく蛇行しながら2人が走って行く。

途中でベルリアがジャンプするのが見えたので、おそらく落とし穴を避けたのだと思う。

ベルリアは剣を魔核銃に持ち替えて鳥型を狙い撃つ。

「プシュ」 「プシュ」

魔核銃のバレットの射出音の直後、鳥型の両翼に穴が空きバランスを崩してスピードが落ちた。

それを見逃さずにあいらさんが

「アイアンボール」

鉄球が飛んで行き、体のだ真ん中に命中して消失させた。

直後もう1体がこちらに向かって来たのでバルザードの斬撃を飛ばすが、気配を察知したのか旋回して回避し、再びベルリア達を強襲しようとした瞬間、ベルリアが魔核銃で翼を撃ち抜き、先程同様あいらさんがアイアンボールで仕留めた。

真司の射撃練習の時にも感じたが、ベルリアは射撃が抜群にうまい。ほとんど練習もしていないのに、飛んでいる敵に全弾命中させてしまった。

もしかしたら剣よりも適性があるのでは無いだろうか？

魔核銃では相手によつては威力が不十分の場合もあると思うが、今後魔核銃はベルリアに渡しておこうと思う。

飛んだり、距離のある敵には一切攻撃手段を持っていなかったが、俺が持つよりも戦力になってくれるだろう。

「ベルリア流石だな」

「マイロードそれほどでもありません」

「それは、今後お前が使ってくれ」

「それとはこの魔核銃の事でしょうか？」

「そうだよ。俺が使つより戦力アップになりそうだからな。俺にはバルザードとマジックシザーがあるから」

「有難き幸せ。剣に続いて銃までも賜われるとは。このベルリア命をかけてお役に立ってみせます」

「まあ死んでもらったら困るけど頑張つてな」

「はい、マイロードの剣として死ぬ気で頑張ります」

ベルリアが俺の言っている事を理解しているのか疑問だが、さっきの攻撃でバルザードの使用上限を迎えたようなので、リュックからスライムの魔核を取り出して補充する事にした。

第330 銃士（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第331 エボリユーション

俺はいつものようにバルザードに6個の魔核を吸収させた。魔核を吸収し終わった瞬間バルザードが激しく明滅し始め、その形状が変化し始めた。

「こ、これは！」

これは以前1度あった現象と同じだ。バルザードの進化！

明滅と形状の変化が終わると、そこには刃渡りがおよそ45cm、50cm程度はありそうな細身のショートソードのような形に変化したバルザードがあった。

今までは剣というよりナイフと呼ぶのが相応しい見た目だったが、今回の変化により完全に剣と呼べる物に変化している。

遂にバルザードが名実共に魔剣となった瞬間だ。

まだ、小さいし細いが完全に魔剣と呼んで問題の無いレベルに進化している。

市販の鞘では合わないかもしれないので、帰ったら専用の鞘を作ってもらおう必要があるそうだ。

手に持って軽く振ってみると以前よりも重量はアップしているが、手に馴染んだ感じはバルザードそのものだ。

このサイズがあれば十分斬り結ぶ事も可能になりそうで、何かワクワクしてしまう。

「海斗これって……」

「ああ、前にもあった魔剣の進化だよ。バルザードにはまだ進化の先があったみたいだ」

「もしかしたらまだ成長するかもしれないわね」
「まだ小ぶりだからありえるかもな」

もしかしたらバルザードも最終的にバスタードソードぐらいの大きさにまで進化するかもしれない。

先程魔核を6個吸収させたので、更に魔核を吸収させてみると4個吸収された。

合計で10個吸収される事となったが、前回の事を考えると使用回数が増えたに違いない。

いろいろ検証してみたいが、とりあえずこのまま使ってみる事にする。

腰に下げると動く度に脚が切れてしまいそうなので、手に持って移動することにする。

「ご主人様、モンスターです。今度は1体だけのようです」

「みんな、新しいバルザードを試してみたいから、俺が1人で前に立っていいかな。一応フォローは頼みたいんだけど」

メンバー全員から了承を得たので、バルザードを手に前に進んで行く。

すぐに敵を確認出来たが敵は移動可能な植物だった。

根のような物が足代わりとなり普通に移動している。しかも結構大型のモンスターだが薔薇の様な華が咲いている。

初見のモンスターに対して、1人でまともに向かって行くのも怖いので、早々にナイトブリンガーの力を発動させる。

バルザードを構えて、そのまま走る。

モンスターも突然認識出来なくなった俺に反応して近い箇所を攻撃してくる。

当たってはいないが、結構長いトゲのようなものが無数に飛んできている。

地味にというかこれが刺さったら滅茶苦茶痛そうだ。

俺はスピードを早めて敵本体まで辿り着き、側面から斬撃を飛ばしてみた。

斬撃は魔氷剣程では無いが、刃の部分が長くなったお陰で強力になったようで、敵に大きくダメージを与えた。

側面に攻撃を加えた直後に背後に回り込み、一気に斬り裂いた。

今迄のバルザードは少し大きめのナイフの様な使い心地だったので突き刺して掻っ切る感じが多かったが、今のバルザードは完全に斬り落とすイメージだ。

ただ、使い勝手とは別に若干の違和感を感じてしまった。

斬撃を飛ばした時も、今斬って落とした時も『アサシン』の効果に影響しているせいなのか、今までと比べると何となく手応えが薄い感じがする。

斬れ味が良くなってスムーズになったのとは違った感じがする。

違和感も今だけなのかもしれないし、気のせいかもしれない。

敵へのダメージを見ても、進化したバルザードがパワーアップしたのは間違いないので、このまま使ってみようと思う。

第331 エボリューション（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第332話 バルザードの力？

俺は今2階層に来ている。

昨日バルザードが進化したので検証しようと思いきい2階層に来ている。あれからも何度かバルザードを振るってみて威力が増した事は間違いないが、やはり振るうたびの違和感は無くならなかったので検証する為に2階層でゴブリン相手にいろいろ試してみたいと思ったのだ。

「ご主人様、前方にゴブリンです」

2階層はゴブリンが単体でしか現れないので、戦闘自体は俺だけでもそれ程問題にはならない。

前方に見えるゴブリンに向かって走り、棒で攻撃してきた所を避けて、そのままバルザードで斬って落とす。

「うーん、なんかおかしいんだよね」

「マイロードどうかされましたか？」

「バルザードを使った感じがちょっとおかしいんだ。いつも通りやつてるんだけど、もっと力が入れられるような、全力じゃ無いような変な感じがするんだ」

「はつきりした事は言えませんが、私も幾つか魔剣を扱った事があるので申し上げますが、もしかしたらマイロードの魔剣はチャージ出来るのでは無いでしょうか」

「チャージって何？」

「攻撃を一旦溜めて放つ事で威力をアップさせる事が可能になるのです」

「それってどうやるんだ？」

「攻撃の前に溜めるんです」

「そう　まあやってみるよ」

ベルリアは剣術の指南は結構分かり易いと思うのだが、今回の正直良く分からないのでやってみるしか無い。

溜めると言っているので、試しに素振り力で力を込めてやってみるが良く分からない。

2匹目のゴブリンを見つけて今度は斬撃を飛ばしてみる。

いつものように斬撃を飛ばす前に振りかぶって自分なりに溜める動作を実践してみた。

力を込めて溜める動作をおよそ3秒程行い思い切って振ってみた。

その瞬間、今まで感じていた微かな違和感は無くなり、進化前と同じ様な感覚で振り切れた。

そして飛ぶ斬撃はゴブリンを真つ二つにしたが明らかに威力が増している。

『愚者の一撃』の様に斬撃が唸りをあげるような事は無いが目に見えて威力が増している。

「すごいな。これがチャージか」

一度成功しただけなのでもっと色々試してみたい。

次のゴブリンには直接攻撃を仕掛けてみた。

試しに飛ぶ斬撃の時と同じように斬る前に溜めの動作をやってみようとしたが無理だった。

いくらゴブリンとはいえ、殺傷能力を持ったモンスターの前で溜める動作を3秒も行う事は、無防備に攻撃を誘っている事に等しく、

1秒も持たずに諦めた。

まともに正面からは不可能な事に気がついたので、すぐにナイトブリンガーの能力を発動してから背後に回り、無防備な背中に向かって静かに溜める動作を行いバルザードを振るった。

先程と同じように違和感無く振る事が出来たが、ゴブリンへの攻撃は斬れ味が増したと言うよりも威力が増した感じでズバツと斬れた感覚だ。

「マイロード、やはりチャージ出来ているようですね。威力が違います」

「そうみたいだな。今までこんなのは出来なかったから進化してパワーアップしたみたいだな」

このチャージについては使い所とタイミングが難しいが、強力なモンスターへの対抗手段として有効だと思う。

その後も2階層で色々検証してみたが、やはり魔核は最大10個吸収する事が出来るようだが使用回数は通常攻撃の場合バルザードの使用効果は15回が上限だった。

普段の戦闘で15回剣を振る事はまず無いので、ダンジョンの探索では十分な使用回数に到達したと言えるかもしれない。

ただチャージを使用すると最大6度の使用で効果が切れた。残念ながら無条件で出力がアップするなどと言う都合の良い話は無かったが、これは使い方次第だろう。

なぜか割り切れる5回では無く6回使用出来るのは理由が分からないがおまけ1回で得した気分だ。

第332話 バルザードの力？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第333話 対ベルリア戦

俺は今ベルリアと戦っている。

俺の今のBPは76。

ベルリアのBPは99。

その差は23あるのでまだまだ開きはあるが、ベルリアが通常の剣を使用しているのに対して俺はバルザードLv3とナイトプリンガーそして『アサシン』の効果やブレスレット、理力の手袋を身に付けているので実際のBPからかなりかさ上げされているはずだ。

普段の訓練では軽くないなされてばかりだが、この辺で俺も主人としていいところを見せておきたいと思い、挑戦する事となった。

「ベルリア、真剣にやってくれ。ただし大きな怪我は無しで行こう。腕とか無くなったら洒落にならないからな」

「マイロードある程度は『ダークキュア』で治りますので大丈夫です」

「ベルリア、治るから大丈夫とかじゃ無いんだ。腕が斬れたら俺はショック死するかもしれないし、腕以外も無理だからな」

「そうですか。分かりました。それでは『アクセルブースト』は控えさせていただきますね。力加減が出来ませんので」

「そうだな、そうしてくれ。腕どころか胴体ごといかれそうだなな」

距離をとってバルザードを構える。

「それじゃあ行くぞ！」

気合を入れてベルリアに対峙する。

正面から斬り合うべくバルザードを構えて踏み出して斬りかかる。ベルリアが左の剣で受け止めたのでそのまま押し込もうとするが全く押し切れる気配が無いので、諦めて角度を変え再度切りかかる。今度もあつさりと受け止められてしまい、その瞬間右手の剣で俺の首筋に向かって剣を振われ、あつさりと勝負は決してしまった。俺としては本気でやったつもりだが、正攻法では全く勝負にならなかった。正に瞬殺だった。

「まいった。やっぱり強いな。悪いけどもう一回いいか？」

「もちろんですよ。何度でも大丈夫です」

「よしっ！」

俺は気合を入れ直して再びバルザードを構えた。

ベルリアが隙を見せてくれるとも思えないので、少しずるいが開始の合図の前にチャージしておいた斬撃をそのまま飛ばす。

それと同時にナイトブリンガーの効果を発動してベルリアの正面から外れるように移動する。

チャージした斬撃を避けるためにベルリアの視線は俺から完全に外れた。

そのままベルリアに向かって踏み込んでいくがベルリアの剣が俺のすぐ横を横切る。ほんの少しだけ剣のスピードが遅く感じるので避ける事が出来たが、避けなければ当たっていた。

ただ、ベルリアの攻撃は完全に俺を捕らえた訳では無く、先端が当たる感じだった。

完全に姿を消せた訳では無いが一定の効果は発揮しているようだ。ただ止まればすぐにやられるので、全力で動き続ける。

背後まで回り込んで剣を振るうが、ベルリアは察知したのか振り向かずそのまま前方へ進み避けられてしまった。

今度は避けられないように追いかけて突きを入れようとするが、ベルリアが反転してこちらに向かって攻撃するのが見て取れたので、バックステップを踏んで一旦下がる。

「ふっ」

聞こえないように短く呼吸をしてからバルザード斬撃を至近距離から飛ばす。

ゼロ距離とは言わないが剣が届く位置からの見えない斬撃なので防ぎようが無いはずだ。

俺の気配は感じていても斬撃は見えないはずなのに、ベルリアが2刀を十字に払った。

流石に完全には防げなかったようでベルリアにもダメージが入るが俺の位置を完全に把握したようで真つすぐに2刀で攻撃を仕掛けてくる。一撃目は何とか防ぐ事が出来たが、その次の攻撃は避ける事ができず、ナイトプリンガーに当たってしまった。

痛い……

鎧越しだが当たるとかなり痛い。

「参った」

これ以上は優位性を保てそうになかったので、すぐに降参した。

「マイロード、先ほどの攻撃は素晴らしかったです。私がマイロードの手の内を知っていたので、予測して対応する事が出来ましたが、そうで無ければどうなっていたか分かりません」

やはりまだまだベルリアには通用しなかったが、ベルリアの言葉は嬉しかった。

そのあと何度か戦って見たが、完全に手の内がバレってしまったので

あっさりといひねられてしまった。

やはりベルリアの壁は高いが、最初よりは距離が詰まってきたりするような気がするので、これからも頑張っていきたい。

第333話 対ベルリア戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第334話 13階層と約束

俺は今13階層に潜っているが、今週こそこの階層を突破しようと思う。

金曜日久しぶりに春香から映画のお誘いを受けたが、急だったので来週行く約束をした。

「海斗、よかったら週末に映画に行かない？『ラビリンスラプソディ』を見たいと思ってるんだけど」

「ごめん今週はダンジョンに潜るのが決まってるから来週でもいいかな」

「うん、もちろんだよ。その時にお買い物もいい？」

「何か欲しいものがあるの？」

「そろそろ春っぽい服も買いたいなと思って」

「そう、いいんじゃないかな」

メンバーには事情を話して来週の土曜日に休みをもらう事を了承してもらった。

「海斗さんって、毎日ダンジョンに潜ってそうですけど普段からデートってちゃんとしてるんですか？」

「いや、そもそもデートじゃ無いけど、たまに」

「たまにってどのぐらいですか？」

「2〜3週間に1回ぐらいかな」

「え、海斗さん高校生ですよ。しかも同じ高校で家も近いんですよ」

「まあそうだけど」

「ありえませんか。普通毎日デートじゃ無いですか？」

「いやだからデートじゃ無いから毎日じゃ無いんだよ」

「海斗さんやばいですよ」

「海斗がやばいのは前からよ。きっと今のままじゃ彼女に振られるわね」

「いやだから彼女じゃ無いし、ふられてもないんだって」

「海斗は己を見つめ直した方がいいと思うぞ。もっと土日休んでもいいんだぞ」

「いえ大丈夫です」

なぜか3人に責められるような形になってしまったが、春香とは学校で毎日会っているの、毎日デートと言われても流石に毎日カフェに行くわけにもいかないし無理だと思う。

出来れば週に1回ぐらい誘ってみたいがそんなに毎週口実を思いつかない。

「ご主人様、敵ですよ。しっかりとってくださいね」

「鼻の下伸ばして春香のことばかり考えてるんじゃないぞ!」

「なっ!何を」

「お前の鼻の下に全部書いてあるんだよ」

毎回、何でこの2人は俺の心が読めるんだ?しかも聞いても教えてくれないがなぜ春香の名前を知ってるんだ?

俺は動揺する気持ちを立て直してモンスターに立ち向かう。

気持ちとは裏腹に身体はしっかりと慣れてきた対トレント戦を順調にこなして撃退したので先を急ぐ。

トレントのエリアを抜けて、先週俺が穴に落ちた位置まで到達する事が出来たが、既に穴は無くなっていた。

ダンジョンの不思議な所だが、全部が無いがダンジョンの損傷した部分については大体自動修復してしまうようだ。

隠しダンジョンの扉などはシルが壊したままになっているので物に

よるようだ。

「よし、ここからはみんな落とし穴と鳥型にも注意していこう」

落とし穴に注意しながら進もうとは言ったものの、突然地面が無くなってしまふのだから注意のしようが無かった。

サーバントの3人と1匹そしてあいりさんだけはなぜか華麗に避けることが出来たが、俺を含む残りの3人には避ける事は出来なかった。

初め俺は飛んだり跳ねたりしながらどうにか避けようと試みたが、ヒカリンが落ちて事態は急変した。

「きゃっ！」

後方で声が上がったので慌てて振り向くと、ヒカリンがいなくなっていた。

「大丈夫か！」

「はい、大丈夫なのです。『ファイアボルト』」

ヒカリンは穴に落ちたものの、後方からゆっくり歩いて来ていただけなので落ちても特別ダメージを受ける事なく冷静に根を倒してから上がった来た。

俺は全力で走って穴に落ちた結果窮地に陥ってしまったが、止まった状態、もしくはゆっくりと歩いた状態で落ちたとしても、穴に落ちてビククリする程度で冷静に対処すればなんて事は無かった。

俺のスピードを逆手に取り、冷静さを奪う恐るべき攻撃ではあったが、対応策が割れてしまえばなんて事は無かった。これからも穴に落ちても冷静に対応していきたい。

第334話 13階層と約束（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第335話 14階層へ

俺は今13階層を進んでいる。

昨日かなり順調に進めたので、今日で13階層を突破するつもりだ。今まで13階層を進んでの感想は13階層は、蚊などの虫を除けば至って快適しかも敵も馴れてしまえばオーソドックスというか組みやすい敵が多いと言う印象だ。

少し気は早いが14階層へと意識がシフトしてしまいそうになる。

「みんな、今日中に14階層へ行けそうな気がするんだけど何か情報持ってる？」

「15階層はゲートがあるから結構情報が出回ってるんだけど、14階層は地味に目立たないせいかな余り情報が無いのよね」

「私も地味に辛いエリアとだけしか分かりませんでした」

「地味に辛い？」

「はい。他の階層よりも敵の出現頻度が多くて進み難かったりするそうです」

「それはキツそうだな」

「ご主人様、敵モンスター3体です。穴には気をつけて下さいね」

「ああ、わかってるよ。ベルリアとあいりさんが敵を追って下さい。俺はゆっくり追いつきます。ヒカリンとミクは射程まで歩いたらフォローを頼む」

俺の考えた穴対策がこれだ。なぜか穴を避けることが出来る2人に先に行ってもらい、俺は落ちても大丈夫なようにゆっくりと歩きながら後を追いかける。ミクとヒカリンも不要に動く事をやめて遠距離攻撃によるフォローに徹する。

ベルリアも魔核銃を完璧に使いこなしているので、あいりさんと連携して鳥型をうまく仕留めている。

魔核銃でダメージを与えてスピードと高度を下げた敵に対してあいりさんの『アイアンボール』が炸裂する。

そして後方へ抜けてきた敵は俺がバルザードで仕留めにかかる。

残念ながら上空を飛んでいる敵を一撃必中とはいかないので、後方からの援護射撃を受けて動きの限定された鳥型をしつかり狙って確実に仕留める。

そしてほぼパターンになりつつあるのでもう慣れてきたが、俺が突然穴に落ち、慌てずにそのまま着地して襲って来た根に向かってバルザードを突き立てて倒した。

「もうこのタイプのモンスターは大丈夫だな」

「そうだな。最初海斗が突然消えた時にはびっくりしたが、ヒカリンのお陰で対処法も分かったしもう大丈夫だろう」

その後も何度か同じ様に戦闘を繰り返すうちに13時になり、お腹が空き始める時間となった。

そろそろ昼休憩を取ろうかと思い、みんなと相談しながら歩いていった所、何の前触れも無く前方に階段を発見してしまった。

「おおっ、あれって14階層への階段だよな」

「そうですね」

「ようやく次の階層ね」

俺達は階段を目指して進み階段のすぐ下までやって来た。

「どうしようか。このまま進んでみようかと思うんだけど。今日はまだ時間がかかり残ってるし」

「そうね。ここでご飯食べてから進みましょうか」

「そうですね。まずご飯ですね」

「そうだな。新しい階層には興味があるから、この後行ってみるのは賛成だ」

みんな今日次の階層に行くのは賛成してくれたので、階段の下でお昼ご飯を食べる事にする。

今日の俺のお昼ご飯はコンビニの焼きそばパンとたらこおにぎりだ。

「海斗さんいつも思うんですけど、パンとおにぎりってどちらかにした方が良くないですか？」

「分かってないな。両方を1回で食べれるからいいんじゃないか。」

コンビニの醍醐味だぞ」

「そう言うものですか？」

「そう言うものだよ。1回で2度美味しい感じだよ。そういえばヒカリンってコンビニで買った物とかするの？」

「行った事はありません。ママが体に良く無いものがいっぱい入っているから食べてはいけないと」

「そうなんだ。俺はいつも食べてるけど至って健康だから大丈夫だと思っけどな。それにしてもそんなに心配性のお母さんが良く探索者になるのを許してくれたな」

「それは、まあ家でゲームばかりするよりも良いだろうとの事で、応援してくれているのです」

メンバーのプライベートは結構謎だがヒカリンだけは、はっきりと分かる。俺も昔はまってしまったから分かる。ヒカリンは生粋のゲーマーだ。恐らくVRゲーム中心だとは思っが、言葉の端々からもそれ以外のゲームに対しても造詣が深い事が窺い知れる。

ミクはカードゲームだけの様だが、俺のパーティは何故かゲーマー比率が高い様だ。

第335話 14階層へ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第336話 14階層と悪魔

俺は今14階層に到達した。

階段を下って行くと、足元もすっかりしているし特別おかしいところもない。

階層自体も明るいので12階層よりは進みやすいと思う。

「それじゃあ、先に進むけどどんな敵が来ても大丈夫なように注意しながら行こうか」

階層が進むにつれ初見のモンスターはスキルも含めて特に注意が必要になって来た。

「ご主人様、モンスター3体がこちらに向かっています」

やはり13階層とは違っらしい。

「俺とベルリアとあいりさんが前へ、残りのメンバーは敵を見てから各自でフォローを頼んだ」

3人で横1列に並んで敵を待ち構えるがすぐにモンスターが現れた。現れたのはゴブリンだが普通のゴブリンよりも明らかに大きい。

「こいつらは、ホブゴブリンか？」

平面ダンジョンに現れたゴブリン達は所謂亜種だと思うが、このホブゴブリンは上位種だ。ゴブリンと言えどもどの程度の力を持っているか分からない。

「ギャギャギャギャ！」

甲高い声でこちらを威嚇してくる。俺達も武器を構えて応戦の構えを見せる。

ゴブリンと比べても重量感のある走りに向かってくる。

手にはそれぞれ武器を持っており、振りかぶって切りつけてきたので、半身になって避ける。

「よけるとは生意気な」

「はっ？」

いきなりホブゴブリンが喋った。さっきのモンスター然とした叫び声は何だったんだ？完全に喋れると思わなかったので面食らってしまったが、止まるわけにはいかなかったのでそのまま反撃する。

「お前喋れたのか、驚かすんじゃない」

「人間のくせに生意気な」

バルザードで斬りつけたが防がれてしまったのでそのまま押し込もうとするが、押し切れない。

「くううう」

思いっきり全身の体重をかけるが、力が拮抗して動かない。

力だけなら俺以上なのだろうがスピードは俺に分がありそうだ。

尚も押し込みながらバルザードに破壊のイメージをのせると、ホブゴブリンの剣がバルザードとの接地面から折れた。

流石はバルザードだ。

俺はそのままの勢いでホブゴブリンを斬り裂いた。

戦いは一瞬で終わったが、このホブゴブリンかなり強い。バルザードと言う特殊な武器を持っていなければ、結構苦戦したかもしれない。

残りの2人はまだ戦闘中だったが、それぞれを後方から残りのメンバーが援護射撃しているので優勢に戦っており、ベルリアもあっさり勝負を決めた。

残るはいりさんだが、相手の武器と間合いが合わずに少し手こずってはいたが、スナッチがヘッジホッグを仕掛けてダメージを与えた所を一気に仕留めた。

「14階層の最初の敵にしては強いな。これは気を引き締めてかかった方が良さそうだ」

「そうだな一対一なら結構苦戦したかもしれない」

「俺達はパーティなんのでみんなで連携して戦いましょう」

「ああ、そうだな」

少し手こずったものの初戦を無傷で切り抜けたので上々の滑り出しと言えるだろう。

魔核を回収してから、気を引き締め直して歩いていると突然周囲の温度が下がり、薄暗くなった。

「なんだ？どうしたんだ？」

「ご主人様、敵だと思われます。3体ですが恐らく通常の敵ではありません」

「通常の敵ではないってどう言うことだ？」

「ベルリアの時と感じが似ています。恐らく悪魔だと思われます。

悪魔のテリトリーにはまっってしまったかもしれません」

悪魔！？

俺が今まで敵として出会った悪魔はベルリアただ1人。

確かに他の悪魔も潜んでいるかもしれないとは聞いていたが14階層でいきなりか！
しかも3体？

「シル、3体とも悪魔なのか？」

「恐らく間違いないと思います」

「引き返せば13階層に逃れると思つか？」

「既に捕捉されていると思われるので、難しいと思います」

「そうか……………」

逃られないなら戦うしかないが、敵であった時のベルリア以上の悪魔が3体出てきたら間違はなく負ける。ベルリアの時は1体のみだったのでルシエの力でなんとかだったが、流石に3体は無理だ。どうする？

第336話 14階層と悪魔（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第337話 下級悪魔

俺は14階層に臨んだ初日に悪魔の脅威に晒される事になってしまった。

多くの探索者がいる中でどうして俺のパーティばかりイレギュラーな敵に襲われるのか納得がいかない。

「とにかく全力でやるしか無い。俺とベルリアとが前に立つ。あいりさんは様子を見ながら前に出てください。残りのメンバーは敵を見ながらフォローを頼んだ」

とにかくやるしか無い。

フォーメーションを整えて前に進んで行くが、何故か少し寒い。

「マイロード、敵です。3体とも間違いなく悪魔です」

「あれってなんの悪魔だ？」

「1番小さいのがインプ、そしてあのモヤの様なのがドリームイーター、最後がフロストデーモンです」

「あいつら強いのか？」

「下級デーモン達です。以前の私程ではありませんが、今の私達にとっては間違いなく強いですね」

「そうか……。ベルリアどれをやる？」

「ドリームイーターは残念ながら相性が悪いのでフロストデーモンを任せてください」

「それじゃあ俺はインプだな。ドリームイーターはシルとルシエに任せよう」

目の前に現れた敵は下級悪魔らしいので土爵だったベルリアよりは

弱いらしいが、3体もいるので油断は出来ない。

俺の相手のインプだが名前だけは聞いたことがある。姿はベルリア達と同じぐらいの大きさだが、目が赤く腹が出ていても強そうには見えないが、俺が知っている程のメジャーな悪魔なので下級と言えども強いはずだ。

俺は、歩いている最中に溜めたバルザードの斬撃を迷う事なく速攻で放った。

そして着弾と同時にナイトブリンガーの効果も発動する。

いつもと同じ動作だ。いける。そう思ってインプに近づこうと走り出すが、インプの方を見て啞然としてしまった。

「どんな硬さだよ」

なんと溜めたバルザードの一撃が生身の右腕により止められていた。しかも、腕を斬り落とすどころか、軽く切り傷ができた程度のダメージしか与える事が出来ていない。

これで大きなダメージを与えられないとすると、近距離から斬撃を放つか直接叩き込むしか無い。

平静を装い気配を消す事に集中して一気に距離を詰めるが、インプは手に持つショートソードで俺に向かって的確に攻撃を仕掛けてきた。

とっさにバルザードで受けるが、俺の腕に強烈な重み加わる。

こいつ俺の事が完全に見えている。

ナイトブリンガーの効果が全く効いていない。

ナイトブリンガーの効果は今までの経験上レベルが高い敵程効果が薄い。

と言う事はこいつは完全に俺よりもレベルが上という事だろう。

ベルリアでさえ、この前の立ち会い時には若干俺の場所を掴み損ねていた。

つまりは今のベルリアよりも上か。

確かに『アサシン』の効果が発動しているにもかかわらず、剣速がそれほどゆっくりになったとは感じられなかった。どう考えても膂力も俺より上なのでバルザードで押し返す事は諦めて斜めに逸らす。

「いやあ〜！」

俺のすぐ背後からあいりさんの気合いの声と共になぎなたの一撃が振り下ろされ、完全にインプを捉えたと思ったが、瞬間的にインプの体がぶれて避けられた。

「やあああ〜！」

あいりさんが更に俺の位置まで踏み込んで来て横薙ぎに刃を振るう。今度は間合いを詰めたおかげで完全に捉えたが、俺の時同様腕で止められてしまった。

すかさず俺もバルザードで斬りかかるが、インプの短い足がカウンター気味に飛んで来て弾き飛ばされてしまった。

「ぐぐつう〜」

やはり強い。

俺が弾き飛ばされたのを見て、ミクがスピットファイアで時間を稼ごうとしてくれるが、インプは火球を煩わしそうに弾いで防いでしまった。

俺はすぐに起き上がり、再び気配を薄めて『アサシン』の効果을期待しつつインプに向かって走った。

第337話 下級悪魔（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第338話 対インプ

この小さく醜悪で腹の出た悪魔を倒す以外に道は無い。

『アサシン』の効果を阻害しない様に心の中で雄叫びを上げながら向かって行く。

既にバルザードは起き上がると同時に溜めている。

狙うのはベルリアにも通用した理力の手袋との連携技しかない。

あいりさんが戦ってくれている間に再びインプに接近してから足首を掴んで引き倒しにかかるが、タイミングを見計らって掴んで思いっきり引つ張ったが短足の恩恵か若干バランスを崩したもののしっかりと踏み留まれてしまった。

こうなったら作戦を変更するしかない。

あいりさんと2人で倒すしか無い。

あいりさんはなぎなたの間合いを生かして必死で切り掛かっているがダメージを与えられていない。

俺はあいりさんの体を死角に使い、インプの前まで飛び込んでから、溜めた状態のバルザードを直接インプの頭に叩き込んだ。

「グエツ！」

カエルの鳴き声の様な音がインプから聞こえたが腕同様に受け止められてしまった。

「嘘だろ……」

進化したバルザードの一撃を直接叩き込んだのに、変な声を上げた以外なんとも無さそうだ。

流石にこの風貌でこの硬さは、こいつのスキルなのかもしれない。

ダメージは与える事が出来なかったが、しっかりとヘイトを集めた様で目の色を変えて俺に斬りかかって来た。

同じショートソード同士なので相性は悪く無いが、それはインプも同じ様で容赦無く斬り付けてくるので防ぎきれずに何度かナイトブリンガーに刃が届いてしまう。

力押し of 剣術でベルリアの様な華麗さは無いが、圧倒されてしまう。

『斬鉄撃』

あいりさんが横から、隙を突いて斬りかかるが『斬鉄撃』も受け止められてしまった。

通常の武器で有れば砕けていてもおかしく無いのでインプの持っているショートソードも魔剣なのかもしれない。

一息つく暇も無くすぐに攻撃を繰り返すが、弾かれてしまう。

今のままでは拉致があかない。

「ミク、あいりさん、少しだけ時間を下さい」

「わかったわ」

「わかった。任せろ。いやあああゝ！」

俺は一旦、後ろに引いてから覚悟を決める。

俺の通常の攻撃では倒せない。俺の最大の一撃を叩き込むしか無い。

『ウォーターボール』

バルザードに氷を纏わせ『魔氷剣』を準備してすぐに溜めの姿勢に入る。

「ふっっ」

息を整えてから再びインプに挑む。
完全に見切られているので息を殺すよりも周りとの連携を優先する
事にした。

「あいりさん、行きます。ミク、スナツチに『ヘッジホッグ』を」

俺の背後から鋼鉄のニードルが多数押し寄せると同時にあいりさん
が引きそのまま

『アイアンボール』

至近距離から鋼鉄の玉をお見舞いした。

「グエツ」

流石に鋼鉄のニードルと玉の両方を捌く事は出来なかった様で、ニ
ードルを弾いている最中に鋼鉄の玉をもろにくらった。

あの距離からくれば今までの敵は潰れていた。残念ながらインプ
は健在だが痛みは有るようで一瞬怯んだので俺も思いつき踏み込
んだ。

「これで決まってくれ！」『患者の一撃』おおおおお」

今の俺の最大の一撃は、溜めた魔氷剣を『患者の一撃』を使い直接
叩き込む事だ。

今まで使用した事は無いが考えてみてもこれ以上の一撃は考えられ
ない。

インプの頭上から渾身の一撃を放つ。

「ギヤアアア」

ゴブリンよりもはるかに大きい叫び声が響いたが、インプはまだ生きています。

インプは俺の剣を受け止めるべく、腕で防ごうとして来たので、俺は腕ごとインプを真っ二つにする気で渾身の一撃を放った。

異様に硬い抵抗感と共に腕を切断する事に成功したが、そこで威力を削がれてしまい、本体を切断するには至らなかった。

第338話 対インプ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第339 必殺の一撃

正に全身全霊をかけた必殺の一撃を放ったがインプを消滅させるには至らなかつた。

「あいらさんっ！代わって下さい」

俺のHPは一桁台まで低下して、激しい疲労感が襲って来たので今インプに蹴られたら確実に死ぬ。

急いで後方に下がって、低級ポーションを出して一気に煽る。

ポーションの効果も身体を駆け巡り、徐々に倦怠感が取れて来た。

インプは流石に片腕を切り落とされて、おびただしい量の出血と共に目に見えて動きが悪くなっている。

あいらさんが無くなった左腕の方から徹底して『斬鉄撃』による攻撃を繰り返して、手傷を増やしているが、それでも倒すには至っていない。

身体が動くようになったのを確認してから、俺は効果の切れた魔氷剣を再び発現させてからナイトプリンガーの効果を発動させる。

流石に今の状況で有れば俺から意識が外れる可能性があると思う。意識を集中してインプの後方に回り込む。

今度は完全に背後を取った。

踏み込んでと止めをさそうとした瞬間、インプがこちらを向いて目が合った。

まずいつ！

残った腕を横に薙ぎ俺に攻撃をかけて来たが、その動きは完全に動きが遅く見える。低い位置からの攻撃を避けるべくジャンプして躲

して上段からの一撃を脳天にお見舞いしてやった。

「うおおおお〜『患者の一撃〜!』」

これで決まってくれ

俺のHPのほとんどを費やした渾身の一撃は何故か抵抗感なくスムーズにインプを両断する事に成功した。

最初の一撃は物凄い抵抗感を感じたが、今の一撃は全く違う感覚だった。

発動条件は全く分からないが『アサシン』になってから時々こう言う事が有る。

とにかく自分達の力で悪魔を1体倒せたので良かった。

すぐに2本目の低級ポーションを取り出して飲み干してから、他のメンバー達に目をやるが、ベルリアだけで無く、なんとシル達まで交戦中だった。

あいりさんはすぐにベルリアの元に走ったが、俺は状況を確認する為にその場に留まった。

ベルリアはフロストデーモンと戦っているが、インプに比べると大型の悪魔であるフロストデーモンに押されている。

時折ヒカリンが『ファイアボルト』で援護して何とか均衡を保っている。

ベルリアもスピードと技術で相手を上回り数度に渡り斬り付けているが、氷で出来た体躯に完全に阻まれている。

シルとルシエはドリームイーターに交互に攻撃を繰り返して寄せ付けてはいないが、どうやら霧状の敵に効果が薄いようで倒せていない。

これは思った以上に相性が悪い。

「ヒカリン、ベルリアのフォローは俺がするからシル達の方に行ってくれ。どうにか『アイスサークル』でドリームイーターを閉じ込

められないか？」

「やってみるのです」

メンバーを入れ替えて2体の悪魔を倒しにかかる。

俺もフロストデーモンに向かい3人で一斉に斬りかかる。

「マイロード、ご助力ありがとうございます。フロストデーモンは身体の硬さと常時氷結スキルを使っているので、同じ場所に長くどまつて斬り結ぶ事は出来ませんので御注意を」

ベルリアのアドバイスを受けている間にも足下が凍りかけて来たので慌てて移動を繰り返す。

ベルリアの双剣に加え俺とあいりさんが加わり4本の刃で一斉に襲いかかるので圧倒的に手数で優っている。

「3対1とは卑怯な。正々堂々戦えないのか」

「悪魔が何言ってるのよ3人だけじゃ無いわ。私達もいるのよ」

突然フロストデーモンが喋りかけて来た。やっぱり悪魔は普通に話せるらしい。

ミクとスナッチも後方から攻撃を仕掛ける。

「人間とはこれ程に卑怯なのか」

「いや、そもそもベルリアは悪魔だしな。悪魔が卑怯を語るなよ」

「悪魔の子供がどうして人間の味方をしているんだ。一緒にその人間どもを倒そうでは無いか」

「話になりませんね。マイロードに反するなどあり得ません」

「何かギアスで縛られてるのか。子供を縛るとは卑怯な人間どもが！」

なんだこの勘違い悪魔は。勝手に勘違いしてヒートアップしている。
フロストデーモンなのだから少しは冷静にしてもらいたいものだ。

第339 必殺の一撃（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第340話 対フロストデーモン

俺は今盛大に勘違いしてヒートアップしたフロストデーモンを相手に戦っている。

4人と1匹でかかっているのですすがに押ししているが、ほとんどダメーシが入らない。

俺の斬撃も何度かヒットしているが、少し氷の身体が削れたただけで決定打には程遠い。

「海斗、ヒカリンが……」

背後からミクの声がしてヒカリンの方に目をやると地面に倒れている。

「ヒカリン！大丈夫かっ！」

俺の呼びかけに全く反応しない。

「マイロード、恐らくドリームイーターに眠らされたのだと思います」

「ベルリア治せるか？」

「お時間をいただければ」

「よしっ、じゃあここは任せて行ってくれ！」

ベルリアをヒカリンの治療に向かわせて、インプ戦と同じメンバーで臨む。

「やはり外道だ。大した事は無いな」

フロストデーモンはベルリアがいなくなったのを良い事にこちらを攻め立ててくる。

「いや、外道はお前だる悪魔なんだから」

「何を馬鹿な事を言ってるんだ。人間こそ外道。悪魔こそ正義の使徒だ」

この悪魔がおかしいだけなのか、文化の違いか話が噛み合わない。

「あいりさん『斬鉄撃』中心でいきましょう。通常攻撃では無理です」

「ああ、わかってる」

あいりさんは『斬鉄撃』で応戦するとして問題は俺だ。俺の手元にあった2本の低級ポーションは既に使い果たしてしまった。

『愚者の一撃』は、あと1回だけは使用出来るが仕留められなかった時はやばいので、本当に最後の最後まで使えない。

とにかくあいりさんが仕留められるよう今度はフローに回る。ベルリアの穴を埋めるべく素早く動いて手数を増やす。

俺では足りない部分をミクとスナッチが後方からフローしてくれる。

「やああああ〜！」

一瞬の隙を見つけてあいりさんが『斬鉄撃』をフロストデーモンの左腕に叩き込み破壊する事に成功した。

「ぐわあああ、痛い、痛いぞ」

フロストデーモンがオーバーアクション気味に騒いでいるが、見ている側から破壊した腕が修復して行く。

「させるか〜！」

あいりさんと俺は回復を阻害するために追撃をかけるが、みるみるうちに腕が修復してしまった。

「痛い。腕を斬るなどやはり外道の所業、許せん」

『フロストソード』

フロストデーモンがその手に出したのは氷の刃だった。

「それってほとんど魔氷剣じゃないか」

俺の漏れ出した心の声とは関係無くいきなり魔氷剣もどきで斬り付けてきたので、咄嗟にバルザードで受け止めるが、急激に冷却されてバルザードが凍り始める。

危険を感じて効果は薄いが、咄嗟に理力の手袋の力で顔を殴りつけ後方に下がる。

このままではまともに斬り合う事もままならない。

『ウォーターボール』

俺はバルザードに氷の刃を纏わせ魔氷剣を出す。

「おい、なんだそれは。フロストソードの真似じゃ無いのか。さす

がは外道。私の剣まで盗み取るうとするとは言語道断。偽物のフロストソードなど一瞬で砕いてくれる」

「いやああああ〜！」

フロストデーモンが長々とふざけた事を喋って注意が俺に集中している間にあいりさんが渾身の一撃を頭に見舞った。

『アイアンボール』

更に頭に向けて鉄球をぶち込んで完全に頭部を破壊する事に成功したが、消滅しない。

頭じゃダメなのか？

俺はすぐさまフロストデーモンの懐まで入り込んで、魔氷剣を胸に突き刺すが、貫通には至らない。

先程『愚者の一撃』は最後の最後まで使わないと決めただけだが、ここしか無い。

使うには早すぎる気もするが、どう考えても今しかない。

「やってやる。くたばれ、このお喋り悪魔！『愚者の一撃』」

胸に刺さった魔氷剣に破裂のイメージをのせて『愚者の一撃』を発動する。

その瞬間フロストデーモンは完全に砕け飛んだ。

「やった。もう無理だ。出し尽くした……」

ステータスを確認すると俺のHPは3まで減ってしまっていたが、なんとか2体目のおしゃべりデーモンも撃破する事に成功した。

第340話 対フロストデーモン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第341話 対ドリームイーター

「えっ!？」

俺はへろへろになりながらフロストデーモンを倒したので最後の1体ドリームイーターがどうなったのか確認する為に視線を移した。

「なんで……」

ドリームイーターは未だ健在で、シルとルシェが交戦している。ヒカリンとベルリアはどうなった？

後方に目をやるとそこにヒカリンが倒れていた。そしてその横にベルリアも倒れていた。

ベルリアお前もか……

どうやらミイラ取りがミイラ状態でベルリアもドリームイーターのスキルにやられてしまったらしい。

「あいりさん、ミク、シル達のフォローを頼む。俺はちょっと休ませて」

「わかった、任せろ」

「わかったわ」

恐らくドリームイーターは固体では無いのでシル達の攻撃が効き難いのだろう。ヒカリンの魔法で氷漬けにしてから破壊すれば倒せるのではと考えたが、ヒカリンが倒れている以上難しい。

後はスキルで倒すしか無いが俺の『ウォーターボール』では絶対無理だ。

可能性が最も高いのはルシェの『神滅の風塵』だが……あれは……

よし、ヒカリンを起こそう。
頭を切り替えた俺はナイトプリンガーの効果を発動して、倒れているカオリンの元まで走った。

「ヒカリン、しっかりしてくれカオリン」

ドリームイーターに気取られないように、耳元に顔を近づけて呼びかけてみるが全く反応が無い。

次に肩を揺すりながら呼びかけるが全く反応が無い。

気が咎めたが緊急事態なので仕方無くほつぺたも少しだけ叩いてみたが反応が無い。

ドリームイーターにより通常では無い深い眠りに誘われているようで反応が無い。

一応念のためベルリアにも同じ事をしてみたが反応は無かった。

「あいらさん！」

ミクの声に反応して前方を見ると今度はあいらさんが倒れてしまっていた。

やはりシルとルシェだけが特別で他のメンバーではドリームイーターのスキルを防ぐ事は難しいようだ。

俺も同じだろう。気絶防止のリングは買ったが、恐らくこれは気絶では無く眠りなので効果は無さそうだ。

俺まで眠ってしまったら詰んでしまう。
もう猶予がない。

う〜ん。あ〜。またあれを……………

まだシルとルシェに1本つつ低級ポーションを持たせてあるが、交戦中なので俺が近づいて目をつけられるとまずい。

俺は極力気配を薄めてミクに近づいていった。

「ミク、低級ポーション持つてる？」

「ええ、あるわよ」

「後で返すから1本くれないか」

「別に返さなくていいわよ」

「助かるよ」

ミクから低級ポーションを受け取って本日3本目を飲み干す。

低級ポーションは洋風な名前だが味は漢方薬のような味がする。

お世辞にも美味いとは言えない味だ。しかもそれなりの量があるので短時間に3本は結構きつい。

「うゝまずい。お腹がちゃばんちゃばん言ってるよ」

しばらくして体力が戻って来たのを実感する。

「ルシエ！あれをやってくれ」

「わたしは今忙しいんだよ。あれってなんだ」

「あれだよあれ。『暴食の美姫』だよ。いっけてくれ」

「えっ？いいのか？本当にいいんだな」

「ああひとおもいにやってくれ」

「わかったよ、こんな低級なやつに使わされるのは癪だけど、まあ美味しいからいいか」

美味しいって何だよ、人を食べ物みたいに言うな！

「それじゃあいくぞ『暴食の美姫』」

おおおおお〜キタ〜久々にキタ。3度目の『暴食の美姫』だ。

「ぐぐぐぐぐぐぐ〜」

相変わらず苦痛耐性（微）が仕事をしてきている感は無い。
この感じM体質の人間にとってはもしかして苦痛では無く快樂なの
かもしれないがノーマル属性の俺には最上級の苦痛でしか無い。
こうなったらもう俺に出来る事は何も無い。
ただひたすらにのたうちながら、俺の命が尽きてしまつ前に事が終
わるのを待つだけだ。

第341話 対ドリームイーター（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第342話 神滅

苦しむ俺の前には大きくなったルシエが立っている。

「あゝ久しぶりだな。やっぱり気分がいいな」

「ルシエ……早くしてくれ。わかってるだろ。俺は気分が……悪い」
「ふふっ」

いやルシエ「ふふっ」じゃ無い。前もそうだったが普段マウントを取れないからか『暴食の美姫』を使ったらやたらと偉そうだ。

「うづえっ」

「まあせっかくだから時間をかけてしっかりと倒してやるよ」

「ルシエ……」

「そんな顔するなって。わたしが何か悪い事してるみたいじゃないか」

「してる だろ……」

「わかってるって。ちょっと待ってるって。それじゃあ、この下級悪魔を始末してやるうかな『神滅の風塵』」

俺がこのスキルを見るのは3度目だが、やはりスキルの格が違う。

巨大な暴風が急激にドリームイーターを中心に集約して消え去ると共にドリームイーターも跡形無く消え去っていた。

分かってはいたが1発で片がついてしまった。

「流石だな……じゃあ解除してくれ」

「ふふん。流石だな？」

カードの超絶美女に近づいた姿でルシエが得意そうな顔で声をかけてくる。

この姿は正直TVで見る芸能人など比較にならない程に美しいので黙っていれば、美の女神と言われれば信じてしまいそうだが、喋りと態度はルシエそのものなので残念すぎる。

「ああ、最高だった」

「最高だけ？」

「超最高だったよ」

「ふふっ、なんか嘘臭いな」

「……エクセレントだ」

「エクセレント？」

「マーベラス」

「ふふっ、マーベラス？」

「わたし偉い？」

「ああ偉い。素晴らしい。グレイト！」

「そんなに言うなら解除してやろうかな」

「流石はルシエだよ。魔核は奮発してやるからな」

「ふふふ絶対だぞ約束だからな。それじゃあ、あと30秒満喫したら解除する」

「いや死んじゃうから20秒で頼む。うううっ……」

「しょうがないな。20秒な」

そこからの20秒はまさに地獄の苦しみを味わうような20秒だったが、以前に比べると明かにルシエが扱い易くなって来ている気がする。

これも日頃から俺が気を使い続けた成果だと思つと感慨もひとしおだ。

「うううっ……」

永遠にも感じる20秒が経ち、ようやく死の苦しみから解放された。

「は〜終わった……シル低級ポーションを頼む」

「かしこまりました」

シルから低級ポーションをもらって、本日4本目を飲み干した。

流石にこの短時間に4本は無理がある。まずい……………

「約束通り魔核をいっぱいくれよ」

「分かってるけど、その前にベルリアとヒカリンを何とかするのが先だろ」

「ベルリアはぶっ飛ばせば起きるだろ」

「ぶっ飛ばすのか？」

「そう」

俺は試しにほつぺたをパチパチやってみたが、やはり効果が無い。

「そんなんじゃ無理無理。もっと強くだ」

仕方がないので少し強めにパチパチ叩いてみたが反応が薄い。

「甘い。こつだよこつ」

「バチ〜ン」

流石はルシエ容赦が無い。

「うつつ。こつは一体？」

おおつ。やりすぎなんじゃ無いかと思ったがベルリアが目覚めたので適切だったらしい。

「ベルリア、ドリームイーターに眠らされてたんだよ」

「なっ……。そんなバカな……。ありえない……」

「いや普通に眠ってたぞ」

「くっ……一生の不覚」

「それはもういいからヒカリンとあいりさんを頼む」

「はっ。お任せ下さい」

ベルリアが『ダークキュア』を唱えるとヒカリンが目覚まし続けてあいりさんも目を覚ました。

「私は……」

「悪魔のスキルで眠らされたんだ。目が覚めてよかったよ」

かなり苦戦はしたが悪魔を3体倒したのだからこれ以上の結果は無
いだろう。

ベルリアさえ眠らなければ『暴食の美姫』を使用しなくても勝てた
かもしれない。

今に始まった事ではないがベルリアにはもっと精神修行が必要なの
かもしれない。

第342話 神滅（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。
興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からの
ポイント評価をお願いします。

第343話 レベルアップ

俺達は遂に3体の下級悪魔を倒すことに成功した。

シルとルシエは頑張ってくれた分約束通り多めにスライムの魔核を渡しておいた。

ベルリアは寝ていただけなので今回はお預けだ。

2人が魔核を摂取し終わるのを待っているとシルとルシエが同時に発光し始めた。

「おおつ。レベルアップか。しかも2人共」

ベルリアは眠っていたせいか光る気配は全く無い。

少し間隔を置いてスナッチも光り始めた。

下級とはいえ流石は悪魔。獲得経験値が段違いだったのだろう。ベルリアを除くサーバント3体が同時にレベルアップした。こんな事は初めてだ。

光が収束したので2人をじっくりと見てみるが

「うーん。少しだけ成長したか？」

変化が微妙すぎてよく分からないが見た目は多分成長した気がする。見た目ではほとんど判断がつかないので早速ステータスを確認した。

種別 子爵級悪魔

NAME ルシエリア

Lv4

HP 93 106

MP 159 180

BP 165 185
スキル

破滅の獄炎

侵食の息吹

暴食の美姫

黒翼の風 NEW

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

種別 ヴァルキリー

NAME シルフィー

LV4

HP 160 181

MP 118 130

BP 216 239

スキル

神の雷撃

鉄壁の乙女

戦乙女の歌

楽園の泉 NEW

装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

2人共ステータスの偏りはあるものの、それぞれが凄まじい伸びを示している。BPについては俺もかなり伸びてきたと思っていたが、比較にならない。

もはや人では追いつけないのでは無いかとも思えて来て、嬉しい反面置いていかれるような微妙な感情を覚えてしまう。

2人共に新しいスキルが発現しているので確認する。

黒翼の風……瘴気を纏う魔界の風で相手を切り刻む。

獄炎に続く風系統の攻撃スキルのようなだ。炎耐性のある敵に有効に働きかけるのでは無いだろうか。バリエーションが増えて確実に火力アップに繋がっていると思う。

楽園の泉……眷属を召喚することが出来る。召喚出来る眷属の強さと数はスキル保持者のレベルに依存する。

おおおつ。楽園の泉というスキル名から回復系のスキルか何かだろうと思っていたが、まさかの召喚スキルのようなだ。シルの眷属と言うぐらいだから天使か何かを喚び出せるのかもかもしれない。このファンタジー感溢れる新しいスキルを早く見てみたい。

シル達のレベルアップが派手なのでおまけの様になってしまったが俺もレベルアップを果たした。

悪魔討伐の恩恵で前回のレベルアップから1カ月経たずしてのレベルアップとなった。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 20 21

HP 75 79

MP 46 50

BP 76 80

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（微）
愚者の一撃

今回はBPが80に到達する事が出来たので良かったが、他のメンバーもヒカリン以外がレベルアップを果たした。ベルリアとヒカリンがレベルアップしなかったと言う事は、やはり戦闘への参加割合がかなり影響しているのだと思う。残念ながら意識を失っている間は戦闘に参加した事にならないのだろう。
あいりさんは俺同様スキルを発現しなかったがミクがスキルを発現したようだ。

ファイヤースターター……………半径1m以内の任意の対象物に炎を付与できる。

これは所謂放火スキルか？
かなり対象物が至近に限定されているが使いようがあるのだろうか？
スキルは個人の特性が色濃く出る事が多いのでミクに適したスキルである可能性は高いと思うが。
最後にスナッチも新たなスキルを身につけたようで

フラッシュボム……………HPの半分を使用して自らの身体を高速の光る弾と化して体当たり攻撃をかけることが出来る。

何か凄いスキルだ。小型のスナッチには似つかわしく無いような、必殺の一撃というか、自爆系スキル？
恐らく、火力不足を補うべく発現したスキルだとは思いますがどう考えても頻繁に使うようなものでは無いのは分かる。
ともかくメンバーの大半がレベルアップを果たしたので戦力アップは間違いない。

第343話 レベルアップ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第344話 ドロップアイテム

レベルアップを果たした後に悪魔達が消え去った跡を確認すると魔核では無く3つのドロップアイテムが残されていた。

流石は悪魔だ。

まず一つ目はフロストデーモンの所に目をやるとマジックオーブが落ちている。

色も青っぽいのでまず間違いなく氷に関する魔法だろう。

他のメンバーの了承も必要だが、前回何のマジックアイテムも渡す事の出来なかった魔法少女カオリンに渡すべきアイテムだろう。

そしてドリームイーターのいた所には見慣れない黒い小さな四角の石のようなものが落ちている。

あれはまさかスキルブロックでは無いだろうか？

今まで一度もドロップした事がない、レアアイテム。

マジックオーブと同じで手にとって壊すとスキルを習得できると言うマジックアイテムだ。

ダンジョンマーケットのVIPルーム以外では、余り見かけるものではないのもちろん実物を見るのは初めてだ。

これは俺も使用してみたいが、順番から言っておいりさんに使ってもらいたいと思う。

そして最後に俺が倒したインプのいた所には指輪が残されていた。

当然ドロップアイテムなので普通の指輪ではあり得ないので、俺のリングのように何かに耐性があるのかもしれない。

体力も回復して落ち着いたので俺がマジックアイテムを回収して回る。

まずはマジックオーブを手にとってみるが、俺の時と同じような色なので『ウォーター』系でないことを祈ろう。

次にスキルブロックを拾って手に持った瞬間ブロックが消えて無く

なってしまった。

「えっ!？」

どう言う事だ？ブロックはどこへ行ったんだ？素手で触ったのが不味かったのか？

「あの……みんな。マジックアイテムが消えちゃったんだけど」「見てたわよ」

「じゃあどこに行つたのか見えた？」

「一瞬で無くなったわね」

「海斗さんに吸収されたんじゃないでしょうか？」

「いやだつて俺、何もしてないけど」

「もしかしたら、最初から破損していたのかもしれないな。それで手に取つた事で使用条件を満たしたんじゃないか？」

「そんな事あります？」

「ステータスを確認してみれば分かるんじゃない？」

確かにステータスを見れば俺が使用したのかすぐに分かる。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 21

HP 79

MP 50

BP 80

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性(微)

愚者の一撃

ゲートキーパー NEW

ああ……………1番下に新しいスキルが発現している。やっぱり俺が使
つてしまったらしい。

「すみません。俺が使っちゃったみたいです。あいりさんに使って
もらいたかつたんですけど」

「それは、別に構わないがどんなスキルなんだ？」

「え〜つとですね」

ゲートキーパー……………ダンジョンで行った事のある階層の入り口ま
で出現させたゲートにより自由に移動する事が出来る。

これって……………やばいスキルじゃ無いか？

つまりダンジョンに常設の5階層毎のゲートとは別に自由に瞬間移
動出来るって事じゃ無いか？

こんなスキル聞いた事が無いし、これって人に知られて大丈夫なの
か？

「みんな……………ちょっとまずいかも」

「どうかしたのか？」

「はい。俺の手に入れたスキル名は『ゲートキーパー』です。どう
もゲートの力で行った事のある好きな階層の入り口に移動出来るス
キルみたいです」

「……………」

「それって凄く無い？」

「ああ、使ってみないと分からないけど、多分凄いやね」
「海斗さん、お気をつけて」

ヒカリン何を不吉な事を言ってるんだ。

ただこのスキルが公になるとまともな活動がし辛くなりそうだ。

まあこのスキルだけでも食べて行けそうな気がする。

最悪運搬屋的な仕事で需要がある気もするので、新しいスキルを前向きに捉えておこうと思う。

第344話 ドロップアイテム（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第345話 新しいスキル

俺の手に入れたスキル『ゲートキーパー』はやばいやつだった。

探索者なら誰しも望んでやまない探索者垂涎のスキルだろう。

後で試してみようとは思うが、まずは手に入れたマジックオーブをヒカリンに渡そうと思う。

「みんなこのマジックオーブはヒカリンに使ってもらおうと思うんだけど」

「いいんじゃない」

「それが適切だろう」

了承が得られたので早速ヒカリンにオーブを渡して壊してもらおう。

「どうだった？」

「はい、すっかり覚える事が出来ましたが、思ってた水系の魔法では無く水系でした」

「水系だったのか……………」

「はい……………」

俺のウォーターボール然りで水系は攻撃力が乏しいので他の系統よりも外れのイメージが強い。

「ウォーターボール？」

「いえ、ウォーターキューブでした」

ウォーターキューブ……………任意の場所に水で出来たキューブを出現させる事が出来る。

「あゝまゝ俺の『ウォーターボール』でもなんとかなってるから、試しに使ってみる？」

「はい、やってみますね『ウォーターキューブ』」

ヒカリンの詠唱と共に前方部分に1Mほどの水の立方体が出現して空中で30秒ほど留まってから地面落ちた。

俺の『ウォーターボール』より遥かに水量は多いがそれだけだ。

窒息専用魔法？いやそれでも相手が抜け出せば窒息には至らない気がする。

「どうでしょうか？」

「う、うん。いいんじゃないかな」

「どの辺がでしょうか」

「水が多いあたりとか」

「……………」

これは完全にハズレだ。ハズレ魔法以外の何者でも無い。

気まずい。俺のプレスレットを渡そうか。いやでもそれだと『アイスサークル』になるだけか。

どうすればいい？

「せっかくだから色々試してみようか」

「色々って何を試せばいいですか？」

「……………今日は疲れただろうから次潜った時に色々試そうか」

「……………はい。わかりました」

これは次潜る時までには何かを考えておかないといけない。

このままハズレ魔法のまま終わらしてしまえば、カオリンが不憫で仕方がない。

今のままでではお風呂かプールの水汲み位にしか役に立たなさそうだ。

今日は疲れたのでもう帰ろうと思うがせっかくなので『ゲートキーパー』を使ってみようと思う。

ただ不確定な事が多すぎるので慎重を期して14階層の階段まで戻ってから使用してみることにした。

「それじゃあ、使ってみるよ。いいかな『ゲートキーパー』」

『ゲートキーパー』を使用した瞬間ステータスの様な表示が目の前に現れて、1〜14階層までが選択できる様になっている。流石に1階層の入り口まで飛んでしまうと目立ちすぎるので2階層を選択して発動してみる。

発動の瞬間エレベーターに乗った様な浮遊感と共に眼前の風景が切り替わり2階層と思しき場所に移動していた。

本当に移動出来た。これは凄い。本当に凄いスキルだが問題があった。

俺1人で移動してしまった様で、他のメンバーが誰もいない。

「これはまずいな……」

慌ててもう一度『ゲートキーパー』を発動して14階層まで戻るとみんなが待っていた。

「ごめん、1人で2階層に行ってしまったみたいだ」

「本当に行けたの？」

「うん、行けたみたい。でも1人で行っても仕方がないからみんなで行ける方法無いかな」

サーバント達はカードに戻せばどうにでもなるが、他の3人はどう

すればいいだろうか。

「おんぶに抱っこすればいけるんじゃないのか？」

「お前じゃないんだから全員は無理だろ」

ルシエに言われて一瞬ミクとヒカリンとあいりさんを3人おんぶと抱っこする自分を想像してみたが、どう考えても無理だ。

普通に考えてこの『ゲートキーパー』では俺しか飛べないか、もしくは接触していないと一緒に飛べないかしか無い。

「サーバントはカードに戻して、みんなで手を繋いでやってみようか」

今度は俺の左右にミクとヒカリンそして対面側にあいりさんの並びで『ゲートキーパー』を発動した。

今度は左右にミクとヒカリンを伴った状態で飛ぶ事が出来たが、あいりさんだけがいない。

あいりさんはミクとヒカリンと手を繋いでいたので、俺と直接接触していないと一緒に飛べないと言う事なのだろう。

慌てて14階層に戻るとあいりさんがポツンと1人で立っていた。

今度はあいりさんも俺の腕を掴んだ形で発動してみたが遂に4人で飛ぶ事ができた。

俺に直接接触している事が条件の様なので一度に大勢は難しいが1パーティ単位なら同時に移動が可能だろう。

とんでも無いスキルを手に入れてしまった。当面内緒にしておこうと思うが、トラブルを避ける為にもばれた時の言い訳も考えておかなければならない。

第345話 新しいスキル（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第346話 探索者サークル

俺は今学校にいる。

お昼休みに弁当を食べながら、真司と隼人と話をしている。

「海斗、実はな、大事な話があるんだ」

「どうしたんだ？まさかふられたのか？」

「いやそうじゃないって。ダンジョンの事なんだけども」

「ああ、ダンジョンの事が。どうした？行き詰まったのか？」

「そう。実はこのところ完全に行き詰まったんだ。それでなパーティメンバーを増やす事にしたんだ」

「メンバーを？2人とも懲りたんじゃ無かったっけ」

「ああ、もちろん女の子は懲りた。だから男だけでメンバーを組む事にしたんだ」

隼人と真司が真剣な顔で何事かと思っただらパーティ増員の話だった。

「どうしても2人だけだと10階層へ行くのは無理そうだったから、ギルドで相談してな、同レベルの5人組のパーティに入れてもらう事にしたんだ」

「じゃあ全部で7人組になったって事か」

「そうなんだ。実は先週から組んでるんだけど、みんないい奴で順調に行ってるんだ」

「もう一緒に潜ってるのか？なんで言ってくれなかったんだよ」

「またすぐに失敗したら恥ずかしいから、ちょっと様子を見てから伝えようと思ってたんだ」

真司達の気持ちもよくわかる。確かに2人だけでこのまま進んで行

くのは無理があつた気がするし、7人組だと俺達と一緒にだ。俺たちの場合は、それに1匹多いが。やはり、10階層以上はこのぐらいの人数は最低必要になってくるのかもしれない。

「それでな、メンバーから聞いたんだけど探索者のグループが独自に運営している探索者のサークルみたいなのがあつて、そこに参加するとダンジョンの情報を色々共有できるらしいんだ。ただ秘密保持契約を結ぶから内容は海斗にも言えないんだけど、出現するモンスターの種類や弱点とかマップとか情報ももらえるんだそうだ」

「そんなの有るのか。俺もう4年近く潜ってるけど聞いた事なかったな」

「会費が月に3万円と自分達の得た情報開示が義務付けられるからな」

「あゝ」

話を聞いてサークルなんて便利なものがあるならば是非俺も登録したいとは思つたが、条件的に俺には無理だ。

月に3万円は問題無いが、俺の情報開示は難しい。

サーバントの3人と装備やスキルの事を公表するのは流石に無理だ。他のメンバーについても、今までの言動から積極的に他の探索者と交わる事を好んでいるとは思えないのでやはり難しい気がする。

「やっぱり俺は無理っぽいな。俺とサーバントの事は内緒で頼むな」

「まあ『黒い彗星』の事はみんな興味あるだろうけど勿論内緒にしとく」

「シルさんやルシエさんの事を俺らが売れるわけがないだろ」

「助かるよ。それと俺からアドバイスな。先週俺14階層まで行ったんだけど、いきなり悪魔に襲われたんだ。しかも3体。2人も、もし悪魔と遭遇する事があつたら何がなんでも逃げろ。俺はサーバ

ントと他のメンバーがいたから何とかなっただけど、冗談抜きでやばいから」

「悪魔……師匠みたいなのとやり合っただって事か？」

「下級悪魔だったけど今のベルリアより力は上だったと思う」

「まじか……」

「海斗よく無事だったな。どうやって逃げたんだ？」

「いや何とか倒せたんだ。けど本当にギリギリだったよ」

「そうか……さすがだな」

「やっぱりダンジョンって悪魔がいるんだな。でも今まで悪魔に遭遇したって聞いた事無いな。海斗限定キャラとかなのか？」

「そんな訳ないだろ」

一体俺限定キャラとは、なんなんだ。しかも悪魔が俺限定とかは嫌すぎる。ベルリアと合わせてまだ2回遭遇したに過ぎないので、あくまでもたまたまだ。

2度有る事は3度有ると言うが、出来れば3度目は無い方が嬉しいが、レアアイテムが手に入っているので文句は言えないな。

レアアイテムと言えばインプの残したリングは鑑定の結果俺の持っているレジストリングとは違いMP消費量を魔法使用時に10パーセント節約してくれるリングだったので、1番魔法使用頻度の高いヒカリンが使うことになった。

オーブとリングをヒカリンに渡したので今後不公平感なく探索を進めていけそうだ。

第346話 探索者サークル（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第347話 因果律

俺は今1階層でスライムを狩っている。

ゴブリンスレイヤー（微）を手に入れた今2階層で魔核収集をしてもいいのだが、やはり3年間慣れしたしんだ1階層は捨てがたい。

「シルちよつといいかな」

「はい、なんででしょうか」

「昨日、真司と隼人共話してたんだけど、探索者のネットワークみたいなのが有るそうなんだけど、悪魔に遭遇した探索者なんか、今まで俺以外で聞いた事が無いつて言ってるんだ。俺つてもう既に4体と遭遇してるだろ。ルシエも入ると5体だから、何か俺だけ多い気がする」

「そうですね。ご主人様は因果律というのをご存知でしょうか？」

「因果律？」

「はい。全ての事象には元となる原因理由があるという事です」

昨日の学校での会話をほんの軽い気持ちでシルに相談を持ちかけたが、シルの口から予想外に難しい言葉が出てきた。

「まあそう言われればそうかも」

「つまりはご主人様が他の探索者に比べて悪魔に出会う回数が多いのも偶然ではあり得ないという事です」

「それって、何か原因があるって事か」

「はい。悪魔との遭遇だけではありません。私やルシエがご主人様と出逢ったのも偶然ではあり得ません」

「ちよつと待ってくれ。俺が悪魔に出会うのもシル達に出逢ったの

も原因があるって事か」

「はい。ご主人様は、パーティーの中でも他の方達よりも明らかに攻撃を受けやすいですね。そしてパーティーを組む前から私達やイレギュラー達と遭遇していますよね。そしてそれはパーティーを組んだ今も続いています」

「……………」

このシルの口ぶりはまるで原因が俺であるかのような言い方だ。攻撃を受けやすいのも悪魔に頻繁に出会うのも俺のせい？ そんなバカな……………」

「シル、いくらなんでも俺が原因で悪魔と会うなんて事は無いよな」「いえ、間違いなくご主人様に起因していると思います。ベルリアも含めると3人もサーバントそして複数の悪魔やイレギュラーとの遭遇、ひいては手に入れられたスキルやアイテムの数々偶然であるうはずがありません」

「そんな事ってあるのか？俺が根っからの不幸体質って事か？」

「そうではありません。ご主人様がこれからなすべきことの為にあるのです。その為に私やルシエが付いているのですよ」

「なすべき事？一体俺は何をなせばいいんだ？」

「それはわかりません。ただしご主人様と私達は同じ因果律の中にいるという事です。何があっても一緒ですよ。ねえルシエ」

シルは何か俺がなすべき事があると言うが、それは何か分からないという。

まるで謎かけのような内容だ。

「ふん、前にも言っただろ。そんなの分かり切ってるだろ」

悪魔との原因が俺に有ると言われて結構ショックだが今2人がさら

つと感動的な事を言ってくれた気がする。

「2人はずっと一緒にいてくれるのか？」

「はい、ご主人様のサーバントですから」

「一応家族だからな」

幼女2人に涙腺を破壊されそうになるが『アサシン』の効果を発動して心を鎮めどうにか食い止める。

「それじゃあ末吉のせいじゃ無いのか。本当に俺のせいだとしたら他のメンバーにも相談しないと。もしかしたらまた俺達だけで潜らないといけないかもな」

「マイロード私もいますのでお忘れなく」

「ああ、分かっているよ。4人いればなんとかなるか。それにしても俺って将来一体何をするんだろうな。ダンジョンを踏破したりするのかな」

「その可能性はありますね」

「もしかしたら英雄になれるかもしれないね」

「英雄って言うよりモブ神様の使徒になれるかもな」

「モブ神様？一体どこでそんな変な言葉覚えたんだよ」

「この前ヒカリンにモブについて詳しく習ったんだ。それでモブの神様がモブ神様だ！」

ヒカリン、ルシエ達と仲が良くなるのは良いが一体何を教えているんだ……

ダンジョンでモブについての講習を開くってどんな状況だ。

しかもモブ神様？そんなの聞いた事がないぞ。ゲームか何かのキャラか？

将来、苦勞してモブ神様使徒になる？

絶対にそんな未来は回避してみせる。

第347話 因果律（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第348話 相談

俺は今パーティメンバーとお茶をしている。

こうしてダンジョン以外の場所でメンバーと食事するのは初めてだ。

「ところで、大事な話って何？」

「まあ、そう焦らずにゆっくり飲んでよ。俺の奢りだから」

メンバー全員を呼び出したものの切り出し難い。

メンバーが離れて行く覚悟は昨日のうちに出来ているが、いざとなると言葉が出ない。

「海斗さん、遂にふられたのですか？」

「いや違うよ」

ヒカリンが的外れな事を聞いてくる。

この微妙な空気が辛いので思い切って切り出してみる。

「みんな因果律って知ってる？」

「一応意味はわかるが突然だな。それがどうしたんだ？」

「昨日ダンジョンに潜ってる時にシルと話してたんだけど、因果律ってという言葉が出てきて」

「それって運命論的な話？」

「うん。運命というか、この前も悪魔に襲われただろ。それで真司達にも聞いてみたんだけど探索者のサークルみたいなネットワークがあつて、そこでも他の探索者が悪魔に遭遇したって言うのを聞いたことが無いって言われて」

「まあ、悪魔に襲われるのなんか私も余り聞いた事は無いけど」

「そうそれでシルに聞いてみたんだけど、物事には原因があったけど、
回の原因は俺だって言われたんだ」

遂に本題を切り出す事が出来た。

「海斗が原因？どういう事よ」

「何か俺が悪魔とかイレギュラーを引き寄せてるって言うか、俺にもよく分からないんだけど、将来何か起こるのかも知れないそうだ」
「何かって何？」

「シルにもそれはわからないらしいんだけど、ルシエは俺が将来モブ神様の使徒になるんじゃないかって」

「モブ神様の使徒……………」

そう言った瞬間にみんなの視線がヒカリンに集中して、ヒカリンが
気まずそうに俺から視線を逸らした。

「あ、あれは、ほんの冗談です。海斗さんの事で盛り上がってつい……………」

俺の事で盛り上がってモブ神様……………一体どんな会話だったんだ。

「正直、使徒になる事は無いと思うけど、とにかく俺が将来何かな
すために、シルとかルシエと一緒にいて、何故かイレギュラーや悪
魔にも遭遇する頻度が高くなっていると話す話らしい」

「そんな事あるの？偶然じゃ無いの？終わってみての結果論じゃ無
い？悪魔を引き寄せるってどんな体質なのよ」

「そう言われても俺も別に身体に星が刻まれたりしたわけでも無い
し実感は何も無いんだけど」

「まあ、仮に海斗がそういう特異体質だったとしてどうするのよ」
「いやそれなんだけど、俺は今まで通りダンジョンに潜る事はやめ

れないけど、みんなはそうじゃ無いだろ。俺が巻き込んでるんだとしたら他の選択肢もあるんじゃないかと思って」

「他の選択肢って何よ」

「いや、だから俺と一緒にいるとこれからも悪魔とかに会いやすくなるかもしれないだろ。それなら俺がいなければみんなは大丈夫じゃないかと思うんだ」

「それって海斗がパーティ抜けるって言う事？抜きたいの？」

「抜けたくは無いけどみんなに迷惑はかけれない……………」

俺だって折角ここまでこのメンバーでやって来たんだから抜けたくなんか無い。だけど悪魔やイレギュラーと会いやすい原因が俺に有るとすれば俺が抜ける以外に選択肢は無いように思える。

「ちよつといい？」

ミクが他の2人と席を移動して話し込み始めた。

結構長い事話している。今後どうするか相談しているのだろう。前衛が1人抜けるのでどこかで見つける必要があるのだからすぐには決めれないのかもしれない。

10分ほど待っていると3人が戻って来た。

「いくつか確認させて」

「はいどうぞ」

「海斗はこれからもダンジョンに潜るのよね」

「はい」

「パーティを抜けたくって言うてるんじゃないのよね」

「はい、違います」

「悪魔とかを呼び込んで私達に迷惑がかかるのを恐れて言ってるのよね」

「そうです」

「わかったわ。3人で話し合ったんだけど、しっかり聞いてよね」
遂にパーティ解散の時間が来てしまった。パーティを組んだこの半年
ぐらい本当に楽しかったな。本当はもう少しこのメンバーで続けた
かった。

第348話 相談（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第349話 通告

3人での話し合いが終わり、俺に最後通告の時が来た。

「海斗、一ついいかしら？シル様は因果律と言われたのよね。物事には原因があつて、海斗が将来なす事のためにシル様やルシエ様がついてるつて」

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

「やっぱり海斗はバカなのね」

「なっ！？何を急に」

「だつてそうでしょ。海斗、因果律というなら私達3人が海斗とパーティを組んでいる事にも意味があるつて事でしょ。シル様達がいるのと同様に私達3人がパーティメンバーとしている事も因果律の中に含まれてるんじゃない？」

ミクに言われて初めて気がついたが、ミクの言っている事には説得力がある。シル達がいるのが偶然では無いのだとしたら、ミク達がいるのも偶然とは言えないのかもしれない。

俺は自分に原因があると言われてそこまで頭が回らなかつた。

みんなに迷惑をかけないようにとだけ頭が働いて、今のメンバーも既に因果律の中に含まれていると言う可能性には一切思い至らなかつた。

「だけど、この前の悪魔もそうだけど危険度が増すかもしれないだろ」

「私達3人の話した結論。今まで通りパーティを組んで潜りましょ」

「いや、でも」

「私達も海斗とそれなりの時間を過ごしてきたつもりだけど。因果律と聞かされて、じゃあサヨウナラとはならない程度には絆があると思ってただけど」

「そうですね。海斗さんですけどシル様とルシエ様とお別れする事など出来ないのですよ」

「お二人と会えないなど考えられないな。まあ海斗もな」

「みんな……………」

完全に思ってたのとは違う答えが返って来たのでやられてしまった。確かにダンジョンでも助け合ってそれなりに絆も構築できているとは感じていたが、みんながこんなに心強いと思えた事は無かった。

「……………う、うっ」

やばい、涙腺が……………」

今までも何度か涙腺を刺激する出来事はあったが、今回は流石にやばい。

奥歯を食いしばって、涙腺にゲートをしようとしたが、今回のウェーブはあっさりとゲートを破壊してしまった。

不覚にも涙が溢れ出してしまった。

「なによ、このくらいの事で泣かないですよ。それにしても私達がそんなに薄情だと思われてた事に軽くショックを受けたわ」

「そうですね。逆の立場だったら海斗さんは私達を捨てて逃げ出していましたか？」

「う、うっ……………」

返す言葉が無い。全くそんなつもりは無かったが、俺のみんなへの信頼が足りなかったのかもしれない。

俺のみんなへの気持ちはベクトルが違ったようで、結構な覚悟で臨

んだつもりだが、杞憂に終わってしまった。

またこれから気持ちを新たに探索を進めて行こうと思うが、まずは14階層を攻略する事に集中したい。ただ問題は悪魔対策だろう。シルの言葉を信じるなら今後も間違いなく悪魔と遭遇するだろうから、どうにかしなければならぬ。

もちろん将来の為に貯金したい気持ちもあるが、まだ見ぬ未来よりも俺を含めたメンバーの今が1番大事だ。

既に進学の為の学費は確保しているので、これからは積極的に装備品やアイテムに投資していこうと思う。

今後の装備等の強化については、他のメンバーも同意してくれたので進めていきたい。

後は、今回のレベルアップで手に入れたスキルや魔法の検証が必要だと思うので、来週の土曜日に約束をして解散をした。

今週末は久しぶりに春香と映画を見に行く予定にしているので、せっかくだから装備品の補充にも付き合ってもらおうと思う。

メンバー同様、春香とも買い物友達としての絆は一步步ずつ深まって行っていると信じたいが、いつかそこから先に進んで行きたい。

第349話 通告（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第350話 お返し

俺は今『ラビリンスラプソディー』を見ている。

ラビリンスとは迷宮つまりはダンジョンをモチーフとした映画だ。現実のダンジョンと比較して、やたらとピンチになったり、強敵が次から次へと出て来たりと気になる部分ももちろんあったが、それ以上に感情移入してラスボスを倒して財宝を手に入れた時には自分が達成したかのような妙な感情に支配された。

「春香、面白かったな。ちょっと興奮しちゃったよ」

「うん面白かったね。海斗の潜ってるダンジョンって実際もあんな感じなの？」

「いや、あんなにテンポ良くは行かないし、そんなに御都合主義みたいに上手く進まないよ」

「そうなんだね」

「映画は2時間だけど、何しろ俺1階層で3年も燻ってたんだから」

「海斗、よく頑張ってるね」

「まあ今は結構うまくいってるからね」

久々の映画を見終わってからお昼ご飯を食べる事にした。

シヨッピングモールのフードコートで食べる事にしたが、今日は2人で大手チェーンのハンバーガーのセットを食べる事にして席に着いた。

対面で座ったのだが、何故か春香からじっと見つめられている。

見つめられてるが、俺の顔を見ているわけでは無さそうだ。

何だ？俺に何かついてるのか？

「春香、どうかしたのか？」

「う、うん。その指輪似合ってるね」

「指輪？」

「その薬指の指輪だよ」

春香に言われて気がついたが俺の左手の薬指には気絶をレジストするマジックリングがはめたままになっていた。

普段は外している事が多いのだが昨日潜ってから外し忘れてずっとつけていたようだ。

ダンジョンでは邪魔にならないように左手にはめて理力の手袋を上から着用していた。

「ああ、これマジックリングなんだ。気絶をレジストしてくれるんだ」

「もしかして誰かにもらったの？」

「一瞬寒気がした様な気がするが気のせいだろう。」

「いやいや、こんな高額なの誰もくれないよ。自分で買ったんだよ」

「そうなんだ。綺麗な指輪だね」

「うん、そうだね」

これはあれだろうか？春香も指輪が欲しいという事だろうか？それとも単純にこのレジストリングが好みだっただけなのか。これはダイレクトに聞いたほうがいいのか？誰か教えてくれ。

「は、春香は、普段指輪とかしたりするの？」

「うん、あんまりつける機会は無いけど、やっぱり憧れるよね」

憧れると言うのは指輪をつけるのに憧れるという意味か？それとも指輪を贈ってもらう事に憧れると言う意味なのか？

これは思い切ってプレゼントした方がいいのか、それとも友達の間際で指輪を贈るなどやばい奴として認定されてしまうのか？

「……………」

今の俺の頭の中は並列思考及び高速思考をリアルで体現しているが、どんなに考えても答えが出ない。

答えが出ないが、極限まで使用された俺の脳が突然奇跡的な事を思い出してしまった。

「海斗、どうかしたの？」

「あ、まあ、春香は指輪とか興味あるの？」

「それは、私も女の子だからもちろんあるよ」

「そうか………………。よかったら俺がプレゼントしようか？」

「えっ？」

「ホワイトデー。トリュフのお返しに春香さえよかったらプレゼントで指輪を贈るけど。も、もちろん変な意味はないよ」

「別を買って欲しくて見てたわけじゃ無いんだけど……………」

「あ、それはそうだよな。ごめん。変な意味じゃないから、じゃあ忘れてよ」

「えっ……………」

あ…………やばい。春香の表情を見る限り俺の対応は不味かったらしい。極限まで冴え渡った俺の脳が瞬時に正解を導き出す。

「いや、やっぱり贈らせてよ。ちょっと早いけど、こう言うのは気持ちだから」

「そっ…………。じゃあお願いします」

勢いで贈る事にはなつてしまつたが、以前ブレスレットでさえ選ぶのに苦労したのに指輪なんかどうやって選べばいいんだ。

俺のマジックリングが50万円だから同じぐらいのものを選べばいいのか？

デザインも同じ様なのがいいのか？

いや、やっぱり春香に選んでもらつた方がいいのだろうか。

俺の脳は既にオーバーヒートしていたようで、この日これ以上の性能を発揮する事はなかつた。

第350話 お返し（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第351話 リング

俺は今ショッピングモールの中のジュエリーショップにいる。

前回ブレスレットを購入したお店に来ているが、ちょっとした問題が発生してしまった。

店員さんが俺達の事を覚えていてくれて、色々と奨めてくれるのだが値段が思ったよりも安い。

大体3〜5万円ぐらいのものを薦めてくれるのだが、俺のリングが50万円した事を考えるとあまり安いのを春香に贈るのも憚られてしまう。

俺のマジックリングは銀色のリングに赤い小さな石がはまっている。春香が同じようなのがいいと言っているので赤い石を探すとルビーになったのだが、ダイヤモンドが圧倒的に1番人気らしくルビーはそれほどでも無いそうで、そこまで種類がある訳でもなく値段も抑えめのものが多い印象だ。

「海斗、これとかどうかな？」

「うーん、もちろん似合ってるしいいと思うんだけど……」

「どうしたの？あつ、もっと安いのにするね。ごめんね」

「え？ああ、そうじゃ無いんだ。もっと高い方がいいんじゃないかと思って」

「もっと高いってこのリングでも35000円もしてるんだよ。十分だよ」

春香の反応を見ていると本気で言っているようにしか見えない。

俺のリングが50万もしたものだから、指輪に対する値段の感覚がおかしくなっているのかもしれない。

心配になった俺は、春香がいくつかの指輪を見比べている際に店員

さんにこそつと50万円レベルの指輪を見せてもらった。

俺は完全に間違えていた。50万円の指輪は結構大きなダイアの婚約指輪みたいなばかりだった。

これをプレゼントは無理だ。完全に引かれてしまう。

やばい……俺の貴金属に対する金銭感覚がダンジョンマーケットのせいで完全におかしくなっている。

「海斗、これ海斗のとよく似た感じでいいと思うんだけど」

春香が見せてきた指輪は確かに俺のリングと良く似ている。

「きつとお似合いだと思いますよ。せつかくですから彼氏さんも彼女さんの指にはめて見てあげてください」

盛大に勘違いした店員がしきりに俺に指輪をはめると圧をかけてくるので、勢いに押されて春香の指にはめてみる事にする。

「あゝお似合いです。お二人お揃いのおようですし、最高のペアリングですよ」

彼氏では無いのでペアリングでは無いのだが、確かに春香にはよく似合っている。というか春香はどれをつけても似合っている。

俺が指輪をはめた春香の手に魅入っていると何故かじつと春香がこちらを見ている。

「うん、良いと思う。似合ってるんじゃないかな」

声をかけると春香が華の咲いたような笑顔を俺に向けて来てくれるが、やはり視線が気になる。

春香にそんなに見つめられると照れてしまう。何だ？やっぱり俺に

何かがついてるのか？

「どうかした？お金は大丈夫だから」

「ううん、なんでも無い。ありがとう。大事にするからね」

気に入ってくれたようでブレスレットの時以上に喜んでくれているように見えるが値段はブレスレットと同額の30000円だった。とてもじゃ無いがあの手作りトリュフの感動は30000円でどうにかなる物では無いがとにかく良かった。

「よろしければ、そのままはめて帰られますか？」

「はいっ、お願いします！」

よっぽど気に入ってくれたのかそのままつけて帰るようだ。

お店の人も勘違いしているせいか、妙な感じで暖かく見守るような目でにこやかに見てくる。

ちょっと気恥ずかしいが、とにかくホワイトデーのお返しを忘れず渡すことが出来てよかった。

俺とお揃いというのも少し気が引けるが、俺同様に春香の左手の薬指に指輪がはまっており抜群に可愛い。

いつの日か50万円の指輪を送れるといいなと、妄想に駆られてしまいながらお店を後にした。

第351話 リング（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第352話 春の香り

俺は今春香と買い物をしている。

無事にホワイトデーのお返しをする事が出来たが、もともと春香の春用の服を買うのが目的だったので買い物続ける。

「その指輪お揃いなんですね。かわいいですよね〜」

服屋の店員さんが春香に声をかけてくるが、いきなりさっき買ったばかりの指輪を褒めてきた。

流石は服屋の店員さん。お洒落に敏感なのか指のリングまで見てるとは凄いな。

「そうなんです。さっき買ってもらったばかりなんです」

「あ〜いいですね。ラブラブじゃないですか〜」

「そうですね〜」

やはり、店員さんも盛大に勘違いをしているようだが、春香もいちいち否定するのも面倒なのか適当にスルーしている。

「春服を探してるんです」

「そうですね。それじゃあ、その指輪にも合いそうな春服を探してみますね〜」

しばらく春香とやり取りをしながら持ってきたのは、水色のパンツに白のトップスと花柄のワンピースだ。

花柄の花の部分が赤色なので指輪を意識したのかもしれない。

「じゃあ、ちょっと待っててね」

春香が試着室に入って着替えるのを待つ為に俺は店内で待つ事にした。

春香の着替えた姿を見れるのは嬉しいが、この時間は正直辛い。

男1人で女性用の服のお店にいるのは場違いな感じだ。

「本当に可愛い彼女さんですね。お揃いの指輪を買ってあげるなんて彼氏さんもなかなかやりますね」

「いや俺は彼氏じゃ……」

「えっ？またまた」

「いや本当に」

「え………まさか、あんな可愛い子を遊びで……」

途端店員さんの態度がおかしくなった。まるで汚物でも見るかのような冷たい目だ。

やばい。俺また何か間違えた。

「いやいや違います。誤解です。遊びだなんてあり得ませんよ。友達です。しかも一方的に俺が好意を持っていて……」

店員さんのあまりの視線に焦ってしまい、言い訳じみた余計な事まで口走ってしまった。

俺の申し開きを聞いた瞬間、店員さんの目がまた変化した。

今度は、なんだろう？生暖かいような、呆れているような何とも言えない目だ。

「余計なお世話かもしれませんが、人生の先輩としてお姉さんからアドバイスです。貢いで貰いたい系の女の子以外は、ただの友達からお揃いの指輪を貰ってあんなに嬉しそうにはしませんよ。しかも

ねえ、左手のねえ…」

そこまで店員のお姉さんが喋っていると着替えた春香が出てきた。

「どうかな？似合っていないかな？」

そこにはパステルカラーのパンツルックの春香が立っていた。

学校ではスカートで普段のお買い物でもスカート姿しか見た事がなかったたので新鮮だ。

一言で表すと『いい』

まさに春色の天使だ。

「あ、ああ。いいと思う」

「あんまり、こういう格好しないから大丈夫かな」

「大丈夫とかじゃない。すごくいいと思う」

俺の言葉に安心したのか笑顔を見せてくれる。

まさに春の香りがして来そうだ。

そうか春香の名前そのものじゃないか。

きっと春香の両親はこうなる事を予測してぴったりの名前をつけたに違いない。

流石は春香の両親だ。

「それじゃあワンピースも着てみるね」

また春香が着替え室に戻って行った。

「やっぱり彼女さん可愛いですね。笑顔が素敵ですし服もよく似合ってます」

「そうですね」

ここでまた否定をすると余計ややこしくなりそうなので、そのまま返事をする。

春香が着替えている間店員さんは、何故か俺に女心とはを語り始めてしまった。

他にもお客さんがいるので相手をしなくていいのか心配になってしまったが、店員さんが何故かヒートアップして来てしまった。

「お待たせ。どうでしょう?」

花柄のワンピースから再び春の風と香りがこちらまで届いたような錯覚を覚える。

今日着ていた服もよく似合っていたが、このワンピースもよく似合っている。

春の妖精が舞い降りたようだ。

「うん、いいと思う」

「さっきのとどっちがいいかな?」

「うん、どっちもいいと思う」

「両方買うのはちょっと無理だから、どっちかなんだけど」

なんだこの究極の選択は。どっちもいいのにどちらかをやめるとは……

いっその事、片方は俺が買ってしまったおうかとも頭をよぎったが、春香の性格からして指輪と両方は受け取ってくれない気がする。

うん。先程のパンツルックを脳裏に浮かべ目の前の妖精に重ねる。どちらも捨てがたい。だがレア度という点でパンツルックに軍配が上がる気がする。

「さっきのパンツルックの方がいいんじゃないかな。春香にぴった

りだと思っ」

「うん。じゃあそれにするね」

春香が店員さんに先程の服を渡して着替えに戻った。

「彼氏さん、センスいいですね。彼女さんにぴったりですよ。彼女さんも似合ってるって言われて笑顔が溢れてましたね」

俺に服のセンスがあるとは思えないが、春香にぴったりの服が見つかってよかった。

もう少ししたらあったかくなるので、今日買った服を見られると思うと俺もテンションが上がってしまった。

早く春になるといいな。春が待ち遠しい。

第352話 春の香り（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第353話 浪漫武器

昨日は本当に楽しかったが今日は春香に俺の買い物に付き合ってもらっている。

いつものように駅で待ち合わせをするが、先に春香がついていたよ
うだ。

「おはよう」

軽く手を挙げて声をかけたが、何故か春香の視線が俺の目では無く
手に集中している気がする。

「どうかした？」

「ううん、今日は指輪してないんだなと思って」

「ああ、昨日は、外し忘れただけで、マジックアイテムだからダン
ジョンでしかつけないんだ」

「そうなんだ」

一瞬春香の表情が曇った気がするが、俺は特に何もしていないので
気のせいだろう。

指輪と言われて気がついたが春香は昨日の指輪をそのままつけてく
れていた。

気に入ってくれたようで良かったと思う。それと昨日は気がつかな
かったが前にプレゼントしたブレスレットも右手首につけてくれて
いた。

どちらも本当に良く似合っているので贈った甲斐があったという物
だ。

「それじゃあ、ダンジョンマーケットに行こうか」

「今日は何を買うの？」

「この前一緒に見たショットガンを考えているんだけど」

「まさかあの350万円の！？」

春香の驚きも仕方がない。流石に350万円有れば外車が買えそう
だ。普通の高校生が買える金額じゃないもんな。

「そう。値段が値段だから迷っただけど、ちょっと状況が変わっ
てしまったんだよ。どうしても装備をバージョンアップしたくて」

「お金は大丈夫？」

「それは大丈夫。大学の学費もしっかり貯めれたし問題ないよ」

「そう。大学はお金だけじゃ無くて受からないと入れないから頑張
ろうね」

「ああ、絶対に王華学院に受かってみせるよ」

俺がそう宣言すると春香が満面の笑顔を浮かべてくれた。

少なくとも一緒にの大学に行く事を嫌がられていない事だけは間違
い。

やはり命に変えても王華学院に合格しなくてはならないと心に決め
た瞬間だった。

それからダンジョンマーケットに行きいつものおっさんの店に向か
った。

「おっ坊主今日はいつもの別嬪な彼女と一緒に。忙しい事だな」

「あゝ武器を見せてもらって良いですか？」

おっさんの言葉尻に悪意を感じる。

「武器？魔剣は持つてるんだろ。他に欲しいもんなんかあんのか？」
「この前見せてもらったショットガンあったじゃ無いですか」
「あゝあれか。ちよっと待つてる」

おっさんが奥に下がってから銃を3つ持ってきた。

2つは見覚えがある

前に見せてもらったショットガンとランチャーだ。もう一つは見た事がないが、なんか形が格好いい。

「これは何の銃ですか？形も見た事無い感じなんですけど」

「おゝやっぱり興味を示したな。これはな聞いて驚けよ、浪漫武器だ！」

「は？」

おっさんがおかしくなった。いや俺の耳がおかしくなった。何か浪漫武器と聞こえた気がする。

浪漫武器？意味が分からない。

「だから浪漫武器だって言ってるだろうが」

やはり浪漫武器であってるらしい。

「浪漫武器ってなんですか？」

「まず見た目だ。ファンタジーな感じでカッコいいだろ！」

「まあ」

「次にこの銃だが燃費がすごぶる悪い」

「え……………」

「そして魔法が使える奴しか扱え無い」

「そんな事あるんですか？」

おっさん、この銃のデメリット以外喋って無い気がするが大丈夫か？

「お兄さん、この銃って良いところあるんですか？」

「おう、嬢ちゃん鋭いな」

いや誰でも感じる疑問だろ。

「まず発動時のエフェクトがイケてんだ！魔法属性毎のオーラと言
うか発光すんだ。スゲーだろ」

「はい。すごいんですね？」

「そしてこの銃はな、バレットと魔核と魔法を消費して撃ち出すん
だ。まさにトリプルアタックだ！スゲ〜だろ」

「すごい？ですか？」

「お〜よ。3つを一気に消費する代わりに威力は格段に跳ね上がる
んだぜ。最高〜だろ」

「まあ威力が上がるのは良いですよね」

要はおっさんの言ってる事を要約すると、魔核、魔法、バレットの
3つを消費する代わりに威力が上がった銃と言っ事だろ。

浪漫武器と聞いてなんて馬鹿な名前なんだとは思ったが、聞いてみ
ると悪くない気がする。

俺はおっさんの雑な話を聞いてもう少し詳しく聞いてみたくなった。

第353話 浪漫武器（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第354話 ドラゲナー

俺は浪漫武器を目の前にして予想外に惹かれている。

「あの〜。魔法ってなんの魔法でも良いんですか？」

「おお、攻撃魔法だったら何でも良いぜ。に〜ちゃん魔法は使えないのか？」

「一応使えるんですけど、水系と言うか氷系と言うか」

「水系はお勧めできね〜な。強力な水鉄砲になっちまうだろ。氷系なら有りだと思っがな」

氷系と言う事はやはりブレスレットの力を借りる必要があるがそれでいけるのか？

「魔道具とかで魔法の代用って出来るんですか？」

「まあ一応この銃も魔道具みたいなもんだからな親和性は高いと思うがやった事はないな」

「この銃って結構一般的なんですか？」

「いや、全く一般的じゃないな。俺も見たのはこれ1つだけだ」

「そうなんですね。値段っていくらなんですか？」

「そうだな、まあ使い手を選ぶしピーキーだからな、本来600万ぐらいもらいたい所だが。450万って所か」

450万か。話に聞く性能にしては安い気もする。出して出せない事は無いが予算は完全にオーバーしてるな。

「海斗ちよつといい？」

「うん、何？」

春香に呼ばれて後ろに下がったが

「多分あの銃が気に入ったんだよね」

「まあ、そうだけど」

「でも予算より高いよね。それと話を聞いてると海斗が使えるかどうかよく分からないように聞こえたんだけど」

「うーんそうなんだよね。俺の魔法で発動してくれるか不安なんだよね」

「それでも欲しいの？」

「出来たら欲しい気はするけど」

「分かった。私頑張ってみるね」

決意の表情の春香がおっさんに向かって言った。

「お兄さん、この浪漫武器ってあんまり売れそうじゃないですよね」

「失礼な。お嬢ちゃん、そんな事は無いぞ」

「使える人も限られて、燃費も悪いですよね」

「まあそうだが」

「それで相談なんですけど、安く売ってもらえませんか？実は予算が300万円なんです」

「おいおい、お姉ちゃん。そりゃ無茶だろ150万たんね〜じゃね〜か」

「でも、もしかしたらこんな特殊な武器他に買う人がいないかもしれませんよ。誰も買わなかったら300万円のマイナスですよ」

「お嬢ちゃん容赦ね〜な」

「それともう一つ。魔法が使えないとだめなんですよね。買って使えないじゃ困るので1週間だけ頭金30万円払うので貸してもらえませんか？もし使えない場合も頭金はレンタル料としてそのままお支払いします」

「お嬢ちゃんさすがだな。頭金の話はそれでいいが値段が無理だな。400万でどうだ！」

「うん。じゃあ頭金50万と後払い300万円でどうですか？」

「分かったよ。負けたよ。それでいいぜ」

「ありがとうございます。さすがお兄さん太っ腹！」

なんだこの攻防戦は。春香凄いな。俺の予算通りに収まってしまった。

「それじゃあ、一応預かり書を書いてもらっぜ」

「はい、わかりました」

とりあえず1週間借りれる事になったので明日から使ってみないといけない。

「海斗ごめんね頭金勝手に50万円も払う事になっちゃって」

「いやいや、春香のおかげでお試し期間を貰えたし、100万円も安くなったんだから大感謝だよ」

「それならよかった」

やはり春香は俺にとって勝手に幸運の女神だ。

魔法銃を受け取ってみると魔核銃よりは随分大きい。

片手銃には違いがないが左手だけで撃つのは難しそうなので右手で撃つ必要があるそうだ。

となるとバルザードを左手か。

「すみません。この銃って名前が浪漫武器なんですか？」

「は？何言ってるんだ、そんなわけねーだろ」

おっさん、自分が浪漫武器だって言ったんだろ！

「この銃はな、その名も『ドラグナー』だ。スゲーだろ」

何が凄いのかよく分からないが名前は竜ほくって格好いい。

こうして俺は春香のサポートもあって浪漫武器 魔法銃『ドラグナー』を手に入れる事が出来た。

第354話 ドラゲナー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第355話 プライスレス

俺は今2階層に来ている。

昨日、浪漫武器『ドラグナー』を購入したので、俺に使えるのか確認しに来た。

それとまだほとんど使用した事の無い『ゲートキーパー』をもっと検証したかった。

「ご主人様　ゴブリンです」

眼前にゴブリンが現れたので『ゲートキーパー』を発動してみる。

『ゲートキーパー』

.....全く反応が無い。

可能性としては十分に考えられた事だが、どうやら交戦中はスキルが発動しないようだ。

戦闘中に『ゲートキーパー』が使えれば緊急離脱用にこれ以上の物は無かったのだが使えない物は仕方がない。

『ゲートキーパー』に戸惑っているうちにゴブリンが迫って来てしまった。

咄嗟に理力の手袋の力でゴブリンに1発入れてからナイトブリンガーの力を発動させる。

レベル21となった今ゴブリン相手であれば完全に気配を消す事が出来るので、そのまま後ろに下がって『ドラグナー』を構える。

既に『ドラグナー』には魔核を10個吸収させてバレットも10個装填してある。

しっかりとゴブリンに狙いをつけてトリガーを引いてみる。

「カチツ」

トリガーを引いた音だけが小さく響いて何も起こらない。

あれ？何も出ない。壊れているのか？それとも俺では使えないのか？少し焦りながらも、すぐに次の動作に移る。

この『ドラグナー』は魔法で発動すると言っていた。それならこの銃は勝手に持ち手の魔法を認識してくれるのか？複数の魔法を使えるカオリンが使った場合はどうなるんだ？勝手に『ドラグナー』が魔法を選ぶのか？

普通に考えると持ち手側がセットする必要があるのでは無いだろうか？

「ウオーターボール」

俺は魔氷剣を発動させる要領で『ドラグナー』に魔法を纏わせてみた。

これでどうだ？

俺は再び右手で狙いを定めてゴブリン目掛けてトリガーを引く。

その瞬間『ドラグナー』の銃身部分が青色に発光した後先端に収束して

「ダウン」

魔核銃の射出音とは全く違う重低音の射出音が聞こえて青白く光った弾が光の残像を残してゴブリンの向こうに消えて行った。

魔核銃には無い重い反動のせいで、銃口がズレた。

慌てて俺は2発目をゴブリン目掛けて放つ。

「ドウン」

再び重い衝撃と射出音と共に青白く光る弾が一瞬でゴブリン迄到達した瞬間、ゴブリンに着弾した部分が弾けて消失してしまった。

高速の弾道が本当に見えるわけでは無いが、光の尾を引いているので見えたような気になってしまふのだろう。

それにしてもこの銃はすごい。魔核銃とは威力が違う。そしてカッコいい。

銃なのに射出されたバレットが青く光っている。しかも射出の瞬間銃身も光ってカッコいい。

唯一の心配は隠密状態の時に相手からこの光は認識されてしまふのだろうか？

それを差し引いても、流石はおっさんが浪漫武器と言うだけあってかなり凄い。

先程の射出で気がついた事が2点ある。

まず咄嗟に撃った2発目は魔法を詠唱していないが射出出来た。

これは最初に『ウォーターボール』を詠唱した効果がまだ残っていたのだと思うが、この状態で何発撃てるのかは確認が必要だろう。

そしておっさんが『ウォーターボール』では効果が厳しいと言っていたので先程の弾はブレスレットの効果が付与された『アイスボール』が適用されているのだと思われるが、普段と違い身体の拘束感が無かった。

理由はわからないが、魔道具同士親和性が高いと言っていたので、俺を介さずにブレスレットの力を使ったのかもしれない。

その後も何体かのゴブリンと交戦した結果いくつかの事が分かった。詠唱が必要なのは最初の1回だけ。その後は10発迄詠唱無しで射出する事が出来る。

そして装填し直した場合また最初の1発目には詠唱が必要となる。

また魔核10個で撃ち出せるバレットは10発。魔核1個で1発だ。そしてMPは1発打つ毎に『ウォーターボール』同様4ずつ消費さ

れていた。

今の俺だと最大で12発撃てることになるが、バルザードや『ゲートキーパー』の事を考えると、今の段階では上限8〜9発だろう。ちなみに『ゲートキーパー』は1回の発動でMP5が必要だった。つまり『ドラグナー』を1発発動する毎に魔核1個とMP4とバレットが1つ必要になる計算だ。

確かに燃費はすこぶる悪いが、確実に火力はアップした上にカッコいい。

やはりカッコいいはプライスレスかもしれない。

第355話 プライスレス（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第356話 超魔法

俺は今週ずっと『ドラグナー』と『ゲートキーパー』に時間を費やしていたが、そのせいで全く収入が途切れてしまっていた。

ゴブリンの魔核1個得るのにスライムの魔核1個とバレット1個必要なのでほぼ等価交換に近い状態が続いており、狙いを外した場合に完全にマイナス状態になってしまっていた。

本当はもつと割の良い下層に行けば良いのだが、余裕を持って検証するには2階層までが望ましかった。

『ドラグナー』の扱いには大分慣れて来たが遠距離で高速移動する敵にはまだ難しいかもしれない。

思った以上に反動があるので色々試した結果、少し窮屈だが肘をナイトブリンガーの脇に当てて固定した状態で撃つのが1番安定していた。

それと同時にバルザードの訓練も行った。『ドラグナー』を右手で扱うので必然的にバルザードを左手に持つ事になるが、左手1本で扱うのに慣れが必要だった。

ステータスの恩恵で左手で扱う事自体は問題なかったが、今までの右手のように自由自在と言うわけにはいかなかったため、実戦で使えるように練習を重ねた。

『ゲートキーパー』は階層のどこにいても各階の入り口迄行く事が出来るので、1階層の先に進んで誰も居ない場所から発動することになっている。

もし転移先で他の探索者に会ってしまったら、今の所顔を見られ無いように逃げ出すか、完全にシラを切り通すしか無い。

土曜日になりメンバーと合流してから『ドラグナー』の説明と『ゲートキーパー』の検証結果を知らせておいた。

『ドラグナー』に関しては概ね好評だったような気がする。

そして14階層に再突入しようと思うが、今日の最大の問題はヒカリンの『ウォーターキューブ』だ。

今の所水汲みにしか使えないこの魔法をどうにか戦力にしてあげたい。

実は俺には秘策があった。

ヒントは俺が小学生の低学年の時に放送されていたアニメだ。確か原作は随分前の作品だった記憶があるが当時リメイクされて特に小学生に人気があった。

そこでは主要キャラの魔法使いが水と炎を融合して、超魔法みたいなのを生み出していた記憶がある。

俺は熟考した結果これしか無いと思えた。

ただ問題はアニメでは右手と左手にそれぞれ属性の違う魔法を同時に発現させていた気がするそんな事が可能かどうかやってみないと分からない。

「ヒカリン『ウォーターキューブ』なんだけど、俺なりに考えたんだ。『ウォーターキューブ』と『ファイアボルト』を融合して超魔法に進化させられないかと思うんだけど」

「海斗、なんか昔そんなアニメがあった気がするんだけど」

「どうやってやるのですか？」

「右手に『ウォーターキューブ』を左手に『ファイアボルト』を発動させて融合するんだ」

敵と出会う前に練習する事になり、まずは2階層に飛んでからやってみる事にしたが、俺の安直な考えは直ぐに頓挫してしまう事となった。

まず『ファイアボルト』をその場に留まらせる事が出来なかった。基本、射出型の様でスピード調整はできるものの手の平の上に止まらせる事が出来なかった。逆に『ウォーターキューブ』を出現後移動させる事も出来なかった。

「アニメみたいには上手くないかな」
「やっぱりアニメだからだったのね」

手の平で融合するのは無理だったのですぐに次善策を考える。

ゴブリンを発見して、ゆっくり試す為にシルに『鉄壁の乙女』を發動してもらってから、ゴブリンに向けて『ウォーターキューブ』を發動してもらった。

「よしヒカリンいまだ！」

ヒカリンに先に發動させた水の塊に向けて『ファイアボルト』を放ってもらった。

「いきます『ファイアボルト』」

ヒカリンの放った炎雷が一直線に飛んでいき水の塊に突き刺さった。衝突の瞬間、大量の水蒸気が上がり次の瞬間

「ドガアアアーン」

『鉄壁の乙女』越しにも熱気が伝わって来る。

俺の思いつきは融合による超魔法では無く、なぜか強烈な爆発を起こしてしまった。

第356話 超魔法（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第357話 エクスプロージョン

「え……………なんで？」

俺の考えていた超魔法では無かったが、ヒカリンの『ファイアボルト』を遥かに超える威力の爆発が起きた。

『ウォーターキューブ』と『ファイアボルト』をぶつけて何で爆発が起きたんだ？

「これは……………水蒸気爆発か？」

「水蒸気爆発ですか？」

「そうだ。大量の水に超高温の炎雷が衝突した事で水蒸気爆発が起こったんだろう」

流星は大学生。あいりさんが説明してくれて初めて気がついたが、これはまさに水蒸気爆発だ。

名前をきけば意味はわかるが実際に爆発したのを見るのは初めてだ。水って本当に爆発するんだ……………

しかも威力が半端では無い。下手をするとシルの『神の雷撃』に近い威力があるかも知れない。

手元で融合していたらと考えたら背筋に冷たい汗が流れていた。

「海斗さん……………これ……………どうしましょう」

「ああ……………思ってたのとはちょっと違うけど『ウォーターキューブ』の有効活用には違いないから良いんじゃないかな……………」

「これ使い所が難しく無いですか？」

「まあ、とにかく自分達から離れた位置で使おうか」

強力ではあるが魔法2発分のMPを消費するのと『ファイアボルト』の着弾までタイムラグが発生するので、上手く使いこなす必要がありそうだ。

その後ゴ布林相手には完全にオーバーキルだったので『ゲートキパー』を使い14階層まで向かう事にした。

「ご主人様、言いにくいのですがひとつお忘れでは無いでしょうか？」

「え？何を？」

「やはりお忘れだったので……私も新しいスキルを身につけたのです」

「あっ……も、もちろん覚えてるよ。いやだなく当たり前じゃ無いか。ははは」

「本当ですか？」

「あ、ああ、本当だよ。あれだよ泉だよな」

「そうです。何の泉でしょうか？」

「泉は泉だよな……ごめん忘れてた」

「私はシヨックです『楽園の泉』です」

「ごめん、いつぺんに色々ありすぎて頭がおかしくなっていたのかも。しれない。ごめん」

完全に忘れてしまっていた。カオリンの『ウォーターキューブ』や俺の『ドラグナー』極め付けに因果律なんていう運命ワード迄飛び出したので頭が既に一杯でシルのスキル『楽園の泉』の事まで頭が働いていなかった。悪い事をしてしまったが『楽園の泉』夢にまで見た召喚スキル。是非試してみたい！

「それじゃあ、試しに使ってみてもらえるか？」

「わかりました。いきますよ。我が忠実なる眷属よここに顕現せよ

『楽園の泉』」

カッコいい聖句と共にスキルを発動したシルの眼前に小さな魔法陣が現れ淡い光と共に眷属が召喚された。

「シルファイ様、召喚に応じ参じました。ルシールです」

そこに現れたのは、小人？の天使だった。

「シル、これって天使？何か小さく無いか？」

「恐らく私のレベルが低いので、このサイズになってしまったのかもしれない」

大体大きさは20CMぐらいだろうか。クレインゲームとかで取れるフィギュアと同じぐらいの大きさだ。

見た目は女の子だ。よく見ると結構可愛いかもしれないが、この大きさと戦えるのか？

「シル、ルシールって戦えるのか？」

「多分、大丈夫だと思います」

「もちろん戦えますよ。任せてください」

本当か？このサイズだとモンスターに一瞬でやられてしまいそうな気がする。

「ルシールって天使？なのか？」

「もちろん天使です。よろしくお願いします」

やはり天使であっているらしい。俺の天使のイメージ通りの白いミニスカートワンピースの様な服を着ている。

しかも結構胸が大きい気がする。いくら大きくてもこのサイズでは

小豆ぐらいの大きさしか無いので残念だ。

「それじゃあ、この階層のモンスターと一緒に戦ってもらおうか」
「わかりました」

それからモンスターを探して奥に歩き始めたが、歩いているうちに突然目の前を飛んでいたルシールが消えてしまった。

「あれ？どこに行ったんだ？」

「申し訳ありません。今の私では2分程度が召喚の限界の様です」

シルの新しいスキルには制限時間があるらしい。

次はモンスターと遭遇してから召喚してもらおうと思う。

第357話 エクスプロージョン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第358話 ルシール

俺は今14階層を探索している。

「ご主人様、モンスター2体です。ご注意を」

「それじゃあもう一度『楽園の泉』を頼む」

「わかりました。我が忠実なる眷属よここに顕現せよ『楽園の泉』」

先程と同じ聖句を唱えると、淡い光と共にルシールが現れた。

「ルシール、敵が現れたら殲滅するのです」

「わかりました」

「そういえばシル、ルシールがいる間も普通に動けてるけど何か制約は無いのか？」

「はい。ルシールが居ても私も普通に動けるので戦闘に加わる事が可能です」

このスキルで1つ心配だったのが『鉄壁の乙女』や『戦乙女の歌』の様に発動時に他の行動に制限がかかるのでは無いかという事だった。

いくらルシールを召喚出来たところでシルが動けなくなったら本末転倒だ。

「それじゃあ、敵も2体だしシルとルシールでお願いしてもいいか？」

「かしこまりました」

すぐにホブゴブリン2体が現れて交戦状態に入った。

ホブゴブリンの大きさとルシールの大きさを比べると、とても勝てそうには見え無いが大丈夫だろうか？

「ルシール大丈夫か？俺が替わろうか？」

「大丈夫です。任せて下さい」

ルシールは女性なので例えは悪いかもしいないが、まさに一寸法師状態で鬼と小人だ。

一寸法師は確か針の刀を持っていたと思うがルシールは特に何も持っていない。

どうやって戦うのだろうか？

「それではルシールいきますよ」

「わかりました。シルフィー様」

ホブゴブリン2体がこちらに向かって走ってきたが、明らかにルシールを目掛けてやって来ている。

小さなルシールを与し易いと思ったのだろう。2体が武器を携えてルシールに迫ろうとしているが、当のルシールは全く焦っていない。

「やはりモンスターとは下品な生き物ですね。お還りください」
「エレメンタルブラスト」

ルシールがスキルを発動した瞬間、ホブゴブリンの一体が突風で巻き上げられ、そのままダンジョンの天井に衝突してから急速に落下してロストした。

「ルシールやりますね。私も負けられません」
「神の雷撃」

今度はシルの雷撃が残ったホブゴブリンに落ちて一瞬で消え去って

しまった。

どうやらシルはルシールが居ても動けるだけで無く、スキルも使用できる様なので、単純にパーティの攻撃力と手数が1人分増えた様なものだ。

それにルシールのスキルも強烈だ。

てつきりスキルも小人サイズなのかと思ったら、全くそんな事は無かった。普通に俺のスキルよりも断然破壊力がある。

「ルシールすごいな。その大きさでの威力は反則級だな」

「ありがとうございます。これでも天使ですから」

確かに小さいだけで人類を超越した天使なのだからこのぐらいは当たり前かもしれない。

しばらくするとまたルシールが消えてしまった。

「シル、召喚出来るのはルシールだけか？」

「はい、今の私ではルシールだけの様です。レベルが上がってけば他の眷属も喚び出せる様になると思います」

「ちなみに1回呼び出すのにMPはどのぐらい必要なんだ？」

「そうですね。確認したところMP20が必要のようです」

「20!?!」

流石味方が1人増えるという破格のスキルだけあって消費するMPが半端では無い。

俺とかのMP量だと一瞬で底をついてしまいそうだ。

これでレベルアップして複数喚べる様になっても時間制限のあるスキルなので、そうそう連発できる様な代物でも無さそうだ。

いずれにしてもヒカリンの水蒸気爆発スキルと合わせて大幅にパーティの火力が上がったのは間違い無さそうだ。

逢いたくは無いが、またそのうち遭遇するであろう悪魔に対抗する

手段が増えた事は歓迎すべき事なので、
今後は使い所を訓練して
きたい。

第358話 ルシール（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第359話 黒翼

俺は今14階層を進んでいる。

事前の情報通り、敵モンスターの出現頻度が高い様で今日だけで既に4回程交戦している。

「まあ、魔核を回収できるからいいんだけど、あんまり無駄撃ちは出来ないな」

「そうですね『楽園の泉』は、この階層では使い辛いですね」

「代わりにわたしが活躍してやるから安心しろ」

初めのホブゴブリンに対して『楽園の泉』を使用して有用性を確認したものの、MP使用量の多さからそれ以降の戦闘には使用できていない。

ヒカリンの水蒸気爆発コンボも1度使用はしてみたが、こちらも2発分のMPを消費する上にタイミングが難しいので、敵が密集した状態などで使用するのが良さそうだった。

「そうだなルシエ頼んだぞ」

「言われなくてもやるけど、いつ使えばいいんだ？わたしの新しいスキル」

「……………」

なんだ？ルシエの新しいスキル？

「次使っているのか？」

「ああ、もちろんだ。頼んだぞ！ルシエ！」

ああ、またやってしまった……………

シルの新しいスキルの事も頭から飛んでいたが、ルシエもだった…

……

やばい。相当に因果律の話と自分の事で頭がいっぱいになってしまっていた。

大丈夫だ。まだ気取られてはいない。堂々としていれば大丈夫だ。

「海斗さん、もしかして忘れてたりしました？」

「えっ？そ、そんな事は無いよ」

「海斗まさか忘れてたのか？すぐ試す様に言っただけから不思議だったんだ。シルのを忘れてたからわたしまで忘れる事は無いだろうと信じてたのに……………」

なんだ？ルシエが妙にしおらしい。そんなにショックだったのか？

「……………ごめん。俺が悪かった」

「謝るだけか？」

「……………魔核？を欲しいのか？」

「欲しいのか？何かおかしいな」

「わかったよ、俺が悪かったよ。魔核を5個で許してくれ」

「まあ、今回だけだぞ。ふふっ」

やはりこいつがしおらしいなんて事がある訳がなかったが、全て俺が悪いので今回は魔核5個で許してもらおう。

しばらく歩くと醜悪な3本角の生えた豚モンスターであるバジッドオークが3体現れた。

普通のオークと違い立派な角が3本生えているのが特徴で、パワーと耐久力が増している。

モンスターの見た目は悪いが角は外国のカブトムシの様でカッコいいので何となくアンバランスな印象が強い。

「3体ともわたしがやっていいのか？」

「1人で大丈夫か？3体だぞ」

「誰に言ってるんだよ。当たり前だろ30体でも大丈夫だぞ」

「わかったよ。それじゃあ頼んだぞ」

スタンピードの時を除き、1人で複数の敵を相手にする事はあまり無かったがルシエの事なので多分問題ないだろう。

「はっつ。新しいスキルのお披露目がお前達のような醜悪なモンスターとは……『黒翼の風』」

ルシエが新しいスキルを発動すると空中に黒いもやの様な物が発生して突風を伴ってバジッドオークを包み込んだ。

黒いもやが包み込んだ瞬間にバジッドオークの全身は切り刻まれて消えてしまった。

「あゝ1発じゃ無理だった。お前らは、散らばらずにまとめてかかってくればいいんだ『黒翼の風』」

再び黒いもやの様なものが現れて今度はバジッドオーク2体を包み込み2体共一瞬で切り刻んでしまった。

ルシエのスキルも風系のスキルだった。ルシエのも同じ風系には違いないが完全に方向性が異なると言うかルシエのスキルが断然エゲツない。

一瞬で切り刻まれる様は正に一瞬でミンチだ。モンスターとは言え余り見たいものではないが、この威力と方向性がルシエの悪魔たらしめる所以だろう。

「ふふふ、どうだった？」

「ああ、さすがだな」

「それだけ？」

「凄かったよ」

「ふふっ」

パーティ全体の火力とレベルがアップしたおかげで14階層の探索は思った以上に順調に進んでいる。

第359話 黒翼（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第360話 発火

日曜日になり俺は14階層を探索している。

昨日は都合10回も戦闘する事になってしまったが、寝たら疲れは完全に抜けていたので今日も目一杯頑張っていけそうだ。

「ご主人様、モンスターですが5体います。まもなくこちらに来ます」

「よしっ、俺とベルリアとあいりさんで前に出よう」

いつもの陣形で敵を迎え撃つが、ホブゴブリン3体にホブゴブリンの上位個体なのだろうか？1本角が生えた個体が2体混じっている。

「人間ども、これで死ねや！」ブリッツッ」

いきなり角の生えた個体が声を上げて魔法で攻撃してきたと思ったら目の前が強烈な光で覆われて前が見えない。

網膜にモンスターによる魔法の光の残像が映り込んでモンスターがよく見えない。

咄嗟に俺は後退の指示を出して反転して後ろへ下がる。

「私がいきまず。『ウォーターキューブ』 皆さん伏せてください
『ファイアボルト』」

敵との距離感が分からないので、ヒカリンの声に従って地面に伏せた直後に爆発音と爆風が頭上を襲った。

魔法の連鎖による完全な水蒸気爆発だ。

まだ目がよく見えないので周りの状況がよく分からない。

「もう1発いきます。『ウォーターキューブ』
ボルト』」

『ファイア

「ドガガガアーン！」

本日2度目の水蒸気爆発が起きて頭上が熱風で熱い。
流石に爆発2連発は激しい。見えなくても身体中で感じるこ
うが出る。凄まじい威力だ。

「みなさん、終わったのです。もう大丈夫ですよ」

声が聞こえてきたので起き上がるが、目がチカチカして状況がよく
分からない。

「ううん、ベルリア治療を頼む」

「かしこまりました。少しお待ち下さい『ダークキュア』」

ベルリアのおかげですぐに目が見えるようになったので周りを見て
みるが、どうやら前衛にいた3人が閃光により目をやられたよう
で、あいりさんはまだ目を気にしていたので、ベルリアに治療を頼んで
おいた。

後衛のメンバーは離れていたおかげで閃光の影響は少なく済んだよ
うだ。

目の前の地面には魔核が5個落ちているのでヒカリンの攻撃2発で
5体とも消滅してしまったようだ。

おそらく、敵モンスターがスキルを発動してから、こちらの様子を
伺っていた瞬間に魔法を叩き込んだのだろう。

「助かったよ」

「私もたまにはやるのですよ」

ヒカリンはたまにというか結構活躍してると思うんだけど……

「それじゃあ次は私の番ね。任せてもらおうよ」

「えっ？大丈夫？」

「失礼ね、しっかり見ておきなさいよ」

ヒカリンの活躍にあてられたのか次はミクがやると言い出した。ただミクは火力不足なので大丈夫だろうか？

しばらく歩くとすぐにホブゴブリン3体に遭遇した。

「海斗、しっかり見ておきなさいよ」

「あ、ああ。危なくなったら助けるから」

ミクは後衛の位置からスピットファイアを構えている。

「幻視の舞」

久々のミクのスキルにホブゴブリン1体が嵌ったようで奇妙な動きを見せ始める。

「それじゃあ消えて無くなりなさい『ファイアスターター』」

ミクがこの前身につけたばかりのスキルを発動してスピットファイアのトリガーを引くと、いつもの卓球の球程のファイアボールでは無くソフトボール程の大きさの火球が撃ち出された。

通常のファイアボールよりは少し小さいが、高速で撃ち出された火球は威力十分で次々にホブゴブリンを捉えて致命傷を与えていった。

「なんで？」

俺にはどうしてスピットファイアの火球が急に大きくなったのか分からなかった。

間も無く3体のホブゴブリンは消滅してしまった。

「時間があつたから私の『ファイアスターター』の使い方を自分なりにいろいろ考えてみたのよ。私は後衛だから敵の1m以内に近づく事がないじゃ無い。だからスピットファイアの弾に炎を付与して撃ち込んだらパワーアップするんじゃ無いかと思ったのよ」

なるほど、元々火の属性の弾に炎を付与したから弾が大きくなって威力が増したのか。

連射が効く分普通にファイアボールの魔法を使うよりも効果的かも知れない。

その後も張り切った、ヒカリンとミクのお陰で探索はいつもよりもスムーズに進んだ。

第360話 発火（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第361話 父来たる

俺は放課後にダンジョンマーケットでドラグナーの残金である300万を払いに行った。

おっさんは普段見せないような満面の笑顔を見せていた。接客業なのだから普段からその顔を見せて欲しいものだ。

その帰り道

「もしもし高木海斗さんでしょうか？」

「はい、そうですがどちら様でしょうか？」

「私、田辺光梨の父です」

俺の携帯に知らない番号から電話がかかってきて、田辺光梨の父を名乗る相手の事が一瞬誰かわからなかったが、すぐに田辺光梨がヒカリンの本名である事に思い及んだ。

「ああ、光梨さんのお父さんですか？」

「はい、突然の電話すいません。実は、おりいってお話ししておきたい事がありました、今週どこかでお時間いただけませんか？」

一体なんだ？ヒカリンのパパの口調は怖くはないが真剣そのものだったので、何か怒られるのか？と不安になったが、答えない訳にもいかないのです、明日の放課後に駅前で待ち合わせをする事にする。俺は、ヒカリンのパパの電話にその日1日悶々として過ごす事となった。

一体俺に何の用だろう。まさか娘に悪い虫がついたと追い払いに来るのだろうか？

うん。俺何も悪い事はしていないよな。大丈夫だよな。

次の日も学校で悶々としながら授業を受けてから駅へ向かうと既にそれらしき人が待っていた。

「あの〜。田辺さんですか？」

「はい。あなたが高木さんですね。今日はわざわざお時間を取っていただきありがとうございます」

初めて会ったヒカリンのパパはメガネをかけており、俺よりも小柄の優しそうな人だった。

挨拶もそこそこに駅前の喫茶店に入ることにした。

「いつも光梨がお世話になっています」

「いえ、こちらこそ」

「早速なんですが、今日は高木さんをお願いがあつてやって来ました」

「お願いですか？」

「一体俺にお願いって何だ？ヒカリンをメンバーから抜けさせて欲しいのか？」

「はい。少し話が長くなりますがよろしいですか？」

「それは別にいいですけど」

「実は光梨は病気なんです。5年程前に病気が判明しまして、症状は薬で抑制されていますが今の医学では根本的な治療は難しいんです」

「え……」

「本人も自分の病気が治るのは難しいのは理解していますが、このままでは成人を迎える事は……」

「ちょ、ちよつと待ってください。そんなバカな……だって光梨さん元氣じゃないですか」

「効果的な薬が開発されて症状を抑える事が出来ているので、普段の生活は今のところは問題無いのですが徐々に効果が薄くなってくる様なんです」

「そんな事って……」

「私達も色々当たって見たところ通常の薬では根治しなくてもダンジョンで発見される薬なら可能性があるかとわかりました」

「ダンジョンで発見される薬？ポーションですか？」

「いえ上級ポーション迄は自分で購入して試す事が出来たのですがダメでした。それ以上の霊薬、エリクサー、ソーマ、ネクターと呼ばれる薬であれば恐らく。ただ私達の様な一般人では幾らお金を出そうが手に入れる事は出来ませんでした。一部の上流階級の方だけがオークションで稀に手にいれることが出来る様で私ではダメでした」

エリクサー、ソーマ、ネクターそれぞれ名前だけは聞いた事がある。死者さえも蘇らす事ができると言う都市伝説さえ生まれている神秘の霊薬。真正正銘のレアアイテムだ。

金額は億ではきかないだろうがそれ以上に一般人では手に入れる事が出来ないアイテムとしても有名だった。

一部の権力者達が己の為に使うべく一般の市場には出回らないと言われていた。

「エリクサーですか……」

「はい。光梨は、身体の事もあつて学校以外は家ではほとんどゲーム等をやつて過ごしていたのですが、自分で薬を手に入れるんだと言い出しまして、止めようとしたのですが、自分の命だからと言われてしまい私には反対する事は出来ませんでした」

「でも光梨さん、ダンジョンでは普通に活躍してるんですよ」

「はい。どうやらダンジョンで得られる特有のステータスのおかげで、ダンジョンでは地上よりも調子がいい様なんです」

ああ、そう言うことか。ダンジョンではステータスの補正が効いて元氣に見えているのか。

ゲームに詳しいのもそれか……………

初めて会ったヒカリンのパパの話は衝撃的だった。

第361話 父来たる（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第362話 運命の調べ

「それで、光梨自身も自分で薬を見つけ出して、自分の運命を変えて見せると行ってダンジョンに通い始めたんですが、最初の頃は思ってた程上手くいって無かった様なのですが、ある時期を境に光梨の態度が明るくなりまして、聞いてみるとパーティを組んだんだと言ってます」

ヒカリンがダンジョンに潜っていた理由が分かった。

自分の病気を治す為にエリクサーやソーマ、ネクターのいずれかをダンジョンで手に入れようとしていたようだ。

そもそも手に入れたと言う話自体が聞こえて来ないレアアイテムなので普通に考えてソロで潜る事の出来る浅い階層で見つかると思えない。

ヒカリンにとってパーティを組む事は文字通り死活問題だったのだろう。

今の所パーティでの探索は上手くいっているのでヒカリンが明るくなったのもうなずける。

「多分僕達とパーティを組んだからなんですな」

「そうですね。あの子に聞いたら楽しそうにダンジョンでの出来事を話してくれるんです。パーティの方の話や敵を倒した話とかもです。あの子が皆さんを信頼しているのがすぐに見て取れました」

「そうですね。それはよかったです」

「ただあの子の時間が少しずつ少なくなっているのは変わりの無い事実なので、厚かましいお願いなのですが、どうかエリクサーを見つけて頂けないでしょうか？お金は出来る限りお支払いたしますので娘に使わせてやってもらえないでしょうか？私にはもうこれしか手

段が無いんです」

ああ、そう言うことか。

ヒカリンのパパはの願いは俺達にヒカリンの病気を根治させる薬を見つけて欲しいと言う事だった。

パパの表情を見ても、ヒカリンが探索者になつてから経過した時間を考えても、もうこれしか手段が無いと思つたのだろう。

「大丈夫です。頭を上げてください。エリクサーかネクターかは分かりませんが、絶対に見つけるんで安心して下さい」

「ありがとうございます。重ねて厚かましいお願いなのですが、光梨が探索者でいられる時間的な余裕は後1〜2年しか無いと思うのでそれまでに何とかお願いします」

「大丈夫です。任せてください。これも決まつたことだと思つので」

初めは、ヒカリンの事で衝撃を受けたがパパと話しているうちに自分の中で話の内容がスーツと入ってきた。

先週因果律の話が出て来てミクからメンバー全員が同じ因果律の中にいるのだと言われた。

つまりはそう言う事だ。

ヒカリンがK-12のメンバーになつた事も偶然では無いと言う事だ。

俺の何かをなす事の中にヒカリンの薬をダンジョンで見つける事も当然含まれている。

そつでなければヒカリンが俺の将来の事に関係してくるはずがないのだ。

ヒカリンの薬を俺が見つけてヒカリンは未来でも探索者を続けている。そして俺と一緒に何かをなす。

先週までは、因果律と言う話にどこか半信半疑なところがあったが、

今はもう確定事項でしか無いと思えた。

このタイミングでパパが俺に相談して来たのも偶然では無いのだろう。

「決まっていた事と言うのは、どう言う意味でしょうか？」

「あ、ちよつと説明し辛いんですけど、絶対に光梨さんは大丈夫なので安心してください」

「……………本当にありがとうございます。高木さんは優しいですね。限りなく可能性が低い事は理解していますが、そう言っていただけだと……………うっ、うっ」

無理もない。パパの気持ちを考えると俺の大丈夫ですは、ベルリア並みに根拠の無い自信に見えるだろう。

だが本当に大丈夫だ。絶対にヒカリンは助かる。俺が助けてみせる。

「もしも薬が見つかった時にはお金は用意出来るだけお支払いします。足りなければ家売ってでも何とかします」

「あ。俺の分は大丈夫です。他にも2人いるので勝手に返事はできませんですけど、多分他の2人もお金は大丈夫だと思いますよ」

「いや、でも」

「光梨さんは俺達のパーティーメンバーですから。この先もいて貰わないと困るんですよ。だからお金は大丈夫です」

パパの必死さは十分に伝わってきたので後は俺達が頑張るだけだ。時間が限られているのは分かったが、今のまま進んでいけば必ず薬は手に入るだろう。

俺はこの時、ヒカリンと俺を引き合わせてくれた、得体の知れない因果律と言う運命の様なものに心の底から感謝した。

第362話 運命の調べ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第363話 決意新たに

俺は今1階層に潜っている。

昨日ヒカリンのパパから話を聞いてダンジョン攻略に決意を新たにしていた。

そして先に進むには先立つ魔核が必要となるので今まで以上に集中して1階層でスライムの魔核を集めている。

スライムスレイヤーとレベル21の補正があり殺虫剤ブレスの効果は更に上がっており、かなり節約しながら狩りを行う事が出来ている。

「今ので何個目だ？」

「今ので20個目です」

中々いいペースで進んでいるのでこのままいくと帰るまでに40個近く行けるはずだ。

それからの3日間で122個の魔核を集めて再び14階層に望む事になったが、ダンジョンのスライムを含むモンスターはエンドレスで湧いてくるのが今でも不思議でしようがない。

土曜日になり再びみんなで14階層に向かったがヒカリンは至って普通でいつも通りだった。

もしかしたらパパと俺のやりとりを知らないのかもしれない。

パパには任せておけと言ったものの実際にヒカリンを目の前にすると不安がよぎってしまう。

そこからは先週同様ヒカリンも活躍して順調に探索は進んでいった。魔核をしっかりと補充した事もあり、ドラグナーも存分に使う事が出来たので俺としても非常に満足出来る1日だった。

ただ今日一日探索を進めながらずっと考えていた。

ヒカリンの事を他の2人に話すべきなのかどうか。このまま何も知らせずに今まで通りの方がいいんじゃないかとも思い、すぐには言い出せなかったが1日終えて決心が固まった。

地上に出て、ヒカリンに気づかれぬようにすぐにミクとあいりさんにメールで連絡を入れた。

返事があつてから近くの指定した待ち合わせ場所に15分程で2人が現れた。

「海斗、大事な話つて何？それにヒカリンには絶対に気づかれない様につて何？」

「ああ、それなんだけどあんまり人の来ない所で話したいんだけど」

俺の表情から、ただ事では無いのを感じたのかミクが以前行ったフレンチのお店個室を用意してくれた。

重い空気の中向かっている間は3人とも無言だった。

「それで、どうしたのよ」

店について個室の席についた瞬間にミクが声をかけて来た。

「ああ、実は4日前にヒカリンのパパから連絡があつて会ったんだ」

「ヒカリンのパパ？どうしたのよ。あの子パーティを抜きたいの？」

「いやそうじゃ無いんだ。実はヒカリンは病気なんだそうだ」

「病気！？なんの？」

「それがこのままだと成人するまで持たないんだそうだ」

「嘘でしょ！？だつてヒカリン元気じゃない」

「そうだ。今日もあれほど活躍してたじゃ無いか。とても病気とは思えないぞ」

2人からは、やはり俺の時同様の反応が返ってくる。

「それが、今は薬で症状を抑えられてて、ダンジョンではステータスの恩恵で地上よりも調子がいいんだそうだ」

「そんなバカな事って」

「本当なのか……………」

「ヒカリン、ゲーム詳しいだろ。体が弱くて家ではゲームをやって過ごす事が多いんだそうだ」

「じゃあ何でダンジョンなんか」

「パパにもお願いされたんだけどな、ヒカリンの目的はエリクサーかソーマ、ネクターの入手なんだよ」

「エリクサー……………。それならヒカリンの病気を治せるって事？」

「自分の命は自分で何とかすると言って探索者になったそうだ。それで、ヒカリンのパパがどうしても薬を手に入れて欲しいって頼んできたんだ」

「でもエリクサーなんて流石に見た事ないわよ」

「俺も無いけど、それは大丈夫だ。ミクがこの前俺達は同じ因果律にいると言ってただろ。じゃあヒカリンが死ぬはず無いんだよ。俺が必ず見つける。これは確定してる事だと思うんだ」

「それは、そうは言っただけど」

「それでいつまでに必要なんだ」

「ヒカリンのパパの話では1〜2年のうちには欲しいとの事でした。手に入れた場合は、出来る限りのお金を払うとは言っていましたけど俺は辞退しました。2人は自分達で決めてくれれば」

「バカじゃ無いの。お金なんか貰える訳ないでしょ。ヒカリンの命がかかっているのよ」

「私も必要ない。ヒカリンは絶対に死なせるわけにはいかないな」

俺が思ってた通り2人ともお金は要らないらしい。これでヒカリンのパパには安心してヒカリンのケアにあたってもらいたい。

第363話 決意新たに（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第364話 ヒカリン

目の前に高級フレンチが用意されているが、誰も手をつけようとはしない。

正直、食べている場合では無い状況だ。

「でも実際の所エリクサーなんかの霊薬って市場で見た事ないわよ」

「一部の特権階級者向けのオークションでしか出回らないらしい」

「そんな貴重なもの手に入れる事なんか出来るの？」

「それじゃあ、聞くけど、シルヤルシエのカードと霊薬ってどっちがレアだと思う？」

「それはもちろんシル様達じゃない？」

「そうだよな。シル達でも手に入れる事が出来るのにそれよりもレアじゃない霊薬が手に入らない事なんかあり得ないでしょ」

「まあ、言われてみればそうかも」

俺にも具体的な根拠は何も無い。ただシルの言う因果律を前提として話しているだけに過ぎない。

「とにかく時間は限られてるけど、進むしか無いと思うんだ。なんとなく下層に行く方が手に入る可能性が高い気がするし」

「まあ今迄の階層では難しい気がするわね」

「それにしても、このままダンジョンに潜り続けてヒカリンは大丈夫なのか？」

「ヒカリンのパパは後1〜2年で潜るのは難しくなるかもとは言ってますけど」

「そうか、それじゃあみんなもう少して春休みだろ。春休みは集中して潜らないか？」

「賛成ですけど、ヒカリンが詰めて潜るのは体調的にもどうかと思うのでペースは考えませんか？」

「そうね。今は最悪ヒカリン抜きでも私は潜るべきだと思うわ」

3人の意思統一は出来た様だ。後はヒカリンに俺達の気持ちを伝えるかどうかだが…………

「ヒカリンにはこの事伝えますか？」

「私にもその判断は難しいな」

「とりあえずヒカリンに気を使わせても良く無いだろうからもう少し様子を見てからでいいんじゃない？」

「そうだな」

その後も俺達が今後どうしていくか話し合った。

とりあえず、ヒカリンは今迄通り極力後衛でいてもらう。

何かの時には『鉄壁の乙女』で優先的に守る。

意識を失う様な敵の攻撃が体に良いとは思えないので今後ドロップでレジストアイテム等が入った場合は優先してつけて貰う事などだ。

ヒカリンは嫌がるかもしれないが、事情が事情だけにここは譲れない所だろう。

「それじゃあ霊薬の情報を各自で出来るだけ集めましょうか」

「そうね」

「どこまで出来るかわからないがやってみよう」

俺達に体の事を何も言わずに探索者を続けていたヒカリンに俺は畏敬の念を禁じ得ない。

俺の知るヒカリンは、大人しいがゲーム好きの明るい女の子だ。自分の命のリミットを知らながら俺に同じ振る舞いが出来るだろうか？

今まで一緒にダンジョンに潜っていて1度たりともヒカリンの不調に気がついた事は無い。

どう考えても、心配をかけない様に意図して振る舞っていたのだと思う。

そして自分の病気は自分の力で克服すると言うその心意気。

言うのは簡単だが、自分の体の心配もしながら実行に移せる人間が実際にどれほどいるだろうか？

しかも俺達とパーティを組む前は正規のパーティを組む事なく独力で解決しようと奮闘していたのだから。

やはりその心中を凶る事は俺には出来ない。

ただ今はもう俺達パーティがついている。

ヒカリンは決して1人では無い。サーバントを含めると6人と1匹が一緒にいる。

1人では霊薬を手に入れる事は叶わなかったかもしれないが、7人と1匹なら必ず手に入れる事が出来るはずだ。

ヒカリン、大丈夫だ。君の病気は必ず治る。俺達パーティメンバーが必ず治して見せる。

以前大学も王華学院もいいなと言っていたので必ず通える様にしてあげたい。

俺は決意と共に俺達と大学進学について語った時のヒカリンの気持ちを考えてと涙が出そうになった。

第364話 ヒカリン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第365話 咳

俺は今14階層を進んでいる。

俺の『ゲートキーパー』によって往復で5時間近くかかっていた移動時間が僅かになったので、その分だけ探索時間が増えてどんどん進めている。

唯一の問題は10階層を経由しなくなった為にダンジョン最大の楽しみとも言つべきシャワーが無くなってしまった事だがこればかりは仕方が無い。

そしてゲートを使用した際に他の冒険者と出会った時の言い訳も完璧だ。

俺は知らなかったが、転移石と言う1個が300万円もする使い切りの超高額アイテムがあるそうで、俺のゲートキーパーとほぼ同等の効果があるそうだ。ただし俺の『ゲートキーパー』と違い1回使うと効果が無くなるそうだ。

なのでもし他のパーティに出会ったとしても何食わぬ顔で「やっぱり転移石は最高だな」と呟けばいいのだ。

まあ高額アイテムの為10階層程度で使用する探索者は稀らしいので目立つ事は間違いないと思う。

「ご主人様、モンスターです。4体来ますのでご注意ください」

「じゃあいつも通り3人が前衛で残りのメンバーはサポートで頼む」

現れたのはホブゴブリンと角ありだが、俺は即座にドラグナーを構えて角ありを撃つ。

ヒカリンも後方から角あり目掛けて火球を放つ。

角ありの発光スキルに以前やられてしまったので、とにかくこの角ありさえ倒してしまえば、ホブゴブリンは問題ない。

ドラグナーの青い銃弾が角ありの胸部分を捉えて風穴を開け消滅させる。

青い銃弾はこの階層のモンスターであれば急所に当たれば一撃で倒す威力を持っている。

ヒカリンのスピットファイアのパワーアップした火球も3連続でもう1体の角ありに命中して、一気に燃え上がらせて消失した。

残る2体になったホブゴブリンにベルリアとあいらさんが突っ込んでいく。

他のメンバーが新しいスキルを身につけたせいで、すっかり影の薄くなってしまったベルリアがいつも以上の勢いで斬りかかる。

『アクセルブースト』

2刀にスキルを纏わせて一気にホブゴブリンを輪切りにしてしまい消滅に追いやった。

影は薄くなったとはいえ、下級デーモンにやられた事が堪えたのか最近ベルリアは集中力も増し、以前よりも遊び無しで敵を倒している感じだ。

あいらさんも残りの1体に向かって『斬鉄撃』で斬りかかるが、ホブゴブリンの武器に受け止められてしまう。力比べになった所を後方からヒカリンが『ファイアボルト』で援護する。

炎雷がホブゴブリンの肩に着弾して怯んだ所をあいらさんが一刀両断にして消滅に追いやった。

「結構あっさり倒せたな。やっぱり遠距離攻撃の火力が上がったのは大きいよな」

「そうね。そのふざけた浪漫武器とやらも思ったより使えるわね」

「そうですね。やはり何と言っても、光るのがカッコいいです。弾が青い閃光みたいになっててゲームみたいでいいです」

「そうかな」

「そうですね。さすがは浪漫武器です」

「どうやらヒカリンは、本気で言っている様なので『ドラグナー』みたいなのが好きらしい。」

「コン、コンッ」

「ヒカリン大丈夫かつ！」

「えっ？ちよつと昨日寝冷えしただけですけど」

「ああ、そうなんだ。それならよかつた……」

「海斗さん、どうしたんですか？ちよつと大げさじゃ無いですか？」

「いや、女の子が風邪ひいたら大変だから。寝冷えは気をつけような、ははは」

「だめだ。今まで全く気にならない程度の事でも過敏になって、声をかけてしまった。」

「当分今までと同じ様に振る舞っていこうと3人でも話し合ったばかりなのに、早速やらかしてしまいそうになってしまった。」

「まあ今のはヒカリンにも気づかれていないだろうからセーフだろう。」

第365話 咳（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

俺は今14階層を進んでいる。

「ミクさん、海斗さんが何かおかしく無いですか？」

「え？何が？」

「咳をちよつとしただけなのに、血相変えて『大丈夫か！』って変じゃ無いですか？」

「あゝまあ、考えすぎじゃない？海斗はいつも変だからいつも通りなんじゃ無い？」

「そうですね。絶対おかしいですよ」

「ヒカリン考えすぎじゃない？海斗は特に何も考えて無いと思うわよ」

ダンジョンを進んでいると後方でヒカリンが難しい顔をしながらミクに話しかけているのが見て取れた。

どうしたんだヒカリン。体調でも悪いのか？

あまり見た事の無いヒカリンの表情に心配が増す。

「どうしたんだヒカリン、やっぱり体調がすぐれないのか？今日はもう引き返そうか？」

「やっぱり変です」

「え？何が？やっぱり体調がおかしいのか？」

「いえ海斗さんが変です」

俺が変？以前も突然同じ様な事を言われた気がするが毎回軽くシヨツクだ。

「あの、変つてどの辺りがでしょうか？」

「さつきから変です。咳1つで血相変えて心配したり、今も何でも無いのに体調が悪いのか？って絶対おかしいです」

なんて鋭いんだヒカリン。絶対ばれて無いと思つたのにばれてる……。

「い、いや〜インフルエンザが流行ってるから……もしそうだったら大変だなと思って」

「咳だけでインフルエンザですか？」

「今年のインフルエンザは咳が酷くなるって聞いたから……」

「もしかして海斗さん聞きました？」

「へっ？な、何をかな」

「パパが連絡したんですね」

「ぱっ、パパ？ヒカリンのパパが俺に一体何の用があるんだよ」

「以前念のために連絡先を覚えていたのですが、連絡したんですね」

「い、いや〜。そんな事は……」

「したんですね」

もうだめだ。ヒカリンはすべてお見通しだ。全部バレてる。

「……………はい」

「そうですね。それじゃあ心配するのはやめてください。私大丈夫なので今まで通りをお願いします」

「……………ごめん。それは出来ない」

「どうしてですか？」

「ヒカリンの身体の事を聞いて、俺には今まで通りには出来ない」

「普通にしたい欲しいんです」

ヒカリンの気持ちは痛いほど分かる。今まで通りに接して欲しい

と言う気持ちは良くわかる。

漫画の主人公でもここは今まで通りに接するよと声をかける所なのだろう。

でも……………

「俺には出来ない。ヒカリンの身体の事が心配なんだ。俺のできる限りフオローをしたいし気にもかけるよ。俺のわがままだけど、俺はこれからは目一杯ヒカリンの事をサポートしながら探索していきたいと思ってる」

「そんなの、私唯の足手纏いじゃ無いですか」

「いやそれは違う。俺たちはパーティだろ。この前俺が因果律の話をしたらヒカリンも俺の事見捨てるわけないって言っただろ。俺だってヒカリンの事を見捨てるわけがないだろ。足手纏いだって思うわけがないじゃないか」

「それは……………」

「俺達は同じ因果律の中にいるんだ。だから将来ヒカリンはパーティに絶対に必要になるって事だよ。だから必ず霊薬は見つかる。いや必ず俺が見つけて見せる。だから安心していいんだ。今まで1人で悩んで頑張ってきたのかもしれないけど、俺一応パーティリーダーだろ。メンバーの世話ぐらい焼くよ。迷惑でも焼くに決まってるだろ！」

「海斗さん……………」

「だから今まで通りは無理だ。今まで以上にヒカリンのサポートをしながら探索を一緒に続けたいんだ」

「そうよ。海斗が1人でらしくないこと言ってるけど私達パーティでしょ」

「ミクさんも知ってたんですか？」

「すまない私も海斗から……………」

「あいりさんもですか？」

「俺達みんなでパーティだろ。誰も欠けちゃだめなんだ。絶対に欠

けさせない。だからヒカリン1人でがんばらなくていいんだ。みんなで頑張ればいい。俺がもっと頑張るから大丈夫だ」

「……………ずるいです……………」

「えっ？」

「海斗さんなのに……………ずるいです」

「たまに柄にもなくなっこのいいこと言うわよね」

「そうだな。たまに言うな」

柄にも無くって自分でも分かっているけど、俺の思いが溢れてしまった。

俺の英雄願望が疼いてしまったのかもしれないが、全てを知った上でヒカリンを今まで通りに扱う事は俺には出来なかった。

「ふう〜ふうふうふう〜。私だって……………私だって怖いんです。

ふうふう〜本当は怖いんです。霊薬なんか本当は見つからないんじゃないかって。もう少ししたら私死んじゃうんじゃないかって……………

ふうふうえ〜ん」

「大丈夫だ。今日からは絶対に大丈夫だから。怖がる必要なんか無い。俺が約束する。何があっても何をしても絶対に見つける。もう心配ないんだ」

「私も手伝うから大丈夫」

「海斗がここまで言うんだ。安心していいと思うぞ」

「ふうふうふう〜。はい……………」

「もう一度言うよ。約束だ。もう大丈夫だ」

「はい。ありがとうございます……………」

盛大にバレてしまったが、この約束だけは絶対を守る。何があっても守ってみせる。

第366話 trust me (後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第367話 きたる時

俺は今14階層を進んでいる。

ヒカリンに全てバレた上で大見得を切ってしまったが、その日の探索がその後大きく変わることは無かった。

もちろん気にはかける様にしているが、モンスターを相手にそれほど余裕がある訳でも無く、ヒカリン自身も十分に戦えているので、今までと何も変わらない探索となった。

何となく申し訳無い様な気持ちになりながらも、探索は順調に進んでいるので15階層に到達するのもそう遠くは無いと思う。
16時になったので探索を切り上げて解散する事になった。

「海斗さん。ありがとうございます。気持ちが楽になったのです。でも希望を持たせたんですからちゃんと責任取ってくださいね。私大人になっても生きていきたいです」

「え？責任……。もちろんだ。任せとけ！」

ヒカリンは落ち着いた様で良かったが責任……。

まあ、言われなくても霊薬は必ず見つけるので大丈夫なはずだ。

次の日学校へ登校すると真司と隼人が声をかけて来た。

「海斗、抜け駆けして、葛城さんにホワイトデーのお返ししたんだってな」

「ああ、抜け駆けした訳じゃ無いけど、その場の流れでな。前澤さんから聞いたのか？」

「そうだよ。前澤さんのハードルが一気に上がったんだけど。どうすればいいんだよ」

「別に好きなもの贈ればいいだろ」

「いや、お揃いの指輪送ったらな……………」

「お揃いってわけじゃないんだけど。俺のはレジストリングだし」

「いやそれでも似た感じの指輪贈ったんだろ。しかも左手の薬指にだよな」

「えっ？左手？そうだったかな。お店で俺の指輪と同じ方にはめてもらった様な……………」

そういえば特に気にしていなかったが、言われてみるとマジックリングは左手にはめているので春香にも左手にはめてもらった気はする。

「海斗。お前なく、本気で言ってるのか？前から天然な所はあると思っただけど、ここまではか」

「ありえないだろ海斗今すぐ死んだほうがいい。左手の薬指だぞ薬指。そこまでやって意味わかってなかったのか」

「え……………。俺…………。やらかしたのかな？」

「は、これだから超絶リア充も納得だよ」

「普通はありえないけど、良かったんじゃないか」

真司達に指摘されて今気がついたが、左手の薬と言えば、婚約指輪とか結婚指輪をはめる指か……………」

俺は一体なんて大胆な事をやってしまったんだ。

「どうしよう。俺やばいかも……………」

「いや、やばくはないと思うぞ。葛城さん喜んでたみたいだしな」

「確かに喜んでくれたと思うんだけど」

「俺の想像を超えてたよ。海斗がついにやったと思っただらやらかしたんだっただとは、思いもしなかったよ」

「あ、やばい。俺、春香に謝った方が良いかな」

「馬鹿につける薬はないな。謝ってどうするんだよ。むしろ正々堂々左手の薬指に贈ったんだって言っておけば良いに決まってるだろ」
「そうだぞ、謝って良いことなんか何も無い。絶対に間違いだつたとか葛城さんに伝えるなよ。取り返しのつかない大変な事になりかねないぞ」

「そうかな。2人がそこまで言うなら分かったよ」

春香の事は気になるが2人がここまで必死に止めると言う事は、このままにしておかないとまずい事なのは流石に俺でも分かる。

「それにしても、このぐらい天然でやらかすぐらいの方が良いんだな。真似しようとして真似できる事じゃ無いけどな」

「俺にもこのナチュラルな鈍感力が欲しい。これさえ有れば俺も女の子にガンガンいけてたはずだ」

「隼人、大きなお世話だ。それより真司も指輪贈ってみたら良いんじゃないか？」

「無理無理。俺の今の状態で無理だろ」

「いや真司案外有りかもしれないぞ。海斗がそれでいけてるんだから天然なふりして渡しちゃえば良いんじゃないか？」

「指輪か。俺買った事ないんだけど」

「俺だつてないけど、どんな事だつて初めてはあるだろ。今度一緒に買いに行くか」

「え？隼人も買うのか？」

「いや俺は義理チョコだから、お返しはお菓子ぐらいにしておくよ。きたる時の為のシミュレーションをしないでいくだけだ」

隼人の春はまだまだ先な気がする。隼人が想定しているきたる時は今の調子ではいつまでも来ないんじゃないだろうか。

第367話 きたる時（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第368話 新技？

「マイロードその銃すばらしいですね」

「そう思つか？」

「姿形がいいですね」

「そうか？」

「はい。射出される弾もいいですね」

「やらないぞ！」

「……………」

「そもそもベルリアは魔法が使えないんだから『ドラグナー』は使えないぞ」

「……………そうですね」

俺は今2階層で魔核集めと修練を積んでいる。

俺だけでは無くサーバントも含めた全員の熟練度を上げるべく頑張っている。

お陰でなかなか魔核が貯まらないが、なんとか両立させるべく頑張っている。

まず新しいスキルの練度を高めるべく積極的に『楽園の泉』と『黒翼の風』そして俺の『ドラグナー』を使用しているがどれも燃費がすごぶる悪い。

そしてあぶれた形になっているベルリアが『ドラグナー』を物欲しそうに見てきたが、さすがにこれをやるわけにはいかない。

そういえば今日はいないが、スナッチの新しいスキルも使い所が難しすぎて未だに使用した事が無い。

「ベルリアも何か新技とか開発してみる？」

「新技ですか？」

「スキルはレベルアップしないと身につかないだろうから新技とか」
「新技ですか……」

「例えば『ダークキュア』使って体内を活性化させて『アクセルブ
ースト』使つと超パワーが生まれるとか」

「やってみますね『ダークキュア』 『アクセルブー
スト』
ダメです」

「そうだな。ごめん。それじゃあ回転しながら『アクセルブー
スト』
とかどうだ？」

「回転しながらですか…… やってみます」

そういうと、ベルリアは『アクセルブー
スト』を使ってコマのよう
に横方向に回転し始めた。

俺が思ってたのは違つたがこれはこれでありなのか？

「……つっ、どうでしょうか……」

「ベルリアふらついてるぞ。やっぱり横回転は無理だな。縦回転で
ジャンプして回転しながら斬るのはどうだ？」

「やってみます」

今度は俺の意図がちゃんと伝わつたようでジャンプして切る瞬間に
二刀で前方にくるくる回りながら斬りつける。

今度は目も回っていない様だしアニメの必殺技みたいな感じで結構
いけてるんじゃないかと思つけど実際にはどうだろうか？

「いいんじゃないか？ゴブリン相手にやってみるか」

「はい」

歩き始めてすぐゴブリンに遭遇したのでベルリアが応戦する。

「マイロードしっかりとご覧ください。いきます『アクセルブー
ス

ト
」

ベルリアがゴ布林まで走って行ってそのままジャンプしてから、一気に前回転を始めたかと思うと3回転したところで勢いを増した剣戟をモンスター頭の頭に浴びせかけ消滅させた。

「マイロード、やりましたよ！」

「ああ、よかつたんじゃ無いか」

確かに威力が増した気がするのと視覚的に大技感がすごい。

正直ベルリアの『アクセルブースト』ならこんな事をしなくてもゴ布林を一撃で倒せるのだが、ベルリアが満足そうなので、ただの思いつきにしては良かったんじゃないだろうか。

「マイロード、魔核を頂いてもよろしいでしょうか？」

「えっ？」

「申し訳ないのですが『アクセルブースト』の連発と新技の動きで魔核が必要になってしまいました」

「そうなんだ……」

俺が言い出した事だから仕方が無いが、ただでさえ魔核の消費が激しいのにベルリアまでか……

「次からは、普通に倒そうな。さっきの技は特別な敵限定で使おうな」

「はい分かりました」

仕方がないのでベルリアに魔核2個を渡しておいたが、なぜか全く活躍していないルシエまで騒ぎ始めてしまい、結局3人に2個ずつ渡す事になってしまった。

やはり思いしきりで話す物ではないかと改めて反省してしまった。

第368話 新技？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第369話 遭遇

俺は今14階層を探索している。

何とか金曜日までに収支をプラスに持つていき週末用の魔核を用意する事が出来たので、今日と明日でどんどん進んで行きたい。

今日も既に3回交戦しており、ベルリアの新技も披露済みだ。

大技だけあつて14階層のモンスター相手でも、一撃で問題無く倒す事が出来た。

「ご主人様、奥に敵モンスターがいますが数が多いです。10体はいます。それと多分他のパーティが交戦中です」

「他のパーティが奥にいるって事か？」

「そうです。モンスターと戦っているようです」

「シル、状況が分かるか？」

「はつきりとは分かりませんが多分押されていると思われれます」

この階層でも1度に出現する敵は3〜5体程度なので、この先にいる敵の数は明かに多い。

もしかしたら偶発的に敵の集団2つ以上と同時に出会ってしまったのかも知れない。

探索者パーティの実力が分からないから何とも言えないが、苦戦しているのもうなずける。

ダンジョンは広い上に多岐に渡っているので、他の探索者に会うことはそれほど多くない。

今まで俺が会った事がある探索者でも交戦中だった事は稀だ。

数回リア充パーティのアオハルモードを見せつけられたぐらいしか記憶に無い。

当然助けに行くべきなのだろうが、k112のパーティ構成が特殊

なので躊躇してしまう。

「みんな、どうする？助けに行つたほうがいいよな」

「当たり前でしょ」

「行きましよう」

「急いだほうがいいだろう」

メンバーの答えは即決だった。

悩んでしまった俺がバカみたいだが、先に急ぐ事にする。

ダンジョンの前方の角を曲がると、先にいるパーティが敵モンスターに囲まれているのが見えた。

探索者のパーティは男4女2の6名パーティだが敵モンスターは、ほぼ倍の11体いるので完全に囲まれている。

探索者になる時の講習で習つた事だが、ダンジョン内で先行している探索者が敵と交戦している場合は、基本的に邪魔をしない。もし助ける時には先行者の許可を得てから参戦する事とされていた気がする。

ただ今の状況でそれをする事は得策では無いとしか思えない。

先行のパーティが必死に戦っており、完全にモンスター達の意識はそこに集中しているので、距離のある俺達には全く気がついていない。

「みんな、気付かれないうちに奇襲をかけて数を減らす方がいいと思う。まずあいりさんとベルリア以外に全員で遠距離攻撃をかける。そのタイミングに合わせてベルリアとあいりさんも突っ込んで下さい」

指示を与えると同時にすぐに『ドラグナー』を構えて狙いをつける。

「ドゥン」

俺が『ドラグナー』の引き金を引くとのが合図となり、ほぼ同時にミクの火球とカオリンの『ファイアボルト』が放たれ、少し遅れてシルの雷撃、ルシエの風が着弾した。

完全に虚を突いた攻撃で一気に4体の敵を葬る事に成功したが、現場は一瞬混乱してしまった。

シルの攻撃による爆音もあり、先行パーティが瞬間的に何が起こったのか理解出来なかったようで、女性陣が怯んでしまったのだ。もちろん敵モンスターも攻撃を受けた事は理解した様で、こちらを向いて捕捉したが向かってきたのは、そのうち2体のみで残りの5体は怯んで隙を見せた女性陣目掛けて一気に襲いかかっていった。

「俺達は助けに来たんだ！持ち堪えろ！」

混乱を収める為に大声で呼びかけてから俺も突っ込んで行く。先行した2人は既に敵と交戦しようとしているが、俺の声で状況を把握したと思われる男性陣が女性陣とモンスターの間に割って入って攻撃を凌いでいる。

5対4の構図だったが、すぐにあいりさんとベルリアがフォローに入って5対6になり数の上でも有利になったのもう大丈夫だろう。俺も自分の役目を果たすべくナイトブリンガーの能力を発動した。

第369話 遭遇（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします。

第370話 増殖

襲われていたパーティを助けに入ったが、俺も気配を薄めてモンスター在所まで行って、2体目のモンスターをバルザードで斬り伏せる。

あいりさんとベルリアもそれぞれ向かって来ていた敵を迎撃して葬ったのでこれで残りは4体だ。

……あれ？

5体いる？俺の数え間違いか？11体のうち7体を倒したので残り4体のはずだが、最初に12体いたのか？

まあ、それほど大きな問題ではないのでそのままもう1体に向かって『ドラグナー』を放つ。

これで間違いなく後4体だ。ベルリアとあいりさんも、困んでいた敵モンスターまで到達しているのもう大丈夫だ。

あれ……

やはり5体いる。何でだ？さすがに今度は2回目なので間違いようが無い。

「そいつら増えるんだ！倒しても倒しても増える！気をつけてくれ！俺達も10体以上は倒したんだ！」

俺達のフォローで少し余裕の出来た先行パーティの1人が大きな声で知らせてくる。

だが、増えるモンスター？そんなの聞いた事が無いが、確かにそれなら数が減らない理由も分かる。

見た目は普通のホブゴブリンだが、そのうち3体は皮膚の緑色が濃いような気もしなくも無い。

この色の濃いのが増殖するのだろうか？

どうする？ナイトブリンガーの効果が切れたとしても指示を出すべきか？

それともこのまま押し切れればいけるか？

一瞬考えだが、既に俺だけでも3体倒せているのでこのままいける気がする。

再度『ドラグナー』を構えて敵の1体に向けて放つ。

やはりこの浪漫武器は目の前の敵を倒すには十分な威力を備えているようで1撃で葬る事が出来た。

急いで数を確認するが4体に減っている。やはりこのまま押し切れる。

今度はあいりさんと連携をとり、あいりさんが切り結んでいる相手の側面に回り込みバルザードで一閃する。

これで後3体と思ったら、何故か4体どころか5体敵が存在していた。

「嘘だろ………こんなの反則じゃ無いか」

このまま俺達前衛だけが1体ずつ倒していても、相手の増殖のペースを上回る事が出来そうに無い。

特定の個体のみが増殖しているのか戦いながらでは判断する事も出来ない。

「シル、ルシエ、一気に倒すぞ！俺たちで左2体を倒すから右3体を頼む。ベルリア、あいりさん左の2体を速攻でいきます」

今すぐに思いつく手は1つ。5体をほぼ同時に葬り去り増殖の間を与えない。

そう思い指示を出した時には敵が6体になっていた。

「ミク、ヒカリン真ん中のを頼んだ！」

こうしている間にも増える可能性があるので速攻で敵との距離を詰めて戦う。バルザードの一撃は相手の武器によって阻まれたので、そのまま右手の『ドラグナー』の引き金を引いて敵を消滅させる。隣ではあいりさんが『アイアンボール』を発動すると同時にベルリアが空を舞い『アクセルブースト』で敵を斬り裂いた。右手ではシル達の攻撃が着弾した音が聞こえているので決まりだろう。

そう思っていると1体残っているのが目に入ったので即座に『ドラグナー』を放ち殲滅した。

どうやら戦っている間に7体目が増殖を済ませていたらしい。これで全部倒した。さすがに無の状態から増殖したら手に負えないので注意深く周囲を窺うが、どうやら新たに敵が発生する気配は無い。

「ふ〜。終わったみたいだな。みんなお疲れ様」

どうにか倒す事が出来たようだが、増殖スキル？があるのだろうか。今まで見た事は無いが、完全にチートだ。反則級のチートスキルだろう。

今の俺達に一気に片をつけるだけの火力が備わっていたから撃退する事が出来たが、そうでなければ死ぬか逃げ切るまで戦い続ける必要があったかもしれない。

やはりゴブリンは侮れないのかもしれない。

第370話 増殖（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします

第371話 お礼

俺は増殖したゴブリンを倒す事に成功した。

増殖するモンスターなんか初めてだったので驚いたが、もう少し上位のモンスターであれば結構敵しかったかもしれない。

「大丈夫ですか？」

襲われていた先行の6人パーティに声をかける。

「あ、ああ、助かったよ。本当にありがとう。もうダメかと思ったよ。まさかこのタイミングで助けに来てくれるとは夢にも思わなかったから、なんと行っていいか」

「こちらもたまたま通りかかっただけですから気にしないでください。怪我とか大丈夫ですか？」

「お陰さまで、うちのパーティメンバーに大きな怪我は無いよ」

「そうですか。それじゃあ俺達はこれで」

「ちよ、ちよっと待ってくれ、命を救われたのに何もお礼をしないわけにはいかない」

「別にお礼なんかいらないですよ」

相手のリーダーっぽい男が声をかけてくる。俺よりは年上に見えるが正直お礼なんかいらないので、早くこの場を去りたい。

ただでさえ目立つパーティ構成なので早く去って無かった事にしてしまいたい。

「いやそういうわけにはいかない。俺達が探索者仲間の笑い者になつてしまう。どうしてもお礼をさせてもらいたい」

「うん……」

「それじゃあ、情報をください。さっきの増殖ゴブリンの情報です」
ここでミクが助け舟を出してくれた。確かにあのゴブリンには興味があるし今後出会った時に参考になる情報はあるに越した事は無い。

「情報と言っても、俺達もよくわからないんだけど、最初遭遇した時は3体だったんだ。俺らはもう少して15階層まで到達する予定だから、そこそこ14階層にも慣れてる。だからホブゴブリン3体はそれほど問題では無いという認識で戦ったんだが、1体倒して気がつくともた3体になっていて、また1体倒すと今度は4体になっていって、段々数が増えていったんだ。5〜6体まではある程度対応できてただけけど、気がついたら10体を超えていて、攻撃を防ぐので精一杯だったところを君たちに助けられたんだ」

「それじゃあ、特別に変わったところとか無かったんですか？」

「はつきりとはわからないけど、増殖したやつは少しだけ肌の色が違う気がする。けどどうやって増殖したのかはわからないんだ。気がついたら増えてる感じだったから」

その感覚はよく分かる。俺がさっき戦った時もそんな感じで気がついていたらそこにいた。

「今までに増殖するモンスターに出会った事はありますか？」

「いや、初めてだ。それに俺らのグループでも、もつと先まで行ってるパーティーもあるけど、こんなのは聞いた事が無い」

グループ……サークルの事か。

「じゃあ、見分けとかは、ほぼつかないって事ですかね」

「交戦して初めて分かる感じだな」

「そうですね、ありがとうございます。それじゃあこれで」
「いや、ちよつと……」

まだ何か言いたそうにしていたが、相手の無事も確認できているのもう俺達に出来る事は無いはずだ。

みんなに目配せをして足早に先に進む事にした。

「あの人たち結構食いついて来てたわね」

「まあ、無用なトラブルを避けるためにも賢明な判断だろう」

「それにしても、増えるゴブリンなんているんですね。初めて見たのです」

「そうだな。あれが1体限定のユニークスキルみたいなものだったらしいんだけど、いろんなモンスターが次から次へと増えたら対応出来ないですね」

恐らく先ほどのパーティは引き返すと思うが、追いつかれても面倒なので先を急ぐ事にする。

まあ、名乗ってもいないし、戦闘でバタバタしていたから俺らの印象もはっきりは残っていないだろう。

俺らの事が特定されるような事は無いと思うが、出来る事なら俺やメンバーの性格からしてもあまり目立つ行動は慎みたいものだ。

まあ今回は、他のパーティを見殺しにするような事は出来ないし、いい事をしたと思うので良しとしておこう。

第371話 お礼（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします

第372話 黒い彗星はイケメン？

俺は今学校に来ている。

「海斗、土曜日って何してたんだ？」

「え、土曜日はいつもの通りダンジョンに潜ってたけど、それがどうかしたか？」

「海斗って今何階層に潜ってるんだ？」

「今14階層だけど」

「やっぱりそうか」

「やっぱりってなんだよ」

「いや、昨日サークルの情報ラインで一気に回ったんだよ」

「なにが？」

この話し方、この展開、以前もあつた気がするが、悪い予感しかない。

「黒い彗星が超絶イケメンだつて」

「ふあっ!？」

俺の思つてたのとはかけ離れた答えに変な声が出てしまった。一体なんの話だ？俺が超絶イケメンってなんだ？

「海斗、土曜日に襲われてたパーティを助けなかったか？」

「ああ、ホブゴブリンの群れに襲われてた6人組は助けたけど」

「やっぱりか。その人達がサークルのネットワークに事の顛末を上げて黒い彗星は超絶イケメンだ！最高の男だつて上げてるんだ」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。確かに助けはしたけど俺、名乗って

無いんだけどなんで俺って特定されてるんだよ」

「相手のパーティは全員が、一目見た時からわかってたみたいだぞ」
「なんで……………」

「第一に幼女や幼児を連れた女性中心のリア充パーティだった事。そして海斗の装備。黒い鎧に黒いマントですぐに分かったらしい」

「……………」
「まあ、俺達のダンジョンでその特徴のパーティって海斗のところだけぐらいだろ」

「……………」
「そうか」

あの時はさっさと切り上げたので身バレするような事は一切無いと思ったのに、全員に一瞬でバレてたなんて複雑だ。

「それで、颯爽と助けてくれた上に、名乗りもせず、お礼をしようとしても受け取らず、あつという間に去っていったそうだ」

「まあ、大体はあってるけど、それがなんで……………」

「いや、普通そんな事されたら惚れるだろ！」

「なにを……………」

「海斗、お前の天然は葛城さんだけに発動する特殊スキルなのかと思っていたら、そうじゃなかったんだな。カッコよすぎだろ」

こいつら一体何を言ってるんだ？この話しのどこにイケメン要素があるんだ？

「それで、どうなってるんだ？何でお前達まで伝わってるんだよ」

「それが、掲示板は黒い彗星ネタで盛り上がってるんだ。今一番ホットな話題だな」

「うそだろ……………」

「本当だって。やっぱり黒い彗星は違うとか、羊の皮をかぶった虎だったとか。まあとにかく今超絶イケメンって事になってるんだ」

羊の皮をかぶった虎………：例えがよく分からないが、超絶リア充というガセが出回ったと思ったら今度は超絶イケメン？どれだけガセが出回れば気が済むのだろう。

以前人の噂も75日だと思っていたが、どう考えても75日でおさまった気がしない。

それにしても、あのパーティーメンバーは一体何を見ていたのだろうか？

6人もいたのに全員が吊り橋効果で俺の顔に超補正が入って見えたのだろうか。

いずれにしても、自他共に認めるモブ顔なのに超絶イケメンなどとあらぬ噂が立つと、何故か俺が悪い事をしたかのような罪悪感に似た感情を覚えてしまう。

行った事は無いが、コンパに行く前に散々情報でイケメンだと吹聴されていた奴が実際に登場した時にモブ顔だった時の周りののがっかり感。想像するだけで恐ろしい。

「なあ、俺これからどうしたらいいと思う」

「別にどうもしないだろ。事実なんだから堂々としてるよ」

「そうだぞ、超絶リア充で超絶イケメンすごいじゃないか。まあ世の中には雰囲気イケメンとか行動イケメンとかいるから海斗も十分ありだろ」

いや、どう考えても無しだろ。何か久しぶりにキリキリと胃が痛くなってきた。

言ってる分には面白いかもしれないが、俺の探索者人生に関わる事のような気がして気が重い……：

まあメンバーがどうにかしてくれれる事を期待してまたダンジョンに潜ろうと思う。

第372話 黒い彗星はイケメン？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします

第373話 呼び出し

俺は今ギルドに来ている。

ギルドから呼び出しがあったので放課後にギルドにやって来ていた。

「あのく、何かあったんでしょっか？」

「高木様、今14階層に潜ってるんですよ」

「そうですけどよく知ってますね」

「ギルドも探索者サークルの情報内容は把握しておりますので『黒い彗星』は超イケメン説も、もちろん存じております」

「……………」

日番谷さんに面と向かって言われると、とんでも無く恥ずかしい……………
やめて欲しい……………

「高木様の事は長年存じておりますが、私の想像を超えた成長を遂げられたようですね。超絶リア充『黒い彗星』は超絶イケメン。すごいです」

「…………… お願いします。やめてください…………… それ、きついです」

日番谷さんに真顔で言われると精神的ダメージが凄まじい。

「14階層で他のパーティを助けたのは高木さんで間違い無いですね」

「いや僕だけじゃなくてパーティですけどね」

「そうですね。それで、今売り出し中の高木様のパーティにお願いがあります」

別に売り出している訳でもなんでも無いのだが、俺達にお願いってなんだ？

「これはすぐに知れ渡る事なのですが、最近になって15階層で隠し部屋が見つかったのです。そこにエリアボスらしきモンスターが出現しまして、すでに何チームかのパーティが挑んで敗れているんです。そこで15階層以上を探索しているパーティの中からいくつかのパーティでチームを組んで頂き、集団戦にて討伐をお願いしたいんです」

「ちよつと待つて下さい。15階層以上って言いましたよね。俺達まだ14階層なんですけど」

「今週中に踏破して下さい。討伐は来週末になりますので」

「日番谷さん、滅茶苦茶ですけど何で俺達なんですか？もつと上位のパーティがいっぱいいるじゃ無いですか」

「それは、高木様のパーティは本来14階層を遥かに超えた戦力であると認識しておりますので。実際に今回助けられたパーティも絶賛しておりますし、圧倒的だったと」

「それにしても可笑しくありませんか？何かありますよね」

「……………はい。実は一応ギルドからの討伐依頼という形になりますので報奨金が出るのですが1パーティあたり100万円となります」

「100万ですか」

100万と聞くと大金に聞こえるが、俺達は4人パーティなので人数で割ると1人25万円だ。1日で終わった場合は日当25万と考えると結構なものだが、集団戦を挑むほどの相手に25万は安い気もする。おまけに土日の2日かかれば日当は半分になってしまう。

「そうです100万円です。これでも地方のギルドとしては頑張ってるんです。でも15階層より上の方達はもつと稼いでいる方も多

くて。しかも上位のパーティを雇う事はほぼ不可能なんです。なので今売り出し中の高木様に是非お願いしたいのです」

ああ、やっぱり安いんだ。15階層で真面目に頑張れば危険をそれほど犯さなくてもそのぐらいは稼げるよな。しかも上位パーティとなると雇う為には桁が違うのかもしれない。

ただ初めてのレイドバトル、興味が無いと言えば嘘になる。普段他のパーティと共闘する機会なんか無いので良い経験になる気がするが、シルとルシエの事もあるしな……

「高木様、悩まれていますね。お金の事でしょうか？それとも例のサーバントの事でしょうか？」

「まあ、それもありますけど、他のメンバーに確認が必要です」

「高木様、サーバントの事は心配ありませんよ。既にネットワーク上はかなり前から上がっておりますので、かなりの数の方が既に存じ上げているのです」

「はい？存じ上げてるってシルとルシエの事を他の探索者が認識してるって事ですか？」

「それは、そうですね。高木様も含めてk-12のパーティは既に結構有名ですから。10階層に到達した時点から皆さんの注目を集めてましたからね」

10階層から未だに話題に上っていたのか……

俺は目立たないように注意して来たつもりなのに無駄だったのか？いずれにしてもこの件は他のパーティメンバーに相談しないと決められない。

第373話 呼び出し（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします

第374話 チャレンジ

俺は今14階層にいる。

みんなに電話で相談した結果来週のレイドバトルの件は受ける事となった。

問題は俺達がこの週末までに15階層に到達できるかという事だが、少しでも進む為に平日だが14階層に潜っている。

ただし、高校生組は3人共が来週学年末テストを控えているので、週末以外は自宅学習をする事になった。

俺は普段通りの生活を送った方が集中出来て良い結果を生んでいるので、今まで通りダンジョンに潜る事にした。もちろん授業は今まで以上に集中して聴いている。

その為、あいりさんと俺そしてサーバントの3人の5名体制で潜っているが、前衛の3名がそのままなので大きな問題無く探索が進んでいる。2名の欠員分はシルとルシエに頑張ってもらっているので、収支は著しく低下しているが、今週だけなので諦めている。

あいりさんは戦闘以外の部分でも充実感を漂わせている。

「シル様、お疲れではないですか？よかったですらおんぶとかいかがでしょうか？ルシエ様もなにか必要な物とかないでしょうか？」

普段残り2名と共有しているシルとルシエの時間を独占できているので、完全に普段のキャラクターが崩壊してしまっているが、とにかく嬉しそうにしているので俺からは何も言う事は無い。

「ご主人様、前方にモンスター5体です」

「それじゃあさっきと同じで行くから」

ほぼイメージは1人1殺でいつているが、今回はシルとルシエにも遠慮せずにどんどん敵を倒すように指示を出している。

目の前に現れたホブゴブリンの1団を迎え撃つべく、バルザードの斬撃を飛ばして突っ込んで行く。

『ドラグナー』であれば一撃で仕留める事も可能だが、ミクとヒカリンのいない分、少しでも長く潜る為にMPの少ない俺は省エネを優先して戦略を練っている。

既にバルザードの飛ぶ斬撃で手傷を負った相手に向かって止めをさすべく斬り込んで行くが、念のためにナイトブリンガーの能力も発動して向かう。

MPの節約を考えれば本当はナイトブリンガーも発動させない方がいいのだが、さすがに素の状態で突っ込んで行くのは精神的に抵抗感があり、いつものように姿を眩ませながら死角に移動してから確実に仕留める。

この辺りが、自分の小物感とアサシン感を痛感してしまう所だが、こればかりはすぐには変えられそうに無い。

逆にあいりさんとベルリアは正面から正々堂々突っ込んで斬り結んでいる。

あいりさんは正面から斬り込んで、モンスターと斬り結んでいる間に正面から『アイアンボール』を叩き込み、ダメージを受けて動きが止まった瞬間に斬り伏せる。

初見で至近距離からの『アイアンボール』を防ぐ事は、通常のモンスターには、ほぼ無理なので、まともに組み合える相手には鉄板ともいえる攻撃パターンになっている。

ベルリアは2刀を使い相手モンスターを完全に手数で上回り秒殺している。

こちらも、この階層では両手に武器を持った敵はいないので2刀使いのベルリアは圧倒的優位性を保っている。

もちろんシルとルシエは1発ずつで相手を瞬殺しているが、ルシエは気分で攻撃魔法を使い分けている。

今は『侵食の息吹』を使って相手は狂って溶けてしまった。
流石は悪魔の所業だが、頼もしい限りだ。

「あいりさん、結構順調ですね。マップを見る限りは土日のどちらかで15階層まで行けそうですね」

「そうだな。私も最近影が薄いから、どうしても今回は張り切ってしまうな」

まだ気にしているのか？それとも自虐出来るぐらい吹っ切れたのだろうか？残念ながら、あいりさんの難易度の高い振りに今の俺ではうまく対応する事が出来ないのでスルーしておく。

とにかくこの数日で出来るだけ距離を稼いでマップピングを進めておきたい。

第374話 チャレンジ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします

第375話 アシスト

俺は今学校にいる。

学年末テストも近いのでいつも以上に集中して授業に臨んでいる。そしてこの日の昼休みに、真司から衝撃的な話を聞かされる事となる。

「海斗、話があるんだ」

「なんだよ改まって」

「実はな、俺前澤さんとお付き合いする事になった」

「……………え？付き合うってあの付き合うだよな？友達からじゃなかったっけ」

「そう。だから友達から始めて、めでたく付き合う事になった」

「おお〜やったな」

なんと真司が前澤さんと付き合うようになったらしい。あれだけ微妙な感じだったので心配していたのに急だな。

「だけどなんで急に付き合う事になったんだ？」

「指輪だよ、指輪。話してただろ。俺も隼人について行ってもらって、お返しに指輪買ったんだよ」

「あれだけ、うだうだ言ったのに結局買いに行ったのか」

「そう。買ってから思い切って前澤さんに渡したんだ。そしたら物凄く喜んでくれて、付き合う事になったんだ」

「そうか〜。よかったな」

今までのやり取りを見ていただけに真司がうまくいったのは純粹に嬉しい。

遂に俺達3人の中から彼女持ちが出たかと思うと感慨もひとしおだ。ただそれと同時に……うらやましい……真司が前澤さんに告白してから、まだどれ程の時間も経っていない気がする。

「前澤さん、葛城さんが海斗から指輪をもらったの知って羨ましかったんだって。今までホワイトデーには自分はお菓子しかもらった事が無かったのに、海斗が葛城さんに指輪をプレゼントしているのを知って軽く衝撃を受けたんだそうだ。そしたら俺が前澤さんに指輪を贈ったもんだから感激してくれて。そのままの流れで付き合う事になったんだ。最後の一押しになったみたいだ。海斗のおかげだよ」

「そうなんだ。よかったな」

ある意味俺がアシストした感じなのか？

俺は真司にアシストしてシュートを決めたのは真司って事が……サッカーの試合だとアシストもシュート同様に評価されるんだろうが、恋愛の世界ではシュートを決めた者だけが評価をされる。

「くっつ。俺だけ誰もいないんだけどどうすれば良いと思う？やっぱり紹介頼んでくれ！2人共合コンをセッティングしてもらってくれ。トリプルデートだよ。カラオケ今から練習しておくから、な！」

「いや、俺も真司に先を越された形だし、合コンなんか行った事無いんだけど」

「あゝ、海斗お前は良いんだよ。今のままでも大丈夫だ。多分クラスの子達の間では指輪の事は既に全員に広がってるんだからな」

「なっ！なんで……」

「そりゃ、葛城さんは言いふらしたりするタイプじゃ無いけど女子高生ネットワークに扉をつける事は出来ないでしょ。もう既に伝説というか既成事実というか、2人は結婚するんだってもっばらの噂

だぞ」

「け、けっこん？付き合っても無いのにけっこんって………」

「そりゃあ、ホワイトデーに左手の薬指に指輪を贈ってりゃあな」

「で、でもな考えてみてくれよ。けっこんて言うのはな1人では出来ないんだぞ、相手がいないと出来ないんだぞ」

「なにを当たり前の事を言ってるんだ。海斗大丈夫か？」

俺のやらかしからまだどれだけでも日が経っていないのに、噂が一人歩きして大きくなってしまっている。

これも75日の我慢というか3年生になったらおさまるだろうか。

いつか春香と付き合って将来的にそうなれば最高だとは思うが、今の俺には夢物語にしか聞こえない。

いずれにしても真司おめでとう。

これから前澤さんに振られない様に一層の努力が求められるのだろう。
頑張れ！

第375話 アシスト（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部からのポイント評価をお願いします

第376話 15階層

俺は今15階層に到達した。

平日に俺とあいりさんで距離を稼いだ事が功を奏したようで、全員でアタックした土曜日1日で15階層まで到達する事が出来た。

14階層は基本ゴブリンの上位種で占められていたので俺のゴブリンスレイヤー（微）とも相性が良く思った以上にスムーズに15階層まで到達する事が出来た。

初めて踏み入れる15階層には残念ながらシャワーは無かった。代わりに小さな売店はあったものの、値段は500m1のミネラルウォーターが大台の1000円となっていた。緊急時以外はとても買う気になれない値段だ。

俺達3人は月曜日からテスト期間に入るので、相談の結果明日は休みにする事となり、このまま少しだけ15階層を探索する事にした。

「15階層の情報は持つてる？」

「はい。15階はゲートがあるので比較的情報が集めやすかったです。ひと言で言うとは幻獣です」

「幻獣？」

「そうです。結構知られているようなメジャーな幻獣も混じってるみたいなのです」

幻獣か！敵モンスターとは言えワード的に惹かれるものがあるので少しワクワクしてしまう。

「ご主人様、モンスターです。2体だけですがご注意ください」

歩きながら探索を始めて程なく敵モンスターに遭遇した。

2体なので14階層に比べると数が少ないが、初見のモンスターなので油断は禁物だ。

メンバーでフォーメーションを固めて敵を待ち受けるが10秒程でモンスターが襲ってきた。

「シル、一応『鉄壁の乙女』を頼む」

「はい、お任せください『鉄壁の乙女』」

「なあ、みんなあれって何？」

「あれは豚じゃないかしら」

「豚だな」

「金色の豚なのです」

幻獣と聞いてワクワクしていたのにあれは一体なんなんだ？

かなり大きい。牛程もある金色の豚。以前金色のスライムを倒したが、あれとはまた違った感じのゴールドなのでレアモンスターという感じでは無い。

「あれって幻獣？なのか？」

「まあ、金色の豚ですから、ある意味幻の生物ですね」

「幻って言うか、巨大な貯金箱みたいなんだけど……」

「倒したら、金銀財宝が出てくるかもしれないわね」

確かにその可能性も捨て切れない。

豚のくせに突っ込んで来ない所を見ると、それなりに知能は高い様に見える。

「それじゃあ、俺からやってみる」

俺はバルザードを構えて左側の黄金豚に向けて斬撃を飛ばしてみることが、見えない刃が豚に届いた瞬間金属音が聞こえたものの何も起こ

らなかった。

「うそだろ。バルザードの斬撃で無傷？」

「完全に金属音がしたな。あの金色は見せかけでは無く本当に金属で出来ている様だな」

「あんなのでも15階層のモンスターだから以前のゴーレムの上位豚版なんじゃない？」

金属製のボディを持っているのであれば近接してバルザードで斬り伏せるか、至近距離から『ドラグナー』を打ち込めばいけるか？

「海斗、せっかくだからスナッチのスキルを使ってみてもいい？どうせ今日はこれで終わりでしょ」

「ああ、それじゃあお願いしてみようかな。右側を頼んだ。左側は俺とベルリアで何とかしてみろ」

「わかったわ。それじゃあスナッチ行くわよ『フラッシュボム』よ」

ミクがスナッチの新しいスキル名を告げると同時にスナッチの体が眩しく発光して、そのまま一直線に右の金豚に向かって飛んで行った。飛んで行ったと言うか俺には大きな光の弾が高速で放たれたようにしか見えなかったが、光の弾が金豚に触れた瞬間破裂音がして大きな穴が空いており、金豚はそのまま消滅してしまった。

「おおっ！スナッチ凄いな。ベルリア俺達も負けてられないぞ」

「マイロードお任せ下さい」

右側の金豚の消滅を確認と同時に俺とベルリアは光のサークルを越えて残りの1体を目掛けて駆けて行く。

距離が縮まって来た瞬間、金豚は予想外の速さで俺の眼前から移動して俺の横側に回り込んで来た。

「はやつ！」

15階層の豚はただの金色の豚では無く、素早い金色の豚だったよ
うだ。

一瞬の動きだったが完全に俺のスピードを凌駕している様に見える
ので、侮れない。

第376話 15階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第377話 金の豚

俺は今15階層の金の豚と戦っている。

こんな豚は見た事はないので幻獣には違いないのだろうが俺の思っていた幻獣とはかなり違う。

ただ、巨大な貯金箱の様なふざけた見かけとは異なり15階層の敵だけあってかなり強い。

近づいた瞬間横に回り込まれたが、目の前から一瞬消えた様に感じてしまい、俺はすぐには対応する事が出来なかったが、ベルリアがすぐに俺との間に割って入り、金豚の突進を食い止めてくれた。

巨体のくせにスピードで俺を上回っている気がするので、すぐにナイトプリンガーの効果を発動して『アサシン』の効果に期待する。

今の所ナイトプリンガーの発動が『アサシン』の能力を引き出すトリガーの様になっているが、本来は別の能力なのでそのうちMP消費の必要無い『アサシン』を自由自在に使いこなしたい。

「ベルリア、そのまま留めておけ！」

俺はその場から『ドラグナー』を構えて発射しようとしたが、俺が狙っているのを感知したのか、豚のくせに後方に下がった。

猪突猛進と言っぐらいだから改良種の豚も前進しかできないのかと思っていたがどうやらこの金豚は後ろにも下がる事ができる様だ。

俺はそのまま豚を追いかける。今度は豚の動きを広く見ているせいもあるが『アサシン』の効果もあり視界から豚が消える事は無くしつかりと捕捉出来ている。

「ベルリア、挟むぞ！」

「わかりました」

俺とベルリアは左右に分かれて挟みうちしようと考えたが、これが良く無かった。

先程『ドラグナー』を察知したので俺の事を見えているものだと思っ
い込んでの行動だったが、実際には見えてはいなかったのだろう。
ベルリアが追い立てた右とは逆方向の左側、つまり俺が挟み込もう
としていた方に迷う事なく全速力で向かって来てしまった。

俺を狙っているわけでは無く、何も無い空間に全速力で移動してい
るだけなのが見て取れるが、スローモーションの様に正面から巨大
な金の豚が迫って来る。

あ……………

俺ダメかも……………

スローで金豚が迫って来る視覚とは別に高速で脳裏に春香、両親、
パーティメンバー、そして真司と隼人の事が浮かんで来てしまった。
これって走馬灯だよなと冷静に考えながら、俺は吹き飛ばされてし
まった。

以前にも飛ばされた事があったが、その時を超える衝撃が全身を駆
け巡る。

痛みを感じながら、俺の人生は金の豚に跳ね飛ばされて終わるのか
……………このまま異世界転生しないのかな

などと考えながら宙を舞っている。

金豚も何かにぶつかった感はある様で動きが止まっている。

「ご主人様〜！豚の分際でご主人様になんて事を！『神の雷撃』」

俺は随分と長い時間宙を舞っていたのだろう。飛んでいる間にシル
の声が聞こえて金豚は跡形なく消えてしまった。

その直後地面に叩きつけられて、再び痛みが襲って来たがどうやら
俺は生きている。

理屈は分からないが、今回の事を考えると走馬灯は死ぬ時以外にも

みる事がある様だ。ただし死ぬ程全身が痛い。

「ご主人様〜！ご無事ですか〜！」

「おい海斗〜！死ぬな！呪うぞ！死ぬな〜！」

サーバントの2人が非常に騒がしい。

特にルシエ俺は死んで無いぞ。

「あ、ああ、大丈夫だ。いや大丈夫じゃないけど生きてるぞ」

「ああ、よかった」

「しぶといな」

ルシエはいつも通りだがかける言葉を間違ってるぞ！

「ベルリア、悪いけど治療を頼む」

「かしこまりました。すぐに治しますのでお待ち下さい『ダークキ
ュア』」

ベルリアの魔法の発動と共に全身の痛みが引いていく。

かなり激しく飛ばされたが、気を失ってもないのでナイトブリ
ンガーとレベルアップしたステータスのお陰で自分の耐久力が上が
っているのを、今の段階で実感出来たのである意味良かったのか？

それにしてもナイトブリンガーと『アサシン』の効果で気配を消し
てしまう事にこんな弊害があるとは思いつかなかった。

消えてる事で逆に遠慮無くぶつかられる事があるとは思いつけな
かった。

今後は効果発動後の相手の移動経路も予測しながら動く必要がある
かもしれない。

第377話 金の豚（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第378話 ギルド

「海斗大丈夫だった？ 思いっきり飛んで行ってたけど」

「まあなんとか」

「本当に海斗さんが飛ぶ時はアニメみたいに飛んでいきますね。人類って飛べるのかもと思わせてくれるのです」

好きな事を言ってくれるが、やはり15階層の敵は強い。見かけは貯金箱だったが強かった。

金豚の消えた跡を見てみたが中身は変わらず普通の魔核が落ちていただけだった。流石にお金がざつくざくとはいかなかった。

「それじゃあ今日はこれで引き上げようか。俺明日ギルドに行つて正式に依頼を受けとくよ」

俺達はそのまま15階層の入り口まで引き返してゲートで地上まで戻つて解散した。

次の日になり俺は朝からギルドに向かった。

「おはようございます。約束通り昨日15階層に到達したので、正式に依頼を受けさせてもらいます」

「やはり流石ですね。今回の依頼ですが高木様のパーティを入れて全部で5組での集団戦となります」

「5組ですか」

5組と言う事は単純計算でも30人以上での戦闘となる。ダンジョンの中で30人以上が同時に戦う事をイメージしてみるが、大乱戦というか連携の取りようがない気がする。

「今週末の予定ですが、万全を期して2日ばかりで行います。まず土曜日は隠しダンジョンの扉の前まで5パーティでお互いの連携を深めながら潜って頂き、日曜日にエリアボスにアタックして頂きます。ちなみにドロップアイテムにつきましては買取の上5パーティに均等配分させて頂きます」

「それで、エリアボスの情報なんですけど……」

「それなのですがエリアボスは……」

エリアボスの情報を聞いてギルドがパーティを集めた理由が分かった。

俺達も舐めてかかると痛い目を見そうなので、他の有力パーティの陰でしつかり頑張っていきたい。

ギルドでの用が済んだので今日はこの後、春香と待ち合わせしている。

明日からの学年末テストを前に急遽春香から連絡が入り、話した結果一緒に勉強する事になったのだ。

しかも勉強する場所は春香の家になってしまった。

小学生の頃一緒に遊んだ記憶はあるが家に行った記憶は無いので、おそらく人生初の春香の家にお邪魔する事になってしまった。

俺は行く前から既に緊張して来ている。

駅前に行くと共に春香が待っていたので、案内されながらそのまま一緒に春香の家まで向かう事となった。

「今日、俺家に行っても大丈夫だったのかな」

「うん、もちろんだよ。ママも楽しみに待ってるって」

「えっ……」

日曜日なのだから当たり前と言えは当たり前だがおばさんもいるのか。しかも楽しみにしてるって言うてくれてるけど何か粗相をしそ

うで不安になつて来る。

しばらく歩くと春香の家に着いた。場所は知らなかったが、同じ小学校区内なので思いの外俺の家に近く、可愛い洋風な家だった。

「それじゃあ入って」

「お邪魔します」

春香に連れられて1階のリビングにお邪魔すると、そこには春香のママ……

とパパが揃って椅子に座っていた。

「あ、あのっ、お邪魔します。春香さんのクラスメイトの高木海斗ですっ！」

「あら海斗くんいらっしやい。中学以来かしら。この前お母さんと偶然会ってお話したのよ」

「はいっ、伺っています」

「私は小学生の時にあった事があるかな」

「はいっ、運動会でお見かけしたことがあります」

「今日は一緒に勉強するそうだね。春香とも仲良くしてくれている様で」

「はい。仲良くさせていただいております」

「そう言えば海斗くんこの前の写真見せてもらったわよ」

「写真ですか？」

「春香を撮った写真よ。本当によく撮れていたわ」

「あ、ああっ、あれですか、ありがとうございます」

春香………両親がいるなら先に言っておいて欲しかった。

第378話 ギルド（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第379話 勉強会

「海斗くんは探索者をしながら王華学院を受験すると聞いたけど」

「はい、その通りです」

「順調に行けそうかい？」

「はい、必ず受かって見せます。探索者としても順調です」

「そう、頑張ってるね」

「はい！ありがとうございます」

挨拶もそこそこに2階の春香の部屋に案内された。

そこは俺の部屋とは全く違う女の子の部屋が広がっていた。

広さはほぼ変わらないと思うが色が全く違う。パステルカラーを基調として、小物も俺の部屋にはないものばかりだ。

俺の部屋も別に臭い訳ではないが、春香の部屋はいい匂いがする。

「それじゃあ勉強始めようか」

そう春香に切り出されて我に帰ったが、春香の部屋には勉強できる机が一つしか無い。

部屋に机が1つ。至って普通の事だが、机は1つしかないのに椅子は2つ並んでいる。

これは、一つの机に並んで勉強するというシュチュエーションに違いないが……………

「ここに座ってね。それじゃあ、明日の試験科目から勉強しようか」

「あ、うん」

明日の試験は古典と英語だったよな。

言われるままに椅子に座って教科書を開くが、距離が近い。
学校の机で隣同士になるよりも遥かに距離が近い。

「まず、テストに出そうな所から問題を出してみるね」
「お願いします」

俺も最近は成績が上向きだが春香の方が優秀なので基本お任せして
みるが、近い。

「え〜つと、これはね〜……………海斗聞いている？」

「えっ、ああ、もちろん聞いているよ」

「それならいいけど、多分これ出ると思うよ」

「あっ、出るの？もう一度お願いします」

テストに懸ける想いはあるのだが、春香との距離感が気になってし
まいボ〜ツとしてしまった。

あ〜シャンプーのいい匂いがする……………

やばい、俺変態っぽい……………

その後、春香から集中する様に注意を受け気合いを入れ直した俺は
一心不乱に春香と勉強をこなしていった。

丁度1時間半経過した時に

「コン、コン。入るわね〜」

ドアをノックする音と共に春香のママの声がして、そのまま部屋に
入ってきた。

「2人共集中して勉強してたみたいだから疲れたでしょ。お茶と
お菓子をどうぞ」

「はいっ、ありがとうございます。いただきます」

どうやら気を使ってお茶を持って来てくれた様だ。

「海斗くんは春香と同じ大学に行くのよね。仲が良いわね」

「はい、ありがとうございます。がんばります！」

「そういえばこの前春香に指輪をプレゼントしてくれたみたいでありがとうね。素敵な指輪だったわ。春香も帰って来てからはしゃいじゃって」

「ママ！」

「はい。贈らせていただきました。ご迷惑では無かったですでしょうか」
「迷惑なわけ無いじゃない。センスの良い指輪で春香が羨ましいわ」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃあ、ゆっくりして行ってね」

「はい、ありがとうございます」

完全にテンパってしまって自分でも受け答えがおかしいのが分かるが、もうどうしようも無い。

お茶を飲みながらお菓子を食べて勉強を再開するが、今度は下の階の春香の両親の事が気になり始めてしまって集中力散漫となり再び春香から注意を受けてしまった。

その後持ち直して13時まで勉強すると再びノックする音と共に春香のママが現れ

「お腹すいたでしょ、下でみんなでお昼にしましょうか」

確かにお昼ご飯を食べる時間ではあるが、下でみんなでか……

「はい！ありがとうございます」

1階に降りてみると昼とは思えない豪華な食事が並んでおり、春香のパパは既に椅子に座っていた。

「それじゃあ、いただきますしょうか」

春香のママの声で食べ始めたが、料理は非常に美味しい。間違いない美味いのだが、春香の両親との食事は緊張してしまった。俺以外の3人はリラックスして和やかな感じだが、俺にとってこんなに緊張感のある昼食は人生で初めてだ。

第379話 勉強会（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第380話 テスト本番

俺は今までの人生には無い新感覚の昼食を終えて春香の部屋で勉強を再開した。

美味しい食事を終えてこれから集中して勉強したいのだが、思いの外疲労してしまった。

ほぼ1日中ダンジョンに潜っていた時の疲労感に近い。

「はい、集中！」

「あ、ああ」

集中力も散漫になりつつあるが明日はテスト本番なので頑張るしかない。

その後も春香と問題を出し合いながら夕方に勉強会を終えて帰宅した。

家に帰ってから直前の詰め込みを敢行したが、やはり自分の部屋の方が集中出来る。

翌朝、いつも通り家を出てテスト本番に臨む。

1時間目は英語だ。

英語は残念ながら、普段使う機会も無いこともあってか苦手な部類に入るので、まずこれを上手く乗り切りたい。

問題を解いていくうちに、何問か見覚えのある問題が混じっている事に気がついた。

春香が昨日出るよと言って問題を出してくれたところがそのまま出ている。

なぜ春香には出る問題の予測が出来ていたのか分からないが、さすがは春香と思いつながらスムーズに解いていった。

集中力散漫になりながら勉強した昨日の成果が確実に出ている。

その後、他の教科のテストも受け無事に初日のスケジュールをクリアする事が出来た。

「海斗、テストどうだった？」

「ああ、結構出来たと思うけど」

「俺も山が当たってかなりいい感じだと思っ」

「真司はどうだった？」

「俺も前澤さんと一緒に勉強したからいつもよりは出来たと思っ」

どうやら手応えがあったのは俺だけでは無い様なので、残りの教科も頑張らないといけない。

帰りの用意をしていると今度は春香が声をかけて来た。

「海斗、どうだった？」

「うん、春香のおかげでいつもより出来た気がする」

「そう、よかった。それじゃあ今日も一緒に勉強する？」

「はい、お願いします」

「それじゃあ、私の家でいいかな？」

「あ、ああ」

「今日は海斗の家にする？」

「あ、じゃあそれをお願いします」

春香と勉強するのはうれしいが、春香の家で集中して勉強するには体力と精神力が必要になってしまっているので、俺の家だとありがたい。そのまま一緒に春香と家まで帰って、すぐに勉強するつもりだったのに母親に捕まってしまった。

「あら〜春香ちゃんじゃない。一緒に勉強するの、あ〜そう。ゆっくりしてたってね」

「はい、ありがとうございます」

「海斗が迷惑かけてない？大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「いつでも来てくれていいからね」

「ありがとうございます」

長くなりそうだったので遮って、春香を自分の部屋に連れて行く。ここで気がついてしまったが俺の部屋にも机は勉強机が1つしかなかった。

仕方が無いので昨日と同じ様に椅子を持って来て勉強を始めたが、やはり距離が近いので集中が乱される。

地上では残念ながら『アサシン』のスキルが作動する事は無くただのモブでしか無いのが辛い。

それでも雑念を払って勉強に集中しているとノックの音がして母親が現れた。

「仲良く勉強して偉いわね。お菓子とお茶持って来たから食べてね」

「はい、ありがとうございます」

「春香ちゃん、本当に久しぶりね。大人っぽくなったわね。」

海斗をよろしくね」

「はい、こちらこそ」

「もついいだろ、勉強の邪魔になるから」

「はい、はい」

やはり母親は油断ならない。お茶を持ってくる以外の意図があったのは間違い無い。

難敵を退けて、お茶を飲んでから再び試験勉強に臨むが、やはり春香の勉強法は参考になる。

ポイントをつかんでいる感じなので俺と違って要領がいいのだろう。1時間程度勉強を続けたところで再びノックする音が聞こえて母親が入ってきた。

「ケーキを買って来たから食べてね。実はこの前2人がデートして
るのを見かけたのよね。仲良くしてくれてるみたいでありがとう
ね。」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「もういいだろ、勉強の邪魔だつて」

「はい、はい」

油断も隙もない。ケーキなんかこの一年出て来たことがないのでさ
つき買って来たのだろう。

久しぶりに家で食べたケーキは美味しかったが、集中力を乱されて
しまった。

第380話 テスト本番（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします。

第381話 テスト終了

俺は学年末テストの終了を無事迎える事が出来た。

今回は、春香のおかげもあっていつも以上に手応えを感じたので、成績表が楽しみだ。

「あゝ終わった。後は終業式だけだな」

「この結果でクラスが変わるかもしれない。前澤さんとまた同じだ
といいな」

「のろけるな。俺はとにかく可愛い女の子と同じクラスになれる事
を切に願っている」

「あゝクラス替えがあるのか。俺今回結構自信ありだからクラス変
わるかも」

「いや俺だって自信ある」

3年生で春香と違うクラスになるのは辛い。春香は恐らく今よりも
もっと上位のクラスに行くだろう。後は俺の問題だ。1年生の時よ
りは確実に成績が上がっていると思うが、春香と同じクラスになれ
るだろうか？

今が4組なので春香は確実に1〜3組になると思うので俺もそれを
狙いたい。同じクラスになる確率は1/3だ。良すぎても悪すぎ
てもダメだ。春香と同程度に良くないといけない。今回このミッシ
ョンをクリアする事が出来ただろうか。もうこれは祈るしかない。
末吉とは年度末に吉が来ると言う意味に違いない。是非ともおみく
じパワーをここで発揮して栄光を掴み取りたい。

「海斗、テストどうだった？」

「ああ、お陰様で結構いけたと思う」

「そう。また同じクラスだといいいね」
「う、うん。そうだね」

春香の笑顔が眩しい。春を迎える季節にぴったりの爽やかな笑顔だ。出来る事なら、いやどうしてもこの笑顔の後1年同じ教室で見たいので末吉様に祈るしかない。

俺は学校での一大イベントを終了したので、明日からはダンジョンでのレイドイベントに臨む。

ただこの1週間ダンジョンに潜っていなかったため、今日1日で出来る限りの魔核を集めなければならない。

可能であれば土日に活動する必要分を集めてしまいたい。

放課後に春香達に誘われたが、断腸の思いで断りを入れて俺は1階層に潜った。

春香達との楽しい時間を犠牲にしてまで潜ったのだから今日とはとにかく結果だ。結果を追い求めるしかない。

スライム退治は普段俺1人でほとんど行っていたが今日はベルリアにも手伝ってもらい、いつも以上にスピードと効率を追い求めて魔核を集めている。

俺が殺虫剤ブレスでダメージを与えている瞬間を狙ってベルリアが止めをさす。

この連携攻撃で俺が1人で倒していた時の半分程度の時間で倒すことが出来ているが、スライムと遭遇するペースはそれほど変わっていないので劇的变化は無いものの少しだけ魔核収穫量が増えた気がする。

「海斗、何か良いことでもあったのか？」

「え！？何が？」

「今週わたしたちは喚ばれなかったけど、その間に何があったのか？」

「何ってテストだよ。大事な学年末テスト」

「テストね。それ以外に何かあったんじゃないのか？」

「いや、何も無いよ。真面目にテスト勉強に勤しんでいたけど」

「春香……………だろ」

「え！？何を言ってるんだよ。勉強してただけだって。そもそも明日の依頼で頭がいっぱいだし」

「ふん」

「ご主人様、私たちに隠し事は無いですよね」

「あ、ああ……………本当に真面目に勉強してただけだ」

「そうですか……………」

サーバント2人の追求に俺は何も悪い事をしたわけでも無いのに、何か判決を待つ罪人のような気分させられてしまう。

「やっぱり春香だな。海斗の奴、バレて無いと思って最近浮かれて調子に乗ってるな」

「そうですね。今回は私から見てもすぐに分かりました。私達も負けていられませんね。やはりご主人様は大人の女性がいいのでし
ようか？」

「その割にわたしが『暴食の美姫』で大人の姿になっても、そんなに反応しなかったからな。小さくてもいけると思うぞ」

「そうですね。私たちの努力が足りないのかもしれないかもですね」

またいつものように俺がスライムと戦っている間にこそそやつている。

気にはなるが触れない方が良く俺の本能が告げているので当然スルーしておく。

第381話 テスト終了（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第382話 スタート

俺は今ギルドにいる。

今日明日でエリアボスを攻略すべくイベント参加者が集合している。当初5パーティとの事だったが1パーティ増えて6パーティでのアタックとなった。

よく見ると14階層で襲われていたパーティも参加していた。

確かもう少して15階層に到達すると言っていたので直前で15階層まで到達して急遽参加する事になったのかもしれない。

俺的には変な噂を流した張本人達なのであまり関わり合いを持ちたくは無い。

「おおっ、この前はどうもありがとうございました」黒い彗星『さんですよね」

「いえ違います」

「いや絶対そうですよね」黒い彗星『さん」

「いえ高木です」

「『黒い彗星』さんは高木さんと言っんですね」

しまった……………本名を知られてしまった。

「『黒い彗星』さんのパーティもやっぱり参加してたんですね。俺達すっかり『黒い彗星』さんのパーティのファンになっちゃって」

ファン？何かの冗談か？しかもこの人こんなキャラじゃなかった気がするけど、他のメンバーも何やら熱い眼差しでこちらを見ている気がする。

「お互いに頑張りましょう」

「はい！」

うくん微妙な感じだ。

「なあ、なんか変じゃ無いか？」

「まあファンだそうだから仕方がないんじゃない？」

「ファンって冗談だろ。なんかやり辛いな」

「『黒い彗星』さんの宿命じゃ無いかしら」

「やめてくれ。ゾワゾワしてくるよ」

他の4パーティにも目をやるが、どのパーティも俺達よりも平均年齢は高そうに見える。

まあ15階層まで到達したパーティであれば専業でもいけると思うので自ずと年齢も高くなるのだろう。

「それでは今から全てのパーティで15階層に向かっていただきませう。集団の状態を保つたままで目的の扉迄行って頂いてから、今日はそのまま戻って来て下さい。くれぐれも単独で進む事の無いようお願いします」

俺達は誘導されるままダンジョンまで行ってからゲートで15階層に向かった。

情報によると目的の扉はダンジョンの1/3程度進んだ付近にあるそうなので、そこまでは既に15階層を踏破している4パーティが先導する事となったが、今回のパーティでこの規模の集団戦を経験した事のある者はおらず、初めは移動する事すらまならなかった。まず、問題となったのが、ただの移動だ。35名を超える集団がダンジョン内を詰まる事なくスムーズに進む事は、ほとんど無理だっ

た。集団で固まると歩く歩調も違えば、違うパーティとはコミュニケーションもろくに取れていないので自由に動く事もままならず、この場をモンスターに襲われたら一網打尽にされてしまいそうだった。

流石にまずいと思ったパーティリーダー達で相談をして、パーティ単位で間隔を開けながら進む事になった。

先頭については4パーティがローテーションで担当することとなった。

自ずと俺達ともう1つのパーティが殿を務めることになったが、一応後方からのバックアタックもあり得るので気を抜く事は出来なかった。

「すごい視線を感じるんだけど、気のせいじゃないよな」

「そうですね。後方のパーティに見られてますね」

「そっだよな。違う心労で倒れそっだよ」

「有名人あるあるですね」

「俺、別に有名人でもなんでもないんだけど」

「まあいいじゃないか。それにしても後方は暇だな。前方ではそれなりに交戦しているようだが、私達が出る幕は無いようだな」

「そうですね。せいぜい前から2パーティいれば用足りてる感じですね」

現在の俺たちは5番目を進んでいるので1番前のパーティとは150m程離れており遠目に戦闘を見てるだけで終わってしまった。まあ同じぐらいのレベル帯の他のパーティ戦を見る機会もあまり無いので、見て勉強させてもらっているが、見ている限りではそれぞれ結構偏った戦い方をしているような印象を受けた。

第382話 スタート（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第383話 行進

俺は今15階層を進んでいるがまだ1回も敵と交戦していない。

「これって良いのか？」

「まあ良いんじゃない。私達は15階層初心者なんだから1/3までオートマツピングされるようなものじゃない。それに次来る時の参考になるし」

「俺あんまり他のパーティの戦闘って見た事無かったんだけど、見る限り放出系の魔法を使ってる人って少ないか？思った以上に物理的な武器を使っている人が多いな」

「まあ、うちのパーティは魔法が多いが、やはり有用な放出系魔法スキルは珍しいと言う事だろう。逆に見ていると分かるが、付与と云うか武器に威力を乗せるようなブースト系のスキルを多用しているパーティが多いように見えるな」

さすがは、あいりさんよく見ている。言われてみると、弓系の武器にしても命中率が高いし、威力も高い気がするので何かの補正がかかっているのかもしれない。

ベルリアの『アクセルブースト』やあいりさんの『斬鉄撃』に似たスキルなのだろう。

「でも見る限り『ドラグナー』っぽい武器を使っている人もいないですね」

「まあ、空を飛ぶモンスターには遠距離用の武器は必須だろうが、そうでは無い敵に魔核銃の類を使用するのはハイコスト過ぎるからこの階層では、余り使用する機会はないんだろう」

「そうね。スライムの魔核を毎週の様は何百個も集めて来れる人も

限られてるし」

これは、褒められているのか？いや、おそらく馬鹿にされてるんだな…………

でも俺は生粋のスライムスレイヤーなんだよ。スライム狩りに誇りを持ってているんだ！

戦闘を見ていると目に見える魔法は少なめだが、武器はそれぞれ良いものを使っているように見える。

恐らくほとんどの探索者が魔剣かそれに類する武器を持っているように見える。

片腕に固定した小型のボウガンのようなものを使っている人もいるが、ブーストを使用しているにしても威力が高すぎる気がするのであれも魔法付与されたマジックアイテムなのだろうと推察される。

敵モンスターも先日俺達が交戦した金豚の他に銀豚そしてケンタウロスっぽい下半身が獣で上半身が人型のモンスターが出て来た。このモンスターは明らかに上半身男のモンスターしか出て来ないようだ。

少し残念な気もするが、上半身女性だと気が咎めるのと、他のメンバーを前にどう反応して良いか混乱してしまいそうなので、これはこれで良かったのかもしれない。

ユニコーンのような角の生えた大型の馬も現れたが、思ったのとは違い、獣っぽさが強く可愛くも美しくも無い。

今のところ幻獣っぽいのが何種類か出て来ているが、どれもゲームのイメージの幻獣とはそれぞれ異なっている気がする。やはり人間は、憧れる物の対しては美化するきらいがあるのかもしれない。

完全に気を抜きながら歩いていると

「ご主人様、後方からモンスターです。ご準備お願いします」

おおつ、今日初めての戦闘だ！俺達は後方から2番目なので、最後尾の例のパーティをサポートする形で臨む。

「みんな、後ろのパーティが直接当たるだろうから俺達は、遠距離攻撃中心にサポートしようか。動き方が分からないから、誤射だけはしないようにいこう」

そういえば最近になって知った事だが、このぐらいの階層まで来ている殆どのパーティは感知石と言うレーダーの役割を果たすマジックアイテムを持っているらしい。

金額が8桁らしいので下位の探索者では無縁のものらしいが、一定の距離までモンスターに近づくと石が光るらしい。

以前の階層で魚探を使用したので、レーダー的な物もあるのかと思っていたが水場以外では磁場が関係するのか分からないが上手く作動しない事が多く故障も多いので最終的には探知石に落ち着くのだそうだ。

ただし、シルのように詳しい距離や数が分かる訳では無い様なので俺は本当に恵まれている。

シルにはいつも感謝しかない。

第383話 行進（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第384話 進行中

今まさに俺のすぐ後ろのパーティーが交戦している。

戦っている相手は見た目でグリフォンかと思っただが一回りは小さい様で、ミクによるとレッサーグリフォンと呼ばれるモンスターらしい。

それが3体上空から襲ってきている。

前回は殆ど彼らの戦いぶりを見る事は無かったが、男性4名が女性2名の前に立ち応戦して、女性2人は恐らく1名が補助魔法を使っている様に見える。もう1名は回復役だろうか直接戦闘に関わっている様には見えない。

実質、攻撃力を持つ戦力は4名なのだろう。

前回数に押し切られたのも若干攻撃の数が足りないのかもしれないが、そのうち1名は中衛で弓を使っている。

ボウガンではなく西洋風のエルフが使っている様なイメージの弓だ。俺達のパーティーには弓を使っているメンバーはいないので特に目を引くが、よく見ると矢が無い。

確かに弓の鉉の部分引いて放つ動作を行なっているが、手元に矢らしき物は見当たらない。

完全にマジックアイテムだろう。空を飛ぶレッサーグリフォンに1番ダメージを与えているのはこの人の攻撃だ。

彼らが交戦している事でレッサーグリフォンの動きはかなり制限されているので俺達からは格好の的となっている。

「それじゃあ、みんないくよ！」

シルとルシエとスナッチは巻き込みが怖いので控えさせて残りの4人で一斉に斉射する。

俺は1番手前まで来ている個体を目掛けて『ドラグナー』を放つ。青い閃光が走りレッサーグリフォンを捕らえた。当たりどころの問題か消滅までは至らなかったが、ふらふらと墜落して交戦していたパーティの男性陣がすぐに止めをさした。残りの2体も同様に手傷を負って墜落し、そのまま止めをさされて消失してしまった。相手の攻撃を完全に受け持つてもらってから不意打ちの様な形だったので思った以上に簡単に倒す事が出来た。

「ありがとうございます！さすがですね。皆さん魔法を使えるんですね。いや〜すごいな〜」

「いや、こちらこそ余計な事だったかもしれないです」

「うちのパーティはどっちかというところと近接を得意としてるんで助かりました。高木さんの武器カッコいいですね。そんな武器初めて見ましたよ。ドロップですか？」

「いや、そういう訳では……。あの、おいていかれない様に進みましょうか」

このパーティとはちょっと絡み辛い。馬鹿にした感じも悪意も無いのは分かるが、俺達に対して超補正が効き過ぎて変な感じに見られている気がして仕方が無い。

そもそも、さっきの戦闘で魔法を使ったのは2人で後は魔法銃での攻撃なのだが説明するとめんどくさそうなので黙っておこう。

「おいつ、今の見たか」

「ああ凄かったな。見た目があんなだから眉唾かと思ってたけど、噂は本当みたいだな」

「ああ、確かに偉ぶる所もないし腕も確かっばいな」

「しかも、他の3人の女の子も全員攻撃に参加してたな」

「ああ、あの子達あの可愛さで反則級だな。『黒い彗星』の取り巻

きなのかと思つたらそうじゃない様だ」

「しかも噂のサーバントは一切参加せずか。余裕だな」

「高火力の遠距離型チームか？」

「いや、噂によると『黒い彗星』は近接らしいぞ」

「まじかよ。さすが彗星」

なぜか一つ前に行くパーティから視線を強く感じる。

特に変な動きをしたつもりも無いが、もしかして横取りしたとでも思われたのだろうか？

やはりいくつものパーティでやっているのでいつもの様にはいかない。

他のパーティの迷惑にならない様に気をつけながらやる必要があるな。

あまり悪目立ちして目をつけられても嫌なので極力目立たない様に目的地まで早く辿り着けるといいな。

第384話 進行中（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第385話 行軍

俺は今15階層を進んでいる。

ローテーションで入れ替わりK112は最後尾を進んでいる。

最後尾になったので少しは戦う機会があるかと気合いを入れ直して進んでいるが今のところモンスターは前方からしか現れていない。今までもそうだったが基本的にダンジョンのモンスターは殆どが奥から出現する。

一度通った所から急に現れるという事は稀なので、これだけの人数が通ったあとに後ろから襲って来るモンスターは殆どいなかった。

「どうだシル？モンスターいる？」

「はい、前方には確認出来ませんが、今のところ後方にはいない様です」

「海斗〜ひま〜。わたし今日なにもしてないぞ！」

「そう言われてもな〜俺のせいじゃ無いから。まあ明日は間違いなく出番があるだろうから今日はもうカードに還つとくか？」

「ふざけるな！還るわけないだろ！」

「じゃあ今日は大人しくしておいてくれよ」

それから更に30分ほど歩いた所で

「ご主人様、ようやくです。後方からモンスターです」

「おおっ、ようやくか！数は？」

「はい。それが1体だけです」

「そうか、もしかしたら単体で凄く強いやつかもしれないしな」

「そうですね」

「それじゃあ、ベルリアと俺が前に出るから、みんなはこのまま待機でお願い」

他のメンバーを残して俺とベルリアで後方に向かって進んで行く。現れたのはケンタウロスだったが、亜種なのか俺がゲームなどで知っているケンタウロスとはかなり異なる。

下半身は馬だと思うが、多分シマウマだ。そして上半身だが人の上半身が占めているのではなく馬の首が伸びており頭の部分だけが人間っぽい。腕は4本の足とは別に胴体というか馬の首の付け根の下側に付いている。

多分ケンタウロスの亜種だとは思うが、どちらかと言うと馬に腕がついて頭が人型。人面馬と言った方がいいかもしれないが、思い描いていたケンタウロスと全体の割合というかバランスが大きく異なる為に、カツコよく無いというか何となく気持ち悪い。

「ベルリア、これ多分ケンタウロスだよな」

「マイロードまず間違いありませんが、縞模様も相まって気持ち悪いですね」

「だよな」

ベルリアと2人で敵モンスターの品評をしていると

「聞こえているぞ！足が2本しか無いお前らの方が気持ち悪いわ！」

やっぱり人型の頭をしているので普通に喋って来た。

「やっぱり喋れるんですね。一応聞いておきますが戦わずに逃げたりしてくれたりそんな事ってあります？」

「舐めているのか？薄い顔の人間が調子に乗っているのか？」

「いや別に舐めてる訳では無いんですけど」

薄い顔……確かにケンタウロスの顔はイタリア人も真つ青というくらい濃い。この顔に比べたら俺でなくとも大半の日本人の顔は相当薄いんじゃないだろうか。

「マイロード、この無礼なモンスターは私にお任せ下さい」

「1人で大丈夫か？」

「はい、問題ありません。こんな顔の濃い奴に遅れをとったりする事などありません」

「そうか、それじゃあ任せるけど危なくなったら助けるな」

ベルリアが2刀を構えて前に出たのでそれに合わせて俺は一步下がる。

『アースジャベリン』

いきなりケンタウロスが魔法を発動しベルリアに向かって3本の石の槍が飛んできたがベルリアが華麗に最小限の動きでかわしていく。何気に1回の詠唱で3つの槍が出て来たのは凄い事な気がする。

俺達のスキルでは1回の詠唱で1つの現象しか起きていないので元々3つワンセットなのかそれともレベルとかの関係で3つ出せるのかは分からない。

ケンタウロスは石の槍が避けられたのを見て4本の足で走り始めて、再び『アースジャベリン』を発動するが、またしてもベルリアは完全に避け切ってしまった。

ベルリアは完全にケンタウロスの攻撃を見切っている。

やはり、俺の剣の師だけはある。まだ俺にはこの動きは出来そうに無い。

第385話 行軍（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第386話 到着

ベルリアは石の槍を躲しながら攻撃に転じるが、やはり4つ脚の相手の方が移動速度は速く、詰めた分だけケンタウロスも後ろに下がりに距離をとられる。

そしてこちらはケンタウロスのイメージ通り手には弓を持っており、矢も合わせて放って来る。

結構な体躯の大きさと見た目に反して、こいつは完全に中遠距離タイプらしい。

明らかにベルリアとは相性が悪い。

「ベルリア、手伝おうか？」

「いえ、大丈夫です。私にはマイロードに頂いたこれがあります」

ベルリアはそう言って右手の剣を魔核銃に持ち替えた。

「プシュ」「プシュ」

「ぐうアッ！」

魔核銃の発射音と共にケンタウロスの呻き声が聞こえてきた。

見るとケンタウロスの前脚2本共の真ん中に魔核銃の着弾痕がくつきりと残っている。

完全に動きが止まったケンタウロスに向かって駆けて行き2刀で、あっさり長い馬の首の中程をを刈り取ってしまった。

「マイロード、全く問題ありませんでした」

「そうか？」

確かに力の差は歴然としていたものの思った以上に強敵だったので、全く問題ないと言える程、楽勝では無かったと思う。

その証拠に本来使うつもりは無かったであろう魔核銃も使わされていた。

ベルリアの見栄っ張りにも困ったものだ。

「おいっ、あのちっこいの他の2人のおまけか付き人が何かだと思つたら、滅茶苦茶強くないか？」

「ああ、俺も1番影が薄いから目に入ってなかったけど、やっぱりサーバントだけあって只者じゃ無いな」

「俺は幼児趣味はないけど、女の子とかには結構人気出そうじゃないか？」

「ああ、でもパーティーの中では序列が低いのかあんまり良い扱いを受けてなさそうに見えるな」

「まあ、あのメンバーの中じゃあな」

ベルリアがケントウロスを倒す事に成功したので隊列に戻って先に進もうとしたが、やはり俺達同様他のパーティーの戦いが気になるのだろう。すぐ前のパーティー以外のパーティーも足を止めてベルリアの戦いを見ていた様だ。

まあベルリアの戦い方が一般的な探索者の参考になるかどうかは分からないが、こうやってお互いに情報を得るのは集団戦に向けては悪くない事だと思う。

「おい、ベルリア！お前だけずるいぞ！わたしだって少しはドカーンとやりたいんだぞ！」

「姫！申し訳ございません。ただあの程度の敵にルシェ姫の手を煩わせる事はありません。全てこのベルリアにお任せ下さい」

「もう退屈なんだ！海斗、1番前に行つてきていいか？」

「いい訳ないだろ！目立ってどうするんだよ。ただでさえ1番下っ

端のパーティなんだから目をつけられる様な真似はやめてくれ」

「それじゃあ、かわりに何かくれよ」

「かわりにつて……………」

「無いのか？」

「分かったよ。魔核だろ。1個だけだぞ」

「1個だけ！？えゝ無理！」

ルシエ無理つてなんだ無理つて。

「分かったよ。それじゃあ2個な。それ以上はこっちが無理だからな」

「ケチ。それで我慢してやるよ」

尚も文句を言うルシエにスライムの魔核を2個渡してやるが、強く視線を感じる。それも2人分感じる。

これは見なくても分かっている。

「わかってるよ。シル達にも2個ずつな」

「えっ？ご主人様、いいんですか？」

良くは無いけど、そんな目をされたら渡さない訳にはいかない。

「マイロード。ありがとうございます。一層頑張ります」

1回の戦闘で6個の魔核が消費されてしまったが、幸いな事に直接的な戦闘が殆ど無いので、魔核の消費も殆ど無い状態でここまで来れている為、少しぐらいの浪費なら許されるだろう。

そこから更に1時間半程経った頃先頭の集団から声が上がった。

「あつたぞ！ここに間違いない」

声の方に進んでみると全てのパーティが集まっており、目の前には大きな土色の扉が閉じた状態でダンジョンの通路の脇の壁に出現していた。

扉とは別方向に通常の通路があり、今でこそはつきりと姿を表しているがカモフラージュされていれば普通気がつく事は無い場所に扉がついているので、見つけた人はよく気がついたものだと思う。

今日は、ここまでの予定なので扉には誰も触らずに、全参加者で道を引き返す事にした。

帰り道もK - 12は後方を歩く事が多かったので足が疲れた事以外は殆ど消耗する事なく初日を終える事が出来た。

明日は遂にエリアボス戦なので、今日はしっかりと寝て備えようと思う。

第386話 到着（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします。

第387話 ギルドミーティング

俺は今ギルドに戻って来ている。

扉から引き返して来てそのまま全員でギルドまで戻って来た。

「それでは、明日エリアボスに挑む事となりますが今日何か気がついた事があればお願いします」

ギルドの職員が集まった探索者に呼びかけるが誰も声を上げない。俺的にはダンジョンが狭くて全員で一斉に戦う機会が無かったので不安しか無いが、他の人達は大丈夫なんだろうか？

「何もないですか？無ければ明日9時に集合をお願いします」

本当に誰も何も言い出さない。

やはりみんなの前で発言するのは憚られるのだろうか？

K-12のメンバーに目配せをするが一様に俺に発言しろと言う無言の合図を送ってくる。

3人共目は口程に物を言うを正に体现している。

あまり気はすすまないが、このままで不安なまま臨むのも怖いので小さく手をあげてみた。

「はい。どうされましたか？」

「あゝ。今日一度も全員で戦って無いので、明日本番の戦い方と言うか連携が分からないんですけど……」

俺が遠慮がちに質問したと同時に

「ああ、それ俺も思ってたんだよね」

「そうそう、連携も何も無いよな」

「適当に全員で戦ったら混乱するよな」

と俺に同調するような声があちこちから聞こえて来た。

そう思ってるんだつたら年上なんだから率先して言ってくれよという思いと、年上でも皆んなあんまり変わらないんだなという親近感とが同時に押し寄せて来た。

「それでは陣形的な事を打ち合わせておきましょうか。既に数パーティが挑んでいますのでマッピング情報がありますので、紙上の図面にパーティの担当エリアを記載して配らせていただきます」

「後、戦い方なんですけど……」

「パーティ毎の担当エリアをある程度区切らせて頂きますが、実際には紙上通りいかない事も考えられますので、そこは現場で臨機応変に対応して頂く他はありませんね」

言っている事は理解できるが、現場でそう上手くいくものだろうか。

「他に何かありませんか？」

「もう一ついいですか？事前にモンスターの情報はもらったんですけど、特に弱点とか気をつける事とかって分かりますか？」

「正直、まだ撃破に至っていませんので弱点などは、詳細は不明ですが見た目以上に防御力があり硬いとは聞いております。また前回のパーティが挑んでから少し時間が経過しておりますので、現場の状況が変化している事も考えられますので挑んで頂いたその場で対応していくしか無いと思われます」

「そうですね。わかりました」

これ以上質問しても詳しい内容は出て来そうに無いので、まだまだ

知りたい事もあったがそこまでにしておいた。

ギルドはやはり現場では無いので、多少お役所仕事感があるのは仕方が無いのだろう。

その後すぐ全員に凶面が配られたが、凶面というか隠し部屋は、ほぼ四角形に近い形をしており、6パーティが扉から進んで横1列に展開して配置されており、俺達は向かって1番左端を担当する事になっている。

恐らく今日前を探索していた4パーティが中心に並び俺達と後方について行っていたパーティが左右の端に配置されているのだろう。

まあ他のパーティの邪魔にならない様に端っこで頑張りたいと思う。

「私達端っこね」

「まあ俺達15階層に潜ったばかりの1番下っ端パーティだからな」

「そうね。でも今日の感じだと私達ってこの中じゃ射程が長い方だと思っただけど、端っこだけでいいのかしら」

「そこは臨機応変に言ってたから、邪魔にならない程度に自由にやればいいんじゃないか？」

「なんか思ってたよりも窮屈な感じね」

「そうですね。ゲームのレイドバトルみたいに一斉にかかって殲滅するのかと思ってたんですけど、よく考えてみるとダンジョンで35人一斉は無理ですよ。仮にオープンスペースでも35人が取り囲んで攻撃とか無理ですよ。やっぱりゲームの世界は自分中心でいけるので、スペース的なものまでは殆ど考え無くていいですもんね」

ヒカリンの言う通りだが、明日は全員で連携をとって殲滅する事になると思っているので、しっかりと脳内シミュレーションをしておきたい。

第387話 ギルドミーティング（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第388話 レイド当日

いつもより少しだけ早く目が覚めてしまった。

今日が初めてのレイドバトルの日だからだ。

今までも命を削る様な戦いをして来たが、それは結果的にであり今日の様に事前に分かっていた事は1度も無い。

今日の敵は既にどんなモンスターか判明しているし俺達他に5パーティーもいるので危険度はかなり低いと思うが、それでもいつもより緊張してしまう。

昨日寝る前に脳内トレーニングは何度も済ませた。

体調もほぼ万全なので今日のバトルにはしっかりと対応できると思う。

朝支度を終えてから、9時の集合に間に合うように家を出てギルドに向かう。

ギルドに行く前にレンタルロッカーで装備を整えてから、気合を入れ直してギルドへと向かう。

ギルドに着くと既にミクとあいりさんが待つており、5分程でカオリンもやって来た。

他のパーティーもほぼ揃っている様で9時になると同時に6パーティーがギルド内へと進んだ。

「それでは今日、皆様でエリアボスを討伐して頂きます。今回は6パーティーで臨んでいただきますので、まず大丈夫だとは思いますが、当然皆様の命が最優先ですので危なくなったら各自撤退してください」

ギルドの人が言っている事は至極当たり前の事なのだが、何となく巷で言うところのフラグっぽくってちょっと引かかってしまった。

まあ俺の受け取り方の問題なので、こう言う時はもつと素直になつた方がいいのだと思う。

そこからは昨日と同じ様に15階層まで全員で向かった。

「みんな、準備はもう大丈夫？」

「当然だな」

「昨日はいつもよりいっぱい寝ましたからね」

「お肌の手入れも万全よ」

あまりお肌の調子はレイドバトルに関係するとは思えないが、それだけに余裕もあると言う事なのでいい事なのだろう。

そこからは昨日と同じルートと同じメンバーで進んだので、昨日よりもスムーズに進む事が出来た為、およそ2時間で目的地迄到達する事が出来た。

今日も俺達パーティが交戦したのは2回だけだったが、今日は初日に交戦した金の豚と銀の豚と戦う事となったが、実際に戦って見てようやく金と銀の違いがわかった。金の豚は物理攻撃に強く銀の豚は魔法攻撃に対して耐性を持っていた。

金銀混合の豚がいればさらに手強かったのだと思うが、そんな豚はいなかったので前回の様に吹き飛ばされる事なく倒す事が出来た。前回の失敗と昨日の経験を生かして、ほとんど消耗無しで目的地の扉の前までやって来る事が出来た。

俺達だけではなく全てのパーティが万全の状態で気合を入れ直して扉に集中する。

「それじゃあ開けるぞ！各パーティ持ち場は把握してるな。行くぞ」

先頭にいたパーティのメンバーが声を上げて隠し扉に手をかけた。遂に俺にとって初めての本格的な集団戦が始まった。

扉は全員が一斉に入れる程は大きくないので、ここまで進んで来たパーティ順に走って中に入って行く。

すぐに俺達の順になったので前のパーティに遅れない様に急いで中に入り、部屋の1番左を目指して走るが、先に入っていたいくつかのパーティは既に交戦状態となっており、剣戟の音が聞こえて来る。俺達も持ち場に着くと同時に直ぐに指示を出す。

「みんな、今日は節約も遠慮も無しだ！とにかく倒し切る事だけに集中だ！俺とベルリア、あいりさんが前に出る。シルもやばくなったら前に出てくれ！後のメンバーは後方から撃ちまくって！」

脳内では飽きる程にシミュレーションを繰り返したが、実戦ではこんなのはやった事ないのでとにかくやってみるしか無い。俺も速攻で終わらせるべく敵に向かって行く。

「おおおおおおお〜！」

第388話 レイド当日（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第389話 レイドバトル

俺の前にはエリアボスがいる。

エリアボスに相応しいメジャーモンスター牛鬼、いやミノタウロスだ！

それも1体では無い。普通ボスといえは1匹だと思うが目の前には推定50体はいる。

1体が結構なサイズ感があるのでこれだけの数揃うと威圧感が半端ではない。

今回の6パーティは前衛タイプが多い様なので相性は良さそうだが単純計算では倍近くの敵がいる事になる。

1体毎の能力も高いと思われるので普通であれば劣勢は免れないところだが、ここはダンジョンで四方を壁で囲まれた限られた空間なので横1列に陣取った俺達に対して、ミノタウロスが50体で向かって来る事は無く、ほぼ半数がこちらの前線と交戦している。

俺も目の前のミノタウロスに向かって行くが、残念ながらこの隊列を組んだ状態では気配を消すメリットも薄く、何よりも俺が後方に回り込む間に前線ラインを突破される恐れがあるので気合を入れて正面から倒しにかかる。

「くっ！でかいくせに速いな。おおおお〜！」

巨体に似合わないスピードと定番とも言える特大サイズの戦斧をぶん回して来るので恐ろしい。

バルザードで受け止める事はできるかもしれないが、この勢いでバルザードが折れる可能性もありえる。

それよりもバルザードの前に俺が力負けしてしまう可能性の方が高いだろう。

俺はベルリア仕込みのステップによる回避を繰り返しながら反撃を試みようとするが、進化したとはいえショートソードサイズのバルザードでは完全にリーチが足りない。

間合いに入り込む事が出来ず苦戦しているところに

「ご主人様、下がってください。我が敵を穿て神槍『ラジュネイト』

」

シルが入れ替わりで前に出て俺の相手をしていたミノタウロスを撃退してくれた。

すぐに次の敵が向かって来るが、少し時間が稼げたのでバルザードに氷を纏わせて魔氷剣を発現させる。

「シル、俺がやる。下がって他の2人のフォローも頼む！」

魔氷剣の斬撃を向かって来るミノタウロスに放ってからそのまま迎え撃つ。

不可視の斬撃が確実にミノタウロスにダメージを与えて動きを鈍らせているが、まだまだ暴れながら突っ込んで来そうだったので『ドラグナー』で追撃をかける。

実際に見るミノタウロスは、かなりの体毛が生えており、思っていた以上に獣っぽいが、強度のありそうな外皮を青い弾丸が貫通して深手を負わせる。

「ブウグアア〜！」

ミノタウロスは痛みに声を上げながらも思った通り突っ込んで来る。流石はエリアボスだ。

鈍った戦斧の一撃を躲した瞬間魔氷剣をミノタウロスの鍛え抜かれた腹部に向かって左手で斬りつけ、そのまま切断のイメージを重ね

で一気に斬り裂く。

これでシルと合わせて2体。戦闘自体は1分に満たない時間だが、初見の敵と普段とは違う雰囲気の中での戦闘にいつもよりも疲労感を感じる。

俺の前方は相手が居なくなったのでベルリアとあいりさんの方に目をやると、ベルリアのフォローをヒカリンが、あいりさんのフォロ―をミクとスナッチがおこなっている。

ルシエは1人自由に後方からスキルを放っている様だ。

ベルリアはミノタウロスの巨体にも力負けせずに正面から斬り結んでいる。

ベルリアの技術あってこそだと思うが、巨大な戦斧を片方の剣でしっかりと受け止めながらも片方の剣で手傷を負わせていつている。動きが止まった所をヒカリンが『ファイアボルト』で攻撃している。

「ヒカリン、あいりさんの所にも『アースウェイブ』を！」

この密集した戦闘では『アースウェイブ』は絶対的な効果を発揮するはずだ。

俺の指示でカオリンが即座に『アースウェイブ』を発動して、あいりさんの正面のミノタウロスの動きを鈍らせる。

その隙をついてあいりさんが『斬鉄撃』を発動してミノタウロスの首をはねとばし消失させる事に成功したのを見届け俺も魔氷剣を構え直して次の敵へと向かって行く。

第389話 レイドバトル（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第390話 レイド進行

俺は今新たなミノタウロスを迎え撃っている。

今のところミノタウロスのパワーには目を見張るところがあるものの、単体での戦闘能力は十分に対応できるものだ。

周りに目を向けてみるが、他の探索者達も十分に渡り合えている様に見える。

俺の場合はMPが問題だが、今回は始めから低級ポーションを使うつもりなので出し惜しみはしない。

魔氷剣の斬撃を飛ばして怯んだ隙に距離を詰めて『ドラグナー』で致命傷を与えてから止めをさす。

もちろん下手をすれば命の危険があるので言う程楽勝では無いが、とにかく落ち着いて手順を繰り返す事に集中する。

他のメンバー2人も使用する手段に差はあるものの、後方からの支援も含めてほぼ同じ手順でミノタウロスを倒して行く。

俺達だけで既に7体を倒したので再度状況を確認してみるが、事前に想定した以上に状況は良く無い。

「みんな大丈夫か〜！」

「私達は全然大丈夫だけど」

「減りませんね〜」

当初50体以上いたと思われるミノタウロスは、かなりの数が前線にいた個体に入れ替わって後方で控えていた個体が前線に出て来ているが、いまだに後方に控えている数と合わせておよそ50体。

戦闘開始から比べて全く数が減っていない。

恐らく、6パーティで30体以上のミノタウロスを倒しているはずだが、現存しているミノタウロスの数は50体余り………

このエリアボスは増える。

以前出会ったホブゴブリンの様に増えるのだ！

ギルドで話を聞いた時には総数40体余りと聞いていたが、開戦時の段階で既に50体を超えていたので、当初の想定を超えている。

1番最初にここを発見したパーティは最初4体のミノタウロスと交戦したらしい。

ただ倒しても倒しても数は減らず、むしろ増えてしまい10体を超えた段階で、扉の外へ退却する事となったらしい。

その後も幾つかのパーティが単独で挑みその度に数を増やしてしまふ結果となり今に至っている。

40体程の敵に総勢で35名を超える探索者で挑み一網打尽にする。それが俺達の当初の計画だったが、思っていたよりも数が多いせいで倒すペースが増殖のペースを大きく上回る事が出来ていないので敵の総数が減らない。

現状、ミノタウロスは後ろに控えている一団の分だけ常に余力を残した状態と言える。

こちらも敵の戦い方に慣れて来たので多少のペースアップは見込めるが、それも一時的なもので体力の減少と共にペースダウンしている事は間違いない。

まだ戦闘を開始してどれだけも経過していないが、普通に考えてこの戦闘状態を数十分に渡ってキープする事は出来そうにない。

たまにアニメなどの描写で数時間に渡って戦い続けている様なものがあるが、あれはリアルルのダンジョンでは絶対に不可能だと思う。

俺は更に後続から向かって来たミノタウロスと交戦を続けるが、魔氷剣が解けてしまったので応戦しながら再びシルの援護を受けるが、俺自身いい加減息も苦しくなってきた。

もう一度周りの状況を確認してみるが、戦闘ラインは殆ど動いていない。負けてはいないが押し込んでいるわけでも無いので、数の暴力で圧倒的にミノタウロスが優位だ。

見る限り、新しく増殖したミノタウロスは完全にフレッシュな状態

を保っており体力に際限は無さそうだ。

このまま行けば、時間と共に撤退も視野に入ってくるが、今回引いてしまえば数がどこまで増えるか分からない。

現状でも乱戦状態なのにこれ以上数が増えてしまうと本当に手に負えなくなってしまうようなので、どうにかして倒してしまいたい。

「シル、どう思う？」

「もう、一気に蹴散らしてしまうしか無いのでは無いでしょうか？
シルシルを呼べばこちらの手数も増えますし」

シルの考えも俺の考えている事と大差は無さそうだが、6パーティもいるのに自分のパーティだけが突出して攻撃をかける事に抵抗感がある。

正直俺達が仕掛けて上手くいかなかった時に戦況全体のバランスが崩れてしまいそうで怖い。

俺一人で責任を取れる様な事ではない。

どうする……………

第390話 レイド進行（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第391話 猛攻

「うーんどうしょか」

俺はすぐに決断する事は出来ずに、ミノタウロスとの戦闘を継続していたが、残念ながら状況が勝手に好転する事は無く、予想通り時間と共にレイドメンバーが目に見えて疲れてきている。

後方から数人が回復を試みたり、入れ替わりでポーションを飲んだりはしている様だが徐々に消耗して来ている。

「何トロトロやってるんだ。考えるだけ無駄だろ！」

ルシエがけしかけて来るが、それしかない様にも思えるので俺は指示を出す。

「シル『楽園の泉』を使ってから『神の雷撃』を！ルシエは『破滅の獄炎』を連続で頼む」

「おい『暴食の美姫』は使わないのか？」

「あゝそれはいいや。ヒカリンも融合魔法を頼んだ。みんなで一気に行くぞ！」

シルがルシールを召喚したのを合図に俺も『ドラグナー』を連射してミノタウロスを倒しにかかる。

ルシールの風が舞い前方のミノタウロスが宙を飛んだのを皮切りに、ルシエが『破滅の獄炎』を放ち目の前が開けた。

開けた所にベルリアが単独で突っ込んで行く。

俺としては突っ込んで行く気は全く無かったのだが、ベルリアだけではすぐに囲まれてしまいそうなので止むをえず遅れて突っ込む。

突っ込むと同時に突然敵が後方待機している場所が爆発して、それまで悠長に待機していたミノタウロスが急に混乱し始めた。ヒカリンの融合魔法が上手く決まった様だ。

混乱に乗じて敵を撃つべくナイトブリンガーを発動して、気配を薄めてミノタウロスに迫り側部からバルザードを突き刺してから破裂のイメージをのせ爆散させる。

俺のすぐ横にはあいりさんが来てミノタウロスに『アイアンボール』をお見舞いしている。

間髪入れずにシルの『神の雷撃』が発動して轟音と共にミノタウロスを消失させる。

一瞬他の探索者達は、突然の爆音の連続に驚いて動きが鈍ったものの、すぐに味方の攻撃である事が分かった様で、その瞬間に今が好機と取った探索者が一気に押し始めた。

全体に押し込み始めた所を、俺達のパーティーが敵の中団から後方にかけてを一気に崩しにかかる。

「ドガガガガガ〜ン」

シル、ルシエ、ルシールそしてヒカリンが2発目を発動した事で更に相手の数は減り、数の上ではほぼ同数になっている。

スナッチも走り回って『ヘッジホッグ』を発動してミノタウロスに混乱をもたらしており、ミクと共に突っ込んだ俺達3人のフォローをしてくれている。

気を抜くとすぐに増殖のスピードが上回り数が増えてしまうので、更に攻撃の手数を増やしていく。

ベルリアが2刀を振るいながら更に前に進んで行くので俺もその背後に陣取り気配を薄めながら攻撃を続ける。

シル達の3発目が炸裂した時点で後ろに控えていたミノタウロスは、ほぼいなくなり、増殖分を含めても完全に探索者側が数的優位に立った。

全てのミノタウロスが探索者と交戦に入ったのでこれから先はシル達に連発させるのは危険だ。

「シル、ルシエ、後は増殖した個体だけ倒してくれ。ヒカリンも融合魔法は終わりにしよう。他のパーティのサポートに回ってくれ！」
増殖のペースよりも倒す速さの方が上回って来たので、ここまでくれば普通に考えて、確実に倒していけば自ずと数は減って行くだろう。

俺とベルリア、あいりさんは目の前の敵を倒してから他の探索者と共闘に入る。

俺は、他の探索者が戦っているミノタウロスの背後に回り込んで魔氷剣で駆逐していく。

探索者の共通認識としてもこのまま押し切れればいけるという認識が広がって来たのが伝わってくる。

最後まで気を抜かない様にしっかり戦っていききたい。

第391話 猛攻（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第392話 キングミノタウロス

ミノタウロスの数は残り7体迄減って来た。ほぼ倍の数の探索者が取り囲んで攻撃を仕掛けているので間も無く戦闘は終了するだろう。想定していたよりも数が多かったので苦戦はしたが、周りも15階層まで来たパーティだけあってかなり強く、ミノタウロスに押し負ける事なく各個撃破していつているのでかなり余裕も出て来た。取り囲んでいる場所にはスペースが無いので、俺達のパーティは既に役割を終えて戦闘から外れた場所で待機している。

「6パーティいたからなんとかあったけど俺達だけじゃ無理だったな。流石はエリアボスだな」

「そうね。もつと数が少ない時に来れば、私達だけでもなんとかなったと思うけど流石に50体は無理ね」

「マイロード、50体だろうが100体だろうがものの数ではありません」

「あゝそうだな。まゝ頑張ろうな」

ベルリアのやる気は買うが、いくら士爵級悪魔でも幼児化した状態で100体は論外だろう。

「増殖したミノタウロスもしっかり魔核を残してるみたいだし100個はあるな」

「そうですね。ある意味ここで倒し続けていれば無限に魔核を稼げる可能性があるのでは無いでしょうか？」

「確かに可能かもしれないけど、それを試すのは勇気がいるな。それよりエリアボスだからレアドロップとか出ないかな」

「その可能性は十分あるな。もしエリクサーだったら……」

「その時は俺が他の人全員に土下座でもなんでもして頼み込みますよ。任せてください！」

「そうか。それは頼もしい……な……」

そうだ。ここでエリクサーが出る可能性もあった。

その場合30名近くいる他の人達を説得しなければならぬ。

なんとか頼み込んで分割払いか何かで融通してもらうしか無いかもしれない。

「うっわあああゝ」

「おいおい、なんだこれ！」

「やべーよ」

ほぼ戦闘が終わっていたはずの所から急に探索者達の声が聞こえて来た。

「なんだ？どうしたんだ何かあったのか？」

「ここからではよくわからないが、探索者が押されてないか？」

見ていると、敵の数が減って取り囲む輪と人数が減っていた戦闘区域の探索者が数人弾き飛ばされているのが見えた。

「グウブウオオオオオ！」

ミノタウロスの雄叫びが上がり、こちらまでビリビリと空気の振動が伝わって来た。

なんだ？今までの感じとは違う。

「ご主人様、戦闘準備をお願いします。敵の1体の変化をした様です。明らかに今までの個体よりも強いです」

変化？

モンスターって変化なんかするの？

「シル、変化ってなんだ？ミノタウロスって変化するの？」

「ミノタウロスに限った事ではありませんが、何かをきっかけにして稀に上位個体に変化する事があるようです」

上位個体に変化、いわゆる進化みたいなものか？

と言う事はミノタウロスの上位個体という事だから、ホブミノタウロス？

あんまりかっこよくないからミノタウロスロードいやキングミノタウロスか？

「みんなも準備しておいて。他のパーティが片付けちゃうかもしれないけど、ダメな場合は俺達もいくよ」

「分かったわ」

「はい」

「ああ」

再び武器を構えて戦闘の中心を凝視していると暴れているモンスターが見えた。

先程迄のミノタウロスより一回り以上大きい上に色が違う。茶褐色だった毛や表面部分が赤く染まっている。

見るからに強そうだが、6人ほどの探索者が全方位を囲んで切り掛かっているものの、赤いミノタウロスは両手に持つ2つの巨大な戦斧を振り回して1体で応戦している。

そして今までには見られなかった魔法かスキルでの攻撃を行なっており、戦斧の動きに合わせて風が舞って、探索者を寄せ付けなくなっていた。

流石はキングミノタウロスだ。俺が勝手にそう名付けただけの事はある。
すぐに裸の王様にしてやるから待ってろよ。

第392話 キングミノタウロス（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第393話 王様達

キングミノタウロスの出現に緊張感を走らせ臨戦態勢に入っているが、俺には一向に出番はやって来ない。

当初囲んでいたメンバーに周囲の数人が加わってほぼ10人の探索者が全方向から攻撃をかけているので、流石のキングミノタウロスも最初の勢いは徐々に失われて来ている。

このままいけば、俺達の出番は無さそうだ。

「もう終わりそうだな。ちょっとあの赤いミノタウロスには興味があつただけど戦う事なく終わりそうだな」

「まあ、あれがいつぱい出て来たら大変だからよかつたんじゃない？」

「そうですね。無事依頼完了なのですよ」

「まあ、普通のミノタウロスより強いのは間違い無いな。探索者10人と単体で渡り合ってるんだから相当なものだろう」

K-12のメンバーも終戦を前に再びリラックスモードになっている。

「うっわあああゝ！」

大きな叫び声がしたので咄嗟に声の方を見るとそこにはキングミノタウロスが立っていた。

立っているが、先程迄の個体はまだ探索者に囲まれて戦っているの
で別の個体だ。

増えた。

頭から完全に抜けていた。ミノタウロスが増殖するのだから当然キ

ングミノタウロスも増殖しておかしくないのだが、残りが最後の1体だったのと進化した特殊個体のせいで頭の中で今までのミノタウロスとは別物だと誤認してしまっていた。
1体で探索者10人を相手に出来るキングミノタウロスなのでこれ以上増えるのはまずい。

「みんないくぞ！」

俺はみんなに声をかけてから、新しく現れたキングミノタウロスに向けて走り出した。

俺よりも近くにいた探索者は既に交戦状態に入っている。

ナイトプリンガーの効果がどれ程通用するかは分からないが、効果を発動して近づいていくが、最初の個体と同じ能力を持っている様で振り回している戦斧の周囲を風が舞っているの、懐に入るのは難しい。

俺は距離を詰めると同時に魔氷剣の斬撃を飛ばす。

斬撃は見事にキングミノタウロスに命中するが、明らかに傷が浅い。通常のミノタウロスよりも防御力が高くなっているのは間違い無さそうだ。

俺の両脇をベルリアとあいりさんが駆けていき、敵と直接斬り結びんだ。

ベルリアが2刀を使い片方の戦斧を受け止め、他の探索者がもう一方の戦斧を抑えている間にあいりさんが『斬鉄撃』で袈裟懸けに斬り裂いた。

「グブウオオオオオ！」

あいりさんの一撃はかなり効いた様で痛みにも暴れ出しているが、消矢には至っていない。

「ご主人様、あっちにも」

後方からシルの声が聞こえて来たので指示する方に目を向けると3体目のキングミノタウロスが出現していた。

まずい。これ以上は冗談抜きでまずい。

まだ1体目のキングミノタウロスも倒せてはいないので、これ以上は探索者の数に余裕がない。

「ミクとヒカリンはベルリア達のフォローを。やばくなったらスナツチの『フラッシュボム』を使ってくれ。

シル、ルシエ、俺と一緒にもう一体の方に向かうぞ！」

3体目にも既に他の探索者が対応しているので俺達が加勢すればいいはずだ。

俺はその場から3体目のキングミノタウロスに向かって『ドラグナー』を放った。

完璧に狙いをつけた蒼い弾は光を引いてミノタウロスの肩口に穴を開ける事に成功した。

「ズレたっ！」

俺の感覚では胸の真ん中に命中させる予定だったのだが、恐らく戦斧による風の影響を受けて弾の軌道がズレてしまった。

それでもかなりの手傷を負わせた事には違い無いので、更に『ドラグナー』を放つが、やはりズレて脇腹に命中する。

「ご主人様、4体目です」

おいおい、4体目ってもう対応できるメンバーいないだろ。

俺達が1体も仕留め切る事が出来ない間に4体目のキングミノタウ

ロスが出現してしまった。

第393話 王様達（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第394話 裸の王様

俺達はキングミノタウロス4体と交戦している。

まずいな……どうする。

4体相手にするのは人間的にギリギリなので早く数を減らしたいが、弱りかけている最初の個体を加勢して先に倒した方がいいのか？

「ご主人様、向こう側に5体目です。増殖のペースが上がっています。どうされますか？」

やばい、俺の行動のスピードを増殖のスピードが上回ってしまった。もう、やるしかない。

「シル、ルシールを喚んでくれ！1人で1体いけるか？」

「もちろんです」

「当たり前だろ、指示が遅いんだよ」

これ以上、敵の数を増やすわけにはいかないので新しくあらわれた3体はサーバント達に任せて俺は最初の1体の討伐に加勢する事にした。

見る限りかなり弱っており動きも鈍いので、囲んでいる探索者の外側から突き出している頭を狙って『ドラグナー』を連射した。

先程何度も弾道をずらされたので、保険をかけて2発放ったが後で放った銃弾が頭を捉えて貫通したと同時にキングミノタウロスが消滅した。

思った以上に弱っていた様で意外にもあっさり止めをさす事が出来た。

取り囲んでいた探索者が一斉に俺の方を向くが、すぐに6体目が出

現してしまったのでそのまま全員で対応にあたる。

俺はすぐには次に向かわずサーバント達に任せた3体に目を向けるが、既にシルは敵を葬っており、残りの1体は炎に包まれ、もう1体は宙を舞っていた。

「シル、次に向かえ！ルシエとルシールも頼んだぞ！」

やはり俺のサーバント達は頼もしい。キングミノタウロスも全く問題では無い様だ。

そういえばもう1人の俺のサーバントは？

見るとベルリアもすっかりと役目を果たしてキングミノタウロスに手傷を負わせながら後少しで倒せそうなところまで持ち込んでいる。

「我が敵を貫け！神槍ラジュネイト」

見ている側からシルがベルリアの相手にしていた手負いのキングミノタウロスを一撃で倒してしまった。

シル流石だな。ベルリアも頑張った。次頑張ろう！

いずれにしてもこれで一気に5体を葬った事になるが既に新たなキングミノタウロスが3体増え4体となっている。

増殖スピードが早すぎるだろ！

「シル、ルシエ、ルシールもう1体ずつ頼んだ。ミク、スナッチに『フラッシュボム』を使わせてくれ。これで一気に決めるぞ」

流石に無尽蔵に増殖され続けると、時間が経過するにつれて俺達が不利になるのでここで4体同時に叩く。

シルとルシエはまず問題無く倒してくれるだろうから、ルシールとスナッチのフォローに入ろうと思うがスナッチにはミクとヒカリンが付いているので俺はルシールの横につく。

ルシールは真ん中のキングミノタウロスに狙いを定めた様で、そのままスーッと飛んでいくと

「増えるとはキリがないですね。早くお還りください」エレメンタルブラスト」

目の前のキングミノタウロスの周囲に突風が発生して、モンスターは空中高く舞い上がったので、俺は完全に無防備となったその体を目掛けて『ドラグナー』を放ち倒す事に成功した。

「海斗様、お見事です」

「いやルシールの魔法がすごいただけだから」

無事に俺の役目は果たしたので他のメンバーに目をやるが、他の3体のキングミノタウロスもほぼ同時に焼失していた。

スナッチの『フラッシュボム』は、キングミノタウロス相手でもいかなく威力を発揮した様だったので安心した。

そしてそれと同時に今度こそ全てのモンスターが消失した様だったが、すぐには安心出来ないので臨戦態勢を解く事なく周囲を意識を張り巡らせていたものの、今度こそ本当に何も起こらなかつた。

結構苦戦したが俺達は無事にエリアボスであるミノタウロスを全て殲滅する事に成功した様だつた。

よかつた。

第394話 裸の王様（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします。

第395話 終戦

「ふっ。終わったみたいだ。進化した時はちょっと焦ったけど倒せてよかったな」

「ご主人様、よかったです。あの……………」

「どうしたシル？どこか怪我でもしたのか？」

「馬鹿なのか。腹が減ったに決まってるだろ。早くくれよ！」

ああ、そうだった。俺は戦いが終わってホッと一息ついてたけど、彼女達の腹減りは待った無しだった。

「それじゃあ、今日は頑張ってくれたから1人10個だ！」

「わたし達を舐めてるのか？これだけ必死に戦ってた10個！
？無いな」

…………… ルシエ、確かに活躍してくれたとは思っけどルシエって今回そんなに必死で戦っていたか？

俺と違って結構余裕を持って戦っていた様にも見えただ。

「そうか……………じゃあ15個だ。それでいいだろ」

「20個だ。それで我慢してやるよ」

20個。3人で60個か。まあ報奨金も出るし必要経費と考えたらこのぐらいは仕方ないか。

「分かったよ、じゃあそれでいこう。シルもそれでいいか？」

「はい、もちろんです。ありがとうございます」

シルが、満面の笑顔で喜んでくれている。

ああ、どうせあげるならルシェの様に毒舌で来られるよりもシルの笑顔が何百倍も素晴らしい。

シルの笑顔はまさにゴツドスマイル。春香の笑顔と双璧を成す俺の心の清涼剤だ。

「マイロード、私にもお願いして宜しいでしょうか」

「もちろんだ。ベルリアも頑張ってくれたからな」

「はい。ありがとうございます。これからも頑張ります」

俺はスライムの魔核を60個取り出して3人のサーバントに手渡した。

あれだけ悪態をついていたルシェも満足そうな顔で魔核を吸収している。

「なあ、シル聞いてもいいか？魔核って美味しいのか？それとも味は無いの？」

「はい。もちろん美味しいですよ。甘くて良い香りがします」

「そうなんだ。不思議なものだな」

「はい、魔核によっても少し味は違いますが、以前頂いた事のある赤い魔核が1番美味しかったです」

赤い魔核か……。以前俺が何も考えずにシルに渡してしまった100万円を超える特別な魔核。

ギルドで日番谷さんから聞いて絶望感に苛まれたあの赤い魔核はやはり高級品なのか。

「そうなんだ」

「はい。今までに無いとろける様な濃厚な味わいでした。出来ればまた頂きたいです」

「あゝ。あれはな〜たまたまだから。レアだから早々手に入る様な魔核じゃ無いんだ」

「そうなんですか……残念です……」

思っていた以上にシルが落ち込んでしまった。そんなにあの赤い魔核が美味しかったのか。だがもし次見つけても前回の様に何も考えずに渡すわけにはいかないな。

「海斗！赤い魔核ってなんだ！私はそんなのもらった事ないぞ！」

「いや、それは渡した事無いから」

「どう言う事なんだ！シルだけっていじめか！わたしに対する嫌がらせか！」

「ちよつと待て。そんなわけないだろ。赤い魔核はレアなんだよ。

俺も今までで1個しか手に入れた事は無いんだ。誤解だよ」

「じゃあなんでその1個はシルなんだよ。やっぱりいじめだな」

「いやいや、その時はシルしかいなかったからだろ。変な言い方がりやめてくれ」

「本当だな。それじゃあ次赤い魔石を手に入れたらわたしにくれよ」

「え……………」

「だっていじめじゃ無いんだろ。シルだけもらって私は無いなんて……………」

「……………」

赤い魔核か。若干のトラウマにもなりかけたあの赤い魔核か。シルにポンと渡すにはあまりに高額な魔核だが、4年間で1個しか手に入れた事の無いレアな魔核なので今後俺が手に入れる可能性は限りなく低い。まあ大丈夫かな。

「分かったよ。次手に入ったらな」

「本当だな。絶対だぞ！」

「ああ、手に入ったらな」

「約束だからな！」

ルシエとの約束は怖くて破れないが、あくまでも手に入らないければそれまでなので、今まで通りあまり気にしなくてもいいだろう。

第395話 終戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします。

第396話 後片付け

俺達は15階層の隠し部屋を攻略した。

合わせて100体を優に超える数のミノタウロスを倒す事に成功しており、当然魔核も同数だけ落ちていたので全員で回収して回る。見る限りかなり大きめの魔核なので1個2万円ぐらいはするのでは無いかと思う。

中に数個大きいのが混じっていおり、恐らくキングミノタウロスの魔核だと思われるが、全部合わせると結構な買取額になりそう。ただ35名で割ると1人10万円ぐらいかもしれない。

全員で拾い集めた結果ミノタウロスの魔核が112個キングミノタウロスのものと思われる大きめの魔核が8個マジックジュエルが1個に魔剣が1つ。そして赤い魔核が1つが残されていた。

魔核はともかくマジックジュエルと魔剣がドロップしたのは大きい。こちらの方が完全に金額は上だと思うが売却価格は両方で1000万円は超えるだろう。

問題となったのは赤い魔核だ。まさかここで出るとは思っていなかったが、出てしまったのでルシェが騒いでいる。

「さつきくれるって言ったばかりだろ！嘘だったんだな。地獄に落ちるぞ！」

「いや、あれはみんなの分だから。俺の取り分は1/35しかないからかけら分しかないんだって」

「それじゃあかけらでもいいからくれよ」

「そんな器用に1/35だけ切り出せるわけないだろ。また今度俺が見つけたらな」

「うっつ。今度っていつだ！次は絶対くれよ！」

「分かってるよ」

あの赤い魔核は以前俺が見つけたものより明らかに大きいので、恐らく300万円ぐらいはするのでは無いだろうか。いくらなんでも味見にルシエに与えるには高すぎる。

俺としては今度米粒ぐらいの赤い魔核が見つかる事を祈る事しか出来ない。

それでも10万円以上の価値があるはずだと思う。

「みんな怪我とかないかな？」

パーティメンバーに声をかけるが、幸いな事にみんな元気そうにしている。

他のパーティに目をやると、前線で戦っていた探索者はそれなりに負傷している者もいた様だが、それぞれが回復アイテムなどを使用して全員無事の様だ。

これだけの数のモンスターを相手に誰一人欠ける事なく攻略出来たので大成功と言っていいだろう。

「それじゃあ15分休憩したら、また順番に戻るぞ〜！」

ここに着いた時に先頭を受け持っていたパーティリーダーが声を上げたので、15分休憩してから戻る事にする。

「いや〜なかなか手強かったな。キングミノタウロスに進化するとは思わなかったし」

「海斗、キングミノタウロスってなに？」

「あの赤いミノタウロスだよ」

「あの赤いミノタウロスってキングミノタウロスって言うの？」

「いや、俺が勝手に命名しただけだから正式名称は分からないけど」

「そう、もし未確認の個体だったら本当にキングミノタウロスにな

るかもね。命名者高木海斗ってなるかも」

「モンスターの名前ってそんな決め方だったのか？」

「適当に言ってみただけよ」

15分間休憩したので、身支度を済ませ連なって地上に戻る事になった。

俺達は定位置の後ろから2番目に陣取り出発したが、帰り道は来る時よりもモンスターと遭遇する回数は少なく、かなりスムーズに進んでいる。

歩きながら考えていたが、来る時にエリクサーがドロップしないかとも期待したが、残念ながら思った様にはいかなかった。

「ヒカリン、今日はかなり活躍だったな。やっぱり敵の数が多いと高火力の魔法の威力はすごいよ」

「ありがとうございます。でもあれは魔法と言つか化学反応と言つか……」

「いいところ取りですごいって。それと身体は大丈夫？」

「はい。全く問題無いのです」

「そう、良かった」

俺にはヒカリンの言葉の真偽は分からないが、時間が限られているのは間違いない事で、時間が過ぎていっているのも間違いない事だ。

レイドイベントも無事に終わったので、春休み中にどうにか霊薬を見つけれられる様に頑張りたい。

第396話 後片付け（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第397話 前夜祭

エリアボスを無事に倒したので全員で地上まで帰ってから、ギルドへと向かった。

ギルドで今日の報告を終え、魔核とドロップアイテムの精算をしてもらった。

「皆様本当にお疲れ様でした。大きな被害も無く無事に攻略出来たようで何よりでした。報告によりますと、想定していた数よりも敵が多かったり、モンスターがイレギュラーに進化したり色々あったようですが、皆様のお陰で攻略することが出来ました。ありがとうございます」

ギルド職員からお礼の挨拶を受けてから報酬の分配となったが、魔核とドロップアイテムの精算額は、1820万円余りとなった。流石に魔核の数が多いのとドロップアイテムの2つと赤い魔核が高額で売れたのでかなりの高額となった。

売却額を均等割で支給されたのとは別に今回の報酬である100万円が支給されたので、この2日間の俺の手取りは75万円を超えている。

初のレイドイベントを経験出来て更にダンジョンの1/3をオートマッピング。そして思った以上の身入りがあったので今回は言う事なしだ。

ギルドも今回の買取品の売却益で依頼料の600万円ぐらいは賄えている気がするので正にWin Winとはこの事だろう。解散する時になって

「黒い彗星さん、よかったら連絡先交換しませんか？」

「え！？連絡先？」

例のパーティーリーダーが、不意打ち気味に突然の申し出をしてきたので慌ててしまったせいかな

「はい。電話番号でもメールでもなんでもいいですけど」

「あゝすいません。教えたいのは山々なんですけどプライベートはシークレットで通してるんで」

「そうなんですか？」

「そうですね。ちよつと事務所に止められてて」

「そうですか。残念です……………」

「ごめんなさい。また機会があったらよろしくお願いします」

と言う訳の分からない返しをしてしまったが、何故か上手く誤魔化せてしまった。

その場を切り抜けて外に出ると

「さっきの事務所ってなに？」

「いやゝ。咄嗟に口から出ちゃったんだ」

「プライベートはシークレットって黒い彗星さんってアイドルか何かだっけ」

「自分でも何であんな事言ったのか分からないけど、つい……………」

「ついって………… それにしてもよくあれで納得したわね」

「まあでも無事終わってよかったよ。今度は15階層攻略するよう頑張ろうか。来週から春休みになるし」

「そうね。みんな来週の木曜日から春休みでしょ。週5ぐらいいいける？」

「はい大丈夫なのです」

「私はもう春休みに入っているから大丈夫だ」

「あゝ大学生って休みが多いんだね」

あいりさんは大分前から春休みに入っているそうで、大学生は羨ましい限りだ。

その日は、そこで解散して家まで帰ったが思ったよりも早く着いたものの結構疲れていたようで、母親に晩ご飯に呼ばれるまでベッドで眠ってしまった。

翌日、いつも通り学校に向かったが今日から学年末テストの結果が返って来る。

今までよりも良い自信はあるが返ってきてみないと点数は分からないので、返って来るのを待つしか無いが今日だけで4教科ぐらいは返って来るだろう。

「おっ！」

「おっ」

「おっ」

いつものように教室に着いて真司と隼人に挨拶を済ませてから自分の席につくと、すぐに真司と隼人が寄って来た。

「海斗、昨日レイドイベント行ったんだな」

「ああ、思ったよりもいろいろ勉強になったし良かったよ」

「それはそうと海斗、お前いつの間にかサーバントが増えたんだよ」

「そうだぞ！俺らにも紹介しろよ」

「え〜と、何の話？」

「ホーリーテインカーベルだよ」

「はい？」

第397話 前夜祭（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第398話 祭り

「ホーリーティンカーベルって何？初めて聞いたんだけど」

「昨日、探索者の情報掲示板が『黒い彗星』でお祭り騒ぎになったんだよ」

「は？何言ってるんだよ。祭りって何のことだ？」

「昨日、レイドイベントクリアしただろ。その時の報告で盛り上がったんだけどネタのほとんどが『黒い彗星』ネタだったんだ」

「もしかしてこの前噂流したあのパーティか？」

「いや、昨日は複数パーティからの情報だよ」

「ホーリーティンカーベルも他のパーティからの情報だぞ」

「ホーリーティンカーベルって何？」

「昨日のレイドで小さな妖精か天使みたいな姿を見たって。それをついた2つ名がホーリーティンカーベルだよ。小さいけど神々しくてすごい魔法を使うって話題になってるんだ」

「あゝルシールの事か。あれはパーティメンバーと言うか、シルの眷属なんだ。シルが一時的に召喚してるだけなんだけどな」

「シル様の眷属？しかも召喚？やっぱりすごいな」

「それよりホーリーティンカーベルってなんなんだ」

「昨日のお祭りで海斗のパーティの全員に二つ名がついたんだ」

「全員に二つ名？意味がわからないんだけど」

「一体どんな流れで全員に二つ名がつく事があるんだ？しかも何で俺祭りなんだ？」

「昨日は6パーティ合同でそこまで目立っては無かったはずだ。」

「ルシールにしても、数分間の間に端で数回スキルを発動しただけなので、ほとんどの探索者の目には触れなかったと思うが、なぜルシールにまで二つ名がついているんだ。」

「海斗、昨日の集団戦で活躍しまくっただろ」

「いや、普通に頑張ったけど、俺自体は特別活躍しては無いと思う」
「魔法銃の一撃でボスみたいなの倒したんだろ」

魔法銃の一撃でボスみたいなの……………

ああ、弱ってたキングミノタウロスに『ドラグナー』で止めをさした事か。

「あれは、他の人達がかなり弱らせてたんだよ。たまたま俺の一撃が止めになったただけだぞ」

「そうなのか？でも倒したのは間違いないんだろ。掲示板では青い閃光の一撃で瞬殺したって盛り上がってたぞ」

「瞬殺……………それは俺が加わったのがその時だけで、他の人達がずっと戦ってくれてたからな。かなり事実とニュアンスが違う気がするけど」

「まあ、それもあって『黒い彗星』は見掛け倒しじゃ無くて本当に凄い奴だったって報告があがってるんだ」
「……………」

そんな事になってるのか。確かにあの場面だけ切り取ればそう見えない事はないが、これからどうすればいいんだ。勘違いからの過剰な評価が怖すぎる。

「シル様は閃光の戦乙女に決まったよ」

「閃光の戦乙女……………決まったって何？」

「いやだから掲示板でいくつか候補が出ただけど、最終的に閃光の戦乙女に決まったんだよ」

閃光の戦乙女か。確かにシルを上手く言い表しているとは思って、

決まったって本人不在で決まったも何もないと思うが。

「シル様は流石の活躍だったみたいだな。神槍の一撃に雷撃にミノタウロスを蹂躪したそうじゃないか。俺もシル様の勇姿を見てみたかったよ」

「俺もだよ。早くレベルアップしてシル様達と同じイベントに参加出来る様になりたいよ」

「そうか……。まあシルは確かに昨日も活躍してたからな。まあ納得出来ない事はないかな」

シルの場合風貌も含めて、こういうイベントに参加すれば目立つのは間違い無いので二つ名は遅かれ早かれついたかもしれないので、そこまで驚きは無い。

「それはそうと、俺のパーティ全員に二つ名がついたって言ったよな」

「ああ、全員についてるぞ」

「ペットみたいなのも含めてな」

ペットとはスナッチの事か。

スナッチまで二つ名がついてるのか。これはちょっと目立ちすぎたのかもしれない。

第398話 祭り（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第399話 後の祭り

「それじゃあ、他のメンバーの二つ名を教えてもらっていいか」

「ああ、もちろんいいぞ。まずはルシエ様だけだな漆黒の炎姫だ」

漆黒の炎姫か物凄い二つ名だな。確かに黒い服装に黒髪そして獄炎で炎姫。確かに間違っではないが漆黒の炎姫とは考えた人も凄いな。

「ルシエ様ぴつたりだよな。いくつか候補が出てたけどこれですぐ決まっただろ。あの圧倒的な火力と風貌でシル様に負けずファン急増中だ」

「ああ、そうなんだ。ファンね。ルシエのね。まあ良いんじゃないか。絶対にMだな。ベルリアにも何かついてるのか？」

「ああ師匠は黒の二刀聖だ！」

「黒の二刀聖か。何か黒比率が高く無いか？」

「そりゃあ黒い彗星のパーティだからイメージカラーが黒なんだろ」

「イメージカラーって……」

「師匠も剣さばきが人間業じゃないって評判だ。さすがは師匠」

「だって人間じゃ無くて悪魔だからな」

これで俺のサーバントも全員二つ名持ちになってしまった様だ。しかもファンか……。面倒な感じしかないな。

「あとは……」

「ちよつと待て。あとはってまだあるのか？」

「だって全員って言っただろ。海斗のパーティは他にも女の子3人と小動物がいるだろ」

「本当に全員なのか」

「まず小動物はモフモフ爆弾だ」

「モフモフ爆弾？それって二つ名なのか？」

あれか。恐らく最後に使用したフラッシュボムを見て思いついたのか？ただ今までと名前の方向性が全く違うので違う人が名付けたに違いない。

「それとそのマスターの女の子が轟の炎術使い」

「轟の炎術使いか。多分スピットファイアで撃ちまくってたからだな。それにしてもあの戦闘中に他のパーティの後衛までよく見てるな」

「それだけ海斗パーティが目立ってたって事だろ。女の子達は、最初おまけなのかと思われてたみたいだけど実際に見たらそれぞれが凄かったって」

「それは、普通に考えて彼女達がおまけて事は無いだろ」

「若いし可愛いし、戦闘力が高い様には見えてなかったみたいだ」

「まあそれはあるかもな」

「それと背の高い薙刀の子が令和御前だ」

「令和御前？何か変な呼び名だな」

「由来は現代の巴御前らしい」

「まあ、現代の巴御前っていうのは納得だけど令和御前か。それってセンスある感じなのか？」

「うーん。俺もこれはもうちょっといいのがあったと思うけど」

「探索者も男が多いからな。そう言うセンスを求めるのは難しいんじゃないか」

「そうかもな」

あいらさんが知ったらどう思うかな。きっと嫌がるだろうな。でも武術やってるから御前って呼ばれると嬉しいんだろうか。

「それで最後は魔法を使う小さい女の子だけど大魔導少女だ」

「大魔導少女。多分融合魔法を連発したからだな」

「この子はシル様達に次いで探索者の中で人気みたいだぞ。小さいアイドルみたいな風貌から訳の分からない爆発魔法を連発してミノタウロスを混乱の渦に陥れたって。あんな爆発魔法今まで見た事ないって噂になってるぞ」

見た事無いつて当たり前だよな。あれはオリジナルの融合魔法だもんな。

「まあヒカリンは確かにアイドルっぽい風貌ではあるから、あれだけバンバン魔法を連発したら目立つよな。」

結構ミノタウロスの集団に押されてたから俺達も余裕がなくて、ガンガン行ったからな。でも本当によく見てるな。俺なんか自分の相手に必死でほとんど他のパーティなんか見てる暇無かったけどな。俺もまだまだって事だよ。もっと頑張らないと」

「いや、それだけ目立ってたら十分だろ」

「そうだぞ。パーティ全員二つ名持ちって凄い事だぞ」

2人共本当にそう思ってるのか？リアルの世界で二つ名は死ぬほど恥ずかしい。

第399話 後の祭り（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第400話 君の名は

今日は学校でテストが順番に返って来ているが、思っていた通り今までよりもいい点数が取れている。

まだ初日なのではっきりした事は言えないがこのままいけそうな気がする。

後はいかに春香の点数に近い点数が取れるかで来年のクラスが決まってしまうので祈るしか無い。

放課後になりいつもの様にダンジョンの1階層に潜る事にした。

「昨日はみんな頑張ってくれて無事に終わって良かったよ。今日からまた頼んだぞ」

「次は15階層を踏破ですね」

「そうだ。もう少しで春休みになるから、そうならパーティーで潜る時間も長くなるから一気に行くぞ」

「マイロード任せてください、頑張ります」

「そういえば昨日のイベントで俺達結構目立ってた見たいで、3人とも二つ名がついたみたいだぞ」

「なんだよそれ」

「昨日参加してた人の一部だと思うけど3人の呼び名を考えたみたいなんだ」

「ちなみにわたしは何て呼ばれてるんだ？」

「ルシエは漆黒の炎姫だそうだ」

「漆黒の炎姫。ふふっ、わかってるじゃないか。炎姫か……ふふっ」

「まあ、姫っぽくはないけど本当に姫だしな。間違いではないよな」

「なっ、失礼な奴だな。他の奴らの方が見る目あるな。海斗に喚び出されたのが間違いだった」

まあ戦闘中は喋る訳でもないので、他の人から見ると姫に見えたのかもしれない。

黙っていれば姫に見えない事も無い。

「ご主人様私も何かあるのですか？」

「ああ、シルは閃光の戦乙女だそうだ。シルにぴったりの名前だな」

「閃光の戦乙女ですか。変な名前を付けられなくてよかったです」

「シルだけじゃ無くてルシルも名前がついててホーリーティンカーベルだって」

「ホーリーティンカーベルですか？ティンカーベルとは何か特別な意味があるのですか？」

「多分小さいから妖精か何かに見えたからだと思う」

「妖精じゃなくて天使ですよ」

「それはそうだけど、悪い意味じゃなくて可愛いって意味で名付けたんだと思う」

「そうなんですな」

確かにルシルは言われなければ妖精に見える。よく見ると虫の羽じゃなくて小さな鳥の翼がついているので天使と言われると納得だがあの乱戦でそこまでしっかり見ていた人はいないだろう。

「マイロード、私はどんな呼び名が付いたのでしょうか？」

「え〜っと何だったかな……………」

「マイロード……………」

「冗談だよ。ちよつとからかってみただけだって。ベルリアは黒の2刀聖だったかな」

「マイロードと同じ黒が入っているのは光栄なのですが、せいとはどう言うせいなのでしょう？」

「聖なるのせいだな」

「聖ですか。悪魔の私が聖とはおかしくないでしょうか？」

「言われてみるとおかしいけど、そこまで考えなくていいんじゃないか？上手い人って言う意味だよ」

「マイロード私は人でも無いのですが」

「まあ難しく考えるな。カッコいい名前が付いて良かったな」

「はい、ありがとうございます」

この3人の二つ名は俺が聞いてもカッコいい名前がついているので本人達も気に入った様で、いつも以上にスライム狩りが順調に進んだ。

春休みにしつかり探索が進められる様に今週は魔核集めに没頭する必要があるので今回の名前を付けた人達のネーミングセンスに感謝だ。お陰でサーバント達のモチベーションが上がった様だ。

ただ、なぜ俺は『黒い彗星』だったのか……こればかりはセンスを疑ってしまう。

第400話 君の名は（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第401話 テスト結果とダンジョン

金曜日になったので昨日迄に全てのテスト結果が返ってきており、今日は学年順位の記載された用紙が返って来た。

俺の順位は400名中の71番だった。

今回の学年末テストの結果が来年度のクラス替えに大きく影響するはずだが、去年に較べると春香の助けもあり随分と成績が向上したものだ。このまま頑張れば王華学院も十分射程に入ってくるだろう。むしろ心の中では完全に掌握しているつもりだ。

後は終業式等を迎えるだけなのでダンジョンに集中したい。

「海斗、学年末の順位どうだったんだよ」

「ああ、春香のお陰もあって結構良かったよ」

「俺、なんか山が当たったみたいで想像の遥か上だったよ。俺のピークが来たみたいだ。来年は海斗達とはクラスが変わっちゃうかな」

「俺も前澤さんと一緒に勉強したお陰で、今までよりも良かったんだ」

「まあ3年で一緒になるかどうかは分からないけど、一緒になったらよろしくな」

「いや、多分俺だけクラスが違っちゃう気がするな。なんか悪いな」

隼人が妙に上機嫌なので本当に成績が良かった様だ。俺も結構良かったと思うんだけど、そんなに良かったんだらうか？まさか1桁だったのか？

春香とも少し話したが春香も結構良かったと言っていたので、余計心配になってしまった。

みんなが1組で俺1人だけ2組とかは勘弁して欲しい。
ちよつとブルーになりながらも、放課後には気分を立て直して1階層に潜った。

「海斗、もつと他の階層に行かないのか？わたし達この階層だとする事がないんだぞ」

「だったら還つといていいんだぞ。無理して付き合ってくれなくても大丈夫だ」

「還る訳ないだろ！15階層とか行つてバクンといきたいんだよ」

「バクンとやる訳ないだろ。バクンとやると魔核が必要になるんだよ。ルシエが魔核無しでやってくれるならいくらでも行つていいぞ」

「そんなの無理に決まってるだろ！」

「じゃあ無理だ」

「ケチ」

俺だつて可能ならば15階層の探索を進めたい気持ちもあるが、先立つものが無いと探索を継続する事が出来無いので魔核を集める為の時間は絶対に必要だ。

春休みに潜るのはおよそ10日間だと思つので、その日数分の魔核をいつもより余分に貯めなければならぬので集中してスライム狩りを進める。

ルシエにばかりかまつていけるとペースダウンしてしまうので、もう放つておくしかない。

今は以前暇つぶしに試していた様な色々なスライムの倒し方は完全に封印して1番効率の良いベルリアとのコンビネーションを多用して倒していく。

「そういえば最近レアスライムと遭遇してないな」

「多分、以前よりもスライムを狩る絶対数が減つたからだと思います」

言われて見ると以前よりも下層に行った事もあり、1階層での活動時間が短くなって来ているのは間違いない。

春香と会ったりしている時間も多少影響していると思われる。

レアスライムからは今まで当たりしかドロップしていないので、どうにかもう1度ピカピカのスライムに出会いたいものだ。

「それじゃあ、余計数をこなしていけないといけないからベルリアしっかり頼むぞ！」

「はいお任せください。刀の錆にしてやります」

「そうだな、頼んだぞ」

今ベルリアの言葉を聞いてふと思ったが、刀の錆にしてやりますとは思議な言葉だな。もちろん聞いたことはあるフレーズだが、刀の錆にすると結果として刀が錆びると言うことではないのか？

どンドン斬って刀の錆がどンドン増えていくと最終的に刀は錆びて使えなくなるのでは無いだろうか？

言葉としては使うと何となくカッコいい感じがするが、実際には刀の錆にしちゃダメなんじゃないだろうか？

下らない事だが急に気になり始めてしまった。

もしかして俺の思っているのは別の意味があるのかもしれないので、帰ってから意味を調べてみようかな。

第401話 テスト結果とダンジョン（後書き）

読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第402話 15階層へ

俺は今15階層に来ている。

土曜日になり、パーティメンバーが集まって本格的に15階層に臨む事となった。

先週レイドイベントで他のパーティについて回っていたので既に1/3付近迄はマッピングも終わっており、ある程度出現するモンスターも把握出来ているので全く未踏のダンジョンよりは安心だが、気を抜かずに細心の注意を払って進んでいきたい。

「みんなちよつといい？みんなは探索者のネットワークとか全然興味ないんだよね」

「ないけどそれがどうかしたの？」

「あゝそれが、この前のレイドイベントで盛り上がったみたいでみんなにも二つ名がついたそうです」

「二つ名？私達3人共に？」

「うんそうみたいだな」

「ちなみにわたしは何？」

「ミクは轟の炎術使いだそうだ」

「轟の炎術使い……私炎術なんか使えないんだけど」

「多分スピットファイアで撃ちまくってたからそれでついたんだと思っ」

「ふゝん。悪い感じはしないけど素で呼ばれると恥ずかしいわね」

いや轟の炎術使いつてかつこいいじゃないか。 黒い彗星の方がずっと恥ずかしいぞ！

「ミクさんはかつこいい呼び名ですね私はなんですか？」

「カオリンは大魔導少女だ！」

「大魔導少女ですか。何かすごく大袈裟な名前ですね。男の人のセンスですよ。あんまり可愛くないです」

「融合魔法を使ったせいだと思うから、俺は悪くはないと思うけど」

「私は何になつたんだ？」

「あいらさんは、令和御前だそうです」

「急に古風になったな。令和御前……微妙だな」

「薙刀使ってるので、巴御前のイメージで令和御前だそうです」

「巴御前をイメージしてもらうのは嬉しいが令和御前か……」

まあ、あいらさんの気持ちも分かる。俺が聞いても微妙な呼び名だと思う。陰で令和御前と呼ばれると思うと微妙な気持ちになっても仕方がない。

「一応スナッチにもあってモフモフ爆弾だ」

「それって二つ名って言うの？ただのあだ名じゃないの」

「そうとも言えるかもな」

15階層をしばらく進んでいくとケンタウロスが3体出現した。

前回交戦したおかしな姿の亜種ではなく本物っぽいケンタウロスだったので少し安心してしまった。

弓を持つのが2体と槍持ちが1体だ。

「ミクとヒカリンは弓を持ってるやつを牽制してくれ。ベルリアとあいらさんが槍持ちを頼みます。俺も後ろでサポートします。シルは『鉄壁の乙女』を使ってくれ」

相手が飛び道具を持っている以上、後衛の2人への直接攻撃だけは避けなければならぬのでシルに頼んでおく。

2人が前に出ようとした所を思った通り弓を持った2体が矢で攻撃

して来たが、矢が燃えているので矢に炎を付与する魔法が何かを使っているのだと思う。

最初は炎を纏っただけなら当たらなければ問題無いと思ったが、本来点の攻撃である矢での攻撃がファイアボール程度の範囲の炎の矢尻となって迫ってくるので、大きくよければならなくなった。

後方からミクとヒカリンが援護する。カオリンが『アースウェイブ』で足止めをしてミクがそれを狙い撃ちにするが、もう一体の方を俺が受け持ちバルザードの斬撃を放つ。

『ドラグナー』も使いたい所だが、普段から頻繁に使っていてもMP切れを起こすのは目に見えているのでバルザードを主体に攻撃を組み立てる。

俺が攻撃した個体は攻撃対象をベルリア達から完全に俺に切り替えた様なので、急いで『鉄壁の乙女』の範囲内に逃げ込んでから再度攻撃に転じる。

「海斗、やったわよ」

ミクが声をかけてきたので、もう一体の方に視線をやるとケンタウロスの1体が既に消失していた。

「ヒカリン、俺の方にも『アースウェイブ』を頼む。ミクはベルリア達のフォローを頼む」

既にベルリアとあいりさんは前方で槍持ちと交戦状態に入っているので、命中精度の高いミクに任せた方が良いと判断してフォローを頼んだ。

俺がこの位置から狙うと最悪ベルリアに直撃しかねない。

ベルリアなら直撃しても死ぬ事はないと思うが一応念のためだ。

第402話 15階層へ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

俺は今ケンタウロス2体と交戦している。

俺の相手にはヒカリンが『アースウェイブ』を放ってくれたので、4つ足の機動力は完全に削がれており、後は慎重に仕留めるだけだ。向かって行くと炎を纏った矢を射って来たが、足を取られているせいで一方からに限定されているお陰で、容易に避けることが出来た。

矢を避けながら近づいて行き、一気に懐に入りケンタウロスの足の一本に向かって一閃する。

足の一本を失ったケンタウロスは完全に動きが止まり、そのままバルザードを突き入れて消失させる事に成功した。

ベルリアもミクとの連携でダメージを与えながら『アクセルブースト』で止めをさした。

「やっぱり、15階層だけあって強いな。豚と言い油断出来ない」

「それにしても幻獣エリアと言いながら豚、馬、牛って家畜エリアみたいになってきてるわね」

「言われるとそうですね」

「モンスターミートがドロップすれば美味しいかもしれないな」

あいりさんの言う通りだ。今まで得体の知れない様なモンスターの肉でもあれほどに美味しかったのだから

豚や牛ならイベリコやA5ランクを遥かに凌ぐ美味しさかも知れない。

ただ馬は食べたことが無いので想像がつかない。

「みんな馬って食べたことがある？」

「私ありますよ。赤身でさっぱりした感じで美味しいですよ」

「そうなんだ。じゃあモンスターミートだと……やっぱり想像できないな」

「ドロップすると良いですね」

そこから数度戦闘をくりかえして1時間半程度で前回の到達点である扉の所迄来ることが出来た。

前回は2時間半ぐらいかかったので、単独パーティの方がかなり進行スピードは早い様だ。

『ゲートキーパー』を使える俺達には関係無い話だが、15階層を超えてくると20階層のゲートエリア迄の中間層でかなり時間をくってしまうので1〜2泊程度の泊まり込みでの探索が増えるらしい。その場合キャンプセットを用いる事が多い様だが、当然荷物が嵩張るのでマジックポーチは必須だろう。

流石にキャンプセットを担いで戦闘は無理だと思う。

ボス部屋だが、不思議な事にしばらく時間が経過するとまたモンスターが出現する様になるらしい。

ただ出現するモンスターは、最初のボスモンスターでは無くランクの落ちるモンスターが出現するらしく、強さも劣り、ドロップアイテムが出る事も無くなるそうで最初の踏破者だけが苦労する分見返りも大きいと言う事らしい。

ここからは初めてのエリアになるので気を引き締めて進んで行きたい。

そこから20分程歩いた所でシルが敵の出現を知らせてくれた。

「ご主人様、敵モンスターが、かなり高速でこちらに2体向かってきます」

「じゃあ一応『鉄壁の乙女』を頼んだ」

未知のモンスターかも知れないので念の為に『鉄壁の乙女』を発動

してもらい、全員サークルの中で待ち受ける。
待っていると直ぐに敵が現れた。

白い馬と白黒のシマウマの2頭だが頭にはしっぺ角が生えているのでユニコーンの一種だろう。

しかしこの前のケンタウロスの亜種と言いつこの階層はシマウマ率が結構高い気がする。

白い方のユニコーンはユニコーンとしての風格もそれなりにあるのだが、シマウマの方はユニコーンと言われてもいまひとつピンと来ない。

たださつき話していた所に馬のモンスターなのでもしかしたらモンスターミートをドロップするかも知れないと思うと自然とテンションが上がってしまった。

『鉄壁の乙女』の中で考えに耽っているとシマウマユニコーンの角が一瞬光ったと思った次の瞬間『鉄壁の乙女』のサークルに雷と思われる攻撃が当たって消失した。

危ない。気を抜いている余裕は無かった。

第403話 1 / 3の先へ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第404話 ユニコーンは馬？

「みんな、雷系の魔法だ！絶対にサークルから出ないように。ヒカリン、『アースウェイブ』を白い方にかけて。ルシエはシマウマの方を頼む。ベルリアは魔核銃で足止めを」

ケンタウロスの炎の矢とかであれば、出所が見えているので集中していれば避ける事は可能だが、ユニコーンの使った雷系はシルの雷撃と威力こそ違うものの突然頭上から雷が降ってくる感じなので、常時移動して避けるか、盾などの防具に頼るしかなさそうだ。

すぐにヒカリンが『アースウェイブ』を仕掛けて白いユニコーンの動きを封じる。

動きが鈍ったユニコーンに向けて、俺、ヒカリン、あいりさんとスナッチが一斉に遠距離攻撃を仕掛ける。

動きが鈍った所に4人からの攻撃をほぼ同時に受けたユニコーンはなす術なく消失した。

シマウマの方はベルリアが魔核銃で足を狙い動きを限定した状態でルシエが『破滅の獄炎』を使って焼き払う事に成功した。

やはり、4つ足のモンスターは動きを止めてから仕留めるのが1番効率が良いようだ。

ヒカリンの『アースウェイブ』はこのタイプのモンスターには相性が抜群だ。

「初見のモンスターはどんな攻撃をしてくるか分からないから、シルの『鉄壁の乙女』を多めに使っていこうか。シマウマの方もスキルを発動する前に倒せたけど雷か違うスキルを持ってた可能性が高いから」

「残念だけどモンスターミートはドロップしなかったみたいね」

「あゝそれは仕方ない。この先で手に入ったら良いけど、今までで2回しか手に入った事ないんだから」

「海斗さんとパーティを組んでから極端にモンスターミートのドロップ率が下がったのです」

「それは気のせいだって」

「いや私も以前はもっとドロップしていたな」

「たまたまですって」

これ以上深い話になっても追い詰められるだけなので、話はそこそこに先に進んでいく。

15階層は、これまでの階層と比較しても至ってノーマルな感じだ。特に湿度や温度が極端な訳でも無く進み易い。

「マイロード、足下に気をつけてください」

「えっ？何を？」

「そこにスイッチがありますので踏まない様をお願いします」

「スイッチ？」

ベルリアの指す床をよく見ると、床の一部がほんの少しだけ飛び出している。普通に歩いていたら絶対に気がつかないレベルの出っ張りだ。

「これってスイッチなのかな？」

「はい、おそらくは」

「ルシエ、気がついてたか？」

「あ、あたりまえだろ。だ、誰に言ってるんだよ」

完全に見落としてたな。同じサーバントでも能力にかなり偏りがあるのが、面白いというか不思議な感じだ。

それにしても15階層はトラップがあるようなのでベルリアを先頭にして細心の注意を払って進んでいく事にする。

「ルシエは前科が何回もあるからな絶対に踏まない様に気をつけてくれよ」

「うるさいっ！」

「カチッ……………」

あ……………」

今足で何か踏んだ……………」

ルシエを注意したら俺が踏んだ……………」

「おい、海斗何か今音がしなかったか？」

「あゝうん。俺が踏んだみたい」

「踏んだって何をだ？」

「多分トラップ」

「でも何にも起こらないぞ」

「マイロード、足を上げた瞬間に発動するトラップかもしれない」

「ベルリア、トラップに気がつかなかったのか？」

「申し訳ありません。全てに気がつく事は非常に難しいのです」

言ってる事は分かるけど、なんで俺ばかり……………」

「それじゃあみんな離れて。足を上げてみるよ。ヤバかったら助けてください。頼んだぞ！」

俺は意を決して足を上げて見たがその瞬間足元が急に沈み始めた。今の今まで普通に立っていたのに足下の地面が突然硬度を失い、沼と化し俺の体重でどんどん沈み始めてしまった。

全く踏ん張りも効かず、沈んだ部分が泥の粘度でほとんど動かせな

い。
これは、沈み切る前にみんなに助けをもらうしかない。

第404話 ユニコーンは馬？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第405話 沼の中

「うっつ。全く抜けそうに無い。悪いけどロープで引っ張って助けてくれ」

本来であれば沼に沈んでいくという絶体絶命のシチュエーションだが、今の俺に焦りはない。

以前隠しダンジョンに落ちた経験からマジックポーチを持つ3人にロープを常備してもらっていたからだ。

「それじゃあ行きますよ」

ヒカリンがマジックポーチからロープを取り出してこちらに向かつて放り投げて貰うが、俺の体は既に腰のすぐ下まで沈んでしまっている。余り猶予は無い。

目の前に投げられたロープを掴み

「それじゃあお願いします」

ロープを持ったヒカリンが頑張って引っ張ってくれるが予想通り全く動く気配は無いので、ミクとあいりさんも加わって引っ張ってくれる。

3人で引くと沈下は完全に止まり徐々に徐々にはあるが引き上げられて来ている。

「コンッ……」

ん！？気のせいかな？

微にだが何かが足に触れたような気もするけど、沼の中に石でも混じっていたのか？
少し気にはなつたが、今はそれよりも抜け出す事が大事なのでロ―プをしつかり掴んで力を込める。

「ゴンッ……………」

おかしい。完全におかしい。何かがあつた。さっきは気のせいかと思つたけど、今度は完全に何かがあつてきた。

「おい。なんかおかしい。何か居るかも。早く引つ張つてくれ！」

「何かつて何よ」

「分からないけど足に何かがあつて来たんだ」

「沼の中にサメでも居るのか？」

「あいりさん怖い事言わないで下さい。ベルリアも手伝え」

ベルリアも加わつた事で一気に浮揚感が増したのもう大丈夫だろう。

「うわっ！」

そう思つた瞬間右足首を何かに掴まれてすごい力で引つ張られた。

「やばい！やばい！何かに掴まれた！足が足が……………掴まれた！」

恐らく見えない敵。ダンジョントラップの全く中が伺い知れない濁つた沼。その中から突然何かに足を掴まれて下に引つ張られる。言葉には出来ない恐怖を感じてしまう。

「沼に引き摺り込まれる！」

俺の異変に気がついたメンバーも先程までの安穩とした顔ではなくなり、必死でロープを引いてくれるが、残念ながら引き込む力の方が強いようで、だんだん沈みこんでしまっている。

「シル、ルシエも頼む！やばい！」

沼に引き摺り込まれるって何かのホラー映画のようだが、引き込んでいるのは恐らくモンスター。そしてこのドロドロの沼に引きずり込まれたら間違いなく死んでしまう。

俺は今ホラー的要素と命の危険を感じて、かなり焦っている。周りからどう見えているか分からないが、見た目以上に余裕が無い。助けてくれ〜！

シルとルシエも加わった事で、再び沈下が止まり浮遊に転じたが足が痛い。掴まれた部分が猛烈に痛い。足が取れる！

「痛いっ！足が……」

「そのぐらい我慢してください」

「そのぐらいって、足が取れる……」

「海斗さん。大丈夫です。人間の足はそんな簡単に取れません。しかも海斗さんはレベル補正でステータスもアップしてるんです。絶対に取りません」

「そうかも知れないけど痛い……」

ヒカリンの言う事も分かるが、痛いんだ〜！なんか股関節が引つ張られてミシミシ言ってる気がする。

「うっっ〜」

痛みに耐えながら全身に力を込めてロープにしがみつくと徐々に引き上げられていく。一時胸の辺りまで沈んでいたのが今は腰の辺りまで浮き上がってきている。

ただ未だに足は沼の中で動かせ無い上に上半身もロープにしがみつ

くので精一杯なので完全に身動きが取れない。

「あと少しですよ。頑張ってください」

「多分俺の足にモンスターが付いてると思うから、俺を引き上げたらすぐに攻撃を頼んだ！」

「マイロードお任せください」

沼地なのでベルリアの直接攻撃よりもミクに狙い撃ってもらった方が良い気もするが、この際どっちでもいいから早く助けてくれ。

第405話 沼の中（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第406話 沼からホラー

俺の足が悲鳴を上げている。

そして俺の腕も悲鳴を上げている。

みんながロープで引つ張ってくれているが、俺の体には凄い荷重がかかっており、特にロープを掴む手と、得体の知れない物につかまれている俺の右足が悲鳴を上げている。

「大分抜けてきた。あと少しだ頑張ってくれ」

あいりさんが俺の声をかけてくれるが、俺はロープにしがみつくのに必死で余裕が無い。

そこから更にひっぱってもらい膝まで出る事が出来たので後もう少しだが、遂に俺の足を掴んでいる奴も一緒に出てくるはずだ。

「もうすぐです」

「ああ」

ヒカリンに声と共に遂に足首の所まで抜けたが、掴まれている所に目をやると、泥に塗れてはつきりとは分からないが、人型の手のようにも見える。

ベルリアが臨戦態勢を整えて他のメンバーが更に力を込めて引つ張ってくれる。

「きゃー！」

「ひっ！」

ヒカリンとミクの悲鳴が聞こえた瞬間俺も息を呑んで強張ってしま

った。

俺の足に連なつて現れて来たのは、泥に塗れた腕とそしてドロドロの長い黒髪。

手の感じから人型なのは予測出来ていたが、現れたモンスターは想像していた以上に人型だった。

ドロドロのロングヘアの女性だったはずのモンスターが現れた。全身が現れたわけでは無いのはつきりとは分らないが、恐らくグールか何かのモンスターだと思う。

沼の中から黒髪の人型モンスターが現れる様は、まさにホラー映画そのものだ。

しかも掴まれているのは俺の足なので気が気では無い。

「べ、ベルリアツ！早く斬ってくれ」

「マイロード、残念ですが完全に沼地から上がって来なければ切れません」

「なにをっ……ミクツ頼んだ。スピットファイアで焼き払ってくれ！」

「で、でも」

「いや、でもじゃ無いって。やってくれ。やって下さい。俺が、俺の足が〜」

俺の必死のお願いにも拘わらず、ミクは顔が引き攣ってスピットファイアを撃つてくれない。

シルとルシエは平気のようだが、この2人のスキルは完全に俺も巻き込んで焼き払ってしまいそうなのでダメだ。

「私がやるっ」

「お願いしますっ！」

あいらさんから天の助けが聞こえて来た。

『アイアンボール』

あいらさんからモンスターの頭に向けて鉄球が放たれた。

「グシャツ」

潰れる音がして完全に仕留めたかと思い、足下を見ると俺を掴んでいたのとは逆の腕で、鉄球を防いでおり、腕は損傷しているものの、モンスターは未だ健在だった。

「ミク〜ッ！」

やはりゾンビ系のモンスターは物理攻撃にはかなりの耐性を持っているようなので火だ。火しかない。

俺の悲痛な叫びが届いたのか引き攣った顔は変わらないもののミクがスピットファイアの引き金を引いてくれた。

火の弾がモンスター目掛けて飛んでいき、先ほどと同じように破損した腕で防いでこようとしたが今度は防いだ瞬間に引火したようで、モンスターの腕が燃え始めた。

「ギイイイイイイイ〜」

今まで聞いた事の無い叫び声を発して、腕をバタバタしているのが効果があったのは間違いないが未だ俺の足を持つ手を放してくれない。

このままでは俺にまで引火してしまう。既に俺の下肢はかなりの熱を感じておりこのままではやばい。

「ミク、頭だ。頭を狙ってくれ！」

「わ、わかったわ」

意を決したミクが再びスピットファイアの引き金を引き、今度は両手を使えなくなったモンスターの頭部に火球が見事命中した。

「ギイイイイイイヤ〜」

再びこの世のものとは思えない叫び声上がり、今度は髪の毛にも引火して一気に頭部が燃え上がった。

片腕と頭部が盛大に燃え上がっているが消失には至っておらず、まだ俺の足首は掴まれたままだ。

しかも頭部が燃え上がったせいで、余計に火力が増してブーツの裏が猛烈に熱い。

これ完全に靴底が溶けて来ている気がする。

第406話 沼からホラー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします。

第407話 濡れガラス

もう一刻の猶予も無い。

ベルリアは頼りにならない。

足が燃えてしまう前に自分でどうにかするしか無い。

俺は覚悟を決めて、しがみつく様に両手で持っていたロープから片手を離してバルザードを素早く構えて足首を持っている腕をめがけて斬りつけた。

鈍い抵抗感があり、その抵抗が無くなったと同時にそれまで感じていた重みが無くなり、俺は一気に安全地帯まで引き上げられた。

慌てて後方の沼を見るが、モンスターが燃え上がりながらも沼から這い出て来ようとしていた。

「ルシエ焼き払え！いぞげ！」

「わかったよ。しぶとい奴は嫌いじゃ無いが燃えて無くなれ『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎がモンスターを包み込み完全に消し去る事に成功した。

「助かった………。何だったんだあれ。あれってグールなのか？」

「グールって言うより化け物でしょ」

「あれ幽霊じゃ無いですか？すごく怖かったのです」

「私も動けはしたが恐怖を感じる相手だったな」

見た目と登場の仕方ホラー映画さながらで恐ろしかったが、見た目以上に精神にダメージを受けた気がする。得体の知れない恐怖感を覚えてしまったので、もしかしたら精神系の恐怖を与えるスキルを発動していたのかも知れない。

「マイロードご無事で何よりです。もう少しこちらに来れば刀の錆びにしてやったのですが」

「ああ、そう……」

畏の探知も含めて今回は全く役に立たなかったな、ベルリア。とにかく助かって良かったが掴まれていた足首が痛い。

「ベルリア、念のために治療を頼む」

「はい、お任せください『ダークキュア』」

「みんなありがとう。本当に助かったよ」

「ロープ持つといてよかったわね」

「ああ、やばかった。畏には要注意だ。以前くらった電撃に次ぐやばさだった」

「海斗電撃のトラップにかかった事あるの？」

「あれは死ぬかと思ったよ。完全に意識が無くなったし。なあルシ

エ

「こ、今回はわたしのせいじゃ無いからな。それにあれはまだダンジョンに慣れてなかったんだ」

「まあ、そう言う事にしとくけど、ヒカリン泥を落としたいんだけど『ウォーターキューブ』を頼んで良いかな」

「はい」

沼に引き込まれたせいで胸から下がドロドロなのでヒカリンの魔法で洗い流してもらおう事にした。

水の塊りの中に自分から飛び込んで汚れを洗い流す。

「ふっつ、これで綺麗になったかな」

「……………」

みんなの反応が薄い。まだどこか汚れているのか？

「どうかした？後ろとかまだ泥が残ってる？」

「いえ、泥は綺麗に落ちてるのです。ただ……………」

「海斗、お前臭うぞ！臭い」

「えっ!？」

「へドロ臭い。腐った匂いがする」

ヒカリンのおかげで沼の泥は綺麗に落ちたようだが臭いまでは落ちていないようだ。

「……………みんな申し訳ないんだけど、今日はこれで切り上げても良
いかな」

今日はもう少し先まで行く予定だったので、みんなには申し訳ないが、他のメンバーも臭いが気になったのか、それがいい是非そうしようとして全員が賛同してくれた。

『ゲートキーパー』を発動して1階層のゲートまで飛んだが、移動の時に手を繋ぐのを一瞬躊躇されてしまったのが思いの外ダメージ大だった。

このままロッカーに戻す訳にもいかないので、ビシヨビシヨの状態
で家に帰ったが装備と合わさって流石に目立ってしまったので周囲
の視線が痛かった。もしかしたら臭いも伝わってしまったかもし
知れない。

家についてから装備を風呂場で脱いで洗濯洗剤を多めに振りかけて
何回も洗い流してみたが、なかなか臭いは取れない。

明日もダンジョンに潜るのでどうにかして臭いを取らなければなら
ないので消臭剤を買いに行く事にしたが、片側のブーツの底が溶け
て変形してしまったので合わせて買いに行く事にした。

今日は大変な目にあっただけで明日からは気をつけて探索を進めてい

きたい。

第407話 濡れガラス（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第408話 15階層進む

「何か匂わない？」

「いい匂いですけど、きつい香水みたいな匂いですね」

「あゝそれ、俺です。昨日の臭いがどうしても取りきれなかったから、消臭芳香剤を買って1本使い切ったんだ。臭いよりは良いだろ」

「もう落ちないようにしないとね」

「私もあれに足を掴まれたら怖すぎます」

「4Dホラーの決定版の様だったな」

気を引き締めて再び15階層の探索を進める事にする。

扉のある1/3を越えて、昨日の罠があつた位置まで来ているが、昨日出現した沼は既に無く普通の地面に戻っていたが、よく見ると罠のスイッチは昨日と同じ場所に存在していた。

流石に試して見る気は無いが、この罠はスイッチが消えてない所を見ると何度でも再利用可能なだろうと思う。

罠のある場所もきっちりマッピングしておかなければ、気を抜いた頃にまた引っかけりそうで怖い。

「昨日はここまでだったけど、ここから先ももしかしたら罠とかもあるかも知れないから気をつけて行こう」「特に海斗がな」

ルシエがぼそつとつぶやいてくるが今回は反論できない。

慎重に先に進んでいくと、いくつか罠らしきものを発見する事が出来たので、この周辺はやはり罠が密集しているようだ。

慎重に進めばベルリアもいるのでいけそうだが、1番の問題はこのエリアでモンスターが出現した場合、意識して罠を避けながら戦闘する事ができるとは思えない。

戦闘中に沼にはまったらもう助からないかも知れないので、一刻も早くこのエリアを抜きたい。

「ご主人様、敵です。前方から3体きます」

心配していたらここで敵か……………

「動きながら戦うのは危な過ぎるから、その場に留まって遠距離攻撃のみで倒そう。シルとルシエも頼んだぞ」

俺達はよく足場を確認してから敵を待ち受ける。

しばらくすると大型の鳥の羽ばたきのような音が聞こえて来て注視していると、前方から現れたのは2体の馬と1体の巨大なこうもり。

馬も普通の馬では無く背中に翼が生えて空を飛んでいるので、おそらくペガサスだろう。

3体で空を舞いながらこちらを目指しているが、一瞬身体に違和感を感じたと思った瞬間、突然視界が歪んで敵がしつかりと見て取れない。

なんだ？

足下も何故かぐらぐらする気がするが、地面が揺れているのか？

慌てて歪む視界の中、他のメンバーに目をやるが、ベルリアとあいりさんも俺同様異変を感じているようで、構えを解いているが、何故か後方のメンバーは変わった様子は無い。

どうやら地面が揺れているのでは無く俺自身に不調が現れているようだ。

考えられるのは一つしかない。敵モンスターのスキル。

そう考えているうちにも揺れが酷くなって気持ち悪くなってきた。

「シル……………『鉄壁の乙女』を頼む……………」

俺は目を回しながらもシルに指示を出して『鉄壁の乙女』を出現させた。

光のサークルに包まれたと同時に状態の悪化は止まった気がするが、まだ気持ち悪い。」

「ベルリア、『ダークキュア』いけるかっ!」

「マ……イロード……。もう……。し……………」

聞き取りにくいがベルリアは完全にダメだと言う事は理解出来た。どうやら俺よりも症状が重いらしい。

「海斗どうしたのっ?」

「ああ、敵のスキルだと思う。多分こうもりの方……。俺もしばらく無理だから、ルシエと一緒に頼んだ」

「わかったわ」

あゝ目が回ってきた。

俺はミク達に任せてその場に座り込んだ。

横に目を向けると既にベルリアとあいりさんは座り込んでいたが、後方のメンバーは全員無事のようにだ。

おそらく、大型こうもり の超音波か何かのスキルで三半規管にダメージを受けたのではないだろうか。

目に見えないだけに防ぎ辛いが『鉄壁の乙女』は超音波も防いでくれる様だ。

風系のスキルも防いでくれるので超音波が防げるのも納得だが、さすがはシルだな。

第408話 15階層進む（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第409話 ペガサスも馬

「くっ……不覚……」

ベルリアが悪役然としたセリフを呟いているが、思った以上にベルリアはこういう感じの攻撃に対する耐性が薄い気がする。

明らかに俺よりもダメージを受けていて全く役に立ちそうには無い。モンスターは3体共空を飛んでおり、遠距離攻撃で狙い撃つしか無いのでミクとヒカリンが火球と炎雷を放って、大こもりにもダメージを与える。

3体の中では1番動きが緩慢なので狙い易く2人の攻撃も着実に当たっている。

「馬が調子にのって空を飛んでるんじゃないぞ！墮ちろ！」黒翼の風

ルシエがスキルを発動するとその瞬間に右手を飛んでいたペガサスが肉塊と化して消滅してしまった。

やはりルシエの攻撃は威力は高いものの、見た感じは美しくは無い。ペガサスの1体が倒されたせいかな残された1体が猛然と攻撃を仕掛けて来た。

ルシエへの仕返しのもりなのか、たまたまなのかは分からないが、風の刃と思しき攻撃が光のサークルを何度も切りつけている。

風系の魔法は他の属性に比べると地味な印象があるが、ほとんど見えないので暗殺とかには最適かもしれない。

「もしかして、わたしの真似ごとをしているのか？馬のくせに生意気な。馬のそよ風なんか効くわけないだろ。これが風の刃だぞ。」

よく見て勉強してから墮ちろ！『黒翼の風』」

再びルシエがスキルを発動すると同時に風が集約してペガサスは切り刻まれ消失してしまった。

ルシエが2体目のペガサスを倒すのとはほぼ同時にミクとヒカリンが大こもり を消滅させる事に成功した。

「ようやく倒せたわ。こもりって侮れないわね。3人が戦闘不能になるなんてね」

「多分超音波か何かだと思うけど、まだ地面が揺れてる……………」

「それにしてもあれだけ大きいと、ドラキュラとかになってもおかしくないですよね」

「ドラキュラか…………この階層でも出るのかな」

「それはわかりませんが、こもり ってドラキュラのイメージなので」

「まあ、言われてみればそうかもな。それで申し訳無いんだけど、ベルリアがスキルを使えるまで休憩させてもらおうよ。俺もこのまま進むのはちょっと無理だから」

休んでいる間にモンスターに襲われる危険性も無くはないが、シルがいるのでまあ大丈夫だろう。

「どうだ？ベルリアいけそうか？」

「…………も…う。だい…じょう…………ぶで…………す」

うん、まだダメだな。これは、しばらく休ませてもらうしかない。

「あいりさんはどうですか？」

「あ、ああ。大分良くなってきたが、まだ気持ち悪いな」

大ごうもりの攻撃は地味だが効果は絶大だった様で、俺以外の2人も回復までまだかかりそうだ。

「あっ！海斗さん、あれ。モンスターミートですよ」

そう言っつてヒカリンがモンスターの消失した場所に向かって行って、肉の塊らしきものを持って帰って来た。

「お〜っ！やった！それっつこもりとペガサスどっちのかな」

「多分落ちていた場所から判断するとペガサスのモンスターミートだと思います」

「おお〜。昨日ユニコーンは馬だっつ言っつたけど、ペガサスも馬だよな」

「そうだと思います」

「馬は美味しいっつ言っつたよね」

「馬は美味しいと思います」

「じゃあペガサスのモンスターミートっつ美味いよね」

「間違いなく美味しいと思います」

今までゲテモノの様なモンスターミートでも絶品の味わいだっつたのだから元来美味しい馬のモンスターミートの味はどれ程のものだろうか？考えただけでもよだれが出そうになる。

「わたし達にも食べさせるよ！わたしが倒したんだからな」

「え！？ルシエっつモンスターミートっつ食べれるのか？」

「当たり前だろ！モンスターは魔界にもいるんだから食べれるに決まっつてるだろ」

「えっ、そ〜なの。じゃあシルは？」

「魔核程では無いですが、嫌いでは無いです」

「そうだっつたんだ。知らなかつたよ」

サーバントがモンスターミートを食べる事が出来るとは知らなかった。幸いにも今回のモンスターミートはかなり大きめなのでサーバントに分けても十分食べ応えがありそうだ。

第409話 ペガサスも馬（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第410話 ダンジョンバーベキュー

俺は今1階層の端でバーベキューの準備をしている。

ペガサスのモンスターミートを手に入れたが、ルシエまで食べさせると言ってきたので、前回ミクに連れて行ってもらったお店に持ち込む事は出来なくなってしまった。

ルシエ達に食べさせる為には、ダンジョンで食べるしかないの、他のメンバーと相談した結果1階層でバーベキューをする事となった。

場所はいつも俺が訓練に使っている場所なので、ほとんどスライムが出る事も無いが、最悪スライムが出現したとしても今の俺達ならバーベキューをしながらでも問題ないだろう。

ただ誰もバーベキューセットなど常備していなかったの、探索を適当なところで切り上げてホームセンターとスーパーに買い出しに行く事になった。

俺はペガサスのモンスターミートだけでも良かったのだが、女性陣がどうせなら他の食材も欲しいと言い出したので野菜とシーフードも買い足した。

ホームセンターに行ったら、バーベキューがブームなのかバーベキューコーナーがあり、炭火を使う様な本格的なバーベキュー用品が色々置いていたが、メンバーに聞いたら誰もバーベキュー経験者がいなかったの、本格セットは諦めガスコンロタイプの誰でも使える物を購入してから再びダンジョンに戻った。

「別にダンジョンでバーベキューしちゃダメとか無いよな」

「多分大丈夫じゃない。キャンプする人達ってバーベキューじゃないにしても調理とかするでしょ」

「そもそもダンジョン内のバーベキューを想定した規定なんか無い

んじゃないか」

「そうですね。まあ大丈夫ですよね」

色々買い込んだ後で気になってしまったが、ダンジョンでバーベキューしても怒られないだろうか。今更聞きに行くわけにもいかないのでさっさと始めてしまおう。

「焼肉のタレでいいよね。適当な大きさに切つてとにかく焼いちゃうか」

「……………」

「みんなどうかしたの？」

「……………」

「なんで無言なんだよ。俺何かした？」

「できない……………」

「何が？」

「切るのができない」

「もしかして全員？」

「……………」

完全に盲点だった。みんなバーベキューだけじゃ無く料理自体が出来なかつたのか。

そういえば3人共お嬢様だった。それでか……………」

俺しかないよな。俺だつて料理なんか普段した事がない。カップ麺ぐらいしか作った事が無いがやるしか無い。

意を決して食材を切る準備をしていると

「マイロード、よろしければお手伝いしましょうか？」

「え？ベルリア料理できるのか？」

「料理が出来るというほどではありませんが、切るぐらいであれば包丁も短剣を使うのとそうは変わりませんので問題ありません」

確かに魔法を斬る程のベルリアなら肉や野菜を切るぐらいわけ無い気がする。

「それじゃあ、悪いけど肉と野菜を切ってもらっていいか？大体一口サイズぐらいで頼む」

「お任せ下さい」

ベルリアが食材を準備している間に俺達はセッティングを済ませておく。

流石にテーブルセットを持ち込む事は難しかったのでレジャーシートを床に敷いて真ん中にコンロを置いて、紙皿を人数分並べて紙コップに買ってきた麦茶を注ぐ。

「マイロードいかがでしょうか？」

ベルリアが準備を終えた様なので食材を見ると、全ての食材が定規で測ったかの如くきっちりと同じ大きさに切り分けられていた。

もはや達人級と言っても過言では無いだろう。

まさか剣の道が料理の道へと通じているとは思ってもよらなかったが、今回は非常に助かったので今後ベルリアは料理番に決定だ。

第410話 ダンジョンバーベキュー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第411話 馬肉

「馬肉は馬刺しが1番じゃないでしょうか？」

「……馬の近縁種には違うと思うけど、この肉って生で食べれると思う？」

「いける……と思うのですが」

「いや、焼いた方がいいと思う。寄生虫とかモンスター特有の病気とかあったらやばいと思う」

「そう……でしょうか」

「ヒカリン馬刺し好きなのか？」

「はい」

「……今回は諦めよう」

ヒカリンは馬刺しを食べたかった様だが、このドロップした肉を生で食べようという発想は俺には無かった。

やはり食欲は全てに勝るのかもしれないが、ある意味すごい。チャレンジャーだな。

「それじゃあ、順番に焼いて行くよ」

ベルリアが綺麗に切り揃えた食材を俺がカセットコンロの網にのせていく。

「ジュ〜ッ！」

食材の焼ける音と共に食欲をそそる良い匂いがしてきたが特に肉の匂いがすごい。普通の焼肉でもいい匂いはするがこれは違う。匂いだけでもご飯が食べれそうだ。人間の本能に働きかけてくる匂い。

食べたいという欲求がくすぐられる。

「海斗、もういいだろ！食べるぞ！」

「いやまだだ。どう見ても生焼けだろ」

「別に生焼けでもいいんだよ。早くわたしの分をとってくれよ」

ルシエの分を俺が取り分けるのか？まあいいけど……

少し焼きが甘いかとも思ったが、ルシエがしつこくせがんでくるので、焼いた肉を取り分けてやった。

「ほら食べていいぞ」

「う〜う〜う〜」

「どうなんだ？焼けてなかったのか？」

「もつとくれ！」

おかわりって事はうまいのか。それにしてもルシエのポキャブラリの無さは酷すぎる気がする。

う〜う〜う〜ってなんだ。うまいですらない。

「あの、ご主人様私にも……」

「ああ、シルにも取らなきゃな。ほら食べてみる」

「んふ、んふ、んふ」

「どうだ？美味しいのか？」

「んふ、んふ」

シルも夢中になって食べているので旨いのは間違いなさそうだが、んふ、んふってちょっと可愛いけど意味が分からない。

俺は全員分を取り分けて、更に追加で肉を網に並べてから自分の分にも手をつける事にした。

やはり最初はモンスターミートからだろう。馬肉の焼肉ってあまり

聞いた事が無いけど、どうだろうか？
焼肉のタレにつけてから口の中に運ぶ。

これは！
明らかに牛や豚とは違う味わいだ。もちろんウーパールーパーとも違う。

噛んだ瞬間に肉の旨味が口の中に広がってくるが、脂身は無いのでしつこい感じは一切ない。

肉本来の旨味というのだろうか？柔らかいが、しつかりとした噛みごたえを残しつつ噛むほどに旨味が増す感じだ。

濃厚なスープの様な肉汁と脂身が無いのに何故か和牛よりも甘味を感じる。

和牛など数えるほどしか食べた事は無いが、その時覚えた感動を上回っている。

肉って旨い！そう叫んでしまいたいようになるほどの美味しさだ。

よく箸が止まらないといったりするが、今の口の中の旨みを逃したく無くて次へと箸が運べない。

他のメンバーを見ても一様に幸せそうな表情を浮かべている。

2切れ目の肉を口に運ぶと、更にフレッシュな肉の旨味が口に広がってきて美味しい。

おそらくフレンチで食べても物凄く美味しいとは思うが、素材の味を最大限活かした、バーベキューというスタイルは最高に美味しいのでは無いだろうか？

「もつとくれ！肉だけでいいぞ肉だけな」

「他のも食べるよ」

「わたしがモンスターミート以外食べれるわけ無いだろ」

そうなのか？悪魔は魔核とモンスターミートしか食べる事が出来ないのか？

「ご主人様私にもお願いします。お肉だけお願いします」

シルモか。やっぱりサーバントはモンスターミートしか食べれないのか？

「海斗さん私にもお肉をお願いします」

「海斗私にも、お肉ね」

「海斗、私にも、肉をお願いしていいだろうか」

これはあれか？肉が美味しいからみんな肉だけ食べたいというだけなのか？

野菜もシーフードも買ってきたんだからしっかり食べて欲しい。

第411話 馬肉（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第412話 もつすぐ春休み

ペガサスの肉を全て食べ切ってしまった。

かなりの量があったと思うがメンバーで全て食べ切ってしまったが、今まで食べた肉の中でナンバーワンだったのは間違い無い。

馬でこれだけ美味しいのであれば牛や豚は想像の遥か上をいっているのでは無いだろうか？

サーバント達も満足していた様だが、モンスターミートを食べると、強くなったり回復したりという事は無いらしいので完全に食欲を満たす為のものらしい。

ただし、他のメンバーがあまり野菜やシーフードに手をつける気配がないので、俺が率先して食べる事となり、他のメンバーよりもペガサスの肉は食べる事が出来なかった。

もちろん、焼いた野菜やシーフードも美味しかったが出来る事なら俺ももつと肉が食べたかった。

今回の経験から今度はシーフードも野菜も買うのをやめようと思う。この満腹状態からは、誰1人ダンジョン探索に戻るとは言い出さなかった。後片付けをしてから解散となった。

朝になり学校に登校したが今日から午前中授業なので、魔核集めに集中しようと思っている。

学校に着くとすぐに春香が声をかけてきてくれた。

「海斗、春休みはどうするの？」

「一応予定ではダンジョンに週5ぐらいで潜る予定なんだけど」

「週5……。それじゃあ週に2日は空いてるの？」

「ああ、特に予定は無いけど」

「それじゃあ、折角の春休みなんだしどこか一緒に遊びに行かない

「？」

「もちろんいいけど。何かやりたい事とか有る？」

「うん。今からいろいろ考えとくね」

「それじゃあ、いつがいいかな」

「海斗はいつが休みの予定なの？」

「土日は全部休みの予定だけど」

「じゃあ土日をお願いします」

「うんいいけど、どの土日？」

「できれば全部。無理かな」

「無理じゃ無いです。お願いします。うん全然大丈夫です。是非お願いします。勉強のお礼もあるしなんでも言つてよ」

春休みはダンジョン漬けのつもりだったのに土日を春香と一緒に過ごせるなんて、なんてラッキーなんだ。しかも春休み中に土日は6日も有る。1日か2日ぐらいは誘ってみたいとは思っていたが、全部という事は6日も春香と一緒にどこかにいけるという事だ。やばい。テンションが上がってきてしまった。早く春休みにならないだろうか。

「海斗、春休みの予定は決まってるのか？」

「ああ、大体ダンジョンに潜る予定だけど」

「まあ俺達も週4で潜る予定だけど、一緒だな」

「俺は週5の予定だけど」

「他のメンバーよくOKだったな。流石ダンジョンジャンキー。休みの日は何するんだ？」

「ああ、さつき春香に誘われてな、土日は春香と遊ぶ事になったよ」

「あゝ海斗もか……。真司も休みの日は前澤さんと遊ぶんだそうだ。楽しそうだな……。いいな……」

まるで高校生のアオハルみたいだな……。俺は1人でゲームセンターにでも行くしか無い……。いいな」

「…………ゲームセンターも楽しいって。もしかしたら出会いもあるかもしれないだろ」

「ゲームセンターに出会いなんかあるわけ無いだろ！そういえば葛城さんに紹介の話してくれたのか？」

「あ…………。ごめんまだけど、あんまり期待はできないと思う」

「海斗も真司もいいよな。俺だけダンジョンとゲームセンターだけで春休みが終わるんだぞ！健全な男子高校生がこれでもいいと思うのか。絶対によくないだろ。この春休みは今しかないんだあゝ！」

気持ちがよくわかるがこればかりはな。そもそも頼む相手を間違ってると思うんだよな。もっと顔が広くて女の子の知り合いがいっぱいいる奴に頼むべきだと思うんだけどな。

そもそも隼人の前に俺が付き合いたいんだよ！真司は上手く行って良かったけど、俺にも余裕はないので春休みに少しでも春香との距離を縮めたい。

第412話 もうすぐ春休み（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第413話 春休み

今日は終業式だったので、このクラスのメンバーで過ごすのも今日で最後かと思うと少し寂しい気がする。

もつとも、それほど友達が多い訳でもなく隼人と真司、春香と最近になって前澤さんと交流があるぐらいなので他の人達に比べると感傷に浸る時間は短い。

ただし、3年生で春香と違うクラスになったらと思うと気が重い…

…

春香とは土曜日に会う約束をしてから学校を後にした。

この3日間学校が午前中に終わってからずっと1階層に潜っている。大体5時間近く潜っているのでかなり集中してスライムを狩る事が出来ていると思う。

明日からは春休みなので15階層に連日潜る事になる。その為の魔核を既に200個近くは手にしているが春休み分としてはまだ十分では無い。

2011

「海斗」。飽きた。もうスライムばかりは飽きた」

「ルシエ、わがまま言っではいけませんよ」

「シルも飽きただろ」

「私は飽きてはいません。少し手持ち無沙汰なだけですよ」

「それを飽きたって言うてるんだよ」

「ルシエそんなに暇ならベルリアと代わって止めをさしてもらってもいいぞ」

「えゝスライムを倒すだけじゃつまんない」

初日から文句は言ってきたが、3日目の今日は特にうるさい。

俺はキリングマシンと化しているので余計な雑念が入る事は無い

が、見ていただけなら暇なのは理解出来る。

「そういえばこの前のモンスターミートは美味しかったです」

「スライムってこれだけ倒してるのにモンスターミートなんかドロップした事ないな」

「スライムは肉がないからミートはドロップしないのでしょうか」

「スライムは良くてゼリーじゃないか？」

「海斗、ゼリーも悪くないな」

「そうですねゼリーもいいかもしれませんが。でもやっぱり赤い魔核には及びませんが」

「そうだった。早く赤い魔核を見つけろよ。シルに聞いたら馬の肉より上だって言ってたぞ」

忘れてなかったのか。赤い魔核なんかそうそう見つかるわけではないが、モンスターミートよりも美味しいってどれだけ美味しいんだ。人は魔核を食べる事は出来無いが、そこまで言われると味わってみたくなってしまう。

その後も時間の許す限り魔核を集めてから家路についた。明日は朝からダンジョンに潜る事になっているがパーティでこれだけの時間を連続して潜るのは初めてなので、ヒカリンや他のメンバーの体調管理を今まで以上にして攻略のペースを調整しながら臨みたい。

翌日になり、朝から15階層に来ている。

「それじゃあ、今日から集中してダンジョン攻略を進めるけど、今回の目標はまずは15階層の攻略ね。順調に進めば16階層も攻略出来る様に頑張ろう。後はドロップアイテムだけこればかりは頑張っただけでどうにかなるもんでも無いから、可能性を高める為に出来るだけモンスターを多く倒せる様にやっつけていこう」

「海斗、張り切るのはいいいけどトラップには注意してよね」

「焦らずゆつくり進みましょうね」

「トランプもこの前のだけとは限らないからな」

流石にみんな地に足がついた感じでした。しっかりしているが、今回の一番の目的は霊薬を手に入れる事なので16階層の攻略にそこまでこだわりの無いものの、15階層ではエリアボスのミノタウロスでさえ霊薬をドロップする事は無かった。

正直15階層では霊薬を手に入れる事は難しい気がする。なので必然的に先の階に進むしか無い気がする。

モンスターミートがドロップした影響もあり、前回までにダンジョンの1/3から先への探索は思ったよりも進んでいない。

今日からはモンスターミートがドロップしても、すぐには帰還せずに探索を進めるつもりだが、出来る事なら牛のモンスターミートが食べてみたい。

第413話 春休み（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第414話 ドラゴン

15階層を順調に進んでいる。

途中で豚と馬のモンスターが出てきたが、残念ながらモンスターミートは落さなかった。

「ここ幻獣階って言うてましたよね」

「ああ、変なものも混じってるけどファンタジー王道モンスターが結構出てきてるな」

「でも王道といえばドラゴンがまだ出てきていませんね」

「ヒカリン……やっぱりいるのかな」

「普通いますよね」

ヒカリンに言われなくても気にはなっていたが、ファンタジーの王道モンスターといえばやはり竜種、ドラゴンだろう。以前恐竜は倒したので竜種と言えないことも無いが、やはり本物のドラゴンに憧れがないかと言われればある！

実際にはドラゴンを倒してもドラゴンスレイヤーを名乗れたりはしないと思う。名乗るのは勝手だろうが恥ずかしすぎて無理だけど心の中では確実に名乗る。

スライムスレイヤーとドラゴンスレイヤーのどちらがかっこいいかと言えば100人いれば100人が後者を選ぶだろう。

まさにキングオブモンスターと言っても過言ではないが、正直見てもみたいが戦いたくは無いらしいのが今の本音だ。

先日モンスターミートを手に入れた地点を超えて進んでいくが、お昼ご飯まではまだ時間があるので更に進んでいく。

「ご主人様、敵モンスターがこの先の右手から来ます。2体です」

「よし、じゃあ俺とベルリアが前に出るから、みんなは後方から攻撃を頼んだ」

バルザードを左手に構えて敵を待ち受けるが、前方に迫って来たのは前回やられてしまった大型こもり が2体だった。

「ベルリア、急いで後ろに下がれ！シル『鉄壁の乙女』を！」

「はい。かしこまりました」

前は前に出ていたメンバーが全員やられてしまったので、俺とベルリアは大急ぎで後方に下がって『鉄壁の乙女』のサークル内に逃げ込む。

「この階層で1番やばいのはあのこもりじゃないか？」

「マイロード、それは間違いありません。私が不覚を取るほどのモンスターですからね」

「……………みんなしっかり狙って倒そう」

大こもりは、光のサークルに向かってどんどん近づいて来たので、俺も狙いを定めてバルザードの斬撃を飛ばす。

ほぼ同時に、シルとルシェ以外のメンバーが一斉に攻撃をかけたので、一瞬で大こもりは蜂の巣状態となり、1体は空中でそのまま消失し、もう1体はふらふらと蛇行して落下した。

深手を負って落下したとは言え超音波攻撃が怖いので、近づく事はせずそのまま遠距離攻撃で止めをさした。

防御系のスキルが無いパーティの場合は超音波の届かない遠距離から攻撃をかけるか、耳栓をするのが最善だろう。

超音波って多分耳栓で防げるんだよね……………

「もうこのこもりは大丈夫ね。直接攻撃もあんまり無さそうだし」

「そうかもしれないけど油断はせずに行こうか」

俺達は落ちている魔核を回収してから奥へと歩を進めて行く。

「今日は順調に行ってるな。この調子で行けば今日中に半分ぐら
いまで進めたりするかもしれないな」

「そういえば海斗さんは、ダンジョン以外で春休みにどこか遊びに
行ったりしないんですか？」

「一応土日は、どこかに行こうと思ってるけど」

「もちろん彼女さんとですよ」

「いや、彼女では無いけども、クラスメイトというか同級生とい
うか買物友達ね」

「いいですね。羨ましいです」

「ヒカリンだって作るうと思えばいくらでも相手はいるだろ」

「私は家にいる事が多いので……」

「……………ゲームも楽しいよな。今ハマってるゲームとかあるの
？」

「今一番ハマってるのはドラゴンハンターって言うゲームなんです」

「どんなゲームなの？」

「オンラインでいろんなドラゴンをみんなで倒すゲームなんです。

自慢じゃ無いですけど私世界ランク305位なんです」

「世界305位か。すごいな。流石ヒカリン。ゲームのプロとか目
指せるんじゃないか？」

どのぐらいの人数がプレイしてるのか分からないけど世界305位
って多分凄いなよな。

俺も小学生の時にハマっていたゲームで世界4509位になった事
があるが、それより確実に上だな。

第414話 ドラゴン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第415話 竜種

大ごもりを退けてから30分程歩いたがちょうどお昼ご飯の時間になったので、ダンジョンの二画でみんなでご飯を食べる事にする。今日の俺のメニューはカレーパンにちよつと贅沢ないくらのおにぎりだ。

やはりパンとおにぎりの組み合わせがダンジョンランチのマスターだろつ。

たまに甘いパンも食べたくなるが、お昼にはおかずパンは最高に美味しい。

他の3人はいつもの通り手作り弁当を食べているが、いずれの弁当も非常においしそうだ。

いつ見てもバリエーション豊かで手作り感と家族愛満載に見える。間違っても俺の母親には頼めないレベルのクオリティだ。

今までも、ダンジョンの傍で何度もランチを食べているが、今までに食事中敵が襲つて来た事は1度も無い。

たまたまかも知れないが、もしかしたらモンスターは人間の食べ物匂いには興味を示さないのかもしれない。ただ人には反応するので人の匂いは嗅ぎ分けているのかも知れない。

「そついえば海斗、彼女とデートするんでしょ。どこに行くのか計画してるの?」

「いや、ただだ。それと彼女でもない」

「映画は行った事あるのよね。遊園地とか水族館とか定番でいいんじゃない?」

「遊園地か。混んでるだろうな」

「それが良かったりするんじゃない?」

「そんなもんかな」

「遊園地とかならノープランでも1日遊べるでしょ」

「ああ、ありがとう。考えてみるよ」

ヒカリンといい何かと気にしてくれているが、映画とショッピング以外のプランを思いつく事が難しいので素直に助かる。

「よし、みんな食べ終わった様だし先に進もうか」

「はい」

ランチとゴミの片付けをしてから先を目指して歩き始める。

「やっぱり、春香とデートするみたいだな」

「そうみたいです。この前のバーベキューで私達との仲も更に深まったと思いますが」

「もつとバーベキューを繰り返さないダメなのかもな」

「私達2人でしっかりとご主人様の胃袋と心を掴むのです」

相変わらずシルとルシェがこそこそやっているが、気にしたら負けなのでどんどん進んで行く。

「ご主人様、敵モンスターですが、1体だけの様です」

「この階層では単体は初めてだな。取り敢えず注意しながらゆっくり進もうか」

ダンジョンのモンスターの1度での出現数は、大体モンスターによって決まっている様なので、単体での出現となると今までのモンスターとは別種の可能性が高い。

スライムやゴブリンは別として単体で現れるモンスターは総じて結構強い事が多い気がする。

「あれって……………何？」

「蛇？」

「龍……………でしょうか？」

「ああ、龍だな」

前方に出現したモンスターだが思った通り初見のモンスターだ。

見た感じは大蛇の様な風貌だが足が生えており、地面を足で移動している。

確かに言われてみると竜ではなく龍のイメージに近いが、空を飛んではない。

地面を4本の短い足で歩いているので、空を駆けるあの龍の感じではない。

大きさも、あの龍にしては少し小さい気がする。

「大分イメージと違うんだけど、あれって龍なのか？」

「なんか飛んでも無いし大きさも中途半端だし龍の下位モンスターなんじゃ無い？」

「所謂レッサー龍じゃ無いですか？」

「ヒカリン、おそらくもつとマシな呼び方があるんじゃないか？」

例え下位の龍だとしても龍は龍なのだろうから弱いとも思えない。

「気を抜いてやられても不味いから、みんなで一斉にいつてみようか」

飛べない龍はただの爬虫類だ。

俺達は大こうもりにやったのと同じ様に、前方のレッサー龍に向かって一斉に攻撃を放った。

俺はすっかり狙ってからバルザードの斬撃を放った。

5人の攻撃が、1秒ほどの時間の間に全弾命中した。

たかが大きめの爬虫類。これで無事なはずが無い。

第415話 竜種（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第416話 下級龍

「やったか？」

俺達の攻撃が全弾命中したので下級龍を仕留めたか？と思ったが前方にいる下級龍は完全に無傷だった。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む！」

初手で5人の攻撃を全弾命中させたのに全くダメージを受けている様子がない。

特殊な防御スキルか？それとも単純に防御力が高いだけなのか？もしかしたら遠距離攻撃に特殊な耐性を持っているのかも知れないが、とにかく初見のこの下級龍を観察しながら戦うしか無い。

「みんな、とにかく攻撃しない事にはどうしようもない。今度は時間差で攻撃してみよう。俺からいくから、タイミングを計って攻撃を頼む」

こちらの出方を窺っているのか下級龍も大きな動きは見せていないので、しっかりと狙ってバルザードの斬撃を飛ばすが、攻撃に動いた瞬間下級龍も素早く動いて斬撃が躲されてしまった。

「はやつ！」

大蛇のような風体にダックスフンドのような脚の短さなので、とても速く動ける様なフォームでは無いのに異常に速いスピードでバルザードの斬撃を横方向に避けた。

「アイアンボール」

間髪入れずに、あいりさんが必殺の鉄球を放ったが、俺の攻撃同様に素早く動いて避けてしまった。

今度は目で動きを追う事ができたが、短い足が想像を超える速さで動き鉄球を完全に躲した。

漫画の様な素早い脚の動きで、その後の2人の攻撃も同様に躲してしまった。

防御力が高い上に回避能力も高いとは、この龍は防御特化型のモンスターなのか？

それなら遠距離からじっくり攻めるのが正解か？

そう思った瞬間今度はこちらに向けて猛然とダッシュして来たのでベルリアが魔核銃で迎撃するが、バレットが命中した瞬間に弾かれてしまった。

下級龍は5M程手前で急停止したと同時に大きく口を開いて火を吐いた。

所謂ファイアブレスを吐いてきた。

もちろん『鉄壁の乙女』はファイアブレスを遮断してくれているが、急激な温度変化までは防いでくれないので光のサークル内の温度が急激に上昇した。

「あっつ！」

熱いが、この距離なら外さない。俺は右手にドラグナーを取り狙いを定めて引き金を引いた。

「ドウッ」

放たれた青い弾丸は糸を引いて下級龍の首？の部分に命中してその

まま貫通した。

「ガアアアア〜！」

やった。今度の攻撃は完全に効いた。単純に距離が近くなった事で威力も増したのか、それともドラグナーと言う名前の通り龍に対して特効があるの分らないがしつかりと貫通した。

ただ首に風穴を空ける事に成功したものの、まだ消失までは至っていない。

今度は止めをさす為に狙いを定めて再度ドラグナーの引き金を引いたが、今度は躲かれてしまった。

「なっ！」

手負いのくせにこの距離で躲すか？

「みんな追撃を！」

ミクがスピットファイアで連射し、そのうちの1発が命中したが効いた感じが余りしない。

この下級龍ってあの赤いミノタウロスと同等以上にしか見えない。もしかしてこいつが裏ボスとかなのか？

「マイロード私が出ます。援護をお願いします」

ベルリアが光のサークルを飛び出して下級龍に向かって行く。

ベルリアに目をつけた下級龍が再びファイアブレスを放つべく口を開いた。

「ヒカリン『アイスサークル』を！」

ヒカリンが俺の声に反応して下級龍の目の前に氷の柱を出現させる。ほぼ同時にファイアブレスが放たれて氷の柱が一気に溶けて小さくなくなっていくが、ベルリアが接近するまでの時間は十分に稼げた。ベルリアが氷の影からそのままジャンプして久々の大技、回転しながらの2刀『アクセルブースト』を放った。

ベルリアの刀が龍の頭部にささり、回転が一瞬止まりかけたが、ベルリアが更に体重を乗せ力を込めてそのまま押し切って真つ二つにってしまった。

飛び出しは無茶だったが流石はベルリアだ。あれ程の強度を誇っていた下級龍を文字通り2刀両断してしまった。

第416話 下級龍（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第417 ゲートキーパーの使いかた

「強かったな。もしかして裏ボスみたいなやつだったのか？」

「そうね。普通に出てくるにしては強かったわね」

「腐っても龍ということなのです」

「だが、ドロップしたのは普通の魔核の様だから裏ボスでは無いと思うが」

あいりさんに言われて見てみると確かに通常の魔核が1個落ちているだけだ。

大きさもペガサスの物と大差ないように見える。

単純に相性の問題か苦戦を強いられてしまったが、労力の割に身入りが少ない。

「でもさっきの龍は、魔法には強い耐性を持つてる感じだったな」

「魔法だけじゃないでしょ。魔核銃とかも弾いてたし鱗が特別なじゃない？」

「まあベルリアが直接斬りつけたらいけないんだから今度出て来たら俺も近接で戦ってみるよ」

「さっきの龍は下級だからか飛んで無かったですけど、飛ぶ龍もいるんでしょうか？」

「多分いるだろうな。流石にあれが飛んで攻撃してきたらきついな。俺達だとドラグナーかシル、ルシエに頼むしかないかもしれない」

まあ、この階層で出てくるとは思えないが将来的にはパーティとして物理的な遠距離攻撃の強化も必要になってくる気がする。パツと思いつくのは以前おっさんの店で見たランチャーだ。あの時はこんな物必要ないだろうと思ったが、必要だから売っていると云う事な

のだろう。

魔核を回収してから探索を再開して更に奥に進んでいく。

そういえば最近ゲートキーパーの能力で気がついた事がある。

今までは帰る時にはカモフラージュのつもりで一旦違う階層まで飛んでから1階層に戻っていたが、何度か繰り返しているうちに気がついてしまった。よくよく考えると通常のゲートから飛んでもゲートキーパーで飛んでも1階層のゲートであればどちらも同じ様にか見えない事に気がついた。仮に15階層のゲートから1階層に移動しても、ゲートキーパーを使用して1階層に転移しても1階層の側から見ると同じにしか見えない事に気がついてしまった。

1階層のゲートは入り口のすぐ脇にあるので、ゲートキーパーで転移したとしてもほぼ同じ場所に移動出来るのだ。

往路はゲートの無い階層に移動する場合、他のパーティに見られたら転移石を使った様に誤魔化す必要があったが、帰りはその必要は無かったのだ。

その事に気がつくまでバレルのを恐れて、わざわざ違う階層を経由して歩いて1階層に移動したりしていたのだが全くの無駄足だったようなので、今では帰る時は1階層に直接転移する事になっている。お陰で今はダンジョンに潜れる時間がかなり伸びている。

「ご主人様、ペガサスのお肉美味しかったですね」

「ああ、美味しかったな。シルも美味しかったですよ。よかったです」

「あのお肉なら何度でも食べたいです。でも赤い魔核が1番です」

「あゝ赤い魔核な。あれは簡単には手に入らないんだよな」

「ルシエにはあげるんですよね」

「手に入ったら一緒に食べればいいだろ」

「はいっ、そうさせていただきます」

それにしても赤い魔核、そんなに美味しいんだな。

「マイロード、よろしければ私にもお願い出来ないでしょうか？」
「うーん、それはどうか。ちよつとな〜3人分はな〜難しいんじゃないかな〜」

「……………」

「いや、ベルリアにも食べさせてやりたい気持ちはあるよ。あるけど実際問題レアだからな〜。多分3人分は無理じゃないかな〜」

「……………」

「ルシエに分けてもらえる様に自分で頼んでみるよ」

「とんでもございません。ルシエ姫にその様な事をお願いできるはずもありません。それであれば私は大丈夫です」

ベルリア……………。赤い魔核をやれないのは申し訳ないと思うが、ルシエにはお願い出来ないのになぜ俺にはお願いしてきたんだ。いつも思つがお前の主人は俺なんだけども。

第417 ゲートキーパーの使いかた（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第418話 赤色

15階層を更に進んでいるが、この階層を朝から晩までずっと潜る事には問題が発生してきた。

1番の要因は俺のMP不足だ。俺のMPはレベルの割にそれ程多い方では無い。『神の祝福』の恩恵で増加傾向にあるとは言え、今の俺のほとんどの攻撃にはMPの消費が伴うがそれに比べると総量が少なめだ。

同じ事はいりさんにも当てはまるが、彼女の場合MP消費無しの場合通常攻撃も多用しているので、まだなんとかなっている。

この階層のモンスターはそれなりに強いのでMP使用無しで乗り切るのはかなり厳しい。

低級ポーションでもMPは回復するのだが、以前は1本使うとHPもMPも全快していたのだが、低級ポーションで回復するのは大体HP60MP30ぐらいだ。今は残念ながら1本でMPが全快する事は無い。

最悪、シルとルシエを前面に押し出し俺達がついて行くと手も無いではないが、それは自分達の能力以上に背伸びをしまっている感もあり出来ればやりたく無い。

メンバーで相談した結果ダンジョンに潜るのは朝10時から夕方4時までで、間にランチと休憩を挟む。MPの状況を見て早めに切り上げる事も検討すると言う事になった。

「みんなの足を引っ張るみたいで申し訳ない」

「普通のパーティは帰る時間も考えるんだから、私達は十分潜ってる方ですよ」

「そうですね。多分こんなにずっと潜ってるパーティはそう無いですよ」

「女性中心のパーティでこれだけスティックに潜ってるのは稀だろう」

「えっ、そうですか。そんなもんですかね」

「海斗は、ほぼダンジョン中毒だから感覚が麻痺してるのよ」

まあ確かに1日8時間潜っていれば、そこそこ潜った感はあるので、このくらいでいいのかもしれないが、本心はもう少し潜りたかった。

「ご主人様、敵モンスターです。1体ですので先程のモンスターと同じかもしれません」

「じゃあ、俺とベルリアとあいりさんが近接を挑むから、シルは後方で『鉄壁の乙女』を。ヒカリンはいつでも『アイスサークル』を発動出来るように待機して」

さっきは苦戦したが先程ベルリアが倒し切ったのを見る限り近接攻撃が正解な気がするので、今度は対策を立てて臨む。

進んでいくと、先程同様の姿のレッサー龍が待ち構えていたが、さっきの龍は緑系の体色だったのが今度のは赤い。

色で何か違うのかは分からないが、事前の作戦通りに動き出す。

念の為にナイトプリンガーを発動してからレッサー龍に向けて走り出す。

俺の横にベルリア、そして少し後方であいりさんが駆けていく。

後方からミクが援護射撃をしてくれていくが、赤い龍も先程の龍と同じく魔法攻撃への耐性に自信があるようで避けもしない。

俺も距離を詰めるべく更に走るが、前方の龍が口を開けようとしているのが見えた。

ファイアブレスが来ると思った瞬間、ヒカリンが打ち合わせ通り『アイスサークル』を発動してブレスを防いでくれようとするが、赤い龍が吐いたのは火では無かった。

吐いたのは大量の紫色のガス。

見るからにやばそうな色のガスを吐き出した。
ガスが氷に触れても氷自体に変化は無かったので、ある程度防壁としての効果はあったようだが、氷の柱を越えて紫色のガスが漂っている。

これはどう考えても体に良くないガスだ。
所謂毒ガスの類にしか見えない。

「あいらさん、一旦距離を取りましょう」

ベルリアはこういうのには耐性があるので放っておいても問題無さそうだが、俺達はやばい。

俺は、紫色のガスに恐怖を覚え突っ込むのを一旦やめて、ガスの届かない中間距離でタイミングを計りながら戦う事にする。

第418話 赤色（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

419話 逆鱗

ベルリアが紫色のプレスを物ともせずについで行く。

「あいりさん、俺たちはベルリアのサポートに回りましょう」
「わかった」

レッサー龍が再び口を開きベルリアに向けて紫色のプレスは吐いたが、ベルリアは本当に大丈夫なようで構わず突っ込んで行く。どう見ても有毒なプレスなので、普通の人間で有れば避ける以外の選択肢はないが、ベルリアは既にレッサー龍の目の前までたどり着いている。

ベルリアが剣で攻撃しようとした瞬間、レッサー龍が短い足を音速稼働させて避けた。

ベルリアも瞬間的に動いて追撃をかけるが、どちらもやたらと素早いので援護し辛い。

この位置からではベルリアが邪魔で狙えないので、俺はレッサー龍の後方に回るべく移動して行く。

レッサー龍はベルリアの剣を口の牙と頭に生えた角を使いダメージを負わないように交戦している。

俺が無事に後方までたどり着いたのを見計らってからベルリアがジャンプしてからの2刀アクセルブーストを放とうとしたのが見えたが、ベルリアのジャンプに呼応するようにレッサー龍も飛んだ。

「え？」

このレッサー龍って飛べるのか？巨体のくせにベルリアよりも上に飛んでいる。

ベルリアは目標を失いそのまま着地するが、頭上からレッサー龍が落ちながらベルリアを狙っているのが見え、咄嗟にバルザードの斬撃を放つ。

「ベルリアよける！」

残念ながらバルザードの斬撃では、決定的なダメージを与える事は出来なかったが、少しの時間を稼ぐ事は出来た。

ベルリアはその場からすぐに飛び退き、着地した龍に向かって剣を振るう。

見る限りどうやらあの龍は飛べる訳ではなく、空高くジャンプしただけのようだ。

再びベルリアがアクセルブーストを使って斬りかかり手傷を負わせる事に成功しているが、やはり龍の外皮が硬いのか切断までは至っていない。

やはり龍の弱点と言えばあれか！

「ベルリア、逆鱗だ！首の辺りに逆鱗が有るはずだ。その辺りを狙え！」

龍の弱点といえば昔から逆鱗だろう。一般的に物語の中では首の辺りに一枚だけ有る逆さの鱗が弱点とされる事が多い。こいつも龍の端くれなら逆鱗が有るはずだ。

「マイロード、どの辺りでしょうか？残念ながら確認できません」

確かに、目の前のレッサー龍の鱗は蛇が大きくなったような鱗なので一枚一枚が1cm程度しかないように見える。しかも枚数がとんでもない枚数なので戦いながら逆さの鱗を見つけてそれを貫くのは難易度が高すぎる。

「ベルリア、すまない。気にせず戦ってくれ！とりあえず首は弱点かもな」

ベルリアを惑わせる真似をしてしまったので、お詫びに援護に入ってくべく後方から迫るが、かなり体長があるので、俺の位置から狙えるのは尻尾に近い場所だけだ。

尻尾の根本の辺りに狙いをつけてス〜ツと近づいて行き、そのままバルザードで斬りかかる

外皮に当たる瞬間硬質な抵抗感があり、バルザードの刃が途中で止まってしまった。

「グウウアアアアア」

尻尾を斬られかけたレッサー龍が叫び声を上げてこちらを振り向いた。

やばい……

焦る心を押さえ込み途中まで刺さったバルザードに切断のイメージをのせて一気に尾を切り離し、そのまま後方に離脱を試みるが怒り狂ったレッサー龍が口を開くのが見えた。

まずい、この距離だとブレスをくらう。

咄嗟に息を止めて身構えるが、ブレスが来る事は無かった。

俺が身構えた直後にレッサー龍の首が落ちたのだ。

ベルリアから目を離して俺をターゲットにしたレッサー龍は、ベルリアに対して完全に無防備な状態で首を晒す事になり、その瞬間ベルリアの2刀で首を切断される事となった。

ベルリアが回転もジャンプも無い状態で一気に切断まで持っていたので、やはり首が弱点だったのかもしれない。

419話 逆鱗（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第420話 再戦

赤いレッサー龍を倒してからも3度程戦闘しながら先に進んで今日は引き上げる事になった。

ダンジョン自体は進み易いのだが、結構敵モンスターが強いで、回数を重ねるとそれなりに疲労して来てしまう。

HPが減った訳では無いのでステータスには表れない疲労感だ。

しかも龍が単体で出現する為魔核の取得数が少ないので、今の所身入りが悪い。

「みんな今日は大丈夫だった？明日もこのペースで先に進むつもりだけどいけそうかな」

「まだ始まったばかりだから。全然大丈夫」

「まだまだ元気なのです」

「問題無いが、龍の倒し方は少し考える必要があるな」

「じゃあ、龍の倒し方は各自宿題で、帰ってしっかりと休みましょう」

比較的早めにダンジョンを切り上げる事にしたので、家で十分に休む事が出来た。

今日の晩ごはんはカレーだった。

ダンジョンに潜るとお腹が空くので2人前ぐらい食べてしまった。

対レッサー龍だが今日の戦闘を見る限り首がウィークポイントでは有るようなので、首を集中して狙うのは有効だと思う。

やはり先に動きを止めてからの近接戦闘が1番だろう。本当は槍が使えればもっと簡単に倒せそうな気もするが、無い物は仕方が無いので明日はあいりさんの薙刀での攻撃に期待したい。

一応シルとルシェのスキルも試しておこうと思う。

翌朝7時に目を覚まして準備を済ませてから、ダンジョンに向かった。

「おはよう。よく眠れた？」

「しつかり寝れたわよ」

「思ってたより疲れてたみたいで22時には寝てしまいました」

「私は龍の倒し方を夜に考えていて寝るのが少し遅くなってしまった」

「あいりさんらしいですね。いい方法思いつきましたか？」

「色々想定してみたが、1番有効なのはブレスの際に開ける口の中を目掛けて、至近距離から『アイアンボール』を叩き込むのが良いと思うんだが、どうだろう」

「口の中に『アイアンボール』ですか。間違いなく効きそうですね。ただタイミングは難易度が高そうですね」

その後俺達は、レッサー龍の倒し方を話し合いながら15階層を進んで行くが、今日はレッサー龍に会う事なく恐らく1/2に近いと思われる位置まで来る事が出来ていた。

「ご主人様、奥に敵モンスターです。恐らくレッサー龍だと思われるます」

「よし、それじゃあみんな打ち合わせ通りでいくよ」

俺達は打ち合わせ通りに展開して敵モンスターに向かって行く。

直ぐに緑色のレッサー龍が現れたので即座に俺とベルリアとあいりさんが向かって行く。

『アースウェイブ』

ヒカリンが魔法を発動してレッサー龍の足止めを図るが、足下を攻

める『アースウェイブ』は短足のレッサー龍には劇的效果を発揮した。

前足と後ろ足が離れている為に『アースウェイブ』の効果は前足のみに限定されたが、完全に足は沈み込み、あれほど素早かった動きを完全に封じ込める事に成功している。

「いいぞっ！このまま押し切るぞ。プレスにだけ注意して！」

足が止まった所をミクとスナッチが攻撃をかける。

ミクは、当初の打ち合わせでは攻撃よりも『幻視の舞』を想定していたが、動きを封じた今ならこのままいけそうだ。

致命傷にはなっていないが、完全に嫌がっている。

俺達が接近しているのを確認してレッサー龍がプレスの体勢に入った瞬間あいりさんが『アイアンボール』を放つ。

高速の鉄球がレッサー龍の口の中を狙うが、龍も咄嗟に口を閉じて首を振り、口の中への直撃は避けてきた。

ただ鉄球は閉じた口の側面に直撃したので、プレスを完全に阻害する形となった。

その隙にベルリアがレッサー龍の前までたどり着いて剣を振るう。

「やあああゝ『斬鉄撃』」

ベルリアが交戦している後ろから、あいりさんが気合の声と共に薙刀を一閃し、その後ほんの少しの間があってレッサー龍の首がずれて落ちた。

前回苦戦したレッサー龍に対して今回ほぼ完勝だった。

ただ今回俺は何もしていない……………

予定では背後から首を狙うつもりだったのだが。

第420話 再戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第421話 亀河童

「上手くいったな。思った以上に『アースウェイブ』が効いたみたいだ」

「やっぱり首は、他よりも柔らかいみたいだな」

このパターンが次も通用する様ならレッサー龍はもう問題無く倒せそうだ。

やはり、相性や戦術が重要だという事を再認識させられる。消耗も殆どなかったので、探索を再開する。

「ご主人様、お見事でした」

「いや……俺は何もして無いけどな」

「いえ的確な指示と囿として十分に機能されていましたよ」

「ああ、ありがとう」

やっぱりシルは天使だ。いや女神だな。心のオアシスだ。

「シル、こいつを甘やかしちゃダメだぞ。はっきり言ってやれ。出足が鈍くて遅れを取っただけだろ。ブレスにびびっただけかもな。ベルリアでさえしっかり役目を果たしてたんだぞ」

「ぐっ……………」

こいつはやっぱり悪魔だ。人の痛い所をえぐって来る。

俺は褒められて伸びるタイプなんだ。M属性は皆無なのでダメージしか感じない。

メンタルを立て直して奥に進んでいく。

「ご主人様、敵モンスターです。1体だけですのでレッサー龍かもしれません」

「よし、それじゃあさっきと同じで行ってみようか」

さつき戦ったばかりなのでタイミングも分かっている。次は確実に活躍しないと何を言われるか分かったものではないので、見つけたら速攻をかける。

俺たちは先程と同じようにベルリアとあいりさんと俺が前衛に立って進んで行くとすぐに敵モンスターを捉える事が出来た。

「あれって……龍じゃ無いな」

「亀？」

「河童？」

「怪獣？」

俺達の前に現れたのは亀のモンスターだと思う。

甲羅を背負っておりサイズも以前の階層で戦った亀型モンスターよりも一回りは大きい。

ただし亀なのに2本の足で立っており、巨大な河童のようにも見えずなくは無いが顔は噛みつき亀のような感じで頭に皿は無さそうなので、やはり河童では無く亀なのだろう。

「えつと……」

龍を想定していたので一瞬戸惑ってしまったが、すぐに頭を切り替えて戦闘に入る。

「折角なんで、もうこのまま龍と同じ作戦で行きましょう」

どうせ初見のモンスターには、特別な対策を立てようも無いので、

当初の予定通りに戦う事に決めて、亀型モンスターに向かって行く。ヒカリンが『アースウェイブ』を発動させて2足の動きを封じ込めようとするが、龍と違い足に水掻きがあるせいか、ぬかるんだ足下の影響を受けずに普通に歩いている。

「ヒカリン、『ファイアボルト』に変更しよう」

足止めして一斉に攻撃する予定だったが、この大型亀には難しいよ。うなのでヒカリンには攻撃魔法に変更してもらおう。

スナッチが『かまいたち』を発動するが、甲羅と外皮に阻まれてダメージを与える事が出来ていない。

見た目通りの硬度を誇っているらしいので、レッサー龍同様に直接攻撃を叩き込む必要がありそうだ。

ベルリアが先陣をきって亀型モンスターに斬りかかるが、やはり腹の部分も硬いらしく、完全には刃が通っていない。

亀型なのでカメラは腕を振るってベルリアを攻撃して来るが爪の部分が凶器と化しており、くらったらただでは済みそうに無い。

「ベルリア、頭を狙え！」

俺とあいりさんがベルリアに代わってカメラを相手にする。

側から見るよりもかなりスピードと迫力があり、爪での攻撃が怖いので、距離を取りながら牽制する。

カメラの意識がこちらに集中したタイミングを狙ってベルリアがジャンプして回転斬りを敢行するが、ベルリアの刃がカメラの頭に振り下ろされた瞬間、頭が甲羅の中に引っ込んでしまった。

ベルリアの2刀はそのまま甲羅の縁にめり込んだが、硬い甲羅に阻まれて断ち切るには至らずにそのままの状態で止まってしまった。

第421話 亀河童（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の「

【を】」をお願いします。悪魔な俺のへブンス

ドア 最新話アップしました。一緒に読んでみてください。

第422話 カメラ

回転が止まり刺さった剣を持ったままの状態でベルリアが宙に浮いている。

刺さった剣を抜こうとしているが、思ったよりも深く切り込んでいくようで、足場のない状態では抜ける気配が無い。

「ベルリア！剣を捨てて下がれ！」

「マイロード、ですがこの剣は……」

「急げ！」

ベルリアが渋々手を離れた瞬間、亀の爪がベルリアのいた空間を切り裂く。

「ベルリア下がれ！」

ベルリアと入れ替りで俺とあいりさんが前に出る。頭の出入り口の部分にベルリアの剣が刺さっているので、頭を出すことは出来ないようだが、気配が分かるのか俺達の方に反応を見せる。

「あいりさん、甲羅が思ったより硬そうなので、足を狙いましょう」

ベルリアの大回転斬りが途中で止まるぐらいなので、胴体の部分を普通に斬っても切断までは至らない気がする。

あいりさんが薙刀で足の部分を狙って斬りつけたが、その瞬間巨体が宙を舞った。

「嘘だろ」

見えないはずなのにタイミングよく飛び上がって、そのまま手足を引つ込めたかと思うと横回転し始めて、空中でコマのように回り始めた。

巨体が回ることで、かなりの風圧を巻き起こしているが、単純に危なくて近づく事が出来無い。

回転しているので、甲羅の隙間が見えない上にこのサイズの回転に巻き込まれて無事でいれるイメージが全く湧かない。

「あいりさん、どうしよう」

「これは、直接攻撃は無理だろう。少しひいて魔法を打ち込んでみる」

「わかりました。お願いします」

回転に巻き込まれない様に、2人でその場から一步引いてあいりさんが魔法を放つ。

『アイアンボール』

かなり近距離から放った鉄球は相当な威力を持って、回転するカメラに命中したもののそのまま弾かれて俺の1M程脇を飛んで行った。

「あぶなっ!」

あの鉄球が当たったらただでは済まない。俺の顔や大事な部分に命中していたら即死していたかもしれない。

怖い……

「海斗すまない」

「あირさんのせいじゃ無いですけど、回転する相手に使うのはもうやめましょうね」

「そうだな。分かった」

この距離からドラグナーで撃てばいける様な気もするが、鉄球同様はね返されたら怖いので撃つ勇気が持てない。

理論的には浮いているので下に潜り込んで回転している中心をつけば倒せる気がするが、1発で倒せなかった時にあのサイズの物が上から降ってきた時のことを考えると、悪い予感しかしない。

潰され無い為にはカメラの上から攻撃するしか無いが、硬い甲羅が障害となる上に回転するカメラの上でずっと留まる事は不可能なので、やるなら一撃必殺で決めるしか無い。

そもそもこの位置から飛んだのでは俺の跳躍力でカメラの上を取るまでには届かない。

「ヒカリン、踏み台が欲しいからカメラの手前に『アイスサークル』を頼む」

待っていても状況は好転しないので一気に勝負に出る。

ヒカリンがカメラと俺の間に氷の土台を出現させてくれる。

しっかりと意図が伝わった様で普段の氷柱を横に倒した様な形で魔法が発現した。

これならいける！

俺は、全速力で氷の土台に向けて走り出した。

上方に意識を向けてジャンプする軌道をイメージしながら氷の土台に足をかける。

一瞬氷の上を滑る様な感覚があつたが、そのままの勢いで足を運ぶ。

1歩、2歩、3歩目で踏み切って上方にジャンプしようとしたが、

3歩目で踏ん張りが利かなかった。

「あつ！」

氷の土台は新調したブーツのゴム底が滑って上方に行く力を生まず
に、慣性の法則を最大限發揮した形となり、そのままの勢いで思い
つきり前方に飛び出してしまった。

焦っていたのかもしれない。当然考慮すべき事だったとは思つ。

ただ今この時にそこまで頭が回っていなかった。そもそもブーツで
氷上を走った事が無かったので、危機感が薄かった。

今はそれが理解できるが、理解出来た時にはもう遅かった。

今俺は慣性の法則を全身で体感している。

第422話 カメラ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の「

【を】」をお願いします。悪魔な俺のへブンス

ドア 最新話アップしました。一緒に読んでみてください。

423話 異変

「あっ！」

慣性の法則を全身で体感している今この時に誰かの声が聞こえて来た。

俺も同じく「あっ！」と声をあげたが、周りからも全く同じ声が聞こえてきた。

どうやら、この場面であげる声はみんな同じらしい。

どこか冷静に他のメンバーの声を聞く自分がいるが、今の自分の状況には全く余裕は無い。

慣性の法則に則って、猛烈に押し出されるといつか滑ってしまい身体が自由が効かないが、それも刹那の出来事に過ぎなかった。

氷の土台は僅か数メートルなので一瞬で俺の足下からは無くなり、その瞬間俺は足場の無い前方へと押し出された。

今度は自由落下の力に従い、下方向にも引つ張られて、凶らずも回転するカメラの下側に飛び込む形となった。

「うっぶ」

地上に放り出された瞬間、重みと痛みが加わって動きを止めてしまおうが、今置かれている状況は分かっている。

痛みを我慢して身体を起こし上を向くと、上方を巨体が高速で回転している。

動きに変化が見て取れないので、もしかして俺の状況を把握出来ないのか？

この巨体が俺の身体にのしかかって来ると言う最悪のイメージが頭を過ったが、そのイメージを振り払いバルザードに賭ける。

一撃で仕留める！

もしダメなら『愚者の一撃』を追加する！

確実に仕留める為にバルザードの一撃にのせるイメージは切断ではなく破裂。

バルザードを両手で持ち直して、全力で上方にある回転の中心に突き入れる。

「ギョリッ」

硬い抵抗を感じたが力を強めて突き入れる。

「ううおおお〜！」

回転の中心部分に突き入れたので大丈夫かと思ったが、そんな事は全く無く突き入れた瞬間に回転による遠心力の影響を受け、振り飛ばされそうになったのでイメージを強めてバルザードに伝える。

遠心力に耐えきれずバルザードの持ち手を離れた瞬間にカメラが爆散した。

「やった……」

一瞬の攻防だったが、終わった瞬間カメラを倒した喜びよりも疲労を感じてしまった。

「危なかったな……」

自分の浅慮が原因とはいえ危なかった。たまたま上手くいったが、もう一度同じ事をやれと言われてもやれる自信は全く無い。手強かった……

「海斗さん。すごいです。以前飛んだのに匹敵する凄さです。人類の可能性を感じる勝利でした」

「冷静に考えると氷を足場にするっておかしいわよね」

「それは今だから言える事だろ。あの時はこれしかないと思ったんだよ。ヒカリンだつて何も言わずに『アイスサークル』で氷を出しただろ」

「海斗さんに言われるまま出してしまいました。あの時は何の疑問も持ちませんでした。海斗さんが駆けて行くスピードを見た瞬間に危ないかもとは思いました」

「普通はあのスピードで躊躇無く氷に向かって行くのは無理だろう。ある意味勇気がいる事だな」

「それって褒めてるんですか？」

「もちろんだ。結果としてカメラも海斗が一人で見事撃退した様な物だしな」

まあバタバタしたけど倒した事に間違いは無いので、その場に座り込んで一息つく。

「あゝ全身疲れた。次からカメラの対策が必要だな」

「また海斗さんが同じ事をすればいいんじゃないですか？」

「うん、無理」

「海斗」。わたししかシルが一撃かましてやればいいだけだろ」

「まあそうなんだけど」

一番手っ取り早いのはルシェの言う様に2人に一撃で仕留めてもらうのが一番良いのだろうが、他のメンバーの底上げには全くならないので考えものだ。

腰を下ろして、今後のカメラ戦をどうしようかなと考えながら、何気に手元のバルザードに目をやる。

「ん？」

いつもの見慣れたバルザードだが一瞬違和感を覚えて、刃の部分をよく見てみる。

「あああゝ！」

よく見るとバルザードの刃先の部分が一部欠けていた。

423話 異変（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第424話 刃こぼれ

「あああああ〜っ!」

俺の、俺の大事なバルザードが……………

「急にどうしたのよ」

「それが……………」

「びっくりしました。虫でも出ましたか？」

「いや、虫じゃ無い」

「どうしたんだ？そんなに大きな声で」

「俺のバルザードが、欠けました」

「……………えっ？」

さっきのカメラ戦で欠けたのだと思うが、僅かながら先端に近い位置がギザギザになっている。

カメラの外装が硬過ぎたのか、もしくは遠心力で変な力がかかったのか。

可能性としては金属疲労も考えられるが、おっさんの店で魔剣用の砥石を買ってからはDVDを見て自分なりに研究を重ねて毎日の様に研いできたのでメンテナンス不足という事はないだろう。

「欠けたってどう言う意味？」

「刃が欠けた。刃こぼれしたって意味」

「バルザードって魔剣よね。魔剣って刃こぼれするの？」

「一応武器屋のおっさんに聞いてはいたんだ。形あるものは壊れる。魔剣だろうが使えば当然壊れる事もある

って。そう言われてメンテナンスも毎日欠かさずにやってたんだけ

どダメだった……」
「ちよつと見せて」

そう言つてミクが俺のバルザードを手に取りじっくりと刃を見始めた。

「これか。確かに欠けてるわね。でも少しじゃない。このぐらい大丈夫じゃないの」

「私にも見せてくれ。あゝ魔剣も欠けるんだな。勉強になったよ。私も武器の扱いには気を付けないといけないな。でもこれなら大丈夫だ。このぐらいなら、それほど斬つたり突いたりする事に影響は無いと思う」

「あんまり硬い敵に使わない方がいいのかもしれないね」

「でも、バルザードを使わないと俺の攻撃手段が『ドラグナー』だけになつちゃうからそれは難しいよ。それにしてもこれ研いだら直つたりしないかな」

「これだけ欠けてるとおそらく素人が研いだのでは難しいだろうな」

「えっ、さつき大した事無いて言つてませんでしたか？」

「う、ううん、まあそう言つたが、素人で直せるレベルは超えてるかな」

「それじゃあ直らないんですかね」

「いや、プロの研ぎ師であれば十分直せる範囲だとおもつぞ」

「そうですか。それじゃあ、明日にでも武器屋に持つて行つてみますよ」

「直るといいわね」

「うん……」

おっさんから魔剣も壊れる事があるとは聞いていたが、実際に起つてしまうとショックが大きい。

デカすぎる……

俺のバルザードが……

よくよく思い返してみるとカメラを倒す時に選択を誤ったかもしれない。

下から突き刺した時にのせたイメージは破裂。一瞬で勝負を決める為に破裂のイメージを選択した。

その為もあり、刺した瞬間にかなり硬い抵抗を感じた。

もしあの時に切断もしくは刺すイメージをのせていれば、バルザードの刃に負担をかける事無く突き刺す事が出来ていたかもしれない。突き入れた後で破裂のイメージをのせるべきだったのだろう。

勝負を急いで焦ったのと、MPの節約も頭にあり一撃で決めようとしてしまったのが裏目に出てしまった。

時と場合にもよるが、硬い敵には必ず最初に切断のイメージをのせて斬りかかる事にしよう。

ケチると取り返しのつかない事になりそうだ。

今回高すぎる授業料だが1つ勉強になったと諦めるしか無い。

「そういえばベルリアもカメラに斬り込んでたけど剣は大丈夫なのか？」

「マイロード、大丈夫かと聞かれればもちろん大丈夫ですが、刃こぼれはもちろん有りますよ」

「え？刃こぼれあるの？大丈夫なのか？」

「当然あれだけ硬い物を斬れば多少の刃こぼれはありますが、そもそも私の2刀は切れ味重視というよりも、重さと勢いで叩き斬るタイプですので、そこを余り気にしても仕方が無いのです」

「そう言う物か？」

「剣とはそう言う物です。斬ればその分痛み（傷み）ます。特に私のは魔剣という訳でもありませんので」

ベルリア………魔剣が欲しいのは分かるが、傷心の俺に対してその言い方はどうなんだ。

第424話 刃こぼれ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第425話 探索続行

「はっ………」

「あんまり気にしても仕方が無いじゃ無い。プロが研げば直るみたいだし」

「そうなんだけど」

バルザードの刃こぼれを見つけてしまったせいで、カメラ戦の疲労が3倍増して襲ってきて身体が重い。

ミクの言う通り修復可能っぽいのが不幸中の幸いだったのだろう。10分程の休憩をとってから探索を開始する。

バルザードも刃こぼれたとは言え使えなくなった訳では無いのでこのまま探索を続ける。

ベルリアが魔剣を欲しがっているのは分かるが、それよりも俺の予備の方が急務かもしれない。

レッサー龍にカメラと敵モンスターも結構強くなって来ている気がするので武器にも万全を期したいところだ。

搦手では無く力押しして来るタイプのモンスター達なので比較的相性は良いと思うが、それでも結構苦戦している。

ただ15階層の足場は良いので、スムーズにマッピングが進んでいる。

「明日はデートなんでしょ」

「まあ、デートでは無いけど」

「どこに行くのか決めたの」

「朝はバルザードを直しにダンジョンマーケットに行くけど」

「まさかダンジョンマーケットだけじゃ無いでしょ」

「一応日曜日は考えたんだけど明日は特別何も」

「海斗さんフラれますよ」

「……………映画にしようかな」

「映画の頻度が高く無いですか？」

「そうかな。春香が映画好きって言ってたから」

「映画ばかりだと飽きられます。出来ない男感が滲み出てきているですよ」

「出来ない男感……………普通は出来る男感じゃないのか？」

「海斗さん、明日は映画で許しますけど次の週はもう無理ですよ」

ヒカリン、無理って何？しかも許しますけどって別にヒカリンに許してもらわなくても……………

言われなければ毎週映画に行っていたかも知れないが、これが出来ない男なのか？

映画で十二分に楽しいと思うのだが、デート情報をもっと検索した方がいいのだろうか。

「ご主人様、敵モンスターです。今度は3体です」

「俺とベルリアとあいりさんが前に。数が多いからシルとルシエもサポート頼んだぞ」

単体での出現が続いていたので、3体出ると多い気がしてしまうが、ユニコーンかペガサスかもしれない。

いつも通りのフォーメーションで進んでいくと現れたのは、レッサー龍2体にカメラが1体だった。

「こいつらって単体でしか出て来ないんじゃないのか！」

どうする？想定していなかったレッサー龍とカメラの組み合わせだが、どう考えても1人1体はきつい。

「ベルリアとあいりさんで左側のレッサー龍を。ミクも一緒に頼んだ俺が右側のレッサーを倒す！カオリンはフォローして。カメラはシルが相手にしてくれ。ルシェも頼んだぞ」

シルに前に出てもらいカメラの相手を頼んでから、俺はレッサー龍との戦闘に臨む。

「ウォーターボール」

俺はバルザードに氷を纏わせてからナイトブリンガーの効果を発動する。

龍の尻尾を斬った時にもかなりの抵抗感があったので、これ以上の刃こぼれを防ぐ為にも魔氷剣を発動しておいた。

MPは勿体無いが今は刃こぼれしない事を最優先に考える。

「アースウェイブ」

ヒカリンが魔法を発動して俺の相手の足止めを敢行する。

魔法の効果でレッサー龍の後ろ足が沈み込み動きを封じる。

それを見計らって一気に距離を詰めてレッサー龍を討つべく、魔氷剣の間合いに踏み込もうとするが、レッサー龍も俺の事がある程度認識出来ているのか、前方に向かってブレスを仕掛けてくるのが見えたので回避すべく左横にシフトする。

回避した直後にファイアブレスが吹き出されたが、アサシンの効果で今いた場所を焦がすのが少しだけスローな感じで見て取れたのでそのまま大きく踏み込んでからブレスを吐き終わったばかりのレッサー龍の喉元に魔氷剣を叩き込んだ。

第425話 探索続行（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第426話 いい感じ

龍の首に叩き込んだ魔氷剣は、ほとんど抵抗感無く首に食い込み、そのまま首を刈り取る事に成功した。

明らかに魔氷剣の性能を超えた一撃でレッサー龍を葬る事に成功したが、これはたまにあるアサシンの効果が発現したのだろう。

会心の一撃というか、思いがけずバルザードの切れ味が増す事がたまにあるが今のはそれだろう。

この調子ならブレスのタイミングさえ気にしていれば、レッサー龍は問題無く倒せそうだ。

左側に目をやると、ベルリアとあいりさんが交戦しており、カメラの方に向くと丁度シルが神槍ラジュネイトの一撃を放つところだった。

「亀がいくらくくる回る回っても所詮は亀です。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

シルが回転するカメラに向かって高速の一撃を放つと、カメラはその体に大きな風穴を作り消失してしまった。

ルシエが手伝った形跡は無く、どうやらシル1人で瞬殺してしまっただらしい。

あれ程俺達が苦戦したカメラを一撃で倒してしまった。

シルの鋒はカメラ程度の盾は問題にならないという事らしい。

俺には無縁の力だと分かつてはいるが少し羨ましい。

「シル、流石だな」

「ありがとうございます。ご主人様もすごかったですよ」

「見てたのか？」

「はい、もちろんです」

「シルに比べるとな」

「いえご主人様も確実に強くなっています」

お世辞でもシルに褒められると嬉しい。

「やあああああ〜！」

あいりさんの大きな声が聞こえて目をやるとあいりさんが『斬鉄撃』を発動して薙刀を一閃するのが見えた。

薙刀が振り切られると同時にレッサー龍の首が落ちて消滅した。

あいりさんも流石だ。

恐らく3体倒すのに1分かかっていないと思うので、ほぼ完勝と言っている出来だと思う。

レッサー龍の倒し方はパーティ全員で共有出来ており、カメラについてはシルに丸投げする事で今までに無くスムーズに戦闘を運ぶ事が出来た。

「みんなお疲れ様。思ったよりうまくいったな」

「そうですね。すぐに戦闘が終わったので消耗も少なかったのです」

「レッサー龍はなんとかなりそうだけど、亀の方は流石シル様ね」

「シル様は流石だが、3体で出て来たと言うことは亀3体の可能性もある。十分に気をつけて進む方がいいだろう」

「そうですね」

カメラ3体か。その場合2体はシルとルシエで対応出来るとして、もう1体は俺達の担当になるだろうから、何らかの対策が必要だろう。

「ふ〜っ」

「ヒカリンどうした？疲れたの？」

「いいえ大丈夫です。ホツと一息ついていただけなのです」

「そう、それならいいけど」

1回毎の戦闘時間はそれ程長くは無いが、精神的には確実に消耗しているのです、その後も探索を進めたが少し早めに切り上げて今日の探索を終える事にした。

ダンジョンを切り上げてから家路についたが、今日はバルザードを持って帰っているので少し目立ってしまう。

もちろん鞄に入れているのだが、ロッカーを借りてから武器を持ち運ぶ機会も余り無かったので、なんと無く周りの目が気になってしまふ。

以前は全く気にならなかったのに不思議な物だが、これが慣れと言ふものなのだろう。

バルザードの事もあるが、そろそろマジックポーチが欲しい。

家への持ち運びも、もちろんあるが、ダンジョンの敵もだんだん強くなってきたので身軽な動きを確保する為にもそろそろマジックポーチが必要なタイミングが来ているような気がする。

俺の荷物はそれ程多くは無いので1番小さいポーチでいけると思ふが、ミク達のポーチで1000万は下らない筈だ。

出来る事ならハーフサイズや中古のポーチが安く出回ったりしないだろうか？

1番いいのは、ドロップする事だが今まで1度もドロップした事ないので望みは薄いだろう。

火力アップにランチャーも欲しいが、マジックポーチが優先だろう。せつかなので明日武器屋のおっさんにも聞いてみようと思ふ。

第426話 いい感じ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第427話 おっさんが研ぐ

今日は久しぶりに春香と遊びに行く為に駅で待ち合わせをしている。9時30分に駅で待ち合わせているが俺は9時から待っている。テスト勉強と一緒にしたし学校でも先日まで一緒に授業を受けていたのに、小学校の遠足前の様にテンションが上がってしまい、朝7時前に目が覚めてしまった。

落ち着かないので早めに出て来て既に20分以上待っているが、突然春の香りを纏った天使が目の前に現れた。

「おはよう」

「ああ、おはよう。その服この前買った服だよ」

「うん、丁度良い季節になって来たから。着てみたんだけど変じゃないかな」

「変じゃないです。良いです」

春香が着ていた服は以前一緒に選んだパステルカラーのパンツルックだった。

試着の時もいいと思ったが、外で見ると一際輝いて見える。

普段スカートを履いた春香しか見る機会がないので、新鮮かつ鮮烈で可憐。

一方の俺は普段通りのデニムのパンツに量販店で買ったグレーのパーカー。

並んだ感じ若干の違和感があるが、こればかりは仕方がない。

「海斗が持つてるのって、剣だよ。でも前買ったのより小さい気がするんだけど」

「うん、よく分かったね。前買ったのとは別物で俺がメインで使っ

てる剣なんだけど、昨日刃こぼれしちゃったから、ダンジョンマーケットに修理に出したいんだけど大丈夫かな」

「うん、もちろん良いよ。でも前の剣も折れたって言ってたし、劍って結構折れたりする物なんだね」

「折れたのはこの前のが初めてなんだけど、これ一応魔剣なんだ。だから大事にしたくって」

「魔剣？魔剣ってこんな感じなんだね。もつと炎が出てたり、妖気みたいなのが吹き出したりしてるかと思っただよ」

「そう言う魔剣もあるかもしれないけど、これはそんなんじゃないかと成長するんだ。最初はこのぐらいのステータキナイフぐらいしか無かったんだけど、成長して今はこのサイズなんだ」

「剣なのに成長するんだね。魔剣ってやっぱりすごいんだね。でも魔剣って言うぐらいだから呪われたりは大丈夫？」

「魔剣って言うてもこれは呪われた剣とかじゃないから大丈夫だよ」
「そうなんだ」

合流してバルザードを春香に見せてから一緒にダンジョンマーケットに向かった。

「それじゃあ、いつものおっさんのお店だから」

「あゝあのお兄さんのお店ね」

ダンジョンマーケットについてすぐにおっさんの店に直行した。

「こんにちは」

「おゝ坊主か。またお嬢ちゃんと一緒になのか。仲のいい事だな。今日は何買ってきてくれるんだ」

「いえ今日はこれを研いで欲しいんです」

そう言うってバルザードをおっさんに見せた。

「これは、ここで買った剣じゃね〜な。あれか、この前言ってた魔剣か」

「そうです」

「あ〜これか。確かに欠けてんな。それにしても珍しいタイプの魔剣じゃね〜か。店で見えた事ね〜な」

「自分の力でドロップした剣ですからね」

「ちよつと小振りだが、特殊効果はなんかあんのか？」

「一応、これ成長するんです。これで2回成長してます。それとイメージを斬撃に伝える効果があります」

「ほう、成長する魔剣か。それじゃあまだ成長する可能性があるって事か。しかし2回成長してこの大きさって元の大きさはどのくらいだったんだ？」

「ステーキナイフぐらいです」

「ステーキナイフ!? そんなサイズの魔剣見た事ね〜ぞ」

「ギルドでも最小かもと言われました」

「ふ〜ん、よくそのサイズからここまで育てたな。普通そのサイズの魔剣をメインで使って育てようとは思わね〜だろ。ある意味スゲ〜な」

「それよりこれ直りますか？」

「ああ、この程度なら問題無く直るぞ。ただし、研いで直すって事はその分は刀身が薄くなるって事だからな。何度も何度もやってるとそのうち折れるぞ」

「欠けたのは今回が初めてです」

「ま〜今後は気をつけるんだな」

「明日の夜か明後日の朝までにお願いしたいんですけど、出来ますか？」

「あ〜? 明後日まで? 俺も忙しいんだぜ? 明後日までなら20万だな」

20万か。安くは無いが直るのなら必要経費だろう。

「じゃあ、それでお願いします」

「おお、それじゃあ俺が魂込めて研いどいてやるよ」

「お願いします」

魂込めてっっておっさんが研ぐのか。本当に大丈夫だろうな。

第427話 おっさんが研ぐ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第428話 映画

「それと聞きたいんですけど、マジックポーチの中古とか格安品ってあつたりしますか？」

「悪いけど今はねえぞ。たまに装備一式下取りする時にポーチも一緒に買い取る事もあるけどな」

「それってどのぐらいの価格ですか？」

「小さいやつで500〜600万ぐらいだ」

「やっぱりそのぐらいしますか」

「マジックポーチは人気あるから中古はすぐに売れんだよ」

「そうですね」

「まあ稀に劣化ポーチが出るがあつてその場合は300万ぐらいからの時もあるけどよ」

「劣化ポーチってなんですか？」

「ああ、たまに普通の物より容量が少なかったり、重量軽減が中途半端だつたりするB品みたいなのが出ることがあんだよ」

「それって使えるレベルなんですか？」

「パーティ全員分とかは無理だろ〜けどよ。1人分なら問題ない場合がほとんどだぜ」

「じゃあ、もしそれが出たら取つといてください」

「あ〜？劣化ポーチが欲しいのか？そもそも坊主金まだ残ってんのか？」

「300万なら何とかします。使えるポーチなら買います」

「分かったよ。出たら取つといてやるよ」

「お願いします」

劣化ポーチとは良い事を聞いた。俺のパーティは俺以外みんなマジックポーチ持ちなので俺の分さえ収まれば全く問題ないので話を聞

く限り劣化ポーチで十分な気がする。値段も300万なら何とか出せるのでこれから週に1回はおっさんの所に顔を出す必要があるな。俺はおっさんに礼を言ってから春香と2人でショッピングモールへと向かう。

「海斗、マジックポーチ買うの？」

「うん、敵も段々強くなって来てるし予備の武器とかも持っていていきたいから、マジックポーチは必要だと思うんだ」

「それにしても前に買った銃もそうだけど、ダンジョンで使う物って全部高いね。中古の劣化ポーチで300万円って、車より高いんだよ。びっくりだよな」

「それは俺も思うけど、買う人がいるからその値段になってるし、こればかりは仕方がないよ」

「よくドロップアイテムとかって聞くけど、マジックポーチは落ちてたりしないの？」

「うん、俺も本当はドロップして欲しいんだけど今まで1度もドロップした事が無いから難しいと思う」

「そっか。じゃあ高くても仕方がないね」

そんな話をしてるうちにショッピングセンターに着いたので先に映画の上映時間を確認する。

「どれか見たい映画ある？」

「今一番見たいのはこれかな」

「ああ『あなたの肝臓を食べたい』か。流行ってるみたいだな。それじゃあそれにしよう。でも次の回が13時からだからしばらく時間があるね」

「ちよつと早いけど先にご飯食べようよ」

「そっしょうか」

2人でフードコートに行つて俺はラーメンを食べる事にしたが、春香はたこ焼きを食べるらしい。

お昼とは言えたこ焼きだけでは少なくないんだろうか？

「お昼にたこ焼きか？」

「美味しいよ。良かったら海斗も1個食べる？」

「いや、それは大丈夫なんだけどお昼ご飯には少なくない？」

「大丈夫。映画館でポップコーンを食べようと思ってるから」

「あゝそれでか」

「海斗は昨日もダンジョンに行つてたんでしょ」

「うん、そうだよ」

「隼人くんや真司くんも一緒だったの？」

「いや2人は別だよ。最近2人共別でパーティ組んだみたいだから」

「じゃあ今海斗はダンジョンに1人で行つてるの？」

「いや、あの、1人では無いよ。俺サーバントもいっぱいいるし」

「そうなんだね。パーティは全部で何人いるの？」

「えゝつと……7人と1匹かな」

「へゝつ。パーティって結構人数が多いんだね。それに1匹って？」

「ああ、メンバーのサーバントにカーバンクルって言うイタチみた

いなのがいるんだよ」

「カーバンクル？ちよつと見てみたい気もするな。可愛い？」

「俺に懐いてるわけでも無いから可愛いって感じでも無いけど見る

人が見れば可愛いかも」

「そうなんだね」

ダンジョンの話しをしながらご飯を食べていると良い時間になったので映画館に再度戻つてからポップコーンとジュースを買って持ち込んだ。

第428話 映画（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第429話 あなたの肝臓を食べたい

「海斗、このペアセットの方がお得だよ」

「あ、そう、そうだね。じゃあそれで」

映画館の売店でポップコーンを買ったがLサイズを春香と2人で分ける事になった。

俺は普通にレギュラーサイズとジュースを買おうとしたが、Lサイズとジュース2個のセットの方がお得だったので春香の勧めでセットを買うことになった。

俺は若干躊躇してしまっただが2人で1つのポップコーンを食べながら映画を観る。

まるでデートのようだ……

これは意識するなと言う方が無理だろう。

むしろ意識しすぎて食べ辛い。

今までとは違う妙な緊張感の中映画が始まった

ストーリーは、主人公とヒロインが高校で出会う所から始まる。

主人公は所謂デブだったのだが、彼女に出会いダイエットに励む事となる。

彼女の献身的なサポートもありダイエットに励む中での笑い恋愛がミックスされた学園青春ラブストーリーだった。

ダイエットしている主人公の前にポップコーンとジュースを飲む事に若干の罪悪感を感じながら、春香が食べていないタイミングを見計らって手を伸ばし食べる。

タイミングを外す訳にはいかないので指先に集中するが、集中しすぎて映画の内容が耳に入ってきて来ない。

「ふふっ」

春香の小さな笑い声が聞こえたのでスクリーンを見ると、主人公がまわしを締めて相撲エクササイズに精を出しているシーンだった。映画の中の主人公はダイエットが上手くいかなかったり、リバウンドして心が折れかけたりする中で、彼女との交流で再びやる気を取り戻して最後にはダイエットを成功させる事が出来た。

クライマックスはダイエットに成功した主人公が彼女に告白をしてOKを貰いハッピーエンドとなるのだが、なんと彼女は、ぽっちゃりも好きと言うオチが最後に待っていた。

映画を見る限り肝臓を食べたいと言う題名は肝脂肪を減らしたいと言う意味合いらしい。

ショッキングな題名なので内容を知らずに観た俺は、途中どこで猟奇的なシーンが出てくるのかと違う意味でもドキドキしながら観ていたが、幸いな事に最後までそんなシーンは出て来なかった。

よくよく考えるとR指定されていない時点でそんなシーンが出てくるはずは無かったが、題名のインパクトが強すぎて途中まで全く気が付かなかった。

「面白かったね」

「ああ、思ってたのと違ったけど面白かったよ」

「あの相撲エクササイズが何とも言えずに笑っちゃったよ」

「あれは面白かったな。でもあれだけ頑張って痩せたのに彼女は、ぽっちゃりも大丈夫ってどうなんだろう」

「ぽっちゃりでも大丈夫っていう女の子は多いと思うけどな」

「えっ？春香もぽっちゃりが好きなの？」

「私は特別ぽっちゃりが好きな訳じゃ無いけど、好きな人がぽっちゃりなのは全然大丈夫だよ」

「そうなんだ。じゃあ春香はどんな体型が1番好き？」

「私は普通感じがいいかな」

「そ、そう。普通が1番だよ。うん」

俺は中肉中背だし所謂普通だよな。
ただダンジョンに潜り続けたせいで最近は少し筋肉質になって来ているが、一応普通の範疇に収まっているはずだ。

「海斗はどんな体型が良いとかあるの？」

「俺？特には無いけど普通で良いです」

「男の子と違って女の子の普通は色々あると思うんだけど」

「痩せすぎず健康的な感じがいいと思うけど」

「そうなんだね」

俺としては春香の体型が1番良いに決まっているが、本人を前に伝える事など出来るはずもないので、健康的なのが良いと伝えしまた。

春香は健康的かつ魅力が溢れている。

この魅力は体型からくるものだけでは無く、顔や内面を含めた春香と言う存在が醸し出しているものだと思うので、体型の好みなど俺には全く意味の無い話しだと思う。

ただ映画の主人公はどう見ても太りすぎているので健康の為にモダイエットは必須だったと思う。

劇中でも主人公は高校生にして既に成人病を心配されており、体脂肪率が40%もあった。

やっぱり健康はプライスレスだ。

第429話 あなたの肝臓を食べたい（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第430話 ジョガーパンツ

映画を見て終わったが時刻は15時15分なので、まだ時間は十分にある。

映画以外は、ほぼノープランだったのでこの後する事を思いつかない。

「春香、この後どうしようか？」

「海斗は、ショッピングモールでいたい事とか無いの？」

「ここでしたい事か……それじゃあ服が買いたいかな。春香は綺麗な服着てるけど俺は……」

「うん、じゃあ海斗の服を買いに行こう。私が選んでも大丈夫かな？」

「もちろんだよ。お願いします」

朝会った時から春香と俺の格好の違いが気になっていたので、春香に服を選んでもらう事にする。

「今の季節に海斗はいつもどんな服を着てるの？今日みたいな感じなのかな？」

「うん、そう。大体トレーナーかパーカーにデニムのパンツ」

「今日は1種類だけ買う？」

「いや出来たらいくつか選んでくれたら嬉しいけど」

「それじゃあ、最初はあのお店に入ってみようよ」

春香に連れられて入ったのは、俺が普段着るような服を扱っているカジュアルウェアのショップだった。

「海斗はトレーナーとかパーカーってどんな色のを着る事が多いのかな？」

「ほとんどグレー系だけど」

「それじゃあ今日は違う色にもチャレンジしてみようよ」

「お任せします」

お任せするとは確かに言っただけでも、何回かの着せ替えを経て今着ているパーカーはピンク色だ……

「春香、これピンク色なんだけど……」

「うん、良い感じだね。春っばいしオシャレだよ」

「そ、そうかな……」

「うん、1着はこれにしようよ」

ピンクのパーカー………今までの俺の人生には全く登場しなかったアイテムだが、これ大丈夫なんだろうか？

「春っばくってすごくお似合いですよ」

「そうですか？」

店員さんも勧めてくるが、本当に似合ってるのだろうか？

確かに、今日着ていた服に比べると随分オシャレになったような錯覚は覚えるが、俺がピンク色の服を着れるのか？

「うん、海斗やっぱり似合ってるよ」

着れる！春香が似合ってると言うのだから似合ってるのだろう。だから俺はピンク色のパーカーを着れる！

「じゃあ、これください」

と言うか春香にお任せした以上俺に買わないと言う選択肢はない。
1軒目の店でピンクのパーカーを買い、次に連れて行ってもらったのは前日も来たちよつとオシャレな大人っぽいお店だ。

「じゃあ、次は大人っぽい感じで選んでみるね」

「はい、お願いします」

そこからは、また着せ替えショーが始まった。

「うーん、ちよつと違うかな。海斗次はこっちに着替えて見てね」

春香が真剣に選んでくれているので俺としては何の不満も無いが、俺の着せ替えショーなど誰も興味が無いと思う。

「あゝ良いんじゃないかな。ぐつと大人な感じ」

「そ、そう？」

「お客様、大変お似合いです。彼女さんのセンスが光りますね」

今度選んでくれたのは、薄手の白のセーターに麻で出来たジャケットだ。

「そのジャケットは麻で出来ているので、これからのシーズンにぴったりです。夏までいけますよ」

「ああ、そうなんですな」

俺に服の素材の話をしてもらってもまいちピンと来ないので答えようが無い。

「海斗、これいいと思う。よく似合ってるよ」

「そ、そう？じゃあこれください」

ジャケットも購入し次のお店で購入したのはズボンだ。

「これ変じゃ無い？裾がゴムでちよつと今まで履いた事が無い感じなんだけど」

「うん、ジョガーパンツって言って結構流行ってるみたいだよ」

「ジョーカーパンツ？」

「違うよ」

「ジャガーパンツ？」

「ジョガーパンツだよ」

ジョガーパンツ？聞いた事が無いけど世の中では流行ってるのか？ちよつとオシャレなスエットかトレーニングウェアのズボンみたいだけど……

「そうなんですよ。今流行ってるんです。ジョガーパンツ。色もいい感じですよ」

「そうですよね。海斗私も良い感じだと思つよ」

店員さんと春香が一緒になって勧めてくる。

これも今までの俺の人生には登場した事のないアイテムだ。

「そうかな。じゃあこれください」

「お買い上げありがとうございます」

今日は春香に手伝ってもらっているいろいろと春服を買う事が出来てよかった。

自分では絶対に買う事の無い服だが、春香が良いと言ってるんだから良いんだろう。

俺一人で買いに来たら間違いなくグレーのパーカーを買って帰っていたと思うが、今日でまた少しだけ大人になった気がする。

第430話 ジョガーパンツ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第431話 ラッターランド

俺は昨日買ったピンクのパーカーにジョガーパンツを履いている。朝服を着て鏡を見たが正直違和感しか無かった。

「海斗おはよう。服良い感じだね」

「そ、そうかな。自分ではよく分からないんだけど」

「オシャレな感じに見えていいと思うよ」

「それなら良かったけど。春香も良い感じだよ」

春香は昨日のパンツルックから一転して水色のワンピースだ。

パンツルックも新鮮で良かったがワンピースも素晴らしい。

目の前に春の風を運んでくる天使が立っている。

天使といえばルシルも天使だが方向性が違いすぎるので同じ天使でも比較のしようはない。

昨日は映画と俺の買い物をして帰ったが、今日は1日テーマパークに行く予定だ。

今日行くのは恐らく日本で1番人気のあるテーマパークのラッターランドだ。

俺も小学生の時に遠足で行ったことはあるがそれ以来となるラッターランド。

夢の国との触れ込みだが、彼女も友達もいなかった俺には全く縁の無い場所だった

世の中には1人で来るのを楽しみにしている強者もいるとネットで見た事があるが、特にラッターに興味の無い俺が1人で訪れた場合は、悪夢しか見えない気がする。

「春香はラッターランドは何度か来てるの？」

「うん、パパとママとも来たことあるし、友達とも何度か来たことあるよ」

「俺は1回しか来たことないから乗りたい乗り物があつたら言つてよ。任せるから」

「うん。私はね〜ジェットコースターとかライド系の乗り物が好きなんだけど海斗は大丈夫？」

「ああ、任せといてよ。なんでも大丈夫だよ」

「それと今日の入園料は俺が払うから」

「えっ？良いよ私もお金持つて来てるし」

「昨日服を選んでもらったお礼だから気にしないでよ」

「うん、じゃあお願いします。ありがとう」

このラッターランドだが事前に調べた所小学生で来た時よりも随分値上がりしており、普通の高校生ならお小遣い1ヶ月分ぐらいはかかってしまう。

俺が誘つたのだから俺が払うのは当然だろう。

電車で移動して1時間程でラッターランドに着いたがオープン前にも係らず既に100人単位の人が行列を為している。

「すごいな……」

「日曜日だからね。やっぱり人は多いよ」

遠足の時も人は多かつた印象はあつたが、あれは平日だったのでこんなに並んでいるイメージは無かつた。

正直甘く見ていたかもしれないと思ひながらチケットを買う為に列に並んだ。

なんとチケットを買うだけで25分も並んでしまったが春香も一緒に並んでくれたので全く苦にはならなかつた。ただ今度は入園の為に列に並ぶ事になった。

「俺、普段並ぶ事とかなないからビックリだよ」

「やっぱり、ここは特別じゃないかな」

「並ぶの大丈夫だった？」

「海斗、こういう所は並ぶ事も楽しみの1つでしょ」

「ああ、そんなもんかな」

「うん、焦っても進む訳じゃないしゆっくり待つのが良いよ」

春香は達観してるな。春香がいるから今の俺には待っている時間も楽しみでしかないが、1人であれば絶対に無理だ。修行いや苦行でしかない。

周りに並んでいる人達に目をやると日曜日だけあって小さい子供を連れた親子連れが目立つが、やはりカップルと思しき人達も多い。それに思いの外女の子だけのグループもいるようだ。

このテーマパークはラッターという野ネズミをモチーフとしたキャラクターをメインに色々なキャラクターを配置した乗り物が売りとなっているが、全世代に人気があるそうだ。小学生の時に来た時よりも乗り物も新たに増えているようなので楽しみだが、よく考えてみると余り遊園地の乗り物に乗った記憶が無い。

恐らく俺の両親はそれほど遊園地が好きでは無かったのだと思うが、ラッターランドにも両親と来た記憶が無い。

普通に動物園とかには連れて行ってきていたのに今考えると不思議なものだ。

第431話 ラッターランド（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第432話 ゴッドサンダーズプラッシュ

ラッターランドの開演と共に順番に入場したかと思うと、先に入った人達が猛ダッシュを始めているのが見える。

「春香、なんか先に入ってる人が走ってるんだけど」

「うん、人気のアトラクションに先に向かってるんだと思う」

「なんか凄いな。俺達も走る？」

「急いだほうがいいと思うけど、走らなくても大丈夫だよ。今スマホで1つは予約していたから」

「え？アトラクションってスマホで予約できるの？」

「うん、中に入ってからしか出来ないんだけど予約できるんだよ」

スマホでアトラクションの予約………思いもつかなかった。

遠足の時はスマホも持ってなかったし、もちろん予約なんかしなかったが、俺の知らないうちにテーマパークの進化が凄い。

「それじゃあ最初にどれ乗ろうか？」

「それじゃあ朝の方が空いてるから1番人気のゴッドサンダーズプラッシュに行ってみようよ」

春香の勧めで足早に目的のアトラクションに向かうがゴッドサンダーとはまるでシルのスキルの様な名前だが本物の凄さは見た者にしか分からないだろう。

「名前からしてジェットコースターなんだよね」

「そう。だけどジェットコースターが最後に水面ギリギリを走るんだよ。乗ったことあるけどあれはすごいよ」

「ふうん、そうなんだ」

遠足の時にはそんな乗り物は無かった気がするので新しく出来たの
だろう。

そもそも両親が余り連れて行ってくれなかったせいだと思うが、俺
の記憶の中にジェットコースターに乗った覚えがほとんど無い。

「……………これ？」

「うん、そうだよ。すごいでしょ」

「なんか高く無い？」

「うんラッターランドの中では2番目の高さだって」

「これで2番目？」

俺の目の前には高層ビルを凌ぐ高さから落ちてくるジェットコース
ターがあった。

ここってラッターをモチーフにしたアトラクションだよ……………
ラッターってこんなに激しい感じじゃ無かったと思うけど。

圧倒されながらも列に並ぶ事にするが既に30分待ちとなっている。

「もう30分待ちなんだな。みんなすごいなあ」

「30分だったらいい方だよ。1番待つ時で3時間ぐらいはかかる
んだよ」

「3時間……………ダンジョンに潜れそうだな」

「海斗、ダンジョンにジェットコースターは無いでしょ」

「うん、そうだね」

どうも最近頭の中の基準がダンジョンになりつつあるので、ちよっ
と良く無い傾向なのは自分でも分かっているのだが、もしかしたら
ダンジョンに潜りすぎなのかもしれない。

それにしても春の快晴の中ジェットコースターを前に春香と順番待

ちをしているなんて、まるでデートのようだ。
もしかして周りの知らない人が見たら恋人のように見えるかもしれない。

「クッッ」

「海斗どうかした？」

「いや、なんでも無いよ。ちょっと妄想に……」

「えっ？」

「いや、ジェットコースターに乗ってるのを想像して」

「うん、楽しみだね」

春香と話しをしているうちに順番が近づいて来て乗り口へ誘導されて行く。

どうやら、ラッターが悪さをして神様から逃げると言う設定のジェットコースターらしいが、ジェットコースターなのに乗り口までエレベーターで運ばれて行く。

「春香、エレベーターで行くんだね」

「うん、そうだよ。スタートからまず落ちるんだよ」

「落ちるんだ……」

俺の知っているジェットコースターは最初低い所から登って行くイメージだが最初から落ちるのか。

初めてのアトラクションに段々緊張して来てしまった。遂に順番が来てゴッドサンダースプラッシュに乗る事になったが、なぜか1番前に乗る事になってしまった。

「春香、1番前になっちゃったんだけど」

「うん、楽しみだよ。私も1番前は初めてだよ」

キャストの人のレッツッターの掛け声と稼働した機械音と共に俺
を乗せたゴッドサンダースプラットシユが進み始めた。

第432話 ゴッドサンダーズプラッシュ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第433話 絶叫

「ぎゃあああああ〜」

スタートして直線に入った瞬間に落ちました。
落ちたような錯覚を覚えるほどに急激に加速して下りに入った。

「ぐぐぐぐぐぐぐ〜」

内臓が……………

出る……………

急激な落下の後に今度は降られながらも徐々に高度を上げて行く。

「ううううううう〜」

スクリーンしながらローリングしている。

なんだこれは……………

俺の知ってるジェットコースターじゃ無い。

激しい……………

鍛えられた俺の動体視力を持ってしても視界がぶれる。

これ家族向けなのか？

必死にバーに捕まりながら春香に目をやると……………

笑っていた。

そこには楽しそうに笑っている春香がいた。

俺がおかしいのか？俺が慣れてないから衝撃を受けてるだけでこれが普通なのか？

スピードを増しながらローリングして行くジェットコースターに乗

りながら頭の中がまとまらない。

「ぐぐぐぐウウ〜」

強烈なGを伴いながらゴッドサンダースプラッシュは更に加速して行く。

一体このジェットコースターはどこまで加速するんだ。
しかも高さが高すぎる。

落ちたら死ぬ。確実に死ぬ。壊れたり脱線したら確実に死ぬ。

ダンジョンでモンスターに追い詰められた時にも匹敵する恐怖感が襲ってくる。

「はははっ」

俺の隣から楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

春香は本当に楽しいようだ、俺は既に必死だ。

数十分にも感じる強烈な加速がようやく終わり徐々に登って行く。

これで終わりだろうと思っただけ気が緩むが、ゴッドサンダー
スプラッシュはどんどん登って行く。

「どれだけ登るんだ……………」

既に中間地点の段階でもものすごく高い。

今まで自分が高所恐怖症だと感じた事は無かったが、今の時点で足
が竦んで恐怖を感じる。

まだか？

レールの最上段が見えてきたので登りはそろそろ終わりそうだが、
もう下を見る事は叶わない。

永遠にも感じた登りは終了したと思った瞬間に今度は一気に落ちた。

「ぐわあああああ〜」

俺はダンジョンでもあげた事のないような叫び声を上げてしまった。
落ちる〜

どこまでも落ちる〜

体の中にある全ての臓器が飛び出す。

死ぬ……………

まだ落ちている。

一体どれだけ落ちるのだろうか。

ダンジョンで落ちたり飛ばされたりもした。

走馬灯のような物も何度か見た。

だが今のこの落下はそれらに勝る。

これは……………家族で乗るもんじゃない。

恋人同士で乗る物でもない。

この乗り物を考えた奴は間違いなく狂っている。狂気の沙汰だ。

「あああああああ〜」

今までに感じた事の無い落下による内臓へのプレッシャーを感じながら、目の前に水面が迫る。
死んだ……………

「ドオツパア〜ン」

強烈な衝撃と共に水面に向かって突っ込んで行き、その瞬間に水しぶきが激しく上がり、最前列だった俺に思いつきりかかった。

「うぶっ!」

やばい。かなり濡れた。この乗り物は一体何だ？

構造的に欠陥があるんじゃないか？
大量の水しぶきを浴びてしばらくすると、終着地点に到着した。

「終わった……………」

「うん、すごく楽しかったね」

「……………うん、そうだね」

春香の表情を見る限り本当に楽しかったようだが、歩いている俺の足がおかしい。

ふわふわして変な感じがする。

「写真だよ。どこにあるかな」

出口のところで写真を売っているが、どうやら俺達に乗っている写真の真のようだ。

「あ……………」

俺はいち早く写真を見つける事に成功したが、そこには楽しそうに笑顔を浮かべる春香とその横には鬼気迫る表情の俺が写っていた。どう考えても人に見せられるような顔では無い。

「海斗、笑顔がないね。途中でカメラがあつたでしょ？あそこで笑顔だよ」

「カメラなんかあつた？気付かなかつたよ」

余裕が無かつたせいかわカメラの存在に全く気がつかなくつた。

ゴッドサンダースプラッシュ、神の雷は伊達ではなく本当に強烈だったが、まだまだ1つ目の乗り物なので、ラッターランドはこれからだ。

ただ、1つ目のアトラクションにして既に疲れを感じてしまっている自分がいた。

第433話 絶叫（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第434話 ラッターシップアドベンチャー

「最初にジェットコースターに乗ったから次はこれにしようよ」

春香がマップで勧めて来たのは、ラッターシップアドベンチャーと言う2人乗りの小型の船に乗りながら、海賊を倒して行くと言うシューティングゲームアトラクションだった。

「ああ、これだったら俺結構得意かも」

「私もこのアトラクション何度かやった事あるから競争しようか」

「それじゃあ、得点が低い方がジューズを奢るのでどう？」

「うん、それいいね。海斗には負けないよ」

10分程歩くと目的のアトラクションに着いたが、やはりここでも30分程の待ち時間があるようだ。

「やっぱりどのアトラクションも行列だな」

「ここは、まだいい方だよ。スマホで予約したところは、普通に並ぶと90分待ちになってるよ」

「人気なんだな。どれを予約したの？」

「それは、行ってみてのお楽しみだよ」

まあ、ラッターランドで人気のアトラクションならどんな乗り物でも楽しいのは間違い無いだろう。

さっきのゴッドサンダースプラッシュは強烈だったが、遊園地もいいもんだな。

映画館は暗いけど明るいところでこうして春香と2人で並んで待っているのは至福の時と言っても過言ではない。

順番が来たので乗り込むが今度のアトラクションは水流で流れて行くようだ。

乗り物に固定された銃で通過して行く海賊に向けてトリガーを引く。

「あつ。結構難しいなあ」

「海斗タイミングだよ。先に敵を確認しておいて来たら撃つんだよ」

「それは分かってるけど」

思ったよりも難しい。

撃つタイミングが遅いのか思ったようにカウントされない。

魔核銃やドラグナーで銃には慣れているので、こういったのには強いかなと思ったが勝手が違う。

襲って来るわけでは無いのでプレッシャーは無いが、2発撃って1発カウントされる感じだ。

今のカウントは15なので普通ぐらいだろうか。

「ガコンッ」

乗っている船に振動があったと思ったたら今度はスピードが増して来た。

「スピードアップした？」

「さっきまでがちょっと登りでここから下りになったんだよ」

ジェットコースターのようなスピード感は無いが、体感だとさっきの倍ぐらいの速さが出ている気がする。

スピードが増した分さっきよりも当たり難くなりカウントのペースが明らかに落ちてきている。

焦って何度もトリガーを引いてみるが、連続で引いても撃ち出すペースは変わらないのかカウントのペースが上がる気配はない。

最後に海賊の船長らしきのが出てきて、飛んだり跳ねたり動き回っているのを狙って撃つがなかなか当たらない。数十回撃ったうちの何発かは当たったとは思いますが、最終的なカウントは62で最終地点に到着した。

「海斗、どうだった？私結構上手く出来た方だと思うな」

「俺は62点だったけど、春香は幾つだった？」

「私はね〜105点だったよ」

「105点!？」

下手をすると俺の倍近いカウントに驚いて春香のカウンターを覗き込んでしまったが、そこには確かに105の数字が表示されていた。負けた……

俺の得意分野だと思ったのに圧倒的に負けた……

「私何度かやった事があるから。初めての時は私も50点ぐらいだったし」

「初めてっていつ頃の話し？」

「多分小学校の1年生の時だったと思うんだけど」

確かに初めてと言うハンデがあったのは確かだと思うが、小学1年生の春香とほぼ同じ点数とはショックだ。

俺が下手なのか春香が上手いのか判断し辛いが探索者としてこのまま終われない。

流星は春香だが今日中になんとか挽回したいところだ。

「ジュース何が良い？」

「それじゃあ、ラッタースカッシュでお願いします」

勝負に負けた事は間違い無いので潔く春香にジュースを奢るが、ラ

ツタースカッシュ思ったより高いな。

普通のカップに入ったジュースが650円もしていた。

俺も自分のを買って一緒に飲んだが流石はラッターランドだ。

第434話 ラッターシップアドベンチャー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第435話 遭遇

ジューズを飲みながら園内を回って見たが、どのアトラクションも混んでいるので、今のうちに早めのランチを取る事にした。

「どこが良いかな」

「天気がいいから外でもいいと思うけど、せっかくだからラッターレストランとかはどうかな」

「じゃあ、そこにしようか」

ラッターレストランとは名前の通りレストランの中にラッター達が出没すると言うラッターファン垂涎のレストランらしいがもちろん俺は行った事はない。

しばらく歩いて行くとラッターの大きなオブジェが飾ってあるラッターレストランに着いた。

「そんなに混んで無いし、座れてよかったね」

「多分あと30分程遅いといっぱいになってたと思うよ。私ちよっとお手洗いに行ってくるね」

「うん」

春香が席を立ったので周りを見てみると、レストランは今お客さんが大体7割ぐらい入ってる感じだが、カップルとファミリーばかりだ。

一人で座っているとなんとなく気後れしてしまい、居心地が悪いので気を紛らわせる意味合いもあり周りをキョロキョロと眺めていると

「おい、高木じゃ無いか？」

「え？ああ、天堂か？」

突然名前を呼ばれてドキツとしてしまったが、声の方を見ると1年生の時に同じクラスだった天堂翔が立っていた。

「やっぱり高木か。なんか服のイメージが違うから別人かと思ったけど、1人でキョロキョロしてるのがいるから気になって見てたら高木っぽかったからな」

「ああ、俺このレストラン初めてだから」

「高木は1人で来てるのか？俺は彼女とデートなんだ」

「ああ、そうなんだ」

天童の隣を見ると同い年ぐらいの女の子が立っているが、見た事ないので同じ高校では無いのかも知れない。

「こっちが俺の彼女の玲。こいつ1年の時に同じクラスだった高木」

この言い方だと同じ学校なのか？

「ああ、よろしく。高木です」

「こんにちは。高木君の事学校で見たことあるよ」

やっぱり同じ高校か。余計な事を言わないで良かった。

「高木はまさか1人でここに来てるのか？お1人様ってやつか？」

「い、いや1人では」

「高木、男1人で来てるからって恥ずかしがる必要は無いだろ。」

人には言えない趣味とかもあるよな。高木はラッターが好きなのか「特にラッターが好きと言う訳では無いけど。来たのも今日で2回目だし」

「いって、学校では言わないで置いてやるから任せとけ」
「本当にそんなんじゃない？」

「別に1人でもいいとは思いますが、やっぱりこう言う所は彼女と来た方がいいよな玲」

「それは彼女がいれば一緒に来た方が楽しいとは思いますが、彼女がいない場合はねえ」

「ああ、すまん。悪気は無かったんだ。ただ俺も玲と付き合いだして初めてのラッターランドでテンションが上がってたんだ。悪い」
「いや、別にそれはいいけど」

まあ、2人共デートで楽しそうだし、俺に彼女がいないのも事実なので特に言う事はないが、何と無く負けた感がある。
確か天堂も1年生の時は彼女はいなかったはずだ。

この1年の間に差がついてしまったのか……

「海斗、お待たせ」

「ああ、全然待って無いよ」

「へっ？え？葛城さん？」

「春香、同じ高校の天堂とその彼女の玲さん」

「あ、海斗と同じ5組の葛城です」

「ああ、葛城さんの事はもちろん知ってるけど、葛城さんがどうしてここに？」

「それは海斗と一緒に遊びに来てるからだよ」

「海斗って高木？だよな」

「もちろんそうだよ」

「え？葛城さん高木とラッターランドに遊びに来たんだ。2人つきりで？」

「うん、そうだけど」

「え？高木1人で来たんじゃないのか？」

「いや、だから1人で来たなんて一言も言ってないだろ」

「あ、ああ、そうだったか」

天堂は春香と俺と一緒にラッターランドに来たのが信じられないのか憮然とした顔で俺と春香を交互に見てくる。

「葛城さんが……………」

「翔、もういいでしょあつちに座りに行くよ。高木君、葛城さんそれじゃあまたね」

天堂は後ろ髪を引かれるように何度もこちらを見ながら彼女に連れられて行ってしまった。

俺と春香の組み合わせがそれ程インパクトがあったのかもしれないが彼女を連れてラッターランドに来ている奴にそんな顔をされる覚えは無い。

玲さんと春香を比べる事は出来ないが、彼女がいると言う時点で天堂は勝ち組だ。

羨ましい……………

第435話 遭遇（後書き）

【読者の皆様へお願い】

レビュー頂きました。ありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第436話 昼食

「やっぱり他にも来てる人いるんだね」

「ああ、びつくりしたよ。急に声かけられたんだけど俺は全然気がつかなかった」

「海斗の場合、隣のテーブルに学校の子がいても気がつかなさそうだけどね」

「いや、さすがに隣は気がつくと思う。それより注文何にしようか」「うーん、いろいろあって迷うけど私はこのラッタッタセットにしようかな」

「あゝそれもいいけど俺にはちょっと少ないから俺はラッタービッグバーガーセットにするよ」

注文を決めるまでは結構時間がかかったが、注文を決めてからはすぐ料理が運ばれてきた。

「おいしいそうだね」

「ラッターバーガーってバンズがラッターの形なのか。女の子受けしそうだけど、ちょっと恥ずかしいな」

「そんな事ないよ。じゃあ食べる前に写真撮るね」

そう言つて春香がスマホで俺のラッターバーガーと俺を写真に収めてくれた。

「そう言えば今日は、あの大きいカメラじゃ無いんだね」

「あれは乗り物に乗るのに邪魔になっちゃうから、今日はスマホでまだあんまり写真撮ってないからご飯食べたらいっぱい写真撮ろうね」

「うん、お願いします。じゃあそろそろ食べようか。いただきます」
初めて食べたラッターバーガーは大きいだけで、普段食べるとそれ程美味しいとは感じないレベルの食べ物だったとは思うが、春香と一緒に食べている今は本当に美味しく感じてしまふ。

俺の舌が単純なのか春香と一緒にいれば何でも美味しく感じるのかもしれない。

俺も春香がラッタッタセットを食べているのをスマホで写真に収めたが、かわいい……

「この後どうしようか」

「うん、朝予約したヘブンズフォールラッターに行こうと思うんだけど」

「ああ、朝スマホで予約してたアトラクションか。じゃあそれ行こうか」

食事を終えて席を立とうとする頃には、既に待ちの行列が出来ていたので早めに入ったのは正解だったようだ。

マップで確認するとヘブンズフォールラッターは1番奥にあり、結構歩かなければならないようなので食後の運動に丁度良さそうだ。

「春香は次のアトラクションに乗った事あるの？」

「私も初めてだよ。去年新しく出来てすごい人気みたいだから」

「そうなんだ。それは楽しみだな」

15分程歩くとアトラクションの全景が見えてきた。

「あ、あれ？あれがエンジェルフォールラッター？」

「ううん、あれがヘブンズフォールラッターだと思う」

「……………」

目の前に広がっていたのは巨大なジェットコースターのレーンだ。正直エンジェルだろうがヘブンズだろうが関係無いレベルででかい。

「なんか大きく無いか？」

「うん、ラッターランド最大だつて」

「なんか高く無いか？」

「うん、日本最大級の高さで落差があるんだつて」

「朝に乗ったゴッドサンダースプラッシュより大きいよね」

「うん、当社比2倍みたいに書いてたと思う」

当社比2倍つて洗剤とかじゃ無いんだから……

「春香、結構激しそうだけど大丈夫？」

「うん、大丈夫。楽しみだね」

どうやら春香は絶叫系の乗り物は全然大丈夫のようだが、今過ぎ去って行ったジェットコースターは足が宙ぶらりんでぐるぐる回っている。

TVであんな感じのコースターを罰ゲームとかで乗ってるのを見た事がある気がする。

「それじゃあこつちだよ」

春香に案内されて、スマホ画面を提示すると行列が出来ている脇を抜けてすぐに搭乗口まで辿り付く事が出来た。

「皆さま、これから天国体験です。今までにない新しい世界への扉が開きます。レッツラッターでスタートします。それでは、ひとときのヘブンズフォールをお楽しみください」

キャストの人の案内で乗り込む事になったが、なぜかまた一番前だ。しかも足がぶらぶらした状態だが、本当にこれで大丈夫なのか？
そもそも靴って脱げたりしないのか？

「それでは皆さん、レッツラッター！」

第436話 昼食（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第437話 天国体験

キャストの人の掛け声と共にヘブンズフォーオールラッターは動き出したが、動いたと思った次の瞬間強烈なGを伴い加速した。は、はやい……

今までの人生で経験した事が無いような加速感だ。

ゴッドサンダースプラッシュの落下も激しかったがそれとはまた違う加速感。

「ぐうぐうぐう」

強烈な加速で押し出された勢いのまま宙ぶらりんの状態で一気に最上段まで運ばれ、次の瞬間に落ちながらローリングしている。

「おおう」

ルシールの『エレメンタルブラスト』でもここ迄の威力は再現出来ないかもしれない。

落ちながら回ると言う新感覚だ。

回り続けながら今度は縦回転に移行してぐるぐる回って行くが同時に俺の内臓がシェイクされて行く。

お昼に食べたラッターバーガーも胃腸を飛び超えてシェイクされている。

どう考えても食事後すぐに乗るような乗り物では無い。

完全に選択ミスを犯してしまったようだ。

重力に顔の動きを障害されながらも、目線を動かして横の春香を見て見たが、笑っている。

何と楽しそうに笑っているではないか。

この状況にもかかわらず天使のような笑顔を浮かべている。
この瞬間俺は悟った。

俺は絶叫マシーンが苦手だ。もしかしたら両親と遊園地に行った記憶が無いのは、両親も苦手だったのかも知れない。

小学生の遠足の時は、テンションが上がっていたのか、それとも記憶にないだけで乗れる乗り物を限定されていたのかも知れない。

そしてこの笑顔を見る限り春香は絶叫マシーンが得意というか好きなのだろう。

今更この状況でどうしようも無い事に気がついてしまったが、今の時怖いものは怖い！

「うっわあああ〜」

春香が横にいたので絶叫する事は出来ない。極限まで声を押し殺すが、口から音が漏れてしまう。

俺の都合など考慮してくれるはずもなくヘブンズフォールラッターは、更に加速を続ける。

俺の足が空中に浮いている。

俺はこの時改めて気がついた。

人間は地上から離れては生きていけないのだと。

しっかりと地に足をつけて生きていかなければいけないのだと。

進行方向を見ると撮影用のカメラが見える。

朝の失敗を繰り返す訳にはいけないので、必死で顔の筋肉を動かして笑顔を作る。

それと同時にカメラの前を過ぎ去って行く。

俺は成し遂げた。朝の失敗から学び写真に笑顔で写ることに成功したと思うが、成功の余韻に浸る暇もなくクライマックスが訪れた。

最後は横回転を続けながらの縦の大回転が待ち構えていた。

横回転と縦回転が同時に襲ってくるが、こんなの見た事無い。

「ふつふつう〜」

内臓という内臓が全方位から圧力を受け、口から変な音と共に肺の中の空気も押し出されて行く。

ゴッドサンダー・スプラッシュを作った人もおかしいのかと思ったが、ヘブンズフォールラッターを作った人も正常とは思えない。狂っている。

テーマパークのコンセプトから完全に外れている。これをファミリィで乗る人の気が知れない。

コンセプトの1つである夢の国だが、これに乗ると違う国に行けそうだ。

必死で肩口のバーにしがみついて回転に耐えているうちにようやく終了を迎える事が出来た。

「皆さま〜ん。天国体験できましたか〜またのお越しをお待ちしております」

と場違いな程に明るく元気なキャストの声と共に固定バーを外されて俺はこの天国体験から解放された。

「海斗、すごかったね。空いてたらもう1回乗りたいぐらいだよ」

「ああ……そう、だね」

「海斗はどうだった？」

「う、うん。楽しかったよ」

「あ〜写真だよ」

ふわふわする足を押さえ込み出口を歩いて行くと先程撮られた写真が並んでいた。

今度は大丈夫なはずなので余裕を持って写真を探してみる。

「海斗、ちよつと表情が固くない？」

春香に言われて見ている写真を確認したが、残念ながら俺の顔は笑顔を書いてはいなかった。

そこに写っていた俺は、確かに口角が少し上がっているのが見取れるが、目は全く笑っていないかった。

あれ程頑張った笑顔を作る努力は完全に失敗に終わっただらしい。

第437話 天国体験（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第438話　メリーゴーランド

何とかヘブンズフォーラッターを終えて次のアトラクションに向かう事にする。

「海斗、なんとなく元気がない気がするんだけど大丈夫？」

「うん……全然大丈夫。気のせいだよ」

「そう、それなら良いけど、楽しくなかった？」

「いやいや、楽しかったよ。春香は結構ジェットコースターとか好きなの？」

「うん、そんなによく乗る訳じゃないけど、楽しいから好きだよ」

「そう。楽しんでくれて良かったよ。ジェットコースターはさっきので十分楽しんだから後は違うのに乗らない？」

「うん、そうしようか」

上手く話しをしてジェットコースター以外の乗り物に乗る事になったのでもう安心だ。

しばらく歩いてアトラクションの前に着いた。

「これ？」

「うん、これだよ。ゆっくりしてるしいいでしょう」

目の前にはメリーゴーランドが現れた。

メリーゴーランドに乗るのはいつ以来だろう。

空いていたのですぐに乗る事が出来たが、俺が乗る事になったのは白い木馬で春香も同じく木馬に乗る事になった。

音楽が始まり、ゆっくりとメリーゴーランドが回り始めた。

今までのアトラクションとは全く違い、身の危険は一切感じないし、

ゆつたりと乗る事が出来ているが、楽しいというより単純に恥ずかしい。

春香が木馬に乗っている姿は絵になるが、俺が木馬で回る様はなんとも言えない感じで、周囲の人達も俺の事など見て無いのはわかっているが、とにかく気恥ずかしい。

ジェットコースターは人の目は気にならなかったが、メリーゴーランドがこんなにも人の目になる乗り物だとは思わなかった。

小さな子供を連れた家族が乗っているのを見ると本当に幸せな感じでほっこりするが、自意識過剰なのか俺の周りだけ変な空気が支配している気がする。

「海斗、楽しいね」

「あ、ああ、うん」

春香が手を振ってくるので俺も遠慮がちに手を振り返す。春香は本当に楽しそうに乗っている。馬上の春香はメルヘンの世界から抜け出したプリンセスのようで笑顔が眩しいが、俺は……

間違っても天堂とかに見られたくは無いなと思いつつ、伏し目がちに周囲を見回すとそこに天堂達がいた……

天堂としっかりと目があってしまった。

さっきのも完全に見られていたと思う。

一気に顔に血液が集中していくのが分かるが今更どうしようもない。

「海斗」

春香が再び俺に向かって手を振ってくれる。

恥ずかしいが俺には春香を無視する事など出来るはずがないので、天堂から見えないよう意識して小さく手を振って返した。

あ、恥ずかしい！早く終わって欲しい。

ジェットコースターの時も早く終わって欲しかったが、今回は違っ

た意味で早く終わって欲しい。

何周目かを終えた時に徐々に回転する速度が遅くなり、メリーゴーランドが止まった。

天堂はこれから乗るのだと思うが、お互いに見られたいものでも無いだろうからそのまま声をかけずに去る事にした。

「やっぱりメリーゴーランドは良いよね」

「うん。ジェットコースターとは違った感じだった……」

食後に乗るならヘブンズフォールラッターよりもメリーゴーランドを先に乗った方が良かったと思うので、順番を間違えた。

その後も緩やかな乗り物に幾つか乗ってる内に時間は過ぎて夕方になってしまったので、次のアトラクションで帰る事となった。

最後のアトラクションはリアルホラーハウス。

名前のどこにもラッターが出て来ない上にリアルがついているのが少し気になる。

所謂お化け屋敷だと思うが、ファミリー向けであればそこまで怖くは無いはずだ。

「春香はお化け屋敷とか大丈夫？」

「大丈夫というかお化けは普通に怖いよ。海斗は？」

「よく考えると俺お化け屋敷入るの初めてかも知れないけど、普段ダンジョンに潜ってるから大丈夫じゃ無いかな」

そう話しながら人生初となるお化け屋敷の入り口を2人でくぐった。

第438話 メリーゴーランド（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第439話 お化け屋敷

初めてのお化け屋敷だが当然テレビとかでは観た事があるので大体のイメージはある。妖怪の人形や装置が飛び出てきたりするはずなので落ち着いて進めば問題ないはずだ。

「暗いな……」

薄暗いというよりも真っ暗に近い。

進む方向が分かる様に通路沿いに所々灯りがついているものの光量は微々たるものだ。

暗い中をゆつくりと春香と並んで進んでいくが、暗いだけで特に何も起こらない。

「春香、何も起こらないんだけど、お化け屋敷ってこんな感じなの？」

「うーん、多分もう少ししたら何か出てくると思うけど」

春香と話していると肩を後ろからトントン叩かれたので、俺は後ろのお客さんかと思い振り向いた。

「どうかしました？」

そこには若い女の人が1人で立っていたが、俺が振り向いて声をかけた瞬間その女の人の首がポロツと落ちた。

「え？あ、あああああああ〜」

「きゃああああ〜」

至って普通に見えた女の人の頭がなんの前触れもなく突然落ちたのだ。

衝撃以外の何者でも無い。

春香と俺は叫びながら、全速力でその場から逃げ出した。

「大丈夫ですか？」

今度は逃げ出した前方から男の人の声が聞こえて来た。

「ああ、びっくりしたけど大丈夫です」

「そうですか、それではまだ足りませんね」

「え？何がですか」

声の主が近づいて来たが、様子がおかしい。

妙にシルエットが小さい気がする。

暗闇の中を近づいて来るシルエットを良く見ていると頭が無い。頭を手を持った男の人が近づいて来ていた。

「きゃああああ〜」

「きゃあああああ〜」

再び俺と春香は叫び声を上げながら男性の脇を抜けて奥へと走った。

「春香……。俺の思ったとお化け屋敷と何かイメージが違うんだけど」

「うん。怖すぎるよね。私もお化け屋敷とかは大丈夫な方だと思っ
てたけど、これは怖いよ」

妖怪とかなら作り物だと笑う自信もあったが、普通の人がお化けとして出て来るのがこんなに怖いとは思わなかった。
これ子供は絶対無理なやつだ。トラウマになりかねない。

「何か音がしない？」

春香が声をかけて来たので耳を澄ますと確かに何かの音がする。
ズルズル擦った様な音が前方の脇から聞こえてくる。

進んで行くとそこには、ダンジョンで足を掴まれた黒髪のゲールを連想させる黒髪の着物を着た人が地面をズルズルとこちらに向かって来ていた。

不気味だがこれは大丈夫そうだ。
そう思った俺がバカだった。

「憎い……憎い……憎い。ああああああ〜」

突然目の前の人が入つん這いになったかと思うと奇声を上げて四肢を使い猛然とこちらにダッシュをかけて来たのだ。

「うあああああああ〜」

「きゃあああああ〜」

俺と春香は3度一目散に逃げ出した。

余りに怖かったのか、逃げている途中気がつくくと春香が俺の手を握っており、普段で有れば、嬉しいとか恥ずかしいとかの感情が生まれるシーンだったと思うが、恐怖感が勝り逃げる事に頭と感情のリリースの大半が割かれてしまい、それどころではなかった。

「はあ、はあ。リアルホラーハウスってリアル過ぎないか？」

「あれってロボットか何かかな。四つん這いで走って来たよ？あん

「なの人間には無理だよな」

びびりながら出口を目指すが、進む先にはまたしても着物姿の女の人が立っている。

「また4つ足で向かって来るのか？」

「そう思い身構えていると、こちらに向かって移動を始めたようだが今度は下半身がおかしい。」

よく見ると下半身が蜘蛛の姿をしている。

「見ている間に顔も化け物の姿に変化し4つ足どころか8つ足で迫って来た。」

「あああああああ〜」

「きゃあああああ〜」

俺は4度春香と手を繋いだまま逃げ出したが、走っていくと先に出口の灯りが見えて来たのでそのまままで一気に走って出た。

人で攻めて来て最後に化け物を持って来るとは怖すぎる。

ダンジョンで慣れていると思ったが、ダンジョンよりも遥かに怖かった。

人為的に人を怖がらせる為に作ったホラーハウスは、ダンジョンを遥かに凌駕していた。

「怖かったな〜。今日1番怖かった」

「うん、これは1人では無理だよ。海斗と一緒にじゃなきゃ絶対無理だったよ」

「ラッターランドは、暫く来てないうちに凄い事になっていた。」

「絶叫マシーンで始まり、絶叫のホラーハウスで1日を終える事となったが、流石の春香もホラーハウスには衝撃を受けたようでラッターランドを出るまでずっと俺と手を繋いだままだった。」

そこからラッターランドを出るまで俺の心臓の鼓動は、ヘブンズフ
ォールラッターに乗っている時よりも激しく早く動いていた。
お化け屋敷効果により初めて繋いだ春香の手は少し小さめで思った
以上に柔らかかった。

もうこれだけで今日ラッターランドに来た意味が十二分にあったと
言い切れる。

ラッター様ありがとう。きっとラッターランドはこの為に存在して
いたに違いない。

刺激は強めだったが、春香と2人で周るテーマパークは小学3年生
の時の遠足とは比較にならない程に楽しく印象的だった。

絶叫マシーンは当分乗りたくないが、お化け屋敷は機会があれば春
香とまた一緒に行ってみたい。

第439話 お化け屋敷（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第440話 最強の剣

昨日は絶叫の連続だったが、僅かな時間だったとしても最後は春香との距離が少し縮まったような気がするので、ラッターランドに行った事は良かったと思う。

ただ昨日は力を使い果たしてしまいバルザードを引き取りにいけなかったので朝一番でおっさんの店に向かう。

「おはようございます。直りましたか？」

「あゝ？直りましたかって直ったに決まってるだろ。誰が研いだと思ってるんだよ。この通りだぜ」

おっさんから渡されたバルザードを見ると刃こぼれは完全に直っている。

「おおっ、直ってる」

「当たり前だろ。けどな直ったって言っても元に戻ったわけじゃね〜からな。刃を研ぐって事は刃をそれだけ削ったって事だからな。これを繰り返すと当然強度は落ちて来るから無茶すんじゃね〜ぞ」

「分かりました。ありがとうございます」

俺は代金の20万円を支払ってからダンジョンへと向かうと既に他のメンバーが揃っていた。

「海斗、バルザードは直ったの？」

「ああこの通りだ」

「ふ〜ん、綺麗に直るものね。全然分からなくなってるわね」

「おっさんがちゃんと仕事をしてくれたみたいだよ。だけどカメラ

と龍は思いの外武器への負担が大きいみたいだからな。特にカメラの対策が必要だよな」

「残念だけど魔法耐性も高いみたいだから私は出来て足止めぐらいね」

「カメラを倒すには、シルカルシエに頼るか、俺がやったみたいに下方に潜り込んでの一撃が有効だとは思うけど、仕留め損なって下敷きになるのが怖いんだよな」

「それならベルリアと一緒に潜り込むのが良いんじゃないか？ベルリアの力があれば最悪支えてくれるんじゃないか？」

「そうですね。それじゃあカメラが出た時はベルリアとペアで対処する事にしましょうか」

大まかな打ち合わせをしてから俺達は15階層へ向かった。

2日間休んだのでリフレッシュしてみんな調子が良さそうにしているが、俺だけは少し勝手が違った。

途中ペガサスなどのモンスターにも遭遇したが、俺だけいつもよりMPの消費が早くなってしまっている。

バルザードの損傷を気にして剣を振るう度に切断のイメージを重ねてしまっているせいで普段よりも余分に

MPを消費してしまっている。

MPがそれ程多く無い俺にとっては、結構な問題だがどうしてもバルザードを庇ってしまう。

「ご主人様、調子がお悪いのでしょうか？剣の捌きに迷いがある様に感じられるのですが」

「……流石シルはよく見てるな。実は、バルザードがまた欠けるんじゃないかと思っただら中々な」

「やはり、そうでしたか。ご主人様、そんな事は全く問題になりません。私とルシエをもっとお使い下さい」

「え？」

「ご主人様の剣はバルザードだけではありません。私とルシエもご主人様の剣であり盾なのです。バルザードが使えないのであれば私達をお使いください。私達は決して欠ける事はありません。安心してもつとお使い下さい」

「海斗、デートのしすぎでボケたのか？バルザードなんかただの魔剣。ただの剣にしか過ぎないのに何気を使ってるんだ。バカなのか。例えばルザードが折れたってわたし達がいるだろう。お前には過ぎた剣が2本もいるだろ。本当にポンコツだな。脳みそ腐ってんじゃ無いぞ」

「2人共……。そうだな、俺にはシルとルシエがいる。確かに最強の剣だな。はは……。それじゃあ次から俺の剣としてどんどん戦ってもらおうかな」

「もらおうかなじゃ無い！わたしが戦ってやるんだよ。感謝しろよ！それで魔核をもつとくれよ」

「ご主人様、私達の力はご主人様の力です。ご主人様のお考えも分かかりますが、私達を使ってこそご主人様の力を最大限発揮する事になるのでは無いでしょうか」

「ああ、そうだな。シルも次から頼んだ」

俺は本当にサーバントに恵まれた。

頼り無い俺を2人がサポートしてくれる。

2人の言う通り俺は最強の剣を2本持っている。例えばバルザードが折れたとしても、既にそれ以上の剣を2本も持っていたのだ。

その事に気がつくのと、バルザードを振るう時に躊躇していた感覚が急に薄らいで行くのを感じた。

「マイロード、私もいます」

ああ、そうだった。俺の剣は2本じゃなくて3本だった……

第440話 最強の剣（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第441話 3本の剣

そこからの探索は少しフォーメーションを変更した。

今まで常に後ろに控えさせていたシルとルシェを中衛に置く事にした。

魔核の効率は落ちるが、火力を重視した形だ。

他のメンバーも俺とシル達のやり取りを聞いていたのでフォーメーションの変更はスムーズにいったが、3人共シル達にいたく感銘を受けたとしきりに呟いていたのが少し気になった。

「ご主人様、敵モンスター2体です」

「それじゃあ、1体はシルとルシェでもう1体は他のメンバーでいこう」

そのまま進んで行くと緑と赤の下級龍が1体ずつ現れたので、すぐに交戦に入る。

カオリンが「アースウェイブ」を緑の下級龍にかけ動きを封じる。

そのタイミングでベルリアとあいりさんが駆けていく。

俺もバルザードの斬撃でプレスを阻害しようと身構えるが、ミクの火球が先に着弾して火球龍の口が開くのを防ぐ。

隣では赤い下級龍に向かってルシェが攻撃を放つ。

「ようやくだな。退屈だったんだ。あゝストレス溜まった。赤いの目障りなんだよ。さっさと消えろ『破滅の獄炎』」

魔法耐性が強くミクやヒカリンの火系の魔法でダメージを与える事が出来なかった下級龍だが、ルシェの獄炎によりあっという間に消し炭と化してしまった。

単純な火力量の問題なのかそれとも炎の質なのかやはりルシエの魔法は別格だった。
赤い下級龍が消滅するのとはほぼ同時に緑の火球龍の首もあいりさんの斬鉄撃により落とされた。

「海斗、腹が減った」

「わかってるよ」

うるさいルシエに魔核を渡すが、拗ねないようにシルにも同数を渡す。

圧倒的に攻略は楽になったが、やはり魔核が減っていく。

このままのペースで潜り続けると事前に貯めた分が全部無くなってしまうかもしれない。

剣であるシルとルシエを養うのも主である俺の役目なので魔核集めはこれからも一切手を抜く事は出来ない。

「海斗さん、ルシエ様の炎は下級龍に通用してたじや無いですか。

私の魔法が効かないのは威力が足りないのでしょうか？」

「いや、ヒカリンの魔法はかなりの物だと思っけどな。俺とじや比較にもならないし。ルシエを基準に考えると中々難しいよな」

「次は爆発させてみてもいいですか？」

「あれは場所と状況次第だからな。安全の為にも出来るだけ使わない方がいいと思う」

「そうですね……」

俺達は更に進んで行き、順調に1/2の位置までマッピングに成功している。

「ご主人様、敵モンスターですが5体です。今までより数が多いのでお気をつけ下さい」

「多いな。シルも前に出てくれ」

進んで行くとカメラが3体に大こうもりが1体、下級龍が1体の5体が待ち受けていた。

「シル、雷撃で大こうもりを先に仕留めてくれ！」

「かしこまりました。こうもりはお任せ下さい『神の雷撃』」

一番に気をつけるべきはこうもりの超音波攻撃なので、速攻でシルの雷撃で落してもらおう。

「ルシエ、カメラいけそうか？」

「は？誰に言ってるの？バカにしてるのか？いけるに決まってるだろ。気でも狂ったのか？」

「あゝそれじゃあとろあえず1体頼んだぞ」

「別に1体じゃなくて全部でもいいけどな。それじゃあやるぞ。鈍い亀は目障りなんだよ。くるくる回ってるんじゃないぞ。さっさと消えろ『侵食の息吹』」

ルシエの攻撃発動と共に真ん中のカメラの回転が止まり地面に落ちたと同時に溶け始めた。

精神汚染と共に身体が溶ける。

ルシエによる『侵食の息吹』はカメラにも問題無く効果を発揮したがやはりエグい。間違ってもくらいたくは無い。

真ん中のカメラの消失を見届けると同時に俺とあいりさんは下級龍に向かって行き、ベルリアはカメラへと向かって行く。

俺はあいりさんの一撃をサポートすべく、下級龍の牽制をする。

ブレスにさえ気をつけていれば、下級龍にはもうそれ程苦戦しなくなっている上にヒカリンとミクが動きを妨害してくれているので安心して戦うことが出来ている。

距離感だけは間違えない様に気を配りバルザードを振り下級龍を
追い詰めて行く。

第441話 3本の剣（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第442話 頑張れベルリア

下級龍の注意すべき点は、足の短さに似合わない高速移動とプレスによる攻撃だが、どちらもミクとヒカリンにより封じ込めているので怖さはそれ程無いが外皮が硬い事には変わりはない。

俺はいりさんの『斬鉄撃』を放つ隙を作るべく、移動を繰り返しながら届くか届かないかぐらいのギリギリの位置まで迫ってからバルザードを振るう。

俺が倒す必要はないので注意を引く様に少し大振りに剣を振るうが、相手もそれなりのサイズのモンスターなので結構な迫力がある。ただラッターランドのリアルモンスターハウスの最後に出て来たモンスターの方が何倍も怖かった。

「やあああああ〜」

あいりさんの気合いの声の後方からすると同時に薙刀の一撃が下級龍の首を刈り取った。

残るはカメラ2体だがベルリアが1人で果敢に攻撃を仕掛けているが回転するカメラは鉄壁とも言える防御力でベルリアの2刀を阻んでいる。

「ベルリア下がれ！シル、ルシエ頼んだぞ！」

「くるくる回っているだけで私の攻撃が避けられるはずがないですよ」『神の雷撃』

「さっさと消えろ。くるくる目障りなんだよ。焼けて無くなれ『破壊の獄炎』」

俺の指示に反応して、シルとルシエがほぼ同時にスキルを発動して目の前のカメラに雷と炎が降り注いだ。

炎への耐性を見せていたカメラだが、ルシエの獄炎の前には無力だった。炎が立ち昇ると同時に燃え始め瞬時に灰と化した。同じくシルの雷もカメラの魔法耐性を無効化して一瞬でカメラを灰に変えてしまった。

「凄いな。カメラも一撃か……。2人共流石だな。ベルリアは次頑張ろうか」

「マイロード次は必ず仕留めてみせます」

「まあ、得手不得手があるからな。とりあえず魔核を集めて来てくれ」

「はい、お任せ下さい」

俺達があれだけ苦戦したカメラだがシルとルシエには全く問題にならなかった。流石は最強の剣。

ベルリアが魔核を回収するのを待ってから2人にスライムの魔核を渡してから進んで行く。

「海斗さん、結局土日はどこに行っただんですか？」

「ああ、ヒカリン達にノープランはダメだって言われたから土曜日は映画に行っただけ、日曜日はラッターランドへ行って来たよ」

「ラッターランドですか。私も小さい時はよく連れて行ってもらったのです。最近は何も行ってませんが……」

「それでどうだったのよ。彼女とうまく行ったの？」

「いや彼女じゃないけどな。それが俺も小学校以来だったんだけどかなり凄かったよ」

「凄かったってどうだったのよ」

「それが乗り物は激しすぎるし、お化け屋敷は怖すぎるし、とてもじゃないけどファミリー向けとは思えなかった。夢の国って言うより悪夢の国に近かったかも」

「それじゃあ楽しく無かったのね」

「いや物凄く楽しかったよ。俺どうやら絶叫系の乗り物は苦手だったみたいで、ほとんど死にそうだったけどね」

「楽しくてよかったですね。それはともかく海斗さんはあれだけダンジョンでも飛んだり落ちたりしてるのに絶叫系ダメなのですか？」

「ああ、俺も大丈夫だと思ってたんだけど乗ったら全くダメだった。それにあそこのお化け屋敷はやばいよ。春香と2人で本気でびびった」

「海斗はそれなのに凄く楽しかったのか？」

「はい、春香と一緒にだったんで物凄く楽しかったですよ」

「そうか。ベタ惚れというか、お花畑というか、まあ良かったな」

「海斗さん次の土日もデートなんですよ。行く場所決めたのですか？」

「デートではないけど、まだ決めてないよ。今度はあんまり激しくない所を考えてみるよ」

「ラッターランドは楽しかったが、どう考えても頻繁に行くものではない事が分かったので当分もう行かないつもりだ。

来週は絶叫しない場所に行きたいと思う。」

第442話 頑張れベルリア（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第443話 再来

「コンッ、コンッ」

「ヒカリン風邪でもひいた？先週も少し咳してなかった？」

「いえ、大丈夫なのです。季節の変わり目で少し調子を崩しただけです」

「そう、じゃあ無理せず行こうか」

順調に進んでいるが、ヒカリンが少し風邪気味の様なので様子を見ながら進んで行こうと思う。

先週も咳していた気がするのでちょっと心配だ。

「海斗、もう半分は超えてるから今週中に16階層に行けそうじゃない？」

「ああ、そうだな。トラブルが無ければ行けそうな気がするな」

いつに無く順調に進んでいるので、この後1時間程探索してきりの良いところで切り上げた。

家に帰ると既に食事の用意が出来ており、今日の晩ご飯は唐揚げだった。

1日ダンジョンに潜ってカロリーを消費した体には唐揚げはぴったりでおかわりをしてしまった。

週の始まりの日なので今日はそれ程疲労していないが、明日に備えて23時には就寝した。

翌朝になり7時に目を覚ましてから身支度をして再びダンジョンへと向かう。

「それじゃあ、今日も一日頑張ろう」

「後4日連続で潜るから無理しない様に行きましょうね」

「ヒカリン体調は？」

「はい、大丈夫です。コホッ」

残念ながらヒカリンの風邪はまだ完全には治ってない様なので今日もペースを考えながら進みたい。

朝から15階層を進み3時間30分程で昨日のマッピングエリア迄来る事が出来た。

カメラとも何度か交戦したが、昨日同様シルとルシエに積極的に攻撃させる事で問題無く進む事が出来ている

「ここからは初めてのエリアになるから注意して行こう」

カメラとは違うモンスターが出てくる可能性もあるので注意しながら進んで行くが、全体の1/2を超えた辺りから分岐が増えてルートの選定が難しくなっている。

ゲームの様に俯瞰して全体を上から見れる訳ではないので、正解ルートに出るまで順番に全てのルートをあたって行くしかない。

「ご主人様、今度は2体です。この奥にいます」

「じゃあ、このままのフォーメーションで当たろうか」

シルとルシエを中衛に据えたまま進んでいくと、そこには今までに出現した事の無いモンスターが現れた。

「あれって、まさか……………」

「どうしたの？あのモンスター初めてだと思っけど何かあるの？」

「あ、ああ……………」

そのモンスターを見ると急に恐怖心が襲って来た。

「海斗どうしたんだ。おかしいぞ、調子でも悪いのか？」

「いえ、ただあのモンスターなんですけどラッターランドのお化け屋敷にいたモンスターにそっくりなんです」

「あれは恐らくアラクネだと思うが、大丈夫か？」

「お化け屋敷では、怖すぎたんですけど、あれはダンジョンのモンスターを参考にしてたのか……………」

俺達の前に現れたのは、リアルホラーハウスのラスボスともいうべき蜘蛛の下半身に上半身が人間のモンスターそのものだった。

恐らく普通に出会っていればそこまで特別なモンスターでは無いのだと思うが、リアルホラーハウスの印象が強く残っているせいでいつにも増してプレッシャーを感じてしまう。

プレッシャーで俺が動きを止めている間にもこちらを認識したアラクネ2体が向かって来ているのを見てベルリアとあいりさんがすぐに飛び出して迎撃に向かう。

俺は一呼吸遅れてしまったが、気持ちを立て直して他のメンバーにも指示を出す。

「ミク、スナッチで左側の足止めを、ヒカリンは『アースウェイブ』を右側のアラクネに頼んだ」

ヒカリンが俺の指示と同時に『アースウェイブ』を唱えたが、アラクネは8本の足ですぐ様跳躍して足下のぬかるみを回避してしまっ

た。

速い！
下半身が蜘蛛のモンスターは思っていた以上に8本の足で俊敏に動ける様だ。

「ヒカリン、『ファイアボルト』に切り替えてくれ」

俺もあいりさんのサポートに入るべく、右側のモンスターへと駆けていくが、見るとあいりさんが縦横無尽に移動するアラクネを捉え切れずに距離を詰め切れていない。

その状況に反応し、俺は走りながらナイトブリンガーの効果を発動して気配を薄めた。

第443話 再来（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第444話 アラクネ

アラクネは2体いるので左側の個体はサーバント達に任せて俺は右側の個体に向かって行くが、スピードと動きが蜘蛛ならではのイレギュラーな物で上手く追尾出来ない。

先に行くあいりさんも同じ状況に陥っているが、突然移動を繰り返しているアラクネのお尻の部分からあいりさんに向かって何かが放出された。

「うわあっ!!」

放出されたものは、そのままあいりさんに命中し、その瞬間あいりさんが走りながらバタツと倒れた。

何だ？

俺は後方から走りながらあいりさんの元に急ぐ。

「あいりさん！大丈夫ですか？」

「ああ、私のことよりアラクネを追ってくれ」

あいりさんを見ると半透明の粘着性の物が全身に付着して動けなくなっていた。

糸か！

どうやらアラクネは糸をネットの様に放出して、とりもちの様にあいりさんの動きを封じ込めてしまったみたいだ。

今の所命には別状がなさそうなので、糸自体に殺傷能力があるわけでは無いようだ。

ただ動きを止める為のネットの様だが、ソロであればこれだけで詰んでしまうので戦闘時の効果は計り知れない。

長く止まると俺も糸をくろう可能性があるんで、気にはなつたがぁ
いりさんを残してアラクネに向かう。

俺は糸の攻撃を警戒して、少し距離がある状態から『ドラグナー』
を放つが、信じられない事にアラクネは一気に数メートル飛び上が
って避けた。

「これを避けるのか」

『ドラグナー』の一撃を完全に避けられたのはこれが初めてだが、
驚きと共に妙に納得してしまう自分がある。

流石はリアルホラーハウスの主……………

『ボンッ』

俺が妙な納得をしている間にミクの火球がアラクネの胴体を捕らえ
る。

胴体に命中した火球はアラクネの胴体に生えていた生毛の様なもの
に引火して、瞬間的に燃え上がったものの蜘蛛の外殻を破る事は出
来なかつた様で、アラクネはそのまま移動を続けている。

もう1体のアラクネはベルリアが追いついて既に交戦をしていたが
2刀のベルリアに対してアラクネは8本の足で対抗している。

強靱な8本の足は、さながら8刀流だが、ベルリアが技術で勝利押
し込んでいっている様に見える。

俺は自分の相手に集中し直して走る速度を上げるが、さっき声をあ
げたせいである程度場所を把握されているのか、俺に向かって前方
を走っているアラクネが粘糸のネットを放出して来た。

俺自身の速度も上がっているので向かってくる糸のネットのスピー
ドはかなりのものとなっていたが、アサシンの効果ではつきりとこ
ちらに向かつて飛んでくるのが見える。

いつもは、ほんの少しだけ相手の動きが遅く見えるだけなのだが、

今は完全にネットの動きが見えている。

アサシンの効果で動きが見えても俺の動きが速くなった訳ではないので視覚情報を元に一刻も早く動き出さなければならぬが、目の前に迫って来た糸はネット状に広がり思った以上に逃げ場が無い。

やばい！

俺は必死に避ける為に動き始めるが、動いたその瞬間いつもとは違う感覚に襲われた。

普段はゆっくりと見える風景の中をゆっくりな俺が先手を取り必死に動く様な感覚だが、今は周りの景色はいつも以上にゆっくりと迫ってくるが動いた俺の身体は、普通で動いているイメージだ。つまり周りがゆっくり動いている中を俺だけが普通のスピードで動いている感覚。俺だけが違う時間軸で動いている様な違和感を感じながら身体を動かすと、難なくアラクネの粘糸のネットを避ける事が出来た。

「なんだ……今の」

今一瞬の事ではあったが、明らかに俺の移動速度は周りの時間経過よりも速かった……。

まだだ！

ネットを躲したがアラクネにダメージを与えた訳ではないので、すぐ様バルザードを構え直して距離を詰めるべく前方へと踏み出した。

第444話 アラクネ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第445話 アラクネ撃退

糸のネットを放出したアラクネは、その瞬間動きを止めており俺が踏み込んだ一歩分距離が詰まる。

距離が詰まった状態からバルザードを振るいアラクネの上半身に向けて斬撃を飛ばす。

この一撃で仕留められるとは思っていない。

斬撃を放つたと同時に斬撃を追うように俺自身も更に前に踏み込んで行き、バルザードの斬撃が命中してアラクネが怯んでいる内に完全に距離を詰めた。

「ドウツ！」

俺は、ほぼゼロ距離から『ドラグナー』を放った。

先程は離れた距離からだったので避けられたが、この距離からなら避けるのは不可能だ。

俺の放った銃弾は青い光の糸を引いてアラクネの胸の部分に命中して風穴を開ける事に成功した。

「やった……」

胸に穴の空いたアラクネは、すぐにそのまま消滅した。

思った以上に強かった。

上半身は人型なのでカメラや龍より防御力は劣っていたが、イレギユラーな動きを可能とする機動力と言う点では今まで出てきたモンスターの中でも上位に位置していると思う。

俺は目の前の敵を倒した事で、少し気を緩めてしまったがまだもう1体いる。

慌ててベルリアの相手にしていた個体に目をやる。

「え？」

俺の目の前には予想外の光景が映った。

俺の目にはアラクネの前に粘糸ネットで包まれたベルリアが倒れているのが見えた。

先程の斬り合いはベルリアが押ししていたはずだ。

それなのにベルリアが倒れている状況を見ると、おそらく先程見た斬り合いの最中に極至近距離から粘糸ネットをくらったのだろう。

ベルリアと言えどあの斬り合いの最中に至近距離からネットをくらえば避ける事は困難だろう。

俺の時はネットを放出して無防備になった所を仕留めたが、まさか戦いの最中にあのネットを放出出来るとは思わなかった。

「ミク！ヒカリン！ベルリアを！」

俺との距離は10Mは離れている。すぐにベルリアの前に立つ事は出来ないのでミクとヒカリンに頼んで俺はもう1体のアラクネに向けて走り出した。

ミクの火球とスナッチのヘッジホッグが着弾しベルリアを襲おうとしていたアラクネの動きを一瞬止める。

その直後にアラクネとベルリアの間に氷の柱が出現する。

ヒカリンは『ファイアボルト』では無く『アイスサークル』を選択した様だが、これによりベルリアを守る時間が稼げた。

アラクネは突然現れた氷柱をどかす為に足を使って削り取り始めたが、『アイスサークル』により出現した氷柱が一撃で壊せる訳もなく、何度も攻撃を繰り返している。

「ベルリア、無事か？」

「マイロード申し訳ありません。この様な姿を……この糸さえなければ私の敵では無いのですが。不覚っ」

一瞬ベルリアを安全圏に運ぼうかとも考えたが、見るからに粘着性のある糸なので、このまま触れるとミイラ取りがミイラになりかねないと思い止まり、ベルリアの前に立ちアラクネとの交戦を選択した。

「シル、俺が退けたら雷撃で倒してくれ」

「お任せ下さい、ご主人様」

当然俺が倒してしまえそうであれば自分で倒すつもりだが、ベルリアを守りながら戦うのはどう考えても不利なのでとにかくここから引き剥がす事を優先する。

氷を削り切って再び攻勢に出ようとするアラクネに向かいバルザードの斬撃を放つが、ジャンプして右上方に避けられた。

先程も『ドラグナー』の一撃を避けられたので想定済みだった俺は続けて『ドラグナー』を放つ。

青い光の糸を引いた弾丸がアラクネの肩口を穿つ。

「キシヤアアアア」

アラクネは完全に人のものとは異なる声を上げて、着地すると同時に後方へと跳ね退いた。

「蜘蛛如きがご主人様の手を煩わすものではありません。消えて無くなりなさい『神の雷撃』」

閃光と爆音と共に雷撃がアラクネに降り注ぎ、その瞬間勝負は決した。

第445話 アラクネ撃退（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第446話 粘糸

シルの一撃でアラクネは完全に消滅した。

だが、依然ベルリアとあいりさんは粘糸に囚われ倒れたままだった。どうやらモンスターが消失しても放出した粘糸は消えないらしい。

「ベルリア、あいりさん大丈夫ですか？」

「マイロード申し訳ございません」

「海斗、大丈夫は大丈夫だが自分で抜け出すのは不可能の様だ」

「分かりました。助け出しますね。ミクとヒカリンはあいりさんを頼む」

俺はベルリアを助ける為に粘糸のネットを取り除くべく手を伸ばした。

「ベチャッ」

粘糸に触れるかと思っていた以上に粘着性が高くベトベトだ。

「うーん」

粘糸を掴んだ俺の右手がベチャベチャして糸から離れない。

これは完全にまずいやつだ。

素手で触るとミイラ取りがミイラになる奴だ。

「海斗。やばい。私も身動きが取れなくなった……」

ミクの声が出て目をやると、そこには両手を粘糸に囚われて外れな

くなり必死でもがいているミクの姿があった。

「海斗さくん。このままだと助けられないのです。この糸厄介すぎるのです」

どうする？何かで切るか燃やすしかないか？

試しにライターで燃やしてみるか？

ベチャベチャしているので燃え難い気はするが、もしも可燃性で一気に燃え上がったらやばいか。

ベルリアの『ダークキュア』があればそれでもいけるか？

うん。ベルリアはそれでもいける気はするけどあいりさんはなく。一時的だとしても火ダルマになるのはまずいよな。

とりあえず直接接触するのは不味いので俺は左手に持ったバルザードで右手についた粘糸を切り払った。

バルザードを使うと思ったよりスムーズに切り離す事が出来た。

これって魔剣との相性がいいのか？

ただバルザードの大きさでこの細い糸を綺麗に切り取るのはかなり困難であると言える。

糸を切り離して動けるようになった俺はミクの所まで行き、今度はミクの手についた糸を切断して切り離れた。

「助かった。まさかこんなにくつついて動かなくなるとは思わなかったわ」

「ミクってナイフ持ってたよな。試しに切り離してもらっていいか」「やってみるわね」

バルザードは刃が大きすぎる為あいりさんまで傷つけてしまう可能性が高いので、ミクのナイフで同じ事が出来るか試してもらった。

「うん。ちょっと無理みたい。切れない事は無いけど、すぐベタ

ベタして切れなくなってくる」

通常のナイフでは上手く切れないようなので、やはりバルザードが魔剣だからスムーズに切れたのかもしれない。

「海斗、思い切ってやってくれ。少しぐらい斬れても文句は言わないから」

あいりさんはこう言っているが、全く上手くいくイメージが湧かない。けどこのままでいる事が出来ないのも間違いない事実だ。

俺は意を決してバルザードをあいりさんの方に向け糸を切り始める。

「あっ……………」

正面から切り始めるのは少し勇気が必要だったので背面から切り始めたが、切り始めてすぐにあいりさんの長い黒髪が数本ハラリと落ちてしまった。

切れた。いや俺が切ってしまった。

あいりさんの黒髪が……………

出来ない。俺には出来ない……………

「くっ……………」

「海斗、どうしたんだ?」

「すみません、あいりさんの髪が切れました」

「……………どのくらい?」

「数本です」

「数本か……………そのくらいだったら問題ない。続けてくれ」

「……………いえ、俺にはこれ以上は……………」

まだ糸はほとんど切れていない。

今は髪の毛数本で済んでいるが、これ以上続けると悲惨な運命が待っているのが明確なビジョンとして見える。

これほど明確に未来のビジョンが見えた事は無い。

これはほとんど未来予知のレベルだ。

極限に追い込まれたこの状況で未来予知という新たなスキルに覚醒したのかもしれないが全く嬉しく無いし余裕も無い。

第446話 粘糸（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第447話 シークレットウエポンのすすめ

手で掴めば粘糸に囚われる。

バルザードで斬れば、あいらさんの髪まで斬れてしまう。

女性の命ともいうべき髪を斬ってしまう行為は俺にはこれ以上出来ない。

それに髪だけでなく他の場所も傷つけてしまいそうで怖い。

最悪の状況の中で残りのメンバーにも意見を聞きたくて目をやるがヒカリンとミクだけでなくシルとルシェも何も言ってはくれない。

誰も妙案が浮かばないのだろう。正直手詰まりだ。アラクネは倒したのにその後でこれ程困った事態になるとは全く予測出来なかった。

「……………どうしよう」

俺の呟きにも誰も答えてはくれない。

このまま置いて帰るわけにはいかないのでベルリアの方の糸は最悪の場合焼くか…………

ベルリアは悪魔だから大丈夫か？

いや『ダークキュア』があるとはいえ流石にな

目の前でベルリアが火ダルマになったら…………

「ベルリア……………」

「マイロード、どうかされましたか」

「……………うん何でもない」

俺には出来ない……………無理だ。

この粘糸は、何と無くベタベタしているが燃える時は一気に燃え上がりそうな気がする。

あまりにリスキーすぎる。

「海斗、ベルリアの奴燃やしてみるか？」

「ルシエお前もか……」

「は？どういう意味だ？シルも言ってた。わたしは海斗の剣だからな。やる時は殺るぞ」

「いや……殺らないでいい」

ルシエも俺と同じ答えにたどり着いたようだが本当に殺りそうではない。

どうにかベルリアを燃やさずにこの事態を回避できないだろうか？カードに戻す事も考えたが、戻したところで糸だけが消えるとは考え難い。

いつその事このまま1階層の出口まで飛んで、他の探索者に助けてもらおうか。

ベルリアを燃やすよりは遥かにいい考えに思える。

「うん」

真剣に考えすぎて頭が煮詰まって来てしまったが、煮詰まった末に閃光のように頭の中に浮かんで来た。

俺にはあれがあった。いざという時のあれが。

俺のシークレットウェポンがまだ残っていた。

通常の武器がダメでもあれならいけるはずだ。

俺にとって最終兵器ともいうべきマジックシザーがあった。

「みんな、まだ手があった。ちょっと待ってて」

俺はリュックからシークレットウェポンであるマジックシザーを取り出して、試しにあいりさんに絡まっている粘糸を切ってみた。

「ジョキッ！」

「おおっ！」

気持ちの良い音と共に糸が抵抗なく切れた。

「みんな切れた！これでいけるぞ！」

そこからの俺は速かった。

あいりさんに絡まった糸を全て切り離し、その後すぐにベルリアの糸も切り離す事に成功した。

「あいりさん、よかったのです」

「心配しましたよ。あいりさん」

「ああ、助かってよかったよ。流石に今回は燃やされるのかと焦ってしまった。次からは気をつけるようにするよ」

「ベルリアも無事でよかったな」

「マイロード、燃やされずに済んで良かったです。このベルリア炎ぐらい耐え切って見せますが、燃やされないに越した事はありませんので」

「そうだな……」

それにしても手強かった。今後絶対にアラクネの粘糸は食らわないようにしないとイケない。

マジックシザーが有効なのは分かったがマジックシザーは俺の持っている1点だけなので俺が囚われてしまうと抜け出せなくなってしまう。

「みんな、やっぱりマジックシザーを1人1個買わないか？」

「うーん私はいいかな」

「私も海斗さんが持っているのでいいと思います」

「買っても使い道が……」

前回の根に足を取られた時といい、このマジックシザーの有用性は証明されていると思うがなぜかメンバーの反応が芳しくない。

いざという時のシークレットウェポン。そして有事の時には自分の髪セルフカットにも使える。

いろんな物を手軽に切る事が出来るマジックシザーはやっぱり俺の
一押しアイテムだ。

第447話 シークレットウエポンのすすめ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第448話 大人の味

「全然取れませんか」

粘糸を切断してベルリアもあいりさんも無事に動けるようにはなつたが、ベトベトに糸がまとわりついていて綺麗には取れなかった。

「ウォーターボール」

水の玉を出して洗ってみているがベトベトしたのが上手く取れない。

「洗剤とかたわしとかが無いと取れなさそうですね」

「みんなの迷惑にはなりたく無い。このまま探索を続けよう」

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だと思う」

あいりさんのたつての希望で探索を再開してみたが、どう考えても無理があつたので10分ほどで諦めた。

「すまないが、今日はこれで引き上げてもいいだろうか？」

「そうですね。この状態で続けるのは難しそうですね。帰りましょうか」

やはり全身ベトベトの状態での探索は集中を欠き危ないので、少し早いが切り上げる事にした。

このまま帰るのは、かなり厳しいので1度1階層に飛んでから10階層に戻ってシャワーを浴びる事にした。

「ベルリア……ベトベトだな。落ちそうか？」

「マイロードこの程度の事は全く問題ありません。鎧は洗えば大丈夫です」

「そうか」

久しぶりのシャワーは気持ち良かったが、手持ちの石鹸だけではベルリアについたネバネバを全て取り切る事は出来なかった。適当なところで我慢してもらうしかなかった。

あいりさんに至ってはフルアーマーを装備しているわけでも無いので、ダイレクトに服がベトベトになっており、洗っても取れそうに無いとのことで、諦めて家に帰ってから処分する事になった。

「あいりさん、これ使ってください」

「いいのか？すまないな」

「気にしないで大丈夫ですよ。昨日洗ったやつなんで汚くは無いです」

「ああ、ありがとう」

あいりさんにベトベトのまま帰らすわけにはいかないので俺は自分が行き帰りの為に持ってきていたグレーのパーカーを貸す事にした。流石に臭いからいらないとかわねられたらショックで立ち直れ無さそうなので、普通に受け取ってくれて良かった。

この日は、このまま解散となったので家路についた。半袖で帰るとまだ少し寒かったが、もう少しで丁度いい季節になりそう。

家に帰ると今日の夕飯は俺の好物であるカレーだったが、今日は何か辛口と中辛を合わせたルーを使用していた。完食したものの大人の味は俺の身体には合わなかったようで、食べてしばらくするとお腹が痛くなってしまった。

やはりカレーは甘口と中辛を合わせたものが一番美味しく身体に

も優しいようだ。

母親にお腹が痛くなった件を伝えてみたが

「海斗は、まだまだお子様ね〜」

の一言で笑って終わらされてしまった。

そこまで心配して欲しい訳では無いが、少しは真剣に受け止めて欲しいものだ。

母親は俺が高校生になったぐらいから時々こういう事をやってくる。突然コーヒをブラックで出して来たり、麻婆豆腐の辛さを激辛にしてみたりして俺の反応を伺ってくるが、未だに俺はコーヒにミルクと砂糖を入れないと飲めないし、麻婆豆腐はピリ辛ぐらいが好みだ。

母親が言うようにまだまだお子様なのか大人の味は口には合わないらしい。

この日は12時前にベッドに入り次の日起きると、全身が筋肉痛になっていた。特に両足の筋肉痛は酷く、ベッドから起き上がって普通に歩ける様になるまでに少しの時間とストレッチを要した。

久しぶりに重度の筋肉痛だ。

これは、昨日の動きのせいかな？

とも思ってたが確かめようも無いので、少し筋肉痛が残ったままだがそのままダンジョンへと向かう事にした。

「海斗、パーカーは洗濯してるから乾いたら返すよ。助かった」

「別にそのままでも全然良かったのに。気を使わせて逆にすみません」

「海斗さんて、結構さりげなく女の子に優しく出来ますよね」

「え？そうかな」

「そうね。それが不思議なところよね〜。彼女とは全く進展がなさそうなのに、こう言う事はさらっと出来るのよね。本当に不思議だわ」

「不思議ってなんだよ。別に女の子でも男でも困ってたら普通ちよつとぐらい助けたりするだろ」

「人に何かをする余裕があったらさっさと告白して付き合えばいいのに」

「そうですよ。いつそのこと告白飛び越してちゅーとかすればいいのですよ」

「お、おい。な、なにを言い出すんだ。ば、ばかな事を言うなよ」

「いや、海斗の場合案外有りかもしれないぞ」

「あいりさんもやめてください。訴えられたらどうするんですか。」

「同級生を勘違いで襲った少年Aとか報道されてそれで怖すぎますよ」

「海斗、流石にそれは無いと思うから思い切っていつてみなさいよ。」

「ダメでも思いつきり殴られるぐらいだと思っわよ」

「えええ……」

第448話 大人の味（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第449話 階層主

「うーん、体が痛いなあ」

「どうかしたの？」

「あーきつい。筋肉痛だよ」

「珍しいわね」

「昨日のアラクネ戦の影響だよ」

「ふーん、筋肉痛だけならいいけど怪我しない様に気をつけなさいよ」

「ああ、分かってる」

俺は今15階層の探索を続けているが、昨日のアラクネ戦に苦戦したものの順調にマッピングをすすめている。

「そういえば、そろそろボス戦の対策考えた方がいいんじゃない？」

「対策って言うてもなく、どんなのが出るか分からないしな」

15階層から各階層の終着点に階層主とも呼ぶべきボス部屋が配置されている。

まるでゲームの様な仕組みだが、ボスモンスターの出現はランダムで自分で倒す事が出来るのは1度のみ。1度倒すと次からは出現しない。

しかも倒した事のあるパーティのメンバーが他のメンバーと組んでも出現はしない。

倒すまでは何度でも出現するが倒せるのは1人1回のみ。

なので、裏技的に先に進みたい場合は既に倒した事のあるメンバーと組めば戦わずに先に進む事が出来る。

ただ俺達の場合は、少しでもドロップの可能性を高める為にも当然

倒して進む事になる。

「16階層への階段の手前にあるのよね」

「そうらしいけど、まあ俺達はいつも通りやるしかないな。シルとルシエもいるしどうにかなるでしょ」

「ご主人様、モンスターです。今度は3体います」

ミクとの雑談を切り上げてモンスターに備えて進んで行く。

「あゝ遂に出てきたな。みんな粘糸だけには注意してくれ」

目の前に現れたのはアラクネが3体。昨日よりも1体多いのでシル達にもしつかりと参戦してもらおう。

「俺とあいりさんで1番右側のをやりましょう。ベルリアとヒカリンで2体の足止めをお願い。シルとルシエは狙えるタイミングで倒してくれ。ミクは各自のフォローを頼んだ」

前回同様俺はあいりさんと組んでアラクネに向かって行くが、敵モンスターは昨日の個体と同じ様に縦横無尽に移動を繰り返してこちらとの距離を詰めさせてくれない。

俺は左手の理力の手袋の力でアラクネの足の1本を掴んで動きを止めようとするが、残念ながらあっさりと振り切られ逃れられてしまった。

やはり理力の手袋は相手の不意をつくか、もう少し動きが少ないモンスターでないかと有効ではない様だ。

あいりさんも前回の反省から無闇に距離を詰めずにある程度の距離を保ったまま敵の隙を窺っている。

2人で追っているとアラクネが前回同様に粘糸のネットを放出してきたのに対して先行していたあいりさんが即座に『アイアンボール』

を発動してネットを迎撃する。

ネットの中心を撃ち抜いた鉄球は、粘糸のネットを巻き込み飛んでいった。

あいりさんがアラクネ用に立てた対策がこれだ。

常に『アイアンボール』を発動出来る距離を保ち、アラクネによるネットの放出と共に鉄球で撃ち落とす。

作戦が思った以上に上手くいったので俺とあいりさんはそのまま距離を詰めて行く。

後方からミクによる火球が飛んで来てアラクネの動きを一瞬止めたのを見計らって、再度あいりさんが『アイアンボール』を放ち、俺もドラグナーの引き金を引く。

アラクネも、足止めされた状態で時間差で放たれた2つの攻撃を避ける事は出来ずに両方の攻撃がアラクネ本体に命中し、そのまま消滅した。

残りの2体に目をやるが、今度はベルリアも上手く立ち回った様でネットに囚われる事無くしつかりと役目を果たした様で、相対したアラクネはルシエの獄炎で焼かれて消滅していた。

最後の1体も、ヒカリンがファイアボールとアイスサークルで足止めし、シルが『神の雷撃』を放ち一瞬で消滅してしまった。

「今回は上手くいったな。誰も粘糸をくらわなかったし完勝だったんじゃないですか」

「そうだな。粘糸は前回で懲りたから、上手く行ってよかったよ」

対策が功を奏して、アラクネ3体も問題無く退ける事が出来た。

この調子であれば注意を払えば今後アラクネも問題ないだろう。

どうやら、ようやく俺はリアルホラーハウスの呪縛から解放されそうだ。

第449話 階層主（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第450話 ボス戦

金曜日となった今日遂に15階層の最奥までたどり着く事が出来た。かなり短期間での到着となったが、やはりレイドバトルで1/3付近まで連れて行ってもらったのが大きかった。

「あの扉がそうだよな」

「まず間違いないと思う」

「よし、じゃあ危なくなったら即撤退！」

「海斗さん、最初から弱腰すぎませんか？」

「いや、ここまで来たら焦る必要もないから、危なかつたら即逃げよう。ポーシヨンもすぐ出せる場所に準備しとこう」

「まあ、慎重に越した事はないな」

眼前には隠し扉とほぼ同じ大きさの扉が出現しているので、俺は扉に手をかけ一気に押し開く。

「あれ……?」

隠し扉の時と同じ様に開かない。

これはあの時と同じ様に押す力が足りないのだろう。

「ベルリア手伝ってくれ。同時に押し込むぞ」

「マイロードお任せください」

今度はベルリアと2人で全力で押し込んでみたがびくともしない。

「だめだ……みんなも手伝ってもらえるかな」

今度はパーティーメンバー全員で押し込んだが全く動かない。

「ふっ。全然動かない。どうなってるんだ？このメンバーで動かないとなると何か開くのには条件があるのか？呪文が必要とかか？」

「そんな呪文のヒントとかなかったわよ」

「俺達のレベル不足か？」

「それは無いと思うのです。私達が15階層の平均以下とは思えないのです」

「そうだよな」

行き詰まってしまった。

どう押してもだめだ。押してだめなら引いてみるか。

「よし全員で引いてみようか」

「でもこの扉引ける様な持ち手がないんだけど」

確かに扉には鍵穴も持ち手も何も無い。

持ち手のない状態でこの重そうな扉を引けるとは到底思えない。

「スライドドア……ではないのでしょうか？」

「スライド？」

前回はスライドドアでは無かったので頭の中から除外していたが、有り得るのか？

「それじゃあみんな横にスライドしてみようか」

俺達は全員で扉に手をつけて一気に横方向へ力を入れてみた。

その瞬間あれほど力を込めても一切動かなかった扉が何の抵抗も無

くすくすと横方向に動いて開いた。

「スライドだったのか……。これ造った人は性格が悪いな」

「多分造ったのは人ではないのでは」

「ヒカリン……例えだよ」

「そうなのですか」

「そうだよ」

「2人ともしつかりして。これからボス戦なのよ。緊張感が無さすぎるんじゃない？」

このやり取り俺は何も悪くないと思うが……

俺は気を取り直して開いた扉の中を覗くと、奥の椅子に敵が座っていた。

15階層のボスなのでドラゴンや大型のアラクネを想定していたのだが、椅子に座っているのは人型のモンスターだった。

「人間？」

「マイロード、人間ではありません。あれはモンスターです」

座っているので背の高さは分からないが、見る限り普通の人間に見える。

黒髪に白い肌で西洋風の出で立ちの男性がそこに座っていた。

俺達は警戒しながら部屋の中に入って行く。

「やあ、やあ、可愛い女の子達がやって来たね。ビューティフル」

「は？」

座っている男が突然話しかけて来たが、普通に日本語だ。しかも可愛い女の子？

「僕は運が良い。こんなに可愛い女の子達の血を吸えるなんてファンタステイック！」

ファンタステイック？

こいつ頭大丈夫なのか？

「さあ、こっちにおいてマドモワゼル。さあカモン」

……だめだこいつ。完全にダメな奴だ。

「海斗、こいつ焼いて良いか？気持ち悪い」

「まあ、そうだろうな。よし焼いていいぞ」

「死んであの世でその軽口を後悔しろ気持ち悪い『破滅の獄炎』」

座ったままの男に向かってルシエが『破滅の獄炎』を放ち、敵は一瞬で炎に包まれた。

なんて馬鹿な奴……

本当にこれがボスモンスターだったのか？

第450話 ボス戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第451話 不滅

「ウグウウアアア」。熱い、熱すぎる。君のハートが熱すぎる」
なんだこいつは？

ルシエの獄炎をくらい燃えながらおかしな事を口走っているが魔法耐性が高いのか一気に灰にはならず、徐々に燃え尽きていつている。

「君のハート……は……受け取った。まって……いて……くれ。すぐに……」

男は再び意味不明の事を口走りながら完全に燃え尽きた。

「これって一体何のモンスターだったんだ？」

「変態？」

「鳥肌が立ったのです」

「気持ち悪い……」

「だけど普通に喋ってたし、モンスターには見えなかったな。もしかして悪魔だったのか？」

「失礼な！あんな変態悪魔なわけないだろ」

あれが何だったのかは分からないが、もう燃え尽きたのだから今更考えても仕方が無い。

まだ時間があるので16階層を少し探索してみようかな。

「それじゃあ、ドロップを回収して先に進もうか」

「海斗、おかしいわよ。何も残されてないわ」

どういう事だ？確かに倒したのに何も残されていない。
もしかして階層主は何もドロップしないのか？

「待たせてしまったね。君のハートが熱すぎて燃えてしまったよ、
マイハニー」

「……………」

どういう事だ？燃え尽きたはずの変態野郎が復活している。
幻術か何か？

いやでも、先程までと違い見た目が変わっている。

恐らく燃えてしまったのだと思うが、最初に来ていた着衣がなくなり、今はパンツ1枚の姿になっている。

パンツ1枚でも履いていてくれて助かるが、逆になぜパンツは燃えて無くなっていないのだろうか？

あのパンツは特殊アイテムなのか？

「海斗……さん。私あれ……無理です」

「ああ、分かるよ。俺でもギリギリだから。」

「ああっ、お嬢さん達の視線を感じるよ。私のこのパーフェクト
バディにメロメロだね。早く君たちの血を吸ってあげるよ。す
ぐに僕の愛の奴隷にしてあげるよ」

「いや、それは普通に無理だろ」

あまりにイカれた内容に柄にも無く突っ込んでしまった。

「何だい君は？ハニー達の影に隠れて見えていなかったよ。目立た
ない顔立ちに黒い出で立ち。わかったぞ君は隠キヤの厨二患者だな。
所謂変態だろう」

「お前にだけは言われたく無い。変態はお前だろ。そもそもお前は
何者なんだ？」

「僕かい？僕は愛の使徒だよ！」

「……………もういいや。消えてくれシル頼んだ」

「その言葉お待ちしていました。ご主人様を愚弄するその口をこれ以上開かせるわけにはいきません。今すぐ消えなさい『神の雷撃』」

俺の為に怒ってくれているのか、シルの雷撃がいつも以上に激しい気がするが、一撃の元に変態野郎を葬り去る事が出来た。

「一体あの変態は何だったんだ？何でルシエの獄炎から復活出来たんだ？」

「今までで一番インパクトがある敵だったかも知れないな。パパ以外のパンツ姿を見たのはこれが初めてだ」

「そうですか。でもさっきのはカウントに入れなくていいと思いませんよ。突発的な事故にあったようなものですよ」

「海斗さん。あれはハイレグと言うんでしょうか？」

「あゝ所謂ブルーメランパンツって奴じゃ無いか」

「海斗さんもあんなの履いてるのですか？」

「いやいや、俺はあんなの履いた事無いよ。俺はボクサーブリーフ派だから」

「ボクサーブリーフですか」

「あゝ。俺のパンツはどうでもいいから。もう気にしないでよ」

俺もさっきのは見たく無かった。真っ白い肌の細マッチョに赤のブルーメランパンツ……………

悪夢に出て来そうな程インパクトがあった。

男の俺でこれ程のダメージがあるのだから彼女達へのダメージは計り知れない。

ある意味すごい精神攻撃だった。

因みに今日の俺は青色のボクサーブリーフだ。

第451話 不滅（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第452話 ヲアンパイア

「マイハニー、君の気持ちも受け取ったよ。僕の体には電撃が走った様だ。これ程までに衝撃的な出会いがあるだろうか。ああこれがデステイニー」

なんだこいつは？

何でまだいるんだ。

ルシエに灰にされシルにも消された筈なのにまたブーメラパンツ姿で変な事を口にしてている。

「シル、間違いなく命中したよな。何で消えてないんだ」

「はい、間違い無く1度消えました。消えて再生した様に見えます」

「一瞬でか？ミノタウロスみたいに少しづつ再生する感じじゃ無いな」

「恐らくですが、あれはヴアンパイアだと思います。ヴアンパイアの不死性だと思われます」

「あれがヴアンパイア？確かに青白いけど、マッチョでブーメラパンツ？イメージと違いすぎるんだけど」

「それは個体差があるのでは無いでしょうか」

これが、あの超メジャーモンスターのヴアンパイア？

ヴアンパイアはもっとダークでスマートなイメージだがこいつはそんな俺の持つイメージを完全に破壊してくれている。

ひとまず風貌は置いておいても、こいつはどうやったら倒せるんだ？シルとルシエの一撃がダメだとすると炎と雷では倒せないと言うことか。

ヴアンパイアといえばニンニク、十字架、銀の武器か。残念ながら

今の俺は全て持っていない。
とりあえず可能性がある事からやってみるしか無い。

「ねえ海斗、それって何？」

「え！？何って十字架のイメージなんだけど」

俺は両腕を上げて 有名な豪華客船の映画をイメージして十字架を
全身を使って体現してみた。

「特に効果は無さそうね」

「……………そうだね」

…………… 妙案だと思った俺が恥ずかしい。

「お嬢様方、お待たせしたね。それで……………」

再び口を開いたヴァンパイアが何か言葉を発しようとした瞬間にあ
いりさんが『アイアンボール』を発動して鉄球がブーメランパンツ
の大事な所にめり込んだ。

おお……………。

自分の事では無いのに見た瞬間、俺の大事な所が縮み上がって文字
通り背筋が凍りついてしまった。

鉄の玉が金の玉に……………

あんな格好をしている奴が悪いが、あれは……………死ぬ……………な。
目の前にはヴァンパイアが悶絶して倒れている。

「ゲウ……………ふ……………ふ……………」

痛そうだ。間違い無くあれは、あれがクラッシュした。

俺は追撃をかける事も忘れてヴァンパイアの様子を見守ってしまう。

「そ、その……お、お嬢さん。こ、こんなに強烈な愛の告白は、初めてだよ。し、死にそうな程のラブだ……」

この状況でもキャラブレしないヴァンパイアにある種の畏敬の念さえ覚えてしまう。

「気持ち悪い『アイアンボール』」
「グフオオオオオオウ」

余程気持ち悪かったのかあいらさんが問答無用で追撃の『アイアンボール』を発動して、狙いすまされた鉄球が再びブーメランパンツの大事な所に突き刺さった。

これは……もうダメなんじゃ無いか？流石に再起不能だろう。

「お、お嬢さん。なんて情熱的なんだ……。私の魂にまで君のラブが……」

「無理！『アイアンボール』」
「グ……………フフオ」

今度はダメージが抜ける間も与えずに3発目の鉄球がめり込んだ。

あいらさんが怖い……

あいらさんは絶対に怒らせてはいけない。

あいらさんの機嫌を損なってはいけない。

容赦がない。

これ程慈悲の無い攻撃は見たことがないかも知れない。

目の前に広がっている地獄絵図に俺の足腰が碎けそうになるのを気を奮い立たせ必死で耐える。

俺は目の前の地獄から目を背ける様にベルリアに目をやるが、土爵級悪魔はいつに無く顔色が悪く目も虚ろに見える。

やはり悪魔でもこの攻撃は恐怖の様だ。
悪魔をも震え上がらせるあいりさんが怖すぎる。

第452話 ヴァンパイア（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第453話 ヴァンパイアの顔も3度まで

「き、君の愛が、お、重い。そ、そろそろ、やめて、くれないかハ
二」

「無理『アイアンボール』」

「ハ……………ッ」

鉄球を3度くらい遂にヴァンパイアが弱音を吐いた。

むしろ3発もくらないながらも正常でいられる事が異常なのかも知れないが、あいりさんが問答無用で4発目のアイアンボールをピンポイントで炸裂させた。

あれでは再生したとしても……………

その惨状を前に戦闘中にも関わらず、俺の身体からは冷たい汗が止まらない。

「フウ、フウ、フウ。止めろと言っているだろうが、このクソガキが！俺様の大事なところに何を晒すんじゃボケ！干物にすんぞコラー！」

あ……………切れた。

4度の鉄球をくらって遂に切れた。

仏の顔も3度までと言うが、どうやらヴァンパイアの顔も3度までだったらしい。

先程迄のエセ紳士のような口調は消え去り、ガラの悪い話し方に変わってしまっているが、恐らくこちらが本性なのだろう。

「変態が切れましたね。切れても変態なのです『ファイアボルト』」

今度はヒカリンが魔法を放ち、寸分変わらず鉄球が命中したのと同じ場所を捉えた。

「フオ……………アアアアア」

大事な所が燃えている……………

それにしても凄い再生力だな。もしかしてメンタルも再生してるから大丈夫なのか？

「なあ、シル精神攻撃にはなってると思うんだけど倒せては無いよな。あれってどうやったら倒せるんだ？」

「全く攻撃してこないのが攻撃力は分かりませんが、再生力だけはかなり上位の能力の様です。倒す方法は3つでしょう。1つ目はこの攻撃を続けて精神崩壊に導く方法です」

「あ、ああ。それだと消滅する？」

「戦闘不能にはなると思いますが消滅はしないかも知れません。2つ目は消滅させ続ける事です。あれだけの再生能力です。MPの使用なりなんらかの代償が必要のほずです。消滅を続けなければいずれ再生不能になると思います」

「確かにあれだけの再生能力を使い続ける事は出来ないよな」

「最後は再生不能な程の一撃を与える事です」

「再生不能な程の一撃か……………」

再生不能な程の一撃。シルの雷撃とルシエの極炎でもダメとなるとあれしか無いが……………

あれは最後の手段だな

「クソガキ！ふ、ふざけるな。殺す。搾り取って殺してやる！ここまで来やがれ！」

「嫌です『ファイアボルト』」
「オツ……………ア」

「またも大事な所が燃え上がり、何を言っているのかもよく分からなくなってきたがあのブーメランパンツ凄いな。燃えようが破れようが完全に再生している。あれ程の再生が付与されたアイテムなんかそうそう無いだろう。間違い無くレアアイテムだろう。」

「ただ、間違ってもあれがドロップして欲しく無い。もしあれがドロップしたら放置決定だな。」

「いくら高性能のパンツでもあいつのお下がりのパンツを触るのは嫌だし、俺にはあれを履く勇氣は無い。」

「みんなも同意見に違いない。」

「クソ、い、いや、お嬢さん。もう、やめてくれないか、これ以上は、もう……………」

「無理なのです『ファイアボルト』」
「な……………っ」

「やっぱり女の子は生理的に受け付けないんだろうな。気持ちにはよく分かる。」

「パンツがドロップしても絶対に誰も触らないだろうな。ベルリアだったらいけるか？」

「サイズが合わないだろうな。」

「もしかしたら自動サイズ補正機能とかついてればベルリアに履かせるのもありか？」

「お、お嬢さん、いやお嬢様。もう、や、やめて下さい。お、お願いだ。お願いします」

「あ……………遂に心が折れたか。」

「無理、気持ちが悪いのです。『ファイアボルト』」
「ヒ……………ア」

ヒカリンも容赦がない。

ヒカリンが怖い。

ヒカリンを怒らせてはいけない。

気持ちが悪いのダメ。

俺は気持ち悪くないよな。

大丈夫だよな。大丈夫だよ……………な。

第453話 ヴアンパイアの顔も3度まで（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第454話 不滅の代償

「もう、やめて……やめてください。お願いします。もう無理……です」

このヴァンパイア最初はエセ紳士を気取っていたが今はもうその面影はない。

不滅とも思える超回復を見せる度に、あいりさんとヒカリンから限定部位への攻撃を繰り返され、完全に心が折れたらしい。

心が折れても気持ち悪いので攻撃の手が止まる事は無く、無限ループとも言うべき地獄に足を突っ込んでいる。

「どうする？何かかわいそうになってきたんだけど」

「かわいそうと言うか気持ち悪いのです」

「既にあの見た目が犯罪級だろう」

「ミクは？」

「無理！」

まあ、かわいそうだけど敵だしな。女性にはこの痛みは理解してもらえないだろうしな。

「そ、そこのお坊ちゃん。いや旦那様、ご慈悲を」

旦那様って俺？ついさっき変態呼ばわりされたばかりだと思っが

……

「じつ言ってるし許してやる？」

「無理です」

「倒さなければドロップが無いんだが」
「許してもいい事ないわよ」

そうだよな。男として少し同情してしまったが、こいつは敵だ！
やっぱり倒すしかないな。

「クソガキどもが、油断しやがって！死ぬ死ぬ死ぬ」

「アイアンボール」

「ファイアボルト」

「……………ン」

あゝやっぱりモンスターはどこまでいってもモンスターだな。
鉄球と炎雷の２段攻撃。痛そうだな……………

「そろそろ本気で倒しに行こうと思うんだけど、どうする？」

「爆破してみるのです」

「やってみる？」

痛みに苦しんで完全に動きが止まっている相手に対してカオリンが
融合魔法を放つ。

「アイスサークル」

「ファイアボルト」

ファイアボルトの着弾と共に爆発が起こり敵は完全に消滅した。
どうだ？これでいけたか？

しばらく様子を見ていたが２分ほど経過した段階で

「容赦がなさすぎるだろう。お前らは悪魔か！悪魔の使徒なのか」

やはり完全消滅に至る事は無かったが、精神的にはかなり追い詰め

ているように見える。

「カオリン「アイスサークル」で氷漬けにしてみても」
「わかりました『アイスサークル』」

俺は氷漬けとなったヴァンパイアに向かって駆けていきバルザードに切断のイメージをのせて振るい、敵の首を落とした。

これでどうだ？魔法がダメなら剣で首を落としてみたが効いたか？俺達は「アイスサークル」の効果が続くまでその場でヴァンパイアの様子を観察してみた。

しばらくすると氷が無くなり首が落ちた状態のヴァンパイアが残ったがすぐに動き出す様子は無い。
やったか？

そう思つて観察を続けていると、突然地面に落ちたヴァンパイアの頭が超能力でも受けたかのように動き始めて、そのまま首の位置まで戻り修復してしまった。

「やっぱりしぶといな。ヒカリン動きを止める為に定期的に「ファイアボルト」を頼む」

ファイアボルトを局所に打ち込み続ける限りこちらの負けは無いが、ヒカリンのMPもいつかは尽きてしまう。

あいつの精神崩壊と競争するのもいいかも知れないが、精神が崩壊したところで倒した事にならなければ何の意味も無い。

「シル、ルシエ2人で同時攻撃をかけるぞ！」

「ご主人様お任せください」

「さすがに鬱陶しくなつてたところだ。まかせろ」

そう言うと2人は即座に攻撃を開始し、動きの止まったヴァンパイ

アに同時攻撃を仕掛けた。

「あまりに見苦しいですね。もう消えてしまってください。『神の雷撃』」

「変態野郎が気持ち悪いんだよ。早く目の前からいなくなれ！『破壊の獄炎』」

2人の攻撃が同時に発動して爆音と閃光と共にヴァンパイアに向けて降り注いだ。

流石にこの攻撃は効いたんじゃないか？

この変態とはお別れしてさっさと16階層に行きたいと言う想いと共に俺達は全員で攻撃の跡を注視した。

第454話 不滅の代償（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第455話 やっぱり

粉塵が収まってきたが勿論ヴァンパイアの姿は無い。

さっきは2分程で突然復活したが、今回はどうだろうか。

それからメンバーと雑談しながら様子を確認していたが、2分経過してもヴァンパイアは現れる様子は無い。

「復活する様子は無いな。倒したんじゃ無いか？」

「そうね。でもやっぱりドロップが何も無いのよね」

言われてみると確かに何もドロップした様子は無い。

という事はまだ倒し切っていないという事だろうか？

それから更に5分程待ってみたが何の変化も無い。

「やっぱりこれで終わりなんじゃ無いか？」

「そうね。微妙な所じゃない」

「許さん。殺す。吸い尽くす。死ぬ。今すぐ死ぬ」

おおっ、やっぱり消滅しきって無かった。

シルとルシエの同時攻撃でもダメなのか。

「人間如きが調子に乗りやがって。崇高なる種族の私に向かって舐めるな！」

「いや、攻撃したのは神と上位悪魔だからお前よりも崇高だと思っけど」

また柄にも無く突っ込んでしまった。

どうもこの相手には自分のペースを乱されてしまう。冷静にならないといけないが、キャラが濃すぎて思わず声が出てしまった。

「ファイアボルト」

「……………ア」

これでまたしばらくの間は大人しくなっているだろう。

「倒せそうに無いんだけど、どうしようか。一旦撤退するのもありだと思っただけど」

「おい、海斗。分かっただけで言ってるよな。逃げんな！撤退とかありえないだろ！」

「……………あれか」

「さっさとやれよ。秒で片をつけてやるから。ほら」

「……………」

「ほら早く。あいつが復活するぞ。急げよ」

「……………やるのか？」

「当たり前だろ、やるに決まってるだろ。バカなのか？」

「……………分かった。約束しろ。倒したら即解除だ」

「分かってるって。大丈夫大丈夫」

「本当だな。約束だぞ。倒したら即解除な」

「ああ約束だ」

「絶対だぞ！」

「任せろって」

「分かった……………はっつ『暴食の美姫』」

本当は使いたく無かった。これを使わずに倒したかった。

俺の命が吸い取られる。この感覚久しぶりだが気持ち悪い……………

「……………うっ……………うっ……………」

「あゝ久しぶりだな。やっぱりこの姿が良いな、そう思うだろ海斗」

「ど、どうでもいい」「どうでもいい？海斗舐めてるのか？どうでもいいわけないだろ。ほら褒めてくれていいんだぞ。綺麗だとか可愛いとか惚れたとか見惚れたとかあるだろ」

「ルシエ……………そんな余裕は無い。早く倒してくれ約束だろ」

「おいおい、それは違うだろ。約束は早く倒すんじゃないや無くて倒したら早く解除する事だろ」

「うう……………同じ事だろ。ふざけるな」

「ふざけてなんか無いぞ。約束は守るって。海斗が死ぬギリギリ手前で倒してから即解除してやるよ。ふふっ」

「……………」

ルシエにやられた。確かに言っている事は間違いでは無い。俺が勘違いしたただだが、普通に考えてそれは無いだろ。ルシエが普通なはずはないが。

「うえっ……………早く倒さないと攻撃して来るだろ！」

「大丈夫だって。なあ、ヒカリン、あいり」

「はい勿論大丈夫なのです。ルシエ様」

「MPの続く限り『アイアンボール』を叩き込んでやります。お任せくださいルシエ様」

この2人は何を言っているんだ？苦しんでいる俺が目に入らないのか？

比較は難しいが2度と乗りたくないと思ったヘブンズフォーラッタの8倍はきつい。

それ程までの苦痛を味わっているのに、その苦痛を長引かせる手助けをするとは……………俺達は仲間じゃないのか。

「アイアンボール」

あいりさんが宣言通りに「アイアンボール」をブーメランパンツに叩き込んだ。

「これでまたしばらく大丈夫ですよルシエ様」

くっ……………何が大丈夫なんだ。なんにも大丈夫じゃない！俺の状況はむしろ悪化してるんだ！
うっっ……………気持ち悪い。

第455話 やっぱり（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第456話 変態ドラキュラの最後

「そ…そろそろ……………いいだろ。もう死ぬ……………」

「まだまだ大丈夫だろ。ふふっ」

「いやもう無理……………あいつの前に俺が死ぬ」

「あと20秒ぐらいは大丈夫だろ」

「うっうっ」

やっぱり俺は『暴食の美姫』が大嫌いだ。

この三途の川がリアルに見える感覚。

気まぐれなルシエに命を握られている様なこのなんとも言えない不安感。

今後もエリアボスが現れるのであればどうにかしてこれを使わずに終わらせた。

ああ……………俺の命が吸われていく。

人の命は軽くて儚い……………

今の俺であれば誰よりも命の尊さを語る事が出来るかもしれない。

命の語り部高木海斗か……………ふふっなんか良いかも。

やばい……………苦痛で思考が変になってきている。あと少しだしっかしる俺！頑張れ俺！

「クソが……………なんだその姿は？俺の贄になる為に大きく美しくなったのか？クソにしては素晴らしい心がけだ。俺が死ぬまで吸って……………」

「ファイアボルト」

「……………ア」

「どこまでも変態なのですね。ルシエ様をその様な目で見るのはやめて下さい。汚れてしまいます。見るだけで罪です。早くくたばっ

て下さい」

今の俺に変態を気遣ってやる余裕は一切無いが、このヴァンパイアの三下感が凄い。

階層主だけあってかなりのものだったが、能力と中身は比例しないと言う事だろう。

あと少しで片がつく。この燃え盛るブーメランパンツを見るのもこれが最後だと思うと少しだけ名残り惜しい。余りのインパクトにこれから赤のブーメランパンツが夢に出てきそうだ。

「そろそろだな。ちゃんと褒美くれよ」

「ああ」

「いっぱいくれよ」

「ああ」

「絶対だぞ」

「ああ」

「それじゃあ終わらずぞ！手間をかけさせてくれたなこの変態！さつさと消えてしまえ『神滅風塵』」

「ぐつぐつぐつあああああ〜」

ブーメランパンツ姿のヴァンパイアに向けて暴力的なまでの風が集約していき風が消えると同時にヴァンパイアの存在が消えて無くなった。

「ルシエ……………はやく……」

「あと10秒あるぞ」

「ぎりぎりすぎる……………はやく……………」

「ふふつ、しょうがないな。それじゃあ約束は守れよ。今回も楽しかったぞ、次もたのしみにしてるからな」

ルシエ、次は……………無い。

やはりルシエは小悪魔どころじゃ無く本物の悪魔だけあってサディスティック感が半端無い。

こいつに付き合っていると身が持たない。

不吉な次回予告と共にルシエは元の姿に戻り、俺から命を吸われる感覚も消え去った。

危なかった……………。

ステータスを確認するとHPは9まで減っていたので急いで低級ポーションを取り出して一気煽ると倦怠感が和らいできた。

ただ『暴食の美姫』の影響で完調には程遠い。

流石に今度こそあのブーメランパンツを完全な消失に追いやる事ができたはずだ。

これでダメなら一旦退却する以外に方法が無い。

「ここまでやらないとダメか。他のパーティは一体どうやって階層主を倒してるんだ？」

「そもそもヴァンパイアが出現するとは限らないし、ヴァンパイアの場合は銀製の武器か何かを用意してるんでしょ」

「それにしても手強かったけどヴァンパイアってこんなに強いのか？」

「個体差はあると思うけど、強いと言うかキャラが強いわね」

「変態なのです」

「ヴァンパイア即斬」

祈るような気持ちでヴァンパイアの消えた跡を見てみるとそこには今までには無かったものが落ちていた。

「嘘だろ……………あ、あれって……………まさか……………」

地面に落ちていたそれはエリアボスがドロップするに相応しいものが落ちていた。

メンバーが望んでいたものがそこに落ちていた。

「あれって、あれよね」

「そう……だな」

「あれが、そうか……」

「初めて見ました」

他のメンバーもドロップした物に目を奪われていた。

第456話 変態ドラキュラの最後（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第457話 ドロップ

ヴァンパイアの代わりに地面に残されていたのは、心配していた赤色のブーメランパンツでは無く一部のメンバーが心から求めていた物だった。

ドロップしたのはシルとルシエが心から望んでいた赤い魔核だった。

「赤い魔核だな……………」

かなり大きい。以前手に入れたものよりかなり大きい。もしかしたら1000万円級かも知れない。

どうする？いや、どうすればいい？

このままあの約束は無かった事にするか？

それともこそつと普通の魔核と入れ替えるか？

「おい、海斗あれって……………」

バレてる……………」

普通に見て赤いものだから、シルとルシエにも当然赤く見えないはずは無い。

「ああ、赤い魔核……………だな」

「やっぱりそうか。ついにだな。わたしが倒したんだからいっぱいくれよ！」

「いや、だけど……………」

「は？何か文句があるのか？約束したよな」

「それは、まあ……………したけど」

「じゃあ、くれるんだろ」

「いや、でも……………」

「いや、でもじゃ無い！くれるんだよな」

「ご主人様私も頑張りました。お願いします」

「あゝこれは、俺の一存では決められない」

俺の取り分だけ綺麗に分割する事など出来るとは思えないし失敗したら最悪消えてしまいそうだ。

しかもこのサイズの赤い魔核……………確かに約束はしたけど、あれはあくまでも小さい小さい小指の爪の先程の赤い魔核を想定したものだっただった。

このサイズの赤い魔核を渡す事はモブの俺には……………

「話が違つぞ！」

「ご主人様、私も楽しみにしていたんですよ」

「それは……………」

確かに約束は大事だが時と場合によるのでは無いだろうか。

他のメンバーも流石にこのサイズの赤い魔核を「はいどうぞ」とは言わないんじゃないか？

「別に私はいいですよ」

「私も何の問題もないのです。だって倒したのはルシエ様ですし」

「私も勿論異議は無い。ルシエ様のあのお姿を見ただけでもう満足だ」

「え？」

みんな本当にいいのか？よく考えて見てくれ。1000万円オーバーかも知れないんだぞ。それを一口だぞ。一口と言っても実際には手から吸収だけそんな高額のお食事なんか聞いた事が無い。

「おい、海斗いいつてよ。早くくれよ。シルと2等分な」
「……………」

本当に渡すのか？これを売ればマジックポーチの新品が買えたりするぞ？

俺もお金にうるさい方では無いと思うが、流石に躊躇してしまう。

「みんな……………本当にいいのか？」

「いいわよ」

「勿論なのです」

「勿論だ」

全員の許可が下りてしまった。

あゝこうなったらどうしようもない。逃げられるはずも無い。

「分かったよ。2分割に綺麗に割れるかはわからないぞ。俺だけがバルザードで割ってみるな」

「おい、間違っても消すなよ。消したら殺すぞ！」

多分ルシエは本気だ。絶対にミスは許されない。ミスったら死ぬ。異常な緊張感の中バルザードの刃を赤い魔核に当てて切断のイメージをのせて力を入れる。

やった。俺は成し遂げた。ほぼ同じ大きさの赤い魔核が2つ出来上がった。

「……………これで満足か？」

「ああ、それじゃあくれよ」

「ご主人様お願いします」

2人共満面の笑みを浮かべている。仕方がない。

「マイロード、私の分は……」

「……………」

「おいベルリア、お前何かしたか？少しでも役に立ったのか？」

「姫……………」

「一撃でもあのヴァンパイアに剣を振るったのか？お前は騎士だろ」

「……………申し訳ございません」

「まあ次は頑張れよ。頑張れば分け前があるかもな」

「姫、有難き幸せ」

そう言えば以前ベルリアも少し分けて欲しいって言ってた気がするが今回は無理だな。

ベルリア残念だが諦めてくれ。

そして次はもう無い。

これでシルとルシエへの約束は果たした。

次に赤い魔核がドロップする事が有れば必ず売却する。

これはもう決定事項だ。

第457話 ドロップ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第458話 赤いドロップ

「ようやくだな」

「ようやくですね」

俺は渋々サーバントの2人に赤い魔核を渡した。

あれ1個で一体どれ程の贅沢ができるのだろうか。

春香へのプレゼントももつといっぱい送れるだろう。

「それじゃあ頂きますね」

「じつくり味わってやるか」

見ていると2人の手から赤い魔核が吸収されていく。

「これです。この豊潤な味わい」

「おお」。確かにシルの言ってた通りだな。普通の魔核と全く違う。魂に染みる様な味わいだな」

吸収と共に2人からは称賛の言葉と幸せそうな笑顔がはじけた。

この2人のこんな表情を見るのは初めてかも知れない。

「どこまでも続く旨味と多幸福感が何とも言えませぬ。正に至高の逸品です」

「これを味あわずに死ぬのはバカにする事だな。全身が溶けてしま
いそうになるぞ」

「そこまで美味しいのか？モンスターミートとどっちが美味しいん
だ？」

「比較は難しいですが全く違う感じですよ。モンスターミートは舌が

喜んでいる感じですが、この魔核は、身体全身に染み渡るイメージです」

「断然この魔核だな。今までで1番だぞ。次は海斗も食べてみるよ。人生観が変わるぞっ！」

「いや、魔核は無理だ。俺の歯が欠ける。それにしてもそこまでか」

「そこまでです」

「ああ、至高だな」

2人の顔が笑顔と幸福感で蕩けてしまっている。

2人の元々整った顔が笑顔により、いつも以上に輝いて見える。

なんだかんだ言いながらいつも頑張ってくれている2人がこれほど迄の笑顔を見せてくれるのなら悪くないかも知れない。

サーバントの2人は無条件に色々な物を俺に与えてくれる。

ルシエは時々俺の命を奪うけど、たまにはお礼の意味を兼ねてこういうのも有りかな。

この2人の笑顔はプライスレスだ。

赤い魔核を吸収して幸せそうな2人の顔を見て俺も幸福感に包まれてきた。

幸福感に包まれながらベルリアに目をやると物欲しそうに2人の事を凝視していた。

その姿を見て流石に不憫に思い、今度爪の先程の極小の赤い魔核が手に入ったらベルリアにあげてもいいかなと考えてしまった。

どうやら俺の中でベルリアも大事なサーバントであるのは間違いないらしい。

「美味しかったです。ご主人様ありがとうございます。大満足です」

「ああ、よかったな。他のメンバーにもお礼を言うんだぞ」

「皆さんありがとうございます。美味しくいただきました」

「シル様こちらこそありがとうございます」

「シル様の笑顔が最高でした」
「シル様の為なら何度でも」

いや、あいりさん次は無い。

「わたしも満足だぞ。シルから聞いていたがこれ程とは思わなかった」

「お前もみんなにお礼を言えよ」

「わかつてるって。みんなありがと。次も期待してるぞ」

「ルシエ様のお役に立てて私も嬉しいです」

「ルシエ様の幸せは私の幸せなのです」

「ルシエ様に次も赤い魔核を」

あいりさん、重ね重ね次は無いです。

やはりうちのパーティーメンバーはシルとルシエの信者化が進んでいる。

次手に入れた赤い魔核も無条件に2人に差し出しそうで怖い。

「それじゃあ16階層に行ってみる？」

「結構疲れたからここで引き返してもいいと思うけど」

「1度降ってマーケティングだけはしましよう」

「私も先程の戦いで『アイアンボール』の使い過ぎでもうほとんどMPが残っていないんだ」

やはりメンバーは思った以上にヴァンパイア戦で消耗したようだ。

俺自身は精神的な疲労はあったもののほとんど役に立つ事は無かった。まだまだ余裕があったが、メンバーの意見を考慮して16階層の階段を降ってからすぐに『ゲートキーパー』で1階層に引き上げる事にした。

春休みの最初の週で15階層を攻略出来たので十分に満足出来る成

果と言えるだろう。

身体は疲労しているが明日明後日はまた春香と会えるので自然とテンションが上がって来た。

それにしても同じ赤でも魔核じゃなくてブーメランパンツがドロップしなくてよかったな。

恐らく一定の確率であれの可能性もあった気がするがあれがドロップしても誰も幸せにならない所だった。

第458話 赤いドロップ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第459話 水族館デート？

やっぱり春香のワンピース姿は最高だ。

何度見ても天使がこの地上に舞い降りたかと錯覚してしまいそうになる

ラッターランドで乗り物には懲りてしまったので今日は水族館に行く事にした。

勿論春香と水族館に行くのは初めてだが、魚好きの俺は行く前から密かに楽しみしていた。

「カメラ持ってきたんだね」

「うん、折角の水族館だから写真撮りたいなと思って」

「この水族館メインはマンタの群泳が見られるらしいよ。国内でこれだけの数がいるのはここだけだって」

「すごく楽しみだね」

水族館の中に入ると、思った以上に人が多い。

家族連れが多く、流石春休みといった所だろう。

「海斗はここに来た事あるの？」

「初めてだよ」

「私も初めてだよ。楽しみだねっ」

当然男だけで来る場所でも無いので来るのは初めてだが、俺の知っている水族館よりも一つ一つの水槽が大きいので見やすいし迫力がある。

目の前の水槽にはイワシの群れが泳いでいるが、数万匹が一つの塊になって群泳する様は圧巻だ。

「すごいな……」

「うん、テレビとかで見た事はあったけど迫力あるね。写真撮らなきゃ」

春香が写真を撮り終わるのを待つが、魚以上に真剣に写真を撮る春香の姿に目を奪われてしまう。やはり真剣な表情の春香は良い。

ポツツと見惚れていると写真を撮り終えた春香が、あっちに行こうと声を掛けてきたので移動しようとした瞬間、俺の左手を春香の右手が包み込んで来た。

えっ!?

俺達は、そのまま手を繋いだ状態で奥の水槽まで進む事になったが、突然の出来事に顔に血液が集中して全身が熱い。心臓の鼓動がドクドクと激しくなってきた。

「……………」

春香から手を繋いで来た……のか？

これは混んでいるからか？

それともラッターランドでも手を繋いだから、手を繋ぐのは普通の事なのか？

俺の頭の中を答えの出るはずの無い問い掛けがぐるぐると回っている。

やばい。春香の手が柔らかくてスベスベ過ぎる。

頭に血が昇りすぎて鼻血が出そうだ……

「海斗、これ可愛いよ」

「ああ、これチンアナゴと錦アナゴだよ」

「これがチンアナゴなんだ。全部同じかと思ったら確かにちょっと模様が違うね。可愛い」

確かにチンアナゴはその独特のフォルムとサイズ感で一部の人気には人気だが、これって可愛いのか？どうも春香の可愛いと俺の可愛いは少し違うのかもしれない。

可愛いとは春香にこそふさわしい言葉だと思う。チンアナゴと春香を同列で語る事は憚れるので、可愛いと言うのとはちょっと違う気がするが、春香は真剣な顔で写真を連写している。

正直名前も見た目も微妙な気がするが、他のお客さんも口々に可愛いを連発しているので女性にはこれが可愛いのもかもしれない。

チンアナゴの写真撮影が終わって次の水槽に移動しようとする、また俺の左手が優しく春香の手で包まれた。

再び俺の全身の血が沸騰を始める。

「……………」

やばい……本当に鼻血が出そつだ。

恥ずかしくて春香を見る事が出来ない。

声をかける事も出来ない。

声をかけて変に思われるのが怖くて無言になってしまつ。

もしかして春香は水族館での移動は俺と手を繋いで移動するつもりなのか。

水族館を手を繋いで廻ると言うのはデートでは無いのか？

これはもうデートじゃないのか？

いや、でも勘違いして調子に乗って、春香にそんなつもりじゃ無かつたとか言われたら立ち直れない。

それに周りをよく見ると結構手を繋いでいる人がいる。

女の子同士でも手を繋いで見ている人たちもいる。

やっぱり水族館は友達同士でも手を繋いで廻るところなのか？

あの女の子達は付き合ってるようには見えないので同級生か何かだろう。

もしかして春香もあの子達と同じノリなのか？

今迄女の子と水族館に来た事が無い俺には判断がつかない。

分からない……………

どうしたらいいんだ。

でも一方で春香と手を繋いでいるこの瞬間が永遠に続いて欲しいと
考えてしまうバカな自分がある。

もしかしたら今この時が俺の人生のピークかもしれない。

第459話 水族館デート？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第460話 水族館は龍宮城

今死んだらこの時は永遠になるのだろうか……

水族館が楽し過ぎる。

元々魚好きなので興味はあったが、今日の水族館の魚達は光り輝いて見える。

深海魚の提灯アンコウですら眩いばかりの煌めく光を放っているように見えてしまう。

今までと同じ物を見ているはずなのに世界が昨日までとは全く違つ色を帯びているように錯覚してしまう。

それは全て春香と一緒にだから。彼女の手が俺の手に触れているからだ。

緊張から手汗をかいてしまっているが、間違つても自分から離すことは出来ない。

「綺麗だね」

「うん」

俺達はクラゲの水槽の前に来ていたが、暗くなったスペースに水槽の中から照らされた7色の光をクラゲが透過して幻想的な光景を演出している。

「よかったら、俺に写真撮らせてもらえるかな」

「うん、いいよ」

カメラの使い方は以前春香から習ったので問題無い。カメラをクラゲに向けて画面に映る映像を確認する。

「春香何してるの？」

「クラゲを撮るのに邪魔かなと思って」

「違うよ、俺が撮りたかったのはクラゲをバックにした春香だから」
「……うん。それじゃあ、お願いするね」

再度画面を覗き込むが、思った通り幻想的な空間に春香が合わさって、この世のものでは無いのかと思えるようなシーンが映り込んでいたのですね。すぐにシャッターを切る。

やばい。可愛い。天使がいる。いやこのシチュエーション的に海の女神か？

この写真どうにかもらえないだろうか。是非ともスマホの待ち受けにしたい。

この写真を待ち受けで毎日眺めていたら幸せだろうな。

いや、でも俺がこの写真を待ち受けにしてたら気持ち悪いだろうか。

「こんな感じだけど、どうかな」

「うん、いいと思う。海斗写真撮るの上手いよね」

「そ、そうかな。春香の教え方が上手かったんだよ」

その後も順番に水槽を見て周りメインの巨大なアクリル水槽まで進んだ。

「すごいな。マンタが何匹いるんだ？」

「20匹よりも多い気がするけど、大きいね」

「泳ぎ方が優雅だよな」

「こんなのに海で出会ったらびっくりしちゃうね」

「水槽越しでこの大きさだから間近で見たらびっくりするだろうね」

「海斗はスキューバダイビングとか興味ないの？」

「今までやる機会は全く無かったけど、大学生とかになったらやってみたいかもしれないな」

「じゃあ、大学生になったら一緒に行こうね」
「あ、ああ。大学生になったら」

実はダイビングへの憧れは以前から持っている。海の中で色とりどりの魚に囲まれるのには憧れる。

ただ春香の大学生になったらと言う言葉が結構響いてきた。

もし春香と同じ大学に行けなかったら……そもそも大学生になれなかったら一緒にダイビングに行く事は叶わない。

誘ってくれた嬉しい気持ちと同時に行けないかもという不安が襲ってきた。

何があんでも王華学院に受かって見せる。死んでも受かってみせる。春香と水槽の中を眺めながらマンタも写真に収めたが、水槽が大きすぎて逆に上手く撮るのが難しいようだった。

昼食を水族館の中の軽食コーナーで済ませてから、午後からイルカショーを2人で観る事になった。

イルカショーを観るのは久しぶりだったが、本当にすごかった。

スタッフの人がイルカに乗って一緒に泳いでいたのには思わずテンションが上がってしまったが、正直左手にずっと触れられている春香の右手が気になってしまい、ショーに集中する事が出来なかった。その後も色々な館内イベントを観ながら夕方迄水族館にいたが、飽きる事は無かった。やっぱり水族館はいいな。

ラッターランドよりもゆっくりしているし、待ち時間も無く春香と手を繋いで廻れるので最高だ。

この素晴らしい場所に必ずまた来ようと心に誓って家路についた。

第460話 水族館は龍宮城（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第461話 合同バーベキュー

今日は6人でバーベキューをする事になった。

メンバーは、俺、真司、隼人それに春香と前澤さんと同じ学校の花園さんだ。

春休み中に何度も隼人から督促のメールが届いていたので春香と前澤さんをお願いして合同バーベキューを開催する事になったのだ。バーベキューになったのはこの前ダンジョン用にコンロとかを俺が買ったので俺からの提案だったが、みんな結構乗り気になってくれた。

花園さんは、前澤さんが1年生の時のクラスメイトらしいが残念ながら俺は知らなかった。

「なあ真司、花園さんって何組だったっけ？」

「多分3組じゃないか」

「真司は花園さんと話したことあるのか？」

「ああ、悠美と一緒にいる時に何度か話した事はあるけど」

「悠美？真司、前澤さんの事名前と呼ぶようになったんだ。いいな。今日は俺も頑張るぜ」

「ふん。隼人は面識あったのか？」

「いや無いけど花園さんいいな……。ありがとうな海斗。本当に恩に着るよ。俺春休み寂しかったんだ……。海斗と真司が毎週デートしてるのに俺だけ取り残された気がして。本当にありがとう心の友よ」

隼人は変な感じで感激してくれているが、花園さんは小柄で色白、イメージで言うと小動物。白いうさぎみたいで可愛い感じの子だ。

「それじゃあ、肉とか焼いてくよ」

「うんお願いするね。私もお手伝いしようか？」

「大丈夫だから座っておいてよ」

6人いるのでどんどん焼いていこうと思う。

「話しには聞いてたけど春香と高木くんは仲良しなんだね」

「え？そうかな」

「うん、春香と悠美からは聞いてたんだけど、高木くんは学校にいる時とはイメージが違うし春香に優しいんだね」

「別に普通だと思うけど。春香とは小学校の時からずっと同じ学校だから」

「ううん。高木くん、聞いてた通りだね」

一体何が聞いた通りなんだ？かなり気になるが流石にこの場では聞き辛いな。

「今日は花園さんも楽しんでね。隼人へ手伝えよ。ほら花園さんにお茶入れて」

「あゝ気がつかなくてごめんね。いやゝ花園さん、何かあったら何でも俺に言ってよ。それにしても今日は来てくれてありがとね」

仕方のない事だがやたらと隼人のテンションが高い。

空回りしなければいいのだが……

「花園さんの好きな食べ物は何ですか？え？肉好き？それじゃあこの肉も焼けてるからいっぱい入れてあげるよ。俺？俺も肉好きだから」

「そういえば3人共探索者やってるの？」

「そうなんだよ。探索者やってるよ。俺と真司は同じパーティーなんだよ。なあ真司」

「ああ、そうだよ。俺と隼人は1度挫折して探索者辞めてただけど、海斗に助けてもらってまた探索者をやってるんだ。海斗には感謝しかないよ」

「お、おいつ。みんなの前でそんな事言うなよ。俺は何もしてないって」

「いや、海斗には世話になりっぱなしだよ。俺らが危ない時も何度も助けてもらったし、泊まり込みで遠征行った時も海斗のおかげで助かったし。そうだよなあ真司」

「へっ高木くん結構すごいんだね」

「いやいや、全然だよ。それより隼人もこう見えて結構すごいんだよ。槍使いだからね。今はちよつとチャライかもしれないけどダンジョンでは人が変わるし、本当はいい奴だから」

「そうなんだ」

真司も隼人も此処で俺の事を持ち上げてても仕方がないだろ。

今日は隼人の日なんだから何とか隼人を盛り上げてやらないといけない。

「海斗、お肉美味しいね」

「それは良かった。前澤さんも食べてね」

「うん、しんちゃんから貰って食べてるよ」

しんちゃん！？前澤さん真司の事をしんちゃんって呼んでるのか？
早いな……

「前澤さんも春休みは真司と遊びに行ってるの？」

「うん、いろいろ行ってる。カフェ巡りもしてるしパスタ屋さん巡りもしたし、パンケーキ屋さん巡りもしてるよ」

「食べ物屋さん多くない？」

「うん2人とも食べるのが好きだからね〜しんちゃん」

「ああ、そうだな。いろいろ悠美と行けて俺は幸せだよ」

「も〜しんちゃんたら、ふふっ」

「……………」

これは一体何を見せられているんだ？
前澤さんってこんなキャラだったっけ。

第461話 合同バーベキュー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第462話 真司が進化

「おいおい真司、見せつけるのは遠慮してくれ。独り身の俺のハートがもたないぜ」

「別に見せつけてるわけじゃないって。悠美も機嫌いいし、いいだろ」

隼人の声は俺の心の声と完全にシンクロしていたが、この春休み2人に一体何が起こったと言うのか。

俺は鉄の心で目の前で繰り広げられる異世界の情景をスルーして肉を焼いて配る。

「ほら、春香も、もっと食べてよ」

「うん、ありがとう。海斗も焼いてばかりじゃなくて食べようよ。これでいいかな。はいどぞぞ」

「……………」
「食べないの？」

「はいどぞぞ」と言いながら春香が焼いた肉を箸で取って俺の方に向けてくれている。

これって俺に食べるって事だよな。

「は、はるか……………」

「はい、どぞぞ」

「うん、ありがとう」

強烈に恥ずかしいが、この状況では選択は1つしか無い。俺は春香が差し出してくれている肉を思い切って頬張った。

肉も熱いが顔が熱い。

「美味しい？」

「うん、美味しいよ」

本当は味が全く分からない。正直味どころでは無い。これは所謂「あ〜ん」ではないのか？

「あ〜海斗もか〜。2人共俺に少しは気を使ってくれよ。お熱いね〜。ねえ花園さん」

「……………」

恥ずかしい……。春香も前澤さん達にあてられたのだとおもつが、少しは俺のメンタルの事を考えて欲しい。

「それより、花園さんは探索者とか興味あるの？」

「そうでもなかったんだけど悠美から色々聞かされてるうちに気になった感じ」

「そうか〜。何でも俺に聞いてよ」

「じゃあ隼人くんは、何でダンジョンに潜ってるの？」

「それは、そこにダンジョンがあるからさ」

「……………」

「冗談だよ。やっぱり楽しいしやりがいがあるし、お金も稼げるからかな」

「お金稼げるの？」

「まあ、俺はそこまですら無いけどサラリーマンぐらいは稼げてると思う」

「そんなに？」

「本当だよ。一応体張ってるから。今度よかったら俺の奢りでカフェでも行かない？」

「あゝ考えとく」

隼人も積極的に花園さんにアプローチをかけているが、上手くいつているのか判断が難しいところだ。

俺達も出来る限りのフォローをしてやりたいが、真司が異世界に行つて帰つて来ないので強制的に呼び戻す。

「ちょっとトイレに行つてくるよ。真司も一緒に行くぞ」

「え？あ、ああ、じゃあ俺も」

真司を異世界から現実のトイレへと引き戻す。

「真司、前澤さんとイチャイチャしすぎだろ。隼人のフォロー頼むぞ」

「ああ、ごめんごめん。気をつけるよ」

「それにしても名前と呼んでるし距離感が一気に近づいてないか？」

「まあ、そうかな」

「春休み中に何かあったのか？」

「まあな。先週のデートでキスした」

「……………マジで？」

「うん、マジ」

「……………マジですか。早くないですか」

「そうか？海斗もそのぐらい春香ちゃんとしてるだろ」

「……………して、ない……………」

「マジで？」

「うん、マジ」

「海斗、今日もあれだけ仲良くしてるのに春休みはどうしてたんだ」

「週末には遊びに行つてたけど」

「それで何も無かったのか？」

「手を、手を繋ぐようにはなつた」

「それだけ？」

「それだけだけど」

「マジか」

「マジ」

「………………。海斗、告白はしたんだろうな」

「いや、まだだけど」

「マジか ……。でも手は繋いだんだよな」

「うん、春香から手を……………」

「そうか。じゃあ海斗俺もフォローするから今日告白しろよ」

「は？」

「は？じゃない。流石に春香ちゃんがかわいそうだぞ。俺も悠美と付き合い出して色々と成長したけど、海斗は奥手すぎる。お前に付き合わされる春香ちゃんの気持ち考えた事はあるのか？」

「いや、でも、断られたら俺再起不能になりそうなんだけど」

「は…………断られる訳ないだろ。今のお前達、世間では完全に付き合ってる状態だぞ。お前春香ちゃんの顔まともに見たことあるのか？さつきだつて完全に海斗の事大好きって顔してただろ」

「そうかな。嫌われては無いと思うんだけど」

「もつと自信を持って。黒い彗星の2つ名が泣くぞ！」

真司が今までと違う。今までも男らしい部分はあったが前澤さんの影響か、生まれ変わったように男らしい。

危うく惚れてしまいそうになるが俺には心に決めた人がいる。

それにしても黒い彗星はこの場では関係無いだろ。

第462話 真司が進化（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第463話 告白？

トイレから戻ってバーベキューを再開するが、突然真司から春香に告白するように言われて、動揺してしまっている。

俺が今日春香に告白するのか？

いつかはしないとイケないのは分かっているが今日か？

「海斗、そのお肉もう焼けてると思うよ」

「あ、ああ、うん、そう」

「海斗、何やってるんだよ。焦げてるぞ。しょうがないな。はいこれは花園さんの分ね」

「水谷くんありがとう」

やばい。頭が告白の事でいっぱい。バーベキューどころでは無い。告白か……。何て告白すれば良い？ やっぱリストレートに付き合っ
て下さいか？ それとももつとおしゃれな告白がいいのか？

「……いと、ねえ、……いと、大丈夫？」

「えっ？ ああ、ごめんちよつと考え事してた」

「具合でも悪いの？ 本当に大丈夫？」

「ああ、ごめん。全然大丈夫」

ダメだ。またボーっとしてしまった。今は隼人のフォローに集中しなくては。

「水谷くん達と大山くんは一緒にパーティを組んでるんだよね。メンバーに女の子とかいないの？ 探索者ってパーティ内恋愛とか凄そうだけ」

「無い無い。俺達のパーティは全員男だから。パーティで男女が上手くやるなんて無理だって。そんなのは、アニメかラノベの中だけだから」

「え〜っそうなの？本当はダンジョンで彼女作ったりしてるんじゃない？」

「本当にそんなんじゃないんだって」

花園さんも探索者に興味があるのかな。隼人と話しが盛り上がっているようでよかった。

は〜告白か〜。

どうしようかな。

流石にみんなの前では無理だから2人にならないとな〜

どうしようかな〜

う〜ん。

「俺と真司も最初は女の子達とパーティ組んだんだけど、それは酷いものだったんだ。ほとんど召使い状態だったよ。今思い出しても胃が痛くなるよ。な〜真司」

「ああ、あれはきつかったな。精神的なストレスでやられそうだったから今のメンバーで助かってる」

「へ〜っ。大山くんが言うなら本当なんだ。意外だね。探索者ってもっとな青春してるのかと思ってた」

「花園さん、どう言う事だよ。俺が言う事は全部本当だから〜。信じてよ〜」

「はい、はい」

「なんか俺の扱いが雑じゃない？探索者なんてそんな甘い青春群像なんか皆無だよ。あ、でもあれだ。超絶リア充黒い彗星の件とかもあるから例外はあるな」

「おいっ、隼人……」

「え〜？そのす〜っそんな名前は何？」

告白か。

ここで振られたら俺立ち直れるかな。

3年生を春香に振られて過ごすのか……………

無理だ……………

は。どうしよかな。

「あ、ああっ、花園さんごめん。俺の間違い。何でもない」

「水谷くん、間違いつてそんな事ある？気になるんだけど」

「いや。ちよつと花園さんと話すのが嬉しすぎて、舞い上がって頭がどうかしてたんだ。忘れてよ」

「そう言われると余計に気になるよ。ねえ悠美」

「うん、気になる。なんかしんちゃんも知ってるっぽいし。ねえ、春香」

「うんそうだね。でも超絶リア充って私はちよつと苦手な感じの名前だけ」

春香さん僕と付き合ってください！

うん、なんか違うな

出会った時から好きでした！

いや、出会った時からではないな。

君の瞳にチエックメイト！

俺おかしくなったのかな。

うん。どうしよかな

「ねえ、しんちゃん。わたし達隠し事はしないって約束したよね」

「うん、それはまあ」

「じゃあ教えて」

「……………」

「水谷くん。何で2人でそんなに隠そうとしてるのかな。何か

やましい事とかあるの」

「いや、全くない。あるはずない。俺が花園さんにやましい事なんかあるはずない」

「それじゃあ、教えてくれる？隼人くん」

「……………」

「何で2人共黙っちゃうのかな。怪しいな。2人がダメでも高木くんなら教えてくれるかな。ね、高木くん」

僕のハートはフォーリンラブ。

無理だな。

お買い物友達からのランクアップをお願いします。

ちよつと意味不明だな。

春香、俺の女になれよ！

気持ち悪い。これは俺が死ぬ……………

「……………ね、高木くん」

ん？なんか呼ばれたか？

またボツとしてしまっていた。このままじゃまずいな。気を取り直してバーベキューに集中だ。

第463話 告白？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第464話 黒き流星

「あ、ああ。ごめんボツとしてた。花園さんどうかしたの？」

「高木くんは超絶リア充黒い彗星って知ってる？」

「……………は……………え……………」

「どうかした？やっぱり知ってるの？」

「……………い……………や……………。知らない……………」

「その反応絶対知ってるでしょ」

何で突然超絶リア充黒い彗星の話が出てきたんだ。

探索者じゃない花園さんが知るはずのない事だよな。

じゃあ、隼人と真司か！？

俺は咄嗟に隼人と真司に目をやるが、2人共が今までに無い程気ま
ずそうな顔をして目を逸らした。

お前らか。お前らなのか。一体何のつもりだ。

「……………しら……………ない……………よ」

「海斗、おかしいよ。何かあるの？」

春香まで……………

「い、いや……………何も無い……………よ」

「海斗？」

春香が不安そうに俺の目を見つめて来る。俺には耐えられない……………

「そ、それは……………」

「海斗もやましい事があるんだ……………」

「そう…じゃない…けど……」

うう…っ。どうすればいいんだ。

「みんなごめん！俺がおかしなこと言ったばかりに変な空気になっちゃって。超絶リア充黒い彗星っていうのは、最近売り出し中の探索者の2つ名なんだ。そいつが女の子とも上手くパーティー組んでるから、それで名前を出したただけなんだ。特に意味は無かったんだごめんね」

「ふ…ん。でもそれだけだったら3人の反応が変じゃ無い？私達の知ってる人？」

隼人が上手くおさめてくれようとしたのに花園さん鋭すぎないか…

……

「い、いや…。そ、そんな事ないよ。なあ真司」

「そ、そうだよ、花園さん。花園さん達が知ってる探索者って、そんな事……」

「うん、わたしが知ってる探索者は水谷くんと大山くんと高木くんの3人だけなんだよね」

「……」

「でも、水谷くんは自分の事語る感じじゃ無かったし……」

隼人、お前か……お前が口を滑らしたのか。どうするんだよ。これっってもうほとんどバレてるんじゃないのか。

「それはそうだよ。俺の事じゃないし」

「じゃあ大山くんの事？」

「しんちゃん本当の事を言っただけじゃないと私……」

「いや、悠美。俺じゃ……無い」

「じゃあ高木くん的事だ！」

「その無言はイエスって意味？」

「……………」

バれた……………別に何もやましい事は無い。名前も俺がつけた訳じゃ無いし。大丈夫だ。大丈夫なはずだ。

あ、あれ？なんか急に足下が冷えてきた気がする。さっき迄春の陽気でポカポカしてたのにどうして……………

「どういう事なのかな？」

春香が質問してきたので春香の方に顔を向けるが、明らかに今までとは違う。

表情はさっきと変わらないが雰囲気明らかに違う。これは怒っているのか？

「あゝ葛城さん。誤解が無いように言っとくけど海斗は全く悪く無いから。勝手に周りがつけただけで、海斗が悪い訳じゃ無いから」「隼人くん、説明してもらえるかな」

あゝ隼人。俺を庇おうとしてくれたのかもしれないが、既に俺が超絶リア充黒い彗星って認めてるじゃ無いか。もう誤魔化しようが無い……………

「か、葛城さん。落ち着いて聞いて欲しい」

「うん」

「黒い彗星っていうのが海斗の探索者としての2つ名なんだ。最近海斗は探索者の中では結構名前が通って来てて2つ名で呼ばれてるんだよ。黒い彗星っていうのは、海斗が探索の時につけてる装備な

んだけど、全身を黒尽くめの装備で固めてるからそう呼ばれるようになったんだ。だから黒い彗星って呼ばれるのは結構すごい事なんだよ」

「ふうん。黒い彗星って呼ばれてるのは分かったんだけど、問題は……その前の部分なんだけど」

あれっ？ここは………どこだ？バーベキュー用の河川敷じゃ無かったっけ。

俺はおかしくなってしまったのだろうか。今俺の目の前に雪山が見える………

第464話 黒き流星（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第465話 黒き燃えかす

俺は今雪山を登っている。

段々と天候が悪化してきている気がするが、俺って雪山なんか登れたっけ。

「カ、カツラギサン、チヨウゼツって言うのはイッパイすごいって言うイミデス」

「うん、それは分かるよ。そこまではね」

「ハイ、ソウデスヨネ。シンジカワツテクレ……………」

「おいっ！隼人。俺？」

「うん、真司くんも知ってるんだよね。お願いしていいかな」

今日はしばれるな。雪山だから当たり前だけど、このままだと凍傷になりそうだ。

雪山の空気は澄んでいる。澄んでいるけど空気が冷たい。呼吸をすると肺が凍りそうになってしまう。

今日は頂きまでたどり着く事ができるかなあ。

「あ、ああ、あのですね、葛城さん……………」

「しんちゃん！すっかりして！どうしたの？」

「ああ、悠美ダイジョウブダ。リアとはリアルの省略系デス」

「うん、そうだよね」

「ハイ、ソシテ充とは充実とか充実組の略デス」

「うん」

「ツマリ、スゴく、リアルが充実している黒い彗星と言っイミデス」

あゝ今日はもうここまでかな。

雪山の頂を目指していたはずなのに全く先が見えなくなってきた。
まった。

ビパークしないといけないかな

「つまり海斗がダンジョンで凄くリアルが充実してるって事だよね」

「……………ハイ、ソウデス」

「充実って何が充実してるのかな」

「……………ソ、ソレハ」

「しんちゃん本当の事を言って」

「パ、パーティーメンバーが……………デス」

「それって海斗がダンジョンで女の子を……………って事？海斗そうなの？」

あれ？吹雪の中誰かに呼ばれた気がする。

春香の声だった気もするけどきつと気のせいだ。

もう今日は眠った方がいいかな

「……………と、海斗！」

「え？あれ春香？どうしてここに？」

「海斗、説明してもらえるかな」

「え？何を？」

「もちろんパーティーメンバーについて」

「……………うん」

別に隠してた訳でも無いし、何もやましい事がある訳でも無いので全く問題は無いのだが、ブリザードの影響で口の中まで凍ってしまった言葉がうまく出てこない。

「葛城さん、海斗のパーティーは7人と1匹のパーティーなんだ」

「うん、それは海斗からも前に聞いたよ」

「それで3人は海斗のサーバントでそのうちの2人が美少女なんだ」
「美容嬢？」

「いや美少女。俺達も一緒に潜った事があるけど滅茶苦茶強いんだ」
「美少女……。そう、それで超絶リア充なのかな」

「……………」

「は、はるか……。別に隠してた訳じゃ無いんだけど、俺のパーティーは女の子比率が高いんだ……。でも別に何も無いよ。本当に」

「海斗、女の子比率が高いってどのくらい？」

「えーっと、俺とサーバントのベルリアとカーバンクルのスナッチ以外です」

「それって、女の子が5人もいるって事？」

「うん、まあ、そう」

「……………全員美少女なの？」

「3人は普通です」

「もしかしてそれで、毎日ダンジョンに潜ってたの？」

「いやいや、違うって。半年前までずっとソロだったから。ソロでも毎日潜ってたからそれは関係無い」

「3人は美人なの？」

「え？まあ……。一般的にはそうかも」

「……………海斗のタイプだったりするの？」

今度は何だ？雪山に突然クレバスが現れた。踏み外せば死ぬ……………

「全くそんなことあり得る訳ないだろ。タイプとかそんな風に考えた事は一度も無いよ。働いた事ないけど、会社の同僚というか同志みたいな感じだよ」

「じゃあ、好きとか付き合ってるとかじゃないの？」

「そんな事はあり得ない。俺の命を賭けてもいいけど絶対にないです」

「……………」

「春香、高木くんがここまで言うって事は嘘じゃないと思うよ」

「……うん、そうだね。それじゃあ一つだけお願いがあるんだけどいいかな」

「ああ、うん何でも言うて下さい」

「じゃあ、今度海斗のパーティーメンバーの人達に会わせて欲しいの」

……………ドウシテ

第465話 黒き燃えかす（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第466話 16階層

「さすが高木様のパーティですね。もう15階層を攻略されたんですね」

「結構苦労しましたけどね。特に階層主のヴァンパイアは大変でした」

「えっ？ヴァンパイアですか？」

「はい。何度も消滅させたんですけど銀の武器じゃ無いからか再生して来て苦労しました」

「何度も再生ですか？」

「はい、倒しても倒しても復活してきました。パンツと一緒に」

「パンツ……ですか？」

俺達は15階層を攻略の報告を行う為に探索者ギルドを訪れている。

「そうです。不滅のブーメランパンツです。マジックアイテムでそういうの無いですか？」

「ブーメランパンツですか……私が知っている限りそのようなマジックアイテムは聞いた事がありません」

「そうですか。レアアイテムなのかもしれないですね」

やはりあの赤いブーメランパンツは普通のものでは無かったようだ。

「高木様、そもそもなのですが15階層の階層主としてヴァンパイアが出現したとは聞いた事ありません。しかも通常のヴァンパイアは、確かに再生力に優れているようですが、消滅から何度も復活できる程の能力があるとは思えません。高木様のお話が本当であればヴァンパイアでも上位種だったのかもしれない」

あの変態がヴァンパイアの上位種？確かに異常な程の再生力だった
が、そつなのだろうか？

「普通のヴァンパイアに会った事がないので判断がつかないのです
が、かなりの変態でしたよ」

「気持ち悪かったのです」

「あれが上位種ってヴァンパイアってやっぱりやばいのね」

「あれはダメなヤツだったな」

「それほどですか。やはり特殊个体だったのかもしれないね。そ
れではドロップアイテムもそれなりの物が出たのでは無いでしょう
か？」

「ああ、一応大きめの赤い魔核が出ました」

「それでは早速買取り致しましょうか？」

「ありがとうございます。でも今回は大丈夫です」

流石にサーバントが吸収してしまったとは言い辛い。

それにしてもあのヴァンパイアがイレギュラーなエンカウントだと
すると、やっぱり俺のせいかな。

いや今回はどちらかと言うとシルとルシエの都合か？

とりあえずギルドへの報告が終わったのでダンジョンへ向かう事に
する。

「……………」と言う訳で今週末に春香と会ってもらえないかな」

「もちろん大丈夫だけど。1度話してみたかったし」

「私も是非お会いしてみたいのです」

「すまない。私は今週末は予定があるんだ」

「あいりさん、全然いいです。俺が無理にお願いしてるだけですか
ら」

俺は道中昨日の出来事をメンバーに伝えて春香と会ってもらえる様に頼んでみたが、突然の頼みにもかかわらず2人来てくれる事になったのでありがたい限りだ。

「それにしても春香さんと会えると思うと楽しみね。オープンキヤンパスの時は一瞬だったから」

「私は会った事が無いので楽しみなのです」

「うん。それが残念ながら楽しいって感じでは無いんだよね。」

春香がなんでか怒つてると言うか、機嫌が悪い感じなんだよ。俺特に何もしてないと思うんだけど」

「今までメンバーの事は黙ってたの？」

「別に黙ってたって事はないけど、今までそんなにダンジョンの事とか話してこなかったし」

「あ。それでじゃない。まあでも大丈夫でしょ」

「しっかりダンジョンでの海斗さんの事もアピールしとくので大丈夫なのです」

「助かるよ」

昨日の春香はいつもと違ってちょっと怖かったので心配ではあるが、そもそも俺は何も悪い事はしていないのだから問題は無いはずだ。

昨日の感じでは春香はメンバーに女の子がいる事に怒っていたと思うが、女の子であっても十二分に力を発揮してくれているので探索には欠かせない。

しかもソロの俺に声をかけてくれたメンバーに問題があるとは全く思えない。

春香は何かしらの勘違いをしているのは間違い無いが昨日のあの場では俺に誤解を解く事は叶わなかったので週末まで待つしか無い。

それまでなんとなく胃が痛い。

第466話 16階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第467話 16階層の敵

「敵が出てこないな」

16階層を進み始めてから既に20分程が経過しているが未だ1体の敵も出現していない。

15階層と比較して気温や地形に大きな違いは見て取れないので比較的進み易い。

「この階層の情報って入ってるの？」

「色々当たっては見ましたが、分かったのは鬼がいると言う事ぐらいなのです」

「鬼？オーガか？」

「オーガの上位種がいるのかもしれないわね」

最近オーガと戦う事は無くなったが元々オーガ自体が結構強いモンスターなので気を抜くことは出来ない。

以前も弓を使った攻撃を仕掛けて来たので遠距離攻撃にも注意した方が良さそうだ。

「ご主人様、敵モンスターですが1体だけのようです。ご注意下さい」

「16階層で初めてのモンスターだからどんなモンスターか様子を見たいな。とりあえずシルは『鉄壁の乙女』を。ルシエは待機。あいらさんとベルリアが前で俺がすぐ後ろに付きます」

折角敵が1体なのにシルとルシエが速攻で倒してしまうと16階層の敵の特徴や能力が分からないので、2人は控えさせて戦いに臨む。

前方に進んでいくとすぐに敵が目に入って来た。
敵は人型だがかなり大きい。2Mは超えている様に見える。

「鬼だな」

「鬼ですね」

敵モンスターは一目で鬼と分かる1本角が頭部に生えているが問題は
はその格好だ。

通常のオーガとは違い服を着ている。

着物？いや浴衣か？

正直着物の種類の区別はよく分からないがとにかく、和装っぽい
を着ている。

しかも手に持つ武器は刀だった。

その姿は侍を彷彿させるが、この風貌なのである程度以上の知能が
あるのは間違いなさそうだ。

「ベルリア、あいりさん行きますよ」

俺達3人は前に向かって駆ける。

牽制の意味を込めて鬼に向かってバルザードの斬撃を飛ばすが、俺
が剣を振るったのに合わせるように鬼も手に持つ刀を振るって来た。

『パシユッ』

直後に聞き慣れない炸裂音がして何も起こらなかった。

何も起こらなかったが起こらなかった事が問題だ。

バルザードの飛ばした斬撃が消えてしまった？

本来であれば着弾すべき斬撃が着弾しなかった。

まさかだが、相殺されたのか？

見えないはずの飛ぶ斬撃を刀の斬撃を飛ばして相殺したとしか思え

ない。

「ベルリア、あいりさん、多分あいつ斬撃を飛ばせるみたいですよ。注意してください。ミク、刀を振るわすな！」

俺はベルリアとあいりさんに注意喚起をして、ミクに援護を促した
が連射の効くミクのスピットファイアが有効だと思ったからだ。
ミクも意図を汲んでくれて、すぐに後方から火球が飛んで来たが、
鬼が先程と同じように刀を振るうと火球が真っ二つに割れた。

割れた火球は勢いを削がれたものの左右に別れてそのまま鬼の両肩
に命中した。

命中してもそれ程ダメージがあるようには無いが浴衣が焦げて穴が
空いているので火傷ぐらいはしたんじゃないだろうか。

それにしても俺はこれと同じ様な情景を見た事がある。
以前ベルリアが敵の火球を斬った時とほぼ同じ状態だ。

この鬼も風貌と武器を見る限り剣に自信があるのだろうが、剣に頼
る脳筋は同じ行動に出て同じ結果を生むのかもしれない。
姿形こそ違えど、ベルリアと同じ匂いがする。

「ミク、効いてるぞ！続けて頼んだ」

続けて数発の火球が鬼に向かって飛んで行ったが、1発目は先程と
全く同じ結末を辿り、鬼にもダメージを与える事が出来たが、流石
に学習した様でその後の火球は斬ると同時に巨体を揺らして回避し
ていた。

4発目を回避されたタイミングでベルリアとあいりさんが鬼に接近
して間合いに入った。

第467話 16階層の敵（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第468話 鬼退治

間合いに入った2人が鬼に攻撃を仕掛ける。

ベルリアは懐に入り足を斬る為に2刀を振るい、あいりさんは一歩引いた所から薙刀で頭部を狙った一撃をほぼ同時に放つが鬼は巨体を物ともせずジャンプしてベルリアの一撃を避けると刀であいりさんの薙刀もはじき返してしまった。

完全に武芸者ばりの動きだが、まだ俺が残っている。

飛び上がった鬼に向けて『ドラグナー』による一撃を放つ。

青い光と共に銃弾が放たれ一直線に鬼の頭部を捕らえたと思った瞬間、鬼が左腕で頭部をガードして来た。

銃弾は防御した左腕を潰す事に成功したが、頭部にダメージを与える事はできなかつた様だ。

強いな……

単騎で俺達3人の攻撃を凌いだ。俺の一撃は完全に倒しにいった一撃だつたのに腕1本だけで凌がれてしまった。

「ベルリア、あいりさん相手は片手だ！このまま手数で押し切るぞ！」

先程の攻撃を凌がれたとはいえ、相手は残った右手1本しか無い。

俺達は3人で剣が4本。負けるはずがない。

体格差の1番大きいベルリアは上部からの鬼の攻撃に気を使いながら2刀で鬼の下半身を徹底して狙っていく。

あいりさんも少し引いた所から薙刀を振るうが、リーチと身長差で薙刀による間合いのアドバンテージがほぼ無くなってしまっている。

俺もリーチの差を少しでも埋める為に魔氷剣を発動させて攻撃を振

るう。

何度か鬼の攻撃を受け止めたが重い。種族と体格の差だと思つがとにかく一撃が重い。

残念ながら正面から切り結ぶのは俺には無理だ。

ベルリアは懐に入っているのでダイレクトに打ち合っているが、剣圧は、ほぼ互角に見える。

体格差を考えると圧倒的にベルリアのポテンシャルが上だとは思うが、大人と子供というより熊と子供程の差があるので、ベルリアの膂力を持ってしても押し切ることは出来ていない。

ベルリアを攻撃に専念させる！

「ベルリア俺が前に立つからその間にお前が仕留めろ。ずっとは持たないからな！頼んだぞ」

「マイロードお任せください」

俺が懐に入れば身長差があるとは言えベルリアへの攻撃は防ぐ事が出来る。

その間に仕留めてもらう。

「おおおおおおお〜」

臆病者と言われるかもしれないが流石に熊ほどある武者の前に立つのは勇気がある。雄叫びを上げ恐怖心を追い払い、2歩程の距離を詰める。たった2歩だがこの2歩のプレッシャーが凄い。

距離を詰めると当然のように鬼が俺に向かって攻撃をかけて来た。

どう考えても片手で対応出来る剣撃ではないので、初めから魔氷剣を両手で構えて攻撃を受ける。

「おあっ！」

覚悟はしていたので初撃を耐える事が出来たが、思った以上にきつい。

俺では跳ね除けて切り返す力が足りない。

「ぐっぐっぐ」

俺に力が足りないのを悟られたのかそのまま力技で押し込んで来た。初撃は気合で防いだが力比べになると勝てるはずも無い。

『斬鉄撃』

あいりさんが必殺の一撃を繰り出し、鬼はあいりさんの一撃を受ける為に俺への圧力を弱めた。

「グウアッ」

俺とあいりさんに気を取られた鬼はベルリアにまで気を回す事は出来なかつた様で、隙を見逃さなかつたベルリアの『アクセルブースト』により両足を切断する事に成功した。

動きを完全に封じられた鬼に対して俺とあいりさんが同時に斬りかかり消失に追いやる事が出来た。

「かなり強かつたな。オーガとは違う鬼みたいだったけど、ほぼ侍だったよな」

「いえ、マイロードこの程度の敵は問題ではありません」

「あゝそうか……まあ次も頼んだぞ。でも1体であれだからな。何体も一緒に出て来たら結構きつい気がするな」

「そうだな、モンスターのくせに刀を使いこなしている様にも見えたりしな。私の攻撃も結構防がれたし油断は禁物だろう」

「そうですね。あいつとは極力数的優位を作った状態で戦いたいで

すね
」

16階層の探索が始まったばかりだが鬼の巢食うフロアは最初から油断ならない階層だと警鐘を鳴らしている様だ。

第468話 鬼退治（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第469話 鬼鬼

俺は今16階層を進んでいる。

「かなり強かったけど他のパーティはどうしてるんだろう」

「まだ1体だから断定は出来ないが刀が武器なのであれば、距離をとって槍系もしくはは遠距離から仕留めているのだろうな」

「私達は前衛の海斗とベルリアのメインウェポンが完全に近距離だから」

「重ね掛けで魔氷槍にすれば間合的にはいけると思っけど、MP的に厳しいな」

「でも大きい割にジャンプしたりしていたので『アースウェイブ』で機動力を奪うのは有効なのではないでしょうか？」

「確かに重そうだし有効かもな。次同じのが出て来たら『アースウェイブ』を頼むよ」

「わかったのです。任せてください」

まだ16階層の探索は始まったばかりなので、マッピングを進めるべくどんどん進んでいく。

「海斗さん、春香さんってどんな方なのですか？」

「そうだな。正義感が強くて優しく可愛くて俺のヒーローだよ」

「海斗さん……ベタ惚れなのですね」

「……っ、ヒカリンが聞くからだろ」

「正義感が強くて優しいってちょっと海斗さんっぽいですね」

「俺！？俺は春香とは全然違うよ。春香のようになりたいと思っただけだよ」

「そうなのですね。週末楽しみですね」

「俺はあんまり楽しみではないんだけど」

「そうなのですか？このパーティーはちょっと恋バナが足りないの
色々聞いてみたいのです」

「恋バナって……。春香にそれを聞くつもりなのか？俺じゃない相
手が出て来たらショックで倒れるかも。出来たらやめてほしいな」

「ふふつ、私達に会いたくないので大丈夫じゃないですか？」

「そういうものかな。それより俺以外の3人でも恋バナとかしない
のか？」

「無いですね。私はそういうのは無理ですし、ミクさんとあいりさ
んもそういう相手はいないようなので」

「そうなのか。3人とも凄くモテそうなのにな。ヒカリンも絶対に
俺が薬を手に入れて見せるから恋愛にも積極的になってもいいと思
うよ」

「流石超絶リア充は言う事が違いますね」

「ヒカリン……………」

「冗談なのですよ。ありがとございます。でもまだちょっと余裕
がないのです」

「そうか」

「ご主人様、前方に敵モンスターです。今度は2体です」

今度は2体か。1体はシルカルシェに任せるか？

対策を考えていると今度は敵の方からこちらに向かって来たようで
目視できる位置に敵影を確認する事が出来た。

どちらも先程の鬼と同様浴衣のようなものを着ている。1体は先程
と同種のように見えるがもう1体は比較するとかなり小さく見える。
対象が大きすぎるので小さく見えるが俺と同じぐらいの大きさだろ
うか？

浴衣の感じが女性物の様にも見えるので性別で言うと女なのかもし
れない。

『アースウェイブ』

俺が敵を目視するのとはほぼ同時に事前の打ち合わせ通りカオリンが魔法を発動した。

狙い通り大きい方の鬼、大鬼は突然足元がぬかるんだ事に対応出来ずに足を取られている。

『アースウェイブ』

カオリンが続け様に魔法を放ち今度は小さい方の鬼、女鬼の足元にも発動したのが見えたが女鬼は瞬時にその場を移動して難を逃れた様だ。

動きは一瞬だったが、かなり素早い。

「ベルリア、あいりさん、大きい方を頼みます。小さい方は俺がやります。ミク、スナッチ援護を頼んだ」

足を取られた今の状態の大鬼であればベルリアとあいりさんの2人で十分仕留められるはずだ。

逆に女鬼の方はあのスピードではシル達の魔法も狙いをつけ辛いので俺が対応するのが適任だろう。

俺は『アサシン』の効果にも期待して『ナイトプリンガー』の効果を発動してから女鬼の方に向かって駆けた。

第470話 戦鬼

俺が駆け出したのとはほぼ同時にベルリアとあいりさんも大鬼を目指して駆け出すのが見えた。

女鬼に近づいて見ると大鬼に比べるとかなり人に近い風貌をしている。

背丈はほぼ俺と同じぐらいで顔も角が無ければそれ程人と変わらな
いが目が赤い。

女鬼も俺が相手と認識した様な動きを見せているので、完全に認識
障害をできている訳では無さそうだ。

先手必勝！

走りながらバルザードの斬撃を飛ばす。

見えない斬撃であれば必中だと思ったのだが、気配を感じたのか斬
撃を放った直後、女鬼が大きく横に飛び跳ねて避けられてしまった。
人よりも気配察知に優れているのかもしれないが、俺は慌てずその
まま距離を詰めて行く。

態勢を整えた女鬼は両方の手に持つ小刀を振るって来たが、小刀を
振るった瞬間炎の刃が発生して俺の方に飛んで来た。

小刀から炎が飛び出るとは考えてもなかったので、かなりびっくり
したが、やはり正確に俺の位置を把握している訳ではない様で俺の
走る横を通過して行った。

命中はしなかったが、油断すると危ない。

俺はそのままスピードを殺さず女鬼を目指すが、女鬼も間合いを詰
めさせる気がないのか、後方に駆け出して
行く。

さっきも感じたが、やはりこの女鬼はかなりのスピードだ。俺より
も速い。

俺も女鬼に向かって走っているのに距離が一向に縮まらない。

『アイアンボール』

「ガアアアアアアア」

あいりさんの声と共に尋常では無い叫び声が聞こえて来たので声の方に目をやるが、あいりさんが動きの鈍った大鬼に向かって鉄球を放ったのが見えた。横目に見ただけなのではつきりとは見えなかったが、恐らくあの位置はあれだ。

いくら大鬼が頑強でもヴァンパイア戦で鍛え抜かれた鉄球をあの場所にくらつては、再生能力が無ければ、ほぼ終了となる事だろう。大鬼の着ている浴衣は、ほぼ防御力はゼロだろう。大鬼自身の外皮の防御力は高そうだが、あの場所の防御力が高いとは思えない。

ヴァンパイア戦は凶らずも、1人の鬼を生んでしまったのかもしれない。

あの戦いは情けを知らない男系モンスターの天敵、戦いの鬼『戦鬼』を生む結果となったのだろう。

やはりあいりさんを怒らせてはいけない事を再認識させられた。

大鬼の消滅を確信したので気を取り直し再び女鬼を追うが、一向に距離が詰まらないので理力の手袋の力を使い前方を走る女鬼の足首を思いつき掴んでやった。

すぐに振り解かれてしまったが、一瞬女鬼のスピードを殺す事に成功した。

その間に俺は女鬼との距離を一気に詰めて接近してバルザードを振るう。

『キイーン』

女鬼が完全には見えてないはずの俺の攻撃を十字に構えた小太刀で受け止めた。

「くっ……」

体格は、ほぼ同じでも相手はモンスターである鬼なので俺よりも臂力に優れている様で全力で押ししてもびくともしない。

女鬼が膠着状態の俺に向けて十字に構えていたうちの一刀を横薙ぎに放って来た。

焦った俺は避ける為にバックステップを踏むが避けきれず女鬼の一撃を脇腹にくらってしまった。

「海斗！」

追撃をかけて来た女鬼に向かってミクが火球を連続で撃ち込んで動きを阻んでくれる。

脇に加えられた衝撃で一瞬呼吸が止まってしまい、同時に動きも止まってしまった。

ミクのお陰で時間を稼ぐ事が出来た俺は、止まった呼吸を取り戻すべく大きく息を吸い込んでから一歩下がって態勢を立て直し『ドラグナー』の引き金を引き銃弾を放ったが近距離で放った銃弾は避けられる事なく女鬼の胸の部分に風穴を開けた。

「ああ………」

女鬼が動きを止め何か言葉にならない言葉を発しようとしたが、間髪入れずにバルザードで追撃を入れ消滅に追いやる事が出来た。思った以上に苦戦してしまった。

第470話 戦鬼（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第471話 対人戦スキル

苦戦したがなんとか女鬼を倒す事が出来た。

大鬼の方を見ると既に姿は無く消滅した様だ。

どうやらとどめはベルリアがさしたらしく、俺の方を得意顔で見ている。

やはり大鬼には『アースウェイブ』が効果的だった様なので、今後もこのパターンで仕留めるのが良さそうだ。

一方俺が今回相対した女鬼はスピードは速かったが、それ以外は突出した能力を持っていた訳では無い気がする。

どちらかと言うと能力的には大鬼やアラクネの方が上だった気がするがソロで臨んだせいか、かなり苦戦してしまった。

ナイトブリンガー越しとは言え直接攻撃もくらってしまった。

衝撃もかなりの物で今も脇腹には結構な痛みが残っているので確実に痣になっているだろう。

女鬼の小太刀をくらった痛みの残る箇所を目をやると

「あゝっ！ちよつと凹んでる！おあっ」

なんと俺のナイトブリンガーが凹んでいた。そこまで大きな損傷では無いが攻撃を受けた部分が少し凹んでしまっている。

今までダンジョンに潜る度に綺麗に磨いてきた俺の大事なナイトブリンガーが〜！

ナイトブリンガーが凹んだ……………

形あるものには傷がつく。ダンジョンマーケットのおっさんが言っていた様に、それは物事の真理だとは思うがかなりショックだ。

文字通り俺の身代わりとなったのだから鎧としては本望だろうが非常にショックだ。

バルザードが欠けた時にもショックを受けたが、それと同じぐらいショックだ。

「まあ、海斗が無事だったんだからいいじゃない。ショックなのも分から無くはないけど、それはあくまでも防具じゃない」

「……………ミク、分かってないな。ナイトプリンガーは大事な大事な防具なんだよ。ちょっとした傷でもこれを見逃してしまえば、次からはもっと大きな傷を受ける様になってしまう。人間は慣れてしまいう生き物なんだ〜！」

「そうね。そうかもしれないわね。次から気をつけて」

「ああ、有り難う」

俺の防具への思い入れがミクにも少しは伝わっただろうか？

それにしても今回の原因は全て俺にある。

自分でも気付いてはいたが、俺は対人戦スキルが低い。

ダンジョンの敵も獣や虫型等の所謂モンスターに対してはそこそこ戦えていると思うが、人型に近い種類のモンスター、特に今回の様に技術を持って臨んで来る敵にすこぶる弱い。

人型に近ければ近い程戦闘技術の応酬戦になるが、剣術を含めそのあたりの技術スキルが圧倒的に劣っている。

ベルリアに鍛えてもらっているとは言え、本格的な相手とはまだまだ比較出来るレベルに無い。

この16階層がオーガの様な力押し主体の鬼では無く、今回の様な鬼中心に出現するのであれば確実に苦戦する。

ベルリアとあいりさんは能力と技術的に問題ない様な気がするが、俺には厳しい探索になりそうだ。

「またベルリアに修行してもらわないとな〜」

こここの所ダンジョン探索と春香と会う為に全ての時間を取られてし

まいベルリアとの修行が全く進んでいなかった。

「マイロード、私はいつでもお待ちしています。スキルアップの為に更に厳しい修行をお約束します。お任せください」

ベルリア、言ってる事は間違っていないが、その言い回しでやる気が出る生徒は皆無だと思っぞ。

今気が付いたが、もしかしてベルリアって教えるのに向いてなかったりするの？

教えてくれる人がいないのでベルリア一択だが、可能であれば他の人に習った方がスキルアップが早かったりするのだろうか。

いずれにしても16階層中に劇的なスキルアップをする事は不可能なので、長期的な計画で対人戦スキルを磨いていこうと思う。

千里の道も一歩からだ。千里はいくら何でも遠すぎるので百里あたりを目指して頑張りたいと思う。

第471話 対人戦スキル（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第472話 妹

「あいりさん、大鬼の方は上手く倒せたみたいですね」

「ああ、『アースウェイブ』のお陰で殆どの動きが限定されていたから間合いさえ気を付ければ問題無かったよ。それより海斗は大丈夫なのか？攻撃をくらってしまったようだが」

「俺は大丈夫です。鎧が凹んだだけですから……」

「そうか、怪我が無くて幸いだっとな」

俺達は落ちている魔核2個を回収してから先に進む事にする。

「次からはシルとルシエも頼んだぞ。この階層の鬼の特徴もそれなりに分かって来たしな」

「分かりました。お任せください」

「ちゃっちゃっとな燃やしてやるよ」

リスクを避ける為に状況次第で次から2人にも参戦してもらおう事にする。

マッピングしながら進んで行くが鬼の気配は無い。

この階層はそれ程エンカウント率は高くないのだろうか？

「マイロード、避けてください！」

「え？」

「上です！」

上？

上がどうしたんだ？

ベルリアに避けて下さいとは言われたが、咄嗟の事で身体が動かな

かった。

「あつ！」

俺の右足に履いているブーツの爪先を掠めるようにして地面に液体のような物が落ちて来て、そのまま液体周辺の地面が煙を上げて溶けてしまった。

危なかった後一步踏み出していたら俺の足は地面同様完全に溶けてしまっていたかもしれない。

だけど一体どこから……いやベルリアが上って言ったから上か。

「マイロードご無事ですか？」

「ああ、危なかったけど大丈夫だ」

咄嗟に動けなかったのが逆に良かったのだろう。

この階層にも罠があるのか。しかも頭上からか……

常時上を向いて先に進む事は非常に難しいのでどうしようかな……

「ベルリア、感知できるのはさつきぐらいが限界か？」

「そうですね。発動してからのしか感知できないので先程のが限界です」

天井までそれなりの高さがあるからか、ベルリアの警告から地面に液体が落ちて来る迄に少しの時間があつた。

「シル、ベルリアの声を聞いた瞬間に『鉄壁の乙女』を発動する事は可能か？」

「恐らく先程ぐらいの感じであれば可能です」

「そうか、じゃあシルは俺と並んで進んでくれ。みんなも俺とシルを中心にして固まって移動しよう」

畏は、意味不明だがほとんどの場合俺を中心にして降りかかって来るので、シルに俺の側にいてもらうのが一番合理的だと思う。俺を中心にしたフォーメーションに変えて先に進む事にする。

「ん？シルどうした？」

「ご主人様をお守りする為に必要な事です」

「そうか？まあそう言う事なら別にいいけど」

歩いているとシルが俺の右手を握って来た。

シルも一応女の子ではあるが春香の時とはまた違った感じで、完全に年の離れた妹と手を繋いでいる感じた。

俺は一人っ子なので今までシスコン属性は全く無かったが、シルが俺の下に来てからと言うもの完全にシスコンの気持ち的理解出来るようになってしまった。

シルもルシエも俺の家族でポジシヨンのには完全に妹なので、この感情は正しい物だと言える。

ただシスコンというだけで無く、大きな娘が出来たような父性とも言えるような不思議な感情も混在している気がするので、それだけシルの事を愛おしく感じているのだと思う。

ただこの時点に於いてもロリコン属性だけには一切目覚めなかったのは、自分を褒めてやりたい。

この状況でロリコン属性に覚醒していればパーティを組むどころの騒ぎでは無くなり、探索者を続ける事は困難になっていたかもしれない。

超絶ロリコン『ピンクの彗星』とかの2つ名が付いていたらもう2度とダンジョンへ踏み入れる事は出来なくなっていたかもしれない。

「あゝ、シルとだけ手を繋ぐとかあり得ないだろ！この変態！わたしも繋ぐぞ」

今度は罵声と共にルシエが俺の左手を握って来た。
ルシエの手繋ぎに対してもシルと全く同種の感情が自分の中に生ま
れている。

幼い妹2人と両手を繋いで探索……

ダンジョンで一体なんの絵面かとも思ってしまったが、かなり幸せな
のでこれはこれで有りかもしれない。

ただ間違っても他の探索者には見せれない姿だ。

第472話 妹（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

「カ！」

やはりルシエとはまともな話が出来ない。精神年齢が見た目かそれ以下なので疲れる……

ただ、2人の言うようにこのお散歩スタイルも否定しきれないところ困ったものだが、他の探索者には絶対に見られたく無い。いや見られてはならない。

「ご主人様、敵モンスターです。今度は3体いるようです」

「打ち合わせ通り、1体はルシエが倒してくれ。シルもいつでも行けるように待機しておいてくれ」

相性の問題か2体の鬼でも結構苦戦したので今度はルシエにも戦ってもらおう。

前方に現れたのはやはり鬼が3体。

親子にも見えるが、大鬼、女鬼そして子供の鬼が並んで現れた。

子供の鬼も他の2体とは違い鎖鎌のような武器を手にしているが、大体シル達と同じぐらいの背丈だ。

「ルシエ、子供の鬼を頼んだぞ！カオリン『アースウェイブ』を大鬼に！」

残念ながら俺は女鬼との相性が悪いようなのでベルリアに任せて、俺はあいりさんと共に大鬼に向かって行く。

カオリンの『アースウェイブ』は確実に大鬼の足を止めてくれている。

「海斗、とどめは私に任せてくれないだろうか。やってみたい事があるんだ」

「えっ？ああ、もちろんいいですよ。俺が注意を引きます」

あいらさんに何か策があるようなので俺は大鬼の注意を引く事に専念する。

足運びが使えない状態なので圧倒的に優位に攻撃をかける事が出来るが、腕力にものを言わせて長刀を振って来るので気は抜けない。バルザードには既に氷を纏わせてリーチ差を埋めるべく魔氷剣で斬りかかる。

相手は足を取られているので後方に回り込めば勝ちだ！

俺は斬り合いながらも距離を保ち、徐々に大鬼の後方に回り込む。

あいらさんの援護も有り、完全に後ろを取ったので無防備な背中に向かって斬りかかるが、踏み込んだ瞬間、カウンター気味に刀による突きが俺に向かって放たれた。

完全に虚をつかれ既に踏み込んでいる為に避ける事が出来ない。

肩越しの後方への突きが完全に俺の身体を捉えているのでこのままではやられる。

そう感じた瞬間にスイッチが入った。

ナイトプリンガーを発動してはいなかったが、追い詰められたこの状況で自然と『アサシン』の能力が発動したようで、大鬼の突きが少しだけゆっくりになり剣筋を目で追う事が出来るようになる。

その剣筋に向かって、既に構えていた魔氷剣を当てるように動かし、俺への攻撃をズラす。

大鬼の刀は魔氷剣の刃に触れて軌道を変え、ナイトプリンガーの肩口を掠めて後方に抜けた。

第473話 防御の陣（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第474話 鉄の呼Q

またこの感覚だ。

完全に間に合わないタイミングだったが、ゆっくりとした時間の流れの中俺の動きが加速した。

いや加速というか周りと違う時間経過の中を動いている感じだろうか。

完全に間に合わないと思われたタイミングで動作して相手の刀による突きを躲す事が出来た。

突きを躲し肩口に衝撃を感じた瞬間切り返して再度攻撃に転じたが、今度は俺だけが素早く動ける事は無く、ゆっくりとした時間の流れの中でゆっくりとした俺の斬撃が繰り出されたが、敵は後ろ向きなのに普通に刀で防がれてしまった。

更なる突きから逃れる為に俺は慌てて後ろに下がる。

「海斗任せろ。鉄の呼Q 15の型 斬鉄旋風撃 紅！」

大鬼の意識が俺に向いているのを見てとり、あいりさんが必殺の一撃を繰り出した。

俺への攻撃の為に無防備となった大鬼の肩口を薙刀が抉る。

見事な一撃だが……

一体さっきのは何ですか？

何か変な掛け声と共に攻撃を繰り出した様に見えたが何だったんだ？

「浅いか！鉄の呼Q 17の型 斬鉄撃蒼炎覇斬 滅！」

あいりさんの追撃が入り大鬼は消滅したが、まただ。

どう考えても気のせいでは無い。

あいりさんがおかしくなってしまった。

策があるとは言っていたが……まさか、これの事か？

何やら不思議な技の名前を叫んでいた様に思うが、今までの『斬鉄撃』と何が違うのだろうか？

どう見ても普通の『斬鉄撃』だった様に見えるのだが何が違ったのか？

「あいりさん………今のは一体何ですか？」

「ああ、ちよつとやってみたかったんだ」

「ちよつとやってみたかった？」

「そうだ。海斗は鬼烈の刀を知っているか？」

「鬼烈の刀ですか？」

「ああ、昔流行ったアニメなんだが知らないか？」

「言われてみれば、聞いた事がある様な気がしますけど」

「そうだろう。私はそのアニメの大ファンだったんだ」

「それと今のは何の関係が……」

「えっ？海斗は知らないのか？」

「何をですか？」

「鬼烈の刀は、敵に鬼が出て来るんだ。しかも着物を着て刀を振るうんだよ」

「はあ……」

「そっくりだとは思わないか？この階層の鬼がその登場する敵によく似てるんだ」

「ああ、そうなんですな」

「それで思いついたんだ」

「何をですか？」

「主人公達の技を鬼相手に使えないだろうかと思っただ」

「……………」

「主人公達は呼Qを使った大技を繰り出すんだ」

「……………見た事無いのでよく知らないんですけど普通に無理じゃ無

いのですか？」

「海斗、さっきのを見てなかったのか？鉄の呼Q 17の型 斬鉄
撃蒼炎霸斬 滅だぞ？」

あいりさん……俺はあなたに謝らなければならぬ事があります。
今まであなたの事を巴御前を彷彿させる大和撫子なクールビューテ
イなお姉さんだと思っていました。俺の勘違いだったようです。本
当にごめんなさい。

俺の一方的かつ独善的な思い込みによるイメージだったようです。
すいませんでした。

今よりあなたへの勝手なイメージを改めさせて頂きます。

俺も人の事は言えませんがあなたも病気に罹っていたのですね。

しかも俺が見る限りかなりの重度の病気のようです。

あなたは完全に厨二病患者だったのですね。

今まで気がつきませんでした、すいません。

「鉄の呼Q 17の型 斬鉄撃蒼炎霸斬 滅だぞ？」と当然の様に
言われても鬼烈の刀を見た事の無い俺には全く理解できませんでし
た。

多分凄い技なのでしょうね。

見た事の無い俺が悪いのです。

ごめんなさい。

あいりさんは大学生ですね。高校生の俺から見たら大学生は随分大
人に見えていましたが、それは俺の勝手なイメージだったのかもし
れません。

もしかしたら数年後俺もこんな大学生になってしまうのかもしれま
せん。

お母さんごめんなさい。未来の事は分かりませんが、今から謝って
おきますね。

第474話 鉄の呼Q（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第475話 氷の呼Q

あいりさんの厨二病が発病したおかげが有るのか無いのか、早々に大鬼を倒すことに成功したが、残りの2体はまだ抗戦中だった。

女鬼とベルリアは互いに2刀使いでスピードに優れており互いに似た特性を備えており交戦を続けているが、俺と違いベルリアは女鬼のスピードにも対応できている様なのでこのままで行けそうだ。

問題は子供の鬼の方だ。

大鬼に比べると格段に小さいので、それ程警戒していなかったのだが、多分こいつが1番厄介だ。

見ると既にルシエが『破滅の獄炎』を放っていたが、女鬼を遙かに上回るスピードで獄炎の効果範囲から瞬時に抜け出している。

ルシエの獄炎を発動して倒せていないとは只者では無い。

「ちょこまか動くなこのチビが！さっさと燃えて無くなれ『破滅の獄炎』」

ルシエが2発目の獄炎を発動した様だが、またも獄炎が発現する前にその場から高速で離脱されてしまった。

どうやらルシエとの相性が悪い様なので俺とあいりさんも参戦すべく敵に向かって走り出す。

「ギヤギヤギヤツ。鈍い鈍いな。鈍いと呪い殺すぞ。ギヤギヤギヤ」

俺達が向かっているのを見て小鬼が声を上げた。

この風貌なので当然の様に喋れる様だが、これはあれか？分かりにくいが一応ダジャレなのか？

鬼もダジャレを言うのか？

鈍いと呪いをかけた感じか？

あんまり上手くない気がするが、これが鬼クオリティなのか。俺とあいりさんが距離を詰めようとするが、明らかに移動速度は小鬼が上回っている。

小鬼の持っている武器は鎖鎌だが、ダンジョンも含めてリアルの世界で見るのは初めてだ。

昔読んだ剣豪の話に鎖鎌の武芸者が出来たのを臆げながら覚えていた程度だ。

確か鎌での攻撃とあの分銅での遠距離攻撃ができるんだっただよな。

小鬼は高速移動をしながら器用に分銅の部分をくるくる回しているが走りながら分銅をこちらに向かって放って来たが明らかに射程外だ。

小鬼のミスに乗じて隙を突こうとしたが、分銅は鎖の長さ以上に伸びて来て俺の胸の部分にヒットしてしまった。

「グウハツ」

ナイトプリンガーにより直接的な怪我は防げたが、胸部に強い衝撃を受け呼吸が出来ない。

さっきの攻撃は完全に射程外だったはずなのに、鎖が伸びた様に見えるまで届いて来た。

あの鎖鎌も魔剣の類か？

「海斗、大丈夫か！」

「あんまり……だい……じょうぶ……じゃないです。息が苦しい……です」

「息が苦しいのか。そうか海斗、今こそ氷の呼Qだ！呼Qを使え！」

先程からあいりさんは何を言っているんだ？

アニメの技を使い始めたと言うか、なりきりヒーローみたいな事を始めたと思ったら、切迫したこの状況で俺にまでアニメの技を使えと言っている。

百歩譲ってアニメはまあいいだろう。

ただ俺そのアニメ見た事ないって言いましたよね。

見た事ないアニメの技なんか使えるわけないじゃないですか！

一体氷の呼Qって何だよ。

どうやったら使えるんだ？

「海斗、全ては呼Qだ！今までの修行を思い出して大きく体に空気を取り込め！内なるコスモを燃やせ！」

よく意味は分からないが、要は深呼吸しろって事か？内なるコスモの意味は不明だが……

「すっつ、はっ。すっつ、はっ」

「そうだ、その調子だ！呼Qが出来れば後は技を繰り返すだけだ！」

やっぱり深呼吸で正解だったようだ。ラマーズ法ではなかったらしい。衝撃で息が出来なくなっていたので深呼吸は間違いでは無かったと思う。ただ、あいりさん。だから無理ですって。

技って何？

氷って魔氷剣の事だよな。

それよりもあいりさん、小鬼に距離をとられてしまったので追って下さい。

今はごっこ遊びをしている余裕はありません。

第475話 氷の呼Q（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第476話 小鬼退治

小鬼は俺に一撃入れてから一旦距離を取ったと思ったが、俺とあいりさんがくだらないやりとりしているのを見てチャンスと思ったのだろう。再びこちらに攻勢をかけて来た。

小鬼はさっき日本語を話していたのだから俺達のやり取りを大体は理解しただろうから、攻めに転じるのも納得ではある。

やはり知能の高いモンスターを前に情報を与える様な会話は控えた方が良さそうだ。

まあ今回の様な意味の分からない呼Qの話をしたところで不利になる事もないと思う。

小鬼はこちらに向かうと再度俺に分銅を放って来た。

どうやらあいりさんではなく既に一撃入れた俺をターゲットにしている様だ。

先程同じ攻撃をくらってしまったので、鎖が伸びるのは既に分かっている。今度は油断せずに避けようとするが、分銅が方向を変え俺を追尾して来たので、迫って来る分銅に向け慌ててバルザードの斬撃を飛ばす。

バルザードの斬撃でも鎖が切れる事は無かったが、分銅の衝突は何か防げた様だ。

小鬼はそのまま向かって来て鎌を振るって来たのでバルザードで受け流す。

今まで鎌を使う相手と対峙したことが無かったので分からなかったが、鎌はかなり厄介だ。

普通の一直線の武器と違い持ち手から横に伸びている刃の部分が今までにない変則的な距離感を生み、避ける事が一気に難しくなってしまうている。

距離感を誤って腕や他の場所を斬られてしまいそうで結構神経を使

うが高速で襲ってくる鎌の攻撃全てをバルザードで防ぐ事は出来ない
ので回避する事にウェイトを置き対応する。

「あいらさん！」

「任せろ！鉄の呼Q 11の型 斬鉄撃爆雷陣 破」

あいらさんが距離の詰まった小鬼に対して踏み込みながら斬鉄撃改
め鉄の呼Q 11の型を放ったが刃が届く前に高速で躲されてし
まった。

「私だつて負けてられないわ『幻視の舞』」

ミクが徐々に『幻視の舞』を繰り出したが小鬼に効くのか？

俺の前方にいる小鬼を注意深く観察すると、若干動きがおかしい。
完全ではないかもしれないが確実に動きに影響を及ぼしている様に
見える。

「このチビ、いい加減にしろよ！炎がダメなら風に刻まれて地獄に
落ちろ『黒翼の風』」

俺達の攻防にルシエが痺れを切らしたらしく、動きが鈍った小鬼に
切れながら必殺の一撃を放った。

急激に風が小鬼に向かって集約していきそのままバラバラに切り刻
んでしまった。

小鬼がいくら素早くても、自分に向かって集約する風の刃から逃れ
る術は無かつたらしい。

ただ、よく考えると最初から『黒翼の風』を使えばこんなに苦戦す
る事は無かつたのでは無いかと思うが、今言つと絶対にルシエが怒
るのが目に見えているので後で言うことにしよう。

ベルリアの方も『アクセルブースト』を使用して既に勝利していた。

タイプは近い気がしたが膂力と技の威力で勝るベルリアが難無く女鬼を退けていた。

「やっぱり鬼は手強いな。俺結構疲れたんだけどみんな大丈夫？」

「私はほとんど活躍してないから疲れてないわ」

「いやでも『幻視の舞』が効いてたっばいし、タイミングがあれば使っていけばいいんじゃないか？」

「そうね。機会があればまた使ってみるわ」

「そうだな」

「私は楽しいし元気だぞ」

「そうでしょうね……鬼烈の刀でしたよね」

「あゝっ！やっぱりそうなのですね。あいりさんの戦うのを見て気になってたんです。やっぱり鬼烈の刀なのですね。私も大好きなんです。再放送を見てハマったんです。確かにこの階層の鬼は、ほいですよね。いいな。私も何か考えようかな。コホッ……」

ヒカリンも鬼烈の刀が好きなのか。あいりさん1人でも微妙なのにヒカリンも一緒になってやるのは控えてくれると嬉しいなあ。

第476話 小鬼退治（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第477話 ラブコメ？

3体の鬼を無事退ける事が出来たものの3体それぞれに特徴があり苦戦してしまつたが特に1番小さい鬼に思いの外手こずつてしまい、結局俺だけでは倒す事が出来なかつた。

今後も出現するであろうあの小鬼には何らかの対策が必須だろう。この階層に来てから戦闘の度にかなり集中しているせいで目に見えて消耗していつているのが分かる。

「みんなそろそろお昼にしようか」

「そうね、適当な場所で食べましようか」

余り根を詰めて探索を進めても良い結果にはならない事が多いので昼食を取る事にする。

ちなみに俺の今日のメニューはコーンマヨネーズパンとツナマヨのおにぎりだ。

どちらもマヨネーズベースだがマヨネーズは何にでも合う。マヨネーズは最高だ。

食べた事は無いがツナマヨのおにぎりが美味しいと言う事はご飯にマヨネーズをかけただけのマヨネーズご飯も案外いけるのかもしれない。

「海斗、両方マヨネーズじゃない？美味しいの？」

「ミクは食べた事ないのか？かなり美味しいけど」

「ふん。それにいつも思うんだけど少なくないの？」

「え？そうかな。こんなもんじゃないかな」

「海斗私達よりも少ないとおもうけど」

「私もそう思うのです。どう考えても私達のお弁当の方がカロリー」

も栄養もありそうなのです」

「ダンジョンでこれだけ動いてるんだからもつと食べた方がいいぞ」
「そうですね。自分ではこんなもんだと思ってたんですけど」

俺のダンジョン飯はおかずパン1個におにぎり1個ですつとこの組み合わせで来ているので、今更増やす気もないのだが、確かに彼女達のお弁当に比べると圧倒的に劣っている感はある。

「良かったらおかずを1個あげるわよ」

「いや、いいよ悪いし」

「私のもあげるのです」

「私のもよかつたら食べてくれ」

気持ちは嬉しいがそんなにひもじく見えただろうか？

「気持ちだけで十分です。ありがとございます」

「気持ちだけじゃ栄養にならないのよ。どれが良い？卵焼きとかどう？男の子ってみんな卵焼きが好きなんでしょ？」

「別に嫌いではないけど、特別卵焼きが好きってわけでもないよ。多分ラブコメとかの知識だと思うけど男がみんな卵焼き大好きって言うのは多分間違いだよ」

「へーそうなんだ。よくお弁当とかのシーンで卵焼き最高！みたいなのでよくみる気がするんだけど」

「それはイメージじゃないかな。肉じゃががお袋の味だから作って欲しいとかってのもよく聞くけど俺の母親は肉じゃが作ってるのなんかほとんど見た事ないから俺のお袋の味は肉じゃがでは無いし、どっちかと言うとじゃがいも無しの肉だけの方が嬉しいくらいだよ」

「そうなのですか？私も男の子は卵焼きと肉じゃがだと思ってました。海斗さんが特殊とかでは無いのですか？」

「いや普通だと思うけどな」

やはり女の子のイメージは卵焼きと肉じゃがのイメージなのか。でも俺の周りでもそんなに卵焼きを毎日食べてる人って見た事ないな。

「それじゃあウィンナーあげるわよ」

「あげると言われても俺お箸が無いんだけど」

「別にお箸ぐらいいいわよ。はいどぞぞ」

はいどぞって、これって言い方が違うだけで所謂あくんじゃないのか？

「いや無理無理！手で食べるって」

「手はダメでしょ。はいどぞぞ」

「海斗さん私はミートボールあげるのです。はい、あくん」

「それじゃあ私はこのアスパラベーコンを。ほら口を開けてくれ」

「……………」

なんだこの状況は？

弁当のおかずをくれるのは正直嬉しいがこの状況は何だ？

普通に無理。

みんな何も感じないのか？3人から同時にあくんって一体どこのラブロメ主人公なんだ。

自慢じゃないが俺はただのモブだぞ？

第477話 ラブコメ？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第478話 愛されキャラ？

「はい、どうぞ。私のは食べれないの？」

「……………」

「海斗さん、あ〜ん。せつかく海斗さんに食べてもらいたかったの
に……………」

「……………」

「海斗、もちろん私のは食べてくれるんだろう」

「……………」

俺はどうすればいいんだ。何が正解なんだ？これを食べてしまえば、
おかずと引き換えに俺は何が大切なものを失ってしまいそうな気が
する。

かと言ってこれを無視するのも難しい……………」

どうすればいいんだ……………」

「ふふふっ」

「ふふふ」

「海斗……………」

何？どうしたんだ？

「海斗、その顔……………」冗談よ」

「えっ？」

「急にラブコメとか言い出すからからかってみたくなかっただけよ
「私もそれに乗ってみただけなのです」

「私もだ。ラブコメハーレム主人公の海斗も悪く無かっただろう」

「な、な、なにをしてるんですか！」

「海斗がどんな反応するかと思ったんだけどある意味予想通りだったわね」

「そうですね。どうせなら順番にあぐんで食べて欲しかったのです」
「まあ海斗だからな」

俺だからって完全に馬鹿にされてるよな。

「そんな事出来るはずがないだろ。俺には……………」

「はいはい、春香ちゃんがいるって言うんでしょ」

「……………まあ、そうだけど」

「でも告白もしてないんでしょ」

「……………まあ、そうだけど」

「振られるかもしれないわね」

「……………まあ、そうだけど」

「冗談よ」

「週末のネタが一つ出来たのです」

……………週末のネタって何だ？

「もしこのまま食べてたらどうなったんだよ」

「それはね〜」

「もちろん報告です。春香さんに」

春香に報告!?

ヤバかった。やっぱり勢いで食べなくて良かった。

それにしても女の子は怖い。今後も調子にのる様な行動は控えないと俺の人生が終了してしまいそうで怖い。

「まあせつかくだから食べてよ」

「あ、ああ、じゃあ手でいただきます」

3人のおかずを順番にいただいたが、味は物凄く美味しかった。ただ出来る事なら普通に食べたかった。

「ありがとうございます。美味しかったです。でも土曜日にはこんな冗談は必要ないから」

「それって振りなのですよね」

「ち、違う。本気だ。絶対にやめてくれ」

「ふくん、土曜日もやればいって事ね」

「ミク………本当にやめてくれ。頼む………お願いします」

「わかってるわよ。冗談に決まってるでしょ」

「ヒカリンもわかってるよな」

「ワカツテルノデス。イヤダナ」

「本当だな」

「大丈夫です」

「海斗愛されてるな」

「どこがですか」

お昼ご飯は休憩を兼ねているはずなのに異常に疲れてしまった。昼からの探索大丈夫だろうか？
疲労が抜けた気が全くしない。

「それじゃあ、そろそろ進みましょうか」

いつまでも休憩している訳にもいかないので俺は重い身体に鞭を入れ先に進む事にした。

「あいりさんが鉄の呼Qで海斗さんが氷の呼Qなのですよね」

「いや俺は別に……」

「私は何が良いですかね」。武器が無くても大丈夫ですよ。うー

ん炎雷の呼Qはどうですかね？」

「いやどうですかと言われてもな。そもそも俺よく知らないし」

「嘘でしょ。鬼烈の刀ですよ。一大ムーブメントを起こした大ヒツトアニメなのですよ」

「いや見たことない。ミクも知らないよな」

「えっ？もちろん知ってるわよ。当たり前でしょ」

当たり前なのか？

俺はマイノリティなのか？

それともこのパーティー内だけの話なのか判断がつかない。

「ヒカリンが炎雷の呼Qなら私は炎被りだから幻の呼Qにしようかな」

「良いですね」

何だこの当たり前の様な会話は？

炎被りって何？

そもそも呼Qってなんだよ。

そんなことしてる余裕あるのか？

このパーティーはダンジョンを使った壮大な厨二なりきりごっこをパーティーでするつもりなのか？

どうやらあいりさんだけじゃ無くパーティーメンバー全員が病気に罹っていたらしい。

俺が気が付いてなかっただけでK-12 (k-12) は重度の厨二病患者で構成されたパーティーだった。

第478話 愛されキャラ？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第479話 呼Qの力？（前書き）

投稿を1話分間違えたので差し替えました

第479話 呼Qの力？

余計なやり取りで疲れた体と精神を奮い立たせて昼からの探索に臨む。

一回毎の戦闘に苦勞してはいるが、進むペースとしては悪くないと思う。

「次に小鬼が出てきたら、シルカベルリアが対応してくれ。女鬼は俺でも何とかなるから」

「おい！わたしが抜けてるだろ！仲間はずれか！いじめか！」

「いや、どう考えてもルシエも相性悪かっただろ。さっきも1人じや仕留められなかつたくせに」

「海斗が余計な事をしなかつたら1人で余裕だったんだ。ふざけんな」

「はいはい、まあシルとベルリア頼んだぞ」

「くっ……………」

そもそもいじめって何だよ。いじめな訳ないだろ。17歳の俺が幼女をいじめるって普通に捕まるだろ……

トラップが怖いので、シルと俺が真ん中に立つフォーメーションのまま進んで行く。

「ご主人様、敵モンスター3体です。その先を曲がった所にいます」

「よし、じゃあ打ち合わせ通りで行くぞ」

注意しながら進んでいくと敵の姿を確認する事ができたが、視線の先には小鬼が3体いた。

小鬼はシルとベルリアに頼むとは言ったが3体とは想定外だ。

「シルとベルリアが1体ずつ、俺とあいりさんで1番左のをやりましょう。ミクと

スナッチは俺の援護を、ヒカリンはベルリアのフォローに回ってくれ」

「お、おい。わたしはどうするんだよ」

「うーん、ルシエはとりあえず待機で」

「待機!？」

「うん、それが1番いい気がする」

「まさかとは思うが、わたしの事を馬鹿にしてるのか？」

「いやいや、普通に状況判断しただけ。馬鹿になんかするはずないだろ。被害妄想だつて」

「……………」

これ以上ルシエに構っている暇はないので小鬼と交戦に入るが、念の為にバルザードに氷を纏わせて魔氷剣を発動しておく。

最初に動いたのはベルリアだ。

真ん中の小鬼を目掛けて一気に加速するが3体からの狙い撃ちを防ぐ為にヒカリンが援護射撃をする。

「炎雷の呼Q 1の型 ファイア炎雷の舞ボルト 炎鳥」

ヒカリンやっぱりやるのか……………

しかもファイアボルトってあんなのでも発動するんだな。

やっぱり魔法ってイマジネーションなんだな。柔軟性があっていいのかもしれない。

固定概念はいけないな。俺のウォーターボールも色々やったしな…

……

俺も頑張らないといけない。可能性は無限に広がっているのだから。

ヒカリンの呼Qに変に感心してしまったが、今度は俺の番だ。
1番左の小鬼に向かって駆けて行く。
あいりさんも俺の動き出しに合わせて速度を上げてくる。

「幻の呼Q 3の型 幻視の舞 幻蝶乱舞 偽」

今度はミクか。それにしても技の名前は自分で考えたんだろうか？
それともアニメの作中に実際に出てくる技なのだろうか？

3人ともやばい感じだが、結構かつこいい名前だな。

しかし呼Qもだが型って何なんだろうか？

確かあいりさんは17ぐらいをあげていた気がするが、まさかとは思うが17個も技の名前があるのか？

どう考えても覚えられそうにないな。

俺は1の型固定でいいや。

いや、その前に俺はアニメを見た事無いのでやらないけど。

気を取り直して左端の小鬼を見ると空に向かって刀を振るっているのが見える。

これは、完全にミクの幻視の舞改め幻の呼Q 3の型 幻視の舞

幻蝶乱舞 偽

が効いている。

名前が長くて憶えられそうに無いが、効いている所を見ると幻の呼Qも一定の効果があるのかもしれない。

検証のしよは無いが、イマジネーションで魔法の効果上がる可能性も否定出来ないの、好きなアニメの技を思い浮かべる事で魔法やスキルの効果が本当に上がっているのかもしれない。
恐るべし呼Q。侮れない。

第479話 呼Qの力？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第480話 ルシエきれる

俺とあいりさんは奇妙な動きを続けている小鬼にむかってそのまま距離を詰めてから

「アイアンの呼Q 4の型 戦撃ボール衝 滅」

あいりさんが『ボール』を放つが、もはや技の発動にほとんど『アイアンボール』を感じられない。

しかも鉄の呼Qですら無くなっている。

ただし命中した鉄球は、心なしかサイズも威力も増している気もするので文句は言えない。

ただ発動にいつもより時間がかかっているので、急ぎの時は控えて欲しい。

『アイアンボール』が直撃した小鬼は苦しんでいるが流石にミクの幻術は解けたようでこちらを睨んできている。

小鬼とはいえ鬼なので睨まれると結構怖い。

いつまでも睨まれ続ける訳にはいかないので速攻で勝負を決めに掛かる。

機動力を削がれた小鬼には俺とあいりさんの同時攻撃を避ける術はない。

「海斗、氷の呼Qだ！」

え……………ここですか？あいりさん。スパツといたら終わるところですよ？

氷の呼吸って何？

どうしたらいいんですか？

無茶振りすぎませんか？

「こ、氷の呼Q 1の型……………氷結烈波……………氷柱」

俺は恥を忍んでオリジナルの技の名前と共に魔氷剣を振るい小鬼の消滅に成功した。

今回の戦闘は魔氷剣の一振りですわったが、疲れた……………。そして恥ずかしい。

俺の精神力がかなり削られてしまった……………

「海斗、なかなか良かったぞ。ただ最後の部分は1文字の方がベタ1だったな」

「……………そうなんですな」

最後は1文字か。思い返してみれば確かに他のメンバーはそうだった気がする。

うっかりしていた……………

でもこれで俺もみんなの仲間入りだ……………な。

他のパーティには絶対見られたく無い。

考えてみると探索者になる人は少なからず厨二病にかかっているのだから。

そうじゃ無いと続けられないよな。

は

残りの小鬼はどうなった？

横に目をやると2体とも交戦状態に入っていた。

ベルリアは追いかけてながら剣を振るっているが、どうもそれなりの距離を走るスピードは両者に大きな差は無い様に見える。

その為、剣を振るっては距離をあけられると言う状態が続いているようだ。

シルの方もどうやら近接戦を選択したようでシルが最前線まで出てきて交戦している。

「スピードだけはある様ですが、それだけのようですね。あまり時間をかけるとご主人様の迷惑になります。そろそろいいでしょう。早く消えてしまいなさい。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

シルは神槍の発光と共に一気に加速して小鬼を捉えて瞬殺してしまった。

俺があれだけ苦労した小鬼もシルは瞬殺。

やはり火力も含めてシルは別格だと再認識させられる。残るはベルリアだけか。

ベルリアは未だ交戦しており、相対する敵を捉え切れていないようだ。

「あゝ、イライラする。わたしだけ除け者か！もういいベルリア代われ。時間かかりすぎ！わたしが瞬殺するから退け！」

ルシエが………きれた？

説明したのに納得してなかったのか？

そもそも小鬼とルシエは相性が悪すぎるだろ。どう考えてもベルリアに任せたほうが良い。

「ル、ルシエいきなり何を言い出すんだ。お前じゃ無理だろ、大人しくしてろ」

「バカなのか？こんな小鬼ぐらい敵の内に入らない。無理なはずないだろ！その小さい目を極限まで開いてしっかり見てろよ」

そう言うとルシエは小鬼に向かって駆け出した。

ルシエまさか近接戦やるつもりか？

躲される事を考えると確かに学習しているのかもしいないがルシエが近接戦？

以前のスタンピードの時以来だが大丈夫なのか？

まさかとは思うが頭に血が上って何も考えずに突っ込んで行った訳じゃ無いよな。そんなはずは無い……よな。

第481話 ルシエ無双

「ベルリア、チンタラしてるんじゃないぞ。さっさとどけ〜！」

ルシエが魔杖トルギルを構えてベルリアと交戦中の小鬼に向かって駆けていく。

「わたしだってこのぐらい朝飯前なんだ〜！」

ルシエはベルリアを押し退けると小鬼に向かってトルギルを振りかぶってからぶつ叩いた。

正直技術も何も無い、ただのフルスイング。

小鬼もトルギルを止めるべくさっさと鎌で応戦したが

「パキ〜イン」

トルギルが鎌に触れた瞬間に鎌の刃の部分が完全に折れて破壊されてしまった。

一体あの杖は何で出来てるんだ？

どこをどうやったら一撃で鎌を折る事が出来るんだ？

ベルリアが結構斬り結んでいたと思うが、その時に既に破損していたのか？

鎌を失った小鬼は後方に逃げ出し、距離を空けた瞬間今度はルシエに向かって分銅を投げつけて来た。

「こんな物！効くわけなだろ〜！」

ルシエが迫って来る分銅に向かってトルギルを一閃すると分銅も碎

け散ってしまった。

ルシエ強すぎないか？

お前は完全な魔法職、純然たる後衛だろ。

ステータスだつてシルと比べても魔法職寄りのものだろ。

それが何で近接戦闘でそんなに強いんだよ。

どう考えてもベルリアより強く無いか？

これが士爵と子爵の差なのか？

それともルシエが特別なのか？

武器を完全に失った小鬼は一瞬怯んだようにも見えたが、覚悟を決めたのか素手でルシエに襲い掛かった。

「近寄るな。臭い！」

ルシエが嫌そうに襲って来た小鬼をトルギルで薙ぎ払った。

「ガフウツ！」

ルシエの一撃は小鬼の左腕を粉碎して、胴体にも大きなダメージを残した様で、小鬼は既に虫の息と化している。

「杖が汚れるから嫌なんだよ。わたしの手を煩わせずに勝手に自分で消えて欲しいくらいだぞ」

流石はルシエ。圧倒的な上からの言葉。流石は王族。庶民でモブの俺には一生口にする事は出来ない言葉だ。

小鬼は最後の力を振りしぼり、残った右腕で攻撃をかけようと試みるが、あっさりとルシエに阻まれてしまった。

「もう死んでしまえ。流石にしつこいぞ！しつこい奴は嫌いなんだ

よ、どうせ死ぬんだからさっさと逝ってくれ！」

そう言いながらルシエが今度は小鬼の右腕に向かってトルギルを振るって粉碎し、完全に死に体となった小鬼に向かって、更に滅多打ちにしてポロポロになった小鬼は程なく消えてしまった。

「ちょっとはスッキリしたけど、やっぱり前にも出るもんじゃ無いな。疲れた！」

「いや、お前が勝手に出ただけだろ」

「海斗、勝手にってなんだ、勝手にって」

「俺はルシエに待機って言ったよな」

「そ、それはそうだけど、お前らが苦戦してチンタラやってたから助けてやったんだろ」

「ふん、別に助けてくれなくても、ベルリアがきつちりと仕留めてたと思うぞ、なあベルリア」

「マイロード、お言葉ですが私ではとどめをさす事は難しかったかもしれません。流星はルシエ姫様です。ご助力感謝いたします」

ベルリア……俺はお前を擁護してやってるんだぞ？
それを……

「ルシエ、もうこれだけやれるんだから前衛に出たらいいんじゃないか？前衛に出たら毎回敵にとどめをさせるぞ」

「バ、バカ！バカなのか。わたしはか弱い女の子だぞ！危ないだろ！怪我したらどうするんだ」

「か弱い女の子……」

これほどの強さと容赦の無さでか弱い女の子は無いだろ。

ルシエがか弱かったら俺は超か弱い男の子だぞ！

と言っよりも世の中の殆どの男は超か弱い事になってしまっ。

「ルシエ……………流石にか弱いつて言うのは無理があるだろ」

「ふ、ふざけるな。海斗お前はわたしの盾だ！わたしを守る義務があるんだよ。死んでもか弱いわたしの事を守る義務があるんだよ

！」

「なっ……………」

俺がルシエの盾！？この前ルシエが俺の盾だつて言っただけか？
主従関係が逆転して無いか？

サーバントを死んでも守るマスターつて聞いたことがないんだけど。
まあ何かあつたら言われなくても守るけど。一応妹だしな。ただ先に俺が死んだら流石に守れないけどな。

第481話 ルシエ無双（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第482話 マジックポジション

ルシエの活躍もあり、小鬼を撃退した後も16階層の探索が続けたが数度の戦闘を経て初日は撤退する事となった。

時間的にはまだ余裕があったが、俺のMPが先に尽きてしまったのだ。

ゲートキーパー1回分を残してMPを使い切った所で切り上げる事になったのだが、初日でMPが尽きてしまうとは想定外だった。

鬼との戦闘の度に魔氷剣やナイトブリンガーを発動させ、『ドラグナー』をそれなりの回数使用したらMPがみるみるうちに枯渇してしまった。

明日、これ以上進もうとするなら、俺自身を温存しながらパーティの戦闘スタイルを変えてしまうか、ポジションを使うしかない。

低級ポジションはあくまでも体力と怪我の回復重視なのでMPの回復量は少なめだ。

やはりマジックポジションが必要かな。

今まで低級ポジションの使い勝手が良かったので、マジックポジションを購入する事は無かったが、この階層まで来たので必須かもしれない。

「みんな、悪いんだけど俺ダンジョンマーケットに寄ってから帰るよ」

「分かった」

「また明日よろしくなのです」

「海斗呼Qの鍛錬を忘れるな」

「……………」

呼Qの鍛錬って何をすればいいんだ？深呼吸でもしとけばいいのか？

とりあえず放っておくしかなさそうだな。

今度時間があったらアニメを見ても良いけど俺も受験生になるし、まあいいかな……

みんなと別れてダンジョンマーケットに向かう事にする。

「すいませ〜ん。マジックポーションを見せてもらって良いですか？マジックポーションを使った事はないので説明もお願いしていいですか？」

「はい、かしこまりました、マジックポーションはこちらです」

店員さんに案内されてマジックポーションのある場所に連れて行ってもらったが、当然のようにいつもの低級ポーションと同じ場所に置かれていた。

「ポーションのお使いは初めてですか？」

「いえ低級ポーションは結構使ってるんですけど、マジックポーションは初めてです」

「そうなんです。ではマジックポーションの説明ですが、通常のポーションと同じく低級、中級、上級そしてその上の特級となっております。等級によりMPの回復量が異なります。ちなみに低級でMPが50前後回復致します。中級はほぼ100程回復しますが、価格は低級10万円、中級で50万円となっております」

「すいません、それだと中級よりも低級の方がお得じゃないですか？」

「そうですね費用対効果は低級が1番優れています。そう何本も飲めるものではありませんし、戦闘中に飲む事を考えると中級を選ばれる方も多いです。それと等級が上がるほど味も良くなっております」

「等級で味が違うんですか？」

「はい。誠に言い辛いのですが低級は美味しくありません。漢方を煮

詰めたような独特な苦味があり、どうしても無理だと言われる方もいます。中級以上はかなり飲みやすくなっています」

「そうですか分かりました。それじゃあ低級を4本お願いします」

「初めての方には中級をお勧めしていますが低級でよろしかったですか？」

「はい、多分1日1本飲まないといけないので安い方が良いです。毎日飲んでも副作用とかは大丈夫ですか？」

「一応、身体に害は無い事が証明されていますが、飲みすぎるとお腹が緩くなる場合があるぐらいでしょうか」

「じゃあ、それでお願います。あと、これはついでなんですけどエリクサーとかネクターと買って売ってたりしますか？」

「いえ、ここではそのような特別な霊薬は取り扱いが無いですね。私も勤めて結構長いですが一度も見ただ事ないですね」

やはり霊薬の類をダンジョンマーケットで買う事は難しいようなので、やはりダンジョンでどうにかして手に入れるしか無さそうだな。マジックポーションの出費は痛いけど、探索を進める為の必要経費と思って明日から積極的に活用していきたい。

第482話 マジックポジション（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第483話 マジックポーチ？

マジックポーションを4つ購入したので、これで今週はMPの心配無くダンジョンに潜れるだろう。

出費は痛い但春休み期間中にどうにか距離を稼ぎたいので、これは必要経費だろう。

せっかくダンジョンマーケットに来たのでおっさんの店にも顔を出す事にする。

「すいませ〜ん」

「おう、坊主か。良いところに来たな。入ってるぞ」

「入ってる？」

「あ〜？坊主が予約頼んで来たんだらうが」

「もしかして、マジックポーチですか？」

「お、おう。まあ似たようなもんだ」

？おっさんの言い回しにちよつと引つかかる感じがする。似たようなもん？マジックポーチじゃないってことか？

「運良く、引退する探索者が装備一式売りに出たんだけどよ、ここに入ってたんだ。坊主ラッキーだったな。こいつはマジックポーチよりレアだぜ！」

おっさんが持ってきた薄汚れたそれは確かにポーチの形では無い
「随分汚れてますね……………」

「そりゃあ前の持ち主が肌身放さずつけてたんだからそのぐらい当たり前前だろ〜が。むしろ歴戦の証ってもんだ」

「……………」

なんと表現したらいいんだろうか？

10年ぐらい使い古された下着のような印象を受けてしまうが、中古を頼んだのは俺だからこれは仕方がない事なのだろう。

勝手に中古でも結構綺麗だろうと思いついていた節があるが、これは完全に俺の落ち度だ。

金には代えられないので我慢するしかない。

「しかもだ！まとめて買い取ったから、これも格安だぞ！聞いて驚け250万で売ってやるよ」

「250万ですか？格安じゃないですか」

「おお、そうだろう。滅多にこんな掘り出しもん出ね〜んだぞ。俺に感謝しろよ」

「……………あの〜、安い理由を聞いても良いですか？」

「理由？そんなもんね〜よ。ただな、これはポーチじゃね〜んだよ」

「すみませんこれって何ですか？微妙にウエストポーチっぽい気がしますけど違うんですか？」

「ああ、大体あってるぜ」

「大体って本当はこれはなんですか？」

「聞いて驚くな。これはマジックポーチより遥かにレアなマジック腹巻だ！」

「腹巻……………ですか？」

「おお、腹巻だ。ただな日本古来の腹巻って言うより、海外とかの旅行用を使う腹巻みたいな感じだな」

「……………やっぱり腹巻なんですね」

「おお、だから腹巻だと言ってんだろ。ただな、こうやってサイズ調整も出来る腹巻なんだよ」

「荷物はこのチャックから入れるんですよ」

「おお、そうだぞ。マジックポーチよりは若干容量は落ちるけどよ、坊主1人分の装備は余裕でいけるだろ」

「そうですか。念の為に装備一式取ってくるんで待っていてもらえ

ますか？」

「おお、いいぞ」

そう言うと俺はいつものレンタルロッカーまで戻って荷物と装備一式を纏めておっさんの所へ急いだ。

「お待たせしました。これが俺の装備一式なんで入れてみていいですか？」

「おお、いいぜやってみろよ」

「これってどうすればいいんですか」

「そりゃ、腹巻なんだから腹に巻いて使うに決まってるだろ」

「それじゃあ、お借りします」

若干の抵抗感はあるが背に腹は代えられない。

俺はマジック腹巻を腹に巻いて、手持ちの荷物を入れてみる。

「おおっ！」

不思議な感覚だが物を入れて手を離すと無くなっている。

ちよつと感動だ………

「これって取り出す時はどうするんですか？」

「そりゃあ手をつ突っ込んで探すしかねーだろ」

「ああ、そうなんですな」

物を入れる時はこれぞマジックアイテムって感じだが取り出す時は、全くファンタジー感が無いな。アナログと言うかマニュアル感全開だな。

入れるときにしっかり仕分けて入れないと取り出すときに苦労する感じか。

じしちからパソコンのフォルダのようにはいかないらしい。

第483話 マジックポーチ? (後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第484話 マジック腹巻

俺はバルザードをマジック腹巻のポケット部分に差し込んでみる。

「おおお〜入った」

「当たり前だろうが。剣ぐらいは入らね〜とマジックストレージとして使いもんにならんだろ〜が！」

「この鎧は入りますかね」

「は〜っ……入るわけね〜だろ。口の大きさよりでけ〜もんが入るわけね〜だろ。無理やり入れたら破れて使えなくなるから注意しろよ」

「はい」

順番の俺の荷物を入れてみたが、ナイトブリンガー以外は全て収納する事が出来たが、重さはほとんど感じない。

これがマジック腹巻。すごい……

薄汚れてはいるが間違い無く本物だ。

これで250万円なら間違いなく買いだ。

だがこのマジック腹巻から物を出し入れする姿は正に猫型ロボットのそれを彷彿とさせる。

ある意味無敵感が漂うが一般的な探索者がこのイメージを良しとするとは思えないのでこの価格なのかもしれない。

おっさんは俺が迷っていると勘違いしたのだろう

「坊主この腹巻の凄いところはな、サイズ調整がこんなに効くところだ。鎧の下につけても鎧の上からでも装着出来る優れものだ！少々汚れちゃいるが、消臭スプレーでなんとかなるだろ。ユーズドだよユーズド。ダメージデニムみたいでかっこいいだろうが！おまけ

にレアだぞレア。他の探索者と被らね〜傾奇者だぜ。しかも滅多に出ねえマジックストーンだぞ。250万はバーゲン価格だぞ！坊主の為に俺が買い取ったんだからな！」

いつになく早口で捲し立てて来る。どうしても売りたいという気持ち伝わってくるが、こちらも元々欲しいと思っていたマジックストーンだ。まさにwin winの関係とはこの事だ。

「分かってますって買います」

「おお〜そうか。じゃあ取り扱いの注意だが間違っても洗濯機で洗ったりすんなよ。中が水浸しで使いもんにならなくなるぜ」

俺はその場で即決してマジック腹巻を購入した。

今まで荷物を背負いながらの戦闘だったので多少動きにも影響が出ていたと思う。

肩が凝ったりもしたがついに、ついに俺は探索者なら誰もが憧れるマジックストーンを手にする事が出来た。

しかも新品のマジックポーチが1000万という事を考えるとこのマジック腹巻の250万は格安だ。あのおっさんとは思えないほど良心価格だった。

一重に汚れと腹巻という斬新なスタイルのお陰でこの値段だったんだろつ。

しかも俺の荷物を全部入れてもまだ余裕があるように見えるので殺虫剤等ももっと詰め込む事が可能になった。

凄い。なんて凄いんだ。しかも腹巻の利点は動きが全く阻害されない。

ただかなり汚れているので、念の為にアルコール消毒もしっかりとしておこうと思う。

以前の持ち主は引退したとの事なので結構年齢は上だったのかも知れないが、おっさんが肌身離さず身につけていたかと思うと少し嫌

なので心の中では前オーナーは妙齢の美女だった事にしておこうと思う。

正直妙齢の美女がこの腹巻をしているイメージは全く湧かないが、俺は可能性に賭けようと思う。

マジックポーションにマジック腹巻で明日から俺の探索者ライフは劇的变化を迎える事になるだろう。

その後嬉しすぎてハイテンションで家に帰ると今日の晩ご飯はカレーだった。

「母さん、最近なんかカレーが多くない？」

最近晩ご飯のカレー比率が急激に高まっている気がする。

「え？嫌だった？じゃあ次はハヤシライスにするわね」

「ルーが違うだけで同じものじゃないか。もっと別のは無いの」

「そうね〜じゃあビーフシチューでどうかしら」

「それもほとんど一緒じゃない？」

「いやね〜カレーとシチューは別物よ」

それは俺だってカレーとシチューが違う物なのは分かるが、正直材料と作り方は一緒じゃないか。

「何でカレーとかシチューばかりになったの？」

「それは、作るのが簡単で美味しいからよ。しかも2日いけたりもするでしょ」

これは堂々の家事サボタージュ宣言ではないのか？

まあ俺はカレーが好きなので問題はないが、普通の人は週に1回以上のペースでカレーが出て来たら流石に飽きるんじゃないだろうか。しかも2日連続の場合があるので最近2週で3食以上のペースでカ

レーが出て来ている。

カレーは大好きだけどハヤシライスで変化をつけるのもいいかもしれない。

第484話 マジック腹巻（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第485話 お披露目

朝から16階層に挑むためにダンジョン前に集合してからダンジョンの中に入って行く。

「今日の俺は、何か違うと思わない?」

「……………」

「気付かないかな」

「……………」

「みんな本当に気付いてないの?」

「……………」

「ほら、装備というか全く違うところがあると思わない?」

「いつも通り真っ黒ですよ」

「いや、色じゃなくて」

「あゝ分かった。マントの材質を変えたのね」

「いや、違う。そうじゃない」

「髪を切ったのか?」

「いえ、切っていません」

この人達は鈍いのだろうか?なんで俺がリュックを持っていない事に気がつかないんだ?

人って興味のない事にはこんなもんなのか……………
ちよっと悲しい。

「ほら、見てよ」

俺はみんなに分かるようくるとターンをして回って見せた。

「……………?」

ここまでやっても分からないのか……………

「俺今日荷物持ってないと思わない?」

「ああ、そういえばそうかも。まさか忘れて来たの?」

「お弁当だったらし分けれますよ」

「ポーションとかも忘れたのか?」

「違いますよ。忘れてないですよ。ほらこれですよ」

俺は遂にメンバーに対してマジック腹巻をお披露目する。

「海斗さん、それは一体何ですか?」

「それって腹巻か?」

「それは海斗的にいけているのか?」

見ても分からないのか……………

おっさんがレアだと言っていたが3人が分からないとなると本当にレアアイテムだったのかもしれない。

「これは、あれですよ」

メンバーによく分かるよう俺は腹巻のポケットに手を入れて殺虫剤を取り出して見せた。

「それってまさか……………」

「そんなタイプあったのですか?」

「初めて見るな……………」

「ようやく分かってくれましたか?これマジックストレージですよ。昨日入荷したんで買ったんですよ。良くないですか?」

「そうなんだ。味は？」

「……………正直低級は2度と飲みたくありません」

「そんなに酷いの？」

「はい……………」

確かにダンジョンマーケットの店員さんは中級を推して来ていたが
そんなになのか……………

確実に今日1本は飲む事になるだろうから、潜る前からテンション
が下がりそうだ。

まあ、酷いと言ってもヒカリンと俺は味覚が違うかもしれない。
多分大丈夫だろう。

今日も1日頑張って探索を進めようと思う。

第485話 お披露目（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第486話 16階層を進む

16階層を進んでいるが、午前中にマッピングが終わっている昨日の地点まで到達する事が出来た。

昨日同様小鬼も出現したのでシルとベルリアを中心に对应してもらっているがルシエは少しは反省したのか今日はここまで暴走はしていない。

「みんな、ここからは来た事の無いエリアだから敵にも気をつけて進もう」

見る限り昨日のエリアと比べてもフィールド的な変化は見取れないので、注意を払いながらもどんどん進んでいく。

昨日はここまでで俺のMPが底をついてしまったが今日は、小鬼を相手にしていない事もあり、まだこのまま行けそうだ。

「ご主人様、この先に敵モンスター4体です」

4体か。この階層では今までで1番数が多い。

「俺とベルリア、あいりさんとシルで当たろう。残りのメンバーはフォローを頼む」

4体となると俺とあいりさんがそれぞれ1人で交戦する事になるので後ろからの援護は必須となる。

「ルシエも積極的に行ってくれ」

「そんな事言われなくてもわかってるって。まかせとけって」

まあルシエがやる気を出してくれれば問題無く進めるだろう。
俺達は臨戦態勢を整えて鬼退治に向かう。

前方に敵が見えて来たが、今まで出て来た事の無いタイプの鬼が4体。

サイズは4体共に大鬼と女鬼の間ぐらいなので結構大きめの人型だが、2体は腕が4本生えており、もう2体は服装が浴衣では無く袴姿なので、より侍のイメージに近い。

「シルとベルリアが4つ腕を頼む。俺とあいりさんで残りの2体を倒しましょう」

4つ腕の方は大小4本の刀を持っているので、何となく俺とあいりさんでは相性が悪い気がしてシル達に任せる。

ミクとヒカリンの攻撃が合図となり4人ほぼ同時に敵に向かって駆けて行く。

ヒカリンの『アースウェイブ』が袴の鬼の1体を捕らえた。

ミクはスピットファイアによる火球を3連射して鬼3体を足止めするが、4つ腕は予想した通り4本の刀で火球を切り飛ばしてしまった。

やはりあの刀は伊達ではないらしい。

俺の相手は火球を前にして刀を持っていない左の拳での正拳突きで火球を消し去ってしまった。

ただの正拳突きのくせにふざけた威力だ。

しかも風か何かを纏っているのか、拳を痛めた様子が全くない。

俺は、相手の意識が火球に集中し、俺から視線が外れた瞬間ナイトプリンガーの効果を発動して気配を薄めながら距離を詰めて、そのまま『ドラグナー』の引き金を素早く引いた。

相手の能力がよく分からない以上速攻でけりをつけるのが最善手だ。気配を薄めた状態から放たれた弾丸は蒼い糸を引いて一直線に鬼の

頭を捉えた。

幸先良く鬼の頭を完全に撃ち抜く事ができたので、あいりさんともう1体に集中出来る。

鬼の頭を撃ち抜いたのを確認した俺は、駆けるスピードを緩めず、そのままあいりさんの後を追おうとするが、後ろからヒカリンの声が聞こえて来た。

「海斗さん、まだです『ファイアボルト』」

え？

ヒカリンの『ファイアボルト』が俺の背後から先程倒したはずの鬼を捉えた。

「なんで……？」

俺が倒した筈の鬼が何故か消滅せずに俺に迫って攻撃をかけてこようとしていたのをヒカリンの『ファイアボルト』が防いでくれた。

この鬼は回復している……のか？頭を撃ち抜いたのに消滅する事無く動いている。

今までの鬼は回復能力は持っていなかった事を考えると、この鬼は特殊个体か上位个体なのかもしれない。

いずれにしても、完全に消滅するまで攻撃を続けるしかないが、頭への攻撃が致命傷にならないとすると心臓か？

俺は再び『ドラグナー』を構え直し、近距離から鬼の心臓に向けて引き金を引いた。

第486話 16階層を進む（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第487話 鬼の首

今度は『ドラグナー』の銃弾が鬼の胸部を捕らえ、胸の真ん中に風穴を開ける事に成功した。

この一撃は確実に心臓を貫いたので流石に仕留めただろう。

ただ先程の事もあるので念の為に注意は切らさずに鬼を注視する。

「ガウアアア〜！」

胸に銃弾をくらい心臓を失ったはずの鬼は咆哮を上げ、三度動き始めた。

胸の穴も徐々に閉じて来ている。

間違いない。この鬼は再生能力持ちだ。赤いミノタウロスやヴァンパイアと同種的能力を持っている。

まずい。もしヴァンパイアに匹敵する再生能力を持っていれば俺1人では倒せないかもしれない。

「あいらさん！こいつ、再生能力持ちです。気をつけてください！」
「分かった！大丈夫だ！」

あいらさんの事も気になるが、俺の方が問題だ。目の前の鬼に集中する。

『ドラグナー』の一撃が必殺となり得ない以上、MPの残量を考えてもこれ以上は撃てない。

俺はマジック腹巻にドラグナーを仕舞い込み、バルザードを両手で構えて鬼に向かって行く。

流石に二撃を放ったので俺の事は認識しているようで、間合いに入った瞬間に正拳突きを放って来た。

幾ら腕が長いと言ってもこの距離は届かない。
そう思った瞬間に俺を衝撃が襲った。

「なんっ……………」

風？いや理力の手袋に近い？

拳が飛んできて間合いの外から一撃入れられてしまった。

間合いはどのくらいだ？俺がバルザードで斬りつけるよりも遠い気がする。

俺は立て直すために一旦距離を取るが鬼が距離を詰めて来て俺に向かってラッシュをかけて来た。

拳戟は突き出された拳の直線上のみの様なのである程度予測出来るが、数が多すぎる。

バルザードだけでは防ぎきれない。

『アイスサークル』

ヒカリンの詠唱と同時に俺と鬼の間に氷柱が現れ鬼の攻撃を遮断してくれる。

「海斗、ちんたらしてるんじゃないぞ。負けそうじゃないか。わたしが助けてやるうか？」

「ああ、お願いするよ。ルシエ、頼んだ。助けてください」

「なっ………………。男があっさり助けを求めるんじゃない！」

何て面倒臭い奴なんだ……………

助けてやるうかって聞くから素直に助けてくれって言うてみたのにこの対応はどう言う事なんだ。

絶対に断っても怒ってたたる。

「ルシエ、とにかく頼んだぞ」

「この腑抜け！しょうがないから助けてやるよ。燃えて無くなれ！『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が鬼を包み込み、そのまま燃え尽きてしまった。どうだ？これで倒せたか？

燃え尽きた鬼に視線を向けるが復活する気配は無い。どうやら倒せたようだ。

俺以外の3人に目を向けるが、ベルリア以外は既に戦闘を終えていた。

シルは4刀を物ともせず、どうやら一撃で片をつけてしまったようだったが、ベルリアは2刀で4刀を凌駕し、よく見ると鬼の腕を斬り落としたのか鬼の腕は既に3本に減っている。

腕が再生していない所を見ると、あの鬼は再生能力を有して無いのかもしれない。

見ている側からベルリアの剣速がどんどん上がって行き、俺の眼には4刀以上を振るっている様に見える。

最後は『アクセルブースト』を使い鬼を十字に斬り裂き倒す事に成功したが、ベルリアが斬り伏せた敵は復活する事は無くそのまま消滅した。

やはりあの鬼は再生スキルを持つてはいなかったようだ。

「あいりさん、あいりさんの倒した鬼は再生スキル持ちじゃなかったですか？」

「ああ、海斗が言った様に再生スキルを持つてたな」

「それじゃあ、どうやって倒したんですか？俺はルシエに頼ったんですけど」

「海斗、そんなのは常識だろう」

「常識ですか？」

「ああ、鬼の常識だ」

「鬼の常識ですか？」

「ああ、だから鬼烈の刀の常識だ」

また鬼烈の刀か……… 見てない俺に作中の常識を言われても困る。

「どうすればいいんですか？」

「ああ、それは、倒せない鬼は首を落とせばいいだけだ」

「首を落とせば倒せるんですか？」

「ああ、常識だろう」

「知りませんでした………」

頭も心臓も効果無かったが、首を落とせば良かったのか。

常識なのか。知らなかった………

ルシエの攻撃は首も何も関係無く全部焼いてしまったから倒せたのだろう。

第487話 鬼の首（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いしま

第488話 マジックポーションいきます

鬼烈の刀の作中にある鬼が首を落とせば消滅すると言つ設定は実際のダンジョンから引用したのかもしれない。

だからこの階層の鬼も設定と同じく首を落とせば消滅するのではないだろうか。

俺達はその後もう1度鬼との戦闘に入ってからお昼ご飯を取る事にした。

「それじゃあ、ご飯にしようか。それと俺のMPがそろそろ不味いから低級マジックポーションも飲んどこうと思う」

「海斗さん、アドバイスです。ご飯の前に飲んでください」

「これって飲用は食前にとかってあつたっけ」

「悪い事は言いません。ご飯の前がいいのです」

「そう……じゃあそうしようかな」

俺はマジック腹巻から低級マジックポーションを取り出して開封する。

マジックポーションは初めてなので、好奇心でテンションが上がる。俺は瓶に口をつけて一気に飲み込む。

「グ、グハッ」

およそ俺の口から出たと思えないような声と共に咽せてしまう。

この味はなんだろうか。

漢方を極限まで煮詰めて、更にそこに苦味を加え、とどめとして刺激を足した様な味。

信じられない事に低級ポーションの比ではなく不味い。

これは毒なのか？そう思わせるような味だ。

これは決して興味本位で飲んではいけないものだ。

店員さんとヒカリンの言っていたことが飲んで初めて理解出来た。

これは売れない……………

ステータスを見るときつちりMPが50回復していたので効果は問題無いが、この味に耐えられる人はそう多くない気がする。

「海斗、大丈夫なの？」

「っ……………大丈夫じゃない」

「そんなに不味いの？」

「滅茶苦茶不味い」

「そう。私は機会があれば中級にしておくわ」

「うん、お金があればそれがいいと思う」

ただ庶民の俺にはこれしか選択肢は無い。

なんとか1本を飲み切ったが、今後後3本は飲まなければならぬ。となると味変するしかないが、砂糖はおそらく意味がない。

これ程強烈で濃い味なので、砂糖を入れても本質的な味が変わると思えない。

であれば何かで割るか？

大人がお酒を飲む時にやってるソーダ割とかはどうだ？

飲み口が爽やかになつたりしないだろうか？

この苦味と煮詰まり感が少しは薄まるだろうが、割った分だけ量が増える。しかも炭酸が胃を圧迫しそうだ。

試す価値は有るが望みは薄い気がする。

おそらくジュースで割るのも大差ないだろう。

それにしても不味さで舌が麻痺してしまいそうだ。

「海斗さん、早くご飯を食べましょう。それしか無いのです」

ああ、それで食前を勧めてくれたのか。
俺は買って来た焼きそばパンに急いで口をつける。

「なんて事だ！味が分からない……………」

舌がマジックポジションの味に浸食されてしまい、焼きそばパンの味がよく分からない。

鼻も麻痺しているのか、ソースの香りもよく分からない。

ヒカリンは口直しの意味で食前を勧めてくれたのだろうが、折角の昼飯が全く味わえない事を考えると寧ろ食後に飲んだ方が良かったんじゃないだろうか？

「ヒカリン、前飲んだ時はどのくらいで味覚が戻ったんだ？」

「およそ1時間です」

「そんなに」

1時間も味覚がやられるのか。

この不味さで戦いにも影響が出てしまいそうなので、飲むとしたらお昼休憩のこの時間しか無いな。

「ヒカリンはその1回しか飲んだ事ないのか？」

「私は1回と言うよりも半分しか飲めなかったのです。それからトラウマ気味です」

「全部飲みきれなかったのか」

以前低級ポジションの飲み過ぎの時も少し健康被害が頭をよぎったが、この低級マジックポジションもかなりのものだ。

良薬口に苦しなんて言う言葉もあるが、これは苦すぎる。

苦すぎて体に悪そうで、明日から飲むのが躊躇われてしまう。

取り敢えず明日はコーラで割ってみようと思う。

第488話 マジックポジションいきます（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第489話 鬼狩り

まだ口の中に苦味と刺激が残っているがいつまでも休憩するわけにも行かないので、探索を開始する。

この先は先程出現した鬼と同種の回復スキルを持った鬼が出る可能性が高いので対応を脳内で反芻する。

ダンジョンを進んで行くが次第にフィールドが変化を見せて来た。ダンジョンの側面がまるで日本家屋の壁のような造りに変化し、床も石畳のようなものが現れて来た。

普段のダンジョンはどちらかと言うと洋風というか遺跡っぽいイメージが強いが、今のこの風景は完全に和風テイストに近づいて来ている。

この辺りはダンジョンの不思議としか言いよの無いところだが、同じ景色をずっと繰り返すと精神的にも疲労が増すのでこの方が有難い。

「雰囲気的に出そうですね」

「雰囲気が出るもんじゃないけどね」

「……………まあ、そうだけど」

女性陣は壮大なごっこ遊びをするくせに、こつ言っ所だけ妙に現実的だな。

男の方が雰囲気に流されやすいのだろうか？

「そういえば、ベルリア、鬼って何となく日本で言う所の悪魔に近いイメージなんだけど、鬼と悪魔って同じ種族だったりするの？」

「マイロード、流石にそれはありません。私とあの鬼を同種扱いですとは心外です。全く違います」

「そうなのか？」

「おい、海斗、ふざけたこと言ってるよ本気で燃やすぞ！あんな低級なのと一緒にするな。天使と悪魔ぐらい全く違う存在だ！次同じ事を言ったら命は無いものと思え！」

「ああ、そうなんだ」

何の気なく聞いた一言だったが、ベルリアとルシエの気に触ったようだ。

俺からするとイメージ的に近縁のような気がしていたが、この反応を見ると非常にデリケートな部分なのだろうから今度からは気を付けようと思う。

「ご主人様、前方に敵ですが5体いるようです。注意して下さい」

昼ごはんを食べてすぐに5体。結構ハードだが、モンスターが俺達の都合に合わせて出てくる事も望めないのだから集中して臨む。

「数が多いから、シルモルシエも最初から行ってくれ。あの回復スキル持ちがいたら2人が優先して当たって欲しい」

敵は5体なのでシルとルシエを合わせてこちらも5人。同数なので確実に自分の相手は倒さなければならぬ。

進んですぐに敵の姿を捉えることが出来たが、5体共が袴を履いているが、よく見るとそれぞれ持っている武器が違う。

俺は1刀使いの敵を指して駆けるが、事前にナイトプリンガーと魔氷剣は発動済みだ。

こいつら袴を履いていると言う事は先ほどの再生スキル持ちと同種か？

であれば狙うは首の一択。

ミクとヒカリンが後方から俺とあいりさんの援護射撃をしてくれる。

俺の相手は刀を振るうと氷の刃が発生してミクの火球を打ち落とすた。

こいつは、氷の刀使いか。

俺と丸被りじゃないか。でもこいつの刀よりも俺の魔氷剣の方が優れているはずだ。

俺は、自分の位置を少しでも悟らせないために、距離が詰まるまで攻撃を控えてミクの攻撃に頼る事にし、駆ける事に集中する。

高速で移動し魔氷剣の届く位置まで近付き、剣を一閃するが、鬼にあっさりと躲されてしまった。

気配を読まれたのかもしれないが、完全に交戦状態になるまで、敵に自分の姿がどの程度認識されているのか、自分では分からないのが辛い。

追撃する為に俺は理力の手袋で相手の手首を掴んで動きを固定してから斬りかかった。

固定出来たのは一瞬だが、十分に時間は稼げた。俺の一撃は、鬼の肩口を捉えて決る事に成功したが、鬼は怯む事なくすぐに斬り返して来た。

返す刀が完全に俺を捕らえていたので、俺も咄嗟に魔氷剣を振るい鬼の一撃を食い止めた。

第489話 鬼狩り（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第490話 あっちの氷は寒い

敵の鬼の刀を受け止めたが、交わっている刃の部分から冷気が吹き出している。

先程見た氷の刃の能力だろうが、こちら氷の刃なのだからこの攻撃は効かない。

「おあつ！」

なぜか手が、魔氷剣を持つ手が冷たくなって来た。

嘘だろ？

普段魔氷剣は氷の塊でも全く問題なく握れるのに、持ち手が急激に冷えて来た。

明らかに斬り結んでいる相手の能力の影響を受け始めている。

自分の氷は大丈夫で敵の氷はダメって一体どんな理屈なんだ。

いずれにしてもやばい。

このままでは俺の手が凍傷になってしまう。

「ミク！援護を頼む！」

俺はミクに援護射撃を頼み、火球が着弾すると同時に後ろに下がって一旦離脱した。

手が、俺の手が、かじかんで感覚が無くなって来たせいで剣を握る力が入らない。

このままではまずい。完全に押されているだけじゃなくて追い詰められている。

俺は『ドラグナー』を手に取り引き金を引く。

蒼い糸を引いた弾丸が鬼の頭部を捕らえ、動きを止める。

そのまま鬼を観察するが、消滅する気配は無いのでやはりこの鬼も再生スキルを持っていてらしい。

鬼の動きが止まっている間に更に後ろに下がり態勢を整えるが、まだ手に力が入らない。

どうする？

完全に手詰まりだ。他のメンバーも全員交戦中なので前線でのフォロワーは望めない。

剣を振るっても今の手の感じでは首を断ち切る事は出来なさそうだ。

「シル、ルシルを召喚してあいりさんの下へ行かせてくれ！」

「ご主人様は大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかいける」

俺も余裕はないが、あいりさんも単独でやり合っているので苦戦しているのが見える。

俺は自分の相手をとにかく倒す。

そうしてる間にも鬼が動き始めようとしていたので再び『ドラグナ―』を構えて狙いを定める。

狙うは頭。

『愚者の一撃』

俺にとつての奥の手とも言つべき必殺の一撃を『ドラグナー』の銃弾にのせて放つ。

普段よりも強い光を放った銃弾が放たれたと同時に着弾し、鬼の頭を吹き飛ばした。

『愚者の一撃』は鬼の頭ごと上半身の一部をも吹き飛ばして、そのまま消滅に追いやった。

やはり首を切断しなくても強力な一撃で首ごと破壊するのは有効らしい。

鬼の消滅とほぼ同時に『患者の一撃』の発動による反動で急激な疲労感が襲って来た。

HPを確認すると8まで減少していたので急いでマジック腹巻から低級ポーションを取り出して、すぐさま飲み干した。

マジックポーション程ではないが不味い。

味覚が完全には戻っていないはずなのに不味いというのがしつかりと認識出来てしまうのは人体の不思議としか言いようがない。

体力が回復するのを待ちながら周囲の状況を確認する。

シルは当然の如く勝利を収めており、ルシエはボロボロになった敵に向かって獄炎を放ったところだったのでこれで終わりだろう。

残るはベルリアとあいりさんだが、あいりさんにはルシルが付いており、圧倒しているのが見て取れるので問題ないだろう。

最後のベルリアの相手は2刀使いでお互いに斬り結んでいるが、相手の剣からは風が吹き出されている様で、通常の剣を使用しているベルリアは少し手こずっている様だ。

単純に剣の重さも刀の方が軽く、アドバンテージがありそうなので単純に武器の性能差が大きいのだと思われるが、こればかりは仕方がないのでベルリアの技量に期待するしかない。

そのうち鬼が刀をドロップしてくれば今度こそベルリアに使わせてあげようと思う。

「ミク、ヒカリン2人でベルリアのフォローを頼む！」

俺もベルリアのフォローをすべく、ベルリアの敵に向かってバルザードの斬撃を飛ばした。

第490話 あっちの氷は寒い（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第491話 自己選択

ミクがスピットファイアで炎弾をヒカリンが炎雷を放ち、俺の放った斬撃と続け様に命中した。

鬼の動きが止まった瞬間を狙ってベルリアが2刀でアクセルブーストを使い一気にけりをつける。

2刀を同時に振るい鬼の首を落とす。

あいりさんもルシルと連携して鬼を倒したようで無事に5体の鬼を倒す事に成功した。

「倒せて良かったけど、俺は結構やばかったよ」

「海斗さん、もしかして『愚者の一撃』を使つてませんでしたか？」

「うん、そう。敵の冷気でバルザード越しに手がかじかんで剣が上手く振れなくなってしまったんだ。それで鬼の首を落とす方法が無くなって仕方なくね」

「海斗さん、最初から魔氷剣を使つてましたよね」

「そうだけど」

「魔氷剣を使つてたのに冷気で手をやられてしまったのですか？」

「うん、俺も大丈夫だと思つてたんだけどダメだったみたい」

今回の苦戦は俺の認識ミスが大きかった。

勝手に魔氷剣には同種の攻撃は無効だと思ひ込んでいたが、実際には普通にダメージを受けてしまったのが大きな問題だ。

今後は氷の刀を使う鬼とは、斬り結ぶ事は避けなければいけない様だ。

「次からは正面からやり合うのは極力避けるよ」

「そうですね。それがいいかもです」

やはり俺の本質はモブ。
格好をつけて主人公の様に正面から立ち回るのは向いていないのかもしれない。
こそつと近づいて死角から刺すスタイルが俺のパターンだ。
ただ最近敵のレベルが上がって来たせいか気配を察知されている感じなので、隠密戦法が使いづらいのも事実だ。
せめて2人で組んで戦う時には心がける様にしたいが、5体とか出てくると絶対無理だな。

「おい、海斗『愚者の一撃』を使うぐらいだったら最初からわたしに頼れ!」

「え?どう言う意味?ルシエが俺の分も頑張ってくれてるって事か?」

「ああ、頑張ってるよ。どうせHPを消費するなら、わたしが消費してやるからさつさと『暴食の美姫』を使えって」

「ああ………そう言う事か……。うん大丈夫、間に合ってるから」
「間に合ってるってどう言う事だよ」

「うん、大丈夫、少しでも期待した俺が馬鹿だった。だからもういい」

「いや、よくないだろ。海斗の『愚者の一撃』よりもわたしの『暴食の美姫』の方が圧倒的に上だろ!しかも燃費も上だ!」

ルシエ、人のHPを燃費って言うな。

お前に吸い取られる感覚が我慢できないんだよ。

しかも毎回毎回俺の命を弄んでくれるから、絶対に使ってやらない。

『愚者の一撃』はHPを消費するが俺の意思で発動しているんだ。
ルシエに完全依存する『暴食の美姫』とは全く異なる。

「うん、本当にダイジョウブだから」

「くっ………バカにしゃがって!」

バカになんかしてないよ。嫌なだけだから。

いずれにしても先程の戦闘はそれなりに消耗が大きかったのは間違いない。

俺はHPが無くなりポーションを使い、シルにはルシールを喚び出してもらったのでMPを普段以上に使わせてしまった。

いざとなればシルにもマジックポーションを飲ますという手もあるが、極力それは避けたい。

幼女にあれを飲ますのは罪悪感から気が引けてしまう。

ルシールに飲ませるのは、ある意味ありだと思ってしまうがシルには出来ない。

「ミク、さっきの戦闘なんだけと言いつい辛いけどスナッチがあんまり存在感ないような気が……」

「そうね。それは私も分かってる。ヘッジホッグにしてもフラッシュボムにしても使い時が難しくて私が自分に集中してしまってるのが原因なのよ」

「例えば今回みたいに数がある場合は、前衛の攻撃に先駆けてスナッチがヘッジホッグで先制攻撃をかけてもいいんじゃないか？」

「そうね。次はやってみるわ」

「敵の数が多いと結構苦戦するからスナッチが活躍してくれると助かる」

スナッチの初期スキルのかまいたちだけでは、そろそろきつくなってきたのは分かるが、ヘッジホッグやフラッシュボムは十分に通用すると思う。

ただシルやルシールの様に完全に自分の意思で動くタイプでは無いのでミクの負担が増えてしまうのは止むを得ないが、今後の探索にはスナッチの活躍が欠かせないのでミクとスナッチには頑張ってもらいたいと思う。

第491話 自己選択（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第492話 スナッチの力

俺は、マジックポーションだけで無く低級ポーションも飲んだおかげでMPは全快しているが、ちょっと疲れた。

16階層の戦闘も段々と厳しくなってきたので精神力が削られて来た。

ダンジョンでの探

索は、ほとんどが無駄の積み重ねというか繰り返した。

初めてのエリアを進む場合、最終的には唯一つの正解ルートをクリックするのだが、それまでに廻った他のルートは基本的に全て無駄となる。

つまりは、ダンジョン探索とはルートを見つける作業というよりもルートを潰していく作業にほとんどの時間を追われているのだ。

行き止まっては戻ってマップピングをするの繰り返し作業なので、効率よく進めている時はそれ程疲労を感じないが、上手く先に進めない時は、想像以上に徒労感と共に神経が磨耗して行く。

まさに今はその状態に陥っている。
マップピングは進まないのに敵は強くなり交戦の度に消耗していつている状態だ。

「ヒカリン、最近何か変わった事とかあった？」

「特に無いのです。あ、でも今朝あいりさんに鬼烈の刀ブルーレイBOXを借りたのです」

「あいりさんブルーレイBOX持ってたんだ」

「良かったら次見ますか？」

「あゝ俺はいいや。家にブルーレイプレイヤーがないから。家は未だにDVDなんだ」

「そうですね。残念ですね。見ると絶対にダンジョンでのテンショ

ンが上がりますよ」

「そんなもんかな」

「鬼の秘密満載なのです。絶対戦闘にも役立つ事間違いなしなので
す。コホッ」

「ヒカリン、ちょっと前から少し咳してないか？」

「別に大丈夫なのです。ほんの少しだけ喉がイガイガするだけなので
す」

「そう、それならいいけど、早めに風邪薬か何か飲んだ方がいいよ」
「大丈夫ですよ」

以前の階層はジメジメ湿っていたりもしたが16階層はどちらかとい
うと乾燥気味なのでそのせいもあるのかもしれない。

「ご主人様、ご準備お願いします。敵モンスター3体です」

「それじゃあ、ベルリアとシルが1体づつで、俺とあいりさんでも
う1体を。ミク、スナッチを攻撃参加させてくれ」

数が3体だけなので、先程よりも戦い易いはずだ。

先に進んで行くと袴の鬼が2体とあれは………蜘蛛？いや鬼か？

1体は背中から蜘蛛の脚が生えているが、頭からは角もすっかり生
えているので鬼蜘蛛だろうか。

「どうする？」

「ご主人様、私はあれ以外がいいです。虫っぽくって嫌です」

「じゃあ、あれはベルリア頼んだぞ！」

「マイロード、お任せください」

鬼蜘蛛をベルリアに任せて俺達は袴の鬼に向かうが、俺たちよりも
先にスナッチが前線に飛び出した。

スナッチが3体の鬼の前をスピードに乗って横切ると同時に『ヘッ

ジホッグ』を放つ。

無数の鉄のニードルが3体の鬼を襲った。

ニードルが致命傷にはならないが、鬼とはいえ鉄のニードルを全身に受けて痛みを感じないはずはないので、かなりのダメージを与える事に成功した様だ。

完全に出足が鈍った鬼に向かって駆けて行くが、あいらさんに先に行ってもらい俺はあいらさんの背後につき身を隠す様に向かって行く。

ヘッジホッグにより刺さったニードルは再生スキルの影響を受けないう様に刺さったままになっており、継続的にダメージを与えている様に見える。

確かに再生スキルは傷に対しては効果を発揮するのだろうが、刺さって埋まった異物に対しては、干渉する事が出来ずに効果がないかも知れない。

スナッチはそのままベルリアのフロアーに回ることにした様で、鬼蜘蛛の前まで行ってから『かまいたち』を発動して背中蜘蛛の脚を2本落としてから後方へと素早く退避した。

先陣をきる役目としては、ほぼ完璧にこなしてくれたと思う。

こここのところ出番が無く影の薄かったスナッチだが、十分に戦力になるところを見せつけてくれた。

第492話 スナッチの力（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第493話 陰の本懐

あいらさんが動きを止めた鬼に向かって攻撃をかける。

俺はそのまま、あいらさんの背後から飛び出すと同時に加速して鬼の背後に回り込む。

あいらさんが完全に鬼の意識を前方に集中してくれているので背中
はガラ空きだ。

とにかく無音。派手さは必要無い。素早く動き、一気に仕留める。

背後から無音で距離を詰めてガラ空きの首に向かってバルザードを
一閃する。

俺が目立つ必要は無い。他のメンバーが輝きを放てば放つ程俺は目
立たずに一撃を放てる。

俺は英雄になりたい。

英雄とは陽の極地。

なので戦闘でも主役を演じられる様に頑張っている。

ただ俺は隠キヤではないが、俺の戦闘の本質は隠。影から攻撃する
時が1番力を発揮できる気がする。

スキルと合わさってアサシン化が進むのは避けたいが、人間の本质
はそう変わる物では無い。

とにかくあれ程苦戦した鬼にも影からの攻撃であっさりと勝利して
しまった。

嬉しい反面、複雑だ……

あいらさんはどう考えても主役。

ミクとヒカリンも端役にはなり得ないだろう。

俺は、敵役？それとも陰で動いて画面には出て来ない黒子？

俺が光り輝く陽の極地に到達するイメージは残念ながら湧かない。

是非ともアニメ制作会社には、陰の者が主役の大ヒットアニメを生
み出してもらいたい。

世の中の英雄像にアサシンや背後から止めをさすキャラクターが加わるべく頑張っていたきたい。

きつとそっちの方が可能性がある気がする。

是非アニメーターの方々に既存の常識、概念を覆す様な世界的ヒット作を生み出して頂きたい。

英雄とは隠の極地のイメージを刷り込んでもらいたい。

無事に鬼を倒したので他の2人に目をやると、いつも通りの展開が繰り広げられており、シルはあっさりと鬼を退けていた。

高火力こそ正義というのをまざまざと見せつけてくれているので頼もしい限りだ。

逆にベルリアの方は思った以上に苦戦している。

スナッチの『かまいたち』で脚が落ちたので、鬼蜘蛛の脚はあまり強度がないのかと思ったが、どうやらたまたま関節部分の弱い箇所にはヒットしただけだったようで、普通にベルリアによる剣戟を防いでいる。

2本少なくなっているとはいえ、ほぼ前面の全てをカバーしているので攻撃が通っていない。

だがこれは……

完全に前面をカバーしている。

が後面はガラ空きだ。

これは俺か？俺の出番だよな。

俺は再び無となる。

そして影となり、こっそり鬼蜘蛛の後方目指して進み出す。

決して足音を立ててはならない。決して気取られてはならない。速さよりも無音を優先する。

鬼蜘蛛はベルリアの猛攻に気を取られてこちらには全く意識を向けていない。

しかも都合よく、剣と蜘蛛脚が触れるたびに金属音が響き渡っており、俺の移動音を完全にかき消してくれている。

スルスルと鬼蜘蛛に近づいて行きその距離はおよそ4M。あと少し

で俺の間合い入る。

周りのメンバーも俺の意図を把握しているのか、俺の行動を妨げる様な動きは誰も見せない。

変化は違和感を生む。

そのままの姿勢を保ちながら間合いをゆっくりと詰めて行く。

あと2M。

手を伸ばせば届く寸前の距離。

飛び込めば間合いに入る距離だが、俺はそのままの足運びで鬼蜘蛛との距離をもう50CM詰めた。

そしてもう一步踏み出すと同時にそのまま無言でバルザードを横に一振りして鬼の首を落とす事に成功した。

「海斗さん、影度が上がりましたね」

これは褒め言葉なのか？

しかも影度って初めて聞いたけど。

MPも消費する事なく、静かに戦闘は終了したが、俺は誰に悟られる事も無く密かに消耗していた。

この無になって移動する事は地味に神経をすり減らし、思いの外疲れてしまう。

これは俺が完全なる隠キヤではなく、ただの地味キヤラだからかもしれない。

第493話 陰の本懐（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第494話 黒

俺は、その後の戦闘で人数的なアドバンテージがある時は仕留め役に徹して戦う事にして進んだ。

お陰でMPの消費はかなり抑えられる事となり、あいりさんが矢面に立つ事が増えたものの、戦闘があっさりと終了する事も増えた為、結果としてあいりさんの負担も減り、それなりにバランスの良い状態を保つことが出来ている。

そしてそれは俺の仕事人化が進んでいる事を示しており、メンバーからお褒めの言葉を頂く事となった。

「影度が上がった上に職人らしくなって来たのです。正に仕事人です。後は武器を暗器にさえ変えれば……………」

うん、俺は別に仕事人を目指している訳では無いから、今の武器のままでもいい。

その後夕方まで数度の戦闘を経て今日の探索を終了した。

「それじゃあまた明日」

俺はみんなと別れてから、すぐには帰らずにホームセンターへ向かい手芸コーナーを探した。

「あつた。これか」

俺が手に取ったのは衣類の黒染め。

今日の探索で俺の戦闘スタイルを再確認し、目立たない事に越した事は無いが、ブーツ以外全身黒で統一された俺の装備の中で新しく

購入したマジック腹巻だけが白い。

そもそもユーズドなので真っ白ではないが白いことには変わりはない。

サイズを調整して鎧の下に装着していることもあるが、戦闘中にポーションを素早く取り出すために、鎧の上から装備する場合は白色が異常に目立つ。

目立つと認識される可能性が上がってしまったので、それに気がついた俺はマジック腹巻を真っ黒に染め上げのことを思いついたのだ。

黒染めの箱に書かれている説明文を読んだが、水に溶いた黒染めに漬け込むだけと非常に簡単な物だったが、おっさんにも言われた様に間違っても口の部分は水の中に漬け込む訳にはいかないので、ゴム手袋も一緒に購入した。

家に帰ってすぐに準備を始め、ゴム手袋をして手に持った状態で腹巻の口に水が入らない様に固定して真っ黒な水の中に1時間程漬け込んでから、一緒に買っておいた色止めという物を使って仕上げをしてから取り出した。

「完璧だな」

取り出したマジック腹巻は完全に真っ黒なマジック腹巻に変わっていた。後は干すだけだ。

このままぶら下げると床が惨事になりそうなので入浴後、風呂場の中で衣類乾燥のスイッチを入れ朝まで放って置くことにした。

朝目が覚めると同時に即マジック腹巻を確認しに浴室へ向かった。

「おおっ！」

そこには真っ黒に彩られたマジック腹巻がしっかりと乾燥された状態でぶら下がっていた。

浴室の床が垂れた滴で真っ黒になっていたのでしっかりと洗い流し

ておいた。

黒いマジック腹巻を手にとって装着してみたが、昨日までとは全く違う。

完全に黒い。

これは昨日までのネコ型ロボットの彷彿させる腹巻ではなくなっている。

むしろ黒くなってカッコイイ。

恐らく10人いれば4人ぐらいはカッコいい、欲しいと言ってくれるレベルの腹巻に生まれ変わった。

俺の装備にも違和感無く溶け込む感じだし昨日まで漂っていたユーズド感が全くとっていいほど無くなっている。

まさに俺によるオリジナルリメイクカスタマイズを経て新生したと言っても過言ではないだろう。

俺は新生黒いマジック腹巻を装着して意気揚々とみんなと合流した。

「どう思う?」

「何が?」

「いや、これだよ」

「……………何?」

「いや、これだって」

「もしかして黒い腹巻を買い直したの?」

「いやあ、昨日帰ってから自分で染めたんだよ」

「えっ、自分で染めたの?海斗って結構マメね」

「でも、随分良くなったのです」

「黒の装備に違和感なくなったな」

「そうでしょう」

「まあ、元のが酷すぎたから、良かったんじゃない」

「ミク……………」

やはり、俺の選択は間違っていなかった様だが、昨日までの腹巻の

評価が低すぎないだろうか。
昨日もしっかり活躍してくれていたと思うのだが。

第494話 黒（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第495話 ダンジョンの難易度

俺達は16階層を進んでいる。

前日同様にマツピングした所までは午前中のうちに到達する事が出来て今は新しいエリアを探索している。

10階層を越えた辺りから感じていた事だが、階を進む毎に難易度が上がっていつている。

ベルリアのせいで出現する敵がおかしかった時を除くと、階が進むごとに敵が強くなっていくだけではなく、明らかにダンジョンの分岐する数が増えている。

別にゲームでは無いのだから下の階層程難易度が上がる必要など無はずだが、確実に難易度が上がっていつている。

シルヤルシェの居ない他のパーティが探索を進めている事を考えると頭が下がる思いだが、サーバントを除いた戦力では他のパーティの方が勝っているのかもと思わされてしまうのでより努力しなければいけないと思う。

「今どの辺りまで来てるかわかる？」

「うーん多分だけど1/3ぐらいまでは来てるんじゃないかな」

「じゃあ、結構順調なのね」

「やっぱり連続で長時間潜れてるから、普段の探索より効率は上がってる気がするよね」

「じゃあ春休みの間に17階層まで行けそう？」

「実質あと3日無いからちよつと無理かも」

今の俺達の1番の目的は霊薬の入手。

階層を越える事が最優先ではないが、通常のモンスターが霊薬をドロップするとは考えられないので、必然的にエリアボスかそれに準

じる様なレアモンスターを目的にする必要がある為、階層を越える際に現れる階層主は現在の所最優先事項にしたいところだ。ただ各階層に1体しか現れない階層主を当てにするのも正直不安は残る。

カオリンも今は問題ない様に見えるのでまだ時間的な余裕はあると思うが、仮に20階層まで行けたとしても単純計算でチャンスは後4回しか無い事になる。

相当な引きが必要となるが、これについてはシルの言っていた因果律という不確かな物に期待するしかない。

「ご主人様、敵モンスターが4体います。ご準備をお願いします」
「それじゃあ、さつきと同じ4人で当たるぞ。残りのメンバーはしっかりフォローを頼んだ」

先に進んでいくと、そこにいたのは和風を思わせるフィールドには似つかわしくない西洋鎧を装備した鬼が4体群れていた。見るからに防御力が高そうな鎧を装備しているが、問題は鬼の首にあたる部分までしっかりと鎧で守られている。

「あれって、どうすればいいんだ？」

兜をかぶっていないだけマシなのかもしれないが、剣がスムーズに通るとは思えない。

「転ばせてから集中攻撃じゃない？」

「ああ、重そうだからな、案外鈍いかもしれない」

「氷漬けなのです」

やってみるしか無い。

スナッチが前線に駆けて行き『ヘッジホッグ』を放つが鉄のニード

ルは鎧によって完全に弾かれてしまった。

あの鎧は見掛け倒しでは無く、見た目通りの防御力を誇っているらしい。

これにより、スナッチの攻撃力は完全に封じ込められてしまい、俺達の先制攻撃は失敗に終わった。

とにかく動きが鈍い事を期待して前に出るがこちらを認識した4体が動き出し、残念ながら普通に動いている。寧ろ素早いぐらいだ。鬼の身体能力は鎧の重さをものともしない様だ。

ミクが火球を放つが『ヘッジホッグ』同様効果が薄い。

俺も隠れる場所も無く、向かって来る鬼と正面から交戦する事となる。

俺は既に魔氷剣を発動しているが、相手の武器は今までの刀では無くグレートソードに近い得物だ。

武器の有効距離では完全に負けているので、思い切って踏み込むしか無いが、正面からあれを掻い潜るのはかなり怖い。

効果は薄いがバルザードの斬撃を飛ばして牽制しながら、鬼の動きを止めて自分のタイミングで距離を詰める。

鬼の腕の長さと合わせると相手の射程は3M近くありそうだ。

もう少しで相手の間合いに入るが、踏み込んだ瞬間、鬼の剣が俺に向かって振るわれた。

第495話 ダンジョンの難易度（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第496話 鎧斬り

グレートソードが俺に向かって振るわれるが、この一撃は予測できた物なのでしっかりと剣筋を見極めて回避する。

回避と同時に再び前に踏み込むが、俺にとってはまだ間合いが遠いのでもう一步踏み込もうとするが、避けたグレートソードが再度俺に向かって襲ってくる。

完全に間合いに入ってしまったので後方に回避する事は出来ない。

魔氷剣で攻撃を防ぐが、相手のグレートソードを受けた瞬間俺の身体ごと持っていかれて弾き飛ばされてしまった。

「くっく……」

相手の攻撃は完全に見切って止める事が出来たが、相手の膂力と剣の威力が俺の耐えられる力を大きく超えてしまっていた。

予定では、相手の剣を受け止めてからいなして、そのまま首に魔氷剣を叩き込むつもりだったが、完全に予定が狂ってしまった。

すぐに起き上がって、敵の追撃に備えるが、既に鬼は目の前に迫っており、俺は距離を取るために後方に駆けた。

残念ながら正面からの斬り合いでは分が悪いので一旦引いて隙を窺う。

「ヒカリン、フォローを！」

ヒカリンの『アイスサークル』を期待して声をかけるが援護が無い。ヒカリンの方に目をやるが、あいりさんのフォローに入っている様で、こちらまで手が回らない様だ。

恐らくあいりさんも苦戦しているのだろう。

「私がフォローするわ」

ヒカリンの代わりにミクから返事があり火球が飛んでくるが、鎧に阻まれて効果が薄い。

こうなったらまたあれか？

でも、あれはそうそう連発する様なスキルじゃないしな。

俺は選択を迷いながら移動を続けるが、決定的な打開策を思いつかない。

「スナッチ、お願い！」

再びミクの声がしたと同時に大きな光の弾が鬼に向かって放たれ、鬼の胸の部分に大きな穴を開けた。

どうやらスナッチが『フラツシュボム』を発動した様だ。

『フラツシュボム』をくらい完全に動きの止まった鬼に向かって、そのまま首に魔氷剣を振るう。

首も鎧で覆われているので通常攻撃では無く魔氷剣が鎧に触れる瞬間に切断のイメージをのせる。

少しの抵抗感を感じながら魔氷剣は鎧を裂き鬼の首を落とす事に成功した。

スナッチのお陰でなんとか倒す事は出来たが、かなり危なかった。それにまだ終わっていない。

他のメンバーの戦況に目を向けるが、シルは鎧程度を問題にするはずも無く相手を倒していたが、ベルリアにとっては鎧ごと鬼を切断する事は容易では無かったようで、押しながら倒しきれず、結局痺れを切らしたルシエが止めをさした様だ。

問題はあいりさんだが、グレートソードと薙刀の間合いがほぼ同じの為、少し遠い間合いからお互いに牽制しあっており倒せてはいな

い。

ヒカリンも魔法でフォローはしているが致命傷を与えるには至っていない。

俺はすぐさまナイトプリンガーの効果を発動してあいりさんが交戦している鬼の後方を目指す。

視界に入るのを避けるべく、大きく迂回して後方10Mの位置につける。

俺の意図を理解したカオリンとミクが意識を前方に集中させる為に攻撃を連発する。

焦りは禁物だ。

はやる気持ちを抑えて、無音で近付いていく。

走れば2秒も有れば詰めれる距離だが、無音を意識して近づくと10Mは思った以上に遠い。

1M近づくと毎に自分へのプレッシャーが増大していく。

相手では無く自分自身によってかけられていくプレッシャーは、剣の届く距離の一手前で最大化され、喉が乾く。

魔氷剣の効果が切れたバルザードをゆっくりと構えて素早く振り切り、後方から鬼の首を落とす。

「ふ〜。疲れた〜」

俺としてはやはりこのやり方が一番有効だが、疲れる。

全ての戦闘をこれでやり通すには相当な精神力が必要とされると思うが、俺にはまだ無理かもしれない。

第496話 鎧斬り（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第497話 連続アタック終了

「ミク、スナッチ助かったよ」

「スナッチが頑張ってくれたのよ」

「でも予想外だったな。侍みたいなのが出てくるんだから
鎧姿の騎士みたいなのが出てくるんだから」

「私とヒカリンの攻撃が効かないのはきついわね」

「ヒカリンも次あれが出て来たら直接攻撃より『アースウェイブ』

か『アイスサークル』で動きを限定してもらった方がいいと思う」

「分かったのです」

「それと、あいつらは俺1人だと相性が悪いから、あいりさんかベルリアと組んで戦った方がいいと思う。ツーマンセルで前に引き付けてもらって俺が後ろからとどめをさしたほうがいいと思う」

「数が多いときは、数を減らせるまではミク、ヒカリン、スナッチで足止めをお願いする事になると思う」

相手にもよるがさっきの鎧の奴は相性が悪い。

最悪『愚者の一撃』を放てばどうにかは出来ると思うが、まともにやったら消耗が激しすぎる。

そこからは、ルシエにも積極的に攻撃参加をしてもらい順調に進んで行った。

「ヒカリン『アイスサークル』を頼む！」

「ルシエは、右端の奴を獄炎で燃やしてくれ！」

最初はベルリアの影に隠れて攻撃に加わろうとしていたが、残念ながら幼児サイズであるベルリアの影に隠れる事は物理的に難しかったので、必然的に俺はあいりさんとツーマンセルを組む事となった。

毎回あいりさんを前面に出して俺が隠れる形になる事に、若干の心理的抵抗感を覚えたが、結果的にこれがあいりさんのリスクも減らす事になるので、あいりさんとも相談して今の形で進んでいる。あいりさんが正面から相手に挑むが、薙刀の間合いを必ず保つ様にし、距離感だけは徹底してもらう。

隙があれば仕留めてもらう様に頼んであるが、基本は注意を引く事にウェイトを置いてもらっているので、心持ち遠目から斬り合ってもらっている。

あいりさんが斬りあいを持ち込んだ瞬間に俺は背後から飛び出して相手の後ろに回り込み、注意深く近づいて行きバルザードを一振りして仕留める。

「あいりさん、お疲れ様でした」

「ああ、海斗も手慣れた物だな。忍者化も進んでいるし、いつその事装備ももつと軽装でもいいかもしれないな。どうせ黒装束ならマントと鎧をやめて忍者衣装とかどうだ？」

「どうだと言われても、さすがにこの階層で軽装備は怖過ぎますよ。俺には無理ですね。しかも忍者衣装ってどこに売ってるんですか？」

「多分ダンジョンマーケットにはないだろうからネットショッピングとかだろう」

「それって……普通の布製のやつですよ」

「そうなるな」

「耐久性とか防御力はないですよ」

「まあ、そうなるな」

一体この人はこの階層に来てから何を言っているんだろうか？

ダンジョンにコスプレ用の衣装を着てくる探索者がどこにいますか？
うのだからか？

布製って、斬られるし、溶けるし、燃えるじゃないか。

完全に却下。検討にも値しない。

あいりさんは少しおかしな様子を時々見せていたが順調にダンジョンを進み春休み最後となる金曜日には16層の半分を超える位置までマッピングを終える事に成功した。

「それじゃあ、今日はこれで引き上げましょう」

「そうね、本当は春休み中に17階層まで行ければ良かったけど、まあ順調ね」

「海斗さん、明日は楽しみですね」

「海斗、私は行けないが健闘を祈っているよ」

「いや、そんな大袈裟な事じゃないですよ。でもミクとヒカリンはわざわざすまないな。明日は宜しく頼むよ」

「まあ、悪い様にはしないから安心してよ。余計な事して、海斗がダンジョンに来れなくなったら私達も困るもの」

「余計な事って……………」

とりあえず春休みダンジョン攻略は15階層と16階層も半分以上進んだので順調だったと言えるだろう。

明日は、春香とパーティメンバーの顔合わせだ。

春香とメンバーの2人も相性は良さそうだから特に問題は起こらないだろう。

第497話 連続アタック終了(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第498話 ガールミーツガール

今日は朝からそわそわして落ち着かない。

春香の強い希望で、パーティメンバーに引き合わせる事になったからだ。

3人の性格的に喧嘩するとは思えないので、年齢も近いし仲良くなるんじゃないかとは思うが、間に入る俺は何となく落ち着かない。

「おはよう」

「うん、おはよう」

駅前で春香と待ち合わせて合流するが、いつも通り可愛いのに、表情はなんとなく硬い気がする。

春香も良く知らない相手に会う事に緊張しているのかもしれない。

「春香、それじゃあ行くこうか」

「うん」

「2人共いい奴だから、大丈夫だよ」

「……………うん」

俺達はパーティメンバーの待つ場所まで向かう事にした。

「海斗、2人に会う前に一つ確認しておきたいんだけどいいかな」
「なに？」

「今日会う2人は女の子なんだよね」

「うん、そうだけど」

「その2人は可愛かったりするのかな」

「まあ、一般的には可愛いんじゃないかな」

あれ？春香が自分で聞いて来たくせに正直に答えたら反応がおかしい。

「……………今日会う2人とは付き合って無いんだよね？」

「え？どう言う事？付き合っただけ……………」

「付き合っただけと言うのは、恋愛的な意味だよ」

「恋愛？いや、いや、無い無い。そんな事ある訳ない」

「本当？」

「本当！」

「残りの1人とも……………」

「無い、無い」

一体春香は何を言い出すんだ。

俺と3人が付き合うなんてあるはずが無いのに何を突飛な事を言い出してるんだ？

「でも可愛いなら、ちょっとはそんな気にもなるでしょ」

「全くなからないから！」

「それって……………海斗ってまさか女性じゃなくて男性に……………」

「いや、怖い事言わないでくれ。ただでさえ探索者は男性比率が高くて、そう言う噂をよく聞くんだから、冗談で済まなくなるんだって」

「男性比率が高いのにどうして海斗のところは女性比率が高いのかな」

「そう言われても、彼女達がパーティ組むのは決まってる最後に俺が誘われて入ったからだけだ」

「それって俗に言うハーレムパーティじゃない？」

春香が止まらない。

なぜかエキサイトしてきて、段々と表情が険しくなってきた感じがする。

「ハーレムって、漫画じゃないんだからそんな事あるはずないだろ。そもそも俺はどう考えても主人公じゃないし」

「じゃあ、ヒモパーティって事なのかな」

「春香………ヒモって。それは、確かにハーレムよりはヒモの方が現実的な気もしなくはないけど、違うから！俺もちゃんと活動してるから！誤解しないでくれ！」

「まあ海斗が貢いでもらうのは難しいと思うけど。うん」

春香の言葉が心に刺さる。

俺はハーレム主人公でもヒモでも無い。と言うか1度たりともそうになりたいと思つた事は無いが、完全に否定されてしまうと自分の主人公適性を完全否定された様で、なんとなく悲しい。

「春香、そろそろ着くよ」

「そう、2人はもう来てるかな」

「あゝ多分あれじゃないかな」

後ろ姿だが、奥にミクとヒカリンらしき人影が見える。

「おゝい！」

「ああ、おはよう海斗！」

「おはようございます海斗さん」

やはりミクとヒカリンだった。

普通に朝の挨拶をしたんだけど、何故か肌寒い。

シヨッピングモールの入り口付近なので冷房が効きすぎているのか？

「海斗……海斗さん……名前」

なんとなく、春香の様子がおかしい気がする。

「春香、こつちが森山ミクさんと田辺光梨さん」

「あ、うん。葛城春香です。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくね。私同年だからそんなに硬くならなくて
もいいわよ春香ちゃん」

「春香さん私の方が年下ですから、もつと砕けた感じで大丈夫です」

「それにしても海斗にフルネームで呼ばれると変な感じね」

「はい、ちょっと新鮮なのです」

「……あの、普段は何て呼んでるんですか？」

「え？普通に名前よ。私がミクでこつちがヒカリン」

「……ミクとヒカリンです……か」

「うん、春香さんもこれからそう呼んでね」

「……はい」

にこやかに挨拶が終わって、中のカフェに移動することになったが、
何となく春香の元気は無い気がして心配だ。

第498話 ガールミーツガール（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第499話 蚊帳の外

「それじゃあ私も春香って呼ぶわね」

「わかりました」

「じゃあ私は春香さんって呼びますね」

にこやかな中にも張り詰めた空気……

カフェはまだだろうか。

喉が乾く……

しばらく歩くと、チェーン店のカフェに着いたのですぐに店に入り注文を先にする。

「俺は、アイスティーで」

「私はマンゴーフラペティで」

「じゃあ私も」

「私もそれで」

俺以外は3人共マンゴーフラペティらしい。なんと値段は650円もしているが、今日は俺がお願いして来てもらったので俺が支払うべきだろう。

まとめて支払いを終えて席に着く。

「……………」

ミクとヒカリンとプライベートで会う事も無いのでこの組み合わせは、不思議な感じがするが、春香は2人と友達になりたいのか？

「ミク、ヒカリン、単刀直入に聞きます。海斗の事をどう思ってい

ますか？」

うつつ……危つくアイスティーをヒカリンの顔に吹き出すところだった。

どう思ってるって本人の前で聞く？

これで嫌いだとかリーダー失格とか言われたらパーティー崩壊しちゃうけど。

「リーダーとして頑張ってくれてるし探索者として信頼してるわ」

「私も命を預けてるので全面的に信頼してます」

「海斗はリーダーなんですね。私は探索者じゃないからよく分からないんですが、男性1人に女性3人のパーティーっていうのは……その、普通なんでしょうか？」

「うーん、居なくは無いと思うけど珍しいかもね」

「でもうちのパーティーはサーバントもいるので小さい女の子が2人と男の子が1人と動物が1匹追加ですよ」

「男性2人で女性5人という事ですよ。これは大丈夫なんでしょうか？」

春香は一体何の話しをしようとしてるんだ？

パーティーメンバーと仲良くなりたいわけじゃないのか？

大丈夫なんでしょうかって何が？大丈夫に決まってるだろ。

「そうね。大丈夫じゃないパーティーもあるでしょうけど、うちのパーティーは大丈夫ね」

「はい。とても上手くいつていると思います」

「そうですか……」

「春香が気にしてる事は理解してるつもりだけど何にも無いわよ」

「えっ……？」

「そもそも、私、春香と会ったことあるんだけど覚えてない？王華

学院のオープンキャンパスで」

「ああ……あの時の……」

「そう。もし何かあったら顔見知りの人間の所になんか来るわけないでしょ。そもそも海斗がそんなこと出来るはずないじゃない」

これはどう言う展開？

そんな事ってどんな事？

まさか春香は俺とミクの仲を疑ってるのか？

いや、普通に考えて無いだろ。とは思うがこの場で言える雰囲気ではない。

「ミクは王華学院を受けるんですか？」

「そう、そのつもり。今日来てないもう1人も学院の先輩だからね。春香も入ったら一緒に遊びましょう」

「……………はい」

「まだ納得してない感じね。海斗ちょっとあっちの席に行つてよ」

「え？」

「ちょっと邪魔だから、1番向こうの席に行つて」

「……………はい」

この状況で邪魔って言われても俺は何もしてないぞ。

しかもこの3人だけで話すって大丈夫なのか？

あんまり雰囲気が良いとは思えないけど。

俺は後ろ髪を引かれながらも仕方がないので席を移動して3人の会話を窺う。

残念ながら距離があり過ぎて会話は全く聞こえないので横顔をチラチラと見ながら窺うしか無い。

この距離感で内容が分からないのはかなり辛い。

仲違いをされると明日からも気ままずくなりそうなので、仲良くして欲しい。

年頃の女の子は色々と難しいのは分かるが、何で今ここなんだ。これなら俺は最初からいない方がよかつたんじゃないだろうか？声は聞こえないが何かを話しているのは分かる。

3人ともが結構話しているが会話の内容が気になる。

アイステイヤーはかなり前に飲み切ってしまった。

飲んだばかりだが喉が乾く。

ここでおかわりを注文していいのか判断に迷うが既に俺の喉はカラだった。

第499話 蚊帳の外（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第500話 終戦の時

喉がカラカラになりながらも身動きを取る事が出来ず多分1時間ぐらいたが経過したと思う。

初対面に近い3人が一体何を1時間も話すことがあるのだろうか？遠目で見る春香の横顔も曇ったり明るくなったりを繰り返しているような気がする。

そうしている間に3人がスマホを取り出して連絡先を交換している様に見え、それから3人揃って俺の所までやって来た。

「海斗、待たせたわね」

「ああ、うん」

「春香とも仲良くなったし、よかったわ」

「へーそう」

「海斗さん、これからダンジョンで1日1枚以上写真を撮ることになったのです」

「写真？」

「そうです。春香さんはダンジョンの事が分からないので写真を送ってあげる事にしたのです」

「なんでそんな事……」

あつ、これは良くない。余計な事言ってしまった。

周りの温度が下がっていき、3人の視線が痛い。

「あ、ああ、いいんじゃないかな。うんいいと思う。ダンジョンの写真はいいと思うな。春香は写真が好きだし。うん」

「それとこれから時々春香と受験の事とか相談する為に遊ぶ事になったから」

「ああ、そうなんだ」

「連絡先交換したからダンジョンでの海斗の行動は逐一報告する事になったから」

「俺の行動？特に何も無いと思うけど」

「海斗さん、本気でそう思っているのですか？普通の探索者の何倍もいるありますよ」

「そうかな。そもそも何で行動を報告なんか……」

「は。海斗、それが分からないうちは、春香に報告が必要ね」

「なんで……」

俺のプライベートは一体どこに……

そこからは、ミクとヒカリンとは別れて別行動となった。

「海斗、ミクもヒカリンもいい人たちだったよ。可愛いけど……」

「ああ、それは良かったよ」

「海斗って私が思ってたよりすごいんだね」

「え？何が？」

「ダンジョンでの活躍を2人から聞いて、思ってたのよりずっと凄かったよ」

「そ、そうでもないと思うけど」

「それにヒカリンの事も聞いたよ」

「ああ……聞いたんだ」

「海斗絶対に助けてあげてね」

「ああ、それは約束だから絶対だ」

「ヒカリン助かるといいね」

「絶対に大丈夫だよ」

「何か私の知ってる海斗じゃないみたい。ダンジョンでは頼もしいんだね」

「……まあ」

それは、普段は頼もしくないと意味だよな。
もっと頑張らないと俺はまずいかも。

「私、海斗がダンジョンで隠れてハーレム主人公になってるのかと思ってたよ」

「ハーレム主人公って、それは漫画とかだけだよ。現実でそんな事ある訳ないよ」

「ふ〜ん。でも2人とも可愛かったし、もう1人のあいりさんも美人だって聞いたけど」

「それは、たまたまだから、たまたま」

「たまたまね〜。ところで海斗は3人のうちの誰がタイプなのかな？」

「な、何を言ってるんだ。タイプとかそんな事ある訳ないだろ。そもそも俺のタイプは………」

「そもそも海斗のタイプはなに？」

やばい顔が熱い。

からかっているのか、いたずらな表情を浮かべてそんな目で俺のタイプを聞かれても……

俺にタイプは春香だ！と言いたいが、本人を前には言えない。

そもそも春香はタイプとかそんなのではなく純粹に好きというか……

あゝ全身が熱い。

「と、とにかくパーティーメンバーはそういう対象じゃないんだって。そういうのは地上で……」

「そうなんだ。でもこれからミクがダンジョンの写真を送ってくれてるって約束してくれたから楽しみだよ」

「仲良くなれたみたいでよかったよ」

「あれだけ海斗のことを信頼してくれてるから、私もね」

よく分からないけど、最悪の事態は回避されたい。

ただミクとヒカリンは春香への俺の気持ちを知っているので余計な事を口走っていないかが心配だが、春香に直接聞く訳にはいかないしな。

何を話したのか分からないが春香の機嫌はいつもよりも良いぐらいなので、悪い話はしていないのだろう。

この日はその後もその事が気になってしまい、なかなか寝付けずに寝るのが遅くなってしまった。

第500話 終戦の時（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第501話 新学年

春休み最終日の昨日は春香と写真を撮りに街を巡ったが、春香も楽しかったのかずっと笑顔だったので俺も嬉しくなってしまう、必要以上に写真をいっぱい撮ってしまった。

そして今日は遂に3年生としての初日だが、俺にとってこの1年を左右する運命の日でもある。

学校に着くと入り口の掲示板に新しいクラスが発表されている。祈る様な気持ちで3年生のクラスを見る。

俺はどこだ？多分学年末の成績から言って2組か3組だと思っが…

……

え〜つと……た、た、た、高木。あつた。

3年2組に俺の名前はあつた。

正直2組でも3組でも良かったが、それよりも春香は何組だ？

俺よりも成績が上だったから1組か2組だろう。

1/2の確率だが春香の名前は………あつた！

おおおおおおおおおおお！

神様、ありがとうございます。

春香の名前は俺と同じ3年2組のところにあつた。

「やった」

思わず心の声が口から出てしまった。

神様ありがとうございます。

これで俺は今年一年頑張れる。

喜び勇んで3年2組の教室に入って自分の席を確認して座る。

春香は………

既に自分の席に座っていたが、数人の男子生徒に囲まれている。

あまり見覚えが無い生徒達なので初めて一緒のクラスになった生徒だろう。

クラスで春香が目立ってるから速攻で声をかけたってところか。これはどうしたものだろうか……

「おう、海斗、また一緒だな」

「ああ、真司も同じクラスか」

「おいおい、それはないだろ。もしかしてクラス発表の貼り紙を見てなかったのか？」

「ああ、ごめん。春香の名前を見て舞い上がって他を見るの忘れた」
「はっつ。海斗らしいといえばらしいけど。それより春香ちゃん大変だな」

「あれ、どうしたらいいと思う？」

「堂々と割って入ればいいんじゃないか？」

「俺、あいつら知らないんだけど……あいつらクラスでも目立ってそうだろ。初日から目をつけられたくは無んだけど」

「そんなんじゃないや春香ちゃん取られるんじゃないか？」

「……………わかったよ。ちょっと行ってくる」

正直俺のキャラじゃないけど新しいクラスになったし真司の言う事も無い話じゃない。

意を決して春香の方に行こうと席を立つと、春香もこちらに気がついた様で声をかけて来た。

「海斗。今年も一緒によかったね、今年もよろしくお願いします」

「ああ、春香、今年もよろしく」

春香は華が咲いた様な笑顔を見せてくれた。

昨日も会ったばかりだが、この笑顔は何度見てもいい。

ただ周りにいた男子の視線が刺さって痛い。

「真司も同じクラスだったみたいだ」

「うん、悠美も一緒だよ」

「そうか。真司も言ってくればいいのに。それじゃあ隼人だけ違うクラスなのか」

「えっ？隼人くんも同じクラスだよ。海斗、それは流石に酷いんじゃないかな」

「はは……。でも今年もみんな一緒か。奇跡的だな」

隼人まで一緒だとは思わなかった。

「いや、また海斗と一緒にか。まあよろしくな」

「隼人。学年末テスト会心の出来だと言ってなかったか？てつきり1組かと思ってたぞ」

「ああ会心の出来だったぞ。78位だった！」

78位って俺より下じゃないか。と言うより2組もギリギリだろ。

「まあ、みんな一緒だからまたよろしくな」

「いや、それがみんなじゃないんだ」

「え？みんなじゃないって……。あと誰かいたか？」

「花園さんだよ。花園さんと離れ離れになっちゃったよ」

「ああ、花園さんか。隼人あれから彼女と連絡とか取ってるのか？」

「もちろんだよ。あれから毎日俺から連絡入ってる。ちなみに花園さんからの返事は2日に1回ぐらいだから、結構忙しいみたい」

隼人、それって……

毎日連絡してるのに返事は2日に1回ってそれで大丈夫なのか？

「そうなんだ……」

「いや〜花園さんダンジョンの話にノリノリなんだよな」

「そうか……………」

「やっぱり花園さんイイわ」

「そう」

「今年1年楽しみしかないな」

「……………ああ」

隼人悪い…………俺には上手くいくイメージが湧かない。

隼人、お前なら新しいこのクラスで新しい恋が見つかるかもしれない。

頑張れ！

頑張れ隼人。

第501話 新学年（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第502話 久々の1階層

学校も初日はお昼までで授業が終わったので、さっそくダンジョンへと向かう。

それにしても、5人が同じクラスになったのは驚いた。俺も含めて男子の3人は昨年度頑張ったと言う事だろう。

3年2組へは去年の5組からは俺達以外は2人だけだったので、普通に考えてすごい事だと思う。

寧ろ、春香と前澤さんが2年生の時になぜ5組だったのかが謎だ。

1年の時の学年末テストで体調でも壊していたのかもしれない。

そして俺には大きな問題が発生していた。春休みずっと16階層に潜っていた為に完全に魔核のストックが枯渇してしまった。

というより最終日には既に尽きており、シル達に泣く泣く鬼の魔核を与える事になってしまっていた。

不思議な事に大きさによる満足度の違いは一応ある様だが、赤い魔核の様に味が特別違うと言う事はない様でスライムの魔核と比較して特段喜ぶと言う事は無かった。

なので今日からスライム狩りを再開する。

「なんか久しぶりだな。もうずっと来てなかった気がするな」

「実際に2週間以上来てないんだから当たり前だろ」

「まあ、そうだけだよっぱりここは落ち着くよな。ホームグラウンドって気がする」

「1階層で落ち着くってどれだけ低レベルなんだよ」

「ご主人様、スライムですよ」

「わかった」

あゝ久しぶりだ。殺虫剤を片手に向かって行く。

この攻撃力がなくて憎めない感じがなんとも言えないよな。
16階層の鬼には間違っても出せない雰囲気だよな。

「久々の必殺殺虫剤プレスだ！」

俺がスライムに向けて殺虫剤を放つと数秒で消え去った。

スライムスレイヤーとしての効果とステータスの恩恵で殺虫剤プレスの威力が凄いことになっている。

このあつさり倒せる感もストレスが溜まらなくていいんだよな。
久々にスライムを倒してテンションが上がってくる。

「さあ、どんどん行くぞ。みんなも次行こう」

「レベル20でスライム相手にその感じはどうなんだよ。恥ずかしくないのか？」

「え？何が？恥ずかしいわけないだろ。俺には他の探索者がスライムに見向かない事が信じられないよ。スライムは誰もが通る初心だぞ。初心忘れるべからずだ」

「スライムばかりだと飽きるんだよ。2階層でいいから行ってみようぜ！」

数体のスライムを倒した後、ルシエがうるさいので仕方無しに2階層にも踏み入れた。

ただ、スライムの魔核とそれほど魔核に違いが無いにもかかわらず、一気に難易度が増して明らかに効率が落ちた。

しかも落ちた効率に不満を募らせたルシエが爆発して勝手に戦い、お腹を空かせてしまう結果となった。

それにより折角手に入れた魔核を消費する事になってしまったので、即座に1階層へと戻る事を決断した。

1階層に戻ると、ルシエの文句は増えるものの、スライムを倒す気が無いのか手を出す事は無くなったので純粹に魔核を集める事が出

来ている。

週末までに200個は欲しいので真面目にスライムを倒し続ける。

「殺虫剤プレス！」

「そもそも、そのプレスっていうのをやめろ！プレスですら無い。プレスっていうのは口から出すもんなんだよ。そんな事も知らなかよ」

「いやそれは知ってるけど、擬人法だよ擬人法」

「擬人法って何だよ。魔法の一種か？」

「違う違う。物を人間に見立てた表現だよ。だから殺虫剤を人に見立てると、噴射口は口だろ。だからプレスであってるんだよ」

「どうせなら悪魔に見たててくれた方が、わかりやすい」

いや悪魔に見立てたとしても噴射口はやっぱり口だろ。

その後も久しぶりの1階層にテンション高めで夕方まで集中してスライムを倒す事に専念出来た。

明日からも張り切ってスライムを倒して魔核をしっかりと集めていきたい。

第502話 久々の1階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第503話 16階層攻略

この5日間は充実したダンジョンライフを過ごす事が出来た。

目的の魔核も十二分に集めることが出来たので、今日の16階層の攻略に集中して臨める。

ダンジョンの入り口前で待ち合わせていたが、どうやら俺が1番最後だった様だ。

「それじゃあ、今日も頑張って行こうか」

「そうね。それじゃあまずその入り口前でポーズとってみて」

「ポーズ？」

「そう、ポーズ。春香に送る写真だから格好良くね」

「本当に送るのか……」

「だって約束したの聞いてたでしょ」

「まあ、いいけど」

どうやら先週約束した事を早速実行に移す様でスマホで写真を撮らせてしまった。

別に写真ぐらいいは構わないけど、一体俺の写真を受け取って春香はどうするつもりなんだ？

まさか変なSNSとかに載せたりはないよな。

こればかりはみんなの良心を信じるしかないと思いつながらピースサインをしてしまった。

入り口には他の探索者もいたので、ルーキーみたいで恥ずかしかったが、よく考えてみるとパーティを組むまでずっとソロだったせいで、ダンジョンで撮った写真が1枚も無かったので、さっきの写真は俺にも送ってもらおう。

「海斗もミクも今年は受験生だな。王華学院受けるんだろう」

「もちろんですよ。俺は絶対受かります。来年もよろしく願います。先輩」

「海斗に先輩と呼ばれると変な感じだな。それにしても絶対に受かるって大丈夫なのか？」

「はい、春香が受かる予定なので俺も必ず受かって見せます」

「ああ、そうか。全く根拠は無いんだな。全国模試の志望校判定とかはどうなんだ？」

「1番最近受けたのでC判定でした」

「Cなら落ちる可能性もあるんじゃないか？」

「大丈夫です。今がCなだけなので受験までにはA判定いやS判定が出るはずですよ」

「海斗、S判定って失敗のSじゃないの？」

「ミク、不吉な事を言うな。言葉にすると現実になったりするんだぞ。そう言うミクはどうなんだ？」

「私？私はもちろんA判定だけど」

「くっ……聞いた俺がバカだった」

「海斗さん、春香さんも受かりそうなんですか？」

「確か春香はB判定だったと思うけど、この1年で2人でA判定をとってみせるよ」

「まあ、今の時期にB判定が出てれば、しっかり1年頑張れば問題無いだろう。Cは……まあ頑張れ」

みんな俺に対しては非常に失礼な態度だがミクがA判定だったとは驚いた。

見かけによらず頭が良かったらしい。

てつきり俺と同レベルだと思込んでいた。

16階層まで『ゲートキーパー』で移動してからマップを見ながら進んで行く。

ほぼ先週と同じ種類の敵が出現して来たのを順調に倒して進むが、1時間30分ほどで先週のポイントまで辿り着くことが出来た。戦闘がスムーズに進んだお陰だろう。

「もう半分は切ってるのよね」

「ああ、それは間違いない」

「じゃあ順調にいけば来週末には17階層に行けそうじゃない？」

「多分そうなると思うけど、この先の敵次第だな」

実際にここからの敵には先週も苦戦させられたので、気を抜く事は出来ない。

「ご主人様、早速ですが敵が3体待ち構えています」

「分かった。じゃあシルとベルリアとあいりさんが当たって下さい。

俺はあいりさんのすぐ後ろにつきます」

敵が現れたが、やはり先週苦戦した西洋鎧姿の鬼が3体だ。

ヒカリンは『アースウェイブ』を放ち、鬼の機動力を奪って行く。

やはり重い鎧を纏った鬼には『アースウェイブ』が効果的だった様で、2体を封じる事に成功した。

自ずと封じる事に失敗した鬼をシルが担当する事になり、そのまま4人で突っ込んで行った。

第503話 16階層攻略（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第504話 更に進む

足を取られた鎧の鬼は、覚悟を決めたのか正面を向きバスターソードを構え、あいりさんを待ち構えている。

あいりさんが少し離れた位置から薙刀を振るい注意を引きつけてくれる。

俺はあいりさんの背後から横を抜け鬼の後方へと走り死角に入る。

今回はここまでのことが出来ずに苦戦してしまったが、あいりさんと『アースウェイブ』のサポートがある今は問題無く遂行出来る。

背後に回った俺は、気配を薄めて鬼の背後に向けて歩を進めて、間合いに入ると同時にバルザードを振り切り切断のイメージをバルザードにのせて鬼の首を鎧ごと断ち切った。

「あいりさん、上手くいきましたね」

「ああ、あれだけ苦戦したのに今回はすぐに終わったな。本当に手慣れてきてるな」

「手馴れるというか、これしか無いと言うか。まあよかったです」

ベルリアを見ると完全に押し込んではいるが、やはり鎧の装甲が邪魔をして首を落とすところまではいっていない。

やはり、通常の武器で金属の鎧を断ち切るのは難易度が高いのだから。

昔漫画か何かで刀で兜を割るのをみた気がするが、確か秘伝の上に刀の耐久性が損なわれるので何回も使える技では無かった気がする。早くベルリアには魔剣を与えてやりたいので、この階層でドロップするのを期待して進んでいくしか無いがそれまでは俺が代わりに仕留めるしか無い。

俺は、ベルリアの相手にしている鬼の背後に回り込み先程と同じ様

に近づいて止めをさした。
ルシエも既に戦闘を終えているので、今回もほとんど消耗も無く戦
闘を終了させることが出来た。

「上手くいったわね」

「そうだな。このパターンで行けば西洋鎧の鬼も大丈夫だと思う」

先日苦戦した西洋鎧の鬼との戦闘もスムーズにこなして、16階層
の探索は先週よりもペースアップして土曜日1日だけでかなりの距
離を稼ぐ事が出来たので明日次第では攻略の目処も立ちそうな気が
する。

翌朝、再び16階層に潜り探索を進める。

「そろそろ昨日の所まで来れたんじゃない？」

「ああ、思ったよりも早いペースだけど、無理は禁物だから」

「この階層もお別れが近いと思うと少し寂しいのです、コンッ」

「ヒカリン風邪治らないな」

「いえ、多分花粉症です」

「ダンジョンの中まで花粉ってあるのか。花粉ってすごいな」

「そうですね」

「ご主人様、あそこに敵がいます」

「え？いつもより近いな」

「申し訳ありません。気配が薄くて気づくのが遅れました」

「ああ、別に気にしなくていいよ」

シルが目視出来るところまで敵を感知出来なかったのは今まで初め
てかもしれない。

目を凝らしてみると奥に小さく見えている姿は老婆。

老婆が3人佇んでいた。

「まさかあれって人間じゃ無いよな」

「老婆だけでこんなところにいるはずが無いからあれは間違いなくモンスターね」

「そうだよな。じゃあ、あれってもしかして鬼ババア？」

「海斗、正しくは鬼婆だ」

「やっぱりそうですよね。だけど母親とかの事を時々鬼ババアみた
いとか言いますよね。でも俺の母親あんな感じでは無いですね」

「いくら例えでも、本物と比較するのはお母さんに失礼だろう」

「そうですね。俺の母親はもつと若いですしね」

話しながら近づいていくが、鬼ババアは歳のせいで耳が遠いのかこ
ちらに気がついた様子は無い。

「ルシエ、いきなり行ってみるか？」

「いいのか？」

「なんか気がついてないみたいだしいいんじゃないか」

「急に攻撃したら鬼みたいに怒るんじゃないですか？」

「鬼ババアってそんなもんだろうから気にしたら負けだろ。ルシエ
頼んだ」

「まあ、いいけどこの距離で気付かないってヤバ過ぎだろ。年寄り
はさっさと消えて無くなれ！『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が鬼ババアの1体を捕らえ燃やし尽くすが、残りの2
体はようやくこちらに気がついた様で、こちらを見た瞬間に奇声を
上げて鬼の様な表情で怒り狂い始めた。

これが本物の鬼ババアの怒りか。流石に俺の母親が怒った時より迫
力あるな。

第504話 更に進む（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第505話 婆が爺

鬼ババアが怒りの表情を浮かべこちらを威嚇してくるが、手には出刃包丁の様なものを持っている。

ただ、ナイフぐらいの大きさしか無く見た目の雰囲気以外には怖さを感じない。

何か特殊攻撃でも仕掛けてくるのか？

「い、いや〜！来ないで、お爺ちゃん。お爺ちゃんがいっぱい……
……あああっ」

ヒカリンの叫び声が後方から聞こえてきたので慌てて振り向くが、怯えた様なヒカリンがいる以外は特に何も変わった様子はない。

「ヒカリン！どうした。何か出たのか？」

「いや、いやなのです。お爺さんが……お爺さんが、一杯……」

お爺さんが一杯……

何かの冗談かとも思ったが、普通に考えてそれは無い。

あの鬼ババアにより何らかの攻撃をくらった可能性が高い。
恐らく精神系の攻撃。

しかしお爺さんが一杯ってあれはお婆さんだぞ？

お婆さんがお爺さんに見えてるのか？

しかも一杯。

一体、どんな精神攻撃なんだ？

「ああっ、助けてっ……お爺さんが……」

今度はミクまでもお爺さんに汚染されてしまったようだ。

「あいりさん、突っ込みます。ルシエも頼んだ」

時間をおけば俺も精神攻撃を受ける可能性もあるので、迷わず突っ込んで行く。

鬼ババアは、老人とは思えない身のこなしで俺を迎え撃つべく向かって来た。

速い……俺よりもしかして速いか？

老婆が出刃包丁を持ちこのスピードで向かってくるとは、確かに恐怖の対象でしか無いが、俺にはババアにしか見えないので精神汚染はされていないのが自分で分かる。

バルザードを振るい首を狙うが、見た目にそぐわない素早い動きで頭を下げ、躲されてしまった。

「年寄りはいたわれや〜！！このガキが！」

おおっ！喋った。この鬼ババア喋れるのか。人型だし不思議はないが、驚きだ。

「年寄りは大人しくして下さい」

「くそガキ！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！」

流星は鬼ババア、狂っているのか全く話にならない。

それでも人間のお婆さんであれば我慢もするが、ツノが生えた完全なる鬼ババアなので容赦はしない。

「死ぬわけないだろ。お前が死ね！」

俺が『ドラグナー』を即座に放つと青い光の糸を引いた銃弾は鬼バ

バアの頭部を捉えて撃ち抜くが、気を抜かずに鬼ババアを注視する。やはり、鬼ババアは消滅する事なく再生の兆しが見えたので、即座にバルザードで首を刎ねる。

もう1体を見ると戦っているのはあいりさんでは無く、ルシエが獄炎で燃やし尽くしていた。

あいりさんは？

俺のすぐ後に走り出していたはずだがどこに行った？

「ああつ……じじ……じじ……怖い」

なんと俺の後ろであいりさんも意味不明の精神攻撃を受け戦闘不能に陥っていた。

ただ3人共同じ攻撃を受けている様で共通点はお爺さん。

お爺さんが大挙して押し寄せているのか？

それともお爺さんの鬼に襲われているのか？

外からでは分からないが、既に鬼ババア3体は消滅しているにもかかわらず、精神汚染は解けていない。

「あいりさんしっかりしてください！俺が分かりますか？」

「ああ………じじ」

だめだ、揺すつたぐらいじゃ解けない。

前みたいにやらないとダメなのか？

でも俺じゃ無理だ………

「ルシエ、頼んだ」

「なんでわたしなんだよ。だらしが無いな。貸しだぞ貸し！」

「いや、貸しは困る」

「ふん、ケチな奴だな。まあいい、おいあいり、寝ぼけてんじゃ無いぞ、さっさと起きろ『バチ〜ン』」

「はっ……ルシエ様、ここは？じじは……」
「まだ寝ぼけてんのか？お前は鬼ババアの攻撃でやられたんだよ」
「もしや、ルシエ様が」
「ああ、わたしが起こしてやったんだ」
「ああっ、やはりそうですか。この頬の痛みはルシエ様の愛……」
「ふん、もうやられんなよ」
「はい。ありがとうございます」

このやり取りであいりさんは無事に正気を取り戻した。

第505話 婆が爺（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第506話 駄剣

「ルシエ、他の2人も頼んだ」

「めんどくさいな！そもそもお爺さんってなんなんだよ。気持ち悪い」

「まあ、それは俺も思っけど、頼んだ」

「ちっ、しょうがないな。おい、ヒカリン起きろ！」

「はあっ！お爺さん……」

「誰がお爺さんだ！ふざけんな！『バチ〜ン』」

「え……あ……ルシエ様。お爺さん……」

「わたしがお爺さんに見えるんだったら、死んできてもいいぞ」

「いえ、申し訳ございません。もう大丈夫です。ルシエ様ありがとうございます」

どうやらヒカリンも正気を取り戻した様なので、後はミクだけか。

「お爺さんが……来ないで。いつぱい……」

「こいつも、お爺さんか……どこをどう見たらわたしがお爺さんに見えるんだ！本当に失礼なやつだな。おい！ふざけてるんじゃないぞ。ここにいるのは絶世の美女だ！お爺さんなんかどこにもいない『バチ〜ン』」

「はっ……。ルシエ様。私はお爺さんにほっぺたを……」

「ほっぺたを張ったのはわたした」

「え？お爺さんはルシエ様でルシエ様はお爺さん？」

「まだ寝ぼけてんのか？わたしがお爺さんなはずないだろ！もう1発いっとくか？」

「あ、ああ、大丈夫です。失礼しました」

どうやら3人共正気に戻った様だ。

「3人共鬼ババアの精神攻撃にやられてしまったんだと思う」

「ああ……………」

「ところで一杯のお爺さんって何？」

「……………それは……………恐怖のお爺さんだ」

「恐怖のお爺さんって何？」

「この世のものとは思えないお爺さんよ」

「いっばいって？」

「ものすごくいっばいなのです」

うーん結局よく分からない。

でも3人を恐慌状態に追いやるのは、かなり強力な精神攻撃だったのは間違いない。

「とりあえず、次からは鬼ババアを見かけたら速攻で倒そう。この精神攻撃はやばい。シルとルシエは大丈夫だと思うけどベルリアは危ない」

「マイロード、失礼ですがあの様な輩の攻撃など私に通じるはずがありません」

「そうは言っても、前にやられた事があるからな」

「くっ……………もう2度と倒れません」

「まあ、頑張れ」

そこからは慎重に探索を進めて行ったが、数度鬼ババアが出現したものの速攻で勝負を決めながら歩を進めて行った。

「ベルリア！速攻で首を落とすぞ！」

「はい、お任せください」

俺とベルリアは全力で突っ込んで行く。

「あ、ああ……………爺が一杯……………爺が……………」

お、おい、嘘だろ。ベルリアお前……………」

あれだけ、宣言していたのに、まさかやられたのか。

「爺……………爺……………爺……………」

あゝこれは使い物にならないな。

「ルシエ、代わりに頼んだぞ」

「こいつは……………」

「まあ、頼んだ」

「駄剣……………」

俺は人の事に構っている場合では無いので、集中し直し、全力で鬼ババに迫りバルザードの斬撃を飛ばす。

斬撃をくらい鬼ババアが怯んでいる間に更に踏み込んで一気に首を刎ねる。

ルシエもすぐ様、獄炎を放ち鬼ババアを燃やし尽くした。

「ルシエ助かった」

「ああ、それよりもコイツ……………」

「爺が……………爺……………」

「海斗、コイツ燃やしていいか？」

「いや、やめてやってくれ。ベルリアも悪気があるわけじゃ無いんだ」

「これでわたしの剣？駄剣が……………錆びて腐ってるんじゃないのか、これ」

「多分精神攻撃に弱いんだと思う」

「悪魔のしかも士爵が、精神攻撃に弱い？ふざけてるのか？」

「爺……」

「やっぱり殺す！いますぐ殺す！生恥を晒すより今殺してやった方がいい」

「ルシエ、そこはぐっと抑えて、ほつぺたを思いっきりやってやってくれ」

「チツ、殺意が湧いてくる。オラ〜！さっさと目を覚ませこの駄剣が〜！『バアアアテイイーン』」

あ……死んだかも。ベルリアがすごい勢いで飛んでいった。

第506話 駄剣（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第507話 ベルリア飛ぶ

ベルリアが飛んで行き地面に落ちると同時に回転を始めてゴロゴロと跳ね飛びながら転がって行く。

通常の間では絶対に耐えられない衝撃だろう。

流石はルシエ容赦が全く無い。

「おい！目を覚ませ！起きないならもう1発いくぞ〜！」

ルシエ、もう1発いくと、いくらベルリアでもタダでは済まないと思う。

「はっ……………姫、私は一体……………爺は……………」

「もう1発必要な様だな」

「いえ、もう大丈夫です。私は……………まさか」

「ああ、ベルリアはあの鬼ババアの攻撃に囚われたんだ」

「そんなバカなっ！私に限ってその様な事は！」

「いや、どう考えても完全にやられてたから。爺って言ってただろ」

「爺……………ああっ！爺……………」

「まあ気にするな。ベルリアはかかりやすいんだよ」

「……………はい」

「ふんっ！駄剣……………」

それ以上言っただけでやるなルシエ。ベルリアは精神攻撃が効きやすい体質なんだよ。大目に見てやってくれ。

そこから更に進み、結局、全体の3/4に近い位置までやって来る事が出来たので、この日の探索を切り上げる事にした。

この調子で行けば来週の週末には16階層を攻略出来るだろう。

翌朝学校へ着くと春香が声をかけて来た。

「海斗、昨日は鬼婆が出たんだったね。それにしても海斗は真っ黒だね。これとかほとんど背景と同化してるよ」

そう言っただけで見てきたスマホの画面には、俺が鬼に向かって走り出した後ろ姿が写されていた。

「これって……戦闘中じゃ……」

「うん、ミクが送ってくれたよ」

「嘘だろ……これって俺の後ろでスマホを構えて撮ったって事だよな」

「うん、戦闘シーンもあった方が良さそうだから」

「ミク……」

「それとねこれはカオリンから」

次に映し出された画面はベルリアがルシエにぶつ飛ばされた瞬間の写真が映し出されていた。

これはシャッターチャンスを狙ってなければ撮れる写真では無い気が……

「ルシエちゃんもベルリア君も可愛いよね。本当にみんな仲がいいんだね」

「そのシーンは仲が良いっていつのかな……」

「仲が良く無いとこんなに思いつきりビンタなんか出来ないでしょ？」

「……そうかもな」

そういう考え方もあるのか。ただルシエの場合はそうではない気

がする。

「でもね、私は1番シルちゃんが好き」

そう言っつてシルの映った画面も見せてくれた。

「本当に可愛いよね。私も写真で撮ってみたいな。輝いて見えるんだろぅな」

「ダンジョンの外には出れないから難しいかもな。春香がダンジョンに入るには探索者になるしか無いしな」

「そうだよ。でもこの3人を思いっきり写真に収めるのも夢見たいな話だよ」

「まあ、ミクとヒカリンに頼んで一杯送ってもらうのがいいと思うよ」

「海斗も送ってくれると嬉しいな」

「うーん、あの3人の写真か……。まずルシエは無理だと思う。他の2人は大丈夫だと思うけど2人だけ撮っているとルシエが拗ねる」

「ふふっ、ルシエちゃんは本当の妹みたいだね」

「まあ間違いは無いけど、妹にしては性格に問題がありすぎる」

「そっか、シルちゃんの写真がもつといる欲しかったな」

「まあ気持ちは分かる。シルはルシエと違って天使、いや女神だからな。心のオアシスだよ」

「そうなんだよね、女神様なんだよね。こんなに可愛いのに神様なんて信じられないよ」

「まあルシエも一応姫らしいけどな」

「それも納得だよ。ルシエちゃんも写真からでも気品が感じられるし」

「気品ね……。食い気は感じられるけど」

どうやらミク達と写真のやり取りをする事で俺のサーバントにも興

味を持ったらしい。

まあ、俺の事をもっと知ってもらおう意味でもいい事だと思ってるので、
今度こそっと一枚ぐらいシルの写真を撮ってきてあげようかな。

第507話 ベルリア飛ぶ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第508話 撮影会

俺は今1階層でスライムを狩っている。

「なあ、シル写真とつてもいいかな」

「ご主人様、写真というのは……」

「写真ていうのはこんな感じのだ」

俺はシルにスマホの画面に映る写真を見せて見た。

「これはずっとご主人様のところに私がいるという事でしょうか？」

「まあ、そうとも言えるけど、この中に写真として姿を残すって事だな」

「はい！もちろん大丈夫です。是非お願いします。いくらでもお撮り下さい。シルは嬉しいです」

「ああ、それじゃあポーズとかとってもらっていいか？」

「はい！これでいかかでしょうか」

「ああ、いいんじゃないか？」

「おい！ちよつと待て！なんでシルだけ写真とやらを撮るんだよ。わたしにはなんで頼まないんだよ。おかしい！」

「おかしいって……いやだってルシエは嫌がるかと思って」

「あ、ああ、もちろん嫌だぞ。だけど海斗がどうしてもって言うなら考えてやらない事も無いぞ。どうしてもって言うならな」

「いや、流石に嫌がる事を強要は出来ないから、俺には無理には言えないけどな」

「は？わたしがどうしてもって言うなら良いって言うてるんだぞ！」

「だから無理強いはしないって」

「くっ………お願いするなら考えてやるぞ」

これはあれか？シルを撮るならルシエも撮ってくれって事か？
まあ、そんなに撮って欲しいなら撮ってやろうかな。
絶対嫌がると思ってたのに反応が思ってたのとちよっと違うな。

「分かったよ。じゃあルシエにもお願いするよ。写真撮らせてくれ」
「ふんっ！そんなにどうしてもって言うなら仕方が無いな。海斗が
どうしてもっていうからだからな。勘違いするなよ」

「ああ、そうだな」

「それじゃあルシエもポーズジグしてみてくれ」

「こ、こんな感じか？どうだ？」

「ああ、いいと思うぞ。グッドじゃないか？」

「マイロード私はいかが致しましょうか？」

これはあれか？ベルリアも撮って欲しいのか。
ただど春香はベルリアの写真が欲しいとは一言も言って無かったな。
ただ、ここで1人だけ仲間外れにするのもな。

「それじゃあ、ベルリアの写真も撮らせてくれるか？」

「はい、もちろんです」

「それじゃあ一応ポーズジグしてくれ」

「はい、お任せください。これでいかがでしょうか」

「まあ、いいんじゃないか」

結局3人の写真を撮ることになったので、それぞれにポーズジグさ
せてスマホのシャッターをきった。ついでにペアや集合写真も撮っ
ておいたが結局15分近く撮影していたのでかなりの枚数が撮れた。
画面を確認すると3人共流石の写りで、正直、テレビに出ている子
役など比較にならない程輝いている。

シルとルシエも、もちろんの事ベルリアも画面で見るとかなりの物
だと思っ。

次の日学校で春香にスマホを見せて欲しい写真を選んでもらったが、ベルリアの写真は2枚だけ選びシルとルシエの写真は全部欲しいとの事で全部送る事になった。

ベルリア済まない。

やはりシルとルシエは別格だったようだ。

「海斗、3人の写真をこんなに貰えると思ってなかったから嬉しいよ。待ち受け画面にするね」

「ああ、そんなに喜んでもらえる撮った甲斐があるよ」

後で設定した画面を見せてもらうと、そこにはシルとルシエが並んでポーシングしている画像が表示されていた。

俺は一応ベルリアとシル、ルシエの3人で写っている画像を待ち受けに設定しておいた。

これほど反応が良いのであれば、シルとルシエの写真はネット販売とかすれば滅茶苦茶売れたりしないだろうか？

まあ、色々と問題も起こりそうなのでそんな事はしないけど、ダンジョンライフの1つの可能性を見た気がした。

第508話 撮影会（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第509話 地獄の門番

俺は今16階層を探索している。

「そろそろじゃないかな」

「今どのあたりなの？」

「何もなければ、1時間もあれば着きそうな気がするんだけど」

「ようやくなのですね」

「鬼狩りも終焉か……少し残念だ」

やはりこの階層はあいりさんをおかしくしてしまつらしい。

これがダンジョンの魔力か……

そこから更に奥へと歩いて行くと遂に16階の階層主がいると思われる部屋の前まで到達したが、扉の前に鬼が2体門番の様に待ち構えていた。

「あれって鬼……だよな」

「恐らくあれがこの階層にいるという事は牛頭馬頭だろうな」

「牛頭馬頭ですか。確かに見た目そのままですね」

「地獄の門番だな」

「という事はあの扉の先は地獄ですか」

「そうかもしれない。まさに開けてみるまで鬼が出るか蛇が出るかわからないと言ったところじゃないか？」

「あいりさん上手い事言いますね。なかなかこの場面ではっと出てきませんよ」

「それにしても、襲っても来ないわね」

「多分門番だから門をくぐろうとする相手を襲うんじゃ無いですか？」

「じゃあ、行ってみる？」

「誰がですか？」

「じゃあ、俺とベルリアで行ってみるか」

「マイロードお任せください」

俺とベルリアが前に立ち扉に向かって全員で進んで行くと、距離が5Mを切った辺りで、突然牛頭馬頭が動き出した。

手にはそれぞれ大型の棍棒を持っているが、トゲトゲのついた所謂鬼の金棒というやつだ。

大きさと重量感そしてトゲトゲの威圧感がすごい。

あんなのに殴られたら一巻の終わりだ。バルザードで受けて大丈夫かな。

「ベルリア、来るぞ！」

「はい、お任せください」

俺の相手は牛頭の様で、完全に俺をターゲットと認識した様だ。

15階層のミノタウロスと同じ牛頭だが、頭から下は屈強な鬼の身体をしており全体的な雰囲気はミノタウロスと少し異なっている。

しかし、俺って思った以上に牛のモンスターに縁があるな。

牛頭が猛然とこちらに向かって走り出して来たので迎撃する為のバルザードの斬撃を飛ばすが、ダメージをもともせず突っ込んでくる。

「シル『鉄壁の乙女』を頼む！」

このままでは牛頭の圧力を殺しきれないと思い、シルに『鉄壁の乙女』を発動してもらい俺もシルに向かって駆ける。

牛頭の突進よりも、俺の方が早く光のサークルの中に辿り着き、駆け込んだ直後に牛頭が強烈なタックルをかけてきたが光のサークル

によって防がれた。

怒り狂った牛頭が金棒で滅多打ちにこちらを狙って来るが『鉄壁の乙女』が無ければ驚異的な攻撃に見える。

今までの侍っぽい鬼が使っていた剣術とは明らかに違う力押しのレストラン。

圧倒的な力の暴力にもびくともしない『鉄壁の乙女』は驚異的だが、俺自身がこの牛頭のラッシュを防ぐ方法を思いつかない。

多分まともにやりあったら負ける。そんなネガティブなイメージしか湧いてこない。

俺は目の前で猛っている牛頭に向かって『ドラグナー』の引き金を引く。

青い閃光が走り、放たれた弾が牛頭の頭を吹き飛ばすが、当然の様に消滅しない。

これは完全に再生するパターンだ。すぐに首を落とさなければならぬ。

俺は牛頭が再生して動き始める前にバルザードを振るい牛頭の首に刃を通し、バルザードの刃が首を切断すると同時に牛頭は消滅した。安全な場所からの一撃だったので、あっさりと決まったが、こいつがエリアボスと言われれば納得する程の圧力だった。

一方ベルリアに目をやると馬頭と交戦している。

今はあいりさんも加わっているが、牛頭同様のラッシュを2刀を使い凌ぎ切っている。

さすがベルリア、圧倒的な力を技術が凌駕している様だ。

第509話 地獄の門番（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

ベルリア、それ以上金棒の滅多打ちを受けていると剣が折れるぞ！
ベルリアは全ての攻撃を受け流しているが、剣には確実にダメージが蓄積していつているだろうからB級品の剣では安心は出来ない。
カオリンとあいりさんがフォローに入り3対1で攻め立てるが、思った以上に金棒の回転数が高く苦戦している。

「ルシエ！頼んだぞ」

「最近人使いが荒くなってるんじゃないか？なんでも頼むって言われても聞ける事と聞けない事があるんだぞ？わかってるんだろ？」

「めんどくさい……」

出番が無かったら無いで暴れ始めるのに、ちょっと頼んだらこれだ。

「ああ、もういいよ。シルに頼むからルシエは大人しくしといてくれ」

「はあ？何言ってるんだよ。誰もやってやらないとは一言も言っていないだろ！ふざけてんのか？」

「いや別に……」

どう考えてもふざけてるのはルシエの方だと思っけど、ここは俺が大人の態度でグツと我慢して言い返す事はしない。

「やればいいんだろやれば。あの馬頭野郎を」

「ああ、頼んだぞ」

「役に立たない奴ばっかりだな。結局わたしが出ないとダメなんだからな。おい、ベルリア避ける『破滅の獄炎』」

ベルリアが避けるかどうか分からないぐらいのタイミングで獄炎が放たれ、ベルリアはギリギリ燃えずに済んだようだが、馬頭が燃え上がる。

燃え上がった馬頭の首をベルリアが落として勝利した。

「ルシエ、危ないだろ。ベルリアがもう少しで燃える所だったぞ」
「わたしがそんなことするはずないだろ。今のは最高のタイミングだったんだよ」

怪しい限りだがとにかく牛頭馬頭を倒す事に成功したので階層主のいる部屋に入る事が可能となった。

「それじゃあボス部屋に行くけどみんな準備は大丈夫？」

「問題無いわ」

「ポーションもありますし大丈夫なのです」

「最後の鬼……やはり無……」

あいりさん、階層主は鬼とは限りませんよ。もしかしたら青いパンスの変態とかが出てくる可能性もゼロでは無いです。

「シル達も大丈夫か？」

「はい、もちろんです」

「ポーションも持つてるか？」

「当たり前だろ」

「ベルリア剣は大丈夫か？」

「もちろんです。どんな敵だろうと斬ってみせます」

準備は万端のようだ。

俺自身もMPを消費してはいるが、最悪買い足したマジックポーション

ヨンがあるので問題は無い。

「じゃあ、行くよ」

俺は階層主の部屋の扉に手をかけて開いたが、今回はあっさりと開いてくれた。

ただ薄暗くて中がよく見えないので、覚悟を決めて中に入る。

俺が先陣をきつて中に入ると、他のメンバーも連なって全員部屋の中に入った。

「暗くてよく見えないな」

「ご主人様、まずいです」

「ああ、まずいな」

「我が剣ここにあり！」

どうやらサーバント達は見えている様だが、俺にはまだ見えて来ない。

「みんな見えてる？」

「いいえ、まだ目が慣れて無いわ」

「私もなのです」

「なんとなく気配は感じるが、1人では無い気がする」

「おい！お前等、そのまま扉から出る！」

「えっ？」

「ご主人様、一旦引きましょう。このまま戦うのは得策ではありません」

「どういう事だ？」

「話しは後だ！さっさと戻れ！」

ルシェが苛立った声を上げるが、こいつが撤退を勧めて来た事など

今まで一度も無いので、普通では無いのは分かる。
これは、どう考えても戻った方がいい。

「みんな、ここは一旦戻ろう」

まだ交戦すらしていないが、ルシエ達に情報を聞いてから再度アタックしても遅くは無い。

「海斗、ダメだな」

「え？ダメってどういう意味ですか？」

「引かないって事ですか？」

「いやそうじゃない、扉が開かない」

うそだろ……………

ボス部屋は出入り自由のはず。危なくなったら逃げるのはボス部屋の常識だ。

それがなんで出れないんだ？

どうしてだ。

俺も慌てて扉に手をかけたがびくともしない。

俺達はボス部屋に閉じ込められてしまったようだ。

第510話 16階層主（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第511話 百鬼夜行

「閉じ込められた……」

「くそっ！やられた。そこを退け！」

「どうするんだよ」

「いいからどけ！さっさと開け！『破滅の獄炎』」

ルシエが閉じてしまった扉に向かって獄炎を放つが扉が開く様子は無い。

ただ、獄炎により周辺部分が明るく照らされて、今まで見えていなかった室内の様子が見て取れた。

「なっ……」

なんと俺達から少し離れた所には、無数とも思える程の数の鬼が立っていた。

「うそだろ。ボスって1体じゃ無いのか？この数は一体……」

「海斗さん、これはまずいのでは……」

「でもやるしか無いのよね」

「百鬼夜行……」

「あいらさん？」

「これは、恐らく百鬼夜行だ。百鬼を超える数の鬼の出現。しかも階層主の部屋とくればそれしか考えられない。ダンジョンでは聞いた事は無いがアニメの定番だ」

「アニメの定番……。百鬼夜行」

あいらさんのとんでも根拠だが、百鬼夜行なら俺も聞いた事はある。

確かにこれは百鬼夜行なのかもしれないが、という事はこの鬼達は百鬼もいるという事か？

以前のスタンピードでも100体はいなかったかもしれない。

15階層のミノタウロスが全部で100体ぐらいだったはず。ただあれは30人以上で

当たって攻略した。

鬼の強さは幅があるが、1体毎の強さは平均するとミノタウロスと比べても大きく劣るものではない。

その鬼を100体相手に単独パーティで攻略？

どう考えても無理だろ。

ゲームが言うところの無理ゲーだ。

これがゲームならリセットするか、放置するところだがこれは現実だ。

そんな事は出来るはずも無い。

「シル、『鉄壁の乙女』を絶対に切らすな！みんなそこで迎え撃つぞ！」

シルに壁を背にした状態で『鉄壁の乙女』を発動してもらおう。

今まで散々危ない場面を経験したせいで感覚が麻痺してしまったのかもしれないが、百鬼を前に絶望感と焦燥感に苛まれながらも、頭ではどうにかこの窮地を切り抜ける方法が無いか必死で考えていた。

「ルシエ、遠慮は無しだ！近づいて来た奴には『破滅の獄炎』をお見舞いしてやれ！みんなも近づいて来た奴から順番に倒すぞ！」

これしか無いと思う。

『鉄壁の乙女』で攻撃を防ぎながら、近づいた鬼を片っ端から倒して行く。

持久戦を覚悟して敵を待ち構えるが、ルシエの獄炎と俺の声に反応

した鬼が一斉にこちらに向け殺到して来た。

『鉄壁の乙女』が防いでくれると分かっているにもかかわらずこの数に寄って来られると怖い。

高速でこちらに向かって来たのは小鬼の一团だ。群を抜いたスピードでこちらとの距離を詰めて攻撃を仕掛けて来るが光のサークルがそれを阻む。

「そんなおもちゃみたいなのが効くはずないだろ！消えろ『破滅の獄炎』」

「氷漬けにしてやります『アイスサークル』」

「スナッチやつちやいなさい」

スナッチもヘッジホッグを放ち群がった小鬼にダメージを与える。

俺は凍った小鬼に止めをさすべくバルザードの斬撃を放つ。

ベルリアとあいりさんも、光のサークルの中から近づいて来た小鬼に向かって武器を振るい、ダメージを与えて行く。

倒した小鬼の後ろからは2刀使いの鬼が割って入って来て、こちらをめがけて刀を振るって来た。

「ベルリア倒せ！」

俺も向かって来る鬼にバルザードを振るうが、極力MPを節約する為に魔氷剣は温存し戦う。

「お願い効いて！『幻視の舞』」

ミクは直接的な攻撃は効果が薄いと踏んで『幻視の舞』を発動するが、最前列で

刀を振るっていた鬼の一体が、こちらに向けて振り続けていた刀を止めた。

効いたのが？

挙動不審になつた鬼に向けてあいりさんが『斬鉄撃』を放ち首をはねる。

流石のあいりさんもこの場では呼Qを使う余裕はなかつた様で通常の技を繰り出している。

場を弁えてくれてよかつた。

第511話 百鬼夜行（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第512話 百鬼猛攻

前線に出張って来る鬼を順番に倒してはいるが、何体倒せたのかよく分からない。

薄暗い中常に鬼が押し寄せて取り囲まれているので、全体が見えず鬼の数がよくわからない。

「ルシエ、ペースが落ちてるぞ！もつと燃やし尽くしてくれ！」

「分かってるよ。別にペースなんか落ちてないだろ。敵が多すぎなんだよ！『破滅の獄炎』」

ルシエの言う事ももつともだ。

恐らく鬼を倒している数はルシエが一番多いとは思うが、次から次へと鬼が押し寄せるので、光のサークルの中とは言え息つく暇がないのだ。

「ご主人様、もう少しで『鉄壁の乙女』の効果は切れます」

「シル、切れると同時にもう一度発動してくれ。みんなは、切れた瞬間を全力で凌いで！ヒカリンはタイミングを合わせ融合魔法で爆発させて欲しい」

『鉄壁の乙女』は上手く連続発動させれば、見た目にはほとんど切れ間無く発動し続けている様に見えるが、消えてから次が発動する間にコンマの数秒のタイムラグが発生するので、万が一の事も無い様に徹底する。

「ご主人様、効果が切れます。『鉄壁の乙女』」

効果が切れる瞬間を狙って、俺達は放出系のスキルを一斉に放つ。ヒカリンの融合魔法による爆発とルシエの獄炎で最前線の鬼達は全て吹き飛び十分な時間を稼ぐ事が出来たので、俺達は再び籠城戦に入るが、流石に鬼達も力押し一辺倒では『鉄壁の乙女』を崩せないと悟ったのか少し距離を置いた状態からスキルによる攻撃を仕掛けて来た

もちろん光のサークルがスキルによる攻撃も完全に防いでくれるが、距離を置かれた事で剣による直接攻撃が届かなくなってしまったので、自動的に遠距離攻撃の術を持たないベルリアが完全に無力化してしまった。

俺は斬撃を飛ばし、あいりさんも『アイアンボール』に切り替えて攻撃を続けているが、遠距離攻撃だけでは致命傷を与える事が出来ずにルシエの攻撃に頼る事になってしまっている。

先程まで前衛の3人とルシエの4人で数を減らしていたのに今はルシエだけが鬼の数を減らす事が出来ている。

「ヒカリン、融合魔法を敵の真ん中に頼む！」

「分かったのです」

ルシエの獄炎に次いで威力があるのはヒカリンの融合魔法なので発動してもらおう。

『ドガアアアン』

融合魔法が爆音と共に炸裂して鬼の集団に穴を開けるが、鬼も学習して今度は密集陣形を取るのをやめて少数で分散し始めた。

人型のモンスターだけあって思った以上に対応が早い。

敵はまだまだ数が多い。

ルシエ1人で全部倒す事は不可能だ。どう考えても先にMPが尽きてしまう。

「ご主人様、もう少しで『鉄壁の乙女』の効果が再び切れます」
「分かった。もう一度頼む」

もう『鉄壁の乙女』の効果が切れるのか。

鬼達に引かれたこの状況で『鉄壁の乙女』をかけ続ける事はルシエと同じくMPの枯渇を招く以外にあり得ない。

完全に以前のスタンピードの時の事が頭をよぎる。

「皆さん『鉄壁の乙女』をもう一度かけます。いきますよ『鉄壁の乙女』」

再び光のサークルが張られるが、鬼がスキル攻撃に特化していた為に結構危なかった。

何度が繰り返せば、このタイムラグをいつか抜かれる。

手詰まりに近い状態で焦燥感を覚えながらも、バルザードの斬撃を飛ばしていると、敵の集団の後方から鬼ババアが数体こちらに向かって歩いて来ているのが見えた。

まさかとは思うが、こいつらの精神攻撃って『鉄壁の乙女』で防ぐ事が出来るのか？

光のサークルの中にとどまっている今の状態は格好のターゲットになり得るのでそんな事は無いと思いたい。

第512話 百鬼猛攻（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第513話 鬼ババアの恐怖

「ルシエ！鬼ババアを倒せ！」

こちらに向かって来る鬼ババアに嫌な予感を覚え、潰す為にルシエに指示を出す。

「ババアは大人しく死んでろ！『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が向かって来ていた鬼ババアの1体を燃やし尽くすが、まだ3体残っている。

俺もバルザードの斬撃を飛ばし命中させるが、再生能力を持つ鬼ババアを倒し切る事が出来ない。

鬼ババアに対する嫌な感じが拭えない。俺には第6感の様なものは全く無いが、なぜかヤバイと感じる。

「ルシエ！残りも倒せ！」

ルシエが獄炎を放ちもう1体を倒すが、まだ2体いる。

「お爺さん……………お爺さんが……………」

俺の後方から声が聞こえてくる……………

これはミク……………

明らかに鬼ババアの精神攻撃を受けている。

『鉄壁の乙女』は物理攻撃には鉄壁を誇る。音も風も光も防いでくれる。

だが、精神攻撃は物理的な攻撃とは一線を画す。

僅かばかりの心配はあった。

しかし今まで光のサークル内でダメージを受けた事が無かったので、その心配は頭の中から消し去っていた。

だが、俺の悪い予感が的中してしまった。

どうする？どうすればいい。

このままサークルの中にとどまれば、シルとルシエ以外はやられてしまう。

「ヒカリン！今すぐミクを起こせ！ベルリア、あいりさん！打って出るぞ！」

「海斗、やるのか。わたしもやるぞ」

「ああ、頼む。シル『鉄壁の乙女』が解けたらお前も頼む！」

「はい、お任せください。ご主人様は絶対に守って見せます」

幼女に守られる俺……

ここまで来ても格好つかないが、頼もしい限りだ。

この数の鬼を相手に気配を消したところで、効果は無いだらう。

「ウォーターボール」

俺は魔氷剣を発動して覚悟を決める。

絶対にここを乗り切って見せる。

「あああああああああ〜！」

身体の底から叫び声をあげ強張る身体と心を鼓舞して光のサークルから踏み出す。

俺の後にベルリアとあいりさんも続くが、サークルを出た瞬間に今まで距離をとっていた鬼が殺到する。

俺とベルリアとあいりさんでトライアングルを形成して鬼を迎え撃

っ。

数が多いのでMPは節約したい。したいがこの数を相手に手加減など出来るはずがない。初手から全力で臨む。

目の前に迫る袴の鬼に向かって『ドラグナー』を放ち間髪入れずに首を刎ねる。

眼前の鬼が消失した瞬間、次の鬼が迫って来る。

先手を取りたいが陣形を崩すと全方位から一気にやられるので1人で突っ込んで行く事は出来ない。

次に迫って来た2刀使いの鬼が刀を振るい斬りかかって来るが、動きが緩慢に見える。

これはアサシンの効果が発動している。

俺は迫り来る刀を掻い潜り魔氷剣を振るい首を刎ねる。

俺の動きが明らかに鬼のスピードを凌駕している。

極限とも言えるこの状態でアサシンの力が覚醒しているのを感じるが、鬼を倒しながらも、どこか冷静な俺が焦りを感じる。

アサシンの効果を発動して、自分だけが素早く動けた事は今まで数度あるが、必ず代償とも言うべき反動が来て、身体中を痛みが襲って来た。

俺が今までこの効果を発動した事があるのは戦闘中単発のみだ。

それでも次の日には全身の筋肉痛に見舞われた。

それが今は単発で終わらす事は出来ない。

可能であれば数十回数百回と続けて発動させる必要があるが、果たしてそんな事が可能なのか？

俺の身体は大丈夫なのか？

考えをまとめる間も無く次の鬼が襲って来て、先程と同じ2刀使いが2刀同時に繰り出して来た。

今は目の前の敵に集中する。

2刀の軌道がハッキリと見える。このままいくと斬られる。

俺はバックステップを踏み間合いを外すと俺の鼻先を刀がすり抜けていく。

まだ、覚醒状態は続いているようだ。

第513話 鬼ババアの恐怖（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第514話 覚醒

刀を避けて追撃が来る前に踏み込み鬼の首を刎ねる。

いける。このままこの戦闘中だけやり過ぎせればいい。

今度は鬼蜘蛛と西洋鎧の鬼が2体同時に襲いかかって来た。

それぞれが斬りかかって来るが、この限定された間合いでグレートソードの一撃はきつい。

『ファイアボルト』

鬼蜘蛛に向けて炎雷が放たれ、動きを阻害する。

「ヒカリン助かる！」

俺は『ファイアボルト』により作られた時間の隙間に鬼蜘蛛目掛けて飛び込み、胴体を袈裟斬りにし、返す刀をで首を刎ね、西洋鎧の鬼に向かって『ドラグナー』を放つと同時に魔氷剣を首に突き立てた。

「く……うあっ……………」

俺の背後からあいりさんの呻き声が聞こえて来たので慌てて後方に目を向けるが、あいりさんが鬼に押し込まれていた。

この密集状態で薙刀は不利。手数を出せずに敵の二刀に押し込まれている。

俺は躊躇する事無く後方に向けて『ドラグナー』を放ち青い閃光が鬼の頭を吹き飛ばし、あいりさんがそのまま鬼の首を刎ねる。

「海斗、すまない」

このままだとあいりさんが持たない。

あいりさんの事を侮っているわけでも舐めているわけでも無いが、この状況で一番先に吞まれてしまうのはあいりさんだ。

「カオリン、ミク！ あいりさんの所に援護を集中してくれ！」

どうにか残りのメンバーにフォローしてもらおうしか無い。

「全然減らないな。こいつら蟻か？ どっから湧いて出てるんだよ。さっさとくたばれ！」『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が前方の鬼を焼き払うが焼け石に水状態で鬼の数が減った気がしない。

ざっと考えてみても既に三十体近くは葬り去っているはずだが一向に減った感が無い。

最初に百鬼いたとすれば残り七十体か？

そもそも初めに百鬼だったのかどうかも分からない。

終わりの見えない戦いに体力と精神力が削られていく。

再び目の前に現れた四本腕の鬼と対峙するが四本の刀を器用に振りこちらに攻撃を仕掛けて来る。

四本対一本の段階でほとんど反則だと思うが、ルールがあるわけでは無いのでどうしようも無い。

普段の俺であれば、正面からあたって勝てる相手では無い気もするが、この場に於いてはそんな事は言っていられない。

相手の四本の刀全てに神経を集中する。

刀が振り下ろされるが、全て同時では無く少しずつズレている。

目でそのズレを追いながら、隙間に身体を滑り込ませながら避けきれない刀に魔氷剣を合わせていなす。

今のこの状態が所謂ゾーンと呼ばれるものなのかそれとは全く違う時間の流れを超越したものなのかは分からないが、今はこのスキルに縋り鬼を撃つ。
滑らした魔氷剣をそのまま鬼の首に突き立て身体をぶつけて薙払うと同時に魔氷剣の効果が切れたので、鬼が近づかない様ドラグナーを構えて再び魔氷剣を発動する。

「あつ……」

魔氷剣を再度発動して構えた瞬間、腕と足に痛みが走る。
もう来たのか。

心配していたリバウンドがこのタイミングで現れてしまった。
まだ動けない程では無いが、後どれだけ動けるか分からない。
低級ポーションのストックは三本。最後まで持つかは分からないがやるしか無い。
痛む足を動かし目の前の鬼に向かってステップを踏みながら魔氷剣を振るう。

「……つつ」

腕の筋肉と腱が痛む。

これが噂に聞く五十肩？いや腱鞘炎か？

世の中のサラリーマンの人達も痛みを抱えて頑張ってるんだ。このぐらいの痛みで音を上げてる場合じゃ無い。

俺は痛みを無視して集中力を高めて鬼の首を狙う。

流星に鬼も俺の狙いを理解して首を守る様にして刀を構えているので『ドラグナー』を放ち、胴体に風穴を開けてから、がら空きになった首に魔氷剣を叩き込み鬼を倒した。

第514話 覚醒（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第515話 消耗

「ぐっっっ……」

身体が軋む。肩が痛い。手首が痛い。筋肉だけでは無く関節も痛い。今低級ポーションを飲むべきなのか判断に迷う。このペースで飲めば最後までもたない気がする。俺の迷いなど関係無く、鬼が襲って来る。

子鬼が分銅を投げて来るが、しっかりと見えているのであっさりと躲すが距離があるのでこちらからは行けない。

僅かばかりの膠着状態を破る様に大型の鬼がこちらに向けてタックルを仕掛けて来た。

避ければ背後にいるあいりさんが背中から直撃を受けてしまうかもしれないので迎撃するしか無いが、この勢いを止めるにはどうすればいいんだ。

「そこをどきなさい『神の雷撃』」

シルの声と共に雷が走り向かって来ていた鬼が消滅した。

「シル、助かった」

「ご主人様、私も一緒に戦います」

「ああ、頼んだ。ルシエ、ミクとヒカリンの前で戦ってくれ！」

シルがここにいると言う事はミクとヒカリンも『鉄壁の乙女』の加護が無くなったという事なのでルシエに守ってもらっただけ無い。

「分かってるって。それにしても数が減らないぞ！どっかに女王蟻

みたいなのがいるんじゃないのか？ あくさつさと地獄に落ちる『破滅の獄炎』」

「本当に群がって来て困りますね。そこをどいてください。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

シルとルシエの攻撃が鬼を消滅させ一瞬空白が出来るがすぐに次の鬼で空間が埋め尽くされる。

あいりさんに一瞬目を向けるが、ミクとヒカリンが交互に援護して持ち直しているようだ。

ただこれもいつまで持つか分からない。

ベルリアを見ると、淡々と剣を振るっている。一切の派手さを捨て、正に剣を振る悪魔と化し二刀を振るい続けている。

通常の攻撃に混ぜて『アクセルブースト』を使い鬼にとどめをさしていくが目の前に立ちはだかる西洋鎧の鬼の首を『アクセルブースト』を使用して勿ね飛ばした瞬間に左手に持っていたバスターソードが根本から完全に折れてしまった。

「ああつ！」

思わず声を上げてしまったがベルリアは僅かに根元の刃が残ったバスターソードを目の前に現れた鬼に向かって投げつけて残ったブロードソードで斬りつけた。

あの折れたバスターソードは25万円だった方だ。

B品の瑕疵がこんなところで出てしまったのか？

いや、これだけ酷使すれば折れて当然か？

ベルリアの『アクセルブースト』で酷使され使用限界を迎えたのだろつ。

ただ今この時に折れるとは厳しすぎる。

そもそも、もう一本のブロードソードも同じ時に購入したものだ。

まさかとは思うが、同じタイミングで折れたりしないよな。

「ご主人様、集中を！」

ベルリアに気を取られていたが俺にも余裕は無い。

前方の鬼に意識を向けるが、今まで見た事の無いタイプの鬼だ。

「鬼ジジイ？」

風貌は鬼ババアを彷彿させるがどう見ても男の鬼だ。

鬼ババアと対をなす鬼ジジイか……

俺は魔氷剣を構え、鬼ジジイが来るのを待ち受けるが、鬼ジジイは俺との距離

四メートル程の距離で足を止めた。

何だ？何で止まったんだ？

不思議に思いながらも気を緩めずに魔氷剣の斬撃飛ばすが、魔氷剣を振るった瞬間剣を、握っている左手の指にはめていたレジストリングが碎ける感触を理力の手袋の内側から感じた。

俺のはめていたレジストリングの効果は対気絶用だ。

つまりこの鬼ジジイは気絶のスキルを俺に向かって放って来たという事だ。

こいつはヤバイ！

次の瞬間、躊躇う事なく『ドラグナー』を放ち鬼ジジイにとどめを刺すべく前方に大きく踏み出して首を刎ねる。

鬼ババアもヤバかったがこの鬼ジジイのスキルはヤバイ。

俺のレジストリングも使い捨てなのでもう無くなってしまった。

第515話 消耗（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第516話 目覚めの炎

「みんな気を付けろ！ 鬼ジジイがヤバイ！ 気絶のスキルを使って来るぞ。相対したら速攻で倒すんだ」

鬼ジジイは一体だけじゃ無い。次くらったらやばい。

「マイロードお任せください！ 私が蹴散らしてみせます」

いや、ベルリアお前はとにかく目の前の敵を倒して気絶しないようにだけ集中してくれ！

「ルシエも鬼ジジイを見たら速攻で倒してくれ！」

「ババアもジジイも厄介だな。さっさとくたばってる！」

目の前の鬼の後方には鬼ジジイの一団が見て取れる。やばい、あいつらが集団でスキルを発動したら防ぐ術が無い。

「シル、ルシエ！ あいつらを頼んだあ！」

シルとルシエにもすぐに意図は伝わり、目の前の敵を倒した後、即攻撃を叩き込んでくれたが、まだ残っている。

俺は目の前の鬼と戦っているために手を出せないが、時間的余裕も無い。

『ドラグナー』を連射して目の前の鬼を退け、首を跳ねるが、その瞬間、身体の痛みと同時に気持ち悪い虚脱感に襲われた。これはMP切れの症状だ。

俺は迷わずマジック腹巻から低級ポーションを取り出し一気に飲み

干した。

身体から痛みが抜けていく。低級ポーションもマジックポーション程では無いが、MPが回復するのでこれでまだ戦える。眼前に迫る鬼ジジイに攻撃を加えるべく、前に向かって大きく踏み出すが、その時俺の後方から音が聞こえて来た。

『ドサツ……………』

この音はまさか……………

この人が倒れたような音はまさか……………

俺は魔氷剣の斬撃を鬼ジジイに向かって飛ばすと同時に音のした後方に目を向ける。

ああ……………

ベルリア……………

やっぱりお前か……………

残念な事に音が聞こえてきた瞬間に予測は出来ていたが、実際にこの場面で倒れているのを見てしまうと、さっきのベルリアとのやり取りが、もうギャグかやらせか何かかと思えてしまう。

あれだけ注意をしたのに……………。

いずれにしてもベルリアが危ない。相対していた鬼が倒れたベルリアに刀を振りかぶり襲いかかろうとしている。

俺は燃費度外視で再び『ドラグナー』を連射しベルリアに刀を振り上げていた鬼を撃ち、全力でベルリアの下に走った。

「おい！　ベルリア！　起きろ！　目を覚ませ！」

ベルリアを庇うように立ち背後で倒れているベルリアに声をかけるが反応が無い。

俺がベルリアの下に走ったので完全にトライアングルのフォーメーションが崩れてしまったので、シルが俺がいた位置に戻り、立て直

す。

「ベルリア！ 目を覚ませ！ 死ぬぞ！」

大声を上げベルリアの覚醒を促すが全く反応が無いが、ルシエもミクとカオリンを護りながら戦っているので誰も直接ベルリアを起こしに向かう事ができない。

「わたしが起こしてやる。燃やせば死ぬ前に起きるだろ！」

「いやっ、それはダメだ！ 二度と起きることが無くなってしまっ」

あのルシエの感じは……本気だ。

ベルリアに獄炎を放つつもりか？

あれは火力が強すぎる。いくらベルリアが悪魔とはいえ気を失った状態であれをくらえば、おそらく燃え尽きてしまっ。

流石に、それはやらせるわけにはいかないが、前衛の枚数が1枚減った状態は長くは続けられない。

こうなったら……

「ミク！ ベルリアを撃て！ スピットファイアで撃ってくれ！」

「え……。海斗！ ベルリアを撃つの！？」

「ああ、頼む！ 頭以外を狙ってくれ！ ベルリアなら回復できるから大丈夫だ！ ミクがやってくれないと獄炎で消し炭にされてしまっ。ただしリングは外してくれ」

流石に強化された炎弾は刺激が強すぎるので、リングを外して小火球を放ってもらっ。

「……わかったわ」

意を決したミクがベルリアに向かってスピットファイアの引き金を引いた。

第516話 目覚めの炎（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第517話 ベルリア目覚める

小さな炎弾がベルリアめがけて飛んでいき、背中部分に着弾した。

「ううん……」

信じられない事に鎧と魔法耐性の強さが仇となり、火球が直撃したにもかかわらず、まだ目を覚さない。

「ミク〜！ 続けてくれ！ 急いで！」

俺は眼前の鬼に向かって魔氷剣を振りながら声を上げる。

「大丈夫？」

「だいじょうぶだ！」

「わかった。ベルリアごめん」

今度はミクも確実にしとめるために、スピットファイアの3連弾を放った。

「う……ぐ……あ」

ベルリアが着弾の度に変な声をあげる。ベルリアなら大丈夫だよ……な？

「あ、ああ、ここは？ 背中が背中が熱い！」

「ベルリア、起きたか！ お前鬼ジジイにやられて気を失ってたんだぞ」

「ま、まさか……この私があんなジジイにやられるはずが」

「まあ、いいから背中は大丈夫なのか？」

「そ、それがものすごく痛いです。焼けただれたような痛さが……」

「そうか……『ダークキュア』をかけとけよ」

「はい、ご心配ありがとうございます」

まあ、素直でいい奴なただけだな。

間違い無く俺よりも強いのに、今一つ実践での活躍が見られない気がする。

「ベルリア！ 鬼ババアと鬼ジジイに気をつけて、早く戦線に復帰してくれ！ 流石にきつい」

「マイロード、お任せください」

『ダークキュア』を発動してからすぐにベルリアが戦線に復帰し、俺はシルとベルリアの間に入り、鬼に立ち向かう。

もう、俺は何体の鬼を倒しただろうか？

十体目ぐらいまでは記憶にある。ただそこから先は、もう数はわからなくなってしまうているが、黙々と狩り続けている。

淡々としているのか朦朧としているのか自分でも良く分からなくなつて来た時だった。気がつくとな隣で発光現象が起こっていた。

ベルリアの身体が光っている。

このタイミングでレベルアップしたのか！

俺は慌ててベルリアのステータスを確認する。

種別 士爵級悪魔

NAME ベルリア

LV 2 3

HP 78 86

MP 89 96

BP 99 108

スキル

ダークキュア

アクセルブースト

ヘルブレイドNEW

装備 魔鎧 シャウド

ブロードソード

おおおっ！新しいスキルが発現している。しかも強そうな名前だ！

ヘルブレイド……自らのHPとMPを地獄の刃に変換して持っている武器から撃ち出す事が出来る。

これは、待望の遠距離攻撃スキル！ 近接しか出来ないベルリアには垂涎だったスキルだ。ただしHPも消費するというのが気にはなるが悪魔なのでこのぐらいは仕方がない。

「ベルリア！ 新しいスキルを使ってみろ！」

「はい、お任せください『ヘルブレイド』」

ベルリアがスキルを発動すると禍々しい黒い妖気のようなものが剣から立ち昇り、振るうと同時に黒い刃が飛んで行き、前方の鬼の前で刃が黒い炎をあげながら、そのまま首を刎ねてしまった。

「おおっ！ やるな」

俺はそのままベルリアのステータスを確認するがHPとMPが4ずつ減少していた。余り使いすぎると、危ないが今この時には助かる。

「ベルリア！ 斬って斬って斬りまくれ！」
「お任せください！」 『ヘルブレイド』 『ヘルブレイド』

ベルリアがスキルを連発してくれたので周囲の鬼が倒れ、一瞬だけ時間が出る。

目の前を見るとおよそ半数ぐらいには減ったのだろうか？

減っているとは思うが、目の前に鬼の一団が現れると全く全容が見取れないので、減った気がしない。

そもそも、こいつらにはリーダーかボスのようなはいないのだろうか？

「あいりさん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫じゃないな。もうすでにポーション三本目だ。そろそろお腹がいっぱいになって来たよ」

あいりさんの消耗が激しい。

どうにかして負担を軽減してあげたいが、俺も既にポーションを二本飲んでおり余裕が無くなって来ている。

第517話 ベルリア目覚める（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

この作品は皆様のブックマークとポイント評価で支えられています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第518話 ポーション

「マイロード、ポーションを頂いてもよろしいでしょうか？」

「どういう事だ？ 別にダメージくらった様には見えないけど」

「はい『ヘルブレイド』を使い過ぎてHPとMPが減ってしまいました」

「ああ……」

そういう事か。確かに俺も撃って撃ちまくれと言ったしな。俺の責任でもあるが、そこは調整して欲しかった。

俺の持っている低級ポーションは残り一本だが、幸いにもシルとルシエにも一本ずつ持たせているので、この一本をベルリアに渡してもまだ余裕はある。

「ベルリア、これで最後だからな！ スキルは少なめでいってくれ」

「はい、ありがとうございます」

俺は自分の持っている低級ポーションを取り出してベルリアに渡し、俺は、奥に見えた鬼ババアに向けて『ドラグナー』を放った。

「『斬鉄撃』 ふうふう……。くう……。『アイアンボール』 ぐっ

……」

やはりあいりさんは限界が近い様に見える。

このままではまずい。

「シル、ルシールを喚んでくれ。あいりさんのフォローにつけてくれ！」

燃費を考えると持久戦のこの場面での召喚は悪手だが、今あいりさんを休ませなければ取り返しがつかなくなる。

「わかりました。我が忠実なる眷属よここに顕現せよ『楽園の泉』ルシール来て」

シルの召喚に応じてルシールが姿を現した。

「ルシールあいりさんのフォローに入って出来る限り鬼を倒せ！」
「お任せください。あなた達、海斗様達の邪魔です。お還りください『エレメンタルブラスト』」

風が巻き起こり前方の鬼が巻き上がる。

「あいりさん、ポーションを飲んで休んでください！」

「ああ、すまない」

低級ポーションを飲むとHPは回復するが、完全に疲れが取れるかというと少し違い、体の芯に溜まったものは残った感じがする。HPの表示とは異なり俺の筋肉痛も完全には回復していないので、ポーションを既に二本飲んで居るが、俺の動きも徐々に落ちて来ている。

「ヒカリン、アイスサークルをあいりさんの前に頼んだ」

ほとんど効果は無いかも知れないが、氷の壁があるだけで精神的な余裕が変わってくるはずだ。

俺はそのまま戦いを続けるが、突然膝に力が入らなくなり踏ん張りがきかない。

腕はまだ動くので魔氷剣の斬撃を飛ばして応戦するが、このままでは、鬼にとどめをさすために踏み込む事ができない。

「ルシエ、預けてあった低級ポーションをこっちに頼む！」

こうなったら少し早いポーションに頼るしか無い。

「無い」

「え？」

「だからもう無い」

「無い？」

「ああ、さっきわたしが飲んだ」

「わたしが飲んだのか？」

「MP がちよつとキツくなつて来たから飲んだ」

「……」

ちよつと待ってくれ。完全にルシエに渡してあったポーションも計算に入っていたのに飲んで、もう無い？

しかもMP がきついんだつたらマジックポーションだろ！何普通のポーションを飲んでるんだよ。

ルシエ……お前に渡しておいたのが間違いだつた。

今度からルシエに渡すのはマジックポーションにしよう。

これが後悔先に立たずというやつか。

しかもこの切迫した状況で痛すぎる。

「シル、預けてた低級ポーションは……」

「もちろんありますよ。どうぞお使いください」

ああ……やっぱりシルは女神だ。ルシエとは全く違う。

だが、ルシエのせいでこれが最後の一本となつてしまった。

かなりまずい状況だが、動けないこの状況はもつとまずい。
俺はシルから低級ポーションを受け取り、一気に飲み干した。
本日三本目の低級ポーションなのでそろそろお腹が水膨れで一杯になつて来た。

膝に力が戻り動かせる様になつたが、下手な動きをすると横っ腹が痛くなりそうだ。

第518話 ポーション（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第519話 攻防

どれだけの時間が経過しただろうか？ 一時間にも二時間にも感じ
てしまうが、実際には数十分に過ぎないのだろうか？

既にルシールも去りあいりさんも戦線復帰しているが、俺は既に限
界を迎えている。

『アサシン』の能力覚醒により鬼を正面から撃破出来ているが、リ
バウンドで動きがどんどん鈍くなって来ている。

敵を見ると、少し減って来た気はするので、無限増殖している訳で
はないらしい。

「カオリン！」

今度はミクの声が後方から聞こえて来たので慌てて声の方に目を向
けるが、ヒカリンが真っ青な顔で膝をついていた。

あの感じは魔力切れか……

「ミク！ ヒカリンにマジックポーションを！」

「でも私、低級マジックポーションしか持ってない」

「それでもいいから、早く！」

魔力切れの状態は死ぬ訳では無いが、著しく体調不良となる。

そのままでは戦えるような状態では無いので一刻も早く回復する必
要がある。

「ヒカリン、ごめん」

意を決したミクが低級マジックポーションの蓋を開け、真っ青な力

オリンの口に向けて流し込んだ。

「うっうっうっうっう……オエッ」

ヒカリンの悲鳴とも取れる声上がるが、なんとか低級ポーションを飲み干した様だ。

苦虫をつぶした様な初めてみるヒカリンの表情だが、マジックポーションの効果で顔色は戻って来た様だ。

「海斗さんミクさん、恨みますよ。うっっ」

目の前の敵を相手にしながらも、他のメンバーの事まで気を回せているのは、やはりアサシンの効果により感覚が広く鋭くなっているからの様な気がする。

『バキイイイン』

この金属音は……

ああ……

遂に来てしまった。

ベルリアの持っていたブロードソードが折れた音だった。

バスタードソードが先に折れてしまったので、可能性は考えていたが、このタイミングで折れるのか……

確かにここまで急激に負荷をかけているので数打ちのベルリアの剣が限界を迎えてもおかしくは無い。

だが二本ともこのタイミングで折れるのか……

『ヘルブレイド』が消耗を加速したのかもしれない。

ベルリアも手元に残った刃の部分で果敢に鬼と渡り合っているが、どう考えても長くは持ちそうに無い。

徒手空拳。ベルリアなら鬼と渡り合えるかもしれないが、どう考え

ても倒す事は出来ないだろう。
どうすればいいんだ。
猶予は無い。

「ベルリア！ これを使え！」

「マイロードそれは……」

「いいから使え！」

俺はベルリアに向けてバルザートを投げて渡した。

悩んだがこれしか無い。

ベルリアにバルザートを使わせ、俺は『ドラグナー』で戦う。

受け止める剣もとどめをさす剣もない事に不安がないと言えば嘘になるが、『ドラグナー』を至近距離から放ち首に当てる。

アサシンの能力が覚醒している今なら何とかかなる。いやなんとかするしかない。

目の前の鬼が俺が武器を手放したのを見て一気に攻勢に出てきた。

今の俺には防ぐ武器は無い。

神経を集中して鬼の動きを見切る。振るって来る刀に対しての動きはサイドステップとバックステップの二つしか無いので、振り出してくる瞬間に判断して避ける。

いくら俺がアサシンの効果で速く動けるとは言え、タイミングを間違えると普通に斬られるので、とにかく目の前の鬼にだけ集中する。左からの袈裟斬りに対して、右ではなく左への移動を選択し、完全に鬼の側面を取った。

五十センチ程の距離にある鬼の首に向かって『ドラグナー』を躊躇なく放つ。

蒼い閃光が走り弾丸が首に着弾し胴体から頭部を飛ばして消滅に追いやる事に成功した。

これなら『ドラグナー』だけでもいける。

ベルリアもバルザートを振るい鬼を退けているが、鬼を倒し切るの

が先か、俺達の体力が尽きるのが先か、それ程先では無い未来に決着がつきそつだ。

第519話 攻防（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第520話 瓦解

「すまない。海斗……もう腕に力が……」

あいりさんが薙刀を手から落としてしまった。度重なる斬撃で遂に薙刀を持つ握力が無くなってしまった様だ。既にポーシヨンも何本か飲んでいたはずなので完全に限界を迎えたのだろう。

「あいりさん！ ルシエの後ろに下がって！」

あいりさんに下がってもらい、俺とシル、ベルリアで鬼の一団を押し返す。

鬼の数は減っているものの、四人で対応していたところが三人へってしまったので、突然負担が三割増してしまった。

残念ながら剣を持たない俺では複数を同時に相手することは出来ないので、挟まれ無い様に注意しながら立ち回るしか無い。

「ヒカリン！ 『アースウェイブ』を周りに張ってくれ」

鬼の動きを止めるためでは無く、少しでも敵からの攻撃範囲を狭める為にヒカリンに『アースウェイブ』を周囲に発動してもらう。

これで効果が続く限り侵入経路は限定できるはずだ。もう一度ルシールを出してもらおうか？

ルシールを出せば、盛り返せるはずだ。

「シル！ ルシールをもう一度頼む」

「ご主人様！ ルシールを喚んでしまうとMPが切れます」

……そこまでか。ずっと戦い続けているのでシルのMPが切れても不思議では無いが、どうする。
こうしている間にも鬼は押し寄せて来ている。

「シル、やっつけてくれ！ ルシールを喚んでくれ！」

「かしこまりました。我が忠実なる眷属よここに顕現せよ『楽園の泉』」

再び戦場へとルシールを喚び戻し、戦況を立て直す。

「ルシール頼んだ。お前だけが頼りなんだ。とにかく鬼の数を減らしてくれ！」

「お任せください。私の出来る限り倒します。ほら、海斗様のお望みです。お還りください『エレメンタルブラスト』」

迫って来ていた鬼が空中へと巻き上がり、少しの間だが攻撃の手が止んだ。

「シル、今のうちにこれを」

このタイミングを逃さずにスライムの魔核をシルに差し出した。

「こんなに良いのでしょうか？」

「いや、今しかない。これで少しでも回復をしてくれ」

これだけ魔核を摂取すれば、シルの体力もMPもかなり回復するはずだ。

「ああああ〜！ ずるい！ ずるい！ シルだけずるい！」

ここでそれを言うのか……ルシエ。
なんで、戦闘中にこっちを見てるんだよ。

「騒がなくてもルシエの分もあるって」

「じゃあ今すぐくれ。すぐにくれ。私もMPが切れる」

今すぐって言われても、この状況でどうやって渡すんだよ。

「とりあえずこれがシルの分な。ルシエは終わったらな」

「無理！ 無理！ 無理！ ミク今すぐ海斗から受け取って来てくれ」

「はいルシエ様、わかりました」

我慢する事を知らないルシエはミクをこちらに寄越して来たので、素早く残る魔核を渡しておいた。

そしてこの時点で気がついてしまった。

さっきベルリアに渡した低級ポジションって魔核でよかった……
やってしまった。

ベルリアが突然MPが切れたと言い出すからテンパってポジションを渡してしまっただが低級ポジションを一本無駄にしてしまった。

この切迫した状況での低級ポジション一本分の価値は計り知れない。俺はどこか抜けている。状況が切迫すればするほどミスを犯してしまう。

そんな自分にショックを受けてしまうが、ルシルの稼いでくれた時間が終わってしまう前に戦闘態勢を整え直すのが、残念ながら俺のMPもそろそろ底を尽きそうだ。

「シル！ 俺が戦える時間もそれ程残ってない！ ルシルと一緒に一気に行くぞ！」

シルのMPは今のでかなり回復しているはず。ルシールの召喚もまた使用できるはずだ。このまま四人の間に殲滅するしかない。俺は最後の気力を振り絞り残り残る鬼に向かって行く。

第520話 瓦解（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第521話 力尽きる

俺は直接的なダメージはほとんどくらっていない。

掠った程度で明確なダメージは負っていないのでHPはまだ大丈夫だ。

だけど、身体が悲鳴を上げて動かなくなってきた。もう足が動かない……

そしてMPが尽きてしまったので覚悟を決めて最後のマジックポーションを飲み切る。

「ガハア……」

戦闘への集中力を完全に削いでしまうまずさだ。

MPが回復するが、もう近接戦闘は無理なので目に入って来る鬼に向かってドラグナーを連発する。

もうMPが尽きるまで打ち尽くすしか術が無い。

前方ではカオリンの放った『ファイアボルト』が炸裂しているのも見える。

みんな分かっている。

ここが勝負所だ。

これ以上は俺達は凌ぎ切れない。ここで完全に押し切ってしまうしかない。

あいらさんの『アイアンボール』も放たれ、完全に弾幕が出来上がっているが、MPはどんどん剥られているので猶予はない。

「ルシエ！ 前に出てくれ！ 俺が代わる」

ルシエに守りを捨てて完全に攻撃に参加してもらおう。

敵の数も減って来ているし、俺と他のメンバーでこの場は凌ぐ。

「あゝさっさと死ね！ あの奥にいるのがボスか？ あいつら倒せば終わりか？」

ルシエの声に反応して奥を見ると確かに、見た事のない鬼が2体立っている。

今まで鬼の群れで奥の状況まで確認出来なかったが、さすがに数が減って来た今なら確認出来る。

明らかに他の鬼とは一線を画す威圧感と風貌。

一体は青、もう一体は白い肌をしており、2体とも猛獣を思わずような、鋭い眼光と体軀をしている。

「あれは……まさか無……いや、虎熊童子と熊童子か？」

「あいりさん、あいつらの事知ってるんですか？」

「確証は無いが、あの風貌、青と白。大江山四天王の二鬼だ」

「大江山ってあいりさんの家の近くなんですか？」

「何を馬鹿な事を！ 大江山は今の京都だ」

「京都の鬼なんですか？」

「ああ、それなりにメジャーな鬼だ。何しろ四天王だからな」

鬼だけど王なんだな。それにしてもあいりさん、鬼に詳しくすぎる。いずれにしても、俺達メンバーはいずれ援護も出来なくなる。であれば今しかない。

「シル、ルシエ、あの二体を倒せ！ ベルリア、ルシールと周りの鬼を蹴散らせ。ミク、スナッチを前に出してくれ」

ここに全てを注ぎ込む。

これを凌がれたら、サーバントはともかく俺達はもう後がない。

俺の指示を受けてスナッチが前面に踊り出し『ヘッジホッグ』をかける。

俺達も残るMPを投入して遠距離攻撃をかける。

シルとルシエは、周囲を突破して虎熊童子と熊童子の前にたどり着いたようだ。

後は二人に託すしかない。

シルとルシエを前に虎熊童子と熊童子も動き出した。

それぞれ、斧と刀を持っているが振るうとそれぞれ、虎と龍を思わせる衝撃波のようなものが放出されている。

あれはスキルか？

二人共上手く避けてはいるようだが強敵なのは間違い無さそうだ。

俺達も自分達の役目を果たす。

「カオリン！ 融合魔法をあそこに放つて！」

ルシールが消えてしまう前に全ての鬼を掃討したい。

「はい、わかったのです」

カオリンが融合魔法で鬼1体を消滅に追いやり、こんな状況にもかかわらずベルリアは念願のバルザードを振るえてテンションが上がりましたのか、いつになく戦場で輝いている。

一方俺は、『ドラグナー』を連発してMPが尽きてこれ以上は『ドラグナー』を放つ事が出来無くなってしまった。

これで俺はもう全て出し尽くした……

俺にはもう出来る事は何も無い。

後はみんなに託すしかない。

「おい！ 海斗！ まだHPは残ってるんだろ。 絞り出せ！」

俺が燃え尽きようとしていた時、ルシエの容赦のない声が聞こえて来た。

第521話 力尽きる（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第522話 搾りかす

「ルシエ！ 絞り出せってどう言う意味だ」

「そんなの一つしかないだろ！ HPがあるならわたしに寄越せ！

」

これはあれか……ルシエ本当に俺の最後の一滴まで絞り取る気か。確かに合理的ではある。

もう戦力となり得ないのであれば、ルシエの糧となり戦力の底上げを試みた方が可能性が上がる。

この戦闘を乗り越えればレベルアップする可能性も高いので戦闘後に回復するかもしれない。

後は、俺の覚悟だけか……

「ルシエ！ ポーションはもう無い。これで最後だぞ。今回は遊びは無しだ」

「そのぐらい分かってるよ。それじゃあ、いただくぞ！ 『暴食の美姫』」

ルシエ、もうセリフがおかしいぞ。いただくぞって……

「ぶつうつうあゝ！」

来た〜！ キツイ。この满身創痕の状態からの『暴食の美姫』いつになくキツイ。

俺の命が吸われていく。立ってられない。

「海斗！ 大丈夫？」

ミクが横について気遣ってくれる。

「いや、大丈夫じゃない」

もう、一刻も早くルシエにおわらせてもらうしかない。

「ふふふつ。虎熊童子とやら、もうお前の命もここまでだ。わたしがこの姿になった以上、逃れる術はもうないぞ。せいぜい残り少ない命を楽しめ」

「大きくなつた程度で笑わせてくれる」

流石ボスだけあつて普通にしゃべれるな。

それにしてもルシエ、完全にセリフが悪役のそれになつてるぞ。まあ悪魔だから悪役で間違い無いのかもしれないが、今のやり取りだけ見るとどっちが敵役か分からない。

「いつもなら時間いっぱいかけて楽しみたいところだが、流石に今は無理っぽい。さつさと死んでくれよ。お前らも死なないように避けるよ」

お前らつて俺達の事か？

『爆滅の流星雨』

ルシエがスキルを発動すると、上方から無数の火の玉が落ちて来た。ある程度範囲指定は出来ているようだが、落ちる角度のまずい火の玉がこちらに向かつてくる。

これが文字通り流れ弾と言うものなのだろうがこれは当たると死ぬやつだ。

「みんな、逃げるぞ！」

俺はミクに肩を借りながらなんとか避難を繰り返す。
やはりルシエは無茶苦茶だ。

「ズドドドドドウウーン」

豪音とフロア全体を焦がすのでは無いかと思われるような熱量を発しながら火の玉が次々に落下を繰り返していく。

無理やり移動した俺は、気を失ってしまいそうだ。

今気を失うわけにはいかない。

なんとかフロアを見回すと、残っているのは十鬼に満たないが熊童子と虎熊童子はダメージは負っているようだが健在だ。

「流石にしぶといな。虎野郎！ これ以上長引かせると海斗が戻って来なくなりそうだからな、これで終わりだ『神滅の風塵』」

ルシエの必殺のスキルが発動して虎熊童子を風の暴力が襲う。

圧倒的な風の圧力が一気に虎熊童子に向けて収束し、瞬時に虎熊童子の存在を消し去った。

「おい、シルいつまでかかっているんだよ。わたしは終わったぞ」

「分かっていますよ。ルシエが終わってしまったようなのでこれ以上あなたにお付き合いする事はできないようです。熊さん、そろそろ終わりにしましょう。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

今度はシルが必殺の一撃を熊童子に放ち、熊童子の胴体に風穴を開け、完全に動きが止まった熊童子に向けて追撃を放ち完全に消滅させた。

「ルシエ！ もう無理だ！ 今日はもう無理！」
「ふふっ、また今度じっくりな」

何を言ってるんだ。もう今回で最後だよ。じっくりなんてするわけない。

ルシエが『暴食の美姫』を解除したが、俺はもう一步も動けなくなっていた。

あとは残りの鬼に襲われないように気配を消して隠れていよう。
後は頼んだ。俺はもう絞り取られて何も出ない。

第522話 搾りかす（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第523話 16階層攻略

虎熊童子と熊童子を倒したシルとルシエが残りの鬼の掃討に参加しているが流石に二人共疲労の色が見える。

唯一元気に動いているのはスナッチくらいだが、もう鬼も残るは数体なので問題なく倒せると思う。

「あゝ、疲れたな。今までの戦いの中でも上位に来るくらい厳しかったな。これ普通のパーティじゃ無理だったんじゃないか？ 完全に俺達仕様な気がする」

「海斗、気を抜くのは早いわよ。まだ終わって無いんだから」

「そうは言うけど、俺にはもう何も出来ないし、見てるしかないから。今攻撃をくらったら俺死ぬよ」

「そうだったら私達が守ってあげるわよ」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

「何それ？」

「いや、持つべきは優しいパーティメンバーだなと思って」

ああ、やっぱり俺は恵まれているな。この追い詰められた状況でも俺の事を思いやってくれるメンバーがいるとは最高だ。

「海斗さん、鬼が……」

カオリンの声で顔を上げるとミクと会話を交わしたのが悪かったのか、気取られたようで端で休んでいた俺に向かって鬼が一体近寄って来ていた。

完全に弱った俺をしとめにきているが、足が動かない。

「ミク……」

「海斗……MPが足りない」

嘘だろ……

スピットファイアを構えてトリガーを引いているがミクのMPではスピットファイアを打ち出す事ができないようだ。

もう手は無い……のか？

このままでは残りのメンバーもやばい。

俺に残されているのはマジックシザー。

無いよりはマシなので急いで取り出して構えるが、これで戦えるとは思えない。

後は殺虫剤。まさか殺虫剤で鬼が死ぬとは思えない。至近で火をつけてファイアブレスにすればなんとかなるか？

いやでも、しとめるまでは無理だ。

残る俺の装備は……

これか、これしかないか。以前購入した際の最後の一個。

でもこれ鬼に効くのか？

でも、今はこれしかない。だが今の俺では無理だ。

「ミク、これを頼む」

「海斗、これは？」

「これは最臭兵器シユールストラーダだ。今の俺ではあそこまで届かない。ミク！ 蓋を開けて鬼に向かって投げつけてくれ！」

「これ本当に大丈夫なの？」

「吹きこぼれに気をつければ大丈夫だ」

「……分かったわ」

ミクは俺から受け取ったシユールストラーダの缶の蓋を開けて、どうしても興味があったのか中身を覗き見てしまっていた。

「……………つうえっ」
「ミク息を止めて投げろ！」

ミクは涙目になりながらも前方の鬼に向かってシユールストラダの缶を投げつけた。

射撃の腕は一級品のミクだが、シユールストラダを投げる腕も一級品だったようで、投げつけた缶はきれいな弧を描きながら鬼の顔に直撃し内容物を撒き散らかした。

その瞬間こちらにまで異臭が漂ってきたが、咄嗟に鼻を腕で覆い息を止めた。

「アアアアアアアア〜！」

鬼からは聞いた事のない声が発せられ、その場で悶えているようなので、シユールストラダは見事に鬼に対しても効果を発揮してくれたようだ。

これで時間は稼げたが止めをさす手段が無い。

「ミク、ここからどうする？」

「うう……。スナッチ『フラッシュボム』よ」

ミクにとって最終手段とも言うべき『フラッシュボム』をスナッチに指示をする。

スナッチが戦線を離脱して一目散にこちらに向かってかけて来て『フラッシュボム』を発動した。

光の弾と化したスナッチがシユールストラダで悶えていた鬼を直撃して、そのまま消滅させる事に成功した。

流石にスナッチにもダメージが大きかったようで、スキルを発動後ヨロヨロと歩いているのが見える。

これであと動けるのは俺のサーバント三体だけだが、鬼の残りもあ

とろ体まで減っていた。
終戦はもう、すぐそこまで来ている。

第523話 16階層攻略（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第524話 レベル22

「ご主人様、終わりました。これで全ての鬼を倒し切った様です」

シルの声と共にシルとルシエが発光し始めた。そして俺自身の身体も軽くなった感じがする。

これは、全員レベルアップした様だ。

今までの分とこの百鬼を合わせたらそれはレベルアップもするだろうが、結構久しぶりな気がする。

俺のステータスを確認すると、いくつかの変化が見て取れた。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 21 22

HP 79 83

MP 50 54

BP 81 86

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

鬼殺しNEW

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（微） 苦痛耐性（弱）

ステータスがそれぞれ上昇しBPが80を超えた。そして特筆するべき変化が2つあった。

一つは、苦痛耐性（微）が苦痛耐性（弱）へと昇華した。

愚者の一撃を頻繁に使用した事や、不味いマジックポーションを飲み干したりした事で苦痛に対する耐性が上がったのでは無いだろうか。

余り苦痛耐性（微）は実感も無く、役に立たなかったが苦痛耐性（弱）には目に見える効果を発揮してもらいたいものだ。そしてもう一つはスキルが増えた。

鬼殺し…… 鬼の首を刈り続けた者に顕現する。 鬼との戦闘時全

ステータス

30パーセントアップ。

これも鬼の首をマシーンと化して刈り続けた成果だと思うが、全ステータス30パーセントアップはかなり大きい。

スライムスレイヤーの全50パーセントアップと比べると少し落ちるが、倒した数が違うので納得の効果だ。

出来る事なら、ボス部屋に入る前に発現してくれていればもう少し楽が出来たのに。それにしてもカタカナと漢字のスキルは何が違うのか未だに分からない。

次にルシェだが レベル5になりステータスが伸びている。MPとBPが200オーバーとなり、人では到達出来ない域に近づいている気がする。

レベルアップによる見た目の変化は…… よく分からない。もしかしたら月齢で数ヶ月分ぐらいは成長しているのかもしれないが、身長が1センチぐらい伸びたかもしれない。

種別 子爵級悪魔

NAME ルシェリア

LV5

HP	106	120
MP	180	200
BP	185	201

スキル

破滅の獄炎

侵食の息吹

暴食の美姫

黒翼の風

炎撃の流星雨 NEW

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

そしてルシエにも新しいスキルが発現している。

『炎撃の流星雨』だ。ルシエが大きくなった状態で使っていたのが

『爆滅の流星雨』

なので、よく似た名前だ。

炎撃の流星雨……炎の塊を雨の様に降らし、周囲の敵を殲滅する。

スキルの内容も『爆滅の流星雨』によく似ているが、おそらく下位スキルなのでは無いだろうか？

威力が範囲もしくは両方が『爆滅の流星雨』を下回るスキルなのだと思いますが、今まで単体か2体程度への攻撃しか出来なかった事を考えると範囲攻撃を取得したと言う事はかなり大きい。

ただ、これも今回の戦いの前に欲しかった。

最後にシルだがHP が200に到達し、なんとBPが260になつてしまった。

この数字はおそらく俺の探索者としての最終到達点を超えてしまっていると思う。

神に並ぼうと考えた俺が愚かなのかもしれないが、ここまで数字の

差を見せられてしまつともう清々しいと思えない。
もうシルに守つてもらつしか無いかもしれない。

種別 ヴァルキリー

NAME シルフィー

LV 5

HP 181 200

MP 130 145

BP 239 260

スキル

神の雷撃

鉄壁の乙女

戦乙女の歌

楽園の泉

祈りの神撃 NEW

装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

どうやらシルにも新しいスキルが発現した様だ。
『祈りの神撃』一体どんなスキルなんだ？

第524話 レベル22（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第525話 しぼり取られる

祈りの神撃……召喚主のMPを消費して真なる神の一撃を放つ事が出来る

これは……

どう判断したらいいだろうか。

召喚主とは俺の事だよな。

俺のMPを消費してシルが強力な一撃を放つ事が出来るスキルという事だろう。

俺のMPを消費して発動するスキル。

俺はこれによく似た特性のスキルを知っている。

ルシェの『暴食の美姫』は俺のHPを消費して発動するが、シルの『祈りの神撃』は俺のMPを消費する。

どちらも俺を触媒として発動されるスキル。

言い方を変えると俺を生贄として発動するスキル。HPだけじゃなくMPまでもか……

「は……」

「ご主人様、どうかなさいましたか？」

「いや、何でも無いよ。まあ、怪我なく攻略出来たし、みんなレベルアップ出来て良かったよ」

身体も大分動くようになって来たので早速魔核とドロップアイテムを回収して回る。

他のメンバーも動き始めているので、それぞれレベルアップして回復したのだと思う。

まず魔核は全部で95個あった。

それとは別にドロップアイテムがいくつかあった。

まず、刀が三本と戦斧が一本。恐らく四本とも魔剣の可能性が高いと思う。

そしてマジックオーブが一つとスキルジュエルが一つ。

幸いにも今回赤い魔核は無かったものの、一番期待していた霊薬が無い……

正直、ここで手に入るんじゃないかとかなり期待していたので、それらしきものが無いか、部屋の隅々まで探したがどこにも見当たらなかった。

魔核だがミノタウロスのものよりは気持ち少し小さい気もするので大体1つ一万八千円ぐらいでは無いかと思うのでおよそ百七十万円ぐらい。

そして残るドロップだが

「あの〜申し訳ないんだけどこの刀三本もらえないかな。ベルリアの剣が二本とも折れてしまったのと予備に一本持っておきたいんだけど」

「もちろん、それでいいと思うわ」

「そうですね。それ以外の選択肢はないと思うのです」

「ベルリアの戦いぶりがなければ今回は切り抜けられなかっただろうから、刀二本は妥当だろう」

「ああ……皆様、この私に魔剣をそれも二本も頂けると言うのですか？マイロードこの刀が折れて無くなるまで死ぬ気で働きます」

「ああ、そうだな。期待してるよ。それで戦斧はマジック腹巻に入りそうにないから俺は持てないんだけど誰かいる人？」

恐らくこの戦斧も魔剣の類なのでそれなりの物だと思うが誰も手をあげないので売却決定だ。もしかしたら戦斧なので不人気かもしれないが、それでも売れば500万円は下らないだろうから金額的には今回一番の収穫かもしれない。

残るはマジックオーブとスキルジュエルだが、高額のレアアイテムではあるが、これは使った方が良い。今後の事を考えても必須だろう。

「マジックオーブとスキルジュエルはそれぞれ使った方がいいと思うんですけど、どうしましょうか」

個数が二個なのも悩ましいが誰が使うかも悩ましい。

マジックオーブだが色は無色透明に近いが透かしてみると角度により黄色味を帯びている気もするが、風系だろうか？

カオリンかミクだ使うのが良いと思うがどちらだろうか。

「できれば私がもらっても良いかしら。どうしても私が後衛だと火力不足なのよね。スピットファイアはあるけど、今回はベルリアを起こすくらいでほとんど役に立てなかったし」

「はい良いと思うのです」

「そうだな、ミクがいいだろう」

と言う事でマジックオーブはミクが使う事になった。

そしてスキルジュエルだがカオリンとあいりさんで考えると前衛のあいりさんの優先度が高いのであいりさんが使う事となった。

第526話 むしり取られる

ミクとあいりさんがそれぞれドロップアイテムを使用する。

「私のは、風じゃなくて雷みたい『ライトニングスピア』の魔法を覚えたわ」

文字通り、雷の槍だと思うが、恐らく雷の槍が敵を目掛けて飛んで行くのだと思う。名前を聞いただけでもかなり強力なスキルだと推察出来るが、雷系のスキルは結構レアな気がするのに、
K I 1
2には雷使いが多い気がする。
いずれにしても、ミクの攻撃力が上がるのは大歓迎だ。

「私のスキルジュエルは『ダブル』というスキルだった」

「『ダブル』ですか？ どんなスキルなんですか？」

「MPを消費して攻撃が倍になるスキルだ」

「倍ですか？ それは威力つて事ですか？」

「威力じゃなくて手数的那样だな」

手数が増えるとはどういう意味なんだろう。速度が倍になると言う意味か？

とりあえず戦力が増強されたのは間違いないが、今回どちらのスキルも当たりの部類に入るんじゃないだろうか。

そして他のメンバーにも確認してみたが鬼殺しが発現したのは俺だけのようなのだ。

あまり他の探索者からもスレイヤー系のスキルを聞いた事が無いので俺にはスレイヤー系のスキルが発現しやすいのかもしれないが、俺はやっぱり何かの特異体質なんだろうか？

「それじゃあ17階層に降りてからすぐに帰りましょうか」
「そうだな。流石に疲れたな」
「そうね。私も燃え尽きたかも」
「久しぶりにMPが切れて疲れたのです」
「ヒカリン、まだ顔色が良く無いみたいだけど大丈夫か？」
「はい疲れたのと少し風邪気味だったのもあって」
「じゃあ、みんな早く帰って休もう」

みんなの総意でもう帰ろうとしたその時だった。

「ちよつと待て」
「なんだよルシエ」
「まさか忘れてるんじゃないだろうな」
「一体何のことだ？」
「お腹が空いたに決まってるだろうー！」
「え？ だって魔核をあれほど渡しただろ」
「その後もしつかり戦ってお腹が空いたんだよ！」
「うそだろ……シルモか？」
「はい。がんばりましたので」
「マイロード私もスキルを連発しましたので」

戦闘中にスライムの魔核は使い果たしてしまったのでもう無い。
ここにあるのは鬼の魔核のみ。
みんなを見回してみるが、みんな満面の笑みで頷いている。
これは、みんなそうしようと言っことだな。

「分かった。それじゃあ鬼の魔核だけ大きいからな一人三個だ」
「海斗！ 燃やされたいのか？ 百体のモンスターを倒して魔核が

一人三個？ ふざけるな〜！」

「海斗流石にそれはないんじゃない？」

これでやり過ぎればと思ったがダメだったか。

「う〜んそれじゃあ特別に一人五個だ。大サービスだぞ」

「もういい。海斗燃えて無くなれ！ 三個も五個も変わらないだろ。もう今後働かないからな。見てるだけでいいんだな」

「海斗、少し渋すぎるんじゃないか？」

これでもダメか……

痛い仕方が無い。

「分かった。俺も男だこれが最後だ。これ以上は何を言われても無理だからな。わかったな。一人十個だ。これ以上は無理。限界だ」

「ふふん、初めからそうしてればよかつたんだよ。それじゃあ早速くれよ」

俺は三人にそれぞれ十個の魔核を分配する事にした。

まあ人数割りしたらこんなものだろうから仕方が無い。今回はサーバントの三人の力無しには攻略出来なかつただろうからこのくらいのご褒美は許容範囲内だ。

「やっぱり働いた後の魔核は最高だな。あ〜おいしいな」

「そうですね。今日は流石に頑張りました。おいしいですね」

「マイロード、魔剣を二刀も頂いた上に、この魔核。このベルリア、マイロードの為なら死も厭わずに頑張ります。魔核おいしいですね」

三人ともニコニコしながら吸収している。

「あゝシル様とルシエ様の嬉しそうなお姿が尊いのです」

他のメンバーも三人の表情を見て喜んでいようなので良かった。三人が魔核を吸収し終えてから俺達は17階層への階段を降りてすぐさま『ゲートキーパー』を使って帰還した。

「魔核とかの売却は後日でもいいですか？」

「そうね。今日はもう帰りましょうか。じゃあ売却はまた連絡するわね」

「それじゃあ、また来週」

「また、土曜日に会おう。次は17階層だな」

俺はメンバーと別れて戦斧と鎧をロッカーに戻してから家に帰って、汗が気になったのでまずシャワーを浴びたが、夕飯は定番となりへピーローテーション化しつつあるカレーを食べてからすぐに寝た。

第526話 むしり取られる(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第527話 朝起きたら

朝になったので目を覚ましてベッドから起きようとしたが、身体が動かない。

これは……まさか以前なつたあれの時と同じか。
ダンジョンで身体を酷使しすぎた反動で動けなくなってしまった。
まずい。学校に行かないと親に怒られてしまう。

「ふっ！」

気合を入れて身体を起こそうとするが、動くのは右腕ぐらいで後は、筋肉痛で強張って動かす事が出来ない。

「あ、あ〜」

声は出る。

どうする。このままではいけないよな。

とにかくベッドから降りないと始まらない。

動かない身体を無理やり少しずつ動かしてベッドの端に身体を寄せ
るが、ここから動かせない。

思いきってベッドの下に落ちてしまえば動けるようになるか？

俺は覚悟を決めてベッドから床にダイブする。

『ゴチン』

床に落ちると硬質な音と共に頭と、骨が当たる部分に衝撃と痛みが
走った。

「いつて〜!」

痛みで涙が出て来たが身体が機能を取り戻す事は無く、今度は床に転り、動く事が出来なくなってしまうた。

しかもベッドは弾力を使って少しだけ移動できたが床が硬くて余計動けなくなってしまった。

超重度の全身筋肉痛。

原因は間違いなく昨日のボス部屋での酷使。

ダンジョンでは上昇したステータスのおかげで動いていたが地上に出ればその恩恵が無くなる。

その分のリバウンドが合わさって、普通ではありえないほどの症状が現れているのだろう。

「母さん〜。お〜い、助けて〜」

俺は覚悟を決めて母親を頼る事にした。
残念ながら他に手は無い。

「海斗、すごい音がしたけど大丈夫？」

母親が俺の声に気づいて来てくれたが、俺が落ちた音は下にまで響いていたようだ。

「ああ、まあ」

「きゃ〜海斗、あんたどうしたの？ まさかドッキリ？」

「いや、そんな事はありえないから。身体が筋肉痛で動けないんだ。ベッドに上がるの手伝ってよ」

「ベッドに戻るって学校はどうするのよ」

「どうにかできると思う？」

「無理そうね。でも前にもこんな事あったわね」

「そうだね」

「約束したわよね。もう二度とこんな風にはならないって」

「したけど、昨日は大丈夫だったんだ。今日起きたら突然これだよ。自分でも信じられない。全然無理してなかったんだ。ちよつとだけ頑張っただけなんだ。約束を守ってダンジョンでは無理をしないように決めてるんだ。本当だよ」

「なんか嘘くさいわね」

「俺が母さんに嘘をつくわけがないじゃ無いか。でも何故か動けないんだ。学校は休みでお願いします」

新年度が始まったなかりで休むのは気が引けるが、授業はまだ本格的に進む感じでは無いから影響は薄い。

「まあ、この状態じゃねー学校は無理よね。まあ学校の配布物とかは春香ちゃんに持って来て貰えばいいんじゃない？」

「なっ……」

「海斗何も教えてくれないけど、また春香ちゃんと一緒のクラスになっただってね」

「なんでそれを……」

「そりゃあ、春香ちゃんママに聞いたのよ。最近は毎日連絡取ってるから」

春香のママと毎日連絡取ってるのか？ 一体いつの間にそんなに親密な関係になっただんだ？

「毎日って一体何の話をしてるんだよ」

「そりゃあ、あなた達の事しかないじゃ無い。海斗と春香ちゃんのことよ」

「毎日？」

「そりゃあ、いろいろあるもの。そういえばあんたのパーティって

女の子ばかりだったのね。あんたも隅に置けないわね。でも春香ちゃんを悲しませるのは感心しないわね」

「なっ……何で」

「まあ、今日は休みの連絡入れといてあげるから春香ちゃんにも休みと配布物の件を連絡しなさいよ」

「あ、ああ。分かった。それはそうと、そろそろベッドに戻して欲しいんだけど」

「海斗、重いわね。ちょっとは自分で力を入れなさい」

「いや、できるならしてる」

第527話 朝起きたら（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第528話 初めての入院

結局母親の力だけではベッドまで戻る事は出来なかった。

仕方がないので床で静養しようかとも考えたが、母親が救急車を呼んでしまい、ストレッチャーで運ばれてしまった。

初めての救急車だったが、動きが取れずにストレッチャーに張り付け状態だったので楽しむ余裕は無かった。

病院に運ばれ、看護師さんに症状を話して検査と医師の診断を受けた。

動けない俺を見て医師にモニターにやられたんじゃ無いかと何回も聞かれたが、モニターのダメージでは無く、過活動による筋肉痛だと説明した。

その後生まれて初めて宇宙船のようなMRIという機械で全身の撮影をされてしまった。

「そんな探索者聞いた事がないな。よく怪我をして運ばれる探索者はいるけど、筋肉痛で動けなくなっただけで運ばれたのは君が初めてだよ。しかもこれは筋肉痛のレベルじゃないな。全身中程度以上の肉離れだな。ここまで全身なってるのはトツプアスリートでも見た事ないよ」

「それで、どのぐらい入院が必要ですか？」

「ちゃんと治そうと思ったら一ヶ月は必要だけどな」

「一ヶ月ですか？学校もあるんで無理です。何とか三日でお願いします」

「自然治癒を待っていたら一ヶ月だけど、君たち探索者が持っているポーションを使えばもっと早く治るだろうね」

「ポーションですか……わかりました。何とかしてみます」

残念ながら俺のポーションは全て使い果たしてしまった。頼れるのはメンバーしかいないが、ミクにお願いしてみるしかないな。俺はそのまま病室に運ばれたが、動く事が出来ない為に、大きくなつてから初めてオムツを履かされ、尿を排出出来る様に尿管に管を通されてしまった。

必要な処置とはいえ17歳の俺には結構ダメージが大きかった。入院してから春香とミクにそれぞれメールで連絡を入れておいた。ご飯を食べる事もままならないので点滴を打たれながら眠りについて、起きたら

昼の三時を過ぎていた。

動けないのは辛いけど、自分でも今回は無理が過ぎたと思う。

アサシンの覚醒とも呼べる効果は対モンスター戦では絶大だったがリバウンドが激し過ぎた。

自分の限界を超えるところはこういう事なのかと実感させられている。

「海斗、大丈夫？」

「ああ、春香、来てくれたんだ」

「連絡が来てから、もうびっくりして、授業の内容が頭に入って来なかったよ」

「ああ、心配させてごめん」

「これ学校の配布物だけど、授業のノートは貸してあげるから安心してね。それにしてもどうしたの？ モンスターにやられちゃったの？」

「モンスターにはやられてないよ。自分でなつたというか、全身肉離れで動けないんだ」

「無理しちゃダメだよ。それとミクがもう少ししたら来ると思う」

「ああ……」

この二人は思った以上に連絡とってるんだな。

それにしても心配してくれている春香の顔がかわいいな。

「昨日ミクからみんなが戦ってる写真が送られて来てて、安心してただけだよ」

「ああ、昨日は特別。階層主の部屋に閉じ込められてちょっと無理しただけだから」

「海斗、ちよつとの無理ではごうはならないよ」

「はは……」

確かに返す言葉も無い。

しばらく春香と雑談しているとミクがやって来てくれた。

「春香！ 先に来てたんだ。海斗本当に入院したのね。しかも全

く動けないの？」

「うん、そう」

「アサシンのスキルって諸刃の剣ね。あんまり頻繁に使う物じゃ無いわね」

「そうだね」

ただ昨日は限界を超えてでも使い続ける必要があった。

「はい、これ。頼まれてた低級ポーションをとりあえず二本買ってきたわよ」

「ああ、すまないな。今回の俺の取り分から引いてくれ」

念願の低級ポーションが手に入ったのでこれで改善する事を期待するしか無い。

第528話 初めての入院（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第529話 入院中

「ミクは身体大丈夫なのか？」

「まあ、少しダルさはあるけど動けないほどじゃ無いわね」

「そうか。じゃあ悪いんだけど低級ポーションを飲ませてもらってもいいかな。動けなくて」

「あゝ、それは春香ちゃんがいいんじゃないかな。ねゝ春香ちゃん」

「うん、それじゃあ私が飲ませてあげるね」

「あ、じゃあお願いします」

そう言つて春香が俺の口元にポーションの瓶を持ってきて飲ませてくれる。

グッジョブだミク。

俺は幸せを感じながらもポーションをゆっくりと飲み干していく。飲み終わると、若干倦怠感が薄らいだ気がするが、なぜか動けない。

「ミク……動けないんだけど。いや少しだけ動けるような……」

俺の首が少し回るようになってるので効果はあったと思うが、何でこんなに効果が低いんだ？

低級ポーションとはいえ骨折でも直してしまうほどの効果があるはずだぞ。

「海斗、あなたが思つてる以上にダメージが重いつて事じゃ無い？」

「うそだろ……そんなにか」

「海斗、普通に見た感じかなり重症だよ。むしろ重体と言つてもいいかも。全く動けなくて点滴してるんだよ」

まあ確かに言われてみれば重体かもしれないが、俺の中にはどうしてもただの肉離れだと言う気持ちがあるからか自分が重体とは思えない。

「それに海斗、その管って……」

ミクがちよつと照れたように指差して来るが、俺にはみる事が出来ない。

ただ管といえば、点滴の管と……

あれか……

「あつ、あのミクさん。それは見てはいけないやつでは……」

「海斗、ごめん」

「あ、あ海斗私は大丈夫だよ。お世話するからね」

春香まで……

止むを得ない事とはいえ好意を寄せる相手にこれは滅茶苦茶恥ずかしい。

「ごめん、できれば見ないでおいでしてくれると嬉しい……」

「はい」

微妙な空気が流れたので打ち消す様に話しをする。

「あいりさんとヒカリンは大丈夫かな」

「二人とも連絡とって無いから分からないけど、海斗みたいな事はないんじゃない」

「そういえば、昨日ヒカリンからは写真が来てなかったけど……」

「まあ、昨日は流石に疲れたんじゃない」

ヒカリンも昨日は頑張ってたからな。身体の事もあるし疲れが溜まってなければいいけどな。

「海斗、明日からも私学校の配布物届けに来るからね。それと、来た時に何か出来る事があつたら遠慮なく言つてね」

ああ、俺入院してよかったかも。むしろ毎日春香が来てくれるんだつたら一ヶ月ぐらい入院するのも悪く無いかもしれない。

「海斗、明日もう一本の低級ポーション飲んででも回復しなかったら、明後日中級ポーション買って来るわね」

「ミク……使った事無いけど中級ポーションの値段つて」

「そうね、少し高いけど五十万円ね」

「五十万……」

既に低級ポーションで二十万円を使ったのに追加で五十万はきつい。今回の現金収入が全部飛んでいってしまうばかりか赤字になってしまう。

「ミク、それはギリギリまで待つてくれ。何とか明日までに治して見せるから」

「海斗、多分無理だと思う」

「海斗、お金大丈夫？」

「ああ、それは大丈夫。こう見えて結構稼いでるから」

ダメだ。春香を心配させてしまったようだ。せめて明るく振る舞わないと本当の病人みたいになってしまう。

その後三人で話しをしていたが、ミクは用があるので先に帰る事になった。

「海斗、そろそろご飯が配膳される時間だけど食べれそう？」

「動けないから無理かな……」

「よかつたら食べさせてあげるよ」

「……え？」

「だから私が食べさせてあげるよ」

「……うん、お願いします。全く動けないから一人じゃ無理なんだ」

どうやら本当に春香がご飯を食べさせてくれるらしい。

入院最高！

第529話 入院中（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第530話 素晴らしきかな入院

「あら、春香ちゃん久しぶりね〜」

「あ、おばさんお邪魔してます」

「春香ちゃんが来てるなら私は来なくてもよかったです」

「もし用があつたら言ってください。私のできる事ならお手伝いします」

「それじゃあ、悪いんだけど、学校が終わってからでいいから海斗のお世話を頼んでいいかしら。退院がいつなのかはつきりしないのよね」

「はい、もちろん大丈夫です」

「それにしても春香ちゃん、綺麗になったわね〜。春香ちゃんのママとは最近よく連絡取り合ってるのよ」

「いえ……。あの、ママとは何を……」

「そりゃあ、受験の事とかいろいろよ。いろいろ。春香ちゃんは王華学院を受けるのよね。なんかうちの海斗も受けるって聞かないのよ。プロの探索者目指してるのにどうして王華学院に行きたいのかしら。ね〜海斗」

「そ、それは素晴らしい学校だからに決まってるだろ。もういいから帰ってくれよ」

「あら、来たばかりなのに追い返すのね。それじゃあ春香ちゃんよろしくね〜」

「はい」

なんだ今の母親の振りは？ 一体何がしたかったんだ。焦ってしまったじゃないか。

「あ、海斗ご飯が来たみたいだよ」

「ああ、今日のご飯はなんだろう」

「おかゆと、ほうれん草のお浸しとスープと魚の塩焼きだけど……
どれも海斗には少なめかも」

「まあ、一応病院食だから」

「それじゃあ起きるの無理そうだから、ベッドを少しだけ起こして
寝たまま食べてさせてあげるね」

そう言つて春香が電動でベッドを起こしてくれたが、それだけで背
中の筋肉が悲鳴を上げているが春香の前なので平静を装う。

「それじゃあ一番食べやすそうなおかゆからね」

春香がスプーンでおかゆを口まで運んでくれる。

ラブコメのように色気も雰囲気も何もないが、これは間違いなく「
あ〜ん」の状況だ。

まさか俺が春香から「あ〜ん」をしてもらえる日が来るとは思って
も見なかった。

口を開けておかゆを口に運んでもらう。おかゆは水分が多く、米の
量は少なく味もほとんどしない。所謂病人用の病院食な感じだが俺
にとつてはモンスターミートに勝る味わい！

これが幸せの味が……

春香に食べさせてもらうおかゆはこんなにも美味しいのか。

というよりも味覚では無く心で食べるとでも言えばいいのだろうか。
口に運んでくれる度に全身が幸福感に包まれる。

「どうかな？ 病院のご飯だからそんなに美味しくないかもしれな
いけど」

「いや、美味しい。今まで食べた中で一番美味しい。最高だよ」

「そう？ そんな風には見えないけど、調理の人が上手いのかもし
れないね」

正直この味は誰が作るかは問題じゃない。誰に食べさせてもらうかが重要なんだ。

そして今は春香に食べさせてもらっている。

これ以上に幸せな事って世の中にあるだろうか？ いやありはしない。あるはずがない。

「じゃあ次はお魚を食べてみる？」

そう言ってほぐした魚の身を口まで運んでくれた。

美味い。正直薄味すぎて塩焼きなのかただの焼きなのかもよく分からない。ただ最高に美味しい。

食べた事はないが国産本マグロの大トロよりもうまい。

「最高に美味しい」

「そう、よかったね。点滴だけでお腹が空いてたんだね」

不思議なもので点滴を一日中していると口の中にも点滴の味がして来たのだが、この魚の塩焼きはそんな事など完全に忘れさせてくれる。

ああ、魚の塩焼きって幸福と同義だったんだな。

その後も、春香がご飯を食べさせてくれたので、入院初日は最高に幸せな時間を過ごす事が出来たので、やっぱり入院って素晴らしい気がして来た。

第530話 素晴らしきかな入院（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第531話 天国と地獄（前書き）

今回はコロナ対応等で頑張っ
て頂いている医療介護関係者の方への
感謝も意識して書きました。

読者の方に該当する方がいれば、
いつもありがとうございます。
ギャグっぽいところは本作なので
笑って読み流してください

第531話 天国と地獄

昨日は最高に幸せだった。

そして今日目を覚ますと昨日よりは少しだけ身体が動く様になっている。

具体的には首が動くようになったが、まだベッドからは一歩も動けない。

これでもう一本低級ポーション飲んだらいけるのか？

なんとなく無理な気もして来た。

そして、俺に入院してから最大の試練が待ち受けていた。

朝寝していると、女性の看護師さんがやって来て

「オムツを交換しますね」

「……………」

女の人が交換する……………のか。

もちろん動けないこの状況で大変ありがたく、また止むを得ない必要な事だとは理解しているし、看護師さんには感謝しか無い。

だが、思春期真っ只中の俺、しかも病気では無く、ダンジョンで無理をして重度の肉離れだけの俺。

かなり恥ずかしい。

「はい、失礼します。それじゃあ楽にしてくださいね」

動けなくても感覚がないわけでは無いので、目を背けてもしつかりと何をされているかは分かっています。

「……………」

これは間違つても春香やミクには見せられない。
二人の事だから馬鹿にしたり面白がったりはしないと思うが、俺が
耐えられない。

せめて青少年の為にオムツをかえてくれるロボットが何か早急に
開発されないものだろうか？

恥ずかしくて看護師さんの顔がまともに見れない。

「はい、終わりましたよ」

「……ありがとうございます」

本当に感謝しかありません。看護師さん日々のお仕事、いつもあり
がとうございます。

この御恩は一生忘れません。

恥ずかしくて顔を見る事は出来ないが、看護師さんはリアル天使だ。
俺だけじゃなくて毎日病気の人達の為に働いてくれている。

本当にありがたい。

普段病院に来る事が無いので、今まで実感する事が無かったが、こ
うなってみて看護師さんだけじゃなく医師の人や病院に勤務する人
達のありがたみを感じる。

ただやっぱり恥ずかしい……

母親以外の女性に見られた記憶はないので……ううっ。

僕お嫁に……

朝、人生最大とも言えるような大きなイベントを乗り越えて夕方に
なると春香がやって来てくれた。

「海斗、調子はどう？少しは良くなった？」

「うん……結構首が動くようになったよ」

「それじゃあ今日もポーシヨン飲んでみる？」

「お願いします」

昨日と同様に春香にポーションを飲ませてもらう。
昨日飲んだ時よりも随分と身体が軽くなった感じがする。

「どうかな？」

「ああ、大分楽になつて来た」

「動ける？」

春香に言われて腹筋に力を入れて起き上がろうとするが、背中が少し浮いたがすぐに力尽きてしまった。

「まだちよつと難しいけど、かなり良くなつてるよ。ありがとう」

「私は何も出来てないから」

「そんな事ないつて。ポーションだつて春香が飲ませてくれないと自分では飲めなかったし、ご飯だつて春香のおかげで食べれるんだから。ありがとう」

「そう言つてもらえると来た甲斐があるよ」

そして今日も春香に晩ご飯を食べさせてもらう事が出来た。

この日も病人用の水分多めのおかゆと味の薄い野菜の煮物と塩気の薄いスープだったが、最高に美味しかった。

春香の手には魔法が宿っているのかもしれない。

春香が食べさせてくれるだけで病院食が三つ星レストランの料理を完全に凌駕している。

やっぱり病院つて素晴らしいな。

病院に運ばれた時は一刻も早く退院しなければと思つていたが、これならしばらくいてもいいかもしれない。

むしろ家でカレーを食べるよりずっと幸せを感じてしまう。

「海斗も早く退院できるといいね」

「う、うん」

「クラスも新しくなったばっかりだし、新しくクラスメイトになった人達とも馴染まないといけないでしょ」

「あ、まあ、そうかも」

俺としては真司や隼人、春香に前澤さんがいればそれでいいかと思っ
てしまっていたのだが、少しは交友関係を広げた方がいいのかな。

第531話 天国と地獄（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第532話 中級

入院三日目の朝を迎えた。

二本の低級ポーションのおかげもあり少し身体を起こせるようにはなっているが、まだ歩けそうにはない。

そして昨日と同じくオムツ交換の時間をなんとか乗り切ったがやはり看護師さんには感謝しかない。

スマホを触る事も難しく、本当に何も出来ないので昼過ぎまで回復に努めてひたすら寝て過ごしたが十五時半頃にミクがやってきてくれた。

「海斗！ まだダメみたいね」

「まあ、それでも大分良くなったよ」

「そう、じゃあはいこれ」

ミクが瓶に入った液体を渡してくれるが、今までに見たことの無い色だ。

「ミク……まさか、これって」

「もちろん、中級ポーションよ」

「低級じゃ無理みたいだから中級を買って来てあげたわよ」

「……………これ五十万円」

「そうね。後で精算するから」

これが五十万円のポーション。

確かに低級では治りきりはしなかったが大分良くなってきていたのでもう一本飲めばなんとかなったかもしれないのに、ここで中級ポーションか。

確かに一昨日そんな話はしていたし、ミクが完全な善意で買ってきてくれたのも分かる。

だが……

五十万円か。今回のボス戦で魔剣を二本も貰えたので価値としては大幅にプラスだが現金的には魔戦斧次第だが微妙だ。

今回使い切ったポーション類も買い直さなければいけないのに現金が……

「ミク……ありがとう。飲ませてもらっていいかな」

「はい、それじゃあ」

ミクに口まで運んでもらい初めての中級ポーションを飲み干した。確かに低級ポーションとは味が違う。

低級ポーションも、マジックポーションのように不味くは無いが、中級ポーションはおいしい。

飲み口というのだろうか、まるやかな味わいで喉ごしがスッキリしている。

飲み干すとすぐに効果を発揮して、さっきまでほとんど動かなかった身体が痛み無く動かせる。

「ミク、動けるよ」

「やっぱり中級ポーションってすごいわね。それにしても今回は重症だったわね。まさか低級ポーション二本と中級ポーション一本が必要になるとは思わなかったわ」

「今回は色々と助かったよ。ありがとう」

「それじゃあ、明日からは学校に行けそうね」

「ああ、ミクのおかげだよ」

「春香もでしょ」

「それはもちろん」

しばらくすると春香も病室に来てくれた。

「海斗、良くなったんだね。よかった」

「さっきまでほとんど動けなかったんだけど、ミクが中級ポーシヨンを買って来てくれて飲んだら動けるようになったんだ」

「中級ポーシヨンってすごいんだね。副作用とか無いのかな」

春香、怖い事言うな。副作用って俺も少し気にはなってたんだ。

大丈夫……だよな。

「ミク、副作用ってあるの？」

「私も中級は飲んだ事ないからわからないわ。多分大丈夫じゃない？」

「……」

飲んでしまったので今更どうしようもない。まあ普通に販売されるんだから死ぬような事は無いだろうし、多分大丈夫だろう。

「今日のご飯一人で大丈夫そうだね」

「え？ あ、ああ、まあ、多分……」

治ってしまったせいで春香に食べさせてもらう事が出来なくなってしまった。

しまった……

ご飯を食べてからポーシヨンを飲めばよかった。やってしまった。

あゝ、そこまで頭が回って無かった。春香からご飯を食べさせてもらうという人生のビッグイベントが……

その後すぐにご飯が出て来て自分で食べてみたが、昨日までの三つ星を超える味が今日は全く美味しく無かった。

病院食なのでとにかく味が薄く、ポリウムが無い。
昨日あれほどまでに輝いて見えた病院食が今は辛い。

「どうしたの？ 食欲がないの？」

「食欲はあるんだけど……」

「ご飯だけじゃなくて、春香がお見舞いに来てくれるのは今日が最後か。」

本当に残念だけどいつまでも入院しているわけにはいけないので明日の朝一番に

退院の手続きをして学校に行こうと思う。

「ミクも春香も本当にありがとう。おかげで元気になったよ。明日から学校も行けそうだから。ミクもまたダンジョンでよろしく」

「まあダンジョンの前にギルドで売却が先ね」

「ああ、分かってる」

俺は売却したお金でポーションの代金と無くなった装備を買い直す必要がある。

少しは残ると良いな。

第532話 中級（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第533話 久々の学校

俺は朝一番に退院してから、すぐに学校へと向かった。

一時間目は無理だったが二時間目には間に合ったので久々に授業を受ける。

まだ学年が始まったばかりだったので、特に遅れを感じる事なく授業を受ける事が出来た。

「海斗！ 心配したぞ。ダンジョンでやられたんだってな」

「いや、ちよつと違うけど誰から聞いたんだ？」

「それはもちろん葛城さんだけだ」

「春香か……。まあ完全に間違いでは無いんだけど、モンスターにやられたんじゃないかって、無理しすぎて全身の筋肉が切れたんだ」

「全身の筋肉が切れたって、一体どれだけ無理したらそんな事になるんだ？」

「一応16階層の階層主を倒すために仕方がなくな」

「おっつ！ 遂に17階層か。さすがだな。羨ましいけど無理すんなよ。昨日まで全く動けなかったんだろ」

「まあ、治ったからそれはもういいんだって」

「海斗、水臭いな。俺に言ってくれれば花園さんも誘ってお見舞いぐらい行ったのに」

「いや、花園さんが来ても仕方がないだろ。病院を誘うダシにするな」

「だって、三年になってからなかなか誘う機会がないんだって」

ああ、久しぶりに学校だが、この二人といると日常生活が戻ってきた感じがして結構楽しい。

4時間目まで真面目に授業を受けて昼休みにトイレに行ってから教

室に戻るうとしていた時だった

「先輩、ちょっといいですか」

「え？ 俺の事？」

「はい、そうです」

「何か用？」

見た事のない女の子が声をかけて来た。

俺の事を先輩と呼んでいるので一年か二年生だと思いが全く知らない顔でショートカットの結構快活な感じの女の子だ。

「はい。先輩って『黒い彗星』ですよ」

「……………」

「聞こえてますか？ 先輩って超絶リア充『黒い彗星』ですよ」

これって…………

多分この子探索者なんだよな。

それで完全に俺の事をわかった上で声をかけて来てるって事だよな。

「……………なんの事かな。俺にはちょっとよく分からないな」

「もしかして、隠してるんですか？ 私ダンジョンで黒づくめの先輩を何度か見た事あるんですけど」

やっぱりこの子探索者か…………

「いやいや、俺の顔ってよくある顔だから、装備に身を包んだら誰だか分からないんじゃないかな」

「私、人の顔を一度見たら大体覚えてるんですよ。しかも黒づくめのハーレムパーティーなんか見た日には忘れるはずないじゃないですか」

これは完全にバレてるな。

「それで、もし俺が仮にそうだったとして何か用か？」

「いえ『黒い彗星』さんが同じ学校だと分かかって、声をかけようと思っただけですけど、何でかずっといませんでしたよね」

「俺、今日の朝まで入院してたから」

「もしかしてダンジョンで何かあったんですか？」

「いや、なにも無いよ。俺そろそろ教室に戻りたいんだけど」

「それじゃあ、連絡先教えてください」

「連絡先？　なんで？」

「せっかく同じ学校なんですから『黒い彗星』さんに探索のアドバイスしてもらいたいなと思って」

「俺はそんなアドバイス出来るような探索者じゃ無いよ。自分のパーティの事で手一杯なんだ」

「やっぱり先輩が『黒い彗星』さんなんですな」

「あ……」

「まあ今日は諦めます。また、日を改めます」

そう言っただけの子は風のように去って行った。

今のは一体なんだったんだ？

『黒い彗星』ネタを校内に拡散する気か？

そもそも何で俺と連絡交換？

最近の若い子は怖いな。それに俺が『黒い彗星』って完全にバレてたな。

やっぱり、目立つと良くないな。これからは特に気をつけて行動しないといけない。流石に何人も同じような人が現れるとは考えにくい、プライベートで『黒い彗星』呼ばわりされたのは初めてだったので、かなりびびくりしてしまった。

第533話 久々の学校（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第534話 イレギュラー

俺は無事二日間学校に通う事が出来体調も万全だ。

今回の件は家族には事情を説明して、一応許してもらったが、父親はかなり心配していた。

ただ俺が将来専業で探索者をしたいと言うことと、ある程度俺の稼ぎを把握しているので強くは言って来なかった。

母親には、春香にお礼がしたいから今度家に連れて来る様にと厳命されてしまった。

そして土曜日を迎えたが探索をするにあたって一つ問題点があった。もうスライムの魔核が無い……

ボス戦で全ての魔核を使い果たしてしまったので、売却分以外にも一個も残っていない。

流石に今週はダンジョンに通う事は憚られたので一度も潜れていないが、魔核が無いときっとシル達がヘソを曲げるので現地調達しかない。

「おはようございます」

「もう身体は大丈夫なのか？」

「はい、おかげさまで、ご心配おかけしました」

「それじゃあ換金に行きましょっか」

「あれ？ ヒカリンは？」

「連絡があつて風邪ひいてるから今日は休むって」

「そうなんだ。大丈夫かな」

「それほど酷くは無いみたいだけど」

「じゃあとりあえず、ギルドに行ってみようか」

ギルドの窓口に行くと日番谷さんがいたので早速声をかける。

「買取お願いします。魔核が百個ぐらいと、この魔戦斧なんですけど」

「随分多いですね」

「16階層のボス部屋で百鬼夜行が生まれて」

「百鬼夜行ですか？」

「はい。鬼が百体出たんです」

「鬼が百体ですか？」

「はい、鬼が百体です」

「それで持ってこられたという事はクリアされたという事ですか？」

「はい、そうです」

「K112ってどのパーティと組まれてましたか？」

「いえ、俺達はずっと単独パーティですよ」

「……………」

「どうかしましたか？」

「という事は皆さんの単独パーティだけで鬼を百鬼倒したという事ですか？」

「はい、そうです。流石に死ぬかと思いましたが」

「高木さん、ちょっとおかしいですよ」

「何がですか？」

日番谷さんが何やら失礼な事を言ってくる。

「まず16階層のボス部屋に百鬼が現れたという報告は受けた事があります」

「そう言われても出ましたよ」

「それが本当なら恐らくイレギュラーだと思います。ただ皆さんのパーティ単独で百鬼倒しきったというのは異常です。本来であればスタンピードに匹敵する数です。完全にレイド案件です。単独で突破できる数じゃありません。失礼ですが高木様のレベルをお聞きし

ても？」

「この前レベル22になりました」

「やはり異常です」

やっぱり今日の日番谷さんは失礼だ。俺は至って普通だ。おかしいとか異常とか言われるのは心外だ。

「高木様のレベルは、16階層において決して低いものではありません。むしろ短期間でのレベルアップは目を見張るものがあります。ただ単独パーティで百鬼を相手にできる様な圧倒的な数値では無いんです。例え高木様のサーバント三体が上位種だとしてもです」

「そう言われても、なんとかまりましたよ。最後は動けなくなるまで頑張りましたけど」

「うーん、実際に魔核もお持ちいただいていますし、嘘をつく意味がないので信じるほか無いのですが、完全に規格外です。サーバントを含め今までエンカウントした敵もおかしいですし完全にイレギュラーです」

「イレギュラーですか？」

「はい。高木様がなのか、パーティ全体なのかはわかりかねますが、最近の高木様は明らかに特異です。普通の探索者は、こんなに色々無いんです。」

改めて第三者から言われると、自分はちょっと普通では無いという事を再認識してしまう。

実は薄々自分でも気づいてはいた。

普通の探索者に比べて色々あるなとは思っていた。

百鬼だけじゃ無く、スタンピードやブーメランパンツの件も普通では無いのは気づいていた。

ただこれが因果律によるものなのか、それとも不幸体質の為なのかは自分では分からない。

第534話 イレギュラー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第535話 売却

「それで買取はとうですか？」

「魔核は85個で百五十四万円になります。戦斧の方は魔力を帯びているので魔剣扱いとなりまして五百万円です」

「それじゃあ魔核は全部売却をお願いします。戦斧は一旦持って帰ってもいいですか？」

「はい、それでは魔核の買取金額はパーティの皆様の口座に均等振り込みでよろしいですか」

「はい、それをお願いします」

一個当たりの単価は思っていたよりも高かったが、やはりシル達に十個ずつ渡したのが響きかなり金額が目減りしてしまった。

「海斗、戦斧は売るのはやめるの？」

「いや、もう一箇所持っていききたいところがあるんだ」

そうやって俺は、ダンジョンマーケットへ向かいおっさんの店に進んだ。

「こんにちは」

「おお、坊主か。今日はいつもとは違うお姉ちゃん連れてんのか？」

「ああ、俺のパーティメンバーです」

「おいおいマジかよ。お前ってまさかのハーレムパーティだったのか？ 信じられね〜けど、時代が変わったのか……こんな奴が」

相変わらず失礼なおっさんだな。

「今日は買い取りの見積もりして欲しいんですよね」

「珍しいじゃね〜か。物は何だよ」

「これなんですけど」

そう言つて俺は戦斧をカウンターの上に置いた。

「戦斧か……」

「はいドロップしたんですけど俺達は使わないんで売りたいんですよ。ギルドでも見積もり取ったんですけど、せつかくだからいつもお世話になつてるお兄さんのお店にと思つて」

「そ、そうかよ。流石お得意様だな。俺の事を思い出してくれて嬉しいぜ！ ちょっと待つてるよ、鑑定してくるわ」

そう言つておっさんは嬉しそうに戦斧を持って奥に下がつていった。あんなに嬉しそうなおっさんを見たのは『ドラグナー』を俺が買った時以来だ。結構あのおっさんつてチヨロインキャラだったりするのか？

ただ強面おっさんのチヨロインキャラ……世間に需要がない気がする。十分程待つているとおっさんが戻ってきた。

「おい坊主、これ魔戦斧じゃね〜か。それなりに需要のあるもんだぞ。お前から何階層でこれ手に入れたんだ？」

「十六階層のボス部屋です」

「なるほどな。それじゃあ坊主、今は十七階層に潜つてんのか？」

「いえ、それはこれからです」

「やっぱハーレムパーティ組むだけあるじゃね〜か。人は全く見かけによらね〜な。それで値段だがよ、せつかく持つてきてくれたんで頑張らせてもらつぜ。五百五十万でどうだ？」

おお、いきなり五十万円アップした。
これで売ってもギルドより得だな。
だけど……

「お兄さん、この魔戦斧結構人気なんですよね。じゃあ買ったらすぐ売れたりしますよね。売る値段っていくらですか？」

「ああ!？」

おおっ、怖い。怖いけどここは引くところじゃない。

「いやだっってお兄さんのお店にこれがあったらすぐ売れちゃうじゃないですか。だから俺もこのお店に是非売りたいんですよ。でも……もう少しなんとかありませんか？俺達も命懸けてるんです」
「……………そうだな。俺が悪かった。六百出そう」

おおっ！更に五十万上がった。流石にこれ以上は強欲すぎるか……………

「わかりました。それでお願いします」

「坊主、俺が思ってたより熱い奴だったんだな！これからもよろしく頼むぜ！」

そう言っっておっさんが笑顔で握手を求めて来た。
やっぱりこのおっさんチヨロインキャラか……
まあ人に好意的な握手を求められて悪い気はしないのでしっかりと両手で握り返しておいた。
すぐにお金を入金してもらってから店を後にする。

「海斗、今の何なの？海斗って交渉とか得意だったの？百万円も高く買ってもらえたじゃない」

「いや、いつもあのおっさん相手に春香が交渉してるのを見てたか

ら真似してみただけ」

「海斗、真似出来るだけ大した物だが、春香さんもかなりのものらしいな」

「そうですね。値段交渉は俺よりも数段上だと思えます」

とにかく百万円高く売れたので、魔核のマイナス分を取り返す事が出来た。

これで、ミクに立て替えてもらってた七十万円を無事返す事が出来る。

よかった。

第535話 売却（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第536話 感覚のズレ

「これからどうしようか。十七階層に行ってみる？」

「ヒカリンが一緒の方がいいと思うけど」

「そうだな初めての階層だしヒカリン抜きはやめておいた方がいいだろう」

まあ、確かにその方がいい気がする。

「それじゃあみんなで一階層を周回しますか？」

「一階層？ それはちよつと……」

「スライムでは、鍛錬にならないな」

やはりというか残念ながら彼女達には一階層の素晴らしさを理解してもらおう事が難しい様だ。

「それじゃあ十六階層に行きましょうか。それならヒカリンがいなくても大丈夫だと思っんですけど」

「そうしましょう」

「また鬼を狩れると思うと滾るな」

相変わらずあいりさんはおかしな事を言っているが、二人共賛成に様なので十六階に向かう事にした。

「あの〜。実は今日魔核の予備がなくてですね、現地調達しないとイケないんです。『ドラグナー』が使えないのとシル達のご褒美も現地で調達する必要があるんで、余りお金にはならないと思います」

「そうね、先にある程度の魔核を集める必要があるわね」

「全く問題ない。シル様とルシエ様と共に鬼が倒せるだけで十分だ」
魔核が無いせいで『ドラグナー』も使えないし俺も退院後初めての探索なので少し不安もある。急がず慎重に進みたい。

「ご主人様、鬼が三体です」

「よし、シルとルシエは待機。魔核が無いからスキルを発動するのは禁止だ」

「おい！ 海斗魔核がないってどういう事だ！」

「どういう事ってこの前ルシエ達が全部吸収しちゃったんだよ」

「なっ……。魔核無しでサーバントを召喚するってバカじゃないのか？ このバカ！」

「今から集めるんだよ、ちょっと待ってるって」

歩いて行くとすぐに袴鬼と女鬼が現れた。

「女鬼はベルリアが頼む。俺とあいりさんは袴鬼をやりましょう」

ベルリアは新しい魔剣が嬉しいのか、異常にテンションが高い。

「すぐに刀の錆にしておく！ 魔剣を持った私の敵では無い。二刀の舞をじっくり味わえ！」

テンションが上がっているせいか、言ってる事も少しおかしい。

すぐに倒すと言っているくせにじっくり味わえと重ねている。

どう考えても矛盾していると思うが、俺以外のみんなはスルーしているの、まあ俺も突っ込むのは控えて戦闘に集中しよう。

魔核が無いのでバルザードの威力も半減しており、それをカバーするべく魔氷剣を発動させて袴鬼に向かって行き、即交戦状態に入る。袴鬼が二刀を振るって俺を倒しに来たので、避ける為に魔氷剣を振

るいながら後ろに下がるが、ボス部屋での戦いの様に鬼の二刀がゆつくりと通り過ぎる事も、俺だけが素早く動ける事も無く、通常の手速度で全ての動作が流れていった。

「あれ？」

あの特別な感覚に慣れてしまっていた為に違和感が凄い。

これが当たり前の速度なのに、相手が速くなって逆に自分は遅くなつた様な錯覚に陥る。

攻撃を避けた俺は相手の攻撃を避けると同時に踏み込んで倒しにかかるが、やはり思った以上に感覚と身体の実際の動きにズレがあり、魔氷剣を振るうタイミングが遅れてしまい鬼にダメージを与える事が出来なかつた。

「海斗〜！ 何をやってるんだ、空振ってるじゃ無いか！ 鈍ってるのか！」

後方からルシエの叱咤激音が聞こえるが、その通りかも知れない。俺は入院している間の数日で鈍ってしまったのかも知れないが、そんな事は目の前の鬼には関係の無い事なのでとにかく倒す事にだけ集中する。

再び攻撃に転じた鬼の二刀を意図的に大きめの動作で回避して、回避中にその後の攻撃をイメージして、刀を躲した瞬間にイメージした通りをトレースして身体を動かし攻撃をかける。

俺が振るった魔氷剣は鬼の身体を捉え、右腕を斬り落とした。

「ガアアアアア！」

鬼が痛みに叫び声を上げる。

思ったよりも早く動けないのであれば、動くよりも先にイメージを

固め、それをトレースする事で動作の動き出しを早める。

第536話 感覚のズレ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第537話 強くなってる？

腕の無くなった鬼の右側に回り込み、斬り込むが、腕を失い右側からの攻撃を防ぐ術を失った鬼はあっさりと消滅した。

あいりさんとベルリアの方を見るとまだ戦闘中だ。

ベルリアは女鬼を圧倒して、もう勝負はつきそうだが、ベルリアの刀はそれぞれ炎と風を纏っている。

剣を振るう度に効果が発動するようで、女鬼はまともに受ける事が出来ずに避け

る事に集中しているが、魔剣の二刀からは逃れる事が出来ずに徐々に手傷を増やし、足が止まるのも時間の問題に見える。

あいりさんは、袴鬼と間合いの差し合いをしているが、新しいスキルである『ダブル』を発動して薙刀を振るった。

その瞬間振り下ろされた薙刀がぶれて二刀になり、そのまま防ぎ損ねた鬼に斬りかかりダメージを与える事に成功した。

『ダブル』の手数が倍になるってこういう事か。

発動の瞬間、物理的に攻撃が倍になる。相手からすると突然攻撃が増えるので、対応が遅れる。

あいりさんがダメージを負った鬼の首を返す刀で勿ね勝負は決した。

「あいりさんの『ダブル』って凄いですね。攻撃が増えるってマジツクみたいですよ」

「ああ、かなり使い勝手が良い。初見でこれを防ぐのは相当難度が高いと思う」

「海斗、次は私もやってみていい？」

「ああ『ライトニングスピア』だよな。次の敵に頼んだ」

俺は魔核を三つ集めて俺の取り分である一個を『ドラグナー』に吸

収させる。

これでようやく『ドラグナー』を最低限使えるようになったが、次はバルザードの分を確保したい。

戦闘時に感覚のずれから少してこずる場面はあったが、鬼殺しとレベルアップの効果もあり、最終的にはあっさりと倒す事が出来た。

「ミク！ その小鬼を頼んだぞ！」

「まかせて」

次に出てきたのは小鬼だったので一体をミクに任せる。

「それじゃあ、いくわよ『ライティングスピア』」

ミクがスキルを発動した瞬間、閃光が走り、次の瞬間には着弾していた。小鬼が雷の槍をくらい地面に倒れているので、俺が走って向かいとどめをさした。

シルの雷撃のように一撃で消し去る程の威力はなさそうだが、雷だけあってそのスピードは光速。光った瞬間には着弾していた。

スピットファイアと併用して使えば、以前よりも間違はなく火力アップしている。

「ミク、やったな」

「うん、やったよ。ついにモンスターを倒せる魔法が使えるようになったわ。今までサポートしか出来なくて、ボス部屋でも役に立ってなかったけど、これで戦えるわ」

確実にみんな強くなっている。

シルとルシェの力を借りなくても十分に戦えている。

この日は一日十六階層の鬼を倒して回ったが、探索の順調さとは比

例せず残念ながら魔核は殆ど貯まる事が無かった。

翌日になり再びダンジョン前で待ち合わせたか、ヒカリンはまだ風邪が治らないとの事で休んでいた。

「ミク、ヒカリンって風邪がひどいのかな」

「私もメッセージのやり取りだけだから詳しくは分からないのよね」

「みななどお見舞いとか行ったほうがいいかな」

「一応私も昨日聞いてみたんだけど、そんな大した事無いから来なくていいって連絡があつたのよね」

「そうか、まあ本人がそう言うなら大丈夫なんだろうけど、ちょっと心配だな」

「あいりさん、今日の探索どうしますか？」

「まあ来週になればヒカリンも戻って来るだろうから、それまでは十六階層でいいんじゃないか？」

「あの……一階層は？」

「うん、ないな」

「多分レベル22で一階層を探索してるのは海斗だけだと思うわよ」

「いや、だって一番効率がいいんだって」

結局二対一の多数決でこの日も一日十六階層を探索し鬼を狩って回る事になった。

第537話 強くなってる？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第538話 素晴らしきかな一階層

ついに俺は念願の一階層で探索をしているが、やはりここは落ち着く。モンスターの襲来に神経を尖らせる必要も無く自分のペースで探索出来るので正にダンジョンでのマイホームといった気分になる。

「一週間以上来れてなかったからな。昨日も魔核はギリギリだったし今週一週間頑張らないと週末の探索に影響が出る。魔核が不足している状態で十七階層は無理だぞ」

「海斗、ベルリア、頑張れよ！ 魔核がもらえないダンジョンなんている意味がないからな！」

「はい。ルシエ姫精一杯頑張ります」

「そういえばベルリアも魔剣になったんだし、その刀であっさり倒せるんじゃないか？」

通常の刀とスライムは相性が悪そうだが魔剣であれば付加効果で難なく倒せそうな気がする。

「やって見ます」

しばらくスライムに対して俺は攻撃を控え、ベルリアの戦いを見ていたが、結果炎の刀は、斬りつけるとスライムを蒸発させながら斬り裂きあつという間に倒す事ができたが、もう一本の風を纏った刀は残念ながらダメだった。風が一瞬スライムを刻むが、すぐに元に戻ってしまい、薄い刃の刀ではなかなか倒す事が出来ずに苦戦してしまっていた。

やはりスライムは攻撃力が皆無で弱いものの倒すには相性が大事ならしい。

思いつきでベルリアの炎の刀を振るう際に殺虫剤プレスを吹きかけて見たが一気に吹き出し口まで炎が回り、焦って殺虫剤の缶を手放してしまった。

やはり戦闘中に思いつきで余計な事はするものでは無いと痛感してしまっただが危うく引火爆発を招いてダンジョンで大惨事を招きかねなかった。

そこからは、ベルリアは炎の刀を使い、俺は大人しく殺虫剤プレスを使ってどんどんスライムを倒していった。

スムーズな連携でスライムとの戦闘時間は少し短縮されたがスライムのエンカウント率は変わらない為、魔核の獲得数は、ほぼ横ばいで一日で三十五個が上限となっていた。

五日間で二百個を目標に頑張ったが金曜日終了時点で少し足りなかった。

ただこれで土日は思う存分魔核を使用する事が出来そうなので、シルとルシェの新しいスキルも試してみたいと思う。

そしてこの一週間は俺にしては珍しく学校以外でも家で勉強をした。約束通り俺が休んでいた3日間のノートを春香が貸してくれたので、それを見ながら復習していた。

「やっぱり、俺とは違うな」

春香の貸してくれたノートは俺のノートとは全く違った。

まず字が細くて綺麗。字を見ただけで女の子のノートと一目でわかる。

そして俺のノートとはにかく授業の板書をほぼそのままの順番で羅列しただけだが、春香のノートは要点にマーカーが引いてありしかも、わかりやすいように整理して書かれてある。

正直教師がこれを元に板書すれば、みんなもつと頭が良くなるんじゃないかと思う。

授業を受けていないのにノートを見ただけで、教科書の内容が理解

出来る。流石は春香だ。ノートの書き方がここまで違うとは思わなかった。

やっぱり授業に対する理解度が違うのかもしれない。

俺はとにかく授業中集中して覚える。とにかく全部覚える。覚えたら答えが書ける。それを基本にやってきたが、これを見てしまうと受験もあるので勉強の仕方でも少し変える必要があるかもと思わされる。

いずれにしても、入院でもお世話になったしノートのお礼もしなければならぬ。

どんなお礼が良いだろうか？ スイーツのセットとかがいいかもしれないが、よく考えると春香の誕生日が近いのでそれも何か考えないといけない。

春香の誕生日は四月三十日に俺は五月で十八歳となり成人を迎えるが大人になると何か変わるのだろうか？ 残念ながら今のところ全く実感は湧いていない。

第538話 素晴らしきかな一階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第539話 病状

一階層で魔核を集める事が出来たので今日から遂に十七階層を探索する。

「おはよう」

「うん、おはよう」

「今日もいい春日和だな」

「あれ？ ヒカリンはまだ来てないの？」

「それが、メッセージが届いて今週も休むって」

「え？ 今週も休みなのか？ それって大丈夫なの？ もう二週間だぞ」

「私も心配なんだけど、電話は出ないし、メッセージでただの風邪だっていうからそれ以上は聞き辛くて」

いや、俺でも完全復活しているのにどう考えても長すぎる。

「俺ヒカリンのパパの連絡先知ってるからちょっと電話していいかな」

「うん、お願いね」

「それがいい」

俺は早速以前登録してあったヒカリンのパパに電話をしたが、やはり緊張してしまう。

「はい、高木です。お久しぶりです。はい……ヒカリンさんは……はい。そうなんですか？ はい……じゃあ教えてもらっていいですか？ はい……待ってくださいね……じゃあ今から、はい」

「どうかしたの？」

「ああ、ヒカリンなんだけど入院してるって」

「え！？」

「どうしたんだ？」

「ボス戦から帰ってから俺と一緒に寝込んだみたいです。ただ、ヒカリンは元々身体が弱いのでかなり悪いみたいです」

「そんな……メッセージでは一言も」

「それで病院名を聞いたのか？」

「はい、今から行っていいですか？」

それからすぐに俺達三人はヒカリンのパパから聞いた病院へと向かった。

「この部屋みたいです」

「じゃあ入りましょう」

『コンコン』

「はい、どうぞ」

中からはヒカリンのママらしき人の声がして来た。

俺は病室のドアを開けて中に入るが、奥のベッドにヒカリンを見つけて一瞬動きが止まってしまった。

ヒカリンは俺同様にベッドで寝ていたが、俺の時には無かった鼻にかニューレをつけて酸素吸入しており、二週間前と比べて顔色が悪く明らかに痩せているのがわかった。

なんだ？　なんでヒカリンは……

「海斗さん……ミクさんとあいりさんも。パパが教えたんですね」

ヒカリンがベッドから声をかけてきたが、明らかに張りも無い。

「ああ、うん。心配で電話したら教えてくれたんだ」

「そうですね……ちょっと風邪をこじらせてしまつて入院なのです。多分来週にはダンジョンに潜れると思います」

「……………」

素人の俺が見てもそれは嘘だと分かつてしまつ。それ程にヒカリンは……

「ヒカリン、実は俺も入院してたんだ。3日間一步も動けなくてミクに低級ポーション二本と中級ポーション一本買ってきてもらつてようやく退院したんだ。多分ヒカリンより酷い状態だったかもしれない」

「そうそう、海斗はベッドに貼り付け状態でオムツしてたのよね」

「海斗それは初耳だがそうなのか？」

「ミク！ みんなの前でそれを言う？ ああ、そうですね。その通りです。今時のオムツはすごいんです。最強ですよ」

「ふふっ……。海斗さん退院できて良かったですね」

「ああ、ヒカリンもすぐに退院出来るつて。俺達も今は十六階層をまた探索してるからゆっくりでも全然大丈夫だけだな」

「早く十七階層に行つてみたいですね……」

「そんなのすぐだつて。攻略だつてあつという間だよ。みんなレベルアップして今までよりもパワーアップしてるから」

「そうですね」

その後しばらくヒカリンと話していたが、余り長くなるのも良くないと思ひそこそこの時間で切り上げる事にした。

「ヒカリン、それじゃあまた来るから」

「はい」

そう言つて病室を出てから俺達三人は病院を後にしたが、病院を出るまで誰一人言葉を口にしなかつたが、みんな分かっていた。ヒカリンの身体の状態はかなり良くない。

第539話 病状（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第540話 決断

病院を出てから俺から二人に声をかけた。

「ヒカリン良くないですね」

「うん……びつくりした」

「ああ、良くないな。海斗の話では、後数年は猶予があると言う話じゃ無かったか？」

「そう聞いてたんですけど、ヒカリンのパパにもう一度電話してみます」

俺は再びヒカリンのパパに電話をかけた。

「はい、今病院を出ました。どうしてあんなに……はい。そんな……はい。じゃあ……そうです。なんで……そうですか。俺が、俺達が何とか……はい。任せてください。はい、それでは」

ヒカリンのパパとの会話を終えて電話を切った。

「何となく聞こえたけど……」

「ああ、ヒカリンの状態は俺と同じリバウンドだと思う。特に影響が出たのは魔力切れたと思うけど、地上に戻った次の日には極端に体調が悪化して、それから悪くなる一方らしい。ポーションも飲んだりしてるみたいだけど効果は薄いみたいだ」

「それじゃあ、ヒカリンはこのままだと」

「はい、厳しいみたいです。リバウンドがきっかけで病状が急激に悪化したみたいです」

「そんな……」

「俺はヒカリンを助けると約束したんで約束を果たすつもりです」
「でもどうやって霊薬を？」

「十七階層をクリアしましょう。それでダメなら十八階層も攻略してポストドロップを狙いましょう」

「私もそれしかないと思うけど、十五、十六階層では出なかったのに都合良く十七階層で出るかしら」

「……でもそれ以外に霊薬を手に入れる方法が俺には無いんだ」

「私もそれしか無いと思う」

「そうだな、それしか無いだろう。ヒカリンがいらないから後衛はミクに任せる事になるがそれでも行くしか選択肢は無いな」

みんな分かっている。ヒカリンにはもう時間がない。少し前までは後数年あるのだから、どこかの層のポストドロップか何かでどうにかなるだろうと思っていた。

だが、さっきのヒカリンのこの二週間での衰弱度合いを見てしまうと、後一ヶ月でも本当に大丈夫なのかと心配になるレベルだった。このまま衰弱していくとは考えたくは無いが、そう遠く無いタイミングで……

「俺は少し無理をしても探索のペースを早めるべきだと思います。シル達もレベルアップしましたし、前面に立つてもらって突き進むのがいいと思います」

「魔核は大丈夫なの？」

「先週一週間で十分な量を確保しているからこの土日だけなら思いっきり行けます。平日はまた魔核を集めるんで大丈夫です」

「分かった。それじゃあ海斗に任せるよ」

俺達は急いでダンジョンまで戻ってきたが既に時刻は十三時を回っている。

正直一分一秒が惜しい。

俺は装備を整えてからダンジョンへと踏み込み『ゲートキーパー』で十七階層へと飛んだ。

「シル、ルシエ、ベルリア、ヒカリンの容態が急変してもう時間が無いんだ。この十七階層を最短で攻略したい。どうしてもボスドロップで霊薬が必要なんだ。シルこの階層は最初から前で戦ってくれ」「はい、かしこまりました」

「おい、ヒカリンはそんなに悪いのか？」

「ああ、良くないな。霊薬が無いとまずい状況だ」

「そうか……」

「ルシエも積極的に戦闘に参加してくれ」

「ああ、分かった」

これで十七階層といえども、必ず攻略出来る筈だ。俺とベルリアを先頭にして初めての十七階層の探索を始める。

「シル、どうだ？ 敵の気配はするか？」

「いえ、今のところ反応はありません」

「海斗、焦っているのは分かるが、落ち着け。焦っていると足下をすくわれるぞ！ まずは着実に進んで、確実に攻略する事に集中しよう」

「はい、そうですね」

頭ではあいりさんの言葉が理解出来ているが、心と身体が焦りを感じてしまう。

第540話 決断（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第541話 十七階層

俺は今十七階層を進んでいるがまだモンスターとの戦闘は起こっていない。

サーバントの新しいスキルも試して見る必要があるが、シルの『祈りの神撃』は

発動時の俺の消費MPがはつきりしないので使いづらい。

最初に使ってMPが大幅に削られてしまうと探索に支障が出てしまうので様子を見ながら使ってみたい。

「ご主人様、モンスターがいます。前方に四体です」

「よし、じゃあ話した通りで行こう。ルシェの『炎撃の流星雨』も試してみたいから機会があれば使ってみてくれ」

「ああ、わかった」

俺もバルザードとドラグナーを携えて前方へと進んで行く。

「なあ、シルあれって……」

「そうですね。ドラゴンですね」

「そうだよな、だけど少し小さいか？」

「あれはドラゴネットだと思います」

ドラゴネットか。小型もしくは子供のドラゴンだと思うが、見た目は完全にドラゴンだ。

ドラゴネットとはいえドラゴンには違いないので油断は出来ないが、ダンジョンに潜る者にとってドラゴンには一種の憧れがある。

以前の階層で超小型のやつと戦ったがあれはドラゴンというよりはトカゲだったし龍もちよっと違う感じだった

ドラゴンといえばブレスと爪や牙そして尻尾での攻撃か。とりあえずブレス以外は近接専門だと思つのでまずは遠距離から攻撃をかけてみるか。

「おい、海斗！ やっていいのか？」

「ルシエやれるのか？」

「わたしのことを馬鹿にしてるのか？ やれるのか？ やれない筈無いだろう。バカなのか？」

「そう。じゃあせつかくだからやってみる？」

「じゃあ、その小さい目を大きく見開いてしっかりとみてるよ。大きな蜥蜴が集まったところで蜥蜴は蜥蜴だろ『炎撃の流星雨』」

あ、これ結構やばいやつかも。

『ゴゴゴゴゴゴゴ』

上からなのに何故か地響きのような音をたてながら、大型の火球が降って来た。

かなりの広範囲に一気に降り注ぐ。

「みんな下がれ！」

あまりの熱量に身の危険を感じて、全員で後方へと走って避難するが、避難している最中にもドラゴネット4匹に向けて無数とも思える火球が降り注いでいる。

眼前が火球に埋め尽くされてドラゴネットの姿が見えなくなってしまう。

確かに『爆滅の流星雨』の隕石と比べると一発一発の威力はかなり落ちるようにも見えるが、数の暴力ともいえるような火球による集中攻撃の熱量は凄まじく、後方に下がっても、熱風が襲って来る。

これは反則級だ。多分この階層ではオーバーキルだろう。十六階層のボス部屋でこれが使えていればもつとあっさり攻略出来ていたと思う。それ程の火力。

「やったか？」

流星雨が止み、前方が晴れてくると、そこにドラゴネット四匹の姿は既に消え去っていた。

「ふふん。海斗どうだった？」

「どうだったって、ドラゴネットが瞬殺というかいなくなったんだけど……」

「当たり前だろ！ 蜥蜴なんか燃やして終わりだ」

「一応蜥蜴じゃなくてドラゴンな」

「どつちも一緒だろ」

俺はルシエのステータスを確認して驚いたが、何とMPが五十も減っていた……

今まででMPを一度にこれほど使用した事は無かった。

ルシエの200を超えるMPがあったとしても四発が限界、しかも他の攻撃もあるので実際には一回の探索で一度か二度使えればいい方だろう。

「おい！ 忘れてるだろ」

「えっ？ 何を？」

「魔核だよ魔核！ お腹が空いたんだ」

「ああ、それじゃあこれ」

俺はルシエに魔核を三個渡した。

「馬鹿にしてるのか？ 全然足りないぞ」

三個で足りないのか。やはり威力に比例して欲しがる魔核の量も増えているのか？

「それじゃあこれだけな」

そう言っつて二個を追加して五個を渡す事にした。

「ご主人様、今回は私は何もしていませんので大丈夫です」

「ああ、シル助かるよ。正直このペースでみんなに渡してたらもたない。省エネで行こうか」

探索の一発目からこのペースで使っていたらいくら魔核が二百近くあってもあつという間に無くなってしまう。今はシルの厚意に甘えておこうと思う。

第541話 十七階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第542話 ワイバーン

ドラゴネットが消えた後には普通に魔核が残されている。

当たり前といえは当たり前だが、ドラゴンといえども通常のモンスターと変わらない。

以前の龍よりもファンタジー感が増えてテンションが上がるが、やはり悪魔の敵では無かった。

それにしても『炎撃の流星雨』はとんでもないスキルだった。

レベル5でキリが良いのでボーナススキルとかか？

となれば同じくレベル5でシルに発現した『祈りの神撃』もとんでもスキルの可能性が高い。

いざという時に本番ぶっつけで使うのはリスクすぎるので、かなり勇気はあるが次の戦闘で一度使用しておいた方が安心だ。

最悪、低級マジックポーションがあるので、俺が我慢さえすればなんとかなると思う。

「シル次現れたモンスターに『祈りの神撃』を使ってもらっていいか？」

「はい、もちろん私は大丈夫ですが、ご主人様は大丈夫ですか？」
「……………」

これはやはりあれか？ 俺が大丈夫じゃなくなるスキルっていう意味か？

「あつ、ご主人様奥にモンスターが三体います」

「そうか…………じゃあシル頼んだぞ。ベルリアが一体、俺とあいりさんでもう一体をやりましょう」

進んでいくと現れたモンスターは、やはりドラゴン。ドラゴネットよりは少し大きいけど、三体のうち二体は普通に空中を羽ばたいている。

「ミク、あれはなんのドラゴン？ ドラゴネットじゃ無いな」

「あれは翼竜だけどサイズが小さいから多分ワイバーンね」

「ああ、あれがワイバーンか」

ワイバーンといえば竜の中では下位種のイメージがあるが実際に見るとかなり立派だ。

普通に、あれこそがみんなの知ってるドラゴンだといわれれば間違いないと信じるレベルだ。

「シルは地面にいるのを頼むな。俺達は飛んでいるのをやるから」

「はい、かしこまりました」

俺達が進んで行くとワイバーンもこちらを認識して襲いかかって来た。

俺は飛んでいる個体に向けて『ドラグナー』を放つと、銃が蒼白く発光し、放たれた銃弾は、蒼い糸を引いて一直線にワイバーンへと向かうがワイバーンが急旋回した為右翼に命中する事になったが、かなり大きな穴を開ける事に成功して、ワイバーンはそのままバランスを崩し墜落した。

「あれ？」

俺が思っていたよりも命中時の威力が高い気がする。

俺がレベルアップしたからか？

少し違和感を覚えたが今は戦いに集中する。

「我が主に仇なす者よ、神の怒りを知りなさい。無へ帰せ『祈りの神撃』」

すぐ横でシルの声が聞こえて来たので、見るとシルが神槍ラジユネイトを構えていつもと違う聖句を唱えている。

『祈りの神撃』の声が聞こえた瞬間、俺の身体がつつすらと赤く光り、俺から急激に何かが抜けて行く感じがした。

「つつつ……」

耐えきれなくなり、俺がその場に膝をついた瞬間シルの神槍が赤く発光して槍の周りの空間が歪んで見えた。

そのままシルが神槍をワイバーンに向けて突き立てた瞬間、完全にワイバーンが消えた。

なんだ今のは？

倒したという感じじゃ無かった。正しく一瞬で消えてしまった。

ダメージを与えるとか、突き殺したとかとは違い、一瞬にしてワイバーンの存在そのものを消し去ったような圧巻の現象が目の前で起こった。

これが真なる神の一撃。

やはりシルのスキルもとんでもスキルだった。

そして、俺は立っている事が出来ない。

目が回って気持ち悪い……

とてもこの状態では戦えない。

これは魔力切れ？

俺は急いで自分のステータスを確認するがMPの残量は1になっていた。

ルシェのスキル同様ほぼ一発でMPを50消費した事になるが、問題はそれが俺のMPほぼ全てを意味するという事だ。

このスキルをシルが発動するとその瞬間に俺は魔力切れを起こして

戦闘不能になる。

なんてリスクいでピーキーなスキルなんだ。

第542話 ワイバーン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第543話 ワイバーン戦

俺は魔力切れを起こしてしまったので、ふらふらしながら腹巻きから低級マジックポーションを取り出して、思い切って飲み干した。やっぱり滅茶苦茶まずい……

「うつつ……シル『祈りの神撃』は当分の間使わないでおこうな。これを頻繁に使ったら俺がもたない」

「そうですね……わかりました。ご主人様のお身体が大事ですから」

シルが残念そうな表情を浮かべている。せつかく発現したスキルなので使っていければ良かったが、一回使う毎に魔力切れを起こして戦闘不能になるのであれば頻繁に使用する事は不可能だ。

やはりルシエの『暴食の美姫』と並んで特A級の危険スキルだと言える。

このスキルは、まず普段使う事は無い。完全なる死蔵スキルだが、残ったワイバーンを相手にベルリアとあいりさんがまだ戦っている。ベルリアは『ヘルブレイド』を使用して、上空にホバリングしているワイバーンを撃ち落としてから、そのまま近接戦に突入しているが、本来のドラゴンよりは少し小さいとはいえ、かなりの大きさと迫力のワイバーンと一対一で近接戦闘を繰り返しているベルリアも流石だ。

ベルリアが二刀を使って、ワイバーンの爪と牙による攻撃を防ぎながら、徐々に手傷を負わせていつている。

炎と風を纏った魔剣はワイバーンの鱗と皮膚も問題にせず、みるみるうちにワイバーンが弱っていくのが見て取れる。明らかに以前の数打ちの剣に比べて武器の性能が上がっているのが目に見えてわかる。

「そろそろでしょう。これで終わりです『アクセルブースト』」

ベルリアがスキルを使い、炎の魔剣が加速してワイバーンの首を刈り取り、勝負は決した。

一方のあいりさんは俺が墜落に追いやったワイバーンと戦っているが、墜落した事でワイバーンは既に右半身にかなりのダメージを負っている様で動きが鈍い。

『アイアンボール』

あいりさんが近距離から容赦無く鉄球を叩き込む。

『サンダースピア』

鉄球が命中すると同時に後方からミクの声がして雷の槍がワイバーンの胴体に突き刺さった。

「ギイイアアア！」

ワイバーンの悲痛な咆哮が周囲に響く。

「止めだ！ 『斬鉄撃』」

あいりさんが弱ったワイバーンに向けて踏み込んで必殺の一撃を放ち勝負を決めた。

俺は、低級マジックポーションを飲んだ事でMPが回復して、動ける様になって来たので、ゆっくりと動き出し魔核を回収に向かうが、倒したワイバーンのうち魔核を回収出来たのは二個だけで、シルが倒したワイバーンからはなぜか魔核を回収する事が出来なかった。

やはりシルの新しいスキルは特殊なので死蔵だ。真なる神の一撃は人知を超えており、俺の限界をも突破している様だ。

「海斗、大丈夫か？ シル様の新しいスキルは凄まじいな。あれならもしかして階層主でも一発で消せるんじゃないか？」

「相手にもよると思いますが、可能性はありますね、それと二人も流石です。初見のワイバーンも問題無く倒せましたね」

「さっきのは海斗の一撃で墜落してくれたのが大きかったし、ミクの魔法でほぼ勝負はついていたな」

「ああ、ミクの『サンダースピア』はワイバーンにも十分通用していたな」

「ええ、ほっとしてる。マジックジュエルを私に使わせてもらって感謝してるわ」

十六階層でのレベルアップにより確実に戦力アップしているのを実感出来るが、今回の戦闘で俺はほとんど役に立たなかった。

ワイバーンも探索者が憧れるモンスターの一つではあるが、今回全く楽しむどころでは無かったので次回は前に出てしっかりと戦いたいと思う。

第543話 ワイバーン戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第544話 特攻

俺達はワイバーンを倒して更に十七階層の探索を進めて行く。

「ミク、あいりさん、気を悪くせず聞いてほしいんですけど、十七階層で霊薬って出ると思えますか？」

「…………… 普通なら無理ね」

「私も詳しくは無いが、霊薬と呼ばれる様なものは二十階層、いや二十五層より下で見つかっている事がほとんどじゃ無いか？」

「やっぱりそうですか……………。ヒカリンの感じからすると俺達が二十階層にたどり着くまでは正直難しいと思うんです。攻略が順調にいったとしても十七、十八、十九階層ぐらいまでがリミットかもしれないと思ってるんです」

「そうかもしれないわね」

「最大でもチャンスは後三回って事だな」

「はい。それも順調に進んでの事です。ヒカリンがいない分は確実にペースが落ちると思います。それがどのくらいかは分かりませんがそれも想定しながら進む必要があると思います」

みんな口には出さないものの、今回の事が難しいという事は理解している様だが、どうにか限られたチャンスを生かして霊薬を手に入れてみせる。

「ご主人様、お話し中ですがモンスターです。この先の右奥に四体待ち構えています」

「それじゃあ、シルモルシェもさっきのスキルは無しで、それ以外は積極的に行くこう」

先程と同じフォーメーションでモンスターの方へ進んで行く。

「やっぱり竜か……」

「ちよつとサイズは小さいけど火竜ね」

「おそらく火竜の下位種だろうな」

ダンジョンの中で進む先が一際明るくなっており、その光源の元になっっているのが四体の火竜。

身体に至る所から炎が立ち昇っており、その炎に照らされて竜の周辺だけが明るくなっている。

俺はあいりさんと目配せをして火竜に向かって走り出す。

火竜に警戒しながらも一気に距離を詰め『ドラグナー』を放つが蒼い閃光を放った銃弾が火竜の頭を完全に撃ち抜いて消滅に追いやる。

「え……」

頑強で怖そうな火竜だったが『ドラグナー』の一撃で倒す事が出来てしまった。

先程のワイバーンの時にも威力が増しているのを感じたが、もしかしてそういう事か？

恐らく俺の魔銃『ドラグナー』の名前の由来はドラゴンだろう。

特にドラゴンを想起させる様なデザインでも無いのに、この名前なのは意味があるのでは無いだろうか？

つまり『ドラグナー』はドラゴンに対して特攻を持っているのでは無いかと思う。

多分、火竜とワイバーンへの二回の使用による威力の向上を見る限り間違いない様に思える。

「あいりさん、フォーローに入ります」

俺はすぐにあいりさんの方へと走り出してフォローに入ろうと背後に陣取るが『ドラグナー』にドラゴンへの特攻があるかも知れないと思い、再度その効果を検証すべく、火竜の頭を狙い後方から『ドラグナー』を放った。

先程同様に蒼い光を放った銃弾は一直線に火竜の頭を捉え、そのまま破壊した。

もう、間違い無い。

完全に他のモンスターに使用した時よりも威力が跳ね上がっているのが分かる。

「海斗、助かったが火竜を一撃って凄く無いか？」

「はい、俺もそう思います」

実質一撃で仕留めてしまったので、俺が一番先に戦闘を終えたが、ベルリアとシルは、まだ火竜と交戦している。

「ご主人様が先に戦闘を終えられた様です。これ以上、あなたを相手にグズグズしているわけにはいきません。もう消えてください。

我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

┌

シルが神槍を発動して火竜に攻撃を仕掛けると、当然の様に一撃で消滅に追いやる事に成功した。

やはりシルの攻撃力の前には特攻とか関係ない。シルの一撃は全ての敵に対して絶大な威力を発揮するな。

第544話 特攻（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第545話 炎の息

ベルリアは火竜と近接戦を繰り返して、火竜が噛みつき攻撃を繰り返しているがベルリアはそれを上回る速度で回避を続け、すれ違いざまに斬りつけてダメージを与えている。

火竜の鱗が至る所剥げ落ち、切り口からは血が滴り落ちている。

「私が最後になった様なのでそろそろ終わりにしましょうか」

ベルリアが刀を振りかぶった瞬間火竜が口をベルリアに向けて思いっきり開いた。

「あつ……」

ここから見える火竜の口の中には、真っ赤に燃え盛る炎が渦巻いているのが見てとれ、次の瞬間、地響きの様な音と共に大量の炎がベルリアに向けて吐き出された。

「ファイアブレス……」

火竜による本物のファイアブレス。

当然俺の殺虫剤ブレスに引火させたのとは比較にならない量の炎が火竜の口から放射線状に放たれた。

「ベルリア！」

近距離からファイアブレスを放たれたベルリアは、上空へとジャンプしてファイアブレスを避けて、そのまま回転斬りに持ち込み火竜

の首を撥ねた。

「ベルリア、大丈夫か？」

「はい、全く問題ありません。蜥蜴の炎など恐るるに足りません」

「けど良く躲せたな。火竜がファイアブレスを吐くとは思って無かったよ」

「まあ、少し驚きましたが問題ありません」

正直俺だったらやばかったな。

あの戦いの最中に近距離からファイアブレスを放たれて避けるイメージが湧かない。

人間である俺では、ベルリアの様に上空へと数メートルジャンプする事は出来ないし、放射線状に放たれたブレスには逃げ場が無い。マントの耐熱性に期待したい所だが、あの熱量の炎は流石に防ぐ事は出来ない気がする。流石に本家本元だけあって他のモンスターのブレスと迫力が違う。掠った程度ならなんとかなるかもしれないが、もろにくらえばただでは済まないだろう。

「ベルリア、流石だな。俺はこの後の対ドラゴン戦を考え無いといけないよ。ブレスを放つ相手に至近距離まで近づく勇氣がない」

「それは私もだが、近づかずに倒し切ることは出来ないからな。口を開けた瞬間『アイアンボール』を叩き込むしか無いな」

「あいりさん『アイアンボール』で防げなかった時にやばいですよ」「その時はベルリアに治してもらおうよ」

仮にベルリアが治せたとしても、あの炎に焼かれると思うと背筋が寒くなる。

「まあでも、次からは極力距離を取って様子を見ながら戦いましょう。ミクとスナッチも援護を頼むな」

俺としては、さっきのファイアブレスを見て攻撃は遠方からの『ドラグナー』による攻撃で仕留めるの一択だが、それだけではどう考えてもMPがもたないので接近戦も視野に入れざるをえない。

「次は、ルシエもいつてみるか。暇だろ？」

「あんな灯火程度でビビってるんじゃないぞ！ 本物の炎との違いを見せてやる」

「ああ、期待してるよ」

魔核を回収して進むが鬼の魔核よりは少し大きいのと色が少し濃い気がするので一個二万円ぐらいはすると思われる。

最悪、霊薬の類がドロップしなかった場合はオークションでの買取も視野に入れる必要があるので、お金はいくらあっても困らない。

ただ、全員でかかったとしても数億以上のお金を確保する事は容易では無いので高額ドロップは必須だろう。

その上でヒカリンのご両親と相談してお金を用立てて貰えばなんとかなるかもしれないが、現在の俺の所持金では全てを注ぎ込んでも購入額の一割にも満たないだろう。

何となくドラゴンといえば財宝を貯め込んでいるイメージがあるので、出来る事なら金持ちドラゴンにこの階層で遭遇する事にも期待したい。

第545話 炎の息（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第546話 地竜

俺達は順調に十七階層を進んでいる。

火竜を退け、マツピングを続けているが俺の言葉に発奮したのかルシエも先頭に並んで歩いている。

「せっかく、わたしがやる気を出してやってるんだから、蜥蜴も早く出てこいよ」

「ルシエ、それは仕方がないだろう。ドラゴンにルシエのやる気は伝わらないって」

「そうですねルシエ、焦らなくてもすぐに現れます。油断してトラップにかかったりしたら大変ですよ」

「シル……それは……だめだ」

余計な事を言っではいけない。全ての不幸は俺に降りかかってくる可能性があるのだから、そういうのは無しでいこう。

俺はシルの余計な一言に怯えながらもみんなと一緒に先へ進んで行く。

「ルシエ、準備してください。モンスターですよ。三体いるのでルシエと私で一体ずつですね。ご主人様残り一体をよろしく願います」

「ああ、わかったよ」

「マイロード、最後の一体は私にお任せください。シル姫とルシエ姫が戦っているのに私が戦わないという選択肢はありません」

「じゃあ、任せるよ。ミクとあいりさんも援護に回りましょうか」

珍しく、俺たちの出番は無さそうなので、俺も後方へと移動してモ

ンスターに向かって進んで行く。

「ミク、あれは何ドラゴン？」

「良くわからないけど見た感じアースドラゴンかロックドラゴンって感じじゃない？」

「見たまんまというか適当だな」

奥に見えるドラゴンは全身ゴツゴツした岩の様な物で覆われており、いかにも固そうな感じだ。

「それではルシエ、行きましようか」

「ああ、まかせとけよ。瞬殺だ！」

「ルシエ、あの岩みたいなの焼けるのか？」

「バカにしているのか？ わたしの獄炎に焼けないものなど無い」

岩が焼けるイメージが湧かないが、ルシエが大丈夫と言っているので多分大丈夫なんだろう。

俺は後方から三人の戦闘を見学させてもらおう事にした。

シルとベルリアはドラゴンに向けて走り出すが、やはりシルの方が速い。

ルシエはその場に留まりスキルを発動する様だ。

「お前如きを燃やせないと思われる事が心外だ！ 一瞬で燃やし尽くしてやる。さっさと灰になれ！ 『破滅の獄炎』」

ルシエが真ん中のドラゴンに向けて獄炎を放った。

「ガアイアアアア〜！」

ドラゴンは獄炎に包まれ熱さに悶えて咆哮を上げているが、まだ焼

失してはいない。やはり岩を燃やすのは無理なのか？

「ルシエ、まだ燃え尽きて無いようだけど」

「うるさい！ 黙って見とけ！」

一瞬で燃やし尽くすという訳にはいかないようなので、シル達の方を見ると既に近接戦に入っていた。

戦闘を見ていると二体のドラゴンが口を開いている。

「ブレスが来るぞ！」

火竜同様にブレスを吐くのかと緊張が走るが、口からブレスが放たれる事は無く、代わりに地表が隆起して大きな岩の槍のようなものが何本も現れてシル達に迫るが、シルとベルリアはそれぞれ上空にジャンプして攻撃を躲す。

シルはそのまま翔んで空中に留まり、ベルリアはくるっと回転しながら攻撃の範囲外に離脱した。

「足下を狙うとは、モンスターにお似合いの姑息な攻撃ですね。そろそろ消えて無くなりなさい。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

ラジュネイトが光を放ち、シルが空中から加速して神槍の一撃をドラゴンに放つと、ドラゴンの岩のような外皮は砕け散り、背中に大きな穴を開けて消失した。

シルの空中からの神槍は初めて見たかもしれない。

だが、思った通りシルにはドラゴンの外皮が岩だろうが、そんな事は全く問題ではなかったようだ。

第546話 地竜（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第547話 ローストドラゴン

残るドラゴンは後二体。

その内一体は絶賛燃え尽き中なので実質残るは後一体。

ベルリアもドラゴンによる攻撃をジャンプで躲して空中から『ヘルブレイド』を放つ。

『ヘルブレイド』は、炎の魔刀の力を吸収している様で、黒く燃え上がった斬撃がドラゴンに向けて放たれた。

「ガアアアッ！」

ベルリアの放った一撃はドラゴンの右肩口に命中し、岩のような外皮を砕き大きなダメージを与える事に成功したようだ。

肩口を大きく抉られたドラゴンはバランスを崩して崩れ落ちた。

着地したベルリアが一気に加速してドラゴンに接近して斬りつける。やはり見た目通り外皮の防御力は高いようで、魔刀の一撃でも斬り刻むという訳にはいかないようだ。ドラゴンは確実にダメージを蓄積させている。

「これで終わりです。この二刀の前に敵無し！ 『アクセルブースト』」

ベルリアがとどめに必殺の一撃を放ちドラゴンは完全に沈黙した。

「ベルリアやるな。ドラゴンに何もさせなかつたな」

「マイロード、この二刀を賜ったのですからこの程度は当たり前です」

これで二匹は消滅した。残るは……

「ルシエ、まだか？」

「は？ だからもうすぐだって言ってるだろ。男のくせに気が短いんだよ」

「どう考えてもルシエの方が短いだろ」

「あゝ、今じっくりと焼き上げてるんだ。そこでゆっくり見とけよ」

見る限りドラゴンは獄炎に包まれ虫の息だが、一番最初に攻撃した割に、最後まで倒す事が出来ていない。

やはり、このドラゴンと炎は相性が悪いようだが、ルシエは認めようとはしない。

「そろそろかな」

「だから〜うるさい！」

「ベルリアはどう思う？」

「はい、ルシエ姫の完封勝利かと」

「まあ確かに、ドラゴンも全く動けてはいないから完封勝利には違いないけど、ちょっと遅くないか？」

「いえ、じっくりと油断せず確実にしとめている結果かと」

「ものは言いようだな」

「くっ！ 殺されたいのか？」

今までのように燃え尽きる事が多かったので気がつかなかったが、どうやらルシエの獄炎は基本敵が燃え尽きるまで消える事は無いようで、今も凶悪な炎が燃え盛っている。

「あ……」

目の前で燃えていたドラゴンがついに事切れたようで消滅してしま

った。

「ふんっ！ どうだ海斗！ 見たか！」

「ああ、じっくり見たよ」

「ルシエ姫流石です。このベルリア、ルシエ姫の獄炎の威力に感服いたしました。じっくりと焼き上がる仕上がりが素晴らしかったです。シル姫も見事な一撃でした。空中から正に一撃必殺。瞬殺でしたね」

「ベルリアも上手く倒せたようですね」

「はい、ありがとうございます」

「おい！ ベルリア〜！」

「はい！」

「バカにしてるのか。お前も燃やして欲しいんだな。いい機会だ獄炎の威力を直に体験してみろ！」

「ルシエ姫、それだけはお許してください」

「ルシエとベルリアは仲がいいですね」

「シル！ これはそんなじゃないぞ」

今回のドラゴンだが最初の火竜よりも俺たちのパーティにとっては難敵だったのは間違いない。

俺の『ドラグナー』とあいりさんの『アイアンボール』ならあの外皮をいけるか？

「ルシエ、次同じ敵だったらどうする？ 俺がかわるうтка？」

「ふざけるな！ わたしがやるに決まってるだろ。今度の蜥蜴は瞬殺してやる」

「じゃあ、まあ、頼んだ」

「ふん！ それよりいつまで待たすんだ。早くくれよ」

「あゝ、そうだな。今回は獄炎一発だけだから魔核は一個だぞ」
「くっ……」

無事に三体のドラゴンを倒す事に成功したので、俺はマジック腹巻きから取り出してベルリアを含む三人にスライムの魔核を一つずつ渡した。

第547話 ローストドラゴン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第548話 油味噌

岩のような外皮のドラゴンを倒してたので一息つく。

「この辺りでお昼ご飯にしようか」

「そういえばお昼まだだったわね」

「ああ、そうしよう」

お昼を過ぎてから潜り始めたので時刻としては既に夕方が近づいている。

ただメンバー三人共がヒカリンの事で頭がいっぱいになり、まだお昼ごはんを食べていなかった。

俺は腹巻きから、コーンマヨネーズパンと油味噌のおにぎりを取り出して食べる準備をする。

「海斗、そのおにぎりって初めて見るけど油味噌ってなに？」

「俺も去年初めて食べたんだけど、この油味噌って沖縄では一般的なみたいなんだ」

「油で出来た味噌なの？」

「甘辛な味噌で、なんで油味噌っていうのかは俺もわからないけど、ご飯のお供って感じですごく美味しいんだよ」

「へっつ。今度私も食べてみようかしら」

「ああ、これはかなりおすすめだよ。最近コンビニでも時々売ってるから」

「コンビニか〜私コンビニにあまり行かないのよね」

「……ああ、そう」

去年から俺がハマっているのが油味噌のおにぎりだが、通年の定番

という訳では無いのか、去年見かけて食べ始めたのだが、春から夏にかけて頻繁に食べていたのいつの間にか姿を消していた。残念に思っていたら、今日また発売されているのを発見して、即買ってきたのだ。食べてみると、去年食べていたのと同じ味がしてやはりご飯が進む。

「あいりさんは食べたことありますか？」

「ああ、おにぎりじゃなくて瓶に入ったのを食べた事があるよ」「瓶に入ったやつですか？」

「ああ、以前沖縄にデモンストレーションに行った事があって、その時にもらった事があるんだ。アツアツのご飯に乗せて食べると美味しいよ」

「へっつ、食べてみたいですね。沖縄ですか〜いいですね。俺は残念ながら行った事ないです。沖縄といえはやっぱり海ですよね。魚の群れとかと一緒に泳いでみたいですね」

「私は泳がなかったけど、聞いたところによると地元の人でも泳がない人は結構多いみたいだぞ」

「え？ そうなんですか？ 勝手に海は友達みたいなイメージでしたけど」

「あんまり泳がない上に、女の人が泳ぐ時は水着じゃなくて普通に服を着て泳いだり、海でバーベキューをしたりする方が多いって言うってたな」

「服を着て泳ぐんですか？」

「理由までは聞かなかったが、日焼けとクラゲ対策じゃ無いか？ 水着を着ているのは観光客が多いって聞いたな」

俺の勝手なイメージは透き通る青い海と大自然で、地元の人もビキニを着て南国の感じで楽しんでるイメージだったが、あれはテレビによる作られたイメージなのだろうか？

「でも海でバーベキューって大らかな感じがしていいですよね」

「いや、それもビーチとかじゃなくて、ビーチの一角にバーベキュー専用の建物とかがあって場所によっては鉄筋コンクリートの二階建てのところまであって、バーベキューセットの貸し出しや、ビールサーバーの貸し出しまであるそうだ」

「そうなんですか？ こっちではそんなビーチ無いですよ。流石にビールを飲んで泳ぐのは無理っぽいですね。やっぱり行ってみたいと知らない事だらけですね」

「多分観光客はあまり行かないんじゃないかな。地元の人が楽しめるんだと思うよ」

「沖縄いいですね。受験が終わってヒカリンが良くなったらみんなで行ってみたいですね」

「海斗」。みんなの水着姿とか想像してるんじゃないの？」

「いやいや、バーベキューだって」

「でも、来年みんなで行けるといいな」

「そうですね。絶対大丈夫ですよ」

「春香も誘わないと、殺されるわよ」

「いや、俺達はまだそんな関係じゃ……」

「海斗、来年の夏までには頑張れ」

「はい……」

春香と沖縄に旅行か。考えた事も無かったけど行けたら最高だな。

海でバーベキューして油味噌でご飯を食べる。ああ沖縄といえばステーキも食べたいな。

俺が思いつくのは食べ物ばかりだな。

昼ご飯が遅かったせいで、まだお腹が空いているのかも知れない。

第548話 油味噌（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第549話 竜人

よくファンタジー物でドラゴンの素材を手に入れて、超強力な武器や防具を作る設定があるが、これは残念ながら余り現実的では無い気がする。

とてもじゃないがあの岩のような外皮で鎧は無理だし、火竜にしても剣で切断出来たので普通にナイトプリンガーの方が硬い。

牙や爪にしてもバルザードで断ち切る事が出来るので、武器の強度としても劣っていると思う。

そもそも、素材を加工して武器に仕上げてくれるような人がいるのかどうかもわからない。だいたい曲がった牙や爪が剣とかの武器になる理屈もよくわからないのでたとえ素材がドロップしたとしても売却する以外には無いだろう。

現実とファンタジーはやっぱり少し違う。

俺達はどんどん奥へと進んでいる。

「ご主人様、敵が五体です。数が多いのでご注意ください」

「五体か。ミク以外は全員前で戦おう。ルシエいけるよな」

「海斗、殺されたいんだな。敵のついでに燃やすぞ！」

まあ、この様子なら相性が悪くてもどうにかするだろう。

進んで行くと奥にはドラゴンがいるだろうと思いついていたが、そこにいたのは人型のモンスターだった。

「リザードマンか？」

「角も生えてるしちょっと違うんじゃない？」

「あれはおそらくドラゴニユート。竜人だ」

「竜人ですか。リザードマンに角が生えただけですかね」
「いや、蜥蜴と竜の差が明確にあるはずだ。能力もそれに比例しているはずだ」

見た目はリザードマンによく似ているが小さな角が二本頭から生えている。ある意味鬼化したリザードマンといった風貌だ。

ドラゴニユートがこちらを指差して何かを話している。
どうやらあちらも俺達の事を認識したようだ。

大型のドラゴンの相手では無いので、『ドラグナー』では無く、バルザードを構え氷を纏わせてから、ナイトプリンガーの効果を発動して気配を薄めて、ドラゴニユートに向けて走り出す。

俺と並走しているのはベルリアか。残りのメンバーはどうやら敵を迎え撃つことにしたらしい。

ドラゴニユートも一斉にこちらに向かって来る。俺がターゲットに捉えた相手の手に持っている武器は金属の六角棒。
すぐに距離は詰まり俺は魔氷剣を振るう。

「キーン」

金属音と共に俺の放った魔氷剣の一撃は相手の六角棍に止められてしまった。

こいつ俺を認識している。

続けて剣を振るうがまた棍で止められてしまった。ドラゴニユートは俺の剣を受けてからクルツと棍を反転させて、俺に攻撃を加えてきたので、今度は俺が魔氷剣で棍の一撃を受けるが、受けた瞬間、俺の腕にはズシンとした重み加わり受けた剣が弾かれてしまった。

「うおっ!」

慌てて立て直し次の一撃を防ぐが、やはりパワーはドラゴニユートに分があるようで、また剣を弾かれてしまった。ドラゴニユートは、今の斬り合いで自らの優位を悟ったのか、一気に攻勢に出て来て、棍を回転させながらどんどん打ち込んでくる。

「くっ……」

まずい。このままだと押し切られる。

完全に近接戦闘のパワーとスキルが俺を上回っている。

いきなり追い詰められ、劣勢に立たされた瞬間スイッチが入り、俺の眼にドラゴニユートの棍の連打がスローに映る。

ドラゴニユートの棍の攻撃を見切り、後方へと避けるが俺の動きも遅い。

この状態を半覚醒とでもいうのだろうか？

十六階層のボス部屋とは違う覚醒の仕方だが、この方が身体への負担は少ないはずだ。

俺の動きが早くなった訳では無いので、視覚から入る情報に対して頭の回転を早めて先手を取るべく動き出す。

第549話 竜人（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第550話 ドラゴニユート

俺は迫りくるドラゴニユートの棍の攻撃を見極めて後方へと避ける。他の四人もそれぞれ戦いに入っていた。

ベルリアは俺とほぼ同時に戦闘に入り、ドラゴニユートと斬り合っているが、二刀を操るベルリアが、圧倒的に押ししている。

ベルリアはドラゴニユートの強烈な一撃に押し負ける事も無く、一刀でさばいて

残るもう一刀でドラゴニユートの外皮を削りダメージを与えている。

「やりますね。だが二刀の魔剣を操る私の敵ではありません」

ベルリアの攻撃が勢いを増し、ドラゴニユートの身体からは青い体液が噴き出している。

劣勢に見えたドラゴニユートは口を開いたと同時に口からファイアボールをはきだした。

「流石は蜥蜴ですね。口から火を吐くとは思いませんでしたが、口の中は焼けないのですか？」

ベルリアが華麗に宙を舞いファイアボールを避けそのまま脳天に魔刀を突き刺した。

他の三人は、迎撃態勢に入り少し遅れてから戦闘に入った。

あいりさんは薙刀で相手の棍に対し先手を取るべくいきなり『ダブル』を使用して、一撃を叩き込んだ。

「流石はドラゴニユート、外皮が硬いな。もう一回だ『ダブル』」

再びあいりさんが2度目の『ダブル』を放ち手傷を負わせる事に成功した。

やはり初見であれを見破る事はまず出来ないだろう。

追い詰められたドラゴニユートの首をベルリアの時と同様にファイアボールを放つべく口を開いたがその瞬間

『アイアンボール』

ドラゴニユートは開いた口の中に鉄球がめり込んで摔倒し、あいりさんがそのままドラゴニユートの首を落とし消滅させた。

ルシエはドラゴンが炎耐性が強い事を警戒してか『破滅の獄炎』では無く『侵食の息吹』を発動してドラゴニユートの様子を見ている。

「がhあ jあ aか kああ〜」

ドラゴニユートが理解出来ない声を発して苦しみ始めた。

「ふん、所詮蜥蜴だな。炎は耐えれてもこれはダメみたいだな。さつさと溶けて無くなれ」

しばらくすると、理解不能な言葉と共にドラゴニユートの身体が溶け始めて崩れて消え去った。

「口ほどにもなかったな」

一方シルは戦いにもならなかった。

「あなたなどに時間を使っている場合ではありません。今すぐ消えてください。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

速攻で神槍の一撃を叩き込み一瞬のもとに消滅させてしまった。

「神槍の敵ではありませんね」

結局のところ俺が一番苦戦している様だ。

ドラゴニユートと斬り合っているが思いの外、棍の攻撃に手こずってしまい、決定打を放てていない。

「海斗避けて！」

ミクの声が聞こえた直後に、後方から雷の槍が飛んできてドラゴニユートの胸に突きささった。

「ガアアア……」

これで決まったか？

俺はそのままドラゴニユートの様子を確認するが、どうやらまだ致命傷には至っていないものの動きは完全に止まっている。

俺は、チャンスを逃さず、すぐに踏み込んで魔氷剣でドラゴニユートにささっている雷の槍のすぐ横を貫いた。

雷の槍と氷の刃がささったドラゴニユートは絶命しすぐに消滅した。

「ミク、助かったよ。それにしても口からファイアボールを吐くとは思わなかったな」

「私はベルリアので、わかっていただけから対処できたよ」

「俺は、もしノーマークで吐かれていたら危なかったですね。人型が口から炎を吐く発想がなかったです」

「やはりドラゴニユートは人型でもドラゴンの仲間という事だろう」

ドラゴニユートは、鬼とは勝手が違い、棍での攻撃に俺は結構苦戦

してしまっただが、他のメンバーは、案外通常のドラゴンよりもあっさり倒せてた感じだったな。
やっぱり相性もあるのかもしれない。

第550話 ドラゴニユート（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第551話 さりげなくない催促

ドラゴニユートを倒した俺達は、そのあともう一度ワイバーンとの戦闘を行い、初日の攻略を終了した。

「今日はこれで切り上げましょうか」

「早くない？ もう少しいけると思っただけど」

「焦る気持ちはわかるけど、初めての階層だから無理は禁物だ。思ってるより疲労が溜まってるはずだから」

「そうだな、海斗の判断が正しいだろう。竜との戦闘はそれほど楽なものではないからな。ヒカリンがいれば融合魔法で竜を倒すシーンを見たかったところだな」

「それってあれですよね」

「ああ、あれだな」

「やっぱりあいらさんアニメ好きなんですね」

「それほどでもないよ」

俺は探索終了後にシルの『祈りの神撃』発動時に消費したマジックポーションを買いにダンジョンマーケットに向かい補充した。味の事を考えて中級マジックポーションにも心惹かれたが、結局は値段に勝るものは無く低級マジックポーションを購入した。

今日、半日の間十七階層を潜って見て、各メンバーのレベルアップと後衛のミクが『サンダースパ』を使えるようになった事で、ヒカリン抜きでも十分探索が出来るという感触は掴めた。

ただ、今日も特別探索のペースが特別早かったわけではないので密かに焦りを覚えている。ゴールデンウィークを探索に当て込めば、多少は距離を稼げると思うが、一ヶ月間にパーティで潜れる日数はおよそ十日程度。果たしてこの階層を十日で攻略できるかと言われ

れば、今日の感じで行くとかかなり厳しい気がする。

「どうするか〜」

ヒカリンの状態を考えると少しでも早く攻略したい。

平日俺だけで潜るか？

恐らくサーバント達がいるのでやってやれない事は無いと思うが、極端にペースが落ちるのは間違い無く、マッピングが進むかと言われれば疑問が残る。

放課後の僅かな時間だけでは、土日に進んだルートをトレースするだけで終わる可能性が高いだろう。

他のメンバーにはまだ相談していなかったが、第三の選択肢として一階層のスライム狩りにかけるというのもありかもしれないと密かに考えている。

俺の全ての始まりである一階層でのスライム狩り。そして一定の確率で現れるメタリックカラーのスライム。

あいつであればドロップに霊薬が出る可能性は十分にある。

たとえ霊薬が出なかったとしても、高額ドロップが出る可能性は高いので、霊薬の購入代金を稼げる可能性はある。かける価値は十分にあると思う。

ただ、メタリックカラーのスライムがエンカウントする為の必要数がパーティ全体に適用されているのかがわからない。

わからない以上、全員でスライムを狩る意味があるのかもわからない。

「やっぱり俺はスライム狩りに励むか」

今考えられる結論としては、土日は十七階層の攻略を目指し、平日はメタリックカラーのスライムを目指してひたすらスライムを狩るしか無い。

今後の事をいろいろ考えながら、家に戻ると今日の晩ご飯はハヤシライスだった。

おいしいのは間違い無いが、カレーとハヤシライス。やっぱり味は違っても具が一緒なのでそこまで新鮮な感じはしない。

そろそろ、焼肉かしゃぶしゃぶが食べたい。

今度帰りにスーパーに寄って自分のお金で肉だけ買ってこようかな。

「海斗、あんたゴールデンウィークの予定とか考えてるの？」

「ずっとダンジョンに潜ると思う」

「母さん、最近腰が痛いよね」

「ふん」

「どこかにいい温泉とか無いかしらね」

「スーパー銭湯とか行けば？」

「やっぱり、泊まりでじっくり湯治したりしたいわよね」

「そうなんだ」

「この前の旅館よかったわよね」

「ああ……」

「ゴールデンウィークは空いてないのかしらね」

これはそういう事が。

「いや、ゴールデンウィークは俺は無理だから父さんと二人で行けるところ探しくよ」

「えゝ悪いわね。でも高いところはお金がちょっと……」

「ああ、そのぐらい俺が出すから二人で行ってきてよ」

「本当に？ 悪いわね。孝行息子を持って幸せだわ」

これほど露骨な催促も珍しい気がするが、まあこのぐらいはいいかな。今月はスライムの魔核でそれなりに稼げそうだしな。

でもゴールデンウィークの温泉宿って高そうだ。

第551話 さりげなくない催促（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第552話 あ の 魔 戦 斧

「おはようございます」

「おはよう」

「ああ、海斗おはよう」

俺はミクとあいりさんに朝の挨拶をして、すぐに三人でダンジョンへと向かう。

十七階層へ飛んでから、とりあえず昨日最後にマツピングしたところまで向かうために進んでいく。

途中で昨日出現したドラゴネットと火竜に遭遇し、交戦したが、昨日である程度勝手が分かっているので、火竜に対しては遠慮なく離れたところから『ドラグナー』を放ち倒す事が出来た。

「ここが昨日の地点ですね」

「それじゃあ、ここからは注意しながら進みましょう」

「思ったよりスムーズに来てる。このままのペースで行こう」

俺達は緊張感を保ちながら先に進むことにする。

「オラ〜！ 死ね〜！」

「しつこいんだよ『バーニングエッジ』」

しばらく進んでいると、奥から人の声が聞こえてくる。

「これって……」

「ああ、別のパーティが戦っているようだな」

「珍しいわね」

もちろん十七階層で他のパーティに会うのは初めてだ。広大なダンジョンで、探索中に他のパーティと出会う事は稀だ。俺達が声のする方に進んで行くと地竜と他のパーティが交戦していた。

戦っているのは六人パーティで男四に女二の構成だ。

「冬彦さん、こいつ硬いですよ。俺の剣が欠けちゃいそう」
「泣き言いうな！ 『バーニングエッジ』」

さっきの声の人はこの人か。ブロードソードに炎を纏わせ地竜に斬りかかっている。

地竜は三体なので男四人が前衛で当たり、後衛の女性二人が魔法を放っている。

「さっさと消えてよ『ファイアスピア』」
「いや〜ん、この子達魔法が効きにく〜い『アースハンマー』」

約一名変なのが混じっているようだが、後方から攻撃魔法を発動して地竜にダメージを与えている。

「都ちゃんありがとう〜『アイアンナックル』」

さっきの援護に対するお礼だと思うが大柄の男がスキルを発動して拳で地竜を殴りつけた。

「すごいな」

俺にはとても真似できない芸当だ。

竜に近接して直接殴りつけるとは、相当勇気のいる行為だが、サイ

ズが違うので致命傷を与えるには至っていない。

「オラ〜退け〜！」

前衛の男の一人が戦斧で斬りかかるが、その瞬間戦斧から冷気が立ち昇り氷の刃を突き立てた。

「ミク、あれってもしかして……」

「海斗もそう思う？」

「ああ、間違い無いな。魔戦斧である特徴的な形」

やっぱりそうだ。あの人の使っている戦斧は俺達がおっさんに売った戦斧に間違いない。

先週仕入れてもう売れたのか。

思った以上にあのおっさんやり手だな。

どうやらあの戦斧は氷を纏うらしいが、魔氷剣よりも纏う氷はかなり薄い感じだ。

完全に被っているので売却したのは正解だったようだ。あの戦斧も死蔵されるより、こうして使ってもらえて本望だろう。

「まだまだいくぜ〜！オラ〜！」

かなりテンション高めの人のようで大きな声を上げながら、戦斧でガンガン斬りつけている。

流石に魔戦斧で斬られた部分の外皮は傷つき血が流れている。

「俺相性悪すぎ。刃が通らないよ。みんな任せたよ」

一人槍使いの男が音を上げているが、確かに強化系スキルか何かがないとあの外皮は手強い。

「涼ふざけんな、あんた撃つわよ」

「そうはいつても俺の攻撃じゃ、無理っばいんだって」

「涼さん、生贄になってください」

あの男の人不憫だな。仲がいいのかもしれないが側から見ると虐待のようにも見えてしまう。

「梨花ちゃん、キツいって。生贄って一回なったらもう復活できないでしょ。ちよつと無理」

「涼！ 無駄口叩く暇があったらおとりぐらいやれよ」

「はいはぐい。ドラゴンちゃんこっちですよ。はい、こっち」

あの人の足速いな。

普段からおとり役をやっているのだろうか。なんとなくあの人には頑張って欲しい。

第552話 あの魔戦斧（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第553話 戦い方

地竜と他のパーティの戦闘はまだ続いている。

「こいつら硬すぎだろ。まだ一体も倒せね〜」

「涼出し惜しみすんな。さっさとやれ！」

「はいはい。わかりましたよ〜」

涼と呼ばれる男が手にしているのは銃の銃身を馬鹿でっかくしたような武器だ。

あれはグレネードランチャー？

「援護するわ『ファイアスピア』」

後衛の女の人が魔法を発動し、その間に涼と呼ばれた男の人が地竜との距離を詰めて、三メートルほどの距離まで近づいた瞬間グレネードランチャーを放った。

『シユポン』

余り聞いたことのない発射音と共に弾が放たれ地竜に当たった瞬間に弾が爆発した。実際には爆発したのとは少し違うかもしれないが爆発したかと思うほどの威力を発揮して、地竜の外皮を大きく抉っていた。

「すごいな……」

初めて見るグレネードランチャーの威力に驚いたが、槍では無理で

もあれなら地竜相手でも十分いける。

「涼、ナイスだ『バーニングエッジ』」

大きく抉れた場所を狙い、メンバーの一人がスキルを発動して攻撃をしかける。

燃え盛る刃が肉を焼き、地竜を消滅へと追いやった。

「よっしゃあ！ 一体しとめた。あと二体だぞ」

「俺も負けてられん！ 『アイアンナックル』 あゝやっぱり硬い…
…。しょうがない俺も使うぜ！」

そう言つて男は何かを地竜の下に投げ込んで、後方へと下がった。

「わたしにまかせて〜 『アースハンマー』」

後方の都さんと呼ばれた女の人がスキルを発動して地竜をその場にとどめ置く。

「ドガアアア〜ン」

次の瞬間、激しい炸裂音と共に地竜の下が爆ぜた。

「な、なんだ？」

スキルは誰も使つて無かつた。とすればさっき投げ込んだやつか。手榴弾とか投げ込み式の爆弾とかか？

地竜も腹の部分は弱いのか、フラフラしながらその場に倒れた。

「今だ〜！ 『バーニングエッジ』」

「俺もやるぜ『アイアンナックル』」

「これで終わりよ『ファイアスピア』」

「俺も一撃。そりゃ〜」

倒れた地竜に向けて四人が一斉に襲いかかり、程なく地竜は消滅した。

「後はこいつだけか。オラ〜くらえ!」

戦斧使いの男が蓮撃を加える。硬い地竜とあの魔戦斧の相性がいいようで、一人でも渡り合う事が出来ている。

「よし、みんなでやるぞ!」

残りのメンバーも集結して四人で最後の地竜を取り囲み、四方から攻撃を仕掛けるが、地竜が反撃しスキルを発動して周囲の地面が隆起し、メンバーを傷つけようとする。

「危ない! 近づくとヤバイね」

「くっ……危うくやられるところだったぜ」

「油断したらやばい」

「近づけないけど」

四人とも察知して効果の範囲の外まで離脱したようだが、距離を取れば直接攻撃をかける事が出来なくなる。

「涼さん。もう一発行きましょうよ〜」

「え〜また俺? 弾も結構するんだよ」

「涼! 早くしなさいよ。燃やすわよ」

やっぱりあの後衛の女の人は怖い人だ。

「わかったよ。じゃあ行くよ〜」

再び涼という人がグレネードランチャーを構えて放つと、先ほどと同じように弾が発射され着弾と共に地竜の外皮を大きく抉った。そこからは一瞬だった。

「オラ〜死ね〜！」

「俺もとどめを！」

二人が傷口目掛けて攻撃を突き入れ、あっという間に消滅までもっていった。

「終わった〜」

「強かったな〜。固すぎるよ〜」

「こいつらまだ下っ端だぜ。これで苦労してちゃ先に進めね〜」

「まあ、倒せてよかったよ」

順調に地竜を倒せたようだが、今回の戦闘の一番の印象は、物理的兵器の火力がすごいという事だ。

スキルや魔法でダメだった地竜の外皮を穿った。

俺達のパーティは余り、物理的火力は使わないが、これだけの威力があるなら検討の余地は十分ある気がする。

第553話 戦い方（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第554話 一緒に進む

物理的火力の有用性を見せつけられたが、サーバントのいないパーティの火力不足も同時に感じる事となった。

結局、スキルや魔法だけでは地竜を消滅まで持っていけなかった。これはかなり厳しい。

俺達とは根本的に戦うスタイルが違う気がする。

スキルや魔法で足りない部分を高火力の物理的な武器で補って戦う。俺達は、自分達の足りない部分をサーバントで補いながら戦っている。物理的火力は圧倒的に目の前のパーティが上だ。

「あれ？ 君達いつからそこに？」

「あゝ探索してたら皆さんの戦っている声が聞こえて来て、それで見学したら戦闘が目に入ったんで、見学させてもらってました」

「ああ、そういう事か」

「あれゝ君達のパーティみんな若いわねゝ。しかも少女と幼児が混じってるじゃない。きゃゝカワイイゝ！」

「本当だ！ でもここにいてるって事はサーバントなのよね。人型のサーバントが三体って凄くない？ もしかして超お金持ちパーティ？」

女性陣に変な風に誤解されている気がする。

「いや、そういうんじゃないです。それじゃあ俺達は先に行きますので、これで」

余計なトラブルを生まない為にも長居は無用だ。

「ごめんね。怒った？ 別に悪気はないのよ」
「お前ら、その若さでこの階層に来てるって事は、かなりの實力だろ。良かったら俺達と一緒に行かないか？ 俺達もここから先は初めてなんだ」

男性メンバーからの突然のお誘いだ。

誘われるのは初めてだが、悪くないかも知れない。

さっきの戦いを見たが、この人達もかなりの実力者だ。一緒に回ればその分先に進めるのは間違いない。

問題は俺達の手の内を見られてしまう事だが、さっきの戦いで彼らの手の内を勝手に見てしまったので、それをいうのはフェアではない気がする。

俺はミクとあいりさんに視線を向ける。

「私は海斗に任せるわ」

「私も同じだ」

「わかりました。それじゃあ今日一日だけ一緒にいていいですか？」

「おお、そうこなくちな」

こうして思いがけず、他のパーティと同行する事になった。

「じゃあよろしくな」

「はい、お願いします」

それから一緒に移動する事になったが、一緒に行動してみて、まず気がついたのは、俺達以上に移動中気を使っているという事だ。

全方向に対応できるようフォーメーションを組み、レーダーを使って進んでいる。

俺達はシルがいるのと、罨があってもサーバントがいるので何とかなるだろうというのもあり、そこまで移動に神経を尖らせる事は稀

だが、シルのいない彼らは常に神経を張り詰めているようだ。移動だけでも俺たち以上に消耗しながら進んでいると思うが、彼らは手慣れたもので平気な顔で進んでいる。

「じゃあ、高木さんとミクちゃんは高校生なのか！」

「はい、そうです」

「マジか！ ヤングだな」

…………… ヤング

「という事は土日だけ潜ってるのか？」

「基本的にそうですね」

「すごいな。週末の兼業で十七階層か！」

「いや、それほどでも」

「それじゃあ、昨日から泊まり込みか」

ああ、そうか。普通は泊まりじゃないとここまで来れないもんな。

「まあ、そんなところです」

「帰りはどうするんだ？ 学校大丈夫なのか？」

「転移石があるので」

「おお、さすがに兼業だとそうなるよな」

「出費は痛いですけど、学校を休むわけには行かないんで」

「愛理ちゃんも学生だもんな。それにしても高木くんやるなあ」

「何がですか？」

「こんな可愛い子達を連れて両手に花だな。正にハーレムパーティ

……………」

「冬彦！ 失礼なことばかり言っていると燃やすわよ」

「はい……………」

やっぱり、この女の人怖いかも。

第554話 一緒に進む(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第555話 共闘？

恐怖の女の人の名前は凜子さんというらしい。

パーティーリーダーは『バーニングエッジ』を使用していた冬彦さんらしいが力関係でいうと凜子さんが一番強いらしい。

既に今日で三日間ダンジョンで寝泊まりしているプロ探索者だそう
だ。

やっぱりこのぐらいの階層になると日帰りは難しいようだが、三日間も潜りっぱなしとは凄い。

「それにしてもよ〜。シルちゃんにルシエちゃんか〜。ヤベ〜な。可愛すぎるだろ〜」

「剛さ〜ん、へんな事しちゃダメですよ〜」

「いや、俺そういう趣味は全くなかったんだけど、二人を前にすると目覚めそうで怖えよ」

「おい！ 調子に乗ると燃やして消し炭にするぞ！」

「あ〜、マジでやべ〜。Sロリやべ〜」

「それはそうと、剛さんの戦斧なんですけど」

「おお、これか！ いいだろ〜。先週奮発して買ったんだ。これでドラゴンも怖くね〜よ」

「良さそうですけど、失礼じゃなければ金額を聞いてもいいですか？」

「おお、ちょっと値引きしてもらったが千百万だったな。お買い得だったぜ。たまたま店で探索者からの買取品を仕入れたらしくてな安く買う事が出来たぜ」

おっさん数日で五百万も儲けたのか。やっぱり、あのおっさん見かけによらず、かなりやり手らしい。

「おい、レーダーに反応ありだ。どうする？」

「数はわかりますか？」

「四体だ」

「じゃあ二体ずつで分けませんか？ 即席で連携は難しいと思うのでそれぞれがいつも通り戦いましょう」

「ああ、それがいいかな」

一応シルにはモンスターの感知はレーダーを持っている冬彦さん達のパーティに任せるように言っておいた。

俺達が全員で進んでいくと、そこにはやはりドラゴンがいたが、今までのとは見た目が違う。

「俺達あれは初めてなんですけど、皆さんはどうですか？」

「あれは水竜だ。ウォーターブレスと表皮を水のベールで覆っているから物理と水と火が効きにくい」

「ありがとうございます。助かりました」

水竜か……。ルシエは難しいかも知れないが、俺達には雷使いが二人いるので、相性は良さそうだ。

それにしても、情報を教えてもらえるだけでも全然違うな。

「それじゃあ一体はシルが雷撃でしとめてくれ。もう一体はミクがいつてみる？」

「そうね。せっかくだからやってみるわね」

シルはすぐさま臨戦態勢に入り雷撃を放った。

「水竜ですね。水は雷を通しやすいものです。ご主人様の前から消えなさい『神の雷撃』」

雷が落ちた瞬間、当然といえば当然のように一瞬で消し炭となり水竜の一体が消えて無くなった。
まあ水でなくともシルの雷撃を耐えるのは至難の技だと思うが、特に水では相手になるはずも無い。

「さすがです。シル様。私も頑張ります『ライティングスピア』」

ミクがスキルを発動すると光の槍が水竜に突き刺さり、その瞬間、水竜の全身が帯電したように煌き、そのまま水竜が硬直したように倒れたが、まだ消滅はしていない。
恐らく全身に電気ショックを与えたような状態となり、感電して倒れたのだろう。

「ベルリアア！」

「マイロードお任せください」

ベルリアアが倒れた水竜に向けて駆け出し、間合いに入った瞬間二刀を振るい首を撥ねた。

「ミクの『ライティングスピア』もやっぱり水系には相性抜群みたいだな」

「そうね、消滅はさせられなかったけど、ドラゴンを一撃で行動不能に出来たのはすごいわよね」

「ああ、十分凄いと思う」

以前のミクの火力からすると考えられないような威力だ。

こうしてシルに続いて、ミクもあつという間に水竜を倒してしまっただが、隣で戦っている冬彦さん達のパーティーは丁度交戦状態に入っ

たばかりだった。

第555話 共闘？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第556話 水竜戦

凜子さんと都さんが後方から魔法を発動して水竜を牽制するが凜子さんの『ファイアスピア』は水竜の水のベールに阻まれてほとんどダメージを与える事が出来なかったようだ。

一方都さんの『アースハンマー』は力押しで水のベール越しにダメージを与える事に成功したようだが、水竜の態勢を崩すまでではない。

後方からの援護が不十分なまま向かって行った男性陣の四人は、結果的にほぼ万全な状態の水竜と正面から組み合う事となった。

『バーニングエッジ』

冬彦さんが炎の刃を水竜に向けるが、凜子さんと同じように水のベールに威力を大きく削がれて、水竜の外皮を貫く事は出来ない。炎をメインに戦う人が二人いるのは、それだけで対水竜には大きなビハインドを背負っているように思える。

「くそっ！ 俺は相性最悪みたいだ。お前ら後は頼んだぞ！」

そう言つて冬彦さんは一步後ろに引いた。

一撃であきらめちゃったのか？

いくらなんでも、あきらめがちょっと早すぎないか？

「まかせろ！ 俺がやってやるぜ！ オラッ！」

剛さんの魔斧が水竜の外皮を削る。

やっぱりあの戦斧、ボス部屋のドロップだけあって結構優秀だな。

剛さんみたいな使いこなしてくれる人に買われてよかった。俺だともう考えても武器に振り回されて使いこなせそうにない。戦斧はやっぱりパワータイプの人に似合うな。

「俺もやりますよ」

「俺も」

残りの二人も、もう一体の水竜に向かって攻撃を仕掛けるが、明らかにあの水のバールを突破するには火力不足に見える。

槍を持った涼さんが牽制しながら、バスタードソードを持った仁さんが横から切りかかっている。

よく見ると仁さんの剣が微かに帯電しているのが見える。

あの剣も魔剣か。雷の魔剣を見るのは、初めてだが、あの感じだとそこまで出力が高いようには見えないので、焦がすというよりも痺れさせる効果とかがあるのかも知れない。いずれにしても水竜には相性がいいはずだ。

「行くぞ！ 『サークルスラッシュ』」

仁さんがスキルを発動して斬りかかると、水竜の外皮が四〇センチ程の円状に抉れた。

『ガアアアアアア！』

水竜が痛みで咆哮をあげた。これは完全に効いている。

仁さんが追撃に入ろうとした瞬間水竜は首を振り、そのまま仁さんに向けて口を開け、ウォーターブレスを放った。

「おおおおっ、やべっ！」

仁さんはウォーターブレスが放たれた瞬間、前方へと飛び込んで水竜の下に潜り込むように転がった。
前方へと飛び込んだが水竜の下に潜り込むのは、相当な勇気がいるはずだ。俺も以前カメに潜り込んだが、あれでも十分に恐ろしかったのだから水竜はそれ以上だろう。
仁さんはそのまま反対側まで転がって離脱して難を逃れた。

「ドガアアアーン！」

仁さんが反対側に離脱して起き上がった瞬間に水竜の腹の下が爆ぜた。

これはさつき地竜戦で見たのと同じだ。

俺には見えなかったが仁さんが転がりながら、爆弾を仕掛けたのだと思う。

あの回避の一瞬で、それができるのは手慣れた戦法なのだろう。
水竜は腹にダメージを受け、かなり弱っている。

「どいてくれ！俺がやる」

冬彦さんを見ると手には小型のガトリング砲のような武器を持っている。

ハンドガトリングか？

冬彦さんが引き金を引くと三本の銃身が回転しながら弾を放出した。

「ガガガガガガ」

連続で銃弾の掃射音が響き渡り水竜にダメージを与えていく。

「すいー……」

実物は初めて見るが、戦争映画さながらですごい威力だ。
ベルリアに持たせてある魔核銃とは桁が違う。
数十いや数百の銃弾が水竜を襲い、一体が消滅した。

「ようやく一体倒せたか。もう一体に全員でかかるぞ〜！」

冬彦さんの声を合図に剛さんが相手にしている水竜に仁さんと涼さんが向かって行くのが見える。

第556話 水竜戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第557話 ガトリング

都さんが再び『アースハンマー』を発動して水竜の注意を引くと、涼さんがとどめをさす為にグレネードランチャーを構えて水竜に向けて放つが、水竜が即座に反応してウォーターブレスを返して来た。グレネードランチャーの弾はウォーターブレスに阻まれたようで水竜に着弾する事はなかった。

「よそ見すんな、こつちだぜ〜！」

ウォーターブレスを放ち無防備となった水竜に剛さんが戦斧で渾身の一撃をお見舞いし、戦斧の刃を横腹にめり込ませる。

「ギヤアアア〜！」

戦斧の斬撃による痛みで水竜が大きな動きで暴れ始めた。ウォーターブレスを四方に連発し始め、全く近づく事が出来なくなったので剛さんも被弾を恐れて今は後方へと下がっている。

「あ〜、これって完全に怒らせましたね〜」

「都、呑気な事言っていないでスキルを放ちなさいよ」

「はい『アースハンマー』」

都さんがスキルを放つが、やはり連続で放たれる水竜のウォーターブレスの前にダメージを与える事は出来なかったようだ。

「しょうがないな。またこいつの出番だな」

冬彦さんが再びハンドガトリングを構えて引き金を引いた。無数の弾丸が放たれウォーターブレスの隙間を抜け水竜に着弾すると、しばらく間をおいてから水竜はその場に倒れた。

「よし、とどめを頼む」

冬彦さんの声で三人が一斉に走り出して、各々が倒れた水竜に渾身の一撃を見舞いとどめをさした。

「弾が勿体なかったな。それにしても高木くん君達のパーティの戦い、チラツと見たけどあれは何？」

「え？ 何って何がですか？」

「俺達が総出でなんとか倒した水竜を君達瞬殺したよね。しかもそちのサーバントの女の子の攻撃って水竜を一撃で消滅させてたよね。完全に反則級だったんだけど」

「はは……水に雷で相性が良かったんですよ」

「いや、あれは相性だけの問題じゃないと思うけどな。それにミクちゃんの攻撃もかなりのものだったぞ。君達もしかしてもっと下層まで行ってるパーティなのか？」

「いえ、十七階層に入ったばかりですよ」

「信じられないな。スキルだけで水竜を倒してしまうんだからな」

「そうよ、私の攻撃なんかダメージ与えられなかったんだから。羨ましいわね」

褒めてくれるのはいいけど、過剰評価のような気がしてなんとも答えにくい。

「それはそうと、皆さんの火器も凄いですね。ガトリングにグレネードランチャーには爆弾ですか？」

「ああ、十五階層からは必須だからな。これが無いと先に進むのは

無理だろう」

「そうなんですな」

「高木くん達は、どんなのを使うんだ？」

「俺達は、特には……まあこれぐらいですかね」

そう言っつて俺は『ドラグナー』を取り出して見せた。

「マジか……これって動くのか？」

「もちろん動きますよ。蒼い光を放って弾を撃ち出します」

「威力は？」

「どうやら、ドラゴンに特攻があるみたいで、かなり効きますよ」

「こんな銃初めて見たよ。正に浪漫武器だな。カッコいい！俺も欲しいぐらいだよ」

「思わず買ってしまったんですけどかなり役立つてますよ」

「いいな。それで他には特別な武器とか無いのか？」

「後は魔核銃を何人か持つてるぐらいですね」

「それだけか。それでここまで来れてるのか。普通に高木くん達すごいな。若さと才能だよな」

妙に褒められて、こそばゆい感じだが、物理的火器を使いこなしている冬彦さん達のパーティもかなりのものだと思う。

「でも、冬彦さん達の戦い方を見て、物理的火器もこれからの戦いで必要かもと思いました。いざという時に威力を発揮しますよね」

「ああ、ただ燃費は悪いからな。俺のガトリングも威力は申し分ないんだが、弾を撃ち出しすぎてコストがな……」

「それは思いました。でもあれを手で持って撃てるって凄い体力ですね」

「ああ、最初使った時は反動で肩が脱臼したかと思っただから、地上で筋トレに励んでるんだ」

やはり、魔核銃でも反動があるのだから、あれだけの威力の物を手で持って撃ち出すとは、並の事ではないようだ。

確かに冬彦さんも結構いいガタイをしているように見えるが、高火力の火器を使いこなすには、アクションスター並みに鍛える必要があるのかもしれない。

俺にはちよつと無理かもしれないな。

第557話 ガトリング（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第558話 言葉のあや

やはり高火力の銃器にもデメリットはあるようだ。

無条件に恩恵だけ受けられる訳ではないようで、恐らく高火力であればあるほど、ルシエのように反動は大きそうだ。

俺達は地面に落ちている魔核を回収してから先を急ぐことにする。

「冬彦さん、聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「ああ、なんだ？」

「実は、俺達霊薬を探してるんです」

「霊薬？」

「はいエリクサーとかソーマとかそんなアイテムです」

「ああ、そういうやつか」

「冬彦さん達は持ってたりしませんか？ もしあれば売ってもらえたりしないですか？」

「悪いな。俺達が今まで手に入れた薬で一番上はハイポーションだ。それより上にはお目にかかった事はないな」

「そうですか、やっぱりなかなか出ないんですかね」

「オークシオンに出回ってるって話は聞いた事があるが、実物は見た事もないな。どうしてそんな高位の霊薬が必要なんだ？」

「俺達本当はもう一人メンバーがいるんですけど、病気で……もう霊薬に頼るしかなくて」

「そんな事情があったのか。恐らく市場には出る事がないんじゃないか？ 直接ゴールドランカーとかに交渉しないと無理かもしれない」

「ゴールドランカーか、一度も会った事がないな。そもそもこのエリアにいるんだろうか？」

「冬彦さん達はお知り合いにいたりしますか？」

「いや、残念だけどいないな。本格的に潜ってる奴ほど基本探索者ってダンジョンに潜る以外での交流って少ないだろう」

確かに冬彦さんの言っている事もっともだ。毎日のようにダンジョンに潜っていたら他の探索者と交流する事はほとんど無い。

「あ、そこ危ないぞ！」

「え？」

冬彦さんの声で足を止めるが目の前の側面から炎が吹き出して来た。

「アチツ！」

炎にまかれる事は無かったが、熱気が伝わってくる。

「この階層は、十六階層に比べるとトラップ多めだからな。気をつけた方がいいぞ」

「あ、ありがとうございます」

今も冬彦さんに声をかけてもらわなければ結構危なかったな。

「ベルリア、気づかなかったのか？」

「マイロード、もちろん気がついていましたよ」

「それじゃあ、なんで言ってくれないんだよ」

「シル姫に感知しないように言っていたので、私も伝え無い方がいいのかと」

確かに、目立たない様にシルにはモンスターを感知しても伝えない

でくれとは言っていたが、ベルリアそこは伝えて欲しかった。もしかしたらトラップで死んでたかもしれないんだぞ。

「ベルリア……次からは伝えてくれるか？」

「はいわかりました。それでは、あそこにもトラップがあります」

ベルリアが五メートルほど前方を指差した。

「あんなところにもあるのか……ベルリア危険がある時は必ず伝えてくれ。頼んだぞ」

「わかりました。任せてください」

俺が言い出した事とはいえ、また危ない目に遭うところだった。

そこからは、十分にトラップに気をつけながら進んで行った。

「その男の子のサーバントはトラップ看破のスキル持ちなのか？」

「いえ、スキルでは無いです。勘というか、第六感みたいな感じだと思います」

「便利なものだな」

「冬彦！ モンスターよ。この先三十メートルぐらいのところに五体いるわよ」

凜さんが、モンスターの存在を告げてくれた。

「俺達が三体受け持ちますね」

「ああ、助かるよ」

進んで行くとワイバーンが空中に二体。地竜が二体。もう一体は見た事のない個体が一体いた。

「冬彦さん達にワイバーンを頼んでいいですか？ 俺達が残りを倒します」

「わかった」

「ルシエ、どうする？ 見学するか？」

「ふざけるな！ あの岩蜥蜴はわたしがやる！」

「それじゃあ、地竜はシルとルシエで頼むな。残りのメンバーであれに当たろう」

俺達は三体のドラゴンに向かって行く。

第558話 言葉のあや（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第559話 雷竜

俺達は初見のドラゴンに向かうが

「ミク『サンダースピア』を頼む！」

俺の指示でミクがドラゴンに向けて雷の槍を放つが、槍がドラゴンに命中した瞬間、雷が霧散してしまった。

「なっ……」

確実に命中したのに完全にノーダメージだ。

あのドラゴンは何だ？

「冬彦さん！ このドラゴンは何ですか？」

「ああ、そいつは雷竜の一種だぞ」

ワイバーンに向かおうとしていた冬彦さんを引き留め聞いてみるが、雷竜か。それでミクの雷が通じなかったのか。それにしても見た目では雷属性は識別できないな。やっぱり、情報は大事だな。

「ミク、スナッチにヘッジホッグを！」

雷属性には土や岩が有効な気がするが、俺達には使えないので、金属なら有効かもしれないと思い、ヘッジホッグで攻撃してもらおうが無数の鉄の針が雷竜を捕らえたと思った瞬間、弾かれて地面に落ちてしまった。

「だめかつ！」

金属がダメならあいらさんの『アイアンボール』や武器による直接攻撃も怪しい。

思った以上に雷竜とは相性が悪い。

あいらさんが、真つ先に飛び込んでいつて薙刀を振るうが、刃が触れる瞬間にスナッチの時同様弾かれてしまった。

『ヘルブレイド』

ベルリアが黒い炎に包まれた刃を放ち雷竜にダメージを与える。

「ベルリア、助かった！」

そのタイミングであいらさんが後方へと離脱する。

「海斗、剣での直接攻撃はダメだ！ 弾かれて斬る事ができない」

やっぱりそうか。雷と金属でまず思い浮かぶのは磁力か？ 強力な磁力が発生して金属を寄せ付けないというのが正解な気がするが、ベルリアの攻撃は普通にダメージを与えているので、遠方から雷と金属以外ならいけそうだが『ドラグナー』の弾丸はどうだろうか？ 金属が使われてはいるが蒼い光を発した魔力弾も弾かれてしまうのか？

効果が定かではないので一瞬躊躇してしまう。

「この岩蜥蜴！ もう燃やすのはやめだ。切り裂かれて消えてしまえ『黒翼の風』」

ルシエが、前回炎で時間がかかった事を気にしたのか、地竜に向けて

獄炎ではなく風の刃で攻撃をかけた。

暴力的な風の刃が地竜を包み、岩のような外皮をも刻んでいく。ロボロになってはいるが、まだ消滅してはいない。

やはり、地竜とは相性が良くないようで、雷竜と戦ってもらった方が良かったかもしれない。

「あゝ、まだ死んでないのか！ もう許さないぞ！ 『破滅の獄炎』

」

今度は獄炎を放つが、前回獄炎を耐えていた岩のような外皮はすでにロボロになっており炎への耐性を発揮する事は無くあっさりと燃え尽きた。

「どうせ燃えるんだから、さっさと最初から燃えておけ」

ルシエ、それは暴論というものだ。あくまでも結果論に過ぎないんだぞ。

ルシエが地竜を倒したのを見て俺も『ドラグナー』の引き金に手をかけて弾を放つ。

ドラグナーが光を発し、放たれた弾が蒼い糸を引いて雷竜へと向かっていき雷竜の頭を射抜いた。

「あ………」

磁力など全く無かったかの様に『ドラグナー』の一撃は雷竜を撃ち抜いた。

魔力を帯びた弾は例外なのかそれともドラゴンへの特攻を発揮したのかは不明だが、思ったよりもあっさりと片を付ける事が出来た。

「ご主人様も戦いを終えた様です。私もそろそろ終わりにしますね。」

我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

前回事様ルシエが神槍の一撃を発動してあっさりと地竜を消滅させたので、そこで俺達の戦闘は終了した。

あとは冬彦さん達だが、すでにワイバーンのうちの一体は片付けて、残る一体に全員でかかっているところだった。

第559話 雷竜（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第560話 別れる

「凜、頼んだぞ！」

「任せてよ『ファイアスピア』」

凜さんが放った炎の槍がワイバーンの右翼に命中し墜落させる事に成功して、地上に落ちたワイバーンに向けて男性陣が一斉攻撃を始めた。

「オラ〜！ さっさとくたばれ！」

「そろそろ、終わりじゃない？」

「なかなかしぶといな〜」

メンバーが総出で攻撃をかけ、ワイバーンはあっという間に消滅してしまった。

「高木くん、その銃を撃つところを見たよ。見た目通りカッコいいな。やっぱり見た目とエフェクトは大事だよな。憧れるよ」

「ありがとうございます。みなさんも流石の戦い方でした」

「いやいや、やっぱり高木くんのところのパーティは頭ひとつ抜けているよ。間違いなくもつと下の階でもいけるよ」

俺達はその後二回ほどドラゴンとの戦闘を繰り返してから別れる事になった。

「俺達は今日はここまでで引き上げます」

「おお、学校だもんな。今日は一緒に回れてよかったよ。また機会があったらよろしく頼む」

「いえ、こちらこそよろしく願います。冬彦さん達はまだ進むんですか？」

「ああ、今日も泊まりで頑張るよ」

「頑張ってください」

やはり専門の人達はすごいな。これから更に進んだ上にダンジョンで寝泊りするの。

それにしても今回は冬彦さん達に同行出来てラッキーだった。

ドラゴンの情報や他のパーティの戦い方も参考になったし、進むペーラスも早くなつた。良い人達だったので、また一緒に潜れる機会があれば是非お願いしたい。

冬彦さん達がダンジョンの先に進むのを見送ってから俺達は少し引き返し、周囲に誰もいないのを確認してから『ゲートキーパー』で一階層へ戻り地上へと出た。

「いい人達だったわね」

「そうだな、パーティとしてもまとまりがあつていい感じだったな」

「そうですね。俺達も負けてられませんね」

「それじゃあ、また来週ね」

「俺は明日からはまた一階層に潜るけどね」

「海斗、頑張れよ」

初めての十七階層の探索は、冬彦さん達との出会いもありかなり順調だったと言えるが、これでまた一週間は十七階層の探索がストップするかと思うと気が焦ってしまう。

みんなと別れてから俺は一人でスーパードへ向かった。

最近土日のカレー比率が上がり過ぎているので、母親に今日は俺が肉を買って帰ると伝えておいたのだ。

焼肉かしゃぶしゃぶにしようと思うけどどっちがいいかな。

スーパードに着いてから、早速肉のコーナーへと向かう。

売り場を見ると一番に焼肉用の肉が目飛び込んできたのでその瞬間俺の心は決まった。今日は焼肉だ。

「どれにしようかな」

家族三人で食べるので最低でも五百グラムは欲しいところだが五百グラムのパックを見るとちょっと少ない気がする。

かなり迷い結局少し多めの六百グラム買う事にしたが、思いの外値段に開きがある。

一番安い輸入牛肉は千円を少し超えるぐらいからあるが、見ると赤身中心でそれなりに美味しそうに見える。

次に安いのが国産牛で二千円ぐらいだ。見た感じは輸入牛肉同様に美味しそうだ。

国産牛の中でも交雑種というのがあり少しだけ値段も高いが、何と交雑しているのかよくわからない。

そして一番高いのが和牛。見るからに霜降り肉だが値段が一番安いので五千円高いものだと一万円に届く値札が貼られている。

十七年間の人生でこれほど真剣に肉を選んだのは初めてだと思う。値段で選ぶなら輸入牛肉。見た目で選ぶなら和牛。普段ならもちろ

ん選択肢に入ってくるが今日に限っては国産牛は除外だ。流石に一食で一万円はきつい。

ただスーパーで売っているところを見ると、普通に一万円の肉を買っている人達がいるという事だろう。

俺が知らないだけで、人の家の食卓は俺が思っている以上に豪華なのかもしれない。

「うーん……」

食肉コーナーで俺が悩んでいる側から、女の人達がどんどん肉へと手を伸ばし取っていく。

みんな多少は値段を見ている様だが俺の様に真剣に悩んでいる人は誰一人としていない。

「あっ……」

俺がじつと見ていた和牛のパックが取られて行ってしまった。

これ以上悩んでいる時間は無い。

俺は遂に決意を固め和牛六百グラム五千円のパックを手に取りレジへと向かった。

第560話 別れる（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第561話 おうち焼肉

五千円の肉を手を持ちレジに並んだが、もちろんこれ程高額な肉を自分で買うのは初めてだ。

レジに金額が表示された瞬間、ちよつとドキツとしてしまったが、問題なく支払いを終えて家へと向かった。

「ただいま」

「海斗、お肉買ってきた？」

「ああ、これ」

「あら、もしかして和牛じゃない。しかも霜降り。こんなにいいお肉じゃ無くてよかったのに。和牛ね和牛」

母親は言葉とは裏腹に明らかにテンションが上がったのがわかる。

「お父さん、海斗が和牛買ってきたわよ和牛！」

「おお、和牛か。霜降りだな」

我が家では珍しい和牛の登場に両親が、和牛と霜降りを連呼している。

早速野菜と一緒にホットプレートで焼いて食べてみる。

「うん、おいしい」

「海斗、柔らかい！ いつものお肉と違うわ」

「ああ、確かに美味しいな。流石和牛だ」

五千円しただけあって、いつも家を出てくる肉よりも明らかにおいしい。柔らかいし肉の脂に甘味がある。

「海斗、どんどん焼いて」
「ああ……」

焼いた側から肉が消えていく。野菜はほとんど減っていないが、明らかに肉の無くなっていくペースが早い。
六百グラム買ったので三人には十分な量あったはずだが、既に半分以上が無くなってしまっている。

「家で焼肉もいいもんだな」
「そうね〜お父さん。海斗がまた買ってきてくれると助かるわね〜」
「わかってるよ。またそのうち買ってくるよ」
「悪いわね〜。今度はもつと安い肉でいいのよ。でも和牛はおいしいわよね。やっぱり和牛は違うわね」

これは暗に次回も和牛を買ってこいと言っているのだろうか？
ちよつと失敗したかもしれない。最初に買ってくるのが和牛だったので次回のハードルが上がってしまった。
こんな事なら今回は輸入牛肉を買ってくればよかった。
まあ確かに今食べている和牛はおいしいから、後悔はしていない。
ただ買ってきた俺以上に両親が肉ばかり食べているのは気になる。

「海斗〜和牛焼いて」
「もう、これで終わりだけど」
「え……嘘……」
「いや、本当だけど」
「足りないわよ。量が少なすぎるんじゃない」
「いや六百グラムだから一人二百グラムはあったはずだから、十分でしょ」
「海斗、次はもう少し量も頼んだぞ」

「わかったよ」

俺の両親は普段食べる量は至って普通だが、この量の肉をペロツと食べた上にまだ足りないらしい。和牛の力は偉大だな。

焼肉を食べ終わってからは学校の宿題をやって、眠りにつく事にした。

三年生になってから地味に宿題が増えている気がするが、探索のせいで学校の勉強が疎かになったとは思われたくないのでしたっかりと終わらせる。そろそろ受験対策で王華学院の過去問題集を買ってき

てやってみようかと思っている。
カオリンの件が一段落したら模試も受けてみようとは思っているが、今は無理だな。

次の日になり、いつもの様に学校へと向かった。

「あゝ春香、ちょっといいかな」

「うん、どうかした？」

「俺今ダンジョンで忙しくて土日の休みも潜ってるんだよ」

「うん、ミクからヒカリンの事は聞いてるよ」

「それで昼間は無理なんだけど来週の日曜日の夜にご飯食べに行きませんか？」

「もちろんいいけど大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。じゃあ日曜日の六時三十分に駅前でもいいかな」

「うんわかったよ、楽しみにしてるね」

春休みが終わってから春香と遊びに行けていなかったが、今週末だけはどうしても外せない理由がある。

今週末は春香の十八歳の誕生日なのでどうしてもお祝いをしたかったが、断られなくて本当に良かった。

残念ながらまだプレゼントも買う事が出来ていないので、明日の夜

トビモ買くら行らんや細な。

第561話 おうち焼肉（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第562話 スライムの歌

学校を終えてすぐにダンジョンへと向かう。

今日からの目標は昨日までとは違う。昨日まで1階層ではスライムの魔核を集める事が第一目標となっていたが今日からはメタリックカラーのスライムを探す事が最優先だ。

「シル、前回メタリックカラーのスライムが出てから何匹ぐらい倒したか覚えてるか？」

「流石に数が多いすぎてハッキリとはわかりませんが確実に四桁はいっていると思います」

「そうだよな。そもそも一定の確率で出現するのも怪しいんだけどな」

とにかく平日潜れる時間は限られているので、小走りにダンジョンを駆けていく。

「お！ イエロースライムだ」

俺はスライムの前まで全速力で走りすぐさま殺虫剤ブレスをお見舞いして魔核を回収した。

ベルリアにも一人でスライムを倒させてみたが色々とした結果、あまりスライムと刀の相性は良くない。普通に斬ったのでは斬り口が鋭すぎてすぐに元の戻ってしまうので消滅までに手数と時間を要した。

実際風の魔刀では何度も斬りつける必要に迫られ、圧倒的に殺虫剤ブレスが勝っていた。

そこで炎の魔刀で突き刺し、炎の力で蒸発させる事にした。

ほぼ全身が水で出来ているスライムにとって炎は弱点なので、ベルリアにはこのパターンでスライムを弱らせる事に専念してもらっている。

効率を考えるとベルリアと交互に倒すのが一番だったが、唯一の心配はサーバントが倒したスライムの数は俺が倒した扱いになるのかどうかという事だ。

恐らくパーティで戦ったとしても戦いに参加していれば経験値的なものは、ある程度分配されているイメージなので、スライムを倒す事についても共有化されているのではと考えているが、明確な計測機があるわけではないのであくまでも推論の域を出ない。今回どうしても失敗できないので、とどめは必ず俺がする様にして戦っている。

以前はこの単調な作業にルシエが文句を言っていたが、今回は一切何も言わない。

事前に今回の事情と俺の考えを伝えておいたので流石にルシエも茶化す様な真似は控えている。

「おお！ あれはピンクスライム！ 結構レアカラーだ。俺がやる」

俺はピンク色のスライムに向けて殺虫剤プレスをお見舞いして、難なく倒す事に成功したが残されたのは当然、通常のスライムの魔核が一個だけだ。

スライムには色々なカラーがあり、水色、緑色、赤色、茶色あたりはメジャーカラーだ。ただそれ以外のレアカラーのスライムを倒したとしても残される魔核は全く同種のものだ。

カラフル過ぎて保護色とは思えないので、スライムの色に何の意味があるのかは全くわからない。

淡々とスライムを狩っていくが、今日は入り口以外では、まだ他の誰とも会っていない。

最近、1階層でたまに成りたての探索者を見かけるが、俺とは全

くペースが違うので一瞬すれ違うだけだ。

「ああ〜メタリック来い。寄って来い。す、す、す〜らいむ、こっちのみ〜ずは甘いぞ」

「ご主人様、それは一体何の歌なのでしょう？ 水が甘いのですか？」

「あ〜、スライムが寄って来る歌？」

「そんな歌があるのですか？」

「まあ、たぶん……」

そんなに真剣に聞かれても困ってしまう。

気分転換というか神頼み的に口ずさんだけなのに、言いづらい。

「シル騙されるなよ。絶対嘘だぞ。さっきのがそんな特殊効果を持っているはずはない！」

「ルシエ、ご主人様は『スライムスレイヤー』なのでから、スライムに対して特殊な能力をお持ちなのかもしれませんが」

「ふん、どうせ思いつきで作った歌に決まってる」

俺の事を信じてくれるシルはやっぱり心のオアシスだ。

だが残念ながら今回はルシエが百パーセント正しいんだ。

出来れば今後は俺の歌やいつもと違う行動はあまり気にせずに流して欲しい。

第562話 スライムの歌（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第563話 スライム

俺は二日連続で一階層に潜ってスライムを狩っている。何となくだが勇気が出ずカオリンとは土曜日以降連絡を取り合っていない。

「ご主人様、昨日のスライムを呼ぶ歌は歌わないのですか？」

「あ、ああ、今日はちよつと喉の調子が悪いからやめておくよ」

「風邪でもひかれたのでしょうか？ 大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ」

本当は喉は全く痛くは無いが、昨日の歌は真顔で言われると恥ずかしくて歌えない。

それから二時間程スライムを倒して回り地上へ戻り、すぐにシヨックピングモールへと向かった。

目的は春香の誕生日プレゼントだが、何を買うかは決めていない。

決めていないというか正直何を買いえばいいのか分からない。

誕生日プレゼントって普通何をあげるのだろうか？

映画で女性の誕生日に主人公が薔薇の花束を渡したりとかは見た事があるが、俺があれを真似すると大変な事になるのは間違いない。

ただ、指輪もブレスレットも既にプレゼントしたしな。女の子って指輪を二つもらっても嬉しいものだろうか？

それとも色違いの同じゲーム機を二台もらった様なもので嬉しくは無いのだろうか？

小学校低学年の時はよかった。手作りの工作物や鉛筆とか消しゴムをプレゼントするので十分だったので、誰かの誕生日プレゼントに迷うという事は無かった。

あれから十年近く経過した今、俺には全くわからない。女の子が春香が喜んでくれるプレゼントがわからない。

以前読んだ事のあるラブコメで、石鹸とかタオルとかクリームっていうのがあったが、そもそも日用品をプレゼントにもらって嬉しいのだろうか？

俺は去年は誰からも誕生日プレゼントをもらっていないが、仮に石鹸やタオルをもらっても嬉しく無い気がする。

しかも俺が春香にそんなものを送った日には下心から送ったと思われるそう怖い。

真司と隼人に聞いても参考になるとは思えないのでとりあえず、モール内を見て回る。

見て回るうちに気になったのは、ちょっと高級なシャープペンだ。受験もあるのでもいいかもしれないとは思ったが、女の子である春香はこれをもらったら喜ぶだろうか？

春香の事だから喜んでくれると思うけど、女子高生への誕生日プレゼントとしてはどうなんだろうか？

一応頭の中でキープして他の店も見てもいい。

「うーん、何がいいのかな。服は俺じゃ無理だしな。どうすればいいんだ……」

買いに来ればどうにかなるだろうと思ってたが俺が甘かった。

よく考えると今までのプレゼントは全部春香が選んだ様なものだった。俺には決定的にセンスが無い。おまけにアイデアも無い。

「うーん……」

頭を悩ませながら館内を歩いていると、前回指輪を買ったジュエリーショップの前まで来ていた。

店頭でボクッと眺めていると前回もいた店員さんが声をかけてきた。

「いつもありがとうございます。本日はあの可愛い彼女さんはご一

緒ではないんですか？」

「どうやら、俺の事をすっかりと覚えてくれているらしい。」

「今日は一人です。誕生日プレゼントを探してるんですけど何が
いかわからなくて」

「そうでしたか。彼女さんが羨ましいです。確か前回来られた時は
指輪をお買い上げいただきましたよね」

「はい、そうです」

この人すごいな。俺が前回買った物まで覚えてるんだ。

「前回の指輪も非常にお似合いでしたし、また指輪はいかがでしょ
うか？」

「指輪ですか……同じ物を二つもらって嬉しい物ですかね」

「お客様、宝石をあしらった指輪は一つとして同じものはない唯一
無二のものなのです。宝石は、それぞれが唯一の輝きを放つ特別な
ものです。たとえ幾つであっても、恋人から指輪を送られて嬉しく
ない女性はいません」

「そういうものですか」

「はい、そういうものです」

やはり、モブに過ぎない俺には女性心理を理解する事は難しいよう
だ。

第563話 スライム（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第564話 プレゼント

俺は店員さんに案内されて指輪をいくつか見ているが、指輪の良し悪しは正直よくわからない。

前回春香に贈った指輪は特に似合っていたと思うけど、色ぐらしか違いがわからない。

それに高校生である春香が複数の指輪を身につけているイメージもあまり湧かない。

「やっぱり、前回指輪だったし指輪じゃないのがいいと思うんですよ。ブレスレットも以前贈ったのでそれ以外がいいと思うんです」「そうですか。それではネックレスか時計はいかがでしょうか？」

ネックレスか時計。ネックレスも春香には似合うと思うけど、時計はいい気がする。学校でも使えるしプレゼントには最適かもしれない。

春香がどんな時計をしていたかは残念ながら思い出せないが、臆けながら時計をしていたような記憶はある。

「それじゃあ、時計を見せてもらってもいいですか？」

「はい、もちろんです」

時計の専門店ではないので、そこまで数はないが女性らしい時計が並んでいる。

「予算はどのくらいをお考えでしょうか？」

「そうですね。二〜三万円でもありますか？」

「もちろんです。彼女さんのイメージだとこの時計とかがいいかし

よつか？」

そう言つて俺の前に店員さんが三つの時計を並べてくれた。それぞれ文字盤が水色、白色、ピンクの時計だが、ジュエリーショップの時計だから何となくお洒落に見える。

「それぞれこちらから一万五千元、二万九千元、三万八千元になります」

値段はどれも出せない事は無い値段だ。

三つの時計を前に春香をイメージしてみるが、どの時計も似合う気がする。春香がつければどんな時計でも輝いて見える。

ただ、俺の春香のイメージは白。白のワンピースも最高に似合っていたし白が一番しっくりくる気がする。

「これってどうですかね」

「彼女のイメージにぴったりだと思います。清楚で清潔なイメージですよ」

「そうですね。それじゃあこれをお願いします」

結局、白色の文字盤の時計を買う事にして会計をお願いした。

「いや、彼女さん愛されていますね。指輪もですけどやっぱり時計も特別な意味がありますからね。時を刻みますからね！」

「いや、本当にそういうのじゃ……」
「照れなくてもいいじゃないですか。仲が良くて羨ましいです。ずっとお幸せに」

結局店員さんは最後まで春香の事を彼女だと勘違いしたままだったが、これ以上この人に説明してもあまり意味は無いので諦めた。そ

れに時計が時を刻むって当たり前の事だと思っけど、妙に強調していたのは何が意味があるのか？ 少しか不思議に感じたが、大した事では無いだろうと思っ俺は会計を済ませてラッピングしてくれ
た時計を受け取って帰る事にした。

店員さんのおかげもあつて思っていたよりもずつといいプレゼント
が買えた気がするので春香が喜んでくれるといいな。

家に帰ると、今日もカレーだったがいっつものカレーとは少し味が違
う。

「母さん、なんかいつもとカレーの味が違う気がするけどルーを変
えたの？」

「そうよ。今日はこれを使ってみたんだけど、どうだった？」

そう言っ母親が見せてくれたのは本格レトルトカレーのルーだっ
た。

いつもと違っと思ったらレトルトカレーだったのか。

「なんでレトルト……」

「それが、急に春香ちゃんママに誘われてお茶してたら、あつと
いう間に時間が過ぎちゃつて、作る時間がなかつたからレトルトな
のよ。美味しくないの？」

「いや、普通に美味しいけど」

いつもと違っ感じだが、これはこれで非常に美味しい。

それよりも春香のママと時間を忘れるほど何を話してたのかとい
う事の方がずつと気になつたが、聞いても「いろいろよ」
としか答えてもらえなかつた。

第564話 プレゼント（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第565話 後輩

昨日は春香のプレゼントも買えだし、俺は朝から機嫌良く授業を受けているが、昼休みになったのでトイレに行く事にした。

「先輩！」

あゝ今日は何を食べようかな。

今日は、パンも弁当もないから学食に行こうかな。今日の日替わりなんだろう。

「先輩、わざとですか？」

その前に早くトイレに行かないと、俺のナイル川が氾濫してしまう。

「先輩！ 無視しないでください。無視するなら乱暴されたって騒ぎますよ」

「へっ？」

「ようやく反応してくれましたね。やっぱり聞こえてるのに無視してたんですね」

「ああ、この前の……いや、先輩って俺の事だとは思って無かったんだ」

「そうですね。これだけ近くで声をかけていたのにそんな事ありませんか？」

「それより何か用かな？」

「ダンジョンの話を知りたいんですけど」

「あゝ、俺トイレに急いでるからまた今度ね。じゃあ！」

この子と話し込んでいる場合じゃない。こんなところでゆっくりしている俺のナイル川が決壊してしまう。
俺は早足でトイレへと駆け込んだ。

「ふゝ、結構危なかったな。膀胱炎になるところだった」

授業が始まってすぐ、ナイル川が暴れ始めたので、五十分近く我慢した事になる。耐え切った自分を褒めてやりたい。
無事にトイレを終えたので、急いで学食へ向かう。

出遅れてので、今日は日替わりが残っているかはちょっと怪しいな。

「先輩！」

「まだいたのか？俺は今から学食だから、それじゃあ」

「私も学食なんで一緒に行きます」

なんだこの子は？なんで付き纏うんだよ。ダンジョンの事が聞きたいんだよな。隼人でも紹介してやろうかな。隼人ならこの子が相手なら喜んで教えてくれそうだし。

「ダンジョンの事が聞きたいんだよな。それじゃあ俺よりもうつつつけの奴がクラスにいるから紹介するよ。隼人も十階層を超えてるし、親切に教えてくれるはずだぞ」

「いえ、結構です」

即答で断って来たが、この子の目的は何なんだ？

まあ、このまま学食で別れればいいか。

俺は学食まで行って日替わり定食を確認するが、残念ながら完売している。

残っているのはカレーかうどんかラーメンか……

今日はラーメンだな。

俺はラーメンの食券を買ってから、出来上がるのを待ってから受け取って、空いているテーブルに座って食べる事にする。

カレーは一昨日の夜食べたので却下だが、うどんかラーメンと言われればラーメンの方が好きだけど、学食のラーメンは残念ながらそれほど美味しくはない。

麺は茹で過ぎだし、具は蒲鉾が2切れにメンマが二本とペラペラのハムが一枚。価格が二百三十円という事を考えると文句は言えない。

「ここ空いてますか？」

「ああ、空いてますよ」

背後から女の子の声がしたので返事をしたが、隣の空いていた席に座ったのは、さっきまでのあの子だった。

「何でいるんだよ」

「それはお昼を食べるからですよ。先輩はラーメンなんですね。私はうどんです」

「ああ、そうなんだ」

「可愛い先輩がお話を聞きたいと言ってるんですから、いいじゃないですか」

「可愛い後輩ね……名前も知らないんだけど」

「私は野村理香子です。探索者に成り立ての一年生です」

やっぱりこの子は探索者なのか。

まあ十五歳から探索者になれるけど、高校生になるタイミングで探索者になる人も多いもんな。

「あゝまあ、頑張つてね」

「先輩は今何階層に挑んでいるんですか？」

「俺？ 十七階層だけ」

「十七階層ですか？ さすが『黒い彗星』ですね」

「野村さん、学校ではその呼び方はやめて欲しいんだけど」

「え？ どうしてですか？ 探索者の勲章ともいえる二つ名じゃないですか。しかも『黒い彗星』ってちよっとカツコよくないですか？」

後輩の扱いなど慣れていない俺には、この子が、素で言っているのかそれとも俺の事をおちよくっているのか判断がつかない。

第565話 後輩（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第566話 お願

俺は学食のラーメンを急いで食べる。

できるだけ早く食べ終わって席を立とうと考えている。

「先輩、私食べるの遅いんで、待っててください」

「……何で俺が待たないといけないのかな？」

「それはもちろんお話があるからです」

食べ終わった瞬間に去るつもりだったが、人から用件をはつきり伝えられて、それを無視する度胸は俺には無いので通常のペースに戻して、余りおいしいとは言えないラーメンを味わう事にする。

「それで、話って何？」

「ああ、それなんですけど、先輩って探索者になってどのくらいですか？」

「ちょうど三年ぐらいだけ」

「三年で十七階層ですか」

「まあ、そうなるな」

「秘訣を教えてください」

「秘訣って何の？」

「探索者としての秘訣です」

探索者の秘訣ってやたらと抽象的な質問だな。

「特に秘訣なんかないけど、努力と継続と運じゃないか？」

「そういう抽象的なじゃなくてもっと具体的なアドバイスをお願いします」

この子自分が抽象的な質問をしたくせに、俺の答えが抽象的って……

「そう言われてもな。ちなみに野村さんは今何階層なんだ？」

「え、えつと、一階層ですな」

「まあ、成り立てだったら当たり前だよな」

「そ、そうですね。わ、わたし成り立てのルーキーですからね」

あれ？　なんか急に受け答えが拳動不審になった気がするけどなんだ？

「ぱ、ぱつと一階層を攻略して二階層へ行く方法とかを教えてくださいませんか？」

「あのなあ、そんなのあるわけないだろ」

「だって先輩は、ぱぱつと二階層ぐらい攻略したんですよ」

「は、そんなはずないだろ。自慢じゃないけど俺ぐらい一階層で足止めくらった探索者はいないと思うぞ」

「そ、そんなの嘘ですよ。ありえないじゃないですか。だって『黒い彗星』ですよ」

この子はまた『黒い彗星』って……何か俺の事を誤解してるのかな。

「何が勘違いがあるようだけど『黒い彗星』っていうのは、結構最近ついた名前で、その前は俺『スライムスレイヤー』って呼ばれてたから」

「スライムスレイヤーですか？」

「うん、そう。長い間一階層の住人だったからそう呼ばれてたんだ」

「嘘ですよな」

「いや本当だけど」

この子の意図がよくわからない。俺が一階層に長くいたら何がこの子に不都合があるのだろうか？
なぜか俺がすごい探索者じゃないと困るような物言いだな。

「じゃあ、二階層へ行くのにどのくらいの時間がかかりましたか？」
「一度結構早い段階で二階層まで降りたんだけど、ゴブリンに殺されかけてね、それからはずっと一階層にいたからほとんど毎日潜って丸二年かかったよ」

「二年ですか……」
「だから成り立ての野村さんはゆっくりやれば良いんじゃないかな」
「……成り立てじゃないんです」
「えっ？」

どういう意味だ？

「恥ずかしくて嘘つきましたけど、本当は私成り立てじゃないんです。もう探索者になって一年経ちました」

あゝそういう事か。てっきり成り立てのルーキーが探索を甘く見て、お手軽に下層へ降ることができする方法を聞き出したのだとばかり思っていたが、どうやらそうでは無いらしい。

「一年か……。結構潜ってるの？」

「平日は難しいので土日は大体潜っています」

「二階層に降りた事はあるの？」

「はい、最近になって何度かは降りた事がありますが、ゴブリンに勝つ自信が無くて、入り口付近ですぐに引き返しています」

「そうか……。今のレベルを聞いてもいいかな」

「はい、大丈夫です。私のレベルは4です」

正直思ったよりも野村さんのレベルは高かった。一年間、週末だけの探索でレベル4なら俺より優秀なんじゃないか？

第566話 お願い（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第567話 お人好しの英雄見習い

「探索者になつて一年でレベル4なら悪くないと思うけど」

「先輩のレベルはいくつなんですか？」

「今はレベル22だけど」

「ほら、やっぱり全然ダメです。わたし才能がないんです」

「いや、俺よりも才能あるよ。俺なんか二年やってレベル3だったんだから」

「惨めになるからそんな嘘はやめてください」

嘘じゃないんだけどな。本当に二年やってレベル3にしかならなかったんだけど。だけど話しているうちに野村さんの悩みも大体わかってきた。

「それで、野村さんは、今一階層で行き詰まってるって事かな」

「そうです。レベルも上がらなくなってしまって、一階層から抜け出せないんです。今のまま無理してゴブリンと戦っても死んじゃうと思うんです。それでどうしようもなくて」

「ゴブリンは強いからな。ちなみに野村さんの使ってる武器は何？」

「サバイバルナイフとスライムにはハンマーです」

「あゝそれじゃあゴブリンには難しいと思う」

「え？ でもわたしにはそれしかありません」

「新しい武器を買うお金は？」

「そんなものありません。ギリギリの生活なんです」

なんとなくだが、この子あんまりお金がないのか？ 表情と言葉から切羽詰まっているような印象を受ける。

まあ、生活費を稼ごうとして探索者になる人も相当数いるので、この子がそうだったとしても驚きはない。

「本当はボウガンがあればいいんだけど」

「だからそんなものを買う余裕は家にはありません」

どうしたものだろうか。この子の事はよく知らないしこれ以上踏み込むのも違う気がするしな。ただこの子の思い詰めた顔を見るとこのまま放っておくのも気が引ける。

「野村さんは二階層に進んでお金を稼ぎたいんだよね」

「はい、そうです」

「それなんだけど俺の経験からすると二階層は、あんまり稼げないんだよね。それに三階層からはソロじゃ無理だと思う」

「そんな……」

確かにショックだよな。ゴブリンはあんなに強いのに魔核の大きさはスライムと大差ないもんな。それにシル達がいなければ俺も三階層は無理だったしな。

「稼げるようになるのは五階層をこえて十階層に近づいてからなんだよ。今は、ちょっと事情があつてすぐには無理だけど、時間ができたら二階層までは連れて行ってあげてもいいけど」

「本当ですか？」

「ああ、この二〜三ヶ月ぐらいは無理だと思うけどその後なら構わないよ」

「お金はありませんよ」

「はは……別にお金が欲しいわけじゃないから」

「身体も無理ですよ」

「……野村さん。俺そんなに悪そうに見える？」

「見えません」

「うん、特に何か見返りが欲しいわけじゃないよ。ただ昔の俺に似てたから、ちょっと手伝おうかなと思っただけだよ」

「ありがとうございます。先輩やっぱり超絶リア充ですね」

そう言っつて野村さんは今日一番の笑顔を見せてくれた。まあちよつとお節介が過ぎる気がするけど、女の子が昔の俺と同じように苦しんでいるのを見たら少しだけ手伝いをしてあげたくなくなってしまった。どんなに頑張っても自分だけの力では越えられない時がある。俺だつてシルとルシェがいたから今の俺があるんだから。

誰かの助けを借りる事は決して恥ずかしい事じゃない。

野村さんは勇気を出して俺に助言を求めてきた。

幸い今の俺にはこの子をサポートしてあげられるだけの力がある。

今の俺は少しはあの時の春香のように振る舞うことができているだろうか？

あの時俺を救ってくれ俺が憧れた春香のような人間に少しは近づけているだろうか？

ただひとつはつきりと言っておきたい。野村さん、俺は間違つても超絶リア充ではないよ。

第567話 お人好しの英雄見習い（後書き）

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】をお願いします

第568話 震える手で予約

俺のテンションは、かなり上がっている。

明後日には、春香の誕生日を祝う為に一緒にご飯を食べに行ける。考えてみると小学校の時の学級での誕生会以外で春香の誕生日をお祝いするのは初めてなので楽しみだ。

「おい、シル、あいつ絶対おかしいぞ」

「そうですね。なにか機嫌もいいですし、顔が嬉しそうですね」

「いや、あれは嬉しそうなんじゃなくて浮かれてるだけだぞ」

「やっぱりいい事があったのでしょうか」

「間違いなく春香だな」

「やっぱりそうですね」

「春香と何かあったな」

「ルシエ負けられませんか」

また、いつものようにシルとルシエが二人でコソコソやっているが、気にしたら負けだ。

ここは気がつかないフリをするのが一番だと思うので、俺はひたすらスライム狩りを継続する。

この五日間は順調にスライムの討伐数を伸ばす事ができているが、どのタイミングでメタリックカラーのスライムが出現するかは全く予測できない。

今回は前回の出現から既に一千匹以上は狩っているはずなので、一千匹ではないのは間違いない。可能性としては二千匹か三千匹だろうか。

討伐数のカウンターがないので、あと何匹狩ればいいのかもわからない。

「そろそろ、いい時間だから今日は引き上げようか」

「わかりました」

「ああ、また明日な」

「マイロード明日はお任せください」

サーバント達をカードに戻して地上へと戻る。

この季節の夕方は気持ちが良い。

魔核も順調に集まっているので明日から集中して探索に臨みたい。
家に帰ると珍しく夕食がカレーではなく麻婆豆腐だった。

カレーに食傷気味だったので久々の中華はいつも以上に美味しく感じた。

「母さん麻婆豆腐って久しぶりだよね。おいしかったよ」

「そう、よかったわ。それで、旅館は決まった？」

「え？ いや、ただけど」

「海斗、ゴールドデンウィークを舐めちゃダメよ。早く取らないとどこも行けなくなってしまうわよ」

「あゝそうなんだ。また見ておくよ」

「頼んだわよ」

もしかして今日麻婆豆腐だったのってこれがあるからか？

そうだとしたらギリギリまで延ばした方が良かったりするのだろうか？

まあ、本当に予約が取れなくなるとまずいから、一応この後夜にでも探してみようかな。

麻婆豆腐を食べ終わってから自分の部屋に戻ってスマホを開いて以前行った宿のホームページを開いて予約ページに進んでみる。

「あ……」

予約ページのカレンダーの中のゴールデンウィークには全て×がついていて予約不可となっていた。

「まずいな……」

正直、この宿を取ろうと思っていたので他は全く考えていなかった。俺は焦りながら、宿の予約サイトを検索してゴールデンウィーク中に空いている宿を探してみる。

「マジか……」

なんとゴールデンウィーク中は既にほとんどの宿で満室と表示されている。

母さんからゴールデンウィークを舐めるなど言われたばかりだが、俺はどうやらゴールデンウィークを舐めていたらしい。

慌てて空いている宿を確認するが、空いている宿は完全に二極化していた。

温泉無しで部屋はトイレ別のレトロな小さな宿か高級温泉宿のハイクラスな部屋しか空いていない。

母さんからは温泉宿と言われているので前者はなしだ。残るはハイクラスの高級宿しかないが、値段を見て驚いた。

高級宿なので通常でもそれなりの値段がかかるのだと思うが、今表示されている金額は恐ろしく高い。

一泊二食付きがここまで高いのか……

二人で泊まると低級ポーションが買ってしまうが、約束した以上取るしかない。

「うつつ」

俺はスマホの予約画面に進み、恐る恐る高級宿の予約ボタンを押す事にする。

「あゝ押してしまったけど、約束だもんな」

自分で予約を取っておいてあれだが、ここまでの高級宿を予約する気はなかったので、さすがにへこんでしまった

第568話 震える手で予約（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第569話 いつもの

週末になったので朝からパーティーメンバーで十七階層に潜っている。徐々に奥へと向かって進んでいるが、今のところ先週末までに遭遇した竜しか遭遇していない。

「海斗、春香が明日誕生日なんですよ」

「よく知ってるな。そうだよ」

「夕食を一緒に食べるんですよ」

「そうだけど、春香に聞いたのか？」

「行くお店決めたの？」

「いや、まだだけど」

「え……明日なのよね。予約しないとまずいでしょ」

「お店って予約するものかな」

「当たり前でしょ。海斗やばいわよ。日曜日はどこもいっぱいよ。」

今日の探索が終わったらさっさと予約しなさいよ」

「わかった。探してみるよ」

俺は昨日までに両親の宿の予約は済ませていたが明日のお店の予約はまだしていなかった。

大体飲食店に予約をして行った事なんか今までに一度もなかったの
で予約をする発想自体がなかったが、ミクの口ぶりから、予約して
おかないと明日の夕食がまずい事になるのは理解できたので、探索
が終わったら即スマホで調べて予約する事にした。

「マイロードお気をつけください。その左側にトラップがあります」

「ああ、ベルリアありがとう」

前回潜った時にも冬彦さんが十七階層は結構トラップが多いと言っていたけど本当だな。

「ルシエ気をつけてくれよ」

「失礼な事を言うな。わたしがトラップなんかにかかるはずないだろ！」

「そうは言ってもな」

「あつ……」

「ルシエどうしたんだよ」

「壁が……」

ルシエが触れた壁の周囲が、なぜか一部凹んでいる。

これは元からじゃないよな。

「ルシエまさか……」

「……」

間違いない。ルシエがまたやらかした。今度は何が起こるんだ？ 壁の凹みからは、銃口に似た物体がいくつかせり出してきた。まずい。

「シル！ 『鉄壁の乙女』だ！ みんなシルの周りに飛び込め！」

俺の声に反応して全員が一齐に動き出す。

シルは即座に『鉄壁の乙女』を発動し、俺はシルに向かってジャンプして飛び込んだ。他のメンバーも既にシルに向かって動き出している。

ルシエもすぐに壁から手を離し『鉄壁の乙女』の効果範囲の中に俺よりも早く到達しているのが見えた。

俺が飛んでいる最中に壁からせり出した銃口から複数の発射音が聞こえてきた。

俺は間一髪光のサークルの内側に飛び込む事が出来た。俺がサークル内に滑り込んだ直後無数の銃弾が光のサークルに襲いかかったが『鉄壁の乙女』が銃弾を通すことは一切なかった。

「ふゝ危なかった。あとちょっとでも動き出しが遅かったら危うく蜂の巣にされるところだったな」

「まあ、みんな無事だったんだから、問題なしだな」

「いや、問題あるだろルシエ」

「だって壁が……」

「だってじゃない。あれだけ注意するように言っただろ。しかも避難するのが俺より速いっておかしいだろ。俺なんか危うく死ぬところだったんだぞ」

「わるかったよ」

「わるかったよ？」

「ご、ごめんなさい」

「は……もう何も触るなよ」

「わかった……」

一体ルシエは何度トラップにかかれば気が済むんだろうか。

しかも毎回本人にはなんの被害も及ばず、影響があるのは俺ばかり。

これも悪魔による一種の呪いなのだろうか。

それならルシエと一緒にいる限りこの状態が続く可能性もあるが、ルシエを切り離すという選択肢がない以上やむを得ないのかもしれない。

まあ、ルシエが単純にドジなだけという可能性もあるので、今後とも注意を続けていこうとは思う。

効果はないと思うけど、今度春香を誘って神社でお祓いでもしても

らおっかな。

第569話 いつもの（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第570話 風竜

俺は今まで以上にトラップへと気を配りながら慎重に進んでいる。以前組んでいたフォーメーションに戻し、ベルリアを先頭にシルを中心にメンバーが極力固まって進む事にした。今の俺はドラゴン以上にトラップを警戒していた。

「ご主人様、敵モンスター三体がその先を曲がったところにいます」

「ベルリア！ その位置迄にトラップはないか？」

「マイロード、おそらく大丈夫だと思います」

敵モンスターに突っ込んだ瞬間、無防備にトラップにハマる事だけは避けたい。

「ベルリアと俺で先に敵を確認。あいりさんとシルは敵の種類が確認でき次第攻撃してください」

壁に阻まれて全く敵の姿が見えないので、慎重にベルリアと俺で先に進んで行く。

通路の角まで来たので、そっと覗いてみるが十メートルほど先にドラゴン三体が見える。

かなり近いな。

姿を見る限り雷竜に近い気がするが、今まで出現した雷竜とは少し体色が違い、青みがかかった色をしている。

もしかして違う種類なのだろうか？

「ベルリアどう思う？ あれって雷竜か？」

「見た目は似ていますが、三体とも雷竜とは色が違うのでおそらく

は違う種類かと」

「そうだよな。とりあえずここから二人で狙ってみるか」

「わかりました。お任せください」

俺達は気配を薄めているので、ドラゴンにはまだ気付かれていない。俺は『ドラグナー』を構えて一番手前にいるドラゴンに狙いを定める。

邪魔も入らないので完全に狙いをつけた状態で『ドラグナー』の引き金を引く。

『ドラグナー』が発光し弾が射出されドラゴンの頭部に命中。

ベルリアもほぼ同じタイミングで風の魔刀で『ヘルブレイド』を放った。

風を纏った黒い刃がもう一体の竜に向けて飛んでいったが、黒い斬撃がドラゴンに命中した瞬間、ドラゴンの体表に分散して消え去った。

俺が撃ったドラゴンはそのまま消失したが、ベルリアの狙ったドラゴンはそれほどダメージを受けた気配がないが、攻撃を受けた事でこちらを認識した二体のドラゴンが猛然と突進してくる。

「シル、あいりさん、ドラゴンが二体向かってくる！」

「ベルリアー旦那引くぞー！」

ベルリアの攻撃が無効化された理由がわからないのでベルリアを一旦下げる。

俺とベルリアが後方へと逃げるのとすれ違うようにシルとあいりさんが前に出る。

「早く消えてください。ご主人様の妨げになっています『神の雷撃』

」

シルの雷撃がこちらに向かって来ていたうちの一体に炸裂し消滅した。
残りは一体だが、あいりさんが『アイアンボール』を発動し、鉄球がドラゴンに向けて飛んで行くが着弾する少し手前で鉄球がドラゴンの表皮を滑って後方へと流れた。

「なんで……」

ベルリアの時よりも鉄球の動きはわかりやすかった。

ドラゴンの五十センチほど手前から後方へとスルツと滑って流れた。だけど、あの変な動きはなんだ？

ドラゴンが勢いを弱める事なくあいりさんに向かって来ているので、ミクに援護を頼む。

「ミク、足止めを頼んだぞ！」

「まかせてよ『ライトニングスピア』」

ミクはすぐさま雷の槍をドラゴンに向けて放つが、先程の鉄球のように滑る事なく命中した。

「ガハアアア〜！」

ドラゴンがミクの攻撃による痛みで、その場に止まった。

「ベルリア！ 倒すぞ！」

俺とベルリアはあいりさんと一緒にドラゴンへと駆けて行く。接近して攻撃しようとして気がついた。

こいつは風竜だ。

ベルリアが風を纏う刀で斬ろうとしたが、表面を覆う見えない防御

壁に防がれてしまった。

防がれた瞬間に見えたが、このドラゴンの体表を風が流れながら覆っている。

この風の壁に同属性である風の魔刀の一撃は防がれてしまったようだ。

第570話 風竜（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第571話 亜種？

ベルリアがもう一方の炎の魔刀で斬りかかるが、やはり弾かれてしまった。

どうやらこのドラゴンは風と炎には、かなりの耐性を持っているようだ。

あいらさんが続けて『斬鉄撃』を繰り返す。

薙刀の一撃は風の壁を抜け風竜にダメージを与えることに成功した。あと少いで倒せる。

ベルリアがジャンプして回転しながら『ダブルアクセルブースト』を発動して、力尽くで風の障壁を突破して風竜へとどめをさした。

「ベルリアよくやった。ベルリアとは相性がよくなかったな」

「この程度の敵相性など問題になりません」

「まあ、倒せたからよかったよ」

思った以上にこの風竜に手こずってしまった。

風と炎と物理に耐性があったようなのでかなり攻撃を限定されてしまった。

それを考えると雷系と『ドラグナー』はドラゴンに対する有効度が高いな。

「海斗、まさか『アイアンボール』が逸らされるとは思わなかったよ。雷竜に続きドラゴンへの戦い方は注意が必要だな」

「そうですね。それにこれまで出現しているドラゴンは、比較的小型ですよ。おそらくレッサーと呼ばれる下位種なので、この階層で上位種が出るかはわかりませんが、注意は必要ですね」

ここまでで、炎、地、水、雷、風の属性竜が出現しているので、考えられるほぼ全ての属性が出て来たことになるが、まだダンジョンの序盤なのでこれで全ての種類のドラゴンが出て来たとは思えない。

「ご主人様お腹が空きました」

「ああ、わかってるよ」

「マイロード私にもお願いしてよろしいでしょうか」

「まあ、頑張ったからな」

「当然わたしにもくれよ」

「ルシエ、さすがに今回は無理だぞ」

「わたしもお腹が空いたんだよ！」

「今回、ルシエは何かしたのか？」

「しっかり見てたぞ！」

「見るだけじゃなく。次回頑張れ」

「うっっ……」

何か俺が悪いような雰囲気だが、今回ルシエの出番は無く全くMPもHPも消費していないのだから、食べただけのルシエには今回はおあずけだ。

次にスキルの一回でも発動したら魔核を渡そうと思う。

それにしても、他の二人と一緒にしてもらいにくるとは強欲というかちゃっかりしているな。さすがはルシエだ。

そこから数度の戦いを経て先日マッピングしたポイントを越えて更に探索を続ける。

「ご主人様、敵モンスター四体です」

「おい、海斗！ 今度はわたしもやるからな。ちゃんと魔核をくれよ」

「わかってるって。それじゃあ今回はスナッチに露払いしてもらおうから頼んだぞ」

スナッチも前衛の俺達と並んで敵を目指して進む。

「あれって、一応水竜と地竜の一種か？」

「そうみたいだな」

眼前に見えているのはドラゴン四体だが今までに出てきた属性竜のどの姿とも異なっている。

二体は表面に氷を纏っており、もう二体は外皮が明らかに金属でできている。

水竜と地竜の亜種か？

いずれにしても、水竜、地竜よりも目に見えて防御力が高そうだ。とりあえずメタリックのドラゴンとルシエの相性が悪いことはわかる。

ドラゴン四体がこちらに気がついたので、スナッチが前方へと駆け出し『ヘッジホッグ』を発動してから戻って来るが、鉄の針はドラゴンの外皮を貫通することではなくダメージを与えることはできなかったようだ。

どうやら見た目通りに硬いらしい。

「さっさとくたばれ。くたばってわたしの魔核の足しになれ！」

破滅の獄炎』」

ストレスを溜めていたルシエが俺達に先駆けて先制攻撃を仕掛けた。ルシエが獄炎を放った相手は、なぜかメタリックのドラゴンだった。ルシエ……その竜はどう考えても相性が悪いだろ。地竜の耐性を更に高めたような奴だぞ。燃やせるのか？

第571話 亜種？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第572話 アイスタンス

「ガアアアアア」

金属の外皮を持つ竜がルシエの獄炎をくらい悶えている。

間違いなくドラゴンにはダメージを蓄積はさせている。あの悶え様なら、おそらくこのままこちらを攻撃する事なく倒すこともできる気がするが、石のドラゴンであれだけ時間がかかったのだから金属はもつと時間がかかるだろう。

これは、燃え尽きるまで当分、放置するしかないな。

「シルもう一体の方を頼んだぞ。ベルリアとあいりさんであの氷の竜を倒しましょう」

氷を纏った竜だが、俺の魔氷剣は相性が悪そうなので、バルザードと『ドラグナー』で戦う。

俺はいつものようにあいりさんの後ろについて駆ける。

「アイアンボール」

あいりさんが鉄球を放つが、風竜のように受け流される事はなく見事に氷を纏う竜のど真ん中に命中する。

鉄球が命中して氷の外装にダメージを与えるが、残念ながら本体に大きなダメージを与えるまでは至っていないようだ。

俺が死角から飛び出して鉄球が命中した箇所を狙おうとするが、氷竜がこちらに向けてスキルを発動してきた。

「おああああ〜！」

氷竜のスキルは俺とあいりさんの周囲を凍らせる効果を持っていた。俺自身はマントの効果と装備に守られて、凍りつくような事はなかったが、問題は走っている足下の地面が凍ってしまった事だ。

以前にも似たようなことがあった気もするが、走っている最中に突然足下の地面が凍ってしまうと当然止まれないだけでなく、デザートブーツの底も当然のようにグリップを失い盛大に転んで勢いよく氷竜に向かって滑っていく。

同じ状況のはずのあいりさんは、なぜか転ばずに体勢を保っている。俺はあいりさんの横を滑りながら追いついて行くこととなったが、すれ違いざまにあいりさんと視線が合い、あいりさんのなんとも言えない表情が印象に残ったが、俺には時間的な余裕は無い。

このままいけば氷竜のところまで滑っていつてしまう。

焦ってはいるが、慣性の法則から逃れる術はなく滑っているこの状況でできる事はあまりにも少ない。数十秒間も滑っていたような感覚が残っているが実際には一秒程度だったかもしれない。

突然地面の氷が途切れて、強烈な抵抗感と共に止まってしまった。氷竜のスキルの効果範囲外にまで到達してしまっただけだが、目の前には氷竜が控えていた。

目と鼻の先とは、この事だがとにかくまずい。

滑った影響ですぐに立ち上がることが出来なかったため、とにかく逃げなければという一心で転がってその場からの離脱を試みるが、氷竜が俺に向かって攻撃を加えようとしているのが、回転する俺の目に映った。

『ライトニングスピア』

ミクの声と同時に雷の槍が氷竜を射抜き俺への攻撃を食い止めてくれる。

『斬鉄撃』

あいらさんが間合いを詰めて氷竜へと攻撃をかけてくれる。

俺へと攻撃しようとしていた無防備な状態で雷の槍をくらった氷竜は完全にノーガードとなっており、あいらさんが放った一撃は見事に氷竜の首元へと食い込んだ。

あいらさんは、そのまま食い込んだ刃に力を込めて氷竜の首を落としました。

助かった……

完全にやられるタイミングだった。

ミクの助けがなければ、あのまま攻撃をくらっていた可能性が高い。あの瞬間の俺は氷竜を相手にするには、あまりにも無防備な状態だった。

武器を構える事も防御態勢をとる時間もなかった。

今回の氷竜に対して俺は何も出来なかったが、心強い仲間がいて俺は幸せ者だ。

俺のミスをメンバー二人が完全にカバーしてくれた。

例えレベルが高くなったとしても今のように文字通り足下をすくわれる事がある。突然走っている足下が氷で覆われたら、レベル22のステータスは完全に無効化され今回のような事態を招く。今後初見のモンスターには特に注意して臨む必要がある。

第572話 アイスタンス（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第573話 不燃物

氷竜を一体倒す事に成功したが、サーバント三人はまだ戦っている。ベルリアは、俺達とほぼ同じタイミングでもう一体の氷竜との交戦に入ったが、氷竜がベルリアとの戦いの最中、俺に向けて放ったのと同じスキルを発動した。

スキルにより地表が凍ってしまったが、なぜかベルリアは俺のように派手に転ぶことはなく、空中へと華麗にジャンプして避けている。ほぼ俺と同じシチュエーションなのに何が違うんだろうか。あいらさんも転ばなかったし何か理由があるなら知りたい。空中へと舞ったベルリアが氷竜へと攻撃をかける。

「ヘルブレード！」

黒い炎の斬撃が氷竜に襲いかかり、大きなダメージを与える事に成功した。

「ヘルブレード」は黒くても炎には違いないので氷竜とは相性がいいようだ。

「これで終わりです。あなたは戦う相手を間違えたようですね」

やたらと上からの発言を残してベルリアが魔刀を振るいとどめをさした。

「その外皮は飾りでは無かったようですね。仕方ありません。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

どうやらシルは最初に『神の雷撃』を放ったようだが、金属製の外

皮を持つ竜には相性が良くなかったようで、竜の背中部分を真っ黒に焦げさせてはいるが、一撃ではしとめきれなかったらしい。今度は確実にしとめる為にシルは神槍の一撃を放ったが、当然の如く今度はあっさりと消滅してしまった。ただ、シルの雷撃を一撃だけでも耐え切ったのは敵ながら称賛に値すると思う。

「ご主人様、思ったよりも手間取ってしまいました」

「ああ、全然大丈夫だぞ。まだまだ時間がかかりそうなのがいるし」
戦闘はほぼ終わっているが、もう一体の金属竜は相変わらず獄炎に焼かれている。

なまじ耐性が高いだけに、俺達の戦闘が終了してもずっと燃えている。

「ルシエ、だから言っただろ。絶対時間がかかるって」

「うるさい、うるさい！ たまたま時間がかかっているだけだ。たまたまだ！」

「いや、普通に考えて金属が燃え切るのには時間がかかるだろ。どう考えても氷竜の方が相性は良かったと思うけど」

「くっ 減らず口ばかり」

どう考えても俺のは減らず口じゃなくて正論だと思うけど、これ以上突っ込むとルシエが拗ねるのがわかってるのでスルーしておく。それにしてもなかなか燃えきらないな。

「ベルリアだったらどうやって倒す？」

「マイロード、もちろん二刀での『アクセルブースト』で首を落とすしてやります」

「まあ、武器もパワーアップしたいけるかもしれないな」

氷竜は、俺のピンチはあったもののそれなりに上手く倒す事が出来たと思うが、金属竜は結構苦戦しそうだな。

バルザードに切断のイメージをのせればいけるか？

冬彦さん達が使っていた爆弾とかも有効かもしれないな。

「シル、ルシエのは、なかなか終わらないな」

「ご主人様、相性というものがありませんから、大目に見てあげてください」

「マイロード、姫様にも意地というものがあるのです。是が非でも獄炎で焼き切るといふ気概を褒め称えるべきかと」

「そういうものかな」

「そういうものです」

おそらく時間にして五分は燃えていたのではないだろうか？
ついに金属竜は獄炎に消し炭にされてしまった。

「どうだ、見たか！」

「ああ、しっかり見させてもらったよ」

「ふん、金属だろうがなんだろうがわたしの獄炎の敵じゃないな」

「まあ、たしかに敵ではなかったな」

「次もわたしが燃やし尽くしてやるよ」

次に金属竜が現れたら、ルシエ以外に担当してもらおう事にしようと思っ

先を急いでいるというのにルシエのせいで思いの外時間をくってしま

った。
俺達は魔核を回収して先に進む事にする。

「おい、お腹がすいた」

「ご主人様私もお腹が空きました」
「わかってるよ」

俺はシルのために魔核三個ずつを二人に渡し、ベルリアにもおまけで一個渡しておいた。

さすがに一回の戦闘で魔核九個はキツイのでベルリアには、少しだけ我慢してもらおう事にする。

第573話 不燃物（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第574話 予約はお早めに

「そういえばベルリア、さっき氷竜がスキルを使った時どうして転ばなかったんだ？」

「マイロード、それは修練の賜物です」

修練の賜物と言われても全く意味がわからない。

「あいりさんも転びませんでしたよね」

「ああ、危なかったが、日頃体幹を鍛えているのが役に立ったな」
「体幹ですか」

「そうだ。武術において体幹を鍛える事は必須だからな」

「それをやれば俺も転ばなくなりますか？」

「転び難くはなると思う」

そうか、俺と二人の違いは体幹を鍛えているかどうかか。

たしかにアスリートがよく体幹トレーニングとかがって口になっているのを聞いた事がある。

今後にも体幹トレーニングというのをやってみようかな。

さっきのような場面で派手に転ぶのと耐え切るのでは命にかかわってくるので真剣に検討しようと思う。

この後もマッピングを進め数度の戦闘を経て、この日の探索を終える事にした。

「今日は結構順調でしたね」

「ああ、この調子で明日も頑張ろう」

明日の行動予定を確認してから俺はみんなと別れて家に帰った。

今日も問題なく順調に進むことができたが、やはりヒカリンがいな
いせいで、後方からのサポートが若干弱くなっているのは感じる。
おそらくヒカリンの『アースウェイブ』はドラゴンに対してもかな
り有効だったと思われる。

俺も隠密というよりも正面から戦う機会が増えてしまっているので、
確実にヒカリン不在の影響が出ている。

今後ヒカリンの代わりにはなり得ないが、この階層では、ほとんど
活躍していないスナッチに今まで以上に活躍してもらおう必要がある。

「あ！」

地上に出ると、春香から俺のスマホに明日の予定を確認する連絡が
入っている。

そういえばまだお店を予約してない。

やばい、頭から抜けていた。

俺は慌てて、お店の予約サイトで検索を始める。

「なにがいいかな」

せっかくの誕生日なので、春香が喜んでくれそうなお店がいいけど、
俺には発想力が乏しいようで女の子はパスタが好き。という事は女
の子はイタリアンレストランが好きぐらいしか思いつかない。

いろいろ思い浮かべて見たが

「やっぱりイタリアンだな」

検索をかけると数件のイタリアンレストランがヒットしたが、スマ
ホで見える限りどのお店もおしゃれで美味しそうに見える。

順番に見ていくが、だいたい二人で五千円から七千円ぐらいのプラ
ンが多いようだ。

「これがいかな〜」

目にとまったお店の予約画面に進むが、なんと明日の予約欄がすべてバツがついていて予約できない。

「うそだろ……」

ミク達が予約しないと危ないとは言っていたが、本当だった。焦った俺は順番に他のお店のお店の予約画面も確認していく。

「やばい……」

日曜日の夜ってそんなにみんな外食しているのか？

どのお店もいっぱいだ。

俺から誘っておいてお店が取れないって……

信じられないが、予約サイトにのっているお店はどのお店もいっぱい予約を取ることができなかった。

悩んでいても仕方がない。

俺は再度お店の画面を開き、とにかく順番に電話していく事にする。

「もしもし、明日の夜なんですけど二名いけますか？」

「申し訳ございません。生憎その時間はご予約でいっぱいとなっております
おります」

「そうですか。わかりました」

一軒目は電話で確認してもやっぱりいっぱいだった。

俺はその後も順番に電話をかけていった。

四軒目まですべて断られて、五軒目のお店に電話した時だった

「はい明日の夜です」

「ちょうど明日の夜に一組キャンセルが出まして、今でしたらご予約していただけますよ」

「本当ですか！ それじゃあ予約お願いします」

たまたまキャンセルが出て席が空いてると言われたので即予約して、コース料理を頼んでおいた。

それにしても、予約なしで行こうと思っていた自分が恐ろしい。

予約せずに明日を迎えていたら大変なことになるところだった。

予約を勧めてくれた、ミクとあいりさんには感謝だな。

それにしても今回の予約で日曜日のイタリアンは人気だと思い知らされることになった。

第574話 予約はお早めに（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第575話 アモーレ

「ミク、あいりさん助かりました。なんとか予約取れましたよ」

「よかったわね」

「どこに行くことにしたんだ？」

「アモーレっていうイタリアンのお店です。他は全部いっぱいでした」

「アモーレ……まあいいんじゃないか」

「海斗やるわね」

イタリアンを直前に予約出来たからか二人は妙に感心してくれている気がする。

どうやら俺の選択は間違っていないかったようだ。

トラップに気をつけながら昨日のポイントまで進んでいくが、出現するモンスターは既に戦った事のあるモンスターばかりなので上手く対応しながら進めている。

この階層は十六階層の様な特殊フィールドは無く、所謂普通のダンジョンだ。もちろんドラゴンが複数体出現するので、通路も含めてかなりの広さはある。

トラップについてもあからさまにわかるものは少なく、ベルリア頼みと各自が余計な所に触れないようにして進んでいるが、ルシエも反省して今は真ん中に近い部分を歩いている。

「そういえば、誕生日プレゼントはなにを買ったのよ？」

「ああ、ジュエリーショップで時計を買ったんだ」

「時計ね。結構やるわね」

「そうだな。海斗にしては積極的だな。アモーレに時計か」

「そうですね？」

アモーレと時計が積極的という意味はよくわからないが、時計のチヨイスも二人には好評のようだったので、あの店員さんには感謝だな。

「やっぱり春香だったな」

「そうですね。うらやましいです」

「わたし達にはケチケチするくせにプレゼントまで買ったって言うぞ」

「そうですね。私もご主人様からのプレゼントを……」

「この前の赤い魔核がいいな」

「そうですね。赤い魔核をプレゼントしてもらえると幸せです」

シルとルシエはいつものように二人でここそ密談しているが、あまりいい予感はない。

「ご主人様、敵モンスターが四体あちら側にいます」

「じゃあいつもの通りでいくぞ」

シルの指示に従いモンスターのいる場所へと向かうが、現れたのは氷竜と金属竜だった。

「ルシエ、わかってるな」

「うるさいな！ 言われなくてもわかってるよ」

「シルとベルリアが金属竜を。俺とあいりさんとルシエで氷竜をやりますよ」

それぞれが、ドラゴンへと向かって走り出す。

先頭をベルリアが走り、俺とあいりさんが続く。

俺が注意するのは氷竜のスキルだ。

急に体幹が強くなる事などあり得ないので、今回は近づいたらスピードを落としゆっくりと移動する。

氷竜を目の前にして予定通りスピードを緩めるが、前回同様に氷竜もスキルを発動して足下の地面が凍り付いてしまった。

俺は慎重にその場から移動を試みるが、一歩動いた瞬間靴底がツルツル滑る。

「あつっ！」

スピードを緩めていたおかげで前回のようには勢いよく滑っていくということはなかった。ただ気を抜くとすぐにでも転倒してしまいそうになるが、ドラゴンが俺の都合に合わせてくれるはずもなく、その場に留め置かれた俺に向かって攻撃を仕掛けてきた。

ドラゴンが噛みつきこうと襲ってくる。

俺は咄嗟にバルザードを振るい、ドラゴンの攻撃を食い止めるが、ドラゴンとの接触の瞬間、足下の氷の影響で踏ん張りがきかずに滑って、後方へと吹き飛ばされてしまった。

「くっ……」

四〜五メートルほど後方へと吹き飛ばされて地面に全身を打ちつけてしまい、痛みのせいですぐに起き上がれない。

「たかだか凍った蜥蜴の分際で海斗に！ 調子にのるなよ。さっさと溶けて無くなれ！ 『破滅の獄炎』」

俺が吹き飛ばされたのを見て、ルシエが俺を庇うように、俺に攻撃してきたドラゴンに対して獄炎を放つ。

第575話 アモーレ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第576話 とどめ

ルシエの獄炎が氷竜を襲う。

やはり氷竜と獄炎は相性が抜群にいいようで、見ている側から身体の表面を覆っていた氷はどんどん溶けてなくなり、剥き出しとなった外皮は獄炎によりあつという間に燃やし尽くされてしまった。

「ルシエ助かったよ」

「それよりさつさともう一体を倒せって」

「ああ、そうだな」

背中はまだ痛い動けないほどではないので、起き上がった残りの氷竜へと攻撃を試みようとするが、すでにあいりさんが先に交戦している。

『斬鉄撃』

あいりさんの一撃が氷竜の外装を砕きダメージを与えるが、氷竜が傷みに悶えながら口を大きく開いた。

この感じは、まさかブレスか？

「あいりさん！」

さすがに至近距離からブレスをくらえばただでは済まない。

『アイアンボール』

あいりさんは、慌てる事なく冷静に氷竜の開いた口に向かって鉄球

を叩き込んだ。

口の中への鉄球攻撃は、ほぼ決定打に近いダメージを与える事に成功したようだが、とどめをさすべく俺も氷竜の側面まで走って行きバルザードの刃に切断のイメージをのせて突き刺し、そのままバルザードを振り切る。

バルザードによる一撃はドラゴンの首の根本部分を大きく抉り氷竜を消滅へと追いやった。

今度はいりさんのおかげもあり攻撃をくらう事なく倒す事ができた。

「それでは、そろそろ終わりにしましょう。あなた達がご主人様に危害を加える事はあってはならないことです。我が主人の敵を滅ぼせ神槍ラジユネイト」

たぶんあの感じだと、シルは怒ってるな。俺が氷竜に飛ばされたのを見ていたんだろう。いつもよりも力が入ってる気がする。場違いだが、俺のために怒ってくれているのを感じるので、内心少し嬉しかった。

シルの渾身の一撃はあっさりと金属竜の装甲を突破して大穴をあけ消滅へと誘った。

残る敵は一体。

「さすがに硬いですね『アクセルブースト』」

ベルリアが金属竜とやりあっているが、やはり外装の硬さに苦戦しているようだ。

ドラゴンの攻撃をほぼ完璧に避け切ってから、魔刀で斬り付けているが『アクセルブースト』以外の攻撃は、外装に傷はつけているものの深手を負わず事はできていない。

逆に『アクセルブースト』を使って斬った所は肉に達する傷を与え

る事ができてきているようで、傷口からは青い血が流れており、金属竜の動きが幾分鈍ってきているように感じる。

「そろそろグロッキーですか？ 『アクセルブースト』」

ベルリアが必殺の一撃を放つが、ベルリアの一撃は寸分変わらず、すでに傷のある箇所へと吸い込まれていく。

「グアアアア〜！」

「これでもまだ決まりませんか。驚異的な硬さですが、他の皆様をこれ以上お待たせするわけにはいきません。これで決めます『アクセルブースト』」

三度放たれた『アクセルブースト』による一撃が、先ほどと全く同じ箇所へと叩き込まれ、今度は肉と骨を断ち金属竜を倒す事に成功した。

「ベルリア流石だな。ルシエの時よりも早かったんじゃないか？」
「マイロードそんな事はありません。攻撃の質の差ですよ。思った以上に硬かったので多少苦労しましたが、涓滴岩を穿つです。いくら硬い装甲でも、寸分変わらず同じ箇所へと攻撃を集中すれば貫く事も可能となりますが、これもマイロードからいただいたこの二刀のおかげです」

なんとなく、今日のベルリアは格好よく見えるな。

本来ベルリアは格好よく見えるだけの技量と強さを持ち合わせているはずだが、どこか抜けているのとパーティ内での立ち位置から、格好よく見える機会は思いの外少ない。

第576話 とどめ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第577話 スモールドロップ

「海斗、さっきの戦闘で結構派手に飛ばされてたけど大丈夫なの？」

「ああ、一応大丈夫だよ。まだちよつと背中が痛いけど」

「今回はフォローできたが、数が多い時は、さっきみたいなのが致命傷になりかねないから、注意した方がいいぞ」

「そうですね。今度からは危なくなったら出し惜しみせずに即『ドラグナー』を撃つ事にします」

「それがいいだろう」

あのまま、あいりさんのフォローがなければ、起き上がる前に氷竜にやられていた可能性も十分にあった。

極力節約の為に『ドラグナー』を使わずに戦闘をすすめようとしていたが、十七階層はそう甘いものではない。

一瞬の判断を誤ると命にかかわる上に俺の脱落は他のメンバーの命にも直結している。

今回は俺の判断が遅れたせいで、みんなにも迷惑をかけるところだった。次回からは同じ轍を踏まないように気をつけたい。

俺は先に進む為に、ドラゴンを倒した場所へ行き魔核を探すが、落ちている魔核はいくら探しても三個だけだ。四体倒したので魔核は四個あるはずだが残りの一個はどこにも無く、代わりにハンカチ程度の薄い革のようなものが残されているだけだ。

「ミク、あれつてもしかしてドロップアイテムかな」

「魔核が一個足りないからたぶんそうじゃない」

「あれって何？」

「……ドラゴンの革？」

「ハンカチぐらいの大きさしかないけど」

「一応拾ってみたら？」

そう言われて、ドロップアイテムと思われるハンカチ大の革のところまで歩いて行き拾ってみる。

「思ったよりも重量がある気がするけど」

拾い上げた革らしきものは、ほぼ四角に近い形をしており、よく見ると表面に爬虫類系の鱗のようなものが付いているのでドラゴンの革に間違いなさそうだが、大きさはハンカチ程度の大きさしかない。

「これ、ドラゴンの革素材だと思うんだけど買い取ってもらえるのかな」

「まあ一応ドロップアイテムだし買い取ってもらえるんじゃない」

「ああ、そんなのでドラゴンの素材には違いない」

「これって何かに使い道あると思いますか？」

「ハード目なハンカチか財布ぐらいにはなるんじゃないか？」

「ああ、財布は良さそうですね。ヘビとかワニとかの財布がありますよね。ドラゴンの財布ってカッコいいし縁起がいい気がしますね」

「それなら海斗が使えばいいんじゃない？ 売ってもあんまりお金になりそうにもないし。海斗ってどんな財布使ってたっけ」

「うん俺が今使ってるのは普通の2つ折りの財布だけだ」

ドラゴン革の財布か。なんとなく響きはカッコいい気がするけど、俺のキャラクターではないような気がする。

どっちかという武器屋のおっさんとかに似合いそうだ。

アメリカンバイクに乗ったワイルドな感じの人が、ドラゴン革の財布を取り出すといい感じかもしれないが、やっぱり俺ではない気がする。

ボス戦以外では久々のドロップアイテムだが、あまり価値を見出せ

なくて正直ガツカリだ。

「一応マジック腹巻きにしまい込んで俺達は気を取り直して奥へと進んで行く。」

「まあ、滅多に出ないドロップが出たんだから、今日の運はいいんじゃないかな」

「まあ、そうかもね」

「そうだな、前向きなのはいい事だぞ」

まあ当たり前だが、この革は、みんなハズレだと思っているのだから。

普通革素材といえれば一体分とかせめて半身分ぐらいは期待する。

だが、まだ時間は十分にあるので今日の俺達の運勢なら更なるドロップアイテムを手に入れる事もできるかもしれないので、無理やりテンションを上げて探索を続ける。

第577話 スモールドロップ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第578話 金属竜

俺は自らを鼓舞してテンションを上げ、探索を続けているが、まだ竜の革以外には何もドロップしていない。

「やっぱり、そう簡単にドロップしないな」

「海斗と一緒にだと特にね」

「ああ、本当に稀だな」

俺のせいなのか、サーバントである悪魔二人のせいかはわからないが、身に覚えがあるのでミク達の言い分に言い返す事はできない。

「ご主人様、モンスター五体です。数が多いのでご注意ください」

五体か。この階層では今までの最大数だな。

「一人一体を相手にいこうか。ミクはスナッチと一緒に俺とあいりさんのフォローを頼んだ」

前衛四人が前に立ちルシエとミクが後ろについてくる形で慎重に進んで行く。

「あゝ五体ともか……」

進んだ先にいたのは、想定外だったが五体全てが金属竜だった。

この時点でスナッチは、牽制役としてほぼ無力となり、ミクのフォローも他の竜ほど期待できなくなってしまった。

シルはそれほど苦にしないだろうが、他の四人は相当に相性が悪い。

「ちよつと硬くなつたぐらいがなんだ！ 調子に乗るなよ蜥蜴風情が！ どうせ時間をかけて燃えるだけだ！ 結果は一緒なんだからさつさと燃えてしまえ『破滅の獄炎』」

ルシエが速攻でスキルを発動して金属竜を炎で覆い尽くす。

これで一体の足は完全に止まったので、俺達が頑張るしかないが、おそらく倒すのはルシエのドラゴンが最後になるな。

俺が金属竜の取れる作戦は二つ。

一つはバルザードに切断のイメージをのせて斬り落とす。

もう一つはある程度近づいた位置から『ドラグナー』で狙い撃つ。

おそらく、どちらの方法でもあの外装を破る事はできるはずだ。

俺は金属竜の一体に向かって駆けて行き、少し手前で足を止める。

俺が選択したのは『ドラグナー』での一撃。

「これで決まってくれ！」

狙いを金属竜の頭部に定めて『ドラグナー』の引き金を引く。

『ドラグナー』が蒼い光を発し、蒼い光の糸を引いてドラゴンに向かって弾が放たれる。

弾丸は見事にドラゴンの頭部に命中しそのまま勢いを弱める事なくドラゴン頭に風穴を開ける事に成功した。

「やった」

おそらく、金属竜相手でも効果を発揮するだろうとは思っていたが、一抹の不安はあったのでうまく倒せて良かった。

今回バルザードではなく『ドラグナー』を選択したのは、少しでも早く倒す為にリスクを減らしたかったからだ。

早く倒す事で俺がみんなのフォローに入れる状況を作りたかった。

近接でバルザードを使えば、反撃を受ける可能性も増える。イレギユラーな事もあり得るので『ドラグナー』を選択したが、今回その選択は正しかったようで上手くいった。俺はすぐにあいりさんのフォローへと走る。

「ガアアアア〜！」

金属竜の咆哮と共にベルリアが相手にしているドラゴンが口から無数の金属のニードルをベルリアに向けて放った。

「あぶないッ！」

スナッチのヘッジホッグをスケールアップしたような攻撃だ。

ベルリアは金属製のニードルが放たれた瞬間地面を蹴り宙へ舞いくるっと回転して何事もなかったかのように着地した。

ベルリアだから躲すことができたが、あの攻撃はやばい。

あれをくらったらナイトプリンガーはともかくそれ以外の場所は完全に蜂の巣になってしまう。

あの距離で放たれたら、俺は……

考えただけでも恐ろしい。

『斬鉄撃』

あいりさんが必殺の一撃を放つが、ドラゴンも後方へと下がりあいりさんの攻撃を躲す。あいりさんも更に踏み込んで追撃するが、今度は見事に金属竜の胴体部分に傷を負わせた。

第578話 金属竜（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第579話 サッカーは初心者

「そろそろ終わりにしますね。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

シルの一撃がドラゴンを消滅へと追いやった。

俺はあいりさんの背後から飛び出して金属竜へと斬りかかる。

バルザードの刃がドラゴンの肩口を抉るが、あいりさんの時と同様に後方へと避けられて致命傷には至らなかった。

「ガアアアア〜！」

「やばい！ あいりさん！」

ドラゴンが咆哮と共に口を開いた。

このままでは、金属のニードルが襲ってくる。俺が蜂の巣になってしまう。

一瞬後方のあいりさんに目を向けるが、すでに退避行動を始めているのが見えた。

俺の方が前に出ているので俺の方が時間がない。

頭をフル回転させて避けるルートを策定するが、この至近距離から放射線状に放たれるニードルを超人的に避ける身体能力は俺にはない。

もはや一瞬たりとも無駄にはできない。

既に金属竜の口からニードルが放たれたようとしている。

刹那の瞬間に俺の思考が加速する。俺は、やった事もないサッカーのスライディングの要領でドラゴンの頭の下に潜り込むべく勢いよく踏み込んで滑り込んだが、実際には俺が思い描いたようにはいかなかった。

ダンジョンの床はピッチの芝や運動場の砂や土のように滑ってく

れず、思いの他、滑った瞬間の抵抗が大きかった。

しかも俺は特殊効果で軽いとはいえ上半身にナイトブリンガーを身につけているので、上半身にウエイトが偏っていた。

結果、俺が滑った距離は僅かで、下半身の支えを失った上半身がそのまま万有引力に従い、ただ地面に落下する事となってしまった。

「！ イダっ……」

激しく背中と後頭部をダンジョンの床に打ち付ける事になったが、倒れた直後に俺の目の前を大量のニードルが通過していくのが見えた。

灯台下暗しで、さすがにドラゴンのニードルは至近距離の床までは攻撃範囲としていなかったようだ。

俺の思い描いた事からすると完全に失敗だが、運良く俺は最良の結果を生む事に成功したようだ。

そして完璧にはないがドラゴンの首元に潜り込んだ形となり、眼前にはドラゴンの無防備な喉元が晒されている。

俺は後頭部が痛むのを我慢してすぐに起き上がって、ドラゴンの喉元にバルザードを突き入れた。

ドラゴンの喉元や腹の部分は、表から見えている部分と違い金属の装甲に覆われていなかったため、あっさりとバルザードで突き通す事ができた。

俺はそのままバルザードを振り、ドラゴンの喉を掻っ切る事に成功した。

ドラゴンをしとめてからあいりさんを見ると、無事にニードルを避け切ったらしく無傷のようだったのでホッとした。

「お見事です」

ベルリアが俺の動きを見ていたようで、声をかけてきた。

「私ひとりが遅れを取るわけにはいきません。そろそろ決めさせてもらいます。『ダブルアクセルブースト』」

ベルリアは炎の魔刀で『アクセルブースト』を使い斬りつけた直後に、今度は時間差で寸分違わず同じ場所に風の魔刀の一撃を浴びせかけ、金属竜の外装を突破してドラゴンを倒す事に成功した。

あの『ダブルアクセルブースト』の使い方は初めて見たが、さすがはベルリアだ。

これで残るは一体のみだが……

「ルシエ、こっちはみんな終わったぞ」

「うるさい！ そんなのは見ればわかるんだよ。早ければいいってもんじゃないんだ！ 質だよ質。クオリティが大事なんだよ！」

ルシエいったい何を言っているんだ。早ければいいってもんじゃなあっていうのは理解できるがクオリティってなんだ。苦し紛れすぎるだろう。

「それじゃあ、ルシエの方はクオリティが高いのか？」

「ああ、もちろんだ。時間をかけてじっくりだからな。質が違うんだ」

「質ね……」

「なんだよ、その目は。本当だからな、じっくり時間をかけて焼くといいんだからな！」

「ああ、わかったよ」

焼き芋じゃないんだからとは思ったが、これ以上はやめておこうと思う。

俺には幼女をいじめる趣味はないのだから。

第579話 サッカーは初心者（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第580話 焼き上がりはじっくりウェルダン

うーん、もう少しだとは思っただけだな。

「ベルリア、そろそろかな」

「はい、そろそろだと思えます」

俺達は全員で獄炎に包まれた金属竜を眺めている。

なかなか、燃え尽きないがさすがにそろそろだろう。

「それじゃあ、先に他のドラゴンの魔核を集めておいてくれ。あれが燃え尽きたらすぐ先に進むから」

「わかりました」

やはり、この金属竜とルシエの獄炎の相性はすごぶる悪い。

時間だけが過ぎていく。

キャンプファイアの炎ならじっと眺めていれば心も安らぐのだろうが、獄炎で焼かれるドラゴンを眺めてみても全く心が安らぐような事はなく、むしろ荒んでしまいそうだ。

「どうだ！ 終わったぞ！ 極上だろう」

ようやくドラゴンが焼失したのを確認してルシエが先程と同様に意味不明なことを言ってきているが放っておこう。

「よし、それじゃあ、その魔核を回収したら出発しよう」

「おいっ！ いじめか！ いじめだな！」

「そんなわけないだろ。ほら」

俺はルシエ達にスライムの魔核を渡して先を急ぐ。

「わかってるならいいんだぞ！」

金属竜と戦うことがあれば今度は『侵食の息吹』を試してみようかな。案外『破滅の獄炎』よりも早くけりがつくかもしれない。俺達はそれから何度か戦闘をくりかえして十六時を迎えた。

「海斗、そろそろ今日は切り上げた方がいいんじゃない」

「約束は十八時三十分だから、あと一時間ぐらいは大丈夫だけど」

「海斗、身嗜みは大事よ。もしかしてそのまま行くつもりじゃないでしょうね」

「一応は着替えていくつもりだけど」

「汗もかいてるんだからシャワーぐらい浴びて行きなさいよ。汗臭いって嫌がられるわよ」

「……そうかな」

「当たり前でしょ」

「それじゃあ、そろそろ今日は終わりにしようか」

「それがいいと思うわ」

「ああ、私もそれがいいと思うぞ」

結局ミクとあいりさんの助言もあり、少し早いが今日の探索を終了する事にして地上へと戻ることにした。

「それじゃあ、また土曜日」

「いい報告を待ってるわよ」

「アモーレだな。頑張れ」

「今日はアモーレでご飯を食べるだけなんで特に何もありませんよ」

どうも二人は、勘違いしているような節があるが、今日は二人で誕生会のようなものなので、特に何かが起こるような事はない。二人と別れてから、家に一旦戻ってからアドバイスに従ってシャワーで汗を流した。これで臭くないはずだ。それから、春香と以前購入したジャケットを羽織り準備をする。

「海斗、今日春香ちゃんの誕生祝いにご飯食べにいくんですよ」

「えっ？ 俺そんな事言っただ？」

「この前春香ちゃんママに聞いたのよ」

「……………」

俺のプライベートな情報が両家の親に駄々漏れだ……
悪い事をしているわけではないが、親に知られるのはかなり恥ずかしい。

「海斗、ちゃんとプレゼントは用意したの？ あんた結構稼いでるんだからこんな時にケチっちゃだめよ。こういう時は目一杯のプレゼントを送るのよ。春香ちゃんだって女の子なんだから、高いプレゼントをもらって悪い気はしないわよ」

母さん 発想がゲスいよ。

「大丈夫だよ。ちゃんとしたのを選んだから」

「何を贈るのよ」

「え、まあ、あれだよ」

「あれってなんのことよ」

「時計だけど」

「ふっん、時計ね。海斗にしてはやるじゃない。時を刻むか……………」

母さんもあいりさんと同じようなことを言ってるな。

時計のイメージの定番のセリフなのかな。

「じゃあ行ってきます」

「はいはい、じゃあ頑張ってるね」

まだ少し早いけど、俺は家をおとにして待ち合わせの駅前へと向かった。

第580話 焼き上がりはじっくりウェルダン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第581話 アモーレで誕生会

駅前に着いたものの約束の時間までは、まだ二十分ほどあるので、再度プレゼントと財布の中身を確認して春香が来てくれるのを待つ。

「お待たせ。待たせちゃったかな」

「いや、俺も今来たところだから」

約束の時間の十分前に春香が来てくれた。

今日の春香は水色の長袖ロングワンピースで、春にぴったりのいで立ちだが、ロングワンピースのせいか、いつもに比べると少し大人びて見える。

とにかくかわいい。いや今日はかわいいよりもきれいと言ったほうがぴったりかもしれない。

控え目に言っても、地上に舞い降りた妖精、いやマーメイド。

「どうかしたの?」

「い、いや、ワンピースが……」

「もしかしてワンピースが似合ってなかった?」

「違う違う。逆だよ。似合ってる。凄く似合ってます」

「それならよかった。変だったらどうしようかと思っただよ」

「変なんて事は絶対にならないから」

危ないところだった。見惚れてたら変な風に思われるところだったな。

「それじゃあ、お店の予約時間もあるから早速いこうか」

「うん、今日はどんなお店を予約したの?」

「イタリア料理のお店なんだけど大丈夫だった？」

「もちろんだよ。私イタリア料理大好きだよ」

「それはよかった」

予約したお店は電車でひと駅なので、早速電車に乗り、スマホでマップを確認して向かうと、降りた駅からは歩いて五分ぐらいで到着した。

「ここみたいだな。春香、予約したのこのお店なんだけど」

「ここなんだ……アモーレ」

「そういう名前みたいだけど来たことあった？」

「ううん、来たことないよ。ただお店の名前が……素敵だなと思って」

「イタリア語だね。時間も時間だし、とりあえず中に入ろう」

そう言っただけで春香に目をやるが、辺りは既に暗くなっている。お店のオレンジ色の光を受けて春香の顔が少し赤い感じがするが、この春香もいい。

さっそく俺は春香を連れお店の中に入ってみる。

「すみません。六時三十分から予約の高木です」

「いらっしゃいませ。お待ちしておりました。それではご案内いたします」

お店は思ったよりも席数の少ない店内だったが、正にイタリア料理店という内装でおしゃれだ。

席につくと、早速飲み物のオーダーを聞かれたので、俺は無難にコーラを頼み春香はブラッディオレンジジュースを注文した。

「海斗、おしゃれなお店だね」

「うん、スマホで予約したんだけどよかったよ。料理はもう予約の時に決めてるからコースというかセットみたいんだけどよかったかな」

「うん、もちろんだよ。今日は誘ってくれてありがとうね」

「あ、ああ、うん。春香お誕生日おめでとう」

「ありがとう。誕生日を海斗とお祝いするのって小学二年生の時以来かな」

「あの時はクラスみんなとだったけどね」

春香もクラスの誕生日の事は覚えてるらしいが、あれから十年経って春香と二人で誕生日に一緒に夕食を食べているなんて夢のようだ。

これが恋人としてだったら俺は死んでも悔いはなかっただろうが、今でも十分に幸せだ。

俺が一人幸せを噛み締めていると早速料理が運ばれてきた。まずは生ハムのサラダ。

生ハムの塩気が絶妙で美味しい。

「生ハムが美味しいね」

「ああ、俺もそう思った。生ハムって美味しいんだな。多分豚だけど、生でも食べられるんだ」

「確か塩漬けにして長い時間をかけて熟成して殺菌してるんだっと思う」

「へへ春香はよくそんな事知ってるな」

「以前テレビのクイズ番組か何かで見た気がするの」

「そうなんだ。俺も勉強になったよ」

春香とたわいもない会話をしながら食べる生ハムのサラダは絶品だ。まるで十年以上熟成したかのような味わいを感じる。

比喻表現でもなく俺一人で食べるより百倍美味しいと感じる。

今のこの美味しさに、人間の味覚は舌ではなく心と気持ちでできているのだと本気で思ってしまう。

第581話 アモーレで誕生会（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第582話 旨味成分はアミノ酸

次に出てきたのはパスタとピザ。

パスタは春キャベツと自家製ベーコンのクリームパスタ。

ピザはマルゲリータピザだが、パスタもピザもそれぞれ一皿を二人で取り分けて食べるようになってる。

「それじゃあ、お皿かしてね」

そう言つて春香がピザとパスタを取り分けてくれる。

ああ……なんかこういうのいいな。まるで恋人のようだ。春香と結婚したら毎日こんな感じに取り分けてくれたりするんだろうな。妄想に過ぎないが憧れる……

「このパスタ美味しいね」

「ああ、そうだね。特にベーコンがおいしいな」

もちろんベーコンも本当においしいのだが、明らかに旨味が増している。

春香とご飯を食べるだけで劇的に旨味成分であるアミノ酸が増している。

仮にベーコンがウィンナーだったとしても同様に旨味成分が激増しておいしかったに違いない。

「このピザも生地がモチモチだよ」

「うん、たしかに。やっぱり冷凍ピザとは違うな」

「冷凍ピザもおいしいけど、やっぱりお店のピザはおいしいね」

おそらく、今の俺はこの場に冷凍ピザを出されたとしても、間違いなくおいしいと思う自信がある。

春香と毎日一緒にご飯を食べたら間違いなく太る。

今までになく太ってしまう。

幸せ太りという言葉聞いた事があるが、間違いなくそれになる自信がある。

幸せ太りって羨ましい。好きな人と毎日一緒にご飯を食べることができるなんて、なんて幸せな人達なんだろう。

きっと春香がレトルトカレーを作ってくれたとしても、一流ホテルのカレーを凌駕するに違いない。

ピザとパスタを食べ終えると、メイン料理が運ばれてきた。

今日のメイン料理はチキンのクリーム煮。

食べてみると鶏肉もホロホロな感じで、柔らかくておいしい。

「チキンのクリーム煮もすごくおいしいね。やっぱり家で作るのとは違うね」

「春香、家でチキンのクリーム煮作ったりするの？」

「うん、たまにだけど作ることもあるよ。こんなにおいしくは無理だけどね」

「いや、春香の作るクリーム煮か。想像しただけで美味しそうだな」

「よかったら今度誕生日に作ろうか？」

「え？ いいの？ 是非お願いします」

「うん、じゃあ今度海斗が家に来る時に作るね」

春香が作ったチキンのクリーム煮が食べられるのか。

お店のクリームにでもこれだけおいしいんだから春香の作ったクリーム煮は、想像を超えて絶品の味なのは間違いない。

いずれにしても今日クリーム煮が出てきてくれて感謝だな。

そのおかげで今度春香の料理したチキンのクリーム煮を食べること

ができるようになったので、本当に感謝だ。

「それにしても結構お腹いっぱいになってきたな。思ったよりピザとパスタがお腹に溜まってきたよ」

「後はデザートで終了だから」

「頑張つて食べるよ」

思いの他、一品ずつのボリュームが結構あり、春香よりもピザとパスタを多めに食べた俺は既に腹八分目は過ぎてしまっている。

最後に運ばれてきたデザートは濃厚ベイクドチーズケーキだったが、これが予想以上においしい。

濃厚な味わいがあつて、すぐに食べ切ってしまった。

「海斗、このチーズケーキ凄いいいね。やっぱりプロの味だよ。満足」

「春香が満足してくれたならよかったよ。予約した甲斐があつたな」

「うん、このお店は当たりだよ。全部の料理がおいしいもん」

「たしかに。全部おいしかった。お腹もいっぱいだし」

春香が喜んでくれたみたいなので、このアモーレを予約してよかったな。

本当は、ここしか空いてなかったんだけど、残り物には福来たるだな。

料理が美味しかったので、この流れに乗ってお店の中でプレゼントを渡す事にした。

第582話 旨味成分はアミノ酸（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第583話 時を刻むプレゼント

「あ、春香、あの、これ、誕生日おめでとう」

かなり前から渡す事は決めていたのに実際にプレゼントを渡すタイミングで急に緊張してしまい、口からスムーズに言葉が出なかった。脳内シミュレーションでは、もっとスマートに渡すつもりだったのに締まらない。

「うん、ありがとう。これ開けてもいいのかな」

「ああ、もちろんいいよ。気に入ってくれると良いんだけど……」

お店の人も似合うと言っていたので間違いは無いと思うが、これに気に入ってもらえないとキツいな。

春香は早速プレゼントのラッピングを開き始めた。

俺は既に時計を確認しているのに、時計が出てくるまで緊張してしまっ。

「わぁ……時計」

「うん、いろいろ考えたんだけど、時計だったら学校でも使えるし、春香にずっと使ってもらえるかと思って」

「つけてみてもいいかな」

「白が春香に似合うと思って選んだんだけど」

春香が時計を取り出して早速腕につけてくれた。

「すごくかわいい。海斗ありがとう」

「うん、イメージ通り似合ってる」

「海斗、ずっと大事にするからね。今までの誕生日プレゼントの中で一番うれしいよ」

「よかった……」

時計は俺の脳内で想像した以上に春香に似合っている。

可愛さと煌びやかさが同居していて春香が一層引き立って見える。

春香も本気で喜んでくれているようなので、このプレゼントで正解だったようだ。

「ひとつ聞いてもいいかな？ あのね……海斗、どうして時計にしたの？」

「え？ さっき言ったけど時計だったら春香にずっとつけてもらえるかなと思って」

「そう……なんだ。それって……うん、今日からずっとつけるね。ありがとう！」

春香は嬉しそうに微笑んでくれ、なぜかちょっと目が潤んでいるようにも見え、それが店内のオレンジ色の照明を反射してキラキラして一層可愛く見える。

表情から喜んでもらえているのはわかるが、さすがに泣くほどのものではないので、俺の気のせいだろう。

「女の子に誕生日プレゼントなんか贈った事がないから、自信がなかったんだけど喜んでもらえてよかったよ」

「そうなんだね。今度は海斗の誕生日に私がお返しする番だね。私も男の子に誕生日プレゼントを渡すのは、初めてだよ」

「そ、そうなんだ。へ、へ。ありがとう」

「海斗、私は、まだプレゼントを渡してないから、ありがとうはまだ早いよ」

「あ、ああ、そうだね」

もちろん春香に誕生日プレゼントを渡す以上、来月の俺の誕生日に春香からのプレゼントを期待しなかったわけではないが、春香からはつきりと「プレゼントを期待して」と言われて、内心嬉しすぎて既に表情筋が溶けてなくなりそうだ。

しかも春香も異性に誕生日プレゼントを渡すのは初めてって、これは俺が彼氏になれる可能性は十分にあるんじゃないか？

少なくともプレゼントでは他の男たちに先んじることができる。

春香から誕生日プレゼントをもらえるなんてなんて幸せなんだ。

俺も母親以外の異性から誕生日プレゼントをもらうのは初めてなので初めて尽くしだ。

今から来月の俺の誕生日が楽しみで仕方がない。

「海斗、どうかしたの？」

「い、いや、なんでもない。なんでもないよ。じゃあ俺の誕生日も一緒にご飯でも食べようか」

「もし、海斗さえ良かったら、私の家でご飯を食べないかな？」

「春香の家で？」

なんで春香の家なんだ？ 多分春香のパパとママもいるよな。正直
気まずいので二人だけの方がいいんだけど

……

「そう。せっかくの誕生日だから私のご飯とケーキを作りたいなあ
と思ってる」

「春香が作ってくれるの？」

「うん、どうかな？」

「もちろんいいです。是非お願いします。絶対それがいいと思いま
す。うん、それがいい」

「よかった。じゃあ、腕によりをかけて作るから楽しみにしていて

ね

「うん」

俺の誕生日に春香が手作りの料理で祝ってくれる。これは夢か？、
夢なのか？ いや間違いなく現実の出来事だよな。

やっぱり、今年の誕生日は俺史上最高に幸せな誕生日になりそう
で今から待ちきれない。

第583話 時を刻むプレゼント（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第584話 学校は青春で彩られている？

「それじゃあ、今日はありがとう。また明日ね」

「ああ、また明日」

俺は、無事プレゼントを渡してから、春香を家まで送って帰路に付いた。

「ただいま」

「お帰り。どうだったのよ」

「どうだったって何が？」

「決まってるじゃない、春香ちゃんとのデートよ」

「デートではないけど、まあご飯もおいしかったし、プレゼントも喜んでもらえたからよかったよ」

「春香ちゃん、プレゼントの時計を見て何か言ってた？」

「え〜っと、ずっとつけてくれるって言ってたけど」

「ふ〜ん。そうか〜。へ〜。うんうん。まあ良かったじゃない」

母親の反応がちょっと気持ち悪いが、今日の俺はすこぶる機嫌がいいので全く気にならない。

お風呂に入った後は幸せな気分になりながら寝ようとしていたら春香から今日のお礼の連絡が入っていた。

『今日は今までの誕生日の中で一番嬉しかったです』

あ〜もうこれは永久保存だ。

嘘でも、これは嬉しすぎる。

俺は間違っただけで消したりする事のないように早速スクリーンショット

を三枚撮って保存しておいた。
これは俺にとつての宝物だ。
春香にプレゼントを贈ったはずなのに、逆に俺がプレゼントをもら
ったような気になってしまう。
今日は本当にいい一日になったので、すぐに眠りについたが、夢の
中でも幸せ一杯で睡眠の質もいつもよりもずっと良かった気がする。
翌朝、気分爽快で目を覚まして、学校へ向かった。

「おう！」

「お、おう」

「海斗、今日はいつてもよりテンション高いな。何かあったのか？」

「隼人、昨日は葛城さんの誕生日だろ」

「ああ、そうだったな。それでか。ところでどうだったんだよ？」

「うん、ご飯も美味しくて楽しかったし、プレゼントも喜んでもら
えた」

「ご飯はどこに行ったんだ？」

「アモーレっていうイタリア料理のお店だよ」

「アモーレ……」

「どうした？ 行ったことあるのか？」

「俺が行ったことなんかあるわけないだろ」

「それじゃあ花園さん誘って今度行ってみればいいんじゃないか？」

「いいお店だったぞ」

「いや、俺にはアモーレはハードル高すぎるから無理だな」

確かに、女の子と二人でイタリアンレストランに入るのは少しハ
ドルが高い気もしなくもないが、あのお店なら花園さんも喜んでく
れると思うけどな。

「ところでプレゼントは何にしたんだよ」

「いろいろ迷ったんだけど腕時計にした」

「腕時計……。そ、そうなのか。それで葛城さんはなんて言ったんだ？」

「ずっとつけてくれるって」

気になって春香の方に目をやり、手首のあたりを確認してみるが、腕には俺が贈った時計がつけられていた。

やっぱり似合ってるな。プレゼントして良かった。

「海斗……。早く付き合えよ。いやもう婚約しろよ」

「真司、何言ってるんだ。話が突飛すぎるだろ。俺だって付き合えるもんだっただらすぐにでも付き合いたいけど、自分で言うのもあれだけど俺と春香は今結構いい感じだと思っただよ」

「じゃあいいじゃないか」

「いやよくないだろ。中途半端に告白して断られたら、せつかく築いた春香との関係が全て無くなってしまいかもしれないんだぞ。そんな事は俺にはできない！」

「海斗、俺が保証するけど絶対上手くいくって。間違いない。時計をずっとつけてくれるんだろ」

「ああ、今日もつけてくれてるみたいだ」

「そうだろ？　じゃあ間違いないって」

「もうそれはいいって。俺の事より隼人も花園さんとどうなんだよ」「毎日連絡は取ってるぞ。俺が夜に連絡したら、だいたい朝には返してくれる感じだな。花園さん夜は早く寝るみたいで返信はいつも翌朝だな」

隼人、もしかしてそれって避けられたりしてるわけじゃないよな。朝返信がくるそうだからそれはないか。

「どんな返信が来るんだ？」

「だいたい朝の挨拶かな」

「挨拶っておはようとか？」

「そう『昨日は寝てました。おはようございます』だいたいいつもこんな感じだな」

「そうか……。頑張れ！」

もしかしたら花園さんがクールというか淡泊なだけかもしれないので隼人の運命が決したとも言えないかもしれない。隼人頑張れ！

第584話 学校は青春で彩られている？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第585話 チョロイン

「前澤さん、ちょっといいかな」

「何か用？」

「いや、花園さんの事で少し聞きたいんだけど、花園さんってメールとか結構淡泊というか短文が多いのかな」

「え？　なんで？　玲は結構いっぱい話す方だからメールとかも結構長文が多い方だけど」

「……そうなんだ。返信とかって結構遅い方だったりする？」

「いつも、すぐに返ってくるけどそれがどうかした？」

「いや、いいんだ。ありがとう」

隼人……次頑張ろう。

隼人の話していた内容が気になってしまい、余計なお世話とは思いつながら前澤さんに確認をとってしまった。

俺は、この瞬間隼人の未来に栄光あれと、心から思ってしまった。

やはり恋愛って難しいなあ……

隼人もちよっとお調子者だけど結構いいやつなのに、花園さんの夕イブじゃなかったのかな。

俺も人の事は言えないが、もう高校三年生。

学園ドラマのようなアオハルな恋愛模様を織りなすことは、俺達には難易度が高すぎるのかも知れない。

真司が羨ましい……

ただ、俺にも可能性は十分あると思いたいが、隼人の喜んでいた姿とこの現実のギャップを目の当たりにしてしまうと、俺の目に見える春香の反応も全て、俺の目が自分の都合の良いような姿を、幻の如く真実を歪曲して写し出しているだけなんじゃないかと心配になつてしまい、昨日盛り上がった俺のハートが急速に冷え込んでしま

った。

俺は、テンシヨンを落としてしまった状態で放課後を迎えてダンジョンの一階層へと向かった。

ダンジョンではテンシヨンの低さとは全く関係なく、俺の身体は染み付いた動きをトレースしていつもと変わらないペースでスライムを狩っていく。

「ご主人様、どうかされましたか？」

「え？ いや別に何も無いよ」

「そうですか。なにかあればいつでも私を頼ってくださいね」

「ああ、ありがとう。シルにはいつも助けられてばかりだな。それにしても人の心ってままたまらないものだな……」

シルはいつも俺に優しくしてくれる。やっぱり俺の心のオアシスだ。俺の沈んだ心を癒してくれる。

「なんだあれ？」

「もしかして昨日上手くいかなかったのでしょうか？」

「ありえるな。無様にふられたのかもしれないぞ」

「そうなのでしょうか？ 落ち込んでいるご主人様を見るのは心苦しいのですが、もしそうなら私達には朗報かもしれないですね」

「まあ、私達にプレゼントもくれずに浮かれてたからな。いいきみだ。ふふっ」

それにやっぱり一階層は落ち着くなく。淡々とスライムを狩っていると、俺の中の悩みや煩惱が浄化されていくような不思議な感覚を覚える。

明鏡止水な感じで次々にスライムを狩っていくが、一向にドロップアイテムも、メタリックなスライムも出現してはくれない。

この調子でいくと十七階層をクリアするとメタリックスライムに

出会うのはどちらが先かわからないな。

「シル、メタリックなスライムってまだ出ないのかな」

「ご主人様ならいずれ必ず遭遇します。その時まで頑張ってくださいね」

「ああ、そうだな。ちよつと弱気になっていたかもしれない。シルのおかげでやる気が出たよ。ありがとう」

やっぱり持つべきものはサーバントだな。シルは当然だがルシエやベルリアだっけていてくれるだけで頑張る事ができる。

「やっぱりあいつ弱ってるな」

「そうかもしれないね」

「ちよつとシルが優しい言葉をかけたただけであの変わりようだぞ。チヨロすぎるな」

「私はご主人様の助けになれて嬉しいですよ」

またいつものようにシルとルシエが後ろでこそそやっている。

「おい、海斗誰にでも辛い時はあるんだ。辛い時はいつでもわたしを頼っていいぞ」

「ルシエお前……ありがとうな」

ルシエまで俺のことを気遣ってくれるなんて、俺は本当にサーバントに恵まれている。もう落ち込んでいる暇はない。テンションを上げてスライム狩りに集中だ！

「ほらな。チヨロすぎだろ」

「そうですね」

第585話 チョロイン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第586話 ワーム

この一週間一階で頑張って見たが、いつものようにスライムの魔核が手元に残った。

気持ちを切り替えて今日は十七階層の探索をすすめる。

俺は完全に切り替えが出来ているので、いつも通りのテンションで臨んでいるが、なぜかミクのテンションがいつもよりも低い気がする。

「ミク、何かあったのか？」

「いえ、別に……」

やっぱりいつもの元氣とキレが無い気がする。

「言いたくないなら聞かないけど、何かあるなら相談にのるよ」

「……………昨日ヒカリンの病院に行ってきた」

「ああ……………それでどうだった？」

「前に行った時よりも目に見えて悪くなった」

「入院していても回復は難しいんだな……………」

「多分、あの感じだと十八階層クリアまでは無理かもしれない」

「そんなに？」

「医者じゃないからはつきりとはわからないけど、無理だと思う」

俺とあいりさんはミクの話にショックを受けてしまった。

ヒカリンが良くないのはこの前見てわかっていたが、俺が思っていた以上に時間はなかった。俺達の認識が甘かったのかもしれない。

十八階層のクリアまで保たないとなると、もう一刻の猶予も無い。

何がなんでも十七階層を最短で攻略して、ドロップを手に入れるし

が無い。

「よし！ この土日でクリアするつもりでやるう」

焦りはあるが、それ以上に使命感に駆られて十七階層の探索をすめる。

およそ二時間ほどで前回のマッピングポイントまでたどり着く事ができた。

そこからしばらく歩くとフィールドに 変化が訪れた。

「急にだな」

「そうだな。 また歩きにくい」

「歩くペースが落ちるわね」

突然、地面が以前の階層と同じような砂のエリアに切り替わってしまった。

このところしばらくは通常の石で出来た床だったので急に足が重くなる。

歩くペースが遅くなり気ばかり焦ってしまう。

「ご主人様、 敵モンスターですが、こちらに向かって来ています」

シルの警告で全員が前方へと目をやるが、敵モンスターの姿は見えてとれない。

「ご主人様近いです」

前方には未だ敵の姿は見えない。

これはまさか……

「みんな下だ！ 下を警戒してくれ！ ベルリア！」

これは以前もあつた巨大ミミズのパターンだ。
全員の意識が足下に集中する。

「マイロード！ 恐らく三体。来ます！」

俺の想像通り砂の中を移動して来たようで、足下からモンスターが飛び出して来て、再び砂へと潜った。

一瞬ミミズかとも思ったが、一瞬見えたギラつく大きな目と、特徴的な頭部の形がミミズではなくドラゴンである事を物語っている。
頭部はドラゴンのそれだが胴体は蛇のようにも見える。

「海斗！ こいつはワームよ！」

「ワームって虫？」

「違うわよ。ワームっていうドラゴンよ！ 牙に強力な毒があるわ」

毒持ちのドラゴン！？ どう考えてもヤバイやつじゃないか。

「シル『鉄壁の乙女』だ！」

毒の牙と聞いてこの初見のドラゴンへの対応策を咄嗟に思いつく事はできなかった。

だが三体いるこのワームの牙による一撃をくらうわけにはいかない
ので、体勢を整える為にシルに『鉄壁の乙女』を展開してもらう。
光のサークルに向かってワームが地中から飛び上がって体当たりして
くるが、見えないところから突然飛び出してきて攻撃をかけると
すぐに地中へと戻っていくのでタイミングが計りづらい。

「みんなどうやってしとめる？」

「攻撃に姿を現した瞬間を狙って一斉攻撃でしょうね」

「それでいこう」

「ルシエ、いけるか？」

「いけないはずがないだろ！ なめてるのか？ 完全にわたしの事をなめてるんだな！」

第586話 ワーム（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第587話 ワームをしとめる

俺達は地面に潜ったワームに神経を集中して、すぐに動けるように待ち構える。

なんとなく地中を動いているような気配は感じるが、複数いるせいかはつきりとした場所の特定はできない。微妙に伝わってくる足下の振動が緊張感を高める。来る！

俺の目の前の地面の砂が盛り上がるのが見えた。

「来るぞ！」

その一点を凝視していると地中からワームの頭部が現れたが、その頭は俺の方に向いていた。

「うあああ〜！」

完全にワームと目があってしまった。

少し小さいとはいえドラゴンと視線を交わすのは恐怖でしかない。攻撃よりも回避。

この状態で攻撃を外せば、確実に殺られる。後方へ逃げたのでは追いつかれる。

俺は、全ての力を足に集中させ、横方向へと踏み出して、そのまま横っ飛びに右方向へと回避する。

回避するのとはほぼ同時にワームが、俺の元いた場所へと襲いかかる。ワームの牙が空を喰むとすぐに俺の方へと進路を向けようとしているのが見えた。

飛んだ事で体勢の崩れている俺の方が遅い。

まずい！

『神の雷撃』

『ヘルブレイド』

『ライトニングスピア』

俺が身の危険を感じた瞬間、シル達が俺を襲ってきたワームに向かって攻撃を発動し一体目のワームを消滅させる事に成功した。これで残りは二体。

すぐに立ち上がり、再び地面の変化に集中するが、直後に今度は二体同時に姿を現し一体はベルリアにもう一体はシルに襲いかかった。

『ヘルブレイド』

ベルリアは黒い炎の刃を飛ばして、ワームの進行を妨げて勢いを削ぐ。

『ライトニングスピア』

『アイアンボール』

間髪おかずに、動きの止まったワームに向けてミクとあいりさんの攻撃が炸裂する。攻撃をもろにくらったワームはフラフラしながら再び砂の中へと潜っていった。

「正面から向かってきて勝てると思っているのですか？」 『神の雷撃』

もう一体のワームもシルに襲いかかったが、シルが一切動じる事なく雷撃を放ち消滅させてしまった。

シルの前に姿を晒した時点であのワームの運命は決まっていたと言えるだろう。

残るは瀕死のワーム一体だが、姿はまだ見えない。

しばらく、地面に集中して見ていたが、一向に姿を現さない。

「ベルリア、どうだ？ 現れそうか？」

「気配はあります」

またパーティメンバー全員で足下に集中する。

「ミク、どう思う？」

「これだけ現れないって事は、逃げた可能性もあるわね」

「やっぱりそうかな」

既に二分は経過しただろうか、一向に姿を現さないワームに対して俺達は疑念を持ちはじめていた。

もしかして、あのワームは俺達を恐れて逃げたんじゃないのか？

そもそもモンスターに撤退するという概念があるのかどうかもわからないが、今までにないパターンだ。

「やっぱり現れないな。本当に逃げたのかもしれない」

その後もしばらくその場で観察を続けだがやはりワームは現れなかった。

「このまま、とどまっても仕方がないだろう。海斗どうする？」

「そうですね。魔核だけ拾って先に進みましょうか」

このままでは、いたずらに時間だけが過ぎ去っていくので、先に進む事を選択する。

「ベルリア、先頭を行ってくれ。殿は俺がつとめる」

俺達は注意を払いながらその場を去ることにして、警戒しながらも砂場をそのまま移動していく。

「マイロード！ 背後です！」

やはり襲ってきたか。

ずっと潜んでいたのに、俺達はその場から離れるのを見計らって後方から攻撃を仕掛けてきた。

だが、今回の攻撃は十分予測できたものなので、慌てる事なく冷静に『ドラグナー』を構えてワームに向かって放つ。

蒼い弾丸は、狙い通りにワームの頭部を貫通して消滅させることに成功した。

それにしても、今までにないパターンで、明らかに敵のワームは策を講じて俺達に対して心理戦を挑んできた。

ワームにとって選択肢が限られる中での攻防だったので、今回は予測できたが、次も同じパターンとは限らないので十分に注意が必要だろう。

第587話 ワームをしとめる（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第588話 ルシエ役にたつてない

そういえば、先程の戦闘で全く攻撃を放たなかった奴がいる。

「ルシエ、さつき何もしなかったよな」

「な、なにを言ってるんだ！ なにもしなかったんじゃない。冷静に状況を見極めていたんだ！」

「結構俺も危ない場面があっただけけど……」

「海斗も一緒に燃やしていいならいくらでもやるぞ！」

「それは困るけど……別に他のスキルでも良かったんじゃないか？」

『黒翼の風』でも倒せただろう」

「そ、それは結果論だろ！ 次は『黒翼の風』を使ってやるよ」

この感じ、もしかして『破滅の獄炎』しか頭になかったのか？

確かによく考えてみるとこの階層にきてからルシエは『破滅の獄炎』しか使用してなかったかもしれない。

最初から他のスキルを使う発想が無かった可能性が高いな……

「ご主人様……お腹がすきました」

「ああ、シルは頑張ってくれたからな」

俺はシルとベルリアに魔核を渡して先に進むことにする。

ルシエが恨めしそうに見ていたが、今回は心を鬼にしてお預けだ。

俺達は、そのまま砂地を進んで行くが、見える限りはしばらく砂地のフィールドが続くようだ。

砂地の場合下手をすると平地の半分程度のスピードでしか進めない
ので、先を急いでいる俺達にとっては地味に痛い、こればかりは
どうしようもない。

そして、それ以上に進みながらも、常に地中からの攻撃に注意を払う必要があるので、精神的に消耗してしまう。

「マイロード、あそこに……」

「ベルリア、あれって敵だよな」

「間違いありません」

ベルリアの前方十メートル程のところの地面が明らかに不自然な感じで数力所すり鉢状に窪んでいる。

「敵が潜んでいるって事だよな。このまま進んだらひきずりこまれる感じが」

「海斗、だけどあんなに丸見え状態じゃ……」

「モンスターにも隠れるのが得意な奴とそうでない奴がいるのかもしれない」

ミクの言う通り、姿こそ見えないが、砂の変化で確実にそこにいる事はわかるので、どう考えてもこのまま進むと言うことはあり得ない。

「窪みが3つあるからたぶん三体なんだよな。とりあえず敵の姿もはっきりしないし、シルの雷撃とルシエの獄炎とミクの『ライトニングスピア』でいつてみようか」

敵の姿は見えないが、この距離から窪みに向かって攻撃すればなんらかの反応があるはずだ。

「今度はまかせとけ！ 私に出番だ！ 地中で焼け死ね『破滅の獄炎』」

「それにしても間の抜けたモンスターもいるものですね。姿を見る

事なくお別れです『神の雷撃』」

「これってボーナスみたいなものなの？ それとも罠？ 『ライトニングスピア』」

三人の攻撃がそれぞれの窪みに向かって放たれた。それぞれの窪み付近の砂が大きく弾けて着弾する。

シルとルシェの攻撃はおそらく敵モンスターを着弾と同時に葬り去る事に成功したようだ。

ミクの攻撃のみが砂の影響で威力が半減したのか、着弾と同時に砂の中に潜んでいた敵モンスターが姿を現した。

「蟹か？」

「蟹ね」

てつきりドラゴンの一種が潜んでいるとばかり思っていたが、砂の中に潜んでいたのは、巨大な蟹。

海の蟹ではなく、川の蟹を巨大にしたような姿だが、ミクの『ライトニングスピア』により片方の爪と足を数本失っているのが見える。

「せっかくだからミクがしとめる？」

「そうね。そうさせてもらうわ。私だけしとめ損なうのも恥ずかしいし『ライトニングスピア』」

姿を現した蟹に向かい再びミクが雷の槍を放ち、攻撃をかけるが、今度は砂の影響を受ける事なく、蟹の甲羅のど真ん中に命中し貫く事に成功した。

やはり、遠距離攻撃を持つパーティにとっては純粹にボーナスだったようだ。

それにしてもこの階層はドラゴンしかいないのかと思っていたが、そんな事は無かったようだ。

この砂地エリアは、他の種類のモンスターが出現する可能性も十分あるな。

第588話 ルシエ役にたってない（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第589話 砂嵐

俺達はあっさりと蟹型モンスター三体を退けて先に進む事にするが、今回の戦闘で残念な事が一つあった。いや正確には2つ。

地中に潜った状態でしとめた蟹型モンスターの魔核が砂に埋れて見つける事が出来なかった。

つまり三体のモンスターを倒したにもかかわらずそのうち2つの魔核を回収する事ができなかった。

簡単に倒せたのでボーナスだと思っていたが、そう都合良くはいかなかった。

「しょうがない。諦めて進もう」

これ以上魔核二個の為に時間を割く事はできないので、魔核を諦めて先を急ぐ事にする。

「海斗！ ちよつと待て！」

「え？ どうかしたのか？」

「ふざけるな！ 今度はちゃんと倒したたる！ 早くくれよ」

「ああ……。魔核か」

「それしかないだろ。バカなのか？」

俺はサーバントの三人にそれぞれスライムの魔核を渡す。

「それでいいんだ。それで」

手に入れた魔核は一個。渡した魔核は全部で六個。大きさが違うとはいえ数だけでいうと大幅なマイナスだ。

満足そうなサーバントを見て、まあいいかと思いつながら砂地を進んでいく。

「今度同じモンスターが現れたら、一旦おびき寄せてからしとめるか」

「ご主人様どうやっておびき寄せるのですか？」

「それは……今は思いつかないな」

「シル、カニを釣るにはエサだろ。海斗をエサにしておびき寄せるのがいいんじゃないか？」

「……さっきと同じでいこう。やっぱりそれが安全でいいと思う」

こいつなら本当にやりかねない。俺を蟹型モンスターの潜む窪みに蹴落とすぐらいやりかねない。

そこからしばらく先に進んでいると、前方のダンジョンの先がよく見えない。

「海斗、あれは砂嵐じゃないのか？」

「砂嵐ですか？」

「ああ、先が見えないには恐らく砂が舞っているからだろう」

「ダンジョンの中でそんなことあるんですね」

「ダンジョンではあらゆる自然現象が起こり得るからな」

「でも、先に行くには通らざるをえませんか」

ダンジョンの先に進むにはこの砂嵐を突破するしかないの、俺達は砂嵐の中へと踏み込む。

中に踏み込んだ瞬間、全身を砂が叩きつけてくる。

防具をつけていない顔が砂で結構痛い。

しかも容赦なく目にも入ってくるのでまともに目を開けていられない。

そして当然だが砂を舞い上がらせている風もかなりきつい。

応急的に手を目に当てて指の隙間から前方を窺いながらゆっくりと進んでいく。

「これって……うっ、ぺっ、って、ぺっ、ぺっ」

あいりさんに喋りかけようとして口を開いた瞬間に口の中へと砂が入り込んできてしまった。

吐き出そうとするが、乾いた砂が唾液を吸収してしまい、上手く吐き出す事が出来ないが、このジャリジャリ感は生理的に耐えがたいものがある。

俺はマジック腹巻きからミネラルウォーターを取り出して口を濯ぐ。大変な目にあってしまった。

喋る時も口に手を当てて口を開けるのは少しだけにして喋るしかない。

ただ、この状況でまともな戦闘ができる気がしない。どう考えてもゴーグルにマスクが必要になるので今日終わってから買いに行く必要があるな。

問題は今だ。

他のメンバーも一様に俺と同じスタイルを取ってはいるが、スナッチは自分で目を覆う事が出来ないの、すでにカードへと戻されている。

どうすればいいだろうか。

このまま進めば確実にモンスターは出てくるだろう。

どうにかできないかと色々考えてみたが、このミネラルウォーターの入っているペットボトル使えるんじゃないか？

俺はペットボトルの中身を飲み干し、半分ぐらいの位置で切断した。底のある方を手に持ち片目に当てる。

少し歪んで見えるが、指の隙間から覗くよりもずっと視界が開けた。

「海斗、それは何をしているんだ？」

「即席のゴーグルですよ。片眼だけですけど、結構いけますよ。あ
いりさん達もやりましょうよ」

「あ、ああ。私はもう少し様子を見てみるから大丈夫だ」

「ミクもやってみてよ」

「う、うん、私ももう少し様子を見てからね」

様子をみたところで、俺にはこの砂嵐が消えるとは思えないけどな
。

第589話 砂嵐（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第590話 砂嵐の戦い

即席のペットボトルゴーグルで片眼を覆って進んでいるが、普通に目を開ける事ができるだけで随分楽に進む事ができている。ただ一向に砂嵐がおさまる様子はないのでしばらくは、この状態が続くのだろう。

即席ゴーグルで目を開ける事はできているが、視界は極端に短く、五メートル先がよく見えない。そして喋ると砂が口の中に入ってくるので全員無言で進んでいる。サーバントもこれは同じなので、パーティが完全に無音状態で、砂嵐の音だけが響いている。

「じゅじん……さま。とき……です」

ようやく砂嵐以外の音が聞こえてきたと思ったたら、シルの敵を知らせる声だったが、シルも喋り辛いようで、いつもと感じが違う。敵の数がわからないがとにかく備えなければならぬ。

あいりさんは、片手で目を覆った状態で、薙刀を振るうことは正直難しいと思うので前衛はできそうにない。

ベルリアは2刀のうちの一刃を諦めれば、なんとかいけるか。シルも雷撃を使用すればいけるな。

「ベルリア、シル、まえ」

最低限の単語で指示を伝えて、俺も前が出る。

警戒しながら進んで行くが数メートル先がはっきりと見えないので、かなり怖い。

気がついたら目の前に敵なんて事が十分にあり得る状況だ。

二十メートルほど進むと、前方に明らかに砂嵐の勢いが強くなっている箇所が見える。砂の密度が濃くなり、明らかにあそこから視界が更に悪くなっている。

全く見えないがたぶんあそこに敵モンスターがいる。

「ルシエ」

もうどれだけでも距離がないので、これ以上進むと敵に遭遇してしまう。

できれば、その前にしとめてしまいたかったのでルシエに『破滅の獄炎』を促す。

ん？

ルシエがスキルを発動しない。

ルシエを見ると、なぜかルシエもこちらを見ている。

「ルシエ」

もう一度促してみるが反応がない。

「なんだ？」

「頼む」

「なにを？」

「あそこ」

「なに？」

「やって」

「やる？」

「くえん」

口に砂が入り込まないようにお互いに最低限の単語で会話を試みる

が、思いの外意思の疎通が難しいようだ。

だが俺の努力によりようやくルシエに意図が通じたようで『破滅の獄炎』を放ってくれた。

放たれた獄炎は前方へと広がり風に煽られ一瞬熱量を増したが、すぐに上空へと舞い上がり消えてしまった。

「なっ……」

獄炎は基本的に一度命中すれば敵が燃え尽きるまで消えないはずなので、どうやら敵モンスターへと命中しなかったようだ。

しかもこの砂嵐が炎とは相性が良くないらしい。

もう、やるしかない。

俺はベルリアとシルと一緒に更に前に進むが、砂の濃いエリアに入った瞬間、風と砂の威力が増して、呼吸もし辛い。

これはゴーグルだけではなく防塵マスクも必要だ。

踏み込めば、敵の姿をはっきりと捉えられるかと考えていたが、実際には視界が更に悪くなり、うっすらと敵影が確認できるのみだ。

見えるだけで確認できる敵影が二体だが、もしかしたらもつといるかもしれない。

激しい砂嵐に声を出す事が難しいので、腕を振り、ベルリアとシルに指示を出す。

シルに一体を任せ、俺はベルリアともう一体の方へ向かって行くが、振り向くと後方は完全に見えなくなっている。これでは後方からはこちらも見えない。ミクヤルシエからの援護は見込めないだろう。

更に敵影に近づくと、ようやく敵の姿が見えた。やはりドラゴンだが、ドラゴンを中心に、その周囲を激しく砂塵が舞っている。見る限り風竜と同じく風を纏っているようにも見えるが、纏っているというよりも風が渦巻いて砂を巻き上げているようだ。

敵はストームドラゴンと呼ぶにふさわしい風貌を俺達の眼前に現し

た。

第590話 砂嵐の戦い（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

SS 1日遅れのハロウィン(前書き)

予定していませんでしたが、他の方がハロウィンSSを書いているのを見て急遽用意しました。
本編とは全く別の話だとしてご理解ください。

SS 1日遅れのハロウィン

今日は日曜日なのでいつもよりは少し起きるのが遅めだ。

朝、目が覚めると学校は休みにもかかわらず、隼人から連絡が入った。

「海斗、昨日は葛城さんとどうだった？」

「昨日？ いつも通りダンジョンに潜ってたから春香とは会ってないけど」

「は？ 海斗昨日はハロウィンだぞ！ 普通一緒に楽しむだろ」

「ハロウィンか……俺あんまりハロウィンで何かした覚えがないから完全に頭から抜けてたな。隼人は昨日は何かやったのか？」

「俺？ 俺は花園さんを誘って仮装パレードに参加するつもりだったんだけど、朝になって急に花園さんの都合が悪くなったみたいで家でゲームしてた」

隼人……たぶん花園さんは無理だぞ。

「それじゃあ、隼人もなにもしてないんじゃないか。人の事言えないだろ」

「いやいや、葛城さんの仮装だぞ？ 海斗は見たくないのか？ 真司と前澤さんは二人でパレードに参加したみたいだぞ？」

春香の仮装姿か……もちろん見たいに決まっている。

「海斗、お前今日暇か？」

「いや、これからダンジョンだけだ」

「じゃあ、夕方からは暇だろ？ 葛城さん誘っておいてくれ。俺も

花園さんと真司達を誘っておくから」

「あ、ああ」

急いで春香に連絡を取り、夕方から会う約束をしてからダンジョンへと向かった。

「夕方に春香達と仮装して会うことになったから今日は少しだけ早めに上がっていいかな」

「昨日は春香とは会ってないの？」

「ああ、ハロウィンの事自体忘れてたんだけど、朝友達から連絡を受けて急遽ね」

「え、私達昨日ハロウィンバージョンでカチューシャとかリボンしてたじゃない」

「そういえば……それだったのか。普通にファッションだと思ってた」

「はあ、海斗、もっと色々気にした方がいいわよ」

「いや普通の高校男子はハロウィンとか気にしてないって。気にかけてるのは、リア充だけだよ」

「超絶リア充がよく言うわね」

その後いつものようにダンジョンに潜ったが、途中でサーバントの三人に家から持ってきたお菓子を渡す事にした。

「トリックオアトリートって言うてみてくれるか？」

「はい『トリックオアトリート』」

「わかりました『トリックオアトリート』」

「なんだそれ『トリックオアトリート』」

三人の可愛らしいトリックオアトリートを聞いてから、それぞれにお菓子を手渡す。

「ハロウィンって言って子供にお菓子をあげるイベントなんだ」

「ご主人様ありがとうございます。シルは嬉しいです」

「マイロード、大事に食べさせていただきます」

「チツ、わたしは子供じゃないけどな。一応もらっておいてやるよ」

有り合わせで急遽用意したが三人とも喜んでくれたようなのでよかった。

まあ、この三人は仮装しなくても年中ハロウィンみたいな風貌だしちょうどよかった。

順調に十六時に探索を終え地上へと戻り、待ち合わせ場所へと向かうが、俺は変装グッズを持っていなかったのでミクに相談すると、探索者のスタイルのまま行けば大丈夫だと言われたので、そのままの格好で行くことにした。

「みんなお待ちせ」

どうやら俺が最後だったようでみんな既に集合していた。

真司は海賊に隼人はアメコミヒーロー。女の子三人はそれぞれが着ぐるみみたいなのを着ているが、春香は猫っぽい。

ハロウィンって魔女とかじゃなくていいのかな。

「海斗、お疲れ様にゃん」

「……………」

「海斗？ どうかしたにゃん」

「……………」

なんだ？ さっきのは？ 俺の意識が完全に飛ぶほどの破壊力。春香が少し赤い顔をしているので、春香も照れているのかもしれないが、その姿がまた可愛いすぎる。

「大丈夫かじゃん」
「……大丈夫じゃん」

思わずにやんで返してしまったが、なんだこの可愛い生き物は。俺は一切ケモノ属性はないが、春香のこれは反則だろう。もちろんコスチュームも異常に似合ってるし、本当に可愛いが、春香がこの姿で「じゃん」ってヤバすぎる。他の2人もそれぞれ衣装に合わせた喋り方をしているようなので、三人で打ち合わせたのだらうと思うが、春香の恥ずかしそうな様子を見る限り発案者は前澤さんだと思われるがグッジョブだ。俺だけでなく真司と隼人もノックアウト前に見える。

「海斗、その格好は、探索者だじゃん。初めて実物見るけどかっこいいじゃん」
「……」

ぐっ……だめだ。意識が遠のく「かっこいいじゃん」って……
「勇者みたいでかっこいいじゃん。よく似合ってるじゃん」
「……春香も似合ってる……じゃん」

もう俺は長くないかもしれない。今日この時に全ての運を使い果たしてしまったのかもしれない。今年受験を控えているというのにこの瞬間に運を使い果たしてしまっただろうか？

「海斗、魔法の言葉をお願いじゃん」

魔法の言葉？ 『ウォーターボール』か？ いやそんなはずはないな。これはあれだな。

「トリックオアトリート」

俺がそう言つと春香が笑顔でクッキーを渡してくれた。

「今日作った手作りクッキーだにゃん」

「ありがとう……にゃん」

「食べてみて……」

春香が心配そうな顔で言うので早速口に入れる

うまい。濃厚なバターと卵の味わいと程よい甘さ。それに春香の手作りというプレミア感が加わり、これは俺史上ナンバーワンクッキーだ。

「おいしい。めちゃくちゃおいしい」

「よかった……にゃん」

春香がこちらに弾けるような笑顔を向けてくれた。

ああ……これは完全に運を使い果たした。受験はやばいかもしれない。運には期待できそうにない。

その後みんなで、カラオケにいつてワイワイ騒いで解散となったが、春香の猫ちゃんスタイルはすっかりスマホの写真におさめる事ができたので永久保存決定だ。

猫ちゃんスタイルの春香が歌っている姿は最高だった。

今回の唯一の心残りは声を録音し忘れた事だ。

いまだに俺の脳内を春香の「にゃん」がリフレインする。

俺にとって初めて春香や友達と過ごす一日遅れのハロウィンは最高だった。

SS 1日遅れのハロウィン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第591話 ストームドラゴン

ドラゴンを中心に砂塵が舞い上がっており、そのせいで一層視界が限定されてしまっている。

俺とベルリアは攻撃態勢に入るが、目の前のドラゴンは結構なスピードで後方へと移動した。

明らかに砂嵐の影響を受けていない。

つまりはこの砂嵐の中を普通に移動できるという事だ。

それに引き換え俺達は、明らかに砂嵐の影響を受けて動きが鈍く限定されている。

ベルリアが下がったドラゴンに向けて追撃すべく追っついていき、剣を振るうが、あっさりと避けられてしまった。

砂嵐の影響と指の間から覗く僅かな視界のせいでベルリアの刀にいつものキレがない。

俺はベルリアの攻撃が躲されたのを見てすぐさま『ドラグナー』を構えて引き金を引く。

弾丸が蒼い光の糸を引いてドラゴンへと放たれたが、ドラゴンに着弾する少し手前で、蒼い光の糸がブレた。

いつもは一直線の糸を引くのに今回に限って、着弾間際でブレて、狙った箇所とは違う場所に着弾した。

「グアアアア〜！」

どうやら傷を与える事には成功したが、残念ながら狙いが逸れたせいで致命傷とはならず倒すには至らなかった。

俺の攻撃に完全にこちらを捕捉したドラゴンが襲いかかってくる。

今の俺は空いている片手に『ドラグナー』を持っている為に、敵の攻撃を防ぐ術を持たない。

逃げるしかない。

そう思い、回避行動を取ろうとするが、激しい砂塵のせいで動きが阻害されてしまう。

「マイロード！ お任せください！」

俺とドラゴンの間にベルリアが割って入り、炎の魔刀を振るう。魔刀を巧みに振るい、ドラゴンの攻撃をいなしているが、ベルリアも二刀の時のようにはいかず、防戦一方になってしまっている。

片手と視覚にハンデを負っているので当然だ。

俺もバルザードに武器を持ち替えてベルリアの横に立ちドラゴンに応戦する。

ベルリアの風の魔刀の代わりに俺が果たす。

ベルリアが攻撃をいなしてくれている間に俺が攻撃をしかけるが、剣を普通に奮っても周りを取り巻いている、風と砂塵で阻害されダメージをうまく与える事ができない。

ドラグナーの弾丸もこの風と砂塵の壁に歪められたのだろう。

バルザードに切断のイメージをのせて至近距離から斬撃を飛ばす。

斬撃が風と砂塵を斬り裂きドラゴンの肉をも断つが、やはり消滅にまでは至らない。

その時だった。

ドラゴンを取り巻き上へと巻き上がっていた砂塵がねじ曲がり、生き物のように俺とベルリアに向かって襲いかかってきた。

「くっくっくっく」

呼吸ができない上に風と砂の圧力で押し戻される。

即席のゴーグル越しでもほとんど視界がゼロになってしまった。

その場から身動きが取れないので、この状態で襲われたらまずいが、敵がこの機を逃すとは思えない。

俺は視界ゼロ状態なので即席ゴーグルを諦め、左手を『ドラグナー』に持ち替えた。

この庄の中でバルザードをまともに振るう事はできそうにないが『ドラグナー』

を放つことぐらいはできる。

俺は何も見えない前方に向かって『ドラグナー』を放つ。

当たらなくても牽制になればいい。

ただ、今の状態では前方の状況が確認できないのでこれ以上の打つ手がない。

すぐ隣にベルリアがいる事だけはわかるが、ベルリアが徐々に前方へと踏み出している気がする。

ベルリアがこの砂嵐の中攻撃に転じようとしているようだ。

俺も少しでもベルリアのサポートすべく、俺が今できる事を必死で考えた。

『ウォーターボール』

ベルリアに向けて、俺が唯一使用できる魔法『ウォーターボール』を発動した。

第591話 ストームドラゴン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第592話 氷の盾

俺の放った魔法は、氷の薄い盾。

以前色々試したうちのひとつだが、実戦での効果は非常に薄いのでほとんど使う事のなかった形態だ。

薄い氷の盾をベルリアの眼前に出現させてゆっくりと前方にいてあるうドラゴンに向けて移動させるように放つ。

氷の盾は守備範囲が狭く強度もモンスターの攻撃を凌ぎきるには弱すぎる。

だが、氷の透明であるという特性と砂を防ぐ盾ぐらいにはなる大きさを備えているので、ベルリアの視界を確保する助けにはなるはずだ。

「ベルリア！」

口に砂が入ってくるのでベルリアの名前だけを呼び、俺の意図を伝える。

はつきりとはわからないがベルリアも氷の盾のスピードに歩調を合わせたように感じるので俺の意図は伝わったのだろう。

氷の盾が着弾するまでは、全身にブレスレットの呪いによる拘束がかかっているの後はベルリアに託すしかない。

既にベルリアの姿も完全に見えなくなってしまうが、微かに剣戟の音だけが聞こえてくる。

どうやら無事ドラゴンの下までたどり着いたようだが、直後に俺の身体を拘束していた呪いが解けた。

『ダブルアクセルブースト』

俺の拘束が解けるとほぼ同時にベルリアのスキル発動の音が聞こえてきた。

氷の盾により視界が開けたので二刀に戻したのだろう。

氷の盾の消滅と同時に勝負をかけたのが声からわかるが、見えないのでどうなったかわからない。

その後数秒経過すると、俺を襲っていた眼前の強烈な砂嵐が弱まり、少しだけ視界が開けたので。

「マイロード、ご助力ありがとうございます。刀の錆にしてやりました。マイロードの盾でドラゴンの直前まで視界を確保する事ができたので、難なく倒す事ができました。うっ……ペッ、ペッ、ペッ」

ベルリア、ドラゴンを倒せて嬉しいのはわかるが、そんなに喋ったらそれは、口に砂も入るだろう。

シルはどうなった？

視界不良で全くシルの動きは見る事ができていなかったなので、再び即席ゴーグルを左目に当てて周囲を見回してみるが、もう一箇所あったはずの砂塵の濃い場所は既に消失していた。

どうやら既にシルが倒してしまっただろう。

大きな声をあげる事もできないので、ベルリアに魔核の回収をさせてから、シルがいるであろう方向にあたりをつけて向かう。

「ご主人様」

「シル！」

すぐにシルを見つける事が出来た。

「大丈夫？」

「はい」

「神槍？」

「はい」
「敵は？」
「いません」

砂対策で最低限の会話を交わして、他のメンバーの下へと引き返す。

「勝った」
「ああ」
「厳しい」
「うん」
「ドラゴン風強い」
「了」

ほぼ単語だけでメンバー間での意思疎通が取れているのが自分でもすごいと思う。

これまでのメンバー間での信頼関係の構築の成果がここで現れているようで密かに嬉しい。

あいりさんが「了」と答えたのはギャップがあつて、ちょっと笑いそうになつてしまった。

案外高校生の時は今とキャラクターが違ったのかもしれない。いずれにしても、この砂嵐エリアはかなり厳しい。

単純に俺達の準備不足だ。

視界を確保する為のゴーグルと砂塵を防ぐマスク的なものがないと、まともに戦闘する事すらままならない。

ただ、ここで引き返してしまうと、今日はここまで戻ってくる事が出来なくなってしまうので、このまま進む事にする。

結局この日の探索では砂嵐のエリアを抜ける事は出来なかったが、戦闘にはルシエも引き連れて、火力で押す事にし、ベルリアには優先的に氷の盾を付与する事にして乗り切った。

今回俺は前衛職というよりも付与魔術師のような立ち位置に徹する事となったが、みんなに大きな怪我なく探索を終了する事ができたので、俺も役目を全うできて満足だ。

第592話 氷の盾（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第593話 砂嵐対策

ダンジョンから引き上げた俺達は早速ダンジョンマーケットに向かい、マスクとゴーグルを購入する事にした。

俺は普通のマスクとゴーグルをイメージしていたが、実際に見てみると、防塵機能まであるものは結構本格的で、ゴーグルの部分とマスクが一体型になった物を選ぶ事になった。

よく映画とかで爆弾処理班の人たちがつけているようなやつだ。

ミクとあいりさんはもう少しかわいいマスクとゴーグルが良かったようだが、残念ながらそんな物はダンジョンマーケットには存在しなかったため、俺と同じ物を購入する事になった。

サーバント分も必要だったが子供用はさすがに置いていなかったのでもって極力サイズの小さいものを選んで購入する事になった。

問題はスナッチの為のゴーグルだがペット用などももちろん置いていないので、ミクが家で自作してくる事になった。

これで明日は万全の態勢で砂嵐エリアに臨む事ができるはずだ。家に帰ると今日はチキンカレーだった。

前回はポークカレーだったので少し変化はあるが、土曜日は、ほぼ毎週カレーになってしまった。

味はおいしいので文句を言わずにしつかりと食べてから早めに眠る事にした。

夢の中で俺は春香の作ってくれたチキンのクリーム煮を食べて大満足していた。

チキンカレーとチキンのクリーム煮は少しだけ似ているので夢に出てきたのかもしれない。

「おはよう」

「今日こそ砂嵐エリアを抜けましょうね」

「ああ、抜けて目処を立てたいところだな」

翌朝九時にダンジョン前に集合して十七階層へと望む。

順調に進んでいくが、途中金属竜が複数出現したので少し時間をくってしまった。そのせいもあり砂嵐エリアに着く頃にはお昼前になっていたが、砂嵐エリアで食事をするわけにもいかないのので、一刻も早くこのエリアを抜けるという事で全員の意見が一致した。

「それじゃあ三人ともこれをつけてくれ。昨日買っておいただ」
「なんだよそれ」

「砂塵対策のゴーグルとマスクだ」

「なんか不格好だな、もっとカッコいいのいないのかよ」

「私もこれはちよつと……」

「そう言わずに一度使ってみてくれよ」

「ダサイ……」

「姫、物は試しです。マイロードの顔を立てると思って一度試してみてはいかがでしょうか？」

「わかりました」

「わかったよ」

思いの他シルとルシエからの抵抗があつたが、これ無しでは昨日の二の舞いになってしまうので、ベルリアにもフォローしてもらい無理やりつけてもらった。

三人には少し大きいようだが後ろのゴムを目一杯締めたらなんとかいけそうだ。

三人とも思ったよりも顔と頭が小さい。

スナッチは完全防塵とはいかないが、ミクの作った小型のフェイスガードのような物を装着して砂嵐エリアへと臨んだ。

昨日は踏み込んだ瞬間から視界が限定され喋る事もままならなかったが、今日は違う。

「よく見えるし、呼吸もできるな！」

「そうだな。昨日とは全く違うな」

「シル達もどうだ？」

「はい、よく見えます。あつた方がいいと思います」

嫌がっていたシルも効果を実感してくれたようだ。

「ああ、ないよりいいかもな。ダサいけど」

どうやらルシエもゴーグルとマスクの有用性を認めたようだ。ただ見えやすくなったとはいえ、砂で視界が悪い事には変わらないので注意しながら進んでいく。

「ご主人様、敵がいます。数はおそらく五体です」

「五体！？ 多いな……ミク以外の全員で当たるか。ミクは後方からフォロー頼んだ」

砂嵐エリアでこの数は最大数なので十分に警戒が必要だ。

前回戦ったストームドラゴンか？ だとしたら結構きついな。

第593話 砂嵐対策（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第594話 サンドシャーク

砂嵐の中を進んでいくが、五体の敵は見当たらない。

昨日戦ったストームドラゴンであれば、五体もいれば砂塵が濃い部分が見えているはずなので、おそらく違う敵だ。

だが、目に見える範囲には一体もない。

「シル、どこにもいないけど本当に五体もいるのか？」

「間違いありません」

そつだとすれば可能性としては下か？

砂嵐でただでさえ視界が悪いのにこの状態で足下の敵とは……

「みんな足下に注意して！」

全員で足下に意識を向けるが視界の悪さと砂嵐の音もあり、俺には全く気配が掴めない。

「ベルリア！ どうだ？」

「向かって来ています」

見えない敵の姿に緊張が走るが、後方のミクが声を上げる。

「前方よ！ ひれみたいなのが見えてるわ！」

俺は完全に足下に集中していたので気がつく事はできなかったが、後方のミクからは全体が見えたのだろう。

俺達が一斉に前方の地面を見ると、確かに鮫のひれのような物が複

数こちらに向かつて移動して来ているのが見えた。
まさかの砂の中を移動する鯨か？

「シル！『鉄壁の乙女』を頼む！」

すぐに五体の地中の敵に対する術を思いつかなかったので、シルに『鉄壁の乙女』を発動してもらう。

「ミクも中へ！」

万が一に備えて後方に控えてもらう予定だったミクにも光のサークル内に避難してもらおう。

徐々に大きな背びれがこちらへと向かってくる。

見えない砂の中から迫ってくる様は、有名な昔の映画さながらで、かなり怖い。

武器を構えて待ち構えるが、すぐ手前まで近づいてきた途端、足下の砂が爆ぜた。

爆ぜると同時に巨大な鯨が飛び出してきて俺達に向かつて襲いかかってきたが、光のサークルに阻まれて、そのまま砂の中へと戻っていく。

鯨と言っても、本物の鯨とはかなり違う。

その姿はドラゴンのような外皮に覆われており、巨大な口からは歯というよりも牙が生えていた。

攻撃手段はその大きな牙によるものようだが、砂から飛び出してから動きは思った以上に素早い。

「姿を現したらルシエは『黒翼の風』を頼む」

ルシエの獄炎はスピードという点では若干劣るので『黒翼の風』を選択する。

この砂嵐のフィールドで影響を受けないかは不安要素だがやってみるしかない。

背びれが前方だけではなく後方へと回り込んできたのが見える。

どうやら前方からの攻撃が弾かれたので、取り囲んで全方位から攻撃してくるつもりかもしれない。

背びれはそのまま周遊するかのようになり、俺達を中心に回り始めた。

俺達はそれぞれがターゲットに定めた背びれの動きを目で追う。

しばらく目で追っていると突然、全方位の地面が一斉に爆ぜて砂鯨が襲いかかってきた。

俺は『ドラグナー』を選択して攻撃を放つが、他の五人もほぼ同時に攻撃を放った。

一瞬の攻防でしとめることができたのは五体のうちの二体。

ルシエの攻撃は心配したフィールドの影響を全く感じさせない威力で、一瞬で敵を斬り刻んだ。

そしてもう一体をしとめたのはあいらさんだ。

牙を向いた砂鯨の大きく開いた口の中に『アイアンボール』を叩き込み、瀕死の状態で砂上に落ちた鯨に雑刀でとどめをさした。

俺を含む残りの三人は、それぞれが攻撃を当てる事には成功したが、消失させるまでには至らず、ダメージを与えた状態で地中へと逃げられてしまった。

俺もすっかり狙ったつもりだが相手がドラゴンではなかったので『ドラグナー』の特性を發揮しきることができずに一発でしとめることができなかった。

ただ、敵に大ダメージを与えたのは間違いない。

次は確実にしとめる。

第594話 サンドシャーク（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第595話 砂嵐エリア突破

残る敵は三体。

いずれの敵も大きなダメージを与える事に成功しているので、さっきまでのような勢いはない。

背びれが見えているが動きも鈍く蛇行している。

シルの雷撃ならここからでも順番に狙い撃てる気もするが、砂鯨の攻撃を待つ。

蛇行状態から瞬間的に速度を増したと思ったら、再び飛び出して襲ってきた。

今度は現れるタイミングを完全に計ることができたので、余裕を持って狙い撃つことができた。

『ドラグナー』から放たれた弾は的確に砂鯨の頭部を撃ち抜き消失させる事に成功した。

他の二体もミクとベルリアが責任を持ってしとめていた。

戦闘の終了を確認してから手早く五個の魔核を回収し先を急ぐ。

砂嵐の中ストームドラゴンや砂鯨との戦闘を数度繰り返し進んでいるが、なかなか砂嵐のエリアを抜ける事ができない。

ゴーグルのおかげでかなり負担は軽減されているが、モンスターに警戒しながら砂嵐の中を進む事でかなり体力を削られていつている。

「ミク、だいじょうぶ？」

「ええ……だいじょうぶよ」

特にメンバーの中では体力の劣るミクに疲れの色が見えるので、どこかで休憩を取りたいが、このエリアを抜けない事にはそれもままならない。

このエリアに入ってから既に一時間以上は経過していると思うが、

戦っている時間もあるので思ったよりも進めていないのかもしれない。

「マイロード、もう少しでぬけるようです」

俺の目では、まだ確認できないが、視力のよいベルリアには砂嵐の終わりが見えているらしい。

「みんな頑張れ！ あと少しでぬけるぞ！」

気を抜いて襲われないようにだけ注意を払い先を目指す。

「ぬけた〜！ きつかったな〜」

「もう、当分砂は遠慮したいわね」

「ああ、身体中が砂だらけだよ」

一様に疲れた声をあげるが、あいりさんが言う通りメンバー全員が砂だらけだ。

全員で装備を外し、全身にかぶった砂を払い落とす。

「砂を落とすだけでもスッキリした気になるな」

「でも、髪がバサバサになっちゃったわね」

「ああ、指がスムーズに通らないな。これはしっかりトリートメントしないとまずいな」

このタイミングで髪の心配を一番にするとはさすがに二人とも女の子だな。

俺は髪の心配より少し休みたい。

「シル、周囲に敵はいるか？」

「いえ、この周囲にはいないようです」
「それじゃあ、ここで十分間休憩を取ろう」

そう言つて、俺はその場に腰を下ろした。
喉も乾いたな。

俺はマジック腹巻きからミネラルウォーターを取り出して一気に半分ぐらい飲み干した。

「ああ〜！ 生き返る〜」

「さすがにちよつと疲れたわね」

「普段砂嵐を体験することなどないからな。ある意味貴重な体験かもしれない」

「あいりさんポジティブですね。俺はもううんざりですよ。普通がいいです。もう当分砂嵐は遠慮したいですね」

「そうは言つても明日また通る事になるぞ」

「ああ……。あいりさん、ぬけたばかりでその言葉はやめて欲しかったです。気が重くなりますよ」

「これも修行の一環だと思えば辛くないものだぞ」

「あいりさん、俺は別に修行をしにきてるわけでは……」

「海斗、土遁の術の修行にいいんじゃないの？」

「ヒカリンみたいなこと言うなあ……」

「……ヒカリンは毎日戦つてるのよね」

「そうだな」

「絶対に助けましょうね」

「ああ、もちろんだ」

「ミク大丈夫だ。私達にはシル様とルシエ様がついているんだからおまけにアサシンまでいるんだぞ」

「そうですね。おまけでアサシンまでいますもんね」

「ああ、ダメな要素を探す方が難しいな」

「俺はおまけですか……」

「ふふっ……そうだな。おまげだ。頼りにしてるぞ」
「はい」

第595話 砂嵐エリア突破（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第596話 弁当にフォアグラ

休憩を終え俺達は再び先へと進み始める。

「あゝ、普通の砂地が快適に感じるな」

「そうね、普通なら、ここでも大変と思うところだけど、慣れって恐ろしいわね」

「ゴーグルとマスクを外せるだけで開放感が違うな」

「そうですね」

砂嵐がないとこんなにも快適なのかと思いつながら、どんどん進んでいくが、しばらくすると砂地エリアも終了して、通常のフィールドへと戻った感じた。

床も砂地ではなくなっているので、これから先出現するモンスターも変わってくるはずだ。

「海斗、そろそろお昼にしない？」

「ああ、そうか、まだ食べてなかったな」

「お腹が空いたな」

砂嵐エリアに入ったのがお昼前だったので既に結構いい時間になっている。

砂地エリアではご飯を食べるのが難しかったので控えていたが、意識し始めると確かにお腹が結構空いている。

三人で相談してその場に留まってお昼ご飯を食べる事にした。

今日の俺のお昼ご飯はハムカツサンドに、塩にぎりだ。

「海斗、ハムカツサンドはいいと思うが塩にぎりとは、また結構渋

「いチョイスだな」

「あつさりしていて美味しいんですよ」

「男子高生としては、発言が妙に老成しているな」

「そんな事ないですよ。いろいろ食べて最終これが一番かもしれないです」

「やはり海斗は老成しているな」

「いやいや普通の十七歳ですよ」

「十七歳なら普通は焼肉、ラーメン、苺パフェだろう」

苺パフェ？ 十七歳は普通苺パフェなのか？

「どれも好きですけど、今日は塩にぎりの気分なんです」

「よかつたら、私のおかずを分けてもいいが」

「いえ、だいじょうぶです。ありがとうございます」

「私のをあげてもいいわよ。今日は体力がつくように鰻とフォアグラがメインだから」

昼の弁当のおかずが鰻にフォアグラか……

普段そんな弁当にはお目にかかった事はない。

うちのパーティーメンバーは三人ともお嬢様には違いないが、フレッチレストランの件も含めてミクは其中でも飛び抜けてお嬢様な気がする。

今までに鰻は食べた事はあるけどフォアグラは食べた事がないので、食べてみたいという興味はあったが、グツと我慢して遠慮しておいた。

「ミク、昼からそんなにいっぱい食べてだいじょうぶなの？」

「食べないともたないじゃない。倒れちゃうわよ」

「そうかもな。ミクは普段からフォアグラとか食べてるのか？」

「そうね。ママが結構好きで昔からお弁当の定番なのよ」

「ああ……そうなんだ」

俺が知らないだけだろうか？

お弁当の定番がフオアグラ。

フオアグラってお弁当のおかずだっけ？

世界三大珍味とかじゃなかったか？

やはりミクは一般から少し外れているような気がする。

それにしてもミクは食べる量に対して、見る限りではかなり痩せ型だと思う。

もしかして胃下垂だろうか？

二十分ほどで全員が食べ終わったので片付けをして、先に進む事にする。

「結構いいペースだとは思うけど、今の感じだと今日明日では攻略できそうにはないな」

「来週からゴールデンウィークだから、そのどこかではクリアしたいわね」

「そうだな。今日明日で出来る限り距離を稼いでゴールデンウィーク中に攻略するというのが一番現実的だろうな」

カロリンの事があるので気ばかり焦るが、マップを見る限り、まだ半分まで来ていないように見える。

どうにか今日中に半分まで行っておきたい。

それにしても、ご飯を食べた後はいつも眠くなるな。少し抑え目にしているつもりだが、血液が腹部に集中するからだろうか。

その理屈でいくと鰻とフオアグラを食べたミクはもっと眠くなってそうだが、もしかしたら気づかれないように振る舞っているのかもしれない。

第596話 弁当にフォアグラ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第597話 居眠りダメ！

やっぱり歩いていても眠いものは眠い。

人間歩きながら寝たらどうなるのだろう。

ボタンとその場に倒れるのだろうか？ それとも寝ていても足は前に進むのか？

興味はあるが実践する気はないので、手の甲をつねって眠気を覚ます。

一瞬痛みに覚醒するが、すぐにまたりとした眠気が襲ってくる。

最近毎日ダンジョンに潜っているので、少し疲れも溜まっているのかもしれない。

眠気と戦いながら進んでいると

「マイロードお気をつけください」

「え？」

ベルリアの声が聞こえてきたが、瞬時に反応ができずにそのまま踏み込んでしまった。

『カチッ』

今までも何度か聞いたことのある音が聞こえてきた。

これはいつもルシェがやった時の音だ。

その音が聞こえてきた瞬間に俺の眠気が一気に覚めた。

「みんな逃げてください！」

声をあげて俺自身、その場からすぐに離脱しようとするが動けない。

よく見ると足下が微かに光っているように見える。

これは、魔法か何かで足が拘束されている。

力を込めて動こうとするがびくともしない。これはまずい。

俺は周囲に意識を向ける。普通に考えて足を拘束するだけの罠はずはない。

動けなくなつた俺に向けて何かあるはずだが、周囲には特に変化は見られない。

どういうことだ？　これだけか？

「マイロード！　上です」

ベルリアの声に反応し咄嗟に上を向くと、天井の一部が俺に向かつてゆっくりと下がってきていた。

ちようど俺のいる部分をカバーするくらいのサイズ感だが、動けない以上このままいくと潰されてしまう。

必死に抜け出そうと足掻いてみるが、全く動けない。

「ベルリア！　抜けない！　どうやっても抜けないんだ！　どうにかしてくれ！　このままだとヤバイ！」

冗談抜きでこのままだとヤバイ。潰されてしまう。

さすがにこんなところで天井に潰されて死ぬのは嫌だ。

俺はまだ春香から誕生日を祝ってもらっていいんだ！　それまでは絶対に死ねない。いや、祝ってもらってからも同じ大学へ行くんだから、やっぱり死ねない！

俺の焦りとは全く関係なく徐々に天井の一部が俺との距離を詰めてくる。もう俺の頭まで一メートルもないぐらいだ。

「マイロード、しゃがんでください」

俺はベルリアの指示に従い、その場へとしゃがみ込むが、既に元々俺の頭があつた位置まで迫ってきている。

まずい、まずい、まずい！

「ベルリア！」

「マイロード、お任せ下さい。最悪の場合は足を切つても助けで見せますのでご安心ください」

「ベルリア！ それはダメだ。絶対にダメだ。それ以外の方法で頼んだぞ！」

ベルリアはまさか本気ではないと思うが、それは助けるとは言わない。俺の足は今後の探索のためにも絶対に必要だ。

そうこうしているうちにも、天井はどんどん近づいてきている。

しゃがんだ俺までメートルをきつたところで、ベルリアが下がってきた天井の下に入り両手を突き上げて、受け止めた。

「ぐっ……これは……さすがの私でもきついですね」

ベルリアによつて一時的に天井が下がってきていたのが停止した。停止はしたがベルリアが、血管が切れるんじゃないかと思うほど全力を出して受け止めているのがわかる。

「ベルリア？」

「マイロード、もしかしたらそう長くは……」

「ベルリア！」

「ぐっ……」

これはまずい。どう考えても一時凌ぎにしかなりえない。

そもそも、普通に考えて下がってきている天井を力づくで止める事などできるはずがない。

なぜベルリアはこの手段を選じたんだ。

もうベルリアが押し込まれるのは時間の問題に見える。

だれか！ だれか助けてくれ！

このままだと俺潰れちゃう！

第597話 居眠りダメ！（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を】

第598話 真理

「マイロード申し訳ございません。もう……」

「ベルリア！ 諦めるな！ 諦めたらそこで終わりだ！ 諦めなければなんとかなる！」

「そう言われましても、もう……」

いよいよ、本格的にベルリアが限界を迎えてしまったようだ。顔から滝のような汗を流し明らかに顔色が悪くなってきた。

士爵級悪魔のステータスと俺への忠誠心でどうにか食い止めていたが、どうやらそれももう潰えてしまいそうだ。

ベルリアを責めることはできない。

俺の為にここまで耐えてくれたサーバントを俺は誇りに思う。

ありがとうベルリア！

だけど、なんとか頑張ってくれ！ 頼む！ 頑張れベルリア！

絶体絶命ともいえる状況の中、シルという本物の女神によって俺に一筋の光がてらされた。

「ご主人様、もしよろしければ私が、ベルリアが支えているそれを壊しましょうか？」

「シル！ できるのか？」

「もちろんできますが、ベルリアも頑張っているようだったので、ご主人様とベルリアの邪魔になるかとも思い控えていたのです」

「邪魔じゃない。今すぐ頼む！ もう時間がないんだ。ベルリアも限界だから」

「わかりました。それではいきますね。我が敵を穿て神槍ラジュネイト！」

神槍が光りシルの渾身の一撃がベルリアを押しつぶそうとしていた天井の一部を大きく抉り取った。

「姫……助かりました。さすがです。このベルリア姫に命を救われました。シル姫の為ならこの命！」

どうやら抉り取られたトラップはそれ以上迫ってくる事はなくベルリアも完全に解放されたようだ。

俺の足を拘束していたものも同時に解除されたようで、普通に歩けるようになったので、念のためにすぐその場から離れる。

「シル助かったよ。ベルリアもありがとうな」

「マイロードお役に立てて本望です」

「ご主人様にお怪我がなくてよかったです」

あゝ俺はサーバントに恵まれてるな。いつも俺を助けてくれる。やはり持つべきものは献身的なサーバントだな。

「なにボケつとしてるんだよ！ 寝てるんじゃないのか？ こんな見え見えのトラップにかかるなんてありえないだろ！」

ああ……俺には献身的ではないサーバントがもう一人いたんだ。ルシエお前だけには言われたくない。

今まで何度もお前がトラップにかかったせいで、どれだけ俺が被害を受けてきたと思っっているんだ。

しかも今回もルシエだけは何もしていない。

ルシエ！ サーバントとしての役目を果たしてくれ。なんで主人である俺を一切助けようとしらないんだ。

いずれにしても、今の出来事で俺の眠気は完全に吹き飛んだ。

やはりダンジョンでは一瞬の油断が命取りだ。間違っても今日はも

うトラップにかかるようなミスは起こさないと心に誓う。

「海斗、海斗ってよくトラップにハマってるわね。でも無事でよかったわ」

「ああ……ありがとうございます」

確かに俺は、ほかのメンバーに比べてトラップによる被害を多く受けている。

ただ俺自身がトラップにハマったのはこれが初めてかもしれない。みんな勘違いをしているようだが、被害を受けているだけで俺がトラップにハマったんじゃない。

ほとんどがルシェがトラップにハマっているんだ！

「海斗、危なかったな。砂地エリアにはなかったようだが、やはりこの階層はトラップが多いようだ。急ぐ気持ちもわかるが慎重にしよう」

「はい、ありがとうございます」

あいりさんは、俺が急いだせいで俺がトラップにハマったと思っているようだが、もちろん真実は違う。

居眠りが原因だ……

居眠りダメ。ゼツタイ。

居眠りするなら探索するな！ 探索するなら居眠りするな！

これが今回の経験から俺が導き出したダンジョン探索における真理だ。

第598話 真理（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を】

第599話 上書き

疲れた……

無事に罫を突破したが、一気に疲れた。

戦いとはまた違った疲れを感じるが、気力を振り絞って先に進む。何度か既に戦った事のあるドラゴンが出現し戦闘となったが順調に攻略してこの日の探索を終了した。

「じゃあ、今日はここまでにしようか」

「そうね」

「そうしよう」

俺達は『ゲートキーパー』を使い一階層まで戻り、そのまま地上へと帰った。

地上に出ると夕暮れ時で辺りは日が落ちてきていた。

今日も1日頑張った。

今日で十七階層の半分はかなり近づいたと思う。明日には半分を超えて更に先に進みたい。

家に帰って先にシャワーを浴びるが、前回同様に頭は砂でジャリジャリで全身が埃っぽい感じだったので、念入りに洗い流すといつもの以上にサッパリした感じがして気持ちよかった。

「母さん、今日の晩ご飯はなに？」

「今日はこれよ」

「カレー……うどん」

「そう、カレーばかりも飽きるでしょ。だからカレーうどんにしてみたのよ」

母さん！ 確かにカレーうどんはカレーライスとは違うしある意味新鮮ではるけど、カレーはカレーだ。

まあ食べたらいいしかったからいいけど……

それにしてもカレーばかり。もしかして家の家計が苦しいのか？ ちよつとは俺も家にお金を入れた方がいいんだらうか？

俺はカレー好きだからいけているが、父さんも同じものを食べているはずなので大丈夫なんだらうか？

「母さん、父さんの仕事ってうまくいってるの？」

「もちろんよ」。この前課長に上がったしお給料もちっと増えたとし順調そのものよ。海斗にお小遣いもあげなくて良くなったしお母さんの的には言う事ないわね」

どうも金銭的な問題ではないようなので、単純に母さんの手抜きという事なのだらう。

「それより、海斗これどう思う？」

「これってなに？」

「今着ている服よ。今日買ってきたの。来週の旅行に着て行くこと思ってる」

「ああ、いいんじゃない。春っぽいし。だけど……その服……」

母親が着ている服は水色のワンピースだ。

確かに春っぽいけど妙に若い子用の服に見える。

今母親が着ている服だが、最近どこかで同じようなワンピースを見た気がする。

どこで見たんだらう。

服には確かに見覚えがあるけどすぐに思い出せない。

うっん。

俺が見たとすればシチュエーションは限られる。

最近の俺の行動を思い出す。

女性の私服を見る機会は……もしかしてあの時か！

間違いない！

全くイメージは違うが、春香がこの前着ていたワンピースとそっくりだ。

というよりも、もしかして同じワンピースじゃないのか？

細部まで覚えているわけではないが、服だけを集中して見てみると記憶の中で春香の着ていたワンピースと重なる。

春香が着ると、妖精がマーメイドのように見えたが、母親が着ると

……

そもそも春香は十八歳になったばかりだが、母親は完全に四十歳代だ。

確かに最近の四十代は若く見える人も多い。

春香のママは確かに年齢よりも若く見える。

もしかすると春香のワンピースを着てもそれなりに似合っているかもしれない。

だが、俺の母親は年相応に見えるので、春香と同じワンピースは……自分が好意を寄せる女の子が着ていたのと同じ服を着て自分の母親が披露してくる。

俺は自分の母親が嫌いではない。

どちらかというと良好な関係性を築けていると思う。

だが、偶然とはいえ春香と同じ服はやめて欲しかった。

あの時天使の衣のように見えた水色のワンピースが俺の脳内で、目の前で母親が着ているワンピースのイメージへと急速に書き換えられていく。

母親は何も悪くない。

悪くはないが、俺の神聖なものが汚されたような複雑な感覚に襲われてしまった。

母さん、もっと落ち着いた服の方がいいと思う。

第599話 上書き（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

第600話 悪夢の続き

昨日は夢の中で春香と待ち合わせをしたが、家を出るのが遅くなって、急いで待ち合わせ場所まで走り、既に到着していた水色のワンピースの春香に背後から声をかけたが、春香が振り向いた瞬間、なぜかそこにいたのは春香ではなく母さんだった。普段夢の内容は目が覚めるとすぐに忘れてしまうのに、朝目を覚ましてしばらく経っても鮮明に覚えていた。

春香が母さんに……ある意味悪夢だ……

今度から本当に春香と同じワンピースを買うのはやめてほしい。憂鬱な気分朝を迎えたが、気を取り直してダンジョンに向かう。

「おはよう」

「おはよう。なんか元気ないわね。春香と喧嘩でもしたの？」

「いや、喧嘩なんかしてないよ。むしろすぐにでも会って記憶を書き換えない」

「よくわからないけど、集中しないとまたトラップにハマるわよ」

「わかってる」

「海斗、悩みがあるなら私も相談にのるぞ？」

「いや、本当に大丈夫です。ありがとうございます」

思った以上に夢と昨日の出来事による精神汚染が進んでいたようで二人から心配されてしまった。

こんな事でパーティメンバーに心配をかけるわけにはいかないな。今日はとにかく半分より先に進む事を目標にして十七階層へと向かう。

「ルシエ、ご主人様が少し元気がないように見えるんだけど、どう

思っ?」

「言われてみればそう見えないこともないな。まああれだろ。どうせ春香に愛想尽かされかけているんだろ」

「そうでしょうか? 昨日もトラップにハマってしまいましたし、心配ですね」

「それだけ春香とうまくいっていない証拠かもな」

「それならいいのですが」

「今がチャンスかもな」

「そうですね!」

いつものようにシルとルシェがコソコソやっているの、俺もいつものようにスルーしておく。

しばらく歩いているとシルが声をかけてきた。

「ご主人様、何か悩み事があるのでしたらいつでも話してくださいね。必ず私が力になります」

「ああ、ありがとう。やっぱりシルは優しいな」

「おい、昨日もトラップにハマってたし大丈夫なのか? わたしも相談にのってやってもいいぞ。どうせ春香の事だろ?」

「な……なにを言ってるんだよ。別に春香は関係ない。いや、関係なくはないが、直接は関係ない。だけど、ルシェもありがとうな」

この二人にまで心配をかけるとは、よっぽど顔と態度に出てたんだな。

本当に反省だ。

「ご主人様、前方に敵モンスター三体です」

「よし! 慎重にいくぞ! 俺とあいりさんがペアでシルとルシェで一体ずつ頼んだぞ!」

俺には頼れる仲間がいる。

俺のくだらない悩みを真剣に心配してくれるパーティメンバーとサ
ーバントがいる。

テンション下げていた自分が恥ずかしい。

俺はテンションと集中力を最大まで引き上げてドラゴンへと向かっ
ていく。

頼れる仲間と戦う俺にとってワイバーン三体などもの数ではな
かった。

それぞれのメンバーがスキルを発動して瞬殺する事に成功した。

「やったな！」

「はい、ご主人様もお見事でした」

「シルとルシエも流石だよ」

「ふふん、このぐらい当たり前だろ」

ああ…… やっぱりダンジョンはいいな。

ワイバーンを倒した俺はすっかり悪夢の影響から脱する事に成功し、
いつも以上の集中力を取り戻した。

「みんな、今日は絶対に半分を超えて探索を進めるぞ！」

ヒカリンのためにもくだらない事に囚われず頑張らないといけない。

「なんか急に元気になったな」

「そうですね。私達の思いが通じたのでしょうか？」

「やっぱりわたし達がいないとあいつはダメだな」

「そうですね」

第600話 悪夢の続き(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を】

第601話 ミラードラゴン

砂嵐の中に突入しているが、今の時刻は十一時前だ。

上がったテンションの恩恵もあるのか昨日よりも一時間近く早いペースでここまでこれている。

既にこのエリアでもストームドラゴンの一団を退け、あと少しで抜けるはずだ。

二回目とはいえ流石にストームドラゴンを瞬殺とはいかず、苦戦しながらも無傷で切り抜ける事ができた。

「みんな、ようやく抜けたよ」

「やつぱりここは難所ね」

「ああ、視界が悪いのがキツイな」

しばらく歩き、無事砂嵐エリアを抜ける事が出来た。

昨日はこの地点で昼ごはんを食べたが、今日はまだ時間的に余裕があるので、食事を取らずに先に進む。

「ご主人様、モンスターです。この先を左に行った先に一体います」

「一体か。この階層じゃ珍しいな。一体なら問題無いだろうから各自好きに動いてくれていい」

この階層で単体の敵が出現するのは初めてだ。先に進んでいる証拠でもあるのかもしれない。

モンスターのいるところへと向かい、角からモンスターをうかがい見る。

二十メートルほど先にドラゴンがいるが、その風体は特異だった。全身が鏡面のように光っており、周囲の景色をその身にうつしてい

る。

鏡のようにガラスではなく金属を磨き上げたような光沢。

おそらくは、金属竜の亜種。

サイズはそれほど変わらないので上位種というわけではなさそうだが、金属であるなら当然硬く、しかも雷も反射してしまいそうだ。

「こそこそするのは、小物のする事だ！ わたしがさっさと片付けてやるよ。燃え尽きてなくなれ！ 『破滅の獄炎』」

「あ……」

ルシエ、どう考えてもこのドラゴンは獄炎と相性悪いだろ。

確かに好きにしているとは言ったが、なんでまた同じ事を繰り返すんだ。

しかも今回は鏡面の効果で、明らかに金属竜の時と比べても燃え方が弱い。

「マイロード、どうされますか？ もしよろしければ私も敵を倒しに向かいますが」

あゝこれはベルリアもわかってるんだな。このままいくと下手をすると三十分コースだという事を。

「よし！ ベルリア頼んだぞ！」

「ちょっと待て！ わたしが戦っているのに邪魔する気か？ ベル

リアー！」

「いえ滅相もございません。ルシエ姫の助けになればと思っただけです」

「余計なお世話だ！」

「そう仰るのですしたら私の出る幕はありません。控えさせていただきます」

「ベルリア！」

「マイロード、ここはルシエ姫にお任せしましょう」

ベルリア……寝返ったな。

このまま待っていても埒があかない。三十分もこのまま待ち続けることなどできるはずがない。

「ご主人様、よろしければ私がとどめをさしましょうか？」

「シル……頼めるか？」

「はい、もちろんです」

「おい！ シル邪魔すんなよな」

「ルシエ、このままずっと待っていてもご主人様から魔核をいただけませんよ。素早く倒して次に行った方が、魔核をいただける機会が増えるのですよ？」

「た、たしかに。目先の一個よりも先の三個というわけだな。わかつたぞ！ シルも頼んだぞ！」

「まかせてください。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

シルが加速して光を放った神槍をドラゴンに叩き込む。

鏡面の効果で威力が半減したりしないかと心配したが全くの杞憂に終わった。

シルの一撃はドラゴンの鏡面装甲を貫き風穴を開けてあっさりと消滅させた。

今回はシルのお陰で助かった。だがベルリアは裏切り者だ。

「ベルリアは当分魔核はおあずけな」

「マイロード……」

「自業自得だな」

「海斗！ わたしにはくれよ。獄炎を使ったんだからな」

なんてずつずつしいんだ。どう考えてもあの獄炎は余計な一撃だっ
ただろう。

第601話 ミラードラゴン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第602話 レッド

活躍していないルシエに魔核を渡す事は心情的にかなり抵抗感があったが、今後の事を考えて大人の対応で結局渡す事にした。

「あゝやっぱり働いた後の魔核は最高だな！」

「そうですね、満足です」

シルの満足そうな笑顔には癒されるが、ルシエの偉そうな態度にはやはり納得はいかない。

ゆっくりと深呼吸をし気持ちを沈めて先を急ぐが、さっきは初見のドラゴンが出てきたのでここからは更に注意が必要だ。

「ミク、さっきのとかはもしかしたら『ライトニングスピア』が効かないかもしれないから、その時はスピットファイアで牽制か『幻視の舞』を試してみてよ」

「そうね。ここから先はあんなのがどんどん出てくるかもしれないものね」

「私は近接で『斬鉄撃』だな。おそらく斬れると思う」
「お願いします」

念の為に今後の戦略を話し合いながら歩いて先に進む。

「そういえば、あのドラゴンの皮どうしたの？」

「一応まだ手元にはあるけど」

「さっさと財布にでもしてもらいなさいよ」

「財布に仕立ててくれるお店がわからないんだけど」

「そうなの？ よかったら紹介するわよ」

「値段つてどのぐらいするんだろっ?」

「素材持ち込みだから十万円もあれば作ってもらえるんじゃない?」

「結構するね」

「職人によるオーダーメイドだからそのぐらいはするでしょ」

「そうなんだ……」

十万円か……

正直財布にそこまでお金をかけなくてもいい気もする。

別にドラゴン革の財布がどうしても欲しいってわけでもないし今使っている一万円の財布もまだまだ現役で使えているし、まあまたでいいかな。

「ご主人様、モンスターですが、おそらく上空にいるのでワイバーンだと思います」

「そうか、じゃあみんないつもの感じでいこう」

ワイバーンとは何度も戦っているの、それほど問題はないだろう。俺とあいらさんとベルリアが前を歩きシルが中衛で後方に残りのメンバーが控える。

「マイロード、ワイバーンに間違いはなさそうですが、色が赤く少し大きいようです」

視力の良いベルリアにはしっかりと敵のドラゴンが見えているようだが、赤くて少し大きい個体か。

普通のワイバーンじゃないのか?

そのまま近づいていくと俺の目にもワイバーンを捉える事ができたが、確かに赤く、いつも見ている個体よりも一回りは大きい。

数は三体。

一体はシルに任せるとして、残りのメンバーで二体をしとめなければ

ばならない。

「シル一体まかせたぞ」

「かしこまりました。ご主人様も頑張ってくださいね」

このシルの一言に癒されるが、どうやら赤いワイバーンもこちらに気がついたようだ。

三体のうちの一体が口を開くと、突然口から大きな炎の塊を放ってきた。

「みんな！ 避ける〜！」

通常のワイバーンは炎をはかない。

やはり普通の個体じゃない。炎の塊はそれなりの大きさがあるが、まだ距離があったので余裕をもって回避する事ができた。

ただ、俺達が回避したのを見て赤いワイバーン三体が同時に炎の塊をこちらに向かって次々に放ってきた。

一個であればそれほど問題ではなかったが三個同時となれば話しは違う。

しっかり予測しながら回避しないと回避した後には他の炎の塊に当たってしまつては元も子もない。

赤いワイバーンの攻撃を集中して躲していくが、このまま一方的に攻められても埒があかない。

「スナッチに牽制を！」

俺は後方に控えるミクに指示を出す。

ミクがスナッチに命じて、すぐにスナッチが前方へと駆けていき、赤いワイバーンに近づき上空に向かって『ヘッジホッグ』を放った。

第602話 レッド（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第603話 中位種

スナッチの『ヘッジホッグ』による鋼鉄の針が上空にとどまる赤いワイバーンへと降り注ぐ。

「ギョアエエエ！」

鋼鉄の針は三体のワイバーンのうちの二体にダメージを与える事に成功し、二体からの炎の攻撃が一瞬止んだ。

俺は『ドラグナー』を構えてトリガーを引く。

他のメンバーもこの機を逃さず、一斉に攻撃をかける。

俺の放った銃弾が蒼い光の糸を引いて赤いワイバーンの胸部を捉えるが、残念ながら消滅までは至らない。翼を止めたワイバーンは揚力を失って地面へと落下する。

ダメージを与える事はできたが、明らかに通常のワイバーンに比べて耐久性が増している。

シルの『神の雷撃』で一体は葬り去る事ができているが、残りの二体はまだ健在だ。

「落ちた蜥蜴はただの蜥蜴だな。さっさと燃えてなくなれ『破滅の獄炎』」

残りの一体に向けてルシエが獄炎を放つ。

いつものように獄炎が赤いワイバーンを包むが、肉が焼けている感じが薄い。

もしかして、この赤い外皮は炎への耐性があるのか？

炎を放つし炎属性なのか。

一応獄炎に縛られて動く事はできなさそうなので、放っておいても

う一体にかかろうとするが、既にベルリアとあいりさんが、ほぼ同時に突っ込んでいった。

向かっていく二人に向けて、地表に落ちたワイバーンは口を開き炎の塊を連発するが、二人とも完全に見切つて躲しながら近づいていく。

ワイバーンは炎が当たらないのを理解したのか、翼を動かして風を起こしベルリアとあいりさんの接近を阻んでいる。

攻めあぐねる二人を見て、すぐさまミクが『ライトニングスピア』でワイバーンの動きを止める。

「ヤアアアア！」

ワイバーンの動きが止まった瞬間一気に間合いを詰めたあいりさんが薙刀で斬りつける。

あいりさんに続いてベルリアも二刀を振るい、ワイバーンに手傷を負わせる。

二人から攻撃をくらってもまだ消滅には至っていない。

やはり耐久力が高い。

「さすがに大きいだけあって、あっさりとは消えてくれないようだな。だがこれで終わりだ！『斬鉄撃』」

なかなかしぶとかったが最後は、あいりさんの一撃がワイバーンの喉元を掻き切り、赤いワイバーンを消滅させた。

残りは一体だが、金属竜の時と同様に地味に燃えている。

獄炎に対してこれほどの耐性を見せているので普通の炎では太刀打ちできないかもしれない。

明らかに今までのワイバーンよりも手強い。

「なんか、この赤いワイバーンって今までのやつよりも大分強くな

いか？」

「海斗、おそらくこの赤いワイバーンは中位種だろう」

「中位種ですか？」

「そうだ。今までのドラゴンは明らかにドラゴンとしては小型の下位種だったが、今回はサイズも少し大きいし、攻撃力、耐久力ともに今までの個体を凌いでいる。おそらくは今までのドラゴンより上の中位種だろう」

中位種か。確かにそう言われれば納得の強さだと思う。

だが、いくら炎耐性があるとはいえ、このままでは、最後の一体が燃え尽きるまで待つ事になってしまう。

「ベルリア！」

俺はベルリアに前回同様とどめを促す。

「姫、このベルリアに武功を立てる機会をお与えください。必ず姫の助けとなってみせます」

ベルリア？ 趣旨が変わってないか？

「ふん！ ベルリアがそうまで言うなら聞いてやってもいいぞ」

「はっ、ありがたき幸せ」

まあ、ある意味ルシエの扱い方としては正解なのか？

ベルリアが獄炎で燻っている最後の一体に近づきとどめをさす。

「姫の前です！ さっさと消えてください『アクセルブースト』」

ベルリアの攻撃が赤いワイバーンの頭部を捉え、消滅へと誘った。

地面に残された魔核を確認すると確かに今までのワイバーンのものよりも少し大きく、そのことがあいりさんの言っていた中位種というのが正しいことを裏付けていた。

第603話 中位種（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第604話 家族と胃痛

赤いワイバーンを倒した俺達は更に先へと進んでいった。目標とする中間と思える地点は既に過ぎていく。

これより先は中位ドラゴンが巢食っているのだと思いき身構えて進んだものの、結果的に中位ドラゴンが出現したのは、この一度のみで出現するのは金属竜をはじめとする属性竜の亜種を中心とした下位ドラゴン達だった。

お陰で、それほど苦戦する事なく進むことができたので、当初の目標よりも距離を稼げたと思う。

時刻が十七時を回ったところで今回の探索を切り上げる事にした。少し早いけど、昨日今日と終日みっちり探索したために、それなりに疲労が溜まっているので、思わぬ怪我を未然に防ぐ意味でもこの時間で地上へ戻る事にした。地上に戻るとまだ明るい。

「それじゃあ次は週末に」

「そうね。いよいよゴールデンウィークね」

「できれば早めに攻略して、残りはヒカリンも一緒に遊びたいものだな」

「そうですね。頑張りましょう」

来週末には、遂にゴールデンウィークを迎えるので、俺達はそのまま解散したが、みんなわかっている。

今のペースならイレギュラーが起こらない限り、まず間違いなくゴールデンウィークのどこかで十七階層を攻略できる。

それは、十七階層の階層主を倒して、ドロップアイテムを手に入れる事を意味している。

つまりは、このタイミングで結果が出るという事だ。

早く結果を出したいという思いはあるが、それよりも、もし結果が望んだものでなかったら……と考えてしまいプレッシャーに押しつぶされそうになる。

他の二人もいつも通りの様にも見えるが、ダンジョンからあがつて来たにもかかわらず、去り際の表情には若干の緊張感が見て取れた。俺と同じ。

二人も俺と同様にプレッシャーを感じているのだろう。

ミクの話では、十八階層を攻略するほどの時間はもう無い。

これでダメならヒカリンは……

いや、俺がネガティブになっても何も変わらない。

俺には幸運の女神ともいうべきシルもついている。

きつと大丈夫だ。

ただ俺には不幸の悪魔ともいうべきルシエもついている。

そのことが俺の心配を加速させてしまう。

たぶん大丈夫だ。さすがにルシエだって今回は空気を読めるはずだ。

きつと幸運の悪魔になってくれるはずだ。

ああ…… ゴールデンウィークの事を考えると胃が痛い……

前にも胃を痛めたことがあったが、あの時はダンジョン内でも痛かった。

レベルアップによるステータスの向上は胃腸機能の向上には繋がっていないようだ。

サーバントは俺にとって家族だ。

シルとルシエは俺の妹でベルリアも師匠だが一応は弟のように思っている。

じゃあパーティーメンバーは俺にとってどういう存在かといえば、やはり家族のような存在だと思う。

これは俺のパーティーメンバーは特に年齢が近いこともあると思う。

もつと歳の離れたメンバー構成なら感じ方も違ったかもしれない。

友達といえないことも無いが、学校のクラスメイトとかとはちよっ

と違う。

俺が仕事に就いたことがあれば、職場の同僚という感覚が芽生えていたかもしれないが、今の俺にその感覚はない。

ある意味命を預け、預かってダンジョンに潜っているのだ。

今の俺はパーティメンバーに全幅の信頼をおいている。

ただの友達にここまでの信頼を寄せるかと言われれば難しいと思う。真司と隼人とも時間をかければ同じような感覚になるかもしれないが、今の段階ではまだ及ばない。

そしてただの仕事仲間にここまでの思い入れを持つのかと言われれば、おそらく違う。

職場恋愛を目指していれば、もしかしたら意中の相手に入れ込む事もあるかもしれないが、俺にはこれはあたららない。

では、パーティメンバーとは俺にとってなにか？

シルヤルシエとは少し違うが、やはり俺にとっては家族。

俺にとってのもう一つの家族。

その家族の文字通り命運があと少しで決まる。

これが胃にこないはずはない……

うっ……

おそらく結果が出るまでこの胃痛がおさまることはなさそうだ。

第604話 家族と胃痛（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第605話 学校で

週が明けて俺は学校にきているが、お昼休みになりいつもと違う事が起きています。

いつものように真司と隼人とで昼ごはんを食べているのだが、なぜか今日は四人いる。

「先輩、十七階層つてどのぐらい儲かるんですか？ やっぱり外車とか買えちゃうんですか？ まさかタワーマンションとか買えちゃうたりします？」

「いや、さすがにタワーマンションは無理だろ」

「えゝそんな事言つて、本当は一カ月で買えたりするんじゃないですか？ 私も早くそうなりたいんです。だから早くお願いしますね」

「ああ、そのうちな」

なぜか今日は野村理香子が昼になったと同時に現れて、俺達と一緒にご飯を食べている。

もしかしてこの子、クラスに友達がいなかったらどうなるか？

さすがにボッチな後輩を追い返すのも良心が痛むのでこうして四人でご飯を食べる事にしたが、さっきから聞いてくる事はダンジョンのお金事情ばかりだ。

前にもお金がないような事を言っていたので、どうしてもダンジョンで稼ぎたいのだろう。

「理香子ちゃん、よかつたら俺が二階層に連れて行ってあげてもいいぜ。これでも俺達だって十二階層組だから頼ってもらっていいんだぜ」

若干隼人が滑り気味だが、花園さんから距離をおかれているので、隼人が他の女の子に声をかけたくなる気持ちもわからなくはない。

「えー隼人先輩、ちょっと目つきがエロいです。ダンジョンと一緒に潜ったらゴブリンより隼人先輩に注意しないといけなくなりそうなので、海斗先輩で大丈夫でーす」

「なんで海斗ばかり……こいつ超絶リア充だぞ？」

「もちろん知ってますよ」

「俺もリア充になりたくーい！」

「頑張ってください」

隼人が完全に空回りしている気がする。

俺としては野村さんも結構可愛いし隼人と一緒に潜ればいい感じなんじゃないかと思うのだが、本人には一向にその気がなさそうだ。

それにしても、今日はやけに教室の温度が低い気がする。もうすぐ五月というのにどうしたんだろう。

特に背中が寒い……

「海斗先輩、今度よかったら一緒にご飯にでも行きませんか？ 私

お金がないので奢ってもらえると嬉しいんですけど」

「いや、行かないけど、なんでそんなにお金がないのか聞いてもいいか？ 答え難かったらいいけど」

「えー海斗先輩には二階層に連れていってもらいますし、特別に教えてあげますね。よくある事なんですけど私、お父さんがいないんです」

「うん……」

「それで、弟と妹がいるんです。お母さんも頑張ってくれてるんですけど、女手ひとつで子供三人は結構きついんです。それで、弟達も将来は大学まで進学させてやりたいし、私が稼がないといけな

んですよ」

「そうなんだ」

「普通のバイトも考えたんですけど、放課後と土日で高校生が稼げる金額はしれてるじゃないですか。だからどうしても探索者として稼げるようになりたいんです。だから今のままじゃダメなんです」

ああ…… やっぱりこの子お金にはシビアな感じがしたけど本当は、いい子だな。

今時弟と妹のために稼ぎたいなんてなかなかないと思う。

高校生になったばかりで、女の子なんだから自分にも色々お金を使いたいだろうに。

「とりあえず月に十万円以上は稼げるようになりたいんです」

「うつつ…… 理香子ちゃん。君の事を誤解していたよ。なんていい子なんだ。ど〜んと俺を頼ってくれていいんだぞ。俺が絶対に十万円以上稼げるようにしてあげるから」

「やっぱり隼人先輩、言い方がエロいです。なんかそういうのはちよつと……」

隼人も根はいい奴だからな。

この話を聞いてほつとけないんだろうな。

それにしてもやっぱり足下が冷えてきたな。なぜか床が底冷えしている気がする。

季節外れの寒波がきたのか？ 天気予報を見ておけばよかったかもな。

第605話 学校で(後書き)

第606話 灼熱の修羅と氷の女王（前書き）

一部修正しました。

第606話 灼熱の修羅と氷の女王

「隼人先輩と違って真司先輩は誠実そうなので、アリかもしれないですけど」

「そんな〜！ それに真司はちょっと無理だと思うな〜。愛しの彼女が許してくれないんじゃないかな〜」

「へ〜。やっぱり真司先輩は彼女がいるんですね。やっぱり誠実な人は違いますよね」

「い、いや〜。別にそんな事はないけどな」

真司も後輩の女の子に高評価してもらって照れているみたいだ。

それにしても、やはり足下が冷え込んでいるのに、今度はなぜか急に背中部分は熱くなってきた気がする。

足下が冷たくて背中では熱い……やっぱり体調が悪いんだろうか？

「ところで真司先輩の彼女さんってどんな人なんですか？」

「あ、ああ。悠美はそこに……あっ……」

「え？ どうかしましたか？」

「い、いや……ごめん俺はちょっと抜けるから」

前澤さんを紹介しようとした瞬間、真司の挙動が突然おかしくなり、真司は話の輪から抜けて前澤さんの下へと向かっていった。

「……」

前澤さんの表情を見ると怒っている。

すごく怒っている。

俺の目線の先には修羅を思わせる前澤さんが立っていた。

なんだ？　なんであんなに怒っているんだ？　もしかして野村さんか？

もしかして野村さんが真司の事を褒めたから怒っているのか？　だけどさっきのはいいい意味で褒めていたと思うけどヤキモチか……前澤さんの周囲だけ明らかに温度が上がっているように感じる。

真司が前澤さんに向かってひたすら頭を下げているが、一向に俺の背中温度は下がる気配がない。

もしかして、背中が熱くなったのは前澤さんのせいか？　そんなことあり得るのか？　もしかして前澤さんって能力者……

「あ……真司先輩に悪いことしちゃいましたね。そんなつもりはなかったんですけど」

「まあ、さっきのは野村さんが悪いわけでもないと思うよ」

「そうそう、前澤さんが真司のこと好きすぎるだけだから。まあ、そんなわけで真司は無理だからやっぱり俺じゃない？」

「いえ、海斗先輩にお願いしているので大丈夫です。ね！　海斗先輩」

「ああ、暇になったらな」

あつ……今度は熱さが一瞬で消えて背中も寒い。凍りそうに寒い。ここは雪国か？

「隼人、なんかこの教室おかしくないか？」

「なにがだよ」

「温度だよ。なんか凍りそうに寒いんだけど。足下と背中が……」

「いや、俺はなんともないけどな。体調でも……あつ……」

「なんだよ」

「海斗！　そろそろ野村さんの事は俺に任せて……な！」

「そういう訳にいかないだろ。一応俺が受けた話だし」

「あ、いや、な！　本当にそうした方がいい。海斗は、今すぐいで

も葛城さんのところに行つた方がいいんじゃないか？」

「え？ 春香？」

「春香さんつてもしかして海斗先輩の彼女さんですか？」

「い、いや、彼女ではないよ」

やばい……冷気が……これはブリザード？

この感覚、以前もあつた気がする。

体感温度が一気に四十度は下がった。

「海斗、悪いことはいわない。今すぐ行つたほうがいい。うっ……

俺にも影響が……」

「わかつたよ。それじゃあ野村さん、後はダンジョンの話は隼人に聞いてよ」

「わかりました。ありがとうございます」

俺は二人から離れて春香の方へ向かっていく。

春香の隣では、まだ真司が前澤さんに謝っているのが見える。

春香はいつものように笑顔だけど……

ちよつと笑顔の感じが違う気がする。

しかも春香の周りだけ温度が低い気がする。前澤さんの周囲の温度が高く見えるだけに余計際立っているような……

これは……なにか怒ってる？

「海斗、あの子と仲が良さそうだったね！」

「え？ この前初めて話したばかりだからそんなに仲良くはないけど」

「ふうん、それにしても色々相談にのってあげているみたいだったけど」

「ああ、彼女も探索者なんだけど一年以上一階層から抜けられないみたいで」

「そうなんだ……もしかして海斗は年下が好きなの？」

「いやいや、年下は好きってことはないけど。うん全然好きじゃないです」

「本当にそうなのかな……」

これってどういう意味だ？

もしかしてさっきの野村さんのやりとりを見てか？

「お、俺は、同い年にしか興味ないです」

「そうなんだ」

「そう！俺が好きなのは同い年だけです！」

「うん……」

幾分春香の雰囲気や和らいできた気がする。

変な誤解が解けたのだろうか？

あ……でもこれってちょっと告白みたいになってないか？

まあ誰が好きとかって言った訳じゃないから大丈夫か。

「海斗、今度また時間がある時に一緒にカフェに行こうね」

そういえばずっとダンジョンに潜りっぱなしで誕生日以外は一切どこにもいけていなかったな。

「ゴールデンウィークが終わったら行けると思う。あと十日ぐらいだけ待ってもらえると嬉しいんだけど」

「もちろんいいけど、大丈夫なの？」

「うん、多分その頃には目処がついてる予定だから」

「そう、楽しみにしてるね！」

今はカオリンの事があるのでダンジョンに集中しているが、普段の

生活との両立も大事だよな。
可能な限り春香との関係も大事にしていきたい。

第606話 灼熱の修羅と氷の女王（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第607話 GW(前書き)

第607話 GW

ついに今日からゴールデンウィークだ。

今週一週間はいつも以上に集中してスライム狩りに励んだ。

十七階層をゴールデンウィーク中に攻略してカオリンを助ける。

そしてゴールデンウィーク明けに春香とカフェに行く。

そのためにこの数日一階層でのスライム狩りに集中したが、期限が決まっているのでこのペースでいくことができたが、ずっとこのペースを保つ事はできない。

今の俺には、たかがスライムだが、長時間没頭すると心身ともにすり減っていく。

おかげでスライムの魔核のストックも十二分にあるのでゴールデンウィークの間は探索に専念できる。

「じゃあ、もう残り半分を切つてると思うから、頑張っていこう」

「そうね。GW中盤までにはこの階層を越えたいわね」

「この階層のボスも想定しておく必要があるな」

「普通に考えると上位ドラゴンですかね」

「可能性はあるな」

上位ドラゴンか。

所謂、俺達のイメージにあるドラゴンはこの上位ドラゴンのことだ
と思うが、当然十七階層に出現するようなモンスターではないので
出るとすれば階層主としてだろう。

サイズも火力も桁違いのはずだ。

「でもその前に、足下をすくわれないように集中して臨みましょう」

「海斗がそれを言う？」

「そうだな、この前も足下をすくわれたのは海斗だったな」
「はは……」

今日は体調も万全なので居眠りをすることはありえない。
なのでトラップにかかることもない。

俺達は、スタートしてからほぼ四時間歩き続けて前回の地点まで到達した。

幸いにも中位ドラゴンには一体も出会っていない。
もしかしたら、あの赤いワイバーンはイレギュラーだったのかもしれない。

「ご主人様、敵モンスター四体ですが、まだ少し距離があります」
「どのくらい？」
「おそらく百メートル程度だと思います」

確かにいつもよりも距離があるな。
シルの感知能力が上がっているのだろうか？

「それじゃあ、いつも通りの隊形で行きましょう」
意識を前方へと集中して、前へと進んで行く。

まだ敵の姿は見えないが、既に五十メートルは進んだので、あと五十メートルもないはずだ。

いつ出現してもいいように、先を見据えながら進む。

「カコッ」

音を立てずに進んでいる最中にその音は聞こえてきた。

前回とは少し違う軽い音だが、しっかりと俺の耳には聞こえた。

まさか……

いや、でも誰だ？

ベルリアも何も言っただけなのに。

またルシエか？

俺は緊張しながらルシエの方を見るが、ルシエは俺に対して全力で首を振る。

ルシエじゃないのか？

じゃあ誰だ？

俺はその場で足を止めてパーティメンバーを見回すが皆一様に首を振っている。

俺の聞き間違えか？

いやでもみんなにも聞こえていたようだし。

「ベルリア、なにかのトラップか？」

「マイロード、申し訳ございません。前方に集中していて気がつきませんでした」

ベルリアを責めることはできない。パーティメンバー全員が前方にいるであろう敵に集中していた。

敵に集中していればしているほど、トラップには気が回らなくて当然だろう。

だけど、特になにも起こる気配はない。

なにもないのか？

「なにも起こらないな。とにかく注意しながら前に進もうか」

この場に留まっただけでも、敵に感知され先制されてしまうかもしれない。

その場から進もうとした瞬間足が動かない。

うそだろ……

俺なのか？

どうしようもない絶望感に苛まれる。

「みんなごめん。俺みたいだ」

「すまない。私もだ」

「え？」

「マイロード申し訳ありません。私もハマってしまったようです」

だれが発動させたのかはわからないが、多重トラップだったようで、どうやら前を歩いていたシルを除く三人が同時にトラップにハマってしまったらしい。

「ご主人様、もしかして動けないのですか？」

「ああ、一歩も動けない……」

第607話 GW(後書き)

第608話 はまったら……

「ベルリアとあいりさんはどうですか？」

「マイロード、申し訳ありません。私も同じく動けそうにありません」

「私も全く足が動かない。無理だな」

俺達の足は魔法の拘束具によりしっかりとロックされてしまっている。

これってどうやったら拘束が解けるんだ？

この前は敵を倒したら解けたけど……

「マイロード！ 少しまずいことが……」

「どうしたんだベルリア？」

「敵です」

「どこだ？」

「こちらに向かって来ています」

俺の目には見えないがベルリアには見えているのだろう。

どうやら俺達のことを感知した敵がこちらに向かって来ています。

どうしよう……動けない。

動けるのはシルとルシェそしてミクとスナッチ。数の上では敵も四体はずなので負けていないが、ミクとスナッチはあくまでも後方支援型だ。

敵と一対一で構えるのは得策ではない。

考えがまとまる前に敵の姿を前方に捉えることができたが、こちらに向かって来ているのは赤いワイバーンが三体に鏡面の身体を持つ

ドラゴンが一体だった。

「ここでこいつらか……」

こいつらと正面から戦って大丈夫なのはシルとルシエだけだ。ミクとスナッチは無理だ。

しかも赤いワイバーンは炎の塊を放ってくる。

動けない俺達は格好の的だ。

「シル！『鉄壁の乙女』を頼む！」

「わかりました」

「ルシエ！今回はルシエが頼みなんだ。頼んだぞ！ミクとスナッチはルシエのフォローを！」

「あくめんどうだな。しょくがない。そんなに頼むんだったらやってやるよ。後でしつかり魔核をくれよな」

「わかってるよ。頼んだ！」

「はい、はい」

シルの手を取られるのは痛い、シルを前に出すと確実に俺があいりさんがやられる。

シルには『鉄壁の乙女』を発動してもらいルシエに任せることにした。

ルシエは、真面目にやれば強い！たとえドラゴン四体であろうと敵じゃないはずだ。

スナッチが飛び出していきドラゴン達の前で『ヘッジホッグ』を発動し鋼鉄のニードルを放つ。

残念ながら鏡面装甲のドラゴンにはノーダメージだが、赤いワイバーンのうちの二体にはダメージを与えることに成功したようだ。

スナッチはスキルの発動と同時に反転してその場から離脱した。

赤いワイバーンは中位ドラゴンなので戦闘力は鏡面装甲のドラゴン

よりも上だが、ルシエに限って言えば相性が悪いのは鏡面装甲の方だ。

「ルシエ！ 鏡面の方は俺達でなんとかする。赤いワイバーンを頼む！」

俺は『ドラグナー』を構えて鏡面装甲のドラゴンに狙いをつける。避けたり動いたりはできないので、空を立体的に飛び回るワイバーンの相手は難しいが、鏡面の方のドラゴンであれば攻撃だけができる。

俺の意図を理解したベルリアとあいりさんもその場からスキルを發動する。

三人の攻撃が鏡面装甲のドラゴンへと向かう。

「チヨロチヨロ飛び回ってうるさい。さっさと墮ちろ！」『黒翼の風』

ルシエが一番手前のワイバーンに向けてスキルを發動すると上空をホバリングしていた赤いワイバーンはルシエによる風の暴力に蹂躪されてスタスタに斬り刻まれて墜落し、そのまま消滅した。ほぼ同じタイミングで俺達の攻撃も鏡面のドラゴンに命中し大きなダメージを与えることに成功した。

見る限り、もうフラフラなのでその場から動くことはできないだろう。

「ガアアアア〜！」

二体の仲間がやられたことに激昂した赤いワイバーン二体は上空から、間髪入れずに炎の塊を連続で放ち始めた。

光のサークルのおかげでダメージはないが、炎の熱気が伝わって来

てかなり暑い。

第608話 はまったら……（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第609話 くっ……

「ルシエ様、援護します！『ライトニングスピア』」

ミクが雷の槍を上空の赤いワイバーンに向かって放つが、二体のワイバーンが放つ炎の塊とぶつかり相殺されてしまった。

この時、俺は初めてスキルによる雷と炎が打ち消し合うことを知ってしまった。

今まで炎で雷が消されるイメージは湧かなかったが、ぶつかり合った瞬間にエネルギー同士が打ち消し合う感じで双方の攻撃が消え去った。

「ミク！ 『ライトニングスピア』じゃ無理だ！ 『幻視の舞』を試して！」

数が違うので雷の槍でダメージを与えることは難しい。それなら打ち消されることのないスキルで攻撃しかない。

「やってみるわ！ お願い効いて！ 『幻視の舞』」

ミクが上空の赤いワイバーンの一体に向かって『幻視の舞』を放つ。どうだ？ 効いたか？

赤いワイバーンを注視するが、炎の塊を放つペースが落ちる様子はない。

「ミク！ わたしに任せとけばいいんだ！ 効果があつたかどうかなんか関係ない！ どうせ一瞬で消えて無くなるんだからな」

「はい！」

これってもしかしてルシエがミクのことをフォローしてるのか？
口は相変わらず悪いし、信じられないことだが、ルシエも少しは成長しているのかもしれない。
出来の悪い妹の成長に、足を拘束されているにもかかわらず俺の胸は熱くなってしまった。

「さっさと消えて無くなれ！ 『黒翼の風』」

赤いワイバーンに風が集約していく。

ミクの時と同じくワイバーンの放つ炎の塊と衝突するが、ルシエの放った風の刃が消えることはなく、ワイバーンの放った炎の塊だけが一方的に消失した。

無防備となったワイバーンを風の刃が蹂躪して斬り刻んだ。
残る敵は一体。

最後の一体が炎の塊を放つが、炎がこちらを捉えることはなく大きく外れた場所に着弾する。

続け様にワイバーンがもう一発を同じ箇所へと放つ。

「これって……」

「ああ、間違いない。ミクの『幻視の舞』の効果だな」

先程、効果を表さずに効かなかったと思ってしまった『幻視の舞』だが、時間をおいて効果が発揮されたらしい。
今あのワイバーンは、あそこに俺達がいるとでも誤認しているのだろう。

「ミク、今なら殺れるんじゃないか？」

「やってみる！ 『ライトニングスピア』」

ミクの放った雷の槍が完全に意識がそれ、無防備となっていたワイバーンの側頭部を貫いた。

「やったわ!」

最後の一体も墜落して消滅した。

「やっぱりわたしがいないとダメだな! ふふふつ。畏にかかるなんか論外だろ。それも三人もって考えられないって。ちよつと弛んでるんじゃないのか?」

くっ……

間違ったことは言っていないが、いつにも増して頭にくる言い方だ。単純に自分は後方から来ていたから無事だっただけなのに。

「姫、申し開きのしようがございません。ルシエ姫のおかげで命拾いいたしました。感謝の言葉もございません」

「はい、ルシエ様は素敵でした。ルシエ様のおかげで助かりました。ありがとうございます」

「ふふふつ。そうだろう、そうだろう。ところで一名感謝の言葉を聞けてないやつがいる気がするけど、わたしの勘違いか?」

くっ……

「ああ、助かったよ」

「ああ、助かったよ?」

くっ……

「ルシエのおかげで助かった。ありがとうございます!」

「ふふふ、そうだろう。それじゃあ約束通り魔核をいっぱいくれよ」
「わかってるよ！」

「ご主人様、私もご主人様を御守りいたしました」
「ああ、もちろんわかってるよ」

ルシエ達が四体の敵を倒すと足の拘束は解けていた。

やはりこの罫は敵と連動していたらしい。

俺は約束通りルシエにいつもより多めの魔核を渡したが

「たったこれだけ？ さっきのお礼は嘘か？ 嘘なのか？」

くっ……

「わかったよ。これでおしまいだぞ？」

「しょうがないな」

くっ……

追加の魔核を受け取ったルシエとシルは満足そうな表情を浮かべて魔核を味わっていた。

第609話 くっ……（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第610話 GW 初日終了

少し大ぶりの魔核三個と通常サイズの魔核を拾い先を目指すべく歩き出す。

「それにしても危なかったな。まさか三人が動けなくなるとは思わなかった」

「私も罠にハマったのは初めてだったから、さすがに焦ったぞ」

「あの程度のトラップを見破れないとは一生の不覚。ただ私は、トラップを発動させた覚えはないのですが」

「ああ、俺も音は聞いたけどスイッチを踏んだりした覚えはないんだよな」

「そういえば私もないな」

「じゃあ一体誰が……」

俺も前回罠にハマった経験があるのでわかるが、確実に今回は俺が引き金ではないはずだ。

ベルリアも普通に考えてハマるとは思えない。

となるとあいりさんだが、あいりさんが嘘を言っているようには見えない。

ハマった三人には覚えがない。

しかも今回は一度に複数発動しているので、必ずしも踏んだ人がハマったというわけではない。

ということは、ハマった三人以外が発動させた可能性もあるということか？

まさか……

いや、可能性として一番高い気がする。

「ルシエ、ちょっと前に何か踏まなかったか？」
「何かってなんだよ。いちいち踏んだものなんか憶えてるはずないだろ！」

あれだけ畏にハマった俺達をバカにしていたが、やっぱりルシエじゃないのか？

俺の中で疑惑は確信に変わった。
さっきのトラップを発動させたのはルシエだ！ 証拠はないけど確信はある。

ただ証拠がない以上推定無罪……
他の二人はルシエの仕業だとしても、あっさりと許してしまいそうだからこれ以上の追及はやめておこう。

この日一番の危機は、畏にハマったこの場面だったが、その後は畏にハマることはなく順調に前進することができた。

赤いワイバーンもその後は合計で二体出ただけで、残りは下位の属性竜中心に出現してきたので、戦闘に困ることもほとんどなく一日を終えることができた。

探索を終えて地上へと戻り、明日の待ち合わせを確認して解散となったので、そのまま帰路に着いた。

「ただいま〜」

あれ？ 返事がない。

いつものように家に入るがなんの反応もない。
鍵は開いていたので、いると思うけど。

リビングへ入ると、母親と父親がそろってスーツケースに荷物を詰め込んでいる最中だった。

「ああ、帰ったのね。明日の準備をしてる最中なのよ」

「一泊二日なのにそんなに荷物いらないでしょ」

「だって海斗が予約してくれたのってスターリゾート旅籠屋でしょ。楽しみで張り切っちゃって」

「スターリゾート旅籠屋って有名なの？」

「そりゃあ有名よ。知ってて取ってくれたんじゃないの？」

「いや、まあ、そうだけど」

スターリゾート旅籠屋って有名だったのか。

ネットで直前に取れる場所が少なく、高めの宿しか空いてなかったから、たまたま取っただけなんだけど、両親ともに張り切っているようなので結果オーライと言っていていいだろう。

「そうだ、海斗、明日のご飯なんだけど……」

「ああ別にいいよ。カップラーメンかなにか食べるから」

「そういうわけにいかないでしょ。私達だけ懐石料理食べても美味しくなくなっちゃうわよ」

「じゃあカレーでも置いといてよ」

「海斗、お母さんに任せときなさい。明日の夕飯は期待できるわよ！ 子供に親孝行してもらってるんだから、親としての義務は果たすわよ！ 受けた恩は返すわ。明日絶対に間食とかして来ちゃダメよ。絶対に真っ直ぐ家に帰って来なさいよ！」

やけに強く言ってくるな。

そんなにご馳走を作ってくれるつもりなのか？

次の日の朝目を覚ますと両親は既に家を出発しており置き手紙が残っていた。

『夕食前に間食は絶対にしないこと。私に感謝すること。頑張りなさい』

なんなんだこの置き手紙は？

なにかの暗号かと思うような意味不明の内容だが、考えてもわからないので、深く考えることはやめて探索に向かう準備をすることにしました。

第610話 GW 初日終了(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第611話 二日目

「おはよう」

「おはよう。今日も頑張っていきましょうか」

「ああ、昨日まででそれなりに進んでるはずだろう。今日でかなりいいところまでいけるんじゃないのか？」

メンバーと朝の挨拶を済ませて早速十七階層へと向かう。

「砂嵐を攻略してから結構良いペースなんで、うまくいけば後数日あれば階層主のところまでいけると思っています」

「そう、いよいよね」

「ミクはヒカリンに今の進捗報告とかしてるのか？」

「いえ、期待させてダメだったらって思うと……」

「そうだな。情けないが私も連絡できていないんだ」

空気が重くなった……

話題を変えよう。

「それより階層主ってなにが出るんでしょうね」

「まあ、順当にいけばドラゴンの上位種あたりじゃない？」

「そうだな。その可能性が高い気がするな」

「ドラゴンって霊薬落としますかね」

「……………」

しまった。思わず思っていることが口をついて出てしまった。

「そういえば、海斗のご両親は今日から温泉宿に行くんじゃないかっ

たか？」

「ああ、そうです。張り切ってるみたいで、俺が起きたら、もうい
ませんでした」

「そうか、温泉も久しく行ってないな。今度みんなで行ってみるか」

「ああ、それ良いですね。ヒカリンも誘っていきましょう」

「そうね、そうしましょう」

「お前らバカだな。わたしがいるのに心配なんか必要ないぞ！ 幸
運はわたしのためにあるんだからな！ もちろん霊薬など造作もな
いことだ！ 全てわたしに任せておけばいいんだぞ」

やはり、今回のことで最大の不安材料はルシエか……

自信満々の態度を見るたびに心配になる。

もう、スルーするしか俺に正面から対抗する術はない。

ルシエに対し一抹の不安を覚えるが、メンバーの集中力は高く、順
調に探索が進んでいく。

昼過ぎには昨日みんなで罠にハマった地点についてたが

「絶対に踏むな。絶対にだぞ」

「海斗、フラグ……」

「いやいや、そんなんじゃないから」

「海斗、妙なことを言うのは控えてくれ」

「はい……」

前にもこんなやりとりがあった気がするが、そもそも昨日トラップ
にハマったのは俺のせいじゃない。

注意を受けながらも慎重に足下を確認しながら進み、何事もなく危
険地帯を抜けることができた。

「ご主人様、敵モンスター二体です。ご注意ください」

シルからの警告を受けてメンバーが臨戦態勢に入り、そのまま進んでいく。

「青いな」

「ああ、青いな」

「サイズも少し大きいわね」

進んだ先にいたのはモンスターだが体色は青く、サイズも属性竜よりも一回り大きい。

前方のドラゴンには赤いワイバーンに似た雰囲気を感じる。

「あれも、中位種なんじゃないですか？」

「可能性はあるな」

「とりあえず俺が狙ってみます」

赤いワイバーンと同種であれば、なんらかの強力な攻撃手段を持っている可能性もあるので、距離があるうちに狙い撃つ。

『ドラグナー』を構えて引き金を引く。

蒼い光を引いて銃弾が飛んでいき、青いドラゴンの一体に命中したが、命中した瞬間に銃弾がドラゴン体表を滑るようにしてそれと肩口に命中した。

「ガアアアッ！」

ダメージを与えることはできたようだが、さっきのはなんだ？

「みんな、弾が滑った。あの青い体表なんか変だ！」

「変だろつが、なんだろつが関係ない！ 燃えて無くなれ 『破滅の獄炎』」

ルシエが俺の言葉を打ち消すようにスキルを発動した。
獄炎が俺がダメージを与えた方のドラゴンを包み込む。

「あれって、燃えてるのか？」

獄炎に包まれたドラゴンからは大量に水蒸気のような煙りが立ち上っているが、肉が焦げたような匂いはしていない。

第611話 二日目（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第612 青い竜

獄炎で炙られて水蒸気を噴き上げてはいるが、本体へのダメージは薄いように見える。

あの青い色は水か！

水竜と同じく水を纏っているのだと思うが、水竜は獄炎でダメージを与えることができていたので、水の質量が違うのかもしれない。全くの無傷の方のドラゴンがこちらに向けてプレスを放つ。

ドラゴンの口から螺旋状に渦巻く水流が放出されるのが見える。

「シル！ 『鉄壁の乙女』を頼む！」

シルが瞬時に光のサークルを張り巡らせて、放たれた水流から俺達を守ってくれる。

光のサークルにより弾かれる渦巻いた水流の威力が明らかに今までのもンスターのものよりも高いことが見て取れる。

やはりこいつらは中位種！

纏っている水により攻撃がいなされはするが通じないわけではない。

「ミク！ あいつに『ライティングスピア』だ！」

「わかったわ『ライティングスピア』」

水を纏っているなら中位種といえども雷には弱いはずだ。

雷の槍が青いドラゴンに向かって飛んでいき、見事に胸の中心を貫いた。

貫いたように見えたが、着弾と同時に雷の槍が消失してしまい、ドラゴンは全くのノーダメージだった。

「なんで……」

「海斗！ おそらくあのドラゴンを覆っているのは純水。混じり物なしの真水だ！」

「それって……」

「純水は電気を通さないんだ！ 理科で習っただろう」

「そうでしたっけ……」

水は雷を通しやすいとばかり思っていたが、純水は雷を通さないのか。

感覚的にちよつと思議だが、勉強になった。

いや、それは今はどうでもいいが、ということはあいつには『神の雷撃』も無効化されるといふことか。

雷撃に獄炎も効果が薄いとなるとかなり厄介な敵だ。

「じゃあベルリアいつてみるか」

「マイロードお任せください『ヘルブレイド』」

ベルリアはさすがに学習したようで、炎ではなく風の魔刀を振るい黒い斬撃を飛ばす。

黒い斬撃は、俺の銃弾と同様に当たった瞬間にズレたが、ドラゴンの肩口をえぐることに成功した。

ただ押し切るには精度が低い。

「ガガガガアアア〜！」

ベルリアがダメージを与えたドラゴンだけでなくルシエの獄炎をくらっているドラゴンも吠え口から同時に渦巻く水流を吐き出した。

二方から光のサークルに向かって渦巻く水流が押し寄せてきた。

『鉄壁の乙女』により防がれてはいるが、絶え間なく押し寄せる水流にシルがスキルを切らすわけにはいかなかった。

つまりは、残りのメンバーで二体を葬り去る必要があるということだ。

「ベルリア、あいりさん、あのドラゴンに一斉攻撃をかけましょう。スナッチにも『ヘッジホッグ』を発動させてくれ！」

ルシエは残念ながら獄炎が鎮火するまでは戦力にはならないので、攻撃手段を持たないミクを除く残りのメンバーで総攻撃をかける。俺も『ドラグナー』をしつかりと構え狙いを定める。

俺が狙っているのは、青いドラゴンが放っている渦巻く水流の中心部分。

かなり狙い辛いけど、台風の目のように中心部分は空白地帯ともいえるべき状況が生まれており、その隙間はドラゴンの口まで続いている。動きながらでは決して狙うことのできない場所だが、光のサークルの中から狙い撃てば十分にしとめることは可能のはずだ。

俺は集中力を高め、狙いを固定して『ドラグナー』の引き金を引く。

第612 青い竜（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第613話 爆発

俺が放った弾丸が蒼い糸を引いて渦巻く水流の中心部分をトレースして一直線に青いドラゴンの口へと飛び込んだ。

口の中へと蒼い光が消えた瞬間、弾丸は後頭部へと抜け、青いドラゴンの頭部を完全に破壊した。

さすがのドラゴンも口の中までは、水に護られてはいなかったようだ。

あいりさんも俺と同じ箇所を『アイアンボール』で狙ったようだったが、銃弾より径の大きい鉄球で隙間を通すことは難しく、口に届く手前で水流に飲まれて攻撃が逸れてしまったようだ。

ベルリアも『ヘルブレイド』を胴体に向かって放っていたが、水に阻害されて致命傷とはならなかったようで、俺の攻撃がとどめとなった。

残りは一体のみ。

「海斗、私がやってみるわ」

「だけどミクの攻撃じゃ……」

「やってみたいことがあるのよ。ダメだったら後はお願いな」

ミクの雷の槍は無効化されるし、攻撃方法はあるのか？

不思議に思いミクをみると手にはスピットファイアが握られている。もしかしてスピットファイアで攻撃するつもりなのか？

どう考えても小さな火球で倒せる相手ではないと思うが、俺は黙ってミクの動向を見守る。

ミクがスピットファイアの引き金を引き二発の火球が青い竜に向かって飛んでいく。

「ドガアアア〜ン！」

火球が時間差で命中する寸前、青い竜の周りが爆発した。

「これって……」

この爆発は、カオリンの融合魔法と同じ原理か！

ルシエの獄炎に炙られて、青い竜は体表から大量の水蒸気を立ち上らせていた。

そこにミクのスピットファイアによる攻撃で着火して水蒸気爆発が起きたのだろう。

ミクの攻撃は通常の状態であれば、おそらく覆われた水に火球の攻撃が打ち消されるところを、ルシエの獄炎とのコンボでカオリンの融合魔法と同種の爆発を引き起こす事に成功した。

ミクの機転が働いた見事な攻撃だ。

「ミクやったな！」

「いえ、まだよ」

「えっ？」

かなりの爆発だったので完全にしとめたと思ったが、ミクはまだ青い竜を見据えていた。

爆発による粉塵が晴れるとそこにはボロボロになった青色だったドラゴンがいた。

今は体表が炭化して青ではなく黒い竜へと変化している。

体表を覆っていた水も爆発により全て蒸発してしまったようで今は炭化した皮膚が剥き出しとなっている。

「グウウイイアア〜！」

黒いドラゴンが悲痛の叫び声をあげる。
体表を護るものがなくなったドラゴンをルシエの獄炎が容赦なく蝕んでいく。

周囲を肉の焦げた匂いが立ち込める。

今度は完全に燃えているので、もう時間の問題だろう。

目線だけはドラゴンから外さず、最後まで注意を切らさないようにする。

しばらくすると表面だけでなく全身が炭化したドラゴンが崩れて消滅した。

ようやく燃え切ったようだ。

「終わったな」

「どうだ！ 海斗、最後はやっぱりわたしの力だろ！」

「いや、さっきのは完全にスキルの選択ミスだ！ ミクのフォローがなかったら千日手でお手あげだったぞ」

「ミクの助けなんかなくても、時間さえかければ結果は同じだったんだ！ なあミク」

「はい、ルシエ様の獄炎はすごいですから」

「ほらみる、ミクもこう言ってるだろ！」

「は……もう終わったからいいけどな。次からは『黒翼の風』を使ってくれよ！」

「ハイハイ、わかったって！」

それにしても中位種だけあって手強かったな。

通常の攻撃がことごとく跳ね返されてしまった。

「ご主人様、さっきのドラゴンには、次からは私も前に出た方がいいと思います」

「相手の数と出方次第だな。捌き切れない数で一斉攻撃されるとやっぱり『鉄壁の乙女』が必要になるからな」

「わかりました」

第613話 爆発（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第614話 ブレイクタイム

赤いワイバーンに青い水竜が出てきたので次に出るのは黄色いドラゴンかもしれない。

黄色いドラゴンだと何ドラゴンだろう？

和辛子による刺激とかあれば地味にきついな。

臭いとかがあっても嫌だ。

さすがにこの位置までくると敵も一筋縄ではいかない。

「少し休憩を取ろうか」

「そうね」

「いいタイミングだろう」

はやる気持ちはあるが、ここまでで結構疲労が溜まって来ているのを感じる。

俺の場合『ドラグナー』を多用しているのでMPもかなり消費している。

後衛を一人で補っているミクも同様だろう。

カオリンとは違い俺達二人のMPは特別多いわけではないので、仮にボス部屋までたどり着けば低級マジックポーションを飲まざるをえないかもしれない。

「海斗、よかつたら食べる？」

「ああ、いただきます」

俺はミクからチョコレートのかけらを貰い口に含む。

普段甘いものをそれほど食べるわけではないが、疲れた身体にチョコレートの甘さが染み渡る。

「やっぱり十七階層は、難度高めですね」

「それはそうだろう。この階層にいるのは、ほぼほぼプロの探索者だろうからな」

「そうですかね？」

「この階層まで来たらこの前のパーティもだが、泊まりが基本になるからな。アマチュアでは難しいだろうな」

「まあ、学校のついであってわけにはいかないですよな」

「海斗の『ゲートキーパー』の恩恵は計り知れないな」

「そうですね。これがなかったら転移石を買うぐらいしかなかったですね」

「私は信じられないわ。パーティさえまともに組めなかった私が十七階層。しかももう少して十八階層って……」

確かによく考えてみると、パーティを組んでまだ一年も経っていないことを考えると今の俺はすごいことをしている。

一年前はひたすらにスライムを狩り続けていた。

今もひたすらスライムを狩っている事には変わりはないが、状況は天と地ほども違う。

一年前の俺に今の状況を伝えても絶対に信じてはくれないだろう。

「俺も今の状況は夢みたいだよ。子供の頃に夢見た探索者みたいだ。ダンジョンの下層を目指して中位種のドラゴンと剣と魔法を交えるってすごいよな」

「海斗の場合、剣と魔法っていうより浪漫武器だけどね」

「確かに。それにしてもその武器を初めに見た時は見掛け倒しのふざけた武器かと思ったが、これほど使える武器だったとは、見かけによらないとはこの事だな」

「あいらさん……見かけて判断すれば『ドラグナー』は最強ですよ。何しろ浪漫武器ですからね」

「ああ、わかってるよ。武器には浪漫も必要だな」

あいらさんも浪漫武器の素晴らしさに気づいてくれたようだ。

「私のスピットファイアも負けてないと思うけど、比べると少し小ぶりなのよね。インパクトでは完敗ね」

「まあインパクト勝負ではないけど。それにさっきの水蒸気爆発凄かったな！」

「まあ思った以上に上手くいったわね」

「スピットファイアの炎弾が水蒸気に触れた瞬間に爆発したもんな」

「海斗、それはちょっと違うわよ」

「え？なにが？」

「水蒸気に触れて爆発したんじゃないじゃなくて青い竜の表面の水に命中したから爆発したのよ」

「それってなにか違うのか？」

「水蒸気が爆発したっていうよりも、水が炎弾の威力で一気に蒸発して爆発した感じよ。もちろんルシエ様の獄炎で爆発しやすい状況があつてこそだけだね」

「そういうもの？」

「そういうものよ」

「海斗も勉強になつたな。まあ知らなくてもおそらく王華の入試にはでないと思うから問題ないだろう。それにしてもこういう時間も楽しいものだな。私もみんなとパーティになれてよかったよ」

「あいらさん……それ、いい話ですけどフラグっばいです。末期の別れみたいですよ」

「そんなつもりはなかったんだが、シル様やルシエ様もいて私は幸せなんだ。もう思い残すことは……」

「あいらさん、からかってます？」

「ああ、冗談だ」

あいらさんの冗談はわかりにくい。
ツッコんでいいのか迷ってしまうレベルの難易度だ。

「それじゃあ、そろそろ出発しましょうか」

「そうね、残りの時間頑張りましょう」

「ああ、しっかり生還できるようにしないと」

またわかりにくいが、あいらさんのは多分冗談だな。

ツッコんでも特に広がりもなさそうなので、あえてスルーして先を急ぐ事にする。

第614話 ブレイクタイム（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第615話 家には……

休憩をとったおかげで少し身体が楽になったので探索を進める。

連日ダンジョンへと潜っているのでフルタイムの二日目でかなり疲労が抜けにくくなってきている。

この一週間、いつもより集中して一階層に潜った分が地味に効いてきているのを感じる。

身体が重いと集中力を欠きトラップにハマる可能性も高まるが、この日は、さすがにこれ以上トラップにハマることなくダンジョンを進むことができた。

途中で中位種である青いドラゴンに遭遇して戦うことになったが、幸い二体だけだったのでシルとルシェが攻撃される前に速攻をかけた倒した。

シルは雷が通じないことを理解していたので神槍の一撃を叩き込み、ルシェも学習して獄炎ではなく『黒翼の風』を選択して難なく斬り刻む事に成功した。

他のメンバーは、青いドラゴンの放つ水流に巻き込まれないように後方待機していたので、あれほど苦戦した青いドラゴンにノーダメージで勝利することができた。

ベルリアも戦いたそうにはしていたが、今回は後方に控えてもらった。

その後も探索を続けたが、やはり十七階層では中位種の個体数はそれほど多くはないようで、この日出現したのはこの二体が最後で、後は下位種のドラゴンを相手にすることとなった。

「それじゃあ、今日はそろそろ帰りましようか」

「海斗、今の進み具合はどうなの？」

「うーん、階層主の部屋の場所が確定しないから、なんとも言えな

いけど上手くいけば明日にでもいけるんじゃないかな？」

「そうか、いよいよだな」

「なので二人もしっかりと休養をとって、明日は万全の体制で臨みましょう」

「ああ、そうしよう」

「私はプラセンタを飲んで備えるわ」

プラセンタか……

美容と健康に効くのかな。

三人でトラップにハマるトラブルはあったが、時間的な口スは最小にとどめることが出来たので、想定していた以上に探索の距離を伸ばすことができた。

朝の段階では今日を含めて後三日は必要かなとも思っていたが、今日の探索で上手くいけば明日攻略できる位置まで進むことができたと思う。

今日は、早めに寝て体調を整えて明日に臨みたいところだけど、そういうえば今日の晩ご飯はなんだろう。

母親が任せとけて言ってたから、冷蔵庫にでも入ってるんだと思うけどカレーかな。

俺は、身支度を済ませて家路についた。

「あれっ？」

家について、家の玄関の扉に鍵をさして、開けるために回すが抵抗感がない。

もしかして、朝鍵をかけ忘れたのか？

やってしまった……普段は母親が家に居るから、鍵をかける習慣がないので、やってしまったのだろう。

泥棒とか大丈夫だろうか？

まあ、うちに金目のものはあまりないので、狙うならもっと金持ち

そんな家にするか。

ちよつと警戒しながら玄関の扉を開けると、部屋と廊下に灯りがついていた。

「え……」

誰かいる。なんかリビングから音がするし、やっぱり泥棒か？

いや、でもよく見ると玄関に見知らぬ靴がきちんと並べておかれている。

泥棒にしては、几帳面すぎる。

俺は、恐る恐る廊下を歩きリビングを覗き見るがリビングに人影は見えない。

リビングの奥にあるキッチンから包丁の音が聞こえてくる。

どうやら誰かがキッチンでご飯を作っているようだ。

母親はスターリゾートに行っているので、母親はずがなない。

俺は更に踏み込んでリビングの入り口からキッチンを覗き見る。

「え……なんで」

「ああ、海斗おかえりなさい」

キッチンにはなぜか春香がいた。

第615話 家には……（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第616話 母の恩返し

これは夢か？ それとも幻か？

誰もいないはずの俺の家に、なんで俺の家に春香が……

「春香……ここでなにしてるんだ？」

「海斗の晩ご飯を作ってるんだよ」

「ああ……そうなんだ」

いや、そうじゃない。なんでここにいるかだ。

「海斗はカレーが好物なんですよ。待っててね。もう少しでできるから。よかったら先にお風呂にする？」

「あ、ああ……じゃあそうしようかな」

わけも分からず、混乱しているうちに、春香に言われるままに、お風呂に入ることになってしまった。いつもはシャワーだけで終わらせることが多いのに、風呂場に行くと既にお風呂が沸いていたので湯船に浸かる。

「ああ……」

風呂に浸かりながら状況を整理する。

今俺はお風呂に浸かっているが、しっかりと熱さを感じるので夢ではない。

そしてなぜか春香が俺の家のキッチンでカレーを作ってくれている、おまけにお風呂の湯を入れてくれたのは、春香だろう。

この状況は、あれか……あれしか考えられないな。

母親が昨日、恩には報いる的なことを言っていたので、これは鶴の恩返しならぬ母の恩返しか。

しかし、俺の母親と春香の母親が最近連絡を取り合っていたのは知っていたが、まさか春香を呼び寄せるほどの仲になっているとは思ってもいなかった。

思ってもいなかったが、これは予想外の僥倖といえる。

今度カフェに行く約束をしたけど、俺にしてみればカフェどころの騒ぎではない。

俺の家で春香の作ったカレーを春香と一緒に食べることが出来る。

しかも、お風呂まで用意して待っていてくれる。

これは、新婚カップルさながらじゃないか。母さん、グッジョブ。

ありがとう！ オブリガード！

春香の入れてくれたお風呂のお湯に浸かっていると、今日1日の疲れがスーツと消えていくようだ。

別に入浴剤が入っているわけでもなさそうだが、この前入った温泉以上にいいお湯だ。

春香って魔法使いなのか？

ただのお湯がここまで疲労に効果を示すとは……

「あゝ。気持ちいいなあゝ」

気持ち良すぎて長湯をしまいそうになるが、春香がご飯を作っていて待っていてくれるのに、一人で長湯するわけにはいかない。

俺は後ろ髪を引かれながらお風呂から上がることにした。

俺の人生でこれほど家のお風呂が名残惜しいと思ったのは今日が初めてだ。

お風呂から出て部屋着に着替えてからリビングに向かうと、そこにはダイニングテーブルにカレーを準備して春香が待っていてくれた。

「お風呂気持ちよかった？」

「あ、うん。春香がお風呂沸かしてくれたんだよね。ありがとう。気持ちよかったよ」

「よかった。お風呂上がりに麦茶飲む？」

「うん、ありがとう」

春香、なんて気がきくんだろう。

お風呂あがりに麦茶か。

俺の母親が風呂あがりの一杯を入れてくれた記憶はこの五年ほどはないな。

テーブルの上に用意された麦茶を一気に飲み干す。

「ああ〜うまい！」

なんだこの麦茶は！

うますぎる。

まるで甘露かなにかを飲み干したかのようにうまい。

風呂あがりの麦茶ってこんなにくまかったっけ？

なんとも言えない香ばしい香りと喉越し。

そして喉を通過した瞬間に全身の細胞に行き渡るような感覚。

「うまい！ 春香、この麦茶うまいよ！」

「海斗、ちょっと大袈裟じゃないかな？ それ普通の麦茶だよ」

「普通の麦茶が最高にいいんだよ」

「うん……ありがとう」

春香の用意してくれたお風呂も気持ちよかったし、風呂あがりの一杯もおいしかった。

もしかしなくても、これって最高じゃないのか。

第616話 母の恩返し(後書き)

第617話 春香のカレー（前書き）

第617話 春香のカレー

「いただきます！」

目の前のテーブルには春香が作ってくれたカレーが鎮座している。今日も一日ダンジョンを歩き回ったのでお腹はぺこぺこだ。スプーンを手に取ってカレーを口の中へと誘う。う、うますぎる！

「うまい！」

ひと口食べたただだが、濃厚な中にも甘みと旨味が凝縮しており、とんでもないうまさだ。

「よかった。海斗がカレーが大好物だっておばさんから聞いてたから」

「うん、カレーは好きだけどうちの母親は……」

「どうしたの？」

「最近、週末はとりあえずカレーを出しとけばいいやみたいなき感じがあつて」

「もしかして、もうカレーは十分だったりしたのかな？」

「いやいや、春香のカレーは全くの別物だよ。今までこんなにおいしいカレーは食べたことがないよ。うますぎるよ」

「うれしいけど、褒めすぎだよ。ルーはおばさんが買っておいでくれた市販のルーを使ってるんだから」

このカレーがいつも母親が使っているのと同じ市販のルー？
嘘だろ？

全く味が違う。完全に別物だ。

母親のカレーは所謂いつもの味で、まあおいしい味だ。ただ今食べているカレーは、どう味わってみてもいつもの味ではない。

有名チェーン店のカレーを遙かに上回り、街の洋食屋さんのカレーも完全に凌いでいる。

俺のカレー人生の中で間違いなくナンバーワンだ！

しかもダントツでだ。

「いや、本当においしいんだ。おいしすぎてスプーンを動かす手が止まらないよ」

「大袈裟だけど、海斗が喜んでくれて、うれしいよ」

「それにしても春香が夕食を作ってくれてるとは思わなかったからびっくりしたよ。いつから来ることになってたの？」

「え〜つとね、多分5日ぐらい前にママから言われて」

「そんなに前から？ 言ってくればよかったのに」

「お婆さんが、海斗へのサプライズだから絶対に黙っておいてって」

「ああ、それですか……」

確かに特大のサプライズだった。

母さんグッジョブ。

「よかつたら、まだおかわりあるよ」

「じゃあ、いただきます」

一杯目のカレーを平らげた俺は、春香に二杯目をもらう。

二杯目を口に入れてもやはりおいしい。

全く飽きのこない深い味わい。ピリツとした辛味が食欲をそそる。

この味なら、いくらでも食べることができそうだ。

味わいながら食べていると、あっという間に二杯目も完食してしまった。

「海斗、すごい食欲だね。よかつたらもう一杯食べる?」
「ああ、お願い」

普段母親のカレーは一杯しか食べない。それなのに春香のカレーは
いくらでも食べられる。

ただ既にお腹がかなり膨らんでいるのはわかる。

残念だが、これ以上食べると明日の探索に響きそうなので三杯でや
めておこう。

さすがに階層主を前に腹痛を起こしたりしたら洒落にならない。

「あゝおいしかったよ。ごちそうさま」

「お粗末さまでした。喜んでもらえてよかった」

「まさか春香の手料理を食べられるとは思ってもなかったから、お
いしいとかうれしかったよ」

「今度は海斗の誕生日に作ってあげるね」

「うん、楽しみにしています」

その後、春香とダンジョンの話や、受験の話をして過ごしたが、楽
しい時間はあっという間に過ぎてしまい、気がつくとも時間は二十一
時になってしまっていたので、春香を家まで送ることにした。

「今日は本当にありがとう。じゃあまた学校で」

「うん、明日からも探索頑張ってね」

春香と別れて、来た道を引き返して家へとついたが、先程まで春香
がいた家は一人になってしまうと、少し寂しい感じがしてしまった。
ただ今回スターリゾートはそれなりの金額かかってしまったが、こ
んなサプライズがあるなら安いものだ。

こんなことなら、またしばらくしたら両親に長期旅行をプレゼント

してもいいかもしれない。

第617話 春香のカレー（後書き）

第618話 GW3日目

今日でGW三日目。

順調にいけば今日にでも十七階層を攻略できるはずだ。

俺の体調はすこぶる良く万全と言っていい状態だ。

春香の作ってくれたカレーが俺の血肉となりいつも以上に調子がいい。

「それじゃあ、今日はできる限り進みましょう」

「そうね。私もプラセンタを飲んで体調万全よ」

言われてみるとミクの顔の肌艶がいいような気がする。

もしかしたらプラセンタとやらの効果なのかもしれない。

「私も雑刀を入念に手入れしてきたからな。万全だ！」

三人ともがいつも以上に気合が入っているので、俺はいつも以上に俯瞰してダンジョンと状況を見るように意識する。

はやる気持ちと調子の良さが、前のめりになってしまうことだけは避けるように意識しながら進む。いつも以上に冷静に沈着にだ！

「今日のご主人様は、いつも以上に調子が良さそうですね。表情からもそのことが見て取れます」

「あの、にやけた顔は確実に、昨日なにかあったな。あの感じはまづ間違いない春香だろうな」

「やはり、そうなのですな。いつになく表情が明るいので、よほど良いことがあったのかもしれないですね」

「まあ、今日はボス戦も控えていることだし、勘違いさせといてや

ればいいだろ。それにしてもあのにやけた顔見てるだけで焼きたくなるな」

いつものようにシルとルシエがコソコソ密談しているが、雰囲気であまり良い話題でないことは感じ取れるので、完全にスルーして前に進む。

「海斗！ 昨日の夜はどうだったのよ」

「昨日の夜？」

「しらばっくれてもダメよ。春香がご飯を作りに来たでしょ」

「なんで知ってるんだよ」

「それは、春香と私が友達だからよ」

「ああ……」

女子高生のネットワークは俺が思っている以上に速度も規模もすごいのだということは理解できるが、昨日の今日でどこまで知ってるんだ？

「それでどうだったのよ」

「どうって、カレーを作ってくれて、おいしかったよ」

「それで？」

「それで？ それから探索の話とか受験の話をしたけど」

「それで？」

「それから家に送って行ったよ」

「それだけ？」

「それだけ？ 他になにかあるのか？」

「は……海斗、昨日家に両親はいなかったのよね」

「そうだけど」

「高校生の男女が、誰もいないひとつ屋根の下にいてカレーを食べる真面目な会話をして終わり？」

「そうだけど……」

ミクとの会話を進めているうちに、さすがの俺でもミクがなにを言わんとしているかは理解できてきた。

「普通、高校生の男女がひとつ屋根の下にいたら、あれとかこれとかあるでしょ」

「ミク……あれとかこれとかって？」

「普通押し倒したり、ガバツといったりとかあるでしょ」

「……いやないよ」

「海斗は春香のこと好きなんですよ」

「まあ、そうだけど」

「じゃあ、あるでしょ」

「いや、ないですよ。というかないです」

「は……海斗」

ミクがこちらにあきれたような表情を向けてくるが、どう考えてもこれはおかしい。

いかにも俺がやってしまったというか、意気地がないというような感じを全面に押し出してくるが、**事実**は違う。

ミクの言っている事は恋人同士の話だ。

実際には俺は春香の彼氏でもなんでもない。

さすがに、ただのお買い物仲間とは言わないが、仲の良い友達といったところだ。

その俺が、春香の昨晚カレーを堪能して、会話を楽しんで家まで送った。

どこにもおかしいところはないと思う。

春香だって楽しそうにしていたんだ。

ミクに俺が意気地なしのように思われるのは心外だ。

むしろ紳士的だと褒めてくれても良いぐらいだと思う。

まあ、あの状況で勢いに任せて告白する勇氣はなかったけど。

第618話 GW3日目（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第619話 トライフックライト(前書き)

ついに100万文字到達しました。

まるで超大作を思わせる文字数になりましたが、これからもよろしくお願ひします

第619話 トラフィックライト

メンバーと会話しながらも着実に十七階層を進んで行き、難所である砂嵐エリアは抜けている。

「そういえば、あいりさん薙刀の手入れをしたって言ってましたけど自分でしてるんですか？」

「当たり前だろう。武器は己の魂ともいえるものだからな。自分の手で入念にしないと安心できないんだ」

「じゃあ研いだりもできるんですか？」

「勿論だろう。刃を研がなければどんな業物もすぐになまくらと同じになってしまうからな」

「コツとかつてあるんですか？ DVDを見て自己流で研いでるんですけど、DVDは刀なんですよ。バルザードとちょっと違う感じなので、今のやり方があってるかどうかもわからないんです」

「コツはないな。ひたすら数をこなすしかないだろう。私も魔剣の研ぎ方はよくわからないが、今度砥石を持って来れば見るぐらいはするぞ？」

「本当ですか？ それじゃあ、さっそく明日持ってきますね」

ダンジョンマーケットのおっさんから貰ったDVDには九十分間ひたすら職人のお爺さんが刀を研いでいる場面が収録されていた。

はしおりながら三本の刀を研いで仕上げる映像が収められているが、レクチャーっぽいものは何もなく淡々と研ぐシーンが続いている。

途中で砥石が変わったりするので、数度見返してなにをやっているのかは理解できたが、これを買う人はなにを目的に購入しているのかわからなかった。

おそらく素人の俺には理解できない真髄を見て楽しむマニア垂涎の

DVDなのだろうが俺には難易度が高すぎた。
見よう見まねでバルザードを日々研磨しているが、あいりさんに教えてもらえるならこんなにラッキーなことはない。
その後も緊張感を保ちながらも、メンバーと他愛のない話をしたりしながらドラゴンとの戦闘を繰り返し更に奥へと進み、既に昨日のマッピングポイントを超えて探索を続けている。

「ご主人様、敵モンスターが三体います」

「それじゃあ、十七階層ももう少して終わるはずだ！ 慎重にいきましょう」

マッピングの状況を見る限り、かなりダンジョンの奥まで来ているのは間違いない。

臨戦態勢を整えて進んでいくと、そこには赤いワイバーンと青い水竜そしてついに黄色のドラゴンが一体ずつ待ち構えていた。

冗談で赤、青、黄色とは考えたけど本当に出るとは思わなかった。

「あいりさん、少しくすんでますけど黄色ってなに属性だと思えますか？」

「見た目ではわからないな。特に臭いを発しているというわけでもなさそうだ」

「そうですね」

正直初見の黄色いドラゴンの属性がわからない以上極力遠慮したい。この場所に変な臭いがついても、今更引き返すことはできないので大惨事になってしまう可能性がある。

ただ、他の二体との相性を考えると、シルとルシェ以外が黄色のドラゴンを担当する方が合理的だろう。

俺は覚悟を決めて指示をだす。

「シルは青をルシエは赤だ。ルシエ『黒翼の風』だぞ！」

「わかつてるって。馬鹿にすんなよ！」

「残りのメンバーで黄色にいきましょう。ミクとスナッチは状況に応じて援護を！」

俺の声と同時にシルが青いドラゴンへと向かっていった。

俺もあいりさんの後ろについて走りだす。

「海斗！いつものことだから意図的ではないと思うが、あの初見の黄色を前に私の後ろにつくのはなあ……私だって臭いのは嫌なんだぞ？」

「あいりさん……すいません。初見のドラゴンなので気配を極力薄めて望んだ方がいいと思って」

「それはわかつている。わかつているが、あの色を前にすると最悪の状況をイメージしてしまったんだ」

あいりさんの言っていることはよくわかる。俺だって同じ気持ちだが今からあいりさんの前に出て戦うのは得策ではない。

決して相手が黄色いからじゃないんだ。

第619話 トラフィックライト（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第620話 黄色はマツディ

あいりさんと俺が縦に並んで走りベルリアがあいりさんの横を並走する。

黄色のドラゴンへ向かっていくが、どちらかという黄色と黄土色の中間ぐらいの色合いなので、違う恐怖を覚えながらも果敢に攻めべくバルザードと『ドラグナー』を構えて走る。

俺達の姿を捉えて黄色のドラゴンが口を開いてブレスを放ってくる。口から放たれたのは、巨大な石の槍。

かなりのスピードで飛んできたので、すぐさまベルリアとあいりさんが左右にわかれて散開する。

俺もあいりさんについて避ける。

一発が大きいおかげで逆に軌道が予測できて避けやすい。どうやらこの黄色いドラゴンの属性は土。

アースドラゴンの上位に位置する個体なのかもしれない。ただ得体が知れば必要以上に恐れる必要はなくなった。

「これでどうでしょう？ 『ヘルブレイド』」

ベルリアが回避直後にスキルを発動して黒い炎の刃を飛ばす。

ベルリアの攻撃は黄色いドラゴンの首部分に命中した。

命中したが、黒い炎の刃は黄色いドラゴンの外皮を傷つけることはできなかった。

「いったいどうなったんだ？」

「多分、ベルリアの攻撃は吸収されたな」

俺も走りながら見ていたが、斬撃が吸収されるってどういことだ？

なんでベルリアの攻撃は吸収されたんだ？
目の前で起こった現象が理解できない。

「これでもくられ、『アイアンボール』」

今度はあいりさんがスキルを発動して鉄の塊が黄色い竜を目掛けて飛んでいき命中した。

命中したが、命中した瞬間に吸収されるようにゆっくりと黄色いドラゴンの中に消えていった。

「なっ！」

さっきのはベルリアの斬撃と違って完全に見えたが、鉄球の威力が完全に殺されていた。

着弾の瞬間から、急にゆっくりになりダメージを与えることは全くできていない。

ただ、なにが起こったのかはわかった。

この黄色いドラゴンの外殻は泥。

おそらくかなり分厚い泥が表面を対流しながら身体を守っている。

その泥のせいで二人の攻撃は効果を削がれてしまったようだ。

まるで沼を纏っているかのような状態だ。

「遠距離攻撃は効果が薄そうです。直接、攻撃を叩き込みましょう！」

まさかとは思うがこの位置から『ドラグナー』を放ったとしても、あいりさんの鉄球のように飲み込まれてしまう可能性もないわけではないので接近を試みる。

黄色のドラゴンは再び口を開き巨大な石の槍を放ってくるが、先程と同じように避ける。

やはりこのドラゴンの攻撃は怖くない。もちろん直撃すれば即死する自信はあるが、注意を切らさなければ攻撃を躲すことはできる。最初に黄色のドラゴンへと斬り込んだのはベルリアだ。

二刀を振るい攻撃をかけるが、黒い斬撃同様に黄色のドラゴンの表面に触れた瞬間、威力を奪われて、ゆっくりとした動きとなりダメージを当てることはできていない。

ベルリアは、すぐに刀を引いてその場から離脱する。

「赤い蜥蜴が、いつまでも調子に乗るなよ。さっさと刻まれて消えてしまえ！」『黒翼の風』」

ルシエが赤いワイバーンに向けてスキルを発動し、風の暴力が赤いワイバーンを襲う。

風の刃が赤いワイバーンの全身をズタボロに斬り刻み、赤いワイバーンはそのまま力なく落下し、地面に叩きつけられると同時に消滅した。

「ふん！ 所詮赤くて飛んでもただの蜥蜴。わたしの相手にはならないな。もっと強いやつはいないのかよ。さっさと終わりすぎて運動にもならないぞ！」

第620話 黄色はマツディ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第621話 ドラゴンチェイス

「いやあああゝ！『斬鉄撃』」

あいりさんが渾身の一撃を放つ。

スキルで強化された一撃は、黄色のドラゴンの表面に触れると威力を減衰させたものの、そのまま奥へと到達しドラゴンの本体へと傷を負わせる事に成功したようだ。

「ガイアアア！」

黄色のドラゴンが痛みで初めて声を上げた。

「すまない。まだ浅い！ 威力を削がれた！」

あいりさんの『斬鉄撃』でも必殺とはなり得ないのか。

ベルリアの攻撃を見てもこの黄色ドラゴンは、思った以上に防御力が高い。

俺はあいりさんの背後から黄色のドラゴン側面へと走り、そのまま脇腹にバルザードを突き立てた。

バルザードはベルリアの魔刀よりも短い。おそらく斬ったのではベルリアの時と同じようにダメージを与えることができない可能性が高い。

俺は突きを選択して身体毎押し込む。

かなりの反発力を感じるが、突きであればいける！

刃の中間まで押し入れるが、まだなんの手応えもない。

「まだかつ！」

更に体重を乗せバルザードを突き入れると根本まで突き入れる寸前に手に刃先が肉に触れる感覚が伝わってきた。
ただ、肉に届いたのは僅かで致命傷を与えるには程遠い。
俺はすぐさま破裂のイメージをバルザードに乗せる。

『ボフウン』

黄色の竜を覆う沼とも呼べる泥が弾け飛び、黄色のドラゴンの本体へもダメージが入る。

ただ、バルザードの触れている面積が少なすぎたのか、破裂した大部分は表面の泥部分であり、本体へのダメージは微小なものとなってしまうた。

「アアアアアアアア！」

黄色のドラゴンはダメージを受けたことで怒り狂い、完全に俺をターゲットに定めたようだ。

さすがにこの近距離で攻撃したことにより俺の存在が明確に認識されてしまったようだ。

ドラゴンが首を振り、俺の姿を完全に捉えたので、俺はバルザードを引き抜き全力でその場から離脱を試みる。

とにかく距離を取る為に、背を向けて全速力で駆けるが逃げる俺は地上であれば人類最速と呼べるスピードに到達していると思われる。ドラゴンの口や腕が届く範囲にとどまることは自殺行為に等しいので、後方からの攻撃のリスクをとっても、とにかく全力でその場から離脱する。

逃げる俺の後方から『ズシン　ズシン』というドラゴンの移動する音が迫ってきているのが聞こえてくる。

やばい！

黄色のドラゴンが俺を追いかけてきている。

俺も前方を向いて必死で逃げるが、どう考えても音が迫ってきている。

移動速度が完全にドラゴンの方が上だ！

このままだと、あと数秒で追いつかれてしまいかもしれない。

俺は走りながら頭を高速回転する。

「もういいでしょう。そろそろ終わりにしますね。我が敵を穿て神槍ラジユネイト！」

シルが敵のドラゴンを倒そうとしている声が聞こえて来るが、今の俺には構っている余裕はない。

どう考えてみてもこのまま逃げ切ることは不可能だ。

そしてベルリアとあいりさんの援護は期待できない。

遠距離攻撃は効かず、しかもこの速度で移動しているので二人が割って入ることは不可能だろう。

そうになると残された選択肢は一つしかない。

黄色のドラゴンと正面から交戦するしかない！

普通に考えて中位種のドラゴンと正面から戦うのは得策とはいえないがそれしか選択肢がない。

全速力で逃げながらも俺の覚悟が決まる。自然とバルザードを握る手に力が入る。

『ライトニングスピア』

俺が覚悟を決めた直後に少し離れた後方からミクの詠唱が聞こえてきた。

第621話 ドラゴンチェイス（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第622話 セブンティーンエンド

俺は足を止めてバルザードを構えて後方へと振り向く。

こちらに迫っていた黄色のドラゴンの動きが、ミクの放った『ライトニングスピア』によって一瞬止まった。

このチャンスを逃すわけにはいかない。

俺の頭の中でスイッチが入り、周囲の時間の流れがゆっくりになるが、その中で俺の動きは加速する。

加速した俺は、距離を詰め動きを止めた黄色のドラゴンの胸部にむかってバルザードを突き入れる。

先程と同様に鈍い抵抗感を覚えるが、無視してそのまま押し込む。

すぐにバルザードの先端がドラゴンの肉に達したのを感じる事ができたので、その瞬間バルザードに破裂のイメージを乗せる。

『ボフウン』

先程と全く同じように、ドラゴンを覆っていた泥が弾け飛び黄色のドラゴンの本体が露出する。

ここまでは先程と同じだが、必死で逃げている間に攻略法は考え済みだ。

ドラゴンの本体が剥き出しになった部分に向かって手早く『ドラグナー』の照準を合わせて引き金を引く。

蒼い糸を引いた銃弾が、爆ぜた部分に再び泥が満ちる前に通過して剥き出しのドラゴンの本体へと達する。

的確に胸部を捉えた銃弾が胸部を貫通してドラゴンの背部へと抜けた。

周囲の動きの速度が普通に帰ると同時に黄色のドラゴンはその場に倒れ込み、そのまま消滅した。

「ふっ……」

久しぶりにスイッチが入ったな。

完全に入ったのは十六階層のボス部屋以来かもしれないが、十七階層のボス部屋を前にいい傾向かもしれない。

後の事を考えなければ十七階層主相手にもスイッチが入った状態で戦うことができる可能性が高い。

身体の異変を探すが、速い動きは一瞬だったので特に不調は感じない。

「終わった」

「海斗、かなり危なかったな」

「そうですね、もう少しで喰われるところでしたよ」

「黄色のは思った以上に手強かった……」

「はい、そうですね。それにミクも助かったよ。あれがなかったらやばかったかもしれない」

「それにしても、あの外装厄介ね。ほとんど全員の攻撃がまともに通じなかったわね」

「うん、派手さはないけど一番の強敵だったかもな」

「海斗、身体は大丈夫なの？ また無茶な動きをしてたでしょ」

「一瞬だったから特に問題はなさそうだよ」

本当にタイミング良くミクが援護してくれて助かった。

いずれにしても階層主と戦う前に無傷で切り抜けることができたのは大きい。

「どうでもいいけど早くくれよ！」

「ああ……」

「私もお願いします」

「わかってるよ」

俺はマジック腹巻きから取り出してルシェとシルに魔核を渡す。ベルリアには前回のお仕置き継続で渡すのをやめておこうかとも思ったが、スキルも発動していたので一応渡しておくことにした。

「マイロードありがとうございます。私の剣はマイロードに！」

ベルリアはやたらとカッコいいセリフを口にはしているが、ベルリアの忠誠はあてにならないので話半分で聞いておく。

今回は中位種の魔核三個なので、普段のものよりも大きい。

あたり前だがスライムの魔核とは比較にならない。

俺達は残された魔核を三個とも拾い、そのまま先へと進んでいく。

「もうかなり近いところまで来てるはずなんですよね」

「そうなの？」

「マッピングの感じからすると、もういつボス部屋の扉が現れてもおかしくないと思う」

「そうか。じゃあいよいよだな」

「はい、いよいよですね」

俺達はその後三十分ほど歩きついに十七階層の終わりへと辿り着くことができた。

第622話 セブンティーンエンド（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第623話 第十七階層主部屋へ

俺達の目の前に現れたのは、大きな赤い扉。

「ようやく着いたな」

「いよいよね」

「これで……」

「それじゃあ、それぞれ準備しましょうか」

階層主を前に体制を整える事にする。

俺は、既にここまでで相当数『ドラグナー』を放っている為にMPが心許ない。

戦闘中にあれを飲むと集中力を削がれて戦いにならない可能性があるるので、覚悟を決める。

ここが階層主の部屋の前でなければ絶対に飲みたくはないが、ここは飲むしかない！

マジック腹巻きから低級マジックポーションを取り出して一気に飲み干す。

「……っっ」

何度飲んでもなれる事のない味だ。

「申し訳ないけど、落ち着くまで少し待って……」

これを飲んですぐにハイパフォーマンスを出せる気がしないのでメンバーにお願いして少し休憩を取る事にする。

「みんなは、もう準備終わった？」

「ええ終わったわ」

「もう万全だ！　どんな敵が出ようと斬る！」

階層主を前に当たり前だが、あいりさんもいつも以上に気合いがはいっている。

この戦いで決まる。いや決める！

「この階層主が霊薬を……」

「……」

「だから、そんな心配はいらないって言ってるだろ！　このわたしがいるんだから間違いないんだ！　くだらない心配してんじゃないぞ！」

今回の階層主の戦いを前に二点心配事がある。

一点はルシエだ。

この悪魔な幼女が調子の良い事を言っている時に良い事が起こったためにはない。

今回ルシエも気合が入っているのかいつも以上に大口を叩いているので、その事が俺の不安を増幅させる。

そしてもう一つが俺の引きの悪さだ。

大きいものを引くのは優れている気がするが、そもそも圧倒的に引く回数が少ない。

これは、今回に特別な一回を引き当てる事を信じるしかない。

「何かなんでも倒すつもりでやりますが、危なかったら逃げますよ。即外に逃げましょう」

「ここまで来たのに？」

「マッピングももう終わってるし、もし明日になっても確実にここまでは来れるから、無理は禁物だよ」

「……そうね」

「海斗がそれだけ冷静なら判断を誤る事はないだろう。判断は任せ
たぞ！」

「はい」

気持ちははやるが、焦りは禁物だ。

ボス戦には退くという選択肢がある以上、この一回で必ず勝つ必要
はない。

危なくなったら即逃げる。

これが俺のボス戦の心構えだ！

しばらく休憩したおかげで、口に残る不快感は変わらずだが、少し
落ち着いて来た気がする。

準備も整ったので俺達はいよいよ階層主へと挑む事にする。

「じゃあ、みんな行こうか」

俺達は赤い扉の前まで進み扉に手をかける。

思いつきり扉を引いてみるがびくともしないので、とりあえず押し
てみる。

ほぼ毎回の決まり事のようになっているが、当然のように開かない。

「またか……」

一応念のために横へとスライドさせてみるが、なんと扉は横方向へ
と動き始めた。

今回は思っていたよりもあっさりと開ける事ができた。

俺達は順番に中の部屋へと踏み込んだ。

十六階層主の部屋もかなりの広さを誇っていたが、この十七階層主
の部屋も同様にかなり広い。

そしてほぼ中央部分に階層主を確認する事ができた。

数は一体。

いや厳密には二体か？

「いつも通りでいくぞ！ みんな、相手の能力がわからないから十分に気をつけて！」

俺達は階層主に向かってゆっくりと駆け出し戦闘を開始した。

第623話 第十七階層主部屋へ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第624話 階層主

「あいりさん、あれってどうやって倒せばいいんですかね」

「スケルトンと同じだろう。頭部の完全破壊が必要になるんじゃないか？」

「そうですね。でもあそこに届くとなると遠距離攻撃しかないですよね」

「足元から削っていけば、いけるだろう」

あいりさんと言葉を交わしながら向かう。

階層主は思っていた通りドラゴンだった。

階層主なので中位種という事はありえないので、上位種か更にその上かもしれない。

確かに中位種よりも大きい。

間違いなく上位のドラゴンで離れていても圧が凄い。

ただ普通のドラゴンと明らかに異なる点が二点ある。

一つはドラゴンの背に敵と思しき奴が乗っている。

つまりドラゴンに敵が騎乗している。

「ドラゴンライダー？」

この姿はまさに竜騎士、ドラゴンライダー。

そしてもう一点決定的に違うのは、ドラゴンも乗っている敵も骨でできていた。

肉が一切見られないスカルドラゴンとでもいうべき存在。

つまりは肉体的な急所を持たない敵だということだ。

あいりさんの言うように頭部を完全に破壊する必要があると思うが、かなりのサイズなので俺の剣を振るっても頭部には届かない。

騎乗している敵が俺達の方を見た。

見たといつても目がないのでこちらを向いたと言つべきだろうか。しゃがれた声でなにやら呪文のようなものを唱えている。

このスケルトンはナイトではなくウィザードか？

詠唱を警戒して一度足を止めて様子をうかがうが、すぐさまスカルドラゴンに劇的な変化が起きた。

骨だけだった身体の周囲を黄色っぽいものが覆い始めたのだ。

この色はまさか……

「海斗、あれはさつき戦つた黄色いドラゴンと同じじゃないのか？」

「やっぱりそう見えますよね」

そこにはスカルドラゴンの周りを泥が覆い、スカルマッドドラゴンとでも言うべき姿があつた。

ただでさえ攻撃しづらそうなのに、更に防御力が上がってしまったようだ。

『アイアンボール』

あいりさんがスキルを発動して鉄球を叩き込むが、先程の黄色いドラゴンの時と同様に外装に触れた瞬間、勢いを失いゆっくりと飲み込まれていった。

やはり先程のドラゴンと同種の防御だ。

先程はこの外装に穴を開けてから攻撃を叩き込んだが、このドラゴンには叩き込むべき肉がない。

思つた以上に厄介だな。

『ライトニングスピア』

ミクの放つた雷の槍が一瞬外装の泥を飛散させたが、効果はそれだ

けですぐに元に戻ってしまった。

骨だけなので雷で痺れるということもないようだ。

ベルリアが突っ込んでいく。

スカルドラゴンが口を開く。

まさか骨のくせにブレスを放つのか？

「ベルリア！」

ベルリアに向けスカルドラゴンが放ったのはファイアブレス。

炎がベルリアに向かって一気に押し寄せる。

ベルリアも炎の勢いに押されてその場から後方へと飛んで逃れるが炎のまわりが早くベルリアの皮膚を焼く。

「くっ……『ダークキュア』」

ダメージを受けたベルリアがすぐさま回復スキルを発動して自らの傷を治す。

回復したベルリアがすぐさま体勢を立て直し再びスカルドラゴンに向かって構える。

それにしてもブレスによる炎の威力が今までのドラゴンとは段違いだ。

第624話 階層主（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第625話 スカルドラゴン

ベルリアがブレスで焼かれるのを目の当たりにして俺とあいりさんの足も止まってしまった。

ベルリアも再度突入の為にタイミングをはかってはいるが、すぐには飛び込めないでいる。

「なにちんたらやってるんだよ！ ただの骨だろ！ わたしがバラバラにしてやるぞ！」 『黒翼の風』

痺れを切らしたルシエが後方からスキルを発動して風が集約しスカルドラゴンを斬り刻む。

ルシエのスキルによりスカルドラゴンを覆っていた泥がズスタに飛散したが、飛散した直後に刻まれた部分には既に泥の皮膜が出来上がっていた。

ルシエの『黒翼の風』でも本体である骨に傷をつけることはできなかったようだ。

「ルシエ、今度は私です。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

シルの攻撃の発動と同時に再びドラゴンの口からはファイアブレスが放たれ、シルを襲う。

シルの神槍による攻撃はファイアブレスの炎を完全に貫通して外装の泥に触れると泥に大穴をあけ、ついには本体である骨にもダメージを与えた。

「やったか？」

いや、頭部にダメージを入れたわけではないのでまだか？
だがかなりのダメージを与えたのは間違いない。

その時スカルドラゴンの上部から小さな呪文のような声が聞こえてきたので、声の方に目をやるとドラゴンに騎乗している敵が呪文を唱えていた。

詠唱が終わると、先程シルがダメージを与えたドラゴンの骨格が修復してしまった。

「回復魔法か！」

「マイロード、スケルトンはそもそも命が尽きた存在です。回復魔法が効く相手ではないはずですよ」

「だけど、完全に修復されたぞ？」

「考えられることは二つです。ネクロマンシーを使った可能性です。あの上に乗ってる奴がネクロマンサーで元々命の尽きたあのドラゴンをネクロマンシーで操っているのかもしれませんが」

「ネクロマンシー……」

ネクロマンサーとは死霊使いのことだ。そしてネクロマンシーとはネクロマンサーが使用する魔法やスキルの名前だ。アニメや漫画にも敵役で度々現れるので聞いた事はあるが、もしアニメの敵のように命無いものに無尽蔵に仮初めの命を与えられるとしたら脅威だ。そもそもネクロマンサーって死ぬのか？

「もう一つの可能性は時空魔法。時間を巻き戻してダメージを受けた事象をなかった事にした可能性ですよ」

「ベルリア！ ちょっと待て！ 時空魔法？ そんなもの本当にあるのか？」

「私自身は見た事はありませんが、神や魔王様レベルであれば使える方もいらっしやるとは聞いたことがあります」

「そんな魔法インチキだろ……それにそうだとするとあの上の奴は

魔王レベルってことになるんだぞ？ 十七階層でそんな事あり得るのか？」

「マイロード、あくまで現時点での可能性の話です」

「ルシエ！ お前の親戚にあんなのいるのか？ あの骨、お前のパパだったりするのかな？」

「ふ、ふ、ふざけるな！ わたしのパパがあんな骨なわけがないだろ！ 親戚にも骨なんかいるわけないだろ！ ふざけるな！」

「だけどベルリアが魔王って……」

「マイロード！ あくまでも仮定の話です。仮定です！ ルシエ姫、落ち着いてください。あくまでも仮定の話ですよ！」

「ベルリア……燃やすぞ？ 魔王を侮辱しているんだな？ そうだな？ たかだか士爵が魔王を骨呼ばわりしているんだな？ 覚悟はいいな？ 言い訳は聞かんぞ！ 『破滅……』」

「ルシエ！ だめだ！ 敵はあいつ、あいつを燃やせ！」

第625話 スカルドラゴン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

「ひかりちゃん、今日は少し顔色が良いようね」

「はい、今日は少し呼吸が楽なの」

「外はいい天気ね。少し窓を開けてみるわね」

看護師さんがそう言って窓を開けてくれた。

あたたかい風が病室へと流れ込んできて気持ちがいい。

ずっと外に出ていないので、風が懐かしい感じさえしてしまうのです。

「ご飯は三割ぐらいかな」

「はい、そんなには食べれなくて……」

「大丈夫よ。点滴で栄養はきちんと取れてるからね。ご飯が食べられなくても

問題ないわ」

今日は少し体調がいいのだけれど、やっぱり食欲はないのです。

病気が悪化してからはずっとベットの上。

ダンジョンが懐かしい。

パーティメンバーのみんなとほんの少し前まで毎週末にダンジョンへと潜っていたのに、今はそれが遙か昔の事か夢のように感じてしまっているのです。

『ファイアボルト』

病室で魔法を唱えてみても、もちろん使えるはずは無いのですが、ちよっと前まで間違いなく私は魔法を使ってモンスターを倒してい

たのです。

今の私ではダンジョンへ潜ったとしてもモンスターと戦う事はできません。

パーティメンバーのミクさんが時々連絡をくれますが、気を遣ってくれているのか私の身体についてはほとんど触れてきません。

ミクさんとダンジョンのことや日々の事をお話しをしていると自分が元気になったような気がしてくるのです。

特にメンバーのリーダーである海斗さんの話はとても楽しいのです。海斗さん達が日々私のために頑張ってくれている事はわかっていますが、余り無理はしてほしくありません。

特に海斗さんは重度のダンジョン中毒に罹患しているので、加減を知らないのです。

元々毎日のようにダンジョンに潜っていたので、今は更に悪化していると思うのです。

無理をして倒れてしまわないか心配になってしまいました。

ミクさんとあいりさんはしっかりしているので心配していませんが、海斗さんは……

私にとって海斗さんは頼りがいがあつて、どこか抜けているお兄ちゃんのような存在ですが、ダンジョンのことに關してのみ異常にストイックなので本当に心配なのです。

もし過労で倒れるようなことがあれば、隣の病室に入院してもらうのもありかもしれません。

「ひかりちゃん、それじゃあ点滴変えるわね」

「はい」

ああ……

自由に歩き回りたい。

家にも帰りたい。

でも本当はわかっているのです。

今回はもう家には戻れないという事を。

私を助けてくれるという海斗さんの言葉を信じてはいるのですが、本当はそれが難しいという事を理解はできています。

でもこの一年は本当に楽しかった。

パーティのみんなとそしてシル様とルシエ様、おまけでベルリアくんと一緒にダンジョンで探索して敵を倒してレベルアップして、昔から身体の弱かった私には信じられないような体験でした。

もう少し時間はあると思っていたので、みんなともうちよっと一緒にダンジョンに潜りたかったなあ……

残念だけど、だんだん内臓機能が低下していく私の病気は現代医学では治らないのです。

パパとママも今まで色々手を尽くしてくれたので、ここまで頑張ることができました。

可能性があるのはダンジョンでドロップされる霊薬。

でも上級ポーションでは一時的に効果はありましたがだめでした。

残るはその上に位置するソーマやエリクサー。

しかも試してみないと本当に効果があるかはわかりません。

霊薬の中にもランクがあるなら、霊薬であつても効果がないものもあるかもしれません。

それに私は霊薬なんか見たことはありません。

ニュースやネット記事で難病の人が完治したとか移植が必要だった人が回復したと見たことがあるだけなのです。

それほど貴重な霊薬を海斗さん達が手に入れられる確率は、ほぼゼロです。

特に海斗さんはアイテムドロップに関しては壊滅的に運が悪いのです。

K112でパーティを組んでからみんなアイテムドロップが減ったと言っていますが、きっと海斗さんのせいだと思つのです。

おみくじも末吉だつて言っていたので、きっと奇跡は起こらないのです。

無理なのはわかっていますが、海斗さんの言葉が嬉しくて信じてみることにしたのです。

ああ……

また以前のように春香さんの事で海斗さんをからかったり冗談言い合ったりしたいなあ。

第626

ヒカリンの想い（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第627話 燃えない

ルシエが獄炎を放つが、一応理性は保っていたようでベルリアにではなくスカルドドラゴンへと獄炎が迫る。

骨であれば獄炎で燃やし尽くす事も可能ではないかと考えたが、どうやら甘かったようだ。

スカルドドラゴンは獄炎を受けても、外装に守られダメージを受けている感じがない。

しかも、周囲を獄炎が取り囲んでいるにもかかわらず、普通に動いている。

普通のモンスターであれば、動きを封じる効果はあるはずだが、やはりこのスカルドドラゴンは命を持たない敵なのかもしれない。

騎乗しているネクロマンサーによって操られている屍。

であれば敵はネクロマンサーということにはなるが、位置的にネクロマンサーを倒そうとすれば、どうしても先にスカルドドラゴンを倒すしかない。

しかも獄炎は燻って消えていない。

今まではこの獄炎の持続性が敵を縛り最後には燃やし尽くしていたのだが、同時にそれはルシエの無力化も意味している。

つまり獄炎が消えなければルシエは次のスキルを放てないが、スカルドドラゴンは纏った泥が沸騰しているのは見て取れるが、一向に焼ける気配もなければ、獄炎も消える様子もない、

つまりは、ルシエはこの戦いにおいて攻撃する術を失ったに等しい。

「ルシエ……」

「なんだよ！ 海斗がベルリアじゃなくてあいつに放つように言っただろ！ ベルリアなら燃え尽きてたぞ！ 海斗のせいだろ！」

確かに俺が獄炎をベルリアではなくスカルドドラゴンへと放つように指示をした。

ただどベルリアに放っておけばよかったような言い方はまずいだろ！
そんな事より今は敵だ。

「ルシエ、下がってる」

「チツ……」

チツってなんだよ。

獄炎が鎮火するまでは仕方がないだろ。

いずれにしてもルシエを除くメンバーで階層主であるネクロマンサーとスカルドドラゴンを倒さなければならぬ。

残念ながらスナッチもほぼ戦力外だ。

唯一『フラツシュボム』なら効果はありそうだが使い所が今のところ見えない。

あのファイアブレスはやばい。

回復スキル持ちのベルリアでなければ対抗できない。

「ベルリアは正面から、残りのメンバーは四方から攻めよう！」

「おまかせ下さい」

ベルリアが正面から注意を引き残りの三人で側面と後方から順番に攻撃をかけるのが一番可能性が高い。

四人が散らばり、それぞれがスカルドドラゴンへと向かっていく。

駆けている俺の耳にまた頭上からネクロマンシーの詠唱の音がボソボソと聞こえてきた。

今度はなんだ？

また違う外装でも出てくるのか？

スカルドドラゴンの後方へと回り込もうとした時だった。

進もうとしていた先の地面が突然盛り上がり、そこからスケルトン

が湧き上がってきた。

「スケルトン！？ いったい何体いるんだ！」

スケルトンは俺の前だけではなくスカルドラゴンを取り囲むようにして出現し、俺たちの行手を阻む形で身構えている。

ネクロマンサーの魔法により生み出されたのは間違いない。

たかがスケルトンとはいえ手にはそれぞれ、研がれた剣を携えているので、油断はできない。

第627話 燃えない（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第628話 スケルトンは嫌われる

俺の前に立ちほだかるスケルトンは三体。

通常のスケルトンはゴブリンに混じりたまに二階層に現れる低級モンスターだが、今日の前にいるスケルトンはそれよりも良い剣を持っているように見える。

いくら低級モンスターとはいえ三体同時はきつい。

しかも戦っている間にスカルドラゴンへの攻撃のタイミングを失ってしまう。

俺はスケルトンと交戦に入る前にドラグナーをスカルドラゴンの頭部に向かって放つ。

蒼い糸を引いた弾丸がドラゴンの頭部を捉え、弾は命中した周囲を弾いて貫通した。

一瞬やったか？ とも思ったが、スカルドラゴンは何事もなかったかのように動いているので、普通のドラゴンとは違い、頭部を撃ち抜くだけでは消滅へとは至らないらしい。

これはどう考えても合間を縫って倒すことはできそうにないので、スケルトンへと視線を移し戦闘に入る。

集中力を高めてバルザードを構えるが、バルザードよりもスケルトンの手にある剣の方が長さがあるので俺は『ウォーターボール』を唱えて魔氷剣を発動する。

十七階層ではドラグナーがメインになっていたので魔氷剣を発動して戦うのは久しぶりな気がする。

スケルトンが一斉にこちらへと向かってくるが、骨だけの身体は滑らかさに欠け動きも鈍い。

「遅いつ！」

俺は最初のスケルトンの剣を避けて斬りつけて、スケルトンの右腕を斬り落とし攻撃力を奪う。

間髪入れずに次のスケルトンが斬りかかってきたので素早く避けてカウンター気味にスケルトンを袈裟斬りに斬りつけてスケルトンを倒す。

集中しLV21に達した今の俺にとっては、スケルトンの動きは問題にならなかった。

そして次の一体を相手にしようと思いついた瞬間、ありえない方向から剣での攻撃を受けてしまった。

「なんっ！」

一体は倒してもう一体も武器を扱う腕を斬り落としたので攻撃力は失っていたはずだ。

もう目の前の一体以外には攻撃する術を持っていないはずだ。

それなのに、スケルトンによる剣戟を受けてしまった。

不意をつかれたので、避けることはできず咄嗟に魔氷剣を使い受け止めた。

罅迫り合いをする相手も見ると確かにスケルトンだが腕はしっかり二本ある。

「なんで!?!」

確実に二体は魔氷剣で攻撃力を奪ったはずなのに、なぜかそのうちの一体から攻撃を受けた。

しかもよく見ると斬り伏せたはずの一体も起きあがろうとしている。

「ネクロマンシーか！」

このスケルトン達はネクロマンサーによって生み出されたモンスター

ーだ。

普通のスケルトンとは違う。

元から命を持たないモンスター。

仮初めの命を生み出せるなら、自ら生み出したモンスターの欠損や傷を修復する程度なんでもないのかもしれない。

厄介極まりない！

いずれにしても再び俺は三体のスケルトンを相手にすることになってしまった。

「そこをどいてください。邪魔です」

スカルドラゴン越しにシルが交戦しているのが目に入る。

低級であるスケルトン相手なのでスキルを使わずに神槍で攻撃して薙ぎ倒しているが、俺の相手同様に倒れる側から起きあがってきている。

「しつこいです。女の子相手に嫌われますよ」

第628話 スケルトンは嫌われる（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第629話 スケルトンは眠らない

「これ以上時間をかけるわけにはいきません。我が敵を穿て神槍ラジュネイト！」

痺れを切らしたシルが、必殺の一撃を放つ。

一瞬でスケルトンの胴体部分が吹き飛んでしまった。

流石に足と頭だけでは動くことはできないだろう。

そう思っていたが、甘かった。

先程と同じようにネクロマンサーの声がボソボソと聞こえてくると、なんと胴体を失ったはずのスケルトンの胴体が徐々に修復していくのが見えた。

「みんな！ 頭だ！ 頭以外への攻撃は無駄だ！ とにかく頭部を破壊するんだ」

シルの神槍の一撃を受けても復活してしまうのであれば、頭部を破壊する以外に方法はない。

これで頭部も復活したりすれば、もう打つ手はないので即退却するしかない。

「いやあああああ〜！ 『斬鉄撃』」

あいりさんが攻撃した声も聞こえてきたが、俺は周りにいる三体のスケルトンに集中する。

迫ってきた二体の攻撃を避けながら頭部に狙いを定めて魔氷剣を振るうが、スケルトンに剣で防がれてしまう。

レベルは俺の方が上だが、そもそも俺の剣技は大したことがないの

で、頭部を狙う剣筋が読まれてしまった。

もしかしたらこちらの言っていることも理解できているのかもしれない。

とにかく短絡的に頭部だけ狙って破壊することは難しいようなので、基本に立ち戻り、一体ずつ確実に仕留める方針へと転換する。

再び魔氷剣を構えて、攻撃する。

いきなり頭部を狙わずに、まずは攻撃力を奪いにいくが二体を相手にしている間に三体目が完全に復活してしまったので三方向からの攻撃に対応するために集中する。

斬りかかってきた相手の動きをよく見て動き出そうとするが、時間差で三方向から攻撃されるといくら遅い動きでも対応が間に合わない。

モンスター中最弱に近いスケルトンとはいえ磨かれた剣での攻撃をまともにくらうと普通に切れて死んでしまう。

当たり前だが、これがゲームとは決定的に違う点だ。

ゲームであればLV22のプレイヤーがLV3の敵に、いくら攻撃を受けても死ぬようなことはあり得ないが、ここではそれが起こり得る。

いくらレベル差があろうと武器には殺傷能力が十分に備わっている。三方からの攻撃を避けるために必要以上に大きな動きで避け、バランスを崩しかける。

動きが大きくなったせいで反撃のタイミングを逃してしまう。

その間にも次々に剣による攻撃が襲いかかってくる。

思った以上に三体同時に攻撃してくるスケルトンは手強い！

「みんな！ 頭部を破壊して一片付けたぞ！ やはり頭だ！」

あいりさんの声が聞こえてくる。

やはり頭か。

だが、俺は頭を狙う以前に三体の攻撃を避けるのに手一杯になって

いた。

その時苦戦している俺の横を何かが横切るのが視界に入った。

『ライトニングスピア』

ミクの詠唱と同時に目の前の一体に雷の槍が命中し、同時に他の一体にも鉄の針が突き刺さっていた。

どうやら先程視界に映ったのはスナッチだったようだ。

ミクとスナッチの攻撃により三体のスケルトンの動きが止まった。

いまだ！

動きを止めたスケルトンを前に考えるよりも先に俺の身体は自然とスケルトンに向かって動き出していた。

第629話 スケルトンは眠らない（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第630話 スケルトン撃破

一番手前にいるスケルトンに向かい魔氷剣を頭部に目掛け振り切る。スナッチの攻撃で動きの止まっていたスケルトンは、俺の動きに反応することなく頭部を破壊されて崩れ去った。

続けてミクの『ライトニングスピア』で下半身を失い、上半身だけになっていた個体に向けて振りかぶった魔氷剣を、その頭蓋に向けて振り下ろし破壊することに成功した。

残るスケルトンは一体だが、二体目を倒した時には、すでに回復して俺に向かって攻撃してきた。

「遅いつ！」

さすがにスケルトンと一対一では負けない。

剣をかわして、最後の一体の頭部を砕く。

これで三体を倒したが、本当にこれで終わりか？

ネクロマンサーにより再び動き出すのではないかと不安になりながら、倒したスケルトンを注視するが動き出す気配はない。

本当に倒すことができたようだ。

「他のみんなは？」

俺は自分の相手を葬り去るとすぐに、メンバーの状況を確認する。

先程見えていたシルは問題なく二体を倒し、あと一体を残すだけとなっているので、問題ないだろう。

あいりさんも二体を相手にはしているが、薙刀の長い間合いをうまく使い問題ないように見える。

問題は俺の反対側にいたベルリアだった。

俺の反対側、つまりはスカルドドラゴンの正面に陣取っているのだが、ベルリアは俺達とは違いスケルトンだけでなくスカルドドラゴンをも相手取って戦っていた。

目の前のスケルトンを相手に剣を振るうが、スカルドドラゴンのファイアブレスが容赦なく襲いかかっていた。

ベルリアは炎に身を焦がしながらも、スカルドドラゴンの注意が四方に散らないように果敢にスカルドドラゴンへの牽制も続けていた。

焼けたその身を『ダークキュア』で回復しながら、その場にとどまり戦っているが、明らかに回復が追いつかなくなっている。

しかもスケルトンが三体ではなく五体までその数を増やしており、実質六対一の状態となっていた。

俺は迷わず、スケルトンの一体に向けてドラグナーを放ちベルリアの元へと走る。

ベルリアのスピードがあれば、広いスペースで戦えばスカルドドラゴンのファイアブレスを避けることも可能だったと思うが、俺の指示を聞いてその場でとどまり続けてくれたのだろう。

いくらベルリアが悪魔とはいえドラゴンのファイアブレスにその身を焼かれることが平気なはずはない。

いつもは怪しいベルリアの忠誠だが、この極まった状況での忠誠は素直に胸が熱くなり、すぐにでも加勢しなければと身体が動いた。

「ベルリアア〜！」

俺は戦略を捨て時間を優先させて、ベルリアの戦場へと突っ込む。

「マイロード……この程度の敵など私一人で大丈夫です……」

「ベルリア……」

言っていることは強気だが、明らかにいつものベルリアではない。

見た目以上に回復を繰り返した肉体にダメージが蓄積しているのは

明らかだ。

ベルリアは役目をしっかりと果たして時間を稼いでくれた。

次は主人である俺の番だ！

俺は目の前に立つ四体のスケルトンとスカルドラゴンに向けて、再び集中力を高める。

第630話 スケルトン撃破（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第631話 負傷

スカルドドラゴンと戦う前に四体のスケルトンを倒さなければならぬ。

一体はさきほど放ったドラグナーの銃弾でうまく倒すことができたが、ドラグナーは貫通することには優れているが、完全に破壊することには向いていない。

少しでもズレると修復してしまうだろうから、やはり魔氷剣をメインで戦うことにする。

スカルドドラゴンのファイアブレスは強力なので、俺の耐熱マントもくれば長い時間は持たないだろう。

とにかくスカルドドラゴンを常に視界に入れつつスケルトンを相手にする。

一番手前のスケルトンに向かって踏み込んで攻撃しようとするが、残りの三体もほぼ同時に動き出し、俺の動きを阻害する。

「邪魔だっ！」

力尽くで押しつけてこじ開けようとするが、そう甘くはなかった。

スケルトンの膂力は単体で俺とそう変わらない。

一気に勝負を決めたい気持ちだけはあったが、気持ちで俺の膂力が跳ね上がるはずもなく、一体目の剣を弾き二体目を相手にした段階で、既に俺の動きは止められていた。

「マイロード、私のこともお忘れなく」

止まった俺に残った二体のスケルトンが攻撃をしかけてこようとするところを、ベルリアが割って入ってきた。

「助かった！ ベルリアいけるのか？」

「マイロード、私にいけないという答えは存在しません」

やたらとかつこいい答えだが、この一瞬で体力が回復するはずもなく、ベルリアの刀にはいつものキレはなく、スケルトンを相手に肩で息をしている。

だが、ここは無理を押しでも共闘してスケルトンを殲滅すべきだ。

「ベルリア、半分はまかせた。ファイアブレスがきたらとにかく逃げろ！ これ以上はまずい」

「お任せください」

ベルリアに半分まかせて俺は目の前の二体に集中する。

二体のスケルトンが連携を見せ左右から同時に攻撃をしかけてくる。俺はタイミングよくバックステップを踏み剣の攻撃を避ける。

俺の顔の二十センチほど手前をスケルトンの剣が通過していくのを見届けると同時に踏み込み攻撃をかけようとするが、目の前を通過した剣の一本が変化を見せその場から突きへと転じ、踏み込んだ俺へと向かってきた。

踏み込んだ俺への完全なカウンター！。

「くっ！」

咄嗟に身体を捻り避けようとするがタイミング的に間に合わない。

瞬間、周囲のスピートが遅くなるのを感じ、俺の動きも加速するが、既に目の前に剣が迫っていた。

俺は首を目一杯捻って剣の軌道から俺の頭をズラす。

スケルトンの突きが顔の横を通過していくと同時に俺のこめかみの上あたりに鋭い痛みを感じ、すぐに同じ箇所が熱くなった。

避けきれなかった！

右目の視界が真っ赤に染まるが、そのまま動きを加速させ、突きを放ち無防備となったスケルトンの頭部へと魔氷剣を叩き込み消滅へと追いやる。

残るスケルトンは一体のみ。

どうやらこめかみの上が先程の突きで切れてしまったらしい。

傷は深くは無さそうだが、そこから垂れた血が目の中に入ってしまったようだ。

腕で右目を拭うが赤く染まった視界は晴れない。

目に入った血の影響で右目は、ほとんど見えないがスケルトン一体ぐらいなら左目だけでも十分倒せる！

第631話 負傷（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第632話 ベルリア離脱

俺は残る一体のスケルトンと相對する。

俺の中のスイッチはまだ入ったままのようで、スケルトンの動きはより遅く感じる。

右側に移動されると死角になるので、視界の左側にとらえられるように俺は敵に向かって右側から回り込んで攻める。

片目だと普段と距離感が微妙に異なるようで、振るった剣が届かず空をきってしまったが、今度はスケルトンの剣を避けると同時に思い切って踏み込んでスケルトンの頭部を切りつける。
今度は魔氷剣がしつかりと頭部を捉えた。

『ドンッ』

ほぼ同時に死角である右側面から何者かのタックルをくらってしまった。

「ぐっ……」

俺は、不意を突かれて完全にバランスを崩し地面へと倒されてしまった。

「マイロード……」

俺を押し倒した敵に目をやるが、そこにいたのはスケルトンではなくベルリアだった。

ベルリアを見ると炎に焼かれて皮膚がただれている。

あれほど注意していたが、右目の視覚が奪われて、スカルドラゴン

から注意が外れていた。

そのせいで死角からスカルドラゴンのブレスをくらいかけたところをベルリアが身を挺して助けてくれたのだろう。

「ベルリア！ 早く回復を！」

「マイロードご無事で何よりです」

「そんな事は早く回復を！」

「問題ありません『ダークキュア』」

ベルリアがスキルを発動して、ただれた皮膚が回復を始める。

「大丈夫か！」

「私は大丈夫です。マイロードこそお怪我を『ダークキュア』」

ベルリアが俺にも回復スキルを発動してくれ俺のこめかみの傷が治癒するが、目の中に入った血が消えてなくなったわけではないので、急いでその場から離脱して、マジック腹巻からミネラルウォーターを取り出して右目にかけて洗い流す。

俺が離脱している間ミクがスピットファイアを連発して時間を稼いでくれている。

「ベルリア助かった」

「ご無事で何よりです」

洗い流して見えるようになった両目でベルリアを見ると火傷は回復しているものの、苦しそうに肩で息をしており、立つのもやっとといった感じだ。

ステータスに表示されるHPとは別の体力ともいえる部分が、明らかにすり減っている感じだ。

俺も入院したので経験済みだが、これはポーションや回復スキルで

はすぐには回復する類いのダメージではない。

「ベルリア、お前もっ……」

「さあ！ あのスカルドラゴンを退治しましょうー！」

「ベルリア！」

ベルリアが、威勢のいいセリフでスカルドラゴンへと向かおうとするが、呼び止める。

今までの戦闘で、ベルリアがこれほど消耗しているのは、ほとんど見たことがない。

スカルドラゴンの注意を引くために一体何度その身を焼かれたのだろうか。

「マイロードどうされましたか？ さあ倒しましょう」

「ベルリア、もう十分だ。これから先はベルリアはミク達と後方支援だ。魔核でMPを回復してサポートに回ってくれ」

「ですが……」

「スカルドラゴンは俺達でなんとかするから大丈夫だ」

「……わかりました。後はおまかせ致します」

周囲を見回すと既にシルも三体のスケルトンを排除していた。あいりさんはまだ二体のスケルトンと切り結んでいるようだ。

「ミク、あいりさんのフォローを頼んだ！ シル、俺達でスカルドラゴンを倒すぞ！」

「はい」

第632話 ベルリア離脱（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第633話 スカルドラゴン戦

俺の前にスケルトンはもういない。

スカルドラゴンと騎乗しているネクロマンサーを倒すのみだ。

だが俺とシルだけで倒すにはどうすればいい？

堅くいくならシルに『鉄壁の乙女』を使ってもらい、そこから俺が攻撃するべきなのかもしれないが、俺では火力不足は否めない。

しかも、あのファイアブレスを一方的に浴びれば、直接ダメージは受けなくても熱は伝わってくるので俺が耐え切れるかどうかかわからない。

もう一つの選択肢は二人で攻めることだ。

この場合絶対にファイアブレスの直撃だけは避けなければならない。もし俺が消し炭になってしまえば、回復する事は不可能となってしまう。

「シル！ 二人で攻撃するぞ！」

「わかりました」

俺は覚悟を決めてスカルドラゴンに向かうが、先にスナッチが飛びだしてスカルドラゴンに向けて『ヘッジホッグ』を放つ。

当然のようにスナッチの攻撃はスカルドラゴンの外装を突破することはできないが、俺とシルが近づく為のわずかな時間を稼いでくれた。

ただ、スカルドラゴンに直接攻撃を叩き込むにはひとつだけ問題がある。

それはルシエの獄炎だ。

獄炎はスカルドラゴンには、分厚い泥の外装のせいでもっとダメージを与えることができているが、未だにドラゴンの周りで燻っ

ている。

この獄炎が厄介だ。

目測を誤って俺が触れれば、俺自身が燃えてしまっただろう。

ルシエが直接主人である俺を攻撃する事はできないが、第三者に向けて放った獄炎に俺が自ら触れれば俺が燃えないという都合の良い話はないはずだ。

つまり俺は獄炎に触れないように攻撃せざるを得ないのでかなり動きが制限されてしまう。

「主と共に消えてなくなりなさい『神の雷撃』」

シルが俺に先んじて雷撃を放ち、ネクロマンサーと一緒にスカルドラゴンを攻撃する。

雷撃がネクロマンサーとスカルドラゴンを覆っていた泥の外装を弾き飛ばす。

ネクロマンサーを覆っていた泥は完全に吹き飛び、スカルドラゴンも上半身の泥が一気に吹き飛んだ。

ネクロマンサーは、本体である骨格にもダメージが入ったようで、かなりの部分が黒く焦げている。

泥の外装のせいで倒せはしていないが、かなりダメージを与えたのは間違いない。

このまま連発すればいける！

「シルもう一発だ！」

「わかりました。これで終わりです『神の雷撃』」

二発目の雷撃が発動して雷がネクロマンサーとスカルドラゴンを撃つ。

「なっ……」

閃光が走りこれで決まったかと思ったが、今度は残念ながらネクロマンサーもスカルドラゴンも無傷だった。

敵モンスターの外装は先程まで纏っていた泥ではなく水に換装していた。

覆っている水はおそらく純水なのだろう。

今度はシルの雷撃を完全にシャットアウトしている。

こいつ、もしかしてネクロマンシーの力でいろんなドラゴンの能力を発現できるのか？

透ける水の外装からネクロマンサーの焦げていた骨が修復していくのが見える。

こいつも自己修復できるのか。さすがは死者を操るネクロマンサーといったところだが、厄介極まりない。

外装が水に変化したことで、ルシエの獄炎によりスカルドラゴンの周りを水蒸気が立ち上る。

この状況は……

第633話 スカルドラゴン戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【】にお願いします

第634話 出し惜しみ無し

「シル様、海斗下がって！」

後方からミクの声が聞こえてきたが、瞬時にミクの意図が理解できなかった。その場から離脱を図る。

『ライトニングスピア』

ミクがスカルドドラゴンに向けて雷の槍を放ち、着弾と同時に爆発が起こり、爆風が襲ってくる。

前回と同じ。

ルシェとのコンボ技ともいえる水蒸気爆発。

ミクに教えてもらったが水蒸気に着火しているわけではないそうだが、とにかく水蒸気爆発だ。

爆発によりスカルドドラゴンの外装と肋骨部分のかなりの部分が吹き飛んだ。

俺も剥き出しになった胸部に向けてドラグナーを放ち、シルも追撃をかける。

「我が敵を穿て神槍ラジユネイト」

俺の放った銃弾は胸骨の一部に穴を開けただけで大した効果をあげることはできなかったがシルの一撃はスカルドドラゴンの背骨を完全にへし折ることに成功した。

支えを失ったスカルドドラゴンはその場に崩れ落ちた。

だが消滅はしていない。あとは頭部を破壊するのみだ。

「シル！」

「はい。これで終わりにします。我が敵を穿て神槍ラジュネイト！」
再び放たれたシルの一撃がスカルドドラゴンの頭部をとらえて完全に粉砕した。

「やった！」

スカルドドラゴンはそのまま灰となって崩れ去った。

残るはネクロマンサーだけだ。

あいらさんもスケルトンを倒し終わり、俺達と共にネクロマンサーを倒しにかかるが

「……………ッ」

ネクロマンサーがまたボソボソとなにかの呪文を唱える。

「うそだろ……………」

ネクロマンサーの詠唱が終了すると同時に俺達の目の前には十体を超えるスケルトンと、二体のスカルドドラゴンが姿を現していた。

さっき敵を倒したばかりなのに、倒した以上の数の敵が一瞬にして目の前に現れてしまった。

まさか、こいつ無限にスケルトンを喚び出せるのか？

「あいらさん……………」

「ああ、これはまずいな。いくら周りのスケルトンを倒しても意味はないという事だな」

「ご主人様、ネクロマンサーを倒すしかありません」

「それはそうだけど、どうやって……………」

「おい海斗、馬鹿みたいに弱気になってるんじゃないぞ！ わたしが一瞬で終わらせてやる！」

ああ、さっきのスケルトンドラゴンが消滅したおかげで、シルの獄炎も消えて戦えるようになったのか。

ネクロマンサーを倒す為には、立ちほだかる残りのスケルトン達も一緒に倒さなければならぬ。

各個撃破していたのではまたすぐに違う敵を喚ばれてしまう。

ここは、出し惜しみしている場合ではない。

勝負に出るしかない。

「みんな、一気に決めるぞ！ シル、ルシールを喚んでくれ」

「わかりました。我が忠実なる眷属よここに顕現せよ『楽園の泉』」

シルによりルシールが顕現する。

「ルシール、とにかく敵を倒せ！」

「かしこまりました」

これで、ベルリアの穴は埋まる。

「ルシエも出し惜しみなした！ 思い切ってやってくれ！」

「出し惜しみなし？ 本当にいいんだな」

「ああ、ここが勝負どころだ！」

「じゃあ『暴食……』」

「さて！」

「なんだよ。出し惜しみ無しだろ？」

「いや、それは無しでいいこう」

「出し惜しみ無しが聞いて呆れるぞ！ ケチッ！」

「いや、それ以外でいいこう」

「チツ！」

危なかった……

軽々しく出し惜しみ無しとか言うもんじゃなかった。

勢いだけではどうしようもない事もある。冷静に敵を倒す！

第634話 出し惜しみ無し（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第635話 全力

「チツ！ しかたがないからやってやるよ。これで終わりだ！」炎撃の流星雨』」

ルシエがスキルを発動すると、以前試しにこのスキルを使用した時と同様に上空から迫ってくるような音が聞こえてきて、大きな炎の塊が一面に降り注ぐ。

俺達は慌てて被弾しないように、その場から下がる。

スケルトンも手に持つ剣で防ごうとするが、頭部に火球をくらうと同時に徐々に焼失していつている。

スカルドラゴンはそれぞれ、水と泥の外装を纏っているが、火球が命中するたびにその外装を蒸発させながら失っていくのがわかる。

『ドドドドドドドドオオオオオン』

さすがはMPを50も消費するルシエの誇るチートスキルだ。スケルトンが少しくらいいい武器を持っていようが、全く関係なかった。

降り注ぐ火球をにより、スケルトンがどんどんその数を減らしていく。

下手に動くと自分が危ないので、その場から動かずにひたすら火球の雨が過ぎ去るのを待つ。

もちろんこれは雨などという生やさしいものではない。

おそらく三十秒にも満たない時間だったかもしれないが、無数の火球が降り注いだフィールドはさながら焼け野原と化していた。

残っているのはボロボロのスケルトンが一体と完全に外装を剥がされたスカルドラゴンが二体とネクロマンサーのみ。

「シル！ ルシル！ あいりさん！」

俺はみんなに声をかけて自らもスカルドラゴンに向けて走り出す。スケルトンにはあいりさんが向かい

「これで終わりだ！ 『ダブル』」

分化した薙刀の一撃を放ち、スケルトンの頭蓋を叩き潰した。

俺とシルはスカルドラゴンに向けて全力で走るが、ネクロマンサーの呪文が再び聞こえると同時に二体のスカルドラゴンは上空へと羽ばたいた。

今度は赤い外装。赤いワイバーンの特性か！

「私にお任せください。私の前で空へと逃れるとはやはり骨、愚かですね。お還りください『エレメンタルブラスト』」

ルシルのスキルによりその場に竜巻が巻き起こり、空中のスカルドラゴンのうちの一体が直撃を受け、暴風の中で錐揉み状に地上へと叩きつけられ、俺のすぐ目の前へと落下した。

俺の狙える位置にスカルドラゴンの頭部が見えている。

ここしかない！

今が完全に勝負どころだ！

俺は躊躇する事なく、ドラグナーをスカルドラゴンの頭部に向けて構えスキルを発動する。

『愚者の一撃』

急激に全身から力が抜けていく。

ドラグナーから放たれた一撃が、一直線に強い光を発しながらスカ

ルドラゴンの頭部へと命中した。

蒼い光りを発する弾丸が命中した瞬間、スカルドラゴンの頭蓋が弾けた。

俺は、それを見届けると同時にすぐさま後方へと移動して離脱する。走ろうとするが、足に力が入らないので、なんとか気力で歩きミクの隣へとたどり着く。

俺は脱力感からその場へと座り込む。

「スナッチ『フラッシュボム』よ！」

スナッチが光りを発して高速で上空のスカルドラゴンへと飛んでいく。

スカルドラゴンは光る砲弾と化したスナッチに脊柱を撃ち抜かれ地上へと落下していく。

第635話 全力（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第636話 総攻撃

「これでもう終わりです。我が敵を穿て神槍ラジュネイト」

落下したスカルドドラゴンに向けてシルが神槍の一撃を放つ。

既にダメージを受けていたスカルドドラゴンに抗う術はなく、シルの一撃により頭部を破壊され消え去った。

残るはネクロマンサーのみ。

『ライトニングスピア』

ミクがネクロマンサーに向けて攻撃を放つ。

雷の槍が頭部を貫いた瞬間、何も起こらなかった。

「どうなったんだ……」

俺には何が起こったのかよくわからないが、放たれた雷の槍が着弾と同時に消え去った。

ミクが続けざまにスピットファイアのトリガーを引き、火球を連続でお見舞いするが、着弾の直前で消えてしまった。

先程の雷の槍と同じだ。

俺の目には見えないが、こいつもスカルドドラゴンと同じように何かの外装を纏っている。

スキルを発動した気配もないので、それしか考えられない。だが、炎も魔法も通じないととなるとミクでは無理だ。

「やああああああ！ 『斬鉄撃』」

あいらさんが、一気に距離を詰めて必殺の一撃を放つが、あいらさんの薙刀は見えない膜に阻まれてダメージを与える事ができない。

「まだまだ！『アイアンボール』」

あいらさんが至近距離から鉄球をお見舞いした。

近距離からの鉄球はネクロマンサーにあたりはしなかったが、鉄球の衝撃によりネクロマンサーが後方へとブレた。

何かを守られているのは間違いないが、全く攻撃が通じないということは無さそうだ。

「今度は私の番ですね。そんな脆弱な防御など紙と同じです。我が敵を穿て神槍ラジュネイト！」

シルが二発目の神槍の一撃を放つ。

光を放つ神槍の一撃がネクロマンサーに突き刺さると、ネクロマンサーは弾かれたように吹き飛んで壁へと激突した。

ネクロマンサーを見ると胸骨の部分に大きな穴が空いている。シルの一撃はネクロマンサーにも致命傷を与えていた。

「……………っ」

またネクロマンサーの呟くような呪文が聞こえると、胸に空いた穴が閉じはじめた。

「しっこいやつだな。さつさと消える！ わたしは、お前らの相手はもう飽きたんだ！ 燃えて無くなれ！」

炎撃の流星雨『』

ルシエがまさかの本日二度目となる火球の雨を降らせた。

先程と同じように地鳴りのような音を響かせ、火球が降ってきた。しかも相手はネクロマンサーのみ。ネクロマンサーに向けて大量の火球が降り注いだ。あまりの熱量に前がよく見えない。数十秒に及ぶ轟音が収まり、周囲の粉塵が晴れてくるとその場にはネクロマンサーの姿は無くなっていた。

「やったのか？」

さすがのネクロマンサーもあの降り注ぐ炎の暴力にはなす術がなかったようだ。

終わった……

やはり階層主は簡単な相手ではなかった。

俺とベルリアは戦闘不能。

スナッチもかなり消耗している。

ルシエもかなりのMPを消費したはずだ。

だけど、消耗した以外はメンバーに被害を出すことなく倒せてよかった。

「疲れたな……」

俺はマジック腹巻から低級ポーションを取り出して飲み干す。

ポーションの効果で倦怠感が残っているが大分楽になってきた。

そうだ、ドロップアイテムは？

第636話 総攻撃（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第637話 祈りの神撃

俺は、身体を起こして周囲を見回す。

「……………」

どこにも無い。

なにも落ちていない。

ドロップアイテムどころか魔核一つとして落ちていない。
どういうことだ？

「ミク、なにも落ちてないな」

「……………そうね」

「なんでだ？」

「もしかして、まだ倒してない？」

「だけど、さっきシルが……………」

まさか……………本当に倒せてないのか？

俺はネクロマンサーの消えた地面を見つめる。

よく見ると地面に散らばった灰のようなものが集まってきているのがわかる。

「嘘だろ……………不死身か？」

灰になっても死なないのか。

そもそも死んでいるから死ぬという事が無いのか？

いくらなんでもそんなバカなことは無いはず。

ネクロマンサーだから元々自分自身にネクロマンシーをかけている

のか？

それで倒されても自動修復するのか？

燃やし尽くせば消えるのか？

俺が考えている間にも、灰は集まりネクロマンサーの姿を形作り始めている。

「チツ、魔界のゴミ虫並みにしぶといな。もう一回燃やしてやる！

完全に炭になれ！『破滅の獄炎』」

ルシエが獄炎を放ち、ネクロマンサーを燃やしにかかる。

確かに燃えている。

燃えてはいるが燃えながらも、修復が止まる気配は無い。

燃えながら骨が修復している。

完全にホラーの世界だ。

どンドン修復していき完全な姿へと復活してしまった。しかも身体は燃え続けている。

炎で燃やし尽くすことはできないようだが、これで再びルシエは攻撃する事ができなくなってしまった。

もうこいつを倒せるのはシルだけだ。

ただ神槍の一撃で灰になっても復活してきたので、同じ攻撃で倒せるかはわからない。

「あれか……」

正直全く気乗りはしない。

できる事なら使わずに終わりたい。

確実に倒すにはこれしか無い。だがこれを使うと大きな問題が二つある。

ひとつ目は俺への負担がとんでもなく大きい。

そしてもうひとつの問題は、ドロップ自体が無くなってしまつ可能

性。

今回絶対にドロップが必要だが、倒すためには使うしか無い。考えがまとまらず、躊躇してしまう。

前回は、敵の存在そのもの敵の全てを消し去ってしまった。まともには仕掛ければ前回と同じになってしまいう可能性が高い。じゃあ、敵の存在を残しながら消滅に追いやるしかない。

「シル『祈りの神撃』を頼む！」

「ご主人様、大丈夫なのですか？」

「ああ、ネクロマンサーの頭だけを狙ってくれ！」

「わかりました」

これがルシエなら怖くて頼めなかったが、シルなら大丈夫だ。絶対に上手くいくはずだ。

「我が主に仇なす者よ、神の怒りを知りなさい。無へ帰せ『祈りの神撃』」

シルが聖句を紡ぎ、俺の身体がうっすらと赤く光る。

「う……うっっ」

急激に力が抜け立っつていられなくなり、その場へと倒れるようにしてしゃがみ込む。

神槍ラジュネイトが赤く光り、周囲の空間が歪み始める。

シルが一気に踏み出してラジュネイトをネクロマンサーの頭部へと突き刺す。

赤く光るラジュネイトが頭部へと触れた瞬間、ネクロマンサーの頭部は消えて無くなった。

そして、その瞬間ネクロマンサーの首から下が灰になり崩れ去った。

第637話 祈りの神撃（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第638話 レベル23

今度こそ倒したか？

シルとあいりさんは崩れ去ったネクロマンサーを前にまだ臨戦態勢を解かずに構えている。

さつきは、これと同じ状況からネクロマンサーが復活してしまった。ただ『祈りの神撃』は通常の攻撃とは違う。

どれだけ強くてもモンスターがあたの攻撃を受けて無事でいられるとは思えない。

みんながネクロマンサーの消滅を確かめている間に、俺は低級ポーションを取り出して飲んだ。

急激な魔力切れで、グルグルと目が回って気持ち悪く、視点が定まらないので状況がよくわからない。

少しでも早く結果を知りたかったのもあり今日二本目の低級ポーションを取り出して一気に飲み干す。

低級マジックポーションと合わせて3本目なのでさすがにお腹が膨れてチャポチャポ音がする。

低級ポーションを飲むとすぐに効果が現れ、目眩はおさまったが『愚者の一撃』と『祈りの神撃』の影響で身体が鉛のように重い。

たとえば、ネクロマンサーが復活したとしても俺はもう戦力にはなれない。

やはり、今回使用したスキルは『暴食の美姫』と並び使用してはいけないマイ三大デッドスキルだ。

敵も死に追いやるが、使用した俺自身も死の淵へと追いやられる、正にデッドスキル。

なぜ俺にはこんなデッドスキルばかり増えていくのだろう。結局頼ってしまっているので文句は言えないが、使うたびに確実に寿命が縮んでいっている気がする。

「あゝ身体が重い……」

「海斗大丈夫？」

「まあ一応大丈夫といえど大丈夫だけど、大丈夫じゃ無いといえど大丈夫じゃない」

「いったいどつちななのよ」

「両方」

ちよつとふざけた答えだが、両方だな。

ポーシヨンのおかげで死んだりするようなダメージは無いので一応大丈夫だが、この身体の芯に残る倦怠感は大丈夫とは言い難い。

「ご主人様、終わりました」

その場からゆつくりと立ち上がった俺の耳にシルの声が聞こえてきた。

「倒したのか。また復活とか大丈夫だよな」

「はい。アイテムがドロップしているので間違ありません」

シルの声とほぼ同時に俺と同じく後方に控えていたスナッチが発光し始めた。

これはレベルアップか。

前の階層でスナッチはあまり戦闘に関与しなかったせいかレベルアップしなかったが、今回は十分に経験値を稼ぐ事ができたようだ。

そして同時に俺の身体も少しだけ楽になったような気がする。

この感覚は……

俺は自分のステータスを確認してみた。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 22 23

HP 83 89

MP 54 59

BP 86 90

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

鬼殺し

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（弱）

愚者の一撃

思った通り俺はレベル23へとレベルアップしていた。

俺のレベルも20を超えてなかなかレベルアップしにくくなってきているが、このタイミングでレベルアップしたという事は、あのネクロマンサーが、かなりの強敵であったのは間違いない。

いつもであれば大喜びするところだが、今はレベルアップに喜ぶよりも先にする事がある。

第638話 レベル23（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第639話 霊薬？

ドロップアイテム……

ステータスを確認しおわった俺はそれを聞いて、いてもたってもいられず重い身体をおしてシルの元へと走った。

「どこだっ！」

「海斗、そこだ！」

あいりさんが指差す方に目を向けると確かにドロップアイテムらしき物がひとつだけ落ちていいる。

周囲を見回してみるが、他にはなにも見当たらないので、どうやらドロップしたのはあれひとつだけのようだ。

俺は恐る恐るドロップアイテムの方へと向かっていく。

ミクとあいりさんも俺の後に続く。

ドロップアイテムの前まで進んだ俺は、慎重に地面に落ちているアイテムを拾い上げた。

「これって……」

地面から拾い上げたアイテムは先程俺が飲み干した低級ポーションほどの大きさだった。

「あいりさん、これって……」

「ああ、なにかのポーションだろうな」

「そうですね。ポーションですよ」

「少なくともダンジョンマーケットにいつも売られているポーションでは無さそうだな」

「やっぱりそうですよね」

俺の手の中にあるポーションらしきドロップアイテムは今まで見た事のない種類のものだった。

「海斗、じゃあれって霊薬？」

「……………」

ミクから霊薬か？ と問われたが俺には答える事が出来なかった。理由は二つあった。

ひとつは本物の霊薬を見た事がないので霊薬かどうかわからなかった。

そしてもうひとつの理由は手に持つポーション色だ。

手に持つポーションの色は毒毒しいと表現すればいいのだろうか。濁った深い緑色。

俺の持つ霊薬のイメージとはかけ離れた色をしている。

煮詰めたような緑色……

緑というよりも黒に近いかもしれない。

霊薬……いや毒薬？

「この色は……毒」

「あいりさん！ ダメです！ それを言うては……………」

「ああ、すまない。思わず本音が」

やはり俺以外にもそう見えるのか……

「……………」

階層主であるネクロマンサーを倒し、ドロップアイテムを手にしたというのに空間をなんとも言えない沈黙が支配した。

「まあ、鑑定してみないとなんととも言えないんじゃないかな」

「そ、そうね」

「ああ、もしかしたら良薬口に苦しとも言っし、この色でも霊薬という可能性も……な」

見れば見るほど霊薬に見えなくなってきてしまった。

とにかく十七階層をクリアした事は間違い無いので、十八階層へと向かう事にするが、その前にやる事がある。

「ご主人様……」

「ああ、わかってるよ。今回はシルのおかげで攻略できたようなものだからな。遠慮しなくていいぞ」

「ありがとうございます。ご主人様にそう言っていたただけで、嬉しくて胸がいっぱいです」

ああ、やっぱりシルは素直でいいなあ。

「おい、ちょっと待て。わたしのおかげでもあるだろ！ ふざけるのか？」

「いや別にそんな気はないけど」

「それじゃあ、もちろんわたしにも、シルと同じだけくれるんだよな」

「わかってるよ」

俺はベルリアも含めたサーバントの三人に、いつもより多めの魔核を渡してから、先へと進み十八階層への階段を降りた。

第639話 霊薬？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第640話 鑑定

「ここが十八階層か」

「特に変わった様子は無いわね」

「いずれにしても、今日はここまでだな」

「はい、すぐに引き返してギルドへ行きましょう」

俺達は『ゲートキーパー』を使ってすぐに移動して、一階層から地上へと戻り、そのままギルドへと直行した。

急げばまだ間に合う時間だ。

足早にギルドへと向かい、いつもの日番谷さんのいる窓口へと進んでいく。

運良く並んでいる人はいないようなので、すぐに対応してもらう事ができた。

「すみません、鑑定をお願いします」

「はい、それでは鑑定するアイテムをここに。それいつものように鑑定料として三万円頂戴いたします」

「わかりました。これをお願いします」

「これは……ポーションですね。それではしばらくお待ちください」

日番谷さんがドロップしたポーションを持って奥の部屋へと消えていった。

「どうですかね？」

「こればかりは鑑定結果を待つしか無いな」

「そうですね」

あゝ緊張してきた。受験の結果が張り出される時と同じ感じだ。しかも今回はもっと切実だ。

受験は落ちても他に選択肢があるが、今回はこれしか無い。

「まだですかね」

「まだ二分しか経ってないぞ」

「そうですよね」

まだ二分しか経って無いのか。

もう五分以上が経過した気がするのに。

もしあれが霊薬じゃなければ、どうすればいいんだ。

だめだ、待っているこの時間にネガティブな考えしか浮かんでこない。

「もう、そろそろですかね」

「海斗、ちよつとは落ち着きなさいよ。まだよ」

「ああ、そうだな」

よく二人は落ち着いていられるな。

あゝ緊張してトイレに行きたくなってきた。

「ごめん。俺ちよつとトイレに行ってくる」

「わかったわ」

急いでトイレに向かう。

焦っても仕方がない。鑑定が終わるまで待てばはつきりとする。

まさか毒薬とかじゃないよな。

トイレに行く間もよくない考えばかりが浮かんでくる。

トイレを済ませてから、みんなの所へ戻るが、まだ日番谷さんは戻ってきていない。

「まだなんだ」

「もう来ると思っけど」

ソワソワしながら待っていると、遂に日番谷さんがポーションを持って戻ってきた。

「お待たせしました」

「はい」

「ひとつお聞きしてもよろしいでしょうか？　これは、どこでドロップしたのでしょうか？」

「十七階層主の部屋です」

「階層主はどんなモンスターだったんですか？」

「多分階層主はネクロマンサーで、使役しているスカルドラゴンが三体とスケルトンがいっぱいでした」

「スカルドラゴンを使役するネクロマンサーですか。それなら納得ですが、十七階層でスカルドラゴンを使役するネクロマンサーですか……十七階層で出る様なモンスターでは無い気がします」

「そう言われても、出ましたよ」

「不思議ですね。高木様達は、イレギュラーなケースが他の探索者の方達よりも頻発している気がします。なにか高木様には、イレギュラーを呼び込む不思議な力があるのかと本気で考えてしまいます」

「また冗談を……」

自分でも自覚があるだけに答えにくいですが、やはりあのネクロマンサーは強すぎると思ったんだよな。

あんなのサーバント無しじゃ倒せる気がしないもんな。

「それではこちらが鑑定結果になります」

そう言って日番谷さんがポーションと鑑定書を渡してきた。

第640話 鑑定（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第641 鑑定結果

鑑定書を受け取る手が震える。
震える手で紙に書かれた内容を確認する。

アイテム名 ドラゴンポーション

このポーションを飲む事で一時的にドラゴンの力を得る事ができる

「……………」

これって……

「あ、ああ、あの……これって」

「高木様、このポーションは本当に珍しいものです。私も今までで三本しか見た事ありません。さすがです」

「い、いや……これは霊薬じゃ……」

「霊薬ですか？ ある意味このドラゴンポーションも霊薬の一種と言えるかもしれません」

「そうじゃなくて……これって病気が治ったりしますか？」

「いえ、あくまでも戦闘用のポーションですのでそのような効果は無いと思われまます」

「……………」

ああ……終わった……

エリクサーでもソーマでもなくドラゴンポーション。

一時的にドラゴンの力を得られるなんて、なんて厨二感溢れる浪漫アイテムなんだ！

ただ、これじゃない！ これじゃないんだ！ 俺達に必要なのはこ

れじゃない！

いや、待て、まだ可能性はある。

「日番谷さん、このポジションって珍しいんですね。じゃあ高く売れたりしますか？」

「はい、もちろん高額での買取となります」

「そうですか！　いくらぐらいになりますか？」

「そうですね。ドラゴンポジションの買取金額は千二百万円となります」

「……………」

確かにポジション一本が千二百万円……

とんでもなく高額だ。

だが、これじゃ足りない！　全然足りない！　一桁違う！
本当に終わってしまった。

「高木様、どうかされましたか？　買取いたしましょうか？」

「……………いや、いいです」

茫然自失とはこの事なのだろう。

これに賭けていただけにショックがデカすぎる。

だがこのまま何もしないわけにはいかない。

ただど何をすればいいのかわからない。

「どうしよう……………」

「……………」

「十八階層を最短で攻略するしかないんじゃないか？」

「間に合いますか？」

「……………」

「なんで……………なんで霊薬じゃないのよ」

このメンバーなら十八階層をクリアもできると思う。
ただそれには時間が必要だ。

間違っても明日明後日で攻略できるという事はありえない。
空気が重い。

空気の重量を肌ではつきりと感じるのはこれが初めてかもしれない。

「多分、ヒカリンには十八階層をクリアするまでの時間はないですよね」

「それは……」

「海斗！」

「聞いてくれ。俺は、ゴールデンウィークの残りの期間は、全部一階層に潜ろうと思う」

「一階層？」

「海斗？」

「もうこれに賭けるしかないと思う。今日までにかなりの数のスライムを倒してきたんだ。あとちょっとでメタルカラーのスライムが出るはずなんだ。シルモルシエもそれで手に入れたんだ。だから今度もレアなサーバントカードを手に入れる可能性は高いと思う。レアカードなら価値は霊薬に匹敵するはずだ」

「確かに」

「だけど、それって不確定でしょ」

「そうだけど、俺はスライムスレイヤーだから。元々俺にはこれしかなかったから、これに賭けたいんだ。俺に本当に因果律なんていうものがあるなら、きつとこれだと思う」

「……………」

俺以外には理解する事ができない理屈なのはわかるが、本当に俺にはもうこれしかない。

「わかった。私も一階層に潜ろう」

「あいりさん」

「うん、私も一階層に潜るわ」

「ミク」

こうして俺達はゴールデンウィークの残りの期間を一階層でのスライム狩りに賭ける事になった。

第641 鑑定結果（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

クリスマスイブSS (前書き)

今日から3日間はクリスマスSSです

クリスマススイブSS

「ルシエ、ミク達から聞いたのですが、地上では今日はクリスマスだそうですね」

「シル、クリスマスってなんだ？」

「クリスマスというのはプレゼントをもらえる日だそうです」

「プレゼント？」

「そうです。家族や恋人にプレゼントを送る日だそうです」

「じゃあ、あれだな。海斗もわたしたちにプレゼントをくれるんだな」

「そうだといいいのですが」

今日、俺は一階層でスライムを狩っている。

夜には春香と食事の約束をしているので今からテンションは高めだ。

「機嫌も良さそうだし、わたしたちへは当然あるな」

春香へのプレゼントはもう購入済みだ。

アクセサリーはこれまでひと通りプレゼントしていたので、悩みに悩んだ結果デイベアのぬいぐるみをプレゼントとして用意した。

少し子供っぽいかとも思ったが、以前春香がブタのぬいぐるみを喜んでいたので思い出してデイベアにした。

多分ブタよりくまの方が可愛いと思うので喜んでもらえるといいな。夜の事を考えると、自然と殺虫剤プレスを押す手にも力が入る。

なんなら、サンタさんから俺へのプレゼントでメタリックカラーのスライムとか出てくれないかな。

本日限定クリスマスカラーのスライムとか出たら面白いのに。

そんなことを考えながら、サクサクとスライムを狩っていくが当然

ダンジョンにクリスマスの影響など全くないのでいつも通りのスライムしか出現しない。

そういえば、ダンジョンにもひとつだけクリスマスの影響が出ていた。

ダンジョンの入り口付近の探索者だが、いつもは男女のパーティや女性の探索者もちらほら見かけるのに、今日は、その姿は一切なかった。

ダンジョンに向かっているのは男性の探索者だけ。

しかも、俺の主観だが、見た感じ非リア充探索者に限られていたような気がする。

クリスマスには彼女のいない探索者がダンジョンへと足を運び、怒りと悲しみをモンスターへと注いでいるのかもしれない。

「おい海斗、今日はクリスマスだな！」

「ああ、そうだな。よく知ってたな。もしかして魔界にもクリスマスってあるのか？」

「あるわけないだろ！？ ふざけてんのか？」

「いや、突然クリスマスって言い出すから」

「フンッ！」

突然ルシェがクリスマスの話題を振ってくるから、魔界にもクリスマスがあるのかと思っただけど、普通に考えて無いよな。

特にそれ以上何も言っただけで、再びスライムを狩っていく。やっぱり今日はいつもよりも他の探索者で場荒れしてないのもあるのか、スライムの出現率が高い気がする。

「ご主人様、今日はクリスマスですね」

「ああ、そうだな。シルもクリスマスを知ってるのか？ 神界には

……無いよな」

「はい。クリスマスはありませんが、ミクさんから聞いたのでどう

いうものなのかは知っています」

「ミクから聞いたのか。それでか」

「ミクさんがクリスマスはとていいものだ」と

「ああ、そうだな。クリスマスがいいものは人によるな。俺ぐらいの年齢になるといいものとは限らないんだ」

「そうなのですか？」

「ああ……ここ数年はダンジョンで時間を潰したりしてたからな。逆に辛い場合もあるんだ」

探索者になってからの俺は、クリスマスには必ず一人でダンジョンに籠っていた。

外界のリア充達を視界に入れない為。世に蔓延るクリスマスの雰囲気遮断する為。

中学生になってからは、クリスマスなんかなくなればいいのにとずっと思っていたが、今年は違う。

クリスマスは最高にハッピーで楽しみなイベントだ。

クリスマスに感謝だ。

早く春香に会いたいなあ。

その後もスライムを狩り続け、いい時間になったのでそろそろ帰る事にする。

「じゃあ、今日はこれで終わりだ。また明日な」

「えっ？」

「は!？」

なんだこのいつもと違う反応は？

「どうかしたのか？」

「い、いえ、なんでもありません」

「くっ……別に!」

「そうか、それならいいけど。それじゃあこれ」

「えっ？」

「は!？」

「二人へのクリスマスプレゼントだ。開けてみてくれ」

二人は、渡したプレゼントをゆっくりと開いた。

「これは……」

「二人に似合いそうだったから、色違いの髪留めだよ。つけてみてくれよ」

「はい」

「あ、ああ」

シルとルシエがお互いの髪に髪留めをつけ合っているが、やはり二人とも似合っていていいかんじだ。

「どうでしょうか？」

「ああ、似合ってるよ。いい感じだと思う」

「ご主人様ありがとうございます。一生大事にします」

「ふ、ふん。一応もらっておいてやるよ。ちょうど髪が邪魔だったんだ、壊れるまで使ってやるよ」

二人とも喜んでくれているようなのでよかった。

「ベルリアにはこれだ」

「私にもただけるのですか？」

「ああ、高いものじゃないけどナイフだ。使ってくれよ」

「マイロードに永遠の忠誠を!」

ナイフは三千八百円だったので永遠の忠誠に対価には少し安すぎる

な。

まあベルリアの忠誠は当てにならないからいいけど。

初めてサーバントの三人にクリスマスプレゼントを贈ったけど喜んでくれたようでよかった。

来年のクリスマスもこの四人でダンジョンに潜れるといいなあ。

クリスマススイブSS (後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

クリスマスSS 1

ダンジョンを切り上げてから急いで家に戻る。

家に戻ってすぐにシャワーを浴びる。

ダンジョンで汗と埃に塗れているので、いつも以上に入念に洗い落とすが、あまり時間がないのでさっさと浴室から出る。

「さむ〜」

身体が完全に温まる前に出てしまったので、ヒートショックを起こすんじゃないかと思うほど寒い。

震えながら急いで身体を拭いて、髪を乾かしながら服を着る。

それから速攻でカレーを食べてプレゼントに買ったテディベアのぬいぐるみの紙袋を手にかを出る。

春香とクリスマスのイベントを過ごすのは小学校の時にクラスのクリスマスパーティーがあつて、それ以来だが

自然とテンションがあがる。

待ち合わせ場所の駅前まで歩いて行くが、クリスマスだけあつてほぼカッパルしかない……

普段街に溢れている世の中の非モテの男性達はいったいどこに行つてしまったんだろう。

ダンジョンにもそれなりの数の男性はいたが、まさか全員がダンジョンに潜っているはずはないので、家に籠っているのかもしれない。俺も去年まではダンジョンに籠っていたので気持ちはよくわかる。

独り身でこの景色を見ているだけでHPとMPがガリガリと削られる……

ただ俺も独り身には違いないが今年は春香と一緒にだ。それだけで景色が全く違って見える。

駅前ですばらく待っていると春香がやってきた。

「お待たせ」

「あ、ああ、うん」

そこには午前中の制服から着替えた春香が立っていたが、白いコートを着ていてその姿は正に冬の妖精。

「このコート新しく買ったんだけど、どうかな」

「うん、いいです」

「そう？ 変じゃない？」

「変じゃない。むしろ素晴らしいです」

「今日の為に買ったのもあるから、そう言ってもらえてよかった」

今日の為にコートを買ってくれたのか？ 白のコートが似合っていて最高に可愛い。

今日は本来なら春香と一緒にクリスマスディナーを食べたかったが、俺は完全にミスを犯してしまった。

クリスマスの飲食店を舐めていた。

一週間前に予約サイトで予約しようとしたら、全てのお店が満席で予約不可になっていた。

焦って電話もかけたが全て断られてしまった。

俺には縁がなかったなので、よくわかっていなかったが、クリスマスに考える事はみんな同じようで、クリスマスビキナーの俺は完全に遅れそして惨敗してしまった。

仕方がないので、スマホで徹底的にクリスマスイベントを調べて検討に検討を重ね、春香に提案したのは夜の公園のイルミネーションを見て回る事だ。

イルミネーションを見て回るのは、クリスマスのイベント人気二位だったので、近くでイルミネーションがあるとところを調べて行く事

にしたのだ。

電車で三駅先まで行き、徒歩で目的の公園へと向かうが、周囲には既に大勢のカップルがいる。

「こんなにいるんだ……」

「イルミネーションは人気があるからね」

結構大きな公園だったので、ゆっくりと回れるかと思っていたが公園に着くとカップルが溢れていた。

なんでイルミネーションにこんなに人が……

イルミネーションを見に来たのに、カップルしか見えない。

失敗したかもしれない……

クリスマスにはビギナーズトラックはないのか……

クリスマスSS 1 (後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

クリスマスSS2

俺は覚悟を決めて人混みの中へと突入を敢行する。

こんな時にアサシンのスキルを使えば、ササッと人をかき分けてイルミネーションを鑑賞できたのに……

「海斗、わたしちょっと……あっ」

俺に続いて春香もついてきていたが、人の多さにうまく進めずに押し戻されそうになっている。

このままだとはぐれてしまう。

咄嗟に手を伸ばして春香の手をつかんだ。

あ……春香は手袋をしているので、直接触ったわけではないが、まぶかったかも。

「大丈夫？」

「うん、すごい人出だから海斗が手をつかんでくれて助かったよ」

「なら、よかった」

どうやら嫌がられたりはしていないようだが、つかんでしまった手のやり場に困ってしまう。

これは、どうすればいいんだ。このまま離してしまうのも名残り惜しい気もするし、そのまま繋いでいるのも変に思われそうで怖い。

「よかつたらこのまま手を繋いでもらっていいかな。また、はぐれそうになりそうだから」

「ああ、もちろん。はぐれたら困るからね。うん」

春香から手の事を切り出してきてよかった。
手袋越しても春香と手を繋ぐのは緊張してしまう。
手を繋いだ状態でイルミネーションを見て回るが、俺の意識の半分
以上は春香と繋いでいる手に集中してしまう。

「イルミネーション綺麗だね」

「あ、そう。そうだな」

「あれは、サンタさんとトナカイのソリだね」

「あ、ああ、そう。そうだね」

本来初めてのイルミネーションに感動する場面なのだと思う。
確かに綺麗だ。

春香も笑顔で嬉しそうだ。

だが、イルミネーションに映える春香の姿がその何十倍も綺麗で、
正直イルミネーションなんか全く印象に残らない。

ピカピカ光ってはいるが、あくまでも春香の後ろを流れる背景でし
かない。

「あそこでみんな写真を撮ってるからわたし達も撮ってもらおうよ」
「ああ、うん」

大きなハートのイルミネーションの前でカップルが順番に写真を撮
っているのが見える。

なんてクリスマスっぽい光景だろう。

どこか現実感がなくて人ごとのように感じながら列に並ぶが、すぐ
に俺達の順番がきたので、係の人にスマホを渡して写真を撮っても
らう。

「はい、それじゃあ撮りますね。お二人とももつと顔を近づけて
下さい」

「え……」

「海斗、こういう時は思い切りも大事だよ」

そう言っただけで春香が俺のすぐ横に顔を寄せてきた。

近い！ 近すぎる…… 春香の体温が感じられそうなほど顔が近い。

やばい。嬉しいけど、やばい。

俺が完全に舞い上がっている間に撮影は終わり。

「はい、撮れましたよ」

そう言っただけでスマホを返してくれた。

画面を見ると、緊張で固まってしまっている俺の顔と笑顔の春香が写っていた。

「綺麗に撮れてるね。わたしにも後で送ってね」

「うん」

春香はイルミネーションをバックに幻想的な感じで写っているけど、俺は酷いな。

ただこれは永久保存フォルダへ直行だ。

その後一時間ほどかけて、公園を回ったが、俺の中では途中からイルミネーションよりもイルミネーションをバックにした春香を眺める会と化していた。

「綺麗だったね」

「うん、本当に綺麗だった」

多分この公園にいる誰よりも綺麗だったと思う。

「また来年も来れるといいね」

「うん」

急遽計画したけど、俺にとっては一生の思い出になったな。
帰り道、俺は用意していたプレゼントを渡した。

「春香、メリークリスマス。これプレゼント」

「ありがとう。わぁ！ ティーベア。可愛い」

そう言って袋から出してクマのぬいぐるみをギュツとした春香がとてつもなくなく可愛いかった。

どうやら喜んでくれているようなのでよかった。

「これはわたしから。メリークリスマス海斗」

「ありがとう。これは……ベルト？」

「それはね、腰にペットボトルとかを下げられるベルトなんだけど、海斗ダンジョンで殺虫剤をいつも使ってるって聞いてたから」

これはいわゆる殺虫剤ホルダーか。しかもなんとなくカッコいい。
明日からスライム狩りが更にスムーズになりそうだ。

「早速明日から使わせてもらおうよ」

「うん」

クリスマスプレゼントをもらうのは随分久しぶりだ。しかもその相手が春香とは、もう何も言うことはない。

クリスマスがこんなに楽しいと感じたのも本当に久しぶりだ。
クリスマス最高！ 全ての人にハッピーメリークリスマス！

クリスマスSS2(後書き)

第642話 ホスピタリティ

ダンジョンギルドから引き上げて家に戻るが、まだ両親は旅行からは戻ってきていないようだ。

今日一日に賭けていたと言っても過言ではないが、成果をあげる事はできなかった。

もちろんダメな時の事も想定はしていたが、実際にそうなってしまうと無力感に苛まれてしまう。切り替えなければいけない。

明日からのスライム狩りが本当のラストチャンスになる。本当に後がない。

両親が戻ってくるのは遅くなりそうなので、俺は家にあつたカップ麺を作つて食べたが、胃が痛い……
夜九時になつて両親が戻ってきた。

「ただいま〜」

「おかえり」

「どうしたのよ、なんか暗いわね。昨日は春香ちゃん来てくれたでしょ。もしかして喧嘩でもしたの？」

「いや、そうじゃない。喧嘩はしてないよ。母さんが呼んでくれたんでしょ。驚いたけど、助かったというかありがとう」

「スターリゾートのお礼だと思えば安いものよ。スターリゾートよかつたわ〜。やっぱり違うわね。ホスピタリティよ、ホスピタリティ。癒されたわ〜。ねえお父さん」

「ああ、良かったな。ホスピタリティ満載だったな」

なんだ？ 両親ともにホスピタリティという耳慣れない言葉を連発している。意味はわかるけど今まで両親の口からは聞いた事のない言葉だ。

「次も行くならスターリゾートの系列がいいわね。ホスピタリティが違うから」

「ああ、ホスピタリティがな」

これはあれだな。完全にスターリゾートのファンになってるな。ホテルのコンセプトに完全にやられてしまっている。ある意味スターリゾートすごいな。一泊しただけの俺の両親がホスピタリティを口にするようになるとは……

さすが有名なホテルは違うな。

「これお土産ね。スターリゾートホスピタリティ饅頭とお守り」

「お守り？」

「ホテルのすぐ近くに大きな神社があったのよ」

母親から赤いお守りを受け取る。

「これって……安産祈願って書いてるんだけど」

「あらく将来役に立つかしら」

「いったい、いつの話してるんだ……」

「まあ広い意味で病気や怪我にも良さそうだから、ダンジョンに持って行くといいわよ」

広い意味って広すぎるだろ。これは完全に何も見ずに買ってきたな。ただ明日からの探索は運頼みなどころも大きいので、何かの足しにはなるかもしれない。

一応持っていこうかな。

ホスピタリティ饅頭は開けて食べてみたが、普通の饅頭だった。

何がホスピタリティなのか、残念ながら饅頭から感じ取ることはできなかつた。

「私達は温泉に入ってから帰ってきたから、海斗だけお風呂に入っ
てね」

「俺はもうシャワーしたからいい」

「温泉もね、癒されたわ。ホスピタリティが溢れてたから普通の温
泉とは違って癒されたわ」

「そうだな。なにか泉質も他の所とは違ったな。疲れの取れ方が全
然違ったよ。やっぱりホスピタリティの違いだな」

ホスピタリティか……

俺のホスピタリティはダンジョンの一階層だ。

一階層にいると落ち着くしある意味、自分のホームに帰ってきたよ
うな気がして癒される。

これはまさにホスピタリティ。

俺にとってダンジョンの一階層はスターリゾート。

明日から毎日スターリゾートに行くような気持ちで頑張ればいいの
かもしれない。

俺はスターリゾートには行ったことが無いのでどんな所なのかは知
らないけど。

第642話 ホスピタリティ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第643話 決死の一階層

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよう」

朝になり、今日からは昨日決めた通りに一階層に潜る。

ゴールデンウィークはあと三日。

あと三日でどうしても結果が欲しい。

「それじゃあ、このまま一階層に向かいますね」

「手順とかはあるのか？」

「特にはないんですけど、シルがスライムを見つけたら倒す感じですね」

「まあ、とりあえずやってみよう」

「そうですね」

俺達はメンバー全員で一階層を進んで行く。

「ご主人様、前方にスライムです」

「ああ、わかった」

俺はいつものようにスライムへと走り殺虫剤プレスで倒した。

「見事なものだな」

「そうですね。本当に殺虫剤だけで倒せるんですね」

「これは、本当にシークレットだから誰にも漏らさないで欲しいんだ」

「ああ、大丈夫だ。約束しよう」
「シークレットって、誰も知りたがる人いないんじゃない？」

ミクは本当に失礼だな。まだこの殺虫剤ブレスの真価がわかってないのかもしれない。

その後三回程スライムと交戦したが、いたって順調だ。

「海斗は普段ずっとこれを繰り返してるのよね」

「まあ、放課後はだいたいね」

「ある意味すごいわね」

「何がだよ」

「普通二階層より下に潜った事のある探索者ならこの作業はきついわよ」

「そうかな」

「変化が乏しいから黙々とやるしかないじゃない。派手さとは対極に位置してる。冒険感がほぼ無い」

「いや、スライムを倒すのにも創意工夫を凝らせば、ペースアップするから」

「そんなもの？」

「ああ、そんなものだ」

更にその後三度スライムを狩った。

「海斗、ちょっといいだろうか？」

「はい、なんですか？」

「このまま全員で回っても海斗一人で回ると大差ないだろう。それなら私とミクはそれぞれ一人で周る方が効率的だろう」

「確かにそうですね」

「それじゃあ、ここで別れよう。17時に入り口に集合でいこう」

「わかりました。それじゃあ一応三本ずつ渡しておきますね」

「やはりそれを使うのか」

「もちろんです。これが一番ですからね」

「……………わかった」

俺はマジック腹巻きから殺虫剤を六本取り出して、ミクとあいりさんに三本ずつ渡しておいた。

これで、ようやくミクとあいりさんもスライムスレイヤーへの第一歩を踏み出したとも言える。

ただ二人とも殺虫剤を受け取る時に微妙な表情だったのは、少し引つかかるが、殺虫剤ブレスを実際に愛用すれば必ず手放せなくなる事だろう。

今日忘れずに帰りの途中でドラッグストアに寄って殺虫剤を買い増しておこう。

メンバーの二人が先に行ったので、俺はいつも通りのメンバーでスライムを狩りに行く。

「そういえば、ルシエは何もしていないんだから、一人でスライムを倒してくればいいんじゃないか？」

「ご主人様、私達サーバントは、長時間ご主人様の側を離れる事はできないのです。だからルシエ一人でスライムを倒して周るのは少し難しいです」

「そうなのか」

「そんな事も知らなかったのか。それでも本当に主なのかよ」

そうは言うけど、サーバント使いは少ないからマニュアル的なものはほとんど無いので実戦での手探りなところが大きい。

しかも以前二階層ヘルシエが一人で行っていた事があるので、少しぐらいなら大丈夫なのだろう。

もしかしたらサーバントについて他にも知らない事はいっぱいあるのかもしれない。

第643話 決死の一階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第644話 特殊能力？（前書き）

本日冬の童話企画に『僕の探し物』というタイトルで短編を投稿しました。
興味があればよろしくお願いします。

第644話 特殊能力？

結局いつもと同じスタイルでスライムを狩ることになった。

少しでも時短になるようにベルリアと俺が同時に攻撃してスライムを倒し、ダンジョンも早歩きで移動する。

既に昼を迎えているが、ミク達とは夕方まで合流しないので、買ってきたウインナーロールと鮭おにぎりを歩きながら頬張る。

「おい！ 休まないのか？」

「まあ、移動時間が長いからな。休憩しているようなもんだ」

「ほとんどビョーキだな。わたしたちはちよつと休みたいぞ」

「いや、ちよつと待て。ルシエは何にもしてないだろ。スライムの一匹でも倒したか？」

「スライムなんか弱すぎて相手にするまでもないんだよ」

「それで休憩はないだろ」

「歩き疲れた！」

「じゃあ、カードに戻ってるよ」

「いやに決まってるだろ。まあいい、さっさと先に進むぞ」

なんでルシエがこの場面で偉そうにしているのか不明だが面倒なので、言われるままに進んでいく。

「ご主人様、スライムです」

「ああ、ベルリアいくぞ！」

「はい」

ベルリアが炎の刀で斬りつけそこに向かって俺が殺虫剤ブレスを吹きかける。

殺虫剤ブレスの本来の力と引火して燃え広がる炎の力であっさりとスライムが焼失して小さな魔核を残す。

それから約二時間ほどダンジョンを歩いたが、そろそろ飽きてきたようで

「海斗、そろそろ休憩にしようぜ。もういいだろ、なあ」

「ずっとは無理でも、ちよつとぐらいなら離れて行動できるんだろ。一人で自由にやってこいよ」

「馬鹿じゃないのか？ 一人でスライムなんか倒して何が楽しいことがあるんだ！ 気分転換どころか気分が余計にわるくなりそうだ」

結局、ルシエがうるさいので五分だけ休憩することにして、サーバント達にスライムの魔核を一個ずつ渡しておいた。

「たったの一個？ ケチツ！」

「ルシエ、文句ばかり言つてはダメですよ。スキルを使った訳でもないのに魔核を頂いているんだから、ご主人様に感謝です」

「シル、騙されるな！ 魔核一個で海斗にいいように丸め込まれるだけだぞ。目を覚ませ！」

「いや、なんにも騙してないだろ。人間きの悪いことを言うな。これ以上文句があるなら返してくれていいんだぞ？」

「ふん、しょうがない。一個で我慢してやる。感謝しろよ？」

どう考えても感謝するのはお前だろ。

そこから更に二時間ほど一階層を歩いて周り、そろそろ出口へと向かう時間が近づいてきた。

「マイロード、今日一日順調にスライムを狩ることができましたね。かなり集中しましたがおよそ七時間ほどでしょうか？」

「ああ、流石にちよつと疲れたな。それにメタリックカラーのスラ

「イムも出なかつたし、順調っていうのはな」

「申し訳ございません。集中のあまり途中からスライムを狩る事で頭がいつぱいになっていました」

「まあ、気持ちはわかるけどな」

「サーバント達と歩いて一階層の出口付近までやってきたが、あと十五分で十七時になるのでちょうどいい時間になったようだ。出口に着くと既にミクは着いていた。」

「お疲れさま」

「思いの外疲れたわ。私は十二匹倒せたけど海斗は？」

「俺は五十五匹だけど」

「五十五！？ そんなに？ さすがというか精神力がすごいわね」

「あんまり精神力は関係ないけど」

「いえ、レベル23で一日七時間以上一階層でスライムを狩り続ける事ができるのは海斗だけだとおもっわ。ある意味すごいのよ」

「ミクの物言いが褒めてくれているのか、それともバカにしているのかは難しい所だが、俺にとって唯一とも言える特技のようなもので七時間ぐらいは全く苦にならない。」

第644話 特殊能力？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第645話 一日目が終わった(前書き)

第645話 一日目が終わった

「海斗は五十五匹か。凄まじいな。すまない私は十匹だけだ」

「スライムに出会うのもある意味運ですからね」

「いや、そうじゃないんだ。実は途中まで殺虫剤を使わずにスライムを倒していたんだ」

「え？ 三本じゃ足りなかったですか？」

「私の修練が足りなかった。どうしても探索者として武道家としてのプライドが邪魔をして、殺虫剤でスライムを倒すことに躊躇ってしまったんだ」

「ああ……」

「途中で数が伸びていない事に気がついて、やむなく殺虫剤を使ってみたんだが、殺虫剤は思った以上にヤバいな」

「そうですか？」

「薙刀ではそれなりに時間をかけて攻撃しなければ消滅しないのに、殺虫剤だとあっという間に倒せてしまったよ。己の未熟さを痛感してしまったよ。明日からはありがたく殺虫剤をメインでいかせてもらう」

「どうやら今日一日であいりさんにも殺虫剤ブレスの威力をわかってもらえたようだ。」

「ある意味同志が増えたようでなんとなく嬉しくなってしまう。」

「ミクは殺虫剤使ったのか？」

「私も最初は『ライトニングスピア』とスピットファイアを使ってたんだけどMPが勿体無いから、すぐに殺虫剤に切り替えたわ。コスパもいいし、一階層で殺虫剤は必須ね」

どうやらミクも良さをわかってくれたようだ。これで更に同志が増えた。

あまり増えすぎると、俺の商売敵になっても困るが、パーティーメンバーはその対象外だ。

「それじゃあ、今日で七十七個ですね。初日には結構いった方かも知れませぬ。ラッキーセブンだし、あと二日です。頑張りましょう」

「ああ、明日は期待してくれ」

「私も頑張るわ」

俺は念のために帰り道、ドラッグストアで殺虫剤を十五本買い増しておいた。

これであと二日は十分いけるはずだ。

家に帰ると、今日のご飯はトンカツだった。

「カツカレーでもよかったんだけど、カレーばかりもあれでしょ」

どうやらカレーばかりという自覚はあるらしい。

俺としては一昨日春香の極上カレーを食べたばかりだからカレーじゃなくてよかったけど、あれってなんだあれって。

最近、母親が、あれとかそれとか言う回数が増えてきて意味不明な会話が多くなってきた気がする。

ちよっと心配だから今度は人間ドックでもプレゼントしてみようかな。

「あくなんかこのトンカツ美味しい気がする。いつものより肉に甘みがある気がするんだけど」

「海斗にもわかる？ これはね、薩摩の黒豚よ。普通ブタよりも美味しい高級ブランドブタよ」

「へっつ、そうなんだ。柔らかだし脂に甘みがある気がする」

「そうでしょ、そうでしょ。奮発した甲斐があったわ」

「なん急に奮発したんだよ。今日って何かあった？」

「だって、海斗が私達にプレゼントしてくれるほど稼ぐようになったし大学の学費も自分で出してくれるんですよ。王華ならここから通えるし、海斗のために学資貯金しなくて良くなったから、その分ちよつと贅沢しようと思って」

「ああ……」

確かに俺は稼げるようになったし、学費も自分で出すけど現金なものだな。

流石は母さん。

まあ、俺も美味しいものを食べられるからいいけど。

第645話 一日目が終わった(後書き)

お正月SS（前書き）

皆さんあけましておめでとつございませう。

予定していませんでしたが、朝思ひ立つて急遽お正月SSを用意しました。

天候も荒れ、コロナも猛威を奮っています、暗い出来事の多かった去年が終わり、今年一年皆さんにとって良い一年であることを願っています。

みなんで頑張って乗り切りませう。

お正月SS

今日は一月一日お正月だ。

ダンジョンには休みはない。

三百六十五日ゲートは毎日開かれる。

お正月ぐらい休めばいいのにも思うが、休日探索者にとってはありがたい限りだろう。

そしてお正月はいつもより早く起きて爽やかな新年を迎える。

家の外に出ると一面の雪。

今年は記録的な寒波が一昨日からやってきて、雪が積もってしまったので、楽しみにしていた春香との初詣もキャンセルになってしまった。

慣れない雪とこの寒さでは仕方がない。

なので俺は予定がポツカリと空いてしまったので、考えた結果、去年同様朝からダンジョンへと向かうことにした。

「あけましておめでとつございます」

「ああ、おめでとつ」

俺は入り口の職員の人に新年の挨拶をしてから中へと向かう。

中には既に結構な数の探索者が来ていた。

ただ、クリスマス同様に男性の探索者のみだ。

中には、着物姿の探索者も混じっている。

完全にお正月仕様だが、あの格好でモンスターと戦う気なのか？

「おお、『黒い彗星』あけましておめでとつ」

「あ、はい。あけましておめでとつございます」

見たことのある探索者が挨拶してくれたので挨拶を返す。

「今日は、こんな天気なのに結構な数の探索者がいますね」

「まあ、非リアの探索者が考えることなんかみんな同じって事だよ。ダンジョンに外界の天気は関係ないからな。ほら、あそこに即席のダンジョン神社も出来てるし、新年はダンジョンだろ」

そう言われて見てみると、小さな社のような物が祀られてある。去年こんなのがあったかな……

俺は挨拶を済ませるとダンジョンへと潜りサーバント達を喚びだした。

「みんな、あけましておめでとう」

「はい、おめでとございませす。今年もよろしくお願いします」

「一年前もやった気がするけど、何がめでたいのか全くわからないな。まあ一応よろしくね」

「このベルリア今年も変わらぬ忠誠を誓います。よろしくお願いいたします」

シル以外はおかしいな新年の挨拶だが、お正月には破魔矢とかもあるし寧ろめでたくないイベントなのかもしれないので仕方がないのでかもしれない。

いくら悪魔でも破魔矢に触ると浄化されて消えたりはしないよな。前バーベキューした時に普通に塩も食べてたから大丈夫っぽいけど。

「ご主人様、スライムです。ご準備ください」

「ああ、わかった」

縁起物とも言うべき今年のファーストスライムは残念ながらメタル

カラーではなく、通常の黄色のスライムだった。

「ベルリア！」

「お任せください！」

いつもの手慣れたルーティーンでスライムを倒す。

今年も順調にベルリアとの連携でファーストスライムを倒す事に成功した。

黄色のスライムに特別感はないがなんとなく運気が良くなったり金運が上がるような気もするので、今年はいい感じかもしれない。

一日中スライムを狩り続けていると時間の経つのは早いものであるという間に夕方になってしまった。

「よし、それじゃあ今日はこれで終わろうか」

俺は初狩りを終えて入り口へと戻るが、流石に朝と比べると人が少なくなっていた。

見ると社には誰も並んでいない。

「よし、せっかくだからこれをあそこに投げ入れてみんなで手を合わせよう」

「何か意味があるのか？」

「まあ、簡単に言ってお金を入れてお願いと叶うかもしれないって事だ」

詳しく説明してもあまり意味はなさそうなので、三人にそれぞれ百円を渡して四人で賽銭箱目掛けてお金を投げ入れる。

サーバントの三人は流石のコントロールとスピードでお金を投げ入れて手を合わせてお願いを始める。

「どうか春香と上手くいきますように。探索者として上手くいきますように。受験が上手くいきますように。みんなが無事で仲良く過ごせますように」

ちよつと百円では欲張りすぎたかもしれないが、どれも外す事ができない願いなので一気にお願いを済ます。

他の三人もお参り終えたようなので聞いてみる。

「シルは何をお願いしたんだ？」

「もちろん、ご主人様の無病息災です」

ああ、シルはやっぱり天使だ！ 俺の事を願ってくれるなんて。

「ルシエは？」

「あ？ もちろん魔核をいっぱいもらえるようにだ。特に赤いやつな」

シルに気を良くしてこいつに期待した俺が馬鹿だった。

「ベルリアは？」

「もちろん姫達の息災です。それともちろんマイロードの息災も」

やはりこいつも俺の優先順位がおかしい気がするがルシエよりはまし。

俺への思いにそれぞれ差は感じるが、いずれにしても今年一年誰も欠ける事なくこのメンバーで探索を頑張りたいと思う。

皆さんあけましておめでとつございます。

今年もよろしく願います。

お正月SS（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】に願います

第646話 二日目(前書き)

皆さんの応援でついに大晦日の23時台に60000P達成しました。
すごいタイミングでしたが本当にありがとうございました。

第646話 二日目

「今日こそメタリックカラーのスライムを倒しましょう!」

「ああ、今日は最初から殺虫剤を使わせてもらおう」

「私もやるわよ」

「じゃあ、一応これ渡しておくから」

俺は昨日買っておいた殺虫剤を二本ずつ渡す事にした。

「海斗いったい何本持ってるのよ」

「まだ十本以上あるからまかせてくれ!」

「とりあえず私もこれを使い切れるぐらいスライムを倒すよう頑張るよ」

準備を整えてから、それぞれが散開してスライムを探して回る。

「ご主人様、スライムです。ご準備をお願いします」

「ああ、わかった」

今日のファーストスライムはオーソドックスなブルーースライムだ。

「ベルリア!」

「おまかせください!」

バルリアが慣れた手つきでスライムを炎刀で斬る。

俺は連携をとり間髪入れずに殺虫剤ブレスを放つ。

ブレスと同時にスライムが一気に燃え上がり、しばらくすると消滅して地面には小さな魔核が残された。

「よし！」

今日も調子良くいけそうだ。

それからは、昨日と同様スライム狩りに没頭する。

既に三時間半探索を続けているが、この段階で狩ったスライムの数は三十二個。

まずまずのペースできているが、残念ながらメタリックカラーのスライムにはまだ出会えていない。

「そろそろ休憩にしようぜ。歩き疲れた！」

「いや、一階層で休憩は無しだ」

「暇なんだよ。同じ事の繰り返しで飽きた！」

「ルシエ！ 昨日も同じ事を言っただけで、そもそも十七層で絶対に霊薬がドロップするって言っただけじゃなかったか？」

「は？ そんな事言っただけじゃないけど！」

「いや、わたしがいるんだから間違いない！ まかせとけって言っただけだろ！」

「うっ……それは、あれだ！ そのうち出るって意味だ」

「それじゃあ、今頑張らないとな。そのうちって今の事だよな」

「ま、まあ、そうだな」

もしかしたら、十七階層で霊薬がドロップしなかったのはルシエの影響もあるのかもしれない。

あの十七層での根拠の無い自信に溢れた言動がマイナス要因に働いた可能性も否定できない。

なにしろ本物の悪魔だ。幸運とは対極に位置していても不思議はない。

しかも俺達のパーティには地味にベルリアもいる。

いくらシルがプラス要因として作用したとしても、悪魔二人分のマ

イナス作用の方が大きい気がする。

とりあえずルシェが大人しくなったので、そのままスライム探索を続ける。

今日はちよつと贅沢にサンドウィッチとたらこのおにぎりだ。

昨日と同じように歩きながら食べる。

一人だけ食事を取るのも気が引けるので、サーバント達にもお昼ご飯の代わりに魔核を一個ずつ渡しておく。

たまにはサンドウィッチも美味しいな。おかずパンよりも高額なのでたまにしか買わないけど、いつもと違った味わいで満足度は高い。ただ、パンの部分が薄くてスカスカなので、普通のパンに比べてなんとなく損した気分になってしまう。

そういえば他の二人はお弁当のはずなので、一階層のどこかで食べているのだろう。

まあ一階層なので危険はないと思うけど、若い女の子がダンジョンの片隅で一人でお弁当を食べている絵面は結構シユールだな。

ダンジョンぼつち飯……

二人の食事の風景を思い浮かべてラノベの題名になりそうなネーミングを思いついてしまった。

あ、でもミクはスナッチがいるから一人と一匹だった。

第646話 二日目（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第647話 でない…

サンドウィッチとおにぎりを完食したのでこれであと残り半分頑張れる。

「午後からは、シルとルシエも戦闘に参加するか？」

「嫌だ！」

「ご主人様、メタリックカラーのスライムが出現する仕組みがはつきりしない以上、ご主人様が倒すのが一番可能性が高いと思います」「まあ、確かに」

退屈しているルシエ達にもスライムを倒してもらおうと思ったけど、ルシエの言うことももつともだ。

結局、今までと同じやり方でスライムを狩っていく。

「でないな……」

「そうですね。数だけで言えばもう出てきてもおかしくないと思います」

「そうだよな。今までで一番数をこなしてると思うし、流石に焦ってくるな」

「お気持ちはわかるのですが……」

「いや、シルのせいじゃないから気にしないでくれ」

今日も既に五十に近い数のスライムを狩っているが、いつもと同じスライムしか出てこない。

スライムを狩ること自体はいつもの事なので全く苦には思わないが、残り時間が徐々に減ってしまっている事に焦りとプレッシャーを感じる。

こんな事なら十八階層を進んだ方がよかったかもしれない。
みんなを説得して一階層に来たのは俺だ。

俺の決断が間違っていたなら責任の取りようがない。
時間は有限だ。

過ぎた時間を巻き戻す事はできない。

恐らくこの調子でいけば、今日も残りの時間でメタリックカラーの
スライムが出現する可能性は極めて低いだろう。

となれば実質フルで潜れるのはあと一日。

最悪明日がダメなら平日の放課後も俺は潜るつもりだが、効率は格
段に落ちる。

成果が出ないとネガティブな考えばかりが頭をよぎり、不安に押し
潰されそうになるが、ここで休むわけにはいかない。

ここで休んでしまえばその時点で可能性が無くなってしまう。

俺は胃に鈍い痛みを感じつつダンジョンを早歩きで進んでいく。

「ご主人様、そろそろお時間です」

「ああ……そうだな。そろそろみんなと待ち合わせた時間だし、今
日はこれで切り上げよう」

「はい」

スライム狩りに集中し過ぎて時間を確認していなかったが、もうあ
と十五分で約束の時間だ。俺達はスライム狩りをやめ、入り口の待
ち合わせ場所へと急ぐ。

結局十分ほど遅刻して入り口へと着いたが、俺達が到着した時には
既にミクとあいりさんは戻ってきており、待っていてくれた。

「はあ、はあ………すいません。お待たせしました」

「その様子じゃ今日もダメだったようね」

「ああ、ギリギリまで粘ったんだけど、ダメだった」

「私も昨日よりは数を倒したんだが、メタリックカラーのスライム

には会えなかった」

「わたしも。今日は十九匹まで数はいったんだけど」

「昨日より大分増えたな。俺は昨日とほぼ同じで六十八匹だった」

「海斗は流石だな。私も昨日よりはスムーズにいったから二十匹だ」

「三人で百は超えてますね。順調ですよ。昨日よりはだいぶ増えましたから、これなら明日に期待が持てますね！」

俺はいつも以上に明るく振る舞って二人に笑いかけた。

「ああ、そうだな。明日こそだ」

「そうね。この調子でいけば明日はもつといけるわね」

「そうですよ。明日に期待です。頑張りましょう！」

俺にできる事は限られているが、パーティのリーダーは俺で、責任は俺にある。

俺にはメンバーの気持ち但至少でも楽になるようにふるまう必要がある。

不安は尽きないが、明日に全てを賭けるつもりで頑張るしかない。

第647話 でない…（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第648話 運命の三日目

昨日の夜はあまり眠る事が出来なかった。

メンバーへの態度とは裏腹に自分の感情と思考をコントロールする事がうまく出来ずに、寝つけなかった。

スライム相手なので、寝不足でも何か起こる可能性は限りなく低い。が、七、八時間歩き続ける事を考えるといい事とは言えない。

それでも今日でゴールデンウィークは終わってしまうので、身支度を済ませていつもより早めに家を出る。

待ち合わせの三十分前にダンジョンの入り口に着いたが、既にミックとあいらさんは待っていた。

「二人共早いですね」

「海斗も三十分前よ」

「まあ、そうだけど」

「まあ、三人共気合いが入っている証拠だな」

「はい」

あいらさんはこう言っているが三人共気持ちは一緒だろう。

『約束』と『不安』

一人でいると押しつぶされそうになる。

メンバーと一緒にならどうにかなる。ダンジョンに潜ればなんとかなる。

「ちょっと早いけど準備しながら行きましょうか」

「ああ」

「そうね」

俺達は装備を整えて三日目の一階層へと臨んだ。

正直今日ばかりはルシェとベルリアを喚ばない事も考えたが、確実にマイナス要因であるとは言いつれぬ為に結局いつものスタイルでスライムを狩っていく事にした。

あとはシルの恩恵と俺のスライムスレイヤーとしての幸運に賭けるしかない。

三日目のファーストスライムは黄色のスライムだ。

黄色は赤や青に比べれば、出現率が低いのでなんとなく幸先がいい気がする。

「ベルリア！」

「マイロード、お任せください」

更に精度の上がった連携で黄色のスライムを消滅させる。

少しだけレアなスライムとは言え、あくまでも普通のスライムなので当然魔核もいつも通りだ。

はやる気持ちを抑えきれずに、移動が早足から駆け足へと変わる。

ただこれがよくなかった。

レベルアップしてステータスの補正を受けているとはいえ、フル装備の状態であれば当然体力が減る。

しばらくの間は気持ちが体力の減少を誤魔化していたが、三十分を過ぎたあたりで完全に俺の足は止まってしまった。

「はあ、はあ、はあ。くそっ！」

情け無い。三十分程度走っただけなのに完全にグロッキー気味になっってしまった。

足と身体が重い。

前に進む一步がなかなか出ない。

「ご主人様、このまま無理をするよりも一度休んだ方がいいと思います」

「いや……そうだな。五分休もう」

俺が少しでも多くのスライムを狩ろうと焦ったせいで、余計効率が下がってしまった。

「マイロード、お気持ちはわかりますが、昨日までも、ほぼ限界まで効率を追求しています。これ以上は難しいと思われます。昨日までのスタイルに戻しましょう」

「……ああ、そうだな」

俺よりもサーバント達の方がよほど状況を冷静に判断出来ている。スライムスレイヤーなんてスキルがあっても、まだまだ全然だな。それにしても休憩をすすめてくれたシルに俺に助言をくれたベルリア。

俺は本当にサーバントに恵まれているなあ。

「後先考えずに走るってただのバカだろ。しかも一人だけダウンってダサッ！ 身の程をわきまえろ。身の程を！」

その通りなので言い返す言葉を持たないが、コイツは……

第648話 運命の三日目（後書き）

第649話 焦りとルシエ

ルシエのせいでサーバントに恵まれていると思った側から、その考えを撤回したくなる。

何もしないルシエは口だけ出してくる。

精神的に追い詰められている今は正直面倒くさい。

休憩している間も、色々と言ってくるが完全のスルーする。

貴重な時間を使って回復に努めているというのに、完全にルシエが妨げとなっている。

「よし、そろそろ行こうか。今度は走るのは無しで、いつも通りのスピードで行こう」

「そんな事は言われるまでも無いんだよ！ バカじゃない？」

くっ……

ここはスルーだ。ルシエに構って無駄な体力を使うべきじゃない。俺は、いつものように早歩きで一階層を進んで行くが、休憩をとったお陰で大分動けるようになってる。

「ご主人様、スライムです」

「おおっ！ 珍しいな。二匹いる」

スライムは、基本単独でしか現れないので、たまたま別々にいたスライムが合流した形なのだろう。

ただ今の俺にはありがたい。

一度に二匹倒せると効率は倍になる。

俺は両手に殺虫剤を構えて二体のスライムめがけて走り出す。

「ベルリア！」
「お任せください」

ベルリアも併走して走り出すが、何故かルシエが背後から俺を追い抜いて行った。

何をしようとしているのかは全くわからないが、俺がやることは決まっているので気にせずターゲットのグリーンカラーのスライムへと向かう。

「さつさと消えてなくなれ！ 気持ち悪いんだよ！」

前方からルシエの声が聞こえて、目を向けると、手に持つ魔杖で思いつきりスライムをぶっ叩いた。

いつもなら『ボヨヨ〜ン』と冗談のような音を立てて消滅するスライムが、『ベチャツ』という音と共に潰れて消滅してしまった。

「あゝ汚い！ 服についちゃうだろ〜！」

圧倒的……

ルシエがスライムを相手にするとこうなるのか。

シルがやっても同じような結果になるのは間違いないな。

規格外を見ても参考にはならないので、俺はベルリアの斬ったグリーンスライムに向けて殺虫剤ブレスを放ち消滅へと追いやる。

ルシエのおかげで一瞬で二匹のスライムを倒す事が出来た。

なんの気まぐれかはわからないがここは素直に感謝だな。

「おい！ お腹が空いた」

「え？」

「戦ったからお腹が空いたんだよ。魔核をくれよ」

「……………」

こいつは……

「何黙ってるんだよ。早くくれよ」

「わかったよ」

俺が間違っていた。ルシエには感謝など全くする必要がなかった。気を取り直して次のスライムを求めてダンジョンを探索する。その後は、ルシエが邪魔してくる事も無く順調にスライムを狩っていく。

「今ので六十一匹目か……」

「はい。六十一匹目です」

既に今日のスライム討伐数は六十一匹となっている。今日もかなりの数を狩っている事になるが、この数は昨日と一昨日の討伐数に迫る。

つまりは、今日もあと少しで待ち合わせの時間になってしまう事を意味している。

やばい……

でない……

全く出る気配が無い。

普通のスライムしか出てこない。

もしかして、もう出ないのか？

数を倒せば出るってものでも無いのか？

焦りが俺を支配して行く。

今日の午前中のように焦っても何もいい事が無いのはわかっているのに焦ってしまう。
もう時間がない。

「ご主人様、前方奥にスライムです」
「ああ、わかった」

俺はシルの声に反応して前方へと駆け出した。

第649話 焦りとルシエ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第650話 ついに

「ああああっ！ あれって、あれだよな！」

「ベルリア！」

「はい、私にもそう見えます」

「そうだよな！」

進んだ先にはついに待ち焦がれたピンクゴールドっぽい色のスライムが佇んでいた。

今まで出現した事のあるメタリックカラーとは色が違うが、間違いなく普通の色では無い！

こいつだけは！ こいつだけは、なにがなんでもしとめなければならぬ。

俺が思わず出した大声に反応して、ピンクゴールドのスライムが回転した。

絶対に逃がさない！

「シル！ ルシエ！」

「おまかせください。絶対に逃しません『神の雷撃』」

「ここまで待ったんだ！ 逃がすわけがないだろ！ 燃え尽きる『炎撃の流星雨』」

二人の攻撃を待たずして俺も最大の一撃を放つ。

「絶対に逃がさない！ 『愚者の一撃』」

「逃げられると思わないでください『ヘルブレイド』」

四人の攻撃が、その矮小なモンスターへと集中する。

逃げようとして逃げられるはずは無い。

轟音と共に攻撃がピンクゴールドのスライムへと命中する。完全なるオーバークル。

考えるまでも無くオーバークルだが、そんな事はどうでもいい。俺のHPも一気に減ったがそんな事は問題では無い。

このスライムに全てを懸けていると言っても過言では無い。ただ次々に極大ともいえる攻撃が命中するのを見て、存在そのものを消し去ってしまうのでは無いかという一抹の不安を覚えてしまった。

ルシエの『炎撃の流星雨』がおさまるのを待つて、スライムのいた場所を凝視する。

徐々に視界が晴れてくる。

当然。ピンクゴールドのスライムの姿はそこには無い。

どうやら無事にしとめる事は出来たようだ。

あとはドロップ……

「ベルリア！ どうだ？」

「マイロード、今確認しています」

どうだ？

とりあえず今見える限りでは魔核は残されていないように見える。

魔核だと小さくても、キラキラしているのですぐに目に入るが、それは無い。

魔核がなければドロップがあるはず。

まさか何も無いという事は無いはずだ。

「マイロード、あそこに」

「どこだ？」

「あそこです」

ベルリアが指す場所を食い入るように凝視する。

俺にはまだ何も見えなかったが、フラフラとしながら歩いて行く。

「ご主人様、先に回復を！」

「いや、大丈夫だ」

本当はHPが一桁まで減っているので大丈夫では無いが、それどころじゃ無い。

これで運命が決まると言っても過言では無い。

そのままフラフラと進んで行くと俺の目にもはっきりとそれが映った。

あれは……

間違いなく『サーバントカード』

既にこれまでに三度見ているので間違いようが無い。

「おおおおおおおおおおおおお〜っ！ でああああああ〜っ！」

ついに、ついに出了た！ 四枚目のサーバントカードが出た。

この瞬間俺は賭けに勝った。

明らかに今回は2000匹を遥かに超えた数を狩ったはずなので、一定数を狩れば現れるという根拠が揺らぐ中で、これしか無いとスライム狩りに賭けたが、結果的に俺は運命に勝った。

これで……

これでヒカリンが……

俺はサーバントカードのところまで歩き、地面に残されたそのカードを手に取った。

第650話 ついに(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第651話 4枚目のカード

「頼む〜！ 今回は絶対に外せないんだ！ とにかく頼む！ 頼んだぞ〜！」

俺は手に取ったサーバントカードを裏返す。
これでレアなサーバントなら霊薬が買える。

間違ってもゴブリンとかは絶対にあってはならない。

心臓の鼓動が速くなる。

どうだ！

思い切って見たカードにはトップアイドルなんか全く及びもつかない、スーパーアイドルを遥かに凌ぐ、超絶可愛い女性が。

ふわりとしたピンク色の髪が特徴的だがこのサーバントは……

俺はサーバントカードに記されているステータスを確認する。

種別 フェアリークイーン

NAME テイターニア

LV 1

HP 65

MP 73

BP 66

スキル ウィンガル キュアリアル ユグドラシル

装備 妖精衣 ティンカート

「お？ おおおおおおおお！？ これだ？ 出たよな？ 多分出た？」

カードに描かれたサーバントの容姿は、どこからどう見てもゴブリ

ンには見えない。その容姿はどこからどう見ても美少女！ いやレアカードのそれだ。

俺は落ち着いて手の中のサーバントカードのステータスを確認する。種族がフェアリークイーンと記されているので、このカードは妖精。しかも妖精の女王。

ステータスを見ると各数値は初期のベルリアと比べて少し劣るようだがL V 1としては十分に高い。

特筆する点はスキルが三つあるようだ。

シルヤルシエでもL V 1の時にはスキルは二つしかなかったのにこのサーバントは三つある。

ただベルリアと同様に武器の表示が無いので、何か訳ありなのかそれとも後方支援専門なのかもしれない。

だが、それを鑑みてモレアカードに間違いない。

俺の勝手な値つけだと一億は堅い。もしかするとこの風貌ならエロ探索者が入札してくれば、もっと出す人もいるかもしれない。

きつとこれならイケる！

「やったあああああ〜！」

俺はやった。遂にやった。

俺のテンションは一気にMAXになり叫び声を上げてしまったが、その瞬間目の前が真っ暗になり意識が遠のいた。

あ……………

「……………っ」

「……………と」

なんだ？

「……………様」

「……………ろっ」

誰かが呼んでいる。

「……………人様」

「……………きろっ！」

俺は……………

確か意識を……………

そっだレアなサーバントカード。

俺の意識が一気に覚醒する。

「サーバントカード！」

「ああっ、よかった。ご主人様気がつかれましたね」

「ようやく起きたか。テンション上がりすぎて倒れるなんてありえないだろ」

「ああ……………それよりもサーバントカードは？」

「大丈夫です。ご主人様の手の中に」

シルに言われて右手を見ると先程のサーバントカードがしっかりと握られていた。

「ご主人様、以前同様にポーションを使用させていただきました」

「ああ、助かったよ。HPがほとんど無かったのにテンションが上がって大声を出したのが良くなかったんだな」

「だから、わたしは先にポーションを飲むように言ったんだよ」

ん？ 確か先に回復を勧めてきたのはルシェではなくシルだったはずだ。

いずれにしても俺は一階層での目的を果たしたので、すぐに一階層

の入り口へと向かった。

第651話 4枚目のカード（後書き）

第652話 やりました

入り口の待ち合わせ場所に着いたが、まだ他の二人の姿は見えない。俺のマジック腹巻には先程手に入れたフェアリークイーンのサーバントカードが仕舞われている。

ついさっきまで俺の中を支配していた焦燥感はすっかり消え去り、今は達成感と充実感でいっぱいだ。

『愚者の一撃』の影響で少し身体は重いが、それ以上に心が軽い。胃の不快感もすっかり消えている。

待っている間にもその事を実感する。本当によかった。

しばらく待っていると、まずミクが現れた。

ミクの顔は、真っ青で泣きそうな顔をしている。

「海斗、ダメだったわ……」

「ミク、俺はいけた」

「え？」

「いや、だから俺はいけた」

「いけたってどういう意味？」

「目的を達成したって意味だけど」

「うそ……」

「嘘じゃないって。ほら」

そうやって俺はマジック腹巻からフェアリークイーンのサーバントカードを取り出してミクに手渡した。

「これは……確かに本物のサーバントカードみたいね」

「ミク、流石に俺にはここで偽物を出す勇氣は無いよ」

「それはそうね。じゃあ本当に手に入れたのね」

「ああ」

「このカードは……フェアリークイーン。聞いた事は無いけど、この風貌だしレアカード間違いなしよね」

「俺もそう思う」

「しかもこの感じ、好きな人にはたまらない感じなんじゃない？」

「やっぱりそうだよな。誰か高値で買ってくれればいいけど」

「絶対いるわよ。この感じが好きなお金持ちのエロ探索者！」

ミクも俺の考えとほぼ同じらしい。やっぱりこのアイドルを更に昇華したような風貌は、その層には絶対受けるはずだ。

ミクと話しているうちにあいりさんが戻って来たが、やはり顔色が悪い。

「すまない。だめだった。もう……」

「あいりさん！ 俺やりましたよ」

「やりました？ 何をだ？」

「何をつてこれですよ。これ」

俺はミクに渡したサーバントカードを指差す。

「これは… なんだ？」

「いや、あいりさんサーバントカードですよ。決まってるじゃないですか」

「うそ……」

ミクと全く同じ反応。俺ってそんなに信じられていなかったのか……。

「嘘じゃないです。ピンクゴールドのスライムが出たんですよ」

「信じられない。本当に出たのか」

「本当です」

「それを見せてもらってもいいか？」

ミクがあいりさんにサーバントカードを手渡す。

「これは……確かに新しいサーバントカードの様だな。フェアリークイーンか。聞いたことは無いが、妖精の女王、レアカードに間違いないな。しかもこの風貌、絶対に人気が出るな」

「あいりさんもそう思いますか？」

「ああ、間違いない。アニメ好きなら絶対だ！ これは買いだ！」

あいりさんがこう言っているので間違いないだろう。

問題はこのカードの買い手としてその層の探索者が入札してくれるかどうかだが、ここまで条件が揃っているのもう間違いはないだろう。

後はオークションで少しでも高く売り、そのお金で霊薬を手に入れるだけだ。

話をしているうちにミクもあいりさんも顔色が良くなってきて表情も明るさが戻ってきた。

第653話 オークション？

俺達は急いでギルドへ向かった。

急げば、まだ窓口も開いているはずだ。

ギルドに着くと、すぐに日番谷さんの元へと向かった。

流石にこのカードを馴染みのないギルド職員に相談は出来ない。

「日番谷さん、ちょっといいですか？」

「高木様、今日はどうされましたか？」

「あの、これなんですけど」

俺はフェアリークイーンのサーバントカードを取り出して日番谷さんへと渡した。

「これは……サーバントカードですか？ 少し失礼します」

「はい、どうぞ」

日番谷さんが渡したカードを確認しはじめる。

「高木様、このカードは普段高木様が使用されているカードとは違うようですが」

「そうです。今日手に入れた新しいカードです」

「まさか、四枚目……。しかもフェアリークイーン？ レア中のレアカードですよ。いったいどうやって……」

「すみません。入手方法は秘密です」

「そうですよね。失礼しました。それでこのカードは、どうされるおつもりでしょうか？」

口が裂けても一階層で手に入れたなどとは言えるはずがない。

「それなんですけど、俺達どうしても霊薬が欲しいんです。だからこのカードを売ってその代金に充てたいんですけど、いくらぐらいになりそうですか？」

「そうですね。はつきりした事は言えませんが、オークションであればスタート価格が一億円からといったところでしょうか？ 実際にそこからどの程度上がるかはその時次第なのでなんとも言えませんが、この風貌であれば数倍に跳ね上がっても不思議は無いかと」

日番谷さんの口ぶりから、思った通りこの感じが好きな層がいるのは間違い無さそうだ。

やっぱりこのサーバントカードは当たりだ。

「そうですね！、それなら霊薬も買えますよね。それじゃあ、すぐにこれをオークションにお願いします」

「かしこまりました。それではオークションの手数料は販売代金の五パーセントとなりますがよろしいでしょうか？」

「はい、大丈夫です」

「それでは、次のオークション開催は七月二十日となりますので、それまでこのカードをお預かりしてもよろしいでしょうか？」

「え？ 今なんて……」

「はい。オークションまでカードをお預かりさせていただきます」

「いや、それじゃなくて次のオークションが……」

「はい、次のオークションは七月二十日になります」

「……………」

「なっ……………」

「嘘でしょー！」

次のオークションの開催が七月二十日？ 後二ヶ月以上先じゃない

か。それじゃあ、カオリンが間に合うかどうか……そんなバカな。

「それって、もっと早くはならないんですか？」

「オークション自体が年四回のみなので、こればかりは……」

年四回という事は三ヶ月に一度。もしかして今ってオークションが開催された直後なのか。

こんな事って……

「ちなみに、次のオークションで霊薬はいくらぐらいで出品されるんでしょうか？」

「そうですね。霊薬の種類にもよりますが二億円からぐらいでしょう。ただ次のオークションに霊薬が出品されるかは、今の段階ではわかりかねます」

「え!？」

次のオークションに霊薬が出品されるかどうかわからない？ そんな事あるのか？

俺は今の今までオークションでは必ず霊薬が取引されていると思っ込んでしまっていた。

第653話 オークション? (後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第654話 詰め

「ひとついいですか？ 霊薬ってオークションで手に入るんですよね」

「はい、それは間違いありません。一般に流通する事はほとんどありませんので、探索者組合のオークションで手に入れるのが一番現実的です。ただこればかりは、その時のドロップ次第ですので確約はできないのです。実際にオークションで霊薬が出品されない事もあります」

「そんな……」

サーバントカードを手に入れた段階で俺は完全に目的を達成したつもりでいた。

それなのに、オークションの開催は二ヶ月以上先。しかもその時に霊薬が買えるかどうかはわからない。もしその次になると半年先……無理だ。どう考えても無理だ。

そもそも七月二十日までヒカリンの身体がもつのか？

逆にそこまで時間がかかるんだったら十八階層を攻略するという選択肢もあるが、そこまでの時間は無いという判断で一階層に全てを懸けていたのだから、それは……

「高木様、オークションに出品されますか？」

「いや……あの……」

「海斗、一旦ここは引き上げよう。オークションまでは、まだ時間もある。今決めなくてもいいだろう」

「そうよ。七月二十日じゃあ、多分……間に合わないと思う」

「……日番谷さん、今日は出直します。すみません」

「わかりました。出品の申請は三週間前まで可能ですので、必要が

在ればいつでも申し出てください」
「ありがとうございます」

俺達は、一旦サーバントカードを返してもらいギルドの外へと出た。三人共ギルドへ来た時とは全く別人のようにテンションが低くなってしまっている。

「どうすれば……」

「参ったな。縁が無かったからオークションの開催日まで把握しなかつたな」

「オークション以外でカードと霊薬の売買ってできないの？」

「多分、業者を介すれば可能かもしれないけど、当然値段は倍以上になってもおかしくない。それにカードも仕入れ値で買い叩かれるだろうから金額が足りなくなると思う」

「正規の業者以外は、そもそも偽物を掴まされるリスクもあるから、現実的ではないな」

「じゃあ手は無いの？ ようやくカードを手に入れたのに！」

正直、完全に詰んだ。

今までは微かな希望を持てるルートが存在していたが、それが時間というどうしようも無い壁に阻まれて完全に途絶えてしまった。

「一応ヒカリンのパパに、今の状況を説明して七月二十日の件も伝えてみるよ」

俺は途切れてしまった可能性を再度繋ぐ為、ヒカリンのパパへと電話する事にした。

「はい。高木です。はい。それで……はいそうです。光梨さんは……はい。そうですか……はい。じゃあ難しいですね。……わかりま

した」

ヒカリンのパパとの電話を終えた。

「海斗……どうだった？」

「ああ、やっぱりそこまでは難しいみたいだ」

「そう……」

「海斗、時間はあとのぐらいあるんだ？」

「体調も日によってかなり波があるようなんですけど、二日前になりひどい症状が出たみたいで、一気に体力を奪われたみたいです。だから今の調子だと二ヶ月は厳しいだろうって……」

「そうか……」

やはり、俺の俺達の希望が絶たれてしまった。

本当にこれで終わりなのか？

もうヒカリンを助ける術は無いのか？

第654話 読み（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第655話 カードが鍵？

絶たれた希望を必死に繋ぐために頭をフル回転させる。

一番現実的なのは、申し込み期限であるオークションの開催日の三週間前、六月末までサーバントカードの売却を先延ばしにする事だ。その段階でおそらく、霊薬の出品の有無が確認できるはずだ。ただこれも不確定要素が大きすぎる。

第一にヒカリンが七月二十日までは難しいという事。

第二に霊薬が出品されない可能性がある事。

第三にサーバントカードの売却金額で霊薬が買えるかどうかは当日のオークション次第であるという事。

シルが結果は偶然による産物ではなく必然によるものだと言っていた。

正直俺は結果ありきの運命論はあまり好きではない。

全ての行動が既に決まってしまうている結果に収斂するのであれば、自分の努力や選択が無駄にも思えてしまうからだ。

ただ今だけは、その運命論にも縋りたい。

運命であっても時間の壁は越えられない。

そうであるなら、可能性としては二つ。

ヒカリンの病状が改善してリミットが伸びる、もしくはそれ以外の選択肢がある可能性。

ただ、今の俺達に選択肢は一つしか残されていないようにも思える。

「海斗、もう一度サーバントカードを見せてもらってもいいだろうか？」

「え、ああ、どうぞ」

あいりさんが声をかけてきたのでカードを取り出して渡す。
あいりさんが念入りにカードを見ている。

「どうかしましたか？」

「私にはどうしてもシル様の言っている事が間違っているとは思えないんだ。実際にこうやってサーバントカードも出たわけだしな。とにかくこのサーバントカードが鍵なのは間違いない。それならばオークションで売却する以外の可能性がこのカードにはあるんじゃないだろうか？」

どうやらあいりさんも俺と同じ考えに行き着いたようだが、俺にはその可能性が全く思い浮かばない。

「どうですか？ 何かわかりましたか？」

「ああ、あくまでも推測だがひとつの可能性として聞いてほしい。ミクも一緒に見てくれ。このカードだが種別はフェアリークイーンだ。妖精の女王。今までも何度か妖精と戦ってきたが、妖精の特徴は大体が直接的な攻撃力を持たないという事だ。補助魔法や精神系の魔法がメインで直接的な攻撃を受けた事は一度も無い」

「ああ、確かにそれはそうですね」

「このカードに武器が記されていないのはそれが理由なんじゃないだろうか？」

「可能性はありますね」

「そしてこのスキル構成だが、この『ウインガル』というスキルは正直よくわからないが『キュリアル』はその名の通り回復系のスキルだろう。武器を持っていない事とこのスキルそしてフェアリークイーンという事から推測するとやはりこのサーバントは後方支援型の可能性が高い」

確かにあいりさんの推測は的を得ているように思える。

武器を持っていないのもベルリアとは違って、種族特性で元々持っていない可能性があるように思える。

そしてあいりさんが言う通り、そうであれば『キュアリアル』というスキルを鑑みてもこのサーバントが後方支援型というのは納得がいく。

ただ、その事とヒカリンの件が俺には結びつかない。

第655話 カードが鍵？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第656話 可能性

「支援型という事は残りのスキルも補助が回復系の可能性が高い。そしてこの『ユグドラシル』というスキルだ」

「このスキルがどうかしたんですか？」

「ユグドラシルという名前に聞き覚えはないか？」

「いや、聞いた事ないと思います」

「私はあるわ」

「え？ ミクは知ってるのか？」

「世界樹って知らない？」

「世界樹？ よくファンタジー物とかで出てくるやつだよな」

「そう。その別名というか呼び名がユグドラシルなのよ」

「じゃあこのスキルは世界樹に類するスキルという事か」

世界樹といえば、昔からあるファンタジー物では生き返ったり、全ての状態異常を回復したりする定番ともいえるアイテムだったはずだ。

「その可能性があるという事だ。もちろん世界樹には他の意味合いもあると思うが、支援タイプのサーバントが使用する『ユグドラシル』というスキル。しかも『キュアリアル』とは別に存在するスキル。キュアリアルとは違う効果を持った回復スキルなんじゃないだろうか」

「そうですね！ 確かに『ユグドラシル』から連想するのはそれですよね」

「でもそれはあくまで可能性で、使用してみない限りわかりませんよね。それに回復系のスキルだったとしても本当にカオリンの症状を治すようなスキルとは……」

「確かにそうだが、私にはこれがシル様の示す正解だと思えるんだ」
「あいりさん……サーバントカードは一度使ってしまうともう売り物にはならないんですよ。使って違いましたは通用しないんです。わかっていますか？ シルだって明確な未来が見えているわけじゃないんですよ」

「ああ、わかっている。だが私にはこれが正解だと思えないんだ」

「ミクはどう思う？」

「あいりさんの話を聞いて、私もこれが正解だと思えない『ユグドラシル』でヒカリンの病気が治るんじゃないかしら」

ミクもか。本当にダメな時のことをわかっているのか？

もしサーバントを召喚して『ユグドラシル』が期待した効果を示さなかった場合、もう俺達には靈薬の代価となるものは何も無くなってしまう。

それをわかっているのか？

あいりさんの言葉は確かに正しいようにも聞こえるが、それはあくまでも前提があつての事だ。

どの方法かで必ずヒカリンが助かるルートが存在するという前提。あいりさんのそれは、あくまでその前提ありきで消去法により導き出された答えであり、その答えには思いつきりバイアスがかかっている。

あいりさんの根拠はシルによる言葉のみ……

リスクが高すぎる。

あまりにもリスクが高い。

ダメだった時の失う物が大きすぎる。

文字通り全てを失ってしまう。

「い、いや、どう考えても無理だろ。そんな一か八かみたいな事は出来ない」

「海斗、別に今すぐ決めると言ってるんじゃない。ただ選択肢のひとつだという事だ。リミットがあり今の段階で完全な正解が無い以上、そういう選択もあるんじゃないかという事だ」

「だ、だけど……」

その選択をしてダメだった時にヒカリンになんて言えばいい。

俺がその選択をしてダメだった時には、俺がヒカリンを殺したと同義だ。

俺にそんな事はできない……

第657話 三人のモブ

結局その場で即決する事などできるはずもないので、その場で解散して家に帰る事になった。

家に戻ってから、ずっとサーバントカードとスキル『ユグドラシル』の事ばかり考えている。

スマホでも検索をかけて見たが古ノルド語らしいけどノルド語って初めて聞いたな。いったいどこの国の言葉なんだ？

ユグドラシルは九つの世界を内包していると書かれてあるので、空間系のスキルの可能性も捨てきれない。

結局夜寝るまで考えたが結論は出なかった。

翌日になりゴールデンウィークも終わったので今日は学校へと向かう。

今日から二日間学校に行けばまた土日になるので、そこまでは結論を出さなければならぬ。

テンションが上がらないまま教室へと入って挨拶をする。

「おお」

「ああ」

「おお」

真司と隼人がいつものように返事を返してくれる。

「どうしたんだ海斗、ゴールデンウィークボケか？」

「いや、そんなんじゃないけど」

「やけにテンション低いな。ゴールデンウィーク中に何かあったのか？」

「まあ……な」

「俺達に話してみろよ。海斗には世話になってるからな、助けになるぞ?」

「そうだけ。一人で考えて上手くいかなくても三人集まれば文殊の知恵って言うだろ」

「ああ、そうだな」

俺自身も、完全に煮詰まって行き詰まっていたので、真司と隼人の言葉はありがたい。

俺だけでは無理でも、二人なら何か名案を思いついてくれるかもしれない。

俺はゴールデンウィークの出来事を二人にかいつまんで話した。

「… と言うわけなんだ。それでどうしていいかわからなくてな」

「……………」

「……あっ」

「どう思う?」

「……ああ」

「……………」

「おい、何か言えよ」

「そう……………だな」

「まあ……………なっ」

「相談にのってくれるんじゃないのか?」

「いや、思ってたよりも重い話だったから俺なんか軽々しい事は言えないと思って」

「そう、それだよ」

「だから、そんな簡単な内容だったらこんなに悩んでないんだって」

「そう……………だよな。うんがんばれ!」

がんばれって何をどう頑張るんだよ。

「多分、それは俺達よりも葛城さんとかに相談した方が絶対がいい間違いない」

「おお、そうだな。悠美もいるしあの二人なら、きつと相談にのってくれる」

は〜……やっぱりこの二人じゃ三人集まってもダメだったか。

いつも通り三人集まっても、やっぱりモブはモブだった。

結局二人からはなんの助言も得られないまま、授業が始まってしまった。

二人からの唯一の助言は春香達に相談する事だった。

授業の合間に相談するような内容でも無いので結局、テンションの上がないまま授業を最後まで受ける事になってしまい、あまり授業の内容も頭には入ってこなかった。

授業って真面目に聞いていないと結構長いので、ずっとヒカリンの事を考えてしまい、結論の出ない問いに放課後になる頃には俺のテンションは更に下がって、燃えカスのようになってしまっていた。

第658話 文殊の知恵（前書き）

新作 勇者を狩る者 ブレイブスレイヤーに目覚めた俺は勇者を殺すために最強を目指す を投稿しました。

<https://ncode.syosetu.com/n3638gt/>

本作下部にリンクがあるのでクリックしてみてください。

第658話 文殊の知恵

これだけ悩んで考えても何も決める事は出来なかったので、もう俺一人では無理だ。

授業が終わって俺はすぐに春香の元へと向かった。

「春香、ちょっと相談があるんだけど」

「うん、それはいいけど、海斗なんか疲れてない？」

「いや、疲れてると言うか、考えすぎて燃え尽きた感じかな……」

「そうなんだ。じゃあ悠美に一人で帰って言って言ってくるね」

「あくできれば前澤さんの意見も聞きたいんだけど」

「そう、じゃあ悠美も誘ってみるね」

「ああ、お願いします」

もちろん今回の事はむやみに大勢に話すような事では無いが、今に限っては少しでも信頼出来る人の意見を聞きたかった。

「海斗、お待たせ」

そう言って春香が前澤さんを連れてきてくれた。

「ああ、前澤さんも悪いね」

「高木くんなんかやつれたんじゃない？」

「そうかな。まあちょっと悩みと言うか……相談があって」

「春香から聞いている。で、相談って何？」

どこか場所を変える事も考えたが、既に教室にはあまり人が残っていなかったの、俺の机を囲んで話をする事にして昨日までの出来

事を二人に話した。

「そうなんだね。でもそのサーバントカードっていうのは手に入れたんだよね」

「ああ、それはなんとなくあったんだけどなあ」

「まあ、話はわかったけど、私には高木くんが何を悩んでるのかわらないんだけど」

「え……」

「だって、言い方は、あれかもしれないけど、高木くん達はその子の為にそこまでのお膳立てをしてあげたわけでしょ？」

「まあ、そうだけど」

「じゃあ、高木くんの役目はそこまで終わりなんじゃ無い？」

「いやいや、何を言ってるんだよ。だからオークションも間に合わないしサーバントカードのスキルも不確定だし決めれなくてずっと悩んでるんだって」

「だからなんで高木くんが悩むのかわからないのよ。悩むのはひかりちゃんですよ」

前澤さんの言っている意味がよくわからない。もちろんヒカリンの悩みではあるが、これは俺が決断しないとイケない問題だ。

「海斗、あのね悠美は、海斗達がそこまで選択肢を用意したんだから、あと決断するのはヒカリンだって言ってるんだよ」

「……え？」

「だってそうでしょ。自分の命がかかっているのよ。どうしてその選択を高木くんがするのよ。どう考えてもひかりちゃんがすべきでしょ。ひかりちゃんだって絶対自分で決めたいと思うわよ。もし高木くんが決めて上手くいかなかったらどうするつもり？ 責任取れるの？ 取れないでしょ」

「まあ、そうなんだけど」

「ひかりちゃんだって、そこまでしてもらって、最後の選択を高木くんが間違えたら恨むに恨めないし、絶対に自分で決めたいはずよ。ひかりちゃんに聞いてみたの？」

「いや、まだ伝えて無いけど」

「じゃあ、決まりね。ひかりちゃんに伝えて決めてもらうのが一番よ」

「海斗、私もそう思う。ヒカリンが自分で決めるのが一番だと思う。ずっと俺がなんとかしないといけないという思いだけでやってきたので、二人に言われるまで、全く気がつく事が出来なかった。ヒカリンの事をヒカリン自身が決める。そんな当たり前の事がわからなくなっていたなんて。」

「多分メンバーの二人も俺と同じでヒカリンへの思い入れが強すぎてわからなくなっていたのだと思う。」

「二人共ありがとう。本当に助かったよ。二人の言う通りだ。ヒカリンに伝えて決めてもらうよ」

「まだ何も解決したわけでは無い。だけどヒカリンの未来はヒカリンが決める。」

「俺はその手伝いをするだけだ。」

第658話 文殊の知恵（後書き）

読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第659話 病院へ(前書き)

新作 勇者を狩る者 ブレイブスレイヤーに目覚めた俺は勇者を殺すために最強を目指す を投稿しました。

<https://ncode.syosetu.com/n3638gt/>

本作下部にリンクがあるのでクリックしてみてください。

第659話 病院へ

俺はその日の夜に早速ミクとあいりさんと連絡を取り、俺の考えを伝えた。

二人共俺と同じく目から鱗だったらしく、ヒカリンに決めてもらうと言う考えに激しく同意してくれた。

そして土曜日になり、覚悟を決めてヒカリンの入院している病院へと向かった。

「ふうやっぱり緊張するな」

「すっかりしなさいよ。海斗がそんな態度だとヒカリンが不安になるわよ」

「そうだぞ、ここは空元気で堂々としておくべきだぞ」

二人の言う事はもっともだが、しばらく会っていないので緊張するなどというのは無理な話だ。

一応ヒカリンのパパには事前に連絡を入れて今日の事を話しておいたが、全面的に納得してくれた。

「失礼します」

そう言っって病室の扉を開ける。

事前に状態は聞いていたので覚悟はしてきたつもりだが、一瞬俺の時間が止まってしまう。

「久しぶり… なのです」

「あ、ああ、久しぶり」

「私は見ての通りなのです。もう……そんなに」

「ヒカリン！ 今日ヒカリンに報告があるんだ」

「はい……」

「実は霊薬はまだ手に入れる事が出来ていないんだ。十七階層をクリアしたけど残念ながら霊薬は出なかつたんだ」

「そうですか……」

「だけど、どうにか霊薬の対価となるサーバントカードは手に入れる事が出来たんだ。ただ霊薬が売られるかもしれないオークションは七月二十日まで開催されないんだ」

「そうなんですね」

「ああ、オークションに霊薬が出るかどうかは今の段階ではわからないんだ。それがわかるのが早くても6月末なんだ。それとこれがそのサーバントカードなんだけど」

俺はサーバントカードをヒカリンに見せる。

「これは……フェアリークイーンですか。聞いた事のないサーバントですね。スキルが三つもあるのですね」

「ああ、それで俺達の見解だと、武器を装備してないようだし『キュリアル』がスキルにあるし種族からも、多分支援型だと思うんだ。それでスキルの欄にある『ユグドラシル』なんだけど、効果はわからないけど意味は世界樹らしいんだよ。調べたら『キュリアル』は、おそらく状態異常を回復するスキルだから、もしかしたらこのスキルはそれを上回る効果を持つスキルの可能性もあると思う」「それ以上の効果というのは私の病気とか……ですか？」

「……それはわからない」

「そうですよね……。すみません」

「それで、俺としては、ヒカリンにきめてもらおうと思ってるんだ。オークションを待つてみるのでも、サーバントを召喚して『ユグドラシル』を使ってみるのでもどちらでも好きな方をえらんで欲しいんだ。俺達はヒカリンの選択を尊重する」

「……わかりました。今すぐ決めないといけませんか？」

「いや、ヒカリンの好きなタイミングで構わないよ」

「それじゃあ、明日また来てもらってもいいですか？ それまでにはどうするか決めておくのです」

「わかった。それじゃあ俺達、今日はこれで帰るよ。また明日」

「はい、また明日」

身体は以前よりも明らかに痩せて弱っているが、ヒカリンの瞳からは、今日最初に会った時よりも強い光が宿っているように見えた。

第659話 病院へ（後書き）

読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】【 】に願います

第660話 ヒカリンの決断(前書き)

新作 勇者を狩る者 ブレイブスレイヤーに目覚めた俺は勇者を殺すために最強を目指す を投稿しました。

<https://ncode.syosetu.com/n3638gt/>

本作下部にリンクがあるのでクリックしてみてください。

第660話 ヒカリンの決断

翌日の朝、俺達は再びヒカリンの病室へと向かった。

「どう思いますか？」

「私なら、どうするだろう。正直わからないな」

「私もこの選択に自分の命がかかっていると思うと怖くて選べないかも」

俺も全く二人と同意見だが、今回は時間がそれを許してくれない。

「失礼します」

「はい」

病室に入ると今日は、ヒカリンの両親も一緒だった。

「え〜つとそれで……」

「その前に、いいでしょうか？」

ヒカリンパパが声をかけてきた。

「はい」

「この度は御三方には、光梨の為にここまで尽力いただき、感謝のしようもありません。本当にありがとうございます。高木君から助けになると言っていただけで、すぎるような気持ちでしたが、正直ここまでの事をやっていただけたとは思っていません。光梨の選択の結果がどうであれ、御三方への感謝は変わりません。本当にありがとうございます」

「ありがとうございました」

ヒカリンの両親が俺達に向けて深々と頭を下げてきた。

「俺達パーティなんで、他人のふりはできないんです。ただそれだけなので頭をあげてください」

俺達は血の繋がった家族ではないかもしれないけど、ファミリーでも言うべき存在だと思う。このぐらいの事は当たり前なので、そんなに感謝されるような事ではない。それにまだ結果が出たわけではないのだから。

「海斗さん。私決めました。サーバントカードを『ユグドラシル』を試してみたいです」

「え……」

突然発せられたヒカリンの答えは俺の思っていたものとは違っていた。

「今日はまだ体調がいい方だけど、明日はそうではないかもしれないかもしれません。多分私の身体は、あと2ヶ月半は持たないと思います。私がかもし海斗さんやシル様と出会った事に意味があるとすれば、それは時間と共に諦める事ではないと思うのです。きっとこの選択にも意味があるはずです」

「ああ……」

「これが私の選択です。もし『ユグドラシル』に思ったような効果が無かったとしても、これは私自身の責任なのです。皆さんには感謝しかありません。希望の持てなかつた私に希望をくれてありがとうございます。今この選択を自分で出来ただけでも皆さんには本当にありがとうございます」

「……………あぁ」

ヒカリンの言葉に胸がいつぱいになり言葉がうまく出てこない。俺の横からは泣いているような気配がする。

見る事は出来ないが、ミクかあいいりさんが声を殺して泣いているんだろう。

「わかった。それじゃあ、今から俺がダンジョンに行って召喚してみるよ。スキルを確認していけそうならすぐに連絡を入れるよ。ミクとあいいりさんはここに残って、俺からの連絡を待つて下さい。それとこれを」

俺は中級ポーションを取り出してミクに渡しておいた。

おそらく、これならヒカリンが移動する時に一時的にでも体力を回復する助けになってくれるはずだ。

第660話 ヒカリンの決断（後書き）

読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第661話 ティーターニア（前書き）

新作 勇者を狩る者 ブレイブスレイヤーに目覚めた俺は勇者を殺すために最強を目指す を投稿しました。

<https://ncode.syosetu.com/n3638gt/>

本作下部にリンクがあるのでクリックしてみてください。

第661話 ティーターニア

俺は、病院を後にしてダンジョンへと急いだ。

ヒカリンが決断した以上、行動は少しでも早い方がいい。

ダンジョンへと到着した俺は、そのままの格好で一階層のいつもの場所へと向かう。

いつもの場所は、日曜日だと言うのに人の気配はしない。

「ご主人様、そのカードを使われるのですね」

「ああ、そう決めたんだ」

「大丈夫ですよ。きっと良い結果が待っています」

「そう願うよ」

「早くしろよ。フェアリークイーン？　クイーンってなんか偉そうな名前だな」

「ルシエは一応プリンセスだもんな。ちょっと負けてるかもな」

「海斗死にたいんだな？　それは死にたいと言う意思表示だな？」

「冗談だつて。それじゃあ使うぞ？　『ティーターニア』召喚！」

俺にとっては四度目となるサーバントの召喚。カードから閃光が放たれ目の前にはサーバントが顕現していた。

もう驚く事は無いがもちろん幼女の姿だ。サーバントというものがそういう仕様なのかそれとも俺のサーバントがそうなのかはわからない。ただ今回はシルとルシエよりも少し小さく幼いようだ。

ルシエ達よりも十センチぐらいは小さい気がする。

薄いピンク色のふわりとした髪に目の色もピンク色だ。

背中には妖精である事を示す小さな羽根が生えているが、ふわっとして全身が可愛らしい感じに溢れており、ロリ属性の無い俺ですら庇護欲をそそられる感じた。

それにキラキラ感がすごい……
人間のアイドル数十人を集めたよりもずっと眩しい！
これは、その属性の探索者であれば数億円出したとしても競り落と
したかったに違いない。

「あの……あなたがマスター。わたしはティターニアです」
透き通った小さな声が聞こえてきた。

「ああ、俺は高木海斗だ。よろしくな」

「はい……よろしくお願ひします」

やっぱり声が小さい。もしかして初対面で照れているのか？

「私が長姉のシルフィーです。よろしくお願ひしますね」

「はい」

「わたしが長女のルシェリアだ。よろしくな」

「はい……」

この微妙な争いはなんなのだろうか？

ティターニアも若干めんくらっているようにも見える。

「私は御三方の剣たるベルリアです。よろしくお願ひします」

「はい……。わたしはティターニアです。よろしくお願ひします」

サーバント同士での挨拶が終わったようだが、やっぱり声が小さい
な。

ただ見た目も含めて完全に末妹に決定だな。

今はそれよりもスキルだ。

俺はすぐにティターニアのステータスを確認する。

まずひとつ目のスキル。

ウイングル …… 戦闘中対象のMP以外のステータスを二十パーセント上昇させる。

これは、能力の底上げ。いわゆるバフか。二十パーセントの上昇はかなり大きい。

レベルが低かった時にはほとんど意味を成さなかったと思うが、今なら仮に戦闘中にこれを使えば技術は置いておいても、俺のステータスがベルリアに近いところまで伸びることになる。

ただこれで確定した。

ティターニアは完全に支援型のサーバントだ。

武器を所持していない事から、このスキルが攻撃魔法かとも思ったが、実際にはバフだった。

という事は今の段階でティターニアは攻撃する術を持たない完全なる後方支援型。

もちろん、BPが66あるので武器を持たせればそれなりに活躍してくれると思うが、これで『ユグドラシル』が補助もしくは回復系のスキルである可能性が一層高まったとも言える。

俺はそのまま二つ目のスキルを確認する。

第661話 ティーターニア（後書き）

読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第662話 ユグドラシル(前書き)

新作 勇者を狩る者 ブレイブスレイヤーに目覚めた俺は勇者を殺すために最強を目指す を投稿しました。

<https://ncode.syosetu.com/n3638gt/>

本作下部にリンクがあるのでクリックしてみてください。

第662話 ユグドラシル

キュアリアル …… 戦闘中低下したMP以外のステータスを一定間隔で回復する。

これは、戦闘中は低下したステータスを継続的に回復させるスキルか。

しかもMP以外のステータスという事はHPを含めた消耗し減衰したステータスも回復するという事だろう。

『キュアリアル』はベルリアのスキルもそうであるように『キュア』と名前が付いているスキルは、ほとんどの場合が回復系スキルなので、この効果も納得だ。

ただこのスキルで回復するステータスに病気や状態異常も含まれるのかはわからない。

二つのスキルが補助、回復系であるという事は残りのひとつもその可能性は高い。

ユグドラシル …… 世界樹の花が咲く満月の日、世界樹に内包される奇跡の力で対象の身体を新生し全ての身体的異常、ステータスを回復する。使用は一度の機会に一度のみ。

「お、おおおおおおお！ こ、これって！ ティタニア『ユグドラシル』で回復できる状態異常って病気も治るのか！？」

「そう… ですよ。すべての病気に試したわけではないので… たぶん」

確かに、ティタニアが言う通りこれがカオリンの病気に当てはま

るのかどうかはやってみないとわからない。

「ほらみる、わたしが言った通りだろ！ やっぱり上手くいっただろ。わたしにまかせれば間違いないって言った通りだ。心配するだけ無駄なんだよ。わたしの言うことは絶対だ！」

ルシエが勝ち誇ったように話してくるが、これは決してルシエの陰ではない事だけははっきりしている。

それと、このスキルは世界樹の花が咲く満月の日にしか使えないのか。それと使用回数は一回のみ。おそらく効果の高さ故のダウンタイムがあると言う事なのだろう。

最大で月に一度だけ使用出来るスキル。

そして新生するという意味からすると病気も治る可能性が高い気がする。

ただ、満月の夜とは記載されずに満月の日となっているので、夜ではなくても使用出来る可能性は高い気がする。

満月の夜の前後であれば日中でも使用可能なのか？

もしこのスキルが夜限定なら更に使用出来る場面が限られてしまう事になる。

「ティーターニア、早速『ユグドラシル』を使って欲しい人がいるんだけどいけるか？」

「はい。マスターに使えばいいのですか？」

「いや、そうじゃないんだ。俺のパーティーメンバーが病気なんだ。だけどこのスキルは満月の日にしか使えないんだよな。そもそも満月っていつなんだろう」

「マイロード、まずは満月の日を確認した方が良いのでは？」

「ああ、そうだな。それじゃあ急いで行ってくるよ」

スキルが当たりだったのに気を取られてしまい、大事な事を忘れて

いた。

仮に昨日が満月だった場合、一カ月は使用できない事になってしま
う。

俺は急いで地上へ戻ってからミクへと電話をかける。

「もしもし『ユグドラシル』だけど多分当たりだと思う。うん、全
ての状態異常とステータスの回復だった。だけど使用出来るのは、
満月の日に一回だけなんだ。その後はまた一カ月のダウンタイムが
あるみたい。それで満月の日なんだけどいつなんだろう」

「ちよつと待つてね。スマホで調べてみるわ」

そうかスマホで調べれば良かったのか。どうやら、俺はまだテンパ
っていたようだ。

「海斗！ 大変よ。5月の満月は今日だわ！」

「今日！？ それじゃあ今日使わないと次は一カ月後になっちゃう
よ。これからヒカリンを連れて来れる？」

「わかった。海斗にもらった中級ポーションを飲んでもらってなん
とかダンジョンまで連れて行くわ」

「ああ、頼んだ」

いきなりだが、これもある意味運命だったのかもしれない。

第662話 ユグドラシル（後書き）

読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第663話 ユグドラシルの発動（前書き）

新作 勇者を狩る者 ブレイブスレイヤーに目覚めた俺は勇者を殺すために最強を目指す を投稿しました。

<https://ncode.syosetu.com/n3638gt/>

本作下部にリンクがあるのでクリックしてみてください。

第663話 ユグドラシルの発動

しばらくダンジョンの入り口で待っていると、メンバーが到着したが、ヒカリンもあいりさんに背負われてやってきた。ヒカリンを見ると呼吸が荒く顔色も良くない。

「ヒカリン大丈夫？」

「大丈夫ではないです。でも海斗さんがくれた中級ポーションのおかげで、どうにか動けました」

「それじゃあ、すぐにダンジョンへ」

俺達はそのままダンジョンへと向かい、一階層のいつもの場所へと向かった。

ヒカリンも自分で歩く事は出来なかったが、ダンジョンに入った事でレベルによるステータスの補正を受けて幾分顔色が良くなっている。

本当はすぐにでも『ユグドラシル』を試してみたいが、流石に他の探索者の前で使うわけにはいけないので、他の探索者がいないであろう場所までは我慢する事にして先を急ぐ。

道中も少しでも早く進めるように俺とベルリアがスライムを倒しながら進んでいく。

見る限りいつもの場所は、日曜日にもかかわらず誰もいない。

「シル、周りに気配は無いか？」

「はい、誰の気配もありません」

念のためにシルにも確認を取るが、大丈夫のようだ。

「テイターニア、それじゃあ早速だけどヒカリンに『ユグドラシル』を使ってくれ」

「わかり……ました。それではいきます。生命の源、万物の母、全ての世界を内包するその力を花びらに込めて与えたまえ。舞い吹雪け！『ユグドラシル』」

テイターニアがシルの聖句にも似た言葉を紡いで『ユグドラシル』を発動すると、ヒカリンを中心に薄いピンク色に輝く花吹雪のようなエフェクトが現れ、その光り輝く花びらがヒカリンを包み込んでいく。

ヒカリンを包み込んだ花びらが密度を増し、強い光を放ち消えていった。

俺達はその場を支配する幻想的な、エフェクトに息を呑む。

「これで終わったのか？ ヒカリン！ どうだ？」

もしこれでも効果がなければ、もう手は無い。

「は……い。息が……」

「息がどうしたんだ。苦しいのか？」

ヒカリンの様子がおかしい。やっぱりダメだったのか？

「いえ、息が吸いやすいような……」

「それって……」

「身体が弱っているので、はっきりとはわからないのですが」

「ベルリア！ 回復を！」

「かしこまりました『ダークキュア』」

ベルリアによりヒカリンの体力を回復させる。

「ヒカリン、どう？」

「はい……。さっきよりも動きやすいような」

そういつてヒカリンが自らの足でゆっくりと歩き始めた。

ベルリアのスキルで病床で落ちた筋力が戻るわけでは無いので、動きは少しきこちなくおぼつかない感じはあるが、呼吸が乱れている様子はない。

治ったの……か？

「ヒカリン、私には良くなっているように見えるんだけど」

「ミクさん。普通に歩く事はできるみたいです。身体が少し突っ張る感じはあるのですが、今までの胸が苦しい感じは無くなっているのです」

「とにかく、病院で検査してもらった方がいいだろう。今の段階では私達に判断する事はできないから」

確かにあいりさんの言う通りだ。

俺達はそのまま病院へと引き返す事にしたが、帰りのダンジョンでヒカリンはあいりさんの肩を借りながらも自らの足で歩いて地上へと戻った。

第663話 ヌグドラシルの発動（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第664話 ヲゲドラシルの効果(前書き)

第664話 ユグドラシルの効果

その後は、少し大変だった。

電話でヒカリンのパパに事情を話し、病院で受け入れ体制を整えてもらったが、病院の人達からかなり怒られてしまった。

スキルを公表するのはあまり良くない気がしたので、霊薬を手に入れて使用したという事にしてどうにか検査してもらったが、検査結果が出るのは明日以降になるとの事だったので、俺達はそのまま、解散する事になった。

病室から出る時に、ヒカリンの両親から泣きながらお礼を言われたが、まだ結果が出ていないので両手をあげて喜ぶ事は出来なかったが、もう待つしかない。

次の日は学校に行き授業を受けていたが、ヒカリンの事が気になって殆ど授業の内容が頭に入って来なかった。

ただ俺の状態とは関係無く時間は過ぎて行き、午前中の授業は終わってしまった。俺のストレスはピークに達しようとしていたが、いに昼休みにヒカリンから連絡があった。

「もしもし、海斗さん。お話があります」
「うん」

当然、検査結果の報告だろう。どうだったんだ。緊張が走る。

「海斗さん……わたし治ったのです。治りました。検査の結果、身体の異常が消えていました。うとうとう」

海斗さ〜ん。治りました〜。あああああ〜。わたし、わたし、まだ生きられるんです。これからも生きられるんです……」

「ああ、良かった……本当に良かった。頑張ったな」

ああ、良かった。『ユグドラシル』は本当にヒカリンの病気を治してくれたようだ。今まで張り詰めていた糸が緩んで全身の力が抜けたような感覚だ。

だけど上手く言葉に出来ない。

「全部海斗さんのおかげです。もうダメだと思って諦めかけてたのです……。でも、海斗さんならもしかしたらと思ってその事に縋っていたんです。感謝のしようありません。海斗さん、ありがとうございます」
「俺だけじゃないよ。ミクもあいりさんも頑張ってくれたから。それにシル達も」

「わかっているのです。みなさんに感謝しかありません。でもやっぱり、海斗さんの言葉に支えられて頑張る事が出来ました。海斗さんはわたしにとっての英雄です」

「い、いや、そんな大袈裟な……」

「命を救ってもらって大袈裟なんて事はありません。春香さんへの対応を見ているととてもそうは、見えませんが、海斗さんは、わたしにとっては間違いなく英雄なのです」

「ま、まあ、良かった。これでまたダンジョンに潜れるの？」

「いえ、入院中に筋力とか心肺機能が落ちてしまったので、元通りになるにはリハビリにしばらく時間がかかるそうです」

「そうか。焦らずにいこう。」

「はい」

まあ、いくら病気が良くなったと言ってもすぐに体力が戻るはずもないので、ゆっくりとリハビリしてくれればいい。

ヒカリンが戻って来るまでの間は、十八階層への挑戦は休むかゆっくりと進めばいい。

もう時間的なリミットは無いのだから。

俺は、ヒカリンの声を聞いてようやくやく実感湧いて来た。

ヒカリンを助ける事が出来たんだ。

本当に良かった。

ずっと重かった胃もすっと軽くなった様な気がする。

ヒカリンが復帰をしてまた一緒にダンジョンに潜るのが今から楽しみだ。

ヒカリンはゲーム好きだから、十八階層に臨む前に。一度十七階層のドラゴンと戦ってみるのもいいかもしれない。

この一カ月間は、精神的に結構キツかったが、ヒカリンは無事に助かり俺の手元には四枚目のサーバントカードが残ったので最高の結果が得られたと言えるだろう。

これで午後からの授業もしっかり頑張れそうだ。

バレンタインSS（前書き）

思い立って本日書き下ろしました。

本編に出てくるバレンタインストーリーとは別のお話です。
本編で隼人の幸せを願っています。

バレンタインSS

「おお、海斗！ 今日はいいい日だよな」

「そうか？ 寒いし曇ってるけど」

「いや、俺の心は晴天だよ。海斗もだろ？」

真司がいつになくテンション高めだ。

理由はわかってる。今日が女の子にチョコレートをもたらえる事もあるバレンタインデーだからだ。

もちろん去年の真司はこんなテンションでは無かった。

去年は今も目の前でソワソワしている隼人と同じような感じだったのに今や、そういう素振りは一切見受けられない。

「あゝお前らはいいいな。俺ももらえるかな」

「隼人、花園さんは？」

「それが、最近連絡しても反応が……前は必ず一日に一回は返事くれたんだけどな」

「そうか……」

そういえば以前は何回か連絡を入れると、挨拶みたいな定型文だけは返って来るような話をしてきたよな……

「義理でもいいから欲しい！ 俺はチョコが欲しいんだ！ ギブミー！」

「隼人、焦っても何も変わらないぞ。百個の義理チョコよりも一つのアガが詰まったチョコが大事なんだぞ」

真司、それは本命が絶対にくれる奴だけが言えるセリフだ。

俺だって、本当は落ち着かない。

もちろん春香から貰えれば最高に嬉しい。それが手作りだったら一生冷凍保存するかもしれない。だけでももらえるかどうかもわからないんだ。義理チョコだろうがなんだろうがもらえれば嬉しいに決まっている。

どうも世の中では義理チョコは極力減らそうなんていう風潮があるみたいだけど、俺としては非常に迷惑だ！

もっと気軽に渡してくれていいと思う。世の中の奇特な女の子達に言いたい。義理チョコは非モテ男子のファンタジーなんだ！ 今まではほとんどもらった事のない俺からすると、義理チョコの一個は非常に重みがある。

たとえそれが十円のチョコレートだったとしてもゼロと一では雲泥の差があるんだ。

なんとなく学校全体が浮ついた雰囲気の中、あつという間に 放課後を迎えてしまった……

まだ俺は誰からも貰えていない。

もしかして今年も母親からのオンリーワンなのか……

「いや〜。やっぱり手作りって最高だよな〜」

真司が話しかけてきたが手にはしっかりとチョコレートの入った箱が……

前澤さんいつの間に渡したんだ？

「海斗〜俺やばい。誰も俺にくれてないんだけど。もしかしてこの学校の女の子は今日がバレンタインデーって忘れてるのか？」

「いや、それは無いと思うけど」

俺同様隼人も貰えて無いのか。

クラスを見回すと何人かのリア充達が手にチョコレートを携えている。しかも複数個持っている奴までいる。

くっ……世の中は不公平だ。顔か？ 顔なのか？ この不条理は両親からの遺伝情報のせいなのか……

もう帰ろう。これ以上教室にいてもいたたまれない。

隼人は、クラスに人がいなくなるまでは粘るらしい。意味はないと思うけど健闘を祈る。

俺はカバンを手にとって教室を出ようとする。

「海斗！」

教室を出ようとした俺の背後から声がした。振り向くとそこには春香が立っていた。

「海斗、これ昨日作ったから食べてね」

そう言っって春香から大きめの箱を渡された。

「これって……」

「うん、今回はガトーシヨコラを作ってみたの。おうちで食べてみてね」

「あ、ああ、うん、ありがとう。帰ったらすぐ食べるよ」

「また、感想聞かせてね」

もう今年はもらえないかと思っていたのに、最後の最後教室から出る直前に春香から手作りのガトーシヨコラをもらえた。

最高に嬉しい。天にも昇る気持ちというのはこういう事なのだろうか。

シヨコラはチョコレートだと思うけどガトーってなんだ？

少し疑問に思ってしまったけど、この際そんな事はどうでもいい。

ガトーシヨコラ最高だ！

俺はテンションが上がりすぎて、周りに気を配る余裕が無かったが、一瞬見えた隼人の目からは赤い涙が流れていたかもしれない。

それから急いで家に帰り、早速ガトーシヨコラを食べてみる事にしたが、ガトーシヨコラはチョコレートケーキだった。

口に入れた瞬間、とろける様な味わい。甘さと少し感じる苦味が絶妙だ。

美味しい。今まで食べたどんなケーキよりも美味しい。

まさに絶品！ 美味しすぎてそれ以上の言葉が出てこない。

そして週末にダンジョンに潜ったがメンバーの三人がそれぞれ数日遅れの義理チョコをくれたので、春香と母親の分を入れて五個のチョコレートをもらう事ができたが、もちろん全て美味しくいただいた。

今年のバレンタインデーは、数も内容も俺史上最高だったが、隼人は例年通り母親からの一個だけだったらしい。

バレンタインSS（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第665話 約束のカフェ

「海斗、今日は表情が明るい気がするんだけど、上手くいったの？」

「ああ、上手くいったよ。ヒカリンは無事に回復したって連絡があったよ。けどしばらくは、リハビリが必要だって」

「そう。でもよかったね」

「ああ、本当によかったよ」

「それじゃあ、もう時間は大丈夫なのかな」

「うん、しばらくは探索のペースも落とすと思うから、今までよりは時間ができると思うけど」

「それじゃあ約束……」

「約束……あ、ああ、もちろん覚えてるよ。カフェだよ。いつがいい？」

「じゃあ明日の放課後はどうかな？」

「ああ、それで大丈夫だよ。明日の放課後にしよう」

約束を忘れていたわけでは無いが、ヒカリンの事で頭がいっぱいになっていたので、すぐに思い浮かばず反応が遅れるところだった。危なかった……

「今日のご主人様は、集中してるし、ずっとご機嫌ですね」

「ああ、あれは春香だな」

「でも、この前はうまくいっていないようでしたよ」

「馬鹿だからな。どうせいいように掌で踊らされているんだろ」

「そんな……ご主人様がかわいそうです」

「本人は仮初の幸せを噛み締めてるんだから、ここは見て見ぬふりをしてやるべきだろ。これがわたしたちの優しさだな」

「そうですね」

「あの……春香さんというのは？」

「ああ、海斗が一方的に好意を寄せてる相手だけど、ほとんど勘違いと妄想の出来事だから相手にするな」

「そう……なのですね。マスターの……」

今日は後方で、シルとルシエにテイターニアもコソコソ話に加わっているが、どうせろくな話じゃないのはわかっているのでスルーしてスライムを狩っていく。

翌日の放課後、約束通り春香とカフェに向かう事にする。

「今日はどこのカフェに行くの？ 前行ったところ？」

「うん、この春に新しくオープンしたお店があるから、そこに行きたいと思ってるんだけど」

「歩いて行けるところ？」

「うん、駅前に行けるから歩いて行けるよ」

二人で歩いてお店へと向かう。

「放課後一緒に帰るのも久しぶりだね」

「うん……三年生になってからは初めてだね。時々カフェに行く約束してたのに……」

「ヒカリンのことがあったから仕方がないよ」

「うん……」

よく考えると二年の時に春香とは放課後に時々カフェ巡りに行く約束をしていたが、三年になってから一度も行けてなかった。

ヒカリンのことがあってダンジョンに集中していたとはいえ、せっかく春香と距離を縮める機会を自ら放棄しているといっても過言ではない。

今まで気に留めていなかったが、せっかくのお誘いを断るといっ

とは、現状維持ではなく後退を意味している。

そんな当たり前のことに今まで気がつかなかった。

ひとつのことに集中すると周りが見えにくくなってしまっただけがあるのは自分でも認識はあるが、やってしまったかもしれない。

どんなに後悔したとしても過ぎ去った時間を巻き戻すことはできない。

俺にできることはこれからの時間をせいっぱい過ごすことだけだ。

「春香！ お茶を楽しもうな！ ケーキも！ パフェも頼む？ 今

日は俺が奢るから好きなだけ食べてよ！」

「うん、パフェはどうか？ でも奢ってもらってばかりで悪いよ」

「いやいや、最近時間が取れなかったお詫びだから。毎日ダンジョンに潜って稼いでたんだからこのぐらいは俺が払うよ」

「うん、わかったよ。じゃあご馳走になります」

話しているうちに新しいお店に着いたが、確かにおしゃれだ。ガラス張りで店内が丸見えだが、誰も気にしている様子はない。

しかも駅前にもかかわらず路上に椅子と机が並んでおり、おしゃれっぽい人達が座ってお茶をしている。

これが、オープンカフェか……

間違っても一人では無理だな。

第665話 約束のカフェ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

を】

【をお願いします

第666話 オープンカフェ そこにある危機

「海斗、席はどこがいいかな」

「別にどこでもいいよ。春香の座りたい場所で」

「それじゃあ、あそこでもいい？」

春香が指した場所は、外にある席だった。

オープンカフェか……

店内で注文を済ませてから、俺の頼んだ紅茶とニューヨークチーズケーキと春香の頼んだロイヤルミルクティーとミルクレープを受け取って外の席へと向かう。

席に着くが、落ち着かない。

店内もガラス張りなので店内に座ったとしても、どうせ外からは丸見えなので大差はないのだが、人の視線が気になってしまう。

誰も俺のことを見ているわけではないのはわかってはいるが、会話も誰かに聞かれそうだと話辛いな……

「海斗、やっぱりオープンカフェだといつもと違う感じで気持ちいいね」

「そ、そうだね。外は気持ちいいね」

「なんとなく外国の映画みたいで、座るだけで楽しいよ」

「あ、ああ、それはよかった。俺も楽しいよ」

やっぱり女の子はこんな感じが好きなんだな。

まあ、隣の席ではサラリーマンっぽい人がパソコンを使っているから男の人でも使う人もいるみたいだけど。

ただ、この席って店内満席の状況で雨が降り始めたらどうしたらいいんだろう。

まあ今日は晴天だから大丈夫だと思うけど。
結構車も走っているしあまりクリーンではないよな……
敷居の高さからネガティブなことばかり頭の中に浮かんでくるが、
せっかくの春香との時間だ。集中だ！集中！

「海斗、身体は大丈夫？ 最近ずっとダンジョンで疲れてたりしない？」

「うん、それは大丈夫だよ。今まででもずっと毎日潜っていたから、
今までとあまり変わってないんだ」

「そうなんだね。最近顔が疲れてるような気がしたから」

「ありがとう。でも本当に大丈夫」

「ところで最近海斗って後輩の女の子と仲良くしてるよね」

「えっ？」

「この前お昼に可愛い子が来てたでしょ？」

「ああ、野村さんのこと？」

外だからか少し肌寒くなってきた。

春香が笑顔で野村さんのことを聞いてきたが、なぜかいつもは天使か妖精にしか見えない春香の笑顔が今は、ちよつと違って見える。表現し辛いのが、太陽が月に変わったような感じがする。どちらも魅力的だがいつもの春香の感じとは少し違う。

「野村さんっていうんだね」

「うん、この前言ったように、ちよつと前に初めて声をかけられたんだけど」

「女の子の方から声をかけてきたんだ……」

「彼女も探索者なんだ。それで一階層で困っててちよつと手伝うこと……」

「それは、この前も聞いたんだけど、海斗あの子と一緒にダンジョンに潜るの？」

うっ……

なんだこのプレッシャーは？

春香は笑顔のままだし、なんだ？ 以前も一度、地上でこれと同じプレッシャーを感じたことがある。

やっぱりダンジョンからモンスターが溢れ出してきているのか？

地上では俺にモンスターに抗う力はない。

「海斗、どうかしたのかな」

「いや、大丈夫。そう、時間ができたら野村さんと潜る約束をしたんだ」

ああっ……プレッシャーが強まった。

十七階層のドラゴンなど比較にならない。

中位種である赤いワイバーンもこれほどのプレッシャーを発することとはなかった。

まさか上位種のドラゴン？

いや、このプレッシャーは竜種をはるかに凌いでいる。

士爵級悪魔であるベルリアと戦った時以上だ。

プレッシャーで息が詰まる。

全身から汗が吹き出してくるが、身体は暑さを感じず、むしろ寒さを感じてしまう。

敵は氷雪系のモンスターか？

第666話 オープンカフェ そこにある危機（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第667話 告白のオープンカフェ

春香は相変わらず笑顔を見せてくれている。

周りの人もさつきと変わった様子はない。

この急激な変化を感じているのは俺だけのようだ。

探索者として日頃鍛えた感覚が常人には感じられないものを感じ取っているのかもしれない。

「一緒にダンジョンに潜ってあげるなんて、やっぱり海斗は年下の女の子に優しいんだね」

「いや、年下だからってわけではないんだけど、あんな感じだけど実は彼女お金に困ってるみたいで」

「そうなの？」

「野村さん母子家庭で弟と妹がいるんだって」

「そうなんだ……」

「家計を助けるために探索者として稼ぎたいらしいんだけど、もう一年近く一階層から抜け出せていないみたいで、俺も三年同じ感じだったから気持ちがよくわかるんだ」

「そう、海斗は優しいね」

「え？ いや、そんなじゃないよ。暇だったらちよっと助けてもいいかなと思っただけだから」

「あの子を助けてあげたいんですよ」

「まあ、俺も少しは春香みたいに……」

春香と会話しているうちに、先ほどまでの冷氣とプレッシャーが消えている。

「私？ 私は何もしてないよ？」

「いや……小学生の時に助けてくれただろ？」

「あ、あゝ。そんなことあったかなあゝ」

「きちんとお礼言えてなかったけど、本当にありがとう。春香のおかげで救われたんだ」

「わたしそんなに大したことはしてないんだけど……」

「あの時、春香の助けがなかったら今の俺はなかったと思うし、探索者にもなつてなかったと思う。本当に感謝してるんだ。ありがとう」

「うん……」

本当はあの時にきちんとお礼を言うべきだったのに、照れ臭さもあって今日まで触れずにきてしまった。

だけど、野村さんの話題から、今日お礼を言えてよかった。

「俺もあの時の春香みたいに、少しは人の助けになりたいとは思ってるんだ。春香と違って俺にはあんまり大したことはできないけど、俺の周りにいる人達が困っている時の助けぐらいにはなりたい」

「そんなこと……うん」

「周りにいる人達ぐらいは危ないことがあれば守ってあげられるようになりたいんだ。だからヒカリンのことも助けてあげたかったし、野村さんも俺を頼ってきたから少しは助けてあげたいと思ったんだ」

「うん。海斗は立派だよ。わたしなんかよりずっと立派だよ」

「そんなことないよ。俺のは春香の真似だから。あの時の春香に憧れて……」

「……ありがとう」

「え？ お礼は俺がしてるんだけど」

「随分前のことなのに、そんな風に思ってくれて嬉しいよ」

「春香は俺の永遠の英雄だから」

「海斗……そんな真剣に言われたら恥ずかしいよ」

「あ、ああ、ごめん」

この思いを人に伝えたのは初めてだが、まさか本人に伝える日が来るとは……

勢いで言ってしまったが、言ってしまったから照れている春香を目の前にして急激に恥ずかしくなってしまった。

言葉に嘘はないが、言葉にしてしまうと恥ずかしすぎる。

ある意味告白よりもくさいセリフだったかもしれない。

全身の体温が急速に上昇して顔が熱い。

先程まで寒かったのに、真夏に入るサウナ並みに熱い。

あゝ汗が吹きだしてきた。

いったいさっきまでの冷気はどこにいったんだ？

「海斗、せっかくだから早く食べようよ」

「ああ、そうだな。このニューヨークチーズケーキ美味しいなあ。

ニューヨークのチーズケーキって全部こんな感じなのかな」

「うん、どうだろう？ このミルクレープもおいしいよ」

春香に思わぬ告白をしてしまったが、この後しばらくは二人とも照れてしまい、ぎこちなかったが、春香も嬉しいと言ってくれたし結果的によかったと思う。

いずれにしても、強烈なプレッシャーも去り、差し迫る危険はなくなっただようだ。

第667話 告白のオープンカフェ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第668話 顔合わせ？

翌日の昼休みに、お昼ご飯を食べる準備をしていると後輩の野村さんがやってきた。

「先輩。ゴールデンウィークも終わりましたし、そろそろダメですか？」

「ああ、そうだったな。俺の方の用は一段落したからいつでもいいよ」

「本当ですか？ やった！ それじゃあ、早速明日の放課後からでもいいですか？」

「うん、それじゃあ明日からで」

「理香子ちゃん、よかつたら俺も一緒に行こうか？ たまたま明日は、予定が何にも無いんだよね」

「隼人先輩ありがとうございます。でも大丈夫です。今回は海斗先輩だけで十分なので遠慮しておきます。それじゃあ失礼しま〜す」
「……」

隼人……

軽い口調とは裏腹に明らかにショックを受けた表情を浮かべている。隼人も調子いいところはあるけど、いい奴なんだけどな。

野村さんとの約束もあるので、今週一週間は野村さんとダンジョンに潜るのも悪く無いかもれない。

潜るにしても一階層もしくは二階層だけなので、それほど心配はいらないと思うけど、一応野村さん用の準備だけはしておこうと思いい装備を整えて翌日を迎えた。

放課後になるとすぐに野村さんがやってきたので、春香の所へ連れて行く。

昨日春香に野村さんとダンジョンに行く事を伝えたと、挨拶するから紹介して欲しいと言われたからだ。

「春香、こっちが野村さん。これから一緒にダンジョンへ行ってくるよ」

「葛城春香です。よろしくね」

「あゝ私は野村理香子です。よろしくお願いします」

「野村さんは、海斗にダンジョンでサポートしてもらいたいただけよね」

「はい！ そうです。それだけです。それ以外は何も無いので安心してください。春香先輩」

「うん、それじゃあ、怪我に気をつけて頑張ってね」

和やかに顔見せも終わったので、早速ダンジョンへと向かう。

「ふゝ緊張したあ」

「何が？」

「春香先輩ですよ。春香先輩綺麗だけど怖いですよね」

「え？ そうか？ さつきも和やかな感じだったたる？」

「海斗先輩、もしかして鈍いんですか？」

「いきなり失礼な奴だな」

「さっきの一瞬で、私が余計な事をしないように釘を刺されたんですよ」

「そんなやりとりなかっただろ」

「目と言葉ですよ。海斗先輩愛されてるんですね」

「何を言ってるんだ。別にそんなんじゃないから」

「あゝ、そういう感じですか。それは釘も刺されますよ。まあ私は先輩がしっかりサポートしてくればそれだけで十分ありがたいんで、今日はお願ひします」

言われなくてもそのつもりなので、まずはロッカーへ向かうが、先に野村さんの装備を確認する。

「野村さんの装備だけ……」

「はい、武器はこのハンマーと防具は特にありません」

ああ……そうだよな。

一階層だけだと、特別お金が無ければこんなもんだよな。

俺も一年前は殺虫剤以外の装備は野村さんと大差無かったもんな。

「ちなみにスライムって一日にどのくらい倒せるんだ？」

「そうですね。運が良ければ四〜五匹ぐらいですね。運が悪いと

一匹の時もありますけど」

確か野村さんは土日に潜っていると言っていたので、毎週末潜っていたとして大体一〜一万五千円程度の収入なのだろう。

高校一年生のお小遣いとしてはそれなりにいい方だと思うけど、俺に頼ってきてるって事は多分それよりも稼ぎたいんだろうな。

第668話 顔合わせ？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第669話 野村さんと1階層

俺達は野村さんの实力を見る為にダンジョンに向かい、一階層へ潜る。

「それじゃあ、俺は横で見ているから二階層へ向けて進んで行こうか」

「海斗先輩、ゴブリンが出た時は……」

「ああ、心配いらぬ。最初は俺が倒すし、絶対に安全だから、徐々に慣れればいいから」

「わかりました」

俺と野村さんは二階層に向かって進んでいくが、シルがないのでスライムに全く遭遇しない。

野村さんの装備は、俺の初期装備と大差無いが、今になって考えると、初期装備こそお金があれば強力な物を用意しておきたい。

強力な装備があれば単独でもすぐに二階層を越える事も可能だし、何よりも貧弱な装備ではどれだけ頑張っても成果がついてくる事は難しいだろう。

もし、今からお金を持った状態でやり直しが効くなら、LV1の段階で、できる限りの装備を買う。

少なくとも数十万円使えたなら、俺の一階層の三年間は無かっただろう。

ただそうなるなら『スライムスレイヤー』のスキルは手に入らず、シルとルシエとも出会えなかっただろうから、今となつては、初期資金が無かった事は俺にとって幸運だったのかもしれない。

「おっ！ スライムが出たな。野村さん頼んだ」

「はい」

野村さんは、そろそろとスライムに向かって行き、ハンマーを両手で構えて振り下ろす。

スライムはハンマーで潰されて一瞬形を崩すが、また元の形に戻り始める。

野村さんはハンマーを再び振るいはじめて、モグラ叩きの要領で、スライム目掛けてハンマーを連打する。

野村さんの持つハンマーはモグラ叩きほどの大きさは無いが、金属製なのでそれなりの重さは有りそうだ。

LV4とはいえ、標準的な女の子の体型である野村さんにとって、それを連打する事はそれなりに体力を消耗するようで、肩で息をし始めているのが後方からでも確認できた。

「ハア、ハア、ハア。どうですか？ 海斗先輩、倒しましたよ」

「ああ、今ので大体の実力はわかったけどちょっと休憩するか？」

「ハア、ハア、大丈夫ですよ。歩きながら大丈夫です」

野村さんがスライムを倒すまでの時間はおよそ二分程度だろうか。たった二分だが、重量のある鈍器を全力で振るう二分はかなりキツイ。

俺は実際にやった事は無いが、テレビで見るボクシングや格闘技の試合が三分間程度の事が多い気がする。たった三分でも選手達は全身から汗を流して、ふらふらになったりするが、おそらく野村さんもそれに近い体力を消耗している。

「野村さんが真剣なのは見てればわかったけど、どうしてそんなに探索者で稼ぎたいんだ？ 他にもコンビとかファーストフード店とかでバイトとかもあるだろ？」

「私の家は母子家庭なんです。それで弟が二人いるんで、お金が必

要なんですよね。まだ先だけど弟達は進学とかさせてあげたいし。それで、今後一切お小遣いはいらなくて、お母さんに頼み込んで探索者になったんですよ。だから、もう後には引けないんです。」「それじゃあ、もしかして十五歳からお小遣い無しでやってるのか」「そうですよ。」「

色々物入りな女子中高生がお小遣い無しで過ごす事は、結構キツイのは俺でもわかる。

やっぱり野村さんは見た目以上に覚悟と家族愛があるみたいだ。

第669話 野村さんと1階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第670話 野村さんと二階層へ

初日は、様子見で出会うスライムは全て野村さんに倒してもらった。LV4だけあってスライム相手であれば十分にやれていたが、装備も含めて一人では二階層は難しいだろう。

以前の俺とそれほど大差無い感じだが、俺と違い殺虫剤を使用していないので、スライムを数匹相手にしただけで既に結構疲れている。

「よし、それじゃあ今日はこれで終わりにしようか」

「いえ、まだまだいけますよ。今日二階層まで行きましょうよ」

「いや、今日は時間も余り無いし、次回にしよう。一応準備もあるし」

「わかりました。じゃあ明日お願いします」

「明日？ まあ俺はどうせ来るからいいけど」

「じゃあ、お願いしますね」

初日は一階層の中程で引き返す事にして引き上げる事にした。翌日学校に着くと、隼人と春香から声をかけられた。

「海斗、昨日はどうだったんだよ」

「どつって、まあ問題なかったよ」

「海斗、野村さんと一緒に大丈夫だったの？」

「ああ、昨日は一階層に潜っただけだから大丈夫だった」

「二階層までは行かなかったんだな。それで理香子ちゃんはどうだった？」

「まあ一階層なら一人で問題ないけど、装備もハンマーだけだし二階層は一人じゃ厳しいと思う」

「ああ、以前の俺と同じ感じか。まあ海斗がいれば三階層ぐらいま

では何でもないだろ」

「まあ、隼人みたいに調子に乗らなかつたらいいんだけどな。今日は様子を見て二階層へ行ってみるよ」

「海斗、気をつけてね。慣れたところだとしても絶対に無理はしちやダメだよ」

嗚呼、春香は優しいな。やっぱり天使だ。

春香の言葉を肝に銘じテンションも上がった俺は放課後に野村さんと再びダンジョンへと向かった。

放課後の時間も限られているので二階層への階段に着くまでに出会ったスライムは、俺も一緒に倒しながら進んだ。

「野村さん、そのハンマーでもゴブリンを倒せない事は無いと思うけど、結果厳しいと思うから、これを貸してあげるよ」

俺は、そう言ってピストルボウガンを渡した。

以前ミクに貸していたが、ミクが魔核銃と魔法を使うようになってからは全く使われていなかったもので、野村さんに貸してあげる事にした。

「これはボウガンですか？ 私使った事ないんですけど」

「ああ、使い方は簡単だから。この矢をセットして狙いを定めてトリガーを引くだけだよ」

「これって当たるんですか？」

「初めてでも少し慣れれば五メートルくらいなら十分当たると思うから、頭とかじゃなくて身体の中心を狙って撃つのがいいと思う。一応連射が利くタイプだから外しても焦らずにもう一度撃てば大丈夫。完全に懐に入られたらハンマーで応戦しながら距離を取って、ボウガンで仕留める感じだな」

「飛び道具を使った事が無いので少し心配です」

「思ってる以上に強力だから。それに危なかったら俺がフォローするから大丈夫だ。本当は盾もあればよかったんだけど、大きいしボウガンには邪魔だから今回は無しでいこう」
「わかりました」

二階層への階段を前に実際に何度かボウガンの矢を放ち練習をしてから、いよいよ二階層へと踏み入れる。

「緊張しますね」

「一匹目は俺が倒すから、ゴブリンが現れたら後ろで見ておいてよ」

「はい、お願いします」

本当にこの子緊張しているのか？

第670話 野村さんと二階層へ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第671話 ゴブリンを討つ

野村さんと二階層に降りて探索を始めるが、よく考えてみると誰かと二人で探索をしていたのは、シルと出会ってからルシエを召喚するまでの数ヶ月間だけだったので随分久しぶりだ。

俺は見本を見せる為に野村さんに渡したボウガンを返してもらいバルザードはマジック腹巻に仕舞い込む。

「先輩のそれってもしかしてマジックポーチですか？」

「ポーチではないけど、まあ、似たようなもんだよ」

「やっぱり！ それって一千万円ぐらいするんですよね。流石『黒い彗星』はお金持ちですね。憧れる〜！」

「ああ、これは中古で格安だったから、そこまで高くなかったんだ」
「中古なんかあるんですね。いいな〜。いいな〜」

「これは貸せないぞ」

「わかってますよ」

野村さんと話しながら探索を続けると、五十メートルほど先に小さくゴブリンを確認する事が出来た。

「野村さん、ここからはおしゃべりは無しで！ 音を立てずに俺の後ろを歩いて来て」

「はい！ わかりました！」

やっぱり野村さんは大物かもしれない。彼女にもゴブリンは見えていないはずなのに、それほど緊張した感じがしない。

俺は音を立てずに慎重にゴブリンへと近づいて行って三十メートル

ほどの距離まで迫ったその瞬間、ゴブリンがこちらに気がついた。こちらを目視したゴブリンは臨戦態勢を整えてから、俺達の方に向かって一気に加速して来た。

俺は、その場でボウガンを構えて冷静にゴブリンが射程に入るタイミングを待ってからトリガーを引く。

一直線に飛んでいった矢が俺達から十メートルほどの位置でゴブリンの胸部を貫き、ゴブリンはその場で倒れて消失した。

「先輩！ ゴブリンやばいですよ。あれ何ですか？ スライムと大きさも迫力も全然違うんですけど。モンスター〜ですよ。モンスター

ー！」

「いや、それはそうだろう。だから俺も倒すのに二年もかかったんだよ」

「あっさり倒した海斗先輩も流石ですよ！ だけど、ゴブリンの魔核ってあれですよ。スライムの魔核とあんまり変わらないような気がするんですけど」

「強さは段違いだけど、売値もほとんど変わらないからな。だけど、ここで戦えるようにならないと、この先のモンスターとは渡り合えないからな。とにかくここでやっていけるようにならないといけないんだ」

「わかりました。がんばります！」

ちよつと、心配もあるが何事も経験なので、ボウガンを野村さんに返して俺はバルザードに持ち替える。

何か有れば俺がすぐにフォロー出来る様に横について進んで行く。シルがないのでいつものようにスムーズに探索は進まず、なかなかゴブリンに出会う事が出来ない。

ただ歩いているだけだが、この階層を初めて探索する野村さんには既に色濃く疲労の色が見られる。

この調子だと、集中力がそんなに長時間は持ちそうにないので、そ

「う長くは潜れないな。」

俺は野村さんの様子を横目で確認しながらダンジョンを進んで行く。

「先輩。もしかしてあれってゴブリンですか？」

「ああ、間違いなくゴブリンだな」

「それじゃあ、やりますね！」

「ああ、引きつけて五、六メートルの位置から撃つんだぞ」

「わかってますよ」

野村さんは、その場でボウガンを構え直してゴブリンへと進んで行く。

第672話 ゴブリンとスライムは違う

だんだん視界に入るゴブリンの姿が大きくなっていく。

既に距離は三十メートルは切っている。

このまま、音を立てずに進めばいい。

「あっ！」

野村さんが前方のゴブリンに集中するあまり、足元の段差に気がつかずに少しバランスを崩して、よろめいてしまった。

よろめいただけならよかったが、口を突いて声が出てしまったせいで、ゴブリンにこちらを認識されてしまった。

野村さんが態勢を立て直した時には、既にゴブリンはこちらを目掛けて走り出していた。

すぐに俺が出ようかとも思ったが、野村さんの訓練にならないと思いき直し、いつでも出れるようにバルザードを構える。

ゴブリンはどんどん距離を詰めてあっという間に半分ほどの位置まで迫って来た。

「く、来るな〜！」

野村さんが声をあげて、ボウガンのトリガーを引く。

まだ距離は十五メートルほどある。早すぎる。

野村さんの放ったボウガンの矢は、迫って来るゴブリンの脇をすり抜けていく。

ゴブリンはスピードを緩める事無く迫って来ており、その距離は既に十メートルを切っている。

「野村さん！ 射て！」

野村さんが、一射目を外した事で迫り来るゴブリンに萎縮したのが手にとるようにわかったので、俺は大きな声で、野村さんに指示を出してから、野村さんのすぐ横に立つ。

「は、はい！」

野村さんが慌てて二射目を放つ

「ガアアア！」

今度は矢がゴブリンの肩口に命中し、ダメージを与える事に成功したが、ゴブリンはすぐに動き出し、野村さんに襲いかかって来た。

「きゃあああ〜！」

野村さんが、至近距離から襲いかかって来たゴブリンの迫力に悲鳴をあげて動きを止めてしまったので、すぐさま俺が前に踏み出してバルザードを振るいゴブリンをしとめた。

「野村さん、大丈夫だから。もう倒したから」

野村さんは、ガタガタ震えながらその場へと座り込んでしまった。

「海斗先輩〜。怖すぎます。ゴブリン怖すぎです」

気持ちはよくわかる。ゴブリンとスライムとの落差が大きすぎる。俺にとっても永遠の天敵とも言えるトラウマを植え付けられた相手だけに、野村さんの今の気持ちは痛いほどに理解出来る。

ただ、ここを乗り越えなければ、探索者としての先は無い。

「野村さん、俺も最初は無茶苦茶怖かったんだ。でも今はもう何とも無い。慣れたよ。それに野村さん、初めてのゴブリン戦だったけど、しつかり一撃いれたんだから大したもんだよ。俺なんか全く歯が立たずにボコボコにされたんだから」

「気を使ってくれてありがとうなんですけど、ちょっと信じれないです。だって一瞬で倒したじゃ無いですか」

「今でこそだよ。俺だけじゃ無い、真司に隼人も最初はビビって一歩も動けなかったんだから、野村さんは大したもんだよ」

「本当ですか」

「ああ、真司と隼人も今や立派な探索者だからな。それなりに稼いでるし。だから、心配いらぬ。危なかったら今みたいに俺がフオローするから」

「ありがとうございます。流石は『黒い彗星』です。女の子に優しいです」

「野村さん……『黒い彗星』はやめてくれ。ちょっとキツイから」

第672話 ゴブリンとスライムは違う（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第673話 野村さんのファーストキル

野村さんの帰りが遅くなるとまずいので、とりあえず今日はあと一体倒したら帰ろう。

「じゃあ、次を倒したら帰るけど、さっきと同じ要領で行こうか。一応俺がダメージを与えてからとどめをさすっていう裏技もあるにはあるけど」

「いえ、自分でやります。海斗先輩無しでもやれるようにならないと、自分が困るんで」

もしかしたら安易な方を選ぶかとも思ったけど、今までずっと一人で一階層に潜っていただけあつて野村さんはしっかりしていた。

この時点で真司と隼人は完全に負けてるな。

あの二人は完全に俺頼みのパワーレベリングだったもんな。

そつえばあいつらとも、前に遠征に行つて以来一緒に潜つて無いな。

また今度誘ってみようかな。

野村さんと話をしながら進んでいくが、野村さんの弟は、2人共小学生で普段は野村さんが面倒を見ることも多いらしい。

基本平日は、弟達の世話をして週末にダンジョンへ潜っているそうだが、自分の時間があまり取れて無さそうなので少し心配になつてしまった。

女子高生なら遊びにも行きたいと思うのだが、俺に出来るのは少しでも効率よく稼げるようにサポートをしてあげる事だろうか。

「野村さん、あそこにいる。ボウガンを構えて。外しても焦らず確実に二射目を放つんだ」

「わかりました」

野村さんがボウガンを構えて、前方のゴブリンに向かって進むと先程の経験から今度は足下にも注意を払いながら進んでいる。

既に二十メートルの距離まで近づいているが、ゴブリンは背を向けているのでまだこちらに気がついていない。

この調子で有れば、いけるか？

十五メートル程までの距離まで近づいたタイミングで野村さんの足が止まった。

様子を伺うと、緊張で身体が強張っているように見える。

おそらくこれ以上距離を詰める事に抵抗感があるのだろう。

少し距離はあるが、動きが無い相手であれば狙えない距離では無い。野村さんは、その場でじつくりと狙いを定めてからボウガンのトリガーを引いた。

矢はゴブリンに向けて飛んで行き見事背に命中した。

「や、やりました」

命中したのを見て野村さんがボウガンを下げる。

「野村さん！ まだだ！ まだ消えて無い。すぐに構え直して！」
「は、はい」

俺の予想通り、野村さんが再びボウガンを構えるのとはほぼ同時にゴブリンがこちらに振り向いて、叫び声を上げながら猛然と向かってきた。

「ダメージはある。焦らずに狙って撃つんだ！」

ゴブリンは背中のダメージのせいでスピードはあるものの動きはぎ

こちらない。

野村さんとの十メートルを切り、間近にゴブリンが迫って来た瞬間、トリガーが引かれ二射目が放たれた。

「ギャツ！」

二射目はしっかりとゴブリンの胸部真ん中に刺さり、ゴブリンはその場にバツタリと倒れた。

野村さんは倒れたゴブリンにボウガンに向けたまま構えを崩さないが、数秒経過後にゴブリンが消失し地面には魔核が残された。

「海斗先輩、今度こそ本当にやりました〜」

野村さんが、全身の緊張を解き、その場に座り込んだ。

「やったな。一人だけでゴブリンを倒せたんだから、今度は胸を張っていいんじゃないか？」

「はい、初めてゴブリンを倒せました〜。でもやっぱりゴブリンって怖いですね〜」

「ああ、ゴブリンを舐めたらやられるからな。雑魚モンスターっていうのはゲームの中だけだよ。でもこれで次からはもっと楽に倒せるはずだよ」

少し気を抜いてしまう場面はあったが、一人で倒せたのは大きい。案外野村さんはセンスがあるのかもしれない。

俺達は今日の目的を達成したので、魔核を拾ってからすぐに帰路につく事にした。

第673話 野村さんのファーストスキル（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下部に新作 勇者を狩る者のリンクを設置しています。是非青文字をクリックして愛読いただければ嬉しいです。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第674話 ハンバーグカレーと学費

「海斗先輩。今日はありがとうございました。なんとか自分だけでゴブリンを倒す事ができました」

「ああ、頑張ったな。大したもんだよ」

「でも、お借りしたボウガンと先輩が横にいてくれたおかげなんでわたし一人じゃまだ無理です」

「まあ、こればかりは慣れだからな」

「ちなみに海斗先輩は土日は、パーティで潜るんですか？」

野村さんがわざとらしく、じつと俺の目を見ている。

これは、あれだな。まあ俺も一人で一階層中心に潜る予定だったから別にいいんだけど。

「よかつたら一緒に潜るか？」

「え、本当にいいんですか？」 迷惑じゃ無いですか？」

「いや、迷惑じゃ無いよ」

まあ、最初だけ見て放置して、これで何かあれば俺の責任だ。

流石にゴブリンを一体倒しただけの女の子を、明日から一人だけで二階層に潜らせるわけにはいかない。野村さんもその気ならちょうど良かった。

「それじゃあもしかして、またこのボウガンを貸してもらえたりしますか？」

「ああ、貸してあげるから使っていていいよ」

「本当ですか？」 助かります」

「だけど、稼いだら自分で買えよ。絶対に必要だからな。それとこ

れ安物だけどあげるよ。懐に入られた時に今のままだとやばいから」

俺はそう言って予備のナイフを渡した。

普通の量産品だが、ボウガンを中心にするとしても必ず、近接戦の機会はある。

ボウガンからハンマーでは間に合わないので、繋ぎですぐに手に取れる小型の武器は必須だろう。

「ありがとうございます。それじゃあ明日もよろしくお願いしま〜す」

真司と隼人の時はゴリ押しで無理やり連れ出されたけど、たまにはこうやって後輩をサポートするのも悪く無いかもしれないな。

家に帰ると今日はハンバーグカレーだった。

しかもハンバーグが今まで家で食べていたものよりも明らかに美味しい。

どう考えても素材の質が向上している。

日々俺の学費が消費されているのを実感するが、俺にもしつかり恩恵があるので文句は一切無い。

上質なハンバーグがのったカレーに文句などあるはずがない。

どちらも俺の好物であるカレーとハンバーグのコラボレーション。ハンバーグカレー最高だ。

夜になり一応春香に、明日明後日に野村さんと一緒にダンジョンに行く事を連絡入れると、すぐに春香から電話がかかって来た。

「海斗、野村さんとダンジョンに潜るんだね」

「ああ、このまま放っておくのも危ないから、それに彼女も結構大変みたいだから」

そう言って俺は、野村さんがダンジョンに潜ってお金を稼ぎたい理

由を春香に説明した。

「そうなんだね。野村さん家族思いのいい子だね。だけど日曜日の海斗の誕生日はダメだからね。忘れてないよね」

「いや、一緒に潜るのは明日と明後日だけだからもちろん忘れてないよ」

「カオリンは今月いっぱいハビリでしょ」

「うん、そうだけど」

「じゃあ、やっぱり言っておいたほうがいいと思うから約束ね」

「本来に来週からは大丈夫なんだけどな」

「海斗は、多分野村さんを放っておけ無いと思うから」

「そんな事はないと思うけど」

一応、春香も野村さんと潜る事には賛同してくれたようだけど、妙な感じで信用されていない気がする。

だけど、再来週の日曜日は、春香の手料理か。こんなに楽しみな誕生日は初めてだ。

早く誕生日来ないかな。

第674話 ハンバーグカレーと学費（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第675話 疑惑？

翌日、朝から待ち合わせて野村さんとダンジョンへと潜る。

「それじゃあ、今日も二階層へ向かってゴブリンを狩ろう。ただ二階層ではたまにスケルトンが出る事があるから注意していこう」

「海斗先輩、スケルトンもこのボウガンで倒せるんですか？」

「いや、スケルトンは頭を破壊しないといけないからボウガンだと厳しいと思う。ハンマーでもいいけない事はないと思うけど、これを貸してあげるよ」

そう言っただけはもう使う事の無くなったタングステンロッドを渡した。

「重っ！ これ、見た目より重くないですか？ 鉄製じゃないんですか？」

「ああ、それはタングステンで出来た棒だから重いけどかなり強力だよ。スケルトンの骨も問題なく碎ける。おすすめの戦い方は、スケルトンに近づいて向こう脛にフルスイングだ。当たればまず骨が碎けて倒れるから、倒れたら頭を碎くんだ」

「痛そうですね……」

俺は野村さんにスケルトン対策を伝授してダンジョンへと潜った。

一階層でスライムを倒しながら二階層へと向かい、二時間弱で二階層へと到達する事が出来た。

「それじゃあ行きますね」

野村さんが少し緊張しながら二階層への階段を降りて行く。

「そういえば先輩、先輩のサーバント達ってどうしたんですか？
まだ一度も見えてないんですけど」

ああ………そういえば野村さんにはダンジョンで目撃されていたんだ
った。当然シル達の姿も見られてるよな。

まあ何日か一緒に潜ってみて悪い子ではなさそうだし、大丈夫だろ
う。

「そうだな。いい機会だから紹介しておくよ」

そう言っただけ俺はサーバントカードを使いサーバント達を喚び出した。

「あれ？ 前見た時は三体だったような」

「ああ、この前増えたんだ」

「先輩サーバントってそんな簡単に増えるんですか？」

「いや、簡単ではないんだけど」

「おい、海斗この失礼なのは誰だ？ まさか春香じゃないよな」

「春香じゃないよ。俺の後輩の野村さんだ。二階層でやっていける
ようにサポートしてるんだ。みんなも、何かあったら手助けしてく
れ」

「ふん、後輩ね。お前の周りは女ばかりだな。信じられない
けどモテモテか？」

俺はルシエをスルーして野村さんに紹介を始める。

「野村さん、この口が悪いのはルシエ。こっちのかわいい方がシル。
あっちがベルリアでその隣がティーターニア」

「あ、わたし野村です。よろしくお願ひします。皆さん可愛すぎませんか？ アイドルなんか目じゃないですよ。海斗先輩つてもしかして……そつちも……」

「はつきり言つておくぞ！ 俺はノーマルだからな。全くもつてそのけは無いからな。絶対に勘違いするなよ！ 絶対だからな！」

「そんなに必死で否定されると言葉の裏を読みたくなりますね」

「おい！」

「冗談ですよ。わかつてますよ。葛城先輩もいますし」

「春香は関係ないけどな」

「もしかして両方いける感じですか？」

「もう帰つていいか？ ここからは一人で行つてくれるか？ がんばれよ」

「先輩、冗談です。ごめんなさい。見捨てないでください。今見捨てられたら死ぬ自信があります」

そんな自信は必要無いが、本当にやめてほしい。冗談でもこんな話が広がってしまえば社会的に俺が死ぬ自信がある。明日から学校大丈夫かな。

第676話 早い気がする

今日は丸一日潜れるので、ゴブリンとの戦闘もかなりこなせるはずだ。

それに今更この状況でシルの能力を隠しても仕方がないので、シルにゴブリンを探してもらおう事にする。

「ご主人様、この先にモンスターです。野村様もご準備をお願いします」

「えっ……こんな感じでわかるんですか？　すごくないですか？　海斗先輩するくないですか？」

まあ確かにずるいと言えはするけれど、日常的にソナーや魔道具を使用しているパーティもいるのだから問題の無いレベルだろう。少し歩くとゴブリンの姿が小さく確認できた。

「ベルリア、野村さんのサポートを頼む。攻撃はいいから危ない時は助けてあげてくれ。それとティターニア、野村さんに『ウイングル』を使ってみてくれるか？」

ティターニアを戦闘に連れて歩くのは初めてなので、この機会にスキルも試して見る事にする。

「はい……わかりました。精霊の加護を『ウイングル』」

ティターニアがスキルを発動すると野村さんの身体がつつすらとピンク色の光に包まれる。

「先輩これは……？」

「ああ、ステータスを確認してみて」

野村さんはまだそこまでステータスが高く無いので、劇的な効果を見込む事は出来ないが、LV4でステータス値が少しでも上がれば動きに余裕が出るはずだ。

「もしかして、ステータスが上がってませんか？」

「ああ、少しだけ上昇しているはずだ」

「これってLV5ぐらいになってますよね。いけそうです！」

テイターニアのスキルによるステータスアップは野村さんの精神面にもプラスに働いたようで、ゴブリンを前にして明らかに昨日よりも表情が明るい。

野村さんがボウガンを構えてゆっくりとゴブリンに向かって進んでいく。すぐ斜め後ろをベルリアがついて歩く。

俺は少し距離をおいた状態で、後ろをついて行く。

「ギャギャギャヒャ！」

こちらに気づいたゴブリンが野村さんに向かって走ってくる。

ここまでは完全に昨日と同じシチュエーションだ。

「今のわたしは昨日とはちがう！」

野村さんが気合を入れ直してボウガンのトリガーに指をかける。

昨日同様に少し離れた距離から一射目を放つ。

一応ゴブリンに命中するが、倒せてはいない。

焦ったか？

昨日と同じ状況にそう思ってしまったが、そうではなかったようだ。

野村さんはダメージを受けたゴブリンが襲いかかって来るのを、冷静に狙いを定めて六〜七メートルまで接近した瞬間に二射目を放った。

今度は完全にゴブリンの頭部を捉えて消滅に追いやった。

昨日は同じ状況でも、焦りから一射目を離れた位置から放ち、しとめ損ない迫るゴブリンに慌てて二射目を放った。後方から見ていたのでわかるが今のは明らかに違う。

しっかりと狙い、意図的に遠目から一射目を放った。そして傷を負ったゴブリンを冷静に二射目でしとめた。

恐れや焦りからくるブレが身体に見て取れなかったのであれば最初から二射目を想定していたのだろう。

「海斗先輩やりましたよ！ どうですか？ あっ！ わたしレベルアップしたみたいです」

どうやらさっきのゴブリンを倒した事でLV5にレベルアップしたようだ。

そして先程まで身体を包み込んでいたピンク色の光が消えている。やはりテイターニアのスキルの効果は戦闘が終わるまでの間に限定されるようだ。

それにしても、野村さんは二日目で既に慣れてしまっているけど、これって普通なんだろうか？

俺は、一体目を倒してから慣れるまでかなり時間を要したと思うんだけど……

第676話 早い気がする（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第677話 スケルトン戦

「やっぱりスライムとゴブリンだと経験値が違うんですね。こんなにあっさりレベルアップするとは思いませんでした」

「多分一階層での成長限界ってあるんだと思う。俺もLV3以上は上がらなかったし」

「それじゃあ、この際せつかくだからどんどんいきましょう」

野村さんはレベルアップして更に自信を深めたのか、すぐに次のゴブリンに向かって歩き出す。

「野村さんすごいな。もうゴブリンに慣れて無いか？」

「慣れては無いですよ。そもそも接近戦になったら危ないのは自分でもわかってるんで。やっぱり先輩達がいてくれる安心感が大きいんですよ」

「もう少しレベルアップしたら近接戦闘もやってみた方がいいな」
「わかりました。でもまだわたしには早いです」

俺もLV3→4でゴブリンと近接戦闘を繰り返すのは滅茶苦茶きつかった。

俺は盾を使用したけど、女の子である野村さんは体力的にも盾で防ぐよりタイミングとスピードで勝負した方がいい気がする。

魔核銃を使用すれば簡単だが、イニシャルコストとランニングコストが二階層では厳しすぎる。

「ご主人様、モンスターです」

「海斗先輩、見つけるの早すぎませんか？ これって完全にチートじゃないですか？」

「チートってそこまででもないだろ」

シルに言われた方向に進んでいくと、そこにはゴブリンではなくスケルトンが立っていた。

「海斗先輩！ 骨ですよ、骨！ 理科室のアレですよ！」

「あれが有名なスケルトンだ。一応武器を持つてるようだから気をつけような。ボウガンじゃなくてタングステンロッドでいった方がいい」

「これですね。重いです。普通に地上だと振れない重さですよ」

「間合いだけ注意して、後は足を狙ってフルスイングだ」

「やってみます」

野村さんが両手でタングステンロッドを構えて、すり足でゆっくりと進んで行く。

ゆっくりと確実に距離を詰めていく。

スケルトンの移動速度はゴブリンと比べても遅いので、じっくりといくのは正解だろう。

スケルトンも野村さんに気付き、手に持つ古びた剣を振りかぶりながら向かってくる。

先程のゴブリン戦に比べて、後方からでも野村さんが緊張しているのが伝わってくる。

距離はすぐに詰まり、スケルトンが剣を振るって野村さんに攻撃をかけてくる。

スケルトンのハンドスピードは特別速くは無いが、遅くもないので回避が遅れると普通に斬られる。

野村さんは、すり足のまま後方へと避けて剣を躲したが、そのままカウンターに出る事は出来なかった。

かなり遅れてタングステンロッドを振るうが、明らかに間合いが遠く届いていない。

「野村さん！ 落ち着いて！ 避けたら踏み込んでから足を狙うんだ」

アドバイスを送るが、野村さんからの返事はない。

スライム以外のモンスターとの初めてとなる近接戦闘で、完全に余裕が無くなっている。

いざとなれば、ベルリアにも参戦させる必要があるかもしれない。

「ベルリア！」

ベルリアに声をかけるとこちらに視線をよこし、頷いた。

どうやらベルリアも俺の意図が理解できているようなので安心だ。

俺はそのまま、後方から野村さんの戦闘を見守る。

第677話 スケルトン戦（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第678話 スケルトンは眠らない

下級モンスターであるスケルトンは、そこまで戦術的な戦いをしてくるわけではない。

空振った野村さんにそのまま直線的に二撃目を放ってくる。

当初のプランが崩れて野村さんも焦りがあるのだろう。本来であれば避ける事が最善であるはずのスケルトンの斬撃をタングステンロッドで受けて防いだ。

「んんっ！」

どうにか受け止めて防ぐことには成功したが、そのまま徐々に押し返されている。

LV5の彼女のステータスがどのぐらいの数値かはわからないが、まだスケルトンと力比べをして勝てるレベルでは無さそうだ。

必死で押し返そうと耐えているが、完全に力負けしている。

力の根源とも言える筋肉が一切ないのに、この膂力。まさにモンスターの神秘と言っても過言ではない。

ただこのまま力比べを続ければ野村さんは押し負けてしまう。

もう少し様子を見ても良かったのかもしれないが、俺には責任がある。

俺がベルリアに目線で合図を送るとベルリアが割って入り、スケルトンを斜め前方から蹴り飛ばした。

「野村さん！ 体勢を立て直して、足狙いだ！」

「はいっ！」

野村さんが肩で息をしながらタングステンロッドを構え直してスケ

ルトンが立ち上がるのをその場で待つ。

スケルトンがゆっくりと立ち上がり再び野村さん目掛けて歩き出す。ベルリアも手加減して蹴っているのでスケルトンに大きなダメージは無い。

スケルトンは、先程同様に距離を詰めてから手にある剣を振りかぶり野村さんに斬りかかるが、ほぼ同じパターンなのでタイミングを掴んだ野村さんが上手くサイドに躲し、そのまま踏み込んで、タングステンロッドをスケルトンの向こう脛に叩き込んだ。

「ガッ！」

タングステンロッドが硬質な物に当たる音がする。

「かった〜」

力が足りないのか、打撃が浅かったのかは分からないがタングステンロッドの一撃を狙い通り脛に当てたものの想定したように足の骨が碎ける事は無かった。

ただ確実にダメージはある。その証拠にスケルトンの動きが止まっている。

「もう一撃だ！」

「はいっ！」

野村さんが俺の声に反応して、すぐさま初撃と同じ箇所タングステンロッドを叩き込んだ。

「ボギン！」

今度こそスケルトンの骨は野村さんの二撃目によって叩き折られ、

スケルトンはその場へと倒れ込んだ。
こうなればあとは頭蓋骨を砕くだけだ。

「海斗先輩やりました！ これで決まりですよね！」

「ああ、後は頭蓋骨を砕くだけだけど、油断はするなよ。そんな状態でも腕は動くんだからな」

「わかりました」

野村さんは慎重に倒れたスケルトンの後方へと回り込んでゆっくりと近づいて、タングステンロッドを頭部へと振り下ろした。

「ガンッ」

やはり力が足りないのか一撃で頭蓋骨が砕ける事は無かった。

「やっぱり硬いです。砕けるまでいきますよ！」

そこからは、動けないスケルトンに向かって野村さんがタングステンロッドを振りかぶり連撃を加え一方的に攻め立て消滅へと追いつた。

「やりました。手が痺れちゃいましたよ。初スケルトンですけどベルリアくんの手を借りちゃいましたね」

「まあ、初めだからしょうがないけど、その後は一人で倒したんだから大したものだよ」

「いえ、はじめての近接でしたけど、焦って身体が動かなかったです。骨も一撃じゃ無理だったし、一人じゃまだまだ危ないです」

しっかりと自己分析ができていようなので、野村さんが調子に乗って突っ走る事は無さそうだ。

真司と隼人は完全にハイになっていたけど、落ち着いているしやっぱり野村さんの方が優秀な気がする。

第678話 スケルトンは眠らない（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第679話 行動パターン

スケルトンとの近接戦をクリアした野村さんは、その後も順調にゴブリンを倒し、この日LV6に達した。

スケルトンと近接戦を繰り返したことで、ゴブリンに近づかれてもなんとかなると自信に繋がったのか、明らかにゴブリンに対する動きが良くなっている。

「今日はありがとうございました。レベルが2つも上がりましたし、少しは二階層に慣れてきた気がします。明日からは一人で二階層に潜ってみます」

明日から野村さん一人で二階層？ どう考えても危ないな。そもそも彼女の武器はハンマーのみ。ハンマーでゴブリンと近接戦？ 今日俺達がいいたので、ある意味保険をかけた状態で臨めたから問題は無かったが、一人で潜るとなると状況は全く異なる。

「明日からも二階層に潜るのか？ 一階層の方がいいんじゃないか？」

「いえ、ようやく一階層から抜けれたんです、これからはもっと先を目指せる様に頑張ります」

「だけどなあ……武器だつてないだろ？」

「あ……ボウガン」

「まあ、それは貸してあげてもいいんだけど」

例えボウガンを貸してあげたとしても野村さん一人では……

「本当ですか？ ありがとうございます。稼げるようになったら絶

対に返しますからそれまで貸してもらえるところらしいです」

「本当は、ここから先はパーティで臨んだ方がいいんだよな。三階層からは複数の敵が同時にエンカウントするから、ソロだときついんだ」

「でも、わたし心当たりとかありませんよ。ソロで頑張ります！」

そうだよな。最初から知り合いでもない限りは万年一階層の探索者と組んでくれるパーティを見つけるのは難しいと思う。もう少しレベルが上がれば、女の子だし入れてくれるパーティはあると思うけど。今のままじゃ厳しいかな。俺は運良くシル達に出会えたから良かったけど。

それにこの階層は基本単体でしかエンカウントしないとはいえ、偶発的に二体同時にエンカウントする事だってありえる。

「それじゃあ、今月だけ俺と一緒に潜るよ。ここで放り出すのも違う気がするし。多分三階層ぐらいは、いけると思うから。そこまでいければ多分パーティメンバーも見つかると思うし」

「え、本当にいいんですか？ 迷惑じゃないですか？」

「たまたま今月は時間があるから、大丈夫だ。来月はもう無理だからパーティメンバーも今から探すんだぞ。四階層より下はソロだとまず無理だから」

「はい！ わかりました」

まあ、今月は時間が取れるし毎日じゃなければ問題ないな。

せつかく一年かけて二階層まで来たんだから、出来る事なら野村さんにはこのまま順調に探索者として活躍してもらいたい。

明日も朝からダンジョンに潜る約束をして解散したが、一応、今日の事を春香にも連絡しておいた。

野村さんを今月だけ面倒を見る事と、平日は放課後に時々カフェに行ける事を伝えると、春香からはそうなると思ってたと言われてし

まった。

これでも、結構悩んで決めたんだけど、俺って行動パターンが読まれやすいタイプなんだろうか？

第680話 親心

結局翌日も朝から二階層を目指して一階層を駆け抜ける。

「今日も頑張ります！ 今日の事を考えたらなかなか寝れませんでしたよ。今日はゴブリンとスケルトンで二桁目指します！」
「ああ、無理しないように頑張ろうな」

昨日の経験で自信をつけたのだろう。野村さんのテンションが明らかに昨日よりも高い。

俺達は最短で一階層を抜けて二階層へと辿り着いた。

「ベルリア、今日も頼んだぞ」
「マイロードお任せください」

昨日ベルリアの出番は一度だけだったが、あれがなければ野村さんは怪我を負っていたかもしれない。なので今日もしっかりとフォロ―を頼む。

「海斗先輩、昨日も思ってたんですけど、マイロードって呼び方凄くないですか？ 映画以外で初めて聞きました。中世の貴族か何かみたいですよね」
「……………」

慣れとは恐ろしい。確かに最初は俺も同じ事を感じていたはずだ。いつの間にかこれが当たり前になってしまっていたが、人に指摘されるとかなり恥ずかしい。あゝ顔が熱い。
俺が答えに困っていると、タイミングよくシルが助け船を出してく

れた。

「ご主人様、敵モンスターです。ご準備を」

「そ、そうか！ 野村さん、気を抜かずにいこう」

「わかりました！ がんばります」

野村さんがボウガンを構えて進んでいくが、昨日のすり足状態よりも進む速度が格段に上がっている。

明らかに、昨日よりも肩の力が抜けているのがわかる。

少し進むとすぐにゴブリンを目視する事が出来た。

俺が目視出来たタイミングとほぼ同時に野村さんが前方に向けスピードを上げた。

「あつ……」

野村さんの予想外の行動に俺の動きがワンテンポ遅れてしまったが、その間にも野村さんは更にゴブリンとの距離を詰めている。

ゴブリンもこちらに気が付き、野村さんの動きに反応して動き出そうとしているが、距離を詰めた野村さんがすぐさまボウガンを放った。

放たれたボウガンの矢は見事にゴブリンの頭部を捉えて、ゴブリンは抗う間もなく、その場でそのまま倒れて消滅してしまった。

「おおっ！」

「先輩！ やりましたよ！」

野村さんの成長が著しい。昨日は恐る恐るだったのに、今日はゴブリンの反撃を許す事なく無傷でしとめた。

LV6になってステータスが上昇した事もあるとは思うが、確実に

昨日戦った事による経験が生きている。

明らかにゴブリンの能力を把握した上で、気付かれて距離を詰められる前にしとめた。

もしかして野村さんってセンスあるのか？

なんか、俺はもとより真司、隼人よりも成長が早い気がする。

そもそも俺の周りの女の子達はみんなセンスあり過ぎないか？

もしかして女性の方が探索者としての適性が高かったりするのだろうか？

野村さんは、次に出現したゴブリンも同様の手際であっさりと片付けてしまった。

「野村さん凄いな」

「やっぱり先輩達がいてくれると安心感が違うんで思い切って踏み込めるんですよ」

お世辞かもしれないが、そう言ってもらえると普通に嬉しい。

俺ってやっぱり単純なのかな。

ただ、野村さんを見てみると俺が育てたわけでもないのに、雛鳥が巣立っていくような不思議な感覚だ。

これが親心というやつだろうか。

この日、俺は十七歳にして親心というものが少しわかった気がする。

第680話 親心（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第681話 ダンジョン中毒（微）

その後も順調に二階層を探索していたが、やはり問題はスケルトンだった。

ボウガンの効果が薄いスケルトンには近接戦闘が必須の為、ゴブリンのように遠距離からノーリスクでしとめるといふ事は難しい。

探索を続けるうちにゴブリンとの戦闘は問題無くこなし、どんどん手慣れてきたが、この日二体目のスケルトンとの戦闘になった途端、明らかに動きが悪くなり苦戦し始めた。

一体目との戦闘経験からスケルトンと正面から切り結ばば、どうしても力負けするので何度か武器を合わせる場面はあったが、基本的に大きく避けながら、カウンターで攻撃を試みているのだが、野村さんの体格もあってリーチがスケルトンのそれよりも短い為にダメージを与える事が出来ずに苦戦している。

俺は苦戦しているのを見て即ティーターニアにスキルを使用してもらうべく指示を出す。

「いきます……精霊の加護を『ウインガル』」

スキルによるブーストがかかり、野村さんの動きが少し軽くなった気がするけど、やっぱりティーターニアの声が小さい。野村さん相手に人見知りしているのか？ それとも慣れてもこれなのか？

「ボギンッ」

ようやく野村さんの一撃がスケルトンの足を捉え砕いた。

スケルトンの右足を砕いてからは危なげなく倒せたが、野村さんの適性は体格や体力的な点からも中衛から後衛寄りなので、先に進む

なら早目にソロではなくパーティを組んだ方がいいな。

「それじゃあ、今日はそろそろ戻ろっか」

「はい！ ありがとうございます」

今日は結構いい感じだったな。数もこなせだし野村さんの経験も上手く積めたと思う。

明日は月曜なので久し振りに一人で一階層へ潜ろっかなと考えながら家路に着いた。

翌日、放課後になったので教室を出てダンジョンに向かおうとしていると背後から声をかけられた。

「先輩！ どこにいくんですか？ 今日もお願ひしますね」

「あれ？ 平日も潜るのか？ 確か週末探索者じゃ無かった？」

「いえ、今しかないと思うんで、毎日お願ひします」

「兄弟は大丈夫なのか？」

「はい、ご飯は朝作って来ました。なので大丈夫です！」

「そうか……じゃあ一緒に行こうか」

「はい、行きましょう！」

てつきり週末だけ一緒に潜るとばかり思っていたが、そうではなかったらしい。

どうせ一階層に潜るだけだったから、特に問題も無いし今日も野村さんのフォローに努めるか。

それにしても、野村さんもダンジョン中毒化しかけてるんじゃないだろうか。

「あくだけどダンジョンに潜る前にダンジョンギルドに寄ってから行っていいか？」

「もちろんいいですよ」

俺は野村さんを連れて先にダンジョンギルドへと向かった。

「日番谷さん、ちょっとご相談があるんですけど」

「はいなんでしょうか？ デートのお誘いででしょうか？」

「なっ……………！」

「ふふっ冗談ですよ」

「日番谷さんってそういう冗談を言うタイプでしたっけ」

「親しい相手には結構冗談言いますよ」

「そうなんですか？ 日番谷さんとも付き合い長くなって来ましたもんね」

「それでどうされましたか？」

日番谷さん自分から振っておいて切り替えが早いな。

「実はこっちの子なんですけど、俺の後輩なんですよ。それで今ソ口なんですけど、よかったらパーティメンバーを探してもらえないかと思って」

「今どのぐらいのレベルなんでしょうか？」

「今はLV6で二階層なんですけど、今月いっぱい俺と一緒に潜ってるんで、月末には三階層も普通にいけると思います」

「じゃあ、来月以降に三〜四階層で活動するパーティ希望という事ですね」

「そうですね。ただ女の子なんです、女の子のいるパーティの方がいいとは思ってます。それと希望は中衛から後衛です」

「わかりました。今メンバー募集中のパーティも含めて調べておきますね」

「ありがとうございます」

日番谷さんをお願いを済ませてダンジョンへと向かう。

「海斗先輩、色々ありがとうございます」

「ああ、結構日番谷さんは頼りになるから」

ちよっとお節介だったかもしれないが、来月いきなりメンバーが見つかるとは限らないので、今から当たっておいた方がいいだろう。野村さんにもいいパーティが見つかるといいな。

第681話 ダンジョン中毒(微) (後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第682話 二階層を超える(前書き)

本日より新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』
で天使な彼女とSランクを目指す の投稿を開始しました。ローフ
アンタジーです。モブからの下部にリンクがあるのでクリックお願
いします。

第682話 二階層を超える

ギルドを後にした俺達は、昨日と同様に一階層を最短で抜けて二階層へと向かった。

野村さんの弱点は近接戦闘だが、これは経験だけではなく、体格やステータスによる所も大きいので、突然強くなるのは難しい。

その事を野村さんに伝えた上で野村さんが将来パーティを組む事を考え、後衛としての能力を磨く事を選択した。

ゴブリンをとにかく無傷で倒す。そして意識して少しずつボウガンの射程距離を伸ばしながら倒す事に専念してもらった。

その結果、スケルトンへの対応は、それ程熟達する事はなかったが、この一週間で、十メートルの距離からならば確実にゴブリンに矢を命中させる事が出来る様になり安定感が出てきた。

「もう、ゴブリンなら問題なく一人でもいけそうだな」

「はい、結構慣れてきました。でも外して近づかれるとまだ焦っちゃいます」

「まあ、パーティを組めば、そこは他のメンバーがカバーしてくれたりすると思うから、今よりも余裕は出ると思うけど」

「はい。まだギルドの人からは連絡ないんですか？」

「まあ、お願いしてからまだ一週間経ってないから。まだ焦らなくてもいいだろ。それで明日からの土日で三階層に向かおうと思うんだけど」

「三階層ですか！？ ちょっと早く無いですか？」

「ソロだったらまだ早いと思うけど、俺が見てあげられるのも後二週間だから二階層でやるより三階層に慣れた方がいいと思うんだ。

三階層の方がレベルアップも早いし、複数の敵が出るから、今後の連携の訓練にもなると思う」

「もちろん先輩がサポートしてくれるんですよ」

「ああ、三階層からは俺が前衛で入るよ」

「わかりました！　じゃあお願いします」

野村さんの言う通り、本来であれば二階層でもっとモンスター戦に慣れてから進むのが良いと思うが、三階層でやれた方が確実にパーティーの選択肢が広がるはずだ。

俺が見てあげられるうちに、できる限りレベルアップさせてあげたい。

「ただし、後衛に徹して深追いは絶対禁止な。真司と隼人も三階層で調子に乗っていきなり死にかけたんだ」

「わかりました。絶対に深追いしません」

「まあ、いざとなったら、シルとルシエも助けってくれるから大丈夫だとは思っけど」

真司達と違い、野村さんは変なテンションになってもいないし、あの時とは違い既にサーバントも喚んでいるので三階層であってもあんな事は起こらないと思う。

それから俺は野村さんと別れて、そのまま家に帰りすぐに春香の電話をした。

「あ、うん、今帰って来たところ」

「野村さんはどう？　うまくいってるのかな？」

「一年一人でやってただけあって、結構順調だと思う」

「そうなんだね。野村さんも早くダンジョンで稼げるようになるといいね」

「明日から三階層に潜るつもりなんだ」

「いつもと勝手が違うと思うから、海斗も気をつけてね」

「俺は大丈夫だけど野村さんには未知の階層だから安全第一で行く

よ

「うん、海斗なら大丈夫だよな」

やっぱり春香は優しいな。

だけど、野村さんも放つてはおけないので、予定していた春香との放課後カフェ巡りが完全に頓挫してしまった。あれ程、機会を逃さないと心に誓ったのに……

野村さんのサポートが終わる来月こそ春香と一緒に放課後カフェ巡りをしようと思う。

第682話 二階層を超える（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第683話 野村さんと三階層（前書き）

本日より新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』
で天使な彼女とSランクを目指す の投稿を開始しました。ローフ
アンタジーです。モブからの下部にリンクがあるのでクリックお願
いします

第683話 野村さんと三階層

土曜日は朝から野村さんとダンジョンに潜っている。既に三階層に通じている階段の所まで進んで来た。

「海斗先輩、ここが三階層への……」

「ああ、ここが三階層への階段だよ。もう一度確認しておくけど、三階層から敵は複数出現するからな。絶対に一人で突っ込んで行ったり無理は禁物だ！」

「もちろんです。絶対に無理はしません」

「よし、それで出現するモンスターは獣系。ヘルハウンドとかワイルドボアが中心だから、まともに正面から組み合えば負けるよ。必ず距離を取って直線的な動きは避けるんだ」

「はい、わかりました」

「まずは一体だけ相手にしよう。それ以外の敵はこっちで受け持つから。もし複数の敵を相手にする場面があったら迷わず、俺等の方へ逃げろ！」

「わかりました」

事前の打ち合わせを終え、野村さんを先頭にして三階層への階段を降りて行く。

当然だが野村さんからは緊張感が伝わってくる。

本来であれば野村さんにマッピングしてもらい徐々に進んでいくのがいいのだろうが、時間は限られているのでこの際マッピングは捨て野村さんの戦闘力とレベルアップを優先して三階層でやっていくように戦闘回数重視でいく事にした。

「シル、頼んだぞ」

「はい、お任せください」

「みんなも、野村さんが一対一で戦えるようにサポート頼んだぞ。テイターニアは、必ず野村さんに『ウインガル』をかけてくれ」

「はい……わかり……ました」

テイターニアはまだ馴染んでくれていないのか、声が小さい。歩き出して十分程で、最初のモンスターと出会う事が出来た。

「ワイルドボア二体か」

「海斗先輩……なんかあれ大きく無いですか？ まだ距離があるのに明らかにゴブリンとかスケルトンより大きいように見えるんですけど」

「え？ それはそうだよ。ゴブリンよりかなり大きいから」

「……そうなんですネ。海斗先輩あの大きさのモンスターってボウガンで倒せるんですか？」

「単発だと難しいかもしれないから、数撃つつもりでいこう」

「わかりました」

「それ……ではいきます。精霊の加護を『ウインガル』」

野村さんがテイターニアのスキルの効果で薄ピンク色の光に包まれる。

野村さんが覚悟を決めてボウガンを構えて、ワイルドボアの方へと向かっていくが、慎重にゴブリンとの戦いの最初の時のように擦り足で少しずつ距離を詰めて行く。

ベルリアに野村さんのすぐ斜め後ろについてもらい、俺はもう一体のワイルドボアをターゲットにする。

ワイルドボアの動きは直線的だがスピードが乗るとかなり速いので、摺り足の野村さんの事は気になるものの、緊張から来るものなので、すぐにどうなるものでも無いので、まずは見守る事にするが、パーティでゆっくり進んでいたせいで早々にワイルドボアから発見され

てしまった。

「野村さん！ 来るぞ！」

「はいっ！」

上手い具合に俺と野村さんに向かって一体ずつのワイルドボアが突進して来た。

スピードはあっても、冷静に対応すれば的も大きく直接的な動きなので狙いやすい。

俺はバルザードを構えて、向かって来るワイルドボアに向かって斬撃を飛ばす。

バルザードの斬撃は、ワイルドボアの突進力と相まって、ワイルドボアを縦に真っ二つに割る事に。成功した。

「うそっ！ 止まらない！」

野村さんの声がして視線を向けると、野村さんはワイルドボアに向けてボウガンの矢を三本放っていた。三本全て命中させていたが、残念ながら急所からは外れてしまったようで、痛みを怒り狂ったワイルドボアが更に加速して野村さんを目掛けて向かって来ていた。

第683話 野村さんと三階層（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第684話 三階層の洗礼（前書き）

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるので本作と合わせてクリックお願
いします。

第684話 三階層の洗礼

咄嗟にバルザードを構え直す、俺では間に合わない。

「ベルリア！」

俺が声をかけると同時にベルリアが素早く前方へと移動して、刀をワイルドボアに向けて一閃。
ワイルドボアはその身を二つに分けて、野村さんのすぐ手前で消失した。

「あ……助かった」

野村さんが、その場で力無く崩れてしゃがみ込んでしまった。

「わたし、ちゃんと狙って……。三本共当たったのに、全然止まってくれなくて」

「大丈夫だ。ちゃんと当たってた。ただ身体が大きいから致命傷にならなかつただけだから。最初にしては十分出来たよ」

「だけどベルリア君が助けてくれなかつたら私……」

「ベルリアはサポートでついてて役目を果たしただけだし、初めから出来る人なんかそうそういるもんじゃ無い。さっきのは、迫って来たら横へ回避して更にボウガンで追撃してとどめをさすのが正解だったんだ、ワイルドボアは直線的な動きだから焦らず避ければ、今の野村さんでも十分対応できるから」

「はい……」

実際野村さんの今の力をテイターニアのスキルで底上げしているの

でワイルドボア一体なら十分に相手に出来るだけの力はある。経験不足と今までに無い大きさの敵の突進によるプレッシャーで判断能力と身体の動きが鈍ったのだろう。

「切り替えて次行こう。多分次はもつと楽に倒せるよ」

経験を積むためには数をこなすしか無いので、次のモンスターを求めて探索を再開する。

「ご主人様、敵のモンスター三体です」

「ベルリアはこのまま野村さんのフォロー、ルシエは一体頼んだぞ」

「働いた分はわかってるよな。タダじゃないぞ」

「ああ、わかつてるよ」

そのまま進むとヘルハウンド二体とワイルドボアが見えて来た。

「ワイルドボアを野村さんが、残りは任せろ」

初見のモンスターよりは先程一度戦ったモンスターの方がやりやすいだろうと思い、俺とルシエでヘルハウンドを受け持つ。

野村さんの動きは先程と同じように摺り足でワイルドボアへと向かって行くが、ヘルハウンドの動きは素早く、すぐにこちらへと向かって来たので、俺も迎え撃つべく走り出す。

ルシエはその場からスキルを発動する。

「こここのところやる事なくて退屈だったんだ。派手に燃えてなくなれ！ 『破滅の獄炎』」

フラストレーションからいつも以上に力が入った獄炎があっさりとヘルハウンドの一体を焼き焦がす。さすがに今のルシエにとってへ

ルハウンドでは相手にもならない。

俺は残りの一体に向けて加速して行く。

ヘルハウンドと交錯する瞬間にバルザードを振るう。

交錯する瞬間、アサシンの効果が発動してヘルハウンドの動きが遅くなる。俺はゆっくりとした時間の中を加速して、がら空きとなった首を落とす。

「ふっつ、上手くいったな」

俺の調子が良いのか、相手とのレベル差が関係しているのかは良くわからないが、ゆっくりとした時間の流れの中を俺だけが速く動く事が出来た。

しかも加速は一瞬だったので身体に痛みも無い。

普段から意識してこれが出来れば、戦闘は劇的に優位に進める事が出来る様になるはずだ。

戦闘を終えた俺は、後方の野村さんの方を見るが、目に入って来たのはベルリアが野村さんの前に立ち、ワイルドボアを斬り伏せる光景だった。

第684話 三階層の洗礼（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第685話 乗り越えるべき壁（前書き）

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるので本作と合わせてクリックお願
いします。

第685話 乗り越えるべき壁

ベルリアは難なくワイルドボアを斬り伏せたが、問題は何故ベルリアがワイルドボアを倒すに至ったかという点だ。

ワイルドボアにはボウガンの矢が刺さっていたが、それは一本のみ。先程と同じシチュエーションだとしても、先程は三本命中させていたのに今回の戦闘では僅か一本。それにワイルドボアが突進して来たら避けるようにも言っていたにもかかわらずベルリアが前に立つて斬り伏せた。

この意味するところは、野村さんはあのままだとワイルドボアの攻撃を避ける事が出来なかった可能性が高かったという事だろう。見る限り怪我をしたような気配はない。だとすれば……

「野村さん、大丈夫？」

「えっ、あっ、大丈夫です」

「どうかしたのか？」

「ルシエリアちゃんの物凄い炎を見た瞬間、びっくりして身体が動かなくなっ……ワイルドボアが近づいて来て余計に動けなくて……」

「やっぱりあれか……」。

最初のワイルドボアとの戦いが、一種のトラウマになりかけているのか。

直接的なダメージを受けたわけでは無いので、俺のゴブリンに対するそれに比べると軽度だとは思うがこのままだとまずいな。

少し探索を急ぎすぎたか？ だけどこれからの事を考えると俺がついてあげれるうちに三階層で活動できるようにしてあげたい。

そうすれば最悪、パーティが見つからなくても、ソロで二階層を探

索出来るはずだ。

「次からは一緒に倒すようにしよう。ダメージは基本俺が与えるから、野村さんは落ち着いて攻撃をしてくれればいい。しばらくすればレベルも上がるはずだから余裕も出てくるよ」

「はい……お願いします」

野村さんを見る限り、少し気落ちしているが、その目からやる気が失われた気配は無い。

事情も聞いているし野村さんにも覚悟はある。

これから探索者としてやっていくなら、野村さんはこの状況は絶対に乗り越えなければならぬ。いや、先輩探索者として付き添っている以上、俺にも責任がある。

責任からいつもとは違うプレッシャーを感じるが、とにかく探索を再開する。

「やっぱり、わたしにはまだ無理だったんでしょうか？」

「そんな事無いよ。前も言ったけど俺なんかゴブリンに袋叩きにあつて一年以上トラウマで再挑戦出来なかつたんだ。だけどそれ乗り越えたら今や『ゴブリンスレイヤー(微)』だし、隼人と真司もこの階層で調子に乗って危なかつたけど今は十階層を超えて活動してるんだから、野村さんも絶対大丈夫だ」

「はい」

野村さんの不安と気持ちがよくわかる。わかるからこそ絶対になんとかしてあげたい。

「ご主人様、この先の左方向にモンスター二体です」

「ベルリア、一体は任せた」

「マイロードお任せください」

俺は野村さんの真横の並んで進んで行くが、そこにはマッドラットが二体いた。

「野村さん、マッドラットだ。ワイルドボアより小さいけど動きが早くて変則的な動きもする。しっかりと動きを予測して狙うんだ！」

「はい！」

野村さんが狙いやすいように、敵を呼び込むように野村さんよりも少し前に立ち、ゆっくりとマッドラットに向かって進んで行く。ベルリアはもう一体をしとめるために駆け出した。

「あっ……」

「野村さん、大丈夫だ。ベルリアは気にしなくていいから自分のペースで集中して！」

「はい」

もう一度野村さんに声をかけ、二人で臨戦態勢に入った。

第685話 乗り越えるべき壁（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第686話 メンタルリカバリー（前書き）

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第686話 メンタルリカバリー

マッドラットが野村さんの構えているボウガンを警戒して細かく左右に移動しながら向かってくる。

野村さんがボウガンのトリガーを引くが、放たれた矢は空を切る。

「先輩！ 動きが速くて当たりません！」

「まかせろ！」

飛ぶ斬撃では力加減が難しいので直接攻撃を選択して、マッドラットを待ち構える。

マッドラットは俺をターゲットに定め右前方から襲って来たので、すぐさま左前足を狙い斬りかかる。

「ガッ」

バルザードの手応えがあり、マッドラットから声が漏れて来た。これで機動力はほぼ奪った。

「野村さん、いまだ！」

「あ………」

後方からボウガンの矢が来ない。

「大丈夫！ 狙えば当たるから！」

「は、はいっ」

少し間があってマッドラットに矢が刺さりそのまま消滅した。

「先輩、すいません……」

「いや、よかったぞ。最後は一撃でしとめたんだから上出来だ」

「……はい」

マッドラットの機動力は俺の攻撃でほぼ失われていたのに野村さんは躊躇してしまった。

落ち着いて射てば問題無く命中したので、能力の問題では無く完全にメンタルだな。

その後も、俺が攻撃してから野村さんがとどめをさすスタイルで何度か戦闘をこなす。

俺は野村さんに対して出来るだけ前向きな言葉をかけ続けるが、野村さんが劇的に改善した様子は無い。

女の子のメンタルを立て直した経験なんか全く無いので、これが正しいのかどうかもよくわからないけど、こんなやり方しか思いつかない。

結局この日は、昼休憩を挟んで夕方までみっちり三階層を探索したが、少しプレッシャーがかかる場面では野村さんの動きが遅れ気味になるのは最後まで改善しなかった。

「野村さん、明日も頑張ろうな。明日にはレベル7まで上がると思うから、もう完全にビギナーは脱出だ」

「はい」

家に戻ってからは、ずっとサポートのやり方を考えてみたけど、今のやり方以外に何も思いつかなかった。煮詰まって春香にも連絡をとり今の状況を相談してみたけど「今のままでいいと思う」と言われてしまったのでそれ以上考えても無駄だと思い寝ることにした。

翌朝になり、野村さんとダンジョン前で待ち合わせてダンジョンに潜る。

「おはようございます!」

「ああ、おはよう」

あれ? 野村さんの表情が昨日よりも明るくなっている気がする。

「海斗先輩、わたし今日はやりますよ! 絶対にレベル7になってみせます。見ててくださいね!」

「おお、頑張ろう」

やっぱり昨日の帰りの時点とは違っている。一晩休んで気持ちの切り替えが出来たのか?

早速ダンジョンへと潜り一階層を最短で抜けて、二階層の戦闘も野村さんに担当してもらったが、ゴブリンとの戦闘は全く問題は無かった。

問題は三階層からだけど、野村さんの表情を見る限りは今のところ変わった様子は無い。

「ご主人様、敵モンスター四体です。野村様もご準備を」

「野村さんと俺で一体を担当するから、残りをみんなで頼んだぞ」

昨日と同じように俺が野村さんの横について戦闘へと臨んだ。

第686話 メンタルリカバリー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第687話 壁を越える(前書き)

サバイバー最弱の俺がハズレスキル『フェイカー』で天使な彼女と
Sランクを目指す がローファンタジー日間5位になりました。あ
りがとうございます。1番下のリンクをクリックお願いします。

第687話 壁を越える

進んで行くとワイルドボアが三体とヘルハウンドが一体が待ち構えていた。

俺と野村さんは、すぐに武器を構えて一番右側のワイルドボアを倒す事にした。

「野村さん、焦らなくて大丈夫だからな」

「わかってます。そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

そう言うと野村さんは大きく深呼吸をしてから、その場で数回軽くピョンピョンと飛んでからボウガンの照準をワイルドボアへと合わせた。

野村さんのボウガンが向けられている事を感じ取ったワイルドボアは、こちらに向けて猛然と駆け出して来た。

一気に距離が詰まるが、野村さんはその場から冷静にボウガンの矢を放つ。

一射目がワイルドボアの肩口に刺さるが、止まらない。続け様に二射目が放たれ、二射目も見事命中するが、怒り狂ったワイルドボアはそのまま突進して来る。

このままでは野村さんがやばい！

俺は前に出てワイルドボアを倒そうかと踏み出そうとしたが、野村さんに視線をやると怯えた様子は無く、しっかりとワイルドボアを見据えていたので思い止まる。

そしてワイルドボアが野村さんの立っている場所を通過する手前で、野村さんは大きく横方向にジャンプして回避しそのまま、ワイルドボアの背後に向けてボウガンの矢を二本放ち消滅へと追いやる事に成功した。

「や、やりました〜」

「おお、やったな!」

「怖かった〜」

「全然そんな風には見えなかったけど」

「昨日ので怖くなって、上手く動けなくなってたんですけど、家に帰ってからよく考えたんです」

「うん」

「これだけ海斗先輩にサポートしてもらってこのままじゃ終われないじゃないですか。自分でも願っておいて昨日の出来じゃ海斗先輩にも申し訳ないし、自分でも情けなくて。だから朝起きて絶対に今日は怯まないって決めてたんです」

「決めてたって……決めて動けるって凄くないか？」

「気持ちの問題というか、そんな感じですよ」

「そうなんだ……」

昨日は明らかに動きが鈍っていたのに、今は普通に動いていた。

確かに気持ちの問題なのは間違い無いが、そんな簡単に切り替えができるものなのだろうか？

俺はゴブリンに対して、トラウマを克服するのに一年近くかかったというのにたった一日で克服してしまうとは……

野村さんのメンタル構造が俺とは全く違うのか、それとも女の子とはこういうものなのだろうか？

この後も野村さんは臆する事無く三階層のモンスターを倒して周り、この日のうちの無事レベル7へと到達した。

結局野村さんとは月末の土曜日までほぼ毎日一緒に潜ったが、思った以上に順調に成長したと思う。

パーティであれば十分三階層でもやっていけると思う。

そしてギルドの日番谷さんからも連絡があり、パーティ候補を二つ見つけてもらった。

一つは女の子ばかりのパーティーで、もう一つは女の子一人に男三人のパーティーだった。

一応一緒に潜ってから決めるようだが、気持ち的には女性ばかりのパーティーに惹かれてるようだ。

それにしても、俺の時はなかなかパーティーが決まらなかったのに、女の子の探索者はやっぱり人気があるのかもしれない。

第687話 壁を越える（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第688話 巣立ちと誕生日(前書き)

新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す がローファンタジー日間3位になる事ができました。ありがとうございます。 下記にリンクがあるのでクリックお願いします。

第688話 巢立ちと誕生日

「海斗先輩！ 本当にお世話になりました。レベルも上がりましたし三階層にも大分慣れました。これも全部海斗先輩のおかげです。この出会いが無かったらわたしはずっと一階層から抜けられませんでした。海斗先輩には感謝しかありません」

今日で野村さんと潜る最終日だったが、最後に野村さんから御礼の言葉を聞かされてグツと胸にくるものがある。

たかだか1カ月足らずだったので、それほど大した事が出来たわけじゃないけど、野村さんからの感謝の言葉は、本当にそう思っていて、やっけて良かったと思える。

過去の自分と同じような環境にいた野村さんを俺がサポートして、一階層を抜け出して探索者として成長させる事が出来て俺も嬉しい。今まで俺がいろんな人達から受けた恩を少しは返せた気がするし、俺自身もダンジョンへの情熱を再確認出来て楽しかったしかなり勉強になった。

「野村さんが頑張ったからだよ。それとそのボウガンだけど次の武器を買うまでは貸しといてあげるよ」

「えっ！ いいんですか？ レンタル料はいくらぐらいですか？ あんまり払えませんか」

「もう俺は使う事が無いから、レンタル料はゼロ円でいいよ」

「ありがとございます。正直お金無いし明日から武器をどうしようか悩んでたんです。とりあえずハンマーだけで頑張ろうかと思っ
てたんですよ」

野村さん……いくらお金が無くても二階層より奥をハンマーだけで探索するのはちょっと無理だろう。

「明日も潜るのか？」

「はい！ 早速ギルドで紹介してもらった人達と潜ってみる事になつてるんです」

「そう、だけど無理はしないようにな。必ず中衛より後ろを担当するんだぞ。間違つても前衛には立つなよ。他のメンバーの力はわからないけど、いつも助けてくれるとは限らないからな」

「はい、それは大丈夫です。海斗先輩達のサポートを受けたおかげで、現実もしっかりと見れましたから無理はしません。教えを守つて危なくなつたら逃げます」

「そうだな。危なくなつたら逃げる」

元々考え方はしっかりしていたけど、この一カ月で精神的により成長した事も見て取れる。

これが巢立ちか……

感慨深いな。野村さんは俺の生徒としては非常に優秀だったな。

隼人と真司があれだっただけに、最初は少し心配したけど、あの二人とは全く違つて、このひと月調子に乗る事は一度も無かった。

あの二人の所為で、もう新人をサポートする事は無いだろうと思つていたけど、野村さんのお陰で、また機会が有ればやってみてもいいかなと思えるようになった。

俺にとつてもこの一カ月は非常に充実したものになった。

ただ、春香とのカフェ巡りが完全に潰れてしまったのは痛かった。先月もヒカリンの件でカフェ巡りが出来なかつたので、今月こそと心に誓っていたのにまたやつてしまった。

やつてしまった事はもう仕方がないが、明日はいよいよ俺の誕生日だ。

春香が手料理を振る舞ってくれる事になっているので今から楽しみ

で仕方が無い。

自分に誕生日に想いを寄せる相手の手料理を食べれるなんて幸せすぎる。

第688話 巣立ちと誕生日（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第689話 誕生日

今日俺はついに十八歳になった。

世間一般で言うところの大人の仲間入りをしたと言っても過言では無い。

その証の選挙権まで得たらしいが全く実感は無い。

今日になれば昨日までの自分と何か変化があるかと思っていたが、もちろん変わったところは何も無い。

当たり前だが年齢だけで、いきなり大人になれるわけでは無かったようだ。

わかってはいたけど、少しだけ劇的変化を期待していたので、ちょっと残念な気持ちになってしまった。

ただ、今日はそれを補ってもあまりあるイベントが待っている。

春香の誕生日は夜にご飯を食べに行っただけだったので、なかなか遊びにも行けていなかったけど、今日は一日春香がコーディネートしてくれる事になっている。

楽しみで家でじっとしている事が出来ずに待ち合わせの四十分前に駅前に着いてしまった。

「今日は何処に行くんだろうな。春香と一緒に何処でもいいんだけど、久しぶりだし楽しみだな。夜はチキンのクリーム煮を作ってくれるのか？」

こんなに楽しみしかない誕生日は十八年目にして初めてと言って間違いない。

今日一日の未来に妄想を膨らませているとあつという間時間は過ぎて待ち合わせ十分前になった。

「海斗お待たせ。待った？」

「ああ、全然待つて無いよ。俺も今来たところだから」
「よかった。来るのが遅過ぎたかと思ったよ」

今日の春香はピンク色のワンピースだが、よく考えるとピンク色は初めてかもしれない。もう桜は終わってしまったが、桜の花びらを連想させるその出立ちは、さながら花の妖精！ ティーターニアも髪とかピンクだし妖精はピンクなのかもしれない。
やはり春香とワンピースは最高としか言いようがない。

「ところで今日は何処へ行くつもりなの？ ショッピングモール？」
「今日は、海斗が喜んでくれそうなカフェに行きます。結構遠いから電車ではばらくかかるけど海斗は絶対好きだと思うから」
「へっつ、楽しみだな」

わざわざ電車で行くぐらいだからいつものカフェとはちょっと違うんだろうとは思いつけど、俺が絶対に好きになるカフェか。あまり思いつかないけど、今日は春香にお任せだからおとなしく春香の後を付いて行く。

「遠くない？」
「だからちよつと遠いつて言ったでしょ」

既に電車で一時間近く移動している。遠いとは聞いてたけど、目的のカフェは思ってた以上に遠いらしい。もしかしたら着く頃にはお昼ご飯にちよつどいい時間になっているかもしれない。

それから暫く電車に揺られ、降りた事のない駅で降りて、春香に連れられて向かった先には確かにカフェがあった。
ただ普通のカフェでは無い。

店内に入るとお店の真ん中に巨大な水槽が置かれていて、熱帯魚が

泳いでいる。そしてその水槽を取り囲むようにテーブルと椅子が並べられている。

「すごいな……」

「そうですね。ネットで見て絶対に海斗は好きだろうなと思って」

「ああ、うん。圧倒されるよ。カフェって言うよりこれは水族館の一部だよ。こんなカフェがあったんだ」

「うん。海斗水族館とか好きでしょ、だからここも絶対好きだと思っただよ」

「ありがとう。これは何時間でもいれそう。見てて飽きないよ。ナポレオンフィッシュとかもいるし本格的だな。ちょっと感動だよ」

「よかった。連れてきた甲斐があったよ」

春香の連れて来てくれたカフェは俺の想像を遥かに超えていた。カフェというよりも水族館で食事を取る感じだ。しかも俺が水族館好きなのをわかっていてわざわざ連れて来てくれたのが、より一層感動に拍車をかけている。

今までこんな場所で誕生日に春香と食事やお茶をするなんて、想像した事もなかったけど、現実は想像を超える事もあるんだと、席に着いたばかりなのに胸が熱くなってしまった。

第689話 誕生日（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第690話 誕生日プレゼント（前書き）

新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す が現在ローファンタジー日間4位です。 下記にリンクがあるのでクリックをお願いします。

今日でモブから初投稿からちょうど2年が経ちました。当初は勢いに任せて投稿して10万字書くことも想像できませんでした。が、読者の方々のおかげで2年も続ける事ができました。

これからも応援よろしくお願いします。

第690話 誕生日プレゼント

このカフェの人気メニューはホットサンドだったので、俺も春香もそれを頼んだ。

飲み物は、俺はセイロントイーを頼み、春香はラズベリーティーを頼んだ。

待っている間も二人で巨大な水槽を眺めているが、未だにここがカフェだという事が信じられないレベルのアクアリウムだ。小さい魚もかなりの数いるが、ナポレオンフィッシュや小型のサメなど結構大きい魚も混じっている。

「海斗、このカフェどうかな？」

「うん、凄いな。感動するレベルだよ。連れて来てくれてありがとう」

「よかった。絶対海斗は気に入ると思うたから思い切って来てみてよかったよ」

「ここなら何時間でもいれる気がする」

「あんまり長居するとお店に迷惑だよ」

水族館でも感じた事だが、水槽の魚をバックに見る春香は乙姫様か水の精霊のようでいつにも増してかわいい！ しかも俺の為にここを選んでくれたのがわかるのでとにかくテンションが上がってしまった。

出てきたホットサンドは、おそらく普通の味だったとは思っけど、このロケーションと春香と一緒にエッセンスが加わり、絶品と言っても過言では無い味わいだっただ。

「そっいえば、野村さんはどうなったのかな」

「昨日でしつかり巣立っていったよ。無事に三階層もこなせるようになったし、新しいパーティメンバーも見つかりそうだから。今日も新しいメンバーとお試して潜っているはずだよ」

「そう、よかった。これで野村さんも目的を果たせそうだね。海斗はやっぱり面倒見がいいんだね」

「いや、野村さんが頑張ったからだよ。俺は別に何もしてないよ。ちよっとフォローしただけだから」

「ふふっ……海斗は変わらないね。昔から……」

「えっ？ 何が？」

「ううん、なんでも無いよ」

何か含みがある言い方だが、よくわからないのでまあいいか。今日は純粹に春香とこの場を楽しみたい。

セイロンティーもいつにも増して美味しい。やっぱり俺には苦いコーヒーよりもこちらの方が向いている気がする。紅茶を飲んでいると春香がテーブルの上に誕生日プレゼントらしき物を取り出した。

「海斗、お誕生日おめでとう。これわたしから誕生日プレゼント」

「あ、ああ、ありがとう。開けてもいい？」

「うん」

春香がくれたプレゼントは小さめの箱のような物だったので、その場で包装を開いてみる。

「時計！」

「うん、あんまり高い物じゃないけど、ダンジョンで暗くてもライトで時間がわかるのと、ぶつけても壊れない時計。写真で海斗が黒い格好をしていたから黒がいいかなと思って」

包装を開くと箱の中には強度が売りの黒色のデジタル式の腕時計が

入っていた。

「つけてみていいかな」

「うん」

早速左腕に着けてみる。

「これ、欲しかったやつだよ。ありがとう、探索でも使えそうだから大事にするよ」

「本当？ よかった。でも、その腕時計はハードユース仕様だから大事にしなくて大丈夫だから、どんどん使ってね」

「ありがとう」

「何がいいか迷ったんだけど、わたしは海斗から腕時計貰ったから、どうせなら同じ腕時計がいいかなと思って」

このシリーズの時計は何度が買おうかと思った事があるが、今まで買った事はなかった。それを春香が誕生日プレゼントにしてくれるとは思ってもみなかったから無茶苦茶嬉しい。

今まで母親からは誕生日プレゼントをもらう事はあったが、それは全く違う喜びを感じる。間違いなく俺の誕生日史上一番嬉しいプレゼントだ。

明日からダンジョンでもこの時計をつけて潜るのは決定だ。

第690話 誕生日プレゼント（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

春香の「昔から変わらない」の部分ですが、もしかしたらweb版以外の紙面で昔の部分に触れられる事がいつの日かあるかもしれません。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願ひします

第691話 腕時計の使い道

春香からもらった腕時計をして、色んな話をしながら水槽の魚を見ているとあつという間に時間が過ぎ去り、既に時間は十四時に近づいている。

「春香、そろそろ出ようか」

「うん、じゃあ次はお花を見に行こうよ」

「お花？」

「うん、電車ですぐだから」

春香に連れられて移動すると、公園のような所に着きそこには一面にラベンダー畑が広がっていた。

「これってラベンダー？」

「そう、ここで毎年育ててるんだって。すごいよね」

「俺、実物見るのは初めてかも」

「わたしも初めてだよ。可愛いし綺麗だね」

ラベンダーって北海道にしか咲かないのかと思ったけど、ここには一面に咲いている。特に花に興味の無い俺が見ても、ちょっと感動するレベルだ。

「海斗って普段ダンジョンに潜ってるから、たまにはこんなのもいいかなと思って」

「確かにダンジョンとは違うな。春って感じがして気持ちいいよ」
「よかった」

ここは俺一人では絶対に来ることのない場所だが、春香となら何度でも来たくなる場所だ。

俺にとつての癒し、憩いの場はダンジョンの一階層だが、ここはそれとはまた違った方向性で癒される。

陽気も手伝って本当に気持ちがいい。

「春香は結構お花とか興味あるの？」

「うん、わたし写真撮ったりするでしょ。だから季節のお花とか咲いている場所は時々ね。ここは夏になるとひまわり畑になるの。今まで夏しか来た事は無かったけど、ラベンダーもいいかなと思って」

「ひまわり畑か。それもいい気がする」

「夏にまた一緒に来ようよ」

「うん、またあのカフェに行つてから来ようか」

いい流れで春香と夏の約束も取り付ける事が出来たのでよかった。ひまわりも数本咲いているのは見た事あるけどひまわり畑は見た事が無いので、今からちよつと楽しみだ。

それにしてもお花畑の中に佇む春香は、もう完全に花の妖精だ。思わずスマホで連写してしまった。

ラベンダー畑で一時間程、楽しく二人で散歩してから電車に乗り春香の家に向かう事にした。

「お邪魔します」

「あらいらっしやい。海斗くんお誕生日おめでとう。今日は春香が張り切つてご飯作るから楽しみにしといてね」

「はい、ありがとうございます」

春香の家に着くと春香のママが出迎えてくれたが、リビングに向かうところには春香のパパが座っていた。

「お邪魔します」

「ああ、こんにちは」

今日は日曜日。それは当然パパもいるよな。春香のパパは一般的には親しみ易い人だとは思うけど、やっぱりなんとなく空気が重い。春香がそのまま料理の準備に取り掛かったので必然的にリビングでは俺と春香の両親の三人で過ごす事となった。

お互いに何も悪い事はしていないのに空気が重い。いや、これは俺が一方的にプレッシャーを感じているだけか。

その証拠に春香のママはニコニコと笑顔だしパパも至って普通だ。

春香、晩御飯はまだ出来ないのだろうか？

時計を見ると席についてからまだ二分しか経過していなかった。

春香のくれた時計はデジタル式なので秒単位までしっかりと確認する事が出来たが、壊れているのかと思ってしまうほどに時間の経過が遅く感じてしまう。

第691話 腕時計の使い道（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第692話 春香の手作りダイナー緊張の調べ風味

「春香、今日の為に張り切って何回も練習してたのよ」

「そうなんですか」

「チキンのクリーム煮期待していいわよ」

「はい」

「ところで高木くん、最近春香とはどうなんだい？」

おおっ、急に春香パパも会話に入ってきた。

「どうと言うのは……」

「いや、仲良くやってるのかい？」

「はい、仲良くさせて頂いています」

「そうか。高木くんは将来探索者としてやっていくつもりなのかい？」

「はい、大学を出たらそうしようかと考えています」

「探索者は危険もあるだろうね。収入もそれなりには見込めるのかい？」

「はい、危ない事もありますが、その分収入は、はい」

「そうか……怪我しないようにね」

「はい、ありがとうございます」

「大学は春香と同じ王華志望でよかったかな。受験勉強はどうだい？ 捗ってるかい？」

「はい、春香さんと同じ王華です。勉強は……はい、がんばります」

「そうだね。頑張つてよ」

非常に紳士的で柔らかい話し方だが、俺にとっては圧迫面接にも勝る程のプレッシャーがかかり、全身から冷や汗が流れ出だす。

その後も春香の料理が出来るまで、三人で他愛も無い話をしていたが、話の間俺の冷や汗が止まる事は無かった。

「お待たせしました」

俺のメンタルゲージがあと僅かとなったその時、春香が出来上がった料理を持ってやって来てくれた。

やっぱり春香は天使だ……この窮状から俺を救ってくれた。テーブルの上にはサーモンのカルパッチョ、じゃがいものポタージュ、そしてチキンのクリーム煮が並んでいる。

「それじゃあ、みんな食べてね。海斗、誕生日おめでとう」
「ありがとう」

四人でテーブルを囲んで料理を食べ始めるが、一言で言っただけ美味しい。

どの料理も美味しいけどこのチキンのクリーム煮、先月食べたお店のより美味しいんじゃないだろうか。

お肉もほろほろで柔らかいし、ソースがとにかく美味しい。

「美味しい……」

「ありがとう」

「海斗くん、言った通り美味しいですよ。春香の愛情がたっぷり注がれてるから」

「……はい、ありがとうございます」

「ママ……」

間違い無く美味しいけど、この場でなんて答えていいのか分からない。

「うん、美味しいな。春香も料理が上手くなったもんだな。海斗くんもそう思うだろう」

「はい、そう思います」

正直、以前の春香がどうだったのかはよくわからないが、今はそれは問題でない事はわかる。

誕生日に好意を寄せる相手から絶品の手料理を振る舞われて、間違いないく俺史上最高の誕生日ディナーだが、春香の家で料理を振る舞ってもらおうと言う事は当然のように今の状況を生む事を理解しておけばよかった。

料理を食べ終わると最後に誕生日ケーキが出てきたが、綺麗にデコレートされたそれは明らかにお店で買って来たケーキではなく、手作りだ。

「もしかして、このケーキも春香が……」

「うん、あんまり作った事が無いから自信は無いけど食べてみてね」

「ああ、ありがとう」

誕生日になっても家にケーキが出て来なくなってから何年経つだろう。

久しぶりの誕生日ケーキが春香お手製とは感動だ。

一口食べてみて更に感動してしまった。

手作りならではの味わい。優しい味が口いっぱい広がって幸せな気分になる。

漫画の様にしょっぱかったり、焼け焦げている様な事も無く純粋に美味しい。

「海斗くん、美味しいな」

「はい、美味しいです」

「海斗くんは甘いものもいけるのかい？」

「はい、もちろんです」

俺の十八歳の誕生日は、春香のおかげで幸せと妙な緊張感が入り混じった今までに無い誕生日となった。

この日もっと俺に対人スキルがあればと切に願ってしまった。

第692話 春香の手作りディナー緊張の調べ風味（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第693話 コミュニケーション(前書き)

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックをお願いします。

第693話 コミュニケーション

ヒカリンのりハビリは順調に進み、既に通常通りの生活を送れているとミクや春香から聞かされている。

今週末からはいよいよ探索にも加わる予定なので、俺はそれに備えて一階層で魔核を集めている。

十七階層でもかなり苦戦したので、その先の十八階層への準備は欠かす事が出来ない。

おそらくテイターニアにも活躍してもらう必要があると思われるが、当然その分魔核の消費が増えるのは間違いない。

現状でも、ルシエを中心にかなり燃費が悪いのに、今まで以上に事前のスライムの魔核収集は必須だ。

「ルシエ、十八階層に降りたら少しは節約というか我慢してくれよ」

「は？ 今でも十分我慢してるだろ。これ以上節約とかありえないんじゃないか？ なあベルリアもそう思うだろ」

「はっ、まあ、そうですね。ルシエ姫は十分に我慢されているかと」

「だろ、海斗、そういう事で無理だな」

「そう言う事って……」

まあ、ルシエもベルリアもこう言う反応なのは十分に予測できたので特にショックもないが、スライム狩りに専念するしかないな。

「ご主人様、私は少しであれば我慢も……」

「ああ、シルありがとう。だけど大丈夫だ。なんとかするよ」

「はい」

やっぱりルシエと違ってシルは優しい。気遣いの出来るいい子だが、

その心遣いとは違って燃費は悪いんだよな。」

「ティターニアも十八層では頼んだぞ」

「……はい」

やっぱりティターニアの声が小さいな。

「ティターニア、少しは、俺達のパーティーに慣れたか？」

「そう……ですね」

「もしかしてルシエが怖いのか？　口は悪いけど怖くはないから安心していいんだぞ」

「いえ……そう言うわけでは」

「海斗！　わたしのせいみたいな言い方はやめろ！」

「ティターニア、戦いで厳しい状況の時も絶対にあるから、出来ればもっと仲良くなって連携を深めておきたいんだ」

「がんばり……ます」

うーんどう考えても馴染んでないよな。他の三人とは違うタイプなのでどうすればいいんだろう。昨日は大人への対応に苦慮してしまったが、今日は子供へ対応に困ってしまう。

やっぱり俺ってコミュニケーション能力が低いんだろうか？

「ティターニア、何か趣味ってあるのか？」

「趣味ですか？　特には……」

「……そうか」

これは質問を間違えたか？

「好きな物とかあるのか？」

「好きな物……ですか？　お花……」

「そうか、花が好きなのか。いい事だよな。うん花はいいな」
「はい」

やばい、花か。昨日ラベンダーを見たけど全然詳しくないので話を広げる事が出来ない。

「それじゃあ好きな食べ物とかはあるのか？」

「好きな食べ物……この前もらった魔核が……おいしかったです」

「そうか。魔核か。サーバントはみんな魔核好きなんだな」

「はい、好きです」

魔核について話すティターニアの顔が僅かに綻んで嬉しそうにして
いる様に見える。

これは、仲良くなる為にもティターニアにも魔核をケチる訳にはい
かないよな。

俺はこの日から更にスライム狩りに集中する事になった。

どうやら万全な体制で十八階層に臨むことが出来そうだ。

第693話 コミュニケーション（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第694話 再始動（前書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第694話 再始動

「ヒカリン、体調は大丈夫なのか？」

「はい、もう大丈夫なのです。むしろ前よりも良いのです」

「確かに顔色は良さそうだけど」

「海斗さん、心配しすぎなのです。前は薬とかで抑えていたのが、根治したので、今も身体が軽いです。リハビリも順調に進んだので体力も問題ないのです」

「それならいいけど」

「はい、もう大丈夫です。海斗さんもテイターニアちゃんも本当にありがとうございます。何度御礼を言っても足りません」

俺達は今十七階層に来ている。

遂にヒカリン復帰の日を迎える事となったが、ヒカリンはまだ十七階層未体験の為、メンバーで相談の結果、まずは十七階層へと向かう事と決まったのだ。

「ヒカリンわかってると思うけど、この階層は下級ドラゴン中心にエンカウントするから、まずは無理せず後方から様子見すればいいから」

「海斗さん、だから心配しすぎなのです」

「ああ、そんなつもりじゃないんだけど。すまない」

とは言え、ヒカリンは病み上がりで、しかも久々の探索なので心配するなという方が無理がある。

「ご主人様、モンスターです。二体この奥にいます」

「それじゃあ、俺とベルリア、あいりさんが前で残りのメンバーは

後方からサポートを頼んだ」

三人を先頭に進んでいくと、十七階層お馴染みの地竜が現れた。

「本当にドラゴンなのですね。やっぱり他のモンスターとは一線を画す感じなのです。それでは久々にいきますね『アースウェイブ』」
久々の戦闘で気持ちちはやったのか、ヒカリンが先制のスキルを発動し、右側の地竜の動きを封じ込める。
どうやら地竜であっても『アースウェイブ』は有効のようだ。

「ベルリアとあいりさんで左側のをお願いします!」

右側の地竜は足を取られて完全に動きが止まっているので、左側の地竜を二人に任せて俺が一人で担当する。

一瞬このまま近づいてバルザードで首を落とそうかとも考えたが、無理をする必要も無いと考え直し『ドラグナー』を構えて狙いを定める。

地竜はその場から迫ってくる事は無かったので、余裕を持って頭部に狙いを定めてトリガーを引く。

蒼い糸を引いた銃弾が一直線に地竜の眉間を撃ち抜き消滅へと追いやった。

動かない敵への攻撃は思った以上に容易く、あっさりと勝負がついてしまった。しばらくヒカリンのサポート無しで探索を続けていたけど、ヒカリンのスキルは改めて凄いと思ってしまった。おそらく今のが、この階層で一番労力無く倒せたと思う。

「あいりさん、避けてください! 『ファイアボルト』」

俺が、地竜をあっさりと倒した余韻の浸る間も無く、ヒカリンがも

う一体の地竜に向けて炎雷を放った。

「ガアアアアア」

ヒカリンの放った炎雷は、地竜の首元に着弾し、地竜の強固な外装を破り内部へとダメージを与える。

「あとは私に任せろ！」『斬鉄撃』」

炎雷を受け、ベルリアとあいりさんから注意のそれた地竜に向け、あいりさんが渾身の一撃を放ち、とどめをさした。
見事な連携だったが、『ファイアボルト』ってこんなに強力だったのだろうか？

第694話 再始動（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でS
ランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第695話 ヒカリンとパーティーの再編成

「ヒカリン、気のせいかもしれないけど魔法の威力が上がってるよ
うな気がするんだけど」

「はい、以前は病気のせいで、ステータス通りの力を出せていなか
ったんです。それがティターニアちゃんのおかげで、本来の力を発
揮できるようになったみたいです」

「ああ、それでか……」

以前のヒカリンはある意味全力では無かったという事か。

いずれにしても、ヒカリンがいきなりレベルアップしたようなもの
なので、パーティーとしては非常に助かる。

そもそも、ヒカリンが戻って来ただけで、戦闘効率が格段に上がっ
た。

ヒカリンがいない間はミクが一人で後衛を担当してくれていたが、
後衛の重要性を改めて認識させられた。

午前中はそのまま十七階層を探索し、ヒカリンも十分やれる事が確
認出来た。午後からはいよいよ十八階層に潜る事になったので『ゲ
ートキーパー』を使い十八階層へと向かった。

「ヒカリン、十八階層は、入り口に入っただけで、俺達もまだ一度
も戦闘は経験していないんだ。だから特に慎重にいこう」

「わかってます。大丈夫なのです」

俺とベルリアを先頭にして十八階層の探索を開始する。

十八階層のフィールドは特段変わった様子は見られない。十七階層
と比較してもあまり違いは感じられない。

少しだけ天井や道幅が狭い気がするくらいだ。

「ご主人様、早速敵モンスターです」

「何体だ？」

「四体だと思われませう」

「四体か……それじゃあ、あいらさんも前で、シルとルシエも危ないようならすぐにスキルを発動してくれ」

初見の敵なので、慎重にいくに越した事は無い。

そして十八階層に臨むにあたって午前中の戦いで少し修正した事がある。

それはティターニアの扱いだ。ティターニアは直接攻撃のスキルを持たない為に『ウインガル』を使用する以外は、何もする事が無く今一つ戦力化出来ていなかった。

だがティターニアもかなり上位に位置するサーバントのはずなので、このままではあまりに勿体ないと思い試しに『ドラグナー』をティターニアに持たせる事にしたのだ。

攻撃魔法を持たないティターニアに『ドラグナー』が使えるかどうか心配だったが、結論から言うと使えた。

残念ながらと言うか当然ながら『キュアリアル』では発動しなかったが『ウインガル』の魔法でドラグナーは発動し、放たれた弾は俺の時の様な蒼い光の糸を引く事は無かったが、明らかにスピードを増し、瞬時に敵モンスターを捉えた。

これにより、BP66のティターニアによる後方からの攻撃支援が増える事になり、さらにパーティの戦闘が安定した。

俺は『ドラグナー』の代わりに、予備で残っていた魔刀を左手に持ち、ベルリアと同じ二刀使いと化していた。

バルザードは剣なので、左手の魔刀と比べると左右の見た目は少しバランスが悪いが、バルザードの剣身が短いので重さのバランスは悪くない。

ドラゴン相手であればバルザードの飛ぶ斬撃を使い『ドラグナー』

無しの戦闘にも十分対応出来ていた。

後は十八階層の敵にもこのスタイルで臨むが、十七階層の時よりも確実にパーティとしての戦力はアップしているので、後は俺がこの二刀流に慣れる必要がある。

ダンジョンを真っ直ぐに歩いて行くと、十八階層のモンスター四体がこちらを向いて待ち構えていた。

第696話 十八階層の敵

「こいつらは……スケルトンか？」

眼前に待ち構えていたのは、先週まで野村さんと二階層で相手をしてきたスケルトンに酷似しているが、大きく違う点もある。

二階層のスケルトンは、傷んだ武器に剥き出しの骨格だったが、この四体のスケルトンは頭部こそスケルトンのそれが見て取れるが首から下はフルアーマーに身を包み、手に持つ剣はいかにも斬れ味が良さそうな感じにピカピカだ。

フルアーマーによりスケルトンの弱点がほぼ隠されてしまっている。

「ただのスケルトンが十八階層に出るとは思えないのです。先に仕掛けましょう。先制攻撃なのです。『アースウェイブ』」

ヒカリンがスケルトンの一体を『アースウェイブ』でその場へと縛り付ける。

「あいりさん、ベルリア行きますよ」

三人でスケルトン四体へと向かうが、スケルトンの一体がこちらに向かって剣を振るった。

なんだ？ 素振りか？

「マイロード！」

ベルリアの声に嫌な感じを受けて咄嗟に横へと回避する。避けた横を風切り音が過ぎていく。

これは、飛ぶ斬撃か！

「こいつ斬撃を飛ばしてくる！」

やはり普通のスケルトンでは無かった。これは不用意に近づけない。俺達は、一旦その場の止まり、スケルトンの動きを見ながら慎重に距離を詰める。

『サンダースピア』

後方からミクの声がして、先程剣を振るったスケルトンに雷の槍が命中する。

鎧が帯電して光を放ち、スケルトンの動きが止まるが、消滅には至っていない。

更に距離を詰めながら様子を伺うが、動きを止めたスケルトンは、時間と共に動きを取り戻したようで、剣を構え直した。

鎧に何かしら魔法耐性効果があるのか『サンダースピア』が効かないとなれば、他の魔法での攻撃も怪しい。

今度は『アースウェイブ』に足を取られているスケルトンがこちらに向けて手をかざしている。

なんかやばい！

俺は咄嗟にバルザードを上げて頭部を守るうとするが、それとほぼ同時にスケルトンから雷の玉が放たれ、俺の横を抜け後方へと飛んでいった。

はずれた？

「させません！」

後方からシルの声が聞こえてきたので、振り向くとミクの前にシルが立ち雷の玉をラジユナイトで撃ち落としているのが見えた。

「シル様助かりました」

今の攻撃は明らかにミクを狙った攻撃だった。仲間を『サンダースピア』で攻撃したミクへの報復攻撃。しかも同じサンダー系の魔法。このスケルトンは飛ぶ斬撃だけで無く魔法まで使えるのか。

差し詰めスケルトンマジックナイトとでも呼ぶスケルトンの上位種か。いずれにしても遠距離攻撃を操るこいつらと、距離を置いて戦うのは得策ではない。

「シルは『鉄壁の乙女』でミクとヒカリンを守れ！ ルシエ、遠慮は無しだ。頼んだぞ！」

俺は様子見をやめ、気配を薄め全速力でスケルトンマジックナイトへと駆け出す。

ベルリアとあいりさんも俺に続いてスケルトンへと向かうが俺達三人に向けて魔法が放たれる。やはり四体共に魔法が使えるようだが突っ込んで避ける。

第697話 スケルトンマジックナイト（前書き）

現在1巻の書籍化作業が順調に進んでいますが、それに伴いweb版の過去投稿部分の一部前書、後書きを削除したり、細かい部分を変更したりの作業をしています。

今後過去の部分で更新がかかる場合がありますが、本文に変更のない場合もありますのでご了承下さい。

第697話 スケルトンマジックナイト

交戦し始めて、それほど時間は経過していないが、おそらくこのスケルトンマジックナイトの魔法は低級なものだけな気がする。今のところ使って来ているのはファイアボールに類する直線的な攻撃魔法に限定されている。

最初距離を詰めている時に魔法を放たれてかなり焦ってしまったが、直線的な魔法であれば今の俺なら十分対応できる。

そして俺ができると言うことは、もちろんあいりさんもベルリアも出来る。

四体から放たれる、魔法と斬撃を躲しながら向かって行き、ようやく剣の届く位置まで来た。

右手に構えるバルザードを振るい、スケルトンに斬りかかる。

「ギイイイン」

スケルトンは手に持つ剣で、バルザードの一撃をあっさりと受け止めてしまう。

通常のスケルトンの動きであれば、今の一撃で決まっていたはずだが、明らかに通常のスケルトンよりも動きがスムーズで速い。

スケルトン特有の、ぎこちない動きが一切見られず、熟練の剣士の様に流麗な動きだった。

力比べになるとやはりモンスターであるスケルトンの方が遥かに強く、押し切る事は出来ず、このままでは、寧ろ力押しで俺の方が斬られてしまう。

俺は左手に持つ魔刀でスケルトンの右側面を斬りつける。

魔刀もかなりの重量があるので地上であれば、左手一本で振るう事は難しいと思うが、今の俺のステータスなら問題無く振れる。

手に持つ剣で俺と力比べをしているスケルトンには、魔刀の一撃を防ぐ事は出来ず俺の二撃目が、スケルトンの脇腹を捉えるが、身に纏う鎧は伊達では無く、刀による一撃は硬質な金属の壁に阻まれた。硬い！

「くうっ」

バルザードでは無いので、意識をのせても鎧が斬れる事は無いが、集中すると刀身が帯電し始めて火花を散らす。

魔刀の力によりスケルトンは硬直し、先程まで押し込んで来ていた剣の力が弱まった。

その隙を突いて、バルザードに意識をのせて、スケルトンの胴体を一気に切断し、地面へと落ちた頭蓋へ魔刀を突き立て消滅させる事に成功した。

突き立てる際に、鎧の断面内部が見えたが、中はやはり骨だけで空洞だった。

魔刀の帯電による、電気ショックが金属製の鎧を伝い、スケルトンの動きを鈍らせたのは間違い無いが、骨だけのスケルトンに電気ショックが効果がある理屈はよくわからない。

やはりモンスターに地上の常識は通じないのだろうが、やはり十八階層だけあって強い。

「鎧をつけていようが、所詮はただの骨だろ。さっさと燃えて灰になれ『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が『アースウェイブ』で足止めされていた、スケルトンを包み込み燃え上がった。

「やっぱり骨はよく燃えるな」

確かにルシエの獄炎は鎧など問題では無い様で、よく燃えている。
スケルトンもひとたまりも無くあっという間に燃え尽きてしまった。
ただ、どうせなら動け無い相手では無く他の二体を燃やして欲しか
った。

第697話 スケルトンマジックナイト（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第698話 スケルトンナイト（前書き）

いつもありがとうございます。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSラン
クを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第698話 スケルトンナイト

残るスケルトンマジックナイトは後二体だが、既にベルリアとあいりさんが交戦している。

ベルリアは俺同様に二刀で斬り結び、一刀のスケルトンマジックナイトを圧倒している。圧倒的な手数で勝り、かなりの斬撃を浴びせかけているが、全身のフルアーマーのせいで、決定的なダメージを与えるには至っていない。

一方のあいりさんは、薙刀の間合いで戦ってはいるが、敵の魔法を気にして攻撃に専念出来ないようだ。

「あいりさん、わたしがフォローするのです『アースウェイブ』」

あいりさんが苦戦しているのを見て、再びカオリンが魔法を発動して敵モンスターを足止めする。

「ヒカリン、後は任せてくれ」

敵が身動き取れなくなった瞬間あいりさんが側面へと踏み込み薙刀を振るう。

『斬鉄撃』

必殺の一撃がスケルトンマジックナイトの首を刈り取り、頭蓋が地面へと落ちた。

「ベルリア、フォローいるか？」

「マイロード、その場で、お茶でも飲んで今しばらくお待ちください」

い。すぐに終わらせますので」

自分が最後になったのが分かり、本気を出したのかベルリアの剣速が上がる。

スケルトンマジックナイトもかなりの腕前だったが、本気のベルリアの剣の前には全くの無力と化している。

「我が主を待たせていますので、そろそろ終わりにしましょう。なかなか楽しめましたがここまでです。『アクセルブースト』」

ベルリアの炎の魔刀がベルリアのスキルにより加速して、炎の残像を残して振り切れた瞬間、スケルトンマジックナイトの鎧が真ん中からズレて地面へと落ちた。

「これで終わりです」

ベルリアが地面に横たわるスケルトンマジックナイトの頭蓋に刃を突き立て戦闘は終了した。

「結構強かったな。このスケルトンマジックナイト」

「海斗さん、スケルトンマジックナイトって今のモンスターですか？」

「ああ、魔法使うし、フルアーマーでスケルトンの騎士っぽいからぴったりだろ？」

「確かにそうかもしれませんが、ちょっと長すぎませんか？ 戦いの最中にスケルトンマジックナイトって舌を噛んじゃいそうなので」

「そうだな確かに長いな。海斗、シンプルにスケルトンナイトでいいんじゃないか？ みんなもどうだろうか？」

「私もそれがいいと思います」

「俺はみんながそれでいいならいいと思います」

確かにスケルトンマジックナイトは長いし言い難いが、この後魔法を使わないスケルトンが現れたら、どう区別するんだろう。

まあ、区別するほどレアなモンスターでも無いだろうから問題は無いかな。

スケルトンマジックナイトは言い得て妙だと思ったけど、この短い戦闘の間だけの命だったな。

次は短いネーミングのモンスターだったらしいな。

それにしても、かかった時間以上に強敵だった。やはり人型で知能のあるモンスターは、見た目以上に手強い。

人型を苦手としていた俺だが、俺も少しは成長しているところを發揮していきたい。

第698話 スケルトンナイト（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】にお願いします

第699話 四人が限界（前書き）

いつもありがとうございます。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第699話 四人が限界

スケルトンマジックナイト改めスケルトンナイトを倒し魔核を拾い先に進もうとするが、いつもの声が聞こえてくる。

「海斗〜早くくれ〜！ 久しぶりで腹減ったぞ」

「ああ、わかってるよ」

当然、先程の戦闘でルシエとシルはスキルを使用したので魔核が必要となる。ベルリアも久しぶりに活躍したしまあいいかなと思う。問題はティターニアだ。

先程の戦闘で一切何もしていない。完全な後方支援役であるティターニアの出番は当然少なく『ドラグナー』を渡してあるとはいえ今回出番は無かった。

全く戦闘に関与しなかったティターニアをどうするべきか……

本心では何も消費していないのだから魔核はいらないだろうと言う気持ちもあるが、コミュニケーションを深めようとしている今の段階で一人だけ仲間外れの様な扱いをするのは憚られる。

「じゃあ、みんな一つずつだからな」

そう言っただけ俺はスライムの魔核を四個取り出した。

「マスターわたし……もですか？」

「ああ、俺達はパーティだからな。ルシエもそれでいいよな」

「当たり前だろ！ ただでさえケチくさいんだ。しっかり貰っとけ」

結局俺はティターニアにも魔核を渡す事を選択してしまった。あま

い……がこれもマスターとしての務めだ。ただ、もうこれ以上サーバントを抱える事は無理だ。どう頑張っても4人が限界だな。平日のスライム狩りだけでは間に合わなくなる可能性がある。受験もあるし今以上に平日の探索に時間を費やす事は出来ない。今ならギリギリいける！

どうせならティーターニアが活躍する場面になつて欲しいが『ドラグナー』を使用すれば『ドラグナー』分の魔核も必要になるので悩ましいところだ。

「やっぱり、運動の後ほうまいな」

「ほんとうに……いいのでしょうか？」

「ティーターニア、ご主人様のご好意です。ありがたくいただきましよう」

「はい」

四人が嬉しそうな顔で魔核を吸収しているのを見ると俺も嬉しくなってくるので、スライム狩りを更に頑張る決意が湧いてくるが、それはあくまでも目的ではないので先を進む事にする。

「スケルトンが出たって事はゴブリンとかも出てくるのかな。ゴブリンナイト？」

「ゴブリンにナイトっていうイメージは全く沸かないわね」

「カッコいいゴブリンはゴブリンとは言えないのです」

フルアーマーに身を包んだゴブリンか。それなりに強そうだけど身長的にサイズの合うフルアーマーがなさそうな気がする。

遠征の時にゴブリンの亜種っぽいのがいたから無い事は無いけど。

「ご主人、モンスターが来ます」

「こちらに向かって来ているって事か？」

「はい。それほど速くはありませんがこちらに向かって来ています」
シルの言葉で俺達は先程と同じ陣形を取り、武器を構えその場で敵を待ち受ける事にするが、敵はすぐに現れた。

第699話 四人が限界（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第700話 アンデッド（前書き）

いつもありがとうございます。

ついに本編が700話に到達しました。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第700話 アンデッド

「あれってゾンビか？」

「ゲールじゃない？」

「腐った死体なのです」

「どちらにしてもアンデッドなのは間違い無いな」

「そうですね。動きはゆっくりしてますけど強そうには見えませんね」

こちらに向かって来ているのは所謂ゾンビの一種の様に見えるが、明らかに動きは緩慢でゆっくりとこちらに向かって来ている。これならスピードで押せば問題無く倒せそうだな。

「ミク、あれっておかしく無いか？」

「そうね、どう見ても普通じゃ無いわね」

アンデットは徐々に俺達の方へと向かって来ているが、近づくにつれその容貌がはつきりとしてきた。

俺の目に映るアンデッドは大きさが俺達と同じぐらいあるが、まだ距離は結構遠い。

最初は気が付かなかったが、あのアンデッドは明らかに大きい。どう考えても人の大きさを超えている。

「トロール？」

「どう見てもオークよりは大きいわね」

ゆっくりに見えたその動きも、そのサイズが加わるとそれなりの速度が出ているようにも見える。

「ミク、ヒカリン！」

「そうね、待ってやる必要もないわね『ライトニングスピア』」

「いくのです『ファイアボルト』」

少し距離はあったが的が大きいのので二人の魔法がモンスターに命中する。

二人の魔法は確実にゾンビにダメージを与え、その身を焦がした。

「やっぱりゾンビって痛みを感じないのかな」

「そうね。完全に倒す必要があるのかも」

ゾンビは魔法によるダメージをうけているにもかかわらず、全く動じた様子無く近づいてくる。

「ベルリア、あいりさん！」

俺はゾンビに向かい走り出す。表面が腐食して分かり辛いけど、やはりこの感じと大きさはトロールがゾンビ化した個体に見える。それであれば、ゾンビ化で倒し難くなっているとは言え問題ないはずだ。

俺は走りながらゾンビの足を狙いバルザードの斬撃を飛ばす。

先程と同じ様に斬撃がゾンビにダメージを与え肉を穿つが、切断するには至らずゾンビの動きは止まらない。

『ブラックブレイド』

俺の攻撃に続きベルリアがスキルを発動し、黒い刃がゾンビの頭部を抉るが、痛がる素振りを見せず動きも鈍った様子は無い。

やはり、このゾンビは痛みを感じていない。

痛みを感じていない所為で、肉体的ダメージを与えても弱っている様子が無い。

この手のモンスターは首を落とすか細切れにするしか無いが、首の位置が俺の手の届く場所には無いので徐々に削っていくしかない。

『アイアンボール』

あいりさんが鉄球をゾンビの頭部へと叩き込む。

鉄球が顔面へとめり込み、一瞬動きが止まるが再び歩き出す。

「ヒカリン！」

「任せてください」『アースウェイブ』

ヒカリンのスキルでゾンビの動きが鈍る。

俺とベルリアはそのままゾンビへと突っ込み、左右から足に斬り込み、手元に十分な手応えはあるが、やはりまだ足りない。

第700話 アンデッド（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第701話 トロールゾンビ（前書き）

モブから始まるがなんと4000万PV突破しました。PVだけなら超人気作品と言ってもいいレベルかもしれません。ありがとうございます。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第701話 トロールゾンビ

斬りかかった俺とベルリアにゾンビが腕を振るい攻撃してくるが、鈍いように見えてサイズがサイズなのでかなりのスピードと圧力で拳が迫って来る。

俺はゾンビの腕に集中して迫る拳を躲すが、鼻先を風圧が襲う。

ベルリアも同様に避けたようだが、気を抜く間もなく、トロールはそのまま腕を振り回して追撃をかけて来た。横に振われた腕に逃げ場を失い、焦るが、その瞬間俺の中のスイッチが入りトロールの腕の動きを遅く感じ、状況の把握をする僅かな時間が出来た。

俺は横風に使われた腕の下へと潜り込み、それと同時に迫り来る腕に下からバルザードと魔刀を交差して刃を立てる。

剣を持つ腕に凄まじい圧力がかかるが、両手に渾身の力を込めて耐える。

「ゲウウウ」

強烈な圧力は一瞬で無くなり、目の前にはゾンビの大きな腕が転がっていた。

ベルリアはジャンプして上手く避けたようだが、俺にはあの避け方は出来そうに無い。

『斬鉄撃』

あいりさんが正面から飛び込んでもう一方の腕に斬りかかり、無防備に振り切られた腕はあいりさんの薙刀により斬り落とされた。

両腕を奪ったので、戦いはもう終わりだが、ゾンビは腕を失ったにもかかわらず、一切声を上げる事はなく無く何事も無かった様に『

アースウェイブ』から抜け出そうと足掻いている。

「ここまでやっても痛みを感じないのか。これはもう頭を落とすしかないな」

その時、加速した超高速の弾丸がゾンビの頭部を捉えて風穴を開けた。

「テイターニア！」

「マスター……やりました」

「海斗！ まだだ！」

「姫、お任せ下さい」

頭を『ドラグナー』に撃ち抜かれたゾンビは一瞬倒れかけたが、踏みとどまり『アースウェイブ』の影響から抜け出した。ベルリアが地を蹴り、ゾンビの頭部の位置まで跳躍し

『アクセルブースト』

炎の残像を残してゾンビの首に向けて魔刀を振り切る。

「ドォーン」

重量感のある音と共にゾンビの頭部が地面へと落ちたが、俺達は集中力を切らさず頭部を失ったゾンビを注視する。まさか頭部を失っても大丈夫って事は無いよな。

ゾンビの耐久性に不安がよぎったが、一瞬の間を置いてゾンビがその場から消え去った。

「ベルリアやったな」

「はい、大きいだけの愚鈍な相手、このベルリアの敵ではありませんん」

「いや、お前一人で倒したわけじゃ無いからな。とどめをさす前に俺とあირりさんで殆ど攻撃力をゼロにしてただろ」

「マイロード、このベルリア調子に乗ってしまいました。お許し下さい」

「まあ別にいいけど。とどめをさしたのはベルリアで間違いないからな」

「はっ、ありがたきお言葉感謝いたします」

それにしても一体しかいなかったのになかなか苦戦したな。スケルトンナイトといい、この階層の敵はかなり難敵だ。

「さっきのつてトロールがゾンビ化したのかな」

「そうね、そう見えたわね」

「トロールゾンビか」

「ネーミングセンスが……まあいいけど」

まだ探索し始めたばかりだが、十七階層のドラゴンとはまた違った難しさを感じる。

敵が消滅するまで気を抜かずにいこう。

第701話 トロールゾンビ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第702話 アンデッドフロア(前書き)

いつもありがとうございます。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第702話 アンデッドフロア

十八階層に潜ってから既に何度かモンスターとの戦闘をこなしているが、まず間違いなくこのフロアは死霊系のモンスターの巢食うアンデッドフロアだ。

スケルトンやゾンビが出現するが、ゾンビにも種類があるらしく、色々なモンスターがゾンビ化して襲って来た。

戦い自体には少し慣れて来たが、ゾンビに噛まれたり傷を負わされたら自分がゾンビ化したりしないかと内心ヒヤヒヤしながら戦っている。

「ゾンビって大丈夫かな」

「大丈夫って何が？」

「手傷を負ったら俺達もゾンビになったりしないかな」

「海斗、それはテレビの見過ぎよ。探索者がゾンビになったなんて聞いた事ないわ。精々雑菌が入って破傷風になるぐらいじゃ無い？」
「それはそれで嫌だけだな」

やっぱりゾンビ化するのはテレビの中だけの話か。

「海斗さん、ゾンビ化は聞いた事が無いですけど、ヴァンパイアに噛まれて亡くなった探索者の話は聞いた事があるのです」

「え……ヴァンパイアはやっぱり噛むんだ」

「はい、そうみたいです。ヴァンパイア化するのかわかりませんが死ぬ事はあるみたいです」

「そう……か」

ヒカリンの発言に一気にテンションが下がってしまった。

ヴァンパイアは噛むのか。という事は以前戦ったブーメランパンツのマッチョに噛まれたらやばかったのか？

想像しただけで身震いしてしまう。

あの赤いブーメランパンツのマッチョに噛まれる……

絶対に嫌だ！

俺が思っていた以上にヴァンパイアはやばい相手だったようだ。もう二度と会いたくは無いが、もし会う機会があれば、速攻で倒すしか無い。噛まれる前に速攻だ。

「海斗、そろそろお昼にしないか？」

「ああ、もうそんな時間ですか。じゃあ適当にその辺で食べましょう。シル周辺に敵はいないか？」

「はい、大丈夫のようです」

俺達は、その場に陣取り十八階層初めての食事を取る事にした。ただ、各種ゾンビやスケルトンが現れる階層での食事は少し気が乗らない。

「久しぶりのダンジョンのご飯なのです。幸せなのです」

「そうね、みんな揃って食べるのは久しぶりだし、いつもより美味しいわね」

「確かに暫くヒカリンがいなかったからな。全員揃ってピクニックだな」

確かにヒカリンが復帰して初めての食事ではあるが、女性陣は遅しいな……

この環境を気にしていたのは俺だけか。

俺のこの日のお昼ご飯は、コンビニで買ったいなり寿司と新発売の納豆ドーナツだ。

まずはいなり寿司から食べ始めるが、安定の美味しさだ。

この甘い感じが小さい時は大好きだったが、十八歳になった今食べてみても普通に美味しい。

いなり寿司には普遍的な美味しさがあるな。

いなり寿司を食べ終わったので、今度は納豆ドーナツを食べてみる。新発売のパンだが、初めて買ってみた。揚げたドーナツの中に納豆が入っているらしい。

袋から取り出してドーナツにかぶりつく。

サクツとしたドーナツの食感に続いて、納豆の感じが口いっぱい広がる。揚げてあるのに中は普通の納豆の感じで柔らかい。

「……………」

ドーナツに納豆……

誰が考えたんだろう。俺も初体験に惹かれて購入はしてみたが、この洋風ドーナツの中に和風の納豆が決定的にミスマッチだ。それぞれ単体で食べれば美味しいと思うが、この二つが合わさる事で不協和音を奏でている。

「まずい……………」

俺の楽しみであるダンジョンでのお昼ご飯が失敗に終わってしまった。せめてこっちを先に食べればよかった。

どうやら俺の冒険は失敗に終わってしまったようだ。

もう二度と買う事は無いだろう。納豆入りドーナツ、想像以上に難敵だった。

第702話 アンデッドフロア（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第703話 噂をすれば(前書き)

いつもありがとうございます。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第703話 噂をすれば

初日にしては十八階層の探索は俺のお昼ご飯を除けば順調に進んでいる。

一番の要因はヒカリンが戻って来たお陰だが、これまでの戦闘で人型モンスターへの対応が上手くなってきている事も大きい。伊達に十七階層に及ぶダンジョンを越えて来たわけではない。

「ご主人様、今度は二体です」

「俺とベルリアが前衛であいりさんはすぐ後ろについてください」「わかった」

これまでの感じなら、余程の事が無い限り二体であれば問題無いだろう。

俺とベルリアは武器を構えて奥へと進む。

「あつ……」

奥には人型のモンスターが待ち構えていたが、明らかに今までのモンスターとは風貌が異なる。

骨でも無いし腐ってもいない。明らかに普通の人間の様な出立ちをしている。

遠目に見る限りはクラシカルな服を着ている事以外は特に変わったところは見受けられないが、どう見ても探索者では無い。

「ベルリア、あれって……」

「マイロードおそらくヴァンパイアでしょう」

「ヴァンパイア……」

ヴァンパイアと言えば以前戦ったブーメラパンツのマツチヨなおつさんを思い浮かべるが、今眼前に見える相手は普通だ。服も普通に着ているし、特に変態性を思わせる要素は見受けられ無いが少し前にヒカリンが話していた内容が頭をよぎる。

「ヴァンパイアに噛まれて死んだ人もいるらしいです」

噛まれたら死ぬかもしれない。もしかしたら狂犬病的な変なウィルスが原因かもしれないが、モンスターだけに未知すぎる。

もしそうならレベルとか耐性とか関係なさそうだし考えただけで身震いしてしまう。

「ベルリア速攻で終わらせるぞ」

「お任せください」

俺は気配を薄めてヴァンパイアに向け駆け出し、そのまま加速する。得体の知れない敵は速攻で倒してしまうに限る。

ヴァンパイアもこちらに気がついた様で、こちらに向かって手をかざすが、その瞬間、俺の前方に小型の雷が落ちた。

「魔法か！」

敵は二体なので、もう一体はベルリアを攻撃したのかも知れないが確認する余裕は無い。

ヴァンパイアの魔法が外れたのはナイトプリンガーの効果で認識が阻害されていたのと、俺が全速力で駆けていたからだろう。

と言う事は足を止めるとやばい。

更に加速してそのままヴァンパイアを目指すが再び雷が落ち俺の行く手を阻む。

前方に落ちた雷に行手を阻まれその場で止まってしまった。
まずい……

足を止めてしまったせいで完全にヴァンパイアに捕捉されてしまった。ヴァンパイアに目を向けるとその赤い目としっかりアイコンタクトしてしまった。

しっかりとこちらを捉えたヴァンパイアの赤い目は、明らかにその瞬間嘲りの感情を湛えていた。

やばい避けられない。

やられる！

そう思った瞬間、後方からあいりさんの声が聞こえて来た。

『アイアンボール』

あのブーメランパンツのマッチョを地獄へと突き落とした鉄球が現れヴァンパイアに向けて一直線に突き進み、腹部へとめり込んだ。

第703話 噂をすれば(後書き)

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第704話 ヴァンパイア（前書き）

いつもありがとうございます。

下に サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

第704話 ヴァンパイア

「グヘエッ」

鉄球をくらったヴァンパイアがアニメでしか聞いた事のない様な声をあげる。

やはりあいらさんの『アイアンボール』は対人型モンスターには絶大な威力を発揮する。

とにかく今がチャンスだ。

俺は再びヴァンパイアに向けて走り出し、距離を詰め、両手に持つ剣を十字に振るいヴァンパイアを斬り裂く。

「ガアアアア〜」

剣を十字に振るったのは、その方がなんとなくヴァンパイアには効きそうな気がしたからだが、効果があつたのかはわからない。たたバルザードと雷の魔刀がヴァンパイアを斬り裂く事に成功した。

普通の人間なら致命傷だが、こいつは不死のヴァンパイアだ。これで気を抜くわけにはいかない。

俺は追撃をかける為にもう一度二刀を振るい首を刎ねようとするが、三度ヴァンパイアのスキルが発動し雷が炸裂した。咄嗟に回避したが、ヴァンパイアをも巻き込む形で発動した為、避けきれずにダメージを受けてしまった。

「グウウウ……」

痛い。猛烈に痛い。回避行動を取ったので直撃したわけでは無いが左半身が猛烈に痛い。

まさかの自爆攻撃。

流石にこの至近距離での戦闘中に魔法を発動するとは思ってもみなかった。

装備のお陰で、ダメージのうちのかなりの部分を受け流す事が出来てはいるが、痛いものは痛い。

「ご主人様！」

「海斗！」

俺は痛みを耐えながら、一旦その場から離脱を図る。

『斬鉄撃』

俺と入れ替わる形であいりさんが前方に飛び込んで薙刀の一撃を放つ。

あいりさんの先には俺が戦っていたヴァンパイアがいて、俺がつけた傷は残っているものの、傷口から煙の様なものを出しながら回復しているのが見て取れた。

あいりさんの一撃も手負いで動きの鈍ったヴァンパイアを捉え、更に深手を負わせる事に成功するが、消失までは至らない。

「あいり、どけ！」

その時ルシエの怒声が後方から響いて来た。

「ご主人様を傷つけるとは許せません。塵となって消えてください
『神の雷撃』」

「たかだかヴァンパイアの分際で調子に乗るな！ さっさと燃えて
なくなれ『破滅の獄炎』」

シルとルシエがほぼ同時にスキルを発動し目の前のヴァンパイアを雷撃と獄炎が襲いかかり、ヴァンパイアは瞬時に消え失せた。

あのブーメランパンツの奴はここから何度も再生して来たが、こいつはどうだ？

バルザードを構えてさっきまでヴァンパイアがいた場所に意識を集中させるが、よく見ると地面には魔核が落ちているのが見える。

どうやらヴァンパイアはシルとルシエの攻撃で本当に消し飛んでしまったらしい。

やはりあのブーメランパンツは上位種だった様で、さっき戦っていた相手はそこまでの再生能力は備えていなかったようだ。

それにしても、これほど直接的なダメージをくらったのは久しぶりだ。

少しは十八階層のモンスターに慣れて来たと思っていたが、まさか再生能力を見越しての自爆攻撃を仕掛けて来るとは思ってもみなかった。

噛まれる事を恐れて、一気に突っ込んだのは悪手だったかも知れないが、噛まれない為にもやむを得ない戦術だったと思う。

目の前のヴァンパイアが消滅して気が抜けそうになるが、奥で魔法が発動した音が聞こえて来た。

第704話 ヴァンパイア（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第705話 ヴァンパイアに勝つ（前書き）

外部情報サイトにイラストレーターさんと発売日がアップされました。

予約サイトが出来次第こちらでも詳細を報告できると思います。
発売まであと少しです。

第705話 ヴァンパイアに勝つ

奥ではベルリアがヴァンパイアとの戦闘を続けていたが、いつの間にかスナッチも参戦している。

ヴァンパイアは俺の相手と同じく、ベルリアと交戦しながら小型の雷を発動しているが、ベルリアは素早い動きで全て躲している。

スナッチは魔法の発動の直後を狙って『かまいたち』を発動する。

風の刃がヴァンパイアを刻むが、すぐに傷が修復してしまっているのが見える。

『アクセルブースト』

ベルリアの右手で振られた魔刀が加速してヴァンパイアの左腕を捉え、斬り落とす。

「ガアアアア！」

ヴァンパイアの叫び声が響き渡るが、魔刀の効果で斬り落とした腕の断面が燃え上がるが、腕が再生する様子は無い。

どうやら燃えた傷口が再生する事は無いようだ。

片腕を失ったヴァンパイアはベルリアとスナッチの敵では無く、最後はあっさりとベルリアに首を刎ねられて戦闘は終了した。

「マイロードお待たせしました」

「いや、待つてないから大丈夫だ」

「それよりマイロード、もしかして怪我をされているのでは無いのですか？」

「ああ、さっきの戦闘でヴァンパイアに自爆攻撃を受けてしまった

んだ」

「ヴァンパイア如きがマイロードに傷を負わせるとは。すぐに治療いたします『ダークキュア』」

ベルリアがスキルを発動すると、皮膚の焼けるような痛みがスーツと引いていくのがわかる。

「ベルリア助かったよ」

「このベルリア、マイロードのお役に立てるとは感激の極み。このぐらい当然の事です」

ベルリアの言い回しがいちいち大袈裟だが気にしていたら疲れてしまつので軽く流しておく。

それはともかくベルリアの『ダークキュア』はHPが劇的に回復するわけではないが、傷が治癒するので本当に助かる。名前はともかく低級ポーション一本分が丸々浮くのでそれだけで価値がある。

前衛で頑張ってくれているベルリアだが、その事と同等以上に回復役として欠かす事が出来ない存在となっている。

「海斗危なかつたわね。もうちょっとで直撃してたんじゃない？」

「まさかあの距離で魔法を発動してくるとは思って無かつたから反応が遅れてしまつたんだ」

「やっぱりヴァンパイアは曲者ね」

「なんか勝手にヴァンパイアはスマートなイメージを持つてたけど、この前のブーメランパンツといいイメージが大分違うな」

「そうね。伯爵とかそんな感じじゃないわね」

「いずれにしても強いのは間違い無いから、次からも十分注意していこう。さっきのを見る限り、炎が弱点な気はしたけど」

「そうね。次は私も『スピットファイア』を連発してみるわね」

「ああ頼んだ」

俺達は、ヴァンパイアの魔核を二個回収してその場で小休止する事にした。

「海斗！ 早くしろよ」

「わかってるって」

俺は小休止の間にサーバント四人それぞれに対しスライムの魔核を渡しておいたが、やはり四人は地味にキツイ。

まあ今回テイターニア以外は十分に活躍してくれたから何も言えない。

第705話 ヴァンパイアに勝つ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第706話 おふだ（前書き）

お待たせしました！ ついに楽天 ヤフーショッピング等に予約ページが開設されました。主要ショッピングサイトで名前を検索してください！

まだイラストなしの状態ですがもう予約できます。ぜひ予約してください。今ならあなたが1番目かも知れません！ お願いします。

HJ文庫 全336P 税込737円です。

発売日は7/1に決まりました！ イラストレーターさんはあるみつく先生です。

今もなるうにずっと載っているキネティックノベル大賞のバナーのバイオリンにマスクの女の子を描いたイラストレーターさんです。最高のイラストで主要キャラを余す所なく描いていただきました！ 2巻が出るかどうかは予約と発売1週間の売り上げ次第とほかの作家さんが書いていました。

買う気のある方もない方もとにかく予約をよろしくお願いします。

第706話 おふだ

その後も何回か戦闘をこなしていた時間になったので切り上げて帰路につく事にしたが、やはり十八階層はアンデッド系モンスターのフロアで間違いないようだ。

ヒカリンが戻って来た事で、戦闘はスムーズになったが徐々に本格的な対人型戦闘を行ったので、思った以上に疲れてしまった。

家に帰ると今日の晩ご飯は唐揚げカレーだった。それにしてもカレーに唐揚げって最高の組み合わせだな。

食後、明日に備えてお風呂に入って入念にストレッチを行い、春香に今日の報告を済ませてからすぐに寝てしまった。

翌朝、準備を整えてダンジョンへと向かうが、しっかりと寝たお陰で疲れはかなり取れ、ダメージを受けた影響も無さそうだ。

今日は朝から十八階層へアタックする事が決まっているので、パーティーメンバーと合流してからすぐにダンジョンへと向かう。

「ヒカリン体調はどう？」

「前までは家に帰ると身体が重かったんですけど昨日はそれも無くて、今日もすごく調子が良いです」

「そう、それはよかったよ」

ヒカリンにとっては数ヶ月ぶりのダンジョンだったので少し心配していたが、表情を見ても俺以上に元気な印象を受けるし問題無さそうなので本当によかった。

俺たちは十八階層を昨日と同じくアンデッド系のモンスターを倒しながら進んで行くが、やはり手強い。

「ご主人様、この先に三体のモンスターです」

シルの声にフォーメーションを整えてから注意深く進んで行くとすぐに敵モンスターの姿を確認する事が出来た。

「あれもアンデッド系のモンスターなのか？」

「そうみたいね」

「あのモンスターなら大昔の映画で見た事がある」

「本当ですか？ 俺は見た事無いんですけど強いですか？」

「ああ映画の中ではかなりの強さだった」

「あんな感じなのにですか？」

「映画ではな。あれの名前はキョンシーだ」

「キョンシーですか？ なんか名前は可愛いですけど見た感じはふざけてるんじゃないですか。前ならえでぴよんぴよん飛んでますよ」

「記憶によると映画では噛まれたらキョンシーになったような……」

「嘘でしょ……あれになるんですか」

あいらさんがキョンシーと呼ぶモンスターは遠目からでも異彩を放っている。

昔のどこかの国の民族衣装のようなものを纏い何故か腕を前へならえの状態で挙げており、直立の状態でぴよんぴよん跳ねながら移動している。

どう見ても強そうには無いが、ヴァンパイア同様噛まれたらキョンシーになるらしい。

流石にあれになってしまふのはヴァンパイア以上に抵抗感がある。というよりも絶対にあれにはなりたく無い。

「あいらさん、キョンシーの弱点はなんですか？」

「おふただな」

「？ おふだですか？

「ああ、おふだだ！」

おふだってなんだ？ まさか花札じゃ無いよな。もしかしてお寺とかにあるおふだの事か？

「おふだってなんですか？」

「法術みたいな感じで、おふだを貼ると動きが止まるんだ」

……これは完全に映画の中の話だな。おふだで動きが止まるってそんな事あるはずも無いし、そもそも都合よくおふだなんか持って無い。

そう思いながらあいりさんを見ると何故か手にはおふだらしき物が握られている。

「あいりさん……。その手に持つてるのってまさか……」

「ああ、おふだだ！ アンデッドフロアなのが分かっていたから昨日の夜に家にあつた物を準備しておいたんだ。他にも聖水がわりの塩水とかもあるぞ」

流石はあいりさんと言った方が良いのだろうか？ 準備万端で素晴らしいと思うが、本気でそのおふだを使う気なのだろうか？ それに塩水って聖水がわりになるのか？

第706話 おふだ（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第707話 キョンシー

「あいりさん、そのおふだどこから持って来たんですか？」

「家にあつたのを借りて来たんだ」

「まさか、それをキョンシーに貼り付けるんですか？」

「ああ、やってみよう」

やはり本気の様だ。

とりあえず、あいりさんがやるつもりなら任せてみるしかない。

俺は俺の役割を果たすだけだ。

見る限りぴよんぴよん飛んでいるだけで、可動域も狭そうなのであっさりと倒せそうな気はする。

前衛の三人でキョンシーへと向かって行く。

俺は真ん中のキョンシーを相手取ることにするが、見れば見るほど不思議な敵だが噛みつきだけには気を配る。

キョンシーは俺に向かって直線的な動きで跳ねながら近づいてくる。俺はタイミングを計り、間合いに入った瞬間、右手に持つバルザードを振るうが、その瞬間今まで直線的で緩慢な動きを見せていたキョンシーが、ありえない様なアクロバティックな動きを見せて上空へと回避し、俺のひと振りは空を切った。

「なっ！」

上空へと回避したキョンシーはそのまま上空で回転し、降下しながらドロップキックを浴びせかけてきたので、咄嗟に剣をクロスして攻撃を防ぐ。

直撃は防いだが、強烈な衝撃が身体を貫き体勢を崩す。

そこへ続けざまにキョンシーが連撃を加えてくるが、硬直した体勢

のままなのにまるでカンフーのような攻撃だ。

突き出した腕と脚を使い、息もつかせぬ勢いで攻撃をしかけてくるので防戦一方となってしまう。

敵は武器を持っているわけではないので純然たる肉弾戦だが、こちらは剣で応戦しているというのにキョンシーの肉体は異常な硬度を保っているのか一切傷ついた様子は無い。

こちらは二刀流だが、素手である敵の回転速度には及ばない。応戦を繰り返すうちに徐々に被弾する回数が増えてきている

「マスターがんばって……」ウインガル」

テイターニアが俺に向かってスキルを発動してくれたようだ。

『ウインガル』の効果のおかげで俺の身体が軽くなり、剣速が僅かに上がる。

剣速が上がった事により、なんとかキョンシーの攻撃を捌けるようになったので、少しだけ余裕が出来た。

「テイターニア助かった！」

息もつかせぬ蓮撃を見せるキョンシーだが、キョンシー自身はもともと息をしていないのだろう。全く息が上がる様子は無いので、守勢に回っているはこちらが一方的に体力を削られるだけだ。

俺は防御の為では無く、攻撃の為に剣を振るう。

『ガッ』

硬い！ やはりこのキョンシーの身体は異常に硬い。敵の攻撃の合間を抜いて魔刀で脇腹を斬ったが、硬くてダメージがはいった気配が無い。

魔刀の効果が発動し、帯電しているのが見て取れるが動きが鈍ぶる様子も無い。

このキョーンシーと言うモンスター名前の響きやその特異な風貌とは異なり強い。

純粹に近接戦闘は俺よりも上かもしれないが、こんな階層序盤で負けるわけにはいかない。

第708話 燃え上がるキョンシー（前書き）

ついにアマゾン 楽天 ヤフーショッピング等に予約ページが開設されました。主要ショッピングサイトで名前で検索してください！まだイラストなしの状態ですがもう予約できます。ぜひ予約してください。お願いします。HJ文庫 全336P 税込737円です。発売日は7/1（木）に決まりました！ の下部にカバーイラスト掲載せました！

2巻が出るかどうかは予約と発売1週間の売り上げ次第とほかの作家さんが書いていました。

買う気のある方もない方もとにかく予約か店頭で購入よろしくお願います。

6月15日ごろに追加のお知らせがあります。お楽しみに。

第708話 燃え上がるキョンシー

俺の奥ではあいりさんがキョンシーと戦っているが、本気でおふだを武器にして戦っているようだ。

キョンシーの体術に真っ向から対抗しているのが見える。

見切りとでもいうのだろうか、キョンシーのアクロバティックな攻撃をひらひらと躲しながら左手に持つおふだを貼り付ける機会を窺っている。

「ハッッ！」

あいりさんが不思議な発声と共に踏み込んでおふだをキョンシーの顔にあてがった。

「危ない！」

思わず声が出てしまう。俺も自分の敵を相手にする事で手一杯でフオローに入る事は出来ないが、あいりさんのおふだを持っている手がキョンシーの口のすぐ近くなので噛みつかれたらやばい。

俺は目の前のキョンシーの攻撃を避けながら、あいりさんに注意を向けるが、あいりさんの手が噛まれる様子はない。

「うそだろ……」

あいりさんが相手にしているキョンシーは先程まで繰り返していた攻撃を止め、その身体の動きを停止していた。

信じられない事だが、この理由は一つしか考えられない。

おふだ……

あいりさんが家から借りて来たというおふだの効果が発揮された
しか考えられない。

映画は事実を元にして作られていたのか？ 鬼の件もあるから無い
とは言い切れない。

動きを止めたキョンシーだったが、おもむろにあいりさんがおふだ
から手を離すと、当然の様におふだはキョンシーから離れて落ち、
その瞬間再び動きを取り戻した。

なんだ？ どういう事だ？ あいりさんは何で手を離したんだ？
おふだで動きを止めて、そのままとどめをさせれば良かったのになん
で手を離したんだ。ただのミスか？

あいりさんの戦いを見て疑念が湧いたが、目の前のキョンシーの攻
撃が激しくなってきたので、あいりさんの事は一旦置いておいて、
自分の敵に意識を集中し直す。

『ウィンガル』の効果でスピードはついていけているが、問題はキ
ョンシーの防御力の高さだ。

俺の拙い技量では魔刀の一撃で切断には至らなかった。

「海斗！ 援護するわ！」

後方からミクの声がすると同時に後方から二発の炎弾が俺の脇をす
り抜けキョンシーを襲う。

一発は垂直に飛び上がり躲されたが、もう一発はキョンシーを捉え
命中し、その身を燃え上がらせた。

キョンシーの衣装が燃え、周囲に肉の焼ける様な匂いがしてくるが、
燃え上がりながらもキョンシーは俺に向かって来た。

これだけ燃えているという事はアンデッド系によくある炎が弱点な
のは間違いないと思うが、痛みを感じないのか、燃えながらもお
構い無しに、ガンガン攻撃してくる。

図らずも、さながら全身燃え盛るファイアキョンシーと化している。
今までの攻撃に炎が加わり完全に攻撃力が上がってしまった。

「アチッ！」

攻撃を避けても炎が追ってくる。これは長引くとまずい。

炎のせいで攻撃されればされるほど俺へのダメージが増えてしまう。もう猶予は無い。速攻で勝負を決めるしか無い。

第708話 燃え上がるキョンシー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下にモブからカバーイラストとサバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリック
お願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第709話 ファイアキョンシー（前書き）

ついにアマゾン 楽天 ヤフーショッピング等に予約ページが開設されました。主要ショッピングサイトで名前で検索してください！まだイラストなしの状態ですがもう予約できます。ぜひ予約してください。お願いします。HJ文庫 全336P 税込737円です。現在着々と準備中です。

発売日は7/1（木）に決まりました！ の下部にカバーイラスト掲載せました！

2巻が出るかどうかは予約と発売1週間の売り上げ次第とほかの作家さんが書いていました。

買う気のある方もない方もとにかく予約か店頭で購入よろしく願います。

6月15日ごろに追加のお知らせがあります。お楽しみに。

第709話 ファイアキョンシー

キョンシーの脅威的な体捌きとその特異な風貌、そして噛まれる事に恐怖を感じて及び腰になっていた感は否めないが、もうそんな余裕は無い。

ファイアキョンシーと化した目の前の敵は全身燃え上がる凶器。悠長に様子を見ていたら軽い火傷どころでは済みそうに無い。速攻でケリをつける為に集中力を高める。

残念ながら俺の技量では魔刀でファイアキョンシーを断ち切る事は出来ないので頼りはバルザードだ。

バルザードを持つ右手に力を込め、ファイアキョンシーの動きに神経を集中するが、やはり迫り来る炎は怖かった。

腰が引けてバルザードでは炎の攻撃を避けながら反撃するには長さが足りない！

「ヒカリン！ 『アイスサークル』を！」

「わかったのです。まかせてください 『アイスサークル』」

俺は一旦その場から後方へと離脱し、俺とファイアキョンシーの間を氷の柱が遮る。

『ウォーターボール』

すぐさま俺はバルザードに氷を纏わせて一瞬の拘束と引き換えに魔氷剣を発現させるが、すぐにファイアキョンシーが氷柱を飛び越えて向かって来た。

今度こそ！

再び右手をきつく握りこみファイアキョンシーを迎撃する。

魔氷剣により射程が伸びた事と、炎に氷という心理的な安心感も加わり、さつきよりもスムーズに身体が動く。

ファイアキョンシーの一番の武器はその燃え盛る突き出された腕。その腕の攻撃に合わせ切断のイメージをのせてカウンターで斬りつける。

少しの抵抗感と共に魔氷剣が振り切れ、ファイアキョンシーの片腕が地面へと落ちた。

魔刀では弾かれたが魔氷剣ならいける！

片腕を落としてもファイアキョンシーの動きが止まる事は無く、そのまま攻撃を続けて来たので俺も魔氷剣を更に振るいもう一本の腕も斬り落とす。

ファイアキョンシーの両腕を落とす事に成功したので、これで終わりかと思っただが、流石はキョンシーそんな甘くは無かった。

両腕を失ったキョンシーは、今度は脚技に転じファイアキックを連発して来た。硬直した身体でどうやっているのかはよくわからないが、とにかく腕以上に厄介な動きで攻撃を繰り返して来る。

腕よりもリーチがあるので、バックステップを踏みながら間合いを保ち魔氷剣で迎撃する。

ファイアキックの撃ち終わりを狙った魔氷剣の一撃は燃え盛る右脚を斬り落とす事に成功したが、それでもファイアキョンシーの攻撃は止まらず、尚も片脚だけで攻撃をしかけて来る。

「どつなってるんだ！」

片脚なのに先程迄と変わらない勢いで蹴りを繰り返して来る。

重力を無視したようなファイアキョンシーの動きには驚きを感じるがこれ以上長引かせる意味もないので、しっかりと動きを見極め魔氷剣で残った脚も切断する。

両手両足を失ったキョンシーは動く術を失いその場へと落ちて、そこから起き上がってくることは無かった。

俺は地面に横たわるファイアキョーンシーに向かって魔氷剣を振るいとどめをさした。

第709話 ファイアキョンシー（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下にモブからカバーイラストとサバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリック
お願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第710話 家内安全（前書き）

発売日は7/1（木）に決まりました！ アマゾン 楽天 ヤフー ショッピング等に予約ページが開設されました。主要ショッピングサイトで名前で検索してください！

もう予約してくれた方もいるようなので本当にありがとうございます！ まだの方はぜひ予約してください。お願いします。HJ文庫

全336P 税込737円です。現在着々と準備中です。 の

下部にカバーイラスト載せました！

2巻が出るかどうかは予約と発売1週間の売り上げ次第とほかの作家さんが書いていました。

買う気のある方もない方もとにかく予約か店頭で購入よろしく願います。

6月15日ごろに追加のお知らせがあります。後10日です。お楽しみに。

第710話 家内安全

「ここまでやらないと倒せないのか」

四肢を切り飛ばした上で頭部を潰してようやく倒す事が出来た。不滅というわけではないが、キョンシーのこの耐久性は厄介極まり無い。

どうやらキョンシーを倒したのは俺が一番早かったようでベルリアとあいりさんはまだ交戦中だった。

「あいりさん、フオローしましょうか？」

「いや大丈夫だ。色々試してわかってきたところだ」

一体何がわかってきたというのだろうか？ あいりさんは相変わらずお札を左手に持ちながら戦っている。

俺の相手とは違いファイアキョンシー化してはいないので幾分は戦い易いと思うが、キョンシーのトリッキーな動きに対して洗練された動きで対応している。

「海斗！ 見ている！」

あいりさんは、俺に呼びかけると再び左手に持ったおふだをキョンシーの頭部へと押し当てた。

「どうだ？ 効果てきめんだろっ」

「そうですね」

信じられない事だが、やはり先程と同じく、頭におふだを押し当て

られたキヨンシーは完全に動きを止めている。

「映画だと、このまま手を離してもおふだが張り付いていたんだが、もしかしたら両面テープでも使っていたのかもしれない」

ああ……それでさつき手を離したのか。先程のあいりさんの不自然な動きの理由がわかった。

「本来で有ればここから法術を使って倒すところだが、残念ながら『アイアンボール』で倒す事は出来なかったからな」

法術？ 俺達の世界には法術なんか無かったはずだが、またあいりさんは映画の世界に入り込んでしまっているのか。

ただ痛みを感じない上にこの耐久性では『アイアンボール』は相性が悪い。

あいりさんは左手でおふだを押し当てたまま、右手で薙刀を短く持ち直し器用に振り切った。

『斬鉄撃』

器用に振り切った薙刀の一撃は見事にキヨンシーの首を薙り取る事に成功し、キヨンシーはその場から消え去った。

「やりましたね」

あの状態から薙刀を振るうとは、さすがあいりさんだな。

「ああ、次はおふだに両面テープを貼り付けておく事にするよ」

おふだってテープで貼りつけても効果を発揮するんだろうか？

おふだに意味があつて貼り付ける方法は問題では無いのかもしれない。

「あいりさん、それよりそのお札すごいですね。本当にキョンシーの動きを封じてましたよ。よくそんな特別なおふだが家にありましたね」

「いや、このおふだはそれほど特別なものでは無いぞ。父が近くの神社で買って来た家内安全のおふだからな」
「家内安全……」

てつきり対キョンシー用の特別なお札だと思つていたが、まさかの家内安全のおふだ。

もしかしておふだだったらなんでもいいのか？

ある意味、このおふだをぶつつけ本番で試してみたあいりさんも凄いが、その事以上に家内安全のおふだのオールマイティさに衝撃を受けてしまった。

家内安全だけでは無く対キョンシー用の武器として十二分に効果を發揮していた。

まさかとは思つが、他のアンデッド系のモンスターにも効果があったりするのだろうか？

第710話 家内安全（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下にモブからカバーイラストとサバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリック
お願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第711話 おふだの種類（前書き）

御礼 ついに70000pt達成しました。ありがとうございます。
80000pt目指して頑張ります。

発売日は7/1（木）に決まりました！ アマゾン 楽天 ヤフー
ショッピング等に予約ページが開設されました。主要ショッピング
サイトで名前で検索してください！

もう予約してくれた方もいるようなので本当にありがとうございます！
まだの方はぜひ予約してください。お願いします。HJ文庫
全336P 税込737円です。現在着々と準備中です。 の
下部にカバーイラスト載せました！

2巻が出るかどうかは予約と発売1週間の売り上げ次第とほかの作
家さんが書いていました。

買う気のある方もない方もとにかく予約か店頭で購入よろしくお願
いします。

6月15日に書籍関連の追加のお知らせがあります。お楽しみに。

第711話 おふだの種類

俺とあいりさんの戦闘が終わり、緊張感が解けてかなり気が抜けてしまったがベルリアはまだ戦っている。

俺とは違いベルリアは近接戦で圧倒的にキヨンシーを上回っているが、ベルリアも俺と同じ状況に陥っていた。

恐怖のファイアキヨンシー化！

ベルリアの炎の魔力で斬りつけて引火したのだろう。

技術で圧倒し燃え盛るキヨンシーを相手に戦っているが、ファイアキヨンシーに対してベルリアの持つ武器が問題だった。

炎の魔力はファイアキヨンシーの炎を更に燃え上がらせ、風の魔力も風を送り込み燃焼を助長している。

攻撃すればするほどにファイアキヨンシーの炎の勢いが増し、今は炎でキヨンシーの姿が倍化したかのような錯覚を覚える程に大きく見える。

「私にこのような対抗策を取って来るとは、死肉にしては頭が回るようですね」

ベルリア何を言っているんだ？ キヨンシーは単純に燃えやすいだけだぞ。

「そろそろ終わりにしましょう。燃え尽きてください」ブラックブレイド」

ベルリアが超至近距離から黒い刃を飛ばしてキヨンシーを切断する。胴体が真っ二つとなっても、バタバタと動きを見せているが、ベルリアがジャンプして上空から刀を頭に突き立て消滅させる事に成功

した。

「ベルリア、結構苦戦したな。武器の相性が良くなかったから仕方がないけど」

「マイロード、全く苦戦などしておりません。先程の戦いは全て想定内です」

「そうか、それならいいんだ」

どう見てもさっきのは苦戦していたのにベルリアの見栄っ張りにも困ったものだ。

「海斗もベルリアもよかつたらこれを使ってみるか？ 一応まだ枚数があるんだが」

そうやってあいりさんは、俺とベルリアにおふだを一枚ずつ渡してくれた。

これがさっき使ってたおふだか。

本当にどこにでもあるような紙製のお札だ。

「安産祈願！？」

先程のあいりさんのおふだは家内安全と書かれていたが、俺の手元にあるおふだには安産祈願と書かれている。

キョンシーに安産祈願のお札が効くのか？ 家内安全のおふだが効くんだから、おふだならなんでもいいのだろうか？

ベルリアの手にあるおふだを見るとそこには交通安全の文字が書かれていた。

「本来で有れば、このおふだを法術で飛ばしてキョンシーに貼り付けるんだが……そうだ、ドローンで運んで貼り付けるのもありかも

しれないな」

「あいらさん……ドローンはやめておいた方がいいです」

「ああ、ドローンといえば……」

ドローンにはいい思い出がない。おそらくキョンシーに向けて飛ばしてもあっさり撃ち落とされて終わるのは、火を見るよりも明らかだ。

「もう、その件はいいんです。かなり前の事ですから。それよりもこの世界には法術なんか無いですから、ある前提の行動は謹んでください」

「そうは言うが、スキルと魔法が存在するんだぞ。法術があってもなんの不思議もないだろう」

「まあ、それはそうですけどね」

「それと、次からは両面テープを持ってきておいた方がいい」

「家にあつたと思うので俺が持つてきますよ」

「そうか、頼んだぞ。これでペタツと貼ればもつと簡単に倒す事ができるはずだからな」

やはりおふだに両面テープを使うつもりか。

まあ何事も挑戦してみる事は大事なので、次回以降おふだの効果も併せて試してみようと思う。

第711話 おふだの種類（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下にモブからカバーイラストとサバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリック
お願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第712話 新たな噂（前書き）

御礼 ついに70000pt達成しました。ありがとうございます。
80000pt目指して頑張ります。

次回更新は6/15です。7/1の発売まで2週間と迫ったこの日に書籍関連の重大告知があります。是非更新をチェックしてください！

アマゾン等に予約ページが開設されました。主要ショッピングサイトで名前で検索してください！

もう予約してくれた方もいるようなので本当にありがとうございます！
まだの方はぜひ予約してください。お願いします。HJ文庫

全336P 税込737円です。現在最後の追い込み中です。

第712話 新たな噂

週末の探索を無事に終えて、学校に登校しているが、教室に着くと隼人が話しかけてきた。

「海斗、今何階層潜ってるんだ？」

「十八階層に潜ったばかりだけど」

「十八階層か……」

「それがどうかしたのか？」

「いや、十八階層なら大丈夫かな」

「いやだからなんの話だよ」

「聞いて無いか？ 最近探索者が結構襲われて被害が出てるみたいなんだ」

「襲われて？」

探索者が襲われるってどういう意味だ？

「いや、襲われるって言い方はあれかもしれないけど、十階層台まで行ってる探査者パーティが全滅したり、戻ってきてても再起不能になってるケースが増えてるらしいんだ」

「十階層を超えたパーティだとアイアンランク以上だろ？ そうそう無茶しなきゃボス戦以外で全滅ってあり得るのか？ しかも複数か？」

「ああ、だから、何かおかしいって噂が広まってるんだ」

「モンスターの種類はわかってるのか？」

「それが、はつきりしないんだ」

「はつきりしないってそんな事あるのか？」

「噂の中にモンスターの種別は一切は言ってないんだ」

やはりこの噂話はガセの可能性が高い気がする。

本当にそんな事が起こっているなら、襲われた当事者たちが相手のモンスターを認識していない事などあるはずがない。

それがモンスターの情報が無いという事はただの噂話に過ぎないという証明だろう。

「そういえば隼人たちは今何階層なんだ？」

「それが今十二階層なんだ。ちょうど十二階層も今回の話の中に出てきてたから、ちよつとびびってるんだ」

「大丈夫だと思うけどな。それより十二階層いけそうか？俺もあの階層は苦勞したよ。小さいくせに強いだろ？」

「やっぱりな。海斗も苦勞したのか。イライラするけど気を抜くとやられそうになるし酷いエリアだよな」

隼人たちも十二階層まで進んでいるのか。かなりやり込んでないとそこまで到達していないと思うので、相当熱心にダンジョンに潜っているのがわかる。

「それともう一つ噂があつて『黒い彗星』が新しい幼女を連れていたって話しなただけだな」

「……………」

「前話してくれてたサーバントか？」

「そうだろうな」

「ピンクの髪か？」

「そうだな」

「それ……噂になつてるぞ」

「……………」

また俺達を見た誰かが、根も葉もない噂を流したのか。

「『黒い彗星』は老若男女なんでもいけるって。その中でも特に幼女がお好きらしいって噂だ」

「隼人！ 絶対に学校では他の人にその話をするなよ！」

「わかってるって」

「俺は絶対に幼女は無理だから！ しかも老も男も無理だ！」

「老はよくわからないけど男は師匠のことだろうな」

「ベルリアかつ！！ そんなことあるわけないだろ！」

「もちろん俺はわかってるけど噂って怖いよな。俺も気をつけないと」

また俺の知らないところでとんでもない噂が立っていた。完全なるガセ。

やはり噂ほど当てにならないものはないと痛感させられた。

恐らくダンジョンの件もただの噂だろう。

それにしても誰が流しているのかはわからないが、頼むから知らないところで俺の噂するのはやめてもらいたい。

第712話 新たな噂（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下にモブからカバーイラストとサバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリック
お願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

第713話 妙な気配（前書き）

お知らせ！！

7/1書籍発売のモブから始まる探索英雄譚ですが、なんとコミカライズします！！

大事な事なのでもう一度言います。コミカライズします！！

しかもコミカライズは、なんとチャンピオン等刊行している秋田書店さんです！！

海斗やシル、ルシエが漫画で読めます。既に漫画家さんも決定しています。発表は7/1になります。

絵がめっちゃくちゃ上手いです。そして漫画もめっちゃくちゃ面白いです。

文庫版とあわせてお楽しみに！！

第713話 妙な気配

今日からまた一階層でスライム狩りに励まないといけない。

なにしろ俺には燃費の悪いサーバントが四体と魔核を消費する魔剣があるからだ。

レベルアップしてランクが上がると共に魔核の消費量が格段に増えてきた。

俺がすっかり働かないとあつという間に破綻してしまう。

サーバントの面倒を見るのは主である俺の義務とも言えるので、スライム狩りに集中する。

「それで探索者のパーティがいくつか壊滅してるって噂なんだ」

「はん、そんなのよくあるただの噂だろ。いちいち聞いてたらきりがないな」

「まあ、そうだよな」

「……………」

「シル、どうかしたのか？」

「その噂と関係あるかどうかはわかりませんが、最近妙な気配のよくなものを感じることがありました。気のせいかとも思ったのですが、もしかしたら……………」

「妙な気配って？」

「それが、はつきりとはわからないのですがモンスターとは違う感じでしたが、おそらく一体だけではないと思います」

「ベルリアは何か感じなかったのか？」

「マイロード、私は何も……………」

「そうか、うん」

ベルリアも感じることでできない妙な気配か。今回の噂と関係があ

るのか？

「おい！ ベルリアに聞いてなんでわたしには聞かないんだよ！」

「だってルシエはなにも感じないだろ。聞くだけなあ」

「くっ、失礼なやつだな！」

「じゃあなにか気がついたのか？」

「あ、ああ、妙な気配だ！ 妙な気配があつたぞ！」

「本当か？」

「も、もちろんだ！」

これは完全に嘘だな。見栄を張って嘘をついたな。

「あ……の、マスター。わたしも妙な気配を……感じました」

「そうなのか？ ティーターニアも感知能力があつたのか？」

「いえ……そんなんじゃない……です。精霊が……騒いで……」

精霊が騒いでいる？

「ティーターニアは精霊が見えるのか？」

「はい。小さな……子たちだけです」

精霊にも小さい大きいがあるのか。ティーターニアはフェアリークインだから精霊も見えるんだな。

だけどティーターニアもなにか感じていたなら、シルの言っていることは間違いないのだろう。

その妙な気配っていうのが探索者を襲った相手なのか？

シルはモンスターの気配じゃ無いって言っているが、じゃあ一体なにが探索者を襲っているんだ？

「ご主人様、スライムです」

「ああ、わかつてる。くらえ！」

俺は現れたパープルスライムに必殺の殺虫剤ブレスを放つ。

レベル補正を受けた殺虫剤ブレスはあっという間にスライムをしとめた。

「ご主人様さすがです。もうスライム退治においては右に出るものはいないので無いかと思います」

「そうかな」

「ふん、海斗みたいに毎日スライム狩ってる奴が他にいないだけだろ」

「姫、スライム狩りにおいては私でもマイロードには敵わないのです。マイロードはスライム狩りのスペシャリストと言っても過言ではありません」

シルとベルリアの評価は、喜んでいいのか？

自分でもスライム狩りはかなり極まってきたとは感じているが、スライム狩りを極めたところで所詮はスライムだからな

第713話 妙な気配（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下にモブからカバーイラストとサバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリック
お願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保
たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第714話 幽霊にはお経？（前書き）

お知らせ！！

7/1書籍発売まであと10日ほどとなりました。是非予約か店頭で購入お願いします！

コミカライズも着々と進行中です。

漫画さんも7/1に発表になりますが、以前、いくつか紙面連載を持たれていた方なので、漫画好きで色んな月刊誌を読んでいる読者さんは知っている方もいるかもしれません。

文庫版とあわせてお楽しみに！！

第714話 幽霊にはお経？

「海斗先輩、聞きましたか？ 探索者パーティが壊滅状態に追いやられる事件が多発してるの」

「ああ、隼人たちから聞いたけど野村さんも知ってるのか」

「はい、結構有名な話ですよ。私たちも大丈夫かな、って話してるんです」

「野村さんは今三階層だろ？ 被害は十階層より下って聞いているけど」

「いえ、私は五階層付近でも被害が出てるって聞きましたよ」

「そうなのか？」

隼人から聞いた話と違うな。これって被害が拡大しているってことか？ それとも敵が複数いるってことなのか？

「まあ、大丈夫だと思うけど気をつけてな。それより新しいパーティはどうなんだ？」

「はい、同世代の女の子ばかりなので楽しいですよ」

「それはよかった。無理せずに頑張ってたな」

「はい」

久しぶりに野村さんと話したけど、上手くやれているようで良かったけど、俺も負けられないように明日からまた十八階層で頑張ろう。

翌朝、準備を整えてからダンジョンへと向かい、メンバーと合流して早速十八階層へと向かう。

「そういえば海斗、探索者キラーのこと聞いた？」

「探索者キラー？」

「探索者を潰して回ってるらしいわよ」

「ああ、その話か。聞いてるよ。それにしても探索者キラーって…

…」

「だって既に何人が殺されてるそうよ」

「殺されてるって、そこまで聞いてなかったけど本当なのか？」

「そうみたい」

ダンジョンなのでもちろん不慮の事故で亡くなってしまふ事はあるが、ダンジョンがある程度解明されてからは、ほとんどのパーティが安全マージンを取りながら探索しているので怪我をする事はよくあるが、亡くなるということはありません。

それが何人かの探索者が殺されたとは穏やかではない。

適正な階層で潜っている限りは、そういったことは起こりにくい。

もし本当に複数そういったことが起こっているとすれば、完全なイレギュラー。その階層以上の力を持った敵の襲来。

シルの言っていた妙な気配の敵による可能性がある。

「ご主人様、ご準備ください」

俺は気を取り直して敵に備え進んで行く。

「みんな……あのモンスター透けてないか？」

「ああ、そのようだな」

「幽霊みたいですね」

進んだ先には二体のアンデッド系と思しきモンスターがいたが、今までのモンスターと違い身体が透けている。外見はかなり腐食が進んでいるようだが髪と服装からおそらく女性だ。

「あれって倒せるのかな」

「ああ、幽霊ならお経で倒せる」

「あいらさん、それ本当ですか？ お経で倒せるんですか？」

まさかのお経だが、先日のおふだの件があるので、あいらさんが倒せるというのなら倒せるのだろう。だが、俺はお経なんか読めない。

「ああ、冗談だ。お経でモンスターが倒せるはずがないだろう。海斗しっかりしてくれよ」

「あいらさん……」

「海斗さんも、あいらさんの冗談を本気にしちゃダメなのです」

え？ 今のって俺が悪いのか？ 先週の事があって、こんな真顔で言われたら誰だって信じるだろう。

「じゃあどうやって倒せばいいんですか？」

「それは聖水だ！ 聖水代わりに塩水を持ってきているから、祈りながらふりかけよう」

これは……どっちだ？ 冗談なのか？ それとも本気か？

「あいらさん冗談はやめましょうよ。もうひっかかりませんよ。いくらなんでも塩水じゃあ無理でしょう」

「海斗、何を言っているんだ。冗談でこんなことを言っはさすがないだろう。しっかりしてくれ」

……今度は本気だったのか。

第714話 幽霊にはお経？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

ゲームーズの販売サイトにオリジナルプロマイドの記載を見つけました。筆者も見ましたがついてるみたいです。予想では多分シルカルシエじゃないかと思えます。海斗のプロマイド……多分ないと思えます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします。

第715話 聖水は精製水（前書き）

モブから始まる探索英雄譚1を予約いただいた方ありがとうございます。モブから始まる探索英雄譚1を予約いただいた方ありがとうございます。

まだの方は来週木曜日に発売です。ぜひ購入お願いします。

書籍版にコミカライズの連載開始日の表示があるようなので7/1の発売日にコミカライズ掲載開始日もお知らせできそうです。

前日入荷の書店さんもあるので、気になる方は、フライングチェックしてみてください。

第715話 聖水は精製水

「あいりさん、モンスターに聖水を試したことはないですよね」

「当たり前だ。初めて会う敵に試せるはずがないだろう」

「あいりさん、そもそも持つてるのは、本物の聖水ではないんですよ」

「そうだな。さすがに本物は手に入らないから疑似聖水とでもいうものだな」

「どうやって作ったんですか？」

「それは精製水に十パーセントの天然塩加えて念を込めながら混ぜたんだ」

……精製水

まさか精製水だけに略して精水なんてことは無いよな。それに念を込めて塩を混ぜると精製水が聖水になって、俺でも作れるけど本当にそんなもの効くのか？

「海斗信じていない顔だな。まあ見ている」

そう言っであいりさんは疑似聖水を手に幽霊のもとへと向かって行く。

「あいりさん！ 危ないですよって」

あいりさんの疑似聖水は霧吹きのようなものに入っているが、どう考えても射程は一メートル程度しかなさそうだ。

「ミク、あれ大丈夫なのか？」

「まあ、あいりさんだし大丈夫じゃない？ それにしてもあれってスペクターかしら」

「ゴーストじゃないのですか？ ゴーストとスペクターってどう違うんでしょうか？」

「まあ、ちよつと透けてるし幽霊なのは間違いないな。それより二体いるからもう一体は俺たちでなんとかしようか。聖水以外って何が効くんだろう。物理攻撃って効果あると思う？」

「無理じゃない？ 魔法攻撃なら効果ありそうな気がするけど」

「そうだな。それじゃあカオリン『アイスサークル』で固めてしまふのはどうかな」

「良さそうですね。さっそくやってみるのです『アイスサークル』」

氷の円柱がスペクターを包み込むように発現して一瞬にしてスペクターの氷漬けが出来上がった。

「海斗、あいりさんが！」

慌ててあいりさんに視線をやると、まさにスペクターに聖水を吹きかける瞬間だった。

あいりさんが霧吹きを構えて吹きかけると前方に向けて霧状の疑似聖水が広がった。

「ぎいいイイアアアア〜」

スペクターが断末魔をあげている。

これは効いているのか？ いや間違いなく効いている。明らかにスペクターがダメージを受けて、その場から逃げようとしている。

「逃がすか！ 聖水で祓われるがいい」

あいらさんが逃げようとするスペクターを追い、更に霧吹きで疑似聖水を吹きかけるとスペクターはその場から消えていなくなってしまうた。

この場合昇天したという言い方が正しいのか？

「あいらさん本当に効果がありましたね」

「当たり前だ。私お手製の聖水だからな」

これってあいらさんが作ったから効果があるのか？ それとも俺が適当に作っても効果があるんだろうか。この場では検証のしようがないので、今日帰ったら家で作ってみよう。家に精製水なんかないから、とりあえず水道水に塩分濃度十パーセントで作ってみよう。あいらさんが念を込めたと言っていたが、念の概念がよくわからないので適当に手を合わせておけばいいかな。

それにしてもあいらさんの疑似聖水はスペクターに対して劇的効果だった。

第715話 聖水は精製水（後書き）

【読者の皆様へお願い】

ゲームーズの販売サイトにオリジナルプロマイドの記載を見つけました。筆者も見ましたが特典みたいです。予想では多分シルカルシエじゃないかと思えます。海斗のプロマイド……多分ないと思えます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

サバイバー最弱の俺は天使な彼女とSランクを目指す もよろしくお願ひします。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願ひします。

第716話 黒い敵（前書き）

来週木曜日発売の書籍購入特典です。

とらのあな SS付きイラストカード シルフィーのご主人様
メロンボックス SS付きリーフレット ゼロから始まる探索英雄譚
アニprogゲームズ 特製プロマイド Wonder goo
ポストカード

数量限定なのでお近くにお店がある方はお早めに！

上記とは別にHJ文庫よりTwitterにて販売記念キャンペーンが開催されるかもしれません。

発売日にお知らせできるかもしれないので楽しみに！

第716話 黒い敵

「それはそうと、もう一体のあれどうしよう」

スペクターをヒカリンの『アイスサークル』で氷漬けにしたものの、このまま放っておくわけにもいかない。

「このまま砕けばいなくなるんじゃない？」

「この氷を砕くのか。結構難易度高いな」

このサイズの氷を斬ることは出来ても砕くとなると難しい。

「シル頼んでいいか？」

「はい、おまかせくださいご主人様。氷ごとモンスターも砕きます

『神の雷撃』」

シルの放った雷撃が氷へと落ち、砕くと同時に蒸発させてしまった。どうやら問題なくスペクターも一緒に蒸発してしまったようだ。

「シル、さすがだな」

「ありがとうございます。御用の時はいつでも言ってくださいね」

シルの一撃に頼ってしまったので、氷ごと砕けばスペクターを倒せるのかどうかの検証はできなかった。

氷漬けで無くともシルの雷撃をくれば蒸散してしまう気がする。

「海斗、ほらほら」

「わかってるよ」

工口鼻肩はいけない。差別もいけない。軋轢を生まない為に平等ルールを設けてはいるが、今回戦ったのはシルだけ。心情的にも懐的にもルシエには渡したくないがしかたがない。ベルリアを除く三人にスライムの魔核を渡して先に進む。

「ミク、あいりさんなんか凄いな。おふだといい聖水といい俺には思いもつかないことをやって結果を出してる」

「私もあいりさんを見習っておふだは一枚持ってきたわ」

そう言っつてミクが一枚のおふだを見せてくれたが、そこに書かれていた文字は『商売繁盛』だった。

「ミク、それっつて本当に効果あるのか？」

「多分大丈夫じゃない？ パパの念が目いっぱいこもってると思うわ」

おふだっつてパパの念でもいいのかわ

「あの聖水の霧吹きもいいのです。わたしは前に出ることはありませんが、万一の時に霧吹きがあれば身を守れるのです」

「スペクターには効果があつたけど、他のモンスターに効くかはわからないから、万一の時は霧吹きよりは魔核銃とかの方がいいと思うけど」

まあ、おふだについては、前回あいりさんからもらった安産祈願のがあるから機会があれば試してみようと思う。

せっかく試してみようと思ったが、進んで行くとスケルトンナイト等のモンスターと何度か戦闘にはなつたが、キョンシーはまだ出現していない。

そう都合良くはいかない。ダンジョンではよくあることだ。

「ご主人様、モンスターだと思います。ご準備ください」

「シル、モンスターだと思うってどういう意味？」

「敵なのは間違いありませんが、通常のモンスターとは少し感じが違う気がします」

シルがこんな事を言うのは珍しいので、どう違うのかはわからないが警戒が必要かもしれない。

「みんな、慎重にいこう。ベルリアを先頭に俺とあいりさんがその後ろでいきましょう」

ベルリアならどんな相手でも咄嗟に反応ができるので、ベルリアに先陣をまかせて、俺とあいりさんがそれに続く。

「マイロード、敵を発見しました。あれは……」

距離があるので俺にはまだ小さな黒い塊にしか見えないが、ベルリアは敵を認識したようだ。

第716話 黒い敵（後書き）

【読者の皆様へお願い】

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

サバイバー最弱の俺は天使な彼女とSランクを目指す もよろしく
お願いします。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします。

第717話 知り合い？（前書き）

ついにモブから始まる探索英雄譚1の発売が明日となります。

書店によっては本日店頭に並ぶところもあるようです。

是非HJ文庫の売り場を探して購入をお願いします。電子版は午前0時配信開始です。

追加

本日レーベルサイトで公開されていたのでコミカライズ情報です。

秋田書店 どこでもヤングチャンピオン（月刊電子書籍）で8/24発売の9月号より連載開始です！

漫画家さんは7/1公開です。連載開始までもうすぐなので、よろしくお願いします。

第717話 知り合い？

慎重に近づいていくと次第に敵の姿がはっきりと見えてきた。

「海斗、もしかしてあれはお前の知り合いか？」

「あいりさん、たしかに俺も黒いですけど笑えない冗談ですね」

見えた敵は真つ黒。

人の形をした真つ黒な敵。

もちろん俺の知り合いではないし人間でもない。

形は人型だが顔もよくわからない。完全なる黒。よく見ると身体全体が微妙に波打っている。

「マイロード、おまかせください。あのようにマイロードを模したような黒いだけのモンスターなど、このベルリアの敵ではありません」

ベルリアお前もか。別にあれは俺を模したのでは無いと思う。

ベルリアが魔刀を構えて黒い敵を目掛けて斬り込んでいくが、ベルリアの振るった刀は確かに敵を捉えたように見えたが、ダメージを与えることはできずに、敵の身体をすり抜けた。

「小細工を！ これで終わりです『アクセルブースト』」

ベルリアがスキルを発動して、先程よりも鋭い加速した刀を叩き込むが、今度も同じだ。

確かに身体を捉えたにもかかわらず刀がすり抜けた。

「ベルリアさがれ！」

身体が波打って見えたのは、身体が普通の肉体ではないから。液体なのか気体なのかよくわからないがどう見ても固体では無い。

「援護するのです『ファイアボルト』」

ヒカリンの放った炎雷が黒い敵を穿ち、その胴体に大きな穴を開けるが一瞬で元の姿を取り戻し動き始める。

「なっ……」

確かにヒカリンの放った炎雷は敵を捉え、穿った。

それなのにノーダメージ。

ベルリアの魔刀による物理ダメージもヒカリンの魔法攻撃も効果無しだ。

「まだよ！」

今度はミクがスピットファイアで炎弾を放つが、先程のヒカリン同様、黒い身体をすり抜けた。

黒い敵は、攻撃を意に介さずこちらへと向かってくるが、黒い敵の手からは炎が噴き出している。

敵の攻撃手段は炎か！

「まかせろ！」

あいりさんが霧吹きとおふだを手に俺たちの前に出た。

「あいりさん！」

あいりさんが、黒い敵へと向かい手前で霧吹きで擬似聖水を吹きかけた。

「まだ足りないかつ！」

あいりさんが連続で霧吹きを射出する。

霧吹きから放たれた擬似聖水を全身に浴びた黒い敵は明らかに動きが鈍くなってきた。

効いてるよな……

あいりさんの攻撃が効果を發揮しているのは明らかだ。

動きが鈍くなった敵に向けて、今度は例のおふだを貼り付けると黒い敵は完全にその動きを止めた。

「家内安全……」

すごいな。もう認めるしか無い。あいりさんの持っている家内安全のおふだは、この階層の敵に必殺とも言える効果を發揮している。そしてただの塩水、いや聖水も確実に効果を發揮している。

あれが魔法より効果が高いとは、目の前の光景を見ても信じがたいが、これが真実。

真実は小説より奇なりという言葉があるが、まさにこの光景はそれだろう。

「ご主人様、おふだや聖水が効果を發揮したという事は、あの黒い敵は、悪霊の類。おそらく炎を発しているところを見てもあれはマサンだと思えます」

第717話 知り合い？（後書き）

【読者の皆様へお願い】

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【を】 【 】をお願いします。

第718話 マサン（前書き）

ついにモブから始まる探索英雄譚1が本日発売です。電子版配信は既にスタートしているところも！

今日から1週間の売り上げで次の出版が決まると他の作家さんが書いていたのでは是非HJ文庫の売り場を見つけて買ってください。今日買ってくれるとスキップするぐらい嬉しいです。今週買っても飛び上がるぐらい嬉しいです。よろしくお願いします。

8/24連載開始の漫画版ですが、担当していただけの漫画家さん
はてりてりお先生です。以前アニメ、映画化されたリトルウィッチ
アカデミアのコミカライズを担当されていた方です。他にも、もも
いろアーメット等を描かれています。秋田書店さんをお願いした大
きな理由の1つがてりお先生です。とにかくば抜けて上手いです。
第1話もかなり面白いのでモブからの読者には是非読んでもらいた
いです。

第718話 マサン

「マサン？ 聞いた事ないな」

「死を司る悪霊です」

どうやらシルによるとあの黒いのは悪霊らしいが、変わった風貌の悪霊もいるものだな。

「海斗のお友達じゃなかったのね」

「ミク、それはもういいから。それよりもあの状態からどうやって倒せばいいんだ？」

おふだも聖水もマサンの動きを止めるには効果を発揮しているがあの状態から、とどめをさせる感じでもない。

「試しにスピットファイアで撃ってみましょうか？」

「そうだな。一発だけ撃ってみる？」

「わかったわ」

いきなり何発も撃ってなにか起こっても困るので、とりあえず一発だけ撃ってもらおう。

ミクの放った炎弾が動きを止めたマサンの胸部に大きな穴を開ける。

「やったか？」

おふだと聖水の効果で胸に穴が開いても全く動く気配は無いが、ゆっくりと穴が閉じているのがわかる。

回復速度は明らかに落ちているが、やはり炎弾でしとめることは難

しいようだ。

「海斗さん『アイスサークル』で固めますか？」

「うん、それもな」

確か『アイスサークル』なら固めて倒せる気がするけど、砕くのが大変なんだよな。

こういう時に他のパーティなら爆弾とかで一気に吹き飛ばすのかも
しれない。

「シル、雷撃で倒せるか？」

「はい、もちろんです」

「おい、ちよつと待て。なんでわたしじゃないんだ？」

「だってルシエは炎だろ？ また燃え尽きるのに時間がかかりそう
だからシルに頼むよ」

「バカにしてるのか？ あんな黒炭野郎一発だぞ！」

「シル頼んだ」

「おい！」

なんにでも相性というものがあるので、ルシエのことはスルーする。

「それではいきます。あいりも離れていてください」

「はい、シル様」

あいりさんがその場から離れるが、おふだはしっかりとマサンの頭
部に張り付いている。

俺の持って来た両面テープがその性能を遺憾なく発揮している。

たとえ両面テープで貼り付けても、おふだの効果が損なわれること
はなかったようだ。

『神の雷撃』

シルの放った雷撃がマサンを焦がす。

一瞬で敵の身体を消し去り、既にマサンの姿は無いが、再生しないとも限らないので注目するが、よくみると地面には魔核が落ちていたので問題なく倒す事に成功したようだ。

「ご主人様、あいり……申し訳ありません」

なんだ？ どうして敵を倒したシルが謝っているんだ。

「シル様、謝る必要など全くありません。おふだなど所詮は紙。代わりはいくらでもありますから問題ありません」

ああ、そういうことか。

シルの雷撃はマサンと一緒に家内安全のおふだを焼き尽くしてしまっていた。

あの万能おふだが無くなるのは少し痛い。敵を倒すためだったので今回は仕方がない。

「あいりさん、俺が弁償します」

「いや、大丈夫だ。今日は他にも持って来ているからな」

そう言ってあいりさんはマジックポーチから新たなおふだを取り出した。

「除災招福ですか」

「ああ、家にあつた中で一番効果がありそうだったから持ってきたんだ」

確かに、家内安全や安産祈願に比べると格段に悪霊に効果がありそうなおふだだ。
それにしてもあいりさんの家には一体何種類のおふだがあるんだろう。

昨日母親に聞いてみたけど残念ながら我が家にはおふだらしきものは一枚もなかった。

第718話 マサン（後書き）

Liccorisさんからレビュー頂きました。本当にありがとうございます！

今日から発売記念で数日間毎日投稿します。ヘブンズドアの読者の方はしばらくお待ちください。

【読者の皆様へお願い】
皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【
【を】 【】にお願いします。

第719話 ウエポンスおふだ（前書き）

特報

モブから始まる探索英雄譚1発売記念キャンペーンです。

HJ文庫公式Twitterのキャンペーンページをフォローとリツイートで10名様に著者 海翔&イラストレーター あるみっくの直筆サイン色紙（多分カラーイラスト色紙）をプレゼント！

超高確率で当たると思っているので是非応募してください！

買わなくても応募できますが、どうか買ってください。お願いします！ 締め切り7/15まで。

第719話 ウエポンスおふだ

マサンを退けたので次の敵には俺もおふだで対抗してみようと思う。みんなでお昼ご飯を済ませてから探索を再開する。

今日のお昼ご飯はカレーパンにオムライスおにぎり。

カレーとオムライスが手軽に味わえて最高だ。しかも今日のカレーパンは焼きカレーパン。揚げたカレーパンとはまた違った感じであり美味しかった。

今日のミクのお弁当には見慣れない食べ物が入っていたので聞いてみると、パテドカンパーニュだそうだ。

「パテよパテ」

とミクに言われて、パテは聞いたことがあると思ったが、パテドカンパーニュか。

馴染みがないのでオペラの題名か自転車のレースのような食べ物だと思ったが、口にするのはやめておいた。

探索を開始するが、思ったよりもモンスターに手こずっていることもあり十八階層のマッピングが進んでいない。

ペースアップの為に、あいりさんの使っているグッズを有効活用する必要がありそうだ。

「ミク、パテって美味しいのか？」

「まあ、物にもよるけど今日のは美味しかったわ」

「ふん、よく食べるの？」

「よくってほどじゃないけどたまに出てくるわね」

「そうなんだ」

俺の記憶が確かならば、俺の家の食卓にパテが出て来た事はない。たまたに食卓に出てくるミクの家って……

「どこかで売ってるのかな」

「デパ地下とかならあると思うわ」

デパ地下か。俺には無縁の世界だな。

パテがおいしいなら今度行ってみようかな。

「ご主人様、お話し中ですが敵モンスターです」

「わかった」

俺は左手におふだを携えモンスターの方へと進んで行く。進んだ先にはキョンシーが四体いた。

「前衛で三体を倒すから、ヒカリンはフォロー。ミクはスナッチにフォローを指示して。残りの一体はシル頼んだぞ！」

「はい、おまかせください」

「ちよつとまで！ わたしはどうするんだよ。わたしも戦っ！」

「ルシエにまかせると余計燃え上がりそうだしな」

「わたしには風もあるんだ！ あんなの一瞬で刻んでやる！」

「うーん、どうするシル」

「ルシエも活躍したいようなのでルシエでいいと思います」

「わかった、それじゃあるシエー体任せたぞ」

「まかせるまでも無いな。瞬殺だ」

まあルシエでも問題はないだろう。

今回はファイアキョンシー化は防ぎたいので火器厳禁だ。

前回の件もあるのでスナッチに頑張ってもらってミクには後方で待機してもらった方がいい。

俺は一番左側のキョンシーに狙いを定め左手には安産祈願のおふだを携えて走る。

キョンシーも俺を認識して向かってくるが相変わらずピョンピョンふざけた動きを見せる。

あつという間に間合いが詰まり交戦状態へと入るが、キョンシーはアクロバティックな動きで連続攻撃をかけてくるので、防御に追われる。

回避しながらバルザードを振るうが、やはりこのふざけたモンスターは強い。

予測不能な動きにバルザードよりも更に間合いが短いおふだを貼り付けるタイミングがなかなか掴めない。

第719話 ウエポンスおふだ（後書き）

昨日買ってくれた方本当にありがとうございます。
まだの方は是非購入お願いします！

第720話 安産祈願（前書き）

週末のお供にモブから始まる探索英雄譚1を是非買ってください！
今日発表されていた7/1の文庫、小説、ライトノベルランキング
売上BEST500になんとモブからが32位に登場していました
！

角川さんのbook Walkerでも日間11位！ 購入してく
れた方は本当にありがとうございます！

初日だけでもめちゃくちゃうれしい。

あと数日でも売れてくれるともっとうれしいです。

そしてまだの方は購入お願いします！

第720話 安産祈願

「テイターニア『ウインガル』を頼む！」

「かしこまり……ました。マスター頑張つて……ください『ウインガル』」

『ウインガル』の効果で少しだけ身体の動きが軽くなる。

キヨンシーのアクロバティックな動きにもなんとか対応できるようになるが、完全に間合いに入り込む事はできない。

更に集中を高め攻撃に転じるが、踏み込む瞬間にスイッチが入り、目の前のキヨンシーの動きがゆっくりになる。

俺の動きも遅いままだが、キヨンシーの動きははっきりと見えるので、動きに合わせてそのまま前へと踏み込む。

とつた！

目の前には無防備に晒されたキヨンシーの頭がある。

俺は左手に持ったおふだに全神経を集中してキヨンシーのおでこに貼り付けることに成功した。

これで俺の勝ちだ！

もうキヨンシーは動く事はない。そう思って気を緩めた瞬間キヨンシーの蹴りが俺の胴体を捉えた。

「ぐはっ………なんで………」

ナイトプリンガーとスーツに守られているとはいえモンスターの一撃をもろにくらったのでめちゃくちゃ痛いし、息が詰まる。

慌ててキヨンシーに目をやる。おふだは完全にキヨンシーの顔に張り付いたままだが、なぜか普通に動いている。

どういう事だ？ おふだで動けなくなるんじゃないのか？

目の前の事態に思考が混乱してしまっ。

「海斗さん！ フォローするのです『アイスサークル』」

キョンシーに向かってカオリンのスキルが発動するが、後方へと飛び退いて直撃を回避されてしまった。

俺とキョンシーの間に氷の柱が壁として出現する。

俺は氷の柱の影に入り、その場から一旦離脱する。

「スナッチ足止めするわよ」

ミクの指示を受けスナッチが俺と入れ替わりで飛び出して『かまいたち』を連発する。

「あいつ、おふだが効かない！」

「海斗のおふだってなんのおふだ？」

「安産祈願だ！」

「安産祈願……それがダメだったのかも。私のおふだを貸してあげるわ」

「ミクのおふだってたしか……」

「商売繁盛よ！」

安産祈願がダメだとしたら商売繁盛はいけるのか？

「ミク、やっぱり無理なんじゃ」

「大丈夫よ！ パパの念がこもってるから。パパの商売への想いと情熱がキョンシーごときに効かないはずがないわ！」

「そう……」

根拠のない論説だが、ここまで言い切られると信じるしなくなる。

確かにミクのパパなら相当なお金持ちのはずだ。

熱意がなければ事業で成功していないのも事実だろう。今はミクのパパの想いを信じるしかない！

俺はミクから商売繁盛のおふだを受け取り再びキョンシーへと向かう。

スナッチが足止めしてくれているので、今度は容易に懐に入る事ができた。

再び集中力を高め、キョンシーの動きを見極め、タイミングを計り商売繁盛のおふだを安産祈願のおふだに重ね貼りする。

「どうだ！」

第720話 安産祈願（後書き）

先日お知らせしたキャンペーンも多くの方に応募いただきありがとうございます。
とっごぞいます。

締め切りは7/15までなのでHJ文庫公式Twitterのトップにキャンペーンページがあります。

Twitterのアカウントを持っている方は是非応募してみてください！

第721話 パパは業界一位（前書き）

書籍発売で新しい読者の方も急に増えていますが、週末のお供にモブから始まる探索英雄譚1を是非買ってください！

昨日発表されていた7/1の文庫、小説、ライトノベルランキング売上BEST500になんとモブからが32位に登場していました！ 多分これはすごいことです！

初日だけでもめちゃくちゃうれしい。

あと数日でも売れてくれるともっとうれしいです。

そしてまだの方は是非購入お願いします！

第721話 パパは業界一位

おふだを重ね貼りしたキョンシーは完全に動きを止めた。

「今度は効いたのか？」

その場から後退してキョンシーの動きを観察するが全く動く気配は無い。

商売繁盛のおふだが効果を発揮してくれたようだ。

俺はバルザードを構えてから、再び踏み込んでキョンシーの身体を斬り捨てた。

キョンシーが消滅した地面には安産祈願と商売繁盛のおふだが残されたので、二枚とも拾って回収する。

「ミク助かったよ。商売繁盛のおふだって効くんだな」

「一般的な商売繁盛のおふだがどうなのかはわからないけど、パパのおふだが効かないはずじゃないじゃない」

「俺には安産祈願と商売繁盛の差がわからないんだけど」

「そんなの私だってわからないわよ。でも私のパパは凄いからアンデッド程度問題にならないわ」

「ミクのパパって神父さんとか探索者じゃないよな」

「違うに決まってるじゃない。社長よ！社長。創業して10年足らずで業界一位まで上り詰めたんだから」

「業界ってなんの業界か聞いてもいい？」

「魔核業界よ」

「魔核業界？魔核って組合と国が管理してるんじゃないのか？」

「毎日大量に持ち込まれるのよ。国だけで流通賄えるわけじゃないじゃない。ちゃんと認定された流通業者が入ってやってるのよ」

「そうなんだ」

探索者をやっているにも、魔核の流通の仕組みを気にしたことなどをなかったのが初めて知ったが、ミクのパパは業界一位なのか。どおりでミクのお金持ちっぷりは突き抜けているはずだ。

俺の持ち込んだ魔核もミクのパパが取り扱ったかもしれない。

俺が戦闘を終えてミクとおしゃべりをしている間も他の3人は戦闘を継続していた。

あいりさんは除災招福のおふだを使いあっさりときょんシーの動きを止めていたが、問題は残りの2人だった。

ルシエは『破滅の獄炎』を放ちきょんシーを燃え上がらせたが、予想通りきょんシーは獄炎に焼かれながらも普通に動いている。

ただの炎よりも遙かに高火力なのでひととき燃え上がっており、時間が経てばそのうち燃え尽きるとは思うがとにかく危ない。超高出力のモンスターが肉弾戦を挑んでくるようなものだ。ルシエは大丈夫だと思うが、危険を察知したカオリンは、早々に逃げ出して離脱している。

ベルリアは火の魔刀が使えないので代わりに交通安全のおふだを持って戦っている。

ベルリアは達人級の身のこなしで変則的なきょんシーの攻撃を躲しつつ間合いに入った。

「これで終わりです」

ベルリアが決めゼリフと共におふだをきょんシーの頭へと貼り付けた。

決めゼリフはどうかと思うが、そこに至るまでの動きはさすがベルリア。俺が真似してもまだまだ届かない域の動きだ。

「ベルリア！」

ベルリアもおふだを貼って完全に気を抜いてしまっていたが、おふだの効果で一瞬停止したかのように見えたキヨンシーが、俺の時間様に動き出しベルリアに蹴りを入れてきた。

「くっ……不覚」

第721話 パパは業界一位（後書き）

購入して頂いた方は是非販売サイトに甘めのレビューをお願いします。

レビューと星をみてやる気が出ます。

辛い評価だと倒れます。

よろしく願います。

第722話 ダンジョン飯（前書き）

モブから始まる探索英雄譚1ですが、皆さんのおかげもあり、恋愛小説が各社ランキングを占める中、密かにまぎれこみランキング内で健闘しています！

店舗で買ってくださいっている方が多いようなのでありがたい限りです。

ただまだ発売して4日なのでこれからもよろしく願います。まだの方は是非購入してください！

新しく読者になってくれた方もよろしく願います。

第722話 ダンジョン飯

ベルリアが蹴りをもろに受けて後方へと弾かれ膝をつく。

「ベルリア！」

俺はバルザードを振るい斬撃を飛ばす。

バルザードの斬撃がキヨンシーに直撃しベルリアへの追撃をとどめる。

その間に俺もベルリアの方へと走る。

「申し訳ございません。このベルリアあのようなふざけた相手に不覚をとるとは。それにしてもあれはなぜ動けるのです？ 顔にはおふだを貼ったというのに」

「あゝそれは多分、ハズレだ。交通安全のおふだがハズレだったんだと思う。俺の安産祈願のおふだもダメだったから」

「ハズレだったとは……気を抜いた私の落ち度、お手を煩わせて申し訳ございません。もう二度とこのような事のないよう今後は細心の注意を払います」

ベルリアと会話をかわしている間にキヨンシーが再び攻撃を仕掛けてきたので俺がベルリアの前に立ち応戦する。

「ベルリア、いけるか？」

「マイロードもちろんです」

ベルリアがその場から立ち上がり、参戦しようとしたその時キヨンシーの頭を加速する銃弾が捉えて弾けた。

「あ……」

突然の事に俺とベルリアは言葉を失うが、すぐに現状を認識する。この攻撃はドラグナーによるものだ。ティターニアがフォローしてくれたのか。

頭部にダメージを負ったキョンシー目掛けて俺とベルリアが剣を振り下ろして消滅へと追いやった。

残りの二体に目をやると、一体は獄炎により炭と化し、もう一体もあいりさんが片をつけていた。

どうやら俺たちが最後だったようだ。

「ティターニア助かったよ」

「はい……お役に立てて、よかったです」

「次からもフォロー頼んだぞ」

「わかりました」

それにしても今回ちよつと危なかった。

全てはおふだのせいだ。安産祈願と交通安全のおふだが全く効果を発揮してくれなかったせいで、隙を突かれて俺とベルリアがピンチに陥るところだった。

「あいりさん、安産祈願と交通安全はダメでした」

「そうなのか。家にあつたのを適当に持ってきただけだからな、わるかった」

「別にあいりさんのせいじゃないですよ」

とりあえず、おふだに頼りすぎるのは良くないのは間違いない。

4つの魔核を回収してから、スライムの魔核をシルたちに渡して先へと進む。

「ベルリア、次はおふだ無しでいった方がいいと思う」
「マイロード承知しています。やはり私にはこの魔刀しかありません。刀こそ私の本分。どんな敵であろうとこの魔刀で斬り伏せてみせます」

おそらくスペクターは刀では斬れないと思うが、まあなんとかなるだろう。

その後何度か戦闘を繰り返しながら進み、お昼ご飯を取る事にした。今日のご飯はいつもと違う。

今日のお昼ご飯はコンビニの唐揚げ弁当だ。

結構ボリュームがあるのに値段が三百九十円だったので思わず買ってしまった。

いつもはおにぎりとパンで三百円程度なので少しだけ奮発したが、食べてみて奮発した甲斐があったことを確信した。

さすがに揚げたてではないので衣はふにゃふにゃだが、冷めていても味がしっかりついていておいしい。

ダンジョンで動いた後だけにこの強い塩気がたまらない。

これはダンジョン飯の定番化確定だ。

今まで安くてお手軽なパンとおにぎりに拘ってきたが、これを機会に他のものもいろいろ試してみるのもいいかもしれない。

第722話 ダンジョン飯（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

第723話 首無し（前書き）

追加速報！

モブから始まる探索英雄譚1ですが、なんと本日、緊急重版が決まりました！！

重版出来です！ジュウハンデキではなくジュウハンシュツタイと読むのを最近知りました。

ランキングを見ても本当に売れているのか心配でしたが、本当に売れていました！

買ってくれた方、本当にありがとうございます！

文庫、小説、ライトノベルランキング売上BEST500になんとモブからが4日連続でランクイン中！

購入してくれた方は本当にありがとうございます。

全く話題にはなっていないませんが密かに人気です！

まだの方は是非購入お願いします。

第723話 首無し

お昼ご飯を食べてしつかり休憩を取ったので、再び探索を開始する。十八階層は、若干湿度は高い気がするが、基本的に少しひんやりとじていて過ごしやすい。

やはりアンデッド系モンスターが過ごしやすい環境という事なのだろうか。

「海斗さんはお化け屋敷とか大丈夫なのですか？」

「お化け屋敷？ この前久しぶりに行つたけど、大丈夫だったよ。最近のお化け屋敷は、迫力がすごかったな」

「じゃあ、お化けとか幽霊とかは大丈夫なのですね」

「いや、お化け屋敷とかダンジョンでは大丈夫だけど、地上で出たらやばいと思う」

「そんなものなのですね」

「ヒカリンは大丈夫なのか？」

「はい、大好きです。刺激がたまらないのです」

大好きなのか。そういえばこの階層に入ってから、メンバーの三人がアンデッドに怯える素振りは一切ないので、他の二人も同じような感じなのかもしれない。

それにしても幽霊が大好きって、普通なのか？ 春香はお化け屋敷でかなり騒いでいたので、やっぱり探索者が続いている女の子は、強くないと続けられないのかもしれない。

俺だって、ダンジョンでは問題なく戦えているが、地上でアンデッドが出現したらビビって逃げ出すかもしれない。

「ご主人様、モンスターが二体？ いえ四体？ こちらへ向かって

きます」

「ん？ 四体なのか？」

「申し訳ありません。はっきりわかりません」

シルが敵の数を誤ることは、ほとんど無い。どういうことだ？

いずれにしてもモンスターがこちらに向かってきているので、ベルリアと俺が前衛へと立ち迎え撃つ。

しばらくすると動物の蹄のような音と何かを引っ張るような音が聞こえてきた。

武器を構えて前方へと集中するが、間もなくモンスターの姿がはつきりとしてきた。

「ベルリア！ 首がないぞ！」

「はい、ありませんね」

「馬も首がない！」

「そうですね」

俺の驚きとは異なりベルリアの返事が妙に淡白だ。

いくらモンスターとはいえ首がないんだぞ？

首無しが馬が二台。そしてその馬車を引く人型のモンスターも首が無い。

さっきカオリンにダンジョンでは大丈夫と言ったが、これは大丈夫じゃない。

首のないモンスター。これはもう完全にホラーだ。

「海斗、落ち着け。あれはそういうモンスターだ」

「あいらさん」

「あれはデュラハンだろう」

「デュラハン！」

その名には聞き覚えがある。

アニメとかにも出てくる、俺でも知っている結構有名なモンスターだ。

ただ俺が見たアニメでは頭を手で持っていた記憶があるが、眼前に現れたモンスターはどこにも頭が無い。

リアルで見ると、他のアンデッド系のモンスターと比べてもホラー度が高めだ。

それにモンスター相手に無用な心配かもしれないが、頭が無いのに馬車を運転して大丈夫なのか？

第723話 首無し（後書き）

購入時に販売サイトに甘めのレビューをくださった読者の方々ありがとうございます。

これからの方も甘めだと助かります。厳しいと怖くて読めません……下に新作 サバイバー最弱の俺はハズレスキル『フェイカー』でSランクを目指す のリンクがあるのでクリックお願いします。

皆様のブックマークと ポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】に願います

第724話 デュラハン（前書き）

緊急特報！！

先日続刊決定をお知らせしていましたが、昨日モブから始まる英雄譚2の発売日が決定しました。

なんと9/1（水）です。あと二ヶ月をきっています。

冗談だろ、間に合うのか？ 本ってそんな短期間でできるの？ と素朴な疑問が湧きますが、絶対に間に合わせます！という事ではばらく書籍化作業に専念します。発売延期になったら筆者がやらかしたと思ってください。

まだ購入してない方は是非1巻を購入して2巻に備えてください！

重版するので店頭在庫もいっぱいあります！ そして2巻もぜひ買ってください。お願いします。

是非購入お願いします！

重版、続刊決定のイラストに差し替えていますので、下部のイラストを是非見てタップしてください！！

第724話 デュラハン

デュラハンが二体に首無し of 馬車が二台。

馬車の単位が台なのかはよくわからないが、今はそれはどうでもいいことだ。

気持ちの悪い首無し of ペアが、こちらに向けて猛然とダッシュしてきている。

「シル！ 『鉄壁の乙女』だ！」

有名かつ初見で得体の知れないモンスターに余裕をかましている暇は無い。

「ご主人様、かしまりました『鉄壁の乙女』」

デュラハンの攻撃手段が全く分からない以上、シルのスキルに頼るのが最善だ。

光のサークルの中でデュラハンの動きを見定めようとするが、一体のデュラハンの勢いが全く止まる様子はなく、そのまま光のサークルへと思いつきり激突した。

「轢き殺そうとしたのか……」

攻め方も何もなかった。ただ勢いにまかせて馬車で俺たちを轢き殺そうとしただけ。

猛烈な勢いで向かってきて光のベールに阻まれ首の無い馬は、自爆でほぼ即死。馬車は大破してデュラハン is 地面へと投げ出された。

「もしかして脳筋……」

「海斗、あれに脳はないんじゃないか？」

たしかにあいりさんの言うことにも一理ある。

頭が無いからそもそも脳筋どころか考える事ができないのか？

「気持ち悪いので消えるのです『ファイアボルト』」

カオリンがファイアボルトを放ち、デュラハンと壊れた馬車が燃え上がる。

『アイアンボール』

あいりさんが地面に倒れ込んでいるデュラハンに向かって鉄球を叩き込むが、身体がのけぞるのは見て取れたが口が無いせいで声も出せないのか全く反応は読めない。

『私だつて！』『ライトニングスピア』

ミクの放った雷の槍が燃えるデュラハンの胴体の真ん中へと突き刺さる。

地面へと投げ出されていた時、既にかなりのダメージを負っていたのかデュラハンは全く抵抗することなく、メンバーの攻撃を順番に受け、そして消滅した。

そのネームバリューとおどろおどろしい風貌にかなりの警戒心を持っていたのに拍子抜けだが敵はもう一組いる。

仲間が派手に突っ込んで大破したのを見て、さすがにもう一組の敵が闇雲に突っ込んでくることはなかった。

「来ないつもりならこちらからいきますよ『ブラックブレイド』」

先程全く出番の無かったベルリアが出番を待ちかねたように、一人先走りデュラハンへと攻撃する。

黒い炎の斬撃がデュラハンに襲いかかるが、デュラハンは手に持つ大剣を振るい斬撃を打ち消す。

頭は使えなくてもその身体から繰り出される技は本物のようだ。

「みんな！　まずは馬車と馬から潰そう」

デュラハンも機動力を奪われれば、戦闘力は半減するはず。

なによりも首の無い馬がこちらを向いていることが生理的に厳しい。ただメンバーを見ると俺以外は特に何も感じるところはないのか涼しい顔で戦闘に臨んでいるが、どう考えても今の状況はお化け屋敷よりも遥かに怖い。

第724話 デュラハン（後書き）

店頭で文庫版を買ってくれている方が多いようですが、電子版もじわじわと順位が上がってきました！！

本当にありがとうございます。

筆者は昨日重版と続刊の連絡をもらい、小躍りしました！！ やりました！！ 応援して買ってくれた方本当にありがとうございます！！

まだの方は是非買ってください。いっぱい売れると3巻も出ます。

第725話 デュララ（前書き）

緊急特報！！

先日続刊決定をお知らせしていましたが、昨日モブから始まる英雄譚2の発売予定日が決定しました。

なんと9/1（水）です。あと二ヶ月をきっています。

1巻が出たばかりで間に合うのか？ 本ってそんな短期間でできるの？ と素朴な疑問が湧きますが、絶対に間に合わせます！という事ではらく書籍化作業に専念します。発売延期になったら筆者がやらかしたと思ってください。

まだ購入してない方は是非今日か明日1巻を購入して2巻に備えてください！ 重版するので店頭在庫もいっぱいあります！ そして2巻もぜひ買ってください。お願いします。

重版、続刊決定のイラストに差し替えていますので、下部のイラストを是非見てタップしてください！！

第725話 デュラ

ターゲットを首無し馬と馬車に定め、攻撃に移る。

「馬車ならこれで動きが止まるはずなのです『アースウェイブ』」

馬と馬車の足下にぬかるみが発生する。

馬が抜け出そうと足を大きく上下させているが、自重と馬車の重さも加わり完全にハマっていつている。

スタック状態になった馬車に向けミクがスピットファイアで炎弾を放ち、馬車を破壊しながら燃え上がらせる。

背後に炎が迫った首無し馬が、逃げようとして暴れるが『アースウェイブ』の効果で抜け出すことは叶わず、尻尾へと炎が燃え移るのが見える。

デュラハンも同様に馬車の炎から逃れる為に馬車から地面へと飛び降りた。

「マイロード、あれは私におまかせください」

さつきから活躍できていないからか、ベルリアが名乗り出てデュラハンと対峙することになった。

俺たちは、残った首の無い馬を相手にすることにするが、炎に背を焼かれ既に瀕死となっている。

「私がとどめをさすわね『ライティングスピア』」

ミクが雷の槍を発動するとあっさり馬は消え去った。

思いの外2台目の馬車も簡単に消し去ることができたが、この階層

に出てくるモンスターが他のモンスターに比べて極端に弱いとも思えないので、単純に相性が良かったのかも知れないが、頭が無いせいで考えて戦う事が苦手なのかもしれない。

ベルリアは光のサークルの外に出てデュラハンと対峙している。

二刀のベルリアに対して大剣のデュラハンの構図だが、身体のサイズ以外はなんとなく悪の騎士繋がりで似ている気もしなくもない。

「そのようなまくらでマイロードから賜ったこの魔刀二本の相手ができると思うな。さっさと刀の錆にしてくれる」

ベルリアが一気に間合いを詰め、デュラハンへと斬りかかる。

ベルリアの攻撃に対して大剣を振るい、デュラハンも応戦するが、小さな身体も手伝い大剣ではベルリアを捉え切ることにはできない。

ベルリアの剣速が更に上がり、デュラハンの防具のない部分が刀傷で埋められていく。

このまま勝負が決するかと思ったが、デュラハンが大剣を最上段に構え、一気振り下ると、剣圧で足下の地面が割れた。

「なんて威力だ。あれは当たるとやばいな」

ベルリアが一方的に押ししていたのでデュラハンもそこまで強いようには見えなかったが、剣圧で地面を割るとか漫画並みにやばい敵だからえば防具があつたとしても、生身の肉体が無事で済むとは思えない。

「そのような大道芸、当たらなければいいだけ。愚かですね」

ベルリアは全く怯むことなく、更に攻撃を加えていく。

今度はデュラハンが大剣を横風にするのをジャンプして躲し、そのまま攻撃を加える。

『アクセルブースト』

ベルリアの炎の魔刀がデュラハンの胸部へと突き刺さる。

第725話 デュララ（後書き）

文庫、新書、一般文芸売り上げランキング500に発売から1週間連続ランクイン中です！ 全て買ってくれた方のおかげです！
店頭で文庫版を買ってくれている方が多いようですが、電子版もじわじわと順位が上がってきました！！
本当にありがとうございます。

まだの方は是非買ってください。いっぱい売れると3巻も出ます。

第726話 コシユタバワ―（前書き）

発売したばかりのモブから始まる探索英雄譚1ですが、早くもモブから始まる英雄譚2の発売予定日が決定しました。なんと9/1（水）です。あと二ヶ月をきっています。

まだ購入していない方は是非今日か明日1巻を購入して2巻に備えてください！ 重版するので店頭在庫もいっぱいあります！ そして2巻もぜひ買ってください。お願いします。

第726話 コシユタバワー

ベルリアが、デュラハンの胸に刺さった剣を引き抜き後方へと一旦下がる。

人間なら即死だが、デュラハンもアンデッド属性なので一撃では倒すことはできない。

ただダメージはあるようで、明らかに動きが鈍った。

それを見て、ベルリアが再び踏み込んで斬り込む。

デュラハンも大剣を振るうが、ベルリアのスピードには及ばない。

『アクセルブースト』

ベルリアが必殺の一撃を放ちデュラハンを斬り伏せた。

「それなりに剣に覚えがあったようですが、所詮は力押し。技の前には無力。フツ、修練が足りなかったようですね」

まあ、今回はベルリアのセリフに間違いは無いので特に言うことはないがベルリア、カッコいいとはどういうことなのか勉強した方がいいな。

そのセリフはどう考えてもカッコ悪い。

馬と馬車はともかく、ベルリアとのやり取りを見る限りデュラハンもそれなりに強かった気がする。俺が相手なら結構苦戦したかもしれない。

「あ〜っ、コシユタバワーだ！ 思い出した」

「コシユタバワー？ ミク、いったいなんの話？」

「あの馬と馬車よ」

「馬車？」

「そうよ、デュラハンの乗る馬車。コシユタパワーって言うのよ」

「コシユタパワーってなんか言いにくいな。舌噛みそう」

「海斗、ある意味ネームドの馬車よ。馬車の中ではトップランカーよ」

「ネームド……」

ミクは熱くコシユタパワーについて語ってくれるが、俺からすればあっさりと大破した気持ちの悪い馬車でしか無いが馬車にランクなんかあるのか？

「そつだぞ海斗、コシユタパワーだ。デュラハンと共に一度は見てみたいと思っていたんだ」

あいりさんもか。コシユタパワー人気だな。

「マイロード、このベルリアの活躍ご覧いただけましたか？」

「ああ、デュラハンを圧倒してたな」

「はっ、ありがたきお言葉」

「わかってるよ。今回は活躍したから魔核な」

「はっ、このベルリア、マイロードの剣として更に精進いたします」

魔核節約のためにベルリアには、普段少し我慢してもらっているの
で今回はきちんと魔核を渡しておく。

「デュラハンは思っていたのと少し違ったのです。もっとカツコよ
くて強いかと思っていたのです」

「いや相性が良かったただけで結構強かったと思うけど」

「だって頭がなかったのです。普通頭を抱えてるものです。頭がな
いせいで顔もわからないうえに、言葉も発しなかったのです。本来

渋いおじさま顔だったりするのにながっかりなのです」

それは俺も思ったが、アニメとリアルは違うということだろう。
この日はもう一度デュラハンが出現したが、やはり頭は持っていない
かった。

コシユタバワーは同じように『鉄壁の乙女』の光のサークルに衝突
して大破したので、やっぱり頭がないせいであまり見えてないのか
もしれない。

第726話 コシユタバワ―（後書き）

店頭で文庫版を買ってくれている方が多いようですが、電子版もじ
わじわと順位が上がってきました！！

本当にありがとうございます。

まだの方は是非買ってください。いっぱい売れると3巻も出ます。

第727話 聖水の作り方（前書き）

現在モブから始まる探索英雄譚2の製作中です！

まだの方は1巻を買って2巻に備えてください！書店の新刊コーナーにいったい並んでいます。

2巻発売は9/1予定です。よろしくお願いします。

しばらく更新ペースは少し落ちますが、続刊状況により8月以降サバイバーとあわせて調整していきたいと思います。売れて続刊すると更新ペースが少し上がります。よろしくお願いします。

第727話 聖水の作り方

探索を終えて家に帰る前に百円ショップに寄って霧吹きを買っていた。

対アンデッド用の準備のために疑似聖水を作るつもりだ。

あいりさんによると聖水の作り方は精製水に塩十パーセントと念だそうだ。

残念ながら我が家には精製水なんてものはなかったが、ただの水道水で大丈夫なのか心配になったので一応二種類作ることにした。

水道水と、一度沸かせたお湯で疑似聖水を作ることにした。

とりあえず水二百ミリリットルに対して塩二十グラム。

塩は一応キッチンにあった海外製の天然塩だ。海外製なのは少し気になったが天然塩なので普通の塩にくらべると効果は高い気がする。水とお湯でそれぞれ作るが、塩を溶かすだけなのであっさりと完成する。このままではただの塩水なのでここから念を込める。

ただこの念を込めるといふ作業に思いの他手こずってしまった。そもそも塩水に念を込めるとどうやるのが正解なんだ？とりあえず出来た塩水を手に取ってから

「うっっ」

手に持った器の中の塩水に目を瞑って集中する。

こういうのはイメージも大事だな。

イメージするのは清らかな感じ。漠然としているので澄んだ湖のイメージを重ねる。

「海斗、あんた大丈夫？ お水持って、うんうん唸って何やってるのよ」

「大丈夫だって。聖水作りの最中だから邪魔しないでよ」

「聖水って、あんた最近頑張りすぎてるんじゃない？ 大丈夫なの？ 明日は休んだらどう？」

「休まないって。ちよっと集中できないからあっちに行っておいてよ」

「はい、はい。おかしな方にいかないでね」

母親が妙に俺のことを気遣ってくれるが、聖水作りをキッチンでやってたのが良くなかった。

せっかく集中したのに母親に集中を乱されてしまった。

再び集中して念を込める。

念を込めるといふより集中して瞑想する感じかもしれないが、これでいいのか？

こんなので本当に聖水になったのか？

一応効果測定をしたいので水道水をA 沸かしたお湯の方をBのラベリングをしておいた。

「よし！ これで準備万端だな」

こうして俺の対アンデッド用の武器が完成したが、効果は既にあいりさんが証明済みなので、俺も魔刀を聖水Aの入った霧吹きに持ち変えて探索を続ける。

アンデッド系モンスターが出現すれば速攻で吹きかけるつもりだ。

殺虫剤スプレーを日常的に使用している俺には吹きかける系のこの霧吹きは相性がいいはずだ。

「ご主人様、モンスター二体です。ご準備ください」

進んで行くと、そこにはスペクターらしきモンスターがいた。

あのモンスターならうってつけだ。

聖水が効くのはあいりさんが先日 of 戦いで実証してくれている。
あいりさんも俺と同じく聖水を片手に構えている。

「いきますよ！」

「ああ」

俺とあいりさんが先陣をきる。

スペクターに向かつて走るが、霧吹きを持つ手に力が入る。

すぐにスペクターとの距離は詰まり霧吹きの射程まで到達する。

確か祈りながら霧吹きで吹きかければいいんだっとな。

俺は祈りを込めながら霧吹きのハンドルを引く。

「頼むぞ！ 効いてくれ！」

第727話 聖水の作り方（後書き）

8/24のコミカライズも連載開始に向け順調に進んでいます。

多くの方に見てほしいので、できればどこでもヤングチャンピオンを買って読んでください。スマホで読めます。

難しい方は単行本の発売を待って是非買ってください。

多分年内発売予定です。（完全に筆者の独自予想です）

第728話 スペクターと聖水（前書き）

現在モブから始まる探索英雄譚2の製作中です！作業が詰まっています更新が遅れますが応援お願いします。

まだの方は1巻を買って2巻に備えてください！書店の新刊コーナーにいったい並んでいます。多くの人に買ってもらえるとテンションが上がって作業がはかどります。

2巻発売は9/1予定です。よろしくお願いします。

第728話 スペクターと聖水

俺の手にある霧吹きから放たれた聖水は、スペクターの半透明な身体全体にかかった。

だが安心はできないので、バルザードを持つ手に力が入る。

聖水Aを浴びたスペクターは、残念なことに特に影響を受けた様子もなく俺に取り付こうとして、スゥツと寄ってきた。

俺はバルザードを振るい咄嗟に後方へと飛び退くが、バルザードでダメージを与えることはできなかった。

水道水で作った聖水Aはただの塩水に過ぎなかったようで、スペクターに対し全く効果を発揮しなかった。

おそらく他のモンスターにも効果はないのだろう。

「それなら、こっちだ！ くらえ！」

聖水Aが効果がない可能性は折り込み済みなので、俺がさせることはなかった。

後方へと下がってすぐにマジック腹巻きから聖水Bを取り出して持ち替えた。

こちらは煮沸した水で作った本命だ。念も一割まして込めておいた。俺は迫ってくるスペクターに聖水Bの霧吹きのハンドルを引く。

「ギヤアアアアアアア」

霧状の聖水Bを全身に浴びたスペクターが悲鳴を上げてその場で暴れ苦しみ始めた。

これは完全に効いている。

俺は暴れるスペクターに聖水Bを更に吹きかけて追撃をかける。

「オオオオオオオ」

苦しみと怨嗟を含んだような声をあげてスペクターがその場から消えてなくなつた。

「やった……」

聖水Bのあまりの効果に、使つた俺自身が驚いてしまった。

下手をすると、スライムに対する殺虫剤プレス以上の効果だ。

あいりさんを見ると、当然聖水によりスペクターを打ち破り既に戦闘を終えていた。

俺はあいりさんの方へと駆け寄り

「あいりさん、やりましたよ。自家製の聖水で倒すことができました」

「ああ、それはよかつたな。所詮あいつらは幽霊だから聖なるものには無力なんだ」

「そうですね」

聖なるもの？ 俺の作つた聖水Bは聖なるものなのか？

確かに効果はあつたが聖なるものとしてではなく、別の要因が作用した気もする。

家の煮沸した水道水と天然塩、それに俺の念。どこにも聖なる要素がない。

ただひとつわかつたのは、普通の水道水ではダメだという事だ。

水道水で作つた聖水Aは機能しなかつた。

煮沸した水道水で作つた聖水Bは劇的な効果を發揮した。

あいりさんの聖水も精製水で作つているとのことだつた。

つまり、聖水のポイントは水！ 精製水に準ずる水であれば聖水の

基材として効果を發揮するということだ。

ある意味大発見かもしれない。

同じレシピで大量に作れば、原価数円で凄いことになるかもしれない。

「あいらさん、ダンジョンマーケットの聖水ってどのくらいの値段なんですか？」

「気にした事もないから、それはちょっとわからないな」

「わたしみたことあるわよ。確か二万円ぐらいじゃなかった？」

「二万円……」

「だいたい香水の瓶みたいなのに入ってるわね」

「香水の瓶ってどのくらいの量なんだ？」

「よくわからないけど多分50ミリリットルぐらいじゃない？」

50ミリリットルで二万円！？

高すぎるだろ。やかんでつくれば一回に1000ミリリットル以上できるんだぞ？

一回で四十万円以上になるのか？

しかも作るのに一時間もかかっていないので時給百万円も夢ではない。

第728話 スペクターと聖水（後書き）

ワンツーさんからレビューいただきました。2巻のイラストも期待大です。ありがとうございました。ー

サイン色紙キャンペーンに450名を超える応募をいただきありがとうございます。

当選の方には後日連絡があると思います。

お楽しみに！

第729話 皮算用（前書き）

なんと！セブンネットとヤフーショッピングでモブから2の予約が始まりました！！ 予約してください！ そして一緒に発売されるのが精霊幻想紀をはじめHJ文庫の人気作ばかりです。モブから2……がんばれ！

まだの方は1巻を買って2巻に備えてください！書店の新刊コーナーにいっぱい並んでいます。多くの人に買ってもらえるとテンションが上がって作業がはかどります。よろしく願います。

第729話 皮算用

時給百万円で一日八時間作れば日給八百万円!?

片手間の副収入というにはあまりに高額。

もしかして俺は億万長者への扉を開けてしまったのか?

「海斗、悪い顔してるわよ。もしかして聖水で儲けられるか思ったんじゃないの?」

「い、いやだなく、そ、そんなことないよ」

「あのね、聖水なんかどれだけ需要があると思ってるの? 幽霊系のモンスターと戦う探索者限定よ。しかもダンジョンマーケットで売ってるのに他で買うと思う? 黒い彗星ブランドでも立ち上げる気?」

「ま、まさか」

「命をかけるのに、いくら安くつても得体の知れないものなんか買うわけないじゃない。ダンジョンマーケットは安心のブランド力よ。それが商売つてもものよ」

たしかにミクの言う通りだ。いくら安くつてもポツと出の一探索者から聖水を買おうなんていう探索者はいないな。

さすがはパパに仕込まれてるだけあってミクの言葉には説得力がある。

「わかってるって。これは自分とパーティ用だから大丈夫だよ。まだまだいっぱいあるからみんなでパツと使おう!」

ミクの言葉で目が覚めた。一瞬甘い考えに支配されて危うく横道にそれるところだった。

俺の本分は探索者だ。深層目指してモンスターを倒し先へ進む！
ただいくらブランド力があるにしても、やっぱり数円で作れる物と同等品が五十ミリリットル二万円は高すぎると思う。
俺たちは気持ちを切り替えて先へと進む。
何度かモンスターとの戦闘になったが、おふだと人工聖水を使いこなす事で戦闘を有利に進める事ができるようになり、当初よりもかなりペースアップする事ができている。

「少しこの階層にも慣れてきたな。やっぱり十八層だけあって手強いな。」

「いや、まだ序盤だからな。油断は禁物だ」

「わかってますよ。俺が油断したら死んじゃいますからね」

「ところで受験勉強はどうだ？ 進んでいるのか？」

「授業は集中して聞いていますよ」

「いや、受験勉強は学校の勉強だけじゃ厳しいだろう。塾に行くなら、過去問に沿って対策をしておくなり準備しておいた方がいいな。そつえば春香も王華学院を受けるんだろう。一緒に受験勉強をすればいいんじゃないか？」

「そうですね。今度春香を誘ってみます」

たしかに受験勉強も大事だ。絶対に落ちることは許されないのだから。

「海斗、そつえば最近春香と遊んでないでしょ」

「なんでそんなこと……」

「それは毎日連絡を取り合ってるからに決まってるじゃない。カフェにも行ってないって泣いてたわよ」

「え！？ 泣いてたのか？」

「それは冗談だけど、それぐらいの気持ちって事よ」

「海斗さん、春香さんが可哀想なのです。ほったらかしはいけません」

んね」

「別にほったらかしてるわけじゃ」

「海斗さん！ 嫌われますよ」

「……………」

なぜか突然、話の流れから俺は女性陣に責め立てられることになってしまった。

ただ、たしかに春香と放課後どこかへ行く事がなくなってしまっている。

今度勉強会も含めて誘ってみようと思う。

ダンジョンばかりになってしまふ俺の悪い癖だ。

第729話 皮算用（後書き）

8/24のコミカライズも連載開始に向け順調に進んでいます。

多くの方に見てほしいので、できればどこでもヤングチャンピオンを買って読んでください。スマホで読めます。

難しい方は単行本の発売を待って是非買ってください。

多分年内発売予定です。（完全に筆者の独自予想です）

第730話 泣く女の子（前書き）

なんと！セブンネットとヤフーショッピングでモブから2の予約が始まりました！！ 予約してください！

まだの方は1巻を買って2巻に備えてください！書店の新刊コーナーにいったい並んでいます。多くの人に買ってもらえるとテンションが上がって作業がはかどります。
よろしく願います。

第730話 泣く女の子

春香には明日にでも声をかけてみよう。一階層へ潜るのを多少減らしてでも時間はどうかするしかないが、大所帯となった弊害が出てしまっている。探索と実生活のバランスを取るいい方法が何かあればいいけど、色々器用にこなせる方でもないので今はなにも思いつかない。

探索を再開してダンジョンの奥へと進んでいく。

「アンデッドって外国のモンスターばかりなのかな」

「そうね、あんまり日本のモンスターでアンデッドって聞かないわね」

「アンデッドという言葉自体が外国語ですからね。日本のものではないのです」

「やっぱりそうなのかな」

「だが、日本のホラー映画とかでは、不死の幽霊とかが描かれていることもあるからわからないぞ」

「日本の幽霊とかだと黒髪の女性とかのイメージですね」

「昔から柳の下とかに出るイメージだな」

デュラハンなどは完全に日本のイメージは無いが、日本と言えば落武者のモンスターと言ったところか？

「ご主人様、ご注意を。モンスターがいます」

「わかった。みんな気を引き締めていこう」

「言われなくても、いつも引き締めてるわよ」

いや、さっきまでみんな雑談してたと思うんだけど

そこから進んでいくと鳴き声のようなものが聞こえてきた。

「え〜ん、え〜ん、え〜ん」

この声はいつたい……

女性の声か？ まさかモンスターに襲われているのか？

足早に進んでいくと、奥に金髪の女性らしき姿が見えてきた。

「こんなところでどうしたんだろう。一人しかいないように見えるけど」

「あやしいわね。絶対なにかあるわね」

「そうですね。こんなところに外国の女の人が一人でいるはずがないのです」

「ああ、随分と古典的な手だな。さすがにこれに引っかかる探索者はいないだろう」

やばい。俺は完全に引っかかりそうだった。本気であの金髪の女性を心配して危つく声をかけるところだった。

「シル、あればモンスターなのか？」

「そうですね。気配は以前のマサンに近いです」

「マサンか。じゃああれは精霊の一種なのか？」

「あれつてもしかしてバンシーじゃない？」

「バンシー？」

「女の精霊よ。確か死か死者かを呼ぶんじゃないか？」

死か死者を呼ぶ？ 物騒だな。

「え〜ん、え〜ん、え〜ん」

こちらの声が聞こえていないのか、お構いなしに泣き続けているが、この場合どうするのが正解なんだろうか。

「どうする？」

「もちろん即攻撃なのです。ある意味敵が隙を見せてくれてるよ
うなものじゃないですか」

「いやでも万が一モンスターじゃなかったり、良い精霊だったりし
たら不味くないか？」

「ありえないのです」

「海斗、ダンジョンの十八階層でそれはありえないわ。お人好しが
すぎるわね」

「そうだな。私が攻撃してみよう『アイアンボール』なら頭以外な
ら万が一の時でもポーシヨンでなんとかなるだろう」

万が一って……… なんとかなるのか？ ならないと思うけど。

第730話 泣く女の子（後書き）

8/24のコミカライズも連載開始に向け順調に進んでいます。

多くの方に見てほしいので、できればどこでもヤングチャンピオンを買って読んでください。スマホで読めます。

難しい方は単行本の発売を待って是非買ってください。

多分年内発売予定です。（完全に筆者の独自予想です）

第731話 バンシー（前書き）

なんと！アマゾン、セブンネット、ヤフーショッピング等の主要ショッピングサイトでモブから2の予約が始まりました！！ 1巻より安くなって715円みたいです。予約してください！

まだの方は1巻を買って2巻に備えてください！たぶん、もうすぐ書店の新刊コーナーから移動します。多くの人に買ってもらえるテンションが上がって作業がはかどります。よろしく願います。

第731話 バンシー

「それじゃあ、『アイアンボール』」

あいりさんがサラッと『アイアンボール』を発動する。

鉄球は無防備な女の子の背中へとめり込んだ。

「グハツ……」

鉄球の攻撃に金髪の女の子が悶絶しているが、憤怒の形相でこちらに振り向いた。

女の子らしい後ろ姿からは想像できないような形相。どう見ても人間ではない。

「キエエエエエエ」

モンスターが奇声を発すると、その姿が視界から消えた

「え……消えた。倒したのか？」

「海斗、違うわよ。魔核が落ちてないわ。バンシーの消える能力よ」

消える能力？ そんなの反則だろ。透明なモンスターなんかとまともにも戦えるはずがない。

「シル『鉄壁の乙女』だ！ 急げ！」

「はい、かしこまりました。皆さんサークルの中へ。『鉄壁の乙女』」

慌ててシルに『鉄壁の乙女』を発動してパーティメンバーを庇護してもらおう。

これでひとまず安心だが、バンシーの姿が全く見えない。

「ベルリア、何か感じないのか？」

「マイロード、間違いなくいる気配は感じるのですが、正確な場所まではわかりません」

「シルにもわからないか？」

「申し訳ありません。どこにいるのかわかりません」

「いや、いいんだ」

もしかしたら電子機器であるソナーのようなものには姿が消えたとしても反応があるのかもしれないが、ベルリアとシルにわからないとなると、俺たちにはバンシーの居場所を特定することは限りなく難しい。

「おい海斗、なんでわたしには聞かないんだ」

「だってルシエにはわからないだろ」

「バカにするな。わからなくはないぞ！」

「わからなくはない？　じゃあわかるのか？」

「あっちだ！」

「あっち？」

「いや、こっちだ！」

「こっち？」

「そっちだった」

やっぱり、無駄だった。だから聞かなかったのに。

「マスター、たぶん……あっち……です」

「ティーターニアもしかしてわかるのか？」

「なんとなく……」

あてにしていなかったが、ティターニアにより場所はなんとかかなり
そうだ。ただ大体の位置でしとめなければならぬ。

「まかせて。スナッチ『ヘッジホッグ』よ!」

ミクの指示でスナッチが飛び出して、ティターニアの指す方向へと
走り『ヘッジホッグ』を発動する。
鉄の針が全方位へと放たれる。

「キエエエエエエエ」

再び奇妙な声が響き渡る。

どうやら命中したようだが、まだ姿は見えない。

「キヨキヨキイキヨイ」

今度は先程と違った叫びが聞こえてくる。

なんだ? 嫌な予感がする。

突然スナッチのいる少し奥の床が液状化して沸き立ち、そこからモ
ンスターが三体現れた。

地面から現れたのは大きな鎌を持ったスケルトン。

その姿はまるで死神のようだ。

まさか、こいつらバンシーが喚んだのか?

そつえば、ミクがバンシーは死か死者を呼ぶと言っていたが、こ
ういうことか!

「スナッチ!」

ミクの声でスナッチが再び『ヘツジホツグ』を放つがスケルトン相手には効果が薄い。

そして今度はバンシーの叫びが聞こえてこない。

もしかしてあの三体がバンシーを護っているのか。

第731話 バンシー（後書き）

2巻発売、コミック連載開始まであと1ヶ月となりましたがタイトなスケジュールで進んでいる気がします。

来月のどこかで執筆を頑張ろうと思っていますが、ストックがほぼ無くなったので頑張ります。

応援よろしくお願いします。

第732話 死神の鎌（前書き）

なんと！アマゾン、セブンネット、ヤフーショッピング等の主要ショッピングサイトでモブから2の予約が始まりました！！ 1巻より安くなって715円みたいです。予約してください！
まだの方は1巻を買って2巻に備えてください！HJ文庫のコーナーにあります。多くの人に買ってもらえるとテンションが上がって作業がはかどります。
よろしく願いします。

第732話 死神の鎌

いずれにしても、バンシーと一緒にこの三体のスケルトンも倒す必要がある。

ただバンシーの姿が見えない状態では、不用意に飛び出すわけにはいかない。

「ルシエ頼んでいいか？」

「当たり前だろ。骨なんか一瞬で焼き尽くしてやる。『破滅の獄炎』」

「

大鎌を持ったスケルトンに向かって獄炎が放たれた。

獄炎がスケルトンを襲うが、スケルトン三体が同時に獄炎に向かって大鎌を振るうと、信じられないことに獄炎が真つ二つに斬れた。

「なっ……」

「ルシエ！」

「ふざけるな！ 骨風情がわたしの獄炎を！」

ただのスケルトンじゃない。

あの鎌といて本当に死神なのか？

どうする、うって出るか？

「ベルリアー！」

「マイロード、おまかせください」

「ちよつと待て！」

「はっ、姫いかがいたしましたか？」

「あれはわたしがやるって言っただろ。手を出すな！」

「はっ、失礼いたしました」

ベルリア……

俺の命令はどうなった。

「だけど、ルシエどうするつもりなんだ」

「どうするつもり？ こうするつもりだ！ 『炎撃の流星雨』」

『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ』

ルシエがまさかの流星雨を発動し、地鳴りのような振動音とともに頭上から火球の塊が一気に降り注いだ。

大型の火球が次々にスケルトンを襲う。

スケルトンも数度鎌を振るい火球を切断したが、すぐに次の火球が押し寄せ一瞬にしてスケルトンを鎌ごと押しつぶす。

潰れた跡を次々に火球が襲い、灰すら残る様子はない。

そして目に見えるのは三体のスケルトンが跡形もなく燃やし潰される姿だが、当然後方に控えていたはずのバンシーも同じ運命を辿っているはずだ。

ただ透明化していたせいで潰れる様は見ることが出来なかったが、いたであろう場所の周辺が火球で埋め尽くされた段階でそれ以外の未来はありえないことはわかった。

「ふん、たかだか骨の分際で調子に乗るからだ！」

「ルシエ……」

「なんだよ全部片付けたんだからいいだろ」

「それはそうだけだ」

やはりルシエの流星雨は尋常ではない。範囲攻撃な上にほぼエンドレスとも言える火球の雨。逃げようがない。

「海斗くそれより早くくれよ。いつもより腹が減ってるんだって
それはそうだろう。何しろ一発でMP50を消耗する大技だ。
だがそれに見合う魔核と同数をみんなに配るわけにはいかない。」

「今回は特別だからな。特別！　そもそも勝手に『炎撃の流星雨』
は使うの禁止だ。次勝手に使ったら魔核は無しだからな」
「わかったよ。だからさっさとくれよ」

ダメだ。この顔は全くわかってない時の顔だ。
それにしてもバンシーはかなりの強敵だった。ルシエの流星雨であ
っさりとは片付けることができたとはいえ、透明化に大鎌のスケルト
ンの召喚。大鎌のスケルトンもルシエの極炎を斬るほどの強さだっ
た。
さすが死を呼ぶ精霊と言われるだけはあった。

第732話 死神の鎌（後書き）

コミカライズも順調に進んでいます。てりてりお先生が描く大人シ
ルがますますぎる。

8/24のどこでもヤングチャンピオン（電子）をよろしくお願
いします。そしてその1週間後のモブから2も一緒にお願いします！

第733話 バンシーの扱い方(前書き)

お知らせ

8/24日どこでもヤングチャンピオン連載開始の漫画版モブから
第1話がなんとニコニコ静画でも公開予定です！
アマゾン、セブンネット、ヤフーショッピング等の主要ショッピング
サイトでモブから2の予約が始まりました！！ まだの方は1巻
を買って2巻に備えてください！

第733話 バンシーの扱い方

「バンシー強かったな。今度からダンジョンで泣いている女の人は要注意だな」

「当たり前でしょ。ダンジョンの十八階層で泣いてるなんて怪しすぎよ。しかも泣き方も下手だったし」

「そうだったかな」

「あれで騙されるのは海斗ぐらいじゃない？ いくらモンスターでも今の時代にやり方がステレオタイプすぎよ」

「そんな事はなかったと思うけど」

普通ダンジョンで女性が泣いていたら気にするだろう。

多分男子高校生としては一般的な反応だったと思うが、他のみんなの反応を見るかぎりそうでもなかったらしい。

「おい、海斗、あんなの全然大したことなかったんだからな。わたしの流星雨で瞬殺だ！ 瞬殺！」

確かに瞬殺だったが、ルシエが流星雨を使用する事自体が、バンシーが強敵だった証拠だ。

ベルリア同様ルシエの負けず嫌いも相当だな。

悪魔はみんな負けず嫌いなのかもしれない。

「それにしてもあのスケルトンの鎌凄かったな。まさかルシエの獄炎を斬り裂くとは思っても見なかった」

「マイロード、おそらくあれも魔剣の一種。いわゆる魔鎌でしょう。そうでなければ姫の獄炎を斬ることなどできません」

「魔鎌か、さすがにあれがドロップしても売るしかないかもな」。

あれは使いこなせないんじゃないか」

「いえ、もしドロップすることがあればこのベルリアに！」

「ベルリアは鎌も使えるのか？」

「使ったことはありませんが、必ず使いこなして見せます」

これはいつものベルリアのクレクレ病だな。

どう考えても身長の高いベルリアがあの大鎌を二刀よりも使いこなせるとは思えない。

「だけどバンシーの透明化は厄介だな。正直どう対処すればいいのかわからない」

「そんなの簡単だろ。また『炎撃の流星雨』を使えばいいだけだろ」

「ルシエ、さつき使っちゃダメだって言っただばかりだろ」

「はい」

やっぱりわかってなかった。

「一番は、またスナッチに『ヘッジホッグ』を使ってもらうのがいいんじゃない？」

「確かに攻撃は当たったけど、その後がな」

「スナッチの『ヘッジホッグ』で攻撃して場所を特定したと同時に、他のメンバーも攻撃するのがいいと思うわ」

「まあ、それがいいかな。今回でバンシーの動きもわかったし次はもう少し上手く対応できると思うしな」

「海斗、もし次にこの階層で泣いている女性を見つけたら問答無用で首を刎ねるのがベストだろう」

「あいらさん、攻撃の前に絶対に顔は確認してくださいね。絶対にすよー！」

「わかってるよ」

本当にわかっているのか？

みんなが言うようにこの階層で泣いている女性はまず間違いなくモンスターだろう。

だが万が一間違いがあったら取り返しがつかない。

顔を見て人間かどうかを確認するのは絶対に必要なことだ。

少々危うい発言もあったが、魔核を拾い探索を続け、その後は泣く女の人に会うことも無く、無事に一日の探索を終えることができた。

第733話 バンシーの扱い方（後書き）

書籍版2巻では一部登場人物の描写と名前が変更されています。2巻のカバーイラストにはそのうちの一人が描かれています。お楽しみに。

9/1には是非手に取って読んでみてください。よろしくお願いいたします。

第734話 誘ってみる（前書き）

お知らせ

8/24日どこでもヤングチャンピオン連載開始の漫画版モブから第1話がなんとニコニコ静画でも公開予定です！（公開日はわかりません）

モブから2の予約がアマゾン、セブンネット、ヤフーショッピング等の主要ショッピングサイトで始まりました！！ まだの方は1巻を買って2巻もお願いします。

第734話 誘ってみる

翌朝、学校へと登校していつものように授業に集中する。
お昼休みを迎えたので思い切って春香を誘ってみる。

「春香、ちょっといいかな」

「うん、どうかしたの？」

「最近、ダンジョンが忙しくて時間がなかったんだけど、今週はペ
ースダウンしようかと思ってるんだ」

「うん、そうなんだね」

「それで、もしよかったら、一緒にカフェでもどうかなと思って
「うん、行く。一緒に行こう」

春香が満面の笑みを浮かべてOKしてくれた。

どうやら誘ったのは間違いではなかったみたいだ。

何度誘っても、誘う時には緊張してしまうし、今回のように間隔が
空いてしまうと、余計に誘い辛くなってしまう。

「それと、今年受験だからよかったら、一緒に勉強もどうかなと思
ってるんだけど」

「もちろん大丈夫だよ。私も海斗のこと誘ってみようかと思ってた
ところなんだ。よかった」

勉強に誘う事にも成功したが、春香の笑みが輝いて見える。こんな
笑顔を見せられたら、勉強に集中できそうにないな。

「私はいつでもいいよ。いつがいいかな」

「俺も今週ならいつでもいいんだけど、カフェなら今日はどうかな」

「うん、じゃあ今日の放課後に行こう。後勉強はどうしようか？」
「一日だけじゃ、あんまり進まない気もするから、よかつたら二三日連続とかどう？」

「うん、私はもちろん大丈夫だよ。それじゃあ明日から三日間一緒に勉強する？」

「是非！」

「それじゃあ、勉強はどこがいいかな。また私のお家に来る？」

春香の家か……

別に嫌ではない。嫌では無いが、たぶん春香の両親がいるよな。前回伺った時に妙にプレッシャーを感じて落ち着かなかつたんだよな。

俺の家も母親がいるから落ち着かないのは一緒だけどまだマシだと思う。

「よかつたら俺の家で勉強しない？」

「うん、もちろんいいけど、三日あるから一日は私の家にも来て欲しいな」

春香から、こんなふうに誘われて断れるはずもない。

「当然だよ！ じゃあ二日目は春香の家で勉強しよう」

「うん、それじゃあママにも、海斗のご飯お願いしとくね」

「あ……うん、ありがとう」

もしかして、またあの家族団欒の場にお邪魔する事になるのか。いや、今度は二回目だ。一回目に上手くいかなかった部分を省みて、今度こそ上手くやってみせる。

それから放課後まではしっかりと授業に集中して、春香と一緒に下校する。

「海斗と一緒に帰るのも久しぶりな気がするなあ〜」

「そうかもしれない。最近ダンジョンで新しい階層に臨んでたりして、全然時間を取れてなかったから」

「あんまり、無理しちゃダメだよ。海斗はよく怪我とかしてるんだから」

「無理してるわけじゃないんだけど、ちょっと頑張らないとなかなか進まないから」

「そうなんだね。それじゃあ今日はゆっくりしてリラックスできるお店がいいよね。昔からあるお店なんだけど、カフェっていうよりも純喫茶なんだけど、海斗は大丈夫かな」

「もちろん大丈夫だよ。むしろそっちの方が安心感があるかも」
「よかった。じゃあ今日は純喫茶ジュピターにするね」

春香は、カフェだけじゃなく純喫茶にも行きつけがあるらしい。

俺の場合、カフェは春香と行くまで行った事がなかったが、純喫茶なら両親と一緒にいった事がある。

カフェはいまだに緊張する時もあるけど、純喫茶なら大丈夫だ。

第734話 誘ってみる（後書き）

モブから2カバーイラストが本日公開になりました。
スクロールして下のイラストを見てください。

第735話 春香と純喫茶（前書き）

モブから2のカバーイラストが公開になりました。一番下をスクロールしてみてください。今回のイラストのメインはミクです。書店でこのイラストを見たらお願いします。

第735話 春香と純喫茶

放課後になり春香と二人で純喫茶ジューピターに向かう。

春香に連れられて向かった先には、歴史のありそうな店構えの純喫茶へと到着したので、そのまま店内へと入る。

時間が中途半端なのかお客さんは俺たちだけのようだ。

「海斗、なににする？」

メニューを見るとかなり年季の入ったメニュー表で、内容も純喫茶っぽいメニューが小さい写真入りで並んでいる。

俺の目にとまったのは、色鮮やかな懐かしい飲み物。

鮮やかな緑色にアイスクリームののったメロンソーダフロート。

子供の頃に飲んだ記憶が蘇ってくるが最後に飲んだのは小学生の四年生か五年生の頃だったと思う。

今見ても、異界を思わせるすごい色だ。だけど飲みたい。

「俺はこのメロンソーダフロートにしようと思う」

「あゝおいしいよね。私はこのホットケーキと紅茶にしようかな」

この前カフェで食べたパンケーキではなくホットケーキというのが妙に安心感がある。

ほぼ同じ食べ物なのにパンケーキになっただけで、おしゃれ食べ物になったような不思議。

「海斗、最近忙しそうだったけど、ダンジョン大変なの？」

「新しい階層になって、少し苦戦してるんだ。それと魔核の消費量も増えたから」

「ティターニアちゃんかわいいよね」

明らかに、ティターニアの風貌を把握している言い方だな。

「写真で見たの？」

「うん、ミクとヒカリンが送ってくれたんだよ。それにお化けとかも怖いよね。私、この前のお化け屋敷も怖かったから、みんなすごいなって感心しちゃった」

「女の子たちの方が、お化けは全然怖くないみたい。俺は、相手によつては怖い時もあるけど、今のところなんとかなってるよ」

「デュラハンの写真も送ってもらったんだけどあれは……」

「ああ、あれを見たのか。あれは無いな。ホラーだよ」

「うん、あれを見た時は夜寝るのが怖くなっちゃった」

それはモンスター耐性のない春香があれを見れば怖くもなるだろう。ミクかヒカリンかはわからないが、なにを思っであれの写真を送ったんだ？ あれはほとんど呪いの写真と言っても過言ではない。相変わらずいつの間にも写真を撮ったんだろう。

「メロンソーダフロートになります」

「ありがとうございます」

春香と話していると、メロンソーダフロートがでてきた。

一緒に春香のパンケーキと紅茶も出てきたので、さっそく飲んでみることにする。

甘い……だけど懐かしい味でおいしい。

アイスクリームが混ざって更においしい。

「おいしい？」

「うん、久しぶりに飲んだけどおいしい」

「ソーダフロートってアイスが溶けると本当においしいよね。でも飲んだ後に舌が緑になるから、予定がない時しか頼めないよ」

たしかに女の子が真緑の舌のまま、出かけたりするのはちょっと獻しいかもしれないな。

「春香の方はどう？」

「うん、おいしいよ。よかったら海斗も食べてみる？」

「じゃあ、お願いします」

春香がホットケーキを切り分けてくれる。

ホットケーキを口に入れると、ふわふわでおいしい。

これも懐かしい感じの味だが、家で作るのとは一線を画すおいしさがある。

「たしかにおいしいな。カフェのパンケーキとは違ったおいしさがある気がする」

「うん、わかるよ。カフェもいいけど、ここも落ち着くしいいよね」

カフェは、今でも周りの目が少し気になったりするが、ここはそれがないので、春香ともゆっくり話ができる。

純喫茶に来たのは本当に久しぶりだが、個人的にはカフェよりもいいかもしれない。

第736話 第二志望（前書き）

モブから2巻のカバーイラストと特設ページが開設されました。
1番下の画像をタップしてみてください。

第736話 第二志望

「春香は最近写真とか撮ってるの？」

「うん、春は好きな季節だから。私の名前にも入ってるし、全部が明るくなる季節だから写真を撮っていても楽しくなるんだよ」

「確かにそうかも。俺は毎日ダンジョンに潜っていると季節感が微妙に感じにくいから気をつけないとな」

「放課後はそうかもしれないけど、毎日学校に来てるんだからそれは大丈夫だよ」

「いや、学校も体育の時間以外は教室の中だし、ダンジョンに季節感はないから。それに基本薄暗いところも多いし、外に出る頃には日が落ちてるから思った以上に季節に疎くなってる。たまには外で散歩しようかな」

「よかつたら私も付き合うよ？ ダンジョンは無理だけど外の散歩だったら大丈夫だから」

「是非お願いします」

春香と今の季節に散歩とか最高だな。

やっぱり地上でしかできないこともあるから、ダンジョン偏重気味の生活を見直した方がいいのかもしれないが、数日潜らないと落ち着かないし、魔核も足りなくなるから難しいところだ。

「海斗は今度の公開模試受けるでしょ？」

「模試……ああ模試ね、模試。受けるよ。もちろん受ける」

「海斗は第一志望が王華で第二志望とか滑り止めってどこを受けるの？」

「第一志望？」

俺は春香と王華に行くことしか考えていなかったの、第二志望なんか考えていない。

「うん、私は帝山を受けようと思ってるの」

「春香つて王華以外も受けるんだ」

「それはもちろん王華が受ければ一番だけど、もしも落ちたらつて思つて帝山も受けるつもり」

「そうなんだ。春香なら絶対大丈夫だと思うけど、じゃあ俺も帝山も受けてみようかな」

「うん、じゃあお揃いだね。まずは今度の模試でB判定以上が目標だね」

「B判定以上……もちろんだよ。春香ならA判定間違いなしだよ」

元々、探索者メインで考えていたので大学はどこでも良かった。だからそれほどリサーチしたこともなかった。受験生としては舐めていると言えなくもないが、今更、大学卒業時に探索者を止めてサラリーマンになるというイメージは全く湧かないので、一般的な受験生とは感覚が違うかもしれない。

春香ととにかく同じ学校に行きたい！ その一心で王華を目指す決意をしたので、落ちるといふ結果は自分の中ではあり得なかった。だけど、春香が帝山に行く可能性があるのなら俺も帝山に受からなければならぬ。

そして、公開模試でのB判定以上か……

残念ながら俺の今の成績でB判定以上は難しいかもしれないが、受験までには必ずレベルアップしてみせる。

「明日からの三日間で、模試でも良い点が取れるように頑張ろうね」

「もちろんだよ」

春香の笑顔が眩しい。春の光にも勝る明るさだ。

いや、これはやっぱり今度の模試で成果を見せないといけない。

俺の勉強を春香と一緒に見てくれるのに、受験までにとか言ってる場合じゃない。

今こそ、俺の力をみせる時だ。

明日からの勉強会が楽しみだが、模試っていつだったっけ。

第736話 第二志望（後書き）

モブから2巻のカバーイラストと特設ページが開設されました。
1番下の画像をタップしてみてください。

第737話 志望理由（前書き）

コミカライズ開始まであと4日となりました。先日完成版を見ましたがモブから書籍版を元にコミカライズ版としてオリジナル昇華されていても面白いです。有料誌ですが是非よろしく願います。遅れてニコニコ静画にも掲載されるはずです。

HJ文庫モブから2巻もよろしく願います。あと10日ほどとなりました。1巻を買ってくれた方もまだの方も2巻をよろしく願います。

第737話 志望理由

昨日は久しぶりに放課後に春香と喫茶店に行けて楽しかった。

「隼人、今度の公開模試って受けるのか？」

「ああ、もちろん受ける。最初受けるつもりなかったんだけど、真司が前澤さんと一緒に受けることになったから俺もついでに受けることにしたんだ」

「隼人は受ける大学決めたのか？」

「あゝただだけど、王華も含めていくつか受けると思う」

「え？ 隼人も王華受けるのか？」

「いやゝオープンキャンパスで見た学園の施設も良かったし、来た子たちもかわいい子多かったからいいかなゝと思って。女の子の比率も高かっただろ。それに海斗も受けるし」

俺が受けるのは一番最後の理由づけか。

「かわいい子が多かったって、そんなのよく見てたな。だけど来た子たちが一緒に通うとは限らないんだぞ？」

「そんなことわかってるって。だけとお嬢様たちってかわいい子が多いイメージあるだろ？ せっかくならお嬢様とお付き合いとかしてみたいだろ？」

隼人は完全にお嬢様狙いか。あれ？ そういえば花園さんってどうなったんだ？ ちょっと前まで、不毛なやり取りしてたはずだけど。

「隼人、花園さんとはどうなったんだ？」

俺が質問をすると隼人の顔が、今までの軽い感じの表情から急にシリアスな顔へと変わった。

「ああ……連絡してもなんの返信もなくなった」

「……そうか」

やってしまった。これは聞いちゃダメなやつだった。

「だから俺は夢のキャンパスライフに全てを賭ける！ そのためなら受験勉強だつて頑張れる！ 今俺は燃えてるんだ！」

「そうだな。がんばろう」

「それにしてもなにが悪かったんだろう。女の子受けしそうな話題をネットで調べ尽くしたのに」

隼人、たぶんそれがいけなかったんじゃないか？ ネットの情報を鵜呑みにするのは危険じゃないか？

「ダンジョンはどうするんだ？ 受験勉強に専念するのか？」

「ダンジョンはもちろん潜る。勉強ばかりじゃ倒れそうだから、ダンジョンに潜りながら受験にも勝つ！」

「俺と一緒にだな。俺は今日から三日は春香と勉強会だけ」

「どこが一緒なんだ。全く同じ要素を見出せない！」

「あゝそれより、あの話どうなったんだ？」

「海斗、あからさまに話題を変えてきたな。あの話ってどの話？」

「ダンジョンで行方不明とか、壊滅したパーティがいるって話」

「それが、探索者も注意する様になったからか前よりは、聞く頻度が減ったけど、やっぱり今もあるみたいだ」

「そうなのか。隼人たちも気をつけるよ」

やっぱりシルの言っていた変な気配の仕業なのかな。

「俺たちは大丈夫だって。調子もいいし無理せずやってるから」
「それならいいけど」

ダンジョンのことも気になるけど今は勉強のことに集中だ。

公開模試は二年生の時にも受けたことがあるけど、今よりも成績が悪かったし志望校も適当に書いていたので参考にならない。それに王華を志望して受けるのは初めてだ。

まさかとは思うけど隼人よりも下の成績だときついな。

どうせならみんな一緒に受かるのが一番いいけど、お嬢様狙いだけで志望している隼人に負けるのはさすがにきつい。

第737話 志望理由（後書き）

プレゼント企画に応募いただいた方ありがとうございます。

たぶん当選した方には来月通知と色紙が届くのではと思います。

立派なカラーイラスト色紙です。筆者も記念に1部欲しかったです。

第738話 久しぶりの勉強会（前書き）

24：00よりどこでもヤングチャンピオンでコミカライズ連載開始です。興味のある方は是非読んでください。

モブから2も発売まであと1週間となりました。1巻を買ってくれた方もまだの方も是非買ってください。こちらは売れないと即打ち切りになるのでよろしく願います。

まだ思ったほど書き溜めできていませんが、今日から定期投稿を再開します。

サイバーと隔日で投稿予定で両作で週に5〜6話を予定していますが、モブから2の発売までは休みなしでどちらかを投稿します。

どちらもしばらく日常回が続くのでよろしく願います。

第738話 久しぶりの勉強会

放課後になったので、春香と一緒に家へと向かう。

「海斗は文系三教科で受験するんだよね」

「うん、そのつもり」

学内の成績をキープするためにしっかりと授業は聞いているが、三年生になって理系の教科はかなり厳しくなってきたので、受験は文系教科に全てを賭けようと思っている。

「文系教科で苦手な教科とかはあるの？」

「そうだな〜三教科の中だと英語かな。国語は、昔からそこそこいけてたし、社会は暗記すればなんとかなるから英語だと思う」

「それじゃあ、今日からの三日間は英語を集中して勉強しようか」

「それは助かる」

受験に必要なのはわかっているが、俺の日常で学校の授業以外に英語と触れ合う環境は全くと言っていいほどにない。

ダンジョンで英語圏の探索者に会ったこともないし、将来的にも会わない気がする。

グローバル化の波がダンジョンに押し寄せないとも限らないが、国外にもダンジョンはあるのでわざわざ日本のダンジョンに外国の探索者がくるとも思えない。

将来役に立つ機会はほとんどないと思うが今は必須だ。

春香と話しながら歩いていると家に着いた。

「ただいま」

「おかえり〜春香ちゃん」

「おじゃまします」

なぜか母親は、ただいまを言った俺はスルーして春香の出迎えをする。

「もっと来てくれていいのよ。いつでも歓迎だから。春香ちゃん
のママとも話はできてるから」

「はい、ありがとうございます」

母親が変なことを言ったのが確かに聞こえた。春香のママと話ができてるってなんの話だ？俺は一切聞いてないぞ？

疑問に思いながらも、この場に長居するのは良くないと思いすぐに自分の部屋へと向かう。

「それじゃあ、勉強を始めようか」

「うん、まずはこれからね」

そう言って春香が英語の教科書と問題集を取り出した。

「俺その問題集持ってないんだけど」

「この問題集すごくいいから一緒に見ながら解いていこうよ」

ひとつの問題集を春香と一緒に解いていくつもうなにも言うことはない。勉強会最高だ。

早速、春香と並んで問題集を解いていく。

前回の勉強会同様かなりの至近距離だ。

しかも真ん中に置いてある問題集に寄る形になるので、右手を動かすと時々肩が触れる。

問題に集中する気はあるが、それ以上に右の肩に意識が集中してし

まう。

「あ……ごめん」

「え？ なにが？」

「い、いや、いいんだ。なんでもない邪魔してごめん」

また肩が春香の左肩に触れてしまった。

それにしても、こうして横に並ぶと春香の髪からふわっといい匂いがしてくる。

学校の帰りなのに何故か風呂上がりのようないい香りがする。

春香の匂いがするってことは俺の匂いも春香に届いてるってことだよな。

俺臭くないかな。やばいかもしれないが、さすがに「臭くない？」とは聞くに聞けない。

それにしても、なんで俺と春香の匂いがこんなに違うんだろうか？

俺からはこんないい匂いがしたことはない気がする。

使っているシャンプーが違うからか？

いやでも、俺が同じシャンプーを使ったらこんなに爽やかないい匂いがするんだろうか？

しない気がする。

第738話 久しぶりの勉強会（後書き）

モブから2購入特典です。

book Walkerで購入の方に特典SS はじまりのスライムがついてきます。

よろしく願いします。

第739話 shampoo(前書き)

来週の水曜日9/1にモブから2が発売です。早い店舗では前日から並んでいるようです。

1巻を購入いただいた方もまだの方も是非買ってください。よろしくお願いします。

第739話 shampoo

シャンプーは英語でshampooだったよな。

受験に出るかな……

いや普通に考えてでないよな。

トリートメントの綴りはtreatment。

やばい、教科書よりも春香の髪のことばかりが気になってしまっ

今になって思うと前日も春香の髪とその匂いが気になって集中できなかつたんだった。

特別匂いフェチでもないはずだが、これでは変態と間違われても文句は言えない。

無だ。無の境地だ。

心を落ち着けよう。そして無心になる。

「海斗、手が止まってるけどわからないところがあるの？ 聞いて

くれれば教えるよ」

「いや、そういうわけじゃないんだ。大丈夫、ありがとう」

だめだ。無心はだめだ。勉強のことまで頭から消え去ってしまう。

『コンコン』

俺が雑念と格闘していると部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「お茶持ってきたわよ。春香ちゃん勉強はかどってる？」

「ありがとうございます。まだ始めたばかりです」

「そう。今日は晩御飯食べていくわよね」

「はい、お邪魔します」

「ちなみに今日は、マグロのカルパッチョにあぐー豚のグリルだから期待してね」

「ありがとうございます」

春香はうちで晩御飯を食べるのか。しかもマグロのカルパッチョにあぐーのグリル！？ 普段そんなの出てきた事ない。というよりも十八年間で一度も出てきたことのない料理だ。それにあぐーって沖繩の高級豚じゃないのか？ 一度もそんなの食べたこともないぞ。どう考えても春香が来る事を知っていたとしか考えられない。

春香のママか？ いやもしかしたら春香？

毎回俺の知らないうちに、いろいろ話が決まっているのが少し気になるが、春香と一緒にご飯を食べることができるのは、素直にうれしい。

母親が出て行つてからは、気持ちを切り替えて、問題に集中し勉強をこなしていく。

「ふっつ、結構進んだな」

「そうだね。これなら模試も頑張れそうだね」

「もちろん頑張るよ。そろそろ夕飯の時間だからここまでにしよっか」

「うん、続きは明日にしようね」

階段を降りると、既に晩御飯が用意されていた。

「春香ちゃん、勉強見てくれたんだって？ ありがとうございます。これからも海斗をよろしく頼むよ」

「はい」

帰って来ていた父親が春香に声をかけてくる。

「もっと来てくれていいんだよ。いつでも歓迎だから」
「ありがとうございます」

父親は、それほど春香のことを知っているわけではないと思うが、思いの他フレンドリーな感じでよかった。

四人でテーブルに座って、夕食を食べ始める。

マグロのカルパッチョ。

普通に美味しいが、カルパッチョなんかどこで習ったんだ？ 前回春香の家でサーモンのカルパッチョを食べたけど、やっぱり春香のママにでも習ったのか？

それにあぐーのグリル。いつも食べている豚肉とは明らかに違う。肉に甘みと旨味が強い。

普段カレーばかりなのに春香が来た途端、テーブルにはおしゃれメニューに高級食材が並んだ。

「どちらも美味しいです」

「あら〜口にあってよかった。家ではよく作るんだけど春香ちゃん
の口に合うか心配だったのよ」

「ありがとうございます。こんなにおいしいものをいただいて大満足です」

「うれしいわね〜明後日も期待しといてね」

家でよく作る？ 俺は初めて見たぞ。それに明後日も春香はうちでご飯を食べるのか。この際母親の嘘はどうでもいいな。

第739話 s h a m p o o (後書き)

昨日からコミカライズ開始していますが、文庫と違い雑誌の一部なので反応がよくわかりませんが、楽しんでいただけていると嬉しいです。

第740話 選択と現在（前書き）

モブから始まる探索英雄譚2の発売まであと5日です。

水曜日の発売ですが1巻とあわせて是非買ってください。

発売から1週間の売れ行きで続刊が決まるという噂は本当でした。

3巻発売に向けて9/1によりしくお願いします。

第740話 選択と現在

昨日の勉強会は 勉強もはかどつたし春香と晩御飯も食べたし充実していた。

今日は春香の家で勉強する日だ。

昨日春香が帰り際に、晩御飯は春香の家で食べることになってるから、期待しておいてねと伝えられたが期待感よりも、緊張感の方が勝っている。二回目なので前回よりはマシだと思っけどやっぱり緊張してしまう。

「なあ、隼人と真司は王華以外も受けるのか？」

「ああ、もちろんいくつかは受けるつもりだぞ」

「俺も受けるよ。王華は正直結構きついからな。まずは帝山かな」

「隼人も帝山受けるのか？」

「ってことは海斗もか？」

「春香が受けるって言うから俺も受けてみようかとは思ってる」

「まあ葛城さんは大丈夫だろうけど、俺たちは帝山でもどうかな」

「帝山って難しいのか？」

「ああ、王華ほどじゃないけど人気あるからな」

帝山を甘く見ていたわけじゃないけど、春香が受験するのを知るまで完全にノーマークだったからな。

「そういえば今週は葛城さんと勉強会なんだろう？」

「ああ、そうなんだけど、俺言っただけ」

「いや、悠美から聞いた。俺たちも最近一緒に勉強したりしてるから。悠美は結構勉強にはストイックなところがあるからついていくのが大変なんだ」

「そうなのか。俺も頑張らないとな」

「探索も進めないといけないし、なかなか大変だよな」

今のところ学業が本分なので、勉強によって探索が遅れるのはどうしようもない。

「隼人と真司も大学に行っても探索者は続けるんだよな」

「ああ、そのつもりだけど。このままレベルアップしていけば十分専業でもいけるだろ？」

「探索者ってやっぱり楽しいしな」

なんだかんだ言っても、友達が同じ道を志していることは結構心強いので助かる。

授業が終わり放課後になったので、春香と一緒に下校する。

「今日は、昨日の続きをやるうね」

「うん。そういえば隼人も帝山受けるんだって」

「そうなんだね。みんな受かるといいね」

今のこの時間が楽しいし充実しているので本当にそうなってほしいとは思うが、それには隼人と俺が特に頑張る必要がある。

この一年で本当にいろいろなことがあって俺の生活も周囲の状況も激変したとを感じる。

最近になってときどき思うことがある。

もし一年前のあの日まで毎日スライムを狩っていなければ。

もし一年前のあの日にシルと出会うことがなかったら。

もしあの時召喚を選択せずに、シルのカードを売却していたら。

おそらくどれか一つでも違う選択をしていたら、今の俺はいないと思う。

ルシェにも出会っていないだろうしK-12のメンバーとも会っ

ていないだろう。

今でも俺は一階層が良くても二階層を彷徨っていたと思う。

そうだとしたら当然隼人と真司も探索者を続けていなかった可能性が高いし、今とは全く違った今があったかもしれない。

今が充実していると感じるたびに、選択の重要性を痛感する。

これから、みんなと楽しくやっていくためにも、これからの選択を間違わないように頑張っていきたい。

第740話 選択と現在（後書き）

9/1はHJ文庫のファンタジー看板作品が集中しています。精霊
幻想記を筆頭に全作重版作です。

1番下っ端感が強いモブからですが、なんとかがんばってほしい。

第741話 未来のサークル活動（前書き）

HJ文庫モブから2の発売がなんと明後日となりました。明日店頭
に並ぶ書店もあるかもしれません。

水曜日ですが是非1巻と一緒に買ってください。水曜日が無理とい
う方は週末に是非お願いします。

おそらく週末までの5日間の売り上げで3巻が出るかが決まります。

第741話 未来のサークル活動

「お邪魔します」

「あら海斗くん、久しぶりね。もっと来てくれていいのよ。ね？春香」

「ママ、勉強するから邪魔しないでね」

「はい、はい。邪魔なんかするわけないでしょ」

早速春香の部屋に向かうが、やっぱり部屋に、お邪魔するのは緊張する。

入ると、部屋からいい匂いがしてくる。

俺は匂いフェチではないはずだが、どうしてもいい匂いが気になってしまう。

良く見ると前回来た時には無かったシルとルシェの写真が飾ってある。

「それじゃあ、昨日の続きから始めようか」

「お願いします」

部屋は春香の部屋だが、昨日と全く同じシュチュエーションだ。

ただ俺も二日目なので多少の耐性ができた。春香のシャンプーの匂いが気にならないということは一切ないが、なんとか問題集に集中することができている。

問題を解いていると春香が話かけてきた。

「海斗は大学生になっても探索者を続けるんだよね」

「うん、そのつもりだけど」

「ちょっと海斗が羨ましいな」

「羨ましい？」

「そこまで一生懸命になれることがあるのが羨ましいよ。私も大学生になったら何か見つかるといいなあ」

「春香には写真もあるし、大学生になればいろんなことがあると思うから」

「私、運動には自信がないのとパパとママが許してくれないから探索者は難しいの。だから何か……」

春香にとって勉強の合間の何気ない会話だったのかもしれないが、春香が俺を羨ましいと思っていたなんてびっくりした。

しかも、あの口ぶりだともしかしたら探索者にも興味があったのかもしれない。

ミクやヒカリンと交流もあるし、それで興味が湧いたのかもしれないが、探索者になるには特別な動機と覚悟がないと続かないと思う。今でも春香はクラスの中心で十分充実しているように見えるけど、俺に見えている以外のこともいろいろとあるんだろう。

それに大学生になると噂ではサークル活動とかがいっぱいあるらしい。春香が新しいことを見つけることもできるかもしれない。

隼人から聞いたところによると王華学園は他の大学に比べても、サークル活動は活発で、毎週のようにイベントもあるそうだ。

特に学園の女の子は人気が高く、他の大学からも頻繁に声がかかるらしい。

王華に入学すれば、春香も今以上にいろいろなお誘いがある気がする。

いや、良く考えてみると、魅力的な春香が他大学に誘われなはずがない。

新しいことを見つけるためにいろいろなことにチャレンジする過程で、男性にも声をかけられる。

まずい……

「春香！ やりたいことは、じっくり探せばいいんじゃないかな。しっかりと見極めて決めた方がいい。なんだったら俺も一緒に探すよ」
「海斗、いつもありがとう。私、受験でちよつと不安になってたみたい。でも、これで頑張れそうだよ。海斗がいてくれてよかった」

一緒に探すといつても、違う大学に行ってしまうえば、それはかなわない。

春香を幾多の外敵から護るためにも絶対に春香の行く大学に受かってみせる。

若干の邪念と使命感をきっかけにこの日の集中力は急激に高まり、昨日よりも勉強がはかどった。

そして勉強の終了を合図に春香の両親との晩御飯が開始された。

第741話 未来のサークル活動（後書き）

サバイバーと交互の予定でしたが、発売間近で気合いが入り、どうしてもモブからの執筆速度の方が早いのでしばらくはモブから中心になります。

よろしく願います。

第742話 葛城家の食事（前書き）

なんと明日はHJ文庫モブから始まる探索英雄譚2の発売日です。
早い店舗は明日に並ぶ店舗もあるようです。

新刊コーナーに並ぶはずなので是非買ってください。
どうかよろしく願います！

第742話 葛城家の食事

リビングに行くのと既に春香のパパとママが座っていて、テーブルに美味しそうな料理が並んでいる。春香と一緒に椅子へと座る。

「やあ、勉強がんばってるかい？」

「はい！がんばっています」

「今度模試があるんだって？成績次第でこの時期だからかなり絞られるけど高木くん大丈夫そうかい？春香と同じ王華志望なんだろっ？」

「はい、もちろんです。大丈夫です！」

「ほかに志望校とか決まってるのかい？」

「はい帝山も受けるつもりです」

「春香も帝山受けるつもりみたいなんだ。一緒だね」

「はい、一緒です！」

ヤバイ。春香のパパからの質問に緊張してせつかくのご飯が美味しいのかどうかわからない。

なにか味がするのはわかるのに、脳が味にリソースを割く余裕がない。

「パパ、海斗は探索者としてもがんばってるんだから、そんなに質問ばかりしないで」

「ああ、すまない。たまにしか会うことがないからつい」

「いえ、全然問題ありません」

「そういえば海斗くんは、学費とかも全部自分で払うそうよ。偉いわね」

「あ、はい、そのつもりです」

なんで春香のママがそのことを知ってるんだ。
なんでも言っても情報のソースはひとつしか考えられない。
俺の母親だ。

「高校生の時から有望ね。探索者ってすごいわね」

「いえ、すごくはないです。たまたまです」

「王華の学費をたまたまじゃ払えないわよ。春香も安心ね」

「ママ！」

春香も安心？ 俺が学費を払えなくて王華に行けなくなる可能性はないって意味か？

「はい、もちろん安心です。安心してください！」

「海斗……」

「あらあら、さすがね。だけど探索者って命の危険があることもあるって聞いたから、頑張るのもそこそこだね」

「若いつて羨ましいな。もっと若い時なら僕も探索者に興味を持つたかもしれないな。だけど継続して稼ぐのが一番大事だからね。そこはしっかりと考えた方がいい」

「はい」

春香のパパの言うことはもつともだ。

探索者はあくまでも自由業。個人事業主だ。

なんの保証があるわけでもないの、全て自分の責任だ。

今は自分の想像を超えて稼ぐことができているが、どんなイレギュラーなことが起こるかかわからないのもダンジョンだ。

春香パパの言うように将来専門を考えている以上、継続性が大事だ。今から将来に備えてしっかりと貯金もしたい。

それから、春香の両親とも和やかに話をしながら食事を食べ終わった。

「それじゃあ、遅くなるのでそろそろ帰ろうと思います」

「ああ、もうそんな時間か。高木くん、今後のこともあるだろうし、また時々来て話を聞かせてくれると嬉しいな」

「はい！ もちろんです」

「海斗くん、お母さんにもよろしくね」

「はい」

「じゃあ、海斗また明日ね」

「うん、また明日」

お母さんによろしくって、やっぱりかなり連絡を取り合ってるんだろっな。

それにしても、いっぱいご飯を振る舞ってもらったが、なにを食べたかほとんど思い出せない。

少しもつたいなかった気もするけど、また明日もがんばろう。

第742話 葛城家の食事（後書き）

発売から1週間の売り上げで3巻が出るかどうか決まります。
どうかお願いします。

第743話 予定変更（前書き）

ついに本日モブから始まる探索英雄譚2が発売になりました！！
電子版は既に販売されているところもあるようです。

発売から五日間の売り上げで3巻の行方が決まります。

新刊コーナーでは非買ってください。よろしく願います！

第743話 予定変更

今日も一日授業をしっかり受けて頑張ってから放課後は春香と勉強会だ。

勉強会の成果も出てきている気がするので今日も頑張りたい。

その前にお昼ご飯だ。

今日は購買でパンを買ってこようかな。

「あの〜すみません。高木先輩はいらっしやいますか？」

教室の入り口から俺のことを探しているような声が聞こえてきたが知らない女子生徒だ。

先輩って事は年下か？

「え〜と、高木は俺だけどなにか用？」

「理香子ちゃんが、野村理香子ちゃんが戻ってこないんです」

「野村さん？」

「はい、私理香子ちゃんと同じクラスの海枝紀梨花といいます。理香子ちゃんとは友達でダンジョンのこととかも結構話してるんですけど、昨日ダンジョンに行っただつきり家にも帰ってきてないみたいなんです。学校にも来てなくて」

「ちよつと待ってよ。たしか野村さんは週末だけ潜ってるんじゃないかっただけ」

「最近パーティでダンジョンに行くのが調子が出てきて稼げるようになったからって、放課後も行くようになってたんです」

「そうなのか。知らなかった。それより帰って来ないって、どういうことなんだ？パーティで潜ってるんだろ？多分野村さんは四階層あたりに潜ってるんだと思うけど」

「昨日の放課後にダンジョンに行ったのは間違いなんですけど、学校にも来てないしそれっきり連絡がつかないんです」

「病気かなにかで休んでるんじゃないか？」

「今までこんな事は一度もなかったですし、朝に理香子の家にも連絡してみたんですけど、戻ってきてないそうです」

普通に考えると、ダンジョン以外でのトラブルに巻き込まれた可能性の方が高い気もするけど、いずれにしても心配だな。

「他のパーティーメンバーとは連絡取れないの？」

「はい、一人だけ会ったことがあるので連絡してみたんですけど、やっぱり反応が無くて」

「海斗、ちよつとやばいんじゃないか？ 例のに巻き込まれたんじゃないのか？」

「いや、でも野村さんはまだ四階層だぞ？」

「海斗、女子高生が戻ってきてないんだ。放っておけないだろう」

「隼人、見かけによらず正義感強いな」

「いや、たぶん野村さんのパーティーメンバーに興味があるだけだぞ」

「真司、なにをバカなこと言ってるんだ！ そんなはずないだろ！

俺は純粹に心配なんだ！」

やっぱり隼人だな。この感じは凶星だったようだ。

野村さんも気になるけど、おそらくダンジョンのトラブルではないだろうし、春香との約束もあるしな。

「海斗、話が聞こえてきたんだけど野村さんが帰ってこないの？」

「ああ、そうみたいなんだ」

「行ってあげた方がいいんじゃない？」

「いやでも……」

「勉強はまた今度一緒にしようよ。ねっ」

「うん」

春香の言う通りだな。

「高木先輩、お願いしてもいいですか？」

「授業をサボるわけにはいかなから放課後になるけど行ってみるよ。たぶん大丈夫だとは思うけどな」

「ありがとうございます。他に頼る人もいなくて」

「俺も行くから安心してよ」

「隼人も来るのか？」

「もちろんだろ。かわいい後輩の危機がもしれないんだぞ。放って置けるはずないだろ」

「ああ、そうなんだ」

隼人もある意味焦ってるな。

第743話 予定変更（後書き）

1巻がまだの方はこの機会に2巻と一緒に買ってください。
よろしく願います。

第744話 誤解（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2 が全国の書店で発売になりました。

是非新刊コーナーで購入お願いします。

TSUTAYAデイリーラノベランキングで1巻と同じ7位にランクインしました。ありがとうございます！

このまま他の書店でも売れてほしい。

第744話 誤解

放課後になるのを待って早速隼人と一緒にダンジョンへと向かう。真司も誘ってみたが、今日は前澤さんと予定があるようなので二人で向かうことにした。

「隼人、野村さんたち本当にダンジョンにいると思うか？」

「可能性としてはあるだろ。俺たちも遠征でトラブルからダンジョンで一夜を過ごしたし。そんな状況に颯爽と助けに入る俺ってイケてると思わないか？」

「はい、はい」

問題は、目的の四階層までどうやって行くかだけど、普通に向かっていたら探す時間がなくなってしまっし、もし急を要する状況なら、少しでも早い方がいい。

「隼人、内緒にできるか？」

「いつたいなんの話だよ」

「これから俺がやることを絶対に口外しないでほしいんだ」

「よくわからないけど、別にいいぞ」

「それじゃあ、とりあえず一階層をちよつと進むか」

隼人なら大丈夫だろう。普段は軽いところもあるけど信用はできる。俺と隼人は一階層を人の気配がしない場所まで進む。

「ここら辺でいいかな。それじゃあ、俺と手を繋ごう」

「……………」

「どうした？ 早くしろよ。急いでるんだろ」

「そういうことか？ 内緒ってそういうことだったのか？ 俺は絶対嫌だ！」

「なに言ってるんだよ。早く手を繋げって」

「お断りだ！ お前のことは友達としか見れない。俺はそんなつもりはない」

隼人はいったいなんの話をしているんだ？ 話が噛み合わない。

「そんなつもりは無いってどういう意味だ？」

「俺は女の子が好きなんだ。だから勘弁してくれ」

「もしかして……隼人それは違うぞ。誤解だ」

「すまない海斗！ 本当に勘弁してくれ。今後の関係性にも影響がある」

「いや、待て。俺だって女の子が、春香が好きなんだ。そんな気は一切ない。これは違うんだ。手を繋ぐのは違う。違う理由があるんだ。本当に！ 信じてくれ隼人！」

隼人の考えていることがわかってしまった。いきなり、ダンジョンのひと気のない場所で、男同士手を繋ごうなって言われたら俺でも勘違いしてしまうかもしれない。

「本当か？ 本当に信じて大丈夫なのか？」

「ああ、俺が春香のこと好きなの知ってるだろ。そんなことはありえない」

「たしかにそうだな。それじゃあなんのために手を……」

「説明するよりやった方が早い。とりあえず手を貸してくれ」

「……変なことはするなよ」

いい加減変なことを言うのはやめてほしい。

俺は、無言で隼人の手を取り『ゲートキーパー』を発動して四階層

へと飛んだ。

「え！？ どうなってるんだ？ ここ一階層じゃないよな」

「ああ、ここは四階層だ」

「四階層！？ まさか、いやでもこの感じ確かに四階層だな。なん
で……」

「俺のスキルだよ」

「海斗のスキル？ まさか転移できるのか？」

「ああ、そんなところだ。行ける場所は行ったことのある階層のスタート地点だけだな」

「本当に転移スキルってあるんだな。これ完全にチートだろ。これ
が使えるだけで、ダンジョン攻略が根底から変わる。海斗すごすぎ
だろ。たしかにこれは人には言えない。言わない方がいいな」

「ああ、だから内緒で頼む。それより早速進むか」

誤解も解けたところで先を急ぐことにする。

第744話 誤解（後書き）

エリアによっては9/2入荷となっているようです。よろしくお願
いします。

北海道、沖縄だけでも少し遅れるようです。

北海道、沖縄エリアでも買ってもらえると嬉しいです。

第745話 四階層に（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2が発売中です！

今週末のお供には是非買ってください！

全国書店の新刊コーナーに並んでいます。

文庫・小説・ライトノベル売上ランキングで35位にランクインしました。ありがとうございます！！

この調子が続けば3巻いけそうです。よろしく願います！！！！

第745話 四階層に

シルたちも喚び出して四階層を進んでいる。

「テイターニアちゃん、イイ！ シルフィーさんとルシエリアさんもいいけどテイターニアちゃんもイイ！ なんか俺そっちの趣味が開花しそうな気がしてきた」

「隼人……花園さんの件は残念だったけどそれはやめといた方がいいんじゃない」

「冗談だよ。それにしても海斗と潜るのも久しぶりだから楽しみだな」

「ご主人様……でました。お願いします」

「ベルリアわかってるな！ 瞬殺だぞ。瞬殺！」

「姫、おまかせください」

レベルアップしても相変わらずか。

「なあ海斗、なんかシルフィーさんとルシエリアさんの様子が変わらないか？」

「まあ、あれだ。もうすぐわかる。隼人も積極的に攻撃に参加してくれ」

「きゃ〜！ でした〜！ ご主人様！」

「ベルリア！ いけ〜！ 今すぐいけ！ うあああ〜。海斗！ 海斗〜！」

「これってもしかして……」

「ああ、見ての通りだ」

「マスター……私も無理です」

女性陣は全滅か。仕方がない。男性陣だけで対処することにする。久々の『Gちゃん』に向かってバルザードを構え向かっていく。

「きゃ〜飛びました。ご主人様！ 飛んだのです」

「シル大丈夫だ」

「シルフィーさん、俺にまかせろ！ 『必中投撃』」

隼人が上空を飛んでいたGちゃんに向けて槍を投げた。

隼人も四階層の適正レベルは大きく超えているので、放たれた槍はあっさりGちゃんの胴体を貫き、Gちゃんは地面へと落ちた。

「カサカサカサッ」

隼人の一撃は確実に致命傷を与えているが、驚異的なGちゃんの生命力はまだその身に動くことを許し、槍が刺さったまま逃げ出そうとしている。

「きゃ〜、動きました！ カサカサ動いてます！」

「隼人！ 早く殺せ！ ベルリアなにしてるんだ！」

「……無理」

サーバントたちが騒いでいるのを尻目にさっさと片をつける。

俺はバルザードの斬撃を飛ばして逃げようとするGちゃんにとどめをさした。

残りは二体。

一体は既にベルリアが交戦しているので、すぐに終わるだろう。

俺と隼人は残りの一体と交戦する。

「海斗、俺にまかせろ！ ここは俺がいいところを見せるチャンスだ！」

隼人が張り切っているようなので止める必要もないだろう。

「いくぞ、ゴキブリ野郎！ 俺の必殺の一撃をくらえ！」

隼人はGちゃんへと走っていき、すれ違いざま胴体へと槍を突き刺した。

「まだまだ、おりゃ！」

続け様に槍を突き刺し、Gちゃんを消滅へと追いやった。

「隼人、やるな」

「まあな。俺の活躍どうだった？ ティーターニアちゃん」
「……………」

反応がないのでティーターニアの方を見るとしゃがんで目を瞑り顔を背けていた。

残りの二人も似たような状態だ。

この様子では三人とも隼人の活躍をその目に焼きつけたということは一切無さそうだ。

「姫、終わりました。いかがでしたか？」

ベルリアもか。

当然ベルリアの活躍もルシエの目には映っていなかったようだ。

それにしても、この階層では三人とも相変わらず全く役に立ちそうにはない。

むしろ毎回騒がれたらペースダウンは免れない。

それほど時間はないのでこのままではまずい。

第745話 四階層に（後書き）

T S U T A Y A デイリー ラノベランキング7位にランクインです。
よろしくお願いします。

第746話 対策（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2が発売中です！

皆さんのおかげで文庫・ライトノベル・小説売上ランキング500で35位にランクインしました！

このままの勢いが続けば3巻も出そうです。ありがとうございます。
是非新刊コーナーで1巻と一緒に買ってください。
よろしく願います。

第746話 対策

「シルは無理だけど、ルシエとティターニアはカードに戻るか？」

シルがいなくなるとモンスターの出現が読めなくなるので、四階層とはいえ外せないが、ルシエとティターニアはこの階層ならいなくても大丈夫だ。

むしろ、いない方が進度は早くなるのは間違いない。

「ちょっとまで。なんでシルは無理でわたしはいいんだよ。なっとくいかないぞ」

「いやだつて、ルシエは探知できないだろ。それならこの階層で無理しない方がいいんじゃないか？」

「ふざけるな！ シルが残るならわたしも残るに決まってるだろ。もちろん残る！」

変なところでルシエの競争心というか自尊心をくすぐってしまったようなので、これ以上は言って無駄だろう。

「私は……戻りたいです。虫は……無理です」

「そうか。わかった」

ティターニアは、よほど先ほどのGちゃんが怖かったのか、普段よりも更に小さな声で申し出てきた。

サーバントが戦いを放棄したいというこの状況は普段であれば、絶対に避けたいところだが、今回はかりは歓迎したい。

俺はティターニアをカードへと送還して先を急ぐことにする。

「ああ……ティターニアちゃんが」
「隼人、さっさと行くぞ」

隼人はお気に入りだったティターニアがいなくなって明らかにテンションが下がって見えるが、そんなことを気にしている暇はないので放っておく。

「ベルリア、隼人、この階層ではシルとルシエのサポートはないものと思ってくれ。むしろ騒いで邪魔になるかもしれないから相手にしないで戦闘に集中してくれ」

進んで行くとすぐにシルがモンスターの出現を知らせてきた。

「ご主人様お願いします。私たちはこちらで控えています。この先なので終わり次第お知らせください」

サーバントとしては完全に失格だが、今回はそれもありがたい。

「よし、隼人、ベルリアいくぞ」
「マイロードおまかせください」
「わかった」

三人でシルの指示のあった場所へと向かう。
今度はセミ型にカマキリ型とムカデ型。バラエティに富んだ組み合わせだ。

「海斗、俺はセミ型をもらっぞ」
「わかった。じゃあ俺はムカデ型をやるからベルリアはカマキリ型な」

「おまかせください」

俺の相手は巨大なムカデ型のモンスターだ。

以前であれば、その変則的な動きと強靱な外殻に苦戦したが、レベルの上があった今なら完全に動きは見切ることができ、その外殻もバルザードで問題なく断ち切れる。

ムカデ型モンスターの胴体をほぼ真ん中から切断するが、切断した胴体の上下はまだうねうねと動いている。

昆虫タイプのモンスターの生命力は尋常ではない。

とどめをさすためにムカデ型の頭部へとバルザードを突き刺そうとしたその時、後方から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃ〜ダメ。きちやった。ルシエ！」

「うあああ〜。くるな〜。なんで後ろから」

「ルシエ、獄炎です！ 獄炎で焼き払って。虫には火です」

「無理無理。無理に決まってるだろ！ 海斗！ 海斗〜！」

第746話 対策（後書き）

TSUTAYAデイリーラノブランキング10位にランクインです。
ありがとうございます。

第747話 新たな脅威（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2を是非購入お願いします！
Webショップと全国書店の新刊コーナーで買うことができます。
一緒に1巻もお願いします！

第747話 新たな脅威

悲鳴の聞こえる後方に振り向くと、脱兎のごとく超スピードで走ってくるシルとルシエが見えた。

「海斗！ そっちはあとだ！ こっち、こっちだ！」

「ご主人様『G』です。『G』が出ました！」

逃げてくるシルたちの更に後方からは黒い昆虫が飛来してくるのが見えた。

「いや、二人ともよく見る。あれは『Gちゃん』じゃない。カブトムシだろ」

『Gちゃん』よりも硬質で体高もあるのですぐに違いが分かりそうなものだ。

「カブトムシだろうがなんだろうが同じだ！ 黒いし気持ち悪いんだよ！」

「脚の感じも色の感じも同じです。同じなんです。ご主人様お願いします！」

「どう見ても同じじゃないだろ」

『Gちゃん』には忌避感しかないがカブトムシは単純にカッコ良さを感じる。

とにかくシルとルシエが大騒ぎして戦場を混乱させるので、先にカブトムシ型を倒した方がいいな。

こちらへと駆けてくる二人と入れ替わる形でカブトムシ型に向かつて走る。

『ブーン』という大きな羽音と共にこちらに向かってくる姿は黒い弾丸のようだ。

いくら低層階のモンスターとはいえ気を抜けば大ダメージを受けかねない。

近接を避けて羽根の部分を狙いバルザードの斬撃を飛ばす。

斬撃は片方の羽根を斬り飛ばすことに成功し、その瞬間カブトムシ型はバランスを崩して転がるようにして地面へと墜落した。

地面に落ちたカブトムシ型との距離を一気に詰めてとどめをさした。それにしても俺でも問題なく倒せるんだから、シルたちなら造作もなく倒せるだろう。それなのに二人は

「海斗！ こつち！ うねうねが〜！」

「ご主人様！ 真つ二つになっても動いています！ 気持ち悪いのです。早く助けてください！」

俺が先に倒していたムカデ型を見て、大騒ぎしている。

もう段取りもなにもあったものではない。

この場を収めるには、目に触れないようにとにかく速攻で消滅させる以外にない。

急いでシルたちの方へと戻りムカデ型のモンスターにとどめをさす。

「遅い！ 遅すぎだぞ海斗！ 死ぬかと思った」

「ご主人様、怖かったです。待っていていれば大丈夫だと思ったのにダメでした。ご主人様から離れようとした私が愚かでした」

虫型モンスターなんかはこの二人がやられてしまう事があるとは思えないが、騒がしくてなかなか大変だった。

「シルフィーさん、ルシエリアさん、俺の勇姿見てもらえましたか？　一発ですよ一発」

「ああ、そうか」

「ありがとうございます」

あの状態で二人が周りの状況が見えていたとはとても思えない。

「姫このベルリア、姫たちの為に、羽虫を排除してまいりました」

「ああ、そうか」

「ありがとうございます」

「はっ、ありがたきお言葉。このベルリア姫たちの為に、立ちほだかる羽虫は必ずや全て排除いたします」

ベルリアは張り切っているけど、二人ともあまり話を聞いてない感じだな。

やはりこの階層での脅威はシルとルシエだ。

二人が騒いで場を混乱させると、不意のイレギュラーが起こる可能性がある。

それが一番怖いので、とにかく二人には大人しくしておいてもらうしかない。

第748話 ダンジョンは沼のようなものだ(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2が発売から6日となりました。
1巻同様に多くの応援いただいています。もっと多くの人に読んでほしい！

是非1巻と一緒に2巻を全国書店の新刊コーナーかネットショップで買ってください！
お願いします。

第748話 ダンジョンは沼のようなものだ

それからシルとルシエは、モンスターが出現するたびに悲鳴をあげ場を混乱させているが、以前の時はアツカーが俺一人だったのでそれを考えると、前衛が三人いる今は随分と余裕を持って進むことができています。

ただ、マップを見る限り既に四階層のおもだったところは、ほぼ確認が終わっている気がする。

「隼人、やっぱりいないんじゃないか？」

「そうだな。四階層にはいないかもしれないよな。もしかしたら五階層へ向かって帰れなくなっただんじゃないか？」

「たしかにその可能性もあるな」

野村さんたちは、少し前まで四階層をベースにしていたはずだ。

五階層に挑んで戻れなくなった可能性はない気がする。

「隼人、どうする？ このまま五階層に向かうか？」

「これ以上四階層を探しても難しい気がするし、行くしかないだろ」

「隼人、さすがに六階層まで行った可能性はゼロだと思うから五階層がダメなら帰るからな」

「わかってるって。まあ久しぶりに海斗とダンジョンに泊まりこむのもありだけど、親に言っただけでこなかったから一度は戻らないとな」

「いや、明日も学校あるし普通に帰るからな」

「わかってるって」

俺たちはそのまま四階層を抜けて五階層へと向かった。

五階層にいる可能性もあるが、そもそもダンジョンにいない可能性

が一番高そうだ。

「ふ〜ようやく抜けたか。もう二度と四階層はごめんだぞ」

「だからカードに戻ってもいいって言っただろ」

「そういうことじゃない！」

「ご主人様、この階層であれば十分お役に立てると思います」

「ああ、頼んだぞ」

以前の俺はこの階層ではアタッカーとしては火力不足で役に立つことは出来なかったが、バルザードと魔刀を使っている今ならいける。

「そういえば今更だけど海斗って、師匠の真似して二刀流にしたのか？」

「いや、別に真似したわけじゃないけど、持ってる武器は使った方が有効だからだよ」

「そうなのか。俺もそろそろ武器をグレードアップしたいんだよな」

「武器は前から変わってないのか？」

「いや、さすがに斬れなくなっただけ一度変わってはいるけど、あくまでも普通の槍だからな。この階層の敵には相性悪い。俺も魔槍とか聖槍みたいな特殊効果付きの武器がそろそろ欲しいんだ」

「聖槍ってシルのみたいなの？」

「いやいや、シルフィーさんみたいな槍は俺には使いこなせないだろ。もっと庶民的な感じで威力が増すと嬉しいんだけどな〜」

庶民的な魔槍に聖槍ってそんなものあるのか？

「まあ特殊な武器は高いからな〜。ドロップでもない限り最低でも五百万。槍なら一千万円はするだろ」

「そうなんだよ。高いよな〜。俺も頑張ってるから無理すれば出せなくはないんだけど、高校生の身で一千万は勇気いるよ。貯

金して将来いい車でも買った方が女の子にモテる気もするし。槍じやモテなさそうだろ」

「いや、槍をモテる基準にするのが間違ってるだろ。まあ気持ちはわかるけど」

俺は既に一千万以上使っているけど、隼人の言うように時々思う。

ダンジョンは抜けることのできない沼のようなものだ。

先に進む為にはいい武器やお金が必要になる。

よりお金や武器を手に入れる為には先に進む必要がある。

第748話 ダンジョンは沼のようなものだ(後書き)

このライトノベルがすごい2022の投票が始まりました。

モブからも対象になっています。

モブからには縁がなさそうですが5作品投票なので5番目でもいいので投票してもらえると嬉しいです。

第749話 武器（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2の発売からちょうど1週間が経過しました。

皆さんのおかげで、巷のランキングを見る限り1巻と同じくらい売れているようです。

今のところ大健闘といえると思います。この調子ならおそらく続刊される気がします。

まだの方は是非購入お願いします！

第749話 武器

五階層を進んで行く。

「ご主人様、この先に敵が二体いるようです」

「じゃあ俺とベルリアが前で隼人はフォロー頼んだぞ」

先に進むとそこにはサンドマンとブロンズマンがこちらに警戒しながら待ち構えていた。

以前は金属製の身体を貫くことができなかったが今ならいける。俺はブロンズマンに向けて加速する。

「海斗、フォローはまかせろ！」

後方からパンチコ玉程度の大きさの鉄球がブロンズマンめがけて飛んでいき命中するが、ダメージを与えるには至らない。

「やっぱり無理かも」

「隼人……」

こればかりは相性の問題なので仕方のないことだが「フォローをまかせろ！」はなんだったんだ。

先程の攻撃でブロンズマンの注意が一瞬それたが、今はもう効果を完全に失っているので、普通にブロンズマンを相手どりバルザードの一撃を突き立てる。

バルザードにのせるイメージは切断。

ブロンズマンの動きは鈍い。しっかりと動きを見定めて、ブロンズマンが腕をスイングした瞬間を狙いバルザードを突き刺す。

鈍い抵抗感と共にバルザードの刃がブロンズマンの身体へと吸い込まれ、俺はそのまま横なぎにバルザードを振り払った。
ブロンズマンはそのまま二つの塊へとわかれて消滅した。
俺がブロンズマンをしとめた時には、サンドマンは既にベルリアの刀によって倒されていた。

「海斗も師匠もさすがだな。やっぱり魔剣はすごいよ。今度いい出物があれば俺も奮発して魔槍買おうかな。魔槍があれば俺だっていけるよな。聖槍もいいけどやっぱり魔槍がカッコいい」

「隼人、槍のことはよくわからないけど、もし買うなら魔刀とかでいうと、同じ魔っていう名前を冠していても刀によって効果は千差万別だ。俺とベルリアの魔刀も効果は全部違うしバルザードは全く違う感じだからよく吟味した方がいい」

「やっぱりそれもあるよな。掘り出し物かと思ったら、なまくらつかまされることもあるってことだよな」

「まあちゃんとした店で買えば騙されるようなことはないんだろうけど、武器はどこで調達してるんだ？」

「もちろんダンジョンマーケットの敵ついオッサンがやってる店だぞ。まあそんなに利用する機会はないけど」

敵ついオッサンって、間違いなくあのオッサンだよな。まあ俺たちのエリアで探索用の武器ならあの店ぐらいだもんな。

「あゝ俺と同じだな。だけどあの店は要注意だぞ。たまに当たりもあるけど基本ぶっかけてくるからな。高額な武器ほどガチャ的な要素が強い」

「そうなのか？」

「ああ、間違いない。あのオッサン、男には甘くない。もし買うなら前澤さんあたりについてきてもらった方がいいかもな」

「そんなにか」

「ああ、女の子にはめっぽう甘い。割引率が明らかに違う。それと武器は誰かが使ってた中古の方がいいかもな」

「新品じゃなくてか？」

「俺の経験的にあの店は中古の方が当たりが多い気がする。中古ってことは、それまでダンジョンで通用してた証明にもなるし価格もあのオッサンにしては良心的なことが多い気がするんだ。ちょっと人気を外したような装備がおすすめだ」

「やっぱり海斗に相談してよかったよ。参考にさせてもらう」

隼人が買ってしまっ前でもよかった。

一千万円から支払ってハズレを引いたら立ち直れないからな。

第749話 武器（後書き）

このライトノベルがすごい2022のWEB投票が始まっています。
是非モブからに投票お願いします。
海斗とシルフィーにも1票お願いします。

第750話 心当たり（前書き）

HJ文庫 モブから始まる探索英雄譚2が好評発売中です！

全く話題にはなっていないませんが、1巻に引き続き多くの方に買っていただいているようです。

是非1巻と一緒に買ってください。

第750話 心当たり

五回層を進んで行くがまだ野村さんたちの姿を見つけることはできない。

「シル、なにか反応っぽいのはないか？」

「特に変わった様子はないです」

「隼人、やっぱりいないんじゃないか？ 五階層へ来ていたとしてもそこまで奥に進んでいるとは思えないんだけど」

「たしかにな。どこか違う場所にいるだけなのか？ もしかして無断で誰かのところにお泊まりしてるだけ？」

「いや、それもな。彼女家計を助ける為に探索者をしてたから、それも無い気がするけど」

パーティの探索メインのためいつもより他のパーティと出会う頻度も高いので、一応会うたびに聞いてはみているが全く情報は得られなかった。

もし途中で全滅しているようなことがあれば、さすがに昨日の今日なので、同じ階層にいてなにも情報が入ってこないということはないはずだ。

「この階層でイレギュラーが起こりそうな場所な。どこかあるかな」

「おい、この階層って前に海斗が死んだ……いや死にかけた場所だろ」

「俺は死んでないけどな。だけどあそこならありえるか。隠しダンジョンか」

たしかにルシエのいうようにこの階層は俺が以前トラップにハマった場所がある。あの時はルシエのせいでトラップにハマってしまったが、あそこならそれほど人目にも触れないしトラップも多い。何かしらのトラブルで戻れなくなった可能性はある。

「よし、じゃああの隠しダンジョンまで一気に向かうか」

「あゝたしかにあそこならありえるな」

「隼人も行ったことあるのか？」

「ああ、何度か入ったことがある。不思議とトラップはランダムに復活するみたいだし、あそこならなにかあっても不思議じゃない」

「ふふん、やつぱりな。わたしの言った通りだろ」

「ルシエ、忘れてないからな。あそこで酷い目に遭ったのはルシエのせいだからな！ 今度は後ろからついてくるんだぞ」

「そ、そんなこと言われなくてもわかってる。しつこい男は嫌われるぞ！」

本当にわかっているのか？

あの時のことは今でも鮮明に思い出すことができる。

一度だけでなく、複数回ルシエがトラップにハマり、なぜか俺がダメージを受けたんだった。

それに電撃のトラップにハマった時の記憶があまり無い。

気がついたらシルがポジションで助けてくれていたんだった。

なぜかあの時のことを思い出そうとすると頭が痛くなる気がする。

もしかしてトラウマになっているのか？

まあ、今回は以前よりも成長しているし隼人もいるから大丈夫だとは思うけど、注意しておくに越したことはない。

いずれにしても、この階層にいるとすれば、もうあの隠しダンジョンぐらいしか思いつかない。

隼人とも相談した結果、時間も限られているので周囲の探索は一旦取りやめて隠しダンジョンへと向かうことにした。

第750話 心当たり（後書き）

このライトノベルがすごい2022の選考対象にモブからもエントリーされています。

是非モブからに投票をお願いします。

海斗とシルフィーもお願ひします。

第751話 隠しダンジョンへ（前書き）

前話の750話と今回の751話は書籍版の1巻と設定が連動しています。

是非1巻を買ってみてください。ルシエの海斗が死んだというフレーズに連動しています。

HJ文庫モブから2も好評発売中です！ 週末のお供に是非買ってください。

よろしく願います。

第751話 隠しダンジョンへ

「なんか、随分前のことのような気がするな」

俺たちは隠しダンジョンへの入り口に来ているが、以前シルがこの入り口を発見してからまだ一年経ってないぐらいだが、それから色々なことがあったせいで、ものすごく前の出来事のような気がする。

「海斗はここに来たのは一度だけか？」

「ああ、最初に入ったつきりだな。前は何度か通ったけど、結構人がいたりして入ってはない」

「そうか、俺は二回入ったけど、トラップの位置はランダムな気がする」

「ランダムなのか……」

そう聞くと少し心配にはなるけど、今の俺たちなら大丈夫だろう。俺たちは隠しダンジョンへと踏み入れる。

「ルシエ、俺たちの後ろから来るんだぞ。絶対になにも触るな。絶対だぞ」

「わかってるって。あゝいやだいやだ。口うるさい小姑みたいだな」

「ベルリアもシルも頼んだぞ」

「はい」

「おまかせください」

ベルリアを先頭にして俺と隼人が並び、後方にシルとルシエがついてくる。

この隊列ならまず間違いは起こらないだろう。

「マイロード、そこに注意してください。おそらくトラップです」
「ああ、ありがとう」

やっぱりこのエリアはトラップだらけだな。

「海斗、やっぱり海斗のパーティはチートだな。シルフィーさんが敵を探知して師匠がトラップ探知って通常のパーティじゃ考えられないな。俺たちがここに来た時なんか、ちまちま壁とか床を棒とかで叩きながら進んだりしたんだぜ」

たしかにベルリアのおかげでトラップにかかる確率は激減しているのは間違いない。ただベルリアにも全てがわかるわけではないので、俺自身も注意しながら進んで行く。

「ご主人様、モンスターがいます」
「わかった。このまま進もう」

隊列を崩さずに進んで行くと、そこには懐かしい赤と黄色の体色をした原色カラーのモンスターがいた。

「あっ！」

まずい。

そこにいたのは真っ赤な『Gちゃん』に真っ黄色の蜘蛛型モンスター。

「ご主人様、ダメです。無理です。もうむりです」

「うううわあああゝむり！」

海斗逃げるぞ、いますぐ逃げよ

うー！」

思った通りだ。

「ご主人様〜早く！ 早く〜！ きゃ〜」

「目が……目が〜海斗〜海斗〜目が潰れる。赤が赤が〜」

後方でシルとルシエが大騒ぎしているのが聞こえてくる。

「海斗、シルフィーさんたち大丈夫なのか？ 四階層の時より激しくないか」

「大丈夫だ。前の時もこんな感じだった。虫が苦手な上にあの色じやな〜。大丈夫な俺でも目が痛い」

「たしかにな。あの色と姿が凶器だよな」

俺と隼人が赤い『Gちゃん』に向かって踏み出そうとしたその時

「後ろから、後ろからも、変な音がしました〜！」

「海斗〜助けてくれ〜！」

シルとルシエがこちらに向けて一目散に走ってくるのが見えた。

『カチッ』

俺の耳にはハッキリと聞こえてきた。

以前何度か耳にした音。

俺にトラウマを植え付けようとしたあの音だ。

第751話 隠しダンジョンへ（後書き）

このライトノベルがすごいにモブからもエントリーしています。
是非、モブからと海斗とシルフィーに1票お願いします。

第752話 転移（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2絶賛発売中です！よろしくお
願いします。

日曜日の暇つぶしに是非買ってください。

第752話 転移

「お、おいっ！ ルシエまさか！」

俺は後方のルシエの方に振り返るが、その瞬間周囲の景色が、加速するように流れていき一変した。完全にトラップが発動したらしいが、これってなんだ？

「海斗、これって……」

「隼人もか……」

周囲を見回してみるが、どうやらこの場にいるのは俺と隼人だけらしい。

「ここってダンジョンの中だよな。だけどどうして……」

「たぶんルシエだ。ルシエがトラップにハマったんだと思う」

「じゃあルシエリアさんはどこに？」

「ルシエがトラップにハマって影響を受けたのは俺たち二人でことだ」

「そんなことあるのか？」

「ああ、よくあることだ」

もしかして隼人も不幸体質なのか？ それとも俺に巻き込まれただけ？ いずれにしてもここはさっきまでいた場所とは違っている。どう見てもダンジョンには違いないが、おそらくどこか違う場所の飛ばされた。

ただ、この感じ五階層とは違うように思える。

「それより、ここどこなんだよ」

「五階層ではない気がするけどな」

「海斗、焦ってないのか？　なんか落ち着いてるな。俺は正直かなり焦ってるんだけど」

「まあ、ここがどこでもシルたちを喚べばいいだけだし、最悪『ゲートキーパー』で跳べばいいだけだからな」

「あゝそれか。シルフィーさんたちを喚べるのか。さすがはサーバントカードだな」

「それじゃあ、早速喚ぼうか。シルフィー戻れ。シルフィー召喚！」

あれ？　なにも起こらない。

「海斗？」

「なんで？　ルシエリア戻れ。ルシエリア召喚！」

やはりなにも起こらない。

「海斗もしかして」

「いや、ちよつと待ってくれ。ベルリア、カードに戻れ。ベルリア召喚！」

サーバントカードがあれば距離があったとしてもカードに一旦戻すことで、再召喚できるはずだ。

今まで最大有効距離を測ったことはないが、俺の中では今までできてきたのでそういう認識だった。

それが、なぜかなんの反応もない。

距離がありすぎるのか？　それともここが特別なフィールドなのか。いずれにしても、全く未踏の地でサーバントがいないということは、俺にとって死活問題と言っても過言ではない。

ここが、見た目通り五階層ではなかったら。

少なくとも俺の記憶にある十八階層までで思い当たる階層はない。俺の杞憂であればいいが、もしここが十九階層よりも下層であったらやばい。

「隼人、手をかしてくれ」

「海斗、こんな時にまさか……」

「おい！」

「冗談だよ」

俺は隼人の手を握りスキルを発動する。

『ゲートキーパー』

「海斗、移動は……してないよな」

「ああしてないな。『ゲートキーパー』も発動しないのか」

今まで十八階層までで『ゲートキーパー』が発動しなかったことは一度もない。

やはりここは特別なフィールドなのかもしれない。

「海斗、まずくないか？」

「ああ、まずいな」

未知のエリアでサーバントも喚べず『ゲートキーパー』で戻ることもできない。

ルシエ！ ルシエのせいでヤバイ。たぶんものすごくまずい状況に陥ってしまったようだ。

冗談抜きでどうしよう。

第753話 唯一のカード（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚の発売からちょうど2週間経過しましたが、たぶん好調です！

まだの方は是非買ってください。

モブからコミック1話がニコニコ静画に近日登場予定です！

詳しいことが決まったら告知しますので是非読んでください！
面
白いです。

第753話 唯一のカード

このまま進んでいいのかもわからないが、ダンジョンなので出口がどこかにあるのは間違いないだろう。

「隼人、ここにいってもどうしようもないしとりあえず進んでみるか？」

「そうだな。もしかしたら野村さんたちもここにいるのかもしれないしな」

たしかに隼人の言うことにも一理ある。もし野村さんたちがダンジョンにいるとすれば五階層の隠しダンジョンからここに飛ばされた可能性は十分にある気がする。

「問題はこの階層のモンスターだな。俺たち二人でいけるやつだといいけど」

「海斗、シルフィーさんたちが喚べないのはわかったけど、ティターニアちゃんも喚べないのか？」

「隼人……冴えてるな。たまにはいいこと言う」
「海斗、その言い方はひどいな」

シルフィーたちは喚べなかったがティターニアはもともとカードに戻っていた。もしかしたら喚べるかもしれない。

「じゃあ喚んでみる。ティターニア召喚！」

俺が喚んだ瞬間エフェクトが発生してその場にティターニアが現れた。

「おおっ！」

「ああっティターニアちゃん」

「マスター……ここは」

「トラップにハマってどこか違う場所に跳ばされたんだ。シルたちとははぐれて、おまけに喚び出せないんだ。ティターニアだけでも来てくれて助かったよ」

「そう……なのですな」

「これから先に進むけどティターニアも一緒に戦ってくれ。俺たち二人だけじゃ不安だったんだ」

「わかり……ました。がんばり……ます」

ティターニアもサーバントの中では前衛タイプとは呼べないが、それでも普通の探索者として考えるとドラグナーを使えば十分前衛もこなせる力があるし、補助スキルもあるので俺と隼人だけの時と比較すると格段に戦力がアップしたといえる。

「それじゃあ進もうか。ティターニアも敵の気配があるようなら教えてくれ。一応俺と隼人が前でティターニアはそのすぐ後ろでいこう」

ティターニアもシルほどではないがモンスターの気配がわかるようなので、この未知のフロアでは頼りにしたいところだ。

「海斗、やっぱりこの階層の感じに見覚えは無いのか？」

「ああ、全くないな」

「じゃあやっぱり十九階よりも下なのか」

「いや、シルたちを喚べないことを考えても通常のフロアとは全く別のフロアの可能性も高いと思う」

注意を払いながら進んで行くとすぐにモンスターと遭遇した。

「海斗、あれは羊、いやヤギか？」

「そうだな頭が3つか。普通じゃないけど毛も少ないしヤギだろ」

サイズもかなり大きいし頭が三つあることを考えても弱いモンスターでないのはすぐわかる。

「ここは俺からいく。『必中投撃』」

隼人が手に持つ大きめの釘を五本同時に放った。放たれた釘は、それぞれ三つの頭に命中した。

「やっぱり浅いか」

釘は頭部に刺さってはいるが、三つ頭のヤギが止まる気配はない。

「テイターニア！」

「はい……いきます」

テイターニアがドラグナーを使い高速の弾丸を放つ。

第754話 三つ頭のヤギ（前書き）

なんとHJ文庫 モブから始まる探索英雄譚の続刊が決定しました
！！

買ってくれた方は本当にありがとうございます！

次は3巻です！！

モブから始まる探索英雄譚3です！！！！

ついにベルリアが登場します。世に出ないまま打ち切りにならなくてよかったです。

がんばって作業するので是非買ってください！！

第754話 三つ頭のヤギ

高速の弾丸が三つある頭のうちのひとつを撃ち抜く。

「メゼエエエエエ」

撃ち抜かれた頭がダランと傾げるが、残りの2つの頭からそれぞれ威嚇音が聞こえて来る。

「テイターニア、そのまま援護を！」

「はい」

全ての頭潰す必要があるのかもよくわからないが、とにかく残りの頭を潰すのが一番手っ取り早い。

俺は踏み込んでバルザードの斬撃を飛ばそうとするが、ヤギの口から先に炎の槍と氷の刃が放たれた。

「魔法か！」

俺に向かってきた炎の槍を咄嗟に身体を横にシフトして避ける。かなりスレスレだったが耐火マントのおかげでダメージはない。

氷の刃は俺ではない方へと着弾したので、慌てて確認すると隼人が地面に転がっているのが見えた。

「隼人！」

「なんとか大丈夫だ！」

どうやら転がって避けることができたらしい。

この頭、かなり厄介だ。

態勢を立て直してバルザードの斬撃を飛ばすが、斬撃に向けて炎の槍が再び放たれ相殺されてしまった。

ティターニアの一撃であっさりと頭ひとつを潰すことができたので、少しほっとしていたが、完全に甘かった。

やはりこのモンスターは五階層レベルの敵ではない。

明らかにもっと下層のモンスターの力を持っている。

「マスターいきます。『ウインガル』」

ティターニアが俺に向けてスキルを発動する。

それに呼応して俺はヤギに向かって走り出す。

相殺されるなら近距離から斬り落とすしかない。

俺は放たれた氷の刃を避けながら更に加速する。

ヤギの喉元に向けてバルザードを突き刺し破裂のイメージをのせる。その瞬間、残った頭から氷の刃が放たれるのが横目に見えた。

間に合わない。

咄嗟にバルザードから手を離し回避動作を取ろうとした瞬間にスイツチが入ったのを感じる。

バルザードを刺したヤギの頭がゆっくりと弾け飛び、氷の刃が俺の首めがけて迫ってくる。

氷の刃に意識の全てを注ぎ、頭ひとつ分だけ必死に身体を沈み込ませる。

絶対に間に合わないタイミングだったが、遅くなった時間の流れを無視するように俺は瞬間だけ速く動く。『ウインガル』の効果も加わりいつも以上に反応速度も上がっている。

スレスレのところでも頭上を氷の刃がすり抜けていくが、まだ残りひとつとなった頭はこちらを向いている。

すぐにしとめなければ次の攻撃がきてしまう。

「海斗〜！ おおおおお、唸れ俺の槍の一撃！ 『必中投撃』」

直後後方から隼人の声がしたと同時に目の前のヤギの頭部に槍が突き刺さっていた。

「海斗！ とどめだ！」

「ああ！」

俺は左手に持つ雷の魔刀でヤギの首の斬撃を見舞い、力任せに一気に斬り落とした。

三つ目の頭が完全に破壊されると同時に三つ頭のヤギはその場から消失した。

危なかった。俺一人なら勝てなかったかもしれない。

「海斗、やっぱりまずくないか？」

「ああ、まずいな。この魔核十八層の魔核より大きい」

「やっぱりか。ここは十九階層より下の可能性があるってことだよな」

「もしかしたら五階層なのかもしれないけどモンスターは十九階層より下層のレベルだ。それは間違いない」

第754話 三つ頭のヤギ（後書き）

ニコニコ静画にモブから始まる探索英雄譚のコミカライズ1話が登場します!!

たぶん来週のもしれません。

ニコニコ会員の方は是非読んでみてください。
面白いです。

第755話 発見（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚の3巻発売が決定しました。

既に書籍化作業に入っていますので、是非連休に1巻2巻を買って発売までお待ち下さい。

今から最短で出版できるよう頑張ります。

たぶんモブからコミカライズ1話がニコニコ静画に来週の21日に掲載される予定です。

ニコニコ会員の方は是非読んでください。

第755話 発見

「海斗、ヤギは強かったけど無傷で倒せたんだ。まずいのはまずいけど大丈夫……だよな」

「いや、正直かなりキツイ。ティターニアのサポートを受けて三人がかりでやっとだからな。それにさっきのはどう考えてもボスじゃない。普通にいるモンスターであのレベルだぞ。かなり慎重にいくしかない」

「やっぱりそうか。本当はわかってた」

「まあ、ポジティブに考えれば三人でかかればなんとかなっただから、三人で進むしかないだろ」

この場に留まるという選択肢がない以上このまま進むしかない。もしかしたらすぐこの先に出口があるかもしれない。

周囲へ注意を払いながらダンジョンを進むと分岐しているので右折して、そのまま進むとすると、その先は二十メートルほどで行き止まりとなっていた。

「あつ……」

「おい、海斗あれって」

「こんなところにいたのか」

行き止まりの端に五人の女の子がくたびれた様子で座っているのが見えた。

それぞれかなり汚れていて装備も乱れているが、出血等はこの位置からでは確認できない。

その中には俺たちが探していた相手、野村さんの姿も確認できた。

「えっ……だれ？」

女の子の一人がこちらに気がついたようで、顔を上げてこちらに視線を向けてきた。

こういう時にはできるだけ落ち着いた対応が必要だ。

俺は一呼吸置いてから、極力ゆっくり喋りかけようとしたが、

「あゝ！ よかったゝ！ 君たちのことを探してたんだ！ もう大丈夫だよ！ 安心してよ！」

俺より先に隼人がハイテンションで声をかけた。

残りの四人も一斉にこちらに顔を向けてきた。

「探してた？ えっ？ なんで？ 誰？」

俺たちのいきなりの登場で五人が混乱しているのが伝わってくる。

そりゃそうだよな。いきなり知らないマント姿の探索者二人と幼女が現れたら対応に困るよな。

この後どう声をかけたらいいか考えていると顔を上げた野村さんと目があつた。

「あつ、海斗先輩」

「ああ、野村さん、大丈夫だった？」

「えっ、なんで海斗先輩がここに」

「いや、海枝さんって子が教室に来て野村さんが帰ってこないっていうから探しに来たんだ」

「紀梨花が……それじゃあ本当に助けに来てくれたんですか？」

「まあ、そうなるな」

「う……うつつ。海斗先輩、怖かったです。五階層で張り切ってたたら、訳がわからないうちにいきなり飛ばされて。ここのモンス

ターに全く歯が立たなくて、煙幕使ってなんとか逃げ出して、うっ、わぁあああん〜」

野村さんが泣き出してしまったが無理もない。

さっきの言葉からだどトラップにハマってここに飛ばされたことすら把握できていないような気がする。

それにしても、レベル十にも満たないはずの彼女たちが、この階層のモンスターとやり合ってよく無事だったものだ。

煙幕を使って逃げたと言っていたが、本当に幸運だったといえるだろう。

第755話 発見（後書き）

昨日気がつきましたが、モブからジャンル別ランキングの日間表紙にランクインしていました。

— 昨日から急に読者の方も増えているようです。

ブックマークと をいただいた方ありがとうございます！

第756話 俺、隼人（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2をよろしくお願いします。

現在モブから3を頑張って書籍化作業中です。

ニコニコ静画でのコミカライズ公開まであと少しです9/21火曜
日予定です。無料登録で読めるのでよろしくお願いします。

第756話 俺、隼人

「理香子、この人たちは理香子の知り合いってことでいいんだよね」
「うん、茜もう大丈夫だよ。海斗先輩が助けに来てくれた」

「海斗先輩ってもしかしてあの超絶リア充『黒い彗星』！ 本当に知り合いだったんだ」

「だから、前からそう言ってたじゃない」

「みんな『黒い彗星』だよ。これで帰れる。やった〜」

「あの〜理香子ちゃん、俺もいるんだけど」

「『黒い彗星』って本当に装備黒いんですね。黒っていいですよ」

「ああ、どうも」

「いや、そっちの子も俺もいるんだけど」

「そっちのピンクの女の子は、もしかして噂のサーバントですか？」

「ああ、まあ、そうだけど」

「きゃ〜やっぱり。かわいい〜」

「いやだから俺も……」

隼人がどうにかして存在をアピールしようとしているが、ことごとくスルーされている。

それに野村さんのパーティメンバーを見ると四人とも野村さんと近い年齢に見える。さっきまで、完全に落ちきっていたはずだが、女子高生中心だからなのか、特有のノリで既に盛り上がっている。

それにしてもこの子たちにまで『黒い彗星』として認識されているのか。

いったいどこの誰が噂を拡散しているんだ。もう沈静化することはほぼ諦めたけど、以前より拡がってるんじゃないのか。

「あ、隼人先輩、なんでここにいるんですか？」

「理香子ちゃん……なんでって、そりゃあ理香子ちゃんたちを助けに来たに決まってるだろ」

「冗談です。ありがとうございます。本当にうれしいです」

「あ、そ、そう？ ははは、まあ、俺も放っておけなくて」

隼人……野村さんの反応に完全に舞い上がってるな。

「あ、すみません、そっちのマントの人も理香子の先輩ですか？

助けに来てくれたんですか？ 助かった」

「あ、うん、そう。俺、先輩」

隼人がロボットみたいな喋り方になってる。

隼人普段はあれだけ軽やかに口が回っているのに、女の子を前にして舌が全く機能していない。

「隼人さんっていうんですか？」

「はい、俺、隼人、です」

それから少し落ち着いてから他のメンバーの人にも事情を確認してみた。

やはり、五階層には、まだ数回潜っただけで、昨日調子が良かったのでいつもよりも奥まで探索エリアを伸ばしたらしい。

そこであの隠しダンジョンへとたどり着いて気がついたらこのエリアへと来ていたそうなので、まず間違いなくこの中の誰かがトラップにハマったのだろう。

一応トラップの件は伝えようとは思っけど、伝えるのは誰がハマったのか喧嘩にならないよう、抜け出すことができたらの方がいい気がする。

「それにしても無事でよかったよ。この階層のモンスターと戦って

よく逃げ切れたなあ」

「はい、それは、完全に運です。戦ったんですけど、全く歯が立たなくて死ぬかと思いました」

「このモンスターは俺たちでもヤバかったから」

「そうなんですか？ 海斗先輩でもヤバかったんですか？ それじやあやっぱりわたしたちじゃ絶対無理じゃないですか。逃げてずつと隠れてて正解でした」

「ああ、本当に正解だと思う。この階層のモンスターはおそらく二十階層クラスだ」

「二十階……」

俺の話を聞いて今までテンションの上がっていた女の子たちも一様に言葉を失ってしまった。

第756話 俺、隼人（後書き）

ここ数日、なぜか過去最高PV数を更新中です。
ありがとうございます。

第757話 脱出行(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚2をよろしくお願いします。
コミカライズ1話がニコニコ静画に明後日掲載予定です。
是非無料登録して読んでください。

第757話 脱出行

「二十階つてなんで……私たち五層にいたんですよ」

「まあ、普通そう思うよな。だけど本当なんだ。それに俺も残りのサーバントとははぐれて喚び出せないから、隼人と三人で結構ギリギリだ」

「そうなんですか？　じゃあこの先……」

「俺たち三人で戦うから、野村さんたちはついてくればいい。むしろ変に手を出すと危ないから」

「でも、それじゃあ」

「いや、大丈夫だ。野村さんのパーティは俺たちが無事に帰すから安心してよ」

「海斗先輩……」

ここまでできたら野村さんたちを置いていくという選択肢は最初からない。

無事にみんなで帰るためには俺たちだけで戦った方がいい。むしろ戦闘中に彼女たちにまで気を配れる自信はない。

「ねえねえ、なんか『黒い彗星』渋くない？」

「私も思った。顔は普通だけど雰囲気イケメンというか、行動と発言がイケメンすぎでしょ」

「うん超絶リア充に偽りなしね」

「こんな場面に颯爽と現れてあのセリフ。私ハートを射抜かれたかも」

「わかる〜私もキュンキュンしちゃった」

何やら野村さんのパーティメンバーが、野村さんの後ろでコソコソ

話をしている。

この感じシルとルシエを彷彿とさせるが、やはり女の子はコソコソ話が好きなんだろうか。

「それじゃあ、早速行こうか。早く帰ろう」

「はい」

時間のこともあるので俺たちは先に進むことにした。

俺と隼人を先頭にして真ん中にティターニア、少し離れて野村さんのパーティがついてきている。

「やっぱり女の子のパーティは華があるな。俺は普段男だけだからこういうのいいな」

「隼人、調子にのって気を抜くと真面目に死ぬぞ」

「そこはわかってるって。三人の中で俺が一番弱いからな。必死にくらいついてやるさ」

「それならいいけどな」

「マスター……たぶん敵……です」

ティターニアが敵モンスターの出現を知らせてきた。

「野村さんたちはここでとどまって。戦闘中は周りに注意をはらって危なくなったら逃げて欲しいんだけど、野村さんたちだけで逃げても逆に危ないから、極力俺たちのことが確認できる位置にいて欲しい」

「わかりました」

「隼人、ティターニアいこう。ティターニアも遠慮はなしだ」

「はい」

俺たち三人は野村さんたちから離れて敵モンスターの方へと向かっていく。

「今度は二体か……」

当たり前だが、この階層のモンスターが単体で出現するとは限らない。

ただ一体でも、結構キツかったのに二体か。

グチったところで状況がなにか好転するわけでもないので敵に集中して倒すしかない。

速攻で倒すのが一番効率的だ。

「ティターニア『ウインガル』を頼む」

「はい」

俺はティターニアにスキルをかけてもらってから、ナイトブリンガーの能力を発動し速攻をかける。

今度の敵は角の生えた大型のオオカミが二体だ。

第758話 ホーンウルフ（前書き）

明日ニコニコ静画にモブから始まる探索英雄譚のコミカライズ1話
が公開予定です。

無料登録で読むことができますので是非よろしくお願いします。

第758話 ホーンウルフ

角の生えたオオカミに向けて走りだすがすぐにモンスターもこちらに気がつく。

オオカミもこちらに駆けてくる。

一気に距離が詰まる。

「海斗！ 援護する。『必中投撃』」

俺の背後から二体のオオカミに向けて小さな鉄球が放たれ、顔へと命中する。

オオカミ自身のスピードも合わさりかなりの衝撃で命中し、二体の脚が止まる。

「マスター撃ちます」

ティターニアが後方からドラグナーの銃弾を放ち、右側の一体の胸部へと命中させる。
いける。

この階層でも二度目の戦闘なので、さっきの戦闘よりも確実に連携が上がっている。

ティターニアが撃ち抜いた敵を消滅させるために剣を構えて更に距離を詰めようとするが、オオカミの角が発光して身体全身に広がったのが見えた。

スキルか！

一瞬このまま踏み込んでとどめをさそうかとも考えたが、すぐに考え直して踏みとどまり後方へとステップしながらバルザードの斬撃を飛ばす。

スキルの能力がわからない以上深追いは禁物だ。
バルザードの斬撃が着弾した瞬間

『バチイ』

表面を覆っていた光が瞬いて、弾けたような音がした。

「バリアか！」

バルザードの斬撃により消滅するはずの手負のオオカミは、消えずにその場にとどまっている。

「海斗！　くるぞ！　『必中投撃』」

もう一匹のオオカミが光を纏ったままこちらに向かってきた。

隼人が釘を投げるがやはり光に弾かれてダメージを与えることはできなかつた。

オオカミが迫ってくる。

全身鎧を纏っているようなものだ。このスピードでぶつかっただけでもタダではすみそうにない。

眼前に迫るオオカミの突撃を回避してすれ違いざまに雷の魔刀で斬りつける。

刀が光に触れた瞬間弾かれるような手応えが伝わってくるが、雷を纏った刃が光のバリアを突破してオオカミにダメージを与える。

「グガアア」

手傷を負ったオオカミは怯む事なく再び俺に向かって迫ってくる。

この光のバリアはシルの光のサークルほど絶対的なものではない。近距離から強力な一撃を放てはダメージを入れることができる。

ただ、大きいくせに速い。
集中力を高め、動きを見定めオオカミの突進を再び避けるが、オオカミが急速反転し俺に体当たりをかましてきた。
イレギュラーな動きに対応しきれなかった俺は、躲しきることが出来ずに弾き飛ばされてしまった。

「ぐっぐっぐっ」

早く立たなければ追撃を受けてしまう。

「海斗！ おおおお！ 舐めるな犬野郎！ 『必中投撃』」

隼人の声と共に槍が飛んできてオオカミの右目に刺さる。

「ギヤイン」

オオカミの悲鳴が聞こえてきたと同時にオオカミを覆っていた光が弱まり消えるのが見えた。

今なら倒せる。

攻撃するべく身体を動かそうとするが、まだ飛ばされたダメージで上手く身体が動いてくれない。

仲間の危機を感じとつてもう一体のオオカミも俺に向かって動き出したのが目に入る。

第758話 ホーンウルフ（後書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1、2もよろしくお願いします。

第759話 必殺(前書き)

本日よりニコニコ静画でモブから始まる探索英雄譚のコミカライズ

1話が公開されました！

無料登録で読むことができるので是非読んでください！
シルとの出会いが描かれています。

2話からシルが活躍予定です。

第759話 必殺

『ドウン』

俺の背後からドラグナーの発砲音が聞こえてくると同時に隼人の槍でダメージを受けたオオカミの眉間に穴が空いた。

「マスター回復させます。『キュアリアル』」

ティターニアが『キュアリアル』の魔法を発動してくれる。

続け様にもう一発発砲音が聞こえて、今度はもう一体のオオカミを覆っている光の一部が弾け、オオカミは俺に向かってくるのを躊躇してとどまった。

その間に眉間に穴が空いたオオカミは消失した。

ティターニアの稼いでくれた時間と『キュアリアル』のおかげでなんとか身体は動くようになってきたので、急いでその場から離脱する。

「俺の出番だな！ だけど海斗、長くは持たないからさっさとかわつてくれよ！」 『必中投撃』」

隼人が動きの止まったオオカミに向けて小さな鉄球を連続で放つが光のバリアに阻まれてダメージがはいったようには見えない。

「くっそ〜やっぱりダメか〜。どう考えても俺の適正レベル超えてるぞ！ くそ〜海斗まだか〜。くらえ俺の必殺！ 『必中投撃』」

隼人が叫びながら玉のようなものを投げつけると、光のバリアに当

たった瞬間、オオカミの周りを煙のようなものが覆った。

「海斗、煙幕玉だ。今のうちに体勢を立て直せ」

「ああ」

煙玉では殺すことができないので必殺ではないと思うが、隼人の稼いでくれた時間ありがたい。

深く息を吸い込み乱れた呼吸を無理やり戻す。

酸素を取り込んだ身体が徐々に元の感覚を取り戻していく。『キュリアル』の効果なのか若干ではあるが身体が軽くなってきたような気がする。

俺はナイトブリンガーの効果を発動し気配を薄め、アサシンの能力を発揮し音を殺して煙幕の後方へと回り込む。

煙幕の張られているこの状況なら今の俺を認識することは難しいはずだ。

両手の武器を握り直してそのまま煙幕の中へと侵入する。

煙幕の中に入ると途端に視界が暗くなるが、中心のあたりが発光しているのはわかる。

俺たちの攻撃を阻害していたオオカミを覆っている光が、煙幕の中で目印となってくれている。

俺は気配を薄めたまま光に向かって進み、背後からバルザードの刃を突き入れた。

光を透過する時強い抵抗を感じたが、力を込め身体で押し込む。

『ボフウン』

破裂のイメージを刃にのせて角ありのオオカミを消滅させることに成功した。

戦闘の終わりと同時に『キュリアル』の効果が切れたようで、身体が軽くなるような感覚も消失したが、そこまでのダメージがあっ

たわけではないので、ほぼダメージを受ける前の状態に戻っている。徐々に煙幕が晴れ、隼人たちにも状況が把握できるようになった。

「おおつ、海斗やったな。今の感じ完全に暗殺者だな」

「まあ一応アサシンだからな。隼人助かったよ」

「ああ、この煙幕も役に立ったな。俺のスキルと相性いいだろ？」

「間違いないな。ティターニアもありがとうな」

「はい」

隼人は、自分の能力の使い方が本当に上手くなっている。

今は前衛にでもらっているがおそらく隼人が最も力を発揮するのは中衛。

隼人もそれをわかった戦い方をしている。

それにティターニアが思いの外いいタイミングで戦ってくれている。今まで他のサーバントに隠れてあまり効果的な働きはみせていなかったが、やはり戦闘能力は高い。

第759話 必殺(後書き)

筆者は1週間前までニコニコは有料だと思っていました。無料でも見れるんですね。

他の掲載漫画も載っていますが、鼻屑目に見てモブからが一番面白いです。

よろしく願います。

第760話 ホーンウルフ戦後の会話（前書き）

ニコニコ静画でモブから始まる探索英雄譚のコミカライズ1話が公開中です。無料なので是非読んでみてください。シルが舞い降ります。

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜2も是非よろしくお願いします。

第760話 ホーンウルフ戦後の会話

もう一点気がついたが、ティターニアが戦闘中は普通に喋っていた気がする。

それほど会話があった訳ではないが、明らかにいつもよりはっきりと声が聞こえた。
少しなれてきたのかもしれない。

「ふっつ、倒せてよかったけど、危なかった。咄嗟の攻撃を躲すことができなかった」

「ああ、かなりやばかったな。身体は大丈夫か？」

「ああ、ティターニアのスキルのおかげで大丈夫だ」

「ティターニアちゃん、マジでイイ。強いし回復までいけるって言うことなしたな」

「まあ、そうかもな。それより隼人もかなりレベルアップしてないか？」

「今はレベル16だ」

「やっぱりかなり上がってるな。だけどレベル以上に上手くなってないか？」

「海斗にそう言われると照れるけど嬉しいな」

隼人がいなくなったら、もっと切迫した状況に追い込まれていたかもしれない。

隼人が邪な考えからついて来てくれて本当によかった。

「海斗先輩！」

「野村さん、もう大丈夫だ。先に進もう」

「海斗先輩が強いのは知ってましたけど私たちが手も足も出なかつ

た相手に勝つなんてさすがです」

「いや結構ギリギリだったよ。攻撃も一回もろにくらったし」

「身体は大丈夫なんですか？」

「今は回復したから大丈夫だ。他のメンバーの人も先に進みましよう」

「理香子ちゃん、俺の活躍も見てくれた？」

「はい、隼人先輩も本当に強かったんですね。びっくりしました」

「そう？ それほどでもないけどね」

野村さんの口ぶり。もしかして隼人の能力を疑っていたのか？ 確かに彼女たちの前で戦うのは今回が初めてだから、隼人の能力を披露するのも初めてだけど、隼人はあんまり信用なさそうだな。

本人は満更でもなさそうというか、顔を見る限りかなりうれしそうなのでまあいいか。

「ねえ、さっきのどう思う？」

「距離があつたのもあるけど、わたしじゃ動きがよく見えなかった」

「そうよね。速すぎじゃない？ あのオオカミみたいなのと普通にやりあつてなかった？」

「というより普通に勝ってるもん」

「もしかして『黒い彗星』って強い？」

「わたしたちじゃモンスターの強さは、はっきりわからないけど、それでもあの戦闘と動き私の知り合いのブロンズランクの人よりすごいと思う」

「やっぱり！ 『黒い彗星』は少女を使って超絶リア充にのしかがったクズ。本人はたいしたことないって聞いたことがあるけど、そんなことないよね」

「まだ一度しか見てないけど、偶然であの敵は倒せないと思う」

「じゃあ『黒い彗星』の二つ名は伊達じゃないってことね」

「理香子が『黒い彗星』はすごい人だって言ってたけど本当だった

んだ」

女の子たちが集まって、またコソコソ話しこんでいる。いままでの経験から、たいていこういう時は、いい話ではないことが多いので触れないでおくのが一番だ。

俺は見て見ぬふりをして先を急ぐことにする。

「あれゝみんな、なんの話してんのかな。もしかしてさっきの戦闘のこと？ 俺の活躍みてくれた？ かなり効果的だったと思うけど」

「はい、そうですね」

「はい、すごかったと思います」

「いやゝそれほどでもないけどね」

俺が触れずにいたのに隼人がおかまいなしに切り込んでいった。

隼人の強心臓はある意味羨ましい。

ただ野村さんと一緒に女の子たちの反応が社交辞令感が強いというか、反応が薄めな気がする。

まあ隼人は嬉しそうだからいいけど。

第760話 ホーソウルフ戦後の会話（後書き）

現在モブから3の書籍化作業を行なっているので、ストックを投稿中です。

また減ってきたので調整しながら投稿していきます。
両立できるよう頑張ります。よろしくお願いします。

第761話 進んだ先（前書き）

ニコニコ静画でモブから始まる探索英雄譚のコミカライズ1話が無料公開中です。

登録して是非読んでください。来週火曜日には2話が掲載のどこでもヤングチャンピオンも出ます。

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜2もよろしくお願いします。

第761話 進んだ先

そのまま先へと進むが、野村さんのパーティメンバーも若干慣れてきたのか、俺たちと少し距離感が近づいてきた気がする。

隼人も必要以上に女の子と積極的にコミュニケーションをとっている。先の見えないこの状況でも場の空気が落ち着いてきた。

彼女たちはダンジョンで一日を過ごして見た目以上に消耗しているはずなので、隼人がそれを意識しているのかどうかは不明だが、隼人の存在は助かる。

「隼人、頼んだ！」

「まかせろ。くらえ！『必中投撃』」

モンスターへと釘が放たれ動きをとめる。

その隙を逃さずに、踏み込んでモンスターの首をバルザードの一撃で刎ねる。

「上手く倒せたな」

「ああ、今度はノーダメージだったし上出来だ」

その後二度ほど戦闘になったが、どうにか勝利することができた。

三人で戦うことにも少し慣れ、連携も向上してきたのでモンスターは手強かったが怪我を負うことなく倒すことができた。

まだ見通しはなにもたっていないが、この階層でもなんとかやれそうなのがしてきた矢先

「おい、海斗あれって……」

「ああ、間違いないな」

「やっぱり普通の階層じゃなかったのか」

俺たちの進む道は一本道で、その先には扉があった。その扉は次の階層へではなくボス部屋への扉。これで確定した。

まだこのフロアに来てから二時間は経過していない。ボス部屋への扉があるということはここが最終地点。ここは、どこかの階層ではなく独立したフロア。隠しダンジョンだ。おそらくはボス部屋のモンスターを倒さない限りこのフロアを出ることはできない。

今までの経験から言って階層の一般的なモンスターと階層主であるボス部屋のモンスターは強さで一線を画す。一線を画すというか全く強さが異なる。

「やっぱりボス部屋だよな」

「それしかないな」

「ボス部屋ってことは階層主がいるってことだよな」

「そうだな」

「海斗！ 落ち着いてる場合か！ 階層主だぞ階層主！」

「いや、焦ってるけどやるしかないだろ」

「ちよっと待ってくれ。階層主って強いんだよな」

「そうだろうな」

「ちなみにどのくらい強いんだ？」

「もしかして隼人階層主と戦ったことないのか？」

「もちろんない！」

確かに階層主が現れるのは通常十六階層からなので隼人が未経験だったとしても不思議はない。

そしてテイターニアも階層主とやったことはない。

つまりこのメンバーでボス戦の経験があるのは俺一人ということ

ことだ。

ただでさえ格上のこのフロアでボス戦。

未経験者は普段通りの力が出せない可能性もある。

しかも扉がある以上野村さんたちも一緒に入るしかない。階層主を倒した場合、即転移とかになったら、また野村さんたちと離れ離れになる可能性もあるので外で待つてもらおうというわけにはいかない。敵が一体であればまだいいが、複数出現した場合、このボス部屋のレベルを考えたら、彼女たちを護りながら戦える自信はない。

第761話 進んだ先（後書き）

先日久しぶりに日間ランキングに載ったので周りを見るとダンジョンと探索者がいっぱいになっていました。

モブからが始まった頃は周りは冒険者ばかりで探索者は少数だったのに。本作もオリジナリティを出したくて探索者にした記憶が。あんなにいっぱいいた冒険者は今どこにいったんだろう。

第762話 隼人II恐怖 煩惱(前書き)

モブから始まる探索英雄譚コミカライズ2話掲載のどこでもヤング
チャンピオンが配信中です。

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜2もよろしくお願いします。
3巻は現在制作中です。

第762話 隼人Ⅱ恐怖 煩惱

「海斗先輩、この扉って……」

「まず間違いないくボス部屋の扉だ。中に階層主がいると思う」

「これがボス部屋の扉ですか。話には聞いたことがあるんですけど」

「ここをクリアすれば、たぶんこのフロアから抜けることができると思う」

「そうなんですか？ よかった」

野村さんたちは俺の言葉を聞いて一様に喜んでるようだ。

気持ちはわかる。わかるけど、それが難しい。

「不安にさせたいわけじゃないけど、しっかりと意思統一してきたいから言っておくよ。みんなもよく聞いてくれ。俺の今までの経験から言って、おそらく階層主を倒せば戻れる。だけど階層主は普通のモンスターよりも遥かに強い。正直勝てるかどうかかわらない」
「でも『黒い彗星』さんは今までも階層主を倒してきてるんですよ」

女の子の一人が声を上げた。

「確かに倒してきてはいるけど、それは俺のサーバントがいたからなんだ。今はメインのサーバントとはぐれて喚び出すことが出来ないから、このメンバーでやるしかない」

「サーバントがいないとそんなに違いますか？ ティーターニアちゃんも十分強いように見えるんですけど」

「残念だけど、全く違うんだ。だけどこのままここにおいても飢え死にするだけだ」

「そんな……」

女の子たちの表情が一気に暗くなる。

「ボス部屋では、なにが起こるかわからないからみんな一緒に入るしかない。俺と隼人だけ戻れても意味ないから。それに扉が一度閉めたら開かなくなる可能性だってあるから」

「海斗先輩、それしかないんですよ」

「ああ、ないと思う。それと階層主との戦いの最中は全く余裕は無
いと思うから、自分たちの身は自分で守ってほしい」

俺の言葉に緊張が走ったのがわかる。

しばらく間があって野村さんが声を発する。

「みんないいよね。それしかないんだから覚悟を決めようよ」

「うん」

「そうだね」

どうやら彼女たちの覚悟も決まったようだ。

あとはやるしかない。

作戦を立てるために隼人に声をかようとすると、小さな声で隼人が話しかけてきた。

「海斗、俺も不安しかないんだけど」

「いや隼人は戦力に入ってるからしっかり戦ってくれないと困るぞ」

「だよな」。正直言うと武者震いってというか、膝が笑ってるんだよな」

女の子ばかりに気を取られていたが、隼人だってボス部屋は初めてなんだ。不安があって当たり前だ。

昔俺が一人でゴブリンに挑んだ時の心境に近いのかもしれない。

「女の子にいいところを見せるチャンスだぞ」

「だよな。ここで活躍すれば補正がかかってリアルハーレム築けるかもしれないよな」

さすがにそれはないと思うが、ここでやる気を削ぐのは得策ではないと思いがぐつと言葉を飲み込む。

「そうだな。吊り橋効果があるかもしれないしな。何しろ女の子五人もいるし、隼人の活躍次第では一人ぐらい、な！」

「そうだったな。俺はそのためにここまで来たんだ。ここでやらなきゃ俺の残り少ない高校生活に春

がこない。一度でいいから彼女とイチヤイチャしてみて。あ、やる気が出てきたかも。なんか足の震えも止まってきた！」

やはり、人間の欲望はすごい。いい方向に向けば恐怖をも凌駕するのをまざまざと見せつけられている。

第762話 隼人II恐怖 煩惱(後書き)

ニコニコ静画でモブからコミカライズ1話を無料公開中です。
よろしくお願いします。

第763話 ボス部屋の中へ（前書き）

現在3巻書籍化作業に時間を取られているので、ご容赦ください。
年内の発売を目指して頑張ります。

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜2もよろしくお願いします。

第763話 ボス部屋の中へ

「それじゃあいくぞ？」

「ああ」

「はい」

俺と隼人がボス部屋の扉に手をかける。

黒い大きな二枚扉だ。

いつものように開け方に工夫が必要かもしれないと思いながら力を込めて押し込むと、扉が徐々に動き始め人が一人通れるほどのスペースがあいた。

「開いたな。ちょっと覗いてみるか」

中には踏み込まずに扉の外側から中のフロアを覗き込む。

「マジか……」

扉の中を覗くとすぐにそこが普通ではないことがわかった。地面一面に大小の蛇が蠢いている。

階層主を確認することはできないが、足下の蛇が毒持ちだとすれば排除しなければ戦うことすらままならない。

「隼人、蛇って大丈夫か？」

「いや、大丈夫な奴っているのか？」

「そうだけど、戦ったりはできるよな」

「もちろん戦えるけど階層主ってヘビ型なのか？」

「いや、階層主はわからないけど床一面に蛇がいる」

「マジか。俺はなんとかいけるけど女の子たちは……」
「マスター、私もヘビは……あんまり」

ティーターニアもか。この感じなら虫型のようなことはなさそうだが、百パーセントの力を発揮できるかは微妙だ。

「みんな聞いてくれ。この中の床には蛇が蠢いてる。モンスターではなさそうだから自分たちで倒して場所を確保してほしい。あとは自分の身を守ることに専念して」
「……………」

野村さんたちから返事がない。

まあ、予想はできたけど、女の子たちは蛇が苦手らしい。

俺は蛇退治のための秘策をマジック腹巻きから取り出してみんなに配る。

「海斗先輩これは？」

「見ての通り殺虫剤とライターだ」

「それはわかるんですけど、これでどうしろと……」

「まあ見ててよ」

俺が殺虫剤の射出口の前にライターの火をつけてかざし、トリガーを引くと引火して炎が吹き付けられた。

「おおっ！ 海斗すごいな。火炎放射か。確かにこれならヘビを焼き払うこともできそうだ」

「殺虫剤にこんな使い方があったなんて」

確かにこんな使い方をするものではないし、製造元に知られたら怒られるかもしれないがスライム狩りで身についた知恵だ。通常の生

き物であれば間違いなく効果はある。

「念のためにもう一本ずつ渡しておくから」

「海斗、一体殺虫剤を何本持つてるんだよ」

「だいたい二十本くらいだな」

「そうか。海斗すげ〜な」

準備は整った。

殺虫剤とライターを手にまず俺と隼人が扉の隙間から中に入る。

入った瞬間ジトつとした湿気を感じるが、気にしている余裕は無いので、地面に向けてすぐに殺虫剤で火炎放射する。

あたりに肉の焼け焦げた匂いが充満するが、そのまま中へと進む。

俺たちが中に入ったのを確認して、テイターニアと野村さんたちが続く。

「うう……ほんとにヘビだらけ」

「やるしかないのよ！ ほら火を向けたら逃げていつてるわ」

「やっぱりヘビも火には弱いんだ。それにしても殺虫剤をこれだけ常備してる『黒い彗星』って何者なの!？」

第764話 階層主のおっ（前書き）

いつのまにかブックマーク20000、ポイントも80000を超えていました。

登録評価していただいた読者の方ありがとうございます。

夢の100000ptもいつか達成できる気がしてきました。
がんばります。

第764話 階層主のおっ

殺虫剤のファイアブレスを床に蠢く蛇に向けて放ち続けるが、あまりに数が多すぎる。

どう考えても全てを焼き尽くすことはできない。

早々に全ての蛇を排除することを諦め、階層主までの道を切り開く。

「テイターニア、階層主はどこだ!？」

「たぶん……あっちです」

薄暗いせいで距離が離れるとよく見えないが、炎に映し出される周囲の感じから、以前戦ったミノタウロスのいた部屋ほどの広さはないように思える。

俺はテイターニアが指し示す方へとファイアブレスを放ちながら進んでいく。

「海斗、さすがにこの数はやばいな。キリがないけどどう見てもコブラっぽいのも混じってる。確実に毒蛇がいるぞ。モンスターよりこっちに殺されそうだ」

「縁起でもないことを言うな! 急ぐぞ! 野村さんたちもいつまでももたない」

彼女たちには殺虫剤を二本ずつ渡しておいたので、上手く使えばしばらくの間は大丈夫だと思うが、それでもタイムリミットは確実に迫ってくる。

若干の焦りを感じながらも、ファイアブレスで道を切り拓きながら進む。

「マスター、モンスターです」

十メートルほど進んだところで前方に蛇とは違う相手がいることに気がついた。

「下半身が大蛇で上半身が人間。ラミア？」

「お、おい。海斗、む、胸が見えてる。あのモンスター胸が見えてる」

隼人、今はそこじゃないだろ。

たしかに前方に浮かび上がるモンスターの姿は上半身は裸の女性。だけど、相手は階層主。たしかに胸は大きいし気にはなるが、今はそこじゃない。

下半身は大蛇のそれ。そして上半身は女性のもの。俺のそれほど詳しくない知識に照らし合わせるとこのモンスターはラミアか？

ラミア。俺でも知っているメジャーな存在。

以前倒したオルトロスなどと並び神話に出てくるようなモンスター。最悪だ。ラミアの能力はよくわからないが、そんな神話級のモンスターが弱いはずがない。

オルトロスだつてシルたちがいたから倒せたんだ。

湿度の高い部屋にも関わらず、俺の背中を冷たい汗が流れる。

「海斗、お、お、おっ………ばい」

隼人には緊張感というものはないのか？ さっきから胸のことしか口をついて出てこないようだ。

「俺はじめて見た。しかも顔が洋風の超美人なんだけど」

確かにギリシャ神話に出てくるだけあって、顔は彫りが深くかなり

の美人であることは間違いないが、その容姿と相まって俺には恐怖の対象にしか映らない。

「あら、かわいい子たち。なにしにきたのかしら」

ねっとりとした声が前方から聞こえてきた。

俺の身体に緊張が走る。

ラミアがこちらに話しかけてきた。

階層主となるほどのモンスター。話ができてても全く不思議ではないが、一瞬でわかる。

こいつはやばい。

ひとこと言葉を発したただけなのに、そのねっとりとした声とは裏腹に空間が強烈なプレッシャーに支配される。

第764話 階層主のおっ(後書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜2をよろしくお願いします。

第765話 ラミアの呪縛(前書き)

モブから3の執筆のため更新遅めです。

10/19日にモブからコミカライズ2話がニコニコ静画で無料公開予定です。

よろしく願います。

第765話 ラミアの呪縛

「あつ、あの、お、お、お、おつ……い」

ラミアの声に隼人が反応したが、いったいなにを言おうとしたんだ。

「隼人！ やるぞー！」

「い、いや、でも、あの、おつ……」

「バカなこと言ってる場合か。わかっているのか？ あれはたぶんラミアだぞ。ふざけてるとマジで死ぬぞ！」

「ラミアさんのおっ……い」

「隼人！」

「マスター……さすがにおかしいです。なにかの精神干渉だと思いません」

精神干渉！？ いったいいつの間に？ だけど、ティターニアの言うようにいくら隼人でもこの状況でおっぱい連呼するのはおかしすぎる。

ふらふらと隼人がラミアに向かって進んで行こうとするのを力づくで引き止めティターニアに頼む。

「ティターニア『キュアリアル』を隼人に頼む！ 俺には『ウインガル』を」

「わかりました。『キュアリアル』マスターいきます。『ウインガル』」

『キュアリアル』が精神干渉に効果があるのか確かめたことはないが、可能性はある。隼人がダメなら俺だけで戦わなければならぬ

かもしれないのでテイターニアに『ウインガル』をかけてもらおう。
隼人をテイターニアに引き渡し、俺は両手に武器を構えて、前方の
ラミアを警戒する。

俺はその場からバルザードを振るい斬撃を飛ばす。
斬撃がラミアの胴体に命中する。

「あら、あなた動けるのね。それに無抵抗の私を攻撃するなんてひどいわね」

声の感じからみて、さほどダメージを受けてはいないだろう。

鱗に覆われていない部分もかなり防御力が高そうだ。

「テイターニア、隼人は？」

「徐々に、そちらへ向かおうとする力が弱まっています。効果が出てきているのだと思います」

どうやら隼人に『キュアリアル』が効いてきたらしい。

それなら今俺がすることは時間稼ぎ。

その場からバルザードの斬撃を連発する。

「そろそろ、いい加減にして欲しいわね。チヨロチヨロうるさいのよ。なんであなた動けるのよ！ やってしまいなさい」

ラミアの苛立った声がした瞬間、突然俺に向かって脇にいた数匹の蛇が飛びかかってきた。

「うわぁー！」

薄暗い中複数の攻撃に反応が遅れ一匹の蛇が噛み付いてきたが避け切ることができなかった。

「あ！ あれ？」

蛇の攻撃をくらい死を想起した。だが蛇は噛み付いてマントにぶら下がっているが、特に俺にはダメージがなさそうだ。

よく考えたら当たり前だ。俺はカーボンナノチューブのスーツの上にナイブリンガーを装備し、更にその上からマントを羽織っている。頭部と手袋をしていない方の手に注意を払っていれば、他の部位は蛇の牙など刺さるはずがなかった。

もちろん蛇の牙を試したことなどなかったので、平然と対応することではできなかったが、結果俺の装備は蛇を寄せ付けなかった。

これで、蛇に割っていた意識の大部分をラミアに向けることができる。

俺は手に持つ魔刀でマントにぶら下がっている蛇の首を刎ねた。

第765話 ラミアの呪縛（後書き）

先日コメントも頂きましたが、オーストラリアのワニがドローンを食べてしまう動画が流れました。見た瞬間妙に嬉しくなっていました。モブからのワニのモデルもオーストラリア産です。

実際ワニは結構リアクションバイトするのでルアーにもよく反応します。

興味のある方は北部のピラボンと呼ばれる湖に行くと数百匹のワニに囲まれることができますが、毎年何人が亡くなっています。

第766話 へびへびへび(前書き)

本日公開予定だったニコニコ静画が更新されました。
モブからコミカライズ2話をよろしくお願いします。

第766話 ヘビヘビヘビ

俺が蛇の首を刎ねると同時に複数の蛇が一斉に襲いかかってきた。俺の装備から、まず大丈夫なのは理解できたが心はやはり反応してしまう。

必死にその場から後方へと飛び退く。

数匹の蛇が今いた場所へと跳んだのが見えたが、その直後右足に拘束されるような感覚を覚える。

まさか……

咄嗟に足を動かそうとするが、完全にロックされて動かない。

足下には種類はハッキリとはわからないが、大蛇といって差し支えないサイズの蛇が巻きついていてた。

そして巻きつきながら、上へと登ってこようとしているのが見える。前方では動きの止まった俺に、先ほど跳んできた蛇がロックオンしてこちらに鎌首をもたげているのがわかった。

「クソッ！ 『ウォーターボール』」

魔氷剣を発動して氷の刃で足下に巻き付いている大蛇の胴体を切断するが、間に合わない。

前方から蛇が跳んできたのが見えた。

このタイミングでは足を抜くのはもう無理だ。

跳んできた蛇を斬るべく魔氷剣を跳ね上げるが、外れてしまった。必死に上半身を回転させてマントで防御する。

広がったマントに向かって蛇が噛み付いてきたので、マントに阻まれた蛇に向かって氷刃を振るい叩き落とす。

「あら、結構そっちの子はやるのね。でもまだまだこれからよ〜」

ラミアの音が前方から聴こえてくるが、それに呼応するように周囲から蛇がこちらに向けて集まってきているのを感じる。

足に巻きついた大蛇を振り払い、周囲に向けて殺虫剤でファイアブレスを放つ。炎で周囲が照らされるが、相当数の蛇が近づいてきているのが見える。

ファイアブレスにより、俺のすぐ近くの蛇は焼くことができたが、残念ながらそこまで射程が長くはないので、これ以上は無理だ。

モンスターではないが、毒を持ってそうな奴もいるので無視するわけにはいかないが、これではキリがない。

「海斗！ 俺にまかせろ！」

「隼人！」

後方から隼人がファイアブレスを俺の周囲に向けて放つ。

どうやらテイターニアの『キュアリアル』が効果を発揮して、精神汚染から立ち直ったらしい。

隼人のおかげで俺が動くことができる状況がつくれた。

敵は蛇ではなくラミアだ。

俺は前方へと向けて一気に加速する。

前方のラミアとの距離が縮まり、魔氷剣を突き立てようと振りかぶるが、その瞬間俺の脇腹に右側から強烈な衝撃があり左へと跳ね飛ばされてしまった。

「ガハッ」

肋骨が何本か折れた。

「グッ」

吐き出された空気を取り戻そうと、必死に肺を広げるが息がうまく吸えない。
苦しい。

「マスター！ 今助けます。『キュアリアル』」

テイターニアが俺に回復をかけてくれる。

僅かだが呼吸が楽になってきたのを感じるが、すぐには回復しない。痛みを堪えて、なんとか立ち上がり、ラミアに向け魔氷剣を構える。暗くてよく見えなかったがさっきの攻撃はラミアの尻尾か？俺が斬ろうと踏み込んだところをカウンターで弾かれた。

「怖いわね〜いきなり斬りかかってくるなんて野蛮じゃない」

第767話 ラミア戦（前書き）

HJ文庫モブから3の発売日が正式決定しました。

12月1日です！ よろしくお願ひします。

使用している端末の修理の為確定ではありませんが、11月10日
前後から更新ペースを上げて行きたいと思ひます。

第767話 ラミア戦

回復するまで下がるか。

それともこのままラミアに迫るか判断がつかない。

さっきの攻撃は薄暗さも手伝って見えなかったが、ナイトブリンガー越しでこの威力なのでラミアが強いのは間違いない。

ティターニアの『キュリアル』は回復まで時間がかかるが、この場でポーシオンを飲むには状況がまだ悪すぎる。

俺はバルザードの斬撃をラミアの方へと放ち、そのまま後方へと飛び退く。

「ぐっ……」

脇腹に痛みが走る。

「マスター、援護します」

すぐ後ろからティターニアの声とドラグナーを放つ音が聞こえてきた。

「痛いわね。この小娘が！」

地面を擦るような音と共にラミアがこちらに近づいてくるのがわかる。

二刀を構えて待ち構えるが、距離が詰まりラミアの姿がはっきりと見えるようになってきた。

ラミアの顔は人間そのもの。西洋風の美人だ。だがその目は爬虫類のそれで、ティターニアの攻撃に怒ったのか、憤怒の形相を浮かべ

ている。

「あんたも邪魔！」

今度は俺に対して威圧してきた。

ラミアに気圧されそうになるが、必死に前方の敵へと意識を集中する。

無駄と思いながらもナイトブリンガーの能力を発動させ、気配を薄める。

攻撃が来る！

ラミアの身体が動いた瞬間に俺の右横からラミアの尻尾が迫ってきた。

一度くらったので予測はできたが、俺の反応速度を超えている。

スイッチが入りアサシンの能力が発動し、迫るスピードが少し遅くなり、俺は必死でラミアの尻尾に意識を集中させながらその場にかみこむ。

幸い、俺の動きは加速して、どうにか避ける事ができたが、すぐに返しの一発が向かってくるのが見えたので、その場から後方へと転がるようにして回避する。

アサシンの能力と『ウインガル』による底上げがなければ、まず対応できないほどのスピードだ。

以前ボス戦でアサシンの能力を連発してから徐々にはあるがアサシンの能力もコントロールできるようになってきているので、このタイミングでうまく使えた。

「くそ〜！俺のファーストおっぱいはモンスターか！　おおおお
」『必中投撃』」

俺の回避直後に隼人が叫びながらナイフを二本放った。

隼人の魂の一撃は狙い通りラミアの胸へと吸い込まれた。

「痛いじゃない！ お前みたいな奴が！ 殺す！」
「ひいいい」

ラミアの胸に刺さったナイフは確かにダメージを与えたように見えるが、ラミアは健在だ。

健在というより、怒りの表情が更に進化して怪物じみてきている。

隼人はラミアのあまりの表情と威圧感に変な声をあげた。

だが、隼人の作ってくれたチャンスだ。身体はまだ痛いがラミアの方に向かって踏み出し加速する。

魔刀を振るい胴体へと斬り込むが、ラミアが腕を振るって魔刀を弾く。

俺の左腕には強烈な衝撃がはしり、危うく魔刀を落としそうになるがなんとか耐え、右手で持つバルザードでラミアの腕に斬りかかるが、狙いがバれていたのかあっさりと躲かれ、カウンターでもう一方の腕が迫ってきた。

回避は間に合わないので魔刀で受けて防ぐが、威力を止める事は出来ずに後方へと弾き飛ばされてしまった。

第768話 ラミアは怖い(前書き)

12/1発売のHJ文庫モブから始まる探索英雄譚3をよろしくお願ひします。

今回のカバーイラストは主人公ではなくあのサーバントがメインです。

ニコニコ静画で11/9からコミック最新話が公開中です。

第768話 ラミアは怖い

「うわあっ!」

弾き飛ばされた地面には複数のへびが這っており、俺の目の前には明らかに毒へびらしきのがこちらに向けて襲って来ようとしているのが見えたので、必死にその場から飛び起きて態勢を立て直す。

「なによ、その武器。ピリツとくるじゃない。鬱陶しい」

雷の魔刀がピリツと? 耐性高すぎだろ。

やはりボスだけあつて強い。

隼人と連携して隙をついたのに全く歯が立たない。

ここにはシルモルシエもないので、チートじみた逆転はない。

「隼人! 攻めるしかない。いくぞ!」

「あ、ああ。やるしかない。やるしかないな。だけどこえ〜」

確かに怖い。だがやるしかない。

俺はバルザードを振るい斬撃を放つ。

隼人も俺の攻撃に合わせるように両手に持つ釘をラミアに向けて連投するが、ラミアの外皮に弾かれダメージが入った様子はない。

俺たちの遠距離攻撃ではラミアを倒すことは難しい。

こちらのリスクも跳ね上がるが近接で倒すしかない。

折られた脇腹がまだ痛みを発しているが、再びバルザードに氷を纏わせ集中力を高める。

出し尽くしても足りないかもしれない相手だ。出し惜しみはなしだ。アサシンの能力を発動し、ラミアへと駆ける。

「チヨロチヨロネズミが！ 食べてやるわ」

こいつなら、冗談抜きで俺たちのことを食べてしまいそうだが、食べられてやるわけにはいかない。

間合いに入る寸前。左横からラミアの尻尾が動くのが見えたので必死に躲す。

アサシンの効果で遅く見えていても、死角からくるその一撃は予測していなければ躲すことが難しいほどの一撃。

だが、今は完全に予測した俺の方の反応速度が勝っている。

迫ってくる尻尾を掻い潜り、前へと踏み込み懐に入ろうとするが、ラミアが手に持つ三叉の槍のような武器で斬りかかってきた。

「マスター！」

後方からティターニアの声が聞こえ、ほぼ同時にラミアの振りかぶった腕に穴が開く。

「小娘〜！ 邪魔をするな〜！」

ラミアは傷ついた腕を、俺にではなくそのままティターニアの方へと振るう。

ラミアの振るった杖からは水の蛇が現れ、ティターニアに向かって襲いかかる。

「このくらいっ」

ティターニアがドラグナーを放ち、向かってきた水蛇を消し去る。

「生意気に歯向かうんじゃないわ」

再びテイターニアに向けて杖を振おうとしたので、魔氷剣をラミアの腕に向けて振るう。

腕にあたると同時に硬質な抵抗感があり、剣をそれ以上振ることができない。切断のイメージを魔氷剣にのせて力を込めるが、やはり振り切ることはできない。

もう一方の腕で、動きの止まった俺に向かって攻撃を仕掛けてくる。その指には刃物のように鋭利な爪がこちらに向かって伸びてきているのがはつきりと見える。

俺は目線を外すことなく、魔氷剣をラミアの腕から引いて、爪による攻撃を最小限の動きで回避する。

伸びた爪が俺の頭を貫こうと迫ってくるのを、首を傾げてスルーして更に一步踏み込み、魔氷剣を下から跳ね上げラミアの胴体を斬りつける。

握る手にガリガリという抵抗感が伝わってくるが、力を込めて振り切る。

第768話 ラミアは怖い(後書き)

お伝えした通りメインの端末が修理に旅立ちました。

修理直前に書いたストックを投稿しています。

本格投稿までしばらくお待ちください。

第769話 水蛇（前書き）

HJ文庫モブから3のカバーイラストが公開されたので下部のイラストを差し替えました。

今回のメインはルシエです。

リンク先はまだなので出来次第貼り付けます。

店頭webでルシエを見かけたらよろしくお願いします。

第769話 水蛇

「このクソガキ！ 痛いわね！」

俺の魔氷剣は間違いなく、ラミアを斬ったが、斬れたのは鱗一枚分の厚みだけ。

剣の走った後がはつきりとラミアの胴体に残ってはいるが、微かに血と思しきものが滲んでいるだけだ。

そしてティターニアと俺の攻撃にラミアがキレた。

全身をぶるつと振るわせると、その巨体に似合わない速度で猛攻を仕掛けてきた。

尻尾と両腕、そして口を使い左右、上下から俺に連撃を加えてくる。どうにかアサシンのスキルの効果で避けることはできているが、身体が軋む。

全身の筋肉と関節が悲鳴を上げている。

完全にアサシンの効果を使いすぎているが、その効果なしでは一撃たりとも避けられる気がしない。

「マスターに手を出さないで。倒れて！」

ティターニアが再びドラグナーを放ち、ラミアにダメージを与えるが止まらない。

「またお前か！ お前を先にいい！」

ラミアの振るった腕が伸び後方のティターニアを襲う。

「一応、俺もいるんでお忘れなく。いや、嘘です。やっぱり忘れて

ください。マジでバケモノこえ〜」

「誰がバケモノだ！ このゴミクズが！」

隼人がティターニアへの攻撃を防ごうと槍を振るうが、すぐに弾き飛ばされる。

「隼人！」

「くそ〜 『必中投撃』 大丈夫だ！ 品切れになるまで投げ尽くしてやる！」

隼人はすぐに起き上がり、距離を保ちながら釘やナイフを投擲している。

「マスター！ こちらは大丈夫です。敵を！」

ティターニアの声に押されるように再び集中する。

注意のそれたラミアの胴体に向けて再び魔氷剣を振るい、鱗を斬る。そのまま制限回数いっぱいまで剣を振るい一旦その場から離脱を試みるが、攻撃を耐えたラミアが俺の離脱を許すはずもなく追ってきた。

「逃がすか！ 小僧〜！」

瞬間的なスピードはこちらが上だが移動スピードはラミアの方が速く、徐々に距離を詰められてしまう。

「やらせません」

ティターニアが後方からドラグナーを放つが、ラミアはそれを避けた。

「そう何度も同じ手を通じるはずないだろうが！ 小娘〜！」

ラミアの振るった三叉槍から放たれた水蛇がティターニアを襲う。

「きゃあっ」

完全に撃ち終わりを狙われ、無防備となったティターニアは水蛇に襲われて避けることができなかった。

「ティターニア〜！」

「くっそ〜！ よくもティターニアちゃんを！ 絶対許さない。服ぐらい着ろよ、このバケモノ野郎！」

ティターニアが後方へと飛ばされてしまった。

咄嗟に腕で防御するのが見えたので致命傷ではないと思うが、すぐに起き上がってくる様子はない。

「このゴミクズが！ お前も小娘の後を追え！」

「ティターニアちゃんはまだ死んでない！ 後なんか追えるわけないだろ。おおおおおおお！ 『必中投撃乱舞』」

隼人が気合の雄叫びと共に、ラミアに向け両手から二ードルのようなものを一斉に放った。

第769話 水蛇（後書き）

まだ少し作業中なので、定期投稿は来週以降となります。
よろしくお願ひします。

無料公開中のコミック最新話がニコニコ静画7位にランクインしました。ありがとうございます。

第770話 死の予感（前書き）

下部のカバーイラストをクリックすると12/1発売のモブからの紹介ページへと飛びます。
よろしく願います。

第770話 死の予感

鋭いニードルはラミアの皮膚を貫き、中心の空洞から血が流れ落ちる。

隼人、すごいな。しかもそのニードルどこで買ったんだよ。まるで拷問器具みたいだ。

「効いた〜！ まだまだいくぞ！ 『必中投撃乱舞』」

更に隼人が追撃をかける。

「ぐううう！ もう許さない！ 私の血肉としてやる！ このゴミクズが〜！」

隼人の攻撃にラミアのターゲットが完全に隼人へと移った。

俺はナイトプリンガーの効果を発動し、気配を薄めてラミアの視界から外れるようにサイドへと移動する。

ティーターニアのことも心配だが、今はコイツを倒す事に集中するしかない。

「ひいいい。向かってきた〜！ うおおおお〜」

再び隼人が雄叫びを上げ、ラミアから背を向け全速力で逃げ始めた。

「ちょこまかと。逃げてても無駄だ！ 大人しく食べられる〜」

「無理〜！ いやだ〜！ うおおおお〜」

ラミアがティーターニアからも離れ、隼人を追っていく。

おそらく、あの叫び声はラミアの注意を引く意味もあるんだろう。俺もラミアの後方に回り込み追うが、ラミアの方が速い。隼人との距離も徐々に詰まってくる。

「ここまでか！ あとは頼んだぞ！」

隼人が不吉な声を上げ、反転してラミアの方へと向きをかえる。

「ようやく諦めたか。骨まで食ってやるから安心しろ」

「安心できるわけないだろ！ おおおおおおお。これが俺の必殺！ 『必中投撃』」

隼人がスキルの発動と同時にメインウエポンの槍を放った。

隼人の放った槍は一直線にラミアへと向かい、そしてラミアの三叉槍によってあっさり弾かれた。

「あ……」

これは隼人……死んだ。

いや死なせるわけにはいかない。

俺は槍を弾いて動きの止まったラミアの背後へと迫り魔氷剣を突き出しながらスキルを発動した。

『愚者の一撃』

俺のHPと引き換えに魔氷剣はラミアの胴体部分に突き刺さり、刺さった周囲が爆ぜた。

「ギイイイアアアアアア」

ラミアの断末魔の叫びが聞こえてくると同時に魔氷剣を引き、後方へと飛び退く。

全身が鉛のように重くなり、思ったように動けない。

急いでマジック腹巻きから低級ポーションを取り出そうとするが、俺の手はそこで止まってしまった。

「お前か〜！ 許さんぞ〜！ お前ら全員今すぐ殺す！ すり潰してひき肉にしてやる！」

いったいどんな生命力なんだ。

胴体に穴の空いた状態にもかかわらず、こちらに憤怒の形相でこちらに振り向き襲ってこようとしている。

まずい。まずい。まずい。

俺の今のHPは一桁しかない。

しかもHPが急激に減ったせいで動きが重い。

今攻撃されたら避けきれない。

つまりは、攻撃を受けてわずかに残ったHPはゼロになり、死ぬ。

やばい、このままなら確実に死んでしまう。

「海斗〜！ 逃げろ〜！」

隼人の声が聞こえてくるが、逃げれるものなら逃げてるって。

身体を動かさそうとするが、目の前に迫った死に筋肉が萎縮して上手く反応してくれない。

どうにか無理やり脚を後方へと運ぶが、目の前でラミアが三叉槍を構えようとしているのが見える。

ああ……俺本当に死んだ。

春香とキャンパスライフ楽しみたかったな……

第771話 危機一髪（前書き）

12/1発売、モブから始まる探索英雄譚3をよろしくお願いします。
予約も始まっています。

第771話 危機一髪

「海斗先輩！」

野村さんの声と共に右方向から飛んできたボウガンの矢がラミアの右目に刺さった。

「ぎゃあああああああ〜！」

ラミアが目を押さえて悶え苦しんでいる。

俺はその隙に後方へと離脱し、急いで低級ポーションを飲み干す。助かった。完全に殺されるところだったが野村さんに救われた。

「野村さん……」

苦しむラミアを追撃が襲う。

野村さんの方を見ると他の女の子たちも一斉にラミアへ向け遠距離攻撃をかけている。

「海斗先輩、私たちだって手伝います。先輩たちだけに無理ばかりさせられないです」

助かった……

ギリギリの状況で、野村さんたちに助けられるとは思っていなかったが、このレベル差で唯一とも言える弱点の目を正確に射抜くとはさすがとしか言いようがない。

「お前らか〜！ 私の目が……目が〜。お前らの目を、目をくり抜

いて食ってやる！ 絶対だ。絶対食ってやる！」

ラミアの残った目は血走り、野村さんたちを見据えている。

「野村さん！ 引くんだ！」

「あ……」

お礼の言葉よりも今はラミアをどうにかする方が先だ。

だが、野村さんたちが俺の声に反応する気配がない。

もしかしてラミアの威圧に押されて動けないのか。

俺は全速力で野村さんたちの元へと走り、向かってくるラミアに対しバルザードの斬撃を飛ばすが、ラミアの動きを止めることはできない。

「野村さん！ 引け！ 引いてくれ！ 長くはもたない！」

ラミアが三叉槍を振りかざしこちらへ向けて迫ってくる。

正直ラミアと近接で斬り結ぶのは避けたい。

いくらなんでもこのレベルの相手と正面からやり合つのは得策ではないが、ここで俺が引いてしまえば野村さんたちが確実に死ぬ。

それはダメだ。絶対にダメだ。

俺たちは野村さんたちを助けにここまで来たんだから、ここで見捨てる選択肢はない。

俺は覚悟を決め、二刀を構え、集中力を高め再び自分の中のスイッチを入れる

ラミアの三叉槍が伸びてくる。

パワータイプではない俺が正面から受け止めるのは無理なので、魔刀を向かってくる三叉槍の側面に沿わせ滑らせながら、サイドへと回避する。

すぐに横風三叉槍が迫ってくるので、必死にかいくぐり避ける。

一瞬でも集中力を切らせればやられる。

低くした姿勢から前方へと飛び出し、ラミアとの距離を詰め、三叉槍の射程を潰すが踏み込んだと同時に尻尾の攻撃が襲い掛かってくる。

どうにかやりすぎすが、すぐに返しの一撃が向かってくるので今度はジャンプして避ける。

やはり、この距離で戦うということは、ラミアの絶え間ない攻撃に晒されることを意味しており、一撃を躲すごとに体力と精神力が一気に削られる。

野村さんたちもようやく動けるようになったようで、後方から離脱し始めたが、まだ時間が必要だ。

「おおおおあああああ〜！」

ラミアの背後から隼人の雄叫びが聞こえてきた。

ラミアと距離が近すぎて姿を確認することはできないが、おそらくなにかの攻撃をしかけたのだろう。

一瞬ラミアの動きが止まった。

第772話 心の声（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3の発売まであと1週間となりました。
よろしくお願ひします。

第772話 心の声

「理香子ちゃん、逃げるんだ！ 今しかない！ 俺！ 今なら吊り橋効果でいける！」

聞こえてくる隼人の声がおかしい。

「おおおお〜こえ〜。今が俺の見せ場だ！ これで女の子たちからも！ 来い！ 俺の春！」

どうやら、この差し迫った状況に振り切れて心の声が口を突いて漏れ出してきたようだ。

「へび女こえ〜。俺は人間がいい。人間のおっぱいが〜！！」

隼人の魂の叫びが聞こえてくるが、この場でそれはまずい。完全に俺の後ろの女の子たちにも聞こえているはずだ。いずれにしても隼人の決死の攻撃で俺への攻撃が一時的に止んでいく。

俺は隙をみて氷剣と魔刀を交互に振るいラミアに斬りつける。強固な鱗を完全に突破することはできないが、お構いなし攻撃を続ける。右目を潰された影響で見えないのか、明らかに両サイドからの攻撃が有効になっている。

既に野村さんたちも移動を済ませたのが見えたので一旦距離をとり斬撃を飛ばす。

だが単発の斬撃ではラミアにダメージを与えるための火力が足りない。

残る目を狙う手もあるが、俺の攻撃の精度では難しい。

やはり俺がラミアにダメージを与えるためには『患者の一撃』しかない。
だが、さっき止め損なって危機に陥ったが、近距離からの一撃はリスクが高すぎる。
今度は野村さんの援護も期待できない。
今俺にできること。

俺は攻撃しながらティーターニアの方へと向かう。

「ティーターニア！ しっかりしろ！」

声をかけるが反応がない。完全に意識を失っているようだ。
起こしてポーシヨンを飲ませてやりたいところだが、今は余裕がない。

俺は床に転がっているドラグナーを拾い、ティーターニアから離れる。
狙いをラミアに定めてドラグナーの一撃を放つ。

『患者の一撃』

いつもよりも激しく発光したドラグナーから放たれた蒼い弾丸がラミアの胸部を貫く。

「ぐっふっ ああああああゝ」

やったか？

いや、胸と腹に穴が空いてなお動いている。
モンスターだからなのかラミアだからなのか、生命力が強すぎる。
これでヴァンパイアみたいに復活とかされたらもうお手上げだぞ。
いや、まさか。
それはないな。

俺はフラつきながら、即座にマジック腹巻きから二本目の低級ポ-

シヨンを取り出し飲み干す。

「ここだ！　ここしかない！　俺の勇姿を女の子に見せるチャンスだ！　『必中投撃』」

隼人の放った槍が無防備となったラミアの頭部へと飛んでいき残った右目へと刺さった。

「あ”あ”あ”あ”　ああああ～許さん。許さんぞ～」

ラミアが怨嗟の声をあげるが、隼人がやってくれた。

これでラミアの両目は完全に潰されたので、圧倒的にこちらが有利となった。

それに腹と胸に穴が空いているんだ。ダメージもかなりあるはずだ。このまま畳み込めばいける。

「海斗！　あとはまかせた！　俺はもう何も無い。打ち止めだ！　投げるものが無くなった」

バカ！　声を出すな。武器がないなんて言ったらラミアの標的になるぞ。

第772話 心の声（後書き）

今気がつきましたがニコニコ静画でコミック最新話が公開されてい
ました。

今回の更新でわかりましたが更新毎に前話が消えていくようなので
興味のある方はお早めに。
よろしく願います。

第773話 リミアの終わり（前書き）

12/1 HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3は来週水曜日発売です！ 店舗によっては火曜日発売です。
是非書店の新刊コーナーでお願いします。

第773話 ラミアの終わり

予想通り、ラミアは隼人の方へと向かい三叉槍を振り回す。

「ぎゃあああ〜。なんで俺の方へ来るんだよ。来るな〜」

……それだけ騒いでたら普通に来るだろ。

俺も三発目を放つために狙いを定めようとするが、なんと隼人を追っているラミアの背中が割れた。

背中の外皮が一気に割れてズルツと剥けた。

嘘だろ……

ラミアが脱皮した。脱皮した下からは傷ひとつない身体が現れ、俺があけた穴が閉じていた。

脱皮による再生。

このレベルの敵が再生したらダメだろ。完全に反則だ。

ただよく見ると完全には再生していない。

槍と矢が突き刺さった目はそのままだ。

ラミアはそのまま隼人のことを追いかけている。

こいつが爬虫類の性質を持っているとしても、そんなに短時間で脱皮を繰り返すことができるとは思えない。

ここしかない。

隼人が囷を引き受けてくれている今しかない。

「海斗〜！ 助けてくれ〜！ 俺食われる。食われちゃう〜！」

すまない隼人、もう少しだけラミアを引きつけておいてくれ。

ラミアの怒声が聞こえてくる。

俺を絶望感が襲ってくる。

背中に大穴を開けて胴体を切断しても倒れないのか？

ラミアがこちらに振り向こうとするのが見えたがもう剣を構える力も残ってはいない。

終わった……

絶望的な思いでラミアの動きを見ることしかできなかったが、振り向いたラミアの上半身がズレて地面へと落ちた。

「こんなやつらに〜！」

ラミアの下半身はそのまま消滅してしまったが上半身は腕の力だけでこちらに向かってこようとしている。

「マスターに近づくことは許しません！」

ラミアの頭部をティーターニアの持つ雷の魔刀が貫く。

「ティーターニア！」

「私たちだって！」

野村さんたちもラミアに向かって総攻撃を開始した。

「俺はもう投げるものがない！」

目を潰され、上半身だけとなったラミアにみんなの攻撃を防ぐ手段はなく、程なくしてラミアの上半身も消滅した。

第773話 ラミアの終わり（後書き）

ニコニコ静画でコミック最新話が公開されていきました。

今回の更新でわかりましたが更新毎に前話が消えていくようなので興味のある方はお早めに。

よろしく願います。

第774話 対ラミア終戦（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3が明後日12/1発売です。
早い書店では明日から売り出される店舗もあるようなので是非買っ
てください。
よろしくお願いします。

第774話 対ラミア終戦

「終わったのか？」

ラミアは消滅したが、まだ油断はできない。

バルザードを構えたまま、しばらく様子をつかっていたが、再生する様子はない。

そして部屋の奥にはゲートらしきものが見える。

どうやら本当に終わったらしい。

そしてテイターニアの身体が俺の後方で発光している。

どうやらレベルアップしたらしい。

少し休んでからと言いたいところだが、ラミアが消えてもヘビの大量は残ったままなので全く休まらない。

おそらく俺もレベルアップしたのだろう。HPが回復したようである。うにか動けるようになってきた。

ただ、アサシンの効果を連続使用して、おまけに『患者の一撃』まで連発したりバウンドの影響は残っているようで身体の筋肉が強ばり、うまく歩けない。

一応中級ポーションが一本残されているが、この場で五十万円を飲むのは抵抗感があるのでここは我慢だ。

「終わった〜！ マジで死ぬかと思った。いやほとんど死んでたな。ボス怖すぎだろ」

隼人の声がボス部屋に響き渡る。

「隼人、女の子たちを連れてこの部屋を出るぞ」

「ああ、わかってるって。こんなところ長居は無用だ。それと俺の

「槍を回収しないと」

隼人がラミアの消失した場所へと向かっていく。

「マスターお身体は大丈夫ですか？」

「ああ、ティターニアこそ大丈夫なのか？」

「はい。気を失ってしまいご迷惑をおかけしましたが、身体は大丈夫です」

「そうか、それならよかった」

「ご主人様、お支えします」

ティターニアが小さな身体で俺のことを支えてくれようとする。

平時であれば小さなティターニアに支えられるのは本意ではないが、正直今は助かる。

「あああああゝ！ これってもしかして！」

突然隼人の大きな声が響き渡る。

「どうかしたのか？」

隼人の方に目をやると隼人の両方の手に槍が握られていた。

一本は隼人の使っている槍。そしてもう一本はラミアが使っていた三叉槍だ。

「これボストロップだろ。この三叉槍ラミアが使ってたやつだろ。サイズは小さくなってる気がするけど」

「ああ、そうみたいだな」

「これ、水蛇が出てたんだから魔槍だよな」

「そうだろうな」

「すげ〜！ 本物の魔槍初めて触った」

「隼人、それは回収してとにかくゲートへ急ごう」

「ああ、そうだな。ちよつと興奮しちゃったよ。みんなそれじゃあゲートに行こう。帰れるぞ」

「本当に帰れるんですね」

「嘘みたい」

「もうダメだと思った」

野村さんたちが口ぐちに安堵の声をあげるが、まだ安心はできない。ゲートを潜ったらまたとんでもないところに飛ばされる可能性もゼロではない。

俺たちは、部屋の奥のゲートに向かい隼人から順番に潜ることにした。

「それじゃあ俺から行くな。みんな待つてるぜ」

隼人がゲートへと消えて行く。

他のメンバーも順番にゲートを潜り、最後に俺とティターニアがゲートを潜った。

ゲートを潜った先には、隼人たちが待つてくれていたが、着いた場所は当然ダンジョンだ。

「ここって何階層だ？」

「見た感じだけだと判断がつかないな」

なんとなくだが見慣れたダンジョンな気もする。

「シルたちを喚べるか試してみるよ。頼む、来てくれ。シルフィー
召喚」

俺は祈るような気持ちでシルを召喚してみた。

第775話 再会（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3がついに明日12/1発売です。ルシエの表紙が目印です！

早い書店では今日から売り出される店舗もあるようなので新刊コーナーでは是非買ってください。

よろしく願います。皆さんに買ってもらえると4巻が出ます。

第775話 再会

召喚のエフェクトと共にシルが目の前に現れた。

「ご主人様〜！ 急にいなくなってしまったので心配しました。シルは、シルフィーは……ううっ」

シルが現れると同時に俺に抱きついて泣き出してしまった。心配をかけたが、再びあえてよかった。

「シル、ついでにルシエも喚んでみるな」

「はい、ルシエも心配して、取り乱してましたから」

ルシエが取り乱す？ そんなことあるのか？

「それじゃあ、喚んでみるな。ルシエリア召喚！」

今度も召喚と共にエフェクトが発生してルシエが現れた。

ルシエと目が合い一瞬表情が崩れたように見えたが、次の瞬間俺に向かってきて飛び上がって俺のほっぺたを叩いてきた。

『バチ〜ン』

な、なぜ……

「おい海斗、勝手にいなくなるとはどういうことだ！ どこまで心配かければいいんだ！ 全然帰ってこないから探し回ったんだぞ！ わたしをなめてるのか！」

ああ……こんなでも心配してくれてたんだな。

ああ、戻ってこれてよかった。

いや、ちよつと待て。

たしか俺と隼人が隠しダンジョンから飛ばされたのってルシエがトランプにハマったからじゃなかったか？

俺が悪いんじゃないかって全部ルシエが悪いんじゃない……

「ご主人様、無事野村様たちを見つけることができたのですね」

「ああ、転移先にいたからなんとか助けられることができたよ」

「ふ、ふん。わたしのおかげだな。わたしには全部わかってたんだ。あの先にいるってこともな」

ルシエ、絶対嘘だな。そんなことはあり得ない。あるはずがない。

全部わかってたなら心配するはずもないし探し回るはずもない。

だが、転移していなければ野村さんたちを見つけることは叶わなかったのも事実。

今回は大目に見てやろう。

「それよりもティターニア、ご主人様はどうかされたのですか？

ずっと支えているようですが」

「はい、シル姉様。転移先でボス部屋があつて戦闘になりました」

「え！？ ボス部屋？ 大丈夫だったのですか？」

「はいマスターの奮闘もあり、どうにか切り抜けることができました」

「ティターニアちゃん俺の活躍も忘れてもらっちゃ困るぜ」

「はい、隼人様の活躍もすごかったです」

「……隼人様、くっっ」

隼人が感激したような表情で止まってしまったので、放っておいて

話を進める。

「ボス部屋ということは階層主を倒したということでしょうか？」
「ああ、倒した。だけど通常の階層からは外れていた気がするから正確には階層主っていうのとは違つかもしれない。だけどラミアは強敵だったな」

「ラミアと戦ったのですか？」

「ああ、ボス部屋にいたのがラミアだったんだ」

「ラミアを倒すとは、ご主人様さすがです」

「そうかな。頑張ったのは間違いないけど」

「ラミアは神にも連なる者です。それを倒すとは、そう簡単にできるものではありません」

「え？ 神にも連なるってあのヘビの化け物が？ 嘘だろ？」

「嘘ではありません。あれは闇堕ちしてモンスター化したのです」

「なんだよそれ。闇堕ち？ 怖いな」

闇堕ちなんかあるのか。神に連なるやつが闇落ちしたらああなるのか。怖すぎるな。

それにしても今考えてもよく勝てたものだ。運が良かったとしか思えない。

第776話 レベルアップとドロップ（前書き）

本日ついにHJ文庫モブから始まる探索英雄譚3が発売となりました。

Webショップは既に解禁されています。

是非書店新刊コーナーで買ってください。よろしくお願いします。

第776話 レベルアップとドロップ

ステータスを確認してみると俺も24へとレベルアップを果たしていた。

レベル22から23までのスパンを考えると24に上がったこのタイミングはラミアとの戦闘によるところが大きい。

テイターニアはいたが、シルヤルシエに頼らずボス格のラミアを倒したことが大きかったのだろう。

今回ステータスが軒並み5上がっている。

俺の中ではほぼ上限に近い上がり方をしているので、今回のラミア戦で主力を務めたことがかなり影響しているのだろう。

いずれにしてもBPが95まで上がっている。うまくいけば次のレベルアップでBP100に届くかもしれない。

BP100はシルバーランクに相当する。

シルバーランクといえばもう中堅を超え上位陣に近いところに位置する探索者というイメージだ。

ずっとウッドランクだった俺がシルバーランクに手が届く位置までたどり着いたことに感動を覚える。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 23 24

HP 89 94

MP 59 64

BP 90 95

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）
鬼殺し
神の祝福
ウォーターボール
苦痛耐性（弱）
愚者の一撃

今回新しいスキルを覚えることはなかったが文句なしのレベルアップだ。

テイターニアのステータスも確認しておく。

種別 フェアリークイーン
NAME テイターニア
Lv 1 2
HP 65 74
MP 73 83
BP 66 77
スキル ウィンガル
キュアリアル
ユグドラシル
フェアリーダンス NEW

さすがはフェアリークイーン。一つレベルアップするだけで俺とは比べ物にならないぐらい数値が跳ね上がっている。しかも新しいスキルが発現にしている。

フェアリーダンス …… 戦闘中使用するとランダムで妖精王の能力を借りることができる。

ダンスというくらいだからなんとなく幻惑系のスキルかと思ったが

どうも違うようだ。

ただ妖精王の力と言われてもよくわからない上にランダムって。完全に使ってみないとわからないが妖精王っていうくらいだからたぶんすごいんだろう。

あとはドロップアイテムの扱いか。

ラミアの三叉槍。

これはやっぱりあれだな。

「あのーみんなちょっといいかな。この三叉槍なんだけど、隼人に使ってもらうのが一番いいと思うんだけど、野村さんたちは大丈夫かな」

「私たちは助けてもらった方なので、なにも言うことはないです。

先輩たちの好きなようにしてください」

「そうです。私たちはむしろ払わないといけない方ですから」

「え！？ マジで！？ 本当にいいのか？ さすがにこの槍の半額とかは払えないぞ」

「そんなのいらなくて。今回隼人がいなかったら無理だったし、魔槍ほしって言ってただろ？ ちょっとイメージとは違うかもしれないけど、れいけいどれつきとした魔槍だぞ。しかもどうやるのかわからないけど水蛇も出せるかもしれないんだ。言うことなしだろ」

「そりゃもちろんだ。おおおお俺が魔槍持ち。しかもドロップで！ レベルアップもしたし最高だな。もちろん野村さんたちを助けることができたのが一番だけだな」

隼人のいう通りだ。今回野村さんたちを救うことができてよかった。みんなで無事帰ることができてよかった。

第776話 レベルアップとドロップ（後書き）

book Walkerさんは特典付きで既にダウンロードが開始
されています。
よろしく願います。

3巻発売記念SS

殺虫剤とスライム(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3が本日発売になりました。
是非書店の新刊コーナー、webショップで買ってください。
よろしく願います。

ウッドランクの探索者となってから既に三ヶ月が経過した。

一日も休むことなく毎日ダンジョンに潜っているが、俺のレベルは1のままだ。

この調子で本当にレベルアップするのか正直不安になってきた。

探索者になるために既に十万円を支払ったので、手持ちのお金はほとんどない。

スライムの魔核は一個が五百円程度なので全くお金が貯まることはない。

探索者になれば、どんどんレベルアップしてばんばんお金を稼げると思っていたが甘かった。

一番の誤算はスライムの出現率の低さと倒す難易度の高さだ。

ダンジョンで一番の雑魚モンスターであるスライム。

俺はゲームのように歩きたびに出現して、あっさり一撃で倒せる。

そんなイメージを持っていたが、実際に探索者になってみて現実は全く違った。

一回の探索でスライムが出現する回数は限られており、一度も現れないことすらあった。

そして現れたスライムも簡単に倒すことはできなかった。

木刀を使い必死で何度も斬りつけてようやく倒せる。

一体倒すとそれだけで体力が大幅に目減りしてしまうので、わずか五百円に過ぎないスライムの魔核すらまともに手にすることはかなわない。

「今度こそ！」

さすがに木刀によるスライム狩りに限界を感じた俺は数日前から木

刀以外の術を模索している。

「昨日の塩は結構イケると思ったんだけどな」

お金のない俺に試すことができる手段は限られている。基本的に家にあるものを拝借して使うしかない。

木刀で苦戦しているの、これがモップや木製のバットになったところで大差はないだろう。打撃以外に活路を見出すしかないと結論づけた俺は、昨日家にあった食塩一キログラムを持ち出してスライムと対峙した。

スライムは見るからに水分でできている。であればナメクジのように塩を振りかければ効果があるのではと考えた。

結論からいうと効果はあった。ただ、ナメクジと違いそれなりの体積があるスライムが縮むには、一キログラムの塩でも十分ではなかった。

一キログラムの塩を振りかけると時間をかけて半分ほどに萎んだので、たしかに楽に倒せるようになった。

ただ五百円の魔核を得るために一キログラム二百円の塩を使い切ることは効率が悪過ぎた。

今日は既に食器用洗剤を試してみたが、目に見えた効果を得ることはできなかった。

あと試せるのはリユックに入っている殺虫剤だけだ。

自分で用意しておいてあれだが、あまり期待はしていない。あのゴキブリを瞬殺できるほどの威力があるので可能性はあるかもしれないが、虫とモンスターであるスライムが同じかといえば明確に違う。

「見つけた」

運良く今日二体目のスライムを見つけることに成功した。

右手に木刀を構え、左手に強力殺虫剤を携えスライムへと走る。

「くらえ！」

左手の殺虫剤を突き出してスライムに向けて噴射する。
勢いよく缶から殺虫剤がスライムに向けて吹き付けられる。

「やっぱりダメか……」

効かない気がしながらも一応殺虫剤を吹きつけてみるが、特に変化がないので諦めかけるが、その時スライムがスプレーを嫌がるようにして後方へと逃げるような動きを見せた。

これは……完全に嫌がってる！

「逃がすか！」

俺は逃げようとするスライムに向けて更に殺虫剤を浴びせかける。

『グチュ、グニユ、ボヨヨーン』

突然スライムがギャグのような音をたててその場から消え去った。

「なんだったんだ、今の音は。だけど効いたよな。殺虫剤が効いた。ははっ、スライムの弱点は殺虫剤だったのか。うそみたいだ」

今まで、倒すのにあれほど苦労したスライムが殺虫剤を吹きかけるだけで、あっさりと消滅してしまった。スライムに殺虫剤が効くなんて聞いたこともないので、今まで誰も試したことがなかったのかもしれない。

だけど、これで俺はスライムへの切り札を手に入れた。

これからは、スライム狩りがもつとスムーズにいくはずだ。

明日から、これまで以上にスライム狩りを頑張ろうと思う。

3巻発売記念SS

殺虫剤とスライム（後書き）

今回のSSは書籍のおまけに以前書いてストックしていたものですが、今回発売記念に投稿します。
よろしくお願いします。

第777話 吊り橋効果？（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3が発売中です。

この数日の売り上げで4巻が出るか決まるかもしれません。

まだの方は是非1巻から買ってください。

よろしく願います。

第777話 吊り橋効果？

結局俺たちが戻ってきたのは五階層だった。

どいう理屈なのかわからないがゲートは一方通行だったようで、あの部屋には行き来できないようどこちら側のゲートは見当たらない。

ベルリアも召喚して念のために『ダークキュア』を使ってもらったので脇腹の痛みはなくなった。

みんなボス戦で消耗していたので、引き上げる前にその場でしばらく休憩を取ることにした。

「海斗先輩本当にありがとうございました。私たちだけじゃ絶対に戻ってこれませんでした」

「無事に戻ってこれてよかったよ。正直俺もみんながいなかったら最後ヤバかったよ」

「理香子ちゃん、俺のことも忘れてない？」

「隼人先輩、もちろん忘れてないですよ。本当にありがとうございました。本当にありがとうございました」

「勇姿……。そ、それほどでもないけど」

たしかに隼人がいなかったら帰ってこれなかったかもしれない。

「はい、海斗さんと隼人さんのおかげです。助けていただいたいて本当にありがとうございます」

「五階層からあそこじゃなく。イレギュラーというか反則だよな。

まあ助かってよかったよ」

「今回、俺の強い希望で助けに来ることになったんだけど、無理してきた甲斐があったよ。こんなかわいい女の子たちを助けることが

できて俺は本望だ」

助かって緊張も取れてきたのか隼人の口もいつも以上に軽やかだ。

「それにしても、おふたり共すごかったですね。あのラミアに一步も引かないなんて」

「勝てたのはほとんど運だよ」

「いや、あんなの見かけ倒しだったな。槍の錆にしてやったよ」

隼人、ラミアに追われて全力で逃げてなかったか？ それに精神攻撃でヤバいことになってたと思うけど。

たしかに隼人の槍がラミアの目を貫いたので槍の錆の部分は間違いない。

その後も女の子たちから目一杯お礼をいわれた。隼人の口も絶好調で、その場で何人かと連絡先まで交換をしていた。

なぜか最後まで俺が連絡先を交換することはなかった。やはり自分から積極的にいかないダメなのか。

下心があるわけではないけど、なぜ隼人だけ。

やっぱり口か。口が大事なのか。今回の件は俺も頑張ったと思うんだけど。

俺が軽くシヨックを受けていると野村さんが、

「海斗先輩には葛城先輩がいるじゃないですか。下手に交換しない方がいいと思いますよ」

「あ、ああ。そうだね」

野村さんのひと言で目が覚めた。

たしかに俺は春香一筋だ。

探索者とはいえ女の子と連絡先を交換して誤解とかされたら大変だ。K-12のメンバーとは仲良くやっているようなので、交換しても

大丈夫だとは思いつけど余計な誤解を招くような事はしない方がいい。とはいえ誰も俺の連絡先を聞いてきたわけではないので、杞憂に過ぎない。

休憩を終えた俺たちはシルたちに護られて無事に地上へと戻ることができた。

「海斗！ ついに俺の時代がきたぞ！ 二人だぞ。女の子二人と連絡先を交換したんだ。俺にも春が！ 春がきた〜。俺は絶対このチヤンスを逃さない！ 見てくれ！」

「ああ、がんばってな」

世の中には吊り橋効果っていうのがあるらしい。

吊り橋効果っていうのは、日常に戻れば大半はブーストが失われると聞いたことがある。

今回のことがこの吊り橋効果によるものなのかは、俺にはわからないけど隼人が嬉しそうにしているのを見ると水をさすべきではないのはわかる。

がんばれ隼人。

第777話 吊り橋効果？（後書き）

TSUTAYAデイリーランキングで10位にランクインしました！
1、2巻にくらべて売れ行きが厳しい気がして落ち込んでいた
が、TSUTAYAさんでは頑張ってくれているようです。
まだの方は是非買ってください。よろしく願います。

第778話 胸には夢が詰まってる(前書き)

T S U T A Y A デイリーランキングで10位にランクインしました。
買ってくれた方がとうございます。

まだの方は是非週末のお供にモブから始まる探索英雄譚3を買って
ください。

よろしく願います。

第778話 胸には夢が詰まってる

「海斗聞いてくれよ」

「おお、どうした？」

「実は早速昨日、連絡先聞いた茜ちゃんと恵ちゃんにメールしたんだ。そしたらどうなったと思う？」

「どうなったんだ？」

「それが、すぐに返事が返ってきたんだ。それも見てくれよ。お礼もあわせてこんな長文で！ しかも二人共！ 俺こんな長文で女の子から返信もらったの初めてだ」

「そうか……」

昨日連絡を入れれば普通の人なら、お礼の返信をするくらいは普通な気もするけど、ずっと花園さんのメールは本当にひと言メールだったからな。

隼人の気持ちもわからなくはない。

「しかも、そのあと何度かやり取りしたんだけど、ちゃんと返ってきたんだ。すごくないか？」

「ああ、そうだな」

「隼人も海斗も昨日は大変だったみたいだな。俺もいければよかったんだけどすまん。悠美がどうしても行きたいところがあるって言うから」

「真司、前澤さんどこに行ったんだ？」

「最近できた雑貨屋に行ってきたんだ。悠美結構可愛いのが好きだからな」

「デートか。いいな。俺も今度誘ってみようかな。そうしようかな」

「隼人、誘ってみるのはいいけどどっちを誘うんだ？」

「それは、もちろん……二人共はまずいか？」

まさかの二人共誘う気だったのか。隼人いくらなんでもそれは節操がなさすぎる。

「それは良くないだろ」

「それじゃあ、順番に……」

「二人同じパーティーだぞ。絶対話が回るぞ」

「そ、そうか。うん、どうしたらいい。どうしたらいいと思う？」

「隼人、もう少しやり取りして気があつた子を誘ったらどうだ。その場合はもう一人の子は諦めろよ」

「真司。そんな簡単に言うなよ。これは俺にとって初めての春なんだ。真司や海斗にはわからないだろうな。苦節十七年俺の人生がようやく報われようとしてるんだ。そう簡単に決めれるわけないだろ。ほら見るよ二人共こんな長文で！ どっちもいい子なんだよ」

隼人の気持ちはよくわかる。世間一般では良くない考えなのもわかるが、今まで女の子に相手にしてもらえなかった隼人の気持ちは痛いほどわかる。

吊り橋効果のブーストがある今こそ動く時なのも理解できる。メールの長文だけでこれほどまでに喜んでる隼人には上手くいってほしい。

隼人は見た目は悪くないと思う。茶髪だし、口も回るしどちらかというと陽キャ寄りだ。変な話俺たち三人の中では一番女の子受けしそうな気もするが実際には一番女の子と縁がない。先に同じパーティーの真司に彼女が出来たのも、思うところはあつただろう。しかも真司は結構惚気るしな……

「隼人、先輩としてアドバイスだ。彼女がいるとな毎日が楽しい。」

こんなに人生つて明るいものだったんだって充実してくるんだ。た
あでもない会話が高校生活を彩ってくれる。だからこそ本命はひと
りに絞れ。隼人が二人同時に上手くやれるイメージが全く湧かない」
「真司、さすがに彼女のいるやつと言うことは重みがあるな。く〜
っ、わかった。ひとりに絞る。茜ちゃんにする」

「隼人、どうして茜ちゃんなんだ？」

「それはもちろん胸だ」

「胸？」

「そう。胸。俺は人間の胸がいいんだ。ラミアの胸はもう十分に見
たから今度こそ人間の胸だ。茜ちゃんは胸が大きいんだ。昨日のメ
ンバーの中でもダントツだった」

「そうなんだ……」

まあ、胸も選ぶ要因のひとつかもしれないが、隼人らしいといえば
隼人らしい。ラミアに精神攻撃くらって胸に異常な反応を見せてた
しな。

まあ頑張れ隼人。なんにもできないけど陰から応援はしてるから。

第779話 ベルリアはアピールしてくる（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3が絶賛発売中です。

TSUTAYAデイリーランキング10位にランクインです。

そしてなぜか前作モブから2が本日のTSUTAYA時間別文庫ランキングで1位を獲得しました！！

一瞬でも1位は嬉しい！！ 多分初めてかもしれませんが！

勝ってくださった方ありがとうございます。

第779話 ベルリアはアピールしてくる

週末になりパーティで十八階層に潜っているが、今週は色々濃かったので随分久しぶりな感じがしてしまふ。

ベルリアにかけてもらった『ダークキュア』と追加で飲んだポーションのおかげで動けなくなるような筋肉痛は避けることができたが、数日が経過したというのにまだ身体の芯に鉛が入ったような、なんとも言えない気だるさがある。

ステータス上は完全に回復しているので、スキルを連発したことによるダメージはステータスに現れないところにも影響を残しているらしい。

「海斗、なんか調子悪そうね」

「うーん、まあ病気とかじゃないから大丈夫だと思う」

このメンバーで五階層を回ることはないとは思うが、念のために先日 の出来事を情報共有しておく。

「それってこの階層よりも下ってことなのですか？」

「結局何階層だったのかはわからないけど、あの敵の感じはそうだと思う」

「それってほとんど詰んでるってことじゃない」

「運が良かったとしか言えないな。ティターニアと隼人が頑張ってくれたから運良くどうにかなったけど、正直シルとルシェ抜きは厳しかったよ」

「マイロード、横から失礼します。そのようなモンスター私がいれば敵ではありません。私一人で軽く倒せたと思います」

「ああ、そうかもな」

おそらく、ラミアはベルリア一人で倒せる相手ではなかったと思うが、自分の名前がでなかったから、必死にアピールしてきたのだろう。

ある意味健気と言えなくもないが、ベルリアらしくて笑ってしまいそうになる。

転移先のダンジョンのことを話しながら、出現したモンスターを倒し進んでいく。

戦闘にはいると身体に痛みはないが、反応速度が鈍くなっているのと、少し力が入りにくい気もする。

不調をおふだと聖水を多用することでカバーしながら探索が続けるが、モンスターを倒しながら進んでいくと、ダンジョンの真ん中で泣き声が聞こえてきた。

そのまま進んでいくと、老婆と思しき人がダンジョンの真ん中でうずくまって泣いているのが見えた。

あやし過ぎる。

「みんな、あれどう思う？」

「どうもこうもないでしょ。ダンジョンの真ん中にお年寄り一人で迷子ってありえないでしょ」

「そうだよな。あれもバンシーなのかな」

「海斗さん、それ以外になにかあるのですか？」

「いや、この前は子供だったのに、今回は年寄りだから」

「バンシーにもバリエーションがあるのかもしれないのです」

「まあ、私にまかせてくれ。『アイアンボール』」
「グエツ」

あいりさんが、怪しさ全開の老婆に容赦なくノーモーションで鉄球を叩き込むと、腹に鉄球がめり込み老婆が変な声をあげた。

「まだダメか。頭を狙った方が良かったな」
「キエエエエエエエ」

あいりさんがとどめをさそうと近づいていくと、老婆が再び奇声を上げ姿を消した。

「やっぱりバンシーだったわね」

「そりゃ、そうだよな。さすがに不自然だよ」

「そんなこと言って、この前は完全に騙されかけてたじゃない」

「万一つてことがあるだろ」

「ダンジョンでは有り得ないシチュエーションだと思っけど」

「それより、消えたバンシーを探さなきゃ。テイターニアわかるか？」

俺は前回バンシーの位置を特定することができたテイターニアに声をかけるが、

「海斗、大丈夫だ。私にまかせてくれ」

あいりさんはそう言って『アイアンボール』をなにもない左前方へと放った。

第779話 ヘルリアはアピールしてくる(後書き)

コミック1巻も来年発売予定です。
お楽しみに。

第780話 K・12のメンバーはすごい(前書き)

好評発売中、モブから始まる探索英雄譚3をよろしくお願いします。

そしてモブから始まる探索英雄譚2がTSUTAYAオンラインラノベ総合ランキングで1位を獲得中です。

なんと文庫総合でも1位を獲得。

TSUTAYAオンラインのトップにモブからのカバーイラストが！！

ありがとうございます。

第780話 K・12のメンバーはすごい

「グエツ」

鉄球が空中でなにかを捉え、バンシーらしき声が聞こえてくる。

「しとめきれなかったか。私もまだまだだな」

「あいらさん、なんでわかつたんですか？」

「この前一度見たし、だいたいの気配はつかめたんだ」

「気配ですか」

俺には全くわからなかった。

サーバントたちならまだ理解できるが、普通の人が気配を察知するって、昔の武芸者みたいだ。

あいらさんが普通じゃないのか。

「キヨキヨキイキヨイ」

この声は……

奇妙な声と共に大鎌を持ったスケルトンが二体現れた。

「あいらさん！」

あの大鎌は魔鎌のはず。まともにくらつたらただでは済まない。

「マスター、援護します。『ウインガル』」

テイターニアがスキルを付与してくれたおかげで、身体が少し軽く

なる。

「カオリン、『アースウェイブ』を頼む」

「わかったのです。その場から動かないでください。『アースウェイブ』」

カオリンの放った『アースウェイブ』がスケルトンの足を止める。

「効いてる！」

「はい。もう一体もいくのです。『アースウェイブ』」

二発目の『アースウェイブ』が発動し、もう一体のスケルトンの足も止める。

「あいりさん、バンシーにとどめを頼みます」

「わかった。まかせてくれ」

「ベルリアいくぞ！」

「マイロード、ラミアなど私の敵ではありません。お役に立てることをここで証明させていただきます」

ベルリアがいつも以上に気合が入っているのか、あっさりと俺を追い越しスケルトンへと迫っていく。

俺はバルザードの斬撃を飛ばし先制するが、大鎌を振われ、威力を相殺されてしまった。

「マスター、右へ避けてください」

ティターニアの声に反応して右に避けると同時にドラグナーの弾丸がスケルトンに襲いかかる。

再び大鎌を振るい弾丸を撃ち落とそうとするが、弾丸の威力に大鎌

を持つ手が大きく弾かれた。

態勢を崩し正面がガラ空きとなったスケルトンに向かいバルザードの斬撃を飛ばし、ダメージを与える。

「私だつて。『ライトニングスピア』」

ミクがスキルを発動し、雷の槍をスケルトンの頭部へと突き立てる。あいりさんは俺たちがスケルトンを相手にしている間に一直線に駆けて行き薙刀を虚空に向けて一閃した。

『斬鉄撃』

あいりさんはそのまま残心の姿勢を続けるが、二撃目を放つことはなかった。

「手応えがあつた。見えずとも心の目で捉えれば私に斬れぬものは無い」

俺の耳には微かにあいりさんの呟いたセリフが聞こえてきた。

あいりさんカッコいい。

完全に達人のセリフだ。

俺も一度言ってみたい。「斬れぬものは無い」

先日隼人と組んでいたので落差が激しい。

最近あいりさんもおかしな言動が見られていたが、本来のあいりさんはジャパニーズクールビューティ。

久しぶりにカッコいいあいりさんを見ることができて安心した。

ミクの攻撃を頭部に受けたスケルトンもそのまま消滅した。

残る一体はベルリアが交戦しているが、足止めされた状態の大鎌ではベルリアの二刀のスピードにはついていくことはできず、一方的にベルリアの攻撃が入りダメージを積み上げていく。

「これで終わりです。『アクセルブースト』」

ベルリアがジャンプし、炎の魔刀を上段から振り下ろしスケルトンの頭蓋を割り倒すことに成功した。

「マイロード、私の活躍を見ていただけましたか？ 魔鎌などマイロードから拝領したこの魔刀の敵ではありません」

ベルリア、前回戦った時にその魔鎌も欲しいって言ってなかったか？

第780話 K・12のメンバーはすごい(後書き)

そして今気づきました。TSUTAYAオンラインの2月発売の欄にモブからコミック1巻が!!
2月発売のようです。文庫と合わせてよろしくお願いします。

第781話 ウイル・オー・ザ・ウィスプ（前書き）

週末のお供に、発売中の新刊モブから始まる探索英雄譚3をよろしくお願いします。

コミック1巻がヤングチャンピオンコミックスより2/18発売が決定しました。

小説版より面白いと評判です……アマゾン、楽天等で予約始まりました。

よろしくお願いします。

第781話 ウイル・オー・ザ・ウィスプ

バンシーたちの魔核を回収するがやはりこのメンバーは心強い。

「ずっと思ってたけどティターニア、妙に積極的になってないか？

海斗と連携が取れてる気がする」

「そうでしょうか。先日の戦いでマスターとの絆が深まったとは思いますが」

「それにしゃべり方が、変わってないか？」

「先日の戦闘で、マスターとのやり取りもかなり慣れてきたので」

「おい、海斗、まさかティターニアになにかしたんじゃないだろうな」

「ルシエ、そんなことあるわけないだろ」

「ティターニア本当か？」

「はい、マスターにはかばっていただいたり感謝しています」

「海斗がティターニアをかばう？ それは下心だな」

「ルシエ！ あるわけないだろ。ふざけるとカードに戻すぞ」

「おい、ちょっとした冗談だって。そんなに怒らなくてもいいだろ」

これは、冗談抜きではつきりと否定しなければならぬ。間違っても変な誤解を生むと俺の人生が詰んでしまう。

ただ、今日の戦いを見るとティターニアの働きがかなり良くないっているのは事実だ。

タイミングよくサポートしてくれるし、何よりも目を見てハッキリと話してくれるようになったのがよかった。

ただ唯一の問題は魔核だ。

なにもしなければ消費しないが、ティターニアが参戦してくれることで当然魔核の消費量が増えてしまった。

こればかりは仕方がないので先を急ぐことにする。
しばらく進むと、遙か前方に青白い光がいくつか浮いているのが見える。

「シル、あれは敵か？」

「気配は薄いですが、おそらく霊の一種だと思われます」

注意を払いながら徐々に距離を詰めていくが、近づいてみてもやはり青白い光がユラユラと浮いているだけだ。

「もしかしてあれって人魂か？」

「ダンジョンだしウィル・オー・ザ・ウィスプじゃない？」

「剣は効かないよな」

「魔法が聖水なら効果ありそうだけど」

「あんまり害はなさそうにも見えるけど」

ひとつの大きさはバスケットボールぐらいの大きさだが、こちらを認識していないのか特に動きが変化する様子もない。

俺たちは聖水を手にして近づいていくが、五メートルほどの距離まで来た瞬間急に人魂が旋回して集まり始めた。

俺は慌てて聖水を吹きかけようとするが、人魂は上昇してそのままひと塊りになりその大きさは数メートルにもなっている。

直感でわかる。なんかやばい。

「みんな下がれ！」

俺は急いで距離を取ろうと後退する。

人魂から俺たちに向けて青白い炎が放たれる。

「ご主人様、その炎ただの炎ではありません。負のエネルギーを感じ

ます。くらはば無傷ではすみません」

シル、心配してくれて本当に嬉しいけど、タダですまないのは見ればわかる。

飛んでくる炎が熱いのに寒気を覚える。

「凍るのです。『アイスサークル』」

カオリンがスキルを発動して人魂の集合体を氷へと閉じ込めるが、すぐに氷から蒸気が立ち上り溶けていく。

俺は、氷が溶けるタイミングを見計らい下がった位置からバルザードの斬撃を放つが、一瞬斬撃により揺らめいたもののダメージを与えることはできなかった。

第782話 次こそ（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3をよろしくお願いします。
ヤングチャンピオンコミックス モブから1が2/28発売です。
予約もできるのであわせてよろしくお願いします。

第782話 次こそ

「私にまかせろ」

あいりさんが人魂に集まりに向かって走るが、あいりさんに複数の炎が放たれる。

あいりさんが躲しながら距離を詰めようとするが、今度は人魂の一部が細かく分離してあいりさんの周囲を取り囲む。

あいりさんが浮いている人魂を撃ち落とそうと薙刀をふるうが、やはり効果は薄い。

「あいりさん！ 聖水です！」

「わかっている」

あいりさんが薙刀を聖水の霧吹きに持ち替え、周囲を取り囲む小型の人魂に向けて聖水を吹きかける。

聖水の霧を浴びた人魂のかけらは、煙をあげて蒸発するようにして消えた。

「いけたぞ」

物理攻撃は効果が薄いが、やはり聖水で倒すことができるようだ。

「マイロード私もいきます」

ベルリアもあいりさんの脇を抜け人魂の集合体へと迫るが、複数の炎がベルリアに向け一気に放たれる。

「遅いですよ。この程度問題にもなりませんね」

ベルリアが炎を避けながら正面に迫る炎を魔刀で斬った。当然のように左右にわかれた炎がベルリアの肩口を掠める。

「この私にダメージを与えるとは。やりますね」

「ベルリア！ 大丈夫かつ！」

「マイロード心配無用です。呪いがあるようですが士爵級悪魔である私にこの程度の呪いが効くはずがありません」

呪いがあるのか。

やはり、シルが言っていたようにただの炎ではなく呪いを内包した炎だったらしい。

それにしてもベルリアは以前も炎を斬ってダメージを受けていた気がする。

武器がかわっても相変わらずだ。

「あいりさんも気をつけてください！」

「ああ、大丈夫だ」

ベルリアが炎を抜け、人魂に向けて聖水を噴霧する。

聖水に触れたところから猛烈な蒸気が吹き上げているが、人魂も後方へと移動しながら炎の攻撃を再び放つ。

「このようなワンパターンの攻撃が通用すると思っているのですか？」

ベルリアは攻撃を躲し今度は炎に向け聖水を吹きかける。

ベルリアの眼前で一気に蒸気が広がり視界が塞がれる。

後方の俺からは見えるが蒸気に包まれたベルリアには見えていない。

ベルリアの頭上から分離した人魂のひとつが迫っている。

「ベルリア！」

「油断しすぎなんだよ。その程度の敵に！ もっとしっかりやれよ。吹き飛ばせ『黒翼の風』」

ルシエがスキルを発動するとベルリアの頭上に迫っていた人魂が消え去り周囲を覆っていた蒸気も一瞬にして吹き飛ばされた。

「ルシエ姫、お手間をとらせてしまい申し訳ありません。視界を塞がれたとはいえこの程度の敵に不覚をとるとは。このベルリア、一瞬にしてこのウィル……」

ベルリアの長口上の間にあいりさんが人魂へ距離を詰めて聖水を噴霧した。

連続で噴霧を繰り返すと、人魂は蒸気とともに完全にその姿を消し、跡には魔核を残した。

「あ……」

「やっぱり聖水だな」

「くっ……次こそ私が」

「ベルリア修行が足りないんじゃないのか？」

「はっ。申し訳ございません。姫の剣としてあるまじき失態。この汚名は必ず次に……」

いちいちベルリアは大袈裟だが、剣は俺に捧げたんじゃなかったけ。

第782話 次こそ（後書き）

サバイバーが123大賞の一次選考通過しました。
ありがとうございます。

第783話 厨二心と聖剣（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚3を年末年始のお供に願います。

諸作業があり、ストックが尽きました。

諸作業と並行して執筆を進めたいと考えています。気長にお待ちください。

第783話 厨二心と聖剣

あいりさんの聖水攻撃で人魂は完全に消失したので、魔核を拾って先へと進む。

ベルリアは『ダークキュア』を自分へとかけて肩に負った傷を治している。

「ベルリア、この階層の敵には物理攻撃より、聖属性系の攻撃の方が有効だと思うぞ」

「マイロード、御助言ありがとうございます。この魔刀に聖属性があれば……」

聖属性の魔刀？ そんなのあるのか？ 聖属性の刀だと聖剣になる気がする。

「ベルリアは聖属性の刀でも使えるのか？」

「も、もしかや拝領……」

「いや、見たこともないから無理だぞ」

「そうですか。もし私にいただけるのであれば、もちろん存分に使いこなしてみせます。アンデット系モンスターなど紙のように斬り伏せてみせます」

いつものベルリア盛りがあつたとしても、どうやら使うのは問題ないようだ。

聖剣を持つ悪魔か。大いに違和感があるが、ルシエもベルリアも悪魔だから悪いって感じでもないからいいのかな。

むしろ聖剣使いの悪魔なんて考えるだけで強そうだ。

「みんな聖剣とかがって見たことある？」

「ああ、あるな。ただ魔剣よりも高かったな」

「やっぱりあるんですか。しかも魔剣よりも高いんですか!？」

「おそらく属性の違いでそれほど斬れ味に違いはないと思うが、イメージの問題だろう。やはり聖剣と聖属性に憧れる者は多いからな」

「私も聖剣だけじゃなくて聖槍とかも見たことあるわよ。それなりの値段してたけど」

「槍もあるんだ。ちなみにどのくらいの値段だった？」

「魔属性の武器の倍くらいしてたと思うけど」

「倍……」

魔剣の相場は一千万からのイメージなので倍ということは二千万を超えるということか。

高い。

バルザードの刃が欠けて分かったが、おそらく聖剣も欠ける。

ある意味消耗品に二千万って、出せない。

下手をすると家を買えてしまうレベルだ。

俺もアサシンとか暗い感じがするので、クリーンなイメージの聖剣には憧れるが自分で買うことは無さそうだ。

片手に聖剣片手にバルザードを手にする自分を想像しながらダンジョンを進んでいくが、厨二心をくすぐられる。

「そう言えば言ってなかったんだけど、この前のラミア戦で俺レベルアップしたんだ。結構ステータスも上がったんだけど次のレベルアップでうまくいけばシルバーランクに上がれるかも」

「海斗、それは本当なのか？ 海斗の今のBPはいくつなんだ？」

「95です」

「95……私はこの前ブロンズに上がったばかり……」

「海斗すごいじゃない。シルバーって実質上位グループよ。参加できるイベントも増えるんじゃない？」

「そうかもしれない。パーティで参加できるのも増えるかもしれないから楽しみだな」

「海斗がシルバー……私はブロンズ……羨ましい」

「あいりさん、どうかしましたか？」

「い、いや、だいじょうだ。シルバーか。うんシルバーいいな。シルバーはいい」

「いや、まだブロンズですからね。次に可能性があるだけですよ」

「そうだな。まだ同じブロンズだ。うん、ブロンズだ」

二十階層付近のひとつの目安にシルバーランクがあげられるが、俺たちのパーティメンバーのBPはそこから考えると少し低めかもしれない。

やはりサーバントによるパーティの戦力補正が大きいので、俺たち自身の力もつけていきたい。

第783話 厨二心と聖剣（後書き）

ニコニコ静画でコミック最新話公開されました。

第784話 みんな揃って（前書き）

遅くなりましたが、あけましておめでとございます。

まだ作業中の為更新が遅れていますが、なんとか本日1話投稿させていただきます。

20階層目指して頑張りたいと思います。

今年もよろしく願います。

第784話 みんな揃って

「もしかして、あれって……」

「うん、間違いなさそうだ。ボス部屋だな」

昨日も結構順調にきているとは思っていたが、どうやら自分が考えていたよりもかなり先に進んでいたようで、今日の探索を終える前に眼前にはボス部屋と思しき扉が現れた。

他のメンバーは前回のボス戦からそれなりに間隔が空いているが、俺は先日ラミアと戦ったばかりなので感覚的には連戦と言っても過言ではない。

「海斗、どうするんだ。このまま入るのか？」

あいりさんが、俺に問いかけてくる。

あいりさんの言葉には二種類の意味が含まれている。

ひとつは言葉通り、このままボス戦へと臨む選択。

そしてもうひとつは、今日はこのまま引き返し来週以降にトライするという選択肢。

今日もスムーズに進んできたのでまだ探索を終えるには早い時間だ。ボス戦に臨む時間的余裕とリソースの余裕はある。

少しだけ引つかかるのは俺自身の問題。

ステータス上は万全だが、ラミア戦での疲労が完全には抜けていないような感覚がまだ少し残っているのと、ボス戦に短期間で続けて臨むという精神的な負荷の問題だ。

気持ちの問題といえ、ただそれだけなのだが、ボス戦では心身共に擦り減る場合が多いので臨むだけで結構なパワーを要する。

「どうした海斗？ 今日はやめておくか？」

「あ、いえ、せっかくな状態でここまでこれたんで、一応入ってみましょう。最悪撤退してもいいですし」

イレギュラーで出られなくなることはあったが基本ボス部屋からの離脱は可能となっている。

やはりここまでできてそのまま引き返すという選択肢はない。

ボスモンスターの種類はわからないが、念のためにお被いグッズも揃えて体勢を整える。

「マイロード私にも聖水をお願いします」

「ああ、これを使ってくれ」

ベルリアにも疑似聖水の入った噴霧器を渡しておく。

今更だけどよく考えたら聖剣どころじゃなく、聖水やおふだを持ったベルリアの違和感がすごいな。

聖水とかは霊的な相手には効果抜群だが、悪魔には全く効果がないようで普通に取り扱っている。

このあたりの微妙な違いは俺にはよくわからない。

悪霊という言葉があるが、文字面だけ見ると悪魔と霊が合わさったようだ。だけど幽霊と悪魔は本質的に違うものなのだろう。

そういえば幽霊になった悪魔はやっぱり悪霊というのだろうか。その場合は聖水が効くのか？

だめだ。

聖水とおふだを手にするベルリアを見てみると雑念が頭を過ぎる。今はそんなくたらないことを考えている時じゃない。集中だ。

扉の前で準備を整えて、小休憩をとる。

「わたしはボス戦は久しぶりなので、ちょっと楽しみなのです」

「ああ、ヒカリンはそうだよな」

「この前もヒカリンがいればもっと簡単に攻略できてたかもしれないわね」

「このメンバーが揃ってこそそのK-12だろう」

あいりさんもいいこと言うなあ。

カオリンの病気が治って、ようやくみんなでここに臨んでいることを思うと感慨深い。

「それじゃあ、そろそろいこうか」

俺は自分自身に気合いを入れ集中力を高める。

その場から立ち上がり、真っ黒なボス部屋の扉へと手をかける。

第784話 みんな揃って（後書き）

なんとHJ文庫モブから4巻の発売が決定しました！ 発売日はまだ未定です。

酷評をもともせず、3巻の壁を突破してここまでこれたのは買ってくれた読者の方々のおかげです。ありがとうございます！
もうすぐ作業が一段落するので、執筆が進み次第投稿を再開しようと思います。

また作業に入るタイミングで止まりますが、よろしくお願いします。

第785話 18階層主（前書き）

まだ書き溜めが十分ではありませんが、作業が一段落したので18階層編を再開したいと思います。

3日に1度程度の更新を予定しています。

また作業に入り次第、不定期となりますのでご了承ください。
よろしく願います。

第785話 18階層主

黒の扉は、それほど抵抗感なく開いた。

俺たちは慎重にボス部屋へと踏み込む。

部屋は暗くはないが、壁、床、天井の全てが扉と同じ真っ黒だ。

周囲が黒いだけで妙に圧迫感を感じてしまう。

「海斗さん、海斗さんが部屋と同化してるのです」

「たしかに。同色で保護色みたいになってるわね。黒いマスクを被れば、遠目には見えないかも」

「そんなことはどうでもいいから階層主は？」

カオリンたちの冗談は置いて今は階層主に集中だ。

「あれは海斗の知り合いか？」

「え？ あいりさんなにを……」

あいりさんの指す方を見ると、そこには漆黒の鎧を身に纏ったモンスターが立っていた。

確かに装備の色だけを見れば、俺のものに近い。類似していると言ってもいい。

ただ決定的に違うところがいくつかある。

「でかい……」

まだ階層主まで距離があるので正確な大きさははっきりとわからないが、それでもラミアよりも大きい。

ゆうに五メートルを越している。

そして、もうひとつ。

「あれは豚？」

全身黒い装備の巨人の顔は人のものとは異なり豚の顔をしている。

「もしかしてオーク？ だけどオークにしてはデカすぎる」

「顔もオークとは少し異なる気もするな」

十八階層の階層主は全身を漆黒の甲冑に身を包んだ巨大な豚だった。オークとは何度も戦ったことがあるが、それとは大きさも放つ威圧感も全く異なる。

「お前たちが侵入者か！ 我の領分に土足で上がるのだ。死ぬ覚悟はあるのだろうか。小さき下等なものどもよ」

突然巨大な豚が野太い声が部屋全体に響き渡る。

「は？ 身体がデカいだけのおっさんがなにをデカイ態度をとってるんだ。死ぬ覚悟！？ そんなものあるわけないだろ。バカじゃないのか？ しかも土足で上がる？ お前も土足だろう。玄関もないの土足もなにもない。やっぱりバカにつける薬はないな！」

「る、ルシエ！」

「小娘が！ 覚悟もなくここにきたのか。まあいい。結果は変わらない。さあ死ぬがいい」

「ああ、結果はかわらないぞ。お前が死ぬんだからな！」

「さすがはルシエ姫。あのようなデカいだけの下郎とは格が違います」

いつになく悪魔二人が、階層主を煽りに煽っている。

「ガアアアアアアアアアア〜！」

巨豚の咆哮で部屋の空気が震え、強烈なプレッシャーが襲いかかってきた。

「あ、あああ……」 「ひっ……」

「ミク！ ヒカリン！」

くっ、凄い圧だ。

俺はなんとか大丈夫だったが、ミクとヒカリンが黒豚の咆哮に恐慌状態に陥ってしまい、我を失っている。

「テイターニア！」

「マスターわたしにおまかせください。『キュアリアル』」

「あいりさん、二人を後方へ！ ベルリアいくぞ！」

先手は巨豚に取られてしまったので、俺はベルリアと共に巨豚の下へと走るが近づくとその大きさがはつきりとわかる。

さっきのがある以上、俺が離れて戦うのは得策とはいえない。

「ほう、動けるか。下賤なる小さき者よ、我の声を凌いだ褒美だ。

そら受け取るがいい。『アブソリユートランス』」

巨豚が魔法を発動すると空中に三本の槍が現れ、俺たちめがけて飛んできた。

第785話 18階層主（後書き）

本日ニコニコ静画でコミック最新話が公開されました。
是非アクセスしてみてください。

第786話 槍は俺が好き？

現れた槍は、俺とベルリア、そして後方へと向けて放たれる。かなりのスピードだが、距離があるので軌道は読める。

俺は槍の軌道から身体をずらして回避する。

大袈裟に贈り物と言う割には普通の攻撃だった。当然ベルリアも回避し、後方ではシルがラジュネイトで撃ち落としたようだ。

おれは再び巨豚の方へと目を向け、駆け出そうとするが、

「マスター！ あぶないです！」

後方からティターニアの声が聞こえてくる。

ティターニアの声に反応して、咄嗟にその場から横へと飛び退くと、後方から躲したはずの槍が再び俺を狙い飛んできた。

「ホーミング！？」

まさかの追尾機能か？

「ご主人様、叩き落とせば消え去ります」

回避ではなく撃墜しろということか。一気に難易度が上がってしまったがやるしかない。

後方から迫る槍を撃ち落とすべく構えるが、バルザードでは余りにリーチが違いすぎる。

このままでは、貫かれる自分の未来を予見し、すぐに回避に切り替え、全力で避ける。

そして回避と同時に魔氷剣を発動し、更に集中を高め、アサシンの

能力を解放する。

反転して迫ってくる槍のスピードが鈍る。十分に目測し、タイミングをみて魔氷剣を槍の側面に合わせて跳ね上げる。俺の動きも鈍いままだが、タイミングを図る時間を稼げた事で上手く合わせることができた。

「このような無粋な贈り物など必要ありません」

ベルリアも問題なく槍の攻撃を退けたようだ。

「ほう。下等な者にしては、なかなかやるようだ。それではこれでどうだ？」

再び巨豚がスキルを発動し空中に槍が浮かぶ。

しかも六本浮かんでいる。

そしてその六本の槍は、全て俺に向かって飛んできた。

「くそ！　なんで俺！？」

挑発したのはベルリアなのになんで俺を狙うんだ。それも六本って、ハードル上がりすぎだろ！

「マイロード！」

「ご主人様！」

「マスター！」

サーバントの声がボス部屋に響き渡るが、正直気にしている余裕は一切ない。

六本の槍がこちらに穂先を向けてくるのをみて、生命の危機を感じた俺は本能的にアサシンのスイッチを入れる。

急速に槍のスピードが遅く感じられるようになるが、六本の槍で正面全体が埋め尽くされて逃げ場がない。

斬って落とし逃げ場を得る以外に方法はない。

俺は正面の一本に向け踏み込み、先程と同じ要領で下から跳ね上げ、素早い動きでそのまま空いたスペースへと無理やり身体を滑り込ませる。

「フッ」

まだあと五本、次の動作に移るために、肺に空気を吸い込み魔氷剣で迎え撃とうとした瞬間、遅くなった時間の流れを無視するかのような動きで俺の前に立つ二人の姿があった。

「下賤なモンスター如きがご主人様を傷つけようとするなど許せません。神罰を受けなさい！」

「マイロードを狙うとは、騎士の格好をしても所詮は下劣なモンスター。そのような紛い物の刃でマイロードに害をなすなどあり得ませんね」

次の瞬間俺は『鉄壁の乙女』の光のサークルに包まれた。

第787話 ジャゲル（前書き）

本日ニコニコ静画にコミック最新話が公開されました。
2/18のコミック1巻発売前最終公開かもしれませんが
是非読んでください。

第787話 ジャグル

光のサークルが五本の槍を弾き返し、弾かれた槍めがけてベルリアが二刀を振るう。

再び俺に向かつて来ようとする槍を素早い動きで撃ち落としていく。

「ほう、それを凌ぐか。矮小なる者よ。我が名乗るにふさわしい力はあるようだな。我はジャグルだ」

「ごちゃごちゃうるさい！ 名乗るにふさわしい？ 偉そうに！

誰に口を聞いているんだ！ 豚風情が喋るな。さっさと燃えて焼豚になれ！ 『破滅の獄炎』」

ジャグルと名乗る階層主にキレたルシエが問答無用で獄炎を放ち、その直後炎がジャグルに襲いかかるが、ジャグルは、左手に持つ巨大な黒い盾を出して構えた。

迫る獄炎が盾によって阻まれ、左右に割れた。

それをみたベルリアがジャグルに向け加速して、盾の脇を抜けようとするが、今度は手に持つ巨大な肉切り包丁のような剣でベルリアに斬りかかる。

ベルリアは空中へとジャンプし迫る剣の一撃を躲すが、ジャグルはその巨体に見合わぬスピードで切り返し、空中のベルリアに向け二撃目を加えた。

「ベルリア！」

ベルリアは咄嗟に二刀をクロスに構え肉切り包丁の一撃を受け止めるが、威力を逃しきれずに弾き飛ばされる。

『アイアンボール』

ベルリアを援護するために、後方のあいりさんが鉄球を放つが、ジャグルはあっさり盾で鉄球を受け流してしまった。
強い。

こいつ、ただの黒豚じゃない。

「マスターフォローします。マスターに力を！ 『ウィンガル』」

ティターニアがスキルを発動してくれたので、俺もすぐにナイトブリンガーの効果を発動し、ジャグルに向かって走る。

「私だっているのよ！」

ミクは無事に恐慌状態から回復したようでスピットファイアを連射しジャグルの気をひいてくれる。

俺は気配を殺してジャグルへと迫り、そのまま後方への回り込もうとするが、その瞬間目の前が真っ暗になり強烈な衝撃と共に後方へと飛ばされた。

「グウツ！ なんだ！」

「マスター！ やらせません。これでもくらいなさい」

倒れた俺の頭上をドラグナーの銃弾が通過し、金属が衝突するような音が響く。

「下郎が、この私の前を横切るうなど甘いわ」

飛ばされた衝撃で頭が振られ、頭がボクッとするが、無理矢理身体を起こし手を地面につきながら必死にシルの下へと駆け込む。

「ご主人様！ お身体は大丈夫ですか？」
「ああ、なんとか。シル、おれはいい……」
「ご主人様があのモンスターと交差する瞬間、あのジャグル、いえ黒豚が、あろうことかご主人様にあの盾をぶつけてきたのです！
許せん！」

どうやら、さっきの衝撃はあの黒い大楯でいわゆるシールドバツシユをくらったらしい。あの大きさだ。至近でやられると俺の避ける場所などない。
頭は痛い、幸いそれ以外には大きな怪我はなさそう。逆によくあれをくらってこの程度で済んだものだが、あの瞬間俺は確実にナイトプリンガーの能力を発動していた。
にもかかわらず、攻撃を合わされたということはあの階層主には効果なかったということだ。
つまりは、あいつには俺のいつものスタイルが通用しないということだ。

これだけで俺にとってはかなりきついがやるしかない。

第788話 フライハイ

「フッッ」

俺は焦る気持ちを抑え大きく息を吐く。

頭痛はするが、どうやら他にダメージはなさそうだ。

再び俺がジャグルへと意識を向けると、俺よりも先にベルリアが立ち上がり、ジャグルへと斬りかかっていた。

ただ、ベルリアとは大きさが違いすぎて、懐に入ろうと試みてはいるが盾によってそれも阻まれている。

ベルリアの技術をもってしてもひとりであれを突破するのは難しいだろう。

「ベルリア、俺も手伝うぞ！」

その声をかけてジャグルへと走る。

ジャグルとまともに斬り合うことはできない。剣や盾をつければ間違いなくまた飛ばされる。

俺にできるのは躲しながら交戦することしかない。

ベルリアと合わせて四本の剣。手数は圧倒的にこちらに分がある。

ベルリアの横に立ち、ジャグルの隙をうかがうが、巨大な肉切り包丁の一撃が、横なぎにベルリアと俺を同時に刈り取りにくる。

ベルリアも先程飛ばされたので、ジャンプせずに後方へと飛び退き躲し、その刃が俺へと迫る。

その一撃は大きさに見合わず、かなり速い。ベルリア同様後方へと避け、刃を躲した瞬間、踏み込み打ち下ろして無防備となっジャグルの腕を狙い魔氷剣を振りかぶる。

「マイロード！」

ベルリアの叫び声に身体が反応する。

反射的に視線を横に向けると俺を目掛けて黒い盾が迫ってきているのが見えた。

回避は間に合わない。ほぼ黒い壁と言っているいい大きさの盾を前に、俺の身体能力では避ける場所がない。

アサシンの能力を解放し、無理矢理振りかぶっていた魔氷剣を引き戻し、体の前で雷の魔刀とクロスしてインパクトの瞬間身体を護る。二刀に硬質な衝撃があり、腕が押され、そのまま身体ごと持つていかれ弾かれた。

「ガッ」

アサシンの能力が継続しているせいで、自分が宙に飛ばされる動きがスローモーションのように感じる。

またくらってしまった。

あれほど注意していたにもかかわらず、完全に飛ばされてしまった。さすがに飛ばされた状態で身体の自由はきかないが、意識はある。必死にすぐくるであろう衝撃に備えるよう身体に命令をだす。その直後俺の身体はボス部屋の床へと叩きつけられた。

「ガハッ、アアッ」

背中から叩きつけられ、そのままバウンドして転がった。

「海斗！ やったな〜！ ふざけるな！ この黒豚が〜！ 死ね！
今すぐ死ね！ 『炎撃の流星雨』」

ルシエの声が聞こえるが、状況を把握している余裕は一切ない。

「ウウツ、ガハツ」

息が苦しい。咳に血が混じっている。肺をやられたのか空気が吸えない。ラミアにも肋骨をやられたが、それよりも苦しい。

「海斗さん！ これを飲んでください」

ヒカリンが俺を上向きにし、ポーションと思しき液体を口に運んでくれる。

口に溜まった液体が喉を通っていかないが、無理矢理喉だけ動かして僅かに摂取するが、飲めた量が少ないせいかすぐには効果が出ない。

「マスター！ 今わたしが助けます。『キュアリアル』」

「スナッチ！ 行きなさい！ 『ライトニングスピア』」

「ご主人様！ 我が忠実なる眷属よここに顕現せよ『楽園の泉』ルシール来なさい！」

「やあああああああ〜！ 『ダブル』」

周囲からみんなの声が聞こえてくるが、まだ確認する余裕はない。

「海斗さん、大丈夫なのです。みんなが戦ってくれています。ゆっくり飲み干してください」

ヒカリンが優しい声をかけてくれる。

僅かに飲めたポーションと『キュアリアル』の効果が見れ始めたのか、さつきよりも喉を動かすことができるようになってきたので、口の中に残るポーションを飲み下す。

「よかった。もう少し飲んでください」

ヒカリンは俺が口の中のポーションを飲み干したのを見て、ポーションの残りを口へと運んでくれた。

第789話 黒豚はご主人様の敵（前書き）

下部にヤングチャンピオンコミックスより2/18発売のコミック1巻のカバーイラストと紹介ページへのリンクを設置しました。是非見てください。

第789話 黒豚はご主人様の敵

少しかけ回復したおかげで今度は口に含ませてくれたポーションをスムーズに飲み込むことができた。

ポーションを全て飲み干すと『キュアリアル』の効果と合わさって、身体の痛みが消え、呼吸も普通にできるようになってきた

「海斗さん、下がってください。ここは私たちが！ 『ファイアポルト』」

カオリンは、俺が落ち着いたのを確認して、すぐに戦闘へと加わった。

俺はその場から後退しながらジャグルを確認するが、ジャグルの周辺はルシェの放った流星雨により炎に包まれてはいたが、それでもジャグル自身はまだ健在だった。

さすがにパーティメンバーからの一斉攻撃に無傷ではないが、盾と剣を使いベルリアとあいりさんを寄せ付けずにいる。

俺の下へとシルとルシルが集まってくる。

「ご主人様、お怪我は大丈夫ですか？ 先程の攻撃でかなりのダメージを負われたように見えました」

「ああ、ティターニアとポーションのおかげで大丈夫だ」

「ご主人様に手をあげるとは、あの黒豚許せません！ ですが思った以上に厄介な相手のようです。ご主人様にはルシルが付き従いますので安心してください。ご主人様へのこれ以上の無礼は私が許しません」

「ああ、助かるよ」

シルが怒っている。あのシルがモンスターのことを黒豚呼ばわりするとは相当怒っている。

ルシエも俺の指示なく流星雨を使っているところを見ると相当な感じだ。

ジャグルもかなり厄介な相手には違いないが、二人が本気を出せば十分倒せる。

それにルシールが付いてくれるだけでも、俺にとっては全く違う。

「それでは、あの黒豚に天罰を与えてやります。ご主人様に仇なす大罪人に神の怒りを！ 『神の雷撃』」

上空から雷撃が落ちるが、ジャグルは手に持つ大楯を上突き上げ雷撃を耐えている。

がら空きになった胴体に向け、他のメンバーが攻撃をかける。

ベルリアが肉切り包丁を妨げ、ミク、カオリン、そして回復した俺が同時に遠距離攻撃をかける。

三人の攻撃がそれぞれ着弾し、ジャグルへとダメージを与える。

「グウアッ」

時間差でティターニア放ったドラグナーの一撃が黒い鎧を貫通し穴を穿つが、巨体のジャグルを倒すには足りない。

「いくぞルシール」

「はい」

俺はルシールを伴ってジャグルへと駆ける。

さっきの攻撃はかなりヤバかった。ヤバいというか、仲間がいなければ死んでいたかもしれない。

正直、恐怖で身体がすくみそうになるが、折れそうになる俺の心を仲間の存在が支えてくれる。

俺が倒れたら、フォローして助けてくれる。サーバントたちは怒ってくれる。

俺がダメでも他のみんながなんとかしてくれる。そう思うと自然と身体が動きジャグルへと向かっていった。

再び魔氷剣を発現させて、二刀を構え走る。

「醜い黒豚よ。お還りください」エレメンタルブラスト」

ルシールがスキル を発動し突風がジャグルを襲い完全に四肢の動きを奪った。

「うおおおおお〜！」

俺は目の前のジャグルの右足に斬りかかる。

雷の魔刀を斬りつけるが、鎧に阻まれる。だが纏った雷は伝わったはずだ。

俺はそのまま右手に持つ魔氷剣を同じ箇所へと振り下ろした。

第790話 焼豚（前書き）

2 / 18 秋田書店 ヤングチャンピオンコミックス モブから始
まる探索英雄譚1の発売まであと1週間となりました。
是非書店やwebショップでよろしくお願いします。

第790話 焼豚

魔氷剣の刃がジャグルに触れる瞬間、切断のイメージをのせて押し込む。

「ギガアアア」

魔氷剣は少しの抵抗と共に漆黒の鎧を突破して、ジャグルの脚の肉の繊維を切断する。

いける！

そのまま力を込めて深く斬りつけようとしますが、途中で硬質なものにあたりそれ以上魔氷剣の刃が動かない。

更に切断のイメージを重ね、体重を乗せ力を込めるが、やはりそれ以上斬り進むことができない。

鎧と肉を絶った感覚はあった。それならこれは骨なのか。なんて硬い骨なんだ。

硬い骨に阻まれ、それ以上斬り進むことができないので、即座に切断することを諦め他の箇所を攻撃することに切り替えるが、今度は引き抜こうとした魔氷剣が抜けない。

「くそっ」

ジャグルの肉と脂に締め付けられ、引こうにも全く抜けない。全力で引き抜きにかかるがびくともしない。

「ご主人様あぶない！」

「ブモオオオオッ」

動きを取り戻したジャグルが、動きを止めた俺に向けて再び大楯を振るってくるのが見えるが、魔氷剣が抜けないせいで反応が遅れる。

「海斗様に手出しはさせません。お還り下さい。」エレメンタルブラスト」

回避の遅れた俺を護るようにジャグルとの間にルシールが飛びスキルを発動する。

再び風がジャグルを襲い、動きを奪う。

本来ルシールの一撃は敵を葬り去るだけの力を持っているが、残念ながら目の前に迫る巨体のジャグルを倒すほどの威力はない。

俺は、その瞬間、風に巻き込まれないよう咄嗟に魔氷剣を手放し、後方へと下がった。

メインウエポンを手放す事には抵抗があったが、あのまま手放さなければ俺にも影響が出ていたのは間違いない。

それに魔氷剣はジャグルの足の深いところまで刺さったままだ。魔氷剣が解けバルザードへ戻ったとしても、剣が深く刺さったあの足のダメージからまともに動くことは難しいだろう。

それにしても鎧を斬ることができた魔氷剣が、骨を絶つことができないとは、いったいどんな骨の硬度なんだ。

「また、ご主人様に害をもたらそうとしましたね。その存在すらもう許すことはできません。消し炭となりなさい！」『神の雷撃』」

ルシールにより動きを拘束され、今度は盾で受けることができなかったジャグルは『神の雷撃』の直撃を受けた。

「グブバアアア」

雷撃を受けたジャグルから肉の焼ける匂いがしてくる。

「やっぱり、デカくても豚は豚だな。焼けたら豚の丸焼きの匂いがある。まあ、こんなに醜い黒豚の肉を食べたらお腹を壊しそうだから頼まれても絶対食べてやらないけどな。ついでに燃えとけ！」
『破滅の獄炎』」

こんな場面で不謹慎とは思うが、ルシエのいう通り周囲には焼豚のなんともいえない薫りが充満している。

しかも獄炎による直火焼きとでもいえるのか、更に本能的に食欲を刺激される薫りが放たれている。

雷撃と獄炎によるダブルロースト。いわゆる二度焼きだ。

ただ、もし食べられるとしても、ルシエ同様このオークロードを直に食べる勇氣は俺にはない。

俺は雷の魔刀を構え焼豚の反撃に備える。

第791話 黒豚に放つ一撃（前書き）

ヤングチャンピオンコミックスよりコミック版モブから始まる探索英雄譚1がついに2/18発売となりました。

てりてりお先生入魂の1巻です！

海翔も書き下ろしSSを寄稿しています。

皆さんのおかげで2/18コミックスPOSランキングで65位にランクインしました！

買ってくれた読者の方ありがとうございます！！

肉切り包丁が俺へと振り下ろされるが、アサシンの能力で時間を稼ぎ、俺自身は加速して肉切り包丁を掻い潜る。

そしてそのまま脇を抜け後方へと回り込むと同時にすぐ後ろにルシルがついてきてくれているのを確認する。

ここが勝負どころだ。出し惜しみなしだ。

まだアサシンの能力が続いているので、ジャグルの動きは鈍く感じる。俺は雷の魔刀を構えジャグルの左脚へと渾身の力を込めて振り下ろす。

アサシンの効果でも、刀の威力が上がるわけではないので先程同様に鎧に弾かれるが、すぐに同じ箇所目掛けて二撃目を放つ。

『愚者の一撃』

俺のHPと引き換えに必殺の一撃が雷の魔刀から放たれる。

魔刀により放たれた一撃が、黒い鎧を吹き飛ばし肉を削るが、魔氷剣同様に骨により阻まれる。

「ルシル！」

「おまかせください。海斗様には指一本触れさせません。お還り下さい。『エレメンタルブラスト』」

ルシルが身体を無理矢理捻り俺に迫ろうとしていたジャグルを風で縛る。

俺はすぐに引き、低級ポーションを取り出して一気に飲み干す。

切断こそならなかったが、これでジャグルの両脚に相当なダメージを与えた。もうまともに動くことはできないはずだ。

「またご主人様に害をなそうとしましたね。まだ焼け切らないようです。これ以上ご主人様には触れさせません。早く消えてください。『神の雷撃』」

「デカすぎなんだよ。さつさと丸焼きになれ。いつまでそうやって立ってるつもりだ！ 消し炭になれ！」 『炎撃の流星雨』」

俺が下がり、ルシールがスキルを発動した直後、シルとルシエも同時にスキルを発動した。

先に雷撃が着弾し、そのあとに炎の流星雨がジャグルへと降り注ぐ。ルシエのスキルの炎が一面を覆う前に、急いでその場から離脱する。ジャグルの近くにいと巻き込まれる。

轟音と熱風が一面を支配して、土埃が舞い上がる。

ノーガードでこれをくらえば、階層主といえどもさすがに生きてはいないだろう。

それほどの熱量と威力。

だが、ジャグルが倒れた様子は、まだない。

立ったまま絶命したのか？

俺は土埃の中目を凝らす。

第792 ジャグルの首（前書き）

おかげ様でヤングチャンピオンコミックス モブから始まる探索英雄譚1はかなり好評のようです。

ただ、文庫版同様、最初の1週間の売り上げが運命の別れ道らしいです。今後の為にも、もう一押し欲しいのでまだの方は是非今日買ってください。できれば紙の本だと感謝5割増です。よろしく願います。

第792 ジャグルの首

ジャグルの巨体は砂埃の舞い散る中でもうつすらと確認することができた。

まだ、その巨体は消え去っていない。

でかいからなのか、あれほどの攻撃を一齐に受けてもまだ立っているのがわかる。

だが、今が攻めるべき時なのは間違いない。

倒すには脚よりも上の部分を斬り裂くしかない。

「ハアハア……スナッチ、お願い。『フラッシュボム』よ」

ミクが恐慌状態を立て直し、スナッチへと指示を出すと、スナッチが光り始めて高速でジャグルへと飛んだ。

光の球と化したスナッチが砂埃の中のジャグル目掛けて猛スピードで迫るが、ヒットする寸前、ジャグルが手に持つ盾を使いスナッチの攻撃を防ぐ。

『キイイイイン』

高音の金属が擦れ合うような音が聞こえ、火花のようなものが飛び散っているのが、俺の目にもうつすらと見える。

一瞬の均衡の後、スナッチはそのまま弾かれ、ジャグルは大きく後ろへとバランスを崩して、その場へと崩れた。

「スナッチ！ 下がって！」

「わたしだってやれるのです。『アースウェイブ』」

背中からバランスを崩して倒れたジャグルをヒカリンの『アースウエイブ』が完全にその場へと縛りつけた。
ここしかない。

ジャグルの方へと飛び込むベルリアとあいらさんの姿も映る。

俺の手の届く位置にはジャグルの頭部が晒されているが、頭は兜でおおわれているので、狙うのは兜と鎧の継ぎ目、首だ。

俺は雷の魔刀を握り直し、脚を動かし再びジャグルへと襲いかかる。おそらく普通の一撃ではジャグルの首を断ち切ることはできないだろう。

「おおおおおあああ！ 『愚者の一撃』」

俺は今日二発目の『愚者の一撃』を雷の魔刀にのせて放つ。

魔刀の刃が『ズブリ』とジャグルの肉を断ち骨に当たる感覚があるがそのまま一気に振り切る。

刃が硬いものに擦れるような感覚があり、振り切った雷の魔刀が手元の部分を残して完全に折れた。

そしてジャグルの首はそのまま地面へと落ちた。

「やった……」

雷の魔刀は、俺の技量が足りなかったのか、それとも『愚者の一撃』に耐えられなかったのか完全に折れてしまったが、それと引き換えに十八階層主の首を落とすことができた。

最上ではないが、これだけの強敵を相手に上出来かもしれない。

俺は力を使い果たしてその場へとへたり込んだ。

「ルシール、やったな」

「……いえ海斗様、まだです」

「え？」

「ポーションを飲んで早く下がってください！」

ルシールの言葉に促され、慌てて二本目の低級ポーションを取り出し飲み下しそのまま後方へと数歩下がる。

「私の首を落とすとは、なかなかではないか。ここまでやられるとは思ってもみなかったぞ。褒めてやろう」

胴体から斬り離され、地面へと落ちたジャグルの頭部から声が聞こえてきた。

まさか、まだなのか。

いや、本当はわかっている。ルシールの反応を見ても、まだ倒せていないのは間違いない。

だけど、なんで。

この階層は死霊系のモンスターが多かったので、ジャグルもそれに当てはまるのかもしれない。

ただ、再生能力を持つほとんどのモンスターは首を落とせば消滅へと至っていた。

ジャグルの首は間違いなく落とした。

それでもこの階層主は消えないのか。

第792 ジャゲルの首（後書き）

週間POSコミック売り上げBest500にランクインしました。
購入いただいた読者の方ありがとうございました。

第793話 種族が違うと思う(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚4の発売日が多分決まりました。何もなければ4/1(金)発売の予定みたいです！販売サイトに情報が出ていたので多分出ます。コミック版共々よろしく願います。

第793話 種族が違うと思う

信じられないことにジャグルの胴体が徐々に動きを取り戻し起きあがるうとしてしている。

「ルシール、下がるぞ！」

それを見て俺はすぐにルシエたちがいる後方へと駆ける。

残念ながらバルザードを手放し、雷の魔刀を失った今の俺にジャグルとやりあう術はない。

「なんであれで動けるのよ」

「文字通り化け物なのです」

起きあがるうとするジャグルに、ベルリアとあいりさんが剣戟を加えようと武器を振るうが、上半身を起こしただけの体勢にもかかわらず頭がある時と変わらぬ素早さで、肉切り包丁と盾でいなされてしまった。

「化け物とは失礼だな。我はデュラハンロード。頭ぐらい取れたところまで死ぬはずがなかるう」

「え!？」

ジャグルの口から語られた衝撃の事実思わず声を上げてしまおうが、周りのメンバーも息をのむのがわかった。

たしかにジャグルは今デュラハンロードと口にした。

完全に、豚然としたその姿にオークの上位種だと思いついていた。

オークジェネラルやオークロードだと勝手にあたりをつけていたの

は否定できないが、他のメンバーも今、同じ気持ちだろう。
だが、ジャグルの言葉に納得する部分も少しだけあるのも事実だ。
身体を焼かれても死なない。たしかにデュラハンの上位種なら頭が
取れることもあり得る。

「デュラハンロード？ オークロードか豚ロードの間違いだろ。種
族間違えてるんじゃないのか？ ふざけるなよ。さっさと焼ける！

『破滅の獄炎』」

獄炎はジャグルを捉えたしかに燃えている。豚肉が焼けるようない
い匂いがより増したので燃えているのは間違いないが、まだ死ぬ様
子はない。

「いでよゴルダバワー」

ジャグルが声を上げるとその場に渦のようなものが現れ、そこから
六本足の首無しの黒い馬二頭が引く巨大な戦車が現れた。

巨大な戦車はジャグルの横につけジャグルは、手に持つ盾を置き代
わりに頭を拾い上げ、そのままその身体を戦車に収め、再び声を上
げた。

「いくのだ！ ゴルダバワー」

ジャグルを乗せた六本足の黒馬が引く巨大な戦車が猛然と俺たちの
方に向けて走り出してきた。

あの巨大な戦車に轢かれれば間違いなく死ぬ。

「ルシール！」

「おまかせください。首無しの自然の摂理に逆らった者たちよ、お
環えりください。『エレメンタルブラスト』」

ルシールの放った竜巻が巨大な戦車の突進と衝突する。風の力に押され一瞬動きが止まったようにも見えたが、すぐに勢いを取り戻し、竜巻の中を突き切って向かってきた。

「シル！ 頼んだ！」

「おまかせください。あのような不浄なものご主人様には一切近づけさせません。『鉄壁の乙女』」

『鉄壁の乙女』の光のサークルが、俺たちを包み込むが、その直後巨大な戦車を引く黒馬が勢いよく突っ込んできた。

『ドガアアアアーン』

耳を劈くような破壊音が響きわたり、光のサークルと巨大な戦車が正面から衝突した。

第794話 黒馬死す（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚4の発売が正式に4/1に決まりました！

あいりさんのカバーイラストが公開となりました。本文下部に公開しました！ よろしくお願いします！！

2/18発売のコミック版も好評いただいているようです。購入していただいた読者の方本当にありがとうございます！

第794話 黒馬死す

巨大な黒馬は五メートルのジャグルを凌ぐ体躯で、俺たちを押しつぶそうとして脚から全速力で『鉄壁の乙女』にぶち当たった。

その迫力に身が竦んでしまったが、光のサークルが不浄なるモンスターを通すことは一切なく、衝突と同時に黒馬の脚は完全に破壊され、光のサークルを飛び越えるようにして地面へと首からダイブし、引いていた戦車も光のサークルへと衝突して激しい音と共に大破してしまった。

当然、座るようにして乗っていたジャグルも前方へと投げ出され、黒馬を飛び越え地面へとダイブし、着地した瞬間、ジャグルの重さに周囲の地面が震え、手に携えていた頭部は二十メートルほど先まで跳ねながら転がっていつてしまった。

黒馬は脚を潰され、その場で踠いているが、ジャグルは意識を失っているのかピクリとも動かない。

「ルシエ、もしかして今ならやれるんじゃないか？」

「あ、ああ、うん。やっぱりただの黒豚だったな」

珍しくルシエが戸惑ったような口振りだが、たしかにこの結末は予想外だった。

まさか、あれほどの馬と戦車を呼び出して僅か数秒でこうなるとは思ってもみなかったが、俺たちにとってはラッキーとしかいえない。

「手間をかけさせられたが、これで終わりだ。黒豚にしては偉そうなやつだったけど、さっさと豚の丸焼きになって消えてしまえ！

『炎撃の流星雨』」

再び上空から大量の炎の塊が降り注ぎ、一面が火の海と化す。腕いていた黒馬二匹はあつという間に炎に飲まれて黒煙をあげ消滅してしまい、その先で動かなくなっていたジャグルにも容赦なく炎の塊が降り注ぐ。無防備となつて晒されたジャグルの黒い鎧も大量の炎の前にして徐々にその姿を失い、剥き出しとなった皮膚が容赦なく焼かれていく。凄惨な状況にあつても、周囲は焼豚の芳しい匂いが充満している。絶え間なく降り注ぐ炎にジャグルの肉が徐々に焼け焦げ、その場にはジャグルの骨だけが残された。

「『アクセルブースト』 くっ、刃が通らないとは」

「なあ、骨つて普通燃えるよな」

「そうね、普通は燃えるわね。しかもルシエ様の炎だし。それにベリリアくんの一撃も通じなかったし。だけどあの黒豚も普通じゃなかったじゃない」

「まあ、そうか」

たしかに普通のモンスターではなかったたのでミクにそう言われると納得してしまう。

「ここまでやるとは思わなかったぞ」

奥へと転がつていったせいで焼け残ってしまったジャグルの頭部から声が聞こえてきた。

骨が消滅していなかったたので、もしかとは思っていたが、この状態でもまだ生きているらしい。

いやデュラハンなら元々死んでいるからその表現も違つのか。

さすがにあの頭部を潰せば消滅するか？

だけど頭蓋骨の耐久性を考えるとルシエの炎じゃ難しいかもしれない。

「ご主人様、あとは私におまかせいただけませんか？」

「ああ、それじゃあお願いしようかな」

「ありがとうございます」

まあ、あの骨がルシエの炎に耐える以上、ここはシルの雷撃に頼るしかない。

俺はシルにジャグルの討伐を託すことにした。

第795話 ジャグルの最後（前書き）

現在4/1発売のモブから始まる探索英雄譚4の最後の追い込み作業にはいつていますが、無事発売されそうです！

各サイトで予約も始まっています。本文下部にカバーイラストを載せているので見てください。

できれば紙で買ってくれると嬉しいです。紙が売れると5が出ます。

電子の読者さんはbook walkerで3000文字超の大作SSがついてきます。過去最長です！内容は緩めです。

モブ4のあとがきはレア食材についてです！

よろしく願います。

第795話 ジャグルの最後

「あなたは少しやり過ぎました。ご主人様にまで危害を加えるとは救いようがありません。我が主に仇なす者よ、神の怒りを知りなさい。無へ帰せ『祈りの神撃』」

え……。てつきり『神の雷撃』を使うとばかり思っていたがまさかの『祈りの神撃』

たしかにシルもいつになく怒っているのはわかる。

ただどこで『祈りの神撃』とは、完全に予想外だった。

俺の身体がうつすらと赤く光り始める。

「うつうつ……」

きた！俺の中からごっそりとなにかが抜けていくような感覚があり、その場に膝をつく。

「うつ……うつうつ」

シルの持つ神槍ラジュネイトが赤く光り、周囲の空間が歪み始める。シルが一気に踏み出してラジュネイトをジャグルの頭部へと突き刺す。

赤く光るラジュネイトが頭部へと触れた瞬間、ジャグルの頭部は消えて無くなった。

そして、その瞬間胴体の骨も崩れるようにして消え去った。

今度こそ終わった。だけど俺は辛い。

しばらく、虚脱感に耐えていると身体がスツと軽くなるのを感じた。この感覚はレベルアップ！

先日のラミア戦でレベルアップしたばかりなのに、今回まさかのレベルアップ。

俺の思っていた以上にデュラハンロードであるジャグルは強敵だったのかもしれない。

そして、シル、ルシエ、ベルリアとスナッチもそれぞれ発光し始めた。

どうやら今の戦闘でサーバント全員がレベルアップしたらしい。

やはり思っていた以上にジャグルから経験値が入ってきたようだ。

俺は、その場から立ち上がって地面に落ちたバルザードを拾ってから今回のドロップを確認する。

ジャグルがいた場所には、なんと二つのドロップらしきものが落ちていた。

ひとつはかなり小さくはなっているが、ジャグルが使っていたと思われる肉切り包丁のような刀が一振り。

そしてもう一つは焼豚ではなく、一本の白い骨。いわゆる豚骨だ。

サイズはかなり大きく肉切り包丁と同じくらいの長さがある。

だけど、この骨はどうしたらいいんだ？

ラーメンのスープの出汁にでも使うのか？ いや、まさかな。

「みんなこれどうすればいいと思う？」

「持って帰れば良い出汁が取れるんじゃない」

「ミク、それ本気か？」

「だってモンスターミートがあれば美味いんだから骨だって美味しいと思わない？」

「まあ、たしかに」

「とりあえず持ち帰って使い道は後で考えればいいんじゃない？」

使い道の決まらない豚骨のことは置いて残ったのは肉切り包丁だ。

俺の雷の魔刀が完全に折れてしまったので、代わりに使いたい気持ちもあるが、バルザードと二本持ちするにはサイズが大きすぎる。ジャグルの使っていたものと比べるとかなり小型化されてはいるが、それでもパツと見て俺の身長を超えている。

形は違うがいわゆるグレートソードの範疇に入る大きさなので片手で扱える代物ではない。

もちろんミクたちが使うはずもないし、売るしかないか。

だけど、これは魔剣の類なのか、それとも普通の剣なのかもわからないな。

魔剣だとしたら結構良い値段で売れるかもしれないので、ちょっと楽しみだ。

第796話 肉切り包丁（前書き）

HJ文庫モブから4が4/1発売です！よろしく願います。

モブから4発売直前企画で新作 それでも僕は君が好き 始まりは勘違いと嘘で告白もしていないけど
を集中連載します。
よろしく願います。

第796話 肉切り包丁

「マイロード、お詫びとお願ひがあります」

「どうしたベルリア」

「実はあの骨に斬りかかった際に、マイロードから賜った魔刀が二本とも刃こぼれを起こしてしまいました。本当に申し訳ございません。このベルリア一生の不覚」

「ちよつと見せてくれる？　もしかしたら俺が研げるかもしれないし」

ベルリアもか。『アクセルブースト』で勢いがついてたからな。俺の雷の魔刀も骨に当たって折れたし、明らかに硬度が魔刀よりもジャグルの骨の方が高かったんだらう。

だけど最近俺の研磨技術もそれなりに上がってきている感があるので、少しぐらい欠けたとしてもどうにかできるかもしれない。

「これなのですが」

「……………」

ベルリアに見せられた魔刀は欠けているというよりも、完全なる破損。かろうじて折れてはいないが刀身の中ほどまでが抉れるように破損している。

これは無理だ。俺じゃなくても研いでどうこうなるレベルを超えている。

どう考えても、もう使えない。

「やはり無理でしょうか。それでお願ひがあります。その肉切り包丁を私に賜うことはできないでしょうか？」

「これベルリアが使うのか？ さすがに長過ぎないか？」

「いえ、剣であればどのようなものでも、必ず使いこなしてみせます」

「みんな、どうかな」

「私たちは使わないし、いいんじゃない」

メンバーに確認を取るがみんなベルリアに使わせることに問題はな
いようなので、渡すことにする。

「それじゃあこれはベルリアのな。だけど一応鑑定しときたいから、
一度回収させてもらおう」

「はっ、ありがたき幸せ。このベルリアその剣が尽きるまでマイロ
ードと姫様のために頑張ります」

このセリフ何回目だろうか。

武器は消耗品であることは理解しているが、ベルリアが使い潰すと
言えば本当に使い潰す。

今までもそれなりの本数の剣がお亡くなりになっている。

それに今回全員レベルアップという思っても見ない恩恵はあったが、
結果として魔刀三本がお亡くなりになり、代わりに肉切り包丁と豚
骨。

仮に肉切り包丁の価値が俺の折った魔刀一本分だとしてもベルリア
の魔刀二本と豚骨が釣り合うとも思えない。

魔刀が一本千五百万円だとすればなんと三千万円のマイナスだ。
考えると目眩がしてきた。

三千万円あれば、俺の住んでいるあたりなら普通に家やマンション
が一括で買える値段だ。

それが今の一戦で消えてしまった。

『愚者の一撃』を連発した疲労とは別種の疲れが全身にのしかかっ
てくる。

しかも俺の武器がひとつ減ってしまった。

また魔核銃を使ってもいいが、これから十九階層ということを考え
ると非力さは隠せない。

あまりのショックに忘れるところだったが、せつかくレベルアップ
したのでステータスを確認してみることにした。

第796話 肉切り包丁（後書き）

それでも僕は君が好き 始まりは勘違いと嘘で告白もしていないけど

<https://ncode.syosetu.com/n6570hn/>

は、女性耐性ゼロの主人公と彼女？の不器用でちょっと切なく甘い
同棲ラブコメです。
よろしく願います

第797話 レベル25（前書き）

ついに来週金曜日の4/1にHJ文庫モブから始まる探索英雄譚4が発売です。

是非買ってください。

紙で買ってもらえると5巻が出ます。

電子でももちろん嬉しいです。

よろしく願います。

第797話 レベル25

気を取り直してステータスを確認してみる。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 24 25

HP 94 100

MP 64 68

BP 95 100

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

鬼殺し

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（弱）

愚者の一撃

不撓不屈 NEW

「ああっ！」

おおおおおっ！

思わず声が出てしまったがレベル25となった俺のステータスには
ついに三桁の数値が現れた。

HPが100に。そして何よりBPが100へと到達した。

この前レベルアップしたばかりなので、BP100になるのはもっ

と先だと思っていた。

それが今この時ついにBP100へと至った。

それは、本格的に探索を志した者としてのひとつの目標。

シルバーランクに至ったという事だ。

まだ上にはゴールドをはじめとした階級は存在するが、シルバーランクは言うなれば探索者として上級に一步足を踏み入れたといっても過言ではない。

おそらく高校生でシルバーランクに至ることが出来るのはほんのひと握りの探索者だろう。

まあ、それだけ俺がダンジョンに潜っている証明ともいえるが、シルバーランクは完全なるプロクラスの階位といえる。

自分で自分を褒めてやっていいレベルだ。BPだけならベルリアに迫る。

先程まで刀が折れてしまったショックで憂鬱になっていたが、この数値を見て一気にテンションが回復してしまった。

地上に戻ったら一番にダンジョンギルドへ直行しよう。

俺がシルバーランカー。ウッドランクに二年間とどまり続けていた俺がシルバーランカー。一年前の俺に言っても絶対信じないだろうな。

興奮で身体が小刻みに震え、全身に体温が急上昇したような錯覚を覚える。

そして新しいスキルも発現していた。

不撓不屈 …………… 常軌を逸した精神力で何度も死の淵から舞い戻った者の証。死に瀕した時、精神力で踏みとどまり、瞬間的にBPが25パーセント上昇する。

このスキルは、おそらく常時待機状態のスキルだ。そして大きなダメージを負った時に、このスキルの効果で死なずに済むのか？

その瞬間一時的にBPが25パーセント上昇するという事は、俺の

場合B Pが125となるということだ。この数値はベルリアに迫るところか完全に上回っている。

おそらくは、強敵と戦い、常に命の危険と隣り合わせの探索者にとって、とんでもなく有用なスキルだ。

何度モルシエの『暴食の美姫』や『愚者の一撃』でHPが一桁になるのを経験し、おまけにシルの『祈りの神撃』まで体験してしまったことで、発現に至ったのだと思うが、このスキルの注釈にある常軌を逸した精神力ってなんなんだ？

たしかに、『暴食の美姫』や『愚者の一撃』を発動するには相当な覚悟が必要だ。その上で俺は何度も発動しているので、かなり頑張っていると思う。

だけど常軌を逸したって、まるで俺がおかしいみたいな表示はちょっと納得いかない。

俺は完全に普通。ノーマルだ。

第798話 サーバントのレベルアップ（前書き）

ついに明日4/1にHJ文庫モブから始まる探索英雄譚4が発売です！

是非買ってください！

紙で買ってもらえると5巻が出ます！

文庫、ラノベ、小説 売上best500にランクインしました！

ありがとうございます！！

そしていつもは微妙な電子で購入いただいた読者の方が今回は多いような気がします。

ありがとうございます！

第798話 サーバントのレベルアップ

俺は気を取り直しシル達のステータスを確認する。なんと四人ともがレベルアップしたようだが余程ジャグルから得られた経験値が高かったのだろう。

ジャグルは間違いなく強敵だったが、他の階層主と比べて飛び抜けた強さだったかと言われれば、そうでもなかった気がするので、モンスターが強さと得られる経験値は必ずしも比例していないのかもしれない。

ジャグルは自分で名乗っていたのでいわゆるネームドモンスターに当たる気がするからその辺りも関係しているのかもしれないが、ゲームのように経験値が数値化されているわけではないので本当のところはよくわからない。

種別 ヴァルキリー

NAME シルフィー

LV 6

HP 200 220

MP 145 162

BP 260 280

スキル

神の雷撃

鉄壁の乙女

戦乙女の歌

楽園の泉

祈りの神撃

装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

さすがはシルだ。レベル6にもかかわらずBPが280にもなっている。

俺はBP100になって喜んでいたが、シルは桁違いだ。

それに勘違いしてはいけませんが、スキルの強力さもあり俺が三人いればシルに勝るという事ではない。

そしてステータスの伸びも四人の中で一番高い。

次にルシエだ。

種別 子爵級悪魔

NAME ルシエリア

LV 5 6

HP 120 135

MP 200 225

BP 201 218

スキル

破滅の獄炎

侵食の息吹

暴食の美姫

黒翼の風

炎撃の流星雨

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

ルシエのステータスもBPが200を上回っている。シルもだが徐々にステータスの伸びが高くなっていくような気もする。もしかしたらレベルが高くなれば、それだけ一回のレベルアップで伸びるステータスの数値も増えるのかもしれない。

そうだとしたら、レベルアップするたびに俺との差が広がってしまう。

サーバントのステータスが伸びるのは、本当に嬉しい事だが、いざれ肩を並べて戦いたいと考えている俺にとっては少しだけ複雑だ。

サーバントの中でベルリアのステータスはかなり俺のステータス値に近い。

BPはまた少し離されてしまったがHPに限っては俺の方が優っている。

ただ、剣術の訓練をしていても全くといってもいいほど歯がたたないので、このステータスはあくまでも目安でしかない。

BPで並んでも、現状俺とベルリアでは技量に天と地ほどの差がある。

そしてベルリアのステータスはバランス型といえるが、徐々にMPが増えてきているので、近接戦闘を得意としているが、本来スキル型なのかもしれない。そして新たなスキルも発現している。

種別 士爵級悪魔

NAME ベルリア

LV 3 4

HP 86 97

MP 96 108

BP 108 118

スキル

ダークキュア

アクセルブースト

ヘルブレイド

ファントムステップ NEW

装備 魔鎧 シャウド

バスタードソード

ファントムステップ …… 加速する一步で敵を幻惑する。連続使用不可。

発現したのはベルリアのステータスに反して完全に近接スキルだと思うが、実際に使用してみないとよくわからないところもあるな。説明の加速する一步と連続使用不可を解釈すると、もしかして加速するのは一步だけという可能性もある。

もしそうなら、そこまで使えるスキルではないかもしれない。

最後にティターニアだが、俺同様先日レベルアップしたばかりだったが今回もレベルアップすることができたようだ。

四人の中では一番ステータスが低いので十九階層へ臨むこのタイミングでレベルアップできた事はよかったと思う。

種別 フェアリークイーン

NAME ティターニア

LV 2 3

HP 7 4 8 2

MP 8 3 9 2

BP 7 7 8 8

スキル

ウィンガル

キュアリアル

ユグドラシル

フェアリーダンス

第798話 サーバントのレベルアップ(後書き)

既刊HJ文庫モブから1〜3

ヤングチャンピオンコミックス モブから1もあわせてよろしくお
願いします。

第799話 カツカレー（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚4の発売から1週間が経過しましたが、皆様のおかげで文庫、ライトノベル、小説売上ランキングbest500にランクイン中です！
まだの方は是非買ってください。
よろしく願います。

第799話 カツカレー

「みんなもレベルアップしたんだよね」

「そうね。スナッチもレベルアップしたし、あのジャグルっていう階層主の経験値が大きかったみたい」

ヒカリンとあいりさんも同様にレベルアップしたようだ。今回のレベルアップでミクとヒカリンもブロンズランクへと到達したようだったが、俺がBP100に到達したことはなんとなく言いそびれてしまった。

「今日は、十九階層に降りたら回らずにすぐ引き上げようと思うんだけど」

「ああ、それがいいだろう」

全員レベルアップによりステータスは回復しているが、さすがにジャグルとの戦いで心身ともに疲弊していたので、十九階層への階段を降りてそのまますぐに地上へと戻ることにした。

ジャグルを倒した事で充実感はあるが、ここで勘違いして深追いするとうるくなことにならないので、ダンジョンギルドは明日向かうことにして今日はそのまま別れることにした。

俺はBPが100に届いたことで、モチベーションはかなり復活はしたが、魔刀二本のダメージから完全に抜け出すことはできなかったので、大人しく家に帰り、カレーを食べて早めに寝ることにした。

「今日はカツカレーか……」

「今日はスーパードルビ島の黒豚が安くなってたのよ」

「黒豚……」

「先に食べてみたけど甘みがあって美味しいわよ」
「そうなんだ」

今日は黒豚のカツカレーか。カツカレーはカレーの王道だし俺の好物のひとつでもある。

たしかにいつもより豪勢だし、鹿児島黒豚って有名だよな。普段の俺ならおかわり確定だ。

それに上にのった豚カツを口に運ぶとたしかにおいしい。

「どう？ いつもものとはちょっと違うでしょ」

「うん……そうだね」

思うところはあったが、ダンジョンで消耗してお腹もすっかりと減っていたので、結局残さず、おいしくいただいでしまった。

夕飯を食べてからしばらくしてから、ベッドに入ると『患者の一撃』を使用したことによる疲れと精神的な疲労ですぐに眠ることができるかと思っていたが、目を閉じると脳裏には一万円札を啜えた黒豚の大群が現れ、なかなか寝つくことはできなかった。

まさかジャグルの呪いではないだろうけど、やはり三千万円相当の損失は俺には堪えたようだった。

翌目を覚ますとスッキリしたとは、言いかねる状態だった。

まだ身体に重さが残っていて、普段あまり夢を見ることも無いのに、しっかりと黒豚と一万円札のことが頭に残っていたので、夢にも出てきていたようだ。

今日は朝からダンジョンギルドへ向かう約束をしているので、重い身体を起こし、顔を洗い意識を覚醒させる。

「もうしばらく豚はいいな……」

朝から豚でお腹がいっぱいというか胸と頭がいっぱいになってしま

っているので、当分の間豚肉料理は遠慮したい。
できれば魚料理とかあっさりしたのが食べたい。
病気の時以外でこんな風に思ったのは初めてかもしれない。

第800話 鑑定（前書き）

なんとモブからの総ポイントが90000ptとなりました。

ありがとうございます。

次は100000pt目指して頑張ります。

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚4も発売から2週間が経過しましたが買ってくれた読者の方ありがとうございます。

まだの方も是非週末のお供に願います。

今週紙で買ってもらえるとう巻が出ます。（願望です）

第800話 鑑定

「おはよう」

「おはよう」

集合場所のギルド前に到着したが、珍しく今日は俺が一番最初だった。

待っていると他のメンバーもすぐ集まったので、そのままギルドへと向かい、いつものように日番谷さんの列へと並ぶ。

それにしても日番谷さんは、いつ来てもいるような気がするけど、いったいいつ休みなんだろう。

もしかしてダンジョンギルドってブラックな感じなんだろうか。

ダンジョンギルドの職員は国家公務員のような扱いのはずなので、そこまではないはずだけど、少なくとも土日はいつもいる気がする。

「すみません。アイテムの鑑定をお願いします」

「はい、そちらの二点でよろしかったですか？」

「お願いします」

「それでは鑑定料として六万円を頂戴します」

「わかりました」

「一本は剣ですね。それともう一本、これは……………」

「これは、十八階層の階層主のドロップなんですけど、多分骨です」

「たしかにこれは骨ですね。それにしても、もう十八階層を攻略されたんですね。高木様達さすがです。それでは、そちらにおかけになってしばらくお待ちください」

いつものようにソファに腰掛けて鑑定が終わるのを待つ。

「海斗、本当に骨も鑑定に出したのね」

「それは出すでしょ。今のままじゃ本当にラーメンの出汁ぐらいしか使い道が無さそうだし」

「そうだけど、三万円出して骨を鑑定する人なんているのかしら」

「いや、普通にいると思うけど」

「まあ、実際に海斗は鑑定に出したわけだしな」

「いい骨だったらしいですね」

しばらく待っていると日番谷さんが鑑定を終えて戻ってきた。

「こちらが鑑定結果になります」

「ありがとうございます」

俺たちは早速鑑定結果を確認する。

まずはベルリアが使う予定の大振り肉切り包丁だ。

牛魔刀…………… 牛魔の力を宿した刀。刀身に血を纏う事によ

り、その切れ味と威力が増す。

「え!?!」

驚きの鑑定結果に思わず声をあげてしまった」

「どうかされましたか?」

「い、いえ。なんでもありません」

俺以外のメンバーも驚きの表情を浮かべている。

牛魔刀? 牛魔の力を宿した刀?

サイズは小さくなっているが、あのジャグルが使っていたのと同じ

と思われる刀なので魔剣なのは予測できていた。ただ牛魔？ どう考えてもジャグルは豚だった。牛魔じゃなくて豚魔じゃないのか？

「あの階層主、もしかして豚じゃなくて牛だったのですか？ いえ、でもあれはどう見ても豚だったのです」

「いや、牛だろうと豚だろうと魔を宿したれっきとした魔剣なのだから、きつと役に立ってくれるだろう」

「そうですね。魔剣だしベルリアが使うには問題ないですよ」

「そうね。血を纏えばっていうのも悪魔っぽいし、牛魔の力つてもしかしたら他にもなにかあるかもしれないわよ」

「そうだな」

鑑定結果は思っていたのとは違ったが、十分に使えなくなった魔刀の代わりになりそうなので結果的にはよかった。

第801話 骨の使い道（前書き）

まだの方はHJ文庫モブから始まる探索英雄譚4を週末のお供によりしく願います。

第801話 骨の使い道

そしてもうひとつの鑑定結果をみてみる。

ジャグルの骨 …… デュラハンロードの脛骨。非常に硬い。

うん、これは鑑定結果に誤りはない。ただこんな事はわかりきっている。

正直これなら鑑定料の三万円を 返してもらいたいぐらいだ。

「高木様、これは倒した階層主の骨なのですよね」

「はい、そうです。一応ネームドモンスターでした」

「確認ですが、ラーメンを作ったりはしないですよ」

「はい、しないですね」

「余計なアドバイスかもしれませんが、ドロップしたモンスターの部位によっては加工して武器や防具になる場合があります。もしかしたらこの骨も可能性があるのではないでしょうか」

「武器か防具ですか。まあなんとなく棒としては使えそうな気がしますけど」

「一度ダンジョンマーケットの武器屋の店主に相談してみてくださいはいかがでしょう。あの方はあれでもその道では知られた方なので」

「武器屋の店主って、まさかあのおっさ……」

「はい、その方です」

あのおっさんがその道で知られた方？ 嘘だろ。ただのぼったくり親父じゃなかったのか。

ただ、俺たちにはこのジャグルの脛骨を活かす術がないのも事実。微妙な気持ちは押し殺し日番谷さんのアドバイスに従うことにする。

「あつ！ その前にする事があつたんだ」

「どうしたんだ？」

「いや、実はジャグルとの戦いでBPが100に到達したんです」

「なっ……もしかしてそれはシルバーランカーになったということか？」

「まあ、手続きがまだですけどそうなります」

「海斗がシルバー。私はようやくブロンズに……」

「ランクアップの手続きをしていきたいんだけど、あいりさんもいいですか？」

「シルバーランク。よかつたら識別票を交換……」

「あいりさん、できるわけないでしょ。性別からして違いますからね」

「あ、ああ。もちろん冗談だ」

俺達はおっさんのところへ行く前にギルドでランクアップの手続きを済ませることにした。

「皆様ランクアップおめでとございます。こちらが新しい識別票になります」

「ありがとうございます」

ミクとカオリンも一緒にブロンズランクへのランクアップを果たしたので、今回は識別票が三枚渡されることとなった。

俺が受け取った。新しい識別票はアイアンランクの時の識別票に似た色合いだが、手に触れた質感が少し違い、金属の光沢も少し高級感がある気がする。

ついに俺もシルバーランクまでたどり着いた。

実際に識別票を手に取ると途端に実感が湧いてきた。

やった！ ついにやった。探索者のほとんどはこの位置までたどり

着くことができないまま引退していく。

俺は本当に運がいい。

スライムに特効のある殺虫剤を発見し、とびきりのサーバントを四人も手にし、しかも最高の仲間とパーティを組んで探索を行う事ができている。

ここまでこれたのは間違いなく俺の力だけじゃない。

みんなのおかげでここまでこれた。

ただ、まだ先がある。探索者としてもまだまだこれからだ。

まだ見ぬダンジョンをしっかりと進んでいきたい。

第802話 おっさんはマエストロ？（前書き）

ゴールデンウィークのお供にHJ文庫モブから始まる探索英雄譚4をよろしく願います！

作者は5月からいつものようにしばらくの間作業に籠りますが、現在の更新ペースを続けられるように頑張ります。

これからもモブから始まる探索英雄譚をよろしく願います。

第802話 おっさんはマエストロ？

「これがブロンズランクの識別票ね」

「感慨深いのです。まさか自分がこれを手にできるとは考えてもいなかったのです」

「これで私たち3人は揃ってブロンズランクだが、海斗は既にシルバーだからな。負けてられないぞ」

「そうですね」

「頑張るのです」

確実にチームとしてもレベルアップしているが、次は十九階層だ。少しでも戦力の底上げはしておきたい。

「あのくちよつといいですか？」

「おう、坊主。今日は美人さんを三人も連れてなんのようだなんか買ってくれんのか？」

「はい、ギルドで紹介されてきたんです。これなんですけど」

俺はジャグルの骨を取り出しておっさんに見せる。

「おう、なんだこの馬鹿でかい骨は？」

「それが、十八階層主との戦いでドロップした階層主の骨です」

「この骨は……豚骨か!？」

「いや、一応豚骨じゃなくてデュラハンロードの骨です。鑑定ではジャグルの骨だそうです」

「ネームドのデュラハンロードの骨か」

「はい。この骨異常に硬くて、使っていた魔刀が三本ダメになっちゃいました」

「やっぱりか。坊主この前の魔剣だけじゃなくて魔刀なんか持ってやがったのか。どつりでうちで魔剣を買っていかないわけだな。よかつたら売れ残ってる魔剣があるぞ？　まとめて三本なら安くしとくぞ？」

「いやいや、魔剣三本って無理ですよ。今日はそうじゃなくてこの骨を武器にできたりしないかと思ってきたんですよ」

「あゝこの骨を武器に！？　このまま振り回せばいいんじゃないのか」

「次は十九階層ですよ？　骨でいけると思えますか？」

「バカやるゝ！　骨だろうがなんだろうが筋肉に力込めて思いつきりぶつ叩けばモンスターなんぞ、どうにでもなるんだよ。最近の若い奴らは鍛え方が足んねえんだ！」

おっさん無茶苦茶だ。全てを筋肉で片付けようとする暴論。その理屈でいくならこの骨である必要もない。

「残念ながらモンスター相手に力押しできるほど筋肉ないです。普通に武器がいいんですけど無理ですか？」

「あ！？　無理？　無理なわけねゝだろ。いけるに決まってるだろうが。ちよつと見せてみる」

「はい」

俺がジャグルの骨を手渡すと、おっさんが無言で真剣にジャグルの骨を観察し始めた。

「おい、坊主。この骨なんだ？」

「いや、だからジャグルって名前のデュラハンロードの骨ですよ」

「そんな事はわかってんだよ！　なんでこんな高密度で固いんだ。下手な武器より全然かてゝじゃねゝか。こんな骨見たことねゝな」

「やっぱり無理ですか？」

「無理じゃね〜よ。いけるって言うてんだろ。このまま棒でもいけるが、坊主が使うなら剣か。正直骨を使った剣は珍しいが、ドラゴンの牙を使った剣もあることだし無くはね〜な」

「その骨で剣ができるんですか？」

「ああ、できる。できるが金がかかるぞ。なにしろ骨から剣だぞ！？ わかってんのか？ 骨から剣を作るんだからそれ相應の金がいるぞ？ まあ坊主十八階層をクリアしたぐらいだ、金がないはずはないよな」

ジャグルの骨から剣か。だけど金か。この守銭奴のようなおっさんが金がかかるっていうぐらいだからとんでもない金額なのか？ 俺は恐る恐るおっさんに聞いてみる。

「あの〜ちなみに金額はいくらぐらいになりそうですか？」

「あ〜そうだな。素材は持ち込みだからな、さすがにそこまでは取れね〜から、まあ四百万円ぐらいあれば足りるんじゃないか」

第802話 おっさんはマエストロ？（後書き）

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【

】に願ひします

第803話 できるおっさん？（前書き）

完全に忘れていました。昨日気がつきましたが初投稿から3年が経過していました。

応援ありがとうございます。

GWも終わりますがHJ文庫モブから始まる探索英雄譚4をよろしくお願いします。

第803話 できるおっさん？

四百万円か。

間違いなく大金だけど、今の俺に払えない額ではない。

魔剣が一本一千万円以上することを考えると、高くはないのか？

素材持ち込みなので、完全に技術料と考えるとやっぱり高いのか？
おっさんの口から出る金額に正直どうなのか確信が持てない。

「ちょ、ちょっと待ってください。みんなちょっと」

自分では判断がつかないのでパーティメンバーに頼ることにする。
おっさんに聞こえないように小声でみんなに聞いてみる。

「ジャグルの骨から武器を作るの四百万って言ってるけど、みんなはどう思う？」

「どう思っつって値段がどうかってどういう意味？」

「うん、そう」

「海斗、私は四百万ならありだと思っぞ。恐らくジャグルの骨から作られる武器なら魔力を帯びた武器になる可能性が高い。魔武器が四百万円で手に入ると考えればいいんじゃないか？」

「そうね、私も値段的にはありだと思っわ」

「問題は、本当に魔力を帯びた武器になるかということなのです。もし出来上がった武器が魔力を帯びていなければ、ただの硬い骨なのです」

「まあ、それに関しては完全には否定できない」

「……そうですよね」

やはり、おっさんの口から出た値段とはいえ、魔武器の製作料とし

ては高くない気がする。ただそれはあくまでも魔武器の製作料としてはだ。

ヒカリンの言う通り、硬い骨を使った武器としては微妙だ。いやむしろ高い。

硬い骨としてなら今のままでもあまり変わらない気がする。

「おい、どうすんだ？ 正直武器を加工すんのは手間がかかるからな。なんなら、在庫の魔剣を買ってもらった方が俺はありがたいんだがな」

「これ、ちゃんとした武器になりそうですか？」

「そりゃ、ネームドの骨だからな。普通ならそれなりのもんになるんじゃないか。まあ硬度も十分だから、幅の細い剣ぐらいはいけんだろ」

「なんでネームドの骨って……」

「そんぐらいわからなくて、こんな店やってられるかよ！」

おっさんには何度か騙されているが、その人柄とは関係なくどうやら希少な鑑定スキルを持っているっぽいな。

たしかに鑑定スキルでもないと、探索者の武器なんか扱えない気もするので妙に納得してしまうところはある。

人柄はあれだけど。

「うーん……」

「人が打ってやるって言うてんだからウダウダ言っでないで、男ならさっさと決めろ！ 女の子たちの前で恥ずかしくねーのか！」

「は、はい」

たしかに俺の魔刀は一本なくなってしまったし、選択肢は少ない。それにさっきおっさんが気になる事を口にした。

「もしかして店長が作ってくれますか？」

「あゝ？ そんなこと当たり前だろゝが！ 俺以外にこんなもん誰が打つんだよ」

「やっぱりおっさんが作るのか。鑑定スキルに鍛冶スキル？ やっぱ
りおっさん何気に優秀なんじゃないか？」

人柄はあれだけど。

「わかりました。お願いします」

「おお、まかせとけ。ちなみにこれをメインで使うつもりか？ こ
の前研いだ魔剣が折れたんだろ」

「いえ、折れたのはもう一本の方なんで、この前のと二本使いする
つもりです」

「二刀流かよ。厨二か。かぶれてんなゝ。まあ探索者なんて、みん
なそんなもんだがな」

「はは……」

第803話 できるおっさん？（後書き）

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】に願います

第804話 十九階層（前書き）

お知らせ

次号のどこでもヤングチャンピオンのモブからはお休みみたいです。
楽しみにしてくれていた方は、6末よりパワーアップして戻ってくる
と思うのでよろしくお願いします。

第804話 十九階層

おっさんに不安がないといえは嘘になるが、他に術もないのでおっさんに依頼することにして前金で半額の二百万円を支払い、いくつか消耗品を補充した。

これで今日の目的は、ほぼ果たすことができたが、新しい剣ができるのは一週間後とのことだった。

「これからどうしましょうか」

この後の予定を何も立てていなかったのでメンバーに確認してみる。

「まだ時間は十分にあるから、軽く十九階層を覗いてみないか？」

「十九階層ですか？」

「ああ、昨日は消耗していたから全く探索してないだろう。本格的に探索するのは来週からだとしても少しは、十九階層の敵を体感しておいた方がよくないか？」

「たしかにそれはありますよね」

「海斗さん武器は大丈夫なのですか？」

「まあ、バルザードがあるし、魔核銃と併用すれば特に問題無いと思っけど」

「それじゃあ決まりね」

メンバーのみんなも俺と一緒にランクアップと新たな階層にモチベーションが上がっているのだろう。結局いつも通りダンジョンに潜ることになってしまったが、初めての十九階層、異存などあるはずもない。

「今日は、あくまでも感触を確かめるだけだから、深追いはしないよ」

「そうだな。そうするとしよう」

早速俺たちはダンジョンへと向かい、ゲートキーパーを使い十九階層へと踏み入れる。

昨日はここまでで、引き返したが、探索を開始する。

ダンジョンを奥へと進むと、十八階層までとは明らかに違うのがわかる。

階段付近は、特に変わったところはなかったが、今歩いている場所は床が石でも砂でもなく、金属で出来ている。

「気をつけないとこの床は滑るな」

「普通に歩くのは大丈夫だけど、戦闘時には注意ね」

足下に注意を払いながら先に進んでいくと、徐々に壁や天井部分も金属質なものへと変化しているのがわかる。

「これ、転んだだけでもダメージ受けそうだな」

「頭から転んだら、流血しそうなのです」

「話には聞いてたけど、本当にダンジョン全体が金属で出来てるのね」

「誤って壁を斬れば刃こぼれはまちがえない。それに銃は要注意だろう。下手をすれば跳ね返って自爆するぞ」

たしかにあいりさんの言う通りだ。これでバルザードまで使えなくなってしまうと取り返しがつかない。

「テイターニア頼んだぞ」

「おまかせください。マスター達に被害が及ぶような真似は決して

致しません」

ティターニアと話していると敵を知らせる声がシルから聞こえてきた。

「ご主人様、敵の気配です。この先に二体います」

「わかった」

「いつも通りでいこう。ベルリア、あいりさんと俺が前に。残りのメンバーは各自の判断でフォローを」

そのままダンジョンを進み、俺たちは初めて十九階層のモンスターと相まみえることとなった。

第805話 金属生命体？（前書き）

おかげさまでHJ文庫モブから始まる探索英雄譚4が好調です。

設定もストーリーも緩めがお好きな方には是非！

筆者はもうしばらく籠ります。

よろしく願います。

第805話 金属生命体？

「あれか」

「話には聞いてたけど、本当にあんな感じなのね」

「ゴーレムとも違いますよね」

「金属生命体、いやロボット型生物といった方がいいのか」

俺達の先には二体の敵が姿を現したが、モンスターと言っているの
がよくわからない。

外装は完全に金属で出来ている。

そのこと自体は今までのモンスターでも経験済みだが、明らかに機
械然としたその姿が明らかに今までのモンスターとは違う。

その形は、おそらく人型の方はリザードマンタイプ、そして四つ脚
の方は大きな牛を想起させる。

「マイロード、おまかせください。マイロードより拝したこの牛魔
刀の錆としてやります」

「無茶するなよ。刃が欠けても、もう買ってやれないからな」

「私がおのような失態を犯すはずはありません」

「いや、その剣で何本目だよ。それにあれって血を流すのか？ そ
の刀の特殊能力発揮できないんじゃないか？」

「問題ありません」

「それじゃあ、ベルリアが牛型、俺とあいりさんで人型をやりまし
よう」

俺の指示と同時にベルリアが大刀を手に牛型に向けて駆けた。

俺とあいりさんは、初見の相手に慎重に距離を詰めていく。

こちらを認識した牛型のモンスターから金属が擦れるような音が聞

こえてきたと同時に牛型のモンスターが突然ベルリアに向けて突進してきた。

「速い！」

表現しづらいが、徐々に加速するのではなく、いきなり全速力で飛び出したような加速でベルリアに突進してくる。

明らかに普通の生物の動きとは異なる動きに目が釘付けになってしまふ。

ベルリアが即座に反応して上空へと飛び上がり、ひらりと牛型の突進を交わすが、その場で急停止した牛型が攻撃しようとするベルリアの着地を待ち構えている。

「その程度の動きで私を捉えられるなどと思わないでください。」
「アクセルブースト」

ベルリアが空中で牛魔刀を振りかぶり落下しながら剣尖を加速させる。

ベルリアの一撃が牛型に当たると周囲に金属音が響きわたり、そのまま敵の首が落ち崩れてそのまま消滅した。

ベルリアが余裕で勝利したように見えるが、明らかに通常のモンスターよりも速い動き、そして外皮だけでなく、内部まで金属で出来ているのが首の断面から見て取れた。

どう考えても通常のモンスターよりも硬い。

というよりも、これをモンスターと呼んでいいのかさえ疑問に思えてしまふが、ダンジョンに出現する敵である以上倒す以外に選択肢はない。

ベルリアの戦闘が終わるのを見届けて俺とあいりさんがリザード型の敵へと駆ける。

二足歩行なので、ベルリアの倒した牛型よりも動きが鈍い事を期待

したが、あっさりとその期待は裏切られた。

動き自体は硬い。滑らかとか流麗な動きからは程遠い。

程遠いが、牛型と同様いきなり加速して俺たちに急接近してきた。

第806 未来型ロボット。それは……まさか猫型

「あいらさん！」

敵モンスターが突然加速して距離を詰めてきた。

徐々にはではなく、いきなり最大速度になったかのような敵の動きに反応が遅れる。

「くっ、パワーもすごいな」

あいらさんが、メタルリザード型の剣戟を薙刀の柄で受け止める。

メタルリザード型から放たれる一撃は、その身体の動き同様にいきなりトップスピードで放たれ異様に速く感じられる。

すぐさま放たれた二撃目もあいらさんが後方へとシフトしながら柄で受け止める。

さすがはあいらさんだが、完全に距離を潰されてあいらさんの間合ではない。

俺もすぐに側面から斬撃を飛ばすが、メタルリザードの身体に軽く亀裂の筋が入ったのは見えるが、動きを止めるには至らない。

やはりその見た目どおりの硬度を誇っているようだ。

メタルリザードは俺の攻撃を意に介さず三撃目をあいらさんへと放つ。

あいらさんはどうにか三撃目も上手く避けたが、完全に押されている。

最初に出てきたモンスターのくせにコイツかなり強い。

俺は一気に集中力を高めアサシンの能力を解放し、メタルリザードへと迫る。

あいらさんへと攻撃し、無防備となった敵の側面へとバルザードを

突き立てようとするが、その瞬間メタルリザードの身体が垂直に飛び上がった。

「なっ！」

アサシンの効果で敵の動きは鈍く感じられるが、メタルリザードの動きは素早く俺の一撃は身体のコを外しかろうじて右脚を捉えた。バルザードの刃が触れた瞬間硬質な感触と抵抗が手元に伝わるが、切断のイメージをのせそのまま左脚を切断する。

メタルリザードは空中でバランスを崩して上昇力を失ったが、消滅には至っていない。

普通、上にジャンプするには予備動作が必要なはずだが、そのような動きは一切見られなかった上に、明らかに重そうなその体躯でベルリア並みに飛び上がった。

明らかに通常の生物の動きとは異なる。そして切った脚からは血が流れていない。

「やああああっ！ 『斬鉄撃』」

あいりさんが薙刀のリーチを活かし空中のメタルリザードの胴体を切断し、消滅へと追いやる事に成功した。

「さすがは十九階層といったところか。かなり手強い。それにあの動き、組みづらいな」

「そうですね」

地面にはモンスターの残した魔核が落ちていたので拾う。

十八階層で手に入れた魔核とそれほど大きな違いは見取れないので、ドロップについては変わらないようだ。

「あいりさん、今までのモンスターとは違いますよね」

「金属生命体とも言えはいいのか」

「海斗さん、ロボットじゃないですか？ 動きがアニメに出てくるロボットみたいなのです」

「そうだよな。だけど切断面からは回路っぽいのは見て取れなかったしなあ」

「アニメとかでもっと進んだ世代のロボットは回路とか無くても普通に動いていたのです」

「そうなんだ」

十九階層の敵は未来型ロボットなのか？ 未来型ロボットってまさか……あれが出てくるわけではないな。

第807 アウトオブコントロール

「どうしますか？ この階層の敵とも戦うことができたしこれで戻りますか？」

「そうだな。まだ後衛が戦闘に参加できていないし、もう少しいいんじゃないか」

「それならもう少し探索しましょうか。じゃあ、次はミクとヒカリンも戦闘に加わるうか。直接攻撃してみて状況でサポートに切り替えて」

「わかったわ」

「硬そうですからね。魔法が効くか試してみるのです」

もし今後も先程同様金属生命体的なモンスターが出るのであれば、その魔法耐性を把握しておいて損はないだろう。

それにしても、見た目だけじゃなく動きもヤバいので気を抜くことができない。

1番ヤバいのは、その加速。

初速からいきなりトップスピードに入るような動きで、近接であればやられるとこちらの反応が遅れてしまう。

「それにしても、ダンジョンの中までメタリックでまるでSFみたいだな」

「足下が濡れているとスリップしそうだから『アイスサークル』はやめといた方が良さそうですね」

「ああ、たしかに。ヘルメットがあつた方がいいかな」

「あつた方がいいとは思うけど、あの黒いのはやめといた方がいいわ」

「いや、あれはあれでけっこう良かっただろ」

「機能は良かったわね。機能はね」

あのファン付きヘルメットの評価が低いのは納得いかない所だけど、このダンジョンの感じはなんとなくワクワクしてしまう。

「これってなんの金属でできてるんだろう」

「鉄だと錆びそうだし、ダンジョン固有の金属の可能性もあるわね」「貴重な金属だったら持って帰って売れたりしないかな」

「海斗、基本ダンジョンを傷つける行為は禁止だから。今までは隠しダンジョンとか理由があつてスルーしてもらってるけど調子に乗ると罰金とられるわよ」

「あゝそういえば罰金あつたな。完全に忘れてた。シルも要注意だからやりすぎるなよ」

「ご主人様、そのような心配は無用です。安心してください」

「そうだな。シルは大丈夫か。ルシエは……」

「なんだよ。わたしは大丈夫だぞ！ 今までだってダンジョンを壊すのは、わたしじゃなくてシルだろ」

「まあ、そうだけど」

たしかに今まで問答無用でダンジョンを破壊してきたのはシルだけど、一応ルシエにも釘はさしておいた方が良さそうだ。

ミクに言われるまで忘れていたけど、罰金の件は以前日番谷さんにも、それとなく言われた気がする。

今更だけどダンジョンは国の所有物なので、その中で活動する俺たちも一応ルールに則って活動を続けているが、正直サーバントにルールを当てはめるのは難しい気がしないでもない。

他のサーバントのことはよくわからないが、きっとルシエ以上に聞き分けのないサーバントもいることだろう。

カード所有者に責任があるのは理解できるが、この一年の経験からサーバントとは、決して絶対服従の召使いのような存在ではなく自

分ではコントロールできないことも多くあるのがわかった。いつコントロールの埒外となりやらかすかもしれない。できればサーバントのやったことには特例で目を瞑って欲しい。

第808話　メタルゴブリン

「ご主人様、この先にモンスターの気配です。数は3体です」

「それじゃあ、隊列はさつきと同じでいくけど、ヒカリン、ミク、テイターニアは積極的に参加してほしい。スナッチにも攻撃させてみて」

シルとルシエがやれるのは検証も必要のないことなので、今回はこの階層で後衛のメンバーがどこまで通用するのかを試しておきたい。ゆっくりと進んだ先に見えるのはやはりメタリックカラーのモンスターだ。

形状は先程とは異なる。

特筆すべきは一体のモンスターは鳥型で宙を舞っている。

「それじゃあちよつと遠いけど、いくわね。『ライティングスピア』

」

ミクが初撃を放ち戦闘が開始される。

ミクの放った雷の槍は一直線に鳥型のモンスターへと伸び命中し、鳥型が弾かれたようにバランスを崩して高度を下げたが、すぐに持ち直し再び滑空し始めた。

「当たったのに。効果ゼロではないけど厳しいわね」

「じゃあ今度はわたしなのです。『ファイアボルト』」

今度はヒカリンが放った炎雷が飛んでいくが、鳥型が急旋回して攻撃をかわす。

「ごめんなさいはでしたのです」

単純に距離がありすぎたかもしれない。そう考えるとミクの命中精度がやばいな。

「ベルリア！　いくぞ！」

「おまかせください。三体ともこの牛魔刀の錆にしてやります」

いや、ベルリア聞いてたか？　今回は後衛のメンバーに積極的に攻撃参加してもらうんだからお前が三体とも倒しちゃダメなんだよ。聞く耳を持たない土爵級悪魔に心の中でツツコミを入れながら俺自身も敵へと突っ込んでいく。

地上にいる敵は人型が二体。

一体はずんぐりとして、それほど背丈は無いが、腕が異常に太い。かにもパワーがありそうだ。

そしてもう一体は俺の見慣れた姿を想起させる。

金属で形作られてはいるが、コイツはゴブリンか。

「ベルリア、俺がゴブリンをやっているか」

「では私はあの不恰好な方を」

俺たちとすれ違いに上空を鳥型が飛んでいくが、後方で控えるあいりさんたちにまかせて俺は初見の敵に集中する。

おそらく敵はゴブリンなので、普段余り役に立つ機会のない『ゴ布林スレイヤー（微）』も活躍してくれるはずだ。

メタルゴブリンも俺を認識して、手に持つ小型の槍を向け一気に加速した。

やはり先程のモンスター同様に初速が異常に速い。

迫る槍を大きく避け、後方に回り込もうとするが、メタルゴブリンが急反転して間髪を入れずに迫ってくる。

「速すぎるだろ！ 動きがおかしいって」

思わず言葉が口をつくが、明らかにターンのスピードがおかしい。前方への加重を無視するかのような急反転からの急加速。

息をつかせぬメタルゴブリンの攻撃に、躲すのが精一杯で防戦一方になってしまう。

このままではまずいが、短槍とはいえバルザードよりはかなり長いので、迂闊に距離を詰めることはできない。

「海斗さん、援護します！ 『アースウェイブ』」

後方からヒカリンの声が聞こえてきたので、俺はその場から後方へと飛び退く。

第809話 やせ我慢

ヒカリンが『アースウェイブ』を発動すると、金属で出来ていてあるう地面が変化を見せ、俺の目の前にいるメタルゴブリンの脚が止まった。

液化した地面に脚を取られ、俺への注意が完全にそれたのを感じ、咄嗟にバルザードを振るうが間合いが遠くダメージが浅い。

「マスター避けてください」

続くティターニアの声に反応して右側へと飛び退く。

『ギイーン』

直後、金属が擦れる音がして、メタルゴブリンの頭部が弾かれたように後方へと仰け反った。

やったか？

目の前のメタルゴブリンを注視すると、右頭頂部が銃弾で削り取られているが、まだ消滅してはいない。

頭にドラグナーの銃弾をくらっても消滅しないってどれだけ硬いんだよ。

俺はのけぞったメタルゴブリンとの距離を詰め側面から胴体へバルザードを突き入れ、切断のイメージをのせたまま横なぎに払った。鈍い抵抗感とともにバルザードの刃が抜けると、徐々に胴体がズレて落ちた。

すぐ様、ヒカリンへと指示を飛ばす。

「ヒカリン！ ベルリアにも頼む！」

「わかったのです。『アースウェイブ』」

『アースウェイブ』が効果を発揮して先程同様ベルリアの切り結んでいた敵の足下がぬかるみ、自重で沈んでいく。

「私の前で動きを止めるなど重いだけの暗愚ですね。これで終わりです。『アクセルブースト』」

「ベルリア上だ！」

上空を旋回していた鳥型のモンスターが、仕留めにかかったベルリアに向け、攻撃を仕掛けてきた。

鋼鉄の羽根がベルリアを襲う。

ベルリアは、咄嗟に発動した『アクセルブースト』のターゲットを鋼鉄の羽根へと変え牛魔刀を振るう。

「ツツツ」

捌ききれなかった羽根がベルリアに刺さる。

「私が仕留める！」

俺は庇うように、ベルリアの前へと走り、あいりさんもベルリアを越え『アースウェイブ』に脚を取られたモンスターへと迫る。

上空の鳥型が再び旋回し攻撃体勢に入ったのが見えた。

ベルリアが、攻撃をくらってしまったので、思わず前に出てしまったが、ベルリアで捌ききれなかった攻撃を俺がバルザード一本だけで対応できると思えない。

「ご主人様への攻撃など、私が許しません。堕ちなさい。『神の雷撃』」

内心焦りながら身構えたところをシルの雷撃が的確に鳥型を捉え、そのまま落下しながら消滅した。

「やあああゝ『斬鉄撃』」

最後にあいりさんが残る一体の首を刎ね、戦闘を終えた。

「ベルリア大丈夫か？」

「この程度、かすり傷です。いえ、正直傷のうちにもはいりません」「いや、結構深く刺さってるだろ。血が出てるぞ」

「いえ、これは皮膚を貫通しただけです。私の鍛えた筋肉で弾いていますから大丈夫です」

「そうか、早く治せよ」

ベルリアの痩せ我慢も大概だな。

明らかに刺さった羽根が肉を抉り、結構な血が出ている。

俺なら痛みで大騒ぎしそなくらいはダメージを受けているように見える。

「不意を突かれただけです。『ダークキュア』」

ベルリアがスキルを発動し、傷が塞がると同時に刺さった鋼鉄の羽根が落ちて消滅したが、結構な枚数刺さっていた。

そつえば本体が消滅しても刺さった羽根はすぐには消滅しないんだな。

次、鳥型と戦うことがあれば回避もしくは『鉄壁の乙女』が必須だ。

第810話 似たもの姉妹

「マイロード、申し上げにくいのですが、先程の戦いでほんの少しだけ消耗してしまいました。できるなら魔核をお願いできないでしょうか」

「ああ、もちろんいいぞ。この後も頑張ってもらわないといけないからな」

俺はマジック腹巻きからスライムの魔核を取り出す。

「ご主人様、私もお腹がすきました」

「ああ、シルも敵を倒してくれたからな。ほら」

「ありがとうございます」

「わたしも腹減ったぞ。早くくれよ」

いつもの事なのでもう何も思わないが、ルシエお前は今回の戦闘には全く参加していなかっただろ。

「それにしてもこの階層のモンスターだけど、やっぱり強いな」

「マイロード、相性の問題です。この程度の相手問題ではありませんん」

「いや、でもなあ。直接的な魔法も効果が薄い感じだし、硬さもあがるしやりにくいと思うぞ」

「そうね。私はあまり役にたてないかも。次は『幻視の舞』を試してみるわ」

「ああ、そうしようか」

やはり、この感じの敵が続くようなら、ミクとヒカリンにはサポー

トに徹してもらった方がいい気がする。
おそらくスナッチも戦力外だ。

「ふふん。ここはわたしの出番だろう。次からわたしがやってやるよ」

「いけるか？ 結構炎への耐性高そうだったぞ」

「バカにしてるのか？ わたしの獄炎にかかれば一瞬だ！ まあ見てるんだな」

まあ、前衛三人だけでは足りない場合もあるので、少し不安はあるがルシエがやる気なら頑張ってもらうのはアリだな。
俺たちは落ちた魔核を拾い探索を続ける事にする。

「流石に十九階層までくると魔核のサイズもかなり大きくなってきたな」

「大きさだけじゃないわ。色も濃くなってるし純度も高くなってるわね」

「そうだよな。見た感じだと以前遠征で落ちた平面ダンジョンの二十階層のと比べても負けてない気がするんだけど」

「多少ダンジョンによって差があるのかもね」

「たしか平面ダンジョンのが九万円はしたはずだから、これもそのくらいはしてるんじゃないか」

「それじゃあ、この三つだけでも三十万円に迫るわね」

「さすがはシルバランクのパーティなのです。ちょっと下世話な話ですが、完全にプロクラスに稼げてるのです」

「シル様やルシエ様のおかげで、普通のパーティより格段に効率がいいからな。おふたりには感謝しかない」

「ふふっ、感謝するなら今度魔核をな」

「もちろんです」

今でも多めに渡しているのに、あいりさんからせしめる気が。あいりさんもいやいやって感じでもないから俺が口を出す事じゃないけど、ルシエはやっぱりルシエだな。

「ルシエ、あまり欲張ってはいけませんよ」

「なんだよ。シルはいらなんだな。じゃあシルのは無しだぞ」

「それは、また別の話ではないですか？」

「もちろんシル様にもですよ」

「そう、そうですね。それほど言われるなら頂かないのは失礼にあたりますね」

「……シル」

やっぱりシルもシルだった。

まあ、この階層の探索は二人の頑張りにかかっているとところもあるし、俺の魔核も有限なのであいりさんにも感謝しておこう。

第811話 メタリックなアレ(前書き)

作者はまたしばらく作業に籠ります。

更新は今までのペースで続けます。

よろしく願います。

第811話 メタリックなアレ

俺達は十九階層を進んでいく。

「そろそろ、お昼ご飯にしようか」

「そうね。結構いい時間になってきたわね」

メタリックな周囲に時間的な感覚がいまいち正確に働いていない気がするが、そんな環境でも俺の腹時計だけは正確に時を刻んでいるようで時間を確認すると、既に十二時を回っている。

「シル周囲にモンスターはいない？」

「はい、このあたりに気配はないようです」

「それじゃあ、もう少し見通しの良さそうなところで落ち着こうか」

そう言いながら、昼ごはんを食べる為に場所の確保にダンジョンを進む。

「マスター！ 敵です！」

「えっ!？」

期せずして突然後方からティターニアの声が聞こえてきたので、咄嗟にバルザードを構えて身構えるが、俺には敵の存在が確認できない。

「マイロード、あそこにいます」

ベルリアも敵を認識したようだが、ベルリアの指す方向を見てもモ

ンスターがいるようには見えない。
横を歩いていたあいりさんに目線をやるが、あいりさんも確認できていないように首を横に振る。

「ベルリア、どこだ。俺には確認できない」

「マイロード、あそこの地面です。地面に同化して見えますが目らしきものが確認できません」

ベルリアの言葉に従い、その場から指された場所を凝視する。

「ベルリア、あれはスライムか？」

「おそらくそれに類するモンスターかと」

よく見るとたしかに地面に目らしきものが確認できる。

ただ、地面のメタリックカラーと完全に同化して見える。

うつすらと確認できるその姿は、さながら海中の砂に紛れるカレイやヒラメを想起させるが、おそらく敵はスライム。

以前隼人達と行った平面ダンジョンに現れたアメーバ状のスライムおそらくはそのメタリック版とでもいうべきモンスターだ。

ほぼ完璧にダンジョンに同化し地面そのものに擬態しているが、今回なぜかシルは何も言ってこなかった。

「シル、このあたりにモンスターはいないんじや」

「ご主人様、申し訳ございません。私にはあのモンスターの気配を感じることはできませんでした」

「ああ、気にするな。大丈夫だ。そういう事もある。それにルシエも全く気がついてなかったようだしな」

「なっ、なにを。わたしはもちろん気がついてたぞ。誰かが気が付かないのかとずっと窺っていたただだからな！ 本当だぞ！」

シルが感知できないとは特殊な能力を備えているのか？

アメーバ状のメタリックなスライム。今まで他の階層で出現したメタリックなスライムは特別な個体が多かったが、出現した眼前のスライムに限って言えば、この階層のモンスターが総じてメタリックなので、それについては特別なスライムではない気もする。

「あのスライムはわたしがもらっからな。海斗はそこで見てろよ！

『破滅の獄炎』」

ルシエが獄炎を放ち前方の地面が炎に包まれる。

やったか？

ただでさえ確認しづらかったその姿が炎に巻かれ全く見えなくなっ
てしまった。

「マスター、まだです。あそこに」

テイターニアの声に従い、確認するとそこには確かに小さな目らし
きものが確認できた。

第812話 速すぎるスライム

あのスライムルシエの獄炎を耐えたのか？

やはりスライムとはいえ、メタリックなボディで炎への耐性があつたということか。

「硬いだけのスライムが調子にのるな！ さつさと燃え尽きる。『破滅の獄炎』」

ルシエが二発目の獄炎を放つが、やはりメタルスライムは消失していない。

今度は、最初からメタルスライムの動きを追っていたのでわかったが、メタルスライムはルシエの獄炎を耐えたのではない。

獄炎が発動する前に目で追いきれないようなスピードでその場から瞬時に移動していた。

獄炎の発動スピードは、そこまで速いものではないかもしれないが、普通スキルの発動スピードよりも速く動けるものではない。とんでもない速さだ。

「ベルリア見たか？」

「はい。姫の攻撃を躲すとはかなりのスピードですね。ただ、あの程度なら私におまかせください」

ベルリアがいつもの「おまかせください」だ。

「あのスピードいけるのか？」

「まったく問題ありません」

「じゃあ、頼んだぞ」

「はい、おまかせください」

「ベルリア！ 絶対倒せ！ あのスライムわたしの攻撃を2回もかわすとは許せないぞ！」

「はっ、このベルリア命に変えても姫様の期待に応えてみせます」

ベルリアはそう答えると同時に牛魔刀を構えメタルスライムに向けて加速する。

迫るベルリアに対しメタルスライムに動きはない。

すぐにベルリアとメタルスライムの距離が詰まり、ベルリアが牛魔刀を振おうとするが、その瞬間メタルスライムの姿が消えた。

「逃しません」

ベルリアは、更に加速してメタルスライムを追う。

メタルスライムの動きだが、俺は距離のある状態で見ているので辛うじて追えているが、近接ならまず見失うスピードだ。

ただベルリアは近接でもしっかりとメタルスライムの動きを追えているようで、敵に牛魔刀を振り下ろすタイミングを計りながらメタルスライムの動きに合わせて駆けている。

何度か振りかぶった隙に逃げられていたが、ついにベルリアがメタルスライムを捉え、牛魔刀を振り下ろした。

『ガッ』

「クッ、ちょこまかと！」

俺の目にも完全に捉えたように見えたが、牛魔刀はメタルスライムではなく地面へと振り降ろされていた。

「こうなれば仕方ありません。私も本気を出さざるを得ないよう

ですね。いきますよ」

ベルリアが今まで手を抜いていたとは思えないが、振り下ろした牛魔刀を再び構え、前方のメタルスライムへと距離を詰めた。

先程と同じように逃げるメタルスライムを追い詰め、剣を振るうタイミングでベルリアがスキルを発動した。

『フロントムステップ』

ベルリアの身体が急加速し、ブレてメタルスライムと立ち位置を入れ替えそのまま牛魔刀を振るった。

『ギイイイン』

金属同士がぶつかる音が響き、ベルリアの一撃がメタルスライムを捉えた。

813話 光の矢 (前書き)

モブから4巻発売から結構期間が空いてしまっていますが打ち切りになったのではありませんのでご安心ください。

HJ文庫の8月のラインナップには入っていませんが気長にお待ちいただけるとうれしいです。

813話 光の矢

「なっ……」

ベルリアの牛魔刀は間違いなくメタルスライムのボディを捉えてど真ん中を斬り込んだ。

にもかかわらず、メタルスライムは全くダメージを受けた形跡はなく、すぐにその場から高速移動でベルリアの射程から抜け出してしまった。

「ベルリア！」

「くっ。マイロード申し訳ございません。不覚をとりました。一撃を加えたにもかかわらず倒すことは叶わず。無念です」

ベルリアのセリフ、明らかにやられたキャラのセリフだが、攻めるのはベルリアだ。

「ベルリア、そんなに硬いのか？」

「はい、牛魔刀の一撃では全くダメージを与える事ができなかったようです」

ベルリアの振るう牛魔刀でダメージを入れる事ができないとなると、俺も無理かもしれない。

一抹の不安を抱きながらもベルリアのフォローに入るべく俺もメタルスライムに向かって走り出す。

俺が距離を詰めようとするや瞬時に移動を繰り返して、全く距離が詰まらない。

「海斗、なにをチンタラやってるんだ。そんな平べったい奴なんかさっさと倒せ！」

背中越しにルシエの厳しい言葉が聞こえてくるが、想像以上に速い。まともにやったら俺のスピードでは捉える事は難しい。

「ベルリア！ 挟むぞ！」

一人で無理ならベルリアと二人でやってやる。

ベルリアも俺の意図を察してメタルスライムを対角線上に追い込んでいく。

メタルスライムがベルリアから逃れ俺の方へと向かって来た。

俺は集中を高めアサシンのスイッチを入れ、逃げるメタルスライムを視界に捉える。

貫通のイメージを乗せて迫るメタルスライムに向けてバルザードを素早く振り下ろす。

スローになって尚追えるギリギリのスピードだ。

『ギイイン』

バルザードの一撃が確かにそのボディを捉えたが、ベルリアの時と同様に金属音が響き渡り、切断する事は叶わなかった。

「うっ、痛っ……」

なんて硬さだ。

バルザードに貫通のイメージを乗せても無傷。

バルザードが欠ける事はなかったが、その衝撃が全て俺の右手首に集中して完全に痛めてしまったようだ。

バルザードを握る手に力が入らない。

俺はバルザードを左手に持ち替え戦闘を続行する。

「マスター、逃げてください」

何から逃げるのかわからないまま、ティターニアの声に反応して左方向へと大きく避ける。

『ジュツ』

俺が避けたその場所を、上空からの一撃が襲った。一筋の光る矢のようなものが上空から一直線に地を目掛けて降ってきた。

上空を見るが、敵らしきモンスターは見当たらない。

という事は今戦っているメタルスライムが放った攻撃なのだろう。

今まで、スライムで直接的な攻撃手段を持つやつはほとんどいなかったのに驚きだが、一気に攻略の難易度が上がってしまったのは間違いない。

続け様に上空から光の矢が襲ってくる。

814話 はぐれた？ いや逃げた（前書き）

ついに正式アナウンスがあったみたいです！！

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚5が9/1発売です！！
皆様のおかげで続刊です。

あと1ヶ月余りですが、予約のはじまったサイトもあるようなので、是非買ってください。

よろしく願います。

814話 はぐれた？ いや逃げた

バルザードの一撃が効かないのであれば、殺虫剤プレスか、愚者の一撃で仕留めるしかないが、空から降ってくる光の矢が厄介で近づく事が出来ない。

シルに『鉄壁の乙女』を使ってもらえばこの攻撃は防げるが、シルを抱えたままで素早いメタルスライムを捉えることは不可能だろう。それなら……

「シル雷撃を頼む！」

「おまかせください。消えて無くなりなさい『神の雷撃』」

シルがメタルスライムに向けて雷撃を放ち、空から降ってきていた光の矢が消える。
やったか？

「マイロードまだです。まだ消滅していません」

「シルの雷撃でもダメなのか」

いくら速くても雷撃を躲すことはできなかったはず。ということはいくら速くても雷撃を耐え切ったということになる。

だが、敵の攻撃が止んだ今がチャンスだ。

俺は再びアサシンのスイッチを入れメタルスライムに迫り覚悟を決め攻撃態勢に入る。

『愚者の……』

メタルスライムに向けて必殺の一撃を放とうとモーションに入った

瞬間眼前のメタルスライムが想像を超える速さでその場から消え去った。

「ベルリアどこだっ！」

「いえ、それがどこにもいません」

「いないはずないだろう」

「ご主人様、敵の気配が消え去りました」

「消え去ったってどういうことだ？」

「海斗、もしかして逃げたんじゃない？」

「ええ…… 逃げたってモンスターだよ？ 逃げるなんてことあるのか？」

「私にもわからないけどいなくなっただってそういうことじゃない？ 消えてなくなっただけじゃないだろうし」

ミクの言う通り消えてなくなったわけじゃない。あの瞬間超速でその場から消えたのはわかった。

「多分ミクの言う通り逃げたんだろう。今までにないパターンだな」
「モンスターが逃げる事があるのですね。ダンジョンは奥深いのです」

納得はいかないが、そうなのだろう。あのメタルスライムは本当に俺たちの前から消え去ってしまったようだ。

それにしてもスライムのくせにかなり手強い相手だった。ルシエの獄炎とシルの雷撃を受けて無傷。ベルリアと俺の攻撃も耐え、そして超速で逃げてしまった。

「マイロード、今度見つけたならば必ず仕留めてみせます」

「ああ、そうだな。次は速攻で全力の一撃を放つしかないかもな。このままいても仕方がないしそろそろ先に進もうか」

「海斗、ちよつと待て」

「なんだ？ なにかあるのか？」

「お腹が空いた！」

「ああ……」

メタルスライムを倒す事ができなかったなので収穫はゼロ。

魔核の回収もなかったので忘れていたが、確かにルシエもスキルを使用していた。

「ご主人様、私もお腹が空きました」

確かにシルにもスキルを使わせた。

「もちろんわかってるよ」

俺はマジック腹巻きからスライムの魔核を取り出して二人へと渡す。

「マイロード、申し訳ありませんが私にもいただけないでしょうか？」

「ああ、そうだな」

確かに今の戦闘で最もスキルを使用したのはベルリアだ。

俺は再度スライムの魔核を取り出してベルリアにも渡す。

今回は完全にマイナスになってしまったので、今度見つけたら絶対にしとめてやる。

814話 はぐれた？ いや逃げた（後書き）

コミック2巻もいずれ出ます。

気長にお待ちいただけると嬉しいです。

815話 メタルスパイダー（前書き）

HJ文庫 モブから始まる探索英雄譚5は9/1発売です！！とお知らせしましたが、諸事情により10/1発売！！となりました。お待たせして申し訳ありませんがよろしく願います。

815話 メタルスパイダー

メタルスライムの逃亡から昼食を挟んで、更に探索を進める。モンスターが完全に逃げたのは、数年に及ぶ探索者生活でも多分初めての経験で面食らってしまったが、この階層は気を抜いて進める階層ではないので、昼食をとってから気を引き締め直した。

「ご主人様、敵モンスター五体です」

「五体か。多いな」

「大丈夫だつて。わたしにまかせとけよ。もう逃したりはしないぞ」

「ああ、頼んだぞ。さすがに五体はルシェの力も借りなきゃ厳しい。期待してるからな」

「ふふつ、そんなに言われたら期待に応えないわけにはいかないだろ。うんやつぱりわたしの力が必要だな」

「シルも状況を見て頼んだぞ」

「おまかせください」

「マスター私は……」

「ティーターニアはサポートを頼んだぞ」

「はい」

残念ながら、この階層ではティーターニアにはサポートに回ってもらった方がいい。

ベルリアとあいりさんの三人で前方へと注意を払いながら進んで行く。

「マイロード、あのデカ物は私がもらってもよろしいですか？」

「ああ、頼んだぞ」

「海斗、私は一番手前のを相手にしよう」

「じゃあ俺は蜘蛛っぽいやつを！」

それぞれがターゲットを決め、走り出す。残りの二体は後方のメンバーがどうかしてくれるはずだ。俺はナイトプリンガーの効果を発動し、大きなメタルスパイダーへと迫るが射程に入る前に感知され、その場から大きく跳ねて避けられた。

八本の太い脚がギシギシと音を立てながら瞬時に跳ねたが、高い。俺は上空へと避けたメタルスパイダーに向けてバルザードの斬撃を放つが、そのタイミングでメタルスパイダーがこちらに向け糸のネットらしきものを放出してきた。

『ギイイイン』

斬撃がネットに当たり、硬質な金属音が響く。

「糸も金属なのか！」

バルザードの斬撃を受けてもメタルスパイダーの放ったネットは消えずにこちらに向かってくるのが見えた。

あのネットはヤバい。

捕まったらやられる。

俺は必死に足を動かかし広がるネットから逃れるが、ネットが地に着いた途端再び硬質な金属音が響き渡る。

ネットと金属製の地面が擦れる音だ。

あのネットは硬質なワイヤーネットのようなもので捕らえるためというよりも、それ自体が完全に殺傷能力を持っているのがわかる。ネットの攻撃を避け、上空のメタルスパイダーを視界に入れるが、今度は放出した糸にぶら下がり移動しているのが見える。

「海斗！ フォローするわ！ 『ライトニングスピア』」

ミクの放った雷の槍が上空の糸を断ち、メタルスパイダーはそのま
ま地表へと落下してきた。

ベルリアはトロールと思しき敵をスピードで押し、あいりさんも『
斬鉄撃』で敵に斬りかかっているのが視界に入ってくる。

俺は地表へ落ちてきたメタルスパイダーへと意識を戻して集中する。

「くっそ、ちょこまか動くな！ さっさと燃え尽きろ！ 『破滅
の獄炎』」

816話 メタルドッグの攻撃（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚5 の発売が諸事情により10
/1となりました！！

少しお待たせすることになってしまいました。あるみつく先生の
パワーアップしたイラストと共にお届けできると思います。
よろしく願います。

816話 メタルドッグの攻撃

俺の集中を乱すように俺の直ぐ横でルシエの獄炎が発動した。

「ルシエ！ あぶないだろ！」

「あぶなくない！ そのくらい避けれるだろ！ そいつがチヨロチヨロと〜！」

どう考えてもあぶない。マント越しでも熱を感じる。

どうやらルシエは大型の犬のような相手に手を焼いているようだ。

ダメージは与えているようだが、獄炎で炙られる前に高速で移動してルシエの攻撃から逃れているようだ。

「ルシエ、俺と代わるぞ！ ルシエはあの蜘蛛を頼む！」

この場はスイッチして当たった方がいいと判断してルシエに声をかけ、俺は犬型のメタルモンスターを追う。

「ちょっと待て海斗！ あんな虫無理！ おい海斗〜！」

後方からルシエの叫び声のようなものが聞こえてくるが、今は敵に集中し、犬型を追うが前方を走るモンスターのスピードは俺を上回る。

メタルスパイダーのようなイレギュラーな動きではないが、距離が詰まらない。

理力の手袋の力を解放するべく手に集中するのとはほぼ同時に犬型モンスターが反転して動きを止めたので、俺は意識を切り替え犬型モンスターの動きに集中させながらバルザードの斬撃を放った。

「オオオオオオオン」

大型モンスターが声を張り上げるとバルザードの斬撃が干渉されたように揺らぎ消え、次の瞬間、俺は強烈に目が回るような感覚に襲われた。

やばいと思い、咄嗟にバルザードを地面に立て、倒れるのを防ぐが、我慢できずにその場に片膝をついてしまう。

なんだ？

敵の攻撃を受けたのか？

くっ……

頭の中が攪拌されたかのようにグワングワン回る。
その場から立ち上がる事ができない。

「海斗さん！！ 『アイスサークル』」

強烈なめまいと耳鳴りのような感じで、周りの状況が良くわからないが、後方から誰かの声が出ている気がする。

正面にいた大型のメタルモンスターがこの隙を逃すはずはない。
必死に身体を立て直そうとするが、力が入らない。

「やらせないわ！ 『バシユ』 『バシユ』」

「弾けて！ 『ファイアボルト』」

前方から爆風が襲ってくる。

味方の攻撃によるものなのか敵の攻撃によるもののかもわからない。
い。

「ベルリアくん、私と代わってください。マスターを頼みます！」

「わかりました。マイロードの事はお任せください」

めまいが酷くて頭が働かない。

今すぐ敵に対応しなければまずいのには敵に意識を向ける事ができない。

片膝だけでは、身体を支える事が出来なくなり、手を突きほとんど四つん這いのような状態になってしまった。

このままだと、完全に倒れ込んでしまう。

「ご主人様を害することはこの私が許しません！ 今すぐ消えてなくなりなさい！ 『神の雷撃』」

もう目を開けている事が辛い、閉じた瞼を通して閃光が走ったのがわかる。

一刻も早くこの場を離脱しなければならないのに一歩も動く事ができない。

817話 音波

辛うじて誰かが俺の真横にいるのがわかった。

「マイロード、すぐに回復いたします。『ダークキュア』」

徐々に目眩が治まってきた気がする。これはベルリアかティターニアが回復スキルを使ってくれているんだろう。

そのままつづくまっついていると目眩と気持ち悪さが少し治まってきたので目を開き横を見ると、そこにはベルリアがいた。

「マイロード、いかがですか？」

「少し治まってきたけどまだ難しい」

「わかりました。ここは危険ですので一旦下がらしましょう」

そう言うとベルリアは俺を背負い後方へと離脱し始めた。

ベルリアと俺では結構身長差があるので、引きずられるようにして後方へと運ばれる。

「海斗！ 大丈夫？ なんの攻撃をくらったの？」

「いや、それがよくわからない。犬型が吠えたと思ったら頭がグラグラして立っていられなくなったんだ」

「おそらくあの犬から音波による攻撃が放たれたのかと」

「音波？」

「はい」

あの揺らぎは音波だったのか。音波でこんな風になるのか。

「あゝも〜怒ったぞ。チヨロチヨロ鬱陶しい！ まとめて燃え尽きる！ あいりも勝手によけるよ。『炎撃の流星雨』」

え！？

俺の耳にはまだ音波によるダメージが残っているのかルシエの声が聞こえた気がする。

『炎撃の流星雨』！？

「マイロードここは危険です。下がりましょう」

危険だからと下がって来たはずの安全ラインから、ベルリアに連れられ更に後方へと移動させられる。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴ』

いつものように、ダンジョン一帯に上空から地鳴りのような低音が響き渡る。

ああ、やっぱり聞き間違いじゃなかった。

上を向くとそこには無数の火球が出現しており、四体のモンスターに向けて降り注ぐ。

五体いたはずなので一体はシルか誰かが倒してくれたのだろう。

一瞬で前方が火球により炎に包まれていく。

炎への耐性を持っていてであろうメタルモンスターも、絶え間なく降り注ぐ火球の前に一体また一体と倒れ消滅していく。

最後に残った大型も全身に火球を浴びて呆気なく燃え尽きてしまった。

「ふふん、チヨロチヨロしたって、わたしから逃げられるわけないだろ」

「姫、さすがです」

「海斗、わたしが倒したぞ？ 見たか？ あんなのわたしの敵じゃなかったぞ。ふふっ」

「いや、まあ、助かったけど」

「ふふっ、そうだろ。わたしのおかげだな」

たしかに、ルシエのおかげで助かった。

ベルリアによると音波による攻撃だったようだが、得体の知れない攻撃を受け俺は完全に戦闘不能になっていた。

このまま戦っても、他のメンバーがどうにかしてくれていたとは思うが、苦戦していたのは事実だ。

「海斗やっぱりわたしが一番だろ？」

「いや、まあ」

「ダントツ一番だっただろ」

「まあ」

「ルシエ、ご主人様を困らせてはいけませんよ」

「ふふん、シルは一体だけだからな」

数の問題ではないし、明らかにオーバーキルだった気はするが、この場合はルシエにお礼を言っておこう。

「ルシエ、助かったよ。ありがとうな」

「ふふん、そうだろ。わたしのおかげで助かっただろ。お礼はいっぱいの魔核でいいぞ。いつもよりお腹が空いちちゃったからな。いっぱいくれたらいいんだぞ」

あゝそうなるよな。『炎撃の流星雨』はMP消費が50もある大技だ。ルシエのお腹が減らないわけがない。

「わかってるよ。ほら、これでいいか？」
「ふふっ、うん、うん、うん、うん」

ルシエに魔核を渡すと満面の笑みを浮かべ魔核を吸収し始めた。

817話 音波（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で筆者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

818話 助かったけどハイコスト（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄5は無事9/30に発売されそうです。
よろしく願います。

818話 助かったけどハイコスト

「海斗、危なかったな」

「はい。音波と言われても正直何をされたのかよくわからなかったです」

「私がくらった精神系の攻撃に近いが、音波ならレジストリングがあつたとしても防ぐことは難しいだろうな」

「たしかにそうですね」

レジストリングが効果があるのは精神系の攻撃のみなので、物理攻撃である音波には効果がないだろう。

「目に見えないだけに厄介だな。耳栓という手もあるが、連携が取れなくなるし音の情報が制限されるのは痛い」

「そうですね。攻撃される前に倒すしかないかもしれません」

「おそらく、海斗だけに効果が及んだところを見ると、干渉はそれほど広範囲ではなく正面方向に限定されている気もするから、気配を感じたら正面から離脱する必要があるだろう」

「わかりました」

音も物理攻撃である以上『鉄壁の乙女』であれば防げるとは思うが、数ができれば各自戦う必要もあるので、可能な限り対策しておくべきだろう。

それにしても、今までにない攻撃で完全に戦闘不能に追いやられてしまったので、混乱して焦ってしまったがみんなのおかげで助かった。

メンバーには感謝だな。

俺が、メンバーへの感謝の念を浮かべているとルシエが大きな声で

呼びかけてきた。

「おかわり！」

「おかわり？」

「そう、おかわり！」

いつもよりも多めに渡したにもかかわらずルシエが魔核の追加をねだってきたが『炎撃の流星雨』以外にも『破滅の獄炎』も使用していたし、このくらいは仕方がないな。

「これでいいか？」

「うん、うん、うん」

ルシエは俺の手から奪い取るように魔核を受け取り満足そうに吸収していく。

幸い、この階層のモンスターの魔核は十九階層だけあってかなり大きいので赤字になる事はないと思うが、今までの階層よりも魔核の消費ペースが早い。

「ご主人様……」

「シル、敵か？」

「いえ、私もお腹がすきました」

「ああ、これがシルの分な」

「はい、ありがとうございます」

シルも俺から魔核を受け取り、嬉しそうに吸収している。

魔核を吸収するのその姿は二人とも戦っている時とは全く違う表情で、ただの子供にしか見えない。

「マスター、あの 私も」

「ああ、そうだなティターニアも頑張ってくれたもんな」

ティターニアだけ除け者にすることはできないのでティターニアにも魔核を渡す。

ルシエだけなら少しくらい多めに渡しても赤字は無いと思っていたが、三人に渡すとなると流石に怪しくなってくるが、やはり十八階層までと比べてもモンスターが強くなっているのでやむを得ない。今までの感じていくとやはり平日にもっと集中して一階層を回る必要があるな。

春香とのカフェ巡りもあまりできていないし、正直時間が足りない。放課後潜る時間を少し延ばすか。だけど、もうすぐテストもあるし難しいところだ。

「マイロード、よろしいでしょうか？」

「ベルリア、どうかしたのか？」

「私にも魔核をお願いしてよろしいでしょうか？」

「ああ、そうだな。これがベルリアの分な」

「はっ、ありがとうございます。このベルリア次こそは敵を薙ぎ倒してご覧にいきます」

「うん、がんばろうな」

ベルリアも敵を倒してはいないが戦闘には加わっていたし、魔核が必要なのはわかる。

わかるけどベルリアもか。

やはり、ルシエに大技を使わせるのは無しだな。

819話 軽い命(前書き)

お時間を頂いていたHJ文庫モブから始まる探索英雄譚5の発売まであと1ヶ月となりました。

作業も順調に進んでいるようなので、9/30には非買ってください。
い。
よろしく願います。

819話 軽い命

四人とも魔核を吸収して終わったようだ。
四人を待っている間にひと息ついたので、俺の調子も完全に回復した。

「それじゃあ、そろそろ進もうか。ルシエ、次から『炎撃の流星雨』は本当に危なくなつた時だけにしような」

「わかつてるつて。さっきは海斗がヤバかつただろ」

「まあ、そうだけど」

「ルシエ様、助かりました」

「ふふつ、そうだろ」

「ルシエ姫の判断は流石でした」

「ふふつ、まあ、それほどでもないけどな」

たしかにルシエのおかげで助かつたので、これ以上は何も言うことはできない。

「とにかく、あの犬みたいなやつは要注意だ。正面に立つのは、できるだけ避けた方がいい。本当に一瞬で動けなくなつてしまったんだ」

「そうだな。特に前に出る、私やベルリアは注意した方がよさそうですね。そうですね。それにもしかしたら他のモンスターも特殊攻撃を持っているかもしれないので注意して進みましょう」

わかつてはいたが、やはり十九階層は一筋縄ではいかない。
敵が硬いというだけでも手強いのに、突然未知のスキルにやられて

しまった。

今の俺では同じ攻撃をくらってしまえば耐える術はないのでくならないように立ち回る以外にはない。

当然また、あの犬型が現れれば注意を払いながら戦うが、それ以外のモンスターが突然同じようなスキルを使ってきたら即座に対応できるか自信はない。

この階層のモンスターの動きは総じて初動から速い。常に側面をとりながら戦うのは難しいだろう。

モンスターの特性を把握するまでは、速攻。

本来なら相手の動きをみて動きたいところだが、未知のスキルを発動されるくらいなら、少し強引にでも敵の攻撃をくらう前に速攻で倒すのが一番リスクが低い気がする。

「海斗さん、体調は大丈夫なのですか？」

「ああ、もう大丈夫みたいだ」

「無理しないでくださいね。わたしももう少し上手くサポートできればよかったですけど」

「いや、ヒカリンの魔法には十分助かってるから」

ヒカリンにはなんの落ち度もないのに気を遣わせてしまって申し訳ない。

並んでメタリックなダンジョンを進んで行くが、先程まとめて倒したせいかモンスターに出会わない。

「ベルリア、敵がかなり硬いけどその肉切り包丁で大丈夫か？」

「はい、血を流さないようなので本来の性能を引き出す事はできませんが、何度か戦闘を経たおかげでようやく手に馴染んできました。この階層程度の敵であれば問題ありません。この肉切り包丁はあの黒豚には過ぎた代物だったようです」

「それはよかったですけど、無理して折れても代わりは無いからそのつ

もりでな」

「もちろんです。マイロードからいただいたこの騎士の命たる剣を失うことなどあり得ません」

「……そうか」

ベルリア、騎士の命たる剣を今まで何本折ってきたと思っているんだ。

今ので六本目じゃなかったか？

本当に命なんだったら何回死んだかわからなくなるぞ。

意気は買っけど相変わらずベルリアの言葉は軽いな。

820話 金属のトカゲ（前書き）

9/30発売のモブから始まる探索英雄譚5の予約がアマゾン、楽天等でも始まりました。
是非よろしくお願いします。

書籍版に合わせて、web版の名前を修正中です。
カオリン ヒカリン

現在修正途中につき混在しているのでご了承ください。

820話 金属のトカゲ

「ご主人様、敵モンスターが三体います。この先を曲がったところ
です」

「わかった。前は三人であたるけど、シルとルシエもタイミングが
あれば攻撃して欲しい」

「おまかせください」

「まかせとけて。バ〜ンとやってやるから」

「流星雨は無しだぞ」

「わかってるって」

「ヒカリンとミクは足止めメインで。スナッチは……まあ、いざと
いう時に」

正直、この階層に入ってからスナッチは空気と化している。

『カマイタチ』も『ヘッジホッグ』もこの階層のモンスターには相
性が悪すぎる。

おそらく『フラッシュボム』なら効果がありそうだが、半分自爆攻
撃のようなものなので本当に危ない時以外は使えない。

警戒を強め、ダンジョンを左へと曲がると前方にモンスターの姿が
確認できた。

俺は、集中力を高め、ナイトブリンガーの効果を発動し、アサシン
のスイッチを入れる。

ベルリアとあいりさんの二人とアイコンタクトをし、敵モンスター
へ向けて駆け出す。

幸いにも先程の犬型はいないようだ。

俺は中型のトカゲらしきメタルモンスターへと迫る。

4つ脚のその姿からは、それほど俊敏性は見取れないので組みや
すいようにも思える。

俺の後方から迫るベルリアとあいりさんに反応しているので俺の存在はおそらく認識されていない。

このまま側面へと回り込み断ち斬る。

モンスターの姿を正面に捉え更に距離を詰めようとしたその時、メタルリザードが声を上げ、ベルリアの方へと頭を向けると首の部分が瞬時に傘のように大きく広がった。

俺の直感がシグナルを鳴らす。

このままだとおそらく、何かのスキルが発動される。

傘のように開いた襟巻きが、小刻みに震え始めた。

まずい。

俺は更に速度を上げ、メタルリザードに迫り、バルザードを襟巻きに向けて振るう。

本当はもう少し奥まで踏み込んで胴体を切断したかったが、それよりも相手のスキル発動の方が早いと判断し、対象を切り替え広がった傘を斬り裂こうとするが、バルザードの刃が触れた瞬間硬質な皮膜に弾かれる。

俺は、即座に左手を添え再びバルザードに切断のイメージをのせ再度振るう。

今度は、持つ手に重い抵抗感を感じながらも、切断する事に成功した。

傘の部分は薄い皮膜のように見えたので、完全に油断してしまっただがやはりこの階層のモンスターは硬すぎる。

切断により、傘の震えは止まったが、メタルリザードに認識されてしまった。

目の前にあるメタルリザードの顔が完全にこちらを向いている。

『ファイアボルト』

「ギユアッ」

「海斗さん！ サポートします『アースウェイブ』」

ヒカリンの攻撃で顔が跳ね、動きの止まったリザードの首に向け三度目のバルザードを振るう。

強い抵抗感と共にバルザードの刃が首へと吸い込まれるが、威力が足りないせいで切断には至らない。

「おおおあああ！」

俺はバルザードを持つ手に全身の力をのせて、刃を身体ごと押し込んだ。

821話 メタルスコピオン（前書き）

9/30日発売のHJ文庫モブから始まる探索英雄譚5の書籍化作業が完了しました！

カバーイラストも活動報告で公開中です。

よろしく願います。

821話 メタルスコープオン

バルザードの刃が更に食い込み、振り切ると力が抜けバランスを崩しそうになるのを、右脚を踏ん張り耐える。

そのまま前方へと飛び込み、前転しながら体勢を整えてメタルリザードへと意識と刃を向けるが、動きの止まったメタルリザードが、ゆっくりとその場に倒れて消失した。

無傷で勝つ事はできたが、正直かなり苦戦した。

バルザードを以ってしても硬い。

それにバルザードの刃渡りでは、中型以上のモンスターには一撃でしとめることが難しい。

「ふっっ」

肩で大きく呼吸し、残りの二体に視線を向けると、既に二体にはそれぞれベルリアとあいりさんがあたっていた。

俺もすぐにあいりさんのフォローに入りたいところだが、メタルリザード相手にアサシンの能力を使い、集中し全身の力を解放したせいで身体に乳酸が溜まり、動こうとしても身体の反応が鈍い。

「マスターいきます『ウインガル』」

後方から俺の様子を伺っていたティーターニアがタイミングよくサポートしてくれる。

ティーターニアがかけてくれた『ウインガル』の効果で、身体が軽くなったような感覚があり、駆けるとすぐにトップスピードへと入りあいりさんの下へと向かう。

あいりさんの相手はメタルボディの巨大なサソリ。

あいりさんがその爪を薙刀で弾きながら戦っているが、更に二本ある尾が襲いかかる。

『ラントニングスピア』

尾に向けミクが雷の矢を放ち迫る尾を弾き返すことには成功したものの、ダメージを与えるには至らない。

やはりメタルボディのモンスターは直接的な魔法とは相性がすこぶる悪い。

「やっぱり厳しいわね。これならどう！ 『幻視の舞』」

ミクが続け様にスキルを放つが、モンスターに変化は見取れない。この階層のモンスターには、『幻視の舞』も効きにくいのか？

「これもダメなの！？ 海斗まかせたわ！」

「わかってる。あいりさん俺も一緒に戦います」

「頼む。四方からの攻撃が思った以上に厳しい」

「左半分は俺が受け持ちます」

『ウォーターボール』

俺は魔法を発動してバルザードに氷を纏わせあいりさんの左側に並ぶ。

俺を認識した敵モンスターが俺に向けてハサミで攻撃してきたのを避けるが、その直後上方から尾が迫ってきた。

魔氷剣を振るい迫る尾に斬りかかるが、弾いた瞬間今度はハサミが襲いかかってくる。

俺は咄嗟にアサシンのスイッチを入れ集中し、ハサミを避ける。

なんとか避ける事ができたものの、ハサミと尾の同時攻撃はかなり

厄介だ。

2方からでも厄介なのに、さっきまであいりさんが一人で四方からの攻撃を凌いでいたのは凄い。

あいりさんと二人で凌いではいるが、二方からの攻撃を避けながらでは攻め手に欠ける。

「あいりさん、海斗さん避けてください。『アイスサークル』」

ヒカリンの声が聞こえた直後、俺達とサソリの間には氷の柱が出現した。

822話 19階層は味方も手強い(前書き)

9/30発売のHJ文庫モブから始まる探索英雄譚5の発売まで2週間をきりました。

是非買ってください。

紙をいっぱい買ってもらえると6が出ます。

よろしく願います。

822話 19階層は味方も手強い

メタルスコープピオンは眼前に現れた氷柱に攻撃のターゲットを移し、左右のハサミで氷を削っていく。

俺とあいりさんは氷柱の影から左右に分かれて、メタルスコープピオンの側面へと迫り胴体へと斬りかかる。

『斬鉄撃』

先にあいりさんの一撃がメタルスコープピオンを捉え、金属の皮膚を突き破る。

「浅かったか。くらえ『アイアンボール』」

あいりさんの『アイアンボール』が発動されるとほぼ同時に俺も魔氷剣を振るいメタルスコープピオンへダメージを与えるが、やはりメタルリザード同様硬い。

『ギイイイイン』

直後『アイアンボール』がメタルスコープピオンの頭部へと命中し金属音が響き渡る。

『アイアンボール』が弾かれてしまうが命中した頭部にはくっきりと鉄球の跡が残っているのが見え完全にメタルスコープピオンの動きが鈍った。

俺とあいりさんは再び攻撃を仕掛け、メタルスコープピオンを消滅させることに成功したが、どうやらベルリアの方もシルの助けを借り敵を倒すことに成功したようだ。

「ふ〜」

戦闘が終わり、緊張が解けるが、身体が重く感じる。

これはアサシンと『ウインガル』の効果の反動だ。

アサシンも『ウインガル』も間違いなく、戦闘に於いて俺の助けになつてくれる素晴らしいスキルだが、アニメや漫画みたいに無条件で能力アップするわけじゃない。

普段以上の力を酷使する分、終わってからの筋肉疲労と消耗が激しい。

時間はまだある。

無理をすればもう少し敵と戦うことは可能だが、確実にベストの状態よりも落ちる。

おそらく、これまでの戦闘で他のメンバーも疲労感を感じているはずだ。

「みんな、悪いんだけど今日はここまでで帰ろうと思うんだ。大丈夫かな」

「ああ、海斗がそう判断するならそれがいいだろう」

「そうですね。やっぱり十九階層は手強いのです」

「悔しいけど、今日は私は役に立てなかったわ」

やはりみんなも俺と同様にこの階層の難しさを感じていたようなので、ここで探索を切り上げ十九階層をあとにすることにします。

「おい、何をそのまま帰ろうとしてるんだ」

「いやだから聞いてただろ？ 今日はこちらまでで終わりだぞ」

「終わりじゃない。ほら、ほら」

「ああ……魔核か」

ルシエがいつものように手を伸ばして魔核をねだってきた。

俺は見えていなかったが、確かにシルは戦闘に加わっていたようだし、テイターニアもスキルを使ってくれたので魔核をねだるのはわかる。ただどなんでルシエが1番先にねだってくるんだ。

俺の記憶違いでなければルシエ今回の戦闘ではなにもしていないはずだ。

もちろんシル達に魔核を渡す場合にはルシエにも渡すつもりはあるけど……

俺はマジック腹巻きから魔核を取り出して三人に渡す事にする。

「「ありがとうございます」」

「ちよつと少ないんじゃないか？ ケチだな」

「いや適量だ」

823話 バランスは大事（前書き）

ついにHJ文庫モブから始まる探索英雄譚5の発売まであと1週間となりました。

9/30金曜日には店頭に並びます。早い店舗は9/29に並びるところもあるみたいです。

是非買ってください。最初の1週間にいっぱい買ってもらえると6巻が出ます。

よろしく願います。

823話 バランスは大事

ダンジョンを早めに切り上げたので、家に帰ってカレーを食べてから部屋でくつろいでいる。

かなり身体が重いが、今までの感じだと寝ればなんとか回復すると思う。

明日ももちろん19階層を探索するつもりだが、やはり敵の硬さと初速の速さに対応するために今まで以上に消耗している。

そして俺の1番の心配がバルザードの事だ。

意識をのせればどうにか断ち斬れてはいるが、かなり負担がかかっているのは感じる。

このままでは、また刃が欠ける可能性大だ。

だが、おっさんに依頼してある豚骨剣はまだできていない。

しばらくの間はバルザードに頑張ってもらっしか無いので、当面は魔氷剣として使用した方が無難だろう。

バルザード同様にベルリアの牛魔刀も心配ではある。

バルザードよりもかなり大ぶりなので耐久力はあると思うけど、あ
る意味ベルリアの『アクセルブースト』はスピードとパワーのゴリ
押しなので、かなりの負荷がかかっているのは間違いない。

牛魔刀が折れてしまえば、代わりは豚骨剣になってしまうので、俺
の武器が一本だけになってしまおうのでそれは避けたい。

どうにか武器への負荷を減らして19階層を周りたいと色々考えて
みたが結局何も思いつかないまま、宿題を済ませてから眠りに
ついてしまった。

翌朝目が覚めると、準備を済ませてからダンジョンへと向かう。

取り敢えずバルザードについては極力魔氷剣を使いながら進む事にする。

「ヒカリンは昨日の夜は何食べたんだ？」

「ママがキツシユを作ってくれたのです」

「キツシユ……うちで出てきたことはないな」

「ママのキツシユは世界一なのです」

「あいりさんは、何を食べました？」

「昨日は家の庭の竹林で筍を取ったから筍尽くしだ。放っておくと大変な事になるから、毎年このシーズンは筍を食べることになってる」

「家の庭で筍が取れるんですか！？ 流石はあいりさんですね」

「私がすごいわけじゃないからな。それに毎日のように食べるのは流石にな」

「ああ、そうかもしれないですね」

「私は昨日肉じゃがだったわ」

「え、肉じゃが？ ミクって肉じゃが食べるんだ」

「どういう意味よ。食べるに決まってるでしょ」

「いや、いつもキャビアとかフォアグラばかり食べてるのかと思つた」

「流石にキャビアとフォアグラ毎日は厳しいでしょ」

「まあ、確かに」

「やっぱり松坂牛は肉じゃがにすると最高ね」

「松坂牛……」

「冗談よ」

ミクの場合、十分にあり得る話なので冗談が非常にわかりにくい。

「海斗さんは何を食べたのですか？」

「俺はカレーだよ」

「海斗さん、カレーの回数が多くないですか？ なんとなく2日に

1回くらいはカレーを食べてるイメージがあるのです」

「まあ土日に限ればそのくらい食べてるかもしれない」

「カレーもいいとは思うのですが、栄養バランスも考えて色々なものを食べた方がいいと思うのです」

「そうは言ってもなあ。家に帰るとカレーがあるんだよな」

「そうなのですな」

「海斗、旬のものも大事だぞ。よかつたら筍を分けようか？」

「いや、筍をもらっても多分、料理できないんじゃないかなあ」

俺はカレーが好物だ。だけどヒカリンの言うことは随前から感じてはいた。

ただ今更、母親がバランスを考えて土日の食事を作ってくれるイメージが全く湧かない。

824話 最善手（前書き）

遂にHJ文庫モブから始まる探索英雄譚5が発売です！

電子はbookwalkerならSS特典付きです！

皆様のおかげでTSUTAYAデイリーランキング11位にランクインです！

是非買ってください。

文庫POSランキング500で初登場50位！！

買ってくれた方本当にありがとうございます！！

この週末にいっぱい買ってもらえると6巻が出ます！

よろしく願います。

824話 最善手

19階層を進み、既に昨日のポイントに近い所まで来ている。

昨日、思ったほど探索が進まなかったこともあるが、今日は昨日に比べるとモンスターとの交戦少なめで距離を稼げている。

張り切って今日の初戦を迎えたが、やはり相性の悪さもあり、いきなり苦戦してしまったので、みんなと相談した結果、シルにお願いして敵の数が多い場合は極力迂回しながら進むことに決めたのだ。以前真司たちと潜った平面ダンジョンでは徹底して逃げたが、そこまではない、あくまでも数が多い時は避けるといった程度だが、それでも昨日よりはかなりスムーズに探索を続けることが出来ている。

「マスター、モンスターがいます」

後方からテイターニアの声が聞こえる。

シルからの知らせは何も無い。

この感じは昨日もあった。もしかしてあいつか？

「マイロード、同じ個体かどうかはわかりませんがあそこにいます」

ベルリアの指す方をよく見ると確かに床と同化したようなメタルスライムがいる。

昨日、しとめ損なったアイツと同タイプのスライムに間違いない。

「昨日逃げたアイツか。また現れるとはいい度胸だな。燃やし尽くしてやる」

「ルシエ、ちょっと待て」

昨日の戦闘でルシエの獄炎が効果的で無いのは既にわかっている。シルの雷撃でもダメだった。炎と雷がダメなら物理攻撃だが、ベルリアの攻撃もダメであっさり逃げられた。

アイツをしとめるには、更に素早く高火力な一撃。

シルのラジュネイトを用いた一撃ならいける気もするが、より高い火力を求めるならタメが必要となる。

あのスライムは異常に素早い。

タメを必要とする攻撃は避けられる気がする。

スルーして先に進むのもひとつの手だとは思うが昨日しとめ損なっただけに可能なら倒したい。

スライムスレイヤーの俺がスライムを前にして逃げるという選択肢はない。

「ベルリア、俺がしとめるから注意を引いてくれ」

「おまかせください」

俺はベルリアに声をかけると、右手にバルザード左手に殺虫剤を持ちナイトプリンガーとアサシンの効果を同時に発動しスライムの方へと慎重に距離を詰めていく。

先に飛び出したベルリアが、反対側に回り込みメタルスライムの移動を限定する。

ベルリアの動きに合わせて、メタルスライムが高速で移動するがベルリアのおかげで俺に近い位置へときた。

俺は気配を薄めたまま速度を上げ、射程へと踏み込む。

『愚者の一撃』

昨日のことを考えても何度もチャンスがあるとは限らないので、俺

は迷わず必殺のスキルを発動し左手に持つ殺虫剤のトリガーを引く。メタルスライムに向け、必殺の殺虫剤プレスが放たれる。

いつもと変わらない霧がスライムに向け伸びていく。アサシンの効果で、ゆっくりと霧が伸びていくのを感じるが、その霧は確実にメタルスライムを捉えた。

今まで『愚者の一撃』が殺虫剤プレスにまで効果が波及するのか試したことはないが、これが俺にできる最善手。

スライムスレイヤーのスキルと合わさり、殺虫剤プレスは必殺の一撃へと昇華したはずだ！

824話 最善手（後書き）

ピッコマでコミカライズ版の単話売りが始まるそうです。
興味のある方は是非！

825話 メタルスライムの最期（前書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚5の発売から1週間が経過しました。

皆様のおかげでこの1週間POSランキングにランクインする事ができました。

買ってくださいった読者の方は本当にありがとうございます。

まだの方は是非この週末によろしく願います。

825話 メタルスライムの最期

いつもと変わらぬ薬剤の霧が、特別な力を宿し必殺の攻撃へと変わった気がする。

ベルリアに気を取られ、俺の存在を忘れていたであろうメタルスライムは、再度のその高速移動を発動することなく、殺虫剤ブレスの餌食となった。

『愚者の一撃』を発動したせいで身体の力が急速に抜けていく。どうだ！

俺は殺虫剤のトリガーを引き続ける。

いくら素早くてもメタリックなボディであっても、効いたはずだ。殺虫剤ブレスが続く中、メタルスライムはその場から動くことなくその姿を消した。

「やった」

昨日は逃げられてしまったが、今回はやった。メタルスライムをしとめる事に成功した。

メタリックなそのボディとその異常とも言える素早さから、俺は密かに期待していた。

最初は違うと思ったが、もしかしたら形こそ違えど、シル達を残したメタリックカラーなスライム達と同種なのではないかと。

そしてメタルスライムの消えた跡を凝視すると残されていた。いつもと変わらぬ魔核が……

「そうだよな。そんなうまい話はないか……」

気落ちした、俺の耳にベルリアの声が聞こえてくる。

「マイロード!!」

「うん？ ベルリアどうかしたのか？」

スライムの魔核から視線を上げベルリアを見る。

「ベルリア！ それって……」

「ご主人様！」

「シルも……いや、みんなか!？」

後方のメンバーに目を向けると、スナッチを含めたサーバントが全員光っている。

これはレベルアップ。

そういえば『愚者の一撃』で消耗したはずの俺の身体も倦怠感が消えている。

まさか、俺もレベルアップしたのか？

俺は慌てて自分のステータスを確認する。

高木 海斗

ジョブ アサシン

LV 25 26

HP 100 105

MP 68 73

BP 100 104

スキル

スライムスレイヤー

ゴブリンスレイヤー（微）

鬼殺し

神の祝福

ウォーターボール

苦痛耐性（中）NEW

愚者の一撃

不撓不屈

おおおお〜！

本当にレベルアップしている。

前回ジャグルと戦ってからほとんど時間が経っていないというのにレベルアップしている。

いくら19階層の敵が強いといっても、こんな短期間にレベルアップするのは異常だ。

となれば、考えられることはひとつだ。

さっき倒したメタルスライム。

あのメタルスライムの持つている経験値が異常に高かった。

それくらいしか考えられない。

しかもサーバントのレベルは俺のレベルよりずっと上がりにくいはずだ。

それが、全員レベルアップしているように見える。

ある意味レアアイテムを引き当てるに匹敵する出来事なのではないだろうか。

あまりに予想外の出来事に興奮を抑えきれないが、再度自分のステータスを確認する。

各ステータスは順調に伸びている。

そして新しいスキルが発現することはなかったが、苦痛耐性（弱）が苦痛耐性（中）へと昇華している。

苦痛耐性が明らかに他のスキルよりも昇華するのが早いのは、それだけ俺が苦痛に耐えているという事の裏返しなのかもしれないが、この瞬間、とにかく俺はレベル26に到達した。

826話 メタルスライムの経験値（前書き）

9/30発売のHJ文庫モブから始まる探索英雄譚5 まだの方は是非！ 書店新刊コーナーで買えます。book walkerでもランクイン中です！ よろしく願います。

826話 メタルスライムの経験値

そしてサーバント達も全員レベルアップした。

ジャグルを倒した際にレベルアップしたばかりなのに今回レベルアップした。

まだ19階層の序盤なので、ジャグル戦からそれ程経験値が溜まっていたとは考え難い。

恐らくだがメタルスライムの経験値は完全に階層主のそれを凌いでいるのではないかと思う。

残されている魔核は他のモンスターが残したものとほとんど変わらないように見えるので、ボスモンスターとかではなく経験値だけが突出しているのだろう。

もしかしなくてもメタルスライムはとんでもないボーナスモンスターだ。

例え特別なドロップがなくても一体倒せばその度にレベルアップする程の経験値を得ることができるのであればこれほどおいしいモンスターはいない。

もしかしてメタルスライムばかり探して倒せばとんでもない事になるんじゃないか？

やはりスライムは、このダンジョンにおいても特別。

なぜか、みんな雑魚扱いで見向きもしないけど本当に特別な存在だと思う。

とりあえず順番にシル達のステータスを確認してみる。
まずシルだが、

種別 ヴァルキリー

NAME シルフィー

Lv 6 7
HP 220 238
MP 162 180
BP 280 300

スキル

神の雷撃

鉄壁の乙女

戦乙女の歌

楽園の泉

祈りの神撃

装備 神槍 ラジュネイト 神鎧 レギネス

新しいスキルは発現していないが、ついにBPは300に届いた。
どうにか並び追い越したいと思っていたがBPに関しては俺のほぼ
3倍。

しかもその差は200。

実際の強さにおいては3倍どころではないので、今の段階でそれは
現実的ではない。

どうにか主人として馬鹿にされないよう必死でついていくしかない。

種別 子爵級悪魔

NAME ルシエリア

Lv 6 7

HP 135 144

MP 225 240

BP 218 235

スキル

破滅の獄炎

侵食の息吹

暴食の美姫

黒翼の風

炎撃の流星雨

装備 魔杖 トルギル 魔装 アゼドム

次にルシエだが、こちらもスキルの発現はないがBP 235。
シルには劣るが、俺からしたら既に手の届かない数値にまで上昇している。

しかも裏技的な『暴食の美姫』があるのでBPだけでルシエの強さを測る事は出来ない。

それにしても二人共レベル7になったので微妙に大きくなった気も
しなくもないが、毎日のように会っているせいかレベル1の時と比べてもそれほど違いを感じられない。

この調子で大きくなったとしてもカードの描かれているような絶世の美女にまで成長するのはいったいいつのことだろう。

まあ、ルシエに関しては、大きくなったら態度も大きくなりそうなのでなんとも言えないところだ。

もちろん自分がレベルアップするのはうれしい。

だけど、シル達がレベルアップするのもまたうれしいものだ。

これは多分サーバントのマスターにならないと味わえない感覚かもしれない。

きつとミクもスナッチに対して同じような気持ちなんじゃないかと思うが、家族の成長を見守っているかのような感じだ。

ルシエは怒るかもしれないが、感覚的に妹が幼稚園を卒業したか、小学校に入学した時のような感覚に近いかもしれない。

まあ、俺には人の妹はいないので違っているかもしれないが。

827話 みんなのレベルアップ(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄5まだの方は是非書店新刊コーナーでよろしくお願いします。

827話 みんなのレベルアップ

そしてベルリアとティターニアも同様にレベルアップを果たした。

種別 士爵級悪魔

NAME ベルリア

LV4 LV5

HP 97 110

MP 108 117

BP 118 130

スキル

ダークキュア

アクセルブースト

ヘルブレイド

ファントムステップ

グラビティストライクNEW

装備

魔鎧 シャウド

肉切り包丁

グラビティストライク …… 重力を倍化させた一撃を放つ事が出来る。その倍率はBPに依存する。

ベルリアのレベルが5となったが、なんとなく今までよりもステータスの伸びが高い気がする。

俺がレベルアップにより超えたと思ったHPは再び逆転され、BPについてもまた離された。

そして、シルヤルシエにスキルは発現しなかったがベルリアに新たなスキルが発現していた。

『グラビティストライク』確認する限り近接スキルのように感じる。アクセルブーストと似た性質を持っているようにも感じられるが、もしかしたら併用が出来るのかもしれない。

倍率とはおそらく重力の重さだと思うのでレベルアップすればそれに応じてスキルに威力も増すという事だろう。

最初は、『ダークキュア』のみだったベルリアのスキルは完全に前衛のそれになりかなり強力に思える。

いずれにしてもベルリアのスキル名は、俺のに比べるとやたらと格好いい名称が多い気がする。

ステータスに表示の中で肉切り包丁だけが異質だが、それ以外は全部横文字で格好いいな。

種別 フェアリークイーン

NAME ティーターニア

LV 3 4

HP 82 90

MP 92 101

BP 88 98

スキル

ウィンガル

キュアリアル

ユグドラシル

フェアリーダンス

初期状態では少し見劣りしていたティーターニアのステータスも今回のレベルアップで、ほぼ俺のステータスと変わらない数値まで上昇しておりMPに関しては俺を大きく上回っている。

もしかしたら次のレベルアップで完全に上をいかれる気がするが、

これでテイターニアがすぐにやられてしまうような心配はほとんどなくなつたとも言える。

後衛のステータスとしては十分だろう。

そして、レベルアップしたのは、他のメンバーも同様でみんな突然のレベルアップに驚いていたが、その中でもあいらさんは、

「これで、また一步シルバーへと近づく事ができたな。海斗、すぐに次のスライムを探すぞ！」

とやたらとテンションが上がっていた。

俺がシルバーに上がった事をかなり気にしていた様子も伺えたので、あいらさんにも早くランクアップしてもらえたらそれにこした事はない。

最後にスナッチもレベルアップを果たし、なんと新しいスキルを発現したらしい。

新しいスキルの名前は『ボルグショット』

名前からはよくわからないが、強力な攻撃スキルらしく、ミクがこの階層で試してみると言っているので楽しみだ。

19階層に入ってからスナッチは完全なマスコットと化しているのでもし戦力になるなら、かなり戦いを有利に進める事ができるようになるかもしれない。

19階層はかなり苦戦中なので全員がレベルアップした事で、少しでもスムーズに探索を進められるといいなあ。

828話 探索のお供はコーラ？ スポーツドリンク？ いや緑
茶でしょ（前書き）

HJ文庫モブから5をよろしく願います。

モブから6は出るといいな。

年末か年明けくらいに秋田書店モブから2が出るかもしれません。
よろしく願います。

828話 探索のお供はコーラ？ スポードリンク？ いや緑茶でしょ

レベルアップしてから何度かモンスターと交戦して楽勝とはいかないものの、慣れも相まって少しだけ攻略がスムーズになった気がする。

「あゝ疲れた。やっぱりモンスターと戦った後はコーラだよな」
俺はマジック腹巻きからコーラの入ったボトルを取り出して喉を潤す。

「海斗、ジュースを飲むにしてもそこはスポードリンクとかじゃない？」

「もちろんスポードリンクもいいけど、コーラの喉越しが疲れた身体にたまらないだよ」

「海斗さん、仕事終わりのおじさんみたいなのセリフですね」

「そうかな。みんなはスポードリンク飲んでるのか？」

「いえ、私はこの前からミクさんに勧めてもらってお茶を飲んでるのです」

「お茶？」

「はい、緑茶なのです」

「麦茶じゃなくて緑茶？」

「はい、緑茶なのです」

「そういえば海斗には勧めてなかったかも。あいらさんも今は緑茶よ」

「そうなんだ」

スポードリンクでも麦茶でもなく緑茶？ あいらさんはキャラ的

にわかる気がするけどミクが勧めたっていうのが意外だ。

「パパの取引先の人を送ってくれて飲んでみたら美味しかったのよ。それに今若い女性を中心に緑茶が流行ってるの知らない？」

「いや、全然知らなかったよ」

「春香とかも学校なんかで飲んでなかった？」

言われてみれば、春香も前澤さんも最近お昼休みとかにお茶を飲んででいた気もするな。

特に気にしてなかったけど、あれは流行りだったのか。

「これ信楽にある『茶のみやぐら』っていうお店の『朝宮茶』なんだけど。よかつたら海斗も飲んでみる？」

「信楽って静岡だっけ？」

「全然違うわよ。滋賀県よ。日本最古の茶産地って言われてるのよ」

「えー！ お茶と言えば静岡じゃないのか？」

「もちろん静岡も有名だけど、福岡の八女茶とかも有名だし、この朝宮茶は平安時代から続く伝統のお茶で、まるやかな甘みの中に爽やかな渋みがあって美味しいのよ」

「そうなんだ」

「小野小町とか清少納言とかも飲んでたかもしれない由緒正しいお茶なの。そう想いを馳せたら、時代を越えてロマンティックじゃない？」

俺は、コーヒーも苦手だが、実は苦味のある緑茶もあまり得意ではない。お茶と言えばいつも麦茶だ。

「緑茶には疲労回復効果があるし、口の中を殺菌してくれるから長時間の探索にはもってこいなものよ」

「緑茶に疲労回復効果？ 知らなかった」

「カフェインで集中力が上がるしテアニンっていう成分でリラックスしたり疲労回復したりするのよ。殺菌効果のあるカテキンは知ってるでしょ」

「カテキンは俺でもわかるよ」

「暑い時には水出しで、ホツとしたい時にはあったかいのがおすすめよ。よかつたら一杯飲んでみる？」

「じゃあ、せつかくだしいただこうかな」

ミクからもらったお茶を飲んでみる。

少し渋みを感じるが、それよりも爽やかな甘味が強い。思ったよりもずつと飲みやすい。

「は〜っ……」

なんか落ち着くな。カフェで飲んだコーヒーより随分飲みやすい。

「どっつ？」

「ああ、なんかいいかも。落ち着く。今まで飲んだことある緑茶よりも飲みやすい気がする」

「そっでしょ？ 歴史ロマンに浸れるでしょ？」

う〜ん、正直歴史ロマンはよくわからないけど、疲労回復効果に口臭予防であるなら確かにありかもしれない。

せつかくなので今度からコーラと併用してみようかな。

829話 魔法剣(前書き)

HJ文庫モブから5絶賛発売中です。

829話 魔法剣

俺はレベルアップを果たした事で試してみたい事があって、ミクに付き合ってもらっている。

「それで私はどうしたらいいの？」

「ミクのスキル『ファイアースターター』でバルザードに火を放つて欲しいんだ」

「火を放つって刀身の部分につて事？」

「そう。19階層の敵が手強いから魔氷剣だけじゃなく、新たな魔法剣を使えないかと思つて」

「バルザードつて人が付与したのででもいいけるの？」

「たぶん。試した事ないけど魔氷剣の事考えたらいいけると思つ」

「かなり熱いと思うんだけど、本当に大丈夫？」

「昨日のレベルアップで苦痛耐性が中まで上がったんだ。だからいける気がする」

「苦痛耐性中つて、それだけ普段苦痛を感じてるつて事？」

「まあ、主な原因はルシエだろうけど」

19階層の敵は硬い。

魔氷剣を多用する事になるが、それでも手こずっているのが現状だ。そして、俺のMPはそれほど多くは無いので、魔氷剣の連発は正直かなりきつい。

そこで考えたのが、他のメンバーによるバルザードの魔法剣化。ラノベとかによくあるエンチャント的な感じでいけないかと思つている。

今までは、自信がなかったけど、苦痛耐性が中になった今ならいけそうな気がする。

それになんとなくだがミクの『ファイアースターター』はその効果がエンチャントっぽい。

「それじゃあいくわよ」

「ああ、頼む」

ミクが『ファイアースターター』を発動させ、バルザードの刀身が炎を纏う。

「おお、いけた？」

俺は炎を纏ったバルザードを振るってみる。

バルザードの軌道に合わせて炎が残像を残し揺らめく。

バルザードを持つ手が徐々に熱くなってくるが、苦痛耐性（中）が仕事をしてきているのか耐えられないほどでは無い。

「海斗、確かに火が弱点のモンスターには効果ありそうだけど、1

9階層のモンスター向きではないんじゃない？」

「たしかに」

炎を纏ったバルザードだが、強度や斬れ味が増したような感じはしない。

「おい海斗、今度はわたしの獄炎いつてみるか」

「いや、それはやめておこう」

「なに、なんでミクのは良くてわたしの獄炎はダメなんだよ！」

「ダメなものはダメだ」

ルシエの獄炎は論外だ。

基本滅せない限り消えない上に広範囲の炎なので、バルザードに放

「つたら俺まで燃えてしまふ可能性が高い。」

「ケチ、せつかくわたしが手伝ってやろうと思ったのに」

「シル、最小の雷撃を落とせるか？」

「はい、もちろんです」

「おい、ちよつと待て！」

「本当に最小だからな。やりすぎると俺死ぬから」

「はい、もちろんです」

「おい！」

「じゃあ、やってくれ」

ルシエは信用ならないが、シルの雷撃なら可能性がある。

もちろん最小の威力じゃ無いと消し炭になってしまふ恐れはあるが、ルシエと違ってシルなら信用に足る。

『神の雷撃』

シルが雷撃をバルザードの刀身に向け放った。

閃光が走り、バルザードが強烈な光を放ち、バルザードを手に持つ俺の身体に電撃が走った。

「あ、あ、あ、あ、ああ」

全身がビリビリして特にバルザードに触れている手が痛い。

痛いがなんとか耐えられるくらいの痛みだ。

俺はそのままバルザードを振るってみるが、雷撃を纏ったバルザードはまさに雷神剣。

以前使っていた雷の魔刀とは比較にならない閃光を放ち空を斬る。間違いない今までの3種の中で最強の威力を持っていることがわかる。

だが、何度か振るっている間も絶えず電撃が襲ってくるため、ただの素振りなのに消耗が激しい。

「はあ、はあ、はあ」

「おい、やっぱり獄炎もいけるだろ」

「無理、絶対に無理」

使い所があるかはわからないが、この雷神剣とミクに手伝ってもらった炎熱剣がどうにか使えそうなのがわかったので、それは成果と呼べるだろう。

ただ、雷神剣を使用している間はずっと髪が逆立っているらしく、見ていたミクが大笑いしていた。

830話 豚骨剣(前書き)

HJ文庫モブから5の発売から1ヶ月、買ってくれた方々本当にありがとうございます。

まだの方はよろしく願います。

作者は、またいつものように籠り始めます。

12月から作業が増えそうですが、更新できるように頑張ります。よろしく願います。

830話 豚骨剣

魔法剣を試し目処がついたので一階層でスライム狩りに励んでいると、木曜日の昼に武器屋のオッサンから連絡が入っていた。

予定よりも少し早いのが、頼んでいたジャグルの骨で作った剣が出来上がったらしい。

「こんにちは」

「おう、坊主が出来てるぞ」

「あれ？ なんかいつもより元気がないような……」

「そりゃあ、元気もなくなるぞ。金に目くらんで安請け合いましたのが間違いだった。なんだあの骨。ふざけた強度じゃねえか。ドラゴンの牙よりかて。普通に熱しようが、叩こうが削ろうがびくともしねえ。あゝこんな事なら1000万はもらいたかったぜ」

「1000万は無理ですよ」

「わかってるって。俺も男だ。1度吹っかけた金額を違えるような事はしねえ」

ふっかけ……

やっぱりふっかけてたのか。

「それにしても、俺が扱った事のある素材の中でも一二を争う厄介さだったぜ。おかげで徹夜しちまったじゃねえか。おかげで肌艶落ちてくすんじまったぞ！」

それでいつもの元気がないのか。それにしてもオッサンでも肌艶とかくすみとか気にするのか。もしかしてこのオッサン意外に心は乙女とかあるのか？

……いや絶対それは無いな。

「ちょっと待ってる」

そう言っているとオッサンは裏へと下がって行き、一本の剣を持って現れた。

「おおっ！」

思わず感嘆の声をあげてしまったが、その剣は見惚れるほどに美しくかった。

真っ白な白磁を思わせる光沢のあるその刀身はとてもあのジャグルの骨からおっさんが打ち出したとは思えない程に流麗。

「どうだ？　すげえだろ。俺の渾身の作だぜ。名付けて豚骨剣だ」
「豚骨……剣」

「ガハハハ、冗談だ。こんだけ苦労して作って豚骨剣はねえだろ。白麗剣つてところか」

「白麗剣ですか。いいですね」

「厨二の坊主にピッタリの名前だろう」

「その言い方はあれですけど、いいですね」

「聞いて驚くな。この剣よゝ特殊効果が出てんだぞ。立派な魔剣だ！　全部俺のおかげだぜ？」

「魔剣ですか。それでいったいどんな効果が？」

「不折だ」

「不折？　折れないってことですか？」

「おう、この剣は元々素材の強度がおかしかったんだけどよゝ。この俺がスペシャルなスキルで仕上げた事で折れない刀になったって事だ」

「それって凄くないですか？」

「おうすげえだろ。俺がな」

「折れないってことは、逆に言つとなんでも斬れるってことですか？」

「まあ、そうとも言えるかもな。そこは使う奴の技量次第じゃねえか」

「技量次第でオリハルコンとかでも斬れたりしますか？」

「おいおい、それは無茶つてもんだろ。物事にはなんでも限度つてもんがあるんだぞ。常識だろうが」

まあ、それはそうか。

そもそも技量次第と言われても俺にそれほどの技量があるとも思えない。

それにしてもあのジャグルの豚骨が、こんな魔剣になるとは望外だが、これで武器は揃った。

週末の19階層の探索が楽しみだ。

「坊主、鞘どうする？」

「鞘ですか。欲しいです」

「その剣に合う鞘だとオーダーメイドだからな。まあオマケして百万でいいぞ」

「え……」

「おいおい、なんて顔してんだ。そんなぐらいい稼いでんだから払えるだろうが」

「いや、でも……」

「冗談だ」

冗談……おっさんが言つと一切冗談には聞こえない。

「二十万でいいぞ」

「まあ、それならお願いします」

百万に比べたら安く感じるけど、鞘で二十万って結構するな。

「じゃあ、これな」

「いや、さっきオーダーメイドだって」

「俺が剣を仕上げて鞘を作ってないわけね？ だろうが」

「そうですか」

「ほらピッタリだろうが、この黒い鞘にその白い刀身。俺ってやっぱりすげえな」

確かに白い刀身に黒い鞘はピッタリマッチしてカッコいいが、このオッサンの自分押しはなんだろう。

831話 カラオケ（前書き）

昨日知りましたが、モブからが受賞したHJネット小説大賞2019の大賞受賞作夢見る男子は現実主義者が2023年アニメ化だそうです。おけまる先生おめでとございます。この年はモブから含め受賞作のうち3作品が5巻越え。そして受賞者の御子柴奈々先生も氷剣の魔術師で2023年アニメ化。御子柴先生おめでとございます。受賞者からアニメ化が2名出るとは本当に当たり年でした。モブからはこれからも地味に頑張りますのでよろしくお願いします。

831話 カラオケ

「海斗く聞いてくれよ」

「どうしたんだ？ なにかあったのか？」

「最近茜ちゃんからの返信が減ってきた気がするんだよ」

「前は長文で返してくれるとかって言ってたか？」

「そうなんだ。前は長文だったのに今は、ほとんど一言だけ」

「なにかやらかしたのか？」

「いや、なにもやってない。思い当たることがない」

「一緒に出かけたりもしたんだろ」

「おう、カラオケには何回も行ってるぞ」

そういえば隼人は、以前カラオケ、カラオケって言ってたな。

「カラオケか。いいんじゃないのか。隼人はどんな曲歌ってるんだ？」

「そりゃあ、女の子と2人でカラオケ行ったらラブソングだろ」

「ラブソングか。そういえば俺と真司も連れられて練習してたな。

他は？」

「ラブソングメドレーだ」

「そうなんだ。もしかしてずっとか？」

「もちろんだろ」

どうなんだ。相手といい感じだったらアリなのか？ それともこれが原因なのか。俺達と行った時もずっとラブソングだけ練習してたな。

「カラオケ以外はどこに行ってたんだ」

「一回だけカフェに行っただけだな」

「もしかして一回以外はカラオケか？」

「おう、女の子と2人の定番だろ」

多分だけど、これが原因だな。毎回カラオケでラブソング。そりゃあ嫌にもなるかもしれない。

「隼人、茜ちゃんはカラオケでどんな感じなんだ？」

「毎回俺のラブソングを静かに聴いてくれてるぞ？俺はこの為に猛特訓したんだからな。海斗も知ってるだろ？」

「まあ、一緒に行っただけだからな。隼人、俺から言えるのはカラオケはやめておいたほうがいい」
「なんでだよ」

ああ、こういうのは自分ではわからないものなんだな。いや、俺も隼人のことを言ってもらえない。俺も最近春香をカフェばかりに連れて行ってる気がする。

まずい。こんなんじゃない、隼人みたいに短文しか返ってこなくなる。早々に隼人との話を切り上げ、急いで春香のところへ向かって声をかけてみる

「春香、よかつたら放課後どっか行かないか？」

「今日ダンジョンは行かなくていいの？」

「うん、今日は大丈夫なんだ。どこか行きたいところとかない？」

「それじゃあ、カラオケ行ってみたいな。海斗と行った事なかったでしょ」

「カラオケか。うんいいんじゃないかな。駅前のカラオケ行こうか」
「うん、楽しみだね」

まさかのカラオケ。いやでも隼人の場合とは違うから問題ないな。

いや問題はある。

俺は歌が上手くはない。上手くはないというより音痴だ。だけど春香が行きたいと言ってくれたんだから行かないという選択肢はない。

放課後になり春香と2人で駅前のカラオケ店へと入る。

「海斗、どっちが先に歌う？」

「もちろん春香が先に歌って」

「それじゃあ、お言葉に甘えて先に歌うね」

よく考えてみると春香の歌を聞くのは小学生の時の音楽の授業以来だけど、流石にその時の歌声までは記憶にない。待っているとすぐに春香の入れた歌が始まった。

「あなたとくあの日一緒に見た夢かなえたいから……」

うまい。ものすごくうまい。こういうのを天使の歌声とでも言えばいいのか？ 春香の澄んだ声が部屋を包み、歌詞が心に染み渡ってくる。

あまり詳しくはないが、テレビに出てくるアイドルなんかより百倍オーラがあって、これが歌姫。

「海斗、どうだったかな」

「うん、いい。すごくいいと思う」

「よかった。じゃあ次は海斗ね」

「あ……」

春香の歌声に聞き惚れていて失念していたが、俺の番……

やばい。何を歌えばいいんだ。普段それほど音楽を聴くわけではないので最新チャートにのっているような曲は歌えない。

だけど、この場で昔のアニメソングを歌うのも違う。

いや、俺にも歌える歌がある。

それは隼人に付き合わされて一緒に練習させられたラブソングの数々。

昔のアニメソングと隼人仕込みのラブソング。

どっちが正解なんだ。

832話 カラオケソング（前書き）

モブからとは関係ありませんが、明日ワールドカップ日本戦です。作者はサッカーとサッカー漫画が大好きです。

AbemaTVさんワールドカップの放送ありがとうございます。本田さんの解説も良かったです。

興味のある方は19時から一緒に応援しましょう。

832話 カラオケソング

「君の瞳に恋をした。僕の心は切なさでフォーリンダウ
ン」

結局俺は悩んだ末に、隼人に付き合わされて、歌えるようになった
ラブソングを選んだ。

春香も目の前で昔のアニメソングを歌われてもテンションが下がる
だろうから、もうラブソングで押し切るしかない。

というより、隼人がラブソングのみをひたすら練習していたので、
当然俺が歌えるのもラブソングしかない。

春香が真剣に聴いてくれているのがわかるので必死に歌い切る。

「海斗、いい歌だね」

「そうかな、なんとか歌えたよ」

カラオケに2人でくると、春香の歌声をずっと聴いていられるのは
嬉しいが、それは数分毎に俺の順番になるということで、あつとい
う間にまた俺が歌う事になってしまった。

「愛が燃える。世界中が敵だとしても俺はバニング」

うつつ、隼人と一緒に歌っていた時には何も感じなかったが、春香
の目の前でこれを歌うのは流石に恥ずかしい。

俺の下手な歌と、この歌詞にもかかわらず、春香が真剣に聴いてく
れているのを見ると歌詞に劣らず羞恥で俺の身体もバニングしそ
うになる。

「海斗、カラオケには結構来るの？」

「いや、そうでもない。ほとんど来たことないし」
「そうなんだ」

なんとなく春香の反応がさつきと違う気がするけど、下手すぎたかどうか。

会話もそこそこに春香の歌が始まる。

「カシューナッツ」私、大好き。あなたがスパイだとしても」

先程同様に春香の美声に酔いしれる。

全然知らない歌だけど、春香が歌うと名曲に感じてしまう。

鼻屑目なしで、巷のアイドルなんかよりずっとうまいんじゃないだろうか。

「やっぱり、春香歌がうまいね。今の曲流行ってるの？」

「海斗、ダンジョンも大事だけど、世の中のことにもちょっとは目を向けた方がいいかも。入試に時事問題とかも出たりするから」

「そうだよな。ダンジョンじゃスマホも繋がらないし毎日潜っていると、世間から取り残されてる実感はあるんだけど、こればかりはな」

やっぱり流行りの歌だったらしい。

ダンジョンと日常生活の両立か。

上位陣はほとんど籠ってるような人もいるって言うしな。

正直隼人経由のラブソングしか歌えないのもヤバい実感はあるが、次もラブソングしかない。

「わずかなこの刻で、一生分の恋をしたあ」

「海斗、続けてラブソングだね。やっぱり結構歌い慣れてる気がするんだけど、もしかして誰かに歌ったりした？」

「いや、前に隼人に付き合わされたんだよ」

「男の子だけでラブソング？」

「ああ、真司もいたけど、主に隼人の希望で。どうしても女の子とカラオケ行く時の練習だった」

「男の子3人でラブソングの練習してたの？」

「そう。隼人がラブソングしか歌わないから、3人でずっとラブソングだけ練習したんだ」

「そうなんだね。隼人くんらしいね」

「前にダンジョンで知り合った女の子とよくカラオケに行ってラブソングを歌ってるんだって」

「もしかして隼人くんの彼女なのかな」

「うーん彼女って感じではないと思うけど、最近は、連絡が少なくなってるって嘆いてたな」

「そうなんだ。多分だけど隼人くんもいろんな歌を歌った方がいいと思うな」

「あーごめん。俺あんまり知ってる曲がないんだけど。古いアニメソングでもいいかな」

「ううん、海斗は別にいいんだけどなあ」

結局、この後は古いアニメソングもなんとか歌い切ったが、音痴な俺を春香が暖かい目で見てくれていた気がする。

今度カラオケに来るまでには、ラブソング以外も歌えるようになっておこうと思う。

833話 右手に白麗剣左手にバルザード(前書き)

ワールドカップのおかげで作業が滞ってしまいそうですが、頑張ります。

クロアチア戦は24時からです。

833話 右手に白麗剣左手にバルザード

「それが海斗の新しい剣か。とてもあの豚骨から削り出されたとは思えない出来だな。かなりの名工の手によるものだろう」

「あいらさん、そう見えますか？」

「ああ、間違いないな。それほどの技、今の時代なかなか見られないものだ」

「これ、武器屋のおっさんが自分で打つたんですよ」

「ほう、あの店主が。人は見かけによらないものだな」

「はい、お金と筋肉だけの人じゃなかったのかもしれないです」

武器を見慣れているであろうあいらさんが言うのだから、おっさんが打つたこの白麗剣、所謂業物なのだろう。あのおっさん、ぼつたくらいかけたが、仕事はキッチリやってくれるタイプなのかもしれない。

「ご主人様、モンスターがきます。数は四体です」

「わかった。みんないつも通りにいこう」

その場で隊列整え、敵モンスターが現れるのを待っているとすぐにメタリックカラーなモンスター達が眼前へと出現した。

俺はナイトブリンガーとアサシンの能力を発動し、モンスターへと駆ける。

俺の相手はメタルリザードマン。

両手に持つ剣をしっかりと握りしめ距離を詰める。

こちらの動きに合わせてメタルリザードマンも武器を構える。

この階層の敵を相手にして完全に気配を消す事ができないのは織り込み済みだ。

それでも、相手の動きが鈍ればいい。

正面からズレ、間合いに入った瞬間右手に持つ白麗剣をメタルリザードマンに向け振るう。

メタルリザードマンも反応を見せるが、こちらの方が速い。

白麗剣の刃がメタルリザードマンの腕を捉える。

『ガギイイイン』

硬質な音と共に抵抗感が手首と腕全体にかかるが、ステータスの全てを乗せ振り切る。

続け様に一步踏み込み、左手に持つバルザードに切断のイメージをのせ更に一閃する。

バルザードがメタルリザードマンの残った腕を落とし、完全に死に体となったモンスターを白麗剣の一撃で消滅させる事に成功した。

そのまま、もう一体のモンスターへと走る。

カオリンがアイスサークルで足止めしているメタルゴブリンの背後へと回り込み頭部へと渾身の一撃を叩き込む。

先程同様に右腕に強い抵抗感が伝わってくるがそのまま力押しで振り切りメタルゴブリンを倒した。

いける。

バルザードだけで戦っていた時よりもやり易い。

それにこの階層で初めて使った白麗剣だが、メタルモンスターを断ち切る強度を備えているのがわかる。

流石に豆腐を切るようにはいかないが、十分な斬れ味と強度を持つ手からも感じる事ができる。

実際には、俺の技量が足りないのかその強度を以ってしても全身の力を込める事でようやく斬ることができているが、確実に自分の戦い方に幅が出た。

おっさんに頼んでよかった。

普通に感謝だ。

ベルリアは牛魔刀で相手を完全に押し込んでいたのであいりさんの
フォローに入る。

「海斗、早いな」

「あいりさんフォローします」

「ああ、私も負けてられないな。やあああああ〜『斬鉄撃』」

833話 右手に白麗剣左手にバルザード（後書き）

途中まで書いた新作が何本か完全に埋没してしまっているので、来年こそ書き上げたいです。

834話 硬度(前書き)

ブラジルクロアチア戦を観ましたがクロアチアすごかった。
朝起きたらもう一試合もPKでした。
ここまで来たらどの国も強い。

834話 硬度

あいらりさんの一撃が、敵モンスターの脚を捉えその一本を切断する。

「キシヤアアア」

メタルスパイダーが威嚇音を出しながら、メタルネットをあいらりさんに向け放ってきたので、俺はあいらりさんの前に立ち両手に持つ剣を振るいメタルネットを叩き落とす。

「海斗、助かった。いやああああ〜！ 『斬鉄撃』 『ダブル』」

あいらりさんが、追撃をかけメタルスパイダーを斬り裂き消滅させる事に成功した。

ベルリアも既に敵を倒しており、四体のメタルモンスターをうまく倒すことができた。

「海斗さん、さっきの戦いかなりよかったですか？」

「うん、この白麗剣、十分この階層のモンスターにも通用しそうだ」

「やはり、その剣なかなかの物だな。私も機会があれば店主に依頼してみてもいいかもしれないな」

「あいらりさんにはその薙刀があるじゃないですか」

「近接専用で薙刀の補助的な刀があってもいいかと思ってな。まあなにか良い素材が手に入ればだが」

「あいらりさん、刀もいけるんですか？」

「私は大体の武器なら扱えるぞ。元々一人で潜る事を想定して薙刀にしたただけだからな」

「そうなんですか」

あいりさんといえば薙刀だが、以前家が武道場だと聞いたことがあるので納得だ。

「マイロード、その純白の刀身が素晴らしいですね」

「ベルリア、やらないからな」

「……わかっています」

ベルリアはいつも通りだけど、そもそもベルリアが手にする牛魔刀は片手で扱えるようなサイズではないので、たとえ白麗剣を手にしたとしても使う機会はないはずだ。

俺たちは落ちている魔核を拾い、ダンジョンを先へと進んでいく。その後何度かメタルモンスターを倒しながら、順調にマツピングを進めていく。

最初の戦闘では気を張っていたのもあり気が付かなかったが、何度か戦闘を繰り返しているうちに問題が出てきていた。

白麗剣の強度は問題ない。

問題はそれを扱う俺の身体だ。

メタルモンスターを斬るたびに結構力を入れている実感はあったが、繰り返すうちに手首と肩の関節が痛くなってきた。

技量があればもっとスムーズに斬れるのだろうが、今の俺では力押しになってしまうので、白麗剣の硬さに身体の強度が負けてしまっているのだろう。

「ベルリア、悪いんだけど『ダークキュア』を頼んでいいか」

「もちろんです。腕でしょうか？」

「わかるか？」

「はい。やはり扱いには慣れが必要かと。それでは腕をお出しください。『ダークキュア』」

「助かったよ。ベルリアは大丈夫なのか？ 牛魔刀も白麗剣に負け

ず扱い辛そうだけど」

「はい、もちろん大丈夫です。この鍛えた身体と技があればどんな武器であろうと問題ありません。マイロードも私と訓練を繰り返しているのですからじきに慣れますよ」

白麗剣もそうだが牛魔刀の大きさから考えて、扱う者の身体への負担は相当なものだろう。

それをなんでもない様に扱っているベルリアはすごい。

普段、色々とやらかすが、戦闘技術については尊敬に値する。

折角の武器に技量と身体がついてこないのでは勿体ない。

平日におこなっているベルリアとの訓練の時間も少し増やす必要があるかもしれない。

835話 凍る（前書き）

あつという間2022年もあと2週間となつてしまいました。

モブから開始から3年9ヶ月となりましたが、なんと、あと1000 ptほどで10万 pt までやってきました。

是非10万 pt 達成できるよう応援よろしくお願いします。

835話 凍る

順調に19階層を進んでいく。

「ご主人様、モンスター二体がこちらへ向かってきています」

「それって、こっちのことを認識してるって事か？」

「おそらく、そうだと思います」

「みんな、ここで迎え撃とう」

モンスターがこちらへと向かっているようなので、俺たちは、その場にとどまりモンスターを迎え撃つことにする。

武器を構え前方に意識を集中して待っていると、すぐに機械音を想起させるような敵モンスターの移動の音が聞こえてきた。

現れたモンスターはシルの言う通り二体。

ただ今までとは違うのが2点。

ひとつはモンスターのうち一体は空を飛んでいる。

メタリックなボディのくせに上空を鳥さながらに滑空している。

そしてもうひとつ。

地上にいるもう一体のモンスターだが、メタリックボディではあるが、今までのモンスターがシルバーメタリックだったのに対し、ブルーメタリックな体色をしている。

上空を舞う、メタルバードが上空からこちらに向け降下してくるが、途中から急加速し一瞬でこちらとの距離を詰めてきた。

「ベルリア！」

辛うじて目で追う事が出来たメタルバードは、ベルリアに向け更に加速して向かってきた。

『ギイイイイン』

ベルリアは、敵の急加速に反応して、メタルバードとの間に牛魔刀を滑り込ませた。

牛魔刀とメタルバードが接触した瞬間、接地したところからは火花が飛び散り、ベルリアが弾かれるように後方へと飛ばされるが、くるっと回って着地した。

メタルバードはそのまま上空へと昇り、体勢を立て直しベルリアへと再び降下し始めた。

ベルリアは牛魔刀を構え迎え撃つ。

「同じ攻撃が通じるとは思わない事ですね。まあ鳥に言っても無駄かもしれませんが。いい機会です。私の新しい技の肥やしとなってもらいましょう。『グラビティストライク』」

ベルリアの持つ牛魔刀の周りに揺らぎが発生したのがわかる。

ベルリアの新しいスキルだ。

そして次の瞬間ベルリアは氷漬けになってしまった。

「なっ……」

何が起こったんだ。

ベルリアのスキルは重力。氷系じゃない。

ベルリアが凍ったのは、ベルリア自身のスキルじゃない。

全く理解できない突然の状況に頭がついてこない。

「海斗さん、止まっちゃダメなのです。『アイスサークル』」

ヒカリンが出してくれた氷柱にメタルバードが追突し、氷柱を破壊

したメタルバードの勢いが削がれた。

『斬鉄撃』

動きの鈍ったメタルバードをあいりさんの薙刀が捉えて斬り落とす。

「海斗、おそらくあの青いやつのスキルだ。止まるな。動くんだ」

あいりさんの声に反応し、俺はすぐさまブルーメタリックな狼へと蛇行しながら走る。

後方からミクが氷漬けとなったベルリアに向けスピットファイアで火球を放つ。

おそらくベルリアは悪魔だから、氷漬けになってもリカバリーできると思っけど、俺が氷漬けにされたら洒落にならない。

ただの人間に過ぎない俺が氷漬けになったら多分死んでしまう。やばい。

836話 俺も凍る(前書き)

メリークリスマス。

クリスマスにあわせた訳ではありませんが、今回は凍るような寒い話です。

今年は大晦日にもう1話投稿です。
よろしく願います。

836話 俺も凍る

ブリーメタリックな狼はこちらの動きに合わせて、移動を繰り返すがその動きは、他のメタルモンスター同様に予備動作無しでのトツプスピードであり、しかも軽い。

狼の特性なのか牛型などに比べても明らかに軽く速い。どうにか距離を詰めようとするが、こちらの動きに合わせて動いているのに相手の方が速い。

『アースウェイブ』

ヒカリンが動きを止めるためにスキルを発動するが、狼の足下が沈みかけた瞬間に、その場から飛び退き避けられてしまった。

この狼、強い。

この階層のモンスターには元々やり辛さを感じてはいたが、その中でもこの狼は上位だ。

今度は『アースウェイブ』を避けた狼がこちらに向け一気に距離を詰めてきた。

アサシンの効果でなんとか直撃を避けるが、すれ違った瞬間、俺の左手がバルザードと一緒に凍りついてしまった。

「うっああああ〜」

痛い。冷たくとんでもなく痛い。

経験したことのない感覚だが左腕が氷で拘束され全く動かせない上に痛い。

「マスター、下がってください」

前触れなく腕が凍ってしまった事に動転してしまったが、ティターニアの声に従い狼とは逆方向へと後ずさるが、狼が反転して追撃をかけてこようとするのが見える。

『ドウンッ』

ティターニアの放ったドラグナーの弾が狼を捉え、頭部の一部を削り取るが致命傷とはならない。

「ご主人様に仇なすとは許せません。今すぐ消えてしまいなさい。

『神の雷撃』」

シルの雷撃が狼を撃つが、狼は雷撃を受ける瞬間咄嗟に横へと跳ね雷撃は左半身を焼くに止まった。

雷撃により左半身は溶けて爛れてはいるが、まだ動きが止まっていけない。

「チヨロチヨロ逃げてるんじゃないぞ。この死に損ないが！ 『黒翼の風』」

狼を黒い風が覆い、斬り刻む。

さすがの狼もシルとルシエの攻撃をその身に受け、ふらふらとしている。

「これで終わりだ。 『斬鉄撃』」

動きの止まった狼の下へとあいりさんが走りどめの一撃を放ち、狼はその場で消滅した。

「ふうかなりの強敵だったな。手こずったがやはり色が違うのは上位個体なのか？」

「あいりさん、冷静に評価してる場合じゃないです！」

「ああ、そうだった。海斗のその左腕だが溶ける様子はないな」

「はい、全くないです」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないです。めちゃくちゃ痛いです」

「ベルリアもなんとかしないとな」

全身氷漬けのベルリアの方がやばいのはわかるが、今は自分の腕の痛みが勝り余裕がない。

「海斗、わたしがなんとかしてやろうか？」

「ルシエ、なんとかできるのか？」

「氷といえば炎だろ。獄炎で炙ればすぐに溶けるだろ」

「ちょっと待て。獄炎はダメだ。溶けるだけじゃなくて腕が燃え尽きる。そもそも主人である俺に使えるのか？」

「主人？ 誰それ。できるかできないかはやってみればわかるだろ」

「いや、やめてくれ」

「じゃあどうするんだよ。ほかに方法があるのか？ そのままじゃ

あ、凍傷とかで腕がダメになるかもな」

「ルシエ、あまりご主人様をいじめてはダメですよ」

「別にいじめてるわけじゃないぞ。ただの事実を言ってるだけだからな」

ルシエの言葉がこたえる。

俺のこの腕どうすればいいんだ。

このままじゃ本当に凍傷になってしまいそうだ。

837話 溶ける（前書き）

今年1年ありがとうございました。

モブからの方向性に試行錯誤した1年でしたが、1年考えた結果来年も大晦日投稿の今話の感じ中心でいきたいと思います。

賛否あるとは思いますが、モブからはこういう物だと思って、来年も応援していただけると嬉しいです。

来春はコミック、文庫の発売が控えているのでよろしくお願いします。

837話 溶ける

「海斗、自分でどうにかできないの？」

ミクに言われて、右手に持つ白麗剣で凍った左腕を叩いてみると、氷に傷が入る。

「自分でやるのは結構厳しい。剣が扱い辛し、力加減が難しい。表面だけならいけると思うけど、それ以上は腕まで斬れそうで怖いな」

氷の強度はそこまですらないので白麗剣で十分に傷つける事は出来るが、かなり危ない。

「やっぱりわたしが燃やしてやるよ」

「いや、いい。そもそも燃やすんじゃなくて溶かすんだからな」

「せっかく親切で言っちゃってるのに」

「いや、本当に大丈夫だから」

ルシエにお願いしたら本当に燃えてしまう。

「海斗、私がやってみようか？」

「どうするつもり？」

「人に使ったことなから自信はないけど『ファイアスターターで燃やしてみる？』」

「ミク、燃やすんじゃなくて溶かしてほしいんだ」

「そんなのわかってるわよ。言葉のあやっちゃつよ」

ミクモルシエに影響されたのか燃やすとか言うのはやめてほしいけど、確かに『ファイアスターター』で溶かしてもらうのが1番いい気がする。

「それじゃあお願いします。腕は燃やさないように。頼んだよ」

「わかってるわよ。それじゃあいくわね。『ファイアスターター』」

ミクのスキルが発動して俺の腕が燃えている。

いや、正確には腕を覆っている氷の上から炎が包み込むように生じている。

そのおかげで徐々に氷が溶け、水蒸気が上がっている。

「ミク、いけそうだ。結構溶けてきてる」

「海斗、話しかけないで。集中できないと本当に燃えちゃうわよ！」

「う、ごめん」

氷が溶けてきたのが嬉しくて声をかけてしまったが、ミクの邪魔をしちゃダメだ。

さっきまで冷たさと痛みに苛まれていた腕が、なんとなく熱さを感じるようになってきたような気がする。

「あっっ！ ミク、熱い熱い！ 燃える。燃えちゃう」

しばらくすると、ほんのりと熱かった腕は、徐々にその温度を上げやけるような熱さにかわった。

「海斗、もうちょっと我慢して。まだ氷が溶けきってないわ」

「えっっ、我慢って、無理無理」

昇華した苦痛耐性（中）が既に活躍してくれているとは思うが、い

くらスキルでも火で炙られるのを耐え切るような破格の性能は備えていない。
もしそれが可能ならもう人では無くなってしまっている気もするが、今はそれどころではない。
氷が溶けきつてはいないので腕が燃えている訳ではないが、燃えるように熱い。

「ご主人様、お力になればいいのですが」

シルの優しい言葉も今は耳に入らない。

「熱い！ 痛い！ 燃えるって！」

「マスター回復を！ 『キュアリアル』」

テイターニアが回復スキルをかけてくれるが、正直痛みには効果が薄い。

もしかしたら回復しているのかもしれないが、回復と同時進行で燃え続けている状況ようではその効果を体感する事はできない。

「ミク！ まだ！？ もう無理」

「あとちよつとだから我慢して」

いや、これは我慢できない。

氷で痛いのか、熱さで痛いのかその両方なのかもよくわからないが、腕が燃えるように熱い！

痛みで気が遠くなりそうだ。

ミクのファイアスターターでこの苦痛。

ルシエの獄炎ならどれだけの苦痛が襲ってくるんだ。
考えただけで倒れそうになる。

「ふ〜ふ〜ふ〜っ」

「海斗、なんだそれ。ふ〜ふ〜うるさいな。シャベンみたいだぞ。これだから軟弱者は」

うるさいのはお前だルシエ。今の俺には精神統一が必要なんだ。それにシャベンってなんだよ。聞いた事ないぞ。魔界の生き物かなんかか？

「海斗、終わったわよ」

「終わった？」

「終わったわ。ちょっと服が燃えたのはご愛嬌ってところね」

「マスター、『キュアリアル』が発動しているので大丈夫ですよ」

服が燃えてるってことは、当然皮膚も焼けているって事で確かに『キュアリアル』で回復はするんだろうけど全く大丈夫ではない。ただ、氷から助けてもらったのは間違いなく、文句を言える立場ではない。

「ミク 助かったよ。ありがとう」

「困った時はお互い様。また氷で困ったら助けてあげるから」

ありがたいお言葉だが、できればもう遠慮したい。

俺には何回もこれを耐え切る自信はない。

838話 解凍（前書き）

あけましておめでとつございませう。

モブからは今年も続きます。

今年には読者の皆様に喜んでもらえるような報告がいつぱい出来るように頑張ります。

応援よろしくお願ひします。

838話 解凍

「どうしようか」

「時間をかければ私の『ファイアスターター』でもいけないことはないと思うけど」

「全身だもんな」

俺達の前には氷漬けとなつたベルリアがいる。

「海斗さん、急いだ方がいいと思うのです。いくらベルリアくんが悪魔でもこのままは厳しいのでは」

「そつだよな」

「お前ら悪魔を舐めてるのか？ 悪魔がこの程度でどうにかなる訳ないだろ。ベルリアだって悪魔の端くれ。氷漬けくらい1年や2年どうって事ないぞ。その証拠に消えてないだろ」

たしかにサーバントであるベルリアにもしもの時があれば消えてしまっているはずだ。そう考えると生命に別状はないのかもしれないが、普通に考えて悪魔でもこれは厳しい。氷漬けのベルリアを観察してみても全く動く気配すらない。

「マスター、カードに戻してみてもいかがでしょう」

「ああ、その手があったか。やってみるよテイターニア。ベルリア戻れ！」

俺はカードを手に、ベルリアを呼び戻してみたが全く変化はない。

「無理っぽいな」

「やっぱり私がやってみるわ」

そう言つてミクがベルリアの氷を炎で炙りだした。炎に包まれた部分から徐々に氷が溶け出ししているのがわかるが、俺の時とは違い全身の上に氷の厚さも段違いに厚い。しばらく様子を見ていたが、ミクの炎が消えてしまった。

「ごめん、無理かも」

「結構いい感じに溶けてきてると思うけど」

「MPが厳しいのよ。どう考えても全身溶かすまでは無理ね」

やばいかもしれない。ベルリアを溶かす術が無くなつたかも。

「ふふん、わたしの出番だな」

「ルシエ、まさかと思うけど獄炎で炙る気じゃないだろうな」

「他になにかあるのか？」

「いや、ないけど獄炎って対象が燃え尽きるまで消えないだろ」

「ベルリアも悪魔の端くれだ。なんとかするだろ」

「いや、無理だろ」

「海斗、ルシエ様の炎で氷が溶けた瞬間カードに呼び戻すのはどうだ。いけるんじゃないか？」

「ほらみる。あいらの言うやり方で全部解決だな。それじゃあいくぞ」

「ちよつとま……」

『破滅の獄炎』

「あ……」

俺が止める間もなくルシエが獄炎を放ってしまった。

ベルリアを獄炎が包み込み、炙られて氷が一気に溶け出して蒸気が立ち上る。
みるみるうちに全身を覆っていた氷がなくなりベルリアがその姿を現した。

「はっ！ あ、熱い！ これは、なんだ！ う、うあああ。燃える。燃えてしまっ！」

「ベルリア、戻れ！」

ベルリアを即座にカードへと送還すると、目の前のベルリアが消えた。

「海斗さん、今、ベルリア君燃えてましたよね」

「うん、まあ」

「海斗、少しタイミングが遅かったかもしれないな」

「そうですね」

「やっぱりルシエ様の炎は段違いね」

「そうだね」

「海斗、うまくいっただろ。私にまかせておけば大丈夫なんだよ」

たしかに氷は溶けたがこれをうまくいったと評していいのか？

悪魔的にはOKなのか？

俺は絶対に獄炎で解凍されたくはない。

839話 すくファンシー

「は、あああゝ熱い、燃える！ い、息が〜」

「ベルリア！」

「炎が！ 炎が！ 凍る！」

「ベルリア！」

「ハッ、ここは！？ マイロード？ 炎は？ いや、しかし、夢なのか？」

「ベルリア、大丈夫か？」

「はい、これはいつたい……。私はどうしたというのでしょうか。夢を見ていたような。息ができなかったような、姫様の獄炎に焼かれたような夢を見ていたような」

「うん、まあ夢ではないけどな。大丈夫そうでよかったよ」

「夢ではないとは？ 確かに全身を包むこの焼けるような痛み。なにが……」

今の今まで氷に閉じ込められていたからか、ベルリアの記憶に混濁があるようで現状を把握しきれていないようだ。

「ベルリアは、青いメタルウルフのスキルで凍らされたんだ」

「青い狼……確かに私は青い狼と相対していたような」

「俺もヤバかったけど、ベルリアは一瞬で全身凍らされてしまったんだ」

「この私が凍らされてしまったなどと、そんな馬鹿な」

「ベルリアくん、本当なのです。完全に凍ってたのです。コールドスリープだったのです」

「コールドスリープ？」

「はい完全にSFの世界だったのです」

「SFですか？　すごくファンシーでしょうか」

「いや、ベルリア、たしかに近い気もするけど違うぞ。すごくファンシーってなんだよ。SFでよくそれを思いついたな」

「信じられない。この土爵級悪魔であるこの私がただのモンスター如きに凍らされるなど」

本当に凍らされてからの記憶はないみたいだ。凍らされると記憶も凍るんだな。

ある種勉強になった。

「それよりまずは火傷を治すのが先だろう。『ダークキュア』を使ったらどうだ」

「火傷……この痛みは火傷。凍傷？　『ダークキュア』」

ベルリア、その火傷は凍傷じゃない。もしかしたら凍傷もあったかもしれないけど。

「ベルリア念のために俺にも頼む」

「わかりました。マイロードもダメージを受けられたのですね。『ダークキュア』」

ベルリアのおかげで腕の痛みが完全に引いた。しばらく待っていていればテイターニアのスキルの効果で完治したとは思って、ここは我慢するところじゃない。

「マイロードも凍傷になられたのですか？」

「まあ、俺のはそうだけどベルリアのは違うぞ」

「ベルリア、このわたしが氷を溶かしてやったんだ。感謝しろよ？」
「姫様が？」

「ああ、お前が無様に氷漬けになったらりするからわたしが獄炎で

炙ってやったんだ」

「姫様の獄炎で助けていただいたのですか？ 姫様自らこのベルリアを！ このベルリア感激です。姫様この命は姫様の為に！」

「お前は暑苦しいんだよ。それだけ暑苦しかったら自分で溶かせたんじゃないのか。そもそも悪魔のくせに凍らされるってダサすぎ。悪魔の氷漬けなんか誰も喜ばないだろうが」

「はっ、このベルリア一生の不覚・申し訳ございません」

ベルリアの一生の不覚って何回あるんだろうな。

もう何回も聞いた気がするけど普通は一生に一回とかじゃないんだろっか。

「次からは凍るなよ」

「はっ、このベルリア、なにがあるうとも二度と凍りません」

ベルリア凍ったことすら覚えて無いんだから、それは約束できないだろ。

それにしてもあの青いメタルウルフのスキルは詠唱もなければ予備動作もなく発動した気がする。

ベルリアにしても本来であれば簡単に凍らされるような奴じゃない。

この階層の色付きは要注意かもしれない。

「どうしようか。時間的にはまだ早いけど、ベルリアも結構ダメージを負ったし今日はこれで切り上げてもいいかなと思うんだけど」

「そうね。それがいいと思うわ」

「マイロード！ お待ちください。私はノーダメージです。このまま帰るわけにはいきません。皆様、このまま進みましょう。いや、是非進みましょう！」

「うーん、そう言ってもな」

「海斗、ベルリアにも騎士としてのプライドもあるんだろう。進んでもいいんじゃないか」

「おおつ、あいり様。わかってくれますか。さあ行きましょう」

俺としては、ベルリアの精神状態も踏まえて撤退でもいいかと思っていたが、本人の強い希望もあり結局、先に進む事となった。

「けどあの青いやつ、強かったな。ベルリアが反応できないスキルって結構ヤバいな」

「後方から見えていましたが、突然凍っちゃった感じだったので」

「記憶にはありませんが、おそらくは突然だったのでしょうか」

「あいりさんも、青いのが出たら気をつけてくださいね。予備動作無しで発動した可能性もありますから」

「ああ、極力正面に立たないように気をつけるよ」

「明らかに他より上位のモンスターな感じなのにドロップは全く同じ魔核だけってセコイわね」

通常レアっぽいモンスターの場合、他よりも良いものがドロップされることが多いが、今回の青い狼からは他のメタルモンスターとほ

ほ同じ魔核がドロップしただけだった。
たしかにセコイと言うミクの気持ちもわかる。
ダンジョンの奥へと進んでいくが、奥に進むにつれ床が濡れている
箇所がちらほらと現れてきた。

「キヤツ」

「ヒカリン大丈夫？」

「ミクさん、ありがとうございます。足が滑ってしまったのです」

「そうよね〜。これなら砂漠仕様の靴を履いてきた方がよかったかも」

「普通に歩いているだけでも滑りそうになるな」

氷とまでは言わないが、戦闘になればこの床はかなりハンデになり
そうだ。

「どうしたシル、敵がいるのか？」

「はい。まだ、それほど近くはないと思うのですが、普通のモンス
ターとは違う気配を感じるような」

「まさか、また悪魔!？」

「悪魔とも違うような。むしろこれは……」

「なんだよシル、もったいぶらないで教えてくれ」

「微かに感じるだけなので、まだはつきりとはしませんが、この感
じは悪魔というよりも私に近いような」

「ちよつと待ってくれ。シルに近い気配!？ それって半神って事
か？」

「うーん、微かな感じだけなので、はつきりとはわかりません」

このフロアに神に連なる敵がいるのか？
それってヤバくないか。

「ルシエ、なにか感じるか？」
「なにも感じないぞ。いや感じるな」
「本当か？」
「ああ、感じる」
「どんな感じなんだ」
「腹が減った」
「は？」
「だ〜か〜ら〜空腹を感じるって」
「感じるって空腹のことか？」
「もちろんだぞ。ほら、魔核をくれよ」
「は〜っ、お前に期待した俺が馬鹿だったよ」
「失礼なやつだな！ さっさとくれよ・ベルリア炙って腹減ったの忘れてた」
「あれでか!？」
「当たり前だろ・誤魔化そうとしてたんじゃないだろうな」
「わかったよ。特別だからな」
「はいはい、特別ね。特別って言う割に魔核はいつも通り小さいな」
「文句があるなら食べなくていいんだぞ」
「あ〜うそうぞ」

ルシエに聞いた俺が悪かった。ルシエが何かの気配を感じたことなんか一度もなかったのに、シルの言葉で気が動転してしまっていたのかもしいな。

841話 じゃれる

金属質な通路を進んで行くと広がった空間に出た。

「ちょっと今までと感じが違うな」

天井がかなり高くなりこの階層独特の圧迫感がかなり軽減している気がするが、やはり足下は濡れているので普通に歩くだけでもバランスを崩しそうになる。

そして今までと違い、ところどころ床が隆起して尖っている箇所がある。

万が一尖っている箇所に転んでしまったらただでは済みそうにない。

「ヒカリン大丈夫？」

「ミクちゃん、ちょっと手を借りてもいい？ この靴滑るのです」

「そうね。転んだら大変だからゆっくり行きましょう」

「そうだな。あいりさんは大丈夫ですか？」

「ああ、私は大丈夫だ」

やっぱりあいりさんは体幹が優れているのか、この場でも姿勢が全く崩れていない。

感心しながら歩いていると突然後ろから押されて足を滑らす。

「ぐっ、いって〜。うあつ、危なかった」

床が硬いので転ぶと結構痛い。だけど、それより転んだ俺の頭の30センチほど横の床が鋭利に隆起している。

「危なかったぞ。もうちょっとで転ぶところだったぞ」

「姫、私の手をお使いください」

「この程度、大丈夫、大丈夫」

まさか、さっき押ししてきたのは……

「ルシエ、お前なのか」

「なんのことだ。変な言いがかりはやめろ」

「ルシエ姉様、しつかり見えてましたよ」

「テイターニア、裏切る気か？」

「そんな凄んだフリをしてもダメです。マスターに謝った方がいいです」

「チツ」

「ルシエ、その舌打ちはなに？ まさか逆ギレとかじゃないよな」

「ちよつと足が滑った、いや滑りそうになっただけだろ」

「それで俺を押ししたのか」

「押したというか、前に手を伸ばしたら海斗がいたただけだぞ」

「ルシエ、ここを見る。もうちよつとズレてたらここに刺さってたかもしれないんだぞ」

「まあ、大丈夫だったんだからいいだろ」

「ルシエ姉様、それはダメだと思いますよ。あまりにひどいとご褒美もらえなくなりますよ」

「それは困る！ 海斗、私が悪かったよ。だから魔核はちゃんとくれよ」

やっぱりルシエか。他のサーバント達は全くバランスを崩す様子もないのに、毎回ルシエだけやらかすのはなんなんだ。

それにしてもテイターニアの方がずつとお姉さんに思えてしまう。見た目は1番幼いけどルシエより精神年齢は高いのかもしれない。

「3人とも仲が良いのはいいことですが、敵が来ます。ルシエも甘えるのはそこまでです」

「シル！ 甘えてるんじゃない。変なこと言うな」

「はい、はい。わかってます。それよりご主人様、ご準備を」

「ああ、わかった。敵の数はわかるか？」

「おそらく5体です」

「マイロード、今度こそおまかせください。蹴散らしてみせます」

ベルリアが張り切っているのはいいけど、数が多いな。

しかも開けた場所なので、守り難い。

「シル、敵が見えたら『鉄壁の乙女』を頼む」

「わかりました」

ベルリアを先頭にして敵が現れるのを待ち構える。

842話 赤いキツネとたぬき

ベルリアが突然前方に向け牛魔刀を振るう。

『ギイイイン』

周囲に激しい金属音が響き渡る。

「シル姫！」

「皆様、中へ！」 『鉄壁の乙女』

シルがスキルを発動し、俺達は光のベールに包まれる。
なんだ！？

ベルリアの少し後方に身構えていた俺には見えなかったが、ベルリアの前方で小型のメタルバードが体勢を立て直し上空へと舞い上がるのが確認出来た。

「鳥型か」

どうやら鳥型のモンスターが超高速で襲って来たらしい。

「たぬきはいないようだな」

「あいらさん、冗談言ってる場合じゃないですからね」

「ああ、すまない。思わずな」

遅れて俺たちの前に現れたのは、先ほどと同じ青いオオカミ、そして青いオオカミに似た個体、大型の赤いキツネ。

鳥型が上空から急降下し、鋼鉄の弾丸と化したモンスターがシルへと一直線に向かってくるが光のベールに弾かれ、その動きを止める。

『ヘルブレイド』

ベルリアがバランスを崩した鳥型のメタルモンスターに向け斬撃を飛ばし、更に追撃をかけて消滅させる。

肉切り包丁から放たれた斬撃はその大振りの魔剣の刃の力を借りパワーアップしているように見える。

「所詮は鳥。私の敵ではありませんでしたね」

「ベルリア、まだ一体倒したただけだ。油断するな！」

一体倒された事で、一瞬引いて警戒するような素振りが見て取れたが、次の瞬間青いオオカミと赤いキツネ型のメタルモンスターが急加速して距離を詰めてきた。

左右に分かれこちらを挟むように展開した直後光のベールの半分を覆うように氷が発生し、残りの半分にはドロドロに溶けた溶岩のような物が覆いかぶさってきた。

「赤いキツネは溶岩か。それならたぬきはなんだ？ マリモか？」

「だからあいらさん、冗談を言っている場合じゃないですよ」

「すまない。どうしても気になってしまったんだ」

あいらさんの場違いな冗談も『鉄壁の乙女』への絶対的な信頼があつてこそだとは思うがやはりあの二体、ノーモーションでスキルを使つて来た。

上空には二体のメタルバードが旋回しているのが見えるが、自分達の攻撃が通じないのが分かったからか距離を詰めてくる気配はない。

「上は私たちに任せて」

ミクとヒカリンが上空への攻撃を開始する。

「わたしもお手伝いします」

ティターニアがドラグナーの銃身を上空へと向ける。

「マイロード、あの青い犬は私にお任せください」

「大丈夫なのか？」

「問題ありません」

正直ベルリアの「問題ありません」は問題ありの事も多いので不安は残るが……

「あっ」

ベルリアは俺の返事を待つ事なく青いオオカミに向け飛び出して行ってしまった。

自動的に俺の相手は赤いキツネ。

「あいらさん」

「ああ、わかつてる」

短くあいらさんと意思確認してから2人で光のサークルを飛び出し赤いキツネに向けて走り出す。

俺達は、赤いキツネの正面から外れるように左右へと散り距離を詰めていくが、突然前方の空中が赤く染まり、そのまま地面へと溶岩が流れ出し行手を防がれる。

843話 赤いキツネは熱い

床に広がった溶岩が熱い。

間違っても触れたらやばい。

キツネまでの最短距離は完全に防がれてしまっているので、足下に気をつけながら迂回して距離を詰めようと試みるが、床が所々凍っているせいでスピードを出すことが出来ない。

注意深く歩くには問題ないが、赤いキツネに意識を割いた状態で速度を上げると完全に滑る。

そして俺の動きに反して何故か赤いキツネの動きは普通に素早い。

やはり、このフィールドでは4つ足のアドバンテージが大きいようだ。

あいりさんも俺より先行してはいるが、スピードは明らかに遅い。

赤いキツネは俺達が距離を詰めるよりも素早く動きこちらへと顔をむけてきた。

「あいりさん！」

必死で足裏に力を込めて、赤いキツネの正面から外れるように側面へと前転しながら跳ぶが、さっきまであいりさんのいた場所がオレンジ色に染まる。

あいりさんも俺同様に飛び退いて、溶岩を躲す。

俺は起き上がると同時にすぐに理力の手袋の力を使い赤いキツネの足首を掴み、動きを止めにかかる。

一瞬拳動がおかしくなり、効果を発揮して動きが止まったように見えたが、直ぐに動きを取り戻してしまった。

足を動かし逃げながら、赤いキツネの視界から外れるように側面へと向かう。

やはり赤いキツネも色付きだけあって強い。

攻略のイメージが湧かない。

赤いキツネに注意を払いながら、もう一体の色付きとひとりで戦っているベルリアが気になり視線を向ける。

「当たらなければ、そんな攻撃私の相手にはなりません」

ベルリアは正面から青い狼と対峙していたが、凍らされる前に移動し完璧に氷結の攻撃を躲している。

青い狼のスキル発動のタイミングを完全に把握しているのか、『フアントムステップ』で敵を翻弄している。ベルリアは心配なさそうだ。

俺には華麗なステップもスキルを感知する超感覚もないので、溶岩に溶かされないように集中だ。

「これならどうだ！ 『アイアンボール』」

あいりさんが放った鉄球が赤いキツネに命中し、頭部を跳ね上げる。俺もバルザードの斬撃を飛ばし追撃をかけ、ダメージを与える事は成功したが、赤くてもメタルモンスターの外装は硬く倒すには至らなかった。

俺たちの攻撃を耐えた赤いキツネがこちらの方へと顔を上げるのが見えた。

まずい。

再び、脚に力を込め全力で横へと飛び込むが、その瞬間下肢に急激な熱を感じる。

「あつっ」

着地と同時に、更に脚に力を込めその場から離れ、即座に熱を感じ

た脚を確認する。

よかった。俺の脚は燃えても溶けてもいない。熱を感じた時には、溶岩をくらってしまっただけの可能性を考えてしまっただが、辛うじて避ける事ができていたようだ。俺のすぐ傍を赤い溶岩が流れている。結構ギリギリだった。

「海斗く手伝ってやろうか？ たかだが赤いだけのキツネに随分手こずってるみたいだな」

後方から緊張感の薄いルシエの声が聞こえてくる。

「ルシエ、頼む。こいつ思った以上に強い」

「ふふん、あとで魔核いっぱいくれよ。溶けて無くなれ。『破滅の獄炎』」

ルシエの獄炎が赤いキツネを覆い燃え上がった。

844話 足下注意(前書き)

お待たせしていたヤングチャンピオンコミックス モブから始まる
探索英雄譚2の発売が4/20に決定しました。

てりてりお先生のモブからもよろしく願います。

HJ文庫モブから6は多分来週くらいに発売日が決まると思います。
もうしばらくお待ちください。

844話 足下注意

「ルシエ！」

「なんだよ。うるさいな〜」

「あれって効いてないだろ」

「こらからだろ。まあ、みてろって」

赤いキツネは獄炎に覆われ少し動きが鈍ったものの普通に動いている。

「おあつ！」

獄炎を放ったのはルシエだが、赤いキツネの視界には俺しか捉えられていないのか、完全に俺をターゲットにスキルを発動させてきたので、必死に避ける。

「ルシエ、大きな口をたたいたんだからなんとかしてくれ」

「そんなに焦んなって。生意気なキツネだな」

溶岩を操るだけあって、赤いキツネはルシエの獄炎に対して強い耐性を持っているようで、倒れる様子は一切見受けられない。

「ルシエ！」

「何回も言わなくてもわかってるって。急かす男はモテないぞ」

「いや、この状況なら急かすだろ」

「はいはい。炙れないなら溶かせばいいんだろ。さっさと溶けて無くなれ。『侵食の息吹』」

俺に急かされ、緊張感なくルシエが赤いキツネに向け新たなスキルを放つ。

「どうだ？」

反撃に即座に対応できるよう神経を張り巡らせ赤いキツネの動きを観察する。

さっきまで左右に動きを見せていた赤いキツネの身体が動きを止める。

「ガガガ ggggh ga ggggg a a a a」

キツネが機械音とも呻き声とも取れない異音を発し、小刻みにその身体を震わせ始める。

「ほらみる。もう溶けてきたぞ。赤いだけしか取り柄がないキツネが私に敵うわけないんだからな」

キツネの身体が溶け始め、ほんの数秒でその場から完全に消えて無くなった。

「あゝ疲れたゝ。赤いだけあっていつもより疲れたなゝ。普通のキツネより疲れたなゝ」

「そんなアピールしなくてもわかってるって。魔核はちゃんと渡すけど、まだ終わってないから」

「えゝ遅い男はモテないぞ」

「ルシエ、さっきは急かすのがモテないって言ってただろ。言うてることが変わってるぞ」

「まあ、どっちにしても海斗はモテないって事だな」

赤いキツネを倒す事には成功したが、まだ戦闘は続いている。ルシエに魔核を食べさせている場合ではない。

俺はサポートをするべく、青い狼と戦っているベルリアの状況を確認する。

「え……なんで」

さつき確認した時は青い狼の攻撃を『フロントムステップ』を使い華麗に躲していたはずのベルリアが凍っていた。

両手を上に上げ、斜め30度くらいの角度で後方へと倒れかけている状態で凍ってしまったている。

青い狼は健在なので、すぐに氷漬けになったベルリアの方へと向かい対峙する。

「あいりさん……」

「すまない。私もベルリアの戦いは見ていなかったんだ。しかし、この体勢は……」

「やっぱりそうですね」

ベルリアの戦況をフォローしていたわけでは無いが、俺と一緒にベルリアの前に立つあいりさんにもベルリアが凍ってしまった状況が理解できているようだ。

氷漬けのベルリア。

その氷の中の体勢と表情が如実にその状況を表していた。

ベルリア……滑ったな。

845話 頑張れベルリア（前書き）

お待たせしましたがHJ文庫モブから始まる探索英雄譚6の発売が4/1に決定しました！

是非買ってください。

みんなに買ってもらえると今年中にモブから7が出ると思います。

縁起の良い7巻が出ると、モブからが限界突破してすごい事になると思うので応援是非お願いします！（本当に限界突破する予定です）
なろうのポイントが10万ポイントを突破しました。

これからもよろしく願います。

845話 頑張れベルリア

ベルリアは俺よりも遙かにボディバランスに優れていて、移動中も全く滑る様子はなかった。

ただ、戦闘中の『ファントムステップ』。濡れてす滑りやすい金属の床を視覚で追えないほどの高速移動を繰り返せば、それはベルリアでも滑る。

氷の中のベルリアの顔……

戦闘が終われば写真で残しておきたいくらい間の抜けた顔をしている。

後悔先に立たずとはこのことだろう。

ベルリアは戦闘において、こんなキャラではなかったはずだが、ルシエに影響を受けてしまったのだろうか。

色々思うところはあるが、今はそれどころじゃない。

俺の目の前には青い狼がいる。

前回の戦闘では、虚をつかれ腕を凍らされてしまった相手だが、今回はそうはいかない。

アサシンのスイッチを入れて、青い狼の正面からズレる。

おそらく、青い狼の強さとこの距離感では効果が薄い。

ただ少しでも認識がズレてくれればそれでいい。

全身に神経を張り巡らせ、左右に細かく動き正面からズレる。

大きく動けばそれだけ青い狼の氷を避けることができる可能性は上がるが、ベルリアの二の舞いになる可能性がある。

俺は、ズラした認識と最小限の移動距離でスキルの直撃を避ける。

俺の避けたすぐ脇が凍りつく。

少しでも遅ければまた凍ってしまう。

敵のスキル発動を避けるため敵の顔に意識を集中し身体を反応させる。

『アイアンボール』

あいりさんがスキルを発動し、青い狼は鉄球を凍らせるべく俺から意識が逸れた。

その瞬間、左右に動いていた足を前へと踏み出す。

速度は出せない。

慎重に一歩づつ前へと足を動かして青い狼へと距離を詰める。

横で鉄球がゆっくりと凍りつくの見える。

周囲が遅くなり俺の時間が加速しているのがわかる。

アサシンの能力で加速した俺は青い狼に届く位置まで到達し、白麗剣を振るう。

白麗剣の先端が狼の顔を捉え、手元に硬質な抵抗感が伝わってくるが、そのまま振り切る。

まだ浅い。

更に踏み込み狼との距離を詰めバルザードの刃を敵の喉元へと下方から突き入れ、そのまま切断のイメージをのせて薙いだ。

少し間があつてから狼の首が落ち、そのまま消滅した。

今度はあいりさんの助けを借りてではあるが完全にしとめることができた。

氷と溶岩の違いはあるが、一度対峙したことがあるからか青い狼の方が戦いやすかった気もする。

ミク達の戦いも無事に終了したようで、もう戦いの音は無くなっていた。

「あいりさん、ナイスタイミングでした」

「ああ、それにしても海斗は強くなったな」

「そうですね？」

「ああ、一連の動きが滑らかだった。さすがはシルバーランクといったところか。いずれ私もな」

「あいらさんならすぐにいけますよ」

「そうだといいが。それにしてもベルリアは滑ったんだな」

「まあ、この床でステップを踏めば滑りますよね」

「そうだな。滑るな」

「またルシエに頼むしかありませんよね」

「ああ、それしかないだろう」

また全身を獄炎で炙られるのか。
ベルリア頑張れ。

846話 ヘルリアの価値は3個分？（前書き）

悲しいお知らせです。

4/20発売予定だったコミック版モブから2の発売が5/18に延期となったみたいです。

もうしばらくお待ちください。

お詫びと文庫版の発売記念も兼ねて3月のどこかで新連載を始めるかもしれません。

モブからの連載ペースも上げたい気持ちはあるのですが、モブから関連のお仕事が詰まっついていて頭の切り替えが難しいのでしばらく今のペースを続けさせていただきます。

よろしくお願ひします。

846話 ヘルリアの価値は3個分？

「また、わたしの出番か。面倒だから、もう燃やしてしまおうか」
「いやいや、気持ちはわからなくは無いけど、ヘルリアも悪気があつてこうなってるわけじゃ無いんだから、燃やすのは無し」

「海斗、分かってないな。こんなやつでも士爵級悪魔なんだぞ。士爵級悪魔と同じモンスターに2度も凍らされたんだぞ。燃えて無くなるにはじゅうぶんだ」

「相性が悪かつたんじゃないか」

「海斗は見てなかったからそんな事を言うんだ。このバカ調子に乗つて、チヨロチヨロ攻撃をさせてるうちに思いつき滑って転んだぞ。こんな間抜けな悪魔見たことないぞ」

「あゝそうなんだ」

「マスター、私も見ていましたが、それはもう見事に滑っていましたた」

「そうなんだ」

「わかつただろ。だからここで燃えて無くなるのがいいんだ」

たしかにヘルリアが滑つたのは不注意だったかもしれないけど、ルシエは何もないところで滑ってなかったか。

「ベルリアも今回の事で反省している筈だから、今回は許してやってくれ。魔核を一個多めに渡すから」

「一個？」

「それじゃあ奮発して2個で」

「2個かゝ。どうしよつかなく。炙るのも疲れるしなゝ」

「わかつた。3個だ。それで頼む」

「3個かゝ。海斗がどうしてもって頼むからやってやるんだぞ。お

まけだからな」

「ああ、わかってるって」

「ベルリアくんの価値は魔核3個なのです」

「マスター、今回だけとのことですが二度あることは三度あると言います」

「……………」

二度目だからか、みんなの突っ込みが結構厳しい。

ベルリア、今回は魔核3個でいけたけど3度目は無理かもしれない。一緒に頑張ろうな。

「それじゃあ、チャツチャツと終わらせて魔核3個だ。いくぞ『破壊の獄炎』」

ルシエの放った炎が氷を溶かしていく。

「熱い！ 熱い！ 燃える！ 身体が燃えるように熱い！」

しばらく待つと、いつも通りのベルリアが獄炎に炙られて復活した。

「敵はどこにいますか？ まさか、見えない攻撃！？」

「ベルリア、もう敵はいないよ」

「マイロード、いつたいこの熱さは……………」

「ベルリア、わたしが助けてやったんだぞ」

「姫様が？」

「これで二度目だぞ。次はないからな」

「はっ、ありがとうございます。まさか、また凍らされたのか？ そんなバカな」

「ベルリア、足下が濡れているところでは『ファントムステップ』は控えた方がいい」

「フロントムステップ？ まさか……私は」

「とりあえず、火傷を治そうな」

「はい、お気遣いありがとうございます。『ダークキュア』」

ベルリアもすっかり反省したようだし3度目はきつとないだろう。

「早くくれよ」

「ああ、わかってるって」

「ご主人様、私たちも頑張りました」

「ああ、シルとティターニアはすっかり戦ってくれたからな」

シルとティターニアにもそれぞれ魔核を3個渡すと、3人揃って美味しそうに魔核を吸収しはじめた。

ベルリアの命は今3人が食べているスライムの魔核3個と等価だと思つと少し複雑だけど、よくよく考えると、今回の戦闘でルシエだけなんにもしれないな。ベルリアの戦いを傍観していただけか。

次の戦闘にはしっかり参加してもらおう。

846話 ヘルリアの価値は3個分？（後書き）

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚6の予約が各販売サイトで始まりました。

是非予約してください。

よろしく願います。

847話 憧れ（前書き）

先週お伝えしていましたが、新作を投稿します。このままではいつまでたつても投稿できないと思い立ち本日作業して、投稿しました。よろしく願います。

俺はこのモンスター溢れる世界をスキル『ガチャ』で生き抜く
最初に出たのは美味しいパンでした

<https://ncode.syosetu.com/n8317ic/>

4/1発売のモブから始まる探索英雄譚6は発売に向けて最後の追い込み作業に入っているので、順調に発売されそうです。

Amazon、楽天等各种サイトで予約が始まっているのでよろしく願います。

bookwalkerさんのみ特典SS付きです。

847話 憧れ

「ベルリア身体は大丈夫か？」

「全く問題ありません。次こそ私におまかせください」

「それはそうと、シル、敵の気配はどう？」

「ご主人様、消えてはいません。ただすぐ近くというわけでは無さそうです」

「まあ、注意は切らさないようにしておいて」

「はい、もちろんです」

シルの言う未知の敵も気にはなるが、それよりも目先の敵に集中しないと危ない。

19階層もそれなりに進んで来ているので、出現するモンスターが強い。

気を緩めると一瞬で氷の棺に閉じ込められたり、消し炭にされそうだ。

緊張感を持ってダンジョンを進んで行くが、幸いにもこの日はこれ以上モンスターに出会う事はなかったので、マッピングが捗った。

ベルリアは不満そうだったが、モンスターを倒す事が探索の1番の目的ではない。

今更だけどダンジョンを探索する目的。

目先の事だとアイテムやお金を手に入れる。

少し先の事だと探索者として生きていきたい。

ダンジョンを進みより深い階層へと行きたい。そしていつの日かダンジョンを踏破したい。

世界には今までも何人かダンジョンを踏破した探索者パーティがいるが、その偉業とも呼べる成果を残した探索者は、どれもが英雄と呼ばれている。

俺はいつか自分もその1人となる事を夢見、目指している。

スライムばかりを倒していた時には届くはずのなかった世界だけど、今ならいつか届くのではと夢見ている。

俺を助けてくれた春香に憧れた事が、俺が英雄になりたいと思い探索者を志したきっかけだ。

何故か、小学生だった俺はあの時英雄になるには探索者になるしかないと思ってしまったが、最近になってその思いの根源が何か思い出した。

ダンジョンが一般公開される前、調査を目的として探索者の前身であるダンジョン探検隊のようなものが国家プロジェクトとして結成され、ダンジョン攻略のバイオニアとしてよくTVで取り上げられていた。

幼かった俺は戦隊物のヒーローと同じくらい、彼らの事をカッコいいと思い羨望の眼差しを向けていた。

最近まで完全に忘れてはいたが、きつとあの時の羨望が春香の姿と重なって見えたんじゃないかと思う。

ある時を境にTVで彼らを見かける事はなくなってしまったので、ずっと俺の記憶からも消えてしまっていた。

現在のダンジョンの状況や探索者という制度が出来ている現状を勘案すると、なんとなく彼らの辿った道が今なら想像はつく。

彼らは文字通り命を賭してバイオニアとしての役割を果たしてくれたのだと思う。

彼らの遺してくれた教訓を胸に探索者として日々英雄を目指す。

だけど、俺はかつて憧れた彼らを目指すことはない。

俺のモットーはダンジョンは安全安心だ。

俺は必ず地上へと戻る。

決して先人たちの二の轍だけは踏まない。

万が一そんな事があつたら、春香に会えなくなってしまう。

春香とのドリーミングキャンパスライフが藻屑と消えてしまう。

そんなのは絶対に嫌だ。

それに両親を悲しませる為に、探索者になったわけじゃない。

「あゝ今日も楽しかったな」

夕飯のカレーを食べて、しっかり睡眠を取って明日の探索を万全の状態で迎えよう。

いや、待て。学校の宿題するのを忘れてた。まだ眠れない。

848話 名案（前書き）

HJ文庫 モブから始まる探索英雄譚6の発売まであと2週間となりました。

ヒカリンのカバーイラストが目印です。是非買ってください。いっぱい買っていたけると7巻が出ます。

新作 俺はこのモンスター溢れる世界をスキル『ガチャ』で生き抜く 最初に出たのは美味しいパンでした もよろしくお願いします。

848話 名案

どんなに探索が楽しくても、どんなに疲れていたとしても勉強を疎かにする事はできない。

もうすぐ模試も控えている。

どうしても、今のこのタイミングでいい成績を残して目処をつけておきたいところだが、俺にとって王華学院はスライムではなくボスモンスターのよう存在だ。

簡単ではない。

残念ながら入試ではシルヤルシエの援護も期待できない。

絶対に負けられない戦い。

それが近づいている。

俺にとってダンジョンボスに勝るとも劣らない戦い。

厳しいのはわかってる。

でも俺の想いは脳を活性化し、奇跡を起こす。

いや、真面目に頑張れば奇跡は必要ない。

きっとモブ神様が、俺の努力に応えてくれるはずだ。

宿題を終わらせた俺は、眠気を我慢してしっかりと勉強をこなした。眠気が襲ってくる度に春香が天使のように舞い降りて、俺を支えてくれた…… ような気がする。

翌朝目を覚ますと、まだ少し眠気が残っていた。

最近、土日は勉強もあって寝不足気味だ。

こんな時は、地上でもダンジョンでのステータスを引き続けられればいいのと強く思ってしまう。

きっとレベル25のステータスをもってすれば徹夜くらいなんでもないはず。

残念な事にダンジョンで眠くなる事はまずないが、地上での眠気が

ダンジョンに潜ったからといって覚めるわけではない。
せつかくシルバークランクまで到達したのに、試験での俺はただのモ
ブ。

「いや、ちよつと待てよ」

よく考えてみると、ダンジョンでステータスが上がっている状態で
勉強すれば滅茶苦茶捗ったりするんじゃないのか？

レベル25、BP100オーバーの俺のステータスは、当然戦いの
中での判断力も上がっている。

ステータス表示はないが魔法を使うためにINT的なものも当然上
がっているはずだ。

家の机で勉強するよりもダンジョンの床で勉強した方がはるかに効
率があがるのでは。

昨晚苦勞した英単語もスラスラ覚えることができる気がする。

「もしかして……」

可能性はある。

いや、これは間違いないかもしれない。

俺、やってしまったかもしれない。

もしかして勉強チート、いや入試チート！？

以前、軽く口頭であいりさんから勉強を教えてもらった事はあるが、
本格的にダンジョンで勉強したことは一度もなかった。

ダンジョンで勉強する。

なんでこんな大切なことを思いつかなかつたんだ。

探索者なら誰でも思いつきそうなこのアイデア。

誰からも聞いたことが無いし、勉強している探索者に出会った事も
ない。

なんでだ？

灯台下暗しというやつだろうか？

入試を控えている探索者の絶対数が少ないから誰も実践してこなかったのかもしれないが、もしかして他のダンジョンとかでは一般的だったりするのかな？

善は急げだ。

早速今日探索を終えたら一階層で勉強してみよう。

俺は探索の準備と一緒に勉強道具一式をマジック腹巻きに入れてダンジョンへと向かう。

849話 受験もダンジョンも対策が大事（前書き）

4 / 1発売のHJ文庫モブから始まる探索英雄譚6、ついにあと1週間となりました。

是非買ってください。最初の1週間にいっぱい買ってもらえると7巻が出ます。

そして、昨日知りましたが、知らない間にモブから台湾、香港版が出ていました。外国版はなぜか大判、しかもおまけが豪華で特装版みたいです。

1番下に6巻カバーイラストを設置してみました。是非クリックしてみてください。

新作 俺はこのモンスター溢れる世界をスキル『ガチャ』で生き抜く 最初に出たのは美味しいパンでした

<https://ncode.syosetu.com/n8317ic/15/>

がローファンタジー1位を獲得しました。まだの方は是非！

849話 受験もダンジョンも対策が大事

「おはようございます」

「ああ、おはよう。海斗、いつにも増して元気いっぱいだな」

「そうですね？ ちょっと寝不足気味ですけどね」

「勉強か？」

「はい、一応これでも受験生ですから」

「来年を楽しみにしているよ。ミクは寝不足とかなさそうだな」

「私は、しっかり寝ましたからね」

「勉強はどうだ？」

「もう、王華学院対策はバツチリです。当日インフルエンザにでもかからない限りはいけると思います」

「え！？ まだ春なのに対策バツチリなの？」

「そんなの当たり前でしょ。海斗、もしかして受験を舐めてる？」

「いや、いや、そんなつもりは全然ないよ。昨日もどうやってらいいか必死に考えてたくらいだし」

「それならいいけど」

以前ミクは模試でA判定だと言っていたし、本当に対策バツチりなんだと思うけど、今更ながら自身の遅れてる感がすごい。

やっぱり今日のダンジョン明けから勉強するしかない。

「おふたり共大変ですね。わたしも来年は続くのです」

「ヒカリンなら大丈夫でしょ。頭良いし」

「まあ、再来年にはみんな同じ学院に通える事を願っているが、とりあえず19階層に集中だ」

「そうですね。昨日かなり苦戦しましたから・ベルリアが今日は氷漬けにならないよう要注意ですね」

「3度目は本当に燃やされそうなのです」

再来年俺だけ違う未来がありそうで怖いが、今はダンジョンに集中だ。

俺達は1階層をしばらく進み周囲に誰もいない事を確認してから『ゲートキーパー』で19階層へと跳んでからサーバント達を召喚した。

「それじゃあ、探索を進めよう。シル、妙な気配はどう？」

「やはり、消えてはいないようです。昨日と変わりありません」

「そうか。みんなも異変があったらすぐに知らせてほしい」

「マイロード、なにかあるうとこのベルリアが必ず」

「まあ、たのむな」

「はっ、おまかせください」

「今日は、滑らないよう気をつけた方がいいですよ」

「テイターニア、心配無用です。このベルリアに2度はありません」

おい！ベルリア既に2度凍っただろ。

いや、たしかに滑ったのは1度だから嘘では無いか。

心の中で突っ込んでみたが、ベルリアは本当に反省したようで完全に戦い方を変えていた。

足下が滑りやすいフィールドでは、昨日のように動き回る事は避け、最小限の動きでカウンターを狙って立ち回り敵モンスターを倒していく。

元々、別格の技術に肉切り包丁の斬れ味が加わり獅子奮迅の活躍を見せている。

これができるなら、なぜ昨日まではやらなかったのかと単純な疑問が湧いてきたが、そこはベルリアだからという事なのだろう。

俺は、相変わらず余裕はないものの、初見ではないモンスターに対

してなんとか対応する事ができている。

849話 受験もダンジョンも対策が大事（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で作者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

850話 緑の(前書き)

ついに本日4/1にHJ文庫モブから始まる探索英雄譚6が発売となりました！

皆様のおかげで書籍POSランキング初登場48位にランクインしました。

ありがとうございます！！

地域によつては来週以降店頭に並びますが、是非この土日のお供に買ってください！

買ってくれると次は7巻です。

よろしく願います。

850話 緑の

「ご主人様、この先にモンスターです。ですが、すでに戦闘中のようです」

「それって、先行の探索者にとって事？」

「はい、おそらく」

「珍しいな。19階層で他の探索者に遭うのは初めてだな」

「そうよね。探索者の数もそれなりにいるはずなのに、ほとんど遭わないわね」

「まあ、それだけダンジョンは広大でしかも下層手前の19階層ともなるとな」

「そうですね」

「とりあえず、警戒しながら進んでみましょうか」

「そうだな」

前方へと注意を向けながら進んでいくと、先行者の戦闘音が聞こえてきた。

「くそっ、やっぱりこいつら硬すぎる」

「英士叩き壊せ」

「軽く言ってくれるな。おおおああ！」

「動きが止まった。いまだ！」

まだ声しか聞こえてこないが、かなり激しい戦いのように思える。

「ここからじゃ、まだ状況がよくわからないな。邪魔しないように、もう少し進もう」

他のパーティの邪魔にならないよう声の方へと更に向かっていると、すぐにモンスターと戦っているパーティを目視する事ができた。モンスターは3体。

それに対するパーティは7名。年齢は俺たちよりも上に見える。

「慶次！ 緑の奴がヤベ〜。2人じゃ無理だ。誰か1人寄越してくれ！」

「こつちは手一杯だ。桂花、八雲をフォロー！」

「まかせて。絡めとれ！」 『ローズバインド』」

もしかしてあのモンスターは緑のためき！？

赤と青が出たから、可能性は感じていたが本当にいるとは。

緑のメタリックモンスターは、他のモンスターに比べるとずんぐりとしているがその動きは、少し離れたここからでも速いのがわかる。桂花と呼ばれた人が放った拘束系のスキルをかい潜り、攻撃を放った。

『ガアアアアン』

緑のためきの前方に大きな岩が現れ、それが弾け四方へと飛び散った。

「クソツ、痛えっ。このためき反則だろ。桂花無事か！」

「大丈夫、それより大地、あのためきどうにかして」

「仕方ねえ。突っ込む。八雲行くぞ」

ためきに向け、男の人2人が突っ込む。

2人ともかなりのスピードだ。

ただ、ためきは2人の速さを上回っている。

「止まれ！ 絡めとれ。ローズバインド」

女の人が再び放った荊がたぬきを捉え、たぬきの動きがにぶる。

「ナイスだ桂花！ オラああ！ 砕けるおおお！」

『ガギイイイン』

「こつちもだ！ 潰れる！」

2人がハンマーのような武器をたぬきに叩きつけると、火花が飛び散る。

おそらく何かのスキルか武器に特殊効果が付いているのだろう。

「クソツ、硬ええ。勿体無いけど、くれてやる。喰らええ」

『ドウウン』

男の探索者の言葉の直後、たぬきの頭部が突然爆ぜた。

「いまだ！」

「うおらあああ〜！」

こちらまで火薬の匂いが立ち込めているので、さっきのは爆弾の一種を使ったのだろう。

緑のためきにかなりのダメージを与え、動きが完全に止まったところを2人が襲いかかった。

851 凍つてもたぶん死なない(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄探索6の発売から1週間が経過しました。

今週は日本全国の書店に並んでいるはずなので是非新刊コーナーで探してみてください。
よろしく願います。

851 凍つてもたぶん死なない

そこからの決着は早かった。

一方的に緑のためきを叩き潰し、残りの2体も程なく消失した。

「ドロップは無しか。赤字だ、赤字。強いくせにケチくさいんだよ」

「八雲、いちいちうるさい」

「お！ 戦闘で気づかなかったけど、他のパーティがきてたのか」
「ほんとだ」

どうやら戦闘を終えこちらに気がついたようなので、挨拶しておく。

「こんにちは」

「ああ、こんにちは？」

ダンジョンで「こんにちは」というのもおかしい気もするが、咄嗟に思い浮かぶ言葉が他になかったので仕方がない。

「すごい戦いでしたね」

「ああ、ありがとう。君たちは……随分若いな」

「幼女？ 子供もいるのか？ いや、サーバントなのか」

「いや、まあ」

「もしかして君、『黒い彗星』じゃない？ 真っ黒な装備にかわいい女の子、それにサーバント。絶対そうでしょ」

「いや、まあ」

「おお、君が噂の『黒い彗星』か。もう19階層なのか。さすがだな」

「いや、そうでもないです」

こんなガチ目なパーティの人にまで俺の事は知られてるのか。俺も普通に答えてしまっているけど、『黒い彗星』をいまだに受け入れ難い自分がいる。

「本当に、女の子ばかりのパーティなんだな。噂通りのリア充ぶりだ。羨ましい限りだよ」

「いや、そんなことは……」

「『黒い彗星』も19階層なんだな。よかつたらしばらく一緒に行かないか？ 戦闘は一緒でもいいし、交互でもいいから」

以前一度他のパーティと一緒にまわった事があるが、結構勉強になったし俺としては誘ってもらえて嬉しいところだ。

それにこの階層まで来ている人達にサーバントの事を見られたとしても問題にはならないだろう。

ただ勝手に決めるわけにもいかないなので、メンバーに確認を取る。

「俺はいいと思うんだけど、みんなどうかな」

「いいんじゃないか」

「いいと思うのです」

「海斗の好きにすれば」

みんな賛成してくれるようなので、あらためてこちらからもお願いする。

「よろしくお願いします。19階層にきてから、結構苦戦してたりするんで勉強させてください」

「いやいや、俺たちも今見た通りこの階層には苦勞してるんだ。硬いし特に色付きのやつには手を焼いている」

「あゝ俺たちもです。特に青いのに」

「凍らせてくるやつな。あれはくらったらヤバい。あれをもろにくらったら生命はないだろう。回避一択だ」

「はは……」

それが、凍っても生命に別状はないんだよなあ。ベルリアは2度凍ってるけどピンピンしてるし。

いや、ベルリアが悪魔だから大丈夫なだけなのかも。

852話 癒し(前書き)

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚6が発売中です！
まだの方は週末のお供に是非。

852話 癒し

一緒に進む事になったのは、男性5名女性2名のパーティだ。男性陣は20代後半から30代で女性陣2人の年齢は不詳だ。

不詳というのは見た目という意味ではない。

パーティリーダーは英土さんという大柄な男性で、メンバー全員がシルバールランクとの事だ。

俺たちのパーティはシルたちのおかげで嵩上げされているが、20階層に臨もうとすればシルバールランク相当は必須という事なのだろう。

「あのくさっきの緑のやつに使ってたのって何ですか。」

「あれか？ あれはマジックボムの一種だ。結構使ってる奴いると思うが知らないのか？」

「勉強不足ですいません」

「いや、別にいいんだが」

あれがマジックボムか。

理屈はわからないが、魔核を素材として使っている爆弾のようなものらしい。

ダンジョンマーケットで売っているのを見かけた事はあるが、威力に段階があり一番安いのも20万はしたはずだ。

「たしかマジックボムって使い切りなんですよね」

「ああ、基本一回限りだが、この階層のモンスターみたいに硬い奴には有効だからな。まあ値段も値段だからポンポン使うようなもんでもないけどな」

たしかに探索用のアイテムは高価なものが多く、計画的に利用しないと、あつという間に支出が収入を上回ってしまう。そう考えると、ルシエの大食いはあるけど、うちのパーティはまだいい方なのかもしれない。

「そっちはあれか。サーバントが4人、いやもう1匹か。それならマジックボムなしでもいけるか」

「まあ、そうですね」

「それにしても、幼女とそのイタチみたいなのヤバいな」

「ヤバいですか？」

「ああ、ヤバいくらいかわいいな。前にゴブリンのサーバントを使ってる奴に会った時はどうかと思ったけど、そっちはヤバカワだろ」

「ゴブリンですか……」

やっぱり本当にゴブリンのサーバントっているんだ。

俺もシルのカードが出た時にはゴブリンだけは勘弁と思ったけど、本当にシルでよかった。

「ゴブリンもそこそこのレベルがあったから結構戦力にはなってたけど、まあ見た目がな」

「そうですね」

「あれを見て以来、サーバントは絶対無いなと思ってたがアリだな。いやかなりアリだな。なあ八雲そう思わないか」

「いや、絶対アリだ。こんなメンバーで探索できたらどれ程楽しいだろうか。癒しだ癒し。特にあの黒いドレスの女の子。いるだけで癒される」

「癒されますか」

「ああ、この殺伐としたダンジョンに咲く一輪の薔薇のようじゃないか。心が潤う。そうじゃ無いか？」

「いや、まあ、そうかな、うん」

まさかのルシエが癒し。

シルなら癒されるのはわかるがルシエ？

いや、まあ、個人の嗜好というか喋らなければ見た目だけなら、そういう事もあるのか？

「おい、海斗！」

「え！？」

「なにか失礼なことを考えてたりしたんじゃないだろうな」

「いや、そんな事はナイヨ」

「本当か？ あやしいぞ」

「本当にナイヨ」

「ふくん、ならいい」

まさか、考えてた事がわかったりするんじゃないよな。
なんで、鈍いはずのルシエに気取られたんだ？

853話 気合いのベルリア

「あれは絶対ふざけた事を考えてる顔だぞ」

「そうですか？ いつものご主人様のお顔に見えるけど」

「いや、見る。右の眉毛がちょっと上がってるだろ」

「言われてみれば、少し上がってるかもしれないね」

「あれ海斗が余計なこと考えてる時の癖だぞ」

「ルシエはご主人様のことよく見ていますね」

「目を離すとろくなことがないからな」

「ふふっ、そういうことにおきます」

またいつものようにルシエとシルが後方でコソコソ話しをしているが、多分俺のことを話してるんだと思う。

気にはなるけど、ここはいつものようにスルーしておくのが正解だろう。

しばらく歩いていると、シルがしっかりと役目を果たしてモンスター の出現を知らせてくれた。

「ご主人様、お話中失礼します。この先にモンスターがいます」

「ああ、ありがとう。何体？」

「4体のようです」

「オオッ、もしかしてこの天使みたいなサーバント、索敵までできるのか！」

「はい、一応そうです」

「いや、ますます羨ましいな。俺たちはこれだからな」

「感知石ですか」

「ああ、そうだ。高いのを買っても不明瞭な上に入り組んだダンジョンじゃ効果が薄い」

「ああ、そうかもしれないですね。それで、どうしますか？ 俺たちが行きましょうか？」

「いいのか？ 正直連戦は結構キツイんで、そうしてもらえると助かる。危ないようならフォローは任せてくれ」

「わかりました」

楽勝とはいかないまでも、それなりにこの階層のモンスターとも戦ってきているので4体であっても問題はないはずだ。

注意を払い進んだ先には、やっぱり色つきがいた。

しかも青だ。

「マイロード、あの青いきつねは私におまかせください」

「大丈夫なのか？」

「このベルリア同じ相手に2度の不覚はとりません」

「それじゃあ、無理するなよ」

「あの程度の敵に無理をする必要はありません」

「そうか……」

ベルリアにも期するところがあるのだろうからこれ以上はやめておこう。

ただ2度の不覚はすでにとっているから3度目の正直だ。

俺とのやりとりを終えると同時にベルリアが駆けた。

「ベルリア！ 滑るなよ！」

足下が滑りやすい状況は変わっていないので思わず声をかけてしまった。

「意識してさえいれば、この程度、私の障害になりはしない！ お

おおおおおっ 『ブラックブレイド』 『』

距離を詰めながら斬撃を飛ばし、更に宙へと舞い青いきつねへと迫る。

「ベルリア！ 空中はダメだ！」

青いきつねのスキルはノーモーションからの凍結。

空中で狙われたら避けようがない。

ベルリアの奴気合いが入りすぎて言った側からやらかしてしまった。

853話 気合いのベルリア（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で作者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

854話 青は塗りつぶせば黒（前書き）

週一更新にも関わらずモブからのストックがなくなってしまう
た。

最近コミックや書籍等のおしごとで過去分を振り返る機会が多く、
過去ばかり読んでいると最新話の記憶が……

HJ文庫モブから6は絶賛発売中です！

そろそろ作者は籠り期間に入りますがモブからは8巻あたりでリミ
ットブレイクします。

よろしく願います。

854話 青は塗りつぶせば黒

俺が声をあげるとほぼ同時に後方から炎の弾が青いきつねへと飛んで命中した。

「ベルリア、いきなさい」

『アクセルブースト』

ベルリアは空中から勢いをつけ肉切り包丁を一閃する。

「ミク様、ご助力ありがとうございます」

「まだ終わってないわよ」

「このベルリアに油断などあるはずがありません。『ブラックブレイド』」

ベルリアは青いきつねを倒すとすぐに次の敵へと斬撃を飛ばした。今度は本当に大丈夫そうなので俺も負けてはいられない。

「いくぞー！」

気合いを入れて残る2体のモンスターへと向かおうとするが、スピードを出そうとするとやはり足下が気になってしまう。

「海斗、重心と体重移動だ！」

「は、はい」

そう言うあいりさんは、いつもと変わらないスピードで敵モンスターへと向かって行ってしまった。

「やっぱりすごいな」

「海斗さん、感心している場合ではないのです。敵がきちゃいますよ。『アースウェイブ』」

俺は目の前の敵へと意識を移し戦いへと臨む。

重心と体重移動だ。

あいらさんの言葉を頭の中で反芻しながら、滑らないように前へと進む。

既にあいらさんは敵モンスターと交戦状態に入っているが、俺は幸いにもヒカリンの『アースウェイブ』のおかげで余裕を持って攻撃をする事ができる。

ベタ足で構えた白麗剣を側面に踏み込み斬りつける。

「ガガッ」

硬質な感覚が手に伝わり、浅いところで刃が止まるが、そのまま手を止めずにバルザードを更に振るう。

のせるイメージは切断。

敵モンスターのメタルボディに触れた瞬間鈍重い感覚が刃を通して伝わってくる。

「斬れる〜!」

気合いの声と共にバルザードを振り切る。

「ふ〜」

「おい、海斗、なにがふ〜だ。お前が1番最後だぞ」

自分的には上手くやれたと思うが、他のメンバーは既に戦いを終えていたようで俺が1番最後だったようだ。

「おいおい、マジか。4体を瞬殺！？ 黒い彗星は伊達じゃないってことか。それに、その小さいのなんだ。影薄いおまけかと思ったらすげえ。青い奴まで」

「空中舞ってたぞ。特撮映画じゃないんだぞ。サーバントすげえ」

「薙刀の子も凄腕よ。あのメタルモンスターを一刀両断したわ」

「流石は『黒い彗星』。パーティメンバーも半端ねえ」

「もしかして幼女2人もすごいのか？」

「完全に俺たち負けてないか？」

「いやいや、俺たちも負けてはないだろ。いや負けてるか？」

落ちた魔核を回収して、英土さん達の下へと戻る。

「ベルリア、頑張りすぎだろ」

「いえ、これが普通です。あの程度のモンスター、ただ青いだけです。青いだけのモンスターに手こずるなどあり得ません。青など塗りつぶせば私の敵ではありません」

「そうか」

やはりかなり気にしてるらしい。

いつも以上に張り切っていたのは間違いない。ベルリアにとってはもはや天敵と言っても過言ではないかもしれない。

今回は上手くいったが、空回りしなようにだけ注意が必要だ。

855話 事案

「いや、いいもん見せてもらつたよ。銃火器系のアイテム無しであつさり倒し切るとは恐れいった。そつちの小つちやいのすごいな。もしかしてそつちのパーティ最強はそのちつちやいのか？」

「は！？ ベルリアが最強？ 目が腐つてるんじゃないのか？ 私が最強に決まつてんだろ！」

「そつちなのか。お嬢ちゃんは後方で控えてたからわからなかつたよ。すまないな」

「わかればいいんだ。わかれば」

「ところでお嬢ちゃんはもしかして悪魔なのか？」

「あたり前のことを聞くんじゃない。決まつてるだろ」

ルシエと話していた英士さんが会話を終え八雲さんの横に立ち、ヒソヒソ話を始めた。

「おい八雲、やっぱりあのお嬢ちゃん悪魔だそうだ」

「悪魔か！ 確かに頭の角はそれっぽい気はするけど。俺、悪魔初めて見たわ」

「どう思う？」

「完全にあるだろ。呪われるとかつて噂もあつたけどガセだったか。悪魔なのに癒しだぞ。完全なるギャップ萌えだ。むしろこれ以上の組み合わせはないんじゃないか？」

「ああ、俺も同じことを考えてた。悪魔のサーバントありだな。しかもあのお嬢ちゃんの属性はツンデレだ。間違いない」

「マジか！ くゝたまんねえな。リアルツンデレか。いいな。絶対ダンジョンが楽しくなる。俺は決めた！ 絶対お金を貯めて悪魔のサーバントを手に入れてみせる」

「おお、いいな。俺はあのピンクの子も捨てがたいけどな」

「英士、八雲そこまでにして。それ以上続けるなら通報するわよ」

「なずな、俺たちなんにもしてないだろ」

「会話がもう犯罪よ。間違いを起こす前に逮捕してもらおう」

「ひどいな。なずなにはこのギャップ萌えが理解できないのか」

「できるわけないでしょ。それはサーバントの子達がかわいいのは理解できるけど、それとこれは別よ」

「なずなはかたいんだよ」

「石神英士35歳職業探索者シルバーランク。事案により逮捕。明日のニュースが楽しみね」

「ぐっ……」

「それじゃあ、もうちょつと大きければいいんだろ。それなら合法だろ」

「合法？ 八雲、気持ち悪いわよ。その考え方がもう犯罪ね。峰岸八雲32歳職業探索者シルバーランク。事案により逮捕。なお石神英士35歳とは同僚とのこと」

「ぐっ……」

「わかった？ 幼女ハーレムなんてリアルじゃありえないのよ。それが可能なのは『黒い彗星』ぐらいなの。特別、例外よ。勘違いしておかした真似したら即逮捕だからね」

「はい、すいませんでした」

「わかればいいのよ。わかれば。お金はそこそこあるんだから、もつと真剣に将来を考えた方がいいと思うわ」

「はい」

なずなさん、興奮で声が大きくなってすっかりこっちにも聞こえてますよ。

幼女ハーレムってなんですか。

俺は特別でも例外でもないんですよ。

変なことを言うのは控えてほしいです。

856話 いい人？（前書き）

5/18木曜日に 秋田書店ヤングチャンピオンコミックスよりモ
ブから始まる探索英雄譚2が発売になります。

原作者の元には一昨日見本誌が届きましたが、大、中、小のシルフ
イーかわいいが詰まった一冊となっています。

是非買ってください。なんと巻末には次巻の情報も！！

856話 いい人？

「いや、今日はいい経験させてもらったよ」

「こちらこそです。みなさんの戦い方勉強になりました」

「そうか。それならよかったが、そっちは火力が違うからな。いずれにしてもやっぱリイイな」

「え？ なにがですか？」

「ああ、気にしないでくれ、こつちの話だ」

「そうですか。それじゃあここで失礼します」

俺たちは英士さん達のパーティと19階層を探索し、いい時間になったので途中で別れて1階層へと戻ってきた。

「さすがベテランって感じでいい人達だったな」

「まあ、ベテランっていうのといい人達っていうのは否定しないけど」

「ミク、それってどういう意味？」

「海斗さん、あのリーダーの人ともうひとりの人のシル様達への視線がダメなのです」

「視線がダメ？」

「そう、ダメなのです。あれはダメな視線なのです」

「海斗、大人には色々な人がいるからな。趣味嗜好も色々あるんだ。海斗ももう少し人を見た方がいい」

「そう、なんですかね」

俺はそんなにダメな感じは受けなかったが、3人がそういうならそうなんだろう。

「それじゃあ、俺はこれで」

「海斗、これでって、これからまたダンジョンに潜るのか？」

「いえ、これから勉強しに行くんですよ」

「????」

「勉強しにって出口は逆だけど」

「ああ、今日はダンジョンで勉強してみようかと思って」

「嘘でしょ。ダンジョンで勉強？ 海斗おかしくなったの？」

「ミク、おかしくなったはないでしょ。俺は普通だって」

「それじゃあなんで？ それに勉強道具は？」

「もちろん、マジック腹巻きの中だよ。この前ミクの話聞いてもつと勉強頑張ろうと思ったんだ」

「それがなんでダンジョン？」

「いや、だってダンジョン内だとステータスの恩恵がある。当然、集中力や判断力も上がってるだろ。じゃあ、ダンジョンで勉強した方が能率上がるんじゃないかと思って」

「海斗さん、普通はそんな事思いつきもしないですけど、それってもしかしたらもしかするのです」

「確かにない話ではないな」

「2人とも本気で言ってます？」

ミクはやたらと懐疑的だったが、やってみればわかる事だ。

俺は3人と別れて一階層の奥へと進み、いつも使っているスペースまで足を運ぶ。

今のレベルならたとえスライムに不意をつかれても大丈夫だとは思うが、念のためにサーバント達を呼び出しておく。

「それじゃあ、頼んだぞ」

「おまかせください。ご主人様が安心してお勉強できるようしっかりと見張っておきますね」

俺は早速、マジック腹巻きから教材一式と今日の為に買っておいた折りたたみ式の小型テーブルを取り出して、勉強を開始した。

857話 勉強（前書き）

5/18日に秋田書店ヤングチャンピオンコミックスよりモブから始まる探索英雄譚2が発売されました。

そしてなんと3巻は今秋発売決定です！！

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜6も是非週末のお供によりしく願います。

857話 勉強

床が冷たいので座布団かクッションを持ってくればよかったと思
うけど、ダンジョンは悪くない。

基本、俺たちの他には誰もいないので静かだし集中できる。

思いつきだったけど、これは当たり前だったかも知れない。

あとは、ステータスの恩恵を受けて勉強が捗るかだ。

さっそく参考書を開いて問題を解き始める。

いつもとは違う環境に図書館とかに来たかのような感じで、いい感
じだ。

「海斗、わたしは何すればいいんだ？」

「いや、別に何もしなくて大丈夫だぞ」

「ふん」

やはり俺の推論は正しかったかもしれない。

英単語がいつもよりスラスラ頭に入ってくる。

いつもは何回も書かないと憶えられないのに、今は2、3回書いた
だけでいけている。

これは明らかにステータスの恩恵。

ステータス画面に頭の良さを示す数字は存在しないが、探索中、普
段にくらべて集中力や感度は明らかに上がっているのがわかるので
数字外の能力にも影響を及ぼしているのは明白だった。

そしてそれは俺の脳細胞にも影響しているっぽい。

やった！

俺はやった！

やってしまった！

今年度に入ってから、去年に比べて学力の上昇が停滞しているのを

感じて焦りを憶えていた。

昨年度の感じのままなら王華学院もいけると踏んでいたが、その確信が揺らぎ始めていた。

春香との夢のキャンパスライフに黄色信号が灯った気がして不安だった。

だが、俺はシルバーランクとなった探索者としての能力を勉強に活かす術を開発してしまった。

「いける。いけるぞ。憶えられる！」

1番のネックだった暗記ものが捗っていく。

「おい、海斗。そろそろわたしの出番だろ？」

「うん？ 特にないぞ？ そこらへんで自由にしろしてくれ」

「ルシエ、ご主人様の邪魔しちゃダメ」

「はい、はい」

さすがはシルだ。

俺のことを考えて行動してくれる。

「ふゝ英語はここまでにするか。次は社会を勉強してみるか」

これで社会もいけるようなら……

「おい海斗、まだ終わらないのか？」

「まだ英語しかやってないんだからまだだつて」

「ちえっ、わかったよ」

さつきからルシエがブツブツ言ってくるが、退屈なのも理解はできる。

今度、ルシエ達のために絵本とか持ってきてやってもいいな。

ルシエなら青虫のやつとかいいかもしれない。

食いしん坊のことか共感しそうだ。

ただ、いっぱい食べて大きくなるときれいな蝶じゃなくて凶悪な悪魔になってしまうのでそこは大きく異なるところだ。

それに大きくなるための食料が俺の生命力というのもいただけない。たしかに大きくなるときれいになるのはおんなじだけど。

857話 勉強（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で作者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

ルシエうるさい

おおっ。

歴史の年表を憶え直してみているが、結構スラスラ頭に入ってくる気がする。

この静かな環境と相まってはかどる。

「海斗、もういいだろ？ 一階層はもういいだろ？ もう、待つのは嫌だ〜！」

「もうちよっとな」

「もうちよっとなってどのくらいだ？」

「そっだな、あと1時間くらいかな」

「1時間？ むり〜そんなに待てない〜むりむりむり！」

やばい。相手をしてやらなかったらルシエが我慢できなくなってしまう。

「それじゃアルシエも一緒に勉強してみるか？」

「するわけないだろ！ ふざけるな〜！」

やっぱり無理か。

「それじゃあ、カードに戻るか」

「海斗、燃やされたいのか？」

「う〜ん、それじゃあ今回だけだぞ」

俺はマジックポーチから魔核を取り出してルシエにひとつ渡してあげた。

「ふ、ふん。わたしをなんだと思ってるんだ。魔核の一個でどうい
うできると思うなよ！」

「それじゃあ特別だからな」

ルシエがまだゴネるので追加で魔核をもう一個渡してみた。

「たった2つで……」

「じゃあ、いらないんだな」

「いるに決まってるだろ。ふざけるなよ！」

一応シル達にも魔核を渡してから再び勉強を開始する。

うん、間違いない。

普段よりも頭に入る。

これは間違いなくステータスの恩恵を受けている。

ここで勉強を続ければ、今までの遅れを取り戻すのもそう難しくは
なさそうだ。

これまでひたすらダンジョンに潜りレベルを上げた自分を褒めてや
りたい。

BP100オーバー。

まさかBPがベンキョウパワーの略だったなんて。

たぶん俺のBP100は受験生の中では上位のはず。

これは受験に勝ったかもしれない。

BPを上げればそれだけ王華学院の合格が近づく。

こんなわかりやすい図式はない。

とんでもない事を発見した俺は、内心歓喜に震えていた。

「なんかあいつ勉強しながらニヤニヤしてないか？」

「ご主人様が幸せそうでも私もうれしいです」

「そうか？ 気持ち悪いだけだろ」

「ルシエ、そんな言い方をしてはダメですよ。ご主人様にもきつと色々あるのですよ」

「それはシルの考えすぎだと思うぞ。あいつはそんな色々考えてない。間違いない」

あゝ勉強が捗ると楽しい。

春香と勉強すると幸福感は凄いいけど、緊張して楽しいのとはちょっと違うからこの感じクセになりそう。

明日からは放課後スライム狩りした後でここで勉強だな。

唯一の難点はちよつと暗い。明日は電池式のLEDライトを何個か買って持って来よう。

あとはクッションだな。

やっぱり地面に直座りは冷たいし固い。

これから半年以上使うことを考えるとちよつといいのを買うのもありだ。

ルシエうるさい（後書き）

5/18日に秋田書店ヤングチャンピオンコミックスよりモブから始まる探索英雄譚2が発売されました。

そしてなんと3巻は今秋発売決定です！！ まだの方は是非！

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜6も是非週末のお供によりしく願います。

刻の神様お願い！

「海斗」聞いてくれよ。昨日茜ちゃんとカフェに行っただよ」

「それはよかったな」

「ダンジョンは潜らなかつたのか？」

「あゝ昨日は特別休暇もらっただよ」

「特別休暇ってなんだよ」

「茜ちゃんとのデートは特別だろ？」

「ああ、そうですね。それはそうと、勉強の方はどうなんだ？ 受験勉強」

「……………」

「隼人？」

「海斗！ どうすればいいと思う？」

「なにが？」

「勉強が全くすすみません。俺このままだと王華は無理かも」

「急にどうしたんだよ。この前は調子いいような事言っただよ」

「やっぱり探索とデートと勉強の両立が俺には無理だ。どれかを削るしかないけど削るとしたら勉強しかないだろ。あゝ1日が36時間あつたらな。時間が、時間が足りないんだ。俺は刻の神様が恨めしいよ」

「真司は？」

「真司は悠美ちゃんが徹底的に管理してるからいけてるっばい」

「ああ……そうなんだ」

真司は前澤さんの尻に敷かれてる感じが。だけどどうせなら3人揃って王華行きたいしな。

「隼人、ちよつといいか」

「なんだよ」

「もうちよつと近くに来てくれ」

「海斗俺、そんな趣味はないぞ」

「そうじゃないって」

「冗談だよ。そんな大事な話か？」

「ああ、絶対誰にも言わないって誓えるか？」

「なんのことかわからないのに誓えるかって言われてもな」

「隼人、これはお前の将来にも関わる大事な話しだ。隼人の入ってるダンジョンサークルにも内緒にするって誓ってくれ」

「お、おう。マジな感じだな。わかった。誓うよ」

隼人から確約を取ってから昨日の事を話すことにする。

「昨日探索が終わってからな、ダンジョンに残って勉強したんだ」

「は？ 海斗、お前がダンジョン中毒なのは知ってるけど、遂におかしくなったのか？ 大丈夫か？ 病院に行くか？」

「今日一緒に行つてやるうか？」

「失礼なやつだな。俺は至つて正常だよ」

「いや、だけどダンジョンで勉強つて、そのうちダンジョンに住んじゃうんじゃない」

「そんなわけないだろ」

「いや、だけど……」

「いいから聞けつて。勉強したら滅茶苦茶捗った」

「それは海斗だけの特殊な事例じゃ」

「ふざけるならここでやめてもいいんだぞ」

「冗談です。お代官様」

「誰がお代官様だよ。ダンジョンだとレベル分ステータスが上がるてるだろ？」

「海斗！！ ま、まさか」

「そのまさかだ」

それまでおちゃらけた雰囲気だった隼人の表情が真剣なものへと豹変する。

「マジか！」

「ああマジだ」

「それじゃあ、ダンジョンで勉強すれば……」

「ああ、勝ちも確定だ」

「マジか。ヤバいな」

「ああヤバい。だから絶対に内緒だぞ」

「ああ絶対誰にも言わない」

「真司は別にいいと思うけど、前澤さんと一緒に勉強してるんじゃないかな？」

「それより、それは海斗だけの特殊技能とかじゃないよな」

「隼人、俺にそんな技能はない」

刻の神様お願い！（後書き）

5/18日に秋田書店ヤングチャンピオンコミックスよりモブから始まる探索英雄譚2が発売されました。

そしてなんと3巻は今秋発売決定です！！ まだの方は是非！

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜6も是非週末のお供によりしくお願いします。

859話 隼人とダンジョン（前書き）

5/18日に秋田書店ヤングチャンピオンコミックスよりモブから始まる探索英雄譚2が発売されました。

そしてなんと3巻は今秋発売決定です！！ まだの方は是非！

HJ文庫モブから始まる探索英雄譚1〜6も是非週末のお供によりしく願います。

859話 隼人とダンジョン

「いやゝ悪いな。さっそく付き合ってもらって」

「どうせ俺はそのつもりだったから問題ないぞ」

「おりゃ！ それにしても海斗はすごいな」

「なにがだよ」

「やつ！ 毎日1階層でこうやってスライム倒し続けてるって凄いな」

「まあ日課みたいなもんだ」

「普通は経験値ほとんどないし、単調だし続かないって。それを何年も続けてるだけである意味尊敬するよ」

「まあ、今の俺は子供を何人も養ってるようなもんだからな」

「そうだよな。今日はルシエ様は？」

「それが、ルシエのやつがうるさくて勉強の邪魔ばかりしてくるから今日はいない方がいいだろうと思って」

「あゝわかる気がする。ルシエ様は甘えん坊だもんな」

「ルシエが甘えん坊？ 暴れん坊の間違いだろ」

シルにスライムを探してもらいながら隼人と2人で1階層に潜っている。ルシエはいないがこれはこれで新鮮でいい感じだ。

スライム相手なので一応隼人にも殺虫剤は渡してあるが、単調なのを嫌ってか普通に槍で攻撃している。

「やっぱりスライムは割に合わないな。急所つかないと倒せないから結構大変な割に落とすのはこの小さな魔核が一個だけだろ。普通の人には無理だつて」

「普通の人に無理って俺は？」

「変人？」

「おい！」

「スライム狂？」

「隼人、今日は1人で勉強するんだな？」

「すいませんでした。嘘です嘘。一緒にいてくれ。頼むこのとおりだ」

隼人が大袈裟にこちらを拜んでくる。

それから1時間ほど集中してスライムを狩りながらいつもの場所へと辿り着く。

「隼人、ここだぞ」

「ここ？ なんにもないけど、本当にこんなところで勉強するのか？」

「なにもないからいいんだろ」

「そんなもんか」

「ああ、それじゃあさっそくやるか。まだ色々買い込めてないから今日は地面に直座りな」

「まあダンジョンだしな」

「今度クツションとか照明とか買うつもりだ」

「ダンジョンのマイホーム化か」

その場に座り隼人とそれぞれ持って来た参考書を開いて勉強を始める。

やっぱり、ここは静かで落ち着く。

「海斗、なんか静かすぎないか？」

「なに言ってるんだよ。ダンジョンなんだから当たり前だろ」

「ああ、そうか」

やっぱり、ダンジョンでの勉強は捗る。

苦手の暗記が特に頭に入ってくる。

「どうだ？ 隼人、捗ってるか？」

「ああ、最初は場所が場所だけに違和感がすごかったけど、悪くないな。いや明らかにいい」

「そうだろ？」

「これって完全にステータスの恩恵を受けてるよな」

「そうだな。完全に受けてるな」

「このままここで勉強したらいけるな」

「ああ、いける」

「海斗、ありがとうな。俺たち勝ったな」

「ああ、勝ったな」

「だけど、今まで誰からも聞いた事ない。サークルでも全く話題に上がったこともない。受験生だっているのにな」

「そうか」

「まあ、まともな探索者がダンジョン内で受験勉強しようとは考えないよな」

「それは俺がまともじゃ無いって言いたいのか？」

「いや、レアというかオンリーというか。まあおかげで俺は助かったんだからいい意味だ」

「いい意味ね」

「当分一緒に潜ってもらっていいか？ 頼む」

「別に1人でくればいいだろ」

「一階層とは言ってもダンジョンには違いないからな。流石にこの静けさの中、スライムに警戒しながら1人で勉強に集中する自信はない」

「わかったよ」

隼人の強い希望もあり、当分の間隼人の都合がつく日は一緒に一階層へと潜る事が決定した。

859話 隼人とダンジョン（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で作者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【 】にお願いします

861話 火力はメンタル

「海斗、よかつたら一緒に勉強しない？ 中間テストも近いでしょ？」

「うん、一緒に勉強します」

「明日の放課後とかどうかな？」

「あゝごめん、隼人と勉強の約束があるんだ」

「そうなんだ。よかつたら隼人くんも一緒にどうかな」

「ちよつと難しいかも。実はダンジョンで勉強してるんだ」

「ダンジョンで！？ もしかしてダンジョンって自習室とかあったりするの？」

「いや、自習室は無いんだけど、勝手に自習してるといっつか」

「そんな事して大丈夫なの？ 危なく無い？」

「一階層だから危なくは無いんだ。だから来週でもいいかな」

「うん、もちろん」

隼人と勉強するようになったのはいいが、突然の予定は入れ辛くなり、せつかく春香が誘ってくれたのに先延ばしになってしまった。

本来、高校最後となる今年はダンジョンへのペースも少し落として春香とカフェタイムなんかを楽しむ時間を増やすつもりだったのに、思い通りにはいかない。

もう少しダンジョンで勉強を頑張って目処が立ったら必ず春香と…。

とりあえず、来週は春香との勉強会があるので、それをモチベーションに週末のダンジョンを頑張ろう。

「あいりさん！」

「まかせろ！ 『斬鉄撃』」

「チヨロチヨロうるさい！ さつさと燃え尽きる。『破滅の獄炎』」

これで決まったな。

今日も順調十九階層を進んでいるが、必要以上にルシエが張り切っている。

理由はわかっている。

最近平日のゴ布林狩りに喚んでないから溜め込んでいたフラストレーションを一気に発散しているんだ。

ほんの少しだけ申し訳ない気持ちもあるが、おとなしくできないルシエに問題がある。

「なんだ、もう終わりか？ 全然歯応えがないな。おい、海斗お腹すいたぞ」

「はいはい、わかってるよ」

ルシエのお願いに応えて、一階層で集めたスライムの魔核を手渡す。

「シル、次はまだか？」

「ルシエ、そんなに急いてもモンスターは湧きませんよ」

「そんなのわかってるけど、今日の敵は弱すぎるんじゃないか？」

「いつもと同じですよ」

まあ、やる気がモンスターへと向いてるので、これはこれで良いとしよう。

「ねえ海斗、ルシエ様今日は絶好調じゃない？」

「いや、あれは絶好調というかストレス発散だな」

「そうなの？ なにかあった？」

「いや、まあ後で話すよ」

それにしてもこの階層のモンスターとルシェの相性はそれほどいいとは言えないはずだけど、そんなの関係ないな。
ルシェのフラストレーションとやる気が獄炎の火力を引き上げているのか、メタルモンスターを次々と灰にしていつている。

861話 火力はメンタル（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で作者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

862話 紫色は毒の色

ルシエの積極的な動きにより、かなりいいペースで探索は進んでいるが、その代償としてスライムの魔核はどんどん減っている。

「海斗、やっぱりヤバかったのね。わかってはいたつもりだけど」「いや、ヤバくはないって」

「いくら探索者でも、普通は思いつくことはあつたとしても絶対に実行には移さないわね。まさか本当にやるとは思わなかった」

「よかつたらミクも……」

「やるわけないでしょ!」

うん、やっぱりこれはやつた人にしかわからないやつだな。

ライバルが増えすぎて場所がなくなっても困るし、王華学院を受験する生徒がこぞってやってきたら、俺の優位性がなくなってしまうので、これはこれでよかつたと思う事にしよう。

「それより海斗さん、結構奥まで来ているような気がするのですが」

「そうだな、ハッキリとはわからないけど、この階層の後半に差し掛かっているのは間違いない気がする」

「という事はもう少しで十九階層主との戦闘か」

「そうなりますね」

「これを抜ければついに二十階層か。この一年で私の状況も大きく変わったな」

「あいらさん、感傷に浸るにはまだ早いのです」

「はは、そうだな」

あいらさんのセリフなんとなくフラグっぽいけど、気のせいだよな。

「ご主人様、敵モンスターです」

「ああ、わかった」

「それじゃあ、ベルリアと……」

「海斗、ゴチャゴチャ言ってるんじゃないぞ。私が燃やしてやる」

「いや、だけど色付きは流石にな」

ルシエのやる気ブーストで獄炎は燃え上がり、相性の悪いはずのメタルモンスターもノーマルタイプをやつはダメージを与える事ができているが、色付きは流石にルシエだけで溶かしきるの難しい。

現れたのは少し小型で紫色のメタルモンスター三体。

奥に足を踏み入れているからか色付き比率がかなり高い。

今まで色付きと戦ってわかってているのは色付きにも系統があり、色によりおおよその能力が測れるという事だ。

そして、目の前に現れた紫。

大ききこそ赤や青に劣るが、完全にやばい色だ。

「シル！ 『鉄壁の乙女』だ！」

「はい」

前衛にいた俺とあいりさんは、全速力で『鉄壁の乙女』の光のサークルへと滑り込む。

「ベルリア！」

「マイロード、おまかせください。このベルリアに毒など効きはないのです」

あの不気味な紫は完全に毒系だ。

毒に対してはレジストリング等がなければ対処のしようがない。

生身の俺やあいりさんがくらえばただでは済まない。

幸いな事に俺たちにはベルリアがいる。

ベルリアの毒耐性は極めて高い。

まかせておけばなんとかなる……よな。

前も毒は大丈夫だったし悪魔だし多分問題ない。

862話 紫色は毒の色（後書き）

【読者の皆様へお願い】

いつもありがとうございます。

皆様のブックマークとポイント評価で作者のモチベーションが保たれています。

興味を持たれた方は是非ブックマークとスクロールして下部の【

】を【】にお願いします

863話 ヘルリア平常運転

「ヒカリン『アースウェイブ』でベルリアの援護を！」

少し小型とはいえ、敵は3体。ベルリア1人では荷が重い気がする
ので、後方からできるだけ支援するしかない。

ベルリアに対し、紫色のメタルモンスターが一斉に襲いかかる。
メタルモンスターはやはり速い。

三方から急加速しベルリアとの距離を詰め攻撃を繰り返すが、ベル
リアは最小限の動きで躲しながらすれ違い様に肉切り包丁で斬りつ
ける。

あの大きな剣で、あの速度の敵に合わせるのは流石ベルリアだが、
溜めを作れない通常の攻撃ではメタルモンスターに致命傷を与える
には至らない。

「『アースウェイブ』 ベルリアくん今なのです！」

ヒカリンがタイミングを測りスキルを発動し、敵の一体が足を取ら
れた。

「ヒカリ様、ご助力感謝します。 『アクセルブースト』」

ベルリアは、それを逃さず、ハマったメタルモンスターに向かい加
速して肉切り包丁を叩き込んだ。

「あと二体ですね。 やはり私の敵ではありません」

「ベルリア！」

ベルリアが一体倒した直後、残りの二体の身体からは紫色の靄のよ
うなものが立ち上りベルリアを包み込んだ。

「マイロード、心配は無用です。このベルリアに毒など効くはずも
ないのですから」

ベルリアは全く気にする様子もなく紫の霧の中を駆け、メタルモン
スターへと肉薄し斬撃を加える。

さすがはベルリアだ。

以前も毒のブレスを浴びてもノーダメージだったように、今度の毒
の霧もダメージは無いらしい。

相性も良さそうだしそこまでフォローを必要としているようにも無
いが、一応、ベルリアに迫るもう一体に向けバルザードの斬撃を放
つ。

同じくミクがスピットファイアで足止めする。

続け様にティーターニアが『ドラグナー』を放ち、ベルリアの相對し
ていたメタルモンスターへとダメージを与える。

動きの止まったメタルモンスターへ『アクセルブースト』でとどめ
をさす。

残るは一体。

もう、大丈夫だろう。

「ベルリア？」

華麗に二体目のメタルモンスターを葬ったベルリアだが、三体目へ
と歩を進めようとしているが、何やら様子がおかしい。

先程まであれほど鋭い動きを見せていたのに、妙に動きが緩慢だ。
ゆっくりとスローモーションのような動きをしており、メタルモン
スターの反撃をくらってしまった。

「くっ……この……ていど」

なにが起こっているのか、ここからでは判断しづらいが、ベルリアがピンチである事には変わりない。

「ルシエ！」

「だから言っただろ。最初からわたしにまかせとけて。倍だからな」

「倍ってなにが？」

「もちろん魔核に決まってるだろ。わたしを都合のいい召使いかなんかと勘違いしてるんじゃないだろうな？」

「わかったって。わかったからベルリアのフォローを頼んだ」

「ベルリアのフォロー？ 違うな。わたしが倒すんだぞ。さっさとくたばれ！ 『侵食の息吹』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n8930fk/>

モブから始まる探索英雄譚

2023年7月1日14時10分発行